独立行政法人国立文化財機構年報

平成２２年度

平成22年度 年報 目次

Ⅰ　22 年度自己点検評価報告書　総括表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅱ　22年度自己点検評価報告書　個別表

ⅰ．　国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置・・・61

１．歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承・・・・・・61

２．文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79

３．我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与・・・・152

４．文化財に関する調査及び研究の推進・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・172

５．文化財の保存・修復に関する国際協力の推進・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・436

６．情報発信機能の強化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・452

７．地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上・・・・・・・・・・・・・・・・・・516

(受託事業)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・534

ⅱ．　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置・・・・・・・・・・・・・・584

ⅲ．　予算、収支計画及び資金計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　－

ⅳ．　その他主務省令で定める業務運営に関する事項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・598

Ⅲ　施設概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・601

Ⅳ　財務諸表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・605

Ⅴ　第 2 期中期目標期間事業報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・649

Ⅵ　評価

１．文部科学省独立行政法人評価委員会評価（平成 22 年度)・・・・・・・・・・・・・・・・・685

２．文部科学省独立行政法人評価委員会評価（第 2 期中期目標期間)・・・・・・・・・・・・・731

３．独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・807

Ⅶ　日誌・・・850

Ⅷ　運営委員・評議員・外部評価委員名簿及び組織図・役職員名簿・・・・・・・・・・・・・・・867

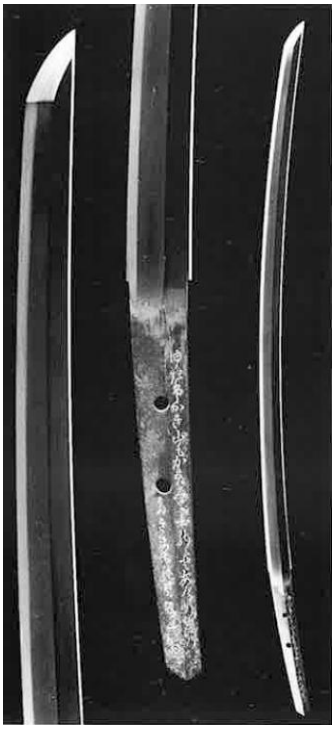
附属資料　：22 年度自己点検評価報告書 統計表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・900

平成 22 年度

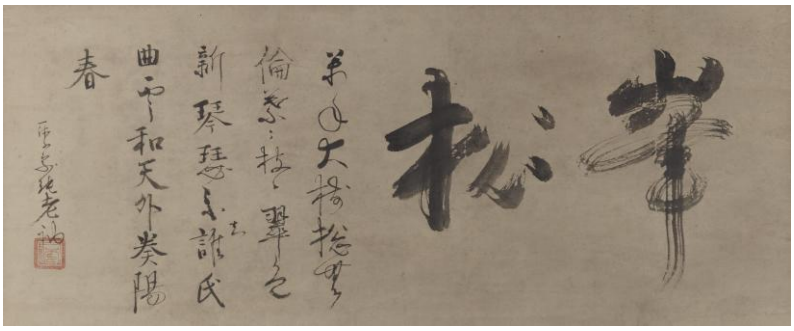
新収品図版　［東京国立博物館］

購　　入

菊螺鈿鞍



重要文化財　刀　無銘　伝当麻



一休宗純墨跡 七言絶句「峯松」

寄　　贈

振袖　鶸色縮緬地秋草几帳模様

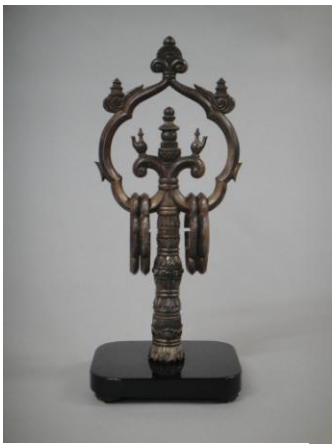
土偶　馬

渡唐天神像

平成 22 年度

新収品図版　［京都国立博物館］

購　　入



重要文化財 金銅錫杖頭

やすらい祭絵巻　松村景文画 上田秋成書

牛祭絵巻　河村文鳳画 上田秋成書

玉篇巻第九残巻（自嗣字至歟字）　紙背金剛界私記

寄　　贈

井口家伝来　幕末・明治期歴史資料のうち

後藤象二郎写真

花弁鳥獣文様刺繍見送（祇園祭函谷鉾旧見送）

松坂屋コレクション

正月飾りに白梅・箒に橙図　鈴木其一筆

平成 22 年度

新収品図版　［奈良国立博物館］

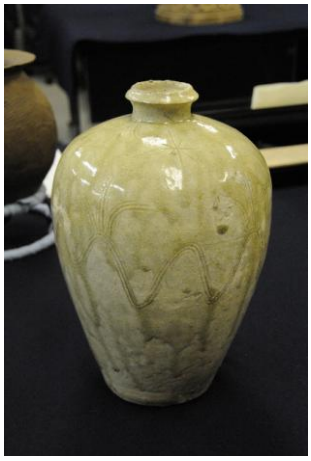
購　　入

絹本著色春日地蔵曼荼羅

木造僧形立像

法華経（建治二年東大寺僧宗性発願経）

黒漆宝塔



瀬戸　灰釉櫛目文瓶子
〔和歌山県新宮市丹鶴山出土〕

寄　　贈

玳瑁螺鈿花形盤　北村昭斎作

平成 22 年度

新収品図版　［九州国立博物館］

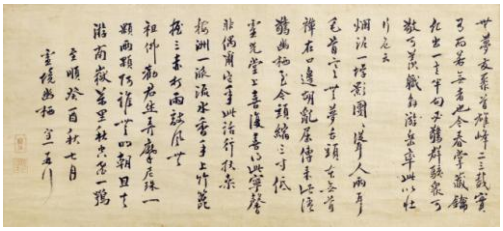
購　　入

絹本著色仏涅槃図　命尊筆

茜地山水松鶴文更紗

紙本墨書興福寺関係文書

紙本著色病草紙断簡（せむしの乞食法師）



紙本墨書惟堂守一墨跡　与無夢一清偈

寄　　贈

十一面観音菩薩立像

Ⅰ　22 年度自己点検評価報告書　総括表

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

(1)　収蔵品の収集

【中期目標】国の文化財保護政策との整合性、一体性を保ちつつ機構の設置する博物館各館の役割・任務に沿って収集方針を定め、これに基づき、計画的かつ適時適切な購入と寄贈・寄託の受入れを進め、体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の充実を図ること。

【中期計画】

(1)－1　体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。

(東京国立博物館)
　日本を中心にして広く東洋諸地域にわたる美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

(京都国立博物館)
　京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

(奈良国立博物館)
　仏教美術を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

(九州国立博物館)
　日本とアジア諸国との文化交流を中心とした、美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

(1)－2　収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。

【主な計画上の評価指標】

○購入、寄贈、寄託の受入により、体系的、通史的にバランスのとれたコレクションを形成すること。

【21 年度評価における主な指摘事項】

○購入による収集は、各館の特質を踏まえ、限られた予算内で努力がなされていることを評価する。
○なお、収蔵品の収集については、今後とも質の確保に努めてほしい。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(1)-1　適時適切な収集 　各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ的確な情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していくよう取り計らう。	(1)－1　適時適切な収集		
1111	（東京国立博物館） 日本を中心として広く東洋諸地域の文化の体系的陳列を目指し、絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料の中から重点的に購入する。	**【東京国立博物館】** ・国民共有の貴重な財産として永く後世へ伝えられるべき、優れた作品4件（内、重要文化財1件）を購入した。 内訳：書跡１件、刀剣１件（重要文化財）、漆工２件 決算額　291,500,000 円	A	順調
1112	（京都国立博物館） 　京都文化を中心とした絵画、彫刻、書跡、陶磁器、染織品、漆工芸品、金工品、考古資料、歴史資料の中から重点的に購入する。	**【京都国立博物館】** ・博物館展示の活性化と高次の調査研究の対象となり、国民が文化の豊かさを実感することができる貴重な作品 23 件を購入した。 ・購入に際しては、中期目標にもあるとおり、「京都文化」を意識しているが、今年度は京都ゆかりの近世絵画５件、また京都の寺院に伝存する文化財と一連の中国絵画と中国書跡１件のほか、中国書跡１件、金工１３件を購入した。 ・内訳：絵画６件、書跡２件、金工 13 件、漆工１件、考古１件 ・決算額　359,320,000 円	A	順調
1113	（奈良国立博物館） 　仏画、仏像、経典・仏教関係書跡等、仏教工芸、仏教考古資料の中から重点的に購入する。	**【奈良国立博物館】** 　購入が７件、寄贈が８件、都合 15 件の文化財が新たな収蔵品として加わった。うち購入分の内訳は次のとおり。 　絵画　絹本著色春日地蔵曼荼羅　１幅　鎌倉時代（14 世紀） 　　絹本著色千手観音影向図　１幅　鎌倉時代（13 世紀） 　彫刻　木造僧形立像　１軀　鎌倉時代（13 世紀） 　書跡　法華経（建治二年東大寺僧宗性発願経）　８巻　鎌倉時代（建治２年：1276） 　工芸　黒漆宝塔　１基　室町時代（16 世紀） 　考古　三彩小壺（筑前早良郡出土）　１口　奈良時代（８世紀） 　　瀬戸灰釉櫛目文瓶子　１口　鎌倉時代（13 世紀） 　購入代金総額は 95,575,000 円。	A	順調
1114	（九州国立博物館） 　日本とアジア諸国との文化交流を中心とした美術、考古及び歴史・民族資料等の中から重点的に購入する。	**【九州国立博物館】** ・日本とアジア諸国との文化交流の足跡をしめす美術、考古及び歴史資料等の分野の資料を積極的に収集し、あわせて国民共有の貴重な財産として永く後世へ伝えられるべき優れた文化財として、31 件を購入した。（内、国宝・重要文化財０件） 　内訳：絵画４件、書跡５件、陶磁２件、漆工１件、染織 13 件、歴史資料６件 　決算額：1,116,488,000 円	A	順調
1121	(1)-2　寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用 （４館共通） １）寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用や、相続税の猶予措置の創設を手始めとする税制面での環境整備を進めるなど、積極的に働きかけるとともに、平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力し、平常展に必要な文化財１１，０６０件（東京：２，４００、京都：５，８００、奈良：２，０６０、九州：８００）の寄託品を目標とする。	(1)－2　寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用 **【東京国立博物館】** ・作品の寄贈は 23 件あった。うち 10 件はインドネシアの伝統的な影絵芝居であるワヤン・クリに用いられる人形であり、平成 24 年度に新装開館予定の東洋館における東洋民族資料の展示を充実させるものである。 ・新規寄託は５件であった。 ・寄託終了は 13 件である。内、当館へ寄贈となった物が１件、当館で購入した物が１件、所有者に返却した物が 11 件（内、重文３件）である。寄託者へ返却したもののうち１件（重文）は、国（文化庁）が購入した。 ・その結果、寄託品件数は昨年度より８件減少した。 ・登録美術品については、増減がなかった。	A	順調
1122		**【京都国立博物館】** （寄贈）	A	順調

		・今年度、寄贈は 35 件で、寄贈者は 8 人であった。 内訳：絵画 14 件　書跡 8 件　金工 4 件　漆工 4 件　染織 2 件 考古 1 件　歴史資料 2 件 （寄託） ・今年度の新規寄託は 107 件。展示館の建て替え工事のため、当面平常展示での活用はできないが、例年通りの数の寄託があり、研究資料として、また特別展覧会での活用が見込まれる。 内訳：絵画50件　書跡23件　金工 10件　陶磁11件　漆工 6件 染織2件　考古 2件　歴史資料 3件		
1123		**【奈良国立博物館】** 寄贈については、３人の所蔵者から計８件の文化財を受け入れた。寄託については、新規に６件（うち重要文化財２件）の文化財を受け入れた。 ［寄贈］　彫刻　：　木造菩薩立像　１軀　平安時代（11～12 世紀） 書跡　：　公盛書状　１巻　江戸時代（正徳５年：1715） 工芸　：　鼓胴形花器　北村久齋作　１口　昭和時代 二月堂机　　１基　昭和時代 蒔絵乱箱「袖」　北村大通作　１口　昭和時代 倶利迦羅龍蒔絵経箱復元模造製作工程手板 １枚　平成時代 珉瑁螺細花形盤　北村昭斎作　１口　平成時代 考古　：　甕　１口　弥生時代（２世紀） ［寄託］　彫刻　３件　　書跡　１件　　工芸　２件	A	順調
1124		**【九州国立博物館】** 寄贈 4 件 （内訳：彫刻 1 件、染織 2 件、民族資料 1 件） 新規寄託 50 件 （内訳：絵画 2 件、陶磁 48 件）	A	順調

定量評価項目	22 年度	21 年度	目標値	評価
寄託品件数(件)				
東京国立博物館	2,726	2,734	2,400	A
京都国立博物館	6,005	5,957	5,800	A
奈良国立博物館	1,947	1,957	2,060	B
九州国立博物館	1,297	1,256	800	S

(2)　適切な管理保存

【中期目標】収蔵品全体を常時、適切な保存及び管理環境下に置くこと。特に、施設の老朽化、耐震対策に計画的かつ速やかに取り組み、貴重な文化財を次代へ継承すること。

【中期計画】
(2)　国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。

【主な計画上の評価指標】
○展示場、収蔵庫の老朽化対策や耐震対策を計画的に勝速やかに実施すること。
○保存環境の調査研究等を実施すること。

【21 年度評価における主な指摘事項】
○奈良博の展示ケース内の温湿度調査については他館の参考ともなり得ることから、成果を広報・普及することが望まれる。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(2)-1　収蔵品の管理・保存 収蔵品の適正な管理に努めるとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。	**(2)　適切な管理・保存**		
1211-1	（東京国立博物館） １）東洋館の耐震補強を図るため、改修工事を実施する。 ２）本館収蔵庫の整備計画を作成しつつ、既存収蔵庫のセキュリティ強化、環境改善の工事を実施する。 ３）列品存在確認作業（棚卸）を継続して計画的に実施する。 ４）歴史資料・和書・古写真・ガラス乾板等の旧資料部関係品を整理し、列品として編入するための作業を進める。 ５)収蔵品の保存と展示に関する環境について全館的視野にたって調査研究を進め、環境データの解析・蓄積を行う。 ６）収蔵品の生物被害を防止するため、統合的有害生物防除管理手法の徹底を図る。	**【東京国立博物館】** （処理番号 1211-1, -2 共通） ・東洋館改修について、平成 24 年度中の開館に向けて準備を進めており、耐震補強は概ね完了したが、3 月の震災の影響により展示ケース取設けに遅れが生じている。 ・耐震補強工事中の東洋館において、工事の進展に伴い、東洋館内に残置していた文化財を 2 回にわたって東洋館内を移動した。 ・本館地下収蔵庫の前室に、書画調査用の壁およびピクチャーレールを新設した。 ・平成 20 年度末から始めた、収蔵品の所在と現状を悉皆的に調査する列品情報整備事業を継続して実施した。 ・収蔵品を移動したのちの新しい所在位置情報を、RFID・バーコード等を利用して電子的に記録して管理の万全を図るシステム（文化財移動情報登録システム）の開発も、昨年度から継続して進めている。 ・歴史資料を中心とする旧資料部関係品を整理し、列品として編入するための作業を進めた。 ・収蔵庫及び展示室など 366 地点の温湿度を計測し、環境の評価及び処置を実施した。空気環境に関しては、収蔵庫及び外気など 34 地点におけるアルデヒド類及び有機酸類などを計測した。環境評価に基づき、除加湿器の設置、フィルターの交換などの措置を講じた。 ・収蔵庫など 447 地点における生物生息状況を冬季と夏季の 2 回にわ	A	順調

		たり調査した。また、ゴキブリなどの生活害虫を防除するため、夏季に防虫薬剤を全館に設置した。		
	7）展示場及び収蔵庫における地震対策の再検討と改善を図る。	・東洋館耐震工事に合わせた展示室リニューアルを期に展示ケースに使用する免震装置の検討、展示ケースの性能に関する検討を実施した。		
1212-1	（京都国立博物館） 1）平常展示館建替工事を実施する。	**【京都国立博物館】** ・平常展示館の建替工事は、平成24年度末完成・25年度開館に向けて進んでいる。	A	順調
	2）平常展示館建替事業の一環として建設された東収蔵庫を活用し、収蔵品の保存環境の充実を図る。	・平常展示館の建て替えに伴い、同館内収蔵庫から館蔵品、寄託品のすべてを東収蔵庫等にて保管を行った。		
	3）特別展示館（重要文化財 旧帝国京都博物館本館）の耐震調査の結果を基に、地震対策を具体的に検討する。	・展示室及び収蔵庫における適正な温湿度管理を行った。 ・特別展示館耐震診断業務の結果を受け、具体的な耐震補強工法等を検討した。 ・半年ごとに実施している寄託品の期間継続にともなう点検を着実に実施した。		
1213-1	（奈良国立博物館） 1）文化財保存修理所を円滑に運用するため、文化財の積極的保存を図る。 2）収蔵庫及び展示室の適正な温湿度管理の徹底を図る。	**【奈良国立博物館】** ・展示室および展示ケース内の温湿度の管理を図るため、無線 LAN によるリアルタイムの温湿度管理システムの導入し、正倉院展のような多数の観覧者がもたらす展示室内の温湿度環境の変化に、科学的データを以て即時に対応することが可能となっている。	A	順調
	3）西新館及び仏教美術資料研究センターの耐震工事等を完了する。	・西新館耐震工事については展示施設として必要とされる耐震性能を確保するための補強工事を行うとともに、展示環境の向上を意図した展示ケース・内装・照明設備等の更新を行った。また、監視面の強化を図るための監視モニターの更新を行った。仏教美術資料研究センターについては、重要文化財指定の建造物であるため、必要最低限の耐震性を確保するとともに、原状に復しつつも現在の使用意図に照らした新たな平面計画の下、内装改修を行った。		
	4）収蔵庫・展示室・文化財保存修理所のＩＰＭ（総合的有害生物管理）を実践し、文化財の有害生物からの被害防止を徹底する。	・文化財害虫の生息が確認された展示室・展示ケースを中心に防虫シートを設置し、併せて展示施設の周囲に害虫忌避剤を散布した。 ・IPM（総合的有害生物管理）の実践として、収蔵庫周辺や展示室内、調査室内の衛生環境保持のため、掃除と防塵マット交換を定期的に実施した。		
1214-1	（九州国立博物館） 1）ＩＰＭ（総合的有害生物管理）による文化財の生物被害防止を引き続き図る。	**【九州国立博物館】** ・収蔵庫・展示室等約 300 ヵ所に粘着トラップを設置し定期的モニタリングを実施し害虫侵入箇所と館内の害虫の生息状況を早期発見対処した。文化財搬入に際し、IPM メンテナンスに基づく収蔵準備作業を実施すると共に、必要に応じて殺虫殺黴処理を実施した。 ・IPM の実施については、地元 NPO 法人やボランティア活動との連携	A	順調

		に努め、文化財の適切な管理・保存について市民や地域の理解を深めた。		
	2）全館的視野にたった陳列品の展示・保存環境に係る調査研究を進め、環境データの蓄積・解析を行う。	・常設展示室 70 箇所、特別展示室約 30 箇所に温湿度計を設置して、環境データを解析した。 ・収蔵庫 30 箇所に温湿度計を設置して環境データを解析した。また、空気質やダストを調査して収蔵環境の改善を行った。		
	3）博物館科学・保存修復諸室を計画的に運用し、文化財の積極的保存を図る。	・展示品を中心に X 線 CT スキャナや三次元計測装置、三次元プリンタを用いて保存状況と構造調査を実施した。測定結果は予防的保存に役立てると共に展示に反映した。		
	(2)-2 保存環境の調査研究の実施 保存カルテの作成及び空調稼働時と休止時の変化が文化財の保管状況に与える影響の調査研究を進める。 （４館共通） 1）収蔵品を中心とした保存カルテを年１，１００件（東京：８００、京都：１００、奈良：１００、九州１００）程度作成する。	**(2)-2 保存環境の調査研究の実施**		
1211-2	（東京国立博物館） 1）収蔵庫、展示室の温湿度、汚染気体など保存環境に関する年次報告を整備する。	**【東京国立博物館】** ・本格修理のための列品調査、対症修理の実施、列品貸与の点検として合計 2368 件の保存カルテを作成した。 ・収蔵庫、展示室など 171 箇所の温湿度に関し、その状態から 3 段階に環境を分類（クラスⅠ、Ⅱ、要注意）した平成 22 年次報告書を作成した。	A	順調
	2）輸送中の文化財に生じる振動及び衝撃に関する計測と調査を実施する。	・列品の貸与・返却及び借用の際に、輸送中の梱包ケース内とトラックなどの輸送機材に発生する振動・衝撃に関し、国内外合わせの計 2 件（東大寺大仏展における輸送など）の輸送を調査した。 ・文化財の梱包に頻繁に使用される緩衝材が輸送中の振動・衝撃を伝達する際に現れる特性について評価するための実験を行った。今年度は発泡ポリエチレン(サンテックフォーム)について調査した。		
1212-2	（京都国立博物館） 1）特別展示館の環境および当該地域の気象を勘案し、文化財への負荷を減らすことを目的とした空調のミニマムインターベンション（最小限の干渉）運用の向上を図る。 2）殺虫剤・防虫剤使用の計画的段階的な廃止を進めつつ、有害生物の監視・初期対応・要因除去にあたり、全館的なＩＰＭ（総合的有害生物管理）システムの再構築を図る。	**【京都国立博物館】** ・館蔵品に係る保存カルテを作成した。 実績　108件 ・展覧会準備中に適宜巡回して害虫の持込み侵入の防止と清掃の徹底を指導、取りこぼしを拾い、開会時の虫・ゴミゼロを実現した。 ・展覧会中、展示ケース内に入った虫の採取、毛髪等ゴミの除去を開館前に行なった。 ・６月以降１０月に及んだ例年にない高温多湿のため、チャタテムシ、ダニ、クモ、シミ、コイガ、カツヲブシムシ、ゴキブリの侵入、徘徊が見られたので以下の措置を講じて駆除した。 （１）　７・８月の「上田秋成・新収品」展の前に全壁付ケース	A	順調

		床面のクリーンルーム清掃業者による吸引拭取り清掃を行ない、虫、カビ等の除去を図った。 （２） ７・８月の「上田秋成・新収品」展会期中、展示ケース内と館内のトラップによる虫の生態調査を業者に依頼して行なった。 （３） ７・８月の「上田秋成・新収品」展と１０・１１月の「高僧と袈裟」展の会期中、一部の展示ケース内に予防のための蒸散性殺虫剤プレートを置いた。 （４） １０・１１月の「高僧と袈裟」展の会期中、ゴキブリの徘徊する箇所にゴキブリ用の誘引トラップとホウ酸剤を置いた。 （５） １・２月の「筆墨精神・園田湖城」展前に、展示ケース内の蒸散性殺虫剤による燻蒸と展示ケース前床面の残効性殺虫剤の塗布を行った。 ・空調については、高温多湿の状況が続いた７・８月の「上田秋成・新収品」展では湿度を低めに設定し、低温乾燥気象下の１・２月の「筆墨精神・園田湖城」展では、温度を低めに湿度を高めに設定して作品と観覧環境の保全を図った。		
1213-2	（奈良国立博物館） １）展示室および展示ケースの温湿度管理について、無線ＬＡＮによるデータ管理システムを更に充実させる。 ２）ＩＰＭ（総合的有害生物管理）による文化財の生物被害防止のための調査を実施する。 ３）展示ケース内の温湿度・粉塵量などを継続的に計測し、ケースの調湿性能や気密性能の向上を計る。	**【奈良国立博物館】** （処理番号 1213-1 と共通） ・保存カルテについては、昨年度の途中から新たに文化財の個別写真が添付されたフォームに統一し､保存修理指導室で作成･保管する新システムに移行した。本年度から本格的に運用が軌道に乗ったことで、機動的かつ詳細に文化財の損傷状態を把握することが可能になったことに加え、保存カルテの作成件数も飛躍的に増加した。 ・展示室および展示ケース内の温湿度の管理を図るため、無線 LAN によるリアルタイムの温湿度管理システムの導入し、正倉院展のような多数の観覧者がもたらす展示室内の温湿度環境の変化に、科学的データを以て即時に対応することが可能となっている。 ・IPM の前提として、館内の文化財害虫生息状況を把握するため、文化財の保管および展示にかかわる箇所を中心に、防虫トラップを 1 ヶ月に 1 回設置・回収し、調査結果の蓄積・分析を行った。 ・防虫トラップ設置および無線 LAN 温湿度管理システムによって得られたデータは､西新館の耐震工事および新免震ケース製作に際して、展示室内・展示ケース内の温湿度環境保持や文化財害虫防止対策への重要な指針となった。		
1214-2	（九州国立博物館） １）館内の温湿度・空気質など保存環境に関するデータを蓄積する。	**【九州国立博物館】** （処理番号 1214-1 と共通） ・修理資料および収蔵資料を中心に保存カルテを作成すると共に、計画的な保存修理事業をすすめた。 ・常設展示室 70 箇所、特別展示室約 30 箇所に温湿度計を設置して、環境データを解析した。 ・収蔵庫 30 箇所に温湿度計を設置して環境データを解析した。また、空気質やダストを調査して収蔵環境の改善を行った。		

定量評価	22 年度	21 年度	目標値	評定
保存カルテの作成(件)				
東京国立博物館	2,368	1,989	800	S
京都国立博物館	108	214	100	A
奈良国立博物館	218	114	100	S
九州国立博物館	101	205	100	A

(3) 計画的な修理

【中期目標】収蔵品の保存技術の向上に努め、貴重な文化財を次代へ継承すること。

【中期計画】
(3) 修理、保存処理を要する収蔵品等については、機構の保存科学・修復技術担当者が連携し、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を取り入れ、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。

【主な計画上の評価指標】
○緊急性の高いものから計画的に修理を実施すること
○外部の専門家と連携すること
○科学的な保存技術を取り入れること

【21 年度評価における主な指摘事項】
○機器分析や画像解析など、自然科学的調査が随所でなされており、その成果の活用を期待する。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(3)-1 収蔵品の修理 修理、保存処理を要する収蔵品等については、外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。 （４館共通） １）作品の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、緊急性の高いものから１００件（東京：７０、京都：１０、奈良：５、九州１５）程度の本格修理を実施する。 **(3)-2 科学的な技術を取り入れた修理**	(3) 計画的な修理		

	伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。 （４館共通） １）紙本作品について、繊維同定を行い、作品の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 ２）修理前あるいは修理中に、蛍光Ｘ線分析、Ｘ線透過撮影などの光学的調査を行い、作品の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 （３）－1			
1311	（東京国立博物館） １）引き続き国宝・重要文化財の中長期修理計画を策定する。 ２）保存修復関係資料（前年度修理実施分）のデータベース化を図る。（７０件程度）	**【東京国立博物館】** 1)修理計画立案に向けて、修理候補作品の選定のために新たに指定・未指定合わせて 79 件の作品の調査を実施した。これまで調査を終えたものと合わせ約 2000 件の作品が今後の修理計画に反映される。調査には必要に応じ X 線透過撮影、光学実体顕微鏡なども使用した。指定品については、絵画 13 件、書跡 3 件、陶磁 3 件ついて具体的な修理計画の策定を開始し、修理方針案の作成を行った。 2)作品の応急（対症）修理を 1004 件実施。本格修理を 139 件実施した。 3)データベース構築のために 21 年度に本格修理を実施した 106 件の内、修理が完了した 98 件の修理内容についてデジタル化を実施した。21 年度に実施した本格修理に関して、東京国立博物館文化財修理報告書XIを刊行した。 4)紙本などの修理技術者として保存修復課に 3 名のアソシエイト・フェローを配置し、館内で実施する館蔵品の本格修理、応急（対症）修理を本格化させた。	A	順調
1312	（京都国立博物館） １）文化財保存修理所修復資料のデータベース化を図る。（２５０件程度）	**【京都国立博物館】** ・文化財保存修理所修復資料のデータベース化を図った。 ・昨年改訂した契約方法等にしたがって、業者選定の公平性、透明性に留意して修理を実施した。 実績　絵画４件、書跡３件、彫刻１件、漆工１件	A	順調
1313	（奈良国立博物館） （３）－1 １）修理資料のデータベース化に備えて、継続して年度毎の修理目録を作成する。	**【奈良国立博物館】** ・館蔵品のうち計 8 件の本格修理に新規着手し、年度内に 4 件完了。 内訳　絵画 2件（※うち国宝 紙本墨画淡彩山水図 1件は2ヶ年継続事業の第1年度） 書跡 1件 漆工 1件 考古資料 4 件（※うち 3 件は 2 ヶ年継続事業の第 1 年度） ・前年度に引き続き、当館紀要「鹿園雑集」13 号（平成 23 年 3 月刊行）に「奈良国立博物館文化財保存修理所　修理一覧（平成 21 年度）」を掲載予定。併せて修理報告資料の整理を進め、将来のデータベース化に備えている。	S	順調

	２）寄託品の修理の可能性を検討する。 （３）－２ １） 木造作品について、可能なものは木材樹種同定の調査を行い、作品の材料の解明および修理指針の検討に役立てる。 ２） 古墳出土の甲冑片、武具等鉄製品、木造彫刻などのＸ線撮影及び実測図作成を順次進め、材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。	・長期にわたり展示に活用する寄託品の修理を、今年度から館の修理費を用いて実施することとし、京都・妙法院所蔵の重要文化財 木造千手観音立像（第 20 号）の修理に着手した。 ・当館文化財保存修理所で修理施工された木造彫刻作品 4 件について、京都大学生存圏研究所に委託して樹種同定調査を実施し、その成果を当館研究紀要『鹿園雑集』第 13 号に掲載した。 ・館蔵品 1 件（二塚古墳出土遺物 25 点）について、平成 21～23 年度の 3 ヶ年継続の修復事業として前年度から本格修理に着手しており、本年度は第 2 年度として実施中。 ・以上、館蔵品修理は合計 9 件（うち前年度からの継続 1 件）		
1314	（九州国立博物館） １）博物館科学・保存修復諸室の積極的活用を図る。 ２）修理資料のデータベース化の調査を実施する。	**【九州国立博物館】** ①館蔵品を中心に、展示や損傷の程度を勘案して、緊急性の高い文化財（本格修理 19 件、応急修理 27 件　合計 46 件）を修理した。 ②加えて九州をはじめとする館外所蔵者負担による文化財修理 23 件のため、当館の保存修復諸施設を積極的に活用し、うち 6 件については現地修理を行った。館費修理とあわせて 69 件の修理を実施したことになる。 ③修理指針の検討のため、各分野の担当研究員とともに修理経過をみながら検討を重ねた。 ④修理指針の検討のための調査について、紙繊維の分析、絵画彩色の蛍光 X 線分析や顕微鏡観察による調査、X 線、CT スキャンを活用した調査を実施した。 ⑤カビなどの生物被害について、顕微鏡観察や写真撮影などを行った。 ⑥漆風呂、板仮張り等の修理用備品を新調した。 ⑦修理報告書および修理経過を示す画像データを整理して、データベース化に備えた。	A	順調

定量評価項目	22 年度	21 年度	目標値	評価
文化財の本格修理(件)				
東京国立博物館	139	106	70	S
京都国立博物館	9	5	10	B
奈良国立博物館	9	11	5	S
九州国立博物館	19	24	15	A
文化財修理のデータベース化(件)				
東京国立博物館	98	53	70	A
京都国立博物館	333	481	250	A

2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

(1)　展示の充実

【中期目標】　展示については、常に点検・評価を行うなど改善への取組みを進め、歴史・伝統文化を国内外に発信し、これらについての理解促進に寄与するものとなるように努めること。

①平常展は、歴史・伝統文化についての理解に資するよう、体系的・通史的な展示に努めるとともに、各館の収蔵品を法人全体として有効活用した魅力ある展示を行うこと。また、展示に関する外国語説明を一層充実させること。

②特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行うこと。また、展示方法、解説などについて機構の人的資源を最大限に生かした魅力あるものを提供すること。

③個々の展覧会において、積極的な広報に努めること。また、過去の入館者等の状況等を踏まえた適切な入館者数の目標を設定し、その達成に努めること。

【中期計画】

(1)　展示の充実

展示については、常に点検・評価を行い国民のニーズ、学術的動　　向等を踏まえた質の高いものを実施するとともに、展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、国際文化交流に配慮するなど魅力あるものとなるよう努力する。

また、見やすさ分かりやすさに配慮した展示及び解説や音声ガイド等の導入を行うことにより、日本の歴史・伝統文化及び東洋文化についての理解を深めるものとなるよう工夫する。

①平常展は、展観事業の中核と位置付け、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解の促進に寄与する展示を実施する。また、特集陳列の充実を図るなど再来館者の増加が期待できる魅力ある展示にも努め、一層の入場者の確保を図る。また、展示に関する外国語説明を一層充実させることに努め、作品キャプションについては全てに外国語訳を付すとともに、展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等を８０％以上設置する。

②特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。

(東京国立博物館)
　年３～４回程度
(京都国立博物館)
　年２～３回程度
(奈良国立博物館)
　年２～３回程度
(九州国立博物館)
　年２～３回程度

③個々の展覧会において、広報に積極的に取り組む。また、展覧会の入館者数については、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。

④黒田記念館については、東京国立博物館に所属を移し、所蔵作品を東京国立博物館でも展示するなど公開機会を拡大する。

【主な計画上の評価指標】

○国民のニーズや学術的同行を踏まえた質の高いものとすること

○観覧者の理解が深まるよう展示・解説を工夫すること

(平常展)

○平常展を魅力あるものとし、再来館者を増加させること

○作品のキャプションについては、すべてに外国語訳を付すこと

○海外からの来館者向けに、展示テーマごとに外国語の解説パネルを80%以上設置すること

(特別展)

○我が国の博物館の中心的拠点に相応しい質の高い展示とすること

○各館ごとに以下の回数程度の特別展を実施すること
東京国立博物館　3～4回
京都国立博物館　奈良国立博物館　九州国立博物館　2～3回

○個々の展覧会ごとに目標入館者数を定め、それを達成すること

○黒田記念館の所蔵作品を東京国立博物館でも展示公開するなど公開機会を拡大すること

【21 年度評価における主な指摘事項】

○パネルの設置や、広報の工夫など、地道な活動を行なうとともに、質の高い特別展の開催とも相まって、500 万人を超す過去最大の入館者数を達成したことを高く評価したい。しかし、このときこそ、快適な観覧環境について今後の課題とすべきである。

を拡大する。

○平常展においても展示替えなどの際は、マスコミなどに働きかけ、平常展にも目を向けさせることに力を注ぐ時期が到来していると考える。今後は、特別展のみならず平常展へ興味関心を促し、平常展への入館者をより増加させるなど、博物館本来の姿を目指すべきである。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
2111	**(1)　展示の充実** 東京、京都、奈良、九州４館の特色を生かし、再度、国立博物館を訪れたくなるような魅力ある平常展や特別展を実施する。 **①　平常展** 展観事業の中核と位置づけ、特集陳列等の充実を図る。また、作品キャプションについては全てに英語訳を付すとともに、時代背景等をわかりやすく伝えるために展示テーマごとの解説の充実を図り、その外国語訳に努める。 （東京国立博物館） ア　定期的な陳列替の実施（年２００回程度） イ　陳列総件数　約５，５００件（東洋館閉館のため） ウ　本館「日本美術の流れ」をはじめとする日本美術関係の展示、平成館の日本考古展示の更なる充実を図る。 エ　東洋館が耐震改修工事のため閉館となるため、表慶館・本館などにおいて東洋考古・美術の展示を積極的に進める。 オ　改修後の東洋館の展示案を検討する。 カ　特集陳列 ２２年度は東洋館が改修工事のため通年休館となり、特集陳列を実施する展示場が減少するため特集陳列の数は例年より減らさざるをえない。東洋館展示の代替として、本館においても東洋美術・考古の特集展示を実施する。 ・古墳時代の甲冑－帯金式甲冑の成立と展開－（9 月 14 日～12 月 12 日） ・中国書画精華－海を渡ってきた名品たち－（10 月 19 日～12 月 12 日）	**(1)展示の充実** **①平常展** **【東京国立博物館】** (陳列替回数、陳列総件数は別途表示) ・本館、平成館、法隆寺宝物館、表慶館において、日本の考古、美術、工芸、民族資料、歴史資料および東洋の考古、美術、工芸に関する平常展示を行った。 ・平成 23 年 1 月から、「平常展」を「総合文化展」に改称し、「平常展はいつも同じ」というイメージの払拭を図った。 ・11 月から 12 月にかけて本館 1 階の 12～15 室を改装した。 ・合わせて、本館 1・2 階の展示室のコーナー解説パネルを、すべて日・英・中・韓の 4 言語表記とした。また題箋のデザインを改訂した。 ・改修後の東洋館の展示案について、展示室・展示ケースの内装、展示手法、展示台・演示具等について具体的に検討した。 ・「古墳時代の甲冑」「中国書画精華－海を渡ってきた名品たち－」「博物館に初もうで」「海外の日本美術品の修復」「平成２２年 新指定 国宝・重要文化財」等、53 件の特集陳列を行った。	A	順調

	・「博物館に初もうで」（23年1月2日～1月30日）等 キ　東京文化財研究所関係企画 ・海外の日本美術品の修復（5月11日～5月23日） ク　文化庁関係企画 ・「平成２２年 新指定 国宝・重要文化財」（仮称）（4月27日～5月9日） 平成２２年（2010）に新たに国宝・重要文化財に指定される文化財を展示する。	・平成館考古展示室において，埴輪コーナーの解説をデジタルサイネージによる4言語表記とした。 ・震災の影響については、観覧者・展示品・設備等への直接の被害は無かったが、安全確認と社会的諸事情により23年3月12日～28日まで臨時休館した。また、23年3月29日から当分の間（23年4月末まで）開館時間を10時～16時とし、表慶館・法隆寺宝物館を休館して本館・平成館のみ開館した。		
2112	（京都国立博物館） 平常展示館建替工事に伴い、平常展は休止せざるをえないが、金沢能楽美術館にて当館収蔵品展を開催する（共催、4月17日～5月30日）ほか、博物館美術館への収蔵品の貸与を積極的に進め、ウェブページで情報を公開する。	**【京都国立博物館】** 平常展示館建替工事にともない、平常展示は休止した。 そのため下記のように、外へ向かっての収蔵品の公開に努めた。 ・「京都国立博物館所蔵能装束展」（金沢能楽美術館）会期：４月１７日～５月３０日 ・国内・国外への博物館美術館への収蔵品の貸与を積極的に進めた。 ・上記の貸出作品の情報をウェブサイトで公開している。	A	ほぼ順調
2113	（奈良国立博物館） ア　活発な収集と新しい資料の発掘により平常展の充実を図る。 ・西新館　考古・絵画・書跡・工芸部門の平常展示 西新館耐震工事のため、正倉院展終了後に開催する。工事完了後は展示ケース・照明など、今回の工事で充実した設備を最大限活用し、より快適な鑑賞環境を提供する。 ・本館（１～１３室）　彫刻部門の平常展示 西新館耐震工事に伴って本館を特別展「大遣唐使展」の会場として使用するため、７月２０日まで休止し、７月２１日には新規収蔵品を含む、より充実した内容でリニューアルオープンする。同時に照明やキャプションを一新し、快適な鑑賞環境を提供する。 ・本館（１４・１５室）　中国青銅器の平常展示 本館における「大遣唐使展」会期中および西新館耐震工事中も開催。 ・「注目の逸品」コーナーを設け、観覧者の関心を喚起する。 イ　定期的な陳列替の実施（年８５０回程度） ウ　陳列総件数　約８５０件	**【奈良国立博物館】** 平成22年7月21日、本館の展示室内の照明設備を一新するとともに、「なら仏像館」と新たに命名し、リニューアルを行った。また、併せて平常展の名称を「名品展」とし、年度を通して、なら仏像館における「珠玉の仏像」（彫刻部門）、青銅器館における「中国古代青銅器」（考古部門）を開催し、西新館では「珠玉の仏教美術」（絵画・書跡・工芸・考古部門）を開催した。そのなかには、「国宝を味わう」（12月7日～1月10日、西新館）、「縄文のムラ」（1月18日～2月16日、西新館）、「シルクロードを旅した漢代漆器」（1月18日～2月16日、西新館）の３回の特集展示が含まれている。年度を通して、なら仏像館における名品展「珠玉の仏像」（彫刻部門）、青銅器館における名品展「中国古代青銅器」（考古部門）を開催し、西新館では名品展「珠玉の仏教美術」（絵画・書跡・工芸・考古部門）を開催した。そのなかには、「国宝を味わう」（12月7日～1月10日、西新館）、「縄文のムラ」（1月18日～2月16日、西新館）、「シルクロードを旅した漢代漆器」（1月18日～2月16日、西新館）の３回の特集展示が含まれている。 （陳列替回数、陳列総件数は別途表示）	A	順調

	エ　特別陳列により平常展の充実を図る。 独創的な研究テーマ及び地域に密着した研究テーマによる特別陳列の充実 ・「おん祭と春日信仰の美術」（12月4日～23年1月16日） ・「お水取り」（23年2月5日～3月14日） オ　考古資料の相互貸借事業の実施	企画展示として恒例の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」（12月7日～1月16日、東新館）、「お水取り」（2月5日～3月14日、東新館）を実施した。 ・は、考古資料相互活用促進事業として「縄文のムラ」を開催した。		
2114	（九州国立博物館） ア　定期的な陳列替の実施（年３００回程度） イ　陳列総件数　約８００件 ウ　平常（文化交流）展の部分的なリニューアルによって充実を図る。 ・来館者にとって分かり易い展示室内サインを開発し、快適な鑑賞環境を提供する。 エ　トピック展示により、独創的なテーマおよび地域に密着したテーマを掘り下げる（日程はいずれも予定）。 ・「邪馬台国　九州ＶＳ近畿」（仮称）（関連３室　23年1月1日～2月20日） ・「湖の国の名宝」（仮称）（関連９室・１１室　6月11日～9月5日） ・「南蛮」（関連１１室　4月28日～6月6日）等 オ　他国語対応の展示室マップの作成 ・英語・中国語・韓国語版の文化交流展示室のマップを継続して作成する。	**【九州国立博物館】** （陳列替回数、陳列総件数は別途表示） ○トピック展示のみならず、分り易い文化交流展示室のサインを開発し、快適な観覧環境を提供した。 ○トピック展示ではちらしやポスター、リーフレットや図録などを作成し、関連したシンポジウムも開催して、展示だけではない情報発信ができた。 ○特定テーマを掘り下げたトピック展示を12回実施し、「湖の国の名宝-最澄がつないだ近江と太宰府-」(6月11日～9月5日)など当館外部の機関と共同で主催したトピック展示も３回実施した。 ○中国・韓国からの来館者に対し、中国語ガイドブックおよび英語・中国語・韓国語の簡単な展示解説付きマップを作成し、展示室の内容を紹介した。	A	順調
2121-1	**②　特別展** （共同企画） ・特別展「細川家の至宝－珠玉の永青文庫コレクション－」 （東京国立博物館、［23年度京都国立博物館、九州国立博物館］） ・特別展「誕生！中国文明」 （東京国立博物館、九州国立博物館、［２３年度 奈良国立博物館］） （東京国立博物館） ２２年度は海外展を重視し、５件の海外展及び１件の特別協力を行う。目標入場者数　９８万人（海外展を除く。） ア　特別展「細川家の至宝－珠玉の永青文庫コレクション－」（4月20日～6月6日） 熊本・細川家に伝来、収蔵される文化財の中から代表的な優品を一堂に展観。（目標入場者数１６万人）	**②特別展** **【東京国立博物館】** **ア　特別展「細川家の至宝－珠玉の永青文庫コレクション－」** ・開会期間　平成22年4月20日(火)～6月6日(日)（43日間） ・会場　平成館特別展示室第1～4室 ・主催　東京国立博物館、永青文庫、NHK、NHKプロモーション、朝日新聞社 ・後援　文化庁 ・協賛　トヨタ自動車、日本写真印刷 ・作品件数　284件（うち国宝：8件　重要文化財：27件　重要美術品：18件） ・入館者数　182,470人 ・入場料金　一般1500円(1300円／1200円)、大学生1200円(1000円／900円)、高校生900円(700円／600円) 中学生以下無料　（　）内は前売り	A	順調

		／20名以上の団体料金 ・アンケート結果　満足度　82.8%		
2121-2	イ　特別展「誕生！中国文明」（7月6日～9月5日） 中国・河南省の全土から名品を選定し、中国文化の真髄に迫る。（目標入場者数２２万人）	**イ　特別展「誕生！中国文明」** ・開会期間　平成22年7月6日(火)～9月5日(日)　(55日間) ・会場　平成館特別展示室第1～4室 ・主催　東京国立博物館、読売新聞社、大広、中国河南省文物局 ・後援　中国大使館 ・協賛　清水建設、光村印刷、トヨタ自動車、三城ホールディングス ・協力　日本航空、日本貨物航空、TBSラジオ ・作品件数　147件 ・入館者数　105,538人 ・入場料金　一般1500円(1300円／1200円)、大学生1200円(1000円／900円)、高校生900円(700円／600円)中学生以下無料 ＊(　)内は前売り／20名以上の団体料金 ・アンケート結果　満足度75.5%	C	一部要注意
2121-3	ウ　光明皇后１２５０年御遠忌記念　特別展「東大寺大仏―天平の至宝―」（10月8日～12月12日） 東大寺大仏開眼にかかわる文化財の中から天平期の寺宝を中心に名品を展観。（目標入場者数４２万人）	**ウ　光明皇后1250年御遠忌記念　特別展「東大寺大仏－天平の至宝－」** ・開会期間　平成22年10月8日(金)～12月12日(日)　(59日間) ・会場　平成館特別展示室第1～4室 ・主催　東京国立博物館、華厳宗大本山東大寺、読売新聞社 ・後援　文化庁、平城遷都1300年記念事業協会 ・協賛　しみず建設、大和証券、トヨタ自動車、ニッセイ同和損害保険、藤田観光、文化服装学院、みずほ銀行、光村印刷 ・特別協力　ソニー、ソニービジネスソリューション ・協力　日本ヒューレット・パッカード、エヌビディア、エルザジャパン ・映像協力　凸版印刷 ・作品件数　67件（うち国宝11件、重文18件、正倉院宝物12件） ・入館者数　232,791人 ・入場料金　一般1500円（1300円/1200円）、大学生1200円（1000円/900円）、高校生900円(700円/600円)中学生以下無料 ＊(　)内は前売り／20名以上の団体料金 ・アンケート結果　満足度　74.4%	C	一部要注意
2121-4	エ　平山郁夫文化財保護活動顕彰特別展「未来への遺産」（仮称）（23年1月～3月）（予定） 文化財保護の重要性と課題等を関連する美術工芸品によって展観。（目標入場者数１８万人）	**エ　文化財保護法制定60周年記念　特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」** ・開会期間　平成23年1月18日（火）～3月6日（日）（42日間） ・会場　平成館特別展示室第1～4室 ・主催　東京国立博物館、ＮＨＫ、ＮＨＫプロモーション、朝日新聞社 ・特別協力　平山郁夫シルクロード美術館、法相宗大本山薬師寺 ・協賛　大日本印刷	A	順調

		・協力　文化遺産国際協力コンソーシアム、東京美術倶楽部、朝日生命保険、あいおいニッセイ同和損害保険 ・後援　　外務省、文化庁 ・作品件数101件(うち重要文化財5件) ・入館者数　188,402人 ・入場料金　一般1500円(1300円／1200円)、大学生1200円(1000円／900円)、高校生900円(700円／600円)中学生以下無料 ＊(　)内は前売り／20名以上の団体料金 ・アンケート結果　満足度80.2%		
2121-5	オ　海外展「日本の美　５０００年」（仮称）（5月4日～6月28日） 会場：トプカプ宮殿博物館（トルコ） ２０１０年の「トルコにおける日本年」を記念し、日本美術の精華を紹介。	**オ　文化庁海外日本古美術展「日本の美　5000年(5000 Years of Japanese Art)」** ・開会期間　平成22年5月5日(水)～ 6月28日(月)（49日間） ・会場　トプカプ宮殿博物館（トルコ共和国・イスタンブール） ・主催　東京国立博物館、文化庁、トルコ共和国文化観光省 ・作品件数　47件（うち国宝：2件　重要文化財：3件） ・入場者数　607,734人（但し、当該期間の総入館者数） ・入場料金　無料	A	順調
2121-6	カ　海外展「日本美術展」（仮称）（未定） 会場：ヒューストン美術館（アメリカ） 東京国立博物館所蔵の日本美術の優品を精選し展示。	**カ　海外展「仏教美術と宮廷の美」（仮称）** ・22年度開催予定であったヒューストン美術館（アメリカ合衆国）における本展は、諸般の事情により、平成23年度に実施予定となった。	F	－
2121-7	キ　「上都から大都へ：クビライ・カーンの世界」展（9月2日～23年1月2日） 会場：メトロポリタン美術館（アメリカ）（東京国立博物館特別協力） 元時代に制作された書画、彫刻、工芸などの至宝を一堂に集め展示。	**キ　The World of Khubilai Khan: Chinese Art in the Yuan Dynasty（クビライ・カーンの世界：元王朝の中国美術）** ・開会期間　平成22年9月20日（月）～平成23年1月2日（日）（105日間） ・会場　メトロポリタン美術館（アメリカ合衆国・ニューヨーク） ・主催　メトロポリタン美術館 ・特別協力　東京国立博物館、奈良国立博物館、中華文物交流協会 ・作品件数　220件（うち重要文化財：3件） ・入場者数　166,476人	A	順調
2121-8	ク　「よみがえるヤマトの王墓－東大寺山古墳と謎の鉄刀」（9月22日～11月23日） 会場：天理大学附属天理参考館 東大寺山古墳出土遺物全点調査した研究の成果を一般に公開。	**ク　創立80周年記念特別展「よみがえるヤマトの王墓－東大寺山古墳と謎の鉄刀－」** ・開会期間　平成22年9月22日(水)～11月23日(火・祝)（56日間） ・会場　天理大学附属天理参考館（奈良県天理市） ・主催　天理大学附属天理参考館、東京国立博物館 ・後援　天理市、奈良県教育委員会、天理市教育委員会、読売新聞大阪本社、読売テレビ放送、奈良テレビ放送 ・作品件数52件（うち重要文化財：20件） ・入場者数　11,139人 ・入場料金　一般400円・小中学生200円・20名以上の団体300円	A	順調

2121-9	ケ　海外展 上海市万国博覧会開催記念「唐宋元絵画珍品展」（仮称）（9月29日～11月23日）　　会場：上海博物館（中国） 宋元絵画の名品を展示し、その意義や価値に迫る。	**ケ　海外展　万国博覧会開催記念「千年丹青―日本中国珍蔵宋元画精品展」** ・開会期間　平成22年9月28日(火)～11月23日(火)（56日間） ・会場　上海博物館（中華人民共和国・上海） ・主催　東京国立博物館、上海博物館 ・作品件数　64件（うち国宝6件、重要文化財22件、重要美術品2件） ・入場者数　331,275人（但し、当該期間の総入館者数）	A	順調
2121-10	コ　海外展 上海市万国博覧会開催記念「鑑真と空海－日中文化交流の検証」展（仮称）（9月29日～11月23日）会場：上海博物館（中国） 万国博覧会の開催を記念し、鑑真と空海に焦点を当て、日中文化交流の意義を検証。	**コ　海外展　万国博覧会開催記念「鑑真と空海―日中文化交流の顕彰」** ・開会期間　平成22年9月28日(火)～11月23日(火)（56日間） ・会場　上海博物館（中華人民共和国・上海） ・主催　東京国立博物館、文化庁、上海博物館 ・作品件数　3件（うち国宝：1件　重要文化財：2件） ・入場者数　331,275人（但し、当該期間の総入館者数）	A	順調
2121-11	サ　海外展「高麗仏画」（10月11日～11月21日） 会場：国立中央博物館（韓国）（東京国立博物館特別協力） 国立中央博物館新館開館5周年を記念し、高麗仏画を一堂に集め、その優れた特色を究明	**サ　海外展「高麗仏画大展」** ・開会期間　平成22年10月12日(火)～11月21日(日)（42日間） ・会場　国立中央博物館・企画展示室（大韓民国･ソウル） ・主催　国立中央博物館 ・特別協力　東京国立博物館 ・作品件数　108件（うち重要文化財11件） ・入場者数　88,659人	A	順調
	（京都国立博物館） 目標入場者数　２０万人	**【京都国立博物館】**		
2122-1	ア　特別展覧会「没後４００年　長谷川等伯」（4月10日～5月9日） 等伯の生涯を追いながら幅広い画業を紹介。（目標入場者数　１３万人）	**ア　特別展覧会「没後 400 年　長谷川等伯」** ・開催期間　22年4月10日～5月9日（27日間） ・会　　場　特別展示館 ・主　　催　京都国立博物館、毎日新聞社、ＮＨＫ京都放送局、ＮＨＫプラネット近畿 ・陳列品総件数 75件（うち国宝 3件、重要文化財 30件、重要美術品 1件） ・入場者数　244,347人（目標130,000人） ・入場料金　一般1,400円、大高生900円、中小生500円 ・アンケート結果　満足度　91% ・関連講座　3回	S	順調
2122-2	イ　特別展観「没後２００年記念　上田秋成」（7月17日～8月29日） 上田秋成の文事と彼と交流した画家たちの書画を展示。（目標入場者数　２万人）	**イ　特別展観「没後 200 年記念　上田秋成」** ・開催期間　22年7月17日～8月29日（39日間） ・会　　場　特別展示館　１～５室 ・主　　催　京都国立博物館、日本近世文学会 ・陳列品総件数　82件 ・入場者数　21,705人（目標20,000人） ・入場料金　一般800円、大高生500円、中学生以下無料 ・アンケート結果　満足度　78%	A	順調
		・関連講座　10回		
2122-3	ウ　特集陳列「新収品展」（7月17日～8月29日） 平成２０～２１年に収集した作品を展示。（上田秋成展と同時開催）	**ウ　特集陳列「新収品展」** ・開催期間　22年7月17日～8月29日（39日間） ・会　　場　特別展示館　６～10室 ・主　　催　京都国立博物館 ・陳列品総件数　99件 ・関連講座　1回	A	順調
2122-4	エ　特別展覧会「高僧と袈裟―ころもを伝え　こころを繋ぐ―」（10月9日～11月23日） 袈裟を通して日本の仏教と染織の歴史を辿る。（目標入場者数　２万人）	**エ　特別展覧会「文化財保護法 60 年記念事業　高僧と袈裟―ころもを伝え　こころを繋ぐ―」** ・開催期間　22年10月9日～11月23日（40日間） ・会　　場　特別展示館 ・主　　催　京都国立博物館（自主展） ・陳列品総件数　121件（うち国宝15件、重要文化財41件） ・海外からの出陳件数　2件（中国・中国絲綢博物館） ・入場者数　19,297人(目標20,000人) ・入場料金　一般1200円、大高生800円、中小生400円 ・アンケート結果　満足度84% ・関連講座　3回、関連国際シンポジウム　1回	A	順調
2122-5	オ　特別展覧会「上野コレクション寄贈50周年記念　中国の書画―深遠なる墨美の世界―（仮）」（23年1月8日～2月20日） 中国書画の優品を展示。（目標入場者数　３万人）	**オ　特別展覧会「上野コレクション寄贈 50 周年記念　筆墨精神　－中国書画の世界－」** ・開催期間　23年1月8日～2月20日（39日間） ・会　　場　特別展示館　1～7室 ・主　　催　京都国立博物館 ・陳列品総件数　113件（うち国宝10件、重要文化財23件、重要美術品2件） ・入場者数　37,535人(目標30,000人) ・入場料金　一般1200円、大高生800円、中小生400円 ・アンケート結果　満足度88% ・関連講座　3回	A	順調
2122-6	カ　特集陳列「生誕１２５年記念　篆刻家 園田湖城」（23年1月8日～2月20日） 篆刻家園田湖城の作品や関連する資料を展示。（中国の書画展と同時開催）	**カ　特集陳列「生誕 125 年記念　篆刻家　園田湖城」** ・開催期間　23年1月8日～2月20日（39日間） ・会　　場　特別展示館　8～10室 ・主　　催　京都国立博物館 ・陳列品総件数　169件 ・関連講座　1回 ・関連イベント　1回（座談会「知られざる園田湖城の篆刻芸術」）	A	順調
	キ　特別展覧会「法然上人８００回忌　法然－生涯と美術－」（23年3月26日～5月8日） 法然上人絵伝を軸に法然の生涯と思想を遺された文化財によって	**キ　（23 年度評価にて自己点検報告を行う）**	－	－

	展望。			
2122-7		**ク　研究成果特別公開「古代の輝きを求めて　～デジタル計測でよみがえった古代青銅鏡の世界～」** ・開催期間　7 月 17 日～8 月 29 日(39 日間) ・会　　場　特別展示館　中央室 ・主　　催　京都国立博物館 ・陳列品総件数　8 件　（復元品 2 点を含む） ・実演デモ：2 回	A	順調
2122-8		**ケ　京都国立博物館所蔵能装束展（金沢能楽美術館）** ・展覧会名称　京都国立博物館所蔵能装束展 ・開催期間　4 月 17 日～5 月 30 日（38 日間） ・会場　金沢能楽美術館 2 階　メイン展示室 ・主催　金沢能楽美術館・京都国立博物館 ・陳列品総件数　18 件 ・入場者数　4,761 人 ・入場料金　一般・大学生 300 円、65 歳以上 200 円、高校生以下無料 ・アンケート結果　満足度 96%	A	順調
	（奈良国立博物館）	**【奈良国立博物館】**	S	順調
2123-1	目標入場者数　３１万人 ア　「平城遷都１３００年記念　大遣唐使展」（4月3日～6月20日） 中国・唐の文化を日本に伝え、古代史に巨大な足跡をのこす遣唐使の全容を紹介。（目標入場者数　１２万人）	**ア　「平城遷都 1300 年記念　大遣唐使展」** ・会期　平成 22 年 4 月 3 日（土）～6 月 20 日（日） ・会場　奈良国立博物館東新館・本館 ・主催　奈良国立博物館、読売新聞大阪本社、NHK 奈良放送局、NHK プラネット近畿 ・共催　平城遷都 1300 年記念事業協会、仏教美術協会 ・後援　文化庁 ・協賛　岩谷産業、大阪芸術大学、関西電力、大日本印刷、大和ハウス工業、ニッセイ同和損害保険、非破壊検査 ・協力　日本香堂、日本航空、日本貨物航空、近畿日本鉄道、JR 西日本、寧波旅日同郷会 ・陳列品総数　261 件（うち国宝 42 件、重要文化財 87 件、米国からの出陳 5 件、中国からの出陳 15 件） ・入場者数　202,166 人（目標 120,000 人） ・観覧料金　一般 1400 円、高・大生 1,000 円、小・中生 500 円 ・アンケート結果　満足度 84.6%		
2123-2		**なら仏像館開幕記念特別展「至宝の仏像」** ・会　期　　7 月 21 日～9 月 26 日（60 日間） ・会　場　　奈良国立博物館　なら仏像館 ・主　催　　奈良国立博物館	S	順調

		・特別協力　　読売新聞社 ・協　力　　東大寺、日本香堂、仏教美術協会 ・後　援　　文化庁 ・陳列品総数　99 件（国宝 7 件、重要文化財 57 件） ・入場者数　　81,342 人（目標 10,000 人） ・観覧料金　　一般 1,000 円　高・大生　700 円 ・アンケート結果　満足度　86.9%		
2123－3	イ　「仏像修理１００年展」（仮題）（7月21日～9月26日） 明治時代から現代までの仏像修理進化の歴史を、実際の作品・模造・模刻・修理資料などを通して語る。（目標入場者数　１万人）	**イ　特別展「仏像修理 100 年」** ・会　　期　7 月 21 日（水）～9 月 26 日（日）　60 日間 ・会　　場　奈良国立博物館　東新館 ・主　　催　奈良国立博物館 ・特別協力　財団法人美術院　読売新聞社 ・後　　援　文化庁 ・協　　力　東大寺　日本香堂　仏教美術協会 ・陳列品総数　97 件　（国宝 3 件、重要文化財 10 件） ・入場者数　　81,342 人（「至宝の仏像」と一体でカウント） ・観覧料金　　一般 1,000 円　高・大生 700 円 ・アンケート結果　満足度 87.9%	S	順調
2123-4	ウ　「第６２回正倉院展」（予定） 正倉院宝庫に伝わる宝物約７０件を展示。（目標入場者数　１８万人）	**ウ　第 62 回正倉院展** ・会期　　10 月 23 日～11 月 11 日（20 日間） ・会場　　奈良国立博物館　東新館・西新館 ・主催　　奈良国立博物館 ・特別協力　　読売新聞社 ・協力　　NHK 奈良放送局、小学館「和樂」編集部、奈良テレビ放送、日本香堂、財団法人仏教美術協会 ・協賛　　NTT 西日本、近畿日本鉄道、JR 東海、JR 西日本、ダイキン工業、大和ハウス工業、帝塚山学園・帝塚山大学、日本生命、白鶴酒造 ・出陳宝物数　　71 件 ・入館者数　　294,804 人 ・観覧料金　　一般 1000 円　高大生 700 円　小中生 400 円 ・アンケート結果　　満足度 77.1%	A	順調
2124-1	（九州国立博物館） 目標入場者数　３０万人（海外展を除く。） ア　「パリに咲いた古伊万里の華」（4 月 6 日～6 月 13 日） 江戸時代ヨーロッパに輸出され愛玩を受けた古伊万里磁器を紹介。（目標人数　５万人）	**【九州国立博物館】** **ア　「パリに咲いた古伊万里の華」** ・開会期間：　4 月 6 日（火）～6 月 13 日（日）（61 日間） ・会場：　九州国立博物館　特別展示室 ・主催：　九州国立博物館・福岡県、日本経済新聞社、西日本新聞社、ＴＶＱ九州放送 ・陳列品総件数：　165　件	A	順調

		・入場者数： 84,738 人（目標入場者数 50,000 人） ・入場料金： 一般 1,300 円、高大生 1,000 円、小中生 600 円 アンケート結果：満足度 95%		
2124-2	イ 「馬 アジアを駆けた二千年」(7 月 13 日～9 月 5 日) 大陸を渡って伝来し日本で独自に発展した馬の文化を紹介。(目標人数 5 万人)	**イ 「馬 アジアを駆けた二千年」** ・開会期間： 7 月 13 日（火）～9 月 5 日（日）(48 日間) ・会 場： 九州国立博物館 特別展示室 ・主 催： 九州国立博物館・福岡県、(財) 全国競馬・畜産振興会、西日本新聞社、ＴＶＱ九州放送 ・陳列品総件数： 133 件（国宝 23 件、重文 24 件、中国国家一級文物 4 件） ・入場者数： 42,022 人（目標入場者数 50,000 人） ・入場料金：一般 1,300 円、高大生 1,000 円、小中生 600 円 ・アンケート結果：満足度 80%	A	順調
2124-3	ウ 「誕生！中国文明」(10 月 5 日～11 月 28 日) 文化芸術の基礎が育まれた王都河南省の文物の優品を紹介。(目標人数 9 万人)	**ウ 「誕生！中国文明」** ・開会期間： 平成 22 年 10 月 5 日（火）～11 月 28 日（日）(48 日間) ・会 場： 九州国立博物館 特別展示室 ・主 催： 九州国立博物館・福岡県、読売新聞社、ＦＢＳ福岡放送、中国河南省文物局 ・陳列品総件数：147 件（中国国家一級文物 63 件） ・入場者数： 53,409 人（目標 90,000 人） ・観覧料：一般 1,300 円、高大生 1,000 円、小中生 600 円 ・アンケート結果：満足度 89%	B	ほぼ順調
2124-4	エ 「没後１２０年 ゴッホ展－こうして私はゴッホになった－」(23 年 1 月 1 日～2 月 1 日) オランダ・ファン・ゴッホ美術館、クレラー・ミュラー美術館所蔵の珠玉の名品を紹介。(目標人数 １１万人)	**エ 「没後 120 年 ゴッホ展」** ・開会期間：平成 23 年 1 月 1 日（土）～2 月 13 日（日）(42 日間) ・会場： 九州国立博物館 特別展示室 ・主催： 九州国立博物館・福岡県、西日本新聞社、ＴＮＣテレビ西日本、ＴＶＱ九州放送 ・陳列品総件数： 122 件 ・入場者数： 354,311 人（目標入場者数 110,000 人） ・入場料金： 一般 1,500 円、高大生 1,000 円、小中生 600 円 ・アンケート結果：満足度 85%	S	達成
2124-5	オ 海外展「ふたつの国の巧と美」(仮称)(23 年 1 月 15 日～3 月 13 日) 会場：タイ王国バンコク国立博物館（タイ王国バンコク都） 九博の国際協力事業の成果として実施。日本・タイの文化を比較して展示し、共通性と差異を示す。本展は２３年度に帰国展として九博で実施の予定。	**オ アジア友好日本古美術海外展「日本とタイ―ふたつの国の巧と美」** ・開会期間：平成 23 年 1 月 15 日(土)～3 月 13 日(日)月・火休館(41 日間) ・会場： タイ王国バンコク国立博物館 ・主催： 文化庁、九州国立博物館・福岡県、タイ王国文化省芸術局 ・陳列品総件数：日本側：56 件（うち国宝 2 件、重要文化財 7 件、重要美術品 2 件)、タイ側：51 件 ・入場者数： 21,525 人 ・入場料金： 一般 50 バーツ、学生 無料	A	順調

		・アンケート結果：実施していない		
	③ 展覧会広報活動の取組み	**③展覧会広報の取組み**		
2130	法人としての広報活動を展開する。 ・法人概要、年報を作成する。 ・法人ウェブサイトを運用する。 （4 館共通） 1）年間スケジュールリーフレットの制作・配付 2）マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動の展開 3）ウェブサイトによる情報提供 （東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館） 1）メールマガジンの配信	**【国立文化財機構】** ・法人の『平成 22 年度概要』を 22 年 7 月に発行し、PDF 版をウェブ掲載した。 ・法人の『平成 21 年度年報』を 23 年 3 月に発行し、PDF 版をウェブ掲載した。 ・法人ウェブサイト(http://www.nich.go.jp)のリニューアルを、23 年 4 月 1 日オープンに向けて進めた。特に、掲載情報の整理・分類を重点的に行い、利用者が必要とする情報にアクセスしやすくなるよう配慮した。また、機構の全体像が一目で分かるようトップページに各施設の画像を配するとともに、簡易な英文ページを追加した。	A	順調
2131	（東京国立博物館） 平常展の活性化に重点をおいた広報活動を行う。 1）「東京国立博物館ニュース」の編集・発行・配付（年６回） 2）広報・宣伝制作物の企画・制作・配布等 3）「総合案内パンフレット」（７カ国語）「フロアガイド」（４カ国語）等パンフレットの制作・配付 4）携帯電話サイトの立上げと情報配信 5）ウェブサイトのリニューアル	**【東京国立博物館】** ・平常展の活性化を目指した広報を行った。 ・東京国立博物館ニュース、総合パンフレット（7ヶ国語）、フロアガイド（4ヶ国語）、展示・催し物のご案内、庭園ガイドマップを改訂発行した。新たに構内マップ(日英 2 カ国語)を作成、正門前に設置した。 ・モバイルサイトを開設し、5 月 6 日より公開した。 ・ウェブサイトについて 2011 年 4 月オープンを目指して、全面リニューアルを行っている。 ・博物館情報をメールマガジンにより配信した。 ・2011 年 1 月 2 日本館リニューアルオープン、平常展から総合文化展への改名をきっかけとした[トーハク？]キャンペーンを実施。タレントを起用したイメージポスターを製作し、交通広告、新聞広告などで大規模な広報展開をはかり、来館者増に貢献した。 ・マスコミ媒体と連携した PR を行った。 ・共催者、ＰＲ会社と協力し特別展の大規模プロモートを実施した。	S	順調
2132	（京都国立博物館） 1）「博物館だより」の発行・配布（年４回） 2）「News Letter」(英文）の発行・配布（年４回） 3）モバイルサイトによる情報提供（随時更新） 4）「館内案内」リーフレット（６カ国語）の作成・配布 5）東山地区の建仁寺・智積院・東福寺などの寄託社寺と連携し、チラシの交換、ホームページのリンク等の広報活動を展開 6）京都市内４美術館博物館で連携し、共通の展覧会情報パンフレットを作成・配布するなどの広報を展開する。	**【京都国立博物館】** ・「博物館だより」の発行・配布（4 回）した。 ・「Newsletter」の発行・配布（4 回）した。 ・モバイルサイトによる情報提供をした。 ・「館内案内」リーフレット（6ヶ国語）の作成・配布した。 ・東山地区の建仁寺・智積院・東福寺などの寄託社寺と連携し、チラシの交換、ホームページのリンク等の広報活動を展開した。 ・京都市内４館（京都国立博物館、京都国立近代美術館、京都府文化博物館、京都市美術館）の連携協力の提携を結び、共通の展覧会情報パンフレットを作成・配布した。 ・マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開した。	A	順調

		・各展覧会の招待日にプレス発表会を開催した。 ・展示予定の新発見作品について、特別にプレス発表会を開催した。 ・「年間スケジュール」リーフレットの作成・配布した。 ・メールマガジンを発行（15回）した。 ・ウェブサイトによる情報提供（日本語・英語）をした。		
2133	（奈良国立博物館） 1）特別展及び平常展の魅力を紹介した博物館だよりを発行する。（年４回） 2）広報・宣伝制作物の企画・制作・配布等。 3）館内配置図リーフレット（７カ国語）の作成・配布。 4）地元の自治体・商工団体・観光団体等と連携した広報活動の展開を図る。 5）液晶ディスプレイによる情報提供を継続して行う。 6）東大寺、春日大社の寄託社寺及び賛助会員企業と連携し、特別展等のチラシを配布する。 7）文化大使を継続し、広報活動を行う。 8）広報の外注化を検討する。	**【奈良国立博物館】** ・奈良国立博物館だより　年４回発行した。 ・奈良国立博物館展示案内を発行した。 ・特別展「大遣唐使展」、「仏像修理100年」、「至宝の仏像」及び「第62回正倉院展」、の広報のため、ポスター（B1、B2、B3）、チラシを作成した。 ・特別展では開催約１ヶ月前に記者発表を行った。 ・特別展、特別陳列の会期前日にプレスプレビューを行った。 ・「正倉院展」をはじめ、特別展・特別陳列では、JR西日本、近鉄、阪神電車とタイアップ広報を行った。 ・特別展「大遣唐使展」では、ツイッターによる展覧会情報の発信を行った。 ・電子メールマガジンによる博物館情報の発信　配信回数12回、登録者6,079人 ・奈良国立博物館リーフレット（７ヶ国語）発行した。 日本語80,000部,英語11,500部、韓国語6,500部、中国語3,500部、仏・独・西語各1,000部 ・（社）平城遷都1300年記念事業協会発行の「せんとくんクーポン」に協力、観覧料金の割引を行った。 ・特別展「仏像修理100年」・「至宝の仏像」では、割引引換券を作成し、観光案内施設等で配布した。 ・液晶ディスプレイによる有効な情報提供の方策を検討した。 ・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」「お水取り」では、ポスター（B2）を作成、観覧料金の割引券付きチラシを作成し、春日大社、東大寺、観光案内施設等で配布した。 ・仏像ガールさんを文化大使に任命、ブログ等で展覧会情報等を発信してもらった。 ・新聞社、テレビ局の広報媒体を活用した。 ・「正倉院展」において、読売新聞社主催の「歴史フォーラム2010」が東京、大阪で開催、「正倉院展の楽しみ方」が名古屋、福岡で開催された。	A	順調
2134	（九州国立博物館） 1）文化交流展示室の展示ストーリーを、日本文化にはじめて接する海外の来館者にも理解しやすいような、外国語のパンフレットまたはガイドブックを刊行する。	**【九州国立博物館】** ①外国語のガイドブック（中国語）・マップ（英語・中国語・韓国語）を刊行した。	A	順調

	2）特別展の実施に伴う広報・宣伝材料を制作する。特に特別展の内容理解を促進するための番組を制作、ＴＶ放映する。 3）「九州国立博物館季刊情報誌アジアージュ」を発行する。（年４回） 4）現在および過去や将来の展示リストを検索・紹介し、新鮮な展示情報を情報発信するためのウェブデータベースを整備する。 5）地元の自治体・商工団体・観光団体等と連携した広報活動を展開する。 6）九州観光推進機構を通じた海外への広報・営業活動を展開する。 7）文化交流展示室からの積極的な情報発信をはかるため、ポスター・ちらし・webコンテンツの活用を一層、促進する。 8）文化交流展示室で展示される作品に焦点を当てた広報ＴＶ番組を制作、放映する。 9）開館５周年を記念したイベント等を実施し、博物館の活動を広報する。	②特別展の実施に伴う広報・宣伝材料を制作した。マスコミ媒体と連携した広報活動を展開した。特別展のＴＶ番組「パリに咲いた古伊万里の華」を制作、放送した。 ③「九州国立博物館季刊情報誌アジアージュ」の発行（年４回　４月１日号、７月１日号、10月１日号、１月１日号） ④展示リストの検索・紹介、展示情報発信のためのウェブデータベースの整備を行った。ウェブサイトによる情報提供を行った。（日本語・英語）（随時更新） ⑤地元の自治体・商工団体・観光団体等と連携した広報活動を行った。 ⑥九州観光推進機構を通じた海外への広報営業活動を行った。 ⑦テーマを定めたトピック展示の特性を踏まえて、webコンテンツやちらし・ポスター・リーフレット・図録などを刊行し、年間を通じ新聞広告掲載を実施するなど、新聞紙上での広報等を通じて新鮮な展示を来館者に提供できた。 ⑧文化交流展示室の展示作品の広報ＴＶ番組「九博のたからもの」を制作、放送した。 ⑨開館５周年を記念したイベント等を行った。		
2141	**④　黒田記念館所蔵作品の公開機会拡大** （東京国立博物館） 1）黒田記念館での展示の他、東京国立博物館本館において特集陳列を開催する。	**④　黒田記念館** **【東京国立博物館】** ・平成23年２月１日から３月13日まで、東京国立博物館本館の展示室において、特集陳列「黒田清輝と京都」を開催した。	A	順調

定量評価	22年度	21年度	目標値	評定
【平常展】外国語パネルの設置（%）				
東京国立博物館	**96%**	**97%**	**80%**	**A**
京都国立博物館	**－**	**－**	**－**	**－**
奈良国立博物館	**84%**	**91%**	**80%**	**A**
九州国立博物館	**83%**	**82%**	**80%**	**A**
【平常展】陳列替回数（回）				
東京国立博物館	290	316	200	A
京都国立博物館	－	－	－	－
奈良国立博物館	101	8	850	C
九州国立博物館	334	431	300	A
【平常展】陳列総件数（件）				
東京国立博物館	5,610	6,601	5,500	A

		京都国立博物館	－	－	－	－
		奈良国立博物館	340	717	850	C
		九州国立博物館	1,668	2,106	800	S
		【特別展】開催回数(件)				
		東京国立博物館	**10**	**12**	**3～4**	**S**
		京都国立博物館	**5**	**5**	**2～3**	**S**
		奈良国立博物館	**4**	**3**	**2～3**	**A**
		九州国立博物館	**5**	**4**	**2～3**	**S**
		【特別展】入館者数(人)				
		東京国立博物館				
		①「細川家の至宝－珠玉の永青文庫コレクション－」	182,470	－	160,000	A
		②「誕生！中国文明」	105,538	－	220,000	C
		③光明皇后1250年御遠忌記念 特別展「東大寺大仏―天平の至宝―」	232,791	－	420,000	C
		④文化財保護法制定60周年記念 特別展「仏教伝来の道 平山郁夫と文化財保護」	188,402	－	180,000	A
		⑤文化庁海外日本古美術展 「日本の美 5000年(5000 Years of Japanese Art)」	(607,734)	－	－	－
		⑥海外展 The World of Khubilai Khan: Chinese Art in the Yuan Dynasty （クビライ・カーンの世界：元王朝の中国美術）	(166,476)	－	－	－
		⑦創立80周年記念特別展 「よみがえるヤマトの王墓－東大寺山古墳と謎の鉄刀－」（会場：天理大学附属天理参考館）	(11,139)	－	－	－
		⑧海外展 万国博覧会開催記念 「千年丹青―日本中国珍蔵宋元画精品展」	(331,275)	－	－	－
		⑨海外展 万国博覧会開催記念 「鑑真と空海―日中文化交流の顕彰」				
		⑩海外展「高麗仏画大展」	(88,659)	－	－	－
		京都国立博物館				
		①特別展覧会「没後400年 長谷川等伯」	244,347	－	130,000	S
		②特別展観「没後200年記念 上田秋成」	21,705	－	20,000	A
		③特別展覧会「文化財保護法60年記念事業 高僧と袈裟―ころもを伝え こころを繋ぐ―」	19,297	－	20,000	B

		④特別展覧会「上野コレクション寄贈50周年記念 筆墨精神―中国書画の世界―」	37,535	－	30,000	A
		⑤京都国立博物館所蔵能装束展 （会場：金沢能楽美術館）	(4,761)	－	－	－
		奈良国立博物館				
		①「平城遷都1300年記念 大遣唐使展」	202,166		120,000	S
		②なら仏像館開幕記念特別展「至宝の仏像」	81,342	－	10,000	S
		③特別展「仏像修理100年」				
		④第62回正倉院展	294,804	299,294	180,000	S
		九州国立博物館				
		①「パリに咲いた古伊万里の華」	84,738	－	50,000	S
		②「馬 アジアを駆けた二千年」	42,022	－	50,000	B
		③「誕生！中国文明」	53,409	－	90,000	C
		④「没後120年 ゴッホ展」	354,311	－	110,000	S
		⑤アジア友好日本古美術海外展 「日本とタイ―ふたつの国の巧と美」	(21,525)	－	－	－
		【展覧会広報】				
		東京国立博物館				
		博物館ニュースの発行(回)	6	6	6	A
		京都国立博物館				
		博物館だよりの発行(回)	4	4	4	A
		Newsletterの発行(回)	4	4	4	A
		奈良国立博物館				
		博物館だよりの発行(回)	4	4	4	A
		九州国立博物館				
		季刊アジアージュの発行(回)	4	4	4	A

(2) **歴史・伝統文化の理解促進**

【中期目標】歴史・伝統文化の理解促進に寄与するよう、機構の人的資源を活用した教育普及活動を実施すること。
①子どもから高齢者までを対象とした幅広い学習機会を提供すること。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ること。
②ボランティアや支援団体を育成し、相互の協力により教育普及活動の充実を図ること。

【中期計画】	**【主な計画上の評価指標】**
歴史・伝統文化の理解促進を図るとともに、その中心的拠点としてふさわしい教育普及事業に重点化する。 ①学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、ギャラリートーク等の学習機会を提供する。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう努める。	○講演会、ギャラリートーク等の参加者数の各館の年間平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにすること ○ボランティア活動を支援すること ○企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図ること

②－１教育普及活動の充実に寄与するようボランティア活動を支援し、ボランティアの資質向上に努める。 ②－２企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図る。	【21 年度評価における主な指摘事項】 ○ボランティアの育成やその受け入れには人手がかかるが、さらに博物館を訪れる人々の増加を促すことに繋がることから、一層の充実を期待したい。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(2) 日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解促進 日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解促進を図り、国立博物館としてふさわしい教育普及事業に重点化する。 **① 学習機会の提供** （４館共通） １）キャンパスメンバーズ（大学会員制度）による大学との連携を継続して実施する。	**(2) 日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解促進** **①学習企画の提供**		
2211-1	（東京国立博物館） １）ナショナルセンターとして日本の歴史・文化及び東洋文化の理解促進を図るための教育普及の先導的事業を実施する。 本館２０室を教育普及スペース「みどりのライオン」と位置づけ、適宜、小講堂等も活用し、内容に応じた環境を設定しながら事業を展開する。 ○ ファミリー向け教育普及的展示企画「親と子のギャラリー」の実施 ・特集陳列「親と子のギャラリー 日本美術のつくり方２」（6 月 15 日～7 月 25 日） ・特集陳列「親と子のギャラリー 博物館の音楽会」（7 月 27 日～9 月 5 日） ○ 体験型プログラムの実施 ・特集陳列「親と子のギャラリー 日本美術のつくり方２」など、平常展示に関連した一般向け及びファミリー向けのワークショップやアクティビティを実施する。 ・本館２０室「みどりのライオン」において、ハンズオン体験コーナー「日本のもようでデザインしよう」を継続して実施する。 ・正月企画「博物館に初もうで」に関連して、ワークシートを用いたアクティビティを実施する。 ○ 教育的展示及びイベント「博物館でお花見を」（3 月 24 日～4 月 11 日）の実施	**【東京国立博物館】** 1）先導的事業のモデル化及び実践 ・本館２０室を教育普及スペース「みどりのライオン」にガイダンス機能をもたせるとともに、展示に関連した各種レクチャーや体験型プログラム、制作工程模型展示などを、一般から学校団体まで幅広い層に向けて展開し、内容にあわせ小講堂・大講堂などでも事業を行った。 ・教育普及的な手法を用いた特集陳列「親と子のギャラリー」として、「日本美術のつくり方 2」（6 月 15 日～7 月 25 日）、「博物館の音楽会」（8 月 3 日～9 月 5 日）を実施した。 ・「日本美術のつくり方 2」、「博物館の音楽会」などの平常展示に関連して、おとなのためのワークショップ、ファミリーワークショップ、ハンズオンアクティビティを行った。 ・本館２０室にて、ハンズオン体験コーナー「日本のもようでデザインしよう」（通年）を継続して実施した。 ・ワークシートを用いたアクティビティ「東博ウサギめぐり＆掛軸ふうカレンダー」（平成 23 年 1 月 2 日・3 日）を実施した。 ・教育的展示及びイベント「博物館でお花見を」（22 年 3 月 24 日～4 月 11 日、23 年 3 月 29 日～4 月 17 日）を実施した。 ・震災の影響による 23 年 3 月 12 日～3 月 28 日の臨時休館に伴い、ワークショップ 2 回を中止した。また、「博物館でお花見を」は 23 年 3 月 23 日から実施の予定であったが、23 年 3 月 29 日からとなった。	A	順調
2211-2	２）学校との連携事業を推進する。 ・スクールプログラム（鑑賞支援・体験型プログラム等）を継続して実施する（小・中・高校生対象）。 ・就業体験の受け入れを継続して行う（小・中・高校生対象）。 ・単位制高校及び高校生向け講座を継続して実施する（高校生対象）。 ・インターンシップを継続して実施する（大学院生対象）。 ・全国高等学校美術・工芸教育研究会所属教員のための研修を継続して実施する。 ・教員鑑賞会・ガイダンスを継続して実施する。	2)-1 学校との連携事業の推進 ・小・中・高等学校を対象に、スクールプログラムを実施した。また就業体験の受け入れを行った。 ・就業体験の受け入れを継続して行った。詳しくは処理番号 2221-1 を参照。 ・高等学校の単位制授業の一環としてプログラムを提供した。 ・将来の博物館研究員の養成を目的として大学院生を対象としたインターンシップを実施した。 ・全国高等学校美術・工芸教育研究会の会員研修会への協力、教員特別鑑賞会・ガイダンスなど、教員を対象とした研修を実施した。 ・大学生および教育関連機関等の見学対応を行った。 ・平成 22 年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備事業として盲学校のためのスクールプログラムの開発を行い、実際に盲学校の生徒(2 校 36 名)に対しプログラムを試行した。平成 23 年度より同プログラムを広く募集し実施する。 ・震災の影響により、スクールプログラム 2 件(2 校 481 名)がキャンセルとなった。	A	順調
2211-3	・東京芸術大学との連携事業を継続して実施する（大学院生対象）。	2)-2 学校との連携事業の推進（大学等との連携事業） ・東京芸術大学との連携事業 大学院生と当館研究員が連携して準備を行ない、総合文化展の解説を行った。また館蔵の仏画の制作工程模型を作成し、ギャラリートークで解説した(陳列期間：平成 23 年 1 月 2 日～2 月 6 日)。 大学院生 7 名、ギャラリートーク回数 40 回、参加者数 1,081 名 ・キャンパスメンバーズ 博物館の歴史や事業等について博物館セミナーを実施した。 博物館実務全般について演習、実習により体験的講座を実施した。	A	順調
2211-4	３）文化財について分かりやすく理解するための列品解説・月例講演会・連続講座・教育普及イベント等を継続して実施する。	3）講演会・列品解説・講座等の実施 講演会 実施39回（月例講演会 実施11回 記念講演会 実施12回 テーマ講演会 実施 1回 その他講演会 実施15回） 列品解説 実施83回(ギャラリートークを含む) 連続講座 実施1回(3日) 公開講座 実施3回 ・震災の影響による23年3月12日～3月28日の臨時休館に伴い、講演会2回(月例講演会1回、その他講演会1回)、列品解説2回、その他展示に関連する事業3回（桜コンサート2回、鑑賞ガイド1回）を中止した。	A	順調

2212	（京都国立博物館） 1）展示・収蔵品に関連する講演会「土曜講座」を開催する。 2）一般向け教育普及事業として「夏期講座」を開催する（テーマ「文学と美術」）。 3）京都大学大学院人間・環境学研究科の歴史文化社会論講座を担当する。 4）京都橘大学との連携事業を継続して実施する。 5）展示品解説シートとしての博物館ディクショナリーを作成し、館内で配布するとともに、京都市内小中学校へ配布する。併せてメールマガジンでの配信を行う。 6）小中学生向けに展示解説を行う「少年少女博物館くらぶ」を実施する。 7）京都市内４美術館・博物館連携の「京都ミュージアムズ・フォー連携講座」を行う。	**【京都国立博物館】** ・土曜講座を展覧会にあわせて開催した。（15 回） ・夏期講座「文学と美術」を実施した。（7/27～29） ・京都大学大学院人間・環境学研究科、歴史文化社会論講座を担当した。 ・京都橘大学との連携を行い、ボランティアによる観覧者アンケート調査を実施した。 ・小・中学生向け作品解説シート（博物館ディクショナリー）を発行した。 ・京都市内の小中学校への訪問授業等を実施した。 ・「少年少女博物館くらぶ」（7/24）を実施した。 ・京都市内４美術館・博物館連携の「京都ミュージアムズ・フォー連携講座」を実施した。 ・「文化財ソムリエ」（７名）を対象としたスクーリングを実施した。 ・「社会科教員のための向上講座」を実施した。 ・キャンパスメンバーズを継続し、大学と連携した。（29 校） ・「留学生の日」（10/23）を実施した。	A	順調
2213-1	（奈良国立博物館） 1）小中学校との連携 ・奈良県内小中学校にメールマガジンを配信し、博物館だよりを送付する。 ・奈良市内小学校５年生を対象に世界遺産学習授業を実施する。 ・中学生の職場体験学習を受入れる。 2）講座等の開催 ・仏教美術等に関するサンデートークを随時実施する。 ・特別展等に際してシンポジウム及び講座を開催する。 ・夏季講座を開催する。 ・特別陳列に因み、伝統的行事を体験する催しを実施する。	**【奈良国立博物館】** ・小中学校との連携 ・奈良県内の小中学校にメールマガジンを配信し、小・中・高校に「奈良博たより」を送付した。メールマガジン配信数 220 件、たより送付数 71 ・奈良市内小学校５年生を対象に世界遺産学習授業を実施した。30 校受入、2,221 人 ・奈良市内の中学生の職場体験学習を受け入れた。1 校 6 人 ・奈良市の小・中学校の教員研修を実施した。8 月 27 日　参加者数 200 人 ・講演会等　参加者数　3,349 人、実施回数 28 回 ・サンデートークの実施。12 回、参加人数 621 人 ・特別展等講座　15 回　参加人数 2，172 人 公開講座の実施。12 回、参加人数 1,522 人 特別講演会の実施。　5 月 15 日　参加者数 316 人　会場：奈良県新公会堂能楽ホール シンポジウムの実施。2 回、参加者数 334 人 ・夏季講座の実施。8 月 24 日～26 日（3 日間）　参加者数 556 人（各日）　会場：奈良女子大学講堂 ・公開講座は、特別展の会期中に 2～4 回、特別陳列では 1 回実施。 ・解説ボランティアによる作品解説 ・展示会場での解説　284 日間、 学校・一般団体の案内 30 件、1,162 人（申し込み件数。当日受入は含まず）、正倉院展の講堂解説 20 日間 計 110 回　など	A	順調
2213-2	3）大学・自治体との連携 ・奈良女子大学及び神戸大学との連携講座を継続して実施する。 ・奈良教育大学・奈良市教育委員会と連携して世界遺産学習のプログラム開発を検討する。 ・文化財保存修理所の一般公開を行い、文化財保存の意義についての啓蒙に努める。	・キャンパスメンバーズによる大学との連携強化を図るべく、未加入校に対し積極的に広報を行い、加入校の増加を図った。 （奈良女子大学大学院人間文化研究科） ・奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程に学芸部研究員１名を客員准教授として派遣し、日本アジア古典資料論を講義している。授業の内容は古典資料講読を中心とし、受講生は前期４人、後期３人である。 （神戸大学大学院人文学研究科） ・神戸大学大学院人文学研究科の連携講座文化資源論に、学芸部研究員２名を客員教授と客員准教授とし、文化資源論を担当した。 ・受講した学生は同研究科の修士課程、博士課程の大学院生であり、８名の学生が受講した。 ・２名の博士論文の査読を行い、副査として口頭試問を行った。 ・世界遺産教育に関する全国大会を、奈良市教育委員会および奈良教育大学と共同で実施。 於．奈良教育大学　11 月 28 日　　参加者数 800 人 （文化財保存修理所の公開） ・平成 22 年 9 月 8 日（水）、15 日（水）　特別展「仏像修理 100 年」の関連イベントとして、文化財保存修理所の特別公開を臨時に開催した。300 名の募集に対し、応募総数 448 名、参加者 237 名となった。他府県からの参加者も多く、満足度の高い感想が得られた。 ・平成 23 年 2 月 9 日（水）　昨年度に引き続き、恒例の文化財保存修理所の特別公開（第 3 回	A	順調

		目）を開催し、120 名の募集に対し、応募総数 234 名、参加者 106 名となった。 ・平成 23 年 3 月 26 日（土）、美術史学会西支部大会を受け入れた。100 名の学会員が講堂で三月堂修理の行程について聴講し、さらに文化財保存修理所を見学した。		
2214-1	（九州国立博物館） 1）博物館における体験型事業の充実を図る。 ・教育普及ゾーンで活用する様々な教育キットの開発 ・幅広い層に向け体験活動の促進を図るため、教育活動の場を提供 ・アジア諸国の文化を理解する様々な体験学習プログラムの開発	**【九州国立博物館】** ①体験型展示室「あじっぱ」における展示・体験活動の充実 ・「あじっぱ」のうち、アジア各国の伝統文化・生活文化等を紹介する「屋台」において延べ 12 回、「あじ庵」において延べ 5 回、「あじぎゃら」において延べ 5 回の展示替えを行った。「屋台」において新たに紹介する国として「モンゴル」「ウズベキスタン」の 2 カ国を追加した。従来からの体験プログラムの展開に加え、新たに「モンゴルの馬具に乗ってみよう」「モンゴルのもようをデザインしよう」「モンゴル・ウズベキスタンの 3D 写真」「きゅうぱっく　モンゴルの馬頭琴」「Boo Boo ペット」「いろんなもようを織ってみよう」「テープ独楽をまわそう」を追加した。また、小・中学生層を対象に、博物館学芸員の仕事の一部を体験するプログラム「なりきり学芸員体験」「なりきり考古学者」を定例化し、毎月第 2・第 4 土曜日に実施したほか、職場体験・学校団体等の希望者に対して随時実施した。 ・「Boo Boo ペット」「いろんなもようを織ってみよう」「テープ独楽をまわそう」は教育普及ボランティアの企画によるもので、ボランティア活動の活性化の成果でもある。 ・夏休み子ども向けイベント「いこうよ！あじっぱ夏祭り」の実施 夏休み子ども向けイベント「いこうよ！あじっぱ夏祭り」を 8 月 7 日～8 日に実施した。内容の企画から準備、当日の運営にいたるまで教育普及ボランティアが主体となって進め、3 カ国 3 コンテンツを運用した。2 日間で延べ約 300 名（子どものみの数）の参加があった。	A	順調
	2）九州大学との共同研究の成果に基づき、平常展を利用して来館者のニーズに合った情報提供を行うためのプログラムを研究・開発する。	②昨年度に引き続いて、九州大学金大雄研究室との共同研究として来館者動向および展示解説システムの改善に向けての実証実験を実施した。その結果、実際に来館者が展示室内でどのように行動しているかの具体的なデータを取得した。		
	3）学校教育との連携事業を実施する。 ・職場体験（中学生）の受け入れを実施 ・ジュニア学芸員(高校生)事業の実施 ・博物館活用の促進を図るため、教員研修の場の設置 ・学校貸出キット「きゅうぱっく」の貸し出しの実施	③学校教育との連携事業 ・初等・中等教育との連携 学校貸出キット「きゅうぱっく」の運用を継続しつつ、昨年度行った改善点の検討に基づき、新規のセットとして「きゅうぱっく Lite」7 種類を開発、運用を開始した。「きゅうぱっく Lite」は「土器のいろいろ」「青銅器のいろいろ」「誕生！！中国文明」「高麗の文化」「イスラームの祈り」「さまざまな穀物」「さまざまな香辛料」の 7 種類。あじっぱ体験用資料を中心に、3D プリンタでの成果等も活用した。また、中学生の職場体験の受け入れ、高校生を対象とした博物館理解のためのプログラム「ジュニア学芸員活動」を実施した。 ・高等教育との連携 博物館学芸員課程を履修する学生のための「博物館実習」を実施し、また、筑紫女学園大学との連携による「ガムランワークショップ」を 5 月～2 月の間に 8 回実施した。 ・教員を対象としたプログラムの実践 経験 2 年目教師、および経験 11 年目教師に対して社会貢献等の体験の場を提供した。経験 2 年目教師 2 名、11 年目教師 4 名を受け入れた。		

2214-2	4）シンポジウムを開催する。 5）特別展記念講演会を開催する。	①シンポジウム・特別展記念講演会を開催した。	A	順調
	6）文化交流展、特別展に関連した教育普及事業を実施する。 7）ギャラリートークを随時実施する。 8）文化施設等へ講師を派遣する。 9）特別展の内容に親しみをもたせ、より良く理解するためのワークショップを開催するとともに、文化交流展示の内容とも連携した事業展開を行う。	②文化交流展、特別展に関連した教育普及事業を実施した。 ③ミュージアムトークを随時実施した。 ④文化施設等へ講師を派遣した。 ⑤特別展の内容に親しみをもたせ、より良く理解するためのワークショップを開催するとともに、文化交流展示の内容とも連携した事業展開を行った。		
2214-3	10）近隣大学等と文化財保存技術および展示・教育普及に関する共同研究を計画する。	①近隣大学等と文化財保存技術および展示・教育普及に関する共同研究を計画した。	A	順調
	11）放送大学の面接授業を実施する。（講師数 8 人） 12）博物館実習生の受け入れを実施する。 13）インターンシップによる研修生の受け入れを実施する。	②放送大学の面接授業を実施した。 ③博物館実習生の受け入れを実施した。 ④キャンパスメンバーズ（大学会員制度）による大学との連携を継続して実施した。		
	②－１　ボランティア活動の支援	**②－1　ボランティア活動の支援**		
2221-1	（東京国立博物館） 1）各種教育普及事業及びイベント等の補助活動の充実を図る。	**【東京国立博物館】** ・各種教育普及事業の補助的活動を継続して展開した。	A	順調
	2）点字や手話による博物館案内を実施する。 3）各種解説ツアーを継続して実施する。 4）ボランティア自身の企画立案による解説ツアーの充実を図る。	・点字や手話による博物館案内を実施した。詳しくは処理番号 2311-1 を参照。 ・ボランティアによるガイドツアー、ワークショップ等の充実を図った。 ・館内の施設誘導案内を行い、来館者サービスに努めた 通年(開館日は基本的に毎日実施) 館内案内実施場所：4 箇所（本館 1・2 階エントランス，本館 17 室，本館 20 室）		
	5）東京芸術大学学生ボランティアによる活動を継続して実施する。	・児童・生徒の就業体験を受け入れた：学校数 33 校、生徒数 131 人 ・東京芸術大学学生ボランティアによる活動を継続して実施した。詳しくは処理番号 2211-3 を参照。 ・震災の影響による 23 年 3 月 12 日～3 月 28 日の臨時休館に伴い、生涯学習ボランティアによるガイドツアー71 回、東京芸術大学学生ボランティアによるギャラリートーク 2 回を中止した。		
2222-1	（京都国立博物館） 1）大学（京都橘大学）との学術交流による特別展覧会観覧者アンケート（反応収集・集計・分析）ボランティアを実施する。	**【京都国立博物館】** ・京都橘大学との学術協定に基づき、当館研究員が事前講習を行ったのち、特別展示館出口にて来館者にアンケート回答の呼びかけを実施。	A	順調
	2）調査・研究支援ボランティアを受け入れ、各種事業活動の充実を進める。 3）学校への訪問授業をする「文化財ソムリエ」の大学生・大学院生ボランティアを育成する。	・「調査・研究支援ボランティア」の募集と活動の充実を進めた。当館職員が行う調査・研究業務、展示替え作業の補助を行った。 ・「文化財ソムリエ」として登録している大学生・大学院生のボランティアに当館研究員がスクーリングを行ったのち、京都市内の小中学校への訪問授業等を行った。		
2223-1	（奈良国立博物館） 1）ボランティアによる、展示解説、イベント、学習普及事	**【奈良国立博物館】** ・特別展、特別陳列の開催ごとに１～２回、当館職員による展示内容の研修を実施した。	A	順調

	業補助等の充実を図る。 2）ボランティアに対する指導助言体制とボランティアに対する研修の充実を図る。 3）ボランティア同士のグループ別学習の充実に努める。 4）外国語対応のできる解説ボランティアの充実に努める。	・全員にすべての展覧会図録を配布。解説と自己鍛錬のための学習資料とした。 ・正倉院展会期中にはボランティアによる講堂解説を実施した。教育室がスライド資料と原稿を作成し、立会研修を行った上、１～２週にわたる自主トレーニングを経て、実地に臨むよう指導した。 ・展示内容に関する質問用紙を用意し、学芸部職員がこれに回答する等の対応を行った。学芸部職員による担任制をとり、問題解説にあたっている。 ・世界遺産学習や一般解説の依頼に対して、教育室を中心に日時の調整から対応方法についてボランティアと打合せを重ねた。特に今年度は、工事等による閉館期間と世界遺産学習の対応が重なったため、新たに仏像コスチューム授業を実践したが、その調整に職員とボランティアが協力体制を組んだ。 ・韓国中央博物館の視察や、韓国の教員研修の一部などを受け入れ、ハングル対応のボランティアが解説・通訳を行った。 （ボランティア展示解説について詳細は処理番号 2213-1 を参照）		
2224-1	（九州国立博物館） 1）ボランティアを受け入れ、展示解説部会、教育普及部会、館内案内部会（日本語、英語、中国語、韓国語）、環境部会、イベント部会、資料整理部会、サポート部会、学生部会の充実を図る。 2）ボランティアに対し資質向上を目的に基礎研修・専門研修を実施する。 3）ボランティア同士のグループ別学習の充実を図る。	**【九州国立博物館】** ①ボランティアを受け入れ、展示解説部会、教育普及部会、館内案内部会（日本語、英語、中国語、韓国語）、環境部会、イベント部会、資料整理部会、サポート部会、学生部会の充実を図った。 ②ボランティアに対し資質向上を目的に基礎研修・専門研修を実施した。 ③ボランティア同士のグループ別学習の充実を図った。	A	順調
	②－２　博物館支援者の増加 （４館共通） 企業との連携及び「友の会」活動の活性化を図る。 1）「友の会」等の会員制度によるリピーターの拡大に努める。 2）「友の会」会員を対象とした事業を実施する。 3）企業等と連携し、広報活動やイベントによる博物館の認知度向上に努める。 4）公共交通機関等とのタイアップによる広報の充実に努める。	**②－2 博物館支援者の増加** （詳細は処理番号 2221-2、2222-2、2223-2、2224-2 参照）		
2221-2	（東京国立博物館・奈良国立博物館） 1）賛助会員制度の継続・拡充を図る。 2）地域、企業との連携・拡充を図る。	**【東京国立博物館】** ・友の会、パスポート及び賛助会等の会員の確保に努めるとともに、地域や企業との連携を推進した。 1)友の会・パスポート・平常展割引パス　会員数 種　別 / 22 年度 / （参考）21 年度 友の会（１万円） / 1,412 人 / 2,085 人 パスポート　一般 4,000 円 / 12,870 人 / 20,392 人 学生 2,500 円 / 863 人 / 1,206 人 平常展割引パス（2,000 円） / 27 人 / 24 人 ・オンラインによる友の会、パスポートの申込受付数:147 名(21 年度は 331 名) 2)賛助会　会員数 22年度 / (参考)21年度 特別会員 / 16団体 / 13団体 維持会員 / 28団体・個人191人 / 24団体・個人178人 ・会員対象の特別鑑賞会等の実施　特別展内覧会　４回　事業報告会　１回 3)地域、機関との連携 ①上野のれん会、上野法人会、上野の山文化ゾーン協議会等、地域の会合等に参加するとともに、台東区及び台東区所管財団法人、東京都、財団法人東芝国際交流財団、株式会社東京美術、三菱商事株式会社等と、展覧会の同時期開催、イベントへの協力、「留学生の日」協賛、障がい者向け内覧会等、さまざまな事業を行った。 ②日本大学芸術学部との共催で、所沢市教育委員会及び新座市教育委員会後援、埼玉県民芸術文化祭協賛事業として、埼玉県所沢市に位置する柳瀬荘を会場に、「柳瀬荘アート・教育プロジェクト」を開催し、ワークショップ、美術学科教職員作品展など６つのプログラムを行った。（参加者合計 1,239 名） ・平成23年1月より募金箱を館内3箇所に設置した（本館玄関、本館1階17室、平成館玄関)。	A	順調
2222-2	（京都国立博物館） 1）支援団体が行う文化財の鑑賞会・見学会等に協力する。 2）企業等との連携により、施設を活用したイベントの実施及び広報活動の充実を図る。 3）展覧会事業への企業からの各種支援（協賛・協力）を募る。	**【京都国立博物館】** ・「友の会」事業を継続して実施した。 会員数　2,468 人 ・支援団体が行う文化財の鑑賞会・見学会等に協力した。 ・企業等との連携により、施設を活用したイベントの実施及び広報活動の充実を図った。 ・今年度より、博物館の諸活動への企業からの各種支援を募るため「ミュージアム・パートナー」制度を設置し、一企業がこの制度に協賛した。 ・「京都市内４館連携協力協議会」を実施した。	A	順調
2223-2	（奈良国立博物館） 1）支援団体との連携により施設を活用したイベント等を実施し、認知度向上に努める。	**【奈良国立博物館】** ・友の会 会員数　3,180 人（一般 3,009 人、学生 125 人、家族 46 人） ・賛助会　27 団体　37 人 特別支援会員：4 団体、特別会員：4 団体、一般会員（個人）：37 人、(団体)：19 団体 会員数の増加に伴い芳名板をリニューアルした。 ・特別展の実施に対して企業等から協力金等を積極的に獲得した。 ・アメリカン・エキスプレス社のカード会員向けポイント・プログラム「メンバーシップ・リワード」において、賛助会の一般会員（個人）に 1 年間入会できる交換アイテムを提供した。 ・特別陳列「お水取り」で企業から協賛金を獲得した。	A	順調

2224-2	（九州国立博物館） 1）寄付金の獲得に努める。 2）九州国立博物館振興財団や近隣地域等と連携したイベントの実施及び広報活動の充実を図る。	・奈良観光イベント「ライトアッププロムナード・なら　2010」、「なら燈花会」、「全国光とあかり祭」、「バサラ祭」、「なら瑠璃絵」に積極的に協力した。 ・３月末になら仏像館入口、新館入口に募金箱を設置した。 **【九州国立博物館】** ①友の会及びパスポート会員制度を継続して実施した。 ②支援団体や近隣地域と連携したイベントを実施し、広報活動の充実を図った。 ③寄附金を募る募金箱を２３年３月末に１階エントランスに設置した。	A	順調

定量評価	22 年度	21 年度	目標値	評定
学習機会の提供　講演会等参加者数(人)				
東京国立博物館	**13,319**	**12,546**	**10,915**	**A**
講演会	9,290	5,600	－	－
列品解説	3,659	6,550	－	－
連続講座(夏期講座)	278	320	－	－
公開講座	92	76	－	－
京都国立博物館	**2,313**	**3,002**	**5,181**	**C**
土曜講座	2,076	2,791	－	－
夏期講座	205	179	－	－
奈良国立博物館	**3,349**	**3,421**	**3,542**	**B**
特別展等講座	2,172	2,043	－	－
夏季講座	556	391	－	－
サンデートーク	621	584	－	－
九州国立博物館	**3,996**	**6,806**	**5,255**	**B**
特別展記念講演会	1,410	1,622	－	－
ミュージアムトーク	1,320	1,285	－	－
講演及びシンポジウム	1,266	3,849	－	－
ミュージアム講座	0	50	－	－
放送大学の面接授業の講師数(人)				
九州国立博物館	7	8	8	B

(3)　快適な観覧環境の提供

【中期目標】国民に親しまれる施設を目指し、入館者の立場に立った観覧環境の整備や利用者の要望を踏まえた管理運営を行い、入館者の期待に応えること。
①高齢者、身体障害者、外国人等を含めた入館者本位の快適な観覧環境を形成すること。
②入場料金及び開館時間の弾力化など、利用者の要望や利用形態等を踏まえた管理運営を行うこと。
③ミュージアムショップやレストラン等のサービスの充実を図ること。

【中期計画】	【主な計画上の評価指標】
(3)　快適な観覧環境の提供	○施設のバリアフリー化を進めること
国民に親しまれる施設を目指し、入館者の立場に立った観覧環境の整備や利用者の要望を踏まえた管理運営を行う。 ①施設のバリアフリー化を進め、高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供する。 ②一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的に実施する。調査結果から入館者のニーズを把握し、入場料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行う。 ③ミュージアムショップやレストラン等のサービスについては利用者の意見を収集し、改善する。	○利用者のニーズを踏まえ、入場料金や開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行う ○利用者の意見を踏まえ、ミュージアムショップやレストラン等を改善すること **【21 年度評価における主な指摘事項】** ○できれば今後は、各館とも座高の高い車いすの導入を検討して欲しい。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(3)　快適な観覧環境の提供 **①　観覧環境の整備プログラム等の策定** （４館共通） 1）特別展において音声ガイド等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。	**(3)　快適な観覧環境の提供** **①観覧環境の整備プログラムの策定**		
2311-1 ～6	（東京国立博物館）	**【東京国立博物館】** ・下記の特別展で音声ガイドの貸出を実施した。（処理番号 2311-6） ・特別展「細川家の至宝―珠玉の永青文庫コレクション―」33,507 件 ・特別展「誕生！中国文明」　15,291 件 ・特別展「東大寺大仏―天平の至宝―」　46,596 件 ・特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」　35,456 件 貸出数：計 130,850 件	A	順調
	1）点字版パンフレット等を配布する。	・点字解説等の増刷版パンフレットの作成を継続し、配布した。（処理番号 2311-1）		
	2）多言語による案内及び誘導サイン等を順次整備する。	・多言語による案内及び誘導サイン等を環境整備委員会に諮り順次整備している。（処理番号 2311-2）		
	3）より快適な観覧環境を構築するため、展示照明を順次整備する。	・より快適な観覧環境を構築するため、展示照明を順次整備した。（処理番号 2311-3） a. 本館 11 室『彫刻』等に LED(発光ﾀﾞｲｵｰﾄﾞ)光源のカッタースポットライト照明を導入。 b. 本館 12 室『漆工』展示室をリニューアルし、低反射ガラスを使用した展示ケースを導入、また付属の下部照明に超高演色ＬＥＤを採用し、照明効果を飛躍的に向上させた。		
	4）本館２階「日本美術の流れ」のテーマ解説及び主な展示作品の解説をまとめた日本語パンフレットを継続して作成し、配布する。 5）外国人に「日本美術の流れ」展示を理解してもらうために、より基礎的な解説	・「日本美術の流れ」鑑賞のための４ヶ国語パンフレットの制作・配布した。（処理番号 2311-4） 日本語：展示テーマと主な展示作品の解説を収録。展示替えに応		

	を盛り込んだ、英語、中国語、韓国語のカラーパンフレットを継続して制作・配布する。 6）平常展における音声ガイドの導入について検討する。	じて、更新・配布した。 英語、中国語、韓国語：日本美術の基礎知識と、カラー図版で構成したパンフレットを改訂・配布した。 ・スマートフォン端末を利用した位置連動型ガイドシステム「とーはくナビ」の実証実験を行なった。総合文化展（平常展）の理解促進につながったほか、最新の技術を用いた展示ガイドの可能性の検証、将来の本格導入に向けて制作・運用上の問題点の解明に成果をあげることができた。 ・震災の影響による23年3月12日～3月28日の臨時休館に伴い、この期間実施を中止した。そのため当初23年1月17日から3月31日としていた実験期間を、4月17日まで延長する予定である。（処理番号2311-5） その他の観覧環境整備 ○障がい者対応（処理番号2311-1、2311-2） ・点字解説等の増刷版パンフレットの作成を継続し、配布した。・バリアフリー対応ボランティアを募り、研修等を実施。 ・当館ウェブサイトにおけるバリアフリーマップ制作のための調査を実施。 ・手話通訳つきガイドツアーを月1回（「たてもの散歩ガイド」）継続して実施。 ・聴覚障がい者対応のため、コミュニケーションボードの使用を開始。 ・車椅子研修を実施。（以上、処理番号2311-1） ・各特別展の際に障がい者内覧会を開催した。（三菱商事株式会社と共催） ・貸出用車いすのうち、展示が見やすい座面昇降式車いす（4台）がある旨の看板を掲示した。（以上、処理番号2311-2） ○観覧者対応（処理番号2311-2、2311-4） ・日ざしの強い日に、お客様の熱中症対策として、敷地内移動用の日傘の貸出を実施した。 ・新型インフルエンザの流行後も引き続き、各展示施設入口に消毒用アルコールを設置し、各展示施設の案内カウンター等にマスクを常備し、希望されるお客様へ実費にて販売した。 ・上野消防署の協力により、防災訓練を実施した。 ・混雑時に、コインロッカーを一時的に増設した。 ・今までＡＥＤの設置がなかった法隆寺宝物館に設えた。 ・建物・黒門の野外解説版で劣化しているものを新調した。 ・老朽化していた本館救護室や茶室の備品を更新した。（以上、処理番号2311-2）		
2312	（京都国立博物館） 1）快適な観覧環境を提供するための平常展示館の建替プログラムを推進する。 2）６カ国語（日本語、英語、中国語、韓国語、仏語、西語）リーフレットを継続して制作する。 3）混雑が予想される展覧会について、入館者調整や陳列品の配置及び音声ガイドの解説場所等の工夫を行い、展覧会場の快適な環境維持に努める。 4）ウェブサイトで展覧会の混雑状況・待ち時間の速報を行う。	・子供向けワークシート（処理番号2311-4） 見学のポイントを示し、鑑賞と理解を促すワークシート「本館見学マップ」「暮らしの道具今昔」「日本の伝統もよう」の3種を改訂、本館で配布。 （23年1月の正門券売所リニューアル関連）（処理番号2311-2） ・これまで特別展看板側に総合文化展券売所があり、総合文化展掲示板側に特別展券売所があったため、お客様の誘導に不具合があった。このため、看板等に合うよう券売所を入れ替え、軒下にそれぞれのチケット売り場表示看板、料金表を夜間照明と併せ新設した。 ・日・英・中・韓の4か国語表記の券売機を導入した。 ・新たに9種類のクレジットカードを利用できるよう機器を設置した。 ・総合文化展チケットの画像を様々な作品や建物画像を印刷して楽しめるようにした。 （東日本大震災関連）（処理番号2311-2） ・激しい揺れが収まった後、お客様を前庭に誘導し怪我がないことを確認した。展示作品や収蔵庫は研究員が確認し、大きな損害がでていないことを確認した。 ・余震が続くため、夕方に臨時閉館とし、帰宅困難なお客様を平成館ラウンジに案内し、ソファや救護室ベッドを運び入れ、毛布を渡し休んでもらった。食事は、夕食は近所で買い物してもらい、朝食は当館で購入しておいたパンを配布した。ラウンジのミュージアムシアター告知用液晶モニターにテレビのニュース放送を流した。 ・外国人のお客様には、英語のわかる研究員が応対し、道路地図のコピーに目印を記入し、配布した。 **【京都国立博物館】** ・平常展示館の建替工事を継続中であり、来館者の観覧を騒音や振動で妨げないよう配慮した。 ・外国人を含め来館者が気持ちよく観覧していただけるよう、２カ国語の観覧マナーの注意事項パネルを看視員が準備し、マナー向上のお願いの方法を改善した。 （リーフレット制作については処理番号2132を参照） ・展覧会において、入館待ち時間の情報等をウェブサイト等で迅速に発信した。また、「長谷川等伯」展においては、過去１週間の混雑状況を時系列でパソコン端末及び携帯端末向けに掲載した。 ・当館職員、臨時要員、売店、レストラン従業員、（財）京都古文化保存協会学生ボランティアを対象とした「マナー講習会」を実施し	A	順調

		た。また、あわせて「クレーム講習会」も実施し、接客の向上に努めた。 ・東山消防署の協力により、地域と連携した消防訓練を実施した。また、展覧会開催中に火災及び地震を想定した避難誘導訓練を実施し、職員等の意識を高めた。 ・普通救命講習及びＡＥＤの取扱講習会を実施した。		
2313	（奈良国立博物館） 1）快適な観覧環境を提供するための展示施設の計画的な整備を実施する。 2）７カ国語（日本語、英語、中国語、韓国語、仏語、独語、西語）リーフレットを継続して制作する。 3）混雑が予想される展覧会について、入館者調整、陳列品の配置及び音声ガイドの開設場所の工夫を行い、展覧会場の快適な環境維持に努める。 4）誘導サイン及び展示照明を順次整備する。	**【奈良国立博物館】** ・快適な観覧環境を提供するため展示ケースを一新し､透過性のあるガラスを使用して見やすくした。また、なら仏像館の回廊の照明が暗く、展示している仏像が見えにくいという声に対応し、照明工事を行い、これを改善した。 （リーフレット制作については処理番号 2133 を参照） ・「正倉院展」期間中に、新たに託児室を開設し、多数の利用があった。 ・「正倉院展」期間中に入場待ち列テントを設置、看護師の館内常駐を実施した。 ・「正倉院展」期間中に混雑緩和のため、会場入り口での入場制限や 11 月 3 日には団体入場の制限を行った。 ・正倉院展入場待ちのお客様サービスとしてモニターによる日曜美術館の放映や正倉院展の号外新聞を配布した。 ・地元ボランティア団体と協力して外国人用案内ブースを設置し、英語による案内を行った。 ・お客様の入場を分散するために閉館前入場割引制度（オータムレイト料金）を設定し、オータムレイト券購入者には記念品を配布した。 ・客数情報システムを導入し、展示室内の観覧者数を正確に把握できるようにし、混雑時に適切な入場案内を行えるようにした。 ・特別展において、音声ガイドの貸出を行い、入館者が展示内容に理解を深めながら観覧できるようにした。 ・入館者サービスの一環として館内サインを統一した。 ・観覧券（入場券）をクレジットカードで購入出来るようにした。	A	順調
2314	（九州国立博物館） 1）快適な観覧環境を提供するための展示施設等の調査・分析及び検討を進める。 2）７カ国語（日本語、英語、中国語、韓国語、仏語、独語、西語）リーフレットを継続して制作する。	**【九州国立博物館】** ・快適な観覧環境を提供するため、文化交流展示室において来館者ニーズに合った情報提供を行うためのプログラムの研究・開発、および混雑対策など観覧環境の整備を行った。 ・７カ国語（日本語、英語、中国語、韓国語、仏語、独語、西語）のリーフレットを継続して制作した。 ・英語・中国語・韓国語による簡単な展示解説付きマップを作成し、	A	順調

		配布した。		
	3）混雑が予想される展覧会について、入場者調整、展示レイアウトの工夫を行い、展覧会場の快適な環境維持に努める。	・混雑が予想される展覧会について、入場者調整、展示レイアウトの工夫を行い、展覧会場の快適な環境維持に努めた。また、障がい者のための特別観覧日を設けた。 ・解説題箋や館内サインを必要に応じて新装した。 ・開館以来、破損等の原因により使用に支障が出ていたケースについて、ガラス交換や外装のタッチアップ等の作業を実施した。 ・竣工以来、６年を経過する映像機器、調光機器の老朽化等を考慮して、使用していない展示情報に係るコンピュータシステムの整理や機器の更新を行った。 ・特別展ごとに展覧会の内容のより深い理解を助けるための音声ガイドを作成した。 ・太宰府消防署の協力により、地域と連携した防災訓練を実施した。 ・電子マネー（nimoca）を導入した。 ・ICエコまちめぐりシステム端末を設置した。		
	②　一般入館者の満足度調査及び専門家の批評聴取	②一般入館者の満足度調査及び専門家の批評聴取		
2321	一般入館者、専門家を対象に満足度調査を定期的に実施し、調査結果を展示等に反映させるほか、必要なサービスの向上に努める。 （4 館共通） 1）入館者のニーズを引き出すため入館者調査を実施し、その結果を改善に生かす。 （京都国立博物館・奈良国立博物館） 1）特別展等に関し、専門家の展覧会評を求め、広報誌等に掲載する。 （京都国立博物館） 1）モニターを委嘱し、提言を受けることで、展覧会を含めた博物館運営に反映する。	**【東京国立博物館】** ○特別展アンケート すべての特別展で実施し、どの展覧会も 74～83%と概ね高い満足度となった。 昨年度開催の特別展「国宝 土偶展」から導入しているタッチパネルアンケートシステムを、22 年度のすべての特別展で設置した。 ○平常展アンケート（22 年 4 月～12 月）：紙媒体でのアンケート 回収サンプル数 446 件（日本語 307 件、英語 104 件、韓国語 30 件、中国語 5 件） 満足度 88%（とても満足 48%、やや満足 40%、どちらともいえない 7%、やや不満 3%、とても不満 2%）※無回答分を含まず ○総合文化展アンケート 23 年 1 月 2 日からの本館リニューアルと「平常展」から「総合文化展」への改称に合わせ、本館玄関ホールへ新規に「総合文化展」タッチパネル式アンケートシステムを導入した。	A	順調
2322		**【京都国立博物館】** ・入館者アンケートを実施 特別展覧会「長谷川等伯」満足度 91% 回答数 2,435 件（良い 74%、まあまあ良い 17%、どちらでもない 3%、あまり良くない 1%、良くない 1%） 特別展観「上田秋成」満足度 78% 回答数 365 件（良い 43%、まあまあ良い 35%、どちらでもな	A	順調

		い 12%、あまり良くない 3%、良くない 4%） 特別展覧会「高僧と袈裟」満足度 84% 回答数 371 件（良い 55%、まあまあ良い 29%、どちらでもない 11%、あまり良くない 1%、良くない 2%） 特別展覧会「筆墨精神」満足度 88% 回答数 297 件（良い 63%、まあまあ良い 25%、どちらでもない 4%、あまり良くない 4%、良くない 0%） ・特別展覧会等に関する専門家の展覧会評を求め、「博物館だより」に掲載した。 ・モニターを委嘱し、提言を受けることで、展覧会を含めた博物館運営に反映した。 ・通常のアンケートとは別に、学生ボランティアによる呼びかけアンケートを行ってより細かなニーズを調査するとともに、館内で情報を共有した。		
2323		**【奈良国立博物館】** ・名品展アンケート（全開館日） 回答数　342 件(良い 74.7%､普通 9.1%､良くない 5.3%､無回答 10.9%) ・英語版名品展アンケート（全開館日） 回答数　83 件 ・特別展アンケート 「大遣唐使展」 回答数 892 件（良い 84.6%、普通 8.2%、良くない 4.7%、無回答 2.5%） 「仏像修理 100 年」「至宝の仏像」 回答数 551 件（良い 87.9%、普通 7.8%、良くない 3.1%、無回答 1.2%） 「第 62 回正倉院展」 回答数 1,008 件（良い 77.1%、普通 13.7%、良くない 6.1%、無回答 3.1%） ・特別展について、専門家の展覧会評を「博物館だより」に掲載	A	順調
2324		**【九州国立博物館】** ①平常展アンケート　満足度 59%　　回答数 292 件 （とても良い 30%、良い 29%、普通 16%、あまりよくない 4%、よくない 9%、無回答 12%） ②特別展アンケート 「パリに咲いた古伊万里の華」　満足度 95%　　回答数 6,815 件 （とても良い 65%、良い 30%、普通 3%、あまりよくない 0%、よくない 0%） 「馬　アジアを駆けた二千年」　満足度 80%　　回答数 620 件	A	順調

		（とても良い 36%、良い 44%、普通 12%、あまりよくない 4%、よくない 2%） 「誕生！中国文明」　満足度 89%　　回答数 347 件 （とても良い 55%、良い 34%、普通　6%、あまりよくない　1%、よくない 1%） 「没後 120 年　ゴッホ展」　満足度　85%　　回答数　3,387 件 （とても良い 56%、良い 29%、普通 7%、あまりよくない 2%、よくない 3%）		
	③　ミュージアムショップやレストラン等館内環境の充実 ミュージアムショップやレストランの利用者等の意見を把握し、関係者との協議のうえ、利用者サービスの向上に努める。	③　ミュージアムショップやレストラン等館内環境の充実		
2331	（東京国立博物館・奈良国立博物館） 1）オリジナルグッズを開発し、サービス向上に努める。	**【東京国立博物館】** ミュージアムショップやレストラン等の利用者サービスの向上に努めた。また、ミュージアムショップに関連した企画等に協力した。 ・ミュージアムショップを運営する東京国立博物館運営協力会(以下「協力会」という。)と、「ミュージアムショップグッズ開発等会議」を開催し、商品の充実及びオリジナル商品の製作について協議・検討を行った。 ・新たな絵はがきとして今年度は、20種類を製作した。 ・台東区立書道博物館と連携した特集陳列「拓本とその流転」の開催期間中、書道博物館の図録も販売し、当館と他館との連携事業に協力した。 ・レストランでは、正月にお年玉プレゼントや甘酒の振る舞いサービスの実施、展覧会にあわせメニューを変える等サービスの向上に努めた。	A	順調
2332	（京都国立博物館）	**【京都国立博物館】** ・南門施設は平成２１年７月にリニューアルオープンし、ミュージアムショップ、レストラン、インフォメーションコーナーと共に入館料を払わずに来館者が利用できるスペースとなっている。３業務とも外部業者に委託しているが、連絡を密にとり、当館の要望に応えた形での運営を心がけた。 ・接客の向上として、当館が開催するマナー講習会及びクレーム講習会に参加した。 （インフォメーション） ・展覧会関係のチラシ及び京都市観光協会の協力より京都観光などのチラシを置き、案内所には英会話のできる人員を配置し、当館の案内だけではなく京都市内の観光案内も行った。来館者にも好評である。	A	順調

	1）オリジナルグッズや展覧会に応じた商品を置くことで、ミュージアムショップのサービス向上に努める。 2）レストラン利用者にアンケート調査を行いサービス向上に努める。	・ぐるっとパスの販促用グッズを設置し、ぐるっとパス加盟館として販促を実施した。 （ミュージアムショップ） ・来館者が手軽にお買い求めいただける絵はがき等を中心にオリジナルグッズを作成した。 ・絵はがき販売総数は 350 種類に上り、日本美術を中心としたグッズを販売した。 （レストラン） ・アンケートを実施したところ、来館者におおむね満足いただけているが、集計した内容をレストラン側に提出し、さらなる接客の向上に努めた。		
2333	（奈良国立博物館） 1）観覧料金の支払いをはじめミュージアムショップやレストラン等での支払いがカード決済出来るよう環境を整える。	**【奈良国立博物館】** ・「正倉院展」では、常設のレストラン及びミュージアムショップ以外に、敷地内に飲食店やグッズ販売等のショップが出店した。 ・平城遷都 1300 年にちなんでミュージアムショップで記念グッズを取り扱った。 ・ミュージアムショップで新しいオリジナルグッズを追加作成し、お客様のニーズに応えた。 ・ミュージアムショップやレストラン等でクレジットカードを利用できるようにした。 ・季節毎にお客様に対して、ミュージアムショップを知っていただき、また親しんでいただくために「七夕に願を」「ビーズで作ろう！元気が出る仏像」等のキャンペーンを実施した。 ・観覧料金の支払いをはじめミュージアムショップやレストランで、クレジットカード（種類：ビザ、マスター、JCB、アメックス、ダイナース）や電子マネー（種類：ピタパ、イコカ、銀聯）を利用できるようにした。	A	順調
2334	（九州国立博物館） 1）オリジナルグッズの開発や特別展に関連した商品の提供など、サービスの向上に努める。 2）特別展に関連した特別メニューを提供するなど、サービスの向上に努める。	**【九州国立博物館】** ①ミュージアムショップでは、特別展、文化交流展の展示内容に即した商品陳列を行い、オリジナル商品の陳列面積を増やすとともに地場産業のお菓子・グッズなどを提供した。 ②レストランでは、特別展に関連したメニューを期間限定で提供した。	A	順調

3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

(1)　収蔵品等に関する調査研究成果の発信

【中期目標】収蔵品等に関する調査研究の成果を多様な方法により積極的に公表し、広く博物館関係者の知見の向上に資すること。

【中期計画】	**【主な計画上の評価指標】**
(1)　収蔵品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に関わる刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信する。また、各種セミナー、シンポジウムを開催する。	○刊行物の発行、学会、インターネット、各種セミナー、シンポジウムを通じて研究成果を広く公表すること。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(1)　調査研究の成果の発信	**(1)　調査研究の成果の発信**		
3111	（東京国立博物館） 1）博物館情報アーカイブを運用し、収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図る。 2）国際的な講演・研究集会を開催する。 3）紀要・図版目録等を刊行する。 4）文化財修理報告書を刊行する。 5）法隆寺献納宝物特別調査概報を刊行する。 6）研究誌「ＭＵＳＥＵＭ」（年６回）を刊行する。	**【東京国立博物館】** ・（博物館情報アーカイブについて詳細は処理番号 6611 参照） ・（国際的な講演・研究集会について詳細は処理番号 3211 参照） ・定期刊行物（紀要・図版目録・修理報告書・法隆寺献納宝物調査概報・研究誌『MUSEUM』（年 6 回））5 件、特別展図録・特集陳列印刷物（特別展図録『細川家の至宝―珠玉の永青文庫コレクション―』・特集陳列図録『清朝末期の光景―小川一眞・早崎梗吉・関野貞―』等）8 件、特集陳列リーフレット（『日本美術の流れ 浮世絵』等）4 件、その他（『ザールデリー―パキスタン古代仏教遺跡の発掘調査―』・『根付 高円宮コレクション』）2 件を刊行した。これらの出版物により、国内外に広く当館の収蔵品に関する調査研究の成果を発信することができた。	A	順調
3112	（京都国立博物館） 1）仏教美術に関するシンポジウム報告書を刊行する。 2）特別展覧会「高僧と袈裟」関連事業として国際シンポジウムを開催する。 3）研究紀要「学叢」を刊行するとともに、学術研究公開の一環として既刊分を順次ウェブサイトで公開する。 4）社寺調査報告書を刊行する。 5）文化財修理報告書を刊行する。 6）社寺調査の成果を盛り込んで特別展覧会「法然」を企画し、併せて図録を作成する。	**【京都国立博物館】** ・仏教美術に関するシンポジウムの報告書「予言と調伏のかたち」を刊行した。 ・（特別展覧会「高僧と袈裟」関連国際シンポジウムについて詳細は処理番号 3212 参照） ・研究紀要「学叢」第 32 号を刊行した。 ・社寺調査報告書２４（光明寺）を刊行した。 ・文化財修理報告書６、７　を刊行した。 ・社寺調査の成果を盛り込んで特別展覧会「法然」を開催し、図録を刊行した。 ・各収蔵先での調査成果を盛り込み特別展覧会「長谷川等伯」を開催し、図録を刊行した。	A	順調

		・各収蔵先での調査成果を盛り込み特別展観「上田秋成」を開催し、図録を刊行した。 ・各収蔵先での調査成果を盛り込み特別展覧会「高僧と袈裟」を開催し、図録を刊行した。 ・各収蔵先での調査成果を盛り込み特別展覧会「筆墨精神」を開催し、図録を刊行した。 ・平成 20～21 年の新収品について調査成果を盛り込み、「新収品展」を開催し、公開した。		
3113	（奈良国立博物館） 1）研究紀要「鹿園雑集」を刊行し、ウェブサイトで公開する。 2）正倉院展に因むシンポジウムを開催する。 3）国際的な講演・研究集会を開催する。 4）文化財修理報告書刊行のため、資料整理等を実施する。 5）入場無料ゾーンを利用し、調査研究活動実績をパネル等で公開する。	**【奈良国立博物館】** ・研究紀要『鹿園雑集』12 号を刊行し、同誌及び各種の学術誌において、研究員各自の収蔵品等に関する調査研究成果を発表した。 ・前年度に引き続き、ホームページ上で研究紀要『鹿園雑集』のバックナンバーを公開し、また文化財保存修理所で修理した文化財を、入場無料ゾーンを利用し写真パネル等で展示した。 ・「正倉院展」会期中に正倉院学術シンポジウム 2010「正倉院宝物はどこで作られたか」(10 月 24 日、奈良県文化会館、参加者数 186 名)を開催した。 ・（国際的な講演・研究集会については処理番号 3213 にも記載） ・前年度に引き続き、『鹿園雑集』12 号に「奈良国立博物館文化財保存修理所修理一覧」を掲載し、修理成果の一端を紹介した。また、併せて修理報告資料を整理した。 ・『平城遷都 1300 年記念　大遣唐使展』(特別展図録)、『仏像修理 100 年』(特別展図録)、『第 62 回正倉院展』(特別展図録)、『The 62th Annual EXHIBITION OF SHOSO-IN TREASURES』(特別展英語版図録)、『おん祭と春日信仰の美術』(特別陳列図録)、以上４冊の展覧会目録を刊行、また特別展「至宝の仏像」開催に併せて『なら仏像館　名品図録』を刊行した（以上は全て作品解説付き、展覧会担当者の総論や各論等を掲載)。 ・平成 14 年以来取り組んできた東大寺の塑造神将像に関する光学調査等の成果をとりまとめた報告書『奈良時代の塑造神将像』(中央公論美術出版、12 月刊）を刊行した。 ・当館敷地内に存在する春日東西両塔跡及びその周辺遺跡の状況を正確に把握し、今後の保存に資するべく、本館南東に調査区（219 ㎡）を設け、奈良文化財研究所と共同で発掘調査を実施した（11 月 15 日～12 月 27 日)。調査の過程で、東塔院の北東隅の位置を確定する遺構の検出などの成果が得られ、新聞各紙で取り上げられた。12 月 17 日～21 日には現場見学会を実施（参加者約 300 名）し、概要をまとめた資料を配布した。	A	順調
3114	（九州国立博物館） 1）研究紀要「東風西風」を刊行する。 2）国際的な講演・研究集会を開催する。 3）文化財修理に関する印刷物を刊行する。 4）保存修復活動の成果を教育普及事業に反映させる。	・読売新聞紙上で「鹿園観照－奈良国立博物館で見る名宝」を連載し、展示作品について定期的な紹介を行った。また特別展開催期間中にも読売新聞紙上で出陳品紹介の連載を行った。 **【九州国立博物館】** ①研究紀要『東風西声』第６号を刊行（3 月発行)。特別展図録を刊行。 ②国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」を開催した。 ③文化財修理に関する印刷物を刊行した。 ④保存修復活動の成果を教育普及事業に反映させた。 ⑤広報テレビ番組「九博のたからもの」(RKB テレビ）の制作・放送（5 月～9 月） ⑥新聞紙上で展示作品紹介の連載を行った。	A	順調

定量評価	22 年度	21 年度	目標値	評定
研究誌の刊行回数 東京国立博物館(MUSEUM)	6 回	6 回	6 回	A

(2)　海外研究者の招聘

【中期目標】国内外の博物館関係者との研究会の開催や研究者の交流等を行い、国際的な博物館の拠点となることを目指すこと。

【中期計画】	【主な計画上の評価指標】
(2)　海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムを開催するなど博物館活動に対する示唆が得られるよう努める。	○海外の優れた研究者を招聘し、博物館活動に対する示唆を得ること。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(2)　海外研究者の招聘等研究交流の実施 （国立文化財機構） 1）日中韓国立博物館長会議へ参加する。 （４館共通） 1）海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。（２０人程度：東京６、京都５、奈良６、九州３） 2）当館職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。（２２人程度：東京６、京都６、奈良６、九州４）	**(2)　海外研究者の招聘等研究交流の実施** **【国立文化財機構】** ・（日中韓国立博物館長会議への参加については処理番号 3211 参照）		
3211	（東京国立博物館） 1）国際交流協定を締結している博物館および欧米主要館を中心に、海外の博物館との交流を活発に行う。	**【東京国立博物館】** ・海外より計 15 名の研究者を招へいし、当館研究員延べ 10 名を海外に派遣して、展覧会事業の推進および学術交流を行った。また、日中韓国立博物館長会議、ICOM 上海大会に職員を派遣し、日中韓三館の協力体制を確認するとともに、世界の博物館との交流を行った。 ・さらに、スイスより 1 名研修生を受け入れ、特に博物館における展	A	順調

		示デザインについて、当館のノウハウを学んでいただく機会を提供した。		
3212	（京都国立博物館） 1）諸外国における国際会議、研究集会等へ積極的に参加する。 2）外国人研究員・研修員の受け入れを行う。	**【京都国立博物館】** ・海外からの研究者の招聘　７名 ・海外への研究員の派遣　２７名 うち、国際会議への派遣　９名 ・国際シンポジウム「染織品にみる東アジア交流　―宋・元・明時代の中国とその周辺―」(11/13)を開催した。	A	順調
3213	（奈良国立博物館） 1）国際交流協定を締結している博物館を中心として、海外の博物館との交流を活発に行う。	**【奈良国立博物館】** ・国際交流協定を結んでいる４館のうち２館との間で研究員の招聘及び派遣を行い、文化財の調査研究を実施した。中国・河南博物院からは研究員２名を１ヶ月間招聘し、韓国国立慶州博物館との間では研究員２名を各１ヶ月間招聘、当館から研究員１名を約１ヶ月間派遣した。 ・正倉院展開催に際し、韓国国立慶州博物館から館長ほか１名を招聘、正倉院宝物の保存管理や日韓両国の文化財行政等について意見交換を行った。また慶州博における特別展「元暁」の開催に際して当館から館長以下３名を派遣し、学芸部長が講演を行うなどしたほか、特別展「皇南大塚」開催に際しても当館から研究員２名を派遣した。 ・「大遣唐使展」における海外からの文化財借用に際し、外国人研究者（米国６名、中国６名）をクーリエとして、また中国・陝西省の文化財関係者５名を代表団として受け入れ、同展出陳作品及び文化財の管理・展示等に関する情報交換を活発に行った。 ・「大遣唐使展」会期中に国際学術シンポジウム「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」(６月５日、於：奈良国立博物館講堂、参加者数 148名）を実施し、米国人研究者１名をパネリストの一人として招聘した。 ・韓国国立中央博物館における特別展「高麗仏画大展」会期中の 10月 28日に同館で開催された国際学術シンポジウム「東アジア仏教美術における高麗仏画」にて、当館研究員２名が研究発表及びコメントを行った。 ・米国・メトロポリタン美術館で開催された特別展「上都から大都へ：フビライ汗の世界」(22年９月 20日～23年１月２日）の展示・撤収に際して、クーリエとして研究員各１名を派遣し、併せて米国における東アジア美術研究の現状について、現地研究者との間で情報交換を行った。	A	順調
3214	（九州国立博物館） 1）国際交流活動推進へ向けての基盤を整備するとともに海外博物館等との交流を実施する。 2）海外の文化財研究者や修理技術者を招聘し、文化財保存修復施設を活用した専門的な国際交流セミナーやワークショップを開催する。	**【九州国立博物館】** ①海外研究者の招聘（9 人） ・交流促進のため韓国の博物館長を招聘した。 ・国際シンポジウムのため中国の研究者を招聘した。 ・平成２２年度在外日本古美術品に係る博物館・美術館研究協力事業及びアジア諸国博物館・美術館研究協力事業の実施に係る研究者を招聘した。 ②海外への研究者派遣（77 人） ・中国 内蒙古博物院との学術文化交流協定を締結した。 ・モンゴル カラコルム博物館への専門家派遣（国際交流基金事業）を実施した。 ・海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」開催した。 ③国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」開催した。	A	順調

定量評価	22年度	21年度	目標値	評定
海外研究者招聘(人)				
東京国立博物館	15	26	6	S
京都国立博物館	7	29	5	A
奈良国立博物館	9	29	6	S
九州国立博物館	9	37	3	S
研究員派遣(人)				
東京国立博物館	54	16	6	S
京都国立博物館	27	13	6	S
奈良国立博物館	14	30	6	S
九州国立博物館	77	46	4	S

(3)　博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施

【中期目標】国内外の文化財の修理・保存処理の充実に寄与すること。

【中期計画】
(3)　博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。

【主な計画上の評価指標】
○博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施すること

【21年度評価における主な指摘事項】
○今後は、研修の一部（保存科学、保存環境学など）について、より一層の充実を期待する。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
3311	(3)　保存修理者への研修プログラム （４館共通）	(3)　保存修理者への研修プログラム **【東京国立博物館】**	A	順調

3312	1）保存修理事業者を対象とした研修会を開催するとともに、インターンの受け入れや保存修理事業者と協力した研修会を開催する。	1．特定非営利活動法人文化財保存支援機構が主催する専門家セミナーに東京国立博物館が共催し、東京国立博物館を会場として「文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅠ」（平成22年8月30日（月）～9月10日（金）の１０日間）を開催した。東京国立博物館は講師・プログラムの選定、およびセミナー会場・修理施設・展示施設の提供を行った。本セミナーの対象は、社会で活動している文化財保存修復専門家及び専門家を目指す学生である。内容としては、国内外で活躍できる高度な能力を持つ専門家を育成するために、基礎能力の格段の向上を目指すものであり、既に現場で活躍している講師陣による実践セミナーである。 2．エジプト国立大エジプト博物館保存修復センターにて「東京国立博物館の臨床保存の実践についてのセミナー」を実施（平成22年9月29日）。科学研究費補助金（基盤（S）（平成20年～24年））「博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究」の経費による。 3．ルーブル美術館素描版画部門にて「東京国立博物館の臨床保存の実践についてのセミナー」を実施（平成23年1月11日）。科学研究費補助金（基盤（S）（平成20年～24年））「博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究」の経費による。 4．ストラスブール日仏大学会館にて「東京国立博物館の臨床保存の実践についてのセミナー」を実施（平成23年1月13日）。科学研究費補助金（基盤（S）（平成20年～24年））「博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究」の経費による。 5．大学院生のインターンを3名受け入れ、東京国立博物館の臨床保存と包括的保存について研修を実施した（平成23年2月14月(月)～25日(金)）。 **【京都国立博物館】** ・毎月1回文化財保存修理所内工房を当館研究員が巡回し、修理技術者に指導・助言を行った。また、2か月に1回修理技術者と当館との定例会議を開催した。 ・当館にて開催の特別展覧会において修理技術者に対する定例の研修会を実施した。 参加者　「長谷川等伯」展　52人 「上田秋成」展　40人 「高僧と袈裟」展　35人 「筆墨精神　－中国書画の世界－」展　39人	A	順調
3313		・文化財修復に関わる大学院生のインターンシップ実習を実施し、報告書を作成した。 参加大学院生：2名 **【奈良国立博物館】** ・修理所巡回を4回実施し、館長をはじめとする総務課、学芸部の館職員が修理所の各3工房を視察した。このことにより修理途中の文化財の修理状況を継続的に観察し、修理の工程を広く知る場を設け、修理について認識を高めることに努めた。 ・平成23年3月中の平日　午後5時から6時30分、当館講堂にて修理所研修会を実施した。 文化財保存工房の絵画書跡の修理状況について、近年の実績のなかから、法華堂不空羂索観音立像（東大寺蔵）の修理を取り上げ、修理品の概要、修理中の調査及び新知見、修理方針、修理技術などについて、他の修理所工房のスタッフ、学芸部研究員と討議を行う。あわせて解説ボランティアも傍聴し、修理に関する理解を深めた。	A	順調
3314		**【九州国立博物館】** ①紙文化財保存基礎講座 a 文化財保存修復研修（地元大学の文化財保存技術専攻学生4名対象）8月16日～20日 b 古文書保存基礎講座（地元博物館文化財関係者23名対象）23年1月21日、29日 ②文化財保存交流セミナー a「東アジアの伝統的製紙技術－日中韓の最新調査研究成果－」4月23日　参加者32名 b「延喜式にみる製紙工程について」5月12日　参加者37名 c「韓国　保存科学の現況」23年2月8日　参加者23名 d「アメリカ国立スミソニアン機構　フリーア美術館アーサー・M・サックラー美術館 保存科学部東洋絵画修理室について」23年3月18日　参加者20名 ③ミュージアムIPM支援者育成事業（文化庁受託事業） 「市民と共にミュージアムIPM」 研修会（講義）3回、研修会（ワークショップ）4回、研修会（見学・討議）3回、シンポジウム1回　　延べ430名	A	順調

(4)　公私立の博物館等への貸与の推進

【中期目標】収蔵品の地方における観覧の機会を確保するため、貸与に関する情報を公開するなど、収蔵品の貸与を推進すること。	
【中期計画】	**【主な計画上の評価指標】**

(4)　収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を推進する。収蔵品の貸与については、貸与に関する情報を公開するなど具体的措置を講ずることとする。

○公私立博物館等に対する支援のため、収蔵品の貸与に関する情報を公開すること

【21 年度評価における主な指摘事項】
○収蔵品の貸与に関する情報公開体制の今後の整備を期待したい。これが整えば、各地の公・私立博物館にとって有益な情報となる。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(4)　収蔵品の貸与	**(4)　収蔵品の貸与**		
3411	（東京国立博物館） 1）国内の博物館等で開催する展覧会へ収蔵品を１，０００件貸与する。 2）長崎歴史文化博物館の平常展示のため、引き続き約８０件を長期貸与する。 3）海外の美術館・博物館等で開催する展覧会へ５０件貸与する（海外交流展出品作品を含む）。 4）国内の公私立博物館と考古資料の相互貸借を実施する。	**【東京国立博物館】** ・国内の公立・私立の博物館が実施した特別展および平常展示に、列品および寄託品を多数貸与した。 ・長崎歴史文化博物館（80 件）、国立西洋美術館、韓国国立中央博物館、フランス・ギメ博物館などに、年度を越えた長期貸与を実施している。 ・本年度も海外からの借用希望が多く、文化庁主催の海外展を含め、12 箇所の会場に 160 件の作品を貸与した。 ・考古資料相互貸借事業は、二つの博物館と協力して実施した。	A	順調
3412	（京都国立博物館） 1）国内外の博物館等へ収蔵品を貸与する。（約１２０件）	**【京都国立博物館】** ・74機関に対し297件の収蔵品貸与を行った。（うち海外4機関に対し16件） 館蔵品の貸与件数：152件 寄託品の貸与件数：145件 計　297件 ・ウェブページでの「貸出作品リスト」の公開	A	順調
3413	（奈良国立博物館） 1）国内外の博物館等で開催する展覧会へ収蔵品を１００件貸与する。 2）国内の公私立博物館と考古資料の相互貸借を実施する。	**【奈良国立博物館】** ・館蔵品と寄託品の貸出は、展覧会の回数において計 43 件、作品件数は計 159 件。 ［貸与先内訳］ 国立 5 館、公立 30 館、私立 1 館、外国 4 件、その他 3 件 ［貸与作品内訳］ 国宝 19 件、重要文化財 74 件、その他 66 件 館蔵品 47 件（絵画 25 件、彫刻 6 件、書跡 3 件、漆工 1 件、考古 12 件） 寄託品 112 件（絵画 42 件、彫刻 48 件、書跡 9 件、金工 6 件、漆工 4 件、染織 1 件、考古 2 件） ・以下の 2 館と相互貸借事業を実施した。	A	順調
3414	（九州国立博物館） 1）収蔵品の充実に努め、貸与の体制を整備する。	1．山形県立博物館・山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 貸与品：杉沢遺跡出土土偶 借用品：押出遺跡出土の縄文土器、漆器類 2．南相馬市博物館 貸与品：泉廃寺ほか出土の古瓦（「内藤コレクション」・「原田コレクション」） 借用品：桜井遺跡出土の弥生土器、石包丁 なお、押出遺跡出土品の展示に際しては、「縄文のムラ－山形・押出遺跡からのメッセージ－」と題するパンフレットを作成し、無料配布した。 **【九州国立博物館】** 国内 31 機関・海外 3 機関に所蔵品および寄託品を貸与した。（東京国立博物館からの長期管理換品を含む）	A	順調

定量評価	22 年度	21 年度	目標値	評定
収蔵品の貸与件数(件)				
東京国立博物館	1,315	1,104	－	－
国内展覧会への貸与	1,155	913	1,000	A
うち長崎歴史文化博物館	80	80	80	A
海外展覧会への貸与	160	191	50	S
京都国立博物館	297	428	120	S
奈良国立博物館	159	108	100	S
九州国立博物館	165	89	－	－

(5)　公私立博物館等に対する援助・助言

【中期目標】全国の博物館等の運営に対する援助、助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努めること。

【中期計画】
(5)　公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努める。なお、援助・助言の実施については今期５年間の実績が前中期目標期間の実績を上回るよう努める。

【主な計画上の評価指標】
○公私立博物館等に対する援助・助言の実績が前中期目標期間の実績を上回ること。

【21 年度評価における主な指摘事項】
○国立博物館に対する信頼の表れであり、文化財保護の推進と、公・私立博物館のレベル向上のためにも積極的に取組んでほしい。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(5)　公私立博物館・美術館等に対する援助・助言の推進 （４館共通）	**(5)　公私立博物館・美術館等に対する援助・助言の推進**		

3511	1）公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言をする。 （東京国立博物館） 1）新規貸与館に対する環境調査は、東京文化財研究所と協力して指導助言を行う。	**【東京国立博物館】** ・公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等に対し、84件の援助・助言を行った。 ・文化庁や地方公共団体等の文化財関係事業にて協力（44件） ・公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言（12件） ・講演会やセミナー等における講演等での協力（11件） ・作品の展示・保存環境についての調査・指導（17件） ・新規貸与館に対する環境調査は、東京文化財研究所と協力して指導助言を行った。	A	順調
3512	（京都国立博物館） 1）「京都国立博物館所蔵　能装束展」（金沢能楽美術館）に援助・助言を行う。	**【京都国立博物館】** ・文化財の展示、修理にかかる指導助言（19件） ・文化財の調査にかかる指導助言（46件） ・講演会、セミナー等における講演等での協力（13件） ・地方公共団体の文化財保護審議会等会議にて協力（45件） ・「京都国立博物館所蔵 能装束展」（金沢能楽美術館）にかかる援助・助言を行った	A	順調
3513	（奈良国立博物館） 1）「奈良の古寺と仏像　～會津八一のうたにのせて～」展（新潟県立近代美術館、三井記念美術館、奈良県立美術館）に援助・助言を行う。	**【奈良国立博物館】** ・「奈良の古寺と仏像－會津八一のうたにのせて」展（新潟市會津八一記念館・新潟県立近代美術館：22年4月24日～6月6日、三井記念美術館：同7月7日～9月20日、奈良県立美術館：同11月20日～12月19日）に協力し、学術面での援助・助言を行った ・米国・メトロポリタン美術館における特別展「上都から大都へ：フビライ汗の世界」（22年9月20日～23年1月2日）開催にあたり、日本からの出陳品の出陳交渉及び輸送に際しての随行及び助言を行い、メトロポリタン美術館での展示にも立会った。 ・韓国国立中央博物館における特別展「高麗仏画大展」（22年10月11日～11月21日）開催にあたり、日本からの出陳品の出陳交渉及び輸送に際しての、随行及び助言を行った。 ・福井県立美術館おける特別展「シルクロードと東アジアの仏教美術」（22年10月9日～11月3日）開催にあたり、出陳品の選定及び事前調査等に際しての協力・助言を行った。 ・独立行政法人科学技術振興機構（ＪＳＴ）が平城遷都1300年祭のメーン会場において大画面ハイビジョンで放映するために制作した、唐招提寺所蔵の東征伝絵巻（重文）全5巻の高精細画像を当館にて撮影した際に、作品輸送・取扱・助言などの協力を行った。また唐招提寺講堂における展示「国宝金堂平成大修理のあゆみ」（22年10月～。内容は修理の成果物・パネル・模型等）の開催にあたり、学術面での協力・助言を行った。 ・山形県立博物館が開催した特別展「縄文のキセキ－半世紀の時を越えて」（22年10月9日～12月5日）に貸与した館蔵品の土偶1件の輸送に際しての随行及び助言を行い、現地での展示・撤収に立ち会った。また福島県・南相馬市博物館が開催した特別展「国史跡指定記念　古代陸奥国　行方の郡家－国指定史跡　泉官衙遺跡」（23年1月8日～3月6日）に貸与した館蔵品の瓦類139点の輸送に際しての随行及び助言を行い、現地での展示に立ち会った（以上は平成22年度考古資料相互活用促進事業による）。	A	順調
3514	（九州国立博物館） 1）地域の自治体と連携し、公私立博物館・美術館等職員のための古文書保存に関する専門講座を開催する。	**【九州国立博物館】** 公私立博物館等で開催された研究集会および講演会において指導・助言を行った。 ①文化財の修理にかかる指導助言 ②講演会、セミナー等における講演 ③文化財の調査にかかる指導助言 ④作品の展示、保存環境についての調査指導 ⑤古文書保存に関する専門講座を開催	A	順調

定量評価	22年度	21年度	目標値	評定
公私立博物館・美術館への指導助言（件）				
東京国立博物館	84	139	40	S
京都国立博物館	123	114	12	S
奈良国立博物館	35	25	5	S
九州国立博物館	77	39	12	S

4　文化財に関する調査及び研究の推進

(1)　文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

【中期目標】文化財の各分野に関する基礎的・体系的な調査及び研究や、総合的な視点に基づく文化財の調査研究手法の開発等を推進することにより、国及び地方公共団体における文化財保護施策の企画立案及び文化財の評価等に係る業務の基盤形成に寄与すること。

特に、文化財保護法の改正によって新たに保護の対象となった文化的景観、民俗技術などに関する調査及び研究を推進し、今後の指定等の業務に係る基礎的な知見を形成すること。

【中期計画】

(1)　文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究として、国内外の機関との共同研究や研究交流も含めて以下の課題に取り組むことにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。

①文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった文化的景観、民俗技術に関する基礎的・体系的な調査・研究を実施し、今後の指定をはじめとする保護施策に関する資料と指針を提供する。

②我が国の有形文化財及びそれに係わる諸外国の文化財に関し、以下の課題に重点的に取り組む。

ⅰ 日本を含む東アジア地域における美術の価値形成の多様性の解明

ⅱ 我が国における近現代美術の歴史の解明

ⅲ 美術や文化財に対する理解を深めるための美術の創作のプロセスの解明

ⅳ 古都所在寺社所蔵の歴史資料・書跡資料等に関する原本調査を通じた日本の歴史、文化の研究

ⅴ 歴史的建造物の保存・修復・活用に関し重点物件に係る調査・研究を通じた基礎データの収集整理・公開

③我が国の古典芸能及び伝統的工芸技術等の無形文化財の伝承実態を把握するとともに、その伝承・公開の基礎となる技法・技術を明らかにする。

④我が国の風俗習慣、民俗芸能、民俗技術など無形民俗文化財の現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等を明らかにするとともに、各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図り、「無形民俗文化財の映像記録作成ガイドライン(仮称)」等の指針を作成し公表する。

⑤平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

⑥遺跡の保存・整備・活用に関する一体的な調査・研究、技術開発の推進及び整備事例のデータベース化等により、個々の遺跡の現況に応じた適切な保存修理・整備に資する。また、これに関連して、平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査・研究を行い、文化庁が行う平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡の整備・復原事業に関して、専門的・技術的な協力・助言を行う。

【主な計画上の評価指標】(1)～(5)共通

○中期計画に示された課題や文化財保護政策のニーズに沿って、研究の目的、テーマを適切に設定すること。

○それぞれの調査研究を計画に沿って適切に実施すること。また、我が国の文化財保護政策上、緊急に保存修復の措置等が必要となった場合において、必要な実績的調査研究を迅速かつ適切に実施すること。

○調査研究の成果により我が国の文化財保護政策に寄与するとともに、学術雑誌等への論文の掲載、学会、研究会での発表、データベースの追加等により定量的観点からも調査研究の成果を確保すること。

【21年度評価における主な指摘事項】(1)～(5)共通

○新たに保護が必要な文化財の基礎的調査については、より一層充実させる必要があり、スタッフについてもさらに充実させるべきである。

○遺跡の保護・整備・活用は、現在活用に焦点が当てられているが、保護、維持管理は、古くて新しいテーマであり、最大の課題と考えられるため、長期的な経年変化を継続して観察する総合的な調査・研究を実施し、より一層良好な保存継承システムが構築されることを望む。

○可能な限り無形文化財に係る調査研究の充実を図ってほしい。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(1)　文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進	**(1)　文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進**		
	文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究として、国内外の機関との共同研究や研究交流も含めて以下の課題に取り組むことにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。 ①　平成１６年の文化財保護法の一部改正に伴い保護対象となった文化的景観、民俗技術に関する基礎的・体系的な調査・研究を実施し、今後の指定をはじめとする保護施策に関する資料と指針を提供する。			
4111	ア　文化的景観の体系化や保護策に関する研究の一環として、文化的景観に関する基礎的な情報の収集を進めるとともに、文化的景観の学術及び保護に資する研究会を定期開催し、その成果をふまえて文化的景観の保護に関する研究集会を開催する。また、ケーススタディーとして実施してきた高知県四万十川流域の文化的景観に関する調査研究報告書を作成する。	**①－ア 文化的景観に関する調査研究** 文化的景観に関する基礎的な情報の収集、四万十川流域や宇治の文化的景観に関する現地調査等を通じて、文化的景観の価値評価、保存計画立案、整備・活用事業の基本的な考え方を整理し、四万十川流域の文化的景観調査報告書を刊行するとともに、論文・Web サイトを通じて成果を報告した。また、文化的景観の学術及び保護に資する研究会である文化的景観学研究会を２回開催し、その成果を踏まえつつ、文化的景観の保存計画と整備・活用をテーマに文化的景観研究集会（第３回）を開催した。関連して、昨年度開催の研究集会（第２回）の成果報告書を刊行した。	A	順調
4112	イ　民俗技術に関して、都道府県・市町村における保護の現状に関して、年中行事に用いられる飾り物等に関する技術伝承を中心に調査を行い、資料を収集する。（④と一体で実施）	**①－イ 民俗技術に関する調査・資料収集（④ 無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究と一体的に実施）** 民俗技術の伝承実態、民俗芸能の伝承組織について現地調査と資料収集を行い、その成果を『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』などに報告した。また無形民俗文化財研究協議会を開催し、無形民俗文化財の保存と活用に関する現実的課題への対応を協議し、その成果を報告書にまとめ、関係者、関係機関等に配布した。さらに地方自治体で作成された無形文化遺産に関する記録の所在情報について、確認作業を行い、データ化を完了した。	A	順調
	②　我が国の有形文化財及びそれに関わる諸外国の文化財に関し、以下の課題に重点的に取り組む。			
4121	ア　日本を含む東アジア地域における美術の価値形成の多様性を解明するために、報告書を平成２２年度に刊行することを目指して、近年の記録媒体や分析手法等の進展に対応しながら調査研究し、美術史研究の資料学的基盤を整備、確立して、国内外の研究交流を行う。	**②－ア 東アジアの美術に関する資料学的研究** (1) 情報資料の収集のための調査：横山大観《山路》の調査。 (2) 美術史研究のためのコンテンツの形成：『日本絵画史年紀資料集成　十五世紀』のデータ入力。古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化。 (3) 研究会の開催：『美術研究』400 号、『美術史論壇』30 号記念日韓共同シンポジウム「人とモノの「力学」―美術史における「評価」」の開催。オープンレクチャーの開催。 (4) 研究成果報告書の編集・刊行：『日本絵画史年紀資料集成（15世紀）』の刊行。	A	順調
4122	イ　我が国における近現代美術の歴史を解明するために、日本の近現代美術に関す	**②－イ 近現代美術に関する総合的研究**	A	順調

	る研究資料を収集、整理し、総合的な視点に基づく研究手法を開発するとともに、多様化する現代美術の動向に関する調査研究を行い、基礎資料を形成する。	未公刊資料の調査研究として、黒田清輝関連資料、笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理・調査を進め、既刊の『日本美術年鑑』所載データをウェブ上に公開するための準備を行った。資料にもとづく研究協議、成果公開としては、黒田記念館にてデジタルコンテンツ「写真で見る黒田清輝の日常」を作成し公開した。		
4123	ウ　美術の創作のプロセスを解明して、美術や文化財に対する理解を深めるために、報告書を平成２２年度に刊行することを目指して、文化財に関する諸分野と連携しながら、基礎的なデータを収集、蓄積し、制作過程や技法、材料の歴史的変遷を明らかにする調査研究を行う。	**②－ウ 美術の技法・材料に関する広領域的研究** 本研究は美術作品が基盤としている材料・技法・制作の過程等を文献史料あるいは作品に対しての科学的手法による分析を援用しながら解明することを目的とする。本年度は天平時代の脱活乾漆像の技法についてこれまでの調査研究成果をまとめた報告書を刊行した。また、ホームページ上で公開している奈良時代史料にあらわれた彩色語彙についてのデータベースを再点検し、精度の向上をはかった。	A	順調
4124	エ　日本の歴史、文化の源流等の実態を探るため、古都所在の寺社や旧家が所蔵してきた歴史資料・書跡資料等に関して、興福寺、東大寺、仁和寺、大宮家等の所蔵資料の原本調査、記録作成を実施するとともに、これまで調査してきたデータを整理し、得られた成果の一部を公表する。	**②－エ 古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究** 石山寺については、昨年度からの調査成果に基づいて、石山寺一切経の大智度論に関する論稿を公表できた。奈良時代の知識経として著名なものだが、後世に数種類の経典を取り合わせて現在の姿になったものを、詳細に調査することにより、その取り合わせ状況を明確にできた。また平城宮周辺等の旧家・自治会等が所蔵する資料の調査を進め、江戸時代から明治時代の平城宮跡の状況、その保存運動に関する資料を収集・公表できた。	A	順調
4125	オ　わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に向けた歴史的建造物、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する基礎データを蓄積し、分析・研究を行うとともに、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の諸構法についての再検証を行い、得られた成果を整理する。	**②－オ 歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究** 文化財建造物の保存修理に関する基礎データである所内保管資料の整理等の作業を行い、「建造物現状変更説明」については出版物として刊行・配布し、「ガラス乾板」については画像をデジタルデータ化し、一般公開を推進した。また、古代建築の技法に関する研究を継続的に実施した。このほか、受託事業により、各種歴史的建造物の調査をおこなった。	A	順調
4131	③　これまで行ってきた無形文化財の伝承実態に関する調査研究をまとめて報告書を刊行する。無形文化財に関する音声・映像記録に基づいて公開講座として発表するほか、能楽・雅楽における楽器、能楽の資料調査、文楽における美太夫節曲節資料の調査を行う。また、伝統芸能の中で伝承の変化の著しい謡曲、講談の記録作成を行う。 工芸技術については技法書や映像資料等の収集を行い、その調査を行う。また、無形文化遺産分野についての国際的研究交流として、韓国をはじめとする近隣諸国との研究交流を実施する。	**③ 無形文化財の保存・活用に関する調査研究** 文化財保護委員会が作成した音声資料、戦前に開発・実用された音声記録媒体フィルモン、現在伝承されている狂言歌謡、能管の製作技法、文化財保護委員会及び文化庁が行った工芸技術記録について調査研究をおこなうとともに、無形文化遺産部所蔵音声資料の整理をおこない、伝承の危ぶまれる伝統芸能について実演記録を作成した。無形文化遺産分野での国際的研究交流では、韓国国立文化財研究所の無形文化遺産研究室との合意書に基づき、研究員の相互派遣を実施した。5年間のまとめてとして『無形文化財の伝承に関する資料集』を発行した。	A	順調
	④　我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術など無形民俗文化財の現在における伝	**④ 無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究**		

	承の実態、伝承組織、公開のあり方等について、平成２２年度は、無形民俗文化財の現代における伝承実態、伝承組織、公開のあり方等について、現地調査公開実態調査およびこれまでの現地調査の補足調査を実施し、その成果をとりまとめ報告書として刊行する。また、無形民俗文化財研究協議会を実施し、その成果を報告書にまとめる。さらに、無形民俗文化財の映像記録についての全国的な所在情報データベースの構築を完了させる。	①－イ参照		
	⑤　国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び文化財建造物に関する基礎的調査研究を実施する。			
4151-1	ア　平城京跡及び飛鳥・藤原京跡について、古代都城の実体解明のため本年度は以下の地区の発掘調査を実施する。 （平城京跡）平城宮跡東院地区・東方官衙地区、平城京内諸寺院ほか （飛鳥・藤原京跡）藤原宮跡朝堂院地区、飛鳥地域ほか	**⑤－ア－1　平城宮跡東方官衙地区（466 次）の発掘調査** 基壇をもつ東西棟礎石建物が南北方向に 3 棟築地塀を挟んで建つことが明らかになった。また周辺の地中レーダー探査により、西隣にも同様の建物配置となる遺構が存在することも判明した。さらにこれらの建物群の南北でそれぞれ宮内道路とそれに伴うと推定される築地塀を検出した。以上により、ある官衙区画の南北範囲を確認することができた。その南には掘立柱建物による別の官衙区画を検出した。また礎石建物群の下層から神亀・養老年間の木簡が出土した。	A	順調
4151-2		**⑤－ア－2　平城宮跡東院地区（第 469 次）の発掘調査** 平城宮跡東院地区の西北部にあたる調査区で、建物跡、掘立柱塀、溝を多数検出した。これらは周辺の調査成果も参照すると６期以上に区分できる。おもな遺構としては、調査区中央部を東西に流れる新旧２条の石組溝、調査区北部の周囲を溝で区画された東西棟礎石建物、推定三面廂付の東西棟建物などがある。 周辺の調査成果と比較して、建物が小規模になる点や、食器類をはじめとする大量の遺物が出土する点から、東院地区のバックヤードとしての機能が推定できる。	A	順調
4151-3		**⑤－ア－3　西大寺旧境内（第 473 次）の発掘調査** 『西大寺資財流記帳』にみえる薬師金堂の回廊推定地の調査。今回の調査では、回廊の痕跡は検出されず、金堂院を囲む回廊は、当地よりも南に位置する可能性が高まった。	A	順調
4151-4		**⑤－ア－4　薬師寺（第 474 次）の発掘調査** 重機により地表より約 165cm 掘削し、そこから作業員による掘り下げを開始した。池の埋め土とみられる暗灰褐粘砂土層を検出し、池の岸を検出した。一部、地表から約 250cm まで掘り下げて池の底の腐植土を確認した。検出遺構は、池１面、土坑６基、瓦土坑２基、東西溝１条、南北溝１条である。池の上の整地層から 12 世紀の瓦器皿が出土したが、各遺構の年代については不明である。	A	順調
4151-5		**⑤－ア－5　薬師寺（第 475 次）の発掘調査**	A	順調

		薬師寺休ヶ岡八幡宮における発掘調査。社殿の東側では奈良時代に開削されたとみられる段差と、この段差を埋める奈良時代の遺物包含層を確認した。出土土器は奈良時代前半のものである。また、社殿の西側では表土直下で現代の土坑４基を検出したが、明確な遺構は皆無である。		
4151-6		**⑤－ア－6　薬師寺（第 476 次）の発掘調査** 調査区は金堂前庭部分にあたり、井戸や前庭に敷かれた河原石を検出した。	A	順調
4151-7		**⑤－ア－7　春日東塔跡（第 477 次）の発掘調査** 春日東塔院の区画施設の外側の雨落溝（L 字に折れ曲がる）、落ち込み（以上、東塔建設以降の遺構）、土坑３基・礫敷１ヵ所（下層遺構、東塔建設以前）、 なお外側の雨落溝と落ち込みの間に遺構（土坑・溝）を検出しているが、時期及び性格は不明。	A	順調
4151-8		**⑤－ア－8　平城京左京三条一坊一・二坪（第４７８次）の発掘調査** 三条条間北小路南北側溝、左京三条一坊一坪を南北に二分する坪内道路の南北側溝、掘立柱建物２棟、井戸１基など、奈良時代の遺構を確認した。平成23年3月３日には報道発表をおこなった。	A	順調
4151-9		**⑤－ア－9　藤原宮跡朝堂院地区の発掘調査** 朝堂院朝庭の発掘調査を実施し、朝庭の礫敷や排水のための暗渠を検出し、朝庭における整備状況を確認した。また、下層遺構の調査では、藤原宮造営期に資材を運搬したと考えられる運河や、運河から北東方向に派生する斜行溝、資材搬入や加工に関わると考えられる沼状遺構、朝庭造営中に機能していたと推測できる東西・南北方向の複数の素掘溝を確認した。これらの変遷から、朝堂院の造営過程を復元する上で重要な手がかりを得た。	A	順調
4151-10		**⑤－ア－10　飛鳥地域の発掘調査** 水落遺跡第 10 次調査においては、斉明朝（7 世紀中頃～後半）以前、斉明朝、天武朝（7 世紀末頃）の 3 時期にわたる遺構を検出した。斉明朝以前では掘込地業および土器埋設遺構、斉明朝には施設群の地固めのための南北 48m 以上に及ぶ掘込地業、そしてその内部に設けられた様々な施設（壺地業、東西棟建物、銅管や木樋を設置するために掘られた素掘溝など）、北側の石神遺跡から通路状に続く石敷などを確認した。	A	順調
4152-1	イ　出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に実施することを目的として、平成２１年度及び平成２０年度以前の発掘により出土した出土遺物（木製品・金属製品・土器・土製品・木簡・瓦等）の分類分析研究及び保存処理を実施するとともに遺構の研究を行う。そしてその成果の一部を『平城宮発掘調査報告』、『平城宮整備報告』等として刊行する。	**⑤－イ－1　平城京跡出土遺物・遺構の調査研究等** 本年度の発掘調査で出土・検出した遺物・遺構の整理・分析研究、図面・写真の作成などの基礎作業を行い、平成 23 年刊行予定の『奈良文化財研究所紀要 2011』の報告を準備した。併せて、昨年度以前の発掘調査で出土した遺物についての調査を継続して実施した。また、『天平びとの声を聞く―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて』を開催した。	A	順調
4152-2		**⑤－イ－2　飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等** 本年度の発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦塼類などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を年間を通じて実施し、成果の一部を公表した。	A	順調
4153	ウ　飛鳥・藤原京・平城京などの古代都城の解明に資するために、古代官衙、集落遺跡に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する。	**⑤－ウ飛鳥・藤原京・平城京などの古代都城の解明に資するために、古代官衙、集落遺跡に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する** 第 14 回古代官衙・研究集落研究集会を開催（12/10・11）した。テーマは「古代官衙・集落と鉄」である。事例紹介のほか、自然科学的手法や文献資料からの分析が報告され、これらを踏まえての活発な討論がおこなわれた。 昨年度実施した研究集会の報告書を『奈良文化財研究所研究報告４官衙と門』（論考編・資料編）』として刊行した。	A	順調
4154	エ　アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する調査研究並びに研究協力について、北魏洛陽城等に関する中国社会科学院考古研究所との共同研究、中国の生産遺跡（唐三彩窯跡及び生産品）に関する河南省文物考古研究所との共同研究、隋唐墓に関する遼寧省文物考古研究所との共同研究、日本の古代都城並びに韓国古代王京に関する韓国国立文化財研究所との共同研究を協定に基づいて実施する。そして、その成果の一部を『漢長安城桂宮発掘調査報告』、『鞏義白河窯の考古新発見』、『日韓文化財論集Ⅱ』として刊行する。	**⑤－エ アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究** A：漢魏洛陽城 3 号門、西南隅で合計 2800 ㎡の共同発掘を実施。漢長安城桂宮の発掘報告書、奈良文化財研究所・中国社会科学院考古研究所編『漢長安城桂宮』奈良文化財研究所学報第 85 冊（2011.3）を刊行した。 B：遼寧省における隋・唐代墓出土品についての調査成果の取りまとめを実施。玉田芳英「中国河南省文物考古局との共同研究」『奈良文化財研究所概要 2011』を刊行予定。 C：河南省および陝西省で生産した唐三彩の調査研究を実施。 D：日本の古代都城 並びに韓国古代王京の形成と発展過程に関する共同研究を実施。『日韓文化財論集Ⅱ』奈良文化財研究所学報第 87 冊、奈良文化財研究所・大韓民国国立文化財研究所（2011. 3）を刊行した。	A	順調
4155	オ　平安時代庭園に関する調査・研究の一環として、平成２２年度は平安時代中期・後期の発掘遺構・現存庭園・史料等について情報収集・調査を行うとともに、平成１８年度からの研究成果を『古代庭園研究Ⅱ』（学報）として取りまとめる。	**⑤－オ　庭園に関する調査研究** 平安時代の庭園・建築・文献等の研究に取り組んでいる研究者とともに検討会を開催し、その成果を踏まえつつ、平成 18 年度以来実施してきた「平安時代庭園に関する研究」について取りまとめ、奈良文化財研究所学報第 86 冊『平安時代庭園の研究（古代庭園研究Ⅱ）』を刊行した。また、日本庭園に関する国際的な情報発信検討の一環として『Japanese Garden Dictionary』の校訂を進めた。さらに、森蘊・村岡正・牛川喜幸の庭園等関係研究資料について、整理・調査するた	A	順調

		めの基盤的環境を整えた。		
4156	カ 飛鳥時代の壁画古墳についての調査研究を行うとともに、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、鋳造関連遺物を中心とした資料の調査を行うとともに、河南霊井遺跡出土品の研究に協力する。また、飛鳥時代木造建築遺物の研究として、山田寺出土部材の研究を行う。	**⑤ー力 東アジア史における飛鳥の研究及び飛鳥時代工芸技術の研究** 飛鳥地域の壁画古墳の研究としては、天文図を中心に研究を進め、関連文献の収集、高松塚・キトラ両古墳の天文図の比較、成田市稲荷山遺跡出土七星刀の調査などを実施した。 東アジアにおける工芸美術史・考古学研究のうち、鋳造関連遺物の調査は、藤原京出土の資料に関し、集成と調査を行った。霊井遺跡出土品の研究協力は、成果の一部を企画展で示した。また、来日した河南省文物考古研究所ほかの研究者と同行し、東北大学、明治大学等での調査をおこなうとともに、内外の学会、シンポジウムで報告をおこなった。 山田寺出土部材については、経年的に計測調査をおこなっており、本年も計測を継続した。その結果、大きな変化がないことを確認した。	A	順調
	⑥ 遺跡の保存・整備・活用に関する一体的な調査・研究、技術開発の推進及び整備事例のデータベース化等により、個々の遺跡の現況に対応した適切な保存修復・整備の向上に資する。また、これに関連して、平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査･研究を行い、文化庁が行う平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡の整備・復原事業に関して、専門的・技術的な協力・助言を行う。			
4161	ア 遺跡の調査・保存・整備計画段階から整備後における管理・運営と公開・活用に至るまでの調査研究を行うとともに、遺構の露出展示を伴う整備事例の資料収集・現地調査を踏まえたデータベースを構築し、遺構露出展示に関する調査研究の成果を報告書として取りまとめる。また、遺跡の総合的マネジメントに関する研究集会を開催する。	**⑥ー ア 遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究** 遺跡等における遺構露出展示について、個別事例の情報収集をおこない、データベース構築の作業を進めるとともに、露出展示遺構の保存管理に関するマニュアルの検討をおこなった。また、過年度の成果について、『遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり』［平成21年度遺跡整備・活用研究集会（第4回）報告書］を刊行・配布するなど、その普及等をおこなった。第5回遺跡整備･活用研究集会「地域における遺跡の総合的マネジメント」を開催した。	A	順調
4162	イ 遺構の安定した公開･展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術ならびに監視技術の開発的研究の一環として、遺跡の水分状態や石材の劣化状態を把握する技術の応用研究、平城宮跡遺構展示館等における遺構安定化の実地試験に取り組む。	**⑥ーイ 遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術並びに監視技術の開発的研究** 遺構の露出展示をおこなった場合の水分移動変化、および塩類による劣化を予測するために、水分移動および溶質移動の推定をおこなった。さらに、塩類による土質遺構の劣化を抑制するために、水による溶質除去の可能性についても検討した。 覆屋を伴わない屋外に位置する遺構において、気象台による限定的な気象観測データ（気温、湿度、日射量、降水量、風速）をもとに、遺構表面からの水分浸潤量および蒸発散量を推定し、土中における水分移動について検討をおこなった。	A	順調
4163	ウ 平城宮跡、藤原宮跡について、公開活用及び整備の具体的方策を研究し、文化庁が行う平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関して、専門的・技術的な援助・助言を行う。文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究として、国内外の機関との共同研究や研究交流も含めて以下の課題に取り組むことにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。	**⑥ーウ 文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿正殿復原をはじめとする整備・公開・活用に関する専門的・技術的な援助・助言** 昨年度に完成した第一次大極殿正殿の完成記録写真撮影をおこなった。また4月24日に開幕した平城遷都1300年祭の準備のため、大極殿正殿内の展示の内容等について援助・助言をおこなった。1300年祭開催期間中は、各方面からの来訪者への対応、あるいは見学客の質問等の応対をおこなった。開催中あるいは開催後はイベント用の仮設建物の建設･撤去や旧状復旧にともなう工事に対する立会をおこなった。 それとともに、平城宮跡の国営公園化にともない、第一次大極殿を中心とした大極殿院内の諸建物を復原することとなった。このための文献資料や発掘遺構等の検討をおこない、またそのための資料収集のほか、類例を抽出して調査をおこなった。検討成果は国土交通省が組織した「第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会」で発表した。	A	順調

(2) 文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進

【中期目標】最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査及び研究を通じて、文化財の保存・修復に係る技術・技法や材料の開発・評価等を推進し、文化財の保存や修復の質的向上に寄与すること。

【中期計画】

(2) 文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進

文化財の調査手法に関する以下の研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与する。

①光に対する物性を利用した高精彩のデジタル画像を形成する手法に関する調査・研究を行い、文化財の色や形状・肌合いなどを正確かつ詳細に再現することを目指す。

②小型可搬型機器の開発及び応用研究を行い、文化財の材質調査をその場で行えるようにする。また、有機化合物の物質同定を目的とした新規手法の検討及びその応用研究を行い、金属文化財や顔料など無機化合物に関する元素分析及び構造解析手法の確立等を目指す。

③遺跡調査における新たな指標や属性分析法の確立に関する研究会等を行い、全国における遺跡調査・研究の質的向上と発掘作業の効率化に資する。

④木質古文化財の年輪年代測定法等を進め、考古学・建築史・美術史の研究に資する。

⑤遺跡出土の動植物遺体や古土壌の考古科学的分析により、過去の生業活動の解明と環境復元を行う。

【主な計画上の評価指標】

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
4211	**(2)文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進** 文化財の調査手法に関する以下の研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的･歴史的･自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与する。 ① 光に対する物性を利用した高精細デジタル画像を形成する手法に関し、文化財の色や形状・肌合いなどを正確かつ詳細に再現し、公開することを目指して、調査・研究を行う。	**(2)文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進** **① 高精細デジタル画像の応用に関する調査研究** 脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財の高精細な画像や特殊撮影画像の公開と多目的な利用に供すべく、平等院と行った	A	順調

		共同研究成果を『平等院鳳凰堂調査資料目録―蛍光線画像編』として刊行した。また、奈良国立博物館との共同研究成果を『大徳寺五百羅漢図報告書』として刊行した。さらに、他機関との共同調査研究として宮内庁三の丸尚蔵館と「春日権現験記絵巻」の調査撮影、奈良国立博物館との共同調査研究として「信貴山縁起絵巻」、徳川美術館との共同研究として「歌舞伎図巻」「本多平八郎姿絵屏風」の調査撮影を行った。		
4221	② 可搬型蛍光Ｘ線分析装置による彩色文化財の材質調査を推進するとともに、有機染料分析のための光学的調査方法の基礎的検討を行う。また、文化財の材質構造に関する調査・助言を行う。	**② 文化財の非破壊調査法の研究** 蛍光Ｘ線分析装置、反射分光分析装置、デジタル顕微鏡さらにはＸ線透過撮影装置など複数の可搬型調査機器を用いて、博物館・美術館等の所蔵作品の材質・構造の非破壊調査を実施した。また、これら調査技術の高度化を目指して、さまざまな検討を行い、実資料への適用を図った。	A	順調
4231	③ 遺跡調査における新たな指標や属性分析法の確立に関する研究等を行い、全国における遺跡調査・研究の質的向上と発掘作業の効率化に資する。 ア 官衙関連遺跡及び寺院遺跡の資料収集を行い、その指標や基本的属性分析を踏まえた資料のデータベース化を推進し、適宜一般公開する。	**③－ア 遺跡データベースの作成と公開** 官衙関係遺跡の建物データについて、各遺跡における建物群の性格・建物の性格を細分化して追加した。とくに、官衙および都城における門遺構のデータを重点的に収集し、『官衙と門』の資料集成を刊行した。また、寺院遺跡の属性分析をふまえたデータベースを、九州から近畿地方の一部まで公開した。さらに、井戸のデータベースを作成し、データ収集を開始した。	A	順調
4232	イ 遺跡や遺物の測量・計測・探査における新たな技術の有効利用法を研究し、実地テストをつうじたデータの収集と分析を行う。また、形状をはじめとする考古資料の情報の分析手法を開発・研究し、デジタルアーカイビング技術の導入を検討する。	**③－イ 遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法の研究** 遺跡の測量・探査技術の向上と有効利用法の研究を推進し、大学や地方公共団体と連携して実践をおこなった。測量では、三次元レーザースキャナーおよび写真測量の技術的検討をおこない、遺跡や遺物の図化法の検討、安価で導入可能な機器の実践と普及を実施した。探査では、ＧＰＲおよびＥＭ法の走査方法改善と新たな機器の試作、ＧＰＳによる位置精度向上実験をおこない、多様な条件下で遺構の確認に成功した。	A	順調
4241	④ 遺跡出土木材、木造建築物、木造美術工芸品などの年輪年代測定を実施し、考古学、建築史学、美術史、歴史学研究に資する。とりわけ、当研究所で開発したマイクロフォーカスＸ線ＣＴやデジタル画像による非破壊年輪年代測定法は、非破壊を原則とする文化財調査に大変有効であるので、実施事例の拡充を図る。これらの研究成果を、学会、学術論文、各種報告書として発表する。また、中期計画の最終年度にあたる本年度は、過去５カ年にわたる研究活動の成果について総括する。	**④ 年輪年代学研究** ２県下２遺跡の出土木製遺物、２県下４棟の木造建造物、３府県下３躯の木彫像に対して年輪年代測定調査を実施した。このうち、１躯の木彫像に対してプロジェクト研究者らが開発したマイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置を用いた年輪年代測定調査を実施している。これらの調査・研究成果の一部を論文等８件、学会発表等７件として公表した。このうち、１件の学会発表ではポスター賞を受賞している。	A	順調
4251	⑤ 動植物遺存体による環境考古学的研究の継続を行う。また、各種計測機器、マイクロスコープを活用して実験品や出土骨に残る加工痕の観察方法を確立し、骨角器製作技術や動物解体技術の研究を推進する。さらに中国、韓国、台湾や、北米北西海岸の日本の先史時代の動植物利用と対比できる遺跡の発掘に積極的に参加し、これまで国内の遺跡で開発してきた微細遺物選別法の実践を行い、東アジア、環太平洋世界の中での農耕・牧畜の起源や動植物利用に関する比較研究を行う。	**⑤ 遺跡出土の動物遺存体や古土壌の考古科学的分析による環境考古学研究** 土壌選別作業を積極的に実施して、これまで出土事例の少なかった内陸部や日本海側の遺跡から動植物遺存体を回収して、分析を進めた。査読誌２本を含む 30 本の論文や報告書を執筆し、学会や研究会で８本の発表を行って研究成果を発表し、研究交流を深めた。藤原宮のウマに関する連携研究を立ち上げて、次年度につながる良好な成果を得た。また、研究の基礎となる現生動物骨格標本についても継続的に収集した。	A	順調

(3) 科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進

【中期目標】国や地方公共団体の要請に応じて、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急性の高い文化財の保存・修復に係る実践的な調査及び研究を実施すること。

【中期計画】

(3) 科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進

最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査及び研究として以下の課題に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。

①生物被害を受けやすい木質文化財(社寺等建造物、彫刻など)の劣化診断や被害防止対策を確立する。

②環境の調査手法、モデル実験やシミュレーション技術を用いた環境の解析手法の確立のための研究及び実践を行い、文化財を取り巻く保存環境の現状を把握し、改善することに資する。

③屋外文化財の保存・修復の手法を確立する。また、文化財の防災についてその予防と被災後の情報収集を行い、文化財防災のネットワーク化の一層の推進を図る。

④考古資料の材質・構造の調査法に関して、特にレーザーラマン分光分析法や高エネルギーＸ線ＣＴ・ＣＲ法の実用化を図る。また、考古資料の保存・修復に関する実践的な研究を実施する。

⑤伝統的修復材料や合成樹脂などの物性、製作技法、利用技法に関する調査・研究をもとに、修復材料・技法の評価及び開発を行う。また、海外の文化財保存担当者を対象に、日本の修復材料の使用法や修理技術に関する研修等を行い本国での基本的な作品の取り扱いや保存処理に反映させる。

⑥近代の文化遺産に特徴的な鉄、コンクリート、プラスティックなどの複合素材及び技法について国際共同研究を実施し、その成果をもとに国内所在の近代文化遺産の保存・修復に関する手法を開発する。

【主な計画上の評価指標】

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(3) 科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進 最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査及び研究として以下の課題に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。	**(3) 科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進**		
4311	① 生物被害を受けやすい木質文化財（寺社等建造物、彫刻など）の劣化診断や被害防止対策の確立のため、調査研究を行う。今年度に報告書を	**① 文化財の生物劣化対策の研究** 本年度は、日光二社一寺の歴史的建造物約 70 棟について、粘着トラップを	A	順調

	刊行する。	用いて木材害虫の棲息状況を調査した。その結果、これまで文化財建造物の被害例が知られていない複数のシバンムシ類が認められ、また調査結果よりこれらは周囲の屋外で棲息している可能性が示唆された。虫害の著しい建造物を調べるのにこのような調査手法が有効であることが示され、レジストグラフなどの手法を用いて建物強度などの調査が行われている。また、漆塗装のある建造物に適した殺虫処理についても検討を進めた。調査、検討結果は、研究報告会で専門家、関係者に報告し、今後取り組むべき課題と問題点を明らかにした。『日光の歴史的建造物において粘着トラップ（ハエトリリボン）に捕獲された甲虫の集計方法と調査結果』「保存科学」50(2011.3)、『日光の歴史的建造物を加害するシバンムシ類の殺虫処理方法の検討』「保存科学」50(2011.3)を刊行した。		
4321	② 環境の調査手法、モデル実験やシミュレーション技術を用いた環境の解析手法の確立のための研究及び実践を行う。今年度に報告書を刊行する。	**②文化財の保存環境の研究** 本年度も、文化財展示・収蔵施設の環境調査を行うと共に、熱・換気回路網計算プログラムによる解析や三次元熱流体解析システムによる気流シミュレーションを行い、環境改善に関する研究を行った。博物館施設の環境に関する研究については、新築の九州歴史資料館を調査対象として、内装材料が福岡県八女産の杉、熊本県小国産の杉、無機質系調湿材、のあわせて 3 種類の内装材料で構成される収蔵庫をモデルとして、各種計測評価方法の比較試験、および内装材料による空気質の違いについて検討した。文化財の保存環境に関する研究会を３回開催した。『文化財の保存環境の研究 平成 18～22 年度研究成果報告書』(2011.3)を刊行した。	A	順調
4331	③ 韓国と日本国内の石造・木質文化財調査を行い、磨崖仏などの劣化要因究明及び修復材料・技術の開発を日韓共同で行う。また、東大寺法華堂及び戒壇堂安置仏像群の防災体制に関する基礎的調査を行う。さらに、文化財防災情報システムを活用した防災体制の整備に関する調査研究を進める。	**③−1 周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究** 石造文化財や木造建造物など屋外に位置する文化財について周辺環境計測を行った。また、その結果に基づく劣化要因の解明、周辺環境影響を軽減する方法および修復材料・技法の開発・評価を行った。詳細には、（1）臼杵磨崖仏における劣化要因の解明および劣化防止対策を含めた保存管理計画の提案、（2）厳島神社における木材充填材料の現地曝露試験、（3）大韓民国・国立文化財研究所との共同調査、共同研究発表会等を実施した。	A	順調
4332		**③−2 文化財の防災計画に関する調査研究** 平成 22 年度は、（1）東大寺法華堂安置仏像群および塑像四天王立像（戒壇堂所在）の耐震対策を講ずるため、対象となる仏像の三次元計測、重心など三次元計測から得られた情報を用いた地震時転倒予測を継続した。また、仏像模型を使った振動台実験を三重大学の協力のもと行った。（2）地理情報システム（GIS）に基づいた文化財防災情報システムについて、地方公共団体における活用実験を継続した。	A	順調
4341	④ 考古資料の材質・構造の調査法に関して、特にレーザーラマン分光分析法や高エネルギーＸ線ＣＴ・ＣＲ法の実用化を図る。また、考古資料の保存・修復に関する実践的な研究を実施する。	**④ 考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究** 1）ガラス製品の標準試料のスペクトルを集積するとともに、ガラス製遺物のスペクトルを取得した。	A	順調

	ア 考古遺物の完全非破壊非接触分析法としてのレーザーラマン分光法の応用を目指し、標準試料及び考古遺物のラマンスペクトルの収集蓄積並びにデータベースの構築を継続する。 イ 高エネルギーＸ線ＣＴ法及びＸ線ＣＲ法を応用し、考古遺物の内部構造並びに材質推定法の基礎的研究を行う。 ウ 繊維製遺物や漆製遺物などの有機質遺物の分析法の実用化とデータベース作成を行う。 エ 木製遺物に対する超臨界溶媒乾燥法の基礎的研究と実用化を目指し、強化含浸薬剤の検討並びに乾燥条件の基礎データの集積と検討を行う。 オ 遺跡及び遺物の保存修復の現状と課題を広く検討するため、保存科学研究集会を開催する。	2）海洋出土鉄製遺物の現状調査としてＸＣＴ撮影することにより、その劣化状態を明らかにした。 3）木造建造物の塗装の材質分析をおこない、漆塗装、チャン塗りおよび膠彩色を明らかにした。 4）貧溶媒真空凍結乾燥法による新規の保存処理法の開発に着手した。 5）「古代の玉―最新の保存科学的研究の動向―」をテーマとした研究集会を開催した。		
4351	⑤ 伝統的な文化財修復材料及び関連技術の現地調査、自然科学的な分析などを行う。文化財などの修復に使用された合成樹脂の劣化状態を調査する。また、海外の文化財保存担当者を対象に、紙および紙文化財についての材料学・保存修復などの講義と、クリーニングなどの実技を行い、基礎的な知識を教授する。在外の日本古美術品を対象に事前調査及び修復を行い、修復後、展示活用する。さらに、専門家を現地に派遣して修復を行う。	**⑤−1 伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究** 漆などの塗装材料に関する調査研究では建造物における過去の塗装修理に関する基礎資料の蓄積を図るとともに、その実績を塗装修理作業の実践的な施工指導に役立てた。合成樹脂の関する調査では、過去使用した樹脂の劣化などの問題点解決に向けた基礎実験を行った。また、研究所が所蔵する過去の合成樹脂を用いた修復事業の資料を分類整理作業では、データベースの目録作成についてはこれを終了させた。紙本絹本文化財の修復材料に関しては、裏打層の開発、表具裂見本目録の作成、和紙の調査を行った。	A	順調
4352		**⑤−2 国際研修「紙の保存と修復」** 2010 年 8 月 30 日～9 月 17 日の期間で 10 カ国から 10 名を迎え入れて研修を行った。紙本文化財の修復理念、材料学の講義を行った。実習では、掛軸修復、和綴じ冊子製作、屏風・掛け軸の取扱などを行った。またスタディーツアーでは美濃を訪れ、和紙の原料・製造から流通までを和紙産地の歴史とともに学習し、和紙の抄造を体験学習した。和紙を使用した文化、紙文化財を徳川美術館、熱田神宮で見学した。修復工房を訪れ現状を視察した。	A	順調
4353		**⑤−3 在外日本古美術品保存修復協力事業** 平成２２年度は、９館１０点の作品（絵画４点、工芸品６点）を修復した。うち４点(絵画２点、工芸品２点が２１年度からの継続、３点（絵画１点、工芸品２点）を海外で修復した。絵画の事前調査はケルン東洋美術館１館２２点の調査を行った。また、平成２１年度に修復した絵画、工芸品の修理状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。	A	順調
4361	⑥ ドイツ技術博物館との共同研究に関する打ち合わせ及び欧米での修復事例調査を行う。船の科学館・手宮機関車庫などでの劣化調査、かかみがはら航空宇宙科学博物館・大樹町航空宇宙実験施設などでの測定データの回収と評価、日本航空協会所蔵の青焼き図面の劣化調査と資料収集を行い、再発色に関する研究を進める。	**⑥ 近代の文化遺産の保存修復に関する研究** 今年度は近代化遺産の中でも２年続けて重要文化財指定された映画フィルムや音楽テープ、ガラス乾板など音声・映像記録メディアの保存に関する関係者を招き、研究会を開催しそれぞれの立場から音声・映像記録メディアの保存と活用に関する発表、問題点の整理や解決法についての討論を行った。	A	順調

		また、設計図面などに多く使われている青図の保存に関する研究も行った。屋外展示されている鉄道車両や航空機などの文化財の防錆対策のため、試験片を使った屋外暴露試験にて、塗装仕様と劣化速度の相関についても調査している。黎明期の日本の航空機の写真データベースをホームページ上で公開した。 昨年度の研究会をまとめた報告書を刊行した。		

(4) 国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・研究の実施

【中期目標】 ------

【中期計画】	【主な計画上の評価指標】
(4) 高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。	

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(4) 我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。	**(4) 我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。**		
4411	① 文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。	**①−1 文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力(1)** 高松塚古墳では、壁画の状態記録のため損傷図面を作成した。天２の漆喰層陥没、青龍の表層面損傷、漆喰層について、透明シートへの描き込みとデジタル化を完了した。 キトラ古墳では 4 月 12 日～4 月 30 日、5 月 10 日～5 月 28 日、10 月 12 日～10 月 29 日、11 月 8 日～11 月 25 日の 4 期にわたり、集中的に漆喰の取り外しを行った。ヘラ、ダイヤモンド・ワイヤーソーを使用し、北壁・東壁・西壁・南壁の取り外しを行い、石室内の漆喰すべての取り外しが完了した。	A	順調
4412		**①−2 文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力(2)** 文化庁が進める高松塚古墳仮整備事業や保存・活用に関する事業が円滑かつ適切に施工されるよう協力するとともに、刊行予定の『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』に関する執筆・編集作業を行い、文化庁へ提出した。 今年度のキトラ古墳壁画の剥ぎ取り作業を支援するとともに、今後のキトラ古墳壁画、および古墳の保存、活用、整備の方向性を議論・検討するための技術的な支援・協力を行った。	A	順調
4421	② 国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存活用に関して技術的に協力する。	**② 国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存活用に関する技術的協力** 2008 年度の試掘調査および 2009 年度の発掘調査成果をもとに、檜隈寺講堂北 50mの丘陵頂部から西側斜面にかけて２カ所の調査区、東側斜面裾部に５カ所の試掘坑を設定し、調査をおこなった。１区では瓦組暗渠１基と奈良時代以降の整地土を確認し、２区では、７世紀前半の遺構面と、７世紀前半から奈良時代後期にかけての断続的な整地を層位的に確認した。また試掘坑では、古代の石敷を検出した。今回の調査では、檜隈寺の伽藍が完成した７世紀後半以降も大規模な整地をおこなっていることを確認し、これまで不明な点の多かった 7 世紀前半、および奈良時代以降の檜隈寺の土地利用状況を考えるうえでも重要な資料を得た。	A	順調
4431	③ 国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業大和平野県営飛鳥工区２号幹線の調査及び保存活用に関して技術的に協力する。	**③ 国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業に関する技術的協力** 大和平野支線水路等その３（県営飛鳥２号幹線（右岸）その３）改修工事に伴う発掘調査で、対象地は藤原京左京七・八条一坊（橿原市上飛騨町）にあたる。総長 325.520mの工事区域のうち、既設管と完全に重複する中央約 130m分は立会で対応し、残りの北区（約 156m×２m）、南区（約 45m×２m）を発掘調査した。その結果、古代を中心とする遺構（柱穴・溝等、一部中世を含む）を検出、記録した。	A	順調

(5) 有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

【中期目標】有形文化財の収集・保管・公衆の観覧等に必要な調査研究を計画的に実施すること。

【中期計画】	【主な計画上の評価指標】
(5) 有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次世代への継承及び我が国文化の向上に寄与する。 ①収集・保管に関する研究を実施し、有形文化財の保存に寄与する。 ⅰ 保存環境の調査研究等を実施することにより、収蔵品の保存環境の向上を図る。 ⅱ 日本の文化財及び日本の文化に影響を与えた東洋諸地域を中心に東洋全般にわたる各国固有の文化財の調査研究を実施する。 ⅲ 収蔵品の調査研究を重視し、特に重要な項目については特別調査を実施する。また、特別展及び海外展実施に向けた事前調査を実施する。 ⅳ トータルケアシステム構築に向けた応用研究を実施し、有形文化財の恒久的保存と持続的公開を具現化する。 ⅴ 修復文化財に関する調査研究を実施し、補修紙製作、剥落止め等修復方針決定に寄与する。 ⅵ 収蔵品について、科学的分析に基づく保存・修復に関する調査研究を実施し、文化財の適切な保存・展示・活用に反映させる。 ②公衆への観覧を図るための研究を実施し、有形文化財の活用に寄与する。	

ⅰ 有形文化財の展示デザインシステムを構築するための応用研究を実施する。
ⅱ 博物館情報学を構築するための研究を実施する。
ⅲ 博物館教育理論の構築に関する研究を実施し、有形文化財理解の推進に寄与する。
ⅳ 京都文化を中心にした文化財の調査研究を実施し、展示することにより、国民の文化財保存に対する意識の高揚に寄与する。
ⅴ 平安仏教とその造形に関する調査研究を実施し、展示することにより、国民の文化財保存に対する意識の高揚に寄与する。
ⅵ 南都諸社寺等に関する計画的な調査研究を実施し、展覧会の活性化に反映させる。
ⅶ 我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究を実施し、仏教美術の解説の充実を図る。
ⅷ 仏教美術の光学的調査研究を実施し、作品の材料・技術の解明に寄与する。
ⅸ 日本とアジア諸国との文化交流に関する文化財の調査研究を実施し、これらの文化財の収集・保管・展示、教育普及事業等を展開する。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(5) 有形文化財に係る調査研究 **① 収集・保管のための調査研究の実施** 競争的資金の獲得に努めつつ、収蔵・寄託する文化財に関する研究、保存・展示環境の改善に関する研究を進めるとともに、次の研究課題に重点的に取り組む。	**(5) 有形文化財に係る調査研究** **① 収集・保管のための調査研究の実施**		
4511-1	（東京国立博物館） 1）収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究	**【東京国立博物館】** **1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究** 館蔵品・寄託品・それらの関連品および今後収集・展示の対象となりうる文化財と、その周辺領域に関して、美術史・考古学・博物館学の各見地から学会・研究会・学術雑誌上で各種の発表をした。	A	順調
4511-2	2）特別調査法隆寺献納宝物（第３２次）「聖徳太子絵伝」第６回	**2) 特別調査法隆寺献納宝物（第 32 次）「聖徳太子絵伝」第 6 回** 本年度は、国宝聖徳太子絵伝 10 面のうち第 7 面と第 8 面を調査対象とした。経年の劣化、補修によって判別の困難な図様の細部について明らかにできた。また、剥落や劣化などにより画の見えないところについて、現法隆寺絵伝に嵌められた吉村法眼周圭充貞の模写(天明 7 年＝1787)を比較検討することによって、その内容を新たに確認した。	A	順調
4511-3	3）特別調査「書跡」第８回	**3) 特別調査「書跡」第 8 回** 当館所蔵の古写経について法量計測・写真撮影を実施し，書写された文字の筆致，巻子装の軸端や料紙の材質分析，奥書記載内容の検討により書写年代推定を行った。掛幅装や手鑑装の古写経断簡については，書写経文の検討によりその原典を可能な限り特定し，当館所蔵古写経の基礎データを整理し，その成果を東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録古写経篇』として刊行。	A	順調
4511-4	4）特別調査「工芸」第２回	**4) 特別調査「工芸」第 2 回** 東京国立博物館の金工・陶磁・漆工の列品について、最新の研究結果を反映させた知見を共有することができた。特に金工調査では舎利容器の 1 件に新たな事実が判明し、陶磁調査では中国清朝の磁器が日本の文化や作陶に与えた影響に関する議論が深まった。漆工調査では現在では不明とされる一部の香道具の使用法について推測可能になり、その成果を東京国立博物館の展示に活用することができた。	A	順調
4511-5	5）特別調査「金地屏風の金箔地についての調査研究」―尾形光琳風神雷神屏風を中心に	**5) 特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究―尾形光琳風神雷神屏風を中心に** 当館収蔵の尾形光琳筆「竹梅図屏風」と「風神雷神図屏風」に加え、同時代の土佐光祐筆「栄華物語図屏風」、狩野永敬筆「十二ヶ月花鳥図屏風」を対象として、エックス線、蛍光エックス線と実体顕微鏡による分析調査を行ない、データの集積を行った。	B	ほぼ順調
4511-6	6）特別調査「江戸幕府御用絵師板谷家関係資料」	**6) 特別調査「江戸幕府御用絵師板谷家関係資料」** 外部閲覧に備えた資料整理（1 万点以上の資料一点ずつに枝番号タグを付し、形状別に箱に収納する）をすべて終了。この整理に平行し、絵画資料の調査、古文書の撮影・翻刻を行った。また、スタッフによる合同調査会を開き、物語絵、風景画、土佐派など各スタッフがテーマを設け、資料調査を行った。以上で得られた成果により、平成 23 年 10 月 25 日～12 月 4 日に「板谷家伝来資料（仮称）」の特集陳列を行う。	A	順調
4511-7	7）館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究	**7) 館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究** 明治時代前期に博物館が収集した漢籍のうち、医学関係のものについて、調査を行った。 江戸時代の幕府医学館収集の漢籍とそれに関連した人物についての特集陳列を企画して展示を行った。	A	順調
4511-8	8）博物館の環境保存に関する研究	**8) 博物館の環境保存に関する研究** これまで継続して行ってきた展示、収蔵空間に存在する空気汚染物質濃度測定の結果を整理した。その結果から、東京国立博物館における空気汚染物質の許容濃度に関する暫定基準を改訂し、東京国立博物館の状況に合致する現実的な新たな基準を策定することができた。	A	順調
4511-9	9）東洋民族資料に関する調査研究	**9) 東洋民族資料に関する調査研究** 東洋民族の収蔵品のうち、南太平洋の生活および宗教儀礼にかかわる代表的なものについて、形状材質の面で従来よりも詳細な調査をおこなった。その結果、形状材質の新知見を得ただけでなく、一部の作品については、不詳だった制作地推定の手がかりも得ることができた。研究成果は、特集陳列「南太平洋の暮らしと祈り」（平成 23 年 3 月 29 日～4 月 24 日）とリーフレットで公開した。	A	ほぼ順調
4511-10	10）油彩画の材料・技法に関する共同調査	**10) 油彩画の材料・技法に関する共同調査** 平成 20 年 11 月から開始し、可能な限り月 1 回のペースで調査を進めてきた。調査は朝 10 時から午後 17 時までであり、1 回の調査では終了しない調査もあるが、これまでのところ調査が終了した作品は、11 点におよぶ。次第にデータが蓄積されているが、その中から、今年度は 3 点についての調査内容を発表する紀要(45 号)を出版する予定である。	A	順調

4511-11	11）荻原守衛「女」の石膏原型とブロンズ鋳造に関する共同研究	**11） 荻原守衛「女」の石膏原型とブロンズ鋳造に関する共同研究** 鋳造した原寸大ブロンズ像を用いて、2010 年 10 月 23 日～12 月 5 日までの間「明治の彫塑　ラグーザと荻原守衛」展を東京芸術大学美術館にて開催した。	A	順調
4511-12	12）日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究	**12） 日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究（科学研究費補助金）** 今年度は、東京国立博物館保管の中国の木彫像、埼玉県桂木寺の釈迦如来像及び木彫像群、を調査し、美術史的基礎データ、写真データ、樹種の科学的識別のための木片資料の収集を実施した。また、京都府広隆寺の著名な 2 躯の菩薩半跏像の木片プレパラートを取得するなど貴重なデータを収集することができた。また、当該研究の蓄積による研究成果の一部を研究論文としてまとめることができた。	A	順調
4511-13	13）目録学の構築と古典学の再生	**13） 目録学の構築と古典学の再生（科学研究費補助金）** 館蔵の古典籍、特に国宝「九条家本延喜式」に関する調査研究を行った。 館蔵の古筆切類について、古典籍学的な視角から調査を行った。	A	順調
4511-14	14）原三渓旧蔵近代絵画・彫刻に関する基礎的研究	**14） 原三渓旧蔵近代絵画・彫刻に関する基礎的研究** プロジェクト責任者が、平成 22 年 7 月 31 日付で退職したため、年度実績なし。	F	
4511-15	15）博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究	**15） 博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究（科学研究費補助金）** これまでに集積した各種データを、博物館の空間と関連付けながら保管・検索することが可能な管理分析サブシステム文化財収蔵場所環境情報管理システム」を構築してきたが、本年は館内に約５０か所配置した温湿度センサー及び所在管理のための２次元バーコードを用いたセンサーサブシステム、収蔵品管理のために館内ですでに開発済みの列品検索データベースシステム（プロト DB）とのネットワークを構築し、各種データを統合的に扱うことが可能になった。	A	順調
4511-16	16）東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究-「正倉院裂」を中心に-	**16） 東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究－「正倉院裂」を中心に－（科学研究費補助金）** 撮影した各作品のデジタル画像について、個々に番号を付けるとともに、各作品については、現状、法量、品質、技法、文様染色、用途等についての詳細を記録化する作業を継続した。 東博が所蔵する上記の正倉院関係資料についても、デジタル写真撮影を継続し、詳細なデータを収集した。	A	順調
4511-17	17）文化財保護の歴史に関する基礎的研究	**17） 文化財保護の歴史に関する基礎的研究（科学研究費補助金）** 東京国立博物館が収蔵する文化財保護に関連する作品や資料について、展示履歴などの情報を参考にして作成した調査対象リストをもとに、デジタルカメラによる記録撮影やスキャニングによるデータ収集を行った。また、海外の博物館との交流にともなって海を渡った内外の資料に関連して、作品および当時の記録類などの調査を実施した。	A	順調
4511-18	18）高度な復元作業のための制作空間の情報化	**18） 高度な復元作業のための制作空間の情報化（科学研究費補助金）** 昨年度に調査、データベース化した職人の制作空間に関する映像と取得した 3D データ（高精細デジタル測定技術と職人の知識を融合させた工芸文化財復元の研究：代表佐藤雅彦）について調査検討し、実際に閲覧デバイスの設計と実装をおこなった。	A	順調
4511-19	19）狩野晴川院養信筆「法隆寺什物図」の研究	**19） 狩野晴川院養信筆「法隆寺什物図」の研究（科学研究費補助金）** 昨年度、予定していた「法隆寺什物図」の調査とデジタル撮影を終えたことを踏まえ、本年度は東京国立博物館が所蔵する狩野家模本類のうち、「法隆寺什物図」の研究にも重要と思われる作品を選別し、2 月 1 日現在「高野山学侶宝蔵古器及楽装束図」をはじめとする 37 点を撮影した。また、養信自筆の「公用日記」について、法隆寺什物の模写に関する記事を探し、該当部分を翻刻した。昨年整備した「模写された宝物の一覧表」と「画中の墨書翻刻」については点検の上で手直しをし、論文に付して発表するために適した状態にした。以上の成果は調査報告としてまとめ、2011 年 4 月発行の『MUSEUM』631 号に発表する。	A	順調
4511-20		**20） 東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究（科学研究費補助金）** 装飾料紙を用いた古筆・典籍を中心に、展示履歴等によって把握できる情報をもとに、調査対象となる作品のリストを作成した。国内では、東京国立博物館・九州国立博物館・三の丸尚蔵館等、海外ではフランスの国立図書館、アメリカ・クリーブランド美術館等に収蔵されている作品について、デジタル写真撮影と、作品の筆跡および料紙に関する調査を実施した。	A	順調
4511-21		**21） 中国書画の表装に関する基礎的研究（科学研究費補助金）** 『歴代名画記』唐・張彦遠などの中国歴代の文献から、書画の表装に関する記載を収集・整理した。また、北京故宮博物院・香港中文大学文物館・京都国立博物館・大阪市立美術館・五島美術館・三井記念美術館・東京国立博物館に所蔵される主として中国の書画を調査し、表装の諸データおよび画像データを収集した。	A	順調
4511-22		**22） 清時代末期の訪中調査における写真資料に関する調査研究（科学研究費補助金）** 東京国立博物館が所蔵する『支那写真帖』に添付される山東地方の写真をもとに、現地で実地調査を行ない、撮影された場所の特定と現状との比較を行なった。調査の過程で、これまで不明であった撮影地を特定することができ、明治時代に行なわれた考古、美術、建築、金石と幅広い分野に渡る訪中調査の一端を確認することができた。	A	順調
4511-23		**23） 占領期の教育政策における国立博物館の役割に関する調査研究（科学研究費補助金）** 本研究は、博物館関係文書データベース構築のための CIE 文書の調査を行った。 文書検索は国立国会図書館が資料選別のため付けた分類記号（十進分類）及び分類記号ごとの文書目録（荒敬、内海愛子、林博史『国立国会図書館所蔵　GHQ/SCAP 文書目録』全 11 巻）を手がかりに、本研究に該当する文書を探し出し、和訳を行い、データを蓄積した。	A	順調
4511-24		**24） 宮廷工芸に関する物質文化的研究―生活感のある工芸史の構築をめざして―（科学研究費補助金）** 本年度は、本研究の基本資料となる東京国立博物館蔵『旧儀式図画帖』の内容研究を行なった。それとともに同図画帖の関連史料となる宮内庁書陵部蔵『公事録』その	A	順調

		他の文献を複写し、その内容を検討した。また京都葵祭に赴き、その祭礼に関する調査を行なった。		
4511-25		**25) 近現代における古日本染織の移動とコレクション形成に関する基礎的研究（科学研究費補助金）** 本年度は、当館に所蔵される日本で最初の小袖コレクションである野口彦兵衛旧蔵コレクション、及び、洋画家・岡田三郎助が蒐集した小袖および小袖裂コレクションの内、現在埼玉・遠山記念館に所蔵されている未公開分を含む染織資料を調査し、明治後期から大正初期にかけて蒐集された古日本染織コレクションのデータを集積し、その傾向等の分析を行った。	A	順調
4511-26		**26) 東京国立博物館所蔵古文書データベース（科学研究費補助金）** 博物館が所蔵する古文書の内，B1715 伏見天皇綸旨（1 幅），B1738 足利尊氏御判御教書（1 幅），B1739 織田信長朱印状（1 通），B1740 徳川家康朱印状（1 通），B1972 前田利家朱印状（1 通），B3175 豊臣秀吉朱印状（1 通），B1746 江戸幕府老中奉書（1 通），B3045 藤原為氏自筆譲状（1 通），B1768 徳川幕府朝鮮国王往復書翰（62 通），B1769 徳川幕府琉球往復書翰模本（48 通），B1878 民政裁判所触書（1 通），B1879 会計官民政所触書（1 通）等。	A	順調
4511-27		**27) 東京国立博物館所蔵印譜データベース（科学研究費補助金）** 小林斗盦(庸浩)氏寄贈による懐玉印室コレクションのうち中国古銅印譜について撮影を行いデータを入力した。 平成 22 年 10 月から「東京国立博物館情報アーカイブ(http://webarchives.tnm.jp/archives/)において、東京国立博物館所蔵印譜 WEB データベース」として公開を開始した（平成 23 年 2 月現在、15,527 画像）。	A	順調
4511-28		**28) 隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究（科学研究費補助金）** 中国山東省、河北省、山西省、陝西省において現地調査を行い、仁寿舎利塔起塔寺院に関する多くの地理的データ及び、文献的資料を多数収集することができた。	A	順調
4511-29		**29) 前方後円墳体制東縁地域における国家形成過程の研究：常陸の場合（科学研究費補助金）** 茨城県かすみがうら市折越十日塚古墳（前方後円墳）の測量調査および横穴式石室の実測調査を行い、詳細な実測図を作成した。 また、3 月に茨城県小美玉市塚山古墳（円墳）の発掘調査をおこない、墳丘の確認および埴輪の詳細を調査した。	A	順調
4511-30		**30) 古文書および古典籍の修復と装幀形態に関する用語の研究（科学研究費補助金）** 東京国立博物館に収蔵されている古典籍を中心に、形態、料紙などについてデータを収集した。また、料紙の製作技法に関する成果の一部を、全国漢文教育学会の『新しい漢字漢文教育』第 50 号、および第 51 号において公開した。	A	順調
4511-31		**31) 彫刻におけるデジタル立体造形の可能性と表現方法の研究・教育への応用（科学研究費補助金）** 京芸術大学美術館所蔵品の立体データアーカイブ作成の研究とデジタルデータによる教育としての応用研究ならびにコンピューター造形システムによる各人力プロセスの造形表現の研究を継続的に行ってきた。こうした研究におけるさまざまなデータをベースにしたレプリカを作成し、専門的な教育利用としての「触れる彫刻」の研究に反映させている。今年度は研究の最終年度として鋳造した原寸大ブロンズ像を用いて、2010 年 10 月 23 日～12 月 5 日までの間「明治の彫塑　ラグーザと荻原守衛」展を東京芸術大学美術館にて開催し、好評を得た。	A	順調
4511-32		**32) アジアの木地螺鈿―その源流、正倉院宝物への道をたどる―（科学研究費補助金）** 正倉院宝物として残されている螺鈿器は技法的に木地螺鈿、漆地螺鈿、樹脂地螺鈿の三種に分類される。インドは東南アジアまでの東方アジアと西方アジアとをつなぐ接点でもあるが、その螺鈿技術についてはほぼ不明と言って良い。こうした状況のなか、今回調査を実施し、インドの螺鈿は、木地螺鈿と同じく象嵌技術を多用する技法と、樹脂地螺鈿のように貝文様を地に貼り付け、その段差を漆などの素材で埋めていく技法との 2 種が存在することを明らかにした。	A	順調
4511-33		**33) 高精細デジタル測定技術と職人の知識を融合させた工芸文化財復元の研究（科学研究費補助金）** 本年度は、昨年度に試撮影にて使用したテックサイエンス社の Alicona 機を用いて奈良県春日大社御宝物「柏木菟腰刀」の目釘金具の撮影、計測とデータ処理を行った。また、Tesco 社 X 線 CT スキャン機器での刀身と刀装具（鐔）の撮影、計測、データ処理を行った。撮影計測結果とともに本研究で用いた冶具の安全性と撮影精度、作業手順について、考察と再検証を行った。	A	順調
4511-34		**34) 日本近世実景図研究** 本年度は、主に東京国立博物館所蔵実景図作品を中心に検討・調査を行った。その結果、日本絵画だけでなく中国絵画・朝鮮絵画を含める東アジアを視野に入れた陳列案の提示を決定した。中でも韓国国立中央博物館研究官、イ・スミ氏の協力により朝鮮絵画の調査を行った成果は、特集陳列公開前に Museum にて報告を予定している。	A	順調
4512-1	（京都国立博物館） 1）近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究	**【京都国立博物館】** **1) 近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査** 対象寺院は有名であり、過去に複数機関による文化財調査が実施されている。しかしそれぞれに新たな文化財の発見や未調査文化財が見つかってきた。その点で成果はあった。 岩船寺では未調査の金工品・陶磁器・古瓦・仏画などに見るべきものがあった。 浄瑠璃寺では本坊大日如来像の詳細な調査および工芸作品の詳細な調査を行うことができた。 海住山寺では桃山時代の屏風などに新出資料が発見された。また仏像・陶磁器・漆工芸品などに見るべき作品があり、調書をとることができた。	A	順調
4512-2	2）鎌倉仏教とその造形に関する調査研究	**2) 鎌倉仏教とその造形に関する調査研究** 仏教美術研究上野記念財団の助成によって、鎌倉仏教に関する資料の調査・撮影を実施し、『図像蒐成ⅩⅡ』を刊行した。	A	順調

4512-3	3）日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察	**3） 日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察（科学研究費補助金）** 平成２１年度に補足調査を行なった静岡建穂寺本尊の観音像についての論考を当館発行の『学叢』第３２号（平成２２年５月発行）に発表した。また、建穂寺で行なった調査の結果にもとづく展覧会が静岡市のフェルケール博物館で開催され（平成２２年４月）、展示作業および図録作成、講演会等に全面的に協力した。また４年間にわたる研究調査の成果を集成した報告書を二篇（考察編と調査報告編）発行した（平成２２年１２月・２３年３月）。	A	順調
4512-4	4）建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究	**4） 建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究（科学研究費補助金）** 5 月、7 月、10 月と都合 3 回の調査を実施し、全体 180 箱のうち、第 161 箱から第 180 箱までの調査を終了した。2 月に最終的な研究打ち合わせ会を実施し、報告書刊行の準備を行い、度末には報告書を刊行する。	A	順調
4512-5	5）修復文化財に関する資料収集及び調査研究	**5） 修復文化財に関する資料収集及び調査研究** 平成 22 年度に新規搬入された作品の「修理計画書（設計書）」にもとづき、データを入力し、平成 20 年度に完成、搬出した作品については、各工房より提出された「修理解説書（報告書）」にもとづき、データを追加、更新した。また、平成 17 年度に修理が完成した作品に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告』第 6 号に掲載し、修理時に発見された銘文 12 件を「銘文集成」として報告した。 また、平成 18 年度に修理が完成した作品に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告』第 7 号に掲載し、修理時に発見された銘文 6 件を「銘文集成」として報告した。	A	順調
4512-6	6）文化財の保存・修復に関する調査研究（奈良文化財研究所との共同研究）	**6） 文化財の保存・修復に関する調査研究（奈良文化財研究所との共同研究）** 長野県中野市柳沢遺跡出土の銅鐸と銅戈の材質分析から、銅鐸や銅戈のタイプ別に成分の配合比が変化していることが明らかになった。これはこれまで蓄積されてきた古代青銅器の考古学的見解を科学的に検証する意味でも重要な成果である。	A	順調
4512-7	7）近世絵画に関する調査研究	**7） 近世絵画に関する調査研究** 京都を中心とした風俗画研究、近世絵画に関する作家研究、作品研究については、着々と研究が進んでいる。 「狩野山楽・山雪展」（平成 24 年度）等について、当館連携協力室長に、作品情報をはじめ、さまざまな助言を行った。近世絵画の寄託品について、当館連携協力室長に、調査助言を行った。	A	順調
4512-8	8）訓点資料としての典籍に関する調査研究	**8） 訓点資料としての典籍に関する調査研究** 貞観十九年（877）に一校され、元慶（879）に再校して科点を加えた『華厳経』六巻（重美、本館蔵）の白書を調査した結果、注釈書である『華厳経探玄記』からの引用であることが確認された。また、永保二年（1082）五月の加点奥書がある『観自在菩薩如意輪瑜伽法要』（重文、本館蔵）について、その朱書の仮名や朱点を調査した。	A	順調
4512-9	9）彫刻に関する調査研究	**9） 彫刻に関する調査研究** 特別展覧会「法然」展出品作品に関して研究を進め、その成果を同展目録に作品解説として発表した。また、平成２１年度に科研による調査を行なった、静岡県建穂寺の仏像についての考察を、当館発行の学叢第３２号に執筆した。	A	順調
4512-10	10）出土・伝世古陶磁に関する調査研究	**10） 出土・伝世古陶磁に関する調査研究** 当館で所蔵している仁清御室窯跡出土陶片について、平成 22 年度からの継続事業（西田記念東洋陶磁史研究助成事業）として行っていた実測図作成作業を引き続き実施し、130 点の図化を完了した。そのほかに、泉屋博古館分館（東京）・板橋区立郷土資料館（東京）・野崎家塩業歴史館（岡山）にて伝世古陶磁、東京大学埋蔵文化財調査室・新宿区教育委員会にて出土品の調査を行い、400 件あまりの調書を作成した。	A	ほぼ順調
4512-11	11）近代建築に関する調査研究	**11） 近代建築に関する調査研究** これまでの調査の成果を踏まえて基本的な図面を比較検討するとともに、建築自体の調査を行い、並行して工事が施工された帝国奈良博物館の建築資料と宮内庁に所蔵される帝国京都・奈良博物館工事録、さらには設計の参考とされた近世以前の建築を調査し、美術としての建築の形成過程とその原状とを総合的に明らかにした。	A	順調
4513-1	（奈良国立博物館） 1）南都諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施	**【奈良国立博物館】** **1） 南都諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施** 奈良を中心とする諸社寺等への働きかけを行って所蔵文化財の調査を実施し、その成果を展示に反映させるとともに、今後の展示活動等に活用できる資料の蓄積、将来の調査に向けた調整などを行った。	A	順調
4513-2	2）仏教美術等の光学的調査研究（東京文化財研究所との共同研究）	**2） 仏教美術の光学的調査研究（東京文化財研究所との共同研究）** 前年度から実施している重要文化財五百羅漢図（大徳寺蔵）82 幅のうち一部の画幅に対して追加の光学調査を実施し、顔料や絵絹について高精細画像及び基礎データを入手した。そしてこれらの基礎データをもとに討論を重ね、本年度中の刊行を目ざして調査報告書の作成を進めている。さらに、今年度から新たに当館の寄託品である信貴山縁起絵巻（朝護孫子寺蔵）に対する光学調査を開始し、全 3 巻について高精細デジタルカメラを用いて基礎的な画像データを入手することができた。	A	順調
4513-3	3）仏教美術写真収集及びその調査研究	**3） 仏教美術写真収集及びその調査研究** 当館内外の文化財の撮影を多数実施し、構造や製作技法の理解に関して貴重な情報資源となりうる写真資料を豊富に蓄積することができた。これらはデータベースに登録して管理運用するとともに、インターネット通して外部にも情報提供をおこなっている。今年度は本格的なデジタル撮影が可能な機器を揃え、データベースもデジタル画像対応のものにリニューアルを進めるなど、デジタル撮影を中心とした体制整備を推進することができた。なお、写真資料は特別観覧により、研究者・学術出版界・一般の利用に供している。	A	順調
4513-4	4）我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究	**4） 我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究** 学術交流協定を締結している中国・韓国の博物館等との間で研究員の派遣・受け入れを行い、活発な研究交流・情報交換を行うことができた。また特別展開催の前提として行った、中国・朝鮮半島で制作された文物に対する調査研究をわが国の文化財との比較という観点に立って進め、その成果を展示・図録・国際シンポジウム等に反映	A	順調

		した。		
4513-5	5）当館所蔵品についての調査研究（客員研究員）	5） 当館所蔵品についての調査研究（客員研究員） 新収蔵品に対する調査研究を重点的に実施し、名品展での公開と併行して研究成果を広く発信することができた。収蔵品についても継続的に調査研究を行い、その成果を展示及び刊行物などに反映することができた。長く寄託されてきたものの展示される機会がなかった作品群が、展示会場のリニューアルや作品の修理完了に伴って、多数展示されたことも本年度の成果として特筆される。	A	順調
4513-6	6）奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流	6） 奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流 （科学研究費補助金） 平成 20 年度から 3 ヵ年の計画で進めてきた①蛍光X線分析装置による光学調査を中心とした東大寺金堂鎮壇具（国宝）についての基礎データ収集と、その体系化。②東大寺法華堂諸像の修理時に（財）美術院によって撮影された彩色文様写真の研究資料化と、これに対する文様史的検討。③館蔵及び寄託の古写経に関する基礎データの集積と料紙分析。などの調査研究を完了させ、その成果をとりまとめた研究成果報告書を刊行した。	A	順調
4513-7	7）統一新羅期の道具瓦集成	7） 統一新羅期の道具瓦集成（科学研究費補助金） 平成 20 年度から 3 ヵ年の計画で、韓国国内で最も多い所蔵資料数を誇る韓国国立慶州博物館（以下、慶州博）ほか、韓国国立中央博物館や東国大学校博物館などの所蔵資料を中心に、実測や写真撮影、熟覧を行い、資料化を進めてきた。	A	順調
	（九州国立博物館）	【九州国立博物館】		
4514-1	1）日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究	1） 日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究 平成 23 年 1 月 15 日より、タイ国バンコク国立博物館において、海外日本古美術展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」を開催した（～3 月 13 日）。展覧会の内容は日タイ共同で構築し、両国の歴史をたどりながら、文化の共通点と差異を示すことをめざした。展示はふたつの国のはじまり、仏教、出会いというテーマで構成し、両国の文化財 107 点を展示した。また両国の伝統工芸も紹介した。	A	順調
4514-2	2）文化財の材質・構造等に関する共同研究	2） 文化財の材質・構造等に関する共同研究 稲荷山古墳出土辛亥銘鉄剣の保存状態、金象嵌文字の調査を実施した。辛亥銘鉄剣は窒素ガス封入状態で保管されてきた。調査の際にも、辛亥銘鉄剣を窒素ガス封入したケースに入れて非接触で調査した。調査の結果、鉄剣の表裏にある 117 文字の象嵌文字を表裏分離して記録することができた。	A	順調
4514-3	3）博物館における文化財保存修復に関する研究	3） 博物館における文化財保存修復に関する研究 吉備国際大学から 2 名、九州産業大学から 1 名、別府大学から 1 名の合計 4 名が参加した。少人数のため、実践的な研修が実施できた。	A	順調
4514-4	4）博物館危機管理としての市民協同型ＩＰＭシステム構築に向けての基礎研究	4） 博物館危機管理としての市民協同型 IPM システム構築に向けての基礎研究 研修会は、全国の美術館・博物館の学芸員の参加が大半を占め、ミュージアム IPM の関心の高さがうかがえた。また美術館・博物館でのミュージアム IPM 取り組みについての意見を聞け、今後のミュージアム IPM 支援者育成プログラム案策定に充分活かすことができ、来年度の研修を具体的に進める目途が得られた。	A	順調
		公開シンポジウムでは市民の活動報告と専門家の講演、また意見交換会では専門家の意見交流の場となり、昨年度より充実した内容となり、市民の理解を深めることができた。		
4514-5	5）東アジアの文化財修復用手漉き和紙の調査研究（ＵＮＥＳＣＯとの共同）	5） 東アジアの文化財修復用手漉き和紙の調査研究（UNESCO との共同） 中国においては UNESCO との共同調査により、甘粛省博物館にて第 4 回紙文化財保存修復国際シンポジウムに参加すると共に、漢時代の出土紙文化財について調査した。 日本においては、高知（2 ヵ所）、山口、島根（5 ヵ所）、岡山の手漉き和紙製作現場 9 ヵ所を調査した。 昨年度までに調査して得た調書、映像記録を総括した。	A	順調
4514-6	6）ＶＲ画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築	6） ＶＲ画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築（科学研究費補助金） 今年度の研究では、装飾古墳のうち大阪府高井田横穴墓の 3 基を対象とした。その結果、本研究によってデジタルアーカイブされた装飾古墳の総数は、石室 12 基・横穴墓 9 基に達し、近畿地方ではじめての VR データが成功裏に作成された。また、日本の装飾古墳を海外の事例と対比するため、イタリア中部のエトルリア彩色壁画墓の実地調査も行なった。また、昨年度に引き続き報告書の作成も継続している。	A	順調
4514-7	7）トルキ山遼墓出土品から見た唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術	7） トルキ山遼墓出土品から見た唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術（科学研究費補助金） 内蒙古自治区の諸機関所有の遼代文物の特別展を台北故宮が開催したため、これまでの調査期間中に観察できなかった作品について調査した。 内蒙古文物考古研究所、内蒙古博物院、新築移転した赤峰博物館はじめ巴林右旗博物館など各地で現地調査を実施し、新知見を得た。 共同研究者である内蒙古関係者を招へいし、中尊寺に代表されるわが国平安時代浄土教仏教美術作品を調査するとともに、当館において国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」を開催し、共同研究の成果について、一般市民向けに発信した。	A	順調
4514-8	8）室町時代の仏教絵画を中心とする東アジアの宗教美術に関する調査研究	8） 室町時代の仏教絵画を中心とする東アジアの宗教美術に関する調査研究 本年度は当該テーマについて次の二つの観点から研究し、下記の成果を得た。 (1)新出の観音図（個人蔵）などを調査し、中国絵画に依拠して絵画を制作した室町時代の水墨画家に関する基本資料を収集した。 (2)室町時代の仏教絵画に注目し、とくに雪舟の観音変相図を考察し、発願者や造像の意図などについて知見を得た。	A	順調
4514-9	9）埴輪に認められる赤色顔料についての基礎的研究	9） 埴輪に認められる赤色顔料についての基礎的研究（科学研究費補助金） 古墳時代以前の赤色顔料には朱とベンガラが知られており、墳墓ではこの二種類の赤色顔料が使い分けられることが多い。今回対象とした埴輪に認められる赤色顔料は、従来目視によりベンガラが多いとされてきたが、本研究から科学的にもベンガラであることが確定した。さらに出土ベンガラには直径 1μｍのパイプ状粒子を含むものと、これを含まないものに大別されているが、埴輪のベンガラはパイプ状粒子を含むベンガラを用いる地域と、これを含まないベンガラを用いる地域があることがわか	A	ほぼ順調

		った。この地域性は墳墓主体部内で使用されていたベンガラの地域性と概ね合致していた。		
4514-10	10）Ｘ線ＣＴスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析	**10）　Ｘ線ＣＴスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析（科学研究費補助金）** 泉屋博古館の所蔵品を中心にＸ線ＣＴ、精密三次元計測機、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて、中国古代青銅器の内部構造データを系統的に集積したデジタルアーカイブを構築した。この成果を基に、伝統的な鋳造技術者に協力を得て、鋳造実験を実施した。さらに、研究成果を内外の研究者に公開して研究会を実施した。	A	順調
4514-11	11）アジアの木地螺鈿－その源流、正倉院宝物への道をたどる－	**11）アジアの木地螺鈿―その源流、正倉院宝物への道をたどる―（科学研究費補助金）** ベトナムでは、今までの調査であまり情報を得ていなかった螺鈿用の貝素材加工等について、特に具体的な情報を得ることができた。また、インド調査は現在螺鈿制作が比較的盛んにおこなわれているインド西北部、特にウダイプールの工房を中心に調査を行い、現代インドにおける螺鈿制作技術を中心とした情報が得られた。なお、成果の一部を九州国立博物館研究紀要『東風西声』第６号にて論文発表した。	A	順調
4514-12	12）五胡十六国から北魏時代の出土陶俑に関する基礎研究	**12）　五胡十六国から北魏時代の出土陶俑に関する基礎研究（科学研究費補助金）** 十六国時期から北朝早期の古墓の年代については、きわめて流動的な状況にあった。本研究は、出土陶俑の諸要素を整理するなかで、当該時期の古墓の年代について一定の見解を得ることが出来た。また、５世紀前半に華北を領有した北魏政権の文化は、十六国時期の諸政権の制度や文化と密接な関係があると判断するに至った。	A	順調
4514-13	13）海の東アジアが醸成した貝と漆の文化‘螺鈿’の再発見－その共通性と多様性を探る－（トヨタ財団研究助成）	**13）　海の東アジアが醸成した貝と漆の文化‘螺鈿’の再発見―その共通性と多様性を探る―（トヨタ財団研究助成）** 韓国の調査は、沖縄の螺鈿職人と共に韓国の人間国宝ほかの工房を訪問調査し、韓国螺鈿技術と沖縄のそれとの比較を含めた検討などを行った。タイでは、基調講演のほか、バンコク近郊の国営および民間螺鈿工房を訪問し、タイの螺鈿制作技術について調査した。また現在、ほとんど制作者がいない沖縄の伝統螺鈿制作について、宮城清氏の制作過程を一貫して撮影し、現在その編集作業を行っている。	A	順調
	②公衆への観覧を図るための研究 特別展、特別陳列等の展示の対象となる文化財の調査研究を行い、展示に反映させるほか、次の研究課題に重点的に取り組む。	**②公衆への観覧を図るための研究**		
4521-1	（東京国立博物館） １）博物館環境デザインに関する調査研究	**【東京国立博物館】** **1）　博物館環境デザインに関する調査研究** 展示デザインのクオリティを向上させるための設計技術や、そのデザインアイデアを実現し、維持するための現場監理・物品管理に関する技術について、過去の事例や、他館における具体的事例を調査した。 また以上の調査にもとづき、当館においていかなるシステムでの導入・実施が可能かを検証し、実現可能なものについては館内の展示において実施した。	A	順調
4521-2	２）博物館教育に関する調査研究	**2）　博物館美術教育に関する調査研究** 本館 20 室「みどりのライオン」での博物館ガイダンスやハンズオン体験コーナー、制作工程模型展示は年間で 10 万人を超える利用者があり、当館における博物館教育プログラムとして定着している。鈴木はこのプログラムを博物館教育の見地から調査研究し、口頭および論文で発表を行った。	A	順調
4521-3	３）博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究	**3）　博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究** 東京国立博物館における収蔵品管理システムのプロトタイプについて、収蔵品検索機能、平常展管理機能、鑑査会議管理機能、貸与管理機能の各機能を継続的に運用し、課題を抽出するとともに随時改善を重ねて性能向上を図った。また、修理関連業務の支援として、鑑査会議管理機能における修理関連機能の運用を開始し、文化財収蔵場所環境情報管理システムとの連携を図った。	A	順調
4521-4	４）凸版印刷と協同で、ミュージアム・シアターでの公開に向けた研究を実施する。	**4）　凸版印刷と協同で、ミュージアム・シアターでの公開に向けた研究** 「洛中洛外図　舟木本」のデータをもとにした、新しいシナリオ 2 件（「京の政」「京のかぶき」）を作成し、平成 23 年 1 月から公開している。	A	順調
4521-5		**5）　博物館をみんなのものに～視覚障害児童・生徒へのスクールプログラム-ハンズオンとワークショップを中心に** 盲学校教員と有識者による委員会において、ハンズオン教材とプログラム開発の実施、バリアフリー対応のボランティアに対する研修会と連携盲学校を対象とした実践を継続的に行っている。今後、盲学校対応のためのスクールプログラムの冊子を作成し、全国盲学校教員に向けた研修会を実施することで、次年度以降の本格受け入れにつなげる計画である。	A	順調
	（京都国立博物館）	**【京都国立博物館】**	A	順調
4522-1	１）文化財情報に関する調査研究	**1）　文化財情報に関する調査研究** 文化財情報システムの問題点を整理し、運用ソフトを全面的に更新 既存の収蔵品高精細画像のファイリングシステムを構築 ウェブサイトのコンテンツ充実のための検討		
4522-2	２）特別展覧会「高僧と袈裟」の開催に向けて、寺院所蔵品の調査研究を行う。	**2）　特別展覧会「高僧と袈裟」の開催に向けての調査研究** ①調査の過程で、南北朝時代を代表する禅僧である夢窓疎石所用の袈裟（天龍寺蔵）を見いだし、各種メディアにて報道された結果、袈裟についての関心を喚起した。 ②特別展覧会「高僧と袈裟」を開催し、日本に伝えられた中世染織の豊かさを広く紹介するとともに、調査データ・織組織分析用語集・論文を盛り込んだ日英二ヶ国語表記による展覧会図録を作成した。 ③日本・韓国・中国の研究者による国際シンポジウムを開催し、国際的な学術交流を実現した。	A	順調
4522-3	３）特別展覧会「中国の書画」に向けて、旧上野コレクションと関連作品の調査研究を行う。	**3）　特別展覧会「中国の書画（仮）」にむけて旧上野コレクションと関連作品の調査研究を行う。** 上野コレクション中の作品を検討し、特別展覧会に出陳すべき作品を選定し、補完すべき作品の検討を行った。これに基づき、他に所蔵される作品の調査を行い、撮影も実施した。その結果、上野コレクションから 40 件、新収品 1 件を含む館蔵品が 29 件、上野家所蔵品 18 件、個人蔵や他機関の所蔵品が 26 件、合わせて 113 件の作品を	A	順調

		選定し、特別展覧会を開催した。		
4522-4	4）特別展観「上田秋成」の開催に向けて、日本近世文学会と共同で調査研究を行う。	**4） 特別展観「上田秋成」の開催に向けて、日本近世文学会と共同で調査研究を行う。** 日本近世文学会と協力し、新発見12件をふくむ上田秋成関連の文化財の調査、作品情報の整理を行い、その成果を展観の展示・図録に反映させるとともに、報道発表や講演会などを通じて広く発信した。	A	順調
4522-5	5）特集陳列「園田湖城」の開催に向けて、篆刻資料の調査研究を行う。	**5） 特集陳列「園田湖城」の開催に向けて、篆刻資料の調査研究を行う** 園田湖城は、日本の篆刻史にその名を刻みながらも近年その業績が評価されることが少なかったため、篆刻や書などの作品や関連資料などの基礎的な調査に重点をおき、その活動の全体像を明らかにした。とくに、大正期の湖城は篆刻家として出発するにあたり、富岡鉄斎や橋本関雪ら京都の書画家たちと密接な交流をもっており、近代京都における書画篆刻が一体となった「文人」文化の拡がりを確認できた。	A	順調
4522-6	6）特別展覧会「法然」の開催に向けて、浄土宗寺院所蔵文化財の調査研究を行う。	**6） 特別展覧会「法然」の開催に向けて、浄土宗寺院所蔵文化財の調査研究を行う** 特別展覧会「法然―生涯と美術―」の充実のために、従来より知られている資料については、より学術的に確かな位置づけを行うための調査研究を行い、さらに従来知られていない資料を得た。 また画像の入手が困難な作品について、新たに撮影を行い高質の展覧会図録を制作した。	A	順調
4522-7	7）特別展覧会「細川家の至宝」（平成２３年度)の開催に向けて永青文庫と共同で関連作品の調査研究を行う。	**7） 特別展覧会「細川家の至宝」（平成２３年度）の開催に向けて永青文庫と共同で関連作品の調査研究を行う** 本展覧会は東京、京都、九州の各国立博物館を巡回する。京都においては平成２３年度秋に開催予定であるが、すでに東京展は平成２２年春より開催された。そのため基本的な宝物調査は２１年度中に終了している。本年度の成果としては、永青文庫に残されている資料を博捜することにより、近代にあらたにコレクションに加えられた作品が、どのような経緯で入手されたのかという点がより明らかとなるとともに、次年度の当館における展示に際して生かしうるあらたな情報を入手することが出来た。 また、東京展の開催にあわせ刊行された図録に、各研究員が分担して執筆にあたったるとともに、京都展のための補足調査および、永青文庫との打ち合わせを行った。	A	順調
4522-8	8）特別展覧会「中国近代絵画（仮）」（平成２３年度）の開催に向けて、旧須磨コレクションと関連作品の調査研究を行う。	**8） 特別展覧会「中国近代絵画（仮）」（平成２３年度）の開催に向けて、須磨コレクションと関連作品の調査研究を行う** 次年度開催予定の展覧会に向けて、約２０００点におよぶ須磨コレクションの調査を継続し、その全容把握に努めた。とくに昭和初期の南京総領事・須磨弥吉郎によるコレクションの性質にかんがみて、政治や社会とのかかわりに注目し、中国近代史のなかでの絵画芸術に位置づけを明らかにした。また、一般にはなじみの薄い分野であるだけに、一般向けの広報・紹介に注力した。	A	順調
4523-1	（奈良国立博物館） 1）南都諸社寺等に関する計画的な調査研究成果の一部を特別展「大遣唐使展」、「仏像修理１００年」並びに特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」、「お水取り」及び本館の仏像展示に反映させる。	**【奈良国立博物館】** **1） 南都諸社寺等に関する計画的な調査研究成果の一部を「大遣唐使展」「仏像修理１００年」並びに特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」、「お水取り」及びなら仏像館の仏像展示に反映させる**	A	順調

		「大遣唐使展」「仏像修理 100 年」「おん祭と春日信仰の美術」「お水取り」に関連する文化財を蔵する近隣社寺等への働きかけを行って所蔵文化財の調査を実施し、その成果を展示活動等に反映させた。		
4523-2	2）我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査研究成果、及び当館所蔵品についての調査研究成果を生かし、本館仏像展示や平常展の充実を図る。	**2） 我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査研究成果、及び当館所蔵品についての調査研究成果を生かし、なら仏像館仏像展示や名品展（平常展）の充実を図る** 学術交流協定を締結している中国・韓国の博物館との間で研究員の派遣・受け入れを行い、活発な研究交流・情報交換を行うことができた。また特別展開催の前提として行った、中国・朝鮮半島で制作された文物に対する調査研究の成果を、展示に反映させることができた。	A	順調
4524-1	（九州国立博物館） 1）平成２０年度特別展「工芸のいま 伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への調査を受けて、継続的かつ発展的に調査研究活動を行なう。	**【九州国立博物館】** **1） 平成 20 年度特別展「工芸のいま 伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への調査を受けて、継続的かつ発展的に調査研究活動を行なう。** 平成 22 年度西部工芸展、日本伝統工芸展など、今年度開催の工芸展で作品調査を行なった。陶芸部門では、西部工芸会陶芸部会の研究会に参加し、新たな創作活動の展開について調査し、これまでに対象となっていなかった若手作家も調査に加わった。 タイと共同で開催する展覧会の中に伝統工芸を位置づけ、日本の伝統技術によって現代に展開する工芸を紹介することとし、タイ国バンコク国立博物館で開催の「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」に日本の伝統工芸とそれが現在に生きている姿の展示を行った。同時に、伝統工芸の技術を示すワークショップを開催した。	A	順調
4524-2	2）京都、九州における黄檗宗寺院に関する調査を進め、成果を特別展に反映する。	**2） 京都、九州における黄檗宗寺院に関する調査を進め、成果を特別展に反映する。** 調査箇所 黄檗宗大本山萬福寺および塔頭（５回）関西地区黄檗宗寺院（1 ヶ寺)、九州地区黄檗宗寺院（12 ヶ寺)、国立国会図書館内閣文庫、京都国立博物館、神戸市立博物館、長崎歴史文化博物館、北九州市立いのちのたび博物館、柳川古文書館 上記各所蔵の文化財についての基礎的な情報を収集・整備することができた。これまで調査対象とされなかった彫刻分野において、数多くの知見を得ることができた。これらの調査の成果は特別展「黄檗」に反映した。	A	順調
4524-3	3）日本、韓国、中国における馬文化に関する考古遺品、美術作品に関する調査を進め、成果を特別展に反映する。	**3） 日本、韓国、中国における馬文化に関する考古遺品、美術作品に関する調査を進め、成果を特別展に反映する。** 騎乗馬や農耕馬など、日本人と密接な関係を持っていた馬との絆は、現代の産業構造の激変に伴って失われた。しかし、私達の生活には馬文化に由来する有形・無形の要素が多く含まれている。特別展では馬のいる情景(厩)を再現すると同時に、最新の考古学研究に基づいた飾り馬の馬装を復元し、馬具から読み取ることのできる馬文化の広がりを立体的に示すことができた。	A	順調
4524-4	4）中国内蒙古自治区出土の遼時代に属する考古遺物に関する調査研究を進め、成果を特別展に反映する。	**4） 中国内蒙古自治区出土の遼時代に属する考古遺物に関する調査研究を進め、成果を特別展に反映する。** 内モンゴル自治区、台湾において調査を実施し、また展覧会開催にむけて関係機関	A	順調

		と積極的に交流をはかり、良好な関係構築につとめた。調査においては、紀年墓出土資料や仏塔出土資料の調査を通して、金銀器を中心に契丹工芸の特質把握につとめた。また遺跡踏査を実施し、陵墓や都城、仏教寺院等の立地等において多くの知見を得た。12 月には調査成果の一部を九州国立博物館主催の国際シンポジウムにおいて発表した。		
4524-5	5）細川家伝来資料に関する調査を行なう。	**5） 細川家伝来資料に関する調査を行なう。** 財団法人永青文庫所蔵資料について、分野ごとに調査結果をまとめ、同時にデータ化を推進し、展覧会出品作品の基礎的な情報を整備した。また。永青文庫所蔵コレクションの性格について分野横断的に研究し、江戸時代の大名家コレクションにおける特質について、分かりやすく展覧会で紹介できる段階におおよそ至ることができた。	A	順調
4524-6	6）九博に関連する絵本の次シリーズの企画について検討する。	**6） 九博に関連する絵本の次シリーズの企画について検討する。** 既刊絵本の外国語版作製を検討するにあたり、福岡県を中心とする九州島内のインターナショナルスクールの実態調査を行った。5 月には日経流通新聞において『月夜のおおさわぎ』に関する取材記事が掲載された。また、交流課とボランティアスタッフを中心として、小学生以下を対称とするワークショップや読み聞かせを行った。	A	順調

5　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進

【中期目標】文化財の保存・修復に関する国際協力の拠点としての位置づけを明確化するとともに、その機能の充実を図ること。また、研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークの構築、アジア諸国等における文化財の保存・修復　協力、技術移転・専門家養成等の支援等、有機的・総合的な事業展開を行い、人類共通の財産である文化財の保存・修復に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与すること。

(1)　保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤の整備

【中期目標】文化財の保存・修復に関する国際協力の拠点としての位置づけを明確化するとともに、その機能の充実を図ること。

【中期計画】

(1)　文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤整備を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国において文化財の保存・修復事業を推進する。

【主な計画上の評価指標】

○情報の収集・分析及びその提供を行うこと。
○国際協力のネットワークを構築すること。

【21 年度評価における主な指摘事項】

○エジプトでの大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズ１）にかかる国内支援業務については、今後に期待したい。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	文化財の保存・修復に関する国際協力に関して、以下の事業を有機的・総合的に展開することにより、人類共通の財産である文化財の保存・修復に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与する。 (1) 文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤整備を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国において文化財の保存・修復事業を推進する。	(1)		
5111	①　ユネスコ、ＩＣＯＭＯＳ、ＩＣＯＭなどが行う主要な国際会合へ出席し、情報の収集を行うとともに諸外国の文化財保護施策等の調査を行う。アジア地域の文化財保護機関と連携して文化遺産国際ワークショップを行い、当該地域における文化財情報の収集に努めるとともに、今後の協力関係を築く基礎とする。また、国際協力に関する国内ワークショップを開催する。	**① 文化財保存施策の国際的研究** 文化財保存施策の国際的研究について、以下の事業を実施した。 1．世界各地で開催された研究会やワークショップに積極的に参加し、文化財の保存に関わる各種の情報を収集し、分析した。 2．国際ワークショップの開催：アジア各国の専門家を招へいしてアジアの文化財について考える国際会議を 1 回、国内外の専門家を講師とする一般公開の国内専門家向け研究集会を 1 回、計 2 回開催した。	A	順調
5121-1	②　文化財の保存修復事業及び国際共同研究事業を以下のように実施する。 ア　カンボジア・アンコール遺跡群のタ・ネイ遺跡及び西トップ寺院遺跡において建築史的、考古学的、保存科学的調査を実施する。タイ・スコータイ遺跡及びアユタヤ遺跡では、生物被害に関する保存科学的調査研究を行う。	**②－ア－1 アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究** 文化財の保存のための覆屋効果について、材質ごとおよび覆屋の形態ごとに検証し、成果をタイ・インドネシアの研究者と共有した。また、タイ・スコータイ遺跡について、環境調査を実施した。さらに、微生物	A	順調

		が石材の風化に与える影響について、カンボジアのアンコール遺跡において検討した。		
5121-2		**②−ア−2 カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査** 考古班は東テラスの中央祠堂前面の状況解明のために、当該箇所に3回に分けて調査区を設定し発掘を実施した。建築班は実測調査をおこなうとともに、類例調査を進めた。保存科学班は、来年度から開始予定の暴露試験に向けて、資料の調整、暴露試験台設置作業などを実施した。カンボジア人人材育成としては3名の研究者を日本に招聘し技術交流をおこなった。	A	順調
5122-1	イ 敦煌莫高窟壁画保存と制作技法に関する現地調査及び研究を実施し、報告書を作成し、シンポジウムを開催する。また、陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究を実施する。	**②−イ−1 陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究** 2010年度は、前年度の調査実績をもとに墳墓壁画の考古発掘現場での調査実現を目指し、準備を進めたが、秋までの間に陝西省での壁画墓の発掘がなく、現場調査は実現しなかった。このため、前年度の作成した報告書の中国語版を作成し、西安市において陝西省の各機関の専門家を集めた研究会を実施し、調査手法についての評価を求めた。さらに壁画が出土してから文化財として保存されるまでの全工程において、どのような記録保存が求められ、それぞれの現場においてどのように現実的に対応するかを討論し、今後の共同研究についてその可能性を考えた。	A	順調
5122-2		**②−イ−2 敦煌壁画の保護に関する共同研究** 本年度は中期計画の最終年度であると同時に日中共同調査研究の5年目最終年度を迎えた。これまでの4年間に実施してきた調査研究についての成果をまとめるとともに、次期共同研究へ向けての準備作業を行った。とくに壁画の制作材料と制作技法に関する研究は、これまでに蓄積してきた劣化状態と色料に関する調査データをもとに劣化を生みだした環境要素のシミュレーション研究を行い、そこから壁画本来の色彩への考察を図ろうという計画をもった科学研究費補助金の申請が通り、研究の総括へ向けて明確な方向性を持つことができた。	A	順調
5123	ウ アフガニスタン（主としてバーミヤーン）及びイラクの文化財保存修復協力事業を実施し、また、あわせて周辺地域の文化財調査研究を実施し、西アジア諸国等における文化財の保存協力事業に役立てるとともに、これらの成果について報告書を作成する。	**②−ウ 西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業** アフガニスタン：バーミヤーン保存修復事業実施、文化財専門家の人材育成・技術移転、専門家会議への出席、報告書の作成・出版、外部機関との共同研究。 イラク：文化財専門家の人材育成・技術移転。 西アジア周辺諸国文化遺産の調査研究・保護への協力：トルコ、タジキスタン、インド、中央アジア諸国、エジプト。	A	順調

(2) 諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転の推進

【中期目標】研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークの構築、アジア諸国等における文化財の保存・修復 協力、技術移転・専門家養成等の支援等、有機的・総合的な事業展開を行い、人類共通の財産である文化財の保存・修復に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与すること。

【中期計画】
(2) 諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。
また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。

【主な計画上の評価指標】
○諸外国への技術移転を積極的に進めること。
○アジア諸国における専門的な人材の育成のための支援事業等を行うこと。

【21年度評価における主な指摘事項】
○文化財保存修復専門家養成のための教科書及び DVD の作成は評価できる。今後はその活用など普及に期待したい。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(2) 諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。	(2)		
5211	ア 中国、アフガニスタン、イラク等の考古学、建造物、歴史資料及び保存科学等の保存専門家養成研修を国内並びに現地で実施する。	**ア 諸外国の文化財保存修復専門家養成** 諸外国における文化財の保存・修復に携わる専門家の研修において使用することを目的とした、教科書（日本語版および英語版）を作成した。 また、人材養成研修手法の改善に資することを目的に、「海外の文化財保存修復専門家養成を目的とする国際研修等の実施に関する研究会」を開催した。	A	順調
5212	イ 国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力及び文化財保存修復に関する国際支援に係る調査を行う。	**イ 国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力** 集団研修では16ヵ国、16名の研修生に対して研修をおこなった。また個人研修ではモンゴル人3名に対して、保存科学を中心とする研修をおこなった。こうした研修をおこなうことにより、各国の人材育成に貢献するとともに、日本側の各国理解の一助とも成った。また国内における国際協力関係の諸機関との連携を強化することができた。	A	順調

6　情報発信機能の強化

【中期目標】調査及び研究の成果について、迅速な報告書の発行、利用価値の高いデータベースの構築等により、適時適切な公表を推進するとともに、施設の有効活用を図ることにより、研究者をはじめ広く社会に還元すること。

(1)　情報基盤の整備充実

【中期目標】 ------

【中期計画】
(1)　文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。
　また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る。

【主な計画上の評価指標】
○ネットワークセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備充実を図ること。
○文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図ること。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	以下のとおり、調査・研究に基づく資料の作成及び文化財に関連する資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査・研究成果を積極的に公表・公開し、研究者や広く一般の人が調査・研究成果を容易に入手できるようにする。 (1) 文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。 また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る。	(1)		
6111	①　ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。	**①−1 情報システムの整備** システム管理については、保守契約等の協議、メールアカウントの管理、コンピュータ・ウィルス対策を行い、現在のネットワーク環境の維持に努めた。またネットワーク環境の整備の一環として、国立文化財機構間 VPN の接続の準備、居室内スイッチの更新、情報セキュリティ強化システムの導入を進め、情報基盤の整備と拡充を進めた。	A	順調
6112		**①−2 ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実** 情報交換システムの更新及びウィルス対策ソフトを更新することによりセキュリティの強化を図った。また、サーバ及び情報端末をネットワークに接続することにより情報基盤システムの整備・充実を行った。	A	順調
6121	②　文化財に関する専門的アーカイブの拡充を図る。	**②−1 文化財に関する専門的アーカイブの拡充** 1)公開用 SQL データの更新・運用。 2)画像資料のデジタル化・貴重書のＣＤ‐ＲＯＭ化 3)近現代美術関係文献等のデータベース化	A	順調
		4) 朝日新聞社版『日本美術年鑑』のテキスト化 5)『東京文化財研究所蔵書目録８　漢籍』の刊行		
6122		**②−2 無形文化財に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化** ２００６年度までに受入れ手続きが完了した資料の内、経年変化に伴う音質劣化が懸念されるオープンテープのデジタル化を昨年度に引き続き実施した。カセットテープに関しても、将来のデジタル化を視野に、収録内容の確認を含めた整理に着手した。所蔵画像資料のデジタル化については、データベース作成の一環として、一昨年度から本格的に始まった歌舞伎写真（２００８年度寄贈・故梅村豊撮影）の整理を進めた。	A	順調
6131	③　文化財関係資料や図書の収集・整理・公開・提供について充実するよう努める。	**③−1 国際資料室の整備** 国内外で図書その他の資料を収集し、整理・分類して目録に登録し、データベース化した。	A	順調
6132		**③−2 文化財関係資料や図書の収集・整理・公開・提供の充実** 遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物の購入および寄贈による収集を行い、整理された資料をデータベースに蓄積してインターネットに公開した。	A	順調
6141	④　文化財情報電子化の研究に基づき、データベースの充実を図る。	**④−1 文化財保存修復国際情報データベース化に関する研究** 情報収集、データベース化：平成 13 年から収集している世界各国の文化財保護に関連する法令について、和訳を行うとともに、保護の対象とする文化財により分類、データベース化した。 また、「文化財保護関連法令シリーズ」としてタジキスタン、ブータンの法令集およびフランス文化財法典（後編）を出版した。 さらに、オーストリアでの文化財データベースに関して、連邦記念物局での聞き取り調査を行った。	A	順調
6142		**④−2 文化財情報電子化の研究に基づくデータベースの充実** 文化財情報電子化の研究を通じて、GIS を活用した文化遺産情報の取得・管理に関する最新の手法を開発するとともに、研究成果を学会で発表ならびに公刊することにより学界に寄与している。開発・改良を継続している各種データベースについて、業務用とともに公開用についても文字コードを Unicode 化して将来の多言語化に備えるとともにデータの充実を図った。また、新規に図面画像データベースを構築した。	A	順調

(2)　研究所の研究成果の発信

【中期目標】 ------

【中期計画】
(2)　文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成１７年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。

【主な計画上の評価指標】
○公開講演会、現地説明会、国際シンポジウム等を積極的に行うこと。
○ＨＰの充実を図り、ＨＰアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均

	また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。	以上確保すること。	

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(2) 文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成１８年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。	(2)		
6211	① 定期刊行物の刊行 ○『東京文化財研究所年報』 ○『東京文化財研究所概要』 ○『東文研ニュース』	**①−1 『東京文化財研究所年報』・『東京文化財研究所概要』・『東文研ニュース』の刊行** 『年報』2009 年度版、『概要』2010 年度版、『東文研ニュース』第 41 号−第 44 号、『東文研ニュースダイジェスト』(『東文研ニュース』英語版) 第 8 号−第 9 号をそれぞれ刊行し、研究所の情報発信に努めた。	A	順調
6212	○『美術研究』（年３冊） ○『日本美術年鑑』（年１冊）	**①−2 『平成 21 年度日本美術年鑑』・『美術研究』の刊行** 今年度は『平成 21 年版 日本美術年鑑』及び、『美術研究』401〜403 号を刊行することができた。	A	順調
6213	○『無形文化遺産研究報告』（年１冊） ○『無形民俗文化財研究協議会報告書』（年１冊）	**①−3 『無形文化遺産研究報告』・『無形民俗文化財研究協議会報告書』の刊行** １）主として無形文化遺産部研究員の業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』第 5 号の刊行。 ２）平成 22 年 11 月 18 日に開催した無形民俗文化財研究協議会での事例報告・総合討議を内容とする『第 5 回無形民俗文化財研究協議会報告書』の刊行。	A	順調
6214	○『保存科学』（年１冊）	**①−4 『保存科学』50 号の出版** 投稿された 25 本の原稿の内容について、専門家による査読を実施し、最終的に報文 6 本、報告 17 本、合計 23 本の掲載を決定した。本誌の体裁は変更せず、総ページ数 244、650 部印刷、関係諸機関に約 580 部配布した。	A	順調
6215		**①−5 第 33 回文化財の保存および修復に関する国際研究集会報告書の刊行** 第 33 回文化財の保存・修復に関する国際研究集会「日本絵画の修復」の報告書（A5、カラー口絵 8 ページ、本文（和文・英文）460 ページ、印刷部数 800 部）を作成し、刊行した。また、集会参加者および国内外の関係機関に配布した。	A	順調
6221	○『奈良文化財研究所紀要』 ○『奈良文化財研究所概要』 ○『奈文研ニュース』 ○『埋蔵文化財ニュース』	**②−1 研究報告書、年報、研究論文集、図録等の刊行** 紀要等 2 点、ニュース 2 種 8 点、合計 10 点を順調に刊行できた。	A	順調
6222	② 公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等 ○国際シンポジウムの開催（年１回）	**②−2 第 34 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会** 平成 23 年 1 月 19 日（水）〜21 日（金）、東京国立博物館において、第 34 回文化財の保存および修復に関する国際研究集会「「復興」と文化遺産」を開催した。	A	順調
6223	○公開学術講座（オープンレクチャー）（年１回）	**②−3 平成 21 年度オープンレクチャー** 第 44 回企画情報部オープンレクチャー「人とモノの力学」と題して 4 講演を 2 日間にわたり開催した（参加者数：200 人、アンケートによる満足度：84%（回収率：68%）。	A	順調
6224	○公開講演会（年６回）（特別公開講演会（２回：東京会場）、飛鳥資料館特別展に伴う講演会（２回）を含む。） ○現地説明会（年６回）	**②−4 公開講演会、現地説明会等の開催** 公開講演会を 2 回、特別講演会(東京会場)を 2 回、飛鳥資料館特別展示記念講演会を 2 回、平城宮跡資料館特別展示等記念講演会を 2 回、計 8 回の公開講演会を開催した。 また、発掘調査に伴う現地説明会等を平城地区、飛鳥藤原地区あわせて計 5 回実施した。 このことにより調査研究成果を適時適切に国民に公開公表することが出来た。 開催回数は目標値を超え、さらに参加延べ人数は、公開講演会等が 2,033 名、現地説明会等が 3,843 名に上り、事業は順調に実施できた。	A	順調
6231	③ ホームページアクセス件数の前期中期計画期間の年度平均以上の確保	**③−1 ホームページの運用** 文化財デジタルイメージギャラリーの新設、メールマガジンの配信など、ホームページの内容の充実に努め、研究所の情報発信機能の向上を図った。	A	順調
6232		**③−2 ホームページアクセス件数の前期中期計画期間の年度平均以上の確保** 研究所のホームページをより充実させるために、各部・室における事業内容、研究発表等を紹介するページを公開した。また、奈文研のホームページをより見やすいものにするために東文研の協力を得て、文化財研究所として類似性のあるホームページの作成を開始した。 木簡人名データベース（試作版）を公開した。	A	順調

定量評価	22 年度	21 年度	目標値	評定
ホームページのアクセス(件)	6,466,167	2,448,108	1,122,695	S
うち東京文化財研究所	1,489,091	1,417,203	−	−
うち奈良文化財研究所	4,977,076	1,030,905	−	−

(3) 研究所所管の展示公開施設の充実

【中期目標】 ------

【中期計画】	【主な計画上の評価指標】
(3) 黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上確保する。	○入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上を確保すること。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期

	(3) 黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上確保する。	(3)		
6311	○ 黒田記念館における作品の展示公開 常設展（毎週木曜日、土曜日の午後開館） 共催展の開催（１回） 年間目標入館者数 １０，６００人	**○ 黒田記念館における作品の展示公開** 一般公開入場者 18,458 人 「写真に見る黒田清輝の日常」（黒田記念館一階６４インチ大型タッチパネル、10.11.03 公開開始） 「近代洋画の巨匠 黒田清輝展」（岩手県立美術館、10.07.17-08.29）入場者 11,942 人	A	順調
6312	○ 平城宮跡資料館における展示・公開 常設展（月曜日、年末年始休館 無料公開 ただし平成 22 年 4 月 24 日～11 月 7 日まで無休） 特別展（年１回） 企画展（年２回） 年間目標入館者数 ７２，５００人	**○ 平城宮跡資料館における展示公開（(5)「平城遷都１３００年記念事業」と一体的に実施）** 平城遷都 1300 年記念事業に合わせて資料館をリニューアルオープンし、常設展示の大幅な展示替えをおこなった。また、3 回の企画展と 1 回の特別展を開催し、調査研究の成果公開や情報発信に努めた。	S	順調
6313	○ 飛鳥資料館における常設展示の充実と特別展示の開催 常設展示（月曜日、年末年始休館 有料公開 ただし平成22年4月1日～5月13日まで無料） 特別展示（年２回） 企画展の開催（年１回） 年間目標入館者数 ５５，４００人	**○ 飛鳥資料館における展示公開** 春期特別展「キトラ古墳壁画四神」を 4 月 16 日から 6 月 13 日まで開催するとともに、期間中の 5 月 15 日から 6 月 13 日までキトラ古墳壁画の特別公開をおこない、四神図（青龍・白虎・朱雀・玄武図）を展示した。また、5 月 30 日には記念講演・討論会を文化庁とともに主催した。夏期企画展は 7 月 1 日から 8 月 30 日に「小さな石器の大きな物語」を開催した。秋期特別展は、10 月 16 日から 11 月 28 日に「木簡黎明－飛鳥に集う いにしえの文字たち」を開催、10 月 17 日に記念講演会、10 月 23 日、11 月 6 日、20 日にギャラリートークをおこなった。冬期企画展は、1 月 28 日から 2 月 28 日に「飛鳥の考古学 2010」を開催した。平常展では、キトラ古墳壁画の陶板による実寸複製品を設置するとともに、キトラ古墳に関わる展示を一新、充実した。	S	順調
6314	○ 藤原宮跡資料室における展示・公開 常設展（土・日曜日、祝日、休日、年末年始休館 無料公開） 年間目標入館者数 ４，５００人	**○ 藤原宮跡資料室における展示公開** 常設展示および発掘調査成果の速報展示などを通年で実施し、展示公開の充実を図った。庁舎エントランスに発掘調査成果を速やかに公開するための速報展示コーナーを設け、多様な成果を継続的に公開した。あわせて、職員による展示解説、展示のための各種資料制作、パンフレットなどの企画と制作、各地の博物館などへの文化財の貸与をおこなった。	A	順調

		定量評価	22 年度	21 年度	目標値	評定
		入館者数				
		黒田記念館	18,458	20,345	10,531	S
		平城宮跡資料館	354,346	25,127	72,500	S
		飛鳥資料館	133,312	77,347	55,400	S
		藤原宮跡資料室	4,815	4,341	4,486	A

(4) 文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力

【中期目標】 ------

【中期計画】	【主な計画上の評価指標】
(4) 文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力し、支援を実施する。また、宮跡等への来訪者に文化財に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティア事業を運営するとともに、各種ボランティアに対して、活動機会・場所の提供等の支援を行う。	○文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力すること。また、ボランティアへの活動支援を行うこと。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(4) 文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原旧跡などの公開・活用事業に協力し、支援を実施する。また、宮跡などへの来訪者に文化財に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティア事業を運営するとともに、各種ボランティアに対して、活動機会・場所の提供等の支援を行う。	(4)		
6411		**○ 平城宮跡解説ボランティア事業の運営** 高い知識に基づくガイドを多くの来訪者に効率よく行い、文化財への理解を大いに広げることができた。	A	順調
6412	○ 平城宮跡解説ボランティア事業及び平城宮跡防災・防犯パトロール「平城宮跡みまもり隊」の運営	**○ 各種ボランティアに対する活動機会・場所の提供、文化財に関す** ボランティア団体への支援は、その育成につながった。	A	順調
6413	○ 各種ボランティアに対する活動機会・場所の提供、文化財に関する学習会の実施等への支援	**○ 平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力** ◇平城宮跡における文化庁平城宮跡等管理事務所の運営及び飛鳥・藤原宮跡の保存活用に対し、積極的な協力を行った。 ◇文化庁宮跡等整備及び公開活用等事業等に対し、積極的な支援協力及び関係機関等との調整を行った。 ◇関連受託事業 ：特別史跡平城宮跡及び特別史跡藤原宮跡地における歴史的環境維持・整備業務、平城宮跡、藤原宮跡の維持管理のために、宮跡地内の草刈・植栽業務等を実施した。 ○平城宮跡〔対象面積：915,150 ㎡〕 ○藤原宮跡〔対象面積：257,840 ㎡〕	A	順調

(5) 平城宮遷都 1300 年記念事業への協力

【中期目標】 ------

【中期計画】	【主な計画上の評価指標】
(5) 奈良県の「平城遷都１３００年記念事業」にあわせ、平城京についてのこれまでの調査・研究成果を生かした展示・公開事業を行う。	○奈良県の「平城遷都 1300 年記念事業」にあわせ、平城京についてのこれまでの調査・研究成果を活かした展示・公開事業を行うこと。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(5) 「平城遷都１３００年記念事業」支援として、リニューアルオープンした平城宮跡資料館において、平城京についての最新の調査・研究の成果及び古代都城等に関する国際共同研究の成果を展示・公開する。また、宮跡内における他の機関の展示公開事業に対しても、学術的指導・助言をもって支援する。 以下のとおり、調査・研究に基づく資料の作成及び文化財に関連する資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査・研究成果を積極的に公表・公開し、研究者や広く一般の人が調査・研究成果を容易に入手できるようにする。	(5) (3)「平城宮跡資料館における展示公開」参照。		

(6) 文化財情報・研究成果の公表

【中期目標】 ------

【中期計画】	【主な計画上の評価指標】
(6) 文化財情報・研究成果などを広く公表すること等を通じて歴史・伝統文化に対する理解が深まるよう努める。 ①ウェブサイト等自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、広く国内　外に情報を発信する。 ウェブサイトのアクセス件数は年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ることとする。 ②－１収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すために、デジタル化を推進し、文化財情報システム等により広く積極的に公開する。また、収蔵品等に関するデジタル化件数は、年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにする。 ②－２美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能を充実させる。	○ウェブサイトのアクセスの年間平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ること。 ○収蔵品等に関するデジタル化件数は、年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにすること。 ○情報資料を収集し、レファレンス機能を充実させること。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	(6) 文化財情報の公開促進 文化財に関する情報を積極的に発信し、国内外における日本文化への理解を深める。 **①ウェブサイト等による情報の発信** ウェブサイトのアクセス件数が増加するよう内容の充実を図る。	**(6) 文化財情報の公開促進** **① ウェブサイト等による情報の発信**		
6611	（東京国立博物館） 1）情報アーカイブにおいて公開中の文化財データベースの充実を図る。	**【東京国立博物館】** ・情報アーカイブサイトでの調査研究成果の公開を継続した。	S	順調
	2）携帯電話サイトによる情報提供サービスを実施する。	（モバイルサイト開設については処理番号 2131 を参照。） ・国指定文化財の高精細画像および解説文（e 国宝）についてデータ整備を進め、展示室およびインターネットで一般公開した。 ・「e 国宝」を閲覧するための iPhone アプリを開発、公開した。 ・国指定文化財について 3 次元計測に基づく動画を作成し、展示室およびインターネットで公開した。		
6612	（京都国立博物館・奈良国立博物館） 1）携帯電話端末用ウェブサイトの充実を図り、利用者の拡大とサービスの向上を図る。 （京都国立博物館） 1）学術研究公開の一環として、研究紀要「学叢」をウェブサイトで公開する。 2）既刊の博物館ディクショナリーをウェブサイトに掲載するとともに、新刊の博物館ディクショナリーをメールマガジンで配信し、利用者の拡大を図る。 3）収蔵品貸与情報をウェブサイトにて公開する。	（処理番号 6612、6613 を参照） **【京都国立博物館】** ・特別展覧会「長谷川等伯」において、過去 1 週間の混雑状況を時系列で掲載したウェブページを公開し、パソコン端末や携帯電話で、来館者に過去の混雑状況をお知らせできるよう配慮した。また、当日の混雑状況のＱＲコードを館内及び当館看板設置場所に掲示し、携帯電話端末用ウェブサイトの利用を促進した。 ・研究紀要「学叢」を創刊号からすべてを当館のウェブサイトに公開した。 ・新刊の博物館ディクショナリーをメールマガジンで配信した。 ・収蔵品の貸与情報を当館のウェブサイトに公開した。トップページに直接のリンク先を設け、閲覧者へのサービスの充実を図った。 ・当館ウェブサイトに、研究者一覧のウェブページを作成し、研究員の自己紹介、主要業績及び過去３年の執筆物を掲載した。	A	順調
6613	（奈良国立博物館） 1）当館保有の文化財の写真並びに研究成果の公開の充実を図る。	**【奈良国立博物館】** ・展覧会名称の変更にともない、携帯用ウェブサイト内の表記の全面的な改定をおこなった。 ・PC 用ウェブサイト内で公開している写真データベースに、新たに 2,303 件のデータを追加した。 ・PC 用ウェブサイト上に、研究員の専門分野と研究課題・調査成果を記した一覧を新たに掲載した（5 月）。 ・季刊誌『奈良国立博物館だより』に、研究員が調査研究成果を紹介する欄を設け、毎号（年 4 回）、記事を掲載している。 ・『鹿園雑集』12 号を刊行し、論文 1 本、資料紹介 1 本のほか、調査報告・修理報告等を掲載した。 ・読売新聞紙上に、研究員による展示文化財の解説記事を連載している（通年、隔週） ・名品展の展示替えによって新規に展示される文化財について、その解説文を盛り込んだプレスリリースを作成し、マスメディア向けに	A	順調

		発信した（12 月）。		
6614	（九州国立博物館） 1）ウェブサイトで提供する情報の充実を図るとともに、利用者からの利便性を考慮した情報の発信に努める。	【九州国立博物館】 ①ウェブサイト利用者からの意見に、九博メールで対応 ②特別展ごとに「ぶろぐるぽ」を実施 ③「九州国立博物館メールマガジン」の会員を 12 月末ウェブサイト等で募集した。 ④「九州国立博物館メールマガジン」創刊号を 1 月 15 日に配信し、今後、月２回配信予定。 ⑤混雑した「没後 120 年　ゴッホ展」において、ウェブサイト・携帯サイト等で混雑状況について情報提供をした。	A	順調
	②－１　デジタル化の推進 （４館共通） 1）収蔵品のデジタル画像による来館者への情報提供及びインターネットでの公開を継続して行う。 2）収蔵品の国宝・重要文化財について、５カ国語（日本語、英語、中国語、韓国語、フランス語）の説明を付したデジタル高精細画像（ｅ国宝）を公開する。 3）７５，７００件（東京：７３，０００、京都：８００、九州：１，９００）の収蔵品写真のデジタル化を実施する。 4）当館所蔵の指定文化財の画像を高精細画像化し、ウェブサイト上で公開する。	**②－1　デジタル化の推進**		
6621-1	（東京国立博物館） 1）収蔵品の基本情報のデータ化を推進し、公開にむけての検討を行う。 2）法隆寺献納宝物について、５カ国語（日本語、英語、中国語、韓国語、フランス語）の説明を付したデジタル高精細画像（「法隆寺献納宝物デジタルアーカイブ」）等の提供を法隆寺宝物館にて継続して実施する。	**【東京国立博物館】** ・国指定文化財のデジタル撮影を集中的に実施し、既存の画像データについては編集・加工を行なった。また国指定文化財の情報と解説文を整備し、英、仏、中、韓の各国語に翻訳して公開した。 ・マイクロフィルムについては昨年度デジタル化が完了したため 0 件となった。カラーおよびモノクロフィルムも完了し、今後は撮影そのものがフィルムからデジタル撮影に移行していく。 ・収蔵品等のモノクロ画像のデジタル化を継続した。 ・列品管理データベースを更新し、列品情報の公開を行うためのデータ整備を推進した。 ・法隆寺献納宝物のデジタルアーカイブの提供を継続した。	B	順調
6622-1		・国指定文化財について 3 次元計測によるデジタル化を実施した。 **【京都国立博物館】** ・収蔵品のデジタルデータを作成し文化財情報システム及び公開収蔵品データベースへの登録を随時行い、当館デジタルアーカイブ及び公開情報サービスを行った。 ・重要文化財高精細画像公開システム「KNM GALLERY」で 21 年度より公開されている 6 カ国語（日英韓中仏西）による解説について、内容及び表示方法等について修正を行った。	A	順調
6623-1	（奈良国立博物館） 1）収蔵品について情報の整備を継続して実施し、収蔵品データベースの充実を図る。 2）写真データベースの個別データを約２，０００件追加更新する。	**【奈良国立博物館】** 本事業は、仏教美術を中心とする文化財に関わる情報資源の構築を図り、館内における調査研究に活用するとともに、館外研究者ならびに広く一般への公開をおこなうことを目的としており、このことを実施するために必要な情報システムやネットワークシステムの構築等、環境整備もあわせて行った。 データベース： ・調査および写真撮影をおこなった文化財について、情報システムへデータを入力し、5,190 件登録・更新した。 ・上記のうち公開準備のできたデータを写真データベースから 2,892 件公開した。 ・21 年度に正式公開した収蔵品データベースを更に充実させるため、データ整備を継続して行い、文字データ：98 件、画像データ：1,273 件を更新した。 ・デジタル撮影の開始、デジタル画像の運用管理、情報公開を推進する準備作業として、写真情報システムのリニューアルを進めた。 画像データ： ・館蔵品・寄託品・その他の文化財について、カラーポジフィルム 4,255 枚、X 線フィルム 56 枚をデジタル化した。	A	順調
6624-1		**【九州国立博物館】** ①昨年度に引き続き、当館で収蔵している国指定文化財のうち 19 件の収蔵品のデジタル画像公開プログラムの制作を行った。これにより館内設置のパソコンおよびインターネットを通じた情報提供が可能となった。 ②独立行政法人国立文化財機構で制作、管理公開しているインターネット情報公開プログラムｅ国宝に当館が収蔵する国指定文化財の解説およびデジタル高精細画像を提供し、公開した。 ③収蔵品写真のデジタル化を行った。(1,391 件) ④当館所蔵の指定文化財のうち、国宝栄花物語についてその一部をカラーポジ撮影し、デジタル画像化を行っている。	A	順調
	②－2　博物館関係資料の収集、レファレンス機能の強化 美術史・考古学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館・美術館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図る。また、資料の登録や検索・利用については、最新の情報処理技術を用いた、活用しやすいシステムを開発する。 （４館共通）	**②－2　博物館関係資料の収集、レファレンス機能の強化**		

	1）約１１，６００件（東京：３，０００、京都：５，０００、奈良：３，０００、九州：６００）の収蔵品・出品作品等の写真撮影及び関連データを整備する。			
6621-2	（東京国立博物館） 1）外部への公開を見据えた「列品管理プロトタイプデータベース」（学芸業務支援システム）の構築を進め、博物館機能の充実をはかる。 2）資料館において、美術史等の情報及び資料を一般に広く公開するために、図書管理システムを軸とした図書資料などのデータ整備を推進し、レファレンス機能とサービスの充実を図る。 3）法隆寺宝物館において、観覧者向け図書コーナーサービスを継続実施する。 4）調査・研究・教育などに有益な情報及び関係資料を収集するための方針を策定する。 5）ナショナルセンターとしての国立博物館における資料館の機能の拡充に向け、閲覧スペースや書庫、事務室等の区画・配置をはじめ、資料館全体のあり方を再検討し 、有効活用へ向けた利用計画を策定する。	**【東京国立博物館】** （列品管理データベースについては処理番号 6621-1 を参照） ・資料館における美術史等の情報・資料の公開のため、図書資料等のデータ整備を推進した。 データ整備件数：新規図書 7,345 冊、逐次刊行物 4,684 冊、遡及入力 7,836 冊 ・資料館において資料の閲覧、複写およびレファレンスサービスを継続して実施した。 ・法隆寺宝物館において、観覧者向け図書コーナーサービスを継続した。 ・調査・研究・教育などに有益な情報及び関係資料を収集した。 収集件数：購入図書 514 冊、寄贈・交換図書 6,831 冊、館蔵品等の写真資料 5,577 枚 ・閲覧室開架書架の増設（22 年 4 月）および埋蔵文化財報告書等の移動（23 年 3 月）を行った。またそれに伴い所在データを更新し、館内配置図を作成した。 ・有料ゾーンからの資料館入退館経路の検討を行った。 ・震災の影響として直接の被害はなかったが、安全確認と社会的諸事情に鑑み、23 年 3 月 14 日～31 日まで臨時休館した。23 年 4 月末まで休館の予定である。	A	順調
6622-2	（京都国立博物館） 1）蔵書検索システム及び所蔵作品検索システムの構築を進める。 2）学芸業務支援システムの構築を進める。	**【京都国立博物館】** ・平成21年度に構築した蔵書検索システムの不具合を訂正しながら整備を進めた。 ・平成21年度に構築した文化財情報システム（所蔵作品検索システムと学芸業務支援システムを兼ね備えたシステム）の不具合を訂正しながら整備を進めた。・ ・収蔵品、展覧会出品作品等の撮影写真、及び社寺調査等での撮影写真並びに関連データを整備した。 ・写真は漸次写真画像管理システムに登録し、各種データベースへの二次提供を行った。 登録件数　3,379件 ・特別観覧件数　　972件	C	順調
6623-2	（奈良国立博物館）	**【奈良国立博物館】**	A	順調

		本事業は、博物館の根幹である展示・研究活動を支援すべく、関連する図書・雑誌等の資料を収集・整理し、学芸部の情報資料として活用するものである。また一般利用者に対しても当該資料を当館仏教美術資料研究センターにおいて公開し、サービスをおこなう（今年度は耐震補強工事により休館中で、来年度 7 月再開を目指し準備している）。		
	1）図書情報システム及び写真情報システムによる資料整備と情報蓄積を推進し、サービスの充実を図る。	・昨年度に導入した図書情報システムによる受入・登録作業を継続しておこない、業務の効率化とサービスの向上を図っている。新システムへの移行作業は順調に進み、既に通常業務に活用しているが、来年度のセンター再開にあわせ、目録情報のインターネット公開を目指しており、館内での成果が外部への情報公開に効果的に反映されるよう、更なる情報整備に努めている。 ・昨年度に引き続き、旧地下通路に新たに確保した収蔵スペースに全資料を移動して、館内利用を継続している。現在会議室の一角を仮事務室として受入・登録作業をおこない、年度末の工事完了後の引越にむけて整理作業に人員と時間を要しているため、現在までの新規受入は、図書 777 冊、展覧会カタログ 40 冊に留まっている。 ・同センターの保有する資料の総数は図書約 67,000 冊、展覧会カタログ約 10,000 冊、雑誌約 3,000 タイトルとなっている。今年度は昨年度に引き続き、特別展『大遣唐使展』の開催に関連して、中国仏教関係・対外交流関係の資料を重点的に収集し、不足していた領域の資料の充実を推進させることができた点も特筆される。		
	2）修理記録・古写真・ガラス乾板等の整理とデジタル化を推進し、運用方法について検討する。	・今年度より、デジタル撮影を開始し、特別展『大遣唐使展』および『至宝の仏像』の開催に合わせ大量のデジタル撮影をおこなった。デジタル撮影：5,663 カット。		
	3）仏教美術資料研究センターの耐震補強工事完了後の再開に向けて、資料配置を全面的に見直し、資料の有効的な活用と効率的な運用について検討し、サービスの更なる充実を図る。	・センターの耐震補強工事を機会に、書庫および閲覧室のレイアウトの全面的なリニューアルをおこなった。年度内に新規に集密書架、固定書架を導入する計画である。これにより、情報資料の利用環境を更に充実させることが叶い、センター再開時に向けて更なるサービスの拡充を進める予定である。		
6624-2	（九州国立博物館） 1）海外調査で撮影した写真やビデオを展示や教育普及事業で活用するための整備を行う。 2）対馬宗家文書データベースの効率的な運用を検討し、実施する。 3）博物館資料（収蔵品、図書、写真など）データベースにおける業務の効率化に向けて、現行業務システムを全面的に見直し、より充実した第２次業務シス	**【九州国立博物館】** ①収蔵品・出品作品等のポジ写真撮影および関連データを整備した。（2,784 件） ②海外調査で撮影した写真やビデオ、また収集した体験用資料を展示や教育普及活動で活用するための整備を行った。 ③対馬宗家文書データベースの効率的な運用を検討し、実施した。 ④博物館資料（収蔵品、図書、写真など）データベースにおける業務の効率化に向けて、現行業務システムを全面的に見直し、より充実	A	順調

	テム構築を目指す。	した第２次業務システム構築を行った。				
		定量的評価	**22 年度**	**21 年度**	**目標値**	**評定**
		ウェブサイトのアクセス(件)				
		東京国立博物館	**4,971,306**	**5,687,673**	**1,928,966**	**S**
		京都国立博物館	**805,935**	**848,486**	**521,965**	**S**
		奈良国立博物館	**3,121,270**	**2,630,035**	**670,948**	**S**
		九州国立博物館	**4,708,102**	**7,459,518**	**783,487**	**S**
		収蔵品のデジタル化(件)				
		東京国立博物館	**8,639**	**775,300**	**73,000**	**C**
		うちカラーフィルム	5,136	3,480	3,000	S
		うちモノクロフィルム	3,503	23,639	10,000	C
		うちマイクロフィルム	0	748,181	60,000	F
		京都国立博物館	**4,594**	**5,603**	**4,359**	**A**
		奈良国立博物館	**9,501**	**102,894**	**8,471**	**A**
		九州国立博物館	**1,391**	**3,574**	**1,900**	**B**
		写真検索システムデータ追加更新(件)				
		奈良国立博物館	5,190	12,339	2,000	S
		収蔵品・出品作品等の写真撮影及び関連データ整備(件)				
		東京国立博物館	5,577	4,177	3,000	S
		京都国立博物館	3,379	3,753	5,000	C
		奈良国立博物館	1,725	5,818	3,000	C
		九州国立博物館	2,784	4,686	600	S

7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

【中期目標】地方公共団体や大学、研究機関とのネットワークや連携協力体制を構築し、機構が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を図り、我が国全体の文化財の収集・展示、調査・研究の質的向上に寄与すること。また、地方公共団体等の指導者層を主たる対象とする高度な研修事業や、若手研究者の育成に寄与するため実践的な連携大学院教育を実施し、今後の我 が国の文化財保護における中核的な人材を育成すること。

【中期計画】

我が国の文化財に関する調査・研究のナショナルセンターとして、これまでの調査・研究の成果を活かし、国・地方公共団体等に対する専門的・技術的な協力・助言を行うことにより、我が国全体の文化財　の調査・研究の質的向上に寄与する。また、専門指導者層を対象とした研修等を行い、文化財保護に必要な人材を養成する。

(1)　地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。

(2)　文化財に関する高度な研究成果をもとに、地方公共団体等で中核となる文化財担当者に埋蔵文化財に関する研修及び保存科学に関する保存担当学芸員研修を実施する。なお、参加者等に対するアンケート調査を行い、８０％以上の満足度が得られるようにする。

また、東京藝術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成に寄与する。

【主な計画上の評価指標】

○文化財に関する協力・助言の円滑勝積極的な実施を行うこと。

○埋蔵文化財に関する高度な研究成果をもとに、中核となる文化財担当者に、各種の研究を実施するとともに、参加者等に対するアンケート調査で 80%以上の満足度が得られるようにすること。

○連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成に寄与すること。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
	我が国の文化財に関する調査・研究のナショナルセンターとして、これまでの調査・研究の成果を活かし、国・地方公共団体等に対する専門的・技術的な協力・助言を行うことにより、我が国全体の文化財の調査・研究の質的向上に寄与する。また、専門指導者層を対象とした研修等を行い、文化財保護に必要な人材を養成する。			
7111	(1) 地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。	**(1)－1 無形文化遺産に関する助言** 平成 22 年度は、無形文化遺産の保存・伝承・活用等に関して、文化庁伝統文化課に対する無形文化遺産保護条約に関する助言をはじめ、26 件の助言を実施した。	A	順調
7112	埋蔵文化財保護行政に資する調査研究を行うとともに、地方公共団体等への協力・助言・専門的知識の提供等について管理・調整する。また、これまで蓄積した調査・研究の成果を活かし、他機関等との共同研究及び受託事業を実施する。	**(1)－2 文化財の修復及び整備に関する調査・助言** 今年度は、件数として４０件を数え、指導助言先やその内容も多岐にわたり、複数回の指導助言に及んだ。今後も継続して指導助言を実施し適正に文化財が保存修復されるように努めるとともに、私たちも新たな知見を得て、的確な指導助言が行えるように努力する。	A	順調
7113		**(1)－3 地方公共団体等が行う史跡の整備、復原事業等に関する技術的助言** 地方公共団体等が行う文化財の調査・保存・修復・整備・活用等の事業について、専門委員会委員への就任等を通して、建造物修理、史跡整備、出土文字資料調査、発掘調査等に関する専門的・技術的な助	A	順調

		言を行った。援助・助言実施件数（出張依頼を受けた件数）332 件（委員会出席 159、審議会出席 18、指導 73、調査 19、講演 28、その他 35）		
7114		**(1)－4 地方公共団体が行う平城京域発掘調査への援助・助言** 平成 22 年度は、平城宮・京域で、計８件の発掘調査を実施した。その結果、平城宮跡西北部では、平城宮の造作にともなう可能性がある奈良時代の整地土を検出し、平城京左京一条二坊十六坪では古代の柱穴 5 基と、土器や瓦を多量に含む南北溝 1 条を検出した。また、西大寺旧境内では古代と考えられる土坑 1 基と、Ｌ字状に屈曲する溝 2 条を検出した。	A	順調
7115		**(1)－5 地方公共団体が行う飛鳥・藤原地区の発掘調査への援助・助言** 藤原宮跡において地方公共団体が行う発掘調査への援助・助言の事業は６件あり、主に現状変更に対する事前調査である。緊急性を要する事前調査に効率よく対応し、藤原宮ならびに飛鳥・藤原地域についての基礎資料を継続的に蓄積している。特に、藤原宮跡東方官衙南方の調査では、掘立柱建物２棟、掘立柱塀１条、宮造営にかかわるとみられる南北溝１条などを確認した。	A	順調
7211	(2) 文化財に関する高度な研究成果をもとに地方公共団体等で中核となる文化財担当者に埋蔵文化財に関する研修、保存科学に関する保存担当学芸員研修を実施する。なお、参加者等に対するアンケート調査を行い、８０％以上の満足度が得られるようにする。 また、東京藝術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成に寄与する。	**(2)－① 埋蔵文化財担当者研修** 遺跡の発掘調査や保存・整備等に関し、必要な知識と技術の研鑽を図るため、地方公共団体等の埋蔵文化財担当者を対象として、専門研修１１課程の研修を実施し、延べ１３７名が受講した。 研修受講者全員に対するアンケート調査では、全員から「有意義だった」「役に立った」との回答を得ており、充実した研修が実施できた。	A	順調
7221	① 埋蔵文化財担当者研修 専門研修１３課程、研修人数のべ１６３人	**(2)－② 博物館・美術館等保存担当学芸員研修** 第 27 回保存担当学芸員研修、保存担当学芸員フォローアップ研修、第 15 回資料保存地域研修、および「博物館資料保存論」対策講座を実施し、いずれも高い満足度を得た。	A	順調
	② 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修を行う。 ○ 期間２週間、受講生２５名程度			
7231	③ 東京藝術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育の推進 ○ 東京藝術大学：システム保存学（保存環境学、修復材料学） ○ 京都大学：共生文明学（文化・地域環境論） ○ 奈良女子大学：比較文化学（文化史論）	**(2)－③ 連携大学院教育　東京藝術大学：システム保存学（保存環境学、修復材料学）** 次に上げる講義と演習を各教官が担当した。保存環境計画論（佐野）、保存環境学特論（石﨑、木川）、修復計画論（川野邊）、修復材料学特論（中山、北野）、文化財保存学演習（石﨑、佐野）	A	順調
7232		**(2)－③ 京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育の推進** 京都大学大学院人間・環境学研究科において６名、奈良女子大学大学院人間文化研究科において３名の研究職員が、客員教授・准教授として各専門分野に関する講義、演習、実習を通して大学院生の研究指導を行った。なお、平成２２年度の受入学生数は京都大学５０名、奈良女子大学２名であった。	A	順調

定量評価	22 年度	21 年度	目標値	評定
参加者満足度				
埋蔵文化財担当者研修	100%	100%	80%	A
保存担当学芸員研修	100%	100%	80%	A
埋蔵文化財担当者研修　実施課程	11 課程	12 課程	13 課程	B
延べ人数	137	130	163	B
保存担当学芸員研修　期間	2 週間	2 週間	2 週間	A
受講生	33	31	25	A

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

【中期目標】法人統合のメリットも最大限に生かし、業務の充実かつ効率化を図るとともに、事務、事業、組織等の見直し、外部委託の推進等により、経費の合理化を図ること。
運営費交付金を充当して行う業務については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、特殊業務経費を除き、５年間で一般管理費は１５％以上、業務経費は５％以上の削減を図ること。
また、「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」（平成１８年法律第４７号）に基づき、平成１８年度以降の５年間において国家公務員に準じた人件費削減を行うとともに、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行う。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針２００６」（平成１８年７月７日閣議決定）に基づき、国家公務員の改革を踏まえ、人件費改革を平成２３年度まで継続すること。
さらに、機構の業務運営に際しては、一般管理業務の本部への一元化、集約化等を図り、統合後５年間で、１９年度一般管理費（物件費）の１０％相当の経費を５年間で削減を図ること。

１　業務の効率化

【中期目標】--------

【中期計画】

１　職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上に考慮する。また、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、さらに、外部委託の推進等により、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き５年期間中一般管理費１５％以上、業務経費５％以上の業務の効率化を図る。
　さらに、法人統合のメリットも最大限に生かしつつ業務の効率化に務め、機構の業務運営に際しては、一般管理業務の本部への一元化、集約化等を図り、19 年度一般管理費（物件費）の１０％相当を統合後５年間で削減を図る。
具体的には下記の措置を講じる。
（１）共通的な事務の一元化による業務の効率化
（２）使用資源の減少
・省エネルギー（５年期間中１年に１．０３％の減少）
・廃棄物減量化（一般廃棄物排出量を５年期間中５％減少）
・リサイクルの推進
（３）施設有効使用の推進
・施設の利用推進
（４）民間委託の推進
・一般管理部門を含めた組織・業務の見直しを行い、民間開放をさらに積極的に進める。
・館の警備・清掃業務について民間委託を推進する。
・来館者サービスを中心に業務の見直しを行い、民間委託を積極的に進める。
（５）競争入札の推進
・契約業者の競合を一層推進することにより、経費の効率化を図る。

【主な計画上の評価指標】

○中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き 5 年期間中一般管理費 15%以上、業務経費 5%以上の業務の効率化を図ること。
○省エネルギー5 年期間中、1 年に 1.03% 減少を図ること。
○施設の有効利用の推進を図ること。
○民間委託の推進を図ること。
○競争入札の推進を図ること。
○保有固定資産について、減損会計の情報（保有目的、利用実績など）を考慮し、充分な推進を図ること。
○官民競争入札等の推進を図ること。

【21 年度評価における主な指摘事項】

○引き続き省エネルギー、リサイクルの推進のための努力をお願いしたい。
○契約の割合は、金額については随意契約見直し計画を達成している。しかし件数については、計画の達成に向けて、また、事業仕分けで指摘を受けた「施設内店舗用地の賃借」についても、展覧環境の質に充分配慮した上で順次企画競争を導入する等、更なる努力をお願いしたい。
○外部資金の活用及び自己収入の増大に向けた定量的な目標は、入場料収入等の増加により、目標を上回っている。今後も着実な目標達成を期待している。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
9110	**(1) 各施設の共通的な事務の一元化による業務の効率化** 財務、人事、企画事務の共通的な事務の一元化を推進し事務の効率化を図る。 1）国立博物館各館における翌年度の展覧会企画等について「研究・学芸系職員連絡協議会」において連絡・調整を行い、企画機能強化を図る。 2）ネットワークの共通化及び、各施設ごとであったグループウェアの機構全体での統合・共通化を図り、業務の効率的な運用及び情報の共有化を推進する。	**(1) 各施設の共通的な事務の一元化による業務の効率化** ・「研究・学芸系職員連絡協議会」を実施し、各博物館における翌年度の展覧会企画等について調整を行い、計画を図った。 ・グループウェアを機構全体で一本化し、7 月以降本部および各施設にて順次、運用を開始した。機構内全職員が一本化されたグループウェア「サイボウズ・ガルーン 2」を利用することで、機構内の連絡および情報共有が大幅に効率化し、セキュリティが向上した。 ・国立文化財機構規程集 PDF 版をグループウェア上で閲覧可能とした。機構内職員が常に最新版を参照できるようになった。 ・給与明細のウェブ閲覧を平成 23 年 3 月給与より試行運用を開始し、業務効率化と経費削減に加え利便性向上が見込まれる。 ・財務会計システムの更新手続きに着手し、23 年 4 月入札公告・24 年 4 月運用開始に向けて準備を進めた。	A	順調
9120	**(2) 省エネルギー、リサイクルの推進** 1）光熱水量の使用状況を把握し、管理部門を中心に引き続き節減に努める。（年間１．０３％減少） 2）廃棄物の分別収集を徹底し、リサイクルを引き続き推進する。（一般廃棄物排出量を年間１．０３％減少）	**(2) 省エネルギー、リサイクルの推進** ・日常の節電節水の周知徹底、夏季の軽装励行、冷暖房の省エネ運転等を行った。 ・廃棄物削減では、ミスコピーの防止及び両面印刷の励行、館内 LAN・電子メール等の活用による文書のペーパーレス化を引き続き行っている。 ・リサイクルの実施（廃棄物の分別収集，リサイクル業者への古紙受け渡し，再生紙の発注等） 使用資源の推移等 光熱水料金　（単位：千円） 事項 / 21 年度 / 22 年度 / 差額 電気料 / 366,202 / 350,947 / △15,255 水道料 / 93,651 / 79,777 / △13,874 ガス料（※1） / 92,510 / 98,213 / 5,703 計 / 552,363 / 528,937 / (4.24%減) △23,426 ※ガスは、全体として使用量ベースでは減少したが、原料高騰による単価上昇により使用料金ベースで増額となった。 （※1）ガス使用量等 事項 / 21 年度(㎥) / 22 年度(㎥) / 差引(㎥) / 単価影響額(千円) ガス使用料 / 1,521,140 / 1,475,110 / △46,030 / 7,785 （参考）特殊要因を考慮した光熱水料金　（単位：千円） 事項 / 21 年度 / 22 年度 / 差額 電気料 / 366,202 / 350,947 / △15,255 水道料 / 93,651 / 79,777 / △13,874	S	順調

		ガス料	92,510	90,428	△2,082
		計	552,363	521,152	(5.65%減) △31,211

※ガス単価上昇等を勘案して算定。

廃棄物排出量 (単位：kg)

事項	21年度	22年度	増減率（%）
一般廃棄物（※2）	228,045	273,407	19.89%

（※2）一般廃棄物増加の特殊要因 (単位：kg)

施設	内容	金額
奈良国立博物館	西新館耐震改修工事等に伴う増加	47,500
奈良文化財研究所	平城遷都１３００年祭関連行事に伴う増加	2,700
	小計	50,200

（参考）特殊要因を考慮した廃棄物排出量 (単位：kg)

事項	21年度	22年度	増減率（%）
一般廃棄物	228,045	223,207	△2.12%

(3) 施設有効使用の推進

（博物館４施設）

1）講座・講演会等を開催する。

2）講堂等の利用案内を関係団体、学校等に対し積極的に行う。

3）国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサートなどを実施し、施設の有効利用を図る。

(3) 施設有効使用の推進

【東京国立博物館】

企業等のパーティー、撮影（映画、ドラマ、雑誌等）、茶室・講堂の貸出による施設の有効利用（それに伴う収入増）を図った。

項目	平成22年度
茶室	112件（内　有償貸付　45 件）
講堂等 （講堂、会議室、研修室）	304件（内　有償貸付　89 件）
その他 （上記以外の敷地建物）	7件（内　有償貸付　7件）
撮影	115件（内　有償貸付 115 件）
合　　計	538件　　収入額　27,987千円

入館者の拡大を目的とするコンサートとして、

「ファミリーコンサート」(8月8日　共催：東京クラリネットクワイアー)

「長唄コンサート」(7月4日　共催：音楽の花束)

9131 A 順調

「チェロとハープのコンサート」(6月20日　共催：サロン･ド･ソネット)

等を、演芸として、

「新春東博寄席」(1月15日)

など様々なイベントを実施した。

・3月11日の東日本大震災の影響で、15件がキャンセルとなった（うち茶室4件、講堂等6件、その他2件、撮影3件）。

9132

【京都国立博物館】

今年度は庭園を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進を図った。

なお、平常展示館建替工事に伴い一昨年度12月8日より講堂が使用できなくなったため、展覧会等に関する講演会、夏期講座及びらくご博物館は館外の施設を利用して行うこととなった。

庭園（丸池周辺）

・「雨月物語」映画鑑賞会（開催日2日　入場者317名）

・自転車発電エコライブ（開催日1日　入場者約100名）

庭園（特別展示館前）

・音燈華（開催日1日　入場者数約270名）

館外の施設を利用

・展覧会等に関する講演会（講座回数15回　聴講者数　合計2,076名）

・夏期講座（開催日3日間　参加者205名）

・らくご博物館（年3回　入場者509名）

また、外部団体等の講演会・研修会等への施設の貸出を積極的に行った。

施設有効利用件数		使用料
茶室	32件（うち有償　32件）	339,500円
研修室等	15件（うち有償　1件、無料14件）	4,725円
その他	10件（うち有償　10件）	368,239円
撮影利用	2件（うち有償　1件、無料 1件）	9,450円
計	59件（うち有償　44件、無料15件）	721,914円

9133 A 順調

【奈良国立博物館】

・施設の利用

講堂：公開講座（12回、1,522人）、サンデートーク（12回、621人）、正倉院展ボランティア解説（20日間計110回）、世界遺産学習（30校、2,221人）、セクシュアル・ハラスメント研修会（43人）、文化財保存修理所特別公開（2回、353人）

・イベント等の実施

講堂：まほろば寄席（2回）、トークイベント(「大遣唐使展の楽しみ方」、大遣唐使展で仏像に会おう！」)、 シンポジウム（東アジアの造形芸術と遣唐使の時代）、特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」関連イベント「金春穂高　能を語る」、「お水取り講話と粥の会」

地下回廊：「奈良生まれのブロックおもちゃで遊ぼう！」、高精細デジタル画像による「吉備大臣入唐絵巻」の全巻展示

		西新館ピロティ北側：昨年までに展示された正倉院宝物を紹介した「NHK 日曜美術館」の映像放映 文化財保存修理所：特別公開　普段は公開していない修理所を当館研究員の解説付きで公開 ・会場提供 敷地内：なら燈花会、コンサート（「秦　基博」　TALK&LIVE）、第 12 回バサラ祭、「全国光とあかり祭」 講堂：いにしえの奈良八重桜再発見の集い、和歌劇「ヌカタ」公演、「なら国際映画祭２０１０」Roger Hsiao 監督作品「鑑真大和尚」上映、奈良市教育委員会主催教員研修講座、 お水取り展鑑賞とお松明　なら瑠璃絵の会場 地下回廊：絵画コンクール入賞作品展示、正倉院展作文コンクール入賞作品展示、（シルクロード写真パネル展示）、「奈良のうまいもの」パネル展示 西新館ピロティ南側：正倉院展での呈茶席		
9134		**【九州国立博物館】** ・文化交流展示室を紹介する講座の開催や各特別展で関連する講演会を開催した。 ・ミュージアムホール、エントランスホール、研修室、茶室等において、館主催事業及び各種団体主催のイベントを開催するとともに、希望団体にはミュージアムホール、研修室、茶室の貸出を行った。 ・今年利用開始した茶室のリーフレットを作成し、茶道関係者に配布を行った。 ・各種国際シンポジウム、アジア諸国に関するイベント、留学生の日のイベント等を開催した。 ・ガムランワークショップや、コンサートの開催等を継続的に実施し、施設の有効活用を促進した。 ミュージアムホールの利用　７７件（内　有料　７件） 研修室の利用　７７件（内　有料６３件） 茶室の利用　２０件（内　有料　６件） その他(ｴﾝﾄﾗﾝｽﾎｰﾙ 外)　１４７件（内　有料　０件）	A	順調
	（文化財研究所２施設） セミナー室、講堂等一般の利用の供することが可能な施設の有料貸付を実施するとともに、展示公開施設におけるミュージアムショップの運営委託等、施設の有効利用の推進を図る。			
9135		**【東京文化財研究所】** ・セミナー室、会議室等を利用することにより、施設の有効利用の推進を図った。 ・研究成果を広く一般にも公表するためのオープンレクチャーを毎年秋に開催。また、このレクチャーは、台東区との連携事業として「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムの一つとしても企画された。	A	順調
9136		**【奈良文化財研究所】** 会議室、セミナー室等一般の利用に供することが可能な施設の有料貸付を実施し、施設の有効利用の推進を図った。 施設名：22 年度 平城宮跡資料館講堂：183 件（内　有償貸与　24 件） 平城宮跡資料館小講堂：143 件（内　有償貸与　8 件） 寄宿舎施設：1,087 件（内　有償貸与　61 件）	A	順調
		飛鳥資料館講堂：60 件（内　有償貸与　0 件） その他（本庁舎・監理棟・収蔵庫等）：16 件（内　有償貸与　12 件） 合計：1,489 件（内　有償貸与 105 件） ①一般利用申し出への行政サービスの向上を図る方針のもとに、ウェブサイト上での施設利用紹介等による積極的有効利用（貸付等）の促進を図った。 ②奈良文化財研究所が企画実施する研修等に際して、宿泊施設の有効活用を図った。 ③上記のほか、平城宮跡資料館、飛鳥資料館の各ミュージアムショップ（売店）の運営を外部委託し、図録等の販売を通して来館者の利便に供した。		
9140	**(4) 民間委託の推進** （東京国立博物館） ・施設管理・運営業務を継続して外部委託 ・展示場における来館者対応等業務を継続して外部委託 ・資料館業務の一部外部委託を継続して実施 （京都国立博物館） ・看視案内業務及び設備保全業務の一部外部委託 ・通用門の受付・案内・警備業務、売札業務及び清掃業務の外部委託 ・情報システムの運用・管理・開発業務の一部外部委託 （奈良国立博物館） ・建物設備の運転・管理業務の外部委託 ・警備及び看視案内の一部並びに売札及び清掃業務の外部委託 （九州国立博物館） ・建物設備の運転・管理業務等の外部委託を継続して実施 ・警備業務、看視案内業務及び清掃業務の外部委託 （東京文化財研究所・奈良文化財研究所） ・一般管理部門を含めた組織・業務の見直しを行い、民間委託をさらに積極的に進める。 ・所の警備・清掃業務について民間委託を推進する。 ・来所者サービスを中心に業務の見直しを行い、民間委託を積極的に進める。	**(4) 民間委託の推進** ・全ての施設において、電気設備保守業務、機械設備保守業務、昇降機設備保守点検業務、売札業務、各種事務補助作業、清掃業務、構内樹木等維持管理業務等について、民間委託を実施している。 ・博物館は警備・展示室監視等業務の大部分を外部委託している。また、研究所は警備業務の全てを外部委託している。 ・博物館の来館者サービスに関しては、インフォメーション業務、図書・写真資料を閲覧等の利用に供するサービス及び図書整理業務等について民間委託を実施している。	A	順調
9150	**(5) 一般競争入札の推進** ・一般競争入札を推進することにより、経費の効率化を図る。	**(5) 一般競争入札の推進** ・より多くの競争参加業者を募るため、公告期間をこれまでの「１０日間以上」から自主的措置として２０日間以上確保するように努めた。 ・列品等修理契約について、修理契約委員会を設置し、修理可能な業者が複数存在すると判断された契約は企画競争を実施している。 ・レストラン・ミュージアムショップについて、東京国立博物館（レストラン）及び奈良国立博物館（ミュージアムショップ・レストラン）において企画競争を実施した。今後も、賃貸	A	順調

		借期間終了時に順次企画競争を実施予定である。 ・その他新たに、警備機器賃貸借及び警備業務、カラー複写機の賃貸借及び保守業務等の契約について一般競争入札を実施した。 一般競争入札件数 年度 / 21年度 / 22年度 / 増減 件数 / 202件 / 175件 / △27件 ※特殊要因：21年度単年度の補助金にかかる一般競争入札件数の減少 補助金名称 / 件数 文化芸術情報電子化推進費補助金 / 41件 （参考）特殊要因を考慮した一般競争入札件数 年度 / 21年度 / 22年度 / 増減 件数 / 161件 / 175件 / 14件		
	・独立行政法人整理合理化計画（19年12月24日閣議決定）の方針に基づき、東京国立博物館及び東京文化財研究所の施設管理・運営業務（展示等の企画運営を除く）については、２１年度１０月から、また、展示場における来館者応対等業務については、２２年度４月から民間競争入札に基づく契約を実施する。	・東京国立博物館及び東京文化財研究所で施設管理・運営業務（展示等の企画運営を除く）について民間競争入札を実施しているほか、東京国立博物館では展示場における来館者応対等業務についても民間競争入札を実施し、平成22年4月1日から民間競争入札による民間委託を実施した。		
9160	**(6) 定量的な目標の設定** 独立行政法人整理合理化計画（19年12月24日閣議決定）の方針に基づき、外部資金の活用及び自己収入の増大に向けて、以下の定量的な目標の達成を目指す。 1）機構全体において、入場料収入（共催展を除く）及びその他収入について、１．１６%の増加を目指す。 2）機構全体において、寄附金２２６件及び科学研究費補助金７６件の確保を目指す。	**(6) 定量的な目標の設定** 1）入場料収入（共催展を除く）及びその他収入について、１．１６%の増加を目指す。 下表のとおり、１３．３８%となり、目標を上回ることができた。（単位：千円） 平成２０年度 / 平成２１年度 / 平成２２年度 自己収入基準額 / ８６４，０８９ / ８７４，１１２ / ８８４，２５２ 自己収入目標額 / ８７４，１１２ / ８８４，２５２ / ８９４，５１０ 自己収入実績額 / ――― / ９４９，９００ / １，００２，５２４ 増　加　率 / ――― / ８．６７% / １３．３８% ※受託研究・受託事業を除く。 ※自己収入目標額は、前年度の目標額から１．１６%増加した場合の額。 ※増加率は、自己収入基準額（前年度の目標額）に対する増加率。 2）寄附金２２６件及び科学研究費補助金７６件の確保を目指す。 下表のとおり、寄附金及び科学研究費補助金ともに目標件数を上回ることができた。 目標値 / 平成２２年度 寄附金 / ２２６件 / ３１４件 科学研究費補助金 / ７６件 / ８１件	A	順調

定量評価	22年度	21年度	目標値	評定
一般管理費の効率化（対前年度比%）	5.53%減	9.11%減	3.20%	S
業務経費の効率化（対前年度比%）	7.61%増 （特殊要因を考慮した場合6.05%減）	11.04%増 （前年度からの繰越分特別展入館者増等による支出増）	1.03%	C（S）
光熱水料費の削減（対前年度比%）	4.24%減 （特殊要因を考慮した場合5.65%減）	15.08%減 （特殊要因を考慮した場合8.77%減）	1.03%	S（S）
一般廃棄物の削減（対前年度比%）	19.89%増 （特殊要因を考慮した場合2.12%減）	7.86%減	1.03%	C（S）
統合による経費削減（対前年度比%）	12.58%減 （特殊要因を考慮した場合6.48%減）	9.13%減	2.09%	S（S）
自己収入増加率	13.38%	8.67%	1.16%	S
寄附金	314件	290件	226件	A
科学研究費	81件	86件	76件	A

2　事業評価の実施及び職員の意識改善

【中期目標】-------

【中期計画】	【主な計画上の評価指標】
2　外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年１回以上事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。	○コンプライアンス体制(倫理行動規程の策定、第三者を入れた倫理委員会等の設置、監事による内部統制についての評価の実施)を整備すること。 【21年度評価における主な指摘事項】 ○今後も内部統制やコンプライアンスの実効性を高めるため、研修等の充実などにより、役職員の意識改革等に努めてほしい。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
9220	**2 事業評価の実施及び職員の意識改善** 理事長のリーダーシップのもとに、事業を推進する。 1）自己点検評価や外部有識者による外部評価等を行い、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。	**2　事業評価の実施及び職員の意識改善** ・自己点検評価、および外部有識者による外部評価等を行い、その結果を機構の事業等に反映させた。	A	順調

	2）各種研修・講習会を通じて、職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図るとともに、職員を外部の研修に派遣し、その資質の向上を図る。 3）２０年度に実施した業務改善コンクールのフォローアップを行う。	・東博全職員を対象とした接遇研修（23 年１月）等、各種研修・講習会を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図った。 ・平成 20 年度運営改善コンクール採択案件のフォローアップを行った。		

3　機構が管理する情報の安全性向上

【中期目標】-------

【中期計画】3　機構が管理する情報の安全性向上のため、必要な措置をとる。	【主な計画上の評価指標】 ○機構が管理する情報の安全性向上のため、必要な措置をとること。 【21 年度評価における主な指摘事項】 ○次年度に情報システムの監査を予定していること及びグループウェアの稼働を予定していることから、一層の情報セキュリティの向上や情報の共有化などの業務の効率化につながることを期待している。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価	
			年度	中期
9330	**3 機構が管理する情報の安全性向上のため、必要な措置をとる。** 1）機構の内部統制体制の整備を図る。 2）機構が保有する知的財産権の管理体制の整備を図る。 3）情報セキュリティポリシーを基に、機構が管理する情報の安全性向上を図る。	**3　機構が管理する情報の安全性向上のため、必要な措置をとる。** ・保有個人情報管理監査を行い、個人情報管理のより一層の適正化を図った（23年1月）。 ・情報システム点検・評価要項に基づき、奈良文化財研究所を対象に、情報システム監査を行った。(23年2月28日) ・国立文化財機構規程集の全文を PDF 化し、グループウェア上で機構内全職員に公開した（22 年 10 月）。以後、最新版へのアップデートを継続して行っている。 ・機構ウェブサイトのリニューアルとともに、サーバーのハード・ソフトを最新版に入れ替えることで、セキュリティの向上を図った。	A	順調

4　人件費の抑制

【中期目標】-------

【中期計画】 4　「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」（平成１８年法律第４７号）に基づき、国家公務員に準じた人件　費改革に取り組み、平成１８年度からの５年間において、△５％以上の人件費削減を行う。また、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行う。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基　本方針２００６」（平成１８年７月７日閣議決定）に基づき、国家公務員の改革を踏まえ、人件費改革を平成２３年度まで継続する。ただし、今後の人事院勧告を踏まえた給与改定分については削減対象から除く。また、削減対象の「人件費」の範囲は、各年度中に支給した報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額とし、退職金、福利厚生費　は含まない。 　その際、役職員の給与に関し、国家公務員の給与構造改革を踏まえた、地場賃金の適正な反映、年功的な給与上昇の抑制、勤務実績の給与等への反映等に取り組む。	【主な計画上の評価指標】 ○平成 18 年度からの５年間において△5%以上の人件費削減を行う。 ○また、役職員の給与に関し、国家国務院の給与構造改革を踏まえた、地場賃金の適正な反映、年功的な給与上昇の抑制、勤務実績の給与等への反映等に取り組むこと。 【21 年度評価における主な指摘事項】 ○削減の方向は評価できるが、業務の拡充を考える上で、これ以上の削減は、法人業務に大きな打撃となるため、10 年先の将来を見据えた人件費の在り方の検討を望む。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価	
			年度	中期
9440	4「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律（平成 18 年法律第 47 号)」「経済財政運営と構造改革に関する基本方針２００６（平成 18 年７月７日閣議決定)」を踏まえ、人件費の抑制を図る。	4 ・人件費削減実績	A	順調

	17 年度（A 分類実績ﾍﾞｰｽ)	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度	22年度目標値（17年度に比して△5.00%）
実績（千円）	2,878,750	2,789,360	2,773,688	2,745,389	2,688,829	2,619,439	2,734,812
前年度対する削減率	－	△3.11%	△0.56%	△1.02%	△2.06%	△2.58%	－
17 年度に対する削減率	－	△3.11%	△3.65%	△4.63%	△6.60%	△9.01%	－
17 年度に対する削減率(補正値)	－	△3.11%	△4.35%	△5.33%	△4.90%	△5.81%	－

・人事給与統合システムが平成２０年４月から稼働し、機構全体として統一的な処理ができるようになった。さらに人件費の削減に向けたシミュレーション等により人件費に関する計画を円滑に企画・立案することができた。
・地域手当について、平成２２年度において平成２１年度の率を据え置く方針が決定された。

定量評価	22 年度	21 年度	目標値	評定
5 年で 5%の人件費削減(17 年度比)	△9.01%	△6.60%	22 年度まで に 5.0%削減	S

Ⅲ 予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画

【中期目標】税制措置も活用した寄付金や自己収入の確保、予算の効率的な執行等に努め、適切な財務内容の実現を図ること。

1 自己収入の増加

税制措置も活用した寄付金などの外部資金、施設使用料等の財源の 多様化を図り、法人全体として積極的に自己収入の増加に努めること。
また、自己収入額の取り扱いにおいては、各事業年度に計画的な収 支計画を作成し、当該収支計画による運営に努めること。

2 固定的経費の節減

管理業務の節減を行うとともに、効率的な施設運営を行うこと等により、固定的経費の節減を図ること。

【中期計画】管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営に努める。
また、収入面に関しては、実績を勘案しつつ、税制措置も活用した寄付金などの外部資金、施設使用料等の財源の多様化を図り、法人全体として積極的に自己収入の増加に努めることにより、計画的な収支計画による運営を図る。

【主な計画上の評価指標】
○外部資金等を積極的に導入することにより、計画的な収支計画による運営を図ること。
○適切な効率化を見込んだ予算による運営に努めること。
○税制措置も活用した寄附金などの外部資金、施設利用等の財源多様化を図ること。
○法人全体として積極的に自己収入の増加に努めること。
○総利益を計上した場合には目的積立金を申請すること。

【21 年度評価における主な指摘事項】
○前年度と同様、特別展における入場者数の増加が展示事業等収入の増加につながっており、実績も２期連続で増加している。今後も、良い企画を期待している。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期

予算

(単位：百万円)

区　　分	金 額
収入	
運営費交付金	8,192
施設整備費補助金	3,992
展示事業等収入	1,132
受託収入	26
計	13,342
支出	
管理経費	1,695
うち人件費	715
うち一般管理費	980
業務経費	7,629
うち人件費	2,450
うち調査研究事業費	1,517
うち情報公開事業費	155
うち研修事業費	22
うち国際研究協力事業費	303
うち展示出版事業費	157
うち展覧事業費	2,905
うち教育普及事業費	120
施設整備費	3,992
受託事業費	26
計	13,342

収支計画

(単位：百万円)

区　　分	金 額
費用の部	7,222
経常経費	7,222
管理経費	1,298
うち人件費	715
うち一般管理費	583
業務経費	5,530
うち人件費	2,450
うち調査研究事業費	902
うち情報公開事業費	92
うち研修事業費	13
うち国際研究協力事業費	180
うち展示出版事業費	94
うち展覧事業費	1,728
うち教育普及事業費	71
受託事業費	26
減価償却費	368
収益の部	7,222
運営費交付金収益	5,696
展示事業等の収入	1,132

	受託収入	26			
	資産見返運営費交付金戻入	269			
	資産見返物品受贈額戻入	99			

資金計画

（単位：百万円）

区　　分	金 額
資金支出	13,342
業務活動による支出	6,854
投資活動による支出	6,488
資金収入	13,342
業務活動による収入	9,350
運営費交付金による収入	8,192
展示事業等による収入	1,132
受託収入	26
投資活動による収入	3,992
施設整備費補助金による収入	3,992

Ⅳ　その他主務省令で定める業務運営に関する事項

【中期目標】

1　人事管理(定員管理、給与管理、意識改革等)、人事交流の適切な実施により、内部管理事務の改善を図ること。また、効率的かつ効果　的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用すること。

2　業務の目的・内容に適切に対応するため長期的視野に立った施設・設備の整備計画を作成し、整備をすること。

【中期計画】

1　人事計画に関する計画

(1)方針

①国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討し、導入する。

②調査研究の機動的実施など研究を効率的かつ効果的に実施するため、任期付研究員制度を導入する。

③人事交流を促進するとともに、職員の資質向上を図るための研修機会の提供に努める。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。

(2)人員に係る指標

常勤職員については、その職員数の抑制を図る。

(参考1)

1)期初の常勤職員数　　３６７人

2)期末の常勤職員の見込み　　３５５人

(参考2)中期目標期間中の人件費総額見込額

１４，３４３百万円

但し、上記の額は、役職員に対し支給する報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額であり、退職金、福利厚生費を含まない。

2　別紙のとおりの施設整備に関する計画に沿った整備を推進する。

【主な計画上の評価指標】

【21 年度評価における主な指摘事項】

○アソシエイトフェローという新たな制度を生み出し、業務の専門性にも対応していることは、評価できる。しかし、有期雇用職員のシステムは当面は良いが、高い能力を持った人材が集まらないという指摘もある。しかし一方では人材育成に対する社会的要請もあることから、必要な人材の基盤構築のため、将来を見据えた人事シミュレーションが必要である。

処理番号	年度計画	主な実績	自己評価 年度	自己評価 中期
0110	1　人事に関する計画 （1）近隣大学等との交流を進め、優秀な人材を確保する。	(1)　**人事交流** 〈事務系職員〉 ・本部事務局及び各施設において、文化庁、東京大学、京都大学、大阪大学、九州大学及び(独)国立美術館等から受け入れており、人材の確保と適材適所の人員配置を行った。 ・また、文化庁には１名の出向を行っている。 ・機構内での人事交流を図るため、本部及び各施設間（本部事務局・九州国立博物館間、京都国立博物館・奈良文化財研究所間、	A	順調

		東京国立博物館・京都国立博物館間、東京国立博物館・東京文化財研究所間、京都国立博物館・奈良国立博物館間、東京文化財研究所・奈良文化財研究所等（9名））における交流を行っている。 〈研究系職員〉 ・職員の適性・能力、年齢構成及び業務の効率化など総合的に勘案し、新規に研究職員を13名採用した。 ・また、文化庁から8名の受け入れ及び文化庁への出向を14名を行っている。 ・機構内での人事交流を図るため、各施設間（東京国立博物館・九州国立博物館間、京都国立博物館・奈良文化財研究所間(6名)）における交流を行っている。		
0120	（2）各種研修を積極的に実施し、また、職員を外部の研修に派遣するなど、その資質の向上を図る。	**(2) 職員の資質向上** ・機構職員としての資質向上を図るため、新任職員や職員を対象とした各種研修（3件）、施設系の職員を対象とした研修（1件）、接遇に関する研修（1件）及びハラスメントに関する研修（1件）を行った。 ・その他、他機関で実施する研修にも積極的に参加した。	A	順調
0130	（3）非公務員化のメリットを活かした制度の活用方法について引き続き検討する。	**(3) 非公務員化のメリットを活かした制度の活用** ・平成19年度において、技術職員及び技能・労務職員について、当面対象とする職種を絞って機構独自で採用可能とする規定の整備を行い、平成20年度に施設の維持管理を行う職員を新たに適用範囲とした。 ・平成22年度においては労務職員（衛士）を東京国立博物館で3名、技術職員（写真技士）を奈良文化財研究所で1名採用した。（計4名） ・平成20年度において、常勤の研究職員に準じた有期雇用職員の人事制度（アソシエイト・フェロー）を新たに整備し、専門的事項の調査研究を行う研究職と高度な専門知識と経験等を有する専門職を対象として採用可能とした。平成22年度は本部で1名、東京国立博物館で6名、奈良国立博物館で1名、九州国立博物館で2名、東京文化財研究所で1名及び奈良文化財研究所で6名を採用した。（計17名）	A	順調

2 施設・設備に関する計画

施設・設備に関する計画

（単位：百万円）

施設・整備の内容	予定額	財　源
京都国立博物館 平常展示館建替工事 （19年度～24年度）	3,992	施設整備費補助金

【書式Ａ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　1111

大項目	Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

中項目	1　歴史・伝統文化の保存とその継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(1)－1　適時適切な収集			
担当者	担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	列品管理課長　谷　豊信

実績・成果

・国民共有の貴重な財産として永く後世へ伝えられるべき、優れた作品4件（内、重要文化財1件）を購入した。

内訳：書跡１件、刀剣１件（重要文化財）、漆工２件

決算額　291,500,000 円

補足事項

・菊螺鈿鞍は、数少ない鎌倉時代の螺鈿作品として貴重である。薄い貝片を用い、繊細な切り抜き、切り透かし技術を駆使した優品である。
・源氏物語蒔絵源氏箪笥は、豪華かつ入念な作行を示している。家紋を散らしていることから大名婚礼調度の一部と考えられる。江戸時代の漆工や武家文化に関する展示に活用できる佳品である。
・重要文化財の刀（無銘　伝当麻）は、当麻派の優品である。長く当館に寄託され、展示に活用してきたものであるが、今回購入することとなり、展示の質を維持することができるようになった。
・以上 3 件は当初予算による購入であるが、他に賛助会員寄附金により一休宗純墨蹟を購入することができた。

購入品　（上）菊螺鈿鞍
　　（下）源氏物語蒔絵源氏箪笥

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
収蔵品件数	113,258件	－	－	経	112,439	112,529	112,776	113,258
うち国宝	87 件	－	－	年	87	87	87	87
うち重要文化財	629 件	－	－	変	619	622	624	629
購入件数	4 件	－	－	化	13	7	8	4

年度実績評価総括

Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ
（Ｓ、Ｆの理由）

中期計画記載事項

体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。
（東京国立博物館）
日本を中心にして広く東洋諸地域にわたる美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1112

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(1)-1　適時適切な収集			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　若杉準治
実績・成果	・博物館展示の活性化と高次の調査研究の対象となり、国民が文化の豊かさを実感することができる貴重な作品 23 件を購入した。 ・購入に際しては、中期目標にもあるとおり、「京都文化」を意識しているが、今年度は京都ゆかりの近世絵画５件、また京都の寺院に伝存する文化財と一連の中国絵画と中国書跡１件のほか、中国書跡１件、金工１３件を購入した。 ・内訳：絵画 6 件、書跡 2 件、金工 13 件、漆工 1 件、考古 1 件 ・決算額　359,320,000 円			
補足事項	・狩野探幽筆柿本人麿像は、後水尾天皇の近臣で、当時の歌壇をリードした堂上歌人として知られる中院通村の賛があり、近世初期の京都文化を知る資料である。 ・やすらい祭絵巻、牛祭絵巻はともに京都を代表する祭を描いた絵画資料として重要であるだけでなく、特別展観「上田秋成」の開催を機に出現したことで注目される。 ・聖賢図押絵貼屏風は、京狩野派の山雪筆になるもので、近い将来に予定されている「山楽・山雪」展での活用が期待される。 ・陳賢筆観音図は、宇治万福寺所蔵の重要文化財観音図帖と一連の作品であり、黄檗美術の重要作品である。 ・玉篇巻第九残巻（写真）は中国南朝梁時代に編纂された字書で、本作品は唐時代の書写になる。日本に伝存する玉篇は５件が知られており、本作品は早稲田大学に所蔵される国宝の１巻から逸失した３紙で、１紙でも重要文化財に指定されていることをみれば、その重要性は自明である。 ・重要文化財金銅錫杖頭は鎌倉時代の特徴をよく示す作品で、同じく重要文化財に指定されている世界救世教所蔵の１柄と極めて酷似しており、同一工房の制作が想定される点でも注目される。 ・押出三尊仏は、奈良・當麻寺奥院に所蔵される作品と同型のもので注目され、当館の仏教考古の展示充実に資するものである。			

「玉篇巻第九残巻（自嗣字至歟字）　紙背金剛界私記」

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	収蔵品件数	6,584 件	－	－	経年変化	6,386	6,417	6,526	6,584
	うち国宝	27 件	－	－		27	27	27	27
	うち重要文化財	177 件	－	－		177	177	176	177
	購入件数	23 件	－	－		36	8	7	23

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。 （京都国立博物館） 京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名　奈良国立博物館　処理番号　1113

中項目	1　歴史・伝統文化の保存の継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(1)－1　適時適切な収集			
担当者	担当部課	学芸部企画室	事業責任者	学芸部長補佐　岩田茂樹

実績・成果

購入が７件、寄贈が 8 件、都合 15 件の文化財が新たな収蔵品として加わった。うち購入分の内訳は次のとおり。

絵画　絹本著色春日地蔵曼荼羅　１幅　鎌倉時代（14 世紀）
　　絹本著色千手観音影向図　１幅　鎌倉時代（13 世紀）
彫刻　木造僧形立像　１軀　鎌倉時代（13 世紀）
書跡　法華経（建治二年東大寺僧宗性発願経）　８巻　鎌倉時代（建治２年：1276）
工芸　黒漆宝塔　１基　室町時代（16 世紀）
考古　三彩小壺（筑前早良郡出土）　１口　奈良時代（８世紀）
　　瀬戸灰釉櫛目文瓶子　１口　鎌倉時代（13 世紀）

購入代金総額は 95,575,000 円。

補足事項

絵画部門の購入品のうち春日地蔵曼荼羅は、春日野の景観のなかに春日社三宮本地仏としての地蔵を描いたもので、類品中最古の作例として貴重。また千手観音影向図は、神仏習合思潮のなかで生まれたとみられもので、類品のまれな図様を有し、かつ画中人物は似絵の代表的作例にも匹敵する優れた造形を示している。

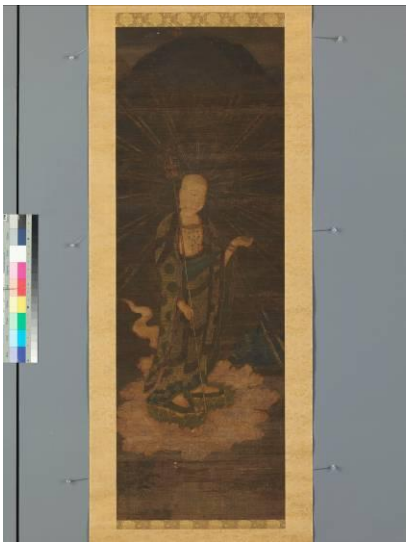
彫刻部門の僧形立像は、像の尊名こそ確定できないものの、いかにも鎌倉時代らしい写実性を示す佳品で、表面の彩色をはじめ保存状態もよいもの。

書跡部門の法華経は、鎌倉時代中期の東大寺の学僧として名高い宗性の発願によるもので、当時の寺院生活の実態を示す史料としても高い価値を有する。

工芸部門の黒漆宝塔は、奈良・西大寺に伝来した国宝・金銅宝塔を模したとみられるが、類品中最も出来のよいもので、南都における舎利信仰から生まれた遺品と位置づけられる。

考古部門の購入品のうち三彩小壺は、遺例の稀少な奈良三彩の貴重な遺品。瀬戸灰釉櫛目文瓶子は梅瓶の名品で、出土地も判明する資料性の高いもの。

以上の購入品および寄贈品のいずれも、今後の当館の活動において重要な役割をになう文化財とみなされる。



絹本著色　春日地蔵曼荼羅

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
収蔵品件数	1,827	－	－	経年変化	1,794	1,805	1,812	1,827
うち国宝	13	－	－		12	12	12	13
うち重要文化財	109	－	－		107	108	110	109
購入件数	7	－	－		2	7	4	7

年度実績評価総括

Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ
（Ｓ、Ｆの理由）

中期計画記載事項

体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。

（奈良国立博物館）
仏教美術を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名　九州国立博物館　処理番号　1114

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(1)－1　適時適切な収集			
担当者	担当部課	文化財課	事業責任者	主任研究員　丸山猶計
実績・成果	・日本とアジア諸国との文化交流の足跡をしめす美術、考古及び歴史資料等の分野の資料を積極的に収集し、あわせて国民共有の貴重な財産として永く後世へ伝えられるべき優れた文化財として、31 件を購入した。（内、国宝・重要文化財 0 件） 内訳：絵画 4 件、書跡 5 件、陶磁 2 件、漆工 1 件、染織 13 件、歴史資料 6 件 決算額：1,116,488,000 円			
補足事項	・絵画分野では、鎌倉時代の仏画の名品で、表装も軸端以外当初とみなされる「絹本著色仏涅槃図　命尊筆」を筆頭に、時代の美意識が顕著に表れた優品を購入した。 ・書跡分野では、後白河法皇院宣をはじめとする 12 世紀末の興福寺別当宛の文書 34 通を集めた「紙本墨書興福寺関係文書」などを購入した。 ・陶磁分野では、仙台・伊達家伝来と考えられ、中国・南宋から元時代にかけて制作された唐物茶壺「黄清香茶壺」などを購入した。 ・染織分野では、「茜地山水松鶴文更紗」をはじめとする完品のインド更紗 3 件など、東西交流史的にも貴重な作品を購入した。 ・漆工分野では、琉球漆器の典型で保存状態が良好な「葡萄栗鼠螺鈿箔絵料紙硯箱」を購入した。 ・歴史資料分野では、長崎阿蘭陀通詞の西家に伝来した蘭英語などによる文書群で、18～19 世紀、出島のオランダ商館とわが国との交流を具体的に示す「長崎阿蘭陀通詞西吉兵衛家関係文書」などを購入した。 ・これらの購入品は、わが国と大陸、あるいは九州と本州などとの文化交流を説明する上で有効な資料であり、4 階の文化交流展示室（平常展示）において多彩な活用が見込まれる。 ※収蔵品件数については、従来、付属品として取り扱っていた 1 件を 22 年度から列品として計上した。 ※収蔵品件数のうち重要文化財 28 件には、平成 22 年 6 月 29 日付けで指定を受けた奈良三彩壺 1 件を含む。			

「絹本著色仏涅槃図　命尊筆」

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
収蔵品件数	433 件	—	—		333	370	397	433
うち国宝	3 件	—	—		3	3	3	3
うち重要文化財	28 件	—	—		24	25	27	28
購入件数	31 件	—	—		42	30	27	31

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。 （九州国立博物館） 日本とアジア諸国との文化交流を中心とした、美術、考古資料及び歴史資料を収集する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1121

中項目	1　歴史・伝統文化の保存とその継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(1)－2　寄贈・寄託品の受入と活用			
担当者	担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	列品管理課長　谷　豊信
実績・成果	・作品の寄贈は 23 件あった。うち 10 件はインドネシアの伝統的な影絵芝居であるワヤン・クリに用いられる人形であり、平成 24 年度に新装開館予定の東洋館における東洋民族資料の展示を充実させるものである。 ・新規寄託は 5 件であった。 ・寄託終了は 13 件である。内、当館へ寄贈となった物が 1 件、当館で購入した物が 1 件、所有者に返却した物が 11 件（内、重文 3 件）である。寄託者へ返却したもののうち 1 件（重文）は、国（文化庁）が購入した。 ・その結果、寄託品件数は昨年度より 8 件減少した。 ・登録美術品については、増減がなかった。			
補足事項	・文化財のご寄贈は、所有者の意思によるものであり、毎年、ご寄贈のお申し出があることは、文化財保存のため当館が努力していることが高く評価されていることの表れと考えられる。 ・本年度の新規寄託は 5 件にとどまった。 ・寄託減の要因は、所蔵者の経済的事情によると思われる取下げもあるが、社寺の宝物館整備に伴う取り下げ、当館への寄贈、国による購入もあり、単純ではない。 ・寄託品の数と質を維持していくために、今後も所蔵者に寄託を働きかける必要がある。 ・登録美術品制度は、個人所有の文化財の公開促進のため文化庁が推奨している制度であり、今後も文化庁と連携をとりつつ適切な運用を図る。	 寄贈品　ワヤン・クリ		

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	寄贈品件数	23 件	－	－	経年変化	26	81	43	23
	寄託品件数	2,726 件	2,400	A		2,743	2,750	2,734	2,726
	うち新規寄託品件数	5 件	－	－		17	39	3	5
	登録美術品件数	3 件	－	－		3	3	3	3

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1122

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(1)-2　寄贈・寄託品の受入と活用			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　若杉準治

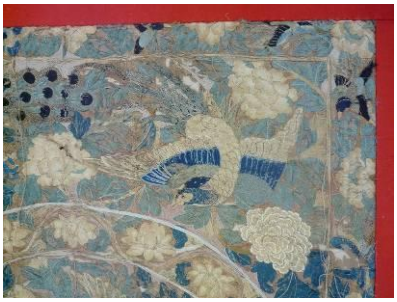
実績・成果

（寄贈）
・今年度、寄贈は 35 件で、寄贈者は 8 人であった。
　内訳：絵画 14 件　書跡 8 件　金工 4 件　漆工 4 件　染織 2 件
　　考古 1 件　歴史資料 2 件

（寄託）
・今年度の新規寄託は 107 件。展示館の建て替え工事のため、当面平常展示での活用はできないが、例年通りの数の寄託があり、研究資料として、また特別展覧会での活用が見込まれる。
　内訳：絵画50件　書跡23件　金工 10件　陶磁11件　漆工 6件　染織2件
　　考古 2 件　歴史資料 3 件

補足事項

・寄贈では大丸松坂屋から京都三大祭の一に数えられる祇園祭の山鉾のひとつ函谷鉾の見送りに用いられていた中国明時代の「花卉鳥獣文様見送」と、藤原鎌足を祀る多武峯寺に伝来した仏具「刺繍三昧耶形幡」の２点の染織の寄贈があり、また坂本龍馬が暗殺された京都近江屋の末裔の井口氏から関係の歴史資料の寄贈があった。
・寄託では、天竜寺で新たに発見された夢窓疎石所用ほかの伝法衣一式が寄託され、「高僧と袈裟」で公開されたこと、上野家から所蔵品が一括寄託され、上野コレクション寄贈五十年を記念して開催する「筆墨精神」で公開されること、また西山浄土宗総本山光明寺から仏教美術の寄託を受け、春に開催する「法然－生涯と美術－」で一部出品されることなど、特別展覧会と連動した有意義な寄託が行われた。
・そのほか、奈良・興福院、香川・円明院、京都・黄梅院から、当館の展示の核の一つである近世の障屏画がまとまって寄託された。
・寄託品の返却件数　59 件



花卉鳥獣文様刺繍見送（祇園祭函谷鉾旧見送）
松坂屋コレクション」

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
新規寄贈品件数	35 件	－	－	経	30	21	102	35
寄託品件数	6,005 件	5,800 件	A	年	6,154	5,907	5,957	6,005
うち新規寄託品件数	107 件	－	－	変	117	111	180	107
				化				

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F
（S、Fの理由）

中期計画記載事項

収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1123

中項目	1　歴史・伝統文化の保存の継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(1)-2　寄贈・寄託品の受入と活用			
担当者	担当部課	学芸部企画室	事業責任者	学芸部長補佐　岩田茂樹

実績・成果

寄贈については、３人の所蔵者から計８件の文化財を受け入れた。寄託については、新規に６件（うち重要文化財２件）の文化財を受け入れた。

［寄贈］　彫刻　：　木造菩薩立像　１軀　平安時代（11～12 世紀）
書跡　：　公盛書状　１巻　江戸時代（正徳５年：1715）
工芸　：　鼓胴形花器　北村久齋作　１口　昭和時代
二月堂机　　１基　昭和時代
蒔絵乱箱「袖」　北村大通作　１口　昭和時代
倶利迦羅龍蒔絵経箱復元模造製作工程手板　１枚　平成時代
玳瑁螺鈿花形盤　北村昭斎作　１口　平成時代
考古　：　甕　１口　弥生時代（２世紀）
［寄託］　彫刻　３件　　書跡　１件　　工芸　２件

補足事項

彫刻部門の寄贈品は、後補部分が多く、展示等に活用するためには若干の修理を要するものの、平安時代後期にさかのぼる貴重な文化財であり、様々な場面での活用が期待できる。

工芸部門の寄贈品は、漆芸家北村昭斎氏（人間国宝）からの寄贈で、昭斎氏とその先代大通氏、先々代久斎氏が、古代から中世にいたる日本の重要な漆工作品を模造あるいは・模造を踏まえて創作されたもので、わが国の漆工の技術的解明に寄与する貴重なものである。

考古部門の寄贈品は、奈良県田原本町唐古から出土したと伝えるもので、基準的遺品であり、今後の調査研究、教育普及などにおける活用が期待できる。

年中行司記

彫刻部門の寄託品のうち重要文化財２件（東鳴川観音講・木造不空羂索観音坐像／長隆寺・木造薬師如来坐像）は、収蔵庫および仏堂修理にともない緊急避難的に当館に寄託されたもので、前者は平成 23 年夏に返還が予定され、後者は同年３月末にすでに返還されたが、ともに「なら仏像館」において展示を行い、多数の観覧者の目にふれることとなった。残り１件の彫刻は、当館の文化財調査によってその価値が見いだされたもので、将来の指定文化財候補となる優れた作品で、今後の展示活動に組みこんでゆきたい。

書跡部門の寄託品である東城戸町自治会・年中行司記は、春日信仰にもとづく年中行事である春日講に関する重要史料で、これにより、ならまちの信仰・生活をリアルに甦らせるに足るもの。

工芸部門の寄託品のうち、性海寺・木造黒漆塗舎利厨子は、工芸部門の展示の柱となっている舎利信仰の代表的作例のひとつであり、今後の展示活動に寄与するもの。また海住山寺・牛玉像は類品まれな遺品で、中世の南都における信仰の諸相を示すことのできる重要な作品である。

寄託品総数は 10 件減少したが、返還した作品のうち２件は文化庁の購入対象となったものであり、以後も当館において展示が可能となる。また所蔵者である寺院に展示収蔵施設が竣工したために返還したものや、所蔵者である財団が財産の整理を行ったことにともなって返還したものなどが含まれる。差し引きでは減であるが、６件の新規寄託作品もあり、寄託作品の増加のための努力は一定の成果をあげていると考える。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
新規寄贈品件数	8	－	－		2	4	3	8
寄託品件数	1,947	2,060	B		2,057	2,067	1,957	1,947
うち新規寄託品件数	6	－	－		113	15	9	6

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F
（S、Fの理由）

中期計画記載事項

収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1124

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(1)－2　寄贈・寄託品の受入と活用			
担当者	担当部課	文化財課	事業責任者	研究員　原田あゆみ
実績・成果	寄贈 4 件 （内訳：彫刻 1 件、染織 2 件、民族資料 1 件） 新規寄託 50 件 （内訳：絵画 2 件、陶磁 48 件）			
補足事項	彫刻分野の寄贈品である「十一面観音菩薩立像」は、17 世紀の制作と考えられ、檀像風彫像の近世における展開を示す佳作。これまで、当館は江戸時代の仏像を収蔵していなかったため、仏像展示における有効な活用が期待される。 染織、民族資料分野における寄贈は、20 世紀に制作された久留米絣の着物等と中国・ミャオ族の衣装で、保存状態が良好な資料である。寄贈者の希望により、当館の体験型展示室「あじっぱ」で、教育普及用資料として活用の予定である。 絵画分野における寄託は、1 件は南宋画院の代表的な画家・夏珪の山水図を考える上で有意義な作品、もう 1 件は江戸時代における雪舟作品観を考える上で重要な作例である。 陶磁分野では、18 世紀を中心とする輸出磁器のコレクションの寄託（48 件）を受けた。文化交流を展示の柱とする当館において、ヨーロッパにおける日本陶磁の受容状況を具体的に物語る資料として、今後大きな展示効果が期待できる。 なお、寄託品を 9 件返却したが、うち 1 件は購入の運びとなった。			

色絵花鳥図婦人鈕有蓋大壺・広口大瓶
伊万里（有田）

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	寄贈品件数	4 件	－	―		10	7	0	4
	寄託品件数	1,297 件	800 件	S		1,091	1,105	1,256	1,297
	うち新規寄託品件数	50 件	－	―		214	46	197	50

年度実績 評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画 記載事項	収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1211-1

中項目	1　歴史・伝統文化の保存とその継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(2) 適切な管理・保存　(1/2)			
担当者	担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	列品管理課長　谷　豊信
実績・成果	(2)-1 収蔵品の管理・保存 -1 ・東洋館改修について、平成 24 年度中の開館に向けて準備を進めており、耐震補強は概ね完了したが、震災の影響により展示ケース取設けに遅れが生じている。 ・耐震補強工事中の東洋館において、工事の進展に伴い、東洋館内に残置していた文化財を 2 回にわたって東洋館内を移動した。 ・本館地下収蔵庫の前室に、書画調査用の壁およびピクチャーレールを新設した。 ・平成 20 年度末から始めた、収蔵品の所在と現状を悉皆的に調査する列品情報整備事業を継続して実施した。 ・歴史資料を中心とする旧資料部関係品を整理し、列品として編入するための作業を進めた。 ・収蔵品を移動したのちの新しい所在位置情報を、RFID・バーコード等を利用して電子的に記録して管理の万全を図るシステム（文化財移動情報登録システム）の開発も、昨年度から継続して進めている。			
補足事項	・列品情報整備事業に専念させるアソシエイト・フェローは、昨年度は 3 名であったが、本年度は 2 名採用し、計 5 名とした。今年度は本格調査の 2 年目にあたり、絵画・書跡・彫刻・金工・刀剣・陶磁・考古・民族・和書・東洋漆工・東洋考古・法隆寺献納宝物の諸分野で作業を進めた。このうち、民族・和書はほぼ完了した。平成 23 年 3 月末現在で、調査件数は 3 万 9900 件である。 ・列品所在情報記録システムの実証実験では、記録システムでえられた所在情報を、現行の収蔵品データベースに直接反映させる実験を行った。			

上　東洋館を移動中の作品
中　列品情報整備の作業（東洋考古）
下　RFID・バーコード併用の作品タグ試作品

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	—	—	—	—		—	—	—	—

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Ｆの理由）
中期計画記載事項	国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1211-2

中項目	1　歴史・伝統文化の保存とその継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(2) 適切な管理・保存　(2/2)			
担当者	担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	保存修復課長　神庭信幸

実績・成果

(2)-1 収蔵品の管理・保存 -2

・収蔵庫及び展示室など 366 地点の温湿度を計測し、環境の評価及び処置を実施した。空気環境に関しては、収蔵庫及び外気など 34 地点におけるアルデヒド類及び有機酸類などを計測した。環境評価に基づき、除加湿器の設置、フィルターの交換などの措置を講じた。

・収蔵庫など 447 地点における生物生息状況を冬季と夏季の 2 回にわたり調査した。また、ゴキブリなどの生活害虫を防除するため、夏季に防虫薬剤を全館に設置した。

・東洋館耐震工事に合わせた展示室リニューアルを期に展示ケースに使用する免震装置の検討、展示ケースの性能に関する検討を実施した。

(2)-2 保存環境の調査研究の実施

・本格修理のための列品調査、対症修理の実施、列品貸与の点検として合計 2368 件の保存カルテを作成した。

・収蔵庫、展示室など 171 箇所の温湿度に関し、その状態から 3 段階に環境を分類（クラスⅠ、Ⅱ、要注意）した平成 22 年次報告書を作成した。

・列品の貸与・返却及び借用の際に、輸送中の梱包ケース内とトラックなどの輸送機材に発生する振動・衝撃に関し、国内外合わせの計 2 件（東大寺大仏展における輸送など）の輸送を調査した。

・文化財の梱包に頻繁に使用される緩衝材が輸送中の振動・衝撃を伝達する際に現れる特性について評価するための実験を行った。今年度は発泡ポリエチレン(サンテックフォーム)について調査した。

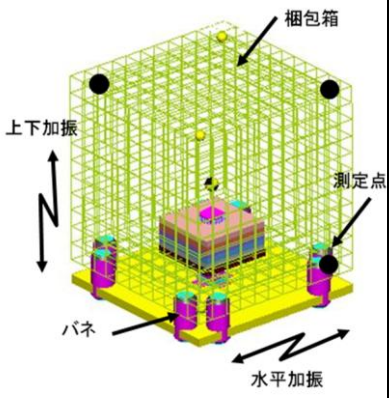
補足事項

・文化財保存修復学会第 32 回大会（平成 22 年 6 月 12 日、13 日・岐阜市）において発表した「収蔵庫内の空気汚染物質に対する濃度指針の検討」の中で、当館の新しい空気汚染物質に対する新しい濃度指針を提示した。

・平成 22 年 11 月 4、5 日の両日、フランス国立科学研究センターにおいて開催したフランス文化通信省、フランス国立科学研究センター、日本学術振興会主催による日仏ワークショップ『文化遺産保存のための科学』で、「The Impact of the Dolly in Global Transport Environment」、「What is Remedial Treatment ？ An Approach to Preventive Conservation at the Tokyo National Museum」などのポスター発表を通して、当館の保存管理について紹介した。

・社団法人日本包装技術協会主催・第 48 回全日本包装技術研究大会(12 月 7 日・京都大会)において発表した「CAE シミュレーション解析による緩衝機材の特性評価事例」を発表し、文化財輸送の振動評価に初めてコンピュータシミュレーションを導入した。

・株式会社大林組技術研究所において、東洋館に導入される新規展示ケースへ組み込まれる新型免震装置の評価実験および展示ケースの耐震実験を実施した（平成 22 年 5 月 11 日、7 月 15 日）。



文化財の輸送時に観測される振動衝撃を評価するために使用したモデル。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
保存カルテ作成件数	2,368 件	800	S		1,725	2,693	1,989	2,368

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F

（S、F の理由）

中期計画記載事項

国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1212-1

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(2) 適切な管理・保存　(1/2)			
担当者	担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	総務課長　植田義雄 列品管理室長　若杉　準治
実績・成果	・平常展示館の建替工事は、平成24年度末完成・25年度開館に向けて進んでいる。 ・平常展示館の建て替えに伴い、同館内収蔵庫から館蔵品、寄託品のすべてを東収蔵庫等にて保管を行った。 ・展示室及び収蔵庫における適正な温湿度管理を行った。 ・特別展示館耐震診断業務の結果を受け、具体的な耐震補強工法等を検討した。 ・半年ごとに実施している寄託品の期間継続にともなう点検を着実に実施した。			
補足事項	・空調設備機器については予防的なメンテナンスときめ細かな運転監視を行い、展示室及び収蔵庫の温湿度環境の適正管理を行っている。 ・将来構想検討委員会建設事業小委員会において耐震補強の工法、方針等の検討を行った。			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	―	―	―	―		―	―	―	―

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1212-2

中項目	１　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(2) 適切な管理・保存　(2/2)			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　若杉　準治 文化財管理監　中村　康

実績・成果

・展覧会準備中に適宜巡回して害虫の持込み侵入の防止と清掃の徹底を指導、取りこぼしを拾い、開会時の虫・ゴミゼロを実現した。
・展覧会中、展示ケース内に入った虫の採取、毛髪等ゴミの除去を開館前に行なった。
・６月以降１０月に及んだ例年にない高温多湿のため、チャタテムシ、ダニ、クモ、シミ、コイガ、カツヲブシムシ、ゴキブリの侵入、徘徊が見られたので以下の措置を講じて駆除した。
（１）　７・８月の「上田秋成・新収品」展の前に全壁付ケース床面のクリーンルーム清掃業者による吸引拭取り清掃を行ない、虫、カビ等の除去を図った。
（２）　７・８月の「上田秋成・新収品」展会期中、展示ケース内と館内のトラップによる虫の生態調査を業者に依頼して行なった。
（３）　７・８月の「上田秋成・新収品」展と１０・１１月の「高僧と袈裟」展の会期中、一部の展示ケース内に予防のための蒸散性殺虫剤プレートを置いた。
（４）　１０・１１月の「高僧と袈裟」展の会期中、ゴキブリの徘徊する箇所にゴキブリ用の誘引トラップとホウ酸剤を置いた。
（５）　１・２月の「筆墨精神・園田湖城」展前に、展示ケース内の蒸散性殺虫剤による燻蒸と展示ケース前床面の残効性殺虫剤の塗布を行った。
・空調については、高温多湿の状況が続いた７・８月の「上田秋成・新収品」展では湿度を低めに設定し、低温乾燥気象下の１・２月の「筆墨精神・園田湖城」展では、温度を低めに湿度を高めに設定して作品と観覧環境の保全を図った。
・館蔵品に係る保存カルテを作成した。
　実績　108件

補足事項

・収蔵品の保存カルテについて、ほぼ目標通りに作成でき、収蔵品の保存状況についての情報蓄積が進んだ。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
保存カルテ作成件数	108 件	100 件程度	A		140	174	214	108

年度実績評価総括

Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ
（Ｓ、Ｆの理由）

中期計画記載事項

国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名　奈良国立博物館　処理番号　1213-1,-2

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	（2）適切な管理・保存			
担当者	担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	保存修理指導室長　谷口耕生

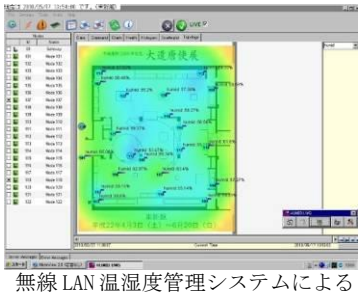
実績・成果

・展示室および展示ケース内の温湿度の管理を図るため、無線 LAN によるリアルタイムの温湿度管理システムの導入し、正倉院展のような多数の観覧者がもたらす展示室内の温湿度環境の変化に、科学的データを以て即時に対応することが可能となっている。
・西新館耐震工事については展示施設として必要とされる耐震性能を確保するための補強工事を行うとともに、展示環境の向上を意図した展示ケース・内装・照明設備等の更新を行った。また、監視面の強化を図るための監視モニターの更新を行った。仏教美術資料研究センターについては、重要文化財指定の建造物であるため、必要最低限の耐震性を確保するとともに、原状に復しつつも現在の使用意図に照らした新たな平面計画の下、内装改修を行った。
・文化財害虫の生息が確認された展示室・展示ケースを中心に防虫シートを設置し、併せて展示施設の周囲に害虫忌避剤を散布した。
・IPM（総合的有害生物管理）の実践として、収蔵庫周辺や展示室内、調査室内の衛生環境保持のため、掃除と防塵マット交換を定期的に実施した。
・保存カルテについては、昨年度の途中から新たに文化財の個別写真が添付されたフォームに統一し、保存修理指導室で作成･保管する新システムに移行した。本年度から本格的に運用が軌道に乗ったことで、機動的かつ詳細に文化財の損傷状態を把握することが可能になったことに加え、保存カルテの作成件数も飛躍的に増加した。
・IPM の前提として、館内の文化財害虫生息状況を把握するため、文化財の保管および展示にかかわる箇所を中心に、防虫トラップを１ヶ月に１回設置・回収し、調査結果の蓄積・分析を行った。

補足事項

・防虫トラップは展示室収蔵庫文化財修理所等 150 箇所に設置し、1 か月ごとに回収したものを外部業者に調査委託し、その結果分析を行い、文化財害虫の侵入の防止に努めた。
・無線 LAN による温湿度管理システム導入後も、毛髪計、データロガーも引き続き使用し、計測結果の精度を高めた。
・以上の防虫トラップ設置および無線 LAN 温湿度管理システムによって得られたデータは、西新館の耐震工事および新免震ケース製作に際して、展示室内・展示ケース内の温湿度環境保持や文化財害虫防止対策への重要な指針となった。
・西新館耐震工事に伴う新造ケースの残留ガス（VOC）をチェックするため、外部機関に検査を依頼するとともに、館内でもパッシブインジケータを利用した独自検査を実施した。
・西新館耐震工事に伴って自動調湿装置を内蔵した免震ケースを新造し、気象条件や多数の観覧者など外的要因で展示室内の温湿度環境に変動が生じた場合でも、展示ケース内の温湿度を安定して好条件に保つことができた。
・なら仏像館のリニューアル・オープンに併せて、同館にも無線 LAN 温湿度管理システムを新たに導入し、同展示室内の温湿度状況の把握に努めた。
・5 月 21 日（金）に当館講堂において「無線センサーネットワークの実務への適用」をテーマとする機械学会の研究会を開催し、当館無線 LAN 温湿度管理システムについて保存修理指導室長による報告を行い、同システムの普及に努めた。

無線 LAN 対応温湿度センサー


無線 LAN 温湿度管理システムによる展示ケース内 24 時間温湿度監視用 PC モニター画面

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
保存カルテ作成件数	218 件	100 件	S		103	108	114	218

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F
（S、F の理由）

中期計画記載事項

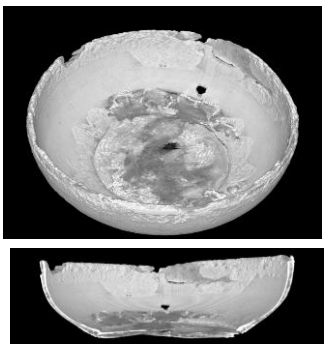
国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1214-1,-2

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(2) 適切な管理・保存			
担当者	担当部課	博物館科学課	事業責任者	博物館科学課長　本田光子
実績・成果	① 収蔵庫・展示室等約 300 ヵ所に粘着トラップを設置し定期的モニタリングを実施し害虫侵入箇所と館内の害虫の生息状況を早期発見対処した。文化財搬入に際し、IPM メンテナンスに基づく収蔵準備作業を実施すると共に、必要に応じて殺虫殺黴処理を実施した。 ② 常設展示室 70 箇所、特別展示室約 30 箇所に温湿度計を設置して、環境データを解析した。 ③ 収蔵庫 30 箇所に温湿度計を設置して環境データを解析した。また、空気質やダストを調査して収蔵環境の改善を行った。 ④ 展示品を中心に X 線 CT スキャナや三次元計測装置、三次元プリンタを用いて保存状況と構造調査を実施した。測定結果は予防的保存に役立てると共に展示に反映した。 ⑤ 修理資料および収蔵資料を中心に保存カルテを作成すると共に、計画的な保存修理事業をすすめた。 ⑥ IPM の実施については、地元 NPO 法人やボランティア活動との連携に努め、文化財の適切な管理・保存について市民や地域の理解を深めた。			
補足事項	・平成 22 年度文化庁受託事業「美術館博物館活動基盤整備支援事業―市民と共にミュージアム IPM」を実施することにより、IPM ボランティア活動へのさらなる指導支援をすすめることができた。 ・環境データを解析することで、極めて安定した収蔵庫・展示環境を維持することができた。 ・元寇関連海底出土遺物（漆器・金属製品等）などの展示品を中心に X 線 CT スキャナや三次元計測装置による調査を実施し、文化交流展示や特別展示やトピック展示に反映した。 ・開館 6 年目で展示・収蔵環境をより安定させることができた。今後は安定化を維持したままで、より一層の効率化を図りながらエネルギーの削減に寄与したい。			



元寇関連遺物（長崎県松浦市鷹島海底遺跡出土）の漆器の調査　X 線 CT スキャナによる保存状態や構造技法の調査

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	保存カルテ作成件数	101 件	100 件	A	経	252	289	205	101
	CT スキャン調査	60 件	—	—	年	35	40	44	60
	三次元計測	58 件	—	—	変	20	42	45	58
	殺虫殺黴処置	7 件	—	—	化	5	6	7	7

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1311

中項目	1　歴史・伝統文化の保存とその継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(3)　計画的な修理			
担当者	担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	保存修復課長　神庭信幸
実績・成果	1)修理計画立案に向けて、修理候補作品の選定のために新たに指定・未指定合わせて 79 件の作品の調査を実施した。これまで調査を終えたものと合わせ約 2000 件の作品が今後の修理計画に反映される。調査には必要に応じ X 線透過撮影、光学実体顕微鏡なども使用した。指定品については、絵画 13 件、書跡 3 件、陶磁 3 件ついて具体的な修理計画の策定を開始し、修理方針案の作成を行った。 2)作品の応急（対症）修理を 1004 件実施。本格修理を 139 件実施した。 3)データベース構築のために 21 年度に本格修理を実施した 106 件の内、修理が完了した 98 件の修理内容についてデジタル化を実施した。21 年度に実施した本格修理に関して、東京国立博物館文化財修理報告書XIを刊行した。 4)紙本などの修理技術者として保存修復課に 3 名のアソシエイト・フェローを配置し、館内で実施する館蔵品の本格修理、応急（対症）修理を本格化させた。			
補足事項	1)絵画、書跡などの本紙あるいは敷き紙などについて、植物繊維の同定を 11 件実施し、本紙の保存に関して検討を行った。 2)修理前あるいは修理中に実施した科学的調査は、以下の通りである。 蛍光Ｘ線分析件数　10 作品、159 箇所測定（A-10447 宇治橋図屏風、A-11189 風神雷神図屏風など） Ｘ線透過撮影の科学調査　30 件　686 枚撮影（A-1069 檜図屏風、A-10447 宇治橋図屏風など）			

当館アソシエイトフェロー及び装こう師連盟技師による宇治橋図屏風の本格解体修理

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	本格修理件数	139 件	70 件	S	経年変化	101	75	106	139
	保存修復関係資料（前年度修理実施分）のデータベース化	98 件	70 件	A		97	85	53	98

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1312

中項目	1　歴史・伝統文化の保存とその継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(3)　計画的な修理			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　若杉準治
実績・成果	・文化財保存修理所修復資料のデータベース化を図った。 ・昨年改訂した契約方法等にしたがって、業者選定の公平性、透明性に留意して修理を実施した。 実績　絵画４件、書跡３件、彫刻１件、漆工１件			
補足事項	・近年の収集品（購入・寄贈）を中心に、展示、教育等に活用できることを期して修理を行っているが、そのうち緊急性の高いものから修理を実施してきた須磨コレクションについては、要修理度が次の段階にあるものや、新たに寄贈を受けたものについて修理を実施し、また焼痕のあることで有名な二月堂焼経について、適正な修理方法を検討して修理を実施した。 ・修理に関しては、契約方法、業者選定の適正化のため、「修理契約委員会」（外部委員：根立研介氏）において、作品ごとに契約方法を決定し、３件を企画競争、６件を随意契約とし、企画競争とした３作品については「請負候補者選定委員会」（外部委員：梶谷亮治氏）で業者を決定した。			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	収蔵品修理件数	9 件	10 件程度	B		15	17	5	9
	文化財保存修理所修復資料のデータベース化	333 件	250 件程度	A		2,377	686	481	333

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	修理、保存処理を要する収蔵品等については、機構の保存科学・修復技術担当者が連携し、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を取り入れ、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1313

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(3) 計画的な修理			
担当者	担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	保存修理指導室長　谷口耕生
実績・成果	・前年度に引き続き、当館紀要「鹿園雑集」13 号（平成 23 年 3 月刊行）に「奈良国立博物館文化財保存修理所　修理一覧（平成 21 年度)」を掲載予定。併せて修理報告資料の整理を進め、将来のデータベース化に備えている。 ・長期にわたり展示に活用する寄託品の修理を、今年度から館の修理費を用いて実施することとし、京都・妙法院所蔵の重要文化財 木造千手観音立像（第 20 号）の修理に着手した。 ・館蔵品のうち計 8 件の本格修理に新規着手し、年度内に 4 件完了。 内訳　絵画 2件（※うち国宝 紙本墨画淡彩山水図 1件は2ヶ年継続事業の第1年度） 書跡 1件 漆工 1 件 考古資料 4 件（※うち 3 件は 2 ヶ年継続事業の第 1 年度） ・館蔵品 1 件（二塚古墳出土遺物 25 点）について、平成 21～23 年度の 3 ヶ年継続の修復事業として前年度から本格修理に着手しており、本年度は第 2 年度として実施中。 ・以上、館蔵品修理は合計 9 件（うち前年度からの継続 1 件） ・当館文化財保存修理所で修理施工された木造彫刻作品 4 件について、京都大学生存圏研究所に委託して樹種同定調査を実施し、その成果を当館研究紀要『鹿園雑集』第 13 号に掲載した。		
補足事項	・本年度新たに「長期受託文化財修理実施要項」を策定し、長期にわたり展示に活用する寄託品の修理を、今年度から館の修理費を用いて実施することとし、京都・妙法院所蔵の重要文化財 木造千手観音立像（第 20 号）の修理に着手した。			

国宝 紙本墨画淡彩山水図　本格修理
（本年度は 2 ヶ年継続事業の第 1 年度）

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	修理件数	9 件	5 件	S	経年変化	10	8	11	9

年度実績評価総括	Ⓢ　A　B　C　F （S、F の理由）展示に活用するため、寄託品に対しても修理を行うこととした。
中期計画記載事項	修理、保存処理を要する収蔵品等については、機構の保存科学・修復技術担当者が連携し、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を取り入れ、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1314

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

事業名	(3)　計画的な修理			
担当者	担当部課	博物館科学課	事業責任者	保存修復室長　藤田励夫
実績・成果	①館蔵品を中心に、展示や損傷の程度を勘案して、緊急性の高い文化財（本格修理 19 件、応急修理 27 件　合計 46 件）を修理した。 ②加えて九州をはじめとする館外所蔵者負担による文化財修理 23 件のため、当館の保存修復諸施設を積極的に活用し、うち 6 件については現地修理を行った。館費修理とあわせて 69 件の修理を実施したことになる。 ③修理指針の検討のため、各分野の担当研究員とともに修理経過をみながら検討を重ねた。 ④修理指針の検討のための調査について、紙繊維の分析、絵画彩色の蛍光 X 線分析や顕微鏡観察による調査、X 線、CT スキャンを活用した調査を実施した。 ⑤カビなどの生物被害について、顕微鏡観察や写真撮影などを行った。 ⑥漆風呂、板仮張り等の修理用備品を新調した。 ⑦修理報告書および修理経過を示す画像データを整理して、データベース化に備えた。			
補足事項	①館費による修理件数 46 件(本格 19、応急 27) （絵画 20（うち応急 13）、書跡 7（うち応急 2）、彫刻 6（うち応急 5）、建築模型 1（うち応急 1）、陶磁 1（うち応急 1）、漆工 3（うち応急 2）、考古 2（うち応急 1）、歴史資料 6（うち応急 2）） ②修復施設 1～3 では、国宝修理装潢師連盟が館所蔵品 13 件のほか、国宝・那覇市所蔵琉球国王尚家関係資料文書記録類や重要文化財・京都国立博物館所蔵旧円満院宸殿障壁画など 38 件の修理を実施した。4 では美術院が 6 件、5 では㈱芸匠が 3 件、6 では目白漆芸文化財研究所が 9 件の館所蔵品等の修理を実施した。（69 件） ③・④修理技術者により技術的な判断に加えて、絵画、書跡、漆工、彫刻、考古などの各専門分野を持つ研究員や最新分析機器を駆使した文化財科学専門の研究員と共同して、最善の修理を行うことができた。 ⑤生物被害への対応策を検討するため、カビや虫についての調査を充実させた。 ⑥新調した備品を修理施設に設置し、修理事業に活用した。			

九州国立博物館所蔵　交易船図巻の修理風景

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	本格修理件数	19 件	15 件	A		22	25	24	19
	修復施設の活用（補助事業等）	23 件	—	—		8	15	26	23
	科学的調査	7 件	—	—		10	10	7	7
	表具裂データ	9 件	—	—		42	32	24	9

年度実績 評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画 記載事項	修理、保存処理を要する収蔵品等については、機構の保存科学・修復技術担当者が連携し、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を取り入れ、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2111

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1)　展示の充実　①平常展			
担当者	担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	列品管理課長　谷　豊信

実績・成果

・本館、平成館、法隆寺宝物館、表慶館において、日本の考古、美術、工芸、民族資料、歴史資料および東洋の考古、美術、工芸に関する平常展示および特集陳列を行った。
・平成 23 年 1 月から、「平常展」を「総合文化展」に改称し、「平常展はいつも同じ」というイメージの払拭を図った。
・改修後の東洋館の展示案について、展示室・展示ケースの内装、展示手法、展示台・演示具等について具体的に検討した。
・11 月から 12 月にかけて本館 1 階の 12～15 室を改装した。
・合わせて、本館 1・2 階の展示室のコーナー解説パネルを、すべて日・英・中・韓の 4 言語表記とした。また題箋のデザインを改訂した。
・平成館考古展示室において，埴輪コーナーの解説をデジタルサイネージによる 4 言語表記とした。
・震災の影響については、観覧者・展示品・設備等への直接の被害は無かったが、安全確認と社会的諸事情により 23 年 3 月 12 日～28 日まで臨時休館した。また、23 年 3 月 29 日から当分の間（23 年 4 月末までの予定）開館時間を 10 時～16 時とし、表慶館・法隆寺宝物館を休館して本館・平成館のみ開館した。

補足事項

・東洋館は、耐震補強工事を実施するため休館中である（平成 24 年度中に開館の予定）。
・本館 12 室に新型の展示ケースを導入し、照明も工夫して、一般の観覧者にも日本の漆工作品の美しさを示すことができる展示とすることができた。
・本館 13～15 室は、引き続き既存のケースを使用しているが、13 室はケース配置を、15 室は展示台の色を改め、観覧者が落ち着いて鑑賞いただけるようにした。
・従来の題箋では、「国宝」「重要文化財」「重要美術品」の表示が小さく、また「撮影禁止」の表示も別になっており、わかりにくいとの指摘があった。このため、「国宝」などの表示を改め、さらに撮影禁止品である旨の表示も一体化し、一般の観覧者にも分かりやすい題箋とした。

本館 12 室の日本漆工展示

新しいデザインの題箋

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
平常展入場者数	373,068	－	－		334,297	412,675	330,536	373,068
陳列替回数	290 回	200 回	A		319	319	316	290
陳列総件数	5,610 件	5,500 件	A		10,223	7,172	6,601	5,610
特集陳列実施回数	53 回	－	－		84	79	66	53
外国語パネルの設置	96%	80%	A		95%	97%	97%	96%

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F
（S、Fの理由）

中期計画記載事項

平常展は、展観事業の中核と位置付け、各国立博物館の特色を充分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解の促進に寄与する展示を実施する。また、特集陳列の充実を図るなど再来館者の増加が期待できる魅力ある展示にも努め、作品キャプションについてはすべてに外国語を付すとともに、展示テーマごとにその時代背景などを説明した外国語パネル等を８０％以上設置する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2112

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1)展示の充実　①平常展			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長　久保智康
実績・成果	平常展示館建替工事にともない、平常展示は休止せざるをえない。 そのため下記のように、外へ向かっての収蔵品の公開に努めた。 ・「京都国立博物館所蔵能装束展」（金沢能楽美術館）会期：４月１７日～５月３０日 ・国内・国外への博物館美術館への収蔵品の貸与を積極的に進めた。 ・上記の貸出作品の情報をウェブサイトで公開している。			
補足事項	・全国的には展示館建替に伴い「貸出し停止」措置をとる博物館・美術館が多い中、当館ではむしろ積極的に貸出を行い、収蔵品公開に努めている。 ・ウェブサイトにおける貸出作品の情報公開（トップページ「館外での作品公開」）は、寄託作品も個人名を伏せるなどして、網羅的なリストを提示している。このような情報公開は、日本の博物館ではきわめて画期的なものといえる。			

ウェブページ「館外での作品公開」

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	平常展入場者数	－	－	－	経年変化	165,080	141,965	－	－
	陳列総件数	－	－	－		1,611	1,081	－	－
	陳列替回数	－	－	－		53	39	－	－
	特集陳列実施回数	－	－	－		7	4	－	－
	外国語パネル設置	－	－	－		100%	100%	－	－

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	平常展は、展観事業の中核と位置付け、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解の促進に寄与する展示を実施する。また、特集陳列の充実を図るなど再来館者の増加が期待できる魅力ある展示にも努め、一層の入場者の確保を図る。また、展示に関する外国語説明を一層充実させることに努め、作品キャプションについては全てに外国語訳を付すとともに、展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等を80%以上設置する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	ほぼ順調

【書式A】　施設名　奈良国立博物館　処理番号　2113

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　①平常展			
担当者	担当部課	学芸部企画室	事業責任者	学芸部長補佐　岩田茂樹

実績・成果

平成 22 年 7 月 21 日、本館の展示室内の照明設備を一新するとともに、「なら仏像館」と新たに命名し、リニューアルを行った。また、併せて平常展の名称を「名品展」とし、年度を通して、なら仏像館における「珠玉の仏像」（彫刻部門）、青銅器館における「中国古代青銅器」（考古部門）を開催し、西新館では「珠玉の仏教美術」（絵画・書跡・工芸・考古部門）を開催した。そのなかには、「国宝を味わう」（12 月 7 日～1 月 10 日、西新館）、「縄文のムラ」（1 月 18 日～2 月 16 日、西新館）、「シルクロードを旅した漢代漆器」（1 月 18 日～2 月 16 日、西新館）の３回の特集展示が含まれている。

企画展示としては、恒例の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」（12 月 7 日～1 月 16 日、東新館）、「お水取り」（2 月 5 日～3 月 14 日、東新館）を実施した。

補足事項

年度を通して、なら仏像館・青銅器館および西新館において、仏教美術に関する、国宝・重要文化財を多数含む高水準の展示を行うことができた。

特集展示も３回に及んだ。とりわけ「シルクロードを旅した漢代漆器」は、当館文化財修理所で修理を完了した漢代漆器の展示であったが、当該作品はウクライナ国立アカデミー附属考古学研究所クリミア支部の所蔵であり、同国内のクリミア半島のスキタイ貴族墓から出土したもので、シルクロードを経て遠く西方へもたらされた文化交流の軌跡を紹介すると同時に、きわめて高度な技術を要したその修復過程を報告することにより、文化財修理への一般の理解を得るために寄与するところの大きいものであったと考える。

また「縄文のムラ」は、考古資料相互活用促進事業としてとりおこなったもので、関西ではふだん公開されることの少ない山形県の遺跡から出土した彩漆土器等を公開する意義深い企画となったと思われる。

「国宝を味わう」は、当館において所蔵ないし寄託を受けている作品の中から、国宝に指定されている名品中の名品を一堂に会した企画であり、観覧者の好評を得ることができた。

正倉院展（10/23～11/11）開始以前は、西新館が耐震工事のため閉館であり、また「なら仏像館」が特別展「大遣唐使展」の会場となるなど、本年度は名品展（平常展）の開催がなかなか困難であったため、陳列総件数は例年より減少した。また、陳列替回数においても、上記理由に加え、他館との統一を図るため、２２年度よりカウント方法の変更を行った事により、目標値の数字を実質以上に大きく下回る実績値となった。なお、特集展示や特別陳列は日程を調整して昨年並みの回数を維持することができた。

陳列替内訳
- 珠玉の仏像（なら仏像館）19 回
- 珠玉の仏教美術（西新館）80 回
- 国宝を味わう（西新館）２回：　計 101 回

陳列件数
- 絵画　47 件、彫刻　111 件、書跡　36 件、工芸　78 件
- 考古　28 件
- 国宝を味わう　14 件
- シルクロードを旅した漢代漆器　６件
- 縄文のムラ　20 件　：　計 340 件

特集展示「シルクロードを旅した漢代漆器」会場風景

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
平常展（名品展）入場者数	71,566 人	－	－		131,336	112,849	136,672	71,566
陳列替回数	101 回	850	C		21	12	8	101
陳列総件数	340 件	850	C		928	605	717	340
特集陳列等実施件数	5 件	－	－		10	6	8	5
外国語パネル等の設置	84%（特集展示除く）	80%	A		56%	77%	91%	84%

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F

（S、F の理由）

中期計画記載事項

平常展は、展観事業の中核と位置付け、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解の促進に寄与する展示を実施する。また、特集陳列の充実を図るなど再来館者の増加が期待できる魅力ある展示にも努め、一層の入場者の確保を図る。また、展示に関する外国語説明を一層充実させることに努め、作品キャプションについては全てに外国語訳を付すとともに、展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等を８０％以上設置する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2114

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　①平常展			
担当者	担当部課	企画課	事業責任者	文化交流展室長　河野一隆
実績・成果	○トピック展示のみならず、分り易い文化交流展示室のサインを開発し、快適な観覧環境を提供した。 ○トピック展示ではちらしやポスター、リーフレットや図録などを作成し、関連したシンポジウムも開催して、展示だけではない情報発信ができた。 ○特定テーマを掘り下げたトピック展示を 12 回実施し、「湖の国の名宝−最澄がつないだ近江と太宰府−」(6 月 11 日～9 月 5 日)など当館外部の機関と共同で主催したトピック展示も３回実施した。 ○中国・韓国からの来館者に対し、中国語ガイドブックおよび英語・中国語・韓国語の簡単な展示解説付きマップを作成し、展示室の内容を紹介した。			
補足事項	○国宝・重文を含む多数の優れた文化財による展示、特定の動線を持たない、体験的な展示を多数盛り込んでいる、露出展示品と観覧者の距離が大変近い、といった当館ならではの文化交流展示の特徴が理解、定着されつつある。 ○海外からの団体ツアーや個人客に向けたマップを作成し、好評を博している。 ○トピック展示を開催し、平常展の活性化を図るためのさまざまな企画を開催した。 ○滋賀県立琵琶湖文化館・滋賀県と共同主催によって「湖の国の名宝−最澄がつないだ近江と太宰府−」(6 月 11 日～9 月 5 日)を開催し、関連するイベント・シンポジウムを開催した。 ○徳川美術館の協力を経て、新春特別公開「姫君の金銀香道具」を開催した。 ○日本の建築史をテーマとしたトピック展示「日本の建築をめぐって」を開催した。			

トピック展示「湖の国の名宝」風景

トピック展示「日本の建築をめぐって」風景

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	平常展入場者数	274,545 人	—	—	経年変化	341,282	241,423	544,661	274,545
	特集陳列	12 回	—	—		5	17	22	12
	作品への外国語キャプション	100%	—	—		100%	100%	100%	100%
	時代背景の外国語パネル（音声ガイドで対応を含む）	83%	80%	A		63%	82%	82%	83%
	陳列替回数	334 回	300 回	A		375	386	431	334
	陳列総件数	1,668 件	800 件	S		2,012	3,146	2,106	1,668

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	平常展は、展観事業の中核と位置付け、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解の促進に寄与する展示を実施する。また、特集陳列の充実を図るなど再来館者の増加が期待できる魅力ある展示にも努め、一層の入場者の確保を図る。また、展示に関する外国語説明を一層充実させることに努め、作品キャプションについては全てに外国語訳を付すとともに、展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネルを８０%以上設置する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2121-1

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（1）展示の充実　② 特別展等　(1/11) 特別展「細川家の至宝－珠玉の永青文庫コレクション－」			
担当者	担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸企画部博物館教育課長 今井 敦
実績・成果	・開会期間　平成 22 年 4 月 20 日(火)～6 月 6 日(日)（43 日間） ・会場　平成館特別展示室第 1～4 室 ・主催　東京国立博物館、永青文庫、NHK、NHK プロモーション、朝日新聞社 ・後援　文化庁 ・協賛　トヨタ自動車、日本写真印刷 ・作品件数　284 件（うち国宝：8 件　重要文化財：27 件　重要美術品：18 件） ・入館者数　182,470 人 ・入場料金　一般 1500 円(1300 円／1200 円)、大学生 1200 円(1000 円／900 円)、高校生 900 円(700 円／600 円) 中学生以下無料　(　)内は前売り／20 名以上の団体料金 ・アンケート結果　満足度　82.8% 永青文庫の収蔵品、細川家に伝来する美術品や歴史資料を展示し、細川家の歴史と日本の伝統文化を紹介し、美の歴史を体系的に示すことができた。あわせて美術コレクターである細川護立の審美眼の独自性を示すことができた。			
補足事項	・巡回各館との業務連絡について、若干の不備がみられたので、展覧会内容について、各館との意志疎通、情報共有をさらに強力に推し進める必要がある。			

チラシ

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	入館者数	182,470 人	160,000 人	A	経年変化	－	－	－	－

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （東京国立博物館） 年３～４回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2121-2

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　② 特別展等 (2/11) 特別展「誕生！中国文明」			
担当者	担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部列品管理課長 谷　豊信

実績・成果

・開会期間　平成 22 年 7 月 6 日(火)～9 月 5 日(日)　(55 日間)
・会場　平成館特別展示室第 1～4 室
・主催　東京国立博物館、読売新聞社、大広、中国河南省文物局
・後援　中国大使館
・協賛　清水建設、光村印刷、トヨタ自動車、三城ホールディングス
・協力　日本航空、日本貨物航空、TBS ラジオ
・作品件数　147 件
・入館者数　105,538 人
・入場料金　一般 1500 円(1300 円／1200 円)、大学生 1200 円(1000 円／900 円)、高校生 900 円(700 円／600 円)中学生以下無料 ＊(　)内は前売り／20 名以上の団体料金
・アンケート結果　満足度 75.5%

中国歴代に渡って数多くの都が置かれ、常に中原の中心地として中国文化の中で重要な位置を占める河南省の全土から、最近の発掘品を含め、各時代の代表的な名品を選定し展示することで、中国芸術の伝統とそれが発展してきた様相を効果的に示すことができた。

補足事項

・展覧会開催に向けて、諸般の事情により準備作業が遅滞する結果となり、各作業工程において不都合が出た。作品の保存的観点を最優先に置きつつ、さらに関係各機関においての調整を十全に行う必要がある。
・展覧会内容、規模に関わらず、入場者数の伸展がなかった。展覧会周知（広報等）のより効果的な手段、方法を検討する必要がある。

動物紋飾板
夏・紀元前 17 世紀～前 16 世紀
偃師市二里頭VI区 11 号墓出土
中国・洛陽博物館

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
入館者数	105,538 人	220,000 人	C	経年変化	－	－	－	－

年度実績評価総括

S　A　B　Ⓒ　F
（S、Fの理由）

中期計画記載事項

特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。
（東京国立博物館）
年３～４回程度

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	一部要注意

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2121-3

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　②特別展等（3/11） 光明皇后1250年御遠忌記念　特別展「東大寺大仏―天平の至宝―」			
担当者	担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部調査研究課東洋室長 浅見　龍介
実績・成果	・開会期間　平成 22 年 10 月 8 日(金)～12 月 12 日(日)　(59 日間) ・会場　平成館特別展示室第 1～4 室 ・主催　東京国立博物館、華厳宗大本山東大寺、読売新聞社 ・後援　文化庁、平城遷都 1300 年記念事業協会 ・協賛　しみず建設、大和証券、トヨタ自動車、ニッセイ同和損害保険、藤田観光、文化服装学院、みずほ銀行、光村印刷 ・特別協力　ソニー、ソニービジネスソリューション ・協力　日本ヒューレット・パッカード、エヌビディア、エルザジャパン ・映像協力　凸版印刷 ・作品件数　67 件（うち国宝 11 件、重文 18 件、正倉院宝物 12 件） ・入館者数　232,791 人 ・入場料金　一般 1500 円（1300 円/1200 円）、大学生 1200 円（1000 円/900 円）、高校生 900 円（700 円/600 円）中学生以下無料 ＊(　)内は前売り／20 名以上の団体料金 ・アンケート結果　満足度　74.4% 東大寺の大仏建立をめぐる作品を通してその精神世界に迫るとともに、天平文化の精華を展観し、肖像彫刻の傑作などを通じて、脈々として続く仏教文化の重要性や意義を効果的に紹介することができた。			
補足事項	・　展覧会内容、規模に関わらず、入場者数の伸展がなかった。展覧会周知（広報等）のより効果的な手段、方法を検討する必要がある。 会場風景			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	入館者数	232,791 人	420,000 人	C	経年変化	－	－	－	－

年度実績評価総括	S　A　B　Ⓒ　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （東京国立博物館） 年３～４回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	一部要注意

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2121-4

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　②特別展等 (4/11) 文化財保護法制定 60 周年記念　特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」			
担当者	担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸企画部長 松本　伸之

実績・成果

・開会期間　平成 23 年 1 月 18 日（火）～3 月 6 日（日）(42 日間)
・会場　平成館特別展示室第 1～4 室
・主催　東京国立博物館、ＮＨＫ、ＮＨＫプロモーション、朝日新聞社
・特別協力　平山郁夫シルクロード美術館、法相宗大本山薬師寺
・協賛　大日本印刷
・協力　文化遺産国際協力コンソーシアム、東京美術倶楽部、朝日生命保険、あいおいニッセイ同和損害保険
・後援　外務省、文化庁
・作品件数 101 件(うち重要文化財 5 件)
・入館者数　188,402 人
・入場料金　一般 1500 円(1300 円／1200 円)、大学生 1200 円(1000 円／900 円)、高校生 900 円(700 円／600 円)中学生以下無料　＊(　)内は前売り／20 名以上の団体料金
・アンケート結果　満足度 80.2%

平山郁夫氏の文化財保護活動に関わる偉大な活動を顕彰し、各地から集めた遺物や、平山氏ゆかりの美術工芸品を展観することで、平山氏の業績を通して文化財保護の重要性や意義をわかりやすく示すことができた。

補足事項

ナーガ上の仏陀坐像
アンコール期・12 世紀
アンコール・トム出土
東京国立博物館蔵

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
入館者数	188,402 人	180,000 人	A	経年変化	－	－	－	－

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F
（S、Ｆの理由）

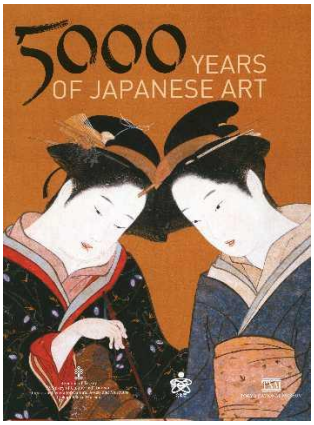
中期計画記載事項

特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。
（東京国立博物館）
年３～４回程度

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2121-5

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　② 特別展等　(5/11) 文化庁海外日本古美術展「日本の美　5000 年(5000 Years of Japanese Art)」			
担当者	担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部上席研究員 池田　宏
実績・成果	・開会期間　平成 22 年 5 月 5 日(水)～ 6 月 28 日(月)（49 日間） ・会場　トプカプ宮殿博物館（トルコ共和国・イスタンブール） ・主催　東京国立博物館、文化庁、トルコ共和国文化観光省 ・作品件数　47 件（うち国宝：2 件　重要文化財：3 件） ・入場者数　607,734 人（但し、当該期間の総入館者数） ・入場料金　無料 「トルコにおける日本年」の記念事業の一環としてトプカプ宮殿博物館において、縄文時代から江戸時代までの 5000 年にわたる日本美術の精華を、当館の収蔵品を中心に紹介することで多くの鑑賞者を集めることができ、両国の文化交流に大きな実績を残せた。			
補足事項	 展覧会カタログ表紙			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	入館者数	607,734 人	―	―	経年変化	―	―	―	―

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （東京国立博物館） 年３～４回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 2121-6

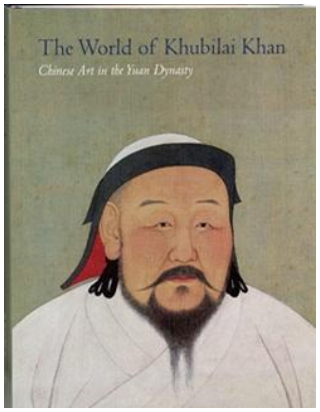
中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（1）展示の充実　② 特別展等　(6/11) 海外展「仏教美術と宮廷の美」（仮称）			
担当者	担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部長 島谷　弘幸
実績・成果	・22 年度開催予定であったヒューストン美術館（アメリカ合衆国）における本展は、諸般の事情により、平成 23 年度に実施予定となった。			
補足事項				

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	入館者数	人	―	―	経年変化	―	―	―	―
年度実績評価総括	Ｓ　Ａ　Ｂ　Ｃ　Ⓕ （Ｓ、Ｆの理由）先方の都合により開催日程に変更があったため。								
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （東京国立博物館） 年３～４回程度								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。									

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2121-7

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　② 特別展等　(7/11) The World of Khubilai Khan: Chinese Art in the Yuan Dynasty (クビライ・カーンの世界：元王朝の中国美術)			
担当者	担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部列品管理課登録室長 救仁郷　秀明
実績・成果	・開会期間　平成 22 年 9 月 20 日（月）～平成 23 年 1 月 2 日（日）(105 日間) ・会場　メトロポリタン美術館（アメリカ合衆国・ニューヨーク） ・主催　メトロポリタン美術館 ・特別協力　東京国立博物館、奈良国立博物館、中華文物交流協会 ・作品件数　220 件（うち重要文化財：3 件） ・入場者数 166,476 人 中国元時代において制作された絵画、工芸品の優品の数々を展示することによって、同時代の美術の重要性を明らかにすることができた。また、多くの入場者を集め大好評を得た。			
補足事項	 展覧会カタログ表紙			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	入館者数	166,476 人	—	—	経年変化	—	—	—	—

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （東京国立博物館） 年３～４回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2121-8

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（1）展示の充実　② 特別展等　(8/11) 創立 80 周年記念特別展「よみがえるヤマトの王墓－東大寺山古墳と謎の鉄刀－」			
担当者	担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部列品管理課長 谷　豊信
実績・成果	・開会期間 平成 22 年 9 月 22 日(水)～11 月 23 日(火・祝) (56 日間) ・会場　天理大学附属天理参考館（奈良県天理市） ・主催　天理大学附属天理参考館、東京国立博物館 ・後援　天理市、奈良県教育委員会、天理市教育委員会、読売新聞大阪本社、読売テレビ放送、奈良テレビ放送 ・作品件数52件（うち重要文化財：20件） ・入場者数 11,139人 ・入場料金　一般400円・小中学生200円・20名以上の団体300円 東京国立博物館と天理参考館が共同で東大寺山古墳出土遺物全点を調査した研究成果を一般に公開するため、出土品のうち、展示可能なものすべてと関連遺物を展示し、東大寺山古墳出土遺物の全貌を余すところなく示すことができた。			
補足事項	 チラシ			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	入館者数	11,139 人	—	—	経年変化	－	－	－	－

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （東京国立博物館） 年３～４回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2121-9

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　② 特別展等　(9/11) 海外展　万国博覧会開催記念「千年丹青―日本中国珍蔵宋元画精品展」			
担当者	担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部調査研究課長 富田　淳
実績・成果	・開会期間　平成 22 年 9 月 28 日(火)～11 月 23 日(火)（56 日間） ・会場　上海博物館（中華人民共和国・上海） ・主催　東京国立博物館、上海博物館 ・作品件数　64 件（うち国宝 6 件、重要文化財 22 件、重要美術品 2 件） ・入場者数　331,275人（但し、当該期間の総入館者数） 当館所蔵品を中心に日本で収蔵される中国・宋元絵画の名品を、上海博物館が所蔵する宋元絵画とともに展示し、その意義や価値に迫り大好評を得ることができた。			
補足事項	 会場風景			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	入館者数	331,275 人	―	―	経年変化	―	―	―	―

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （東京国立博物館） 年３～４回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 2121-10

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（1）展示の充実　② 特別展等　(10/11) 海外展　万国博覧会開催記念「鑑真と空海―日中文化交流の顕彰」			
担当者	担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部調査研究課長 富田　淳
実績・成果	・開会期間　平成 22 年 9 月 28 日(火)～11 月 23 日(火)（56 日間） ・会場　上海博物館（中華人民共和国・上海） ・主催　東京国立博物館、文化庁、上海博物館 ・作品件数　3 件（うち国宝：1 件　重要文化財：2 件） ・入場者数　331,275人（但し、当該期間の総入館者数） 万国博覧会の開催を記念し、日中の文化交流に多大な功績のあった鑑真と空海に焦点を当てることによって、その業績を顕彰することで、各時代の日中の文化交流の一端を的確に示すことができた。			
補足事項	 会場風景			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	入館者数	331,275 人	―	―	経年変化	―	―	―	―

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （東京国立博物館） 年３～４回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2121-11

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　② 特別展等　(11/11) 海外展「高麗仏画大展」			
担当者	担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部調査研究課長 富田　淳
実績・成果	・開会期間　平成 22 年 10 月 12 日(火)～11 月 21 日(日) (42 日間) ・会場　国立中央博物館・企画展示室（大韓民国･ソウル） ・主催　国立中央博物館 ・特別協力　東京国立博物館 ・作品件数　108 件（うち重要文化財 11 件） ・入場者数　88,659人 東アジア美術の最高峰の一つである高麗仏画を日本、韓国、アメリカ、ヨーロッパから一堂に集め、その優れた特色を究明することで、高麗仏画研究に大きな足跡を残すことができた。			
補足事項	 展覧会ポスター			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	入館者数	88,659 人	―	―	経年変化	―	―	―	―

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （東京国立博物館） 年３～４回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2122-1

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（1）　展示の充実　②特別展(1/8) 特別展覧会「没後 400 年　長谷川等伯」			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	美術室長　山本英男
実績・成果	桃山時代を代表する絵師、長谷川等伯の画業の全貌を紹介する史上最大規模の回顧展。国宝などの代表作はもちろん、初期から晩年までの遺作 75 件を展示することで、等伯芸術の魅力を堪能できる最高、最良の場となった。 ・開催期間　22 年 4 月 10 日～5 月 9 日（27 日間） ・会　　場　特別展示館 ・主　　催　京都国立博物館、毎日新聞社、ＮＨＫ京都放送局、ＮＨＫプラネット近畿 ・陳列品総件数　75 件（うち国宝　3 件、重要文化財　30 件、重要美術品　1 件） ・入場者数　244,347 人（目標 130,000 人） ・入場料金　一般 1,400 円、大高生 900 円、中小生 500 円 ・アンケート結果　満足度　91% ・関連講座　３回			
補足事項	・展覧会開催の事前準備として、可能な限り広範かつ綿密な作品調査を行った。その結果、これまで皆無とされてきた等伯初期の金碧花鳥図屏風を発見し、展示することになった。また本作品については展覧会前に論文を執筆した関係から、メデイアでも大々的に報道されたため、展覧会入場者数の激増を招く要因の一つとなった。 ・計３枚のポスター（プレポスター１、本ポスター２）および２種類のチラシを事前に作成し、宣伝に努めた。 ・様々なメデイアで取り上げられるなどその関心は極めて高く、実質 27 日間という短期開催ながら約 24 万 5000 人の入場者数を記録した。一日平均入場者数 9049 人は、当館の展覧会では雪舟展（約 9200 人）に次ぐものである。 ・一日平均入場者数9049人は当館の特別展示館の規模を考えた場合には、ほぼ最大限の数値であり、様々な努力（入退館時間の延長・民間会社による入場者の誘導・展示ケースの移動・解説題箋の簡潔化）を試みたにもかかわらず、常時、１～２時間の待ち時間（最大３時間）が生じた。もし会場が広ければ、３０万人くらいの入場者数は優に確保できたはずである。 ・等伯作品および関連資料をすべて網羅した図録を作成したが、その内容は等伯研究の最先端を行くものであり、今後の研究に寄与する可能性大である。			

「長谷川等伯展　会場風景」

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	入場者数	244,347 人	130,000 人	S	経年変化	—	—	—	—
年度実績評価総括	Ⓢ　A　B　C　F （S、Fの理由）準備に膨大な調査を実施し、それを反映した展示内容、図録などに高い評価を得た。入館者数も目標を大きく超える数となった。								
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （京都国立博物館）　年２～３回程度								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調								

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2122-2

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（1）展示の充実　②特別展等　(2/8) 特別展観「没後 200 年記念　上田秋成」			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	アソシエイトフェロー　水谷亜希
実績・成果	京都国立博物館と日本近世文学会が協力し、上田秋成の雅俗にわたる文事を集めるとともに、彼の交友圏にあった文人や画家たちの書画等をあわせて展示した。18 世紀後半、京都を中心とする上方の豊饒な文学・芸術の世界を、秋成という個性的な人物を軸として紹介するはじめての展観となった。 ・開催期間　22 年 7 月 17 日～8 月 29 日（39 日間） ・会　　場　特別展示館　１～５室 ・主　　催　京都国立博物館、日本近世文学会 ・陳列品総件数　82 件 ・入場者数　21,705 人（目標 20,000 人） ・入場料金　一般 800 円、大高生 500 円、中学生以下無料 ・アンケート結果　満足度　78% ・関連講座　10 回			
補足事項	・怪異小説『雨月物語』の作者として有名な上田秋成であるが、俳諧・和歌・国学、煎茶の分野でも多くの著作を残し、同時代や後世の人々に多大な影響を与えたことは、あまり知られていなかった。本展観では、秋成の幅広い活動を紹介するとともに、交流のあった文人・画人の名品を展示し、18 世紀後半京都の空気を肌で体感できる展示となった。 ・『雨月物語』（初版）や晩年の傑作『春雨物語』、随筆『胆大小心録』の自筆草稿など、重要作品が一同に会するはじめての機会となった。また、新発見作品 12 件をふくむ計 29 件が初公開作品であり、最新の調査・研究成果を反映した内容となった。 ・展観を機に、秋成に再注目した観覧者から重要な新出作品についての情報提供を受け、今後の研究につながる大きな成果となった。 ・関連イベントとして 7 月 30 日、8 月 6 日の 2 回にわたり屋外で映画「雨月物語」（溝口健二監督）の 16 ミリフィルムの上映会を行った。映画ファン層にも、展観や博物館に興味を持っていただくきっかけとなった。 ・当館で開催する土曜講座、夏期講座の他に、日本近世文学会企画の関連行事として、西福寺での秋成忌にあわせた講演・演奏会、同志社女子大学での連続講演会が行われ、地域の方々の関心を呼んだ。			

「上田秋成」展チラシ

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	入場者数	21,705 人	20,000 人	A	経年変化	—	—	—	—

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （京都国立博物館）　年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2122-3

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（1）展示の充実　②特別展等(3/8) 特集陳列「新収品展」			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	主任研究員　永島明子
実績・成果	平成 20 年 4 月から 21 年 12 月までの寄贈品 122 件と購入品 9 件を披露した。寄贈品のうち 95 件は戦前の外交官、須磨弥吉郎氏の収集品であり、すでに当館に収蔵されている「須磨コレクション」を補完する。近代中国絵画のみならず、洋画や陶磁器なども含む。そのほか、縄文土器、重要美術品の古今集や後撰集、仏画、狩野山雪筆の屏風、曾我蕭白筆の掛軸、御所人形、漆器、振袖などが特別展示館の半分を埋め、当館の収集対象の多様性をよく示す展示となった。 ・開催期間　22 年 7 月 17 日～8 月 29 日（39 日間） ・会　　場　特別展示館　6 ～10 室 ・主　　催　京都国立博物館 ・陳列品総件数　99 件 ・関連講座　1 回			
補足事項	新収品展は、これまでほぼ毎年、平常展示館の一～二室を用いて行なってきた小さな特集陳列であるが、平常展示館の建て替え工事のため、しばらく行なわれなかった。このたび、須磨コレクションの大きな寄贈もあり、特別展観「上田秋成」の同時開催として特別展示館で開催することとなった。そのため､広報も通常のモノクロ印刷ではなく､「上田秋成」展用のチラシやポスターの一区画を占め、展示設計も特別展会場用にディスプレイを設計した。ガラス貼りの作品キャプションを外注し、イヤホンガイドも用意しての大がかりな展示となった。質量ともに充実した御披露目展となり、寄贈者の方々や一般の来館者から好評を得ることができた。	 「特別展示館　第 9 室　展示風景」		

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	—	—	—	—		—	—	—	—

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （京都国立博物館）　年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2122-4

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（1）展示の充実　②特別展等　(4/8) 特別展覧会「文化財保護法 60 年記念事業　高僧と袈裟―ころもを伝え こころを繋ぐ―」			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	主任研究員　山川　曉
実績・成果	袈裟を通して日本の仏教と染織の歴史を辿る初の展覧会。袈裟のみならず、袈裟を着用した高僧の肖像画、袈裟の相伝文書を一堂に集め、製作年代がはっきりしない染織作品のうち基準となる作例を提示し、染織を通して東アジアの交流史を展望する初めての機会となった。 ・開催期間　22 年 10 月 9 日～11 月 23 日（40 日間） ・会　　場　特別展示館 ・主　　催　京都国立博物館（自主展） ・陳列品総件数　121 件（うち国宝 15 件、重要文化財 41 件） ・海外からの出陳件数　2 件（中国・中国絲綢博物館） ・入場者数　19,297 人(目標 20,000 人) ・入場料金　一般 1200 円、大高生 800 円、中小生 400 円 ・アンケート結果　満足度84% ・関連講座　３回 ・関連国際シンポジウム　１回			
補足事項	・担当者の十年間におよぶ調査・研究成果を反映し、未知の作品の紹介に努めるとともに、既知の作品については、作品分析、相伝過程の再検討を徹底し、見解を図録に反映させた。 ・展覧会図録はすべて、日英の二ヶ国語表記とし、多くの人が展覧会内容を共有できるよう努めた。 ・染織作品についてはすべて、顕微鏡による拡大写真と、二ヶ国語による組織分析を図録に掲載した。 ・染織作品の分析用語として、近年世界で主流となりつつある米国方式を採用し、用語解説を二ヶ国語表記することにより、日本では未紹介の染織品分析の基礎を提示した。 ・袈裟および織物の構造という、身近ではない主題を理解する一助として、小中学生向けワークシート「袈裟ってなあに？」を作成し、一般アンケートおよびモニターアンケートで好評価を得た。 ・関連土曜講座を三回開催した。 ・国際シンポジウム「染織にみる東アジア交流―宋・元・明時代の中国とその周辺―」は、中国・韓国・日本の染織研究者が一堂に会する貴重な機会となり、最新の情報による学術交流となった。 ・自主展のため広報が行き届かず、また専門性の高い主題であったため、入館者数は目標値にわずかに至らなかったが、京都国立博物館で開催する意義の大きい展覧会であったと自負する。			

「高僧と袈裟」展示風景

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	入場者数	19,297 人	20,000 人	B		—	—	—	—

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （京都国立博物館）　年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2122-5

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　②特別展等 (5/8) 特別展覧会「上野コレクション寄贈 50 周年記念　筆墨精神 －中国書画の世界－」			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	学芸部長　西上　実 上席研究員　赤尾栄慶
実績・成果	当館の中国書画の中核をなす上野コレクションの寄贈 50 周年を記念し、上野コレクションを中心にして関連する作品を加え、中国の書画の流れが俯瞰できるように構成した特別展覧会を開催した。 ・開催期間　23 年 1 月 8 日～2 月 20 日（39 日間） ・会　　場　特別展示館　1～7 室 ・主　　催　京都国立博物館 ・陳列品総件数　113 件（うち国宝 10 件、重要文化財 23 件、重要美術品 2 件） ・入場者数　37,535 人(目標 30,000 人) ・入場料金　一般 1200 円、大高生 800 円、中小生 400 円 ・アンケート結果　満足度88% ・関連講座　３回			
補足事項	・現在、上野家に所蔵されている国宝 3 件、重文 15 件も合わせて展示し、広い意味での上野コレクションの様子がわかるように展示した。 ・中国の南北朝時代 5 世紀の仏典や『三国志』などの写本から 20 世紀の呉昌碩までを一同に展示し、中国の書画の流れが俯瞰できる展示内容とした。 ・上野コレクションの柱のひとつである拓本については、三井記念美術館や東京国立博物館など国内有数の優品を合わせて展示した。 ・明、清時代の書に関しては、可能な限り、読み本を掲示し、鑑賞の手助けとなるように配慮した。 ・鑑賞の手引きとして、図版付き目録を作成したが、ほぼ 9 人に一冊という高い購買率をしめしたことはその関心と図版付き目録の完成度の高さを示している。 ・上野家に所蔵されている国宝 3 件、重文 15 件の文化財が、展覧会終了後、当館の寄託品となったことも重要な成果の一つである。			

「筆墨精神」展示風景

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	入場者数	37,535 人	30,000 人	A		—	—	—	—

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （京都国立博物館）　年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2122-6

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（1）展示の充実　②特別展等（6/8） 特集陳列「生誕 125 年記念　篆刻家　園田湖城」			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	学芸部長　西上実
実績・成果	近代日本を代表する篆刻家の一人である園田湖城(1886-1968)の業績を回顧する展示。湖城が当館正面破風の額字を揮ごうしたつながりからの企画であり、篆刻の世界から近代京都の書画文化を紹介する初の機会となった。 ・開催期間　23 年 1 月 8 日～2 月 20 日（39 日間） ・会　　場　特別展示館　8～10 室 ・主　　催　京都国立博物館 ・陳列品総件数　169 件 ・関連講座　１回 ・関連イベント　１回（座談会「知られざる園田湖城の篆刻芸術」）			
補足事項	・日本の博物館・美術館において、篆刻の展覧会がほとんど開催されないなかでの企画であり、園田湖城作品をとおして篆刻芸術の顕彰に資することができた。 ・園田湖城と富岡鉄斎や橋本関雪ら京都の書画家との交流を、絵画作品とその刻印を合わせて展示し、詩書画篆刻という伝統的な芸術概念を再提示した。それにより、伝統を受け継ぐ近代京都文化の奥行きの広さを示した。 ・湖城の篆刻作品のみならず、湖城収集の中国書画や印章も展示し、湖城が理想とした明清の文人文化を再現。近代日本において中国文化への関心の高さを実証し、日中文化交流の意義を提示した。 ・約 110 件の篆刻作品には、印影と側款の拓本を添え、実際の印面と対照できるようにして、鑑賞の助けとしたが、展示ケースの構造上、拡大鏡などを置くことができず、小さな印章を鑑賞するには若干の困難がともなった。	 「園田湖城」展示風景		

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	—	—	—	—	経年変化	—	—	—	—
年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）								
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （京都国立博物館）　年２～３回程度								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調								

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2122-7

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　②特別展等　(7/8) 研究成果特別公開「古代の輝きを求めて　～デジタル計測でよみがえった古代青銅鏡の世界～」			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	保存修理指導室長　村上　隆
実績・成果	・開催期間　7 月 17 日～8 月 29 日(39 日間) ・会　　場　特別展示館　中央室 ・主　　催　京都国立博物館 ・陳列品総件数　8 件　(復元品 2 点を含む) ・実演デモ：2 回			
補足事項	・京都国立博物館では館蔵品に対するデジタルアーカイブ化を推進している。その成果の一部をタイムリーに一般公開する機会を設けた。 ・厚く覆われたサビの上からしか見たことがなかった青銅鏡を 正確な計測データをもとに形状をバーチャルに復元し、さらに分析によって得られたオリジナルな成分に基づく色で仕上げた。これにより、これまで想像できなかったオリジナルな古代の鏡の実態に近づくことができた。 ・また、実際の金属板をオリジナルな形状に仕上げ、研磨した鏡面を復元することにより、鏡としての機能を再現することも試み、成果品を展示した。観覧者も自分の顔を映して、古代の鏡の雰囲気を体験することができ、好評を得た。 ・実際の計測機を用いたデモを行い、実際の計測を味わってもらうことも実施した。			

「古代の輝きを求めて」ポスター

展示風景

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	―	―	―	―		―	―	―	―

年度実績 評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画 記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （京都国立博物館）　年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2122-8

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（１）　展示の充実　②特別展等　(8/8) 京都国立博物館所蔵能装束展（金沢能楽美術館）			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	工芸室長　尾野善裕
実績・成果	平成 22 年度計画の中には当初盛り込まれていなかった事業であるが、能楽関係美術品の展示・保存を専門とする開催館からの要請を受け、京都国立博物館平常展示館休館中の所蔵品の活用・公開促進を図るために実施した。開催館での特別展覧会としては、史上２位の総入館者数を記録するなど、大いに好評を得た。 ・展覧会名称　京都国立博物館所蔵能装束展 ・開催期間　4 月 17 日～5 月 30 日（38 日間） ・会場　金沢能楽美術館 2 階　メイン展示室 ・主催　金沢能楽美術館・京都国立博物館 ・陳列品総件数　18 件 ・入場者数　4,761 人 ・入場料金　一般・大学生 300 円、65 歳以上 200 円、高校生以下無料 ・アンケート結果　満足度 96%			
補足事項	・本展覧会では、加賀藩 13 代藩主前田斉泰が妹・厚姫の嫁ぎ先である会津藩主・松平容敬より贈られた生地を用いて仕立てた〈黄地唐花文様綴錦半切〉など、開催館の性格・地理的条件を特に考慮した展示品選定を行った。 ・来館者に対するアンケートでは、74%が大変良いと回答しており、良いも含めると 96%という極めて高い満足度であったと共に、否定的な評価（悪い）が皆無であったことが注目される。			

「京都国立博物館所蔵能装束展チラシ」

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	入場者数	4,761 人	—	—	経年変化	—	—	—	—

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （京都国立博物館）　年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2123-1

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（1）展示の充実　②特別展　(1/4) 「平城遷都 1300 年記念　大遣唐使展」		
担当者	担当部課　学芸部企画室	事業責任者	企画室長　稲本泰生
実績・成果	・会期　平成 22 年 4 月 3 日（土）～6 月 20 日（日）　(69 日間) ・会場　奈良国立博物館東新館・本館 ・主催　奈良国立博物館、読売新聞大阪本社、NHK 奈良放送局、NHK プラネット近畿 ・共催　平城遷都 1300 年記念事業協会、仏教美術協会 ・後援　文化庁 ・協賛　岩谷産業、大阪芸術大学、関西電力、大日本印刷、大和ハウス工業、ニッセイ同和損害保険、非破壊検査 ・協力　日本香堂、日本航空、日本貨物航空、近畿日本鉄道、JR 西日本、寧波旅日同郷会 ・陳列品総数　261 件（うち国宝 42 件、重要文化財 87 件、米国からの出陳 5 件、中国からの出陳 15 件） ・入場者数　202,166 人（目標 120,000 人） ・観覧料金　一般 1400 円、高・大生 1,000 円、小・中生 500 円 ・アンケート結果　満足度 84.6%		
補足事項	・平城遷都 1300 年を記念して企画された特別展。国内外から第一級の関連文化財を集め、約 300 年に及ぶ遣唐使の歴史を空前の規模で紹介する初の試みとして注目を集めた。 ・同時代の日本と唐を代表する観音像として常に比較されてきた、薬師寺聖観音像（国宝）と米国ペンシルバニア大学博物館・観音菩薩像の二体並んでの展示や、ボストン美術館「吉備大臣入唐絵巻」第 1・4 巻の 27 年ぶりの里帰りなどが話題を呼び、一般からも専門家からも高評価を得た。 ・共催メディアとともに効果的な広報を展開し、「正倉院展」を除けば当館史上 4 位となる入館者数を記録した。 ・展覧会図録は会期中に増刷し、総計 13,016 部の売り上げを記録した。 ・「吉備大臣入唐絵巻」全巻の高精細画像に基づくデジタルコンテンツ（株・大日本印刷による撮影・制作）、及び遣唐使をテーマとした NHK 制作の展示映像を監修し、会期中に地下回廊で公開した。 ・会期中に公開講座を 4 回、トークイベントを 2 回開催した。5 月 15 日には遣唐使研究の第一人者である東野治之氏（奈良大学教授）を講師として特別講演会（奈良県新公会堂能楽ホール、参加者 316 名）を、6 月 5 日には国際学術シンポジウム「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」（当館講堂、参加者 148 名）を開催した。また館外諸会場（関西一円）で開催された NHK 公開セミナーにて、展覧会担当者による、遣唐使をテーマにした講演を行った（計 5 回実施）。	 大遣唐使展チラシ

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	入場者数	202,166 人	120,000 人	S		—	—	—	—

年度実績評価総括	Ⓢ　A　B　C　F （S、F の理由） 出陳品の質・量、話題性などで非常に注目された展覧会であり、当初目標を大幅に上回る入場者があった。またテーマの今日性、内容の深さなどの面でも、各方面から高い評価を受けた。
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （奈良国立博物館）　年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2123-2

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　②特別展 (2/4) なら仏像館開幕記念特別展「至宝の仏像」			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	部長補佐　岩田茂樹
実績・成果	・会　期　7月21日～9月26日（60日間） ・会　場　奈良国立博物館　なら仏像館 ・主　催　奈良国立博物館 ・特別協力　読売新聞社 ・協　力　東大寺、日本香堂、仏教美術協会 ・後　援　文化庁 ・陳列品総数　99件（国宝7件、重要文化財57件） ・入場者数　81,342人（目標10,000人） ・観覧料金　一般1,000円　高・大生　700円 ・アンケート結果　満足度　86.9%			
補足事項	・本展覧会は、7月21日から名称も新たにリニューアルオープンした「なら仏像館」の開幕記念として開催したもので、奈良国立博物館に寄託されている仏像や奈良国立博物館の所蔵する仏像のなかから、選りすぐりの名品を展示した。 ・期を同じくして、東大寺法華堂須弥壇の耐震工事にともない、同堂の国宝・脱活乾漆金剛力士立像が当館に寄託されたので、所蔵者の了解を得て、これを特別公開することができた。多くの観覧者より本像の魅力を再認識することができたとの意見が寄せられ、その展示は好評を博した。 ・本展の会場となった「なら仏像館」は、「旧帝国奈良博物館本館」として重要文化財指定を受けた明治時代を代表する洋風建築であるが、その魅力をより強く発信するため、西入口ロビーを整備するとともに新規照明を導入して、室内の装飾の美しさや、重厚な空間を観覧いただけるよう一新し、これを休憩室として公開した。 ・仏像展示室においても、スポット照明のための配線ダクト工事を全室に及ぼした結果、各仏像の表情などがより魅力的に引き出すことができるようになりアンケート等でも高い評価を得た。一方で、像の大きさや展示室の形状等の理由から、なお照明が十全でない箇所については、追加工事を行い、改善に努めた。 ・図録の販売数は5,000冊を数え、好評を博した。 ・会期中に実施された夏季講座「仏像修理100年と仏像研究の現在」において、本展に関連する３つの講座を設け、本展の理解を深めることができた。	 特別展「至宝の仏像」会場風景		

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	入場者数	81,342人	10,000人	S	経年変化	—	—	—	—

年度実績評価総括	Ⓢ　A　B　C　F （S、Fの理由）当初目標を大きく上回る入場者があり、アンケートによる評価も非常に高かった。
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （奈良国立博物館）　年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2123-3

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　②特別展 (3/4) 特別展「仏像修理 100 年」			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	上席研究員　鈴木喜博
実績・成果	・会　　期　　7 月 21 日（水）～9 月 26 日（日）　　(60 日間) ・会　　場　　奈良国立博物館　東新館 ・主　　催　　奈良国立博物館 ・特別協力　　財団法人美術院　読売新聞社 ・後　　援　　文化庁 ・協　　力　　東大寺　日本香堂　仏教美術協会 ・陳列品総数　97 件　(国宝 3 件、重要文化財 10 件) ・入場者数　　81,342 人（「至宝の仏像」と一体でカウント） ・観覧料金　　一般 1,000 円　高・大生 700 円 ・アンケート結果　満足度 87.9%			
補足事項	・本展覧会は、近代の仏像修理が始まった明治 31 年（1898）から今日にいたる約 110 年余りの歴史を振り返り、記憶しておくべき修理などをトピック風に紹介したものである。さらに長年修理に携わった技術者たちの伝統的修理技術の継承および新材料の改良・工夫などの視点も加えた修理の歴史を、展示という手法で本格的にたどるのは史上初めての試みである。 ・展示内容の分かりやすさと、保存修理という視点から仏像を鑑賞するという展示手法も好評で、文化財の保存の関心をさらに高める上でも高い評価を得ている。 ・近代修理に最初から携わってきた美術院（現在財団法人）の特別協力を得て、修理された仏像の他に、修理途中で製作された模型・模造、図面および写真等も併せて展示しており、文化財保存修理の質の高さを紹介する上でも重要な展覧会となった意義は大きい。 ・触れる展示コーナーを設け、日本の木の仏像の主な用材（樟、榧、および檜）を用いて荒彫りした仏像（美術院製作）も展示し、あわせて同じ種類の木端（こっぱ）を傍に置いて、木の堅さ、匂い、木の色などを体感する企画を実施した。木端（美術院提供）の持ち帰り可能も観覧者に好評で、老若男女に新鮮な驚きでもって受け入れられた。 ・図録の販売部数は予想を越えて 4,404 冊を数え、二度の増刷をするほどの盛況を得た。 ・展示開催中に公開講座（２回）および夏季講座（講師４名）を実施し、文化財修理に携わってきた専門家の生の言葉を通して、文化財保存および展示の理解を深めた。 ・さらに会期中、当館文化財保存修理所内の美術院工房の特別見学を二日実施し（9 月 8 日、15 日　見学者総数 237 名）当展覧会の意義を高めた。			

仏像修理 100 年展　入口看板

さわれる展示コーナー風景

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	入場者数	81,342 人	10,000 人	S		—	—	—	—

年度実績評価総括	Ⓢ　A　B　C　F (S､F の理由)当初目標を大きく上回る入場者があり、アンケートによる評価も非常に高かった。
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （奈良国立博物館）　年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2123-4

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　②特別展 (4/4) 第 62 回正倉院展			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	部長補佐　内藤　栄
実績・成果	・会期　　10 月 23 日～11 月 11 日 (20 日間) ・会場　　奈良国立博物館　東新館・西新館 ・主催　　奈良国立博物館 ・特別協力　　読売新聞社 ・協力　　NHK 奈良放送局、小学館「和樂」編集部、奈良テレビ放送、日本香堂、財団法人仏教美術協会 ・協賛　　NTT 西日本、近畿日本鉄道、JR 東海、JR 西日本、ダイキン工業、大和ハウス工業、帝塚山学園・帝塚山大学、日本生命、白鶴酒造 ・出陳宝物数　　71 件 ・入館者数　　294,804 人 ・観覧料金　　一般 1000 円　高大生 700 円　小中生 400 円 ・アンケート結果　　満足度 77.1%			
補足事項	・正倉院宝物を代表する名品として名高い、『螺鈿紫檀五絃琵琶』をはじめ、『種々薬帳』、『繧繝鞋』、『銀壺』など 71 件の宝物を展示した。その中には聖武天皇遺愛品である鳥獣花背八角鏡など 14 件の初出陳品も含まれ、新資料を提示することもできた。 ・今年度より西新館の展示ケースが一新され、宝物への安全性、鑑賞しやすさが向上したほか、西新館では従来つまずく危険のあった床配線も床下に配備され、観覧者への配慮が向上した。 ・ケースは気密性の高く、温度変化の少ない LED 照明が採用され、おおむね良好な展示環境を実現することができた。とりわけ、LED 照明は低い照度でも鑑賞しやすいという効果があり、また新しく採用した光ファイバー照明も十分に効果を発揮した。 ・また、西新館の新ケース前には観覧者の安全と宝物の保全を考慮し手摺を新設したが、ケース内の環境を保全したほか、ガラスに手垢がつかず、人垣の後方からも鑑賞しやすいなどの効果があり、さらに混雑した会場でも観覧者の安全性を増すことができた。 ・展示会場も従来と比較すると格段に明るくなり、観覧者の安全性を高めることができた。そのほか、観覧者へのサービスの一環として休憩室も新設した。 ・国立博物館として初めて託児所を開設し、好評を得た。 ・20 日間の会期で 29 万人を超える観覧者が訪れ、人気のある宝物の周囲には多くの人垣ができていたが、整理の人員を配置することで大きなトラブルもなく多人数の観覧を行うことができた。 ・西新館のリニューアルに伴い、１階にトイレが新設されたほか、国立博物館としては初めて託児所を開設し、好評を得た。			

螺鈿紫檀五絃琵琶の展示風景

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	入場者数	294,804 人	180,000 人	S		248,389	263,765	299,294 (20 日間)	294,804 (20 日間)

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Ｆの理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （奈良国立博物館）　年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名　九州国立博物館　処理番号　2124-1

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1)　展示の充実　　②　特別展等（1/5） 「パリに咲いた古伊万里の華」			
担当者	担当部課	企画課	事業責任者	学芸部長　伊藤　嘉章
実績・成果	・開会期間：　4 月 6 日（火）～6 月 13 日（日）（61 日間） ・会場：　九州国立博物館　特別展示室 ・主催：　九州国立博物館・福岡県、日本経済新聞社、西日本新聞社、ＴＶＱ九州放送 ・陳列品総件数：　165　件 ・入場者数：　84,738 人（目標入場者数　50,000 人） ・入場料金：　一般　1,300 円、高大生　1,000 円、小中生　600 円 ・アンケート結果：満足度　95％			
補足事項	・17 世紀後半から 18 世紀前半にかけて、ヨーロッパへ輸出されて人気を博した伊万里磁器を、「第１章　欧州輸出の始まりと活況」、「第２章　好評を博した日本磁器の優美」、「第３章　宮殿を飾る絢爛豪華な大作」、そして「第４章　欧州輸出の衰退」という構成で展示した。 ・本展に出陳された 165 点の古伊万里はすべて、フランス・パリに在住するコレクター、碓井文夫氏のコレクションである。ヨーロッパに渡った古伊万里を偏りなく収集した同氏のコレクションは、すべて日本初公開のものであり、輸出古伊万里の全体像を伝えることができた。 ・古伊万里がどのようにヨーロッパで愛されたのかを紹介するために、東洋の磁器を飾った空間で有名なドイツ・シャルロッテンブルク宮殿「磁器の間」を再現して展示するなど、展示について工夫を凝らした。 ・歴史背景や伊万里磁器の製作技法をわかりやすく解説した「解説パネル」を制作し、展示室内に掲示した。また、古伊万里の技法を体験的に理解してもらうため，親子向けのワークショップ「えをかこう、いろをぬろう」、「金ピカにかざっちゃえ」をおこない、展示への理解を深める教育普及活動をおこなった。 ・「ポプリの香り体験コーナー」を設置した。これらは巡回先（MOA 美術館，兵庫陶芸美術館）へも引き継がれ，好評を得た。 ・14 代酒井田柿右衛門氏、大橋康二氏の講演会を開催し、大変な好評を博した。 ・テレビ番組「パリに咲いた古伊万里の華　ヨーロッパを魅了した NIPPON の美」を制作、期間中に放映した。	 「磁器の間」を再現した展示室 技法を解説したパネル		

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	入場者数	84,738 人	50,000 人	S		－	－	－	－

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （九州国立博物館） 年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名　九州国立博物館　処理番号　2124-2

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1)　展示の充実　　②　特別展等（2/5） 「馬　アジアを駆けた二千年」			
担当者	担当部課	企画課	事業責任者	文化交流展室長　河野一隆
実績・成果	・開会期間：　7月13日（火）～9月5日（日）（48日間） ・会　　場：　九州国立博物館　特別展示室 ・主　　催：　九州国立博物館・福岡県、（財）全国競馬・畜産振興会、西日本新聞社、ＴＶＱ九州放送 ・陳列品総件数：　133件（国宝23件、重文24件、中国国家一級文物4件） ・入場者数：　42,022人（目標入場者数　50,000人） ・入場料金：一般　1,300円、高大生　1,000円、小中生　600円 ・アンケート結果：満足度　80％			
補足事項	・東アジアの馬に関する文化を総合的に展示した。展示構成は第１章「人と馬との出会い」、第２章「アジアを駆けた馬」、第３章「黄金の馬」、第４章「神馬の誕生」、特別エリア「近代競馬のあゆみ」の５章からなる。 ・馬の文化について特に文化交流の観点から紹介するため、中国・韓国の博物館が所蔵する資料から日本初公開をふくむ23点を借用し、国内外の最新の調査成果を交えながら展示した。また国宝・奈良県藤ノ木古墳出土の馬具を九州で初めて展示した。なお、展示予定であった鉄地金銅張杏葉の一部について、輸送中に毀損していたことが展示作業に伴う開梱点検時に判明した。速やかに関係機関等に報告するとともに、修理等について指導を仰いだ。その後、当館にて修理を行い、借用先へと無事返送を行なった。 ・学術講演としてシンポジウム「藤ノ木古墳の馬具」（7月18日、千賀久氏・鈴木勉氏ほか）、講演会（7月31日、末崎真澄氏・川嶋舟氏）などを、関連事業としてミュージアム「馬」セミナー　（7月25日、楠瀬良氏、8月1日、石田信繁氏）を実施した。 ・教育普及として、展示室導入部に「教育普及コーナー」を設置し、グラフィックや模型を用いて馬の生態と馬具の歴史や機能を紹介した。また，馬を身近に感じてもらうため，馬に関する雑学を紹介する解説パネル「おしえてギャロップ」も設置した。館外広場で（財）全国競馬・畜産振興会とともに「九博で本物の馬と仲良しになろう　ポニーとのふれあいイベント」（毎週・木・土・日曜日）などを実施した。			

藤ノ木古墳馬具　展示風景

埴輪馬　展示風景

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	入場者数	42,022人	50,000人	B		－	－	－	－

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （九州国立博物館） 年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2124-3

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1)　展示の充実　　②　特別展等（3/5） 「誕生！中国文明」			
担当者	担当部課	企画課	事業責任者	企画課長　小泉惠英
実績・成果	・開会期間：　平成 22 年 10 月 5 日（火）～11 月 28 日（日）（48 日間） ・会　　場：　九州国立博物館　特別展示室 ・主　　催：　九州国立博物館・福岡県、読売新聞社、ＦＢＳ福岡放送、中国河南省文物局 ・陳列品総件数：147 件（中国国家一級文物 63 件） ・入場者数：　53,409 人（目標　90,000 人） ・観覧料：一般　1,300 円、高大生　1,000 円、小中生　600 円 ・アンケート結果：満足度　89%			
補足事項	・展示構成：幻の王朝といわれる夏王朝をはじめ中国歴代王朝の多くが都を置いた河南省に焦点を当て、３つのテーマから中国文明の様々な文物を総合的に展示した。展示構成は第１部「王朝の誕生」、第２部「技の誕生」、第３部「美の誕生」の３部からなる。 ・河南省下の博物館が所蔵する資料から日本初公開を多く含む 147 件を借用し、これまでにない切り口から中国文明の多彩な魅力を紹介した。 ・講演会として「三国志をめぐる謎」（10 月 5 日、三好徹氏）、「文字の発生と歩み」（11 月 14 日、新井光風氏）、「王朝、技、美の誕生―中国河南省が生み出した芸術と文化―」（10 月 24 日、小泉惠英、市元塁）を開催。また、関連事業として、「中国王朝への旅―胡弓の調べにのせて―」（10 月 9 日、趙国良氏）、「中国伝統音楽からクラシックまで」（11 月 6 日、九州交響楽団）などを実施した。 ・教育普及活動として、展示室に出陳作品に関わる漢字の豆知識を紹介するシリーズ「カンジちゃいな」、玉の製造工程を示した解説パネルなどを作成した。そのほか、玉器の加工の難しさを感じていただくため、「玉の原石に錐で穴を開ける体験コーナー」を設置し、好評を博した。これらは巡回先（奈良国立博物館）へも引き継がれた。	 金縷玉衣　展示風景 宝冠如来　展示風景 玉穴あけ体験コーナー		

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	入場者数	53,409 人	90,000 人	C		－	－	－	－

年度実績評価総括	S　A　Ⓑ　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （九州国立博物館） 年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	ほぼ順調

【書式Ａ】　施設名　九州国立博物館　処理番号　2124-4

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1)　展示の充実　　②　特別展等（4/5） 「没後 120 年　ゴッホ展」			
担当者	担当部課	企画課	事業責任者	文化財課長　臺信祐爾
実績・成果	・　開会期間：平成 23 年 1 月 1 日（土）～2 月 13 日（日）（42 日間） ・　会場：　九州国立博物館　特別展示室 ・　主催：　九州国立博物館・福岡県、西日本新聞社、ＴＮＣテレビ西日本、ＴＶＱ九州放送 ・　陳列品総件数：　122 件 ・　入場者数：　354,311 人（目標入場者数　110,000 人） ・　入場料金：　一般　1,500 円、高大生　1,000 円、小中生　600 円 ・　アンケート結果：満足度　85％			
補足事項	・　フィンセント・ファン・ゴッホ（1853-1890 年）の没後 120 年に際し、初期から晩年までのゴッホ作品 68 点および同時代の絵画作品などを含む計 122 点を展示した。構成は、第 1 章「伝統」、第 2 章「若き芸術家の誕生」、第 3 章「色彩理論と人体の研究」、第 4 章「パリのモダニズム」、第 5 章「真のモダンアーティストの誕生」、第 6 章「さらなる探求と様式の展開」とした。 ・　ファン･ゴッホが自らの様式と技法を発展させる上で参考にした同時代の画家の作品や､道具や材料などに加えて収集していた浮世絵も展示し､ゴッホの創作方法について観覧者に理解を促した。 ・　絵画に描かれたゴッホの寝室を再現展示することで､より具体的に観覧者がイメージできるように工夫した。 ・　教育普及を目指した配布物として「ゴッホメモ」を作成し、ゴッホについてわかりやすく紹介した。また、この「ゴッホメモ」は、混雑対策としても活用できた。 ・　圀府寺司氏（大阪大学文学研究科教授）､深谷克典氏（名古屋市美術館学芸課長）の講演や、映画上映会、日展作家による作品展、自画像コンクール、ヒマワリの種を使ったモザイクアートなど､多数のイベントを開催し、大変な好評を博した。			

展示室風景

油彩画「アルルの寝室」を再現展示

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	入場者数	354,311 人	110,000 人	S		－	－	－	－

年度実績 評価総括	Ⓢ　Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由） 当館初めての西洋絵画展として､浮世絵を通じてわが国に強い憧れを抱いていたゴッホを取り上げた｡現代美術にも大きな影響を及ぼしているゴッホの創造の秘密に迫る質の高い展覧会として各方面から高い評価を得た。また共催者とともにさまざまな広報戦略を展開したため、予想を大幅に超える入場者があった。
中期計画 記載事項	特別展等については､国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （九州国立博物館） 年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	達成

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2124-5

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)　展示の充実　　②　特別展等（5/5） アジア友好日本古美術海外展「日本とタイ―ふたつの国の巧と美」			
担当者	担当部課	企画課	事業責任者	企画課長　小泉惠英
実績・成果	・　開会期間：平成 23 年 1 月 15 日（土）～3 月 13 日（日）月・火休館（41 日間） ・　会場：　タイ王国バンコク国立博物館 ・　主催：　文化庁、九州国立博物館・福岡県、タイ王国文化省芸術局 ・　陳列品総件数：日本側：56 件（うち国宝 2 件、重要文化財 7 件、重要美術品 2 件)、 タイ側：51 件 ・　入場者数：　21,525 人 ・　入場料金：　一般 50 バーツ、学生 無料 ・　アンケート結果：実施していない			
補足事項	・展示構成： 第一章「ふたつの国のはじまり」では、日本とタイ、ふたつの国の形成を発掘された遺跡や考古遺品を通して紹介した。稲作文化、死者の葬送儀礼など、生活や信仰の面から両国の文化を比較するための文化財を展示した。第二章「ふたつの国の仏教」では、古来ともに仏教を篤く信仰してきた両国の仏教美術の名品を展示した。第三章「ふたつの国の出会い」では、交易に焦点をあて、日本とタイの出会いにさかのぼり、ふたつの国の出会いから生まれた工芸品や同時代の歴史資料を紹介した。第四章「現代を生きる伝統」では、様々な文化交流を背景に発達してきた日本とタイの伝統工芸について、現代に息づく技とその作品を紹介した。 本展覧会は、2007 年から始まったタイ王国国立博物館との交流事業を通して計画された。なお、本展は文化庁が日本文化の紹介と国際親善のために、毎年、海外で開催する日本古美術展のひとつでもある。 九州国立博物館の支援団体である九州国立博物館を愛する会､九博ボランティアとタイ在住ボランティアの協力を得て、日本の伝統的な遊戯を紹介するワークショップを実施した。 日本の伝統工芸の１つである久留米絣の制作に関して、日本より招聘した絣制作作家の協力を得てバンコク国立博物館内でワークショップを実施した。	 バンコク国立博物館		

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	入場者数	21,525 人	―	―	経年変化	―	―	―	―

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 （九州国立博物館） 年２～３回程度
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 国立文化財機構　処理番号 2130

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　③展覧会広報活動の取組み			
担当者	担当部課	総務企画課	事業責任者	総務企画課長　藤本慎也
実績･成果	・法人の『平成 22 年度概要』を 22 年 7 月に発行し、PDF 版をウェブ掲載した。 ・法人の『平成 21 年度年報』を 23 年 3 月に発行し、PDF 版をウェブ掲載した。 ・法人ウェブサイト(http://www.nich.go.jp)のリニューアルを、23 年 4 月 1 日オープンに向けて進めた。特に、掲載情報の整理・分類を重点的に行い、利用者が必要とする情報にアクセスしやすくなるよう配慮した。また、機構の全体像が一目で分かるようトップページに各施設の画像を配するとともに、簡易な英文ページを追加した。			
補足事項	・『平成 22 年度概要』: 2,750 部、カラー44 ページ、和英併記。 ・『平成 21 年度年報』: 280 部、1,081 ページ。 ・年報の印刷は、震災の影響により印刷会社に紙が入荷しない時期と重なったが、納品が 10 日程度遅れるのみで、年度内に発行することができた。 『平成 22 年度概要』 リニューアルサイトのトップページ			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	—	—	—	—		—	—	—	—

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	個々の展覧会において、広報に積極的に取り組む。また、展覧会の入館者数については、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2131

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　③展覧会広報活動の取組み			
担当者	担当部課	学芸企画部広報室	事業責任者	広報室長　小林　牧

実績・成果

・平常展の活性化を目指した広報を行った。
・東京国立博物館ニュース、総合パンフレット（7ヶ国語）、フロアガイド（4ヶ国語）、展示・催し物のご案内、庭園ガイドマップを改訂発行した。新たに構内マップ（日英 2 カ国語）を作成、正門前に設置した。
・モバイルサイトを開設し、5月6日より公開した。
・ウェブサイトについて2011年4月オープンを目指して、全面リニューアルを行っている。
・博物館情報をメールマガジンにより配信した。
・2011年1月2日本館リニューアルオープン、平常展から総合文化展への改名をきっかけとした[トーハク？]キャンペーンを実施。タレントを起用したイメージポスターを製作し、交通広告、新聞広告などで大規模な広報展開をはかり、来館者増に貢献した。
・マスコミ媒体と連携したPRを行った。
・共催者、ＰＲ会社と協力し特別展の大規模プロモートを実施した。

補足事項

・特集陳列「拓本とその流転」（2011年3月15日～5月15日）開催にあたり、台東区立書道博物館と連携して、報道内覧会、周知印刷物の制作、DM、交通広告を行なった。
・「月刊うえの」「展覧会ガイド」等で収蔵品を紹介する連載ページを確保。
・約280媒体にほぼ隔月1回プレスリリースを送付、その他美術記者クラブ等に臨時のリリースを配信するなど、マスコミ媒体との連携による広報を行なった。マスコミの取材・撮影・写真貸出し等対応約270件（特別展ＰＲ事務局窓口分含まず）。

リニューアルキャンペーンポスター

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
東京国立博物館ニュースの発行	6回	6回	A		6	6	6	6
ウェブサイトの更新	5138回	－	－		4,547	3,616	5,576	5,138
電子メールマガジン配信	38回	－	－		57	53	57	38
登録者数	17,727名	－	－		16,758	14,237	16,508	17,727
総合パンフレット作成	7ヶ国語	7ヶ国語	A		7ヶ国語	7ヶ国語	7ヶ国語	7ヶ国語
フロアガイド作成	4ヶ国語	4ヶ国語	A		4ヶ国語	4ヶ国語	4ヶ国語	4ヶ国語

年度実績評価総括

Ⓢ　A　B　C　F

（S、Fの理由）本館リニューアルに伴う[トーハク？]キャンペーンで館の認知度をあげ、来館者増に貢献した。「博物館に初もうで」の入館者数は、21,724人（22年1月）から62,400人（23年1月）に増加した。

中期計画記載事項

個々の展覧会において、広報に積極的に取り組む。また、展覧会の入館者数については、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2132

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（１）　展示の充実　③展覧会広報活動の取組み			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長　久保智康
実績・成果	・「博物館だより」の発行・配布（4回）した。 ・「Newsletter」の発行・配布（4回）した。 ・モバイルサイトによる情報提供をした。 ・「館内案内」リーフレット（6ヶ国語）の作成・配布した。 ・東山地区の建仁寺・智積院・東福寺などの寄託社寺と連携し、チラシの交換、ホームページのリンク等の広報活動を展開した。 ・京都市内４館（京都国立博物館、京都国立近代美術館、京都府文化博物館、京都市美術館）の連携協力の提携を結び、共通の展覧会情報パンフレットを作成・配布した。 ・マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開した。 ・各展覧会の招待日にプレス発表会を開催した。 ・展示予定の新発見作品について、特別にプレス発表会を開催した。 ・「年間スケジュール」リーフレットの作成・配布した。 ・メールマガジンを発行（15回）した。 ・ウェブサイトによる情報提供（日本語・英語）をした。			
補足事項	・「博物館だより」は、年4回、それぞれ1万5,000部から2万5,000部発行（季節による入館者見込により増減）し、観覧者、新聞・雑誌・放送局各社、学校・図書館・美術館・博物館ほか、郵送希望者にも発送している。 ・「Newsletter」は、「博物館だより」の英語版として年４回発行し、配布している。第110号発行を機に、デザインを一新し、全面カラー化したことにより、より親しみやすい英語版広報誌となり、外国人観覧者や留学生らの好評を博している。			

「Newsletter vol.110」

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	博物館だよりの発行	4回	4回	A		4回	4回	4回	4回
	Newsletterの発行	4回	4回	A		4回	4回	4回	4回
	展示案内リーフレットの作成	6ヶ国語	6ヶ国語	A		6ヶ国語	6ヶ国語	6ヶ国語	6ヶ国語

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	個々の展覧会において、広報に積極的に取り組む。また、展覧会の入場者数については、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2133

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　③展覧会広報活動の取組み			
担当者	担当部課	総務課渉外室	事業責任者	総括専門職員　吉田貴至

実績・成果

・奈良国立博物館だより　年 4 回発行した。
・奈良国立博物館展示案内を発行した。
・特別展「大遣唐使展」、「仏像修理 100 年」、「至宝の仏像」及び「第 62 回正倉院展」、の広報のため、ポスター（B1、B2、B3）、チラシを作成した。
・特別展では開催約 1 ヶ月前に記者発表を行った。
・特別展、特別陳列の会期前日にプレスプレビューを行った。
・「正倉院展」をはじめ、特別展・特別陳列では、JR 西日本、近鉄、阪神電車とタイアップ広報を行った。
・特別展「大遣唐使展」では、ツイッターによる展覧会情報の発信を行った。
・電子メールマガジンによる博物館情報の発信　配信回数 12 回、登録者 6,079 人
・奈良国立博物館リーフレット（7 ヶ国語）発行した。
日本語 80,000 部,英語 11,500 部、韓国語 6,500 部、中国語 3,500 部、仏・独・西語各 1,000 部
・(社) 平城遷都 1300 年記念事業協会発行の「せんとくんクーポン」に協力、観覧料金の割引を行った。
・特別展「仏像修理 100 年」・「至宝の仏像」では、割引引換券を作成し、観光案内施設等で配布した。
・液晶ディスプレイによる有効な情報提供の方策を検討した。
・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」「お水取り」では、ポスター（B2）を作成、観覧料金の割引券付きチラシを作成し、春日大社、東大寺、観光案内施設等で配布した。
・仏像ガールさんを文化大使に任命、ブログ等で展覧会情報等を発信してもらった。
・新聞社、テレビ局の広報媒体を活用した。
・「正倉院展」において、読売新聞社主催の「歴史フォーラム 2010」が東京、大阪で開催、「正倉院展の楽しみ方」が名古屋、福岡で開催された。

補足事項

特別展「大遣唐使展」
　読売新聞　新聞紙上における連載、特集、記事等の掲載ポスター、看板を主要駅に掲出
ＮＨＫ　日曜美術館、ラジオ深夜便、展覧会情報のスポット放送、ニュース
特別展「仏像修理 100 年」
　ＮＨＫ　ニュース
特別展「第 62 回正倉院展」
　読売新聞　新聞紙上における連載、特集、記事等の掲載
　ポスター、看板を東京駅等主要駅に掲出
　ＮＨＫ　日曜美術館、ラジオ深夜便、ニュース
　朝日放送　正倉院展特番２０１０

「仏像修理 100 年」、なら仏像館開幕記念「至宝の仏像」割引引換券

割引券付きチラシ　↑
（裏面の最下段に割引券がついている）

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
博物館だより発行	4 回	4 回	A	経年変化	4	4	4	4
メールマガジン登録者数	6,057 件	－	－		3,413	3,978	4,970	6,057

年度実績評価総括

Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ
（Ｓ、Ｆの理由）

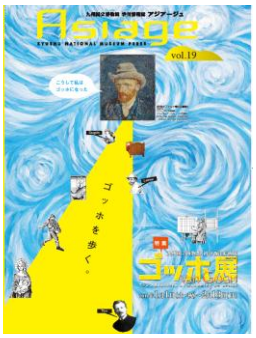
中期計画記載事項

個々の展覧会において、広報に積極的に取り組む。また、展覧会の入館者数については、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名　九州国立博物館　処理番号　2134

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　③ 展覧会広報活動の取組み				
担当者	担当部課	企画課 広報課 総務課	事業責任者	企画課長　小泉惠英 文化交流展室長　河野一隆 広報課長　不動勝義 総務課長　岩﨑英明	
実績・成果	①外国語のガイドブック(中国語)・マップ(英語・中国語・韓国語)を刊行した。 ②特別展の実施に伴う広報・宣伝材料を制作した。マスコミ媒体と連携した広報活動を展開した。特別展のＴＶ番組「パリに咲いた古伊万里の華」を制作、放送した。 ③「九州国立博物館季刊情報誌アジア―ジュ」の発行（年４回　４月１日号、７月１日号、10月１日号、１月１日号） ④展示リストの検索・紹介、展示情報発信のためのウェブデータベースの整備を行った。ウェブサイトによる情報提供を行った。（日本語・英語）（随時更新） ⑤地元の自治体・商工団体・観光団体等と連携した広報活動を行った。 ⑥九州観光推進機構を通じた海外への広報営業活動を行った。 ⑦テーマを定めたトピック展示の特性を踏まえて、web コンテンツやちらし・ポスター・リーフレット・図録などを刊行し、年間を通じ新聞広告掲載を実施するなど、新聞紙上での広報等を通じて新鮮な展示を来館者に提供できた。 ⑧文化交流展示室の展示作品の広報ＴＶ番組「九博のたからもの」を制作、放送した。 ⑨開館５周年を記念したイベント等を行った。				
補足事項	②特別展では、ポスター・チラシを制作。うち２回の展覧会で先行・本チラシおよび先行・本ポスターと複数制作するとともに、広報資料を制作し、チラシ・ポスターとともに関東・関西圏の雑誌、メディア約 300 媒体と九州圏内の情報誌約 150 媒体に送付した。イベントやトピック展示の開催など 80 件のリリースを記者クラブに資料提供した。また、特別展の開催に関する記者発表やプレスプレビューを実施した。 特別展ＴＶ番組「パリに咲いた古伊万里の華」を作成し、好評を得た。 ⑤地元の市、商工会、観光協会等と例月の太宰府ブランド創造協議会等を開催し、情報を交換した。また、太宰府天満宮参道の商店や「九州国立博物館を愛する会」などを対象とする特別内覧会を実施した。 ⑥九州観光推進機構を通じ、海外（韓国・中国・台湾・香港・タイ・シンガポール）に随時情報提供を行った。 ⑦トピック展示として、滋賀県・滋賀県立琵琶湖文化館、徳川美術館および那覇市、津久見市の共同主催・協力等によって、当館の自主的な企画の枠を越える活性化した展示を提供すると同時に、地元諸機関を通じてひろく広報することができた。 ⑧文化交流展示室の展示作品の広報ＴＶ番組（「九博のたからもの」）を制作、放送した。この番組は、九州国立博物館が所蔵または借用している作品１・２点を学芸員が紹介する短編番組（1 回 2 分 30 秒）を 22 回分制作し、RKB 放送にて 5/3 から 9/25 まで、毎週月曜夜 19:55 より放送した。（平均視聴率 8.6%） ⑨開館５周年記念式典を挙行、関連イベントとして九博大茶会、九州浄瑠璃フェスティバル、第５回九州地域ブランドフォーラム、パネル展九博のあゆみ、きゅーはくミュージアムコンサート博多芸妓の世界、九博ボランティアフェスタを実施。				 「南蛮」ちらし(津久見市協力)  季刊情報誌アジアージュ

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	「九博季刊情報誌アジアージュ」の発行	４回	４回	A		4	4	4	4

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	個々の展覧会において、広報に積極的に取り組む。また、展覧会の入館者数については、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2141

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(1) 展示の充実　④黒田記念館収蔵品の公開機会の拡大			
担当者	担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	列品管理課長　谷　豊信
実績・成果	・平成 23 年 2 月 1 日から 3 月 13 日まで、東京国立博物館本館の展示室において、特集陳列「黒田清輝と京都」を開催した。			
補足事項	・特集陳列「黒田清輝と京都」では、黒田記念館収蔵品 30 件と当館絵画分野所属の絵画作品 1 件により、黒田と、彼にとって重要な制作の場となった京都とのかかわりを紹介した。			

特集陳列「黒田清輝と京都」

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	特集陳列展示件数	31 件	－	－	経年変化	44	34	34	31
	内、黒田記念館収蔵品数	30 件	－	－		44	18	31	30

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	黒田記念館については、東京国立博物館に所属を移し、所蔵作品を東京国立博物館でも展示するなど公開機会を拡大する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2211-1

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)　歴史・伝統文化の理解促進　①学習機会の提供（1/4）			
担当者	担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	教育普及室　伊藤信二

実績・成果

1）先導的事業のモデル化及び実践

・本館２０室を教育普及スペース「みどりのライオン」にガイダンス機能をもたせるとともに、展示に関連した各種レクチャーや体験型プログラム、制作工程模型展示などを、一般から学校団体まで幅広い層に向けて展開し、内容にあわせ小講堂・大講堂などでも事業を行った。
・教育普及的な手法を用いた特集陳列「親と子のギャラリー」として、「日本美術のつくり方 2」（6 月 15 日～7 月 25 日）、「博物館の音楽会」（8 月 3 日～9 月 5 日）を実施した。
・「日本美術のつくり方 2」、「博物館の音楽会」などの平常展示に関連して、おとなのためのワークショップ、ファミリーワークショップ、ハンズオンアクティビティを行った。
・本館２０室にて、ハンズオン体験コーナー「日本のもようでデザインしよう」（通年）を継続して実施した。
・ワークシートを用いたアクティビティ「東博ウサギめぐり＆掛軸ふうカレンダー」（平成 23 年 1 月 2 日・3 日）を実施した。
・教育的展示及びイベント「博物館でお花見を」（22 年 3 月 24 日～4 月 11 日、23 年 3 月 29 日～4 月 17 日）を実施した。
・震災の影響による 23 年 3 月 12 日～3 月 28 日の臨時休館に伴い、ワークショップ 2 回を中止した。また、「博物館でお花見を」は 23 年 3 月 23 日から実施の予定であったが、23 年 3 月 29 日からとなった。

補足事項

展示との関連性の高い事業実施を通じ、関連展示の鑑賞を深め、伝統文化の理解の促進に寄与し、伝統文化への興味関心をより高めることができた。

○本館２０室での体験型プログラム
本館８室「暮らしの調度」関連　日本のもようでデザインしよう(通年)
新春企画「博物館に初もうで」関連　東博ウサギめぐり＆掛軸ふうカレンダー(平成 23 年 1 月 2 日・3 日)
本館リニューアル記念特別公開関連　北斎の冨士を作ってみよう(平成 23 年 1 月 5 日～1 月 16 日)

○本館２０室以外で実施したプログラム
総合文化展展示関連
・ファミリーワークショップ　実施回数 8 回
・おとなのためのワークショップ　実施回数 5 回
・ハンズオンアクティビティ　実施回数 4 回
・イベント　実施回数 1 回

特別展展示関連
・ワークショップ　実施回数 2 回

本館１３室関連　ファミリーワークショップ
「からだが動くエビを作ってみよう」
自在置物を鑑賞し、その仕組みと歴史を勉強したあとに、作った自在エビを並べて発表会。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
体験型プログラム参加者数	101,622人	－	－		113,492	75,675	124,785	101,622

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F
（S、Fの理由）

中期計画記載事項

学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、ギャラリートーク等の学習機会を提供する。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう努める。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2211-2

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)歴史・伝統文化の理解促進　①学習機会の提供（2/4）			
担当者	担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	教育普及室長　伊藤信二

実績・成果

2)-1 学校との連携事業の推進

・小・中・高等学校を対象に、スクールプログラムを実施した。また就業体験の受け入れを行った。
・就業体験の受け入れを継続して行った。詳しくは処理番号 2221-1 を参照。
・高等学校の単位制授業の一環としてプログラムを提供した。
・将来の博物館研究員の養成を目的として大学院生を対象としたインターンシップを実施した。
・全国高等学校美術・工芸教育研究会の会員研修会への協力、教員特別鑑賞会・ガイダンスなど、教員を対象とした研修を実施した。
・大学生および教育関連機関等の見学対応を行った。
・平成 22 年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備事業として盲学校のためのスクールプログラムの開発を行い、実際に盲学校の生徒(2 校 36 名)に対しプログラムを試行した。平成 23 年度より同プログラムを広く募集し実施する。
・震災の影響により、スクールプログラム 2 件(2 校 481 名)がキャンセルとなった。

補足事項

・スクールプログラムでは人数・学年・目的などに応じ、ガイダンス、鑑賞支援プログラム、体験型プログラムなど 11 のコースを設け、123 校 5,493 人に対して実施した。また就業体験プログラムには、33 校 131 名が参加した。
・高校生を対象とした連続講座（共催：国立西洋美術館、東京国立近代美術館）は、9 月 4 日、9 月 25 日、10 月 2 日の 3 日間実施し、13 名が参加した。
・全国高等学校美術・工芸教育研究会の会員研修会(共催：東京藝術大学)は、7 月 28 日～7 月 30 日の 3 日間行われ、46 名が参加した。
・教員特別鑑賞会・ガイダンスは、4 月 23 日（特別展「細川家の至宝」）、7 月 9 日（特別展「誕生！中国文明」）、10 月 15 日（特別展「東大寺大仏」）の 3 回実施した。
・15 大学 22 名のインターンシップを受け入れ、7 月 22 日～23 年 3 月 31 日のうち、10～30 日の活動を行った。

スクールプログラム実施の様子
レクチャールームでのプログラム「はじめての東博」（本館 20 室）

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
スクールプログラム	123 校	－	－		187 校	133 校	163 校	123 校
	5,493 人	－	－		4,646 人	5,857 人	5,732 人	5,493 人
就業体験	33 校	－	－		－	33 校	27 校	33 校
	131 人	－	－		－	117 人	100 人	131 人
教員鑑賞会参加者数	456 人	－	－		408 人	868 人	617 人	456 人
インターンシップ受入	15 大学	－	－		12 大学	18 大学	17 大学	15 大学
	22 人	－	－		20 人	25 人	21 人	22 人

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F
（S、F の理由）

中期計画記載事項

学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、ギャラリートーク等の学習機会を提供する。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう努める。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2211-3

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)　歴史・伝統文化の理解促進　①学習機会の提供　(3/4)			
担当者	担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	ボランティア室長　鈴木みどり
実績・成果	2)-2 学校との連携事業の推進（大学等との連携事業） ・東京芸術大学との連携事業 大学院生と当館研究員が連携して準備を行ない、総合文化展の解説を行った。また館蔵の仏画の制作工程模型を作成し、ギャラリートークで解説した(陳列期間：平成 23 年 1 月 2 日～2 月 6 日)。 大学院生 7 名、ギャラリートーク回数 40 回、参加者数 1,081 名 ・キャンパスメンバーズ 博物館の歴史や事業等について博物館セミナーを実施した。 博物館実務全般について演習、実習により体験的講座を実施した。			
補足事項	・ギャラリートーク実施者にとっては、参加者にわかりやすい内容や話し方を工夫することが貴重な経験となり、参加者は作品鑑賞の理解を深めることができた。 ・制作工程模型の作成は、古典的技法を追体験することにより、制作者自身が新知見を得ることができ、その説明を受けた観覧者が作品の制作に関して抱く疑問を解く手がかりを得ることができた。 ・総じて東京芸術大学との連携事業において、模型の制作・総合文化展ギャラリートークを行うことで、学生の学習意欲を喚起し（当館の所蔵作品における新知見を見出す等）、発表する機会を提供した。その結果として博物館の事業および文化財について、来館者が多角的な視点で鑑賞・理解を一層深めることにつながった。			

博物館実務全般について
体験的講座を実施

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	東京芸術大学登録者数	7 人	－	－	経年変化	9 人	7 人	8 人	7 人
	キャンパスメンバーズ加入校数	35 校	－	－		22 校	29 校	35 校	35 校

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、ギャラリートーク等の学習機会を提供する。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう努める。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2211-4

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)　歴史・伝統文化の理解促進　①学習機会の提供　(4/4)			
担当者	担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	教育講座室長　丸山士郎

実績・成果

3）講演会・列品解説・講座等の実施

講演会　実施39回（月例講演会　実施11回
記念講演会　実施12回
テーマ講演会　実施 1回
その他講演会　実施15回）

列品解説　実施83回(ギャラリートークを含む)

連続講座　実施1回(3日)

公開講座　実施3回

・震災の影響による23年3月12日～3月28日の臨時休館に伴い、講演会2回(月例講演会1回、その他講演会1回)、列品解説2回、その他展示に関連する事業3回（桜コンサート2回、鑑賞ガイド1回）を中止した。

補足事項

・その他展示に関連する事業として、桜コンサート、鑑賞ガイド　国宝「花下遊楽図屏風」、花見で一服、中国展記念公演「チェンミンスペシャルコンサート」、芸大ギャラリートーク「月光菩薩について」、恩賜上野動物園・国立科学博物館連携事業「上野の山でツルめぐり」、教育イベント「夕すずみ能」等を実施した。

・多様な講座・講演会等により、文化財に対する理解と親しみが促進した。特に列品解説、月例講演会はわかりやすい解説を目指した結果、参加者の年齢層の幅も広がった。また国立科学博物館と上野動物園との連携企画も順調に成果を上げている。

・その他講演会１回の中止については、外国人講師が急遽帰国したため、臨時休館に関わらず中止であった。

月例講演会「美術の中のうさぎ」

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
講演会等の実施回数	126 回	－	－		142	132	153	126
参加者数	13,319 人	10,915 人	A		11,361	12,332	12,546	13,319
うち								
講演会実施回数	39 回	－	－		24	29	24	39
参加者数	9,290 人	－	－		4,770	7,134	5,600	9,290
列品解説等実施回数	83 回	－	－		101	101	126	83
参加者数	3,659 人	－	－		3,934	4,774	6,550	3,659
連続講座実施回数	1 回	－	－		1	1	1	1
参加者数	278 人	－	－		288	356	320	278
公開講座実施回数	3 回	－	－		16	1	2	3
参加者数	92 人	－	－		2,369	68	76	92

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、ギャラリートーク等の学習機会を提供する。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう努める。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2212

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（2）　日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解促進　①学習機会の提供			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長　久保智康 連携協力室長　山下善也

実績・成果

・土曜講座を展覧会にあわせて開催した。(15 回)
・夏期講座「文学と美術」を実施した。(7/27～29)
・小・中学生向け作品解説シート（博物館ディクショナリー）を発行した。
・京都大学大学院人間・環境学研究科、歴史文化社会論講座を担当した。
・キャンパスメンバーズを継続し、大学と連携した。(29 校)
・京都橘大学との連携を行い、ボランティアによる観覧者アンケート調査を実施した。
・「留学生の日」(10/23)を実施した。
・「少年少女博物館くらぶ」(7/24) を実施した。
・京都市内の小中学校への訪問授業等を実施した。
・「文化財ソムリエ」（７名）を対象としたスクーリングを実施した。
・「社会科教員のための向上講座」を実施した。
・京都市内４美術館・博物館連携の「京都ミュージアムズ・フォー連携講座」を実施した。

補足事項

・土曜講座・夏期講座については、従来平常展示館講堂にて開催してきたが、展示館建替工事のため、講堂も閉鎖され事業の継続が危ぶまれた。しかし、学習機会の提供をつづけるため、外部の施設を借りて実施にこぎつけた。なお目標値を割り込んでいるのは、開催回数が大幅に減っていることによるもので、１回あたりの参加者はむしろ増加傾向にある。
・土曜講座は 23 年 3 月末現在で 1708 回を数える当館の伝統的な普及活動で、高い評価を得ている。
・夏期講座も例年東京などから泊まりがけで参加される聴講者も多数いて、見学会も合わせ好評を博している。
・京都大学大学院人間・環境学研究科、歴史文化社会論講座では、研究員５名が客員教授（2 名）、准教授（3 名）を担当し、博士前期・後期課程の学生に対し、実作品の展示・調査活動を通して専門的教育を行っている。

夏期講座風景

・外国人留学生の「留学生の日」入館者は、同伴者を含め 184 名。「高僧と袈裟」展の観覧により文化財への理解を深める機会を提供するとともに、お茶会を催し、留学生を通じて、日本の伝統文化の国外への発信を行った。
・「少年少女博物館くらぶ」については、以前は平常展において展示解説を行っていたが、平常展休止に伴い、本年は、豊臣秀吉をテーマに博物館庭園及び近隣の社寺や遺跡をめぐり小中学生向けの解説を行った。
・京都市内の小中学校への訪問授業等については、文化財の高精細複製を教材として、文化財ソムリエと当館研究員が小中学校を訪問したほか、建仁寺にて鑑賞プログラムを行い、子どもたちが美術や文化財に親しむきっかけづくりをした。
・「文化財ソムリエ」については、京都市内の大学で日本美術を専門に学ぶ大学生、大学院生７名を対象に訪問授業等に向けたスクーリングを実施した。
・「社会科教員のための向上講座」については、京都市内の小中学校で社会科を担当する教員を対象として、講義と特別展のギャラリートークを行った。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
講演会等　参加者数	2,313 人	5,181	C		4,489	3,413	3,002	2,313
実施回数	17 回	－	－		46	37	21	17
うち土曜講座　参加者数	2,076 人	－	－		4,329	3,254	2,791	2,076
実施回数	15 回	－	－		45	36	19	15
うち夏期講座　参加者数	205 人	－	－		160	159	179	205
実施回数	1 回(3 日)	－	－		1	1	1	1
うち社会科教員のための向上講座　参加者数	32 人	－	－		－	－	32	32
実施回数	1 回	－	－		－	－	1	1
キャンパスメンバーズ加入校	29 校	－	－		21	29	30	29

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、ギャラリートーク等の学習機会を提供する。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう努める。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2213-1

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)歴史・伝統文化の理解促進　①学習機会の提供　（1／2）			
担当者	担当部課	学芸部教育室	事業責任者	教育室長　吉澤　悟

実績・成果

講演会等　参加者数　3,349 人、実施回数 28 回

・特別展等講座　15 回　参加人数 2，172 人
　公開講座の実施。12 回、参加人数 1,522 人
　特別講演会の実施。　5 月 15 日　参加者数 316 人　会場：奈良県新公会堂能楽ホール
　シンポジウムの実施。2 回、参加者数 334 人
・サンデートークの実施。12 回、参加人数 621 人
・夏季講座の実施。8 月 24 日～26 日（3 日間）　参加者数 556 人（各日）　会場：奈良女子大学講堂

小中学校との連携

・奈良市内小学校 5 年生を対象に世界遺産学習授業を実施した。30 校受入、2,221 人
・奈良県内の小中学校にメールマガジンを配信し、小・中・高校に「奈良博たより」を送付した。
　メールマガジン配信数 220 件、たより送付数 71
・奈良市の小・中学校の教員研修を実施した。8 月 27 日　参加者数 200 人
・奈良市内の中学生の職場体験学習を受け入れた。1 校 6 人

解説ボランティアによる作品解説

・展示会場での解説　284 日間、
　学校・一般団体の案内 30 件、1,162 人（申し込み件数。当日受入は含まず）、
　正倉院展の講堂解説 20 日間 計 110 回　など

補足事項

・公開講座は、特別展の会期中に 2～4 回、特別陳列では 1 回実施。
・サンデートークは、当館研究員等により、最近の調査・研究の成果、博物館ならではの話などを講演形式で実施。
・夏季講座は奈良女子大学との連携事業として実施。
　今年は「仏像修理 100 年と仏像研究の現在」と題し、過去最高の参加希望が寄せられた。
・特別講演会は、「大遣唐使展」に関連して、遣唐使に詳しい東野治之氏（奈良大学）を招いて館外で実施した。
・シンポジウムは、「大遣唐使展」と「正倉院展」に関連した学術シンポジウムを行った。2 回とも海外の講演者が参加。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
講演会等　参加者数	3,349 人	3,542	B		2,949	3,655	3,421	3,349
実施回数	28 回	－	－		28	32	33	28
うち特別展等講座参加者数	2,172 人	－	－		1,943	2,706	2,043	2,172
実施数	15 回	－	－		15	19	16	15
満足度	93.2%	－	－		87%	90%	95.6%	93.2%
うち夏季講座　参加者数	556 人	－	－		358	362	391	556
実施回数	1	－	－		1	1	1	1
満足度	94.8%	－	－		84%	90%	92.0%	94.8%
うちサンデートーク参加者数	621 人	－	－		648	587	584	621
実施数	12 回	－	－		12	12	11	12
満足度	87.6%	－	－		－	－	90.6%	87.6%
うち大学との連携講座								
参加者数	－	－	－		－	－	353	－
実施回数	－	－	－		－	－	4	－
満足度	－	－	－		－	－	86.0	－
うち世界遺産学習特別勉強会参加者数	－	－	－		－	－	50	－
小中学校へのメールマガジンの配信	220 校	－	－		220	220	220	220

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、ギャラリートーク等の学習機会を提供する。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう努める。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2213-2

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2) 歴史・伝統文化の理解促進　①学習機会の提供（２／２）			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	学芸部長　西山　厚

実績・成果

・キャンパスメンバーズによる大学との連携強化を図るべく、未加入校に対し積極的に広報を行い、加入校の増加を図った。

【神戸大学大学院人文学研究科】

・神戸大学大学院人文学研究科の連携講座文化資源論に、学芸部研究員２名を客員教授と客員准教授とし、文化資源論を担当した。
・受講した学生は同研究科の修士課程、博士課程の大学院生であり、８名の学生が受講した。
・２名の博士論文の査読を行い、副査として口頭試問を行った。

【奈良女子大学大学院人間文化研究科】

・奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程に学芸部研究員１名を客員准教授として派遣し、日本アジア古典資料論を講義している。授業の内容は古典資料講読を中心とし、受講生は前期４人、後期３人である。
・世界遺産教育に関する全国大会を、奈良市教育委員会および奈良教育大学と共同で実施。
　於．奈良教育大学　11 月 28 日　　参加者数 800 人

【文化財保存修理所の公開】

・平成 22 年 9 月 8 日(水)、15 日(水)　特別展「仏像修理 100 年」の関連イベントとして、文化財保存修理所の特別公開を臨時に開催した。300 名の募集に対し、応募総数 448 名、参加者 237 名となった。他府県からの参加者も多く、満足度の高い感想が得られた。
・平成 23 年 2 月 9 日(水)　昨年度に引き続き、恒例の文化財保存修理所の特別公開（第 3 回目）を開催し、120 名の募集に対し、応募総数 234 名、参加者 106 名となった。
・平成 23 年 3 月 26 日（土）、美術史学会西支部大会を受け入れた。100 名の学会員が講堂で三月堂修理の行程について聴講し、さらに文化財保存修理所を見学した。

補足事項

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
キャンパスメンバーズ加入校	28 校	－	－	経年変化	20	25	27	28

年度実績評価総括

Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ

（Ｓ、Ｆの理由）

中期計画記載事項

学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、ギャラリートーク等の学習機会を提供する。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう努める。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2214-1

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)　歴史・伝統文化の理解促進　　①　学習機会の提供(1/3)			
担当者	担当部課	交流課	事業責任者	主任研究員　　池内　一誠
実績・成果	① 博物館における体験型事業の充実を図った。 ②九州大学との共同研究の成果に基づき、平常展を利用して来館者のニーズに合った情報提供を行うためのプログラムを研究・開発した。 ③学校教育との連携事業を実施した。			
補足事項	①体験型展示室「あじっぱ」における展示・体験活動の充実 ・「あじっぱ」のうち、アジア各国の伝統文化・生活文化等を紹介する「屋台」において延べ12回、「あじ庵」において延べ5回、「あじぎゃら」において延べ5回の展示替えを行った。「屋台」において新たに紹介する国として「モンゴル」「ウズベキスタン」の2カ国を追加した。従来からの体験プログラムの展開に加え、新たに「モンゴルの馬具に乗ってみよう」「モンゴルのもようをデザインしよう」「モンゴル・ウズベキスタンの３D写真」「きゅうぱっく　モンゴルの馬頭琴」「Boo Booペット」「いろんなもようを織ってみよう」「テープ独楽をまわそう」を追加した。また、小・中学生層を対象に、博物館学芸員の仕事の一部を体験するプログラム「なりきり学芸員体験」「なりきり考古学者」を定例化し、毎月第2・第4土曜日に実施したほか、職場体験・学校団体等の希望者に対して随時実施した。 ・「Boo Booペット」「いろんなもようを織ってみよう」「テープ独楽をまわそう」は教育普及ボランティアの企画によるもので、ボランティア活動の活性化の成果でもある。 ・夏休み子ども向けイベント「いこうよ！あじっぱ夏祭り」の実施 夏休み子ども向けイベント「いこうよ！あじっぱ夏祭り」を8月7日～8日に実施した。内容の企画から準備、当日の運営にいたるまで教育普及ボランティアが主体となって進め、3カ国3コンテンツを運用した。2日間で延べ約300名(子どものみの数) の参加があった。 ②昨年度に引き続いて、九州大学金大雄研究室との共同研究として来館者動向および展示解説システムの改善に向けての実証実験を実施した。その結果、実際に来館者が展示室内でどのように行動しているかの具体的なデータを取得した。 ③学校教育との連携事業 ・初等・中等教育との連携 学校貸出キット「きゅうぱっく」の運用を継続しつつ、昨年度行った改善点の検討に基づき、新規のセットとして「きゅうぱっくLite」7種類を開発、運用を開始した。「きゅうぱっくLite」は「土器のいろいろ」「青銅器のいろいろ」「誕生！！中国文明」「高麗の文化」「イスラームの祈り」「さまざまな穀物」「さまざまな香辛料」の7種類。あじっぱ体験用資料を中心に、３D プリンタでの成果等も活用した。また、中学生の職場体験の受け入れ、高校生を対象とした博物館理解のためのプログラム「ジュニア学芸員活動」を実施した。 ・高等教育との連携 博物館学芸員課程を履修する学生のための「博物館実習」を実施し、また、筑紫女学園大学との連携による「ガムランワークショップ」を5月～2月の間に8回実施した。 ・教員を対象としたプログラムの実践 経験2年目教師、および経験11年目教師に対して社会貢献等の体験の場を提供した。経験2年目教師2名、11年目教師4名を受け入れた。			

「いこうよ！あじっぱ夏祭り」

「きゅうぱっくLite 青銅器のいろいろ」

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	あじ庵の展示替え	5回	－	－		2	2	2	5
	なりきり学芸員体験	40回	－	－		45	63	65	40

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、ギャラリートーク等の学習機会を提供する。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう努める。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2214-2

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)　歴史・伝統文化の理解促進　①　学習機会の提供　(2/3)			
担当者	担当部課	企画課	事業責任者	企画課長　小泉惠英 文化交流展室長　河野一隆
実績・成果	①シンポジウム・特別展記念講演会を開催した。 ②文化交流展、特別展に関連した教育普及事業を実施した。 ③ミュージアムトークを随時実施した。 ④文化施設等へ講師を派遣した。 ⑤特別展の内容に親しみをもたせ、より良く理解するためのワークショップを開催するとともに、文化交流展示の内容とも連携した事業展開を行った。			
補足事項	①中国より研究者を招聘した国際シンポジウム「契丹帝国(遼王朝)の美術と文化」(12 月 18 日)をミュージアムホールにて開催した。各特別展では記念講演会・シンポジウム等を実施した。内容は外部講師や著名ゲストを迎えての、より親しみやすい内容のものと、館外・館内研究者による学術的なものの両面を打ち出し、各層の期待に応えるものとなった。またいずれの特別展でも、地元自治体への出張講演を複数回実施した。 ③毎週火曜日（火曜休館の週は休み）に研究員によるミュージアムトークを実施した。(月 2 回～4 回で 15～30 分程度。1 回の平均参加人数は 30 名程度である。開催にあたっては昨年と同様に講師の調整は担当研究員が行い、実際の運営にあたってはボランティアコーディネーターの指導により、ボランティアの手で行われている。当館では展示替えが頻繁に行われていることから、展示解説ボランティアにとっても資料学習の良い機会となっている。ミュージアムトークでは、開館以来、展示品を来館者が分かりやすく、気軽に楽しめるスタイルを踏襲しており、web 上で告知することもあって、好評を博している。 ④各特別展では、近隣の高校や博物館等に研究員が出向き展覧会の見どころ等を講義した。 ⑤特別展では，観覧者の理解を助けるためのワークショップ・教育普及プログラムを実施した。また、学校教育プログラムと連携事業を実施した。			

ミュージアムトーク開催風景

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
講演会等								
実施回数	64 回	－	－		61	56	73	64
参加者数	3,996 人	5,255 人	B		4,168	5,507	6,806	3,996
内特別展記念講演会								
実施回数	9 回	－	－		7	11	6	9
参加者数	1,410 人	－	－		1,892	2,670	1,622	1,410
内ﾐｭｰｼﾞｱﾑﾄｰｸ								
実施回数	44 回	－	－		42	37	42	44
参加者数	1,320 人	－	－		1,320	1,096	1,285	1,320
内講演及びｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ								
実施回数	11 回	－	－		1	6	24	11
参加者数	1,266 人	－	－		316	1,555	3,849	1,266
内ﾐｭｰｼﾞｱﾑ講座								
実施回数	0 回	－	－		11	2	1	0
参加者数	0 人	－	－		640	186	50	0

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、ギャラリートーク等の学習機会を提供する。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう努める。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2214-3

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)　歴史・伝統文化の理解促進　　①　学習機会の提供(3/3)			
担当者	担当部課	総務課 交流課	事業責任者	総務課長　岩﨑英明 交流課長　宮本裕一
実績・成果	①キャンパスメンバーズ（大学会員制度）による大学との連携を継続して実施した。 ②近隣大学等と文化財保存技術および展示・教育普及に関する共同研究を計画した。 ③放送大学の面接授業を実施した。 ④博物館実習生の受け入れを実施した。			
補足事項	①キャンパスメンバーズ制度により大学との連携を継続させるため、今年度も募集・実施し、各教育機関（大学・専門学校・高校）が新規および継続で入会した。 キャンパスメンバーズ加入校　27 校 （大学　15 校・短期大学　4 校・専門学校　1 校・高等学校　7 校） ・会員校へ特別展の出張講義を実施した。（1 校） ・会員校の学園祭へ協賛した。（4 校） ・会員校へ博物館体験型講義を実施した。（1 校） ・本年度から新規に 1 校が加入した。特典の利用として、文化交流展（平常展）へ 4,710 名観覧、特別展へ 3,956 名観覧、パスポートを 1,759 名の学生会員が購入した。 ・会員校である筑紫台高校はキャンパスメンバーズ制度を活用し、授業のカリキュラムに当館の特別展観覧を組み込んでいる。特典である年間パスポートを学生全員が購入し、年 4 回の特別展を全て観覧、のべ約 3,290 人の高校生が来館した。そのうち、特別展「誕生！中国文明」については担当研究員が 1 年生向けに事前講義を行い、観覧のための事前学習の機会を提供した。 ・その他、文化交流展（平常展）においては 8 割を超す割合で利用している学校もあり、若年層への文化財観覧の機会の向上に資することができた。また、会員校へは博物館実習の機会も優先的に提供しており、継続的に連携している。 ④博物館実習は 13 大学 17 名を受け入れた。 なお、インターンシップによる研修生の受け入れは実績なし。			

出張講義の様子

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	キャンパスメンバーズ加入校	27 校	―	―		21	22	29	27
	放送大学面接授業の講師数	7 人	8 人	B		―	5	8	7

年度実績 評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画 記載事項	学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、ギャラリートーク等の学習機会を提供する。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう努める。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2221-1

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)歴史・伝統文化の理解促進　②-1 ボランティア活動の支援			
担当者	担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	ボランティア室長　鈴木みどり

実績・成果

・各種教育普及事業の補助的活動を継続して展開した。
・点字や手話による博物館案内を実施した。詳しくは処理番号 2311-1 を参照。
・ボランティアによるガイドツアー、ワークショップ等の充実を図った。
・児童・生徒の就業体験を受け入れた：学校数 33 校、生徒数 131 人
・館内の施設誘導案内を行い、来館者サービスに努めた
　通年(開館日は基本的に毎日実施)
　館内案内実施場所：4 箇所（本館 1・2 階エントランス，本館 17 室，本館 20 室）
・東京芸術大学学生ボランティアによる活動を継続して実施した。詳しくは処理番号 2211-3 を参照。
・震災の影響による 23 年 3 月 12 日～3 月 28 日の臨時休館に伴い、生涯学習ボランティアによるガイドツアー71 回、東京芸術大学学生ボランティアによるギャラリートーク 2 回を中止した。

補足事項

・各種教育普及事業等の補助（ハンズオン体験コーナー利用者数：98,891 人）、ボランティア自身の自主的な企画立案による活動、各種解説ツアーの実施により、来館者の生涯学習機会の増大に寄与し、来館者へのサービスを向上することができた。
　実施回数 522 回、参加人数 13,373 人
・各種ボランティア活動を通じてボランティアを育成し、館職員とボランティアとが相互協力することにより、教育普及活動が充実してきている。
・国際ボランティアデーにあわせ、東博ボランティアデーを 1 日実施し、生涯学習ボランティアの活動紹介を行った。
・東洋館の耐震補強工事に伴う、表慶館での東洋美術・考古の代替陳列が行われ、この陳列の紹介を目的とした生涯学習ボランティアによる「表慶館アジアギャラリーガイド」を事前の研修も含めて企画・立案・実施した。
・留学生の日、「博物館でお花見を」企画との連携で、各種プログラムを実施した。

生涯学習ボランティアが
ハンズオン体験コーナーの補助を行う

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
ボランティア数	159 人	－	－		162	171	163	159
うち生涯学習ボランティア登録者数	152 人	－	－	経年変化	153	164	155	152
うち東京芸術大学学生ボランティア数	7 人	－	－		9	7	8	7

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	教育普及活動の充実に寄与するようボランティア活動を支援し、ボランティアの資質向上に努める。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2222-1

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（2）歴史・伝統文化の理解促進　②－1ボランティア活動の支援			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	連携協力室長　山下善也
実績・成果	・京都橘大学との学術協定に基づき、当館研究員が事前講習を行ったのち、特別展示館出口にて来館者にアンケート回答の呼びかけを実施。 ・「調査・研究支援ボランティア」の募集と活動の充実を進めた。当館職員が行う調査・研究業務、展示替え作業の補助を行った。 ・「文化財ソムリエ」として登録している大学生・大学院生のボランティアに当館研究員がスクーリングを行ったのち、京都市内の小中学校への訪問授業等を行った。			
補足事項	・京都橘大学との学術協定に基づき、当館研究員が事前講習を行い、10 月 19 日から 29 日、11 月 9 日から 12 日までの毎火・水・金曜日の 10 時 00 分から 16 時 00 分まで、特別展示館出口にて来館者にアンケート回答の呼びかけを実施。終了後に結果の集計・分析を行った。 ・「調査・研究支援ボランティア」の募集と活動の充実を進めた。当館職員が行う収蔵品調査、社寺調査等の調査・研究業務の補助として、作品の計測、調書の作成、撮影等を行った。また、展示替えの際、作品の移動、収納等の作業の補助を行った。			

アンケートボランティア

文化財ソムリエによる訪問授業

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	ボランティア数	40 人	－	－		23 人	30 人	35 人	40 人
年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）								
中期計画記載事項	教育普及活動の充実に寄与するようボランティア活動を支援し、ボランティアの資質向上に努める。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調								

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2223-1

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)歴史・伝統文化の理解促進　②-1 ボランティア活動の支援			
担当者	担当部課	学芸部教育室	事業責任者	教育室長　吉澤　悟
実績・成果	・特別展、特別陳列の開催ごとに１～２回、当館職員による展示内容の研修を実施した。 ・全員にすべての展覧会図録を配布。解説と自己鍛錬のための学習資料とした。 ・正倉院展会期中にはボランティアによる講堂解説を実施した。教育室がスライド資料と原稿を作成し、立会研修を行った上、１～２週にわたる自主トレーニングを経て、実地に臨むよう指導した。 ・展示内容に関する質問用紙を用意し、学芸部職員がこれに回答する等の対応を行った。学芸部職員による担任制をとり、問題解説にあたっている。 ・世界遺産学習や一般解説の依頼に対して、教育室を中心に日時の調整から対応方法についてボランティアと打合せを重ねた。特に今年度は、工事等による閉館期間と世界遺産学習の対応が重なったため、新たに仏像コスチューム授業を実践したが、その調整に職員とボランティアが協力体制を組んだ。 ・韓国中央博物館の視察や、韓国の教員研修の一部などを受け入れ、ハングル対応のボランティアが解説・通訳を行った。			
補足事項	・解説ボランティアには自己学習と班内研鑽を奨励し、来館者に対しては人柄を生かした柔軟な対応をするよう求めている。 ・解説ボランティアの活動は、火曜から日曜までの開館日であるが、年５～６回の月曜開館および年末年始の開館においても活動可能な人に来館者対応を依頼している。 ・年度内に一度、全ボランティアと館長・職員による懇談会を行い、共に博物館を支える意識を共有している。 ・12 月の当館敷地内の発掘調査に対して、現場説明会にボランティアの中から有志を募り、解説に当たってもらった。 ・現時点でボランティアは随時募集をせず、定年制も行っていない。これは数年来の活動経験や知恵、そして個性を生かした人間味のある解説を目指すためである。その一方で高齢化が進んでおり、今後ボランティアの在り方について検討していく。 ・語学対応可能なボランティアの増化を引き続き呼びかけている。			

世界遺産学習「仏像コスチューム授業」

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	ボランティア数	85 人	－	－	経年変化	96	102	98	85

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	教育普及活動の充実に寄与するようボランティア活動を支援し、ボランティアの資質向上に努める。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2224-1

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)　歴史・伝統文化の理解促進　　②－１　ボランティア活動の支援			
担当者	担当部課	交流課	事業責任者	主任研究員　上野知彦
実績・成果	①ボランティアを受け入れ、展示解説部会、教育普及部会、館内案内部会（日本語、英語、中国語、韓国語）、環境部会、イベント部会、資料整理部会、サポート部会、学生部会の充実を図った。 ②ボランティアに対し資質向上を目的に基礎研修・専門研修を実施した。 ③ボランティア同士のグループ別学習の充実を図った。			
補足事項	・毎日 30 名前後、１ヶ月で延べ 1000 名を超えるボランティアが館内案内、４階文化交流展示室の解説案内、体験型展示室「あじっぱ」での体験活動のサポート、館内の IPM 活動に取り組んでいる。 ・開館５周年記念関連イベントの１つとして、参加体験型イベントを中心としたボランティア企画による「九博ボランティアフェスタ」を開催した。 ・語学系を中心とした自主的なグループ研修が活発になり、その活動を通してボランティア企画による広報紙等の作成が行われるようになった。 〔対応来館者数（団体数)〕　※事前予約団体分のみ 展示解説案内 : 6,518 人（197）　館内案内 : 4,896 人（121）　バックヤード : 3,027 人（124） ・１階エントランスホール、及び４階文化交流展示室の入口にボランティアガイド受付カウンターを設置し、来館者サービスの向上と共にボランティア活動の充実を図っている。 ・ボランティアによるイベントの開催においては、ボランティアの意欲や主体性を尊重。 ・「九博ボランティアフェスタ」のほか、九州国立博物館を愛する会と共催で市民・ボランティアによる手作りイベント「九博子どもフェスタ」を毎年２月に開催。 ・語学研修、展示物に関する研修、IPM（総合的有害生物管理）に関する研修を実施した。 ・グループ活動はボランティアの資質の向上、活動の活性化を目的とし、それを通して参加体験型のイベントの企画やコンテンツの開発を行っている。 ・博物館 IPM 活動の広報・周知を目的にボランティア企画による広報紙「みどりの広報」を作成し、関連機関・施設に配布している。 ・海外展「日本とタイ―ふたつの国の巧と美」において、九博ボランティア、九州国立博物館を愛する会とタイ在住ボランティアの協力を得て、日本の伝統的な遊戯を紹介するワークショップを実施した。（九博ボランティア 30 人参加）			

九博ボランティアフェスタの一コマ

手話によるバックヤードの案内

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	ボランティア数	288 人	－	－		293	388	345	288
	全体研修会	3 回	－	－		17	10	5	3
	部会別研修	193 回	－	－		105	95	149	193
	グループ研修	44 回	－	－		54	3	40	44

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	教育普及活動の充実に寄与するようボランティア活動を支援し、ボランティアの資質向上に努める。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2221-2

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2) 歴史・伝統文化の理解促進　②-2 博物館支援者の増加			
担当者	担当部課	総務課	事業責任者	総務課長　樋口理央

実績・成果

・友の会、パスポート及び賛助会等の会員の確保に努めるとともに、地域や企業との連携を推進した。

1)友の会・パスポート・平常展割引パス　会員数

種　別		22年度	(参考) 21年度
友の会（1万円）		1,412 人	2,085 人
パスポート	一般 4,000 円	12,870 人	20,392 人
	学生 2,500 円	863 人	1,206 人
平常展割引パス (2,500 円)		27 人	24 人

・オンラインによる友の会、パスポートの申込受付数:147 名(21 年度は 331 名)

2)賛助会　会員数

	22年度	(参考)21年度
特別会員	16団体	13団体
維持会員	28団体・個人191人	24団体・個人178人

・会員対象の特別鑑賞会等の実施　特別展内覧会　4回　事業報告会　1回

3)地域、機関との連携

①上野のれん会、上野法人会、上野の山文化ゾーン協議会等、地域の会合等に参加するとともに、台東区及び台東区所管財団法人、東京都、財団法人東芝国際交流財団、株式会社東京美術、三菱商事株式会社等と、展覧会の同時期開催、イベントへの協力、「留学生の日」協賛、障がい者向け内覧会等、さまざまな事業を行った。

②日本大学芸術学部との共催で、所沢市教育委員会及び新座市教育委員会後援、埼玉県民芸術文化祭協賛事業として、埼玉県所沢市に位置する柳瀬荘を会場に、「柳瀬荘アート・教育プロジェクト」を開催し、ワークショップ、美術学科教職員作品展など６つのプログラムを行った。（参加者合計 1,239 名）

・平成 23 年 1 月より募金箱を館内 3 箇所に設置した（本館玄関、本館 1 階 17 室、平成館玄関)。

補足事項

1)・賛助会団体維持会員・特別会員については新規に企業へのPRなどをした結果、増加した。
・個人の維持会員数についても、個別に制度の紹介をするなどした結果、参加者が増加した。

2)・地域との連携事業を進めるためには、相互の資源を活かせる企画を、展示計画と連動させつつ早期に立てることが重要である。
・所沢の柳瀬荘を活用した企画を地元の日本大学芸術学部と共催し、地域の住民を取り込んだ活動を実施し、一定の成果があったので、今後も継続していきたい。
・企業との連携を今後さらに推進していくためには、企業側にも魅力となるような事業を提案するなどの工夫を図っていく必要があると思われる。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
友の会会員数	1,412 人	－	－	経年変化	1,341	1,913	2,085	1,412
パスポート会員数	13,733 人	－	－		16,035	20,405	21,598	13,733
賛助会員								
特別会員数	16 団体	－	－		16	13	16	16
維持会員数(団体)	28 団体	－	－		24	26	24	28
(個人)	191 人	－	－		123	157	178	191

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図る。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2222-2

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)歴史・伝統文化の理解促進　②-2 博物館支援者の増加			
担当者	担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	総務課長　植田義雄 連携協力室長　山下善也
実績・成果	・「友の会」事業を継続して実施した。 会員数　2,468 人 ・支援団体が行う文化財の鑑賞会・見学会等に協力した。 ・「京都市内 4 館連携協力協議会」を実施した。 ・企業等との連携により、施設を活用したイベントの実施及び広報活動の充実を図った。 ・今年度より、博物館の諸活動への企業からの各種支援を募るため「ミュージアム・パートナー」制度を設置し、一企業がこの制度に協賛した。			
補足事項	・支援団体（社団法人清風会）が行う鑑賞会（4 回）・見学会（5 回）・会報（4 回）の解説・執筆に協力した。 ・「京都市内４館連携協力協議会」では、京都国立近代美術館、京都市美術館、京都文化博物館、京都国立博物館の 4 館が連携し、広報のための合同パンフレット 77,000 部の製作、友の会の相互協力を行った。 ・初めての試みとして、庭園を利用した「雨月物語」映画鑑賞会（計２回）を開催した。また、特別展覧会チケット半券による入場としたため、集客につながった。 ・自転車活用推進研究会及びアーティストであるリキュー氏の協力により「自転車発電エコライブ」を青空の下庭園を利用して開催した。なお、このイベントは今回が３回目となる。 ・人間国宝　桂米朝氏が所属している米朝事務所の制作協力による「京都・らくご博物館」を実施した。平常展示館建替中に伴い、今年度は 3 回実施した。 ・全館休館期間中に、音楽イベント「音燈華」を庭園を利用して開催した。武田高明氏の燈火による演出の元、ジュスカ・グランペールが音楽を奏で、大盛況であった。 ・「友の会」会員数においては、平常展示館建替工事中であるにもかかわらず、加入者数は前年度並となった。これは、「長谷川等伯」展開催中の「友の会」入会者数が非常に多かったこと、及び京都市内４館連携協力の成果によるものと思われる。			

自転車発電エコライブ

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	友の会会員数	2,468 人	―	―	経年変化	3,224	2,932	2,612	2,468
	ミュージアム・パートナー会員数	1 件	―	―		―	―	―	1
	清風会会員数	391 件	―	―		390	388	389	391

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図る。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名　奈良国立博物館　処理番号　2223-2

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)歴史・伝統文化の理解促進　②-2 博物館支援者の増加			
担当者	担当部課	総務課渉外室	事業責任者	総括専門職員　吉田貴至
実績・成果	・友の会 会員数　3,180 人（一般 3,009 人、学生 125 人、家族 46 人） ・賛助会　27 団体　37 人 特別支援会員：4 団体、特別会員：4 団体、一般会員（個人）：37 人、（団体）：19 団体 会員数の増加に伴い芳名板をリニューアルした。 ・特別展の実施に対して企業等から協力金等を積極的に獲得した。 ・アメリカン・エキスプレス社のカード会員向けポイント・プログラム「メンバーシップ・リワード」において、賛助会の一般会員（個人）に 1 年間入会できる交換アイテムを提供した。 ・特別陳列「お水取り」で企業から協賛金を獲得した。 ・奈良観光イベント「ライトアッププロムナード・なら　2010」、「なら燈花会」、「全国光とあかり祭」、「バサラ祭」、「なら瑠璃絵」に積極的に協力した。 ・３月末になら仏像館入口、新館入口に募金箱を設置した。			
補足事項	・賛助会員に対する特別観賞会を実施するなどのサービスを行い、あらゆる機会を通じて会員獲得に対する努力を行っている。 ・奈良市観光協会に入会し、新たな顧客層の開拓を図る。			

賛助会員芳名板

メンバーシップ・リワード
（アメリカン・エキスプレス社）

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	友の会会員数	3,180 人	－	－	経年変化	2,439	2,815	2,799	3,180
	賛助会会員数（総数）	64 件	－	－		45	49	56	64

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図る。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2224-2

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(2)　歴史・伝統文化の理解促進　　②―2　博物館支援者の増加			
担当者	担当部課	総務課 交流課	事業責任者	総務課長　岩﨑英明 主任主事　藤崎秀典
実績・成果	①友の会及びパスポート会員制度を継続して実施した。 ②支援団体や近隣地域と連携したイベントを実施し、広報活動の充実を図った。 ③寄附金を募る募金箱を２３年３月末に１階エントランスに設置した。			
補足事項	①友の会会員数　１４４名 パスポート会員数　３，３１８名 ②支援団体や近隣地域と連携したイベント ・ 九州国立博物館を愛する会」と連携して「九博こどもフェスタ」を開催。館内ボランティアや周辺自治体の協力を得て、地域のこどもたちを対象にしたイベントを実施した。 ・ 福岡女子短期大学（太宰府市）と連携して館内のカフェで定期的にコンサートを実施。地域連携の促進及び館内施設の有効利用を図った。 ・ 開館以来、５年連続で国の重要無形文化財である博多祇園山笠の飾り山をエントランスホールで展示。 この事業は、西日本新聞社との共同事業として実施した。 ・ 内容を勘案したうえで、自治体や文化団体の主催するイベントを受け入れ、各団体との連携を強化した。これらの様々なイベント事業の実施により来館者へのサービスが促進された。 ・ 支援団体である九州国立博物館を愛する会、参道会への内覧会を行った。 ・ 福岡空港に九州国立博物館宣伝用看板（電照広告）を設置した。 ・ 海外展「日本とタイ―ふたつの国の巧と美」において、九州国立博物館を愛する会、九博ボランティアとタイ在住ボランティアの協力を得て、日本の伝統的な遊戯を紹介するワークショップを実施した。			

九博こどもフェスタ風景

博多山笠展示風景

九州国立博物館宣伝用看板
（福岡空港）

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	友の会会員数	144 人	―	―		167	154	206	144
	パスポート会員数	3,318 人	―	―		3,252	3,120	3,914	3,318

年度実績 評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画 記載事項	企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図る。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2311-1

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3)快適な観覧環境の提供　①快適な観覧環境の提供　(1/6)			
担当者	担当部課	博物館教育課	事業責任者	ボランティア室長　鈴木みどり
実績・成果	・点字解説等の増刷版パンフレットの作成を継続し、配布した。 ・バリアフリー対応ボランティアを募り、研修等を実施。 ・当館ウェブサイトにおけるバリアフリーマップ制作のための調査を実施。 ・手話通訳つきガイドツアーを月１回（「たてもの散歩ガイド」）継続して実施。 ・聴覚障がい者対応のため、コミュニケーションボードの使用を開始。 ・車椅子研修を実施。			
補足事項	・平成 22 年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備事業「博物館をみんなのものにーハンズオン・ワークショップを中心にー」を実施し、当館のバリアフリー化の促進に寄与した。詳しくは処理番号 2211-2 を参照。			

ハンズオン教材の点字ラベルを作成

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	配布部数	10 部	―	―	経年	9	9	5	10
	増刷部数	15 部	―	―	変化	10	10	15	15

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	施設のバリアフリー化を進め、高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2311-2

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3) 快適な観覧環境の提供　①快適な観覧環境の提供　(2/6)			
担当者	担当部課	総務課	事業責任者	総務課長　樋口理央
実績・成果	・多言語による案内及び誘導サイン等を環境整備委員会に諮り順次整備している。 ・日ざしの強い日に、お客様の熱中症対策として、敷地内移動用の日傘の貸出を実施した。 ・新型インフルエンザの流行後も引き続き、各展示施設入口に消毒用アルコールを設置し、各展示施設の案内カウンター等にマスクを常備し、希望されるお客様へ実費にて販売した。 ・各特別展の際に障がい者内覧会を開催した。（三菱商事株式会社と共催） ・上野消防署の協力により、防災訓練を実施した。 ・貸出用車いすのうち、展示が見やすい座面昇降式車いす（４台）がある旨の看板を掲示した。 ・混雑時に、コインロッカーを一時的に増設した。 ・今までＡＥＤの設置がなかった法隆寺宝物館に設えた。 ・建物・黒門の野外解説版で劣化しているものを新調した。 ・老朽化していた本館救護室や茶室の備品を更新した。 （23 年 1 月の正門券売所リニューアル関連） ・これまで特別展看板側に総合文化展券売所があり、総合文化展掲示板側に特別展券売所があったため、お客様の誘導に不具合があった。このため、看板等に合うよう券売所を入れ替え、軒下にそれぞれのチケット売り場表示看板、料金表を夜間照明と併せ新設した。 ・日・英・中・韓の４か国語表記の券売機を導入した。 ・新たに９種類のクレジットカードを利用できるよう機器を設置した。 ・総合文化展チケットの画像を様々な作品や建物画像を印刷して楽しめるようにした。 （東日本大震災関連） ・激しい揺れが収まった後、お客様を前庭に誘導し怪我がないことを確認した。展示作品や収蔵庫は研究員が確認し、大きな損害がでていないことを確認した。 ・余震が続くため、夕方に臨時閉館とし、帰宅困難なお客様を平成館ラウンジに案内し、ソファや救護室ベッドを運び入れ、毛布を渡し休んでもらった。食事は、夕食は近所で買い物してもらい、朝食は当館で購入しておいたパンを配布した。ラウンジのミュージアムシアター告知用液晶モニターにテレビのニュース放送を流した。 ・外国人のお客様には、英語のわかる研究員が応対し、道路地図のコピーに目印を記入し、配布した。			
補足事項	・新たに日傘を 200 本購入した。 ・障がい者内覧会は、三菱商事株式会社が募集を行い、当館共催のうえ、閉館後に研究員が解説を行い、その後観覧していただいた。 「細川家の至宝」　5 月 29 日　164 人 「誕生！中国文明」　8 月 21 日　96 人 「東大寺大仏－天平の至宝－」　10 月 30 日　57 人 「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」　23 年 1 月 29 日　154 人 ・大地震当日は、近隣の台東区役所や国立科学博物館と連絡をとり、他の避難所や駅の情報をやり取りし、毛布を借りるなど連携を取った。			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	―	―	―	―		―	―	―	―

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	施設のバリアフリー化を進め、高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2311-3

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	（３）快適な観覧環境の提供　①快適な観覧環境の提供（3/6）			
担当者	担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	デザイン室長　木下史青
実績・成果	より快適な観覧環境を構築するため、展示照明を順次整備した。 a. 本館 11 室『彫刻』等に LED(発光ﾀﾞｲｵｰﾄﾞ)光源のカッタースポットライト照明を導入。 b. 本館 12 室『漆工』展示室をリニューアルし、低反射ガラスを使用した展示ケースを導入、また付属の下部照明に超高演色ＬＥＤを採用し、照明効果を飛躍的に向上させた。			

補足事項

a.　本館１１室　『彫刻』　（ほか本館18室、特別5室）の展示照明に、従来のハロゲンランプ光源の器具に加え、寿命の長いLED(発光ﾀﾞｲｵｰﾄﾞ)光源の器具を導入した。
- 以前から使用しているカッタースポットライトの光源は白熱系ランプであり、調光により色温度が変化したが、LEDでは色温度の変化が無い。
- LED照明は長寿命であることに加え、単一指向性が強いのが特徴で、彫刻等のモデリング効果に優れている。

a．本館 11 室『彫刻』（ほか 18 室、特別 5 室）

b.　総合文化展・本館12室『漆工』の展示室をリニューアルした。
- 展示ケースは低反射ガラスを使用した免震装置付ケースを新規に製作し、ケース付属の下部照明には超高演色ＬＥＤ光源の器具が採用された。
- このケース及び照明器具の採用により、漆工作品の様々な技法的魅力を引き出す展示が可能となった。
  特に低反射ガラスの採用は、展示照明の設計上の自由度を飛躍的に拡大させた。

ｂ．本館 12 室『漆工』

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
ａ．本館 11 室『彫刻』等	３件	－	－	経年変化	－	－	－	３件
ｂ．本館 12 室『漆工』	１件	－	－		－	－	－	１件

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	施設のバリアフリー化を進め、高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2311-4

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3)快適な観覧環境の提供　①快適な観覧環境の提供　(4/6)			
担当者	担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	教育普及室長　伊藤信二
実績・成果	①「日本美術の流れ」鑑賞のための4ヶ国語パンフレットの制作・配布 日本語：展示テーマと主な展示作品の解説を収録。展示替えに応じて、更新・配布した。 英語、中国語、韓国語：日本美術の基礎知識と、カラー図版で構成したパンフレットを改訂・配布した。 ②子供向けワークシート 見学のポイントを示し、鑑賞と理解を促すワークシート「本館見学マップ」「暮らしの道具今昔」「日本の伝統もよう」の3種を改訂、本館で配布。			
補足事項	日本美術の流れパンフレット　日本語版 計34回更新・制作 （第193号－226号　2011年3月末現在） 日本美術の流れパンフレットは、日本語、英語、中国語、韓国語いずれも、本館2階「日本美術の流れ」1室で配布した。 子供向けワークシートは本館2階1室、1階20 室での配布のほか、ホームページからもダウンロードが可能。 展示を理解するための有効な手段として多くの来館者に利用され、日本の伝統文化の理解促進に寄与した。 また、日本美術の流れパンフレット英語、中国語、韓国語と子供向けワークシートは内容が作品の展示替えに左右されないので、長期間にわたって配布できるようになった。			

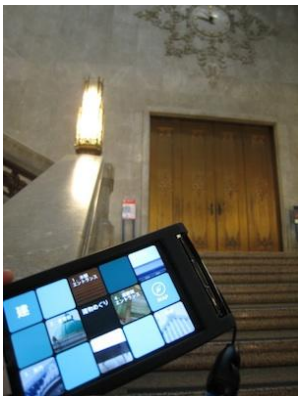
日本美術の流れ　外国語版パンフレット
（英語・中国語・ハングル）

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	日本美術の流れパンフレット更新回数	34回	－	－	経年変化	39回	36回	29回	34回

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	施設のバリアフリー化を進め、高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2311-5

中項目	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3)快適な観覧環境の提供　①快適な観覧環境の提供　(5/6)			
担当者	担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	課長 今井敦
実績・成果	・スマートフォン端末を利用した位置連動型ガイドシステム「とーはくナビ」の実証実験を行なった。総合文化展(平常展)の理解促進につながったほか、最新の技術を用いた展示ガイドの可能性の検証、将来の本格導入に向けて制作・運用上の問題点の解明に成果をあげることができた。 ・震災の影響による 23 年 3 月 12 日～3 月 28 日の臨時休館に伴い、この期間実施を中止した。そのため当初 23 年 1 月 17 日から 3 月 31 日としていた実験期間を、4 月 17 日まで延長する予定である。			
補足事項	・来館者にスマートフォン端末を無償で貸与し、総合文化展のガイドを行なった。 ・利用者は興味関心と観覧予定時間に応じて、「建物めぐりコース」「日本美術入門コース」「日本美術の流れコース」「リニューアルエリア体験コース」「法隆寺宝物館鑑賞コース」「日本美術じっくりコース」の 6 つのコースから選択し、無線 LAN を利用した位置連動機能をそなえたガイドにしたがって観覧する。 ・一部インタラクティブな機能を利用したコンテンツを用意した。	 「とーはくナビ」の使用イメージ		

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	ガイド端末貸出件数(3月31日まで)	2,217	－	－	経年変化	－	－	－	2,217

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	施設のバリアフリー化を進め、高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2311-6

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3) 快適な観覧環境の提供　①快適な観覧環境の提供　(6/6)			
担当者	担当部課	学芸企画部　企画課	事業責任者	特別展室長　松嶋雅人
実績・成果	下記の特別展で音声ガイドの貸出を実施した。 ・特別展「細川家の至宝―珠玉の永青文庫コレクション―」　33,507 件 ・特別展「誕生！中国文明」　15,291 件 ・特別展「東大寺大仏―天平の至宝―」　46,596 件 ・特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」　35,456 件 貸出数：計　130,850 件			
補足事項				

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	音声ガイド貸出件数	130,850件	－	－		256,441	305,135	360,901	130,850

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	施設のバリアフリー化を進め、高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2312

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3)　快適な観覧環境の提供　①快適な観覧環境の提供			
担当者	担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	総務課長　植田義雄 学芸部長　西上　実

実績・成果

・平常展示館の建替工事を継続中であり、来館者の観覧を騒音や振動で妨げないよう配慮した。
・外国人を含め来館者が気持ちよく観覧していただけるよう、２カ国語の観覧マナーの注意事項パネルを看視員が準備し、マナー向上のお願いの方法を改善した。
・展覧会において、入館待ち時間の情報等をウェブサイト等で迅速に発信した。また、「長谷川等伯」展においては、過去１週間の混雑状況を時系列でパソコン端末及び携帯端末向けに掲載した。
・当館職員、臨時要員、売店、レストラン従業員、(財)京都古文化保存協会学生ボランティアを対象とした「マナー講習会」を実施した。また、あわせて「クレーム講習会」も実施し、接客の向上に努めた。
・東山消防署の協力により、地域と連携した消防訓練を実施した。また、展覧会開催中に火災及び地震を想定した避難誘導訓練を実施し、職員等の意識を高めた。
・普通救命講習及びＡＥＤの取扱講習会を実施した。

補足事項

・特別展示館内及び庭園内において、混雑状況に応じて休憩場所の増加を行い、来館者が休憩しやすいようにした。前年度に引き続いて、日よけテント、待合所テントの設置、自動販売機及び観光客の旅行用大型バック（カート）が収納可能な大型コインロッカーの増設を行った。また、本館入口前にもコインロッカーを設置し、荷物を預け忘れた来館者が庭園まで戻る必要がないようにした。
・「長谷川等伯」展においては、臨時の救護所、飲料水販売所を設置し、救護所には看護師を配置した。また、待ち時間がはっきりとわかるよう、南門及び庭園内随所にも時間を明示し、京都駅前及び京阪七条駅前においても待ち時間表示を行った。
・音声ガイド利用台数
　・特別展「長谷川等伯」
　　（日本語版・一般向け）36,843 台
　・特別展観「上田秋成」
　　特集陳列「新収品展」
　　（日本語版・一般向け）1,493 台
　・特別展「高僧と袈裟」
　　（日本語版・一般向け）1,927 台
　・特別展「筆墨精神」
　　（日本語版・一般向け）5,734 台
　・特別展「法然」
　　（日本語版・一般向け）1,671 台（～3/31 まで）
・事務職員はすべて普通救命講習を受講し、衛士は上級救命講習を受講している。AED 取扱については繰り返し訓練を行った。

臨時コインロッカー及び自動販売機設置テント
（右手奥は清涼飲料水販売所）

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
音声ガイド貸出件数	47,668 件	－	－		50,344	34,597	78,797	47,668
リーフレット	6 カ国語	6 カ国語	A		6 カ国語	6 カ国語	6 カ国語	6 カ国語

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	施設のバリアフリー化を進め、高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2313

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3) 快適な観覧環境の提供　①快適な観覧環境の提供			
担当者	担当部課	総務課	事業責任者	利用者サービス係長　築部一男

実績・成果

・快適な観覧環境を提供するため展示ケースを一新し､透過性のあるガラスを使用して見やすくした。また、なら仏像館の回廊の照明が暗く、展示している仏像が見えにくいという声に対応し、照明工事を行い、これを改善した。
・「正倉院展」期間中に、新たに託児室を開設し、多数の利用があった。
・「正倉院展」期間中に入場待ち列テントを設置、看護師の館内常駐を実施した。
・「正倉院展」期間中に混雑緩和のため、会場入り口での入場制限や 11 月 3 日には団体入場の制限を行った。
・正倉院展入場待ちのお客様サービスとしてモニターによる日曜美術館の放映や正倉院展の号外新聞を配布した。
・地元ボランティア団体と協力して外国人用案内ブースを設置し、英語による案内を行った。
・お客様の入場を分散するために閉館前入場割引制度（オータムレイト料金）を設定し、オータムレイト券購入者には記念品を配布した。
・客数情報システムを導入し、展示室内の観覧者数を正確に把握できるようにし、混雑時に適切な入場案内を行えるようにした。
・特別展において、音声ガイドの貸出を行い、入館者が展示内容に理解を深めながら観覧できるようにした。
・入館者サービスの一環として館内サインを統一した。
・観覧券（入場券）をクレジットカードで購入出来るようにした。

補足事項

・新設した託児室は、保育士 2 名を常駐して 1 歳児から未就学児までを預かり、予約制で実施した。遠くは、神奈川県、群馬県、福岡県等から来られ、会期中 196 名の利用があり、みなさまに喜んでいただいた。
・オータムレイト料金とは、閉館の 1 時間 30 分前以降に販売する当日券の割引料金で、一般が 1,000 円のところ 700 円で販売した。オータムレイト券購入者に記念品として第 3 回正倉院展ポスターの一部を模したしおりを配布した。

託児室

・大遣唐使展においては、耐震工事中で会場が分断されたため、会場の移動途中に、展覧会関連の映像を流す等配慮した。
・展示ケースを一新し、透過性のあるガラスを使用しているので見やすくなった。

正倉院展入場待ち列テント

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
音声ガイド貸付件数	69,219 件	－	－		37,110	60,356	51,970	69,219
リーフレット	7 カ国語	7 カ国語	A		7 カ国語	7 カ国語	7 カ国語	7 カ国語

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	施設のバリアフリー化を進め、高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2314

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3)　快適な観覧環境の提供　　①　快適な観覧環境の提供			
担当者	担当部課	企画課 総務課	事業責任者	企画課長　小泉惠英 文化交流展室長　河野一隆 総務課長　岩﨑英明
実績・成果	・快適な観覧環境を提供するため、文化交流展示室において来館者ニーズに合った情報提供を行うためのプログラムの研究・開発、および混雑対策など観覧環境の整備を行った。 ・７カ国語（日本語、英語、中国語、韓国語、仏語、独語、西語）のリーフレットを継続して制作した。 ・英語・中国語・韓国語による簡単な展示解説付きマップを作成し、配布した。 ・混雑が予想される展覧会について、入場者調整、展示レイアウトの工夫を行い、展覧会場の快適な環境維持に努めた。また、障がい者のための特別観覧日を設けた。 ・解説題箋や館内サインを必要に応じて新装した。 ・開館以来、破損等の原因により使用に支障が出ていたケースについて、ガラス交換や外装のタッチアップ等の作業を実施した。 ・竣工以来、６年を経過する映像機器、調光機器の老朽化等を考慮して、使用していない展示情報に係るコンピュータシステムの整理や機器の更新を行った。 ・特別展ごとに展覧会の内容のより深い理解を助けるための音声ガイドを作成した。 ・太宰府消防署の協力により、地域と連携した防災訓練を実施した。 ・電子マネー（nimoca）を導入した。 ・IC エコまちめぐりシステム端末を設置した。			
補足事項	○情報システムやコンピュータ機器、ケースの更新や修理を進め、老朽化に伴う機器トラブルを回避するための準備を進めた。 ○混雑が予想される展覧会について ・混雑した「没後 120 年　ゴッホ展」において、期間中に入場待ち列用のテントを設置した。 ・混雑緩和のため、入場者数を適宜調節することにより快適な観覧環境への提供に努めるとともに、混雑状況をホームページ・携帯サイト等で情報提供するなどの対策を講じた。 ・休館日に障がい者の日を設けることで、障がい者の方にも静かな観覧環境を提供した。（参加者　障がい者・介護者　527 名） ・看護師の館内常駐を実施した。 ○nimoca 端末を導入し電子マネー決裁が可能になり、来館者の利便性を向上した。 ○IC カードリーダー又は二次元バーコードを携帯で読み取り登録することで、携帯サイトから観光情報を得ることができるようになった。			

「没後 120 年　ゴッホ展」
入場待ち列用テント

障がい者の日観覧風景

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	音声ガイド貸出件数	81,717	－	－		74,367	67,663	139,159	81,717
	うち特別展	73,130	－	－		62,661	59,547	133,833	73,130
	うち文化交流展示	8,587	－	－		11,706	8,116	5,326	8,587

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	施設のバリアフリー化を進め、高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2321

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3) 快適な観覧環境の提供　②満足度調査及び専門家からの批評聴取による管理運営の改善			
担当者	担当部課	総務課	事業責任者	総務課長　樋口理央

実績・成果

○特別展アンケート
すべての特別展で実施し、どの展覧会も 74～83%と概ね高い満足度となった。
昨年度開催の特別展「国宝 土偶展」から導入しているタッチパネルアンケートシステムを、22 年度のすべての特別展で設置した。
○平常展アンケート（22 年 4 月～12 月）：紙媒体でのアンケート
回収サンプル数 446 件（日本語 307 件、英語 104 件、韓国語 30 件、中国語 5 件）
満足度 88%（とても満足 48%、やや満足 40%、どちらともいえない 7%、やや不満 3%、とても不満 2%）※無回答分を含まず

○総合文化展アンケート
23 年 1 月 2 日からの本館リニューアルと「平常展」から「総合文化展」への改称に合わせ、本館玄関ホールへ新規に「総合文化展」タッチパネル式アンケートシステムを導入した。
※経年変化比較のため、定量評価は上記紙媒体でのアンケートを使用

補足事項

・特別展アンケート結果から、どの展覧会も平均して高い満足度となった。この結果を踏まえ、次年度以降の展覧会でもより高い満足度となるよう、アンケートを積極的に活用していきたい。特にキャプションやディスプレー設置場所などに注意したい。
総合文化展タッチパネル式アンケートシステム導入後の調査結果は下記のとおり。
導入後（23 年 1 月～3 月）：
回収サンプル数 1,445 件（日本語 1,013 件、英語 206 件、韓国語 64 件、中国語 162 件）
満足度 72%（とても満足 25%、やや満足 46%、どちらともいえない 20%、やや不満 3%、とても不満 6%）※無回答分を含まず

タッチパネル式アンケート（左：特別展「仏教伝来の道－平山郁夫と文化財保護」、右：総合文化展）

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
細川家の至宝	83%	－	－	経年変化	－	－	－	－
誕生！中国文明	76%	－	－		－	－	－	－
東大寺大仏―天平の至宝―	74%	－	－		－	－	－	－
仏教伝来の道 平山郁夫と文化財保護	80%	－	－		－	－	－	－
平常展	88%	－	－		－	84%	89%	88%

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的に実施する。調査結果から入館者のニーズを把握し、入場料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行う。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2322

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3)　快適な観覧環境の提供　②満足度調査及び専門家からの批評聴取による管理運営の改善			
担当者	担当部課	総務課	事業責任者	総務課長　植田義雄
実績・成果	・入館者アンケートを実施 特別展覧会「長谷川等伯」満足度 91% 回答数 2,435 件（良い 74%、まあまあ良い 17%、どちらでもない 3%、あまり良くない 1%、良くない 1%） 特別展観「上田秋成」満足度 78% 回答数 365 件(良い 43%、まあまあ良い 35%、どちらでもない 12%、あまり良くない 3%、良くない 4%) 特別展覧会「高僧と袈裟」満足度 84% 回答数 371 件(良い 55%、まあまあ良い 29%、どちらでもない 11%、あまり良くない 1%、良くない 2%) 特別展覧会「筆墨精神」満足度 88% 回答数 297 件(良い 63%、まあまあ良い 25%、どちらでもない 4%、あまり良くない 4%、良くない 0%) ・特別展覧会等に関する専門家の展覧会評を求め、「博物館だより」に掲載した。 ・モニターを委嘱し、提言を受けることで、展覧会を含めた博物館運営に反映した。 ・通常のアンケートとは別に、学生ボランティアによる呼びかけアンケートを行ってより細かなニーズを調査するとともに、館内で情報を共有した。			
補足事項	・特別展覧会において入館者アンケートを実施し、質問等には電話等で回答した。 ・平常展示館は建替工事に伴い休館中であるため、特別展覧会の入館者アンケートのみ実施した。			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	平常展満足度	－%	－	－	経	72%	70%	－	－
	長谷川等伯展満足度	91%	－	－	年	－	－	－	－
	上田秋成展満足度	78%	－	－	変	－	－	－	－
	高僧と袈裟展満足度	84%	－	－	化	－	－	－	－
	筆墨精神展満足度	88%	－	－		－	－	－	－

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的に実施する。調査結果から入館者のニーズを把握し、入場料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行う。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2323

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3)快適な観覧環境の提供　②満足度調査及び専門家からの批評聴取による管理運営の改善			
担当者	担当部課	総務課	事業責任者	利用者サービス係長　築部一男
実績・成果	・名品展アンケート（全開館日） 回答数　342 件（良い 74.7%、普通 9.1%、良くない 5.3%、無回答 10.9%） ・英語版名品展アンケート（全開館日） 回答数　83 件 ・特別展アンケート 「大遣唐使展」 回答数 892 件（良い 84.6%、普通 8.2%、良くない 4.7%、無回答 2.5%） 「仏像修理 100 年」「至宝の仏像」 回答数 551 件（良い 87.9%、普通 7.8%、良くない 3.1%、無回答 1.2%） 「第 62 回正倉院展」 回答数 1,008 件（良い 77.1%、普通 13.7%、良くない 6.1%、無回答 3.1%） ・特別展について、専門家の展覧会評を「博物館だより」に掲載			
補足事項	（アンケートなどの意見を反映して、改善したこと） ・観覧料金の支払いをはじめミュージアムショップやレストランでクレジットカードや電子マネーを利用できるようにした。 ・トイレの設置個所の増設に努め、西新館１階にトイレ（男・女）を新たに設置した。 ・なら仏像館の回廊の照明が暗く、展示している仏像が見えにくいという声に対応し、照明工事を追加し、これを改善した。 ・アンケートの結果を受けて開館時間の延長を行った。 ・ホームページの御意見箱の質問に対し、迅速に対応した。 ・展示室が暗いとの意見があったが、西新館のリニューアルに伴いこれを一新し、展示室が明るくなったとのお客様の声が増えた。			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	名品展満足度	74.7%	－	－		66%	67%	68.4%	74.7%
	大遣唐使展満足度	84.6%	－	－	経年	－	－	－	－
	仏像修理 100 年･至宝の仏像満足度	87.9%	－	－	変化	－	－	－	－
	正倉院展満足度	77.1%	－	－		68%	75%	79.3%	77.1%

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的に実施する。調査結果から入館者のニーズを把握し、入場料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行う。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2324

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3) 快適な観覧環境の提供　② 満足度調査及び専門家からの批評聴取による管理運営の改善			
担当者	担当部課	総務課	事業責任者	総務課長　岩﨑英明
実績・成果	①平常展アンケート　満足度 59%　　回答数 292 件 （とても良い 30%、良い 29%、普通 16%、あまりよくない 4%、よくない 9%、無回答 12%） ②特別展アンケート 「パリに咲いた古伊万里の華」　満足度 95%　　回答数 6,815 件 （とても良い 65%、良い 30%、普通 3%、あまりよくない 0%、よくない 0%） 「馬　アジアを駆けた二千年」　満足度 80%　　回答数 620 件 （とても良い 36%、良い 44%、普通 12%、あまりよくない 4%、よくない 2%） 「誕生！中国文明」　満足度 89%　　回答数 347 件 （とても良い 55%、良い 34%、普通　6%、あまりよくない　1%、よくない 1%） 「没後 120 年　ゴッホ展」　満足度　85%　　回答数　3,387 件 （とても良い 56%、良い 29%、普通 7%、あまりよくない 2%、よくない 3%）			
補足事項	①平常展アンケート ・年齢層 （10 代以下 34%、20 代 5%、30 代 11%、40 代 7%、50 代 14%、60 代 13%、70 歳以上 8%、無回答 8%） 社会科見学等、学校行事で観覧する学生が多い。 ・認知経路 （テレビ・ラジオ 16%、ちらし・ポスター 15%、新聞 12%、人から聞いて 12%、ウェブサイト 5%、学校 12%、雑誌 4%、季刊誌アジア―ジュ 1%、その他 9%、無回答 14%） テレビ・ラジオでの認知が高いが、学生の観覧者が多いため、学校からの認知も高い。 ・管理運営の改善のためアンケート結果を関係各課へ回覧している。 ②特別展アンケート ・「没後 120 年　ゴッホ展」において、アンケート結果から開館時間の延長を行った。			

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
平常展満足度	59%	—	—	経年	64%	63%	66%	59%
古伊万里の華展満足度	95%	—	—	変化	—	—	—	—
馬展満足度	80%	—	—		—	—	—	—
中国文明展満足度	89%	—	—		—	—	—	—
ゴッホ展満足度	85%	—	—		—	—	—	—

年度実績 評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画 記載事項	一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的に実施する。調査結果から入館者のニーズを把握し、入場料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行う。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2331

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3)快適な観覧環境の提供　③ミュージアムショップやレストラン等の改善			
担当者	担当部課	総務課	事業責任者	総務課長　樋口理央
実績・成果	ミュージアムショップやレストラン等の利用者サービスの向上に努めた。 また、ミュージアムショップに関連した企画等に協力した。 ・ミュージアムショップを運営する東京国立博物館運営協力会(以下「協力会」という。)と、「ミュージアムショップグッズ開発等会議」を開催し、商品の充実及びオリジナル商品の製作について協議・検討を行った。 ・新たな絵はがきとして今年度は、20種類を製作した。 ・台東区立書道博物館と連携した特集陳列「拓本とその流転」の開催期間中、書道博物館の図録も販売し、当館と他館との連携事業に協力した。 ・レストランでは、正月にお年玉プレゼントや甘酒の振る舞いサービスの実施、展覧会にあわせメニューを変える等サービスの向上に努めた。			
補足事項	・新たなミュージアムグッズとして、代表的な館蔵品をモチーフとしたオリジナル切手を製作販売した。 ・上記以外のミュージアムグッズについても、その都度協力会と協議を重ね、新たな商品の開発に貢献した。(八橋蒔絵硯箱模様ボールペン、館蔵の名品の額絵など) ・今後も、ミュージアムショップやレストランと連携協力を図りながら、利用者のニーズをより適切に反映できるよう努めていく必要がある。			

オリジナル切手

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	—	—	—	—	経年変化	—	—	—	—

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F (S、Fの理由)
中期計画記載事項	ミュージアムショップやレストラン等のサービスについては利用者の意見を収集し、改善する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2332

中項目	２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3)快適な観覧環境の提供　③ミュージアムショップやレストラン等の改善			
担当者	担当部課	総務課	事業責任者	総務課長　植田義雄
実績・成果	・南門施設は平成２１年７月にリニューアルオープンし、ミュージアムショップ、レストラン、インフォメーションコーナーと共に入館料を払わずに来館者が利用できるスペースとなっている。３業務とも外部業者に委託しているが、連絡を密にとり、当館の要望に応えた形での運営を心がけた。 ・接客の向上として、当館が開催するマナー講習会及びクレーム講習会に参加した。 【インフォメーション】 ・展覧会関係のチラシ及び京都市観光協会の協力より京都観光などのチラシを置き、案内所には英会話のできる人員を配置し、当館の案内だけではなく京都市内の観光案内も行った。来館者にも好評である。 ・ぐるっとパスの販促用グッズを設置し、ぐるっとパス加盟館として販促を実施した。 【ミュージアムショップ】 ・来館者が手軽にお買い求めいただける絵はがき等を中心にオリジナルグッズを作成した。 ・絵はがき販売総数は 350 種類に上り、日本美術を中心としたグッズを販売した。 【レストラン】 ・アンケートを実施したところ、来館者におおむね満足いただけているが、集計した内容をレストラン側に提出し、さらなる接客の向上に努めた。			
補足事項	・展覧会ごとにオリジナルグッズや関連グッズ、関連書籍等と取りそろえ、来館者へのサービスを行った。 ・来訪できない方には、図録等の通信販売を実施して対応した。 ・レストランの新メニューとして、コーヒー類を刷新し、コーヒーの最高峰と言われるブルーマウンテンＮｏ．１や、茶葉から抽出する紅茶を充実させた。 ・これらは、レストランを利用した来館者の声により改善したものである。 ・インフォメーションコーナー、ミュージアムショップ、レストラン共通の営業カレンダーを制作し、掲示した。 ・博物館が全館休館中であっても、通常通り営業を行った。	 南門施設インフォメーション		

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	―	―	―	―		―	―	―	―

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	ミュージアムショップやレストラン等のサービスについては利用者の意見を収集し、改善する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2333

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3)快適な観覧環境の提供　③ミュージアムショップやレストラン等の改善			
担当者	担当部課	総務課	事業責任者	利用者サービス係長　築部一男
実績・成果	・「正倉院展」では、常設のレストラン及びミュージアムショップ以外に、敷地内に飲食店やグッズ販売等のショップが出店した。 ・平城遷都 1300 年にちなんでミュージアムショップで記念グッズを取り扱った。 ・ミュージアムショップで新しいオリジナルグッズを追加作成し、お客様のニーズに応えた。 ・ミュージアムショップやレストラン等でクレジットカードを利用できるようにした。 ・季節毎にお客様に対して、ミュージアムショップを知っていただき、また親しんでいただくために「七夕に願を」「ビーズで作ろう！元気が出る仏像」等のキャンペーンを実施した。 ・観覧料金の支払いをはじめミュージアムショップやレストランで、クレジットカード（種類：ビザ、マスター、JCB、アメックス、ダイナース）や電子マネー（種類：ピタパ、イコカ、銀聯）を利用できるようにした。			
補足事項	・ミュージアムショップのオリジナルグッズとして、「元気が出る仏像シリーズ」の新商品オリジナル・マグネットを作成した。 ・事業仕分けの対象となり、業者選定の企画競争を行った。 ・ミュージアムショップ、レストランと定期的に連絡会を行い、商品の開発や改善を検討することとした。			

平城遷都 1300 年記念グッズ

オリジナルグッズ

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	―	―	―	―		―	―	―	―

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	ミュージアムショップやレストラン等のサービスについては利用者の意見を収集し、改善する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2334

中項目	2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

事業名	(3)　快適な観覧環境の提供　③ミュージアムショップやレストラン等の改善			
担当者	担当部課	広報課	事業責任者	広報課長　不動勝義
実績・成果	①ミュージアムショップでは、特別展、文化交流展の展示内容に即した商品陳列を行い、オリジナル商品の陳列面積を増やすとともに地場産業のお菓子・グッズなどを提供した。 ②レストランでは、特別展に関連したメニューを期間限定で提供した。			
補足事項	①博物館の記念セレモニーにあわせた記念セット商品を販売した。 トピック展示「茶の湯を楽しむⅢ」の会期中は、お茶に関連した商品の陳列コーナーを設けるなど、展示と連動した商品展開を実施した。 ②特別展に関連したメニューを提供した。 夏に開催した特別展「馬　アジアを駆けた二千年」では、話題性を意識し、時代を駆け抜けた坂本龍馬をイメージした「龍馬御前」（松花堂弁当）　2,100円 温泉玉子西京漬（京都）、蒸大根あちゃら漬（鹿児島・指宿）、若鶏文化大砲巻（長崎・野崎島）などを提供した。			

5周年記念セット

「龍馬御前」

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	―	―	―	―		―	―	―	―

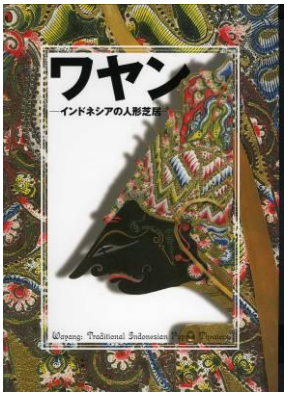
年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	ミュージアムショップやレストラン等のサービスについては利用者の意見を収集し、改善する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 3111

中項目	3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	(1)　収蔵品等に関する調査研究の成果の発信			
担当者	担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	出版企画室長　立道惠子
実績・成果	・（博物館情報アーカイブについて詳細は処理番号 6611 参照） ・（国際的な講演・研究集会について詳細は処理番号 3211 参照） ・定期刊行物（紀要・図版目録・修理報告書・法隆寺献納宝物調査概報・研究誌『MUSEUM』（年 6 回））5 件、特別展図録・特集陳列印刷物（特別展図録『細川家の至宝―珠玉の永青文庫コレクション―』・特集陳列図録『清朝末期の光景―小川一眞・早崎梗吉・関野貞―』等）8 件、特集陳列リーフレット（『日本美術の流れ 浮世絵』等）4 件、その他（『ザールデリー―パキスタン古代仏教遺跡の発掘調査―』・『根付 高円宮コレクション』）2 件を刊行した。これらの出版物により、国内外に広く当館の収蔵品に関する調査研究の成果を発信することができた。			
補足事項	・『東京国立博物館紀要』には、舟木家本「洛中洛外図屏風」の近世初期風俗画における位置づけ（田沢裕賀）、海外日本美術展にみる「日本」（鬼頭智美）の研究論文 2 本を収録。当館所蔵品の詳細な研究報告は、研究員の責務を果たすものである。 ・『東京国立博物館図版目録 古写経篇』には、当館の収蔵品約 800 点を掲載し、その全貌を明らかにした。 ・『法隆寺献納宝物調査概報ＸＸXI』は、国宝聖徳太子絵伝 10 面のうち、第 7・8 面についての詳細な調査報告である。彩色の剥離等により図様が不明瞭であったが、拡大写真を多用し、解説を付すことによって描かれた内容が把握できるようになった。聖徳太子研究に寄与するところが大きい。 ・特集陳列の図録は、その内容や展示作品のみを紹介したものではなく、多くの参考図版を入れたわかりやすい解説書として、来館者より好評を得ている。特に、『ワヤン―インドネシアの人形芝居―』の図録には、当館としてはじめて、巻末にワヤンのポップアップカードを付けるなど、多くの方々に作品に親しんでもらえる図録の制作を心がけた。 ・『ザールデリー―パキスタン古代仏教遺跡の発掘調査―』は、当館がはじめて行った国際的な学術発掘調査の報告であり、パキスタンにおける仏教美術・考古学の研究に大いに寄与するものである。 ・『根付 高円宮コレクション』は、故高円宮殿下が妃殿下とともに蒐集された根付が当館に寄贈されるにあたり制作された図録であり、現代根付を広く紹介するものである。			



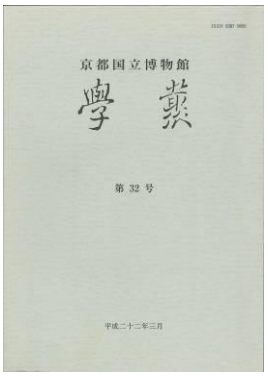
特集陳列　『ワヤン―インドネシアの人形芝居―』の図録

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	Museum 発行	6 回	6 回	A	経年変化	6	6	6	6
	定期刊行物	5 件	―	―		5	6	6	5
	特別展図録・特集陳列印刷物	12 件	―	―		6	11	10	12
	その他	2 件	―	―		1	2	2	2

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	収蔵品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会にかかわる刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 3112

中項目	３　我が国における博物館のナショナルセンターとしての機能の強化

事業名	（１）　収蔵品等に関する調査研究の成果の発信			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	学芸部長　西上　実
実績・成果	・仏教美術に関するシンポジウムの報告書「予言と調伏のかたち」を刊行した。 ・（特別展覧会「高僧と袈裟」関連国際シンポジウムについて詳細は処理番号 3212 参照） ・研究紀要「学叢」第 32 号を刊行した。 ・社寺調査報告書２４（光明寺）を刊行した。 ・文化財修理報告書６、７　を刊行した。 ・社寺調査の成果を盛り込んで特別展覧会「法然」を開催し、図録を刊行した。 ・各収蔵先での調査成果を盛り込み特別展覧会「長谷川等伯」を開催し、図録を刊行した。 ・各収蔵先での調査成果を盛り込み特別展観「上田秋成」を開催し、図録を刊行した。 ・各収蔵先での調査成果を盛り込み特別展覧会「高僧と袈裟」を開催し、図録を刊行した。 ・各収蔵先での調査成果を盛り込み特別展覧会「筆墨精神」を開催し、図録を刊行した。 ・平成 20～21 年の新収品について調査成果を盛り込み、「新収品展」を開催し、公開した。		
補足事項	・『学叢』第 32 号で、論文 3 本、作品研究 2 本、調査報告 1 本を発表した。  『学叢』第 32 号			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	—	—	—	—		—	—	—	—

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	収蔵品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に関わる刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信する。また、各種セミナー、シンポジウムを開催する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 3113

中項目	3　我が国における博物館ナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	(1)　収蔵品等に関する調査研究の成果の発信			
担当者	担当部課	学芸部企画室	事業責任者	企画室長　稲本泰生

実績・成果

・研究紀要『鹿園雑集』12 号を刊行し、同誌及び各種の学術誌において、研究員各自の収蔵品等に関する調査研究成果を発表した。
・「正倉院展」会期中に正倉院学術シンポジウム 2010「正倉院宝物はどこで作られたか」（10 月 24 日、奈良県文化会館、参加者数 186 名）を開催した。
・前年度に引き続き、『鹿園雑集』12 号に「奈良国立博物館文化財保存修理所修理一覧」を掲載し、修理成果の一端を紹介した。また、併せて修理報告資料を整理した。
・前年度に引き続き、ホームページ上で研究紀要『鹿園雑集』のバックナンバーを公開し、また文化財保存修理所で修理した文化財を、入場無料ゾーンを利用し写真パネル等で展示した。
・『平城遷都 1300 年記念　大遣唐使展』（特別展図録）、『仏像修理 100 年』（特別展図録）、『第 62 回正倉院展』（特別展図録）、『The 62th Annual EXHIBITION OF SHOSO-IN TREASURES』（特別展英語版図録）、『おん祭と春日信仰の美術』（特別陳列図録）、以上４冊の展覧会目録を刊行、また特別展「至宝の仏像」開催に併せて『なら仏像館　名品図録』を刊行した（以上は全て作品解説付き、展覧会担当者の総論や各論等を掲載）。
・平成 14 年以来取り組んできた東大寺の塑造神将像に関する光学調査等の成果をとりまとめた報告書『奈良時代の塑造神将像』（中央公論美術出版、12 月刊）を刊行した。
・当館敷地内に存在する春日東西両塔跡及びその周辺遺跡の状況を正確に把握し、今後の保存に資するべく、本館南東に調査区（219 ㎡）を設け、奈良文化財研究所と共同で発掘調査を実施した（11 月 15 日～12 月 27 日）。調査の過程で、東塔院の北東隅の位置を確定する遺構の検出などの成果が得られ、新聞各紙で取り上げられた。12 月 17 日～21 日には現場見学会を実施（参加者約 300 名）し、概要をまとめた資料を配布した。
・読売新聞紙上で「鹿園観照－奈良国立博物館で見る名宝」を連載し、展示作品について定期的な紹介を行った。また特別展開催期間中にも読売新聞紙上で出陳品紹介の連載を行った。

補足事項

① 最新の調査研究の成果を盛り込んだ展覧会目録を刊行し、いずれも非常に充実した内容であるとの評価を得た。
② 塑造神将像の報告書では、塑像の内部構造に関する従来の定説を覆す、当館の調査による画期的発見を、広く示すことができた。
③ 特別展の会期中、それぞれの内容に応じた学術シンポジウムを開催した。いずれも第一線で活躍する研究者を招聘し、知的刺激に満ちた研究発表・討論を催すことができた。
④ 敷地内における発掘調査は、奈文研との初の共同調査であることが特筆される。
⑤ 新聞紙上で展示品・所蔵品についての解説や研究成果の発表を行い、当館の活動を広く一般にアピールできた。

正倉院学術シンポジウム風景

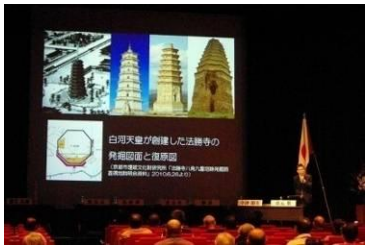
定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
展覧会図録刊行	5 冊	－	－	経年変化	6	7	5	5
シンポジウム開催	2 回	－	－		2	1	3	2
研究発表・講演	15 回	－	－		4	4	35	15
研究論文等	33 本	－	－		21	16	22	33
「たより」刊行	4 回	－	－		4	4	4	4
新聞への連載	33 回	－	－		37	55	51	33

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	収蔵品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に関わる刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信する。また、各種セミナー、シンポジウムを開催する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 3114

中項目	3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	(1)　収蔵品等に関する調査研究成果の発信			
担当者	担当部課	交流課 博物館科学課 企画課	事業責任者	交流課長　宮本裕一 環境保全室長　今津節生 保存修復室長　藤田励夫 主任研究員　鳥越俊行 文化交流展室長　河野一隆
実績・成果	①研究紀要『東風西声』第６号を刊行（3 月発行)。特別展図録を刊行。 ②国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」を開催した。 ③文化財修理に関する印刷物を刊行した。 ④保存修復活動の成果を教育普及事業に反映させた。 ⑤広報テレビ番組「九博のたからもの」(RKB テレビ）の制作・放送（5 月～9 月） ⑥新聞紙上で展示作品紹介の連載を行った。			
補足事項	①特別展図録『パリに咲いた古伊万里の華』・『馬　アジアを駆けた二千年』・『誕生！中国文明』　・『没後 120 年　ゴッホ展』・『Artisanship and Aesthetic of Japan and Thailand』を刊行した。 ②国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」を開催した。 ③『九州国立博物館　博物館科学部門の取り組みⅢ（2009-2010）』にて、「国宝　琉球王国尚家関係資料の修復工程」を報告した。 ④文化財保存修復研修、古文書保存基礎講座、文化財保存交流セミナーを行った。 ⑤九州国立博物館が所蔵または借用している作品 1・2 点を学芸員が紹介する短編番組（1 回 2 分 30 秒）を 22 回分制作し､RKB 放送にて 5/3 から 9/25 まで､毎週月曜夜 19:55 より放送した。（平均視聴率　8.6%） ⑥西日本新聞に『パリに咲いた古伊万里の華』・『黄檗の名宝』、読売新聞に『誕生！中国文明』を連載し、展示作品について紹介を行った。	 国際シンポジウム 「契丹帝国(遼王朝)の美術と文化」 広報番組「九博のたからもの」 タイトルバック		

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	研究紀要「東風西声」	1 冊	—	—		1	1	1	1
	特別展図録刊行	5 冊	—	—		4	4	4	5
	シンポジウム開催	4 回	—	—		—	6	4	4
	シンポジウム参加者	566 人	—	—		—	—	1,020	566

年度実績 評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画 記載事項	収蔵品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に関わる刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信する。また、各種セミナー、シンポジウムを開催する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 3211

中項目	3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	(2) 海外研究者の招聘等研究交流の実施			
担当者	担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	国際交流室長　鬼頭智美
実績・成果	海外より計15名の研究者を招へいし、当館研究員延べ10名を海外に派遣して、展覧会事業の推進および学術交流を行った。また、日中韓国立博物館長会議、ICOM 上海大会に職員を派遣し、日中韓三館の協力体制を確認するとともに、世界の博物館との交流を行った。 さらに、スイスより1名研修生を受け入れ、特に博物館における展示デザインについて、当館のノウハウを学んでいただく機会を提供した。			
補足事項	・中国、韓国、トルコより 15 名の研究者を招へいした。また当館研究員延べ54（うち27名は科研費による）を中国、韓国、欧州へと派遣し、最新の学術情報取得・交流および展覧会事業を推進した。これらの交流活動により、欧州および東アジア（中国･韓国）の主要館・機関との連携を強化するとともに当館収蔵品とその保存・活用（展示および教育普及）についての意見交換を行い、さまざまな新知見を得た。 ・中国国家博物館で行われた日中韓国立博物館長会議に出席、同館および韓国国立中央博物館との情報交換およびネットワーク強化を行なった。 ・上海で開催された ICOM 定期総会に出席、各国博物館との交流を行った。 ・海外展としては、「トルコにおける日本年」を記念して「日本の美 5000 年」展を開催、また上海万国博覧会記念「唐宋元画名品展」が、多方面から高い評価を得た。来年度は、米国・ヒューストン美術館に新設の日本室への長期貸与協力に向け準備を進めている。 ・欧米の主要館が構成する国際展覧会オーガナイザー会議（IEO）に運営委員会メンバーとして継続参加、欧米主要館およびオセアニア各国とのネットワーク強化につとめた。			

トプカプ宮殿博物館「日本の美 5000 年」展

日中韓国立博物館長会議（中国国家博物館）

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	海外研究者の招聘	15名	6名	S		10	15	26	15
	海外への研究者派遣	54名	6名	S		22	25	16	54
	海外研修生の受入	1名	－	－		2	4	2	1

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	海外の優れた研究者を招聘するとともに、館研究員を海外に派遣、研究者交流を活性化することにより、博物館活動に対する示唆が得られるよう努める。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 3212

中項目	3　我が国における博物館のナショナルセンターとしての機能の強化

事業名	（2）　海外研究者の招聘等研究交流の実施			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長　久保智康
実績・成果	・海外からの研究者の招聘　７名 ・海外への研究員の派遣　２７名 　うち、国際会議への派遣　９名 ・国際シンポジウム「染織品にみる東アジア交流　―宋・元・明時代の中国とその周辺―」(11/13)を開催した。			
補足事項	・平成 22 年度の国際シンポジウムは、11 月 13 日に「染織品にみる東アジア交流　―宋・元・明時代の中国とその周辺―」をテーマに開催し、国内外の研究者3名が研究発表を行い、パネル・ディスカッションでは活発な討論がなされた。213 人が参加し、熱心に聞き入っていた。 　海外からは、 　中国シルク博物館上級研究員　周　暘氏 　韓国伝統文化大学教授　沈蓮玉氏 　の２名を迎えた。 ・特別展覧会「高僧と袈裟」 　中国シルク博物館　Zhang Shuping　ほか３名 を作品随伴、展示立会い、開会式出席、として招へいした。 ・研究員を作品調査、科研費調査、海外展協力及び国際会議出席などで派遣した。			

「国際シンポジウム・パネルディスカッション」

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	海外からの研究者招聘	7 人	5 人程度	A		7 人	9 人	29 人	7 人
	海外への研究員の派遣	27 人	6 人程度	S		21 人	18 人	13 人	27 人
	国際シンポジウム参加人数	213 人	―	―		285 人	190 人	288 人	213 人

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムを開催するなど博物館活動に対する示唆が得られるよう努める。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 3213

中項目	３　我が国における博物館ナショナルセンターとしての博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	(2) 海外研究者の招聘等研究交流の実施			
担当者	担当部課	学芸部企画室	事業責任者	企画室長　稲本泰生

実績・成果

・国際交流協定を結んでいる４館のうち２館との間で研究員の招聘及び派遣を行い、文化財の調査研究を実施した。中国・河南博物院からは研究員２名を１ヶ月間招聘し、韓国国立慶州博物館との間では研究員２名を各１ヶ月間招聘、当館から研究員１名を約１ヶ月間派遣した。
・正倉院展開催に際し、韓国国立慶州博物館から館長ほか１名を招聘、正倉院宝物の保存管理や日韓両国の文化財行政等について意見交換を行った。また慶州博における特別展「元暁」の開催に際して当館から館長以下３名を派遣し、学芸部長が講演を行うなどしたほか、特別展「皇南大塚」開催に際しても当館から研究員２名を派遣した。
・「大遣唐使展」における海外からの文化財借用に際し、外国人研究者（米国６名、中国６名）をクーリエとして、また中国・陝西省の文化財関係者５名を代表団として受け入れ、同展出陳作品及び文化財の管理・展示等に関する情報交換を活発に行った。
・「大遣唐使展」会期中に国際学術シンポジウム「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」（6 月 5 日、於：奈良国立博物館講堂、参加者数 148 名）を実施し、米国人研究者１名をパネリストの一人として招聘した。
・韓国国立中央博物館における特別展「高麗仏画大展」会期中の 10 月 28 日に同館で開催された国際学術シンポジウム「東アジア仏教美術における高麗仏画」にて、当館研究員２名が研究発表及びコメントを行った。
・米国・メトロポリタン美術館で開催された特別展「上都から大都へ：フビライ汗の世界」（22 年 9 月 20 日～23 年 1 月 2 日）の展示・撤収に際して、クーリエとして研究員各１名を派遣し、併せて米国における東アジア美術研究の現状について、現地研究者との間で情報交換を行った。

補足事項

① 国際交流協定を結ぶ館を中心とした、海外各館との交流を通して、将来の共同調査や展覧会開催に向けた実りある情報交換を行うことができた。
② 特別展「大遣唐使展」の開催に際してはクーリエ・代表団との間で有意義な情報交換を行うことができ、会期中の国際学術シンポジウムでも、世界的な東洋建築史家であるペンシルバニア大学・スタインハルト教授を招聘し、知的刺激に満ちた質の高い研究発表・討論を行うことができた。
③ 当館からの研究員派遣では、派遣先で文化財調査を行うことにより、仏教美術に関する当館の調査研究・展示活動を広く世界的視野に立って展開する上で、貴重な情報の収集を行うことができた。また海外における特別展への協力や研究発表・講演を通して、当館の活動の一端を対外的に発信することもできた。

国際学術シンポジウム
「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」風景

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
海外の研究者招聘	9 人	6 人	S	経年	9	9	29	9
職員の海外への派遣	14 人	6 人	S	変化	6	6	30	14
国際シンポジウム開催	1 回	－	－		－	－	1	1

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムを開催するなど博物館活動に対する示唆が得られるよう努める。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 3214

中項目	3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	(2)　海外研究者の招聘等研究交流の実施			
担当者	担当部課	交流課 総務課	事業責任者	交流課長　宮本裕一 総務課長　岩﨑英明
実績・成果	①海外研究者の招聘（9 人） ・交流促進のため韓国の博物館長を招聘した。 ・国際シンポジウムのため中国の研究者を招聘した。 ・平成２２年度在外日本古美術品に係る博物館・美術館研究協力事業及びアジア諸国博物館・美術館研究協力事業の実施に係る研究者を招聘した。 ②海外への研究者派遣（77 人） ・中国 内蒙古博物院との学術文化交流協定を締結した。 ・モンゴル カラコルム博物館への専門家派遣（国際交流基金事業）を実施した。 ・海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」開催した。 ③国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」開催した。			
補足事項	・海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」（於：バンコク国立博物館）は、平成 19 年度から JICA と協力して実施してきた人材養成を中心とする共同事業のひとつの成果となるもので、展覧会開催準備段階から人的交流の促進が図られた。 また、平成 22 年度在外日本古美術品に係る博物館・美術館研究協力事業及びアジア諸国博物館・美術館研究協力事業の実施に係る研究者招聘事業では米国のフリーア/サックラー美術館より研究員を招聘し、当館の文化財保存修復技術および修理技術者との交流を深め、交流セミナーを実施した。 ③国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」これまでの共同研究等の実績を踏まえて更なる交流を推進するため、8 月に中国・内蒙古博物院と学術文化交流協定を締結した。 12 月に開催した国際シンポジウムでは、内蒙古より 4 名の研究者を講師に招き、契丹族の国・遼王朝に焦点を当て、その美術と文化について一般参加者へ発表した。			

海外展　内覧会の様子

国際シンポジウムの様子

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
海外研究者招聘	9 人	3 人	S	経年変化	38	18	37	9
海外への研究員の派遣	77 人	4 人	S		44	35	46	77
国際シンポジウム　回数	1 回	－	－		4	1	1	1
国際シンポジウム参加者	117 人	－	－		586	385	300	117

年度実績 評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画 記載事項	海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムを開催するなど博物館活動に対する示唆が得られるよう努める。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 3311

中項目	3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	(3) 博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムの検討、実施			
担当者	担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	保存修復課長　神庭信幸
実績・成果	1．特定非営利活動法人文化財保存支援機構が主催する専門家セミナーに東京国立博物館が共催し、東京国立博物館を会場として「文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅠ」(平成 22 年 8 月 30 日（月）～9 月 10 日（金）の１０日間)を開催した。東京国立博物館は講師・プログラムの選定、およびセミナー会場・修理施設・展示施設の提供を行った。本セミナーの対象は、社会で活動している文化財保存修復専門家及び専門家を目指す学生である。内容としては、国内外で活躍できる高度な能力を持つ専門家を育成するために、基礎能力の格段の向上を目指すものであり、既に現場で活躍している講師陣による実践セミナーである。 2．エジプト国立大エジプト博物館保存修復センターにて「東京国立博物館の臨床保存の実践についてのセミナー」を実施（平成 22 年 9 月 29 日)。科学研究費補助金（基盤（S)（平成 20 年～24 年))「博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究」の経費による。 3．ルーブル美術館素描版画部門にて「東京国立博物館の臨床保存の実践についてのセミナー」を実施（平成 23 年 1 月 11 日)。科学研究費補助金（基盤（S)（平成 20 年～24 年))「博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究」の経費による。 4．ストラスブール日仏大学会館にて「東京国立博物館の臨床保存の実践についてのセミナー」を実施（平成 23 年 1 月 13 日)。科学研究費補助金（基盤（S)（平成 20 年～24 年))「博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究」の経費による。 5．大学院生のインターンを 3 名受け入れ、東京国立博物館の臨床保存と包括的保存について研修を実施した（平成 23 年 2 月 14 月(月)～25 日(金))。			
補足事項	1．セミナーカリキュラムは 5 テーマに沿って２年間で１２０時間分を履修する。①「保存修復事業における調査診断法ー」、②「環境保全概論」、③基礎修理設計、④基礎材料論、⑤特講。参加者は 34 名であった。 2．大エジプト博物館保存修復センターでの参加者は 51 名。 3．ルーブル美術館素描版画部門での参加者は４１名。 4．ストラスブール日仏大学会館での参加者は 10 名。 5．大学院生インターンは筑波大学大学院人間総合化学研究科世界遺産専攻博士前期課程 1 年 1 名、共立女子大学大学院家政学研究科被服学専攻修士課程 1 年 1 名、チューリッヒ大学大学院東アジア美術史日本美術史専攻修士課程 2 年 1 名であった。	 「東京国立博物館の臨床保存の実践についてのセミナー」の開催風景（平成２３年１月１１日パリ・ルーブル美術館）		

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	研修会開催	4 回	―	―	経年	―	1	4	4
	インターン受入れ	3 人	―	―	変化	―	3	2	3

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 3312

中項目	３　我が国における博物館のナショナルセンターとしての機能の強化

事業名	(3) 博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムの検討、実施			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	保存修理指導室長　村上　隆
実績・成果	・毎月1回文化財保存修理所内工房を当館研究員が巡回し、修理技術者に指導・助言を行った。 また、2か月に1回修理技術者と当館との定例会議を開催した。 ・当館にて開催の特別展覧会において修理技術者に対する定例の研修会を実施した。 参加者　「長谷川等伯」展　52人 「上田秋成」展　40人 「高僧と袈裟」展　35人 「筆墨精神　－中国書画の世界－」展　39人 ・文化財修復に関わる大学院生のインターンシップ実習を実施し、報告書を作成した。 参加大学院生：2名			
補足事項	・文化財保存修理所巡回によって、修理技術者へ専門的な立場から指導・助言を行うことで双方の見識にプラスとなった。 ・文化財修復に関わる大学院生をインターンとして受け入れ、実習を行ったことは、今後の技術者育成を考える上でも意義は大きい。			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	研修会開催	4回	－	－	経年変化	3	3	4	4
	実習生受け入れ	2名	－	－		1	－	3	2

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 3313

中項目	3　我が国における博物館ナショナルセンターとしての博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	(3) 博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムの検討、実施			
担当者	担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	保存修理指導室長　谷口耕生
実績・成果	・修理所巡回を 4 回実施し、館長をはじめとする総務課、学芸部の館職員が修理所の各 3 工房を視察した。このことにより修理途中の文化財の修理状況を継続的に観察し、修理の工程を広く知る場を設け、修理について認識を高めることに努めた。 ・平成 23 年 3 月中の平日　午後 5 時から 6 時 30 分、当館講堂にて修理所研修会を実施した。文化財保存工房の絵画書跡の修理状況について、近年の実績のなかから、法華堂不空羂索観音立像（東大寺蔵）の修理を取り上げ、修理品の概要、修理中の調査及び新知見、修理方針、修理技術などについて、他の修理所工房のスタッフ、学芸部研究員と討議を行う。あわせて解説ボランティアも傍聴し、修理に関する理解を深めた。			
補足事項	・平成 22 年 9 月 8 日(水)、15 日(水)　特別展「仏像修理 100 年」の関連イベントとして、文化財保存修理所の特別公開を臨時に開催した。300 名の募集に対し、応募総数 448 名、参加者 237 名となった。他府県からの参加者も多く、満足度の高い感想が得られた。 ・平成 23 年 2 月 9 日(水)　昨年度に引き続き、恒例の文化財保存修理所の特別公開（第 3 回目）を開催し、一般の方々に対する文化財修理及び保護について広く知ってもらう予定である。（何名参加か入れる） ・平成 23 年 3 月 26 日（土）、美術史学会西支部大会を受け入れた。100 名の学会員が講堂で三月堂修理の行程について聴講し、さらに文化財保存修理所を見学した。			

文化財保存修理所特別公開チラシ

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	研修会等の開催	6 回	－	－	経年変化	2	1	1	6

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 3314

中項目	3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	(3) 博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムの検討、実施			
担当者	担当部課	博物館科学課	事業責任者	博物館科学課長　本田光子 環境保全室長　今津節生 保存修復室長　藤田励夫 主任研究員　志賀智史
実績・成果	①紙文化財保存基礎講座 a 文化財保存修復研修（地元大学の文化財保存技術専攻学生 4 名対象）8 月 16 日～20 日 b 古文書保存基礎講座（地元博物館文化財関係者 23 名対象）23 年 1 月 21 日、29 日 ②文化財保存交流セミナー a「東アジアの伝統的製紙技術－日中韓の最新調査研究成果－」4 月 23 日　参加者 32 名 b「延喜式にみる製紙工程について」5 月 12 日　参加者 37 名 c「韓国　保存科学の現況」23 年 2 月 8 日　参加者 23 名 d「アメリカ国立スミソニアン機構　フリーア美術館アーサー・M・サックラー美術館保存科学部東洋絵画修理室について」23 年 3 月 18 日　参加者 20 名 ③ミュージアム IPM 支援者育成事業（文化庁受託事業） 「市民と共にミュージアム IPM」 研修会（講義）3 回、研修会（ワークショップ）4 回、研修会（見学・討議）3 回、シンポジウム 1 回　延べ 430 名			
補足事項	 ①a 文化財保存修復研修 ①b 古文書保存基礎講座 ②a 東アジアの伝統的製紙技術 ②b 延喜式にみる製紙工程 ②c 韓国　保存科学の現況 ③市民と共にミュージアム IPM			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	研修会等開催回数	22 回	—	—	経年変化	11	10	20	22

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 3411

中項目	3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	（4）公私立博物館等への貸与の推進			
担当者	担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	列品管理課長　谷　豊信
実績・成果	・国内の公立・私立の博物館が実施した特別展および平常展示に、列品および寄託品を多数貸与した。 ・考古資料相互貸借事業は、二つの博物館と協力して実施した。 ・長崎歴史文化博物館（80 件）、国立西洋美術館、韓国国立中央博物館、フランス・ギメ博物館などに、年度を越えた長期貸与を実施している。 ・本年度も海外からの借用希望が多く、文化庁主催の海外展を含め、12 箇所の会場に 160 件の作品を貸与した。			
補足事項	・貸与に当たっては、先方の施設および責任体制の確認、作品の保存状況の確認、先方の事前調査への対応、作品が輸送・展示に耐えるかの判定、希望が重複した場合の調整、引渡し時および返却時の状況確認を行っている。 ・法人の考古資料相互貸借事業経費により、福岡市立博物館には 13 件を貸与し 19 件を借用、鹿児島県立歴史センター黎明館には 32 件を貸与し、34 件を借用した。借用品により、当館では特集陳列「九州の経塚」と特集陳列「神秘に満ちた貝製品－鹿児島県広田遺跡－」を開催した。 ・韓国国立中央博物館開催の「高麗仏画大展」に当館は特別協力として参加し、韓国側による出品交渉・作品輸送などにも協力し、同展の成功の一端を担った。 ・平成 18 年度以降、国内の貸与先件数・貸与件数とも連続して減少していたが、本年度は昨年実績を上回っており、回復の傾向が見られる。			

上：相互貸借で借用して展示した鹿児島県広田遺跡主土の貝製品（重要文化財）
下：「高麗仏画大展」開幕式で挨拶する銭谷東京国立博物館長

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	貸与件数	1,315 件	－	－	経	1,302	1,125	1,104	1,315
	うち国内の貸与件数	1,155 件	1,000 件	A	年	1,118	1,012	913	1,155
	うち海外の貸与件数	160 件	50 件	S	変	184	113	191	160
	貸与先施設数	150 件	－	－	化	149	135	124	150

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館に対し、展示等の充実に寄与するための貸与を促進する。収蔵品の貸与については、貸与に関する情報を公開するなど具体的措置を講ずることとする。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 3412

中項目	3　我が国における博物館のナショナルセンターとしての機能の強化

事業名	(4) 公私立博物館等への貸与の推進			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　若杉準治
実績・成果	・74機関に対し297件の収蔵品貸与を行った。（うち海外4機関に対し16件） 館蔵品の貸与件数：152件 寄託品の貸与件数：145件 計　297件 ・ウェブページでの「貸出作品リスト」の公開			
補足事項	・ギャラリー建替中は作品貸出を停止する博物館・美術館が多い中で、当館は、公私立博物館・美術館からの要請を受け、積極的に収蔵品の貸与を行い、各博物館、美術館の展示の充実に寄与した。 ・海外機関への貸与のうち、グリマルディ・フォーラム・モナコ「京都ー東京、侍からマンガ」展に関しては、作品の輸送・展示作業・展示替え・撤収作業に延べ５名の職員を派遣するなど多大な協力を行った。 上海博物館(中華人民共和国）で開催の「千年丹青―日本・中国珍蔵唐宋元絵画精品展」への作品貸与の際には、作品展示・展示替え・撤収・返送に延べ３名派遣し、國立故宮博物院（台北）で開催の「文藝紹興―南宋的藝術與文化特展」への作品貸与の際にも作品輸送・展示作業に職員を派遣するなど、作品貸与に伴い、多大な協力を行った。 韓国国立中央博物館で開催の「高麗仏画大展」へは寄託品を貸与した。 ・ウェブページで、上記の貸与作品についての全リストを、貸与館・展覧会ごとに公開して、「京博の収蔵品がいまどこへいけば鑑賞できるか」の情報をリアルタイムで提供した。			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	貸与件数	297 件	約 120 件	S	経年変化	171	246	428	297
	うち海外への貸与件数	16 件	―	―		3	1	28	16

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を推進する。収蔵品の貸与については、貸与に関する情報を公開するなど具体的措置を講ずることとする。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 3413

中項目	3　我が国における博物館ナショナルセンターとしての博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	(4) 公私立博物館等への貸与の推進			
担当者	担当部課	学芸部列品室	事業責任者	列品室長　岩田茂樹

実績・成果

・館蔵品と寄託品の貸出は、展覧会の回数において計 43 件、作品件数は計 159 件。
［貸与先内訳］
国立 5 館、公立 30 館、私立 1 館、外国 4 件、その他 3 件
［貸与作品内訳］
国宝 19 件、重要文化財 74 件、その他 66 件
館蔵品 47 件（絵画 25 件、彫刻 6 件、書跡 3 件、漆工 1 件、考古 12 件）
寄託品 112 件（絵画 42 件、彫刻 48 件、書跡 9 件、金工 6 件、漆工 4 件、染織 1 件、考古 2 件）
・以下の 2 館と相互貸借事業を実施した。
1．山形県立博物館・山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
貸与品：杉沢遺跡出土土偶
借用品：押出遺跡出土の縄文土器、漆器類
2．南相馬市博物館
貸与品：泉廃寺ほか出土の古瓦（「内藤コレクション」・「原田コレクション」）
借用品：桜井遺跡出土の弥生土器、石包丁

なお、押出遺跡出土品の展示に際しては、「縄文のムラ－山形・押出遺跡からのメッセージ－」と題するパンフレットを作成し、無料配布した。

補足事項

・目標値をクリアしており、順調に推移している。
・たんに数的目標を第一義とするのではなく、展覧会の意義と作品の保存状態を慎重に検討しつつ貸出を行っている。

館蔵　舞楽面　崑崙八仙
神奈川県立歴史博物館「天狗推参」展に貸出

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
貸出件数	159 件	100 件	S	経年	137	163	108	159
うち海外への貸与件数	14 件	－	－	変化	3	2	1	14

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F
（S、F の理由）

中期計画記載事項

収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を推進する。収蔵品の貸与については、貸与に関する情報を公開するなど具体的措置を講ずることとする。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 3414

中項目	3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	(4)　公私立の博物館等への貸与の推進			
担当者	担当部課	文化財課	事業責任者	主任研究員　原田あゆみ
実績・成果	国内 31 機関・海外 3 機関に所蔵品および寄託品を貸与した。（東京国立博物館からの長期管理換品を含む）			
補足事項	○国内機関への貸与については、文化庁・奈良国立博物館・京都国立博物館・奈良文化財研究所飛鳥資料館・国立歴史民俗博物館のほか、九州・沖縄管内外の公私立博物館・美術館（東北歴史博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館・岡山県立博物館・佐賀県立九州陶磁文化館・宮崎県立西都原考古博物館・花巻市博物館・名古屋市博物館・静岡市美術館・和泉市久保惣記念美術館・福岡市博物館・板橋区立美術館・サントリー美術館など）からの出品要請に協力し、国宝 4 件・重要文化財 22 件を含む所蔵品・寄託品を貸与した。 ○海外機関への貸与については、メトロポリタン美術館・上海博物館・バンコク国立博物館への出品要請に協力し、所蔵品・寄託品を貸与した。			

重要文化財　色絵藤棚文大皿　鍋島（G17・当館所蔵）サントリー美術館「誇り高きデザイン　鍋島」展 出品

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	貸与件数	165 件	—	—	経年変化	104	106	89	165
	うち海外への貸与件数	34 件	—	—		31	30	1	34

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を推進する。収蔵品の貸与については、貸与に関する情報を公開するなど具体的措置を講ずることとする。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 3511

中項目	3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	(5) 公私立博物館等に対する援助・助言			
担当者	担当部課	学芸研究部	事業責任者	学芸研究部長　島谷　弘幸

実績・成果

公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等に対し、84 件の援助・助言を行った。
・文化庁や地方公共団体等の文化財関係事業にて協力（44 件）
・公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言（12 件）
・講演会やセミナー等における講演等での協力（11 件）
・作品の展示・保存環境についての調査・指導（17 件）

新規貸与館に対する環境調査は、東京文化財研究所と協力して指導助言を行った。

補足事項

文化庁や地方公共団体等の文化財関係事業にて協力
・奈良県立美術館　特別展「花鳥画」中国・朝鮮部分監修
・文化庁「文化遺産オンライン」の運営に関する検討会委員
・厚木市史編さん事業に関する調査・助言
・伊豆の国市教育委員会による大仁町史編さん事業に関する調査・指導
・松戸市教育委員会　松戸市小金東漸寺所蔵「二十五菩薩来迎図」の市指定調査
・スリランカ・シーギリヤ博物館　地域観光振興をテーマとした研修・国際協力機構（JICA)主催プロジェクト協力　他

文化財の展示にかかる指導助言
・新潟県立近代美術館「小千谷縮・越後上布」展の展示・撤収指導
・国立歴史民俗博物館「武士とはなにか」展示プロジェクト委員
・ふくやま書道美術館　特別展「王朝の名跡－三蹟を中心として」の企画・展示指導
・オーストラリア ヴィクトリア州国立博物館への日本の武器武具などの展示・保存方法の指導助言　他

講演会やセミナー等における講演等での協力
・根津美術館　特別展「南宋の青磁」特別講演会講師
・文化庁　指定文化財（美術工芸品）企画・展示セミナー講師
・浦安市当代島公民館「北斎の生涯と作品」講演会講師
・国立民族学博物館　「博物館学集中コース」見学研修講師　他

作品の展示・保存環境についての調査・指導
・沖縄県立博物館・美術館、下関市立美術館、山種美術館　他

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
公私立博物館・美術館への援助・助言	84 件	40 件	S	経年変化	124	134	139	84

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F
（S、F の理由）

中期計画記載事項

公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努める。なお、援助・助言の実施については今期 5 年間の実績が前中期目標期間の実績を上回るよう努める。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 3512

中項目	3　我が国における博物館のナショナルセンターとしての機能の強化

事業名	（5）公私立博物館等に対する援助・助言			
担当者	担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	総務課長　植田　義雄 学芸部長　西上　実
実績・成果	文化財の展示、修理にかかる指導助言（19 件） 文化財の調査にかかる指導助言（46 件） 講演会、セミナー等における講演等での協力（13 件） 地方公共団体の文化財保護審議会等会議にて協力（45 件） 「京都国立博物館所蔵 能装束展」（金沢能楽美術館）にかかる援助・助言を行った			
補足事項	文化財の展示、修理にかかる指導助言 ・特別展「細川家の至宝」東京会場作品撤収立ち会い ・宮内庁皇室用美術工芸品修理指導 他 文化財の調査にかかる指導助言 ・成城大学　金剛寺蔵の聖教調査 ・沖縄県教育委員会　沖縄のガラス・玉等製品関係調査 他 講演会、セミナー等における講演等での協力 ・研修会「京都きものサローネ」講義 ・講演会「料紙の加工―日・中・韓の典籍」の講師 ・シンポジウム「進化するミュージアム」の講師　他 地方公共団体の文化財保護審議会等会議にて協力 ・滋賀県文化財保護審議会 他			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	公私立博物館･美術館への援助・助言	123 件	12 件	S	経年変化	81	114	114	123

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努める。なお、援助・助言の実施については今期 5 年間の実績が前中期目標期間の実績を上回るよう努める。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 3513

中項目	3　我が国における博物館ナショナルセンターとしての博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	(5) 公私立博物館等に対する援助・助言			
担当者	担当部課	学芸部企画室	事業責任者	企画室長　稲本泰生
実績・成果	・米国・メトロポリタン美術館における特別展「上都から大都へ：フビライ汗の世界」(22 年 9 月 20 日～23 年 1 月 2 日) 開催にあたり、日本からの出陳品の出陳交渉及び輸送に際しての随行及び助言を行い、メトロポリタン美術館での展示にも立会った。 ・「奈良の古寺と仏像－會津八一のうたにのせて」展（新潟市會津八一記念館・新潟県立近代美術館：22 年 4 月 24 日～6 月 6 日、三井記念美術館：同 7 月 7 日～9 月 20 日、奈良県立美術館：同 11 月 20 日～12 月 19 日）に協力し、学術面での援助・助言を行った ・韓国国立中央博物館における特別展「高麗仏画大展」(22 年 10 月 11 日～11 月 21 日) 開催にあたり、日本からの出陳品の出陳交渉及び輸送に際しての、随行及び助言を行った。 ・福井県立美術館おける特別展「シルクロードと東アジアの仏教美術」(22 年 10 月 9 日～11 月 3 日) 開催にあたり、出陳品の選定及び事前調査等に際しての協力・助言を行った。 ・独立行政法人科学技術振興機構（ＪＳＴ）が平城遷都 1300 年祭のメーン会場において大画面ハイビジョンで放映するために制作した、唐招提寺所蔵の東征伝絵巻（重文）全 5 巻の高精細画像を当館にて撮影した際に、作品輸送・取扱・助言などの協力を行った。また唐招提寺講堂における展示「国宝金堂平成大修理のあゆみ」(22 年 10 月～。内容は修理の成果物・パネル・模型等）の開催にあたり、学術面での協力・助言を行った。 ・山形県立博物館が開催した特別展「縄文のキセキ－半世紀の時を越えて」(22 年 10 月 9 日～12 月 5 日）に貸与した館蔵品の土偶 1 件の輸送に際しての随行及び助言を行い、現地での展示・撤収に立ち会った。また福島県・南相馬市博物館が開催した特別展「国史跡指定記念　古代陸奥国　行方の郡家－国指定史跡　泉官衙遺跡」(23 年 1 月 8 日～3 月 6 日）に貸与した館蔵品の瓦類 139 点の輸送に際しての随行及び助言を行い、現地での展示に立ち会った（以上は平成 22 年度考古資料相互活用促進事業による)。			
補足事項	・国内外の博物館・美術館等の展覧会への援助を通して、当館収蔵品や仏教美術一般の展示・普及等に大きく貢献することができた。ことにメトロポリタン美術館及び韓国国立中央博物館との間では、近年しばしば作品を貸与されるなど良好な関係を保っており、今後さらに連携を強化していく上でも、今回の協力は大変有意義である。また国内の公私立館に対する協力の面でも、今年度は実績をあげることができた。			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	公私立博物館・美術館への援助・助言	35 件	5 件	S	経年変化	5	5	25	35

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努める。なお、援助・助言の実施については今期５年間の実績が前中期目標期間の実績を上回るよう努める。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 3514

中項目	3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

事業名	（5）公私立博物館等に対する援助・助言			
担当者	担当部課	総務課	事業責任者	総務課長　岩﨑英明
実績・成果	公私立博物館等で開催された研究集会および講演会において指導・助言を行った。 ①文化財の修理にかかる指導助言 ②講演会、セミナー等における講演 ③文化財の調査にかかる指導助言 ④作品の展示、保存環境についての調査指導 ⑤古文書保存に関する専門講座を開催			
補足事項	①文化財の修理にかかる指導助言 ・国立民族学博物館：被災した民族資料の保存修復方法の研究実施のための助言 ②講演会、セミナー等における講演 ・日光輪王寺：「生物被害調査報告会」での講議 ・一般社団法人文化財保存修復学会：「平成 22 年度文化財保存修復専門家養成セミナー特別講義」講師 ・滋賀県立琵琶湖文化館　琵琶湖館友の会総会記念講演会 ・滋賀県立琵琶湖文化館：「琵琶湖館友の会総会記念講演会」講師 ・上海博物館：「2010 博物館文物保存環境国際学術検討会」での討議　他 ③文化財の調査にかかる指導助言 ・淡路市埋蔵文化財事務所：五斗長垣内遺跡出土土器付着遺物の分析指導 ・モンゴル　カラコルム博物館：博物館運営支援　他 ④作品の展示、保存環境についての調査指導 ・仙台市博物館：チベット展の返却前事前展示確認、作品点検梱包立ち会い ・文化庁、ブリュッセル芸術館：文化庁海外展「アジアへの道」会場における展示等指導 ・韓国国立中央博物館：高麗仏画大展の輸送・展示指導　他 ⑤古文書保存に関する専門講座を開催 ・地域の文化財関係機関と連携して古文書保存に関する基礎的な研修を実施。併せて寒糊炊き実習も実施した。 ・当館において講義「文化財の保存と修理について」「接着剤について～古を中心に～」を開催 ・筑紫野市歴史博物館：「古文書整理の流れと応急手当」講義			

古文書保存基礎講座の様子

寒古糊炊き実習の様子

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	公私立博物館・美術館等への援助・助言件数	77 件	12 件	S		38	47	39	77

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努める。なお、援助・助言の実施については今期５年間の実績が前中期目標期間の実績を上回るよう努める。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4111

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.1

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化的景観に関する調査研究　((1) －①－ア)

【事業概要】

文化的景観の体系化や保護策に関する研究の一環として、文化的景観に関する基礎的な情報の収集を進めるとともに、文化的景観の学術及び保護に資する研究会を定期開催し、その成果をふまえて文化的景観の保護に関する研究集会を開催する。また、ケーススタディーとして実施してきた高知県四万十川流域の文化的景観に関する調査研究報告書を作成する。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	文化遺産部長　小野健吉

【スタッフ】　清水重敦［文化遺産部景観研究室長］、惠谷浩子［同部研究員］、松本将一郎［同部アソシエイトフェロー］、宮城俊作［客員研究員］、小浦久子［客員研究員］

【主な成果】　文化的景観に関する基礎的な情報の収集、四万十川流域や宇治の文化的景観に関する現地調査等を通じて、文化的景観の価値評価、保存計画立案、整備・活用事業の基本的な考え方を整理し、四万十川流域の文化的景観調査報告書を刊行するとともに、論文・Web サイトを通じて成果を報告した。また、文化的景観の学術及び保護に資する研究会である文化的景観学研究会を２回開催し、その成果を踏まえつつ、文化的景観の保存計画と整備・活用をテーマに文化的景観研究集会（第３回）を開催した。関連して、昨年度開催の研究集会（第２回）の成果報告書を刊行した。

【年度実績概要】

１．基礎的・体系的研究

文化的景観の基礎的・体系的な調査研究の一環として、文化的景観に関する学術及び保護行政の情報・課題を共有し、議論を深める場として昨年度末に立ち上げた「文化的景観学研究会」を２回開催した。第１回は「文化的景観の概念」を、第２回は「文化的景観の整備・活用に関わる計画と諸問題」をテーマに開催した。

研究集会の様子

ここでの議論を踏まえつつ、一昨年度、昨年度に開催した研究集会での検討内容を受け、2010 年 12 月 16・17 日に「文化的景観の持続可能性－生きた関係を継承するための整備と活用－」をテーマとして文化的景観研究集会（第３回）を開催した。初日は、基調講演の後、「保存計画と整備手法」をテーマに４件の報告と総括の議論をおこない、２日目は５件の報告の後、総合討議をおこなった。これに合わせ、『文化的景観研究集会（第３回）講演・報告資料集』（資料集③）を作成した他、昨年度開催した研究集会（第２回）の成果報告書（報告書①）を刊行した。

２．　文化的景観保護に関する現地調査・研究

昨年度まで実施してきた四万十川流域の文化的景観に関する現地調査成果を整理・分析し、文化的景観の価値評価と保存計画の立案のあり方に関するモデルケースの提示を意図した報告書『四万十川流域の文化的景観調査報告書』（報告書等②）を出版した。

この他、京都岡崎、佐渡相川の文化的景観に関する受託調査研究、宇治の文化的景観選定地区における伝統的家屋調査の受託研究や、全国の文化的景観の視察と担当者との協議を通して、特に都市に関わる文化的景観の価値評価と保存計画立案、文化的景観の整備・活用事業のあり方について、調査報告会や受託調査の成果報告書においての基本的な考え方を整理し、提言として盛り込んだ。

【実績値】　研究集会開催数：１回（資料集③）、参加者数：地方自治体職員（文化財、都市計画、企画ほか）等、169 名。報告書刊行：2 冊（①、②）、論文：５件（④～⑧）、研究発表：５件（⑨～⑬）

【備考】

報告書等：①『文化的景観研究集会（第2回）報告書　生きたものとしての文化的景観−変化のシステムをいかに読むか−』奈良文化財研究所、2010.12、②『四万十川流域の文化的景観調査報告書』奈良文化財研究所、2011.3、③『文化的景観研究集会（第3回）講演・報告資料集』奈良文化財研究所、2010.12

論文：④清水重敦「変化を前提とするものとしての文化的景観」『奈良文化財研究所紀要2010』2010.6、⑤松本将一郎・惠谷浩子「伝統的家屋からみた宇治の文化的景観」『奈良文化財研究所紀要2010』2010.6、⑥惠谷浩子「宇治の文化的景観」『奈文研ニュース No.38』奈良文化財研究所、2010.9、⑦惠谷浩子「広域の文化的景観をどう捉えるか　四万十川流域を事例として」『文化的景観研究集会（第2回）報告書』奈良文化財研究所、2010.12、⑧松本将一郎「都市・集落を文化財とすること―伝統的建造物群と文化的景観―」,『遺跡学研究　第7号』,p220,2010

研究発表：⑨惠谷浩子「四万十川流域の文化的景観　景観から読み解く四万十川」（四万十・流域圏学会　第 10 回大会「四万十川流域の活性化」特別記念講演、2010.5）、⑩惠谷浩子「中宇治地区における碾茶生産・製造の有機的関係」（平成 22 年度　日本造園学会関西支部大会、2010.12）、⑪清水重敦「文化的景観における都市建築」（文化的景観研究集会（第３回）報告、2010.12）、⑫惠谷浩子「白川に息づく茶業風景」松本将一郎「白川の民家が面白い」（宇治市白川区伝統的家屋調査中間報告会、2011.１）、⑬清水重敦「相川の景観構造の特質―二極構造を持つ都市とその周辺環境」（佐渡市相川地区文化的景観調査中間報告会、2011.03）

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4111

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.1

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

重要文化的景観の国選定事例が増加しつつありながら、その保護手法に関する事例が少なく、かつ基礎的情報が整備されていない現状に対し、①調査及び保護手法に関する研究会及び研究会の開催、②その成果報告書の刊行による情報発信、③現地調査を通じた保護手法についての独創性ある提案、をおこない、文化的景観を学術及び保護行政の両面において持続的かつ発展性のある領域へと広げていくことに貢献し得た。特に研究会及び研究集会においては、専門領域や立場を越えた議論の場を設けることに務めたことで、保護行政及び学術の両面において新しい局面を切り開いている。

2．定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	A	A				

備考

研究成果を 2 冊の報告書として出版刊行したほか、学術雑誌等における論文や研究発表による公表をおこなった。

本年度開催した研究集会には 169 名の参加を得、文化的景観の保護行政をめぐる諸課題に関する活発な議論ができた。また参加者の内 97%の参加者から有意義であったという評価を得た。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化的景観に関する基礎的情報の収集・発信、研究会及び研究集会等の実施、四万十川流域等を対象とした現地調査・研究、学会や学術雑誌等での研究成果発表と、年度当初の計画を十全に実施し、的確な成果を公表し得た。これらの成果を踏まえつつ、今後も文化的景観に関する保護行政及び学術に資する成果の的確な公表を目指し、基礎的調査研究と現地調査研究を進めていく。なかでも、文化的景観研究集会に関しては、地方公共団体や専門家等からの評価も高く、次年度以降もこれを開催していくべき事業であると判断される。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化的景観の体系化と保護行政に関する実践的研究に関して、基礎的研究、現地調査、研究集会の開催等を通じて、計画通り研究が進捗し、多くの成果を公表し得た。新規中期計画の初年度である次年度は、文化的景観の保護行政に資する目的で、諸外国との比較を含めた文化的景観保護施策に関する研究を実施する。また、文化的景観の概念と保護手法に資することを目的に、研究所独自のフィールドを設定し、専門領域を越えた文化財保護のあり方について調査研究を深めていく。

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 4112

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.2

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	民俗技術に関する調査・資料収集（(1)-①-イ） 無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究（(1) - ④）

【事業概要】

風俗慣習、民俗芸能、民俗技術など無形民俗文化財の伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等についての調査研究を行い、その成果をデータベースとして構築する。さらに研究協議会の開催を通じて各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図る。

また文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった民俗技術に関する基礎的な調査研究を実施し、保護施策に資するデータを提供する。

【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長　宮田繁幸

【スタッフ】

俵木　悟（無形文化遺産部）、服部比呂美（客員研究員）

【主な成果】

民俗技術の伝承実態、民俗芸能の伝承組織について現地調査と資料収集を行い、その成果を『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』などに報告した。また無形民俗文化財研究協議会を開催し、無形民俗文化財の保存と活用に関する現実的課題への対応を協議し、その成果を報告書にまとめ、関係者、関係機関等に配布した。さらに地方自治体で作成された無形文化遺産に関する記録の所在情報について、確認作業を行い、データ化を完了した。

【年度実績概要】

１．民俗技術に関する調査・資料収集

民俗技術に関する調査・資料収集として、長野県飯田市の水引細工の製作と伝承の現状について、現地調査を行った。その成果は、過去 5 年間の調査の成果とともに『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』で報告した。

２．無形民俗文化財の伝承状況に関する調査研究

無形民俗文化財の伝承状況の調査として、千葉県銚子市の銚子大神幸祭、鹿児島県悪石島の盆踊り、鹿児島県いちき串木野市の羽島崎神社春祭などの現地調査と資料収集を行った。また、過去 5 年間の調査研究に基づく成果を、『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』で報告した。

３．無形民俗文化財の公開状況に関する調査研究

ブロック別民俗芸能大会等の公開状況について調査を行った。

４．研究集会の開催

第 5 回無形民俗文化財研究協議会を、「無形の民俗の保護における博物館・資料館の役割」をテーマに、2010 年 11 月 18 日（木）に、東京文化財研究所セミナー室において開催した。4 件の事例報告をもとに、コーディネーター1 名、コメンテーター2 名を含めた総合討議を行なった。協議の成果は『第 5 回無形民俗文化財研究協議会報告書』にまとめた。参加者 98 名。

５．無形文化遺産の記録の所在情報のデータベースの構築

昨年度末までに収集した記録の所在情報のデータについて整理を行い、その結果を一覧表にして、情報提供者である地方自治体に配布し、情報の確認、訂正の作業を行って、データ化を完了した。その経過については学術雑誌で報告した。

【実績値】

論文等発表数：3 件（①～③）

研究会等発表数：1 件（④）

【備考】

①俵木悟「無形民俗文化財の映像記録−「使える記録」の実現に向けて−」『日本民俗学』264、pp. 122-137、10.11

②宮田繁幸「無形民俗文化財の公開と国際交流−「国際民俗芸能フェスティバル」の 15 年−」『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』pp. 39-57

③俵木悟「民俗芸能の伝承組織についての一試論−「保存会」という組織のあり方について−」『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』pp. 59-79

④俵木悟「文化財としての民俗芸能、昭和 30～40 年代の再検証」、第 62 回日本民俗学会年会（東北大学）、10.10.03

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 4112

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.2

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2．定量的評価

観点	論文等	発表				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	無形民俗文化財としての民俗技術や民俗芸能の伝承状況や伝承組織の調査と情報収集、無形民俗文化財研究協議会の実施、学会や学術雑誌等での研究成果発表などを十分実施できた。また中期計画最終年度として、調査研究報告書も予定通り刊行できた。伝承組織の実態の調査は、伝承者の不足に悩む多くの保護団体に対して有益な情報提供が可能であり、今後も継続していきたい。また無形民俗文化財研究協議会は、この数年、それまで以上の多数の参加者を集め、反響も大きくなっているので、テーマ設定を工夫するなどして、継続的かつ発展的に今後も取り組んでいきたい。記録所在データに関しては、データ化は完了したが、今後はその有効な公開方法につきされに検討を進めていく。以上、本年度の目標は 100%達成できたと考える。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度は、中期計画最終年度として、報告書も刊行でき、当初の計画は順調に達成できた。次期に関しては、取り組むスタッフの専門性を生かしつつ、今中記計画の成果を発展的に継承していく。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4121

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.3

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	東アジアの美術に関する資料学的研究（(1) - ② - ア）

【事業概要】

日本を含む東アジア地域の美術を対象に、人とモノとが複雑に絡み合って多様に展開する価値形成のしくみを解明することを目指す。研究にあたっては、より質の高い資料の提示が求められる時勢に対応して、新しい技術、精度、信頼性、網羅性など必要な条件を満たすこれからの美術資料のあり方や可能性を探り、資料の収集・蓄積・公表等においてそれを具体的に実現することに留意している。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化形成研究室長　塩谷純

【スタッフ】

田中　淳、勝木言一郎、津田徹英、山梨絵美子、綿田　稔、皿井　舞、江村知子、土屋貴裕（以上、企画情報部）、中野照男（副所長）、相澤正彦、吉田千鶴子、三上　豊、森下正昭（以上、客員研究員）

【主な成果】

(1) 情報資料の収集のための調査：横山大観《山路》の調査。
(2) 美術史研究のためのコンテンツの形成：『日本絵画史年紀資料集成　十五世紀』のデータ入力。古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化。
(3) 研究会の開催：『美術研究』400 号、『美術史論壇』30 号記念日韓共同シンポジウム「人とモノの「力学」―美術史における「評価」」の開催。オープンレクチャーの開催。
(4) 研究成果報告書の編集・刊行：『日本絵画史年紀資料集成（15 世紀）』の刊行。

【年度実績概要】

(1) 情報資料の収集のための調査

永青文庫が所蔵する横山大観《山路》の調査を、寄託先である熊本県立美術館にて行った（塩谷）。

(2) 美術史研究のためのコンテンツの形成

『日本絵画史年紀資料集成（15 世紀）』の刊行にむけて蓄積したデータ（総登録数 4181 件、重複を含む）のうち載録分（全 833 件）の校正、ならびに未収載分の整理統合作業を完了した（綿田）。既に当研究所ＯＢによってカード化されている古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化を行った。作業にあたっては目録（出典等）のみならず当該記事本文も入力し、公開時の利便性を図った。今年度は約 1,800 件の入力を終えた（土屋）。

(3) 研究会の開催

2 月 27 日に『美術研究』400 号、『美術史論壇』30 号記念日韓共同シンポジウム「人とモノの「力学」―美術史における「評価」」を開催、洪善杓氏（韓国美術研究所・梨花女子大学校）による基調講演、張辰城氏（ソウル大学校）・文貞姫氏（韓国美術研究所）・綿田・江村による発表、および田中・相澤による司会でディスカッションを行なった。同シンポジウムは 3 月 12 日にソウルでも開催、基調講演を田中が務めた。またオープンレクチャーを本研究と関連させ、「人とモノの力学」というテーマのもと 10 月 15・16 日に開催した。

(4) 報告書の刊行

日本絵画史関係の年紀資料のうち 15 世紀の銘記類、833 件を翻刻して年代順に集成した『日本絵画史年紀資料集成（15 世紀）』を刊行した。

【実績値】

学会誌等への掲載論文数 3 件（①～③）
学会等での発表件数 5 件（④～⑧）
報告書刊行件数 1 件（⑨）

【備考】

①田中淳「東京文化財研究所『日本美術年鑑』とデジタルアーカイブ」　水谷長志編著『MLA 連携の現状・課題・将来』　勉誠出版　10.6
②土屋貴裕「「天狗草紙」の作画工房」　『美術研究』403　11.03
③皿井舞「神護寺薬師如来の史的考察」　『美術研究』403　11.03
④綿田稔「山水長巻考―雪舟の再評価にむけて」　日韓共同シンポジウム「人とモノの「力学」―美術史における「評価」」　11.2.27
⑤江村知子「江戸時代初期風俗画の表現世界」　日韓共同シンポジウム「人とモノの「力学」―美術史における「評価」」　11.2.27
⑥田中淳「創作と評価―萬鉄五郎《風船を持つ女》を中心に」　日韓共同シンポジウム「視線の「力学」―美術史における「評価」」　11.3.12
⑦津田徹英「中世における真宗祖師先徳彫像の制作をめぐって」　企画情報部オープンレクチャー　10.10.15
⑧塩谷純「秋元洒汀と明治の日本画」　企画情報部オープンレクチャー　10.10.16
⑨『日本絵画史年紀資料集成（15 世紀）』　東京文化財研究所　11.03

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 4121

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.3

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	論文等掲載数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は 15 世紀の日本絵画についての銘記類を集成した『日本絵画史年紀資料集成（15世紀)』を刊行、文化財研究の基盤整備に大きく寄与し、また日韓共同シンポジウム「人とモノの「力学」―美術史における「評価」」を開催、同内容のシンポジウムはソウルでも行われ、日韓両国の研究交流を促進したためＡと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	上記の成果の他、前年度より継続して行なっている古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化も順調に進み、また今年度より新たに横山大観の代表作《山路》の多角的な調査を開始、画材や来歴についての新知見を得ることができた。これらの蓄積されたデータについては、次期中期計画において公開に努めることにしたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4122

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.4

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	近現代美術に関する総合的研究（(1)-②-イ）

【事業概要】

多様化する現代美術の動向の調査研究を含め、日本近代美術の研究資料のあり方、研究の手法の開発、研究成果の公開の仕方を研究し、文化財行政に寄与することを目的としている。そのため、具体的には、第一にこれまで未公開の基礎資料の収集整理の上、データ化等の公開にむけた調査研究を行う。第二に資料にもとづく研究協議、論文等の研究成果の公開を進める。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長　山梨絵美子

【スタッフ】

田中　淳、塩谷　純（以上、企画情報部）、三上　豊、丸川雄三（以上、客員研究員）

【主な成果】

未公刊資料の調査研究として、黒田清輝関連資料、笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理・調査を進め、既刊の『日本美術年鑑』所載データをウェブ上に公開するための準備を行った。資料にもとづく研究協議、成果公開としては、黒田記念館にてデジタルコンテンツ「写真で見る黒田清輝の日常」を作成し公開した。

【年度実績概要】

1　未公開資料の収集整理とデータ化に向けた調査研究では以下の３件を行うことができた。

（１）　矢代幸雄筆ベレンソン宛書簡の翻刻および関連調査を行った。

（２）　笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理を進めた。

（３）　既刊の『日本美術年鑑』の年史、文献目録、物故者の各データ（1936 年から 2003 年）を創 IMAGINE 上で試験的に公開した。

2　資料にもとづく研究協議、論文等の研究成果の公開促進としては、以下を行った。

（１）昨年度の受贈作品 5 点を黒田清輝展（岩手県立美術館、7.17－8.29）で特別公開し、それに伴って配布するパンフレットに掲載するために当該作品の画像と作品解説を作成した。

（２）黒田家遺族から寄贈された資料写真の中から 73 点を選び、解説を付して「写真で見る黒田清輝の日常」と題するデジタルコンテンツを作成し、黒田記念館に設置した 64 インチ大型タッチパネルにて公開した（2010.11.3～）。そのうち 3 点の写真については最新の「絵引き」技術を用い、被写体部分をタッチすることによって、それに関する解説が見られるように作成した。

【実績値】

研究会等発表　3 件（①～③）

論文掲載数　　5 件（④～⑧）

【備考】

①山梨絵美子　「黒田清輝と西洋文学補遺―ド・ラマルティヌ「湖」と「湖畔」をめぐって」企画情報部研究会　10.5.19

②山梨絵美子　東アジア近代洋画史再考のための二、三の視点　国立台湾師範大学（台湾）10. 6.7

③田中　淳「日本近代美術におけるデューラー受容」、シンポジウム「デューラー受容史　500 年」、明治学院大学文学部芸術学科、10.11.13

④塩谷　純「川端玉章の研究（三）」　『美術研究』401　2010.8

⑤山梨絵美子「渡辺幽香　幼児図」『国華』　1382 号　10.12

⑥田中　淳　「『後期印象派・考－1912 年前後を中心に』連載をめぐって」、『美術史論壇』31 号、韓国美術研究所、2011.1　（韓国語、日本語併載）

⑦山梨絵美子　「平成二十一年度に寄贈された黒田清輝作品について―≪舟≫、≪芍薬≫、≪日清役二龍山砲台突撃図≫、≪林政文肖像≫二点」　『美術研究』402 号、10.2

⑧田中　淳「画家中川一政　ひねもす走りおおせたる者」、『没後 20 年　中川一政展』カタログ（日本橋高島屋）、11.3

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4122

自己点検評価調書

研究所 No.4

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2．定量的評価

観点	研究会発表数	論文掲載数	報告書件数			
判定	A	A	A			
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	未公開資料の収集整理とデータ化、および近現代視覚芸術に関する調査研究ともに順調に推進することができた。ウェブ上への公開や最新のデジタル技術を用いたタッチパネルでの公開等、調査成果の発信も積極的に試み、公開方法についても智識と経験を蓄積することができた。次年度以降、さらなる内容の充実につなげていきたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に従って実施することができ、また、ウェブ上での公開を進めることができた。ウェブ上での公開により、国内のみならず日本近代美術史研究の国際的な広がりを獲得しつつある。次年度の東アジア等諸地域における近現代美術の交流に関する調査研究に活かしていきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4123

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.5

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	美術の技法・材料に関する広領域的研究（(1) -②-ウ）

【事業概要】

文化財にかかわる諸分野との提携による作品の多角的研究を目指す。具体的には作品を構成する材料や用いられた技法、制作の過程、作品の成り立ち、生成されてから今日にまでそれがどのように受容され、あるいは伝来してきたかなどを、関係の文献史料や、あるいは作品そのものに対する科学的・光学的分析（X線撮影など）を援用しながら解明し、文化財についてより深く考究していくことを目的としている。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	広領域研究室長　綿田　稔

【スタッフ】

田中　淳、山梨絵美子、勝木言一郎、津田徹英、塩谷　純、綿田　稔、皿井　舞、江村知子、土屋貴裕（以上、企画情報部）

【主な成果】

本研究は美術作品が基盤としている材料・技法・制作の過程等を文献史料あるいは作品に対しての科学的手法による分析を援用しながら解明することを目的とする。本年度は天平時代の脱活乾漆像の技法についてこれまでの調査研究成果をまとめた報告書を刊行した。また、ホームページ上で公開している奈良時代史料にあらわれた彩色語彙についてのデータベースを再点検し、精度の向上をはかった。

【年度実績概要】

本年度は過去４年にわたって行ってきた脱活乾漆技法の解明のため作品調査を総括した報告書『研究資料 脱活乾漆像の技法』を刊行した。

また研究の発展的継承を期し、木造彫刻の調査を行った（京都・神光院蔵、薬師如来立像および地蔵菩薩立像）。

美術工芸品の彩色を考えてゆくうえで、史料にあらわれた関係語彙とその使用例を総覧することを目的に彩色関係資料データベース（語彙・史料編）のデータ集積とホームページ上での公開を行ってきたが、今年度は全約 6,500 件のデータの校正ならびに再整理を行い、精度の向上を図った。同時に索引を作成し、報告書に添付した。

研究会 2 件（2010 年 11 月 24 日、皿井舞「作品紹介　京都神光院・地蔵菩薩立像」／2011 年 12 月 17 日、皿井舞「平安初期神仏習合彫刻史試論　京都・神光院薬師如来立像をめぐって」）を開催し、調査成果を報告した。

前年度までに寄贈を受けた資料のうち、技法材料研究ととくに関わりの深い久野健旧蔵資料および秋山光和旧蔵資料の整理を進めた。

【実績値】

彩色関係資料データベース　全約 6,500 件の校正並びに再整理
報告書数　　1 件（①）
論文掲載数　　2 件（②～③）
発表件数　　2 件（④～⑤）

【備考】

①『研究資料　脱活乾漆像の技法』　東京文化財研究所　11.3
②津田徹英「研究資料　奈良国立博物館蔵 木造南無仏太子立像」『美術研究』401 号　pp. 50-56　10.8
③津田徹英「脱活乾漆技法覚書」　『研究資料　脱活乾漆像の技法』　pp. 25-32　11.3
④皿井舞「作品紹介　京都神光院・地蔵菩薩立像」　企画情報部研究会　東京文化財研究所　10.11.24
⑤皿井舞「平安初期神仏習合彫刻史試論　京都・神光院薬師如来立像をめぐって」　企画情報部研究会　東京文化財研究所　10.12.17

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 4123

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.5

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	報告書刊行数	論文掲載数	発表件数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	美術や文化財に対する理解を深めるための美術の創作のプロセスの解明を行うべく、実作例と史料の双方からアプローチを行ってきた。計画最終年度として予定した成果を得られたため、Ａと判断した

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全般的に計画通りに進捗したと考える。本中期計画で中心として扱った脱活乾漆技法以外にも問題は多岐にわたるため、次期中期計画においても本研究を発展継承していきたい。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4124

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.6

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究(（１）－②－エ)

【事業概要】

古都に所在する寺社等が所蔵する歴史資料や書跡資料について継続的、悉皆的に整理・調書作成・写真撮影等の調査をおこない、現存資料の実態の把握に努め、その調査成果を目録、データベース等により、また重要資料については翻刻をおこない公開する。このような文化財の総合的研究の基礎となる調査を基本とし、その上で記載内容を分析して文化財の歴史的性格・特徴等を研究し、日本の歴史、文化の研究に資する。調査にあたって撮影した写真は焼き付けを作成し、研究者等の研究に供する。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	歴史研究室長　吉川　聡

【スタッフ】

谷本 啓(任期付研究員)、渡辺晃宏(都城発掘調査部史料研究室長)、馬場 基、山本 崇(以上、同部主任研究員)、浅野啓介、桑田訓也(以上、同部研究員)、加藤 優(客員研究員)、吉川真司(客員研究員)

【主な成果】

石山寺については、昨年度からの調査成果に基づいて、石山寺一切経の大智度論に関する論稿を公表できた。奈良時代の知識経として著名なものだが、後世に数種類の経典を取り合わせて現在の姿になったものを、詳細に調査することにより、その取り合わせ状況を明確にできた。また平城宮周辺等の旧家・自治会等が所蔵する資料の調査を進め、江戸時代から明治時代の平城宮跡の状況、その保存運動に関する資料を収集・公表できた。

【年度実績概要】

本年度は、興福寺・薬師寺・仁和寺・東大寺・氷室神社大宮家・三仏寺所蔵の書跡資料・歴史資料調査を行った。興福寺調査は、第 108 函～111 函の調書を作成した。写真は第 4 函・90 函・91 函を撮影した。薬師寺調査は、第 45 函・49 函・51 函～56 函の調書作成と、第 24 函の写真撮影を継続して実施した。仁和寺調査は、御経蔵聖教第 35 函～41 函の調書原本校正と、第 33 函～38 函の写真撮影を実施した。

東大寺は、東大寺図書館収蔵庫第４号室収蔵の新修東大寺文書聖教の調査を、科学研究費補助金も充当して実施した。第 5 函・第 15 函の写真撮影を実施し、また第 59 函・61 函～65 函を調査して、目録データをパソコンに入力した。

また三徳山三仏寺の古文書調査を実施し、第 1 函・2 函の調書作成・写真撮影をおこなった。

氷室神社大宮家文書については、昨年度に引き続き奈良市教育委員会との間で共同研究をおこない、未成巻文書仮第３函 1 巻～19 巻の調書作成を実施した。

また、平城宮跡周辺の旧家等が所有する絵図・古文書や、明日香村の自治会が所有する典籍等について、調査・写真撮影を実施した。

その他調査協力の依頼を受けて、滋賀県石山寺聖教調査や、文化庁依頼の醍醐寺聖教調査などに協力した。

三仏寺古文書調査風景

【実績値】

論文等数：論文２件（①②)、公刊図書１件(③)

収集資料点数

興福寺：調書作成資料点数 163 点、写真撮影資料点数 226 点

薬師寺：調書作成資料点数 309 点、写真撮影資料点数 28 点

仁和寺：調書原本校正資料点数 886 点、写真撮影資料点数 417 点

東大寺：調査データ入力資料点数 624 点、写真撮影資料点数 324 点

三仏寺：調書作成資料点数 282 点、写真撮影資料点数 208 点

平城宮跡周辺・明日香村諸家：調書作成資料点数 169 点・写真撮影資料点数 125 点

【備考】

① 吉川 聡「整備以前の平城宮跡」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010.6

② 吉川 聡「石山寺一切経「大智度論」の基礎的検討」『石山寺資料叢書　史料篇第三』法藏館　2010.6

③奈良文化財研究所『明治時代平城宮跡保存運動史料集』奈良文化財研究所史料第 87 冊、2011.3

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4124

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.6

1. 定性的評価

観点	正確性	適時性	継続性	発展性		
判定	A	A	A	A		

備考
古都に所在する寺社には、未だに調査・整理されていない歴史資料・書跡資料が数多く存在している。その内容を把握し、保存を図り、史料として利用できる状態にまで整理することは、極めて適時性が高い調査である。そのため、着実に中断なく全容を把握する調査を実行しており、正確性・継続性に優れている。このような調査が今後の所蔵者の管理の基礎となり、また研究の基礎となるものであり、発展性がある。今年度は特に、石山寺・明治以前平城宮跡に関する成果を公表し、また、三仏寺の調査を実施することができた。以上より A と判定した。

2. 定量的評価

観点	調査対象箇所数	論文等数	調査点数			
判定	A	A	A			

備考
　調査対象箇所数は、年度計画に掲げた寺社をすべて調査した。論文等数・調査点数は、それぞれ目標値２件・500 件であり、実績値はそれと同等または上回っているので、A と判定した。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	興福寺、東大寺、氷室神社大宮家の調査は計画通り実施し、石山寺はその成果の一部を公表できた。また薬師寺・仁和寺のほか、三徳山三仏寺の調査も実施することができた。そして平城宮跡周辺や明日香村の諸家も調査して成果の一部を公表できた。以上の進捗状況を総合的に判定して A とした。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査事業は堅調に実現できたと考える。三徳山三仏寺は、今年度初めて調査したが、まだ緒に就いたばかりであり、今後も継続的に実施する必要がある。他の寺社についても、成果を公表するまでには更なる調査が不可欠であり、地道な調査研究を継続する必要がある。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4125

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.7

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究（(1) －②－オ）

【事業概要】
わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に向けた歴史的建造物、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する基礎データを蓄積し、分析・研究を行うとともに、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の技法についての再検証（調査研究）を行い、得られた成果を整理するとともに、一般公開を図る。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	建造物研究室長　島田敏男

【スタッフ】箱崎和久［都城発掘調査部遺構研究室長］、黒坂貴裕、大林潤、番　光、鈴木智大、海野聡、高橋智奈津［以上、同部研究員］、清水重敦［文化遺産部景観研究室長］、恵谷浩子［以上、同部研究員］、松本将一郎［同部特別研究員］、成田聖［企画調整部任期付研究員］、増井正哉［奈文研客員研究員］

【主な成果】
文化財建造物の保存修理に関する基礎データである所内保管資料の整理等の作業を行い、「建造物現状変更説明」については出版物として刊行・配布し、「ガラス乾板」については画像をデジタルデータ化し、一般公開を推進した。また、古代建築の技法に関する研究を継続的に実施した。このほか、受託事業により、各種歴史的建造物の調査をおこなった。

【年度実績概要】
1. 所内で保管している文化財建造物保存修理時の「建造物現状変更説明」資料のうち、1956 年度から 1958 年度分のワード文書化、図版調整を行い、その成果を本文編と図版編に分けて刊行・配布した。また、同じく所内保管の文化財建造物等の撮影ガラス乾板（愛知･三重･滋賀県分）を整理して、画像をデジタル化した（デジタル化は外注）。また、上記ガラス乾板及び建造物保存図並びに同摺拓本資料について、外部への資料提供を実施した。
2. 古代建築の技法に関する調査研究では、昨年度に開始した法隆寺所蔵の古材調査を継続的におこなった。本年度は、かつて法隆寺西院金堂に使用されていた部材について調査をおこなった。なお、調査にあたっては、竹中大工道具館の協力を得た。

法隆寺古材実測風景

3. 建造物の基礎データ収集等を目的とした愛媛県松山市の晩翠荘、福井県若狭町の倉見屋荻野家および高知県高知市の竹林寺客殿の調査を受託し、調査・図面作成・報告書原稿作成・報告書編集をおこなった。
4. 海外関連事業として、日中韓の 3 国の文化財研究所における共同研究の一環として、2010 年９月３・４日に、奈良文化財研究所において、第２回日・中・韓建築文化遺産保存国際学術会議を開催した。研究発表をおこなうとともに、討議をおこなった。
5. 海外協力として、文化庁がおこなう協力事業の一環として、ベトナムフエ省フクティック村およびフーホイ村の調査をおこなった。また、奈良文化財研究所を主体として調査をおこなっている、カンボジア・アンコール遺跡群西トップ寺院について、建築的調査をおこなった。

【実績値】
論文等数 20 件（公刊図書 9 件①～⑨、論文等　11 件⑩～⑳）　　学会等発表件数０件
保管建造物関係資料整理：写真乾板デジタル化 2167 枚、現状変更資料入力等 1956～1958 年分
古代建築研究現地資料収集：法隆寺古材調査 91 回
保管建造物資料の外部者利用数：乾板写真６件 407 枚、建造物保存図４件 113 枚

【備考】①奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1956～1958（本文編)』2011.3　②奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1956～1958（図版編)』2011.3　③奈良文化財研究所『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究２　木部』2010.25　④島田敏男他『ベトナム社会主義共和国　フクティック村　村落調査報告書』2011.3　⑤大林潤他『晩翠荘調査報告書』2010.125　⑥黒坂貴裕他『若狭町倉見屋建造物調査報告書』2011.3　⑦島田敏男他『鷲原八幡宮総合調査報告書』2011.3　⑧黒坂貴裕他『奈良県近代和風建築総合調査報告書』2011.3　⑨島田敏男他１名『山田寺とその遺物』　⑩成田聖他１名「西トップ寺院の建築調査－2009 年度の成果－」　⑪箱崎和久「ベトナム中部民家の特質－フエ省フクティック村の調査から－」　⑫海野聡「法隆寺所蔵古材調査１」　⑬黒坂貴裕「奈良県近代和風建築とその設計者」　⑭島田敏男「津和野町社寺建築調査」　⑮鈴木智大「山木遺跡出土建築部材の調査」(⑩～⑮『奈良文化財研究所紀要 2010』2010.6)　⑯島田敏男「日本の遺跡における建物復元の考え方」　⑰大林潤「日本における発掘遺構と復元研究」　⑱清水重敦「平城宮第一次大極殿の復元と古代建築遺構研究の現在」(⑯～⑱『第２回韓・中・日建築文化遺産保存学術会議予稿集』2010.9　⑲島田敏男「魚梁瀬森林鉄道を歩く①～⑥」『高知新聞 2010.5.19～24 日』　⑳島田敏男「大極殿の復原と研究」『毎日新聞 2010 年５月 12 日夕刊』

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4125
(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.7

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	S	A	

備考
文化財建造物保存修理事業等で作成された貴重な記録である「建造物現状変更説明」「ガラス乾板」の資料整理、デジタル化作業は継続的に実施しており、地味な作業ではあるが、適時性・継続性・正確性の上で高く評価できる。古代建築の諸構法の研究は、研究所がこれまで継続してきた調査研究に基づき、これを発展させるため、新たに「技術・技法」等の視点を加え研究するもので、独創性のある研究内容といえる。特に、法隆寺古材調査は、古代建築の技法を知る上でまたとない資料であり、新たな視点での調査おこない、成果を資料化することは、古代建築研究の展開におおきく貢献するものである。さらには、修理にともなって取り替えられる古材の価値を明確にすることによって、その保存に資するものである。したがって、上記の５項目のすべての観点で高く評価できる。また、ベトナム・カンボジアにおける協力事業については、詳細な調査方法およびその成果を示すことにより、当該国における調査研究の水準を高めるとともに、当該国における文化財保存に貢献している。受託業務として行った松山市晩翠荘、若狭町倉見屋荻野家、高知市竹林寺客殿の調査においては、詳細かつ正確な調査にもとづいて、その価値を明確にするとともに、その保存・活用方針を提案しており、近年文化庁で推進されている文化財の保存・活用によるまちづくり施策に、おおきく貢献している。以上の点を総合的に判断し、特に古代建築関連で顕著な成果に結実し、今後もそれが期待される継続性についてはＳ評価とし、その他項目についてもＡ評価と判断する。

2．定量的評価

観点	論文等数	資料整理数				
判定	A	A				

備考
論文等数は、20 件に達した。目標値に掲げた出版物のうち１件は諸般の事情で出版し得なかったが、予定出版物以外に受託調査成果の報告書２件および昨年度おこなった調査２件についても報告書の執筆編集をおこない、報告書が刊行された。また、予定をしていた国際学術シンポジウムを開催し、多くの研究者の参加を得た。総合的に判断して論文等数については、 A と判定した。資料整理数は特に目標値を掲げていないが、十分に成果が認められるので、A と判定した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財建造物の保存修理に関する基礎データの整理等については計画通り実施でき、この継続的な実施によって、本事業の重要性が認知されるようになっている。古代建築の研究に関しては、法隆寺古材調査は、現段階ではまだ基礎的な作業であるが、今後高く評価されるものと考える。受託の形態で行った松山市晩翠荘、若狭町倉見屋、高知県竹林寺の建造物調査において、諸建築の具体的様相を究明できたことは、委託者はもちろん、文化庁等の調査に寄せる期待に応えることになり評価できるとともに、将来実施する建築調査にも反映できる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	所内保管の建造物関係資料についての整理等作業、古代建築の諸構法に関する研究とも順調に進捗している。前者は地味な作業であるが、これを継続させることの重要性をさらにアピールしたい。後者は、研究所が蓄積した過去の研究成果を元にした本研究所ならではの研究として継続的におこない、随時その成果を報告書として刊行してゆく予定である。今年度の成果を元に、次年度においては本研究の実施にさらに力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4131

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.8

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	無形文化財の保存・活用に関する調査研究（(1)-③）

【事業概要】

わが国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承実態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成をおこなう。

また、無形文化遺産分野についての国際的研究交流として、アジア地域を中心とした諸外国の関係機関との具体的交流を推進するための協議を行う。

【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長　宮田繁幸

【スタッフ】

高桑いづみ、飯島　満、俵木　悟、菊池理予（以上、無形文化遺産部）、森下愛子（客員研究員）

【主な成果】

文化財保護委員会が作成した音声資料、戦前に開発・実用された音声記録媒体フィルモン、現在伝承されている狂言歌謡、能管の製作技法、文化財保護委員会及び文化庁が行った工芸技術記録について調査研究をおこなうとともに、無形文化遺産部所蔵音声資料の整理をおこない、伝承の危ぶまれる伝統芸能について実演記録を作成した。無形文化遺産分野での国際的研究交流では、韓国国立文化財研究所の無形文化遺産研究室との合意書に基づき、研究員の相互派遣を実施した。5 年間のまとめてとして『無形文化財の伝承に関する資料集』を発行した。

【年度実績概要】

現在伝承されている狂言小歌のうち、初期歌舞伎と交流のあった歌謡について検討し、現在でも江戸初期の音楽構造をそのまま伝えていることを検証した。成果は楽劇学会大会で口頭発表し、『楽劇学』18 号に掲載した。

金沢と名古屋で別個に伝承されている和泉流狂言の技法について調査をおこない、伝承の違いを明らかにした。成果は 12 月 12 日、石川県立能楽堂で開催した第 5 回無形文化遺産部公開学術講座で発表した。

明治 2 年に執筆された能管の製作方法に関する伝書の翻刻を行い、プロジェクトの報告書に掲載した。

戦前に開発・実用化された国産の音声記録媒体で、未だその全容が明らかとなっていないフィルモン音帯について、早稲田大学演劇博物館と共同で調査を行い、その成果を報告書に掲載した。

二世鶴沢清八による義太夫節の曲節に関する音声資料（1958 年 2 月収録）について調査を行い、その成果をプロジェクトの報告書に掲載した。

工芸技術に関しては、実地調査を行いつつ文化財保護委員会及び文化庁が行った工芸技術記録、及び近世における染織技法書について調査・検討を行い、その成果をプロジェクトの報告書に掲載した。

連続口演の機会が激減している講談について、一龍斎貞水師と神田松鯉師による実演記録を作成した。また、伝承が変化しつつある宝生流謡曲及び喜多流謡曲について、今井泰男師と喜多六平太師による実演記録を作成した。

【実績値】

学会等発表件数　2 件（①、②）
論文等発表件数　6 件（③～⑧）

【備考】

①高桑いづみ「独吟一管「海道下り」の伝承再考」　楽劇学会第 18 回大会　10.07.18
②高桑いづみ「和泉流：狂言小舞の音楽」　第 5 回無形文化遺産部公開学術講座　石川県立能楽堂　10.12.12
③飯島満「フィルモン音帯に関する調査報告」『無形文化遺産研究報告』5　11.03
④飯島満「資料紹介　二代目鶴沢清八『義太夫節の種類と解説』」『無形文化財の伝承に関する資料集』11.03
⑤高桑いづみ「翻刻と解題『横笛細工試律便覧』」『無形文化財の伝承に関する資料集』11.03
⑥高桑いづみ「独吟一管「海道下り」の伝承再考」『楽劇学』18号　11.03
⑦菊池理予「工芸技術記録に関する研究－『江戸小紋工芸技術記録』を通じて－」『無形文化財の伝承に関する資料集』　11.03
⑧菊池理予「我が国における工芸技術保護の歴史と現状―染織技術を中心として一」『無形文化遺産研究報告』5　11.03

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 4131

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.8

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保護委員会の録音を継続して調査し、一般にその成果を公開したのは、高く評価できる。また、狂言歌謡の調査に関して、その成果を伝承地で開催した公開学術講座で公表した意義も大きい。伝承が危ぶまれる芸能の実演記録も他にない事業であり、適時性にかなうものである。また、公開学術講座は金沢大学と共催、フィルモンについては近代文化遺産研究室とともに早稲田大学演劇博物館の事業との協力であり、研究成果を広く外部と共有でき、今後の研究交流にも得るところが大きかった。なお狂言歌謡の調査、工芸技術記録の調査は緒に就いたばかりであり、本成果を踏まえ次期中期計画でも継続しておこなう予定である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	総合的評価で記した通り、多角的に無形文化財の伝承について成果をあげることができ、年度計画を 100%達成できた。次年度計画ではこの方向性を保ちながら、さらに深く調査研究を行いたいと考えている。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4151-1

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.9

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	平城宮跡東方官衙地区（第４６６次）の発掘調査（(１）－⑤－ア－１）

【事業概要】
平城宮東方官衙地区の学術発掘調査。中期計画にもとづき重点的に発掘調査を遂行している地区で、東西６m、南北 111mの調査区を設定した。調査面積は約 666 ㎡。調査期間は平成 22 年 1 月 18 日～4 月 28 日。現地説明会を 4 月 17 日に開催し、750 名の参加があった。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人

【スタッフ】
渡邉晃宏、国武貞克、桑田訓也、海野聡、中村亜希子（以上、都城発掘調査部）、金田明大、山崎 健（以上、埋蔵文化財センター）、中村一郎（企画調整部）

【主な成果】
基壇をもつ東西棟礎石建物が南北方向に 3 棟築地塀を挟んで建つことが明らかになった。また周辺の地中レーダー探査により、西隣にも同様の建物配置となる遺構が存在することも判明した。さらにこれらの建物群の南北でそれぞれ宮内道路とそれに伴うと推定される築地塀を検出した。以上により、ある官衙区画の南北範囲を確認することができた。その南には掘立柱建物による別の官衙区画を検出した。また礎石建物群の下層から神亀・養老年間の木簡が出土した。

【年度実績概要】
主な調査成果は次の通り。

①基壇を伴う東西棟の礎石建物が 3 棟、築地塀を挟んで建ち並ぶ様相が明らかとなった。礎石建物の構造は、規模や床の有無などで 3 棟それぞれが異なった様相をもつ。

②今回の調査区の北方に位置する平城 429 次調査区の南端で想定された築地塀と、今回調査区の北端で検出した築地塀からなる東西中軸線は、東区朝堂院東門の中軸線と一致する。このため両築地間は東区朝堂院東門を中軸とする、南北約 12m（40 小尺ないし 35 大尺）の東西方向の宮内道路を想定できる。これは東方官衙地区が東区朝堂院と一体の配置計画に基づいていることを示すと考えられる。

③レーダーによる地中探査の成果によると、基幹排水路 SD2700 から東の区画には、東西棟礎石建物が東西に 2 棟ずつ、南北方向に 3 列にわたって合計 6 棟並ぶとみられる。今回はその東の列の建物と築地塀を、調査したことになる。このようにレーダーによる地下探査によって未発掘区を含めた官衙区画の全体像を把握した。

調査区全景（南東から）

④礎石建物群の下層から神亀・養老年間の木簡が出土した。このうちの 1 点から『続日本紀』に登場する大伴直宮足の役職が武蔵国豊嶋郡大領であったことが判明した。

【実績値】
論文等数：6 件（備考欄参照）
発表件数：2 件（報道発表 1 回、現地説明会 1 回）
出土品　：金属器 1 点、石器 1 点、木器 1 箱、木簡 1 箱、土器 10 箱、鬼瓦 1 点、軒瓦 5 箱、丸瓦･平瓦 90 箱
記録作成数：遺構実測図（A2 判）19 枚、遺構写真（４×５）20 枚

【備考】
①『平城宮東方官衙地区（平城第 466 次調査）記者発表資料』2010.4.15
②『平城宮東方官衙地区（平城第 466 次調査）現地説明会資料』2010.4.17
③国武貞克「平城宮東方官衙地区（平城第 466 次）の調査」『奈文研ニュース』No.37 2010.6
④国武貞克・金田明大「東方官衙地区の調査－第 466 次」『奈良文化財研究所要 2010』2010
⑤国武貞克「東方官衙地区の調査－第 466 次」『奈良文化財研究所要 2011』2011（予定）
⑥金田明大「土の中には何かがある？？　平城宮東方官衙地区の調査」『奈文研ニュース』No.39 2010.12

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4151-1
(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.9

1. 定性的評価

観点	正確性	継続性	適時性			
判定	A	A	A			

備考
正確性：複数の研究員による発掘調査を実施し、建物遺構を検出することができた。４月８日には都城発掘調査部員による現場検討会を実施して意見を集約し、その後の調査に活かすことができた。
継続性：中期計画にのっとり実施した第 407 次・第 429 次・第 440 次調査の成果とあわせて、東方官衙地区の全体構造の解明に寄与した。
適時性：調査成果を迅速かつ広く公表した。

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				

備考
論文等数：『奈良文化財研究所紀要 2010』で調査成果の概要を報告した。調査の概要についてはほかに『平城宮東方官衙地区（平城第 466 次調査）現地説明会資料』などで、上記報告に先駆けて公開し、『奈文研ニュース』№37 において広く普及につとめた。これらに加えて『奈良文化財研究所紀要 2011』で調査成果の詳細を報告する予定である。
発表件数：報道発表や現地説明会で、調査の成果を国民に広くかつ迅速に公開した。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東方官衙地区の構造およびその性格の解明に寄与し、その成果を論文として発表するとともに、現地説明会を開催し、新たな知見を広くかつ迅速に国民に公表した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に沿ってすでに実施した第 407 次・第 429 次・第 440 次調査の成果を踏まえ計画をたてることで、的確な調査を遂行でき、東方官衙地区の様相をさらに一層明らかにすることができた。この調査により、次回に調査を予定している同じ区画の東西方向の調査計画の立案にも寄与した。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4151-2

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.10

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	平城宮跡東院地区（第４６９次）の発掘調査（（１）－⑤－ア－２）

【事業概要】

平城宮跡東院地区の学術発掘調査。調査区は東院地区の西北部に位置し、調査面積は 850 ㎡。調査期間は、平成 22 年４月１日～10 月 29 日である。７月 15 日に調査成果を報道発表し、７月 17 日には現地説明会をおこない、約 1,000 名の参加があった。

【担当部課】	都城発掘調査部	【プロジェクト責任者】	副所長　井上和人

【スタッフ】

箱崎和久、馬場 基、芝 康次郎、中村亜希子、小池伸彦、清野孝之、鈴木智大、桑田訓也（以上、都城発掘調査部）、青木達司（文化遺産部）、中村一郎・栗山雅夫・鎌倉 綾（以上、企画調整部）

【主な成果】

平城宮跡東院地区の西北部にあたる調査区で、建物跡、掘立柱塀、溝を多数検出した。これらは周辺の調査成果も参照すると６期以上に区分できる。おもな遺構としては、調査区中央部を東西に流れる新旧２条の石組溝、調査区北部の周囲を溝で区画された東西棟礎石建物、推定三面廂付の東西棟建物などがある。

周辺の調査成果と比較して、建物が小規模になる点や、食器類をはじめとする大量の遺物が出土する点から、東院地区のバックヤードとしての機能が推定できる。

【年度実績概要】

2006 年度から計画的におこなっている東院地区の調査で、今年度の調査区は、昨年度の調査区の北方、および 1965 年に行われた第 22 次南調査区の東方に設定し、昨年度に検出した東西通路の北方にあたる地区の様相解明を目的とした。

検出遺構は建物８棟、掘立柱塀 17 条、溝 10 条などである。これらは少なくとも６期以上に区分できるが、時期を通して以下のような重要な所見を得ることができた。

〔南北を分断する数条の区画〕　調査区中央部と北部で、数時期にわたって建て替えられた東西塀を確認した。中央部の東西塀に沿って幅約１ｍの石組溝が２条ある。これは当初の石組溝と、それを少し北に付け替えた溝である。これらの溝をまたぐ建物が存在しないため、塀の有無に関わらず、区画溝として機能していた可能性が高いと考えられる。各時期を通じ、この調査区中央部の溝と塀を境界として南北に建物群が配置され、北側の区画は、内部にある東西塀の存在から、時期によってさらに細かく区画されていたとみられる。

〔中央の区画施設を境とした南北で異なる建物群〕　中央の区画施設（石組溝と塀）をはさんで南北では、建物群の規模と展開が異なる。南側の区画で相対的に大規模なものが多く、北側は小規模である。この差異は、遺物の出土状況や内容にも表れており、南側よりも北側での出土量が多い傾向がある。遺物の内容は、食器類や大甕が目だつことから、北側の区画でこれらを保管あるいは使用していた可能性がある。こうした状況は、今回の調査区より南方で見つかった大規模な総柱建物群が展開する空間では、認められない。遺物の内容と豊富さは、これらの空間とは性格が異なることを示し、この付近は東院での人々の生活を支えるバックヤード的機能を備えた空間であったと考えられる。

調査区中央部東西石組溝（東から）

【実績値】

論文等数：３件（①～③）

発表件数：１件（報道発表１回）

出土品：土器コンテナ 162 箱、軒瓦 188 点、丸瓦・平瓦 2830.503kg、磚 80.675kg、礎板、帯金具、佐波理椀、神功開宝

記録作成数：実測図（A2 判）50 枚、遺構写真（４×５）43 枚

【備考】

①『平城宮東院地区西北部の調査　平城第 469 次調査記者発表資料』2010.7.15

②芝 康次郎・桑田訓也「平城宮東院地区西北部の調査（平城第 469 次）」『奈文研ニュース』№38　2010.9

③芝 康次郎・桑田訓也ほか「平城宮東院地区の発掘調査―469 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定）

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4151-2

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.10

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考

850 ㎡という比較的小規模な調査区であったのにも関わらず、東院地区の構造を知る上で、重要な成果を得ることができた。

適時性：平城京遷都 1300 年祭が開催されており、多くの来場者が訪れるなかで、調査区の西で発掘作業を間近に見ることのできるよう、調査区のフェンスの位置などを工夫した。これには遷都 1300 年協会によるボランティアガイドの協力があったが、毎日、遺構の概要と調査の進捗状況などをガイドへ説明した。これによってガイドの理解度も大きく増した。

発展性：調査成果は、平城宮をはじめとする都城研究に大きく貢献すると考えられる。

継続性：未調査の区域への建物や構造物の連続性が確認でき、次調査への足がかり的な成果を得ることができた。

正確性：遺跡は整地土層が複雑な谷部に立地するため、遺構の検出には困難を極めたが、複数の調査員による綿密な観察により、複雑な土壌堆積を理解し、多くの建物跡を検出することができた。また都城発掘調査部員による現場検討会を７月８日とおこなって意見を集約し、その後の調査に活かすことができた。それ以外にも適宜都城発掘調査部員が現場を訪れて、検討をおこなった。

2．定量的評価

観点	資料収集数	発表件数				
判定	A	A				

備考

本調査区では、東院地区のこれまでの調査区と比較してより多くの遺物が出土した。これは調査区の性格によるところが大きいが、より上層の堆積層から作業員による掘削作業を開始したこともその要因かもしれない。出土遺物については整理・調査中である。

調査期間は平城京遷都 1300 年祭の期間中であり、調査区脇で間近に発掘調査を見ることができるよう、調査区を隔てるフェンスの位置を工夫し、公開施設とした。これには遷都 1300 年協会によるボランティアガイドの協力を得て、随時、来場者に解説をおこなっていただいた。これによって調査成果をリアルタイムで公表することができた。これにはその成果もあってか、調査中盤におこなわれた現地説明会では、約 1000 人の聴衆を得ることができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまでの調査からうかがえる東院地区の性格とはやや異なる調査成果を得た。これは東院地区ひいては平城宮の研究を進める上で重要な成果である。また、平城京遷都 1300 年祭にあたり、調査を「フィールドミュージアム」として広く市民に公開できたことは、今後の平城宮跡の発掘調査のあり方を考える上で、一つのモデルケースとなったと思われる。 今回の調査では、遺跡の立地から遺構の検出に困難を極め、調査期間を延長したが、調査成果を今後の調査へ活かすことができるようにしたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	構造物が多い点と土層堆積の複雑さから難しい発掘調査であったが、２現場体制で調査を終えることができた。今後、東院地区の発掘調査を継続していくためには、上記のことを念頭に置き、大胆かつ細心の調査を進めていく必要がある。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4151-3

業務実績書

研究所 No.11

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	西大寺旧境内（第４７３次）の発掘調査　((1) －⑤－ア－３）

【事業概要】
個人住宅新築にともなう事前の発掘調査。調査面積は全体で約 15 ㎡。調査期間は平成 22 年９月 22 日～10 月１日。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長　井上和人

【スタッフ】
鈴木智大、小池伸彦、清野孝之、桑田訓也（以上、都城発掘調査部）、青木達司（文化遺産部）、
中村一郎・栗山雅夫（以上、企画調整部）

【主な成果】
『西大寺資財流記帳』にみえる薬師金堂の回廊推定地の調査。今回の調査では、回廊の痕跡は検出されず、金堂院を囲む回廊は、当地よりも南に位置する可能性が高まった。

【年度実績概要】
西大寺旧境内中枢部の基礎データを獲得した。層序は、地表から現代の盛土、耕作土、床土、灰褐粘土（包含層。瓦片多含）となり、包含層の直下（現地表面から約 150cm 下、H=75.30m）で検出をおこなった。検出した面は、整地土が場所により異なり、東側は地山（黄褐色砂質土混青灰色砂礫土）であるが、西北隅ではその上に灰褐色粘質土層が、西南隅には灰色砂質土がのる。

上記の検出面においては、土坑１基、Ｌ字型の溝２条を確認した。

［土坑ＳＸ１］直径 1.3m。埋土は、黄褐色粘土。直径 25cm ほどの花崗岩、凝灰岩が出土した。礎石の据付穴の可能性がある。

［Ｌ字型溝ＳＤ２・３］埋土は黄褐色粘質土。南北溝ＳＤ２が、西にまがり東西溝ＳＤ３となる。深さはＳＤ２に比べ、ＳＤ３は 10cm ほど深い。ＳＤ２の底からは、凝灰岩が出土、ＳＤ３は東壁で瓦を確認できる。

［Ｌ字型溝ＳＤ４・５］埋土は黄褐色粘質土。南北溝ＳＤ４が、東にまがり東西溝ＳＤ５となる。ＳＤ４はＳＤ２よりも新しい。

上記の遺構の詳しい性格は、不明であるが、その存在の有無が問われていた西大寺金堂院の回廊とは関わらないことが判明した。

調査区全景（東から）

【実績値】
出土品：丸瓦 31 点 2.6 kg、平瓦 558 点 22.5 kg、凝灰岩７点 2.1 kg、土器１箱
記録作成数：実測図（A2 判）３枚、遺構写真（4×5）４枚

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4151-3

自己点検評価調書

研究所 No.11

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考
本調査地区は、15㎡という小面積であったが、奈良時代に東大寺とならぶ大寺であった西大寺の中枢部の構成に迫る調査成果を得た。
適時性：緊急性の高い調査で、また限られた調査面積にもかかわらず、大きな成果をあげた。
発展性：調査成果は、西大寺にとどまらず古代寺院の伽藍構成の研究に大きく貢献すると考えられる。
継続性:今回の調査成果は西大寺旧境内においてこれまで継続的に実施してきた発掘調査の成果を基礎とするものであり、本調査の成果により、今後の調査の指針となる成果が得られた。
正確性：文献資料およびこれまでの発掘成果による知見を正確に把握した上で、あらゆる可能性を勘案した慎重な観察により得られた結果である。

２．定量的評価

観点	資料収集数					
判定	A					

備考
これまで未解明であった西大寺の中枢部の囲繞施設を知る上で、基礎的な図面および観察のための写真を採取することができた。また多数の瓦・凝灰岩・土器を収集することができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査面積は限られており、回廊に伴う遺構は発見されたなかったが、今後の継続的な調査の前提条件となる基礎的なデータを収集することができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性の高い発掘調査に対応し、調査期間も短いながらも、今後の西大寺旧境内地の主要部に迫る十分な情報を獲得することができた。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4151-4
（様式 1）

業務実績書

研究所 No.12

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	薬師寺（第４７４次）の発掘調査（（１）－⑤－ア－４）

【事業概要】
薬師寺境内の防災設備設置工事にともなう事前の発掘調査である。調査区は防災設備の設置位置を含む逆 L 字型のトレンチで、南北トレンチが幅約１ｍ、長さ約４ｍ、この延長部幅約２ｍ、長さ９ｍと、東西トレンチ幅約２ｍ、長さ約 10m、この延長部幅 2m、長さ 21m、計 80 ㎡を断続的に調査した。調査期間は平成 22 年８月 16 日（月）に着手し、10 月 21 日（木）に終了した。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人

【スタッフ】
小池伸彦、清野孝之、鈴木智大、桑田訓也、渡辺晃宏、森川 実、中川あや、海野 聡（以上、都城発掘調査部）、青木達司（文化遺産部）、中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾（以上、企画調整部）

【主な成果】
重機により地表より約 165cm 掘削し、そこから作業員による掘り下げを開始した。池の埋め土とみられる暗灰褐粘砂土層を検出し、池の岸を検出した。一部、地表から約 250cm まで掘り下げて池の底の腐植土を確認した。検出遺構は、池１面、土坑６基、瓦土坑２基、東西溝１条、南北溝１条である。池の上の整地層から 12 世紀の瓦器皿が出土したが、各遺構の年代については不明である。

【年度実績概要】
これまでの発掘調査・研究では、今回調査区の北側に僧房が存在したことは確認されていたが、この僧房の南側に建物が存在したかどうかについてはわかっていない。今回の調査の結果、池や排水にかかわる東西溝を発見した。
池の範囲では、自然木や松かさの混じる層があり、その下層には池の堆積、池底には水草の堆積があった。このことから池の周囲には松がたくさん生えていたものと考えられる。このあたりは中心伽藍から東に向けて標高が下がる地形で、この湿地状の地形を利用するために、池を何度も改修し、東西溝を掘って排水するなど、知恵を搾った様子が窺えた。
今回の調査では僧房南側の建物の存在は確認できなかったが、回廊の東側からわずか 20mほどしかない伽藍中心附近まで池が広がっていたという、かつての伽藍中心部の環境の一端を明らかとすることができた。

東西トレンチの様相（東から）

【実績値】
論文等数：２件（①②）
発表件数：１件（報道発表１回）
出土品　：軒瓦 12 点、丸・平瓦 80 箱、土器・陶磁器２箱、鉄釘１点、炉壁片１点、竹片１点、種子８点
記録作成数：実測図（A2 判）14 枚、遺構写真（4×5）22 枚

【備考】
①海野 聡ほか「薬師寺の調査」『奈文研ニュース』No.39　2010.12
②海野 聡ほか「薬師寺境内の発掘調査―第 474 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定）

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4151-4

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.12

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			

備考
適時性：緊急性の高い調査に対応し、限られた調査期間と調査面積にもかかわらず、大きな成果をあげた。
発展性：調査成果は薬師寺伽藍のかつての様子を知る上で、建物以外の周辺環境の解明に大きく貢献すると考えられる。
継続性：今回の調査成果は薬師寺境内においてこれまで継続的に実施してきた発掘調査の成果を基礎とするものであり、今回の成果も今後の周辺地域における発掘調査に寄与すると考えられる。

2. 定量的評価

観点	資料収集数	発表件数				
判定	A	A				

備考
遺物の出土量は調査者の意志で左右できるものではないが、本調査では、偶然にも分析をおこなうために十分な量の遺物が出土した。遺物の整理・調査を進めている。また調査成果を記録保存するための図面類や写真は必要かつ十分な数を採取した。調査区が狭小のため、一般への現地説明会等はおこなうことができなかったが、奈文研ニュースにて成果の一部を公開した。1 月 13 日には奈良新聞に取りあげられ、広く周知するにいたった。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	既設管の埋設状況や安全性から判断して、掘り下げを断念した部分があったが、限られた調査範囲で、必要十分な成果を得るとともに、適切な発掘調査現場運営をおこなうことができた。発掘成果の学術的意味は非常に大きいと考えられる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性の高い調査であったが、高い学術的水準を維持した調査を実施し、予想以上の成果をあげた。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4151-5

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.13

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	薬師寺（第４７５次）の発掘調査（（１）－⑤－ア－５）

【事業概要】
薬師寺休ヶ岡八幡宮境内における防災施設設置にともなう事前の発掘調査。調査は八幡宮本殿の東側と西側との２箇所で実施した。調査期間は平成 22 年 10 月５日～11 月２日（社殿東側）と、同年 12 月 1 日～７日（社殿西側）である。調査面積は合計 41 ㎡。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長　井上和人

【スタッフ】
森川 実、渡邊晃宏、中川あや、海野 聡（以上、都城発掘調査部)、
中村一郎・栗山雅夫（以上、企画調整部）

【主な成果】
薬師寺休ヶ岡八幡宮における発掘調査。社殿の東側では奈良時代に開削されたとみられる段差と、この段差を埋める奈良時代の遺物包含層を確認した。出土土器は奈良時代前半のものである。また、社殿の西側では表土直下で現代の土坑４基を検出したが、明確な遺構は皆無である。

【年度実績概要】
八幡宮社殿の東側では、管路に沿う細長い南北方向の調査区を設けた。防災設備（会所枡）の設置予定位置で調査区を拡張したところ、地山（白色シルトおよび橙色砂礫層）が八幡宮の社殿側（西側）で高く、東側へと急激に低くなることが判明した。この東落ちの段差は人為的に切り出されたものとみえ、地山の比高は最大で 1.5mにおよぶ。また、段差を埋めている遺物包含層は「炭混土」・「灰色土」など都合８層以上に細分できる。これらの土層は西側で高く、現地形を反映した堆積状況をみせる。ことに「灰色土」は奈良時代前半の土師器・須恵器を多く含んでおり、整理箱で土器９箱、瓦多数が出土している。土器の内容は土師器杯Ａ、杯Ｃ、皿Ａ、高杯、盤、甕、鍋、薬壺や製塩土器、須恵器杯Ａ・Ｂとその蓋、各種の壺、平瓶、甕などである。土師器杯・皿類には１段斜放射暗文＋連弧暗文を施した例が目立つ。墨書土器には土師器皿の外底部に「十」と記したものなどがある。このほか、細片であるが三彩片が出土している。全体に細片が多いものの、器種構成が明らかな奈良時代前半の土器群である。休ケ岡八幡宮の創建は９世紀末であり、段差の開削が八幡宮以前に遡るのは確実である。

八幡宮社殿の西側（参道側）では東西方向の狭長なトレンチを設定し、調査をおこなったが、表土直下で現代の土坑４基を検出したほかは、明確な遺構は皆無である。地山の傾斜は、八幡宮社殿の東側とは異なっており、東側が高く西側が低い。この傾斜は厚い整地層で埋められているが、その時期を特定することはできない。

【実績値】
論文等数：２件（①・②）
出土品　：軒瓦 61 点、土器９箱
記録作成数：実測図（A2 判）12 枚、遺構写真（4×5）10 枚

【備考】
①森川 実「薬師寺休ヶ岡八幡宮の調査」『奈文研ニュース』No.39 2010.12
②　森川 実ほか「薬師寺休ヶ岡八幡宮の発掘調査―第 475 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定）

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4151-5

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.13

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			

備考

薬師寺休ヶ岡八幡宮の本殿東側において、八幡宮創建以前の地形復原に必要な知見を得ることができた。

適時性：緊急性の高い調査に対応し、限られた調査期間と調査面積にもかかわらず、八幡宮創建以前の地形改変の様子を明らかにした。

発展性：調査成果は、薬師寺休ヶ岡八幡宮についての研究に大きく貢献すると考えられる。

継続性：今回の調査成果は薬師寺境内において継続的に実施してきた発掘調査の成果を基礎とし、今回の成果も今後の周辺地域における発掘調査に寄与するものと思われる。

2．定量的評価

観点	資料収集数					
判定	A					

備考

薬師寺休ヶ岡八幡宮の本殿東側で出土した奈良時代前半の土器は、この時期のまとまった資料として量的・質的に貴重である。調査の成果として必用かつ十分な量の実測図を作成し、大判写真を撮影した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまで未調査地域であった薬師寺休ケ岡八幡宮の境内地において発掘調査を実施し、①八幡宮創建以前の地形改変のありさまと、②八幡宮本殿が地形上の高所を選んでいることを確認した。緊急調査ながら学術的価値のある調査と考えられる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性の高い調査であったが、高い学術的水準を維持した調査を実施し、予想以上の成果を挙げた。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4151-6

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.14

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	薬師寺（第４７６次）の発掘調査（(1) －⑤－ア－６）

【事業概要】

平城京薬師寺金堂周囲における防災施設設置にともなう事前の発掘調査。調査区は大きく３箇所（Ａ～Ｃ区）に分かれ、調査面積は全体で約 60 ㎡。調査期間は平成 23 年１月 17 日～2 月 25 日。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長　井上 和人

【スタッフ】

浅野啓介、今井晃樹、大林 潤、国武貞克（以上、都城発掘調査部）、
中村一郎・栗山雅夫（以上、企画調整部）

【主な成果】

調査区は金堂前庭部分にあたり、井戸や前庭に敷かれた河原石を検出した。

【年度実績概要】

Ａ区：金堂南面の東よりに東西 1.6m、南北 12mの調査区を設定し、Ａ区とした。現代の整備盛土、自然堆積層、遺物包含層を経て、現地表面より約 80～90 ㎝ほど下で、複数の河原石を検出した。石の大きさは径 15～40 ㎝ほどで比較的集中して出土した。石がない部分も石の抜取が検出され、本来は調査区一面に敷かれていたものである。石の間はやや隙間があり、石の上面も平らでないことから、人が歩くための舗装ではなく、庭園的な景観を意図したものと思われる。透水層の上に厚さ 40 ㎝ほどの粘土の整地をした上に石をすえており、薬師寺造営当初の奈良時代の遺構であると考える。石の間や石の上にかぶる砂層から瓦器片が出ており、中世のある段階には埋没したようだ。

Ｂ区：金堂南面の西よりに東西 1.6m、南北 12mの調査区を設定し、Ｂ区とした。現代の整備盛土、自然堆積層、遺物包含層を経て、現地表下 70 ㎝ほどで、井戸とそれにともなう溝を検出した。井戸は平面円形で２段掘である。上段は直径 2.5m、深さ約 70 ㎝をはかる。その中央に直径１ｍ、深さ約 70 ㎝の下段の穴をほり、木桶をすえていた。木桶の枠板は抜きとられており、竹のたがが残存していた。井戸の西北には溝があり、排水施設と考えられる。井戸本体と溝には上下２層の埋土があり、溝下層には中世の瓦器片が出土しており、中世以前に構築された可能性はあるが、構築と廃絶の年代は現在のところ不明である。

井戸掘り込み面の下層には粘土の整地層があり、その上面には河原石が数個据えられていた。その状況はＡ区と同様で、同時期の遺構と考えられる。調査区の北側で、この粘土の整地面から掘り込まれた土坑があり、中から鎌倉時代の軒瓦が出土した。したがって、この下層の遺構は、薬師寺の造営時期から、中世のある段階まで使用されていたものと考えられる。

ただし、Ａ区、Ｂ区とも遺物は整理中であり、各遺構の正確な時期は、今後の整理をまって確定したい。

Ｃ区：南北 1.8m、東西 15mの調査を設定。現地表下 80 ㎝ほどで瓦の廃棄土坑を検出。土坑は東西約６ｍ、南北は 1.8mの範囲におよぶ。土坑からは多量の瓦は出土し、ほとんどは奈良時代の薬師寺創建時の瓦である。土坑の位置や出土品からみて、金堂で使用していた瓦であろう。土坑の瓦は、室町時代に金堂が大風で倒壊したときに破損した瓦とみられる。

【実績値】

出土品　：瓦 211 箱、土器３箱。
記録作成数：実測図（A2 判）６枚、遺構写真（4×5）20 枚

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4151-6

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.14

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考

Ａ～Ｃ地区は幅 1.6m、長 12～15mにおよぶ狭小な調査区であったにもかかわらず、薬師寺金堂前庭部に関する貴重な成果を得ることができた。

適時性：緊急性の高い調査に対応し、限られた調査期間と調査面積で大きな成果をあげた。

発展性：薬師寺ひいては古代寺院の金堂前の状況を研究するうえで大きく貢献すると考えられる。

継続性:今回の調査成果は薬師寺旧境内においてこれまで継続的に実施してきた発掘調査の成果を基礎とするものであり、今回の成果も今後の周辺地域における発掘調査に寄与すると考えられる。

正確性：発掘調査における緻密な観察と寺院前庭部についての知識に裏打ちされた成果である。

2．定量的評価

観点	資料収集数					
判定	A					

備考

遺物の出土量は調査者の意志で左右できるものではないが、薬師寺金堂周辺の調査区では、偶然にも分析をするための十分な出土量を得ることができ、整理を進めている。また、調査成果を記録保存するための図面類や写真は必要かつ十分な数を採取した。年度末の調査のため、出土遺物の整理が未完である。したがって検出した遺構の時代や意義付けを確定するには、さらに時間を必要とする。学術的評価の正確性を期するため、調査期間中の報道発表や一般への現地説明会等はおこなわなかった。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査面積には限りがあったものの、これまで不明であった金堂前庭部の状況が明らかになり、今後、研究を進めていく上で必要十分な成果を得ることができた。また、適切に発掘調査を実施することができた。発掘成果の学術的意味は非常に大きいと考えられる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性の高い調査であったが、高い学術的水準を維持した調査を実施し、予想以上の成果をあげた。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4151-7

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.15

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	春日東塔跡（第４７７次）の発掘調査（(1) －⑤－ア－７）

【事業概要】

春日東塔院は、1965 年に奈良国立博物館が調査し、規模は東西約 70m、南北約 80mであることが明らかになっている。今回の調査は、1965 年の成果をうけて、春日東塔院の北東隅を解明し、遺跡の範囲を押さえることを目的として、奈良国立博物館なら仏像館（本館）の南東に計 219 ㎡（うち８㎡は北門推定位置）の調査区を設定した。調査期間は 2010 年 11 月 15 日～12 月 27 日。12 月 16 日には報道発表をおこなった。12 月 17～21 日には現場公開をおこない、約 300 名が見学した。なお、今回の調査は独立行政法人国立文化財機構奈良国立博物館との初めての共同発掘調査である。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人

【スタッフ】

渡邉晃宏、森川 実、中川あや、海野 聡（以上、都城発掘調査部）、中村一郎、鎌倉 綾（以上、企画調整部）
吉澤 悟（奈良国立博物館）

【主な成果】

春日東塔院の区画施設の外側の雨落溝（Ｌ字に折れ曲がる）、落ち込み（以上、東塔建設以降の遺構）、土坑３基・礫敷１ヵ所（下層遺構、東塔建設以前）、
なお外側の雨落溝と落ち込みの間に遺構（土坑・溝）を検出しているが、時期及び性格は不明。

【年度実績概要】

今回の調査によって、春日東塔院の北面及び東面の区画施設に伴う外側の雨落溝を検出し、春日東塔院の北東隅の位置が確定し、当初の目的を達成することができた。外側の雨落溝には多数の丸瓦や平瓦が埋没しており、区画施設の屋根には瓦が葺かれていた可能性が高いと考えられる。

また塔建設予定地は樹木を切らずに建てられる場所としたとする史料があり、その他、塔建立以前には興福寺別当坊の敷地であったという説が唱えられているが、今回の調査により、東塔建立よりも古い時期の遺構を検出したことによって、東塔院及びその北方周辺の一帯が、塔建立以前にすでに開発されていたことを発掘調査によって初めて明らかとすることができた。

区画施設東北隅（北東から）

【実績値】

論文等数：２件（①②）
発表件数：１件（報道発表：2010 年 12 月 16 日、現場公開：12 月 17～21 日、見学者 300 名）
出土品　：瓦 137 箱、土器・陶磁器 31 箱、土製品 3 点、石器・石製品等 18 点、金属製品 3 点、鉄滓 3 点、木製品 4 点、木炭少量
記録作成数：実測図（A2 判）11 枚、遺構写真（4×5）21 枚

【備考】

①海野 聡「春日東塔跡の調査」『奈文研ニュース』No.40　2011.3
②海野 聡ほか「春日東塔跡の発掘調査―第 477 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定）

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4151-7

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.15

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考

適時性：春日東塔跡の遺跡保存を十全に進めるために、1965 年の調査遺構の測量上の位置確認の必要性もあり、大きな成果をあげた。

発展性：調査成果として春日東塔跡の北東隅を発掘し、この位置を世界測地系による座標によって示すことができた。このことで、春日東塔跡の範囲を定める上で重要なポイントを押さえることができ、今後の春日東塔跡の史跡整備及び発掘調査に貢献すると考えられる。

継続性：現在のところ、この周辺を継続して調査する予定はないが、今後おこなうための素地を十分に得ることができた。また奈良国立博物館と共同発掘調査をおこなったことで、両機関の共同調査の基礎を築くことができ、今後の共同調査体制に貢献すると考えられる

正確性：複数の研究員による遺構検出とともに、12 月 13 日には都城発掘調査部員による現場検討会を実施し、正確な発掘調査を実施することができた。

2．定量的評価

観点	資料収集数	発表件数				
判定	A	A				

備考

本調査区では、偶然にも分析をするための十分な出土量を得ることができ、整理を進めている。また調査成果を記録保存するための図面類や写真は必要かつ十分な数を採取した。また 12 月 16 日には記者発表をおこない、広く周知するにいたった。調査区の安全上の理由から、一般への現地説明会等はおこなうことができなかったが、12 月 17 日～21 日の間、調査区を隔てるフェンス越しに一般の方が見学する機会を設け、奈良国立博物館のボランティアによる現場解説をおこない、約 300 名が見学した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	一部、既設管によって遺構が壊されており、上層遺構の保護の観点から下層遺構の検出は一部にとどめたが、必要十分な成果を得るとともに、適切な発掘調査現場運営をおこなうことができた。発掘成果の学術的意味は非常に大きいと考えられる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高い学術的水準を維持した調査を実施し、予想以上の成果をあげた。また奈良国立博物館との共同発掘調査をおこなうことができた。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4151-8

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.16

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	平城京左京三条一坊一・二坪（第４７８次）の発掘調査（（１）－⑤－ア－８）

【事業概要】

平城京左京三条一坊一・二坪（奈良市二条大路４）における、平城京資料館（仮）の建設にともなう試掘調査。調査面積 1030 ㎡（南北 103m、東西 10m）。調査期間は平成 22 年 12 月 20 日～平成 23 年 3 月 30 日。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長　井上 和人

【スタッフ】

浅野啓介、今井晃樹、大林 潤、国武貞克（以上、都城発掘調査部）
中村一郎、栗山雅夫、鎌倉綾（以上、企画調整部）

【主な成果】

三条条間北小路南北側溝、左京三条一坊一坪を南北に二分する坪内道路の南北側溝、掘立柱建物２棟、井戸１基など、奈良時代の遺構を確認した。平成23年3月3日には報道発表をおこなった。

【年度実績概要】

調査区は、左京三条一坊一・二坪の東寄りに位置し、調査面積は 1030 ㎡（南北 103m、東西 10m）である。遺構検出面は現地表下約２mにあり、基本層序は上から、整備にともなう盛土、旧耕作土、旧床土、遺物包含層、黄色粘質土（整地土：遺構検出面）となり、それ以下のベース土は、砂と粘土が互層となる。調査区西半を、流路とみられる砂層が覆い、ベース土も粗砂や細砂が入り込むことから、整地以前は何度も水が流れたと考えられ、秋篠川の氾濫の跡とみられる。

検出遺構は以下のとおりである。

・三条条間北小路…南北で幅約１m程度の東西溝（側溝）。両側溝の心心間距離は約 6.2m。
・坪内道路…左京三条一坊一坪を南北に二分する東西溝（側溝）。両側溝の心心間距離は約 9.5m。
・掘立柱建物…調査区北端で掘立柱建物２棟を検出。一つは南北の柱穴３基で、径 25ｃm程度の柱痕跡を残す。柱間寸法は 3.9m（13 尺）。東西棟建物の西妻の柱筋とみられる。もう一つは調査区の東壁で断面を確認した南北の柱穴３基。柱間寸法は北から 6.0m、2.7mととれる。抜取穴から円筒埴輪片が出土。
・井戸…抜取穴の直径約４m、方形の木製井戸枠が出土。井戸の内法は 2.3m。埋土に多量の遺物を含む。

この他、掘立柱東西塀１条を検出した。

調査区全景（北東から）

【実績値】

論文等数：２件
発表件数：１件（報道発表：平成 23 年３月３日）
出土品　：瓦 60 箱、土器 37 箱、金属器 16 点、木簡 30 点。
記録作成数：実測図（A2 判）17 枚、遺構写真（4×5）100 枚

【備考】

①大林 潤ほか「平城京左京三条一坊一・二坪の調査」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定）
②大林 潤「平城京左京三条一坊一・二坪の調査」『奈文研ニュース』2011（予定）

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4151-8
(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.16

1．定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性			
判定	A	A	A			

備考
適時性：緊急性の高い調査に対応し、奈良時代の遺構の残存状態を限られた面積・期間の中で確認、公開した。
継続性：1999 年に奈良市教育委員会が調査した調査区の東に位置し、その際に検出された遺構の延長部分を確認している。今後予定される調査区東西の敷地における発掘調査につながる成果を得た。
正確性：複数の研究員による遺構検出とともに、都城発掘調査部員による現場検討会を１月 28 日に開催し、正確な発掘調査を実施することができた。

2．定量的評価

観点	資料収集数	発表件数				
判定	A	A				

備考
資料収集数：今後の調査の参考となる奈良時代の大規模な井戸遺構を検出した。検出した井戸の井戸枠は、取り上げ後、整理室にて適切な記録を取る予定である。また、図面、写真など、必要かつ十分な数の記録を採取した。
発表件数　：調査の成果が確定した段階で、記者発表をおこなった。なお、現地説明会は、試掘調査であることと、調査区の遺構検出面が現地表から深く危険であるためおこなわなかった。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	試掘調査のために敷地の全貌を解明するだけの十分な広さが取れないなか、条間小路や坪内道路など、敷地の区画範囲示す遺構を検出することができた。また、大規模な井戸や掘立柱建物を検出し、敷地の使われ方を示す資料を確認している。今後継続される同敷地の調査につながる成果を適切に得ることができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画どおり、調査をおこない、平城京左京三条一坊一・二坪の状況をあきらかにする成果を得た。今後、同敷地の調査は継続して行う予定であり、今回の調査成果をもとに、今後の調査計画を立案する予定である。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4151-9
(様式 1)

業務実績書

研究所 No.17

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	藤原宮跡朝堂院地区の発掘調査（（１）－⑤－ア－９）		

【事業概要】
「飛鳥・藤原」地域は、わが国古代国家成立期の舞台であり、６世紀末から８世紀初めに至る間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究をおこなうものである。その成果を広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。藤原宮跡は、わが国初の本格的都城を備えた宮殿遺跡であり、平成 11 年度から中枢部の実態解明のための計画調査を実施している。

【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】
森先一貴、若杉智宏、山本 崇、石橋茂登、青木 敬、高橋 透、石田由紀子、高橋知奈津［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区)］、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛［以上、企画調整部］

【主な成果】
朝堂院朝庭の発掘調査を実施し、朝庭の礫敷や排水のための暗渠を検出し、朝庭における整備状況を確認した。また、下層遺構の調査では、藤原宮造営期に資材を運搬したと考えられる運河や、運河から北東方向に派生する斜行溝、資材搬入や加工に関わると考えられる沼状遺構、朝庭造営中に機能していたと推測できる東西・南北方向の複数の素掘溝を確認した。これらの変遷から、朝堂院の造営過程を復元する上で重要な手がかりを得た。

【年度実績概要】
本研究は、朝堂院朝庭の整備・利用状況を明らかにすること、藤原宮の造営に関わる遺構の状況を明らかにすることを主な目的として実施した。調査期間は 2010 年４月２日～2011 年１月 24 日、調査面積は 1500 ㎡である。

調査の結果、調査区全面で径５～10 ㎝ほどの礫を検出し、朝庭が礫敷によって整備されていたことが再確認できた。また、調査区西半で南北溝を２条検出した。２条とも溝内に礫を詰めており、暗渠として機能していたと考えられる。

下層遺構の調査においては、過去の調査で確認していた南北方向に貫流する運河を南北の排水溝で確認した。過去の調査成果を合わせると運河の総延長は 550m以上になることが明らかとなった。また、運河から北東方向に支流として派生する斜行溝（幅４～６ｍ、深さ１ｍ）を確認した。運河から派生する支流は、2008 年度の調査（飛鳥藤原第 153 次）でも検出されていたが、今回の調査では、同じ様な大規模な支流がもう一条、朝庭部に存在したことが確かめられた。調査区の北東では、2008・2009 年度の調査（飛鳥藤原第 153 次・第 160 次）で確認されていた沼状遺構の南西隅部分を検出し、この遺構の大きさが、南北 44m・東西 38m以上の規模であることが明らかとなった。また、運河など資材運搬用の溝を埋め立てた後にも、幾度かにわたり、排水や区画のための溝や塀を造っていることが確認できた。これまで考えられていたより、多くの作業工程が復元でき、より複雑な宮造営過程が明らかになった。

調査区全景（南から）

なお、2010 年７月１日に記者発表、７月３日に現地説明会をおこなった。さらに 11 月 18 日に記者発表を実施し、調査成果の公表および７月の発表内容の訂正をおこなった。

【実績値】
論文等数　３件（調査報告１件①、その他２件②③）
発表件数　３件（現地説明会１件④、報道発表２件⑤⑥）
出土遺物　軒瓦 221 点、丸平瓦 31,121 点、土器 49 箱、木製品・加工木９箱、獣骨など
記録作成数　遺構実測図 112 枚、写真（４×５）249 枚
現地説明会来場者数　423 人

【備考】

① 若杉智宏・森先一貴・山本 崇「朝堂院の調査―第 163 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011 年６月（予定）
② 森先一貴「藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第 163 次)」『奈文研ニュース』No.38、2010 年９月
③ 若杉智宏・深澤芳樹「藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第 163 次)」『奈文研ニュース』No.39、2010 年 12 月
④ 奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮朝堂院朝庭の調査－飛鳥藤原第 163 次調査現地説明会資料」2010 年７月３日
⑤ 奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第 163 次調査記者発表資料)」2010 年７月１日
⑥ 奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第 163 次調査記者発表資料)」2010 年 11 月 18 日

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4151-9

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.17

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	B	

備考

適時性・継続性：特別史跡藤原宮跡の全体解明のための継続的な計画調査である。
独創性:わが国最初の本格的都城の造営から解体までの一連の過程解明に寄与する。
発展性：藤原宮中枢部の造営過程を復元するための手がかりを得、さらなる研究課題への展望が生まれた。
正確性：調査自体は正確に実施されていたが、調査成果が確定する前に外部への発表をおこなった。そのため、７月時の発表内容を 11 月に訂正することとなった。

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	A	A				

備考

調査成果は、研究所紀要をはじめとする紙面において、順調に公開することができた。また、現地説明会では、多くの参加者を得、盛況となった

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査研究は、調査・記録・公開・発表等、適切におこない、定性的・定量的評価においてほぼすべてがＡと判定されるため、総合的評価もＡと判定した。 計画調査として、次年度以降も継続的に調査をおこなう予定である。 ただし、公開・発表の時期については、調査成果をこれまで以上に慎重かつ十分に検討した上で決定することとする。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通りに実施されており、かつ目的を順調に達成した。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4151-10
(様式 1)

業務実績書

研究所 No.18

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	飛鳥地域の発掘調査（（１）－⑤－ア－１０）

【事業概要】
日本における古代国家成立期の舞台である飛鳥地域は、6 世紀末から 8 世紀初めの間、国家における政治・経済・文化の中心地としての役割を担っていた。本研究は、このような重要性をもつ同地域の具体像を復元するために考古学・文献史学・建築史学・保存科学などの分野からなる学際的な研究を行うものである。今年度は水落遺跡および石神遺跡の構造の把握にむけた調査を進めている。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】
庄田慎矢、黒坂貴裕、玉田芳英、次山 淳、廣瀬 覚、木村 理恵、小田裕樹、諫早直人、番 光［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区)］、降幡順子、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛［以上、企画調整部］

【主な成果】
水落遺跡第 10 次調査においては、斉明朝（7 世紀中頃～後半）以前、斉明朝、天武朝（7 世紀末頃）の 3 時期にわたる遺構を検出した。斉明朝以前では掘込地業および土器埋設遺構、斉明朝には施設群の地固めのための南北 48m 以上に及ぶ掘込地業、そしてその内部に設けられた様々な施設（壺地業、東西棟建物、銅管や木樋を設置するために掘られた素掘溝など)、北側の石神遺跡から通路状に続く石敷などを確認した。

【年度実績概要】
水落遺跡第 10 次調査（前半：東区）により、斉明朝以前、斉明朝、天武朝の遺構がそれぞれ検出された。

斉明朝以前の遺構としては、何らかの施設の下部構造と考えられる掘込地業および土器埋設遺構が確認され、同時期にすでにこの一帯の利用が始まっていたことが分かった。土器埋設遺構は、土器の一部を打ち欠いて周囲に石を並べた特殊なものであったが、内部からは目立った遺物は検出されなかった。

斉明朝の遺構としては、石神遺跡から通路状に続く石敷と、基壇建物を含めた施設群の地固めのための南北 48m以上に及ぶ掘込地業、そしてその内部に設けられた様々な施設が確認された。二か所で集中的に地固めを行った壺地業、小銅管や木樋を設置するために掘られた素掘溝、基壇建物の北側に東西 9 間（総長 24.6m）以上に細長く延びる東西棟建物などがこれに該当する。中でも素掘溝は、間を中世以降の流路によって削平されているものの、調査区の南北両端で検出され、水落遺跡の中心部から石神遺跡へと続いていたことが把握された。これにより、水落遺跡と石神遺跡が密接に関連する遺跡であることが改めて確認された。

天武朝の遺構としては、以前の調査でその大部分が確認されていた 7 間×2 間の東西棟建物の柱穴を検出し、この建物の規模を把握した。

出土遺物は多くなかったが、土器埋設遺構に埋められていた長胴甕、斉明朝以前の時期の素弁蓮華文軒丸瓦、細長い形状の青銅小破片などがある。調査成果を一般に公開するために 2010 年 12 月 5 日に現地見学会を開催し、1420 名の見学者があった（写真)。

現在は第 10 次調査（後半：西区）が進行中であり、通路状の石敷きと、これに関連すると見られる細石敷を確認している。これらの成果から、石神遺跡と水落遺跡を一体的に捉えた研究への道筋がつきつつある。

現地見学会の様子

【実績値】
論文等数　2 件（調査報告 2 件①、その他 1 件②)
発表件数　2 件（現地見学会 1 件③、報道発表 1 件④)
出土遺物　長胴甕 1 点、土師器・須恵器・瓦器碗片など 13 箱、軒瓦 3 点、丸平瓦 249 点、動物歯牙 5 点、青銅小片 1 点など
記録作成数　遺構実測図 33 枚、写真（4×5）107 枚

【備考】
①庄田慎矢・玉田芳英・廣瀬覚・黒坂貴裕「水落遺跡の調査　第 165 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定)
②庄田慎矢「水落遺跡の調査（飛鳥藤原第 165 次調査)」『奈文研ニュース』No.40、2011.3（予定)
③奈良文化財研究所都城発掘調査部「水落遺跡の調査（水落遺跡第 10 次発掘調査現地見学会資料)」2010.12
④奈良文化財研究所都城発掘調査部「水落遺跡の調査(飛鳥藤原第 165 次(水落遺跡第 10 次)調査記者発表資料)」2010.12

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4151-10
(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.18

1．定性的評価

観点	適時性	継続性	発展性			
判定	A	A	A			

備考

適時性：水落遺跡と石神遺跡の関連性の解明に向けた調査
継続性：計画調査の継続による遺跡全体の構造の解明
発展性：水落遺跡と石神遺跡の密接な関連性を確認し、両者を一体として保護していく見通しを得た

2．定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第 165 次調査では、北側の石神遺跡から続く通路状の石敷、南側の水落遺跡から続く掘込地業および関連施設群、そして両者をつなぐ木樋を設置した素掘溝を検出した。これにより、両遺跡の密接な関連性が裏付けられた。今次調査の成果によって当地域一帯の遺跡群を一体として把握することができるようになり、今後の調査研究および遺跡の保護に対して大きく貢献するものと考え、総合的にＡと判断した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通りに進行しており、課題であった水落遺跡と石神遺跡との相互関連性の把握が順調に進んでいる。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4152-1
（様式 1）

業務実績書

研究所 No.19

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	平城京跡出土遺物・遺構の調査研究等（(1) －⑤－イ）

【事業概要】
平成 22 年度の発掘調査によって平城宮・京跡から出土した木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などの整理・分析研究、検出遺構の整理・分析研究を、年間を通じて実施し、昨年度以前の調査で出土した遺物について、報告書刊行またはその準備作業としての再調査をおこなった。また、出土遺物の科学的保存処理を継続して実施した。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人

【スタッフ】
小池伸彦、国武貞克、芝 康次郎、神野 恵、森川実、城倉正祥、中村亜希子、清野孝之、今井晃樹、
中川あや、渡辺晃宏、馬場 基、浅野啓介、桑田訓也、箱崎和久、大林 潤、鈴木智大、海野 聡
（以上、都城発掘調査部）、
中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾（以上、企画調整部）

【主な成果】
本年度の発掘調査で出土・検出した遺物・遺構の整理・分析研究、図面・写真の作成などの基礎作業を行い、平成 23 年刊行予定の『奈良文化財研究所紀要 2011』の報告を準備した。併せて、昨年度以前の発掘調査で出土した遺物についての調査を継続して実施した。また、『天平びとの声を聞く―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて』を開催した。

【年度実績概要】
・本年度の発掘調査による出土遺物について
平城宮・京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などの整理・分析研究、出土遺構の図面作成・写真作成・分析研究、及び出土遺物の科学的保存処理は、発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じて発掘調査と併行して、これを遅滞なく実施した。
・平成 21 年度以前の出土遺物について
『平城宮発掘調査報告ⅩⅥ（第一次大極殿院）』、および『名勝大乗院庭園発掘調査報告』の刊行に向けての再整理・分析を重点的に実施した。平成 23 年３月には、『平城宮発掘調査報告ⅩⅥ（第一次大極殿院）』を刊行する予定である。
・これまでに平城宮内から出土した木簡の中から優品を選び、平城宮跡資料館にて特別企画展「天平びとの声を聞く―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて」を開催し、広く公開した（平成 22 年 9 月 25 日から 11 月 7 日まで）。
・報告書などの刊行について
『平城宮発掘調査出土木簡概報（四十）』を刊行し、特別企画展「天平びとの声を聞く―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて」に伴って、展示解説図録『天平びとの声を聞く―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて』を作成した。

展示リーフレット表紙

【実績値】
論文等数：４件（報告書等３件②～④、解説等１件①）

【備考】
①『天平びとの声を聞く―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて』2010.9
②『平城宮発掘調査出土木簡概報（四十）』2010.11
③『平城宮発掘調査報告ⅩⅦ（第一次大極殿院）』2011・3
④『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定）

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4152-1

自己点検評価調書

研究所 No.19

１．定性的評価

観点	正確性	継続性	発展性	適時性		
判定	A	A	A	A		

備考
正確性：蓄積されている資料を正確に資料化し公表した。
継続性：厖大な歴史資料についての基礎的な分析と研究を継続した。
発展性：新出土の厖大な資料を活用してより高度な古代史研究を推進するとともに、資料の分析にあたって新たな方法を追求した。
適時性：新出土品の資料価値を明確にし、重要なものについては迅速に情報公開し、国民の文化財としての活用を図った。

２．定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					

備考
論文等数：当初予定の刊行物を順調に刊行できたことに加え、新しい成果を適時公表することができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮・京跡で出土した厖大な考古・文字資料を継続的に整理・分析し、古代史研究上のさまざまな重要課題について、汎東アジア的な視点で検討を加えたことで、総合的にみてＡと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの研究を基礎として、さらに新しい方法を加味・活用して、研究を深化した。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4152-2

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.20

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等（（１）－⑤－イ－２）

【事業概要】

本年度の発掘調査により飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦塼類、木簡などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を年間を通じて実施し、合わせて前年度までの発掘調査成果を報告書等で公開するための基礎的整理・分析・復原研究を行う。また、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】

玉田芳英、次山 淳、降幡順子、石橋茂登、山本 崇、廣瀬 覚、青木 敬、木村 理恵、小田裕樹、若杉智宏、高橋 透、森先一貴、庄田慎矢、諫早直人、石田由紀子、黒坂貴裕、番 光、高橋知奈津［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区)］、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛［以上、企画調整部］、西口壽生（客員研究員）、豊島直博（文化庁）、高田貫太（国立歴史民俗博物館）

【主な成果】

本年度の発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦塼類などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を年間を通じて実施し、成果の一部を公表した。

【年度実績概要】

① 本年度の発掘調査による出土遺物について

本年度、飛鳥・藤原京跡で出土した木簡・木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦塼類などの整理、分析研究、発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業及び、出土遺物の保存と保存処理は発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じての野外での発掘調査と並行して各研究室において計画的に遅滞なく実施した。成果の一部は、『奈良文化財研究所紀要 2011』等で公表した。

② 前年度までの出土遺物について

発掘調査成果を、計画中の『藤原京左京六条三坊発掘調査報告』等の報告書として公刊するための基礎的整理・分析・復原研究、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。藤原京条坊に関連する発掘成果をデータ化する作業は、前年度に引き続いて実施した。藤原宮期以前の木簡 173 点は、これまでの調査成果をふまえて飛鳥資料館で開催した「木簡黎明」展に出展し、その研究成果を図録『木簡黎明』に紹介した。過年度調査で出土した瓦、高台・峰寺瓦窯の採集瓦、坂田寺５次調査（1985 年）出土の地鎮具、藤原京右京七条二坊（1986 年）の遺物の調査成果及び、昨年度実施した甘樫丘東麓遺跡の調査（第 161 次）の発掘調査概要を報告した。桜井市教育委員会と連携し、桜井市安倍寺遺跡出土木簡の保存処理後の再検討を行った。

【実績値】

公刊図書等数　12 件（論文等 11 件①～⑩、その他１件⑪）
記録作成数　写真（4×5）1,544 枚

【備考】

①奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定）
②山本　崇「解説」（飛鳥資料館『木簡黎明―飛鳥に集ういにしえの文字たち』展示図録）2010.10
③青木　敬「掘立柱建物の検討視点」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定）
④石田由紀子「高台・峰寺瓦窯採集の瓦」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定）
⑤豊島直博「飛鳥池遺跡出土の銅製刀装具」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定）
⑥降幡順子「キトラ古墳出土遺物の保存処理」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定）
⑦石田由紀子「瓦補遺」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定）
⑧木村理恵「藤原京右京七条二坊の井戸について」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定）
⑨降幡順子・木村理恵「坂田寺出土の地鎮具」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定）
⑩番　光「甘樫丘東麓遺跡の調査―第 161 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定）
⑪番　光「甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第 161 次）」『奈文研ニュース』No.37、2010.6

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4152-2
(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.20

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

適時性：新出土資料の迅速な公開と活用
独創性：新たな資料分析方法の追究
発展性：蓄積された歴史資料の正確な資料化
継続性：膨大な歴史資料の基礎的分析研究及び保存
正確性：新出資料の正確な資料的性格と価値の公表

2. 定量的評価

観点	公刊図書数					
判定	A					

備考

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	出土遺物・遺構についての整理調査を、野外での発掘調査と並行して遅滞なく計画通りに実施することができた。また、図書等の刊行を通じて、調査成果の公開も適切に行い得たので、総合的にＡと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順　調	報告書作成のための遺物・遺構整理作業を、ほぼ予定通り進めることができた。また、成果物の刊行も計画通りに行い得た。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4153

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.21

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	飛鳥・藤原京・平城京などの古代都城の解明に資するために、古代官衙、集落遺跡に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する（（１）－⑤－ウ）

【事業概要】

飛鳥・藤原京、平城京などの古代都城は、多くの古代官衙・集落遺跡との関連性の中にその歴史的特性を位置づけることが重要である。また、こうした古代官衙・集落遺跡の調査・研究は、各地で分散的に行われる傾向が強く、都城研究を背景としての総合的検討が地方自治体からも渇望されている。そこで、各地の古代官衙・集落遺跡の調査・研究集会を検討する研究集会を開催し、報告書を刊行することで、こうした研究課題や地方自治体の要望に答える。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長　井上和人

【スタッフ】

井上和人（副所長）、馬場 基、青木 敬、小田裕樹、小池伸彦（以上、都城発掘調査部）
清水重敦（文化遺産部）

【主な成果】

第 14 回古代官衙・研究集落研究集会を開催（12/10・11）した。テーマは「古代官衙・集落と鉄」である。事例紹介のほか、自然科学的手法や文献資料からの分析が報告され、これらを踏まえての活発な討論がおこなわれた。

昨年度実施した研究集会の報告書を『奈良文化財研究所研究報告４　官衙と門』(論考編・資料編)』として刊行した。

【年度実績概要】

Ⅰ．古代官衙・集落研究集会の開催（12/10・11）

テーマを「古代官衙・集落と鉄」とした。鉄は古代社会を考える上で重要な問題である。近年事例も増加してきており、これらを①鉄素材の生産と②鉄製品の生産、という２段階に分け、かつ自然科学的分析や文献資料からの研究も踏まえて総合的に分析することを目指した。

小池伸彦氏から飛鳥池遺跡の調査成果を踏まえた鉄生産総論、菅波正人氏から元岡遺跡群の調査成果と意義付け、曽根俊雄・小杉山大輔氏から鹿の子Ｃ遺跡の調査成果と意義付け、鈴木瑞穂氏は鉄滓等の分析からの鉄生産状況の分析、古尾谷知浩氏からは文献資料からの鉄生産についての報告、小田和利氏からは北九州地区における集落からの鉄出土状況の分析、という報告を得た。これらの中で、製鉄技術と炉の関係や、遺跡の性格などについて多くの新知見が公表された。こうした知見を踏まえ、松村恵司氏の司会により討論をおこない、遺跡相互の比較などが議論された。

Ⅱ.『奈良文化財研究所研究報告４　官衙と門』(論考編・資料編)』の刊行

昨年の研究集会の報告集を『奈良文化財研究所研究報告４　官衙と門』として刊行した。２分冊からなり、報告編（192 頁）には論考８編と討論記録を収録し、資料編（460 頁）には全国の官衙遺跡で確認された門遺構を集成した。

【実績値】

古代官衙・集落研究集会　参加者総数 126 名
アンケート回答 109（回収率約 87%）
大変有意義であった：62、有意義であった：40、普通：7、あまり有意義でなかった：0、有意義でなかった：0
収集資料数　約 1,200 点

【備考】

『官衙・集落と鉄』第 14 回　古代官衙・集落研究会研究報告資料、奈良文化財研究所、2010.12
『奈良文化財研究所研究報告４　官衙と門　報告編』奈良文化財研究所、2010.12
同　記録資料編』　同上

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4153

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.21

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

今年度の実績については以下のような評価を与えることができると考えている。

適時性：古代官衙や集落の研究を進めるうえで、適切な議題設定をおこなうことができた。

独創性：当研究所にとって、もっとも関心の深い分野である古代の官衙・集落について、全国的視野からの研究発表と討論をおこなうことができた。

発展性：発表と議論の内容は、今後の研究に対して大いに発展性が見込むことができる。

効率性：研究会の準備や資料集の作成には、各方面の助力を得て効率的に進めることができた。

継続性：平成 22 年度より当研究所の事業として研究会を継続させることとなり、当研究所内外の研究者の協力を得て、充実した内容の研究会を開催することができた。これは今後の開催に励みとなるものであった。

正確性：発表者による研究の成果を討論することによって、内容をさらに充実させることができたと同時に、正確性についてもさらに向上させることができた。

2．定量的評価

観点	成果報告	収集資料数				
判定	A	A				

備考

成果報告：昨年度の研究集会の記録を『奈良文化財研究所研究報告４　官衙と門』(論考編・資料編)』として刊行することができた。論考編には８編の論文と研究集会における討論記録を収録し、資料編（460 頁）には全国の官衙遺跡で確認された門遺構を集成した。今後の活用が大いに期待される。

収集資料数：今年度の研究集会予稿集『官衙・集落と鉄』を簡易製本にて作成した。ここには、当研究所内外７名の研究者による発表資料を収めており、発表で引用された遺跡数や文献数は膨大な数にのぼる。これらをもとに活発な討論をおこなうことができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究集会には多くの参加者を得、アンケートの結果も報告書も好評である。また、各地方自治体からの参加者の評価も高く、継続的に研究集会を開催し、成果を公表することが望まれる。次年度以降は、研究集会の開催と報告書の発行とともに、継続性の基盤をさらに固めるためにも、編集作業等のさらなる効率化を進めていく必要がある。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究集会での報告や討論を通じて、古代都城の分析に資する成果を得たのみならず、全国地方自治体職員等の相互の調査･研究情報共有や質の向上にも寄与することができた。また、研究報告の刊行によって、これらの成果をしっかりと公表し、国民共有の財産とすることもできた。ただ、報告書刊行は、大部のものであったこともあり、予定よりも多くの業務量が発生することになってしまった。 本研究集会･報告書については、全国の地方自治体職員からもその継続を望む声も大きい。古代都城の分析にも非常に役立つものであり、今後もしっかりと継続する必要があると考える。そこで、継続性を担保するためにも、編集作業等のより一層の効率化を推し進めていく。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4154

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.22

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究（（１）―⑤―エ）

【事業概要】

Ａ：漢長安城桂宮発掘調査報告書および付篇の論文集の作成、漢魏洛陽城跡の発掘調査を中国社会科学院考古研究所と共同して実施し日本の都城との比較研究をおこなう。また、調査成果の概要を公刊する。

Ｂ：朝陽地区隋唐墓出土副葬遺物について中国遼寧省文物考古研究所と共同で整理・比較研究し、日本都城成立期の交流を考察しその成果を公表する。

Ｃ：鞏義市黄冶唐三彩窯跡および当地出土をはじめとした製品の共同研究を実施し、日本の奈良三彩との関連を総合的に考察し、成果を公刊する。

Ｄ：日本と韓国の都城・王京形成について韓国国立文化財研究所と共同研究を実施し、古代における両国の文化交流を跡づける。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長　井上和人

【スタッフ】

Ａ：井上和人、今井晃樹、城倉正祥［以上、都城発掘調査部］他 9 名（王巍、銭国祥他）

Ｂ：井上和人、小池伸彦、清野孝之［以上、都城発掘調査部］他 4 名(李向東、呂学明他)

Ｃ：深澤芳樹・玉田芳英・森川 実（以上、都城発掘調査部）他８名（孫新民・趙志文他）

Ｄ：深澤芳樹、次山 淳、石橋茂登、庄田慎矢、諫早直人、若杉智宏［以上、都城発掘調査部］他 18 名（李熙濬 他）

【主な成果】

Ａ：漢長安城桂宮の発掘報告書の刊行。漢魏洛陽城 3 号門、西南隅で合計 2800 ㎡の共同発掘を実施。

Ｂ：遼寧省における隋・唐代墓出土品についての調査成果の取りまとめを実施。

Ｃ：河南省および陝西省で生産した唐三彩の調査研究を実施。

Ｄ：日本の古代都城 並びに韓国古代王京の形成と発展過程に関する共同研究を実施。

【年度実績概要】

Ａ：漢長安城桂宮の発掘報告書は、報告編・論集編を編集し、2011 年 3 月に刊行。漢魏洛陽城は、合計 9 名の研究員を派遣、2011 年 4～5 月、8 月、11～12 月の 5 か月間で 2800 ㎡の発掘調査を実施した。

Ｂ：平成 22 年 6 月に 2 名の研究員を派遣し、共同研究成果の取りまとめと次期五カ年計画について協議した。また、平成 21 年 12 月に文物考古研究所の 3 名を招聘、平成 23 年 3 月には遼寧省文化庁・文物考古研究所の 3 名を招聘して学術講演会を開催した。

Ｃ：2010 年 6 月・2010 年 9 月・2011 年 3 月に研究員を中国に派遣し、鞏義市水地河・白河地区、漢魏洛陽城、陝西省揚州窯などより出土した唐三彩、北朝白釉・青釉などを調査した。同年 10 月には中国側から 5 名を招聘して、学術講演会を開催した。

Ｄ：韓国国立文化財研究所との共同研究では、『韓日文化財論集Ⅱ』（韓国語版）、『日韓文化財論集Ⅱ』（日本語版）を刊行し、発掘交流で１名の派遣、１名の招聘を実施した。また、共同研究に関連して研究報告会を開催し、調査研究協力等をおこなっている。

【実績値】

論文等数：８件（①～⑧）

記録作成数：Ａ 報告書・論文集計２部、遺構平面図 28 枚、フィルム 115 カット、デジカメ 200 カット、Ｂ 写真・3D デジタイザ・調書・実測図等の記録多数、Ｃ 写真・調書等の記録多数、Ｄ 論文等 4 件

【備考】

① 奈良文化財研究所・中国社会科学院考古研究所編『漢長安城桂宮』奈良文化財研究所学報第 85 冊 2011.3

② 城倉正祥「漢魏洛陽城　北魏宮城西南隅の発掘調査」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定）

③ 小池伸彦「遼寧省朝陽地区隋唐墓副葬品の調査」『奈文研ニュース』№37　2010.6

④ 玉田芳英「中国河南省文物考古局との共同研究」『奈良文化財研究所概要 2011』2011（予定）

⑤ 『韓日文化財論集Ⅱ』（韓国語版）大韓民国国立文化財研究所・奈良文化財研究所、2010. 12

⑥ 『日韓文化財論集Ⅱ』奈良文化財研究所学報第 87 冊、奈良文化財研究所・大韓民国国立文化財研究所 2011.3

⑦ 若杉智宏「日韓発掘調査交流に参加して」『奈文研ニュース』N0.40 2011.3

⑧ 李熙濬「韓日発掘調査交流に参加して」『奈文研ニュース』No.40 2011.

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4154

自己点検評価調書

研究所 No.22

１．定性的評価

観点	独創性	発展性	適時性			
判定	A	A	A			

備考
独創性：東アジアの考古学に関する最新情報を入手・公開し、日本古代史の再検討に貢献した。
発展性：海外の研究機関と連携し、日本文化の源流を探るための基礎的研究の蓄積を継続している。
適時性：成果報告を迅速に作成し、公表した。

２．定量的評価

観点	成果報告	記録件数				
判定	A	A				

備考
成果報告：速報性を重視した報告を行った。
記録件数：未公開の貴重な学術資料について多くの記録調書を作成した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国および韓国で、関係研究機関との連携のもとに遺跡・遺物を調査し、相互の研究を向上させたほか、計画どおりに事業を実施できたので、総合的にＡと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通りに実施し、成果をあげることができた。国際共同研究は都城発掘調査部が担当しており、４本の研究を総合的に組み立てることにより、古代史の解明に資する成果を達成することを目指す。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4155

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.23

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	庭園に関する調査研究（(1) －⑤－オ）

【事業概要】

平成 18 年度以降実施してきた平安時代庭園に関する研究について、各種補足調査を行うとともに、これまでの研究成果を踏まえつつ奈良文化財研究所学報『平安時代庭園の研究（古代庭園研究Ⅱ）』として取り纏めた。また、森・村岡資料の整理を進め、併せて国際的観点をも含め、次期中期計画に向けた準備を進めた。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長　平澤　毅

【スタッフ】

小野健吉（文化遺産部長）、青木達司（遺跡整備研究室研究員）、高橋知奈津（都城発掘調査部研究員）、惠谷浩子（景観研究室研究員）、エドワーズ・W（客員研究員）

【主な成果】

平安時代の庭園・建築・文献等の研究に取り組んでいる研究者とともに検討会を開催し、その成果を踏まえつつ、平成 18 年度以来実施してきた「平安時代庭園に関する研究」について取りまとめ、奈良文化財研究所学報第 86 冊『平安時代庭園の研究（古代庭園研究Ⅱ）』を刊行した。また、日本庭園に関する国際的な情報発信検討の一環として『Japanese Garden Dictionary』の校訂を進めた。さらに、森蘊・村岡正・牛川喜幸の庭園等関係研究資料について、整理・調査するための基盤的環境を整えた。

【年度実績概要】

1. 大学等の外部研究者とともに学報「古代庭園研究Ⅱ」検討会を、平成22年9月18日に開催した。
2. 上記検討のほか、平成18年度以来取り組んで来た平安時代庭園に関する調査研究成果を踏まえて、学報『平安時代庭園の研究（古代庭園研究Ⅱ）』を刊行した。
3. 森蘊・村岡正・牛川喜幸の庭園等関係研究資料について、整理・調査するための基盤的環境を整えた。
4. 日本庭園研究に関する国際的な情報発信検討の一環として、『Japanese Garden Dictionary』の校訂を進めた。
5. 発掘庭園データベースについては、新たな事例情報の収集を進めるとともに、情報項目充実の方向性について検討を進めた。
6. 全国の地方公共団体教育委員会文化財保護主幹課等に対して平成21年度に刊行した報告書の配布をおこない、過年度の成果の公表に努めた。
7. その他、国内外における庭園史及び歴史的庭園の保護等に関する調査研究に係る情報の収集・整理・検討を進め、現地調査・研究協議等をおこなった。

森蘊等関係研究資料の整理・収納の状況

【実績値】

１．研究会等開催数：１回、参加者数：大学研究者等 13 名
２．報告書等刊行数：１件（①）
３．論文等数：19 件（論文 15 件［①に所収のもの５件+②～⑪］、講演・発表等４件⑫～⑮）。

【備考】

①奈良文化遺産部遺跡整備研究室編（小野健吉・青木達司共編著）『平安時代庭園の研究（古代庭園研究Ⅱ）』、2011.3
　小野健吉「平安時代庭園史の概観と研究の現状」
　小野健吉「平安時代初期における離宮の庭園　－神泉苑と嵯峨院をめぐって－」
　小野健吉「臨池伽藍の系譜と浄土庭園」
　高橋知奈津「屏風歌にみる平安時代の『山里』」
　平澤毅「奈良時代までの庭園　－平安時代庭園検討の前提として－」
②小野健吉「発掘庭園に見る日本庭園の成立」、『考古学ジャーナル』No.599、ニューサイエンス社、2010.5
③平澤毅・栗野隆、「東アジアにおける理想郷と庭園」、『奈良文化財研究所紀要2010』、2010.6
④小野健吉「（都市の文化）庭園」『史跡で読む日本の歴史９・江戸の都市と文化』、吉川弘文館、2010.6
⑤平澤毅「古代庭園の世界」、古代の都２『平城京の時代』、吉川弘文館、2010.7
⑥小野健吉「（平城京の造営）庭園の姿」、『季刊考古学第112号・特集平城京研究の現在』、雄山閣、2010.8
⑦青木達司「桂離宮と『桂垣』」、『遺跡学研究』第7号、2010.11
⑧平澤毅「名勝庭園の指定名称」、『遺跡学研究』第７号、2010.11
⑨青木達司「『桂垣』の補修に関する研究」、平成22年度日本造園学会関西支部大会、2010.12
⑩野健吉「古代日本の宮苑」、『百済研究第53輯』、韓国忠南大学校百済研究所、2011.2
⑪青木達司「『桂垣』と『桂垣』裏ハチク林に関する研究」、『ランドスケープ研究』第74巻第5号、2011.3
⑫平澤毅「文化遺産としての池田氏庭園の保護とその意義」、秋田県史跡整備市町村協議会研修会他合同講演会、2010.10
⑬小野健吉「古代日本の宮苑」、韓国忠南大学校百済研究所、2010.10
⑭青木達司「『桂垣』の補修に関する研究」、平成22年度日本造園学会関西支部大会、2010.12
⑮小野健吉 Resurrecting the 12th-century Japanese Garden Estate of Aristocrat Fujiwara Toshimori(b.1120-) 米国コロンビア大学、2011.3

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4155
(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.23

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
第２期中期計画において、庭園に関する調査研究の中核的な調査研究テーマとしてきた「平安時代庭園に関する調査研究」については、平成 18 年度から平成 21 年度までの調査研究成果を踏まえつつ、新たに総括して報告書として取りまとめたことは、奈良時代の古代都城における庭園を検討する上でも極めて重要な成果である。さらに、日本庭園研究の基盤的資料として極めて重要な森蘊・村岡正・牛川喜幸の庭園史等関係資料の整理･研究の基盤的環境を整えたことなどを含め、調査研究の取組の成果は良好であると評価できる。また、次期中期計画において主軸とするべく日本庭園の研究成果を国際的に発信するための検討をおこなうとともに、海外における日本文化あるいは庭園に関する研究者等と今後の共同研究に関する協議を進めたことにより、今後における日本庭園史及び歴史的庭園の保護に関する研究の飛躍的な進展に資するものと考える。

2．定量的評価

観点	研究会等の開催回数	論文等件数	報告書等刊行数			
判定	A	S	A			

備考
平成 18 年度以来取り組んできた「平安時代庭園に関する調査研究」の成果として、学報『平安時代庭園の研究』の検討に伴う研究会を開催し、計画通り報告書として取りまとめて刊行したことは、基盤的な調査研究の具体的な成果の公表において、高く評価できる。さらに、発掘庭園に関する検討を継続的に重ねてきたこととともに、古代から近代に及ぶ種々の研究成果を 15 件の論文等、４件の講演・発表等として公表できたことは、研究成果の社会的還元であるとともに、古代都城における庭園研究を相対化し、かつ、それらの保存整備に対しても多くの示唆を与える重要な学術的成果の蓄積として評価でき、極めて有意義であったと言える。論文等件数については当初目標値を設定していないが、絶対数においてＳと評価できる。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の計画通り事業を実施でき、また、今後の調査研究に関して取り組むべき国際的な調査研究の方向性について検討を進めることができた。特に、「平安時代庭園に関する調査研究」においては、庭園史学のほか、考古学、建築史学、文献史学、文学等の学際的な検討の重要性を示すことができたとともに、このような庭園研究の取組は、さらに国際的観点からも推進していくべきであると判断される。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順　調	第１期中期計画からの取組も含め、第２期中期計画においては、特に古代後期に関する検討を中心として古代庭園に関する調査研究を様々な観点から進めることができた。これらの成果を踏まえつつ、また、国内外の庭園史に関する調査研究及び歴史的庭園の保護をめぐる諸々の現状を踏まえると、今後、学際的・国際的な観点から、外部の研究者等と調査研究協議を重ねていくことが極めて重要である。また、今年度に基盤的環境を整備した森蘊・村岡正・牛川喜幸等の庭園史等関係資料については、さらに整理を進め、庭園史及び歴史的庭園保護の基盤的な資料の整理・研究をさらに推進していく必要がある。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4156

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.24

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	東アジア史における飛鳥の研究及び飛鳥時代工芸技術の研究（(1) －⑤－カ）

【事業概要】

飛鳥地域の壁画古墳についての調査研究をおこない、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、鋳造関連遺物を中心とした資料の調査をおこなうとともに、河南霊井遺跡出土品の研究に協力する。また、飛鳥時代木造建築遺物の研究として、山田寺出土部材の研究をおこなう。

【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長　加藤真二

【スタッフ】

成田聖、丹羽崇史[以上、飛鳥資料館]

【主な成果】

飛鳥地域の壁画古墳の研究としては、天文図を中心に研究を進め、関連文献の収集、高松塚・キトラ両古墳の天文図の比較、成田市稲荷山遺跡出土七星刀の調査などを実施した。

東アジアにおける工芸美術史・考古学研究のうち、鋳造関連遺物の調査は、藤原京出土の資料に関し、集成と調査を行った。霊井遺跡出土品の研究協力は、成果の一部を企画展で示した。また、来日した河南省文物考古研究所ほかの研究者と同行し、東北大学、明治大学等での調査をおこなうとともに、内外の学会、シンポジウムで報告をおこなった。

山田寺出土部材については、経年的に計測調査をおこなっており、本年も計測を継続した。その結果、大きな変化がないことを確認した。

【年度実績概要】

飛鳥地域の壁画古墳の研究：関連する文献資料を収集するとともに、天文図を中心に研究を進め、高松塚・キトラ両古墳の天文図の比較、成田市稲荷山遺跡出土七星刀の調査などを実施した。キトラ古墳の天井天文図は、実際の天文図をもとにしたものと思われることから、天文図等の厳格な管理が大宝律令で規定される以前にキトラ古墳壁画が描かれたことが想定された。この研究成果は平成 23 年度春期特別展、およびその展示図録の基礎となる。なお、昨年度の研究成果を飛鳥資料館図録第 52 冊として刊行した。

鋳造関連遺物の調査研究：藤原京出土の資料に関し、集成と調査をおこない、研究図録第 13 冊を刊行した。

霊井遺跡出土品の研究協力：河南省文物考古研究所で研究協力を実施した。また、研究協力の成果を夏期企画展で展示し、飛鳥資料館カタログ第 22 冊を刊行した。さらに、来日した河南省文物考古研究所ほかの研究者と同行し、東北大学、明治大学等での調査を行うとともに、「The Initial Human Habitation of the Continental and the Insular Parts of the Northeast Asia 」、「北アジア調査研究報告会」など内外の学会、シンポジウムで報告をおこなった。

山田寺出土部材の研究：第 2 展示室で常設展示中の重要文化財山田寺出土部材について、ひずみ計を設置して、その経年変化を計測している。近年、春期のキトラ古墳壁画の特別公開にともない、多数の来客があることから、その影響の有無に特に注意を払っている。計測によれば、大きな変化は生じておらず、展示を継続している。

サハリン州立大学国際シンポジウムでの報告

【実績値】

飛鳥地域の壁画古墳の研究　図録 1 冊（①）
鋳造関連遺物の調査研究　　研究図録 1 冊（②）
霊井遺跡出土品の研究協力：カタログ 1 冊（③）、研究報告　2 回（④・⑤）
山田出土回廊部材　経年変化計測値

【備考】

①キトラ古墳壁画四神』 飛鳥資料館図録第 52 冊　2010 年 4 月
②『飛鳥の冶金関連遺跡』飛鳥資料館研究図録第 13 冊　2011 年 3 月
③『小さな石器の大きな物語』飛鳥資料館カタログ第 22 冊　2010 年 7 月
④加藤真二“The Microblade industry of Lingjing, Xuchang, Henan province, China”
International Symposium “The Initial Human Habitation of the Continental and the Insular Parts of the Northeast Asia” Sakhalin State Univ.　2010 年 9 月
⑤加藤真二「霊井遺跡の細石刃技術」第 12 回　北アジア調査研究報告会　於札幌学院大　2011 年 3 月

【書式Ｂ】
(様式 2)

奈良文化財研究所	処理番号	4156

自己点検評価調書

研究所 No.24

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
壁画古墳についての調査研究は、天文図に関わる新たな知見を打ち出し、キトラ古墳、高松塚古墳の造営年代に関わる議論に影響を与えた。
鋳造関連遺物の調査研究は、飛鳥地域における鋳造関連遺跡とそこからの出土品を集成し、飛鳥・奈良時代の金工技術の解明のための貴重な基礎データを提供した。
河南霊井遺跡出土品の研究協力は、展覧会をひらくとともに、内外の学会、シンポジウムに参加し、その成果の一部を広く公開し、当該遺跡出土の資料の重要性が内外に浸透しはじめた。
山田寺の出土部材の研究で行っている、保存処理済み大型部材に関する継続的なデータは、従来我が国になかった長期的なデータとなり、保存科学および大型木製品の展示保管に大いに資している。

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	A	A				

備考
当初計画どおり、研究図録１冊を刊行するとともに、展覧会の開催やカタログ１冊の刊行などをつうじて、成果を広く公開することができた。調査・分析についても必要な回数を実施し、成分分析データ、画像データ等を得ることができた。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の研究計画通り、壁画古墳の調査では、春期特別展示およびその図録刊行に必要な成果をあげることができた。鋳造関連遺物の調査では、飛鳥地域における資料を集成でき、それを研究図録として刊行できた。霊井遺跡出土品の研究協力でも順調に調査が進行した。 また、山田寺の出土部材についても、継続的な調査を推進し、展示・保存にかかわる異常変化を見出すこともなく、順調に展示を継続するとともに、保存処理を行った大型木製品の展示・保存に関するデータを蓄積することができた。 以上の進捗状況を総合的に評価し、Ａと判定する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の予定どおり遂行するとともに、中期計画全体を通じて、所定の成果をあげることができたことから、当事業は達成できたと判定した。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4161

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.25

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究（(1) －⑥－ア）

【事業概要】

遺跡の調査・保存・整備計画段階から整備後における管理・運営と公開・活用に至るまでの調査研究を行うとともに、遺構の露出展示を伴う整備事例の資料収集・現地調査を踏まえたデータベース構築に取り組み、管理マニュアル等を含む遺構露出展示に関する調査研究の成果の取り纏めを進めた。また、遺跡整備・活用研究集会（第５回）『地域における遺跡の総合的マネジメント』を開催した。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長　平澤　毅

【スタッフ】

小野健吉（文化遺産部長）、青木達司（遺跡整備研究室研究員）、黒崎直（客員研究員）

【主な成果】

遺跡等における遺構露出展示について、個別事例の情報収集をおこない、データベース構築の作業を進めるとともに、露出展示遺構の保存管理に関するマニュアルの検討をおこなった。また、過年度の成果について、『遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり』[平成 21 年度遺跡整備・活用研究集会（第 4 回）報告書] を刊行・配布するなど、その普及等をおこなった。

【年度実績概要】

1. 国内外における遺跡の整備に関する調査研究活動の一環として、遺跡整備事例に関する現地調査・情報収集を実施した。また、文化遺産の保護と遺跡整備との関連について検討した。
2. 2011年１月21・22日に、「地域における遺跡の総合的マネジメント」をテーマとして、平成22年度遺跡整備・活用研究集会（第５回）を、平城宮跡資料館講堂で開催した。発表内容は「研究集会の開催趣について」のほか、「地域と遺跡」に関する基調講演２件、「社会振興と遺産」に関する講演２件で、これらを踏まえ総合討議をおこなった。なお、研究集会参加者からアンケートの回収率は出席者の96%で、うち95%から有意義であったとの回答を得た。
3. 研究集会開催後、次年度にこの研究集会の報告書を刊行する準備として総合討議の内容の整理等をおこなった。
4. 昨年度の研究集会「遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり～」の成果について、「奈良文化財研究所紀要 2010」に報告するとともに、報告書を編集・刊行した。
5. 全国における遺構露出展示に関する現状と課題を詳細に把握するため、個別事例の整情報収集に基づきデータベース構築を進め、管理マニュアルの作成など、露出展示における問題点の分析と今後のあり方について具体的な検討を進めた。
6. 昨年度の研究集会における成果を踏まえつつ、文化庁が実施している歴史文化基本構想の取組や、国土交通省が主に所管している歴史まちづくり法に関わる取組に関する情報収集を行った。
7. 全国の地方公共団体教育委員会文化財保護主幹課等に対して平成21年度に刊行した報告書の配布をおこない、過年度の成果の公表に努めた。
8. 遺跡の調査保護に関するアーカイブ事業として2011年１月14日に鼎談『奈文研と遺跡の調査・保護』を実施した。

遺跡整備・活用研究集会（第５回）

【実績値】

１．研究集会等開催数：２回（資料集①：参加者数：地方公共団体職員等約 80 名）
２．報告書等刊行数：１件（②）
３．論文等数：10 件（論文３件③～⑨、講演・発表等３件⑩～⑫）。

【備考】

①奈良文化財研究所遺跡整備研究室編『平成 22 年度遺跡整備・研究集会（第 5 回）　講演資料集』2011.1
②奈良文化財研究所遺跡整備研究室編（平澤毅編著）『遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり～』2010.12
③平澤毅「遺跡整備と地域づくり」、『奈良文化財研究所紀要 2010』、2010.6
④小野健吉「大極殿復元」、古代の都２『平城京の時代』、吉川弘文館、2010.7
⑤平澤毅「名勝及び天然記念物浦富海岸の価値とその保護」、平成 22 年度日本造園学会関西支部大会、2010.12
⑥平澤毅「自然と文化の多様性をめぐる最近の国際的な動向と視点」『グローバルランドスケープ通信』、2011.1
⑦平澤毅「造園学が取り組むべき『遺産』について」、『ランドスケープ研究』第 74 巻第 4 号, 2011.2
⑧平澤毅「浦富海岸の名勝地としての価値とその保護」、名勝及び天然記念物浦富海岸保存管理計画報告書、2011.3
⑨平澤毅「名勝の保存管理計画策定に関する考察」、『ランドスケープ研究』第 74 巻第 5 号, 2011.3
⑩HIRASAWA Tsuyoshi “Protection of the Cultural Properties in Japan”, George Town, MALAYSIA, 2010.9
⑪平澤毅「地域における遺跡の総合的マネジメント」、遺跡整備・活用研究集会（第５回）、2011.1
⑫平澤毅「名勝及び天然記念物浦富海岸の価値とその保護」、平成 22 年度日本造園学会関西支部大会、2010.12

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4161

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.25

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

遺跡整備分野の中期計画事業における中心的な課題である遺構露出展示に関する調査研究においては、特に平成 19 年度以降、全国的な現状把握を進め、平成 20 年度に開催した研究集会『埋蔵文化財の保存・活用における遺構露出展示の成果と課題』における検討を踏まえて、平成 21 年度以降、さらに個別具体的な事例における詳細な状況把握を進める中で、遺構の適切な保存と活用のために把握すべき情報項目に関する検討が予想以上に複雑であることが明らかとなり、事例の条件を絞って当該遺構の管理者等への照会を行ったところであるが、遺構の種類や環境条件・管理条件等の整理・検討と、その分析に基づく管理マニュアルの検討を進めた。昨年度開催した研究集会のテーマである遺跡整備と地域づくりとの密接な関連は、文化庁が推進している「歴史文化基本構想」、文部科学省・農林水産省・国土交通省の三省共管による「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」の動向とも関連して、近年極めて注目されている研究課題であり、研究集会『遺跡内外の環境と景観　～遺跡整備と地域づくり～』の報告書を取りまとめ、公表したことは極めて高く評価できる。また、国際的な動向も踏まえて開催した研究集会『地域における遺跡の総合的マネジメント』をはじめ、時宜に適った調査研究の取組の成果は極めて良好であると評価できる。

2．定量的評価

観点	研究会等の開催回数	論文等件数	報告書等刊行数			
判定	A	S	A			

備考

国内外の動向を踏まえ、地域の視点から遺跡の保護とそのための総合的な保存管理の在り方を検討するために開催した研究集会は、全国各地及び様々な分野から約 80 名の参加が得られ、その情報や課題の共有等において高く評価できる。また、近年の遺跡整備をめぐる発展動向を踏まえ、遺跡の調査保護に関するアーカイブ事業について新たに検討し、鼎談『奈文研と遺跡の調査・保護』を企画・実施したことは、遺跡保護の根本理念を確認し、将来にわたる遺跡整備の方向性を検討する上で極めて重要な事業であったと評価できる。一方、年度当初において、取り纏めを計画していた遺構露出展示に関する調査研究においては、全国各地の個別事例の照会に係る詳細な情報項目の検討について検討を進めてきたが、予想以上にその組立に時間を要し、また、照会事例の回答収集にも時間を要し、分析と報告書等の刊行が年度を跨ることとなった点については、計画立案・実施の見通しの点で課題を残したものの、今後の成果公表において、正確性等を確保するために適切な判断であったと考える。

なお、国内外の動向を踏まえつつ、論文・講演等を通じ、文化遺産の保護に関して、保存管理対象の理解、保存管理手法及び技術的事項を含む遺跡等の整備に関わる調査研究成果等の公表・普及を行った件数も極めて高く評価できる。論文等件数については当初目標値を設定していないが、絶対数においてＳと評価できる。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	内容としては当初の計画通り事業を実施でき、また、今後の調査研究に関して取り組むべき具体的な課題を明らかにできた。特に、第５回を迎えた研究集会については、地域における遺跡の総合的マネジメントを検討することで総括し、大枠において次の段階に向かって、さらに充実を図っていくべき事業のひとつであると判断される。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順　調	遺跡整備に関する情報の収集・整理・公開に関する検討を様々な観点から進めることができた。特に、研究集会の成果を踏まえ、地域における遺跡のマネジメントについて検討したことは、時宜に適った成果として評価できる。次期中期計画の初年度となる次年度については、国内外の動向を踏まえて各種記念物が所在する地域における総合的な保存管理・公開活用手法を検討するための具体的課題の明確化を進めていく必要がある。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4162

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.26

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術並びに監視技術の開発的研究（(1) －⑥－イ）

【事業概要】

遺構の安定した公開･展示をおこなうことを目的とした事前調査法､保存技術ならびに監視技術の開発的研究の一環として、遺跡を構成する土中の水分移動や石材の劣化状態を把握する技術の応用研究、平城宮跡遺構展示館等における遺構安定化薬剤の実地試験に取り組む。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長　高妻洋成

【スタッフ】

降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）、脇谷草一郎（埋蔵文化財センター研究員）、田村朋美（埋蔵文化財センター研究員）

【主な成果】

遺構の露出展示をおこなった場合の水分移動変化、および塩類による劣化を予測するために、水分移動および溶質移動の推定をおこなった。さらに、塩類による土質遺構の劣化を抑制するために、水による溶質除去の可能性についても検討した。

覆屋を伴わない屋外に位置する遺構において、気象台による限定的な気象観測データ（気温、湿度、日射量、降水量、風速）をもとに、遺構表面からの水分浸潤量および蒸発散量を推定し、土中における水分移動について検討をおこなった。

【年度実績概要】

1）土質遺構の露出展示を実施した場合、遺構の劣化を引き起こす要因として、塩類の析出が挙げられる。そこで、遺構を露出展示した場合の水分・溶質移動を推測し、さらに水による遺構の安定化および溶質除去の可能性を検討するために、シルト質土壌をもちいた土壌カラムを作製して、鉛直一次元の水分・溶質移動に関する室内実験を実施した。実験結果からは、遺構の安定化を図りつつ、溶質が鉛直下方へと移動して除去可能なことが明らかとなった。

2）岡山市に位置する千足古墳では、石障の表層剥離が著しく進行しているため､表面に施された線刻が失われる危険性があり､その対策が急がれている。石障の劣化を引き起こしている要因の一つとして、石室内へ流入し、内部に溜まった水が石障底部で吸収され､石材表面で蒸発することの繰り返しが挙げられる。そこで、石障劣化の基礎的なデータを得るため、墳丘土壌の不飽和水分移動特性を把握すると同時に、限られた気象観測データに基づいて､墳丘表面からの水分の浸潤量および蒸発散量を推定し､降雨時の雨水の移動に関する数値実験をおこなった。その結果、豪雨時には墳丘土中に浸潤した雨水が石室内でしみ出すことが示唆されたことから、千足古墳で観察された水たまりは降雨によるものと推測された。

千足古墳石障の劣化状況

【実績値】

発表件数：１件
論文等数：２件

【備考】

論文発表・学会発表等については、別紙「論文等発表実績一覧」「学会、研究会等発表実績一覧」参照

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4162

自己点検評価調書

研究所 No.26

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
遺構を露出展示する際の水分と溶質の移動を推測するための実験をおこなった結果、用いたシルト質土壌について遺構の安定化を図りつつ、溶質を鉛直方向へと移動させて遺構表面からの析出を抑えることができることを明らかにした。また、岡山市の造山古墳の陪塚である千足古墳の石障の表層剥離の問題に対して、墳丘土壌の墳丘土壌の不飽和水分移動特性、墳丘表面からの水分の浸潤量および蒸発散量を数値実験により推定したところ、豪雨時には墳丘土中に浸潤した雨水が石室内でしみ出すことが示唆されたことから、千足古墳において観察された水たまりは降雨によるものと推測した。これらの知見は、石障の保存対策上、重要な知見として、委員会で検討されている。

2．定量的評価

観点	発表件数	論文等数				
判定	A	A				

備考
日本文化財科学会第 27 回大会において発表１件をおこなった。また、『日本文化財科学会第 27 回大会発表要旨集』に１件、『奈良文化財研究所研究紀要 2010』に１件、『史跡ガランドヤ古墳―史跡ガランドヤ古墳の保存整備に伴う調査報告書―』に１件の、合計３件の論文を発表した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初計画どおり順調に達成することができたことから、総合的評価をＡと判定した。土質遺構を露出展示するためには、水蒸気移動を含めた遺構土壌の不飽和水分移動特性および溶質の移動を定量的に把握する必要がある。そこで次年度は、熱・水分・溶質の同時移動解析をおこない、遺跡土壌安定化の最適条件について検討する予定である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調と判定した。次年度より新たな中期目標・中期計画の下、事業を展開していくが、新たな中期計画のもとで、次年度は熱・水分・溶質の同時移動解析をおこない、遺跡土壌安定化の最適条件について検討する予定である。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4163

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.27

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿正殿復原をはじめとする整備・公開・活用に関する専門的・技術的な援助・助言（（１）－⑥－ウ）

【事業概要】

平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査研究のため、文化庁の行う平城宮跡第一次大極殿院地区の復原整備計画に沿った実践的調査研究を実施するとともに、『特別史跡平城宮跡保存整備基本計画推進計画』に基づく具体的整備に対して専門的・技術的な援助・助言を行うため、復原に関する資料の整理、新たに行うべき調査研究の計画案などを提示するとともに、文化庁記念物課や国土交通省の主催する会議等に参画し、専門的・技術的な援助・助言を行う。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長　井上和人

【スタッフ】

渡辺晃宏、小池伸彦、箱崎和久、大林 潤、鈴木智大、海野 聡（以上、都城発掘調査部）
小野健吉、島田敏男（以上、文化遺産部）、中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾（以上、企画調整部）
今西康益、宮本隆行（以上、研究支援推進部）

【主な成果】

昨年度に完成した第一次大極殿正殿の完成記録写真撮影をおこなった。また４月 24 日に開幕した平城遷都 1300 年祭の準備のため、大極殿正殿内の展示の内容等について援助・助言をおこなった。1300 年祭開催期間中は、各方面からの来訪者への対応、あるいは見学客の質問等の応対をおこなった。開催中あるいは開催後はイベント用の仮設建物の建設・撤去や旧状復旧にともなう工事に対する立会をおこなった。

それとともに、平城宮跡の国営公園化にともない、第一次大極殿を中心とした大極殿院内の諸建物を復原することとなった。このための文献資料や発掘遺構等の検討をおこない、またそのための資料収集のほか、類例を抽出して調査をおこなった。検討成果は国土交通省が組織した「第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会」で発表した。

【年度実績概要】

第一次大極殿の完成記録写真については、建物の外観は高所作業車を導入して４×５判の写真撮影をおこなった。建物内部については、内部の全景写真のほか、中心に設置された高御座の内外写真、正殿内小壁に描かれた上村淳之画伯による壁画の写真撮影をおこなった。

大極殿正殿内の展示施設について、その内容等について援助・助言をおこなった。皇太子殿下が列席された４月 23 日の完成記念式典、天皇・皇后両陛下がご列席された 10 月８日の記念祝典に際しては、関係各方面の助力を得て準備等を進め、つつがなく終了することができた。このほか開催期間中は国内外の要人や研究者への応対に追われた。

遷都 1300 年祭の開催期間中および終了後は、イベント用仮設建物の建設や撤去にともなう掘削部分、および旧状復旧にともなう要請に応えて、立会等を精力的におこなった。

一方で、国土交通省がおこなう第一次大極殿院の復原整備に向けて、奈良時代の大極殿院の建物、すなわち大極殿院南門、東西楼、南面・東西面の築地回廊、内庭部の様相について、平成 13・14 年度におこなった研究成果を吟味しつつ、その後の発掘調査成果を加味して復原原案作成のための資料収集をおこなった。これにともなう復原検討会を 14 回実施して、大極殿院復原のための研究をさらに深化させた。これらの成果を『第一次大極殿復原検討会記録』としてまとめた。また「第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会」にオブザーバーとして参加し、上記の検討成果を発表した。

【実績値】

大極殿正殿完成記録写真：４×５、124 点。
記念式典等、国内外の要人に対する対応：4/23、10/8 をはじめとして、20 回以上。
平城宮跡の遷都 1300 年祭関係を中心とする立会対応：平成 23 年１月より計 20 回以上。
大極殿院復原にむけての復原検討会開催：平成 22 年７月 23 日～平成 23 年３月 10 日まで計 14 回開催。
第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会への出席：平成 22 年９月 23 日・12 月９日、23 年２月 14 日
収集資料数：約 8,000 点

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4163
(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.27

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性	発展性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
平成 22 年は平城遷都 1300 年の記念すべき年であり、第一次大極殿正殿の復原事業もこれに向けておこなわれてきた。平成 21 年度末で完成した大極殿正殿の完成記録写真撮影、および各種イベントに対する応対あるいは、協議事項等に対する対応を迅速におこなったことは、適時性の評価を満たすと考えている。
また平城宮跡の国営公園化にともなう第一次大極殿院内の建造物および内庭部の復原にあたっては、これまでの発掘調査成果を活かし、またその成果を分析することで、研究を深化させることができた。ここからさらに詳細な研究を継続し、建物の復原につなげていくことができると考えている。独創性・継続性・発展性・正確性の評価は、上記のような諸点から十分満足させられると考えている。

2．定量的評価

観点	記録件数	応対数	収集資料数			
判定	A	A	A			

備考
竣工した第一次大極殿正殿の記録写真は、必要十分な数の写真撮影をおこない、当研究所の出版物などに利用することができた。このほかにもデジタルカメラによる平城遷都 1300 年関係のイベントの写真撮影をおこなった。
平城遷都 1300 年祭関係で平城宮跡を訪れた国内外の要人、研究者への対応は膨大な数にのぼる。またイベント会場の撤去にともなう立会も平成 23 年に入って増え、関係者は多忙を極めたが、つつがなく終了することができた。
第一次大極殿院復原のための検討では、平成 13・14 年度の先行研究を参照しつつ、再度十分な検討をおこなうための資料収集をおこない、検討会を開催することができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	100 年に一度の大イベントが挙行された年度であったが、関係各方面の助力を得て、無事に乗り切ることができた。このイベントの裏では、第一次大極殿院の復原に向けた検討をおこない、これまでの検討成果から問題点を洗い出し、研究計画を構築し、それに基づいて復原研究を進めることができた。これらを次年度にも引き継いでいきたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に掲げた第一次大極殿正殿とその周辺の復原・整備に関する業務は、大極殿正殿の完成とその記録をもって、ほぼ当初の予定を完遂することができたと考えている。今後は引き続きおこなわれる第一次大極殿院の復原建物、あるいはその周辺の整備に関する調査・研究にシフトしていきたい。復原研究に関しては、第一次大極殿正殿以来の事業であり、その頃から当研究所の研究体制が変化したこともあって、やや準備と経験が不足していた感もあったが、次年度以降は今年度の成果や収集資料を活用して、円滑な検討をおこなうことができるよう工夫したい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4211

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.28

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	高精細デジタル画像の応用に関する調査研究（(2)-①）

【事業概要】

前の中期計画５カ年中に開発した高精細デジタル画像形成の手法を用い、着色仏画・彩色壁画・油彩画・日本画・漆絵などの美術品を対象とし、それぞれについて、１）光に対する物性の検討、２）光物性の画像化に関わる技術開発、３）形成画像の汎用的な活用法（表示・出力）に関する条件整備を行い、広範な文化財研究を支援するために不可欠な研究画像を形成し、それらを応用・利用する方法を探ることを目的とする。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化財アーカイブズ研究室長　津田徹英

【スタッフ】

田中　淳、山梨絵美子、勝木言一郎、塩谷　純、綿田　稔、皿井　舞、江村知子、土屋貴裕、城野誠治、中村節子、中村明子、井上さやか、鳥光美佳子（以上、企画情報部）

【主な成果】

脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財の高精細な画像や特殊撮影画像の公開と多目的な利用に供すべく、平等院と行った共同研究成果を『平等院鳳凰堂調査資料目録―蛍光線画像編』として刊行した。また、奈良国立博物館との共同研究成果を『大徳寺五百羅漢図報告書』として刊行した。さらに、他機関との共同調査研究として宮内庁三の丸尚蔵館と「春日権現験記絵巻」の調査撮影、奈良国立博物館との共同調査研究として「信貴山縁起絵巻」、徳川美術館との共同研究として「歌舞伎図巻」「本多平八郎姿絵屏風」の調査撮影を行った。

【年度実績概要】

１.他機関との共同研究・報告書の刊行

本研究は、先の中期計画において開発した画像形成技術を用いた画像の汎用的な活用・運用を行う方法・技法の研究に重点を置いている。脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財を間近で精査・鑑賞する機会は限定されている。文化財の高精細な画像や特殊撮影画像を公開し、多目的な利用に供することは、文化財への理解を深め、実物の保存と共に活用の道を開く有効な方法である。デジタルコンテンツの多目的利用の一環として、平成 17 年度に行った平等院との鳳凰堂仏後壁の共同研究成果のうち『平等院鳳凰堂調査資料目録―蛍光線画像編』』を刊行した。また、平成 21 年度に行った奈良国立博物館との共同研究成果を『大徳寺五百羅漢図報告書』として刊行した。

２.今年度の他機関との共同調査研究

1)宮内庁三の丸尚蔵館（「春日権現験記絵巻」の調査撮影 12/13-17,20-22）

2)奈良国立博物館（「信貴山縁起絵巻」の調査撮影 5/9-15、研究協議会 11/1）

3)徳川美術館（「歌舞伎図巻」「本多平八郎姿絵屏風」の調査撮影 6/14-18,11/22-27）

３.デジタルコンテンツの多目的利用の一環としての徳川美術館との調査成果の公表を行うための報告会と、これに併せて高精細デジタル撮影による実物大画像の展示を行った（1/29）。

【実績値】

報告書の刊行	２件（①、②）
学会研究会等での発表件数	１件（③）
画像展示の件数	１件（④）

【備考】

①『平等院鳳凰堂仏後壁調査資料目録―蛍光線画像編』11.03

②『大徳寺五百羅漢図報告書』11.3

③江村知子「歌舞伎図巻の描写について」『近世風俗画共同研究調査報告会』11.01.29

④「歌舞伎図巻」「本多平八郎姿絵屏風」の高精細デジタル撮影による実物大画像の展示、東京文化財研究所　11.1.29

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4211

自己点検評価調書

研究所 No.28

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	調査箇所数	論文数	画像展示件数	発表件数		
判定	A	A	A	A		
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	他館との共同研究により、各時代の日本美術を代表する作品（「春日権現験記絵巻」、「信貴山縁起絵巻」、「歌舞伎図巻」「本多平八郎姿絵屏風」）の調査・撮影を行い、「歌舞伎図巻」「本多平八郎姿絵屏風」の調査成果中間報告会を開催し、併せて、高精細デジタル撮影による実物大画像の展示を行うとともに、これまでの成果を『平等院鳳凰堂調査資料目録―蛍光線画像編』『大徳寺五百羅漢図報告書』として刊行するなど、デジタルコンテンツの多目的利用の成果を上げたのでＡと判定した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に沿って各年ともに調査・研究を実施し、その成果報告書についても順調に刊行することができた。また、他館との共同研究の成果公表の一環として、共同研究相手館における展覧会に際してパネル展示等を行い、高精細デジタル画像の文化財への応用研究についての周知と関心を喚起することができた。次期中期においても文化財への高精細デジタル画像の応用と研究をすすめ、積極的に成果公開に努めることにしたい。

【書式Ｂ】　　施設名 | 東京文化財研究所 | 処理番号 | 4221

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.29

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の非破壊調査法の研究（(2)-②）

【事業概要】

文化財の材質調査をその場で行うことを目的に、小型可搬型機器に関する調査・研究と、その応用研究を行う。金属文化財や顔料などの無機化合物に対する元素分析法、および染料など有機化合物の物質同定を目的とした分光学的手法の調査･研究を中心に行い、絵画・彫刻・工芸品など実資料への適用を図る。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長　石﨑武志

【スタッフ】

早川泰弘、佐野千絵、木川りか、吉田直人、犬塚将英（以上、保存修復科学センター）、三浦定俊（客員研究員）

【主な成果】

蛍光Ｘ線分析装置、反射分光分析装置、デジタル顕微鏡さらにはＸ線透過撮影装置など複数の可搬型調査機器を用いて、博物館・美術館等の所蔵作品の材質・構造の非破壊調査を実施した。また、これら調査技術の高度化を目指して、さまざまな検討を行い、実資料への適用を図った。

【年度実績概要】

５年計画の最終年度として、以下に示す成果を得た。また、５ヵ年の研究成果を報告書として刊行した。

（１）可搬型非破壊調査機器を駆使した文化財の材質・構造調査

蛍光Ｘ線分析装置、反射分光分析装置、デジタル顕微鏡さらにはＸ線透過撮影装置などの可搬型調査機器を作品所蔵館に持ち込み、さまざまな文化財資料の材質や構造の調査を非破壊で安全に行った。複数の機器を駆使することで、単一機器だけでは特定できない材料の分析を行うことが可能となった。今年度は、国宝阿弥陀聖衆来迎図（高野山）、重要文化財泰西王侯騎馬図（サントリー美術館）、重要文化財元禄国絵図（国立公文書館）などの日本絵画を中心に、重要文化財住之江蒔絵硯箱（静嘉堂文庫美術館）や沖縄県所在のガラス資料（沖縄県）などの工芸品についても調査を実施し、新たな情報を多数得ることができた。

（２）有機染料の高精度分析に関する検討と実資料への適用

反射分光分析によって得られたデータから二次微分スペクトルを作成する方法により、有機染料を中心とした色材の分析確度を高める研究を行った。染料を含む青色色材に関する実用性が確認でき、江戸期から明治初期の絵図資料の分析に適用して、有益な分析結果を得た。また、多くの色材に関する二次微分スペクトルを収集し、基礎データの蓄積を図った。

（３）非破壊調査法の高度化に関する研究

非破壊調査手法をより高度化し、安全にかつ最小の照射条件での調査を実現するために、いくつかの検討を行った。

・蛍光Ｘ線分析による空気中で軽元素測定法の検討
・実験的手法とｺﾝﾋﾟｭｰﾀｼﾐｭﾚｰｼｮﾝの両者を用いてＸ線透過撮影の最適条件を求める方法の検討
・新たな照射光（近赤外 LED）撮影による色材判別の可能性の検討

【実績値】

論文等数　２件（①、②）
発表件数　２件（③、④）
報告書　　１件（⑤）

【備考】

①早川泰弘：「ポータブル蛍光Ｘ線分析装置による沖縄県所在ガラス製品の現地調査」　『保存科学』50、pp.217-227、 11.03
②吉田直人：「可視反射スペクトルと二次微分スペクトルによる青色色材の判別に関する検討」　『保存科学』50、pp.207-215、 11.03
③早川泰弘、城野誠治、黒田泰三：「国宝伴大納言絵巻の彩色材料調査」　日本文化財科学会第 27 回大会、関西大学 10.6.26-27
④吉田直人、間渕創：「近赤外 LED を光源とした資料撮影で得られる情報」　文化財保存修復学会第 32 回大会　長良川国際会議場 10.6.12-13
⑤『文化財の非破壊調査法の研究　平成 18～22 年度　研究成果報告書』、11.03

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4221

自己点検評価調書

研究所 No.29

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	学術雑誌等への掲載論文等数	学会研究会等での発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	高い水準でさまざまな文化財資料の材質･構造調査を実施し、迅速にその結果を報告して、作品の保存・修理等に有益な情報を多数提供することができた。各地の博物館・美術館等と協同して作品調査を推進し、その調査技術の普及や調査結果の説明にも努めた。さらに、より高度な文化財非破壊調査の実現を目指し、さまざまな改良や研究にも取り組んだ。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本中期計画の５ヵ年において、文化財の材質・構造調査をその場で行う基礎的技術はほぼ確立したと考える。各地の博物館・美術館あるいは寺院・神社などにもその情報が普及し、これまで調査されたことのない多くの文化財資料の非破壊調査が実施され、貴重なデータを多数得ることができた。すべての調査に対して、迅速に調査結果の報告を行い、特に重要な成果については、書籍・論文・学会発表などでの公表を図った。当初に計画した通りの研究進捗状況であったと考える。 今後は、より安全に、より高精度に調査できる手法の確立をめざし、従来技術の改良、新技術の開発を推進する。また、調査データの蓄積とその公開を積極的に進めていきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4231

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.30

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	遺跡データベースの作成と公開（(2) －③－ア）

【事業概要】

官衙関連遺跡の指標や属性分析法の確立に関する研究等を継続し、資料収集とデータベース化を進めて順次一般公開するとともに、寺院遺跡の発掘調査において抽出すべき基本的属性についてのデータ収集と分析をおこない、一般公開する。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅

【スタッフ】

山中敏史（客員研究員）、森本晋（企画調整室長）、馬場基（都城発掘調査部主任研究員）、小田裕樹、青木敬（以上、都城発掘調査部研究員）、清野陽一（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）

【主な成果】

官衙関係遺跡の建物データについて、各遺跡における建物群の性格・建物の性格を細分化して追加した。とくに、官衙および都城における門遺構のデータを重点的に収集し、『官衙と門』の資料集成を刊行した。また、寺院遺跡の属性分析をふまえたデータベースを、九州から近畿地方の一部まで公開した。さらに、井戸のデータベースを作成し、データ収集を開始した。

【年度実績概要】

1. 各地の官衙関連遺跡について、建物群の性格と個々の建物の性格に関する属性データを追加入力した。
2. 建物規模について、より詳細な数値を入力し、データ化した。
3. 平成21年度以前刊行の都城および官衙関係遺跡に関する報告書のめくり作業をおこない、門遺構に関する資料を収集整理した。
4. 門遺構のデータに関して、昨年度に開催した研究集会「官衙と門」の資料集成を編集・刊行した。
5. 平成18年度以降刊行された報告書のめくり作業をおこない、国府・郡衙・城柵やその他の官衙関連遺跡等の資料を収集整理した。また、平成20年度までに刊行された古代寺院に関する報告書のめくり作業をおこなった。
6. 新たに収集した資料をデータベース化し、新出資料も追加して一般公開した。
7. 古代寺院遺跡の建物遺構を中心とした属性分析を進め、それにもとづく寺院遺跡データベース構造を作成して資料収集と整理をおこない、近畿地方以西のデータについて、奈良文化財研究所ホームページで一般公開した。
8. 平成21年度以前刊行の都城および官衙関係遺跡に関する報告書のめくり作業をおこない、新たに井戸のデータベースを作成し、データ収集を開始した。

古代寺院建物データ入力画面（部分）

【実績値】

官衙関係遺跡データベース入力・補訂件数：遺跡数約150件、文献データ約800件、
建物データ約400件、画像データ約400件、
井戸データ約300件

古代寺院遺跡データベース入力・補訂件数：遺跡数約200件、文献データ約2,000件、
建物データ約620件、画像データ約900件

公開データ数：官衙関係遺跡：遺跡数約1,450件、文献データ約13,900件、建物データ約16,100件など
古代寺院遺跡：遺跡数約1,300件、文献データ約8,600件、建物データ約1,700件など

研究集会報告書：１件（①）

【備考】

馬場基ほか編『第 13 回古代官衙・集落研究集会報告書　「官衙と門」資料編』奈良文化財研究所研究報告第４冊、奈良文化財研究所、2010.12

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4231

自己点検評価調書

研究所 No.30

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
情報の共有化が要望されてきた古代寺院遺跡について、データ数の拡大をともなうデータベースを充実させている点で、適時性と発展性が認められる。また、毎年増加する官衙関連遺跡に関するデータを逐次補足・補充することにより、正確性と継続性、適時性を確保している。

2．定量的評価

観点	データベース入力件数	データベース公開件数				
判定	A	A				

備考
毎年増加する官衙関係遺跡のデータの追加入力に加えて、新たに都城を含めた門遺構を全国的に集成し、データベースの充実化を図るとともに、門遺構の資料集成を編集・刊行した。また、寺院遺跡データの収集・入力作業を進め、データの公開も着実に達成した。さらに、井戸のデータベースを作成し、資料収集を開始した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	データベース入力件数の目標値を大幅に上まわったほか、都城および官衙関係遺跡における門遺構資料収集とデータベース化をおこない、資料集成を刊行した。古代寺院遺跡のデータベースを、近畿地方の一部を除く西日本について一般公開できたことは、とくに各地で寺院遺跡の調査研究にあたっている者にとって、情報の共有化につながると同時に、遺跡から抽出すべき遺構の属性についての指標を提示するものであり、寄与するところが大きい。今後も、新発見の官衙関係遺跡データを継続的に収集・整理するとともに、全国に及ぶ古代寺院のデータベースを作成し、公開していくことにしたい。また、これにくわえて、発掘調査で検出例の多い井戸遺構についても属性分析をおこない、整理・収集とデータベース化を始めることにより、官衙関連遺跡の調査や建物遺構分析における新たな指標を示すことができるよう努めたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	官衙関連遺跡について、新出資料の補充を含めたデータベースの作成を着実に進め、一般公開するとともに、宮・都城の門についてもデータ収集を開始し、データベースの一層の充実化を図っている。一昨年度に構築した寺院遺跡のデータベースについては、近畿地方の一部を除く西日本のデータを網羅的に収集・整理してデータベース化し、一般公開することができた。今後は、官衙関連遺跡および寺院データの収集とデータベース化を継続し、利用しやすいかたちでの一般公開をさらに推進していくことが必要である。さらに、集落遺跡など、官衙以外における廂付建物についてもデータ収集を開始し、発掘調査や建物遺構分析における新たな指標を示すことができるよう努めたい。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4232

業務実績書

研究所 No.31

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法の研究（(2) －③－イ）

【事業概要】
遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法を研究し、遺跡調査の質的向上と発掘作業の効率化に資するべく、方法の検討と実地での実践によるデータの収集と分析をおこなう。本事業は、現在の遺跡調査の実態に鑑み、従前の方法との乖離を埋めつつ、新たな技術の有効利用法を研究・提示することで、当該分野における指針としての役割を果たすことを目的としている。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅

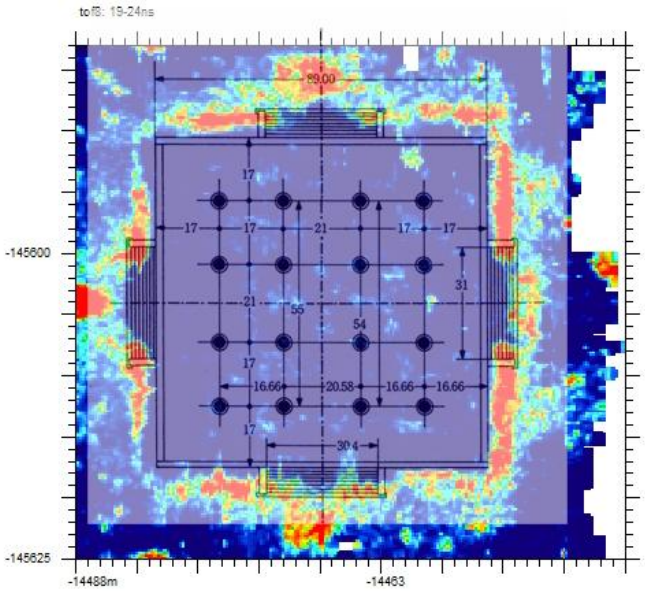
【スタッフ】
金田明大（埋蔵文化財センター主任研究員）、西村康、西口和彦（以上、客員研究員）

【主な成果】
遺跡の測量・探査技術の向上と有効利用法の研究を推進し、大学や地方公共団体と連携して実践をおこなった。測量では、三次元レーザースキャナーおよび写真測量の技術的検討をおこない、遺跡や遺物の図化法の検討、安価で導入可能な機器の実践と普及を実施した。探査では、ＧＰＲおよびＥＭ法の走査方法改善と新たな機器の試作、ＧＰＳによる位置精度向上実験をおこない、多様な条件下で遺構の確認に成功した。

【年度実績概要】
探査分野では、小坂城（茨城県）、天良七堂遺跡、三軒屋遺跡（以上、群馬県）、松本城（長野県）、平城宮、藤原宮、東大寺、赤田横穴（以上、奈良県）、鋼山製鉄所、苗代川窯（以上、鹿児島県）、大宰府（福岡県）、クランコー村遺跡（カンボジア）などで地方公共団体や大学と共同調査をおこなった。なかでも、東大寺東塔院では、基壇内の礎石などの残存状況や回廊、門の配置を明らかにすることができた。

測量・計測分野では、低価格の三次元レーザースキャナーの実用化を達成し、従来の記録法に加えて三次元計測が現実的に導入可能なことを示し、連携した行政内や企業の研究者とともに、解説書を刊行した。くわえて、東大寺東塔院、中宮寺（奈良県）、平城宮・京出土遺物、遼寧省出土遺物（中国）などの計測をおこない、三次元計測の有効性を検証することができた。

このほか、考古学情報の流通改良を目的とする、ＳＶＧおよびＸＭＬを利用したデジタル実測図の流通に関する研究、平城京条坊の既往の発掘成果の整理、遺跡の位置情報データの活用などをおこない、その成果の一部を発表した。



東大寺東塔基壇のレーダー平面図と過去の復元案との比較

【実績値】
講演件数：３件
発表件数：４件
論文等数：８件
遺跡探査実施件数：15 件
三次元計測資料数：52 点
研修実施件数：３件
大学講義件数：１件

【備考】
論文・学会発表等については、別紙「論文等発表実績一覧」「学会、研究会等発表実績一覧」参照

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4232

自己点検評価調書

研究所 No.31

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性：技術革新が進行するなかで的確な指針を欠く現況の改善。
発展性：全国の遺跡調査への応用性と影響力。
効率性：時間的投資・人的投資の効率化。
継続性：事業中断以前を含めた、黎明期以来のデータの継続的収集と蓄積。

2．定量的評価

観点	探査実施件数	計測実施件数	発表件数	研修件数		
判定	S	A	A	A		

備考
いずれの項目も当初の目標値を上回っている。とくに探査実施件数はそれが著しい。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	測量・探査ともに、作業の迅速化や結果の向上、地方公共団体などへの協力と成果の還元が達成できたため、Ａと判定する。反面、新たな多方面からの要求に応えるための研究補助者の確保が必要だが、現状では充分に対処できていないことから、スタッフの負担が大きくなっており、これ以上の研究の拡大は事実上困難である。また、漏水事故や機器の老朽化により、かなりの機材が使用できない状況となり、これらの機器を必要とする作業には対応できない点が大きな問題である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	現状では、新しい方法や機器の導入と試行、成果の蓄積という点では、当初の予想を超える進展をみせており、全国各地からの依頼や問い合わせも急増している。三次元データや探査データの処理は時間を要する作業であるが、研究補助者の入れ替わりもあって、研究員の負担が増大している。探査については、ＲＴＫ-ＧＰＳの導入などが進み、今後、さらなる進展が期待できる。しかし、依頼の急増や、機器の老朽化や漏水事故による故障のため、新しい技術を利用した効率化が難しい状況であり、調査で得られた新たな方法の試験や改良に取り組む時間がないことは問題である。したがって、すみやかな対応を図るとともに、次年度の調査研究の計画や依頼の受諾を大幅に見直す必要がある。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4241

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.32

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	年輪年代学研究（(2)－④）

【事業概要】

遺跡出土木材、木造建築物、木造美術工芸品などの年輪年代測定を実施し、考古学、建築史学、美術史、歴史学研究に資する。とりわけ、当研究所で開発したマイクロフォーカスＸ線ＣＴやデジタル画像による非破壊年輪年代測定法は、非破壊を原則とする文化財調査に大変有効であるので、実施事例の拡充を図る。これらの研究成果を、学会、学術論文、各種報告書として発表する。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	年代学研究室長 大河内隆之

【スタッフ】　国武貞克（研究員、年代学研究室兼務）・児島大輔（特別研究員〈アソシエイトフェロー〉）
光谷拓実・伊東隆夫・藤井裕之（以上、客員研究員）

【主な成果】

２県下２遺跡の出土木製遺物、２県下４棟の木造建造物、３府県下３躯の木彫像に対して年輪年代測定調査を実施した。このうち、１躯の木彫像に対してプロジェクト研究者らが開発したマイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置を用いた年輪年代測定調査を実施している。これらの調査・研究成果の一部を論文等８件、学会発表等７件として公表した。このうち、１件の学会発表ではポスター賞を受賞している。

【年度実績概要】

１．文化財の年輪年代調査：上記の年輪年代調査実績のうち、奈良・法隆寺金堂の年輪年代測定調査は一昨年度までの継続的な研究成果を昨年度に公表したが、良好な状態で保存されている同寺同堂古材の年輪年代調査をなお継続して実施しているほか、同寺大講堂の屋根替えに伴い同堂の部材および半解体修理の行われた同寺中院の部材を対象に年輪年代測定調査を実施している。また、島根・西川津遺跡出土の弥生時代の木製品に対して年輪年代測定調査を行い（右図参照）、結果として紀元前 71 年の年輪年代を得ている。

西川津遺跡出土木製品の年輪年代調査風景

２．年輪年代測定対象樹種の拡大：奈良文化財研究所ではスギ・ヒノキ・コウヤマキ・ヒバに対して年輪年代法を応用し年代測定調査を行ってきたが、近年の調査研究では近世の建造物に多用される栂（トガ）に対しても年輪年代法が有効であることがほぼ明らかになってきている。こうした研究成果に対して日本文化財科学会においてポスター賞が授与された（参照：【備考】欄⑩）。

３．木簡の樹種同定：昨年度までに継続的に実施してきた奈良・平城宮跡出土木簡の樹種同定結果を公表した（参照：【備考】欄②）。

４．マイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置の活用：同装置は年輪年代調査を主たる目的として開発されたものであるが、貴重な文化財の不可視情報を非破壊かつ高解像度で可視化するという特徴を活かし、年輪年代測定以外の文化財調査にも活用している。一例として、愛知・朝日遺跡出土の石鏃の刺さった動物骨を同装置で撮影し、骨内部に石鏃が貫入している状況を非破壊で確認した事例を挙げる。

【実績値】

論文等数：８件（①～⑧）、学会発表件数：４件（⑨～⑫）。

【備考】

論文等：①国武貞克・藤井裕之・吉岡直人・浅野啓介「檜扇の製作に関わる新知見」②山本崇・藤井裕之「平城宮木簡の樹種」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010.6 / ③大河内隆之・光谷拓実「年輪年代法による補訂」『中世禅宗様建築の研究』関口欣也著作集 2010.9 / ④大河内隆之「年代をはかる」『図説 平城京事典』2010.12 / ⑤Mechtild MERTZ, Takao ITOH“Analysis of Wood Species in the Collection” In, ed. D. P. Leidy and D. Strahan “*Wisdom Embodied: Chinese Buddhist and Daoist Sculpture in The Metropolitan Museum of Art*” 2011.1 / ⑥光谷拓実「府中石田遺跡出土木材の年輪年代」『福井県埋蔵文化財調査報告 第 121 集 府中石田遺跡―舞鶴若狭自動車道建設に伴う調査―』2011.3 / ⑦光谷拓実「木崎遺跡出土木材の年輪年代」『福井県埋蔵文化財調査報告 第 122 集 木崎遺跡―一般県道小浜インター線道路改良工事に伴う調査―』2011.3 / ⑧光谷拓実「曲物底板の年輪年代測定」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸＸⅥ 古渡路遺跡』2011.3

学会発表等：⑨大河内隆之「日本年輪年代学研究史話―アリゾナ大学年輪研究所に保管されている故渡辺直経氏収集の木曽ヒノキ資料をめぐって―」⑩藤井裕之・光谷拓実「日本産ツガ属の年輪年代測定（その３）―現生材による基準パターンの作成と既存データの再検討―」日本文化財科学会第 27 回大会、2010.6 / ⑪児島大輔「正倉院宝物・金剛智の袈裟について」第 66 回彫刻史研究会、2010.7 / ⑫伊東隆夫・Mechtild MERTZ「中国における木の文化研究の２，３の事例―樹種同定からのアプローチ―」第 61 回日本木材学会大会、2011.3

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4241

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.32

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

適時性：建造物や木彫像の解体修理あるいは木製遺物の出土に際しては、迅速に対応して調査研究に及び、建築史・美術史・考古学等の歴史学・文化財科学関連諸分野に年輪年代情報を提供することができた。昨年度以上の成果を上げたため、高い評価とする。

独創性：ツガ（トガ）に対して年輪年代法が有効であることを示した研究成果は、学会で受賞したことにも端的に表れているように、独創的な成果として認めることができる。

発展性：マイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置の利用価値を多角的に認め、不可視の情報を可視化することにより、年輪年代調査だけではなく、文化財の非破壊調査を一層進めることができた。また、上記の年輪年代法の適用樹種の拡大も発展性のあるテーマとして認められる。

効率性：十分に効率的な調査・研究を行っている。

継続性：年輪データを継続的に収集しているほか、法隆寺建造物の年輪年代調査等も継続的に行っている。

正確性：多くの自然科学的年代測定法の中で、年輪年代法は１年単位の年代を測定できる点できわだった存在である。公表する年代は統計学的にきわめて正確な数値である。

2．定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				

備考

公表した研究成果は論文等数・発表件数ともに当初の目標値を上回っており、Ａ評価に値すると判断した。なお、発掘調査報告書や解体修理報告書など発行主体がほかにある場合、当研究室における担当分の結果報告が済んでいても、報告書自体が刊行されていないために未だ日の目を見ていない調査研究成果が数多く存在していることを付言する。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的にも、定量的にも高い評価に値すると判断したため、総合的にＡ判定を与えた。とくに、若い研究者が年輪年代法の適用樹種の拡張に努め、美術作品の年輪年代調査を積極的におこなっていることは、年輪年代学の今後の発展に大きく寄与するものであり、高く評価できる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の中期計画の調査研究事業を順調に遂行できた。次期中期計画においても、年輪データの蓄積、適応樹種の拡大、さらにはマイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置の活用といった継続的かつ発展性のある調査研究事業を推進するとともに、発掘調査や解体修理事業に即応できる体制を整えて研究に適時性をもたせ、従前の正確性をさらに高めることで、質的にも量的にも豊かな成果を上げられるよう努力したい。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4251

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.33

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	遺跡出土の動物遺存体や古土壌の考古科学的分析による環境考古学研究（(2) －⑤）

【事業概要】

動植物遺存体による環境考古学的研究を継続して行う。また、出土骨に残る加工痕の観察方法を確立し、骨角器製作技術や動物解体技術の研究を推進する。日本の先史時代の動植物利用と対比できる中国、韓国、台湾、北米北西海岸などの遺跡の発掘調査に積極的に参加し、これまで国内の遺跡で開発してきた微細遺物選別法の実践を行う。そして、東アジアや環太平洋地域の中での農耕・牧畜の起源や動植物利用に関する比較研究を行う。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	環境考古学研究室長　松井章

【スタッフ】

山崎健（研究員）、丸山真史・橋本裕子（以上、客員研究員）、菊地大樹（特別研究員）、樋廻理恵子、藤田芙美（以上、派遣職員）、納屋内高史（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）、金原裕美子（京都大学大学院人間・環境学研究科博士前期課程）

【主な成果】

土壌選別作業を積極的に実施して、これまで出土事例の少なかった内陸部や日本海側の遺跡から動植物遺存体を回収して、分析を進めた。査読誌 2 本を含む 30 本の論文や報告書を執筆し、学会や研究会で 8 本の発表を行って研究成果を発表し、研究交流を深めた。藤原宮のウマに関する連携研究を立ち上げて、次年度につながる良好な成果を得た。また、研究の基礎となる現生動物骨格標本についても継続的に収集した。

【年度実績概要】

屋代遺跡（長野県）、水汲遺跡（愛知県）、池島・福万寺遺跡（大阪府）、旧練兵場遺跡（香川県）および奈良文化財研究所が実施した発掘調査で出土した動物遺存体の分析を行った。長野県の屋代遺跡群では、水洗フルイ選別法とフローテーション法を実施して微細遺物を回収し、非常に多くの焼骨片を抽出した。これらの焼骨片を分析した結果、屋代遺跡群ではサケ・マス類を集中的に獲得したことが明らかとなった。また、掘立柱建物の火床と付属する土坑からサケ・マス類の椎骨破片や歯が集中して出土しており、捕獲したサケ・マス類の保存処理に伴うものと考えられる。こうした屋代遺跡群における分析をつうじて、貝層が形成されない内陸部においても、適切な土壌選別作業を実施すれば、食料残滓となった動植物遺存体が採取できることを明らかにできた。

屋代遺跡から出土したサケ科魚類の椎骨

研究成果の発信としては、人間文化研究機構の公開講演会、COP10（生物多様性条約第 10 回締約国会議）に関連して開催された国際学術ワークショップ、野生生物保護学会・日本哺乳類学会の合同大会、弥生時代のシンポジウムなどで講演・発表を行った。

継続的に実施している現生動物骨格標本の収集と公開では、オオカミ、ロバ、セキショクヤケイ、トウカイハマギギ、コクチイシナギなどの希少な骨格標本を含む、65 点を収集した。他にも、春から秋までの袋角の成長段階に合わせてニホンジカの頭蓋骨標本を作成した。

また、連携研究では、同位体科学分析の予備分析として、藤原宮から出土したウマの骨のコラーゲン抽出率を推定した。その結果、多くのコラーゲンが残存する可能性が示唆され、藤原宮跡の土壌環境は骨や歯の有機分析に適しているものと推測された。今年度の分析結果を踏まえて、来年度に同位体科学分析を実施し、藤原宮におけるウマの飼育形態や長距離移動を検討する予定である。

【実績値】

標本作製・収集数：魚類 29 点、鳥類 16 点、哺乳類 15 点、両生類・爬虫類 5 点
論文等数：30 件
発表件数：9 件

【備考】

論文発表・学会発表等については、別紙「論文等発表実績一覧」「学会、研究会等発表実績一覧」参照

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4251

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.33

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		

備考

適時性：国や地方公共団体からの要請を受けて、発掘調査や整理作業、報告書作成における環境考古学関係の協力や助言を行い、動物遺存体の分析も数多く担当した。

独創性：動植物遺存体の出土事例が少ない内陸部の遺跡において土壌選別を積極的に行い、動植物遺存体の蓄積に努めることで、生業活動を明らかにするための基礎研究を進めた。

発展性：今年度より東京大学との連携研究として、藤原宮におけるウマの飼育形態や長距離移動を検討するための同位体科学分析を実施した。

継続性：研究の基礎となる動物骨格標本を、継続的に収集・作製・管理・公開している。また、国内外の埋蔵文化財担当職員や研究者に対して環境考古学の研修を行っている。

2．定量的評価

観点	論文等数	発表件数	標本収集数			
判定	A	A	A			

備考

査読誌 2 本を含む 30 本の論文等の刊行、学会や研究会で 9 本の発表を行った。また、動物骨格標本 65 点を収集したことから、評価をＡとする。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価に関しては、これまで出土事例の少ない日本海側や内陸部の遺跡で土壌選別を積極的に実施し、生業活動や食生活の歴史を明らかにするための貴重な資料を検出した。また、連携研究を実施して、古代におけるウマの飼育形態や長距離移動を検討するための研究を進めている。定量的評価に関しては、動物考古学や環境考古学に関する研究について、国内外で数多くの論文や学会発表等を行った。以上の点から、総合的にＡと評価するのが妥当と考える。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度も多くの学会や研究会などで研究発表を行い、これまでに上げた成果を紹介してきた。また、新規に連携研究を実施して良好な結果を得ることができ、次年度以降も継続的に分析を進める予定である。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4311

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.34

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の生物劣化対策の研究（(3)-①）

【事業概要】

歴史的建造物や彫刻等、屋外環境に近い空間にある文化財は生物被害を受けやすいが、その劣化の早期検出や被害防止対策について、研究はまだ十分な状況とはいえない。本プロジェクトでは、特に屋外に近い環境に置かれた文化財の生物劣化対策を確立することを目標に、生物による被害の現況についてデータを集め、早期発見のためのシステム作りや劣化の防止手法の開発などの研究を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長　石﨑武志

【スタッフ】

木川りか、佐野千絵、犬塚将英、吉田直人、川野邊　渉、林　美木子（以上、保存修復科学センター）、藤井義久、小峰幸夫、間渕　創（以上、客員研究員）、鳥越俊行、今津節生、本田光子（以上、九州国立博物館、保存修復科学センター併任）、吉川也志保（日本学術振興会特別研究員）、トム・ストラング（カナダ保存研究所）

【主な成果】

本年度は、日光二社一寺の歴史的建造物約 70 棟について、粘着トラップを用いて木材害虫の棲息状況を調査した。その結果、これまで文化財建造物の被害例が知られていない複数のシバンムシ類が認められ、また調査結果よりこれらは周囲の屋外で棲息している可能性が示唆された。虫害の著しい建造物を調べるのにこのような調査手法が有効であることが示され、レジストグラフなどの手法を用いて建物強度などの調査が行われている。また、漆塗装のある建造物に適した殺虫処理についても検討を進めた。調査、検討結果は、研究報告会で専門家、関係者に報告し、今後取り組むべき課題と問題点を明らかにした。

【年度実績概要】

（１）日光二社一寺のおよそ 70 棟の国宝、重要文化財を含む歴史的建造物において約 27000 本のハエ取りリボンを仕掛け、加害虫について詳細な調査を行った。また、シバンムシ類に加害された漆塗装のある建造物の殺虫方法の策定のため、被害材や漆塗りのケヤキ材試験ブロックなどを用いて、二酸化炭素やフッ化スルフリルなどによる殺虫効果の試験を実施し、高い効果が得られる処理方法を検討した。

日光の歴史的建造物の加害虫調査

（２）高湿度環境における微生物活性についての基礎研究

これまで浮遊菌数、付着菌の調査を行っていたが、それらとあわせ、温度と相対湿度から絶対湿度算出による環境の評価や、微生物に由来する生体活性から微生物の量や活性を検出するＡＴＰ発光法についてもより多くの事例で検討し、培養による結果と環境条件、ＡＴＰ発光量との相関を検証した。

（３）歴史的建造物の害虫調査、殺虫法に関する研究報告会の開催

平成 23 年 1 月 27 日(木)於：(財)日光社寺文化財保存会　テーマ：「日光の歴史的建造物における昆虫調査・劣化調査等結果報告会」　プログラム：原田正彦　日光の歴史的建造物を対象とした捕虫テープによる広域害虫調査について/ 林美木子　日光の建造物において粘着トラップに捕獲された甲虫の集計方法と調査結果/　小峰幸夫　日光の建造物で確認された木材害虫（シバンムシ類）の種類と生態/　藤井義久・藤原裕子・原田正彦　輪王寺三仏堂の主要構造部材に見られる虫害の調査結果と今後の展望/　鳥越俊行　X 線 CT による部材内部の虫害の調査と害虫の活動の有無の調査/　木川りか　修理に伴う処置法の検討、および今後の対策について

【実績値】

論文数　２件（①，②）

学会研究会等での発表件数　２件（③，④）

研究会　１回

【備考】

①日光の歴史的建造物において粘着トラップ（ハエトリリボン）に捕獲された甲虫の集計方法と調査結果（林美木子、小峰幸夫、木川りか、原田正彦、川野邊渉、石崎武志）「保存科学」50　pp.123-132　11.03

②日光の歴史的建造物を加害するシバンムシ類の殺虫処理方法の検討（木川りか、小峰幸夫、鳥越俊行、原田正彦、今津節生、本田光子、三浦定俊、川野邊渉、石崎武志）「保存科学」50　pp.141-158　11.03

③X 線 CT による被害材の調査(2)害虫活動の検出（鳥越俊行、木川りか、今津節生、本田光子、原田正彦、小峰幸夫、川野邊渉、）文化財保存修復学会第 32 回大会　岐阜　10.6.12-13

④文化財公開施設等におけるＡＴＰ拭き取り検査の活用について（間渕創、木川りか、佐野千絵）　文化財保存修復学会第 32 回大会　岐阜　10.6.12-13

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4311

自己点検評価調書

研究所 No.34

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
歴史的建造物や古墳など、生物被害を受けやすい文化財の生物劣化対策は急務である。
本研究は時宜を得たテーマであり、研究を進めるなかで従来あまり知られていなかった害虫の存在や、歴史的建造物特有の問題点が明らかになり、具体的な検討とともに今後の方向性を探ることができた。

2．定量的評価

観点	論文数	研究発表件数	研究会開催数			
判定	A	A	A			

備考
研究成果は、論文、学会での研究発表を通して、すみやかに公表することができた。
また、研究会では、今年度得られた多くのデータに基づいて問題点を共有し、議論をすることができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現場調査、基礎研究の実施、専門家間の交流、すみやかな研究成果公開を果たし、本課題について必要不可欠な調査研究を実施することができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本課題において重大な虫害が検討している歴史的建造物を絞り込むための調査法について貴重な成果が得られた。また、それと併せて、部材の強度調査に関する基礎調査も取り入れて劣化状況を検討することができた。さらに、大きな漆塗装のある歴史的建造物において、どのような殺虫方法が適しているか、十分なデータに基づいて考察することができた。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　処理番号 4321

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.35

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の保存環境の研究（(3)-②）

【事業概要】

文化財を取り巻く保存環境の現状を把握し改善することを目的として、様々な文化財を取り巻く環境の調査手法、モデル実験やシミュレーション技術を用いた環境の解析手法の確立のための研究を行う。また、地方公共団体等が設置する文化財の収蔵・公開施設に対して、その依頼に応じて環境調査を行い、専門的・技術的な援助・助言を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長　石﨑武志

【スタッフ】

佐野千絵、犬塚将英、早川泰弘、木川りか、吉田直人（以上、保存修復科学センター）、呂　俊民（客員研究員）、小椋大輔、三村　衛（以上、京都大学、客員研究員）、白石靖幸（北九州市立大学、客員研究員）

【主な成果】

本年度も、文化財展示・収蔵施設の環境調査を行うと共に、熱・換気回路網計算プログラムによる解析や三次元熱流体解析システムによる気流シミュレーションを行い、環境改善に関する研究を行った。博物館施設の環境に関する研究については、新築の九州歴史資料館を調査対象として、内装材料が福岡県八女産の杉、熊本県小国産の杉、無機質系調湿材、のあわせて 3 種類の内装材料で構成される収蔵庫をモデルとして、各種計測評価方法の比較試験、および内装材料による空気質の違いについて検討した。文化財の保存環境に関する研究会を３回開催した。

【年度実績概要】

本年度も、文化財展示・収蔵施設の環境調査を行うと共に、熱・換気回路網計算プログラムによる解析や三次元熱流体解析システムによる気流シミュレーションを行い、環境改善に関する研究を行った。

博物館施設の環境に関する研究は、新築の九州歴史資料館を調査対象として、内装材料が福岡県八女産の杉、熊本県小国産の杉、無機質系調湿材、のあわせて 3 種類の内装材料で構成される収蔵庫をモデルとして、各種計測評価方法の比較試験、および内装材料による空気質の違いを検討した。その結果、木材由来の成分について大きな相違があり、八女産の杉は低分子量の揮発性物質が多いこと、小国産の杉はやや分子量の多いヤニ成分が多いこと、無機質系調湿材は外壁のコンクリートからの放出物質量に依存することなど、それぞれの特徴を把握することができた。

また消火薬剤の顔料への影響や紙の中性化に用いられるアルカリの影響、収蔵資料の殺虫処理薬剤による変色事故の原因や現状の調査など、文化財と直かに接触する化学物質の影響とその変化について研究した。

平成 22 年 4 月 15 日、東京文化財研究所で、「博物館環境－環境モニタリングの結果から－」というテーマでノルウェー大気研究所のエリン、ダーリン氏にお話しを頂き研究会を開催した。参加者は、33 名であった。平成 22 年 10 月 19 日、九州国立博物館を会場に、九州、中四国地方の博物館美術館等保存担当者を対象に、文化財の保存と活用に関する研究会「ガス燻蒸剤の現状と今後」を開催し、126 名の参加を得た。平成 23 年 2 月 25 日、東京文化財研究所で「文化財施設の環境解析と博物館の省エネ化」というテーマでドレスデン工科大学のグルネワルド教授、プラーゲ研究員にお話しを頂き研究会を開催し、50 名の参加を得た。

本年度は、中長期計画の最終年度にあたるので、報告書を作成した。

【実績値】

論文等数　３件（①、②、③）
発表件数　３件（④、⑤、⑥）
報告書　　１件（⑦）
研究会開催　３件

【備考】

①犬塚将英、多比羅菜美子、佐野千絵：「収蔵庫内の温湿度環境とスチール棚の表面温度」『保存科学』50、pp. 91- 100、11.03
②呂俊民、佐野千絵、加藤和歳：「内装材の異なる収蔵庫の空気環境の比較」『保存科学』50、pp. 3-12 11.03
③吉川也志保、佐野千絵、石崎武志：「亜寒帯湿潤大陸性気候における資料保存環境調査、付着菌・空中浮遊菌のサンプリングを中心として」『保存科学』50、pp. 101- 110、11.03
④呂　俊民、佐野千絵：書物から発生するガスの空気環境への影響、文化財保存修復学会第 32 回大会、10.06.12-13
⑤佐野千絵、呂　俊民：文化財を収納する保存箱の環境の評価方法について、文化財保存修復学会第 32 回大会、岐阜 10.06.12-13
⑥石崎武志、犬塚将英、ルドルフ・プラーゲ：凝灰角礫岩の乾燥過程のシミュレーション解析、文化財保存修復学会第 32 回大会、岐阜、10.06.12-13
⑦『文化財の保存環境の研究　平成 18～22 年度　研究成果報告書』、11.03

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4321

自己点検評価調書

研究所 No.35

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

２．定量的評価

観点	学術雑誌等への掲載論文等数	学会研究会等での発表件数	研究会開催数			
判定	A	A	A			
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	美術館・博物館での環境調査、海外の研究者との情報交換、研究会の実施、学会や紀要での研究成果公表など予定通り実施し、高い調査研究水準を保つことができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画の第５年度として、環境のシミュレーションに関する現地調査および基礎的な研究も行い、研究は予定通り進んだ。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4331

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.36

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究（(3) －③－１）

【事業概要】

屋外に位置する美術工芸品、文化財建造物等は、周辺環境の変化が大きな劣化要因となる。本研究では、周辺環境が文化財に及ぼす影響を評価し、予測手法の確立や新たな保存修復技法や材料の開発を目的とする。また、石造文化財の保存修復に関して韓国・国立文化財研究所との共同研究を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター副センター長　川野邊　渉

【スタッフ】

早川典子、森井順之（以上、保存修復科学センター）、朽津信明（文化遺産国際協力センター）

【主な成果】

石造文化財や木造建造物など屋外に位置する文化財について周辺環境計測を行った。また、その結果に基づく劣化要因の解明、周辺環境影響を軽減する方法および修復材料・技法の開発・評価を行った。詳細には、（１）臼杵磨崖仏における劣化要因の解明および劣化防止対策を含めた保存管理計画の提案、（２）厳島神社における木材充填材料の現地曝露試験、（３）大韓民国・国立文化財研究所との共同調査、共同研究発表会等を実施した。

【年度実績概要】

石造文化財や木造建造物など屋外に位置する文化財について、周辺環境計測を行った。また、その結果に基づいて劣化要因を解明し、その影響を軽減する方法および修復材料・技法の開発・評価を試みた。
今年度の主な成果は次の通りである。

（１）臼杵磨崖仏で行ってきた劣化要因調査および保存修復技術および材料に関する研究をまとめ、「臼杵磨崖仏保存環境調査報告会」(2010（平成 22）年 11 月 6 日、於：臼杵中央公民館）において成果報告および保存管理計画に関する提案を行った。また、殺菌灯照射による着生生物除去施工の実用化試験、冬期寒冷時の凍結防止対策に関する調査を実施した。

（２）厳島神社など海浜環境で使用可能な木材充填材料について評価するため試験体を製作し、修復材料として使われる樹脂の発熱量と比重測定、圧縮強度測定、紫外線照射試験及び冷熱サイクル試験、現地曝露試験を行った。

（３）今年度の大韓民国・国立文化財研究所との共同研究は、2010（平成 22）年 12 月 7 日、大韓民国・国立文化財研究所にて研究発表会を開催した。また、2010 年夏には臼杵磨崖仏（日本）および雲住寺（韓国）にて、凝灰岩強化材料に関する現地曝露試験の経過観察を共同で行った。

【実績値】

報告書：２件 (①、②)
論文等：３件 (③～⑤)
発表等：７件 (⑥他)

【備考】

①日韓共同研究報告書 2010　国立文化財研究所／東京文化財研究所　51p　11.2
②臼杵磨崖仏保存環境調査報告書　東京文化財研究所　225p　11.3
③イ・チャンヒ、チョ・ジヒョン、キム・ジヨン、森井順之、イ・ミョンソン、キム・サドク　日本・大分県臼杵磨崖仏の損傷度評価と微気候環境分析　日韓共同研究報告書 2010　pp.28-33　11.02
④イ・ミョンソン、イ・ジェマン、森井順之　臼杵磨崖仏に対する保存処理剤の適用研究　日韓共同研究報告書 2010　pp.34-42　11.02
⑤森井順之　国宝及び特別史跡・臼杵磨崖仏の次期保存修理計画　日韓共同研究報告書 2010　pp.43-51　11.02
⑥森井順之、川野邊渉、柏谷博之　石造文化財着生生物のクリーニング手法の開発　2010 韓国文化遺産保存科学会第 32 回大会　扶余ロッテリゾート　10.10.08

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4331

自己点検評価調書

研究所 No.36

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究について、石造文化財の劣化要因解明および保存管理計画の提案が出来た。また、木材充填材料に関して室内実験による評価が出来た。また、大韓民国・国立文化財研究所との共同研究では、情報交換のみならず共同成果を意識した研究交流を継続できた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画通り順調に進めることができた。特に石造文化財の保存修復では、劣化要因解明とともに保存管理計画の提案まで行うことができた。また、木造建造物に関しても充填材料に関する評価研究を開始するなど、新たな研究テーマも生まれた。今後、次期中期計画においてもこれらの研究を継続して進めていきたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 4332

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.37

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の防災計画に関する調査研究（(3)－③－２）

【事業概要】

阪神淡路大震災などの大地震で被害を受けた文化財は数多く、また、平成 10（1998）年の台風 7 号による倒木被害を受けた室生寺五重塔など、自然災害による文化財被害の甚大さは記憶に新しい。本調査研究では、文化財の地震防災対策として、東大寺に安置される仏像群を対象に基礎的調査を行うとともに、文化財防災情報システムから地震や台風など過去の災害を対象に調査を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター副センター長　川野邊　渉

【スタッフ】

中山俊介、森井順之、加藤雅人（以上、保存修復科学センター）

【主な成果】

平成 22 年度は、（１）東大寺法華堂安置仏像群および塑像四天王立像（戒壇堂所在）の耐震対策を講ずるため、対象となる仏像の三次元計測、重心など三次元計測から得られた情報を用いた地震時転倒予測を継続した。また、仏像模型を使った振動台実験を三重大学の協力のもと行った。（２）地理情報システム（GIS）に基づいた文化財防災情報システムについて、地方公共団体における活用実験を継続した。

【年度実績概要】

平成 22 年度の成果は次の通りである。

（１）東大寺法華堂安置仏像群および塑像四天王立像（戒壇堂所在）の耐震対策を講ずるため、重量や重心などを推定するために三次元形状計測を行った。計測には、凸版印刷株式会社にて開発中の「ステレオカメラの移動撮影に基づいた簡易形状計測システム」を使用した。今年度は、修理のため美術院奈良国立博物館工房に移動した状態で撮影・解析を実施した。またその結果をもとに地震時転倒予測を行い、低重心ゆえ転倒しにくい（例えば乾漆金剛力士像（阿形）で奈良東縁断層を震源とする地震を想定した場合、転倒確率が 0.6%）という結果が得られた。

また、地震時転倒予測手法の妥当性について確認するため、三次元計測結果より仏像模型を製作し、三重大学工学部建築学科にある振動台にて実験を行った。その結果、採用した地震時転倒予測手法の妥当性を確認するとともに、仏像の像高・底面摩擦係数の違いにより仏像の挙動が変化することがわかった。

（２）地理情報システム（ＧＩＳ）に基づいた文化財防災情報システム運用において、鎌倉市役所世界遺産登録推進担当および教育委員会文化財課の協力のもと、問題点の把握を行った。詳細には、①本システムを活用した広域地震ネットワーク構築のための基礎調査として、国宝・鎌倉大仏およびその周辺地盤の調査を行い、地震計による長期連続観測の可能性を検討、②文化財防災情報システム（地方版）運用に関する問題点の整理、を行った。

【実績値】

報告書：１件（①）
論文等：２件（②、③）
発表等：２件（④、⑤）

【備考】

①文化財の防災計画に関する研究報告書　東京文化財研究所　78p　11.03
②HANAZATO Tohsikazu, MINOWA Chikahiro, NIITSU Yasushi, NITTO Kazuhiko, KAWAI Naohito, MAEKAWA Hideyuki and MORII Masayuki　Seismic and Wind Performance of Five-Storied Pagoda of Timber Heritage Structure　"Advanced Materials Research"　Vols. 133-134 pp.79-95　10.10
③中村豊、斎田淳、立花三裕、森井順之、井上修作、大町達夫　鎌倉大仏およびその周辺地盤の常時微動調査　第 13 回日本地震工学シンポジウム論文集（PDF 版）　10.11
④運天弘樹、巽英之、増田智仁、猪瀬健二、安藤真、森井順之、久世めぐみ　ステレオカメラを用いた密集仏像群の形状計測手法に関する研究　日本文化財科学会第 27 回大会　関西大学 100 周年記念会館　10.06.26-27
⑤中村豊、斎田淳、立花三裕、森井順之、井上修作、大町達夫　鎌倉大仏およびその周辺地盤の常時微動調査　第 13 回日本地震工学シンポジウム　つくば国際会議場　10.11.17-20

【書式Ｂ】　　施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4332

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.37

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財の防災計画に関して、文化財防災情報システム運用における問題点抽出など、実用化に向けた取り組みを進めた。また、仏像群の耐震対策に関する研究では、仏像群の三次元計測結果に基づく地震時転倒予測手法を開発した。今後は、地震時転倒予測の精度向上のため、更なる調査研究の推進が求められる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画通り順調に進めることができた。今後は、文化財防災情報システムを活用した、文化財建造物の地震モニタリングおよび広域ネットワーク化、また仏像彫刻の地震対策に関する調査研究を推進してゆきたい。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4341

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.38

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	考古資料の材料・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究（(3) －④)

【事業概要】

標記プロジェクトに関して、１）考古遺物の完全非破壊非接触分析法としてのレーザーラマン分光法の応用研究、２）高エネルギーＸ線ＣＴ法およびＸ線ＣＲ法の応用研究、３）繊維製遺物や漆製遺物などの分析法の実用化とデータベース作成、４）木製遺物に対する超臨界溶媒乾燥法の基礎的研究と実用化、５）古代の玉に関する最新の保存科学的研究に関する研究集会の開催、に取り組む。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存･修復科学研究室長　高妻洋成

【スタッフ】

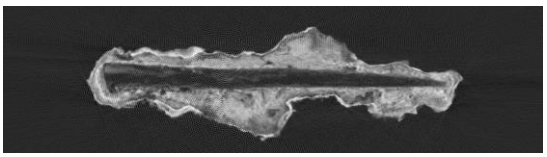
脇谷草一郎（埋蔵文化財センター研究員)、田村朋美（埋蔵文化財センター研究員)、降幡順子（都城発掘調査部主任研究員)、佐藤昌憲（客員研究員)、肥塚隆保（客員研究員）

【主な成果】

１）ガラス製品の標準試料のスペクトルを集積するとともに、ガラス製遺物のスペクトルを取得した。
２）海洋出土鉄製遺物の現状調査としてＸＣＴ撮影することにより、その劣化状態を明らかにした。
３）木造建造物の塗装の材質分析をおこない、漆塗装、チャン塗りおよび膠彩色を明らかにした。
４）貧溶媒真空凍結乾燥法による新規の保存処理法の開発に着手した。
５)「古代の玉―最新の保存科学的研究の動向―」をテーマとした研究集会を開催した。

【年度実績概要】

１）ガラス製品の着色技法の解明と劣化状態の診断法の確立を目的としたレーザーラマン分光分析法の応用研究をおこなった。本年度は、古代ガラスの着色技法を解明するため、古墳時代に出土したガラス玉類のラマンスペクトルを取得・収集した。



海洋出土鉄製品の XCT 画像

２）海洋出土鉄製遺物の現状調査としてＸＣＴ撮影することにより、海洋出土鉄製遺物の内部が著しく低密度化していることを明らかにした。
３）談山神社および霧島神宮の塗装材料の材質分析（顕微鏡観察、蛍光Ｘ線元素分析、顕微鏡観察、テラヘルツ分光イメージング）をおこない、漆塗装、チャン塗りおよび膠彩色を区別できるようになった。
４）マンニトール含浸後、貧溶媒として種々の有機溶剤に投入し、マンニトールを材内で析出させた後、真空凍結乾燥処理をおこなったところ、高い寸法安定性を示すことが明らかとなった。
５)、「古代の玉―最新の保存科学的研究の動向―」と題した研究集会を開催し、ガラス製、石製および琥珀製の玉類を対象に、新しい研究成果の報告と総合討議をおこない、出土玉製品の分析法やデータ解釈に関する問題について議論した。

【実績値】

発表件数：９件
論文等数：17 件
研究集会参加者数：105 名

【備考】

論文発表・学会発表等については、別紙「論文等発表実績一覧」「学会、研究会等発表実績一覧」参照

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4341

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.38

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

レーザーラマン分光分析の応用研究の一環としてガラス製遺物への応用を継続し、標準試料および考古遺物のラマンスペクトルの蓄積をおこなった。木製品の保存処理法の開発研究では、含浸処理法に貧溶媒法を適用し、その後真空凍結乾燥する方法についての基礎研究を実施した。建造物塗装材料の材質分析をおこない、漆塗、チャン塗りおよび膠彩色の３種類を区別することが可能となった。また、継続して遺物の調査分析を実施し、多くの遺物について重要な知見を得ることができた。

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数	研究集会参加者数			
判定	A	A	A			

備考

文化財保存修復学会で１件、日本文化財科学会で６件、国際シンポジウムで２件の、合計９件の学会発表をおこなった。また、『文化財保存修復学会研究発表要旨集』に１件、『日本文化財科学会研究発表要旨集』に６件、『奈良文化財研究所紀要』に５件、『月刊文化財』に３件、『考古学と自然科学』に１件、『国際シンポジウムプロシーディングス』に２件の、合計 18 件の論文を発表した。なお、研究集会では 105 名の参加者を得て、研究事例報告に加え、総合討議でも活発な議論をおこなうことができた。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初計画どおり順調に達成することができたことから、総合的評価をＡと判定した。次年度より新たな中期目標・中期計画のもとで事業を展開していくが、基本的には遺物の劣化と保存処理に関する基礎研究、ミリ波およびテラヘルツ波の文化財資料への応用に関する研究に重点をおくことになる。これらの事業は、これまでの中期計画において展開した事業の成果をベースとするものである。また、保存修復科学分野において、東京文化財研究所や東京国立博物館、九州国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館などとの共同研究も今後さらに推進していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調と判定した。次年度より、新たな中期目標・中期計画のもとで事業を展開することになるが、基本的には遺物の劣化と保存処理に関する基礎研究、ミリ波およびテラヘルツ波の文化財資料への応用に関する研究に重点をおいた事業を推進していきたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 4351

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.39

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究（(3)-⑤－１）

【事業概要】

日本ではこれまで和紙、糊、膠、漆などのなどの伝統的な文化財修復材料が劣化の程度や修復技術者の経験をもとに長年使われてきた。このような伝統的修復材料や合成樹脂の物性、製作技法、利用法に関する調査研究をもとに、修復材料・技法の評価及び開発を行う。また海外の文化財保存修復担当者を対象に、日本の修復材料の使用や修理技術に関する研修を行い本国での基本的な作品の取り扱いや保存修復に反映させる。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター副センター長　川野邊　渉

【スタッフ】

北野信彦、加藤雅人、早川典子（以上、保存修復科学センター）

【主な成果】

漆などの塗装材料に関する調査研究では建造物における過去の塗装修理に関する基礎資料の蓄積を図るとともに、その実績を塗装修理作業の実践的な施工指導に役立てた。合成樹脂の関する調査では、過去使用した樹脂の劣化などの問題点解決に向けた基礎実験を行った。また、研究所が所蔵する過去の合成樹脂を用いた修復事業の資料を分類整理作業では、データベースの目録作成についてはこれを終了させた。紙本絹本文化財の修復材料に関しては、裏打層の開発、表具裂見本目録の作成、和紙の調査を行った。

【年度実績概要】

1.建造物に使用する塗装材料の耐候性向上に向けた基礎実験を進めるとともに、PY-GC/MS 分析装置を用いた塗装材料をはじめとする各種修復材料の基礎分析を継続して進めた。さらにこのような調査実績を国宝都久夫須麻神社本殿蒔絵修理作業などの実践的な施工指導に役立てた。

2. 掛軸の裏打材料として三軸織物を使用した新たな裏打層の開発を行った。

3. 表具裂見本のデジタル目録を作成し、データベースの基本構成を作成した。

4. 劣化したポリビニルアルコールの現地調査および再現実験を行い、劣化機構についての研究を行った。また、酵素を用いたポリビニルアルコールの分解除去の手法を試験し、良好な結果が得られた。

5. 研究所が所蔵する過去の合成樹脂を用いた修復事業の資料を分類整理、目録作成、ネガフィルムのデジタルデータ化は継続してこれを進め、データベースの目録作成についてはこれを終了させた。

6.「膠（Ｉ）」というテーマで、2011 年 6 月 21 日に東京文化財研究所の地下会議室で第 4 回伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会を開催し、計 40 名の参加を得た。

7. 手漉き和紙産地の現地調査を行った。

【実績値】

研究会開催数：１回 参加者数：40 名
報告書：１冊（①）
論文数：３件（②～④）
研究発表件数：３件（⑤～⑦）

【備考】

①『伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究報告書 2010 年度』pp.127、 東京文化財研究所、11.03
②加藤雅人、君嶋隆幸、酒井良次、川野邊渉：「三軸織物・紙貼合シートの特性―紙本絹本文化財の裏打を想定して―」『保存科学 vol.50』p.83-90、11.03
③北野信彦・本多貴之・松尾昭子・高妻洋成：「鷹島海底遺跡出土の元寇関連漆製品に関する調査」『保存科学 vol.50』p229-238、11.03
④北野信彦・原島誠：「厳島神社摂社(重要文化財)大元神社本殿及び玉殿の旧塗装・彩色材料に関する調査」『伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究報告書 2010 年度』p.43-51、東京文化財研究所
⑤岡田祐輔・平井利博・藤松仁・滝沢辰洋・川野辺渉・早川典子・坪倉早智子・中條利一郎：「顔料剥落止めとして利用されたポリビニルアルコールの白化原因とその再現」『文化財保存修復学会 第 32 回大会』、岐阜、10.06.13
⑥北野信彦・竜子正彦・川口洋平・川村紀子・本多貴之・宮腰哲雄「桃山文化期における輸入漆の調達と使用に関する調査」、『日本文化財科学会 第 27 回大会』、大阪、10.06.27
⑦早川典子「修復材料としての膠の物性」『膠(Ｉ)- 第 4 回伝統的修復材料と合成樹脂に関する研究会』東京文化財研究所、10.06.21

【書式Ｂ】　　施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4351

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.39

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2．定量的評価

観点	発表件数	論文数	刊行書発行数			
判定	A	A	A			
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	建造物などに使用する屋外塗装の歴史資料に関する調査研究や物性・耐候性試験、紙・絹などの分析手法、文化財の修復材料などに関して有益な基礎的知見を収集することができた。本研究所が携わった修復事業のうち、研究所が所蔵する資料を分類整理し、目録作成を継続してすすめ、終了させた。これにより成果の公開が容易になると考えられる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本プロジェクトで実行してきた手法の有効性が明らかになってきており、それに伴い重要な知見の蓄積と実際の保存修復作業への還元もなされつつあることから、計画の実施状況は順調であり、当初目的を達成することができた。これらの成果を踏まえて、次年度以降に行う次期五カ年中期計画では、文化財に用いられた伝統的な材料・技術や建造物や合成樹脂に関する調査研究をさらに推進し、その成果を個々の事例に則した文化財修復や人材育成に活用すべく、基礎的知見の収集と資料目録化をさらに推進する予定である。

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 4352
(様式 1)

業務実績書

研究所 No.40

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	国際研修「紙の保存と修復」((3)-⑤－２)

【事業概要】
日本絵画などの日本の紙本文化財は海外の美術館・博物館でも所蔵されている。所蔵館には修復部門が存在するものの、日本の紙本文化財の修復の専門家が所属していることは稀であり、そのため海外の保存担当者や学芸員、修復技術者からの修復についての問い合わせも多い。そこで文化財研究所は、ICCROM と共同で１０カ国１０人の参加者を募り国際研修会を開催し、日本紙本文化財の保存と修復についての研修を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	副センター長　川野邊　渉

【スタッフ】
加藤雅人、早川典子（以上、保存修復科学センター）

【主な成果】
2010 年 8 月 30 日～9 月 17 日の期間で 10 カ国から 10 名を迎え入れて研修を行った。紙本文化財の修復理念、材料学の講義を行った。実習では、掛軸修復、和綴じ冊子製作、屏風・掛け軸の取扱などを行った。またスタディーツアーでは美濃を訪れ、和紙の原料・製造から流通までを和紙産地の歴史とともに学習し、和紙の抄造を体験学習した。和紙を使用した文化、紙文化財を徳川美術館、熱田神宮で見学した。修復工房を訪れ現状を視察した。

【年度実績概要】
期間：2010 年 8 月 30 日～9 月 17 日

参加者（研修生）：DIDIK Joanna（アイルランド国立公文書館・アイルランド）、HASHIM Fauziah（マレーシアイスラム美術館・マレーシア）、HOEVEL Claire（インディアナポリス美術館・USA）、KOCSIS Marika（クイーンヴィクトリア博物館＆美術館・オーストラリア）、KOKOĆ Joanna（ニコラウスコペルニクス大学トルン・ポーランド）、MAZZARINO Sara（大英図書館・UK）、NUÑEZ GAITAN Angela（バチカン図書館・バチカン市国）、STORACE Maria Speranza（文書書籍遺産修復保存研究所・イタリア）、XU Wenjuan（上海博物館・中国）、CHARLES Catherine（ナミュール大学モレトゥスプランタン図書館・ベルギー）

研修内容（講義）：「装潢概念」岡泰央（岡墨光堂）、「紙の基礎知識」加藤雅人（東京文化財研究所）、「日本画修復に使われる接着剤について」早川典子（東京文化財研究所）、「紙の文化財をめぐって―古写経を中心に―」赤尾栄慶（京都国立博物館）、「日本の紙文化財の保存と修理」池田寿（文化庁）（以上、講義順）
研修内容（実技）：「巻子修復」、「和綴じ製作」、「紙本文化財の形態・構造と取り扱い」以上、国宝修理装潢師連盟
研修内容（見学・視察・体験）：紙文化財関連個所（美濃和紙の里会館、長谷川和紙工房、美濃史料館、美濃市美濃町伝統的建造物群保存地区、徳川美術館、熱田神宮、国宝修理装潢師連盟工房）

【実績値】
研修会開催数　1 回
報告書数　1 件　（①）

【備考】
①「International Course on Conservation of Japanese Paper 2010」、35 pp、11.01

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 4352

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.40

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2．定量的評価

観点	研修会開催数	報告書数				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	参加者に依頼したアンケート結果では、満足度 100%であったのでAとした。アンケート中のさらなる要望としては、研修期間の長期化、上級クラスの開設、他の形態の紙文化財の保存修復コースの開設など、原状を拡大する方向のものであった。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	5ヵ年の中期計画がつつがなく終了した。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4353

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.41

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	在外日本古美術品保存修復協力事業（(3)-⑤－３）

【事業概要】

海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と共同で、保存修復に関連する研究を行う事業である。この事業により修復した作品の公開によって、わが国の修復技術に対する理解が深まり交流が促進されている。当研究所は修理内容の検討、修理作品の写真記録の作成および整理・保存、輸送手続きに責任を持って当たっている。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター副センター長　川野邊　渉

【スタッフ】

中山俊介、北野信明、加藤雅人、早川典子（以上、保存修復科学センター)、井手真二（以上、研究支援推進部)、中野照男(副所長)、田中　淳、津田徹英、塩谷　純、綿田　稔、江村知子、城野誠治、勝木言一郎、（以上、企画情報部)、清水真一、岡田　健（以上、文化遺産国際協力センター）

【主な成果】

平成２２年度は、９館１０点の作品（絵画４点、工芸品６点）を修復した。うち４点(絵画２点、工芸品２点が２１年度からの継続、３点（絵画１点、工芸品２点）を海外で修復した。絵画の事前調査はケルン東洋美術館１館２２点の調査を行った。また、平成２１年度に修復した絵画、工芸品の修理状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。

【年度実績概要】

平成２２年度は、９館１０点の作品を修復した（うち４点が２１年度からの継続、３点が海外での修復（◆印))。

＜絵画＞

1)「伯牙弾琴図屏風」　２曲１隻　ヴィクトリア・アルバート美術館
2)「源平合戦図屏風」　６曲１双（裏に、竹に雀図）　ベルン歴史博物館（２年計画の２年目）
3)「四季花鳥図屏風」　６曲１双　ブルックリン美術館（２年計画の２年目）
4) ◆「山水図」　１幅　ベルリン国立アジア美術館

＜工芸品＞

1)「螺鈿鶴形合子」　１基　アムステルダム国立博物館
2)「花鳥螺鈿枕」　１基　ライデン国立民族学博物館
3)「菱繋文螺鈿篳篥」　１基　国立ナープルステク博物館（２年計画の２年目）
4)「花樹鳥蒔絵螺鈿篳篥」　１基　アシュモリアン美術館（２年計画の２年目）
5) ◆「瀧蒔絵鼓箱」　１合　ケルン東洋美術館
6) ◆「折枝散蒔絵喇叭」　１本　ライデン国立民族学博物館

平成２２年度、絵画の事前調査はケルン東洋美術館で１館２２点の調査を行った。加えて、欧米の各美術館、博物館に対して、修理が必要と思われる作品に関するアンケート調査を実施した。
また、平成２１年度に修復した絵画、工芸品の修復状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。

【実績値】

事前調査	１件
修復件数	１０件
ケルンにおけるワークショップ	１件
ベルリンにおけるワークショップ	１件
報告書刊行数	１件（①）

【備考】

①『在外日本古美術品保存修復協力事業報告書　平成 22 年度　(絵画／工芸品)』　163p　東京文化財研究所　11.03

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 4353

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.41

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	調査件数	修復件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は９館、１０点の作品の修復を実施した。海外においても、修復家を派遣し、修復作業を実施したとともに海外の修復家、学芸員などを対象にしたワークショップを開催した。このように海外における日本絵画や工芸品を修復したり、ワークショップを開催することによりその技術、取扱い方法を伝えるだけでなく再び展示することができるようになりその価値を高めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度も引き続き、事前調査を実施しており、来年度に向けて、修復する候補作品を抽出している。今後はより広範囲な美術館、博物館から、収蔵庫に眠っている価値ある日本絵画と工芸品を修復し、再度展示可能な姿にするべく努力を重ねる。また、海外において修復技術を伝えることにもなお一層の努力を傾注する。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4361

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.42

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	近代の文化遺産の保存修復に関する研究（(3)-⑥）

【事業概要】

近代の文化遺産は、絵画、彫刻、木造建造物など従来の文化財とは、規模、材質、製造方法などに大きな違いがあるため、その保存修復方法や材料にも大きな違いがある。本研究では、近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型構造物の劣化機構の解明とその修復方法の究明、航空機、船舶、鉄道車両などの保存修復上の問題点とその解決方法の究明を目指している。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	近代文化遺産研究室長　中山俊介

【スタッフ】

川野邊　渉、加藤雅人、森井順之、中村明子（以上、保存修復科学センター)、朽津信明（文化遺産国際協力センター)、小堀信幸、横山晋太郎、長島宏行、坪倉早智子（以上、客員研究員）

【主な成果】

今年度は近代化遺産の中でも２年続けて重要文化財指定された映画フィルムや音楽テープ、ガラス乾板など音声・映像記録メディアの保存に関する関係者を招き、研究会を開催しそれぞれの立場から音声・映像記録メディアの保存と活用に関する発表、問題点の整理や解決法についての討論を行った。また、設計図面などに多く使われている青図の保存に関する研究も行った。屋外展示されている鉄道車両や航空機などの文化財の防錆対策のため、試験片を使った屋外暴露試験にて、塗装仕様と劣化速度の相関についても調査している。黎明期の日本の航空機の写真データベースをホームページ上で公開した。

昨年度の研究会をまとめた報告書を刊行した。

【年度実績概要】

今年度は近代化遺産の中でもここ２年連続で重要文化財指定を受けた映画フィルムに代表される、音声・映像記録メディアの保存と修復に関する手法や問題点をテーマとして研究を行った。保存修復に実際に携わっている担当者の方々四人と国外の方一人を招き、利活用を考えた保存と修復方法に関する手法や問題点に関する研究会を平成２３年１月１４日に東京文化財研究所地階セミナー室にて実施した。さらに、フランス及びスイスにおいて、国立鉄道博物館や国立自動車博物館、交通博物館における展示物の保存方法や材料の分析手法について現地にて情報交換を実施した。また国内においては、新潟県佐渡市の佐渡金銀山遺跡、静岡県伊豆の国市の韮山反射炉、山口県萩市の反射炉などの現地調査を実施した。さらに、屋外展示されている鉄道車両や航空機等の金属を主体とした文化財に関しても同様に現地調査を実施した。加えてそのような屋外展示されている鉄道車両や航空機などの金属を主体とする文化財の防錆対策のために各種サンプルを作成し小樽市総合博物館、船の科学館、かかみがはら航空宇宙科学博物館、大樹町多目的航空公園、海上自衛隊鹿屋航空基地での曝露実験も継続して実施している。これらの地点では、試料の受けた紫外線量をはじめ、温度、湿度などの測定も行い、これらの塗装仕様と劣化速度の相関についても調査している。屋外展示航空機の環境測定も継続している。設計図面あるいは明治後期から大正前期にかけて記録された航空史関連資料などの保存手法に関しても現地で状態を調査し研究している。

【実績値】

論文数　　４件（①～④）
発表件数　　２件（⑤～⑥）
報告書刊行数　２件（⑦～⑧）

【備考】

①中山俊介　「Conservation and Utilization of Steel Structures」　Preservation and Utilization of Steel Structures, pp.5-17、11.03
②中山俊介　「コンクリート構造物の保存と修復」　『コンクリート構造物の保存と修復』、 pp.5-14、11.3
③中山俊介　「鉄構造物の保存と修復」　(社)日本防錆技術協会、『防錆管理』５４号　pp.1-10、10.9.1
④飯島満、永井美和子、中山俊介　「フィルモン音帯に関する調査報告」　『無形文化遺産研究報告』５号　pp.53-76、11.03
⑤中山俊介　「音声・映像記録メディアの保存と修復」　音声・映像記録メディアの保存修復に関する研究会、東京文化財研究所、　11.01.14
⑥坪倉早智子、加藤雅人、中山俊介　「劣化したシアノタイプの修復（２）　－アルカリによるシアノタイプの劣化・再発色実験－」　文化財保存修復学会第 32 回大会、長良川国際会議場・岐阜、10.06.12-13
⑦『Preservation and Utilization of Steel Structures』　東京文化財研究所　65p　11.03
⑧『コンクリート構造物の保存と修復』　東京文化財研究所　85p　11.03

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4361

自己点検評価調書

研究所 No.42

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近代文化遺産の保存・修復と活用について、各種の現地調査を実施することが出来た。それらの現地調査を通じて、現状の把握、解決すべき問題点なども新たに掴むことが出来た。特に、建造物関連で、明治期から大正期に使用されている油性塗料に関して、修理の際などに国内で調達困難な状況の把握、また、油性塗料かどうかの判定手法の開発など研究すべきテーマを把握した。来年度以降に取り組むべき課題である。また音声・映像記録メディアの保存・修復に関係する専門家を招いた研究会を開催し多くの知見、新たなる研究者との連携の可能性も得ることが出来た。さらに今後の修復材料の開発、修復技法の開発に関する重要な成果を得る事が出来た。 現地調査や研究会を通じて近代文化遺産の重要性を多くの方々に認識していただいた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	第５年次として、継続している現地調査から重要な調査結果を収集することが出来た。現地調査に関しては、今後も続けて行くことでさらに重要な成果が期待できると考えている。また、研究会を通じて新たな知見をうると共に、多くの研究者との連携も可能となり、今後の研究を進める上で、重要な成果を得た。次期中期計画でも今次中期計画の成果を元にさらに調査研究を発展させることが可能となった。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4411

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.43

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力（(4)-①－１）

【事業概要】

高松塚古墳：壁画の修理及び修理環境の保全並びに壁画の劣化原因及び劣化防止対策措置などの調査・研究を実施

キトラ古墳：石室内の環境調査と壁画の取り外し作業を実施

【担当部課】	保存修復科学センター	【担当部課】	保存修復科学センター長　石﨑武志

【スタッフ】

佐野千絵、早川泰弘、木川りか、吉田直人、犬塚将英、川野邊　渉、中山俊介、北野信彦、早川典子、森井順之、加藤雅人（以上、保存修復科学センター）、間渕　創、坪倉早智子（以上、客員研究員）

【主な成果】

高松塚古墳では、壁画の状態記録のため損傷図面を作成した。天２の漆喰層陥没、青龍の表層面損傷、漆喰層について、透明シートへの描き込みとデジタル化を完了した。

キトラ古墳では 4 月 12 日～4 月 30 日、5 月 10 日～5 月 28 日、10 月 12 日～10 月 29 日、11 月 8 日～11 月 25 日の 4 期にわたり、集中的に漆喰の取り外しを行った。ヘラ、ダイヤモンド・ワイヤーソーを使用し、北壁・東壁・西壁・南壁の取り外しを行い、石室内の漆喰すべての取り外しが完了した。

【年度実績概要】

高松塚古墳

昨年度に引き続き、壁画の状態記録のため損傷図面を作成した。天２の漆喰層陥没、青龍の表層面損傷、漆喰層について、透明シートへの描き込みとデジタル化を完了した。また完成した、図面の点検も引き続き行っている。天 1・東男子・青龍・西女子については常温抽出布海苔にて脆弱化した漆喰層の 1 度目の強化を行った。これにより一昨年度より行っていた 1 度目の強化作業は全石終了した。天 2 はクリーニング後に精製布海苔による 2 回目の漆喰層強化を行っている。また、より適切な処置方法を検討するために、模擬漆喰を用いた実験を行い、作業道具の作成・改良も行った。これらの作業についての記録、資料整理も随時行っている。

平成のカビの発生の発端となった2001年の分離株を含む重要な菌株約450株についてアンプルの生育確認、メンテナンスを実施している。古墳壁画仮修復施設においては、ひきつづきムカデ、クモなどのモニタリングのためのトラップ調査を実施し、必要に応じて物理的な侵入防止対策など講じた。

キトラ古墳

4 月 12 日～4 月 30 日、5 月 10 日～5 月 28 日、10 月 12 日～10 月 29 日、11 月 8 日～11 月 25 日の 4 期にわたり、集中的に漆喰の取り外しを行った。ヘラ、ダイヤモンド・ワイヤーソーを使用し、北壁・東壁・西壁・南壁の取り外しを行い、石室内の漆喰すべての取り外しが完了した。集中取り外し期間中で作業のない土曜日・日曜日、及び取り外し期間外は石室内に紫外線灯を設置し、週に 1 回のカビ点検を行っている。これまでに取り外した漆喰片については随時経過観察と処置を行い、「朱雀」については平成 22 年 5 月の公開のための額装を完成させた。また、昨年度までに剥ぎ取った天文図漆喰片の適切な処置方法の検討、漆喰上の泥の処置のための実験を行っている。これらの作業についての記録、資料整理も随時行っている。

石室内の微生物の調査を 5 月、10 月に実施し、おもに間欠的な紫外線照射でカビなどの被害を防止している環境において、従来と比較して菌類や細菌などの微生物相に変化がみられるかどうかについて調査した。目視ではほとんど被害はみられなかったが、培養すると微生物は検出され、分離された微生物の種類は昨年までとあまり変化はなかった。壁画の修復材料として使用されている樹脂などの材料について、本年度は、酵母や細菌などによる資化性（栄養源として利用できるかどうか）について調査した。その結果、細菌などによって、一部の材料は資化される場合があることがわかった。

【実績値】

論文　２件（①、②）

【備考】

①三村衛、長屋淳一、石崎武志：「動的解析による高松塚古墳の損傷要因の検討」『保存科学』50、pp. 13 -22, 11.03

②木川りか　他：「キトラ古墳の微生物調査報告(2010)」『保存科学』50、pp. 193-198, 11.03

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4411

自己点検評価調書

研究所 No.43

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性			
判定	A	A	A			
備考						

２．定量的評価

観点	援助・助言 実施件数				
判定	A				
備考					

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	キトラ古墳、高松塚古墳ともに、本年度の計画を予定通り遂行し、良好な成果を上げることができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高い調査研究の水準で事業を進めることができた。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4412

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.44

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力（(4) －①－２）

【事業概要】

本事業は、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施するもので、文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査および保存・活用に関して技術的な協力を行った。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】

玉田芳英、降幡順子、廣瀬 覚、青木 敬、若杉智宏、番　光、石田由紀子［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区)]、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛、辻本与志一[以上、企画調整部]

【主な成果】

文化庁が進める高松塚古墳仮整備事業や保存・活用に関する事業が円滑かつ適切に施工されるよう協力するとともに、刊行予定の『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』に関する執筆・編集作業を行い、文化庁へ提出した。

今年度のキトラ古墳壁画の剥ぎ取り作業を支援するとともに、今後のキトラ古墳壁画、および古墳の保存、活用、整備の方向性を議論・検討するための技術的な支援・協力を行った。

【年度実績概要】

春・秋の高松塚古墳壁画修理施設の一般公開に際しては、解説員として研究員（のべ 5 名）を派遣した。『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』の刊行にむけて、これまでの一連の調査成果を検討したものを執筆・編集作業をおこない、文化庁へ提出した。

キトラ古墳では、春・秋の壁画の集中剥ぎ取り作業に研究員（１名）を派遣して、これを支援した。さらにキトラ古墳壁画の取り外し終了後は、2 週間に 1 回、研究員による古墳壁画等のカビ点検作業を実施した。

キトラ古墳壁画の保管、活用については、今後予定されているキトラ古墳墳丘の整備に関し、遺構図に標高を表示した図面の作成をおこなった。また実際の整備案を参考とするため、墳丘の復原に関する検討会を 2 回開催し、キトラ古墳墳丘復原案を作成した。緊急時には現地において応急的な処置にあたり、文化庁に状況を報告した。

【実績値】

論文数：1 件（①）
制作物：2 件（②～③）

【備考】

①松村恵司・廣瀬　覚「発掘調査からみた壁画の保存環境」『月刊文化財』第 563 号 2010.8
②「キトラ古墳遺構編集図」　2011.3
③「キトラ古墳墳丘復原案」　2011.3

【書式Ｂ】　施設名　奈良文化財研究所　処理番号　4412
(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.44

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
適時性：現地への緊急事態等に対して迅速かつ適切に対応することができた。
独創性：保存科学、考古学の双方の立場から、壁画古墳の保存・活用に助言を行うことができた。
発展性：緊急性を有する文化財の保存・活用に対する今後の方向性を示すことができた。
効率性：高松塚古墳の発掘調査の成果を、整備、公開に直結させることができた。
継続性：高松塚古墳の実績を基に、今後、キトラ古墳の整備・活用を進めていく見通しが得られた。
正確性：古墳や壁画に関する学術的成果を高い精度で得ることができた。

2. 定量的評価

観点	論文数	制作物				
判定	A	A				

備考
『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』の執筆・編集をおこない文化庁へ提出した。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	高松塚古墳壁画の恒久保存対策に係る一連の発掘調査に関する報告書を執筆・編集し、高松塚古墳に関する適切な情報公開の準備が整った。その実績に基づいて、今後のキトラ古墳の保存・活用・整備等の事業が円滑に進められることが期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	壁画古墳という重要かつ緊急性の高い文化財に対して、保存・活用に関するモデルケースを構築することができ、今後の方向性を示すことができた。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4421

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.45

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存活用に関する技術的協力（(4) －②）

【事業概要】

飛鳥・藤原地域は、我が国国家成立期の舞台であり、６世紀末から８世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心地であった。本事業は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内に所在する檜隈寺の全体像を復元すべく、遺跡周辺の調査をおこなうものである。檜隈寺は、飛鳥における古代寺院として重要な遺跡であり、この遺跡の実体解明および保存活動に資するため、2008 年度より発掘調査を実施している。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】

石田由紀子、森先一貴、石橋茂登、若杉智宏、高橋 透、高橋知奈津［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区)］、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛［以上、企画調整部］

【主な成果】

2008 年度の試掘調査および 2009 年度の発掘調査成果をもとに、檜隈寺講堂北 50ｍの丘陵頂部から西側斜面にかけて２カ所の調査区、東側斜面裾部に５カ所の試掘坑を設定し、調査をおこなった。１区では瓦組暗渠１基と奈良時代以降の整地土を確認し、２区では、７世紀前半の遺構面と、７世紀前半から奈良時代後期にかけての断続的な整地を層位的に確認した。また試掘坑では、古代の石敷を検出した。今回の調査では、檜隈寺の伽藍が完成した７世紀後半以降も大規模な整地をおこなっていることを確認し、これまで不明な点の多かった７世紀前半、および奈良時代以降の檜隈寺の土地利用状況を考えるうえでも重要な資料を得た。

【年度実績概要】

本調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業に関わる事前調査である。調査地は、明日香村南西部の丘陵上に位置し、この丘陵上には、渡来系氏族である東漢氏の氏寺と考えられる檜隈寺が所在する。今年度は、2008 年の試掘調査および 2009 年度の発掘調査の成果をもとに、檜隈寺北方の丘陵頂部から西側斜面にかけて２カ所（１区・２区)、丘陵部東側斜面裾部に５カ所の試掘坑を設け、発掘調査を実施した。調査期間は 2010 年 8 月 24 日～2010 年 12 月 27 日。調査面積は、計 655 ㎡である。

講堂の北方約 50ｍに位置する１区では、後世の削平が著しかったものの、素掘り溝２条、瓦組暗渠１基、谷１条を検出した。瓦組暗渠は、７世紀後半の檜隈寺創建瓦を用いており、先端部分のみが残存する。調査南西で検出した、北西に入り込む谷筋の谷頭部分に暗渠を設置し、排水していたものと思われる。

２区では、素堀溝２条、沼状堆積層、およびその下層から７世紀前半の土坑を１基確認した。２区には大規模な整地層を確認しており、整地層に含まれる遺物から７世紀前半、７世紀末～８世紀初頭、８世紀後半にかけて断続的に大規模な整地をおこなっていることを層位的に確認した。

また、丘陵東側斜面裾部では、人頭大の石を用いた石敷を確認しており、遺構の様相や土器の年代から６世紀末から７世紀までの所産と考えられる。

今年度の調査では、檜隈寺の伽藍が完成した７世紀後半の資料のみならず、これまで不明な点の多かった７世紀前半、および奈良時代以降の檜隈寺に関する重要な資料を得ることができた。

１区出土瓦組暗渠　北から

【実績値】

論文等数２件（論文１件①、その他１件②)

出土遺物　　軒丸瓦 25 点、軒平瓦 26 点、丸瓦 2630 点（380.0 kg)、平瓦 9325 点（762.5 kg)
土器 15 箱、鉄製品３点、鉄片１点、鉄釘２点、銭貨１点、鉄滓 14 点
羽口４点、種子２点、加工木１点、自然木１点

記録作成数　遺構実測図 50 枚、写真（４×５）136 枚

【備考】

①石田由紀子・石橋茂登・高橋透「檜隈寺周辺の調査－飛鳥藤原第 164 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011. 6（予定)

②石田由紀子「檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原 164 次)」『奈文研ニュース№39』2010.12

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4421

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.45

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			

備考

適時性：檜隈寺周辺の遺構状況解明への寄与
継続性：2008 年度から実施している発掘調査の成果を受け、檜隈寺周辺の全体像復元にかかわる継続的な調査をおこなった。
発展性:これまで不明な点の多かった７世紀前半および奈良時代以降の檜隈寺の動向が確認できる重要な資料を得た。

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	A	A				

備考

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査では、檜隈寺の伽藍が完成した７世紀後半の資料のみならず、これまで不明な点の多かった７世紀前半、および奈良時代以降の檜隈寺の動向が確認できる資料、および土地利用状況に関わる重要なデータを得ることができたため、総合的にＡと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査は、年度当初の計画通りに実施されており、課題であった檜隈寺の全体像復元の解明に向けての有益なデータを得ることができた。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4431
（様式 1）

業務実績書

研究所 No.46

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業大和平野県営飛鳥工区２号幹線の調査及び保存活用に関する技術的協力（(4) －③）

【事業概要】
飛鳥・藤原地域は、わが国古代国家成立期の舞台であり、６世紀末から８世紀初めにいたる間、政治・文化の中心地であった。本研究は、国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業にともなう本地域の埋蔵文化財の調査・研究に対して協力・支援を行うものである。

【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】
廣瀬 覚、小田裕樹、玉田芳英、次山 淳、廣瀬 覚、木村 理恵、若杉智宏、高橋 透、庄田慎矢、諫早直人、石田由紀子、黒坂貴裕、番 光［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）］、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛［以上、企画調整部］

【主な成果】
大和平野支線水路等その３（県営飛鳥２号幹線（右岸）その３）改修工事に伴う発掘調査で、対象地は藤原京左京七・八条一坊（橿原市上飛騨町）にあたる。総長 325.520ｍの工事区域のうち、既設管と完全に重複する中央約 130ｍ分は立会で対応し、残りの北区（約 156ｍ×２ｍ）、南区（約 45ｍ×２ｍ）を発掘調査した。その結果、古代を中心とする遺構（柱穴・溝等、一部中世を含む）を検出、記録した。

【年度実績概要】
北区では、大部分が既設管の設置範囲と重複しており、遺構および遺構面の残存状況は良好ではなかったが、柱穴約 10 基、溝１条を検出した。遺構の検出面は、調査区北側に隣接する飛鳥藤原第 115 次調査区の遺構検出面と層位、および標高がほぼ一致しており、出土遺物からも概ね７世紀中頃から藤原宮期のものと理解できる。ただし、衛門府と想定されている第 115 次調査区内の遺構群との対応は、調査区間の距離が大きいことから十分な検討を行うことができなかった。
南区では、柱穴約 30 基、溝２条を検出した。溝は埋土出土遺物から６世紀代に開削されたものと理解できる。一方、柱穴には一部に形状から中世段階のものと推定できるものを含むが、その他は古代の建物に伴うものと推定でき、掘方埋土から７世紀中頃の土器が出土したものもある。ただし、建物の全体像を復元的できたものはない。
以上のように、本事業では、水路付け替え工事に伴う限られた調査範囲の中ではあったが、埋蔵文化財に関する情報を最大限に引き出し、必要となる記録類の作成を迅速に進めることができた。
なお調査期間は、平成 22 年 11 月 29 日～平成 23 年３月３日であったが、調査終了後も、調査地外の既設管撤去工事の立会を実施し、工事が埋蔵文化財に影響を与えることがないよう監視した。

北区完掘状況

中央区立会風景

【実績値】
論文等数　１件（①）
出土遺物　土器 14 箱、瓦類 31 点、木製品３箱、動植物遺存体２箱
記録作成数　遺構実測図 43 枚、写真（4×5）101 枚

【備考】
①廣瀬覚・小田裕樹「藤原京左京七条一坊・八条一坊の調査―第 166 次」『奈良文化財研究所紀要 2010』2011.6（予定）

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4431

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.46

1．定性的評価

観点	適時性	継続性				
判定	A	A				

備考
適時性：工事の状況に応じて迅速に対応して文化財を保護・記録することができた。
継続性：飛鳥・藤原地域の遺跡情報を継続的に収集することができた。

2．定量的評価

観点	援助・助言数					
判定	A					

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業にともなう埋蔵文化財への影響について、迅速かつ適切に対応・処理することができ、遺構の保護・記録を行うことができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性を要する事前調査について効率良く対応し、藤原地域の基礎資料を蓄積することができた。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-1

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究((5)-①-ⅲ)

【事業概要】
館蔵品・寄託品・それらの関連品および今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、あわせて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長　富田淳

【スタッフ】
浅見龍介(調査研究課東洋室長)、安藤香織(列品管理課登録室アソシエイトフェロー)、池田宏(上席研究員)、伊藤信二(博物館教育課教育普及室長)、井上洋一(企画課長)、猪熊兼樹(列品管理課貸与特別観覧室主任研究員)、今井敦(博物館教育課長)、及川穣(列品管理課登録室アソシエイトフェロー)、大橋美織(調査研究課絵画・彫刻室任期付研究員)、沖松健次郎(企画課特別展室主任研究員)、沖本明子(保存修復課アソシエイトフェロー)、小山弓弦葉(企画課特別展室主任研究員)、川村佳男(調査研究課東洋室研究員)、神庭信幸(保存修復課課長)、木島隆康(東京藝術大学)、鬼頭智美(企画課国際交流室長)、後藤健(上席研究員)、佐々木佳美(列品管理課登録室アソシエイトフェロー)、澤田むつ代(特任研究員)、鈴鴨富士子(東京藝術大学)、鈴木晴彦(保存修復課アソシエイトフェロー)、関紀子(博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー)、瀬谷愛(列品管理課平常展調整室研究員)、髙梨真行(調査研究課書跡・歴史室主任研究員)、高橋裕次(博物館情報課長)、竹内奈美子(調査研究課工芸・考古室長)、田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)、谷豊信(列品管理課長)、塚本麿充(調査研究課東洋室研究員)、土屋裕子(保存修復課保存修復室主任研究員)、冨坂賢(保存修復課保存修復室長)、富田淳(調査研究課長)、原田明夫(博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー)、日高慎(保存修復課保存修復室主任研究員)、古谷毅(列品管理課列品情報整備室長)、松嶋雅人(企画課特別展室長)、松本伸之(学芸企画部長)、三笠景子(保存修復課保存修復室研究員)、望月幹夫(特任研究員)、米倉乙世(保存修復課アソシエイトフェロー)、

【主な成果】
館蔵品・寄託品・それらの関連品および今後収集・展示の対象となりうる文化財と、その周辺領域に関して、美術史・考古学・博物館学の各見地から学会・研究会・学術雑誌上で各種の発表をした。

【年度実績概要】
・内外の学会・研究会で、各種の発表をした。
・学術雑誌に各種の論考を発表し、著書を刊行した。

【実績値】
学会・研究会等発表件数：23 名 29 件。
高橋祐次(博物館情報課長)「日本・中国・朝鮮半島の料紙について」墨跡研究会ほか。
論文等掲載数：36 名 59 編。
松本伸之（学芸企画部長)「中国古代の工芸品に表わされた花と鳥」『平城遷都 1300 年祭特別展　花鳥画－中国・韓国と日本－』ほか。

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-1

(様式 2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適宜性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
東京国立博物館『ＭＵＳＥＵＭ』をはじめとする各種学会誌・紀要等の学術誌や学会・研究会において、平素の調査研究で得た成果や、平常陳列・特別展に係る業務・他館への協力の中で得た最新の学術情報を、多岐の分野にわたって発表しえた。

2. 定量的評価

観点	学会・研究会等発表件数	論文等				
判定	A	A				

備考
学会・研究会等発表件は海外を含み 23 名 29 件、論文等の掲載は 36 名 59 編。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	絵画・書跡・工芸・考古・歴史資料などの各ジャンルにわたり、最新の学術情報を盛り込んだ情報を発信しえた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画に基づき順調に進捗している。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-2

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)特別調査法隆寺献納宝物（第 32 次)「聖徳太子絵伝」第 6 回（(5)-①-ⅲ）

【事業概要】

東京国立博物館では、法隆寺献納宝物について、昭和 54 年より、31 次にわたって献納宝物の調査を館内および館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。献納宝物は、経年によって脆弱化しており、各分野の研究者が直接的な調査をすることは難しい。本事業はすべての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。毎次の調査研究については「法隆寺献納宝物特別調査概報」を発刊している。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長　田沢裕賀

【スタッフ】島谷弘幸(学芸研究部長)、田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)、澤田むつ代(特任研究員)、沖松健次郎(企画課特別展室主任研究員)、瀬谷愛（列品管理課研究員)、小林達朗(調査研究課主任研究員)、小山弓弦葉(企画課特別展室主任研究員)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、若杉準治（京都国立博物館列品管理室長)、朝賀浩（文化庁文化財調査官)、村重寧（元早稲田大学教授)、松原茂（根津美術館学芸部長<当館客員研究員>)、東野治之（奈良大学教授<当館客員研究員>)、岡本明子（早稲田大学助手)、谷川ゆき（金城学院大学非常勤講師)

【主な成果】

本年度は、国宝聖徳太子絵伝 10 面のうち第 7 面と第 8 面を調査対象とした。経年の劣化、補修によって判別の困難な図様の細部について明らかにできた。また、剥落や劣化などにより画の見えないところについて、現法隆寺絵伝に嵌められた吉村法眼周圭充貞の模写(天明 7 年＝1787)を比較検討することによって、その内容を新たに確認した。

【年度実績概要】

高精細デジタルカメラによって 1 面 132 カット(2 面合わせて 264 カット)撮影し、それを合成することによって原寸大以上に引き伸ばすことが可能となったことから、実作品に基づいて、これとも細部を照合しつつ、各事跡場面の特定と、描かれたモチーフの形状、描写について詳細な客観的記述を回を重ね、各研究者共同で、確認、確定を行った。高精細画像の各場面の拡大図とともにこれを公表することにより、事業概要で述べたとおり、すべての研究者に対して通常の状態では観察の困難な詳細な本図の詳細な客観的情報を提供する下地ができたものと考える。平成 22 年度に実施した第 32 次特別調査は、報告書として、『法隆寺献納宝物特別調査概報 31』「聖徳太子絵伝 4」によって刊行する予定である。

【実績値】

調査回数 2 回
調査概報発行　1 件

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-2

(様式 2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　年一回のケース内展示のみの公開となっている本絵伝のこれによっては把握できない詳細な情報を公開することができた。本調査開始以来蓄積した光学的資料等と調査方法にもとづき、今年度はポイントをしぼって調査をすすめることができた。多方面の専門研究者の知見を得ることができ、今後の成果の反映を効率的におこなうことができるようになった。

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査概報				
判定	A	A				

備考
　実物を前にしながら、必要にして充分な調査を計 6 日間にわたって行うことができた。またこれをまとめた調査概報を刊行できた。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当該調査は、絵画史、工芸史だけでなく、歴史の専門家を含めた調査であり、各場面の検証、用絹、絵具など総合的な作品評価が可能である。改良点としては、今後は絵具の分析や赤外線写真撮影なども取り入れて科学的な側面からのアプローチも図りたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	23 年度は当該調査研究の成果を公表する概報の発刊を行う予定である。また引き続き、これまでの成果をふまえ、第 9、10 面の同様の調査を行ってゆく計画である。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-3

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）特別調査「書跡」第 8 回（(5)-①-iii）

【事業概要】

本年度は断続的に行われてきた当館書跡収蔵品の中の奈良～安土桃山時代にかけての古写経・仏典について，情報の整理・統合と整備の完成を目指し，古写経調査を実施。特に断簡写経の原典特定作業，使用された料紙の種類，書写年代の比定を行うとともに法量計測，写真撮影など基礎データを収集する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部長　島谷弘幸

【スタッフ】

島谷弘幸（学芸研究部長），富田淳（調査研究課長），田良島哲（書跡・歴史室長），髙梨真行（書跡・歴史室主任研究員），冨坂賢（保存修復課保存修復室長）高橋裕次（博物館情報課長），赤尾栄慶（京都国立博物館学芸部副部長），羽田聡（京都国立博物館学芸部企画室研究員），野尻忠（奈良国立博物館学芸部情報サービス室研究員），斎木涼子（奈良国立博物館列品室研究員），藤田励夫（九州国立博物館学芸部博物館科学課保存修復室長），丸山猶計（九州国立博物館学芸部文化財課資料登録室主任研究員），酒井芳司（福岡県立アジア文化交流センター展示課研究員）

【主な成果】

当館所蔵の古写経について法量計測・写真撮影を実施し，書写された文字の筆致，巻子装の軸端や料紙の材質分析，奥書記載内容の検討により書写年代推定を行った。掛幅装や手鑑装の古写経断簡については，書写経文の検討によりその原典を可能な限り特定し，当館所蔵古写経の基礎データを整理し，その成果を東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録古写経篇』として刊行。

【年度実績概要】

対象:当館書跡収蔵品について巻子装 67 件、掛軸装 12 件、冊子装 5 件、折帖 14 件、手鑑装 7 件、屏風装 1 件，その他 2 件の調査を実施

結果: 巻子装 130 点、掛軸装 13 点，冊子装 17 点，折帖 18 点，経切 195 点，屏風装 1 件，その他 2 点の写経および写経断簡に関して計測し，軸端材質，使用された料紙の材質分析，奥書記載事項など抽出し書写年代推定した。また経切などの写経断簡については原典確認を行った。

・必要と判断された重要な写経については撮影を実施した

　撮影対象　写経 50 件　　撮影写経　77 点

・調査データをデータベースとして整理した

（手鑑装古写経断簡の調査風景）

【実績値】

調査回数　全 1 回

　第 1 回　平成 22 年 8 月 4 日(水)～6 日(金)

　調査日数　　3 日間

　調査員・調査補助員　　のべ 44 人

採取データ数

　写経および写経切の調査総点数　375 点

　撮影画像　114 カット（情報量 1 カット 3M）

刊行物

　上記調査写経のデータと画像を掲載

「東京国立博物館図版目録古写経篇」（３００頁）刊行予定

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-3

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A

備考
　当館所蔵の古写経および古写経断簡の基礎的データ採取と画像の取得により，図版目録出版の準備が整った。この刊行によって，他の研究機関や研究者に今回の調査により取得されたデータが公開されることとなり，仏教学・仏教思想・日本書跡・歴史学等の分野に研究進展に資するところが大きいと考える。

2．定量的評価

観点	調査回数	採取データ数	刊行物			
判定	A	A	A			

備考
　平成 18 年度からの継続的な調査の実施により，当館収蔵品の古写経および古写経断簡について，今回の事業で基礎的データと画像については整理し終えた。その結果，研究の成果物として図版目録の刊行につなげることに成功した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	所蔵する古写経・古写経断簡についての整理が完了し，またその成果としての図版目録の刊行につながったため，目的を達成したと判断される。また目録掲載という制限から撮影した画像の内，未掲載のものも多い。こうした画像を公共に資する為，次年度以降はデータベース公開を目指したい。一方，今回の調査ではまた，一部の聖教類について基礎データが未整理のも明らかとなったため，次年度以降にこうした仏典・聖教などを主な対象とした調査を継続・実施していく必要を感じた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	図版目録の刊行とデータベース公開の準備が整えられたことからも，中期計画の目的は達成されたと判断される。今後は，得られた基礎データをより公共に資するためにその方法を模索していく必要がある。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-4

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)　特別調査「工芸」第 2 回（(5)-①-ⅲ）

【事業概要】

東京国立博物館における文化財のうち、金工・刀剣・陶磁・漆工・染織等工芸分野の特別調査。独立行政法人文化財機構国立博物館 4 館および文化庁の工芸担当者が集まり、同じ専門分野の研究者が同時に作品調査を行う。複数の専門家の目で同時に同じ作品を調査することにより、精度の高い成果が得られる。また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示公開の向上に結びつけることを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸・考古室長　竹内奈美子

【スタッフ】

小松大秀（副館長）、今井敦（博物館教育課長）、伊藤信二（博物館教育課教育普及室長）、三笠景子（保存修復課保存修復室研究員）、猪熊兼樹（列品管理課貸与特別観覧室主任研究員）、酒井元樹（調査研究課工芸・考古室研究員）、横山梓（列品管理課平常展調整室研究員）、尾野善裕（京都国立博物館学芸部工芸室長）、永島明子（京都国立博物館学芸部企画室主任研究員）、内藤榮（奈良国立博物館学芸部長補佐）、清水健（奈良国立博物館学芸部教育室研究員）、伊藤嘉章（九州国立博物館学芸部長）、川畑憲子（九州国立博物館学芸部企画課特別展室研究員）、齋藤孝正（文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官）、伊東哲夫（文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官）

【主な成果】

東京国立博物館の金工・陶磁・漆工の列品について、最新の研究結果を反映させた知見を共有することができた。特に金工調査では舎利容器の 1 件に新たな事実が判明し、陶磁調査では中国清朝の磁器が日本の文化や作陶に与えた影響に関する議論が深まった。漆工調査では現在では不明とされる一部の香道具の使用法について推測可能になり、その成果を東京国立博物館の展示に活用することができた。

【年度実績概要】

◆金工調査

実施期間　平成 22 年 8 月 12 日（木）・13 日（金）

金工列品のうち、鏡像・懸仏、及び舎利容器などの荘厳具について調査を実施し、図像的特徴や美術史的な価値などについて検討を行った。表裏に金剛界・胎蔵界の尊像を描いた鏡像について、形状面で特異な特徴がみられるものの、尊像描写が優れていることなどから平安時代末期の作例であろうとの結論に達した。また、従来舎利容器として考えられていた列品が、能作生（如意宝珠）を塔下に納めるための容器であることが判明し、こうした作例は他に例を見ないことが分かった。

◆陶磁調査

実施期間　平成 22 年 11 月 16 日（火）・17 日（水）

東洋陶磁および陶磁列品のうち、白磁・青花・五彩・粉彩など清朝磁器の各種と初期伊万里の代表作例を一堂に集めて調査を実施し、比較検討を行なった。中国清朝の磁器が日本の文化や作陶に与えた影響について、議論を深めた。

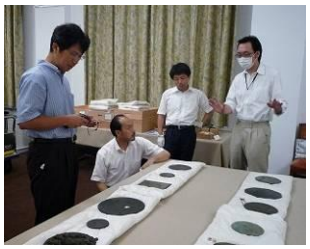
◆漆工調査

実施期間　平成 22 年 12 月 2 日（木）・3 日（金）

漆工列品のうち香道具をテーマとし、今年度は香を聞き当てる遊び、組香に用いる道具類をとりあげて調査を実施した。特に組香に用いる道具を一括して収める十種香箱の構成は多様で、内容品の中には現在では使用法が分からないものもあるが、調査の中で討議を重ねて意見を集約し、用途を推測するに到った。その成果は特集陳列「香りを楽しむ―香道具―」（平成 23 年 1 月 2 日～2 月 20 日）に反映することができた。

【実績値】

調査回数　3 回
調査日数　6 日
調査員　16 名
調査対象作品　67 件



調査風景（陶磁・金工）

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-4

(様式 2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

備考

工芸分野では美術や考古、歴史などの分野より研究者が不足しており、研究推進の緊急性が高く、本事業は時宜に適っている。

また工芸各分野の研究者がそれぞれ複数揃う国立文化機構ならではの事業であり、独創性や正確性・効率性が高い。本年度も各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができ、作品調査の中で新知見を得た例もあった。

さらにこの調査事業を継続的に行うことにより、研究推進や展示公開に寄与するところは多く、発展性も大きい。

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査日数	調査員人数	調査作品数		
判定	A	A	A	A		

備考

計画通り、それぞれ２日間にわたる金工・陶磁・漆工の調査会を実施した。早期に日程調整を行い、各分野の各機関専門家がそれぞれほぼ全員揃って調査を行った。昨年度の改善計画にもとづき分野に分かれて作品調査を実施し、きわめて効率良く多数の作品を調査できた。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができ、作品調査の中で新知見を得た例もあった。今後の研究推進および展示公開に寄与するところが大きい。また分野ごとに分かれて作品調査を実施するため効率性も高く相当数の作品を調査している。今後は刀剣・染織分野についても調査も行っていくことが望ましく、22 年度以降も継続する必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り作品調査を実施することにより、研究を推進し、その成果が展示公開の向上に寄与している。本事業のような調査会を次年度以降も継続的に行っていくことにより、工芸分野の文化財に関する研究の推進をはかる。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-5

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5)　特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究―尾形光琳風神雷神屏風を中心に（(5)－①－iii）

【事業概要】

尾形光琳の「紅白梅図屏風」(MOA 美術館蔵)の金地が金箔ではなく、金泥によるものだという調査結果が注目されている。これをうけて、当館が収蔵する光琳の「風神雷神図屏風」をはじめ、各派各時代の金地屏風を、同条件の下で調査し、金地についての客観性のあるデータを蓄積することを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長　田沢裕賀

【スタッフ】

神庭信幸(保存修復課長)、松嶋雅人(企画課特別展室長)、荒木臣紀(保存修復課環境保存室主任研究員)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、大橋美織（調査研究課絵画彫刻室員）

【主な成果】

当館収蔵の尾形光琳筆「竹梅図屏風」と「風神雷神図屏風」に加え、同時代の土佐光祐筆「栄華物語図屏風」、狩野永敬筆「十二ヶ月花鳥図屏風」を対象として、エックス線、蛍光エックス線と実体顕微鏡による分析調査を行ない、データの集積を行った。

【年度実績概要】

当館収蔵の絵画作品の中から、尾形光琳筆「風神雷神図屏風」を改めて蛍光エックス線により調査し、また「竹梅図屏風」他の作品を選び、金色部分の化学分析を行なった。

本年度は作品調査を 4 回実施し、データの検討会を 1 回行なった。

これまで行なった屏風作品の調査と同様に、肉眼観察で金箔の厚さが異なって見える部分数箇所を選んで、顕微鏡観察と蛍光エックス線により金箔と想定される部分のサンプル調査・成分分析を行なった。

また、調査結果をふまえて分析結果の検討を行った結果、調査箇所により金の存在を示す蛍光エックス線の強度に違いのあることが確認できたが、そのデータの客観性と有意性を確認するためには、さらなる作品の調査を実施する必要とされることがあらためて認識された。

蛍光エックス線による調査

印章部分の観察

【実績値】

調査回数

・分析調査　4 回

　蛍光エックス線調査　4 作品　51 箇所

　顕微鏡写真　　なし

　エックス線撮影　　なし

・分析結果検討会　1 回（2 月 25 日開催）

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-5

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	B	A	B	B	

備考
本調査は、現在注目されている金地作品の箔使用に関する調査で、多くのサンプルからデータを集めることで、各時代のさまざまな流派の絵画制作上の特徴をより客観的に研究する基礎調査としてきわめて重要なものである。21 年度におこなった光琳と同時代に活動した絵師の作品の調査結果の正確性をさらに確認するため、本年度は、あらためて光琳作品で調査、データ収集をおこなった。

2．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	B	B				

備考
実作品を対象とした調査を 4 回行ない、調査結果を検討する機会を設けた。今後は、蛍光エックス線分析装置によるデータ収集を進めることはもちろんのこと、さらにデータの有意性を高めるために外部機関の作品の調査も働きかけ、サンプル数を増やしデータの客観性を高めるための確認調査を行なっていきたい。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度の 4 回の調査により、データ集積数を伸展することができた。さらに内部調査を実施して、サンプル数を増やすこととあわせ、今後は、他の機関による同種の調査と連動できるようなデータ収集を行い、共通の分析ができる体制を確立したい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	検討会での分析により、今後は、さらにサンプル数を増やすことで、調査データの客観性が高める必要性があらためて確認された。そのためには綿密な計画を立て、さらに調査回数を増やすことで、データ集積をさらに進め、基準となるデータを求める必要がある。 今後は、同様な調査・データ集積を行なっている機関と連携した検討を行なうことで、調査内容の検討を充実させ、結果の外部公開を目指したい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-6

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6）特別調査「江戸幕府御用絵師板谷家関係資料」（（５）－①－ⅲ）

【事業概要】

板谷家関係資料は、安永 2 年（1773）住吉家の門人広当が御用絵師に取り立てられたことに始まる、江戸幕府御用絵師・板谷家に伝来した資料群である。本事業は、平成 21 年度東京国立博物館に一括寄贈された、粉本・下絵などの絵画、御用絵師叙任前後から明治維新後の新政府役人としての活動までを記録した古文書類、ガラス乾板や歴代の印章など総数 1 万点を整理調査し、公開に備えることを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	絵画･彫刻室長 田沢裕賀

【スタッフ】

池田宏（上席研究員）、冨坂賢（保存修復課保存修復室長）、小野真由美（企画課出版企画室主任研究員）　瀬谷愛（列品管理課平常展調整室研究員）、大橋美織（調査研究課絵画･彫刻室研究員）、山下善也（京都国立博物館連携協力室長）、金井裕子（九州国立博物館文化交流展室）、田中潤、長倉絵梨子、森道彦（以上、整理作業補助）

【主な成果】

外部閲覧に備えた資料整理（1 万点以上の資料一点ずつに枝番号タグを付し、形状別に箱に収納する）をすべて終了。この整理に平行し、絵画資料の調査、古文書の撮影・翻刻を行った。また、スタッフによる合同調査会を開き、物語絵、風景画、土佐派など各スタッフがテーマを設け、資料調査を行った。以上で得られた成果により、平成 23 年 10 月 25 日～12 月 4 日に「板谷家伝来資料（仮称）」の特集陳列を行う。

【年度実績概要】

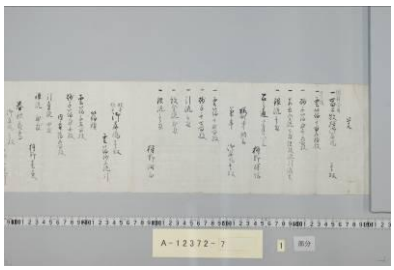
対象

・　板谷家伝来資料 10,629 点（古文書 858 点、絵画資料 9413 点、印章ガラス乾板など資料 358 点）

成果

・　資料全点の養生・封入を終了し、箱詰めした（85 箱）。
・　古文書を中心に画像撮影を行い（990 点）、うち重要文字資料の翻刻を行った（27 点）。
・　東京国立博物館にて合同調査会を行った（調査員のべ 23 名、1 回）。

資料保管箱



古文書画像撮影

合同調査会風景

【実績値】

整理資料点数　10,629 点　85 箱
画像データ作成点数　990 点
古文書調査・資料整理日数　124 日（平成 22 年 5～12 月）
合同調査会　1 回
　日程　平成 22 年 9 月 28 日（火）～30 日（木）
　調査日数　3 日間
　調査員　のべ 23 名

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-6

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	B

備考

平成 21 年度東京国立博物館に一括寄贈された本資料群は、江戸幕府御用絵師のひとつの家の成り立ちから明治以後の転身までを含むきわめて珍しい資料で、江戸時代の絵師を研究する上でたいへん貴重なものである。できるだけ早く一般公開して公共に資するため、簡易で安全な出納を可能にする必要があり、本年度はこの基盤となる整理を第一の目標としてこれを終えることができた。また古文書資料の画像撮影と一部の翻刻まで進むことができたので、次年度以降の調査研究の一歩をすでに踏み出していると思われる。

本資料群研究の進展は、当館が所蔵する板谷家、住吉家の本画理解を促進することは疑いない。またこれまで等閑視されてきた近世やまと絵の一側面が明らかになることによって、世界中に眠る板谷家作品の再評価へつながる可能性を秘めている。

1 万点以上に及ぶ膨大な資料の整理に、平成 22 年度 4 人の整理作業補助員が当館研究員とともに作業にあたり、一人あたり約 2500 点もの資料を確認し保存容器に収める作業を無事終了した。次年度以降はこのデータをもとに再度各資料に関する情報を精査し、より利便性の高いデータベースの作成を目標としていきたい。

2．定量的評価

観点	調査点数	調査回数	研究発表数			
判定	A	A	B			

備考

当初目標であった、1 万点以上に及ぶ本資料すべての保存容器への収納と整理については、目標値を 100%達成した。またこの整理作業と古文書解読などの調査に 124 日、絵画資料をふくむ当機構研究員の合同調査に 3 日をあてることができた。本事業は基盤となる資料確認にあるため、これの研究については十分な発表ができていないが、平成 23 年度に本資料と当館所蔵の板谷家・住吉家作品とを比較する特集陳列を予定している。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度の当初目標を達成し、次年度以降の明確な調査・作業予定の見通しがたっている。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を 100%達成した。 次年度以降の目標である調査研究の基盤ができた。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-7

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7）館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究（(5)-①-ⅲ）

【事業概要】

東京国立博物館が所蔵する漢籍・洋書に関する書誌学的調査である。これらは、博物館草創期の明治時代初期に、文部省より引き継いだ江戸幕府旧蔵資料を中心とする資料群よりなっている。また洋書にはドイツ人医師シーボルトより献納された数百冊を含んでいる。詳細調査を実施し、その学術的意義を明らかにする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長　高橋　裕次

【スタッフ】

田良島　哲（調査研究課書跡・歴史室長）

【主な成果】

＊ 明治時代前期に博物館が収集した漢籍のうち、医学関係のものについて、調査を行った。
＊ 江戸時代の幕府医学館収集の漢籍とそれに関連した人物についての特集陳列を企画して展示を行った。

【年度実績概要】

＊ 本年度は、明治前期に博物館が旧江戸幕府医学館から引き継いだ漢籍類とその伝来に関する調査を行った。
＊ 平成 23 年 2 月 1 日から 3 月 11 日まで本館第 16 室を会場として、特集陳列「医学館の漢籍」を開催し、調査を行った及び漢籍および関連資料 35 件を公開した。

【実績値】

展示への反映：1 回（35 件）

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-7

(様式 2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	独創性	発展性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	B
備考						

2. 定量的評価

観点	展示への反映					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまで十分に内容を把握できなかった館蔵の漢籍について、調査の結果、一つのテーマで展示を構成するまでに、内容を確認できたが、予定していた医学関係の専門家との連携が実現できなかった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	洋書・漢籍ともその保存の状況を把握することは進展しており、その結果、特集陳列に反映して、資料を公開することが可能となった。一方で内容の詳細について、外部の専門家を活用することについて、課題を残している。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-8

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	8)博物館の環境保存に関する研究((5)－①－ｉ)

【事業概要】

東京国立博物館における文化財の保存環境及び展示環境について調査研究し、今後の環境の向上に結びつけることを目的として実施する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長　神庭　信幸

【スタッフ】

和田　浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、荒木　臣紀(保存修復課環境保存室主任研究員)

【主な成果】

これまで継続して行ってきた展示、収蔵空間に存在する空気汚染物質濃度測定の結果を整理した。その結果から、東京国立博物館における空気汚染物質の許容濃度に関する暫定基準を改訂し、東京国立博物館の状況に合致する現実的な新たな基準を策定することができた。

【年度実績概要】

1. 建物毎の特性評価

東京国立博物館内には建築年代が異なる複数の展示施設、収蔵施設が存在する。新たな資材等が追加されぬ限り、古い施設に用いられている木材や塗料などは長年月を経ることで”枯れて”いるため、それらから揮発する物質の濃度はゼロではないが、相対的に低いことがこれまでの測定結果から判明した。また、現実的な結果として、そのような収蔵場所に保管された作品に汚染空気を原因とする大きな劣化は見出されない。このことは、比較的新しい施設内の比較的高い汚染物質濃度をどのレベルまで低減させるのが現実的に妥当な数値目標であるのかという課題に対して解答を導き出す一つの根拠になりうると考えた。そこで、建物毎あるいは測定箇所毎の改修履歴等を調査し、新基準の目安となる場所の選定を行った。

2. 暫定基準の見直し

暫定基準は平成 17 年度に制定したものであるが､既に公立研究機関や省庁が提示している基準よりも低い数値を採用していた。人間の生活環境ではなく、文化財の保存を目的とした基準であるため、厳格であることは妥当と考えていたが、実測値との比較から、さらに暫定基準値を引き下げるべき汚染物質濃度も存在することが判明した。上記 1.で評価した建物毎の濃度特性を参考に、アンモニア、ギ酸、酢酸の各濃度値を大きく見直した。

3. 新基準の制定

新たに制定した濃度規準は下表の通りである。

汚染物質	NO	NO_2	SO_2	NH_3	HCO□	CH_3CHO	HCOOH	CH_3COOH
濃度	5.0ppb	□0ppb	5.□ppb	5.□ppb	60.0μg/m^3	19.0μg/m^3	10.0ppb	50.0ppb

【実績値】

研究会発表件数　３件

文化財保存修復学会（岐阜）

「資料保存と四大元素」に関する国際会議（北京）

French-Japanese Workshop ″Science for Conservation of Cultural Heritage″　（パリ）

論文掲載件数　０件

調査回数

本年度 2 回、のべ 34 箇所(本研究に用いた前年度までの調査回数 11 回のべ 213 箇所)

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-8

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
博物館が独自の許容濃度基準を制定することは極めて稀である。特に開館から長い年月を経た施設と新しい施設が混在する環境下で測定を行い、得られた情報は今後施設の新築や改修を行う際に有益なものである。

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	調査回数			
判定	A	B	A			

備考
新基準を制定するために現在まで定期的に行ってきた調査回数(本年度 2 回のべ 34 箇所、前年度までの調査回数 11 回のべ 213 箇所)は統計的な処理を行うにあたり十分な数量である。論文は発表の予定で、現在準備中である。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	新たな施設を新築、改修する際、全く揮発性物質が発生しない資材を使用するのが理想的であるが、現実的にはそのような施工は不可能である。従って、竣工後の空気環境をどれだけ清浄に保つかが予防保存において重要な視点となる。吸着フィルターなどを用いて汚染物質を除去する場合でも何らかの現実的な目標値がなければ永遠にその作業は継続し、コストの面からも結果的に全ての場所に対処できない。本研究により、基準を制定したことで、機能的かつ効果的にそのような対処ができるようになったことは大きな成果である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を 100%達成。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-9

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9）東洋民族資料に関する調査研究　((5)-①-ⅲ)		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する約 3500 件の東洋民族資料を対象として、総合的な調査研究をおこなう。従来の台帳の記載内容を踏まえながら形状、材質のほかに、旧蔵者がつけた札や箱書きの内容や保存状態など実際の観察を通してしか分からない情報を、画像とともに一括してデータベース化する。これにより、研究・陳列・保管・修理などに必要な基礎情報をより充実した形で整備する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課長　谷豊信
【スタッフ】 谷豊信（列品管理課長)、川村佳男（調査研究課東洋室研究員)、丸山清志（客員研究員）			
【主な成果】 東洋民族の収蔵品のうち、南太平洋の生活および宗教儀礼にかかわる代表的なものについて、形状材質の面で従来よりも詳細な調査をおこなった。その結果、形状材質の新知見を得ただけでなく、一部の作品については、不詳だった制作地推定の手がかりも得ることができた。研究成果は、特集陳列「南太平洋の暮らしと祈り」（平成 23 年 3 月 29 日～4 月 24 日）とリーフレットで公開した。			
【年度実績概要】 作品調査 東京国立博物館が所蔵する南太平洋の民族資料から、代表的な作品の形状材質を調査した。 文献調査 国立民族学博物館、天理大学附属天理参考館、南魚沼市立今泉博物館、早稲田大学、南山大学、大英博物館、メトロポリタン美術館、ピーボディー・エセックス博物館、ケ・ブランリー美術館などが所蔵する南太平洋民族資料の図録等から、類例を抜粋し、形状材質にかかわる画像と記載を収集・整理した。 上記の調査の結果、形状品質について当館の台帳には記載されていなかった知見を得ることができた。一部の作品については、形状品質の新知見をもとに、不詳だった制作地を推定する手がかりも得られた。 その成果は、特集陳列「南太平洋の暮らしと祈り」とリーフレットで公表する。			
【実績値】 調査回数：7 回。作品調査件数：155 件。データベース更新件数：55 件。撮影点数：約 200 カット。 陳列回数：特集陳列「南太平洋の暮らしと祈り」1 回。 冊子刊行数：リーフレット 1 冊。			
【備考】			

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-9

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	A	A	B	A	B

備考

当館が所蔵する南太平洋の民族資料は、ほとんどが１９世紀後半から２０世紀初頭にかけて将来されたものであり、なかには現地ですでにみられなくなったものも含まれている。世界的にみても貴重な価値を有していながら、これまで公開される機会は非常に少なかった。特集陳列「南太平洋の暮らしと祈り」と同名のリーフレットでは、少なくとも約３０年ぶりの公開となる展示品が全体の約７割を占める。今年度の当館では、より開かれた博物館を目指して平常展を「総合文化展」と改称したが、本特集陳列の実施とリーフレットの刊行により、時宜にかなった成果を示すことができたといえる。

2．定量的評価

観点	調査回数	作品調査件数	データベース更新件数	撮影件数	陳列回数	冊子刊行数
判定	B	B	A	A	A	A

備考

東洋館リニューアルオープンの準備や特別展にかかわる業務などが集中し、所期の調査回数と作品調査件数には至らなかった。しかし、形状材質についてこれまで以上に詳細な調査を実施できたことで、多くの新知見をデータベースに反映させることができた。また、調査時のメモ的な写真撮影だけでなく、スタジオで本格的な撮影を様々なカットで行えたことは、当館所蔵の東洋民族資料のさらなる公開・活用につながる。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	もともと本年度は台湾の民族資料の調査研究を計画していたが、他の業務との兼ね合いにより、基礎的な調査を済ませている南太平洋の民族資料をより詳しく調査することとなった。調査の実施回数や件数も目標を下回ったが、きめ細かな調査は少なからぬ新知見をもたらし、特集陳列やリーフレットの内容のさらなる充実につながった。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	南太平洋の民族資料については、成果を積み上げることができた。しかし、南太平洋と同様に重要な台湾の民族資料に対して、調査研究を進めることが次年度の課題である。しかし、台湾の民族資料の大半は前年度に基礎的な調査を済ませているうえ、次年度は東洋館リニューアルオープン準備や特別展にかかわる業務のさらなる増加が見込まれる。そこで次年度の数値目標は、今年度をやや下回る範囲とする。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-10
(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	10)油彩画の材料・技法に関する共同調査((5)－①－ｉ)

【事業概要】
東京国立博物館所蔵の油彩画約 150 件の中から、明治期を中心とした約 70 件を調査対象とする。東京芸術大学大学院油画保存修復研究室はこれまで大学所蔵の明治期油彩画について調査研究を続け、多数の成果を公表している。この度の共同調査の目的は、高精細デジタルカメラを使用した顕微鏡写真、普通光写真、赤外線写真、紫外線蛍光写真、透過デジタルＸ線写真、蛍光Ｘ線分析等の科学的調査を通し、当館所蔵の油彩画に使用された材料と技術に関するデータ構築を行ない、これまで芸大が集積したデータと比較を可能にすることである。それによって、今後我が国の初期油彩画の技法的解明、あるいは歴史的解明が一層進展するものと考える。

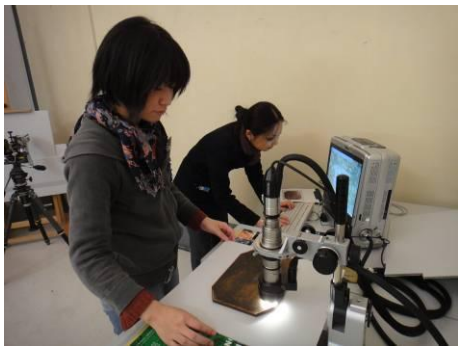
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長　神庭　信幸

【スタッフ】
木島隆康(東京芸術大学大学院教授)、鈴鴨富士子(東京芸術大学大学院助教)、田沢裕賀(調査研究課絵画彫刻室長)、土屋裕子(保存修復室主任研究員)、荒木臣紀(環境保存室主任研究員)

【主な成果】
平成 20 年 11 月から開始し、可能な限り月 1 回のペースで調査を進めてきた。調査は朝 10 時から午後 17 時までであり、1 回の調査では終了しない調査もあるが、これまでのところ調査が終了した作品は、11 点におよぶ。次第にデータが蓄積されているが、その中から、今年度は 3 点についての調査内容を発表する紀要(45 号)を出版する予定である。

【年度実績概要】
平成 22 年度に調査が終了した作品は、①A-698 P.D.ヘール筆≪風景≫、②A-705 筆者不詳≪風景≫、③A-708 筆者不詳≪風景≫、④A-715 J.B.フランク筆≪シバの女王とソロモン王≫、⑤A-732 筆者不詳≪遠望富岳図≫、⑥A-11690 原撫松筆≪影の自画像≫、⑦A-11789　原撫松筆≪老婆≫であり、それぞれについてのデータを CD に保存し、カルテを作成した。なお、今年度は、透過デジタルＸ線写真を以下の作品について撮影した。①A-11690 原撫松筆≪影の自画像≫、②A-11789　原撫松筆≪老婆≫、③A-11261 フォンタネージ筆≪風景≫、④A-11687 フォンタネージ筆≪不忍池≫、⑤A-11752 高橋由一筆≪最上川舟行の図≫

【実績値】



調査回数　：10 回
調査作品数：7 点
論文掲載：1 件　神庭信幸、木島隆康、土屋裕子、鈴鴨富士子、中安知佳「東京国立博物館および東京藝術大学による油彩画の共同研究（一）―東京国立博物館所蔵　原撫松筆《老婆》《影の肖像》の高額調査―」『MUSEUM』631 号、2011 年にて、成果の一部を公表予定。
研究発表　2 件
①2010 年 6 月文化財保存修復学会第 32 回」会ポスター発表（『油彩画の材料・技法に関する共同調査―東京藝術大学と東京国立博物館の学術共同調査―』）
②2010 年 11 月フランス・パリ French-Japanese Workshop”Science for Conservation of Cultural Heritage”(日仏ワーショップ“文化財の保存科学”)にて口頭発表（『日本における油彩の発展と保存修復』）

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-10

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
今年度は、東京芸大が集積しているデータベースに追加情報をもたらす作家の作品についての調査およびＸ線透過撮影の一部を行なうことができた(高橋由一、フォンタネージなど)。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	調査回数	調査件数		
判定	A	A	A	A		

備考
本調査の意義などについて、国内外の学会などで紹介を行ない本調査の結果として得たデータの一部は、平成 23 年 4 月出版の『MUSEUM』第 631 号を皮切りに順次掲載予定である。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館が所蔵する油彩画コレクションは、東京藝術大学の同時期の作品群を補完する意味でその存在は大きい。これまで光学的調査が不十分であったため、芸大作品と材料や技術に関する科学的な比較が困難であったが、一連の調査によって徐々に可能になってきている。今後の調査の進捗が更なる可能性を開いていくものと考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を 100%達成。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-11
(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11)荻原守衛「女」の石膏原型とブロンズ鋳造に関する共同研究((5)－①－ⅲ)		
【事業概要】 東京藝術大学と共同で実施する共同研究で、東博所蔵・荻原守衛作「女」石膏原型からブロンズ鋳造を計画している。これまで試みられたことのない大型の像に対する非接触・非破壊の方法を用いたブロンズ製作に関し、一連の製作工程ついて実証的な調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長　神庭　信幸
【スタッフ】 北郷　悟(東京藝術大学美術学部副学長)、古田　亮(東京藝術大学大学美術館准教授)、丸山士郎(博物館情報課情報管理室長)、田良島哲(調査研究課書跡・歴史室長)			
【主な成果】 鋳造した原寸大ブロンズ像を用いて、2010 年 10 月 23 日～12 月 5 日までの間「明治の彫塑　ラグーザと荻原守衛」展を東京芸術大学美術館にて開催した。			
【年度実績概要】 ・2 体目の鋳造による鋳造プロセスの検証 ・東京国立博物館所蔵「女」石膏像と東京芸術大学美術館所蔵「女」石膏像の比較検討 ・東京国立近代美術館所蔵、碌山美術館、東京芸術大学がそれぞれ収蔵するブロンズ製「女」との比較検討			
【実績値】 調査回数 東京藝術大学にて 3 回 研究発表・論文：公表に向けて準備中 当館銭谷館長と芸大宮田学長が 完成した「女」鋳造を確認			
【備考】			

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-11

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
3 次元デジタルデータを用いたブロンズ鋳造に向けた準備、及びブロンズ鋳造の実施など、当初の計画に従い所定の成果を得ることができた。

2．定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	調査回数			
判定	B	B	A			

備考
特別展を開催することによって、今回鋳造を行った作品と、東京国立近代美術館、芸大、碌山美術館などの既存のブロンズ像との比較を直接行うことができた。今後これら一連の調査研究工程を学会等で発表し、かつ論文として公刊するための準備中である。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	石膏原型と今回制作したブロンズ像を基準にしながら、様々なブロンズ像との定量的な比較を実施し、石膏原型とブロンズ像との関係が明らかになった。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を 100%達成。

【書式 B】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-12
(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	12)　日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究(科学研究費補助金)((5)-①-ⅱ)

【事業概要】
日本に現存する木彫像の樹種について調査研究し、日本と中国の木彫像の用材観の相違や、日本特有の木の文化、歴史の理解を深めることを目的として実施する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	特任研究員　金子啓明

【スタッフ】
浅見龍介(調査研究課東洋室長)、丸山士郎(博物館教育課教育講座室長)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、岩佐光晴(成城大学教授)、能城修一(森林総合研究所木材特性研究領域樹種識別担当チーム長)、藤井智之(森林総合研究所関西支所長) 、

【主な成果】
今年度は、東京国立博物館保管の中国の木彫像、埼玉県桂木寺の釈迦如来像及び木彫像群、を調査し、美術史的基礎データ、写真データ、樹種の科学的識別のための木片資料の収集を実施した。また、京都府広隆寺の著名な 2 躯の菩薩半跏像の木片プレパラートを取得するなど貴重なデータを収集することができた。また、当該研究の蓄積による研究成果の一部を研究論文としてまとめることができた。

【年度実績概要】
東京国立博物館保管の中国の木彫像の 3 躯を調査し、美術史的基礎データ、写真データ、樹種の科学的識別のための木片資料の収集を実施した。樹種の分析については森林総合研究所の能城が担当し、3 躯のうち唐時代に遡る可能性のあるその (1) についてはカキノキ属、やや時代の下がる (2) はキリ属、(3) はトチノキ属であることが判明した。中国の木彫像で唐時代に遡る作例は少なく、現存像の多くは檀像かその系統の像である。今回の像はそれとは種類の異なる中国の木彫像で、日本の像には例のないカキノキ属と判明したことの意義は極めて大きい。

また、埼玉・桂木寺の木彫像はいずれも平安時代の作例で、釈迦如来像は 9 世紀に遡る可能性がある。この像の樹種はカヤと識別され、この時期の地方作例においても一木彫像をカヤで作る奈良時代以来の伝統が踏襲されたことが判明した。一方、桂木寺の他の一木彫像は 10 世紀以後の作と考えられカツラ、ヒノキ、サクラ属等であることが判明した。関東においても 10 世紀以後の一木彫像の樹種選択については多様であったことが確認された。

また、広隆寺菩薩半跏像は宝冠弥勒、宝髻弥勒と呼ばれる著名な 2 躯で、いずれも 7 世紀の作であるが、小原二郎氏の分析で前者がマツ、後者がクスノキであることが判明した。これはその後の木彫像の樹種同定の先導的研究として評価が高い。当該研究はそれをさらに発展させ、用材観研究という新しい視点を提示したものであるが、小原氏は当該研究を評価し所蔵の貴重な木片プレパラートを当方に寄贈された。これにより当研究班の木片プレパラートの集積はより充実したものになったといえる。

また、これまで調査した木彫像のうち、樹種データが未公表の 8・9 世紀の木彫像及び鉈彫像について論文をまとめ、東京国立博物館研究誌『MUSEUM』(平成 22 年 4 月) に掲載した。また、これまで調査した仏像、神像等については、その研究成果を来年度以後も引き続き論文として報告していくことを協議した。桂木寺像の研究については研究誌『国華』に掲載予定である。

【実績値】
調査作品件数　　全 10 件　　中国木彫像 3 件　日本木彫像 7 件
写真データ　　130 点
木片資料　　50 点
論文掲載数　1 件

金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之
「日本古代における木彫像の樹種と用材観Ⅲ―八・九世紀を中心に(補遺)―」東京国立博物館研究誌『MUSEUM』(平成 22 年 4 月)

菩薩立像 (当館)

【備考】

【書式 B】
(様式 2)

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-12

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考
中国木彫像は遺例がきわめて少なく、今回唐時代に遡る像の樹種を同定できたことの意義は大きい。今回の中国木彫像は当該研究によりはじめて注目された作例である。本年度は中国木彫像に視点を変更し研究を進展させることができた。また、桂木寺のように地方寺院等に所蔵の作例については、調査の許可を得るまでに時間がかかり、日程調整等に非効率なところがある。従って、早い段階での所蔵者との交渉と日程調整が必要である。

2. 定量的評価

観点	調査作品件数	収集資料数	論文掲載数			
判定	B	B	B			

備考
今年度は中国木彫像の貴重な事例について調査研究を実施できたが、さらに広範囲の情報を収集する必要がある。日本と中国の木彫像の比較検討のため、中国での調査が必要であるが調整の制約から実行には至らなかった。論文作成はこれまでの調査に基づく 1 本を研究誌に掲載したが、桂木寺像は平成 23 年度に公表とすることとした。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	唐時代に遡る中国の木彫像の遺例は少なく、美術史的研究、樹種同定の科学的研究は不充分である。今回その貴重な作例を美術史的観点から見出し、樹種同定ができた意義は大きい。また、小原二郎氏から寄贈の貴重な木片プレパラートの活用方法は今後の課題として残されている。当該研究は本年度をもって終了するが、その蓄積に基づく研究はさらに多方面に発展させることが可能であり、その成果は十分に期待できる。また、樹種の同定については顕微鏡分析の他にも、放射性炭素年代測定や年輪年代学をはじめ当該研究で試行を重ねている。それらの成果に基づく研究論文も今後は期待することができる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	4 年計画の調査研究は順調に進展させることができた。今後もこのペースを維持しつつ、蓄積に基づく美術史的、科学的な調査研究の充実を計りたい。そのため科学研究費による研究の継続が必要である。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-13

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13）目録学の構築と古典学の再生（科学研究費補助金）（(5)－①－ⅱ）		
【事業概要】 日本独自の目録学を構築し、「知のネットワーク」で結ばれた公家社会の文庫群(＝データベース)の復原や伝統的知識体系を解明することにより日本古典学の研究基盤を再生する(研究代表者　東京大学史料編纂所教授　田島公)			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	書跡・歴史室長　田良島　哲
【スタッフ】 島谷弘幸(学芸研究部長)、恵美千鶴子（調査研究課アソシエイト・フェロー）			
【主な成果】 ＊　館蔵の古典籍、特に国宝「九条家本延喜式」に関する調査研究を行った。 ＊　館蔵の古筆切類について、古典籍学的な視角から調査を行った。			
【年度実績概要】 ＊　「九条家本延喜式」紙背文書の釈文作成のための研究会を 14 回行い、釈文の確定を図った。 ＊　「九条家本延喜式」の影印本刊行のための準備を進めた。 ＊　「九条家本延喜式」紙背をより詳細に調査するため、透過光写真の撮影（476 画像）を行った。 ＊　館蔵の古筆切類の詳細調査を継続している。(1 月末現在 66 点調査)			
【実績値】 研究会の開催：14 回 画像の作成：476 画像 作品の調査：66 点			
【備考】			

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-13

(様式 2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	研究会の開催	画像作成				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究において当館の寄与する最も大きな役割である館蔵の「九条家本延喜式」の調査研究に関して、継続的に紙背文書の釈文作成を実施して、成果公開の準備を整えることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	上記総合的評価のとおり、当館の研究上の責務を果たすとともに、館蔵文化財に関する情報の蓄積と公開のための準備が順調に進んでいる。次年度も研究の継続に努め、成果公開を果たしたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-14

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14）原三渓旧蔵近代絵画・彫刻に関する基礎的研究　((5)-①-ⅲ)		
【事業概要】 本研究は、原三渓旧蔵作品の基礎的調査、および原三渓を中心とした当時の美術家ネットワークの調査を目的としている。本年度は、そのうちの後者にあたる原三渓によるパトロネージの問題について、調査研究を行う。			
【担当部課】	企画課特別展室	【プロジェクト責任者】	任期付研究員　植田　彩芳子
【スタッフ】			
【主な成果】			
【年度実績概要】 プロジェクト責任者が、平成 22 年 7 月 31 日付で退職したため、年度実績なし。			
【実績値】			
【備考】			

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-14

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点						
判定						
備考						

2. 定量的評価

観点						
判定						
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
F	

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-15
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	15)博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究（科学研究費補助金）((5)－①－ⅳ)

【事業概要】
保存と公開という博物館の使命を持続的なものとするためには、あらゆるリスクを予測し、リスクを回避するための対策を事前に講じることによって、高い安全性に裏付けられた活動へと博物館を質的に転換する必要がある。そのためには、従来行われてきた基礎研究及び個別的対処を統合し、機動的かつ実効的な臨床保存学を確立する必要がある。その具体的な方法論としてトータルケアシステムの構築について研究を行う。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長　神庭　信幸

【スタッフ】
土屋裕子（保存修復室主任研究員）、和田浩（環境保存室研究員）、荒木臣紀（環境保存室主任研究員）、大場詩野子（研究支援者）

【主な成果】
これまでに集積した各種データを、博物館の空間と関連付けながら保管・検索することが可能な管理分析サブシステム文化財収蔵場所環境情報管理システム」を構築してきたが、本年は館内に約５０か所配置した温湿度センサー及び所在管理のための２次元バーコードを用いたセンサーサブシステム、収蔵品管理のために館内ですでに開発済みの列品検索データベースシステム（プロトDB）とのネットワークを構築し、各種データを統合的に扱うことが可能になった。

【年度実績概要】
平成２２年度は、これまでに構築したシステムとシステムにおける４つの基本段階、すなわち測定（Measure）、分析（Analysis）、改善(Improve)、管理（Control）の中から、温湿度センサー及びデータ管理サブシステムとのネットワークの構築を行った。
- 温湿度の測定を行うセンサーを館内に約５０か所配備し、センサーサブシステムの構築を行った。
- 2次元バーコードを用いた移動･管理を記録するセンサーサブシステムと管理分析サブシステム「文化財収蔵場所環境情報管理システム」とネットワークを構築した。
- 収蔵品カルテ、点検調書を整備し、症例検索システム情報をネットワークから管理できるようにした。
- 博物館既存の列品検索データベースシステム（プロトDB）と管理分析サブシステム「文化財収蔵場所環境情報管理システム」のネットワークを構築した。

【実績値】
研究会発表件数
資料保存と４大元素シンポジウム発表１回(北京)(2010.06.23)
文化財保存修復学会ポスター発表１回(岐阜)(2010.06.13)
大エジプト博物館保存修復センター講演１回（カイロ）(2010.09.29)
日仏保存科学ワークショップ講演１回（パリ）(2010.11.04)
図書館総合展展示発表１回（横浜）(2010.11.24 - 26)
ルーブル美術館臨床保存ワークショップ（パリ）講演１回(2011.01.11)
JSPS 学術セミナー講演１回（ストラスブール）(2011.01.13)
論文掲載件数２件

ルーブル美術館でのワークショップ風景

【備考】
地震対策としての文化財の転倒防止に関する検討、神庭信幸、長嶋文、J.P.ゲッティ美術館・国立西洋美術館共催国際シンポジウム「美術・博物館コレクションの地震対策」報告書、2009 年 7 月 21 日、国立西洋美術館、67－76、2011 年 2 月
展示の工夫、神庭信幸、月刊文化財、571、16-17、2011

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-15

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　作品の状態、履歴及び環境の情報の収集と解析に関して、実践を通じた研究を行った。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。

２．定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	研究計画・方法			
判定	A	A	A			

備考
　科学研究費補助金（基盤（S）（平成 20 年～24 年））を活用して、各種のデータを博物館の空間と関連付けて保存・検索できるデータ活用システム「文化財収蔵場所環境情報管理システム」に昨年までに整備したデータを用いて構築したサブシステムや温湿度センサーネットワークなどとのネットワークを構築して、博物館内に蓄積したデータを包括的に活用する実用実験を実施した。また、一部成果を学会などで 4 回の発表を行った。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	保存と公開を実践しつつ、安全性をより向上させるために、現状の解析と改善を具体的に実施し、臨床保存学の具体的な機能が明確化できた。現在構築中の支援システムの精度の向上を図ると同時に、将来予測に立脚した現状判断が可能なように、目標とするシステムの確立を目指したい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を１００％達成。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-16

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	16)東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究―「正倉院裂」を中心に― (科学研究費補助金)((５)―①―iii)

【事業概要】

東京国立博物館(以下、東博)が所蔵する約 1,300 点余りの上代裂(法隆寺の染織品と正倉院の染織品〈正倉院裂〉)のうち、主に正倉院裂の調査とデータの収集を目標とする。東博は明治５年(1872)から昭和 22 年(1947)まで正倉院宝物の管理に関わってきたため、明治時代の正倉院宝物の修理、模写、模造、古写真、出版物等を所蔵する。それら東博所蔵の調査を中心に奈良国立博物館などが所蔵する資料も調査とデータ収集を行なう。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	特任研究員　澤田むつ代

【スタッフ】

高橋裕次(博物館情報課長)、丸山士郎(博物館教育課教育講座室長)、浅見龍介(調査研究課東洋室長)、西山厚(奈良国立博物館学芸部長)

【主な成果】

撮影した各作品のデジタル画像について、個々に番号を付けるとともに、各作品については、現状、法量、品質、技法、文様染色、用途等についての詳細を記録化する作業を継続した。

東博が所蔵する上記の正倉院関係資料についても、デジタル写真撮影を継続し、詳細なデータを収集した。

【年度実績概要】

①デジタル撮影した画像に番号と名称等を付け、画像データの整理を継続して行った。
②撮影した各作品について、報告書刊行に向けて調査カード用のデータ整理を継続して行った。
③東博所蔵の正倉院裂の摸写、模造、模織作品のデジタル写真撮影の継続と、それらの資料に関するデータの収集を行なった。一部の分野(模写、裂帖)については補足撮影と調査も行なった。
④これらの調査の成果を踏まえ、昨年度に引き続き今年度は、「東京国立博物館所蔵 正倉院の染物」というテーマで特集陳列を行ない、昨年同様、図録を刊行した。また、昨年同様列品解説も行なった。

今年度制作した図録の表紙(左)と内容(右)

【実績値】

１．資料収集(写真撮影と調査カードのデータ化)
　①　調査カードのデータ整理は全体の 90 パーセント程度完了。
　②　模写の追加撮影と裂帖作品の写真撮影　180 枚余り。
２．研究発表、論文発表、展示への反映
　研究発表　１回、論文掲載数　４件、
　①澤田むつ代　特集陳列「東京国立博物館所蔵 正倉院の染物」を実施した。:平成 22 年 11 月２日～11 月 28 日(東京国立博物館・平成館企画展示室)
　②澤田むつ代　特集陳列「東京国立博物館所蔵 正倉院の染物」にかかる『東京国立博物館所蔵 正倉院の染物』と題した図録を刊行し、同タイトルの論文他１件の論文と９件のコラム解説を掲載した。
　③　澤田むつ代　特別展『東大寺大仏―天平の至宝―』(平成 22 年 10 月８日～12 月 12 日)の展覧会図録において、各論「天平の染織」を執筆。
　④澤田むつ代　②の展覧会図録において「天平古裂は正倉院から頒布された〈正倉院頒布裂〉」というコラムを執筆。
　⑤　澤田むつ代　国際シンポジウム「陵山里出土遺物」(於：韓国・国立扶餘博物館)において「藤ノ木古墳出土の織物から法隆寺の織物」というテーマで、古墳から法隆寺・正倉院の綾織物の技法・文様の変遷等について発表し、レジュメ(40～63 頁)を執筆した。
　⑥澤田むつ代　科学研究費補助金による研究成果として報告書『東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究―「正倉院裂」を中心に―』(平成 23 年３月) を刊行し、「東京国立博物館所蔵　正倉院の染織品と裂帖、模織品、模写」という論文を執筆した。
３．調査回数　９回
４．補足撮影　３回

備考

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-16

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　裂帖、模写、模織においても研究代表者の澤田が以前執筆した「正倉院頒布裂」記述項目等のデータをもとに、効率よく作品の撮影の継続とデータの収集、データの入力等を行なうことができた。本年度が最終年度にあたるため、これまで撮影した「正倉院頒布裂」の画像データと各作品の詳細データ、また、上記の裂帖、模写、模織の画像データと作品のデータ等を整理し、報告書の執筆、編集等を行ない、報告書を刊行した。

2．定量的評価

観点	論文数	調査回数	収集資料数	特集陳列		
判定	A	A	A	A		

備考
　正倉院裂の調査と関連する裂帖等の調査を９回行ない、正倉院頒布裂と裂帖に貼られている作品にあっては、正倉院宝物との比較において、同種の裂の確認とともに、裂の使用年代や用途等について検討した。　また、模写や裂帖の補足撮影もすることができた。さらに、今年度も昨年度(「東京国立博物館所蔵　正倉院の織物」)に引き続き、特集陳列「東京国立博物館所蔵　正倉院の染物」を開催し、昨年同様、図録も刊行した。さらに、３月には研究成果として、『東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究「正倉院裂」を中心に―』を刊行した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	正倉院頒布裂と裂帖に貼られている作品にあっては、正倉院宝物との比較において、同種の裂の確認とともに、正倉院のどのような作品に用いられているかを類推し、裂の使用年代や用途等について検討した。また、特別展『東大寺大仏―天平の至宝―』に出陳された染織品について、由来が不明であったが、正倉院から頒布された「正倉院裂」であったことを確認し、コラムを執筆できたことは予想外の成果といえる。　これまで撮影した各作品の画像と、これらの調査データ等を盛り込んだ論文をまとめ、３月にはカラー版の報告書を制作して刊行した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの成果を昨年同様、特集陳列で一般に公開することができ、調査研究は順調に進んでいる。これらを総合的にまとめ、報告書を刊行する準備を進め３月にはカラー版の報告書を刊行した。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-17

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	17)文化財保護の歴史に関する基礎的研究(科学研究費補助金)((5)－①－ⅲ)

【事業概要】

東京国立博物館は、明治 4 年(1871)の「古器旧物保存」や、同 5 年に博覧会の出品物考証に備えるために行った文化財調査「壬申検査」をはじめ、「臨時全国宝物取調」など文化財保護に関する多くの資料を所蔵している。こうした文化財保護の歴史に関わる情報、資料などを広く収集、整理し、そのデータを公開することを目標とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長　高橋裕次

【スタッフ】

浅見龍介(調査研究課東洋室長)、丸山士郎(博物館教育課教育講座室長)、白井克也(列品管理課平常展調整室長)、島谷弘幸(学芸研究部長)、恵美千鶴子(調査研究課任期付研究員)

【主な成果】

東京国立博物館が収蔵する文化財保護に関連する作品や資料について、展示履歴などの情報を参考にして作成した調査対象リストをもとに、デジタルカメラによる記録撮影やスキャニングによるデータ収集を行った。また、海外の博物館との交流にともなって海を渡った内外の資料に関連して、作品および当時の記録類などの調査を実施した。

【年度実績概要】

1. 東京国立博物館所蔵の関係資料の調査

文化財保護に関連する戦後の資料について、その収集と整理を継続して行った。

2. 特集陳列の開催による資料の公開

本年度、特集陳列「東京国立博物館の模写・模造－平家納経－」において、当館が、明治 5 年（1872）の創立・開館以来、制作あるいは購入した多くの模写・模造のうち、平家納経に関係する模写・模造および関係資料の公開を行った。

特集陳列で公開した平家納経(模本)

3. 他機関への調査

今年度は、国立国会図書館が所蔵する関連資料の調査を行った。海外では、東京国立博物館が、草創期にモデルとし、あるいは交流した英国の博物館（大英博物館、ビクトリア＆アルバート博物館、ケルヴィングローブ博物館）を対象に、文化財保護に関する公文書およびその管理状況の他、併せて東京国立博物館より当該博物館に寄贈された作品などの調査を実施した。いずれも公文書、作品の保管・整理状況は良好で、日本からの作品に貼付されたラベルの記載内容などから、輸出にいたるまでの経過などが明らかになるであろうと考えられた。作品の伝来、保管、展示などに関する各館の公文書をとおして、博物館活動における文化財保護のあり方を検討することが、今後の課題である。

【実績値】

○資料公開回数　1 件

特集陳列「東京国立博物館の模写・模造－平家納経－」　作品数 20 点　期間 10 月 19 日 ～ 11 月 28 日

○調査件数　100 件、写真撮影点数　1500 点、データ入力点数　300 点

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-17

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A

備考
　文化財に関連する資料には、未整理のものも多く、効率性の面から、調査方針の検討も必要である。しかし、科学研究費の協力者が、関係機関との連絡を密にしたことで、より多くの情報が得られ、調査・研究において成果をあげることができた。

2．定量的評価

観点	公開回数等	調査件数	写真撮影点数	データ入力点数		
判定	A	A	A	A		

備考
　国会図書館の調査では、東京国立博物館所蔵作品の伝来について新所見があった。英国のケルヴィングローブ博物館では、日英の博物館の間で交換された作品約 50 件の調査が実施できた。また、大英博物館、ビクトリア＆アルバート博物館では、文化財保護に関する公文書の収集・管理などの状況について担当者より説明をうけるなど、多くの情報を収集できた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保護の歴史に関する資料は、国内では東京国立博物館が最も多く所蔵しているが、その収集・管理については、英国の博物館に学ぶべき点が少なくないことが明らかになった。今後は、情報の収集・整理のあり方を検討すると同時に、調査・研究の成果を刊行物などで公開していく方針である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの博物館の国際交流の実績を反映して、英国の 3 博物館において調査を実施することができた。こうした調査を継続的に行っていく必要がある。また、国内外の関連資料を総合的に調査するために、所在情報や、調査方法について、博物館を中心に相互に連絡を取り合っていきたいと考えている。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-18
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	18）高度な復元作業のための制作空間の情報化(科学研究費補助金)((5)－①－ｉ)

【事業概要】
工芸文化財デジタルデータの活用法について、復元職人の実制作空間の情報化を行うことにより、従来にない視点から文化財閲覧デバイスを開発することを目的とする。復元作業に精通した職人の制作空間を参考にすることで、制作者の作業意図や技能に合わせた文化財デジタルデータ閲覧デバイスの開発を行う。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課　河内晋平

【スタッフ】　河内晋平（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）

【主な成果】
昨年度に調査、データベース化した職人の制作空間に関する映像と取得した 3D データ（高精細デジタル測定技術と職人の知識を融合させた工芸文化財復元の研究：代表佐藤雅彦）について調査検討し、実際に閲覧デバイスの設計と実装をおこなった。

【年度実績概要】
1. 閲覧デバイス設計
表示ディスプレイと各種センサーについて調査を行い、実際にコンピューターディスプレイと iPad を用いて開発実験を行った。またセンサーについてはジャイロセンサーを始め、既存のデバイス（wii コントローラー、iPhone 等)に使用されているセンサーについて各種起動ソフトとともに検討と実験を行った。

デバイス使用時の調査風景

2. 閲覧デバイス開発
まずはコンピューター画面上で動かせるコンテンツを使用し、予想される閲覧者（職人）の動作に合わせて開発実験を行った。その後 iPad を使用し制作空間の中でのユーザービリティをより考慮したデバイス開発を行った。
また、デバイス内で表示する 3D データの形式や容量についてもデータ編集を行った。
3. 開発したデバイスを使用しての実験
開発したデバイスを実際に使用してもらい、改良点などについて検討を行った。その結果を反映し改良を加えたデバイスを開発した。その後、新たに出てきた要望についても開発のための調査を行っている。

【実績値】
ソフトウェア開発　2 件
・閲覧デバイスソフトウェア bata 版完成　1 件
・閲覧状況記録デモ機能　1 件

【備考】

Apple 社 iPad を使用したデバイス操作図

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-18

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
文化財閲覧に関するデジタルデータの活用法についての考察と、実際に使用するデバイスを開発しその利用効率について様々な実空間において調査することは今後より必要となってくる。本研究は文化財デジタルデータ活用について職人の視点から考察しているが、文化財復元や博物館展示での文化財閲覧の新たな方向性を探る上でも有益であり、将来に結びつく重要な情報の取得であると考えられる。

2．定量的評価

観点	ソフトウェア開発件数					
判定	A					

備考
情報収集に関してはデバイス設計のために予定していた機器の調査、開発後の職人への調査とその改良を十分に行い、実際に使用する 3D 閲覧デバイスができた。また、今後の研究発展もふまえ、閲覧だけでなく閲覧状態を記録するデータ収集についても研究、開発を始めることができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	職人が文化財復元に際して実際にどのような情報を必要としているのかについての調査を実際のデバイスを開発し実施できた。これらの成果を踏まえつつ、文化財閲覧時の必要情報について記録する手法の検討を行い、それらの結果を今後のデジタル閲覧デバイス開発に活かしていく。本研究での職人の視点から考察するという手法はこれまでとは違う文化財情報提示の可能性について考察できる有効な調査方法であった。今後、より多くの制作者の意見を収集し、これまでにない閲覧デバイス開発へと継続させていく。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	復元職人の作業記録映像から実際のデバイス開発ができた。デジタルデータ編集プログラムや閲覧デバイスのハードウェアについも実際に運用されている状況を参考にし、いくつかのプロトタイプの制作が行え、それらの情報をもとに完成品を開発した。今後は本研究で開発したデバイスを多くの方に使用してもらい、その成果を調査し資料としてアーカイブを構築していくことが必要となる。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-19
(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	19)狩野晴川院養信筆「法隆寺什物図」の研究(科学研究費補助金)((5)－①－ⅲ)

【事業概要】
江戸時代後期の幕府御用絵師・狩野晴川院養信は、古画・古絵巻の模本制作に積極的に取り組んだと知られているが、絵画だけでなく古器物等を含む宝物の模写もしており、中でも東京国立博物館の所蔵する「高野山学侶宝蔵古器及楽装束図」と「法隆寺什物図」は比較的規模が大きい作例と言える。前者は既に報告書の刊行にまで至っているため、まず本研究では後者の基礎的な調査研究をし、今後、養信による寺社宝物模写の全容を明らかにすることを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課　安藤香織

【スタッフ】安藤香織（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）

【主な成果】
昨年度、予定していた「法隆寺什物図」の調査とデジタル撮影を終えたことを踏まえ、本年度は東京国立博物館が所蔵する狩野家模本類のうち、「法隆寺什物図」の研究にも重要と思われる作品を選別し、2 月 1 日現在「高野山学侶宝蔵古器及楽装束図」をはじめとする 37 点を撮影した。また、養信自筆の「公用日記」について、法隆寺什物の模写に関する記事を探し、該当部分を翻刻した。昨年整備した「模写された宝物の一覧表」と「画中の墨書翻刻」については点検の上で手直しをし、論文に付して発表するために適した状態にした。以上の成果は調査報告としてまとめ、2011 年 4 月発行の『MUSEUM』631 号に発表する。

【年度実績概要】
１、撮影
本年度は、養信による宝物模写の全容を論じるのに必要な周辺作品として、「高野山学侶宝蔵古器及楽装束図」をはじめとする 31 点の狩野家模本類をデジタル撮影した。撮影にはカメラマンと作業補助の協力者を依頼し、利便性と普及性を考えて、当館における基本的な撮影条件を満たすかたちで実施した。

２、「公用日記」翻刻
昨年度は着手できなかったため、今年度改めて、「公用日記」の記事のうち「法隆寺什物図」にかかわる記述を抜き出し、翻刻を行った。同様に、受け入れ時の状態がわかる館史資料に関しても該当部分の翻刻をした。以上は、古文書を専門とする協力者の確認を得ながら行った。

３、調査結果とりまとめ
昨年度の成果である作品のデジタル画像、模写された宝物の一覧表、墨書の翻刻を適宜編集し、上述した「公用日記」翻刻など本年度の成果も反映させて、調査結果を報告できるよう取りまとめた。以上を 2011 年 4 月発行の『MUSEUM』631 号に発表する。

【実績値】
調査・撮影日数：8 日（協力者：撮影者 1 名、撮影補助 1 名）
撮影件数：37 件
撮影枚数：448 枚
翻刻作業：2 日（協力者：1 名）

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-19

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	A	A	A

備考
独創性をＢとしたのは、今回は基礎的な調査の段階であるため、独創性が認められるというまでには至っていないと判断したためである。ただし、今回の綿密な調査で得られた基礎的情報は、発展的に活用できるため、今後の研究には非常に有益である。また、本年度も必要に応じて専門の研究協力者を依頼したが、これにより作業効率が上がり、正確性も増していると考えられる。

2．定量的評価

観点	撮影作品数	撮影枚数	翻刻作業日数	作業協力者数		
判定	A	A	A	A		

備考
撮影した作品数は当初の予定よりも若干多く、十分に評価できると考える。撮影枚数、翻刻作業の日数、全体の作業協力者数も、過不足なく適当であった。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	昨年度、「法隆寺什物図」の基礎的調査・撮影を終えた際、同筆の「高野山学侶宝蔵古器及楽装束図」やその他の周辺作品を調査し検討する必要性を感じた。そのため本年度は方針をやや修正し、周辺作品の撮影に取り組み、基礎情報の収集に着手することができた。また昨年度実施予定であった「公用日記」の翻刻は本年度無事に終了することができ、昨年度の成果物を修正したものと併せて、論文に生かすことができた。「法隆寺什物図」を十分な情報、画像とともに一般に紹介することは、今後の狩野派研究の発展につながると期待できる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は、本年度で終了である。「法隆寺什物図」の基礎的調査をし、充実した情報とともに紹介することを目標とした本研究は、十分達成できたと考える。同時に、本研究はより広い視野を持つ、養信の寺社宝物模本制作に関する研究を推進するための第一歩であり、今後は別の課題としてこれらの研究に取り組んでいきたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-20
(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	20) 東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究（科学研究費補助金）((5)－①－ⅱ)

【事業概要】
国内外に所蔵される東アジアの書道史に関わる作品について、1 点ごとに詳細な書誌や伝来などの情報と、デジタル画像を収集する。さらに、科学機器を用いて、料紙の技法、変遷、使用法を検証するとともに、時代による書風の特徴やその変化などを調査研究する。また、個々の作品に関する歴史的・文学的調査も進める。これらによって、書の作品を、料紙と書風という二つの側面から解明し、複合的・総合的なデータ作成を行う。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部長　島谷弘幸

【スタッフ】
神庭信幸(保存修復課長)、高橋裕次(博物館情報課長)、富田淳(調査研究課長)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、荒木臣紀(保存修復課環境保存室主任研究員)、恵美千鶴子(学芸研究部調査研究課任期付研究員)、赤尾栄慶(京都国立博物館副部長)、羽田聡（京都国立博物館学芸部企画室研究員)、丸山猶計(九州国立博物館学芸部主任研究員)

【主な成果】
装飾料紙を用いた古筆・典籍を中心に、展示履歴等によって把握できる情報をもとに、調査対象となる作品のリストを作成した。国内では、東京国立博物館・九州国立博物館・三の丸尚蔵館等、海外ではフランスの国立図書館、アメリカ・クリーブランド美術館等に収蔵されている作品について、デジタル写真撮影と、作品の筆跡および料紙に関する調査を実施した。

【年度実績概要】
1. 東京国立博物館所蔵の装飾料紙作品の調査とデータ化
東京国立博物館が所蔵する装飾料紙作品の調査とデータ化を行った。今年度は、東京国立博物館において、本研究成果を生かした特集陳列「日本・中国・朝鮮の料紙」(9 月 18 日～10 月 24 日）を実施し、解説のパンフレットを配布した。
2. 特別展に関係する作品の調査とデータ化
2013 年度に東京国立博物館で開催予定の特別展「和様の書」(仮称）においては、本研究と関係の深い作品が一堂に展示される予定である。その展示準備を兼ねて、関係作品の詳細なデータを収集した。
3. 他機関への調査
国内では、九州国立博物館、宮内庁三の丸尚蔵館、筆の里工房、ハラ・ミュージアム・アーク、個人所蔵者宅へ出張し調査を行った。海外では、フランス・国立博物館、韓国・国立中央博物館、アメリカのクリーブランド美術館、フィラデルフィア美術館、フリア・ギャラリー、アメリカ・個人所蔵者宅へ出張、装飾料紙を用いた写経・古筆・典籍等の調査を行なった。許可の出た作品に関しては、東京国立博物館内部での調査と同様に、顕微鏡による料紙の拡大画像の撮影を行い、データの充実をはかった。

書風を検討するために、文字の拡大写真を撮影。蝶下絵和歌巻(光悦筆、ハラ・ミュージアム・アーク所蔵)より。

【実績値】
・研究会などでの発表
島谷弘幸「古筆における伝統と創意」(日本書芸院展記念講演会)平成 22 年 4 月 20 日ほか計 9 件
・論文掲載数
島谷弘幸「古筆における伝統と創意」(『公益社団法人　日本書芸院会報』150 号、公益社団法人日本書芸院発行、平成 22 年 8 月）　ほか計 6 件
調査件数 約 70 件、写真撮影点数 約 1500 点、データ入力点数 約 300 点、文献資料のデジタル化 3 件

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-20

(様式 2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	S	A

備考
本研究はすでに三年間の基礎研究を行っており、実質的には四年目にあたる。継続して行っていることで、基礎的なデータを確実に収集できた。オリジナリティの高い調査内容であるが、調査方針の再検討も行った上で、その調査方法は確立したと言える。その方法にしたがって他機関においてもすみやかに調査を進めることができた。科学研究費を使用して、協力者を増やし、より多くの情報を得ることができた。

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査件数	写真撮影点数	データ入力点数	文献資料のデジタル化	研究会発表
判定	A	A	A	A	B	A

備考
本年度は当初より他機関への調査を行っており、調査件数や調査データの入力点数は増加している。調査の成果を論文や研究会、特集陳列等で年間を通して定期的に公表できた。文献資料のデジタル化のみ、昨年度に比較して件数を増やすことができなかった。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究は継続的に行ってきていることで、調査効率が上がり、その成果の公表についても、論文や特集陳列等で確実に行うことができた。光学顕微鏡などの科学機器を用いた客観的なデータをさらに収集して、調査の内容を充実したものにすると同時に、さらなる成果を刊行物などで公開していく方針である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの博物館の国際交流の実績を反映して、海外においても中国やフランス、アメリカなど東アジアの書道史に関わる資料の調査を行うことができた。その調査を継続的に行っていく必要がある。また、これまで収集した調査データや成果をひろく公表するとともに、所在情報や、調査方法について、相互に連絡を取り合っていきたいと考えている。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-21
(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	21）中国書画の表装に関する基礎的研究(科学研究費補助金)((5)-①-ⅱ)

【事業概要】
本研究は、中国の諸文献から表装に関する記述を整理し、歴史的な様式の変遷を明らかにしつつ、日本および中国に収蔵される中国書画を実際に調査し、「中国表装」および「日本表装」の双方について、時代や地域ごとの様式や素材のデータを網羅的に収集・整理し、表装の変遷に関する体系的な調査研究を進めようとするものである。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長　富田淳

【スタッフ】富田淳(調査研究課長)、鍋島稲子(台東区立書道博物館主任研究員)

【主な成果】
『歴代名画記』唐・張彦遠などの中国歴代の文献から、書画の表装に関する記載を収集・整理した。また、北京故宮博物院・香港中文大学文物館・京都国立博物館・大阪市立美術館・五島美術館・三井記念美術館・東京国立博物館に所蔵される主として中国の書画を調査し、表装の諸データおよび画像データを収集した。

【年度実績概要】
文献調査
・『歴代名画記』唐・張彦遠、『書史』・『画史』北宋・米芾、『南村輟耕録』元・陶宗儀等から、書画の表装に関する記載を収集・整理した。

作品調査
・北京故宮博物院「清宮善本碑帖特展」を視察、清朝宮廷作品 46 件を調査した。
・香港中文大学文物館の所蔵する漢碑「夏承碑」「西嶽華山廟碑」2 件を調査した。
・三井記念美術館の所蔵する中国書跡 14 件を調査した。
・五島美術館の所蔵する中国書跡 2 件を調査した。
・京都国立博物館の所蔵する中国書画 8 件を調査した。
・大阪市立美術館の所蔵する中国書画 11 件を調査した。
・東京国立博物館の所蔵する墨蹟(日本表装)8 件を調査した。

上記の成果に基づいて、研究会発表(清宮蔵善本碑帖特展専題座談会)や論文(『拓本とその流転』)として発表した。

【実績値】
調査回数：海外 2 回、国内 4 回。調査作品：91 件　撮影点数約 180 カット。
論文発表：「華夏と安国」(『拓本とその流転』)など 3 編。
研究会発表：「日本に現存する清朝宮蔵の拓本について」(北京故宮博物院) 1 回。

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-21

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適宜性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A

備考
本研究において得られた成果の一部を、東京国立博物館と台東区立書道博物館の連携企画展である「拓本とその流転」に反映させた。将来的には、毎年継続して実施している中国書画の修理において、修理方針を検討する際の基礎データとして有効な資料となりうる。

2．定量的評価

観点	調査回数	論文等				
判定	A	A				

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	データは当初の研究計画にそって蓄積･整理が進んだ。また本研究で得られた成果の一部を、論文や学会発表として公開することもできたためＡと判断した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は当初の研究計画にそって、順調にデータの蓄積・整理・発表ができたと考える。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-22

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	22）清時代末期の訪中調査における写真資料に関する調査研究（科学研究費補助金）（(5) -①-ⅱ）

【事業概要】

東京国立博物館が収蔵する写真資料のうち、清末民初に中国において文物、史跡の撮影を行った小川一眞及び早崎梗吉、関野貞の写真資料に焦点をあて、他機関が所有する文献資料および実地調査によって、写真が撮影された行程、未詳な被写体、被写体が選択された背景を明らかにし、当時における写真撮影の実態を解明する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課　関紀子

【スタッフ】

関紀子（博物館情報課情報管理室任期付研究員）、富田淳（調査研究課長）

【主な成果】

東京国立博物館が所蔵する『支那写真帖』に添付される山東地方の写真をもとに、現地で実地調査を行ない、撮影された場所の特定と現状との比較を行なった。調査の過程で、これまで不明であった撮影地を特定することができ、明治時代に行なわれた考古、美術、建築、金石と幅広い分野に渡る訪中調査の一端を確認することができた。

【年度実績概要】

東京国立博物館が所蔵する『支那写真帖』は、中国の史跡、文物、風景写真を添付した写真帖であるが、目録には簡単な撮影地が記されているのみで、撮影者、撮影時期等が不明であった。近年の調査で、一部に茨城県天心記念五浦美術館が所蔵する早崎梗吉が撮影した原板と一致する写真が含まれていること、また関野貞の『支那仏教史蹟』に掲載される写真が含まれることが明らかとなった。

今年度はこのうち、関野貞が明治 40～41 年に行なった山東地方の調査に関わる写真に注目し、『支那写真帖』及び『支那仏教史蹟』に掲載される写真が撮影された場所の特定と調査の行程を追うため、2 回にわたり山東省で現地調査を行なった。

第 1 回目は、泰安、袞州、済寧、嘉祥県、肥城県、青州地方を調査。この調査では、主に漢時代の石碑や画像石、北魏～唐時代の石窟を調査した。

第 2 回目は、曲阜を中心に孔廟や孟廟など明～清時代の建築群と、撮影当時には孔廟にあった石碑群を漢魏碑刻陳列館で調査し、関野の建築や石刻史料考証の足跡を追った。

「孟廟・復聖殿」　平成 22 年撮影

明治 40 年撮影　『支那写真帖』より

【実績値】

第 1 回目山東調査…泰山、岱廟、普照寺、蒿里山冥福寺、袞州興隆寺塔、京杭大運河、智照禅師塔、済寧文廟、鉄塔寺塔（現済寧市博物館）肥城県孝堂山石室、嘉祥県武氏石室、青州雲門山石窟、駝山石窟を調査し、1,090 画像撮影。

第 2 回目山東調査…孔廟、孔府、孔林、孟廟、孟府、孟林、重興寺塔を調査、966 画像撮影。

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-22

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　これまで､あまり行なわれてこなかった古写真の撮影地の特定と､実地調査による現状との比較によって､すでに失われ、写真でのみ知りうることができる史跡や文物の実状を把握することができた。

2．定量的評価

観点	調査回数	写真撮影数				
判定	A	A				

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査地を山東地方に焦点を絞り、明治時代に行われた山東地方の各分野の調査地をほぼ網羅することができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査は 3 年計画であり、順調に進んでいる。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-23

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	23）占領期の教育政策における国立博物館の役割に関する調査研究（科学研究費補助金）（(5) -①-ⅱ）

【事業概要】

本研究は、占領期（1945 年から 1952 年）の連合国軍最高指令官最高司令部（GHQ/SCAP 以下 GHQ）による歴史教育政策を調査し、国立博物館を中心に据えた歴史教育事業の成果とその意義について考察することを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課　神辺知加

【スタッフ】

神辺知加（博物館教育課教育講座室主任研究員）

【主な成果】

本研究は、博物館関係文書データベース構築のための CIE 文書の調査を行った。
文書検索は国立国会図書館が資料選別のため付けた分類記号（十進分類）及び分類記号ごとの文書目録（荒敬、内海愛子、林博史『国立国会図書館所蔵　GHQ/SCAP 文書目録』全 11 巻）を手がかりに、本研究に該当する文書を探し出し、和訳を行い、データを蓄積した。

【年度実績概要】

1 国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書　博物館関係の資料を選別、和訳を行った。
2 国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書　和訳のデータの蓄積を行なった。

【実績値】

国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書　博物館関係の資料和訳　　200 枚
国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書　博物館関係の資料データ化　200 枚

【備考】

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-23

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	B	A	

備考
本研究の基本資料となる国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書　博物館関係の資料を選別、和訳、データ蓄積を行った。これによって必要資料が整理でき検索ができるようになった。

２．定量的評価

観点	情報収集					
判定	A					

備考
マイクロフィルムを購入し携帯型パソコンを活用することにより､効率的にデータ収集を行なうことができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究は、膨大な文書１枚１枚に目を通す必要があるが、国立国会図書館のマイクロフィルムを活用し迅速に、関係文書を選別することができた。しかしながらマイクロフィルム撮影時の状態によって、内容が判別しづらい文書もあり和訳に予定より時間がかかった。次年度には、今年度蓄積したデータを分析し調査研究を進める予定である。また蓄積したデータはデータベース公開にむけて準備する予定である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究の計画では、博物館関連の全データを選別し、和訳する予定であった。今年度は、ほぼ予定通りに進行した。来年度は蓄積、検索のためのスキャナーを活用し、速やかにデータベースを構築したい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-24
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	24）宮廷工芸に関する物質文化的研究―生活感のある工芸史の構築をめざして―（科学研究費補助金）（(5) -①-ⅱ）

【事業概要】
本研究は、日本の宮廷で用いられた建築・服飾・調度品などの工芸資料について、生活様式を反映する物質文化の見地から研究し、公家階層の生活様式に基づいた宮廷工芸の分類体系を構築するものである。本研究は、日本の公家階層が用いた宮廷工芸という特定事例を対象とするが、その成果は、歴史研究の物質文化的側面を深化させて、人間の生活感を反映する歴史の構築に資する工芸史研究の試論とすることを念頭におく。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課　猪熊兼樹

【スタッフ】
猪熊兼樹（列品管理課貸与特別観覧室主任研究員）

【主な成果】
本年度は、本研究の基本資料となる東京国立博物館蔵『旧儀式図画帖』の内容研究を行なった。それとともに同図画帖の関連史料となる宮内庁書陵部蔵『公事録』その他の文献を複写し、その内容を検討した。また京都葵祭に赴き、その祭礼に関する調査を行なった。

【年度実績概要】
１．東京国立博物館蔵『旧儀式図画帖』の内容研究を行なった。
２．宮内庁書陵部蔵『公事録』その他の史料を複写し、その内容研究を行なった。
３．京都葵祭に赴き、その祭礼に関する調査を行ない、静止画と動画による祭礼記録を行なった。

『旧儀式図画帖』の一部

葵祭の牛車

【実績値】
宮内庁書陵部所蔵史料複写（A4 紙焼き）　9312 枚
国立公文書館所蔵史料複写（A4 紙焼き）　450 枚
京都葵祭祭礼資料　（静止画・動画）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-24

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
本研究の基本資料となる東京国立博物館蔵『旧儀式図画帖』の内容研究を行なった。そして同図画帖の関連史料となる宮内庁書陵部蔵『公事録』をはじめとする文献を複写した。これによって前近代の宮廷における建築・服飾・調度などの工芸資料について、図画的かつ文献的な観点から検討するための有力な資料・史料が充実した。また京都葵祭に赴き、同祭礼の静止画・動画による記録を行なった。これによって前近代の工芸資料について、用例的な観点から検討するための有力な記録が充実した。

２．定量的評価

観点	情報収集					
判定	A					

備考
史料の所蔵機関や祭礼の実行組織から懇切な協力を得ることができ、本研究に必要な史料や記録を充実させることができた。携帯型パソコンを活用することにより、調査地における効率的なデータ整理を行なうこともできた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究は、膨大な文献複写を必要とするが、幸いにして、史料所蔵機関の懇切な協力を得ることができ、調査の早い段階で史料が充実した。また祭礼の調査についても、実行組織および関係者の厚情によって、円滑な調査を行なうことができた。次年度には、予算的事情によって見送った文献史料や現地記録などを一層充実させ、それらの分析に努める予定である。大容量のハードディスクや史料をデータ化するスキャナーなどを活用すれば、より充実したデータを収集できるものと考える。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究の計画では、初期段階で史料を収集し、記録を蓄積してのち、すみやかに分析にかかる予定であった。今年度は、ほぼ予定通りに進行した。紙媒体にせよデジタルにせよ、大容量のデータを収集するため、ハードディスクやスキャナーなどを活用すれば、より充実したデータを収集できるものと考える。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-25
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	25)近現代における古日本染織の移動とコレクション形成に関する基礎的研究（科学研究費補助金）((5) -①-ⅱ)

【事業概要】
本研究は、近現代に形成された古日本染織コレクションがいつ、どのような形態のものが、どのような経路で、どのような形状の変化を伴いながら移動し、コレクションとして集積されたのかを調査することによって、染織史研究の基盤となる古日本染織コレクションの形成過程を明らかにし、古日本染織が近現代に形成された美術史の中でどのように価値付けられたのかを明らかにする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	企画課　小山弓弦葉

【スタッフ】小山弓弦葉（企画課特別展室主任研究員）

【主な成果】
本年度は、当館に所蔵される日本で最初の小袖コレクションである野口彦兵衛旧蔵コレクション、及び、洋画家・岡田三郎助が蒐集した小袖および小袖裂コレクションの内、現在埼玉・遠山記念館に所蔵されている未公開分を含む染織資料を調査し、明治後期から大正初期にかけて蒐集された古日本染織コレクションのデータを集積し、その傾向等の分析を行った。

【年度実績概要】
本年度は、東京国立博物館に所蔵される、染色作家・野口彦兵衛が蒐集した古日本染織コレクション、および、洋画家・岡田三郎助が蒐集したものの内、現在、埼玉・遠山記念館に所蔵される古染織コレクションを調査し、その画像付きデータベースをファイルメーカーで作成した。調査内容としては、まず、画像のないものに関しては、新規撮影を行って画像で閲覧可能なデータの集積を目指した。また、不明なコレクションの伝来や 古日本染織の古美術品としての流通経路を所蔵館や国会図書館に所蔵される資料によって可能な範囲で調査した。岡田三郎助コレクションの画像については、遠山記念館の協力を得て画像のあるものについては画像資料をご提供いただいた。また、画像のない未公開の小袖裂についてはでデジタル画像の撮影を行った。さらに、同コレクションの所蔵リストや目録を提供いただき、それらの基礎資料を元にリストをデータ化するとともに、コレクションの全容を調査しその形態や形態の変化、墨書やラベルといった記録を中心に調査を行った。以上の調査によって、東京国立博物館に所蔵される野口彦兵衛コレクションの構成や形成過程とその由来を明らかにするとともに、ほぼ同時期に形成されたと考えられる岡田三郎助のコレクションとの比較検討が可能となった。
古日本染織コレクションデータベースの入力、および、調査で得られたデータについては検索がしやすいようにそれぞれのコレクションについてリストを作成し、非常勤調査員がデータの入力と整理を担当した。また、本調査の一部は東京国立博物館研究誌『MUSEUM』627 号において、その成果を論文「近代染織史研究における『辻が花』の受容について」で発表した。

【実績値】
野口彦兵衛旧蔵古染織コレクションデータ（調査データ入）　119 件
岡田三郎助旧蔵古染織コレクションデータ（調査データ入）　217 件
長尾欣弥旧蔵古染織コレクションデータ（未調査分）　268 件
野村正治郎旧蔵古染織コレクションデータ（未調査分）　460 件

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-25

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	データ集積					
判定	A					
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、近代に形成された古日本染織コレクションの内、その最初期と考えられる野口彦兵衛および岡田三郎助のコレクションに重点を置き、初期におけるコレクションのデータを集積することによって、その全容をコレクターの視点からうかがうことが可能となったかつてない試みが達成できた。次年度以降も同様の手法によって、順次、近代コレクターの古日本染織コレクションのデータを集積し比較検討資料をさらに充実させたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	近代の日本人コレクターによって蒐集された主要なコレクションは、今回データを集積した野口彦兵衛、岡田三郎助の他に、古美術商である野村正治郎、実業家・長尾欣弥、実業家・根津嘉一郎、日本画家・吉川観方などがあげられるが、本年度は、その初期段階における二人の主要な蒐集品を調査し、データを集積することができた。次年度以降は、同様の手法によって、日本のコレクターによるコレクションの調査を進めるとともに、海外に流出し、蒐集されることになったコレクションについても調査を進め、より幅広い視野で古日本染織コレクションの形成過程を概観できるよう、情報の集積を図りたい。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-26

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	26）東京国立博物館所蔵古文書データベース（科学研究費補助金）（(5) -①-ⅱ）

【事業概要】

文部科学省科学研究費補助金(公開促進費データベース)を利用して、東京国立博物館で所蔵する古文書について、書跡収蔵品を対象に調査を実施。古文書学によって記載内容の検討，形式・様式の分類，使用された料紙の素材分析を行い，１通ごとの古文書名称の特定，法量計測，写真撮影など基礎データを収集した。記載された文字を翻刻し最終的に画像とテキストを統合したデータベースを東京国立博物館情報アーカイブスで公開する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課　　高梨真行

【スタッフ】

髙梨真行（調査研究課書跡・歴史室研究員)、高橋裕次（博物館情報課長)、丸山猶計（九州国立博物館学芸部文化財課資料登録室主任研究員)

【主な成果】

博物館が所蔵する古文書の内，B1715 伏見天皇綸旨（1 幅)，B1738 足利尊氏御判御教書（1 幅)，B1739 織田信長朱印状（1 通)，B1740 徳川家康朱印状（1 通)，B1972 前田利家朱印状（1 通)，B3175 豊臣秀吉朱印状（1 通)，B1746 江戸幕府老中奉書（1 通)，B3045 藤原為氏自筆譲状（1 通)，B1768 徳川幕府朝鮮国王往復書翰（62 通)，B1769 徳川幕府琉球往復書翰模本（48 通)， B1878 民政裁判所触書（1 通)，B1879 会計官民政所触書（1 通）等。

【年度実績概要】

平成１９から２１年度に行った古文書調査におけるデータを基礎として，対象古文書について，古文書名検討，差出・宛所の特定，作成時代特定，様式・検討，料紙・内容分析，釈文翻刻，１点（１通）ごとの写真撮影を行った。

九州国立博物館に長期管理替となっている古文書（B1768 徳川幕府朝鮮国王往復書翰 5 通，B1769 徳川幕府琉球往復書翰模本 17 通）について，平成 22 年 11 月 16 日から 18 日にかけて出張調査を実施。

本年度調査・整理が完了したデータに関しては 2011 年 6 月から東京国立博物館情報アーカイブス(http://webarchives.tnm.jp/archives/cat/database)にて公開予定。

調査対象古文書

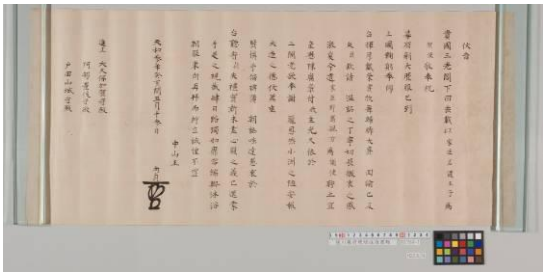
掛軸装　50 点,巻子装　19 点,非表装(まくり)　183 点 対象総計 252 点

データベースの形式

・古文書１通を１レコードとする。

・１レコードは古文書，差出・宛所，年代，様式，料紙・内容，釈文(フルテキストデータ)と数カットの本紙画像で構成

【朝鮮国王李渼国書（B1768 徳川幕府朝鮮国王往復書翰の内)】



【中山王尚貞書状（B1769 徳川幕府琉球往復書翰模本の内)】

【実績値】

調査対象数　列品　103 件，古文書点数では 282 点（通）

撮影画像数　1,040 カット 内整理済公開予定　1,047 カット

翻刻釈文テキストデータ数　282 点（通）

１レコードあたりの情報量　約 3M バイト(画像とテキストデータ)

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-26

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	A	A	A

備考
古文書の年代も，平安時代から明治にわたり，時代的にも広い範囲を対象とし得たため，日本史各時代を専攻とする研究者や大学生・大学院生のニーズにも対応できると判断される。また，朝鮮および琉球関係の外交古文書も対象としたため，交際交流の歴史に寄与することが可能と思われる。

2．定量的評価

観点	調査対象数	撮影画像数	テキストデータ数			
判定	A	A	A			

備考
科研費の有効的使用に成功し，計画通りのデータ整理が完了し得た。古文書に記された文字をフルテキストデータ化しての公開により,歴史学や書跡など関連諸分野の研究推進に対して良質な情報を提供することができたと思われる。また本年度で当館が所蔵する古文書については約６割の情報整備が完了したことになる。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	生涯学習機会の増加から，学生はもとより多くの層からの利用が期待できる。古文書の画像と釈文を総合化した本データベースの公開によって，国民全体の資源としての有効利用に資することができたと判断される。次年度以降は残る４割の館蔵古文書の情報整備に着手したい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	古文書という東アジア圏に共有される漢字で記されたテキストデータについて，科学研究補助金の導入により調査・研究を実施し,原典の高精細画像を準備して，データベース化して公開したことは、法人全体としての計画にある「我が国における博物館のナショナルセンターとしての機能の強化」および当館の年度計画にある「博物館情報アーカイブを運用し、収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図る」という事項に対応した事業であると思われる。特に本年度は科学研究費の有効利用に成功して，その整備と公開に更なる推進がはかられたと判断される。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-27
(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	27)東京国立博物館所蔵印譜データベース（科学研究費補助金）((5)-①-iii)

【事業概要】
東京国立博物館では、漠南印譜コレクション、懐玉印室コレクションなどの印譜を所蔵する。歴代の主要な印譜を網羅するこれらのコレクションには、製作部数の少ない原鈐本や、編者自らが注記を書き加えた稀覯本が多数含まれており、内外からの閲覧希望が多い。しかしながら、これまで保存上の問題から必ずしも十分な公開が行われてこなかった。本事業では、東京国立博物館が所蔵する印譜およそ 2,300 件約 7,500 冊の画像データベースを作成する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課　関紀子

【スタッフ】
関紀子（情報課情報管理室任期付研究員)、富田淳(調査研究課長)、髙梨真行(調査研究課書跡・歴史室研究員)

【主な成果】
小林斗盦(庸浩)氏寄贈による懐玉印室コレクションのうち中国古銅印譜について撮影を行いデータを入力した。
平成 22 年 10 月から「東京国立博物館情報アーカイブ(http://webarchives.tnm.jp/archives/)において、東京国立博物館所蔵印譜 WEB データベース」として公開を開始した（平成 23 年 2 月現在、15,527 画像)。

【年度実績概要】
平成 22 年度は、平成 14 年に小林斗盦(庸浩)氏から寄贈を受けた懐玉印室コレクションのうち、張廷済『清儀閣古印偶存』や、呉雲『二百蘭亭斎古銅印存』、陳介祺『十鐘山房印挙』など中国古銅印譜の撮影およびデータ入力を行った。
本データベースの撮影は、印譜の体裁、装丁を明らかにするため、表紙、見返し、白紙を含む全頁撮影、半丁 1 カットを原則とし、レコード数は半丁 1 カットを 1 件とする。また、データの項目は、画像番号、資料番号、名称、作者・編者、時代、員数、形質、法量、備考である。

【実績値】
○データ作成件数　　25,470 件
（内訳）
張廷済『清儀閣古印偶存』　清・道光 8 年（1828）　500 件
朱為弼『鋤経堂集古印譜（朱為弼手注本)』　清・道光 8 年（1828）　86 件
潘季彤『聴颿楼古銅印彙』　清・道光 12 年（1832）401 件
張廷済『古印綴存（張廷済手注本)』　清・道光 14 年(1834)　50 件
呉式芬『双虞壷斎印存』　清・19ｃ　758 件
胡之森『青琅玕館摸古印譜』　清・道光 22 年（1842）　401 件
陳介祺『簠斎印集』　清・咸豊 1 年（1851）　2092 件
凌壇『采柏園古印沢存』　清・咸豊 7 年（1857）　193 件
何昆玉『吉金斎古銅印譜』　清・同治元年（1862）　854 件
呉雲『二百蘭亭斎古銅印存』　清・同治元年（1862）　1502 件
陳介祺『十鐘山房印挙』　清・同治 3 年（1864）　2186 件
呉大徴『十六金符斎印存』　清・光緒 17 年（1891）　4516 件
など
○公開画像　　28,098 画像

呉大徴『十六金符斎印存』

【備考】
「東京国立博物館情報アーカイブ」(http://webarchives.tnm.jp/archives/)において、東京国立博物館所蔵印譜 WEB データベース」として平成 22 年 10 月から公開。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-27

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 表紙、見返し、裏表紙、序文、跋文等の撮影も行い、装丁の状態や、文字データが確認できるよう、撮影に配慮した。						

2．定量的評価

観点	データ作成件数	公開画像数				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	予定画像数 25,000 を超える 28,098 画像の撮影とデータ入力を行うことができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	6 年計画で、撮影、データ入力は順調に進んでいる。 23 年度もこのペースを維持しつつ、撮影をすすめ、あわせて諸データの充実をはかり、より完備されたデータベースとして公開したい。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-28

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	28）隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究（科学研究費補助金）((5)-①-iii)

【事業概要】

本調査研究は隋唐時代の舎利荘厳に注目し、その実際を美術史、考古学、歴史学、保存科学を専門とする研究分担者が詳細に調査し、総合的に考察を加えようとするもので、本年度は山東省、河北省、山西省、陝西省において現地調査を実施する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課　和田浩

【スタッフ】

松本伸之(学芸企画部長)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、東野治之(奈良大学)、岡林孝作(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)、泉武夫(東北大学)、長岡龍作(東北大学)

【主な成果】

中国山東省、河北省、山西省、陝西省において現地調査を行い、仁寿舎利塔起塔寺院に関する多くの地理的データ及び、文献的資料を多数収集することができた。

【年度実績概要】

1. 文献収集

中国側研究者と協力し、中国国内でこれまでに発表、出版された、仁寿舎利塔起塔寺院跡から出土した遺物の報告書、研究論文、書籍を収集し、今年度調査地点の絞込み、現地との連絡調整、旅程の決定を行った。

2. 現地調査の実施

2010 年 8 月に中国側研究協力者の協力のもと、中国山東省、河北省、山西省、陝西省において 18 日間に及ぶ現地調査を実施した。これにより現地における①仁寿舎利塔起塔寺院に関する地理的データ、②仁寿舎利塔出土遺物と隋代関連遺物、③関連岳廟、等に関する詳細なデータを収集することができた。

舎利石函出土地の調査(2010.8.11 山東省)

3. 国内関連調査の実施

2011 年 3 月に東京国立博物館所蔵の関連遺物(舎利容器)の調査および、奈良県、京都府、岐阜県において国内関連遺跡及び遺物の調査を行なった。

【実績値】

仁寿舎利塔起塔寺院に関する地理的データ 27 点、記録画像 13,000 枚、収集資料(青州勝福寺遺物仁寿元年舎利塔下銘拓本)1 点、調査時の調書記録 5 冊 156 枚

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-28

(様式 2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳の実際について、美術史(彫刻史、絵画史、工芸史)、考古学、歴史学、保存科学を専門とする研究分担者が中国山東省、河北省、山西省、陝西省において詳細な現地調査を実施し、基礎資料を収集した。これにより、中国の造形美術を通して浮かび上がる信仰と思想について総合的な見地から考察をくわえる基礎が構築された。

2. 定量的評価

観点	収集情報数					
判定	A					

備考
　今年度は特に実資料を調査する機会に恵まれた。また、多くの制約が存在する中で地理的データが相当数収集できた成果は大きいと考える。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳の実際について、中国山東省、河北省、山西省、陝西省において詳細な現地調査を実施し、基礎資料を収集することができた。集積された基礎的データは従来にない重要な新知見を数多く含んだものである。本年度の調査により次年度以降の現地調査が着実に実施される基礎が確立されたので、次年度以降の調査による基礎データが集積されれば各分野の研究発表及び研究論文が成果と数多くなされるものと確信している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳の実際について、現地調査や研究会等を通じて、美術史(彫刻史、絵画史、工芸史)、考古学、歴史学、保存科学的見地からのデータ収集を当初計画の通り進めることができた。本年度の成果を受け、次年度以降も、中国現地調査及び国内関連調査による基礎資料の収集とそれにもとづいた研究のとりまとめを進めていく。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-29

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査および研究の推進
プロジェクト名称	29）前方後円墳体制東縁地域における国家形成過程の研究：常陸の場合（科学研究費補助金）((5)-①-ⅲ)

【事業概要】

本研究は日本列島の国家形成期にあたる古墳時代について、中央から遠く離れた「周縁地域」が中央の意思決定にどのように対応し、どのようなプロセスを経て国家段階の社会に進化したかを、常陸を具体例としてモデルとして提示することを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課　日高慎

【スタッフ】

佐々木憲一（明治大学教授)、田中裕（茨城大学准教授)、倉林眞砂斗（城西国際大学教授)、日高慎（保存修復課保存修復室主任研究員）

【主な成果】

茨城県かすみがうら市折越十日塚古墳（前方後円墳）の測量調査および横穴式石室の実測調査を行い、詳細な実測図を作成した。

また、3 月に茨城県小美玉市塚山古墳（円墳）の発掘調査をおこない、墳丘の確認および埴輪の詳細を調査した。

【年度実績概要】

１．現地調査の実施

2010 年 9 月にかすみがうら市折越十日塚古墳の測量調査および横穴式石室の実測調査をおこなった。茨城県かすみがうら市折越十日塚古墳は、以前から列島最後の前方後円墳の一つとして注目されてきたものである。しかしながら、測量図も石室実測図もないことから、今回測量調査および横穴式石室の実測調査をおこなった。この調査を通して、霞ヶ浦沿岸地域の前方後円墳の墳丘および内部主体の基礎的データを蓄積することができた。また 2011 年 3 月に茨城県小美玉市塚山古墳の発掘調査をおこない、墳丘の確認および埴輪の詳細を調査した。

２．文献収集

関連する研究論文や報告書等を収集した。

３．国内関連調査の実施

近畿や関東地方の関連する遺跡・遺物等の調査をおこない、常陸地域の首長墓との比較資料を蓄積することができた。

【実績値】

基礎的情報の収集　３件

- 前方後円墳の測量１件
- 実測調査１件
- 円墳の発掘調査による確認調査１件

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-29

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
本年の調査により、常陸のなかでも霞ヶ浦沿岸地域の首長墓の墳丘測量図を整備できたことは、今後の古墳研究において中央と周縁地域を比較する基礎が築かれたといえる。

2．定量的評価

観点	基礎的情報数					
判定	A					

備考
本年は考古学研究の基礎的情報である、古墳の測量調査、石室の実測調査を予定通り実施することができた。これまで古墳の形状が未詳であったものを明らかにした点で極めて重要である。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまで重要視されながら、形状が未詳であった古墳の測量図・石室実測図を作成することができた。この成果により、次年度以降に測量図・石室実測図の検討をおこなう。また、古墳時代中期の状況を知るため、茨城県小美玉市塚山古墳、石岡市舟塚山古墳の調査をおこなっていき、古墳時代を通した常陸の古墳の具体的様相を明らかにしたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の成果を踏まえ、次年度以降も継続的に常陸の古墳の測量調査、実測調査等をおこない、最終的な研究のとりまとめを進めていく。また、研究成果を研究会等により広く公開していくことも必要であり、次年度以降に進めていく予定である。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-30
(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	30) 古文書および古典籍の修復と装幀形態に関する用語の研究(科学研究費補助金)((5)－①－iii)

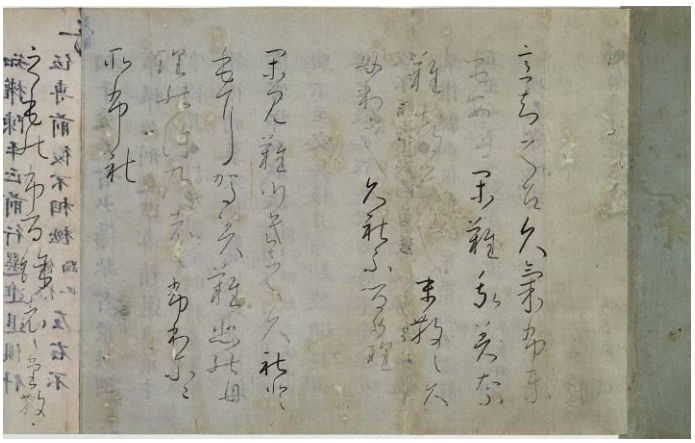
【事業概要】
　紙文化財の修復技術に関して、用語・名称に着目して研究を行うものである。紙文化財の修復技術には様々な系統があり、それぞれの系統によって、手法・工程、道具、材料をはじめ、用語・名称が異なっていることがある。そこで、工程全体の流れ、手法・各工程の内容と名称、道具と材料の使用法や名称を調査して分類することにより、紙文化財および無形文化財である装こう(表具、表装、装丁)技術に対する理解をより深めることを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長　高橋裕次

【スタッフ】
プロジェクト代表者：加藤雅人(東京文化財研究所保存修復科学センター主任研究員)、川野邊　渉（東京文化財研究所保存修復科学センター副センター長)、稲葉政満（東京芸術大学美術学部教授)、半田正博(東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター教授)

【主な成果】
　東京国立博物館に収蔵されている古典籍を中心に、形態、料紙などについてデータを収集した。また、料紙の製作技法に関する成果の一部を、全国漢文教育学会の『新しい漢字漢文教育』第 50 号、および第 51 号において公開した。

【年度実績概要】
　調査対象とすべき作品を選定し、その装丁形態、使用している料紙の種類や材質などについて調査を実施した。デジタルカメラや顕微鏡を用い、細部にわたって記録撮影を行った。そのデータにもとづき、作品の構造や、過去の修理において施された手法・工程などを検討した。



【実績値】
論文掲載
　高橋裕次「漢籍善本紹介－東京国立博物館(2)－」、「同－(3)－」、『新しい漢字漢文教育』第 50 号、第 51 号（全国漢文教育学会、平成 22 年 5 月、11 月）
調査回数　5 回、調査件数　30 件
収集資料　30 件

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-30

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　作品の構造を具体的に検討し、その手法・工程などを明らかにする点で成果があった。用語・名称などの情報の照合について作業を進める必要がある。

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数	調査件数	収集資料数		
判定	A	B	A	A		

備考
　東京国立博物館には、古典籍がまとまっており、時代や種類なども多岐にわたっている。調査回数は 5 回で、作品 30 件について調書を作成し、所定の成果をあげることができた。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査において、光学機器の導入により、客観的なデータの収集を効率よく多く行うことが可能となり、研究を質量ともに向上させることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査を継続的に行い、総合的に検討するために、内外の関連資料などの情報を収集していきたいと考えている。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-31
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	31）　彫刻におけるデジタル立体造形の可能性と表現方法の研究・教育への応用（科学研究費補助金）（(5)-①-ⅲ）

【事業概要】
芸術分野における立体表現として、アナログ的な造形彫刻の新しい表現研究に伴い、デジタルによる造形表現の可能性を相互反映し、その両面における可能性について探り、アーカイブとしてのデータベース研究活用と教育研究としての新しい芸術表現の獲得を目的とした基礎研究を行う。
今年度は特に、東京国立博物館所蔵・荻原守衛作「女」石膏原型からブロンズ鋳造を実施し、大型の像に対する非接触・非破壊の方法を用いたブロンズ製作に関し、一連の製作工程ついて実証的な調査研究を実施する。また、その成果を教育研究に活用し、「触れる彫刻」の展覧会を開催し、最終年度の報告書をまとめる。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	企画課長　井上洋一

【スタッフ】
プロジェクト代表者　北郷悟（東京芸術大学副学長）、プロジェクト協力者　木戸修（東京芸術大学美術学部教授）、橋本明夫（東京芸術大学美術学部教授）

【主な成果】
東京芸術大学美術館所蔵品の立体データアーカイブ作成の研究とデジタルデータによる教育としての応用研究ならびにコンピューター造形システムによる各入力プロセスの造形表現の研究を継続的に行ってきた。こうした研究におけるさまさまなデータをベースにしたレプリカを作成し、専門的な教育利用としての「触れる彫刻」の研究に反映させている。今年度は研究の最終年度として鋳造した原寸大ブロンズ像を用いて、2010 年 10 月 23 日～12 月 5 日までの間「明治の彫塑　ラグーザと荻原守衛」展を東京芸術大学美術館にて開催し、好評を得た。

【年度実績概要】
①東京芸術大学美術館等の所蔵品の立体データアーカイブ作成の研究とデジタルデータによる教育としての応用研究
・東東京国立博物館所蔵・荻原守衛作「女」石膏原型からブロンズ鋳造を実施。これまで試みられたことのなかった大型の像に対する非接触・非破壊の方法を用いたブロンズ製作に関し、一連の製作工程ついて実証的な調査研究を実施した。
・東京国立博物館所蔵「女」石膏像と東京芸術大学美術館所蔵「女」石膏像の比較検討を行った。
・東京国立近代美術館、碌山美術館、東京芸術大学が収蔵するブロンズ製「女」との比較検討を行い、彫刻研究のためのアーカイブとしての高精細データを作成し、これを如何に教育的に利用すべきかを検討した。
②①の成果をもとに、2010 年 10 月 23 日～12 月 5 日までの間「明治の彫塑　ラグーザと荻原守衛」展を東京芸術大学美術館にて開催した。

【実績値】
調査回数
東京藝術大学等にて 3 回
研究発表・論文
公表に向けて準備中

【備考】

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-31

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
本研究において作成したさまざまなデータをベースにしたレプリカを作成し、専門的な教育利用としての「触れる彫刻」の研究に反映させている。こうした研究は、その成果を展覧会の中に組み込むことなどで社会利用の可能性が増幅するとともに仮想空間の造形表現の展開と表現の可能性の広がりについても多方面から期待されている。
3 次元デジタルデータを用いたブロンズ鋳造の実施、それらをもとにした展覧会の実施など、当初の計画に従い所定の成果を得ることができた。

２．定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	C	B				

備考
彫刻研究のためのアーカイブとしての高精細データを作成するとともに「触れる彫刻」の教育的利用のための調査を行った。
特別展を開催することによって、今回鋳造を行った作品と、東京国立近代美術館、芸大、碌山美術館などの既存のブロンズ像との比較を直接行うことができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	彫刻研究のためのアーカイブとしての三次元高精細データの取得と解析出力による作品制作が良好に進展。こうした成果をもとに展覧会の中での「触覚展示」の可能性が大幅に広がったことは大いに評価される。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は概ね研究計画にそったかたちで順調に進められたと考える。この研究成果をまとめ、特に教育的利用に関しての具体的な提案を行っていきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-32
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	32)アジアの木地螺鈿―その源流、正倉院宝物への道をたどる―（科学研究費補助金）((5)-①-ⅲ)

【事業概要】
本年度はインドにて現地調査を行った。インドは東方アジアとイスラム圏をつなぐ狭間の位置にあり独自様式の螺鈿制作が行われているが、その制作地や製作実態などについて調査すべき余地を多く残してきた。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課　猪熊兼樹

【スタッフ】
研究代表者：小林公治（九州国立博物館）、研究協力者：原田一敏（東京芸術大学教授）ほか

【主な成果】
インド調査は現在螺鈿制作が比較的盛んにおこなわれているインド西北部、特にウダイプールの工房を中心に調査を行い、現代インドにおける螺鈿制作技術を中心とした情報が得られた。

【年度実績概要】
正倉院宝物として残されている螺鈿器は技法的に木地螺鈿、漆地螺鈿、樹脂地螺鈿の三種に分類される。インドは東南アジアまでの東方アジアと西方アジアとをつなぐ接点でもあるが、その螺鈿技術についてはほぼ不明と言って良い。こうした状況のなか、今回調査を実施し、インドの螺鈿は、木地螺鈿と同じく象嵌技術を多用する技法と、樹脂地螺鈿のように貝文様を地に貼り付け、その段差を漆などの素材で埋めていく技法との 2 種が存在することを明らかにした。

【実績値】
○調査回数　インド 1 回

○収集資料数　15 件
　記録画像ＣＤ 1 枚、貝片 14 枚

○調査概報　1 部

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-32

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　従来の研究ではほとんど行われていない視点から研究を実施できた。

２．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	B	A			

備考
　調査対象者との関係から、収集資料を十分に収集できたとは言い難いが、それ以外については当初計画同等ないしはそれ以上の成果を上げることができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査の回数は多くはないが、その中で従来にない新たな視点による調査成果を上げることができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	２１年度の中国調査や外国人研究者招聘、また今年度の調査などを通して順調に計画を達成している。こうした成果を受けて、最終年度となる 23 年度は木地螺鈿の調査を計画している。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-33

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	33)高精細デジタル測定技術と職人の知識を融合させた工芸文化財復元の研究（科学研究費補助金）((5)-①-ⅲ)

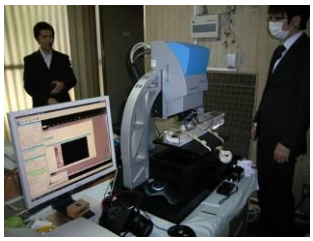
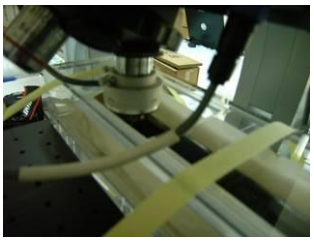
【事業概要】
高精細３次元デジタル測定技術と復元作業に精通した職人の知識を融合させて、従来にない制度と視点を持って、主に刀剣と刀装具の工芸文化財復元を行う手法を開拓する研究（2 年間）の 2 年目である。最新の高精細３次元デジタル測定技術を用いることで、これまでのように目視だけでは十分に分析できなかった技巧を解明して復元作業に活用することを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課　河内晋平

【スタッフ】
佐藤雅彦（東京芸術大学教授）、桐山孝司（東京芸術大学准教授）、桂英史（東京芸術大学准教授）、河内晋平（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）

【主な成果】
本年度は、昨年度に試撮影にて使用したテックサイエンス社の Alicona 機を用いて奈良県春日大社御宝物「柏木菟腰刀」の目釘金具の撮影、計測とデータ処理を行った。また、Tesco 社 X 線 CT スキャン機器での刀身と刀装具（鐔）の撮影、計測、データ処理を行った。撮影計測結果とともに本研究で用いた冶具の安全性と撮影精度、作業手順について、考察と再検証を行った。

【年度実績概要】
1. 奈良県春日大社御宝物「柏木菟腰刀」の目釘金具の計測撮影
　昨年度開発した冶具とテックサイエンス社 Alicona 機を使用して計測撮影を行い、その後撮影時の安全性についての考察を機器操作技術者とともに考察、検討した。
2. Tesco 社 X 線 CT スキャン機器においては、刀と刀装具（鐔）の撮影を行い、制作した冶具の安全性についての考察と検証を行った。
3. 計測データの処理、計測冶具の改良点をふまえ冶具の再設計を行った。

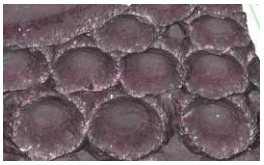
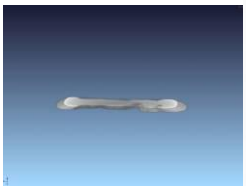
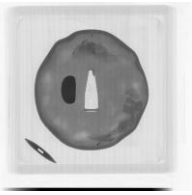


春日大社での撮影

【実績値】
計測撮影
テックサイエンス社 Alicona 機を使用して奈良県春日大社御宝物「柏木菟腰刀」の目釘金具の計測撮影
取得データ：奈良県春日大社御宝物「柏木菟腰刀」の目釘金具の 3D データ、6 種類のデータ取得

Tesco 社 X 線 CT スキャン機器においては、刀と刀装具（鐔）の計測撮影
取得データ：刀身内部の情報、刀装具（鐔）断面画像情報、正面 X 線画像情報取得、4 種類×3 データ取得

【備考】
取得データ画像

春日大社宝物測定 3D データ（１部）




X 線 CT 測定データ（１部）

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-33

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　文化財撮影に関しての安全性を検討し奈良県春日大社御宝物「柏木菟腰刀」撮影、測定を行った。本研究で使用する機材での安全性を重視した冶具製作の有効性が確認できた。また今後使用を検討する撮影機材においても有効に活用できる形状や性能について検討ができ継続性に期待ができる。実際に今年度の早い時期に撮影を実施できたことにより確認、修正すべき点がより詳細に明らかとなった。これらの情報の蓄積が研究を進める上で重要となるため、今後の発展性にも期待ができる。

2．定量的評価

観点	調査回数	情報収集				
判定	B	A				

備考
　調査回数に関しては、Alicona 機、Tesco 社 X 線 CT スキャン機器での計測撮影で取得したデータについて、データ処理に有する時間が当初の予想より必要となった。目標とする文化財３Ｄ情報は取得し研究の目的は達成できたが、今後の研究に直接繋がるための発展版の撮影パターン実験まで進行できなかった。
その他、処理した３Ｄデータ、撮影手順についての考察を整理し、情報のアーカイブ、論文等の発表資料整理を行った。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財デジタル測定機器での撮影について、撮影測定、データ処理、手順や冶具の考察を行った。これらの結果により、今後はより汎用性を持った撮影冶具、手順についての開発を引き続き行っていくことができる。今後は本年度の撮影測定手順の評価をもとに、より安全性を備えたその他の方法も念頭におきながら研究を発展させていく。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	デジタル測定機器に合わせた冶具開発を実施し測定、撮影を行い、調査手順の検討が行えた。今後これらの結果をもとに、より多くの文化財での撮影を目標にして調査意義、方法についての意見交換を職人、学芸員、撮影技術者の方々と相談していく。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-34

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	34）日本近世実景図研究（(5)-①-ⅲ）

【事業概要】

東京国立博物館が所蔵する実景図を中心に、館外の実景図も視野に入れ、作品調査・実地調査・文献資料に基づき研究することにより、近世における実景表現の制作態度を明らかにする。日本絵画の実景表現を広く東アジアの中で捉えるため、中国絵画・朝鮮絵画も研究の対象とし、その影響関係を探る。特集陳列としての公開として寄与できる研究を目的とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課　大橋美織

【スタッフ】大橋美織（調査研究課絵画彫刻室任期付研究員）

【主な成果】

本年度は、主に東京国立博物館所蔵実景図作品を中心に検討・調査を行った。その結果、日本絵画だけでなく中国絵画・朝鮮絵画を含める東アジアを視野に入れた陳列案の提示を決定した。中でも韓国国立中央博物館研究官、イ・スミ氏の協力により朝鮮絵画の調査を行った成果は、特集陳列公開前に Museum にて報告を予定している。

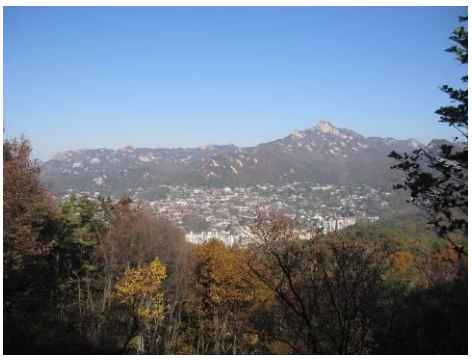
【年度実績概要】

１．作品検討及び調査

東京国立博物館所蔵品のうち、特集陳列での公開意図に合った作品の選定及び調査を行った。また、関連する作品については、館外の作品も調査を依頼した（田辺市立美術館（脇村奨学会）、和歌山県立博物館、個人）。

２．実地調査

実景の絵画化を検討するに際して、現地に足を運ぶ作業は不可欠である。現在の景観との比較により、作品の強調点や景物の再構成を指摘することも可能となる。陳列予定作品をもとに、描かれた場所（和歌山・韓国）への実地調査を行うとともに、特集陳列時のパネル制作を想定した写真撮影を行った。



北岳山（ソウル）からの眺望

耶馬渓図巻　部分（個人蔵）

【実績値】

１．作品調査（館外）：２回（和歌山、兵庫）

（館内の作品調査は、業務の合間に幾度にもわけて行ったため、正確な回数を出すことは難しい。）

２．実地調査：２回（和歌山、韓国〔ソウル〕）

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-34

(様式 2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
「東アジアの中での日本」という視点は、美術史研究の上でも近年特に活発化している。その視点を取り入れ、かつ実際の風景を描いた作品という一般の人にも馴染みやすいテーマで特集陳列を組むことが、本研究の特徴といえる。東京国立博物館所蔵品の中でも、今まで陳列されることのなかった実景図作品を公開し、その位置付けを Museum 等で報告することにより、近世絵画史研究へ寄与することができる事業となると考えている。

2. 定量的評価

観点	作品調査	実地調査				
判定	B	A				

備考
当初予定していた九州への作品調査を行うことができなかったため、作品調査は B とした。しかし本事業は二年計画であるため、今年度の主な予定である基礎調査や実地調査は、概ね実行することができたと考える。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本事業は二年計画であるため、今年度は主に基礎調査に比重を置くことを予定していた。そのため、館内の実景図作品の選定・調査が順調に進んだことは望ましいことと考える。しかし、選定作品を陳列する上での関連作品の調査、実地調査を来年度に集中して行わねばならないため、より計画性を持って調査にあたることが必要といえる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度の予定は順調に消化された。引き続き来年度の調査計画を立て、それに基づき資料紹介や論文執筆を進める予定である。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-1

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査

【事業概要】

京都を中心とした近畿地方の社寺のうち、文化財を多数保有している社寺をとりあげて、所蔵文化財の悉皆調査を行う。調査に際しては、各分野の専門研究員が極力、同時に参加し、相互に情報・意見を交換しながら、調書の作成・写真撮影を行い、当該社寺保有の文化財に関する基礎情報の蓄積に努める。

今年度は京都府南部の木津川市域に所在する岩船寺・浄瑠璃寺・海住山寺の三箇寺の文化財調査を行った。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	考古室長　宮川禎一

【スタッフ】

西上実(学芸部長)、赤尾栄慶(上席研究員)、若杉準治(列品管理室長)、山本英男(美術室長)、久保智康(企画室長)、山下善也(連携協力室長)、浅湫毅(主任研究員)、山川曉(主任研究員)、永島明子(主任研究員)、大原嘉豊(研究員)、羽田聡(研究員)、呉　孟晋(研究員)、水谷亜希(アソシエイトフェロー)、比嘉飛鳥(列品管理室技術職員)

【主な成果】

対象寺院は有名であり、過去に複数機関による文化財調査が実施されている。しかしそれぞれに新たな文化財の発見や未調査文化財が見つかってきた。その点で成果はあった。

岩船寺では未調査の金工品・陶磁器・古瓦・仏画などに見るべきものがあった。

浄瑠璃寺では本坊大日如来像の詳細な調査および工芸作品の詳細な調査を行うことができた。

海住山寺では桃山時代の屏風などに新出資料が発見された。また仏像・陶磁器・漆工芸品などに見るべき作品があり、調書をとることができた。

【年度実績概要】

事前に調査対象寺院である岩船寺・浄瑠璃寺・海住山寺へ伺って調査方法などの打ち合わせを行った。

平成 23 年 2 月 7 日（月）に岩船寺で本調査を行った。

平成 23 年 2 月８・９日（火・水）に浄瑠璃寺で本調査を行った。

平成 23 年 2 月 14～16 日（月～水）に海住山寺で本調査を行った。

平成 23 年末の刊行予定で、長岡京市光明寺（平成 21 年度調査分）の文化財調査の報告書を準備している。

【実績値】

調査日数　　のべ６日間

調書作成件数　　約 300 件（整理中）

【備考】

この調査報告書は、平成 23 年末に刊行を予定。

海住山寺については一部分野（金工・絵画）の調査を完了できなかったので、平成 23 年度前半中にも補足調査を実施する予定である。

【書式Ｂ】　　施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-1

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

この南山城地域の古寺伝来文化財の悉皆調査研究は将来、当館で開催する予定である「南山城の古寺」（仮称）に関する事前調査の意味も含むものである。引き続き行われる個別寺院の調査成果を合わせ、将来的に展覧会という形で社会に還元できるものである点は意義が高い。この南山城地域の寺院は奈良と京都の中間に位置し、独特の仏教文化を開花させている。京都府内であるが奈良の影響もまた大きいのである。このような観点での調査ですでにいくつかの独特な作品が見いだされてもおり、その発展性は高い。さらに京都国立博物館から１時間余という距離はその調査のアクセスを容易にしている。京都国立博物館が調査することで継続性も高い。さらに年度各に調査報告書を刊行しており、情報の公開も進展している。今年度調査の岩船寺・浄瑠璃寺・海住山寺については来年度の刊行を予定している。なお地元の各寺院もこの調査に積極的に協力いただいている。

2．定量的評価

観点	調査日数	調査件数				
判定	A	A				

備考

いずれも山間部の寺院ということで、交通の事はやや不便であったが、調査対象となる文化財・作品の分量を勘案し、岩船寺１日間、浄瑠璃寺２日間、海住山寺３日間の調査時間を取った。その結果、ほぼ所期の調査対称作品の調査を終えることが出来た。

調査件数約 300 件は昨年度の西山光明寺の調査件数とほぼ同数であり、日数的にもほぼ順当な調査件数であるとすることができよう。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展覧会が目白押しのなか、２月という極寒期の調査であったが、調査対象を拝見し、調書をとり、撮影を行うことが出来たのは所期の目的をほぼ達成したと考える。 今後は次年度において整理作業・報告書の刊行作業を行う。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	京都を中心とする社寺伝来の文化財の調査は京都国立博物館の長い伝統のある調査である。引き続き、その調査の質を落とさないようにすることが必要である。この南山城地域の寺院文化財の調査は次年度においても対称寺院を代えて行っていく予定である。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　処理番号 4512-2

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)　鎌倉仏教とその造形に関する調査研究　((5)－①－ⅱ)

【事業概要】
鎌倉仏教の美術・造形にかかわる作品や図像及び関連資料を収集、整備する。
報告書の刊行、シンポジウム(研究座談会)の開催により、成果を公開する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員　赤尾栄慶

【スタッフ】
若杉準治(列品管理室長)、山本英男(美術室長)、山下善也(連携協力室長)、大原嘉豊(研究員)、羽田　聡(研究員)、淺湫　毅(主任研究員)、久保智康(企画室長)、尾野善裕(工芸室長)、山川曉(主任研究員)、永島明子(主任研究員)、宮川禎一(考古室長)、中村　康(文化財管理監)、村上　隆(保存修理指導室長)、呉　孟晋(研究員)、水谷亜希(アソシエイトフェロー)

【主な成果】
仏教美術研究上野記念財団の助成によって、鎌倉仏教に関する資料の調査・撮影を実施し、『図像蒐成ＸⅡ』を刊行した。

【年度実績概要】
鎌倉仏教の美術・造形にかかわる作品や図像及び関連資料を収集、整備する中で、源空（法然）の弟子である証空らが中心となって仁治四年（1243）に造立されたと考えられる「阿弥陀如来立像」（重文、京都・大念寺蔵)の像内納入品の全点を調査し、撮影を行った。また、源空（法然）の『選択集』を厳しく批判した明恵の『摧邪輪』三巻（重文、京都・仁和寺蔵）の書誌学的調査を実施し、今後の資料とするために全巻のデジタル撮影を行った。
図像資料の収集、整備としては、「曼荼羅集　経弁本」(京都国立博物館蔵)の翻刻を行い、解題も付して翻刻付き図版集として刊行した。

【実績値】
○調査　2件
・重文「阿弥陀如来立像」(京都・大念寺蔵)の仁治四年（1243）の紀年がある像内納入品の全点を調査し、撮影を行った。
・明恵が著した『摧邪輪』三巻（重文、京都・仁和寺蔵）の調査と全巻の撮影を実施した。
○撮影　2件
・重文「阿弥陀如来立像」(京都・大念寺蔵)の仁治四年（1243）の紀年がある像内納入品の全点を調査し、撮影を行った。
・明恵が著した『摧邪輪』三巻（重文、京都・仁和寺蔵）の調査と全巻の撮影を実施した。
○刊行　1件
『図像蒐成ＸⅡ』として「曼荼羅集　経弁本」(京都国立博物館蔵)の解題・翻刻付きの図版集を刊行した。

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-2

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
鎌倉仏教の美術について多面的に調査研究し、多岐にわたる資料を収集している。これらの成果は、平成23年3月26日（土）から開催される、特別展覧会「法然―生涯と美術―」の展示に活用される。『図像蒐成』の刊行は、持続性のある活動であり、仏教美術分野のみならず、宗教史など幅広い分野から注目されている。

2. 定量的評価

観点	調査	撮影	刊行			
判定	A	A	A			

備考
調査と撮影を、各々２件ずつ行い、『図像蒐成』の刊行も行った。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	４カ年の継続事業「鎌倉仏教とその造形に関する調査研究」の第２年度として、本研究成果を早速、平成23年3月からの特別展覧会「法然―生涯と美術―」に反映することができ、また来年度の会期中に研究発表・座談会を開催する運びとなった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	多岐にわたる分野の資料について収集・整備ができ、また、研究資料を広く公開することで、仏教美術研究の発展に資することができた。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-3

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3)　日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察（科学研究費補助金　((5)-①-ⅱ）

【事業概要】

先史時代より明治時代に至るまでの、樹木を素材・主題とした美術工芸遺品を通じて、従来蓄積されてきた歴史学の諸成果をフィードバックしながら、日本の木の文化を、他の東アジア諸国との比較史的視座を援用しつつ、跡づけることを目的とする。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	館長　佐々木　丞平

【スタッフ】

西上実（学芸部長)、若杉準治（列品管理室長)、山本英男（美術室長)、山下善也（連携協力室長)、大原嘉豊（研究員)、赤尾栄慶（上席研究員)、羽田聡（研究員)、淺湫毅（主任研究員)、中村康（文化財管理監)、久保智康（工芸室長)、尾野善裕（主任研究員)、山川曉（主任研究員)、永島明子（主任研究員)、宮川禎一（考古室長)、村上隆（保存修理指導室長)、呉孟晋（研究員)、水谷亜希（アソシエート・フェロー）

【主な成果】

平成２１年度に補足調査を行なった静岡建穂寺本尊の観音像についての論考を当館発行の『学叢』第３２号（平成２２年５月発行）に発表した。また、建穂寺で行なった調査の結果にもとづく展覧会が静岡市のフェルケール博物館で開催され（平成２２年４月)、展示作業および図録作成、講演会等に全面的に協力した。また４年間にわたる研究調査の成果を集成した報告書を二篇（考察編と調査報告編）発行した（平成２２年１２月・２３年３月)。

【年度実績概要】

事業４年度（最終年度）の本年は、昨年度までのの調査地の補足調査を行なうとともに、四年間の調査研究成果の集成として調査報告書の発行を行なった。

具体的な調査事例としては、初年度に購入したファイバースコープを援用することにより静岡建穂寺の千手観音像の像内より、室町時代の鎌倉仏師長勤の銘文を発見し、本像が長勤の現存する作例としては最晩年のもので、関東以外で造立された唯一の作品であることが判明した。

社寺における組織的な調査としては、浜松市の黄檗寺院で補足調査を行なった。本館の調査の結果、同市宝林寺の本堂安置像が黄檗宗初期の事例として貴重であることが再確認され、次年度に静岡県指定文化財となる運びである。

これと平行して、各研究分担者は、自事業目的にそって個人研究を遂行した。たとえば、二年度に予備調査を行なった島根県出雲市の大寺薬師において本調査を行ない、これまで紹介されてこなかった彫像群が平安時代に遡るものであることが確認された。その成果は、平成２４年に当館で開催する予定の『出雲大社展（仮称)』において公表する予定である。

過去の社寺調査データの清理としては、昨年度に続き、これまで京都国立博物館が収集してきた京都社寺の所蔵品に関するデータの再整理および、昨年度あらたに調査で得られたデータを、事業目的に即して順次データベース化していった。

【実績値】

調査実績データベース化　2000 点
補足調査　国内２件（浜松市宝林寺・出雲市大寺薬師）
個人研究出張調査　国内１件（東京・三井記念美術館）
科研調査による成果の公表　刊行物６件　口頭発表３件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-3

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	S	A	A	A	A	

備考
適時性については博物館事業における公開性及び緊張性を増す環境問題と絡む点、独創性・発展性については適時性での理由をもとにした人文系では先駆的総合研究である点、効率性に関しては各研究分担者の本務である博物館事業が多忙を極める中で効率的に調査しその成果を好評したという点、正確性についてはデータの収集という点からみて、それぞれ評価を下した。また、発展性は、本科研により各地の社寺および博物館と良好な関係が構築されたことは、当館が調査研究および展覧会を行なう上で今後の発展継承が期待されるという観点から判断した。

2．定量的評価

観点	調査実績 データベース化	調査機材整備	研究分担者による 個人研究（出張調査）	成果公表		
判定	A	A	A	S		

備考
４年間にわたる事業全般として、目標は概ね達成されている。
機材整備の面では、初年度に購入したファイバースコープは極めて有用であり、本年度も１件の新規銘文を仏像の像内より発見した。今後も有効に活用できるものと考えられる。
成果公表の点では予定していた報告書の刊行に加えて、当館が刊行する『学叢』３２号に二篇の論考（淺湫・永島）を発表し、フェルケール博物館での展覧会に際しては図録の発行および講演を淺湫が行った。また。出雲市で開催されたシンポジウム「神々の姿の変遷」において淺湫が「神像とは何か」と題して発表するなど、成果の速やかかつ活発な公表が行われた点を考慮し判断した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第４年度（最終年度）にあたる２２年度は、前年度までの調査によって得られた成果を基に、その補足をする方向で、発展的調査を行なった。それとともに、最終年度として、これまでの調査結果をまとめることを目的とする調査研究も行なった。その目標はほぼ達成されたが、博物館業務の多様化にともなう時間的制約のある中で、上記の通りの成果をあげることができた。また、本科研の調査成果は平成２４年度に開催する予定の『出雲大社展（仮称）』などで発表するとともに、さらにあらたな形で調査を継続していきたいと考えている。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全研究職員を研究分担者とする競争的資金の導入によって、館全体の研究を活性化している点で意義が深い。 成果公表の点では、極めて速やかかつ活発な公表が行われたのは上述のとおりである。その公表が、専門家向けの論文のみではなく、一般の人々を対象とした展覧会やシンポジウムで行われたということは、科研による研究成果を広く一般に公開するという点でも、極めて意義深いことと考えられる。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-4

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究(科学研究費補助金) ((5)－①－ⅱ)

【事業概要】

建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類を順次調査し、それらの調書を作成し、それらの目録を作成する(科学研究費)。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員　赤尾栄慶

【スタッフ】

(当館研究者)赤尾栄慶(上席研究員)、羽田　聡(研究員)、西上　実(学芸部長)、山本英男(美術室長)
(外部研究者)興膳　宏、米谷　均、山城喜憲、藤本幸夫、井上　進、川本慎自、堀川貴司、宇都宮啓吾、梶浦晋、金　文京、柳田征司、住吉朋彦

【主な成果】

5 月、7 月、10 月と都合 3 回の調査を実施し、全体 180 箱のうち、第 161 箱から第 180 箱までの調査を終了した。2 月に最終的な研究打ち合わせ会を実施し、報告書刊行の準備を行い、度末には報告書を刊行する。

【年度実績概要】

全体 180 箱のうち、第 161 箱から第 180 箱までの調査を実施し、各々の箱に納められている書跡・典籍類に関して、一冊ごとにその書名・法量・装訂・外題・首題・尾題・版式・行数・訓点・奥書・刊記などの書誌学的調査と内容に関する調査を実施し、それぞれを調書に記入した。

それらの調査内容を入力し、報告書刊行の準備を行い、年度末に報告書を刊行し、最終年度のまとめを行った。

【実績値】

全体 180 箱のうち、第 161 箱から第 180 箱までの 20 箱についての調査をし、調書を作成した。年度末には報告書を刊行する。

○調査回数　3 回
○調査箱数　全 180 箱中 20 箱
○研究打合会　1 回

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-4

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
各方面から、蔵書目録の作成が望まれている状況にある。

2. 定量的評価

観点	終了箱数	調査回数				
判定	A	A				

備考
20 箱の調査を終了し、予定している全体の調査を無事に終了した。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	4 カ年の継続事業のうち、最終年度である第 4 年度の事業計画について達成し、全体の予定を完了した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	年次計画を予定通り実施し、4 カ年継続の調査を計画通りに行った。報告書も刊行した。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-5

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4. 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 修復文化財に関する資料収集及び調査研究 ((5)－①－ｖ)		
【事業概要】 文化財保存修理所において修復が行われている文化財に関して情報を収集する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　村上隆
【スタッフ】 淺湫毅(主任研究員)、伊東史朗(調査員)			
【主な成果】 平成 22 年度に新規搬入された作品の「修理計画書(設計書)」にもとづき、データを入力し、平成 20 年度に完成、搬出した作品については、各工房より提出された「修理解説書(報告書)」にもとづき、データを追加、更新した。また、平成 17 年度に修理が完成した作品に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告』第 6 号に掲載し、修理時に発見された銘文 12 件を「銘文集成」として報告した。 また、平成 18 年度に修理が完成した作品に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告』第 7 号に掲載し、修理時に発見された銘文 6 件を「銘文集成」として報告した。			
【年度実績概要】 文化財保存修理所の工房に搬入される新規修理作品に関して、データを収集し、データベースに登録した。 過去の修理作品に関してもデータの更新、整理作業を行なった。 毎月行っている文化財保存修理における修理工房の巡回時のほか、適宜工房において、修復中にしか得ることの出来ない情報(作品の構造や使用材料、内部納入品や銘文など)を収集し、分析を行なった。 『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 6 号に掲載する平成 17 年度修理作品のデータと第 7 号に掲載する平成 18 年度修理作品のデータを整理するとともに、同年の修理で発見された銘文の解読作業を行なった。 また、これらの業務に調査員伊東史朗氏の協力を得た。			
【実績値】 ○データ収集件数 22 年度は 106 件の新規修復文化財の搬入があり、これらの作品に関してデータを収集するとともに、データベースへの登録を行なった。 ○データ追加更新件数 過去のデータに関して 2227 回追加、更新を行なった。 ○調査回数 修理所の巡回を 12 回行なった。その他、新発見の事実や銘文の調査を適宜行なった。 ○報告書 22 年 12 月に『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 6 号(17 年度分)を発行した。 23 年　3 月に『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 7 号(18 年度分)を発行した。			
【備考】			

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-5

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
限られた期間中にあらゆる側面からの調査を行い、データ収集に努めた。
制作年や制作者など､文化財の制作時に関わる情報は､解体修理の折に発見されることがほとんどであり、作品を多角的に評価する上での基準となりえる。ここで得た情報を「銘文集成」として記録にとどめる意義は大きいといえよう。

2. 定量的評価

観点	データ収集件数	データ追加更新件数	調査回数	報告書	
判定	A	A	A	A	

備考

修理に関するデータの蓄積は順調であり、今年度は『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告』第 6 号と『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告』第 7 号の 2 冊を完成した。これにより、これまで滞っていた情報公開のスピードを速めることができた。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存修理所で行なわれる修理作品から得られる情報はおおむね収集できた。 また、その成果を報告書に反映した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	22 年度に収集された情報をさらに充実させる為、他年度と関連づけながらさらなる情報の収集をはかりたい。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-6

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6)文化財の保存・修復に関する調査研究(奈良文化財研究所との共同研究) ((5)－①－vi)

【事業概要】

奈良文化財研究所が保有するさまざまな科学分析装置を用いて、特に金属製文化財を中心にした材質と製作技術の調査を行う。また、その成果を踏まえた保存処理法の開発と実践を実施する。独法内の既存施設を横断的に活用することにより、効率的な調査研究の推進を図ることも視野に入れている。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　村上　隆

【スタッフ】

高妻洋成(奈良文化財研究所)
難波洋三(　　〃　　)

【主な成果】

長野県中野市柳沢遺跡出土の銅鐸と銅戈の材質分析から、銅鐸や銅戈のタイプ別に成分の配合比が変化していることが明らかになった。これはこれまで蓄積されてきた古代青銅器の考古学的見解を科学的に検証する意味でも重要な成果である。

【年度実績概要】

長野県中野市柳沢遺跡から出土した銅鐸は計 5 個、銅戈は 8 本である。本年度は、このうち、銅鐸 2 個の成分分析と保存処理を行った。また、銅戈 5 本に対して、成分分析と保存処理を行った。また、同時に将来実施予定の鉛同位体比分析に備えて、分析試料のサンプリングを行った。

【実績値】

調査件数：7 個
収集資料数：7 件
調査概報：1 件

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-6

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考

東日本において銅鐸と銅戈が同時に出土するという大発見に対して、最新の科学的調査と保存処理をタイミング良く実施することができた。

2．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	B	B			

備考

本年度は調査途中であるため、公開できる情報を蓄積している段階である。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	弥生時代を代表する銅鐸や銅戈の正確な分析はこれまでにほとんど行われてきていない。本調査研究は、歴史的金属製品の材質研究の専門家が考古学者とともに協議し、様々な観点から多角的な調査を行うことが特徴である。古代青銅器研究の基準となる研究と位置付けられる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	独法内の機関が、相互の特徴を生かした共同研究を行うことは、相互の活性化のためにたいへん重要である。ただ、作品を移動させなくてはならないというリスクを伴うため、実際に実施できる研究内容に制約を伴う。今後とも、少しずつでも事例を増やしていくことを考えている。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-7

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7)　近世絵画に関する調査研究　((5)-①-ⅳ)

【事業概要】

京都文化の一端を明らかにすることを目的として、客員研究員である大阪大学教授奥平俊六氏に、京都を中心とした風俗画研究、近世絵画に関する作家研究、作品研究、とくに狩野山楽・山雪をはじめとする京狩野の研究の実施を依頼した。「狩野山楽・山雪展」等、開催を予定している展覧会の助言を依頼し、当館連携協力室長と協力して展覧会に関わる研究を行う。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長　山下　善也

【スタッフ】

山下善也（連携協力室長）、奥平俊六（客員研究員）

【主な成果】

京都を中心とした風俗画研究、近世絵画に関する作家研究、作品研究については、着々と研究が進んでいる。

「狩野山楽・山雪展」（平成 24 年度）等について、当館連携協力室長に、作品情報をはじめ、さまざまな助言を行った。近世絵画の寄託品について、当館連携協力室長に、調査助言を行った。

【年度実績概要】

奥平俊六客員研究員の洛中洛外図、風俗画をはじめとする近世絵画研究は年々深化しているが、それを通じ、京都国立博物館館蔵品・寄託品の価値がいっそう高まってきている。とともに、客員研究員から当館近世絵画担当研究員への適切な指導・助言が連携協力室長の調査研究の諸活動に対して実に大きな刺激と力を与えていることは、特筆される。さらに、同客員研究員および近世絵画担当研究員の著作活動をつうじて、一般の人々の京都文化に対する興味を喚起し、ひいては博物館に対する理解を深めている。

【実績値】

調査回数	12 回
収集資料数	150 点
調査概報	2 件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-07

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展覧会「狩野山楽・山雪」展（平成 24 年度３～４月）の準備は順調に進んでおり、その進捗に客員研究員の助言等が大きな役割を果たしている。 近世絵画寄託品・館蔵品の調査研究は、順調に進んでおり、客員研究員の助言等が大きな役割を果たしている。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	客員研究員の京都国立博物館の諸活動に対する指導・助言等及び近世絵画担当研究員と同客員研究員との協力により、近世絵画に関する調査研究は順調に進んでいる。

【書式Ｂ】　　施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-8

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	8)訓点資料としての典籍に関する調査研究((5) - ①－ⅱ)

【事業概要】
訓点資料のうち、平安時代の古写経や漢籍に付された訓点に関する調査研究を実施した。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員　赤尾栄慶

【スタッフ】
(当館研究者)赤尾栄慶(上席研究員)、羽田　聡(研究員)
(客員研究員)宇都宮啓吾

【主な成果】
貞観十九年（877）に一校され、元慶（879）に再校して科点を加えた『華厳経』六巻（重美、本館蔵）の白書を調査した結果、注釈書である『華厳経探玄記』からの引用であることが確認された。また、永保二年（1082）五月の加点奥書がある『観自在菩薩如意輪瑜伽法要』（重文、本館蔵）について、その朱書の仮名や朱点を調査した。

【年度実績概要】
古写経の訓点を中心とし、平安時代の訓点の調査研究を実施し、貞観十九年（877）に一校し、元慶（879）に再校して科点を加えた『華厳経』六巻（重美、本館蔵）の白書を調査と永保二年（1082）五月の加点奥書がある『観自在菩薩如意輪瑜伽法要』（重文、本館蔵）について、その朱書の仮名や朱点を調査した。
これと関連して、中国・南宋時代の版本で、高山寺旧蔵の『清凉国師礼讃文』（本館蔵）を調査し、角筆点を確認した。日中間相互の関連については、今後の検討が必要となっている。
また、韓国の口訣学会の研究者とは、7月と2月の2回にわたって交流を行い、意見交換を行った。

【実績値】
○調査　10 回
○国際交流　2 回（7 月、2 月）

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-8

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　平安時代の古写経の訓点に関して、日本・韓半島・中国という漢字文化圏を視野に入れた研究は、非常に有益であり、関連する資料を使っての調査は、当館の客員研究員にふさわしい内容である。

2. 定量的評価

観点	調査	国際交流				
判定	A	A				

備考
　基本的に毎月１回の調査日を設定し、調査及び意見交換会を実施している。
　韓国の口訣学会の研究者と２回にわたる意見交換を行った。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平安時代の古写経の訓点に関して、日本・韓半島・中国という漢字文化圏を視野に入れた研究は、非常に有益であり、訓点語学会を中心とした研究者から注目を集めている。韓国・口訣学会との交流をさらに深めていく必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	館蔵品の訓点資料を順次、調査し、日本・韓半島・中国という漢字文化圏を視野に入れた研究へと発展している。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-9

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4．文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	9）彫刻に関する調査研究　((5)-①-ⅲ)

【事業概要】
当館に保管および寄託される仏像を中心とした彫刻作品の調査、研究

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員　淺湫　毅

【スタッフ】
井上一稔（客員研究員）

【主な成果】
特別展覧会「法然」展出品作品に関して研究を進め、その成果を同展目録に作品解説として発表した。また、平成２１年度に科研による調査を行なった、静岡県建穂寺の仏像についての考察を、当館発行の学叢第３２号に執筆した。

【年度実績概要】
当館が保管、あるいは当館が社寺より寄託を受けている彫刻作品の調査および写真資料の収集を、新たに行なった。
社寺、個人宅など、館外に所在する彫刻作品の調査・撮影を行なった。
上記調査作品の関連文献、史料の収集および研究を行なった。その成果に基づき島根県主催のシンポジウム「神々の姿の変遷」において、「神像とは何か」と題して口頭発表を行なった。
これらの調査に際し、客員研究員の井上一稔氏の協力を得た。
過去の研究データに基づき特別展覧会の作品選定、展示、解説執筆を行なった。

【実績値】
［展覧会展示企画および図録執筆］３件
フェルケール博物館で開催の『建穂寺の仏像』展において図録執筆、講演、展示協力を行なった。これは科学研究費補助金『日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察』による成果の公表として行なったものである。
特別展覧会『永青文庫の至宝』展の開催（本館では次年度に巡回）の開催にあたり、図録に概説、作品解説の執筆を行なった。
特別展覧会『法然』展の開催にあたり、図録に作品解説の執筆を行なった。
［展覧会準備］２件
将来の特別展準備のための調査を島根県立古代出雲歴史博物館において行なった。
次年度開催の『細川家の至宝』展準備のための調査と打ち合わせを永青文庫において行なった
［調査］３件
長岡京市の勝龍寺において彫刻作品２件の調査を大阪大学と共同で行なった。
科研による調査を静岡県浜松市の宝林寺、島根県出雲市の大寺薬師において行なった。
社寺調査を南山城の岩船寺、浄瑠璃寺、海住山寺でおこなった。
［論文等］４件
「宝慶寺から請来された石仏群」『永青文庫の至宝』展覧会図録
「まぼろしのおおでら建穂寺の仏たち」『建穂寺の仏像』展覧会図録
「静岡・建穂寺の観音菩薩立像　仏師長勤作」『学叢』３２号
「神像とは何か」『神々の姿の変遷』シンポジウム資料集
［口頭発表等］４件
「建穂寺の仏たち」フェルケール博物館
「三十三間堂の諸仏」『シンボジウム　美を伝える』
「神像とは何か」『シンポジウム　神々の姿の変遷』
「アンコール期石造彫刻の編年に関する一試案」東南アジア学会・東南アジア考古学会合同例会

【備考】

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-9

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　彫刻作品の調査の成果を、特別展覧会の作品展示および、図録、解説等により公開できた。また、次年度以降の展観事業の準備として継続的に調査・研究を行っている。

2．定量的評価

観点	論文数	口頭発表	調査			
判定	S	S	A			

備考
　科研その他で、彫刻作品に関して計画的に調査を行い、その成果を報告書、展覧会図録および口頭による発表等に、速やかにかつ活発に反映させることができた。具体的な件数に関しては【実績値】の欄に記したとおり。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館の所蔵、寄託作品に関する情報は順調に得られており、館外での作品調査に際しても重要な情報が収集された。引き続き特別展覧会等で成果を公開したい。 　一方、平常展示館が長期閉館することにより、平常展示においてこれまで行ってきた成果の公開が当面できなくなったが、報告書、論文等それにかわる成果公開を従来にまして行なってきた。次年度以降も継続したい。また、今年度は科研の調査成果に関して報告書を執筆・編集するとともに、口頭による成果の発表も行なった。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	継続的に、順次彫刻作品に関する情報は、順調に収集されている。 　これらの調査において客員の井上一稔氏ほかの彫刻研究者と随時協力して行っており、今後も各研究者と協力して事業の継続を行ない、研究の充実を目指したい。 　本研究によって得られた情報を将来の展覧会に生かせるよう、さらなる情報の収集を図りたい。

【書式Ｂ】　　施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-10

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	10）出土・伝世古陶磁に関する調査研究((5)-①)

【事業概要】

日本国内で伝世・出土した陶磁器について総合的に調査を実施し、博物館の所蔵品・寄託品の充実を図ると共に、近い将来に予定されている特別展覧会（平成 25 年度『(仮) 清朝陶磁』）出品作品の候補選定を進める。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長　尾野善裕

【スタッフ】

谷口愛子（調査員・京都工芸繊維大学准教授）・橘倫子（調査研究支援ボランティア・茶道資料館学芸員）・梶山博史（調査研究支援ボランティア・兵庫陶芸美術館学芸員）・森下愛子（調査研究支援ボランティア・泉屋博古館分館職員）

【主な成果】

当館で所蔵している仁清御室窯跡出土陶片について、平成 22 年度からの継続事業（西田記念東洋陶磁史研究助成事業）として行っていた実測図作成作業を引き続き実施し、130 点の図化を完了した。そのほかに、泉屋博古館分館（東京）・板橋区立郷土資料館（東京）・野崎家塩業歴史館（岡山）にて伝世古陶磁、東京大学埋蔵文化財調査室・新宿区教育委員会にて出土品の調査を行い、400 件あまりの調書を作成した。

【年度実績概要】

所蔵陶磁の悉皆調査を依頼されている野崎家塩業歴史館の所蔵品調査をのべ８日、その他の施設については各１日の調査を実施し、デジタルカメラでの資料写真撮影と共に、調書の作成を行った。最も力を割いた野崎家塩業歴史館での調査は、これまで調査の手が及んでいなかった厖大な資料群の情報化に主眼があり、それ自体は必ずしも研究として独創性をもつものではないが、文化財の保護・調査・研究上必要不可欠な基本情報の整備として行っている。泉屋博古館分館（東京）・板橋区立郷土資料館（東京）・東京大学埋蔵文化財調査室・新宿区教育委員会では、平成 25 年度に開催予定の特別展覧会『(仮) 清朝陶磁』に向けての予備調査も兼ねて、中国清朝陶磁やその影響を受けたと考えられる日本陶磁中心に調査を行い、従来指摘されている以上に両者の関係が密接であることを確認した。

昨年度からの継続事業である館蔵の仁清御室窯跡出土陶片図化については、納品された実測図の点検を行うと共に、調書の作成を行った。また、特別展覧会『(仮) 清朝陶磁』に向けての予備調査も兼ねて、館蔵品・寄託品についても 39 件について改めて調書の作成を実施した。

【実績値】

調査日数（館外）　　のべ 12 日
調書作成件数　　454 件

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-10

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	B	A	A

備考

大きく力を割いた野崎家塩業歴史館の所蔵品調査は、今後の調査・研究のための基礎情報の整備が中心である以上、そもそも際立った独創性が求められるものではなく、遠隔地（岡山）での調査であるがゆえに、移動などに要する時間も少なからず必要であり、京都近郊での調査と較べて効率性はどうしても低くならざるをえない（昨年は２日で 155 件、一昨年は５日で 261 件）。しかし、既に 300 件の調書作成を終えており、第一次分として予定している約 1300 件の悉皆調査に向けての展望は明るい。

2．定量的評価

観点	調書作成件数	調査日数	成果公表			
判定	A	A	C			

備考

昨年はわずか２日、一昨年でも５日しか確保できなかった館外調査日数が、のべ 12 日も確保できたことは喜ばしく、450 件あまりという調書作成件数も大いに満足できるが、事業責任者である尾野が特別展覧会（『高僧と袈裟』展）の副担当を兼ねていたこともあって時間をとれず、証書を作成はしたものの、爾後の資料整理がほとんど手付かずになっていることが大きな悩みである。

また、他の用務に追われて、研究成果としては過年度の研究成果を口頭発表する機会を１回持ったのみで、蓄積した情報を基にした研究成果の公表がほとんどできていないことは、無闇に短期的成果を求めるべきではないとはいえ、対外的な説明の上ではいささか苦しいものがある。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究成果公表の面ではいささか物足らないかもしれないが、本来の目的である調査（情報の蓄積）自体は着実に進んでおり、調査・研究では短期的成果ばかりを追求すべきではない、という観点からＡとした。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	調査自体は着実にすすんでおり、本年度だけの評価であれば十分にＡと評価できるが、報告書の作成や特別展覧会の開催など、最終的な成果公表を視野に入れるならば、資料整理が遅れていることは些細な問題とはいえないため、「ほぼ順調」と評価する。資料整理を進めることが、来年度以降の大きな課題であるが、法人化後各種業務が繁忙化している中で、飛躍的に状況が改善される見通しは決して明るくない。

【書式Ｂ】　　施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-11

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	11)　近代建築に関する調査研究　((5)-①-ⅱ)

【事業概要】
重要文化財・旧帝国京都博物館建築資料を調査研究し、その成果に基づいた図版目録を発行する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	文化財管理監　中村　康

【スタッフ】
中村　康（文化財管理監）　登谷伸宏（調査員）

【主な成果】
これまでの調査の成果を踏まえて基本的な図面を比較検討するとともに、建築自体の調査を行い、並行して工事が施工された帝国奈良博物館の建築資料と宮内庁に所蔵される帝国京都・奈良博物館工事録、さらには設計の参考とされた近世以前の建築を調査し、美術としての建築の形成過程とその原状とを総合的に明らかにした。

【年度実績概要】
建築図面の内、基本的な構造と意匠の設計に関わる平面図・立面図・断面図・矩計図、詳細図等を比較検討し、設計と建築の実際の形成過程を明らかにした。
躯体外壁の花崗岩と凝灰岩による石造部分、地下の遣方・地業・基礎・レンガ積について建築資料と対照した調査を行い、その原状と伝統的な技法・技術についての知見を得た。
奈良国立博物館所蔵の旧帝国奈良博物館建築資料と宮内庁書陵部に所蔵される内匠寮の京都・奈良博物館新築工事録を閲覧し、設計と工事の進行形成の過程と制作に関わる人と組織についての知見を得た。
東寺の講堂および金堂、平等院鳳凰堂、二条城書院を調査して、外観意匠と室内構成を設計する上の参考とされた建築遺品とそれが及ぼした影響を解明した。

【実績値】
調査回数　３９回
調査件数　１０件
調査建築図面数　１３４枚

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-11

(様式 2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
適時性:美術の優れた鑑賞空間でありそれ自体卓越した美術建築である京都国立博物館本館についての関心の高まりに応える研究である。
独創性：建築図面が美術制作と建築造営に果たした重要な役割を明らかにした。
発展性：建築資料の創造的、芸術的意義を究明する新しい研究分野を開拓した。

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査件数	調査図面数			
判定	A	S	A			

備考
当初予定した建築図面調査が達成できた上に、躯体壁石造部分の清掃・保存処置、免震工事計画に関わる埋蔵文化財調査を利用して建築構造についての精細な調査ができた。また旧帝国奈良博物館建築資料の閲覧も奈良国立博物館の調査と連携して効率的に進めることが出来た。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	２０年に及んだ建築資料調査を統括する調査研究ができた。次年度はその成果をまとめた図版目録を編集する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施した。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4513-1

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)　南都諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施（(5)-①-ⅱ）

【事業概要】

近隣社寺等へ奈良国立博物館に対する積極的な協力の働きかけを行って所蔵文化財の調査研究等を行い、その成果を事業（展示等）に反映させる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西山　厚

【スタッフ】

【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博（上席研究員）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（企画室長）、吉澤悟（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、野尻忠（情報サービス室員）、清水健（教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）

【主な成果】

奈良を中心とする諸社寺等への働きかけを行って所蔵文化財の調査を実施し、その成果を展示に反映させるとともに、今後の展示活動等に活用できる資料の蓄積、将来の調査に向けた調整などを行った。

【年度実績概要】

① 「大遣唐使展」において史上初公開となった安祥寺十一面観音像の調査研究を前年度以来継続して行い、その成果は展覧会図録の論考、及び会期中に行われた国際学術シンポジウムにおける研究発表等に反映された。
② なら仏像館（本館）における特別展「至宝の仏像」及び名品展「珠玉の仏たち」における東大寺法華堂金剛力士像の展示に際し、それ以前から同像について行ってきた調査研究の成果を、会場における解説・パネル及び『なら仏像館　名品図録』に反映させた。
③ 平成 14 年以来取り組んできた東大寺戒壇堂四天王像・法華堂執金剛神像の構造・彩色等に関する調査研究の成果をとりまとめた報告書『奈良時代の塑造神将像』（中央公論美術出版、12 月刊）を刊行した。同書には東大寺の塑造神将像の比較材料として、新薬師寺十二神将像のＸ線透過画像及びその描起こし図等（従来未公開であったもの）を付載し、研究者の参考に供することができた。
④ 平成 23 年夏の特別展「天竺へ－三蔵法師三万キロの旅」開催に向け、同展の中核をなす藤田美術館所蔵の国宝「玄奘三蔵絵」全 12 巻を主たる対象として、関連文化財の調査研究を藤田美術館及び薬師寺の協力のもとで進めた。
⑤ 平成 23 年夏の特別陳列「初瀬にますは与喜の神垣－與喜天満神社の秘宝と神像」開催に向け、同社において天神坐像、男神像、狛犬、御輿等の文化財調査を実施し、所蔵品リストを作成した。
⑥ 将来の特別展・特別陳列の実施に向けて当麻寺（葛城市）、海住山寺（木津川市）等と交渉を行い、総合的な文化財調査の計画を立てた。うち当麻寺中之坊については、23 年 1 月に予備調査、3 月に本調査を行った。
⑦ 東大寺・醍醐寺における聖教調査への参加
⑧ 東大寺金堂鎮壇具の実測・光学調査等（科研）
⑨ 東大寺法華堂諸像の彩色文様関連資料の調査（科研）
⑩ 薬師寺・藤田美術館所蔵大般若経（魚養経）の基礎調査（科研）

【実績値】

社寺等における調査回数　７回
学会等発表回数　５回
論文等　１７本

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4513-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
南都諸社寺等に蔵される文化財の調査は、奈良に立地する当館の基本的不可欠な作業の一つであると位置づけられる。こうした調査を通じて、近隣社寺との交流・信頼関係が一層深まりつつあり、今後の当館の企画・事業に好影響が期待される。

2．定量的評価

観点	調査回数	学会等 発表回数	論文発表本数			
判定	A	A	A			

備考
着実に調査活動を進めており、その点では必要十分な条件を満たしている。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近隣社寺を中心とした所蔵品の調査を着実に行って資料の蓄積を進めており、その成果を展覧会図録や報告書に反映させて注目を集めるなど、大きな実績をあげることができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	仏教美術と奈良の文化を調査研究展示活動の主眼としている当館にとって、近隣社寺の宝物調査は必須の事業である。22 年度も特別展で借用した作品などを中心に調査活動を行い、将来、展覧会を開催するための資料蓄積を行うことができた。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4513-2

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 仏教美術の光学的調査研究(東京文化財研究所との共同研究) ((5)-①-vi)

【事業概要】

奈良国立博物館と東京文化財研究所との間で締結した協定書に基づき、両機関の共同研究として仏教美術作品の光学的調査を実施し、使用材料、製作過程等について検討するとともに、高精細デジタルコンテンツを作成する。光学的調査は、①高精細フルカラー画像の作成、②可視光励起による高精細蛍光画像の作成、③高精細反射近赤外線画像の作成、④高精細透過近赤外線画像の作成、⑤蛍光エックス線による非破壊分析、を実施する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西山　厚

【スタッフ】　［奈良国立博物館］：岩田茂樹(美術室長)、稲本泰生(企画室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、北澤菜月(研究員)、原瑛莉子（アソシエイトフェロー）［東京文化財研究所］：田中淳(企画情報部長)、津田徹英(文化財アーカイブズ研究室長)、早川泰弘(分析科学研究室長)、江村知子(研究員)、城野誠治(専門職員)

【主な成果】

前年度から実施している重要文化財五百羅漢図(大徳寺蔵)82 幅のうち一部の画幅に対して追加の光学調査を実施し、顔料や絵絹について高精細画像及び基礎データを入手した。そしてこれらの基礎データをもとに討論を重ね、本年度中の刊行を目ざして調査報告書の作成を進めている。さらに、今年度から新たに当館の寄託品である信貴山縁起絵巻（朝護孫子寺蔵）に対する光学調査を開始し、全 3 巻について高精細デジタルカメラを用いて基礎的な画像データを入手することができた。

【年度実績概要】

前年度から継続的に調査を実施してきた重要文化財五百羅漢図 82 幅（京都・大徳寺蔵）のうち、京都国立博物館寄託分 20 幅について追加調査を実施し、高精細デジタルカメラを用いて絵絹組成の撮影等を実施した(7/30)。そして、前年度の調査及び今年度に実施した追加調査で得られた画像データの分析結果をもとに、両機関研究員の間で検討会を重ね、特に共同研究メンバー以外から東洋史研究の専門家を招へいして画中の金泥銘文の解読を試みた(11/4)。その成果は本年度中の刊行を目ざして作成中の調査報告書に掲載する予定である。一方、本年度から新規に当館の寄託品である平安絵巻の名品・国宝 信貴山縁起絵巻を調査対象に加え、今後 3 ヶ年にわたる継続的な調査の前提となる基礎的な画像データの収集に努めた。具体的には、1 週間にわたる調査を 2 度行い（5/10～5/14、8/2～8/7)、山崎長者巻・延喜加持巻・尼公巻の全 3 巻全紙について、高精細デジタルカメラを用いてカラー画像、近赤外線画像、可視励起光による蛍光画像の撮影を実施した。年度内はこれらのデータを加工・分析を行い、次年度に実施予定の蛍光エックス線を用いた顔料分析に具える。

【実績値】

作品調査実施回数　3 回：5/10～5/14、7/30、8/2～8/7
研究会開催件数　　2 回：東京文化財研究所で 10/4、奈良国立博物館で 11/4 に実施。
調査概報　　1 件：『大徳寺伝来五百羅漢図調査報告書』(3 月 25 日刊行)
調査作品数　　2 件 28 点：
　重文　五百羅漢図(大徳寺蔵)　25 幅
　国宝　信貴山縁起絵巻(朝護孫子寺蔵)　3 巻

高精細デジタルカメラを用いた
信貴山縁起絵巻調査（8/2）

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4513-2

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考　前年度に初の本格的な光学的調査を実施した南宋仏画の名品・大徳寺所蔵五百羅漢図 82 幅について、本年度も継続的に追加調査を実施し、東洋絵画史あるいは東洋史研究など学会に裨益する貴重なデータを調査報告書として年度内に刊行する目途が付いた。また、国宝 信貴山縁起絵巻の新たに光学調査の対象に加えこれまで十分に検討されてこなかった同絵巻の顔料・絵画技法の解明に向けて、基礎データの収集を実施することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考　両機関研究員の日程確保が難しい状況の中で、本年度はすでに 1 週間にわたる調査 2 度を含む 4 度の調査を実施することができた。特に信貴山縁起絵巻は全 3 巻の全紙にわたって光学調査を実施したことにより、膨大なデータを収集することができた。また前年度から引き続き大徳寺五百羅漢図の追加調査も実施し、これらのデータを踏まえた研究会を 2 回行い、両機関研究員の討議を重ねた結果、本年度中に報告書刊行が刊行できる見込みである。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	最新鋭の光学機器を用いた調査の実施により、従来は不明だった文化財の材質や構造を明らかにすることができ、また文化財の保存・修理を将来行う上での指針となる詳細な現状記録を残すことができた。特に本年度は中国南宋時代と平安時代の重要絵画作品について詳細な調査を実施し、そこで得られたデータをもとに研究会を重ね、着実に報告書刊行につなげることができた。また、共同研究のメンバー以外にも当該作品を総合的に評価するために外部の研究者を招聘して調査を実施することができた。今年度調査したもののうち、信貴山縁起絵巻については基礎的データの収集に努めたが、次年度には新たに蛍光エックス線を用いた顔料分析も行う計画であり、追加調査を重ねていくことで分析の精度を高め、報告書の刊行につなげたい。また調査前・調査後の検討会をより綿密に行う一方、現在は 1 週間程度かかる 1 回あたりの調査実施期間を圧縮して、スムーズな日程調整を実現にするとともに、作品自体への負担を軽減したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、目録作成やデータベースの公開に力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4513-3

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）仏教美術写真収集及びその調査研究（(5)-②-ⅱ）

【事業概要】

収蔵品・寄託品および展覧会等に際して館外から借用した仏教美術を中心とする文化財について、写真撮影をおこなう。図録や美術書などには通常掲載されていない、作品の側面、背面、内側などの撮影を多数おこなうことにより、作品の構造理解や製作技法の解明に資する情報を収集することを目的とする。写真資料の整理にあたっては、文化財の基本情報を整備するとともにデータベースへの登録を行い、学術研究や保存を目的とした利活用に対応できる体制を整える。

【担当部課】	学芸部資料室	【プロジェクト責任者】	資料室長　宮崎　幹子

【スタッフ】

【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博(上席研究員)、岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、稲本泰生(企画室長)、吉澤悟(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室員)、斎木涼子(列品室員)、岩戸晶子(工芸考古室員)、野尻忠(情報サービス室員)、清水健(教育室員)、永井洋之(企画室員)、北澤菜月(企画室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)

【主な成果】

当館内外の文化財の撮影を多数実施し、構造や製作技法の理解に関して貴重な情報資源となりうる写真資料を豊富に蓄積することができた。これらはデータベースに登録して管理運用するとともに、インターネット通して外部にも情報提供をおこなっている。今年度は本格的なデジタル撮影が可能な機器を揃え、データベースもデジタル画像対応のものにリニューアルを進めるなど、デジタル撮影を中心とした体制整備を推進することができた。なお、写真資料は特別観覧により、研究者・学術出版界・一般の利用に供している。

【年度実績概要】

今年度は、展覧会や調査に際して数多くの写真撮影をおこない、仏教美術を専門とする当館ならではの貴重な写真資料を蓄積することができた。以下に特筆すべき成果について述べる。

① 特別展『大遣唐使展』では、寺外では初公開となる十一面観音立像（安祥寺蔵）の撮影をおこなった。同像は、遣唐使らがもたらした盛唐前期の様式の影響が認められる奈良時代の一木彫刻で、像高 2 メートルを超える大型の立像である。通常は堂内に安置されているため、本格的な写真撮影が殆どおこなわれてこなかったが、当館での撮影により学術的にも貴重な写真資料を蓄積することができた。

② 特別展『至宝の仏像』では、収蔵品・寄託品の彫刻について膨大な数の新規撮影をおこなった。これまで纏まった撮影の機会には恵まれていなかったが、今回の撮影により仏像彫刻の基礎資料の充実が叶った。

③ 同展覧会では、修理を機に当館へ寄託されている金剛力士立像（東大寺蔵）の撮影もおこなった。同像は東大寺法華堂須弥壇に安置される二軀一対の、3 メートルを超える巨像である。堂内から移動するこの貴重な機会を捉え、奈良時代の乾漆像について細部の文様も含めた詳細な撮影をすることにより、学術的にも極めて価値の高い写真資料を蓄積することができた。

④ その他、館外では、地蔵菩薩像厨子扉絵（東大寺知足院蔵）、当麻曼荼羅〈根本曼荼羅〉（當麻寺蔵）等、いずれも実見や調査の機会の極めて限られる貴重な文化財の撮影をおこなった。

⑤ また、当館寄託の仏涅槃図（永慶寺蔵）の撮影を、奈良文化財研究所の写場と機材を借用して実施した。本品は一辺 4m 余りの巨大な仏画で、当館の施設では撮影が不可能であったが、この機会に法人内での連携協力、人的交流、情報交換を更に深めることができた。

デジタル化に関しては、昨年度に引き続き写真原板のデジタル画像化を推進した。また、本格的なデジタル撮影に対応出来る体制整備を進めると同時に、写真情報システムのリプレイスも進行している。来年度以降も引き続き体制の拡充に努め、デジタル画像の利活用が可能な環境整備を推進させると同時に、仏教美術の研究拠点として、学術的価値の高い写真資料の充実に努める。

安祥寺十一面観音立像撮影風景

【実績値】

○収集資料数

収集した写真枚数は以下の通り（収集資料数）。

カラー・ポジ(4×5)：840 枚、モノクロ：763 枚、X 線：122 枚、デジタル撮影：9,959 カット

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4513-3

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
本事業は継続性の高いものであり、短期的な成果や個別の画期性を期待すべきでなく、間断なく質の高い写真資料の蓄積を続けている点が評価できる。その中でも、当館の特別展や調査研究と密接に連携することで、重要領域の貴重な資料を重点的に収集し、全体として質の高い独自のコレクションを形成していることは、特筆に値する。今年度刊行された学術報告書『奈良時代の塑造神将像』は、本事業で蓄積された執金剛神立像・四天王立像（ともに東大寺蔵）の写真資料が内容の中心となっており、今後もこうした研究の基礎資料となるべく、優れた写真資料の収集に努める。

2．定量的評価

観点	収集資料数					
判定	A					

備考
撮影回数や収集資料数は多ければ良いというわけではないが、質や継続性を鑑みても、本年度は充分な調査と撮影をこなしており、資料の収集も豊富であった。当館の規模やスタッフ数を勘案しても、他機関と比較して遜色のない撮影数をこなしているといってよく、仏教美術の研究拠点に相応しいコレクションの形成に寄与している。また、貴重な写真資料を当館刊行の図録や学術報告書に掲載するなど、独自の研究成果を多数公表することにも大いに貢献した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	写真撮影は、文化財の保存や所蔵者の意向、物理的・時間的制約など様々な要因が影響するため、過去の平均撮影枚数との比較から年度の実績を評価することは必ずしも適切ではない。実績概要でも述べたとおり、学術的に重要であり、撮影および調査の機会を得ることが通常では困難な文化財について、調査を実施し質の高い写真資料の収集が叶うことの意義は大変大きい。今後も調査や展覧会の開催と密接に連携した写真資料の蓄積を続け、仏教美術写真の一大コレクションとしての質の維持に努める。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	実績概要でも述べたとおり、ポジフィルムの生産中止により、来年度には本格的なデジタル撮影への移行が必須となっており、鋭意準備を進めているところであるが、機材と人材の確保を含めた長期的な展望が今後とも必須であると思われる。 仏教美術分野では国内唯一と言っていい貴重なコレクションを維持しつつ、引き続き内外の研究者や学術出版界の利用に供する体制を整備することと、今日的な要請をふまえたデジタルアーカイブシステムの構築、情報公開への対応が必要である。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4513-4

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)　我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究（(5)-①-ⅱ）

【事業概要】

仏教美術の専門館であり、日本仏教美術に関するもののみならず、広くアジアを視野に入れた展示を構成している奈良国立博物館の特長に鑑みて、中国や朝鮮半島における文化財とわが国の文化財の比較研究を実施する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西山　厚

【スタッフ】

【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博（上席研究員）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（企画室長）、吉澤悟（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、野尻忠（情報サービス室員）、清水健（教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）

【主な成果】

学術交流協定を締結している中国・韓国の博物館等との間で研究員の派遣・受け入れを行い、活発な研究交流・情報交換を行うことができた。また特別展開催の前提として行った、中国・朝鮮半島で制作された文物に対する調査研究をわが国の文化財との比較という観点に立って進め、その成果を展示・図録・国際シンポジウム等に反映した。

【年度実績概要】

① 学術交流協定を結んでいる韓国・国立慶州博物館に研究員１名を派遣した。また、中国・河南博物院から２名、慶州博物館から２名の研究員を受け入れた。正倉院展開催に際して慶州博物館から館長ほか 1 名を受け入れた。また慶州博における特別展「元暁」開催時に、当館から館長以下 3 名を、また特別展「皇南大塚」開催時に研究員 2 名を派遣した。

② 「平城遷都 1300 年記念　大遣唐使展」開催に際し、中国で制作された文化財を中・米両国から借用し、クーリエとして研究者計 12 名（米国 6 名、中国 6 名）を、また中国・陝西省の文化財関係者 5 名を代表団として受け入れ、文化財を介した日中間の交流に関する情報交換を活発に行った。またクーリエとして 3 名の研究員を中国に派遣（うち 2 名は前年度末）し、併せて今後の両国における文化財調査に向けた情報収集を行った。同展では中国の仏教文化がわが国に与えた影響に関するこれまでの調査研究の成果を、会場のパネル、展覧会図録、各種講座等に反映させた。展示構成の面では唐と日本の文物の比較だけでなくアジア全域を視野に入れ、同時代の新羅、渤海、南詔、吐蕃、突厥などの諸国家に関連する文物も陳列し、より厚みある文化交流の様相を浮き上がらせることに努めた。また会期中の 6 月 5 日に実施した国際学術シンポジウム「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」では、米国人研究者 1 名と当館研究員 2 名を含む計 4 名が遣唐使の時代の文物に関する研究発表を行い、学術的にも有意義な討論を行うことができた。

③ 中国・河南省の文物を一堂に展観した特別展「誕生！中国文明」（東京国立博物館：7 月 6 日～9 月 5 日、九州国立博物館：10 月 5 日～11 月 28 日）の図録に研究員 2 名が仏教美術関係の作品解説を執筆し、これまで当館が行ってきた河南博物院との交流の成果が反映された。また東京会場に研究員 2 名、福岡会場に同 3 名を派遣して会場の状況視察、作品の点検等を行い、23 年度における同展の当館での開催に備えた。

④ 特別展「第 62 回正倉院展」では、東アジア文化圏の中で正倉院宝物の意義を考察し、展示及び展覧会図録に反映した。会期中の 10 月 24 日には正倉院宝物の制作地をテーマとする学術シンポジウム「正倉院宝物はどこで作られたか」を開催した。当館研究員 1 名を含む 4 名のパネリストが研究発表を行い、唐代併行期の文物における唐・新羅・日本それぞれの製品の区別の問題等を中心に、議論が深められた。

【実績値】

研究員の派遣　７名
研究員の受入　２４名
学会、研究会等発表件数　３件
論文掲載件数　　４件

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4513-4

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　我が国の仏教美術を研究する上で、中国・韓国をはじめとする海外の仏教文化研究は必要不可欠である。そのために数箇所の研究機関と学術交流協定を基軸として効率的に調査研究を進め、その成果を当館の特別展等に反映させるように努めている。

2．定量的評価

観点	研究員の派遣人数	研究院の受入人数	学会、研究会等発表件数	論文掲載件数	
判定	A	A	A	A	

備考
　展覧会企画に沿った調査研究ができ、その点では必要十分な条件を満たしている。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	河南博物院（中国）・国立慶州博物館（韓国）と研究員の交流を行うことで、広くアジア諸国を視野に入れた調査研究を行うことができた。特別展「平城遷都 1300 年記念　大遣唐使展」では、7～9 世紀における仏教文化を介した日本と大陸の交流の様相を多角的に紹介し、中国・米国・日本国内から中国の文化財を借用し、展覧会の内容を充実させることができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	わが国とアジア諸国との文化交流に関する文化財の調査研究は次第に蓄積を増しており、こうした成果によって 22 年度特別展「平城遷都 1300 年記念大遣唐使展」の内容を充実させることができた。23 年度以降も中国・韓国との交流を内容に含む特別展を計画中で、今後も引き続き調査研究を続けていく必要がある。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4513-5

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5)　当館所蔵品についての調査研究(客員研究員)（(5)-①-ⅲ）

【事業概要】

従来からの収蔵品について継続的に調査研究を実施する。なお、新収蔵品については具体的な公開等を見越して重点的にこれを行う。調査研究の成果は、展覧会、印刷物、インターネット等を通じて公表し、広く斯界の学術的発展に資する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西山　厚

【スタッフ】

【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博（上席研究員）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（企画室長）、吉澤悟（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、野尻忠（情報サービス室員）、清水健（教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）。客員研究員：根立研介（京都大学大学院文学研究科）、板倉聖哲（東京大学東洋文化研究所）、井手誠之輔（九州大学大学院人文科学研究院）、木村法光（元宮内庁正倉院事務所）、森郁夫（帝塚山大学人文学部）　調査員：藤岡穣（大阪大学大学院文学研究科）、高梨純次（滋賀県立近代美術館）、黒田泰三（出光美術館）、橋詰文之（和泉市久保惣記念美術館）、稲城信子（元財団法人元興寺文化財研究所）、渡邊智山（関西大学文学部）

【主な成果】

新収蔵品に対する調査研究を重点的に実施し、名品展での公開と併行して研究成果を広く発信することができた。収蔵品についても継続的に調査研究を行い、その成果を展示及び刊行物などに反映することができた。長く寄託されてきたものの展示される機会がなかった作品群が、展示会場のリニューアルや作品の修理完了に伴って、多数展示されたことも本年度の成果として特筆される。

【年度実績概要】

① 特別展「平城遷都 1300 年記念　大遣唐使展」開催に向けて行った関連収蔵品調査の成果を、展示及び展覧会図録等に反映した。

② 当館で目下進めている新納忠之介旧蔵美術院資料（当館所蔵）のデジタル画像化事業の過程で行った調査研究の成果を「仏像修理 100 年展」会場における解説・パネル、及び展覧会図録に反映した。同展では同資料の展示も行われたが、中でも関東大震災後における仏像修理の状況を物語る資料群が整理を経て初めて公開され、その歴史上の価値が再認識された意義は大きい。

③ 阿弥陀如来坐像（歓喜寺）、釈迦如来立像（法明寺）、十一面観音立像（西光院）など、長年寄託されているものの、調査が不十分であったがゆえにほとんど紹介されることのなかった平安時代の諸像の調査研究を重点的に行い、その成果をリニューアル以降の本館（なら仏像館）における展示及び『なら仏像館名品図録』等に反映した（彫刻部門）。

④ 長年寄託されてきた優品であるものの、状態不良のため展示されたことがなかった奈良豆比古神社の能装束（狩衣）を、修理完成に伴って西新館の名品展で初公開し、修理時の調査で得られた知見等を展示に反映した（工芸部門）。また「慈円僧正懐紙」（当館）「策彦周良墨跡探春」（慈済院）等についても、修理完了を承けて名品展で公開し、修理時の知見等を展示に反映した（書跡部門）。

⑤ 長く寄託されてきたものの、これまで紹介されることのなかった大画面浄土変相図「当麻曼荼羅」（三重・西来寺蔵）を調査し、大型の壁付展示ケースが西新館に新造されたのを機に初めて公開し、研究成果を展示に反映した（絵画部門）。

⑥ 前年度の新収品「祐顕和歌懐紙」を、購入前後における調査研究をふまえ、初めて展示した（書跡部門）。

【実績値】

展覧会図録　3 冊
収蔵品の調査研究成果の展示への反映　１２回
論文掲載数　１本

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4513-5

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　収蔵品の調査研究は各部門による定期的継続的な点検調査を通して、平常展等で新たな成果を公開している。また、新収蔵品等についても集中的な調査を実施しており、この成果を公開しているのは前述の通りである。

2．定量的評価

観点	図録の作成	論文掲載数	展示への反映			
判定	A	A	A			

備考
　調査研究成果について、質の高い図録等として発表することができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	収蔵品の調査研究を進め、その成果を特別展・名品展及び各種刊行物等に反映させた。諸般の事情で長く公開されてこなかった作品が、調査研究を経て会場のリニューアルや修理の完了を機に展示され、真価が再認識された例が多いことも、本年度の成果として特筆される。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	従来からの収蔵品及び新収蔵品についての調査が継続的に実施され、その成果は評価の高い展覧会を生み、また展覧会図録等の出版物やインターネット等を通じて公表された。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4513-6

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6)　奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流　（科学研究費補助金）（(5)-①-ⅱ）

【事業概要】

奈良時代においてわが国で制作された、あるいは中国・朝鮮半島から舶載されたと考えられる仏教関連の美術工芸品の中から特に重要なものを選定し、綿密な調査と様々な角度からの検討によって、今後の議論の基礎となる資料を学界の共有財産として提供する。同時に唐・新羅との活発な交流が生んだこの時代の文化の国際性に特に留意し、東アジア文化交流史の全体像の中に奈良時代の仏教美術工芸史を位置づける。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	館長　湯山賢一

【スタッフ】

研究代表者：湯山賢一

研究分担者：西山厚、鈴木喜博、岩田茂樹、内藤栄、稲本泰生、吉澤悟、谷口耕生、宮崎幹子、野尻忠、清水健、岩戸晶子、斎木涼子、北澤菜月、永井洋之（以上当館学芸部）

連携研究者：有賀祥隆（東京藝術大学）、東野治之（奈良大学）、前園実知雄（奈良芸術短期大学）、根立研介（京都大学）、藤岡穣、高橋照彦（以上、大阪大学）

研究協力者：杉本一樹、成瀬正和、尾形充彦、西川明彦（以上、宮内庁正倉院事務所）、山崎隆之（前愛知県立藝術大学）、梶谷亮治（東大寺ミュージアム）、中島博（前当館）

【主な成果】

平成 20 年度から３ヵ年の計画で進めてきた①蛍光Ｘ線分析装置による光学調査を中心とした東大寺金堂鎮壇具（国宝）についての基礎データ収集と、その体系化。②東大寺法華堂諸像の修理時に（財）美術院によって撮影された彩色文様写真の研究資料化と、これに対する文様史的検討。③館蔵及び寄託の古写経に関する基礎データの集積と料紙分析。などの調査研究を完了させ、その成果をとりまとめた研究成果報告書を刊行した。

【年度実績概要】

・「大遣唐使展」に出陳された海獣葡萄鏡（香取神宮蔵、国宝）の蛍光Ｘ線分析、高精細画像による撮影等を実施した。同鏡は「第 62 回　正倉院展」に出陳された鳥獣花背円鏡と同型であり、比較検討の成果の一端を同展図録の「宝物寸描」で報告した。
・東大寺金堂鎮壇具（国宝）の高精細画像による撮影、実測、三次元計測、Ｘ線透過撮影（一部）、蛍光Ｘ線分析（一部）などを実施し、データの蓄積を行った。
・秋田市立赤れんが郷土館に研究員 2 名を派遣し、文様史研究の一級資料であるにもかかわらず全貌が紹介されていない「小場恒吉資料」（同館所蔵）のうち、東大寺法華堂諸像に関連する描起こし図の調査を実施した。併せて当該資料と、前年度に作成した同堂諸像の彩色文様画像目録に掲載された文様写真の照合を行った。
・唐代併行期の東南アジア仏教美術の様相を今日に伝える藤井有鄰館所蔵「南詔図伝」を一時的に借用し、全巻の写真撮影及び光学調査等を実施し、基礎データを収集した。
・奈良朝写経の代表作である藤田美術館所蔵「大般若経」（薬師寺伝来、通称魚養経、国宝。総数 387 巻）全巻を借用・搬入して集中的に調査・撮影を行い、全巻分の基礎データ収集を完了した。
・当該テーマに即して研究分担者各人が進める調査研究の成果を、各種学会・学術論文等で発表した。
・本研究の成果の一部を当館編『奈良時代の塑造神将像』（中央公論美術出版、12 月刊）に反映させた。
・これまでの三年間にわたる成果をとりまとめ、二分冊からなる研究成果報告書を完成させた。

【実績値】

調査回数　25 回、延べ 120 日
学会等発表回数　　7 回
研究成果に基づく報告書の刊行　３冊
論文発表本数　8 本

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4513-6

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

仏教美術の研究において、名実ともに日本を代表する機関として内外の学界をリードしてきた当館の伝統と実績をふまえて企画された他ではなしえない研究であり、古代東アジア文化に関わる全ての学問領域の研究者の待望する、重要作品の精査に基づく基礎資料の整備を順調に進めている。また東アジアの文化交流史上に奈良時代の仏教美術を位置づけるという視点を堅持して研究を進めており、最終年度である本年度末に結実する成果が、国際的規模で学界に貢献するとの展望をすでに得ている。

2．定量的評価

観点	調査回数	学会等 発表回数	論文発表本数			
判定	A	A	A			

備考
彫刻・絵画・書跡・考古の各部門において当該テーマに相応しい作品（ないし写真資料）の調査・撮影を計画的・継続的に進めており、質量ともにきわめてすぐれた基礎資料が整備されつつある。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	３年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。蓄積した資料をとりまとめるだけでなく、多角的な観点から分析・考察を加え、充実した研究成果報告書の刊行に結実した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	規模・内容ともに国内最大の仏教美術の研究拠点である当館に相応しいプロジェクトであり、計画にそって着実に実績を挙げている。23 年度以降も継続して競争的資金の獲得に努め、拠点としての体制・設備をさらに充実させ、関連学界の要請に応える総合的な研究活動を展開する必要がある。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4513-7

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7)統一新羅期の道具瓦集成(科学研究費補助金)（(5)-①-ⅱ）

【事業概要】
日本の瓦生産に大きく影響を与えたと考えられる朝鮮半島の様相を日本と比較検討することを目的として、特に研究が遅れている道具瓦を取り上げる。これまで文様の分析に偏りがちだった鬼瓦と鴟尾について出土数が多い統一新羅の資料を対象に集成を行い、これまで研究・調査によって明らかにしてきた技術的観点から見た古代日本の鬼瓦の様相とを比較検討しつつ、製作技術など技術的観点にもとづくデータを採取し、基礎的資料を作成する。

【担当部課】	学芸部工芸考古室	【プロジェクト責任者】	工芸考古室員　岩戸 晶子

【スタッフ】
工芸考古室員　岩戸 晶子

【主な成果】
平成 20 年度から３ヵ年の計画で、韓国国内で最も多い所蔵資料数を誇る韓国国立慶州博物館(以下、慶州博)ほか、韓国国立中央博物館や東国大学校博物館などの所蔵資料を中心に、実測や写真撮影、熟覧を行い、資料化を進めてきた。

【年度実績概要】
平成 20 年度から３ヵ年の計画で進めてきた調査であったが、昨年度は慶州博所蔵の雁鴨池出土の一括資料について集中的に調査を行う予定であったものの、先方とのスケジュールが合わず、今年度８月まで繰越して調査を完了させた。今年度は、慶州博での資料調査では雁鴨池遺跡出土の道具瓦について悉皆調査を完了し、データと写真の整理を終えた。
行った調査は、実測と写真撮影である。
実測は断面を中心とし、写真撮影は文様面だけでなく、側面文様や裏面、製作技術の一端を示す痕跡、笵傷などについて詳細に記録し、莫大な雁鴨池出土の鬼瓦について型式分類を行うことができた。
このデータを研究資料として最大限活用するためにはどのように公表すべきかについても所蔵機関と協議を進めることができ、今後、順次公表していく予定である。

【実績値】
調査回数：１７日間
収集資料数：約７０点

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 4513-7

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
雁鴨池出土品の報告は古いものしかなく、遺物の再調査は韓国だけでなく関連する日本の研究者にとっても待望するものである。昨年度から今年度は、道具瓦特に鬼瓦についての悉皆調査であったが、雁鴨池は統一新羅を代表する遺跡であり、ここでの遺物の再整理の端緒となる研究であり、今後もさらに発展させた研究が可能となると思われる。また、本調査は、奈良国立博物館における慶州博との学術交流などの人的交流の成果を基に可能となったものである。

2．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				

備考
　先方とのスケジュール調整がうまくいかず、年度繰越を行ったが、その結果、確実に予定していた調査を完了することができた。これまでの調査データの整理や分析も順調に進められた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	基礎資料の蓄積と大量の調査データの整理を果たし、今年度も相応の評価が得られると思われる。最終年度であったため、韓国人研究者との検討も行いつつ、成果の公表への準備を進めることができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の調査の目的を果たし、雁鴨池出土の大量の道具瓦の悉皆調査を終え、統一新羅期の道具瓦についての基礎データと概要をほぼ把握することができた。今後はこの成果を基にして、日韓の比較研究など検討を深めていきたいと考える。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4514-1

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究((5)-①-ⅱ)

【事業概要】

平成 19 年度より継続的に実施してきた JICA 草の根技術協力事業「文化財の保存と観光資源としての利活用」によるタイ国との文化財保存活用に関する交流の成果として、タイ国バンコク国立博物館において海外日本古美術展「日本とタイーふたつの国の巧と美」を開催した。

【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	企画課長　小泉惠英

【スタッフ】

原田あゆみ（文化財課主任研究員)、小泉惠英（企画課長)、赤司善彦（展示課長)、藤田励夫（博物館科学課保存修復室長）

【主な成果】

平成 23 年 1 月 15 日より、タイ国バンコク国立博物館において、海外日本古美術展「日本とタイーふたつの国の巧と美」を開催した（～3 月 13 日)。展覧会の内容は日タイ共同で構築し、両国の歴史をたどりながら、文化の共通点と差異を示すことをめざした。展示はふたつの国のはじまり、仏教、出会いというテーマで構成し、両国の文化財 107 点を展示した。また両国の伝統工芸も紹介した。

【年度実績概要】

タイ国での特別展開催に向けての準備として、8 月 26～31 日に、日本より 2 名を派遣し、展示施設、展示内容、図録編集にかかる協議を行なった。10 月 28～11 月 1 日に、日本より 3 名を派遣し、同展ならびにワークショップにかかる協議を行なった。1 月 4～3 月 7 日に、日本よりのべ 13 名を派遣し、文化財輸送、展示作業をタイ国バンコク国立博物館、タイ芸術局職員と共同で実施した。1 月 15 日に、九州国立博物館を愛する会、ボランティア、タイ国在住ボランティアの協力を得て、日本の伝統的な遊戯を紹介するワークショップを実施した。同日に、両国の博物館ボランティア活動における意見交換会を実施した。1 月 29～30 日に、日本の伝統工芸の 1 つである久留米絣の制作に関して、日本より招聘した絣制作作家の協力を得てバンコク国立博物館内でワークショップを実施した。

3 月 5～21 日に、研究員 4 名を派遣し、来年度に九州国立博物館で実施予定の同展の帰国展に向けて、バンコク国立博物館で作品の集荷、輸送を行なった。同時にタイ国より点検、展示に携わる研究員 2 名を招聘した。

【実績値】

○調査回数　3 回

○研究員海外派遣数　のべ 22 名をタイ国に派遣。

○研究員受入数　2 名をタイ国より受け入れ。

○論文掲載数　展覧会図録 Artisanship and Aesthetic of Japan and Thailand を刊行し、同図録に研究員が作品解説 56 点、テーマ解説 10 点を執筆した。

バンコク国立博物館での
展示風景

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-1

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	S	A	S	A

備考
博物館がもつ使命である文化財の活用と、地域との共生とを関連させた事業は、高い公共性を持つもので、今後の博物館のあり方を考える上で極めて重要な取組である。交流の成果を合同出品の展覧会の形で結実し、諸外国との文化を比較研究することは独創的な取組であり、その成果はアジアの文化財行政の多角的な取組に新たな視点を提示し、今後の文化交流にも寄与するところが大きい。

２．定量的評価

観点	調査回数	研究員海外派遣数	研究員受入数	論文掲載数		
判定	A	A	A	A		

備考
派遣、招聘とも、文化財行政の現場の第一線で活躍するメンバーで行なわれ、展示会準備、ワークショップなど具体的な成果をあげている。また、図録執筆にも多くの職員が関与している。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財の展示活用を通じての諸外国との交流は、国立博物館の活動として文化財行政の観点で極めて大きな貢献であるといえる。展覧会を通じて、広く市民に対してもその成果が還元されている。相互の文化理解に対して与える影響はきわめて大きく、展示準備を通じて相互の信頼関係も構築され、今後の文化財活用への足がかりとなる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	3 ヵ年にわたるタイとの交流を通して博物館の地域共生という問題についての成果をあげ、それを展覧会の形で結実した。予定されている九州国立博物館での帰国展へ向けての準備も順調に進められており、次年度はタイ国の文化を日本へ紹介する格好の機会を得ることになる。

【書式Ｂ】　　施設名 | 九州国立博物館 | 処理番号 | 4514-2

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)文化財の材質・構造等に関する共同研究((5)-①-v)

【事業概要】

九州国立博物館において、X 線 CT を用いて文化財の内部構造調査を行い、文化財の健康状態や制作技法を理解し、得られた成果を展示に活用することを目的とする。

【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室長　今津節生

【スタッフ】

臺信祐爾（文化財課長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元塁（企画課研究員）、楠井隆志（展示課主任研究員）、坂元雄紀（展示課研究員）

【主な成果】

稲荷山古墳出土辛亥銘鉄剣の保存状態、金象嵌文字の調査を実施した。辛亥銘鉄剣は窒素ガス封入状態で保管されてきた。調査の際にも、辛亥銘鉄剣を窒素ガス封入したケースに入れて非接触で調査した。調査の結果、鉄剣の表裏にある 117 文字の象嵌文字を表裏分離して記録することができた。

【年度実績概要】

九州国立博物館の展示に借用する文化財を中心に、1 年間で約 250 点の CT 調査を実施した。得られた成果は、文化交流展での展示の際に活用している。

また、特別展で借用した埼玉県稲荷山古墳出土の辛亥銘鉄剣などの調査を実施した。辛亥銘鉄剣は保存処理を終了して 30 年を経過していた。外観調査と X 線 CT 調査の結果、新たな錆による変形は観察されず、健康状態を保っていることが確認された。また、初めて鉄剣の表裏に書かれた 117 文字の金象嵌文字の表裏分離をおこなうことができた。象嵌文字の表裏分離によって象嵌の施工順序も明確になった。また、象嵌文字以外にも柄に金属が使用されていることが初めて判明した。さらに、辛亥銘鉄剣の三次元情報を３D プリンタで出力することによってデジタル複製品を製作した。この複製品は“触れる国宝”として埼玉県教育委員会が公開して地元の博物館教育に活用している。このように、本研究の成果は修理ための基礎情報や製作技法を解明する学術的な基礎情報として役立つことが期待される。

その他、外部との連携としては、東京国立博物館・興福寺国宝館との連携調査の成果として、国宝阿修羅像の CT 調査についてデジタル文化財創出機構主催のシンポジウムで発表した。参加者は約 500 名であった。また、泉屋博古館の所有する中国古代青銅器について調査を実施した。その結果、青銅器の製作技術を非接触で解明することができた。この研究成果は日本文化財科学会とアジア鋳造技術史学会で発表した。

【実績値】調査件数　約１００件

○調査回数　　６０回

○資料収集数　　２５０点

○学会研究会等発表数　　５件（日本文化財科学会、アジア鋳造技術史学会、デジタル文化財創出機構）

○論文掲載数　　２件（日本中国考古学会・泉屋博古館紀要）

CT 画像（正面・側面）　　文字摘出　ﾃﾞｼﾞﾀﾙ複製品

稲荷山古墳 国宝・辛亥銘鉄剣の調査

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-2

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
効率性では、安全・敏速に計測できる体制が整った。国内各博物館・寺社・教育委員会等からの調査要請が多く、我が国の文化財科学情報のセンターとしての期待が高まっている。得られたデータを展示で活用する機会も増えており、活用の応用範囲が全国的に広がっている。

２．定量的評価

観点	調査回数	資料収集数	学会研究会等発表数	論文掲載数		
判定	A	A	A	A		

備考
保存修復学会には約 650 名、文化財科学会には約 500 名の研究者が参加した。また、アジア鋳造技術史学会には約 200 名の研究者が参加した。日本中国考古学会、泉屋博古館紀要に論文を発表した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財用の X 線 CT としては、世界的で最も優れた装置の一つであり、内外の研究者からその有用性について高い評価をいただいた。泉屋博古館、徳川美術館、等に加えて埼玉県立さきたま史跡の博物館など国宝・重要文化財を保有する機関との連携研究も進んでいる。 23 年度も、より幅広い他機関との連携を目指すと共に多方面でのデータの活用を進めると共に展示への活用を進めたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	九州国立博物館では展示に際し文化財を常に借用するため、X 線 CT スキャナ装置で文化財所蔵者と共同調査し成果を上げることで、他の博物館・研究機関との連携が進みつつある。23 年度はさらに連携を強化して広い範囲で調査・展示を実施したい。

【書式Ｂ】　　施設名 九州国立博物館　処理番号 4514-3

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3)博物館における文化財保存修復に関する研究（(5)-①-ｖ）

【事業概要】

当館文化財保存修復施設の機能と利点を生かし、西日本地域の大学で文化財保存修復を学ぶ学部生・大学院生を対象とした研修を実施する。

【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　志賀　智史

【スタッフ】

篠崎悠美子(別府大学教授)、藤田励夫(保存修復室長)、松尾かをる(研究補佐員)、藤岡春樹(国宝修理装こう師連盟九州支部長)、木村愛(国宝修理装こう師連盟九州支部主任技師)、井口茉也・平河智恵(国宝修理装こう師連盟九州支部技師)

【主な成果】

吉備国際大学から 2 名、九州産業大学から 1 名、別府大学から 1 名の合計 4 名が参加した。少人数のため、実践的な研修が実施できた。

【年度実績概要】

別府大学の篠崎悠美子教授を招聘し、保存修復施設を利用し、地域の大学との協業を果たすことを目的とした短期インターンシップ研修プログラムを平成 17～21 年度の実績を踏まえ検討、改善した。成果は 8 月 16 日(月)～20 日(金)の 5 日間にわたり国宝修理装こう師連盟の協力を受け、吉備国際大学と九州産業大学、別府大学の学生 4 名に対して、装こう技術に関する短期インターンシップ「文化財保存修復研修」として開催した。研修では障壁画下貼り作製に関する講義と実習を通して、文化財保存修復についての理解と研鑽を深めた。

【実績値】

○研修開催数　6 回目（平成 17 年度より）

○参加者数　4 名

研修風景

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-3

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　近年、文化財修理についての関心が高まっているが、九州で文化財修理に関する研修をおこなっている機関は他に無く、独創的で発展性のある研修といえる。

２．定量的評価

観点	研修開催数	参加者数				
判定	A	A				

備考
短期の実習としては適切な数である。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財を伝えるため修復技術者の育成は必要不可欠である。将来を担う学生・大学院生に対して実践的な研修の場を提供することにより、修復技術者の育成を目指す。このような研修を行っている機関は極めて少ない。少数の研修生で毎年継続することに意味のある事業であり、平成 23 年度以降も実施する計画である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平成 17 年度より少人数の実習を継続的におこなっており、参加者数も安定している。平成 23 年度以降も同様な研修を実施する計画である。

【書式Ｂ】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4514-4

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)博物館危機管理としての市民協同型 IPM システム構築に向けての基礎研究（(5)－①－ⅱ）

【事業概要】

今年度も文化庁の受託事業、平成 22 年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業「市民と共に ミュージアム IPM」を実施した。昨年度はモデル事業として「策定・実施」の段階であり、22 年度からはモデルを完成するため、さらに順次検証・検討・策定・実施・改善する構想である。

今年度はミュージアムにおける資料保存の一部について、市民の直接参加を可能にするため、館の設置形態や規模にとらわれない支援者人材育成プログラムを策定し研修をおこなった。また今年度も公開シンポジウムを開催し、地域や市民への普及に努めた。

【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	博物館科学課長　本田光子

【スタッフ】

三輪嘉六（館長）、森田稔（副館長）、宮本裕一（交流課長）、神谷真美（総務課長補佐）、今津節生（環境保全室長）、鳥越俊行（環境保全室主任研究員）、上野知彦（交流課主任研究員）、秋山純子（アソシエイトフェロー）、上野敦子（研究補佐員）

【主な成果】

研修会は、全国の美術館・博物館の学芸員の参加が大半を占め、ミュージアム IPM の関心の高さがうかがえた。また美術館・博物館でのミュージアム IPM 取り組みについての意見を聞け、今後のミュージアム IPM 支援者育成プログラム案策定に充分活かすことができ、来年度の研修を具体的に進める目途が得られた。

公開シンポジウムでは市民の活動報告と専門家の講演、また意見交換会では専門家の意見交流の場となり、昨年度より充実した内容となり、市民の理解を深めることができた。

【年度実績概要】

1.人材育成プログラムの策定

専門家や有識者による会議を開催し、前年度の本事業による策定案に基づきモデルプログラムを策定、実施し参加登録者の意見を加え、検討協議をかさね、設置目的や館の形態を超えてプログラム案を策定する。

2.モデル研修会の実施

IPM ボランティア導入検討館が推薦する者の中から事前に申し込みを受け、20～30 名程度の登録制とする。

3.公開シンポジウムの開催

市民協同型ミュージアム IPM の必要性・重要性を広く社会へ紹介するとともに、その担い手であるボランティアや NPO 法人等支援者達からのメッセージを地域社会へ直接伝える場とする。

【実績値】

○検討会等開催回数・・・・・・・・・・8 回
- プログラム策定会議：2 回
- 地域協力者会議：　2 回
- ワーキンググループ検討会：　4 回

○支援者育成研修会開催回数・・・・・・・1 回

○支援者育成研修会参加者数・・・・・・160 名
- 1 日目(ガイダンス・講義 3 回)：　63 名
- 2 日目(ワークショップⅠⅡⅢⅣ)：80 名
- 3 日目(施設見学・総合討議)　　：17 名

○シンポジウム開催回数・・・・1 回

○シンポジウム参加者数・・・・236 名

プログラム策定会議

公開シンポジウム

ミュージアム IPM 支援者育成研修

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-4

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	検討会等	支援者育成研修会開催回数	支援者育成研修会参加者数	シンポジウム開催回数	シンポジウム参加者数	
判定	A	A	A	A	A	
備考 モデル研修会等参加登録者は毎回 20 名前後であり、各回とも 90%以上の出席であった。						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今回の事業が、IPM をひとつの切り口とした、九博の着実な取組を多くの方々に理解していただく契機になるとともに、館の規模や設置形態を超えて、広く参考となるモデルを示すことができた。次年度には、本プログラム案を基にした研修を定型として実施すると共に、ステップ研修会の計画を検討、開催する。特に、地域文化施設との連携を深めながら、より広範な普及をはかるようにする。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	地域の支援者層の拡大充実を図ることで、市民や機関との連携を深めながら、より積極的に文化財に関する調査及び研究を推進した。

【書式Ｂ】　　施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-5

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5)東アジアの文化財修復用手漉き和紙の調査研究(UNESCO との共同)　((5)-①-ⅱ)

【事業概要】

絵画、書跡、古文書等の文化財修復には、伝統的な材料と技術を用いた手漉き紙が不可欠である。東アジア各国では、伝統手漉き和紙の技術が廃れ、良質の手漉き紙を入手することが困難になってきており、いずれは消滅してしまう危機に瀕している。そこで、日本、中国、韓国を中心とする手漉き紙の技術について、現地調査を実施し、保存策策定のための資料を得る。

【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長　藤田　励夫

【スタッフ】

森田稔(副館長)、本田光子(博物館科学課長)、志賀智史(博物館科学課主任研究員)、秋山純子(アソシエイトフェロー)

【主な成果】

中国においては UNESCO との共同調査により、甘粛省博物館にて第４回紙文化財保存修復国際シンポジウムに参加すると共に、漢時代の出土紙文化財について調査した。

日本においては、高知(2 ヵ所)、山口、島根(5 ヵ所)、岡山の手漉き和紙製作現場 9 ヵ所を調査した。

昨年度までに調査して得た調書、映像記録を総括した。

【年度実績概要】

日本および中国の調査地においては、動画撮影、写真撮影、聞き取り調査、調書作成、サンプル収集などを実施した。

また、中国の調査地においては、中国各地および韓国、日本から集まった文化財関係者とともに国際シンポジウムを開催し、主に中国各地の手漉き紙製作についての発表が行われた。日本から九州国立博物館のスタッフのほか、高知県立紙産業技術センターの研究員、紙文化財の修理技術者の代表が出席した。

第４回東アジア紙文化財保存修復シンポジウム
(2010/12/6-12/8　甘粛省博物館にて開催)

【実績値】

調査地　海外：中国　２件(甘粛省博物館、甘粛省文物考古研究所)
　　国内：　　９件(高知(2 ヵ所)、山口、島根(5 ヵ所)、岡山)

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-5

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 ほぼ計画通りに実施されている。						

2. 定量的評価

観点	海外調査	国内調査				
判定	A	A				
備考 ほぼ計画通りに実施されている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国、国内共に効率的に手漉き地生産地を調査し、資料を入手することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ほぼ計画通りに実施されている。次年度以降、昨年度までの調査結果に加えて、今年度収集した調査結果を集約し、修理現場へ還元していくことが望まれる。

【書式Ｂ】　　施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-6

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6)ＶＲ画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築（科学研究費補助金）（(5)－①－ⅱ）

【事業概要】

本研究では、日本列島に分布する装飾古墳を対象とし、写真測量技術を応用して壁画に影響を与えることなく、石室全体を客観的に記録する方法を開発した。この技術を活用して装飾古墳の記録・管理の事業を展開し、博物館や web 上で展示・公開するためのデジタルアーカイブを構築する。これにより装飾古墳を３次元的に記録する研究基盤を確立する。また、装飾古墳の現状記録としては、石室構造や文様の写真を高精細画像として撮影する。

【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展室長　河野一隆

【スタッフ】

研究分担者　赤司善彦　（九州国立博物館）

研究協力者　安村俊史・北野重(柏原市教育委員会)・吉田東明（福岡県教育委員会）
武廣正純・天賀光広・村上浩明　((株)とっぺん)
小堀昇　((財)日本地図センター)

【主な成果】

今年度の研究では、装飾古墳のうち大阪府高井田横穴墓の 3 基を対象とした。その結果、本研究によってデジタルアーカイブされた装飾古墳の総数は、石室 12 基・横穴墓 9 基に達し、近畿地方ではじめての VR データが成功裏に作成された。また、日本の装飾古墳を海外の事例と対比するため、イタリア中部のエトルリア彩色壁画墓の実地調査も行なった。また、昨年度に引き続き報告書の作成も継続している。

【年度実績概要】

本研究は、人手による実測図や写真によって記録・管理されてきた装飾古墳に対して、写真測量技術を応用して、非接触によって壁画に影響を与えることなく VR 画像を作成し、石室全体を客観的に記録するための方法の開発と実践の研究である。これにより、石室と壁画の記録方法が従来の実測図の作成と比べて飛躍的にスピードアップしただけではなく、壁画とカビ等の汚損や石室の崩壊などの石室内における位置関係を 3 次元的に記録できるようになり、装飾古墳の保存のためのデータ基盤が確立した。本年度は、昨年度に引き続き九州以外の横穴墓の調査として、大阪府高井田横穴墓群の計測を実施した。特に、脆弱な凝灰岩に掘り込まれた横穴墓を安全かつ迅速に計測することが課題であったが、大きな問題も無く終了した。これらの方法で製作した VR 画像データは、通常は内部に立ち入れない装飾古墳を博物館で映像展示することにも活用できる。VR 画像は文化財の保存・普及に新しくかつ最適な記録手段であるという評価が定着しつつある。

また、今年度は 4 ヶ年の研究期間のうち最終年度であり、今までの研究成果の総仕上げとしての報告書の作成と海外事例との比較研究のため、イタリアのエトルリア彩色壁画墓やポンペイのフレスコ画等の実地調査を行った。日本の装飾古墳との類似や相違点が明確となり、画題や墓室構造の比較研究に益する部分が少なくなかったのみならず、保存方法等にも参考となる部分が大きかった。

【実績値】

○調査回数　大阪府高井田横穴墓　３基(７日間)

○ＶＲ画像数　ＶＲデータ３基分

○資料収集数　３基

○調査概報　　１冊　（科学研究費調査報告書）

○学会研究会等発表数　　１回

高井田横穴墓　正射投影図面

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-6

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 概ね当初の計画通り、目標を達成することができた。						

２．定量的評価

観点	調査回数	ＶＲ画像数	資料収集数	調査概報	学会研究会等発表数	
判定	A	A	A	A	A	
備考 概ね当初の計画通り、目標を達成することができた。						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	順調に当初計画に沿って、目標を達成することが出来た。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度が最終年度ではあるが、順調に当初計画に沿って、目標を達成することが出来た。

【書式Ｂ】　　施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-7

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7)トルキ山遼墓出土品から見た唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術（科学研究費補助金）（(5)－①－ⅱ）

【事業概要】

907 年の唐滅亡後、遼、宋、高麗、日本の諸国は、唐の制度・文化を規範としつつ、それぞれに独自の文化を醸成してきたことはよく知られている。まだ十分な基礎的研究条件が整っていなかった遼代文化についても、ようやく近年、内蒙古自治区トルキ山遼墓など、各地で重要な発掘が相次ぎ、考古学的情報を伴う実物資料が飛躍的に増えた。現地で調査研究を実施している内蒙古文物考古研究所と工芸技術の変遷を軸に遼代文化研究の基礎固めとなる共同研究を実施するものである。

【担当部課】	文化財課	【プロジェクト責任者】	文化財課長　臺信祐爾

【スタッフ】

今津節生（博物館科学課環境保全室長）、市元塁（企画課特別展室研究員）

【主な成果】

内蒙古自治区の諸機関所有の遼代文物の特別展を台北故宮が開催したため、これまでの調査期間中に観察できなかった作品について調査した。

内蒙古文物考古研究所、内蒙古博物院、新築移転した赤峰博物館はじめ巴林右旗博物館など各地で現地調査を実施し、新知見を得た。

共同研究者である内蒙古関係者を招へいし、中尊寺に代表されるわが国平安時代浄土教仏教美術作品を調査するとともに、当館において国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」を開催し、共同研究の成果について、一般市民向けに発信した。

【年度実績概要】

4 月 29 日-5 月 2 日　台北故宮　遼展調査
8 月 12-19 日　現地調査
12 月 13 日-15 日　東京国立博物館・中尊寺など調査
12 月 16 日　　長崎県松浦市鷹島埋蔵文化財センター調査
12 月 17 日　　国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」

【実績値】

○調査回数
　日本国内外で 4 回
○収集資料数
　写真資料　500 点
○学会研究会等発表数
　国際シンポジウム　4 本（中国側 3 本・日本側 1 本）
　保存修復学会　1 本
○論文掲載数
　3 本
○研究員海外派遣数
　延べ 5 名
○海外研究者招へい
　4 名

国際シンポジウム

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-7

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　わが国平安時代平行期にあたる遼代工芸作品について、これまでほとんど実施されてこなかった現地コレクションの実物調査により、その技術的特性の諸様相が明らかとなりつつある。

２．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	学会研究会等発表数	論文掲載数	研究員海外派遣数	海外研究者招へい
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　研究計画に沿って順調に進んだ。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	唐王朝滅亡後の東アジアにおいて、北宋と並び立つ大勢力であった遼王朝の実態に工芸品を通じて迫ろうとする計画に対して、一定の成果を挙げることができた。調査の内容について、その成果を来年度秋の特別展で紹介する予定である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査は当初計画通り順調に進んでおり、その成果については、内蒙古関係諸機関の全面的協力の下、来年度秋に当館で開催予定の特別展で、広く一般に公表することになっている。なお、本特別展は、当館会期終了後、東京藝術大学美術館・MIHO MUSEUM・静岡県立美術館（順不同）に巡回する予定である。

【書式Ｂ】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4514-8
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	8)室町時代の仏教絵画を中心とする東アジアの宗教美術に関する調査研究（(5)－①－ⅱ）

【事業概要】

室町時代に政治権力者や有力寺院が関与して制作･受容された仏教絵画について基礎的な調査研究を行う。その造形的・文化的な意義を中国・朝鮮を含めた東アジアの宗教美術のなかに位置付けることを目的として実施する。

【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　畑　靖紀

【スタッフ】

【主な成果】

本年度は当該テーマについて次の二つの観点から研究し、下記の成果を得た。
(1)新出の観音図（個人蔵）などを調査し、中国絵画に依拠して絵画を制作した室町時代の水墨画家に関する基本資料を収集した。
(2)室町時代の仏教絵画に注目し、とくに雪舟の観音変相図を考察し、発願者や造像の意図などについて知見を得た。

【年度実績概要】

従来、室町時代の仏教絵画についての研究成果は非常に少ないが、この研究の状況に対して本調査研究では、当該の領域に関する基礎的なデータを収集して歴史的な意義を考察し、それらを東アジアの宗教美術のなかに位置付けることを目的としている。この目的を達成するために、今年度は「主な成果」に記した観点から研究を遂行した。
(1)については、未紹介の観音図（個人蔵）をはじめとする１００点の作品の調査を山口県立美術館などで遂行し、中国絵画に依拠して絵画を制作した室町時代の水墨画家に関する基本資料を収集した。
(2)については、雪舟の観音変相図を対象として選択し、原本の復元や制作の目的について考察した。その成果として発願者や造像の意図などについて、雪舟のパトロンである大内氏の仏事に関する具体的な新知見を得た。

【実績値】

○調査回数　４回

○収集資料数　１００点

○論文掲載数　１回
・辻惟雄監修『日本の美術Ｖ水墨画Ⅱ』美術年鑑社

○学会研究会等発表数　２回
・"Utsushi: The Art of Copying,"
University of Hawaii at Manoa
・雪舟研究会講演会（山口県立美術館）

○研究員海外派遣数　３回
・米国（作品調査）　１回
・韓国（作品調査）　２回

研究対象資料　伝雪舟筆観音図（個人蔵）ほか

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-8

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 定性的評価については、国際性・オリジナリティ・多様性・人的投資・基礎性・達成値の観点から、充分な成果が認められると判断される。						

２．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	論文掲載数	学会研究会等発表数	研究員海外派遣数	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価についてはとくに国際性とオリジナリティの観点から、定量的評価については公表した成果の実績値から、別記の総合的判断が妥当であると考える。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は、研究内容の水準を保ちつつ、順調に遂行できたと考える。 本事業については、今後も外部資金などを積極的に活用する方法により、調査研究を継続してゆきたいと考える。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 九州国立博物館　処理番号 4514-9

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	9)埴輪に認められる赤色顔料についての基礎的研究（科学研究費補助金）((5)－①－ⅱ)

【事業概要】
埴輪に認められる赤色顔料について、粒子の形態分類や組成による分類を行い、編年や地域性を検討することを目的として実施する。

【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　志賀　智史

【スタッフ】

【主な成果】
古墳時代以前の赤色顔料には朱とベンガラが知られており、墳墓ではこの二種類の赤色顔料が使い分けられることが多い。今回対象とした埴輪に認められる赤色顔料は、従来目視によりベンガラが多いとされてきたが、本研究から科学的にもベンガラであることが確定した。さらに出土ベンガラには直径 1μｍのパイプ状粒子を含むものと、これを含まないものに大別されているが、埴輪のベンガラはパイプ状粒子を含むベンガラを用いる地域と、これを含まないベンガラを用いる地域があることがわかった。この地域性は墳墓主体部内で使用されていたベンガラの地域性と概ね合致していた。

【年度実績概要】
今年度は東日本を中心に調査をおこなった。埴輪に認められる赤色顔料は、全てベンガラであった。出土ベンガラは直径 1μｍのパイプ状粒子を含むもの(以下、ベンガラ(Ｐ))と、これを含まないもの(以下、ベンガラ(非Ｐ))に大別できるが、今回調査をおこなったものは全てベンガラ(Ｐ)と考えられた。
ベンガラ(Ｐ)に含まれるパイプ状粒子については、先行研究により湖沼に生息する鉄酸化細菌を焼成して得られたものであることが判明している。ベンガラ(非Ｐ)については、現段階では原料が何であったのか明らかではない。

【実績値】
○調査遺跡数　８遺跡

○収集資料数　約 150 点

○論文掲載数　1 件
志賀智史 2011「森添遺跡出土の赤色顔料について」『森添遺跡発掘調査報告書』三重県度会町教育委員会

顕微鏡で確認された赤色顔料

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-9

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 同様な視点での研究は無く、一定の研究成果も認められる。継続していくべきテーマである。						

２．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	論文掲載数			
判定	A	A	A			
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	考古学的な視点に立った埴輪の赤色顔料についてのはじめての調査研究である。これまで知られていなかった地域性が明らかになりつつある。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	地域性があることが明らかになりつつある点は大きな成果であり、目的を順調に達成しているといえる。しかし、編年については、現時点では変化は認められなかった。 平成 23 年度以降も出土赤色顔料についての研究を継続する予定である。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 九州国立博物館　処理番号 4514-10

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	10）Ｘ線ＣＴスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析（科学研究費補助金）（(5)－①－ⅱ）

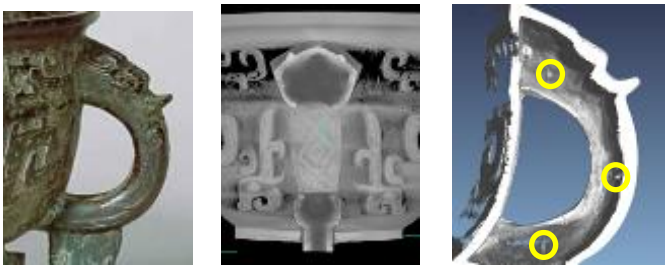
【事業概要】
九州国立博物館において、X 線 CT、精密三次元計測機、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて文化財の内部構造調査を行い、文化財の状態や製作技法を理解し、得られた成果を展示に活用することを目的とする。

【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室長　今津節生

【スタッフ】
森田　稔（副館長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元塁（企画課研究員）、鳥越俊行（博物館科学課主任研究員）

【主な成果】
泉屋博古館の所蔵品を中心に X 線 CT、精密三次元計測機、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて、中国古代青銅器の内部構造データを系統的に集積したデジタルアーカイブを構築した。この成果を基に、伝統的な鋳造技術者に協力を得て、鋳造実験を実施した。さらに、研究成果を内外の研究者に公開して研究会を実施した。

【年度実績概要】
九州国立博物館の展示に借用する文化財を中心に、1 年間で約 60 点の CT 調査や精密三次元計測を実施した。得られた成果は、文化交流展での展示の際に活用している。
本研究は、Ｘ線 CT スキャナならびに 3 次元計測器を使用して得られたデジタルデータを蓄積しアーカイブを構築し、そのデータを活用した共同研究・博物館展示の可能性を探るものである。とくに、Ｘ線 CT スキャナによる調査では複雑な形状の青銅器の内部構造の解析、精密 3 次元計測調査では青銅器表面に施文された精緻な文様の記録などをおこなった。また、研究成果を検証する鋳造実験も実施した。
その結果、中国古代青銅器の製作技術を非接触非破壊で解明することができた。この研究成果は日本文化財科学会とアジア鋳造技術史学会で発表した。また、論文を日本中国考古学会、泉屋博古館紀要で発表した。



X 線 CT による中国古代青銅器鋳造技術解明の調査

【実績値】

○調査回数　６０回
○資料収集数　６０点
○学会研究会等発表数　２件
○論文掲載数　２件

中国古代青銅器（西周前期）における鋳造技術の解明（取っ手部分）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-10

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
独創性と効率性では、国内外の研究者から注目を集めた。発展性では取得したデジタルデータから三次元プリンタで正確な複製品を作製する技術を確立すると共に、このデジタル複製品を活用して鋳造実験による研究結果の検証を実施することができた。正確性では高精度を保った三次元計測を行い、さらにデジタルデータを蓄積している。今後は、展示への活用、デジタルデータの国際的な共同利用に向けて研究を進めたい。

２．定量的評価

観点	調査回数	資料収集数	学会研究会等発表数	論文掲載数		
判定	A	A	A	A		

備考
日本文化財科学会には約 500 名の研究者が参加した。またアジア鋳造技術史学会には韓国・日本の研究者が約 200 名参加した。また、日本中国考古学会、泉屋博古館紀要に論文を発表した。さらに、内外の研究者が参加して研究成果を検証するための鋳造実験を行った。今後はさらに国際的な共同研究を進めたい。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財用の X 線 CT としては、世界的で最も優れた装置の一つであり、国内外の研究者からその有用性について高い評価をいただいた。京都泉屋博古館との共同研究を進めながら、奈良文化財研究所・中国上海博物館・南京博物院など外部機関との連携研究も進んでいる。 23 年度は、より幅広い他機関との連携を目指しデータの活用を進めると共に、展示への活用を進めたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	九州国立博物館では展示に際し文化財を常に借用するため、X 線 CT スキャナ装置、精密三次元計測装置等を活用しながら成果を上げることで、国内外の博物館・研究機関との連携が進みつつある。23 年度はさらに広い範囲で展示に活用したい。

【書式Ｂ】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4514-11
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	11)アジアの木地螺鈿―その源流、正倉院宝物への道をたどる―（科学研究費補助金）((5)－①－ⅱ)

【事業概要】
本年度は、ベトナム、インドにて現地調査を行った。ベトナムは正倉院の螺鈿宝物の多くを占める木地螺鈿が現在でも盛んに制作されている土地であり、インドは東方アジアとイスラム圏をつなぐ狭間の位置にあり独自様式の螺鈿制作が行われているが、その具体的な様相は明らかとなっていない場所である。
また、調査の帰路、この調査成果を含めたアジアの螺鈿について、バンコク国立博物館ボランティアを対象とする講演を行った。

【担当部課】	文化財課	【プロジェクト責任者】	資料管理室長　小林公治

【スタッフ】
研究代表者：小林公治（文化財課資料管理室長）
研究分担者：猪熊兼樹（東京国立博物館）
研究協力者：原田一敏（東京芸術大学）ほか

【主な成果】
ベトナムでは、今までの調査であまり情報を得ていなかった螺鈿用の貝素材加工等について、特に具体的な情報を得ることができた。また、インド調査は現在螺鈿制作が比較的盛んにおこなわれているインド西北部、特にウダイプールの工房を中心に調査を行い、現代インドにおける螺鈿制作技術を中心とした情報が得られた。なお、成果の一部を九州国立博物館研究紀要『東風西声』第 6 号にて論文発表した。

【年度実績概要】
正倉院宝物として残されている螺鈿器は技法的に木地螺鈿、漆地螺鈿、樹脂地螺鈿の三種に分類される。またその制作地については諸説あるが、木地螺鈿と樹脂地螺鈿は中国唐代に造られたものとされている。しかし、この後、この両者の技法によって螺鈿が造られることはごくまれになり、中国を含めその後の歴史は明らかとなっていない。
こうした中で、ベトナムでは 19 世紀頃から突如として木地螺鈿制作が盛んに行われるようになる。今年度の調査ではこうしたベトナムの木地螺鈿技術について詳細に確認し、正倉院に残る木地螺鈿と同類の技術がベトナムの木地螺鈿制作にも使われていることが理解できた。
またインドは東南アジアまでの東方アジアと西方アジアとをつなぐ接点でもあるが、その螺鈿技術についてはほぼ不明と言って良い。こうした中今回初めて調査を実施し、インドの螺鈿は、木地螺鈿と同じく象嵌技術を多用する技法と、樹脂地螺鈿のように貝文様を地に貼り付け、その段差を漆などの素材で埋めていく技法との 2 種が存在することを明らかにした。
なお成果の一部を、九州国立博物館研究紀要『東風西声』第 6 号にて「ベトナムの螺鈿」として報告した。

【実績値】
○調査回数　ベトナム 1 回、インド 1 回

○収集資料数　数点

○論文掲載数　2 回

○学会研究会等発表数　2 回

ベトナムの貝加工

インドの螺鈿制作

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-11

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
全体的に従来の研究ではほとんど行われていない視点から、研究を実施できたと言える。

２．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	論文掲載数	学会研究会等発表数		
判定	A	B	A	A		

備考
調査対象者との関係から、収集資料を十分に収集できたとは言い難いが、それ以外については当初計画同等ないしはそれ以上の成果を上げることができたと考えている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査の回数は多くはないが、その中で従来にない新たな視点による調査成果を上げると共に、また様々な機会を通じてその成果を迅速に公表することができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	昨年度の中国調査や外国人共同研究者を日本へ招聘し、また今年度の調査などを通して順調に計画を達成している。こうした成果を受けて、最終年度となる来年度は木地螺鈿の歴史的中心地と考えている中国の調査を計画している。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 九州国立博物館　処理番号 4514-12

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	12)五胡十六国から北魏時代の出土陶俑に関する基礎研究（科学研究費補助金）((5)－①－ⅱ)

【事業概要】
五胡十六国から北魏時代は、隋唐社会の基盤が形成される時期であり、また日本の古墳文化を東アジア史の中で理解する上で欠くことのできない領域である。本研究では、これまで十分な考古学研究が進んでいなかった当該時期の出土資料について、調査研究をおこなうものである。主な調査対象地域は陝西省、内蒙古自治区、寧夏回族自治区、山西省である。

【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	研究員　市元　塁

【スタッフ】
市元塁（企画課研究員）

【主な成果】
十六国時期から北朝早期の古墓の年代については、きわめて流動的な状況にあった。本研究は、出土陶俑の諸要素を整理するなかで、当該時期の古墓の年代について一定の見解を得ることが出来た。また、５世紀前半に華北を領有した北魏政権の文化は、十六国時期の諸政権の制度や文化と密接な関係があると判断するに至った。

【年度実績概要】
６月には寧夏回族自治区において調査を実施した。特に固原博物館における調査では、破片資料の観察機会に多く恵まれ、陶俑の製作技法にかかわる重要な知見を得ることが出来た。また、前年度に実施した陝西省での調査成果と比較をすることで、ひとつの政権内における斉一性と地域差を明らかにすることができた。
７月には特別展「馬　アジアを駆けた２千年」において、研究成果の一部を公開した。特に古代中国における装飾馬を扱う中で、漢時代から北魏時代にいたる変遷過程を整理し、また日本の古墳文化とのつながりについても言及する機会を得た。１０月には内蒙古自治区において調査を実施した。北魏時期の木棺画や剥ぎ取り壁画など画像資料の観察を通して、北魏の文化や風俗に関する新知見を得た。
１２月～３月にかけては、２ヶ年に及んだ本研究の成果をまとめるべく、論文の執筆にとりかかった。

【実績値】
○調査回数　３回

○収集資料数　４００点

○調査概報　１篇

○論文掲載数　１篇

○研究員海外派遣数　２回

固原彭陽新集郷墓出土の陶馬
甲冑を身に着けた馬で、5 世紀初頭頃の副葬と考えられる。

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-12

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
十六国時期の研究は、そこに民族や地域性の問題を多分に含んでおり、今日のアジア文化理解を深める上で重要な領域である。しかし既往の研究は、多くが正史などの後代に編纂された漢文文献を主たる典拠としていた。本研究では出土資料という同時代資料を基軸に歴史の構築を目指したものであり、独創性や発展性はもとより、定性的評価に掲げる各観点において、高評価に値する成果を挙げることができたと考える。

２．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報	論文掲載数	研究員海外派遣数	
判定	A	A	A	A	A	

備考
調査を実施するにあたっては、対象機関と連絡を密にとりながら良好な関係を構築したことで、十分な成果を挙げることが出来た。本年度は現地調査と資料整理に力点をおいたため、学会発表は行っていないが、次年度以後、成果を発表していく予定で準備をすすめている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究史を十分に踏まえて問題点を整理し、調査研究にあたることができた。一方、当該研究では華北を主たるフィールドとしたため、華南地域の資料との比較を通して研究成果を批判的・客観的に整理し、拡充をはかることができなかった。この点については次年度以後の課題として継続して取り組んでいきたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初予定していた調査対象資料のうち、主要なものについてはほぼ観察を行うことができた。また、調査資料の整理を進める中で、今後の研究につながる成果をあげることができた。

【書式Ｂ】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4514-13
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	13)海の東アジアが醸成した貝と漆の文化‘螺鈿’の再発見―その共通性と多様性を探る―（トヨタ財団研究助成）((5)－①－ⅱ)

【事業概要】
平成 20 年度に開始した本研究は本年度が最終年度となる。6 月に、韓国螺鈿調査、バンコクで開催されたタイ国主催漆国際会議における基調講演およびタイの螺鈿工房調査を実施したほか、沖縄の工房調査と九州大学に編集委託して、沖縄の伝統的螺鈿制作技術についての映像化事業を実施した。

【担当部課】	文化財課	【プロジェクト責任者】	資料管理室長　小林公治

【スタッフ】
研究代表者：小林公治（文化財課資料管理室長）
共同研究者：宮里正子（前那覇市歴史博物館）ほか

【主な成果】
韓国の調査は、沖縄の螺鈿職人と共に韓国の人間国宝ほかの工房を訪問調査し、韓国螺鈿技術と沖縄のそれとの比較を含めた検討などを行った。タイでは、基調講演のほか、バンコク近郊の国営および民間螺鈿工房を訪問し、タイの螺鈿制作技術について調査した。また現在、ほとんど制作者がいない沖縄の伝統螺鈿制作について、宮城清氏の制作過程を一貫して撮影し、現在その編集作業を行っている。

【年度実績概要】
6 月の韓国螺鈿調査では、統営において長年螺鈿制作を行っている韓国人間国宝・宋芳雄氏の工房にて、その螺鈿制作について実際に調査し記録を行った。また国立民俗博物館・国立中央博物館にて韓国の螺鈿作品の調査を実施したほか、ソウル近郊の漆匠裴金龍工房でも調査を実施した。
バンコクで開催されたタイ国政府主催漆国際会議”Study of Oriental Lacquer Initiated by H.R.H. Princess Maha Chakri Sirindhorn for the Revitalization of Thai Wisdom”では本研究を含むこれまでの研究成果について、王女ほかタイ国政府関係者や海外からの会議参加者ら対して基調講演を行いまたその概要が予稿集として公表されたほか、長年の探索の結果ようやく調査が実現した国営および民間の螺鈿工房を訪問し、タイの螺鈿技術調査を実施した。このほか沖縄で王朝期以来造られてきた伝統的な螺鈿制作技術について、九州大学芸術工学部の協力を得て琉球王朝時代の代表的螺鈿である雲龍黒漆螺鈿盆の復元過程を、具体的かつ理解しやすく映像化した。
なお、成果の一部を九州国立博物館研究紀要『東風西声』第 6 号にて「ベトナムの螺鈿」として報告したほか、上記国際会議の成果論文集に論文を投稿中である。

【実績値】
○調査回数　3 回

○論文掲載数　2 回

○学会研究会等発表数　2 回

○研究員海外派遣数　2 回

韓国人間国宝 宋芳雄工房での調査風景

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-13

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　一般的な作品調査だけでなく、同行してもらった沖縄の螺鈿職人に韓国の螺鈿技術について比較してもらう、また国内外の螺鈿制作工程の映像化など、従来の研究ではほとんど行われていない視点も含めて研究を実施できた。

２．定量的評価

観点	調査回数	論文掲載数	学会研究会等発表数	研究員海外派遣数		
判定	A	A	A	A		

備考
　調査成果の公表も含め、当初計画と同等ないしはそれ以上の成果を上げることができたと考えている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査の回数は多くはないが、その中で従来にない新たな視点による調査成果を上げると共に、様々な機会を通じてその成果を迅速に公表することができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	昨年度までの沖縄・韓国・中国・東南アジア調査に今年度の調査成果などを含めて、その一部を公表するなど、順調に計画を達成している。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-1

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)博物館環境デザインに関する調査研究　(5)－②－ｉ)

【事業概要】
東京国立博物館における文化財の展示環境について調査研究し、今後の展示環境の向上に結びつけることを目的として実施する。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課　木下史青

【スタッフ】
矢野賀一（企画課デザイン室主任研究員）

【主な成果】
展示デザインのクオリティを向上させるための設計技術や、そのデザインアイデアを実現し、維持するための現場監理・物品管理に関する技術について、過去の事例や、他館における具体的事例を調査した。
また以上の調査にもとづき、当館においていかなるシステムでの導入・実施が可能かを検証し、実現可能なものについては館内の展示において実施した。

【年度実績概要】

①東洋館耐震改修工事にともなう展示デザインおよびサイン計画　8 月 4 日～　※継続中（写真）
- 低反射ガラスを使用した展示ケースの調査研究および導入。
- 超高演色ＬＥＤ(発光ﾀﾞｲｵｰﾄﾞ)の素子および照明器具の展示照明への利用。

② 『本館・工芸展示リニューアル』(東京国立博物館アクションプラン)　※2011 年 1 月 2 日(日)～(写真)
- 本館(重要文化財)における新たな展示システムのあり方。
- 展示ケースへの床からの電源供給システムと、免震装置付展示ケースの設置方法。

③ 『館内サイン リニューアル』(東京国立博物館アクションプラン)　※2011 年 1 月 2 日(日)～（写真）
- 正門チケット売場付近の来館者誘導のためのサインのあり方。
- 多国語対応（日/英/中/ﾊﾝｸﾞﾙ）による、案内誘導サイン及び展示解説システムの導入

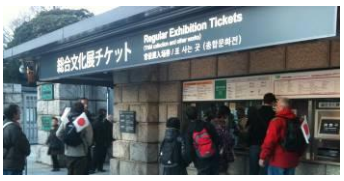
【実績値】
●研究会発表件数　　2 回
- 江東区森下文化センター 講演
- 日本美術解剖学会　等

●論文掲載数　　1 回
- 『淡交 増刊号』　等

●他館調査　　国内外多数（20 館以上）
- 三菱一号館美術館（東京）
- 三井記念美術館（東京）
- 汐留ミュージアム（東京）
- 九州国立博物館（福岡・大宰府）
- ベルリン博物館島（ベルリン）
- モダンピナコテーク（ミュンヘン）
- レンバッハハウス（ミュンヘン）
- ローマンゲルマン歴史博物館（ケルン）
- 通信/郵便美術館（フランクフルト）　等

①新規展示ケース検討

②漆工展示リニューアル



③正門・売札サイン

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-1

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
博物館における公開・展示は、最新技術の調査研究に基づいた、その時代に会った展示手法の実現と、その客観的な評価が求められる。またデザインプロセスの効率面を向上させるための設計技術や、高品質のデザインを実現・維持するための現場監理・物品管理に関する技術について、他館における事例調査を行った。

２．定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載数	調査回数			
判定	B	B	A			

備考
調査・研究によって明らかになった展示技術・手法を、当館の特別展および平常展において、どのようなシステムで導入・実施が可能かを整理し、研究会・論文等で発表した。また実現可能なものについては館内の展示において実施し、撮影等の手法による記録・調査を行っている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画的に導入を継続している、質の高い展示・照明システムにより、展示のバリエーションが広がったといえる。さらに照明器具の問題点についてメーカーと改良を進めている。具体的には次期中期計画で予定の特別展・平常展への導入・実施に向け、検討・デザインを進めている。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。 調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、独創的アイデアの創出と技術開発および館内展示システムの充実に力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-2

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)博物館美術教育に関する調査研究　((5)－②－ⅲ)		
【事業概要】 当館本館 20 室の教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」において、総合文化展と密接に関連した博物館教育事業の理論と実践に関する調査研究を実施し、その成果の一部を研究会等で発表する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長　今井敦
【スタッフ】 鈴木みどり（博物館教育課ボランティア室長)、神辺知加（博物館教育課教育講座室主任研究員）			
【主な成果】 本館 20 室「みどりのライオン」での博物館ガイダンスやハンズオン体験コーナー、制作工程模型展示は年間で 10 万人を超える利用者があり、当館における博物館教育プログラムとして定着している。鈴木はこのプログラムを博物館教育の見地から調査研究し、口頭および論文で発表を行った。			
【年度実績概要】 ・ 当館本館20室の教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」において、スライドショー「東京国立博物館ガイダンス」、ハンズオン体験コーナー「日本のもようでデザインしよう！」、制作工程模型展示「悉皆金色 阿弥陀如来像ができるまで」の博物館教育事業を実施した。 ・ 上記事業を博物館教育の一事例として、その理論と実践について以下のように発表した。 鈴木みどり「博物館で伝える日本の伝統文化」（『教育研究』） 「教員の『ミュージアムリテラシー』の展開―歴史系（古美術）博物館の活用」（『科学系博物館の学校利用促進方策調査研究報告書―教員のミュージアムリテラシー向上プログラム開発―』） 「東京国立博物館のスクールプログラムとワークショップ」（東京都中学校美術教育研究会。口頭発表） 神辺知加　「博物館で行うイベントについて―『博物館でお花見を』を例に」（『博物館研究』vol.45）			
【実績値】 研究発表 1 回（東京都中学校美術教育研究会） 論文発表 3			
【備考】			

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」での総合文化展と密接に関連した博物館教育事業を研究会等で報告できたことは、今後の国内外の博物館教育研究に寄与するところがきわめて大きい。						

2．定量的評価

観点	研究会回数	論文本数				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館本館 20 室の教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」では、博物館のガイダンス機能にくわえ、各種レクチャーや体験型プログラム、制作工程模型展示などを、一般から学校団体まで幅広い層に向けて展開している。これは当館の博物館教育を推進する上で大きな成果といえる。また、この事業を通して、博物館教育の理論と実践について、担当研究員が研究し、その内容を広く内外に発信できたと。今後もさらに研究を続け、博物館美術教育に関する情報発信を精力的に行ってゆきたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館美術教育に関する調査研究は、博物館教育課の研究員を中心に概ね研究計画にそったかたちで順調に進められていると考える。今後も有形文化財とそれらに関する調査研究の成果を活用しながら、博物館美術教育理論の構築、ならびに実践的プログラムの開発に取り組んでいきたい。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-3
(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3)博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究((5)－②－iii)

【事業概要】
　東京国立博物館における収蔵品管理システムの開発を通じて、資料情報と学芸業務情報の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理および蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課　村田良二

【スタッフ】
村田良二（博物館情報課情報管理室長)、佐藤祐介（博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー）

【主な成果】
　東京国立博物館における収蔵品管理システムのプロトタイプについて、収蔵品検索機能、平常展管理機能、鑑査会議管理機能、貸与管理機能の各機能を継続的に運用し、課題を抽出するとともに随時改善を重ねて性能向上を図った。また、修理関連業務の支援として、鑑査会議管理機能における修理関連機能の運用を開始し、文化財収蔵場所環境情報管理システムとの連携を図った。

【年度実績概要】
　収蔵品管理システムの運用を継続することにより、収蔵品のデータ更新・追加・訂正を円滑に行える環境を維持し、運用経験から改善のための課題を抽出した。これらの課題については、随時システムを更新することにより迅速に対応した。特に、定型文書の出力についてきめ細かい改善を積み重ねた。
　鑑査会議管理機能においては、昨年度実装した修理議案機能について運用を開始し、随時改善を行った。
　他システムとの連携機能も強化し、文化財移動情報登録システムと連動した所在情報の一元管理、文化財収蔵場所環境情報管理システムと連動した保存環境情報の連携、画像管理システムと連動した収蔵品画像データの連携を実現した。

収蔵品管理システム
（プロトタイプ）

【実績値】
作品データ件数　　182,980 件
平常展データ件数　　2,508 件
鑑査会議データ件数　　22 件
貸与データ件数　　655 件

○研究会等での発表　2 件
　村田良二「ミュージアム資料情報構造化モデル」（南山大学人類学博物館シンポジウム）平成 22 年 7 月 24 日
　村田良二「人文科学とコンピュータ研究を支える資料を考える―MLA の立場から」（第 89 回人文科学とコンピュータ研究会）　平成 23 年 1 月 22 日

○論文等掲載数　2 件
　村田良二「ミュージアム資料情報構造化モデル」，南山大学人類学博物館シンポジウム『博物館資料の文化資源化』発表要旨，南山大学，平成 22 年 7 月 24 日
　村田良二「「人文科学とコンピュータ研究を支える資料を考える―MLA の立場から」，第 89 回人文科学とコンピュータ研究会 発表要旨，平成 23 年 1 月 22 日

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-3

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　博物館のシステムに必要な機能を着実に開発しており、業務の円滑化と情報の効果的な蓄積につながっている。最新の技術も取り入れており、博物館におけるシステムのあり方を先導的に示すものとなっている。

2．定量的評価

観点	収集データ件数	研究会等発表件数	論文掲載数			
判定	A	A	A			

備考
　効果的な業務支援機能により、学芸業務を行う流れのなかで効率的に無理のないデータ収集が可能となり、その結果データを着実に蓄積している。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	収蔵品のデータ蓄積と業務支援を密接に連動させたシステムにおいて効果的にデータの蓄積を行えることが確認された。また各種外部システムとの連携により、収蔵品データを軸としてさらに発展的・総合的な情報システムへの展望が得られた。今後は未実装の業務支援機能の開発とともに、これまでに得られた知見からより高度なシステム設計の検討を進める。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	各分野の研究員、業務担当者と連携をとりながらシステム開発を継続し、博物館におけるシステムの参照実装となるよう、さらに調査研究を進めていく。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-4

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査研究の推進
プロジェクト名称	4)凸版印刷と協同で、ミュージアム・シアターでの公開に向けた研究((5)－②－ｉ)

【事業概要】
館蔵文化財のデジタル・アーカイブを活用した、新たな公開手法を凸版印刷株式会社と協同で研究する。平成 19 年度から「国宝　聖徳太子絵伝」「国宝　灌頂幡」「重要文化財　洛中洛外図　舟木本」の高精細デジタル・アーカイブを作成し、それらを素材としてミュージアム・シアターにおけるコンテンツの公開を実施している。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課長　井上　洋一

【スタッフ】
田良島　哲（調査研究課書跡・歴史室長）

【主な成果】
＊　「洛中洛外図　舟木本」のデータをもとにした、新しいシナリオ 2 件（「京の政」「京のかぶき」）を作成し、平成 23 年 1 月から公開している。

【年度実績概要】

＊　新規公開コンテンツ　2 件
- 京の政
  江戸時代前期の幕府の権力と天皇家との関係を、洛中洛外図の中で読み解いた。
- 京のかぶき
  歌舞伎の語源である「かぶき者」の姿と初期の歌舞伎の有様を洛中洛外図の中で紹介した。

【実績値】
新規コンテンツ　2 件

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-4

(様式 2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	独創性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	コンテンツ作成					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は新規のアーカイビング作業は行わなかったが、既存のコンテンツを素材にした応用を比較的スムーズに行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	新たな文化財の公開手法を開発するという点で、３年間の共同研究は十分な成果をあげたと言える。引き続き、アーカイブの方法も含めたデータの蓄積と活用に関する研究を行うとともに、来館者の反応を確かめながら、公開方法についてさらに研究を進めることが必要だと考えられる。

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-5
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5)博物館をみんなのものに～視覚障害児童・生徒へのスクールプログラム-ハンズオンとワークショップを中心に　((5)－②－ⅲ)

【事業概要】
「平成 22 年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備事業」により、盲学校に向けたスクールプログラムの本格実施を 23 年度以降に行うための基盤事業。スクールプログラムの企画開発と教員への広報、盲学校の児童・生徒に対応するためのボランティアの育成を行う。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長　今井敦

【スタッフ】
鈴木みどり（博物館教育課ボランティア室長）、藤田千織（博物館教育課教育普及室研究員）、神辺知加（博物館教育課教育講座室主任研究員）、池内一誠（九州国立博物館交流課主任研究員）

【主な成果】
盲学校教員と有識者による委員会において、ハンズオン教材とプログラム開発の実施、バリアフリー対応のボランティアに対する研修会と連携盲学校を対象とした実践を継続的に行っている。今後、盲学校対応のためのスクールプログラムの冊子を作成し、全国盲学校教員に向けた研修会を実施することで、次年度以降の本格受け入れにつなげる計画である。

【年度実績概要】

①盲学校および視覚障がい者の博物館対応の有識者による委員会を通じ、ハンズオン教材の開発、プログラムの企画開発を行った。
②当館生涯学習ボランティアのうち、バリアフリー対応に特化したボランティア 22 名に対し、継続的に研修を行い、視覚障がい児童・生徒に対する理解と経験を深めた。（図１）
③八王子盲学校、文京盲学校との連携により、学校における事前授業、博物館での見学プログラムを実施した。（図２・３）
④盲学校のためのスクールプログラムを作成し、全国盲学校教員に向けた研修会を実施した。

図１

図２

図３

【実績値】
・委員会　5 回
・ボランティア研修　12 回
・盲学校における事前授業　　2 回
　対応生徒 8 人
・盲学校の見学対応　　2 回
　対応生徒 9 人
・バリアフリーボランティア　22 人
・教員研修会　1 回
　参加者数　36 人

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-5

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	A	A	A

備考
　国立博物館としての公共性から、障がいをもつ人々への対応は、ソフト、ハードともに改善していく必要があり、館全体としてもバリアフリー化に取り組んでいる。本事業では、対応する人材育成やプログラム開発などのソフト面から、積極的に活動を行っている。
　また、視覚障がい者の対応の中でも、盲学校を焦点にあてたスクールプログラムの開発は当館独自の視点であり、全国の博物館でも特筆すべきものである。来年度以降の本格実施にあたり、継続性や発展性をもった事業である。

2．定量的評価

観点	委員会数	ボランティア研修数	盲学校事前授業数	盲学校見学対応数	バリアフリーボランティア数	教員研修会参加者数
判定	A	A	A	A	A	A

備考
計画に沿って実行した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画的に委員会およびボランティア研修を行い、質の高い教材開発、プログラム開発を行っている。また、ボランティア研修においては、着実に育成を行い、実践を重ねている。次年度の盲学校受け入れに向けて、教員研修会を行い、具体的な教員への広報や受け入れ準備を行った。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本事業はその進捗度、質の高さからも、堅調に実現した。計画に沿って実施し、来年度以降の盲学校の本格的受け入れに向けて、基盤作りを行うことができた。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4522-1

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)　文化財情報に関する調査研究　((5)-②－ⅱ)		
【事業概要】 当館のウェブサイトや文化財情報システムに関する調査研究を実施した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長　久保智康
【スタッフ】 山田奨治（客員研究員）			
【主な成果】 文化財情報システムの問題点を整理し、運用ソフトを全面的に更新 既存の収蔵品高精細画像のファイリングシステムを構築 ウェブサイトのコンテンツ充実のための検討			
【年度実績概要】 ・各月ごとに現時点での情報システムの運用面における現状調査を行い、その結果について、当館研究員・事務職員・SEと共同で検討会を実施して、システム全体の問題点を抽出、見直しを行い、運用ソフトの全面更新を行なった。 ・e-国宝のための国宝・重要文化財高精細画像コンテンツの拡充の検討を行った。 ・特別観覧への対応を見越して、既存の収蔵品高精細画像のファイリングシステムを構築した ・重要文化財高精細画像データベース「KNM Gallery」の拡充、公開収蔵品データベースの拡充、研究紀要「学叢」バックナンバーPDF 版の拡充、館外貸出作品一覧の追加、展覧会混雑情報の追加など、コンテンツ充実に向けての検討を行った。			
【実績値】 ・システムの現状調査　　６回 ・システム検討会　　11 回 ・ウェブサイトコンテンツの検討　６回			
【備考】			

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4522-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
文化財情報システムを全面更新し、研究業務、特別観覧業務の円滑化が各段に進んだ。
当館のウェブサイトは、コンテンツの豊富さ（収蔵品データベースなど）から定評があるが、さらに多くのページで質の充実をはかった。

2．定量的評価

観点	システム検討会	システム現状調査	ウェブサイトコンテンツの検討			
判定	A	A	A			

備考
　システムとウェブサイト・コンテンツの検討を随時行い、定期的な検討会を実施した（計 11 回）。
　特別観覧業務の作品原板提供の全面デジタル化に備え、1000 カット以上に及ぶ既存高精細画像のファイリングシステムを構築できた。
　ウェブサイトにおける重要文化財高精細画像データベース「KNM Gallery」の拡充、公開収蔵品データベースの拡充、研究紀要「学叢」バックナンバーPDF 版の拡充、館外貸出作品一覧の追加、展覧会混雑情報の追加、メールマガジンの配信などの充実をはかった。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財情報システムを更新し、ウェブサイトも質・量ともに格段の充実をはかった。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	予算をフルに活用し、緊急性の高い事項から順次検討を行い、改良を加えている。特に４館共通の e-国宝に向けてのコンテンツ整備の達成度はきわめて高い。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4522-2
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)　特別展覧会「高僧と袈裟」の開催に向けての調査研究　((5)-②)

【事業概要】

①室町時代以前に製作された袈裟を中心に、袈裟を着用した肖像画（頂相）・関連する古文書などの資料を、広く調査・研究する。
②袈裟については綿密な調査と顕微鏡撮影を行い、詳細な作品調書を作成する。
③近年世界で主流となっている染織の織組織分析の基礎をまとめた用語集を作成する。
④展覧会にあわせて日英二ヶ国語表記の図録を作成し、国際シンポジウムを開催することにより、研究成果を広く発信する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員　山川　曉

【スタッフ】
モニカ・ベーテ（調査員）
吉田雅子（調査員）

【主な成果】

①調査の過程で、南北朝時代を代表する禅僧である夢窓疎石所用の袈裟（天龍寺蔵）を見いだし、各種メディアにて報道された結果、袈裟についての関心を喚起した。
②特別展覧会「高僧と袈裟」を開催し、日本に伝えられた中世染織の豊かさを広く紹介するとともに、調査データ・織組織分析用語集・論文を盛り込んだ日英二ヶ国語表記による展覧会図録を作成した。
③日本・韓国・中国の研究者による国際シンポジウムを開催し、国際的な学術交流を実現した。

【年度実績概要】

特別展覧会の実施年度であるため、データ確認および顕微鏡撮影のための追加調査を主に実施した。その中で、新出の夢窓疎石着用の袈裟について事前記者発表を行い、多くのメディアに取り上げられ、身近ではない袈裟についての関心を喚起した。

昨年度遅れ気味であったデータベースの入力に傾注するとともに、調査作品から出品作品 121 点を選定し、展示計画および展覧会図録の作成にあたった。展覧会は日本の仏教史を袈裟を通して辿る構成とし、奈良時代から室町時代初期までの作例を取り上げ、展覧会場を一巡することで、東アジアの織物の発展を体感できるよう努めた。

本研究は、袈裟という製作年代を類推できる作品群を取り上げ、織物の構造と文様の分析を行い、東アジア染織の基準作についての情報を公開することを主眼とするが、それを展覧会として多くの観客に分かりやすく提示することは容易ではない。そこで、ワークシート「袈裟ってなあに？」を作成し、その中に組織分析の重要性を盛り込んだ。会場では、作品ケースに作品解説とともに織組織の拡大写真を示し、織組織の分析用語については会場にパネル掲示した。また会期中には、関連土曜講座を三回（10 月 9 日・16 日、11 月 6 日）開催した。

図録では、作品写真とともにこれまでに蓄積してきたデータを織物の分析結果と顕微鏡による 10 倍拡大画像という形で併記し、織組織分析の基礎をまとめた用語集、作品解説、ふたつの論文（山川曉「ころもが語るふたつの歴史」・モニカ・ベーテ「東アジアの顕文紗」）を、すべて日英二ヶ国語によって掲載した。

11 月 13 日には関連国際シンポジウム「染織にみる東アジア交流」を開催し、日本・中国・韓国の研究者が集い、最新の情報による学術交流を行った。

【実績値】

①写真撮影 12 件。
②袈裟の調査および顕微鏡撮影、約 50 件。
③袈裟データベースおよび裂データベースの作成、92 件。
④これまでの調査に基づく論文、2 件。

【備考】

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4522-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	S	A	A	A	S

備考
　中世に遡る袈裟は脆弱化が進んでおり、現時点での正確な調査は、今後の保存策の検討において重要な意味を持っている。染織史および仏教史という複眼的な視座からの袈裟の研究はこれまで全くないうえ、中世以前の袈裟を集めた展覧会も初めてであり、新たな研究分野を提示することができたと考える。展示された袈裟の多くは所用者が判明することから、これから東アジア染織品の基準作となるものである。図録に示した基礎データはすべて、追加検証ができるよう、分析結果とともに拡大画像を同倍率で掲載した。

2．定量的評価

観点	調査件数	写真撮影数	顕微鏡撮影数	データベース作成数	論文	
判定	A	A	S	S	A	

備考
　特別展覧会の実施年度であり、データ確認および顕微鏡撮影のための追加調査を主に実施した。昨年度遅れ気味であったデータベースの入力に傾注し、成果の多くを論文とともに作品分析として図録に反映した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中世以前の染織品が伝世品としてかなりの量伝えられているのは、染織の先進地域であった東アジア文化圏では日本だけである。これまで、法隆寺や正倉院に伝来した古代の染織品については紹介されてきたが、鎌倉時代・南北朝時代といった中世前半期の染織品がまとめて紹介される機会は、なかったと言っても過言ではない。 　このたびの「高僧と袈裟」展によって紹介された袈裟の多くは、この中世前半期の作品群であり、いずれも所用者の名とともに伝えられることから製作時期が類推でき、基準作となりうる作例ばかりである。その研究は、日本のみならず東アジア染織史の発展を考えるうえで、極めて重要な意味を持っている。世界的に見ても重要な作品群を綿密に調査し、世界中の研究者と共有しうる分析データを公開することはこれまでにも望まれていた。 　その実現に向けて取り組んできた業務であったが、本年度はそれを自主展覧会という形で公開し、調査データの共有、織組織分析手法の共有、関連論文を含んだ日英二ヶ国語による図録を発刊した。さらに、日本・韓国・中国の染織研究者が集う公開シンポジウムを開催したことにより、中世の東アジア染織品に対する三ヶ国の研究状況を互いに確認し、今後の共同研究に向けての第一歩となる成果を得た。 　計画の最終年度として予定以上の成果があったと考える。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査結果をデータベース化した。 展覧会を実現し、調査結果を反映した二ヶ国語による図録を作成した。 国際シンポジウムを開催し、染織研究者の学術交流を実現し、今後の共同研究へ向けての基礎を築いた。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4522-3

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3)特別展覧会「中国の書画（仮)」にむけて旧上野コレクションと関連作品の調査研究を行う（(5)-②－ix）

【事業概要】

上野コレクションの明清の書画を中心に、関連する作品を調査し、その成果を特別展覧会「中国の書画（仮称)」（平成２３年１月８日～２月２０日）に反映させ、特別展覧会を充実させる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員　赤尾栄慶

【スタッフ】

(当館研究者)赤尾栄慶(上席研究員)、西上　実（学芸部長)、呉　孟晋(研究員)

【主な成果】

上野コレクション中の作品を検討し、特別展覧会に出陳すべき作品を選定し、補完すべき作品の検討を行った。これに基づき、他に所蔵される作品の調査を行い、撮影も実施した。その結果、上野コレクションから 40 件、新収品 1 件を含む館蔵品が 29 件、上野家所蔵品 18 件、個人蔵や他機関の所蔵品が 26 件、合わせて 113 件の作品を選定し、特別展覧会を開催した。

【年度実績概要】

特別展覧会開催のために、明清時代の書画を中心に法帖など書跡 76 件、絵画 87 件、合わせて 163 件からなる上野コレクションの中から、調査して展覧会に出陳すべき作品を 40 件選定し、上野コレクション以外の館蔵品からは 29 件を選定した。これに加えて、上野家及び個人や他機関に所蔵されている作品を調査し、上野家から 18 件、個人蔵や他機関所蔵品から 26 件を選定し、テーマごとに特別展覧会に出陳する作品を選定した。

【実績値】

事前の調査に基づいて、上野コレクションから 40 件、新収品 1 件を含む館蔵品が 29 件、上野家所蔵品 18 件、個人蔵や他機関の所蔵品が 26 件、合わせて 113 件の作品を選定した。さらに特別展覧会の名称も「中国の書画（仮称)」から「筆墨精神―中国書画の世界―」に改め、特別展覧会の構成も「典籍の世界―テキストを写す―」「法帖の世界―名筆をめでる―」「文人の世界Ⅰ―宋～明時代―」「文人の世界Ⅱ―清～民国時代―」「名品と収集余光」という 5 テーマとし、上野コレクションの特徴と書画の時代的な流れが理解できるように組み立てた。

研究書としても使えるように配慮した解説付き目録も作成した。

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4522-3

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
昭和 35 年（1960）にご寄贈を受けた上野コレクションを顕彰することができ、上野コレクションを中心とした中国書画の流れを理解しやすいように展示した。

2. 定量的評価

観点	特別展覧会開催					
判定	A					

備考
総入場者数　37,535 人（目標値 30,000 人）
目録販売数　4,204 冊（8.9 人に 1 冊）

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	事前の調査に基づいて、上野コレクションを中心に、国宝 10 件、重要文化財 23 件、重要美術品 2 件を含む 113 件の作品を選定した。さらに内容を勘案し、特別展覧会の名称も「中国の書画（仮称）」から「筆墨精神―中国書画の世界―」に改め、特別展覧会の構成も「典籍の世界―テキストを写す―」「法帖の世界―名筆をめでる―」「文人の世界Ⅰ―宋～明時代―」「文人の世界Ⅱ―清～民国時代―」「名品と収集余光」という 5 テーマとした。 展示に際しては、上野コレクションの特徴と中国の写本を含む書画の時代的な流れが理解できるように配慮した。また研究書としても使えるように配慮した解説付き目録も作成した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	事前調査を踏まえ、個人及び他機関との出陳交渉を行い、質の高い特別展覧会を開催した。

【書式Ｂ】　　施設名　京都国立博物館　　処理番号　4522-4

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	４）　特別展観「上田秋成」の開催に向けて、日本近世文学会と共同で調査研究を行う。((５）-②-ⅳ)

【事業概要】

平成 22 年 7 月 17 日（土）から同年 8 月 29 日（日）まで開催される特別展観 没後２００年記念「上田秋成」を視野に入れ、日本近世文学会と協力し、上田秋成と周辺の画家・文人に関する調査研究を行う。あわせて、博物館収蔵品の文化財に関する情報を蓄積し、得られた成果を展観や講座、誌上で公開し、広く還元することを目的とする。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー　水谷亜希

【スタッフ】

［京都国立博物館］ 山下善也（連携協力室長）、狩野博幸（客員研究員）

［日本近世文学会］ 稲田篤信（首都大学東京教授）、木越治（上智大学教授）、長島弘明（東京大学教授）、飯倉洋一（大阪大学教授）

【主な成果】

日本近世文学会と協力し、新発見 12 件をふくむ上田秋成関連の文化財の調査、作品情報の整理を行い、その成果を展観の展示・図録に反映させるとともに、報道発表や講演会などを通じて広く発信した。

【年度実績概要】

・展観にかかわる収蔵品の再調査を行い、得られた情報を蓄積した。また、日本近世文学会の稲田篤信氏、木越治氏、長島弘明氏、飯倉洋一氏と打合せを重ね、日本近世文学会が調査した秋成に関する情報と、京都国立博物館が調査した秋成ゆかりの画人・文人の作品に関する情報を共有、それに基づき展観の作品選定、展示、解説執筆を行った。展観の構成、作品選定に関しては狩野博幸氏（客員研究員）の助言を受けた。

・展観の開催にあわせて小冊子「没後２００年記念　上田秋成」（京都国立博物館編）を発行・販売し、会期後には図録「没後２００年記念　上田秋成」（日本近世文学会編）を作成、日本近世文学会会員に配布した。

・展観に関連して下記の講座を行い、研究成果を広く公開した。
□連続講座「いま、京都で秋成を読む。」（6 月 12 日、6 月 19 日、同志社女子大学主催、京都国立博物館後援）
□夏期講座「文学と美術」（長島弘明「上田秋成の画賛」、7 月 29 日、京都国立博物館主催）
□土曜講座（7 月 24 日、31 日、8 月 21 日、京都国立博物館主催）

・京都新聞の連載記事「畸人 秋成の世界」で 4 月 7 日から 7 月 21 日にかけて、高田衛氏（東京都立大学名誉教授）、中野三敏氏（九州大学名誉教授）、廣瀬千紗子氏（同志社女子大教授）らと展観関係者あわせて 9 名による連載 15 回を行い、研究成果の公表と展観の周知につとめた。

【実績値】

・調査資料点数 108 件（絵画 24 件、秋成資料 84 件）
・著作数　2 冊（小冊子、図録）
・講座聴講人数　約 1,330 名（連続講座　約 600 名、夏期講座　約 240 名、土曜講座　約 490 名）
・新聞連載　15 回（「畸人 秋成の世界」、京都新聞）

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　京都国立博物館　　処理番号　4522-4

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

上田秋成の没後２００年を機に、一般にはあまり知られていなかった秋成の広範囲な創作活動と、同時代の人々との交流を紹介することができた。

日本近世文学会と協力することで、博物館主催の企画の他に、西福寺での秋成忌にあわせた講演・演奏会、同志社女子大学での連続講演会など、館外の催しものを通じて展観に対する地域住民の関心を高めることができた。また、文学と美術の両側面から、この時代の文化・芸術の様子をさぐる独創性の高い展観となったことは大きな成果であり、両者の協力は、今後の研究活動にもつながる有意義な人的交流となった。

展観をきっかけとして、観覧者から重要な新出資料に関する情報が寄せられ、今後の秋成研究に大いに貢献する収穫となった。

2．定量的評価

観点	調査資料点数	著作数	講座聴講人数	新聞連載		
判定	A	A	A	A		

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究は順調に進展し、特別展観「上田秋成」では、今年度の調査だけでなく、各研究者が長年蓄積してきた調査・研究成果を、実物の展示とともに一般に公開できる大きな機会となった。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	展覧会計画の中で、調査研究は順調に進めることができた。予定通り、特別展観「上田秋成」にて調査の結果を広く公開し、計画を完遂することができた。

【書式Ｂ】　　施設名　京都国立博物館　　処理番号　4522-5

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5)特集陳列「園田湖城」の開催に向けて、篆刻資料の調査研究を行う

【事業概要】

大正・昭和期に京都を拠点に活動した篆刻家・園田湖城（１８８６－１９６８）の篆刻作品や書跡作品、関連資料の調査を行い、特集陳列「園田湖城」展にてその成果を公開する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西上　実

【スタッフ】

赤尾栄慶（上席研究員）、呉　孟晋（研究員）

【主な成果】

園田湖城は、日本の篆刻史にその名を刻みながらも近年その業績が評価されることが少なかったため、篆刻や書などの作品や関連資料などの基礎的な調査に重点をおき、その活動の全体像を明らかにした。とくに、大正期の湖城は篆刻家として出発するにあたり、富岡鉄斎や橋本関雪ら京都の書画家たちと密接な交流をもっており、近代京都における書画篆刻が一体となった「文人」文化の拡がりを確認できた。

【年度実績概要】

・園田湖城作品・資料にかんする調査

関西地方と関東地方を中心に、個人や美術館・博物館（和泉市久保惣記念美術館、清荒神清澄寺鉄斎美術館、白沙村荘橋本関雪記念館、日本習字教育財団観峰館、東京国立博物館など）３１ヶ所、のべ３５回にわたる調査を実施した。昭和４４年（１９６９）の琵琶湖文化館（大津市）での遺作展以降、湖城作品・資料の多くは門弟を含む個人が分散して所蔵していたが、本調査により９９点の篆刻作品を確認した。また、湖城旧蔵の日中の印譜や秦漢古印、中国書画などについても調査を行い、湖城が作品制作の際に参考としたこれらの文物から湖城作品について多面的な理解の助けとした。

・園田湖城の業績にかんする研究

上記の調査により、日本篆刻史における園田湖城の位置づけと、湖城をとおして近代京都における書画篆刻一体の文人文化の様相が明らかになった。湖城は中国美術に傾倒するなかで、呉昌碩に私淑した中国味あふれる剛健な作風を確立し、篆刻家としての地位を確立した。その一方で「同風印社」結成や戦後の日展審査員就任など、篆刻界の活性化につとめた側面も評価されるべきである。また、富岡鉄斎や橋本関雪ら著名な画家たちと交流は中国美術愛好という共通の趣味をとおしてであり、近年京町家の「看板書き」として評価の気運がある小川鶴斎との交流も明らかとなった。こうした成果は特集陳列での展示とその図録にて公開した。

・特集陳列関連講演・講座およびワークショップ

外部での講演として、西上が園田湖城ゆかりの京都書道連盟にて湖城の篆刻芸術について紹介した（２０１１年１月８日）。また、本事業をとおして構築した篆刻家および篆刻研究者とのネットワークを活用して、特集陳列「園田湖城」展開催期間中に外部講師による当館土曜講座（２０１１年２月１２日於京都女子大学）や、ディスカッション形式のワークショップ（２０１１年１月２３日於当館）を開催。来場者はそれぞれ、２１０名、５１名であり、ともに収容人員を上回る多数の来場者でにぎわった。

・園田湖城関連資料・作品の寄贈・寄託

調査の進展に伴って明らかになった湖城作品のうち数点が寄贈・寄託され、特集陳列以後の展示にも活用が期待できる。寄贈されたのは湖城作品印譜で、寄託作品は書・画・印影合装の一幅や湖城宛て書簡など。とくに合装の一幅は、湖城の早期の活動で拠点とした平安印会の会員たちとの交流を示すうえで重要な作品となる。

【実績値】

（刊行物）特集陳列図録１冊
（講演・講座）３回（２０１１年１月於京都書道連盟など）
（調査）調査地：３１ヶ所　　回数：のべ３５回　　件数：３２０点
（寄贈・寄託）寄贈：園田湖城印譜１件　寄託：湖城関連書画作品など２件

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 4522-5

(様式 2)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		

備考
園田湖城生誕１２５年（２０１１年）にあわせた事業であり、かつ特別展覧会「筆墨精神―中国書画の世界」展との同時開催により、書画篆刻を不可分の芸術と考える中国美術の全体像を提示できた。通常の篆刻の展示では印章作品を陳列するにとどまるが、本陳列では富岡鉄斎や橋本雪ら書画家のために制作した印章とそれが捺された絵画作品を同時に展示しただけではなく、各所に四散していた湖城旧蔵の中国文物も合わせて展示したことで、湖城芸術の背景にまで踏み込んだ独創性を志向した内容を目指した。また、本事業は京都で活動した篆刻家に焦点をあてた企画であるゆえ、京都文化の展示・研究を掲げる当館の活動方針に適い、今後も京都に発展性と継続性をみることができる。

2. 定量的評価

観点	刊行物	講演・講座数	調査回数	調査件数	寄託・寄贈件数	
判定	A	A	A	A	A	

備考
特集陳列では図録を制作しない場合も多いが、調査公開の観点から約７０頁で構成した図録を刊行した。
講演・講座数の３回は特集陳列としては多く、寄贈・寄託作品も今後の展示に活用が見込まれる件数を確保した。こうした成果をもたらしたのが、特集陳列では類を見ない調査の規模の大きさである。その回数と件数は篆刻作品の調査・研究・展示という当館では初の試みゆえに基礎資料収集から開始したことにもよるが、実証的な手法にもとづいた悉皆調査を志向したゆえの結果である。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査・研究の成果を特集陳列の展示とその刊行物である図録に十全に反映することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当該年度にて調査・研究にもとづく特集陳列を終えた。その成果は、今後の篆刻作品の展示にあたり参考に供することができる。

【書式Ｂ】　　施設名　京都国立博物館　　処理番号　4522-6

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	６）特別展覧会「法然」の開催に向けて、浄土宗寺院所蔵文化財の調査研究を行う

【事業概要】

浄土宗寺院所蔵文化財の調査研究をし、その成果を特別展覧会「法然―生涯と美術―」（平成 23 年 3 月 26 日～5 月 8 日）に反映させる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室長　若杉準治

【スタッフ】

赤尾栄慶　浅湫毅　大原嘉豊　久保智康　呉孟晋　永島明子　羽田聡　山川暁　若杉準治

【主な成果】

特別展覧会「法然―生涯と美術―」の充実のために、従来より知られている資料については、より学術的に確かな位置づけを行うための調査研究を行い、さらに従来知られていない資料を得た。
また画像の入手が困難な作品について、新たに撮影を行い高質の展覧会図録を制作した。

【年度実績概要】

・「法然―生涯と美術―」という展覧会テーマに関連する作品のリストアップを行い、個々に資料調査を行い、展覧会出品候補作品の絞り込みを行った
・展覧会の出品候補作品について、従来資料の乏しかった作品について、展示の可否および展示方法等を検討するため、現地調査及び写真撮影を行った。
　大念寺　阿弥陀如来立像及び像内納入品
　興善寺　阿弥陀如来立像
・出品の決定した作品について、事前に搬入し、詳細な調査を行った。
　知恩院　二祖曼陀羅図
　浄土宗　阿弥陀如来立像
・展示の充実のため、知恩院において、法然上人像のヴァリエーションを調査し、従来全く知られることのなかった「自画像」と伝える画像や、法然上人の本地身が勢至菩薩であることを視覚的に示す宝瓶御影などの新出資料を得た。

【実績値】

刊行物　：特別展覧会「法然―生涯と美術―」展覧会図録刊行

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4522-6

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	刊行物					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査の成果を特別展覧会にて公開することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	展覧会準備において、調査研究を順調に進めることができ、特別展覧会「法然―生涯と美術」を開幕することができた。展覧会は翌年度に渡って開催される。

【書式Ｂ】　　施設名　京都国立博物館　　処理番号　4522-7

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	７）特別展覧会「細川家の至宝」（平成２３年度）の開催に向けて永青文庫と共同で関連作品の調査研究を行う

【事業概要】

東京・目白に位置する永青文庫は、熊本藩主であった細川家に伝来してきた文化財を保護するために設立されたもので、そのコレクションは８万件にものぼり、国宝、重要文化財に指定されたものも数多い。本計画は、これら宝物をあらためて調査した上で、初代細川藤孝（幽斎）ゆかりの京都の地で展覧会として結実させ、広く一般に公開することを目的とする。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員　淺湫毅

【スタッフ】

西上実（学芸部長）、若杉準治（列品管理室長）、山本英男（美術室長）、山下善也（連携協力室長）、大原嘉豊（研究員）、赤尾栄慶（上席研究員）、羽田聡（研究員）、中村康（文化財管理監）、久保智康（工芸室長）、尾野善裕（主任研究員）、山川曉（主任研究員）、永島明子（主任研究員）、宮川禎一（考古室長）、村上隆（保存修理指導室長）、呉孟晋（研究員）、水谷亜希（アソシエート・フェロー）

【主な成果】

本展覧会は東京、京都、九州の各国立博物館を巡回する。京都においては平成２３年度秋に開催予定であるが、すでに東京展は平成２２年春より開催された。そのため基本的な宝物調査は２１年度中に終了している。本年度の成果としては、永青文庫に残されている資料を博捜することにより、近代にあらたにコレクションに加えられた作品が、どのような経緯で入手されたのかという点がより明らかとなるとともに、次年度の当館における展示に際して生かしうるあらたな情報を入手することが出来た。また、東京展の開催にあわせ刊行された図録に、各研究員が分担して執筆にあたったるとともに、京都展のための補足調査および、永青文庫との打ち合わせを行った。

【年度実績概要】

上でも述べたように、本展覧会の開催は京都国立博物館においては平成２３年１０月からであるが、東京国立博物館を最初の巡回地として、すでに平成２２年４月より開催された。巡回先の各館で、出品作品は７割が共通し、残りの３割は異動があり、開催地それぞれで個性を出すように構成されているが、図録は共通のものとした。その結果、東京展の開催に合わせて図録を出す必要があり、基本的な調査は平成２１年度中に終了している。したがって本年度の主な成果としては、図録に淺湫が概説を執筆し、各研究員が作品解説を分担して執筆した。また、東京展開催中に出品作品の補足調査をおこなうとともに、次年度に開催する京都展における出品作品を最終確定するとともに、展示レイアウトの基本プランを作成した。

【実績値】

図録の刊行『細川家の至宝　―珠玉の永青文庫コレクション』　４月

同書概説　淺湫毅が「宝慶寺から請来された石仏群―細川護立と中国彫刻」と題して執筆した。

作品解説　各研究員が出品作品のうち９７作品について解説執筆を行った

東京展開最中に作品の補足調査をのべ２回行なった。

永青文庫において展示作品に関する打ち合わせを１回行った。

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 4522-7

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	A	A	A

適時性：近年の歴史（とくに戦国時代）に関する一般の関心の高まりにかなうものと考えられる。
独創性：熊本藩主のイメージが強い細川家であるが、初代が頭角を表したのは京都・長岡京市の勝龍寺城を根拠としていた時代であり、細川家と京都とのゆかりは深い。京都展では、京都と細川家のゆかりを全面に押し出した作品選定となっており、これまで数多く開催されてきた細川家関連の展覧会でも、これまでにない構成となっている。
発展性・継続性：本展に関連する調査で永青文庫と良好な関係が築かれ、将来へと発展しうる。
効率性：各研究員が多忙を極める中で効果的な調査及び展覧会の企画ができた。
正確性：永青文庫コレクションに対し、学問的により正確な位置づけを行うことができた。

各項目を以上の観点から判定した。

2．定量的評価

観点	執筆					
判定	A					

図録の執筆においては、東京、九州の国立博物館と分担し、当初想定どうりの分量を達成することが出来た。なお、調査に関しては、今年度のみの成果ではないが、各研究員が永青文庫におもむき、実際に収蔵作品されている作品の調査行い､既存の図録等に収録されている所蔵品情報の数倍に上る成果をあげることができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査および図録の刊行という観点からは、おおむね当初の計画通り遂行することができた。次年度秋に、当館において展覧会が開催されるが、調査結果を十分に反映した展示となるように努力したいと考える。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	永青文庫に所蔵される各分野の文化財について、まんべんなく調査し、その成果を展覧会の作品選定および図録の執筆に遺憾なく発揮することができ、これまでのところはおおむね順調と考えられる。次年度は実際に展覧会が開催されることになるが、調査・研究の成果を生かして、作品の安全な移動、展示をこころがけるとともに、観覧者の理解、賛同が得られるような、効果的な展示解説を行いたい。

【書式Ｂ】　　施設名　京都国立博物館　　処理番号　4522-8

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	8)特別展覧会「中国近代絵画（仮)」(平成２３年度）の開催に向けて、須磨コレクションと関連作品の調査研究を行う

【事業概要】

京都国立博物館が平成１１年（１９９９）度からその後数回にわたって寄贈を受けた須磨コレクションを中心に、中国近代絵画にかんする調査・研究を行い、平成２３年度に開催を予定する特別展覧会「中国近代絵画（仮)」にてその成果の公開を目指す。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西上　実

【スタッフ】

呉　孟晋（研究員）

【主な成果】

次年度開催予定の展覧会に向けて、約２０００点におよぶ須磨コレクションの調査を継続し、その全容把握に努めた。とくに昭和初期の南京総領事・須磨弥吉郎によるコレクションの性質にかんがみて、政治や社会とのかかわりに注目し、中国近代史のなかでの絵画芸術に位置づけを明らかにした。また、一般にはなじみの薄い分野であるだけに、一般向けの広報・紹介に注力した。

【年度実績概要】

・須磨コレクションにかんする調査およびその研究

中国近代絵画は膨大な現存作品数と近代の日中関係の複雑な展開から、清時代中期以前の中国絵画研究とはアプローチを異にする面もある。須磨コレクションには、日中の政治・外交の場で贈答された作品が多く、中国近代政治史・外交史との関連を念頭において作品調査を行った。その結果、康有為、汪兆銘、唐紹儀、鄭孝胥ら中国近代史にその名を残す著名政治家の書作品について、いくつかの新知見を得ることができた。また、須磨コレクションには中国書画のみならず、民国期の中国に流寓した日本人画家による作品もある。そのほとんどはこれまで日本近代絵画史でも等閑視されてきたが、本事業により、大正期新興美術運動に参加した後台湾や中国大陸を放浪した重松岩吉や、水彩画家の太田貢、上海の日本人サロンにいた小川七五三二らの活動の一端を解明することができた。これらは中国での日中文化交流の新たな一側面を示すものであり、その成果の一部は平成２２年７月から８月にかけての当館の「新収品展」において公開した。

・海外招へい研究員の受け入れ

平成２２年９月から翌年３月まで、日本学術振興会海外招へい研究員として広東美術館研究員の蔡涛氏を受け入れ、展覧会目録や新聞雑誌記事など須磨コレクションの関連資料についての調査・目録制作などで協力を得た。これらの資料は中国本国には現在ほとんど残っておらず、将来的にデータベースとして情報発信を目指すうえでも必要不可欠な準備作業となる。また、中国近代絵画史を専門とする同氏とは滞在中積極的に意見交換を行い、中国側からの視点で展覧会への助言も数多く得ることができた。

・中国近代絵画について紹介

上記の成果について、一般向けにまだ広く知られていない中国近代絵画の紹介につとめた。具体的には、当館における講座や他機関での講演会の開催のほか、一般向け書籍の刊行や各種刊行物で広く紹介の機会をもった。

【実績値】

（調査）回数：３０回
（刊行物）単行本１冊、論文・エッセイ２本
（講座・講演）４回

【備考】

【書式Ｂ】　施設名　京都国立博物館　処理番号　4522-8

(様式 2)

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

平成２３年（２０１１）は、近代中国のあり方を大きく変えた辛亥革命１００周年であり、平成２４年（２０１２）は、日中国交正常化から４０年の節目にあたる。本調査の成果として計画される特別展覧会は平成２３年度の事業にして平成２４年１月から２月に開催するため、二つの記念年にまたがる。また、当該年度は関西地方において当館や大阪市立美術館など９つの博物館・美術館がリレー方式の「中国書画コレクション展」を開いており、本特別展はその掉尾にあたる。日中関係が大きな振幅をもって推移するなかで、近代での日中交流の軌跡をたどる試みは、両国の相互理解の一助となりうる。とくに絵画をとおしての交流は、これまでその重要性が認識されていながら、具体的な取り組みには乏しかった。本調査では、当館が所蔵する須磨コレクションを基礎にして、新出の作品や関連資料からその軌跡を検証するものであり、定性評価の項目として、「独創性」「発展性」「効率性」「継続性」の４項目に適う成果を導くものである。

2．定量的評価

観点	調査回数	刊行物数	講座・講演数			
判定	A	A	A			

備考

須磨コレクションの調査は当館所蔵品であるゆえ、通常の業務の合間に週１回程度、継続して実施した。その成果は、単行本では関西中国書画コレクション研究会著『中国書画探訪―関西の収蔵家とその名品』(二玄社、平成２３年１月）にて、西上と呉がコレクターとしての須磨弥吉郎の伝記と須磨コレクションの名品を紹介し、当館紀要の『学叢』や広報誌『京都国立博物館だより』などでも須磨コレクションに関連した日中の近代絵画について言及した。講座・講演については、当館土曜講座（平成２２年８月２８日）や、兵庫県民会館における「ひょうご講座」(同１１月６日)、神奈川県立近代美術館・葉山における「県立機関活用講座」（２０１０年１１月２１日）などで行い、当館以外の場所においても積極的に中国近代絵画の紹介につとめた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	須磨コレクションの基礎的調査を継続するとともに、一般向けに中国近代絵画の紹介と次年度開催の展覧会広報に注力できた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	次年度での特別展覧会の開催に向けて基礎的調査をほぼ終え、研究面においても一般向け広報の面においても、当館所蔵のコレクションについての理解を深めることができるようになった。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4523-1

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)　南都諸社寺等に関する計画的な調査研究成果の一部を「大遣唐使展」「仏像修理１００年」並びに特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」、「お水取り」及びなら仏像館の仏像展示に反映させる（(5)-②-vi）

【事業概要】

近隣社寺の所蔵文化財の調査研究等を行い、その成果を事業（展示等）に反映させる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西山　厚

【スタッフ】

【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博（上席研究員）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（企画室長）、吉澤悟（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、野尻忠（情報サービス室員）、清水健（教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）

【主な成果】

「大遣唐使展」「仏像修理 100 年」「おん祭と春日信仰の美術」「お水取り」に関連する文化財を蔵する近隣社寺等への働きかけを行って所蔵文化財の調査を実施し、その成果を展示活動等に反映させた。

【年度実績概要】

① 特別展「平城遷都 1300 年記念　大遣唐使展」の開催に際して借用した薬師寺・法隆寺・唐招提寺・東大寺・大安寺等所蔵の文化財について前年度に行った調査研究の成果を、同展の図録、展示解説、パネル等に反映させた。

② 特別展「仏像修理 100 年」出陳作品（法隆寺・東大寺・興福寺・唐招提寺・平等院・三十三間堂等から借用）に関する調査研究の成果を、同展の展示解説・パネル類や展覧会図録等に反映させた。当館修理所で復元修理作業が進行中の薬師寺四天王像（重文）のうち 3 軀が展示され、最新の修理の過程で得られた成果が図録や解説等に盛り込まれたことが特筆される。

③ 聖観音立像（勝林寺蔵、重文）のなら仏像館（本館）における名品展「珠玉の仏たち」への出陳を機に、同像と作風が酷似する観音菩薩立像（斑鳩町・法輪寺蔵、重文）の調査・撮影（8 月 5 日）を行い、その成果を展示解説や夏季講座等で公表した。

④ 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」開催にあたっては、春日大社三宮の本地仏としての地蔵に対する信仰に注目し、この観点からの関連資料収集・調査研究を重点的に実施して、その成果を展覧会に反映した。特に米国・ジョン・C・ウエーバーコレクションの絹本著色地蔵菩薩像の里帰り展示は、新聞紙上で紹介されるなど注目を集め、また若草山の地蔵石仏の調査・撮影（8 月 26 日）や、東大寺知足院における地蔵菩薩立像及び厨子の調査・撮影（9 月 16 日）で得た資料と知見も、会場のパネル展示や展覧会図録の論考に活用された。

⑤ 特別陳列「お水取り」の開催にあたり、近世に刊行された名所図絵に掲載された東大寺二月堂及び修二会に関する情報についての調査研究を重点的に進め、具体例を展示するとともに、調査研究の成果を展示解説や、会期中配布するリーフレットに反映した。

【実績値】

調査回数　７回

関連調査の展覧会への反映回数　５回

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4523-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
南都諸社寺等に所蔵される文化財の調査は、奈良に立地する当館の基本的不可欠な作業の一つであると位置づけられる。こうした調査を通じて、近隣社寺との交流・信頼関係が一層深まりつつあり、今後の当館の企画・事業に好影響が期待される。

2. 定量的評価

観点	調査回数	展覧会への反映				
判定	A	A				

備考
展覧会企画に沿った調査研究が中心になっており、その点では必要十分な条件を満たしている。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展「大遣唐使展」「仏像修理 100 年」等に出陳した近隣社寺を中心とした所蔵品の事前調査の成果は展示及び展覧会図録に反映され、高い評価を得た。また春日信仰・若宮おん祭及び東大寺二月堂・修二会に関する文化財調査の成果は特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」「お水取り」に反映された。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	仏教美術と奈良の文化を調査研究展示活動の主眼としている当館にとって、近隣社寺の宝物調査は必須の事業である。22 年度も東大寺を初めとする社寺の宝物調査を行うことにより、展覧会を活性化させ、学術的成果をあげることもできた。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4523-2

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)　我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査研究成果、及び当館所蔵品についての調査研究成果を生かし、なら仏像館仏像展示や名品展（平常展）の充実を図る（(5)-②-ⅶ）

【事業概要】

仏教美術の専門館であり、日本仏教美術に関するもののみならず、広くアジアを視野に入れた展示を構成している奈良国立博物館の特長に鑑みて、中国や朝鮮半島における文化財とわが国の文化財の比較研究を実施する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西山　厚

【スタッフ】

【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博（上席研究員）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（企画室長）、吉澤悟（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、野尻忠（情報サービス室員）、清水健（教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）

【主な成果】

学術交流協定を締結している中国・韓国の博物館との間で研究員の派遣・受け入れを行い、活発な研究交流・情報交換を行うことができた。また特別展開催の前提として行った、中国・朝鮮半島で制作された文物に対する調査研究の成果を、展示に反映させることができた。

①名品展（平常展）彫刻部門では、本館の「なら仏像館」への改称に伴うリニューアル以降も、中国及び朝鮮半島の石仏・金銅仏から日本の仏像に至る様式の流れを体系的に展観した。また小金銅仏・檀像・塑像・塼仏のコーナーを中心に、隋唐時代の中国で流行した仏像の諸類型がその信仰背景とともに古代日本に伝来したこと、平安初期木彫における用材観と中国檀像との関係などについての近年の研究成果を、展示構成・作品解説・展示パネルなどに反映した。

②耐震工事の完了・展示ケース新造後の西新館で最初に開催された名品展（平常展）では、工芸部門において中・韓・日の舎利容器・密教法具の比較研究の成果に基づき、各地域の作例の比較展示を行った。また書跡部門でも、平成 21 年度特別展「寧波」の開催に際して行った調査の成果などを踏まえ、鎌倉期以降における仏教を介した中国との文化交流の様相を最もよく示す、禅僧の墨跡に重点をおいた展示を行った。

【実績値】

名品展（平常展）への成果の反映　3 回

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4523-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　我が国の仏教美術を研究する上で、中国・韓国をはじめとする海外の仏教文化研究は必要不可欠である。そのために数箇所の研究機関と学術交流協定を基軸として効率的に調査研究を進め、その成果を当館の平常展・特別展等に反映させるように努めている。

2．定量的評価

観点	平常展への反映					
判定	A					

備考
　調査研究の成果を積極的に反映させており、その点では必要十分な条件を満たしている。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	学術交流協定を締結している上海博物館（中国）・河南博物院（中国）・中国国家博物館（中国）・国立慶州博物館（韓国）との研究員の交流などをとおして行った、アジア諸国を視野に入れた調査研究の成果を名品展（平常展）に反映させることができた。その過程で、中国・韓国・日本の三国の作例を比較展示してその共通点・相違点を浮き彫りにするなどの工夫を行った。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	わが国とアジア諸国との文化交流に関する文化財の調査研究は次第に蓄積を増しており、こうした成果によって 22 年度名品展（平常展）の内容を充実させることができた。今後も引き続き調査研究を続け、その成果を展示に反映していく必要がある。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4524-1

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)平成 20 年度特別展「工芸のいま　伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への調査を受けて、継続的かつ発展的に調査研究活動を行なう。((5)-②-ix)

【事業概要】

九州･沖縄における伝統工芸の作家の創作活動について、調査研究を行なう。無形文化財としての伝統技術と、そこから生まれる新たな創作について、それぞれの作家の取り組みを調査する。これまで調査を行ってきた作家の調査を継続するとともに、新たな作家を調査対象に加えていく。伝統工芸の技術についてもワークショップを開催した。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　伊藤　嘉章

【スタッフ】

原田あゆみ（文化財課主任研究員)、赤司善彦（展示課長）

【主な成果】

平成 22 年度西部工芸展、日本伝統工芸展など、今年度開催の工芸展で作品調査を行なった。陶芸部門では、西部工芸会陶芸部会の研究会に参加し、新たな創作活動の展開について調査し、これまでに対象となっていなかった若手作家も調査に加わった。

タイと共同で開催する展覧会の中に伝統工芸を位置づけ、日本の伝統技術によって現代に展開する工芸を紹介することとし、タイ国バンコク国立博物館で開催の「日本とタイーふたつの国の巧と美」に日本の伝統工芸とそれが現在に生きている姿の展示を行った。同時に、伝統工芸の技術を示すワークショップを開催した。

【年度実績概要】

九州･沖縄の伝統工芸の中で最も層の厚い陶芸で、調査の継続と研究会への参加を行なった。西部工芸展、日本伝統工芸展、西部工芸陶芸部会展、九州･山口陶芸展の出品作品の調査を行い、新たな創作の動向とこれまで調査対象となっていなかった新しい人材の発掘を行なった。その一方で、日本工芸展の審査に関り、全国規模での陶芸の状況の把握をつとめた。

陶芸では柿右衛門様式の色絵技術の復活と伝統の継承について、タイ国バンコク国立博物館で開催の「日本とタイーふたつの国の巧と美」で紹介した。

染織の久留米絣の作家による伝統工芸の技術を示すワークショップを開催した。

【実績値】

○調査回数　　3 回

第 107 回 九州･山口陶芸展、第 45 回西部工芸展、第 57 回日本伝統工芸展で九州･沖縄の工芸の調査と全国的な工芸の状況の調査。

○収集資料数　伝統工芸展　99 件　西部工芸展　237 件

九州･山口陶芸展　98 件

タイで開催のワークショップ

○研究会　2 回

秋季、冬季の西部工芸会陶芸部会研究会に出席し、九州･沖縄の陶芸の現状調査と研究発表。

○展示　8 件

1/15～3/13　タイ国バンコク国立博物館で日本の伝統工芸について伝える展示を実施。

○ワークショップ　3 回

1/29～30　　タイ国バンコク国立博物館で久留米絣のワークショップ開催。

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-1

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　伝統工芸への取り組みは近代美術館を持たない九州地区にあって、無形文化財を扱う役割を果たすとともに、地域にある博物館として伝統工芸の発展を通して地域貢献を果たすというものである。これらは平成20年度の展覧会以来の、継続的な事業であった。工芸作家の中にこの活動に対する期待も大きく、また既に昨年度のこの事業によって九州･沖縄の工芸は確実に新たな展開を示しつつある。
　海外展の中に伝統工芸を組み込むことができた。

２．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	研究会	展示	ワークショップ	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　個別調査主体から、展覧会出品作による追跡調査を行っている。さらに全国レベルでの工芸の状況へと調査対象を広げている。それらの成果の一部は、工芸作家とともに行なう研究会によって公表している。
　海外で日本の伝統工芸を紹介し、その技術保護の状況を伝えた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	地域に根ざした博物館として、九州･沖縄の伝統工芸の発展に寄与している。技術の保存とともに、伝統の美意識について、貢献することができる。 日本以外の工芸技術の実情調査、保護といった新たな研究の広がりがあり、文化交流を視座に置く九州国立博物館としては今後さらに広げる必要がある。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	工芸展開催以来の成果を受け、さらに広がりを大きくもてたという点は評価できる。陶芸、染織といった層の厚い分野では、より活発な研究活動が行なわれているが、今後は層の薄い分野での活動を深めていく必要がある。 海外での工芸技術の実情と保護という面について、更なる研究が望まれる。無形文化財に積極的に取り組んできた日本の状況について、海外に伝えることで、海外の無形文化財の保護についても貢献が可能となる。

【書式Ｂ】　　施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-2

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)京都、九州における黄檗宗寺院に関する調査を進め、成果を特別展に反映する。((5)－②－vii)

【事業概要】

江戸時代における日中文化交流の接点の役割を果たした黄檗宗寺院の所蔵する文化財について、調査研究を実施する。調査を通して見えてくる黄檗宗の開立と興隆の歴史を 17 世紀の東アジア世界という広域的な歴史の中で捉え、その成果を特別展としてまとめる。

【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　楠井　隆志

【スタッフ】

伊藤嘉章（学芸部長）、金井裕子（企画課研究員）、川畑憲子（企画課研究員）、楠井隆志（展示課主任研究員）、小泉惠英（企画課長）、酒井芳司（展示課研究員）、末兼俊彦（アソシエイトフェロー）、畑靖紀（企画課主任研究員）、原田あゆみ（文化財課主任研究員）、藤田励夫（博物館科学課保存修復室長）、丸山猶計（文化財課主任研究員）、森實久美子（企画課研究員）、

【主な成果】

調査箇所　黄檗宗大本山萬福寺および塔頭（５回）
関西地区黄檗宗寺院（1 ヶ寺）、九州地区黄檗宗寺院（12 ヶ寺）
国立国会図書館内閣文庫、京都国立博物館、神戸市立博物館、長崎歴史文化博物館、
北九州市立いのちのたび博物館、柳川古文書館

上記各所蔵の文化財についての基礎的な情報を収集・整備することができた。これまで調査対象とされなかった彫刻分野において、数多くの知見を得ることができた。これらの調査の成果は特別展「黄檗」に反映した。

【年度実績概要】

分野横断的に調査を実施して黄檗の美術や文化について基礎的な情報を収集・整備することができた。その成果は特別展準備に反映された。また、調査の課程で所蔵文化財の保存状態について問題となる場面もあったが、所蔵者への適切な助言をおこなうとともに修復方法の研究にも寄与するところがあった。

【実績値】

○調査回数
　18 回
○収集資料数
　調査点数 200 点
○調査概報
　特別展『黄檗』図録

福岡県久留米市・福厳寺
釈迦如来坐像および観音菩薩坐像・地蔵菩薩坐像

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-2

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　江戸時代における日中交流の接点となった黄檗宗の歴史と文化を調査研究の対象とし、その成果を展覧会としてまとめ、広く一般に紹介することは、アジア諸国との文化交流をテーマに掲げる九州国立博物館にふさわしい活動と評価される。

２．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			

備考
　調査成果を反映した特別展「黄檗」の開催は今年度末からであるため、成果公表の反響については来年度の評価となろうが、実績値としては充分な成果をあげたといえる。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	黄檗宗大本山萬福寺および各黄檗宗寺院の理解と協力を得て、分野を横断した総合的な調査を実施することができたことは大きな成果である。それは、特別展「黄檗」の質の向上と内容的魅力の増大におおいに寄与している。よって、標記評価が適当である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査はほぼ計画どおりに達成された。その成果を、23年3月から開催する特別展「黄檗」の展示内容に反映させるとともに、調査概報として図録を刊行した。

【書式Ｂ】　　施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-3

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 日本、韓国、中国における馬文化に関する考古遺品、美術作品に関する調査を進め、成果を特別展に反映する。((5)－②－ix)

【事業概要】

日本の馬文化は、紀元５世紀に朝鮮半島から渡来したウマが起源であり、以来 1600 年に亘って日本人と密接な関わりをもって展開する。また、黄金で馬や人を飾る習俗も馬文化に付随して日本に導入されたものである。本研究事業では、ウマの動物学的な特性を明らかにすると同時に、中国・韓国・日本の考古資料や美術作品から馬と人の悠久の歴史を考究し、特別展へと結実させる。

【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展室長　　河野一隆

【スタッフ】

赤司善彦(展示課長)・市元塁(企画課特別展室研究員)・坂元雄紀（展示課研究員)・進村真之(展示課研究員)

【主な成果】

騎乗馬や農耕馬など、日本人と密接な関係を持っていた馬との絆は、現代の産業構造の激変に伴って失われた。しかし、私達の生活には馬文化に由来する有形・無形の要素が多く含まれている。特別展では馬のいる情景(厩)を再現すると同時に、最新の考古学研究に基づいた飾り馬の馬装を復元し、馬具から読み取ることのできる馬文化の広がりを立体的に示すことができた。

【年度実績概要】

本研究事業では、動物としてのウマ、歴史としての馬、文化としての馬という多元的な馬の捉え方を試み、その成果を特別展にて公開することを主眼とした。特別展の実施に当たっては約 10 回の事前調査を遂行し、135 件の出品を収集することができた。まず、動物としての馬は、馬の祖先ヒラコテリウムから原生馬への進化過程を示し、人を騎乗するのに適した生態へと変化してきたことを示した。歴史としての馬については、1600 年前に日本に渡来した最古の馬を遺跡出土資料によって例示し、中国・韓国・日本の馬具伝来ルートに係る考古資料によって馬が日本に渡来したことを立体的に示すことができた。中でも、日本の馬の伝来に高句麗が果たした役割が大きいことを示すために、実物拓本を室内に樹立して、馬の伝来と東アジアの動乱が背景にあることを印象付けた。また、鐙の発生として古くから注目されてきた河南省安陽孝民屯遺跡出土品を初公開できた意義は大きかった。また、古墳時代の馬具の到達点に位置付けられる奈良県藤ノ木古墳の馬具を通じて、シルクロードへと繋がる日本の馬文化の広がりを示すことができた。黄金の馬具の展示と併せて、最新の考古学研究の成果に基づいた飾り馬の馬装をイラスト図で提示した。文化としての馬は、現在でも神事として行われている古式競馬や飾り馬によって、武家の権威の象徴や農耕馬以外に、文化としての馬文化の諸相を示した。現在、ウマと人との絆は以前ほど密接なものではなくなってはいるけれども、現代に到るまでの日本人の生活にとって欠くことのできない役割を果たしたことが、研究事業の成果を踏まえて示すことができた。

特別展の観覧者の意見では、馬に対してより身近に感じられた、文化交流の要素としての重要性が認識できたという意見が寄せられた。一方、歴史として馬を捉える場合には、アジアの他地域、中世武士の馬文化も取り上げるべきとの意見が寄せられた。

【実績値】

○調査回数
　10 回
○収集資料数
　135 件
○調査概報
　１冊
○論文掲載数
　１本
○学会研究会等発表数
　１本

和歌山市博物館での作品調査風景

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-3

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 着手当初に策定した目的に鑑みて、成果公開の場である特別展で、ほぼその内容を達成することができた。						

２．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報	論文掲載数	学会研究会等発表数	
判定	A	A	A	A	A	
備考 実施にあたっては多少の改善を要する問題等もあったが、概ね達成することができた。						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的・定量的な面において、おおむね内容を達成でき、自主企画としての特別展として開催することができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究系プロジェクトの成果を特別展に結実させることで、目に見える成果をだすことができた。

【書式Ｂ】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4524-4

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)中国内蒙古自治区出土の遼時代に属する考古遺物に関する調査研究を進め、成果を特別展に反映する。((5)-②-ⅱ)

【事業概要】

唐滅亡後の東アジアは契丹や宋、高麗などが互いに影響関係を保ちながら、新たな国際秩序の形成へと向かった。なかでも契丹はいちはやく国家建設に着手し、国力を増大させた。しかしながら、契丹の文化芸術に対する研究は宋や高麗の研究と比較して大きく立ち後れた感があり、東アジアの文化理解における大きな空白地帯となっていた。そこで九州国立博物館では、契丹文化の総合理解を目指し、現地調査を進めることとなった。

【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	研究員　市元　塁

【スタッフ】

市元塁（企画課研究員）、小泉惠英（企画課長）、臺信祐爾（文化財課長）、今津節生（博物館科学課環境保全室長）、末兼俊彦（文化財課アソシエイトフェロー）

【主な成果】

内モンゴル自治区、台湾において調査を実施し、また展覧会開催にむけて関係機関と積極的に交流をはかり、良好な関係構築につとめた。調査においては、紀年墓出土資料や仏塔出土資料の調査を通して、金銀器を中心に契丹工芸の特質把握につとめた。また遺跡踏査を実施し、陵墓や都城、仏教寺院等の立地等において多くの知見を得た。12 月には調査成果の一部を九州国立博物館主催の国際シンポジウムにおいて発表した。

【年度実績概要】

4 月に台湾故宮博物院において契丹文化を中心とする展覧会を実見し、特別展開催にむけての具体的なプランの構築と、資料調査を実施した。8 月には内モンゴル自治区へ赴き、調査を実施した。トルキ山古墓、耶律羽之墓の各出土品の調査においては、一対あるいは複数組となる器物について、彫金技法や材質に優劣の差異が認められることを確認した。陳国公主墓出土品の調査においては、公主の葬具が主人の葬具よりも良質であることを確認した。また、慶州城や上京、豊州城遺跡などにおいて仏塔の調査を実施し、その立地や建築様式に関して多くの知見を得た。11 月には赤峰地区を中心として現地踏査を実施した。特にヘシグテン旗では契丹に続く国家である金の時代の出土品を実見し、契丹時代とのつながりに関する知見を得た。12 月には内モンゴル自治区から研究者を招聘し、契丹文化に関わる国際シンポジウムを開催し、契丹文化の特質と日本の平安文化との関わりについて発表した。

【実績値】

○調査回数　３回

○収集資料数　４００点

○調査概報　２編

○論文掲載数　１篇

○学会研究会等発表数　１回

金製七稜杯（耶律羽之墓出土、10c 前半）
唐代に盛行した形態を引き継ぐが。7 面体は珍しい。各面には老賢者を彫金する。

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-4

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
近年、契丹研究はとくに日本仏教史や日本美術史のなかで関心が高まり、研究が活性化しつつあるが、本研究では、それらにも寄与し得る十分な成果を挙げることが出来た。また本研究においては、内モンゴル自治区の契丹研究者を招聘し、日本における平安文化遺存の調査を実施するなど、幅広い視点で契丹文化に対する研究を実施することが出来た。

２．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報	論文掲載数	学会研究会等発表数	
判定	A	A	A	A	A	

備考
定量評価に掲げるすべての観点において、十分な成果をあげることができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	次年度の展覧会開催にむけて、契丹文化の周知をはかるべくシンポジウムの開催などを通して一定の成果を挙げることができたが、契丹に対する認知度はいまだ十分とはいえない。今後研究成果を十分に活用しながら成果公開につとめていきたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初予定していた調査対称資料のうち、主要なものについて調査の機会を得て、見識を深めることができた。その成果の多くは、次年度に予定している展覧会に反映させることが可能であるが、今後も継続して調査を進め、研究領域を拡充していきたい。

【書式Ｂ】　　施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-5
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5)細川家伝来資料に関する調査を行なう。((5)－②－ix)

【事業概要】
23 年度開催予定の特別展「細川家の至宝」の作品調査を兼ねて、今年度は細川家伝来資料のなかでも中心的なコレクションを形成している永青文庫所蔵作品について、美術・工芸・考古遺品の代表的な作例の保存状態を中心に調査した。また、永青文庫所蔵作品の学術調査にもとづき、当館での特別展開催に向けて調査研究を進めた。

【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	文化財課　主任研究員　丸山猶計

【スタッフ】
美術部門総括：丸山猶計（文化財課主任研究員）
工芸・考古部門総括：川畑憲子（企画課研究員）
美術担当：畑靖紀（企画課主任研究員）、金井裕子（企画課研究員）、絵画分野　森實久美子（企画課研究員）、小泉惠英（企画課長）、楠井隆志（展示課主任研究員）、彫刻分野　原田あゆみ（文化財課主任研究員）、酒井芳司（展示課研究員）、藤田励夫（博物館科学課保存修復室長）、書跡・歴史資料分野　丸山猶計（文化財課主任研究員）
工芸・考古担当：陶磁分野　伊藤嘉章（学芸部長）、漆工分野　川畑憲子（企画課研究員）、考古分野　市元塁（企画課研究員）

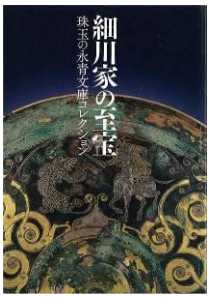
【主な成果】
財団法人永青文庫所蔵資料について、分野ごとに調査結果をまとめ、同時にデータ化を推進し、展覧会出品作品の基礎的な情報を整備した。また。永青文庫所蔵コレクションの性格について分野横断的に研究し、江戸時代の大名家コレクションにおける特質について、分かりやすく展覧会で紹介できる段階におおよそ至ることができた。

【年度実績概要】
前年来、特別展『細川家の至宝』の巡回先である東京国立博物館・京都国立博物館の研究員とともに行ってきた永青文庫所蔵作品調査を基礎に、今年度は同文庫所蔵作品についての約 1000 点にのぼる作品情報を分野別に整理し、研究を進め、展覧会準備に寄与した。また、同文庫所蔵作品を中心に、その保存状態について集中的に調査・確認し、当館で開催する特別展「細川家の至宝」のための文化財のより安全な輸送および取扱方法について考究した。

【実績値】
○調査回数　4 回

○収集資料数　1000 点

○調査概報　　特別展図録『細川家の至宝』



特別展図録「細川家の至宝」

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-5

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
11 万件以上になる細川家伝来資料のうち、古美術品の優品が多く収蔵される財団法人永青文庫所蔵コレクションを調査対象とし、その中核をなす作品群についての精査を反映したものとなっている。くわえて、精査した作品の収蔵状況についての調査結果を含むものとなった。展覧会開催にあたり、永青文庫の格別の理解と協力を得て、予想以上に充実した調査研究が可能となった。よって、標記評価が適当である。

２．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			

備考
展覧会出品作品についての質の高い情報を網羅的に収集できたこと、さらに展覧会には出品しない重要作品群についても具体的で詳細な文化財情報が収集できた。本件の発表の場として、当初から 23 年度特別展「細川家の至宝」を予定している。よって、標記評価が適当である。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	永青文庫の特段の協力を得て、脆弱な文化財に対しても細やかな調査を行うことができたのは特筆すべき点であった。上記のような分野単位の精査を基礎に、同文庫コレクションの性格や本質について、総合的な視点から見直す基盤が整い、当館特別展「細川家の至宝」の質の向上に確実に寄与している。よって、標記評価が適当である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査は当初の計画にそって順調に進んでおり、その成果を、23 年度開催予定の特別展「細川家の至宝」に反映させる予定である

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4524-6

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6)九博に関連する絵本の次シリーズの企画について検討する。((5)－②－iii)

【事業概要】

「きゅーはくの絵本」シリーズは、17 年度開館時から発刊をすすめ、21 年度に１０巻目の刊行を遂げた。21 年度末には、絵本１０巻刊行を記念して座談会を実施し、その席上で今後の新たな展開案が示された。これをうけて本年度は既往の絵本に対する内容の分析を進め、絵本を用いた各種の取り組みを推進しながら、今後の展開を検討することとした。

【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	研究員　市元塁

【スタッフ】

新名佐知子（企画課研究補佐員）

【主な成果】

既刊絵本の外国語版作製を検討するにあたり、福岡県を中心とする九州島内のインターナショナルスクールの実態調査を行った。５月には日経流通新聞において『月夜のおおさわぎ』に関する取材記事が掲載された。また、交流課とボランティアスタッフを中心として、小学生以下を対称とするワークショップや読み聞かせを行った。

【年度実績概要】

交流課とボランティアスタッフが主体となって、絵本を用いた取組みを実施し成果を挙げている。４月にはあじっぱにおいて、『はらなのかのはらっぱで』の読み聞かせと出典資料である医学書針聞書の鑑賞を行った。５月には文化交流展示室において、『じろじろぞろぞろ』の読み聞かせと出典資料である南蛮屏風の鑑賞会を行った。８月には『エイサー！ ハーリー』の主要作品であるハーリー船のペーパークラフトを作製する小学生向けのワークショップを開催した。

【実績値】

○調査回数　1

○収集資料数　１０

○調査概報　1

南蛮屏風の登場人物に扮して、絵本『じろじろぞろぞろ』の読み聞かせ。夢中になって絵本をみつめるこどもたち。

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-6

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　絵本の読み聞かせについては、絵本の題材となった収蔵品の展示公開期間にあわせておこない、かつ展示室内で行うものとして、適時性と独創性に富んだ取り組みといえる。また読み聞かせはこどもたちの絵本に対する反応を直接知ることができるので、今後の絵本製作にむけての参考と成るべき知見を得ることができるため今後も継続していきたい。

２．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			

備考
　本年度は既刊絵本を用いた活用と今後の展開を探るための諸調査に重点をおいた。また、絵本の取り組みに関しては論文や研究会発表等でも公開すべく準備を進めている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	きゅーはくの絵本シリーズは、文化財に対するより深い理解を得る上で有効であり、また新たな来館者層の獲得という側面においても有効なツールである。本年度は絵本を用いた様々な活動を実施することで、参加者の生の反応を知ることができ、絵本が高い情報発信力をもつことを再確認することができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	きゅーはくの絵本シリーズは、発刊を出発点として、博物館の内外で積極的に活用することを重視している。今後も新しいシリーズの製作にむけて、さまざまな取り組みを続けていきたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 5111

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.47

中期計画の項目	５ 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進
プロジェクト名称	文化財保存施策の国際的研究（(1)-①）

【事業概要】

日本国内における文化財保護政策・施策の充実に、また日本が行う国際協力事業の円滑な実施に必要とされる、文化財の概念やその保護の理念、保護のための各種施策に関する国際情報を収集し分析、報告する。また文化遺産に関する国際ワークショップを国内外で開催してこれら情報の共有の場を提供することにより専門家国際ネットワークの構築を図り、文化遺産分野での日本の国際貢献、日本からの情報発信に寄与する。これらの事業により得た国際情報は、国際情報データベースに蓄積、また国際資料室に配架して公開する。

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	国際情報研究室長　岡田　健

【スタッフ】

清水真一、山内和也、友田正彦、朽津信明、二神葉子、有村　誠、影山悦子、秋枝ユミイザベル、邊牟木尚美、島津美子、鈴木 環、安倍雅史（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、今井健一朗（以上、客員研究員）

【主な成果】

文化財保存施策の国際的研究について、以下の事業を実施した。

１．世界各地で開催された研究会やワークショップに積極的に参加し、文化財の保存に関わる各種の情報を収集し、分析した。

２．国際ワークショップの開催：アジア各国の専門家を招へいしてアジアの文化財について考える国際会議を 1 回、国内外の専門家を講師とする一般公開の国内専門家向け研究集会を 1 回、計 2 回開催した。

【年度実績概要】

１．文化財保存施策に関する国際情報の収集・分析、活用

世界各地で開催された研究会やワークショップに積極的に参加し、文化財の保存に関わる各種の情報を収集し、分析した。主なものは以下のとおり：第 34 回世界遺産委員会（ブラジリア、7 月 25 日～8 月 3 日）；第 2 回日中韓建築文化遺産保存国際学術会議（奈良、9 月 3 日～4 日）；第 12 回世界歴史都市会議（奈良、10 月 12 日～14 日）；イクロム理事会（ローマ、11 月 4 日～5 日）；第 8 回アジアの建築交流国際シンポジウム（北九州、11 月 9 日～11 日）；ユネスコ無形文化遺産保護条約第 5 回政府間委員会（ナイロビ、11 月 14 日～19 日）。

２．文化遺産国際ワークショップの開催

1）アジア文化遺産国際会議：本会議は、アジアの各地域におけるネットワーク構築に貢献するため、今中期計画において実施している地域ワークショップで、2007 年度中央アジア（ウズベキスタン）、2008 年度東南アジア（タイ）、2009 年度東アジア（東京）で開催したのに引き続き、本年度は西アジアを対象として実施した。シリア、レバノン、ヨルダン、イラク、バーレーンのアラブ 5 カ国から文化遺産保護・保存修復・考古学などの専門家を東京に招へいし、併せて各国で文化遺産研究・文化遺産保護の活動している日本の専門家にも参加を仰ぎ「西アジアの文化遺産－その保護の現状と課題－」をテーマとした専門家会議を開催した（日時：2011 年 3 月 3～5 日、場所：東京文化財研究所会セミナー室）。また、2010 年度（東京）開催分についての報告書を刊行した。

2）国際文化財保存修復研究会の開催：本研究会は、日本国内への国際情報の発信と、国際協力に関する国内専門家の情報交換・連携強化を目的として国内向け一般公開の研究会として開催している。本年度は、「覆屋保存を考える」をテーマに開催し（日時：2010 年 7 月 8 日、場所：東京文化財研究所セミナー室）それに伴う報告書を刊行した。

【実績値】

国際ワークショップ開催件数： 2 件
報告書刊行件数： 3 件（①,②,③）
外国人招へい者数：アジア文化遺産国際会議：16 人　国際文化財保存修復研究会：2 人
国際ワークショップのうち一般公開分（国際文化財保存修復研究会）参加者数：71 人
国際ワークショップのうち一般公開分（国際文化財保存修復研究会）参加者満足度：100％

【備考】

①アジア文化遺産国際会議報告書「東アジア地域の文化遺産―文化遺産保護国際協力活動を通じて我々は何を発見し共有しうるか―」 11.03
②国際文化財保存修復研究会報告書「覆屋保存を考える」 10.12
③アジア文化遺産国際会議報告書「西アジアの文化遺産－その保護の現状と課題」11.03

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　5111

自己点検評価調書

研究所 No.47

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	ワークショップ開催件数	参加者数	満足度	報告書刊行件数		
判定	A	A	A	A		
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	地域ワークショップ専門家会議と国際文化財保存修復研究会はともに継続性・発展性を持ったテーマ設定によって多様な情報の収集と強固なネットワーク構築を成し遂げている。とくに地域ワークショップは西アジア（中東）に焦点を当てた画期的な企画となった。さらに国内外で開催される各種の文化遺産保護に関する会議に積極的に参加し、日本の文化財保護施策の策定に有効な情報を収集した。これらの情報をもとに国際情報データベースの充実をはかった。一連の活動は文化遺産国際協力コンソーシアムの活動にも、その一員として、また事務局担当機関として多大な貢献をなしている。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究、国際・国内ワークショップとも、5年間の研究の終了にあたり、これまでの成果を総括する形で実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ事業を進め、国内の文化財保護施策の充実に貢献する。国際ワークショップについてはアジアを中心とする各地域で現在文化遺産国際協力センターが展開している各事業に関連した、より具体的な、理念と保存技術に関する研究会を実施していくとともに、本年度末にみられた西アジア（中東）のような地域的な変動とそれに伴う文化遺産保護の課題と方向性を敏感に読み取り、我が国における文化遺産国際協力活動の最先端組織として、その能力を発揮していくための体制を作ることを目指していきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 5121-1
（様式 1）

業務実績書

研究所 No.48

中期計画の項目	５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進
プロジェクト名称	アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究((1)-②-ア-1)

【事業概要】
アジア諸国では、煉瓦、土、石など、各地の遺跡に共通して用いられている材料が認められる。本研究では、地域で区切って研究を行うのではなく、各文化財に共通して用いられている素材を調査・研究することから、その素材で形作られた多くの文化財の保存修復に寄与することを目的とする。具体的には、材料の物性とその劣化に関する基礎的な研究を行うことから、それぞれの材料が劣化しにくい条件を考察し、材料に対して、あるいは遺跡の環境に対して、材料劣化を起こしにくい条件を与えることで、文化財の保存修復に貢献する。

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	主任研究員　朽津信明

【スタッフ】
清水真一、二神葉子、秋枝ユミイザベル（以上、文化遺産国際協力センター）、鉾井修一、柏谷博之（以上、客員研究員）

【主な成果】
文化財の保存のための覆屋効果について、材質ごとおよび覆屋の形態ごとに検証し、成果をタイ・インドネシアの研究者と共有した。また、タイ・スコータイ遺跡について、環境調査を実施した。さらに、微生物が石材の風化に与える影響について、カンボジアのアンコール遺跡において検討した。

【年度実績概要】
昨年度までの研究により、覆屋を設けることが遺跡の保存に有効となる場合があることが定量的に指摘されていたが、今年度はさらに細かく覆屋の形態に注目し、覆屋のタイプの違いによりその効果がどのように異なるかを検証した。その結果、例えば凝灰岩と花崗岩とでは覆屋の効果が異なる（凝灰岩に対しての方が覆屋効果が概して大きい）など、遺跡を構成する材質ごとに状況が異なることがわかったため、まずは材質を正確に把握することが重要であることが確認された。こうした研究に関連した日本国内の現場を、共同研究を進めるタイ芸術局や、インドネシア文化観光省の研究者とともに訪れることにより、研究成果を各機関で共有した。
海外の現場としては、タイ・スコータイ遺跡のスリチュム寺院において、温度・湿度・風速・風向・日射などの各種環境データを引き続き計測した。また、カンボジア・アンコール遺跡群のタ・ネイ遺跡において、砂岩石材表面に存在する地衣類について解析し、それが砂岩の風化に与える影響について引き続き検討した。同遺跡において砂岩試料に蘚苔類を繁茂させる現地実験では、既に表面に蘚苔類が繁茂した試料があり、そこでは実験開始前の初期値に比べて有意に物性値が低下していることが確認された。

【実績値】
報告書刊行　1冊　(①)
論文掲載数　2編　(②、③)
学会発表数　3件　(④、⑤、⑥)

【備考】
①『アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査･研究　平成 22 年度成果報告書』10.03　65 部
②朽津信明「越前式石廟に施された彩色装飾について」　『考古学と自然科学』61　pp.17 -26 10.06
③朽津信明「日本における覆屋の歴史について」『保存科学』　50　pp.65-70　11.3
④朽津信明「板碑に見られる彩色について」日本文化財科学会第 27 回大会　関西大学 10.6.26
⑤朽津信明「遺跡の覆屋保存を考える」第 24 回国際文化財保存修復研究会　東京文化財研究所 10.7.8
⑥朽津信明「石造五輪塔で見る岩種による風化速度の違い」日本応用地質学会平成 22 年度研究発表会　島根県民会館　10.10.21-22

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　5121-1

自己点検評価調書

研究所 No.48

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

２．定量的評価

観点	報告書刊行数	論文掲載数	学会発表数			
判定	A	A	A			
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	報告書刊行、論文数、学会発表件数ともに、計画通りの数字が得られたことから A と判断した。また、順調にデータが蓄積されていることから、次年度にも同等の成果が期待される。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り、順調にデータが蓄積されている。次年度以降もさらに継続してデータを増やす予定である。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 5121-2

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.49

中期計画の項目	５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進
プロジェクト名称	カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査（(１）－２－アー２）

【事業概要】

カンボジア王国アンコール遺跡群において、現地のAPSARA機構と共同研究をおこない、文化遺産の保護と人材育成に貢献する。平成18年度から新たな中期計画に基づき西トップ寺院遺跡を対象とした共同研究を継続した。

【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	国際遺跡研究室長　杉山洋

【スタッフ】

森本晋、石村智、田代亜紀子[以上、企画調整部]、高妻洋成、脇谷草一郎、田村朋美[以上、埋蔵文化財センター]、降幡順子、庄田慎矢、大林潤[以上、都城発掘調査部]、島田敏男[文化遺産部]

【主な成果】

考古班は東テラスの中央祠堂前面の状況解明のために、当該箇所に３回に分けて調査区を設定し発掘を実施した。建築班は実測調査をおこなうとともに、類例調査を進めた。保存科学班は、来年度から開始予定の暴露試験に向けて、資料の調整、暴露試験台設置作業などを実施した。カンボジア人人材育成としては３名の研究者を日本に招聘し技術交流をおこなった。

【年度実績概要】

調査研究は考古、建築、保存科学の３つの分野において実施されている。今年度の考古学調査では、東テラスの中央祠堂前面に３つの調査区を設定し、発掘をおこなった。発掘調査は、第１１次（５月２９日～６月１日)、第１２次（８月１３日、１５日～１６日)、第１３次（１２月１５日～２０日）に分けておこない、これら調査の成果によって、東テラス建築当初は、ラテライトを使った低い基壇が中央祠堂前面に延びていたが、その後、基壇のかさ上げがおこなわれるとともに、掘立柱による構築物が作られていることがわかった。次の段階では、ラテライト敷石を伴う基壇が整備され、その廃絶時には、破損した石仏を地鎮具とともに埋納する宗教儀式をおこなっていたことが推定される。このような成果は、東テラスの歴史的変遷解明へつながる大きな手がかりとして注目される。建築学調査は、平成２０年度から実施している実測調査を継続しておこなった。また、アンコール遺跡群とタイのアユタヤ遺跡において類似調査をおこなうことで、西トップ寺院の特徴を明らかにした。調査成果は現状図および復元図とともに報告書にまとめ、刊行した。保存科学調査では、来年度予定している暴露試験にむけ、暴露試験台の設置、石材サンプル調整などをおこなった。

また、カンボジア人若手研究者の人材育成として、３月２３日から３１日にかけて３名の研究者を招聘した。研究所の施設、大極殿、平城宮跡資料館の見学に加え、東京文化財研究所や東京国立博物館などの関東における文化遺産保存管理状況を見学し、意見交換をおこなった。

第13次調査における掘立柱の検出状況）

【実績値】

発表件数：2件（下記①～②）　①西トップ遺跡の調査、②西トップ遺跡の調査と今後
調査報告書：『西トップ遺跡調査報告書』2011 年 2 月刊行
小冊子発行：2 冊　カンボジア王国アンコール遺跡群西トップ寺院遺跡保全事業
ニュースレター２号　2010 年 12 月刊行、ニュースレター3 号　2011 年 2 月刊行

【備考】

① 第 17回国際調整委員会　ソカーホテル 2010.6.21
②第 18 回国際調整委員会　ソカーホテル 2010.11.25

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　5121-2

自己点検評価調書

研究所 No.49

観点	継続性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			

備考
継続性の面では中期五ヶ年計画に則って順調に調査をおこなうことができた。各調査においてこれまでにない成果を上げることができ、独創的な面も評価できると考える。今回の調査によって今後の調査進展に関する大きな指標を得ることができ、発展性の面でも評価できると考えた。

２．定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				

備考
本年度はまず報告書の出版が特筆される。西トップ遺跡ニュースレターも順調に２回刊行し、刊行物による調査成果の公開を進めることができた。
発表に関しても国際調整委員会における発表を行い、当研究所の調査成果を紹介することができたとともに、各国の調査チームと意見交換をおこなうことができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度も当初予定した調査予定を順調に進行することができるとともに、中央塔に関する様々な事実を明らかにすることができた。招聘事業も確実に進行し、相手国文化財保護機関からも一定の評価を得ることができた。以上の進捗状況を総合的に判定してＡとした。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の予定とおり遂行したことから、当事業は順調であると判定した。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 5122-1

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.50

中期計画の項目	５ 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進
プロジェクト名称	陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究（(1)-②-イ－１）

【事業概要】

近年発見が相次いでいる中国陝西省の墳墓壁画は、建設工事など壁画保護を優先できない環境にあるため、そのほとんどがはぎ取り、考古研究所等への移動という対応が取られているが、発見直後の環境の変化に始まり、はぎ取り、移動のための処理によって破損や変色・褪色が発生している。貴重な壁画に関する情報をできる限り保存し、壁画の状態変化が最も少ない現場での調査実施と記録保存方法を構築することを目的として、日中で共同研究を行う。

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	国際情報研究室長　岡田　健

【スタッフ】

高林弘実、佐藤香子（以上、客員研究員）

【主な成果】

2010 年度は、前年度の調査実績をもとに墳墓壁画の考古発掘現場での調査実現を目指し、準備を進めたが、秋までの間に陝西省での壁画墓の発掘がなく、現場調査は実現しなかった。このため、前年度の作成した報告書の中国語版を作成し、西安市において陝西省の各機関の専門家を集めた研究会を実施し、調査手法についての評価を求めた。さらに壁画が出土してから文化財として保存されるまでの全工程において、どのような記録保存が求められ、それぞれの現場においてどのように現実的に対応するかを討論し、今後の共同研究についてその可能性を考えた。

【年度実績概要】

１．陝西省考古研究院若手研究員の来日研修

共同研究へ若手研究員を積極的に参加させることを目的として、6 月 12 日から 7 月 5 日の日程で、陝西省考古研究院助理研究員邵安定氏を招聘し、共同研究の内容・意義についての理解を深めさせるとともに、文化財に応用される理化学研究全般にわたる基本的技能を習得させた。また高松塚古墳壁画修理施設、奈良文化財研究所等の施設見学の他、奈良、京都の世界遺産地を視察して日本の文化遺産保護の理念と方法について理解を図った。

２．調査計画の立案と中止

8 月中旬に 5 日間の日程で陝西省涇南地区の唐時代壁画墓を調査する計画を立て、直前まで準備を進めたが、陝西省側の都合により調査が取りやめとなり、以後秋季にかけては壁画墓の発掘がなかった。12 月以降になり 4 ヶ所程の壁画墓が発見されたものの、厳冬期に入り、調査体制が作れず、今年度の現場調査を断念した。

３．2009 年度報告書中国語版の作成

2009 年度報告書の全文を中国語へ翻訳し、陝西省考古研究院と共同で校訂を行って中国語版 300 冊を作成し、陝西省を中心とする中国の関係機関、専門家に配布した。

４．研究会の開催

2 月 14 日、陝西省考古研究院で壁画の記録保存と修復技術に関する研究会を開催した。会議には陝西省考古研究院の他、西北大学文博学院、陝西省文物保護修復センター、陝西歴史博物館、西安師範大学、咸陽市文物保護修復センター、中国文化遺産研究院の専門家 21 名が参加し、会議を通じ今後より多くの機関と分野の専門家が参加して壁画保護の技術面での交流を促進していくことの必要性が話し合われた。同日午後、咸陽市文物保護修復センターの収蔵庫、修復室を視察し、とくに剥ぎ取り後の壁画の状況について観察を行った。

【実績値】

研究会開催件数：　１件
報告書刊行件数：　１件（①）

【備考】

①報告書「關於陝西省墓葬壁画記録保存方法的研究 2010」10.03

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　5122-1

自己点検評価調書

研究所 No.50

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2．定量的評価

観点	報告書作成	研究会開催数				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、研究の中心に据えた現場調査が実現しなかったため、研究成果としては不十分な結果に終わった。陝西省西安市周辺では都市のインフラ開発に伴う墳墓の出土が年間 150 ヶ所に及ぶが、壁画を持つものは 5 ヶ所程度で、日本側の渡航と調査の実施には困難がともなった。本年度は昨年度の良好な成果を挙げた調査結果をもとに、陝西省の各機関に所属する壁画を専門とする修復技術者、分析研究者、材料研究者、考古学研究者との学術交流を図り、調査の重要性について理解を得るとともに、これらの多領域の専門家による総合的な研究が重要であるとの合意が形成された。それは剥ぎ取られる前、剥ぎ取られた後のすべての壁画についての調査方法と保存方法についての研究である。この結果をもとに次期中期計画での新たな日中共同による壁画研究の展開を期したい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中国との文化遺産に関する共同研究は、従来からある、また他の諸外国との間で実施しているような援助型の共同研究から、両者が共通のテーマを共通の関心から掲げ、双方の経験と技術を活用して実施する真の共同研究の段階へ移ろうとしている。本研究は、陝西省考古研究院という日本との研究交流に永年の経験を持つ陝西省の有力機関をパートナーとするもので、さらにその他の機関の参加を実現することによって、本研究の経験と今後の展開が、東アジア地域における文化遺産の共同研究推進のための先駆的実施例となることが期待される。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 5122-2

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.51

中期計画の項目	５ 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進
プロジェクト名称	敦煌壁画の保護に関する共同研究（(1)-②-イ－２）

【事業概要】

敦煌壁画に関して、敦煌研究院と共同で調査研究を行う。これは、壁画の制作材料と技法を古代のシルクロードを通じた文化交流、技法・材料の移動という観点から研究し、敦煌壁画を総合的に理解しようとするものである。具体的な研究項目としては、１）壁画制作技法・制作材料に関する光学的方法及び分析的方法を用いた総合研究、２）放射性炭素年代測定法による主要窟の年代同定に関する研究、３）日中の若手研究者育成、を実施している。

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	国際情報研究室長　岡田　健

【スタッフ】

山内和也、朽津信明、宇野朋子（以上、文化遺産国際協力センター）、高林弘実、佐藤香子、津村宏臣（以上、客員研究員）、中村俊夫（名古屋大学）、齋藤　努（歴史民俗博物館）、鉾井修一、小椋大輔（以上、京都大学）

【主な成果】

本年度は中期計画の最終年度であると同時に日中共同調査研究の 5 年目最終年度を迎えた。これまでの 4 年間に実施してきた調査研究についての成果をまとめるとともに、次期共同研究へ向けての準備作業を行った。とくに壁画の制作材料と制作技法に関する研究は、これまでに蓄積してきた劣化状態と色料に関する調査データをもとに劣化を生みだした環境要素のシミュレーション研究を行い、そこから壁画本来の色彩への考察を図ろうという計画をもった科学研究費補助金の申請が通り、研究の総括へ向けて明確な方向性を持つことができた。

【年度実績概要】

１）合同調査：2010 年 8 月 14 日～9 月 4 日の日程で、現地調査を実施した。日本側の参加者は 11 名。2009 年度に申請した科学研究費補助金「敦煌芸術の科学的復原研究―壁画材料の劣化メカニズムの解明によるアプローチ」(4 年間)が交付されることになったので、本事業として第 285 窟南壁、西壁、北壁についての壁画の劣化状態、顕微鏡・蛍光 X 線等による壁画材料に関する補充調査を重点的に実施し、現状での調査研究の完成度を高めるとともに、科学研究費補助金による研究の中心となる洞窟内外の環境の変動と彩色の劣化との関係に関する現地調査も同時に行った。

第 5 期共同研究の最終年度にあたり、この 4 年間の研究成果を発表し、総括に向けての準備を進めるとともに、次期共同研究に向けての展望を話し合うための研究会を、8 月 27 日、敦煌研究院保護研究所で開催した。光学調査による第 285 窟北壁及び東壁の題記に関する新知見の報告、鉛同位対比の分析研究による研究発展の可能性に関する報告などが敦煌側に対する新たな情報として提供された。また科学研究費補助金による研究に関連して、壁画の内容に関する美術史的見地からの研究成果の報告と、環境シミュレーション研究の原理に関する報告も併せて行った。

２）敦煌研究院保護研究所研究員の来日研修：2010 年度は、前年度に予算の関係で敦煌側研究員の来日研修が実施できなかったため、前年度分の人数を含む研修を要望されていた。6 月に 3 週間の日程で分析化学分野と環境分野で 3 名を招へいし、2 月に科学研究費補助金による研究遂行のため、改めて環境分野 1 名を招へいし、京都大学において専門的内容による研修を実施した。

３）学会発表：6 月の文化財保存修復学会（岐阜市）で彩色材料・彩色技法研究、文化財科学会（吹田市）でデータベース研究、9 月の日本建築学会（富山市）で環境シミュレーション研究と、それぞれに異なる内容での学会発表を行った。

４）報告書の作成：東京文化財研究所と敦煌研究院両者共同の 2010 年度成果報告書を編集し、発行した。

【実績値】

報告書　　1 冊（①）

学会ポスター発表　　4 件（②～⑤）

【備考】

①報告書「敦煌壁画の保護に関する日中共同研究 2010」10.03

②敦煌莫高窟第 285 窟南壁に描かれた龕楣の図案と色彩表現（高林弘実ほか） 文化財保存修復学会第 32 回大会 10.06.13

③敦煌莫高窟第 285 窟北壁に描かれた如来および菩薩に用いられた彩色材料と技法－衣と頭光の表現－（佐藤香子ほか）文化財保存修復学会第 32 回大会 10.06.13

④敦煌莫高窟 285 窟に関する 3D-GIS 技術を基準としたデータベース構築（津村宏臣ほか）文化財科学会第 27 回大会 10.06.27

⑤敦煌莫高窟内の壁画の劣化に及ぼす塩の影響（長谷隆秀、宇野朋子ほか）日本建築学会 2010 北陸大会 10.09.09

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　5122-2

自己点検評価調書

研究所 No.51

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	報告書作成	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	4年間にわたる基礎データの収集とそれをもとにした考察、さらに反復的な補充調査が続き、壁画の制作材料と技法に関する研究は、その芸術性の実現方法との関連という大きなテーマについての考察へと発展しており、着実に成果をあげている。今期共同研究を通じて、これまで単に劣化状態を修復の対象としてのみ見ていたのに対して、その劣化のメカニズムを色彩の変化という観点から見ることにより、しかもその劣化要因としての環境の変動に着目して、この環境変動をシミュレーション研究によって把握し、色彩を復原的に見ようという画期的な方向が打ち出された。本年度中での完成はできなかったが、次期共同研究の継続によってこれを完成させたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	毎年のデータの蓄積と、強固な信頼関係の構築によって、堅調に調査研究が実現できたと考える。研究の進展とともに研究項目が増えており、また蓄積されたデータをいかに管理し、活用するかについてのデータベース構築作業も、本年度中に大量の作業を完成した。現場調査の人員配置など、改善すべき点を見直しつつ、次期共同研究へ向けて作業を進めている。

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 5123

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.52

中期計画の項目	５　文化財の保存・修復に関する国際研究の推進
プロジェクト名称	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業（(1)-②-ウ）

【事業概要】
西アジア諸国等の文化財の保護・保存修復に関する協力・支援事業の一環として、とくに内戦・紛争によって危機にさらされているアフガニスタン及びイラクの文化遺産の調査研究や文化遺産の保護・保存修復事業を通して、技術移転及び人材育成を図り、自国民の手による文化財保護事業の確立の支援を目指す。また、あわせて周辺地域（特に中央アジア、インド）の文化遺産の調査研究・保護への協力を実施する。

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	地域環境研究室長　山内和也

【スタッフ】
朽津信明、有村　誠、影山悦子、島津美子、邊牟木尚美、鈴木　環、安倍雅史（以上、文化遺産国際協力センター)、前田耕作、谷口陽子、松岡秋子、松田泰典、藤沢明、伏屋智美、末森　薫、高林弘実（以上、客員研究員)、井上和人、杉山　洋、森本　晋、石村　智、脇谷草一郎、田村朋美、田代亜紀子（以上、奈良文化財研究所)、中村俊夫（名古屋大学)、津村宏臣（同志社大学)

【主な成果】
アフガニスタン：バーミヤーン保存修復事業実施、文化財専門家の人材育成・技術移転、専門家会議への出席、報告書の作成・出版、外部機関との共同研究。
イラク：文化財専門家の人材育成・技術移転。
西アジア周辺諸国文化遺産の調査研究・保護への協力：トルコ、タジキスタン、インド、中央アジア諸国、エジプト。

【年度実績概要】
１．アフガニスタン
1−1. バーミヤーン遺跡保存事業：第 10 次ミッションの実施（7 月 9 日～7 月 30 日)。
1−2. アフガニスタン文化財専門家研修事業（ユネスコ文化遺産保存日本信託基金と連携)：考古学専門家の人材育成・技術移転（8 月 2 日～12 月 17 日／9 月 27 日～10 月 15 日)：カーブル考古学研究所より研究員 3 名（うち 2 名は信託基金）を招へいし、考古学調査の技術研修を実施。
1−3. バーミヤーン遺跡保存のための専門家会議への出席（3 月 3、4 日、パリ、出席者 4 名)
1−4.『アフガニスタン文化遺産調査資料集』の出版：備考欄②、③
1−5. 外部機関・団体との共同研究等：名古屋大学
２．イラク
イラク文化財専門家研修事業（ユネスコ文化遺産保存日本信託基金と連携)：イラク国立博物館より 3 名（うち 2 名は信託基金）の保存修復家を招へいし、文化財保存修復に必要な分析機器の研修と木製品や金属製品の保存修復を実施（9 月 22 日～12 月 9 日)
３．西アジア周辺諸国における文化遺産の調査研究・保護への協力等：トルコ（カッパドキア石窟壁画の状態調査)、タジキスタン（タジキスタン国立古代博物館所蔵の壁画片の保存修復及び文化財専門家の人材育成・技術移転［文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業の一環])、インド（アジャンター壁画の保存修復［文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業の一環])、エジプト（JICA 事業「エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト」への協力)、アルメニア（文化遺産国際協力コンソーシアム「相手国調査」への協力)。
４．国際会議等への参加：「“Ancient and Medieval Urbanization of Eurasia and Development of Almaty city” International Conference」(2010 年 11 月 17-18 日、アルマティ)。

【実績値】
報告書作成　8 件（①～⑧)

【備考】
①『アジナ・テパ仏教寺院考古学調査報告』11.01
②『バーミヤーン遺跡保存事業概報－2009・2010 年度（第 9・10 次ミッション）－』11.03
③『バーミヤーン仏教石窟の建築構造およびその意匠と技法』11.03
④『タジキスタン国立古代博物館所蔵壁画断片の保存修復　2009 年度(第５次～第７次ミッション)』10.09
⑤『タジキスタン共和国科学アカデミー歴史・考古・民族研究所アーカイヴ、カフカハ遺跡群出土壁画』10.09
⑥『カライ・カフカハⅠ、Ⅱ遺跡出土壁画資料集　写真編２』11.03
⑦『アジャンター第２窟、第９窟壁画　ドキュメンテーションと状態調査』10.07
⑧『Indo-Japanese Project for the Conservation of Ajanta Paintings, 2008』10.12

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 5123

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.52

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	招へい者数	職員派遣数	報告書数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	アフガニスタン、イラクに関しては、治安等の問題に配慮しつつ、現地での活動、日本に招へいしての人材育成・技術移転など、効率的に実施し、着実に成果が上がっている。また、周辺地域に関しても、文化遺産の調査研究、さらには保護に係る協力を実施し、成果を上げているとともに、日本との協力関係の構築にも大きく寄与している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	治安情勢やそれぞれの国情といった様々な問題に配慮しつつ、計画に沿って、戦略的に事業が実施されており、着実に成果が上がっている。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 5211

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.53

中期計画の項目	５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進
プロジェクト名称	諸外国の文化財保存修復専門家養成（(2)-ア）

【事業概要】

諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	文化遺産国際協力センター長　清水真一

【スタッフ】

友田正彦、新免歳靖（以上、文化遺産国際協力センター）

【主な成果】

諸外国における文化財の保存･修復に携わる専門家の研修において使用することを目的とした、教科書（日本語版および英語版）を作成した。

また、人材養成研修手法の改善に資することを目的に、「海外の文化財保存修復専門家養成を目的とする国際研修等の実施に関する研究会」を開催した。

【年度実績概要】

諸外国における文化財の保存・修復に携わる専門家の研修において使用することを目的とした教科書を作成した。教科書の内容としては、考古学的な遺跡から出土する遺物のうち、木材等の有機質遺物とならんで保存上の対応がしばしば問題となる金属質遺物の保存をテーマとした。このテーマについては、既存の文献等も少なからず存在するが、これらを参考にしながら新たに内容を書き起こし、奈良文化財研究所の降幡順子氏の監修を得る形で編集を行った。発掘現場における応急措置から保存処理方法および手順の概説、また文化財展示収蔵施設における劣化防止等について基礎知識を簡潔にまとめたガイドラインとしても活用されることを意図している。同一内容の日本語版と英語版をそれぞれ作成した。

一方、文化財保護活動に従事する専門的人材を教育するための具体的な実施方法、とりわけ教授法については依然、十分に確立されていないのが現状である。そこで、外国人を対象とした人材育成研修という観点から、研修の具体的な内容や実施方法、さらには研修成果の評価法や問題点などについて分析を行う機会として、「海外の文化財保存修復専門家養成を目的とする国際研修等の実施に関する研究会」を 2 日間にわたって開催した。今回の研究会では、途上国をはじめとする外国からの研修生を対象として行う、保存科学や修復技術、その他の調査手法等のトレーニングや能力開発研修に関して、海外招聘者 4 名を含む国内外 7 機関（東京文化財研究所を含む）の研修実施担当者から実践例をとりあげながら報告してもらい、相互に情報の共有化を図るとともに、研修事業の実施に伴うさまざまな課題をめぐって意見交換を行った。研究会での報告および討議の内容については、今後の改善検討に資することを目的に報告書を作成した。

【実績値】

研修用テキスト作成　２冊（①②）
研究会開催　　１回（③）
同報告書作成　１冊（④）

【備考】

①文化遺産国際協力センター編集　「出土金属の保存処理」　テキスト　11.03
②Japan Center for International Cooperation in Conservation edition “Conservation Treatment for Archaeological Metal Objects” 11.03
③「海外の文化財保存修復専門家養成を目的とする国際研修等の実施に関する研究会」平成 23 年 2 月 2 日～3 日、東京文化財研究所会議室
④文化遺産国際協力センター編　「海外の文化財保存修復専門家養成を目的とする国際研修等の実施に関する研究会」報告書　11.03

【書式Ｂ】　　施設名　東京文化財研究所　　処理番号　5211

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.53

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	テキスト作成	研究会開催	報告書作成			
判定	A	A	A			
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	テキストを計画通りに作成し、これにより、出土遺物保存に関する基本的分野のテキスト作成が完結した。研究会は５年間の総括的意味合いを込め、国際研修実施の方法と課題をめぐって発表、議論したが、参加者から情報共有、意見交換の機会として非常に有益であったとの評価を得た。また、その報告書も年度内に取りまとめることが出来た。これにより、今後の研修の改善と研修実施機関相互の連携促進が期待される。次年度計画はこのような連携の具体的構築に主眼を置く方針である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	毎年の成果を順調に達成し、保存修復に関する国際的人材養成研修のための教材整備が進んだ。教授法の研究に関しては今年度開催した研究会が具体的成果となり、これを踏まえて今後は東南アジア地域等における連携構築、研修実施等に取り組んでいく。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　5212

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.54

中期計画の項目	５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進
プロジェクト名称	国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力（（２）－イ）

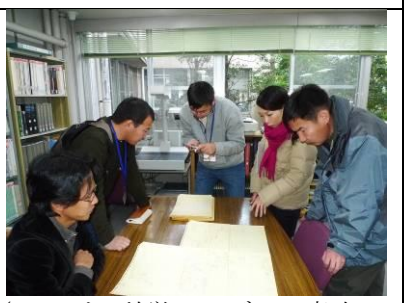
【事業概要】
ユネスコアジア文化センターが企画する研修事業に協力する。本年は集団研修事業と個人研修事業に関して、研修の講師派遣、現地指導等、全面的に協力した。

【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	国際遺跡研究室長　杉山洋

【スタッフ】
石村智、田代亜希子［以上、企画調整部］

【主な成果】
集団研修では 16 ヵ国、16 名の研修生に対して研修をおこなった。また個人研修ではモンゴル人 3 名に対して、保存科学を中心とする研修をおこなった。こうした研修をおこなうことにより、各国の人材育成に貢献するとともに、日本側の各国理解の一助とも成った。また国内における国際協力関係の諸機関との連携を強化することができた。

【年度実績概要】
本年度はユネスコアジア文化センター奈良事務所との共催で、集団研修 1 回と、個人研修 1 回をおこなった。集団研修はアジア太平洋地域から 16 ヶ国 16 名の専門家が参加して、「遺跡の調査と保存」をテーマに、9 月 7 日から 10 月 7 日までの 31 日間の日程で実施した。この内、当研究所では、考古学の調査方法や保存科学的処置、遺跡の測量、遺跡整備など、遺跡の調査と保存についての研修を 9 月 19 日から 28 日までおこなった。
個人研修ではモンゴル科学アカデミー考古学研究所所属の研修生 3 名について、11 月 16 日から 12 月 16 日までの 31 日間の日程で、遺跡（遺構･遺物）の記録方法（測量･実測･写真）について研修を実施した。


（モンゴル科学アカデミー考古学研究所関係者への研修風景）

【実績値】
ユネスコアジア文化センター主催の研修への協力
集団研修 1 回　アジア太平洋地域から 16 ヶ国 16 名の参加「遺跡の調査と保存」
9 月 7 日から 10 月 7 日までの 31 日間
考古学の調査方法や保存科学的処置、遺跡の測量、遺跡整備について研修を実施。
個人研修 1 回　モンゴル科学アカデミー考古学研究所所属の研修生３名
11 月 16 日から 12 月 16 日までの 31 日間
遺跡（遺構･遺物）の記録方法（測量･実測･写真）について研修を実施。

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 5212
(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.54

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			

備考
近年、諸外国からの文化財保護技術についての研修依頼が増加する傾向にあり、国際協力機構やユネスコアジア文化センターからの研修依頼に対して、適宜迅速に対応しており、適時性はＡと評価した。また、こうした研修を通して相手国側の文化財保護機関との人的なつながりを醸成することができ、研修後の協力関係の発展という面での貢献は大きい。発展性にも大なるものがあると言える。ユネスコアジア文化センターの創立以来、継続して研修への協力を続けており継続性も高い。

2．定量的評価

観点	研修回数等					
判定	A					

備考
当初計画された研修に対して、的確に対応し回数も予定通りであった。また参加者の満足度も高く、多国間の文化財協力に一助をなしていると思量される。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近時、ODA の見直し論議を受けて、国際協力の分野でソフト的な人材養成への期待が高まっている。特に文化財等の文化協力は、費用対効果も高いとともに、精神的な協力関係醸成への遡及効果も高いと判断されつつある。こうした傾向を受けて研究所としては各国際機関からのこうした自在養成を中心とした依頼に積極的に対応してきた経緯がある。そのなかでも当該事業の対象である国際協力機構とユネスコアジア文化センターからの研修依頼には、適宜的確に対応するとともに、研修生の満足度や理解度の上でも大きな成果を収めていると判断できる。 ただこれまでの当該事業の実施内容を踏まえて、カリキュラムの見直しや研修方法の改善などいくつかの改善点も把握できている。今後はこうした改善点に沿ってより良くかつ効果的な研修を目指して内容の改善と質の向上に努めていく必要があると考える。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	国際協力機構やユネスコアジア文化センターからの研修依頼について、適宜・的確に対応できていると考える。本年度の内容を踏まえ、研修のより質的な改善に努めるとともに、外部機関からの要請に積極的に答えていく予定である。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6111

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.55

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	情報システムの整備（(1)-①－１）

【事業概要】

文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図り、システム面から文化財に関する専門的アーカイブの拡充、データベースの充実を支援する。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長　勝木言一郎

【スタッフ】

綿田　稔，土屋貴裕（以上、企画情報部），崎部　剛（管理部 LAN 委員），俵木　悟（無形文化財部 LAN 委員），犬塚将英，森井順之（以上、保存修復科学センターLAN 委員），二神葉子（文化遺産国際協力センター LAN 委員）

【主な成果】

システム管理については、保守契約等の協議、メールアカウントの管理、コンピュータ・ウィルス対策を行い、現在のネットワーク環境の維持に努めた。またネットワーク環境の整備の一環として、国立文化財機構間 VPN の接続の準備、居室内スイッチの更新、情報セキュリティ強化システムの導入を進め、情報基盤の整備と拡充を進めた。

【年度実績概要】

１．システム管理

所内におけるシステム管理については、システム管理者がシステム全体の日常的な運用をはじめ、保守契約等の協議、メールアカウントの管理、グループウェアのユーザー管理、コンピュータ・ウィルス対策を行った。

２．ネットワーク環境の整備

現在のユーザー環境を維持しつつ、より安全で、より高速な情報ネットワークの構築を図るために、Interscan および居室内スイッチを更新するとともに、Fire Wall を補強した。

３．国立文化財機構間における情報ネットワークの整備

国立文化財機構間における情報ネットワークの整備の一環として、機構間グループウェアの運用を開始した。グループウェアの運用開始に際しては、事前にグループウェア「ガルーン２」の説明会を 2 度開催した。

【実績値】

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　6111

自己点検評価調書

研究所 No.55

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点						
判定						
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	情報システムの整備についてはネットワーク環境の更新に伴い、セキュリティの強化及び高速化が図られた結果、適時性、効率性、継続性、正確性が向上したと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	情報システムの整備についてはセキュリティの強化及び高速化を図るに当たり、現在のユーザー環境を維持しつつ、より効率的な運用ができるよう、ネットワーク環境の段階的な更新を進めた。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6112

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.56

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実（(１）－①－２）

【事業概要】
　コンピュータウィルスをはじめとする様々な脅威から研究所の情報を守り、正確な情報を発信して行くため、ネットワークのセキュリティを強化する。また、文化財情報の電子化によるデータベース及びホームページに掲載された情報の所内外への提供を推進するため、サーバ機器・ネットワークといった情報基盤システムの整備・充実を行う。

【担当部課】	管理部文化財情報課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長　田中 康成

【スタッフ】
渡　勝弥（文化財情報係長）ほか１名

【主な成果】
　情報交換システムの更新及びウィルス対策ソフトを更新することによりセキュリティの強化を図った。また、サーバ及び情報端末をネットワークに接続することにより情報基盤システムの整備・充実を行った。

【年度実績概要】
　情報交換システムを更新することによって、情報伝達の効率化及びセキュリティの強化を行った。また、最新のウィルス対策ソフトを導入することにより、ネットワークシステムのセキュリティ強化を行った。
新規サーバ及び各研究室の情報端末をネットワークに接続することにより、情報基盤システムの整備・充実を行った。

【実績値】

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 6112

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.56

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性:新システムの導入及び最新のウィルス対策を行った。
効率性:機構本部との情報共有が可能となった。
継続性:不具合なく適切なネットワーク環境を維持した。
正確性:情報漏洩・改竄、ネットワークを介しての攻撃は皆無であった。

2. 定量的評価

観点						
判定						

備考

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	情報交換システムの更新と最新のウィルス対策ソフトを導入することによりネットワークシステムのセキュリティ強化を行った。またサーバ、情報端末のネットワーク接続を行うことにより情報基盤システムの整備・充実を行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ネットワーク機器の更新について、やや遅延しているものの、次期ネットワークシステムとしては高速化とセキュリティ強化を計画している。

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 6121
（様式 1）

業務実績書

研究所 No.57

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	文化財に関する専門的アーカイブの拡充（(1)－②－１）

【事業概要】
文化財関連の図書等の文字資料およびアナログ・デジタル画像資料の登録・管理、一般利用者へのそれらの提供、そのためのデータベースや検索システムの構築・運用を行い、質の高い専門的アーカイブの拡充を図る。あわせて、上記アーカイブに必要不可欠である画像形成技術等の継続的な更新を行い、最先端の研究活動を支援することを目的とする。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化財アーカイブズ研究室長　津田徹英

【スタッフ】
田中　淳、山梨絵美子、勝木言一郎、塩谷　純、綿田　稔、皿井　舞、江村知子、土屋貴裕、
城野誠治、中村節子、中村明子、井上さやか、鳥光美佳子（以上、企画情報部）

【主な成果】
1)公開用 SQL データの更新・運用。
2)画像資料のデジタル化・貴重書のＣＤ‐ＲＯＭ化
3)近現代美術関係文献等のデータベース化
4) 朝日新聞社版『日本美術年鑑』のテキスト化
5)『東京文化財研究所蔵書目録８　漢籍』の刊行

【年度実績概要】
1)資料閲覧室の運営：文化財に関する諸資料の収集・管理・公開・データベースの構築・運用を基本に、より充実したアーカイブ形成に努めた。その一環として、インターネット上での公開を目指して朝日新聞社版『日本美術年鑑』のテキスト化を行った。また、劣化が進む資料類の保護対策の一環として貴重雑誌の CD－ROM 化をすすめるとともに、国内外の関連機関との協力関係構築とへの取り組みと有効な資料公開システム構築のため協議を行った。 また、『東京文化財研究所蔵書目録８漢籍』を刊行した。
2)画像情報室：他部・センター、他機関との共同調査研究により文化財の画像資料の収集・作成を行った。06 年度より継続の尾高鮮之助撮影フィルムについて文化遺産国際協力センターの協力を得て画像をデジタル化した。
企画情報部にて作成・更新中の 37 種データベース：1)所蔵和漢書(～09)、2)受入和漢書(10 年度分)、3)所蔵洋書、4)所蔵簡易図書、5)売立目録、6)所蔵美術館博物館収蔵目録、7)和雑誌誌名、8)所蔵洋雑誌誌名、9)所蔵中国雑誌誌名、10)所蔵韓国雑誌誌名、11)所蔵和雑誌巻号(～03)、12)所蔵洋雑誌巻号(～05)、13)所蔵和雑誌巻号(02 以降)、14)所蔵洋雑誌巻号(06 以降)、15)所蔵中国雑誌巻号、16)所蔵韓国雑誌巻号、17)所蔵地方公共団体刊行報告書、18)所蔵香取秀真資料関係、19)展覧会(02 まで)、20)展覧会(03 以降)、21)近現代作家名、22)近現代展覧会開催情報(43 以降)、23)写真原板、24)キャビネット写真、25)古美術文献目録(明治～66)、26)近現代美術文献目録(35～90)、27)美術館博物館名、28)東京文化財研究所年表、29)美術研究総目次、30)撮影調査票、31)古美術展覧会開催情報(43 以降)、32)物故者記事、33)美術懇話会、34)開所記念展覧会出品目録、35)美術家美術関係者情報、36)画廊情報、37)美術史論壇、
インターネット公開中の研究資料検索システムに提供中の 15 種データベース：1)美術関係図書、2)伝統芸能関係図書、3)保存修復関係図書、4)売立目録、5)展覧会カタログ、6)和雑誌、7)写真原板、8)美術家・美術関係者資料、9)画廊資料、10) 美術関係文献、11)『保存科学』所載文献、12)伝統芸能関係三雑誌所載文献、13)『美術研究』総目次、14)近現代美術展覧会開催情報、15)伝統楽器情報、

【実績値】
通常フルカラー画像撮影件数 6,091 件、特殊画像撮影件数 1,583 件、デジタル画像撮影の全体に占める割合 100%、図書書受入数:和漢書 764 件.洋書 33 件,展覧会図録・報告書等 4,174 件,雑誌 1,893 件(受入総数 6,864 件),35 種の目録所在情報(作成件数 28,761 件,収録件数 973,420 件,公開件数 952,909 件),インターネットで公開中の目録累計数 15 種,資料閲覧室の利用状況:公開日総数 135 日・利用者年間合計 1,017 人、目録刊行 1 件（①）

【備考】
所内イントラによる目録の公開　http://www2.tobunken.go.jp
①『東京文化財研究所蔵所目録８ 漢籍』(11.03)

【書式Ｂ】　　施設名　東京文化財研究所　　処理番号　6121

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.57

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	文献資料 受入件数	画像資料 収集件数	データベース 公開件数	閲覧者利用者数		
判定	A	A	A	A		
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	質の高い文化財に関する専門的アーカイブの拡充に努め、一般利用者への提供を行うべく、公開用 SQL データの更新・運用、画像資料のデジタル化、劣化が進む貴重書のＣＤＲＯＭ化、近現代美術関係文献のデータベース化、インターネット上での公開を目指して朝日新聞社版『日本美術年鑑』のテキスト化をすすめ、『東京文化財研究所蔵書目録８　漢籍』を刊行し、実施計画に従い遂行できたので、Ａと判定した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に則り、各年ともに、文化財関連の図書等の文字資料およびアナログ・デジタル画像資料の登録・管理、一般利用者へのそれらの提供、そのためのデータベースや検索システムの構築・運用を行い、あわせて、文化財アーカイブに必要不可欠である画像形成技術等の継続的な更新を行うことで、最先端の研究活動を支援することができた。次期中期計画においても、この路線を継続・発展させ、より質の高い専門的文化財アーカイブの拡充を目指してゆきたい。

【書式Ｂ】　　施設名　東京文化財研究所　　処理番号

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.58

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	無形文化財に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化（(1)-②－２）

【事業概要】

無形文化遺産部が所蔵する音声・画像・映像資料のデジタル化。前中期計画（平成１７年度終了）の事業案策定後の購入・寄贈にかかるアナログ資料を中心に、これまでに収集蓄積してきた分野を補完する資料の媒体転換を重点的に実施する。併せて、デジタル化を済ませた音声資料は、インデックス付与を含む整理を推進する。この事業は、将来的には資料のデータベース公開と音声・画像等の配信を目指すものである。

【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長　宮田繁幸

【スタッフ】

高桑いづみ、飯島　満、俵木　悟、金子　健、綿貫　潤、星野厚子（以上、無形文化遺産部）

【主な成果】

２００６年度までに受入れ手続きが完了した資料の内、経年変化に伴う音質劣化が懸念されるオープンテープのデジタル化を昨年度に引き続き実施した。カセットテープに関しても、将来のデジタル化を視野に、収録内容の確認を含めた整理に着手した。所蔵画像資料のデジタル化については、データベース作成の一環として、一昨年度から本格的に始まった歌舞伎写真（２００８年度寄贈・故梅村豊撮影）の整理を進めた。

【年度実績概要】

今年度、無形文化遺産部が推進した音声記録のデジタル化は、前年度に引き続き、これまで収集実績が比較的少なかった諸芸（舌耕芸など）の分野、および１９６０年代の放送録音を中心に行った。後者については、放送局にも保存されていない録音が多いことから、その資料的な価値が近年再認識されつつあるもので、今年度はＣＤ１５０枚を作成した。また、媒体変換を完了した音声資料から、インデックス付与済みＣＤを９２枚作成した。カセットテープに関しては、寺事の現地録音を中心に内容確認を行い、リストを作成した。

所蔵画像資料のデジタル化事業の一環として実施しているデータベース作成の内、今年度は２００８年度に寄贈を受けた歌舞伎写真の整理を中心に行い、昭和４０年代のモノクロネガ１２０３点について所蔵一覧を公表した。このほか、無形文化財関連の作成ＤＶＤ４５４枚を登録した。

【実績値】

作成資料［ＣＤ］２４２枚,［ＤＶＤ］４５４枚

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 6122

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.58

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点	資料作成数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	新たに寄贈された資料を中心に、劣化が懸念される貴重なアナログ資料の媒体変換を行うとともに、デジタル化しただけでは一般の利用には供しがたい音声資料へのインデックス付与も着実に実施している。また、専門の研究者も少なく、これまで収集実績の乏しかった分野に加え、資料的な価値が再認識されつつある放送録音の資料整理も併せて遂行している。以上の状況を総合的に判断して、Ａと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	事業は、従来の水準を維持している。また、音声資料、写真資料ともに、将来的なデータベース公開へ向けて、所蔵一覧の作成を着実に進めている。以上により、事業の進捗状況を順調と判定した。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6131

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.59

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	国際資料室の整備（(1)-③－１）

【事業概要】

本プロジェクトは、国際資料室に配置する外国の文化財や文化財保存修復事業に関する蔵書・資料の質及び量を充実させ，国際文化財保存修復協力センターでの関連の研究や事業に利用するとともに，国内外の関連分野の専門家が閲覧・利用できるようにする。同時に，資料のデータベース化を行い，利用者の便を図る。

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	主任研究員　二神葉子

【スタッフ】

清水真一、岡田　健、山内和也、朽津信明、友田正彦（以上、文化遺産国際協力センター）

【主な成果】

国内外で図書その他の資料を収集し、整理・分類して目録に登録し、データベース化した。

【年度実績概要】

１．資料の収集とデータベース化

今年度はインド、インドネシア、中国、タイ、中央アジア諸国などの文化財に関する資料及び世界遺産、保存科学、文化財保護制度などに関する書籍 1087 点（和漢書 555 点、洋書 532 点)、雑誌 104 点の資料を収集し、データベース化した。

２.『国際資料室蔵書目録』の作成

2011（平成 23）年 3 月に、今年度に国際資料室で受け入れてデータベース化した 1087 点（和漢書 555 点、洋書 532 点）の資料、及び国際資料室で所蔵する雑誌 456 種類を掲載した『国際資料室蔵書目録』を発行した。

【実績値】

目録作成数　１件（①）

【備考】

①『国際資料室蔵書目録』　11.03

【書式Ｂ】　　施設名　東京文化財研究所　　処理番号　6131

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.59

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	目録作成数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究業務に必要な資料を効率的に多数収集し、データベース化している。内容は外国の調査地で収集した資料や、文化財保護制度に関する外国語文献など独自性を有するものである。次年度以降は、より大きな枠組みである文化財保護制度に関する調査研究の一環として、引き続き同様の事業を実施していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	資料の収集は例年の実績を堅持し、順調に実施することができた。今後も、書籍に限定せず会議資料や機関のパンフレット、地図など、多様な資料の充実に努めたい。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6132

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.60

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	文化財関係資料や図書の収集・整理・公開・提供の充実（（１）－③－２）

【事業概要】
文化財に関する資料・図書を計画的に収集・整理し、外部の研究者および一般の利用者に積極的に公開・提供するための方策を検討し、実施する。

【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長　田中 康成

【スタッフ】
渡　勝弥（文化財情報係長）ほか 6 名

【主な成果】
遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物の購入および寄贈による収集を行い、整理された資料をデータベースに蓄積してインターネットに公開した。

【年度実績概要】
図書等の収集・整理:
遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心とする資料の収集・整理を行なった。また、国立情報学研究所が構築しているオンライン共同分担目録方式による全国規模の総合目録データベース(NACSIS-CAT)への新規及び遡及入力の継続等、所外の利用者への情報提供も行なっている。
図書資料以外では、発掘調査関係の遺跡、建造物、庭園等の写真の収集、整理を行った。

利用者サービス:
歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物等を一般公開施設として広く利用に供している。遠隔地からの図書利用については、国立情報学研究所が行なっている NACSIS-ILL を通じて文献複写・現物貸借サービスを行なっている。

【実績値】
受入数:
購入図書　791 冊
寄贈図書　7,445 冊
雑誌　1,502 タイトル
写真　10,516 点

利用者サービス:
一般利用者数　622 人
利用冊数　4,084 冊
来館者複写件数　1,054 件

遠隔利用:
複写件数　770 件
貸借件数　4 冊

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　6132

自己点検評価調書

研究所 No.60

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
備考 適時性:刊行された図書資料等の収集・整理・公開を行った。 発展性:遠隔地利用者サービスとして現物貸借を開始した。 継続性:図書資料等の収集・整理・公開を滞ることなく遂行した。						

2. 定量的評価

観点	資料の受入数	利用者数	複写件数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	書庫の狭隘化を緩慢すべく、重複図書を抜取、各部署への配付および別置を行ったが、依然として狭隘化が深刻な状態であるため、書庫内の整理、棚板の追加等による対応措置を行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	利用者数、利用冊数、複写件数のいずれもが昨年度並みの実績を出しており、順調といえる。今年度より相互貸借の受付を開始したので、次年度には新たな実績が予想される。

【書式Ｂ】　　施設名　東京文化財研究所　　処理番号　6141

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.61

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	文化財保存修復国際情報のデータベース化に関する研究（(1)-④）

【事業概要】

世界各地の文化財およびその保存修復に関する情報を収集・整理し、調査研究に活用するとともに、関連分野の専門家に対して効果的に発信していくことを目的にデータベースを作成する

また、文化遺産国際協力センターでこれまでに実施してきた事業の成果をデータベース化して公開する。

さらに、ウェブサイトを利用してセンターの事業について広報を行う。

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	主任研究員　　二神葉子

【スタッフ】

清水真一、岡田　健、山内和也、朽津信明、友田正彦（以上、文化遺産国際協力センター）

【主な成果】

情報収集、データベース化：平成 13 年から収集している世界各国の文化財保護に関連する法令について、和訳を行うとともに、保護の対象とする文化財により分類、データベース化した。

また、「文化財保護関連法令シリーズ」としてタジキスタン、ブータンの法令集およびフランス文化財法典（後編）を出版した。

さらに、オーストリアでの文化財データベースに関して、連邦記念物局での聞き取り調査を行った。

【年度実績概要】

１．情報の収集とデータベース化

平成 13 年度から収集を行っている世界各国の文化財保護に関連する法令について、引き続き法令を収集するとともに、日本の文化財保護法で用いられている分類を手がかりとして、昨年度に引き続き各国の法令が対象とする文化財による分類を行い、データベース化を実施している。

２．情報の発信

これまでに和訳した世界各国の文化財保護に関連した法令の条文についてＰＤＦ化を行い、ウェブサイトに公開している。印刷物としては、まず、タジキスタンの法令についてロシア語から和訳し、「文化財保護関連法令シリーズ[10]」として印刷・出版した。また、フランスの「文化財法典」の和訳のうち後半部分を「文化財保護関連法令シリーズ[9-a2]」として出版した。さらに、ブータンの文化財保護関連の法令 2 件を和訳している。なお、法令の翻訳にあたっては、あえて原語に忠実で説明的な直訳を心がけることで、日本語の類似の制度などとの混同を避ける工夫を図っている。

文化遺産国際協力センターのウェブサイトで、最新の出版物の目次やプレスリリース等を掲載することで、研究成果を公開している。

３．文化財データベースに関する調査

オーストリアの文化財保護に携わる国立の機関である、Bundesdenkmalamt（連邦記念物局）の専門家に対して、文化財データベースについて聞き取り調査を行った。オーストリアでは、2010 年に文化財インベントリーを完成し公開するとの方針が出されていたため、その状況について聞くことが目的であった。現状ではデータベースは構築中で、フランスなど構築済みの国について調査も行ったが、そのまま導入できるようなものはなく、結局独自のシステムを構築している。

【実績値】

法令集作成数　3 件（①～③）、データベース作成数　1 件

【備考】

①文化財保護関連法令シリーズ　[9-a2]フランス文化財法典（後編）
②文化財保護関連法令シリーズ　[10]タジキスタン
③文化財保護関連法令シリーズ　[11]ブータン

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 6141

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.61

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	独創性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	出版物作成数	データベース作成数				
判定	A	A				
備考 文化財保護に関する法令の収集・翻訳、さらに出版は他に例がない事業であり独創的であり、当該分野への貢献度を高く評価するものである。今年度も昨年度に引き続き法令集シリーズを出版した。また、研究成果の発信も速やかに実施している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存修復および国際協力に関する資料の蓄積、本センターの調査研究成果の発信を、および海外での事例の調査を順調に実施することができた。 次年度以降は、より大きな枠組みである文化財保護制度に関する調査研究の一環として、引き続き同様の事業を実施していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	５年計画の中で、調査研究は順調に進んだ。次年度以降も引き続き文化財保護関連のデータベースに関する調査研究事業を実施していく予定である。また、当研究所でのデータベースの構築についても、法令にとどまらない研究成果発信のツールの構築に取り組む予定である。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6142

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.62

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	文化財情報電子化の研究に基づくデータベースの充実（(1) -④）

【事業概要】
文化財情報の特性について具体的な資料の研究に基づいて検討を加え、それに最も適した電子化・情報化の方法を探り実際のデータベース入力を進める。

【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	企画調整部長　難波洋三

【スタッフ】
森本　晋[企画調整部]

【主な成果】
　文化財情報電子化の研究を通じて、GIS を活用した文化遺産情報の取得・管理に関する最新の手法を開発するとともに、研究成果を学会で発表ならびに公刊することにより学界に寄与している。開発・改良を継続している各種データベースについて、業務用とともに公開用についても文字コードを Unicode 化して将来の多言語化に備えるとともにデータの充実を図った。また、新規に図面画像データベースを構築した。

【年度実績概要】
1. 文化財情報電子化の研究
　遺跡・遺物情報電子化の実態調査として、遺跡公園での遺構情報の提示方法を鳥取県むきばんだ史跡公園で調査した。遺跡・遺物情報電子化の資料調査として関連学会の中でも重要な CAA2010、地球惑星科学連合、Vast2010 に参加するとともに、地理情報システム学会において研究成果の発表を行った。また、研究成果を埋蔵文化財ニュースの 1 冊として刊行した。
2. 文化財情報データベースの充実
　遺跡、図書、写真、報告書抄録、航空写真等のデータベースについてデータの入力・更新をおこなった。データベースの構造の改良として文字コードの Unicode 化を実施するとともに、新規に図面画像データベースを構築した。奈文研所蔵資料の電子化に努め、特にガラス乾板、大判フィルム、航空写真画像のデジタル化を進めた。
3. 遺跡 GIS 研究会の開催
　第 15 回遺跡 GIS 研究会を 2010 年 11 月 19 日、奈文研講堂で開催。発表 4 件。

【実績値】
研究会開催件数: 1 回、参加者数:　32 名。
研究会発表件数: 2 件（①、②）
研究報告刊行　: 1 冊（③）
データベース登録件数　　平成 22 年度末（　）内は平成 21 年度末の値
全文 211,533（210,541）、木簡 148,733（149,376）、図書 228,524（239,630）、抄録 62,218（60,289）、写真 276,965（214,984）、遺跡 439,700（421,051）、航空写真 1,246,696（1,222,142）
*木簡データベースは資料整理のため、図書データベースはデータ構造の変更のため見掛け上の件数が減少。

【備考】
① 森本晋ほか「大規模で構造的な遺構への遺構情報モデルの適用」(『地理情報システム学会講演論文集』2010.10)
② 森本晋「遺物実測図の構造」(第 15 回遺跡 GIS 研究会、2010.11)
③『遺構情報モデルに基づく地理空間データ作成のための製品仕様書』(『埋蔵文化財ニュース』144、2011.3)

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 6142

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.62

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　奈文研独自のデータベースを整備して研究に資するとともに公開用データベースを充実されている。この点において、一般国民が求める情報を広く継続的に提供しており、情報の正確さを担保しつつ文化財情報電子化の研究を踏まえた質の向上に努めている。これにより上記諸観点を満たしている。

2．定量的評価

観点						
判定						

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価の各観点において十分な水準を維持していることから総合的にＡと判定した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	各データベースにおいて、着実にデータの充実が進んでいる。新規データの入力だけではなく、既存のデータの更新も行い、さらに研究用の新規データベースも構築した。全体として当初計画通り進捗しているので順調と判定した。

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 6211

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.63

中期計画の項目	6　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	『東京文化財研究所年報』・『東京文化財研究所概要』・『東文研ニュース』の刊行((2)-①)

【事業概要】

『年報』『概要』『東文研ニュース』など広報三誌の編集・刊行は、研究所が進める広報活動の中核に位置づけられる。それらの目的は媒体に応じて、調査・研究、国際協力の推進、調査研究成果の発信、協力・助言など、研究所が担うさまざまな活動を対外向けに情報発信することにある。またそれらはホームページにおいても PDF ファイル形式のデータとして配信されている。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長　勝木言一郎

【スタッフ】

田中　淳，山梨絵美子，津田徹英，塩谷　純，綿田　稔，皿井　舞，江村知子，土屋貴裕，城野誠治，中村明子，井上さやか，鳥光美佳子，中村節子（以上、企画情報部）

【主な成果】

『年報』2009 年度版、『概要』2010 年度版、『東文研ニュース』第 41 号-第 44 号、『東文研ニュースダイジェスト』(『東文研ニュース』英語版）第 8 号-第 9 号をそれぞれ刊行し、研究所の情報発信に努めた。

【年度実績概要】

1．『年報』2009 年度版の刊行

2009 年度版の構成は従来通り、機構、年度計画及びプロジェクト報告、その他の研究活動、個人の研究業績、研究交流、主な所蔵資料、研究所関係資料、東京文化財研究所プロジェクト索引とした。

2．『概要』2010 年度版の刊行

2010 年度版は構成を改め、組織、職員一覧、東京文化財研究所の役割、各部・センターの紹介、調査と記録、多様な文化財の概念、文化財に関わる材料と技術、環境と文化財、修復する、壁画の調査研究と保護、日本から世界へ、文化財アーカイブの役割、“人”を育てる、連携・交流・公開、情報発信、刊行物、資料とした。またその割付は従来通り、日英 2 カ国語を併記し、図版を多用した。

3．『東文研ニュース』第 41 号-第 44 号の刊行

『東文研ニュース』の構成は従来通り、四半期ごとの活動報告、コラム、刊行物の案内、新人紹介、人事異動、案内などとした。また『東文研ニュースダイジェスト』(『東文研ニュース』英語版』) 第 8 号-第 9 号を刊行し、海外に向けた情報発信に努めた。

4．子供向けパンフレットの刊行

2009 年度に引き続き、子供向けパンフレット『東京文化財研究所ってどんなところ？』の改訂版を刊行し、小学校児童・中学校生徒を対象にした情報発信に努めた。

5．広報誌の配布先の充実

一般者向けの広報を強化するため、諸施設に対し、『概要』『東文研ニュース』および子供向けパンフレットの配置、配布を依頼した。2010 年度に配布の依頼を行った施設は、東京国立博物館、国立西洋美術館、上野の森美術館、国立科学博物館、国際子ども図書館、東京文化会館、上野動物園、東京都上野公園管理事務所、東部公園緑地事務所、国立東京近代美術館、東京都写真美術館、東京都現代美術館、貨幣博物館、日本大学文理学部資料館、多摩美術大学美術館などである。

【実績値】

刊行物数　『東京文化財研究所年報』2009 年度版　1,000 部
『東京文化財研究所概要』2010 年度版　5,000 部
『東文研ニュース』第 41 号・第 42 号・第 43 号・第 44 号　各 5,000 部
『東文研ニュースダイジェスト』第 8 号・第 9 号　各 5,000 部
子供向けパンフレット　10,000 部

【備考】

【書式Ｂ】　　施設名　東京文化財研究所　　処理番号　6211

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.63

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	刊行物数					
判定	A					
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	『年報』『概要』『東文研ニュース』『東文研ニュースダイジェスト』、そして子供向けパンフレットについて、受信者側の視点からその内容の見直しを行い、一般に向けた広報の充実を図った。こうした結果、広報企画事業の適時性、独創性、発展性、効率性、継続性、正確性が改善された。したがって実績の総合評価も十分な成果が認められると結論した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	東京文化財研究所に対する地域社会や学校社会での理解の向上を促すために、『年報』『概要』『東文研ニュース』『東文研ニュースダイジェスト』、そして子ども向けパンフレットの効果的な配置・配布のあり方を見直し、一般に対する普及に努めた。こうした実績から、当年度における中期計画の実施状況は順調であると判断した。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6212

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.64

中期計画の項目	6　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	『平成 21 年版日本美術年鑑』・『美術研究』の刊行 ((2)-①)

【事業概要】

各年の美術活動と美術研究、批評の状況を記録するために、昭和 11 年以来刊行を続けている『日本美術年鑑』を年 1 冊刊行するとともに、昭和 7 年 1 月以来、日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術等に関わる研究論文・図版解説・書評、展覧会評、研究資料、研究ノート等を掲載する『美術研究』を年 3 冊刊行する。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長　山梨絵美子

【スタッフ】

田中　淳、勝木言一郎、津田徹英、塩谷　純、綿田　稔、皿井　舞、江村知子、土屋貴裕（以上、企画情報部)、相澤正彦、三上　豊、吉田千鶴子、森下正昭（以上、企画情報部客員研究員)、中野照男（副所長）

【主な成果】

今年度は『平成 21 年版　日本美術年鑑』及び、『美術研究』401～403 号を刊行することができた。

【年度実績概要】

①『平成 21 年版　日本美術年鑑』　B5 版　450 ページ
　2008（平成 20）年美術界年史、美術展覧会（企画展、作家展、団体展)、美術文献目録（定期刊行物所載文献、美術展覧会図録所載文献（企画展、作家展))、物故者
②『美術研究』401 号
　鄭　于澤（石附啓子訳)「朝鮮王朝時代における釈迦誕生図の図像研究」
　塩谷　純「川端玉章の研究（三)」
　津田徹英「研究資料　奈良国立博物館蔵 木造南無仏太子立像」
　皿井　舞「書評　冨島義幸『密教空間史論』」
③『美術研究』402 号
　石守　謙（植松瑞希訳)「夏文彦から雪舟へ―『図絵宝鑑』と、十四・十五世紀東アジアにおける山水画の歴史的理解の形成―」
　山梨絵美子「図版解説　平成二十一年度に寄贈された黒田清輝作品について―《舟》《芍薬》《日清役二龍山砲台突撃図》《林政文肖像》二点―」
④『美術研究』403 号
　皿井　舞「神護寺薬師如来像の史的考察」
　土屋貴裕「「天狗草紙」の作画工房」

【実績値】

『日本美術年鑑』刊行数　１点　(①)
『美術研究』刊行数　　３点　(②～④)

『日本美術年鑑』刊行部数　600 部　　配布部数　483 部
『美術研究』刊行部数　各 400 部　　配布部数　各 380 部

【備考】

①『平成 21 年版　日本美術年鑑』東京文化財研究所　11.03
②『美術研究』401 号　東京文化財研究所　10.08
③『美術研究』402 号　東京文化財研究所　11.02
④『美術研究』403 号　東京文化財研究所　11.03

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 6212

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.64

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点	刊行物件数	配布部数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	『日本美術年鑑』は、例年よりも多数の展覧会および展覧会図録掲載文献情報を集め、計画通り年度内に刊行できた。ウェブへのデータ公開も一部について試験的に行なうことができた。次年度にさらなる改善をめざしたい。また、『美術研究』においては、従来からの基礎的研究の充実に加え、地域的あるいは時代的に従来の枠を超えた研究が登場するなど、誌面がより一層充実する傾向にあり、この点は評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画にあげた実施状況は、順調である。次年度は、『日本美術年鑑』のウェブへのデータ公開の迅速化を図るとともに、同年鑑創刊以前のデータについても補完をめざしたい。

【書式Ｂ】　　施設名　東京文化財研究所　　処理番号　6213

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.65

中期計画の項目	6　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	『無形文化遺産研究報告』・『無形民俗文化財研究協議会報告書』の刊行 ((2)-①)

【事業概要】

無形文化遺産部スタッフによる業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』及び民俗文化財保護行政担当者、無形民俗文化財保存関係者、研究者の参加を得て開催する無形民俗文化財研究協議会の事例報告・総合討議を内容とする『無形民俗文化財研究協議会報告書』を刊行する。

【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長　宮田繁幸

【スタッフ】

高桑いづみ、飯島　満、俵木　悟、菊池理予、金子　健、星野厚子（以上、無形文化遺産部)、星野　紘、森下愛子、永井美和子（以上、客員研究員)、松山直子（特別研究員）

【主な成果】

1）主として無形文化遺産部研究員の業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』第 5 号の刊行。

2）平成 22 年 11 月 18 日に開催した無形民俗文化財研究協議会での事例報告・総合討議を内容とする『第 5 回無形民俗文化財研究協議会報告書』の刊行。

【年度実績概要】

○『無形文化遺産研究報告』第 5 号を以下の内容で刊行した。

「我が国における工芸技術保護の歴史と現状―染織技術を中心として―」菊池理予、「近・現代の京焼における伝統的意匠の継承―伝統の継承に関する一考察―」森下愛子、「過疎地の伝統芸能の苦闘」星野紘、「無形文化遺産保護条約における Traditional Craftmanship」松山直子、「フィルモン音帯に関する調査報告」飯島満・永井美和子・中山俊介、「〔資料紹介〕浅田正徹採譜楽譜」星野厚子、「〔資料紹介〕梅村豊撮影歌舞伎写真（三)」金子健

○「無形の民俗の保護における博物館・資料館の役割」をテーマとした『第 5 回無形民俗文化財研究協議会報告書』を以下の内容で刊行した。

序にかえて、I.趣旨説明、II.報告 1:「マーラン船の民俗技術の保護と継承―市民協働の資料館活動―」前田一舟（うるま市立海の文化資料館学芸員)、報告 2:「築 27 年目の「再開館」―芸北民俗芸能保存伝承館の試行錯誤―」六郷寛（北広島町教育委員会生涯学習課課長補佐)、報告 3:「生活文化伝承のために博物館ができること・できないこと―「体験博物館」がめざす先―」榎美香（千葉県立房総のむら上席研究員)、報告 4:「氷見の獅子舞―天狗が獅子を殺して祭りが終わる―」小境卓治（氷見市立博物館長)、報告 5:「田園空間博物館における伝統芸能の保存・継承―ひみ獅子舞ミュージアムの活動について―」鈴木瑞麿（氷見市産業部農林課田園・漁村空間整備推進班)、III.総合討議、IV. 参考資料、V.アンケート結果

【実績値】

発行数　　2 件

発行部数　1,250 部（『無形文化遺産研究報告』750 部、『無形民俗文化財研究協議会報告書』500 部）

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 6213

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.65

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	発行数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	『無形文化遺産研究報告』: 無形文化遺産をめぐる論考や報告、資料紹介等、幅広い内容の報告書となった。本誌は、将来の無形文化遺産全般の保護行政や研究に資する報告書となることをめざしているが、その目的に適うものとなっている。 『無形民俗文化財研究協議会報告書』: 当研究所でおこなった無形民俗文化財に関する研究協議会の報告書で、会場での研究報告や総合討議の様相を掲載したものである。今後もこれまでの研究を踏まえながら、協議会をおこない、報告書を刊行する予定である。 以上を総合的に判断して、Ａと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	両誌ともに、計画通り、年１回の刊行がなされ、目的を順調に達成した。今後もこのペースの維持をめざす。

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 6214

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.66

中期計画の項目	６ 情報発信機能の強化
プロジェクト名称	『保存科学』５０号の出版　((2)-①)

【事業概要】

保存修復科学センター・文化遺産国際協力センターで行われた文化財の保存・修復に関する調査・研究に基づく資料の作成・公開を目的とし、年１回研究論文集『保存科学』を刊行する。様々な文化財の科学的調査結果や基礎研究に関する論文、受託研究に関する研究報告・修復処置報告などを掲載する。また、より一層の研究成果の公開につとめるため、『保存科学』掲載論文の電子化を行い、インターネット上での公開を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長　石﨑武志

【スタッフ】

川野邊　渉（保存修復科学センター）、清水真一（文化遺産国際協力センター）、吉田直人（保存修復科学センター）（編集担当）

【主な成果】

投稿された 25 本の原稿の内容について、専門家による査読を実施し、最終的に報文 6 本、報告 17 本、合計 23 本の掲載を決定した。本誌の体裁は変更せず、総ページ数 244、650 部印刷、関係諸機関に約 580 部配布した。

【年度実績概要】

保存修復科学センター長、副センター長、文化遺産国際協力センター長、東京国立博物館学芸研究部保存修復課長・神庭信幸氏、東京藝術大学大学院美術研究科教授・稲葉政満氏の 5 名からなる編集委員会によって編集を行った。平成 22 年度は、23 件の研究論文・報告を掲載した『保存科学』第 50 号を発行した。その中で 6 件の報文の題目を以下に記す。

1. 収蔵庫内の温湿度環境とスチール棚の表面温度
2. 動的解析による高松塚古墳の損傷要因の検討
3. 闘鶏山古墳の石槨内部発掘調査時の空調制御方法に関する研究
4. Simulation Analysis on the Drying Process of Tuff Breccia Stone Composing Stone Chamber of Takamatsuzuka Tumulus
5. 日本における覆屋の歴史について
6. 諸外国における文化財の把握と輸出規制の概要

その他、17 件の報告を掲載した。

【実績値】

刊行数　1 件（①）
印刷部数　650 部
配布部数　約 580 部
本誌体裁 B5、総ページ数　224 ページ

【備考】

①「保存科学」第 50 号

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　6214

自己点検評価調書

研究所 No.66

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
今回掲載した 23 本の報文や報告は、最新の調査や研究結果を公表するためのものであり、速報的な意味合いを持つものも少なくない。掲載には専門家による厳正な査読を経る必要があり、その内容が十分精査されたもののみを取り上げている。これは、水準以上のレベルを維持するために不可欠なことである。

2．定量的評価

観点	印刷部数	掲載論文数				
判定	A	A				

備考
掲載報文、報告数は計 23 本と多く、今年度の成果の充実ぶりを示すものである。印刷部数は 650 部と、国内外の多くの研究機関などに配布していることを反映している。また、各報文、報告は PDF 化し、インターネット上で公開しており、非常に好評である。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	非常に質の高い報文と報告が多く掲載され、刊行物として、またインターネットでの公開を通じて、国内外の研究者にとって重要な情報源として確立している。今後も現在の方法での公開を継続していきたいが、インターネット公開に関しては、もっと周知する方法を検討する必要があると考えている。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	昭和 38 年度の第 1 号以来、確実に刊行を重ねており、今号で 50 号を数えた。調査研究の成果は公開すべきとの原則のもと、今後もこれまで以上の充実を目指していきたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 6215

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.67

中期計画の項目	6　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	第 33 回文化財の保存および修復に関する国際研究集会報告書の刊行 ((2)-①)

【事業概要】

2009 年 11 月 12 日～14 日に東京国立博物館平成館大講堂にて開催した第 33 回文化財の保存および修復に関する国際研究集会「日本絵画の修復」の報告書を刊行する。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター副センター長　川野邊　渉

【スタッフ】

中山俊介、北野信彦、加藤雅人、早川典子、森井順之（以上、保存修復科学センター）

【主な成果】

第 33 回文化財の保存・修復に関する国際研究集会「日本絵画の修復」の報告書（A5、カラー口絵 8 ページ、本文（和文・英文）460 ページ、印刷部数 800 部）を作成し、刊行した。また、集会参加者および国内外の関係機関に配布した。

【年度実績概要】

以下の内容で報告書を刊行した。和文：「日本における絵画修理の理念」鬼原俊枝、「日本絵画修復における自然科学の役割」川野邊渉、「大英博物館における日本絵画の保存修復」杉山恵助、「クリーブランド美術館における東洋絵画修復」ジェニファー・ペリー、「東京文化財研究所事業『在外日本古美術品の修復協力プロジェクト』における海外工房での修復」中山俊介、「材料からみた和紙の歴史的変化」大川昭典、「和紙の保存性」稲葉政満、「補紙・補絹の動向」加藤雅人、「絵画修復に使われる糊と布海苔」早川典子、「日本の膠」森田恒之、「修復における新たな試み」田畔徳一、「新しい材料と新しい技術－科学の裏づけと技術者の選択－」山本記子、「フリーア美術館における科学的研究と絵画の保存修復」ブライス・マッカーシー、「ボストン美術館における日本絵画コレクションの保存修復と科学分析」ジャッキー・エルガー、「伝統を継承する先端施設の取り組み－九州国立博物館の場合－」本田光子、藤田励夫、志賀智史。英文：Kihara Toshie, Principles of the restoration of paintings as cultural property established in Japan / Kawanobe Wataru, The role of science in the restoration of Japanese paintings / Sugiyama Keisuke, Conservation of Japanese paintings at The British Museum in London / Jennifer Perry, The Conservation of East Asian Paintings at the Cleveland Museum of Art / Nakayama Shunsuke, Conservation of Japanese paintings in an overseas studio / Okawa Akinori, Historical changes in the varieties of washi / Inaba Masamitsu, The durability of washi / Kato Masato, Trends in infilling paper and infilling silk / Hayakawa Noriko, Nori and funori for the restoration of Japanese paintings: Starch paste, aged paste and seaweed paste / Morita Tsuneyuki, Nikawa: Animal glue in Japan / Taguro Tokuichi, Collaboration of traditional techniques and science technology for the restoration of Japanese paintings / Yamamoto Noriko, New materials and new techniques: Scientific support and the restorers' choice / Blythe McCarthy, The tradition of scientific research and paintings conservation at the Freer Gallery of Art / Jacki Elgar, Conservation and scientific analysis of the Japanese painting collection at the Museum of Fine Arts, Boston / Honda Mitsuko, Fujita Reio and Shiga Satoshi, Work of a contemporary facility transmitting tradition: Case of the Kyushu National Museum

【実績値】

報告書　1 件　（①）

【備考】

①「Restoration of Japanese Paintings –Advanced Technology and Traditional Techniques / 日本絵画の修復　－先端と伝統－」、468　pp、11.3

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 6215

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.67

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	報告書数	印刷部数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究集会参加者が多かったため報告書の印刷部数も多くなったが、限られた予算内で、必要かつ十分な部数を印刷した。また、参加者から要望が寄せられた日本語も併せて掲載することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度内に予定通り刊行した。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6221

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.68

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	研究報告書、年報、研究論文集、図録等の刊行（(2) —①）		
【事業概要】 文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成 18 年度の実績以上刊行する。			
【担当部課】	奈良文化財研究所	【プロジェクト責任者】	所長　田辺征夫
【スタッフ】			
【主な成果】 紀要等 2 点、ニュース 2 種 8 点、合計 10 点を順調に刊行できた。			
【年度実績概要】 (紀要等)　『奈良文化財研究所紀要 2010』2010.6 月刊、3,000 部 『奈良文化財研究所概要 2010』2010.9 月刊、3,500 部 (ニュース)『奈文研ニュース』NO.37,2010.6 月刊,3,000 部、『奈文研ニュース』NO.38,2010.9 月刊,3,000 部 『奈文研ニュース』NO.39,2010.12 月刊,3,000 部『奈文研ニュース』NO.40,2011.3 月刊,3,000 部 『埋蔵文化財ニュース』NO.142(ｶﾝﾎﾞﾃﾞｨｱ･ｱﾝｺｰﾙ遺跡群の調査と国際協力)、2011.3 月刊、3,500 部 『埋蔵文化財ニュース』NO.143(文化財の最新ｲﾒｰｼﾞﾝｸﾞ技術)、2011.3 月刊、2,500 部 『埋蔵文化財ニュース』NO.144(遺構情報ﾓﾃﾞﾙに基づく地理空間ﾃﾞｰﾀ作成のための製品仕様書)、2011.3 月刊、3,000 部、 『埋蔵文化財ニュース』NO.145(2009 年度埋蔵文化財関係統計資料)、2011.3 月刊、2,500 部			
【実績値】 目標値（平成 18 年度実績）は、紀要等 2 種、ﾆｭｰｽ 2 種 8 点、計 10 点の刊行			
【備考】			

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 6221

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.68

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性			
判定	A	A	A			

備考
適時性：調査研究の成果を適時に刊行できた。
継続性：継続的な定期刊行物として刊行出来た。
正確性：調査報告としての正確性は十分であった。

2. 定量的評価

観点	紀要等刊行数	ニュース刊行数				
判定	A	A				

備考
紀要、概要、ﾆｭｰｽの刊行数は、目標値を達成した。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	紀要等 2 点、ニュース 2 種 8 点を刊行し、研究成果を順調に刊行できたことでＡと判定した。次年度も、本年度にまして、多様な研究成果、特に継続的な調査研究の成果を、専門家だけでなく、一般向けにも分かりやすい形での刊行に努めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	紀要、概要、ニュースの刊行は順調に実施出来た。次年度は、公表方法の検討も含めて刊行の充実を図る。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6222

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.69

中期計画の項目	6　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	第 34 回文化財の保存および修復に関する国際研究集会（(2) - ②)

【事業概要】

第 34 回文化財の保存および修復に関する国際研究集会は、「「復興」と文化遺産」をテーマに、文化遺産国際協力センターの担当で開催した。本研究集会では、災害や紛争後の復興過程、あるいは政治体制や社会状況の変化といった様々な局面において文化遺産がどのように扱われ、その保存や修復にどのような意図が込められ、そこで文化遺産が社会に対してどのような役割を果たしてきたのか、といった文化遺産と社会とのかかわりについて、具体的な事例の分析を通じて改めて考察することを目標とした。

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	文化遺産国際協力センター長　清水真一

【スタッフ】

友田正彦、岡田　健、山内和也、朽津信明、二神葉子（以上、文化遺産国際協力センター）

【主な成果】

平成 23 年 1 月 19 日（水）～21 日（金)、東京国立博物館において、第 34 回文化財の保存および修復に関する国際研究集会「「復興」と文化遺産」を開催した。

【年度実績概要】

基調講演では、海外と日本の事例に即しながら考察の鍵となる要点の提示が行われた。

第 1 セッションは「災害からの復興」がテーマで、イタリア、中国、日本における震災復興プロセスにおける文化財をめぐる事例報告が行われた。

第 2 セッションは「紛争からの復興」がテーマで、いずれも紛争からの国家再建過程にあるアフガニスタン、ボスニア、西バルカン諸国、カンボジアの文化財保護に関する報告が行われた。

第 3 セッションは「社会変化の中での復興」をテーマとし、旧東ドイツ、ロシア、ブータン、日本における近年の社会変化と文化財保護をめぐる状況が紹介された。

以上のセッションごとに論点整理のディスカッションを行い、最後に講演者の代表による総合討議を行った。

各講演および討議の内容については、次年度の報告書作成に向けて、テープ起こし等の作業を行った。

海外招聘者　10 名（基調講演者 1 名（イタリア)、セッション講演者 9 名（イタリア、中国、アフガニスタン、ボスニア・ヘルツェゴビナ、アルバニア、カンボジア、ドイツ、ロシア、ブータン))

国内招聘者　5 名（基調講演者 1 名、セッション議長 3 名、セッション講演者 1 名）

【実績値】

シンポジウム開催　　1 回（①)

参加者　　のべ 347 名（講演者および主催関係者を含む 3 日間の総数)

【備考】

①東京文化財研究所主催・第 34 回文化財の保存および修復に関する国際研究集会 「「復興」と文化遺産」11.01.19～21、東京国立博物館平成館大講堂

②予稿集　300 部

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 6222

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.69

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	開催回数	印刷物				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	シンポジウムを予定通り開催し、国内外専門家についても当初の企画・人選が予定通り実現したことに加え、文化庁外国人芸術家・文化財専門家招へい事業や渡航経費自己負担での参加も得てさらに充実することができた。講演内容は事前の打ち合わせを踏まえて開催趣旨によく沿ったものとなり、それぞれが非常に興味深く、参加者の満足度も高かった。外国人専門家からは、復興という局面を文化遺産の切り口からテーマとして取り上げたこと自体が新鮮だったとの評価も得られた。平日・3 日間の開催ということで参加登録がやや少なかったのが残念であったが、内容については十分に当初の目的を達成したと自負している。来年度は報告書を作成し、今回の成果をさらに広く普及・活用に供する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	国際研究集会の開催を通じて、国内外に向けた文化遺産研究に関する情報発信を促進することが出来た。今回は基本的に専門家を対象に設定したが、テーマによってはより広く一般に広報を行うことも検討に値する。次年度の報告書出版を通じて、成果の発信をさらに促進したい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6223

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.70

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	平成 22 年度オープンレクチャー ((2)-②)

【事業概要】
企画情報部の美術史研究の成果を一般に公表することを目的とする。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	企画情報部長　田中　淳

【スタッフ】
山梨絵美子、勝木言一郎、津田徹英、塩谷　純、綿田　稔、皿井　舞、江村知子、土屋貴裕（以上、企画情報部）

【主な成果】
第 44 回企画情報部オープンレクチャー「人とモノの力学」と題して 4 講演を 2 日間にわたり開催した（参加者数：200 人、アンケートによる満足度：84%（回収率：68%）。

【年度実績概要】
企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年で 44 回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2 日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。今回も昨年度に引き続き「人とモノの力学」をテーマに掲げた。個々の講演内容は以下の通りである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても位置づけられている。

今回は 2 日間でのべ 200 人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、136 人から回答を得た（回収率：68%）。満足度に関する回答結果は、「たいへん満足した」55 人、「おおむね満足した」59 人、「普通だった」5 人、「不満が残った」1 人、無回答 17 人、回答者の 84%が満足感を得たことがわかった。

第 1 日：2010 年 10 月 15 日（金）午後 1:30～4:30、東京文化財研究所セミナー室
「中世における真宗祖師先徳彫像の制作を廻って」津田徹英（東京文化財研究所）
「草花の美–都久夫須麻神社社殿の空間–」須賀みほ（岡山大学）

第 2 日目：2010 年 10 月 16 日（土）午後 1:30～4:30、東京文化財研究所セミナー室
「御歌所の歌人と書」高橋利郎（成田山書道美術館）
「秋元洒汀と明治の日本画」塩谷純（東京文化財研究所）

【実績値】
参加者数：200 人
満足度　：84%（回収率 68%）

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 6223

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.70

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点	参加者数	満足度				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財に関する調査・研究に基づく成果・新発見を、時宜に適応しながら、公表することができ、その参加者数も満足度も目標値を満たしたので、Ａと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り、進捗した。次期中期計画においても文化財に関する調査・研究に基づく成果・新知見を、公開講演というかたちで開催していきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6224

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.71

中期計画の項目	6　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	公開講演会、現地説明会等の開催（(２) －②)

【事業概要】文化財に関する調査・研究に基づく成果について、公開講演会、現地説明会等の開催により、積極的に公開・提供する。

【担当部課】	研究支援推進部 連携推進課、研究支援課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長　田中康成 研究支援課長　紅林孝彰

【スタッフ】永井あつ子、車井俊也、今西康益、宮本隆行、飯田信男［以上、研究支援推進部］

【主な成果】公開講演会を 2 回、特別講演会(東京会場)を 2 回、飛鳥資料館特別展示記念講演会を 2 回、平城宮跡資料館特別展示等記念講演会を 2 回、計 8 回の公開講演会を開催した。
また、発掘調査に伴う現地説明会等を平城地区、飛鳥藤原地区あわせて計 5 回実施した。
このことにより調査研究成果を適時適切に国民に公開公表することが出来た。
開催回数は目標値を超え、さらに参加延べ人数は、公開講演会等が 2,033 名、現地説明会等が 3,843 名に上り、事業は順調に実施できた。

【年度実績概要】

Ⅰ．公開講演会等

1. 第 106 回公開講演会 H22/6/12(土) 参加者数 222 人　場所:平城宮跡資料館講堂
   講演者数 4 人ｱﾝｹｰﾄ結果= 回収数 133 人,回収率 59.9%,満足度Ａ=129 人(97%)/Ｂ=4 人(3%)/Ｃ=0 人
2. 第 107 回公開講演会 H22/11/13(土)　参加者数 206 人　場所:平城宮跡資料館講堂
   講演者数 3 人ｱﾝｹｰﾄ結果=回収数 136 人,回収率 66%,満足度Ａ=135 人(99.3%)/Ｂ=1 人(0.7%)/Ｃ=0 人
3. 特別講演会（東京会場）H22/5/15(土) 参加者数 409 人　場所:江戸東京博物館
   講演者数 3 人ｱﾝｹｰﾄ結果=回収数 255 人,回収率 62.3%,満足度Ａ=252 人(98.8%)/Ｂ=3 人(1.2%)/Ｃ=0 人
4. 特別講演会（東京会場）H22/9/25(土) 参加者数 526 人　場所:有楽町朝日ホール
   講演者数 6 人ｱﾝｹｰﾄ結果=回収数 282 人,回収率 53.6%,満足度Ａ=281 人(99.6%)/Ｂ=1 人(0.4%)/Ｃ=0 人
5. 飛鳥資料館春期特別展示「キトラ古墳壁画四神」特別公開記念講演会　H22/5/30(日)
   講演者数 2 人,加者数 150 人　場所:明日香村立中央公民館ホール
6. 飛鳥資料館秋期特別展示記念講演会　H22/10/17(日)　参加者数 47 人　場所:飛鳥資料館講堂
   講演者数 1 人ｱﾝｹｰﾄ結果= 回収数 34 人、回収率 72%、満足度Ａ=34 人(100%)/Ｂ=0 人/Ｃ=0 人
7. 平城宮跡資料館秋期特別展示記念講演会　H22/10/9(土) 参加者数 202 人　場所:講堂
   講演者数 4 人
   ｱﾝｹｰﾄ結果=回収数 136 人,回収率 67.3%,満足度Ａ=113 人(83.1%)/Ｂ=20 人(14.7%)/Ｃ=3 人(2.2%)
8. 平城宮跡資料館冬期企画展示記念講演会　H22/12/19(日) 参加者数 271 人　場所:講堂
   講演者数 3 人ｱﾝｹｰﾄ結果=回収数 163 人,回収率 60.1%,満足度Ａ=158 人(96.9%)/Ｂ=5 人(3.1%)/Ｃ=0 人

Ⅱ．発掘調査現地説明会等

1. 平城第 466 次(平城宮東方官衙地区)666 ㎡,発掘調査現地説明会 H22/4/17(土),参加者 750 人,報告者 2 人
   ｱﾝｹｰﾄ結果=回収数 260 人,回収率 34.7% 満足度Ａ=145 人(55.8%)/Ｂ=102 人(39.2%)/Ｃ=13 人(5.0%)
2. 飛鳥藤原第 163 次(藤原宮朝堂院) 1,500 ㎡,発掘調査現地説明会 H22/7/3(土),参加者 423 人,報告者 1 人
   ｱﾝｹｰﾄ結果=回収数 68 人,回収率 16.1% 満足度Ａ=41 人(60.3%)/Ｂ=27 人(39.7%)/Ｃ=0 人
3. 平城第469次(平城宮跡東院地区西北部) 850㎡,発掘調査現地説明会 H22/7/17(土),参加950人,報告1人
   ｱﾝｹｰﾄ結果=回収数 159 人・回収率 16.7% 満足度Ａ=81 人(50.9%)/Ｂ=75 人(47.2%)/Ｃ=3 人(1.9%)
4. 飛鳥藤原第 165 次調査(水落遺跡) 287 ㎡,現地見学会 H22/12/5(日),参加者 1,420 人
5. 平城第 477 次(春日東塔院)219 ㎡,発掘調査現地見学会 H22/12/17～21,参加者 300 人

【実績値】

Ⅰ．公開講演会等 年 8 回開催（目標値は年 6 回）
　聴講者延人数 2,033 人、ｱﾝｹｰﾄ回収数 1,139 人、回収率 56%
　満足度Ａ=1,102 人(96.8%)/Ｂ=34 人(3.0%)/Ｃ=3 人(0.2 %)

Ⅱ．発掘調査現地説明会等 年 5 回開催（目標値は年 6 回）
　参加者延人数 3,843 人内ｱﾝｹｰﾄ実施回数 3 回：参加者延数 2,123 人,回収数 487 人,回収率 22.9%
　満足度Ａ=267 人(54.8%)/Ｂ=204 人(41.9%)/Ｃ=16 人(3.3%)

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 6224

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.71

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
公開講演会
適時性：広く一般に公開し、必要性に答えることが出来た。
独創性：公開は、内容の新規性及び卓越性を持たせ実施することが出来た。
発展性：聴講者は多数かつ多種にわたり様々な分野への影響が期待される。
継続性：研究成果の継続的な公表、連続的な社会還元が出来た。
正確性：多数が満足する正確性を持った内容であった。

2. 定量的評価

観点	開催回数	参加者数	参加者満足度			
判定	A	A	A			

備考
公開講演会
開催回数は目標値の 1.3 倍を達成した。聴講者数は、昨年度(1,018 人)に対して２倍となった。
9 割強の方に満足していただいた。
現地説明会等
開催回数は目標値を下回ったが、9 割強の方に満足していただいた。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	公開講演会については、年 8 回実施し、発掘調査現地説明会等については、5 回実施し、いずれも多数の参加者があった。これらの参加者に対し行ったアンケートでは、公開講演会で 99.8%、発掘調査現地説明会等で 96.7%の「大変満足である」又は「おおむね満足である」という結果を得ている。 これらの結果を総合的に判断して、Ａと認めたものである。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	公開講演会の開催回数は目標値を超え、現地説明会等の開催は目標値を達成し、この事業が順調に実施できたと考える。 今後もこのペースを維持しつつ、調査研究の成果に基づく講演、現地説明会等の内容及び配付資料の充実、アンケート調査による参加者ニーズの把握等に力を注ぎ、さらに参加者数の増加と満足度の向上に努めたい。

【書式Ｂ】　　施設名　東京文化財研究所　　処理番号　6231

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.72

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	ホームページの運用((2)-③)

【事業概要】
研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長　勝木言一郎

【スタッフ】
綿田　稔，土屋貴裕，中村明子（以上、企画情報部），崎部　剛（管理部 LAN 委員），俵木　悟（無形文化財部 LAN 委員），犬塚将英，森井順之（以上、保存修復科学センターLAN 委員），二神葉子（文化遺産国際協力センターLAN 委員）

【主な成果】
文化財デジタルイメージギャラリーの新設、メールマガジンの配信など、ホームページの内容の充実に努め、研究所の情報発信機能の向上を図った。

【年度実績概要】
１．ホームページの運用
東京文化財研究所のホームページは、研究所における情報発信機能の一翼を担う重要なメディアであり、また文化財研究のデジタル・アーカイブとしての役割を果たす。
平成 22 年度は文化財デジタルイメージギャラリーを新設し、メールマガジンを配信するなど、ホームページの内容の充実と利便を図った。とくに文化財デジタルイメージギャラリーでは「赤外線の眼で見る《昔語り》」「菊花に覆われた未完の武者絵」「国宝彦根屏風の共同調査」「古写真　名古屋城本丸御殿」を公開し、画像を中心とするデジタル・アーカイブの構築に努めた。
平成 22 年度のホームページアクセス件数は 1,489,091 件であり、昨年度に比べ、71,888 件増加した。

【実績値】
ホームページアクセス件数：1,489,091 件

【備考】

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　6231

自己点検評価調書

研究所 No.72

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	ホームページアクセス件数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ホームページの運用については、ホームページアクセス件数の高さから、適時性、独創性、発展性、効率性、継続性、正確性の向上を裏付ける結果だと判断した。したがって実績の総合評価も十分な成果が認められると結論した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ホームページの運用については、ホームページが研究所の広報活動の一翼を担うとともに、かつ文化財研究のデジタル・アーカイブとして多角的な情報発信を行ってきたことがホームページアクセス件数からも裏付けられた。こうした実績から、当年度における中期計画の実施状況は順調であると判断した。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6232

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.73

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	ホームページアクセス件数の前期中期計画期間の年度平均以上の確保（(2) －③）

【事業概要】
研究所の事業・研究成果をはじめ、施設・案内など様々な広報をしているホームページであり、常に拡充を図っている。社会への広報の目安となるアクセス件数を把握し、より一層の情報提供に務める。

【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長　田中 康成

【スタッフ】
渡　勝弥（文化財情報係長）ほか 1 名

【主な成果】
研究所のホームページをより充実させるために、各部・室における事業内容、研究発表等を紹介するページを公開した。また、奈文研のホームページをより見やすいものにするために東文研の協力を得て、文化財研究所として類似性のあるホームページの作成を開始した。
木簡人名データベース（試作版）を公開した。

【年度実績概要】
各部・室及び各研究員のページを作成することによって、奈文研の事業内容や研究内容、研究発表等をより明らかに公開することが可能となった。
木簡人名データベース（試作版）により、木簡に現れる人名を検索することが可能であり、将来的には木簡の詳細情報が閲覧できることを目指している。

【実績値】
ホームページ閲覧件数：4,977,076 件

ホームページアクセス者数：641,695 人

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 6232

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.73

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性:より詳細な情報を公開することが可能となった。
発展性:従来の部単位の紹介から研究員単位にまで紹介が可能となった。
継続性:随時更新することによって情報を継続して公開している。
正確性:各部・室、研究員のページを作成することで、研究所を網羅的に理解することが可能となった。

2. 定量的評価

観点	ホームページのアクセス件数					
判定	A					

備考

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	従来の部単位までのホームページから、研究者単位までのホームページを公開することが可能となった。より詳しく奈文研の紹介が可能となった。今後の目標としては、奈文研トップページの更新と供に、各部・室のページのより一層な充実を図る。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	データベースの追加と各部・室のホームページを公開したことにより、更なる情報の提供が可能となったと認められるため、今年度中期計画の実施状況は順調と判断した。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6311

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.74

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	黒田記念館における作品の展示公開（(3)）

【事業概要】

当研究所は、黒田清輝の芸術を顕彰するために黒田記念館において作品や資料、研究成果を公開するとともに、地方文化の振興に資するために、昭和５２年からの事業として「近代日本洋画の巨匠　黒田清輝」展を年１回地方において共催している。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長　山梨絵美子

【スタッフ】

田中　淳、塩谷　純、綿田　稔、皿井　舞（以上、企画情報部）

【主な成果】

一般公開入場者　18,458 人

「写真に見る黒田清輝の日常」（黒田記念館一階６４インチ大型タッチパネル、10.11.03 公開開始）

「近代洋画の巨匠　黒田清輝展」（岩手県立美術館、10.07.17-08.29）入場者　11,942 人

【年度実績概要】

①一般公開（無料）：毎週木・土曜日　午後１時～４時、特別公開：２０１０（平成２２）年１１月３日～１１月７日、入場者数　18,458 人（２０１０年４月１日～２０１１年３月１０日）

なお、黒田記念室のパンフレット（Ａ４サイズ、三つ折）を作成し、来館者に無料で配布した。

また、黒田家遺族から受贈した黒田清輝関連写真の調査研究の成果の一部として「写真で見る黒田清輝の日常」と題するデジタルコンテンツを作成し、記念館 1 階にあらたに設置した６４インチ大型タッチパネル上で公開した（１１月 3 日公開開始）。

②２０１１年2月２４日から3月１０日まで、来館者にアンケートを実施した（19 日まで実施予定であったが、3月１１日に発生した東北地方巨大地震により１２日から休館）。来館者９１７人のうち、１５６人の回答を得た。回答率は１７．０％で、そのうち「満足した」「おおむね満足した」と回答してものは１５５人（９９．４％）、「不満が残った」１人（０．６％）であり、アンケート回答の９９．４％が満足感を得たことになる。

③平成２２年度地方共催展は下記のように開催した。

会場：岩手県立美術館、会期：２０１０年（平成２２）年7月１７日（土）～8月２９日（日）

主催：東京国立博物館、東京文化財研究所、岩手県立美術館、黒田清輝展実行委員会

開催日数：３８日、入場者：１１，９４２人、陳列点数：油彩・パステル画８５点、素描６２点、写生帖１７冊、書簡４通、日記５冊、参考出品２点、記録写真１６点、特別陳列（油彩２点、素描３点）（以上、黒田記念館所蔵作品）　図録：Ａ４版変形、１８２ページ、

会期中の２０１０（平成２２）年8月１日（日）、会場出口において来館者にアンケート調査を実施し、２８０人から回答を得た（入館者数３００人に対して、回収率９３．３％）。満足度として「満足」、「おおむね満足」の回答が、１００％をしめた。

④作品貸与：１件１点

黒田清輝「風景（グレー）」（油彩画）：「セーヌの流れに沿って」展（ブリヂストン美術館、10.10.30-12.23、ひろしま美術館 11.1. 3-2.27）１件１点

【実績値】

黒田記念館　アンケート、同集計表　入場者の満足度：９９．４％

共催展：岩手県立美術館　入場者　１１，９４２人　入場者の満足度：１００％

作品貸与件数：１件１点

【備考】

黒田記念館　アンケート、同集計表

共催展　アンケート集計表

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　6311

自己点検評価調書

研究所 No.74

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考						

２．定量的評価

観点	黒田記念館 入館者数	同記念館 入館者満足度	共催展 入場者数	同入場者 満足度	作品貸与数	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	黒田記念館の公開、共催展開催、作品の貸与、および黒田記念館における研究成果公開ともに順調に行うことができた。記念館での展示を条件に昨年度寄贈された作品の展示公開も、共催展、平常陳列で行うことができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に従って事業を進めることができた。今後も、建物と作品および調査研究が一体化した展示公開を目指していきたい。黒田記念館の作品を多くの国民に鑑賞していただくため、各地の美術館との共催による黒田清輝展も継続していきたい。画像等のウェブ上での公開等、より広く研究成果を公開できるかたちを考えていく方針である。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 6312
(様式 1)

業務実績書

研究所 No.75

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	平城宮跡資料館における展示公開（Ｉ６（５）「平城遷都 1300 年記念事業」と一体で実施）（（３））

【事業概要】
平城宮跡に関する理解促進、ならびに当研究所がおこなう平城宮・京の発掘調査および研究の成果公開や情報発信のため、平城宮跡資料館において常設展・企画展を実施する。

【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	企画調整部長　難波洋三

【スタッフ】
加藤真二、渡邉淳子、森先奈々子[以上、企画調整部]、車井俊也[研究支援推進部]

【主な成果】
平城遷都 1300 年記念事業に合わせて資料館をリニューアルオープンし、常設展示の大幅な展示替えをおこなった。また、3 回の企画展と 1 回の特別展を開催し、調査研究の成果公開や情報発信に努めた。

【年度実績概要】
平城宮跡資料館における展示
＜常設展＞
平城宮跡やその発掘調査の概要をわかりやすく解説したガイダンスコーナー、宮内の役所や宮殿の内部を実物大ジオラマと映像で再現した宮殿・官衙復原コーナー、発掘調査で出土した遺物を展示する出土遺物コーナーで展示を構成した。
＜企画展＞
○夏期企画展「平城宮跡 今・昔－岡田庄三写真展－」(7 月 10 日から 8 月 31 日)
平城宮跡を半世紀にわたり撮影してきた地元写真家岡田庄三氏の写真展。昭和 30 年代の宮跡の写真と現在の姿を比較した。
アンケート　回収数：789 名　回収率：2%
満足度（良以上）：554 名　79%
○秋期特別展 平城宮跡発掘調査 50 周年記念「天平びとの声をきく－地下の正倉院・平城宮木簡のすべて」(9 月 25 日から 11 月 7 日)
当研究所の平城宮跡発掘調査 50 周年を記念し開催した特別展。平城宮および周辺の主要な出土木簡約 300 点を一堂に展示した。
アンケート　回収数：972 名　回収率：1%
満足度（良以上）：788 名　87%
○冬期企画展「測る、知る、伝える－平城京と文化財－」(11 月 26 日から 1 月 17 日)
国土地理院近畿地方測量部との合同主催企画。平城京を地理と測量の視点から読み解く展示をおこなった。
アンケート　回収数：177 名　回収率：1%　満足度（良以上）：141 名　80%
○春期企画展「発掘速報展 平城 2009・2010」(2 月 19 日から 5 月 8 日)
当研究所が 2009・2010 年度に平城宮・京で実施した発掘調査の速報展。９地点の調査成果を紹介した。

秋期特別展　展示風景

【実績値】
常設展の公開日数：143 日　常設展の入館者数：189,338 名
企画展の公開日数：170 日　企画展の入館者数：165,008 名
春期企画展「平城宮跡 今・昔」53 日　38,443 人
秋期特別展「天平びとの声をきく」 42 日　92,394 人
冬期企画展「測る、知る、伝える－平城京と文化財－」40 日　20,282 人
春期企画展「発掘速報展 平城 2009・2010」35 日（3 月 31 日現在）　13,889 人

【備考】
企画展に因んで図録・リーフレット・パンフレットなどの刊行物の作成、記念講演会・ギャラリートークを開催した。
秋期特別展 図録：平城宮跡発掘調査 50 周年記念『天平びとの声をきく－地下の正倉院・平城宮木簡のすべて』(2010.9)
記念講演会：2010.10.9　於 平城宮跡資料館講堂　参加人数：202 名　満足度（良以上）：83.1%
ギャラリートーク：2010.10.3、10.17、10.31
冬期企画展パンフレット：『測る、知る、伝える－平城京と文化財－』(2010.11)
リーフレット：『文化財を測る、知る、伝える の最前線－空間情報科学と測量・計測技術を用いた文化財研究－』(2010.11)
記念講演会：2010.12.19　於 平城宮跡資料館講堂　参加人数：271 名　満足度（良以上）：96.9%
屋外測量体験：2010.12.19　於平城宮跡　参加人数：80 名
春期企画展パンフレット：『発掘速報展 平城 2009・2010』(2011.2)
ギャラリートーク：会期中毎週金曜日

【書式Ｂ】
(様式 2)

奈良文化財研究所	処理番号	6312

自己点検評価調書

研究所 No.75

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性			
判定	S	A	A			

備考
適時性：平城遷都 1300 年祭という平城宮跡がメイン会場となる一大イベントの開催にあわせて資料館をリニューアルオープンし、例年の４倍におよぶ入館者があった。
独創性：資料館リニューアルにあたり、ジオラマや映像など解りやすい新しい展示手法を取り入れた。
各種企画展では、展示内容・展示方法ともに趣向を凝らしオリジナリティーをだした。
継続性：ほぼ年間を通じて数多くの企画展を開催し（計 4 回)、平城宮・京に関わる様々な内容を入館者に提供することができた。

2. 定量的評価

観点	公開日数	入館者数	入館者の満足度			
判定	S	S	A			

備考
当該年度は、「平城遷都 1300 年祭」が開催され、平城宮跡資料館がリニューアルオープンし、例年に比べ入館者数、企画展の開催回数などが大幅に増加している。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	平城宮跡資料館をリニューアルオープンさせ､33 万人を超える入館者があった｡また年間、４回にわたる企画展を実施し満足度も高かったことから、S と判定した。この状況を引き続き維持できるよう、次年度以降も展示の充実をはかりたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	リニューアルした平城宮跡資料館で、平城宮跡に関する理解促進、ならびに当研究所がおこなう平城宮・京の発掘調査および研究の成果公開や情報発信をおこなうことができた。特に本年は、平城宮跡内で平城遷都 1300 年祭が開催されていたこともあり、例年の４倍におよぶ入館者を獲得できた。また多数の来場に応えるべく、企画展も多く実施し好評を得た。

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　6313

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.76

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	飛鳥資料館における展示公開　((3))

【事業概要】

飛鳥資料館において特別展を春秋の２回開催するとともに、企画展を開催する。春期特別展では、キトラ古墳壁画の特別公開をあわせておこなう。平常展示では、第１、第２展示室の展示の維持管理をおこなうとともに、展示の手直しを適宜おこなう。

【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長　加藤真二

【スタッフ】

成田聖、丹羽崇史（以上、飛鳥資料館）

【主な成果】

春期特別展「キトラ古墳壁画四神」を 4 月 16 日から 6 月 13 日まで開催するとともに、期間中の 5 月 15 日から 6 月 13 日までキトラ古墳壁画の特別公開をおこない、四神図（青龍・白虎・朱雀・玄武図）を展示した。また、5 月 30 日には記念講演・討論会を文化庁とともに主催した。夏期企画展は 7 月 1 日から 8 月 30 日に「小さな石器の大きな物語」を開催した。秋期特別展は、10 月 16 日から 11 月 28 日に「木簡黎明－飛鳥に集う いにしえの文字たち」を開催、10 月 17 日に記念講演会、10 月 23 日、11 月 6 日、20 日にギャラリートークをおこなった。冬期企画展は、1 月 28 日から 2 月 28 日に「飛鳥の考古学 2010」を開催した。平常展では、キトラ古墳壁画の陶板による実寸複製品を設置するとともに、キトラ古墳に関わる展示を一新、充実した。

【年度実績概要】

春期特別展「キトラ古墳壁画四神」(4 月 16 日から 6 月 13 日)　キトラ壁画の特別公開のまとめと位置づけて開催した。期間中、キトラ古墳壁画特別公開（5 月 15 日から 6 月 13 日）を行い、四神図（青龍、白虎、朱雀、玄武）を展示した。また、記念講演・討論会（5 月 30 日）を文化庁とともに開催した。

夏期企画展「小さな石器の大きな物語」(8 月 1 日から 8 月 30 日)　奈文研が研究に参与している河南省霊井遺跡の出土品の写真を中心に、東アジア各地の細石刃に関わる出土品と写真を展示し、更新世末期における東アジアの人類集団の動向を示した。期間中に、河南省より 3 人の研究者を招へいし、学術交流をおこなった。

秋期特別展「木簡黎明－飛鳥に集う いにしえの文字たち」(10 月 16 日から 11 月 28 日)　奈文研が所蔵する飛鳥藤原地区出土の木簡を中心に、日本全国より日本において木簡が使われ始めた 7 世紀の木簡を集めて展示を行い、黎明期の木簡に関する研究の最前線を示した。10 月 17 日には寺崎保広奈良大学教授を講師として、記念講演会『7 世紀木簡のおもしろさ』、10 月 23 日、11 月 6 日、20 日には学芸室ほかによるギャラリートークをおこなった。

冬期企画展「飛鳥の考古学 2010」(1 月 28 日から 2 月 28 日)　平成 21 年度に、飛鳥地域でおこなった奈文研、明日香村教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所の発掘調査のうち、興味深い成果が得られたものについて展示した。檜前遺跡群、飛鳥京跡、甘樫丘東麓遺跡などを取り上げた。

平常展　キトラ古墳壁画の陶板による実寸複製品を設置し、キトラ古墳に関わる展示も一新、充実した。

春期特別展の状況

【実績値】

刊行図書：5 冊
講演会　：2 回、ギャラリートーク 3 回
年間入館者数：133,312 人

【備考】

春期特別展図録『キトラ古墳壁画四神』
秋期特別展図録『木簡黎明－飛鳥に集う いにしえの文字たち』
夏期企画展カタログ『小さな石器の大きな物語』
秋期特別展カタログ『木簡黎明－飛鳥に集う いにしえの文字たち』
冬期企画展カタログ『飛鳥の考古学 2010』
春期特別展　記念講演・討論会『キトラ古墳～四神ってなに？～』
秋期特別展　記念講演会『7 世紀木簡のおもしろさ』

【書式Ｂ】
(様式 2)

奈良文化財研究所	処理番号	6313

自己点検評価調書

研究所 No.76

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	正確性			
判定	A	A	A			

備考
　キトラ古墳壁画の取り外し作業の進行のなかでおこなっており、キトラ古墳壁画の修復作業について国民の理解を得るのにまさに、適時で不可欠な展示となっている。また、春期、夏期の各展覧会は強い国際性を有するとともに、秋期展では、おそらく全国で初めて、全国の主だった 7 世紀木簡を集成、展示することができた。これらの展示は、奈良文化財研究所の付設機関であるとともに、飛鳥地域にあるという本資料館の特性と発想が生んだ独創的なものである。正確性については、これらの展示は、いずれも十分な研究と検討を経たものであり、担保されている。

2. 定量的評価

観点	論文数等	発表件数	入館者数			
判定	A	A	S			

備考
　特別展図録：2 冊、カタログ 3 冊
　講演会　　：2 回、ギャラリートーク 3 回
　年間入場者数：133,312 名（目標：55,400 名）

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展覧会を年間 4 回開催し、展示図録等も計画通り以上に刊行することができた。講演会も計画通り 2 回開催したうえで、ギャラリートークも実施できた。定量的にも、年間入場者数が、目標値を大きく上回っている。このため、総合的評価をＡと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今次中期計画のいずれの年度も定性的、定量的評価でＡ以上の評価をあげることができた。特に、年間入場者数は、目標人数を大幅に上回った。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 6314

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.77

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	藤原宮跡資料室における展示公開（(３)）

【事業概要】

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）に併設された藤原宮跡資料室およびエントランスにおいて、常設展示、発掘調査成果の速報展示などを実施し、展示公開の充実を図る。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】

玉田芳英、次山 淳、降幡順子、石橋茂登、山本 崇、黒坂貴裕、廣瀬 覚、青木 敬、森先一貴、庄田慎矢、番　光、諫早直人、若杉智宏、高橋知奈津、小田裕樹、石田由紀子、木村理恵、高橋 透［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区)］、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛［以上、企画調整部］

【主な成果】

常設展示および発掘調査成果の速報展示などを通年で実施し、展示公開の充実を図った。庁舎エントランスに発掘調査成果を速やかに公開するための速報展示コーナーを設け、多様な成果を継続的に公開した。あわせて、職員による展示解説、展示のための各種資料制作、パンフレットなどの企画と制作、各地の博物館などへの文化財の貸与をおこなった。

【年度実績概要】

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）庁舎に併設された藤原宮跡資料室において、通年にわたり常設展示を実施した。また、申請のあった団体などへは展示説明､藤原宮跡および発掘調査現場の案内などの応対をした。

庁舎エントランスに設けた発掘調査成果の速報展示コーナーにおいては、「甘樫丘東麓遺跡の土器、檜隅寺の土器（第 157 次・第 159 次調査)」「大極殿院回廊出土瓦（第 160 次調査)」「大極殿院南門の土層はぎ取り（第 160 次調査)」(以上前年度から継続)、「藤原宮朝堂院朝庭(163 次)」「甘樫丘東麓遺跡、古宮遺跡（山田道の変遷）(161・152-8 次)」「水落遺跡(165 次)」「檜隈寺周辺の調査(164 次)」の各展示を実施した。

エントランスの速報展示コーナー

利用者むけ印刷物としてパンフレット『藤原宮跡資料室案内』、リーフレット『特別史跡藤原宮跡』を制作し、あわせてマスコットキャラクターを多用した児童向けワークシートと解説を作成した。

また、各地の博物館などの求めに応じ、当調査部保管遺物ならびに模型・模造品などの貸与、保管遺物のレプリカ作成などへの協力をおこなった。

【実績値】

平成 22 年度の入室者数は 4,815 名、開室日 242 日。
各種団体などへの展示説明 11 件、他機関への所蔵品貸出 16 件。
印刷物など３件（印刷物２件①②、その他１件③)。

【備考】

①奈良文化財研究所『藤原宮跡資料室案内』2010.11
②奈良文化財研究所『特別史跡藤原宮跡』2011.3
③奈良文化財研究所『ワークシート「ぼくの仲間をさがしてください」』2010.9

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 6314

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.77

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性：調査研究成果を常設展示と速報展示により公開することで多様な要望にこたえている。
独創性：展示公開のための文化財の保存修復作業、調査機関ならではの豊富な実物展示に独創性がある。
また児童向けにオリジナルのワークシートを作成した。
発展性：速報展示の展示方法と内容に工夫をし、各遺跡の特徴に的を絞った展示を実現している。
継続性：常設展示および速報展示を通年で公開し、内容を適宜変更している。

2. 定量的評価

観点	入室者数					
判定	A					

備考
年間入室者数４，８１５名（目標４，５００人）

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	常設展示とともに、エントランスでの速報展示コーナーの内容が一層充実し、調査成果の速報性がより高まった。入室者数も適正であり、総合的にＡと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	速報展示なども充実した内容のもとに継続的に実施されており、順調と判断した。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6411

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.78

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティア事業の運営（(４)）		
【事業概要】 平城宮跡への来訪者に奈良文化財研究所の調査研究の成果を発信するとともに、平城宮跡の歴史や文化財に対する理解を深めてもらうため、 平城宮跡資料館、遺構展示館、復原建物等の案内・解説を行う平城宮跡解説ボランティアの運営を実施する。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長　田中康成
【スタッフ】 渡邉淳子［企画調整部］、永井あつ子、車井俊也［以上、研究支援推進部］			
【主な成果】 高い知識に基づくガイドを多くの来訪者に効率よく行い、文化財への理解を大いに広げることができた。			
【年度実績概要】 この事業は 10 年を超え総体的に定着してきているが、今年度は特に 4 月～11 月の平城遷都 1300 年記念事業（平城宮跡会場）期間中には、「平城宮跡探訪ツアー」事業の定点ガイドボランティアとして参加したほか、都城発掘調査部の研修と指導を受けながら、発掘現場解説も行なった。 また、期間終了後は同事業の「ツアーガイド」としてボランティアに参加したメンバー73 名を新たに当研究所のボランティアとして受け入れ、平成 23 年 1 月～3 月に講義・実習・日帰り体験等の研修を行なうことにより知識の研さんとガイド技術の熟達を促進し、今後の運営の充実を図った。			
【実績値】 ・平城宮跡解説ボランティア登録数：１８７名 ・ボランティア解説受講延べ人数：約３６２，０００人 ・ボランティアに対する学習会等 第５期生基礎研修　３日間			
【備考】			

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 6411

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.78

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
適時性：平城遷都 1300 年記念事業期間を含めて、来訪者の需要・必要性に対し公開性もって十分な対応が出来た。
発展性：多種多様な層の来訪者へ解説ができ、その反響は大きかった。
効率性：解説に係る時間的・人的投資は効率よく出来た。
継続性：とぎれず継続して解説者の配置行うことが出来た。
正確性：研修で得た知識経験を基に正確な情報を伝えることが出来た。

2. 定量的評価

観点	ボランティア登録者数	解説受講者数				
判定	A	A				

備考

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城遷都 1300 年記念事業期間中、約３６０万人が訪れた平城宮跡において、定点ガイドとして昨年の約４倍に上る約３６万人に効率よくガイドを行い、文化財の理解を広めることに大きく貢献した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ボランティアへの更なる研修機会提供、登録ボランティア数の維持、解説受講者数の増加などボランティア運営に対する積極的な支援が順調に実現できたと考える。 今後もこのペースを維持し、奈良文化財研究所の情報発信、さらには平城宮跡の公開活用につながるよう力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6412

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.79

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	各種ボランティアに対する活動機会・場所の提供、文化財に関する学習会の実施等への支援（(４)）

【事業概要】
　平城宮跡で活動しようとする各種ボランティア、また文化財関係のボランティアに対して要請があれば、平城宮跡（施設を含む）を活動の場所として提供することや、文化財に関する学習会等への講師の派遣を行う等の支援を行い、ボランティア団体の育成に寄与する。

【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長　田中康成

【スタッフ】
　永井あつ子、車井俊也［以上、研究支援推進部］

【主な成果】
　ボランティア団体への支援は、その育成につながった。

【年度実績概要】
　平成 13 年 11 月に設立された「特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワーク」に対して、活動機会、活動場所、講師の派遣など積極的な活動支援を行った。
　平成 22 年 7 月 31 日には、「特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワーク」と共催で、「平城っ子歴史教室特別編」を平城宮跡内に設置された「まほろばステージ」で開催した。

【実績値】
奈良文化財研究所が支援し,ボランティアが実施した主な事業名称,回数,活動場所,従事ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ数,参加者数
　平城宮跡歴史文化講座,　3 回開催,平城宮跡資料館,ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ延べ 45 名,参加者数延べ 450 名
　万葉集勉強会,　12 回開催,平城宮跡資料館,ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ延べ 48 名,参加者数延べ 250 名
　平城っ子歴史教室,　11 回開催,平城宮跡資料館,ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ延べ 61 名,参加者数延べ 198 名,(講師派遣)
　拓本づくり教室,　6 回開催,平城宮跡資料館,ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ延べ 29 名,参加者数延べ 152 名

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 6412

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.79

1. 定性的評価

観点	継続性	効率性	発展性			
判定	A	A	A			

備考
継続性：支援し実施された事業は、継続的に連続するものであった。
効率性：奈良文化財研究所の施設を有効かつ効果的に使用し、参加者への広報・成果発表が出来た。
発展性：子供達等への将来につながる影響のある体験学習等が実施された。

2. 定量的評価

観点	支援事業数等					
判定	A					

備考
支援事業（従事ボランティア数、講師派遣、参加者数）は、昨年度実績と同じである。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城っ子歴史教室への講師派遣、平城宮跡内での清掃活動への用具等の提供、平城宮跡歴史文化講座等への活動場所提供の支援を行い、活動の活性化に貢献した。 これらを総合的に判断して、Ａと認めたものである。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ボランティア団体の要請に対し、積極的に支援し、各事業が行われた。 今後も各種ボランティア育成に寄与したい。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6413

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.80

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	文化庁が行う平城宮跡等の公開・活用事業への協力・支援（(４)）

【事業概要】

文化庁平城宮跡等管理事務所の運営に対する積極的協力を以下のとおり実施する。

○施設の公開・利用等に係る連絡調整及び連携協力

○各種行事、発掘調査等の連絡調整

○修繕等に係る相談、状況の把握、等

【担当部課】	研究支援推進部・研究支援課 研究支援推進部・連携推進課	【プロジェクト責任者】	研究支援課長　紅林　孝彰 連携推進課長　田中　康成

【スタッフ】

今西康益、飯田信男、永井あつ子、車井俊也、松本正典［以上、研究支援推進部］

【主な成果】

◇平城宮跡における文化庁平城宮跡等管理事務所の運営及び飛鳥・藤原宮跡の保存活用に対し、積極的な協力を行った。

◇文化庁宮跡等整備及び公開活用等事業等に対し、積極的な支援協力及び関係機関等との調整を行った。

◇関連受託事業：特別史跡平城宮跡及び特別史跡藤原宮跡地における歴史的環境維持・整備業務

平城宮跡、藤原宮跡の維持管理のために、宮跡地内の草刈・植栽業務等を実施した。

○平城宮跡〔対象面積：915,150 ㎡〕○藤原宮跡〔対象面積：257,840 ㎡〕

【年度実績概要】

◇平城宮跡における文化庁平城宮跡等管理事務所の運営及び飛鳥・藤原宮跡の保存活用に対し、積極的な協力を行った。

○宮跡の公開・活用事業に対する協力・支援、利用申込み等に対する連絡及び申込者との打合せ

○各種行事、発掘調査等に係る連絡調整

○宮跡内建物、工作物等の維持管理・修繕に当たり、状況の把握、文化庁・業者との連絡調整、現場監理等

・平城宮跡内東院庭園池循環設備修理及び清掃等維持管理　・国有地公有化範囲等国有財産の状況確認

・平城宮跡内グレーチング、外灯等設備、兵部省式部省等遺構表示等工作物の修理及び維持管理

○住民等からの苦情対応・取次ぎ及び周辺自治会等との協力

・宮跡内水路、道路等の修理等環境改善及び維持管理等　・蜂の巣駆除等、日常環境改善維持管理

・宮跡来訪者・利用者等一般からの申し出（防火、防犯、植生、運営等）対応、文化庁への調整

・地元自治会との協力対応、文化庁への調整

○平城宮跡内禁止行為等への対応・異状報告

・　平城宮跡内火災対応及び救急車出動対応　・禁止行為等看板設置に関する文化庁への協力

・　宮跡毀損事故、事件及び不法投棄等禁止行為への対応及び文化庁への調整

○平城宮跡安全安心連絡協議会で平城宮跡みまもり隊を企画・構成、パトロールを実施

○所轄消防署警察署との連絡調整

・火災、盗難・強盗等事件捜査への協力、連絡調整

◇文化庁宮跡等整備及び公開活用等事業等に対し、積極的な支援協力及び関係機関等との調整を行った。

○文化庁事業への支援・協力

・東院庭園の名勝指定に関する資料提供等支援協力

・大極殿正殿復原整備、遺構展示館改修、大極殿高御座製作、大極殿・遺構展示館内部展示、大極殿小壁彩色製作の計画・設計・整備等推進への等文化庁事業への支援・協力

・大極殿小壁彩色制作の実行調整及び現場制作管理

・高松塚古墳仮整備、山田寺跡復旧整備事業の計画・設計・整備推進等、文化庁事業への支援・協力

・平城宮跡の国営公園化に関する事業の計画・設計・整備推進等、国土交通省への支援・協力及び文化庁との調整

・平城遷都 1300 年記念事業実施に関する文化庁との調整

◇関連受託事業：特別史跡平城宮跡及び特別史跡藤原宮跡地における歴史的環境維持・整備業務

○平城藤原宮跡の維持管理のために宮跡地内の草刈植栽業務等及び宮跡地内における不具合対応策提案を実施した。

・平城宮跡　草刈り等（芝、雑草、草花類）　実施時期：4～11 月、作業回数：1～8 回

植栽等（表示、景観樹木類）　実施時期：12～3 月　作業回数：1～8 回

その他　側溝等工作物清掃維持、害虫駆除

・藤原宮跡　草刈り等（芝、雑草、草花類）　実施時期：4～11 月　作業回数：1～2 回

植栽等（表示、景観樹木類）　実施時期：12～3 月　作業回数：1 回

その他　耕作物用水路等隣接部清掃維持、側溝等工作物清掃維持、害虫駆除

【実績値】

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　6413

自己点検評価調書

研究所 No.80

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：緊急性の高い連絡・修繕相談等へ適時に対応 独創性：宮跡内建物、工作物等の維持管理に寄与 発展性：専門知識を生かした協力による人的投資上の効率性 継続性：需要に応じた継続的な連携協力体制						

２．定量的評価

観点						
判定						
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮跡・藤原宮跡等の公開・活用に必要な準備等に積極的に協力し、また、平城宮跡等において発生する緊急性の高い連絡等に、良く対応している。 さらに、平城宮跡国営公園化や平城遷都１３００年祭記念事業の実施に伴う専門的支援を行っており、これら事業の推進に伴う文化庁等からの相談等に良く対応している。 これら実績から、Ａとしたものである。

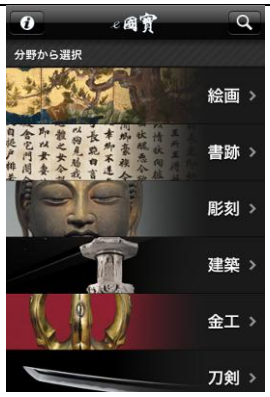
４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	施設の公開・利用等の連絡、各種行事・工事・発掘調査の連絡、修繕相談・状況の把握等、各業務について積極的に協力できた。 特に、事故・事件、火災、修繕相談等は、緊急性の高い場合が多かったが、適時・的確に対応できた。 なお、今後、平城宮跡国営公園化や平城遷都１３００年祭記念事業の実施に伴い、平城宮跡等の管理の協力・支援のあり方について検討する。

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 6611

中項目	6　情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表　①ウェブサイト等による情報の発信			
担当者	担当部課	学芸企画部博物館情報課	事業責任者	博物館情報課長　高橋裕次
実績・成果	・情報アーカイブサイトでの調査研究成果の公開を継続した。 ・モバイルサイト開設については処理番号 2131 を参照。 ・国指定文化財の高精細画像および解説文（e 国宝）についてデータ整備を進め、展示室およびインターネットで一般公開した。 ・「e 国宝」を閲覧するための iPhone アプリを開発、公開した。 ・国指定文化財について 3 次元計測に基づく動画を作成し、展示室およびインターネットで公開した。			
補足事項	・ウェブサイト「東京国立博物館情報アーカイブ」を運用し、研究員の調査研究成果の一部と科学研究費による成果データベース（古地図、古写真、博物図譜、古文書）の公開を継続した。 ・デジタル化した画像ファイルとメタデータを効率的に公開・提供するため、画像管理システムをリニューアルした。			



「e 国宝」iPhone アプリ

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	ウェブサイトへのアクセス件数	4,971,306 件	1,928,966 件	S	経年変化	5,504,468	5,211,261	5,687,673	4,971,306
	検索対象画像の拡充	約 246,000 点	－	－		約50,000点	約51,000点	約164,177点	約246,000点

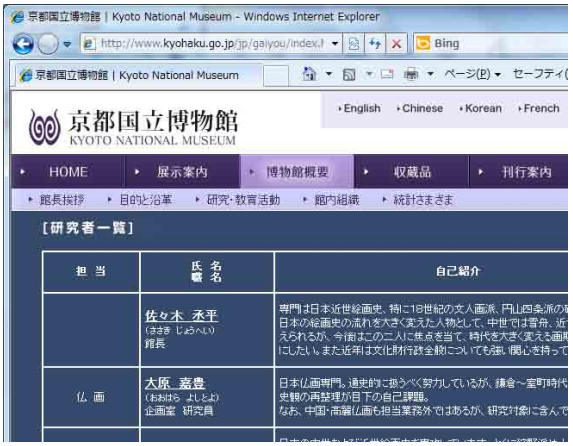
年度実績評価総括	Ⓢ　A　B　C　F （S、Fの理由）インターネットの急速な普及と当館ウエブサイトの充実等により、ここ数年、アクセス件数が目標値を大きく上回り、当館からの情報発信に多大な役割を果たしている。
中期計画記載事項	ウェブサイト等自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、広く国内外に情報を発信する。 ウェブサイトのアクセス件数は年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ることとする。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名　京都国立博物館　処理番号　6612

中項目	６　情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表　　①ウェブサイト等による情報の発信			
担当者	担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	総務課長　植田義雄 列品管理室長　若杉準治
実績・成果	・特別展覧会「長谷川等伯」において、過去１週間の混雑状況を時系列で掲載したウェブページを公開し、パソコン端末や携帯電話で、来館者に過去の混雑状況をお知らせできるよう配慮した。また、当日の混雑状況のＱＲコードを館内及び当館看板設置場所に掲示し、携帯電話端末用ウェブサイトの利用を促進した。 ・当館ウェブサイトに、研究者一覧のウェブページを作成し、研究員の自己紹介、主要業績及び過去３年の執筆物を掲載した。 ・研究紀要「学叢」を創刊号からすべてを当館のウェブサイトに公開した。 ・新刊の博物館ディクショナリーをメールマガジンで配信した。 ・収蔵品の貸与情報を当館のウェブサイトに公開した。トップページに直接のリンク先を設け、閲覧者へのサービスの充実を図った。			
補足事項	・アクセス解析ツールを新規導入し、当館ウェブサイトのユーザーセッション数を把握できるように改善した。これにより、より正確なページアクセス件数を割り出すことができ、どのようなページにアクセス数が多いかを把握できるようになった。 ・来館者のニーズに応えて作成した「東山七条周辺絵図」をウェブサイトで公開した。 ・パソコン向けサイト及び携帯電話端末用サイトにおいて、特別展覧会、各種講座・イベント等のコンテンツを適宜更新し、モバイルユーザーに対して、最新の博物館情報の提供に努めた。また、月１回発行しているメールマガジンについても、同様に最新の博物館情報の提供に努め、特別展覧会の混雑状況や、イベント情報について臨時号の発行も随時行った。			



研究者一覧ページ

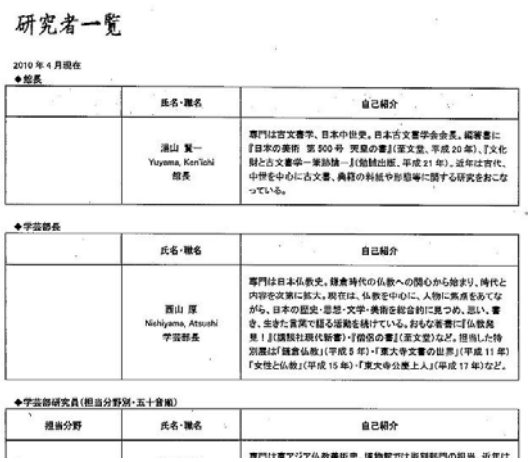
定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	ウェブサイトへのアクセス件数	805,935（トップページビュー数） 2,077,562（ユーザーセッション数）	521,965 －	S －	経年変化	733,885 －	1,409,634 －	848,486 －	805,935 2,077,562

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	ウェブサイト等自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、広く国内外に情報を発信する。 ウェブサイトのアクセス件数は年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ることとする。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 6613

中項目	6　情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表　①ウェブサイト等による情報の発信			
担当者	担当部課	学芸部情報サービス室	事業責任者	情報サービス室研究員　野尻　忠
実績・成果	・展覧会名称の変更にともない、携帯用ウェブサイト内の表記の全面的な改定をおこなった。 ・PC 用ウェブサイト内で公開している写真データベースに、新たに 2,303 件のデータを追加した。 ・PC 用ウェブサイト上に、研究員の専門分野と研究課題・調査成果を記した一覧を新たに掲載した（5 月）。 ・季刊誌『奈良国立博物館だより』に、研究員が調査研究成果を紹介する欄を設け、毎号（年 4 回）、記事を掲載している。 ・『鹿園雑集』12 号を刊行し、論文 1 本、資料紹介 1 本のほか、調査報告・修理報告等を掲載した。 ・読売新聞紙上に、研究員による展示文化財の解説記事を連載している（通年、隔週） ・名品展の展示替えによって新規に展示される文化財について、その解説文を盛り込んだプレスリリースを作成し、マスメディア向けに発信した（12 月）。			
補足事項	・ウェブサイト上に掲載した研究員一覧については、今後 1 年ごとに内容を更新していく予定である。 ・展示替えにともなう出陳文化財のプレス向け情報発信は、今後も継続し、さらなる内容のレベルアップに取り組みたい。			


研究者一覧

2010年4月現在

◆館長

	氏名・職名	自己紹介
	浦山 賢一 Yuyama, Ken'ichi 館長	専門は古文書学、日本中世史。日本古文書学会会長。編著書に『日本の美術 第500号 天皇の書』(至文堂、平成20年)、『文化財と古文書学－実践論－』(勉誠出版、平成21年)。近年は古代、中世を中心に古文書、典籍の料紙や形態等に関する研究をおこなっている。

◆学芸部長

	氏名・職名	自己紹介
	西山 厚 Nishiyama, Atsushi 学芸部長	専門は日本仏教史。鎌倉時代の仏教への関心から始まり、時代と内容を次第に拡大。現在は、仏教を中心に、人物に焦点をあてながら、日本の歴史・思想・文学・美術を総合的に見つめ、思い、書き、生きた言葉で語る活動を続けている。おもな著書に『仏教発見！』(講談社現代新書)・『聖徳の書』(至文堂)など。担当した特別展は『鎌倉仏教』(平成5年)・『東大寺文書の世界』(平成11年)『女性と仏教』(平成15年)・『東大寺公慶上人』(平成17年)など。

◆学芸部研究員(担当分野別・五十音順)

担当分野	氏名・職名	自己紹介

PC 用ウェブサイト上の「研究員一覧」
研究員の専門分野と研究課題・調査成果が一目でわかる

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	ウエブサイトアクセス件数	3,121,270 件	670,948件	S		1,402,834	1,230,774	2,630,035	3,121,270

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	ウェブサイト等自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、広く国内外に情報を発信する。 ウェブサイトのアクセス件数は年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ることとする。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 6614

中項目	6　情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表　①ウェブサイト等による情報の発信			
担当者	担当部課	広報課 総務課	事業責任者	広報課長　不動勝義 総務課長　岩﨑英明
実績・成果	①ウェブサイト利用者からの意見に、九博メールで対応 ②特別展ごとに「ぶろぐるぽ」を実施 ③「九州国立博物館メールマガジン」の会員を 12 月末ウェブサイト等で募集した。 ④「九州国立博物館メールマガジン」創刊号を 1 月 15 日に配信し、今後、月２回配信予定。 ⑤混雑した「没後 120 年　ゴッホ展」において、ウェブサイト・携帯サイト等で混雑状況について情報提供をした。			
補足事項	②「ぶろぐるぽ」への記事の投稿件数 ・特別展『パリに咲いた古伊万里の華』　27 件 ・特別展『馬　アジアを駆けた二千年』　26 件 ・特別展『誕生！中国文明』　20 件 ・特別展『没後 120 年　ゴッホ展』　36 件 ③情報の一方的な提供とならないよう、会員参加型メールマガジンとする予定。また、情報毎にウェブサイトの該当頁にリンクすることで、個別情報の詳細については、ウェブサイトを閲覧するため、アクセス数の向上に寄与する。			

九州国立博物館メールマガジン

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	ウェブサイト アクセス件数	4,708,102 件	783,487 件	S	経年変化	5,943,616	5,699,860	7,459,518	4,708,102

年度実績 評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画 記載事項	ウェブサイト等自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、広く国内外に情報を発信する。 ウェブサイトのアクセス件数は年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ることとする。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 6621-1

中項目	6　情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表　②-1 デジタル化の推進			
担当者	担当部課	学芸企画部博物館情報課	事業責任者	博物館情報課長　高橋裕次

実績・成果

・列品管理データベースを更新し、列品情報の公開を行うためのデータ整備を推進した。
・収蔵品等のモノクロ画像のデジタル化を継続した。
・国指定文化財のデジタル撮影を集中的に実施し、既存の画像データについては編集・加工を行なった。また国指定文化財の情報と解説文を整備し、英、仏、中、韓の各国語に翻訳して公開した。
・国指定文化財について 3 次元計測によるデジタル化を実施した。
・法隆寺献納宝物のデジタルアーカイブの提供を継続した。

補足事項

○収蔵品等の写真の高精細デジタル化
・所蔵品等の 4×5 モノクロフィルムの高精細デジタル化を実施した。
・カラーのデジタルデータについては、来館者をはじめとする幅広い利用者の求めに応じて、利用に供した。
・マイクロフィルムについては、インターネットを通じた情報提供のためのシステムを導入した。
・マイクロフィルムについては昨年度デジタル化が完了したため 0 件となった。カラーおよびモノクロフィルムも完了し、今後は撮影そのものがフィルムからデジタル撮影に移行していく。
○国指定文化財 8 件について 3 次元計測を実施した。
○法隆寺献納宝物のデジタル高精細画像等の提供
・事業計画のとおり法隆寺献納宝物デジタルアーカイブの提供を継続した。

3 次元計測データ
(《十二神将立像 巳神》)

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
デジタルデータ作成件数	8,639 件	73,000 件 (18,829 件)	C		124,996	139,000	775,300	8,639
うちカラーフィルム	5,136 件	3,000 件	S		3,396	2,583	3,480	5,136
うちモノクロフィルム	3,503 件	10,000 件	C		0	14,817	23,639	3,503
うちマイクロフィルム	0 件	60,000 件	F		121,600	121,600	748,181	0
収蔵品の基本情報のデータ化	13 万字	30 万字	C		30万	55万3千	123万	13万

年度実績評価総括

S　A　Ⓑ　C　F
（S、Fの理由）

中期計画記載事項

収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すため、デジタル化を推進し、文化財情報システム等により広く積極的に公開する。また、収蔵品等に関するデジタル化件数は、年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにする。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 6622-1

中項目	６　情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表　②-1 デジタル化の推進			
担当者	担当部課	総務課	事業責任者	総務課長　植田義雄
実績・成果	・収蔵品のデジタルデータを作成し文化財情報システム及び公開収蔵品データベースへの登録を随時行い、当館デジタルアーカイブ及び公開情報サービスを行った。 ・重要文化財高精細画像公開システム「KNM GALLERY」で 21 年度より公開されている 6 カ国語（日英韓中仏西）による解説について、内容及び表示 方法等について修正を行った。			
補足事項	・マイクロフィルムのデジタル化及び X 線フィルムのデジタル化を併せて行った。 公開収蔵品データベース 重要文化財高精細画像公開システム「KNM GALLERY」			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	デジタルデータ作成件数	4,594 件	4,359 件	A		8,047	6,478	5,603	4,594
年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）								
中期計画記載事項	収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すため、デジタル化を推進し、文化財情報システム等により広く積極的に公開する。また、収蔵品等に関するデジタル化件数は、年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにする。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。				順調					

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 6623-1

中項目	6　情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表　②-1 デジタル化の推進			
担当者	担当部課	学芸部資料室	事業責任者	資料室長　宮崎幹子

実績・成果

本事業は、仏教美術を中心とする文化財に関わる情報資源の構築を図り、館内における調査研究に活用するとともに、館外研究者ならびに広く一般への公開をおこなうことを目的としており、このことを実施するために必要な情報システムやネットワークシステムの構築等、環境整備もあわせて行った。

データベース：

・調査および写真撮影をおこなった文化財について、情報システムへデータを入力し、5,190件登録・更新した。
・上記のうち公開準備のできたデータを写真データベースから2,892件公開した。
・21年度に正式公開した収蔵品データベースを更に充実させるため、データ整備を継続して行い、文字データ：98件、画像データ：1,273件を更新した。
・デジタル撮影の開始、デジタル画像の運用管理、情報公開を推進する準備作業として、写真情報システムのリニューアルを進めた。

画像データ：

・館蔵品・寄託品・その他の文化財について、カラーポジフィルム4,255枚、X線フィルム56枚をデジタル化した。

補足事項

・デジタル撮影の実施と、デジタル画像の外部提供を来年度から本格的に推進するにあたり、環境整備、人員確保の面で更なる充実が必要である。

金剛力士立像（東大寺蔵）
〈デジタル撮影〉

写真情報システム

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
登録データ	5,190件	2,000件	S		3,889	6,989	12,339	5,190
公開データ	2,892件	―	―		2,017	4,019	5,825	2,892
デジタル化件数	9,501件	8,471件	A		4,584	8,399	102,894	9,501

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F

（S、Fの理由）

中期計画記載事項

収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すために、デジタル化を推進し、文化財情報システム等により広く積極的に公開する。また、収蔵品等に関するデジタル化件数は、年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにする。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 6624-1

中項目	６　情報発信機能の強化

事業名	(6)　文化財情報・研究成果の公表　②-1　デジタル化の推進			
担当者	担当部課	文化財課	事業責任者	資料管理室長　小林　公治
実績・成果	①昨年度に引き続き、当館で収蔵している国指定文化財のうち 19 件の収蔵品のデジタル画像公開プログラムの制作を行った。これにより館内設置のパソコンおよびインターネットを通じた情報提供が可能となった。 ②独立行政法人国立文化財機構で制作、管理公開しているインターネット情報公開プログラムｅ国宝に当館が収蔵する国指定文化財の解説およびデジタル高精細画像を提供し、公開した。 ③収蔵品写真のデジタル化を行った。(1,391 件) ④当館所蔵の指定文化財のうち、国宝栄花物語についてその一部をカラーポジ撮影し、デジタル画像化を行っている。			
補足事項	①当館収蔵の国指定文化財情報のデジタル公開については、文化財解説および高精細画像に加え、当館が独自で所有する理化学機器（CT スキャニング、３Ｄ画像）による分析成果の情報提供や、高精細動画・イラストを活用した情報公開も行い、e国宝との差別化を図っている。 ②ｅ国宝については、すでにインターネット公開が行われている。 ③本年度は、民族資料や教育参考資料のデジタル画像撮影が一段落したためデジタル化件数は大幅に減っているが、ポジ撮影フィルムのスキャニング件数は例年と同程度数となる見込みである。 ④国宝栄花物語は、全 17 帖のうちの 2 帖の撮影を行い、残る 15 帖分の撮影についても今後検討する。	 栄花物語第 2 帖		

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	デジタルデータ作成件数	1,391 件	1,900 件	B	経年変化	3,295	3,963	3,574	1,391

年度実績評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く記録を残すために、デジタル化を推進し、文化財情報システム等を活用してより広く積極的に公開する。また、収蔵品等に関するデジタル化件数は、当該期間の平均数が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにする。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 6621-2

中項目	6　情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表　②-2 情報・資料の収集・蓄積、レファレンス機能の充実			
担当者	担当部課	学芸企画部博物館情報課	事業責任者	博物館情報課長　高橋裕次

実績・成果

・資料館における美術史等の情報・資料の公開のため、図書資料等のデータ整備を推進した。
　データ整備件数：新規図書 7,345 冊、逐次刊行物 4,684 冊、遡及入力 7,836 冊
・資料館において資料の閲覧、複写およびレファレンスサービスを継続して実施した。
・法隆寺宝物館において、観覧者向け図書コーナーサービスを継続した。
・調査・研究・教育などに有益な情報及び関係資料を収集した。
　収集件数：購入図書 514 冊、寄贈・交換図書 6,831 冊、館蔵品等の写真資料 5,577 枚
・閲覧室開架書架の増設（22 年 4 月）および埋蔵文化財報告書等の移動（23 年 3 月）を行った。またそれに伴い所在データを更新し、館内配置図を作成した。
・有料ゾーンからの資料館入退館経路の検討を行った。
・震災の影響として直接の被害はなかったが、安全確認と社会的諸事情に鑑み、23 年 3 月 14 日～31 日まで臨時休館した。23 年 4 月末まで休館の予定である。

補足事項

〈収集〉
・東京国立博物館の収蔵品に関連する分野を中心に、博物館の調査研究、展示、教育普及、保存修復等の業務に必要な資料および一般利用者の利用に供するための資料を収集した。新規購入図書については購入希望図書を元に候補リストを作成し、合同会議で了承を得て購入している。
・国指定文化財のデジタル撮影を集中的に実施し、約 5,500 カットの画像を作成した。

「資料館所蔵資料紹介コーナー」

〈データ整備〉
・新規受入図書とは別に、遡及入力を行い、漢籍（線装本）2,634 冊、洋貴重書 973 冊、複製本 219 冊、個人文庫 2,412 冊など、計 7,836 冊の既存図書のデータを作成した。
・東京国立博物館開催の展覧会の出品作品のデータベース化をすすめ、データの蓄積に努めた。
・雑誌等の製本 422 冊を実施した。

〈公開〉
・国立情報学研究所の目録所在情報サービス(NACSIS-CAT)および美術館図書室横断検索に継続して参加し当館蔵書への検索サービスの向上に努めた。
・東京国立博物館刊行図書・等の目次・論文データの入力を継続して行った。
　（OPAC 公開数：図書約 18 万冊、雑誌約 6 千タイトル、目次・論文データ約 6 千件）
・図書資料の展示コーナーおよび新着書架において、所蔵資料の紹介（年 6 回）、月毎の新着資料の展示、展覧会関連図書の展示を行った。
・新着図書の案内等のライブラリーニュースを随時発信した。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
収蔵品等の写真撮影･関連データ整備	11,114 件	－	－		3,642	4,721	16,567	11,114
うちフィルム撮影	5,577 件	3,000 件	S		3,642	4,703	4,177	5,577
うちデジタル撮影	5,537 件	－	－		0	18	12,390	5,537
新規図書整理	7,345 件	－	－		4,013	7,781	3,411	7,345
遡及図書整理	7,836 件	－	－		4,574	5,709	11,105	7,836

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F
（S、Fの理由）

中期計画記載事項

美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能を充実させる。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 6622-2

中項目	６　情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表　②-2 情報・資料の収集・蓄積、レファレンス機能の充実			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　若杉準治
実績・成果	・平成21年度に構築した蔵書検索システムの不具合を訂正しながら整備を進めた。 ・平成21年度に構築した文化財情報システム（所蔵作品検索システムと学芸業務支援システムを兼ね備えたシステム）の不具合を訂正しながら整備を進めた。・ ・収蔵品、展覧会出品作品等の撮影写真、及び社寺調査等での撮影写真並びに関連データを整備した。 ・写真は漸次写真画像管理システムに登録し、各種データベースへの二次提供を行った。 　登録件数　3,379件 ・特別観覧件数　　972件			
補足事項	・蔵書検索システムと文化財情報システムの整備については、情報システム検討委員会で常に問題点を共有しながら行った。 ・平常展示館建て替え工事中のため、収蔵庫と写場が離れており、展示室が開館している時間帯は作品の移動ができないため、撮影日程の調整に苦慮した。 ・今年度は、特別展関係の撮影が例年より少なかったことで、原板登録枚数が減少した。 『長谷川等伯』　前年度に先行調査撮影した 『上田秋成』　既撮作品が多かった 『高僧と袈裟』　大型作品のため、数年度にわたって旧写場にて先行撮影した 『筆墨精神』　館蔵品が多く既撮作品が多かった ・デジタル画像の提供は、別途「@KYOTOMUSE Digital Archives」(artize.net) を介し継続的に行っている。			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	収蔵品・出品作品等の写真撮影及び関連データの整備	3,379 件	約 5,000 件	C	経年変化	4,256	6,478	3,753	3,379

年度実績評価総括	Ｓ　Ａ　Ｂ　Ⓒ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画記載事項	美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能を充実させる。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 6623-2

中項目	6　情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表　②-2 情報・資料の収集・蓄積、レファレンス機能の充実			
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	資料室長　宮崎幹子

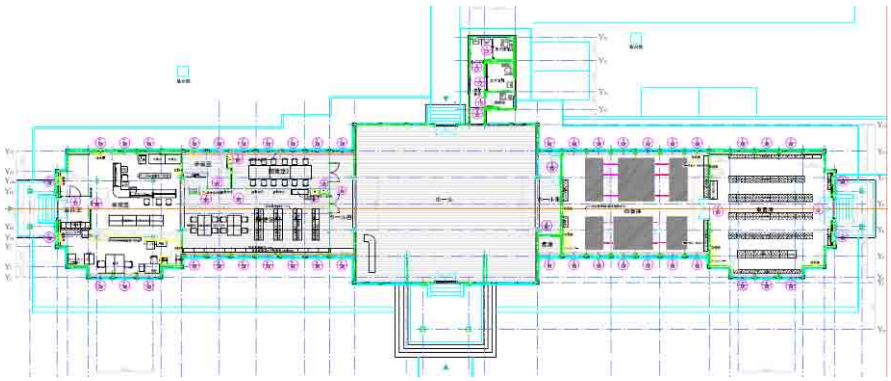
実績・成果

本事業は、博物館の根幹である展示・研究活動を支援すべく、関連する図書・雑誌等の資料を収集・整理し、学芸部の情報資料として活用するものである。また一般利用者に対しても当該資料を当館仏教美術資料研究センターにおいて公開し、サービスをおこなう（今年度は耐震補強工事により休館中で、来年度7月再開を目指し準備している）。

・昨年度に引き続き、旧地下通路に新たに確保した収蔵スペースに全資料を移動して、館内利用を継続している。現在会議室の一角を仮事務室として受入・登録作業をおこない、年度末の工事完了後の引越にむけて整理作業に人員と時間を要しているため、現在までの新規受入は、図書777冊、展覧会カタログ40冊に留まっている。
・今年度より、デジタル撮影を開始し、特別展『大遣唐使展』および『至宝の仏像』の開催に合わせ大量のデジタル撮影をおこなった。デジタル撮影：5,663カット。
・昨年度に導入した図書情報システムによる受入・登録作業を継続しておこない、業務の効率化とサービスの向上を図っている。新システムへの移行作業は順調に進み、既に通常業務に活用しているが、来年度のセンター再開にあわせ、目録情報のインターネット公開を目指しており、館内での成果が外部への情報公開に効果的に反映されるよう、更なる情報整備に努めている。
・同センターの保有する資料の総数は図書約67,000冊、展覧会カタログ約10,000冊、雑誌約3,000タイトルとなっている。今年度は昨年度に引き続き、特別展『大遣唐使展』の開催に関連して、中国仏教関係・対外交流関係の資料を重点的に収集し、不足していた領域の資料の充実を推進させることができた点も特筆される。
・センターの耐震補強工事を機会に、書庫および閲覧室のレイアウトの全面的なリニューアルをおこなった。年度内に新規に集密書架、固定書架を導入する計画である。これにより、情報資料の利用環境を更に充実させることが叶い、センター再開時に向けて更なるサービスの拡充を進める予定である。

補足事項

従前より仏教美術に関する資料の充実化をはかっているが、関連研究分野の拡張化や学際化が近年著しく、新たな分野の資料の強化・整備がさらに必要である。今後とも、仏教美術関係の資料収集はもとより、多様な資料の蓄積をはかると共に、効率のよい資料整理・公開の方法について検討し、仏教美術の研究拠点に相応しい運営と情報公開を進める必要がある。



仏教美術資料研究センターの新レイアウト

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
図書	1,271件	—	—		2,280	1,520	1,129	1,271
展覧会カタログ	183件	—	—		532	489	248	183
収蔵品・出品作品等の写真撮影・関連データの整備	11,684件	—	—		3,240	6,457	5,818	11,684
うちフィルム撮影	1,725件	3,000	C		3,240	6,457	5,818	1,725
うちデジタル撮影	9,959件	—	—		—	—	—	9,959

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能を充実させる。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 6624-2

中項目	6　情報発信機能の強化

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表　②-2 情報、資料の収集・蓄積、レファレンス機能の充実			
担当者	担当部課	文化財課 交流課	事業責任者	資料管理室長　小林公治 主任研究員　池内一誠
実績･成果	①収蔵品・出品作品等のポジ写真撮影および関連データを整備した。(2,784 件) ②海外調査で撮影した写真やビデオ、また収集した体験用資料を展示や教育普及活動で活用するための整備を行った。 ③対馬宗家文書データベースの効率的な運用を検討し、実施した。 ④博物館資料（収蔵品、図書、写真など）データベースにおける業務の効率化に向けて、現行業務システムを全面的に見直し、より充実した第２次業務システム構築を行った。			

補足事項

①収蔵品・出品作品などについてフィルム撮影のほか、撮影データの収集に努め、画像データベースの充実を図った。

②情報、資料の収集による展示や教育普及活動

・特別展や館内イベントの開催等にあわせ、体験型展示室「あじっぱ」で使用するハンズオン資料の収集を継続して行った。モンゴル関係資料 171 件、ウズベキスタン関係資料 136 件、インドネシア関係資料 7 件、日本関係資料 28 件（四季の風俗関係 28 件）、タイ関係資料 20 件、合計 362 件のハンズオン資料を収集し、随時展示に活用している。

・体験用資料収集にあわせて、現地において「あじっぱ」資料についての情報を収集し、展示に反映させた。体験資料収集先のモンゴル・ウズベキスタンにおいて、現地の遊牧民・民族楽器演奏家・工房職人等から各資料の制作方法･使用方法等について直接聞き取りを行ったほか、作業工程を映像および静止画像に収めることができた。また、タイ国政府観光庁、福岡・ウズベキスタン友好協会からも生活文化や資料についての情報を得ることができた。現地で撮影した静止画像の一部は立体写真に加工して既に「あじっぱ」で紹介しており、映像や音声についても今後「あじっぱ」で紹介できるよう加工する予定である。

④博物館資料（収蔵品、図書、写真など）の横断的データベース

・旧業務システムの問題点改良や対応していない機能への拡充などを目的として、来年度に新規業務システムの構築と運用開始を予定している。またこれと同時に、購入・寄贈・寄託品や借用などによる収蔵品の異動データや図書データは随時入力して、システム移行に伴う欠落や不便が生じないように対応した。

・現状システムの館内閲覧提供に加え、来年度計画している新規業務システムの構築･運用に向けた暫定システムの設計整備運用を行った。

収蔵品写真撮影風景

「あじっぱ　モンゴル屋台」

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
収蔵品・出品作品等の写真撮影および関連データ整備件数	2,784 件	600 件	S		12,556	6,633	4,686	2,784
うちフィルム撮影	1,357 件	—	—					1,357
うちデジタル撮影	36 件	—	—					36
うちデジタルデータ作成件数	1,391 件	—	—					1,391
ハンズオン資料	362 件	—	—			136	161	362

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図ると共に、レファレンス機能を充実させる。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 7111

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.81

中期計画の項目	7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	無形文化遺産に関する助言（(1)）		
【事業概要】 地方公共団体等の依頼に基づき、それらの実施する無形文化財・無形民俗文化財の調査・保存・修復・整備・活用などの事業に対し助言を行う。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長　宮田繁幸
【スタッフ】 高桑いづみ、飯島　満、俵木　悟、菊池理予（以上、無形文化遺産部）			
【主な成果】 平成 22 年度は、無形文化遺産の保存・伝承・活用等に関して、文化庁伝統文化課に対する無形文化遺産保護条約に関する助言をはじめ、26 件の助言を実施した。			
【年度実績概要】 平成 22 年度は、無形文化遺産の保存・伝承・活用等に関する各種委員会等へ出席し、以下の助言を行った。 1 文化庁伝統文化課　3 件 2　㈶伝統文化活性化国民協会への助言　3 件 3　㈶日本青年館への助言　4 件 4　日本芸術文化振興会への助言　3 件 5　静岡県教育委員会への助言　3 件 6　日本放送協会への助言　1 件 7　日本ユネスコ協会連盟への助言　3 件 8　外務省広報文化交流部国際文化協力室への助言　1 件 9　早稲田大学演劇博物館への助言　1 件 10　神田鍛冶町 1 丁目町会への助言　4 件			
【実績値】			
【備考】			

【書式Ｂ】
(様式 2)

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　7111

自己点検評価調書

研究所 No.81

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
備考						

2．定量的評価

観点	助言件数					
判定	A					
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本事業は、依頼を受けて行うものであり、あらかじめ個々の助言について予定することは出来ないが、本年度も各種委員会等への出席及び助言の依頼がコンスタントに寄せられており、無形文化遺産分野での様々な要望に的確に対応できたものと考える。以上の状況を総合的に判断して、Ａと判定した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	例年通り、多様な助言依頼に対応できており、計画は順調に達成できた。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 7112

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.82

中期計画の項目	7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上
プロジェクト名称	文化財の修復及び整備に関する調査・助言（(1)）

【事業概要】

地方公共団体等の実施する文化財の調査・保存・整備・活用などの事業に対して援助・助言するために、文化財の修復及び整備に関する調査を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター副センター長　川野邊　渉

【スタッフ】

中山俊介、北野信彦、早川典子、加藤雅人、森井順之（以上、保存修復科学センター）、坪倉早智子（客員研究員）

【主な成果】

今年度は、件数として４０件を数え、指導助言先やその内容も多岐にわたり、複数回の指導助言に及んだ。今後も継続して指導助言を実施し適正に文化財が保存修復されるように努めるとともに、私たちも新たな知見を得て、的確な指導助言が行えるように努力する。

【年度実績概要】

・国宝高松塚古墳壁画の保存修復に関する指導助言　（川野邊　渉、北野信彦、加藤雅人、早川典子、森井順之）
・特別史跡・キトラ古墳壁画の保存修復に関する指導助言　（川野邊　渉、北野信彦、加藤雅人、早川典子、森井順之）
・厳島神社の保存修復に関する指導助言　（川野邊　渉、北野信彦、早川典子、森井順之）
・国宝臼杵磨崖仏の保存修復に関する指導助言　（川野邊渉、森井順之、早川典子、朽津信明）
・国宝都久夫須麻神社本殿の蒔絵修理に科する指導助言(北野信彦)
・国宝都久夫須麻神社本殿の彩色修理に科する指導助言(北野信彦)
・国宝瑞巌寺本堂の塗装彩色修理に関する指導助言(北野信彦)
・国宝三十帖冊子の修理材料選択に関する指導助言（早川典子）
・重要文化財・霧島神宮本殿の修復に関する指導助言　（川野邊渉、早川典子、森井順之）
・史跡大分高瀬石仏の保存修復に関する指導助言　（川野邊渉、森井順之）
・史跡大分元町石仏の保存修復に関する指導助言　（川野邊渉、森井順之）
・重要文化財・０．５ｔ及び３ｔスチームハンマーの修復後モニタリングに関する指導助言（森井順之）
・重要文化財大谷磨崖仏の保存環境に関する指導助言（森井順之）
・日光二社一寺の世界遺産環境モニタリングに関する指導助言　（川野邊渉、森井順之）
・重要文化財岩崎邸金唐革紙に使用された塗料の分析（中山俊介、北野信彦、早川典子）
・重要文化財三河島鉄扉に使用されていた塗料の分析（中山俊介、早川典子）
・史跡佐渡金銀山遺跡の保存管理計画に関する指導助言（中山俊介）
・史跡韮山反射炉の保存修復に関する指導助言（中山俊介）
・史跡萩反射炉の保存修復に関する指導助言（中山俊介）
・重要文化財旧手宮鉄道施設の保存修復に関する指導助言（中山俊介）
・重要文化財旧日本郵船小樽支店の保存修復に関する指導助言（中山俊介）
・天野山金剛寺所蔵重要文化財大日如来像座像の修理に関する指導助言（川野邊渉、早川典子）
・東京都指定文化財候補地の史跡整備に関する指導助言(北野信彦)
・京都市中出土歴史資料の保存修復及び分析に関する指導・助言　（北野信彦）
・函館市立博物館所蔵革製上衣クリーニングに関する指導助言（早川典子）
・鳥取県指定有形民俗文化財「長谷寺の絵馬群」の保存修復に関する助言（加藤雅人）
・東京都中央区所蔵「震災橋梁復興図面」の保存修復に関する助言（加藤雅人）
・広島東照宮唐門部材表面の顔料調査に関する指導助言(北野信彦)
・熊本博物館所蔵赤色顔料付着瓦の調査に関する指導助言(北野信彦)
・松江歴史館整備事業に伴う近世出土漆製品の整理に関する指導助言(北野信彦)
・高知城下町西広小路遺跡出土漆製品の整理及び分析に関する指導助言(北野信彦)
・有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土漆器の調査に関する指導助言（北野信彦）
他

【実績値】

指導助言実施件数　：　４０件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　7112

自己点検評価調書

研究所 No.82

１．定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性			
判定	A	A	A			
備考						

２．定量的評価

観点	指導助言件数					
判定	A					
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	重要文化財を含む各種文化財の保存修復に関して、それぞれの保有団体、所有者の方々あるいは修復を担当する団体に対して、指導助言を行った。またその過程において、私たちも、現地を調査する機会を得、更に知見を得ることが出来た。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度は、件数は４０件と昨年よりも上回った。また、その内容も多岐にわたり、複数回の指導助言に及んだ。今後も継続して指導助言を実施し適正に文化財が保存修復されるように努めるとともに、私たちも新たな知見を得るように努力する。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 7113

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.83

中期計画の項目	7　地方公共団体等への協力等による文化財保護の質的向上
プロジェクト名称	地方公共団体等が行う史跡の整備、復原事業等に関する技術的助言　（(1)）

【事業概要】

地方公共団体等が行う遺跡、建造物等の調査・整備・修復・保存等について、専門委員会委員への就任等を通して、必要な事項に関し援助・助言を行う。

【担当部課】	奈良文化財研究所	【プロジェクト責任者】	所長　田辺征夫

【スタッフ】

【主な成果】

地方公共団体等が行う文化財の調査・保存・修復・整備・活用等の事業について、専門委員会委員への就任等を通して、建造物修理、史跡整備、出土文字資料調査、発掘調査等に関する専門的・技術的な助言を行った。援助・助言実施件数（出張依頼を受けた件数）332 件（委員会出席 159、審議会出席 18、指導 73、調査 19、講演 28、その他 35）

【年度実績概要】

地方公共団体等が行う文化財の調査・保存・修復・整備・活用等の事業について、専門委員会委員への就任等を通して、建造物修理、史跡整備、出土文字資料調査、発掘調査等に関する専門的・技術的な助言を行った。

①地方公共団体等による文化財建造物等の調査、修復、整備について、学術的、技術的側面からの具体的な援助・助言を現地等で行った。(「宇治の文化的景観」における伝統的建造物の保存・整備に関する調査研究、相川地区文化的景観　景観変遷・景観構造調査、京都岡崎の文化的景観に関する保存計画策定調査、「宇治の文化的景観」整備に伴う宇治橋通りの調査研究、萬翠荘に係る学術調査、倉見屋荻野家住宅調査など)

②地方公共団体等による遺跡の発掘調査における調査方法や検出した遺構の性格、建物遺構の構造的特徴についての援助・助言、遺跡・名勝などの保存管理や整備事業に係る調査、価値評価、実施内容、構想・計画の立案などの援助・助言を行った。(小谷地遺跡出土遺材についての建築史的研究、第一次大極殿院建造物復元整備にかかる調査委託、天良七堂遺跡の総合的探査、平成 22 年度大宰府史跡・蔵司地区における総合的探査業務、三軒屋遺跡総合的探査、埋蔵文化財発掘調査に係る青銅器科学分析業務委託、田熊石畑遺跡武器形青銅器の保存処理及び保存台作製、宇治橋擬宝珠成分分析、土壌水分の蒸発による史跡ガランドヤ古墳石室内環境の変化に関する調査、東名遺跡出土動物遺存体調査、長割遺跡の動物遺存体調査、六反田南遺跡Ⅳにおける動物遺存体の同定、永保寺開山堂の年輪年代調査など)

③文化庁事業「発掘調査の手引き」の刊行は、１９６６年の初版以来、改訂が重ねられ、平成２１年度には、「集落遺跡発掘編」及び「整理・報告書編」が刊行されたところである。このたび、本研究所は文化庁の委託を受けて、文化庁文化財部記念物課及び地方公共団体と協同して、「(仮称) 発掘調査の手引き－集落遺跡以外の発掘調査編－」の作成作業を行った。

【実績値】

援助・助言実施件数（出張依頼を受けた件数）　　332 件

（委員会出席 159、審議会出席 18、指導 73、調査 19、講演 28、その他 35）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　7113

自己点検評価調書

研究所 No.83

１．定性的評価

観点	継続性	適時性	発展性			
判定	A	A	A			
備考 継続性：依頼機関への対応 適時性：実施業務に適時・適切に対応 発展性：的確な援助・助言による実施業務の順調な実現						

２．定量的評価

観点	援助・助言実施件数					
判定	A					
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	地方公共団体等が行う遺跡、建造物などの調査・整備・修復・保存等に関して、援助・助言を的確に行うことができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	現在、全国で行われている遺跡の発掘調査、保存・整備・復原事業や、建造物の調査、修理事業について、各担当機関から専門的な援助・助言を求められ、適時・適切に対応している。奈文研に対する社会的要求に応えるべく、今後も的確に対応する。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 7114
（様式 1）

業務実績書

研究所 No.84

中期計画の項目	7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上
プロジェクト名称	地方公共団体が行う平城京域発掘調査への援助・助言（(1)）

【事業概要】
平城宮跡の隣接地や平城京の寺院跡などの重要地区内において、近年とみに小規模開発が進んでいる。この開発に対して宮及び宮周辺における奈良時代を含む各時代の土地利用の実態把握と遺構深度などを明らかにする目的で発掘調査を実施した。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人

【スタッフ】
小池伸彦、国武貞克、芝康次郎、神野恵、森川実、城倉正祥、中村亜希子、清野孝之、今井晃樹、中川あや、渡辺晃宏、馬場基、浅野啓介、桑田訓也、箱崎和久、大林潤、鈴木智大、海野聡［以上、都城発掘調査部］

【主な成果】
平成 22 年度は、平城宮・京域で、計８件の発掘調査を実施した。その結果、平城宮跡西北部では、平城宮の造作にともなう可能性がある奈良時代の整地土を検出し、平城京左京一条二坊十六坪では古代の柱穴 5 基と、土器や瓦を多量に含む南北溝 1 条を検出した。また、西大寺旧境内では古代と考えられる土坑 1 基と、Ｌ字状に屈曲する溝 2 条を検出した。

【年度実績概要】
平城宮に密接に関連する平城京域発掘調査への援助・助言は総数５件あり、そのいずれも開発行為に対する事前発掘調査である。発掘の総面積は 105 ㎡、調査期間は平成 22 年 5 月 6 日～平成 23 年 3 月 17 日の間で、延べ 40 日におよぶ。

次数	調査地	調査原因	面積	期間	概要
470	平城京右 3.1.15	住宅建設	26 ㎡	100506～100513	中世以降の柱穴、土坑、落ち込みを検出。
471	平城宮跡西北部	住宅建設	7.5 ㎡	100517～100518	奈良時代の可能性がある整地土を確認。
472	平城京左 1.2.16	住宅建設	28 ㎡	100531～100604	古代の柱穴 5 基と南北溝 1 条を検出。
473	西大寺旧境内	住宅建設	15 ㎡	100922～101001	古代と考えられる土坑 1 基と、L 字状に屈曲する溝 2 条を検出。
479	興福寺旧境内	住宅建設	18 ㎡	110308～110317	時期不明の庭園とみられる深さ 40 ㎝の落ち込みを検出。
480	平城宮北方	住宅建設	10.5 ㎡	110215～110302	古墳の墳丘の一部と周溝を検出した。

【実績値】
論文等数　：１件（①）
出土品　　：瓦磚など５箱、土器５箱、金属器・木器・石製品など１箱
記録作成数：実測図 18 枚、遺構写真（4×5）18 枚

【備考】
①中村亜希子「平城京左京一条二坊の調査―第 472 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定）

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　7114

自己点検評価調書

研究所 No.84

１．定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性			
判定	A	A	A			

備考
適時性：奈良県教育委員会および奈良市教育委員会の要請に迅速に対応し、発掘調査を実施した。
継続性：データ収集のため、規模の大小にかかわらず発掘調査を継続的に実施した。
正確性：文化財行政に協力し、正確な調査を実施した。

２．定量的評価

観点	援助・助言 実施件数					
判定	A					

備考
対象地区内の開発行為に、すべて対応した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	地方公共団体から要請のあった緊急性を要する発掘調査に効率よく対応し、平城宮・京についての基礎資料を継続的に蓄積していることからＡと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平城宮・京の構造や変遷を検討するために有効な基礎データを得た。

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 7115

(様式 1)

業務実績書

研究所 No.85

中期計画の項目	7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
プロジェクト名称	地方公共団体が行う飛鳥・藤原地区の発掘調査への援助・助言（(1)）		

【事業概要】

飛鳥・藤原地域は、わが国古代国家成立期の舞台であり、６世紀末から８世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、地方公共団体と連携し、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果を広く公開するとともに、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】

玉田芳英、次山 淳、降幡順子、石橋茂登、山本 崇、廣瀬 覚、青木 敬、木村 理恵、小田裕樹、若杉智宏、高橋 透、森先一貴、庄田慎矢、諫早直人、石田由紀子、黒坂貴裕、番 光、高橋知奈津［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区)］、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛［以上、企画調整部］、高田貫太［国立歴史民俗博物館］

【主な成果】

藤原宮跡において地方公共団体が行う発掘調査への援助・助言の事業は６件あり、主に現状変更に対する事前調査である。緊急性を要する事前調査に効率よく対応し、藤原宮ならびに飛鳥・藤原地域についての基礎資料を継続的に蓄積している。特に、藤原宮跡東方官衙南方の調査では、掘立柱建物２棟、掘立柱塀１条、宮造営にかかわるとみられる南北溝１条などを確認した。

【年度実績概要】

藤原宮跡および飛鳥・藤原地域において地方公共団体が行う発掘調査への援助・助言の事業は６件あり、主に特別史跡内の現状変更に対する事前調査である。

次　数	調査地	調査原因	面積	調査期間	概　要
162-1次	藤原宮跡東方官衙南方	住宅建設	28㎡	2010.4.22～4.30	掘立柱建物等検出
162-2次	藤原宮跡大極殿院南門他	現状変更	4㎡	2010.4.28	遺構面に達せず。
162-3次	雷丘	植栽整備	4,049㎡	2011.2.4	遺構面に達せず
162-4次	藤原宮跡内裏・大極殿院	現状変更	18㎡	2011.3.4、3.15	遺構面に達せず
162-5次	和田廃寺	道路拡幅	32㎡	2011.3.9	既調査の遺構面を確認
162-6次	山田寺跡	水路改修	35㎡	2011.3.23～3.25、3.29、3.30	瓦組暗渠等検出

以下、藤原宮跡東方官衙南地区でおこなった調査（第 162-1 次）の成果を述べる。

本調査では、藤原宮期と推定される建物や塀を複数確認した。なかでも SB10920 は柱穴規模が大きく、正殿クラスの大型建物と推定され、ここが官衙中枢部であった可能性を示唆する。既往の調査で、藤原宮大極殿造営に先行して南北方向の運河 SD1901A をはじめ、宮造営にかかわる水路が設けられていたことが明らかになっている。今回の調査で、宮域全体の整地以前に南北方向の溝 SD10924 が確認された。層位からみて本遺構は、藤原宮造営期の大型溝である可能性がたかい。なお、調査区内では、遺構の重複関係から４期にわたる遺構変遷が考えられる。

第 162-1 次調査区全景（南から）

出土遺物は、古代の土器以外に縄文時代前期の土器がまとまって出土したことが特記される。近傍では類例が稀少であり、調査区および周辺で縄文時代前期から土地利用があったことがはじめて推定できた。

【実績値】

論文等数　２件（①・②）
出土遺物　土器コンテナ１箱、丸平瓦コンテナ１箱、石器コンテナ１箱（以上 162-1 次）
記録作成数　遺構実測図３枚、写真（4×5）６枚（以上 162-1 次)、遺構実測図３枚（162-6 次）

【備考】

① 「2010 年度 都城発掘調査部（飛鳥藤原地区）小規模調査等の概要」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定）
② 青木　敬「東方官衙南地区の調査―第 162-１次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定）

【書式Ｂ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　7115

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No.85

1．定性的評価

観点	適時性	継続性				
判定	A	A				

備考

適時性：開発行為に対する迅速性、地方公共団体の文化財行政に対する協力。

継続性：飛鳥・藤原地域に関する遺跡情報の収集のために、規模の大小にかかわらず、調査を継続して行った。

2．定量的評価

観点	援助・助言数					
判定	A					

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	年間６件の案件に対して、迅速かつ適切に対応し、地方公共団体の行う埋蔵文化財行政に対して協力することができた。また、これらの調査を通して継続的に遺跡のデータを収集し、蓄積を図ったことから、総合的に A と判定した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性を要する事前調査に効率よく対応し、藤原宮並びに飛鳥・藤原地域についての基礎資料を継続的に蓄積している。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 7211
（様式１）

業務実績書

研究所 No.86

中期計画の項目	７　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上
プロジェクト名称	埋蔵文化財担当者研修（（２）―①）

【事業概要】
地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者に対する研修を実施する。
研修受講者のうち平均８０％以上の者から「有意義だった」、「役に立った」と評価されるよう研修内容の充実を図る。

【担当部課】	企画調整部 研究支援推進部総務課	【プロジェクト責任者】	企画調整部長　難波洋三 総務課長事務取扱　多 昭彦

【スタッフ】
森本　晋［企画調整部］、廣中保彦、宮本隆行、岩永恵子、橋本牧枝［以上、研究支援推進部］
（研修内容に応じ、研究所職員の適任者及び外部の学識経験者が講師を行っている。）

【主な成果】
遺跡の発掘調査や保存・整備等に関し、必要な知識と技術の研鑽を図るため、地方公共団体等の埋蔵文化財担当者を対象として、専門研修１１課程の研修を実施し、延べ１３７名が受講した。
研修受講者全員に対するアンケート調査では、全員から「有意義だった」「役に立った」との回答を得ており、充実した研修が実施できた。

【年度実績概要】
専門研修１１課程を実施し、延べ１３７名が受講した。
また研修受講者に対し、「今回受講した研修が『有意義だった』あるいは『役に立った』と思うか、思わないか」のアンケート調査を行った結果、１００％の者から『思う』の回答を得た。

		実施期日（日数）				定員	受講者数	満足度
専門研修	建築遺構調査課程	6月14日	～	6月18日	（5日）	12 名	16名	100%
	古代・中近世瓦調査課程	9月 1日	～	9月 7日	（7日）	15 名	18名	100%
	三次元計測課程	9月27日	～	10月 1日	（5日）	10 名	11名	100%
	保存科学Ⅰ（無機質遺物）課程	10月 6日	～	10月15日	（10日）	10 名	12名	100%
	保存科学Ⅱ（有機質遺物）課程	10月18日	～	10月26日	（9日）	10 名	5名	100%
	遺跡地図情報課程	11月16日	～	11月19日	（4日）	16 名	5名	100%
	自然科学的年代決定法課程	11月29日	～	12月 3日	（5日）	12 名	5名	100%
	報告書作成課程	12月 9日	～	12月17日	（9日）	16 名	26名	100%
	出土文字資料調査課程	1月17日	～	1月21日	（5日）	10 名	15名	100%
	中近世城郭調査整備課程	1月27日	～	2月 3日	（8日）	20 名	18名	100%
	生物環境調査課程	2月15日	～	2月23日	（9日）	12 名	6名	100%

【実績値】
実施課程数　11 課程
受講者数　137 人
受講者の満足度　100%

【備考】
7/6～7/22 実施予定であった文化財写真Ⅰ（基礎）課程及び 7/22～8/5 実施予定であった文化財写真Ⅱ（応用）課程については、受講希望者が定員（各 10 名）を大幅に下回ったため中止した。

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　7211

自己点検評価調書

研究所 No.86

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	B	A	A	A	A	

備考
適時性：研修の需要・必要性、公共性、緊急性への対応
独創性：研修内容のオリジナリティ、新規性、卓越性
発展性：発掘・保存・整備等に関する技術の全国的な水準向上
効率性：時間的投資、人的投資、設備的投資上の効率性
継続性：研修の継続的な実施

２．定量的評価

観点	研修実施回数	受講者数	受講者の満足度			
判定	B	B	A			

備考
実施課程数　11 課程
受講者数　137 人
受講者の満足度　80%以上

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度の埋蔵文化財担当者研修は、当初予定していた１３課程のうち２課程（文化財写真課程）を大幅な定員割れを理由に中止したこと、また、受講者数も連動して、年度計画の延１６０人に対して１３７人という結果となったが、満足度を評価して総合評価をＡとした。当該課程の受講希望者が極めて少なかった理由としては、本務の都合等やむを得ない事情もあったかと思われるが、これまで継続してきた研修の問題点が、適時性及び独創性という課題となって現れたものと考える。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度の研修実績について、受講者に対するアンケートでは、「今回受講した研修が『有意義だった』或いは『役に立った』」と『思う』との回答が１００％という結果ではあったが、文化財写真課程において大幅な定員割れが生じた。 本研究所では、この現実を真摯に受けとめ、次期中期計画策定に向けて、我が国の文化財保護行政のなかで、本研究所が研修を通して担うべき役割、並びに受講者側のニーズを最大限に反映させる研修の在り方について検討を重ねるとともに、各地方公共団体に対してアンケート調査も実施した。 次期中期においては、その結果を踏まえ、名称も「文化財担当者研修」にあらためて、真に地方公共団体が求める研修、さらには厳しい財政事情のなか、対費用効果も十分に勘案しながら研修事業の充実を図りたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 7221
（様式 1）

業務実績書

研究所 No.87

中期計画の項目	7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上
プロジェクト名称	博物館・美術館の保存担当学芸員研修（(2)-②）

【事業概要】
近年、全国の博物館や美術館など文化財保存施設の多くにおいて、資料保存を担当する職員が配置されているが、専門教育を受けたものは少なく、また学ぶ機会も多くはないのが現状である。当研修は、資料保存担当者に、自然科学的見地からの文化財保存に関する基礎的かつ幅広い知識や技術を講義および実習を通じて学んでいただき、その資質の向上をもって文化財の保護に資することを目的とし、開催するものである。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長　石﨑武志

【スタッフ】
佐野千絵、早川泰弘、木川りか、吉田直人、犬塚将英（以上、保存修復科学センター）

【主な成果】
第 27 回保存担当学芸員研修、保存担当学芸員フォローアップ研修、第 15 回資料保存地域研修、および「博物館資料保存論」対策講座を実施し、いずれも高い満足度を得た。

【年度実績概要】
今回で 27 回目となる「博物館・美術館等保存担当学芸員研修」を 7 月 13 日から 7 月 24 日の 2 週間実施した（参加者 33 名）。前半週では主に保存環境や生物被害対策に関する講義と実習を行い、後半週では、文化財の種類ごとの劣化と修復に関する講義を中心とするカリキュラム構成で研修を行った。保存環境実習の現場実践として行う「ケーススタディ」は袖ヶ浦市郷土博物館で実施し、4 人ないし 5 人ずつのグループがそれぞれ実習テーマを設定し、温湿度や害虫管理などに関して調査を行い、結果を発表、質疑応答を行った。この研修により、受講生は、資料保存に対する基礎的な知識と、方法論を習得した。

今年度は他に下記にあげる 3 つの研修会を行った。

・「保存担当学芸員フォローアップ研修」
保存担当学芸員研修受講経験者を対象に、保存環境に関する新しい知見や情報を伝えることを目的とし、LED、微生物調査、木材からの化学物質測定法に関する講義を行った（参加者 97 名、満足度 99%）。

・「第 15 回資料保存地域研修」
12 月 13 日、高知県歴史民俗資料館において開催し（高知県教育委員会との共催）、温湿度や照明といった保存の基礎に関する講義を行い、好評を得た（参加者　76 名、満足度 98%）。

・「博物館資料保存論対策講座」
平成 24 年度より、大学・短大の学芸員課程で必須となる「博物館資料保存論」を担当する予定の大学教官や外部の非常勤講師を対象に、講義内容に関する情報を提供する目的で、3 月 8 日から 10 日までの 3 日間実施した。（参加者　81 名、満足度 93.5%）。

【実績値】
実施回数　１回　研修受講者数　３３名　受講者の満足度　１００％

【備考】

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　7221

自己点検評価調書

研究所 No.87

1．定性的評価

観点	適時性	継続性	発展性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考
人文系を専門とする学芸員が多数を占める現状で、自然科学に基礎を置く保存環境に関して学ぶ少ない機会の一つである本研修は、2 週間という長期にも関わらず、毎回多くの参加者があり、高い評価を得ている。これは、科学の基礎から実地での応用まで、幅広いカリキュラムで構成しているためである。また、研修終了後も、フォローアップ研修や様々な研究会を通じて、最新の情報を提供している。さらに、受講生とスタッフの間には、インターネットを利用した情報交換や相談を行うネットワークを構築しており、修了後、勤務館において研修で学んだことを実践し、またその成果を共有できる体制を作っている。

2．定量的評価

観点	参加者数	満足度				
判定	A	A				

備考
本年の学芸員研修には全国の国公立、また私立の博物館や美術館から 33 名の保存担当学芸員が参加した。修了後のアンケートでは、全員から「満足」という評価を得たことから、判定を「A」とした。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研修参加者数、アンケートによって得られた参加者の満足度ともに、高評価に値するものである。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	毎年、継続して実施しており、参加者、満足度ともに非常に高いレベルを維持するよう、内容の充実をはかってきた。今後は、省エネやエコミュージアムといった環境に配慮した博物館環境が求められることから、これらを研修内容に含めていくことも検討していきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 7231

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.88

中期計画の項目	７　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上
プロジェクト名称	連携大学院教育　東京藝術大学：システム保存学（保存環境学、修復材料学）((2)-③)

【事業概要】

１９９５（平成７）年４月より東京藝術大学大学院と連携して大学院教育を行い、２１世紀の文化財保存を担う人材を育成している。システム保存学教室は、文化財の保存環境を研究する保存環境学講座と保存修復に用いる材料について研究する修復材料学講座の二講座から成っている。
各講座３名ずつの研究所員が連携教員として研究教育指導に当たっている。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長　石﨑武志

【スタッフ】

佐野千絵、木川りか、川野邊　渉、中山俊介、北野信彦（以上、保存修復科学センター）、間渕　創（東京藝術大学教育研究助手、保存修復科学センター客員研究員）

【主な成果】

次に上げる講義と演習を各教官が担当した。保存環境計画論（佐野）、保存環境学特論（石﨑、木川）、修復計画論（川野邊）、修復材料学特論（中山、北野）、文化財保存学演習（石﨑、佐野）

【年度実績概要】

次に上げる講義と演習を各教官が担当した。
保存環境計画論（佐野）、保存環境学特論（石﨑、木川）、修復計画論（川野邊）、修復材料学特論（中山、北野）、文化財保存学演習（システム保存学担当分）（石﨑、佐野）

保存環境学計画論（履修者２０名）では、文化財を劣化させる熱・水分・光・汚染空気・生物などが文化財の材質にどの様な影響をあたえるか劣化を防ぐにはどうすれば良いか、また文化財の公開に関する法規制等の講義を行った。
保存環境学特論（履修者８名、聴講２名）では、博物館展示室や収蔵庫などの室内におかれた文化財や、屋外に展示されている文化財の保存方法について、主に温湿度の制御や生物被害対策の最新の研究成果を中心に講義、実習を行った。
修復計画論（履修者８名、聴講１名）では、合成樹脂の文化財への応用についてのこれまでの使用例を解説する講義と、合成樹脂を実際に用いて基礎的な実験を行い、その特性について学ぶ実習を行った。
修復材料学特論（履修者７名）では、近代文化遺産の保存科学と文化財資料の保存修復作業およびそれに伴う各種分析等についての講義を行った。
文化財保存学演習（履修者２０名）では、各専門分野の教員により、一年間を通して文化財保存の様々な講義・実習を行い、システム保存学担当分として文化財修復材料・保存環境実験などを行った。

【実績値】

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　7231

自己点検評価調書

研究所 No.88

１．定性的評価

観点	発展性	効率性	継続性			
判定	A	A	A			
備考						

２．定量的評価

観点						
判定						
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究現場から得られる新しい情報を加えるなど、学生にとって有益で高い水準の内容の授業や演習を行うことができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	年度当初に予定した授業・演習計画通り、事業は進捗した。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 7232

（様式 1）

業務実績書

研究所 No.89

中期計画の項目	7　地方公共団体等への協力等による文化財保護の質的向上
プロジェクト名称	京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育の推進　（(２)―③）

【事業概要】

京都大学大学院人間・環境学研究科及び奈良女子大学大学院人間文化研究科と協定を締結、連携・協力し、文化財保存・活用に関する幅広い知識と高度な技術を兼ね備えた次代の研究者及び技術者の育成を図る。

【担当部課】	奈良文化財研究所	【プロジェクト責任者】	所長　田辺征夫

【スタッフ】

松井章、小野健吉、小澤毅（京都大学客員教授）大河内隆之、高妻洋成、清水重敦（京都大学客員准教授）小池伸彦、渡邉晃宏（奈良女子大学客員教授）次山淳（奈良女子大学客員准教授）

【主な成果】

京都大学大学院人間・環境学研究科において６名、奈良女子大学大学院人間文化研究科において３名の研究職員が、客員教授・准教授として各専門分野に関する講義、演習、実習を通して大学院生の研究指導を行った。なお、平成２２年度の受入学生数は京都大学５０名、奈良女子大学２名であった。

【年度実績概要】

京都大学大学院人間・環境学研究科〔共生文明学専攻文化・地域環境論講座文化遺産学分野（客員)〕並びに奈良女子大学大学院人間文化研究科における平成２２年度の実施状況については下記のとおりである。

①小野健吉
「庭園文化論１」【修士課程１６名】

②清水重敦
「文化的景観論２」【修士課程８名】
【博士課程１名】

③高妻洋成
「保存科学論２」【修士課程７名】

④小澤　毅
「遺跡調査法論２」【修士課程４名】

⑤松井章
「環境考古学論２」【修士課程１０名】

⑥大河内隆之
「年輪年代学論１」【修士課程４名】

⑦小池伸彦
「文化財学の諸問題Ⅰ」【博士後期課程】
「文化財学の諸問題Ⅱ」【博士後期課程】

⑧渡邉晃宏
「歴史資料論Ⅰ」【博士後期課程１名】
「歴史資料論Ⅱ」【博士後期課程１名】

⑨次山淳
「歴史考古学持論Ⅰ」【博士後期課程】
「歴史考古学持論Ⅱ」【博士後期課程】

【実績値】

受入学生数（延人数）　京都大学：５０名、奈良女子大学：２名

【備考】

教官研究費及び学生の教育費は連携大学が支出

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　7232

自己点検評価調書

研究所 No.89

１．定性的評価

観点	効率性	適時性	発展性			
判定	A	A	A			
備考 効率性：研究水準の社会的評価 適時性：時代の要請 発展性：若手研究者層の充実、人材確保						

２．定量的評価

観点	受入学生数					
判定	A					
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存・活用に関する幅広い知識と高度な技術を兼ね備えた人材の育成を順調に行うことができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	連携大学との協定に基づき、計画的かつ継続的に実施できた。次期についても、引き続き連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成に寄与する。

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8001

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 1-1

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	「宇治の文化的景観」における伝統的建造物の保存・整備に関する調査研究（受託）((１)－①－ア)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長　清水重敦

【スタッフ】
清水重敦［文化遺産部景観研究室長］、惠谷浩子［同部研究員］、松本将一郎［同部アソシエイトフェロー］

【年度実績概要】

本受託事業は、「宇治の文化的景観」における伝統的建造物の保存・整備に関する調査研究の２年目として、重要文化的景観の追加選定を目指す宇治市白川区を対象に、現存する伝統的建造物の価値評価を目的として実施した。現地調査では、１次調査として区内に残る木造家屋や近代建築の残存状況を悉皆的に把握し、次に２次調査として個別の建造物についての詳細な調査を行った。また、併せて、白川区の集落構造や主要な生業である茶業についての分析も行い、今後の保存・活用に向けた基礎資料の提示を行った。本調査の成果は、宇治市により本年度刊行される『宇治市文化財総合把握調査報告書Ⅰ』の原稿として執筆するとともに、宇治市主催「白川の伝統的家屋調査中間報告会」において成果報告を行った。

１次調査では、近世から昭和 30 年までの間につくられた 109 件の伝統的建造物を確認することができた。この１次調査の結果を踏まえて抽出した 10 件の家屋を対象に２次調査を実施し、その歴史調査、実測調査、写真撮影を行い、配置図・平面図・断面図の作成と価値評価を行った。２次調査の対象は、茶農家や茶工場、覆小屋などの茶業関連家屋のほか、茅葺建物や米農家の建物など、集落の変遷や生業の特徴を示すものとした。ただし、今回は「宇治の文化的景観」に関する追加調査として、既選定地区である中宇治に所在する２件の伝統的建造物、また将来的に選定を目指す黄檗地区の１件についても個別の実測調査を行った。

本調査の成果として、①白川区における伝統的建造物の残存状況を把握し、その建築類型と分布特性を捉えられたこと、②金色院からの白川の歴史と建造物・敷地との関係を読み取ることができたこと、③茶工場を含む敷地構成や建物の在り方の変遷、中宇治との違いが具体的に明らかになったこと、④建造物を含めて茶業に関連する諸要素が揃った白川の特質を把握できたこと、があげられる。

服部家旧製茶場（明治 5 年）
手製製茶時代の茶工場。表通りに外壁を接する細長い長屋で、敷地側に戸口を開き、半間幅の横連子窓が二面に巡る。

旧白川共同製茶場（昭和 30 年頃）
製茶機械の普及に伴い建設された機械式製茶工場。敷地外の土地を新たに求めて工場を建て、木造トラスにより広い空間を得ている。

本調査の成果は、「宇治の文化的景観」に白川区を追加選定するための基礎資料となるとともに、重要文化的景観選定後の整備・活用計画策定の視点を具体的に提示するものとなるだろう。

【実績値】
調査票 13 枚、実測野帳 45 点、デジタル写真 1390 点、報告書原稿 111 ページ。

【受託経費】
950 千円

【受託】
（様式３）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8002

業務実績書（受託事業）

研究所 No.1-2

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	京都岡崎の文化的景観に関する保存計画策定調査（受託）（（１）－①－ア）		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長　清水重敦

【スタッフ】
清水重敦［文化遺産部景観研究室長］、惠谷浩子［同部研究員］、松本将一郎［同部アソシエイトフェロー］

【年度実績概要】

本受託事業は、H21年度より国庫補助事業である文化的景観保存活用事業として京都市が実施している「京都岡崎の文化的景観調査検討事業」において、京都岡崎地区の文化的景観の重要文化的景観への選定申出のための調査および保存計画策定を目的に調査を実施するものである。

現地調査では、岡崎の現況景観の構造的把握を目的として、土地利用調査、景観構成要素分布調査、生業分布調査を岡崎地区全域の悉皆調査を行った。その他、自然調査として岡崎公園の街路樹調査、疏水苑池式庭園における生態系調査、生活・生業に関わる資史料調査を実施した。なお、本調査の成果は、京都岡崎の文化的景観調査検討委員会(第1回～第3回)において調査成果の中間報告を行った。

本調査の成果として、①琵琶湖疏水・白川の水利用によって形成された都市・産業景観の特質を明らかにしたこと、②大規模土地利用を可能とする都市構造の変遷とその特質を明らかにしたこと、③岡崎の文化的景観を構成する諸要素（建築物、工作物、自然物、土地利用、産業等）の分布と特質を明らかにしたこと、④文化的景観保存計画における重要な構成要素候補のリストアップを行ったこと、が挙げられる。

本調査の成果は、平成23年度以降実施する予定である重要な構成要素の詳細調査と文化的景観保存計画策定に向けた基礎資料として活用する予定である。

京都踏水会
１８９６年（明治２９年）に、大日本武徳会遊泳部として開設。かつては琵琶湖疏水の夷川舟溜りをプールとするなど、暮らしの中での疏水利用がみられた。

並河靖之七宝記念館
明治・大正時代に活躍した七宝家・並河靖之の旧邸。庭園は植治の作庭で、七宝焼の研磨と共に苑池式庭園に琵琶湖疏水の水を利用している。

【実績値】
調査票 21 枚、実測野帳 77 点、デジタル写真 1964 点。

【受託経費】
1,580 千円

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8003

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 1-3

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	相川地区文化的景観　景観変遷・景観構造調査（受託）((１）－①－ア)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長　清水重敦

【スタッフ】
清水重敦［文化遺産部景観研究室長］、惠谷浩子［同部研究員］、松本将一郎［同部アソシエイトフェロー］

【年度実績概要】

本受託事業は、近世初頭に開かれた金銀山とそれに付随して形成された都市相川を中心とする領域である佐渡市相川地区において、文化的景観としての価値付け及びその保存計画の策定を目的として、景観の変遷及び景観構造の分析をおこなうものである。

調査は、歴史、文化財、都市構造、景観に関わる既存の諸調査の整理、史料・絵図類の収集といった文献調査と、現地における地形、植生、土地利用、都市構造の把握、生活及び生業に関する聞き取り、を実施した。

現地調査は８月、１１月、３月に計４回実施した。景観上関連性が認められる金銀山、上町・下町の市街地部及び周辺漁村、市街地を取り巻く段丘崖及び山林、段丘崖上に設けられた水田につき、概要を把握するための一次調査を実施した上で、史料・絵図類の収集、都市部における生活・生業と関連が深い海岸段丘の段丘崖における植生調査、都市部における地形実測、生業に関する聞き取り調査を、詳細調査として実施した。

海から見た相川
金銀山（右奥に見える頂部の割れた山「道遊の割戸」付近）と交易によって栄えた相川は、海沿いの下町と丘上の上町など、景観の多くの要素が生業の核をなす二極を構造的に反映している。

本調査の成果として、①既往の相川に関する諸調査が専門分野ごとに分断されていたのに対し、総合的な視点から相川の景観を捉え直す上での基礎が得られたこと、②金銀山と交易という生業の２つの核が、景観のあらゆる局面に反映し、相川の文化的景観の特性を形作っていること、③この景観構造が、金山の幕府支配・明治政府管理から三菱鉱山への移管などの大きな変化を経ながらも今に持続していること、が挙げられる。調査成果は中間報告としてまとめ、次年度の調査へと引き継ぐ。この成果を踏まえて、文化的景観の価値評価をとりまとめ、さらに同地区の保存計画を立案し、重要文化的景観の選定を目指す予定である

【実績値】
調査票 25 枚、デジタル写真 250 点。

【受託経費】
2,697 千円

【受託】
(様式 3)

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8004

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 1-4

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	「宇治の文化的景観」整備に伴う宇治橋通りの調査研究（受託）((１）－①－ア)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長　清水重敦

【スタッフ】
清水重敦［文化遺産部景観研究室長］、惠谷浩子［同部研究員］、松本将一郎［同部アソシエイトフェロー］

【年度実績概要】

本受託事業は、重要文化的景観「宇治の文化的景観」の重要な構成要素の一つである宇治橋通り商店街を対象に、文化的景観としての整備を念頭に置き、伝統的家屋の特性をまとめ、整備の方向性につき一定の提言をおこなうことを目的とするものである。

宇治橋通りの伝統的家屋については、2009 年度の受託事業として実施した中宇治地区を中心とする伝統的家屋調査において多くの成果を得ており、その成果を踏まえて、伝統的家屋の特性の抽出と、建造物としての整備の方向性につき、一定の方向性を提示し、合わせて関連する図面の作成をおこなった。

宇治橋通りに残る伝統的家屋は、茶業関連家屋と、近代宇治の活況を反映する諸職業の家屋、に大きく二分される。町家形の表屋が多く見られる中で、一部に宇治の茶業独特の建築類型が混じる（長屋門、茶工場等）。また、銭湯なども町家に類する形式ながら、独自の形態を有している。これら伝統家屋については、個々の特性に従った整備方針の立案が必要であり、その方針を提示した。

個々の物件の特性とともに、住居集合のあり方について特徴が見出せるところに、宇治橋通りの特性がある。それは各家屋と宇治橋通りの側溝との関係で、家屋正面の壁面線と側溝との間に間隙がないことである。これはかつて茶師屋敷が並んでいた宇治橋通りの特性を今に伝える痕跡であり、この特性を活かした整備方針を提案した。

本調査の成果は、「宇治の文化的景観」における整備方針の基礎資料となることはもちろんのこと、都市に関する文化的景観における家屋の整備を考える上での重要な先例となることだろう。

現在も茶製造をおこなう茶農家の町家
１階の庇の軒が深い上、平格子を多用し、軒下空間を広く取る点に生業の反映がみられる。

通りに面する旧茶工場
通りに面して設けられた旧茶工場を整備、活用する要望があり、文化的景観としての整備・活用方針の立案が急務となっている。

【実績値】
家屋図面 30 点、デジタル写真 500 点

【受託経費】
915 千円

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8005

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 7-1

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	萬翠荘に係る学術調査（受託）((1)②オ)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長　島田敏男

【スタッフ】
大林潤、高橋知奈津［以上、都城発掘調査部研究員］、清水重敦［文化遺産部景観研究室長］、松本将一郎［文化遺産部アソシエイトフェロー］

【年度実績概要】

晩翠荘本館外観

萬翠荘は、旧松山藩主・久松定謨によって松山城南麓に建てられた久松家の別邸である。愛媛県では、当建築の重要文化財指定を目指して、その価値をあきらかにすることを目的として調査事業を計画し、当研究所が調査をおこなった。

調査対象は、萬翠荘本館、収蔵庫、旧管理人舎の 3 棟および庭園とし、敷地全体の調査をおこなった。

調査の結果、建築年代は、萬翠荘本館と旧管理人舎が大正 11 年、収蔵庫は昭和初年であることがあきらかとなった。本館の設計は木子七郎であり、旧管理人舎も木子と思われる。

本館は、鉄筋コンクリート造、小屋組を鉄骨造とする。建築様式は、フランス・ルネッサンス様式を基調とする、第２帝政様式と位置づけられる。様式の表現は、細部にわたって、ルネッサンス様式に忠実な意匠としながら、ステンドグラスにアール・ヌーボー風のデザインを取り入れている。平面は、１階に接客空間とサービス空間、２階に生活空間を置き、サービス空間からの導線を大階段の背面に隠すといった工夫がなされており、木子七郎の作品の特徴を良く示している。

木子七郎は、大正 10 年に海外視察をおこなっており、その前後で作風が変化する。様式に忠実であり、鉄筋コンクリートを用いる手法はその両方の要素をもったものであり、木子の作品としても重要な作品であることを明確にした。また、これまでハワイ製と伝えられていたステンドグラスの作家が木内真太郎と判明した点でも、当建築の資料的価値が高いことをあきらかにした。

【実績値】
調査票 31 枚、実測図 13 枚、デジタル写真 3000 点、４×５ポジ写真 42 点

【受託経費】
2,500 千円

【受託】
(様式 3)

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8006

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 7-2

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	倉見屋荻野家住宅調査（受託）((1)②オ)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長　島田敏男

【スタッフ】
黒坂貴裕、鈴木智大、番光、海野聡［以上、都城発掘調査部研究員］

【年度実績概要】

本受託事業では、福井県若狭町に位置する若狭町熊川宿重要伝統的建造物群保存地区内に位置する町家である倉見屋荻野家を調査したものである。倉見屋は、かつて宿場町で問屋を営んだ家で、主屋および倉で構成される屋敷地全体が、当地方のかつての問屋の形態を良く伝えるものと考えられてきたが、その価値付けが明確でなかった。このようななか、その価値を明確にし、重要文化財の指定を目指して、建造物の調査をおこなうこととなった。

調査の目的は、当家の建立時期および改造の経緯をあきらかにするとともに、当地区における問屋建築の特質を明確にすることによって、当該町家の価値を明確にすることである。その上で、保存に向けての方針および伝統的建造物群保存地区における活用方針を提案することを目的とした。

倉見屋外観

調査では、実測調査・痕跡調査・技法調査等によって、建築物の特性および改造の経緯を検討した。また、200 点以上にもおよぶ家蔵文書の調査もおこなった。その結果、当家は、文化７年（1810）年の建築であり、建築年代が明らかな町家建築としては福井県内で最古あることがあきらかとなった。また、普請帳の調査成果を勘案すると、建築当初から改造がきわめて少ないことが判明した。そして、主屋と付属建物で構成される建築群が一体として熊川宿問屋建築のひとつの完成形として評価でき、さらには膨大な史料とともに当伝統的建造物群保存地区の歴史を示す重要な存在であることを示した。その上で、伝統的建造物群保存地区における公開民家として活用を提案した。

【実績値】
実測野帳等　29 枚。デジタル写真　920 点、4×5 ポジ写真 25 点、作成図面 15 枚

【受託経費】
1,853 千円

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所　　処理番号 8007

業務実績書(受託事業)

研究所 No.8-1

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	日本／ユネスコパートナーシップ事業　アジア太平洋地域無形文化遺産保護活動の調査研究（受託）((1)-③)		
【担当部課】	無形文化遺産部	【事業責任者】	無形文化遺産部長　宮田繁幸

【スタッフ】
高桑いづみ、飯島　満、俵木　悟、菊池理予（以上、無形文化遺産部）七海由美子、松山直子（以上、特別研究員（アソシエイトフェロー））

【年度実績概要】
今年度は、以下の事業を実施した。
①国際会議等への派遣
ユネスコ無形文化遺産保護条約政府間委員会をはじめとする各国で開催される国際シンポジウムや会議、研究会等に無形文化遺産部の職員を派遣し、無形文化遺産保護に関する発表や助言を行うとともに、各国及び国際状況についての情報収集を行った。
派遣回数：11 回

②海外現地調査
モンゴル、ラオス、タイ、フィリピン等、アジア太平洋地域での調査を通じて、各国における無形文化遺産保護のための施策・取り組みについて情報を調査収集し、本テーマに関する意見交換を行いつつ、同地域の無形文化遺産保護に関する研究交流を行った。
調査回数：7 回

タイ王国ランパン県民俗芸能伝承活動調査（H22.12.7）

③国内現地調査
無形文化遺産として登録及び推薦された国内の案件を中心に、その保護活動に関する情報を調査収集し、関係者と意見交換及び研究を行った。
調査回数：24 回

【実績値】

【受託経費】
24,573 千円

【受託】
(様式 3)

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8008

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 12-1

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平城京薬師寺旧境内の発掘調査（資材置場北側搬入路）（受託）（（１）－⑤－ア）		
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【事業責任者】	副所長 井上和人

【スタッフ】
小池伸彦、清野孝之、鈴木智大、桑田訓也、渡辺晃宏、森川実、中川あや、海野 聡（以上、都城発掘調査部）、中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾（以上、企画調整部）、青木達司（文化遺産部）

【年度実績概要】

本調査は、薬師寺旧境内である奈良市西ノ京町内における防災設備の設置工事にともなう事前の発掘調査である。調査区は防災設備の設置位置を含む逆Ｌ字型のトレンチを設定した。南北トレンチは幅約１ｍ、長さ約４ｍと、これに接続する幅約２ｍ、長さ９ｍで、東西トレンチは幅２ｍ、長さ 10ｍとこれに接続する幅２ｍ、長さ 21ｍであり、調査面積は計 80 ㎡におよぶ。調査は平成 22 年８月 16 日（月）に着手し、調査区に応じて断続的に調査をおこない 10 月 21 日（木）に埋め戻しを完了した。

重機で地表より約 165cm まで掘削ののち、作業員による掘り下げを開始した。池の埋め土とみられる暗灰褐粘砂土層を検出し、池の岸を検出した。一部、深掘りして、地表から約 250cm まで掘り下げ、池の底の腐植土を確認した。遺構としては池１面、土坑６基、瓦土坑２基、東西溝１条、南北溝１条を検出した。池の上の整地層から 12 世紀の瓦器皿が出土したが、各遺構の年代については不明である。

これまでの調査・研究では、今回調査区の北側に僧房が存在したことは確認されていたが、この僧房の南側に建物が存在したかどうかについてはわかっていない。今回の調査の結果、池や排水にかかわる東西溝を発見した。

池の範囲では、自然木や松かさの混じる層があり、その下層には池の堆積、池底には水草の堆積があった。このことから池の周囲には松がたくさん生えていたものと考えられる。このあたりは中心伽藍から東に向け下がる地形で、この湿地状の地形を利用するために、池を何度も改修しり、東西溝を掘って排水するなど、知恵を搾った様子が窺えた。

今回の調査では僧房南側の建物の存在は確認できなかったが、回廊の東側からわずか20ｍほどしかない伽藍中心附近まで池が広がっていたという、かつての周辺環境の一端を明らかとすることができた。

東西トレンチの瓦溜り

【実績値】
海野 聡ほか「薬師寺の調査」『奈文研ニュース』No. 39　2010. 12
海野 聡ほか「薬師寺境内の発掘調査―第 474 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定）
出土品　：軒瓦 12 点、丸・平瓦 80 箱、土器・陶磁器２箱、鉄釘１点、炉壁片１点、竹片１点、種子８点
記録作成数：実測図（A2 判）14 枚、遺構写真（4×5）22 枚

【受託経費】
1,882 千円

【受託】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8009

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 13-1

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平城京薬師寺旧境内の調査（金堂周辺）（受託）((1) －⑤－ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【事業責任者】	副所長　井上 和人

【スタッフ】
浅野啓介、今井晃樹、大林 潤、国武貞克（以上、都城発掘調査部)、
中村一郎・栗山雅夫（以上、企画調整部）

【年度実績概要】

Ａ区：金堂南面の東よりに東西 1.6m、南北 12mの調査区。層序は上から現代の整備盛土、自然堆積層、遺物包含層で、現地表面より約 80～90 ㎝ほど下で複数の河原石を検出した。石の大きさは径 15～40 ㎝で比較的集中して出土した。石がない部分も石の抜取穴を検出し、本来は調査区一面に敷かれていたものである。石の間はやや隙間があり、石の上面も平らでないことから、人が歩くための舗装ではなく、庭園的な景観を意図したものと思われる。透水層の上に厚さ 40 ㎝ほどの粘土の整地をした上に石をすえており、薬師寺造営当初の奈良時代の遺構であると考える。石の間や石の上にかぶる砂層から瓦器片が出ており、中世のある段階には埋没したようだ。

Ｂ区：金堂南面の西よりに東西 1.6m、南北 12mの調査区。現代の整備盛土、自然堆積層、遺物包含層を経て、現地表下 70 ㎝ほどで、井戸とそれにともなう溝を検出した。井戸は平面円形で２段掘りである。上段は直径 2.5m、深さ約 70 ㎝をはかる。その中央に直径１m、深さ約 70 ㎝の下段の穴をほり、木桶をすえていた。木桶の枠板は抜きとられており、竹のたがが残存していた。井戸の西北には溝があり、排水施設と考えられる。井戸本体と溝には上下２層の埋土があり、溝下層には中世の瓦器片が出土しており、中世以前に構築された可能性はあるが、構築と廃絶の年代は現在のところ不明である。

井戸掘り込み面の下層には粘土の整地層があり、その上面には河原石が数個据えられていた。その状況はＡ区と同様で、同時期の遺構と考えられる。調査区の北側で、この粘土の整地面から掘り込まれた土坑があり、中から鎌倉時代の軒瓦が出土した。したがって、この下層の遺構は、薬師寺の造営時期から、中世のある段階まで使用されていたものと考えられる。

ただし、Ａ区、Ｂ区とも遺物は整理中であり、各遺構の正確な時期は、今後の整理をまって確定したい。

Ｃ区：南北 1.8m、東西 15mの調査を設定。現地表下 80 ㎝ほどで瓦の廃棄土坑を検出。土坑は東西約６m、南北は 1.8mの範囲におよぶ。土坑からは多量の瓦は出土し、ほとんどは奈良時代の薬師寺創建時の瓦である。土坑の位置や出土品からみて、金堂で使用していた瓦であろう。土坑の瓦は、室町時代に金堂が大風で倒壊したときに破損した瓦とみられる。

【実績値】
出土遺物：瓦 211 箱、土器３箱
記録作成数：実測図６枚、遺構写真（4×5）20 枚

【受託経費】
2,456 千円

【受託】
(様式 3)

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8010

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 14-1

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	薬師寺旧境内の発掘調査（休ヶ岡八幡神社境内地）（受託）（（１）－⑤－ア）		
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【事業責任者】	副所長　井上和人

【スタッフ】
森川 実、渡邊晃宏、中川あや、海野 聡（以上、都城発掘調査部）中村一郎・栗山雅夫（企画調整部）

【年度実績概要】

本受託事業は、薬師寺休ヶ岡八幡宮境内における防災施設設置工事にともなう事前調査である。調査は現存する八幡宮社殿（重要文化財）を挟み、東西２箇所で実施した。それぞれを「東区」、「西区」と呼ぶ。東区は平成 22 年 10 月５日～11 月２日、西区では平成 22 年 12 月１日～12 月７日で。調査面積は合計 41 ㎡。

【東　区】

休ヶ岡八幡宮社殿の東側では、管路に沿う南北方向に長い調査区を設け、発掘調査を開始した。防災設備（会所枡および放水銃）の設置予定位置で調査区を西へと拡張したところ、地山（白色シルトおよび橙色砂礫層）が八幡宮の社殿側（西側）で高く、東側へと急激に低くなることが判明した（写真）。この東落ちの段差は人為的に切り出されたものとみえ、地山の比高は最大で約 1.5mにおよぶ。この段差を埋めている遺物包含層は「炭混土」・「灰色土」など都合８層以上に細分できる。「灰色土」やこれに挟在する間層は西側で高く、現地形を反映した堆積状況をみせる。また「灰色土」は、奈良時代前半の土師器・須恵器を多く含んでおり、整理箱で土器９箱、瓦多数が出土している。その内容は土師器杯Ａ、杯Ｃ、皿Ａ、高杯、盤、甕、薬壺や製塩土器、須恵器杯Ａ・Ｂとその蓋、各種の壺、平瓶、甕などである。土師器杯・皿類には１段斜放射暗文＋連弧暗文を施した例が目立つ。墨書土器には土師器皿の外底部に「十」と記したものなどがある。このほか、細片であるが三彩片が出土している。全体に細片が多いものの、器種構成が明らかな奈良時代前半の土器群である。

東区　拡張区全景(東から)

【西　区】

八幡宮社殿の西側では、社務所のすぐ南側で東西方向の狭長なトレンチを設定し、発掘調査をおこなった。表土直下で現代の土坑４基を検出したほかは、明確な遺構は皆無である。地山の傾斜は東区とは異なっており、東側(社殿側)が高く西側が低い。この傾斜は厚い整地層で埋められているが、整地をおこなった時期は特定できない。

【まとめ】

東西両区で得た知見から、休ヶ岡八幡宮が地形上の高所に占地していることが判明した。また、東区で検出した段差の開削時期が、八幡宮の創建（９世紀末）以前に遡るのは確実である。

【実績値】
論文等数：２件（①・②）
①森川 実「薬師寺休ヶ岡八幡宮の調査」『奈文研ニュース』
②森川 実ほか「薬師寺休ヶ岡八幡宮の発掘調査―第 475 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定）
出土遺物：軒瓦 61 点、土器９箱
記録作成数：実測図（A2 判）12 枚、遺構写真（4×5）20 枚

【受託経費】
1,379 千円

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 8011
(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 27-1

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	第一次大極殿院建造物復原整備にかかる調査委託（受託）((１）－⑥－ウ)		
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【事業責任者】	副所長　井上和人

【スタッフ】
井上和人（副所長)、深沢芳樹、小池伸彦、国武貞克、芝 康次郎、神野 恵、森川 実、城倉正祥、清野孝之、今井晃樹、中川あや、渡辺晃宏、馬場 基、浅野啓介、桑田訓也、箱崎和久、大林 潤、鈴木智大、海野 聡、井上麻香、北山夏希、山本 崇、青木 敬、小田裕樹、中村亜希子、黒坂貴裕、番 光、高橋智奈津（以上、都城発掘調査部)、小野健吉、吉川聡、島田敏男、清水重敦、平澤 毅（以上、文化遺産部)、大河内隆之、児島大輔、小澤 毅（以上、埋蔵文化財センター)、丹羽崇史（飛鳥資料館)、紅林孝彰、宮本隆行、田中康成（以上、研究支援推進部)、千田剛道(奈文研名誉研究員)、吉田歓(山形県立米沢女子短期大学)

【年度実績概要】
第一次大極殿院の奈良時代前期（Ⅰ－２期）における様相を明らかにするため、文献資料、発掘遺構、出土遺物などの直接的資料の検討をはじめ、それに関わる類例の調査をおこなった。これらについての復原検討会および類例調査は以下のように開催し、復原に向けての資料の検討をおこなった。

[復原検討会]
第 1 回(2010/7/23)「全体計画と今後の検討事項」箱崎和久、「文献史料からみた大極殿院内の諸施設」渡辺晃宏「検出遺構の確認」大林潤、
第 2 回(2010/8/24)「平城宮の諸門と平城宮の寺院の門－重閣門をめぐる補考」渡辺晃宏
第 3 回(2010/9/10)「平安時代の大極殿儀－回廊の機能を中心として」山本崇、「第一次大極殿院の瓦①」中川あや
第 4 回(2010/10/6)「中国における大極殿院相当施設の様相」吉田歓
第 5 回(2010/10/15)「発掘資料に見る大極殿院相当施設と南門・楼・回廊－高句麗・新羅・渤海・高麗」千田剛道
第 6 回(2010/10/25)「六国史にみえる 9 世紀以降の平安宮などの楼の史料－大射・騎射の施設について」渡辺晃宏、「中央区朝堂院の仮設建物と柵列－騎射の場」鈴木智大
第 7 回(2010/11/5)「第一次大極殿院回廊の標準断面」鈴木智大
第 8 回(2010/11/25)「第一次大極殿東西楼の復原案の推移」海野聡、「第一次大極殿院回廊内部・地形復原にかかわる検討課題」大林潤
第 9 回(2010/12/1)「渤海 上京龍泉府の宮殿遺構」井上和久、「大極殿院南門の上部構造検討史と今後の課題」箱崎和久
第 10 回(2010/12/22)「宮殿遺構の調査報告－第一次大極殿院相当施設の遺構」北山夏希、「第一次大極殿院東西楼事例研究の中間報告」井上麻香
第 11 回(2011/1/26)「「重閣門」の解釈について」「第一次大極殿院南門遺構の検討」箱崎和久
第 12 回(2011/2/10)
第 13 回(2011/2/25)
第 14 回(2011/3/10)

復原検討会風景（第３回）

[類例調査]
第 1 回(2010/10/9-11)弘前市・岩木山神社楼門および長勝寺三門にて楼造の類例調査
第 2 回(2010/11/8)京都市・京都御所および平安神宮にて宮殿建築、宮殿内庭部の類例調査
第 3 回(2010/11/13)甲府市・善光寺三門および慈眼寺鐘楼門にて楼造の類例調査
第 4 回(2010/12/10-13)中国・故宮および独楽寺観音閣にて宮殿建築、宮殿内庭部、楼造の類例調査

【実績値】
「復原検討会とその成果 ― 第一次大極殿院の復原研究１」『奈文研紀要 2011』(予定)
「東西楼・南門の検討成果 ― 第一次大極殿院の復原研究２」『奈文研紀要 2011』(予定)
「大極殿院復原のための調査 ― 第一次大極殿院の復原研究３」『奈文研紀要 2011』(予定)

【受託経費】
13,843 千円

【受託】
(様式 3)

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　8012

業務実績書(受託事業)

研究所 No.28-1

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	初期洋風画の光学調査（受託）((2)-①)		
【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	文化財アーカイブズ研究室長　津田徹英

【スタッフ】
城野誠治、鳥光美佳子、江村知子（以上、企画情報部)、早川泰弘（保存修復科学センター）

【年度実績概要】
本調査は、サントリー美術館が所蔵する重要文化財「泰西王侯騎馬図屏風」を対象として、同美術館からの受託調査研究として実施した。
この「泰西王侯騎馬図屏風」は八曲一双をなしたものの片隻に相当する。旧会津藩主松平家から個人の所有を経て、現在、サントリー美術館の所蔵となるものである。本図は、主題、モチーフ、短縮法や陰影法などに西洋風が認められる一方で、朱地に金箔を貼ることや、墨線による下描き、彩色顔料などには日本画の手法が駆使されており、和洋折衷の様式を示すものである。騎馬像の原画は、アムステルダムにおいて 1606 年頃に刊行されたウィレム・J・ブラウ世界地図を、1609 年に改訂してできた大型世界地図の上部を飾った騎馬図に求められるという。それを 17 世紀初頭に拡大し独立させ、新に装飾性を加味して騎馬人物図に仕立て上げたものとされているが、今回の受託調査研究では、高精細デジタル画像撮影を行い、光学的に屏風の絵の作りの実態に迫ろうとするものである。
そのための基礎作業として、屏風各扇の本紙について、詳細に高精細デジタル画像撮影をすすめた。今年度の作品調査・撮影は 8/23-27（５日間)、9/27-10/1(５日間)、10/26-28（３日間）の合計 13 日間に及んで実施した。

【実績値】
調査日数：13 日間
撮影枚数：カラー画像 240 枚、反射赤外画像 269 枚、透過赤外画像 56 枚、蛍光画像 270 枚

【受託経費】
1,633 千円

【受託】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 8013

（様式 3）

業務実績書（受託事業）

研究所 No.29-1

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	ＧＥＭによる超高感度・大面積ガンマ線イメージセンサー（受託）((2)-②)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	主任研究員　犬塚将英

【スタッフ】

【年度実績概要】

Ｘ線透過撮影により、文化財の内部構造を非破壊非接触で調べることができる。しかし、既存の器材では大型かつ高額であるために、移動が困難な文化財の現地調査が難しいのが現状である。特に、物質量が大きい塑像などの彫刻や建造物の内部構造を調査するためには高エネルギーのＸ線またはガンマ線を用いる必要があるので、現地調査はさらに困難となる。本研究では光コンバータと信号読み出し基板を開発し、ガス電子増幅フォイルを用いた検出器に適用することにより、高エネルギーのＸ線またはガンマ線を用いた現地調査を目的とした開発を行っている。読み出し基板の製作及び試験は長崎総合科学大学と東京大学ＣＮＳが担当し、光コンバータの開発はサイエナジー株式会社が担当した。本年度は、これら別々に開発された各構成要素をひとつのシステムとして構築し評価実験を行った。評価実験に際しては、東京文化財研究所のＸ線撮影室にあるＸ線管球を用いてエネルギーが最大で 320keV までのＸ線を高い線量で照射することにより、超高感度・大面積ガンマ線イメージセンサーの動作を試験し、性能を評価した。

【実績値】

発表件数 2 件（①、②）

①超高感度・大面積ガンマ線イメージセンサー（犬塚将英、房安貴弘、越牟田聡、田中義人、浜垣秀樹）日本文化財科学会第 27 回大会　関西大学　10.06.26-27

②GEM による超高感度・大面積ガンマ線イメージセンサーの開発と移動が困難な文化財の調査（房安貴弘、越牟田聡、浜垣秀樹、田中義人、犬塚将英）日本物理学会第 66 回年次大会　新潟大学　11.03.25-28

【受託経費】

1,300 千円

【受託】
（様式３）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8014

業務実績書（受託事業）

研究所 No. 31-1

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	天良七堂遺跡の総合的探査（受託）（(2) －③－イ）		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅

【スタッフ】
金田明大（主任研究員）、西村康、西口和彦（以上、客員研究員）

【年度実績概要】

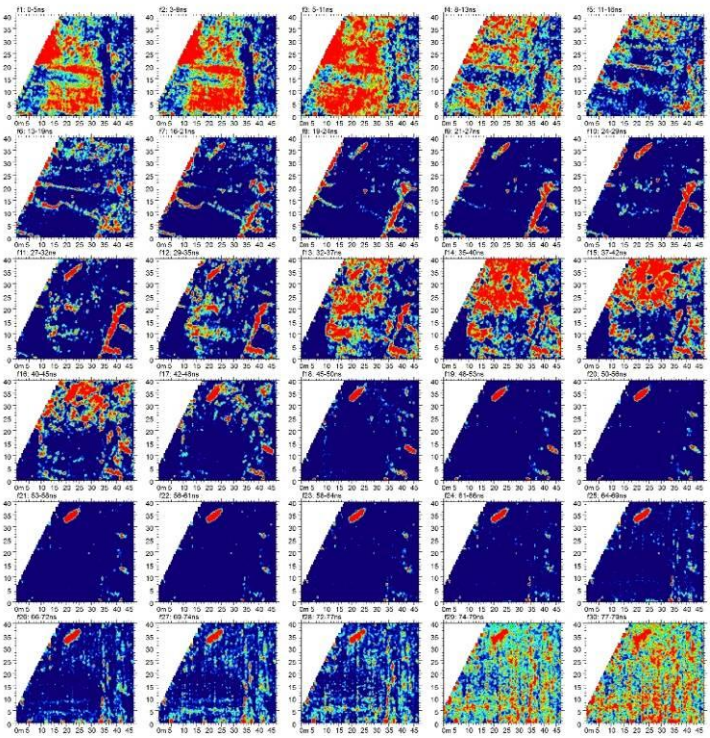
天良七堂遺跡は群馬県太田市に所在する古代の官衙遺跡であり、上野国新田郡衙に比定されている。近年、発掘調査が進められ、中心施設の構造や南面の区画施設が確認されている。当研究室では、昨年度に引き続き、今年度もこの遺跡についての探査を実施した。

昨年度の調査では､南側と北側の区画溝および総柱建物の存在を明らかにすることができた。本年度は追加調査として、東西および北側の境界となる区画施設の存在を推定することをおもな目的とした。

探査手法は地中レーダー（ＧＰＲ）探査に絞り、良好な信号を獲得できる走査方法を検討して探査をおこなった。この結果、溝の北西のコーナーとみられる部分を確定するとともに、正庁周辺の方形区画を限る溝の存在を推定することができた。

探査後におこなわれた発掘調査では、上記の推定の正しさが証明され、遺跡の範囲を確定することができた。

本調査は官衙における探査の成功例としてだけでなく、探査技術の向上という点でも重要な調査となった。



区画溝北西コーナーの確認

【実績値】
探査距離：19,500m
探査地点：８地点
概要報告作成：１件

【受託経費】
1,596 千円

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8015

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 31-2

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	三軒屋遺跡総合的探査（受託）((2) －③－イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅

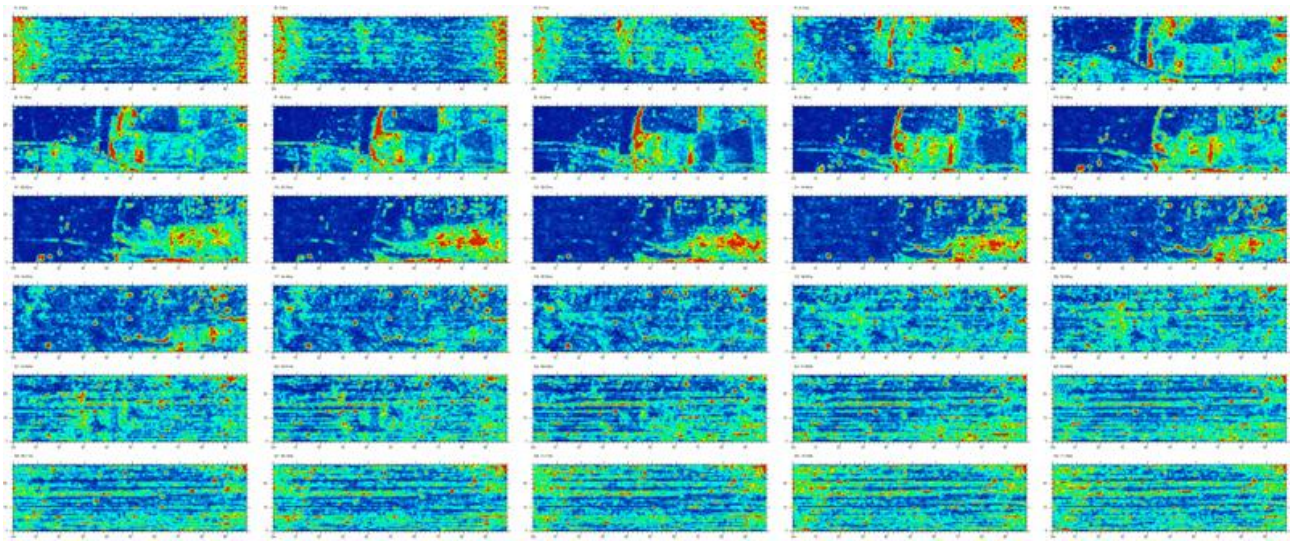
【スタッフ】
金田明大（主任研究員）、西村康、西口和彦（以上、客員研究員）

【年度実績概要】

三軒家遺跡は群馬県伊勢崎市に所在する古代の官衙遺跡であり、上野国佐位郡衙に比定されている。近年、発掘調査が進められ、八面甲倉と史料に記載された八角形の倉庫跡など、中心施設の構造や南面の区画施設が確認されている。

しかし、西側および北側の境界となる区画施設の存在は未確認であった。そこで、遺跡の範囲を確定するために、遺跡探査と小規模な発掘調査を組み合わせて範囲確認をおこなうこととなり、遺跡周囲の探査の有効性の検討とあわせて、受託研究を実施した。

探査手法は地中レーダー探査に絞り、良好な信号を獲得できる走査方法を検討した。これをもとに探査をおこなったところ、西側と北側の区画溝の可能性のある異常部位の存在を明らかにすることができた。ただし、郡衙の区画施設の可能性のあるものが複数確認されることから、今後、発掘調査などの手段を用いて、その詳細な性格と考古学的な情報の取得をおこなう必要がある。



深度別探査平面図（15 地点）

【実績値】
探査距離：約 35,000m
探査地点：７地点
概要報告作成：１件

【受託経費】
804 千円

【受託】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8016

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 31-3

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	「発掘調査のてびき」作成に係る業務（受託）((2) －③)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅

【スタッフ】

井上和人（副所長)、金田明大（主任研究員)、山中敏史（客員研究員）ほか

【年度実績概要】

『発掘調査の手引き』は昭和 41 年に文化庁文化財保護部から刊行され、数多く版を重ねてきたが、その後の発掘調査件数の急増と規模の増大、さらに調査技術と関連分野の研究の進展により、現状に応じた内容への改訂が求められるようになった。このため、文化庁文化財部記念物課の委託を受けて、奈良文化財研究所では、平成 17 年度から５年間にわたる全面的な改訂作業をおこない、平成 22 年３月にあらたな『発掘調査のてびき』を刊行することができた。

これらは、発掘件数の約７割を占める集落遺跡の発掘作業と、整理・報告書作成作業全般を対象としたものであり、文化庁は、本年度以降も、それ以外の遺跡を対象とする『発掘調査のてびき』の刊行に向けての作業を進めることを決定した。そして、奈良文化財研究所は、ひきつづき作成作業の事務局として、実務全般を担当することとなった。

本年度は、まず文化庁との打ち合わせを重ねて、基本的な枠組づくりをおこなったのち、９月に文化庁で作成検討委員会を開催した。委員会では、これまでの経緯と今後の計画について報告し、作業方針や内容に関する承認と指導・助言を受けた。そして、これにもとづき、12 月（文化庁）と２月（奈良文化財研究所）に、作成検討委員会作業部会を開催した。作業部会では、文化庁文化財部記念物課の担当者と地方公共団体および大学等の委員、奈良文化財研究所委員が、「墳墓」「寺院・官衙」「生産遺跡」「城館」の４部会に分かれて、「てびき」の構成や内容、執筆分担等についての協議をおこなった。

【実績値】

作成検討委員会作業部会開催件数：２回
作成検討委員会開催件数：１回
実績報告書：１件

【受託経費】

990 千円

【受託】
（様式 3）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8017

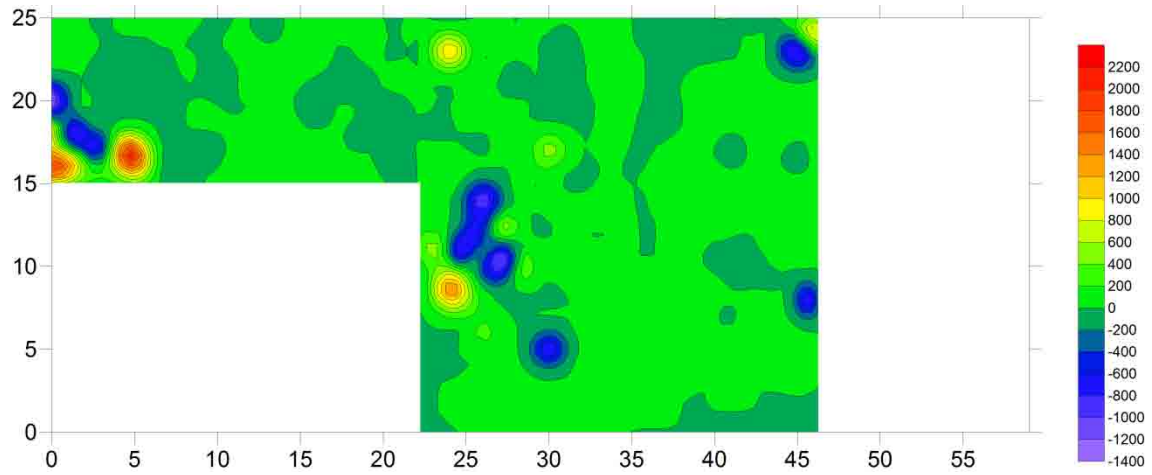
業務実績書(受託事業)

研究所 No. 31-4

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平成２２年度大宰府史跡・蔵司地区における総合的探査業務（受託）((2) －③－イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅

【スタッフ】
金田明大（主任研究員）、西村康、西口和彦（以上、客員研究員）

【年度実績概要】
大宰府史跡は福岡県太宰府市に所在する古代の官衙遺跡である。政庁部分を中心に特別史跡に指定され、保存と活用が進められている。また、継続的な発掘調査が 1968 年以降おこなわれている。
今回の調査は、おもに政庁東側に所在する蔵司地区の遺構配置の状況とその性格の把握を目的として実施することとなった。また、それにくわえ、すでに市街地化が進行して発掘調査が難しい状況にある条坊内の運河と考えられる大溝の調査をおこなうこととした。
蔵司地区では、建物の可能性のある反射や、炉の痕跡をとらえることができた。一方、大溝については、市街地のため明瞭ではないが、溝の両岸の可能性のある反射をとらえることができた。



蔵司地区における炉の痕跡（画面中央部）

【実績値】
探査距離：6,741m
探査地点：５地点
概要報告作成：１件

【受託経費】
634 千円

【受託】
(様式 3)

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8018

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 32-1

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	永保寺開山堂の年輪年代調査（受託）((2) －④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	年代学研究室長　大河内隆之

【スタッフ】
廣岡とし（派遣職員）

【年度実績概要】

国宝永保寺（岐阜県多治見市）開山堂の屋根葺き替え修理工事に伴い、小屋や軒廻りを構成する部材を中心に、同堂の年輪年代調査を実施した。

調査に際しては、高解像度のデジタル一眼レフカメラを用いて各建築部材の年輪計測用画像を撮影し、当研究室においてデジタル画像を用いた年輪計測を行う方法を採用した。当該事業では３回（延べ８日）の現地調査を実施し、約 20 点の部材から年輪データを取得している。

永保寺は、正和二年（1313）に夢窓疎石と仏徳禅師らが同地を訪れ開創したと伝える中部地方随一の名刹であり、同寺開山堂は詰組の禅宗様建築の代表例として現在国宝に指定されている。開山堂には仏徳禅師の墓所である宝篋印塔のほか、夢窓疎石像と仏徳禅師像が安置されており、寺伝によると観応二年／正和六年（1351）に夢窓疎石が没し、その翌年（1352）に足利尊氏によって建立されたという。

しかし、これまでの調査では、辺材を十分に残す複数の部材から 1334 年頃の年輪年代が得られており、1352 年の建立とする寺伝には従い難い。むしろ、正慶元年／元弘二年（1332 年）の仏徳禅師の入寂を契機として開山堂建立事業が始まったと考えられることを、これまでの年輪年代調査結果は示唆している。

同堂の屋根葺き替え修理工事は今年度で完了するが、同寺では引き続き観音堂の屋根葺き替え修理工事などが続く予定である。その期間内は開山堂調査のための足場の設営なども都合がつきやすい。永保寺開山堂のような典型的な詰組の禅宗様建築は多くの部材によって構成されており、年輪年代調査の対象となる良好な部材も多く遺されている。よって、今後も継続して調査することが望まれるが、幸い永保寺および修理工事関係者の了解も得られているので、屋根葺き替え修理工事完了後も、引き続き年輪年代調査にあたり、同堂建立の経緯について考究する年輪年代学的な調査成果を提供したい。

永保寺開山堂の年輪年代調査風景

【実績値】
『永保寺開山堂の年輪年代調査に関する調査報告』((財) 文化財建造物保存技術協会・永保寺・多治見市教育委員会の関係者向けの調査報告書。次年度に屋根葺き替え修理工事予定の永保寺観音堂の調査成果とあわせて刊行予定)

【受託経費】
343 千円

【受託】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8019

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 33-1

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	東名遺跡出土動物遺存体調査（受託）((2) －⑤)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	環境考古学研究室長　松井章

【スタッフ】
丸山真史（客員研究員）

【年度実績概要】

東名遺跡群では、平成 20 年度に発掘報告書が刊行された後も、掘り上げた第一、第二貝塚の貝塚土壌の水洗選別作業を継続している。その選別作業で得られた魚類耳石は、これまで 80 個体にのぼるが、それらは大部分が破損した破片で、完全な形のものは少ない。それらの耳石を古生物学、特に魚類化石を専門とする大江文雄氏に同定を依頼したところ、現在の有明海に生息するスズキ、メナダ、ボラ、クロダイ、コイチなど代表種５種に加え、現在は生息しないニベ科２種を含む単純な魚種構成であることが判明した。

その特徴は、全個体数の 61%をスズキ科（Percichthyidae）スズキ *Lateolabrax japonicus* Cuvier、16%をボラ科(Mugilidae)のメナダ *Liza haematocheila* (Temminck et Schlegel)が占めることである。両種で 77%となり、東名遺跡に居住した縄文早期人は、耳石から見る限り、この 2 種を集中的に漁労したことを明らかにできた。その他の種も、他の骨格部位では種名までの同定は不可能であった。

従来、遺跡出土魚類の同定は、顎骨関係、鰓蓋骨、咽頭骨、棘などで行われてきたが、今回、大量の貝塚土壌を水洗選別することによって耳石の採集が可能となり、種の特徴が現れやすい耳石を用いたことで、種名レベルまで明らかにすることができた。メナダ、コイチなどは、これまでの方法では同定例がない。動物考古学の新しい可能性を示すことができたといえよう。

メナダ *Liza haematocheila* (Temminck et Schlegel)の耳石

出土した耳石の種名一覧（大江文雄による）

魚　　種	和名	個体数	%	摘　　要
Percichthidae(スズキ科)				
***Lateolanbrax japonicus* Cuvier**	**スズキ**	**49**	**61.25**	***Lateolabrax* sp., *? Lateolabrax* sp.も含む**
Mugilidae(ボラ科)				
***Liza haematocheia* (Tem. et Sch.)**	**メナダ**	**13**	**16.25**	
***Mugil cephalus* Linnaeus**	**ボラ**	**2**	**2.5**	
Sparidae(タイ科)				
***Acanthopagrus schlegeli*(Bleeker)**	**クロダイ**	**8**	**10**	***Acanthopagrus* sp., *?Acanthopagrus* sp.も含む**
Sparidae gen. et sp. indet.	**不明種**	**2**	**2.5**	
Sciaenidae(ニベ科)				
***Nibea albiflora* (Richardson)**	**コイチ**	**4**	**5**	
***Nibea mitsukurii*Jordan et Snyder**	**ニベ**	**1**	**1.25**	
***Miichthys miiuy* (Bsilewsky)**	**ホンニベ**	**1**	**1.25**	
合計		**80**	**100**	

【実績値】
耳石の同定個体数：80 個体

【受託経費】
708 千円

【受託】
(様式 3)

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8020

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 33-2

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	長割遺跡の動物遺存体調査（受託）((2) －⑤)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	環境考古学研究室長　松井章

【スタッフ】
山崎健（研究員)、納屋内高史（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）

【年度実績概要】

新潟県長割遺跡では、縄文時代後期前葉主体の遺構や遺物包含層から白色の微細な焼骨片が多量に確認された。これらの骨片類を回収するために、遺構ごとに土壌を採取して、フルイによる選別作業を実施した。

出土資料は、すべて火を受けて白色化した焼骨の細片で、かなりの高温にさらされたものと考えられる。同定結果から、出土した魚類の生息環境を考慮すると、主に河川や湖沼などの淡水域に生息する種としてはサケ科、アユ、コイ科が、沿岸や沖合などの海水域に生息する種としてはタイ科、コチ科、ブリ属、板鰓亜綱（エイ・サメ類)、ニシン科が認められた。そのため、長割遺跡では淡水域から海水域までを漁場としており、出土量からみて、とくに河川でサケ科魚類を集中的に獲得していたと推測される。狩猟活動では、イノシシやニホンジカを主体として、ツキノワグマやタヌキも獲得していた。ほかに種同定が可能な資料は認められなかったが、鳥類の骨が出土していることから、鳥類も狩猟していたと推測される。

炉跡からの出土資料には、魚類が多く含まれていた。炉跡資料は、炉の使用時期と関連する可能性が高く、当時の食生活の一端が反映されたものと評価できる。また、袋状土坑の出土資料は、炉跡資料と類似した様相を示し、廃絶時に炉跡内の焼土を投棄したとみられる。一方、遺物包含層出土資料には哺乳類が非常に多く、古人骨を含むという特徴があり、葬制や儀礼に関わる資料が含まれている可能性が指摘できる。

長割遺跡から出土した動物遺存体や古人骨は、骨が焼けて無機化したために残りやすくなったものと考えられ、貝塚が少ない日本海側において非常に重要な資料である。焼骨の生成に関して多様な要因が想定されるため、生業だけでなく、葬制や儀礼など、縄文時代研究に寄与できる資料といえる。

長割遺跡から出土したサケ科魚類
（上段： 歯，下段： 椎骨破片）

【実績値】
同定資料数：573 点

【受託経費】
338 千円

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8021

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 33-3

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	六反田南遺跡Ⅳにおける動物遺存体の同定（受託）((2) －⑤)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	環境考古学研究室長　松井章

【スタッフ】
山崎健（研究員）

【年度実績概要】

六反田南遺跡は、新潟県糸魚川市に所在する縄文時代中期の低地集落である。新潟県埋蔵文化財調査事業団が実施した国道 8 号糸魚川東バイパス建設に伴う発掘調査により、縄文時代中期の遺物包含層から白色の微細な焼骨片や炭化種子が多量に確認された。

これらの骨片類や種実類を回収するためには、土壌を採取してフルイによる選別作業を実施する必要がある。そこで、奈良文化財研究所では 1 ㎜目までのフルイによる水洗フルイ選別法と 0.25 ㎜目のフローテーション法を実施し、微細遺物を回収した。合計 4,564 g の土壌を選別し、18.83 g の骨片、503.33 g の炭化材片、2.72 g の種実類を回収した。なお、分析にあたっては、奈良文化財研究所だけでなく、新潟県埋蔵文化財調査事業団の土壌選別作業で回収された動物遺存体や植物遺存体も同定対象とした。

同定は現生骨格標本との比較により行い、比較標本には環境考古学研究室が所蔵する標本（NAC 標本）を用いた。同定や計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。その結果、動物遺存体は 13,429 点（433.55 g）の資料が同定できた。哺乳類ではニホンジカ、イノシシ、ツキノワグマ、鳥類ではカモ科、キジ科、魚類ではサケ科、サメ類、タイ科などを確認した。とくにサケ科魚類が非常に多く出土しているのが特徴的である。種実類は 169 点を同定した。オニグルミ、カラスザンショウ、サンショウ属、ウコギ科などが多く出土している。

水洗フルイ選別選別法による土壌選別作業風景

【実績値】
同定資料数：13,598 点

【受託経費】
893 千円

【受託】
(様式 3)

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　8022

業務実績書(受託事業)

研究所 No.36-1

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国指定史跡高瀬石仏保存修理設計監理業務（受託）((3)-③)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉

【スタッフ】
森井　順之（保存修復科学センター）

【年度実績概要】
国指定史跡高瀬石仏（大分市）では仏龕天井部の剥離や表面の藍藻類繁茂などが保存上の問題となっている。管理者である大分市は「史跡・大分高瀬石仏調査委員会」を開催、委員により議論した結果、仏龕内の着生生物除去、剥落止め、覆屋の設置を保存修理事業で行うこととなり、それらの設計監理を東京文化財研究所で受託した。

諸般の事情により施工開始が 10 月中旬となったが、仏龕のある丘陵頂部の撥水・排水施工、紫外線殺菌灯を用いた仏龕内部の着生生物除去、仏龕表面の剥落止め、覆屋建設などにおいて、東京文化財研究所の指導・助言のもと３月までに終了した。

写真　丘陵頂部の雨水排水方法に関する協議

【実績値】
受託研究報告書

【受託経費】
1,691 千円

【受託】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 8023

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No.36-2

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	霧島神宮における彩色剥薄止めの手法開発及び施工監理（受託）((3)-③)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター副センター長　川野邊　渉

【スタッフ】
森井　順之、早川典子（以上、保存修復科学センター）

【年度実績概要】
国指定重要文化財霧島神宮本殿の壁画および建築彩色を保存するにあたって、環境面からの保存対策、残存する壁画および建築彩色の状態調査、クリーニング、剥落止めの手法、材料に関する実験、助言、施工管理を受託した。

対象となる壁面が大きいため、全体の施工は３年度計画とし、今年度は、試験施工として４面の施工管理を行い、無事終了した。過去に用いられた修復材料の同定とその除去手法に関しても調査、実験を行い、その成果を施工に反映することができた。

施工が完了し、顔料の剥落止めの終了した壁面

【実績値】
受託研究報告書

【受託経費】
575 千円

【受託】
(様式 3)

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8024

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 38-1

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	田熊石畑遺跡武器形青銅器の保存修理及び保存台作製（受託）((3) －④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長　高妻洋成

【スタッフ】
脇谷草一郎（埋蔵文化財センター研究員)、田村朋美（埋蔵文化財センター研究員)、降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）

【年度実績概要】

福岡県宗像市の田熊石畑遺跡（弥生時代中期前半）において武器形青銅器 15 点が出土した。これらの武器形青銅器は、出土時点ですでに腐食が進行した状態にあり、取り上げにあたって著しい破損が懸念されたため、ガーゼや副木をアクリル樹脂で接着して応急的に補強が施された。奈良文化財研究所では、これらの武器形青銅器の保存修理を 2 ヵ年にわたり受託することになった。本年度はその初年度であり、7 点に対して保存修理をおこなった。

保存修理にあたって、肉眼観察、顕微鏡観察、Ｘ線ラジオグラフィならびに蛍光Ｘ線元素分析を実施したところ、これらの武器形青銅器は腐食がきわめて進行し、ブロック状の崩壊や刃部の粉状化を生じていることが明らかとなった。したがって、現状でのレプリカ作製のための型取りは極めて困難であること、固着した遺物を分離するために内部状況および固着状況を把握する必要があることから、高エネルギーＸ線ＣＴ装置による断層撮影をおこない、三次元画像を作成した。これらのＸ線ＣＴ画像からは、武器形青銅器の内部まで腐食が進行していること、遺物同士を固着しているのは粘土状の土であることなどが明らかとなった。

以上の事前調査から得られた劣化状態に関する知見をもとに、応急処置で施されたガーゼや副木の取り外し法、個々の遺物に適したクリーニング法、安定化および強化処置法を検討し、実行に移した。その際、接合可能な破片はアクリル樹脂による接着をおこない、変形を生じているものは無理に接合しないという方針をとった。欠損部分については、取扱い時に引っかかることによる破損を防ぐための必要最低限の充填にとどめた。

以上の事前調査と保存修理の結果、本年度搬入した武器形青銅器を安定した状態にすることができた。

取り上げ時の応急処置に際して接着されたガーゼの除去作業

【実績値】
保存修理：武器形青銅器 7 点
報告書作成：１件

【受託経費】
4,998 千円

【受託】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8025

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 38-2

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	宇治橋擬宝珠成分分析（受託）((3) －④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長　高妻洋成

【スタッフ】

脇谷草一郎（保存修復科学研究室研究員)、田村朋美（保存修復科学研究室研究員)、降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）

【年度実績概要】

伊勢神宮の宇治橋は、遷宮と同様、20 年ごとに架け替えがおこなわれている。その欄干には、現在、最も古いもので慶長から、新しいもので寛文銘の擬宝珠が取り付けられている。しかしながら、そうした紀年銘と実際の製作年が一致するかどうかは定かではない。日本において現存する欄干の擬宝珠で最古とされているのは､京都市鴨川に架かる三条大橋の擬宝珠である。宇治橋の擬宝珠の製作年がその紀年銘のとおりであるならば、三条大橋のものよりも古いということになる。そこで、製作年代についての知見を得るため、宇治橋に取り付けられている擬宝珠の成分組成を調査した。

擬宝珠の元素組成は、基本的に、主成分として銅、スズおよび鉛からなっている。亜鉛は検出されなかった。また、慶長、明応および寛文銘の擬宝珠からサンプリングして精密化学分析をおこなったが、若干の組成比の違いはあるものの、年代などを反映するような結果は得られなかった。

宇治橋擬宝珠の蛍光Ｘ線元素分析

【実績値】

分析点数：宇治橋（現地）に取り付けられた擬宝珠 16 点、収蔵庫保管擬宝珠等 6 点

報告書作成：1 件

【受託経費】

696 千円

【受託】
(様式 3)

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8026

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 38-3

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	埋蔵文化財発掘調査に係る青銅器科学分析業務委託（受託）((3) －④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長　高妻洋成

【スタッフ】
脇谷草一郎（埋蔵文化財センター研究員)、田村朋美（埋蔵文化財センター研究員)、降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）

【年度実績概要】
弥生時代中期の遺跡である長野県中野市柳沢遺跡より銅戈８点ならびに銅鐸５点が出土した。長野県内における初めての銅戈出土例である。また、出土した銅戈のうち１号銅戈は、その型式から九州型であるとされるが、東日本で九州型銅戈が出土したのは初めてのこととなる。

平成 20 年度と平成 21 年度におこなった受託事業では、保存修理とそれに先立つ事前調査をおこなったが、本年度は、銅戈５点（４～８号）および銅鐸２点（１・２号）について科学分析業務を実施した。調査内容は、Ｘ線ラジオグラフィによる内部構造調査、遺物表面の肉眼観察および顕微鏡観察、蛍光Ｘ線元素分析ならびにサンプリング法によるＩＣＰ発光分析である。

Ｘ線ラジオグラフィの結果、肉眼観察では比較的劣化していないと思われた銅戈にも細かな亀裂が存在すること、銅鐸はかなり腐食が進行していることが明らかとなった。遺物表面の肉眼観察と顕微鏡観察では、銅戈表面にきわめて細かな亀裂が観察されること、銅鐸表面では腐食が進行し、酸化銅、塩基性炭酸銅および酸化錫などのサビ層が皮殻状に形成されていることが把握できた。蛍光Ｘ線元素分析およびＩＣＰ発光分析の結果からは、今回分析した銅戈の成分組成は、前回および前々回の受託事業において分析した大阪湾型とされる銅戈と類似し、九州型とされる１号銅戈とはスズの含有率が高いという点で異なることが判明した。また、銅鐸については、前回分析した銅鐸と同様、九州型の銅戈と類似した成分組成であることがわかった。２～７号銅戈では腐食があまり進行していないのに対し、1 号銅戈と銅鐸は腐食が進行しているという状況にも共通性が認められる。

以上の科学分析の結果から、柳沢遺跡出土の４～８号銅戈ならびに１・２号銅鐸について、その劣化状況を詳細に把握し、保存処理に対して有用な知見を提示することができた。

銅鐸の精密分析のためのサンプリング

【実績値】
分析点数：銅戈５点および銅鐸２点
報告書作成：１件

【受託経費】
1,283 千円

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8027

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 38-4

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	土壌水分の蒸発による史跡ガランドヤ古墳石室内環境の変化に関する調査（受託）((３)－④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長　高妻洋成

【スタッフ】
脇谷草一郎(埋蔵文化財センター研究員)、田村朋美（埋蔵文化財センター研究員)、降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）

【年度実績概要】

大分県日田市に所在する史跡ガランドヤ古墳は、玄室奥壁などに赤色や緑色の顔料で装飾が施されている。これらの石材表面には、石材の劣化によると思われる石材表面の剥離が生じており、装飾の保存が危ぶまれている。

このような劣化を引き起こす要因として、石材表面における乾湿の繰り返しが挙げられる。すなわち、石室周辺の土壌から蒸発した水が石材表面で結露して石材の濡れを引き起こし、さらに石室内大気温度あるいは石材表面温度の上昇に伴い、再び蒸発することを繰り返していると推定される。このような状況に陥る原因としては、次の２点が挙げられる。１）石室周辺土壌の含水率が比較的高い。２）石室の断熱性が乏しいため、石室石材および石室内大気の温度変化が大きい。

石室に設置した覆屋と気象観測装置

ガランドヤ古墳が位置する段丘は地下水位が比較的深く、石室周辺土壌の水分量に影響をおよぼすものは雨水のみであることが、以前に実施した環境調査から判明している。そこで本研究では、遮水性の墳丘の復元を想定した覆屋を設置して、周辺土壌への雨水の浸透を抑制し、石室周辺土壌の含水率の低下を促進させた。そして、石室周辺土壌の含水率の低下に伴い、石室石材表面での結露が抑制できるのか、検討をおこなった。

調査の結果、石室周辺および石室床面の土壌含水率は低い値で安定しており、土壌が乾燥した環境を作り出すのは可能であることが確認された。

今回の調査では、断熱性をもつ覆屋を設置することはできなかったため、上記２）については今後継続して検討する必要があると考える。

【実績値】
報告書作成：１件

【受託経費】
2,670 千円

【受託】
（様式３）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　8028

業務実績書（受託事業）

研究所 No.43-1

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務（受託）((4)-①)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長　石﨑武志

【スタッフ】
佐野千絵、早川泰弘、木川りか、吉田直人、犬塚将英、川野邊　渉、中山俊介、北野信彦、早川典子、森井順之、加藤雅人（以上、保存修復科学センター）、間渕　創、坪倉早智子（以上、客員研究員）

【年度実績概要】
昨年度に引き続き、壁画の状態記録のため損傷図面を作成した。天２の漆喰層陥没、青龍の表層面損傷、漆喰層について、透明シートへの描き込みとデジタル化を完了した。また完成した、図面の点検も引き続き行っている。天１・東男子・青龍・西女子については常温抽出布海苔にて脆弱化した漆喰層の１度目の強化を行った。これにより一昨年度前より行っていた１度目の強化作業は全石終了した。天２はクリーニング後に精製布海苔による２回目の漆喰層強化を行っている。
また、より適切な処置方法を検討するために、模擬漆喰を用いた実験を行い、作業道具の作成・改良も行った。これらの作業についての記録、資料整理も随時行っている。
平成のカビの発生の発端となった 2001 年の分離株を含む重要な菌株約 450 株についてアンプルの生育確認、メンテナンスを実施している。
古墳壁画仮修復施設においては、ひきつづきムカデ、クモなどのモニタリングのためのトラップ調査を実施し、必要に応じて物理的な侵入防止対策など講じた。施設内の環境中の浮遊菌調査についても８月と２月に調査を実施し清浄な環境であることを確認した。
石室の石材間に使用されていた目地漆喰について、アミノ酸、糖、脂肪酸などの含有量を定量し、どの程度の有機物が目地漆喰に含まれていたかについて詳細調査を行った。

【実績値】

【受託経費】
45,608 千円

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 8029
（様式３）

業務実績書（受託事業）

研究所 No.43-2

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	特別史跡キトラ古墳保存対策等調査（受託）　((4)-①)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長　石﨑武志

【スタッフ】
佐野千絵、木川りか、吉田直人、犬塚将英、川野邊　渉、中山俊介、北野信彦、早川典子、森井順之、加藤雅人（以上、保存修復科学センター）、間渕　創、坪倉早智子（以上、客員研究員）

【年度実績概要】
4月12日～4月30日、5月10日～5月28日、10月12日～10月29日、11月8日～11月25日の4期にわたり、集中的に漆喰の取り外しを行った。ヘラ、ダイヤモンド・ワイヤーソーを使用し、北壁・東壁・西壁・南壁の取り外しを行い、石室内の漆喰すべての取り外しが完了した。集中取り外し期間中で作業のない土曜日・日曜日、及び取り外し期間外は石室内に紫外線灯を設置し、週に1回のカビ点検を行っている。

これまでに取り外した漆喰片については随時経過観察と処置を行い、「朱雀」については平成22年5月の公開のための額装を完成させた。また、昨年度までに剥ぎ取った天文図漆喰片の適切な処置方法の検討、漆喰上の泥の処置のための実験を行っている。これらの作業についての記録、資料整理も随時行っている。

石室内の微生物の調査を５月、１０月に実施し、おもに間欠的な紫外線照射でカビなどの被害を防止している環境において従来と比較して菌類や細菌などの微生物相に変化がみられるかどうかについて調査した。目視ではほとんど被害はみられなかったが、培養すると微生物は検出され、分離された微生物の種類は、昨年までとあまり変化はなかった。

壁画の修復材料として使用されている樹脂などの材料について、本年度は、酵母や細菌などによる資化性（栄養源として利用できるかどうか）について調査した。その結果、細菌などによって、一部の材料は資化される場合があることがわかった。

施設内の除菌清掃を実施した。また、小前室についても、カビなどが生えにくくなるよう、樹脂施工メンテナンスを実施した。

キトラ古墳から2004年以降分離された菌株約260株についてアンプルの生育確認、メンテナンスを実施した。

【実績値】

【受託経費】
43,031 千円

【受託】
(様式 3)

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8030

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 44-1

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務（受託）((4)-①)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】
廣瀬 覚、青木 敬、降幡順子、玉田芳英、若杉智宏、石田由紀子［以上、都城発掘調査部（飛鳥藤原地区)］、辻本与志一、脇谷草一郎、高妻洋成、田村朋美［以上、埋蔵文化財センター］、井上直夫、栗山雅夫、岡田愛［以上、企画調整部］、肥塚隆保［客員研究員］、石崎武志、早川泰典、吉田直人、佐野千絵、三浦定俊（以上、東文研)、青柳泰介、岡林孝作（奈良県立橿原考古学研究所)、水野敏典（奈良県教育委員会)、相原嘉之（明日香村教育委員会)

【年度実績概要】
平成 21 年度に引き続き、平成 18 年・19 年度に実施した石室解体事業に係る発掘調査の成果、出土資料・記録類の整理作業、石室石材の修理と安全な拘束の実施、安置法の検討、壁画の保存修復（劣化原因）に関する分析調査を進めた。
『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』資料編：発掘調査（原案）を執筆、編集し、文化庁へ提出した。さらに、石室石材の細部三次元計測、発掘調査３Ｄ計測による石室解体事業のＣＧ動画作成、・発掘調査および解体作業中に撮影した記録映像の編集作業、遺構図のデジタルトレース作業、石室石材上に残存する朱線の材質分析、版築土の粒度分析調査などを実施した。
石室石材の修理としては、石室石材の接合・補填法の検討、安定台の改良製作（天井石 1、2）ならびに天井石 3 の亀裂部側面支持サポートの製作をおこなった。
壁画の保存修復に関する分析調査としては、今後の経年変化の基礎データとして用いるために、改造したデジタルアーカイブスキャナを使用して、壁画面（4 面）の高精細データならびに赤外画像も取得した。また、紫外線画像を撮影するための開発実験をおこない、紫外線画像の取得も可能な状態とした。
劣化原因調査および修復のための継続的な材料調査として、壁画面上での分析時に利用する機器固定ステージの改良をおこない、蛍光 X 線分析（西壁 3、閉塞石)、可視分光分析、近赤外分光分析、テラヘルツ分光イメージングを実施し、鉛の面的な分布状況や表面の観察、漆喰の断面方向の調査を実施した。
漆喰の分析調査では目地漆喰の微量成分分析、偏光顕微鏡観察、電子顕微鏡観察をおこなった。
以上の作業を踏まえて、『国宝高松塚古墳壁画高級保存対策事業報告書』資料編の執筆、編集を行った。

天井石 3 の亀裂部側面支持サポート

【実績値】
論文等数 2 件（①～②)
①肥塚隆保他「高松塚古墳壁画の材料調査」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010.6
②肥塚隆保他「材料調査の概要」『月刊文化財』第 563 号 2010.8

研究発表件数３件（③～⑤)
③肥塚隆保他「国宝高松塚古墳壁画の材料調査－目地漆喰および下地漆喰－」日本文化財科学会、2010.6
④高妻洋成他「ミリ波およびテラヘルツ波の文化財への応用Ⅰ―層構造調査へのテラヘルツ波イメージング技法の基礎研究―」日本文化財科学会、2010.6
⑤降幡順子他「高松塚古墳壁画の材料調査－蛍光 X 線分析法による下地漆喰に関する調査(2)－」日本文化財科学会、2010.6

【受託経費】
67,992 千円

【受託】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8031

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 44-2

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務（受託）((4)-①)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】

玉田芳英、若杉智宏、高橋 透、木村理恵、降幡順子、[以上、都城発掘調査部]、井上直夫、中村一郎、栗山雅夫、岡田愛[以上、企画調整部]

【年度実績概要】

都城発掘調査部では、特別史跡キトラ古墳より出土し、保存処理の終了した遺物の管理・保管環境について継続的に調査・記録をおこなった。非常に脆弱遺物な遺物などは処理後にも定期的に状態観察などをおこなう必要がある。このため、琥珀玉や微細な金属片などの遺物については点検を実施し、密閉用特殊フィルムおよび脱酸素剤の交換などをおこなった。

展示活用としては、キトラ古墳壁画のハイビジョン 3DCG ナレーションの吹き込み作業（英語・韓国語・中国語）をショートバージョンについて、ロングバージョンの吹き込み作業（日本語、英語、韓国語、中国語）を実施した。またショートバージンはブルーレイディスクプレス作業およびフォトマップ資料の印刷製本を実施した。さらに壁画面の漆喰が石材からどの程度浮いているのかを画像中で定点を指定すると計算・表示できるコンテンツを作成した。

今後予定されているキトラ古墳墳丘の整備に関しては、標高値の記載された遺構編集図を作成した。また実際の整備案を参考とするため、墳丘の復元に関する検討会を 2 回開催し、復元案を作成した。

キトラ古墳壁画 2004　ブルーレイハイビジョンディスク

【実績値】

論文等数 1 件（①）

① 降幡順子・佐藤昌憲「キトラ古墳出土琥珀玉の保存処理」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010.6

制作物　4 件（②～⑤）

②奈良文化財研究所「ブルーレイハイビジョンディスク　キトラ古墳壁画 2004」ショートバージョン（英語、韓国語、中国語版）　2011.3

③奈良文化財研究所「ブルーレイハイビジョンディスク　キトラ古墳壁画 2004」ロングバージョン（日本語版、英語、韓国語、中国語版）2011.3

④奈良文化財研究所「キトラ古墳壁画　フォトマップ資料　奈良文化財研究所史料 86 冊」2011.3

⑤奈良文化財研究所「キトラ古墳壁画高低座標系分布の計算・表示コンテンツ」　2011.3

【受託経費】

45,372 千円

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 8032

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 45-1

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区檜隈寺跡周辺遺跡発掘調査（受託）((4)-②)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】

石田由紀子、森先一貴、石橋茂登、若杉智宏、高橋 透、高橋知奈津［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区)］、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛［以上、企画調整部］

【年度実績概要】

本調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業に関わる事前調査である。調査地は、明日香村南西部の丘陵上に位置し、この丘陵上には、渡来系氏族である東漢氏の氏寺と考えられる檜隈寺が所在する。今年度は、2008 年の試掘調査および 2009 年度の発掘調査の成果をもとに、檜隈寺北方の丘陵頂部から西側斜面にかけて２カ所（１区・２区)、丘陵部東側斜面裾部に５カ所の試掘坑を設け、発掘調査を実施した。調査期間は 2010 年８月 24 日～2010 年 12 月 27 日。調査面積は、計 655 ㎡である。

講堂の北方約 50mに位置する１区では、後世の削平が著しかったものの、素掘溝２条、瓦組暗渠１基、谷１条を検出した。瓦組暗渠は７世紀後半の檜隈寺創建瓦を用いており、先端部のみ残存する。調査区南西部で検出した北西に入り込む谷筋の谷頭部分に暗渠を設置し、排水していたものと思われる。また、調査区西半では、平安時代以降の大規模な整地を確認した。

２区では、素堀溝２条、沼状堆積層、およびその下層から７世紀前半に位置づけられる土坑を１基確認した。２区では大規模な整地層を確認しており、整地層に含まれる遺物から７世紀前半、７世紀末～８世紀初頭、８世紀後半にかけて断続的に大規模な整地をおこなっていることを層位的に確認した。

また、丘陵東側斜面裾部に設置した試掘坑では、人頭大の石を用いた石敷を確認しており、土器の年代からも６世紀末から７世紀までのものと考えられる。

今年度の調査では、檜隈寺の伽藍が完成した７世紀後半の資料のみならず、これまで不明な点の多かった７世紀前半、および奈良時代以降の檜隈寺に関する重要な資料を得ることができた。

１区出土瓦組暗渠　北から

【実績値】

論文等数２件（論文１件①、その他１件②)

①石田由紀子・石橋茂登・高橋透「檜隈寺周辺の調査－飛鳥藤原第 164 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011. 6（予定)

②石田由紀子「檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原 164 次)」『奈文研ニュース№39』2010.12

出土遺物　軒丸瓦 25 点、軒平瓦 26 点、丸瓦 2630 点（380.0 kg)、平瓦 9325 点（762.5 kg)
土器 15 箱、鉄製品３点、鉄片１点、鉄釘２点、銭貨１点、鉄滓 14 点
羽口４点、種子２点、加工木１点、自然木１点

記録作成数　遺構実測図 50 枚、写真（４×５）136 枚

【受託経費】

9,329 千円

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8033

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 49-1

中期計画の項目	５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業　カンボジア（受託）（（１）－②－ア）		
【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	国際遺跡研究室長　杉山　洋

【スタッフ】
石村智、田代亜希子（以上、企画調整部）

【年度実績概要】

今年度は現地調査２回と日本での研究会１回を行った。研修事業としては、現地での研修活動を2回、大学における講義を1回行った

現地調査第１回目は 2010 年 11 月 27 日から 12 月 4 日に行った。プノンペン王立芸術大学の研修生７名と芸術文化省から２名が参加し、クラン・コー遺跡の２地点に調査区を設定し、計３トレンチで発掘調査を行った。第 6 地点第 2 トレンチでは、火葬に伴うレンガ状の遺構を検出した。あわせて物理探査を行い、遺構の有無を確認した。

現地調査第２回目は 2011 年２月 16 日から２月 21 日に、同じくクラン・コー遺跡で行った。２地点に各１トレンチを設定し発掘調査を行った。第 4 地点第 2 トレンチでは木簡墓２基を発見し、そのうちの１基では木棺の痕跡を検出した。

研修活動としては、まず第１回目の現地調査に合わせて、プノンペンの王立芸術大学で考古物理探査の講義を行った。講義だけでなく上記の現地調査の折に、プノンペン王立芸術大学考古学部の卒業生７名を現地へ帯同し、現場において探査実習を行った。第 2 回目の現地調査においては、出土遺物整理手法の研修として、遺物実測と写真撮影の研修を行った。

研究会は、２０１１年３月２５日に研究所飛鳥資料館で開催した。カンボジアから本事業の相手方である文化芸術省官房長ウク・ソチアット氏以下４名を招聘し、本年度の調査研修成果の情報共有と、今後の事業展開についての討議を行った。

現地における探査実習

大学における講義風景

【実績値】
現地調査２回：11 月　１回、２月１回
現地実習２回：11 月　１回、２月１回
研究会　１回：３月

【受託経費】
5,000 千円

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 8034

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No.52-1

中期計画の項目	５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	ユネスコ／日本信託基金　バーミヤーン遺跡の保護プロジェクト（受託）((1)-②-ウ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長　山内和也

【スタッフ】

清水真一、山内和也、有村　誠、影山悦子、邊牟木尚美、島津美子、鈴木　環、安倍雅史（以上、文化遺産国際協力センター)、前田耕作、谷口陽子、松岡秋子（以上、客員研究員)、井上和人、森本　晋、石村　智、脇谷草一郎、田村朋美、田代亜紀子（以上、奈良文化財研究所）

【年度実績概要】

文化遺産国際協力センターは、2004 年より、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金によるバーミヤーン遺跡保存事業に参画し、バーミヤーンの文化遺産保護のために様々な活動を行ってきた。本年度は、バーミヤーン遺跡保存事業第 10 次ミッションを実施し、日本国内においてアフガニスタンの考古学専門家の人材育成・技術移転を行った。

①バーミヤーン遺跡保存事業の実施

7/9～7/30 にかけて、アフガニスタンのバーミヤーン遺跡において、アフガニスタン情報文化省と共同で「バーミヤーン遺跡保存事業」第 10 次ミッションを実施した。第 10 次ミッションでは、1) 東大仏龕の西側に隣接する C(a)窟、C(b)窟、D 窟、D1 窟の壁画の状態調査と応急的な保存修復処置、2) 第 6 次、第 7 次、第 8 次ミッションで実施した N(a)窟と I 窟における壁画の保存修復処置の経過観察、3) 来年度以降の発掘調査候補地の視察、4) 第 8 次ミッションまでの考古学調査で得られた考古遺物の整理、などを実施した。全ての現地での活動は、アフガニスタン専門家と共同で実施することで、現地専門家の人材育成・技術移転も達成することができた。

②考古学専門家の人材育成・技術移転

アフガニスタン考古学研究所よりアフガニスタン人専門家 2 名を招へいし、2 つの研修を行った。第 1 は、若手研究者を対象とした考古学研修で、8/2～12/17 の日程で、東京文化財研究所、静岡県埋蔵文化財調査研究所、奈良文化財研究所の 3 機関で連携して実施した。研修では、フィールド調査で必要な発掘、測量の方法や最新の機器の使用方法、また発掘後の室内作業として、遺物の実測、拓本、インクトレースによる製図などが指導された。それぞれの機関で、共通した研修内容を繰り返し指導することができたので、研修生の研修内容に対する理解と習熟度は高かった。研修の最後には、アフガニスタンの考古学事情や研修内容を発表する報告会「アフガニスタン人考古学専門家による研修成果発表会」を実施した。

第 2 は、シニア研究者を対象とした研修で、9/27～10/15 の日程で、東京文化財研究所と奈良文化財研究所が連携して行った。この研修は、遺跡の発掘調査後の遺跡の公開・管理の方法を学ぶことを目的としたもので、さまざまな史跡整備の方法やサイト・ミュージアムにおける展示の方法などを実見するために関東や近畿の史跡公園や博物館を訪れて研修を行った。

【実績値】

報告会：「アフガニスタン人考古学専門家による研修成果発表会」(08.12.17)
報告書：『バーミヤーン遺跡保存事業概報-2009・2010 年度（第 9・10 次ミッション）-』

【受託経費】

98,000USD（間接経費 15%含む）

【受託】
（様式 3）

施設名 東京文化財研究所　　処理番号 8035

業務実績書（受託事業）

研究所 No. 53-1

中期計画の項目	５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	インドネシア西スマトラ州パダンにおける歴史的地区文化遺産復興支援（専門家交流）事業　（受託）（(2)－ア）		
【担当部課】	文化遺産国協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長　清水真一

【スタッフ】
亀井伸雄（東京文化財研究所・所長）、秋枝ユミイザベル（文化遺産国際協力センター）、岡村知明（同・客員研究員）、康　成源（同・来訪研究員）、田代亜紀子（奈良文化財研究所）、武内正和（文化庁）、渡邊　泰（塩尻市）、布野修二（滋賀県立大学）、牧　紀男（京都大学）、脇田祥尚（近畿大学）、竹内　泰（宮城大学）、有　友至、中島郁子（以上、国立公文書館）、菅原由美（大阪大学）

【年度実績概要】
本事業は、2009 年 9 月 30 日に発生した西スマトラ州地震において被災したインドネシア共和国西スマトラ州パダンの文化遺産の復興を支援することを目的としている。事業は、2009 年にインドネシア政府およびユネスコの要請のもとで同研究所が行った調査成果をもとに、現在も復興の過程にあるパダンの歴史的建造物および町並み、そして被災した文字文化財の保存修復に関して、日本人専門家を派遣しワークショップを開催することで、その復興を支援することを目的としたものである。また、関係分野のインドネシア専門家を日本に招へいし、日本が蓄積してきた歴史的建造物および町並みに対する耐震、防災技術、また文字文化財の修復技術についての技術交流を行った。

平成 22 年度に実施された本事業は、歴史的建造物・町並みおよび文字文化財の 2 班に分かれておこなわれた。それぞれにおいて、現地の状況調査、ワークショップ、日本への専門家招へいとを行った。

［建造物・町並み］現地調査、ワークショップ、招へい

［文字文化財］　現地調査、日本招へい

【実績値】
［文字文化財］
現地状況調査およびワークショップ：2010 年 11 月 20 日―28 日
日本への専門家招へい：2011 年 1 月 25 日―2 月 2 日
報告書『西スマトラ州パダンにおける文字文化財復興支援』
［建造物・町並み］
現地状況調査：2010 年 10 月 15 日―25 日
ワークショップ：2010 年 12 月 11 日―17 日、2011 年 1 月 1 日―10 日
日本への専門家招へい：2011 年 2 月 7 日―13 日
報告書『西スマトラ州パダンにおける歴史的建造物および町並み復興支援』

【受託経費】
15,000 千円

【受託】
（様式 3）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　8036

業務実績書（受託事業）

研究所 No. 53-2

中期計画の項目	５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力コンソーシアム事業（受託）((2)-ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長　清水真一

【スタッフ】
田代亜紀子（特別研究員）、原本知実、原田　怜（以上、特別研究員（アソシエイトフェロー））、土居香菜子、中山仁美（以上、事務補佐員）、小角由子、（研究補佐員）、佐藤　桂、岡村友明（以上客員研究員）

【年度実績概要】
文化遺産国際協力に係わる諸課題について議論するための分科会を計１３回、専門家会合を計 1 回開催すると共に、会員間の情報共有を促進するための場として研究会を２回、講演会を 1 回開催した。コンソーシアム活動を広報するために、５月には、一般市民向けの公開シンポジウムを行ったほか、コンソーシアムパンフレット及び国際協力事業を紹介する冊子の作成、公式ウェブサイトのデータ追加・改修を行った。さらに、協力相手国調査としてアルメニアとミクロネシアにて調査を実施した。また、四カ国（フランス、イタリア、オランダ、米国）を対象に被災文化遺産の復旧に係る調査を実施した。

Ⅰ．コンソーシアムの企画・運営

1. 運営委員会を２回開催し活動方針等を協議したほか、３月には講演会と併せて総会を開催した。2. 企画分科会、東南アジア分科会、西アジア分科会、東アジア・中央アジア分科会を計１３回開催した。3. 文化遺産情報共有化ワーキンググループでは、文化遺産情報共有化システム構築にむけての活動を同志社大学文化遺産研究科学センターによる再委託事業を中心に行った。事業報告及び研究成果を研究会で発表し、文化遺産情報共有化ワーキンググループは終了とした。4. 広域ワーキンググループを設置し、欧州、アフリカ、中東をカバーする分科会の立ち上げの是非について検討した。5. プリア・ヴィヒアに関する勉強会を１回開催した。　6. 広報活動のため、事業紹介冊子の作成、一般向けウェブサイトのデータ追加、及びウェブサイト機能の向上のための改修を行った。

Ⅱ. 情報共有と情報発信

1. 国際シンポジウム「文化遺産保護は平和の礎（いしずえ）をつくる」を開催した。2. 研究会「アンコール遺跡に対する国際協力と情報管理－情報資源共有化の課題と展望－」、「文化遺産保護の国際動向」を開催した。　・講演会として「欧州における遺産―非政府的視点から」を開催した。3. 報告書『平成２２年度協力相手国調査　ブータン』をまとめた。4. 報告書『被災文化遺産復旧に係る報告書―支援実施国編』をまとめた。5. 報告書『第 6 回研究会遺跡の情報発信と地域への還元』をまとめた。6. 報告書『文化遺産保護は平和の礎をつくる』をまとめた。

国際シンポジウム「文化遺産保護は平和の礎をつくる」

Ⅲ．文化遺産国際協力に関することがら

1. 被災文化遺産の復旧に係る調査として、フランス、イタリア、オランダ、米国を対象に調査を行い、報告書をまとめた。
2. 日本によるモンゴル国への国際協力事業の支援調整を行った。3. 協力相手国調査としてアルメニアとミクロネシアにて調査を実施した。

【実績値】
運営委員会の開催：２回、総会の開催：１回、国際シンポジウムの開催：１回、分科会の開催：企画分科会４回、東南アジア分科会３回、西アジア分科会３回、東・中央アジア分科会３回）　合計１３回、専門家会議の開催：　合計１回、特別講演会開催　１回、研究会の開催　２回、諸国国際協力体制調査：　アルメニアの文化遺産国際協力状況調査、ミクロネシアの文化遺産国際協力状況調査、被災文化遺産の復旧に係る調査実施数：　４カ国　（フランス、イタリア、オランダ、米国）

（成果物ドキュメント名）①『平成２２年度協力相手国調査　ブータン』（2011 年 3 月、500 部）②『平成２２年度協力相手国調査　ブータン 英語』（2011 年 3 月、130 部）③『被災文化遺産復旧に係る報告書―支援実施国編』（2011 年 3 月、500 部）④『被災文化遺産復旧に係る報告書―支援実施国編　英語』（2011 年 3 月、500 部）⑤『第 6 回研究会遺跡の情報発信と地域への還元』（2011 年 3 月、120 部）⑥『文化遺産保護は平和の礎をつくる』予稿集（2010 年 5 月、430 部）⑦『文化遺産保護は平和の礎をつくる』（2011 年 3 月、430 部）⑧「文化遺産国際協力コンソーシアムパンフレット」（2010 年 5 月 1000 部、12 月 7000 部）⑨「文化遺産国際協力コンソーシアムパンフレット英語」（2010 年 5 月 400 部、7 月 1000 部）⑩「文化遺産国際協力事業紹介」　（2011 年 3 月、275 部）⑪「文化遺産国際協力事業紹介英語」（2011 年 3 月、275 部）

【受託経費】
60,126 千円

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 8037

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No.53-3

中期計画の項目	５　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業　インド（受託）((2)-ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長　山内和也

【スタッフ】

鈴木　環、島津美子（以上、文化遺産国際協力センター)、谷口陽子（客員研究員、筑波大学)、福山泰子（中部大学)、早川廣行（株式会社電画)、米澤　宏（写真家)、土田　勝（日本電信電話株式会社コミュニケーション科学基礎研究所)、樋上将之、渡辺真樹子、ステファニー・ボガン（以上、保存修復家)、中村土光、林田康一（以上、東京藝術大学)

【年度実績概要】

「東京文化財研究所とインド考古局との壁画保存に関する拠点交流事業」の枠組みにおいて、古代仏教壁画が豊富に残るインド・アジャンター石窟を対象に、壁画の保存修復のための調査・研究を行い、保存修復材料および技術に関する知識、専門的技術および経験を日本－インド間で共有し、人材育成・技術移転を図る。

１．日本におけるインド人保存修復専門家の人材育成

7 月 28 日～8 月 4 日にかけて、インド考古局の若手専門家１名を日本に招聘し、アジャンター壁画の保存に関する成果発表を行った。国内の研究所等では、壁画保存に有効な科学分析手法と機器の使用に関する研修を実施し、将来的な保存修復を担う若手専門家の人材の育成を行った。

２．壁画の高精細写真記録（第４次ミッション）

9 月 8 日～10 月 2 日にかけて第 4 次ミッションを実施した。インド考古局の専門家と共同で第 9 窟壁画の写真記録を行い、デジタルドキュメンテーションに関する専門的知識・技術の交換を行った。

アジャンター石窟では膨大に残る壁画の記録作業が課題とされていたが、昨年度、高精細デジタルカメラを使用し、第 2 窟壁画の全体図から細部の状態までを判別しうる高精細記録に成功し、インド考古局の専門家にとって初の経験となった。本年度は、遺跡の多様な状況に適応した、効率的・効果的な記録作業を目指し、実践した。保存修復における記録の重要性を共有し、また国内の様々な文化遺産保存における今後の導入が期待された。

３．壁画の保存修復（第５次ミッション）

11 月 14 日～12 月 4 日にかけて、第 5 次ミッションを派遣し、アジャンター壁画に特有な問題点に対する実践的な修復方法の定着を目指した。壁面に塗布されたシェラックの劣化の問題、コウモリの糞尿による被害に対して、インド考古局の若手専門家とともに状態観察、化学的な試験を行い、壁画の適切な保存修復方法を検討するための試験的なクリーニングを行った（右写真)。本年度は本事業の最終年度にあたることから、保存状態の記録・分析から修復作業にいたるまでの一連のプロセスを再確認することで、実践的な保存修復にむけた経験値の向上となった。

【実績値】

報告書１冊

①「東京文化財研究所とインド考古局との壁画保存に関する拠点交流事業」2010 年度業務報告書

【受託経費】

30,685 千円（拠点交流事業　モンゴル、中央アジアを含む。）

【受託】
(様式 3)

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　8038

業務実績書(受託事業)

研究所 No.53-4

中期計画の項目	５　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業　モンゴル（受託）((2)-ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長　清水真一

【スタッフ】
友田正彦、二神葉子、秋枝ユミイザベル、康　成源（以上、文化遺産国際協力センター)、北野信彦、本多貴之（以上、保存修復科学センター)、高妻洋成、脇谷草一郎、田村朋美（以上、奈良文化財研究所）

碑文に見られる赤色物質の調査（セルベン･ハールガ）

【年度実績概要】
平成 22 年度は、モンゴルで(1)建造物保存、(2)碑文・岩画の保存に関する技術交流、研修を行った。
(1) 建造物保存に関する研修
1. 6 月 26 日～7 月 3 日の日程でミッションを派遣し、ウランバートルのモンゴル教育・文化・科学省（MECS）及びセレンゲ県のアマルバヤスガラント寺院で、文化財の保存管理計画の策定についての協議及びワークショップを実施した。モンゴル側からは、MECS の関係者や、前モンゴルユネスコ国内委員会委員長、オルホン渓谷の文化的景観管理事務所長などが参加した。
2. 8 月 21 日～28 日の日程でミッションを派遣し、セレンゲ県のアマルバヤスガラント寺院で木造建造物の保存修復に関する研修ワークショップを開催した。モンゴル国立科学技術大学建築学科の学生を対象とし、保存修理設計に必要な事前調査について、建物の破損個所のマッピングなどの実際の作業を行った。
3. 2 と同時期に、アマルバヤスガラント寺院周囲に保護区域を策定するため、MECS やセレンゲ県、および村の関係者とともに、現地調査及びワークショップを実施した。
(2) 碑文・岩画の保存に関する研修
1. 8 月 18 日～28 日、ヘンティ県のセルベン・ハールガ、アラシャーン・ハダの 2 箇所でのミッションを実施した。目的は、両遺跡の保存について検討するうえで必要な保存科学的な手法に基づく遺跡の現状把握、モンゴル専門家への調査法に関する技術移転である。モンゴル側は文化遺産センター（CCH）から 4 名が参加した。今回は、石材の構造的な安定性および状態の調査をより詳細に実施した。具体的には、節理面や層理面の走向・傾斜の観察・測定、石材の表面温度や水分量、岩石の亀裂幅の現状の記録、析出した物質や岩体から浸出する水の分析などである。また、環境計測およびそれぞれの遺跡で見られた赤色の物質の分析も実施した。
2. 12 月 12 日～25 日、CCH の専門家 2 名を日本に招へいし、奈良文化財研究所で主に石材の保存処理とその評価に関する研修を行った。同時に、文化無償資金協力による供与が検討されている機材に関する研修を実施した。

【実績値】
「東京文化財研究所とモンゴル教育・文化・科学省および文化芸術局との拠点交流事業」2010 年度業務報告書　２点（建造物、碑文・岩画）
『モンゴル国アマルバヤスガダランド寺院の保存修復に関するワークショップおよび研修－保存管理計画ワークショップおよび建造物保存修復調査研修－』
『モンゴル国ヘンティー県所在セルベン・ハールガ、アラシャーン・ハダ遺跡における平成２２年度活動報告』

【受託経費】
拠点交流事業　インドに含まれる。

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 8039

（様式 3）

業務実績書（受託事業）

研究所 No. 53-5

中期計画の項目	５　文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業　中央アジア（受託）（(2)-ア）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長　清水真一

【スタッフ】

山内和也、島津美子、影山悦子（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、松岡秋子（客員研究員）、森本　晋（奈良文化財研究所）、増田久美、佐藤由季、エミリー・シェクルン、ステファニー・ボガン、マーティン・レーマン（以上、保存修復家）

【年度実績概要】

「中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」の枠組みにおいて、中央アジア諸国の文化財保存修復専門家間のネットワーク作りに貢献し、幅広い技術交流、人材育成の促進を図ることを目的とする。本事業では、タジキスタン共和国科学アカデミー歴史・考古・民族研究所と文化遺産保護のための協力に関する合意書にもとづき、タジキスタン国立古代博物館が所有する壁画の保存修復活動を通じ、若手タジク人保存修復家の育成を目指す。

１．本年度実施ミッション

平成２２年度５・６月に第８次、１０月に第９次ミッション、平成２３年２・３月に第１０次ミッションを実施し、タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画断片の保存修復作業を現地の研修生とともに行った。

第８次ミッションでは、カフィルカラ遺跡から出土した壁画断片と、カライ・カフカハＩ遺跡から出土した壁画断片を対象に、それらを新しい支持体に設置するマウント処置の試験を実施した。第９次ミッションにおいては、試験の結果をふまえ、さらなる改良を加えた。合計９点の壁画断片の保存修復およびマウント処置を完了し、博物館の展示室に設置した。

３年間の研修を通して、タジク人研修生は壁画断片の取扱方法、クリーニング、接合作業、強化処置、側面・表面の充填、新しい支持体への設置まで、一連の保存修復処置に必要な知識と技術を習得した。今後の課題は、壁画の状態に応じて、どのような修復処置が適切かを見極める能力を身につけていくことである。

新しい支持体の作成

２．ワークショップ開催

１０月末に古代博物館において第３回目となるワークショップ「中央アジア出土壁画の保存修復」を開催した。中央アジアのタジキスタン、カザフスタン、トルクメニスタンに加え、ロシア（エルミタージュ博物館）、中国（敦煌研究院）の保存修復専門家を招聘し、意見交換および技術交流を行った。今回のワークショップは、壁画断片を新しい支持体に設置するマウント処置をテーマとし、実習をおこなった。

【実績値】

報告書２件：

①ワークショップ「中央アジア出土壁画の保存修復 2010」

②「東京文化財研究所と中央アジア諸国における文化財保護に関する拠点交流事業」タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画片の修復（第８次、９次、10 次ミッション）2010 年度業務報告書

【受託経費】

拠点交流事業　インドに含まれる。

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 8040

（様式 3）

業務実績書（受託事業）

研究所 No.53-6

中期計画の項目	５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズⅠ）にかかる国内支援業務（受託）((2)-ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長　清水真一

【スタッフ】

山内和也、邊牟木尚美（以上、文化遺産国際協力センター）、松田泰典、藤沢　明、伏屋智美、末森　薫（以上、客員研究員）

【年度実績概要】

エジプトで２０１３年開館予定の大エジプト博物館付属施設である保存修復センターの設立に関し、国際無償技術協力を担う独立行政法人国際協力機構（JICA）より要請を受け、２００９年６月から事業を受託し、保存修復分野における人材育成と技術移転に関する協力を開始した。協力内容は、１．計画策定支援業務、２．研修支援業務、３．専門家派遣支援業務、４．その他、に大別される。

１．２０１１年度開始を予定しているフェーズⅡのための支援を実施した。保存修復専門家に協力を要請し、２００９度に作成した各保存修復人材育成プログラムを取りまとめ、修正し、「フェーズⅡ保存修復人材育成事業計画（案）」を作成した。

２．保存修復センタースタッフの保存修復に関する人材育成研修を行うため、JICA 派遣講師の専門家選定とその研修支援、受け入れ機関との調整準備を行った。支援を行った研修は、下記の７つである（カッコ内は開催時期と参加人数）。

＜現地研修（計４回）＞
「第１回ＩＰM研修」（５月、１２名）
「移送・梱包研修」（７月、１６名）
「遺物取扱い研修」（１０月、２０名）
「第２回ＩＰM研修」（１１－１２月、１８名）
＜本邦研修（計３回）＞
「保存修復マネジメント研修」（９月、１名）
「保存科学機器分析研修」（９－１０月、３名）
「ＩＰＭ（微生物）研修」（９－１０月、２名）

IPM（微生物）研修の様子

３．専門家派遣支援業務として、プロジェクトの進捗状況を鑑みながら、現地で活動を行う短期専門家２名（保存科学、文化遺産マネジメント）を選定し、派遣の支援を行った。

４．保存修復の技術情報支援や、プロジェクトの活動に必要な各種教材・資料の作成支援、新技術導入の検討を行った。その一環として、各研修内での言葉の違いによる研修内容の誤解を避けるために３ヶ国語（日本語、英語、アラビア語）で書かれた保存修復専門用語の語彙集作成と支援を行った。また、７月に日本の収蔵庫管理とデータ管理方法の視察のために JICA が収蔵庫管理者とデータベース構築マネジャーの２名を日本へ招聘した際、日本国内の博物館、美術館、研究所などの受け入れ機関の選定、調整を行い、支援をした。

【実績値】

計画案１件（①）
報告　２件（②～③）
①「大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズⅡ）保存修復人材育成事業計画（案）
②「大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズⅠ）業務実施報告書（上半期分）」
③「大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズⅠ）業務実施報告書（下半期分）及び完了報告書」

【受託経費】

16,482 千円

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 8041

（様式 3）

業務実績書（受託事業）

研究所 No.53-7

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術人員の育成プログラム（受託）((2)-ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	国際情報研究室長　岡田　健

【スタッフ】

亀井伸雄（所長）、清水真一（文化遺産国際協力センター）、石﨑武志、吉田直人、犬塚将英（以上、保存修復科学センター）、高妻洋成（奈良文化財研究所）、田中陽子、中村力也（以上、宮内庁正倉院事務所）、西尾太加二（静岡県埋蔵文化財調査研究所）、岡　興造（国宝修理装こう師連盟）、城山好美、依田尚美（以上、松鶴堂）、木部　徹、島田　要、加藤玲子（以上、資料器材保存）、増田久美（絵画修復家）、金　宣伶（韓国国立文化財研究所）、趙　娟兌（韓国国立中央博物館）

【年度実績概要】

本事業は、公益財団法人文化財保護芸術研究助成財団の委託を受け、中国文化遺産研究院との共同により、2006-2010 年の 5 年間で、シルクロード沿線の文化財保護修復技術のレベルを引き上げることを目的として、新疆、青海、寧夏、甘粛、陝西、河南の 6 省・自治区からの研修生を対象に土遺跡、古建築、考古発掘現場出土品、陶磁器・金属器、壁画、紙類、染織品の保護修復および博物館技術の 8 項目の専門分野について、トレーニングを行うものである。

1) 染織品保存修復専攻 期間：4 ヶ月（8 月 16 日～12 月 17 日)、研修員の人数：12 名

期間中は日中両国の講師による指導が行われ、日本からは 4 名の専門家を派遣した。また韓国から 1 名の専門家を招へいした。

2) 壁画保存修復専攻　期間：4 ヶ月（8 月 16 日～12 月 17 日)、研修員の人数：14 名

期間中は日中両国の講師による指導が行われ、日本からは 2 名の講師を派遣した。また韓国から 1 名の専門家を招へいした。

両コース共通科目の講師として、日本から 8 名を派遣した。

3) 総括シンポジウム：5 年間で 8 項目の研修コースが終了するにあたり、12 月 15 日から 17 日の日程で、これを記念し総括するためのシンポジウムを開催した（主催：中国国家文物局、担当：中国文化遺産研究院、協力：文化財保護芸術研究助成財団・東京文化財研究所・日本サムスン・中国サムスン)。研修生の約 8 割にあたる 80 名以上の研修生が参加し、各コースから数名ずつが代表して発表を行った。日本からは 5 名が参加し、4 つの発表を行った。5 年間の成果に対して、中国国家文物局から財団・当研究所・日中両サムスンに対して、“文化遺産保護榮譽奨”が授与された。

【実績値】

染織品保存修復専攻 期間：4 ヶ月（8 月 16 日～12 月 17 日)、研修員の人数：12 名

壁画保存修復専攻　期間：4 ヶ月（8 月 16 日～12 月 17 日)、研修生の人数：14 名

報告書：詹長法・岡田健主編『古建築保護論文集』(中国・文物出版社、2010 年 12 月)、詹長法・岡田健主編『博物館技術論文集』(中国・文物出版社、2010 年 12 月)、詹長法・岡田健主編『土遺跡保護研修報告』(中国・文物出版社、2010 年 12 月)、(公益財団法人) 文化財保護芸術研究助成財団編『シルクロードよ永遠なれ』(2010 年 11 月、編集協力)

【受託経費】

7,472 千円（うち間接経費 679 千円）

【受託】
(様式 3)

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　8042

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 53-8

中期計画の項目	５ 文化財の保存・修復に関する国際協力の推薦		
【事業名称】	ユネスコ/日本信託基金　バグダードにあるイラク博物館の保存修復室の復興プロジェクト（受託）((2)-ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長　山内和也

【スタッフ】
有村　誠、影山悦子、邊牟木尚美、島津美子、鈴木　環、安倍雅史（以上、文化遺産国際協力センター)、岡田　靖（東北芸術工科大学)、笹岡直美（立正大学)、田川新一朗（箭上文化財修復)、片岡太郎（東北大学）

【年度実績概要】

当事業は、イラク国立博物館の保存修復室の復興支援を目的に 2005 年度に開始され、本年度で 6 年目を迎える。

本年度は、イラク国立博物館より、アリ・ガーニム氏、ナフラ・ナビール氏、ハディール・アブドゥルハーディ氏の 3 名の保存修復専門家を日本に招聘して研修を行った。

研修は 9 月 22 日から 12 月 9 日にかけて、およそ 3 カ月に渡り行われた。今年度はイラクからの要請に応じ、「文化財の保存修復および分析調査のために使われる機器に関する研修」、「金属製品の保存修復研修」、「木製品の保存修復研修」を実施した。

まず、9 月下旬から 10 月上旬にかけて、東京文化財研究所にて走査型電子顕微鏡や蛍光 X 線分析装置などの最新機器を使った分析に関する研修を実施した。また、研修の一環として、株式会社日立ハイテクノロジーの見学も行った。

10 月中旬から 11 月上旬にかけては、「金属製品の保存修復研修」を行った。まず、金属製品の保存修復に関する基礎的な講義を実施した後、東京大学総合研究博物館から拝借したイラン、デーラマン出土の金属製品を対象に保存修復実習を行った。

11 月中旬から 11 月下旬までは、「木製品の保存修復研修」を行った。岡田靖氏、笹岡直美氏、田川新一朗氏、片岡太郎氏を講師に招き、松戸市立博物館所蔵の奥山儀八郎作の木製看板を対象に保存修復実習を行った。

本年度は、ユネスコ/日本信託基金による本事業の最終年度にあたる。過去、6 年の間に、日本で研修を受けたイラク人保存修復専門家の数は、20 人以上におよぶ。いずれの研修生も、意欲的に研修に取り組んでいたため、日本で学んだ技術を生かしイラク国立博物館の復興に役立ててくれることが期待できる。

【実績値】
報告 1 件
UNESCO/Japanese Funds-in-Trust Project “Restoration of the Laboratories of the Iraq National Museum in Baghdad”: Final Report

【受託経費】
82, 682USD

【受託】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 8043

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No.53-9

中期計画の項目	5　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	ユネスコ/日本信託基金　タンロン・ハノイ文化遺産群の保存事業（受託）((2)-ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長　清水 真一

【スタッフ】

友田正彦（文化遺産国際協力センター)、井上和人、田代亜紀子（以上、奈良文化財研究所)、上野邦一（奈良女子大学)、青木繁夫（サイバー大学)、桃木至朗（大阪大学)、坪井善明（早稲田大学)

【年度実績概要】

ハノイの都心に立地するタンロン皇城遺跡は、11 世紀初頭の大越国建国以来、歴代の王朝が拠点とした宮城の中枢域に関する遺跡である。指定対象としての遺跡は、2002 年に国会議事堂建設予定地で発見された李・陳朝期の考古学的遺構と黎朝期以降の地上遺構を含む皇城中枢部の遺跡とで構成されている。その後、日越両政府の合意に基づき両国専門家による協力体制によって調査研究等が行われてきた。

本事業は、歴史・考古・建築・保存科学・社会学および管理計画策定等の各分野専門家を現地に派遣し、ベトナム側専門家や遺跡保存センター、社会科学院考古研究所等の現地関係機関との協力の下、同遺跡の歴史的文化的価値をさらに明らかにするとともに、今後のより良い保存に向けた技術的検討と保存管理体制強化を含む総合的支援を行うことを目的としている。

事業初年度である今年度は、以下の現地ミッションを派遣し、現地調査および技術研修等を実施した。

5 月：保存修復班 6 名および保存管理計画班 1 名
8 月：保存管理計画班 1 名および歴史班 4 名
11-12 月：保存修復班 5 名および保存管理計画班 2 名
12－1 月：歴史班 2 名
1 月：考古班 3 名
2 月：保存管理計画班 2 名

また、1 月に社会科学院考古学研究所より 2 名を招聘し、奈文研にて出土木材保存研修を実施した。さらに、歴史班においては関係論文翻訳作業等も実施している。

【実績値】

【受託経費】

225,500USD

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 8044

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No.82-1

中期計画の項目	7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	関西大学博物館所蔵重要文化財附縄文土器破片および壷形土器破片の復元修理（受託）((1))		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター副センター長　川野邊 渉

【スタッフ】
北野　信彦（保存修復科学センター)、犬竹　和（修復家）

【年度実績概要】
本事業で復元修理を行った縄文土器破片・壷形土器は、大正８年に大阪府藤井寺市国府遺跡から出土した資料である。同遺跡から出土した縄文鉢形土器（平成１８年度受託研究にて修復完了)、籠型土器（平成１９年度受託研究にて修復完了)、高坏土器（平成２０年度受託研究にて修復完了)、縄文土器破片・壷形土器（平成２１年度受託研究にて修復完了）などと共に重要文化財に指定されている。本資料も、近年にいたって、以前の復元で使用された修復材料の劣化が認められ、再修復を要する状態にあった。使用されていた石膏や接着剤は、経年変化による劣化が著しく、本資料の取り扱いにも支障をきたすような状態であった。そこで、平成１８年度から平成２１年度までの受託研究に引き続き、本資料の再修復を行うこととなった。今回の再修復でも土器が展示や学術研究に活用されることを目的とし、石膏に代わる土器修復材料であり、質感・耐久性などにすぐれた補修用擬土を使用して修復した。

概　　要
◇修復対象　縄文土器破片１点・壷形土器２点
◇修復概要
1）解体およびクリーニング・・・劣化した石膏は超音波メスで除去。接着剤は有機溶剤を使用して除去し解体した。表面の汚れは蒸留水を少量綿棒に含ませて拭き落とした。
2）土器の強化・・・劣化して脆弱になった土器破断面をアクリル樹脂で強化した。
3）接合・・・アクリル樹脂を使用して破片を接合した。
4）復元・・・補修用擬土を充填し、常温で乾燥後、整形し文様を施した。55℃の定温乾燥機に入れ樹脂を硬化させた。
5）展示台の作成・・・支えが必要な壷形土器１点については桐製の展示台を作成した。

【実績値】
受託事業報告書　　1件
本事業は関西大学から依頼

【受託経費】
998 千円

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8045

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 83-1

中期計画の項目	7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	(社) 奈良県看護協会第 2 センター (仮称) 新築工事のための発掘調査 (受託) ((1))		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】
番 光、玉田芳英、廣瀬 覚、庄田慎矢、諫早直人［以上、都城発掘調査部 (飛鳥・藤原地区)］、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛［以上、企画調整部］

【年度実績概要】

本調査は、(社)奈良県看護協会第 2 センター(仮称)新築工事のための事前調査である。調査地は飛鳥川の東岸、藤原京跡右京六条二・三坊にあたり、西二坊大路およびその東西側溝の検出が予想された。調査区の 25m 南では、1989 年に奈良国立文化財研究所が発掘調査をおこない、西二坊大路東側溝の可能性がある古代の溝 2 条を確認している。また、調査地は弥生時代の集落遺跡である四分遺跡の西南部にもあたり、調査区の一部において下層調査をおこなった。調査期間は 2010 年 10 月 7 日から 11 月 29 日まで、調査面積は 280 ㎡である。

調査の結果、藤原京跡西二坊大路の東西両側溝については、南北溝 SD10930・SD10933 を検出したが、埋没時期や遺構の位置等から、確定するには至らなかった。東側溝については、1989 年の調査から推定される位置に南北溝 SD10930 を検出した。出土遺物より SD10930 が中世に埋没したことはほぼ確実であろうが、条坊側溝が中世まで何らかの形で利用されていた可能性など、都城の条坊遺構について今後検討すべき新たな視点を得た。西側溝については、推定される位置に遺構は検出されなかったが、推定位置より少し西に平安時代に埋没した南北溝 SD10933 を確認している。調査地周辺には条坊遺構の遺存する可能性が十分残されていることが判明した。

下層調査においては、調査区東側で弥生時代中期の溝 SD10950、調査区西側で弥生時代後期の溝 SD10951 を検出した。調査地は四分遺跡の集落の一部であったことが確認されたが、住居跡や墓地などは確認されず、集落のはずれであったことがうかがわれる。四分遺跡の集落構成を考察するうえで重要な知見を得た。

調査区全景 (東から)

【実績値】
論文数等　1 件 (論文 1 件①)
① 番 光・高橋透・森先一貴・廣瀬覚「右京六条二・三坊の調査－飛鳥藤原第 167 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6 (予定)
出土遺物　土器・土製品 13 箱、軒瓦 4 点、丸平瓦 2 箱、石器 19 点、金属製品 1 点など
記録作成数　遺構実測図 18 枚、写真 (4×5) 32 枚

【受託経費】
3,208 千円

【受託】
(様式 3)

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8046

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 83-2

中期計画の項目	7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	大和紀伊平野農業水利事業（二期）に係る埋蔵文化財発掘調査（受託）((7))		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】
廣瀬 覚、小田裕樹、玉田芳英、次山 淳、木村 理恵、若杉智宏、高橋 透、庄田慎矢、諫早直人、石田由紀子、黒坂貴裕、番 光［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区)］、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛［以上、企画調整部］

【年度実績概要】

大和平野支線水路等その３（県営飛鳥２号幹線（右岸）その３）改修工事に伴う発掘調査で、対象地は藤原京左京七・八条一坊（橿原市上飛騨町）にあたる。工事区域は、総長 325.520mであるが、区域中央の約130m分は既設管との重複部分にあたるため、事前協議により立会で対応することとなった。このため調査は、中央の立会区間を挟んで、北区（約 156m×２m)、南区（約 45m×２m）に別れて実施した。全体の調査面積は約 402 ㎡で、平成 22 年 11 月 29 日より調査を開始し、平成 23 年３月３日をもって終了した。

北区では、大部分が既設管の設置範囲と重複しており、遺構および遺構面の残存状況は良好ではなかったが、柱穴約 10 基、溝１条等を検出した。遺構の検出面は、調査区北側に隣接する飛鳥藤原第 115 次調査区の遺構検出面と層位、および標高がほぼ一致しており、出土遺物からも概ね７世紀中頃から藤原宮期のものと理解できた。衛門府と想定されている第 115 次調査区の遺構群との対応は、調査区間の距離がややあることから十分な検討を行うことができなかったが、南へと７世紀代の遺構が確実に展開する状況を把握することができた。このほか、明確な遺構検出には至らなかったが、古墳時代以前の遺物も少量出土した。

南区では、柱穴約 30 基、溝２条を検出した。溝埋土には５世紀末から６世紀後半にかけての須恵器・埴輪片が含まれており、西側に隣接する丘陵上に古墳が存在することが推測された。一方、柱穴には一部、中世段階のものと考えられるものが含まれるが、その他は古代の建物に伴うものと推定でき、掘方埋土から７世紀中頃の土器が出土したものもあった。北区同様に、７世紀中頃から藤原宮期にかけて一定の土地利用があったことが判明したが、調査範囲が限られていたため、建物の全体像や遺構変遷を明らかにする作業は、周辺の調査の進展に委ねることとなった。

以上のように、本事業では、水路付け替え工事に伴う発掘調査を円滑に遂行し、藤原地域の埋蔵文化財における基礎資料を蓄積することができた。また、発掘調査中、および調査終了後における調査地外の既設管撤去工事では、研究員の立会のもと工事が埋蔵文化財に影響を与えないよう監視した。

北区調査風景

中央区立会風景

【実績値】
論文等数　１件（①）
①廣瀬覚・小田裕樹「藤原京左京七条一坊・八条一坊の調査―第 166 次」『奈良文化財研究所紀要 2010』2011.6（予定）
出土遺物　出土遺物　土器 14 箱、瓦類 31 点、木製品３箱、動植物遺存体２箱
記録作成数　遺構実測図 43 枚、写真（4×5）101 枚

【受託経費】
5,382 千円

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8047

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 83-3

中期計画の項目	7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	興福寺旧境内（奈良第１地方合同庁舎）の発掘調査（受託）（１）		
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【事業責任者】	副所長　井上和人

【スタッフ】
箱崎和久、馬場 基、芝 康次郎（都城発掘調査部）
中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾（企画調整部）

【年度実績概要】

奈良県合同庁舎オイルタンク設置にともなう事前の発掘調査で、平成 22 年４月 13 日～５月 12 日にかけて、東西５ｍ×南北３ｍの 15 ㎡の調査をおこなった。

調査区の南半は現合同庁舎建設時あるいはそれ以前に、標高 89.9m（地表下 1.6m）まで大きく破壊されていた。それより下層には 13 世紀の土師器を含む土坑が重複しており、記録を取りながら掘り下げた。標高 89.0m（地表下 2.5m）付近では、北壁にかかる東西方向に石や瓦を敷いた遺構を検出した。石は人頭大の河原石で、石の下面は凹凸をもつものの、上面が平滑な面となるよう据えられていた。石のない部分には平瓦が置かれている。石は比較的精良な整地土の直上に据えられており、瓦の下面には溝の埋土と同様の土があることから、ほんらいはすべて石組みであったが、部分的に瓦で改修されているものと考えられる。この遺構は東西方向の溝の底石と判断した。溝の南辺を確認したものの北辺は調査区の北方に続くため、溝幅は明確でない。埋土はマンガンの沈着した灰褐色土で瓦片を含んでいた。石組みは調査区の中央部分のみで検出し、その長さは 2.1mほどであり、東および西は先述した土坑で削平を受けている。

また西壁にかかる南北溝を確認した。検出面からの深さは 30 ㎝で、底面は地山（明黄色砂礫）が現れ、地山は西壁にむかってやや立ち上がるので、西壁付近がこの溝の西肩になる。先述した北壁にかかる東西石組溝とこの南北溝との関係については、いずれも上層の土坑で削平されており、関係は明確でない。ただし溝の深さからみて、東西石組溝の方が新しいと考えられる。南北溝からは奈良時代の瓦が出土しており、古代の遺構の可能性がある。

北壁で検出した石組溝底石

【実績値】
出土遺物：軒丸瓦４点、軒平瓦１点、丸・平瓦整理箱 24 箱、土器整理箱 12 箱
記録作成数：実測図（A2 判）４枚、遺構写真（４×５）６枚

【受託経費】
612 千円

【受託】
(様式 3)

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8048

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 83-4

中期計画の項目	7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	小谷地遺跡出土遺材についての建築史的研究（受託）（１）		
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【事業責任者】	箱崎和久（都城発掘調査部）

【スタッフ】
箱崎和久、大林 潤、鈴木智大、海野 聡、黒坂貴裕、番 光（以上、都城発掘調査部）
中村一郎（企画調整部）

【年度実績概要】

秋田県男鹿市の小谷地遺跡において、昭和 39 年から３ヵ年にわたる発掘調査で出土した多量の木製部材は、男鹿の埋没家屋としてつとに有名であった。平成 21 年６月から秋田県埋蔵文化財センターが開始した発掘調査でも、過去の調査と同様、多量の木製部材が出土し、やはり埋没家屋の部材と考えられたため、平成 21 年度から奈良文化財研究所が出土遺材の調査・研究の委託を受け、平成 22 年度はその第２年目にあたる。

調査方法は、秋田県埋蔵文化財センターで作成した実測図の下図（部材外形線の描画）に、観察所見による描画を追加することによって部材の実測図を完成し、あわせて部材に対する所見や加工痕跡、使用痕跡などの所見を記入した調査票を作成する。同時に、手持ちのカメラによって、全体ならびに調査所見を裏付ける細部写真の撮影をおこなう。以上の調査を１週間（計５日）おこない（平成 22 年４月 19 日～23 日）、また実測部材について大判写真による撮影をおこなう（平成 22 年６月７日～９日）。以上２ヵ年の成果を秋田県埋蔵文化財センターが制作する報告書に掲載するため、報告書の体裁等の指示を秋田県埋蔵文化財センターから受け、版下の作成と部材に対する解説を執筆した。この過程で生じた疑問点についての補足調査を平成 22 年 11 月 18～20 日におこなった。

平成 22 年度の調査部材は 44 点であった。調査所見は昨年度の成果と大きく変わらず、大径材を打ち割って得た材が割肌の部材が多いこと、なかには出土遺構では使用していない穴や欠きがあるため、転用材と考えられる部材があること、が特徴としてあげられる。驚くべきことは、建物遺構から出土した柱根が、大径材をミカン割りにして得た材を使用している点で、いわゆる丸太をそのまま使用している材はほとんど見られないことである。豊富な森林資源に裏打ちされた使用法であると同時に、優れた木材加工技術をもつと考えることもできる。これらの調査成果から、埋没建物とみられたまとまった部材群は、発掘調査で得られた所見と同様、建物所用の材でなく土木構築物の材である可能性が大きい、と結論づけた。一方で土木構築物の遺材を詳細に調査した例は少なく、今後発見が期待される同様の遺構に対して、調査方法や調査の視点といった点で、貴重な成果を得ることができたと考えている。

これら２ヵ年の成果は秋田県埋蔵文化財センターが制作する報告書に掲載する予定である。

建物柱根の底面
年輪の様相から、大径材から割り出した材であることがわかる。底面はヨキで加工しており、使用した道具の刃の幅と使用方向が判明する

【実績値】
記録作成数：実測図 44 枚、写真（４×５）50 枚
報告書用作成版下 64 枚
報告書本文 38 ページ
箱崎和久ほか「出土遺材」『小谷地遺跡発掘調査報告書』（仮称）秋田県埋蔵文化財センター、2011（予定）

【受託経費】
1,506 千円

【受託】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 8049

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 83-5

中期計画の項目	7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	平城京跡　右京三条一坊十坪　西一坊坊間西小路の発掘調査（受託）（１）		
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【事業責任者】	副所長　井上和人

【スタッフ】
海野 聡、中川あや、森川 実、渡邉晃宏（以上、都城発掘調査部）
中村一郎・栗山雅夫（以上、企画調整部）

【年度実績概要】

本受託事業は、平城京跡右京三条一坊十坪（重点地区平城宮跡周辺）における共同住宅新築にともなう事前の発掘調査である。調査区は南北幅６ｍ×東西幅 10ｍの長方形を呈する。調査面積は 60 ㎡、調査期間は 2010 年 11 月 10 日～11 月 16 日である。

調査成果は次の通り。

（１）基本層序

調査区の基本層序は次の通り。現地表から順に、表土・整備に伴う盛土（約 60cm)、旧耕作土（約 20cm)、旧床土（大きく２層に分かれる。あわせて約 50cm)、黄灰色粘土層（地山）が存在する。旧床土を掘り下げた面で、穴や流路などの遺構を検出した。遺構検出面の標高は約 64.15m である。

（２）検出遺構

流路　：　調査区東半分で、北西から東南方向に流れる流路を確認した。東岸は検出できず、調査区の東側に存在するとみられる。幅は調査区内だけで約 4.9m、深さは 0.7m以上におよぶ。遺物は出土せず、形成された時期は不明。

小穴列　：　調査区東寄り、流路上で確認した南北小穴列。３基検出。一辺 50cm 前後で隅丸方形～円形の穴が約５尺（1.5m）の間隔で並び、若干、東に振れる。深さは約５～10cm。いずれも、柱穴の抜取痕跡の可能性がある。埋土から遺物は出土せず、時期は不明。

本調査区は、平城京右京三条一坊十坪、西一坊坊間西小路想定地にあたり、今回の調査で坊間西小路の東側溝が検出される可能性があった。しかし、後世の耕作によって、奈良時代の整地土および地山の一部が削平されており、存否の検証が不可能であった。

【実績値】
出土遺物：土器整理箱１箱分、瓦整理箱４箱分、金属製品１点。
記録作成数：実測図３枚、写真（4×5）３枚、（デジタル）27 枚

【受託経費】
415 千円

【受託】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　8050

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No. 83-6

中期計画の項目	7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	朱雀大路緑地遺跡発掘調査（受託）（１）		
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【事業責任者】	副所長　井上 和人

【スタッフ】
浅野啓介、今井晃樹、大林 潤、国武貞克（以上、都城発掘調査部）
中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾（以上、企画調整部）

【年度実績概要】

平城京左京三条一坊一・二坪（奈良市二条大路４）における、平城京資料館（仮称）の建設にともなう試掘調査。調査面積 1030 ㎡（南北 103m、東西 10m）。調査期間は平成 22 年 12 月 20 日～平成 23 年 3 月 30 日。

調査区は、左京三条一坊一・二坪の東寄りに位置し、調査面積は 1030 ㎡（南北 103m、東西 10m）である。遺構検出面は現地表下約２mにあり、基本層序は上から、整備にともなう盛土、旧耕作土、旧床土、遺物包含層、黄色粘質土（整地土：遺構検出面）となり、それ以下のベース土は、砂と粘土が互層となる。調査区西半を、流路とみられる砂層が覆い、ベース土も粗砂や細砂が入り込むことから、整地以前は何度も水が流れたと考えられ、秋篠川の氾濫の跡とみられる。

検出遺構は以下のとおりである。

・三条条間北小路…南北幅約１m程度の東西溝（側溝）。両側溝の心心間距離は約 6.2m。
・坪内道路…左京三条一坊一坪を南北に二分する東西溝（側溝）。両側溝の心心間距離は約 9.5m。
・掘立柱建物…調査区北端で掘立柱建物２棟を検出。一つは南北にならぶ柱穴３基で、径 25 ㎝程度の柱痕跡を残す。柱間寸法は約 3.9m（13 尺）。東西棟建物の西妻の柱筋とみられる。もう一つは、調査区の東壁で断面を確認した南北の柱穴３基。柱間寸法は北から 6.0m、2.7mととれる。抜取穴から円筒埴輪片が出土。
・井戸…抜取の直径約 4m、方形の木製井戸枠が出土。井戸の内法は 2.3m。埋土に多量の遺物を含む。奈良時代とみられる。

この他、掘立柱東西塀 1 条を検出した。

【実績値】
大林 潤ほか「平城京左京三条一坊一・二坪の調査」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定）
大林 潤「平城京左京三条一坊一・二坪の調査」『奈文研ニュース』2011（予定）
出土品　：瓦 60 箱、土器 37 箱、金属器 16 点、木簡 30 点。
記録作成数：実測図 17 枚、遺構写真（4×5）100 枚。

【受託経費】
27,068 千円

【書式A】　施設名 法人全体　処理番号 9110

大項目	Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中項目	Ⅱ-1　職員の意識改革、サービスの向上、業務の効率化

事業名	(1)共通的な事務の一元化による業務の効率化			
担当者	担当部課	総務企画課	事業責任者	総務企画課長　藤本慎也
実績・成果	・「研究・学芸系職員連絡協議会」を実施し、各博物館における翌年度の展覧会企画等について調整を行い、計画を図った。 ・グループウェアを機構全体で一本化し、7 月以降本部および各施設にて順次、運用を開始した。機構内全職員が一本化されたグループウェア「サイボウズ・ガルーン 2」を利用することで、機構内の連絡および情報共有が大幅に効率化し、セキュリティが向上した。 ・国立文化財機構規程集 PDF 版をグループウェア上で閲覧可能とした。機構内職員が常に最新版を参照できるようになった。 ・給与明細のウェブ閲覧を平成 23 年 3 月給与より試行運用を開始し、業務効率化と経費削減に加え利便性向上が見込まれる。 ・財務会計システムの更新手続きに着手し、23 年 4 月入札公告・24 年 4 月運用開始に向けて準備を進めた。			
補足事項	・グループウェア「サイボウズ・ガルーン 2」利用実績（平成 22 年度） 機構全体　930 ユーザ （本部・東博 210 ユーザ、京博 100 ユーザ、奈博 60 ユーザ、 九博 150 ユーザ、東文研 150 ユーザ、奈文研 260 ユーザ） ・国立文化財機構規程集は、PDF 版の利用開始とともに紙媒体の部数を減らし、差替業務が省力化された。 ・給与明細ウェブ閲覧の開始により、各職員が随時閲覧・印刷が可能となった。グループウェア用の VPN(Virtual Private Network)を活用し、機構内からのみ閲覧可能とし、移行期間として平成 23 年 3 月・4 月給与まで紙媒体による給与明細も並行して配布。正式運用は平成 23 年 5 月給与からの予定である。			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	―	―	―	―		―	―	―	―

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	共通的な事務の一元化による業務の効率化

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 法人全体　処理番号 9120

中項目	Ⅱ-1　職員の意識改革、サービスの向上、業務の効率化

事業名	(2)　使用資源の減少			
担当者	担当部課	本部財務課（取りまとめ） 東京国立博物館総務部経理課、京都国立博物館総務課、 奈良国立博物館総務課、九州国立博物館総務課、東京 文化財研究所管理部、奈良文化財研究所管理部管理課	事業責任者	事務局長　金谷史明

実績・成果

・　日常の節電節水の周知徹底、夏季の軽装励行、冷暖房の省エネ運転等を行った。
・　廃棄物削減では、ミスコピーの防止及び両面印刷の励行、館内 LAN・電子メール等の活用による文書のペーパーレス化を引き続き行っている。
・　リサイクルの実施（廃棄物の分別収集，リサイクル業者への古紙受け渡し，再生紙の発注等）

使用資源の推移等

光熱水料金　（単位：千円）

事項	21 年度	22 年度	差額
電気料	366,202	350,947	△15,255
水道料	93,651	79,777	△13,874
ガス料（※1）	92,510	98,213	5,703
計	552,363	528,937	(4.24%減) △23,426

※ガスは、全体として使用量ベースでは減少したが、原料高騰による単価上昇により使用料金ベースで増額となった。

（※1）ガス使用量等

事項	21 年度(㎥)	22 年度(㎥)	差引(㎥)	単価影響額(千円)
ガス使用料	1,521,140	1,475,110	△46,030	7,785

（参考）特殊要因を考慮した光熱水料金　（単位：千円）

事項	21 年度	22 年度	差額
電気料	366,202	350,947	△15,255
水道料	93,651	79,777	△13,874
ガス料	92,510	90,428	△2,082
計	552,363	521,152	(5.65%減) △31,211

※ガス単価上昇等を勘案して算定。

廃棄物排出量　（単位：kg）

事項	21 年度	22 年度	増減率（%）
一般廃棄物（※2）	228,045	273,407	19.89%

（※2）一般廃棄物増加の特殊要因　（単位：kg）

施設	内容	金額
奈良国立博物館	西新館耐震改修工事等に伴う増加	47,500
奈良文化財研究所	平城遷都１３００年祭関連行事に伴う増加	2,700
	小計	50,200

（参考）特殊要因を考慮した廃棄物排出量　（単位：kg）

事項	21 年度	22 年度	増減率（%）
一般廃棄物	228,045	223,207	△2.12%

補足事項

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
光熱水料	4.24%減	年間 1.03%減	S		1.6%増	2.3%減	8.8%減	4.24%減
一般廃棄物排出量	2.12%減	年間 1.03%減	S		2.9%減	9.3%減	7.9%減	2.12%減

年度実績評価総括

Ⓢ　A　B　C　F
（S、Fの理由）

中期計画記載事項

（2）使用資源の減少
・　省エネルギー（５年期間中１年に１．０３％の減少）
・　廃棄物減量化（一般廃棄物排出量を５年期間中５％減少）
・　リサイクルの推進

中期計画に対して順調に成果を上げているか。　順調

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 9131

中項目	Ⅱ-1　職員の意識改革、サービスの向上、業務の効率化

事業名	(3) 施設有効使用の推進			
担当者	担当部課	総務課	事業責任者	総務課長　樋口　理央

実績・成果

企業等のパーティー、撮影（映画、ドラマ、雑誌等）、茶室・講堂の貸出による施設の有効利用（それに伴う収入増）を図った。

項目	平成 22 年度
茶室	112 件（内　有償貸付　45 件）
講堂等 （講堂、会議室、研修室）	304 件（内　有償貸付　89 件）
その他 （上記以外の敷地建物）	7 件（内　有償貸付　7 件）
撮影	115 件（内　有償貸付 115 件）
合　　計	538 件　　収入額　27,987 千円

入館者の拡大を目的とするコンサートとして、
「ファミリーコンサート」（8 月 8 日　共催：東京クラリネットクワイアー）
「長唄コンサート」（7 月 4 日　共催：音楽の花束）
「チェロとハープのコンサート」（6 月 20 日　共催：サロン･ド･ソネット）
等を、演芸として、
「新春東博寄席」（1 月 15 日）
など様々なイベントを実施した。

補足事項

撮影件数のさらなる増加のため、
・今までの料金体系を見直した（ムービー、スチールの料金を分け、また 1 時間毎の料金体系とした）。
・昨年度作成した撮影案内パンフレットを、さらに撮影可能な場所の写真を増やした改訂版を作成し、過去の利用会社、出版社、テレビ等映像製作会社、広告代理店、フリーカメラマン等に送付した。
・23 年 2 月より、インターネットロケーション検索サイト（ロケなび！）に登録した。これによりそのサイトを見た会社からの問い合わせが急増した。
講堂利用件数の増加のため、
・8 月から 23 年 1 月まで会議室検索サイト（会議室ドットコム）に登録した。当該ページへのアクセスは 906 件あり、当館の講堂貸出についての周知が図れた。
・講堂設備の一新（小講堂：カーペット・テーブル・イス、大講堂：演台・録画設備）
茶室利用件数の増加のため、
・都内近郊のカルチャーセンターへ茶室案内パンフレットを置いていただけるようお願いし、了解をいただいたところへ発送した。
法隆寺宝物館イベント利用の増加のため
・黒門（宝物館イベント時の入口）前の道路柵を東京都に申請し、撤去した。これにより外から黒門へのアクセスが容易となった。
施設の有効利用件数について、21 年度は利用申込数としていたが、22 年度からは利用申込日数とし、複数利用日の場合に日数分をカウントすることとした。
3 月 11 日の東日本大震災の影響で、15 件がキャンセルとなった（うち茶室 4 件、講堂等 6 件、その他 2 件、撮影 3 件）。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
施設の有効利用件数	538 件	－	－		885	574	341	538
うち有償利用件数	256 件	－	－		350	238	262	256

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F
（S、F の理由）

中期計画記載事項

(3) 施設有効使用の推進
・施設の利用推進

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 9132

中項目	Ⅱ-1　職員の意識改革、サービスの向上、業務の効率化

事業名	(3)施設有効使用の推進			
担当者	担当部課	総務課	事業責任者	総務課長　植田　義雄

実績・成果

今年度は庭園を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進を図った。

なお、平常展示館建替工事に伴い一昨年度 12 月 8 日より講堂が使用できなくなったため、展覧会等に関する講演会、夏期講座及びらくご博物館は館外の施設を利用して行うこととなった。

庭園（丸池周辺）
- 「雨月物語」映画鑑賞会（開催日 2 日　入場者 317 名）
- 自転車発電エコライブ（開催日 1 日　入場者約 100 名）

庭園（特別展示館前）
- 音燈華（開催日 1 日　入場者数約 270 名）

館外の施設を利用
- 展覧会等に関する講演会（講座回数 15 回　聴講者数　合計 2,076 名）
- 夏期講座（開催日 3 日間　参加者 205 名）
- らくご博物館（年 3 回　入場者 509 名）

また、外部団体等の講演会・研修会等への施設の貸出を積極的に行った。

施設有効利用件数		使用料
茶室	32件（うち有償　32件）	339,500円
研修室等	15件（うち有償　1件、無料14件）	4,725円
その他	10件（うち有償　10件）	368,239円
撮影利用	2件（うち有償　1件、無料 1件）	9,450円
計	59件（うち有償　44件、無料15件）	721,914円

補足事項

庭園（丸池周辺）
- 初めての試みとして、庭園を利用した「雨月物語」映画鑑賞会（計２回）を開催し、大盛況であった。
- 今回で開催３回目となる「自転車発電エコライブ」を青空の下庭園において開催し、一般観覧者も自転車発電のこぎ手として参加、大盛況であった。

庭園（特別展示館前）
- 全館休館期間中に「音燈華」という音楽イベントを開催し、大盛況であった。

茶室
- 当館に茶室が設けられていることが浸透してきているようで、茶道愛好家の利用が多い。

講堂の建替にともなう措置
- 講堂については、平常展示館建替工事に伴いリニューアルオープンするまで、約 5 年間使用できない。このため、「土曜講座」・「らくご博物館」の開催会場は、館外の施設を利用し、今後も継続開催する。
- 昭和 48 年から毎週土曜日に開講の「京都国立博物館土曜講座」の会場として活用し、当館の長寿看板講座となっている。館外の施設を利用しているにもかかわらず、盛況であった。
- 当館の恒例となっている夏期講座も館外の施設を利用したが、盛況であった。
- 「京都・らくご博物館」も館外の施設による開催であったが、毎回ほぼ満席の盛況であった。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
施設の有効利用件数	59 件	－	－	経年変化	56	57	35	59
うち有償利用件数	44 件	－	－		30	29	26	44

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	（3）施設有効利用の推進 ・施設の利用推進
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　　施設名　奈良国立博物館　　処理番号　9133

中項目	Ⅱ－１　職員の意識改革、サービスの向上、業務の効率化

事業名	(3) 施設有効使用の推進			
担当者	担当部課	総務課渉外室	事業責任者	総括専門職員　吉田貴至

実績・成果

・施設の利用
講堂：公開講座（12 回、1,522 人）、サンデートーク（12 回、621 人）、正倉院展ボランティア解説（20 日間計 110 回）、世界遺産学習（30 校、2,221 人）、セクシュアル・ハラスメント研修会（43 人）、文化財保存修理所特別公開（2 回、353 人）

・イベント等の実施
講堂：まほろば寄席（2 回）、トークイベント（「大遣唐使展の楽しみ方」、大遣唐使展で仏像に会おう！」）、 シンポジウム（東アジアの造形芸術と遣唐使の時代）、特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」関連イベント「金春穂高　能を語る」、「お水取り講話と粥の会」
地下回廊：「奈良生まれのブロックおもちゃで遊ぼう！」、高精細デジタル画像による「吉備大臣入唐絵巻」の全巻展示
西新館ピロティ北側：昨年までに展示された正倉院宝物を紹介した「NHK 日曜美術館」の映像放映
文化財保存修理所：特別公開　普段は公開していない修理所を当館研究員の解説付きで公開

・会場提供
敷地内：なら燈花会、コンサート（「秦　基博」　TALK&LIVE)、第 12 回バサラ祭、「全国光とあかり祭」
講堂：いにしえの奈良八重桜再発見の集い、和歌劇「ヌカタ」公演、「なら国際映画祭２０１０」Roger Hsiao 監督作品「鑑真大和尚」上映、奈良市教育委員会主催教員研修講座、お水取り展鑑賞とお松明　なら瑠璃絵の会場
地下回廊：絵画コンクール入賞作品展示、正倉院展作文コンクール入賞作品展示、(シルクロード写真パネル展示)、「奈良のうまいもの」パネル展示
西新館ピロティ南側：正倉院展での呈茶席

補足事項

施設の有効利用件数　内訳

講演会等	31	(18)
修理所特別公開	2	
茶会等	1	(1)
映画上映会	2	(1)
観光イベント	8	(1)
展示	6	
まほろば寄席	2	
トークイベント	3	
シンポジウム	1	
公開講座	12	
サンデートーク	12	
世界遺産学習	30	
正倉院展ボランティア解説	20	
その他	16	(10)
計	146	(31)

()内は有償利用件数で内数

トークイベント

「金春穂高　能を語る」

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
施設の有効利用件数	146 件	－	－	経年変化	122	84	59	146
うち有償利用件数	31 件	－	－		18	23	21	31

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	(3)施設有効使用の推進 ・施設の利用推進
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 9134

中項目	１　職員の意識改革、サービスの向上、業務の効率化

事業名	(3)　施設有効使用の推進			
担当者	担当部課	交流課	事業責任者	主任主事　藤崎秀典
実績・成果	・文化交流展示室を紹介する講座の開催や各特別展で関連する講演会を開催した。 ・ミュージアムホール、エントランスホール、研修室、茶室等において、館主催事業及び各種団体主催のイベントを開催するとともに、希望団体にはミュージアムホール、研修室、茶室の貸出を行った。 ・今年利用開始した茶室のリーフレットを作成し、茶道関係者に配布を行った。 ・各種国際シンポジウム、アジア諸国に関するイベント、留学生の日のイベント等を開催した。 ・ガムランワークショップや、コンサートの開催等を継続的に実施し、施設の有効活用を促進した。 ミュージアムホールの利用　７７件（内　有料　７件） 研修室の利用　７７件（内　有料６３件） 茶室の利用　２０件（内　有料　６件） その他(ｴﾝﾄﾗﾝｽﾎｰﾙ 外)　１４７件（内　有料　０件）			
補足事項	・特別展関連講演会 「古伊万里」展関連 14 代柿右衛門氏講演会（期間：5/8，参加者数：300 名）等を開催した。 ・主催イベント 今年利用開始した茶室の一般来館者へのお披露目と茶道関係者への PR も兼ねて開館 5 周年記念事業として「九博大茶会」（期間：10/9 ～ 10/11,10/13 ～ 10/17,10/23,10/24,10/30,10/31 参加者数：1,962 名）等を開催した。 ・各種団体主催イベント 吉野ヶ里 Days in 九博（期間：8/28～8/29，参加者数：1,314 名）、みかわち焼展（期間：11/23～11/28，参加者数：3,495 名）等を開催した。 ・国際シンポジウム 「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」（期間：12/18，参加者数：117 名）等を開催した。 ・コンサート きゅーはくミュージアムコンサートを毎月開催した。			

吉野ヶ里 Days in 九博

茶室（宝満亭）

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	施設有効利用件数	321 件	—	—	経年	188	193	250	321
	うち有償利用件数	76 件	—	—	変化	28	45	69	76

年度実績 評価総括	Ｓ　Ⓐ　Ｂ　Ｃ　Ｆ （Ｓ、Ｆの理由）
中期計画 記載事項	(3)施設有効利用の推進 ・施設の利用推進
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　　施設名 東京文化財研究所　処理番号 9135

中項目	Ⅱ-1　職員の意識改革、サービスの向上、業務の効率化

事業名	(3)　施設有効利用の推進			
担当者	担当部課	東京文化財研究所管理部	事業責任者	管理部長　北出猛夫
実績・成果	・セミナー室、会議室等を利用することにより、施設の有効利用の推進を図った。 ・研究成果を広く一般にも公表するためのオープンレクチャーを毎年秋に開催。また、このレクチャーは、台東区との連携事業として「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムの一つとしても企画された。			
補足事項	 第 44 回オープンレクチャー「人とモノの力学」の模様			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
	施設の有効利用件数	196 件	―	―	経年変化	266	140	178	196
	うち有償利用件数	12 件	―	―		40	21	13	12

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	(3) 施設有効使用の推進 ・施設の利用推進
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 9136

中項目	Ⅱ-1　職員の意識改革、サービスの向上、業務の効率化

事業名	(3) 施設有効利用の推進			
担当者	担当部課	研究支援推進部	事業責任者	研究支援推進部長　多 昭彦

実績･成果

会議室、セミナー室等一般の利用に供することが可能な施設の有料貸付を実施し、施設の有効利用の推進を図った。

施設名	22 年度
平城宮跡資料館講堂	183 件（内　有償貸与　24 件）
平城宮跡資料館小講堂	143 件（内　有償貸与　8 件）
寄宿舎施設	1,087 件（内　有償貸与　61 件）
飛鳥資料館講堂	60 件（内　有償貸与　0 件）
その他（本庁舎・監理棟・収蔵庫等）	16 件（内　有償貸与　12 件）
合計	1,489 件（内　有償貸与 105 件）

①一般利用申し出への行政サービスの向上を図る方針のもとに、ウェブサイト上での施設利用紹介等による積極的有効利用（貸付等）の促進を図った。
②奈良文化財研究所が企画実施する研修等に際して、宿泊施設の有効活用を図った。
③上記のほか、平城宮跡資料館、飛鳥資料館の各ミュージアムショップ（売店）の運営を外部委託し、図録等の販売を通して来館者の利便に供した。

補足事項

平成 21 年度実績

施設名	21 年度
平城宮跡資料館講堂	26 件（内　有償貸与　1 件）
平城宮跡資料館小講堂	35 件（内　有償貸与　0 件）
寄宿舎施設	1,115 件（内　有償貸与　27 件）
飛鳥資料館講堂	4 件（内　有償貸与　0 件）
その他（本庁舎・監理棟・収蔵庫等）	31 件（内　有償貸与　12 件）
合計	1,211 件（内　有償貸与　40 件）

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
施設の有効利用件数	1,489 件	－	－	経年変化	1,841	2,079	1,211	1,489
うち有償利用件数	105 件	－	－		75	71	40	105

年度実績評価総括　S　Ⓐ　B　C　F
（S、F の理由）

中期計画記載事項　(3) 施設有効使用の推進
・施設の利用推進

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 法人全体　処理番号 9140

中項目	Ⅱ-1　職員の意識改革、サービスの向上、業務の効率化

事業名	(4)　民間委託の推進			
担当者	担当部課	本部財務課（取りまとめ） 東京国立博物館総務部経理課、京都国立博物館総務課、奈良国立博物館総務課、九州国立博物館総務課、東京文化財研究所管理部、奈良文化財研究所管理部管理課	事業責任者	事務局長　金谷　史明

実績・成果

- 全ての施設において、電気設備保守業務、機械設備保守業務、昇降機設備保守点検業務、売札業務、各種事務補助作業、清掃業務、構内樹木等維持管理業務等について、民間委託を実施している。
- 博物館は警備・展示室監視等業務の大部分を外部委託している。また、研究所は警備業務の全てを外部委託している。
- 博物館の来館者サービスに関しては、インフォメーション業務、図書・写真資料を閲覧等の利用に供するサービス及び図書整理業務等について民間委託を実施している。
- 東京国立博物館及び東京文化財研究所で施設管理・運営業務（展示等の企画運営を除く）について民間競争入札を実施しているほか、東京国立博物館では展示場における来館者応対等業務についても民間競争入札を実施し、平成 22 年 4 月 1 日から民間競争入札による民間委託を実施した。

補足事項

- 外部委託が可能な業務については、民間委託を進めている。
- また、複数の業務についての包括契約化、複数年契約、近隣の機関及び法人内同一地域での一括契約等の実施により、業務の効率化を図っている。
- 民間委託の増加に伴い、契約手続・監督等の業務が増加しているが、人員削減が急速に進んでいるため、業務継続に必要なノウハウが館に蓄積されないなどの問題が生じている。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
―	―	―	―	経年変化	―	―	―	―

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F

（S、Fの理由）

中期計画記載事項

（4）民間委託の推進

- 一般管理部門を含めた組織・業務の見直しを行い、民間開放をさらに積極的に進める。
- 館の警備・清掃業務について民間委託を推進する。
- 来館者サービスを中心に業務の見直しを行い、民間委託を積極的に進める。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 法人全体　処理番号 9150

中項目	Ⅱ-1　職員の意識改革、サービスの向上、業務の効率化

事業名	(5)　一般競争入札の推進			
担当者	担当部課	本部財務課（取りまとめ） 東京国立博物館総務部経理課、京都国立博物館総務課、奈良国立博物館総務課、九州国立博物館総務課、東京文化財研究所管理部、奈良文化財研究所管理部管理課	事業責任者	事務局長　金谷　史明

実績・成果

・ より多くの競争参加業者を募るため、公告期間をこれまでの「１０日間以上」から自主的措置として２０日間以上確保するように努めた。
・ 列品等修理契約について、修理契約委員会を設置し、修理可能な業者が複数存在すると判断された契約は企画競争を実施している。
・ レストラン・ミュージアムショップについて、東京国立博物館（レストラン）及び奈良国立博物館（ミュージアムショップ・レストラン）において企画競争を実施した。今後も、賃貸借期間終了時に順次企画競争を実施予定である。
・ その他新たに、警備機器賃貸借及び警備業務、カラー複写機の賃貸借及び保守業務等の契約について一般競争入札を実施した。

一般競争入札件数

年度	21 年度	22 年度	増減
件数	202 件	175 件	△27 件

※特殊要因：21 年度単年度の補助金にかかる一般競争入札件数の減少

補助金名称	件数
文化芸術情報電子化推進費補助金	41 件

（参考）特殊要因を考慮した一般競争入札件数

年度	21 年度	22 年度	増減
件数	161 件	175 件	14 件

補足事項

・ 「独立行政法人の契約状況の点検・見直しについて（21 年 11 月 17 日閣議決定）」に基づき、外部委員で構成された契約監視委員会を設置し、機構が 22 年度に締結した契約（委員会開催時見込みの契約も含む。）の点検・見直しを行った。
　第１回契約監視委員会（平成 22 年 12 月 3 日開催）
　第２回契約監視委員会（平成 23 年 3 月 17 日開催）
・ 総務省からの要請に基づき、「独立行政法人整理合理化計画（19 年 12 月 24 日閣議決定）」の一環として、随意契約の見直しを行い、随意契約によることがやむを得ないものを除き、引き続き競争契約に移行している。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
一般競争入札件数	175 件	－	－	経年変化	98 件	142 件	202 件	175 件

年度実績評価総括　S　Ⓐ　B　C　F
（S、Fの理由）

中期計画記載事項

（５）競争入札の推進
・ 契約業者の競合を一層推進することにより、経費の効率化を図る。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 国立文化財機構　処理番号 9160

中項目	Ⅱ－１　職員の意識改革、サービスの向上、業務の効率化

事業名	(6)　定量的な目標の設定			
担当者	担当部課	本部財務課（取りまとめ） 東京国立博物館総務部経理課、京都国立博物館総務課、奈良国立博物館総務課、九州国立博物館総務課、東京文化財研究所管理部、奈良文化財研究所管理部管理課	事業責任者	事務局長　金谷　史明

実績・成果

１）入場料収入（共催展を除く）及びその他収入について、１．１６％の増加を目指す。

下表のとおり、１３．３８％となり、目標を上回ることができた。

（単位：千円）

	平成２０年度	平成２１年度	平成２２年度
自己収入基準額	８６４，０８９	８７４，１１２	８８４，２５２
自己収入目標額	８７４，１１２	８８４，２５２	８９４，５１０
自己収入実績額	―――	９４９，９００	１，００２，５２４
増　加　率	―――	８．６７％	１３．３８％

※　受託研究・受託事業を除く。
※　自己収入目標額は、前年度の目標額から１．１６％増加した場合の額。
※　増加率は、自己収入基準額（前年度の目標額）に対する増加率。

２）寄附金２２６件及び科学研究費補助金７６件の確保を目指す。

下表のとおり、寄附金及び科学研究費補助金ともに目標件数を上回ることができた。

	目標値	平成２２年度
寄附金	２２６件	３１４件
科学研究費補助金	７６件	８１件

補足事項

定量的評価

項目	実績	目標値	評価		19	20	21	22
・自己収入増加率	13.38%	1.16%	S	経年変化	―	―	8.67%	13.38%
・寄附金	314 件	226 件	A		―	―	290 件	314 件
・科学研究費	81 件	76 件	A		―	―	86 件	81 件

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F
（S、Fの理由）

中期計画記載事項

Ⅲ　予算
収入面に関して、実績を勘案しつつ、税制措置も活用した寄附金などの外部資金、施設使用料等の財源の多様化を図り、法人全体として積極的に自己収入の増加に努めることにより、計画的な収支計画による運営を図る。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 本部事務局　処理番号 9220

中項目	Ⅱ-2　事業評価の実施及び職員の意識改善

事業名	事業評価の実施及び職員の意識改善			
担当者	担当部課	総務企画課	事業責任者	総務企画課長　藤本慎也
実績・成果	・自己点検評価、および外部有識者による外部評価等を行い、その結果を機構の事業等に反映させた。 ・東博全職員を対象とした接遇研修（23 年 1 月）等、各種研修・講習会を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図った。 ・平成 20 年度運営改善コンクール採択案件のフォローアップを行った。			
補足事項	・平成 20 年度運営改善コンクール採択案件のフォローアップについて詳細は以下のとおり。 ①生理用品の自動販売機の設置について： 東博に 2 台、21 年度より継続して設置した（平成館・本館）。京博・奈良博・九博においては、申し出られた方に個々に対応している。 ②撮影申込者増加のための撮影紹介パンフレットの作成・HP の掲載方法の修正（東博）： 21 年度製作のパンフレットを継続して配付した。東博ウェブサイトについては、撮影紹介ページのコンテンツを新規作成し、平成 23 年 4 月のリニューアルに合わせて公開予定である。 ③研究者一覧（データベース）の作成： 学芸・研究系職員連絡協議会での検討に基づき、各施設の HP にて公開した。 ④規程集のウェブ化： 22 年 10 月に実施した。詳しくは処理番号 9330 を参照。			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	—	—	—	—		—	—	—	—

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年 1 回以上事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　　施設名 本部事務局　　処理番号 9330

中項目	Ⅱ-3　情報の安全性向上

事業名	情報の安全性向上			
担当者	担当部課	総務企画課	事業責任者	総務企画課長　藤本慎也
実績・成果	・保有個人情報管理監査を行い、個人情報管理のより一層の適正化を図った（23年1月）。 ・情報システム点検・評価要項に基づき、奈良文化財研究所を対象に、情報システム監査を行った。（23年2月28日） ・国立文化財機構規程集の全文をPDF化し、グループウェア上で機構内全職員に公開した（22年10月）。以後、最新版へのアップデートを継続して行っている。 ・機構ウェブサイトのリニューアルとともに、サーバーのハード・ソフトを最新版に入れ替えることで、セキュリティの向上を図った。			
補足事項				

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	―	―	―	―		―	―	―	―

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	機構が管理する情報の安全性向上のため、必要な措置をとる。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式Ａ】　施設名 本部事務局　処理番号 9440

中項目	Ⅱ-4　人件費の削減

事業名	人件費の削減			
担当者	担当部課	総務企画課	事業責任者	総務企画課長　藤本慎也

実績・成果

・人件費削減実績

	17年度（A分類実績ﾍﾞｰｽ）	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	22年度目標値（17年度に比して△5.00%）
実績（千円）	2,878,750	2,789,360	2,773,688	2,745,389	2,688,829	2,619,439	2,734,812
前年度に対する削減率	－	△3.11%	△0.56%	△1.02%	△2.06%	△2.58%	－
17年度に対する削減率	－	△3.11%	△3.65%	△4.63%	△6.60%	△9.01%	－
17年度に対する削減率（補正値）	－	△3.11%	△4.35%	△5.33%	△4.90%	△5.81%	－

・人事給与統合システムが平成２０年４月から稼働し、機構全体として統一的な処理ができるようになった。さらに人件費の削減に向けたシミュレーション等により人件費に関する計画を円滑に企画・立案することができた。
・地域手当について、平成２２年度において平成２１年度の率を据え置く方針が決定された。

補足事項

※１　人件費削減実績表中の「補正値」とは、「行政改革の重要方針」（平成17年12月24日閣議決定）による人事院勧告を踏まえた官民の給与較差に基づく給与改定分を除いた削減率である。なお、平成18年、平成19年、平成20年、平成21年、平成22年の行政職(一)職員の年間平均給与の増減率はそれぞれ0%、0.7%、0%、△2.4%、△1.5%である。
※２　レクリエーション経費は運営費交付金からの支出はない。レクリエーション経費以外の福利厚生費（法定外福利費）は15,030千円である。また、国とは異なる諸手当は機構にはない。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
人件費削減率（17年度比較）	△9.01%	17年度決算額に比して5年間で5%削減	S		△3.65%	△4.63%	△6.60%	△9.01%

年度実績評価総括

S　Ⓐ　B　C　F

（S、Fの理由）

中期計画記載事項

・「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」（平成１８年法律第４７号）に基づき、国家公務員に準じた人件費改革に取り組み、平成１８年度からの５年間において、△５％以上の人件費削減を行う。また、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行う、更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針２００６」（平成１８年７月７日閣議決定）に基づき、国家公務員の改革を踏まえ、人件費改革を平成２２年度まで継続する。

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 本部事務局　処理番号 0110

大項目	Ⅳ　その他主務省令で定める業務運営に関する事項

中項目	Ⅳ-1　人事に関する計画

事業名	(1)　近隣大学等との交流を進め、優秀な人材を確保する。			
担当者	担当部課	総務企画課	事業責任者	総務企画課長　藤本慎也

実績・成果

〈事務系職員〉

・本部事務局及び各施設において、文化庁、東京大学、京都大学、大阪大学、九州大学及び(独)国立美術館等から受け入れており、人材の確保と適材適所の人員配置を行った。
・また、文化庁には１名の出向を行っている。
・機構内での人事交流を図るため、本部及び各施設間（本部事務局・九州国立博物館間、京都国立博物館・奈良文化財研究所間、東京国立博物館・京都国立博物館間、東京国立博物館・東京文化財研究所間、京都国立博物館・奈良国立博物館間、東京文化財研究所・奈良文化財研究所等（9名））における交流を行っている。

年度	本部・東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	年度計（人）
19	18（東大、医科歯科大、西美、政研大）	11（京大）	9（阪大、京大、阪教大、奈女大）	7（九大、東大、九工大）	5（東□医科歯科大、千葉大）	8（京大、阪大、滋賀大、滋賀医科大）	58
20	16（東大、西美、政研大）	10（京大、民博）	10（文化庁、阪大、京大、北九州高専）	8（九大、九工大）	6（東大、医科歯科大）	7（京大、阪大、滋賀大、総地研）	57
21	18(文化庁、東大、東近美、政研大、京博)	13(京大、民博、奈良博、東博)	10(文化庁、阪大、京大、北九州高専、京博□	11(九大、九工大、本部)	8(東大、医科歯科大、東博、奈文研)	8(京大、阪大、滋賀大、総地研、奈女大)	68 (8)
22	18(東大、東近美、政研大、京博)	14(京大、阪大、民博、奈文研、東博)	8(文化庁、阪大、京大、京博□	8(九大、本部)	5(医科歯科大、東博、奈文研)	11(京大、阪大、総地研、奈女大)	64 (9)

※表中の人事交流者の人数は、各年度末現在でカウントした。(機構に受け入れている人数)
※平成21年度から機構内の人事交流中の人数を含めた。合計欄の(　)内の人数。

〈研究系職員〉

・職員の適性・能力、年齢構成及び業務の効率化など総合的に勘案し、新規に研究職員を13名採用した。
・また、文化庁から8名の受け入れ及び文化庁への出向を14名を行っている。
・機構内での人事交流を図るため、各施設間（東京国立博物館・九州国立博物館間、京都国立博物館・奈良文化財研究所間（6名））における交流を行っている。

補足事項

・事務系職員において、近隣大学等との交流数が11法人あり、優秀な人材を確保した。また、人事交流者数も64名と、引き続き優秀な人材を確保し、計画に対し順調に成果をあげている。
・事務系職員において、平成22年度においては、新たに日本芸術院へ１名の出向を行ったが、他法人からの受け入れが交流の中心となっているため、引き続き双方向の人事交流を増加させる必要がある。
・研究職員については、文化庁との双方向の人事交流が行われているが、交流の多様化と交流先の拡大を図る必要がある。しかし、退職手当の通算ができない場合が多く、難しい問題がある。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
－	－	－	－		－	－	－	－

年度実績評価総括　S　Ⓐ　B　C　F
（S、Fの理由）

中期計画記載事項

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 本部事務局　処理番号 0120

中項目	Ⅳ-1　人事に関する計画

事業名	(2)　各種研修を積極的に実施し、また、職員を外部の研修に派遣するなど、その資質の向上を図る。			
担当者	担当部課	総務企画課	事業責任者	総務企画課長　藤本慎也

実績・成果

・機構職員としての資質向上を図るため、新任職員や職員を対象とした各種研修（3 件）、施設系の職員を対象とした研修（1 件）、接遇に関する研修（1 件）及びハラスメントに関する研修（1 件）を行った。
・その他、他機関で実施する研修にも積極的に参加した。

研修名称	日程	受講対象者	受講者数
新任職員研修会	H22.7.20～H22.7.22	平成 21 年度以降の新任職員等	36 人
接遇研修	H22.7.20	平成 21 年度以降の新任職員等	36 人
個人情報保護についての講演会	H22.7.21	平成 21 年度以降の新任職員及び本部事務局、東京国立博物館、東京文化財研究所全職員及び近隣独立行政法人職員	約 100 人
施設系職員研修会	H22.8.23～H22.8.24	機構内の施設系職員	10 人
接遇研修会	H23.1.24～H23.1.28	本部事務局、東京国立博物館の来館者対応の機会がある職員	141 人
ハラスメントに関する研修会	H22.12.1	本部事務局、東京国立博物館のハラスメント防止等委員会委員及び相談員等	12 人

補足事項

・新任職員及び人事交流者に対しては、機構職員としての必要な業務・組織等についての基礎的知識及び執務要領を修得させ、新任職員等の資質の向上を図ることができた。
・新任職員を対象とした接遇研修の企画及び実施により、機構職員としての資質向上を図るとともに、修得した知識等（お客様からの苦情への対応方法等）を業務に反映させることができた。
・「独立行政法人等の保有する個人情報の適切な管理のための措置に関する指針について」に基づき、保有個人情報の取扱いに従事する職員に対し、保有個人情報の取扱いについて、理解を深め、個人情報の保護に関する意識の高揚を図ることができた。
・施設系職員について、各施設だけではなく、機構全体の施設系職員としての必要な業務等についての知識及び執務要領について、意見交換等を行い、施設系職員の資質の向上を図ることができた。
・本部事務局、東京国立博物館職員を対象とした接遇研修の企画及び実施により、接遇の基本を確認するとともに、職員として来館者をお迎えする心構えを認識し、接遇マナーの向上を図ることができた。
・ハラスメントに関する規程を平成 20 年 4 月に整備し、ハラスメント防止等委員会を設置した。また、ハラスメント相談員及びハラスメント防止等委員会委員との連携を目的とした研修会を開催し、外部講師による専門的見地によるアドバイスから事案発生から解決方法についての相談体制を再認識することができた。

定量的評価

項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
研修機会の提供	6 件	－	－		3	4	6	6

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、Fの理由）
中期計画記載事項	
中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

【書式A】　施設名 本部事務局　処理番号 0130

中項目	Ⅳ-1　人事に関する計画

事業名	(3)　非公務員化のメリットを活かした制度の活用			
担当者	担当部課	総務企画課	事業責任者	総務企画課長　藤本慎也
実績・成果	・平成 19 年度において、技術職員及び技能・労務職員について、当面対象とする職種を絞って機構独自で採用可能とする規定の整備を行い、平成 20 年度に施設の維持管理を行う職員を新たに適用範囲とした。 ・平成 22 年度においては労務職員（衛士）を東京国立博物館で 3 名、技術職員（写真技士）を奈良文化財研究所で 1 名採用した。（計 4 名） ・平成 20 年度において、常勤の研究職員に準じた有期雇用職員の人事制度（アソシエイト・フェロー）を新たに整備し、専門的事項の調査研究を行う研究職と高度な専門知識と経験等を有する専門職を対象として採用可能とした。平成 22 年度は本部で 1 名、東京国立博物館で 6 名、奈良国立博物館で 1 名、九州国立博物館で 2 名、東京文化財研究所で 1 名及び奈良文化財研究所で 6 名を採用した。（計 17 名）			
補足事項	・選考の方法等については、さらに検討し、改善していく必要性があると考える。 ・研究職員においても、人事の流動化を図りたいが、退職手当の通算の問題があるので、難しい状況にある。			

定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	機構独自の採用	21 名	－	－		－	6 名	25 名	21 名

年度実績評価総括	S　Ⓐ　B　C　F （S、F の理由）
中期計画記載事項	

中期計画に対して順調に成果を上げているか。	順調

Ⅲ　施設概要

【東京国立博物館】

土地・建物　　(㎡)

土地面積	１２０，２５８（黒田記念館、柳瀬荘含む）		
建物	建築面積		２１，８９６
	延面積		７１，６４２
展示館	展示面積	計	１８，１６８
	収蔵庫面積	計	８，６１４
	本館	建	６，６０２
		延	２２，４１６
		展示面積	６，９７８
		収蔵庫面積	４，３０４
	東洋館	建	２，８９２
	※耐震改修工事のため	延	１２，５３１
	休館中	展示面積	４，２５２
		収蔵庫面積	１，３３３
	平成館	建	５，５２９
		延	１９，３９３
		展示面積	４，４７１
		収蔵庫面積	２，１１９
	法隆寺宝物館	建	１，９３５
		延	４，０３１
		展示面積	１，４６２
		収蔵庫面積	２９１
	表慶館	建	１，１３０
		延	２，０７７
		展示面積	６３７
		収蔵庫面積	５４２
	黒田記念館	建	７０５
		延	１，９５８
		展示面積	３６８
		収蔵庫面積	２５
	その他	建	３，１０３
		延	９，２３６

【京都国立博物館】

土地・建物　　(㎡)

土地面積	５３，１８２		
建物	建築面積		７，９４９
	延面積		１３，８３１
展示館	展示面積	計	２，０７０
	収蔵庫面積	計	２，７１１
	特別展示館	建	３，０１５
		延	３，０１５
		展示面積	２，０７０
		収蔵庫面積	８０３
	管理棟	建	５９０
		延	１，９５４
	資料棟	建	４１４
		延	１，１２５
	文化財保存修理所	建	７２８
		延	２，８５６
	技術資料参考館	建	１０１
		延	３０４
	東収蔵庫	建	１，０８４
		延	１，９９６
		収蔵庫面積	１，４１２
	北収蔵庫	建	３１０
		延	６８２
		収蔵庫面積	４９６
	その他	建	１，７０７
		延	１，８９９

【奈良国立博物館】

土地・建物　　(㎡)

土地面積	７８，７６０		
建物	建築面積		６，７６９
	延面積		１９，１１６
展示館	展示面積	計	４，０７９
	収蔵庫面積	計	１，５５８
	本館	建	１，５１２
		延	１，５１２
		展示面積	１，２６１
	本館付属棟	建	３４１
		延	６６４
		展示面積	４７０
	東新館	建	１，８２５
		延	６，３８９
		展示面積	８７５
		収蔵庫面積	１，３９４
	西新館	建	１，６４９
		延	５，３９６
		展示面積	１，４７３
	仏教美術資料研究センター	建	７１８
		延	７１８
	文化財保存修理所	建	３１９
		延	１，０３６
	地下回廊	延	２，１５２
		収蔵庫面積	１６４
	その他	建	４０５
		延	１，２４９

【九州国立博物館】

土地・建物　　(㎡)

土地面積	１６０，７１５		
			（法人　１０，７３３ 県　１４９，９８２）
建物	建築面積		１４，６２３
	延面積		３０，６７５
			（法人　９，０４８ 県　６，０３４ 共用　１５，５９３）
展示館	展示面積	計	５，４４４
			（法人　３，８４４ 県　１，３７５ 共用　２２５）
	収蔵庫面積	計	４，５１８
			（法人　２，７４４ 県　１，３３５ 共用　４３９）

【東京文化財研究所】

土地・建物　　（㎡）

土地面積	４，１８１	
建物	建築面積	２，２５８
	延面積	１０，６２３

【奈良文化財研究所】

土地・建物　　（㎡）

	土地面積	建物	
本館地区	８，８６０	建築面積 延面積	２，７５４ ６，７５５
平城宮跡資料館地区	（文化庁所属の国有地を無償使用）	建築面 延面積	１０，６３１ １６，１５０
都城発掘調査部 （飛鳥・藤原地区）	２０，５１５	建築面積 延面積	６，０１６ ９，４７７
飛鳥資料館地区	１７，０９３	建築面積 延面積	２，６５７ ４，４０４

Ⅳ　財務諸表

目　　次

１．貸借対照表

２．損益計算書

３．キャッシュ・フロー計算書

４．行政サービス実施コスト計算書

５．利益の処分に関する書類

６．注記（重要な会計方針等）

７．附属明細書

貸 借 対 照 表

平成23年3月31日

独立行政法人国立文化財機構　　（単位：円）

科目	金額		科目	金額	
（資産の部）			（負債の部）		
Ⅰ 流動資産			Ⅰ 流動負債		
現金及び預金		3,580,504,401	預り寄附金		85,973,267
有価証券		500,000,000	未払金		3,634,811,143
たな卸資産		22,784,280	未払費用		59,383,395
前払費用		4,075,814	預り金		100,854,680
未収金		636,629,504	その他の流動負債		4,886,643
その他の流動資産		23,868	流動負債合計		3,885,909,128
流動資産合計		4,744,017,867	Ⅱ 固定負債		
Ⅱ 固定資産			資産見返負債		
1有形固定資産			資産見返運営費交付金	2,428,424,476	
建物	62,337,084,818		資産見返寄附金	177,381,800	
減価償却累計額	−16,754,625,638	45,582,459,180	資産見返物品受贈額	90,098,187	
構築物	3,519,273,354		資産見返その他補助金	174,082,420	
減価償却累計額	−1,540,013,595	1,979,259,759	建設仮勘定見返運営費交付金	143,312,700	
機械・装置	177,452,047		建設仮勘定見返施設費	2,383,051,681	
減価償却累計額	−156,346,751	21,105,296	資産見返負債合計	5,396,351,264	
車両運搬具	50,938,999		その他の固定負債		
減価償却累計額	−37,664,280	13,274,719	長期未払金	33,878,811	
工具器具備品	4,754,781,336		固定負債合計	33,878,811	5,430,230,075
減価償却累計額	−2,911,706,701	1,843,074,635	負債合計		9,316,139,203
収蔵品		101,359,041,504			
土地		44,410,675,104	（純資産の部）		
建設仮勘定		2,526,364,381	Ⅰ 資本金		
有形固定資産合計		197,735,254,578	政府出資金		104,713,813,740
2無形固定資産			資本金合計		104,713,813,740
ソフトウエア		165,102,059	Ⅱ 資本剰余金		
電話加入権		5,266,800	資本剰余金		106,348,980,588
無形固定資産合計		170,368,859	損益外減価償却累計額（−）		−19,030,536,496
3投資その他の資産			損益外減損損失累計額（−）		−2,343,600
保証金		632,000	資本剰余金合計		87,316,100,492
長期前払費用		79,944	Ⅲ 利益剰余金		
投資その他の資産合計		711,944	前中期目標期間繰越積立金		9,025,086
固定資産合計		197,906,335,381	積立金		1,152,545,478
			当期未処分利益		142,729,249
			（うち当期総利益 142,729,249 ）		
			利益剰余金合計		1,304,299,813
			純資産合計		193,334,214,045
資産合計		202,650,353,248	負債純資産合計		202,650,353,248

（注）運営費交付金から充当されるべき退職給付の見積額は2,358,346,618円であります。

（注）運営費交付金から充当されるべき賞与の見積額は210,332,042円であります。

損益計算書

（平成22年4月1日～平成23年3月31日）

独立行政法人国立文化財機構　　（単位:円）

経常費用			
業務費			
人件費		2,947,717,781	
業務経費			
調査研究業務費	1,192,399,353		
情報公開業務費	121,494,574		
研修業務費	17,341,054		
国際研究協力業務費	225,078,642		
展示出版業務費	143,559,797		
展覧業務費	1,085,807,394		
教育普及業務費	87,351,294		
受託業務費	505,056,933		
その他業務費	1,213,318,563	4,591,407,604	
減価償却費		368,278,589	7,907,403,974
一般管理費			
人件費	856,166,311		
一般管理経費	851,928,289		
減価償却費	82,779,773	1,790,874,373	
財務費用		2,073,383	
雑損		2,874,085	1,795,821,841
経常費用合計			9,703,225,815
経常収益			
運営費交付金収益		6,792,123,976	
受託収入			
政府関係受託収入		480,451,921	
地方自治体・民間受託収入		105,299,340	
入場料収入		891,598,757	
展示事業等附帯収入		382,616,184	
財産利用収入		154,046,531	
寄附金収益		122,302,354	
施設費収益		216,483,830	
その他補助金収益		98,265,408	
資産見返負債戻入			
資産見返運営費交付金戻入	357,257,959		
資産見返寄附金戻入	28,999,568		
資産見返物品受贈額戻入	4,764,998		
資産見返その他補助金戻入	31,432,838		
建設仮勘定見返施設費戻入	94,434,013	516,889,376	
財務収益			
受取利息		2,294,748	
その他財務収益		1,251	
雑益		81,881,665	
経常収益合計			9,844,255,341
経常利益			141,029,526
臨時損失			
固定資産除却損			11,521,432
			11,521,432
臨時利益			
資産見返運営費交付金戻入			7,238,153
資産見返物品受贈額戻入			3,942,029
			11,180,182
当期純利益			140,688,276
前中期目標期間繰越積立金取崩額			2,040,973
当期総利益			142,729,249

キャッシュ・フロー計算書

独立行政法人国立文化財機構　　（平成22年4月1日～平成23年3月31日）　　（単位：円）

Ⅰ　業務活動によるキャッシュ・フロー	
人件費支出	−3,729,715,397
業務支出	−5,326,092,139
科学研究費支出	−198,259,138
運営費交付金収入	8,192,326,000
科学研究費収入	218,008,335
展示事業等収入	1,132,141,818
財産利用収入	159,457,746
受託収入	630,641,534
寄附金収入	141,628,475
その他補助金による収入	136,143,631
その他の業務収入	54,890,040
小計	1,411,170,905
利息の受取額	5,420
利息の支払額	−916,136
業務活動によるキャッシュ・フロー	1,410,260,189
Ⅱ　投資活動によるキャッシュ・フロー	
施設費による収入	5,102,073,909
有形固定資産の取得による支出	−6,477,838,242
無形固定資産の取得による支出	−104,966,195
有価証券の取得による支出	−500,000,000
その他投資活動による支出	−37,052
投資活動によるキャッシュ・フロー	−1,980,767,580
Ⅲ　財務活動によるキャッシュ・フロー	
リース債務の支払による支出	−6,552,679
財務活動によるキャッシュ・フロー	−6,552,679
Ⅳ　資金増加額	−577,060,070
Ⅴ　資金期首残高	4,157,564,471
Ⅵ　資金期末残高	3,580,504,401

（注記事項）

（1）資金の期末残高の貸借対照表科目の内訳

現金及び預金勘定	3,580,504,401 円
資金期末残高	3,580,504,401

（2）重要な非資金取引

①現物寄附の受入

収蔵品	116,295,442
その他の有形固定資産	537,500
合計	116,832,942

行政サービス実施コスト計算書

（平成22年4月1日～平成23年3月31日）

独立行政法人国立文化財機構　　（単位:円）

Ⅰ 業務費用		
損益計算書上の費用		
業務費	7,907,403,974	
一般管理費	1,790,874,373	
財務費用	2,073,383	
雑損	2,874,085	
臨時損失	11,521,432	9,714,747,247
（控除）		
受託収入	−585,751,261	
入場料収入	−891,598,757	
展示事業附帯収入	−320,891,684	
財産利用収入	−154,046,531	
寄附金収益	−122,302,354	
財務収益	−2,295,999	
雑益	−81,881,665	
資産見返寄附金戻入	−28,999,568	−2,187,767,819
Ⅱ 損益外減価償却相当額		2,321,017,451
Ⅲ 損益外除売却差額相当額		42,423,741
Ⅳ 引当外賞与見積額		−6,732,364
Ⅴ 引当外退職給付増加見積額		12,280,285
Ⅵ 機会費用		
国有財産無償使用の機会費用	134,281,734	
政府出資等の機会費用	2,297,107,652	2,431,389,386
Ⅶ 行政サービス実施コスト		12,327,357,927

（注記）

・特定償却資産の除却損については、従来「損益外固定資産除却相当額」に計上しておりましたが、当該年度より、「損益外除売却差額相当額」の区分に計上しております。
これによる実施コストに与える影響はありません。

・国有財産無償使用の機会費用の計算方法については、国の庁舎等の使用又は収益を許可する場合の取扱の基準（昭和33年1月7日付大蔵省管財局長通知蔵管1号）を準用しております。

・政府出資等の機会費用の計算利率については、国債の利回り及び昨今の市場情勢を勘案し、1.255%としております。

利益の処分に関する書類

独立行政法人国立文化財機構　　（単位：円）

Ⅰ	当期未処分利益		142,729,249
	当期総利益	142,729,249	
Ⅱ	積立金振替額		9,025,086
	前中期目標期間繰越積立金	9,025,086	
Ⅲ	利益処分額		
	積立金		151,754,335

注記事項

Ⅰ．重要な会計方針

１．運営費交付金収益の計上基準

人件費のうちの役員給与、職員給与、法定福利費並びに管理部門の経費（特に指定するものを除く）及び減価償却費については、業務の実施が運営費交付金と期間的に対応しているため期間進行基準（一定の期間の経過を業務の進行とみなし、運営費交付金債務を収益化する方法）を採用しております。

人件費のうちの退職手当並びに事業部門の経費及び管理部門の経費のうち特に指定するものについては、業務達成基準（当該業務等の達成度に応じて、財源として予定されていた運営費交付金債務を収益化する方法）を採用しております。

財務費用、その他計画外の発生費用については、費用進行基準（発生費用の額を限度として運営費交付金債務を収益化する方法）を採用しております。

２．減価償却の会計処理方法

（１）有形固定資産

定額法により行っております。

なお、主な資産の耐用年数は以下のとおりであります。

建物	２年～５８年
構築物	２年～６３年
機械・装置	２年～　５年
車両・運搬具	２年～　７年
工具・器具・備品	２年～２０年

また、特定の償却資産（独立行政法人会計基準第８７）の減価償却相当額については、損益外減価償却累計額として資本剰余金を減額しております。

（２）無形固定資産

定額法により行っております。なお、機構内利用のソフトウエアについては、機構内における利用可能期間（５年）に基づいております。

３．賞与に係る引当金及び見積額の計上方法

役職員の賞与については運営費交付金により財源措置がなされるため、賞与に係る引当金は計上しておりません。

また、行政サービス実施コスト計算書における引当外賞与見積額は、当事業年度の引当外賞与見積額から前事業年度の同見積額を控除した額を計上しております。

４．退職給付に係る引当金及び見積額の計上方法

役職員の退職給付については運営費交付金により財源措置がなされるため、退職給付に係る引当金は計上しておりません。

また、行政サービス実施コスト計算書における引当外退職給付増加見積額は、自己都合退職金要支給額の当期増加額に基づき計上しております。

５．有価証券の評価基準及び評価方法

満期保有目的である譲渡性預金について、取得価格をもって貸借対照表価格としてお

ります。

６．たな卸資産の評価基準及び評価方法
　貯蔵品等･･･最終仕入原価法を採用しております。

７．収蔵品の評価方法
　国からの承継分については、承継時の物品目録上の価額をもって評価しており、新規取得分については取得時の価額をもって評価しております。

８．行政サービス実施コスト計算書における機会費用の計上方法
（１）国有財産無償使用の機会費用の計算方法
　国の庁舎等の使用又は収益を許可する場合の取扱の基準（昭和３３年１月７日付大蔵省管財局長通知蔵管第１号）を準用して算出しております。
（２）政府出資等の機会費用の計算に使用した利率
　１０年利付国債の平成２３年３月末利回りを参考にして１．２５５％で計算しております。

９．リース取引の処理方法
　リース料総額が３００万円以上のファイナンス・リース取引については、通常の売買取引に係る方法に準じた会計処理によっております。
　リース料総額が３００万円未満のファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。

１０．消費税等の会計処理
　消費税等の会計処理は、税込方式によっております。

（重要な会計方針の変更）
　当事業年度より、改訂後の「独立行政法人会計基準」及び「独立行政法人会計基準注解」（独立行政法人会計基準研究会　平成２２年１０月２５日最終改訂）並びに「「独立行政法人会計基準」及び「独立行政法人会計基準注解」に関するＱ＆Ａ」（総務省行政管理局、財務省主計局、日本公認会計士協会平成２２年１１月最終改訂）を適用しております。

Ⅱ．固定資産の減損
　該当なし

Ⅲ．重要な債務負担行為

京都国立博物館平常展示館建替工事　　7,114,787,300　円

Ⅳ．金融商品関係
（１）金融商品の状況に関する事項
　当機構は、資金運用については短期的な預金に限定し、活動資金は事業収入及び運営費交付金等によりまかなっているため、資金調達はありません。

（２）金融商品の時価等

期末日における貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

(単位：円)

	貸借対照表 計 上 額	時　　価	差　　額
(1)現金及び預金	3,580,504,401	3,580,504,401	―
(2)満期保有目的債券	500,000,000	500,000,000	―
(3)未払金	(3,634,811,143)	(3,634,811,143)	―

（注１）負債に計上されているものは、(　) で示しております。

（注２）金融商品の時価の算定方法並びに有価証券等に関する事項

(1) 現金及び預金

短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(2) 満期保有目的債券

時価については、取引金融機関から提示された価格によっております。

(3) 未払金

短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

Ⅴ．賃貸等不動産関係

当機構は、東京都その他の地域において、賃貸等不動産を保有しておりますが、賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、注記を省略しております。

Ⅵ．資産除去債務関係

（１）石綿（アスベスト）関係

当機構では、石綿関連法令により使用等が規制されている石綿が、奈良文化財研究所収蔵庫３棟の天井材、東京国立博物館黒田記念館の床材に使用されております。

これらの石綿は全て封じ込め済みであり、建物の解体時に石綿の除去義務が発生しますが当該資産の具体的な解体計画はなく、今後も、現状のまま継続的に使用する予定であります。加えて計画策定には国による認可及び予算措置が必要であり機構単独の意思決定ではなし得ない状況にあるため、資産除去債務を合理的に見積ることができません。このため、貸借対照表に資産除去債務を計上しておりません。

（重要な会計方針の変更）

当事業年度より、改訂後の「独立行政法人会計基準」及び「独立行政法人会計基準注解」（独立行政法人会計基準研究会　平成２２年１０月２５日最終改訂）並びに「「独立行政法人会計基準」及び「独立行政法人会計基準注解」に関するＱ＆Ａ」（総務省行政管理局、財務省主計局、日本公認会計士協会平成２２年１１月最終改訂）を適用しております。

なお、これによる損益及び資本剰余金に与える影響はありません。

第4期　附属明細書

自：平成22年 4月 1日
至：平成23年 3月31日

１．　固定資産の取得、処分、減価償却費（「第８７ 特定の償却資産の減価に係る会計処理」及び「第９１ 資産除去債務に係る特定の除去費用等の会計処理」による損益外減価償却相当額も含む。）及び減損損失累計額の明細

２．　たな卸資産の明細

３．　有価証券の明細

４．　長期貸付金の明細

５．　長期借入金及び債券の明細

６．　引当金の明細

７．　資産除去債務の明細

８．　法令に基づく引当金等の明細

９．　保証債務の明細

１０．　資本金及び資本剰余金の明細

１１．　積立金の明細

１２．　目的積立金の取崩しの明細

１３．　運営費交付金債務及び当期振替額等の明細

１４．　運営費交付金以外の国等からの財源措置の明細

１５．　役員及び職員の給与の明細

１６．　セグメント情報

１７．　主な資産、負債、費用及び収益の明細

1. 固定資産の取得、処分、減価償却費（「第87 特定の償却資産の減価に係る会計処理」及び「第91 資産除去債務に係る特定の除去費用等の会計処理」による損益外減価償却相当額も含む。）及び減損損失累計額の明細

（単位：円）

資産の種類		期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	減価償却累計額		減損損失累計額			差引当期末残高	摘要
							当期償却額		当期損益内	当期損益外		
有形固定資産（償却費損益内）	建物	1,636,903,299	310,482,296	11,577,000	1,935,808,595	569,358,484	112,732,209	0	0	0	1,366,450,111	
	構築物	117,850,484	19,706,480	0	137,556,964	28,131,647	9,975,427	0	0	0	109,425,317	
	機械装置	688,995	3,423,000	0	4,111,995	656,549	36,454	0	0	0	3,455,446	
	車両運搬具	41,384,161	5,250,000	2,654,522	43,979,639	31,400,872	3,070,272	0	0	0	12,578,767	
	工具器具備品	2,584,565,109	498,314,408	43,340,385	3,039,539,132	1,743,717,775	270,584,137	0	0	0	1,295,821,357	
	小計	4,381,392,048	837,176,184	57,571,907	5,160,996,325	2,373,265,327	396,398,499	0	0	0	2,787,730,998	
有形固定資産（償却費損益外）	建物	55,135,047,812	5,329,944,729	63,716,318	60,401,276,223	16,185,267,154	2,039,909,761	0	0	0	44,216,009,069	東京国立博物館東洋館、奈良国立博物館西新館、仏教美術資料研究センター耐震補強工事等竣工に伴う増
	構築物	3,365,586,550	16,474,557	344,717	3,381,716,390	1,511,881,948	118,065,538	0	0	0	1,869,834,442	
	機械装置	173,541,932	0	201,880	173,340,052	155,690,202	4,548,391	0	0	0	17,649,850	
	車両運搬具	7,012,752	0	53,392	6,959,360	6,263,408	510,688	0	0	0	695,952	
	工具器具備品	1,607,455,160	16,004,100	2,153,072	1,621,306,188	1,167,988,926	158,613,150	0	0	0	453,317,262	
	小計	60,288,644,206	5,362,423,386	66,469,379	65,584,598,213	19,027,091,638	2,321,647,528	0	0	0	46,557,506,575	
有形固定資産（非償却）	工具器具備品	94,256,366	537,500	857,850	93,936,016	0	0	0	0	0	93,936,016	その他有形固定資産含む
	収蔵品	99,520,608,546	1,982,766,292	144,333,334	101,359,041,504	0	0	0	0	0	101,359,041,504	
	土地	44,410,675,104	0	0	44,410,675,104	0	0	0	0	0	44,410,675,104	
	建設仮勘定	3,092,817,176	5,164,364,965	5,730,817,760	2,526,364,381	0	0	0	0	0	2,526,364,381	
	小計	147,118,357,192	7,147,668,757	5,876,008,944	148,390,017,005	0	0	0	0	0	148,390,017,005	
有形固定資産合計	建物	56,771,951,111	5,640,427,025	75,293,318	62,337,084,818	16,754,625,638	2,152,641,970	0	0	0	45,582,459,180	東京国立博物館東洋館、奈良国立博物館西新館、仏教美術資料研究センター耐震補強工事等竣工に伴う増
	構築物	3,483,437,034	36,181,037	344,717	3,519,273,354	1,540,013,595	128,040,965	0	0	0	1,979,259,759	
	機械装置	174,230,927	3,423,000	201,880	177,452,047	156,346,751	4,584,845	0	0	0	21,105,296	
	車両運搬具	48,396,913	5,250,000	2,707,914	50,938,999	37,664,280	3,580,960	0	0	0	13,274,719	
	工具器具備品	4,286,276,635	514,856,008	46,351,307	4,754,781,336	2,911,706,701	429,197,287	0	0	0	1,843,074,635	その他有形固定資産含む
	収蔵品	99,520,608,546	1,982,766,292	144,333,334	101,359,041,504	0	0	0	0	0	101,359,041,504	
	土地	44,410,675,104	0	0	44,410,675,104	0	0	0	0	0	44,410,675,104	
	建設仮勘定	3,092,817,176	5,164,364,965	5,730,817,760	2,526,364,381	0	0	0	0	0	2,526,364,381	
	小計	211,788,393,446	13,347,268,327	6,000,050,230	219,135,611,543	21,400,356,965	2,718,046,027	0	0	0	197,735,254,578	
無形固定資産（償却費損益内）	ソフトウエア	294,923,951	75,759,000	7,525,770	363,157,181	198,055,125	54,659,863	0	0	0	165,102,056	
	小計	294,923,951	75,759,000	7,525,770	363,157,181	198,055,125	54,659,863	0	0	0	165,102,056	
無形固定資産（償却費損益外）	ソフトウエア	3,444,861	0	0	3,444,861	3,444,858	286,694	0	0	0	3	
	小計	3,444,861	0	0	3,444,861	3,444,858	286,694	0	0	0	3	
無形固定資産（非償却）	電話加入権	7,610,400	0	0	7,610,400	0	0	2,343,600	0	0	5,266,800	
	小計	7,610,400	0	0	7,610,400	0	0	2,343,600	0	0	5,266,800	
無形固定資産合計	ソフトウエア	298,368,812	75,759,000	7,525,770	366,602,042	201,499,983	54,946,557	0	0	0	165,102,059	
	電話加入権	7,610,400	0	0	7,610,400	0	0	2,343,600	0	0	5,266,800	
	小計	305,979,212	75,759,000	7,525,770	374,212,442	201,499,983	54,946,557	2,343,600	0	0	170,368,859	
投資その他の資産	保証金	701,000	135,000	204,000	632,000	0	0	0	0	0	632,000	
	長期前払費用	80,843	79,944	80,843	79,944	0	0	0	0	0	79,944	
	小計	781,843	214,944	284,843	711,944	0	0	0	0	0	711,944	

2. たな卸資産の明細

（単位:円）

種　　類	期首残高	当期増加額		当期減少額		期末残高	摘　要
		当期購入・製造・振替	その他	払出・振替	その他		
貯蔵品等	30,383,399	21,611,804	0	20,430,889	8,780,034	22,784,280	
合　　計	30,383,399	21,611,804	0	20,430,889	8,780,034	22,784,280	

（注）当期減少額その他は、経年等による売却可能性のないものについての評価替えによるものであります。

3. 有価証券の明細

(1)流動資産として計上された有価証券　　(単位:円)

	種類及び銘柄	取得価額	券面総額	貸借対照表計上額	当期費用に含まれた評価差額	摘要
満期保有目的債券	譲渡性預金	500,000,000	500,000,000	500,000,000	0	
	計	500,000,000	500,000,000	500,000,000	0	
貸借対照表計上額合計				500,000,000		

4. 長期貸付金の明細

当該年度は長期貸付金に関して該当がないため、記載を省略しております。

5. 長期借入金及び債券の明細

当該年度は長期借入金及び債券に関して該当がないため、記載を省略しております。

6. 引当金の明細

当該年度は引当金を計上していないため、記載を省略しております。

7. 資産除去債務の明細

当該年度は資産除去債務を計上していないため、記載を省略しております。

8. 法令に基づく引当金等の明細

当該年度は法令に基づく引当金等を計上していないため、記載を省略しております。

9. 保証債務の明細

当該年度は保証債務に関して該当がないため、記載を省略しております。

10. 資本金及び資本剰余金の明細

（単位:円）

区　　分		期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	摘　　要
資本金	政府出資金	104,713,813,740	0	0	104,713,813,740	
	合　　計	104,713,813,740	0	0	104,713,813,740	
資本剰余金	施設費補助金	3,660,664,711	5,362,423,386	0	9,023,088,097	施設費補助金による固定資産の取得
	目的積立金	469,592,463	0	0	469,592,463	
	運営費交付金	10,335,924,211	1,825,713,000	0	12,161,637,211	収蔵品購入
	寄附金等	54,857,850	39,900,000	0	94,757,850	収蔵品購入
	贈　　与	85,676,578,509	116,832,487	144,333,334	85,649,077,662	増加:収蔵品寄贈受入、図書寄贈受入 減少:収蔵品評価額減額
	収蔵品編入	2,041,921	455	0	2,042,376	一般物品から収蔵品への編入
	損益外除売却差額相当額	-984,745,692	-66,469,379	0	-1,051,215,071	出資財産の除却
	小　　計	99,214,913,973	7,278,399,949	144,333,334	106,348,980,588	
	損益外減価償却累計額	-16,733,564,683	-2,321,934,222	-24,962,409	-19,030,536,496	増加:出資財産等の減価償却相当 減少:出資財産等の除却
	損益外減損損失累計額	-2,343,600	0	0	-2,343,600	
	差引合計	82,479,005,690	4,956,465,727	119,370,925	87,316,100,492	

11. 積立金の明細

（単位：円）

区　　分	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	摘　　要
通則法第44条第1項積立金	1,005,041,058	147,504,420	0	1,152,545,478	（注1）
前中期目標期間繰越積立金	11,066,059	0	2,040,973	9,025,086	（注2）
合　計	1,016,107,117	147,504,420	2,040,973	1,161,570,564	

（注1）通則法第44条第1項積立金の当期増加額は、平成21年度利益処分によるものであります。

（注2）前中期目標期間繰越積立金の当期減少額の内訳は次のとおりであります。

受託研究費購入資産分に係る減価償却相当分取崩額　　2,040,973 円

12. 目的積立金の取崩しの明細

（単位:円）

区分		金額	摘要
目的積立金取崩額	前中期目標期間繰越積立金取崩	2,040,973	受託研究費取得資産減価償却分
合計		2,040,973	

13. 運営費交付金債務及び当期振替額等の明細

(1)運営費交付金債務の増減の明細　　(単位:円)

交付年度	期首残高	交付金当期交付額	当期振替額					期末残高
			運営費交付金収益	資産見返運営費交付金	建設仮勘定見返運営費交付金	資本剰余金	小計	
20年度	79,907,000	0	13,465,000	0	0	66,442,000	79,907,000	0
21年度	1,117,569,126	0	366,707,029	98,605,169	0	652,256,928	1,117,569,126	0
22年度	0	8,192,326,000	6,411,951,947	652,897,281	20,462,700	1,107,014,072	8,192,326,000	0
合計	1,197,476,126	8,192,326,000	6,792,123,976	751,502,450	20,462,700	1,825,713,000	9,389,802,126	0

(2)運営費交付金債務の当期振替額の明細

①平成20年度交付分　　(単位:円)

区分		金額	内訳
業務達成基準による振替額	運営費交付金収益	0	①業務達成基準を採用した経費:人件費のうちの退職手当及び事業部門の経費並びに管理部門の経費のうち特に指定するもの ②当該業務に係る損益等 ア)損益計算書に計上した費用の額:該当なし イ)自己収入に係る収益計上額:該当なし ウ)固定資産の取得額:66,442,000円 (陳列品購入費:66,442,000円) ③運営費交付金収益化の積算根拠 業務等の達成度に応じて、財源として予定されていた運営費交付金の計画額を収益化
	資産見返運営費交付金	0	
	建設仮勘定見返運営費交付金	0	
	資本剰余金	66,442,000	
	小計	66,442,000	
期間進行基準による振替額	運営費交付金収益	0	―
	資産見返運営費交付金	0	
	建設仮勘定見返運営費交付金	0	
	資本剰余金	0	
	小計	0	
費用進行基準による振替額	運営費交付金収益	0	―
	資産見返運営費交付金	0	
	建設仮勘定見返運営費交付金	0	
	資本剰余金	0	
	小計	0	
会計基準第81第3項による振替額		13,465,000	会計基準第81第3項による振替額を採用した経費:財源として予定されていたが、期間終了時に未執行であった役員退職手当13,465,000円を振替額として収益化
合計		79,907,000	

②平成21年度交付分　　（単位:円）

区　分		金 額	内　訳
業務達成基準による振替額	運営費交付金収益	366,707,029	①業務達成基準を採用した経費:人件費のうちの退職手当及び事業部門の経費並びに管理部門の経費のうち特に指定するもの ②当該業務に係る損益等 ア)損益計算書に計上した費用の額:366,707,029円 （退職手当33,796,712円、一般管理費1,870,680円、調査研究事業費11,992,819円、展覧事業費　315,042,643円、教育普及事業費4,004,175円） イ)固定資産の取得額:750,862,097円 （陳列品購入費:652,256,928円、一般管理費2,947,812円、展覧事業費95,657,357円 ） ③運営費交付金収益化の積算根拠 業務等の達成度に応じて、財源として予定されていた運営費交付金の計画額を収益化
	資産見返運営費交付金	98,605,169	
	建設仮勘定見返運営費交付金	0	
	資本剰余金	652,256,928	
	小　計	1,117,569,126	
期間進行基準による振替額	運営費交付金収益	0	―
	資産見返運営費交付金	0	
	建設仮勘定見返運営費交付金	0	
	資本剰余金	0	
	小　計	0	
費用進行基準による振替額	運営費交付金収益	0	―
	資産見返運営費交付金	0	
	建設仮勘定見返運営費交付金	0	
	資本剰余金	0	
	小　計	0	
会計基準第81第3項による振替額		0	―
合　計		1,117,569,126	

③平成22年度交付分　　（単位：円）

区　分		金 額	内　訳
業務達成基準による振替額	運営費交付金収益	2,616,828,236	①業務達成基準を採用した経費：人件費のうちの退職手当及び事業部門の経費並びに管理部門の経費のうち特に指定するもの ②当該業務に係る損益等 ア）損益計算書に計上した費用の額：2,616,828,236円 （退職手当162,300,237円、一般管理費325,500円、 調査研究事業費1,003,243,966円、情報公開事業費169,321,175円、 研修事業費16,421,800円、国際研究協力費277,249,050円、 展示出版事業費146,221,050円、展覧事業費778,374,578円、 教育普及事業費63,370,880円） イ）自己収入に係る収益計上額：該当なし ウ）固定資産の取得額：1,711,741,904円 （陳列品購入費：1,104,284,072円、一般管理費199,038円、 調査研究事業費210,843,234円、情報公開事業費3,624,025円、 国際研究協力事業費1,863,750円、展示出版事業費10,389,750円、 展覧事業費378,963,035円、教育普及事業費1,575,000円 ） ③運営費交付金収益化の積算根拠 業務等の達成度に応じて、財源として予定されていた運営費交付金の計画額を収益化
	資産見返運営費交付金	584,265,132	
	建設仮勘定見返運営費交付金	20,462,700	
	資本剰余金	1,107,014,072	
	小　計	4,328,570,140	
期間進行基準による振替額	運営費交付金収益	3,785,445,945	①期間進行基準を採用した経費：人件費のうちの役員給与、職員給与、法定福利費、管理部門の経費（特に指定するものを除く）及び減価償却費 ②当該業務にかかる損益等 ア）損益計算書に計上した費用の額：3,785,445,945円 （役職員給与2,629,604,301円、法定福利費311,863,842円、一般管理費843,977,802円） イ）自己収入に係る収益計上額：該当なし ウ）固定資産の取得額：68,632,149円（一般管理費） ③運営費交付金収益化額の積算根拠 期間が経過したので、財源と予定されていた運営費交付金の計画額を収益化
	資産見返運営費交付金	68,632,149	
	建設仮勘定見返運営費交付金	0	
	資本剰余金	0	
	小　計	3,854,078,094	
費用進行基準による振替額	運営費交付金収益	0	―
	資産見返運営費交付金	0	
	建設仮勘定見返運営費交付金	0	
	資本剰余金	0	
	小　計	0	
会計基準第81第3項による振替額		9,677,766	会計基準第81第3項による振替額を採用した経費：東日本大震災の影響による未達成業務について、中期目標期間の最終年度であることから、独立行政法人会計基準第81 第3 項の規定に基づき、運営費交付金債務残高の全額を収益化
合 計		8,192,326,000	

(3)運営費交付金債務残高の明細

該当ありません

14. 運営費交付金以外の国等からの財源措置の明細

施設費の明細　　（単位:円）

区　　分	前期繰越額	当期交付額	左の会計処理内訳				期末残高	摘　要
			建設仮勘定見返施設費	資本剰余金	その他	小　計		
東京国立博物館東洋館耐震補強改修工事		1,863,108,765	0	1,765,303,423	97,805,342	1,863,108,765	0	
東京国立博物館東洋館設備改修工事	500	654,087,526	0	621,700,913	32,387,113	654,088,026	0	
京都国立博物館平常展示館建替工事		1,337,132,250	1,276,573,500	0	60,558,750	1,337,132,250	0	
奈良国立博物館西新館耐震補強工事		311,983,651	0	297,753,553	14,230,098	311,983,651	0	
奈良国立博物館西新館免震展示ケース設置工事		809,492,617	0	809,014,500	478,117	809,492,617	0	
奈良国立博物館仏教美術資料研究センター耐震補強工事		117,759,900	0	106,735,490	11,024,410	117,759,900	0	
合　　計	500	5,093,564,709	1,276,573,500	3,600,507,879	216,483,830	5,093,565,209	0	

（注）その他の内訳は、「施設費収益:216,483,830円」であります。

文化芸術情報電子化推進費補助金の明細　　（単位:円）

区　　分	前期繰越額	当期交付額	左の会計処理内訳				期末残高	摘要
			建設仮勘定見返補助金	資産見返補助金	収益計上	小　計		
重要文化財の高精細デジタルアーカイブ化事業	6,174,684	136,143,631	0	44,052,907	98,265,408	142,318,315	0	
合　　計	6,174,684	136,143,631	0	44,052,907	98,265,408	142,318,315	0	

（注）収益計上の内訳は、「補助金収益:98,265,408円」であります。

15. 役員及び職員の給与の明細

区　分	報酬又は給与		退職手当	
	支給額	支給人員	支給額	支給人員
役員	（ 2,880 ）千円 62,765	（ 2 ）人 4	（ 0 ）千円 0	（ 0 ）人 0
職員	（ 574,579 ） 2,556,674	（ 335 ） 336	（ 1,330 ） 224,063	（ 14 ） 17
合計	（ 577,459 ） 2,619,439	（ 337 ） 340	（ 1,330 ） 224,063	（ 14 ） 17

(1) 支給人員数は、報酬又は給与については平成22年4月～平成23年3月の平均支給人員数を記載しております。
また、退職手当については総支給人員数を記載しております。

(2) 役員報酬基準の概要　理事長　989,000円（期末における金額）
理事 3名　838,000円（期末における金額）
その他諸手当については、独立行政法人国立文化財機構役員報酬規程に基づき支給しております。
非常勤役員の報酬は、120,000円を月額として支給しております。

(3) 役員退職手当基準の概要　役員の退職手当は、独立行政法人国立文化財機構役員退職手当規程に基づき支給しております。

(4) 職員給与基準の概要　職員の給与は、基本給及び諸手当としております。
基本給は、一般職の職員の給与に関する法律（昭和25年法律第95号）及び人事院規則を準用し、独立行政法人国立文化財機構職員給与規程に基づき支給しております。

(5) 職員退職手当基準の概要　職員の退職手当は、国家公務員退職手当法を準用し、独立行政法人国立文化財機構職員退職手当規程に基づき支給しております。

(6) 非常勤の役員及び職員に係るものは、上段括弧書外数で記載しております。

(7) 上記の金額には、法定福利費は含まれておりません。

(8) 中期計画における予算上の人件費には、非常勤の役員・職員に係る給与は含まれておりません。

16. セグメント情報　（平成22年4月1日～平成23年3月31日）

独立行政法人 国立文化財機構　　（単位：円）

区　　分	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	計	法人共通	合　　計
Ⅰ事業費用,事業収益及び事業損益									
事業費用									
業務費	2,347,589,959	642,724,967	951,478,003	1,217,160,133	1,065,542,861	1,658,426,579	7,882,922,502	24,481,472	7,907,403,974
人件費	892,741,968	332,966,695	268,842,406	269,444,240	475,571,329	697,918,974	2,937,485,612	10,232,169	2,947,717,781
業務経費	1,366,614,185	306,135,193	649,827,753	764,644,240	571,000,126	918,936,804	4,577,158,301	14,249,303	4,591,407,604
調査研究業務費	327,789,420	83,354,655	78,993,599	210,606,446	86,455,820	390,950,110	1,178,150,050	14,249,303	1,192,399,353
情報公開業務費	0	0	0	0	35,059,392	86,435,182	121,494,574	0	121,494,574
研修業務費	0	0	0	0	2,447,677	14,893,377	17,341,054	0	17,341,054
国際研究協力業務費	0	0	0	0	164,150,247	60,928,395	225,078,642	0	225,078,642
展示出版業務費	0	0	0	0	9,445,801	134,113,996	143,559,797	0	143,559,797
展覧業務費	366,384,915	214,513,478	223,561,646	281,347,355	0	0	1,085,807,394	0	1,085,807,394
教育普及業務費	71,760,859	4,654,680	10,935,755	0	0	0	87,351,294	0	87,351,294
受託業務費	0	0	0	0	273,441,189	231,615,744	505,056,933	0	505,056,933
その他業務費	600,678,991	3,612,380	336,336,753	272,690,439	0	0	1,213,318,563	0	1,213,318,563
減価償却費	88,233,806	3,623,079	32,807,844	183,071,653	18,971,406	41,570,801	368,278,589	0	368,278,589
一般管理費	452,954,348	230,003,966	157,185,711	136,766,597	233,070,052	323,515,333	1,533,496,007	257,378,366	1,790,874,373
人件費	207,711,185	84,435,251	82,001,403	53,506,005	137,867,536	132,391,763	697,913,143	158,253,168	856,166,311
一般管理経費	218,559,161	136,707,743	54,515,773	63,310,650	94,934,527	189,070,294	757,098,148	94,830,141	851,928,289
減価償却費	26,684,002	8,860,972	20,668,535	19,949,942	267,989	2,053,276	78,484,716	4,295,057	82,779,773
財務費用	0	0	0	0	1,522,818	550,565	2,073,383	0	2,073,383
雑損	1,786,584	38,100	83,424	0	965,977	0	2,874,085	0	2,874,085
事業費用計	2,802,330,891	872,767,033	1,108,747,138	1,353,926,730	1,301,101,708	1,982,492,477	9,421,365,977	281,859,838	9,703,225,815
事業収益									
運営費交付金収益	1,868,389,730	622,223,210	404,196,534	987,646,995	1,014,607,250	1,615,016,150	6,512,079,869	280,044,107	6,792,123,976
受託収入	34,284,447	1,000,000	2,241,559	4,373,084	278,954,871	239,136,923	559,990,884	25,760,377	585,751,261
入場料収入	268,900,600	93,829,670	355,735,620	131,683,367	0	41,449,500	891,598,757	0	891,598,757
展示事業等附帯収入	119,966,523	61,077,937	120,893,503	21,865,358	16,633,410	39,779,767	380,216,498	2,399,686	382,616,184
財産利用収入	109,275,786	11,398,477	23,349,908	4,079,248	1,063,435	4,879,677	154,046,531	0	154,046,531
寄附金収益	13,519,777	3,787,861	95,705,126	2,050,000	2,000,000	5,239,590	122,302,354	0	122,302,354
施設費収益	130,192,455	60,558,750	25,732,625	0	0	0	216,483,830	0	216,483,830
その他補助金収益	98,265,408	0	0	0	0	0	98,265,408	0	98,265,408
資産見返負債戻入	181,785,578	12,484,051	81,042,622	194,365,285	10,559,833	32,356,950	512,594,319	4,295,057	516,889,376
財務収益	2,294,019	1,251	0	0	0	729	2,295,999	0	2,295,999
雑益	4,069,749	5,952,941	222,509	1,170,380	892,455	169,099	12,477,133	69,404,532	81,881,665
事業収益計	2,830,944,072	872,314,148	1,109,120,006	1,347,233,717	1,324,711,254	1,978,028,385	9,462,351,582	381,903,759	9,844,255,341
事業損益	28,613,181	−452,885	372,868	−6,693,013	23,609,546	−4,464,092	40,985,605	100,043,921	141,029,526

（単位：円）

区　　分	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	計	法人共通	合　　計
Ⅱ総資産									
流動資産	2,125,837,561	356,694,688	544,154,967	654,454,872	451,722,312	321,101,358	4,453,965,758	290,052,109	4,744,017,867
固定資産	90,036,926,682	37,648,147,080	30,942,150,893	26,528,989,976	6,740,130,659	5,948,928,992	197,845,274,282	61,061,099	197,906,335,381
建物	17,512,727,073	2,458,814,503	6,577,359,043	11,531,098,458	3,782,696,623	3,672,133,645	45,534,829,345	47,629,835	45,582,459,180
収蔵品	44,557,215,215	23,192,308,545	19,812,518,484	13,694,164,689	0	102,834,571	101,359,041,504	0	101,359,041,504
土地	26,832,788,000	9,071,896,900	3,875,010,204	458,980,000	2,650,000,000	1,522,000,000	44,410,675,104	0	44,410,675,104
その他の固定資産	1,134,196,394	2,925,127,132	677,263,162	844,746,829	307,434,036	651,960,776	6,540,728,329	13,431,264	6,554,159,593
総資産	92,162,764,243	38,004,841,768	31,486,305,860	27,183,444,848	7,191,852,971	6,270,030,350	202,299,240,040	351,113,208	202,650,353,248
Ⅲ損益外減価償却相当額及び引当外退職給付増加見積額									
損益外減価償却相当額	771,160,752	126,801,629	311,828,303	672,533,467	232,932,510	202,240,526	2,317,497,187	3,520,264	2,321,017,451
損益外除売却差額相当額	39,663,432	0	2,519,473	0	0	240,836	42,423,741	0	42,423,741
前中期目標期間繰越積立金取崩額	0	0	0	0	0	2,040,973	2,040,973	0	2,040,973
引当外賞与増加見積額	−2,425,877	−1,546,934	−387,728	−392,759	−2,883,295	1,078,633	−6,557,960	−174,404	−6,732,364
引当外退職給付増加見積額	−11,421,805	1,836,632	8,565,720	15,098,892	−29,615,350	18,201,865	2,665,954	9,614,331	12,280,285

（注）　1．事業の種類の区分方法及び事業の内容

（1）東京国立博物館
我が国を代表する博物館として、日本を中心にして広く東洋諸地域にわたる文化財について収集･保管･展示、調査研究、教育普及事業等を行っております。

（2）京都国立博物館
平安時代から江戸時代に至る京都文化を中心とした文化財について、収集･保管･展示、調査研究、教育普及事業等を行っております。

（3）奈良国立博物館
仏教美術を中心とした文化財について、収集･保管･展示、調査研究、教育普及事業等を行っております。

（4）九州国立博物館
日本とアジア諸国との文化交流を中心とした文化財について、収集･保管･展示、調査研究、教育普及事業等を行っております。
なお、事業の実施に当たっては、福岡県等と連携協力を行っております。

（5）東京文化財研究所
美術、伝統芸能並びに文化財の保存・修復に関する調査・研究等を行っております。

（6）奈良文化財研究所
遺跡、建造物、庭園等の不動産的文化財に関する調査・研究等を行っております。

2．事業費用のうち共通の項目に含めた配賦不能な金額は281,859,838円であり、全て本部事務局に係る費用であります。

3．事業収益のうち国又は地方公共団体による財源措置等は、運営費交付金収益、施設費収益、その他補助金収益であります。
なお、事業収益のうち共通の項目に含めた配賦不能な金額は381,903,759円であり、すべて本部事務局に係る収益であります。

4．総資産のうち共通の項目に含めた金額は351,113,208円であり、全て本部事務局に係る資産であります。

17. 主な資産、負債、費用及び収益の明細

(1)資産見返運営費交付金の明細　　(単位:円)

区　　分	金　　額
建　　物	1,271,571,584
構　　築　　物	59,145,605
機　　械　・　装　　置	3,386,546
車　両　運　搬　具	9,066,300
工　具　器　具　備　品	1,013,542,859
ソ　フ　ト　ウ　ェ　ア	71,079,582
差　入　敷　金　・　保　証　金	632,000
合　　計	2,428,424,476

平成22年度　決算報告書

（単位：円）

区　　分	予 算 額	決 算 額	差　額	備　考
収　入				
運営費交付金	8,192,326,000	8,192,326,000	0	
施設整備費補助金	3,992,206,000	5,093,564,709	1,101,358,709	（注記）1
文化芸術情報電子化推進費補助金	0	136,143,631	136,143,631	（注記）2
展示事業等収入	1,131,249,000	1,580,098,603	448,849,603	
受託収入	26,000,000	518,091,794	492,091,794	（注記）3
その他寄附金等	0	143,228,475	143,228,475	
計	13,341,781,000	15,663,453,212	2,321,672,212	
支　出				
運営事業費	9,323,575,000	11,010,096,504	−1,686,521,504	
管理経費	1,694,877,000	1,722,646,983	−27,769,983	
人件費	714,499,000	790,586,224	−76,087,224	
一般管理費	980,378,000	932,060,759	48,317,241	（注記）4
業務経費	7,628,698,000	9,287,449,521	−1,658,751,521	
人件費	2,450,122,000	2,371,746,315	78,375,685	
調査研究事業費	1,517,225,000	1,632,855,285	−115,630,285	（注記）5
情報公開事業費	154,445,000	126,915,252	27,529,748	
研修事業費	21,669,000	18,076,054	3,592,946	
国際研究協力事業費	302,687,000	226,942,392	75,744,608	
展示出版事業費	157,339,000	149,942,255	7,396,745	
展覧事業費	2,904,766,000	4,672,045,674	−1,767,279,674	（注記）6
教育普及事業費	120,445,000	88,926,294	31,518,706	
施設整備費	3,992,206,000	5,093,565,209	−1,101,359,209	（注記）1
文化芸術情報電子化推進費	0	142,318,315	−142,318,315	（注記）2
受託事業費	26,000,000	506,999,667	−480,999,667	（注記）3
計	13,341,781,000	16,752,979,695	−3,411,198,695	

（注記）

1. 施設整備費補助金及び施設整備費の差額は、主に前年度からの繰越により生じた差額であります。
2. 文化芸術情報電子化推進費補助金及び文化芸術情報電子化推進費の差額は、前年度からの繰越により生じた差額であります。
3. 受託収入及び受託事業費について、予算額と決算額の差異が多額になったのは、当初の受入見込みになかった受託発掘調査、受託調査研究の契約があったためであります。
4. 一般管理費の差額は、施設整備費による工事がしゅん工したことにより消費税が還付されたことによるものであります。
5. 調査研究事業費の差額は、当初の見込みになかった無形文化遺産保護パートナーシッププログラム等の受託事業契約があったためであります。
6. 展覧事業費の差額は、前年度からの繰越による陳列品購入費、展示棟の改修経費等が増加したものであります。

平成 22 年度　事業報告書（第4期）

目　　次

1. 国民の皆様へ

2. 基本情報
(1) 機構の概要
(2) 本社・支社等の住所
(3) 資本金の状況
(4) 役員の状況
(5) 常勤職員の状況

3. 簡潔に要約された財務諸表
①貸借対照表
②損益計算書
③キャッシュ・フロー計算書
④行政サービス実施コスト計算書
・用語解説

4. 財務情報
(1) 財務諸表の概況
① 資産、負債、経常費用、経常収益、当期総損益、キャッシュ・フローなどの主要な財務データの経年比較・分析
② セグメント総資産の経年比較・分析
③ セグメント事業損益の経年比較・分析
④ 積立金の申請、目的積立金の取崩内容
⑤ 行政サービス実施コスト計算書の経年比較・分析
(2) 施設等投資の状況（重要なもの）
① 当事業年度中に完成した主要施設等
② 当事業年度において継続中の主要施設等の新設・拡充
③ 当事業年度中に処分した主要施設等
(3) 予算・決算の概況
(4) 経費削減及び効率化目標との関係

5. 事業の説明
(1) 財源構造
(2) 財務データ及び業務実績報告書と関連付けた事業説明

独立行政法人国立文化財機構　平成 22 年度事業報告書

1.国民の皆様へ

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災で大きな被害を受けられました皆様に心よりお見舞い申し上げます。

私ども独立行政法人国立文化財機構（以下「機構」と略します。）では、東京国立博物館において建物の一部に被害を受けましたが、文化財の被害は免れることができました。現在、文化庁を補佐しつつ機構を挙げて東日本大震災における被災文化財の救援活動に取り組んでおります。

私ども機構は、平成 19 年 4 月に、独立行政法人国立博物館と独立行政法人文化財研究所の 2 法人が統合されて設立されました。国の文化財保護行政を総合的に支え、社会の要請に機動的・効果的に対応することを目的とし、歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と次代への継承、文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信及び文化財に関する調査・研究の推進等を任務としております。

平成 22 年度は、独立行政法人国立博物館と独立行政法人文化財研究所の 2 法人が設立されて 10 年目、第 2 期中期目標期間の最終年度の節目の年に当たりました。

業務面で、博物館では、いずれの展覧事業も入館者の満足度は高く、例年多数の入館者においでいただく奈良国立博物館の正倉院展は例年同様のにぎわいでしたが、他の特別展は、昨年度と比較すると、集客としては小粒のものが多く入館者は 340 万人に止まりました。一方、奈良文化財研究所では平城遷都 1300 年祭により入館者は 50 万人となりました。

財務面で、まず、施設設備について、京都国立博物館平常展示館建替等工事がおおむね順調に進展し、東京国立博物館東洋館耐震補強改修工事等及び奈良国立博物館西新館耐震補強改修工事等、同仏教美術資料研究センター耐震補強改修工事が計画どおり竣工しました。収蔵品もほぼ計画通りに取得しております。一方、損益では入館料収入が減少しましたが、一般管理費の削減などによりほぼ前年度並みの 143 百万円の当期総利益を確保しました。

私ども機構は、国の文化財保護行政の土台をしっかりと支えていくという大きな使命の下、引き続き、文化財の保存と活用、またそのための基礎研究と最先端の研究という四つの大きな柱を機能させ、さらなる活性化を推進してまいる所存です。国民の皆様におかれましては、私どもの事業及び運営へのご理解とご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

２.基本情報

(1) 機構の概要

① 法人の目的

独立行政法人国立文化財機構は、博物館を設置して有形文化財（文化財保護法（昭和二十五年法律第二百十四号）第二条第一項第一号に規定する有形文化財をいう。以下同じ。）を収集し、保管して公衆の観覧に供するとともに、文化財（同項に規定する文化財をいう。以下に同じ。）に関する調査及び研究等を行うことにより、貴重な国民的財産である文化財の保存及び活用を図ることを目的としております。（独立行政法人国立文化財機構法第三条）

② 業務内容

当機構は、独立行政法人国立文化財機構法第三条の目的を達成するため以下の業務を行います。

1）博物館を設置すること。
2）有形文化財を収集し、保管して公衆の観覧に供すること。
3）前号の業務に関連する講演会の開催、出版物の刊行その他の教育及び普及の事業を行うこと。
4）第一号の博物館を文化財の保存又は活用を目的とする事業の利用に供すること。
5）文化財に関する調査及び研究を行うこと。
6）前号に掲げる業務に係る成果を普及し、及びその活用を促進すること。
7）文化財に関する情報及び資料を収集し、整理し、及び提供すること。
8）第二号、第三号及び前三号の業務に関し、地方公共団体並びに博物館、文化財に関する調査及び研究を行う研究所その他これらに類する施設（次号において「地方公共団体等」という。）の職員に対する研修を行うこと。
9）第二号、第三号及び第五号から第七号までの業務に関し、地方公共団体等の求めに応じて援助及び助言を行うこと。
10）前各号の業務に附帯する業務を行うこと。

③ 沿革

平成 19 年 4 月　独立行政法人国立博物館と独立行政法人文化財研究所が統合し、独立行政法人国立文化財機構として設立

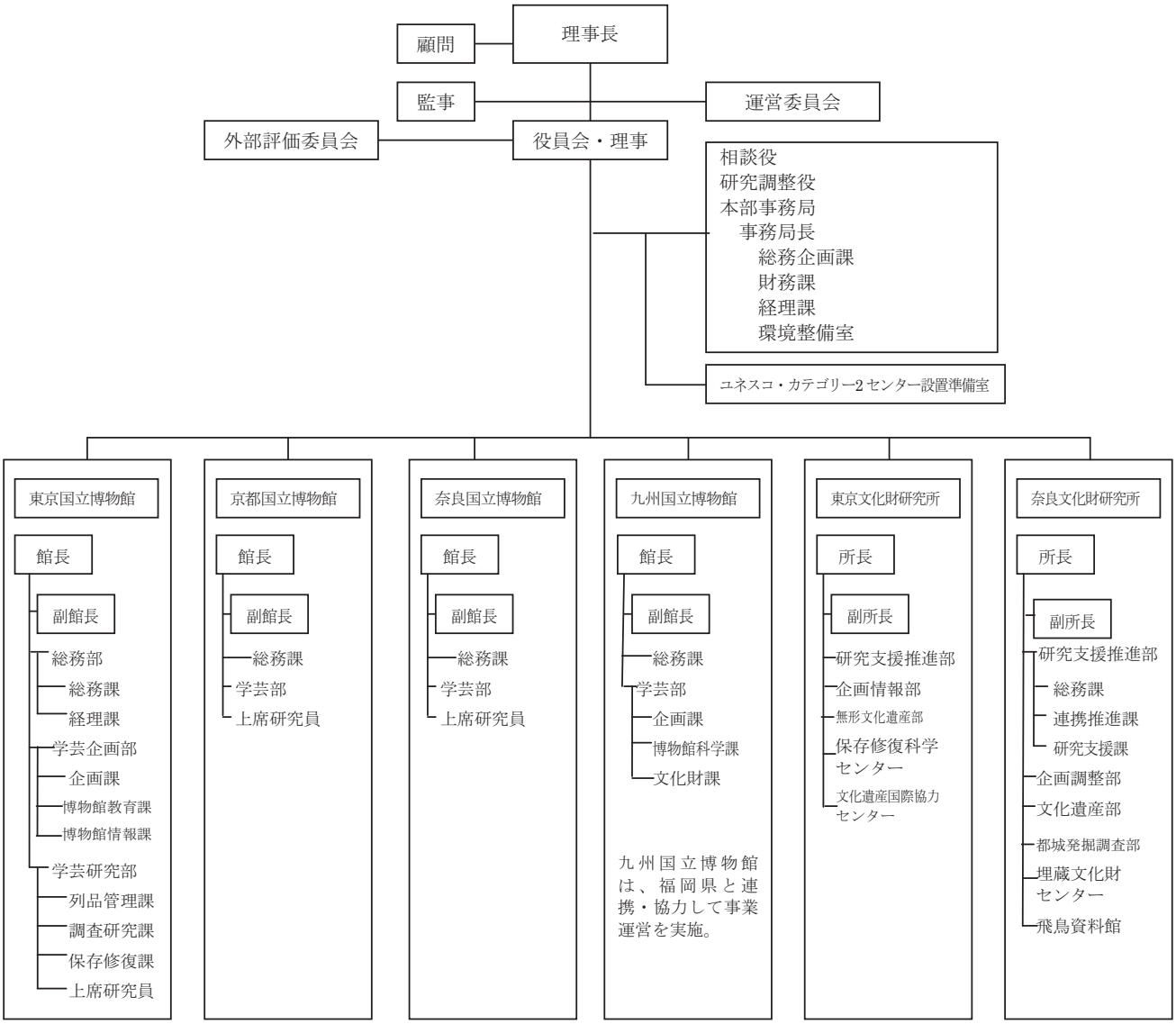
④ 設立根拠法

独立行政法人国立文化財機構法（平成 11 年法律第 178 号）

⑤ 主務大臣（主務省所管課等）

文部科学大臣（文化庁文化財部美術学芸課）

⑥ 組織図（平成 23 年 3 月 31 日現在）



(2) 本社・支社等の住所

本社：東京都台東区上野公園 13－9

支社：東京都台東区上野公園 13－9（東京国立博物館）

東京都台東区上野公園 13－43（東京文化財研究所）

京都府京都市東山区茶屋町 527（京都国立博物館）

奈良県奈良市登大路町 50（奈良国立博物館）

奈良県奈良市二条町 2－9－1（奈良文化財研究所）

福岡県太宰府市石坂 4－7－2（九州国立博物館）

東京都台東区上野公園 13－43（ユネスコ・カテゴリー2センター設置準備室）

(3) 資本金の状況

（単位：百万円）

区分	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高
政府出資金	104,714	0	0	104,714
資本金合計	104,714	0	0	104,714

(4) 役員の状況

役職	氏名	任期	担当	経歴
理事長	佐々木丞平	自 平成 19 年 4 月 1 日 至 平成 25 年 3 月 31 日		昭和 45 年 4 月　京都府教育委員会 昭和 47 年 4 月　文化庁入庁 昭和 56 年 4 月　京都大学 平成　3 年 3 月　京都大学文学部教授 平成 12 年 4 月　京都大学附属図書館長(併任) 平成 12 年 11 月　京都大学 大学文書館長 平成 17 年 3 月　退職 平成 17 年 4 月　(独)国立博物館理事（(兼)京都国立博物館長） 平成 19 年 3 月　退職（統合のため）
理　事	亀井伸雄	自 平成 22 年 4 月 1 日 至 平成 25 年 3 月 31 日		昭和 48 年 4 月　文化庁入庁 平成 13 年 1 月　文化庁文化財部建造物課長 平成 15 年 4 月　国立都城工業高等専門学校長 平成 17 年 4 月　文化庁文化財部文化財鑑査官 平成 20 年 3 月　退職 平成 20 年 7 月　(財)文化財建造物保存技術協会常務理事 平成 22 年 3 月　退職
理　事	田辺征夫	自 平成 21 年 4 月 1 日 至 平成 25 年 3 月 31 日		昭和 44 年 7 月　奈良国立文化財研究所 平成 15 年 4 月　(独)文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長 平成 17 年 3 月　退職 平成 17 年 4 月　(独)文化財研究所理事（(兼)奈良文化財研究所長） 平成 19 年 3 月　退職（統合による旧法人役員身分の消滅） 平成 19 年 4 月　(独)国立文化財機構奈良文化財研究所長 平成 21 年 3 月　退職
理　事	遠藤啓	自 平成 19 年 4 月 1 日 至 平成 25 年 3 月 31 日		昭和 50 年 4 月　文部省入省 平成 13 年 1 月　文化庁文化部長 平成 14 年 8 月　内閣府官房審議官（沖縄大学院大学担当） 平成 17 年 5 月　文部科学省　退職 平成 17 年 5 月　北海道大学理事・事務局長
監　事	雪山行二	自 平成 21 年 4 月 1 日 至 平成 23 年 3 月 31 日		昭和 51 年 4 月　国立西洋美術館 平成　4 年 9 月　国立西洋美術館学芸課長 平成 10 年 9 月　退職 平成 10 年 10 月　愛知県美術館副館長 平成 14 年 4 月　横浜美術館長 平成 21 年 4 月　和歌山県立近代美術館長　　現在に至る
監　事	服部彰	自 平成 22 年 4 月 1 日 至 平成 23 年 3 月 31 日		昭和 46 年 10 月　監査法人中央会計事務所 昭和 55 年 3 月　クーパースアンドライブランド・シドニー事務所 昭和 63 年 9 月　中央監査法人代表社員 平成　9 年 4 月　中央監査法人評議員 平成 12 年 4 月　中央青山監査法人代表社員・評議員 平成 18 年 9 月　みすず監査法人パートナー 平成 19 年 8 月　服部公認会計士事務所　　現在に至る

(5) 常勤職員の状況

常勤職員は平成 22 年度末で 344 人（前期末比、１名減少、0.29％減）、平均年齢は 43 歳（前期末 43 歳）です。このうち、国等からの出向者は 17 人、民間からの出向者は 0 人です。

3.簡潔に要約された財務諸表

①貸借対照表

平成 23 年 3 月 31 日　（単位：百万円）

資産の部	金　額	負債の部	金　額
流動資産		流動負債	
現金及び預金	3,581	未払金	3,635
有価証券	500	その他	251
未収金	637	流動負債合計	3,886
その他	26		
流動資産合計	4,744	固定負債	
		資産見返負債	5,396
固定資産		その他の固定負債	34
有形固定資産		固定負債合計	5,430
建物	45,582	負債合計	9,316
収蔵品	101,359	純資産の部	
土地	44,411	資本金	104,714
建設仮勘定	2,526	資本剰余金	87,316
その他	3,857	利益剰余金	1,304
無形固定資産	170	純資産合計	193,334
投資その他資産	1		
固定資産合計	197,906		
資産合計	202,650	負債純資産合計	202,650

②損益計算書

平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日　（単位：百万円）

	金　額
経常費用(A)	9,703
業務費	
人件費	2,948
業務経費	4,591
減価償却費	368
一般管理費	
人件費	856
一般管理経費	852
減価償却費	83
その他	5
経常収益(B)	9,844
運営費交付金収益	6,792
受託収入	586
入場料収入	892
資産見返負債戻入	517
その他	1,057
臨時損失(C)	－11
臨時利益(D)	11
前中期目標期間繰越積立金取崩額(E)	2
当期総利益(B－A＋C＋D＋E)	143

③キャッシュ・フロー計算書

平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日　　（単位：百万円）

	金　額
Ⅰ業務活動によるキャッシュ・フロー(A)	1,410
人件費支出	－3,730
運営費交付金収入	8,192
自己収入等	2,282
その他の支出	－5,525
その他収入	191
Ⅱ投資活動によるキャッシュ・フロー(B)	－1,981
Ⅲ財務活動によるキャッシュ・フロー(C)	－6
Ⅳ資金増加額（又は減少額）(D＝A＋B＋C)	－577
Ⅴ資金期首残高(E)	4,158
Ⅵ資金期末残高(F＝D＋E)	3,581

④行政サービス実施コスト計算書

平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日　　（単位：百万円）

	金　額
Ⅰ業務費用	7,527
損益計算書上の費用	9,715
（控除）自己収入等	－2,188
（その他の行政サービス実施コスト）	
Ⅱ損益外減価償却相当額	2,322
Ⅲ損益外除売却差額相当額	42
Ⅳ引当外賞与見積額	－7
Ⅴ引当外退職給付増加見積額	12
Ⅵ機会費用	2,431
Ⅶ行政サービス実施コスト	12,327

■ 用語解説

①貸借対照表

現金及び預金　　：現金、銀行預金及び普通貯金

有価証券　　：満期保有目的債券

その他（流動資産）　：たな卸資産、前払費用など

有形固定資産　　：土地、建物、機械装置、車両、工具、収蔵品など長期にわたって使用または利用する有形の固定資産

建設仮勘定　　：建設または製作途中の有形固定資産の建設または製作のため支出した金額及び充当した材料の相当額

無形固定資産　　：ソフトウエア、電話加入権など長期にわたって使用または利用する無形の固定資産

その他（固定資産）　：保証金及び長期前払費用

未払金　　：退職給付などの未払金で１年以内に支払期限が到来するもの

その他（流動負債）　：住民税納税のための給与控除に係る預り金など

資産見返負債　　：運営費交付金などにより取得した固定資産（償却資産）の取得額で未償却の相当額

その他（固定負債）　：リース長期未払金など

政府出資金　　：国から出資された土地、建物等の相当額

資本剰余金　　：運営費交付金、施設費、目的積立金、寄附金などで取得した建物、収蔵品の相当額
利益剰余金　　：剰余金の累計額

②損益計算書

業務費　　：業務の実施に要した費用
人件費　　：給与、賞与、法定福利費等、職員等に要した経費
減価償却費　　：業務に要する固定資産の取得原価をその耐用年数にわたって費用として配分する経費
運営費交付金収益等：運営費交付金、補助金等のうち、当期の収益として認識した相当額
資産見返負債戻入　：固定資産の償却時に、当該資産に係る資産見返勘定を戻入したことによる収益
臨時損失　　：固定資産除却損
臨時利益　　：運営費交付金及び寄附による工具・器具・備品の除却により資産見返運営費交付金等を戻入したことによる利益
前中期目標期間繰越積立金取崩額　：前中期目標期間に受託研究費で取得した研究機器に係る減価償却費等の相当額

③キャッシュ・フロー計算書

業務活動によるキャッシュ・フロー：通常業務の実施に係る資金の状態。サービス提供等による収入、原材料、商品又はサービス購入による支出、人件費支出等
投資活動によるキャッシュ・フロー：将来に向けた運営基盤の確立のために行われる投資活動に係る資金の状態で、固定資産の取得・売却等による収入・支出
財務活動によるキャッシュ・フロー：増資等による資金の収入・支出、債券の発行・償還及び借入れ・返済による収入・支出等、資金の調達及び返済等

④行政サービス実施コスト計算書

業務費用　　：損益計算書における一切の費用から運営費交付金、施設整備費補助金等の国からの措置に基づく収益を控除した相当額
損益外減価償却相当額　：建物などで減価に対応すべき収益の獲得が予定されないとされた資産の減価償却費相当額（損益計算書には反映されていないが、減価償却累計額は貸借対照表に反映）
損益外除売却差額相当額：上記のような建物などを除売却した場合の損益計算書には反映されない除売却損相当額
引当外賞与見積額・引当外退職給付増加見積額　：財源措置が運営費交付金により行われる場合の賞与引当金増加見積額・退職給付引当金増加見積額（損益計算書には反映されていないが、貸借対照表に注記）
機会費用　　：政府から出資された土地・建物等の出資額及び政府から譲与を受け資本剰余金となっている収蔵品等の相当額を市場で運用すると仮定した場合に得られたと考えられる運用益相当額

４．財務情報

(1) 財務諸表の概況

①資産、負債、経常費用、経常収益、当期総損益、キャッシュ･フローなどの主要な財務データの経年比較・分析

主要な財務データの経年比較（国立文化財機構）　（単位：百万円）

区　　分	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
資産	－	194,047	195,434	197,977	202,650
負債	－	5,395	7,377	9,621	9,316
利益剰余金（又は繰越欠損金）	－	719	1,019	1,163	1,304
経常費用	－	9,096	9,450	9,700	9,703
経常収益	－	9,518	9,771	9,847	9,844
当期総利益	－	414	304	148	143
業務活動によるキャッシュ・フロー	－	2,612	2,444	2,860	1,410
投資活動によるキャッシュ･フロー	－	－2,572	－1,575	－2,025	－1,981
財務活動によるキャッシュ・フロー	－	－20	－16	－20	－6
資金期末残高	－	2,490	3,343	4,158	3,581

＜参考情報＞主要な財務データの経年比較（国立博物館）　（単位：百万円）

区　　分	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
資産	175,633	－	－	－	－
負債	4,762	－	－	－	－
利益剰余金（又は繰越欠損金）	290	－	－	－	－
経常費用	5,390	－	－	－	－
経常収益	5,780	－	－	－	－
当期総利益	287	－	－	－	－
業務活動によるキャッシュ・フロー	2,642	－	－	－	－
投資活動によるキャッシュ・フロー	0	－	－	－	－
財務活動によるキャッシュ・フロー	－13	－	－	－	－
資金期末残高	2,076	－	－	－	－

＜参考情報＞主要な財務データの経年比較（文化財研究所）　（単位：百万円）

区　　分	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
資産	18,806	－	－	－	－
負債	1,345	－	－	－	－
利益剰余金（又は繰越欠損金）	54	－	－	－	－
経常費用	3,655	－	－	－	－
経常収益	3,712	－	－	－	－
当期総利益	50	－	－	－	－
業務活動によるキャッシュ・フロー	－92	－	－	－	－
投資活動によるキャッシュ･フロー	0	－	－	－	－
財務活動によるキャッシュ・フロー	－5	－	－	－	－
資金期末残高	394	－	－	－	－

（資産）

平成22年度末現在の資産合計は202,650百万円と、前年度末比4,673百万円(2.4%)増加しました。これは、東京・奈良国立博物館の耐震補強改修工事等が竣工し建物が同3,439百万円（8.2%）増加し、また、京都国立博物館平常展示館建替工事も順調に進行していること、並びに各博物館における収蔵品が同1,838百万円（1.8%）増加したことが主な要因です。

（負債）

平成 22 年度末現在の負債合計は 9,316 百万円と、前年度末比 305 百万円（3.2%）減少しました。これは、運営費交付金債務が第 2 期中期目標期間最終年度であることから 0 百万円と同 1,197 百万円（100%）減少した一方で、未払金が 3,635 百万円と同 1,187 百万円（48.5%）増加したことが主な要因です。

（経常費用）

平成 22 年度の経常費用は 9,703 百万円と、前年度末比 3 百万円（0.03%）増加しました。これは、建物の耐震改修工事に併せて各所の修繕等を実施したことにより業務経費が同 210 百万円（4.8%）増加した一方で、一般管理経費が 852 百万円と同 191 百万円（18.3%）及び人件費合計が 3,804 百万円と同 39 百万円（1.0%）減少したことが主な要因です。

（経常収益）

平成 22 年度の経常収益は 9,844 百万円と、前年度末比 3 百万円（0.03%）減少しました。これは、運営費交付金収益が同 428 百万円（6.7%）増加した一方で、入場料収入が 892 百万円と同 430 百万円（32.5%）減少したことが主な要因です。

（当期総利益）

以上による経常利益 141 百万円に加え、奈良国立博物館の耐震補強改修工事に伴う建物附属設備除却損等 11 百万円を臨時損失に計上する一方で、同工事に伴う資産見返運営費交付金戻入などを臨時利益に 11 百万円計上したため、前中期目標期間繰越積立金取崩 2 百万円とあわせ、平成 22 年度の当期総利益は 143 百万円と、前年度末比 5 百万円（3.4%）減少しました。

（業務活動によるキャッシュ・フロー）

平成 22 年度の業務活動によるキャッシュ・フローでは、収入超過が 1,410 百万円と前年度末比 1,450 百万円（50.7%）減少しました。これは、自己収入等が 2,282 百万円と同 628 百万円（21.6%）及び前年度限りの経費であるその他収入（文化芸術情報電子化推進費補助金等）が 191 百万円と同 426 百万円（69.0%）減少したことが主な要因です。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

平成 22 年度の投資活動によるキャッシュ・フローでは、支出超過が 1,981 百万円と前年度末比 44 百万円（2.2%）減少しました。これは、施設整備費補助金による収入超過が 5,102 百万円と前年度末比 2,782 百万円（119.9%）、及び有形固定資産の取得による支出超過が 6,478 百万円と同 2,207 百万円（51.7%）増加した一方で、有価証券の取得による支出超過が新規に 500 百万円あったことが主な要因です。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

平成 22 年度の財務活動によるキャッシュ･フローでは､支出超過が 6 百万円と、支出超過が前年度末比 14 百万円（70.0%）減少しました。これは、当該区分はすべてリース債務の支払であるところ、当該支払が同額減少したためです。

② セグメント総資産の経年比較・分析

セグメント総資産の経年比較　（単位：百万円）

国立文化財機構	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	－	88,121	88,113	89,823	92,163
京都国立博物館	－	34,931	36,544	36,385	38,005
奈良国立博物館	－	29,751	29,691	29,955	31,486
九州国立博物館	－	26,357	26,752	26,677	27,183
東京文化財研究所	－	7,624	7,284	7,080	7,192
奈良文化財研究所	－	6,880	6,659	6,595	6,270
共通	－	383	391	1,462	351
合　　計	－	194,047	195,434	197,977	202,650

＜参考情報＞セグメント総資産の経年比較　（単位：百万円）

国立博物館	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	84,496	－	－	－	－
京都国立博物館	34,623	－	－	－	－
奈良国立博物館	29,915	－	－	－	－
九州国立博物館	26,430	－	－	－	－
共通	169	－	－	－	－
合　　計	175,633	－	－	－	－

＜参考情報＞セグメント総資産の経年比較　（単位：百万円）

文化財研究所	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京文化財研究所	11,445	－	－	－	－
奈良文化財研究所	7,235	－	－	－	－
共通	126	－	－	－	－
合　　計	18,806	－	－	－	－

総資産は 202,650 百万円と、前年度末比で 4,673 百万円（2.4%）増加しました。

施設毎に分析しますと、東京国立博物館においては 92,163 百万円と、同 2,340 百万円（2.6%）増加しました。これは、東洋館耐震補強改修工事等の竣工による建物・建物附属設備･構築物が 3,800 百万円増加し建設仮勘定が 1,336 百万円減少したほか、現金・預金が 61 百万円減少した一方で、有価証券が 500 百万円及び陳列品が 172 百万円増加、また、減価償却費 886 百万円を計上したことが主な要因です。

京都国立博物館においては 38,005 百万円と、同 1,620 百万円（4.5%）増加しました。これは、管理棟耐震補強改修工事等による建物・建物附属設備・構築物が 35 百万円増加、平常展示館建替工事の建設仮勘定が 1,297 百万円増加、陳列品が 400 百万円増加した一方で、減価償却費 139 百万円を計上したことが主な要因です。

奈良国立博物館においては 31,486 百万円と、同 1,531 百万円（5.1%）増加しました。これは、西新館耐震補強改修工事及び西新館免震展示ケース設置工事並びに仏教美術資料研究センター耐震補強改修工事の竣工による建物・建物附属設備・構築物が 1,737 百万円増加し建設仮勘定が 521 百万円減少したほか、現金・預金が 350 百万円、陳列品が 141 百万円及び工具・器具・備品が 149 百万円増加、また、減価償却費 365 百万円を計上したことが主な要因です。

九州国立博物館においては 27,183 百万円と、同 506 百万円（1.9%）増加しました。これは、現金・預金が 187 百万円及び陳列品が 1,123 百万円増加した一方で、減価償

却費 876 百万円を計上したことが主な要因です。

東京文化財研究所においては 7,192 百万円と、同 112 百万円（1.6%）増加しました。これは、現金・預金が 232 百万円及び研究機器の取得による工具・器具・備品が 142 百万円増加した一方で、減価償却費 253 百万円を計上したことが主な要因です。

奈良文化財研究所においては 6,270 百万円と、325 百万円（4.9%）減少しました。これは、現金・預金が 96 百万円減少し、また、減価償却費 246 百万円を計上したことが主な要因です。

③ セグメント事業損益の経年比較・分析

セグメント事業損益の経年比較　（単位：百万円）

国立文化財機構	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	－	293	190	－70	29
京都国立博物館	－	21	13	35	0
奈良国立博物館	－	41	76	38	0
九州国立博物館	－	40	11	75	－7
東京文化財研究所	－	20	11	18	23
奈良文化財研究所	－	6	18	47	－4
共通	－	1	2	4	100
合　　計	－	422	321	147	141

＜参考情報＞セグメント事業損益の経年比較　（単位：百万円）

国立博物館	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	124	－	－	－	－
京都国立博物館	36	－	－	－	－
奈良国立博物館	97	－	－	－	－
九州国立博物館	128	－	－	－	－
共通	2	－	－	－	－
合　　計	387	－	－	－	－

＜参考情報＞セグメント事業損益の経年比較　（単位：百万円）

文化財研究所	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京文化財研究所	12	－	－	－	－
奈良文化財研究所	11	－	－	－	－
共通	35	－	－	－	－
合　　計	58	－	－	－	－

事業損益は 141 百万円と、対前年度末比 6 百万円（4.1%）減少しました。この要因を施設毎に分析しますと、東京国立博物館においては 29 百万円の利益と、同 99 百万円（141.4%）増加しました。これは、事業収益が 2,831 百万円と、同 9 百万円（0.3%）減少し、事業費用が 2,802 百万円と、同 109 百万円（3.7%）減少したことの差し引きによります。事業収益は、入場料収入が同 393 百万円（59.4%）減少し、繰越による運営費交付金収益が同 393 百万円（26.6%）増加したことによりほぼ同額となり、事業費用は、いずれも退職手当の増減により業務人件費が同 163 百万円（15.4%）減少し、一般管理人件費が同 55 百万円（35.9%）増加したことが主な要因です。

京都国立博物館においては損益 0 百万円となり、同 35 百万円（100.0%）減少しました。これは、事業収益が 872 百万円と、同 26 百万円（2.9%）減少し、事業費用が 873 百万円と、同 10 百万円（1.2%）増加したことの差し引きによります。事業収益は、繰越による運営費交付金収益が同 81 百万円（15.0%）増加し、その他補助金収益が同 49 百万円（100.0%）減少したこと、事業費用は、展覧業務費が同 40 百万円（22.9%）増加したことが主な要因です。

奈良国立博物館においては損益 0 百万円となり、同 38 百万円（100.0%）減少しました。これは、事業収益が 1,109 百万円と、同 10 百万円（0.9%）増加し、事業費用が 1,109 百万円と、同 48 百万円（4.5%）増加したことの差し引きによります。事業収益は、運営費交付金収益が同 185 百万円（31.4%）減少し、入場料収入が同 89 百万円（33.3%）、寄附金収益が同 38 百万円（65.5%）及び資産見返負債戻入が同 39 百万円（92.9%）増加したこと、事業費用は、建物の耐震補強改修工事に併せて各所の修繕等を実施したことにより業務経費が同 74 百万円（12.8%）増加したことが主な要因です。

九州国立博物館においては 7 百万円の損失と、同 82 百万円（109.3%）減少しました。これは、事業収益が 1,347 百万円と、同 124 百万円（8.4%）減少し、事業費用が 1,354 百万円と、同 42 百万円（3.0%）減少したことの差し引きによります。事業収益は、入場料収入が同 131 百万円（49.8%）減少したこと、事業費用は、業務経費減価償却費が同 38 百万円（17.2%）減少したことが主な要因です。

東京文化財研究所においては 23 百万円の利益と、同 5 百万円（27.8%）増加しました。これは、事業収益が 1,325 百万円と、同 68 百万円（5.4%）増加し、事業費用が 1,301 百万円と、同 62 百万円（5.0%）増加したことの差し引きによります。事業収益は、運営費交付金収益が同 55 百万円（5.7%）増加したこと、事業費用は、業務人件費が退職手当の増により同 40 百万円（9.2%）増加、調査研究業務費が同 15 百万円（21.1%）増加したことが主な要因です。

奈良文化財研究所においては 4 百万円の損失と、同 52 百万円（108.3%）減少しました。これは、事業収益が 1,978 百万円と、同 17 百万円（0.9%）減少し、事業費用が 1,982 百万円と、同 35 百万円（1.8%）増加したことの差し引きによります。事業収益は、運営費交付金収益が同 23 百万円（1.4%）及び入場料収入が同 23 百万円（127.8%）増加し、前年度限りの施設費収益が同 66 百万円（100.0%）減少したこと、事業費用は、調査研究業務費が同 47 百万円（13.7%）増加したことが主な要因です。

共通は、機構本部事務局の損益で、受託収入同 26 百万円、消費税還付金同 69 百万円が新規に増加したことが主な要因です。

④積立金の申請、目的積立金の取崩内容

本年度は中期目標期間終了年度であるため、当期未処分利益 143 百万円は積立金として整理し、利益剰余金については、前中期目標期間繰越積立金相当額を控除した額を国庫納付する予定です。

目的積立金取崩は、前中期目標期間において自己収入により取得した償却資産に関する減価償却費相当額などについて前中期目標期間繰越積立金取崩を 2 百万円計上しております。

⑤ 行政サービス実施コスト計算書の経年比較・分析

行政サービス実施コストの経年比較 （単位：百万円）

国立文化財機構	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
業務費用	－	7,013	7,165	7,558	7,527
損益計算書上の費用	－	9,109	9,471	10,049	9,715
（控除）自己収等	－	－2,096	－2,306	－2,491	－2,188
損益外減価償却相当額	－	2,545	2,507	2,296	2,322
損益外減損損失相当額	－	102	0	0	0
損益外除売却差額相当額	－	7	301	0	42
引当外賞与見積額	－	5	－21	－9	－7
引当外退職給付増加見積額	－	－42	－173	－69	12
機会費用	－	2,430	2,554	2,652	2,431
（控除）法人税等及び国庫納付金	－	0	0	0	0
行政サービス実施コスト	－	12,060	12,333	12,428	12,327

＜参考情報＞行政サービス実施コストの経年比較 （単位：百万円）

国立博物館	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
業務費用	3,973	－	－	－	－
損益計算書上の費用	5,492	－	－	－	－
（控除）自己収入等	－1,519	－	－	－	－
損益外減価償却相当額	1,881	－	－	－	－
損益外減損損失相当額	2	－	－	－	－
損益外固定資産除売却相当額	18	－	－	－	－
引当外賞与見積額	0	－	－	－	－
引当外退職給付増加見積額	112	－	－	－	－
機会費用	2,694	－	－	－	－
（控除）法人税等及び国庫納付金	0	－	－	－	－
行政サービス実施コスト	8,680	－	－	－	－

＜参考情報＞行政サービス実施コストの経年比較 （単位：百万円）

文化財研究所	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
業務費用	2,930	－	－	－	－
損益計算書上の費用	3,662	－	－	－	－
（控除）自己収入等	－732	－	－	－	－
損益外減価償却相当額	424	－	－	－	－
損益外減損損失相当額	2	－	－	－	－
損益外固定資産除売却相当額	0	－	－	－	－
引当外賞与見積額	0	－	－	－	－
引当外退職給付増加見積額	36	－	－	－	－
機会費用	420	－	－	－	－
（控除）法人税等及び国庫納付金	0	－	－	－	－
行政サービス実施コスト	3,812	－	－	－	－

平成 22 年度の行政サービス実施コストは 12,327 百万円と、前年度比 101 百万円（0.8%）減少となっています。これは、業務費用が 31 百万円（0.4%）及び機会費用が同 221 百万円（8.3%）減少した一方で、引当外退職給付増加見積額が 81 百万円（117.4%）増加したことが主な要因です。

(2)施設等投資の状況（重要なもの）

①当事業年度中に完成した主要施設等

＜東京国立博物館＞

東洋館耐震補強改修工事

東洋館設備改修等工事

＜奈良国立博物館＞

西新館耐震補強改修工事

西新館免震展示ケース設置工事

仏教美術資料研究センター耐震補強改修工事

②当事業年度において継続中の主要施設等の新設・拡充

＜京都国立博物館＞

平常展示館建替工事

③当事業年度中に処分した主要施設等

該当なし

(3) 予算・決算の概況

国立文化財機構　　(単位：百万円)

区　分	18年度		19年度		20年度		21年度		22年度		
	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算	差額理由
《収入》 運営費交付金	-	-	9,042	9,042	8,771	8,771	8,367	8,367	8,192	8,192	
施設整備費補助金	-	-	711	148	1,698	1,872	3,674	2,331	3,992	5,094	前年度よりの繰越
文化芸術情報電子化推進費補助金	-	-	-	-	-	-	700	548	0	136	前年度よりの繰越
展示事業等収入	-	-	1,098	1,558	1,109	1,786	1,120	1,898	1,132	1,580	特別展入場者の増加等
その他寄附金等	-	-	0	148	0	127	0	139	0	143	
受託収入	-	-	26	527	26	514	26	525	26	518	当初見込外契約の増加
合　計	-	-	10,877	11,423	11,604	13,070	13,887	13,808	13,342	15,663	
《支出》 運営事業費	-	-	10,140	10,341	9,880	9,779	9,487	10,454	9,324	11,010	
・人件費	-	-	3,560	3,483	3,635	3,507	3,330	3,244	3,165	3,162	
・業務経費	-	-	6,580	6,858	6,245	6,272	6,157	7,210	6,159	7,848	
（一般管理費）	-	-	1,754	1,191	1,087	1,173	1,020	1,066	980	932	消費税の減少
（展覧事業費）	-	-	2,591	3,780	2,951	3,079	2,940	4,050	2,905	4,672	前年度よりの繰越
（調査研究事業費）	-	-	1,449	1,261	1,445	1,448	1,438	1,473	1,517	1,633	当初見込外契約の増加
（教育普及事業費）	-	-	125	70	121	63	121	74	120	89	
（国際研究協力事業費）	-	-	314	249	305	229	304	223	303	227	
（情報公開事業費）	-	-	161	166	156	146	155	144	155	127	
（研修事業費）	-	-	23	22	22	22	22	17	22	18	
（展示出版事業費）	-	-	163	119	158	112	158	163	157	150	
受託事業費	-	-	26	486	26	503	26	492	26	507	当初見込外契約の増加
施設整備費	-	-	711	148	1,698	2,106	3,674	2,212	3,992	5,094	前年度よりの繰越

文化芸術情報電子化推進費補助金	-	-	-	-	-	-	700	542	0	142	前年度よりの繰越
合　　計	-	-	10,877	10,975	11,604	12,388	13,887	13,700	13,342	16,753	

＜参考情報＞
国立博物館

（単位：百万円）

区　　分	18 年度		19 年度		20 年度		21 年度		22 年度		
	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算	差額理由
《収入》											
運営費交付金	6,103	6,103	-	-	-	-	-	-	-	-	
施設整備費補助金	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	
展示事業収入	1,045	1,478	-	-	-	-	-	-	-	-	
その他寄附金等	0	51	-	-	-	-	-	-	-	-	
その他収入	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	
合　　計	7,148	7,632	-	-	-	-	-	-	-	-	
《支出》											
運営事業費	7,148	6,863	-	-	-	-	-	-	-	-	
・人件費	2,367	2,083	-	-	-	-	-	-	-	-	
・業務経費	4,781	4,780	-	-	-	-	-	-	-	-	
（一般管理費）	830	860	-	-	-	-	-	-	-	-	
（展覧事業費）	3,143	2,984	-	-	-	-	-	-	-	-	
（調査研究事業費）	692	868	-	-	-	-	-	-	-	-	
（教育普及事業費）	116	68	-	-	-	-	-	-	-	-	
（九州国立博物館（仮称）設立等準備事業費）	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	
施設整備費	0	518	-	-	-	-	-	-	-	-	
合　　計	7,148	7,381	-	-	-	-	-	-	-	-	

＜参考情報＞
文化財研究所

（単位：百万円）

区　　分	18 年度		19 年度		20 年度		21 年度		22 年度		
	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算	差額理由
《収入》											
運営交付金	2,985	2,985	-	-	-	-	-	-	-	-	
展示事業等収入	42	63	-	-	-	-	-	-	-	-	
受託収入	26	627	-	-	-	-	-	-	-	-	
附帯収入	0	10	-	-	-	-	-	-	-	-	
その他寄附金等	0	8	-	-	-	-	-	-	-	-	
固定資産売却益	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	
合　　計	3,053	3,693	-	-	-	-	-	-	-	-	
《支出》											
運営事業費	3,027	3,024	-	-	-	-	-	-	-	-	
・人件費	1,320	1,301	-	-	-	-	-	-	-	-	
・調査研究事業費	583	623	-	-	-	-	-	-	-	-	
・展示出版事業費	165	140	-	-	-	-	-	-	-	-	
・情報公開事業費	162	187	-	-	-	-	-	-	-	-	
・研修事業費	23	24	-	-	-	-	-	-	-	-	
・国際研究協力事業費	317	286	-	-	-	-	-	-	-	-	

・平城宮跡公開活用支援事業費	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	
・管理費	457	463	-	-	-	-	-	-	-	-	
施設整備費	0	516	-	-	-	-	-	-	-	-	
受託事業費	26	590	-	-	-	-	-	-	-	-	
附帯業務費	0	6	-	-	-	-	-	-	-	-	
その他寄附金	0	8	-	-	-	-	-	-	-	-	
合　　計	3,053	4,144	-	-	-	-	-	-	-	-	

(4)経費削減及び効率化目標との関係

国立文化財機構
（一般管理費全体で削減目標を定めているため区分は「一般管理費」のみ）

（単位：百万円）

区　分	前中期目標期間終了年度		当中期目標期間									
	金額	比率	平成 18 年度		平成 19 年度		平成 20 年度		平成 21 年度		平成 22 年度	
			金額	金額	比率	金額	金額	比率	金額	比率	金額	比率
一般管理費	1,455	100%	-	-	1,191	81.9%	1,173	80.6%	1,066	73.3%	932	64.1%

※比率は対前中期目標終了年度

＜参考情報＞
国立博物館
（一般管理費全体で削減目標を定めているため区分は「一般管理費」のみ）

（単位：百万円）

区　分	前中期目標期間終了年度		当中期目標期間									
	金額	比率	平成 18 年度		平成 19 年度		平成 20 年度		平成 21 年度		平成 22 年度	
			金額	比率	金額	比率	金額	金額	金額	比率	金額	比率
一般管理費	1,001	100%	860	85.9%	-	-	-	-	-	-	-	-

※比率は対前中期目標終了年度

＜参考情報＞
文化財研究所
（一般管理費全体で削減目標を定めているため区分は「一般管理費」のみ）

（単位：百万円）

区　分	前中期目標期間終了年度		当中期目標期間									
	金額	比率	平成 18 年度		平成 19 年度		平成 20 年度		平成 21 年度		平成 22 年度	
			金額	比率	金額	比率	金額	比率	金額	比率	金額	比率
一般管理費	454	100%	463	102.0%	-	-	-	-	-	-	-	-

※比率は対前中期目標終了年度

機構は、当中期目標期間終了年度における一般管理費を、前中期目標期間の最終年度に比べて、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き 5 年期間中で一般管理費 15%以上の削減を目標としております。

この目標を達成するため、具体的には下記の措置を講じます。

①共通的な事務の一元化による業務の効率化

②使用資源の減少
・省エネルギー（5 年期間中 1 年に 1.03%の減少）
・廃棄物減量化（一般廃棄物排出量を 5 年期間中 5%減少）
・リサイクルの推進（古紙の回収、ディスプレイ材料の再利用徹底等）
③施設有効使用の推進
・施設の利用推進
④民間委託の推進
・一般管理部門を含めた組織・業務の見直しを行い、民間開放をさらに積極的に進めます。
・各施設の警備・清掃業務について民間委託を推進します。
・来館者サービスを中心に業務の見直しを行い、民間委託を積極的に進めます。
⑤競争入札の推進
・契約業者の競合を一層推進することにより、経費の効率化を図ります。
・包括契約、近隣他機関や法人内同一地域での共同購入及び複数年契約への変更等により、経費の効率化を図ります。

５． 事業の説明

(1) 財源構造

当機構の経常収益は 9,844 百万円で、その内訳は、運営費交付金収益 6,792 百万円（69.0%）、受託収入 586 百万円（6.0%）、入場料収入 892 百万円（9.1%）、展示事業等附帯収入 383 百万円（3.9%）、財産利用収入 154 百万円（1.6%）、寄附金収益 122 百万円（1.2%）、施設費収益 216 百万円（2.2%）、その他補助金収益 98 百万円（1.0%）、資産見返負債戻入 517 百万円（5.3%）等です。

(2) 財務データ及び業務実績報告書と関連付けた事業説明

ア 調査研究事業

調査研究事業は、文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究を通して、国内の機関との共同研究や研究交流を深め、種々の課題に取り組むことにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与すること、及び文化財の調査手法に関する研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与することを目的としています。

事業に要した費用は 1,192 百万円です。その財源は、運営費交付金 826 百万円及び自己収入 366 百万円です。

イ 情報公開事業

情報公開事業は、調査・研究に基づく資料の作成及び文化財に関連する資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査・研究成果を積極的に公表・公開し、研究者や広く一般の方が調査・研究成果を容易に入手できるようにすることを目的としています。

事業に要した費用は 121 百万円です。その財源は、運営費交付金 119 百万円及び自己収入 2 百万円です。

ウ 研修事業

研修事業は、文化財に関する高度な研究成果をもとに、地方公共団体等で中核となる文化財担当者に埋蔵文化財に関する研修、及び保存科学に関する保存担当学芸員研修等を行うことにより、文化財保護に必要な人材を養成することを目的としています。

事業に要した費用は 17 百万円です。その財源は、運営費交付金のみです。

エ　国際研究協力事業

国際研究協力事業は、文化財の保存・修復に関する国際研究協力に関する事業を有機的・総合的に展開することにより、人類共通の財産である文化財の保存・修復に関する国際研究協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与することを目的としています。

事業に要した費用は 225 百万円です。その財源は、運営費交付金 220 百万円及び自己収入 5 百万円です。

オ　展示出版事業

展示出版事業は、文化財に関する調査・研究に基づく成果について刊行物を発行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供すること、及び研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことを目的としています。

事業に要した費用は 144 百万円です。その財源は、運営費交付金 117 百万円及び自己収入 27 百万円です。

カ　展覧事業

展覧事業は、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解の促進に寄与する展示を実施すること、及び国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行うことを目的としています。

事業に要した費用は 1,086 百万円です。その財源は、運営費交付金 532 百万円及び自己収入 554 百万円です。

キ　教育普及事業

教育普及事業は、日本の歴史・伝統文化及び東洋文化への理解促進を図るための中心的拠点として相応しい事業を重点的に行うこと、及び教育普及活動の充実に寄与するようボランティア活動を支援し、ボランティアの資質向上に努めることを目的としています。

事業に要した費用は 87 百万円です。その財源は、運営費交付金 75 百万円及び自己収入 12 百万円です。

ク 受託事業

受託事業は、高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施することを目的としています。

事業に要した費用は 505 百万円です。その財源は、受託収入のみです。

以上

Ⅴ　第２期中期目標期間事業報告書

目　　次

Ⅰ.中期目標の期間

Ⅱ.国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項

1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

4　文化財に関する調査及び研究の推進

5　文化財の保存・修復を通じた我が国の国際貢献への寄与

6　情報発信機能の強化

7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

Ⅲ.業務運営の効率化に関する事項

Ⅳ.財務内容の改善に関する事項

Ⅴ.その他業務運営に関する重要事項

Ⅰ　中期目標の期間

平成１８年４月１日から平成２３年３月３１日

Ⅱ　国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項

１　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

中期目標

（１）国の文化財保護政策との整合性、一体性を保ちつつ機構の設置する博物館各館の役割・任務に沿って収集方針を定め、これに基づき、計画的かつ適時適切な購入と寄贈・寄託の受入れを進め、体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の充実を図ること。

（２）収蔵品全体を常時、適切な保存及び管理環境下に置くこと。特に、施設の老朽化、耐震対策に計画的かつ速やかに取り組み、貴重な文化財を次代へ継承すること。

（３）収蔵品の保存技術の向上に努め、貴重な文化財を次代へ継承すること。

中期計画

１　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

（１）－１　体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。

（東京国立博物館）

日本を中心にして広く東洋諸地域にわたる美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

（京都国立博物館）

京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

（奈良国立博物館）

仏教美術を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

（九州国立博物館）

日本とアジア諸国との文化交流を中心とした美術、考古資料歴史資料等を収集する。

（１）－２　収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。

（２）国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。

（３）修理、保存処理を要する収蔵品等については、機構の保存科学・修復技術担当者が連携し、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を取り入れ、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。

実績

１．収蔵品の収集

収蔵品は開館から５年経過した九州国立博物館を含め順調に増加している。寄託品については奈良国立博物館で社寺等への一括返還の影響で目標を下回った年もあるが、他の博物館では各年度それぞれの目標を達成しており、購入・寄託により、コレクションの体系的・通史的バランスをより良いものにすることができた。

【収蔵品件数推移】（件）

収蔵品件数	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度	第１期比増
東京国立博物館	111,588	112,439	112,529	112,776	113,258	1,699
京都国立博物館	6,320	6,386	6,417	6,526	6,584	324
奈良国立博物館	1,790	1,794	1,805	1,812	1,827	91
九州国立博物館	281	333	370	397	433	160
合計	119,979	120,952	121,121	121,511	122,102	2,274

【寄託品件数】（件）

	１８年度	１９年度	２０年度	２１年度	２２年度
東京国立博物館	2,773	2,743	2,750	2,734	2,726
京都国立博物館	6,179	6,154	6,145	5,957	6,005
奈良国立博物館	1,957	2,057	2,067	1,957	1,947
九州国立博物館	1,506	1,091	1,105	1,256	1,297

２．収蔵品の管理、保存

京都国立博物館の平常展示館の建替工事を始め、各博物館の改修工事については概ね順調に進行し、老朽化・耐震対策は進んでいるが、3 月の震災の影響により東京国立博物博の東洋館が展示ケース取設けに遅れが生じている。

定量的な目標を定めている保存カルテの作成件数については、全ての博物館で目標を上回っている。各博物館ではＩＰＭ（総合的有害生物管理）活動の実践として防虫対策に取り組み、展示室内の万全の体制を図っている。

【保存カルテ作成件数】（件）

	１８年度	１９年度	２０年度	２１年度	２２年度
東京国立博物館	1,638	1,725	2,693	1,989	2,368
京都国立博物館	96	140	174	214	108
奈良国立博物館	102	103	108	114	218
九州国立博物館	205	252	289	205	101

３．収蔵品修理、保存処理

定量的な目標を定めている本格修理件数については、各博物館ともほぼ目標を上回った。また、応急（対症）修理の体制充実や、修理に反映するための各種科学的調査を実施している。

九州国立博物館や京都、奈良の文化財保存修理所などの保存修復施設は、修理業者に貸与して国宝・重要文化財等の保存修復の場を提供しており、研究者との連携の下、文化財修理のナショナルセンターとしての機能を果たしている。長期的な修理計画を東京国立博物館で策定するなど効率的な修理を行うよう努めている。

【修理件数】（件）

	１８年度	１９年度	２０年度	２１年度	２２年度
東京国立博物館	101	101	75	106	139
京都国立博物館	11	15	17	5	9
奈良国立博物館	4	10	8	11	9
九州国立博物館	10	22	25	24	19

２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

中期目標

（１）展示の充実

展示については、常に点検・評価を行うなど改善への取組みを進め、歴史・伝統文化を国内外に発信し、これらについての理解促進に寄与するものとなるように努めること。

①平常展は、歴史・伝統文化についての理解に資するよう、体系的・通史的な展示に努めるとともに、各館の収蔵品を法人全体として有効活用した魅力ある展示を行うこと。また、展示に関する外国語説明を一層充実させること。

②特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行うこと。また、展示方法、解説などについて機構の人的資源を最大限に生かした魅力あるものを提供すること。

③個々の展覧会において、積極的な広報に努めること。また、過去の入館者等の状況等を踏まえた適切な入館者数の目標を設定し、その達成に努めること。

（２）歴史・伝統文化の理解促進

歴史・伝統文化の理解促進に寄与するよう、機構の人的資源を活用した教育普及活動を実施すること。

①子どもから高齢者までを対象とした幅広い学習機会を提供すること。また、参加者数については、各館の

年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ること。

②ボランティアや支援団体を育成し、相互の協力により教育普及活動の充実を図ること。

（３）快適な観覧環境の提供

国民に親しまれる施設を目指し、入館者の立場に立った観覧環境の整備や利用者の要望を踏まえた管理運営を行い、入館者の期待に応えること。

①高齢者、身体障害者、外国人等を含めた入館者本位の快適な観覧環境を形成すること。

②入場料金及び開館時間の弾力化など、利用者の要望や利用形態等を踏まえた管理運営を行うこと。

③ミュージアムショップやレストラン等のサービスの充実を図ること。

中期計画

２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

（１）展示の充実

展示については、常に点検・評価を行い国民のニーズ、学術的動向等を踏まえた質の高いものを実施するとともに、展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、国際文化交流に配慮するなど魅力あるものとなるよう努力する。

また、見やすさ分かりやすさに配慮した展示及び解説や音声ガイド等の導入を行うことにより、日本の歴史・伝統文化及び東洋文化についての理解を深めるものとなるよう工夫する。

①　平常展は、展観事業の中核と位置付け、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解の促進に寄与する展示を実施する。また、特集陳列の充実を図るなど再来館者の増加が期待できる魅力ある展示にも努め、一層の入場者の確保を図る。また、展示に関する外国語説明を一層充実させることに努め、作品キャプションについては全てに外国語訳を付すとともに、展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等を 80%以上設置する。

②　特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。

（東京国立博物館）年３～４回程度

（京都国立博物館）年２～３回程度

（奈良国立博物館）年２～３回程度

（九州国立博物館）年２～３回程度

③　個々の展覧会において、広報に積極的に取り組む。また、展覧会の入館者数については、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。

④　黒田記念館については、東京国立博物館に所属を移し、所蔵作品を東京国立博物館でも展示するなど公開機会を拡大する。

（２）歴史・伝統文化の理解促進

歴史・伝統文化の理解促進を図るとともに、その中心的拠点としてふさわしい教育普及事業に重点化する。

①　学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、ギャラリートーク等の学習機会を提供する。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう努める。

②－１　教育普及活動の充実に寄与するようボランティア活動を支援し、ボランティアの資質向上に努める。

②－２　企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図る。

（３）快適な観覧環境の提供

国民に親しまれる施設を目指し、入館者の立場に立った観覧環境の整備や利用者の要望を踏まえた管理運営を行う。

①　施設のバリアフリー化を進め、高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供する。

②　一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的に実施する。調査結果から入館者のニーズを把握し、入場料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行う。

③　ミュージアムショップやレストラン等のサービスについては利用者の意見を収集し、改善する。

実績

１．展示の充実

平常展は各博物館とも展示方法を改善している。展示室のリニューアルや展示解説パネルや外国語パネルの設置、また全ての作品のキャプションに外国語を付すなど観覧・観賞しやすくなるよう努力している。

また 22 年 7 月に奈良国立博物館が本館を「なら仏像館」と新たに命名し、リニューアルを行い、併せて平常展の名称を「名品展」とし、23 年 1 月から東京国立博物館では「平常展」を「総合文化展」に改称した。これで九州国立博物館の従来からの「文化交流展」を併せ３博物館で平常展を別称で表示することで、「平常展はいつも同じ」というイメージの払拭を図り、平常展の活性化の一環とした来館者へのアピールを図った。

第２期中期目標期間における国立博物館への総来館者数は、1,910 万 5,912 人となり、前期に比して約 766 万 7 千人増（67%増）となっている。22 年度は工事等の影響により前年度より減少したものの、平常展については 475 万 9,759 人で前期に比して約 176 万 2 千増（58.7%増）、特別展は 1,434 万 6,153 人で前期に比して約 590 万 5 千人増（70%増）と驚くべき数の来館者増加となった。これは 21 年度開催の「国宝阿修羅展」（東博、九博合計 165 万 7 千人）のような特別展を開催できたこともあるが、平常展も前期比６割増という結果になったことは、各博物館の努力が実りつつあることを表している。

特別展実施回数は全ての年で各博物館とも目標を上回り、目標来館者数もほとんど上回っている。

黒田記念館所蔵作品の公開については、東京国立博物館で特集陳列を毎年開催したほか、毎年１回地方巡回展を開催するなど東京文化財研究所と共同し、公開の機会を広げている。

【平常展来館者数推移】（人）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度	合計
東京国立博物館	361,773	334,297	412,675	330,536	373,068	1,812,349
京都国立博物館	146,752	165,080	141,965	0	0	453,797
奈良国立博物館	137,739	131,336	112,849	136,672	71,566	590,162
九州国立博物館	501,540	341,282	241,423	544,661	274,545	1,903,451
合計	1,147,804	971,995	908,912	1,011,869	719,179	4,759,759

【平常展外国語パネルの設置率】

	１８年度	１９年度	２０年度	２１年度	２２年度
東京国立博物館	100%	95%	97%	97%	96%
京都国立博物館	69%	100%	100%	―	―
奈良国立博物館	56%	56%	77%	91%	84%
九州国立博物館	100%	63%	82%	82%	83%

【特別展開催回数推移】（回）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度	合計
東京国立博物館	8(3)	5(1)	8(1)	12（4)	10(6)	43(15)
京都国立博物館	4	3	3	5(1)	5(1)	20(2)
奈良国立博物館	3	3	4	3	4	17
九州国立博物館	4	4	4	4	5(1)	21(1)
合計	19(3)	15(1)	19（1)	24（5)	24(8)	101(18)

※（　）内は海外展及び別会場開催（内数）

【特別展等開催実績】

年度	博物館	名　　称	来館者数（人）	目標来館者数（人）
18	東京国立博物館	特別展「最澄と天台の国宝」	197,859	100,000
		特別展「プライスコレクション　若冲と江戸絵画展」	317,712	100,000
		特別展「仏像　一木にこめられた祈り」	335,489	150,000
		特別展「悠久の美　中国国家博物館名品展」	98,133	80,000

		特別展「マーオリ　楽園の神々」	72,720	50,000
	京都国立博物館	特別展「大絵巻展」	186,772	60,000
		特別展「開館記念 110 周年記念　美のかけはし」	59,280	30,000
		特別展「京焼―みやこの意匠と技―」	25,283	20,000
		特別展「京都御所障壁画－御常御殿と御学問所－	138,683	50,000
	奈良国立博物館	特別展「大勧進　重源」	41,813	20,000
		特別展「北村昭斎―漆の技―」	14,571	10,000
		特別展「第 58 回正倉院展」	283,515	160,000
	九州国立博物館	特別展「うるま　ちゅら島　琉球」	177,478	50,000
		特別展「南の貝のものがたり」	63,560	30,000
		特別展「発掘された日本列島 2006－新発見考古速報展―」		
		特別展「海の神々－捧げられた宝物」	139,981	60,000
		特別展「プライスコレクション　若冲と江戸絵画展」	300,171	50,000
19	東京国立博物館	特別展「レオナルド・ダ・ヴィンチ　天才の実像」	796,004	500,000
		特別展「京都五山　禅の文化」展	108,917	100,000
		特別展「大徳川展」	425,492	250,000
		特別展「宮廷のみやび―近衛家 1000 年の名宝」	157,718	120,000
	京都国立博物館	特別展「藤原道長　－極めた栄華・願った浄土－」	37,411	20,000
		特別展「狩野永徳」	230,656	70,000
		特別展「憧れのヨーロッパ陶磁」	59,267	(30,000)
	奈良国立博物館	特別展「神仏習合」	40,493	30,000
		特別展「美麗　院政期の絵画」	22,696	10,000
		特別展「第 59 回正倉院展」	248,389	180,000
	九州国立博物館	特別展「未来への贈りもの」	77,380	100,000
		特別展「日本のやきもの－選び抜かれた名宝 120 点」	50,986	50,000
		特別展「本願寺展－親鸞と仏教伝来の道」	197,697	150,000
		特別展「京都五山　禅の文化展」	171,336	80,000
20	東京国立博物館	特別展「平城遷都 1300 年記念　国宝 薬師寺展」	794,909	400,000
		特別展「フランスが夢見た日本」	58,342	50,000
		特別展「対決－巨匠たちの日本美術」	326,784	120,000
		特別展「スリランカ-輝く島の美に出会う-」	80,865	100,000
		特別展「大琳派展－継承と変奏－」	308,213	140,000
		特別展「未来をひらく福澤諭吉」展	73,128	100,000
		特別展「妙心寺」	151,833	100,000
	京都国立博物館	特別展「絵画の冒険者　暁斎 kyosai」	76,686	30,000
		特別展「ｊａｐａｎ 蒔絵－宮殿を飾る 東洋の燦めき－」	67,050	50,000
		特別展「御即位二十年記念 京都御所ゆかりの至宝」	116,363	30,000
	奈良国立博物館	特別展「天馬 －シルクロードを翔ける夢の馬－	31,910	30,000
		特別展「国宝　法隆寺金堂展」	132,919	40,000
		特別展「西国三十三所-観音霊場の祈りと美」	106,411	30,000
		特別展「第 60 回正倉院展」	263,765	180,000
	九州国立博物館	特別展「国宝 大絵巻展 」	115,740	100,000
		特別展「島津の国宝と篤姫の時代」	152,420	50,000
		特別展「国宝　天神さま」	174,698	100,000
		特別展「工芸のいま　伝統と創造」	72,637	80,000
21	東京国立博物館	特別展「STORY OF･･･」	120,483	90,000
		特別展「国宝　阿修羅展」	946,172	540,000
		特別展「染付－藍が彩るアジアの器」	52,731	70,000
		特別展「伊勢神宮と神々の美術」	114,796	110,000
		特別展「皇室の名宝―日本美の華」	447,944	350,000
		特別展「国宝　土偶展」	128,285	(50,000)
		特別展「長谷川等伯展」	292,526	160,000
	京都国立博物館	特別展「開山無相大師 650 年遠諱記念 妙心寺」	92,144	30,000

		特別展「シルクロード 文字を辿って」	25,511	20,000
		特別展「日蓮と法華の名宝－華ひらく京都町衆文化－」	88,187	30,000
		特別展「ＴＨＥ ハプスブルク」	247,078	50,000
	奈良国立博物館	特別展「国宝 鑑真和上展」	93,779	35,000
		特別展「聖地寧波」	30,548	30,000
		特別展「第６１回正倉院展」	299,294	180,000
	九州国立博物館	特別展「聖地チベット ポタラ宮と天空の至宝」	140,917	100,000
		特別展「国宝 阿修羅展」	711,154	120,000
		特別展「古代九州の国宝」展	72,741	30,000
		特別展「京都妙心寺－禅の至宝と九州・琉球」	130,231	80,000
22	東京国立博物館	特別展「細川家の至宝」	182,470	160,000
		特別展「誕生！中国文明」	105,538	220,000
		特別展「東大寺大仏-天平の至宝-」	232,791	420,000
		特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」	188,402	180,000
	京都国立博物館	特別展「没後４００年　長谷川等伯」	244,347	130,000
		特別展観「没後２００年記念　上田秋成」	21,705	20,000
		特別展「高僧と袈裟-ころもを伝え こころを繋ぐ-」	19,297	20,000
		特別展「筆墨精神　中国書画の世界」	37,535	30,000
	奈良国立博物館	特別展「大遣唐使展」	202,166	120,000
		特別展「仏像修理１００年」	81,342	10,000
		特別展「至宝の仏像　東大寺法華堂金剛力士像特別公開」		
		特別展「第６２回正倉院展」	294,804	180,000
	九州国立博物館	特別展「パリに咲いた古伊万里の華」	84,738	50,000
		特別展「馬　アジアを駆けた二千年」	42,022	50,000
		特別展「誕生！中国文明」	53,409	90,000
		特別展「没後１２０年　ゴッホ展」	354,311	110,000

※目標来館者数の（　）付きの数字は年度計画外の特別展のため、年間の目標来館者数の合計から除いている。

【特別展来館者数推移】（人）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度	合計
東京国立博物館	1,055,422	1,433,901	1,759,267	2,085,745	709,201	7,043,536
京都国立博物館	410,018	327,334	274,036	452,920	331,131	1,795,439
奈良国立博物館	339,899	311,578	535,005	423,621	578,312	2,188,415
九州国立博物館	691,880	512,856	515,495	1,055,043	543,489	3,318,763
合計	2,497,219	2,585,669	3,083,803	4,017,329	2,162,133	14,346,153

【黒田記念館所蔵作品公開実績】

19 年度

･東京国立博物館企画展示室において、黒田記念館をテーマにした特集陳列を 2 回開催（東博）

20 年度

・特集陳列「黒田清輝の留学時代」を東文研、東京藝術大学と共同で開催（東博）

21 年度

・特集陳列「農村（田園）へのまなざし」を開催（東博）

22 年度

・特集陳列「黒田清輝と京都」を開催（東博）

２．歴史・伝統文化の理解促進

今中期目標期間の定量的な目標として掲げた講演会等参加者数は、東京国立博物館以外の３博物館では残念ながら目標に達しなかった。京都国立博物館においては工事の影響、奈良国立博物館、九州国立博物館では館内混雑対策等による講座開催回数の減少や、講演会１回当たりの参加者数の減少が主な原因と思われる。

各博物館とも毎年児童・生徒のみならず一般も対象とした事業を実施し、学習の機会の提供を図ってきた。京博

では 21 年から工事による休館にもかかわらず、外部施設を借用して講演会等を開催するなど歴史・伝統文化の理解促進に努力した。

ボランティアについては、各博物館において研修や自己学習の機会を提供するとともに、ボランティアにとっても充実した活動となるよう各博物館とも協力して事業を実施している。

博物館支援者の増加については、賛助会や寄附金などは経済情勢に伴い厳しくなっている中、各博物館では企業などへ積極的なアプローチに取り組んだほか、募金箱を設置するなどの取組みにより昨年以上の実績をあげている。また各博物館とも所在地域等と様々な取組みを共同して開催することにも積極的に取組むなど、支援者の増加に結びつく方策を実施した。

【講演会、ギャラリートークの参加者数】（人）

	１８年度	１９年度	２０年度	２１年度	２２年度
東京国立博物館	9,922	11,361	12,332	12,546	13,319
京都国立博物館	4,980	4,489	3,413	3,002	2,313
奈良国立博物館	2,743	2,949	3,655	3,421	3,349
九州国立博物館	6,494	4,152	5,507	6,806	3,996

【ボランティア受入れ数】（人）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	171	162	171	163	159
京都国立博物館	23	23	30	35	40
奈良国立博物館	85	96	102	98	85
九州国立博物館	293	293	388	345	288
合計	572	574	691	641	572

【賛助会加入件数】（件）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	150	163	196	218	235
京都国立博物館	378	390	388	389	392
奈良国立博物館	35	45	49	56	64
合計	563	598	633	663	691

【友の会・パスポート加入数】（人）

		18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	友の会	1,346	1,341	1,913	2,085	1,412
	パスポート	18,705	16,035	20,405	21,598	13,733
	小計	20,051	17,376	22,318	23,683	15,145
京都国立博物館	友の会	3,784	3,224	2,932	2,612	2,468
奈良国立博物館	友の会	2,288	2,439	2,815	2,799	3,180
九州国立博物館	友の会	229	167	154	206	144
	パスポート	1,312	3,252	3,120	3,914	3,318
	小計	1,541	3,419	3,274	4,120	3,462
合計		27,664	26,458	31,339	33,214	24,255

【キャンパスメンバーズ加入校】（件）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	16	22	29	35	35
京都国立博物館	15	21	29	30	29
奈良国立博物館	12	20	25	27	28
九州国立博物館	0	21	22	29	27
合計	43	84	105	121	119

３．快適な観覧環境の提供

施設のバリアフリー化は年々改善されてきている。利用者のニーズを踏まえ、入場料金や開館時間の弾力化などの管理運営の改善も対応可能な範囲内で適宜行っている。

特別展の混雑対策として開館時間の柔軟な対応や、奈良国立博物館では新たに「客数情報システム」を導入し展示室内の入場者数を正確に把握することで、混雑時に適正な入場案内を行える工夫をしたり、現場対応ではあるがウェブサイトに待ち時間情報等をきめ細かく発信したり、日傘の貸し出しや給水所を設置するなど、少しでも入場者の負担を軽減できる工夫を行っている。今後も引き続きより快適な観覧環境となるよう努力していく必要がある。

また利用者の意見を踏まえ、ミュージアムショップではオリジナルグッズを開発するなど改善し、レストランでは接客の向上や特別展ごとにその趣に合わせた新メニューを提供するなど、サービスの向上に努めた。

３　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

中期目標

（１）収蔵品等に関する調査研究の成果を多様な方法により積極的に公表し、広く博物館関係者の知見の向上に資すること。

（２）国内外の博物館関係者との研究会の開催や研究者の交流等を行い、国際的な博物館の拠点となることを目指すこと。

（３）国内外の文化財の修理・保存処理の充実に寄与すること。

（４）収蔵品の地方における観覧の機会を確保するため、貸与に関する情報を公開するなど、収蔵品の貸与を推進すること。

（５）全国の博物館等の運営に対する援助、助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努めること。

中期計画

３　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

（１）収蔵品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に関わる刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信する。また、各種セミナー、シンポジウムを開催する。

（２）海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムを開催するなど博物館活動に対する示唆が得られるよう努める。

（３）博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。

（４）収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を推進する。収蔵品の貸与については、貸与に関する情報を公開するなど具体的措置を講ずることとする。

（５）公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努める。なお、援助・助言の実施については今期５年間の実績が前中期目標期間の実績を上回るよう努める。

実績

１．調査研究成果の発信

各種出版物の多言語化や研究紀要等の発行、ウェブサイトを活用した公開などを通して、博物館における研究成果の発信を積極的に行っている。また各種シンポジウムの開催や学会、研究会などで広く研究成果の公表に努めるなど、収蔵品等に関する調査研究の成果を多様な方法により積極的に公表し、広く博物館関係者の知見の向上に資するよう努めた。

２．海外研究者の招聘

海外からの研究者招へいは今期合計 321 人と積極的に招へいし、国際交流を進めている。特に、中国、韓国の博物館等と各博物館が学術交流協定を締結するなど活発な活動を行い、博物館にとって新たな知見を広めることができている。また多くの国際シンポジウムを各博物館で実施しており、他国研究者との研究交流が推進できていると考える。

【海外研究者の招へい者数】（人）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度	合計
東京国立博物館	9	10	15	26	15	75
京都国立博物館	9	7	9	29	7	61
奈良国立博物館	10	9	9	29	9	66
九州国立博物館	17	38	18	37	9	119
合計	45	64	51	121	40	321

３．博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムの検討、実施

文化財保存を担う専門家の育成や基礎能力の向上のために各博物館がその組織の特色を生かして各種研修会を開催した。東京国立博物館では保存修復家養成セミナーを、京都国立博物館では特別展開催ごとに修理技術者に対する定例研修会を、奈良国立博物館では修理技術者に対する研修会を、九州国立博物館では紙文化財保存講座やセミナーを開催するなど、各博物館において博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした指導や研修を実施し、我が国における文化財技術・保存のレベルアップを図ることができていると考える。

４．収蔵品貸与の推進

国内外の博物館等からの要請に積極的に対応し、文化財を貸与した。減少傾向だった貸与先施設数については、回復の兆しが見られた。

なお、京都国立博物館において 21 年度からウェブページでの京都国立博物館収蔵品の「貸出作品リスト」を公開しているが、他の各博物館では収蔵品の貸与に関する情報について公開する体制はまだ整っていない。収蔵品の管理・展示とも大きく関係するので全体として引き続き取り組んでいきたい。

【文化財の貸与件数（国内）】（件）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	1,329	1,118	1,012	913	1,155
京都国立博物館	224	168	245	400	281
奈良国立博物館	125	134	161	107	145
九州国立博物館	172	73	76	88	131
合計	1,850	1,493	1,494	1,508	1,712

【文化財の貸与先施設数（国内）】（件）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	146	137	131	119	138
京都国立博物館	70	59	44	66	70
奈良国立博物館	37	35	46	33	39
九州国立博物館	11	28	28	21	31
合計	264	259	249	239	278

５．公私立博物館・美術館等に対する援助・助言

各博物館とも毎年目標を上まわる実績をあげている。相手のニーズによって指導・助言件数の増減が起こる実態ではあるが、文化財の保存、展示などの分野での地方の博物館等から国立博物館の援助・助言に期待される役割に今後も積極的に取り組んでいく。

【公私立博物館・美術館等に対する援助・助言件数】（件）

	１８年度	１９年度	２０年度	２１年度	２２年度
東京国立博物館	56	124	134	139	84
京都国立博物館	28	81	114	114	123
奈良国立博物館	7	5	5	25	35
九州国立博物館	57	38	47	39	77

４　文化財に関する調査及び研究の推進

中期目標

（１）文化財の各分野に関する基礎的・体系的な調査及び研究や、総合的な視点に基づく文化財の調査研究手法の開発等を推進することにより、国及び地方公共団体における文化財保護施策の企画立案及び文化財の評価等に係る業務の基盤形成に寄与すること。

特に、文化財保護法の改正によって新たに保護の対象となった文化的景観、民俗技術などに関する調査及び研究を推進し、今後の指定等の業務に係る基礎的な知見を形成すること。

（２）最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査及び研究を通じて、文化財の保存・修復に係る技術・技法や材料の開発・評価等を推進し、文化財の保存や修復の質的向上に寄与すること。

（３）国や地方公共団体の要請に応じて、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急性の高い文化財の保存・修復に係る実践的な調査及び研究を実施すること。

（４）有形文化財の収集・保管・公衆の観覧等に必要な調査研究を計画的に実施すること。

（５）文化財の保存・修復に関する国際協力の拠点としての位置づけを明確化するとともに、その機能の充実を図ること。また、研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協　力のネットワークの構築、アジア諸国等における文化財の保存・修復　協力、技術移転・専門家養成等の支援等、有機的・総合的な事業展開を行い、人類共通の財産である文化財の保存・修復に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与すること。

中期計画

４　文化財に関する調査及び研究の推進

（１）文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究として、国内外の機関との共同研究や研究交流も含めて以下の課題に取り組むことにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。

①　文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった文化的景観、民俗技術に関する基礎的・体系的な調査・研究を実施し、今後の指定をはじめとする保護施策に関する資料と指針を提供する。

②　我が国の有形文化財及びそれに係わる諸外国の文化財に関し、以下の課題に重点的に取り組む。

ⅰ 日本を含む東アジア地域における美術の価値形成の多様性の解明

ⅱ 我が国における近現代美術の歴史の解明

ⅲ 美術や文化財に対する理解を深めるための美術の創作のプロセスの解明

ⅳ 古都所在寺社所蔵の歴史資料・書跡資料等に関する原本調査を通じた日本の歴史、文化の研究

ⅴ 歴史的建造物の保存・修復・活用に関し重点物件に係る調査・研究を通じた基礎データの収集整理・公開

③　我が国の古典芸能及び伝統的工芸技術等の無形文化財の伝承実態を把握するとともに、その伝承・公開の基礎となる技法・技術を明らかにする。

④　我が国の風俗習慣、民俗芸能、民俗技術など無形民俗文化財の現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等を明らかにするとともに、各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図り、「無形民俗文化財の映像記録作成ガイドライン（仮称）」等の指針を作成し公表する。

⑤　平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

⑥　遺跡の保存・整備・活用に関する一体的な調査・研究、技術開発の推進及び整備事例のデータベース化等により、個々の遺跡の現況に応じた適切な保存修理・整備に資する。また、これに関連して、平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査・研究を行い、文化庁が行う平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡の整備・復原事業に関して、専門的・技術的な協力・助言を行う。

（２）文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進

文化財の調査手法に関する以下の研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等

の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与する。
①光に対する物性を利用した高精彩のデジタル画像を形成する手法に関する調査・研究を行い、文化財の色や形状・肌合いなどを正確かつ詳細に再現することを目指す。
②小型可搬型機器の開発及び応用研究を行い、文化財の材質調査をその場で行えるようにする。また、有機化合物の物質同定を目的とした新規手法の検討及びその応用研究を行い、金属文化財や顔料など無機化合物に関する元素分析及び構造解析手法の確立等を目指す。
③遺跡調査における新たな指標や属性分析法の確立に関する研究会等を行い、全国における遺跡調査・研究の質的向上と発掘作業の効率化に資する。
④木質古文化財の年輪年代測定法等を進め、考古学・建築史・美術史の研究に資する。
⑤遺跡出土の動植物遺体や古土壌の考古科学的分析により、過去の生業活動の解明と環境復元を行う。

（３）科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進

最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び 研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査及び研究として以下の課題に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。

① 生物被害を受けやすい木質文化財（社寺等建造物、彫刻など）の劣化診断や被害防止対策を確立する。
② 環境の調査手法、モデル実験やシミュレーション技術を用いた環境の解析手法の確立のための研究及び実践を行い、文化財を取り巻く保存環境の現状を把握し、改善することに資する。
③ 屋外文化財の保存・修復の手法を確立する。また、文化財の防災についてその予防と被災後の情報収集を行い、文化財防災のネットワーク化の一層の推進を図る。
④ 考古資料の材質・構造の調査法に関して、特にレーザーラマン分光分析法や高エネルギーＸ線ＣＴ・ＣＲ法の実用化を図る。また、考古資料の保存・修復に関する実践的な研究を実施する。
⑤ 伝統的修復材料や合成樹脂などの物性、製作技法、利用技法に関する調査・研究をもとに、修復材料・技法の評価及び開発を行う。また、海外の文化財保存担当者を対象に、日本の修復材料の使用法や修理技術に関する研修等を行い本国での基本的な作品の取り扱いや保存処理に反映させる。
⑥ 近代の文化遺産に特徴的な鉄、コンクリート、プラスティックなどの複合素材及び技法について国際共同研究を実施し、その成果をもとに国内所在の近代文化遺産の保存・修復に関する手法を開発する。

（４）高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。

（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次世代への継承及び我が国文化の向上に寄与する。

① 収集・保管に関する研究を実施し、有形文化財の保存に寄与する。
 ⅰ 保存環境の調査研究等を実施することにより、収蔵品の保存環境の向上を図る。
 ⅱ 日本の文化財及び日本の文化に影響を与えた東洋諸地域を中心に東洋全般にわたる各国固有の文化財の調査研究を実施する。
 ⅲ 収蔵品の調査研究を重視し、特に重要な項目については特別調査を実施する。また、特別展及び海外展実施に向けた事前調査を実施する。
 ⅳ トータルケアシステム構築に向けた応用研究を実施し、有形文化財の恒久的保存と持続的公開を具現化する。
 ⅴ 修復文化財に関する調査研究を実施し、補修紙製作、剥落止め等修復方針決定に寄与する。
 ⅵ 収蔵品について、科学的分析に基づく保存・修復に関する調査研究を実施し、文化財の適切な保存・展示・活用に反映させる。
② 公衆への観覧を図るための研究を実施し、有形文化財の活用に寄与する。
 ⅰ 有形文化財の展示デザインシステムを構築するための応用研究を実施する。
 ⅱ 博物館情報学を構築するための研究を実施する。
 ⅲ 博物館教育理論の構築に関する研究を実施し、有形文化財理解の推進に寄与する。
 ⅳ 京都文化を中心にした文化財の調査研究を実施し、展示することにより、国民の文化財保存に対する意識

の高揚に寄与する。

ⅴ 平安仏教とその造形に関する調査研究を実施し、展示することにより、国民の文化財保存に対する意識の高揚に寄与する。

ⅵ 南都諸社寺等に関する計画的な調査研究を実施し、展覧会の活性化に反映させる。

ⅶ 我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究を実施し、仏教美術の解説の充実を図る。

ⅷ 仏教美術の光学的調査研究を実施し、作品の材料・技術の解明に寄与する。

ⅸ 日本とアジア諸国との文化交流に関する文化財の調査研究を実施し、これらの文化財の収集・保管・展示、教育普及事業等を展開する。

実績

１．調査研究の目的、内容の適切性

中期計画に示した課題を達成するために、毎年度ごとに研究目的・テーマを設定した。

中期目標・中期計画を達成するための適切な計画を立てることができたと考える。

【調査・研究テーマ数】（延件数）

調査研究テーマ数	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度	合計
東京国立博物館	18	22	33	41	39	153
京都国立博物館	7	25	17	18	19	86
奈良国立博物館	11	13	9	10	9	52
九州国立博物館	9	16	18	17	19	79
博物館計	45	76	77	86	86	370
東京文化財研究所	21	20	20	20	21	102
奈良文化財研究所	31	28	28	26	29	142
共同研究 （東京・奈良文化財研究所）	1	2	3	2	1	9
文化財研究所計	53	50	51	48	51	253
機構計	98	126	128	134	137	623

２．調査研究の実施状況

18 年度（法人統合前）

（１）文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

文化財に関する基礎的・体系的な調査研究について、国内外の機関との共同研究・研究交流・受託研究等を含め実施した。法律改正に伴い新たに文化財として保護対象となった文化的景観や民俗技術などの分野へ取組んだ。

（２）文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進

文化財の調査法に関する研究開発について、調査研究・受託事業を実施した。

（３）科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進

最新の科学技術の活用による保存科学に関する調査・研究、伝統的な修復技術・製作技法、利用技法に関する調査・研究を実施した。

（４）我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。

我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて実施した。

キトラ古墳・高松塚古墳ともに今後の保存を進めていく上で、重要な資料を得るなど、高い調査研究の水準で事業を進めることができた。また、キトラ古墳においては、壁画の取り外し手法としてワイヤソーを開発するなどの世界で初めての取組みも実施した。

19－22 年度（法人統合後）

（1）文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

今中期目標期間において無形文化遺産から遺跡の発掘まで幅広い分野についての継続的な調査・研究を通して文化財に関する基礎的な情報を蓄積することができている。基礎的・体系的な調査・研究は成果がすぐに出るものではなく、長期的な視野に立つことが欠かせないので、報告書の刊行や研究会・学会での発表を通じて、調査研究の成果を国民に還元していけるよう努力している。

（２）文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進

今中期目標期間中の主な実績としては年輪年代法で特許の取得をはじめ、動植物の遺存体の調査・研究等からは製作時期の特定、遺跡の測量・計測分野では低価格の三次元レーザースキャナーによる三次元計測の有効性の実証、GPR 及び EM 法の走査方法改善等により多様な条件下で遺構を確認することができたなどの実績をあげている。また、その他にも高精細デジタル画像の活用研究や遺跡データベースの公開を順調に進めている。今後も調査・研究を継続的に実施し、新たな調査手法の開発を通して、調査研究に新たな知見が得られるように努めたい。

（３）科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進

我が国の有形文化財は紙や木など劣化しやすい材質で作られているものが多く、保存環境や修復に関する調査研究は重要である。今中期計画期間では国内外を問わず、文化財の保存に関する調査研究を進め、海外の日本古美術品の修復も行うことができた。海外からも期待されている分野である文化財保存・修復に関する研究は今後も継続的に実施し、我が国文化財の保存・修復のナショナルセンターとしての機能を強化していきたい。

（４）国・地方公共団体の要請に応じた文化財の保存措置等のための調査・研究の実施

文化庁の要請に応じて高松塚古墳壁画及びキトラ古墳壁画の修復事業を実施した。高松塚古墳では石室の解体の実施、バイオフィルムによる汚れのクリーニング方法を確立するなど古墳の保全、カビ等汚染の除去も着実に実施や、損傷図面を作成し『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』の執筆・編集を行い、文化庁へ提出した。キトラ古墳ではワイヤソー、バンドソーを用いた集中剥ぎ取り作業を行い、石室内の全ての漆喰の剥ぎ取りを完了した。今後も文化庁の要請に応じて、適宜協力して実施していきたい。

（５）有形文化財に係る調査研究

博物館の調査研究は、展覧会の事前調査や収蔵品の調査研究など日常業務に密着したものが多く、論文や学会発表だけでなく、展覧会等でその成果を反映させるところに大きな特徴がある。また文化財研究所との共同研究や大学などとの共同研究も実施しており、その成果も展示に積極的に活用し、広く公開した。

文化財の保存と公開という博物館の使命を持続するために保存環境やリスク回避などについての研究を行い、次世代へ継承するために不断の努力を続けている。また公衆の観覧を図るための研究としては、博物館環境デザインの研究や先駆的な教育普及理論や実践的研究など公開に力点を置いた研究を行い、文化財情報に関しては複合的データベースの連動化などの研究を進めている。

３．調査研究の成果の状況

専門家や研究者への研究成果の還元については、論文や学会での発表を通して、着実に成果をあげていると考える。定量的観点からも論文の発表件数、学会等での発表件数とも順調に成果をあげている。

なお、今中期計画期間では①木材又は木造文化財の年輪幅又は密度測定装置並びに測定方法（21.5.22 登録：奈良文化財研究所）、②壁画漆喰層剥離用ワイヤソー装置及び壁画漆喰層剥離方法（22.3.5 登録：東京文化財研究所・奈良文化財研究所）、③文化財用表打ち材料及びそれを用いた文化財修復方法（22.12.10 取得：東京文化財研究所）の３件の特許を取得した。

【学術雑誌等への掲載論文数】

テーマ		学術雑誌等への論文掲載数				
		18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
1	文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進	89 件	70 件	63 件	77 件	96 件
2	文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進主な実績	25 件	17 件	40 件	40 件	47 件
3	科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進	25 件	37 件	27 件	25 件	35 件

4	国・地方公共団体の要請に応じた文化財の保存措置等のための調査・研究の実施	10 件	3 件	4 件	17 件	4 件
5	有形文化財に係る調査研究	―	78 件	110 件	124 件	156 件
6	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究	―	2 件	2 件	4 件	2 件
7	情報発信機能の強化	―	―	―	1 件	2 件
8	地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上	―	―	―	6 件	3 件
	計	149 件	207 件	246 件	294 件	345 件

【学会、研究会等での発表件数】

テーマ		学会、研究会等での発表件数				
		18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
1	文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進	59 件	34 件	43 件	37 件	29 件
2	文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進主な実績	29 件	15 件	35 件	20 件	26 件
3	科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進	23 件	27 件	25 件	38 件	29 件
4	国・地方公共団体の要請に応じた文化財の保存措置等のための調査・研究の実施	1 件	―	―	―	―
5	有形文化財に係る調査研究	―	62 件	82 件	129 件	111 件
6	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究	―	6 件	5 件	9 件	9 件
7	情報発信機能の強化	―	―	―	1 件	2 件
8	地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上	―	―	―	―	―
	計	112 件	144 件	190 件	234 件	206 件

外部資金の獲得

【科学研究費補助金獲得件数】

	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
新規応募件数（件）	87	84	83	86
新規採択件数（件）	34	32	35	25
新規採択率	39%	38%	42%	29%
件数（新規＋継続）計	78	83	86	81
直接経費（千円）	234,390	252,860	231,330	206,881
間接経費（千円）	55,380	74,379	67,629	60,265
交付額計（千円）	289,770	327,239	298,959	267,146

５　文化財の保存・修復を通じた我が国の国際貢献への寄与

中期目標

文化財の保存・修復に関する国際協力の拠点としての位置づけを明確化するとともに、その機能の充実を図ること。また、研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協　力のネットワークの構築、アジア諸国等における文化財の保存・修復　協力、技術移転・専門家養成等の支援等、有機的・総合的な事業展開を行い、人類共通の財産である文化財の保存・修復に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与すること。

中期計画

５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進

文化財の保存・修復に関する国際協力に関して、以下の事業を有機的・総合的に展開することにより、人類共通

の財産である文化財の保存・修復に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与する。
（１）文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤整備を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国において文化財の保存・修復事業を推進する。
（２）諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。

実績

１．国際協力に関する研究基盤の整備

文化財の保存・修復事業を通じた国際協力の実績としては、国際的な文化財機構のネットワーク構築のため、各種ワークショップを開催し、またそれに参加して情報の収集に努めている。国際協力事業については、カンボジア、中国、西アジアなどアジアを中心に文化財修復に積極的に協力し、国際協力が図られている。

なお、21 年度にカンボジア政府から奈良文化財研究所長に宛てて、カンボジアの発展に寄与した外国人に送られるサハ・メトレイ勲章を授与される栄誉を受けた。

各年度の主な実績

18 年度（法人統合前）

・文化財保存施策の国際的研究
・アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究
・アンコールワット遺跡群西トップ寺院の調査
・龍門石窟及び陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する調査研究
＜受託研究＞
・陝西省唐代陵墓石彫像保護修理事業
・龍門石窟保護修復プロジェクト
・敦煌壁画の保護に関する共同研究
・西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業
＜受託研究＞
・ユネスコ／バーミヤーン遺跡保存事業
・タジキスタン共和国アジナ・テパ仏教寺院の保存修復事業
・中国及び中央アジア各国におけるシルクロード広域の世界遺産登録推進運動の実態調査及び登録文化遺産または登録の可能性のある文化遺産の現状調査
・文化遺産国際協力コンソーシアム

19－22 年度（法人統合後）

19 年度
・敦煌壁画・龍門石窟・唐代陵墓（中国）
・タ・ネイ遺跡・西トップ寺院（カンボジア）
・プランバナン遺跡（インドネシア）
・アユタヤ遺跡、スコータイ遺跡（タイ）
・タンロン遺跡（ベトナム）
・バーミヤン遺跡（アフガニスタン）
・アジナ・テパ遺跡（タジキスタン）
・学術交流、共同研究（ドイツ、北米、韓国、中国、台湾、ベトナム、中央アジア）
・文化財施策の国際的研究
・文化遺産国際協力コンソーシアム
・アジア諸国の専門家ネットワーク
20 年度
・文化財保存施策の国際的研究

・アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究
・カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査
・龍門石窟及び陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する調査研究
・敦煌壁画の保護に関する共同研究
・西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業
21 年度
・文化財保存施策の国際的研究
・アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究
・カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査
・陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究
・敦煌壁画の保護に関する共同研究
・西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業
22 年度
・文化財保存施策の国際的研究
・アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究
・カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査
・陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究
・敦煌壁画の保護に関する共同研究
・西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業

２．保存修復に関する技術移転の推進

国際協力機構やユネスコアジア文化センター（ACCU）への協力だけでなく、専門家研修の教材の作成を通して、アジア各国への技術移転を進めることができている。

各年度の主な実績

18 年度（法人統合前）

・諸外国の文化財保存修復専門家養成
・ＪＩＣＡ，ＡＣＣＵ等の研修事業の協力
＜受託研究＞
［ベトナム］保存管理計画等作成のための行政機関に対する状況調査、必要となる保存修復機材の選定を行った。、「タンロン遺跡の保存に関する日越合同専門家委員会」の立ち上げのための準備会合に専門家を派遣した。
［インドネシア］プランバナン遺跡を中心に、古都ジョグジャカルタ地域の文化遺産被害状況に関する調査を実施。
［インドネシア］修復マスタープラン策定のための基本調査、地震被害解析のための構造調査、地震被害解析のための地盤調査、修復履歴調査、足場建設指導及び修復工事基本計画策定のための調査を実施。
シルクロード沿線の新疆、青海、寧夏、甘粛、陝西、河南の 6 省・自治区からの 27 名の文化財保護修復技術担当者トレーニングを行った。
イラク国立博物館より 2 名の保存修復専門家を招聘し、研修を行った。

19－22 年度（法人統合後）

19 年度
・アフガニスタン、イラク等の専門家養成
・ＪＩＣＡ，ＡＣＣＵ研修事業への協力
・ＩＣＣＲＯＭ国際研修「漆」
・シルクロード文化財保護フェローシップ事業協力
20－22 年度
・諸外国の文化財保存修復専門家養成
・国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力

【文化財の保存・修復に関する国際協力による受託事業一覧】

東京文化財研究所	
19 年度	陝西省唐代陵墓石彫像保護修理事業（受託）
	龍門石窟保護修復プロジェクト（受託）
	ユネスコ／バーミヤーン遺跡保存事業（受託）※奈文研と共同
	タジキスタン共和国アジナ・テパ仏教寺院の保存修復事業（受託）
	中国及び中央アジア各国におけるシルクロード広域の世界遺産登録推進運動の実態調査及び登録文化遺産または登録の可能性のある文化遺産の現状調査（受託）
	ユネスコ／バーミヤーン遺跡保存に関する第６回専門家作業グループ国際会議の開催（受託）※奈文研と共同
	文化遺産保護国際貢献事業　専門家派遣：ベトナム・タンロン皇城遺跡の保存に関する活動計画案協議のための専門家派遣（受託）※奈文研と共同
	文化遺産保護国際貢献事業　専門家派遣：ベトナム・タンロン皇城遺跡の保存に関する専門家派遣と研修事業（受託）※奈文研と共同
	文化遺産国際協力コンソーシアム事業（受託）
	文化遺産国際協力拠点交流事業　インドネシア・プランバナン遺跡群復興およびインド・アジャンター石窟壁画の保存修復に関する人材養成・技術移転（受託）
	日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術人員の育成プログラム（受託）
	ユネスコ／日本信託基金　イラク博物館における修復研究室復興プロジェクト（受託）※奈文研と共同
20 年度	諸外国における文化財輸出規制を規定した法令に関する調査
	陝西省唐代陵墓石彫像保護修理事業
	龍門石窟保護修復プロジェクト
	ユネスコ／バーミヤーン遺跡保存事業
	タジキスタン共和国アジナ・テパ仏教寺院の保存修復事業
	タンロン皇城遺跡の保存に関する専門家派遣と研修事業
	タンロン皇城遺跡の保存に係る専門家派遣
	文化遺産国際協力コンソーシアム事業
	文化遺産国際協力拠点交流事業
	日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術人員の育成プログラム
	ユネスコ／日本信託基金　イラク博物館における修復研究室復興プロジェクト
	四川大地震文化財復興支援に関する現地調査
	四川震災復興に係る文化財協力（専門家交流）事業
21 年度	ユネスコ／バーミヤーン遺跡の保護プロジェクト
	ユネスコ／インドネシア西スマトラ地震により被災した文化遺産緊急支援
	文化遺産国際協力コンソーシアム事業
	文化遺産国際協力拠点交流事業　インド
	文化遺産国際協力拠点交流事業　モンゴル
	文化遺産国際協力拠点交流事業　中央アジア
	エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズ１）にかかる国内支援業務
	・日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術人員の育成プログラム
	・ユネスコ／日本信託基金 バクダードにあるイラク博物館の保存修復室の復興プロジェクト
22 年度	文化遺産国際協力拠点交流事業　カンボジア（受託）（奈良文化財研究所）
	ユネスコ／日本信託基金　バーミヤーン遺跡の保護プロジェクト（受託）
	インドネシア西スマトラ州パダンにおける歴史的地区文化遺産復興支援（専門家交流）事業（受託）
	文化遺産国際協力コンソーシアム事業（受託）
	文化遺産国際協力拠点交流事業　インド（受託）
	文化遺産国際協力拠点交流事業　モンゴル（受託）
	文化遺産国際協力拠点交流事業　中央アジア（受託）
	エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズ１）にかかる国内支援業務（受託）

	日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術要員の育成プログラム（受託）
	ユネスコ／日本信託基金　バクダードにあるイラク博物館の保存修復室の復興プロジェクト（受託）
	ユネスコ／日本信託基金　タンロン・ハノイ文化遺産群の保存事業（受託）
	日本／ユネスコパートナーシップ事業　アジア太平洋地域無形文化遺産保護活動の調査研究（受託）

６　情報発信機能の強化

中期目標

調査及び研究の成果について、迅速な報告書の発行、利用価値の高いデータベースの構築等により、適時適切な公表を推進するとともに、施設の有効活用を図ることにより、研究者をはじめ広く社会に還元すること。

中期計画

６　情報発信機能の強化

以下のとおり、調査・研究に基づく資料の作成及び文化財に関連する資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査･研究成果を積極的に公表･公開し、研究者や広く一般の人が調査･研究成果を容易に入手できるようにする。

（１）文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。

また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る。

（２）文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成 17 年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究･業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

（３）黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

（４）文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力し、支援を実施する。また、宮跡等への来訪者に文化財に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティア事業を運営するとともに、各種ボランティアに対して、活動機会・場所の提供等の支援を行う。

（５）奈良県の「平城遷都 1300 年記念事業」にあわせ、平城京についてのこれまでの調査・研究成果を生かした展示・公開事業を行う。

（６）文化財情報･研究成果などを広く公表すること等を通じて歴史･伝統文化に対する理解が深まるよう努める。

①ウェブサイト等自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、広く国内外に情報を発信する。ウェブサイトのアクセス件数は年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ることとする。

②－１　収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すために、デジタル化を推進し、文化財情報システム等により広く積極的に公開する。また、収蔵品等に関するデジタル化件数は、年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにする。

②－２　美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能を充実させる。

実績

１．情報基盤の整備充実

ネットワーク環境の整備や情報交換システム及びウイルス対策ソフトの更新によるセキュリティシステムの強化を行った。また文化財に関する専門的なアーカイブ化を順調に進めることができている。文化財保護関連情報のデータベース化も積極的に進め、外国の文化財保護法令について、各国法令が対象とする文化財によって分類し、データベース化している。

主な実績

・ファイヤーウォールの更新、スパム対策システムサーバの導入などネットワーク環境の整備を実施

・専門的アーカイブの拡充
・文化財関係資料の充実と文化財情報の電子化によるデータベースの充実
・定期刊行物、ホームページの運用と広報誌
・動画サーバの導入、センタスイッチの増設等を実施
・近現代美術関係文献および美術全集掲載図版目録のデータベース化、『日本美術年鑑』のテキスト化
・劣化が進む貴重雑誌のＣＤ－ＲＯＭ化
・「文化財保護関連法令集　イラク」等、文化財保存修復国際情報データベース化の推進
・文化財機構内のグループウェア運用に向けたＶＰＮ接続の実施
・情報セキュリティ強化システムの導入
・劣化が懸念される貴重雑誌やオープンテープ等のデジタル化の実施
・国内外の文化財に関する資料の収集及びデータベース化の実施
・「各国の文化財保護法令シリーズ」及び「フランス文化財法典(前編)」の刊行
・GIS（地理情報システム）を活用した遺跡・遺物情報の取得・管理に関する最新手法の開発
・『東京文化財研究所七十五年史　本文編』の刊行
・情報交換システム及びウイルス対策ソフトの更新によるセキュリティシステムの強化
・将来の多言語化に備えるために、各種データベースについて、業務用とともに公開用についても文字コードをUnicode 化

２．調査研究成果の公開・提供

研究報告書や年報等定期刊行物をとおして研究成果の公表を行っている。また、文化財の保存・修復に関する国際研究集会を通して、文化財の保存・修復の国際的な課題や取り組みなどを検討する機会を設け、研究成果を積極的に公表している。また、HP のアクセス件数も目標を達成し、前年度実績も上回っている。オープンレクチャーや現地説明会などを通した一般への研究成果の公表にも力を入れており、今後も積極的に公表の機会を設けていきたい。

主な実績
・研究報告書、日本美術年鑑、美術研究、無形文化遺産研究報告、保存科学、年報等の刊行
・第 31 回文化財の保存・修復に関する国際研究集会の開催
・オープンレクチャーの開催
・発掘調査の現地説明会の開催と公開講演会の実施
・文化財の保存・修復に関する国際研究集会の開催
・無形文化遺産研究報告など、研究報告書の刊行
・キッズページ(日本語版・英語版)、携帯サイトの新設など、ホームページの充実

【研究所 ＨＰアクセス件数】(件)

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京文化財研究所	1,355,306	1,526,409	1,405,278	1,417,203	1,489,091
奈良文化財研究所	1,033,457	923,466	701,711	1,030,905	4,977,076
合計	2,388,763	2,449,875	2,106,989	2,448,108	6,466,167

３．公開施設の運用

研究公開施設の公開を通して、文化財研究所の研究成果を公表している。黒田記念館の黒田作品の公開機会の拡大については、年 1 回の巡回展のほか東京国立博物館での特集陳列の開催など、公開の機会拡大に努めた。平城宮跡資料館では 22 年度のリニューアルオープンにあたり、新しい展示手法を取り入れた大幅な展示替えを行うなどして、入館者の平城宮跡への理解促進に努めている。また、飛鳥資料館ではキトラ古墳壁画の特別公開の特別展を開催し、研究･展示の成果を公開した。今後も引き続き研究の成果を発信することにより、文化財研究所の事業内容を積極的に公開していきたい。

文化庁事業の協力としては、飛鳥資料館においてキトラ古墳壁画を公開するなど、積極的に協力している。ボランティアについても、毎年多くのボランティアを受け入れ、22 年度は平城遷都 1300 年記念事業のツアーガイド 73 名を研究所のボランティアとして受け入れ、講義、実習等の研修を行うなど、登録ボランティア数の維持及

びガイド技術の熟達の促進等積極的に支援している。

主な実績
・黒田記念館・平城宮跡資料館・藤原宮跡資料室・飛鳥資料館の展示公開
・平城宮跡における解説ボランティア事業の運営と支援
・飛鳥資料館において、春期特別展示「キトラ古墳壁画四神玄武」等を開催
・朱雀門の解説ボランティアをしたいと申し出のあった地元ＮＰＯ法人へ活動機会を提供
・平城宮跡における発掘調査を速報展「平城宮東方官衙の調査」（平城宮跡資料館）等で公開
・飛鳥資料館において、春期特別展示「キトラ古墳壁画十二支―子・丑・寅―」等を開催
・平城遷都１３００年記念事業に向け、解説ボランティアの専門研修、「続日本紀」読書会等の実施
・飛鳥資料館において、特別展示「キトラ古墳壁画四神－青龍白虎－」等を開催
・平城遷都 1300 年記念事業に併せ平城宮跡資料館のリニューアルオープンに伴う、常設展示の大幅展示替え
・平城遷都 1300 年記念事業終了後、同事業のツアーガイド（ボランティア）73 名を新たに研究所のボランティアとして受け入れ研修を実施
・飛鳥資料館において、特別展示「キトラ古墳壁画四神」等を開催

【研究公開施設入館者数】（人）

	１８年度	１９年度	２０年度	２１年度	２２年度
黒田記念館	20,975	13,707	19,038	20,345	18,458
平城宮跡資料館	77,560	85,486	92,597	25,127	354,346
藤原宮跡資料室	4,457	6,885	4,423	4,341	4,815
飛鳥資料館	112,128	100,825	84,608	77,347	133,312

【ボランティア受入れ数】（人）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
奈良文化財研究所	144	137	131	128	187

４．情報発信機能の強化

ウェブサイトのアクセス件数は、各博物館とも目標を達成した。各博物館ともウェブサイトのリニューアルに取り組み、常に最新情報や豊富な情報量の提供に努めるとともにウェブサイト上に特別展の混雑情報を提供するなど、利用者の利便性の向上に努めた結果と考えられる。

収蔵品等のデジタル化については東博で前中期目標期間からの順調なデジタル化作業の進行によりポジフィルムからのデジタル化が終了に近づくなど、中期計画の設定にはそぐわなくなってきており、次期中期より目標設定方法を変更する。

ｅ国宝については補正予算もあり重要文化財を追加するなど充実を図った。

【ウェブサイトのアクセス年間平均件数】（件）

	１８年度	１９年度	２０年度	２１年度	２２年度
東京国立博物館	3,680,028	5,504,468	5,211,261	5,687,673	4,971,306
京都国立博物館	757,812	733,885	1,409,634	848,486	805,935
奈良国立博物館	1,249,608	1,402,834	1,230,774	2,630,035	3,121,270
九州国立博物館	7,118,540	5,943,616	5,699,860	7,459,518	4,708,102

【収蔵品等の画像デジタル化件数】（件）

	１８年度	１９年度	２０年度	２１年度	２２年度
東京国立博物館	4,472	124,996	139,000	775,300	8,639
京都国立博物館	6,169	8,047	6,478	5,603	4,594
奈良国立博物館	3,830	4,584	8,399	102,894	9,501
九州国立博物館	1,986	3,295	3,963	3,574	1,391

７　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

中期目標

地方公共団体や大学、研究機関とのネットワークや連携協力体制を構築し、機構が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を図り、我が国全体の文化財の収集・展示、調査・研究の質的向上に寄与すること。また、地方公共団体等の指導者層を主たる対象とする高度な研修事業や、若手研究者の育成に寄与するため実践的な連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成すること。

中期計画

７　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

我が国の文化財に関する調査・研究のナショナルセンターとして、これまでの調査・研究の成果を活かし、国・地方公共団体等に対する専門的・技術的な協力・助言を行うことにより、我が国全体の文化財の調査・研究の質的向上に寄与する。また、専門指導者層を対象とした研修等を行い、文化財保護に必要な人材を養成する。

（１）地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。

（２）文化財に関する高度な研究成果をもとに、地方公共団体等で中核となる文化財担当者に埋蔵文化財に関する研修及び保存科学に関する保存担当学芸員研修を実施する。なお、参加者等に対するアンケート調査を行い、80%以上の満足度が得られるようにする。

また、東京藝術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成に寄与する。

実績

１．地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制の構築

文化財研究所は文化財に関する研究や保存・修復、発掘調査等においてナショナルセンター機能を有しており、地方公共団体等へ文化財の調査に関する援助・助言を実施し、地域における文化財行政に協力することにより、我が国の文化財の保護に貢献している。

【指導・助言件数】（件）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
文化財研究所	496	534	747	482	498

２．中核的文化財担当者の研修・若手研究者の育成

地方公共団体の文化財担当者や博物館・美術館の保存担当学芸員、東京藝術大学・京都大学等の大学院学生を対象に、文化財の調査研究や保護について研修を実施することにより、将来的な文化財保護行政を担う人材の育成を図ることができていると考える。保存担当学芸員研修、埋蔵文化財担当者研修はともに満足度も高く、有意義な研修を行えている。

また、大学院教育の連携にも積極的に参画し、研究現場の新しい情報により、若手研究者の育成に寄与した。

【研修参加者数】（人）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
埋蔵文化財担当者研修	182	155	170	130	137
保存担当学芸員研修	30	32	29	31	33

※保存担当学芸員研修フォローアップ研修を除く

【研修　満足度】

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
埋蔵文化財研修	100%	100%	100%	100%	100%
保存担当学芸員研修	100%	100%	100%	97%	100%

【大学院教育の推進（連携大学院)】

19 年度

・東京芸術大学：システム保存学（文化財保存学演習、保存環境計画論、修復材料学特論等）

・京都大学大学院人間・環境学研究科：共生文明学（文化財調査法論、環境考古学論等）

・奈良女子大学大学院人間文化研究科：比較文化学（日本考古学の諸問題、歴史考古学特論等）

20 年度

・東京芸術大学：システム保存学（文化財保存学演習、保存環境計画論、修復材料学特論等）

・京都大学大学院人間・環境学研究科：共生文明学（遺跡調査法論、環境考古学論等）

・奈良女子大学大学院人間文化研究科：比較文化学（日本考古学の諸問題、歴史考古学特論等）

21 年度

・東京芸術大学：システム保存学（文化財保存学演習、保存環境計画論、修復材料学特論等）

・京都大学大学院人間・環境学研究科：共生文明学（遺跡調査法論、環境考古学論等）

・奈良女子大学大学院人間文化研究科：比較文化学（日本考古学の諸問題、歴史考古学特論等）

22 年度

・東京芸術大学：システム保存学（保存環境学、修復材料学等）

・京都大学大学院人間・環境学研究科：共生文明学（文化・地域環境論等）

・奈良女子大学大学院人間文化研究科：比較文化学（文化史論等）

Ⅲ　業務運営の効率化に関する事項

中期目標

法人統合のメリットも最大限に生かし、業務の充実かつ効率化を図るとともに、事務、事業、組織等の見直し、外部委託の推進等により、経費の合理化を図ること。

運営費交付金を充当して行う業務については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、特殊業務経費を除き、５年間で一般管理費は１５%以上、業務経費は５%以上の削減を図ること。

また、「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」（平成１８年法律第４７号）に基づき、平成１８年度以降の５年間において国家公務員に準じた人件費削減を行うとともに、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行う。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針２００６」（平成１８年７月７日閣議決定）に基づき、国家公務員の改革を踏まえ、人件費改革を平成２３年度まで継続すること。さらに、機構の業務運営に際しては、一般管理業務の本部への一元化、集約化等を図り、統合後５年間で、１９年度一般管理費（物件費）の１０%相当の経費を５年間で削減を図ること。

中期計画

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

１　職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上に考慮する。また、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、さらに、外部委託の推進等により、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き５年期間中一般管理費 15%以上、業務経費５%以上の業務の効率化を図る。さらに、法人統合のメリットも最大限に生かしつつ業務の効率化に務め、機構の業務運営に際しては、一般管理業務の本部への一元化、集約化等を図り、19 年度一般管理費（物件費）の 10%相当を統合後５年間で削減を図る。

具体的には下記の措置を講じる。

（１）共通的な事務の一元化による業務の効率化

（２）使用資源の減少

・省エネルギー（５年期間中１年に1.03%の減少）

・廃棄物減量化（一般廃棄物排出量を５年期間中５%減少）

・リサイクルの推進

（３）施設有効使用の推進

・施設の利用推進

（４）民間委託の推進

・一般管理部門を含めた組織・業務の見直しを行い、民間開放をさらに積極的に進める。

・館の警備・清掃業務について民間委託を推進する。

・来館者サービスを中心に業務の見直しを行い、民間委託を積極的進める。

（５）競争入札の推進

・契約業者の競合を一層推進することにより、経費の効率化を図る。

２　外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年１回以上事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。

３　機構が管理する情報の安全性向上のため、必要な措置をとる。

４「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」（平成18年法律第47号）に基づき、国家公務員に準じた人件費改革に取り組み、平成18年度からの５年間において、△５%以上の人件費削減を行う。また、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行う。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」（平成18年７月７日閣議決定）に基づき、国家公務員の改革を踏まえ、人件費改革を平成23年度まで継続する。ただし、今後の人事院勧告を踏まえた給与改定分については削減対象から除く。また、削減対象の「人件費」の範囲は、各年度中に支給した報酬（給与）、賞与、その他の手当の合計額とし、退職金、福利厚生費は含まない。その際、役職員の給与に関し、国家公務員の給与構造改革を踏まえた、地場賃金の適正な反映、年功的な給与上昇の抑制、勤務実績の給与等への反映等に取り組む。

実績

１．業務の効率化

一般管理費については、退職手当を除くと、中期目標期間中△１５%以上の削減目標に対して、△３８．８４%削減し、また、業務経費についても△５%以上の削減に対して、△５．０５%の削減とそれぞれ達成できたと評価できる。

省エネルギー（水道光熱費）については、年△１．０３%以上の目標に対して、特別展の入場者急増や原油価格等の高騰により達成できない年度もあったが、このような臨時要因を除くと、冷暖房の省エネ運転やより効率の良い空調機器への交換等により、概ね達成できたと評価できる。

公共サービス改革基本方針（19年12月）に基づき、民間委託の推進に関しては、東京国立博物館及び東京文化財研究所の施設･管理運営業務及び来館者応対等業務について、民間競争入札を実施し、民間委託を実施したところである。

随意契約については、契約監視委員会による審議を21年度契約分から実施しており、文化財の購入といった随意契約をせざるを得ない契約を除き、競争性のある契約への移行を進め、契約総数に占める随意契約の契約件数及び金額共に減少させており、引き続き契約の適正化にむけて見直しを進めていく。

契約の公表については、国立文化財機構契約情報公表要項に基づき、20年4月1日以降の競争契約及び随意契約に関する情報を当機構WEBサイトに公開し、公表に努めている。

自己収入については、20 年度に入場料収入（共催展を除く）及びその他収入について、１．１６%の増大、寄附金件数を２２６件及び科学研究費補助金件数７６件という目標を設定し、２１･２２年度ともに達成した。

業務の一元化による業務の効率化については、給与システム･会計システムの導入やグループウェアの統一化による業務の効率化を図ったところである。

【一般管理費の削減状況】

	実績	削減割合
一般管理経費		
17年度	2,662,291千円	－
22年度	1,628,154千円	△38.84%

・17 年度は、国立博物館と文化財研究所の合計額。
・一般管理経費の決算報告書決算額（退職手当を除く）。
17 年度：2,794,634 千円－132,343 千円（退職手当）＝2,662,291 千円
22 年度：1,722,647 千円－ 94,493 千円（退職手当）＝1,628,154 千円

【事業費の削減状況】

	実績	削減割合
業務経費		
17 年度	8,244,052 千円	－
22 年度	7,827,597 千円	△5.05%

・17 年度は、国立博物館と文化財研究所の合計額。
・業務経費の決算報告書決算額（退職手当・臨時要因を除く）。
17 年度：
9,508,168 千円－165,462 千円（退職手当）－1,068,666 千円（臨時要因（前年度からの繰越））－29,988 千円（臨時要因（デジタルアーカイブ経費））＝8,244,052 千円

22 年度：
9,287,450 千円－130,215 千円（退職手当）－1,179,193 千円（臨時要因（前年度からの繰越））－6,437 千円（臨時要因（京都国立博物館北収蔵庫収蔵品運搬等））－144,008 千円（臨時要因（東京文化財研究所研究機器整備））＝7,827,597 千円

【光熱水料】

光熱水料金　（単位：千円）

事項	17 年度	22 年度	差額
電気料	432,382	350,947	△81,435
水道料	88,109	79,777	△8,332
ガス料	101,112	※90,428	△10,684
計	621,603	521,152	△100,451 （17 年度比　△16.2%）

※２２年度のガス料は、臨時要因を考慮した使用料である。
・光熱水料について、平成１７年度比△１６．２%と目標を達成することができた。

（１）平成２２年度のガス料の臨時要因内容　（単位：千円）

事項	21 年度	22 年度	差額
ガス料（※1）	92,510	98,213	5,703

※ガスは、使用量ベースでは減少したが、原料高騰による単価上昇により使用料金ベースで増額となった。

（※1）ガス使用料

事項	21 年度(㎥)	22 年度(㎥)	差引(㎥)	単価影響額(千円)
ガス使用料	1,521,140	1,475,110	△46,030	7,785

（２）臨時要因を考慮したガス料金　（単位：千円）

事項	21 年度	22 年度	差額
ガス料	92,510	90,428	△2,082

※ガス単価上昇等を勘案して算定。

廃棄物排出量

事項	18 年度	22 年度	増減
一般廃棄物	244,997 kg	※223,207 kg	△21.790 kg （１８年度比 △8.9%）

※２２年度の排出量は、臨時要因を考慮した排出量である。(273,407－50,200＝223,207)
・廃棄物については、平成２２年度末で平成１８年度比△８．９％となっており、平成２３年度までの５年間で５％削減する目標は、順調に達成してきている。

・平成２２年度 一般廃棄物増加の臨時要因内容　（単位：kg）

施設	内容	排出量
奈良国立博物館	西新館耐震改修工事等に伴う増加	47,500
奈良文化財研究所	平城遷都１３００年祭関連行事に伴う増加	2,700
	計	50,200

【施設の有効利用件数（有償利用件数）】

年度	合計	東博	京博	奈良博	九博	東文研	奈文研
18	1,415 件	751 件	101 件	304 件	259 件	―	―
	(554 件)	(233 件)	(34 件)	(199 件)	(88 件)	―	―
19	3,358 件	885 件	56 件	122 件	188 件	266 件	1,841 件
	(541 件)	(350 件)	(30 件)	(18 件)	(28 件)	(40 件)	(75 件)
20	3,127 件	574 件	57 件	84 件	193 件	140 件	2,079 件
	(427 件)	(238 件)	(29 件)	(23 件)	(45 件)	(21 件)	(71 件)
21	2,074 件	341 件	35 件	59 件	250 件	178 件	1,211 件
	(431 件)	(262 件)	(26 件)	(21 件)	(69 件)	(13 件)	(40 件)
22	2,749 件	538 件	59 件	146 件	321 件	196 件	1,489 件
	(524 件)	(256 件)	(44 件)	(31 件)	(76 件)	(12 件)	(105 件)

※上段：有効利用件数　下段：(有償利用件数)
※19 年度の統合後から研究所も実績をカウントした。

【固定資産の減損】
・平成 18 年度電話加入権について市場価格の著しい下落のため、国立博物館 4,914 千円のうち 2,344 千円、文化財研究所 5,104 千円のうち 2,424 千円の減損損失を計上。
・平成 20 年度京都国立博物館旧平常展示館閉館のため、102,356 千円の減損損失を計上。(旧平常展示館は平成 21 年に取壊し)

【民間委託の推進】
全ての施設において、電気設備保守業務、機械設備保守業務、昇降機設備保守業務、売札業務、各種事務補助作業、清掃業務、構内樹木等維持管理業務等について、民間委託を実施している。
博物館は、警備・展示室監視等業務の大部分を外部委託している。また、研究所は警備業務を外部委託している。
博物館の来館者サービスに関しては、インフォメーション業務、図書・写真資料を閲覧等の利用に供するサービス及び図書整理業務等について民間委託を実施している。
東京国立博物館・東京文化財研究所で施設管理・運営業務（展示等の企画運営は除く）については平成 21 年 10 月 1 日に民間競争入札により業務を実施済みであるが、さらに平成 22 年 4 月 1 日から東京国立博物館では展示場における来館者応対等業務についても民間競争入札による業務を実施した。

【契約に係る規程類の整備及び運用状況】
（１）契約に係る規程類
①独立行政法人国立文化財機構会計規程
②独立行政法人国立文化財機構会計規程の特例を定める規程
③独立行政法人国立文化財機構契約事務取扱細則
④独立行政法人国立文化財機構契約情報公表要項
⑤契約情報公表に必要な事項に関する取扱
⑥独立行政法人国立文化財機構修理契約委員会要項
⑦独立行政法人国立文化財機構契約監視委員会要項

⑧調査の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式
⑨研究開発の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式
⑩広報の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式
⑪独立行政法人国立文化財機構における「企画競争・公募」ならびに「総合評価落札方式」に関するマニュアルについて

【契約監視委員会の設置】
（１）設置年度　平成２１年度
（２）実施回数
　　平成２１年度　２回、平成２２年度　２回

【随意契約等見直し計画の実績と具体的取組】

	①平成 20 年度実績		②見直し計画（H22 年 4 月公表）		③平成 22 年度実績		②と③の比較増減（見直し計画の進捗状況）	
	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）
競争性のある契約	164	1,968,416	235	2,334,578	210	2,099,703	△25	△234,875
競争入札	142	1,718,996	199	2,009,789	158	1,816,224	△41	△193,565
企画競争、公募等	22	249,420	36	324,789	52	283,479	16	△41,310
競争性のない随意契約	152	1,469,766	81	1,103,603	116	2,165,608	35	1,062,005
合計	316	3,438,181	316	3,438,181	326	4,265,311	10	827,130

【一者応札・応募の状況】

	①平成 20 年度実績		②平成 22 年度実績		①と②の比較増減	
	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）
競争性のある契約	164	1,968,416	217	2,144,321	53	175,905
うち、一者応札・応募となった契約	65	738,860	87	783,429	22	44,569
一般競争契約	55	531,498	47	581,699	△8	50,201
指名競争契約	0	0	0	0	0	0
企画競争	4	61,445	23	86,212	19	24,767
公募	6	145,917	10	70,900	4	△75,017
不落随意契約	0	0	7	44,618	7	44,618

２．外部評価等の実施

外部評価については博物館と研究所でそれぞれ別個に行ってきた評価の統一を図り、「自己点検評価」を明確に位置づけ、評価システムを明確化することができた。

職員の研修については職員の資質の向上と能力開発の推進を図るため、本部事務局及び各施設において新任職員研修を始め、各種研修等を実施した。

コンプライアンス体制の整備に関しては、整備された規程等を踏まえ、継続的に対処し透明性の確保に努めている。

（１）事業評価
　毎年実施
　・実績報告書作成時の自己点検評価の実施（年１回）
　・外部評価委員会の開催及び外部評価報告の実施

・文部科学省独立行政法人評価委員会国立文化財機構部会による評価
・総務省独立行政法人評価委員会による評価
・定期監事監査（業務・会計）（年１回）及び各施設の臨時監査
・会計監査人による財務諸表に関する監査

（２）職員の意識改革

・東京国立博物館では18年度に実施した業務改善プロジェクトの結果を踏まえ､20年４月に組織改革を実施した。
・19年度に運営改善コンクールを実施し（39件の応募中入選４件）、職員の運営の向上、職員の意識改善を図り、入選提案に対するフォローアップを毎年実施した。
・東京国立博物館では「独立行政法人国立文化財機構保有個人情報管理規程」に基づき実施された保有個人情報の管理状況監査における監事からの指示より、個人情報を扱う業務について、確実な取扱いを行うための再点検を行った。
・職員の資質の向上と能力開発の推進を図るため、本部事務局及び各施設に次のような研修等を実施した。

主　催	研　修　等（２２年度実施分）
本部事務局・ 東京国立博物館	新任職員研修、接遇研修、個人情報保護講演会、産業医による講習会、 接遇（顧客対応）研修、施設系職員研修、ハラスメントに関する講演会及び研修会、防災訓練
京都国立博物館	衛生管理講習会、普通救命講習会、マナー講習会、クレーム講習会、初期消火活動講習
奈良国立博物館	防災訓練、産業医による講習会、セクシュアルハラスメントに関する講習会
九州国立博物館	研究費の管理・監査体制及び会計手続き説明会、防災訓練、ハラスメント防止研修、産業医による講話
東京文化財研究所	個人情報保護講演会※1、産業医による講習会※2、消防訓練およびＡＥＤ操作講習会（※1、2は東博との共催）
奈良文化財研究所	新人研修、産業医による講習会２回、消防訓練

（３）コンプライアンス体制の維持

・競争的資金による公的研究費の管理体制（不正防止計画管理部署の設置、監査体制の整備、検収窓口の設置等）について規則を整備した。
・研究員の行動規範について規則を整備した。
・情報システム管理規程を制定し、情報セキュリティ体制整備を行った。
・随意契約見直し計画の制定、実施及び随意契約情報、競争契約情報の公開を行った。
・いままで各施設での制定等で運用していた「文化財購入に関する手続き」等の規定について、機構全体として透明性を図る観点から、統一した規定として整備した。
・「独立行政法人国立文化財機構職員倫理規程」及び「独立行政法人国立文化財機構役員の倫理に関する取り扱い」等を策定した。
・22 年度は「独立行政法人国立文化財機構保有個人情報管理規程」に基づき、本部事務局及び各施設における保有個人情報の管理状況について保有個人情報管理監査を行った。

（４）内部統制の整備

・研究職員の採用については公募により、委員会方式で選考し、収蔵品購入については外部委員による委員会の意見を聞いて、購入の是非、価格を決定するなど、体制を整備し、適正な執行に努めているところであるが、パワハラに関する規則等が未整備であったので、ハラスメント全般に関する規則として19年度に制定した。
・「独立行政法人の契約状況の点検・見直しについて」（平成21年11月17日閣議決定）に基づき、「独立行政法人国立文化財機構契約監視委員会要項」を制定し、外部委員も含めた契約監視委員会を設置して、随意契約の点検等を行っている。
・本部及び各施設において内部監査を実施し、随意契約の見直し状況及び一者応札の改善方策を含めて監査を行った。
・22 年度は「独立行政法人国立文化財機構保有個人情報管理規程」に基づき、本部事務局及び各施設における保有個人情報の管理状況について保有個人情報管理監査を行った。

３．情報の安全向上

・情報システム管理規程を制定し、情報セキュリティ体制の整備を行った。
・情報システム点検・評価要項に基づき、各施設において情報システム点検の実施を検討し、情報セキュリティの向上に努めた。
・20 年度に作成した知的財産管理体制報告書に基づき、知的財産検討ワーキンググループを設置し、規定整備のための検討を図った。
・保有個人情報管理監査を行い、個人情報管理のより一層の適正化を図った。
・国立文化財機構規程集の全文を PDF 化し、グループウェア上で機構内全職員に公開し、随時最新版へのアップデートを行っている。
・機構ウェブサイトのリニューアルとともに、サーバーのハード・ソフトを最新版に入れ替えることで、セキュリティの向上を図った。

４．人件費の削減、給与体系の見直し

・現業職職員の定年退職後不補充による人件費抑制を行った。
・人事給与統合システムが 20 年４月から稼働し、機構全体として統一的な処理ができるようになった。さらに人件費の削減に向けたシミュレーション等により人件費に関する計画を円滑に企画・立案することができた。
・地域手当について、22 年度において 21 年度の率を据え置く方針が決定された。
・「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」（平成１８年法律第４７号）に基づき、国家公務員に準じた人件費改革に取り組み、削減目標の達成に対しては順調に進捗し、平成１８年度からの５年間において、△５％以上の人件費削減を実現した。

【総人件費改革への対応】

	人件費決算額 （Ａ分類実績ベース）	対 17 年度 人件費削減率	対 17 年度 人件費削減率 （補正値）
17 年度実績	2,878,750 千円	－	－
18 年度実績	2,789,360 千円	△3.11%	△3.11%
19 年度実績	2,773,688 千円	△3.65%	△4.35%
20 年度実績	2,745,389 千円	△4.63%	△5.33%
21 年度実績	2,688,829 千円	△6.60%	△4.90%
22 年度実績	2,619,439 千円	△9.01%	△5.81%

※人件費削減実績表中の「補正値」とは、「行政改革の重要方針」（平成 17 年 12 月 24 日閣議決定）による人事院勧告を踏まえた官民の給与較差に基づく給与改定分を除いた削減率である。なお、平成 18 年、平成 19 年、平成 20 年、平成 21 年、平成 22 年の行政職(一)職員の年間平均給与の増減率はそれぞれ 0%、0.7%、0%、△2.4%、△1.5%である。

【ラスパイレス指数（中期目標期間実績）】

	ラスパイレス指数
18 年度（国立博物館）	98.5
18 年度（文化財研究所）	93.3
19 年度	94.2
20 年度	95.8
21 年度	96.9
22 年度	96.9

※平成 18 年度は統合前のため、国立博物館と文化財研究所の各々を記載している。

ラスパイレス指数は中期目標期間中、国を毎年度下回っており、給与水準は適正であり、引き続き給与水準の適正化に努める。

Ⅳ　財務内容の改善に関する事項

中期目標

Ⅳ　財務内容の改善に関する事項

税制措置も活用した寄付金や自己収入の確保、予算の効率的な執行等に努め、適切な財務内容の実現を図ること。

１　自己収入の増加

税制措置も活用した寄付金などの外部資金、施設使用料等の財源の多様化を図り、法人全体として積極的に自己収入の増加に努めること。

また、自己収入額の取り扱いにおいては、各事業年度に計画的な収支計画を作成し、当該収支計画による運営に努めること。

２　固定的経費の節減

管理業務の節減を行うとともに、効率的な施設運営を行うこと等により、固定的経費の節減を図ること。

中期計画

Ⅲ予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営に努める。また、収入面に関しては、実績を勘案しつつ、税制措置も活用した寄付金などの外部資金、施設使用料等の財源の多様化を図り、法人全体として積極的に自己収入の増加に努めることにより、計画的な収支計画による運営を図る。

１　予算（中期計画の予算）

２　収支計画

３　資金計画

Ⅳ　短期借入金の限度額

短期借入金の限度額は、16 億円

短期借入金が想定される理由は、運営費交付金の受入れに遅延が生じた場合である。

Ⅴ　重要な財産の処分等に関する計画

①　京都国立博物館新館の取り壊し予定。

②　奈良文化財研究所本館改築計画の実施に伴い取り壊し予定。

Ⅵ　剰余金の使途

決算において、剰余金が発生した時は、次の購入等に充てる。

１　文化財の購入・修理

２　調査・研究、出版事業の充実

３　展覧会の充実

４　入館者サービス、情報提供の質的向上

５　国際協力

６　老朽化対応のための施設設備の充実

実績

１．予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

収入に関しては、盛況な展覧会が開催できたこと、及び受託収入・寄附金等の獲得に努めたことにより、予算を上回る自己収入を確保することができた。

支出に関しては、経費等の縮減・効率化目標の達成に向けて、一般管理費については、固定経費を中心に節減に努め予算を下回ることができたが、事業費については、事業の効率化を通じて経費の削減に努める一方、展覧事業費において展覧会等が盛況であったことによる開催経費の増加、及び収蔵品を積極的に購入したことにより、決算額が多額となっている。

【外部資金の獲得状況】

	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
科学研究費補助金	289,770 千円	327,239 千円	298,959 千円	267,146 千円
研究助成金	39,395 千円	30,192 千円	30,241 千円	21,840 千円
寄附金	147,854 千円	109,630 千円	134,934 千円	136,828 千円
合計	477,019 千円	467,061 千円	464,134 千円	425,814 千円

・科学研究費補助金については、研究件数は各年度維持しているが、研究金額が少ない課題が多いため、金額が減少している。
・寄附金は、不況下の影響を受けながらも、各年度一億円を超える寄附をいただいている。

【外部資金の活用及び自己収入の増大】

〇定量的な目標の設定（21 年度設定）

20 年度に外部資金の活用及び自己収入の増大に向けた定量的な目標を策定し、21,22 年度と達成することができた。

なお、21 年度の事業仕分けにおいて文化財収集（展覧事業）について「自己収入の拡大、コスト縮減といった努力を徹底し、国からの負担を増やさない形での拡充を図る。」とされたことから、今後も継続して自己収入の増大に努力していく。

定量的目標：

1. 入場料収入（共催展を除く）及びその他収入について、1.16%の増加を目指す。
下表のとおり、21,22 年度とも、目標を上回ることができた。

（単位：千円）

	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
自己収入基準額	―	864,089	874,112	884,252
自己収入目標額	①864,089	②874,112 (①×1.16%増)	③884,252 (②×1.16%増)	894,510 (③×1.16%増)
自己収入実績額	―	―	949,900	1,002,524
増加率	―	―	8.67%	13.38%

※受託研究・受託事業を除く。
※自己収入目標額は、前年度の目標額から 1.16%増加した場合の額。ただし平成 19 年度自己収入目標額は、平成 19 年度自己収入実績額から京都国立博物館平常展示館建替工事による影響額等を除いて算定。
※増加率は、自己収入基準額（前年度の目標額）に対する増加率。

2. 寄附金 226 件及び科学研究費補助金 76 件の確保を目指す。
下表のとおり、寄附金及び科学研究費補助金ともに目標件数を上回ることができた。

	目標値	21 年度	22 年度
寄附金	226 件	290 件	314 件
科学研究費補助金	76 件	86 件	81 件

【中期目標期間に係る予算、収支計画及び資金計画に対する実績】

（１）予算（18 年度～22 年度）

（単位：百万円）

区　　分	中期計画予算	決算額	差引増減額
収　　入			
運営費交付金	43,759	43,461	△298
施設整備費補助金	22,707	9,444	△13,263
文化芸術情報電子化推進費補助金	700	684	△16
展示事業等収入	5,545	8,363	2,818

受託収入	130	2,710	2,580
その他寄附金等	0	629	629
計	72,841	65,291	△7,550
支　　出			
管理経費	12,109	10,102	△2,007
うち人件費	4,164	4,416	252
うち一般管理費	7,945	5,686	△2,259
業務経費	37,195	41,371	4,176
うち人件費	13,216	12,366	△850
うち調査研究事業費	7,240	7,306	66
うち情報公開事業費	803	768	△35
うち研修事業費	113	103	△10
うち国際研究協力事業費	1,573	1,214	△359
うち展示出版事業費	818	684	△134
うち展覧事業費	12,807	18,566	5,759
うち教育普及事業費	625	364	△261
施設整備費	22,707	10,594	△12,113
文化芸術情報電子化推進費	700	684	△16
受託事業費	130	2,577	2,447
その他寄附金等	0	14	14
計	72,841	65,342	△7,499

・施設整備費補助金・施設整備費は、京都国立博物館平常展示館建替工事の一部繰越し、奈良文化財研究所本館改修工事の未着手のため決算額が減少している。
・展示事業等収入は、展覧会等が盛況で入場料収入が多かったこと等により決算額が増加している。
・受託収入・受託事業費は当初予定外の受託事業が多かったことによるものである。
・その他寄附金等は、寄附の獲得に努めたため決算額が多額となっている。
・一般管理費は、管理業務の見直し、効率化等により決算額が減少している。
・展覧事業費は、展覧会等が盛況であったことにより開催経費が増加したこと及び収蔵品を積極的に購入したことにより決算額が多額となっている。

（２）収支計画

（単位：百万円）

区　　分	中期計画予算	決算額	差引増減額
費用の部	42,667	47,499	4,832
経常経費	42,667	47,499	4,832
管理経費	9,898	9,937	39
うち人件費	4,164	4,840	676
うち一般管理費	5,734	5,097	△637
事業経費	30,522	32,397	1,875
うち人件費	13,216	14,747	1,531
うち調査研究事業費	5,225	5,354	129
うち情報公開事業費	580	655	75
うち研修事業費	82	92	10
うち国際研究協力事業費	1,135	1,150	15
うち展示出版事業費	590	642	52
うち展覧事業費	9,243	9,398	155
うち教育普及事業費	451	353	△98
その他の費用	0	6	6
受託事業費	130	2,518	2,388
減価償却費	2,117	2,127	10
その他の費用	0	520	520
収益の部	42,667	48,831	6,164
運営費交付金収益	34,875	33,834	△1,041

展示事業等の収入	5,545	8,088	2,543
受託収入	130	2,860	2,730
資産見返運営費交付金戻入等	2,117	2,151	34
寄附金収益	0	427	427
施設費収益	0	499	499
その他補助金収益	0	474	474
その他の収益	0	498	498
純利益	―	1,282	―
前中期目標期間繰越積立金取崩	―	13	―
総利益	―	1,295	―

・純利益は、平成 19 年度文化財研究所が国立博物館との統合のための清算を行ったため費用・収益の差額より 50 百万円減少している。

（３）資金計画

（単位：百万円）

区　　分	中期計画予算	決算額	差引増減額
資金支出	72,841	70,465	△2,376
業務活動による支出	41,250	45,602	4,352
投資活動による支出	31,591	21,200	△10,391
その他の支出	0	82	82
次期中期目標期間への繰越金	0	3,581	3,581
資金収入	72,841	70,465	△2,376
業務活動による収入	50,134	57,479	7,345
運営費交付金による収入	43,759	43,461	△298
展示事業等による収入	5,545	7,575	2,030
受託収入	130	2,723	2,593
文化芸術情報電子化推進費補助金による収入	700	684	△16
その他の収入	0	3,036	3,036
投資活動による収入	22,707	9,448	△13,259
施設整備費補助金等による収入	22,707	9,448	△13,259
前期中期目標期間よりの繰越金	0	3,538	3,538

【当期総利益（当期総損失）とその発生要因】

・当中期目標期間の総利益は 1,295 百万円である。

・展示事業等収入予算額 5,545 百万円に対して、2,818 百万円超の 8,363 百万円の収入実績があったことによる。4 博物館で積極的に展覧会を開催したことによる入場料・刊行物売払等の収入増加、友の会・パスポート・キャンパスメンバーズにより会費を得たこと、建物等を積極的に部外者に貸与し利用料収入を得たこと、商用利用に収蔵品画像の貸出しを行い、使用料収入を得たこと等が原因である。

２．短期借入金

短期借入金については、中期目標期間中において必要とする案件はなかった。

３．重要な財産の処分

京都国立博物館では、平常展示館建替工事のため平成 21 年度に旧建物を取壊し、建替工事を進めている。

４．利益剰余金

・利益剰余金の発生理由：展覧会が盛況なことにより入場料収入が収入予算額を上回ったこと、及び自己収入により固定資産（収蔵品等）を購入したため見かけの利益が発生したこと等により生じている。

・利益剰余金の内訳：平成 18 年度 287,275 千円、平成 19 年度 413,922 千円、平成 20 年度 303,845 千円、平成 21 年度 147,504 千円、平成 22 年度 142,729 千円、前中期目標期間繰越積立金 9,025 千円。

・平成 22 年度末利益剰余金 1,304,300 千円については、次期中期目標期間繰越積立金相当額 653,432 千円を控除した 650,868 千円を国庫納付することとしている。

（単位：百万円）

区　　分	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
積立金（44 条 1 項）	0	287	701	1,005	1,152
当期未処分利益	287	414	304	147	143
前中期目標期間繰越積立金	3	17	14	11	9
合　　計	290	718	1,019	1,163	1,304

Ⅴ　その他業務運営に関する重要事項

中期目標

１　人事管理（定員管理、給与管理、意識改革等）、人事交流の適切な実施により、内部管理事務の改善を図ること。また、効率的かつ効果　的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用すること。

２　業務の目的・内容に適切に対応するため長期的視野に立った施設・設備の整備計画を作成し、整備をすること。

中期計画

Ⅶ　その他主務省令で定める業務運営に関する事項

１　人事計画に関する計画

（１）方針

①　国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討し、導入する。

②　調査研究の機動的実施など研究を効率的かつ効果的に実施するため、任期付研究員制度を導入する。

③　人事交流を促進するとともに、職員の資質向上を図るための研修機会の提供に努める。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。

（２）人員に係る指標

常勤職員については、その職員数の抑制を図る。

（参考１）

１）期初の常勤職員数　　367 人

２）期末の常勤職員の見込み　355 人

（参考２）中期目標期間中の人件費総額見込額　14,343 百万円

但し、上記の額は、役職員に対し支給する報酬（給与）、賞与、その他の手当の合計額であり、退職金、福利厚生費を含まない。

２　別紙のとおりの施設整備に関する計画に沿った整備を推進する。

実績

１．人事計画に関する計画

・平成 18 年度に任期付研究員の就業規則を整備し採用を行った。

・平成 19 年度に技術職員及び技能・労務職員について、当面対象とする職種を絞って機構独自で採用可能とする規程の整備を行い、22 年度までに計 9 名を採用した。

・平成 20 年度において、常勤の研究職員に準じた有期雇用職員の人事制度（アソシエイトフェロー）を新たに整備し、専門的事項の調査研究を行う研究職と高度な専門知識と経験等を有する専門職を対象として採用可能とし、

22 年度までに計 43 名を採用した。

【独自選考採用実績】（人）

	技術職員採用数	労務職員採用数	合計
平成 20 年度	1	1	2
平成 21 年度	3	0	3
平成 22 年度	1	3	4
合計	5	4	9

【アソシエイトフェロー採用実績】（人）

	採用数
平成 20 年度	4
平成 21 年度	22
平成 22 年度	17
合計	43

（参考）常勤の事務職員及び研究職員採用実績

（平成 20 年度より実施した独自選考採用実績もあわせて記載）

【常勤職員採用実績】（人）

	事務職員	研究職員	技能・労務職員	合計
平成 18 年度	1	8		9
平成 19 年度	2	8		10
平成 20 年度	3	17	2	22
平成 21 年度	4	14	3	21
平成 22 年度	1	13	4	18
合計	11	60	9	80

・人事交流の実績

事務系職員：

年度	本部・東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	合計（人）
18	14（東大、西美）	11（京大）	7（阪大、京大、阪教大、奈女大）	7（九大、東大）	7（東大、医科歯科大、千葉大）	9（京大、阪大、滋賀大、滋賀医科大）	55
19	18（東大、医科歯科大、西美、政研大）	11（京大）	9（阪大、京大、阪教大、奈女大）	7（九大、東大、九工大）	5（東大、医科歯科大、千葉大）	8（京大、阪大、滋賀大、滋賀医科大）	58
20	16（東大、西美、政研大）	10（京大、民博）	10（文化庁、阪大、京大、北九州高専）	8（九大、九工大、東大）	6（東大、医科歯科大）	7（京大、阪大、滋賀大、総地研）	57
21	18（文化庁、東大、東近美、政研大、京博）	13（京大、民博、奈良博、東博）	10（文化庁、阪大、京大、北九州高専、京博）	11（九大、九工大、本部）	8（東大、医科歯科大、東博、奈文研）	8（京大、阪大、滋賀大、総地研、奈女大）	68（8）
22	18（東大、東近美、政研大、京博）	14（京大、阪大、民博、奈文研、東博）	8（文化庁、阪大、京大、京博）	8（九大、本部）	5（医科歯科大、東博、奈文研）	11（京大、阪大、総地研、奈女大）	64（9）
合計	84	59	44	41	31	43	302（17）

※合計の（　）内の数字は、21 年度から機構内人事交流中の人数を含めた。

研究系職員：

平成 19 年度は文化庁への出向 13 名実施

平成 20 年度は文化庁への出向 13 名実施
平成 21 年度は文化庁から 8 名の受け入れ及び文化庁への出向 14 名実施
平成 22 年度は文化庁から 8 名の受け入れ及び文化庁への出向 14 名実施
※平成 21 年度より出向の受け入れを記載

・機構職員としての資質向上を図るため、新任職員や職員を対象とした各種研修を行った。
・その他、他機関で実施する研修にも積極的に参加した。（３１ページ参照）
平成 18 年度　3 件（新任職員研修会、接遇研修、研究職員研修会）
平成 19 年度　3 件（新任職員研修会、接遇研修、個人情報保護についての講演会）
平成 20 年度　4 件（新任職員研修会、接遇研修、個人情報保護についての講演会、ハラスメントに関する研修会）
平成 21 年度　6 件（新任職員研修会、接遇研修、個人情報保護についての講演会、施設系職員研修会、顧客対応研修会、ハラスメントに関する研修会）
平成 22 年度　6 件（新任職員研修会、接遇研修、個人情報保護についての講演会、施設系職員研修会、接遇研修会、ハラスメントに関する研修会）

２．施設整備に関する計画

施設整備に関する計画に沿った整備を推進した。　（単位：百万円）

施　設	事　項	金　額
東京国立博物館	東洋館耐震補強改修工事	２，７５４
	東洋館設備改修等工事	１，０９９
奈良国立博物館	西新館耐震補強改修工事	７０８
	西新館免震展示ケース設置工事	８２８
	仏教美術資料研究センター耐震補強改修工事	２２８
京都国立博物館	平常展示館建替工事	３，６６０

VI　評価

1．文部科学省評価委員会評価（平成22年度）

全体評価　　＜参考＞ 業務の質の向上：A　業務運営の効率化：A　財務内容の改善：A

①評価結果の総括

・第2期の中期計画の達成に向けて順調に進捗している。
・独立行政法人国立文化財機構の平成22年度に係る業務は、効率化を図りながら、各館・各研究所の特徴を活かしており、確実な成果をあげている。
・研究成果の公表・展示の工夫・展示表示の多言語化・学習ツールの開発など、国民全体に配慮された運営が行われてきており、また来館者の満足度や財務・人事などの経営改善を図る仕組みが整備されていることが高く評価できる。
・文化財に関する調査及び研究においては、ナショナルセンターとして多彩な先端的で時世にあった研究テーマが設定され、当該調査・研究が着実に 実施されるとともに、論文・学会発表・刊行物等を通じて、研究成果が適切に発信されており、我が国の文化財研究をリードしていると極めて高く評価できる。

②平成22年度の評価結果を踏まえた、事業計画及び業務運営等に関して取るべき方策（改善のポイント）

（1）事業計画に関する事項
・文化財の活用、調査研究の実績、保存に関する取組などは大きな成果があげられている。特に保存・修復に関する国際協力の比重が高まっており、保存・修復技術が国際的にも高い評価を得て、世界各地で活用されている。今後は、これらの事業自体の意義がより広く国民に理解されるよう、成果を国内外に情報発信することが必要である。
・情報のデジタル化や様々なコンテンツの開発と工夫がなされているが、一方では、情報メディアの多様化も進んでいることから、コンテンツ開発にも一層の充実を図り、より多くの国民のニーズに応えられるよう期待したい。
・講演会、ギャラリートークの参加者数の減少が見られるが、来館者を育てるための必須の教育普及活動であり、今後も一層の充実が望まれることから、テーマや内容について様々な可能性を検討すべきである。
（2）業務運営に関する事項
・業務運営については、指標・業務管理・人事、財務・資産管理のいずれも概ね適正である。経費・人員・エネルギー消費など効率化の削減目標は十分に達成されている。一方で、これ以上の削減は法人運営に致命的な影響をもたらしかねないこととなる。特に、常勤職員の削減については、「貴重な国民的財産である文化財の保存活用を図る」という本来業務の質を守る体制を将来的にわたって維持できるよう配慮すべきである。
・ナショナルセンターとしての充実した活動のために、外部資金の導入については、今後とも更に努力を望む。
（3）その他
特になし

③特記事項

・事業仕分けや「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」等については、着実に対応を進めている。
・東日本大震災による影響を最小限に抑え得たことは、非常に評価できる。東京国立博物館以外の各館・各研究所においても、未着手分の耐震補強工事等の促進が期待される。

全体－1

文部科学省独立行政法人評価委員会
文化分科会　国立文化財機構部会　名簿　　（五十音順）

（委　員）
○ 嶋田　実名子　　花王株式会社コーポレートコミュニケーション部門理事

（臨時委員）
上原　真人　　京都大学大学院文学研究科教授
内田　篤呉　　（財）エム・オー・エー美術文化財団MOA美術館理事・副館長・学芸部長
佐野　みどり　　学習院大学文学部哲学科教授
竹本　幹夫　　早稲田大学文学学術院教授・演劇博物館館長
永村　眞　　日本女子大学文学部教授
宮島　博和　　公認会計士

○：部会長

独立行政法人国立文化財機構の平成22年度に係る業務の実績に関する評価

項目別評価総表

項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※						項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※					
	18年度		19年度	20年度	21年度	22年度		18年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
	博物館	研究所						博物館	研究所				
（大項目名）国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A	A	A	A	A	（中項目名）文化財の保存・修復に関する国際協力の推進	－	A	S	A	A	A
（中項目名）歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承	A	－	A	A	A	A	（小項目名）国際協力に関する研究基盤の整備	－	A	S	A	A	A
（小項目名）収蔵品の収集	A	－	A	A	A	A	（小項目名）保存修復に関する技術移転の推進	－	A	S	A	A	A
（小項目名）収蔵品の管理、保存	A	－	B	A	A	A	（中項目名）情報発信機能の強化	－	A	A	A	A	A
（小項目名）収蔵品の修理、保存処理	A	－	A	A	A	A	（小項目名）情報基盤の整備充実	－	A	A	A	A	A
（小項目名）収集、保管のための調査研究	A	－	－	―	―	―	（小項目名）調査研究成果の公開・提供	－	A	A	A	A	A
（中項目名）文化財を活用した歴史・ 伝統文化の国内外への発信	B	－	A	A	A	A	（小項目名）公開施設の運用	－	A	A	A	A	S
（小項目名）展示の充実	S	－	S	S	S	A	（小項目名）情報発信機能の強化	B	－	A	A	S	A
（小項目名）歴史・伝統文化の理解促進	A	－	A	A	A	B	（中項目名）地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上	－	A	A	A	A	A
（小項目名）展示、教育普及活動などの博物館活動のための調査研究	A	－	－	―	―	―	（小項目名）地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制の構築	－	A	A	A	A	A
（小項目名）快適な観覧環境の提供	B	－	A	B	A	A	（小項目名）中核的文化財担当者の研修・若手研者の育成	－	A	S	A	A	A
（中項目名）我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与	A	－	A	A	A	A	（大項目名）業務の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A	A	A	A	A
（小項目名）調査研究成果の発信	－	－	A	A	A	A	（小項目名）業務の効率化	A	(A)	A	B	A	A
（小項目名）海外研究者の招聘	－	－	A	A	A	A	（小項目名）外部評価等の実施	A	(A)	B	A	A	A
（小項目名）博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムの検討、実施	－	－	A	A	A	A	（小項目名）情報の安全向上	A	－	A	A	A	A
（小項目名）収蔵品貸与の推進	－	－	A	A	A	A	（小項目名）人件費の削減	A	(A)	A	B	A	A
（小項目名）公私立博物館・美術館等に対する援助・助言	－	－	A	A	A	A	（大項目名）財務・人事	A	A	A	A	A	A
（中項目名）文化財に関する調査及び研究の推進	－	A	A	A	A	A	（小項目名）予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画	A	A	A	A	A	A
（小項目名）調査研究の目的、内容の適切性	－	S	A	A	A	A	（小項目名）人事計画に関する計画	A	A	A	A	A	A
（小項目名）調査研究の実施状況	－	S	A	S	A	A							
（小項目名）調査研究の成果の状況	－	A	A	A	A	A							

※当該中期目標期間の初年度から経年変化を記載。

※「－」は当該年度では該当がないことを、「／」は終了した事業を表す。

備考（法人の業務・マネジメントに係る意見募集結果の評価への反映に対する説明等）
本法人の業務・マネジメントに係る意見募集を実施した結果、意見は寄せられなかった。

【参考資料1】予算、収支計画及び資金計画に対する実績の経年比較（過去5年分を記載）

単位：百万円）

区　分	19年度	20年度	21年度	22年度		区　分	19年度	20年度	21年度	22年度	
収入						支出					
運営費交付金	9,042	8,771	8,367	8,192		運営事業費	10,341	9,779	10,454	11,010	
施設整備費補助金	148	1,872	2,331	5,094		人件費	3,483	3,507	3,244	3,162	
文化芸術情報電子化推進費補助金	－	－	548	136		一般管理費	1,191	1,173	1,066	932	
展示事業等収入	1,558	1,786	1,898	1,580		業務経費	5,667	5,098	6,144	6,916	
受託収入	527	514	525	518		調査研究事業費	1,261	1,448	1,473	1,633	
その他寄附金等	149	127	139	143		情報公開事業費	166	146	144	127	
						研修事業費	22	22	17	18	
						国際研究協力事業費	249	229	223	227	
						展示出版事業費	119	112	163	150	
						展覧事業費	3,780	3,079	4,050	4,672	
						教育普及事業費	70	62	74	89	
						施設整備費	148	2,106	2,212	5,094	
						文化芸術情報電子化推進費	－	－	542	142	
						受託事業費	486	503	492	507	
計	11,424	13,070	13,808	15,663		計	10,975	12,388	13,700	16,753	

備考（指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等）
施設整備費補助金の増は、建物改修工事等の増によるものである。
文化芸術情報電子化推進費補助金は、平成21年度補正予算によるものである。
展示事業等収入の減は、平成21年度特別展の入場者増の反動減によるものである。
展覧事業費の増は、前年度からの繰越による収蔵品購入によるものである。

単位：百万円）

区　分	19年度	20年度	21年度	22年度		区　分	19年度	20年度	21年度	22年度	
費用						収益					
経常経費	9,095	9,451	9,700	9,703		運営費交付金収益	7,010	6,861	6,364	6,792	
人件費	3,956	4,025	3,842	3,804		受託収入	529	562	554	586	
一般管理費	1,035	1,153	1,128	852		入場料収入	1,081	1,160	1,322	892	
業務経費	4,104	4,273	4,730	5,047		展示事業等附帯収入	310	423	370	383	
調査研究業務費	886	1,026	1,393	1,192		財産利用収入	162	150	159	154	
情報公開業務費	141	130	124	122		寄附金収益	57	80	123	122	
研修業務費	20	20	17	17		施設費収益	7	132	143	216	
国際研究協力業務費	248	225	222	225		その他補助金収益	－	－	376	98	
展示出版業務費	108	114	179	144		資産見返負債戻入	359	398	418	517	
展覧業務費	1,768	1,819	1,894	2,299		雑益等	3	5	18	84	
教育普及業務費	70	62	68	87		臨時利益	－	－	347	11	
受託業務費	483	474	484	505							
減価償却費	378	400	346	451							
雑損等	2	3	3	5							
臨時損失	14	20	349	12							
計	9,109	9,471	10,049	9,715		計	9,518	9,771	10,194	9,855	
						純利益	409	300	145	141	
						目的積立金取崩額	5	4	3	2	
						総利益	414	304	148	143	

備考（指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等）
展覧業務費の増は、東京国立博物館総合文化展リニューアルによるものである。
入場料収入の減は、平成21年度特別展の入場者増の反動減によるものである。
受託収入の増は、アジア太平洋無形文化遺産研究センター関連業務によるものである。
施設費収益の増は、建物の竣工によるものである。

単位：百万円）

区　分	19年度	20年度	21年度	22年度	区　分	19年度	20年度	21年度	22年度
資金支出					資金収入				
業務活動による支出	9,107	9,114	9,034	9,254	業務活動による収入	11,719	11,558	11,894	10,665
投資活動による支出	2,575	3,595	4,345	7,083	運営費交付金による収入	9,042	8,771	8,367	8,192
財務活動による支出	20	16	20	7	展示事業等による収入	2,677	2,787	3,527	2,473
翌年度への繰越金	2,490	3,343	4,158	3,581	投資活動による収入	3	2,020	2,320	5,102
					施設費による収入	0	2,020	2,320	5,102
					固定資産売却による収入	3	0	0	0
					財務活動による収入	0	0	0	0
					前年度よりの繰越金	2,470	2,490	3,343	4,158
計	14,192	16,068	17,557	19,925	計	14,192	16,068	17,557	19,925

備考（指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等）
投資活動による支出の増は、施設整備費補助金によるものである。
展示事業等による収入の減は、平成21年度特別展入場者増の反動減によるものである。

【参考資料2】貸借対照表の経年比較（過去5年分を記載）　　単位：百万円）

区　分	19年度	20年度	21年度	22年度	区　分	19年度	20年度	21年度	22年度
資産					負債				
流動資産					流動負債				
現金・預金	2,490	3,343	4,158	3,581	運営費交付金債務	752	1,350	1,197	0
未収金	553	664	601	637	預り施設費	－	－	0	0
その他	71	36	32	526	預りその他補助金	－	－	6	0
固定資産					預り寄附金	113	152	144	86
有形固定資産					未払金	1,805	1,787	2,448	3,635
建物	45,827	43,830	42,143	45,582	未払費用	47	51	59	59
収蔵品	95,898	97,362	99,521	101,359	前受金	1	1	－	0
土地	44,411	44,411	44,411	44,411	預り金	122	146	229	101
その他	4,686	5,666	6,961	6,383	その他流動負債	2	2	4	5
無形固定資産									
ソフトウェア	105	116	144	165	固定負債				
電話加入権	5	5	5	5	資産見返負債				
投資その他資産	1	1	1	1	資産見返運営費交付金	2,111	2,030	2,038	2,429
					資産見返寄附金	42	73	106	177
					資産見返物品受贈額	127	113	99	90
					資産見返その他補助金	－	－	162	174
					建設仮勘定見返運営費交付金	123	123	126	143
					建設仮勘定見返施設費	116	1,526	2,963	2,383
					その他の固定負債				
					長期未払金	33	23	39	34
					負債合計	5,394	7,377	9,620	9,316
					純資産				
					資本金	104,714	104,714	104,714	104,714
					資本剰余金	83,220	82,324	82,479	87,316
					利益剰余金	719	1,019	1,164	1,304
					（うち当期未処分利益）	414	304	148	143
					純資産合計	188,653	188,057	188,357	193,334
資産合計	194,047	195,434	197,977	202,650	負債純資産合計	194,047	195,434	197,977	202,650

備考（指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等）
未払金の増は、施設工事によるものが主な要因である。
資本剰余金の増は、東京国立博物館東洋館工事、奈良国立博物館西新館・仏教美術資料研究センターの完成によるものである。

【参考資料3】利益（又は損失）の処分についての経年比較（過去5年分を記載）　（単位：百万円）

区　分	19年度	20年度	21年度	22年度
Ⅰ　当期未処分利益				
当期総利益	414	304	148	143
前期繰越欠損金	0	0	0	0
Ⅱ　利益処分額				
積立金	414	304	148	143
独立行政法人通則法第44条第3項により				
主務大臣の承認を受けた額	0	0	0	0
業務拡充積立金	0	0	0	0
施設改修積立金	0	0	0	0

備考（指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等）

【参考資料4】人員の増減の経年比較（過去5年分を記載）　（単位：人）

職種※	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
定年制研究職員	99	188	186	186	186
任期制研究系職員	2	2	7	7	10
再任用研究職職員	0	1	1	2	2
定年制事務職員	88	122	121	123	123
任期制事務職員	0	0	0	0	0
再任用事務職員	3	2	1	1	1
定年制技能・労務職員	26	23	22	20	19
任期制技能・労務職員	0	0	0	0	0
再任用技能・労務職員	0	3	3	3	0
指定職相当職員	0	3	3	3	3

※職種は法人の特性によって適宜変更すること

備考（指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等）
・平成18年度については、統合前のため博物館のみ記載

Ｓ：特に優れた実績を上げている。（客観的基準は事前に設けず、法人の業務の特性に応じて評定を付す。）

Ａ：中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。（当該年度に実施すべき中期計画の達成度が100％以上）

Ｂ：中期計画通りに履行しているとは言えない面もあるが、工夫や努力によって、中期目標を達成し得ると判断される。（当該年度に実施すべき中期計画の達成度が70％以上100％未満）

Ｃ：中期計画の履行が遅れており、中期目標達成のためには業務の改善が必要である。（当該年度に実施すべき中期計画の達成度が70％未満）

Ｆ：評価委員会として業務運営の改善その他の勧告を行う必要がある。（客観的基準は事前に設けず、業務改善の勧告が必要と判断された場合に限りFの評定を付す。）

独立行政法人国立文化財機構の平成 22 年度に係る業務の実績に関する評価

【（大項目）1】	Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
A	A	A	A	A

【（中項目）1－1】	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承	【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
A	―	A	A	A

【（小項目）1－1－1】	収蔵品の収集

【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
A	―	A	A	A

【法人の達成すべき計画】

（1）－1　体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。

（東京国立博物館）

日本を中心にして広く東洋諸地域にわたる美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

（京都国立博物館）

京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

（奈良国立博物館）

仏教美術を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

（九州国立博物館）

日本とアジア諸国との文化交流を中心とした美術、考古資料歴史資料等を収集する。

（1）－2　収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。

【インプット指標】

（中期目標期間）	H18	H19	H20	H21	H22
決算額（百万円）	699	1,737	1,037	1,759	1,863
従事人員数（人）	99	98	99	103	105

※決算額は、4国立博物館の文化財購入費の決算額を計上している。
※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。
　その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準（評価指標）

○購入、寄贈・寄託の受け入れにより、体系的・通史的にバランスのとれたコレクションを形成したか。

主な実績

収蔵品　122,102件　（うち新収品591件　購入65件、寄贈70件、編入456件）
　文化財購入費　18億6千万円　　※21年度　17億6千万円（1億円増）
寄託品　11,975件　（うち新規寄託品　168件）　※21年度11,904件（71件増）

【寄託件数】指標：平常展に必要と考えられる件数（年度計画）
※定量的評価の目標値を設定しているものについては、実績が目標値の1.5倍以上をあげた場合「S」とした。

東京国立博物館

A	B	C	実　績	定量的評価
2,400件以上	1,680件以上 2,400件未満	1,680件未満	2,726件	A

京都国立博物館

A	B	C	実　績	定量的評価
5,800件以上	4,060件以上 5,800件未満	4,060未満	6,005件	A

奈良国立博物館

A	B	C	実　績	定量的評価
2,060件以上	1,442件以上 2,060件未満	1,442件未満	1,947件	B

九州国立博物館

A	B	C	実　績	定量的評価
800件以上	560件以上 800件未満	560件未満	1,297件	S

（参考）法人の自己評価

22年度も展示や研究に活かせるような文化財の収集に努め、編入を除いて135件の新収品を得た。（うち購入65件）
　主な購入品としては、「菊螺鈿鞍」（東博）、「玉篇巻第九残巻（自嗣字至敫字）　紙背金剛界私記」（京博）、「絹本著色春日地蔵曼荼羅」（奈良博）、「絹本著色仏涅槃図　命尊筆」（九博）など各館の特色を活かした効果的な収集を行っており、平常展の活性化や調査研究を行う上で、重要な役割を果たすことが期待される。
　寄贈については、個人収集家等へ積極的な働きかけを行った結果、70 件の文化財を新規で寄贈いただくことができた。これまでの良好な関係の構築と積極的な働きかけにより、京都国立博物館では大丸松坂屋から京都三大祭の一に数えられる祇園祭の山鉾のひとつ函谷鉾の見送りに用いられていた中国明時代の「花卉鳥獣文様刺繍見送」と、藤原鎌足を祀る多武峯寺に伝来した仏具「刺繍三昧耶形幡」の2点の染織の寄贈があり、また坂本龍馬が暗殺された京都近江屋の末裔の井口氏から関係の歴史資料のご寄贈をいただくことができた。
　寄贈は個人収集家や社寺等のご厚志によるものであるので、今後も顕彰などを活用して積極的に働きかけに努めていきたい。
　定量的な目標を定めている寄託品については、東京国立博物館、京都国立博物館、九州国立博物館では目標値を上回ったが、奈良国立博物館では所蔵者である寺院に展示収蔵施設が竣工したために返還したものや、所蔵者である財団が財産の整理を行ったことにともなって返還したものなどがあったため目標を達成できなかった。寄託者の経済的事情や当機構への寄託品の寄贈、寄託品の購入、前述のような社寺の宝物館整備による返還などにより、22 年度は 97 件返還されたが新規寄託 168 件を受けたため寄託品の総数は、前年度に比べ 71 件増となった。京都国立博物館では天龍寺で新たに発見された夢窓疎石所用ほかの伝法衣一式が寄託されて特別展「高僧と袈裟」で公開され、また上野家から所蔵品が一括寄託された上野コレクション寄贈五十年を記念して開催する「筆墨精神」で公開されるなど、特別展と連動した有意義な寄託が行われた。
　以上のような購入・寄託により、コレクションの体系的・通史的バランスをより良いものにすることができたと考えている。
　次年度以降もナショナルセンターの役割に相応しい収集を実施していきたい。

分析・評価

○各博物館の特色を生かした、購入、寄贈・寄託による体系的・通史的なコレクションが形成されていると評価できる。
　新規購入品については、いずれも重要なものであり、国立博物館が保有するべき文化財として評価できる。
　寄贈・寄託については、各博物館の日頃の情報収集や社会的・学術的な実績に加え、所蔵者との信頼関係の構築により、着実に成果を上げている。
　またこれらの寄贈・寄託は、各博物館のコレクションを一層有意義に関連付けることとなり、展示への展開が大いに期待できる。
　なお、奈良国立博物館においては、周辺寺社の文化財管理施設の進展により、寄託数の減少がみられたが、その背景は、周辺寺社に対する博物館・文化財研究所の指導・援助の成果として、寺社の施設整備が進んだものであるから、むしろ「ナショナルセンターとしての役割」を果たしたものと認識する。

【(小項目)1−1−2】 収蔵品の管理、保存

【評定】 A

【法人の達成すべき計画】
(2)国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
A	ー	B	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	1,034	148	2,106	2,212	5,094
従事人員数(人)	110	110	109	115	115

※決算額は、決算報告書・施設整備費補助金の決算額を計上している。
(管理・保存にかかる光熱水料や、調査にかかる事務費は個別に計上できないため、勘案していない。)
※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員及び常勤施設系職員の人数を計上している。
その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)

○展示場、収蔵庫の老朽化対策や耐震対策を計画的かつ速やかに実施したか。
○保存環境の調査研究等を実施したか。

主な実績

・東洋館改修について、平成24年度中の開館に向けて準備を進めており、耐震補強は概ね完了したが、東日本大震災の影響により展示ケース取設けに遅れが生じている。(東博)
・平常展示館の建替工事は、平成24年度末完成・25年度開館に向けて進んでいる。(京博)
・西新館耐震工事については展示施設として必要とされる耐震性能を確保するための補強工事を行うとともに、展示環境の向上を意図した展示ケース・内装・照明設備等の更新を行った。また、監視面の強化を図るための監視モニターの更新を行った。仏教美術資料研究センターについては、重要文化財指定の建造物であるため、必要最低限の耐震性を確保するとともに、原状に復しつつも現在の使用意図に照らした新たな平面計画の下、内装改修を行った。(奈良博)
・常設展示室 70 箇所、特別展示室約 30 箇所に温湿度計を設置して、環境データを解析した。収蔵庫 30 箇所に温湿度計を設置して環境データを解析した。また、空気質やダストを調査して収蔵環境の改善を行った。(九博)
・IPM(総合的有害生物管理)の実施・普及を行った。(奈良博・九博)

【保存カルテ作成件数】指標:年度計画

東京国立博物館

A	B	C	実績	定量的評価
800件以上	560件以上800件未満	560件未満	2,368件	S

京都国立博物館

A	B	C	実績	定量的評価
100件以上	70件以上100件未満	70件未満	108 件	A

奈良国立博物館

A	B	C	実績	定量的評価
100件以上	70件以上100件未満	70件未満	218件	S

九州国立博物館

A	B	C	実績	定量的評価
100件以上	70件以上100件未満	70件未満	101件	A

(参考)法人の自己評価

定量的な目標を定めている保存カルテの作成件数については、全ての館で目標を上回っている。奈良国立博物館では保存カルテ作成について、21年度の途中から新たなフォームに統一し、作成・保管する新システムに移行し、本年度から本格的に運用が軌道に乗ったことで、機動的かつ詳細に文化財の損傷状態を把握することが可能になったことに加え、保存カルテの作成件数も飛躍的に増加した。また各博物館ではIPM(総合的有害生物管理)活動の実践として防虫対策に取り組み、展示室内の万全の体制を図っている。
なお、各館の改修工事については概ね順調に進行しているが、東京国立博物館の東洋館が3月の東日本大震災の影響により展示ケース取設けに遅れが生じている。

分析・評価

○各博物館ともに、耐震工事、展示ケース等の更新、防虫対策の実施など、博物館の業務を支えるべき基本的な条件の整備が着実に進められており、評価できる。
特に東京国立博物館において、耐震補強工事が順調に進行していたことが、東日本大震災の被災を未然に防いだ大きな要因と考えられる。
保存カルテの作成については、目標を大きく上回って達成しており、評価できる。保存カルテや調書の作成は、地味で目立たない仕事であるが、博物館機能上、重要な業務であり、今後も計画的に実施していくべきである。
保存・活用のための展示環境等についても、文化財の次世代への継承を目的とした計画が実施されるとともに、収蔵環境に関するデータの解析がなされ、それが改善へとフィードバックされており、継続した対応を期待する。

【(小項目)1−1−3】 収蔵品修理、保存処理

【評定】 A

【法人の達成すべき計画】
(3)修理、保存処理を要する収蔵品等については、機構の保存科学・修復技術担当者が連携し、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を取り入れ、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
A	ー	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	126	132	126	158	187
従事人員数(人)	49	50	51	50	50

※決算額は、文化財修理を外注した決算額を計上している。
※従事人員数は4国立博物館の常勤保存修復担当職員の人数を計上している。
その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)

○緊急性の高いものから計画的に修理を実施したか。
○外部の専門家と連携したか。
○科学的な保存技術を取り入れたか。

主な実績

・計画的な文化財の本格修理を実施した。(176件:21年度146件)
・修理契約委員会を21年度に設置し、22年度も引き続き同委員会を開催し、契約の透明性を高めた。(各館)
・紙本などの修理技術者として保存修復課に3名のアソシエイト・フェローを配置し、館内で実施する館蔵品の本格修理、応急(対症)修理を本格化させた。(東博)
・本年度新たに「長期受託文化財修理実施要項」を策定し、長期にわたり展示に活用する寄託品の修理を、館の修理費を用いて実施することとし、京都・妙法院所蔵の重要文化財 木造千手観音立像(第20号)の修理に着手した。(奈良博)
・収蔵品のほか、九州をはじめとする館外所蔵者負担による文化財修理23件のため、保存修復諸施設を積極的に活用し、うち6件については現地修理を行った。(九博)

【修理件数(本格修理)】指標:年度計画

東京国立博物館

A	B	C	実績	定量的評価
70件以上	49件以上70件未満	49件未満	139件	S

京都国立博物館

A	B	C	実績	定量的評価
10件以上	7件以上10件未満	7件未満	9件	B

奈良国立博物館

A	B	C	実績	定量的評価
5件以上	3件以上5件未満	3件未満	9件	S

九州国立博物館

A	B	C	実績	定量的評価
15件以上	10件以上15件未満	10件未満	19件	A

(参考)法人の自己評価
定量的な目標を定めている修理件数については、京都国立博物館を除く3館で目標を上回った。収蔵品の本格修理は176件実施し、21年度を30件上まわる実績をあげている。
修理に関する契約方法、業者選定の適正化のために外部有識者を交えた「修理契約委員会」を各館ごとに設けて実施している。

分析・評価

○文化財修理については、限られた予算の中にあり、長期的な視野のもとで、破損の現状等により優先順位を付けて計画的に実施していると認められる。
アソシエイト・フェローの配置が効果を上げ、修理実績を増やすことにつながったと評価できるが、本来は十二分な専任の修復スタッフを配置する必要があり、そうした人材も育成すべきである。
また、外部の専門家を交えた修理契約委員会による契約の透明性の確保についても、各博物館で軌道にのせ、公私立博物館へのよい影響ともなり得る観点からも評価したい。
なお、奈良国立博物館で導入した「長期受託文化財修理実施要項」の策定については、博物館運営の透明性の視点から評価できる。

【(中項目)1−2】	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	【評定】 A			
		H18		H19	H20	H21
		博物館	研究所			
		B	ー	A	A	A

【(小項目)1−2−1】	展示の充実	【評定】 A			
		H18		H19	H20	H21
		博物館	研究所			
		S	ー	S	S	S

【法人の達成すべき計画】
(1)展示の充実
展示については、常に点検・評価を行い国民のニーズ、学術的動向等を踏まえた質の高いものを実施するとともに、展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、国際文化交流に配慮するなど魅力あるものとなるよう努力する。
また、見やすさ分かりやすさに配慮した展示及び解説や音声ガイド等の導入を行うことにより、日本の歴史・伝統文化及び東洋文化についての理解を深めるものとなるよう工夫する。
① 平常展は、展観事業の中核と位置付け、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解の促進に寄与する展示を実施する。また、特集陳列の充実を図るなど再来館者の増加が期待できる魅力ある展示にも努め、一層の入場者の確保を図る。また、展示に関する外国語説明を一層充実させることに努め、作品キャプションについては全てに外国語訳を付すとともに、展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等を80%以上設置する。
② 特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。
(東京国立博物館) (京都国立博物館) (奈良国立博物館) (九州国立博物館)
年3〜4回程度 年2〜3回程度 年2〜3回程度 年2〜3回程度
③ 個々の展覧会において、広報に積極的に取り組む。また、展覧会の入館者数については、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。
④ 黒田記念館については、東京国立博物館に所属を移し、所蔵作品を東京国立博物館でも展示するなど公開機会を拡大する。

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	844	920	894	980	1,086
従事人員数(人)	99	98	99	103	105

※決算額は、展覧事業費に要したディスプレイ費・印刷製本費・旅費・謝金・消耗品費等の損益計算書上の費用額を計上している。
※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。
その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○国民のニーズや学術的動向を踏まえた質の高いものとしたか。 ○観覧者の理解が深まるよう展示・解説を工夫したか。 (平常展) ○平常展を魅力あるものとし、再来館者を増加させたか。 ○作品のキャプションについては、すべてに外国語訳を付したか。 ○海外からの来館者向けに、展示テーマごとに外国語の解説パネル等を80%以上設置したか。 (特別展) ○我が国の博物館の中心的拠点にふさわしい質の高い展示としたか。 ○特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとしたか。 ・東京国立博物館 3〜4回 ・京都国立博物館 2〜3回 ・奈良国立博物館 2〜3回 ・九州国立博物館 2〜3回	**主な実績** **22年度国立博物館入場者数 合計 288万1,312人 ※21年度 502万9,198人(約214万8千人、42.7%減)** **①平常展(入場者数 71万9,179人) ※21年度 101万1,869人(約29万3千人、28.9%減)** ・平成23年1月から、「平常展」を「総合文化展」に改称し、「平常展はいつも同じ」というイメージの払拭を図った。(東博) ・平常展示館建替工事に伴い、平常展示は休止せざるをえなかったが館外での収蔵品公開に努めた。(京博) (※特別展参照「京都国立博物館所蔵能装束展」4月17日〜5月30日:主催 金沢能楽美術館・京博) ・平成22年7月21日、本館の展示室内の照明設備を一新するとともに、「なら仏像館」と新たに命名し、リニューアルを行い、併せて平常展の名称を「名品展」とした。(奈良博) ・特定テーマを掘り下げたトピック展示を12回実施し、「湖の国の名宝−最澄がつないだ近江と太宰府−」(6月11日〜9月5日)など外部機関との共同で主催したトピック展示も3回実施した。(九博) ・中国語ガイドブック及び英語・中国語・韓国語の簡単な展示解説付きマップを作成した。(九博) **②特別展(入場者数 216万2,133人) ※21年度 401万7,329人(約185万5千人、46.2%減)** **(※各展覧会の詳細については次ページ以降参照)** **●海外展** ・文化庁海外日本古美術展「日本の美 5000年(5000 Years of Japanese Art)」 主催:東京国立博物館・文化庁、トルコ共和国文化観光省 会場:トプカプ宮殿博物館(トルコ) 入場者数:607,734人 ・The World of Khubilai Khan: Chinese Art in the Yuan Dynasty (クビライ・カーンの世界:元王朝の中国美術) 主催:メトロポリタン美術館 特別協力:東京国立博物館、奈良国立博物館、中華文物交流協会	○外国語の解説パネルの充実、ガイドブックの多言語化に向けて着実に工夫を重ねている。 平常展については、各博物館が工夫し、「平常展」から「総合文化展」・「名品展」へ名称変更し、展示文化財の価値を強調するという意味において、各博物館が開催する展示企画を、来館者に明確に伝えるための取り組みがなされたといえる。 特別展については、結果的に過去4年間で最低の来館者数となったが、それは21年度の「国宝阿修羅展」ほどの展覧会がなかったためである。一方で、九州国立博物館の「パリに咲いた古伊万里の華展」に代表される、来館者の満足度の高さは評価できる。 集客などの経営努力は必要であるが、展示の充実は来館者数では判断できない。むしろ日本文化の向上、教育普及等の博物館の使命達成のために構築された展示内容も評価すべきである。 その他、東京文化財研究所と東京

○個々の展覧会ごとに目標入館者数を定め、それを達成したか。
○黒田記念館の所蔵作品を東京国立博物館でも展示公開するなど公開機会を拡大したか。

会場：メトロポリタン美術館（アメリカ）
入場者数：166,476人
・万国博覧会開催記念「千年丹青―日本中国珍蔵宋元画精品展」
主催：東京国立博物館・上海博物館
会場：上海博物館（中国）
入場者数：331,275人
・万国博覧会開催記念「鑑真と空海―日中文化交流の顕彰」
主催：東京国立博物館、文化庁、上海博物館
会場：上海博物館（中国）
入場者数：331,275 人（上記万博展と同時開催）
・「高麗仏画大展」
主催：国立中央博物館
会場：国立中央博物館（韓国）
特別協力：東京国立博物館
入場者数：88,659 人
・アジア友好日本古美術海外展「日本とタイ―ふたつの国の巧と美」
主催：文化庁、九州国立博物館・福岡県・タイ王国文化省芸術局
会場：タイ王国バンコク国立博物館（タイ）
入場者数：21,525 人

③展覧会広報

・モバイルサイトを開設し、5 月 6 日より公開し、ウェブサイトについては 23 年 4 月に全面リニューアルを目指す。（東博）
・23 年 1 月 2 日に本館をリニューアルオープンした。「平常展」を「総合文化展」に改名をきっかけとしたキャンペーンにタレント（貫地谷しほり）を起用したイメージポスターを製作し、交通広告、新聞広告などで大規模な広報展開を実施し、来館者増に貢献した。（東博）
・東山地区の建仁寺・智積院・東福寺などの寄託社寺と連携し、チラシの交換、ホームページのリンク等の広報活動を展開した。（京博）
・「正倉院展」をはじめ、特別展・特別陳列では、JR西日本、近鉄、阪神電車とタイアップ広報を行った。（奈良博）
・文化交流展示室の展示作品の広報TV番組「九博のたからもの」を制作、放送した。（九博）

④黒田記念館作品の公開機会拡大

・特集陳列「黒田清輝と京都」を開催（東博）

■博物館の年間総来館者数、陳列件数等

	総来館者数	平常展				特別展・共催展	
		来館者数	陳列件数	陳列替	特集陳列	来館者数	開催回数
4博物館	2,881,312人	719,179人	7,618件	725回	70件	2,162,133人	24回
東博	1,082,269人	373,068人	5,610件	290回	53件	709,201人	10回

国立博物館黒田記念館との共同開催展は、公開機会の拡大として注目される。
なお、６回の海外展については評価基準・評価指標となっていないが、例えば、上海万博にあわせた海外展などで大きな成果を挙げており、日本の歴史・伝統文化の海外発信、東アジアにおける日本の国立博物館の実力を示した意義は評価できる。

京博	331,131人	－人	－件	－回	－件	331,131人	5回
奈良博	649,878人	71,566人	340件	101回	5件	578,312人	4回
九博	818,034人	274,545人	1,668件	334回	12件	543,489人	5回

※開催回数に海外展（東博5回、九博1回）及び別会場開催（東博1回、京博1回）を含む（来館者数は除く）
※来館者数は年度集計（22.4.1-23.3.31）

【平常展外国語パネルの設置率】指標：中期計画

東京国立博物館

A	B	C	実績	定量的評価
80%以上	56%以上80%未満	56%未満	96%	A

京都国立博物館

A	B	C	実績	定量的評価
80%以上	56%以上80%未満	56%未満	－%	－

奈良国立博物館

A	B	C	実績	定量的評価
80%以上	56%以上80%未満	56%未満	84%	A

九州国立博物館

A	B	C	実績	定量的評価
80%以上	56%以上80%未満	56%未満	83%	A

【特別展等来館者数】指標：年度計画

東京国立博物館（目標合計：98万人）

特別展「細川家の至宝－珠玉の永青文庫コレクション－」（22.4.20～6.6　43日間）				
A	B	C	実績	定量的評価
160,000人以上	112,000人以上 160,000人未満	112,000人未満	182,470人	A
特別展「誕生！中国文明」（22.7.6～9.5　55日間）				
220,000人以上	154,000人以上 220,000人未満	154,000人未満	105,538人	C
光明皇后1250年御遠忌記念　特別展「東大寺大仏―天平の至宝―」（22.10.8～12.12　59日間）				
420,000人以上	294,000人以上 420,000人未満	294,000人未満	232,791人	C
文化財保護法制定60周年記念　特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」（23.1.18～3.6　42日間）				
180,000人以上	126,000人以上 180,000人未満	126,000人未満	188,402人	A

京都国立博物館（目標合計：20万人）

特別展覧会　没後400年「長谷川等伯」（22.4.10～5.9　27日間）				
A	B	C	実績	定量的評価
130,000人以上	91,000人以上130,000人未満	91,000人未満	244,347人	S
特別展観「没後200年記念　上田秋成」（22.7.17　～8.29　39日間）				
20,000人以上	14,000人以上 20,000人未満	14,000人未満	21,705人	A
特別展覧会「文化財保護法60年記念事業　高僧と袈裟―ころもを伝え　こころを繋ぐ―」（22.10.9　～11.23　40日間）				

20,000人以上	14,000人以上 20,000人未満	14,000人未満	19,297人	B	
特別展覧会「上野コレクション寄贈50周年記念 筆墨精神―中国書画の世界―」(23.1.8 ～2.20 39日間)					
30,000人以上	21,000人以上 30,000人未満	21,000人未満	37,535人	A	
(参考)※年度計画外に実施のため目標値は全体の目標値に含めない(開催回数に含む) 「京都国立博物館所蔵能装束展」(22.4.17～5.30 38日間) (主催:金沢能楽美術館、京都国立博物館 会場:金沢能楽美術館)					
―	―	―	(4,761人)	―	
奈良国立博物館(目標合計:24万5千人)					
特別展「平城遷都1300年記念 大遣唐使展」(22.4.3 ～6.20 69日間)					
A	B	C	実績	定量的評価	
120,000人以上	84,000人以上120,000人未満	84,000人未満	202,166人	S	
なら仏像館開幕記念特別展「至宝の仏像」(22.7.21～9.26 60日間)					
10,000人以上	7,000人以上 10,000人未満	7,000人未満	81,342人	S	
特別展「仏像の修理」(22.7.21～9.26 60日間)※「至宝の仏像」と同時開催のため来館者数を一体でカウント					
10,000人以上	7,000人以上 10,000人未満	7,000人未満	81,342人	S	
第62回正倉院展(22.10.23～11.11 20日間)					
180,000人以上	126,000人以上 180,000人未満	126,000人未満	294,804人	S	
九州国立博物館(目標合計:30万人)					
「パリに咲いた古伊万里の華」(22.4.6～6.13 61日間)					
A	B	C	実績	定量的評価	
50,000人以上	35,000人以上50,000人未満	35,000人未満	84,738人	S	
「馬 アジアを駆けた二千年」(22.7.13～9.5 48日間)					
50,000人以上	35,000人以上50,000人未満	35,000人未満	42,022人	B	
「誕生！中国文明」(22.10.5～11.28 48日間)					
90,000人以上	63,000人以上 90,000人未満	63,000人未満	53,409人	C	
「没後120年 ゴッホ展」(23.1.1～2.13 42日間)					
110,000人以上	77,000人以上 110,000人未満	77,000人未満	354,311人	S	

(参考)法人の自己評価

22年度は奈良国立博物館の陳列替回数、陳列総件数について耐震工事に伴う減少と計数方法を他館と統一を取るため変更したことにより、年度計画との乖離があったが、他博物館においては目標を達成している。また外国語パネルの設置については、閉館中の京都国立博物館を除き、各博物館とも目標(80%以上)を達成しており、また全ての作品のキャプションに外国語を付している。

東京国立博物館では23年1月の本館リニューアルを期に平常展を「総合文化展」とし、奈良国立博物館では22年7月に本館を「なら仏像館」としたことを期に「名品展」とするなど、九州国立博物館の従来からの「文化交流展」も併せ3博物館で平常展を別称で表示することで、平常展の活性化の一環とした来館者へのアピールを図った。

22年度における国立博物館への総来館者数は、288万1,312人となり、前年度に比して約214万8千人減(42.7%減)となっている。これは前年度が「国宝阿修羅展」(東博・九博会場合計 約165万7千人)の恩恵を受けた過去最高来館者数(約503万人)を記録した年だったことによるギャップが主な要因といえる。

平常展については、前述の各館のアピールはあったものの、東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館の3館において耐震工事等に伴う一部もしくは全部を休館しているという物理的な理由と、さらに東京国立博物館においては東日本大震災に伴う臨時休館による減少が重なったこともあり、21年度の101万2千人から72万(約29万3千人、28.9%減)へと減少した。第3期中期目標期間中には各博物館の工事も終了することから、万全の体制で臨みたい。

特別展来館者数は東京国立博物館を除く3博物館で目標来館者数の合計を超すことができた。しかし人数的には185万6千人減(46.2%減)と大幅に減少した。目標来館者数の合計がもともと21年度より23.5万人少ないところに、東京国立博物館及び九州国立博物館を巡回した「誕生！中国文明」、東京国立博物館の「東大寺大仏」がそれぞれの会場で目標の半数程度になってしまったことと、前述の「国宝阿修羅展」との差が昨年との比較においてより大きな落ち込みを演出してしまった。なお、お客様の満足度では「誕生！中国文明」の東京国立博物館が75.5%と低かったが、一方、九州国立博物館では89%と高いというアンケート結果もあり、今後の企画における検討材料としたい。

目標の設定の難しさがより浮き彫りになった年でもあり、改めて第3期中に設定方法の在り方を再検討する必要があると考える。

来館者の満足度の高かった特別展のトップ3は「パリに咲いた古伊万里の華」(九博)が95%、「長谷川等伯展」(京博)の91%、「誕生！中国文明」(九博)89%であった。

海外展もトルコ・トプカプ宮殿博物館で開催された文化庁海外展「日本の美 5000年」が60万人を超える来館者を得るなど、計6本の海外展を開催し、日本文化の発信に貢献できたと考えている。

黒田記念館所蔵作品の公開については、東京国立博物館で特集陳列を開催したほか、岩手県立美術館にて「近代洋画の巨匠 黒田清輝展」を開催するなど東京文化財研究所と共同し、公開の機会を広げている。

【(小項目)1−2−2】 歴史・伝統文化の理解促進

【評定】

B

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
A	ー	A	A	A

【法人の達成すべき計画】

(2)歴史・伝統文化の理解促進

歴史・伝統文化の理解促進を図るとともに、その中心的拠点としてふさわしい教育普及事業に重点化する。

① 学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、ギャラリートーク等の学習機会を提供する。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう努める。

②−1 教育普及活動の充実に寄与するようボランティア活動を支援し、ボランティアの資質向上に努める。

②−2 企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図る。

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	68	70	62	74	89
従事人員数(人)	51	52	53	52	54

※決算額は、決算報告書・教育普及事業費の決算額を計上している。

※従事人員数は、東京国立博物館の学芸企画部博物館教育課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課の常勤学芸職員の人数を計上している。
その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○講演会、ギャラリートーク等の参加者数の各館の年間平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにしたか。 ○ボランティア活動を支援したか。 ○企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図ったか。	**①学習機会の提供** ・平常展示に関連して、おとなのためのワークショップ、ファミリーワークショップ、ハンズオンアクティビティを行った。(東博) ・昨年に引き続き工事に伴う講堂閉鎖のため、外部施設を借りて土曜講座・夏期講座を実施し、学習機会の提供を継続した。(京博) ・サンデートークは、当館研究員等により、最近の調査・研究の成果、博物館ならではの話などを講演形式で実施した。(奈良博) ・体験型展示室「あじっぱ」における展示・体験活動の種類を増やしたりプログラムを定例化するなど充実を図った。(九博) ・学校貸出キット「きゅうぱっく」の新規のセットとして「きゅうぱっく Lite」7 種類を開発、運用を開始した。あじっぱ体験用資料を中心に、3D プリンタでの成果等も活用した。(九博) **②−1ボランティア活動の支援** ・ボランティア向け研修の実施、自己学習の奨励をした。(4館) ・ボランティアによるガイドツアー、ワークショップ等の充実を図った。(東博) ・「調査・研究支援ボランティア」の募集と活動の充実を進め、職員が行う調査・研究業務、展示替え作業の補助を行った。(京博) ・正倉院展会期中、ボランティアによる講堂解説を実施した。(奈良博) ・開館5周年記念関連イベントの1つとして、参加体験型イベントを中心としたボランティア企画による「九博ボランティアフェスタ」を開催した。(九博)	○講演会、ギャラリートーク等については、子どもから大人まで対象別に様々な工夫がなされ評価できるが、参加者数は、定量的評価としては低い。 これは来館者数の減少と連動するものと分析できるが、講座やギャラリートーク等は、来館者を育てるための必須の活動であり、今後も一層の充実が望まれることから、今一度テーマや内容について、様々な可能性を検討すべきである。 ○博物館内におけるボランティア・ガイドの活動範囲を、従来の展示解説から、ボランティア企画の事業に広げた企画は注目される。 また、小中学校との連携は、重要な課題であり、児童・生徒への学習の機会の提供を図っている点で評価に値する。

■ボランティア人数

合計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
572 人	159 人	40 人	85 人	288 人

②−2博物館支援者の増加

・友の会、パスポート及び賛助会等の会員の確保に努めるとともに、地域や企業との連携を推進した。(東博)

・支援団体が行う文化財鑑賞会・見学会等に協力した。(京博)

・アメリカン・エキスプレス社のカード会員向けポイント・プログラム「メンバーシップ・リワード」において、賛助会の一般会員(個人)に 1 年間入会できる交換アイテムを提供した。(奈良博)

・「九州国立博物館を愛する会」と連携して「九博こどもフェスタ」を開催。館内ボランティアや周辺自治体の協力を得て、地域のこどもたちを対象にしたイベントを実施した。(九博)

【講演会、ギャラリートークの参加者数】指標:前中期目標期間の年間平均実績(中期計画)

東京国立博物館(10,915 人)

A	B	C	実績	定量的評価
10,915人以上	7,641人以上 10,915人未満	7,641人未満	13,319人	A

京都国立博物館(5,181人)

A	B	C	実績	定量的評価
5,181人以上	3,627人以上 5,181人未満	3,627人未満	2,313人	C

奈良国立博物館(3,542人)

A	B	C	実績	定量的評価
3,542人以上	2,479人以上 3,542人未満	2,479人未満	3,349人	B

九州国立博物館(5,255人)

A	B	C	実績	定量的評価
5,255人以上	3,679人以上 5,255人未満	3,679人未満	3,996人	B

(参考)法人の自己評価

定量的な目標として掲げた講演会等参加者数は、東京国立博物館以外は目標に達しなかった。京都国立博物館においては工事の影響、奈良国立博物館では講座開催回数の減少、九州国立博物館では多数の来館者が見込まれたゴッホ展については、混雑緩和対策を最優先したため、講演会等の実施を見送るなど、結果として 22 年度は前年度と比べ開催件数が大幅に減少し、さらに猛暑等の影響と思われる来館者数の減少により、講演会1回当たりの参加者数も減少したことが主な原因と思われる。

各博物館ともこれまでの事業を継続的に実施し、児童・生徒のみならず一般も対象とした事業を実施し、学習の機会の提供を図ってきた。京都国立博物館では昨年に引き続き工事による休館に伴い、外部施設を借用して実施に努力した。

ボランティアについては、各博物館において研修や自己学習の機会を提供するとともに、ボランティアにとっても充実した活動となるよう各博物館とも協力して事業を実施している。なかでも九州国

	立博物館においては、開館5周年記念関連イベントの1つとして、参加体験型イベントを中心としたボランティア企画による「九博ボランティアフェスタ」を開催した。 博物館支援者の増加については、賛助会や寄附金などは経済情勢に伴い厳しくなってはいる中、各博物館で企業などへの積極的なアプローチに取り組んだほか、募金箱を設置するなどにより昨年以上の実績をあげている。また地域等と様々な取組みを共同して開催するなど、積極的に取組み、支援者の増加方策を実施した。	

【(小項目)1－2－3】 快適な観覧環境の提供

【評定】

A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
B	ー	A	B	A

【法人の達成すべき計画】

(3)快適な観覧環境の提供

国民に親しまれる施設を目指し、入館者の立場に立った観覧環境の整備や利用者の要望を踏まえた管理運営を行う。

① 施設のバリアフリー化を進め、高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供する。

② 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的に実施する。調査結果から入館者のニーズを把握し、入場料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行う。

③ ミュージアムショップやレストラン等のサービスについては利用者の意見を収集し、改善する。

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	8	13	25	15	33
従事人員数(人)	76	90	85	88	85

※決算額は、平常展に要するチラシ・パンフレット等の作成にかかる決算額を計上している。

※従事人員数は、東京国立博物館の総務部及び京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館の各総務課の常勤事務職員の人数を計上している。その際、役員及び学芸系職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○施設のバリアフリー化を進めたか。 ○利用者のニーズを踏まえ、入場料金や開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行ったか。 ○利用者の意見を踏まえ、ミュージアムショップやレストラン等を改善したか。	・聴覚障がい者対応のため、筆談ツールとして携帯できるコミュニケーションボードの使用を開始した。(東博) ・盲学校のためのスクールプログラムの開発と試行を行った。(東博) ・スマートフォン端末を利用した位置連動型ガイドシステム「とーはくナビ」の実証実験を行なった。(東博) ・外国人を含め来館者が気持ちよく観覧していただけるよう、2カ国語の観覧マナーの注意事項パネルを看視員が準備し、マナー向上のお願いの方法を改善した。(京博) ・快適な観覧環境を提供するため展示ケースを一新し、透過性のあるガラスを使用して見やすくした。また、なら仏像館の回廊の照明が暗く、展示している仏像が見えにくいという声に対応し、照明工事を行い、これを改善した。(奈良博) ・「正倉院展」期間中に、新たに託児室を開設し、多数の利用があった。(奈良博) ・混雑が予想される展覧会について、入場者調整、展示レイアウトの工夫を行い、展覧会場の快適な環境維持に努めた。また、障がい者のための特別観覧日を設けた。(九博) **(参考)法人の自己評価** 施設のバリアフリー化は年々改善されてきている。東京国立博物館では庭園の舗装を改良し、足の不自由な方に配慮した。来館者の要望にこたえ、奈良国立博物館では展示ケースを一新し、透過性の高いガラスを使用して見やすく、また正倉院展開催期間中には託児室を設置するなど来館者の利便性を高めた。施設設備のハード面の改善とともに、ソフト面の充実を図るため東博では新たに聴覚障がい者のためのコミュニケーションボードの使用を開始するなど工夫を行っている。	○観覧環境の向上のため、障害者・外国人・乳幼児同伴者への多様な試みがなされていることを評価する。 特に、奈良国立博物館の「正倉院展」に合わせての託児所開設は、館独自の来館者サービス向上の取り組みとして評価したい。 ミュージアムショップやレストランについても、アンケート調査を通して来館者のニーズを把握し、接客の向上やサービスの向上に努めている。 ただし障害者への対応については、我が国の歴史と文化に関する知識の伝達という意味において、すべての国立博物館があらゆる障害者に開かれた施設であってほしいため、なお一層の工夫を望む。

	混雑対策はなかなか解決策を見出せないが、ウェブサイトを利用した混雑情報の配信、休憩場所の増設、日傘の貸し出しやテントの設置、給水所の設置など、現場対応はできるだけ来館者の負担を軽減するために各博物館とも工夫を行っている。しかしながらどれも対症療法的な対応にとどまっており、今後も引き続きより快適な観覧環境となるよう努力していく必要がある。 ミュージアムショップやレストランについては、アンケートなどで来館者のニーズを調査し、レストランの接客の向上や特別展ごとにその趣に合わせた新メニューを提供するなど、サービスの向上に努めた。またミュージアムショップではオリジナルグッズの開発・販売に引き続き努め、改善を図っている。	

【(中項目)1－3】	3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与	【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
A	―	A	A	A

【(小項目)1－3－1】	調査研究成果の発信	【評定】 A

【法人の達成すべき計画】
(1)収蔵品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に関わる刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信する。また、各種セミナー、シンポジウムを開催する。

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
―	―	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	24	24	28	33	32
従事人員数(人)	99	98	99	103	105

※決算額は、紀要等の調査研究にかかる印刷物作成の決算額を計上している。
※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。
　その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○刊行物の発行、学会、インターネット、各種セミナー、シンポジウムを通じて研究成果を広く公表したか。	出版物等を通した情報発信 ・『MUSEUM』(東博)、『学叢』(京博)、『鹿園雑集』(奈良博)、『東風西声』(九博)などの研究誌や展覧会図録等を通して研究成果を発信した。 シンポジウム等の開催 ・正倉院学術シンポジウム2010「正倉院宝物はどこで作られたか」(奈良博) **(参考)法人の自己評価** 各種出版物の多言語化や研究紀要の発行、ホームページの公開などを通して、博物館における研究成果の発信を積極的に行っていると考える。また、学会や国内シンポジウムを開催し広く研究成果の公表に努めている。	○研究誌、展覧会図録については、量的、質的に適切かつ十分な実績をあげて刊行されるとともに、ホームページの公開、シンポジウムの開催等、広く研究成果の発信・公開にも努力が認められる。 今後は、研究成果に関する一般向け情報発信の工夫や、各種出版物の多言語化に一層の努力が求められる。

【(小項目)1−3−2】 海外研究者の招聘

【法人の達成すべき計画】
(2)海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムを開催するなど博物館活動に対する示唆が得られるよう努める。

【評定】
A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
ー	ー	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	11	9	5	3	4
従事人員数(人)	53	56	58	56	56

※決算額は、国際シンポジウム開催に要するディスプレイ・旅費・滞在費等の決算額を計上している。
※従事人員数は、東京国立博物館の学芸企画部企画課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課の常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○海外の優れた研究者を招聘し博物館活動に対する示唆を得たか。	・ヨーロッパ・アジアを始めとして世界各国から40人の研究者を招聘し学術交流を図った。 ・中国、韓国、トルコより15名の研究者を招へいし、最新の学術情報を取得した。(東博) ・国際シンポジウム「染織品にみる東アジア交流 ―宋・元・明時代の中国とその周辺―」(11/13)を開催した。(京博) ・国際学術シンポジウム「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」を開催した。(奈良博) ・国際シンポジウム「契丹帝国(遼王朝)の美術と文化」を開催した。(九博) **(参考)法人の自己評価** 海外からの研究者招聘は40名、海外への派遣は176人と積極的に国際交流を進め、博物館に新たな知見を広めることができた。また多くの国際シンポジウムを各館で実施しており、他国研究者との研究交流を推進している。	○東アジアの文化圏に位置する日本の文化について相対化するためにも、アジア・欧州の研究者との交流が不可欠であり、そのための学術交流、シンポジウム等が積極的に開催されており評価できる。 特別展テーマへの反映や国際交流といった波及効果も推進された。 今後も継続して、担当研究員の本務を考慮しつつ、東アジアを中心とした積極的な交流が望まれる。

【(小項目)1−3−3】 博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムの検討、実施

【法人の達成すべき計画】
(3)博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。

【評定】
A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
ー	ー	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	―	―	―	―	―
従事人員数(人)	49	50	51	50	50

※決算額は、研修テキストなどのコピー機を利用しての作成により外注額が少額のため、個別に計上できない。
※従事人員数は4国立博物館の常勤保存修復担当職員の人数を計上している。
その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施したか。	**主な実績** ・「文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅠ」を開催した。また海外(エジプト・フランス)において科学研究費補助金により「東京国立博物館の臨床保存の実践についてのセミナー」を開催した。(東博) ・特別展覧会において修理技術者に対する定例の研修会を実施した。(京博) ・修理技術者に対する研修会を実施した。(奈良博) ・「紙文化財保存基礎講座」、「文化財保存交流セミナー」、ミュージアム IPM 支援者育成事業(文化庁受託事業)「市民と共にミュージアム IPM」を開催した。(九博) **(参考)法人の自己評価** 昨年に引き続き特定非営利活動法人文化財保存支援機構主催の専門家養成実践セミナーを東京国立博物館が共催して開催し、また海外でセミナーを開催するなど、文化財保存を担う専門家の育成や基礎能力の向上に取り組んだ。京都国立博物館では特別展開催ごとに修理技術者に対する定例研修会を開催し、奈良国立博物館では修理技術者に対する研修会を実施し、九州国立博物館では紙文化財保存講座やセミナーを開催するなど、各館において博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした指導や研修を実施した。	○文化財保存に関わる専門家の育成や基礎能力の向上に向けて、各博物館がそれぞれの特色をいかして、修理技術者等の専門家養成のセミナー・研修会等の様々な研修プログラムを検討・作成し、事業を推進していると評価できる。 ナショナルセンターに相応しい役割が果たされており、今後も、ナショナルセンターとして求められる指導力等を発揮し、文化財修理等の総合的課題への取り組みを期待したい。

【(小項目)1−3−4】 収蔵品貸与の推進

【法人の達成すべき計画】
(4)収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を推進する。収蔵品の貸与については、貸与に関する情報を公開するなど具体的措置を講ずることとする。

【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
—	—	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	9	13	11	14	14
従事人員数(人)	99	98	99	103	105

※決算額は、考古相互貸借事業にかかる輸送費・資料保存箱作成費等の決算額を計上している。
※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。
その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)

○公私立博物館等に対する支援のため、収蔵品の貸与に関する情報を公開したか。

主な実績

・各博物館とも積極的に貸与を行った。
・考古資料相互貸借事業として、東博では福岡市博物館、鹿児島県歴史資料センター黎明館と、奈良博では山形県立博物館・山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館、南相馬市博物館との貸与・借用を実施した。
・ウェブページにて「貸出先作品リスト」を公開し、京博の収蔵品がどこへ行けば鑑賞できるかをリアルタイムで情報提供している。(京博)

■文化財の貸与件数

		合計	東京	京都	奈良	九州
件数	21年度	1,729件	1,104件	428件	108件	89件
	22年度	**1,936件**	**1,315件**	**297件**	**159件**	**165件**
館数	21年度	248館	124館	68館	34館	22館
	22年度	**301館**	**150館**	**74館**	**43館**	**34館**

(参考)法人の自己評価
国内外の博物館等からの要請に積極的に対応し、文化財を貸与しており、貸与件数は21年度と比較して207件増加の1,936件であり、貸与先館数も53館増の301館となり、それぞれ増加した。実績では京都国立博物館以外の3博物館は増加となるなど、回復の傾向が見られた。
なお、京都国立博物館においてウェブページでの京都国立博物館収蔵品の「貸出作品リスト」を公開しているが、各博物館とも収蔵品の貸与に関する情報については、公開する体制はまだ整っていない。収蔵品の管理・展示とも大きく関係するので全体として引き続き取り組んでいきたい。

分析・評価

○21 年度比でも収蔵品貸与実績が大きく伸びており、各博物館において、公私立博物館等に収蔵品の貸与を積極的に行っていると評価できる。
特に、京都国立博物館における収蔵品貸与に関わる情報は、ウェブページなどで公開し、国民へのサービス向上に資するものとして評価できる。
今後は、収蔵品の次代への継承という文化財の保護の観点も十分考慮しつつ、保存状況も勘案した無理のない収蔵品貸与の推進を望む。

【(小項目)1−3−5】 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言

【法人の達成すべき計画】
(5)公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努める。なお、援助・助言の実施については今期5年間の実績が前中期目標期間の実績を上回るよう努める。

【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
—	—	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	—	—	—	—	—
従事人員数(人)	99	98	99	103	105

※決算額は、公私立博物館・美術館等に対する援助・助言に係る外注額が少額なため、個別に計上できない。
※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。
その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)

○公私立博物館等に対する援助・助言の実績が前中期目標期間の実績を上回ったか。

主な実績

・新規貸与館に対する環境調査は、東京文化財研究所と協力して指導助言を行った。(東博)
・「奈良の古寺と仏像ー會津八一のうたにのせて」展(新潟市會津八一記念館・新潟県立近代美術館:22年4月24日〜6月6日、三井記念美術館:同7月7日〜9月20日、奈良県立美術館:同11月20日〜12月19日)に協力し、学術面での援助・助言を行った。(奈良博)
・淡路市埋蔵文化財事務所に「五斗長垣内遺跡出土土器付着遺物」の分析指導を行った。(九博)

【公私立博物館・美術館等に対する援助・助言件数】
指標:前中期目標期間の年間平均実績(中期計画)

東京国立博物館 (40件)

A	B	C	実績	定量的評価
40件以上	28件以上40件未満	28件未満	84件	S

京都国立博物館 (12件)

A	B	C	実績	定量的評価
12件以上	8件以上12件未満	8件未満	123件	S

奈良国立博物館 (5件)

A	B	C	実績	定量的評価
5件以上	3件以上5件未満	3件未満	35件	S

九州国立博物館(12件)

A	B	C	実績	定量的評価
12件以上	8件以上12件未満	8件未満	77件	S

分析・評価

○各博物館において、目標を大きく上回る指導・助言がなされており、日常業務と併行して確実に対応している実績は評価できる。
要望への対応件数の増加は、ナショナルセンターとしての機能を果たすだけでなく、研究者等のスキルの高さと信頼による実績が大きい。
当該業務を専門に担当する部門(部署)がないだけに、研究員にとっては大きな負担となることは確かであるが、今後も積極的にその役割を果たすことが望まれる。

	(参考)法人の自己評価 東京国立博物館で昨年度に比べ減少したが、各博物館とも目標値を上まわり、22年度は4博物館計319件となり21年度に比べて2件増と微量ながら増加となった。 相手のニーズによって指導・助言件数の増減が起こる実態ではあるが、文化財の保存、展示などの分野で地方の博物館等から国立博物館の援助・助言に期待される役割に今後も積極的に取り組んでいく。	

【(中項目)1－4】	4 文化財に関する調査及び研究の推進 調査研究の目的、内容の適切性／調査研究の実施状況／調査研究の成果の状況	【評定】 **A**			
		H18		H19	H20	H21
		博物館	研究所			
		―	**A**	**A**	**A**	**A**

【法人の達成すべき計画の概要】
○国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与するため、文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究を推進する。
○文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与するため、文化財に関する新たな調査手法の研究・開発を推進するとともに、文化財の保存や修復の質的向上に寄与するため、科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として、先端的調査研究等を推進する。
また、高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。
さらに、有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次世代への継承及び我が国文化の向上に寄与する。
○それぞれの調査研究を計画に沿って適切に実施するとともに、文化財保護政策上必要な実践的調査研究を迅速かつ適切に実施し、当該調査研究の成果により我が国の文化財保護政策に寄与する。

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	1,491	1,261	1,448	1,473	1,633
従事人員数(人)	194	187	189	191	197

※決算額は、決算報告書・調査研究事業に要した決算額を計上している。
※従事人員数は4国立博物館及び2文化財研究所の全常勤学芸職員の人数を計上している。
その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	**主な実績**	**分析・評価**
○中期計画に示された課題や文化財保護政策のニーズに沿って、研究の目的、テーマを適切に設定したか。	**1. 調査研究の目的、内容の適切性** ・中期計画に示した課題を達成するために、毎年度ごとに研究目的・テーマを設定 (1)文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進 目的:文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究として、国内外の機関との共同研究や研究交流も含めて以下の課題に取り組むことにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。 主なテーマ: ・文化的景観に関する調査研究 ・新しい美術資料学の確立、近現代美術研究、技法材料の広領域研究 ・無形文化遺産研究 ・歴史資料・書跡資料等の調査 ・文化財建造物の保存・修復・活用の研究 ・平城京跡・飛鳥藤原京跡の発掘調査 ・出土遺物の分析とアジアの古代都城遺跡の調査研究	**(調査研究の目的、内容の適切性)** **【評定: A 】** ○調査研究の目的や内容は適切に設定されていると評価できる。 特に、新たに文化財の類型となった「文化的景観」の調査研究をテーマの筆頭にあげる点など、文化財保護政策をはじめとする文化財に関する基礎的・体系的な調査研究に大きく寄与する目的・内容と評価できる。 また、高精細デジタル画像の応用

	・遺跡の保存、整備、活用の技術開発（平城宮跡、藤原宮跡の整備復原）

(2)文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進

目的	文化財の調査手法に関する以下の研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与する。
主なテーマ	・高精細デジタル画像の応用 ・文化財の非破壊調査法 ・遺跡データベースの作成と公開 ・遺跡の測量・探査技術の有効利用法の確立 ・年輪年代学研究 ・動植物遺存体や古土壌の考古科学的分析による環境考古学研究

(3)科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進

目的	最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査及び研究として以下の課題に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。
主なテーマ	・文化財の生物劣化対策 ・文化財の保存環境研究 ・周辺環境が文化財に及ぼす影響 ・考古資料の材質、構造の調査と保存、修復の研究 ・伝統的修復材料と合成樹脂の研究 ・在外古美術品保存修復協力事業 ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究

(4)国・地方公共団体の要請に応じた文化財の保存措置等のための調査・研究の実施

目的	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。
主なテーマ	●高松塚古墳壁画 ・生物対策と保存修理 ・壁画の保存修復及び石材の保存修理 ●キトラ古墳壁画 ・生物対策と保存修理 ・壁画の取り外し ・手法の開発

(5)有形文化財に係る調査研究

目的	①収集・保管のための調査研究 収集・保管に関わる研究を実施し、有形文化財にかかる保存に寄与する。 ②公衆への観覧を図るための研究 公衆への観覧を図るための調査研究を実施し、有形文化財の活用を図る。
主なテーマ	①収集・保管のための調査研究 ・特別調査「書跡」（東博） ・近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究（京博） ・南部諸諸社寺等に関する計画的な調査研究（奈良博） ・日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究（九博） ②公衆への観覧を図るための研究 ・特別展、共催展等の事前調査（4館） ・博物館環境デザインに関する調査研究（東博） ・博物館美術教育に関する調査研究（東博）

や文化財の生物劣化対策など、最新技術の研究・開発・推進も、高松塚やキトラ古墳の保存措置などの実践と深く結びついたテーマ設定がなされ、各項目で提示された調査研究の目的や内容が、相互に有機的な関係をもって設定されている点もきわめて適切であると評価できる。

特に保存科学の先端的研究とその手法の開発は、我が国の文化財保護政策の基盤を形成するものとして、今後も積極的に推進して欲しい。

○それぞれの調査研究を計画に沿って適切に実施したか。また、我が国の文化財保護政策上、緊急に保存修復の措置等が必要となった場合において、必要な実践的調査研究を迅速かつ適切に実施したか。

(参考)法人の自己評価

中期目標・中期計画を達成するための適切な計画を立てることができたと考える。

2. 調査研究の実施状況

(1)文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

主な実績

・上記テーマ設定に従い、以下の調査・研究を実施

		調査研究の名称	施設名
①	ア	**文化的景観に関する調査研究**	奈良文化財研究所
		文化的景観に関する基礎的な情報の収集、四万十川流域や宇治の文化的景観に関する現地調査等を通じて、文化的景観の価値評価、保存計画立案、整備・活用事業の基本的な考え方を整理し、四万十川流域の文化的景観調査報告書を刊行するとともに、論文・Web サイトを通じて成果を報告した。また、文化的景観の学術及び保護に資する研究会である文化的景観学研究会を2回開催し、その成果を踏まえつつ、文化的景観の保存計画と整備・活用をテーマに文化的景観研究集会（第3回）を開催した。関連して、昨年度開催の研究集会（第2回）の成果報告書を刊行した。 ・「宇治の文化的景観」における伝統的建造物の保存・整備に関する調査研究（受託） ・京都岡崎の文化的景観に関する保存計画策定調査（受託） ・相川地区文化的景観 景観変遷・景観構造調査（受託） ・「宇治の文化的景観」整備に伴う宇治橋通りの調査研究（受託）	
	イ	**民俗技術に関する調査・資料収集 無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究 （Ⅰ4(1)④と一体で実施）**	東京文化財研究所
		民俗技術の伝承実態、民俗芸能の伝承組織について現地調査と資料収集を行い、その成果を『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』などに報告した。また無形民俗文化財研究協議会を開催し、無形民俗文化財の保存と活用に関する現実的課題への対応を協議し、その成果を報告書にまとめ、関係者、関係機関等に配布した。さら地方自治体で作成された無形文化遺産に関する記録の所在情報について、確認作業を行い、データ化を完了した。	
②	ア	**東アジアの美術に関する資料学的研究**	東京文化財研究所
		(1)情報資料の収集のための調査：横山大観《山路》の調査。 (2)美術史研究のためのコンテンツの形成：『日本絵画史年紀資料集成 十五世紀』のデータ入力。古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化。 (3)研究会の開催：『美術研究』400 号、『美術史論壇』30 号記念日韓共同シンポジウム「人とモノの「力学」―美術史における「評価」」の開催。オープンレクチャーの開催。 (4)研究成果報告書の編集・刊行：『日本絵画史年紀資料集成（15 世紀）』の刊行。	
	イ	**近現代美術に関する総合的研究**	東京文化財研究所
		未公刊資料の調査研究として、黒田清輝関連資料、笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理・調査を進め、既刊の『日本美術年鑑』所載データをウェブ上に公開するための準備を行った。資料にもとづく研究協議、成果公開としては、黒田記念館にてデジタルコンテンツ「写真で見る黒田清輝の日常」を作成し公開した。	
	ウ	**美術の技法・材料に関する広領域的研究**	東京文化財研究所
		本研究は美術作品が基盤としている材料・技法・制作の過程等を文献史料あるいは作品に対しての科学的手法による分析を援用しながら解明することを目的とする。本年度は天平時代の脱活乾漆像の技法についてこれまでの調査研究成果をまとめた報告書を刊行した。また、ホームページ上で公開している奈良時代史料にあらわれた彩色語彙についてのデータベースを再点検し、精度の向上をはかった。	
	エ	**古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究**	奈良文化財研究所
		石山寺については、昨年度からの調査成果に基づいて、石山寺一切経の大智度論に関する論稿を公表できた。奈良時代の知識経として著名なものだが、後世に数種類の経典を取り合わせて現在の姿になったものを、詳細に調査することにより、その取り合わせ状況を明確にできた。また平城宮周辺等の旧家・自治会等が所蔵する資料の調査を進め、江戸時代から明治時代の平城宮跡の状況、その保存運動に関する	

(調査研究の実施状況)

【評定： Ａ 】

○設定された調査研究の目的や内容に即して、具体的な調査研究が適切に実施されていると評価できる。

○基礎的・体系的な調査・研究においては、いずれも紀要類にその成果が報告されており、学界に資するところ大であると確信される。特に新たな分野である「文化的景観に関する調査研究」においては、各地の受託事業として、特色ある文化的景観が研究対象として選択・実施されており、新分野における研究例として適切な事例を積み上げていると評価できる。

また、新たな調査手法の研究・開発調査においては、単行本・紀要の刊行、論文による研究報告を通じて、新しい文化財保存方法の提案を行っており、所期の目的を十二分に達したと判断される。

○科学的・先進的な保存方法の推進に関しては、実際に多くの事例で先進的な保存手法を適用し、すぐれた成果を上げ、その結果を紀要類に報告しており、評価できる。

国・地方公共団体等の要請に応じた調査研究においては、重要な古墳の遺跡保存に関する研究を行い進展させており、きわめて重要な役割を果たしたと評価される。

			資料を収集・公表できた。		有形文化財研究においては、収集・保存と観覧との両局面に関して、各博物館ごとに数多くの研究を行い、実際の博物館業務に反映させるとともに、その成果を展覧会に結実させたことが評価できる。
		オ	**歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究**	奈良文化財研究所	
			文化財建造物の保存修理に関する基礎データである所内保管資料の整理等の作業を行い、「建造物現状変更説明」については出版物として刊行・配布し、「ガラス乾板」については画像をデジタルデータ化し、一般公開を推進した。また、古代建築の技法に関する研究を継続的に実施した。このほか、受託事業により、各種歴史的建造物の調査をおこなった。		
			・萬翠荘に係る学術調査（受託）		
			・倉見屋敷野家住宅調査（受託）		
		③	**無形文化財の保存・活用に関する調査研究**	東京文化財研究所	
			文化財保護委員会が作成した音声資料、戦前に開発・実用された音声記録媒体「ワイルモジ」、現在伝承されている狂言歌謡、能管の製作技法、文化財保護委員会及び文化庁が行った工芸技術記録について調査研究をおこなうとともに、無形文化遺産部所蔵音声資料の整理をおこない、伝承の危ぶまれる伝統芸能について実演記録を作成した。無形文化遺産分野での国際的研究交流では、韓国国立文化財研究所の無形文化遺産研究室との合意書に基づき、研究員の相互派遣を実施した。5年間のまとめとして『無形文化財の伝承に関する資料集』を発行した。		
			・日本／ユネスコパートナーシップ事業　アジア太平洋地域無形文化遺産保護活動の調査研究（受託）		
		④	①－イ参照		
		⑤	ア	**平城宮跡東方官衙地区（第466次）の発掘調査**	奈良文化財研究所
			基壇をもつ東西棟礎石建物が南北方向に3棟築地塀を挟んで建つことが明らかになった。また周辺の地中レーダー探査により、西隣にも同様の建物配置となる遺構が存在することも判明した。さらにこれらの建物群の南北でそれぞれ宮内道路とそれに伴うと推定される築地塀を検出した。以上により、ある官衙区画の南北範囲を確認することできた。その南には掘立柱建物による別の官衙区画を検出した。また礎石建物群の下層から神亀・養老年間の木簡が出土した。		
			平城宮跡東院地区（第469次）の発掘調査	奈良文化財研究所	
			平城宮跡東院地区の西北部にあたる調査区で、建物跡、掘立柱塀、溝を多数検出した。これらは周辺の調査成果も参照すると6期以上に区分できる。おもな遺構としては、調査区中央部を東西に流れる新旧2条の石組溝、調査区北部の周囲を溝で区画された東西棟礎石建物、推定三面廂付の東西棟建物などがある。 周辺の調査成果と比較して、建物が小規模になる点や、食器類をはじめとする大量の遺物が出土する点から、東院地区のバックヤードとしての機能が推定できる。		
			西大寺旧境内（第473次）の発掘調査	奈良文化財研究所	
			『西大寺資財流記帳』にみえる薬師金堂の回廊推定地の調査。今回の調査では、回廊の痕跡は検出されず、金堂院を囲む回廊は当地よりも南に位置する可能が高まった。		
			薬師寺（第474次）の発掘調査	奈良文化財研究所	
			重機により地表より約165cm掘削し、そこから作業員による掘り下げを開始した。池の埋め土とみられる暗灰褐粘砂土層を検出し、池の岸を検出した。一部、地表から約250cmまで掘り下げて池の底の腐植土を確認した。検出遺構は、池1面、土坑6基、瓦土坑2基、東西溝1条、南北溝1条である。池の上の整地層から12世紀の瓦器皿が出土したが、各遺構の年代については不明である。		
			・平城京薬師寺旧内調査（資置場北側搬入路）（受託）		
			薬師寺（第475次）の発掘調査	奈良文化財研究所	
			薬師寺休ヶ岡八幡宮における発掘調査。社殿の東側では奈良時代に開削されたとみられる段差と、この段差を埋める奈良時代の遺物包含層を確認した。出土土器は奈良時代前半のものである。また、社殿の西側では表土直下で現代の土坑4基を検出したが、明確な遺構は皆無である。		
			・薬師寺旧境内の発掘調査（休ヶ岡八幡神社境内地）（受託）		
			薬師寺（第476次）の発掘調査	奈良文化財研究所	
			調査区は金堂前庭分にあたり、井戸や前庭に敷かれた河原石を検出した。		
			・平城京薬師寺旧境内の調査（金堂周辺）（受託）		
			春日東塔跡（第477次）の発掘調査	奈良文化財研究所	

			春日東塔院の区画施設の外側の雨落溝（L字に折れ曲がる）、落ち込み（以上、東塔建設以降の遺構）、土坑3基・礫敷1ヵ所（下層遺構、東塔建設以前）、なお外側の雨落溝と落ち込みの間に遺構（土坑・溝）を検出しているが、時期及び性格は不明。		
			平城京左京三条一坊一・二坪（第478次）の発掘調査	奈良文化財研究所	
			三条条間北小路南北側溝、左京三条一坊一坪を南北に二分する坪内道路の南北側溝、掘立柱建物2棟、井戸1基など、奈良時代の遺構を確認した。平成23年3月3日には報道発表をおこなった。		
			藤原宮跡朝堂院地区の発掘調査	奈良文化財研究所	
			朝堂院朝庭の発掘調査を実施し、朝庭の礫敷や排水のための暗渠を検出し、朝庭における整備状況を確認した。また、下層遺構の調査では、藤原宮造営期に資材を運搬したと考えられる運河や、運河から北東方向に派生する斜行溝、資材搬入や加工に関わると考られる沼状遺構、朝庭造営中に機能していたと推測できる東西・南北方向の複数の素掘溝を確認した。これらの変遷から、朝堂院の造営過程を復元する上で重要な手がかりを得た。		
			飛鳥地域の発掘調査	奈良文化財研究所	
			水落遺跡第10次調査においては、斉明朝（7世紀中頃～後半）以前、斉明朝、天武朝（7世紀末頃）の3時期にわたる遺構を検出した。斉明朝以前では掘込地業および土器埋設遺構、斉明朝には施設群の地固めのための南北48m以上に及ぶ掘込地業、そしてその内部に設けられた様々な施設（壺地業、東西棟建物、銅管や木樋を設置するために掘られた素掘溝など）、北側の石神遺跡から通路状に続く石敷などを確認した。		
		イ	**平城京跡出土遺物・遺構の調査研究等**	奈良文化財研究所	
			本年度の発掘調査で出土・検出した遺物・遺構整理分析研究、図面・写真の作成などの基礎作業を行い、平成23年刊行予定の『奈良文化財研究所紀要2011』の報告を準備した。併せて、昨年度以前の発掘調査で出土した遺物についての調査を継続して実施した。また、『天平びとの声を聞く―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて』を開催した。		
			飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	奈良文化財研究所	
			本年度の発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦塼類などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を年間を通じて実施し、成果の一部を公表した。		
		ウ	**飛鳥・藤原京・平城京などの古代都城の解明に資するために、古代官衙、集落遺跡に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する**	奈良文化財研究所	
			第14回古代官衙・研究集落研究集会を開催（12/10-11）した。テーマは「古代官衙・集落と鉄」である。事例紹介のほか、自然科学的手法や文献資料からの分析が報告され、これらを踏まえての活発な討論がおこなわれた。 昨年度実施した研究集会の報告書を『奈良文化財研究所研究報告4　官衙と門』（論考編・資料編）として刊行した。		
		エ	**アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究**	奈良文化財研究所	
			A：漢甚安城経営の発掘報告書の刊行。漢魏洛陽城3号門、西南隅で合計2800㎡の共同発掘を実施。 B：遼寧省における隋・唐代墓出土品についての調査成果の取りまとめを実施。 C：河南省および陝西省で生産した唐三彩の調査研究を実施。 D：日本の古代都城並びに韓国古代王京の形成と発展過程に関する共同研究を実施。		
		オ	**庭園に関する調査研究**	奈良文化財研究所	
			平安時代の庭園・建築・文献等の研究に取り組んでいる研究者どもに検討会を開催し、その成果を踏まえつつ、平成18年度以来実施してきた「平安時代庭園に関する研究」について取りまとめ、奈良文化財研究所学報第86冊『平安時代庭園の研究（古代庭園研究Ⅱ）』を刊行した。また、日本庭園に関する国際的な情報発信検討の一環として『Japanese Garden Dictionary』の校訂を進めた。さらに、森蘊・村岡正・牛川喜幸の庭園等関係研究資料について、整理・調査するための基盤的環境を整えた。		
		カ	**東アジア史における飛鳥の研究及び飛鳥時代工芸技術の研究**	奈良文化財研究所	
			飛鳥地域の壁画古墳の研究としては、天文図を中心に研究を進め、関連文献の収集、高松塚・キトラ両古墳の天文図の比較、成田市稲荷山遺跡出土七星刀の調査などを実施した。		

		東アジアにおける工芸美術史・考古学研究のうち、鋳造関連遺物の調査は、藤原京出土の資料に関し、集成と調査を行った。霊井遺跡出土品の研究協力は、成果の一部を企画展で示した。また、来日した河南省文物考古研究所ほかの研究者と同行し、東北大学、明治大学等での調査をおこなうとともに、内外の学会、シンポジウムで報告をおこなった。 山田寺出土部材については、経年的に計測調査をおこなっており、本年も計測を継続した。その結果、大きな変化がないことを確認した。
⑥	ア	**遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究**　奈良文化財研究所 遺跡等における遺構露出展示について、個別事例の情報収集をおこない、データベース構築の作業を進めるとともに、露出展示遺構の保存管理に関するマニュアルの検討をおこなった。また、過年度の成果について、『遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり』[平成21年度遺跡整備・活用究集会（第4回）報告書]を刊行・配布するなど、その普及等をおこなった。
⑥	イ	**遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術並びに監視技術の開発的研究**　奈良文化財研究所 遺構の露出展示をおこなった場合の水分移動変化、および塩類による劣化を予測するために、水分移動および溶質移動の推定をおこなった。さらに、塩類による土質遺構の劣化を抑制するために、水による溶質除去の可能性についても検討した。 覆屋を伴わない屋外に位置する遺構において、気象台による限定的な気象観測データ（気温、湿度、日射量、降水量、風速）をもとに、遺構表面からの水分浸潤量および蒸発散量を推定し、土中における水分移動について検討をおこなった。
	ウ	**文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿正殿復原をはじめとする整備・公開・活用に関する専門的・技術的な援助・助言**　奈良文化財研究所 昨年度に完成した第一次大極殿正殿の完成記録写真撮影をおこなった。また4月24日に開幕した平城遷都1300年祭の準備のため、大極殿正殿内の展示の内容等について援助・助言をおこなった。1300年祭開催期間中は、各方面からの来訪者への対応、あるいは見学客の質問等の応対をおこなった。開催中あるいは開催後はイベント用の仮設建物の建設・撤去や旧状復旧にともなう工事に対する立会をおこなった。 それとともに、平城宮跡の国営公園化にともない、第一次大極殿を中心とした大極殿院内の諸建物を復原することとなった。このための文献資料や発掘遺構等の検討をおこない、またそのための資料収集のほか、類例を抽出して調査をおこなった。検討成果は国土交通省が組織した「第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会」で発表した。 ・第一次大極殿建造物復原整備にかかる調査委託（受託）

（参考）法人の自己評価

21年度同様22年度においても、無形文化遺産から遺跡の発掘まで幅広い分野についての継続的な調査・研究を通して文化財に関する基礎的な情報を蓄積することができている。基礎的・体系的な調査・研究は成果がすぐに出るものではなく、長期的な視野に立つことが欠かせないので、報告書の刊行や研究会・学会での発表を通じて、調査研究の成果を国民に還元していけるよう努力している。今後もこれらの調査・研究を通じて、我が国における文化財に関する調査・研究の底上げを図っていきたい。

（2）文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進

主な実績

・上記テーマ設定に従い、以下の調査・研究を実施

	調査研究の名称	施設名
①	**高精細デジタル画像の応用に関する調査研究**	東京文化財研究所
	脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財の高精細な画像や特殊撮影画像の公開と多目的な利用に供すべく、平等院と行った共同研究成果を『平等院鳳凰堂調査資料目録―蛍光線画像編』として刊行した。また、奈良国立博物館との共同研究成果を『大徳寺五百羅漢図報告書』として刊行した。さらに、他機関との共同調査研究として宮内庁三の丸尚蔵館と「春日権現験記絵巻」の調査撮影、奈良国立博物館との共同調査研究として「信貴山縁起絵巻」、徳川美術館との共同研究として「歌舞伎図巻」「本多平八郎姿絵屏風」の調査撮影を行った。	
	・初期洋風画の光学調査（受託）	
②	**文化財の非破壊調査法の研究**	東京文化財研究所
	蛍光X線分析装置、反射分光分析装置、デジタル顕微鏡さらにはX線透過撮影装置など複数の可搬型調査機器を用いて、博物館・美術館等の所蔵作品の材質・構造の非破壊調査を実施した。また、これら調査技術の高度化を目指して、さまざまな検討を行い、実資料への適用を図った。	
	・GEMによる超高感度・大面積ガンマ線イメージセンサー（受託）	
③	ア **遺跡データベースの作成と公開**	奈良文化財研究所
	官衙関係遺跡の建物データについて、各遺跡における建物群の性格・建物の性格を細分化して追加した。とくに、官衙および都城における門遺構のデータを重点的に収集し、『官衙と門』の資料集成を刊行した。また、寺院遺跡の属性分析をふまえたデータベースを、九州から近畿地方の一部まで公開した。さらに、井戸のデータベースを作成し、データ収集を開始した。	
	イ **遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法の研究**	奈良文化財研究所
	遺跡の測量・探査技術の向上と有効利用法の研究を推進し、大学や地方公共団体と連携して実践をおこなった。測量では、三次元レーザースキャナーおよび写真測量の技術的検討をおこない、遺跡や遺物の図化法の検討、安価で導入可能な機器の実践と普及を実施した。探査では、GPRおよびEM法の走査方法改善と新たな機器の試作、GPSによる位置精度向上実験をおこない、多様な条件下で遺構の確認に成功した。	
	・天良七堂遺跡の総合的探査（受託） ・三軒屋遺跡総合的探査（受託） ・「発掘調査のてびき」作成に係る業務（受託） ・平成22年度大宰府史跡・蔵司地区における総合的探査業務（受託）	
④	**年輪年代学研究**	奈良文化財研究所
	2県下2遺跡の出土木製遺物、2県下4棟の木造建造物、3府県下3躯の木彫像に対して年輪年代測定調査を実施した。このうち、1躯の木彫像に対してプロジェクト研究者らが開発したマイクロフォーカスX線CT装置を用いた年輪年代測定調査を実施している。これらの調査・研究成果の一部を論文等8件、学会発表7件として公表した。このうち、1件の学会発表ではポスター賞を受賞している。	
	・保寺開山堂の年輪年代調査（受託）	
⑤	**遺跡出土の動物遺存体や古土壌の考古科学的分析による環境考古学研究**　奈良文化財研究所	
	土壌選別作業を積極的に実施して、これまで出土事例の少なかった内陸部や日本海側の遺跡から動植物遺存体を回収して、分析を進めた。査読誌2本を含む30本の論文や報告書を執筆し、学会や研究会で8本の発表を行って研究成果を発表し、研究交流を深めた。藤原宮のウマに関する連携研究を立ち上て、次年度につながる良好な成果得た。また、研究の基礎となる現生動物骨格標本についても継続的に収集した。	
	・東名遺跡出土動物遺存体調査（受託） ・長割遺跡の動物遺存体調査（受託） ・六反田南遺跡Ⅳにおける動物遺存体の同定（受託）	

（参考）法人の自己評価

文化財の調査研究において、新たな手法が開発されることによって、これまで知り得なかったことが明らかになることは少なくない。22年度も文化財に関する新たな手法について継続的に研究を実施している。遺跡の探査では、GPR及びEM法の走査方法改善等により、多様な条件下で遺構を確認することができた。

その他にも高精細デジタル画像の活用研究や遺跡データベースの公開を順調に進めている。今後も調査・研究を継続的に実施し、新たな調査手法の開発を通して、調査研究に新たな知見が得られるように努めたい。

(3)科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進

主な実績

・先述したテーマに従い、以下の調査・研究を実施

	調査研究の名称	施設名
①	**文化財の生物劣化対策の研究**	東京文化財研究所
	本年度は、日光二社一寺の歴史的建造物約 70 棟について、粘着トラップを用いて木材害虫の棲息状況を調査した。その結 果、これまで文化財建造物の 被害例が知られ ていない複数のシバンムシ類が認められ、また調査結果よりこれらは 周囲の屋外で棲 息している 可能性が示唆された。虫害の著しい建造物を 調べるのにこのような調査手法が有効であることが示され、レジストグラ フなどの手法を 用いて建物強度などの 調査が行われている。また、漆塗装のある 建造物に適した殺虫処理についても検討を 進めた。調査、検討結果は、研究報告会 で専門家、関係者に報告し、今後取り組むべき課題と問題点を 明らかにした。『日光の歴史的建造物において粘着トラップ（ハエトリリボン）に捕獲された甲虫 の集計方法と調査結果』『保存科 学』50(2011.3)、『日光の歴史 的建造物を 加害するシバンムシ類の殺虫処理方法の検討』『保存科学』50(2011.3)を 刊行した。	
②	**文化財の保存環境の研究**	東京文化財研究所
	本年度も、文化財展示・収蔵施設の環境調査を 行うと共に、熱・換気回路網 計算プログラムによる 解析や三次元熱流体解析システムによる 気流シミュレーションを行い、環境改善に関する研究を 行った。博物館施設の環境に関する研究については、新築の 九州歴史 資料館を調査対象として、内装材料 が福岡県 八女産の 杉、熊本県小国産の杉、無機質系調湿材、のあわせて 3 種類の内装材料で構成される 収蔵庫をモデルとして、各種計測評価方法の比較試験、および内装材料による 空気質の違いについて検討した。文化財の保存環境に関する 研究会を 3回開催した。	
③	**周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究**	東京文化財研究所
	石造文化財や木造建造物など 屋外に 位置する 文化財について 周辺環境計測を 行った。また、その結果に基づく劣化要因の解明、周辺 環境影響を 軽減する 方法および修復材料・技法の開発・評価を 行った。詳 細には、（1）臼杵磨崖仏における 劣化要因の解明および劣化防止対策を 含めた保存管理計画の 提案、（2）厳島神社における 木材充填材料の現地曝露試験、（3）大韓民国・国立文化財研究所との共同調査、共同研究発表会等を 実施した。	
	・国指定史跡高瀬石仏保存修理設計監理業務（受託）	
	・霧島神宮における 彩色剥落薄止めの手法開発及び施工監理（受託）	
	文化財の防災計画に関する調査研究	東京文化財研究所
	平成 22 年度は、(1)東大寺法華堂安置仏像群および塑像四天王立像（戒壇堂所在）の耐震対策を 講ずるため、対象となる 仏像の三次元計測、重心など 三次元計測から 得られた情報を 用いた地震時転倒予測を 継続した。また、仏像模型を 使った振動台実験を 三重大学の協力のもと行った。（2）地理情報システム（GIS）に基づいた文化財防災情報システムについて、地方公共団体における 活用実験を 継続した。	
④	**考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究**	奈良文化財研究所
	1)ガラス製品の標準試料のスペクトルを 集積するとともに、ガラス製遺物のスペクトルを 取得した。 2)海洋出土鉄製遺物の現状調査としてXCT撮影することにより、その劣化状態を 明らかにした。 3)木造建造物の塗装の材質分析を おこない、漆塗装、チャン塗りおよび膠彩色を 明らかにした。 4)貧溶媒真空凍結乾燥法による 新規の保存処理法の開発に着手した。 5)「古代の玉―最新の保存科学的研究の動向―」をテーマとした研究集会を 開催した。	
	・田熊石畑遺跡武器形青銅器の保存修理及び保存台作製（受託）	
	・宇治橋擬宝珠成分分析（受託）	
	・埋蔵文化財発掘調査に係る青銅器科学分析業務委託（受託）	
	・土壌水分の蒸発による史跡ガランドヤ古墳石室内環境の変化に関する調査（受託）	
⑤	**伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究**	東京文化財研究所
	漆などの塗装材料に関する調査研究では建造物における過去の塗装修理に関する基礎資料の蓄積を図るとともに、その実績を塗装修理作業の実践的な施 工指導に役立てた。合成樹脂の 関する 調査では、過去使用した樹脂の劣化などの問題点解決に向けた基礎実験を 行った。また、研究所 が所蔵する 過去の合成樹脂を 用いた修復事業の資料を 分類整理作業では、データベースの目録 作成についてはこれを 終了させた。紙本絹本文 化財の修復材料に関しては、裏打層の開発、表具裂見本目録の作成、和紙の調査を 行った。	
	国際研修「紙の保存と修 復」	東京文化財研究所

2010 年 8 月 30 日～9 月 17 日の期間で 10 カ国から 10 名を 迎え入れて研修を 行った。紙本文化財の修復理念、材料学の講義を 行った。実習では、掛軸修復、和綴じ冊子製作、屏風・掛け軸の取扱などを 行った。またスタディーツアーでは美濃を 訪れ、和紙の原料・製造から流通までを 和紙産地の歴史とともに学習し、和紙の抄造を 体験学習した。和紙を 使用した文化、紙文化財を 徳川美術館、熱田神宮で見学した。修復工房を 訪れ現状を 視察した。

	在外日本古美術品保存修復協力事業	東京文化財研究所
	平成22年度は、9館 10点の作品（絵画 4点、工芸品 6点）を 修復した。うち 4点(絵画2点、工芸品 2点が21年度からの継続、3点（絵画 1点、工芸品 2点）を 海外で修復した。絵画の事前調査は ケルン 東洋美術館1館22点の調査を 行った。また、平成21年度に修復した絵画、工芸品の 修理状況を まとめて「在外日本古美術品保存修 復協力事業」の報告書を 刊行した。	
⑥	**近代の文化遺産の保存修復に関する研究**	東京文化財研究所
	今年度は近代 化遺産の中でも2年 続けて重要 文化財指定された映画 フィルム や音楽テープ、ガラス乾板など 音声・映像記録メディアの保存に関する 関係者を 招き、研究会を 開催しそれぞれの立場から音声・映 像記録メディアの保存と活用に関する 発表、問題点の整理や解決法についての 討論を 行った。また、設計 図面などに多く使われている 青図の保存に関する 研究も行った。屋外展示されている 鉄道車両や航空機など の文化財の防 錆対策のため、試験片を 使った屋外暴露試験にて、塗装仕 様と劣化速 度の相関についても調査している。黎明期の日本の 航空機の写真データベースを ホームページ上で公開した。 昨年度の研究会をまとめた報告書を 刊行した。	

(参考)法人の自己評価

我が国の有形文化 財は紙や木など劣化しやすい材質で作られているものが多く、保存環境や修復に関する調査研究は重要である。22年度も国内外を問わず、文化財の保存に関する調査研究を進め、海外の日本古美術品の修復も行うことができた。海外からも期待されている分野である文化財保存・修復に関する研究は今後も継続的に実施し、我が国文化財の保存・修復の ナショナルセンターとしての機能を強化していきたい。

(4)国・地方公共団体の要請に応じた文化財の保存措置等のための調査・研究の実施

主な実績

・先述したテーマに従い、以下の調査・研究を実施

調査・究の名称	施設名
文化庁が行う高松塚古墳・キトラ 古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力(1)	東京文化財研究所
高松塚古墳では、壁画の状態記録のため損傷図面を 作成した。天 2の漆喰層陥没、青龍の 表層面損傷、漆喰層について、透明シートへの描き込みとデジタル化を 完了した。 キトラ 古墳では 4 月 12 日～4 月 30 日、5 月 10 日～5 月 28 日、10 月 12 日～10 月 29 日、11 月 8 日～11 月 25 日の 4 期にわたり、集中的に漆喰の取り外しを 行った。ヘラ、ダイヤモンド・ワイヤーソーを 使用し、北壁・東壁・西壁・南壁の取り外しを 行い、石室内の漆喰すべての取り外しが完了した。	
・国宝松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務（受託）	
・特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務（受託）	
文化庁が行う高松塚古墳・キトラ 古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力(2)	奈良文化財研究所
文化庁が進める高松塚古墳仮整備事業や保存・活用に関する事業が円滑かつ適切に施 工されるよう協力するとともに、刊行予定の『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』に関する 執筆・編集作業を 行い、文化庁へ提出した。 今年度のキトラ 古墳壁画の剥ぎ取り作業を 支援するとともに、今後のキトラ 古墳壁画、および古墳の保存、活用、整備の方向性を 議論・検討するための技術的な支援・協力を 行った。	
・国宝高松塚古墳壁画恒保存対策関す研究等業務（受託）	
・特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務（受託）	
国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区 公園予定の調査及び保存活用に関する技術的協力	奈良文化財研究所
2008 年度の試掘調査および 2009 年度の発掘調査成果を もとに、檜隈寺講堂北 50mの丘陵頂部から西側斜面にかけて	

2カ所の調査区、東側斜面裾部に5カ所の試掘坑を設定し、調査をおこなった。1区では瓦組暗渠1基と奈良時代以降の整地土を確認し、2区では、7世紀前半の遺構面と、7世紀前半から奈良時代後期にかけての断続的な整地を層位的に確認した。また試掘坑では、古代の石敷を検出した。今回の調査では、檜隈寺の伽藍が完成した7世紀後半以降も大規模な整地をおこなっていることを確認し、これまで不明な点の多かった 7 世紀前半、および奈良時代以降の檜隈寺の土地利用状況を考えるうえでも重要な資料を得た。

・国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区檜隈寺跡周辺遺跡発掘調査（受託）

国土交通省が行う大和紀平野土地改良事業大和平野県営飛鳥工区2号幹線の調査及び保存活用に関する技術的協力	奈良文化財研究所

大和平野支線水路等その3（県営飛鳥2号幹線（右岸）その3）改修工事に伴う発掘調査で、対象地は藤原京左京七・八条一坊（橿原市上飛騨町）にあたる。総長325.520mの工事区域のうち、既設管と完全に重複する央約130m分は立会で対応し、残りの北区（約156m×2m）、南区（約45m×2m）発掘調査した。の結果、古代を中心とする遺構（柱穴・溝等、一部中世を含む）を検出、記録した。

（参考）法人の自己評価

文化庁の要請に応じて、高松塚古墳では損傷図面を作成し、『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』の執筆・編集を行い、文化庁へ提出した。カビ等汚染の除去も着実に実施している。キトラ古墳では集中剥ぎ取り作業を行い、石室内の全ての漆喰の剥ぎ取りを完了した。今後も文化庁の要請に応じて、適宜協力して実施していきたい。

（5）有形文化財に係る調査研究

主な実績

・先述したテーマに従い、以下の調査・研究を実施

	調査研究の名称
①	**収集・保管のための調査研究**
	競争的資金の獲得に努めつつ、収蔵・寄託する文化財に関する研究、保存・展示環境の改善に関する研究を進めるとともに、以下の研究課題に取り組んだ。
	東京国立博物館
	・収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究
	・特別調査法隆寺献納宝物（第 32 次）「聖徳太子絵伝」第 6 回
	・特別調査「書跡」第 8 回
	・特別調査「工芸」第 2 回
	・特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究―尾形光琳風神雷神屏風を中心に
	・特別調査「江戸幕府御用絵師板谷家関係資料」
	・館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究
	・博物館の環境保存に関する研究
	・東洋民族資料に関する調査研究
	・油彩画の材料・技法に関する共同調査
	・荻原守衛「女」の石膏原型とブロンズ鋳造に関する共同研究
	・日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究（科学研究費補助金）
	・目録学の構築と古典学の再生（科学研究費補助金）
	・原三渓旧蔵近代絵画・彫刻に関する基礎的研究（科学研究費補助金）
	・博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究（科学研究費補助金）
	・東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究―「正倉院裂」を中心に―(科学研究費補助金)
	・文化財保護の歴史に関する基礎的研究(科学研究費補助金)
	・高度な復元作業のための制作空間の情報化(科学研究費補助金)
	・狩野晴川院養信筆「法隆寺什物図」の研究(科学研究費補助金)
	・東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究(科学研究費補助金)

	・中国書画の表装に関する基礎的研究(科学研究費補助金)
	・清時代末期の訪中調査における写真資料に関する調査研究（科学研究費補助金）
	・占領期の教育政策における国立博物館の役割に関する調査研究（科学研究費補助金）
	・宮廷工芸に関する物質文化的研究―生活感のある工芸史の構築をめざして―（科学研究費補助金）
	・近現代における古日本染織の移動とコレクション形成に関する基礎的研究（科学研究費補助金）
	・東京国立博物館所蔵古文書データベース（科学研究費補助金）
	・東京国立博物館所蔵印譜データベース（科学研究費補助金）
	・隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究（科学研究費補助金）
	・前方後円墳体制東縁地域における国家形成過程の研究：常陸の場合（科学研究費補助金）
	・古文書および古典籍の修復と装幀形態に関する用語の研究(科学研究費補助金)
	・彫刻におけるデジタル立体造形の可能性と表現方法の研究・教育への応用（科学研究費補助金）
	・アジアの木地螺鈿―その源流、正倉院宝物への道をたどる―（科学研究費補助金）
	・高精細デジタル測定技術と職人の知識を融合させた工芸文化財復元の研究（科学研究費補助金）
	・日本近世実景図研究
	京都国立博物館
	・近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究
	・鎌倉仏教とその造形に関する調査研究
	・日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察（科学研究費補助金）
	・建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究（科学研究費補助金）
	・修復文化財に関する資料収集及び調査研究
	・文化財の保存・修復に関する調査研究（奈良文化財研究所との共同研究）
	・近世絵画に関する調査研究
	・訓点資料としての典籍に関する調査研究
	・彫刻に関する調査研究
	・出土・伝世古陶磁に関する調査研究
	・近代建築に関する調査研究
	奈良国立博物館
	・南都諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施
	・仏教美術の光学的調査研究（東京文化財研究所との共同研究）
	・仏教美術写真収集及びその調査研究
	・我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究
	・当館所蔵品についての調査研究（客員研究員）
	・奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流 （科学研究費補助金）
	・統一新羅期の道具瓦集成（科学研究費補助金）
	九州国立博物館
	・日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究
	・文化財の材質・構造等に関する共同研究
	・博物館における文化財保存修復に関する研究
	・博物館危機管理としての市民協同型 IPM システム構築に向けての基礎研究
	・東アジアの文化財修復用手漉き和紙の調査研究（UNESCO との共同）
	・VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築（科学研究費補助金）
	・トルキ山遼墓出土品から見た唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術（科学研究費補助金）
	・室町時代の仏教絵画を中心とする東アジアの宗教美術に関する調査研究
	・埴輪に認められる赤色顔料についての基礎的研究（科学研究費補助金）
	・X線CTスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析（科学研究費補助金）
	・アジアの木地螺鈿―その源流、正倉院宝物への道をたどる―（科学研究費補助金）
	・五胡十六国から北魏時代の出土陶俑に関する基礎研究（科学研究費補助金）
	・海の東アジアが醸成した貝と漆の文化“螺鈿”の再発見―その共通性と多様性を探る―（トヨタ財団研究助

成）

② **公衆への観覧を図るための研究**

公衆への観覧を図るために、各館では、教育普及やバリアフリー、情報処理などの観点から調査・研究を進めている。また、調査研究が展覧会の形で実を結ぶなど有形文化財についての調査研究を通して、広く観覧の機会を創出するような調査・研究を実施している。

東京国立博物館
- ・博物館環境デザインに関する調査研究
- ・博物館美術教育に関する調査研究
- ・博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究
- ・凸版印刷と協同で、ミュージアム・シアターでの公開に向けた研究
- ・博物館をみんなのものに～視覚障害児童・生徒へのスクールプログラム～ハンズオンとワークショップを中心に

京都国立博物館
- ・文化財情報に関する調査研究
- ・特別展覧会「高僧と袈裟」の開催に向けて、寺院所蔵品の調査研究
- ・特別展覧会「中国の書画（仮）」にむけて旧上野コレクションと関連作品の調査研究
- ・特別展覧「上田秋成」の開催に向けて、日本近世文学会と共同で調査研究
- ・特集陳列「園田湖城」の開催に向けて、篆刻資料の調査研究
- ・特別展覧会「法然」の開催に向けて、浄土宗等院所蔵文化財の調査研究
- ・特別展覧会「細川家の至宝」（平成23年度）の開催に向けて永青文庫と共同で関連作品の調査研究
- ・特別展覧会「中国近代絵画（仮）」（平成23年度）の開催に向けて、須磨コレクションと関連作品の調査研究

奈良国立博物館
- ・南都諸社寺等に関する計画的な調査研究成果の一部を「大遣唐使展」「仏像修理100年」並びに特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」、「お水取り」及びなら仏像館の仏像展示に反映
- ・我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査研究成果、及び当館所蔵品についての調査研究成果を生かし、なら仏像館仏像展示や名品展（平常展）の充実を図る

九州国立博物館
- ・平成 20 年度特別展「工芸のいま 伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への調査を受けて、継続的かつ発展的に調査研究活動を行う。
- ・京都、九州における黄檗宗等院に関する調査を進め、成果を特別展に反映
- ・日本、韓国、中国における寓文化に関する考古遺品、美術作品に関する調査を進め、成果を特別展に反映
- ・中国内蒙古自治区出土の遼時代に属する考古遺物に関する調査研究を進め、成果を特別展に反映する。
- ・細川家伝来資料に関する調査
- ・九博に関連する絵本の次シリーズの企画について検討

（参考）法人の自己評価

各博物館とも、日常の調査研究の成果が特別展や特集陳列などの展示に結びついている。京都国立博物館における「高層と袈裟」展、奈良国立博物館における「大遣唐使展」や「仏像修理100年展」、九州国立博物館の「馬　アジアを駆けた二千年」などにその成果が活かされた。一方機構内の文化財研究所との共同研究や大学などとの共同研究も実施しており、その成果も展示に積極的に活用し、広く公開した。

文化財の保存と公開という博物館の使命を持続するために保存環境やリスク回避などについての研究を行い、次世代へ継承するために不断の努力を続けている。また公衆の観覧を図るための研究としては、博物館環境デザインの研究や先駆的な教育普及理論や実践的研究など公開に力点を置いた研究を行い、文化財情報に関しては複合的データベースの連動化などの研究を進めている。

○調査研究の成果により我が国の文化財保護政策に寄与するとともに、学術雑誌等への論文の掲載、学会、研究会での発表、データベースの追加等により定量的観点からも調査研究の成果を確保したか。
○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次世代への継承及び我が国文化の向上に寄与したか。
○研究の実施にあたっては、外部資金を活用したか。

3. 調査研究の成果の状況

主な実績

		学術雑誌等への論文掲載数		学会、研究会等での発表件数	
		21年度	22年度	21年度	22年度
(1)	文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進	77件	96件	37件	29件
(2)	文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進主な実績	40件	47件	20件	26件
(3)	科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進	25件	35件	38件	29件
(4)	国・地方公共団体の要請に応じた文化財の保存措置等のための調査・研究の実施	17件	4件	—	—
(5)	有形文化財に係る調査研究	124件	156件	129件	111件
(6)	文財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究	4件	2件	9件	9件
(7)	情報発信機能の強化	1件	2件	1件	2件
(8)	地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向	6件	3件	—	—
	計	294件	345件	234件	206件

新規特許取得件数

1件（文化財用表打ち材料及びそれを用いた文化財修復方法）

外部資金の獲得

■科学研究費補助金獲得件数

	21 年度	22 年度
新規応募件数	83	86
新規採択件数	35	25
新規採択率	42%	29%
件数（新規＋継続）計	86	81
直接経費（千円）	231,330	206,881
間接経費（千円）	67,629	60,265
交付額計（千円）	298,959	267,146

【学術雑誌等への掲載論文数】（指標：中期計画）

A	B	C	実績	定量的評価
100件以上	100件未満70件以上	70件未満	345件	S

【学会、研究会等での発表件数】（指標：中期計画）

A	B	C	実績	定量的評価
80件以上	80件未満56件以上	56件未満	206件	S

（調査研究の成果の状況）

【評定：Ａ】

○学術誌等への論文掲載数、学会、研究会等での発表件数は目標を十分に達成しており、特に刊行物は非常に水準が高く、我が国の文化財研究をリードするものとして高く評価できる。

東京文化財研究所による文化財修理に関する特許取得は高く評価できる。

	(参考)法人の自己評価 専門家や研究者への研究成果の還元については、論文や学会での発表を通して、着実に成果をあげていると考える。定量的観点からも論文の発表件数、学会等での発表件数とも順調に成果をあげている。 なお、本年は東文研が特許を出願していた「文化財用表打ち材料及びそれを用いた文化財修復方法」について特許を取得することができた。研究成果が結実したものである。なお特許の取得数は本件を含め3件となった。	

【(中項目)1－5】	5　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進	【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
－	A	S	A	A

【(小項目)1－5－1】	国際協力に関する研究基盤の整備	【評定】 A

【法人の達成すべき計画】
文化財の保存・修復に関する国際協力に関して、以下の事業を有機的・総合的に展開することにより、人類共通の財産である文化財の保存・修復に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与する。
(1)文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤整備を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国において文化財の保存・修復事業を推進する。

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
－	A	S	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	286	249	229	223	227
従事人員数(人)	95	89	90	88	92

※決算額は、決算報告書・国際研究協力事業費の決算額を計上している。
　(小項目1－5－1と1－5－2は個別に計上できないため。)
※従事人員数は2文化財研究所の全常勤学芸職員の人数を計上している。
　その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○情報の収集・分析及びその提供を行ったか。 ○国際協力のネットワークを構築したか。	・文化財保存施策の国際的研究 文化財保存施策の国際的研究について、以下の事業を実施した。 1. 世界各地で開催された研究会やワークショップに積極的に参加し、文化財の保存に関わる各種の情報を収集し、分析した。 2. 国際ワークショップの開催:アジア各国の専門家を招へいしてアジアの文化財について考える国際会議を1回、国内外の専門家を講師とする一般公開の国内専門家向け研究集会を1回、計2回開催した。 ・アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究 文化財の保存のための覆屋効果について、材質ごとおよび覆屋の形態ごとに検証し、成果をタイ・インドネシアの研究者と共有した。また、タイ・スコータイ遺跡について、環境調査を実施した。さらに、微生物が石材の風化に与える影響について、カンボジアのアンコール遺跡において検討した。	○各種ワークショップへの参加や国際共同研究を通して、アジア諸国を中心とする国際協力関係は順調に構築されており、研究基盤整備も粛々と進行していると認められるとともに、機構の国際的なネットワークを構築するためのワークショップの開催や情報収集に向けて努力していると評価できる。 特に、東南アジア、中国、西アジアにおける文化財修復事業に積極的に参画し、成果を挙げている。

	・カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査 考古班は東テラスの中央祠堂前面の状況解明のために、当該箇所に3回に分けて調査区を設定し発掘を実施した。建築班は実測調査をおこなうとともに、類例調査を進めた。保存科学班は、来年度から開始予定の暴露試験に向けて、資料の調整、暴露試験台設置作業などを実施した。カンボジア人人材育成としては3名の研究者を日本に招聘し技術交流をおこなった。 ・陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究 2010年度は、前年度の調査実績をもとに墳墓壁画の考古発掘現場での調査実現を目指し、準備を進めたが、秋までの間に陝西省での壁画墓の発掘がなく、現場調査は実現しなかった。このため、前年度の作成した報告書の中国語版を作成し、西安市において陝西省の各機関の専門家を集めた研究会を実施し、調査手法についての評価を求めた。さらに壁画が出土してから文化財として保存されるまでの全工程において、どのような記録保存が求められ、それぞれの現場においてどのように現実的に対応するかを討論し、今後の共同研究についてその可能性を考えた。 ・敦煌壁画の保護に関する共同研究 本年度は中期計画の最終年度であると同時に日中共同調査研究の5年目最終年度を迎えた。これまでの4年間に実施してきた調査研究についての成果をまとめるとともに、次期共同研究へ向けての準備作業を行った。とくに壁画の制作材料と制作技法に関する研究は、これまでに蓄積してきた劣化状態と色料に関する調査データをもとに劣化を生みだした環境要素のシミュレーション研究を行い、そこから壁画本来の色彩への考察を図ろうという計画をもった科学研究費補助金の申請が通り、研究の総括へ向けて明確な方向性を持つことができた。 ・西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業 〇アフガニスタン：バーミヤーン保存修復事業実施、文化財専門家の人材育成・技術移転、専門家会議への出席、報告書の作成・出版、外部機関との共同研究。 〇イラク：文化財専門家の人材育成・技術移転。 〇西アジア周辺諸国文化遺産の調査研究・保護への協力等：トルコ、タジキスタン、インド、中央アジア諸国、エジプト。 受託研究 日本／ユネスコパートナーシップ事業 アジア太平洋地域無形文化遺産保護活動の調査研究（受託） ユネスコ／日本信託基金 バーミヤーン遺跡の保護プロジェクト（受託） インドネシア西スマトラ州パダンにおける歴史的地区文化遺産復興支援（専門家交流）事業（受託） 文化遺産国際協力コンソーシアム事業（受託） 文化遺産国際協力拠点交流事業 インド（受託） 文化遺産国際協力拠点交流事業 モンゴル（受託） 文化遺産国際協力拠点交流事業 中央アジア（受託） 文化遺産国際協力拠点交流事業 カンボジア（受託） エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズ1）にかかる国内支援業務（受託） 日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術要員の育成プログラム（受託） ユネスコ／日本信託基金 バクダードにあるイラク博物館の保存修復室の復興プロジェクト（受託） ユネスコ／日本信託基金 タンロン・ハノイ文化遺産群の保存事業（受託）	かつて戦域であった地域の文化財修復には、我が国の協力が不可欠であることから、今後もアジアに向けての人材育成等の一層の推進が期待される。

	（参考）法人の自己評価 国際的な文化財機構のネットワーク構築のため、各種ワークショップを開催し、またそれに参加して情報の収集に努めている。国際協力事業については、カンボジア、中国、西アジアなどアジアを中心に文化財修復に積極的に協力し、国際協力が図られている。	

【(小項目)1−5−2】 保存修復に関する技術移転の推進

【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
−	A	S	A	A

【法人の達成すべき計画】
(2)諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。
また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	286	249	229	223	227
従事人員数(人)	95	89	90	88	92

※決算額は、決算報告書・国際研究協力事業費の決算額を計上している。
(小項目 1−5−1 と 1−5−2 は個別に計上できないため。)
※従事人員数は2文化財研究所の全常勤学芸職員の人数を計上している。
その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○諸外国への技術移転を積極的に進めたか。 ○アジア諸国における専門的な人材の育成のための支援事業等を行ったか。	・諸外国の文化財保存修復専門家養成 諸外国における文化財の保存・修復に携わる専門家の研修において使用することを目的とした、教科書(日本語版および英語版)を作成した。 また、人材養成研修手法の改善に資することを目的に、「海外の文化財保存修復専門家養成を目的とする国際研修等の実施に関する研究会」を開催した。 ・国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力 集団研修では16ヵ国、16名の研修生に対して研修をおこなった。また個人研修ではモンゴル人3名に対して、保存科学を中心とする研修をおこなった。こうした研修をおこなうことにより、各国の人材育成に貢献するとともに、日本側の各国理解の一助とも成った。また国内における国際協力関係の諸機関との連携を強化することができた。 **(参考)法人の自己評価** 国際協力機構やユネスコアジア文化センター(ACCU)への協力だけでなく、専門家研修の教材の作成を通して、アジア各国への技術移転を進めることができている。	○文化財保存修復に関する研修用テキストの作成、ユネスコ等が実施する研修への協力等により、アジア諸国への技術転移を積極的に進めており、アジア諸国の保存修復に関わる人材育成、教材や手法の開発に成果をあげている。 なお、こうした文化財に関する国際貢献については、あまり一般に知られていない。その成果公開を国内で推進すること、すなわち文化財に関する日本の技術等が世界に発信しうる内容のものである事実を、国内で周知することも、今後、海外だけでなく、国内における後継者育成を推進する上で必要である。

【(中項目)1−6】 6 情報発信機能の強化

【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
−	A	A	A	A

【(小項目)1−6−1】 情報基盤の整備充実

【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
−	A	A	A	A

【法人の達成すべき計画】
以下のとおり、調査・研究に基づく資料の作成及び文化財に関連する資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査・研究成果を積極的に公表・公開し、研究者や広く一般の人が調査・研究成果を容易に入手できるようにする。
(1)文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。
また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る。

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	187	166	146	144	127
従事人員数(人)	83	89	77	85	87

※決算額は、決算報告書・情報公開事業費の決算額を計上している。
(当該項目は小項目 1−6−2 と重複があり、個別に計上できないため。)
※従事人員数は、東京国立博物館の学芸企画部企画課、学芸企画部博物館情報課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課、東京文化財研究所の企画情報部、奈良文化財研究所の企画調整部の常勤学芸職員の人数を計上している。
その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○ネットワークセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備充実を図ったか。 ○文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図ったか。	・ネットワークセキュリティの強化 ・文化財機構内のグループウェア運用に向けたVPN接続の実施 ・情報交換システム及びウイルス対策ソフトの更新によるセキュリティシステムの強化 ・専門的アーカイブの拡充 ・劣化が懸念される貴重雑誌やオープンテープ等のデジタル化の実施 ・国内外の文化財に関する資料の収集及びデータベース化の実施 ・「各国の文化財保護法令シリーズ」及び「フランス文化財法典(前編)」の刊行 ・GIS(地理情報システム)を活用した遺跡・遺物情報の取得・管理に関する最新手法の開発 ・『東京文化財研究所七十五年史　本文編』の刊行 ・将来の多言語化に備えるために、各種データベースについて、業務用とともに公開用につい	○ネットワークセキュリティの強化及びグループウェア運用に向けた VPN 接続等が図られて、適時性・効率性・継続性・正確性等、情報基盤が整備・充実したと評価できる。 貴重雑誌やオープンテープ等のデータベース化やアジア・欧米諸国の文化財保護法令のデータベース化等に取り組み、充実したアーカイブを構築

	ても文字コードをUnicode化 **(参考)法人の自己評価** 文化財に関する専門的なアーカイブ化を順調に進めることができている。文化財保護関連情報のデータベース化も積極的に進め、22 年度はフランス、タジキスタン、ブータンの文化財保護法令について、各国法令が対象とする文化財によって分類し、データベース化している。	しており、研究上有用なデータベースであると評価できる。

【(小項目)1－6－2】 調査研究成果の公開・提供

【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
－	A	A	A	A

【法人の達成すべき計画】
(2)文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成17 年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額①(百万円)	187	166	146	144	127
決算額②(百万円)	140	119	112	163	150
従事人員数(人)	83	89	77	85	87

※決算額①は、決算報告書・情報公開事業費の決算額を計上している。
(当該項目は小項目 1－6－1 と重複があり、個別計上できないため。)
決算額②は、決算報告書・展示出版事業費の決算額を計上している。
(当該項目は小項目 1－6－3 と重複があり、個別計上できないため。)
※従事人員数は、東京国立博物館の学芸企画部企画課、学芸企画部博物館情報課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課、東京文化財研究所の企画情報部、奈良文化財研究所の企画調整部の常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	**主な実績**	**分析・評価**
○公開講演会、現地説明会、国際シンポジウム等を積極的に行ったか。 ○HPの 充実を図り、HPアクセス件数を 前期中期計画期間の年度平均以上確保したか。	・年報、日本美術年鑑、美術研究、保存科学など、定期刊行物の刊行 ・無形文化遺産研究報告など、研究報告書の刊行 ・第33回文化財の保存・修復に関する国際研究集会の開催 ・オープンレクチャーの開催 ・発掘調査の現地説明会の開催と公開講演会の実施 ・キッズページ(日本語版・英語版)、携帯サイトの新設など、ホームページの充実 【研究所 HPアクセス件数】指標:前中期計画期間年度平均件数:1,122,695件 (中期計画) (21 年度実績:2,448,108 件)	○公開講演会・現地説明会・国際シンポジウム等の開催、研究報告書 や年報等の定期的な刊行により、研究成果を積極的に公表している。 特に、刊行された紀要類は内容が充実し、極めて有用であるとともに、一般向けの公開講演会等も、専門的な学術研究集会と同じく順調に行われていると認められる。 ホームページのアクセス件数は目標を達成し、21 年度実績も上回っている。これは、モバイルサイトの新設やホームページの内容の充実が、アクセス件数の向上に貢献したと考えられる。アクセス件数の増加は、博物館

A	B	C	実績	定量的評価
1,122,695件以上	785,886件以上 1,122,695件未満	785,886件未満	6,466,167件	S

(参考)法人の自己評価
22年度も研究報告書や年報等定期刊行物をとおして研究成果の公表を行っている。また、文化財の保存・修復に関する国際研究集会を通して、文化財の保存・修復の国際的な課題や取り組みなどを検討する機会を設け、研究成果を積極的に公表している。また、HPのアクセス件数も目標を達成し、前年度実績も上回っている。オープンレクチャーや現地説明会などを通した一般への研究成果の公表にも力を入れており、今後も積極的に公表の機会を設けていきたい。

		事業の理解の広がりという観点から意義が大きく、調査研究成果が適切に公開・提供できたと評価できる。

【(小項目)1－6－3】 公開施設の運用

【評定】

S

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
―	A	A	A	A

【法人の達成すべき計画】

(3)黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

(4)文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力し、支援を実施する。また、宮跡等への来訪者に文化財に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティア事業を運営するとともに、各種ボランティアに対して、活動機会・場所の提供等の支援を行う。

(5)奈良県の「平城遷都1300年記念事業」にあわせ、平城京についてのこれまでの調査・研究成果を生かした展示・公開事業を行う。

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	140	119	112	163	150
従事人員数(人)	95	89	90	88	92

※決算額は、決算報告書・展示出版事業費の決算額を計上している。
(当該項目は小項目 1－6－2と重複があり、個別計上できないため。)
※従事人員数は2文化財研究所の全常勤学芸職員の人数を計上している。
その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)

○黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示の充実を図ったか。
○入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上を確保したか。
○文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力したか。また、ボランティアへの活動支援を行ったか。
○奈良県の「平城遷都 1300 年記念事業」にあわせ、平城京についてのこれまでの調査・研究成果を生かした展示・公開事業を行ったか。

主な実績

・黒田記念館・平城宮跡資料館・藤原宮跡資料室・飛鳥資料館の展示公開
・平城宮跡資料館のリニューアルオープンに伴う、常設展示の大幅展示替え
・平城遷都1300年記念事業終了後、同事業のツアーガイド(ボランティア)73名を新たに研究所のボランティアとして受け入れ研修を実施
・飛鳥資料館において、特別展示「キトラ古墳壁画四神」等を開催

【研究公開施設入館者数】指標:前中期計画期間年度平均入館者数(中期計画)
黒田記念館入館者数(10,531 人)

A	B	C	実績	定量的評価
10,531人以上	7,371人以上 10,531人未満	7,371人未満	18,458人	S

平城宮跡資料館入場者数(72,430人)

A	B	C	実績	定量的評価
72,430人以上	50,701人以上 72,430人未満	50,701人未満	354,346人	S

分析・評価

○平城宮跡資料館常設展示の大幅展示替え、飛鳥資料館のキトラ古墳壁画の特別公開等、広く国民の理解を得る展示を企画・実施し、来館者数も目標値を大きく上回ったことが高く評価できる。

「平城遷都 1300 年記念事業」にあわせて、調査・研究成果を生かした展示を行い、当該記念事業のためのツアーガイド(ボランティア)を育成し、配置したことから、国民に対し、古代日本文化の理解と普及に貢献していると認められる。

小規模な資料館等におけるこうした

藤原宮跡資料室入館者数(4,486人)

A	B	C	実績	定量的評価
4,486人以上	3,140人以上 4,486人未満	3,140人未満	4,815人	A

飛鳥資料館入館者数(55,274人)

A	B	C	実績	定量的評価
55,274人以上	38,691人以上 55,274人未満	38,691人未満	133,312人	S

(参考)法人の自己評価

22年度も施設の公開を通して、文化財研究所の研究成果を公表している。黒田記念館の黒田作品の公開機会の拡大については、引き続き年1回の巡回展のほか、東京国立博物館での特集陳列の開催など公開の機会拡大に努めている。平城宮跡資料館ではリニューアルオープンにあたり、新しい展示手法を取り入れた大幅な展示替えを行うなどして、入館者の平城宮跡への理解促進に努めている。また、飛鳥資料館ではキトラ古墳壁画の特別公開のまとめと位置づけた特別展を開催し、研究・展示の成果を公開している。入館者数は平城宮跡資料館、飛鳥資料館は目標値をかなり上回っている。今後も引き続き研究の成果を発信することにより、文化財研究所の事業内容を積極的に公開していきたい。

文化庁事業の協力としては、飛鳥資料館においてキトラ古墳壁画を公開するなど、積極的に協力している。

ボランティアについても、平城遷都1300年記念事業のツアーガイド73名を研究所のボランティアとして受け入れ、講義、実習等の研修を行うなど、登録ボランティア数の維持及びガイド技術の熟達の促進等積極的に支援している。

実績は、今後の博物館運営にとっても非常に重要な意味を持つと考えられ、極めて高く評価できる。

S評定の根拠(A評定との違い)

【定量的根拠】

○黒田記念館、平城宮跡資料館ではいずれも目標値を大幅に上回る来館者があり、また藤原宮跡資料室も目標値を達成しており、総合的に判断してS評価がふさわしい。

※入館者数　黒田記念館　目標:10,531人　実績:18,458人
平城宮跡資料館　目標:72,430人　実績:354,346人
藤原宮跡資料室　目標:4,486人　実績:4,815人
飛鳥資料館　目標:55,274人　実績:133,312人

○研究公開施設4ヶ所の来館者数がすべて大幅に目標Aを上回っており、特に、平城宮跡資料館は約5倍の入館者を記録した。

【定性的根拠】

○大規模博物館とは違った小回りのきく資料館での展示・解説は、一般見学者のより深い理解を助けることになるであろうし、博物館ファンを確実に増やすことにつながるはずであるので、こうした事業での成功は、今後の博物館運営にとっても非常に重要な意味を持つと考えられ、高く評価できる。

【(小項目)1－6－4】 情報発信機能の強化

【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
B	―	A	A	S

【法人の達成すべき計画】

(6)文化財情報・研究成果などを広く公表すること等を通じて歴史・伝統文化に対する理解が深まるよう努める。

①ウェブサイト等自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、広く国内外に情報を発信する。ウェブサイトのアクセス件数は年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ることとする。

②－1　収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すために、デジタル化を推進し、文化財情報システム等により広く積極的に公開する。また、収蔵品等に関するデジタル化件数は、年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにする。

②－2　美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能を充実させる。

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額①(百万円)	10	19	27	53	21
決算額②(百万円)	―	―	―	542	142
従事人員数(人)	83	89	77	85	87

※決算額①は、デジタルアーカイブ化にかかる撮影費・データ入力費等の決算額を計上している。
決算額②は、文化芸術情報電子化推進費補助金にかかる決算額(決算報告書・文化芸術情報電子化推進費)を計上している。

※従事人員数は、東京国立博物館の学芸企画部企画課、学芸企画部博物館情報課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課、東京文化財研究所の企画情報部、奈良文化財研究所の企画調整部の常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○ウェブサイトのアクセスの年間平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ったか。 ○収蔵品等に関するデジタル化件数は、年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにしたか。 ○情報資料を収集し、レファレンス機能を充実させたか。	**インターネットを利用した情報の発信** ・情報アーカイブサイトでの調査研究成果の公開を継続した。(東博) ・モバイルサイトを開設し公開した。(東博) ・「e国宝」を閲覧するためのiPhoneアプリを開発、公開した。(東博) ・収蔵品の貸与情報をウェブサイトに公開した。(京博) ・研究者一覧のウェブページを作成し、研究員の自己紹介、主要業績等を掲載した。(京博、奈良博) ・ウェブサイトにおいて特別展ごとに館のウェブ上でブログとリンクさせる仕組みの「ぶろぐるぽ」を実施した。(九博) 【ウェブサイトのアクセス年間平均件数】 指標:前中期目標期間の年間平均実績(中期計画)	○iPhoneのアプリケーションを利用した「e国宝」の閲覧やモバイルサイトの開設等、時代に即応した試みとサービスの向上により、WEBサイトアクセス件数を大幅に増やしたことは評価できる。 収蔵品等のデジタル化も順調に進展しており、今後のコンテンツ構築の一層の進展を期待する。

東京国立博物館（1,928,966件／5,687,673件）（前中期目標期間の年間平均実績／21年度実績）

A	B	C	実績	定量的評価
1,928,966件以上	1,350,276件以上 1,928,966件未満	1,350,276件未満	4,971,306件	S

京都国立博物館（521,965件／848,486件）

A	B	C	実績	定量的評価
521,965件以上	365,376件以上 521,965件未満	365,376件未満	805,935件	S

奈良国立博物館（670,948件／2,630,035件）

A	B	C	実績	定量的評価
670,948件以上	469,664件以上 670,948件未満	469,664件未満	3,121,270件	S

九州国立博物館（783,487件／7,459,518件）

A	B	C	実績	定量的評価
783,487件以上	548,441件以上 783,487件未満	548,441件未満	4,708,102件	S

デジタル化の推進、レファレンスの充実

・国指定文化財について3次元計測によるデジタル化を実施した。（東博）
・国指定文化財の高精細デジタル撮影の実施と5ヶ国語（日英仏中韓）での解説文の整備（東博）
・デジタル撮影の開始、デジタル画像の運用管理、情報公開を推進する準備作業として、写真情報システムのリニューアルを進めた。（奈良博）
・e国宝にデータを順次追加し、公開件数の充実を図った。（4博物館）
・資料館における美術史等の情報・資料の公開のため、図書資料等のデータ整備を推進した。（東博）
・仏教美術資料研究センターの耐震補強工事を機会に、書庫および閲覧室のレイアウトの全面的なリニューアルを行った。（奈良博）
・博物館資料（収蔵品、図書、写真など）データベースにおける業務の効率化に向けて、現行業務システムを全面的に見直し、より充実した第2次業務システム構築を行った。（九博）

【収蔵品等の画像デジタル化件数】
指標：前中期目標期間の年間平均実績（中期計画）

東京国立博物館（18,829件／775,300件）（前中期目標期間の年間平均実績／21年度実績）

A	B	C	実績	定量的評価
18,829件以上	13,180件以上 18,829件未満	13,180件未満	8,639件	C

京都国立博物館（4,359件／5,603件）

A	B	C	実績	定量的評価
4,359件以上	3,051件以上 4,359件未満	3,051件未満	4,594件	A

奈良国立博物館（8,471件以上／102,894件）

A	B	C	実績	定量的評価
8,471件以上	5,930件以上 8,471件未満	5,930件未満	9,501件	A

九州国立博物館（1,890件／3,574件）

A	B	C	実績	定量的評価
1,890件以上	1,323件以上 1,890件未満	1,323件未満	1,391件	B

（参考）法人の自己評価

ウェブサイトのアクセス件数は、各博物館とも目標を達成した。各博物館ともウェブサイトのリニューアルに取り組み、常に最新情報や豊富な情報量の提供に努めた。またウェブサイト上に特別展の混雑情報を提供するなど、利用者の利便性の向上に努めた結果と考えられる。

収蔵品等のデジタル化については東京国立博物館で前中期目標期間からの順調なデジタル化作業の進行により、ポジフィルムからのデジタル化が終了に近づくなど、中期計画の設定にはそぐわなくなってきており、次期中期より目標設定方法を変更する必要がある。

【(中項目)1−7】	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上	【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
ー	A	A	A	A

【(小項目)1−7−1】	地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制の構築	【評定】 A

【法人の達成すべき計画】
我が国の文化財に関する調査・研究のナショナルセンターとして、これまでの調査・研究の成果を活かし、国・地方公共団体等に対する専門的・技術的な協力・助言を行うことにより、我が国全体の文化財の調査・研究の質的向上に寄与する。また、専門指導者層を対象とした研修等を行い、文化財保護に必要な人材を養成する。
(1)地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
ー	A	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	―	―	―	―	―
従事人員数(人)	95	89	90	88	92

※決算額は、協力・助言等にかかる外注費が少額なため、個別に計上できない。
※従事人員数は2文化財研究所の全常勤学芸職員の人数を計上している。
その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行ったか。	**協力・助言の積極的な実施** ・無形文化遺産の保存・伝承・活用に関する助言の実施(26件) ・各種文化財の保存修復に関する指導助言の実施(133件) ・地方公共団体等が行う遺跡、建造物などの調査・整備・修復・保存等に関する援助助言の実施(332件) ・地方公共団体が行う平城京域発掘調査への援助・助言(5件) ・地方公共団体が行う飛鳥・藤原地区発掘調査への援助・助言(6件) 助言の事例 ①厳島神社大鳥居修復材料の選定に関する指導助言 厳島神社大鳥居は海中にあることに加え、海風や強い紫外線や太陽光による熱にさらされているため、修復の際にはこれらの条件下で使用することができる材料を選定する必要がある。このために材料の基礎物性の確認や現地での海中浸漬試験などを行っている。	○地方公共団体や大学・研究機関との連携・協力体制を構築し、地方公共団体並びに公私立博物館に対して、文化財に関する協力・助言が適切になされていると評価でき、ナショナルセンターとしての役割を十分果たしていると評価できる。

	②根津美術館の改築工事に伴う室内空気汚染対策や文化財害虫対策に関する指導助言 美術館の改築工事に関して、展示室、展示ケース、収蔵庫内の温湿度環境、空気環境等の調査を行い、室内空気汚染対策や文化財害虫対策に関する指導、助言を行った。 ③「宇治の文化的景観」における伝統的建造物・整備に関する調査研究 京都府宇治市の重要的文化景観「宇治の文化的景観」の中核をなす宇治橋通りの調査を行い、あわせて、宇治市に対する援助・助言を行った。 ④大分県日田市史跡ガランドヤ古墳の保存に関わる調査研究 平成 22 年度は壁画をもつ横穴式石室内の環境変化を追究するための土壌水分の蒸発量を測定するなどの調査を進めるなど、壁画古墳の保存について指導・助言を行った。 **(参考)法人の自己評価** 文化財研究所は文化財に関する研究や保存・修復、発掘調査等においてナショナルセンター機能を有している。22 年度も地方公共団体等へ文化財の調査に関する援助・助言を実施し、地域における文化財行政に協力することにより、我が国の文化財の保護に努めている。	

【(小項目)1−7−2】 中核的文化財担当者の研修・若手研究者の育成

【評定】

A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
ー	A	S	A	A

【法人の達成すべき計画】

(2)文化財に関する高度な研究成果をもとに、地方公共団体等で中核となる文化財担当者に埋蔵文化財に関する研修及び保存科学に関する保存担当学芸員研修を実施する。なお、参加者等に対するアンケート調査を行い、80%以上の満足度が得られるようにする。

また、東京藝術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成に寄与する。

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22
決算額(百万円)	24	22	22	17	18
従事人員数(人)	95	89	90	88	92

※決算額は、決算報告書・研修事業費の決算額を計上している。

※従事人員数は2文化財研究所の全常勤学芸職員の人数を計上している。
その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)

○埋蔵文化財に関する高度な研究成果をもとに、中核となる文化財担当者に、各種の研修を実施するとともに、参加者等に対するアンケート調査で 80 パーセント以上の満足度が得られるようにしたか。

○連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成に寄与したか。

主な実績

埋蔵文化財研修の実施

・専門課程11課程の実施(137名参加)

保存担当者研修の実施

・1回33名の参加者を得て実施、その後「保存担当学芸員フォローアップ研修」(参加者97名)を実施

大学院教育の推進(連携大学院)

・東京芸術大学:システム保存学(保存環境学、修復材料学等)
・京都大学大学院人間・環境学研究科:共生文明学(文化・地域環境論等)
・奈良女子大学大学院人間文化研究科:比較文化学(文化史論等)

【埋蔵文化財研修　満足度%】指標:中期計画

A	B	C	実績	定量的評価
80%以上	80%未満56%以上	56%未満	100%	A

【保存担当学芸員研修　満足度%】指標:中期計画

A	B	C	実績	定量的評価
80%以上	80%未満56%以上	56%未満	100%	A

(参考)法人の自己評価

地方公共団体の文化財担当者や博物館・美術館の保存担当学芸員、東京藝術大学・京都大学等の大学院学生を対象に、文化財の調査研究や保護について研修を実施することにより、将来的な文化財保護行政を担う人材の育成を図ることができていると考える。保存担当学芸員研修、埋蔵文化財担当者研修はともに満足度も高く、有意義な研修を行えている。

分析・評価

○埋蔵文化財研修、保存担当学芸員研修において、100%の満足度を得るということは、研修内容の質の高さを物語っており、地方公共団体や博物館、美術館の文化財担当者の研修に成果を上げている。

連携大学院における教育実施は、将来的に人材育成の基盤を形成するものとして評価できる。

【(大項目)2】	Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
A	A	A	A	A

【(小項目)2−1】	業務の効率化	【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
A	(A)	A	B	A

【法人の達成すべき計画】

1　職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上に考慮する。また、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、さらに、外部委託の推進等により、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き5年期間中一般管理費 15%以上、業務経費5%以上の業務の効率化を図る。

さらに、法人統合のメリットも最大限に生かしつつ業務の効率化に務め、機構の業務運営に際しては、一般管理業務の本部への一元化、集約化等を図り、19 年度一般管理費(物件費)の 10%相当を統合後5年間で削減を図る。

具体的には下記の措置を講じる。

(1)共通的な事務の一元化による業務の効率化

(2)使用資源の減少

・省エネルギー(5年期間中1年に 1.03%の減少)　・廃棄物減量化(一般廃棄物排出量を5年期間中5%減少)

・リサイクルの推進

(3)施設有効使用の推進

・施設の利用推進

(4)民間委託の推進

・一般管理部門を含めた組織・業務の見直しを行い、民間開放をさらに積極的に進める。

・館の警備・清掃業務について民間委託を推進する。

・来館者サービスを中心に業務の見直しを行い、民間委託を積極的進める。

(5)競争入札の推進

・契約業者の競合を一層推進することにより、経費の効率化を図る。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き5年期間中一般管理費 15%以上、業務経費5%以上の業務の効率化を図ったか。 ○省エネルギー5年期間中、1年に 1.03%減少を図ったか。 ○施設の有効利用の推進を図ったか。 ○民間委託の推進を図ったか。 ○競争入札の推進を図ったか。 ○保有固定資産の活用状況について、減損会計の情報(保有目的、利用実績など)を考慮し、十分な推進を図ったか。 ○官民競争入札等の推進を図ったか。	**・事務の一元化による業務の効率化** ・「研究・学芸系職員連絡協議会」を実施し、各博物館における翌年度の展覧会企画等について調整を行い、計画を図った。 ・グループウェアを機構全体で一本化し、7 月以降本部および各施設にて順次、運用を開始した。機構内全職員が一本化されたグループウェア「サイボウズ・ガルーン 2」を利用することで、機構内の連絡および情報共有が大幅に効率化し、セキュリティが向上した。 ・国立文化財機構規程集PDF 版をグループウェア上で閲覧可能とした。機構内職員が常に最新版を参照できるようになった。 ・給与明細のウェブ閲覧を平成 23 年 3 月給与より試行運用を開始し、業務効率化と経費削減に加え利便性向上が見込まれる。 ・財務会計システムの更新手続きに着手し、23 年 4 月入札公告・24 年 4 月運用開始に向けて準備を進めた。 【一般管理費の削減状況】　(単位:千円) 管理人件費 757,295 / 790,586 / 4.4% 一般管理費 1,066,178 / 932,061 / △12.6% 合計 1,823,473 / 1,722,647 / △5.5% ※管理人件費は、一時的な退職手当の増加による。 【事業費の削減状況】　(単位:千円) 業務人件費 2,487,085 / 2,371,746 / △4.6% 業務経費 6,143,724 / 6,915,704 / 12.6% 合計 8,630,809 / 9,287,450 / 7.6% ※業務経費は、21 年度からの運営費交付金の繰越約 12 億円を含むため増加している。21 年度繰越分は退職が延期されたため執行されなかった退職手当を除き、陳列品購入等の繰越時の執行計画を含み 22 年度において全てを執行した。22 年度実績の対 17 年度削減割合は△5.05%であり、中期目標期間での効率化目標は達成している。 ■光熱水料 光熱水料金　(単位:千円) 電気料 366,202 / 350,947 / △15,255 水道料 93,651 / 79,777 / △13,874 ガス料(※1) 92,510 / 98,213 / 5,703 計 552,363 / 528,937 / △23,426 ※ガスは、全体として使用量ベースでは減少したが、原料高騰による単価上昇により使用料金ベースで増額となった。 (※1)ガス使用料 ガス使用料 1,521,140㎥ / 1,475,110㎥ / △46,030㎥ / 7,785千円 (参考)臨時要因を考慮した光熱水料金　(単位:千円) 電気料 366,202 / 350,947 / △15,255 水道料 93,651 / 79,777 / △13,874	○グループウェアを機構全体で一本化し、運用を開始する等、事務の一元化による業務の効率化が図られていると認められる。今後も財務会計システムの更新等により一層の業務の効率化を図ることが望まれる。 一般管理費については計画に従い削減されている。一方、事業費については 7.6%の増加となっているが、17 年度に比べ 5.05%の削減となり、中期目標期間で5%以上の削減を達成しており、全体として問題はない。 光熱水料については、ガス料金の原料高騰による単価上昇を除くと5.65%減少しているとともに、一般廃棄物排出量も臨時要因を除くと2.12%減少していることから、省エネルギー及びリサイクルは、機構の努力により推進されていると認められる。 民間委託については、文化財保護という重要な業務を担う中、着実に推進していると判断できる。今後は、民間委託が人件費・経費の削減や業務の効率化にどれだけ資するか検証する必要がある。

	ガス料 92,510 90,428 △2,082 計 552,363 521,152 (5.65%減)31,211 ※ガス単価上昇等を勘案して算定。 ■廃棄物排出量 事項 / 21 年度 / 22 年度 / 増減率(%) 一般廃棄物(※2) 228,045 kg 273,407 kg 19.89 (※2)一般廃棄物増加の臨時要因 (単位:kg) 施設 / 内容 / 排出量 奈良国立博物館 西新館耐震改修工事等に伴う増加 47,500 奈良文化財研究所 平城遷都1300年祭関連行事に伴う増加 2,700 小計 50,200 (参考)臨時要因を考慮した廃棄物排出量 事項 / 21 年度 / 22 年度 / 増減率(%) 一般廃棄物 228,045 kg 223,207 kg △2.12 ・施設の有効利用 ■施設の有効利用件数(有償利用件数) 合計 / 東博 / 京博 / 奈良博 / 九博 / 東文研 / 奈文研 2,749 件(524 件) / 538 件(256 件) / 59 件(44 件) / 146 件(31 件) / 321 件(76 件) / 196 件(12 件) / 1,489 件(105 件) ■固定資産の減損 ・該当なし。 ・民間委託の推進 全ての施設において、電気設備保守業務、機械設備保守業務、昇降機設備保守業務、売札業務、各種事務補助作業、清掃業務、構内樹木等維持管理業務等について、民間委託を実施している。 博物館は、警備・展示室監視等業務の大部分を外部委託している。また、研究所は警備業務を外部委託している。 博物館の来館者サービスに関しては、インフォメーション業務、図書・写真資料を閲覧等の利用に供するサービス及び図書整理業務等について民間委託を実施している。 東京国立博物館・東京文化財研究所で施設管理・運営業務(展示等の企画運営は除く)について民間競争入札を実施済みであるが、さらに東京国立博物館では展示場における来館者応対等業務についても民間競争入札を平成22年4月1日から実施した。	
【契約の競争性、透明性の確保】 ・ 契約方式等、契約に係る規程類について、整備内容や運用は適切か。	【契約に係る規程類の整備及び運用状況】 (1)契約に係る規程類	○契約方式、契約に係る規程類については整備されるとともに、「契約監

	①独立行政法人国立文化財機構会計規程 ②独立行政法人国立文化財機構会計規程の特例を定める規程 ③独立行政法人国立文化財機構契約事務取扱細則 ④独立行政法人国立文化財機構契約情報公表要項 ⑤契約情報公表に必要な事項に関する取扱 ⑥独立行政法人国立文化財機構修理契約委員会要項 ⑦独立行政法人国立文化財機構契約監視委員会要項 ⑧調査の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式 ⑨研究開発の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式 ⑩広報の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式 ⑪独立行政法人国立文化財機構における「企画競争・公募」ならびに「総合評価落札方式」に関するマニュアルについて (2)国の契約基準と異なる規程の有無 「独立行政法人等における適正化について(通知)」(平成20年12月31日付、20文科会第583号)を受け、国と同様の契約基準としたため、国の契約基準と異なる規程はない。	視委員会要項」に則り、随意契約及び一者応札・一者応募についての見直し状況の点検を実施する等、適切に運用されている。
・ 契約事務手続に係る執行体制や審査体制について、整備・執行等は適切か。	【契約事務手続に係る執行体制及び審査体制の整備・執行状況】 【執行体制】 ・法人内の役職別契約従事者数(施設系職員は含まない) 本部事務局　財務担当室長1名、係員1名 東京国立博物館　経理課室長1名、契約担当係　係長1名、主任・係員3名(本部事務局職員兼務) 京都国立博物館　課長補佐1名、財務担当係　係長1名、主任・係員3名 奈良国立博物館　財務担当係　係長1名、係員2名 九州国立博物館　課長補佐1名、財務担当係　係長1名、主任2名 東京文化財研究所　管理室長1名、契約担当専門職員1名 奈良文化財研究所　課長補佐1名、会見担当係　係長1名、用度担当係　係長1名、係員1名 【審査体制】 (1)内部のチェック体制 各施設に分任契約担当役を設置し、各施設において契約処理ならびに適正な契約が行われているかをチェックする体制を整備している。特に随意契約の場合、契約が適正かを十分に精査し、契約を行うよう本部から指導の徹底を行っている。 (2)内部でのチェック対象案件の抽出方法 各施設において契約された契約のうち、契約金額や案件等から抽出した契約にかかる書類等を監事監査ならびに内部監査においてチェックを実施し、適正な契約処理が行われているか等の確認を実施している。 【契約監視委員会の審議状況】	○また、各施設に分任契約担当役を設置し、各施設において契約処理ならびに適正な契約が行われているかをチェックする体制を整備していることや、各施設において契約された契約のうち、契約金額や案件等から抽出した契約にかかる書類等を監事監査ならびに内部監査においてチェックを実施する等、審査体制を整備しつつ適切に契約事務手続きが行われていると認められる。

（1）実施回数　2回（12月3日・3月17日）
（2）実施対象契約案件
【第1回】
・平成22年度上半期における契約実績
【第2回】
・平成22年度下半期における契約実績及び見込み
（3）委員会点検内容
・平成22年度における競争性のない随意契約及び一者応札・一者応募について、その見直し内容についての点検を実施
（4）評価結果
・一者応札・一者応募については、さらに公告期間の確保に努める必要がある。また、随意契約見直し計画の達成状況については、機構の特殊性として随意契約とせざるを得ない文化財購入と文化財修理について、その件数と金額が年度により大きく変わるので、これが要因となり未達成の年度が生じる場合は未達成も致し方ないと判断する。

【随意契約等見直し計画】
・「随意契約等見直し計画」の実施・進捗状況や目標達成に向けた具体的取組状況は適切か。

【随意契約等見直し計画の実績と具体的取組】

	①平成20年度実績		②見直し計画（H22年4月公表）		③平成22年度実績		②と③の比較増減（見直し計画の進捗状況）	
	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）
競争性のある契約	164	1,968,416	235	2,334,578	210	2,099,703	△25	△234,875
競争入札	142	1,718,996	199	2,009,789	158	1,816,224	△41	△193,565
企画競争、公募等	22	249,420	36	324,789	52	283,479	16	△41,310
競争性のない随意契約	152	1,469,766	81	1,103,603	116	2,165,608	35	1,062,005
合計	316	3,438,181	316	3,438,181	326	4,265,311	10	827,130

※以下、随意契約等見直し計画に比し乖離している場合のみ記載

【原因、改善方策】
競争性のない随意契約が見直し計画に比して件数で35件、金額で 1,062,005 千円未達成の状況であるが、これは見直し時に比べ文化財購入が 15 件、989,646 千円増えているなどのためである。
・見直し時　　文化財購入　30 件　766,294 千円
・平成22年度実績　文化財購入　45 件　1,755,940 千円

○競争性のない随意契約が見直し計画に比して件数で 35 件、金額で 1,062,005 千円未達成の状況であるが、これは見直し時に比べ文化財購入が 15 件、989,646 千円増えているためである。
　文化財購入等の、随意契約によらざるを得ない契約を除き、競争入札は推進されている。また、監事監査ならびに内部監査においてチェックを実施するとともに、契約監視委員会による契約の点検も実施されており、特段の問題はないと判断できる。

【個々の契約の競争性、透明性の確保】
・ 再委託の必要性等について、契約の競争性、透明性の確保の観点から適切か。

【再委託の有無と適切性】
　当法人においては、再委託の実績はない。

○再委託となっている契約はない。

・ 一般競争入札等における一者応札・応募の状況はどうか。その原因について適切に検証されているか。また検証結果を踏まえた改善方策は妥当か。

【一者応札・応募の状況】

	①平成20年度実績		②平成22年度実績		①と②の比較増減	
	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）
競争性のある契約	164	1,968,416	217	2,144,321	53	175,905
うち、一者応札・応募となった契約	65	738,860	87	783,429	22	44,569
一般競争契約	55	531,498	47	581,699	△8	50,201
指名競争契約	0	0	0	0	0	0
企画競争	4	61,445	23	86,212	19	24,767
公募	6	145,917	10	70,900	4	△75,017
不落随意契約	0	0	7	44,618	7	44,618

【原因、改善方策】
　一者応募の増加は、文化財修理契約における企画競争が見直し時に比べ、20 件・53,436 千円増加したことが主たる要因となっている。
　文化財修理は、見直し時に一部を随意契約から企画競争へと移行したものであり、外部有識者を含めた修理契約委員会に諮った上で、特定の技術を持った修理業者を対象に企画競争を行っているが、応募者数が少ない案件も存在するため、一者応募が見直し時に比べて増えた要因となっている。
　文化財保護の観点から契約条件の見直しは難しいため、適切な公告期間を確保し、企画競争への参加促進を図っている。

○一般競争入札等において、一者応札・応募は増加しているが、文化財修理に係る契約が増えたことが主たる要因となっている。
　外部有識者を含めた修理契約委員会に諮り、その原因を検証していると認められる。
　文化財保護の観点から契約条件の見直しは難しいため、適切な公告期間を確保し、企画競争への参加促進を図るという改善方策についても適切と判断できる。

【一般競争入札における制限的な応札条件の有無と適切性】
一般競争入札において、制限的な応札条件を設けていない。

【関連法人】
・ 法人の特定の業務を独占的に受託している関連法人について、当該法人と関連法人との関係が具体的に明らかにされているか。
・ 当該関連法人との業務委託の妥当性についての評価が行われているか。
・ 関連法人に対する出資、出えん、負担金等（以下「出資等」という。）について、法人の政策目的を踏まえた出資等の必要性の評価が行われているか。

【関連法人の有無】
関連法人は無い。

○関連法人はない。

※以下、関連法人が有る場合のみ記載。
【当該法人との関係】
【当該法人に対する業務委託の必要性、契約金額の妥当性】
【委託先の収支に占める再委託費の割合】
【当該法人への出資等の必要性】

【(小項目)2−2】	外部評価等の実施	【評定】
【法人の達成すべき計画】 2　外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回以上事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。		A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
A	(A)	B	A	A

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○事務事業改善のための外部評価及び職員の研修を実施したか。	・実績報告書作成時の自己点検評価の実施(年1回) ・外部評価委員会の開催及び外部評価報告の実施 機構の外部評価委員会は、機構の行った自己点検評価について評価を行うことを任務として設置しており、現在13名で構成されている。委員会には、総会と別に博物館調査研究等部会及び研究所調査研究等部会が置かれ、機構の調査研究等の実績に関する評価について特に専門的な立場で評価を行い、委員会に報告することになっている。(22年度の外部評価については23年4〜5月に実施済(研究所調査研究等部会・博物館調査研究等部会、総会(各1回)) ・監事による業務・会計監査の実施(年1回) ・文部科学省独立行政法人評価委員会国立文化財機構部会による評価 ・総務省独立行政法人評価委員会による評価 ・監事による各施設の臨時監査(計5回)を実施した。 法人本部(23年1月14,21日)、東京国立博物館(23年1月14,3月4日)、京都国立博物館(23年2月18日)、 東京文化財研究所(23年2月10日)、九州国立博物館　(23年3月11日) ・職員の資質の向上と能力開発の推進を図るため、本部事務局及び各施設において次のとおり研修等を実施した。 主催 / 研修等 本部事務局・東京国立博物館: 新任職員研修、接遇研修、個人情報保護講演会、産業医による講習会、接遇(顧客対応)研修、施設系職員研修、ハラスメントに関する講演会及び研修会、防災訓練 京都国立博物館: 衛生管理講習会、普通救命講習会、マナー講習会、クレーム講習会、初期消火活動講習 奈良国立博物館: 防災訓練、産業医による講習会、セクシュアルハラスメントに関する講習会 九州国立博物館: 研究費の管理及び会計手続き説明会、防災訓練、ハラスメント防止研修、産業医による講話 東京文化財研究所: 個人情報保護講演会※1、産業医による講習会※2、消防訓練およびAED操作講習会(※1、2は東博との共催) 奈良文化財研究所: 新人研修、産業医による講習会2回、消防訓練 **職員の意識改革**	○自己点検評価や外部評価等を実施し、事業改善に努力していると評価できる。また、職員の研修については、各施設の問題意識に沿って、自主的に行なわれていると認められる。引き続き研修や運営改善コンクールのフォローアップ等を行い、事務事業の改善を図ることが望まれる。

	・20年度運営改善コンクールにおいて採択された案件についてフォローアップを行った。 ・東京国立博物館では「独立行政法人国立文化財機構保有個人情報管理規程」に基づき実施された保有個人情報の管理状況監査における監事からの指示より、個人情報を扱う業務について、確実な取扱いを行うための再点検を行った。	
○コンプライアンス体制(倫理行動規程の策定、第三者を入れた倫理委員会等の設置、監事による内部統制についての評価の実施)を整備したか。	**コンプライアンス体制の維持、内部統制の整備** ・「独立行政法人国立文化財機構職員倫理規程」及び「独立行政法人国立文化財機構役員の倫理に関する取り扱い」等を策定し、転任者も対象とした初任者研修時に説明を行い、職員の意識改善を図っている。 ・「独立行政法人の契約状況の点検・見直しについて」(平成21年11月17日閣議決定)に基づき、「独立行政法人国立文化財機構契約監視委員会要項」を制定し、外部委員も含めた契約監視委員会を設置して、随意契約の点検等を行っている。 ・決算業務については、決算作業開始を早期化し22年末に決算準備を開始するとともに、詳細な決算スケジュールを作成し、決算に必要となる資料・データについて各施設に周知することにより、22年度決算は予定どおり順調に完了することができた。 ・本部及び各施設において内部監査を実施し、随意契約の見直し状況及び一者応札の改善方策を含めて監査を行った。会計監査では科学研究費補助金等を監査し、給与簿監査では出勤簿等について全般的な監査をした。 ・会計監査人による財務諸表に関する監査を実施し、特に改善を要する指摘はなかった。 ・監事の定期監査においては、規定の整備状況、内部監査の実施状況等について監査を行い、特に改善を要する指摘はなかった。 ・22年度は「独立行政法人国立文化財機構保有個人情報管理規程」に基づき、本部事務局及び各施設における保有個人情報の管理状況について保有個人情報管理監査を行った。 **(参考)法人の自己評価** 機構の自己点検について外部評価委員による評価会として、総会と博物館及び研究所のそれぞれの研究について部会の延べ3回開催し、評価を受けた。 職員の意識改革については、20年度に実施した運営改善コンクールのフォローアップ行い、また保有個人情報管理監査により、個人情報を扱う業務について、確実な取扱いを行うための再点検を行った。今後も引き続き職員の意識改革や取り組みの改善を継続的に実施していきたい。 コンプライアンス体制の整備に関しては、基本的に整備された規程等を踏まえ、継続的に対処し透明性の確保に努めている。また、22年度は「独立行政法人国立文化財機構保有個人情報管理規程」に基づいた個人情報保護監査を行うとともに、「独立行政法人国立文化財機構のウェブサイトにおいて取得した個人情報の取扱基本方針」を制定し、個人情報の管理体制を明文化した。	○コンプライアンス及び内部統制の整備・運用については、規程に基づき個人情報保護監査を行う等、有効に機能していると評価できる。今後も、業務の有効性及び効率性、財務報告の信頼性、事業活動に関わる法令等の遵守並びに資産の保全に努めることが望まれる。
【法人の長のマネジメント】 (リーダーシップを発揮できる環境整備) ・ 法人の長がリーダーシップを発揮できる環	【リーダーシップを発揮できる環境の整備状況と機能状況】 ・理事長のトップマネジメントとそれを支える体制の確立	○役員会の協議や相談役の規程化により、理事長がリーダーシップを発揮でき

境は整備され、実質的に機能しているか。	運営上の諸課題への対応方針の決定等については、「役員会」の協議を踏まえて理事長が行った。また、理事長の勤務地（京博）と本部の所在地（東博）が離れていることから、21年度に理事長代理にあたる「相談役」として規程化し、東京国立博物館長をあて、トップマネジメントとそれを支える体制を整えた。方針の決定に当たっては「運営委員会」などの評価及び提言を十分検討するとともに、方針決定後は速やかに実施するように留意した。また、各施設間で調整を図る必要がある課題については、「国立文化財機構6施設連絡協議会」及び「国立文化財機構研究・学芸系職員連絡協議会」にて協議を行っている。 【組織にとって重要な情報等についての把握状況】 ・役員会（22年度開催回数：7回） 国立博物館の業務に関する重要事項について審議を行う。 ・運営委員会（22年度開催回数：1回） 機構の管理運営の重要事項について審議し、理事長に助言する。（現員17名） ・外部評価委員会（22年度開催回数：1回　※博物館・研究所各部会各1回実施） 国立文化財機構の業務の実績及び自己点検評価の妥当性について評価を行う。（現員13名） ・国立文化財機構契約監視委員会（22年度開催回数：2回） 機構の契約の適正化に関し意見具申を行う。（現員6名） ・国立文化財機構6施設連絡協議会（22年度開催回数：3回） 法人全体や各施設の課題の整理や連絡・協議を行う。 ・国立文化財機構研究・学芸系職員連絡協議会（22年度開催回数：2回） 研究調整役のもと、機構内の研究者間の情報交換の場を設け、展覧会企画、機構の取組み、課題等について協議を行う。 ・独立行政法人国立文化財機構情報化委員会（22年度開催回数：2回） CIOのもとに、情報担当者の情報交換の場を設け、問題点の共有と対応について検討を行う。 以上のほか、各施設の情報の共有化や意思疎通を図るため、機構内グループウェアを22年度から稼働し、連絡事項の職員への周知など迅速に行う体制ができた。	る環境が整備されるとともに、「6施設連絡協議会」や「研究・学芸系職員連絡協議会」を開催する等、実質的に機能していると認められる。
（法人のミッションの役職員への周知徹底） ・ 法人の長は、組織にとって重要な情報等について適時的確に把握するとともに、法人のミッション等を役職員に周知徹底しているか。	【役職員に対するミッションの周知状況及びミッションを役職員により深く浸透させる取組状況】 ・役員会（22年度開催回数：7回） 役員会を通じ機構の役職員に対するミッションの周知状況及びミッションを役職員により深く浸透させる取組を行っている。	○役員会を通じて役職員に対してミッションを周知していると認められる。しかし、役員会を通じてだけではミッションを役職員により深く浸透させることは十分ではないため、各種会議への役職員の参加や、朝礼及び機関誌等を利用することにより、すべての役職員への周知徹底を図ることが必要である。
（組織全体で取り組むべき重要な課題（リスク）の把握・対応等） ・ 法人の長は、法人の規模や業種等の特性を考慮した上で、法人のミッション達成を	【組織全体で取り組むべき重要な課題（リスク）の把握状況】	○「6施設連絡協議会」等において、法人全体の課題の整理や連絡・協議を行

阻害する課題（リスク）のうち、組織全体として取り組むべき重要なリスクの把握・対応を行っているか。	役員会のほか ・国立文化財機構6施設連絡協議会（22年度開催回数：3回） 法人全体や各施設の課題の整理や連絡・協議を行い、必要に応じて役員会に上程している。 ・国立文化財機構研究・学芸系職員連絡協議会（22年度開催回数：2回） 研究調整役のもと、機構内の研究者間の情報交換の場を設け、展覧会企画、機構の取組み、課題等について協議を行い、必要に応じ役員会に上程している。 【組織全体で取り組むべき重要な課題（リスク）に対する対応状況】 役員会のほか ・国立文化財機構6施設連絡協議会（22年度開催回数：3回） 法人全体や各施設の課題の整理や連絡・協議を行い、必要に応じて役員会に上程している。 ・国立文化財機構研究・学芸系職員連絡協議会（22年度開催回数：2回） 研究調整役のもと、機構内の研究者間の情報交換の場を設け、展覧会企画、機構の取組み、課題等について協議を行い、必要に応じ役員会に上程している。	い、必要に応じて役員会に報告することにより、理事長が課題（リスク）を把握できていると認められる。 また、「国立文化財機構の長期展望（平成 22 年 8 月 31 日）」を取りまとめ、機構における長期的な課題への取り組み方針等を明確にし、課題（リスク）へも対応していると認められる。
・ その際、中期目標・計画の未達成項目（業務）についての未達成要因の把握・分析・対応等に着目しているか。 （内部統制の現状把握・課題対応計画の作成） ・ 法人の長は、内部統制の現状を的確に把握した上で、リスクを洗い出し、その対応計画を作成・実行しているか。	【未達成項目（業務）についての未達成要因の把握・分析・対応状況】 ・未達成項目については役員会において各施設長から聴取するなど、常に状況等を把握するよう努めている。、またその対応についても、その都度協議している。 【内部統制のリスクの把握状況】 ・リスクについては役員会において各施設長から聴取するなど、常に把握している。またその対応についても、その都度協議している。 【内部統制のリスクが有る場合、その対応計画の作成・実行状況】 ・リスクへの対応計画などについては役員会において協議し、最終的に理事長の判断により実施時期、実施期限などを定めている。またその進捗状況等については役員会にて随時報告している。	○未達成項目については、役員会において各施設長から聴取する等、常に状況等を把握するよう努めるとともに、その対応策等についても必要に応じて協議していると認められる。 ○内部統制のリスクについては、役員会において聴取する等、常に把握しており、また対応計画についても役員会で協議・決定し、進捗状況も報告する等、着実に行われていると認められる。課題（リスク）に対する改善が行われていると判断できる。
【監事監査】 ・ 監事監査において、法人の長のマネジメントについて留意しているか。	【監事監査における法人の長のマネジメントに関する監査状況】 1．監査規程の整備状況 （1） 監事監査 ①独立行政法人国立文化財機構監事監査要項（平成 19 年 4 月 1 日制定） ②独立行政法人国立文化財機構監査実施基準（平成 19 年 4 月 1 日制定）	○「監事監査要項」や「監査実施基準」の規程に則り監事監査が実施されていることに加え、監事が理事長の出席する役員会等の会議に出席することにより、

	（2）内部監査 ①独立行政法人国立文化財機構の会計に関する内部監査要項（平成 19 年 11 月 13 日制定） ②監査計画 内部監査実施要項を参照し、その都度本部事務局財務課で作成する。 （3）独立行政法人国立文化財機構職員倫理規程（平成 19 年 4 月 1 日制定） 2．監査体制の整備状況 （1）監事監査 ①監事（文部科学大臣任命） 2 名（専任：非常勤 2 名） ②監査の事務補助（監事監査要項第8条） 平成 22 年度実績　2 名 （2）内部監査 ①監査員（内部監査要項第 5 条） 理事長が命ずる職員 平成22年度実績 14 名 （本部事務局財務課長、本部事務局財務課室長、本部事務局予算･主計担当係長、本部事務局決算･財務分析担当係員、本部事務局監査･調査担当係員、東京国立博物館経理課室長、東京国立博物館経理課法規担当専門職員、東京国立博物館経理課契約担当係員 2 名、東京国立博物館経理課経理担当係員、京都国立博物館総務課財務担当係長、京都国立博物館総務課財務担当主任、奈良文化財研究所管理部会計担当係長、奈良文化財研究所管理部用度担当係員） 3．監査実績（実施項目、実施時期、監査手法等） （1）監事監査の実績 ①監事監査の概要 独法統合後（平成 19 年 4 月以降）各年度において、役員会その他重要な会議に出席するほか、役職員から事業の報告を聴取し、重要な決裁書類等を閲覧し、本部において、財務及び業務についての状況を調査した。さらに、会計監査人から会計監査人の監査方法及びその結果について説明を受け、会計帳簿等の調査を行い、財務諸表、事業報告書及び決算報告書について検討を加え、いずれも適正であることを確認するとともに、業務の執行に関する法令遵守等の状況についても確認した。 ②定期監査スケジュール、報告書、指摘事項等 ○ 監事監査計画作成（4 月）→ 提出先：理事長 ○ 定期監査（6 月） 業務監査・会計監査（毎年度 1 回）→ 監査結果報告書（提出先：理事長）監査結果報告については、役員会議で結果を報告することとしており役職員に対して具体的に周知している。 ③その他の監査 役員会議その他重要な会議への出席。聴取、意見交換等，必要に応じた臨時監査（関係役職員からの聴取等）、施設視察等。	法人の長をはじめとする役職員のマネジメントに留意できているものと認められる。

	○臨時監査（服部監事） ・法人本部（23 年 1 月 14,21 日） ・東京国立博物館 （23 年 1 月 14,3 月 4 日） ・東京文化財研究所（23 年 2 月 10 日） ・京都国立博物館 （23 年 2 月 18 日） ・九州国立博物館 （23 年 3 月 17 日） ○施設視察（服部監事） ・京都国立博物館 （22 年 7 月 9 日） ・九州国立博物館 （22 年 8 月 2,3 日） ・東京国立博物館、東京文化財研究所（22 年 8 月 6 日） ④会計監査人との連携 会計監査人からの監査計画の報告（12 月頃），会計監査人からの監査報告（6 月） ⑤「独立行政法人、特殊法人等監事連絡会」総会への参加 ⑥会計検査院実施によるセミナー等年間数回参加 （2）内部監査の実績 ①内部監査の概要 内部監査要項に基づき平成 22 年度においては、本部事務局を含めた全施設を対象として、会計全般及び少額随意契約、謝金・旅費に係る源泉徴収、債権管理及び科学研究費補助金について監査を実施した。 ②監査スケジュール、報告書、指摘事項等 ○内部監査計画の通知：平成 22 年 10 月 5 日 ○実地監査実施　平成 22 年 10 月 12,13 日（奈良国立博物館） 平成 22 年 10 月 28,29 日（本部事務局、東京国立博物館） 平成 22 年 10 月 20,21 日（東京文化財研究所） 平成 22 年 11 月 1,2 日　（九州国立博物館） 平成 22 年 11 月 4,5 日　（京都国立博物館、奈良文化財研究所） ○内部監査報告書の提出：監査実施後2週間以内 4．監査結果概要 内部監査報告書について（報告）（平成 22 年 11 月 30 日） 5．監事監査報告書 独立行政法人国立文化財機構監事監査要項（平成19年国立文化財機構理事長決裁第8号）第10条第1項に基づく平成22年6月25日付けの監査結果報告書	
・監事監査において把握した改善点等について、必要に応じ、法人の長、関係役員に対し報告しているか。その改善事項に対するその後の対応状況は適切か。	【監事監査における改善点等の法人の長、関係役員に対する報告状況】 監査終了後に報告書を提出いただいている。また第 3 回役員会においてその結果を報告している。	○監事監査終了後に、監査報告書を作成し、役員会においてその内容等を報告しており、法人の長、関係役員に対し報告がなされていると認められる。

	【監事監査における改善事項への対応状況】 22 年度監査における改善を求める指摘事項は特になかった。	○なお、22 年度監査において指摘事項はなかった。

【(小項目)2－3】	情報の安全向上	【評定】				
【法人の達成すべき計画】 3 機構が管理する情報の安全性向上のため、必要な措置をとる。		A				
		H18		H19	H20	H21
		博物館	研究所			
		A	ー	A	A	A

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○機構が管理する情報の安全性向上のため、必要な措置をとったか。	・22 年度は「独立行政法人国立文化財機構保有個人情報管理規程」に基づき、本部事務局及び各施設における保有個人情報の管理状況について、以下の通り、保有個人情報管理監査を行った。 (実施者 服部監事) ・本部事務局(23 年 1 月 21 日) ・東京文化財研究所(23 年 2 月 10 日) ・京都国立博物館(23 年 2 月 18 日) ・東京国立博物館(23 年 3 月 4 日) ・九州国立博物館(23 年 3 月 11 日) ・情報システム点検・評価要項に基づき、奈良文化財研究所を対象に、情報システム監査を行った。(23年2月28日) ・国立文化財機構規程集の全文を PDF 化し、グループウェア上で機構内全職員に公開した(22 年 10 月)。以後、最新版へのアップデートを継続して行っている。 ・機構内全職員が一本化されたグループウェア「サイボウズ・ガルーン2」を、22 年 7 月以降本部及び各施設にて運用を開始し、機構内の連絡及び情報共有が大幅に効率化すると同時にセキュリティが向上した。 ・機構ウェブサイトのリニューアルとともに、サーバーのハード・ソフトを最新版に入れ替えることで、セキュリティの向上を図った。 **(参考)法人の自己評価** 個人情報保護管理規程に基づき監事による保有個人情報管理監査を各施設にて実施した。これにより日常的な個人情報の取り扱いについて改善が図られ、職員への啓蒙も図られた。 情報セキュリティ監査は機構のもつ情報の安全性を向上させるためにも重要であるので、今後も継続的に向上させていきたい。	○管理する情報の安全性の向上のための施策は実施されていると認められることから、セキュリティの強化を実施していることは評価できる。 また、情報セキュリティ監査を活用し、セキュリティの弱点の把握とその改善を検討することが望まれる。 なお、東日本大震災の経験から、データやシステムのバックアップが十分か検証する必要がある。

【(小項目)2−4】	人件費の削減、給与体系の見直し

【評定】

A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
A	(A)	A	B	A

【法人の達成すべき計画】

4 「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」(平成 18 年法律第 47 号)に基づき、国家公務員に準じた人件費改革に取り組み、平成 18 年度からの5年間において、△5%以上の人件費削減を行う。また、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行う。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針 2006」(平成 18 年7月7日閣議決定)に基づき、国家公務員の改革を踏まえ、人件費改革を平成 23 年度まで継続する。ただし、今後の人事院勧告を踏まえた給与改定分については削減対象から除く。また、削減対象の「人件費」の範囲は、各年度中に支給した報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額とし、退職金、福利厚生費は含まない。その際、役職員の給与に関し、国家公務員の給与構造改革を踏まえた、地場賃金の適正な反映、年功的な給与上昇の抑制、勤務実績の給与等への反映等に取り組む。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○平成18年度からの5年間において△5%以上の人件費削減を行ったか。 ○また、役職員の給与に関し、国家公務員の給与構造改革を踏まえた、地場賃金の適正な反映、年功的な給与上昇の抑制、勤務実績の給与等への反映等に取り組んだか。	・人事給与統合システムが 20 年 4 月から稼働し、機構全体として統一的な処理ができるようになった。さらに人件費の削減に向けたシミュレーション等により人件費に関する計画を円滑に企画・立案することができた。 ・地域手当について、22 年度において 21 年度の率を据え置く方針が決定された。 ・「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」(平成18年法律第47号)に基づき、国家公務員に準じた人件費改革に取り組み、削減目標の達成に対しては順調に進捗し、平成18年度からの5年間において、△5%以上の人件費削減を実現した。	○過年度から引き続き、人件費の削減は順調に実施されており、大変な努力がなされていると評価する。今後は、優秀な人材を確保・育成することにより、組織の活性化を図る必要がある。
【総人件費改革への対応】 ・ 取組開始からの経過年数に応じ取組が順調か。また、法人の取組は適切か。	【総人件費改革への対応】 (17 年度実績 / 22 年度実績) 人件費決算額: 2,878,750 千円 / 2,619,439 千円 対 17 年度人件費削減率: − / △9.01% 対 17 年度人件費削減率(補正値): − / △5.81% ※人件費削減実績表中の「補正値」とは、「行政改革の重要方針」(平成17年 12月 24日閣議決定)による人事院勧告を踏まえた官民の給与較差に基づく給与改定分を除いた削減率である。なお、平成 18 年、平成 19 年、平成 20 年、平成 21 年、平成 22 年の行政職(一)職員の年間平均給与の増減率はそれぞれ 0%、0.7%、0%、△2.4%、△ 1.5%である。	○「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」(平成 18 年法律第 47 号)に基づき、国家公務員に準じた人件費改革に取り組み、削減目標の達成に対しては順調に進捗し、18 年度からの5年間において、△5%以上の人件費削減を実現しており、法人の取り組みは適切と認められる。
【給与水準】 ・ 給与水準の高い理由及び講ずる措置(法人の設定する目標水準を含む)が、国民に対して納得の得られるものとなっているか。	【ラスパイレス指数(平成22年度実績)】 ラスパイレス指数は 96.9 であり、国を 3.1 ポイント下回っており、給与水準は適正である。引き続き給与水準の適正化に努める。	○国家公務員に比べ低い給与水準であり、国民の理解を得られるものと認められる。

・ 法人の給与水準自体が社会的な理解の得られる水準となっているか。 ・ 国の財政支出割合の大きい法人及び累積欠損金のある法人について、国の財政支出規模や累積欠損の状況を踏まえた給与水準の適切性に関して検証されているか。		
【諸手当・法定外福利費】 ・ 法人の福利厚生費について、法人の事務・事業の公共性、業務運営の効率性及び国民の信頼確保の観点から、必要な見直しが行われているか。	【福利厚生費の見直し状況】 レクリエーション経費は運営費交付金からの支出はない。レクリエーション経費以外の福利厚生費(法定外福利費)は 15,030 千円である。また、国とは異なる諸手当は機構にはない。	○国とは異なる諸手当はないが、引き続き、法人の事務・事業の公共性、業務運営の効率性等の観点から、必要に応じて見直しを行うことが望まれる。

【(大項目)3】	Ⅲ 財務・人事	【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
A	A	A	A	A

【(小項目)3−1】	予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画	【評定】 A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
A	A	A	A	A

【法人の達成すべき計画】
管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営に努める。
また、収入面に関しては、実績を勘案しつつ、税制措置も活用した寄付金などの外部資金、施設使用料等の財源の多様化を図り、法人全体として積極的に自己収入の増加に努めることにより、計画的な収支計画による運営を図る。
1 予算(中期計画の予算) 別紙のとおり
2 収支計画 別紙のとおり
3 資金計画 別紙のとおり
Ⅳ 短期借入金の限度額短期借入金の限度額は、16 億円
短期借入金が想定される理由は、運営費交付金の受入れに遅延が生じた場合である。
Ⅴ 重要な財産の処分等に関する計画
① 京都国立博物館新館の取り壊し予定。
② 奈良文化財研究所本館改築計画の実施に伴い取り壊し予定。
Ⅵ 剰余金の使途
決算において、剰余金が発生した時は、次の購入等に充てる。
1 文化財の購入・修理
2 調査・研究、出版事業の充実
3 展覧会の充実
4 入館者サービス、情報提供の質的向上
5 国際協力
6 老朽化対応のための施設設備の充実

Ⅶ その他主務省令で定める業務運営に関する事項
2 別紙のとおりの施設整備に関する計画に沿った整備を推進する。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価

○外部資金等を積極的に導入することにより、計画的な収支計画による運営を図ったか。
○適切な効率化を見込んだ予算による運営に努めたか。
○税制措置も活用した寄附金などの外部資金、施設利用等の財源多様化を図ったか。
○法人全体として積極的に自己収入の増加に努めたか。
○総利益を計上した場合には目的積立金を申請したか。

○定量的な目標の設定
1) 入場料収入(共催展を除く)及びその他収入について、1．16%の増加を目指す。

下表のとおり、13．38%となり、目標を上回ることができた。

(単位:千円)

	平成20年度	平成21年度	平成22年度
自己収入基準額	864，089	874，112	884，252
自己収入目標額	874，112	884，252	894，510
自己収入実績額	———	949，900	1，002，524
増 加 率	———	8．67%	13．38%

※受託研究・受託事業を除く。
※自己収入目標額は、前年度の目標額から1．16%増加した場合の額。
※増加率は、自己収入基準額(前年度の目標額)に対する増加率。

2)寄附金226件及び科学研究費補助金76件の確保を目指す。

下表のとおり、寄附金及び科学研究費補助金ともに目標件数を上回ることができた。

	目標値	平成22年度
寄附金	226件	314件
科学研究費補助金	76件	81件

○自己収入の増大及び外部資金の確保については、定量的な目標は上回っており評価できる。今後も着実な目標達成を期待している。
制度上、予算設定時に見込めない受託関係及び施設整備関係の乖離については、特に問題ないと判断できる。
展示事業等収入は、21 年度と比較すると、来館者数の減少に伴って減少している。今後は国民のニーズを捉えつつ、ナショナルセンターの機能としてふさわしい優れた企画を期待するとともに、中長期的に来館者数の増減に左右されない財務体質の構築が望まれる。

【収入】

【平成 22 年度収入状況】 (単位:千円)

収 入	予算額	決算額	差引増減額	備 考
運営費交付金	8,192,326	8,192,326	0	
施設整備費補助金	3,992,206	5,093,565	1,101,359	
文化芸術情報電子化推進費補助金	0	136,144	136,144	
展示事業等収入	1,131,249	1,580,098	448,849	
受託収入	26,000	518,092	492,092	
その他寄附金等	0	143,228	143,228	
計	13,341,781	15,663,453	2,321,672	

【主な増減理由】
・施設整備費補助金及び文化芸術情報電子化推進費補助金は、前年度予算の繰越しによるものである。受託収入は、当初予定外の受託契約が多かったことによる。展示事業等収入とその他寄附金等を合わせると、予算と比較して 592,077 千円の増加であった。

【支出】

【平成 22 年度支出状況】 (単位:千円)

支 出	予算額	決算額	差引増減額	備 考
管理経費	1,694,877	1,722,647	△27,770	
人件費	714,499	790,586	△76,087	
一般管理費	980,378	932,061	48,317	
業務経費	7,628,698	9,287,450	△1,658,752	
人件費	2,450,122	2,371,746	78,376	
調査研究事業費	1,517,225	1,632,855	△115,630	

情報公開事業費	154,445	126,915	27,530	
研修事業費	21,669	18,076	3,593	
国際研究協力事業費	302,687	226,943	75,744	
展示出版事業費	157,339	149,942	7,397	
展覧事業費	2,904,766	4,672,046	△1,767,280	
教育普及事業費	120,445	88,927	31,518	
施設整備費	3,992,206	5,093,565	△1,101,359	
文化芸術情報電子化推進費	0	142,318	△142,318	
受託事業費	26,000	507,000	△481,000	
計	13,341,781	16,752,980	△3,411,199	

【主な増減理由】
・管理経費人件費は、定年退職者の増により一時的に退職手当が増加したことによる。
・管理経費物件費は、平成 21 年度約 70,000 千円の消費税が、平成 22 年度は還付となったこと（建物が竣工したため）等により減少したことによる。
・業務経費人件費は、定年退職者の再雇用人数の増加により給与単価が低くなったこと及びアソシェイトフェロー（給与は物件費支出）への移行による給与支給額の減少による。
・業務経費は、前年度からの繰越しによる収蔵品の購入等の増加による。

【収支計画】

【平成 22 年度収支計画】　（単位：千円）

区　分	計画額	実績額	差引増減額
費用の部	7,221,809	9,714,747	2,492,938
経常経費	7,221,809	9,703,226	2,481,417
管理経費	1,297,601	1,708,095	410,494
うち人件費	714,499	856,167	141,668
うち一般管理費	583,102	851,928	268,826
業務経費	5,530,189	7,034,069	1,503,880
うち人件費	2,450,122	2,947,718	497,596
うち調査研究事業費	902,401	1,192,399	289,998
うち情報公開事業費	91,858	121,495	29,637
うち研修事業費	12,889	17,341	4,452
うち国際研究協力事業費	180,029	225,079	45,050
うち展示出版事業費	93,582	143,560	49,978
うち展覧事業費	1,727,671	2,299,126	571,455
うち教育普及事業費	71,637	87,351	15,714
受託事業費	26,000	505,057	479,057
減価償却費	368,019	451,058	83,039
その他費用	0	4,947	4,947
臨時損失	0	11,521	11,521
収益の部	7,221,809	9,855,435	2,633,626
運営費交付金収益	5,696,541	6,792,124	1,095,583
展示事業等の収入	1,131,249	1,428,261	297,012
受託収入	26,000	585,751	559,751
資産見返運営費交付金戻入等	368,019	516,889	148,870
寄附金収益等	0	437,052	437,052
その他の収益及び臨時利益	0	95,358	95,358

前中期目標期間繰越積立金取崩	0	2,041	2,041	
計	0	142,729	142,729	

【主な増減理由】
・費用の部では、計画額は平成 22 年度予算分のみの計画であり、実績額は前年度からの繰越しによる費用及び当初予定外の受託事業費用を含めているため額が増加している。
・収益の部では、運営費交付金収益は前年度からの繰越しにより額が増加している。その他収益は寄附金収益等で計画額を設定していないため、実績額が増加している。

【資金計画】

【平成 22 年度資金計画】　（単位：千円）

区　分	計画額	実績額	差引増減額
資金支出	13,341,781	16,344,377	3,002,596
業務活動による支出	6,853,790	9,254,983	2,401,193
投資活動による支出	6,487,991	7,082,841	594,850
財務活動による支出	0	6,553	6,553
資金収入	13,341,781	15,767,317	2,425,536
業務活動による収入	9,349,575	10,665,243	1,315,668
運営費交付金による収入	8,192,326	8,192,326	0
展示事業等による収入	1,131,249	1,291,600	160,351
受託収入	26,000	630,641	604,641
その他の収入	0	550,676	550,676
投資活動による収入	3,992,206	5,102,074	1,109,868
施設整備費補助金による収入	3,992,206	5,102,074	1,109,868
資金増加額	－	△577,060	－
資金期首残高	－	4,157,564	－
資金期末残高	－	3,580,504	－

【主な増減理由】
・資金支出では、計画額は平成 22 年度予算分のみの計画であり、実績額は前年度からの繰越しによる支出及び当初予定外の受託事業費用を含めているため額が増加している。
・資金収入では、運営費交付金による収入は前年度からの繰越しにより、受託収入は当初予定外の受託契約の増、その他の収入は寄附金収入等で計画額を設定していないため、それぞれ額が増加している。

【財務状況】
（当期総利益（又は当期総損失））
・ 当期総利益（又は当期総損失）の発生要因が明らかにされているか。
・ また、当期総利益（又は当期総損失）の発生要因は法人の業務運営に問題等があることによるものか。

【当期総利益（当期総損失）】
・当期総利益は 142,729 千円である。

【当期総利益（又は当期総損失）の発生要因】
・展示事業等収入予算額1,131,249千円に対して、448,849千円超の1,580,098千円の収入実績があったことによる。
平城遷都1300年祭の影響で、関西地区での展覧事業による入場料・刊行物売払等の収入増加が原因である。

○財務状況については、自己資本比率が高く、当期総利益を計上していること等から、特段の問題はないと判断できる。当期総利益の発生要因は、自己収入が見込みを上回ったこと等によるもので、法人の業務運営に問題があるとは認められない。

（利益剰余金（又は繰越欠損金））
・ 利益剰余金が計上されている場合、国民

生活及び社会経済の安定等の公共上の見地から実施されることが必要な業務を遂行するという法人の性格に照らし過大な利益となっていないか。	【利益剰余金】 ・利益剰余金の発生理由：入場料収入が収入予算額を上回ったこと、及び自己収入により固定資産（収蔵品等）を購入したため見かけの利益が発生したこと等により生じている。 ・利益剰余金の内訳：平成 18 年度 287,275 千円、平成 19 年度 413,922 千円、平成 20 年度 303,845 千円、平成 21 年度 147,504 千円、平成 22 年度 142,729 千円、前中期目標期間繰越積立金 9,025 千円。 ・平成 22 年度末利益剰余金 1,304,300 千円については、次期中期目標期間繰越積立金相当額 653,432 千円を控除した 650,868 千円を平成 23 年 7 月 8 日に国庫納付した。	
・ 繰越欠損金が計上されている場合、その解消計画は妥当か。	【繰越欠損金】 ・該当なし	
・ 当該計画が策定されていない場合、未策定の理由の妥当性について検証が行われているか。さらに、当該計画に従い解消が進んでいるか。	【解消計画の有無とその妥当性】 ・該当なし 【解消計画に従った繰越欠損金の解消状況】 ・該当なし	
（運営費交付金債務） ・ 当該年度に交付された運営費交付金の当該年度における未執行率が高い場合、運営費交付金が未執行となっている理由が明らかにされているか。	【解消計画が未策定の理由】 ・該当なし 【運営費交付金債務の未執行率（%）と未執行の理由】 ・平成 21 から繰越の運営費交付金債務 1,197,476 千円は、役員退職手当を除き全て執行した。 ・役員の退職が延期されたことにより執行されなかった役員退職手当 13,465 千円及び東日本大震災の影響による未達成業務 9,678 千円の合計 23,143 千円について、会計基準第 81 条第 3 項による振替え（中期目標期間の最終年度に未執行の運営費交付金も収益化して清算する）を行った。	○運営費交付金の未執行については、理由が明確であるとともに、業務運営との関係について分析が行われ、その結果についても特に問題とはならないと認められる。
・ 運営費交付金債務（運営費交付金の未執行）と業務運営との関係についての分析が行われているか。	【業務運営に与える影響の分析】 ・役員退職手当は、役員の退職時期が確定した時点で再度概算要求し、その他については、平成 23 年度予算により実施するため、特段の影響はない。	
【実物資産】 （保有資産全般の見直し） ・ 実物資産について、保有の必要性、資産規模の適切性、有効活用の可能性等の観点からの法人における見直し状況及び結果は適切か。	【実物資産の保有状況】 ① 実物資産の名称と内容、規模 施設 / 土地（㎡） / 建物（延面積㎡） 東京国立博物館 120,258 / 71,642 京都国立博物館 53,182 / 13,831 奈良国立博物館 78,760 / 19,116	○実物資産の保有の必要性、資産規模の適切性、有効活用の可能性等については、減損もなく、特に指摘すべき点はない。 また、当事業年度より適用された資

	九州国立博物館 160,715(うち九博 10,733) / 30,675(うち九博 9,048) 東京文化財研究所 4,181 / 10,623 奈良文化財研究所 46,468 / 36,786 合計 463,564(313,582) / 182,673(161,046) ※九州国立博物館は、福岡県と分有しており、福岡県は土地 149,982 ㎡、建物 6,034 ㎡を分有、建物のうち 15,593 ㎡は共有面積である。	産除去債務については、財務諸表の注記事項において適切に開示されており、特に問題はない。
・ 見直しの結果、処分等又は有効活用を行うものとなった場合は、その法人の取組状況や進捗状況等は適切か。	② 保有の必要性（法人の任務・設置目的との整合性、任務を遂行する手段としての有用性・有効性等） ・展示棟、研究施設、事務所、収蔵品倉庫、資料館等として全ての建物を使用しており、博物館・研究所としての任務を遂行するために必要不可欠である。 ③ 有効活用の可能性等の多寡 ・博物館・研究所の本来業務以外にも、講堂・会議室の貸与、建物・庭園等を映画等のロケーションとして貸出すなど部外者に対しても積極的な貸出を行い、施設の有効利用を図っている。 ④ 見直し状況及びその結果 ・③のように部外者に対する積極的な貸与等が実施されていることを確認し、今後もさらに継続することとしている。 ⑤ 処分又は有効活用等の取組状況／進捗状況 ・全ての資産は、博物館・研究所の任務を遂行するために活用されており、処分に該当する資産はない。有効活用については、今後もさらに継続することとしている。	
・「勧告の方向性」や「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」等の政府方針を踏まえて処分等することとされた実物資産について、法人の見直しが適時適切に実施されているか（取組状況や進捗状況等は適切か）。	⑥ 政府方針等により、処分等することとされた実物資産についての処分等の取組状況／進捗状況 ・該当なし。	○なお、「勧告の方向性」や「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」等の政府方針を踏まえて処分等することとされた実物資産はない。
（資産の運用・管理） ・ 資産の活用状況等が不十分な場合は、原因が明らかにされているか。その理由は妥当か。	⑦ 活用状況が不十分な実物資産の有無とその理由 ・該当なし。	○また、活用が不十分な資産はないと認められる。
・ 実物資産の管理の効率化及び自己収入の向上に係る法人の取組は適切か。	⑧ 実物資産の管理の効率化及び自己収入の向上に係る法人の取組 ・民間委託の推進として、電気設備保守等の各種保守業務、清掃業務、警備・監視等業務について、大部分を民間委託している。 ・自己収入の獲得のための施設の有効利用として上記③を積極的に実施している。	

【金融資産】 （保有資産全般の見直し） ・ 金融資産について、保有の必要性、事務・事業の目的及び内容に照らした資産規模は適切か。 ・ 資産の売却や国庫納付等を行うものとなった場合は、その法人の取組状況や進捗状況等は適切か。 （資産の運用・管理） ・ 資金の運用状況は適切か。 ・ 資金の運用体制の整備状況は適切か。	【金融資産の保有状況】 ① 金融資産の名称と内容、規模 ・現金及び預金の平成 22 年度末残高は約 36 億円であり、そのほとんどは購入物品等の未払金に充てるものである。 ・東京国立博物館において、有価証券である満期保有目的債権（譲渡性預金）5 億円を保有している。 ② 保有の必要性（事業目的を遂行する手段としての有用性・有効性） ・余裕資金を利息のない決済用預金ではなく、安全で利息のある譲渡性預金として預け入れることにより、利息を運営費の一部に充当することが可能となる。 ③ 資産の売却や国庫納付等を行うものとなった金融資産の有無 ・該当なし。 ④ 金融資産の売却や国庫納付等の取組状況／進捗状況 ・該当なし。 【資金運用の実績】 ・東京国立博物館において、有価証券である満期保有目的債権（譲渡性預金）5 億円を保有している。 【資金運用の基本的方針（具体的な投資行動の意志決定主体、運用に係る主務大臣・法人・運用委託先間の責任分担の考え方等）の有無とその内容】 ・独立行政法人国立文化財機構会計規程第27条において、出納命令役は，業務の執行に支障がない範囲で，法令で定められた安全資産により余裕金の運用をすることができると定めている。 　また、東京国立博物館余裕資金運用取扱要項において、余裕資金の運用は運営会議の議を経て、館長が決定すること。運用の対象を寄附金、入場料等自己収入、その他館長が定める資金とすること。資金繰計画の作成を要すること。運用方法は、国債等、独立行政法人通則法第 47 条に指定する有価証券、預金等とすること。債権の発行者等の経営状況の把握することを定めている。 【資産構成及び運用実績を評価するための基準の有無とその内容】 ・今年度初めて 5 億円の運用を行ったのみの実績であるため、評価基準策定には至っていない。 【資金の運用体制の整備状況】 ・平成 22 年度は東京国立博物館において運用体制を新設した。他の施設においては余裕資金	○金融資産の保有の必要性、事務・事業の目的及び内容に照らした資産規模、また運用状況についても、安全、有効かつ適切に運用されており、特に問題ないと認められる。

	の状況により今後整備を検討する。	
・ 資金の性格、運用方針等の設定主体及び規定内容を踏まえて、法人の責任が十分に分析されているか。	【資金の運用に関する法人の責任の分析状況】 ・東京国立博物館での運用については、安全に計画どおりの利息を得ており、運用を計画した館長としての責任を果たしているものと判断される。	
（債権の管理等） ・ 貸付金、未収金等の債権について、回収計画が策定されているか。回収計画が策定されていない場合、その理由は妥当か。 ・ 回収計画の実施状況は適切か。ⅰ）貸倒懸念債権・破産更生債権等の金額やその貸付金等残高に占める割合が増加している場合、ⅱ）計画と実績に差がある場合の要因分析が行われているか。	【貸付金・未収金等の債券と回収の実績】 ・貸付金の実績なし。 ・未収金（建物、収蔵品画像使用料等）の管理は、独立行政法人国立文化財機構債権管理要項に基づき実施している。使用後精算する建物使用料、外国からの後払いの収蔵品画像使用料等の少額の未収金が大半のため、回収コスト等も考慮しながら実施している。 ・3カ月以上の未収金　　11 件、203 千円。 ・3カ月以上の未収金回収実績　　0 件、　0 千円。（10 件 83 千円は平成 23 年 4～6 月回収、1 件 120 千円は平成 23 年度不納欠損処理予定） 【回収計画の有無とその内容（無い場合は、その理由）】 ・同要項に基づき、未収金の債権管理を帳簿により行い、回収計画、督促状況等を記録している。滞留管理としての管理、保全手続きについても定めている。 【回収計画の実施状況】 ・回収計画に基づき実施しているが、債務者の所在不明等で、効果を上げない場合がある。 【貸付の審査及び回収率の向上に向けた取組】 ・該当なし。 【貸倒懸念債権・破産更生債権等の金額／貸付金等残高に占める割合】 ・該当なし。	○債権の管理等については、債権管理要項に基づき実施し、計画に沿って回収されていると認められ、特に問題はないと判断できる。
・ 回収状況等を踏まえ回収計画の見直しの必要性等の検討が行われているか。	【回収計画の見直しの必要性等の検討の有無とその内容】 ・平成 22 年度に新設の要項のため、回収計画の見直し等はしていないが、今後の状況の変化に対応し検討する。	
【知的財産等】 （保有資産全般の見直し） ・ 特許権等の知的財産について、法人における保有の必要性の検討状況は適切か。	【知的財産の保有の有無及びその保有の必要性の検討状況】 ・特許権3件（研究技法関係）（今中期目標期間中に登録）と商標権6件（ロゴマーク等）（今中期目標期間中に2件登録）を保有している。取得費用がいずれも少額であるため財務諸表上の資産計上はしていないが、権利として管理している。研究継続の必要性から研究技法関係特許の	○知的財産については、研究継続の必要性から、研究技法関係特許の保有等であり、法人運営上の支障となる他者の使用を未然に防止するために必要な

	保有は必要であり、ロゴマーク等の商標権も運営上の支障となる他者の使用を未然に防止するために必要である。 なお特許権は当然収入に繋がるものであれば活用するが、維持費との兼ね合いが今後の課題である。 取得特許件数　3件 ①木材又は木造文化財の年輪幅又は密度測定装置並びに測定方法（21.5.22　登録：奈良文化財研究所） ②壁画漆喰層剥離用ワイヤソー装置及び壁画漆喰層剥離方法（22.3.5　登録：東京文化財研究所・奈良文化財研究所） ③文化財用表打ち材料及びそれを用いた文化財修復方法（22.12.10 取得：東京文化財研究所）	ものであり、適切に運用並びに管理されていると認められる。 　また、発明取扱規程を定め、組織体制が整備されていると認められる。
・ 検討の結果、知的財産の整理等を行うことになった場合には、その法人の取組状況や進捗状況等は適切か。	【知的財産の整理等を行うことになった場合には、その法人の取組状況／進捗状況】 ・機構で定めた「独立行政法人国立文化財機構発明取扱規程」に基づき対応することになる。	○なお、整理等を行う必要のある知的財産はない。
（資産の運用・管理） ・ 特許権等の知的財産について、特許出願や知的財産活用に関する方針の策定状況や体制の整備状況は適切か。	【出願に関する方針の有無】 ・機構で定めた「独立行政法人国立文化財機構発明取扱規程」に基づき、各施設長から理事長に届け出る。 【出願の是非を審査する体制整備状況】 ・機構で定めた「独立行政法人国立文化財機構発明取扱規程」により整備されている。 【活用に関する方針・目標の有無】 ・機構で定めた「独立行政法人国立文化財機構発明取扱規程」により規定している。 【知的財産の活用・管理のための組織体制の整備状況】 ・機構で定めた「独立行政法人国立文化財機構発明取扱規程」により整備されている。	
・ 実施許諾に至っていない知的財産の活用を推進するための取組は適切か。	【実施許諾に至っていない知的財産について】 ① 原因・理由 研究成果の結実として特許権取得をしている。当機構における特許権取得は、パテント収入を目指すためではなく、研究継続の必要性から防衛的な対抗特許として保有することを主眼としている。 当然収入に繋がるものであれば活用するが、その場合は維持費との兼ね合いが今後の課題である。 ② 実施許諾の可能性	

	・収入に繋がるものであれば活用する。 ③ 維持経費等を踏まえた保有の必要性 ・防衛的な対抗特許として保有が必要であるが、維持費との兼ね合いが今後の課題である。 ④ 保有の見直しの検討・取組状況 ・特段必要に迫られる事項は発生していない。 ⑤ 活用を推進するための取組 ・収入に繋がるものであれば活用を推進する。	
・ 短期借入金は有るか。有る場合は、その額及び必要性は適切か。	【短期借入金の有無及び金額】 ・該当なし。 【必要性及び適切性】 ・運営費交付金の受入れに遅延が生じた場合に必要である。 ・受入れの遅延期間は3ヶ月と想定し、運営費交付金の4半期相当額としている。	○短期借入金はない。
・ 重要な財産の処分に関する計画は有るか。ある場合は、計画に沿って順調に処分に向けた手続きが進められているか。	【重要な財産の処分に関する計画の有無及びその進捗状況】 ・当年度は該当なし。 ・京都国立博物館では、平常展示館建替工事のため平成 21 年度に旧建物を取壊し、建替工事を進めている。 ・奈良文化財研究所本館改築計画に伴い現建物の取壊しを予定している。（取壊年度は未定）	○重要な財産の処分に関する計画はない。
・ 利益剰余金は有るか。有る場合はその要因は適切か。	【利益剰余金の有無及びその内訳】 ・項目別－76 参照。 【利益剰余金が生じた理由】 ・項目別－76 参照。	○利益剰余金を計上しているが、法人の性格に照らし、過大なものではなく、要因も適切であり、特段問題ないと認められる。
・ 目的積立金は有るか。有る場合は、活用計画等の活用方策を定める等、適切に活用されているか。	【目的積立金の有無及び活用状況】 ・該当なし。	○目的積立金はない。
【施設及び設備に関する計画】 ・ 施設及び整備に関する計画は有るか。有る場合は、当該計画の進捗は順調か。	【施設及び設備に関する計画の有無及びその進捗状況】 （完成した主要施設等） ・東京国立博物館東洋館耐震補強改修工事及び東洋館設備改修工事 ・奈良国立博物館西新館耐震補強改修工事、西新館免震展示ケース設置工事及び仏教美術資	○施設・設備の改修等については、京都国立博物館平常展示館建替工事に一部遅れはあるものの、概ね計画通りに進行していると認められる。

【中期目標期間を超える債務負担】 ・ 中期目標期間を超える債務負担は有るか。有る場合は、その理由は適切か。 【積立金の使途】 ・ 積立金の支出は有るか。有る場合は、その使途は中期計画と整合しているか。	料研究センター耐震補強改修工事 （工事継続中の主要施設等） ・京都国立博物館平常展示館建替工事 【中期目標期間を超える債務負担とその理由】 ・京都国立博物館平常展示館建替工事　7,114,787 千円 工事敷地に地下水の湧出があり、防水対策に不測の日数を要し、平成 23 年度へ繰越しを行ったため。 【積立金の支出の有無及びその使途】 ・該当なし。	特に、東京国立博物館における耐震補強工事等が、東日本大震災による被害を未然に防いだ点で特筆に値する。 ○京都国立博物館平常展示館建替工事に係る債務負担があるが、適正な理由と認められる。 ○積立金の支出はない

【(小項目)3－2】　人事計画に関する計画

【評定】

A

H18		H19	H20	H21
博物館	研究所			
A	A	A	A	A

【法人の達成すべき計画】
Ⅶ その他主務省令で定める業務運営に関する事項
1人事計画に関する計画
(1)方針
① 国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討し、導入する。
② 調査研究の機動的実施など研究を効率的かつ効果的に実施するため、任期付研究員制度を導入する。
③ 人事交流を促進するとともに、職員の資質向上を図るための研修機会の提供に努める。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。
(2)人員に係る指標
常勤職員については、その職員数の抑制を図る。
(参考1)
1)期初の常勤職員数　367 人
2)期末の常勤職員の見込み　355 人
(参考2)中期目標期間中の人件費総額見込額　14,343 百万円
但し、上記の額は、役職員に対し支給する報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額であり、退職金、福利厚生費を含まない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度の検討・導入を図ったか。 ○任期付研究員制度の導入を図ったか。 ○人事交流、職員の研修等に努めたか。 【人事に関する計画】 ・ 人事に関する計画は有るか。有る場合は、当該計画の進捗は順調か。 ・ 人事管理は適切に行われているか。	【人事に関する計画の有無及びその進捗状況】 ・ 常勤職員の削減状況 平成 18 年度から継続的に業務の見直しや人員の再配置、退職後の職員の不補充を行い、期末の常勤職員を 355 人とした。 ・ 常勤職員、任期付職員の計画的採用状況 ・平成 19 年度において、技術職員及び技能・労務職員について、当面対象とする職種を絞って機構独自で採用可能とする規模の整備を行い、平成 20 年度に施設の維持管理を行う職員を新たに適用範囲とした。平成 22 年度においては労務職員(衛士)を東京国立博物館で 3 名、技術職員(写真技師)を奈良文化財研究所で1名採用した。(計 4 名) ・平成 20 年度において、常勤の研究職員に準じた有期雇用職員の人事制度(アソシエイトフェロー)を新たに整備し、専門的事項の調査研究を行う研究職と高度な専門知識と経験等を有	○人事計画は適正に進捗し、任期付き常勤職員の雇用の促進等により、常勤職員数の実質的抑制が図られていると認められる。 常勤職員数の実質的抑制は、若手研究者等をアソシエイト・フェローとして採用することにより、博物館の本来業務に支障を来さないよう措置されており、努力がみられる。 アソシエイト・フェロー制度は、安定的な継続が担保できないため、将来的にはあり方を見直す機会を設ける必要がある。

	する専門職を対象として採用可能とした。平成 22 年度は本部で 1 名、東京国立博物館で 6 名、奈良国立博物館で 1 名、九州国立博物館で 2 名、東京文化財研究所で 1 名及び奈良文化財研究所で 6 名を採用した。(計 17 名) ・常勤職員については、平成 22 年度において、事務職員を奈良国立博物館で 1 名、研究職員を東京国立博物館で 6 名、九州国立博物館で 1 名、奈良文化財研究所で 6 名採用した(計 14 名)。 ・人事交流の実績 事務系職員:文化庁、東京大学、京都大学、大阪大学、九州大学及び(独)国立美術館等との人事交流を実施(64 名) 機構内の各施設間における人事交流の実施(9 名) 研究系職員:文化庁から 8 名の受け入れ及び文化庁への出向を 14 名の人事交流の実施 ・ 危機管理体制等の整備・充実に関する取組状況 ・災害等の危機管理体制については、「独立行政法人国立文化財機構防災規程(規程第 44 号)」及び各施設ごとに「危機管理マニュアル」を制定して危機管理体制を整備し、非常時の対応を明確化している。	

２．文部科学省評価委員会評価（第2期中期目標期間）

独立行政法人国立文化財機構の中期目標期間に係る業務の実績に関する評価

全体評価　　＜参考＞　業務の質の向上：A　業務運営の効率化：A　財務内容の改善：A

①評価結果の総括

・第2期の中期目標が達成されている。

・国立博物館と文化財研究所が統合されたことで、それぞれの組織の本来業務の他、組織としてのガバナンスの仕組みが整えられたと認められる。また、国民へのサービス提供が総合的、効果的になされ、業務の効率化を図りつつも、業務の質を向上させ、中期計画にそって順調に成果を上げていると評価する。

・中期目標期間に係る事業面での取り組みでは、電子媒体の情報発信の充実（多言語化を含む）や、来館者の大幅な向上につながった展覧会の開催、平常展示の工夫、教育普及活動など、多岐にわたる取り組みがなされた。特に、文化財に関する調査・研究においては極めて高い水準に達しており、文化財の保存修復技術を格段に向上させるとともに、アジア諸国への技術協力をはじめとする国際交流・援助を行っている。また、公私立博物館等への適切な指導助言を行うなど、ナショナルセンターとしての役割りを十分に果たしたと評価できる。

②中期目標期間の評価結果を踏まえた、事業計画及び業務運営等に関して取るべき方策（改善のポイント）

（1）事業計画に関する事項

・文化財の調査研究成果や保存修復技術が国際貢献を果たしていること及びユネスコ無形文化遺産保護条約に基づき、新たにアジア太平洋地域における無形文化遺産に係る調査・研究の拠点を設置し、調査研究等事業を行うことは次世代後継者の積極的な参画にもつながるものであり、ナショナルセンターとして非常に有意義であることから、国民に対してもっと情報発信をすべきである。

　また、平常展については展示方法等の更なる充実につとめ、その魅力の向上が図られることを期待することから、より一層の広報活動の充実が必要と考える。さらには啓蒙的な講座の開設についても、入場者数の伸長に貢献できると思われるため、更なる広報が必要である。

・資料収集と施設の補修工事等については、引き続き法人として計画的に対応すべきである。なお、保存修復に関する調査研究など、継続性を必須とし、緊急性もある事業については、柔軟な対応が必要である。

（2）業務運営に関する事項

・業務運営の効率化と経費の節減が着実に進められたことは高く評価できる。一方で、過度な縮減は文化サービスの質の低下につながり、法人本来の業務目的が損なわれる危険性があるので、適正なバランスを意識しつつ、更なる合理的な業務運営に努める必要がある。

・次期中期目標期間においては、ナショナルセンターとしてこれまでに蓄積した研究成果と文化財保存技術等の継承と、それに基づく次なる発展が期待される中、常勤職員数の抑制が本来業務に影響を与えないかの検証が望まれるとともに、将来的なアソシエイトフェロー制度の在り方についても見直す機会を設けることを望む。

（3）その他

・目的積立金制度については、国立の博物館が「文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外に発信する」ための活動を行い、来館者により自己収入を得ているという性格上、法人内のインセンティブのみならず法人としての国民へのサービスの還元という観点からも重要な制度である。このことから、制度の趣旨に沿った運用がなされるよう、諸課題の解決に向けて積極的な取組が望まれる。

③特記事項

・事業仕分けや「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」等については、着実に対応を進めている。

全体－1

文部科学省独立行政法人評価委員会
文化分科会　国立文化財機構部会　名簿　　（五十音順）

（委　員）

○　嶋田　実名子　　花王株式会社コーポレートコミュニケーション部門理事

（臨時委員）

上原　真人　　京都大学大学院文学研究科教授

内田　篤呉　　（財）エム・オー・エー美術文化財団MOA美術館理事・副館長・学芸部長

佐野　みどり　　学習院大学文学部哲学科教授

竹本　幹夫　　早稲田大学文学学術院教授・演劇博物館館長

永村　眞　　日本女子大学文学部教授

宮島　博和　　公認会計士

○：部会長

独立行政法人国立文化財機構の中期目標期間に係る業務の実績に関する評価

項目別評価総表

中期目標の項目名	評定	中期計画の項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
（大項目名）国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項	A	（大項目名）国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A	A	A	A	A
（中項目名）歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承	A	（中項目名）歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承	A	－	A	A	A	A
		（小項目名） (1)体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。 (2)収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。	A	－	A	A	A	A
		（小項目名）国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。	A	－	B	A	A	A
		（小項目名）修理、保存処理を要する収蔵品等については、機構の保存科学・修復技術担当者が連携し、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を取り入れ、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。	A	－	A	A	A	A
		（小項目名）収集、保管のための調査研究	A	－	－	―	―	―
（中項目名）文化財を活用した歴史・ 伝統文化の国内外への発信	A	（中項目名）文化財を活用した歴史・ 伝統文化の国内外への発信	B	－	A	A	A	A
		（小項目名）展示の充実	S	－	S	S	S	A
		（小項目名）歴史・伝統文化の理解促進	A	－	A	A	A	B
		（小項目名）展示、教育普及活動などの博物館活動のための調査研究	A	－	－	―	―	―
		（小項目名）快適な観覧環境の提供	B	－	A	B	A	A
（中項目名）我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与	A	（中項目名）我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与	A	－	A	A	A	A
		（小項目名）収蔵品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に関わる刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信する。また、各種セミナー、シンポジウムを開催する。	－	－	A	A	A	A

総表－1

中期目標の項目名	評定	中期計画の項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
		（小項目名）海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムを開催するなど博物館活動に対する示唆が得られるよう努める。	－	－	A	A	A	A
		（小項目名）博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。	－	－	A	A	A	A
		（小項目名）収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を推進する。収蔵品の貸与については、貸与に関する情報を公開するなど具体的措置を講ずることとする。	－	－	A	A	A	A
		（小項目名）公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努める。なお、援助・助言の実施については今期5年間の実績が前中期目標期間の実績を上回るよう努める。	－	－	A	A	A	A
（中項目名）文化財に関する調査及び研究の推進	A	（中項目名）文化財に関する調査及び研究の推進	－	A	A	A	A	A
		（小項目名） （1）文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進 （2）文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進 （3）科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として、先端的調査研究等の推進 （4）高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。 （5）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究	－	S	A	A	A	A
			－	S	A	S	A	A
			－	A	A	A	A	A
（中項目名）文化財の保存・修復に関する国際貢献への寄与	A	（中項目名）文化財の保存・修復に関する国際協力の推進	－	A	S	A	A	A
		（小項目名）文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤整備を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国において文化財の保存・修復事業を推進する。	－	A	S	A	A	A

総表－2

中期目標の項目名	評定	中期計画の項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
		（小項目名）諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。 　また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。	－	A	S	A	A	A
（中項目名）情報発信機能の強化	A	（中項目名）情報発信機能の強化	－	A	A	A	A	A
		（小項目名）文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。 　また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る。	－	A	A	A	A	A
		（小項目名）文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成17年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。	－	A	A	A	A	A
		（小項目名） （1）黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上確保する。 （2）文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力し、支援を実施する。また、宮跡等への来訪者に文化財に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティア事業を運営するとともに、各種ボランティアに対して、活動機会・場所の提供等の支援を行う。 （3）奈良県の「平城遷都1300年記念事業」にあわせ、平城京についてのこれまでの調査・研究成果を生かした展示・公開事業を行う。	－	A	A	A	A	S
		（小項目名）文化財情報・研究成果などを広く公表すること等を通じて歴史・伝統文化に対する理解が深まるよう努める。	B	－	A	A	S	A
（中項目名）地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上	A	（中項目名）地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上	－	A	A	A	A	A

総表－3

中期目標の項目名	評定	中期計画の項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
		（小項目名）地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。	－	A	A	A	A	A
		（小項目名）文化財に関する高度な研究成果をもとに、地方公共団体等で中核となる文化財担当者に埋蔵文化財に関する研修及び保存科学に関する保存担当学芸員研修を実施する。なお、参加者等に対するアンケート調査を行い、80%以上の満足度が得られるようにする。 　また、東京藝術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成に寄与する。	－	A	S	A	A	A

総表－4

中期目標の項目名	評定	中期計画の項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
(大項目名)業務の効率化に関する事項	A	(大項目名)業務の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A	A	A	A	A
		(小項目名) 1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上に考慮する。また、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、さらに、外部委託の推進等により、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き5年期間中一般管理費15%以上、業務経費5%以上の業務の効率化を図る。 さらに、法人統合のメリットも最大限に生かしつつ業務の効率化に務め、機構の業務運営に際しては、一般管理業務の本部への一元化、集約化等を図り、19年度一般管理費(物件費)の10%相当を統合後5年間で削減を図る。 具体的には下記の措置を講じる。 (1)共通的な事務の一元化による業務の効率化 (2)使用資源の減少 ・省エネルギー(5年期間中1年に1.03%の減少) ・廃棄物減量化(一般廃棄物排出量を5年期間中5%減少) ・リサイクルの推進 (3)施設有効使用の推進 ・施設の利用推進 (4)民間委託の推進 ・一般管理部門を含めた組織・業務の見直しを行い、民間開放をさらに積極的に進める。 ・館の警備・清掃業務について民間委託を推進する。 ・来館者サービスを中心に業務の見直しを行い、民間委託を積極的進める。 (5)競争入札の推進 ・契約業者の競合を一層推進することにより、経費の効率化を図る。	A	(A)	A	B	A	A
		(小項目名)外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回以上事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。	A	(A)	B	A	A	A
		(小項目名)機構が管理する情報の安全性向上のため、必要な措置をとる。	A	−	A	A	A	A

総表−5

中期目標の項目名	評定	中期計画の項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
		(小項目名)「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」(平成18年法律第47号)に基づき、国家公務員に準じた人件費改革に取り組み、平成18年度からの5年間において、△5%以上の人件費削減を行う。また、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行う。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」(平成18年7月7日閣議決定)に基づき、国家公務員の改革を踏まえ、人件費改革を平成23年度まで継続する。ただし、今後の人事院勧告を踏まえた給与改定分については削減対象から除く。また、削減対象の「人件費」の範囲は、各年度中に支給した報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額とし、退職金、福利厚生費は含まない。 その際、役職員の給与に関し、国家公務員の給与構造改革を踏まえた、地場賃金の適正な反映、年功的な給与上昇の抑制、勤務実績の給与等への反映等に取り組む。	A	(A)	A	B	A	A

総表−6

中期目標の項目名	評定	中期計画の項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
(大項目名)財務・人事	A	(大項目名)財務・人事	A	A	A	A	A	A
		(小項目名)管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営に努める。 また、収入面に関しては、実績を勘案しつつ、税制措置も活用した寄付金などの外部資金、施設使用料等の財源の多様化を図り、法人全体として積極的に自己収入の増加に努めることにより、計画的な収支計画による運営を図る。 1 予算(中期計画の予算) 別紙のとおり 2 収支計画 別紙のとおり 3 資金計画 別紙のとおり Ⅳ 短期借入金の限度額短期借入金の限度額は、16億円 短期借入金が想定される理由は、運営費交付金の受入れに遅延が生じた場合である。 Ⅴ 重要な財産の処分等に関する計画 ① 京都国立博物館新館の取り壊し予定。 ② 奈良文化財研究所本館改築計画の実施に伴い取り壊し予定。 Ⅵ 剰余金の使途 決算において、剰余金が発生した時は、次の購入等に充てる。 1 文化財の購入・修理 2 調査・研究、出版事業の充実 3 展覧会の充実 4 入館者サービス、情報提供の質的向上 5 国際協力 6 老朽化対応のための施設設備の充実	A	A	A	A	A	A

総表－7

中期目標の項目名	評定	中期計画の項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
		(小項目名)その他主務省令で定める業務運営に関する事項 1 人事計画に関する計画 (1)方針 ① 国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討し、導入する。 ② 調査研究の機動的実施など研究を効率的かつ効果的に実施するため、任期付研究員制度を導入する。 ③ 人事交流を促進するとともに、職員の資質向上を図るための研修機会の提供に努める。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。 (2)人員に係る指標 常勤職員については、その職員数の抑制を図る。 (参考1) 1)期初の常勤職員数　367人 2)期末の常勤職員の見込み　355人 (参考2)中期目標期間中の人件費総額見込額 14,343百万円 但し、上記の額は、役職員に対し支給する報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額であり、退職金、福利厚生費を含まない。 2 別紙のとおりの施設整備に関する計画に沿った整備を推進する。	A	A	A	A	A	A

※「－」は当該年度では該当がないことを、「／」は終了した事業を表す。

備考(法人の業務・マネジメントに係る意見募集結果の評価への反映に対する説明等)
本法人の業務・マネジメントに係る意見募集を実施した結果、意見は寄せられなかった。

総表－8

【参考資料1】予算、収支計画及び資金計画に対する実績の経年比較（過去5年分を記載）

（単位：百万円）

区　分	19年度	20年度	21年度	22年度	区　分	19年度	20年度	21年度	22年度
収入					支出				
運営費交付金	9,042	8,771	8,367	8,192	運営事業費	10,341	9,779	10,454	11,010
施設整備費補助金	148	1,872	2,331	5,094	人件費	3,483	3,507	3,244	3,162
文化芸術情報電子化推進費補助金	－	－	548	136	一般管理費	1,191	1,173	1,066	932
展示事業等収入	1,558	1,786	1,898	1,580	業務経費	5,667	5,098	6,144	6,916
受託収入	527	514	525	518	調査研究事業費	1,261	1,448	1,473	1,633
その他寄附金等	149	127	139	143	情報公開事業費	166	146	144	127
					研修事業費	22	22	17	18
					国際研究協力事業費	249	229	223	227
					展示出版事業費	119	112	163	150
					展覧事業費	3,780	3,079	4,050	4,672
					教育普及事業費	70	62	74	89
					施設整備費	148	2,106	2,212	5,094
					文化芸術情報電子化推進費	－	－	542	142
					受託事業費	486	503	492	507
計	11,424	13,070	13,808	15,663	計	10,975	12,388	13,700	16,753

備考（指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等）
施設整備費補助金の増は、建物改修工事等の増によるものである。
文化芸術情報電子化推進費補助金は、平成21年度補正予算によるものである。
展示事業等収入の減は、平成21年度特別展の入場者増の反動減によるものである。
展覧事業費の増は、前年度からの繰越による収蔵品購入によるものである。

（単位：百万円）

区　分	19年度	20年度	21年度	22年度	区　分	19年度	20年度	21年度	22年度
費用					収益				
経常経費	9,095	9,451	9,700	9,703	運営費交付金収益	7,010	6,861	6,364	6,792
人件費	3,956	4,025	3,842	3,804	受託収入	529	562	554	586
一般管理費	1,035	1,153	1,128	852	入場料収入	1,081	1,160	1,322	892
業務経費	4,104	4,273	4,730	5,047	展示事業等附帯収入	310	423	370	383
調査研究業務費	886	1,026	1,393	1,192	財産利用収入	162	150	159	154
情報公開業務費	141	130	124	122	寄附金収益	57	80	123	122
研修業務費	20	20	17	17	施設費収益	7	132	143	216
国際研究協力業務費	248	225	222	225	その他補助金収益	－	－	376	98
展示出版業務費	108	114	179	144	資産見返負債戻入	359	398	418	517
展覧業務費	1,768	1,819	1,894	2,299	雑益等	3	5	18	84
教育普及業務費	70	62	68	87	臨時利益	－	－	347	11
受託業務費	483	474	484	505					
減価償却費	378	400	346	451					
雑損等	2	3	3	5					
臨時損失	14	20	349	12					
計	9,109	9,471	10,049	9,715	計	9,518	9,771	10,194	9,855
					純利益	409	300	145	141
					目的積立金取崩額	5	4	3	2
					総利益	414	304	148	143

備考（指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等）
展覧業務費の増は、東京国立博物館総合文化展リニューアルによるものである。
入場料収入の減は、平成21年度特別展の入場者増の反動減によるものである。
受託収入の増は、アジア太平洋無形文化遺産研究センター関連業務によるものである。
施設費収益の増は、建物の竣工によるものである。

（単位：百万円）

区　分	19年度	20年度	21年度	22年度	区　分	19年度	20年度	21年度	22年度
資金支出					資金収入				
業務活動による支出	9,107	9,114	9,034	9,254	業務活動による収入	11,719	11,558	11,894	10,665
投資活動による支出	2,575	3,595	4,345	7,083	運営費交付金による収入	9,042	8,771	8,367	8,192
財務活動による支出	20	16	20	7	展示事業等による収入	2,677	2,787	3,527	2,473
翌年度への繰越金	2,490	3,343	4,158	3,581	投資活動による収入	3	2,020	2,320	5,102
					施設費による収入	0	2,020	2,320	5,102
					固定資産売却による収入	3	0	0	0
					財務活動による収入	0	0	0	0
					前年度よりの繰越金	2,470	2,490	3,343	4,158
計	14,192	16,068	17,557	19,925	計	14,192	16,068	17,557	19,925

備考（指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等）
投資活動による支出の増は、施設整備費補助金によるものである。
展示事業等による収入の減は、平成21年度特別展入場者増の反動減によるものである。

【参考資料2】貸借対照表の経年比較（過去5年分を記載）

（単位：百万円）

区　分	19年度	20年度	21年度	22年度	区　分	19年度	20年度	21年度	22年度
資産					負債				
流動資産					流動負債				
現金・預金	2,490	3,343	4,158	3,581	運営費交付金債務	752	1,350	1,197	0
未収金	553	664	601	637	預り施設費	－	－	0	0
その他	71	36	32	526	預りその他補助金	－	－	6	0
固定資産					預り寄附金	113	152	144	86
有形固定資産					未払金	1,805	1,787	2,448	3,635
建物	45,827	43,830	42,143	45,582	未払費用	47	51	59	59
収蔵品	95,898	97,362	99,521	101,359	前受金	1	1	－	0
土地	44,411	44,411	44,411	44,411	預り金	122	146	229	101
その他	4,686	5,666	6,961	6,383	その他流動負債	2	2	4	5
無形固定資産									
ソフトウェア	105	116	144	165	固定負債				
電話加入権	5	5	5	5	資産見返負債				
投資その他資産	1	1	1	1	資産見返運営費交付金	2,111	2,030	2,038	2,429
					資産見返寄附金	42	73	106	177
					資産見返物品受贈額	127	113	99	90
					資産見返その他補助金	－	－	162	174
					建設仮勘定見返運営費交付金	123	123	126	143
					建設仮勘定見返施設費	116	1,526	2,963	2,383
					その他の固定負債				
					長期未払金	33	23	39	34
					負債合計	5,394	7,377	9,620	9,316
					純資産				
					資本金	104,714	104,714	104,714	104,714
					資本剰余金	83,220	82,324	82,479	87,316
					利益剰余金	719	1,019	1,164	1,304
					（うち当期未処分利益）	414	304	148	143
					純資産合計	188,653	188,057	188,357	193,334
資産合計	194,047	195,434	197,977	202,650	負債純資産合計	194,047	195,434	197,977	202,650

備考（指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等）
未払金の増は、施設工事によるものが主な要因である。
資本剰余金の増は、東京国立博物館東洋館工事、奈良国立博物館西新館・仏教美術資料研究センターの完成によるものである。

【参考資料3】利益（又は損失）の処分についての経年比較（過去5年分を記載）　（単位：百万円）

区　分	19年度	20年度	21年度	22年度	
Ⅰ　当期未処分利益					
当期総利益	414	304	148	143	
前期繰越欠損金	0	0	0	0	
Ⅱ　利益処分額					
積立金	414	304	148	143	
独立行政法人通則法第44条第3項により					
主務大臣の承認を受けた額	0	0	0	0	
業務拡充積立金	0	0	0	0	
施設改修積立金	0	0	0	0	

備考（指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等）

【参考資料4】人員の増減の経年比較（過去5年分を記載）　（単位：人）

職種※	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
定年制研究職員	99	188	186	186	186
任期制研究系職員	2	2	7	7	10
再任用研究職職員	0	1	1	2	2
定年制事務職員	88	122	121	123	123
任期制事務職員	0	0	0	0	0
再任用事務職員	3	2	1	1	1
定年制技能・労務職員	26	23	22	20	19
任期制技能・労務職員	0	0	0	0	0
再任用技能・労務職員	0	3	3	3	0
指定職相当職員	0	3	3	3	3

※職種は法人の特性によって適宜変更すること

備考（指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等）
・平成18年度については、統合前のため博物館のみ記載

S：特に優れた実績を上げている。（客観的基準は事前に設けず、法人の業務の特性に応じて評定を付す。）

A：中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。（当該年度に実施すべき中期計画の達成度が100％以上）

B：中期計画通りに履行しているとは言えない面もあるが、工夫や努力によって、中期目標を達成し得ると判断される。（当該年度に実施すべき中期計画の達成度が70％以上100％未満）

C：中期計画の履行が遅れており、中期目標達成のためには業務の改善が必要である。（当該年度に実施すべき中期計画の達成度が70％未満）

F：評価委員会として業務運営の改善その他の勧告を行う必要がある。（客観的基準は事前に設けず、業務改善の勧告が必要と判断された場合に限りFの評定を付す。）

独立行政法人国立文化財機構の中期目標期間に係る業務の実績に関する評価

【(大項目)1】	Ⅱ　国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
A	A	A	A	A	A

【(中項目)1−1】	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承	【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
A	ー	A	A	A	A

【(小項目)1−1−1】	収蔵品の収集	【評定】 A

【法人の達成すべき目標】
(1)国の文化財保護政策との整合性、一体性を保ちつつ機構の設置する博物館各館の役割・任務に沿って収集方針を定め、これに基づき、計画的かつ適時適切な購入と寄贈・寄託の受入れを進め、体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の充実を図ること。

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
A	ー	A	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額(百万円)	699	1,737	1,037	1,759	1,863	7,095
従事人員数(人)	99	98	99	103	105	504

※決算額は、4国立博物館の文化財購入費の決算額を計上している。
※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○購入、寄贈・寄託の受け入れにより、体系的・通史的にバランスのとれたコレクションを形成したか。	【収蔵品件数推移】(件) 東京国立博物館 111,588 / 112,439 / 112,529 / 112,776 / 113,258 / 1,699 京都国立博物館 6,320 / 6,386 / 6,417 / 6,526 / 6,584 / 324 奈良国立博物館 1,790 / 1,794 / 1,805 / 1,812 / 1,827 / 91 九州国立博物館 281 / 333 / 370 / 397 / 433 / 160 合計 119,979 / 120,952 / 121,121 / 121,511 / 122,102 / 2,274 (18年度 / 19年度 / 20年度 / 21年度 / 22年度 / 第1期比増) 【寄託件数】(件)　指標:平常展に必要と考えられる件数(年度計画) 寄託品件数 東博 目標値 2,400 − 2,400 2,400 2,400 2,400 東博 実績 2,773 − 2,743 2,750 2,734 2,726 東博 定量的評価 A − A A A A 京博 目標値 6,000 − 6,000 6,000 5,800 5,800 京博 実績 6,179 − 6,154 6,145 5,957 6,005 京博 定量的評価 A − A A A A 奈良博 目標値 1,960 − 1,960 2,060 2,060 2,060 奈良博 実績 1,957 − 2,057 2,067 1,957 1,947 奈良博 定量的評価 B − A A B B 九博 目標値 350 − 350 350 800 800 九博 実績 1,506 − 1,091 1,105 1,256 1,297 九博 定量表評価 A − A A S S (項目名 / 第2期中期目標期間中の評価の経年変化 / 18年度 博物館 / 18年度 研究所 / 19年度 / 20年度 / 21年度 / 22年度) **※21年度から定量的評価の目標値を設定しているものについては、実績が目標値の1.5倍以上をあげた場合「S」とした。** **(参考)法人の自己評価** 収蔵品は開館から5年経過した九州国立博物館を含め順調に増加している。寄託品については奈良国立博物館で社寺等への一括返還の影響で目標を下回った年もあるが、他の博物館では各年度それぞれの目標を達成しており、購入・寄託により、コレクションの体系的・通史的バランスをより良いものにすることができた。 中期計画に対して順調に成果を上げている。	○中期目標期間を通じて、各博物館の特色を生かした、購入、寄贈・寄託の受け入れによる、体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品が、形成・充実されたと評価できる。 奈良国立博物館における寄託品の減少は、寄託元での環境整備の結果の返還要望に応じたための一時的な減少であり、特に問題となる事象ではない。むしろ九州国立博物館が目標を大幅に上回ったことを高く評価したい。

【(小項目)1－1－2】 収蔵品の管理、保存

【法人の達成すべき目標】
(2)収蔵品全体を常時、適切な保存及び管理環境下に置くこと。特に、施設の老朽化、耐震対策に計画的かつ速やかに取り組み、貴重な文化財を次代へ継承すること。

【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
A	ー	B	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額(百万円)	1,034	148	2,106	2,212	5,094	10,594
従事人員数(人)	110	110	109	115	115	559

※決算額は、決算報告書・施設整備費補助金の決算額を計上している。(管理・保存にかかる光熱水料や、調査にかかる事務費は個別に計上できないため、勘案していない。)
※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員及び常勤施設系職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)

○展示場、収蔵庫の老朽化対策や耐震対策を計画的かつ速やかに実施したか。
○保存環境の調査研究等を実施したか。

主な実績

18 年度
収蔵品の管理・保存
・本館地下の特 8 収蔵庫の改修(東博)
・文化財保存修理所空調設備の改修(京博)
・免震付き展示ケースの設置(奈良博)
・生物モニタリングや清掃等によるIPM(総合的有害生物管理)活動の実施(九博)
調査研究
・文化財輸送の安全性(振動・衝撃)に関する調査(東博)
・東京文化財研究所との先進的な光学的調査に関する共同研究(奈良博)
・帝塚山大学との斑鳩地区出土古瓦の保存修理に関する共同研究(奈良博)
・ポーラ財団助成金による紙文化財の保存修復に関する研究(九博)
19 年度
・18年度に改修した本館地下特8収蔵庫への収蔵品の搬入(東博)
・特別展示館の耐震診断の実施(京博)
・定期的な防虫トラップの調査の開始(奈良博)
・生物モニタリングや清掃等によるIPM(総合的有害生物管理)活動の実施(九博)
20 年度
・RFID(電子タグ)・バーコード等を利用した収蔵品所在情報管理を開始(東博)
・輸送中の文化財にかかる振動・衝撃の計測、調査(東博)
・平常展示館内収蔵品の東収蔵庫等への移動(京博)
・無線LANによるリアルタイムでの温湿度管理の構築(奈良博)
・IPM(総合的有害生物管理)活動の普及(九博)
21 年度
・東洋館耐震補強工事に伴い、同館内収蔵庫から文化財を搬出し館内で安全に保管(東博)

分析・評価

○中期目標期間を通じて、各博物館において、収蔵庫や保存環境の改修・改良、耐震補強工事の実施など、次世代への文化財の継承に必要な適切な措置がとられたと評価できる。
特に所蔵品の保存カルテ作成は、中期計画の目標を上回る実績をあげている。
また、中期目標期間において収蔵品の展示・保存施設の免震・耐震工事が進展したことにより、東日本大震災による、大きな被害を免れたとも考えられる。
なお、各博物館の施設は経年劣化に幅があり、今後も老巧化・耐震対策の継続が必要である。

・平成20年度から実施している列品情報整備事業の2年目として、絵画・歴史資料・東洋漆工分野で作業を進めた(東博)
・平常展示館の建替に伴う、同館内収蔵庫からの館蔵品、寄託品を搬出し館内で安全に保管(京博)
・西新館の耐震補強工事、仏教美術資料研究センターの過剰ではなく必要最低限の耐震性を確保する改修工事(奈良博)
・IPM(総合的有害生物管理)の実施・普及(奈良博・九博)
22 年度
・東洋館改修について、平成24年度中の開館に向けて準備を進めており、耐震補強は概ね完了したが、東日本大震災の影響により展示ケース取設けに遅れが生じている。(東博)
・平常展示館の建替工事は、平成24年度末完成・25年度開館に向けて進んでいる。(京博)
・西新館耐震工事については展示施設として必要とされる耐震性能を確保するための補強工事を行うとともに、展示環境の向上を意図した展示ケース・内装・照明設備等の更新を行った。また、監視面の強化を図るための監視モニターの更新を行った。仏教美術資料研究センターについては、重要文化財指定の建造物であるため、必要最低限の耐震性を確保するとともに、原状に復しつつも現在の使用意図に照らした新たな平面計画の下、内装改修を行った。(奈良博)
・常設展示室 70 箇所、特別展示室約 30 箇所に温湿度計を設置して、環境データを解析した。収蔵庫 30 箇所に温湿度計を設置して環境データを解析した。また、空気質やダストを調査して収蔵環境の改善を行った。(九博)
・IPM(総合的有害生物管理)の実施・普及を行った。(奈良博・九博)

【保存カルテ作成件数】(件)　指標:年度計画

項目名			第2期中期目標期間中の評価の経年変化					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
保存カルテ作成件数	東博	目標値	*500*	－	*500*	*500*	*800*	*800*
		実績	1,638	－	1,725	2,693	1,989	2,368
		定量的評価	A	－	A	A	S	S
	京博	目標値	*100*	－	*100*	*100*	*100*	*100*
		実績	96	－	140	174	214	108
		定量的評価	B	－	A	A	S	A
	奈良博	目標値	*100*	－	*100*	*100*	*100*	*100*
		実績	102	－	103	108	114	218
		定量的評価	A	－	A	A	A	S
	九博	目標値	*200*	－	*200*	*200*	*200*	*100*
		実績	205	－	252	289	205	101
		定量的評価	A	－	A	A	A	A

(参考)法人の自己評価
京都国立博物館の平常展示館の建替工事を始め、各博物館の改修工事については概ね順調に進行し、老朽化・耐震対策は進んでいるが、3 月の東日本大震災の影響により東京国立博物博の東洋館が展示ケース取設けに遅れが生じている。

	定量的な目標を定めている保存カルテの作成件数については、全ての博物館で目標を上回っている。各博物館ではIPM（総合的有害生物管理）活動の実践として防虫対策に取り組み、展示室内の万全の体制を図っている。 中期計画に対して順調に成果を上げている。	

【（小項目）1－1－3】 収蔵品修理、保存処理

【法人の達成すべき目標】

（3）収蔵品の保存技術の向上に努め、貴重な文化財を次代へ継承すること。

【評定】

A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
A	ー	A	A	A	A

【インプット指標】

（中期目標期間）	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額（百万円）	126	132	126	158	187	729
従事人員数（人）	49	50	51	50	50	250

※決算額は、文化財修理を外注した決算額を計上している。

※従事人員数は4国立博物館の常勤保存修復担当職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準（評価指標）	主な実績	分析・評価
○緊急性の高いものから計画的に修理を実施したか。 ○外部の専門家と連携したか。 ○科学的な保存技術を取り入れたか。	18 年度 収蔵品の本格修理は 122 件と 17 年度の 172 件を大きく下回ったが、応急修理を実施するなど継続的に収蔵品の保全を図っている。 19 年度 ・計画的な本格修理及び必要に応じた応急修理を実施し詳細を修理報告書として刊行（各館） ・蛍光X線分析及び赤外線撮影などの科学的調査を実施（東博） ・20年度以降の修理指針の検討のため、絵画の彩色の蛍光X線分析や、生物被害等による劣化損傷状態を調査（九博） 20 年度 ・計画的な文化財の本格修理を実施（125件） ・長期的な修理計画策定に向けてX線透過撮影、光学実態顕微鏡などを使用した調査を実施（東博） ・修理指針の検討のため、絵画の彩色の蛍光X線分析や、生物被害等による劣化損傷状態を調査（九博） 21 年度 ・計画的な文化財の本格修理を実施（146件） ・修理契約委員会を設置し、契約の透明性に努めた（各館） ・X線透過撮影、光学実体顕微鏡などを使用した調査を実施し、今後の修理計画に反映した（東博） ・展示や損傷の程度を勘案して、緊急性の高い文化財を修理した（九博） 22 年度 ・計画的な文化財の本格修理を実施した。（176件） ・修理契約委員会を21年度に設置し、22年度も引き続き同委員会を開催し、契約の透明性を高めた。（各館）	○中期目標期間を通じて、各博物館において、緊急性の高い収蔵品の応急修理や、長期的な修理計画策定に不可欠なX線透過などの調査、およびそれにもとづく計画的な本格修理が行われており、文化財が次世代へと適切に継承されつつあると評価できる。 特に、九州国立博物館においては、修理前にCTや蛍光X線分析などの科学調査を行い、文化財の状態を精査し修理を実施している点は、今後の文化財修理のあり方を示唆するものとして評価される。

・紙本などの修理技術者として保存修復課に3名のアソシエイト・フェローを配置し、館内で実施する館蔵品の本格修理、応急（対症）修理を本格化させた。（東博）
・本年度新たに「長期受託文化財修理実施要項」を策定し、長期にわたり展示に活用する寄託品の修理を、館の修理費を用いて実施することとし、京都・妙法院所蔵の重要文化財 木造千手観音立像（第 20 号）の修理に着手した。（奈良博）
・収蔵品のほか、九州をはじめとする館外所蔵者負担による文化財修理23件のため、保存修復諸施設を積極的に活用し、うち6件については現地修理を行った。（九博）

【修理件数（本格修理）】（件）　指標：年度計画

項目名			第2期中期目標期間中の評価の経年変化					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
修理件数	東博	目標値	*70*	－	*70*	*70*	*70*	*70*
		実績	101	－	101	75	106	139
		定量的評価	A	－	A	A	S	S
	京博	目標値	*10*	－	*10*	*10*	*10*	*10*
		実績	11	－	15	17	5	9
		定量的評価	A	－	A	A	C	B
	奈良博	目標値	*6*	－	*4*	*4*	*4*	*5*
		実績	4	－	10	8	11	9
		定量的評価	B	－	A	A	S	S
	九博	目標値	*10*	－	*8*	*15*	*15*	*15*
		実績	10	－	22	25	24	19
		定量的評価	A	－	A	A	S	A

（参考）法人の自己評価

定量的な目標を定めている本格修理件数については、各博物館ともほぼ目標を上回った。また、応急（対症）修理の体制充実や、修理に反映するための各種科学的調査を実施している。

九州国立博物館や京都、奈良の文化財保存修理所などの保存修復施設は、修理業者に貸与して国宝・重要文化財等の保存修復の場を提供しており、研究者との連携の下、文化財修理のナショナルセンターとしての機能を果たしている。長期的な修理計画を東京国立博物館で策定するなど効率的な修理を行うよう努めている。

中期計画に対して順調に成果を上げている。

【（中項目）1－2】　2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

【評定】 **A**

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
B	ー	A	A	A	A

【（小項目）1－2－1】　展示の充実

【評定】 **S**

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
S	ー	S	S	S	A

【法人の達成すべき目標】
（1）展示の充実
展示については、常に点検・評価を行うなど改善への取組みを進め、歴史・伝統文化を国内外に発信し、これらについての理解促進に寄与するものとなるように努めること。
①平常展は、歴史・伝統文化についての理解に資するよう、体系的・通史的な展示に努めるとともに、各館の収蔵品を法人全体として有効活用した魅力ある展示を行うこと。また、展示に関する外国語説明を一層充実させること。
②特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中心的拠点にふさわしい質の高い展示を行うこと。また、展示方法、解説などについて機構の人的資源を最大限に生かした魅力あるものを提供すること。
③個々の展覧会において、積極的な広報に努めること。また、過去の入館者等の状況等を踏まえた適切な入館者数の目標を設定し、その達成に努めること。

【インプット指標】

（中期目標期間）	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額（百万円）	844	920	894	980	1,086	4,724
従事人員数（人）	99	98	99	103	105	504

※決算額は、展覧事業費に要したディスプレイ費・印刷製本費・旅費・謝金・消耗品費等の損益計算書上の費用額を計上している。
※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準（評価指標）	主な実績	分析・評価

○国民のニーズや学術的動向を踏まえた質の高いものとしたか。
○観覧者の理解が深まるよう展示・解説を工夫したか。
（平常展）
○平常展を魅力あるものとし、再来館者を増加させたか。
○作品のキャプションについては、すべてに外国語訳を付したか。
○海外からの来館者向けに、展示テーマごとに外国語の解説パネル等を 80%以上設置したか。
（特別展）
○我が国の博物館の中心的拠点にふさわしい質の高い展示としたか。
○特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとしたか。
・東京国立博物館
3～4回
・京都国立博物館
2～3回
・奈良国立博物館
2～3回
・九州国立博物館
2～3回
○個々の展覧会ごとに目標入館者数を定め、それを達成したか。
○黒田記念館の所蔵作品を東京国立博物館でも展示公開するなど公開機会を拡大したか。

【平常展来館者数推移】（人）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度	合計
東京国立博物館	361,773	334,297	412,675	330,536	373,068	1,812,349
京都国立博物館	146,752	165,080	141,965	0	0	453,797
奈良国立博物館	137,739	131,336	112,849	136,672	71,566	590,162
九州国立博物館	501,540	341,282	241,423	544,661	274,545	1,903,451
合計	1,147,804	971,995	908,912	1,011,869	719,179	4,759,759

【平常展外国語パネルの設置率】指標：中期計画

項目名			第2期中期目標期間中の評価の経年変化					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
外国語パネルの設置（80%以上）	東博	実績	100%	－	95%	97%	97%	96%
		定量的評価	A	－	A	A	A	A
	京博	実績	69%	－	100%	100%	―	―
		定量的評価	B	－	A	A	－	－
	奈良博	実績	56%	－	56%	77%	91%	84%
		定量的評価	B	－	B	B	A	A
	九博	実績	100%	－	63%	82%	82%	83%
		定量的評価	A	－	B	A	A	A

【特別展等開催実績】

年度	博物館	名　称	来館者数（人）	目標来館者数（人）	評価
18	東京国立博物館	特別展「最澄と天台の国宝」	197,859	100,000	A
		特別展「プライスコレクション 若冲と江戸絵画展」	317,712	100,000	A
		特別展「仏像 一木にこめられた祈り」	335,489	150,000	A
		特別展「悠久の美 中国国家博物館名品展」	98,133	80,000	A
		特別展「マーオリ 楽園の神々」	72,720	50,000	A
	京都国立博物館	特別展「大絵巻展」	186,772	60,000	A
		特別展「開館記念 110 周年記念 美のかけはし」	59,280	30,000	A
		特別展「京焼―みやこの意匠と技―」	25,283	20,000	A
		特別展「京都御所障壁画－御常御殿と御学問所－」	138,683	50,000	A
	奈良国立博物館	特別展「大勧進 重源」	41,813	20,000	A
		特別展「北村昭斎―漆の技―」	14,571	10,000	A
		特別展「第 58 回正倉院展」	283,515	160,000	A
	九州国立博物館	特別展「うるま ちゅら島 琉球」	177,478	50,000	A
		特別展「南の貝のものがたり」	63,560	30,000	A
		特別展「発掘された日本列島 2006－新発見考古速報展―」			
		特別展「海の神々－捧げられた宝物」	139,981	60,000	A
		特別展「プライスコレクション 若冲と江戸絵画」	300,171	50,000	A
19	東京国立博物館	特別展「レオナルド・ダ・ヴィンチ 天才の実像」	796,004	500,000	A
		特別展「京都五山 禅の文化」展	108,917	100,000	A
		特別展「大徳川展」	425,492	250,000	A
		特別展「宮廷のみやび―近衛家 1000 年の名宝」	157,718	120,000	A
	京都国立博物館	特別展「藤原道長 －極めた栄華・願った浄土－」	37,411	20,000	A

○各博物館の特色を生かした平常展（総合文化展、なら仏像館、文化交流展）や特別展を開催し、中期目標期間を通じて、我が国の博物館の中心的な拠点としての役割を果たしたと評価できる。

特に平常展は、展示室のリニューアル、展示パネルの設置及び多言語化、名称の変更等、様々なアプローチによる『平常展』の活性化が図られ、来館者数が前期比 6 割増となった。また、特別展は実施回数も来館者数も目標値を上回ったと認められる。さらに、黒田記念館所蔵作品の公開については、毎年1回地方巡回展を開催するなど国立博物館と文化財研究所が共同し、公開の機会を広げていると認められる。

		特別展「狩野永徳」	230,656	70,000	A
		特別展「憧れのヨーロッパ陶磁」	59,267	(30,000)	(A)
	奈良国立博物館	特別展「神仏習合」	40,493	30,000	A
		特別展「美麗 院政期の絵画」	22,696	10,000	A
		特別展「第 59 回正倉院展」	248,389	180,000	A
	九州国立博物館	特別展「未来への贈りもの」	77,380	100,000	B
		特別展「日本のやきもの－選び抜かれた名宝 120 点」	50,986	50,000	A
		特別展「本願寺展－親鸞と仏教伝来の道」	197,697	150,000	A
		特別展「京都五山 禅の文化展」	171,336	80,000	A
20	東京国立博物館	特別展「平城遷都 1300 年記念 国宝 薬師寺展」	794,909	400,000	A
		特別展「フランズが夢見た日本」	58,342	50,000	A
		特別展「対決－巨匠たちの日本美術」	326,784	120,000	A
		特別展「スリランカ-輝く島の美に出会う-」	80,865	100,000	B
		特別展「大琳派展－継承と変奏－」	308,213	140,000	A
		特別展「未来をひらく福澤諭吉」展	73,128	100,000	B
		特別展「妙心寺」	151,833	100,000	A
	京都国立博物館	特別展「絵画の冒険者 暁斎 kyosai」	76,686	30,000	A
		特別展「japan 蒔絵－宮殿を飾る 東洋の燦めき－」	67,050	50,000	A
		特別展「御即位二十年記念 京都御所ゆかりの至宝」	116,363	30,000	A
	奈良国立博物館	特別展「天馬 －シルクロードを翔ける夢の馬－」	31,910	30,000	A
		特別展「国宝 法隆寺金堂展」	132,919	40,000	A
		特別展「西国三十三所-観音霊場の祈りと美」	106,411	30,000	A
		特別展「第 60 回正倉院展」	263,765	180,000	A
	九州国立博物館	特別展「国宝 大絵巻展 」	131,197	100,000	A
		特別展「島津の国宝と篤姫の時代」	152,420	50,000	A
		特別展「国宝 天神さま」	174,698	100,000	A
		特別展「工芸のいま 伝統と創造」	72,637	80,000	B
21	東京国立博物館	特別展「STORY OF･･･」	120,483	90,000	A
		特別展「国宝 阿修羅展」	946,172	540,000	S
		特別展「染付－藍が彩るアジアの器」	52,731	70,000	B
		特別展「伊勢神宮と神々の美術」	114,796	110,000	A
		特別展「皇室の名宝―日本美の華」	447,944	350,000	A
		特別展「国宝 土偶展」	128,285	(50,000)	(S)
		特別展「長谷川等伯展」	292,526	160,000	S
	京都国立博物館	特別展「開山無相大師 650 年遠諱記念 妙心寺」	92,144	30,000	S
		特別展「シルクロード 文字を辿って」	25,511	20,000	A
		特別展「日蓮と法華の名宝－華ひらく京都町衆文化－」	88,187	30,000	S
		特別展「THE ハプスブルク」	247,078	50,000	S
	奈良国立博物館	特別展「国宝 鑑真和上展」	93,779	35,000	S
		特別展「聖地寧波」	30,548	30,000	A
		特別展「第61回正倉院展」	299,294	180,000	S
	九州国立博物館	特別展「聖地チベット ポタラ宮と天空の至宝」	140,917	100,000	A
		特別展「国宝 阿修羅展」	711,154	120,000	S
		特別展「古代九州の国宝」	72,741	30,000	S
		特別展「京都妙心寺－禅の至宝と九州・琉球」	130,231	80,000	S
22	東京国立博物館	特別展「細川家の至宝」	182,470	160,000	A
		特別展「誕生！中国文明」	105,538	220,000	C
		特別展「東大寺大仏-天平の至宝-」	232,791	420,000	C

	特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」	188,402	180,000	A
京都国立博物館	特別展「没後400年　長谷川等伯」	244,347	130,000	S
	特別展観「没後200年記念　上田秋成」	21,705	20,000	A
	特別展「高僧と袈裟-こころもを伝え こころを繋ぐ-」	19,297	20,000	B
	特別展「筆墨精神　中国書画の世界」	37,535	30,000	A
奈良国立博物館	特別展「大遣唐使展」	202,166	120,000	S
	特別展「仏像修理100年」	81,342	10,000	S
	特別展「至宝の仏像　東大寺法華堂金剛力士像特別公開」			
	特別展「第62回正倉院展」	294,804	180,000	S
九州国立博物館	特別展「パリに咲いた古伊万里の華」	84,738	50,000	S
	特別展「馬　アジアを駆けた二千年」	42,022	50,000	B
	特別展「誕生！中国文明」	53,409	90,000	C
	特別展「没後120年　ゴッホ展」	354,311	110,000	S

※目標来館者数の（　）付きの数字は年度計画外の特別展のため、年間の目標来館者数の合計から除いている。

【特別展来館者数推移】（人）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度	合計
東京国立博物館	1,055,422	1,433,901	1,759,267	2,085,745	709,201	7,043,536
京都国立博物館	410,018	327,334	274,036	452,920	331,131	1,795,439
奈良国立博物館	339,899	311,578	535,005	423,621	578,312	2,188,415
九州国立博物館	691,880	512,856	515,495	1,055,043	543,489	3,318,763
合計	2,497,219	2,585,669	3,083,803	4,017,329	2,162,133	14,346,153

【特別展開催回数推移】（回）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	8(3)	5(1)	8(1)	12(4)	10(6)
京都国立博物館	4	3	3	5(1)	5(1)
奈良国立博物館	3	3	4	3	4
九州国立博物館	4	4	4	4	5(1)
合計	19(3)	15(1)	19(1)	24(5)	24(8)

※（　）内は海外展及び別会場開催（内数）

黒田記念館作品の公開機会拡大

19年度
・東京国立博物館企画展示室において、黒田記念館をテーマにした特集陳列を2回開催（東博）
20年度
・特集陳列「黒田清輝の留学時代」を東文研、東京藝術大学と共同で開催（東博）
21年度
・特集陳列「農村（田園）へのまなざし」を開催（東博）
22年度
・特集陳列「黒田清輝と京都」を開催（東博）

項目別－11

（参考）法人の自己評価

平常展は各博物館とも展示方法を改善している。展示室のリニューアルや展示解説パネルや外国語パネルの設置、また全ての作品のキャプションに外国語を付すなど観覧・観賞しやすくなるよう努力している。

また22年7月に奈良国立博物館が本館を「なら仏像館」と新たに命名し、リニューアルを行い、併せて平常展の名称を「名品展」とし、23年1月から東京国立博物館では「平常展」を「総合文化展」に改称した。これで九州国立博物館の従来からの「文化交流展」を併せ3博物館で平常展を別称で表示することで、「平常展はいつも同じ」というイメージの払拭を図り、平常展の活性化の一環とした来館者へのアピールを図った。

第2期中期目標期間における国立博物館への総来館者数は、1,910万5,912人となり、前期に比して約766万7千人増（67%増）となっている。平常展については475万9,759人で前期に比して約176万2千増（58.7%増）、特別展は1,434万6,153人で前期に比して約590万5千人増（70%増）と驚くべき数の来館者増加となった。これは21年度開催の「国宝阿修羅展」（東博、九博合計165万7千人）のような特別展を開催できたこともあるが、平常展も前期比6割増という結果になったことは、各博物館の努力が実りつつあることを表している。

特別展実施回数は全ての年で各博物館とも目標を上回り、目標来館者数もほとんど上回っている。

黒田記念館所蔵作品の公開については、東京国立博物館で特集陳列を毎年開催したほか、毎年1回地方巡回展を開催するなど東京文化財研究所と共同し、公開の機会を広げている。

中期計画に対して順調に成果を上げている。

S 評定の根拠（A 評定との違い）

【定量的根拠】
○中期目標期間の総来館者数が、前中期目標期間に比して 67%増加しており、個別に見ても、特別展で 70%、平常展で 59%の増加が見られ、目標を大きく上回っている。

【定性的根拠】
○各博物館の平常展の展示方法を、リニューアル等により展示の活性化を図るとともに、解説パネルの増加、多言語化等、鑑賞の手助けに努めた。
○中期目標期間中に、各博物館の特色を活かした特別展を実施している。特に、「国宝阿修羅展」のような大型で話題性の高いものから、「国宝土偶展」のような国際的な評価があり、かつ児童教育に資するもの、「マーリオ楽園の神々」や「スリランカ−輝く島の美に出会う−」のような国際交流に資するものなど、ナショナル・センターに相応しい質の高い特別展を精力的に実施した。

【(小項目)1−2−2】 歴史・伝統文化の理解促進

【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
A	ー	A	A	A	B

【法人の達成すべき目標】
(2)歴史・伝統文化の理解促進
歴史・伝統文化の理解促進に寄与するよう、機構の人的資源を活用した教育普及活動を実施すること。
①子どもから高齢者までを対象とした幅広い学習機会を提供すること。また、参加者数については、各館の年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ること。
②ボランティアや支援団体を育成し、相互の協力により教育普及活動の充実を図ること。

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額(百万円)	68	70	62	74	89	363
従事人員数(人)	51	52	53	52	54	262

※決算額は、決算報告書・教育普及事業費の決算額を計上している。
※従事人員数は、東京国立博物館の学芸企画部博物館教育課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課の常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)

○講演会、ギャラリートーク等の参加者数の各館の年間平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにしたか。
○ボランティア活動を支援したか。
○企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図ったか。

主な実績

【講演会、ギャラリートークの参加者数】(人)　指標:前中期目標期間の年間平均実績(中期計画)

項目名			第2期中期目標期間中の評価の経年変化					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
講演会、ギャラリートークの参加者数	東博	目標値	*10,915*	−	*10,915*			
		実績	9,922	−	11,361	12,332	12,546	13,319
		定量的評価	B	−	A	A	A	A
	京博	目標値	*5,181*	−	*5,181*			
		実績	4,980	−	4,489	3,413	3,002	2,313
		定量的評価	B	−	B	C	B	C
	奈良博	目標値	*3,542*	−	*3,542*			
		実績	2,743	−	2,949	3,655	3,421	3,349
		定量的評価	B	−	B	A	B	B
	九博	目標値	*5,255*	−	*5,255*			
		実績	6,494	−	4,152	5,507	6,806	3,996
		定量的評価	A	−	B	A	A	B

【ボランティア受入れ数】(人)

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	171	162	171	163	159
京都国立博物館	23	23	30	35	40
奈良国立博物館	85	96	102	98	85
九州国立博物館	293	293	388	345	288
合計	572	574	691	641	572

【賛助会加入件数】(件)

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	150	163	196	218	235
京都国立博物館	378	390	388	389	392
奈良国立博物館	35	45	49	56	64
合計	563	598	633	663	691

【友の会・パスポート加入数】(人)

		18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	友の会	1,346	1,341	1,913	2,085	1,412
	パスポート	18,705	16,035	20,405	21,598	13,733
	小計	20,051	17,376	22,318	23,683	15,145
京都国立博物館	友の会	3,784	3,224	2,932	2,612	2,468
奈良国立博物館	友の会	2,288	2,439	2,815	2,799	3,180
九州国立博物館	友の会	229	167	154	206	144
	パスポート	1,312	3,252	3,120	3,914	3,318
	小計	1,541	3,419	3,274	4,120	3,462
合計		27,664	26,458	31,339	33,214	24,255

【キャンパスメンバーズ加入校】(件)

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
東京国立博物館	16	22	29	35	35
京都国立博物館	15	21	29	30	29
奈良国立博物館	12	20	25	27	28
九州国立博物館	0	21	22	29	27
合計	43	84	105	121	119

(参考)法人の自己評価

今中期目標期間の定量的な目標として掲げた講演会等参加者数は、東京国立博物館以外の3博物館では残念ながら目標に達しなかった。京都国立博物館においては工事の影響、奈良国立博物館、九州国立博物館では館内混雑対策等による講座開催回数の減少や、講演会1回当たりの参加者数の減少が主な原因と思われる。

各博物館とも毎年児童・生徒のみならず一般も対象とした事業を実施し、学習の機会の提供を図ってきた。京都国立博物館では21年から工事による休館にもかかわらず、外部施設を借用して講演会等を開催するなど歴史・伝統文化の理解促進に努力した。

ボランティアについては、各博物館において研修や自己学習の機会を提供するとともに、ボランティアにとっても充実した活動となるよう各博物館とも協力して事業を実施している。

博物館支援者の増加については、賛助会や寄附金などは経済情勢に伴い厳しくなっている中、各博

分析・評価

○東京国立博物館を除いて、講演会参加者数は減少傾向にあるが、中期目標期間中に、賛助会員、キャンパスメンバーズ加入校等が継続的に増加しており、各博物館における積極的な博物館支援者への取り組みの成果がみられる。

児童等の学校教育及び一般市民に対する学習の機会が継続的に提供され、増加傾向にあり、特にボランティアの教育普及と支援は、生涯学習の視点からも有意義であり、評価できる。

次期中期目標期間においては、減少傾向にある講演会やギャラリートークについて、親子イベントなどを増やして若年層の博物館ファン層の開拓を行う等、さらなる工夫が必要である。

	物館では企業などへ積極的なアプローチに取り組んだほか、募金箱を設置するなどの取組みにより昨年以上の実績をあげている。また各博物館とも所在地域等と様々な取組みを共同して開催することにも積極的に取組むなど、支援者の増加に結びつく方策を実施した。 　中期計画に対して順調に成果を上げている。	

【(小項目)1－2－3】 快適な観覧環境の提供

【評定】

A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
B	ー	A	B	A	A

【法人の達成すべき目標】

(3)快適な観覧環境の提供

国民に親しまれる施設を目指し、入館者の立場に立った観覧環境の整備や利用者の要望を踏まえた管理運営を行い、入館者の期待に応えること。

①高齢者、身体障害者、外国人等を含めた入館者本位の快適な観覧環境を形成すること。

②入場料金及び開館時間の弾力化など、利用者の要望や利用形態等を踏まえた管理運営を行うこと。

③ミュージアムショップやレストラン等のサービスの充実を図ること。

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額(百万円)	8	13	25	15	33	94
従事人員数(人)	76	90	85	88	85	424

※決算額は、平常展に要するチラシ・パンフレット等の作成にかかる決算額を計上している。

※従事人員数は、東京国立博物館の総務部及び京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館の各総務課の常勤事務職員の人数を計上している。
　その際、役員及び学芸系職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○施設のバリアフリー化を進めたか。 ○利用者のニーズを踏まえ、入場料金や開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行ったか。 ○利用者の意見を踏まえ、ミュージアムショップやレストラン等を改善したか。	【バリアフリー化等】 18 年度 ・表慶館を改修するとともに、案内・誘導サインを整備。1 階部分はバリアフリー対応(東博) ・本館出入口横に手すりを設置(奈良博) 19 年度 ・点字解説の配布(東博) ・トイレ手すりの改修(京博) 20 年度 ・オストメイト対応トイレの設置(東博・九博) ・男子用トイレに小児用小便器と車椅子用手すりを3カ所設置(奈良博) 22 年度 ・聴覚障がい者対応のため、筆談ツールとして携帯できるコミュニケーションボードの使用を開始した(東博) ・庭園の舗装を改良し、歩行や車椅子に配慮した。(東博) ・本館 13 台、平成館 4 台の和便器を洋便器に変更した。(東博) 【管理運営の改善】 18 年度 ・特別展覧会開催時の混雑状況をホームページやハローダイヤルにより案内(京博) ・土曜講座の整理券方式の導入(京博) ・ミュージアムショップオリジナルグッズを開発(奈良博)	○中期目標期間を通じて、高齢者や障害者等の弱者に対するバリアフリー化を計画的に整備するとともに、混雑対策や開館時間の弾力化等、来館者に対するきめ細かな取り組みがなされており、観覧環境の向上が図られたと評価できる。 　また、レストランの接客、新メニューの提供等、来館者のニーズを踏まえたサービスの向上に努めていると認められる。 　次期中期目標期間においては、視覚障害者に対応した点字解説板の設置や解説ボランティア、触れるレプリカの設置等の検討が望まれる。また、それぞれの博物館における良い取り組みを他館に広げることも期待する。

	・快適な観覧環境を提供するための展示施設等の温湿度調査を実施（九博） ・来館者の要望を踏まえ冷水器の設置などを実施（九博） ・西日本鉄道と連携して、特別展観覧券付き割引キップを販売（九博） ・来館者の緊急事態に備え、AED（自動体外式除細動器）を設置し、職員とボランティアに対し、普通救命講習を実施（全博物館） ・上級救命講習の受講（警備係衛士が受講）（京博） 19 年度 ・平常展料金無料化（18 歳未満）（4博物館） ・オータムレイト割引、夫婦の日割引などの割引制度の整備（奈良博） ・救護室設備の整備（九博） 20 年度 ・地下回廊に携帯電話接続のため、携帯電話各社によるアンテナを設置（奈良博） 21 年度 ・客数情報システムを導入し、展示室内の観覧者数を正確に把握することで混雑時に適切な入場案内を行えるようにした。（奈良博） 22 年度 ・南門にインフォメーションコーナーを設け、ミュージアムショップとともにリニューアルした。これにより、レストラン含め3施設とも入場券のないお客様にも利用可能となった。（京博） 【ミュージアムショップ・レストラン】 ・ミュージアムショップやレストランについては、各博物館ともアンケートなどで来館者のニーズを調査し、レストランの接客の向上や特別展ごとにその趣に合わせた新メニューを提供するなど、サービスの向上に努めた。またミュージアムショップではオリジナルグッズの開発・販売に引き続き努め、改善を図った。 **（参考）法人の自己評価** 施設のバリアフリー化は年々改善されてきている。利用者のニーズを踏まえ、入場料金や開館時間の弾力化などの管理運営の改善も対応可能な範囲内で適宜行っている。 特別展の混雑対策として開館時間の柔軟な対応や、奈良国立博物館では新たに「客数情報システム」を導入し展示室内の入場者数を正確に把握することで、混雑時に適正な入場案内を行える工夫をしたり、現場対応ではあるがウェブサイトに待ち時間情報等をきめ細かく発信したり、日傘の貸し出しや給水所を設置するなど、少しでも入場者の負担を軽減できる工夫を行っている。今後も引き続きより快適な観覧環境となるよう努力していく必要がある。 また利用者の意見を踏まえ、ミュージアムショップではオリジナルグッズを開発するなど改善し、レストランでは接客の向上や特別展ごとにその趣に合わせた新メニューを提供するなど、サービスの向上に努めた。 中期計画に対して順調に成果を上げている。	

【（中項目）1－3】	3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与	【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
A	－	A	A	A	A

【（小項目）1－3－1】	調査研究成果の発信	【評定】 A

【法人の達成すべき目標】
（1）収蔵品等に関する調査研究の成果を多様な方法により積極的に公表し、広く博物館関係者の知見の向上に資すること。

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
－	－	A	A	A	A

【インプット指標】

（中期目標期間）	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額（百万円）	24	24	28	33	32	141
従事人員数（人）	99	98	99	103	105	504

※決算額は、紀要等の調査研究にかかる印刷物作成の決算額を計上している。
※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準（評価指標）	主な実績	分析・評価
○刊行物の発行、学会、インターネット、各種セミナー、シンポジウムを通じて研究成果を広く公表したか。	**出版物等を通した情報発信** 18 年度 ・正倉院展図録の英語版を刊行（奈良博） ・読売新聞、朝日新聞紙上にて奈良国立博物館の名宝、仏教美術について定期的に掲載（奈良博） ・紀要「東風西声」第 2 号、「きゅうはくの絵本」（2 巻）刊行（九博） 【シンポジウム等の開催】 18 年度 ・公開研究会「博物館情報学の構築」を開催（東博） ・国際シンポジウム「博物館における保存学の実践と展望－臨床保存学と 21 世紀の博物館－」（東博） ・国際シンポジウム「京焼へのまなざし」（京博） ・正倉院学術シンポジウム「正倉院宝物と 8 世紀東アジアの文化」（奈良博） ・国際研究集会「高麗時代の美術」（奈良博） ・国際シンポジウム「漢字文化のひろがり－日本・韓国出土の木簡を中心に－」（九博） ・国際シンポジウム「東アジア文化財保存サミット」（九博）	○中期目標期間を通じて、展覧会図録や研究誌が質的に向上するとともに、継続的に国際シンポジウムを開催することにより、海外の最新の研究成果を国民に向けて発信し、研究成果を広く公開するというナショナルセンターとしての機能を果たしたと評価できる。

	・国際シンポジウム「博物館教育の活性化へ向けて～アジアの博物館教育の現場から～」（九博） 19 年度 ・国際シンポジウム「狩野永徳研究の現状と課題」の開催（京博） ・「第2回東アジア紙文化財保存修理シンポジウム―文化をつたえる紙の路―」の開催（九博） ・日本・中国・韓国学術文化交流協定締結記念国際シンポジウム「百済と古代東アジアの国際交流」の開催　（九博） 20 年度 ・国際シンポジウム「輸出漆器が語る東西交流の400年」を開催（京博） ・正倉院学術シンポジウム「正倉院展60回　その歴史と未来」（奈良博） ・国際シンポジウム「百済、倭そして大宰府」の開催（九博） 21 年度 ・仏教美術に関するシンポジウム「予言と調伏のかたち」（京博） ・「鑑真和上・唐招提寺フォーラム2009」、正倉院学術シンポジウム「皇室と正倉院宝物」（奈良博） ・「中国考古学会」（九博） 22 年度 ・正倉院学術シンポジウム2010「正倉院宝物はどこで作られたか」（奈良博） ・博物館教育国際シンポジウム「伝統文化を伝えるために博物館ができること」を開催（東博） ・「アジア博物館フォーラム」を開催（東博） ・国際シンポジウム「染織品にみる東アジア交流　―宋・元・明時代の中国とその周辺―」（11/13)を開催した。（京博） ・国際学術シンポジウム「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」を開催した。（奈良博） ・国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」を開催した。（九博） **（参考）法人の自己評価** 　各種出版物の多言語化や研究紀要等の発行、ウェブサイトを活用した公開などを通して、博物館における研究成果の発信を積極的に行っている。また各種シンポジウムの開催や学会、研究会などで広く研究成果の公表に努めるなど、収蔵品等に関する調査研究の成果を多様な方法により積極的に公表し、広く博物館関係者の知見の向上に資するよう努めた。 　中期計画に対して順調に成果を上げている。	

【（小項目）1－3－2】 海外研究者の招聘

【法人の達成すべき目標】
（2）国内外の博物館関係者との研究会の開催や研究者の交流等を行い、国際的な博物館の拠点となることを目指すこと。

【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
―	―	A	A	A	A

【インプット指標】

（中期目標期間）	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額（百万円）	11	9	5	3	4	32
従事人員数（人）	53	56	58	56	56	279

※決算額は、国際シンポジウム開催に要するディスプレイ・旅費・滞在費等の決算額を計上している。
※従事人員数は、東京国立博物館の学芸企画部企画課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課の常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準（評価指標）	主な実績	分析・評価
○海外の優れた研究者を招聘し博物館活動に対する示唆を得たか。	18 年度 ・アジア国立博物館協会（ANMA）設立準備に参加（東博） ・「京焼」展関連で 5 人の研究者を招聘、研究者の海外派遣も行い、国際交流を推進（京博） ・上海博物館、慶州博物館（韓国）、韓国国立中央博物館との研究交流を実施（奈良博） ・南京博物院長を招聘し、学術交流協定締結に向けて意見交換を実施（九博） ・韓国国立扶餘博物館、韓国国立公州博物館と学術文化交流協定を締結（九博） 19 年度 ・ヨーロッパ・アジアを初めてとして世界各国から64人の研究者を招聘し学術交流を図る ・国際交流協定を結んでいる中国の3国立博物館及び韓国・慶州博物館より研究者を招聘（奈良博） ・JICA草の根技術協力事業によりタイから3人の研究者を招聘（九博） 20 年度 ・ヨーロッパ・アジアを初めてとして世界各国から51人の研究者を招聘し学術交流を図る ・ロシア科学アカデミー東洋写本研究所　イリナ・ポポヴァ所長を招聘（京博） ・中国・隋唐時代の主要文物を多数所蔵する西安碑林博物館から館長を、また陝西歴史博物館から仏教造像を専門とする研究員を招聘（奈良博） 21 年度 ・ヨーロッパ・アジアを初めてとして世界各国から121人の研究者を招聘し学術交流を図る ・「アジア博物館研究集会」を文化庁と共催で開催。海外参加者17ヶ国40名（国立文化財機構） ・「日中韓国立博物館長会議」、「アジア国立博物館協会（ANMA）理事会・定期大会」及び「アジア博物館研究集会」の主催館として、日中韓3館の協力体制を確認するとともに、アジアの国立博物館間における連携を深めた（東博）	○中期目標期間において、欧州とアジアの研究者をバランスよく招聘しており評価できる。 　特に海外における最先端の研究者を招聘し、最新の学術情報の取得とその紹介に努め、学術交流の推進を果たしている。また、交流成果を特別展のテーマ等にも反映させていると認められる。 　さらに、アジア国立博物館協会の設立準備への参加や、海外の博物館との協定締結等、ナショナルセンターにふさわしい海外との交流が進んでいると認められる。

	22 年度 ・ヨーロッパ・アジアを始めとして世界各国から40人の研究者を招聘し学術交流を図った。 ・中国、韓国、トルコより15名の研究者を招へいし、最新の学術情報を取得した。(東博) 【海外研究者の招へい者数】(人) 18 年度 / 19 年度 / 20 年度 / 21 年度 / 22 年度 / 合計 東京国立博物館 9 / 10 / 15 / 26 / 15 / 75 京都国立博物館 9 / 7 / 9 / 29 / 7 / 61 奈良国立博物館 10 / 9 / 9 / 29 / 9 / 66 九州国立博物館 17 / 38 / 18 / 37 / 9 / 119 合計 45 / 64 / 51 / 121 / 40 / 321 **(参考)法人の自己評価** 海外からの研究者招へいは今期合計321人と積極的に招へいし、国際交流を進めている。特に、中国、韓国の博物館等と各博物館が学術交流協定を締結するなど活発な活動を行い、博物館にとって新たな知見を広めることができている。また多くの国際シンポジウムを各博物館で実施しており、他国研究者との研究交流が推進できていると考える。 中期計画に対して順調に成果を上げている。	

【(小項目)1－3－3】 博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムの検討、実施

【法人の達成すべき目標】
(3)国内外の文化財の修理・保存処理の充実に寄与すること。

【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
―	―	A	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H21	H21	H22	計
決算額(百万円)	―	―	―	―	―	―
従事人員数(人)	49	50	51	50	50	250

※決算額は、研修テキストなどのコピー機を利用しての作成により外注額が少額のため、個別に計上できない。
※従事人員数は4国立博物館の常勤保存修復担当職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施したか。	18 年度 ・文化財保存修理所と連携した研修会の実施(奈良博) ・「有形文化財の修理について」(福岡県博物館協議会主催)へ会場提供、講師派遣等の協力(九博) ・シンポジウム「東アジア文化財保存サミット」の開催(九博) 19 年度 ・インターンとして保存科学を専攻する大学院生の保存修復課への受入れ(東博) ・国宝修理装潢師連盟等との協定によるインターンシップの受入れ(京博) ・文化財保存修理所の修理技術者による一般向け講演会の実施(奈良博) ・東アジア紙文化財保存修理シンポジウム・ワークショップの開催(九博) ・文化財保存に関わる技術者等を対象とした研修会「ミュージアムIPM研究会」の開催(九博) ・文化財保存修復研修、古文書保存基礎講座等による博物館の文化財担当者への研修の実施(九博) 20 年度 ・特定非営利活動法人文化財保存支援機構と共催で「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」を開催 (東博) ・修理技術者に対する研修会の実施(京博・奈良博) ・九州国立博物館文化財保存国際交流セミナーの開催(九博) ・市民協同型IPM活動に関する研究会の開催(九博) ・文化財保存修復研修、漆工品の取り扱い講座等による博物館の文化財担当者への研修の実施(九博) 21 年度 ・文化財保存修復家養成実践セミナーの開催(東博) ・ワークショップ「古代染織品の保管と公開」、国際シンポジウム「上代裂をまもる」、公開シンポジウム「文化財をまもる－文化財のまもり手を育てる－」を開催(東博)	○全国の博物館施設の展示・保存関係者を対象とする多彩な研修会の開催は、ナショナルセンターの重要な役割であり、中期目標期間を通じて、国内外の文化財の修理・保存処理の充実に寄与するための、研修やシンポジウム等を多く開催しており評価できる。 次期中期目標期間においては、技術交流等も配慮しつつ、機構内で横断的な研修の開催を検討して欲しい。

	・修理技術者に対する研修会を実施（京博・奈良博） ・公開シンポジウム「市民と共に ミュージアムIPM」を開催（九博） 22 年度 ・「文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅠ」を開催した。また海外（エジプト・フランス）において科学研究費補助金による「東京国立博物館の臨床保存の実践についてのセミナー」を開催した。（東博） ・特別展覧会において修理技術者に対する定例の研修会を実施した。（京博） ・修理技術者に対する研修会を実施した。（奈良博） ・「紙文化財保存基礎講座」、「文化財保存交流セミナー」、ミュージアム IPM 支援者育成事業（文化庁受託事業）「市民と共にミュージアム IPM」を開催した。（九博） **（参考）法人の自己評価** 文化財保存を担う専門家の育成や基礎能力の向上のために各博物館がその組織の特色を生かして各種研修会を開催した。東京国立博物館では保存修復家養成セミナーを、京都国立博物館では特別展開催ごとに修理技術者に対する定例研修会を、奈良国立博物館では修理技術者に対する研修会を、九州国立博物館では紙文化財保存講座やセミナーを開催するなど、各博物館において博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした指導や研修を実施し、我が国における文化財技術・保存のレベルアップを図ることができていると考える。 中期計画に対して順調に成果を上げている。	

【（小項目）1－3－4】 収蔵品貸与の推進

【法人の達成すべき目標】
（4）収蔵品の地方における観覧の機会を確保するため、貸与に関する情報を公開するなど、収蔵品の貸与を推進すること。

【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
―	―	A	A	A	A

【インプット指標】

（中期目標期間）	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額（百万円）	9	13	11	14	14	61
従事人員数（人）	99	98	99	103	105	504

※決算額は、考古相互貸借事業にかかる輸送費・資料保存箱作成費等の決算額を計上している。
※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準（評価指標）	主な実績	分析・評価
○公私立博物館等に対する支援のため、収蔵品の貸与に関する情報を公開したか。	【主な貸与実績】 18 年度 ・富山市佐藤記念美術館「広田不孤斎コレクション」展へ 137 点貸与（東博） ・考古資料の相互貸借 70 件（四国地区埋蔵文化財センター）（東博） ・韓国国立中央博物館の平常展示のため 103 件を長期貸与（継続）（東博） 19 年度 ・富山市佐藤記念美術館「広田不孤斎コレクション」展へ文化財を貸与（東博） ・フリーア美術館における西暦1600年を巡る特別展に「唐船南蛮船図屏風」を貸与（九博） 20 年度 ・考古相互貸借事業で長野県立歴史館、福島県埋蔵文化財センター白河館と文化財を貸借（東博） ・韓国釜山市博物館特別展「韓国と日本」展に文化財を貸与（九博） 21 年度 ・考古資料相互貸借事業として、茨城県立歴史館、埼玉県立さきたま史跡の博物館に対し、貸与・借用を実施（東博） ・ウェブページにて「貸出先作品リスト」を公開し、京博の収蔵品がどこへ行けば鑑賞できるかをリアルタイムで情報提供（京博） 22 年度 ・考古資料相互貸借事業として、東博では福岡市博物館、鹿児島県歴史資料センター黎明館と、奈良博では山形県立博物館・山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館、南相馬市博物館との貸与・借用を実施した。 **【文化財の貸与件数**（国内）**】**（件）	○各博物館の収蔵品は、公私立博物館等の展示開催に重要な役割を果たしていると認められる。 また、中期目標期間を通じ、貸与件数が一定水準に保たれ、その機能が着実に果たされていると評価できる。

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
東京国立博物館	1,329	1,118	1,012	913	1,155
京都国立博物館	224	168	245	400	281
奈良国立博物館	125	134	161	107	145
九州国立博物館	172	73	76	88	131
合計	1,850	1,493	1,494	1,508	1,712

【文化財の貸与先施設数（国内）**】**（件）

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
東京国立博物館	146	137	131	119	138
京都国立博物館	70	59	44	66	70
奈良国立博物館	37	35	46	33	39
九州国立博物館	11	28	28	21	31
合計	264	259	249	239	278

（参考）法人の自己評価

国内外の博物館等からの要請に積極的に対応し、文化財を貸与した。減少傾向だった貸与先施設数については、回復の兆しが見られた。

なお、京都国立博物館において21年度からウェブページでの京都国立博物館収蔵品の「貸出作品リスト」を公開しているが、他の各博物館では収蔵品の貸与に関する情報について公開する体制はまだ整っていない。収蔵品の管理・展示とも大きく関係するので全体として引き続き取り組んでいきたい。

中期計画に対して順調に成果を上げている。

【（小項目）1－3－5】 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言

【法人の達成すべき目標】

（5）全国の博物館等の運営に対する援助、助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努めること。

【評定】

A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
ー	ー	A	A	A	A

【インプット指標】

（中期目標期間）	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額（百万円）	―	―	―	―	―	―
従事人員数（人）	99	98	99	103	105	504

※決算額は、公私立博物館・美術館等に対する援助・助言に係る外注額が少額なため、個別に計上できない。

※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準（評価指標）	主な実績	分析・評価
○公私立博物館等に対する援助・助言の実績が前中期目標期間の実績を上回ったか。	18 年度 ・神奈川県文化財保護審議会にて文化財関係事業に関する助言の実施（東博） ・元離宮二条城事務所にて「二条城二の丸障壁画修理ワーキング」出席し助言の実施（京博） ・北海道立近代美術館にて「鑑真和上展」展示指導・助言の実施（奈良博） ・香春町教育委員会にて宮原遺跡出土箱式石棺の調査における指導を実施（九博） 19 年度 ・宮内庁所蔵の「春日権現験記絵」の修理に関する援助・助言の実施（京博） ・「国宝　鑑真和上展」（福岡市博物館）への学術協力、出品作品選定等の援助・助言の実施（奈良博） ・松浦市海底遺跡調査（長崎県松浦市教育委員会）に関する指導（九博） 20 年度 ・「国宝　鑑真和上展」（静岡県立美術館）への学術協力、出品作品選定等の援助・助言の実施（奈良博） ・釜山博物館開館30周年記念国際交流展に伴う出品資料の輸送・開梱・展示に関する指導（九博） 21 年度 ・「石山寺の美　観音・紫式部・源氏物語」（富山県水墨美術館ほか）への学術協力、出陳作品の選定・集荷等の助言・補助、目録の編集協力等を実施（奈良博） ・新九州歴史資料館に対し、館内施設の保存環境整備及び環境調査についての助言・指導（九博） 22 年度 ・新規貸与館に対する環境調査は、東京文化財研究所と協力して指導助言を行った。（東博） ・「奈良の古寺と仏像－會津八一のうたにのせて」展（新潟市會津八一記念館・新潟県立近代美術館：22年4月24日～6月6日、三井記念美術館：同7月7日～9月20日、奈良県立美術館：同11月20日～12月19日）に協力し、学術面での援助・助言を行った。（奈良博）	○中期目標期間において、公私立博物館・美術館等に対し、きわめて有意義な援助・助言を数多く実施しており、かつその件数も着実に増加しており、その実績は評価できる。 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言は数値目標化しにくいテーマではあるが、信頼の醸成とともに、順調に行なわれていると認められ、ナショナルセンターとしての機能が大いに発揮されているものといえる。

・淡路市埋蔵文化財事務所に「五斗長垣内遺跡出土土器付着遺物」の分析指導を行った。（九博）

【公私立博物館・美術館等に対する援助・助言件数】（件）
指標：前中期目標期間の年間平均実績（中期計画）

項目名			第2期中期目標期間中の評価の経年変化					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
公私立博物館に対する援助助言実績	東博	目標値	*40*	－	*40*			
		実績	56	－	124	134	139	84
		定量的評価	A	－	A	A	S	S
	京博	目標値	*12*	－	*12*			
		実績	28	－	81	114	114	123
		定量的評価	A	－	A	A	S	S
	奈良博	目標値	*5*	－	*5*			
		実績	7	－	5	5	25	35
		定量的評価	A	－	A	A	S	S
	九博	目標値	*12*	－	*12*			
		実績	57	－	38	47	39	77
		定量的評価	A	－	A	A	S	S

（参考）法人の自己評価
　各博物館とも毎年目標を上まわる実績をあげている。相手のニーズによって指導・助言件数の増減が起こる実態ではあるが、文化財の保存、展示などの分野での地方の博物館等から国立博物館の援助・助言に期待される役割に今後も積極的に取り組んでいく。
　中期計画に対して順調に成果を上げている。

【（中項目）1－4】	4　文化財に関する調査及び研究の推進 調査研究の目的、内容の適切性／調査研究の実施状況／調査研究の成果の状況	【評定】

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
―	A	A	A	A	A

【法人の達成すべき目標の概要】
文化財に関する以下の調査及び研究を行い、貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与すること。
（1）文化財の各分野に関する基礎的・体系的な調査及び研究や、総合的な視点に基づく文化財の調査研究手法の開発等を推進することにより、国及び地方公共団体における文化財保護施策の企画立案及び文化財の評価等に係る業務の基盤形成に寄与すること。
特に、文化財保護法の改正によって新たに保護の対象となった文化的景観、民俗技術などに関する調査及び研究を推進し、今後の指定等の業務に係る基礎的な知見を形成すること。
（2）最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査及び研究を通じて、文化財の保存・修復に係る技術・技法や材料の開発・評価等を推進し、文化財の保存や修復の質的向上に寄与すること。
（3）国や地方公共団体の要請に応じて、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急性の高い文化財の保存・修復に係る実践的な調査及び研究を実施すること。
（4）有形文化財の収集・保管・公衆の観覧等に必要な調査研究を計画的に実施すること。

【インプット指標】

（中期目標期間）	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額（百万円）	1,491	1,261	1,448	1,473	1,633	7,306
従事人員数（人）	194	187	189	191	197	958

※決算額は、決算報告書・調査研究事業に要した決算額を計上している。
※従事人員数は4国立博物館及び2文化財研究所の全常勤学芸職員の人数を計上している。
　その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準（評価指標）	主な実績	分析・評価
○中期計画に示された課題や文化財保護政策のニーズに沿って、研究の目的、テーマを適切に設定したか。	**1．調査研究の目的、内容の適切性** ・中期計画に示した課題を達成するために、毎年度ごとに研究目的・テーマを設定 **18年度（法人統合前）** 研究所 **（1）文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進** **・目　的** 　文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究として、国内外の機関との共同研究や研究交流も含めて以下の課題に取り組むことにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与することを目的とする。 **・テーマ** 　①文化的景観に関する調査研究	**（調査研究の目的、内容の適切性）** **【評定：　A　】** ○中期目標期間を通じて、調査研究の目的や内容は適切に設定されたと評価できる。 　例えば、法人統合前に設定された文化的景観の調査研究は、新たに文化財の類型となった概念であり、各地で選定に向けた検討を進める際の先駆的かつ指針となる研究分野である。 　また、高松塚古墳やキトラ古墳の保

	①④民俗技術に関する調査・資料収集　無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究 ②東アジアの美術に関する資料学的研究 ②近現代美術に関する総合的研究 ②美術の技法・材料に関する広領域的研究 ②古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究 ②歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究 ③無形文化財の保存・活用に関する調査研究 ⑤平城宮跡東院地区（第401次）の発掘調査 ⑤平城宮跡東方官衙地区の調査 ⑤西大寺旧境内(第404，410，415次)の発掘調査 ⑤興福寺大乗院(第407次)の発掘調査 ⑤興福寺旧境内果園推定地の発掘調査 ⑤藤原宮跡朝堂院東第四堂発掘調査 ⑤本薬師寺跡住宅建設に伴う発掘調査 ⑤来迎寺塀新設に伴う確認調査 ⑤石神遺跡（第19次）発掘調査 ⑤甘樫丘東麓遺跡発掘調査 ⑤平城京跡出土遺物の調査研究 ⑤飛鳥・藤原京跡出土遺物の調査研究 ⑤古代瓦に関する研究集会の開催 ⑤アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究 ⑤庭園に関する調査研究 ⑤飛鳥時代の歴史に関する調査研究 ⑥遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究 ⑥遺跡の保存・整備・活用に関する技術開発研究 ⑥第一次大極殿復原整備研究 **(参考)法人の自己評価** 平成16年の文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった「文化的景観」「民俗技術」に関する調査研究を研究テーマとして設定したことは、今後の指定をはじめとする国の文化財政策に資するものと判断する。 また、多岐にわたる文化財の各分野について、継続的な調査研究を要するテーマも含め文化財保護政策上のニーズに沿った研究目的・テーマを設定したと判断する。 **(2)文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進** **・目　的** 文化財の調査手法に関する以下の研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与することを目的とする。	存・修復事業に対応する研究テーマの設定等も、最新のニーズに応える対応措置として評価でき、詳細かつ多岐にわたる項目で示された調査研究内容が、相互に有機的な関連をもって設定されている点も、適切であると評価できる。 さらに、法人統合により全般的に業務の効率化が促進され、効率的に調査研究の目的やテーマが設定されたと認められる。

	・テーマ ①高精細デジタル画像の応用に関する調査研究 ②文化財の非破壊調査法の研究 ③遺跡データベースの作成と公開 ③古代官衙・集落に関する研究集会の開催 ③遺跡の測量・探査技術の有効利用法の研究 ④年輪年代学研究 ⑤動物遺存体による環境考古学研究 **(参考)法人の自己評価** 広範な文化財研究を支援するための手法の開発、文化財非破壊調査法としての材質調査のための新規手法、遺跡調査・研究の質的向上や発掘調査の効率化に資するための調査手法、年輪年代学研究の効率的・効果的な応用手法による考古学、建築史学、美術史、歴史学研究への寄与など、現在求められている文化財研究に係る新たな調査手法の研究開発として適切な研究目的・テーマを設定したと判断する。 **(3)科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進** **・目　的** 最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査及び研究として以下の課題に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与することを目的とする。 **・テーマ** ①文化財の生物劣化対策の研究 ②文化財の保存環境の研究 ③周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究 ③文化財の防災計画に関する調査研究 ④考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究 ⑤伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究 ⑤国際研修「紙の保存と修復」 ⑤在外日本古美術品保存修復協力事業 ⑥近代の文化遺産の保存修復に関する研究 **(参考)法人の自己評価** 文化財の生物劣化や文化財を取りまく保存環境、屋外文化財や近代文化遺産の保存修復手法、考古資料の材質・構造の調査法など、文化財を適切に保存していくための課題に対して、保存科学に関する先端的な調査・研究テーマを設定した。 また、伝統的な修復材料・技法についての調査研究や文化財の保存修復に関する国際的な支援や人材育成など、ニーズに沿った研究目的・テーマを設定したと判断する。 **(4)我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施することを目的とする。**	

・テーマ

文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力
外部機関の要請に基づく文化財の保存修復に関する実践的研究

・自己点検評価

我が国の文化財保護政策上、重要かつ緊急な措置として文化庁より、「キトラ古墳の遺物調査・保存処置、環境調査と壁画の取り外し」及び「高松塚古墳の壁画の環境や修復に関する調査研究、墳丘の発掘調査、ならびに石室解体方法検討のための調査・研究」を受託したことは、ニーズに沿った研究目的・テーマであると判断する。

また、地方公共団体からの要請に応じて受託した文化財の保存修復に関する実践的研究についても文化財保護政策のニーズに沿った研究目的・テーマと判断する。

博物館

「収集、保管のための調査研究」

収蔵品に関する調査研究

・特別調査「法隆寺献納宝物」(第 28 回、聖徳太子絵伝)(東博)
・特別調査「古写経」(第 2 回)(東博)
・和書・歴史資料の調査研究(東博)
・五條市猫塚古墳出土品に関する調査研究(奈良博)
・X線CTスキャンを利用した文化財調査(九博)

展示のための調査研究

・特別展、共催展等の事前調査(4 博物館)
・情報、教育、広報、デザイン等、博物館ならではの分野における調査研究を推進(東博)
・妙心寺及びその塔頭、日蓮宗諸寺の調査(平成 21 年度に開催予定の「妙心寺展」「日蓮展」のための事前調査)(京博)

継続的な調査研究

・近畿地区社寺調査(京博)
・平安仏教とその造形に関する調査研究(京博)
・東大寺の総合的調査(奈良博)
・春日若宮おん祭りの文化財調査(奈良博)

学術協定

・海外 4 機関(中国及び韓国)との学術協定による調査研究(奈良博)
・韓国国立扶餘博物館、韓国国立公州博物館、南京博物院等との学術交流協定締結(九博)

その他調査研究

・教育委員会から出土赤色顔料についての調査を受託(2 件)(福岡市、大分市)(九博)

(参考)法人の自己評価

調査研究には継続性が欠かせないが、事業費の削減により大変厳しい状況になってきている。科学研究費補助金を中心とした外部資金の獲得についての一層の努力が必要である。

19－22 年度(法人統合後)

19年度

(1)文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

目的	文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究として、国内外の機関との共同研究や研究交流も含めて以下の課題に取り組むことにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。
主なテーマ	・新たな保護対象の調査研究（文化的景観・民俗技術） ・新しい美術資料学の確立、近現代美術研究、技法材料の広領域研究 ・無形文化遺産研究 ・歴史資料・書跡資料等の調査 ・文化財建造物の保存・修復・活用の研究 ・平城京跡・飛鳥藤原京跡の発掘調査 ・出土遺物の分析とアジアの古代都城遺跡の調査研究 ・遺跡の保存、整備、活用の技術開発（平城宮跡、藤原宮跡の整備復原）

(2) 文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進

目的	文化財の調査手法に関する以下の研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与する。

主なテーマ	・高精細デジタル画像の応用 ・文化財の非破壊調査法 ・遺跡調査の新たな指標・属性分析法の研究 ・遺跡の測量・探査技術の有効利用法の確立 ・年輪年代測定法による研究 ・動植物遺存体による環境考古学研究

(3) 科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進

目的	最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査及び研究として以下の課題に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。
主なテーマ	・文化財の生物劣化対策 ・文化財の保存環境研究 ・周辺環境が文化財に及ぼす影響 ・考古資料の材質、構造の調査と保存、修復の研究 ・伝統的修復材料と合成樹脂の研究 ・在外古美術品保存修復協力事業 ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究

(4) 国・地方公共団体の要請に応じた文化財の保存措置等のための調査・研究の実施

目的	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。
主なテーマ	●高松塚古墳壁画 ・生物対策と保存修理 ・石室解体 ・壁画の保存修復および石材の保存修理

	●キトラ古墳壁画 ・生物対策と保存修理 ・壁画の取り外し ・手法の開発（ﾀﾞｲﾔﾓﾝﾄﾞﾜｲﾔｰｿｰ）

(5) 有形文化財に係る調査研究

目的	①収集・保管のための調査研究 収集・保管に関わる研究を実施し、有形文化財にかかる保存に寄与する。 ②公衆への観覧を図るための研究 公衆への観覧を図るための調査研究を実施し、有形文化財の活用を図る。
主なテーマ	①収集・保管のための調査研究 ・特別調査「古写経」（東博） ・近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究（京博） ・仏教美術の光学的調査研究（奈良博） ・博物館における文化財保存修復に関する研究（九博） ②公衆への観覧を図るための研究 ・特別展、共催展等の事前調査（4館） ・研究の成果をもとに凸版印刷と協同でミュージアムシアターを設置（東博） ・博物館美術教育に関する調査研究（東博） ・高齢者・障がい者・外国人の利用者等に対しての、展示の内容・方法、施設整備、管理運営面からの改善、改修方策についての調査研究（九博）

20年度

(1)文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

目的	文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究として、国内外の機関との共同研究や研究交流も含めて以下の課題に取り組むことにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。
主なテーマ	・新たな保護対象の調査研究（文化的景観・民俗技術） ・新しい美術資料学の確立、近現代美術研究、技法材料の広領域研究 ・無形文化遺産研究 ・歴史資料・書跡資料等の調査 ・文化財建造物の保存・修復・活用の研究 ・平城京跡・飛鳥藤原京跡の発掘調査 ・出土遺物の分析とアジアの古代都城遺跡の調査研究 ・遺跡の保存、整備、活用の技術開発（平城宮跡、藤原宮跡の整備復原）

(2)文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進

目的	文化財の調査手法に関する以下の研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与する。
主なテーマ	・高精細デジタル画像の応用 ・文化財の非破壊調査法 ・遺跡調査の新たな指標・属性分析法の研究 ・遺跡の測量・探査技術の有効利用法の確立 ・年輪年代測定法による研究 ・動植物遺存体による環境考古学研究

(3)科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進

目的	最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査及び研究として以下の課題に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。
主なテーマ	・文化財の生物劣化対策 ・文化財の保存環境研究 ・周辺環境が文化財に及ぼす影響 ・考古資料の材質、構造の調査と保存、修復の研究 ・伝統的修復材料と合成樹脂の研究 ・在外古美術品保存修復協力事業 ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究

(4)国・地方公共団体の要請に応じた文化財の保存措置等のための調査・研究の実施

目的	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。
主なテーマ	●高松塚古墳壁画 ・生物対策と保存修理 ・壁画の保存修復および石材の保存修理 ●キトラ古墳壁画 ・生物対策と保存修理 ・壁画の取り外し ・手法の開発（ﾀﾞｲﾔﾓﾝﾄﾞﾜｲﾔｰｿｰ）

(5)有形文化財に係る調査研究

目的	①収集・保管のための調査研究 収集・保管に関わる研究を実施し、有形文化財にかかる保存に寄与する。 ②公衆への観覧を図るための研究 公衆への観覧を図るための調査研究を実施し、有形文化財の活用を図る。
主なテーマ	①収集・保管のための調査研究 ・特別調査「書跡」（東博） ・近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究（京博） ・仏教美術の光学的調査研究（奈良博） ・博物館における文化財保存修復に関する研究（九博） ②公衆への観覧を図るための研究 ・特別展、共催展等の事前調査（4館） ・研究の成果をもとに凸版印刷と協同でミュージアムシアターを設置（東博） ・博物館美術教育に関する調査研究（東博） ・高齢者・障がい者・外国人等の利用者に対しての、展示の内容・方法、施設整備、管理運営面からの改善、改修方策についての調査研究（九博）

21年度

(1)文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

目的	文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究として、国内外の機関との共同研究や研究交流も含めて以下の課題に取り組むことにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。
主なテーマ	・新たな保護対象の調査研究（文化的景観・民俗技術） ・新しい美術資料学の確立、近現代美術研究、技法材料の広領域研究

	・無形文化遺産研究 ・歴史資料・書跡資料等の調査 ・文化財建造物の保存・修復・活用の研究 ・平城京跡・飛鳥藤原京跡の発掘調査 ・出土遺物の分析とアジアの古代都城遺跡の調査研究 ・遺跡の保存、整備、活用の技術開発（平城宮跡、藤原宮跡の整備復原）

(2)文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進

目的	文化財の調査手法に関する以下の研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与する。
主なテーマ	・高精細デジタル画像の応用 ・文化財の非破壊調査法 ・遺跡調査の新たな指標・属性分析法の研究 ・遺跡の測量・探査技術の有効利用法の確立 ・年輪年代測定法による研究 ・動植物遺存体による環境考古学研究

(3)科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進

目的	最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査及び研究として以下の課題に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。
主なテーマ	・文化財の生物劣化対策 ・文化財の保存環境研究 ・周辺環境が文化財に及ぼす影響 ・考古資料の材質、構造の調査と保存、修復の研究 ・伝統的修復材料と合成樹脂の研究 ・在外古美術品保存修復協力事業 ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究

(4)国・地方公共団体の要請に応じた文化財の保存措置等のための調査・研究の実施

目的	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。
主なテーマ	●高松塚古墳壁画 ・生物対策と保存修理 ・壁画の保存修復及び石材の保存修理 ●キトラ古墳壁画 ・生物対策と保存修理 ・壁画の取り外し ・手法の開発

(5)有形文化財に係る調査研究

目的	①収集・保管のための調査研究 収集・保管に関わる研究を実施し、有形文化財にかかる保存に寄与する。 ②公衆への観覧を図るための研究 公衆への観覧を図るための調査研究を実施し、有形文化財の活用を図る。
主なテーマ	①収集・保管のための調査研究 ・特別調査「書跡」（東博） ・近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究（京博） ・仏教美術の光学的調査研究（奈良博）

	・博物館における文化財保存修復に関する研究（九博） ②公衆への観覧を図るための研究 ・特別展、共催展等の事前調査（4館） ・博物館環境デザインに関する調査研究（東博） ・博物館美術教育に関する調査研究（東博） ・高齢者・障がい者・外国人等の利用者に対しての、展示の内容・方法、施設整備、管理運営面からの改善、改修方策についての調査研究（九博）

22年度

(1)文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

目的	文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究として、国内外の機関との共同研究や研究交流も含めて以下の課題に取り組むことにより、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関する基盤の形成に寄与する。
主なテーマ	・文化的景観に関する調査研究 ・新しい美術資料学の確立、近現代美術研究、技法材料の広領域研究 ・無形文化遺産研究 ・歴史資料・書跡資料等の調査 ・文化財建造物の保存・修復・活用の研究 ・平城京跡・飛鳥藤原京跡の発掘調査 ・出土遺物の分析とアジアの古代都城遺跡の調査研究 ・遺跡の保存、整備、活用の技術開発（平城宮跡、藤原宮跡の整備復原）

(2)文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進

目的	文化財の調査手法に関する以下の研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与する。
主なテーマ	・高精細デジタル画像の応用 ・文化財の非破壊調査法 ・遺跡データベースの作成と公開 ・遺跡の測量・探査技術の有効利用法の確立 ・年輪年代学研究 ・動植物遺存体や古土壌の考古科学的分析による環境考古学研究

(3)科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進

目的	最新の科学技術の活用による保存科学に関する先端的な調査及び研究や、伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査及び研究として以下の課題に取り組むことにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。
主なテーマ	・文化財の生物劣化対策 ・文化財の保存環境研究 ・周辺環境が文化財に及ぼす影響 ・考古資料の材質、構造の調査と保存、修復の研究 ・伝統的修復材料と合成樹脂の研究 ・在外古美術品保存修復協力事業 ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究

(4)国・地方公共団体の要請に応じた文化財の保存措置等のための調査・研究の実施

目的	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。
主な	●高松塚古墳壁画

	テーマ ・生物対策と保存修理 ・壁画の保存修復及び石材の保存修理 ●キトラ古墳壁画 ・生物対策と保存修理 ・壁画の取り外し ・手法の開発	

(5)有形文化財に係る調査研究

目的	①収集・保管のための調査研究 収集・保管に関わる研究を実施し、有形文化財にかかる保存に寄与する。 ②公衆への観覧を図るための研究 公衆への観覧を図るための調査研究を実施し、有形文化財の活用を図る。
主なテーマ	①収集・保管のための調査研究 ・特別調査「書跡」(東博) ・近畿地区(特に京都)社寺文化財の調査研究(京博) ・南部諸諸社寺等に関する計画的な調査研究(奈良博) ・日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究(九博) ②公衆への観覧を図るための研究 ・特別展、共催展等の事前調査(4館) ・博物館環境デザインに関する調査研究(東博) ・博物館美術教育に関する調査研究(東博)

(参考)法人の自己評価

中期目標・中期計画を達成するための適切な計画を立てることができたと考える。

【調査・研究テーマ数】(延件数)

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	合計
東京国立博物館	18	22	33	41	39	153
京都国立博物館	7	25	17	18	19	86
奈良国立博物館	11	13	9	10	9	52
九州国立博物館	9	16	18	17	19	79
博物館計	45	76	77	86	86	370
東京文化財研究所	21	20	20	20	21	102
奈良文化財研究所	31	28	28	26	29	142
共同研究(東京・奈良文化財研究所)	1	2	3	2	1	9
文化財研究所計	53	50	51	48	51	253
機構計	98	126	128	134	137	623

※年度ごとの調査研究テーマは別添参照

○それぞれの調査研究を計画に沿って適切に実施したか。また、我が国の文化財保護政策上、緊急に保存修復の措置等が必要となった場合において、必要な実践的調査研究を迅速かつ適切に実施したか。

2. 調査研究の実施状況

・テーマ設定に従い調査研究を実施

(参考)法人の自己評価

18年度(法人統合前)

(1)文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

文化財に関する基礎的・体系的な調査研究について、国内外の機関との共同研究・研究交流・受託研究等を含め上記のとおり実施した。法律改正に伴い新たに文化財として保護対象となった文化的景観や民俗技術などの分野への適時的な取組みも含め各プロジェクト研究の実施状況に関する自己点検評価は「定性的評価」「定量的評価」とも中期計画どおり、または中期計画を上回って履行できた。

このことから、中期目標に向けての実施状況としては、「順調」であると判断する

(2)文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進

文化財の調査法に関する研究開発について、上記のとおり調査研究・受託事業を実施した。

文化財研究や文化財保護政策に資するための各プロジェクト研究の実施状況に関する自己点検評価は「定性的評価」「定量的評価」とも中期計画どおり、または中期計画を上回って履行できた。

このことから、中期目標に向けての実施状況としては、「順調」であると判断する。

(3)科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進

最新の科学技術の活用による保存科学に関する調査・研究、伝統的な修復技術・製作技法、利用技法に関する調査・研究を上記のとおり実施した。

保存科学や修復技術に関する先端的な各プロジェクト研究の実施状況に関する自己点検評価は「定性的評価」「定量的評価」とも中期計画どおり、または中期計画を上回って履行できた。

このことから、中期目標に向けての実施状況としては、「順調」であると判断する。

(4)我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。

我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて上記のとおり実施した。

キトラ古墳・高松塚古墳ともに今後の保存を進めていく上で、重要な資料を得るなど、高い調査研究の水準で事業を進めることができた。その他外部機関からの要請による実践的研究も含め、キトラ古墳・高松塚古墳の実施状況に関わる自己点検評価は、「定性的評価」(特に適時性、発展性、正確性の観点において評価できる。)、「定量的評価」とも中期計画を上回って履行できた。また、キトラ古墳においては、壁画の取り外し手法としてワイヤソーを開発するなどの世界で初めての取組みも評価できる。

このことから、中期目標に向けての実施状況としては、「順調」であると判断する。

19−22年度(法人統合後)

(1) 文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

今中期計画期間において無形文化遺産から遺跡の発掘まで幅広い分野についての継続的な調査・研究を通して文化財に関する基礎的な情報を蓄積することができている。基礎的・体系的な調査・研究は成果がすぐに出るものではなく、長期的な視野に立つことが欠かせないので、報告書の刊行や研究会・学会での発表を通じて、調査研究の成果を国民に還元していけるよう努力している。今後もこれらの調査・研究を通じて、我が国における文化財に関する調査・研究の底上げを図っていきたい。

中期計画に対して順調に成果を上げている。

(調査研究の実施状況)

【評定: A 】

○中期目標期間を通じて、設定された目的や内容に即して、具体的な調査研究が適切に実施されたと評価できる。

中期計画に従い、保存科学や修復技術の先端的研究、また我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急な保存修復の措置が実行されている。また文化財調査手法の開発についても年輪年代法、3次元レーザースキャナーによる調査で実績をあげる等、調査研究が適切かつ順調に実施されている。

特に、社会的な関心の高い高松塚・キトラ古墳における保存・修復事業は、生物による文化財の劣化対策等の具体的な目標を設定し、実践的、具体的なニーズに対応した調査・研究を実施していると認められる。

	（２）文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進 今中期計画期間中の主な実績としては木製品の年輪年代法で特許の取得をはじめ、動植物の遺存体の調査・研究等からは製作時期の特定や当時の生活生活様式の推定などの実績をあげ、遺跡の測量・計測分野では低価格の三次元レーザースキャナーによる三次元計測の有効性の実証、GPR 及び EM 法の走査方法改善等により多様な条件下で遺構を確認することができたなどの実績をあげている。また、その他にも高精細デジタル画像の活用研究や遺跡データベースの公開を順調に進めている。今後も調査・研究を継続的に実施し、新たな調査手法の開発を通して、調査研究に新たな知見が得られるように努めたい。 中期計画に対して順調に成果を上げている。 **（３）科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進** 我が国の有形文化財は紙や木など劣化しやすい材質で作られているものが多く、保存環境や修復に関する調査研究は重要である。今中期計画期間では国内外を問わず、文化財の保存に関する調査研究を進め、海外の日本古美術品の修復も行うことができた。海外からも期待されている分野である文化財保存・修復に関する研究は今後も継続的に実施し、我が国文化財の保存・修復のナショナルセンターとしての機能を強化していきたい。 中期計画に対して順調に成果を上げている。 **（４）国・地方公共団体の要請に応じた文化財の保存措置等のための調査・研究の実施** 文化庁の要請に応じて高松塚古墳壁画及びキトラ古墳壁画の修復事業を実施した。高松塚古墳では石室の解体の実施、バイオフィルムによる汚れのクリーニング方法を確立するなど古墳の保全、カビ等汚染の除去も着実に実施や、損傷図面を作成し『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』の執筆・編集を行い、文化庁へ提出した。キトラ古墳ではワイヤソー、バンドソーを用いた集中剥ぎ取り作業を行い、石室内の全ての漆喰の剥ぎ取りを完了した。今後も文化庁の要請に応じて、適宜協力して実施していきたい。 中期計画に対して順調に成果を上げている。 **（５）有形文化財に係る調査研究** 博物館の調査研究は、展覧会の事前調査や収蔵品の調査研究など日常業務に密着したものが多く、論文や学会発表だけでなく、展覧会等でその成果を反映させるところに大きな特徴がある。また文化財研究所との共同研究や大学などとの共同研究も実施しており、その成果も展示に積極的に活用し、広く公開した。 文化財の保存と公開という博物館の使命を持続するために保存環境やリスク回避などについての研究を行い、次世代へ継承するために不断の努力を続けている。また公衆の観覧を図るための研究としては、博物館環境デザインの研究や先駆的な教育普及理論や実践的研究など公開に力点を置いた研究を行い、文化財情報に関しては複合的データベースの連動化などの研究を進めている。 中期計画に対して順調に成果を上げている。	

○調査研究の成果により我が国の文化財保護政策に寄与するとともに、学術雑誌等への論文の掲載、学会、研究会での発表、データベースの追加等により定量的観点からも調査研究の成果を確保したか。 ○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次世代への継承及び我が国文化の向上に寄与したか。 ○研究の実施にあたっては、外部資金を活用したか。	**３．調査研究の成果の状況** **（参考）法人の自己評価** **18 年度（法人統合前）** **（1）文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進** 学術雑誌等への掲載論文数89件、学会、研究会等での発表件数59件であり、上記のとおりであった。 「定性的評価」「定量的評価」とも中期計画どおりまたは、中期計画を上回って実施されており、中期目標に向けての実施状況は「順調」であると判断する。 **（2）文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進** 学術雑誌等への掲載論文数25件、学会、研究会等での発表件数29件であり、上記のとおりであった。 「定性的評価」「定量的評価」とも中期計画どおりまたは、中期計画を上回って実施されており、中期目標に向けての実施状況は「順調」であると判断する。 **（3）科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進** 学術雑誌等への掲載論文数25件、学会、研究会等での発表件数23件であり、上記のとおりであった。 「定性的評価」「定量的評価」とも中期計画どおりまたは、中期計画を上回って実施されており、中期目標に向けての実施状況は「順調」であると判断する。 **（4）我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。** 学術雑誌等への掲載論文数10件、学会、研究会等での発表件数1件であり、上記のとおりであった。 「定性的評価」「定量的評価」とも中期計画どおりまたは、中期計画を上回って実施されており、中期目標に向けての実施状況は「順調」であると判断する。 ――――――――――――――――――――――――――――――――― **19－22 年度（法人統合後）** **（参考）法人の自己評価** 専門家や研究者への研究成果の還元については、論文や学会での発表を通して、着実に成果をあげていると考える。定量的観点からも論文の発表件数、学会等での発表件数とも順調に成果をあげている。 なお、今中期計画期間では①木材又は木造文化財の年輪幅又は密度測定装置並びに測定方法（21.5.22 登録：奈良文化財研究所）、②壁画漆喰層剥離用ワイヤソー装置及び壁画漆喰層剥離方法（22.3.5 登録：東京文化財研究所・奈文研）、③文化財用表打ち材料及びそれを用いた文化財修復方法（22.12.10 取得：東京文化財研究所）の3件の特許を取得した。 中期計画に対して順調に成果を上げている。	**（調査研究の成果の状況）** **【評定：　A　】** ○中期目標期間における学術雑誌等への掲載論文数、学会・研究会等での発表件数が、中期計画の目標を上回り、評価できる。 公開された成果のレベルは高く、ナショナルセンターとしての水準の高さをよく反映するものとなっている。 特に、年輪年代法、ダイヤモンドソー等の特許取得は、着実な研究実績の成果であり、特筆すべき成果と認められる。 5年という中期目標期間ではカバーできない地道な調査・研究を積み上げねばならない研究テーマや調査事業についても定量評価にこだわらず、ナショナルセンターとして継続的かつ着実な調査・研究とその成果の公開に努めることが望まれる。

【学術雑誌等への掲載論文数】(件)　(指標:中期計画)

項目名		第2期中期目標期間中の評価の経年変化					
		18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
		博物館	研究所				
学術雑誌等への掲載論文数	目標値	－	*100*				
	実績	－	149	207	246	294	345
	定量的評価	－	A	A	A	S	S

【テーマ別内訳】

テーマ		学術雑誌等への論文掲載数				
		18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
1	文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進	89 件	70 件	63 件	77 件	96 件
2	文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進主な実績	25 件	17 件	40 件	40 件	47 件
3	科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進	25 件	37 件	27 件	25 件	35 件
4	国・地方公共団体の要請に応じた文化財の保存措置等のための調査・研究の実施	10 件	3 件	4 件	17 件	4 件
5	有形文化財に係る調査研究	―	78 件	110 件	124 件	156 件
	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究	―	2 件	2 件	4 件	2 件
7	情報発信機能の強化	―	―	―	1 件	2 件
8	地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上	―	―	―	6 件	3 件
	計	149 件	207 件	246 件	294 件	345 件

【学会、研究会等での発表件数】(件)　(指標:中期計画)

項目名		第2期中期目標期間中の評価の経年変化					
		18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
		博物館	研究所				
学会、研究会等での発表件数	目標値	－	*80*				
	実績	－	112	144	190	234	206
	定量的評価	－	A	A	A	S	S

【テーマ別内訳】

テーマ		学会、研究会等での発表件数				
		18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
	文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進	59 件	34 件	43 件	37 件	29 件
2	文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進主な実績	29 件	15 件	35 件	20 件	26 件
3	科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進	23 件	27 件	25 件	38 件	29 件
4	国・地方公共団体の要請に応じた文化財の保存措置等のための調査・研究の実施	1 件	―	―	―	―
5	有形文化財に係る調査研究	―	62 件	82 件	129 件	111 件
6	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力	―	6 件	5 件	9 件	9 件

	及び国際共同研究					
7	情報発信機能の強化	―	―	―	1 件	2 件
8	地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上	―	―	―	―	―
	計	112 件	144 件	190 件	234 件	206 件

外部資金の獲得

■科学研究費補助金獲得件数

	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
新規応募件数(件)	87	84	83	86
新規採択件数(件)	34	32	35	25
新規採択率	39%	38%	42%	29%
件数(新規＋継続)計	78	83	86	81
直接経費(千円)	234,390	252,860	231,330	206,881
間接経費(千円)	55,380	74,379	67,629	60,265
交付額計(千円)	289,770	327,239	298,959	267,146

【(中項目)1−5】	5　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進	【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
―	A	S	A	A	A

【(小項目)1−5−1】	国際協力に関する研究基盤の整備	【評定】 A

【法人の達成すべき目標】
文化財の保存・修復に関する国際協力の拠点としての位置づけを明確化するとともに、その機能の充実を図ること。また、研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークの構築、アジア諸国等における文化財の保存・修復協力、技術移転・専門家養成等の支援等、有機的・総合的な事業展開を行い、人類共通の財産である文化財の保存・修復に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与すること。

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
―	A	S	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額(百万円)	286	249	229	223	227	1,214
従事人員数(人)	95	89	90	88	92	454

※決算額は、決算報告書・国際研究協力事業費の決算額を計上している。(小項目 1−5−1 と 1−5−2 は個別に計上できないため。)
※従事人員数は2文化財研究所の全常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○情報の収集・分析及びその提供を行ったか。 ○国際協力のネットワークを構築したか。	18 年度(法人統合前) **(1)文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤整備を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国において文化財の保存・修復事業を推進する。** ・文化財保存施策の国際的研究 文化財保存施策の国際的研究について、以下の事業を実施した。 1. 文化財保存施策に関する情報の収集分析:欧州委員会(EU)・欧州評議会(Council of Europe)の文化財保存施策についての調査を実施し、情報を収集し、分析した。 2. 国際ワークショップの開催:アジア各国の専門家を招へいしてアジアの文化財について考えるラウンドテーブル形式の国際会議を1回、国内外の専門家を講師とする一般公開の国内専門家向け研究集会を1回、計2回開催した。 **(参考)法人の自己評価**	○中期目標期間を通じて、東南アジア、東アジア、中央アジア等の諸国における文化財の保存・修復協力や技術移転・専門家養成等の支援、研究機関間の連携強化や共同研究、情報交換等を実施し、文化財の保存・修復に関する国際協力の拠点としての研究基盤の整備及び国際協力のネットワークの構築に貢献したと評価できる。 中でも、世界的にも関心を集めているバーミヤン遺跡やアンコール遺跡への保存や調査研究の積み重ねは、報

	国際協力に関する研究基盤の整備を図るため、上記のとおり調査研究及び受託研究を実施した。 国際動向や国際協力の情報収集・分析・活用を図るとともに、東アジア、西アジア、東南アジアなどで文化財の保存・修復に関する国際協力のネットワークを構築し、協力事業の実施を通して我が国の国際貢献に寄与した。また、文化庁・外務省の要請による「文化遺産国際協力コンソーシアム」事業について受託し、文化遺産の国際協力に関する日本国内のネットワークの構築について積極的に支援した。 各プロジェクトの実施状況等については、「定性的評価」「定量的評価」とも中期計画どおり、または中期計画を上回って履行できたことから、中期目標に向けての実施状況は「順調」と判断する。 ・アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究 カンボジアのアンコール遺跡群のタ・ネイ遺跡で、繁茂する生物群を調査し、蘚類 8 属 9 種、苔類 2 属 3 種、地衣類 34 属 41 種(シアノバクテリア、緑藻を含む)を同定した。また新たに環境計測を開始した。タイ・スコータイ遺跡のスリチュム寺院では、生物が繁茂しにくい条件を考察するための環境データ回収と、若手研究者の研修を行った。ベトナムのミーソン遺跡において環境データを回収するとともに若手研究者の研修を行った。 ・アンコールワット遺跡群西トップ寺院の調査 西トップ寺院では引き続き西トップ寺院での諸調査を行った。8月には東テラス南北縦断トレンチの最終調査として北端に調査区を設定して、砂岩建築装飾などを検出した。12月の調査では東テラスの東端部にトレンチを設定し、セマ石の基部の構造物や、下層の石列を検出した。 こうした成果については6月の国際調整委員会で発表するとともに、いくつかの国内の研究会で発表を行った。 ・龍門石窟及び陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する調査研究 龍門石窟研究院保護センター楊剛亮研究員を招へいし、地理情報システム GIS の技術を活用した文化遺産の保護研究方法についての研究・研修を行なわせた。また、西安文物保護修復センターと共催で、「石造文化財の表面処理に関する各種の問題」をテーマとする研究会を西安にて開催した。 ＜受託研究＞ ・陝西省唐代陵墓石彫像保護修理事業　1，684千円 ・龍門石窟保護修復プロジェクト　3，734千円 ・敦煌壁画の保護に関する共同研究 敦煌壁画に関して、東京文化財研究所と敦煌研究院が共同で調査研究を行うもので、2006 年 4 月から 5 年間の新たな合意書に基づき第 5 期として推進するものである。その内容は、壁画制作技法・制作材料に関する光学的方法及び分析的方法を用いた総合研究、放射性炭素年代測定法による主要窟の年代同定に関する研究、日中の若手研究者育成、第 4 期において修復作業を完了した研究対象窟第 53 窟についての継続的経過観察である。 ・西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業 バーミヤーン遺跡に関して、第6次及び第7次の二度のミッションにて現地調査を行うとともに、現地技術者の人材養成を行い、保存に関する国際会議にも出席した。また、資料集及び	告書の刊行等、学問上の意義も大きく、日本の国際貢献への理解を深めるとともに、日本の存在感を高めていると認められる。カンボジア政府よりサハ・メトレイ勲章を授与されたことは、よくそのことを物語っている。

報告書を6冊刊行した。さらに、イラクバグダード国立博物館等から専門家 2 名を日本に招へいし、研修を行った。

＜受託研究＞

・ユネスコ／バーミヤーン遺跡保存事業　8，608千円

・タジキスタン共和国アジナ･テパ仏教寺院の保存修復事業　2，621千円

・中国及び中央アジア各国におけるシルクロード広域の世界遺産登録推進運動の実態調査及び登録文化遺産または登録の可能性のある文化遺産の現状調査　1，771千円

・[文化遺産国際協力コンソーシアム]運営委員会を 3 回開催し3つの分科会を開催した。会員専用コミュニティ･サイトを開設した。日本の実施した文化遺産国際協力プロジェクト一覧を冊子にまとめ公開した。フォーラムとシンポジウムを開催した。41，740千円

19－22 年度(法人統合後)

19 年度

・敦煌壁画・龍門石窟・唐代陵墓（中国）

11 月 19 日から 12 月 16 日の日程で、龍門石窟研究院保護センターの研究員の 2 名を招へいし、石質文化財の修理技術、撥水材料を塗布した後の効果の評価方法、修理作業終了後の環境のモニタリングなどについて、研修を実施した。10 月 11 日から 13 日の日程で西安文物保護修復センターと共同で「石造文化財の保存処理技術に関する研究会―石造文化財の保存修復と展示方法/保存処置に際しての接合部分及び表面の化粧方法」をテーマとし、日中専門家による研究会を開催した。

年間を通じて 3 回のミッションを派遣し、敦煌研究院と共同で、莫高窟第 285 窟壁画に対する光学調査、肉眼観察による壁画の保存状態の調査、第 285 窟壁画に使用されている色料についてのデジタル顕微鏡・携帯型蛍光 X 線分析装置・携帯型ラマン分光計を用いた非接触分析調査、第 285 窟を含む主要研究対象窟での 14C 年代測定及び分析研究のための試料採取を行った。日中若手研究者の相互派遣研修を行った。敦煌莫高窟における GIS 活用に関する研究を行った。2007 年に成果報告書を編集、発行した。

・タ・ネイ遺跡・西トップ寺院（カンボジア）

・プランバナン遺跡（インドネシア）

・アユタヤ遺跡、スコータイ遺跡（タイ）

・タンロン遺跡（ベトナム）

文化財表面の凹凸程度を定量化できるシステムと、石材の硬さを定量化する方法、さらに合成樹脂による撥水処理効果を定量化する方法を確立した。こうした基礎研究を受けて、カンボジアのタ・ネイ遺跡において、砂岩の表面に蘚苔類が繁茂した部分がそうでない部分に比べて表面硬度が低下していることを明らかにした。また、タイ・スコータイ遺跡において、生物劣化防止のための撥水処理効果に関する現地実験を開始した。

西トップ寺院では引き続き西トップ寺院での諸調査を行った。今年度からはテラス部の調査を終え、中央塔の周囲に調査区を設定し、基礎地業のあり方を明らかにすることを目指した。８月には中央塔の西側にトレンチを設定し、１２月には同じく中央塔の東北部にトレンチを設定した。その結果、掘り込み地業の存在は確かめられなかったが、

２層の整地層を確認することができ、１２世紀頃に第一の整備が、１４世紀頃に第二の整備が行われたと考えることができた。１月には建築班の調査が行われ、現状の図面作成を前提とした調査が行われた。こうした成果については６月と１２月の国際調整委員会で発表するとともに、いくつかの国内の研究会で発表を行った。

・バーミヤン遺跡（アフガニスタン）

・アジナ・テパ遺跡（タジキスタン）

西アジア諸国の文化財の保護・保存・修復に関する協力・支援事業の一環として、とくに内戦・紛争によって破壊の危機にさらされているアフガニスタン及びイラクの文化財の調査研究を行い、破壊された文化財の保存・修復事業を通して、関連する分野の技術移転を図るとともに、人材育成を行い、自国民の手による文化財保護事業の確立の支援を目指した。また、あわせて周辺地域（特に中央アジア）の文化財の調査研究を実施した。

・学術交流、共同研究（ドイツ、北米、韓国、中国、台湾、ベトナム、中央アジア）

・文化財施策の国際的研究

文化財保存施策の国際的研究について、以下の事業を実施した。

１．文化財保存施策に関する情報の収集分析：北欧の文化財保存施策についての調査を実施し、情報を収集し、分析した。

２．国際ワークショップの開催：アジア各国の専門家を招へいしてアジアの文化財について考えるラウンドテーブル形式の国際会議を１回、国内外の専門家を講師とする一般公開の国内専門家向け研究集会を１回、計２回開催した。

・文化遺産国際協力コンソーシアム

・アジア諸国の専門家ネットワーク

東京文化財研究所
陝西省唐代陵墓石彫像保護修理事業（受託）
龍門石窟保護修復プロジェクト（受託）
ユネスコ／バーミヤーン遺跡保存事業（受託）※奈文研と共同
タジキスタン共和国アジナ・テパ仏教寺院の保存修復事業（受託）
中国及び中央アジア各国におけるシルクロード広域の世界遺産登録推進運動の実態調査及び登録文化遺産または登録の可能性のある文化遺産の現状調査（受託）
ユネスコ／バーミヤーン遺跡保存に関する第６回専門家作業グループ国際会議の開催（受託）※奈文研と共同

20年度

・文化財保存施策の国際的研究

文化財保存施策の国際的研究について、以下の事業を実施した。

1．世界各地で開催された研究会やワークショップに積極的に参加し、文化財の保存に関わる各種の情報を収集し、分析した。

2．国際ワークショップの開催:アジア各国の専門家を招へいしてアジアの文化財について考えるラウンドテーブル形式の国際会議を1回、国内外の専門家を講師とする一般公開の国内専門家向け研究集会を1回、計2回開催した。

・アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究

石材表面への微生物繁茂を軽減するために、表面に撥水剤を塗布することの効果とその弊害について具体的に検証した。そうした微生物を繁茂しにくくする環境条件について、タイのスコータイ遺跡で検討した。さらに、微生物が石材の風化に与える影響について、カンボジアのアンコール遺跡において検討した。また、タイとのこれまでの共同研究成果を公表する報告会をバンコクで開催した。

・カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査

6月5日と6日に現地で開催された本年第1回目の国際調整委員会へ参加。本年第1回目の調査は8月1日から13日の間、考古班と建築班が実施した。11月には雨期を経過した後の遺跡の状態確認の現地調査を行った。12月1日と2日に第2回目の国際調整委員会に参加。1月29日から2月7日の間、第2回目の調査を考古班と保存科学班が行った。招聘事業は3月23日から31日まで。若手研究者2名を招聘した。

・龍門石窟及び陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する調査研究

2つの調査研究が本年度で終了するにあたり、龍門石窟研究院に対する助言を行うとともに、これまでの活動を総括し広くその内容を紹介するパンフレットを作成した。また西安市で石造文化財の保存に関するシンポジウムを開催し、報告書を作成した。

・敦煌壁画の保護に関する共同研究

共同調査・研究は3年目を迎え、壁画の制作材料と技法に関する知見の蓄積が進みつつある。写真撮影作業は天井の全景を含む全てが完了した。光学調査と分析調査は、未着手の部分での作業とここまでの検討で不十分な部分での作業を反復して行っている。日中双方のメンバーの連携が取れ、作業の一部分を完全に中国側に委託することが可能になるなど、顕著な進歩が見られる。

・西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業

アフガニスタン及びイラクから文化財専門家を招へいして人材育成・技術移転を実施。バーミヤーン遺跡の保存に関し、専門家会議への出席、報告書の作成・出版、外部機関との共同研究を実施。西アジア周辺諸国における文化遺産保護に関する調査・研究等としては、タジキスタン出土の壁画片の保存修復及び文化財専門家の人材育成・技術移転、アジナ・テパ仏教寺院の保存修復、アジャンター壁画の保存修復を実施し、あわせて国際会議等へ参加。

受託研究
諸外国における文化財輸出規制を規定した法令に関する調査
陝西省唐代陵墓石彫像保護修理事業
龍門石窟保護修復プロジェクト
ユネスコ／バーミヤーン遺跡保存事業
タジキスタン共和国アジナ・テパ仏教寺院の保存修復事業

21年度

・文化財保存施策の国際的研究

文化財保存施策の国際的研究について、以下の事業を実施した。

1. 世界各地で開催された研究会やワークショップに積極的に参加し、文化財の保存に関わる各種の情報を収集し、分析した。
2. 国際ワークショップの開催：アジア各国の専門家を招へいしてアジアの文化財について考

えるラウンドテーブル形式の国際会議を 1 回、国内外の専門家を講師とする一般公開の国内専門家向け研究集会を 1 回、計 2 回開催した。

・アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究

文化財石材が屋外で風雨に晒される場合に比べ、覆屋内で保存されると、風化が軽減されることを定量的に示した。また、タイ・スコータイ遺跡について、覆屋の効果を含めた環境調査を実施した。さらに、微生物が石材の風化に与える影響について、カンボジアのアンコール遺跡において検討した。

・カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査

考古班は西トップ寺院の前面にある小ストゥーパの調査を行い、建立時期と変遷を明らかにした。建築班は引き続き実測調査を行い、中成基壇までの図を作成するとともに、全体の構造変遷に理解を深めた。

・陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究

2009年度は、まず陝西省考古研究院との共同研究体制の構築を行い、次いで同研究院の指導者、保存修復部門担当者に我々の調査方法の原理を理解してもらうことを目的として、作業を行った。

・敦煌壁画の保護に関する共同研究

共同調査・研究は4年目を迎え、壁画の制作材料と技法に関する知見の蓄積から、考察とまとめの段階に入りつつある。今年度の調査研究では、昨年度までに行ってきた研究の成果をもとに、個別のテーマを選択してさらに詳細な観察を行い、第285窟壁画を構成する材料と技法に関して、その特徴を明確なものとする作業を行った。研究は写真撮影、表面観察、分析調査、データの集積という基礎的な作業から、多彩な図案を彩る色彩効果の問題、劣化メカニズムの問題へと、進展している。

・西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業

〇アフガニスタン：文化財専門家の人材育成・技術移転、専門家会議への出席、報告書の作成・出版、外部機関との共同研究。

〇イラク：文化財専門家の人材育成・技術移転。

〇西アジア周辺諸国文化遺産の調査研究・保護への協力等：トルコ、シリア、タジキスタン、インド、中央アジア諸国、エジプト。

受託研究
ユネスコ／バーミヤーン遺跡の保護プロジェクト
ユネスコ／インドネシア西スマトラ地震により被災した文化遺産緊急支援
文化遺産国際協力コンソーシアム事業
文化遺産国際協力拠点交流事業　インド
文化遺産国際協力拠点交流事業　モンゴル
文化遺産国際協力拠点交流事業　中央アジア
エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト(フェーズ1)にかかる国内支援業
・日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術要員の育成プログラム
・ユネスコ／日本信託基金　バクダードにあるイラク博物館の保存修復室修復興プロジェクト

22年度

・文化財保存施策の国際的研究
　文化財保存施策の国際的研究について、以下の事業を実施した。
1. 世界各地で開催された研究会やワークショップに積極的に参加し、文化財の保存に関わる各種の情報を収集し、分析した。
2. 国際ワークショップの開催：アジア各国の専門家を招へいしてアジアの文化財について考える国際会議を 1 回、国内外の専門家を講師とする一般公開の国内専門家向け研究集会を 1 回、計 2 回開催した。

・アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究
　文化財の保存のための覆屋効果について、材質ごとおよび覆屋の形態ごとに検証し、成果をタイ・インドネシアの研究者と共有した。また、タイ・スコータイ遺跡について、環境調査を実施した。さらに、微生物が石材の風化に与える影響について、カンボジアのアンコール遺跡において検討した。

・カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査
　考古班は東テラスの中央祠堂前面の状況解明のために、当該箇所に3回に分けて調査区を設定し発掘を実施した。建築班は実測調査をおこなうとともに、類例調査を進めた。保存科学班は、来年度から開始予定の暴露試験に向けて、資料の調整、暴露試験台設置作業などを実施した。カンボジア人人材育成としては3名の研究者を日本に招聘し技術交流をおこなった。

・陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究
　2010年度は、前年度の調査実績をもとに墳墓壁画の考古発掘現場での調査実現を目指し、準備を進めたが、秋までの間に陝西省での壁画墓の発掘がなく、現場調査は実現しなかった。このため、前年度の作成した報告書の中国語版を作成し、西安市において陝西省の各機関の専門家を集めた研究会を実施し、調査手法についての評価を求めた。さらに壁画が出土してから文化財として保存されるまでの全工程において、どのような記録保存が求められ、それぞれの現場においてどのように現実的に対応するかを討論し、今後の共同研究についてその可能性を考えた。

・敦煌壁画の保護に関する共同研究
　本年度は中期計画の最終年度であると同時に日中共同調査研究の5年目最終年度を迎えた。これまでの4年間に実施してきた調査研究についての成果をまとめるとともに、次期共同研究へ向けての準備作業を行った。とくに壁画の制作材料と制作技法に関する研究は、これまでに蓄積してきた劣化状態と色料に関する調査データをもとに劣化を生みだした環境要素のシミュレーション研究を行い、そこから壁画本来の色彩への考察を図ろうという計画をもった科学研究費補助金の申請が通り、研究の総括へ向けて明確な方向性を持つことができた。

・西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業
○アフガニスタン：バーミヤーン保存修復事業実施、文化財専門家の人材育成・技術移転、専門家会議への出席、報告書の作成・出版、外部機関との共同研究。
○イラク：文化財専門家の人材育成・技術移転。
○西アジア周辺諸国文化遺産の調査研究・保護への協力等：トルコ、タジキスタン、インド、中央アジア諸国、エジプト。

受託研究
日本／ユネスコパートナーシップ事業　アジア太平洋地域無形文化遺産保護活動の調査研究（受託）
ユネスコ／日本信託基金　バーミヤーン遺跡の保護プロジェクト（受託）
インドネシア西スマトラ州パダンにおける歴史的地区文化遺産復興支援（専門家交流）事業（受託）
文化遺産国際協力コンソーシアム事業（受託）
文化遺産国際協力拠点交流事業　インド（受託）
文化遺産国際協力拠点交流事業　モンゴル（受託）
文化遺産国際協力拠点交流事業　中央アジア（受託）
文化遺産国際協力拠点交流事業　カンボジア　（受託）
エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズ1）にかかる国内支援業務（受託）
日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術要員の育成プログラム（受託）
ユネスコ／日本信託基金　バクダードにあるイラク博物館の保存修復室の復興プロジェクト（受託）
ユネスコ／日本信託基金　タンロン・ハノイ文化遺産群の保存事業（受託）

（参考）法人の自己評価

　文化財の保存・修復事業を通じた国際協力の実績としては、国際的な文化財機構のネットワーク構築のため、各種ワークショップを開催し、またそれに参加して情報の収集に努めている。国際協力事業については、カンボジア、中国、西アジアなどアジアを中心に文化財修復に積極的に協力し、国際協力が図られている。
　なお、21年度にカンボジア政府から奈良文化財研究所長に宛てて、カンボジアの発展に寄与した外国人に送られるサハ・メトレイ勲章を授与される栄誉を受けた。
　中期計画に対して順調に成果を上げている。

【(小項目)1－5－2】	保存修復に関する技術移転の推進

【評定】

A

【法人の達成すべき目標】

文化財の保存・修復に関する国際協力の拠点としての位置づけを明確化するとともに、その機能の充実を図ること。また、研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークの構築、アジア諸国等における文化財の保存・修復協力、技術移転・専門家養成等の支援等、有機的・総合的な事業展開を行い、人類共通の財産である文化財の保存・修復に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与すること。(再掲)

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
－	A	S	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H21	H21	H22	計
決算額(百万円)	286	249	229	223	227	1,214
従事人員数(人)	95	89	90	88	92	454

※決算額は、決算報告書・国際研究協力事業費の決算額を計上している。(小項目 1－5－1 と 1－5－2 は個別に計上できないため。)

※従事人員数は2文化財研究所の全常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○諸外国への技術移転を積極的に進めたか。 ○アジア諸国における専門的な人材の育成のための支援事業等を行ったか。	**18 年度(法人統合前)** **(2)諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。** ・諸外国の文化財保存修復専門家養成 文化遺産の保存修復を実施するためには、経験豊かな修復専門家の関与が必要不可欠である。しかし、紛争が長期間続いた国々では、文化遺産を保存・修復する人材が決定的に不足しており、その養成が緊急的課題になっている。そのため諸外国における専門家の研修を実施する際の教科書として使用することを目的にして、「土器の修復」をテーマにしたテキストおよびビデオDVDを作成した。 ＜受託研究＞ [ベトナム]保存管理計画等作成のための行政機関に対する状況調査、必要となる保存修復機材の選定を行った。また、「タンロン遺跡の保存に関する日越合同専門家委員会」の立ち上げのための準備会合に専門家を派遣した。　1，244千円 発掘された遺構の再精査実地研修、測量研修を実施するため、考古専門家が派遣され、9名のベトナム人専門家に対して研修が行われ、統一した測量基準による遺構測量図面の作成が実施された。　2，589千円 [インドネシア]プランバナン遺跡を中心に、古都ジョグジャカルタ地域の文化遺産被害状況に関する調査を実施した。この調査により、プランバナン遺跡群について、緊急的に必要な応急措置を提言した。　2，995千円 [インドネシア]修復マスタープラン策定のための基本調査、地震被害解析のための構造調	○中期目標期間において、JICA・ACCUとの連携の下で、東南アジア、中央アジア等の諸国に対して、文化財の保存・修復技術者の養成・研修事業を進めるとともに、専門家養成のための教材作成等、機構で蓄積された技術を諸外国に提供し、国際的な文化財保存の技術向上に大きく貢献していると評価できる。 なお、次期中期目標期間においては、当該技術移転による我が国の国際貢献等について、一層社会に公表していくことが望まれる。

	査、地震被害解析のための地盤調査、修復履歴調査、足場建設指導及び修復工事基本計画策定のための調査を、各専門家の派遣により実施した。　18，936千円 シルクロード沿線の新疆、青海、寧夏、甘粛、陝西、河南の6省・自治区からの27名の文化財保護修復技術担当者トレーニングを行った。土遺跡保護専攻15名(2カ月間)と陶磁器金属保護修復専攻12名(3ヶ月間)である。　8，078千円 イラク国立博物館より2名の保存修復専門家を招聘し、研修を行った。東京と奈良で文化財保存活動の現状について視察を行い、イラク国立博物館の現状と研修成果についての報告会も行った。　5，864千円 ・JICA，ACCU等の研修事業の協力 ACCU(ユネスコ文化センター文化遺産保護協力事務所)が実施した、アジア太平洋地域文化遺産保護に従事する、合計19名の研修者に対して、長期、短期合わせて3コースにわたる研修事業に協力し、実地研修、実習研修を行った。 **(参考)法人の自己評価** 諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を進めるため、上記のとおりの専門家養成事業及び受託研究を実施するとともに必要な教材や教育手法の研究開発を実施した。 特にインドネアシア・ジャワ島中部地震により深刻な被害を受けたプランバナ遺跡群に関する緊急支援について、文化庁・外務省の意向を受け受託研究を適時に実施するとともに、ベトナム「タンロン遺跡の保存に関する日越合同委員会」の設置についても、中心的な役割を担ったことは評価できる。 また、諸外国からの人材育成について積極的に支援事業を行っており、「定性的評価」「定量的評価」とも中期計画どおり、またはそれを上回って履行できたことから、中期目標に向けての実施状況は「順調」と判断する。 **19－22 年度(法人統合後)** 19年度 ・アフガニスタン、イラク等の専門家養成 文化遺産の保存修復を実施するためには、経験豊かな修復専門家の関与が必要不可欠である。しかし紛争や治安の不安定な状態が長期間続いた国々では、文化遺産を保存・修復する人材が決定的に不足しており、その養成が緊急的課題になっている。そのため諸外国における専門家の研修を実施する際の教材として使用することを目的にし、「水侵木材」をテーマにしたDVD映像と、過去の保存・修復や研究事例の極端に少ない「樺皮仏典文書」をテーマにしたテキスト及びDVD映像を作成した。 ・JICA，ACCU研修事業への協力 2007年度は、ユネスコアジア文化センター(ACCU)が実施した三つの長期、短期研修について、当研究所が有する人材の知識、経験および設備などを有効に活用して、アジア・太平洋地域から来日した研修生に対して効果的な研修を実施した。 ・ICCROM国際研修「漆」	

・シルクロード文化財保護フェローシップ事業協力

東京文化財研究所
文化遺産保護国際貢献事業　専門家派遣：ベトナム・タンロン皇城遺跡の保存に関する活動計画案協議のための専門家派遣（受託）※奈文研と共同
文化遺産保護国際貢献事業　専門家派遣：ベトナム・タンロン皇城遺跡の保存に関する専門家派遣と研修事業（受託）※奈文研と共同
文化遺産国際協力コンソーシアム事業（受託）
文化遺産国際協力拠点交流事業　インドネシア・プランバナン遺跡群復興およびインド・アジャンター石窟壁画の保存修復に関する人材養成・技術移転（受託）
日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術人員の育成プログラム（受託）
ユネスコ／日本信託基金　イラク博物館における修復研究室復興プロジェクト（受託） ※奈文研と共同

20 年度

・諸外国の文化財保存修復専門家養成

諸外国における専門家の研修を実施する際の教材として使用することを目的にして、次の教材を作成した。すなわち、1.「水浸木材の保存修復」DVD。2.「水侵木材の保存修復」テキスト。3.「Conservation for water logged wood」テキスト、である。これらは、遺跡から出土した水浸木材の適切な修復方法をしているばかりではなく、そもそも遺跡から脆弱な水浸木材を取り上げる方法にまで言及しており、発掘から保存まで広く網羅した内容に仕上がっている。

・国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力

国際協力機構及びアジアユネスコ文化センターが計画した研修の多くの部分を担当した。参加者はアジア太平洋地域諸国で文化財の保護に携わる、まだ経験が十分でない研究者であり、今般の各研修により、研修生に対して有益な成果をもたらすことができた。

受託研究
タンロン皇城遺跡の保存に関する専門家派遣と研修事業
タンロン皇城遺跡の保存に係る専門家派遣
文化遺産国際協力コンソーシアム事業
文化遺産国際協力拠点交流事業
日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術人員の育成プログラム
ユネスコ／日本信託基金　イラク博物館における修復研究室復興プロジェクト
四川大地震文化財復興支援に関する現地調
四川震災復興に係る文化財協力（専門家交流）事業

21 年度

・諸外国の文化財保存修復専門家養成

諸外国における文化財の保存・修復に携わる専門家の研修において使用することを目的とした、教科書(日本語版及び英語版)とビデオDVD(日英 2 ヶ国語ナレーション)を作成した。

・国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力

国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力を行った。国際協力機構からはエジプトの博物館研修生の受入れを行った。ユネスコアジア文化センターからは本年も個人研修と集団研修の研修受入れ要請があり、個人研修はラオス人とモンゴル人に対

して研修を行った。集団研修は各国の研修生を受入れ、木造建造物の保存修復を中心とした研修を行った。さらに本年はベトナムのホイアンで行われたワークショップにも研究員を派遣し、主に木造建造物の保存修復に関する研修を行った。

22 年度

・諸外国の文化財保存修復専門家養成

諸外国における文化財の保存・修復に携わる専門家の研修において使用することを目的とした、教科書(日本語版および英語版)を作成した。

また、人材養成研修手法の改善に資することを目的に、「海外の文化財保存修復専門家養成を目的とする国際研修等の実施に関する研究会」を開催した。

・国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力

集団研修では16ヵ国、16名の研修生に対して研修をおこなった。また個人研修ではモンゴル人3名に対して、保存科学を中心とする研修をおこなった。こうした研修をおこなうことにより、各国の人材育成に貢献するとともに、日本側の各国理解の一助とも成った。また国内における国際協力関係の諸機関との連携を強化することができた。

(参考)法人の自己評価

国際協力機構やユネスコアジア文化センター(ACCU)への協力だけでなく、専門家研修の教材の作成を通して、アジア各国への技術移転を進めることができている。

中期計画に対して順調に成果を上げている。

【(中項目)1−6】	6　情報発信機能の強化	【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
―	A	A	A	A	A

【(小項目)1−6−1】	情報基盤の整備充実	【評定】 A

【法人の達成すべき目標】
調査及び研究の成果について、迅速な報告書の発行、利用価値の高いデータベースの構築等により、適時適切な公表を推進するとともに、施設の有効活用を図ることにより、研究者をはじめ広く社会に還元すること。

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
―	A	A	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額(百万円)	187	166	146	144	127	770
従事人員数(人)	83	89	77	85	87	421

※決算額は、決算報告書・情報公開事業費の決算額を計上している。(当該項目は小項目 1−6−2 と重複があり、個別に計上できないため。)
※従事人員数は、東京国立博物館の学芸企画部企画課、学芸企画部博物館情報課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課、東京文化財研究所の企画情報部、奈良文化財研究所の企画調整部の常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○ネットワークセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備充実を図ったか。 ○文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図ったか。	**18 年度(法人統合前)** ・ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実 ・文化財に関する専門的アーカイブの拡充 ・東京文化財研究所75年史編纂 ・無形文化財に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化 ・国際資料室の整備 　資料の収集とデータベース化 　『国際資料室蔵書目録』の作成 ・文化財保存修復国際情報データベース化に関する研究、文化財情報電子化の研究に基づき、データベースの充実 ・文化財関係資料や図書の収集・整理・公開・提供の充実 **(参考)法人の自己評価**	○中期目標期間において、広く社会に最新の情報が提供できるようにネットワーク及びセキュリティが強化され、情報基盤の充実が図られたことにより、研究成果が広く国民に還元できる環境が整備されたと認められる。 　また、中期目標期間の年度が進行する毎に、文化財に関するアーカイブやデータベースの充実に成果があったと評価できる。

	ネットワークセキュリティの強化等の情報基盤整備・充実と文化財情報の計画的収集・整理・保管及び電子化の推進として、上記のとおり事業を実施した。情報基盤を整備するとともに各種資料のデジタル化・データベース化を推進できたことは評価できる。 　各プロジェクトの実施状況等については、「定性的評価」「定量的評価」とも中期計画どおり、または中期計画を上回って履行できたことから、中期目標に向けての実施状況は「順調」と判断する。 **19−22 年度(法人統合後)** 19 年度 ・ファイヤーウォールの更新、スパム対策システムサーバの導入などネットワーク環境の整備を実施 ・専門的アーカイブの拡充 ・文化財関係資料の充実と文化財情報の電子化によるデータベースの充実 ・定期刊行物、ホームページの運用と広報誌 20 年度 ・ネットワークを安全に運用 ・動画サーバの導入、センタスイッチの増設等を実施 ・近現代美術関係文献および美術全集掲載図版目録のデータベース化、『日本美術年鑑』のテキスト化 ・劣化が進む貴重雑誌のCD−ROM化 ・「文化財保護関連法令集　イラク」等、文化財保存修復国際情報データベース化の推進 21 年度 ・ネットワークセキュリティの強化 　・文化財機構内のグループウェア運用に向けたVPN接続の実施 　・情報セキュリティ強化システムの導入 ・専門的アーカイブの拡充 　・劣化が懸念される貴重雑誌やオープンテープ等のデジタル化の実施 　・国内外の文化財に関する資料の収集及びデータベース化の実施 　・「各国の文化財保護法令シリーズ」及び「フランス文化財法典(前編)」の刊行 　・GIS(地理情報システム)を活用した遺跡・遺物情報の取得・管理に関する最新手法の開発 　・『東京文化財研究所七十五年史　本文編』の刊行 22 年度 ・ネットワークセキュリティの強化 　・文化財機構内のグループウェア運用に向けたVPN接続の実施 　・情報交換システム及びウイルス対策ソフトの更新によるセキュリティシステムの強化 ・専門的アーカイブの拡充 　・劣化が懸念される貴重雑誌やオープンテープ等のデジタル化の実施 　・国内外の文化財に関する資料の収集及びデータベース化の実施 　・「各国の文化財保護法令シリーズ」及び「フランス文化財法典(前編)」の刊行	

	・GIS（地理情報システム）を活用した遺跡・遺物情報の取得・管理に関する最新手法の開発 ・『東京文化財研究所七十五年史　本文編』の刊行 ・将来の多言語化に備えるために、各種データベースについて、業務用とともに公開用についても文字コードをUnicode化 **（参考）法人の自己評価** ネットワーク環境の整備や情報交換システム及びウイルス対策ソフトの更新によるセキュリティシステムの強化を行った。また文化財に関する専門的なアーカイブ化を順調に進めることができている。文化財保護関連情報のデータベース化も積極的に進め、外国の文化財保護法令について、各国法令が対象とする文化財によって分類し、データベース化している。 中期計画に対して順調に成果を上げている。	

【（小項目）1－6－2】 調査研究成果の公開・提供

【法人の達成すべき目標】
調査及び研究の成果について、迅速な報告書の発行、利用価値の高いデータベースの構築等により、適時適切な公表を推進するとともに、施設の有効活用を図ることにより、研究者をはじめ広く社会に還元すること。（再掲）

【評定】
A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
ー	A	A	A	A	A

【インプット指標】

（中期目標期間）	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額①（百万円）	187	166	146	144	127	770
決算額②（百万円）	140	119	112	163	150	684
従事人員数（人）	83	89	77	85	87	421

※決算額①は、決算報告書・情報公開事業費の決算額を計上している。（当該項目は小項目 1－6－1 と重複があり、個別計上できないため。）
決算額②は、決算報告書・展示出版事業費の決算額を計上している。（当該項目は小項目 1－6－3 と重複があり、個別計上できないため。）
※従事人員数は、東京国立博物館の学芸企画部企画課、学芸企画部博物館情報課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課、東京文化財研究所の企画情報部、奈良文化財研究所の企画調整部の常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準（評価指標）	主な実績	分析・評価
○公開講演会、現地説明会、国際シンポジウム等を積極的に行ったか。 ○HPの充実を図り、HPアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保したか。	**18 年度（法人統合前）** **（2）文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成17年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。** ・「東京文化財研究所年報」・「東京文化財研究所概要」・「東文研ニュース」（25 号～28 号）の刊行 ・「奈良文化財研究所紀要」・「奈良文化財研究所概要」・「奈文研ニュース」（21 号～24 号）・「埋蔵文化財ニュース」（126 号～129 号）の刊行 ・「平成17年度版　日本美術年鑑」1冊・「美術研究」（389 号、390 号、391 号）の刊行 ・「無形文化遺産研究報告」（第1号）・「無形民俗文化財研究協議会報告書」の刊行 ・「保存科学」46号の出版 ・第29回文化財の保存・修復に関する国際研究集会報告書の刊行 ・研究報告書、研究論文集、図録等の刊行 ・第30回文化財の保存・修復に関する国際研究集会 ・平成18年度美術部オープンレクチャー ・公開講演会、現地説明会等の開催 ・ホームページの運用、ホームページアクセス件数の前期中期計画期間の年度平均以上の確保 広報活動、情報発信の一翼を担い、かつ文化財研究のデジタル・アーカイブとして機能した	○中期目標期間を通じて、公開講演会や現地説明会、国際シンポジウムを実施し、年報・概報・研究誌（定期刊行物）・図録やホームページ等も利用して、研究成果を迅速に公開し、社会に還元したと評価できる。 また、研究成果のみならず、各施設の現況に対しても、概要やニュース等により、積極的でわかりやすい情報公開が行われていると認められる。 中期目標期間中は、ホームページアクセス件数が飛躍的に増大したばかりでなく、研究状況の公開、研究成果の報告等においても質・量共に高い水準を維持したが、次期中期目標期間においても高い水準を維持することを期待したい。

結果、ホームページアクセス件数は 2,694,976 件に達した。
　また、奈良文化財研究所においては、ホームページのアクセシビリティについて再検討を行ない、音声ファイルを追加した。さらにキトラ情報専用サーバ、携帯サイトを追加し、情報発信に努めた。

(参考)法人の自己評価

　文化財に関する調査・研究に基づく成果について、刊行物の刊行、講演会等の開催、ホームページの充実等を上記のとおり実施した。いずれも、中期目標・計画に沿って実施状況は順調と判断する。
　文化財に関する調査・研究に基づく成果について、刊行物の刊行、講演会、国際シンポジウム等の開催、ホームページの充実等を上記のとおり実施した。特に国際シンポジウムについては、2006年4月に発行した「無形文化遺産の保護に関する条約」を視野に入れ「無形文化遺産の保護―国際的協力と日本の役割―」をテーマとし、今後の国際的な取組みについても一定の方向性を提示できたことは評価できる。また、ホームページアクセス件数についても昨年度実績を大幅に上回ったことからも充実が図られた結果であると評価できる。各プロジェクトの実施状況等については、「定性的評価」「定量的評価」とも中期計画どおり、または中期計画を上回って履行できたことから、中期目標に向けての実施状況は「順調」と判断する。

19－22 年度(法人統合後)

19 年度
・研究報告書、日本美術年鑑、美術研究、無形文化遺産研究報告、保存科学(47号)、年報等の刊行
・第31回文化財の保存・修復に関する国際研究集会の開催
・オープンレクチャーの開催
・発掘調査の現地説明会の開催と公開講演会の実施
・第31回文化財の保存・修復に関する国際研究集会の開催
20 年度
・研究報告書、日本美術年鑑、美術研究、無形文化遺産研究報告、保存科学(48号)、年報等の刊行
・第32回文化財の保存・修復に関する国際研究集会の開催
・オープンレクチャーの開催
・発掘調査の現地説明会の開催と公開講演会の実施
21 年度
・年報、日本美術年鑑、美術研究、保存科学など、定期刊行物の刊行
・無形文化遺産研究報告など、研究報告書の刊行
・第33回文化財の保存・修復に関する国際研究集会の開催
・オープンレクチャーの開催
・発掘調査の現地説明会の開催と公開講演会の実施
・キッズページ(日本語版・英語版)、携帯サイトの新設など、ホームページの充実

22 年度
・年報、日本美術年鑑、美術研究、保存科学など、定期刊行物の刊行
・無形文化遺産研究報告など、研究報告書の刊行
・第33回文化財の保存・修復に関する国際研究集会の開催
・オープンレクチャーの開催
・発掘調査の現地説明会の開催と公開講演会の実施
・キッズページ(日本語版・英語版)、携帯サイトの新設など、ホームページの充実

【研究所 HPアクセス件数】(件)
指標:前中期計画期間年度平均件数:1,122,695件 (中期計画)

項目名			第2期中期目標期間中の評価の経年変化					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
HPアクセス件数(研究所)	文化財研究所	目標値	－	*1,122,695*				
		実績	－	2,388,763	2,449,875	2,106,989	2,448,108	6,466,167
		定量的評価	－	A	A	A	S	S

(参考)法人の自己評価

　研究報告書や年報等定期刊行物をとおして研究成果の公表を行っている。また、文化財の保存・修復に関する国際研究集会を通して、文化財の保存・修復の国際的な課題や取り組みなどを検討する機会を設け、研究成果を積極的に公表している。また、HP のアクセス件数も目標を達成し、前年度実績も上回っている。オープンレクチャーや現地説明会などを通した一般への研究成果の公表にも力を入れており、今後も積極的に公表の機会を設けていきたい。
　中期計画に対して順調に成果を上げている。

【(小項目)1−6−3】 公開施設の運用

【評定】 A

【法人の達成すべき目標】
調査及び研究の成果について、迅速な報告書の発行、利用価値の高いデータベースの構築等により、適時適切な公表を推進するとともに、施設の有効活用を図ることにより、研究者をはじめ広く社会に還元すること。(再掲)

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
ー	A	A	A	A	S

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額(百万円)	140	119	112	163	150	684
従事人員数(人)	95	89	90	88	92	454

※決算額は、決算報告書・展示出版事業費の決算額を計上している。(当該項目は小項目 1−6−2 と重複があり、個別計上できないため。)
※従事人員数は2文化財研究所の全常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)

○黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示の充実を図ったか。
○入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上を確保したか。
○文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力したか。また、ボランティアへの活動支援を行ったか。
○奈良県の「平城遷都 1300 年記念事業」にあわせ、平城京についてのこれまでの調査・研究成果を生かした展示・公開事業を行ったか。

主な実績

18 年度(法人統合前)

(3)黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上確保する。
(4)文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力し、支援を実施する。また、宮跡等への来訪者に文化財に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティア事業を運営するとともに、各種ボランティアに対して、活動機会・場所の提供等の支援を行う。
(5)奈良県の「平城遷都1300年記念事業」に向け最新の調査・研究に基づく平城宮跡資料館の展示リニューアル、及び古代都城等に関する国際共同研究の成果の展示・公開について検討を始める。

・黒田記念館における作品の展示公開
・平城宮跡資料館における展示・公開
・飛鳥資料館における常設展示の充実と特別展示の開催
・藤原宮跡資料室における展示公開
・平城宮跡等公開活用事業への協力・支援
・平城宮跡解説ボランティア事業の運営
・各種ボランティアに対する活動機会・場所の提供、学習会の実施等への支援

(参考)法人の自己評価
各種の資料館において研究成果の公開施設としての役割から、展示を充実させ、調査・研究の成果内容を広く一般に理解を深めることとして、上記のとおり実施した。特に飛鳥資料館においては、特別展によるキトラ古墳から発掘された「玄武」の公開を行い、これによる入館者数は大幅な伸びをみせたことは評価できる。各プロジェクトの実施状況等については、「定性的評価」「定量的評価」とも中期計画どおり、または中期計画を上回って履行できたことから、中期目標に向けての実施状況は「順調」と判断する。

分析・評価

○古代遺跡・文物に関する国民的関心の高さに応えた企画を展開する等 、中期目標期間を通じて、公開施設による調査研究成果の公開・展示を適切に行ったと評価できる。
また、すべての公開施設において、ほぼ目標の来館者数を上回っており、全体としては予想を上回る成果を上げたことも評価できる。
特に、文化庁によるキトラ古墳壁画の公開事業、奈良県による「平城遷都 1300 年記念事業」では、ツアーガイド(ボランティア)の研修を担当し、事業への支援等を実施したことも評価できる。

19−22 年度(法人統合後)

19年度
・黒田記念館・平城宮跡資料館・藤原宮跡資料室・飛鳥資料館の展示公開
・平城宮跡における解説ボランティア事業の運営と支援
・飛鳥資料館において、春期特別展示「キトラ古墳壁画四神玄武」等を開催
・朱雀門の解説ボランティアをしたいと申し出のあった地元NPO法人へ活動機会を提供
・平城宮跡における発掘調査を速報展「平城宮東方官衙の調査」(平城宮跡資料館)等で公開
20年度
・黒田記念館・平城宮跡資料館・藤原宮跡資料室・飛鳥資料館の展示公開
・平城宮跡における解説ボランティア事業の運営と支援
・飛鳥資料館において、春期特別展示「キトラ古墳壁画十二支―子・丑・寅―」等を開催
・平城遷都1300年記念事業に併せ、平城京に関する調査・研究成果の公開を充実させるため、平成21年度予算として平城宮跡資料館公開展示部門機能充実整備等工事経費を計上した。
21年度
・黒田記念館・平城宮跡資料館・藤原宮跡資料室・飛鳥資料館の展示公開
・平城宮跡資料館の改修工事に伴う閉館のため、本庁舎にガイダンスコーナーの設置
・平城遷都1300年記念事業に向け、解説ボランティアの専門研修、「続日本紀」読書会等の実施
・飛鳥資料館において、特別展示「キトラ古墳壁画四神ー青龍白虎ー」等を開催
22年度
・黒田記念館・平城宮跡資料館・藤原宮跡資料室・飛鳥資料館の展示公開
・平城宮跡資料館のリニューアルオープンに伴う、常設展示の大幅展示替え
・平城遷都1300年記念事業終了後、同事業のツアーガイド(ボランティア)73名を新たに研究所のボランティアとして受け入れ研修を実施
・飛鳥資料館において、特別展示「キトラ古墳壁画四神」等を開催

【研究公開施設入館者数】(人)　指標:前中期計画期間年度平均入館者数(中期計画)

項目名			第2期中期目標期間中の評価の経年変化					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
研究公開施設入館者数	黒田記念館	目標値	−	*10,531*				
		実績	−	20,975	13,707	19,038	20,345	18,458
		定量的評価	−	A	A	A	S	A
	平城宮跡資料館	目標値	−	*72,430*				
		実績	−	77,560	85,486	92,597	25,127	354,346

	定量的評価	－	A	A	A	C	S
藤原宮跡資料室	目標値	－	*4,486*				
	実績	－	4,457	6,885	4,423	4,341	4,815
	定量的評価	－	B	A	B	B	A
飛鳥資料館	目標値	－	*55,274*				
	実績	－	112,128	100,825	84,608	77,347	133,312
	定量的評価	－	A	A	A	A	S

【ボランティア受入れ数】(人)

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
奈良文化財研究所	144	137	131	128	187

(参考)法人の自己評価

研究公開施設の公開を通して、文化財研究所の研究成果を公表している。黒田記念館の黒田作品の公開機会の拡大については、年1回の巡回展のほか東京国立博物館での特集陳列の開催など、公開の機会拡大に努めた。平城宮跡資料館では22年度のリニューアルオープンにあたり、新しい展示手法を取り入れた大幅な展示替えを行うなどして、入館者の平城宮跡への理解促進に努めている。また、飛鳥資料館ではキトラ古墳壁画の特別公開の特別展を開催し、研究・展示の成果を公開した。今後も引き続き研究の成果を発信することにより、文化財研究所の事業内容を積極的に公開していきたい。

文化庁事業の協力としては、飛鳥資料館においてキトラ古墳壁画を公開するなど、積極的に協力している。

ボランティアについても、毎年多くのボランティアを受け入れ、22年度は平城遷都1300年記念事業のツアーガイド73名を研究所のボランティアとして受け入れ、講義、実習等の研修を行うなど、登録ボランティア数の維持及びガイド技術の熟達の促進等積極的に支援している。

中期計画に対して順調に成果を上げている。

【(小項目)1－6－4】 情報発信機能の強化

【評定】 **A**

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
B	―	A	A	S	A

【法人の達成すべき目標】

調査及び研究の成果について、迅速な報告書の発行、利用価値の高いデータベースの構築等により、適時適切な公表を推進するとともに、施設の有効活用を図ることにより、研究者をはじめ広く社会に還元すること。(再掲)

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額①(百万円)	10	19	27	53	21	130
決算額②(百万円)	―	―	―	542	142	684
従事人員数(人)	83	89	77	85	87	421

※決算額①は、デジタルアーカイブ化にかかる撮影費・データ入力費等の決算額を計上している。
　決算額②は、文化芸術情報電子化推進費補助金にかかる決算額(決算報告書・文化芸術情報電子化推進費)を計上している。
※従事人員数は、東京国立博物館の学芸企画部企画課、学芸企画部博物館情報課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課、東京文化財研究所の企画情報部、奈良文化財研究所の企画調整部の常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○ウェブサイトのアクセスの年間平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ったか。 ○収蔵品等に関するデジタル化件数は、年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにしたか。 ○情報資料を収集し、レファレンス機能を充実させたか。	18年度 **インターネットを利用した情報の発信** ・展示案内の5カ国版をホームページに掲載(京博) ・研究、展示などの情報をデータベース化した情報アーカイブ(第2web)サイトを推進(東博) ・ホームページ、メールマガジンによる情報の発信 ・ホームページに一般の方のブログをリンク(九博) **デジタル化の推進、レファレンスの充実** ・資料館資料(図書13万件、雑誌5千件)のNACSIS－CATへの対応(東博) 19年度 **インターネットを利用した情報の発信** ・モバイル版文化財情報データベースの拡充(京博) ・重要文化財高精細画像公開システム「KNM Gallery」の整備と公開に向けた準備(図6-3、京博) ・ウェブサイトへの研究紀要の掲示(奈良博) ・特別展における「ブログるぽ」(館のWEB上でブログとリンクさせる仕組み)の設定(九博) **デジタル化の推進、レファレンスの充実** ・継続的な文化財情報のデータベース化の推進 ・OPACでの公開及び美術図書館横断検索(ALC)への参加による資料館所蔵の図書検索の利便性向上(東博) ・「あじっぱ」内の「あじ庵」や「たなだ」で活用する映像を撮影(九博) 20年度 **インターネットを利用した情報の発信**	○中期目標期間において、WEBサイトアクセス件数が各博物館ともに飛躍的に増加を重ねており、情報公開を推進したと評価できる。 　また、収蔵品に関するデジタル化についても、年度により増減はあるものの、e国宝の取り組みを含め、全体として順調に進行していると認められる。公開された情報の質についても、内容や視覚的効果の面で非常にレベルが高く、外国語対応等のレファレンス面での充実も著しい。 　次期中期目標期間においても、デジタルアーカイブの前提となる収蔵品等のデジタル化が、より円滑に進み、情報公開に反映されることが望まれる。

・研究紀要学叢のWEBサイトにおける公開（京博）
・WEBサイトのリニューアル（奈良博・九博）
・特別展における「ブログるぽ」（館のWEB上でブログとリンクさせる仕組み）の継続的な実施（九博）

デジタル化の推進、レファレンスの充実

・継続的な文化財情報のデータベース化の推進（東博）
・美術品台帳のテキストデジタル化（東博）
・京都国立博物館所蔵の指定文化財の画像を高精細画像化し、重要文化財高精細画像データベース「KNM Gallery」としてウェブサイト上で公開（京博）

21年度

インターネットを利用した情報の発信

・古文書画像データベースの公開（東博）
・館外での作品公開一覧ページの作成（京博）
・WEBサイトの一部リニューアル（京博・九博）

デジタル化の推進、レファレンスの充実

・継続的な文化財情報のデータベース化の推進
・所蔵品等のモノクロフィルム・マイクロフィルムのほぼ全てについて高精細デジタル化の実施（東博）
・国指定文化財の高精細デジタル撮影の実施と5ヶ国語（日英仏中韓）での解説文の整備（東博）
・重要文化財高精細画像データベース「KNM Gallery」で公開されているほぼ全ての作品について6ヶ国語（日英仏中韓西）の解説文を整備（京博）
・e国宝に重要文化財を加え、充実を図った（4博物館）

22 年度

インターネットを利用した情報の発信

・情報アーカイブサイトでの調査研究成果の公開を継続した。（東博）
・研究者一覧のウェブページを作成し、研究員の自己紹介、主要業績等を掲載した。（京博、奈良博）
・ウェブサイトにおいて特別展ごとに「ぶろぐるぽ」を実施した。（九博）

デジタル化の推進、レファレンスの充実

・国指定文化財について3次元計測によるデジタル化を実施した。（東博）
・国指定文化財の高精細デジタル撮影の実施と5ヶ国語（日英仏中韓）での解説文の整備（東博）
・デジタル撮影の開始、デジタル画像の運用管理、情報公開を推進する準備作業として、写真情報システムのリニューアルを進めた。（奈良博）
・e国宝に重要文化財を加え、充実を図った（4博物館）
・資料館における美術史等の情報・資料の公開のため、図書資料等のデータ整備を推進した。（東博）
・博物館資料（収蔵品、図書、写真など）データベースにおける業務の効率化に向けて、現行業務システムを全面的に見直し、より充実した第2次業務システム構築を行った。（九博）

【ウェブサイトのアクセス年間平均件数】（件）　指標：前中期目標期間の年間平均実績（中期計画）

【収蔵品等の画像デジタル化件数】（件）　指標：前中期目標期間の年間平均実績（中期計画）

項目名			第2期中期目標期間中の評価の経年変化					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
ウェブサイトのアクセス年間平均件数	東博	目標値	*1,928,966*	－	*1,928,966*			
		実績	3,680,028	－	5,504,468	5,211,261	5,687,673	4,971,306
		定量的評価	A	－	A	A	S	S
	京博	目標値	*521,965*	－	*521,965*			
		実績	757,812	－	733,885	1,409,634	848,486	805,935
		定量的評価	A	－	A	A	S	S
	奈良博	目標値	*670,948*	－	*670,948*			
		実績	1,249,608	－	1,402,834	1,230,774	2,630,035	3,121,270
		定量的評価	A	－	A	A	S	S
	九博	目標値	*783,487*	－	*783,487*			
		実績	7,118,540	－	5,943,616	5,699,860	7,459,518	4,708,102
		定量的評価	A	－	A	A	S	S
収蔵品等に関する画像のデジタル化件数	東博	目標値	*18,829*	－	*18,829*			
		実績	4,472	－	124,996	139,000	775,300	8,639
		定量的評価	C	－	A	A	A	C
	京博	目標値	*4,359*	－	*4,359*			
		実績	6,169	－	8,047	6,478	5,603	4,594
		定量的評価	A	－	A	A	A	A
	奈良博	目標値	*8,471*	－	*8,471*			
		実績	3,830	－	4,584	8,399	102,894	9,501
		定量的評価	C	－	C	B	S	A
	九博	目標値	*1,890*	－	*1,890*			
		実績	1,986	－	3,295	3,963	3,574	1,391
		定量的評価	A	－	A	A	S	B

（参考）法人の自己評価

ウェブサイトのアクセス件数は、各博物館とも目標を達成した。各博物館ともウェブサイトのリニューアルに取り組み、常に最新情報や豊富な情報量の提供に努めるとともにウェブサイト上に特別展の混雑情報を提供するなど、利用者の利便性の向上に努めた結果と考えられる。

収蔵品等のデジタル化については東博で前中期目標期間からの順調なデジタル化作業の進行によりポジフィルム からのデジタル化が終了に近づくなど、中期計画の設定にはそぐわなくなってきており、次期中期より目標設定方法を変更する。

e国宝については補正予算もあり重要文化財を追加するなど充実を図った。

中期計画に対して順調に成果を上げている。

【(中項目)1−7】	7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上	【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
―	A	A	A	A	A

【(小項目)1−7−1】	地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制の構築	【評定】 A

【法人の達成すべき目標】

地方公共団体や大学、研究機関とのネットワークや連携協力体制を構築し、機構が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を図り、我が国全体の文化財の収集・展示、調査・研究の質的向上に寄与すること。また、地方公共団体等の指導者層を主たる対象とする高度な研修事業や、若手研究者の育成に寄与するため実践的な連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成すること。

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
―	A	A	A	A	A

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額(百万円)	―	―	―	―	―	―
従事人員数(人)	95	89	90	88	92	454

※決算額は、協力・助言等にかかる外注費が少額なため、個別に計上できない。

※従事人員数は2文化財研究所の全常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行ったか。	**18 年度(法人統合前)** **(1)地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。** **埋蔵文化財保護行政に資する調査研究を行うとともに、地方公共団体等への協力・助言・専門的知識の提供等について管理・調整する。また、これまで蓄積した調査・研究の成果を活かし、他機関等との共同研究及び受託研究を実施する。** ・無形文化遺産に関する助言 無形文化遺産の保存・活用等に関して、以下のとおり、64 件の助言を行った。 文部科学省(教育映画等審査に関して)に対する助言　12 件 文化庁芸術文化課地域文化振興室に対する助言(文化芸術による創造のまち支援事業に関して)　17 件 文化庁伝統文化課に対する助言(国際民俗芸能フェスティバルに関して)　1 件 岐阜県揖斐川町教育委員会に対する助言　1件	○中期目標期間を通じて、無形文化遺産、保存科学、文化財の修復・復元等、幅広い分野にわたり、専門的・技術的な協力・指導・助言を行い、地方公共団体や大学・研究機関との連携・協力体制を適切に構築したと評価できる。 特に、若手研究者に対する研究や保存・修復、発掘調査等の文化財に関する指導育成に努め、ナショナルセンターとしての機能を果たしていると認められる。 次期中期目標期間においても、援

	日本芸術文化振興会に対する助言(劇場賞選考、運営計画、文化デジタルライブラリー関連)9 件 日本芸術文化振興基金に対する助言(助成事業に関して)3 件 (財)伝統文化活性化国民協会に対する助言(伝統文化データベース、ふるさと文化再興事業、伝統文化こども教室関連事業に関して)　9 件 全国民俗芸能大会に関する助言　5 件 全国青年大会郷土芸能の部運営委員会での助言　2件 園田学園近松研究所に対する助言　2 件 韓国国立民俗博物館に対する助言　4 件 ・文化財の修復及び整備に関する調査・助言 地方公共団体等の実施する文化財の調査・保存・整備・活用などの事業を援助・助言するために、文化財の修復及び整備に関する調査を行った。今年度は、高松塚古墳壁画やキトラ古墳壁画から、旧手宮鉄道施設の機関車庫や旧下野煉化製造会社煉瓦窯などの近代文化遺産まで、多種多様な文化財に対して、以下のとおり計 20 件の指導助言を行った。 財団法人日本航空協会評議員会 有限責任中間法人国宝修理装潢師連盟資格試験委員会 史跡原爆ドーム保存技術指導委員会 史跡原爆ドーム躯体レンガの保存修復に関する指導助言 重要文化財旧下野煉化製造会社煉瓦窯の保存修復に関する指導助言 重要文化財旧手宮鉄道施設(小樽市)の保存修復に関する指導助言 御料車及び1号機関車(交通博物館)の搬出入方法に関する指導助言 所沢航空発祥記念館所蔵 91 式戦闘機胴体の保存修復に関する指導助言 第五福竜丸エンジンの保存修復に関する指導助言 国宝高松塚古墳壁画の保存修復に関する指導助言 特別史跡キトラ古墳壁画の保存修復に関する指導助言 重要文化財「京都府行政文書」の調査／保存修復の指導助言 曼殊院所蔵竹虎図の保存修復に関する指導助言 熊野磨崖仏(豊後高田市)の保存整備に関する指導助言 愛媛県立科学博物館所蔵グレイトフォールズ型転炉の保存修復に関する指導助言 大韓民国に所在する鉄道文化財の保存修復に関する指導助言 市川市指定有形文化財常夜灯の保存修復に関する指導助言 喜多見氷川神社(世田谷区)石鳥居の保存修復に関する指導助言 小倉城(北九州市)三の丸跡の遺構整備に関する指導助言 重要文化財 0.5t 及び 3t スチームハンマーの修復後処置に関する指導助言 ＜受託研究＞ ・関西大学博物館所蔵重要文化財縄文鉢形土器の復元修理　1，177千円 ・地方公共団体等が行う史跡の整備、復原事業等に関する技術的助言 地方公共団体等が行っている史跡整備、建造物修理、発掘調査、出土文字資料調査等の各分野において専門委員会の委員になるなどして、専門的・技術的な助言を行っている。 大内氏館跡(山口県山口市)にかかる大内氏館跡西北部に残る枯山水庭園跡の発掘調査・	助・助言を通じて、地方の文化財行政に貢献することを期待したい。

復原整備事業
奈良市指定春日大社桂昌殿にかかる破損木材の具体的な補修方法についての技術的な援助、桂昌殿の飾金具の在来仕様、小屋組の復原に関する専門的な助言
兵庫県太子町所在の斑鳩寺仁王門、山王社に対する、専門的な調査援助、同町内建造物の保存のあり方に関する助言
岐阜県恵那市、滋賀県大津市、奈良県大宇陀町、島根県高梁市等の伝建群保存地区審議会等での専門的助言
茨城県石岡市常陸国衙跡、福島県須賀川市栄町遺跡、埼玉県深谷市幡羅遺跡、岐阜県垂井町美濃国府跡、三重県四日市市久留倍遺跡、愛媛県松山市史跡久米官衙遺跡群、鳥取県倉吉市伯耆国衙跡発掘調査への援助・助言、岩手県盛岡市志波城跡、鳥取県鳥取市栃本廃寺跡、福岡県大刀洗町下高橋官衙遺跡、佐賀県大和町肥前国府跡、宮崎県西都市日向国府・国分寺跡の整備事業への助言
奈良市平城京跡、大阪府枚方市禁野本町遺跡、兵庫県加古川市坂元遺跡、兵庫県氷上郡氷上町市辺遺跡、兵庫県赤穂郡上郡町山野里四ツ日遺跡、青森市高間(1)遺跡、同新田(1)遺跡などから出土した資料にかかる釈読・写真撮影などの援助・助言
上記のとおり、地方公共団体等の委員就任件数180件、援助・助言実施件数(出張依頼を受けた件数)400件(委員会出席175、審議会出席20、指導50、調査47、講演21、その他87)の助言を行った。
約 40 年ぶりに全面改訂することになった『発掘調査のてびき』の作成。
静岡県伊場遺跡群出土木簡、徳島県観音寺遺跡出土木簡の再釈読事業なども受託している。
＜受託研究＞
・発掘調査作業マニュアル作成のための調査・検討業務　4，563千円
・伊場遺跡他出土木簡再解読・調査研究業務　197千円
・徳島市観音寺遺跡(阿波国府推定地)出土木簡の総合的研究　693千円
・地方公共団体が行う平城京域発掘調査への援助・助言
平城宮周辺の重点地区で、主として住宅建設に伴う 12 件の事前調査を実施した。発掘の総面積は 184.2 ㎡、調査期間は延べ 97 日である。このうち、409 次調査西大寺薬師金堂で凝灰岩切石を壺地業とした地耐工法がみつかり、法華寺町でおこなった 412 次調査では二条条間路北側溝からガラス小玉鋳型や羽口を検出するなど、多くの成果をえた。
・自己点検評価
地方公共団体等に対する文化財に関する専門的・技術的な協力・助言を上記のとおり実施した。各プロジェクトの実施状況等については、「定性的評価」「定量的評価」とも中期計画どおり、または中期計画を上回って履行できたことから、中期目標に向けての実施状況は「順調」と判断する。

19－22 年度(法人統合後)
19 年度
協力・助言の積極的な実施
・文化財公開施設の調査・支援

・無形文化遺産の保存・伝承・活用等
・文化財の修復・整備
・文化財の発掘調査・史跡整備等の助言
研修実施
・博物館・美術館の保存担当学芸員研修
・文化財担当者を対象とした埋蔵文化財担当者研修
20年度
・財団法人伝統文化活性化国民協会への助言
・地方公共団体等が行う文化財の調査・保存・修復・整備・活用等の事業への建造物修理、史跡整備、出土文字資料調査、発掘調査等に関する専門的・技術的な助言
助言の事例
①日光山輪王寺宝物殿における劣化工芸品の修復
工芸品の修理方法および、修理後の保存方法についての指導助言等(文化財の調査・保存・整備・活用などの事業を援助・助言するために、文化財の修復及び整備に関する調査等を行う)を行った。
②熊本県八代市麦島城跡出土建築部材の保存
豊臣秀吉の命により破城されたといわれる麦島城跡から出土した平櫓の建築部材の中に、現在では文献上でしか確認できない太鼓壁が含まれていたため、八代市教育委員会ではできるだけその構造を損なうことなく遺構の切り取りを行い、良好な保存を行うこととしており、遺構の切り取り、一時保管、部材に応じた保存処理などについて指導・助言を行った。
③関ヶ原古戦場保存管理計画の策定
史跡関ヶ原古戦場は、全国の諸大名を巻き込んで慶長5年(1600)9 月 15 日にあった天下分け目の合戦場の跡である。その史跡としての適切な保存と活用の基本となる保存管理計画策定にあたり、遺跡保存の考え方や整備の手法、計画書の構成・内容のほか、計画実施のための体制作り等について指導・助言を行った。
・地方公共団体が行う平城京域発掘調査への援助・助言
21年度
・無形文化遺産の保存・伝承・活用に関する助言の実施(30件)
・各種文化財の保存修復に関する指導助言の実施(40件)
・地方公共団体等が行う遺跡、建造物などの調査・整備・修復・保存等に関する援助助言の実施(337件)
・地方公共団体が行う平城京域発掘調査への援助・助言(8件)
・地方公共団体が行う飛鳥・藤原地区発掘調査への援助・助言(7件)
助言の事例
①厳島神社大鳥居修復材料の選定に関する指導助言
厳島神社大鳥居は海中にあることに加え、海風や強い紫外線や太陽光による熱にさらされているため、修復の際にはこれらの条件下で使用することができる材料を選定する必要がある。このために材料の基礎物性の確認や現地での海中浸漬試験などを行っている。

	②根津美術館の改築工事に伴う室内空気汚染対策や文化財害虫対策に関する指導助言 美術館の改築工事に関して、展示室、展示ケース、収蔵庫内の温湿度環境、空気環境等の調査を行い、室内空気汚染対策や文化財害虫対策に関する指導、助言を行った。 ③「宇治の文化的景観」における伝統的建造物の保存に関する計画策定 京都府宇治市の重要的文化景観「宇治の文化的景観」の中核をなす中宇治地区において、現存する伝統的建造物の価値評価とその整備活用に関する計画の策定に関して、宇治市に対する援助・助言を行った。 ④秋田県男鹿市小谷地遺跡出土遺材についての建築史的研究 秋田県男鹿市の小谷地遺跡での発掘調査で出土した奈良時代から平安時代のかけての時期の埋没家屋や堰などに関わる多量の木製部材について、建築構造的な観点からの調査研究の指導・助言を行った。 22年度 **協力・助言の積極的な実施** ・無形文化遺産の保存・伝承・活用に関する助言の実施（26件） ・各種文化財の保存修復に関する指導助言の実施（133件） ・地方公共団体等が行う遺跡、建造物などの調査・整備・修復・保存等に関する援助助言の実施（332件） ・地方公共団体が行う平城京域発掘調査への援助・助言（5件） ・地方公共団体が行う飛鳥・藤原地区発掘調査への援助・助言（6件） 助言の事例 ①厳島神社大鳥居修復材料の選定に関する指導助言 厳島神社大鳥居は海中にあることに加え、海風や強い紫外線や太陽光による熱にさらされているため、修復の際にはこれらの条件下で使用することができる材料を選定する必要がある。このために材料の基礎物性の確認や現地での海中浸漬試験などを行っている。 ②根津美術館の改築工事に伴う室内空気汚染対策や文化財害虫対策に関する指導助言 美術館の改築工事に関して、展示室、展示ケース、収蔵庫内の温湿度環境、空気環境等の調査を行い、室内空気汚染対策や文化財害虫対策に関する指導、助言を行った。 ③「宇治の文化的景観」における伝統的建造物・整備に関する調査研究 京都府宇治市の重要的文化景観「宇治の文化的景観」の中核をなす宇治橋通りの調査を行い、あわせて、宇治市に対する援助・助言を行った。 ④大分県日田市史跡ガランドヤ古墳の保存に関わる調査研究 平成 22 年度は壁画をもつ横穴式石室内の環境変化を追究するための土壌水分の蒸発量を測定するなどの調査を進めるなど、壁画古墳の保存について指導・助言を行った。 【指導・助言件数】（件） 18年度 / 19年度 / 20年度 / 21年度 / 22年度 文化財研究所：496 / 534 / 747 / 482 / 498 **（参考）法人の自己評価**	

	文化財研究所は文化財に関する研究や保存・修復、発掘調査等においてナショナルセンター機能を有しており、地方公共団体等へ文化財の調査に関する援助・助言を実施し、地域における文化財行政に協力することにより、我が国の文化財の保護に貢献している。 中期計画に対して順調に成果を上げている。	

【(小項目)1−7−2】 中核的文化財担当者の研修・若手研究者の育成

【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
ー	A	S	A	A	A

【法人の達成すべき目標】
地方公共団体や大学、研究機関とのネットワークや連携協力体制を構築し、機構が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を図り、我が国全体の文化財の収集・展示、調査・研究の質的向上に寄与すること。また、地方公共団体等の指導者層を主たる対象とする高度な研修事業や、若手研究者の育成に寄与するため実践的な連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成すること。(再掲)

【インプット指標】

(中期目標期間)	H18	H19	H20	H21	H22	計
決算額(百万円)	24	22	22	17	18	103
従事人員数(人)	95	89	90	88	92	454

※決算額は、決算報告書・研修事業費の決算額を計上している。
※従事人員数は2文化財研究所の全常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準(評価指標)

○埋蔵文化財に関する高度な研究成果をもとに、中核となる文化財担当者に、各種の研修を実施するとともに、参加者等に対するアンケート調査で80パーセント以上の満足度が得られるようにしたか。
○連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成に寄与したか。

主な実績

【研修参加者数】(人)

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
埋蔵文化財担当者研修	182	155	170	130	137
保存担当学芸員研修	30	32	29	31	33

※保存担当学芸員研修フォローアップ研修を除く

【埋蔵文化財研修　満足度】指標:中期計画
【保存担当学芸員研修　満足度】指標:中期計画

項目名			第2期中期目標期間中の評価の経年変化					
			18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
			博物館	研究所				
埋蔵文化財研修満足度(80%以上)	文化財研究所	実績	−	100%	100%	100%	100%	100%
		定量的評価	−	A	A	A	A	A
保存担当学芸員研修満足度(80%以上)	文化財研究所	実績	−	100%	100%	100%	97%	100%
		定量的評価	−	A	A	A	A	A

18年度(法人統合前)

(2)埋蔵文化財に関する高度な研究成果をもとに地方公共団体等で中核となる文化財担当者に埋蔵文化財に関する研修、保存科学に関する保存担当学芸員研修を実施する。なお、参加者等に対するアンケート調査を行い、80%以上の満足度が得られるようにする。
また、東京芸術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成に寄与する。

・実施状況

・埋蔵文化財担当者研修
遺跡の発掘調査や保存・整備等に関し、必要な知識と技術の研鑽を図るため、地方公共団体等の埋蔵文化財担当者を対象として、一般研修1課程、専門研修12課程、計13課程の研修を実施し、延べ182名が受講した。
研修受講者全員に対するアンケート調査では、全員から「有意義だった」「役に立った」との回答を得ており、充実した研修が実施できた。
・博物館・美術館等の保存担当学芸員研修
研修は、2週間開催し、参加者は30名であった。総論、文化財材質調査、温湿度管理など、保存環境や生物対策に関する講義と実習、また紙や油絵の修復についての講義でプログラムを構成した。参加者全員が全てのプログラムに出席し、保存担当学芸員研修修了証書が授与された。また、これまでの研修受講生を対象に、最新の保存科学に関する研究成果・知見を講義する「フォローアップ研修」を実施した。
・連携大学院教育　東京芸術大学:システム保存学(保存環境学、修復材料学)
システム保存学教室は保存環境学講座と修復材料学講座の二講座から成っていて、各講座3名ずつ計6名の研究所員が連携教員として文化財保存学分野の大学院生の研究教育指導に当たった。
・京都大学との連携大学院教育
大学院人間・環境学研究科において6名の客員教授・助教授で担当。博士課程で講義を実施した。
・奈良女子大学との連携大学院教育
大学院人間文化研究科において、3名の客員教授・助教授で担当。博士課程で講義を実施した。

(参考)法人の自己評価
埋蔵文化財に関する高度な研究成果をもとに地方公共団体等で中核となる文化財担当者等への研修を上記のとおり実施した。「埋蔵文化財担当者研修」「博物館美術館等の保存担当者研修」については、受講者の満足度は100%であり、充実した研修であったと評価できる。また、連携大学院教育にも積極的に参画し、研究現場の新しい情報により、若手研究者の育成に寄与したことも評価できる。各プロジェクトの実施状況等については、「定性的評価」「定量的評価」とも中期計画どおり、または中期計画を上回って履行できたことから、中期目標に向けての実施状況は「順調」と判断する。

19−22年度(法人統合後)

19年度
埋蔵文化財研修の実施
・一般課程1課程、専門課程13課程、計14課程の実施(170名参加)
保存担当者研修の実施
・1回29名の参加者を得て実施、その後「保存担当学芸員フォローアップ研修」を実施(65名の参加)
大学院教育の推進(連携大学院)
・東京芸術大学:システム保存学(文化財保存学演習、保存環境計画論、修復材料学特論等)
・京都大学大学院人間・環境学研究科:共生文明学(文化財調査法論、環境考古学論等)
・奈良女子大学大学院人間文化研究科:比較文化学(日本考古学の諸問題、歴史考古学特論等)

分析・評価

○地方公共団体等の埋蔵文化財担当者や保存担当学芸員並びに大学院生を対象に、中期計画に基づき順調に研究者の育成に努めていると認められる。
特に保存担当学芸員や埋蔵文化財の研修会は、中期目標期間中ほぼ100%の満足度が得られており評価できる。
次期中期目標期間においても、将来の文化財保護行政や文化財の調査研究を担う若手研究者の育成に寄与するため、研修事業の継続が望まれる。

	20 年度 **埋蔵文化財研修の実施** ・一般課程1課程、専門課程13課程、計14課程の実施（170名参加） **保存担当者研修の実施** ・1回29名の参加者を得て実施、その後「保存担当学芸員フォローアップ研修」を実施（65名の参加） **大学院教育の推進（連携大学院）** ・東京芸術大学：システム保存学（文化財保存学演習、保存環境計画論、修復材料学特論等） ・京都大学大学院人間・環境学研究科：共生文明学（遺跡調査法論、環境考古学論等） ・奈良女子大学大学院人間文化研究科：比較文化学（日本考古学の諸問題、歴史考古学特論等） 21年度 **埋蔵文化財研修の実施** ・専門課程12課程の実施（130名参加） **保存担当者研修の実施** ・1回31名の参加者を得て実施、その後「保存担当学芸員フォローアップ研修」（参加者69名）を実施 **大学院教育の推進（連携大学院）** ・東京芸術大学：システム保存学（文化財保存学演習、保存環境計画論、修復材料学特論等） ・京都大学大学院人間・環境学研究科：共生文明学（遺跡調査法論、環境考古学論等） ・奈良女子大学大学院人間文化研究科：比較文化学（日本考古学の諸問題、歴史考古学特論等） 22 年度 ・東京芸術大学：システム保存学（保存環境学、修復材料学等） ・京都大学大学院人間・環境学研究科：共生文明学（文化・地域環境論等） ・奈良女子大学大学院人間文化研究科：比較文化学（文化史論等） **（参考）法人の自己評価** 地方公共団体の文化財担当者や博物館・美術館の保存担当学芸員、東京藝術大学・京都大学等の大学院学生を対象に、文化財の調査研究や保護について研修を実施することにより、将来的な文化財保護行政を担う人材の育成を図ることができていると考える。保存担当学芸員研修、埋蔵文化財担当者研修はともに満足度も高く、有意義な研修を行えている。 中期計画に対して順調に成果を上げている。	

【（大項目）2】	Ⅲ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
A	A	A	A	A	A

【（小項目）2－1】	業務の効率化	【評定】 A

【法人の達成すべき目標】
法人統合のメリットも最大限に生かし、業務の充実かつ効率化を図るとともに、事務、事業、組織等の見直し、外部委託の推進等により、経費の合理化を図ること。
運営費交付金を充当して行う業務については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、特殊業務経費を除き、5年間で一般管理費は15%以上、業務経費は5%以上の削減を図ること。
また、「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」（平成18年法律第47号）に基づき、平成18年度以降の5年間において国家公務員に準じた人件費削減を行うとともに、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行う。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」（平成18年7月7日閣議決定）に基づき、国家公務員の改革を踏まえ、人件費改革を平成23年度まで継続すること。
さらに、機構の業務運営に際しては、一般管理業務の本部への一元化、集約化等を図り、統合後5年間で、19年度一般管理費（物件費）の10%相当の経費を5年間で削減を図ること。

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
A	(A)	A	B	A	A

評価基準（評価指標）	主な実績	分析・評価

○中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き5年期間中一般管理費 15%以上、業務経費５%以上の業務の効率化を図ったか。
○省エネルギー5年期間中、1年に1.03%減少を図ったか。
○施設の有効利用の推進を図ったか。
○民間委託の推進を図ったか。
○競争入札の推進を図ったか。
○保有固定資産の活用状況について、減損会計の情報（保有目的、利用実績など）を考慮し、十分な推進を図ったか。
○官民競争入札等の推進を図ったか。

項目名		第2期中期目標期間中の評価の経年変化（対前年度比）					
		18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
		博物館	研究所				
一般管理経費効率化率（中期期間中15%以上）	目標値	*△3.2%*	*△3.0%*	*△3.2%*	*△3.2%*	*△3.2%*	*△3.2%*
	実績	△3.2%	△4.01%	△7.49%	0.93% (△4.07%)	△9.11%	△5.53%
	定量的評価	A	A	A	C (A)	S	S
業務経費効率化率（中期期間中5%以上）	目標値	*△1.03%*	*△1.0%*	*△1.03%*	*△1.03%*	*△1.03%*	*△1.03%*
	実績	△1.03%	△1.19%	7.74% (△6.06%)	△6.95%	11.04% (△1.17%)	7.61% (△6.05%)
	定量的評価	A	A	C (A)	A	C (A)	C (S)
省エネルギー（△1.03%以上）	実績	－	－	1.6%	8.34% (△2.30%)	△15.08% (△8.77%)	△4.24%
	定量的評価	－	－	C	C (A)	S	S

○中期目標期間における、光熱水料の削減については、概ね達成していると認められる。一部コスト増はあるが、大規模展覧会等の来館者数の増大や外部要因である原油価格等の高騰のためであり、特に問題ないと判断できる。
一般廃棄物排出量も臨時要因を除くと目標を達成しており、リサイクルは推進されていると認められる。
民間委託については、着実に推進していると判断できるが、今後は、民間委託が人件費・経費の削減や業務の効率化にどれだけ資す

法人統合による一般管理費の削減（統合後5年間中10%以上）	目標値	－	－	△2.09%	△2.09%	△2.09%	△2.09%
	実績	－	－	△4.96%	△1.52% (△6.95%)	△9.13%	△12.58 (△6.47%)
	定量的評価	－	－	A	C (A)	S	S (S)

※下段括弧内は、臨時要因を除いた場合の率

(参考)法人の自己評価

一般管理費については、退職手当を除くと、中期目標期間中△15%以上の削減目標に対して、△38．84%削減し、また、業務経費についても△5%以上の削減に対して、△5．05%の削減とそれぞれ達成できたと評価できる。

省エネルギー(水道光熱費)については、年△1．03%以上の目標に対して、特別展の入場者急増や原油価格等の高騰により達成できない年度もあったが、このような臨時要因を除くと、冷暖房の省エネ運転やより効率の良い空調機器への交換等により、概ね達成できたと評価できる。

公共サービス改革基本方針(19年12月)に基づき、民間委託の推進に関しては、東京国立博物館及び東京文化財研究所の施設･管理運営業務及び来館者応対等業務について、民間競争入札を実施し、民間委託を実施したところである。

随意契約については、契約監視委員会による審議を 21 年度契約分から実施しており、文化財の購入といった随意契約をせざるを得ない契約を除き、競争性のある契約への移行を進め、契約総数に占める随意契約の契約件数及び金額共に減少させており、引き続き契約の適正化にむけて見直しを進めていく。

契約の公表については、国立文化財機構契約情報公表要項に基づき、20 年 4 月 1 日以降の競争契約及び随意契約に関する情報を当機構 WEB サイトに公開し、公表に努めている。

自己収入については、20 年度に入場料収入(共催展を除く)及びその他収入について、1．16%の増大、寄附金件数を226件及び科学研究費補助金件数76件という目標を設定し、21･22年度ともに達成した。

業務の一元化による業務の効率化については、給与システム･会計システムの導入やグループウェアの統一化による業務の効率化を図ったところである。

中期計画に対して順調に成果を上げている。

【一般管理費の削減状況】
・ 中期目標期間中の一般管理費の削減は順調に進められたか。

【一般管理費の削減状況】

	実績	削減割合
一般管理経費		
17 年度	2,662,291 千円	－
22 年度	1,628,154 千円	△38.84%

・17 年度は、国立博物館と文化財研究所の合計額。
・一般管理経費の決算報告書決算額(退職手当を除く)。
17 年度:2,794,634 千円－132,343 千円(退職手当)＝2,662,291 千円
22 年度:1,722,647 千円－ 94,493 千円(退職手当)＝1,628,154 千円

○中期目標期間中、一般管理費の削減は順調に進められ、目標を大幅に上回る 38.84%の削減がなされたと認められる。

【事業費の削減状況】
・ 中期目標期間中の事業費の削減は順調に進められたか。

【事業費の削減状況】

	実績	削減割合
業務経費		
17 年度	8,244,052 千円	－
22 年度	7,827,597 千円	△5.05%

・17 年度は、国立博物館と文化財研究所の合計額。
・業務経費の決算報告書決算額(退職手当･臨時要因を除く)。
17 年度:9,508,168 千円－165,462 千円(退職手当)－1,068,666 千円(臨時要因(前年度からの繰越))－29,988 千円(臨時要因(デジタルアーカイブ経費))＝8,244,052 千円
22 年度:9,287,450 千円－130,215 千円(退職手当)－1,179,193 千円(臨時要因(前年度からの繰越))－6,437 千円(臨時要因(京都国立博物館北収蔵庫収蔵品運搬等))－144,008 千円(臨時要因(東京文化財研究所研究機器整備))＝7,827,597 千円

○中期目標期間中、事業費の削減は順調に進められ、目標を上回る5.05%の削減がなされ、業務の効率化が進められたと認められる。

ただし、機構の果たすべき社会的な役割を前提にすれば、事業費の削減は見直すべきと考える。

■光熱水料

光熱水料金 (単位:千円)

事項	17 年度	22 年度	差額
電気料	432,382	350,947	△81,435
水道料	88,109	79,777	△8,332
ガス料	101,112	90,428(※)	△10,684
計	621,603	521,152	△100,451 (17 年度比 △16.2%)

※22年度のガス料は、臨時要因を考慮した使用料である。
・光熱水料について、平成17年度比△16．2%と目標を達成することができた。

(1)平成22年度のガス料の臨時要因内容

(単位:千円)

事項	21 年度	22 年度	差額
ガス料(※1)	92,510	98,213	5,703

※ガスは、使用量ベースでは減少したが、原料高騰による単価上昇により使用料金ベースで増額となった。

(※1)ガス使用料

事項	21 年度(㎥)	22 年度(㎥)	差引(㎥)	単価影響額(千円)
ガス使用料	1,521,140	1,475,110	△46,030	7,785

(2)臨時要因を考慮したガス料金 (単位:千円)

事項	21 年度	22 年度	差額
ガス料	92,510	90,428	△2,082

※ガス単価上昇等を勘案して算定。

■廃棄物排出量

事項	18 年度	22 年度	増減率(%)

一般廃棄物	244,997 kg	※223,207 kg	△21,790 kg （18 年度比 △8.9%）

※22年度の排出量は、臨時要因を考慮した排出量である。（273,407－50,200＝223,207）

・廃棄物については、平成22年度末で平成18年度比△8.9%となっており、平成23年度までの5年間で5%削減する目標は、順調に達成してきている。

・平成22年度 一般廃棄物増加の臨時要因内容　（単位：kg）

施設	内容	排出量
奈良国立博物館	西新館耐震改修工事等に伴う増加	47,500
奈良文化財研究所	平城遷都1300年祭関連行事に伴う増加	2,700
計		50,200

・施設の有効利用

■施設の有効利用件数（有償利用件数）

年度	合計	東博	京博	奈良博	九博	東文研	奈文研
18	1,415 件 （554 件）	751 件 （233 件）	101 件 （34 件）	304 件 （199 件）	259 件 （88 件）	－ －	－ －
19	3,358 件 （541 件）	885 件 （350 件）	56 件 （30 件）	122 件 （18 件）	188 件 （28 件）	266 件 （40 件）	1,841 件 （75 件）
20	3,127 件 （427 件）	574 件 （238 件）	57 件 （29 件）	84 件 （23 件）	193 件 （45 件）	140 件 （21 件）	2,079 件 （71 件）
21	2,074 件 （431 件）	341 件 （262 件）	35 件 （26 件）	59 件 （21 件）	250 件 （69 件）	178 件 （13 件）	1,211 件 （40 件）
22	2,749 件 （524 件）	538 件 （256 件）	59 件 （44 件）	146 件 （31 件）	321 件 （76 件）	196 件 （12 件）	1,489 件 （105 件）

※上段：有効利用件数　下段：（有償利用件数）
※19 年度の統合後から研究所も実績をカウントした。

■固定資産の減損

・平成18年度電話加入権について市場価格の著しい下落のため、国立博物館 4,914 千円のうち 2,344 千円、文化財研究所 5,104 千円のうち 2,424 千円の減損損失を計上。

・平成 20 年度京都国立博物館旧平常展示館閉館のため、102,356 千円の減損損失を計上。（旧平常展示館は平成 21 年に取壊し）

・民間委託の推進

全ての施設において、電気設備保守業務、機械設備保守業務、昇降機設備保守業務、売札業務、各種事務補助作業、清掃業務、構内樹木等維持管理業務等について、民間委託を実施している。

博物館は、警備・展示室監視等業務の大部分を外部委託している。また、研究所は警備業務を外部委託している。

博物館の来館者サービスに関しては、インフォメーション業務、図書・写真資料を閲覧等の利用に

	供するサービス及び図書整理業務等について民間委託を実施している。 東京国立博物館・東京文化財研究所で施設管理・運営業務（展示等の企画運営は除く）については平成 21 年 10 月 1 日に民間競争入札を実施済みであるが、さらに平成 22 年 4 月 1 日から東京国立博物館では展示場における来館者応対等業務についても民間競争入札による業務を実施した。	
【契約の競争性、透明性の確保】 ・ 契約方式等、契約に係る規程類について、整備・運用は適切に行われたか。	【契約に係る規程類の整備及び運用状況】 （1）契約に係る規程類 ①独立行政法人国立文化財機構会計規程 ②独立行政法人国立文化財機構会計規程の特例を定める規程 ③独立行政法人国立文化財機構契約事務取扱細則 ④独立行政法人国立文化財機構契約情報公表要項 ⑤契約情報公表に必要な事項に関する取扱 ⑥独立行政法人国立文化財機構修理契約委員会要項 ⑦独立行政法人国立文化財機構契約監視委員会要項 ⑧調査の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式 ⑨研究開発の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式 ⑩広報の業務委託に関する入札に係る総合評価落札方式 ⑪独立行政法人国立文化財機構における「企画競争・公募」ならびに「総合評価落札方式」に関するマニュアルについて （2）国の契約基準と異なる規程の有無 「独立行政法人等における適正化について（通知）」（平成20年12月31日付、20文科会第583号）を受け、国と同様の契約基準としたため、国の契約基準と異なる規程はない。	○中期目標期間において、契約方式、契約に係る規程類が整備されるとともに、「契約監視委員会要項」に則り、随意契約等の見直し状況を点検する等、適切に運用されている。
・ 契約事務手続に係る執行体制や審査体制について、整備・執行等は適切に行われたか。	【契約事務手続に係る執行体制及び審査体制の整備・執行状況】 【執行体制】 ・法人内の役職別契約従事者数（施設系職員は含まない） 本部事務局　財務担当室長1名、係員1名 東京国立博物館　経理課室長1名、契約担当係　係長1名、主任・係員3名（本部事務局職員兼務） 京都国立博物館　課長補佐1名、財務担当係　係長1名、主任・係員3名 奈良国立博物館　財務担当係　係長1名、係員2名 九州国立博物館　課長補佐1名、財務担当係　係長1名、主任2名 東京文化財研究所　管理室長1名、契約担当専門職員1名 奈良文化財研究所　課長補佐1名、会見担当係　係長1名、用度担当係　係長1名、係員1名 【審査体制】 （1）内部のチェック体制 各施設に分任契約担当役を設置し、各施設において契約処理ならびに適正な契約が行われて	○また、各施設の契約については、契約に係る書類等を監事監査ならびに内部監査によりチェックする等、審査体制を整備しつつ適切に契約事務手続きが行われていると認められる。

	いるかをチェックする体制を整備している。特に随意契約の場合、契約が適正かを十分に精査し、契約を行うよう本部から指導の徹底を行っている。 (2)内部でのチェック対象案件の抽出方法 各施設において契約された契約のうち、契約金額や案件等から抽出した契約にかかる書類等を監事監査ならびに内部監査においてチェックを実施し、適正な契約処理が行われているか等の確認を実施している。 【契約監視委員会の設置】 (1)設置年度 平成21年度 (2)実施回数 平成21年度 2回、平成22年度 2回	
【随意契約等見直し計画】 ・ 中期目標期間における「随意契約等見直し計画」は順調に実施・進捗したか。また、目標達成に向けた具体的取組は適切に行われたか。	【随意契約等見直し計画の実績と具体的取組】 (下表)	○中期目標期間における随意契約については、契約監視委員会による審議を経て見直しを行い、文化財の購入等、随意契約をせざるを得ない契約を除き、見直し計画に沿って競争性のある契約へ移行を進めていると認められ、適切に取り組みがなされている。 なお、競争性のない随意契約が見直し計画に比して件数で 35 件、金額で 1,062,005 千円未達成の状況であるが、これは見直し時に比べ随意契約をせざるを得ない文化財購入が 15 件、金額で 989,646 千円増えているためである。

	①平成 20 年度実績		②見直し計画（H22 年 4 月公表）		③平成 22 年度実績		②と③の比較増減（見直し計画の進捗状況）	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
競争性のある契約	164	1,968,416	235	2,334,578	210	2,099,703	△25	△234,875
競争入札	142	1,718,996	199	2,009,789	158	1,816,224	△41	△193,565
企画競争、公募等	22	249,420	36	324,789	52	283,479	16	△41,310
競争性のない随意契約	152	1,469,766	81	1,103,603	116	2,165,608	35	1,062,005
合計	316	3,438,181	316	3,438,181	326	4,265,311	10	827,130

【原因、改善方策】
競争性のない随意契約が見直し計画に比して件数で35件、金額で1，062，005千円未達成の状況であるが、これは見直し時に比べ文化財購入が 15 件、989,646 千円増えているなどのためである。
・見直し時
文化財購入 30 件 766,294 千円
・平成22年度実績
文化財購入 45 件 1,755,940 千円

【再委託の有無と適切性】
当法人においては、再委託の実績はない。

【中期目標期間における個々の契約の競争性、透明性の確保】 ・ 個々の契約について、競争性・透明性の	【一者応札・応募の状況】 (下表)	○中期目標期間における契約の競争性、透明性の確保については、

	①平成 20 年度実績		②平成 22 年度実績		①と②の比較増減	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
競争性のある契約	164	1,968,416	217	2,144,321	53	175,905

確保の観点から、適切な検証が行われたか。	(下表)	特に問題はないと判断できる。 一者応札・応募は、件数、金額ともに増加しているが、文化財修理契約における企画競争が増加したことが主たる要因である。これは特定の技術を持った修理業者を対象に企画競争を行っており、応募者数が少ないためである。 文化財保護の観点から契約条件の見直しは難しいため、適切な公告期間を確保し、企画競争への参加促進を図る等、適切な措置がとられていると認められる。

		①平成 20 年度実績		②平成 22 年度実績		①と②の比較増減	
		件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
うち、一者応札・応募となった契約		65	738,860	87	783,429	22	44,569
	一般競争契約	55	531,498	47	581,699	△8	50,201
	指名競争契約	0	0	0	0	0	0
	企画競争	4	61,445	23	86,212	19	24,767
	公募	6	145,917	10	70,900	4	△75,017
不落随意契約		0	0	7	44,618	7	44,618

【原因、改善方策】
一者応募の増加は、文化財修理契約における企画競争が見直し時に比べ、20 件・53,436 千円増加したことが主たる要因となっている。
文化財修理は、見直し時に一部を随意契約から企画競争へと移行したものであり、外部有識者を含めた修理契約委員会に諮った上で、特定の技術を持った修理業者を対象に企画競争を行っているが、応募者数が少ない案件も存在するため、一者応募が見直し時に比べて増えた要因となっている。
文化財保護の観点から契約条件の見直しは難しいため、適切な公告期間を確保し、企画競争への参加促進を図っている。

【一般競争入札における制限的な応札条件の有無と適切性】
一般競争入札において、制限的な応札条件を設けていない。

【関連法人】 ・ 法人の特定の業務を独占的に受託している関連法人について、当該法人と関連法人との関係が具体的に明らかにされているか。 ・ 当該関連法人との業務委託の妥当性について検証されているか。 ・ 関連法人に対する出資、出えん、負担金等（以下「出資等」という。）について、法人の政策目的を踏まえた出資等の必要性が検証されているか。	【関連法人の有無】 該当なし 【当該法人との関係】 【当該法人に対する業務委託の妥当性】 【当該法人への出資等の必要性】	○関連法人はない。

【(小項目)2−2】	外部評価等の実施

【評定】

A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所	B	A	A	A
A	(A)				

【法人の達成すべき目標】

法人統合のメリットも最大限に生かし、業務の充実かつ効率化を図るとともに、事務、事業、組織等の見直し、外部委託の推進等により、経費の合理化を図ること。

運営費交付金を充当して行う業務については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、特殊業務経費を除き、5年間で一般管理費は15%以上、業務経費は5%以上の削減を図ること。

また、「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」(平成18年法律第47号)に基づき、平成18年度以降の5年間において国家公務員に準じた人件費削減を行うとともに、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行う。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」(平成18年7月7日閣議決定)に基づき、国家公務員の改革を踏まえ、人件費改革を平成23年度まで継続すること。

さらに、機構の業務運営に際しては、一般管理業務の本部への一元化、集約化等を図り、統合後5年間で、19年度一般管理費(物件費)の10%相当の経費を5年間で削減を図ること。(再掲)

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○事務事業改善のための外部評価及び職員の研修を実施したか。 ○コンプライアンス体制(倫理行動規程の策定、第三者を入れた倫理委員会等の設置、監事による内部統制についての評価の実施)を整備したか。	**18年度(法人統合前)** 博物館 **事業評価** ・実績報告書作成時の自己点検評価の実施(年1回) ・外部評価委員会の開催(年2回)及び外部評価報告の実施(年1回) ・監事による業務監査の実施(年1回) ・文部科学省独立行政法人評価委員会美術館・博物館部会による評価 ・総務省独立行政法人評価委員会による評価 **職員の意識改革** ・税金に関する研修会の実施(本部・東京) ・監事による講演会「博物館の運営における原価意識について」の実施(奈良) ・館内職員を集めた業務改善プロジェクトの実施(東京) 研究所 ・昨年度の評価を、法人運営に反映させるとともに、評価手続きのあり方についての反省点等を踏まえ、効率的かつ効果的な自己点検評価を実施するため、自己点検の評価方法及び様式等の一部を変更するとともに、自己点検評価外部評価委員のヒアリングの方法等についても見直しを行い、平成18年度の自己点検評価を行うこととした。 ――――――――――――――――――――――――――――― **19−22年度(法人統合後)** 19年度 **事業評価** ・実績報告書作成時の自己点検評価の実施(年1回) ・外部評価委員会の開催及び外部評価報告の実施	○中期目標期間を通して、外部評価及び職員研修が計画的に実施され、コンプライアンス体制と内部統制の整備と併せた、確実な進展が見られる。特に、内部統制・コンプライアンスについては、各種規程の整備を着実に進める等、法人としての意識の高さが認められる。

	平成18年度の外部評価報告で、専門分野ごとの組織のない機能別に再編成された組織での学芸部門における専門性の継承について指摘があったことを踏まえ、平成19年度に委員会を立ち上げ、平成20年4月に組織を改編した。 ・監事による業務・会計監査の実施(年1回) ・文部科学省独立行政法人評価委員会国立文化財機構部会による評価 ・総務省独立行政法人評価委員会による評価 ・博物館における評価を「実績報告」から「自己点検評価」へ改め、「評価」システムを明確化 ・監事による定期監事監査(1回)及び各施設の実地監査(各施設1回)を実施した。 ・接遇研修会、普通救命講習会、AED操作講習会等の研修を実施 **職員の意識改革** ・18年度に実施した業務改善プロジェクトの結果を踏まえ、20年4月に組織改革を実施(東博) **コンプライアンス体制の維持** ・競争的資金による公的研究費の管理体制(不正防止計画管理部署の設置、監査体制の整備、検収窓口の設置等)について規則を整備 ・研究員の行動規範について規則を整備 ・情報システム管理規程を制定し、情報セキュリティ体制整備の準備を行った。 ・随意契約見直し計画の制定、実施及び随意契約情報、競争契約情報の公開 **内部統制の整備** 従来より、研究職員の採用については公募により、委員会方式で選考し、収蔵品購入については外部委員による委員会の意見を聞いて、購入の是非、価格を決定するなど、体制を整備し、適正な執行に努めているところであるが、パワハラに関する規則等が未整備であったので、ハラスメント全般に関する規則として19年度に制定した。 20年度 **事業評価** ・実績報告書作成時の自己点検評価の実施(年1回) ・外部評価委員会の開催及び外部評価報告の実施 機構の外部評価委員会は、機構の行った自己点検評価について評価を行うことを任務として設置しており、現在14名で構成されている。委員会には、総会と別に博物館調査研究等部会及び研究所調査研究等部会が置かれ、機構の調査研究等の実績に関する評価について特に専門的な立場で評価を行い、委員会に報告することになっている。(20年度の外部評価については21年4〜5月に実施済(研究所調査研究等部会・博物館調査研究等部会、総会(各1回)。) ・監事による業務・会計監査の実施(年1回) ・文部科学省独立行政法人評価委員会国立文化財機構部会による評価 ・総務省独立行政法人評価委員会による評価 ・監事による各施設の臨時監査(計3回)を実施した。	

	東京国立博物館（21年2月16日）、九州国立博物館（21年3月5,6日）、 奈良文化財研究所（21年1月26日,27日） ・接遇研修会、普通救命講習会、AED操作講習会等の研修を実施 **職員の意識改革** ・運営改善コンクールを実施（39件の応募中入選4件）。職員の運営の向上、職員の意識改善を図った。 **コンプライアンス体制の維持、内部統制の整備** ・「独立行政法人国立文化財機構職員倫理規程」及び「独立行政法人国立文化財機構役員の倫理に関する取り扱い」等を策定し、転任者も対象とした初任者研修時に説明を行い、職員の意識改善を図っている。 ・いままで各施設での制定等で運用していた「文化財購入に関する手続き」等の規定について、機構全体として透明性を図る観点から、統一した規定として整備した。 「独立行政法人国立文化財機構有形文化財の収集等に関する規程」 「独立行政法人国立文化財機構修理契約委員会要項」 公募・企画競争に係る手続き等に関する標準マニュアル ・決算業務については、決算作業開始を早期化し 20 年末に決算準備を開始するとともに、詳細な決算スケジュールを作成し、決算に必要となる資料・データについて各施設に周知することにより、20 年度決算は予定どおり順調に完了することができた。 ・文化庁からの「研究機関における公的研究費の適正な執行等のための取組の徹底について（通知）」に基づき機構職員及び取引業者のうち調査対象者について公的研究費の適正な執行等のための取組の調査を行った。（20年9月） ＜調査結果＞ 職員（公的研究費に係わる事務職員及び全学芸系・研究系職員を対象） ：預け金・プール金の有無　該当なし 取引業者（上位10社または50万円以上の取引を行った業者のいずれか少ない数の業者を対象） ：預け金の有無　該当なし ・本部及び各施設において内部監査を実施した。会計監査では科学研究費補助金等を監査し、給与簿監査では出勤簿等について全般的な監査をした。 ・専任の経理課室長を新たに配置し、契約業務等の体制を強化した。 ・会計監査人による財務諸表に関する監査を実施し、特に改善を要する指摘はなかった。 ・監事の定期監査においては、「内部統制の確保を図るための体制の整備状況」について監査を重点的に実施し、具体的には規定の整備状況、内部監査の実施状況等について監査を行い、特に改善を要する指摘はなかった。 21 年度 ・実績報告書作成時の自己点検評価の実施（年1回） ・外部評価委員会の開催及び外部評価報告の実施	

	機構の外部評価委員会は、機構の行った自己点検評価について評価を行うことを任務として設置しており、現在 14 名で構成されている。委員会には、総会と別に博物館調査研究等部会及び研究所調査研究等部会が置かれ、機構の調査研究等の実績に関する評価について特に専門的な立場で評価を行い、委員会に報告することになっている。（20 年度の外部評価については 21 年4～5月に実施済（研究所調査研究等部会・博物館調査研究等部会、総会（各1回）。） ・監事による業務・会計監査の実施（年1回） ・文部科学省独立行政法人評価委員会国立文化財機構部会による評価 ・総務省独立行政法人評価委員会による評価 ・監事による各施設の臨時監査（計3回）を実施した。 東京国立博物館（21年2月16日） 奈良文化財研究所（21年1月26日,27日） ・接遇研修会、普通救命講習会、AED操作講習会等の研修を実施 **職員の意識改革** ・運営改善コンクールを実施（39件の応募中入選4件）。職員の運営の向上、職員の意識改善を図った。 **コンプライアンス体制の維持、内部統制の整備** ・「独立行政法人国立文化財機構職員倫理規程」及び「独立行政法人国立文化財機構役員の倫理に関する取り扱い」等を策定し、転任者も対象とした初任者研修時に説明を行い、職員の意識改善を図っている。 ・いままで各施設での制定等で運用していた「文化財購入に関する手続き」等の規定について、機構全体として透明性を図る観点から、統一した規定として整備した。 「独立行政法人国立文化財機構有形文化財の収集等に関する規程」 「独立行政法人国立文化財機構修理契約委員会要項」 公募・企画競争に係る手続き等に関する標準マニュアル ・決算業務については、決算作業開始を早期化し 20 年末に決算準備を開始するとともに、詳細な決算スケジュールを作成し、決算に必要となる資料・データについて各施設に周知することにより、20 年度決算は予定どおり順調に完了することができた。 ・文化庁からの「研究機関における公的研究費の適正な執行等のための取組の徹底について（通知）」に基づき機構職員及び取引業者のうち調査対象者について公的研究費の適正な執行等のための取組の調査を行った。（20年9月） ＜調査結果＞ 職員（公的研究費に係わる事務職員及び全学芸系・研究系職員を対象） ：預け金・プール金の有無　該当なし 取引業者（上位10社または50万円以上の取引を行った業者のいずれか少ない数の業者を対象） ：預け金の有無　該当なし ・本部及び各施設において内部監査を実施した。会計監査では科学研究費補助金等を監査し、	

給与簿監査では出勤簿等について全般的な監査をした。
・専任の経理課室長を新たに配置し、契約業務等の体制を強化した。
・会計監査人による財務諸表に関する監査を実施し、特に改善を要する指摘はなかった。
・監事の定期監査においては、「内部統制の確保を図るための体制の整備状況」について監査を重点的に実施し、具体的には規定の整備状況、内部監査の実施状況等について監査を行い、特に改善を要する指摘はなかった。

22 年度
・実績報告書作成時の自己点検評価の実施（年１回）
・外部評価委員会の開催及び外部評価報告の実施
　機構の外部評価委員会は、機構の行った自己点検評価について評価を行うことを任務として設置しており、現在13名で構成されている。委員会には、総会と別に博物館調査研究等部会及び研究所調査研究等部会が置かれ、機構の調査研究等の実績に関する評価について特に専門的な立場で評価を行い、委員会に報告することになっている。（22年度の外部評価については23年4～5月に実施済（研究所調査研究等部会・博物館調査研究等部会、総会（各1回））
・監事による業務・会計監査の実施（年１回）
・文部科学省独立行政法人評価委員会国立文化財機構部会による評価
・総務省独立行政法人評価委員会による評価
・監事による各施設の臨時監査（計5回）を実施した。
　法人本部（23年1月14,21日）、東京国立博物館（23年1月14,3月4日）、京都国立博物館（23年2月18日）、東京文化財研究所（23年2月10日）、九州国立博物館　（23年3月17日）

・職員の資質の向上と能力開発の推進を図るため、本部事務局及び各施設において次のとおり研修等を実施した。

主催	研修等
本部事務局・東京国立博物館	新任職員研修、接遇研修、個人情報保護講演会、産業医による講習会、接遇（顧客対応）研修、施設系職員研修、ハラスメントに関する講演会及び研修会、防災訓練
京都国立博物館	衛生管理講習会、普通救命講習会、マナー講習会、クレーム講習会、初期消火活動講習
奈良国立博物館	防災訓練、産業医による講習会、セクシュアルハラスメントに関する講習会
九州国立博物館	研究費の管理・監査体制及び会計手続き説明会、防災訓練、ハラスメント防止研修、産業医による講話
東京文化財研究所	個人情報保護講演会※1、産業医による講習会※2、消防訓練およびAED操作講習会（※1、2は東博との共催）
奈良文化財研究所	新人研修、産業医による講習会２回、消防訓練

職員の意識改革

・20年度運営改善コンクールにおいて採択された案件についてフォローアップを行った。
・東京国立博物館では「独立行政法人国立文化財機構保有個人情報管理規程」に基づき実施された保有個人情報の管理状況監査における監事からの指示より、個人情報を扱う業務について、確実な取扱いを行うための再点検を行った。

コンプライアンス体制の維持、内部統制の整備
・「独立行政法人国立文化財機構職員倫理規程」及び「独立行政法人国立文化財機構役員の倫理に関する取り扱い」等を策定し、転任者も対象とした初任者研修時に説明を行い、職員の意識改善を図っている。
・「独立行政法人の契約状況の点検・見直しについて」（平成 21 年 11 月 17 日閣議決定）に基づき、「独立行政法人国立文化財機構契約監視委員会要項」を制定し、外部委員も含めた契約監視委員会を設置して、随意契約の点検等を行っている。
・決算業務については、決算作業開始を早期化し 22 年末に決算準備を開始するとともに、詳細な決算スケジュールを作成し、決算に必要となる資料・データについて各施設に周知することにより、22 年度決算は予定どおり順調に完了することができた。
・本部及び各施設において内部監査を実施し、随意契約の見直し状況及び一者応札の改善方策を含めて監査を行った。会計監査では科学研究費補助金等を監査し、給与簿監査では出勤簿等について全般的な監査をした。
・会計監査人による財務諸表に関する監査を実施し、特に改善を要する指摘はなかった。
・監事の定期監査においては、規定の整備状況、内部監査の実施状況等について監査を行い、特に改善を要する指摘はなかった。
・22年度は「独立行政法人国立文化財機構保有個人情報管理規程」に基づき、本部事務局及び各施設における保有個人情報の管理状況について保有個人情報管理監査を行った。

（参考）法人の自己評価
　外部評価については博物館と研究所でそれぞれ別個に行ってきた評価の統一を図り、「自己点検評価」を明確に位置づけ、評価システムを明確化することができた。
　職員の研修については職員の資質の向上と能力開発の推進を図るため、本部事務局及び各施設において新任職員研修を始め、各種研修等を実施した。
　コンプライアンス体制の整備に関しては、整備された規程等を踏まえ、継続的に対処し透明性の確保に努めている。
　中期計画に対して順調に成果を上げている。

【内部統制の取組】
・ 内部統制（業務の有効性・効率性、法令等の遵守、資産の保全、財務報告等の信頼性）に係る取組についての評価が行われているか。

【業務の有効性・効率性に係る取組】
・各年度の主な実績のとおり個別法により規定されている当該法人の設置目的を果たすことに努めた。

【法令等の遵守に係る取組】
・各年度の主な実績のとおり法令の遵守に係る取組を行っている。
【資産の保全に係る取組】

○中期目標期間を通して、自己点検評価等を実施し、事業改善に努力していると評価できる。
　また、コンプライアンス及び資産保全については、規程に基づいた手続きが行われ、有効に機能していると評

	・国立文化財機構の重要な資産である文化財の取得については、独立行政法人国立文化財機構有形文化財の収集等に関する規程等において、購入する場合、寄贈を受ける場合等について、所定の手続きに基づき取得することを定めている。 資産の使用・処分等については、資産の種類別に施設管理規程、固定資産管理規程、列品管理規程等が定められており、適正な手続きに基づいて実施している。 ・機構各施設の土地・建物は全て展示館、研究施設、事務所、収蔵庫等として使用されており、遊休資産はない。 ・資産の有効利用については、各施設で定める建物使用規則、建物等の撮影に関する要項(部外者の利用手続きを定めた規則)に基づき、ホームページ等に利用案内を掲出し、積極的な利用に努めている。 ・収蔵品の画像については、画像等利用に係る規則を定めて商用利用のための一連の業務を外部委託により実施しており、自己収入獲得の面からも重要なものとなっている。 【財務報告等の信頼性の確保に係る取組】 ・財務報告等は、機構の役員会の承認、監事による監査、監査法人の監査による承認を経ることにより、十分な信頼性を確保している。	価できる。 さらに、監事監査、内部監査等が十分に行われており、財務報告の信頼性も確保されている。 次期中期目標期間においても、業務の有効性及び効率性、財務報告の信頼性、事業活動に関わる法令等の遵守並びに資産の保全に努めることが望まれる。

【(小項目)2－3】	情報の安全向上

【評定】

A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
A	―	A	A	A	A

【法人の達成すべき目標】
法人統合のメリットも最大限に生かし、業務の充実かつ効率化を図るとともに、事務、事業、組織等の見直し、外部委託の推進等により、経費の合理化を図ること。
運営費交付金を充当して行う業務については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、特殊業務経費を除き、5年間で一般管理費は15%以上、業務経費は5%以上の削減を図ること。
また、「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」(平成18年法律第47号)に基づき、平成18年度以降の5年間において国家公務員に準じた人件費削減を行うとともに、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行う。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」(平成18年7月7日閣議決定)に基づき、国家公務員の改革を踏まえ、人件費改革を平成23年度まで継続すること。
さらに、機構の業務運営に際しては、一般管理業務の本部への一元化、集約化等を図り、統合後5年間で、19年度一般管理費(物件費)の10%相当の経費を5年間で削減を図ること。(再掲)

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○機構が管理する情報の安全性向上のため、必要な措置をとったか。	19 年度 ・情報システム管理規程を制定し、情報セキュリティ体制整備の準備を行った。 20 年度 ・19年度に整備した情報システム管理規程に基づき、各種セキュリティ手順を整備。 ・情報セキュリティ自己点検評価を行うと同時に、奈良国立博物館を対象に①情報システムにかかる内規の整備状況、②ネットワーク構成図、保守業務報告書等の文書確認、③システム運用状況を担当者に確認、④サーバ設置場所の実見についての情報セキュリティ監査を行うと共に現場担当者とのシステムにかかる日頃直面している諸課題についての意見交換を行った。なお、特に指摘する事項は無かった。 21 年度 ・20年度に作成した知的財産管理体制報告書に基づき、知的財産検討ワーキンググループを設置し、規定整備のための検討を図った。 機構における特許保有は、開発した技術等が他者に製品化に利用されて使用できなくなることや、類似の発明を権利化させないための防衛特許の意味合いが強いものである。なお、自己収入の増加につながる発明などができた場合には速やかに出願を行える体制を整えていく。 ・情報システム点検・評価要項に基づき、各施設において情報システム点検の実施を検討し、情報セキュリティの向上に努めた。(監査は次年度に実施) 22 年度 ・保有個人情報管理監査を行い、個人情報管理のより一層の適正化を図った(23年1月)。 ・情報システム点検・評価要項に基づき、奈良文化財研究所を対象に、情報システム監査を行った。(23年2月28日) ・国立文化財機構規程集の全文を PDF 化し、グループウェア上で機構内全職員に公開した(22 年 10 月)。以後、最新版へのアップデートを継続して行っている。 ・機構ウェブサイトのリニューアルとともに、サーバーのハード・ソフトを最新版に入れ替えること	○中期目標期間を通して、情報システム管理並びに情報セキュリティ体制の整備が強化改善され、管理する情報の安全性の向上のための施策が実施されていると認められる。 さらに保有個人情報管理監査等を実施し、セキュリティの向上に努め、情報管理の安全性が高められた。 次期中期目標期間においては、情報セキュリティ監査を活用し、セキュリティの弱点の把握とその改善を検討することや、東日本大震災の経験からデータやシステムのバックアップが十分か検証する必要がある。

	で、セキュリティの向上を図った。	

【(小項目)2－4】	人件費の削減、給与体系の見直し

【法人の達成すべき目標】
法人統合のメリットも最大限に生かし、業務の充実かつ効率化を図るとともに、事務、事業、組織等の見直し、外部委託の推進等により、経費の合理化を図ること。
運営費交付金を充当して行う業務については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、特殊業務経費を除き、5年間で一般管理費は15%以上、業務経費は5%以上の削減を図ること。
また、「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」(平成18年法律第47号)に基づき、平成18年度以降の5年間において国家公務員に準じた人件費削減を行うとともに、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行う。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」(平成18年7月7日閣議決定)に基づき、国家公務員の改革を踏まえ、人件費改革を平成23年度まで継続すること。
さらに、機構の業務運営に際しては、一般管理業務の本部への一元化、集約化等を図り、統合後5年間で、19年度一般管理費(物件費)の10%相当の経費を5年間で削減を図ること。(再掲)

【評定】

A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
A	(A)	A	B	A	A

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○平成 18 年度からの5年間において△5%以上の人件費削減を行ったか。 ○また、役職員の給与に関し、国家公務員の給与構造改革を踏まえた、地場賃金の適正な反映、年功的な給与上昇の抑制、勤務実績の給与等への反映等に取り組んだか。	19 年度 ・現業職職員の定年退職後不補充による人件費抑制 ・人件費の統一的な管理を図るため、20年4月に開始する人事給与システムを統合させる作業を実施 20 年度 ・総人件費改革に基づく人件費の削減を行った。 ・人事給与統合システムが20年4月から稼働し、機構全体として統一的な処理ができるようになった。さらに人件費の削減に向けたシミュレーション等により人件費に関する計画を円滑に企画・立案することができた。 21 年度 ・人事給与統合システムが20年4月から稼働し、機構全体として統一的な処理ができるようになった。さらに人件費の削減に向けたシミュレーション等により人件費に関する計画を円滑に企画・立案することができた。 ・地域手当について、22 年度において 21 年度の率を据え置く方針が決定された。 22 年度 ・人事給与統合システムが20年4月から稼働し、機構全体として統一的な処理ができるようになった。さらに人件費の削減に向けたシミュレーション等により人件費に関する計画を円滑に企画・立案することができた。 ・地域手当について、22 年度において 21 年度の率を据え置く方針が決定された。 ・「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」(平成18年法律第47号)に基づき、国家公務員に準じた人件費改革に取り組み、削減目標の達成に対しては順調に進捗し、平成18年度からの5年間において、△5%以上の人件費削減を実現した。 **【人件費削減率(5年間中△5%以上)】** 項目名 / 第2期中期目標期間中の評価の経年変化(対前年度比)	○中期目標期間において、人件費の削減は順調に実施され、総人件費改革への対応も順調に実績をあげたと認められる。 人件費削減については大変な努力がなされていると評価するとともに、次期中期目標期間においては、優秀な人材を確保・育成することにより、組織の活性化を図る必要がある。

		18年度		19年度	20年度	21年度	22年度
		博物館	研究所				
人件費削減率（5年間中△5%以上）	目標値	*1.03%*	*△1.0%*	*△1.03%*	*△1.03%*	*△1.03%*	*△1.03%*
	実績	△3.4%	△3.2%	△0.56%	△1.02%	△2.06%	△2.58%
	定量的評価	A	A	C	B	S	S

【総人件費改革への対応】
・ 中期目標期間中の総人件費改革への取組が順調に進められたか。

【総人件費改革への対応】

	人件費決算額（A分類実績ベース）	対17年度人件費削減率	対17年度人件費削減率（補正値）
17年度実績	2,878,750千円	－	－
18年度実績	2,789,360千円	△3.11%	△3.11%
19年度実績	2,773,688千円	△3.65%	△4.35%
20年度実績	2,745,389千円	△4.63%	△5.33%
21年度実績	2,688,829千円	△6.60%	△4.90%
22年度実績	2,619,439千円	△9.01%	△5.81%

※人件費削減実績表中の「補正値」とは、「行政改革の重要方針」(平成17年12月24日閣議決定)による人事院勧告を踏まえた官民の給与較差に基づく給与改定分を除いた削減率である。なお、平成18年、平成19年、平成20年、平成21年、平成22年の行政職(一)職員の年間平均給与の増減率はそれぞれ0%、0.7%、0%、△2.4%、△1.5%である。

○中期目標期間において、総人件費改革への取り組みが順調に進められ、5%以上の人件費削減を実現しており評価できる。

【給与水準】
・ 中期目標期間中の実績について、国家公務員と比べて給与水準の高い理由及び講じた措置（法人の設定する目標水準を含む）が、国民に対して納得の得られるものとなっているか。
・ 法人の給与水準自体が（民間等と比べて）社会的な理解の得られる水準となっているか。
・ 国の財政支出割合の大きい法人及び累積欠損金のある法人について、国の財政支出規模や累積欠損の状況を踏まえた給与水準の適切性に関して、法人において検証がされていたか。

【ラスパイレス指数（中期目標期間実績）】

	ラスパイレス指数
18年度（国立博物館）	98.5
18年度（文化財研究所）	93.3
19年度	94.2
20年度	95.8
21年度	96.9
22年度	96.9

※平成18年度は統合前のため、国立博物館と文化財研究所の各々を記載している。

ラスパイレス指数は中期目標期間中、国を毎年度下回っており、給与水準は適正であり、引き続き給与水準の適正化に努める。

○中期目標期間中、国家公務員と同様の処遇改善を実施するとともに、ラスパイレス指数も、国の水準を毎年度下回っており、適切な水準と認められる。

【諸手当・法定外福利費】
・ 中期目標期間中、法人の福利厚生費について、法人の事務・事業の公共性、業務運営の効率性及び国民の信頼確保の観点から、必要な見直しが行われたか。

【福利厚生費の見直し状況】
レクリエーション経費は運営費交付金からの支出はない。レクリエーション経費以外の福利厚生費（法定外福利費）は、国の基準に準じた支出を行っている。また、国とは異なる諸手当は機構にはない。

○国と異なる諸手当はない。また、福利厚生費についても、国と同様の内容であり問題ない。

【(大項目)3】	Ⅳ 財務・人事	【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
A	A	A	A	A	A

【(小項目)3−1】	予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画	【評定】 A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
A	A	A	A	A	A

【法人の達成すべき目標】
Ⅳ財務内容の改善に関する事項
税制措置も活用した寄付金や自己収入の確保、予算の効率的な執行等に努め、適切な財務内容の実現を図ること。
1 自己収入の増加
税制措置も活用した寄付金などの外部資金、施設使用料等の財源の 多様化を図り、法人全体として積極的に自己収入の増加に努めること。
また、自己収入額の取り扱いにおいては、各事業年度に計画的な収 支計画を作成し、当該収支計画による運営に努めること。
2 固定的経費の節減
管理業務の節減を行うとともに、効率的な施設運営を行うこと等により、固定的経費の節減を図ること。

Ⅴその他業務運営に関する重要事項
2 業務の目的・内容に適切に対応するため長期的視野に立った施設・設備の整備計画を作成し、整備をすること。

評価基準(評価指標)	主な実績	分析・評価
○外部資金等を積極的に導入することにより、計画的な収支計画による運営を図ったか。 ○適切な効率化を見込んだ予算による運営に努めたか。 ○税制措置も活用した寄附金などの外部資金、施設利用等の財源多様化を図ったか。 ○法人全体として積極的に自己収入の増加に努めたか。	**外部資金の獲得状況** **18 年度(法人統合前)** 博物館 科学研究費補助金　21件　5,275万円(17年度　22件　8,386万円) 研究助成金　9件　2,235万円(17年度　0件　0万円) 寄附金　201件　4,219万円(17年度 153件　5,119万円) 合計　231件　1億1,729万円(17 年度 175件　1億3,505万円) 研究所 ③外部資金等の導入状況 ○科学研究費補助金 直接経費　141,500千円 (間接経費　24,240千円) ○その他助成金　19,150千円	○中期目標期間を通して、外部資金の確保及び自己収入の増大に向けた定量的な目標を上回っており評価できる。中でも展示事業等収入については、入場料収入等の増加により、決算額が中期計画予算を上回っており、受託収入及びその他寄附金等の獲得と併せた法人の努力が認められる。 収入を拡大し支出を抑制するという単純だが達成困難な目標を実現させた

○総利益を計上した場合には目的積立金を申請したか。	○自己収入の増加状況　【( )内数字は年度計画予算】 ・展示事業等収入　21,118千円 (41,749千円) ・受託収入　600,658千円 (26,000千円) ・附帯収入　10,401千円 (　− 千円)	ことは高く評価できる。

19−22 年度(法人統合後)
○外部資金の獲得状況

	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
科学研究費補助金	289,770 千円	327,239 千円	298,959 千円	267,146 千円
研究助成金	39,395 千円	30,192 千円	30,241 千円	21,840 千円
寄附金	147,854 千円	109,630 千円	134,934 千円	136,828 千円
合計	477,019 千円	467,061 千円	464,134 千円	425,814 千円

・科学研究費補助金については、研究件数は各年度維持しているが、研究金額が少ない課題が多いため、金額が減少している。
・寄附金は、不況下の影響を受けながらも、各年度一億円を超える寄附をいただいている。

■外部資金の活用及び自己収入の増大
○定量的な目標の設定(21 年度設定)
20 年度に策定した外部資金の活用及び自己収入の増大に向けた定量的な目標をについて、21 年度は達成することができた。
なお、事業仕分けにおいて文化財収集(展覧事業)について「自己収入の拡大、コスト縮減といった努力を徹底し、国からの負担を増やさない形での拡充を図る。」とされたことから、今後も継続して自己収入の増大に努力していく。

定量的目標:
1.入場料収入(共催展を除く)及びその他収入について、1.16%の増加を目指す。
下表のとおり、21,22 年度とも、目標を上回ることができた。

(単位:千円)

	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
自己収入基準額	—	864,089	874,112	884,252
自己収入目標額	①864,089	②874,112 (①×1.16%増)	③884,252 (②×1.16%増)	894,510 (③×1.16%増)
自己収入実績額	—	—	949,900	1,002,524
増 加 率	—	—	8.67%	13.38%

※受託研究・受託事業を除く。
※自己収入目標額は、前年度の目標額から 1.16%増加した場合の額。ただし平成 19 年度自己収入目標額は、平成 19 年度自己収入実績額から京都国立博物館平常展示館建替工事による影響額等を除いて算定。
※増加率は、自己収入基準額(前年度の目標額)に対する増加率。

2.寄附金 226 件及び科学研究費補助金 76 件の確保を目指す。

【予算、収支計画及び資金計画】
・ 中期目標期間中、予算、収支計画、資金計画が順調に進められたか。

下表のとおり、寄附金及び科学研究費補助金ともに目標件数を上回ることができた。

	目標値	21年度	22年度
寄附金	226件	290件	314件
科学研究費補助金	76件	86件	81件

【中期目標期間に係る予算、収支計画及び資金計画に対する実績】
→各年度の詳細は【参考資料1】参照

（1）予算

（単位：百万円）

区　　分	中期計画予算	決算額	差引増減額
収　入			
運営費交付金	43,759	43,461	△298
施設整備費補助金	22,707	9,444	△13,263
文化芸術情報電子化推進費補助金	700	684	△16
展示事業等収入	5,545	8,363	2,818
受託収入	130	2,710	2,580
その他寄附金等	0	629	629
計	72,841	65,291	△7,550
支　出			
管理経費	12,109	10,102	△2,007
うち人件費	4,164	4,416	252
うち一般管理費	7,945	5,686	△2,259
業務経費	37,195	41,371	4,176
うち人件費	13,216	12,366	△850
うち調査研究事業費	7,240	7,306	66
うち情報公開事業費	803	768	△35
うち研修事業費	113	103	△10
うち国際研究協力事業費	1,573	1,214	△359
うち展示出版事業費	818	684	△134
うち展覧事業費	12,807	18,566	5,759
うち教育普及事業費	625	364	△261
施設整備費	22,707	10,594	△12,113
文化芸術情報電子化推進費	700	684	△16
受託事業費	130	2,577	2,447
その他寄附金等（平成18年度限り）	0	14	14
計	72,841	65,342	△7,499

・施設整備費補助金・施設整備費は、京都国立博物館平常展示館建替工事の一部繰越し、奈良文化財研究所本館改修工事の未着手のため決算額が減少しています。
・展示事業等収入は、展覧会等が盛況で入場料収入が多かったこと等により決算額が増加しています。
・受託収入・受託事業費は当初予定外の受託事業が多かったことによるものです。
・その他寄附金等は、寄附の獲得に努めたため決算額が多額となっています。
・一般管理費は、管理業務の見直し、効率化等により決算額が減少しています。
・展覧事業費は、展覧会等が盛況であったことにより開催経費が増加したこと及び収蔵品を積極的に購入したことにより決算額が多額となっています。

○予算、収支計画及び資金計画については、中期目標期間中、計画的に遂行されていると認められる。

（2）収支計画

（単位：百万円）

区　　分	中期計画予算	決算額	差引増減額
費用の部	42,667	47,499	4,832
経常経費	42,667	47,499	4,832
管理経費	9,898	9,937	39
うち人件費	4,164	4,840	676
うち一般管理費	5,734	5,097	△637
事業経費	30,522	32,397	1,875
うち人件費	13,216	14,747	1,531
うち調査研究事業費	5,225	5,354	129
うち情報公開事業費	580	655	75
うち研修事業費	82	92	10
うち国際研究協力事業費	1,135	1,150	15
うち展示出版事業費	590	642	52
うち展覧事業費	9,243	9,398	155
うち教育普及事業費	451	353	△98
その他の費用	0	6	6
受託事業費	130	2,518	2,388
減価償却費	2,117	2,127	10
その他の費用	0	520	520
収益の部	42,667	48,831	6,164
運営費交付金収益	34,875	33,834	△1,041
展示事業等の収入	5,545	8,088	2,543
受託収入	130	2,860	2,730
資産見返運営費交付金戻入等	2,117	2,151	34
寄附金収益	0	427	427
施設費収益	0	499	499
その他補助金収益	0	474	474
その他の収益	0	498	498
純利益	—	1,282	—
前中期目標期間繰越積立金取崩	—	13	—
総利益	—	1,295	—

・純利益は、平成18年度文化財研究所が国立博物館との統合のための清算を行ったため費用・収益の差額より50百万円減少しています。

（3）資金計画

（単位：百万円）

区　　分	中期計画予算	決算額	差引増減額
資金支出	72,841	70,465	△2,376
業務活動による支出	41,250	45,602	4,352
投資活動による支出	31,591	21,200	△10,391
その他の支出	0	82	82

	次期中期目標期間への繰越金　0　3,581　3,581 資金収入　72,841　70,465　△2,376 業務活動による収入　50,134　57,479　7,345 運営費交付金による収入　43,759　43,461　△298 展示事業等による収入　5,545　7,575　2,030 受託収入　130　2,723　2,593 文化芸術情報電子化推進費補助金による収入　700　684　△16 その他の収入　0　3,036　3,036 投資活動による収入　22,707　9,448　△13,259 施設整備費補助金等による収入　22,707　9,448　△13,259 前期中期目標期間よりの繰越金　0　3,538　3,538	
【財務状況】 （当期総利益（又は当期総損失）） ・ 中期目標期間中の当期総利益（又は当期総損失）の発生要因が明らかにされているか。また、当期総利益（又は当期総損失）の発生要因は法人の業務運営に問題等があることによるものか。 （利益剰余金（又は繰越欠損金）） ・ 中期目標期間中、利益剰余金が計上されていた場合、国民生活及び社会経済の安定等の公共上の見地から実施されることが必要な業務を遂行するという法人の性格に照らし過大な利益となっていないか。 ・ 中期目標期間中、繰越欠損金が計上されていた場合、その解消計画は妥当であったか。また、当該計画に従い解消が順調に進められたか。 ・ 当該計画が策定されていない場合、未策定の理由は妥当か。	【当期総利益（当期総損失）とその発生要因】 ・当中期目標期間の総利益は 1,295 百万円である。 ・展示事業等収入予算額5,545百万円に対して、2,818百万円超の8,363百万円の収入実績があったことによる。4博物館で積極的に展覧会を開催したことによる入場料・刊行物売払等の収入増加、友の会・パスポート・キャンパスメンバーズにより会費を得たこと、建物等を積極的に部外者に貸与し利用料収入を得たこと、商用利用に収蔵品画像の貸出しを行い使用料収入を得たこと等が原因である。 →【参考資料3】参照 【利益剰余金】 ・利益剰余金の発生理由：入場料収入が収入予算額を上回ったこと、及び自己収入により固定資産（収蔵品等）を購入したため見かけの利益が発生したこと等により生じている。 ・利益剰余金の内訳：平成 18 年度 287,275 千円、平成 19 年度 413,922 千円、平成 20 年度 303,845 千円、平成 21 年度 147,504 千円、平成 22 年度 142,729 千円、前中期目標期間繰越積立金 9,025 千円。 ・平成 22 年度末利益剰余金 1,304,300 千円については、次期中期目標期間繰越積立金相当額 653,432 千円を控除した 650,868 千円を平成 23 年 7 月 8 日に国庫納付した。 →【参考資料2及び3】参照 【繰越欠損金】 ・該当なし →【参考資料2及び3】参照 【解消計画の有無とその妥当性、解消計画に従った解消状況】 ・該当なし。	○財務状況については、中期目標期間の全年度において、当期総利益が計上され、当期総利益の増収は、入場料、友の会等の会費、施設使用料等の、機構の努力の成果であり、法人の業務運営に問題があるとは認められない。 ○中期目標期間における利益剰余金については、公共性のある法人として必要な財務状況の安定性の観点から、適正な利益が計上されていると判断できる。

（運営費交付金債務） ・ 中期目標期間の各年度に交付された運営費交付金の各年度における未執行率が高い場合、運営費交付金が未執行となっている理由が明らかにされているか。	【解消計画が未策定の理由】 ・該当なし。 【運営費交付金債務の未執行率（%）と未執行の理由】 ・運営費交付金債務は、平成 18 年度末国立博物館 783,252 千円、同研究所 8,769 千円、平成 19 年度末 751,736 千円、平成 20 年度末 1,349,950 千円、平成 21 年度末 1,197,476 千円であり、次年度又は次々年度において全て執行している。 ・役員の退職が延期されたことにより執行されなかった役員退職手当 13,465 千円及び東日本大震災の影響による未達成業務 9,678 千円の合計 23,143 千円について、会計基準第 81 条第 3 項による振替え（中期目標期間の最終年度に未執行の運営費交付金も収益化して清算する）を行った。 ・役員退職手当は、役員の退職時期が確定した時点で再度概算要求し、その他については、平成 23 年度予算により実施するため、特段の影響はない。	○運営費交付金の未執行については、理由が明確であるとともに、業務運営との関係について分析が行われ、その結果についても特に問題とはならないと認められる。
【実物資産】 （保有資産全般の見直し） ・ 実物資産について、保有の必要性、資産規模の適切性、有効活用の可能性等の観点からの適切な見直しが行われたか。 ・ 見直しの結果、処分等又は有効活用を行	【実物資産に関する見直し状況】 ① 実物資産の名称と内容、規模 施　設　土　地（㎡）　建　物（延面積㎡） 東京国立博物館　120,258　71,642 京都国立博物館　53,182　13,831 奈良国立博物館　78,760　19,116 九州国立博物館　160,715(うち九博 10,733)　30,675(うち九博 9,048) 東京文化財研究所　4,181　10,623 奈良文化財研究所　46,468　36,786 合　計　463,564(313,582)　182,673(161,046) ※九州国立博物館は、福岡県と分有しており、福岡県は土地 149,982 ㎡、建物 6,034 ㎡を分有、建物のうち 15,593 ㎡は共有面積である。 ② 保有の必要性（法人の任務・設置目的との整合性、任務を遂行する手段としての有用性・有効性等） ・展示棟、研究施設、事務所、収蔵品倉庫、資料館等として全ての建物を使用しており、博物館・研究所としての任務を遂行するために必要不可欠である。 ③ 有効活用の可能性等の多寡 ・博物館・研究所の本来業務以外にも、講堂・会議室の貸与、建物・庭園等を映画等のロケーションとして貸出すなど部外者に対しても積極的な貸出を行い、施設の有効利用を図っている。 ④ 見直し状況及びその結果 ・③のように外部者に対する積極的な貸与等が実施されていることを確認し、今後もさらに継続することとしている。	○中期目標期間を通して、実物資産の保有の必要性、資産規模の適切性、有効活用の可能性等については、減損もなく、特に指摘すべき点はない。 保有する実物資産は、法人の業務遂行上必要不可欠なものである。 また、保有施設は、映画等のロケーションとしての貸出など、有効利用が図られ、開かれた博物館への改革に向かう意識変革の努力が認められる。

うものとなった資産について、法人の取組状況や進捗状況等は適切（順調）であったか。	【処分又は有効活用等の取組状況／進捗状況】 ・全ての資産は、博物館・研究所の任務を遂行するために活用されており、処分に該当する資産はない。有効活用については、今後もさらに継続することとしている。	
・「勧告の方向性」や「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」等の政府方針を踏まえて中期目標期間中に処分等することとされた実物資産について、法人の見直しが適時適切に実施されたか（取組状況や進捗状況等は適切（順調）であったか）。	【政府方針等により、処分等することとされた実物資産についての処分等の取組状況／進捗状況】 ・該当なし。	○なお、「勧告の方向性」や「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」等の政府方針を踏まえて中期目標期間中に処分等することとされた実物資産はなく、活用が不十分な資産はないと認められる。
（資産の運用・管理） ・ 中期目標期間中の資産の活用状況等が不十分な場合は、原因が明らかにされたか。その理由は妥当であったか。	【活用状況が不十分な実物資産の有無とその理由】 ・該当なし。	
・ 実物資産の管理の効率化及び自己収入の向上に係る法人の取組は適切に行われたか。	【実物資産の管理の効率化及び自己収入の向上に係る法人の取組】 ・民間委託の推進として、電気設備保守等の各種保守業務、清掃業務、警備・監視等業務について、大部分を民間委託している。 ・自己収入の獲得のための施設の有効利用として上記③を積極的に実施している。	
【金融資産】 （保有資産全般の見直し） ・ 金融資産について、保有の必要性、事務・事業の目的及び内容に照らした資産規模は適切であったか。	【金融資産の保有の必要性（事業目的を遂行する手段としての有用性・有効性、規模の適切性）】 ① 金融資産の名称と内容、規模 ・現金及び預金の平成 22 年度末残高は約 36 億円であり、そのほとんどは購入物品等の未払金に充てるものである。 ・東京国立博物館において、有価証券である満期保有目的債権（譲渡性預金）5 億円を保有している。 ② 保有の必要性（事業目的を遂行する手段としての有用性・有効性） ・余裕資金を利息のない決済用預金ではなく、安全で利息のある譲渡性預金として預け入れることにより、利息を運営費の一部に充当することが可能となる。	○金融資産の保有の必要性、事務・事業の目的及び内容に照らした資産規模、また運用状況についても、安全、有効かつ適切に運用されており、中期目標期間を通して、特に問題ないと認められる。
・ 資産の売却や国庫納付等を行うものとなった場合は、その法人の取組状況や進捗状況等は適切に行われたか。	【資産の売却や国庫納付等を行うものとなった金融資産の売却や国庫納付等の取組状況／進捗状況】 ・該当なし。	

（資産の運用・管理） ・ 中期目標期間中の資金の運用は適切に行われたか。	【資金運用の実績】 ・東京国立博物館において、有価証券である満期保有目的債権（譲渡性預金）5 億円を保有している。	
・ 資金の運用体制の整備は適切に行われたか。	【資金の運用体制の整備状況】 ・平成 22 年度に東京国立博物館において運用体制を新設した。他の施設においては余裕資金の状況により今後整備を検討する。	
（債権の管理等） ・ 貸付金、未収金等の債権について、回収計画が策定されたか。回収計画が策定されていない場合、その理由は妥当か。	【回収計画の有無とその内容（無い場合は、その理由）】 ・独立行政法人国立文化財機構債権管理要項に基づき、未収金の債権管理を帳簿により行い、回収計画、督促状況等を記録している。滞留管理としての管理、保全手続きについても定めている。	○また、債権の管理等については、債権管理要項に基づき実施し、中期目標期間を通して計画に沿って回収されていると認められ、特に問題はないと判断できる。
・ 中期目標期間中、回収計画は適切に実施されたか。ⅰ）貸倒懸念債権・破産更生債権等の金額やその貸付金等残高に占める割合が増加している場合、ⅱ）計画と実績に差がある場合の要因分析が行われたか。	【回収計画の実施状況】 ・回収計画に基づき実施しているが、債務者の所在不明等で、効果を上げない場合がある。 【ⅰ）貸倒懸念債権・破産更生債権等の金額／貸付金等残高に占める割合、ⅱ）計画と実績に差がある場合の要因分析結果】 ・該当なし。	
・ 回収状況等を踏まえ回収計画の見直しの必要性等の検討が行われたか。	【回収計画の見直しの必要性等の検討の有無】 ・平成 22 年度に新設の要項のため、回収計画の見直し等はしていないが、今後の状況の変化に対応し検討する。	
【知的財産等】 （保有資産全般の見直し） ・ 中期目標期間中、特許権等の知的財産について、法人における保有の必要性の検討が適切に行われたか。	【知的財産の保有の必要性の検討状況】 ・特許権3件（研究技法関係）（今中期目標期間中に登録）と商標権6件（ロゴマーク等）（今中期目標期間中に2件登録）保有している。取得費用がいずれも少額であるため財務諸表上の資産計上はしていないが、権利として管理している。研究継続の必要性から研究技法関係特許の保有は必要であり、ロゴマーク等の商標権も運営上の支障となる他者の使用を未然に防止するために必要である。 なお特許権は当然収入に繋がるものであれば活用するが、維持費との兼ね合いが今後の課題である。 取得特許件数　3件	○中期目標期間中に、特許権3件及び商標権6件を保有したが、研究継続の必要性からの研究技法関係特許の保有等であり、法人運営上の支障となる他者の使用を未然に防止するために必要なものであると認められる。知的財産については、適切に運用並びに管理されていると認められる。 　また、発明取扱規程を定め、組織体

	①木材又は木造文化財の年輪幅又は密度測定装置並びに測定方法（21.5.22 登録：奈良文化財研究所） ②壁画漆喰層剥離用ワイヤソー装置及び壁画漆喰層剥離方法（22.3.5 登録：東京文化財研究所・奈良文化財研究所） ③文化財用表打ち材料及びそれを用いた文化財修復方法（22.12.10 取得：東京文化財研究所）	制が整備されていると認められる。 　なお、整理等を行う必要のある知的財産はない。
・ 検討の結果、知的財産の整理等を行うことになった場合には、その法人の取組状況や進捗状況等は適切であったか。	【知的財産の整理等を行うことになった場合には、その法人の取組状況／進捗状況】 ・機構で定めた「独立行政法人国立文化財機構発明取扱規程」に基づき対応することになる。	
（資産の運用・管理） ・ 特許権等の知的財産について、特許出願や知的財産活用に関する方針の策定や体制の整備は適切に行われたか。	【出願に関する方針及び体制整備状況】 ・機構で定めた「独立行政法人国立文化財機構発明取扱規程」に基づき、各施設長から理事長に届け出る。	
・ 実施許諾に至っていない知的財産の活用を推進するための取組は適切に行われたか。	【実施許諾に至っていない知的財産を活用するための取組】 研究成果の結実として特許権取得をしている。当機構における特許権取得は、パテント収入を目指すためではなく、研究継続の必要性から防衛的な対抗特許として保有することを主眼としている。 当然収入に繋がるものであれば活用するが、その場合は維持費との兼ね合いが今後の課題である。	
【短期借入金の限度額】 ・ 中期目標期間中の短期借入の実績は有ったか。有る場合は、その額及び必要性は適切であったか。	【短期借入金の有無及び金額】 ・該当なし。 【必要性及び適切性】 ・運営費交付金の受入れに遅延が生じた場合に必要である。 ・受入れの遅延期間は3ヶ月と想定し、運営費交付金の4半期相当額としている。	○短期借入金はない。
【重要な財産の処分等に関する計画】 ・ 重要な財産の処分に関する計画は有ったか。有る場合は、計画に沿って順調に処分に向けた手続きが進められたか。	【重要な財産の処分に関する計画の有無及びその進捗状況】 ・京都国立博物館では、平常展示館建替工事のため平成 21 年度に旧建物を取壊し、建替工事を進めている。 ・奈良文化財研究所本館改築計画に伴い現建物の取壊しを予定している。（取壊年度は未定）	○21 年度に京都国立博物館平常展示館建替工事のため、旧建物を取壊し、建替工事を実施しているが、建替計画に沿って適切に処分されている。
【剰余金の使途】 ・ 中期目標期間中の利益剰余金は有ったか。有る場合はその要因は適切であったか。	【利益剰余金の有無及びその要因】 ・項目別－99 参照。 【参考資料2及び3】参照	○中期目標期間において、入場料収入が収入予算額を上回ったこと等により、利益剰余金が生じたが、法人の適切な業務運営等により生じたものであると認

		められる。
・ 中期目標期間中の目的積立金の実績は有ったか。有る場合は、活用計画等の活用方策を定める等、適切に活用されたか。	【目的積立金の有無及び活用状況】 ・平成 18 年度は、国立博物館は現金を伴う利益がないため、研究所は国立博物館との統合により国庫納付等をしたため目的積立金の申請はありません。平成 19 年度 195 百万円、平成 20 年度 304 百万円、平成 21 年度 148 百万円を申請する協議を行いましたが、経営努力による収入と認定されなかったため、目的積立金申請は行っておりません。平成 22 年度は、中期目標期間最終年度のため全て積立金として振替える処理をしているため、当中期目標期間における目的積立金はありません。	○なお、中期目標期間における目的積立金の実績はないが、法人の努力により生じた利益剰余金は、法人のインセンティブのみならず、国民へのサービス還元という観点からも、今後は制度の趣旨に沿った適切な運用がなされるよう希望する。
【施設及び設備に関する計画】 ・ 施設及び整備に関する計画は有るか。有る場合は、当該計画の進捗は順調か。	【施設及び設備に関する計画の有無及びその進捗状況】 （完成した主要施設等） ・東京国立博物館東洋館耐震補強改修工事及び東洋館設備改修工事 ・奈良国立博物館西新館耐震補強改修工事、西新館免震展示ケース設置工事及び仏教美術資料研究センター耐震補強改修工事 （工事継続中の主要施設等） ・京都国立博物館平常展示館建替工事	○中期目標期間における施設・設備の改修等については、東京国立博物館東洋館耐震補強改修工事、京都国立博物館平常展示館建替工事等が、概ね計画通りに進行したと認められる。 　特に、東京国立博物館東洋館耐震補強工事等が、東日本大震災による被害を未然に防いだ点で特筆に値する。 　次期中期目標期間においても、計画的な施設設備の整備が望まれる。

【(小項目)3−2】	人事計画に関する計画

【法人の達成すべき目標】

1 人事管理(定員管理、給与管理、意識改革等)、人事交流の適切な実施により、内部管理事務の改善を図ること。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用すること。

【評定】

A

H18		H19	H20	H21	H22
博物館	研究所				
A	A	A	A	A	A

評価基準(評価指標)

○職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度の検討・導入を図ったか。
○任期付研究員制度の導入を図ったか。
○人事交流、職員の研修等に努めたか。

主な実績

・平成 19 年度において、技術職員及び技能・労務職員について、当面対象とする職種を絞って機構独自で採用可能とする規程の整備を行い、平成 20 年度に施設の維持管理を行う職員を新たに適用範囲とした。
・平成 20 年度において技術職員(写真技師)を京都国立博物館で 1 名、また労務職員(衛士)を奈良国立博物館で 1 名採用した。(計 2 名)
・平成21年度において施設の維持管理を行う技術職員(電気)を東京国立博物館で1名、技術職員(写真技師)1 名及び技術職員(建築)1 名を奈良国立博物館で採用した。(計 3 名)
・平成 22 年度においては労務職員(衛士)を東京国立博物館で 3 名、技術職員(写真技師)を奈良文化財研究所で 1 名採用した。(計 4 名)

【独自選考採用実績】(名)

	技術職員採用数	労務職員採用数	合計
平成 20 年度	1	1	2
平成 21 年度	3	0	3
平成 22 年度	1	3	4
合計	5	4	9

・平成 20 年度において、常勤の研究職員に準じた有期雇用職員の人事制度(アソシエイトフェロー)を新たに整備し、専門的事項の調査研究を行う研究職と高度な専門知識と経験等を有する専門職を対象として採用可能とし、東京国立博物館で1名、東京文化財研究所で3名を採用した(計 4 名)。平成 21 年度は東京国立博物館で 11 名、京都国立博物館で 1 名、奈良国立博物館で2名、東京文化財研究所で5名及び奈良文化財研究所で3名を採用した(計22名)。平成 22 年度は本部で 1 名、東京国立博物館で 6 名、奈良国立博物館で 1 名、九州国立博物館で 2 名、東京文化財研究所で 1 名及び奈良文化財研究所で 6 名を採用した。(計 17 名)

【アソシエイトフェロー採用実績】(名)

	採用数
平成 20 年度	4
平成 21 年度	22
平成 22 年度	17
合計	43

(参考)

分析・評価

○中期目標期間において、人事計画は着実に進展し、成果を上げつつあると認められる。特に、アソシエイト・フェロー制度の導入の効果は大きく、人件費の削減や業務の合理化に貢献している。

また、専門分野を勘案した人事交流や、職員としての資質向上を図るための研修も積極的に行われていると認められる。

次期中期目標期間においては、ナショナルセンターとしてこれまでに蓄積した研究成果と文化財保存技術等の継承と、それに基づく次なる発展が期待される中、常勤職員数の抑制が本来業務に影響を与えないかの検証が望まれる。将来的には、アソシエイト・フェロー制度の在り方についても見直す機会を設ける必要がある。

常勤の事務職員及び研究職員採用実績

(平成 20 年度より実施した独自選考採用実績もあわせて記載)

※独自選考採用については、欠員補充とは別に、業務運営上真に必要な職種を絞って規程の整備を行った。その結果、業務遂行の充実が実現できた。なお、独自採用のポストについては、人件費削減計画等を踏まえ、法人内の職員配置の見直しを行った上で確保する等、人件費削減目標値内での人事管理を行った。

・平成 18 年度は 1 名の常勤の事務職員を新規で採用(奈良文化財研究所)し、8 名の常勤の研究職員を新規で採用した(東京国立博物館 2 名、京都国立博物館 2 名、九州国立博物館 1 名、奈良文化財研究所 3 名)。
・平成 19 年度は 2 名の常勤の事務職員を新規で採用(本部事務局 1 名、東京国立博物館 1 名)し、8 名の常勤の研究職員を新規で採用した(東京国立博物館 3 名、九州国立博物館 1 名、東京文化財研究所 1 名、奈良文化財研究所 3 名)。
・平成 20 年度は 3 名の常勤の事務職員を新規で採用(本部事務局 2 名、奈良文化財研究所 1 名)し、17 名の常勤の研究職員を新規で採用した(東京国立博物館 2 名、京都国立博物館 1 名、奈良国立博物館 1 名、九州国立博物館 2 名、東京文化財研究所 3 名、奈良文化財研究所 8 名)。また、独自選考にて 2 名の技術職員及び技能・労務職員を新規で採用した(京都国立博物館(技術職員)1 名、奈良国立博物館(労務職員)1 名)。
・平成 21 年度は 4 名の常勤の事務職員を新規で採用(東京国立博物館 4 名)し、14 名の常勤の研究職員を新規で採用した(東京国立博物館 3 名、京都国立博物館 1 名、奈良国立博物館 1 名、奈良文化財研究所 9 名)。また、独自選考にて 3 名の技術職員及び技能・労務職員を新規で採用した(東京国立博物館(技術職員)1 名、奈良国立博物館(技術職員)2 名)。
・平成 22 年度は 1 名の常勤の事務職員を新規で採用(奈良国立博物館 1 名)し、13 名の研究職員を新規で採用した(東京国立博物館 6 名、九州国立博物館 1 名、奈良文化財研究所 6 名)。また、独自選考にて 4 名の技術職員及び技能・労務職員を新規で採用した(東京国立博物館(労務職員)3 名、奈良文化財研究所(技術職員)1 名)。

【常勤職員採用実績】(名)

	事務職員	研究職員	技能・労務職員	合計
平成 18 年度	1	8		9
平成 19 年度	2	8		10
平成 20 年度	3	17	2	22
平成 21 年度	4	14	3	21
平成 22 年度	1	13	4	18
合計	11	60	9	80

・人事交流の実績

事務系職員:

年度	本部・東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	合計(人)
18	14	11	7	7	7	9	55

	（東大、西美）	（京大）	（阪大、京大、阪教大、奈女大）	（九大、東大）	（東大、医科歯科大、千葉大）	（京大、阪大、滋賀大、滋賀医科大）	
19	18 （東大、医科歯科大、西美、政研大）	11 （京大）	9 （阪大、京大、阪教大、奈女大）	7 （九大、東大、九工大）	5 （東大、医科歯科大、千葉大）	8 （京大、阪大、滋賀大、滋賀医科大）	58
20	16 （東大、西美、政研大）	10 （京大、民博）	10 （文化庁、阪大、京大、北九州高専）	8 （九大、九工大、東大）	6 （東大、医科歯科大）	7 （京大、阪大、滋賀大、総地研）	57
21	18 （文化庁、東大、東近美、政研大、京博）	13 （京大、民博、奈良博、東博）	10 （文化庁、阪大、京大、北九州高専、京）	11 （九大、九工大、本部）	8 （東大、医科歯科大、東博、奈文研）	8 （京大、阪大、滋賀大、総地研、奈女大）	68 (8)
22	18 （東大、東近美、政研大、京博）	14 （京大、阪大、民博、奈文研、東博）	8 （文化庁、阪大、京大、京博）	8 （九大、本部）	5 （医科歯科大、東博、奈文研）	11 （京大、阪大、総地研、奈女大）	64 (9)

※合計の（ ）内の数字は、21 年度から機構内人事交流中の人数を含めた。

研究系職員：
平成 19 年度は文化庁への出向 13 名実施
平成 20 年度は文化庁への出向 13 名実施
平成 21 年度は文化庁から 8 名の受け入れ及び文化庁への出向 14 名実施
平成 22 年度は文化庁から 8 名の受け入れ及び文化庁への出向 14 名実施
※平成 21 年度より出向の受け入れを記載

・機構職員としての資質向上を図るため、新任職員や職員を対象とした各種研修を行った。
・その他、他機関で実施する研修にも積極的に参加した。
平成 18 年度　3 件（新任職員研修会、接遇研修、研究職員研修会）
平成 19 年度　3 件（新任職員研修会、接遇研修、個人情報保護についての講演会）
平成 20 年度　4 件（新任職員研修会、接遇研修、個人情報保護についての講演会、ハラスメントに関する研修会）
平成 21 年度　6 件（新任職員研修会、接遇研修、個人情報保護についての講演会、施設系職員研修会、顧客対応研修会、ハラスメントに関する研修会）
平成 22 年度　6 件（新任職員研修会、接遇研修、個人情報保護についての講演会、施設系職員研修会、接遇研修会、ハラスメントに関する研修会）

別　添

研究テーマ一覧

第２期中期目標期間　調査研究テーマ延べ件数

国立文化財機構	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
623件	370件	153件	86件	52件	79件
	文化財研究所計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	共同研究（東京・奈良文化財研究所）	
	253件	102件	142件	9件	

１８年度　調査研究テーマ一覧

国立文化財機構	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
98件	45件	18件	7件	11件	9件
	文化財研究所計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	共同研究（東京・奈良文化財研究所）	
	53件	21件	31件	1件	

【東京国立博物館】　１８件
１）法隆寺献納宝物・聖徳太子絵伝の調査研究（特別調査）
２）古写経（特別調査）
３）金地屏風の金箔地についての調査研究（特別調査）
４）応挙館障壁画の復元に関する調査研究
５）館蔵狩野家模本に関する調査研究
６）館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究
７）東京国立博物館所蔵博物図譜データベースの調査研究（科学研究費補助金）
８）日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究（科学研究費補助金）
９）江戸幕府旧蔵資料の総合的研究（科学研究費補助金）
10）日本古代手工業史における埴輪生産構造の変遷と技術移転からみた古墳時代政治史の研究（科学研究費補助金）
11）文化財の恒久的保存と持続的公開を具現化する博物館トータルケアシステムの構築
12）ガンダーラの仏教寺院の伽藍配置と遺物に関する研究
13）耐震性の高い展示手法に関する研究
14）環境保存に関する研究
15）法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝の調査研究（科学研究費補助金）
16）博物館教育・普及事業の事例分析と日本の伝統文化に関する先駆的教育・普及理論の構築（科学研究費補助金）
17）東京国立博物館所蔵写真資料データベース（科学研究費補助金）
18）東京国立博物館所蔵古地図データベース（科学研究費補助金）

【京都国立博物館】　７件
１）近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査
２）平安仏教とその造形に関する調査研究
３）難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成（科学研究費補助金）
４）五山禅宗寺院に伝わる典籍の総合的な調査研究－建仁寺両足院所蔵本を中心に－（科学研究費補助金）
５）仏教における衣服の寄進と再利用に関する基礎的研究－袈裟、打敷、幡－（科学研究費補助金）
６）中国仏教美術における南北の問題（科学研究費補助金）
７）修復文化財に関する資料収集及び調査研究

【奈良国立博物館】　１１件
１）五条市猫塚古墳出土品に関する調査
２）東大寺戒壇院四天王像（国宝）及び法華堂執金剛神像（国宝）の総合的調査
３）春日大社おん祭に関する文化財調査
４）奈良・平安時代墳墓の被葬者に関する基礎的研究（科学研究費補助金）
５）統一新羅期の道具瓦集成（科学研究費補助金）
６）斑鳩法輪寺出土の古瓦類の整理及び調査研究（帝塚山大学考古学研究所と共同研究）
７）客員研究員及び調査員による調査
８）東京文化財研究所と共同研究協定を延長し、薬師寺吉祥天像などの調査を実施
９）第５８回正倉院展に伴う調査研究
10）韓国及び中国の博物館との研究交流による調査研究
11）展覧会等開催時に収集した作品についての調査研究

【九州国立博物館】　９件
１）文化財の材質・構造等に関する調査研究
２）博物館における文化財保存修復に関する研究（客員研究員）
３）文化財専用Ｘ線ＣＴスキャン装置等を利用した九州における文化財の保存と活用のための基盤調査
４）彩色水浸文物の保存科学的研究　―中国江蘇省泗水王陵出土文物の保存―（科学研究費補助金）
５）室町時代の中国文物の受容に関する調査研究（科学研究費補助金）
６）弥生時代後期～古墳時代の墳墓大量出土ベンガラについての基礎的研究（科学研究費補助金）
７）日本近世宗門改制度に関する基礎的研究（科学研究費補助金）
８）高麗経の形態および材料・製作技法に関する研究
９）日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究

平成18年研究テーマー覧

東京文化財研究所　計　21件

	調査研究名称	施設名
文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進		
1	民俗技術に関する調査・資料収集　無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究　（Ⅰ1(1)④と一体で実施）	東京文化財研究所
2	東アジアの美術に関する資料学的研究	東京文化財研究所
3	近現代美術に関する総合的研究	東京文化財研究所
4	美術の技法・材料に関する広領域的研究	東京文化財研究所
5	無形文化財の保存・活用に関する調査研究	東京文化財研究所
文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進		
6	高精細デジタル画像の応用に関する調査研究	東京文化財研究所
7	文化財の非破壊調査法の研究	東京文化財研究所
文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進		
8	文化財の生物劣化対策の研究	東京文化財研究所
9	文化財の保存環境の研究	東京文化財研究所
10	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究	東京文化財研究所
11	文化財の防災計画に関する調査研究	東京文化財研究所
12	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究	東京文化財研究所
13	国際研修「紙の保存と修復」	東京文化財研究所
14	在外日本古美術品保存修復協力事業	東京文化財研究所
15	近代の文化遺産の保存修復に関する研究	東京文化財研究所
文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究		
16	文化財保存施策の国際的研究	東京文化財研究所
17	アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究	東京文化財研究所
18	龍門石窟及び陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する調査研究	東京文化財研究所
19	敦煌壁画の保護に関する共同研究	東京文化財研究所
20	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業	東京文化財研究所
諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転とアジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業及び人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発		
21	諸外国の文化財保存修復専門家養成	東京文化財研究所

奈良文化財研究所　計　31件

	調査研究名称	施設名
文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進		
1	文化的景観に関する調査研究	奈良文化財研究所
2	古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究	奈良文化財研究所
3	歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究	奈良文化財研究所
4	平城宮跡東院地区（第401次）の発掘調査	奈良文化財研究所
5	平城宮跡東方官衙地区の調査	奈良文化財研究所
6	西大寺旧境内(第404，410，415次)の発掘調査	奈良文化財研究所
7	興福寺大乗院(第407次)の発掘調査	奈良文化財研究所
8	興福寺旧境内果園推定地の発掘調査	奈良文化財研究所
9	藤原宮跡朝堂院東第四堂発掘調査	奈良文化財研究所
10	本薬師寺跡住宅建設に伴う発掘調査	奈良文化財研究所
11	来迎寺塀新設に伴う確認調査	奈良文化財研究所
12	石神遺跡（第19次）発掘調査	奈良文化財研究所
13	甘樫丘東麓遺跡発掘調査	奈良文化財研究所
14	平城京跡出土遺物の調査研究	奈良文化財研究所
15	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関するの調査研究等	奈良文化財研究所
16	古代瓦に関する研究集会の開催	奈良文化財研究所
17	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究	奈良文化財研究所
18	庭園に関する調査研究	奈良文化財研究所
19	飛鳥時代の歴史に関する調査研究	奈良文化財研究所
20	遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究	奈良文化財研究所
21	遺跡の保存・整備・活用に関する技術開発研究	奈良文化財研究所
22	第一次大極殿復原整備研究	奈良文化財研究所
文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進		
23	遺跡データベースの作成と公開	奈良文化財研究所
24	古代官衙・集落に関する研究集会の開催	奈良文化財研究所
25	遺跡の測量・探査技術の有効利用法の研究	奈良文化財研究所
26	年輪年代学研究	奈良文化財研究所
27	動物遺存体による環境考古学研究	奈良文化財研究所

文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進		
28	考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究	奈良文化財研究所
国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査研究		
29	外部機関の要請に基づく文化財の保存修復に関する実践的研究	奈良文化財研究所
文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究		
30	アンコールワット遺跡群西トップ寺院の調査	奈良文化財研究所
諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転とアジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業及び人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発		
31	JICA，ACCU等の研修事業の協力	奈良文化財研究所

東京文化財研究所と奈良文化財研究所の共同研究　計1件

国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査研究		
1	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力	東京・奈良文化財研究所

１９年度　調査研究テーマ一覧

国立文化財機構	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
126件	76件	22件	25件	13件	16件
	文化財研究所計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	共同研究（東京・奈良文化財研究所）	
	50件	20件	28件	2件	

【東京国立博物館】　22件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	特別調査法隆寺献納宝物（第27次）、「聖徳太子絵伝」第32回、	文化財部	上席研究員　松原茂
2	特別調査「書跡」第4回	文化財部	文化財部長　島谷弘幸
3	特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究―尾形光琳風神雷神屏風を中心に	文化財部	上席研究員　松原茂
4	応挙館障壁画の復元に関する調査研究	文化財部	上席研究員　松原茂
5	館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究	事業部情報課	情報課長　高橋裕次
6	館蔵博物図譜の調査研究（研究成果公開促進費補助金）	東京国立博物館所蔵博物図譜データベース作成委員会	情報課長　高橋裕次
7	日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究（科学研究費補助金）	文化財部	特任研究員　金子啓明
8	江戸幕府旧蔵資料の総合的研究（科学研究費補助金）	事業部情報課	情報課長　高橋裕次
9	日本古代手工業史における埴輪工人編制の変遷と技術移転から見た古墳時代政治史の研究（科学研究費補助金）	文化財部保存修復課	保存修復課保存修復室長　古谷毅
10	東アジアの書道史における料紙と書風に関する基礎的研究（科学研究費補助金）	文化財部	文化財部長　島谷弘幸
11	ガンダーラの仏教寺院の伽藍配置と遺物に関する研究	文化財部展示課	展示課主任研究員　小泉惠英
12	文化財の恒久的保存と持続的公開を具現化する博物館トータルケアシステムの構築（科学研究費補助金）	文化財部保存修復課	保存修復課長　神庭信幸
13	環境保存に関する研究	文化財部保存修復課	保存修復課長　神庭信幸
14	耐震性の高い展示手法に関する研究	文化財部保存修復課	保存修復課長　神庭信幸
15	大型油彩画のロール状保存と木枠に張り込まない展示手法の開発に関する調査研究	文化財部保存修復課	保存修復課長　神庭信幸
16	国立博物館の機能と役割の変遷に関する基礎的研究　―館史資料の分析を中心に―（科学研究費補助金）	文化財部列品課	列品課主任研究員　丸山士郎
17	東京国立博物館所蔵写真資料の調査研究（研究成果公開促進費補助金）	文化財部列品課	列品課列品室長　富田淳
18	東京国立博物館所蔵古地図の調査研究（研究成果公開促進費補助金）	事業部情報課	情報課情報管理室長　田良島哲
19	特別展の事前調査	事業部事業企画課	事業企画課長　井上洋一
20	博物館環境デザインに関する調査研究	事業部事業企画課	事業企画課デザイン室長　木下史青
21	博物館美術教育に関する調査研究	事業部教育普及課	教育普及課長　加島勝
22	博物館教育・普及事業の事例分析と日本の伝統文化に関する先駆的教育・普及理論の構築（科学研究費補助金）	事業部事業企画課	事業企画課長　井上洋一

【京都国立博物館】　25件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究	学芸課	学芸課長　森田　稔
2	平安仏教とその造形に関する研究	学芸課	美術室長　西上　実
3	江戸時代京焼の技術基盤に関する研究	学芸課	工芸室長　久保智康
4	日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察（科学研究費補助金）	学芸課	館長　佐々木丞平
5	建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍書類の調査研究（科学研究費補助金）	学芸課	企画室長　赤尾栄慶
6	仏教における衣服の寄進と再利用に関する基礎的研究－袈裟、打敷、幡－（科学研究費補助金）	学芸課	企画室主任研究員　山川　暁
7	修復文化財に関する資料収集及び調査研究	学芸課	保存修理指導室長　山本英男
8	永徳に関する調査研究（客員研究員）	学芸課	美術室長　西上　実
9	近世絵画に関する調査研究（客員研究員）	学芸課	美術室長　西上　実
10	文化財情報に関する調査研究（客員研究員）	学芸課	情報管理室長　難波洋三
11	訓点資料としての典籍に関する調査研究（客員研究員）	学芸課	美術室長　西上　実
12	彫刻に関する調査研究	学芸課	美術室長　西上　実
13	建仁寺本坊所蔵典籍の調査・研究	学芸課	美術室長　西上　実
14	古写経の書誌学的研究	学芸課	美術室長　西上　実
15	日本の漆芸品にかかる調査研究	学芸課	工芸室長　久保智康
16	中近世の金属工芸品の製作と受用にみる江南、嶺・湖南、瀬戸内の地域特質と相互文化認識、交流媒体の研究（トヨタ財団研究助成）	学芸課	工芸室長　久保智康
17	古代中世山林寺院の調査・研究	学芸課	工芸室長　久保智康
18	仏教工芸の調査・研究	学芸課	工芸室長　久保智康
19	特別展の事前調査	学芸課	美術室長　西上　実
20	宸翰（天皇の書）の歴史学的見地からみた調査・研究	学芸課	美術室長　西上　実
21	特別展覧会開催に向けての在日ヨーロッパ陶磁の調査研究	学芸課	工芸室長　久保智康
22	敦煌写本の保存と修理	学芸課	美術室長　西上　実
23	妙心寺本坊、塔頭（麟祥院及び衡梅院）に所蔵されている文化財の調査研究	学芸課	学芸課長　森田　稔
24	輸出漆器に関する調査研究	学芸課	工芸室長　久保智康
25	本満寺境内蓮乗院廟の発掘調査に伴う出土品の整理	学芸課	学芸課長　森田　稔

【奈良国立博物館】　13件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	南部諸諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施	学芸課	学芸課長　梶谷　亮治
2	大和古代寺院出土遺物の研究を帝塚山大学考古学研究所との共同研究として実施	学芸課	学芸課資料室長　吉澤　悟
3	仏教美術の光学的調査研究（東京文化財研究所との共同研究）	学芸課	学芸課長　梶谷　亮治
4	仏教美術写真集及びその調査研究	学芸課	学芸課資料室長　吉澤　悟

5	我が国における仏教美術の展開と中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究	学芸課	学芸課長　梶谷　亮治
6	当館所蔵品についての調査研究（客員研究員）	学芸課	学芸課長　梶谷　亮治
7	統一新羅期の道具瓦集成（科学研究費補助金）	学芸課	学芸課教育室研究員 岩戸　晶子
8	古墳時代中期における対外交渉の特質と地域圏の形成・展開過程（科学研究費補助金）	学芸課	学芸課資料室長　吉澤　悟
9	特別展の事前調査	学芸課	学芸課資料室長　吉澤　悟
10	平安仏教とその造形に関する調査研究成果の「院政期の絵画」展への反映	学芸課	学芸課長　梶谷　亮治
11	南都諸社寺に関する計画的な調査研究成果の「神仏習合」展並びに特集陳列「おん祭と春日信仰の美術」への反映	学芸課	学芸課長　梶谷　亮治
12	我が国における仏教美術の展開と中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査研究成果の平常展への反映	学芸課	学芸課長　梶谷　亮治
13	仏教美術の光学的調査研究成果の親と子のギャラリー「仏さまの彩り」への反映	学芸課	学芸課長　梶谷　亮治

【九州国立博物館】　16件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究	企画課	企画課長　　伊藤　嘉章
2	文化財の材質・構造等に関する共同研究（客員研究員）	博物館科学課	環境保全室長　今津　節生
3	博物館における文化財保存修復に関する研究（客員研究員）	博物館科学課	保存修復室研究員　志賀　智史
4	彩色水浸文物の保存科学的研究―中国江蘇省泗水王陵出土文物の保存―（科学研究費補助金）	博物館科学課	環境保全室長　今津　節生
5	弥生時代後期～古墳時代の墳墓大量出土ベンガラについての基礎的研究（科学研究費補助金）	博物館科学課	保存修復室研究員　志賀　智史
6	室町時代の中国文物の受容に関する調査研究（科学研究費補助金）	企画課	特別展室研究員　　畑　靖紀
7	日本近世宗門改制度に関する基礎的研究（科学研究費補助金）	文化財課	資料管理室研究員　　東　昇
8	ＶＲ画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築（科学研究費補助金）	企画課	文化交流展室長　河野　一隆
9	博物館危機管理としての市民協同型IPMシステム構築に向けての基礎研究(科学研究費補助金)	博物館科学課	博物館科学課長　本田　光子
10	博物館におけるＸ線ＣＴスキャンデータの活用（科学研究費補助金）	博物館科学課	環境保全室研究員　鳥越　俊行
11	古代東南アジアにおける三尊像図像の研究－タイ・ミャンマーの図像を中心に－（科学研究費補助金）	企画課	特別展室研究員　原田　あゆみ
12	超高精細大容量画像の安全・ダイナミック表示総合システムの開発（科学技術振興機構）	博物館科学課	環境保全室長　今津　節生
13	近代工芸の美術史・産業史・地域史の基礎資料としての内国勧業博覧会出品作品の研究(科学研究費補助金)	企画課	企画課長　伊藤　嘉章
14	特別展の事前調査	企画課	文化交流展室長　河野　一隆
15	高齢者・障害者・外国人の利用者に対しての、展示の内容・方法、施設整備、管理運営面からの改善、改修方策についての調査研究	企画課	企画課長　伊藤　嘉章
16	高齢者・障害者・外国人の利用者に対しての、展示の内容・方法、施設整備、管理運営面からの改善、改修方策についての調査研究	展示課	展示課長　赤司　善彦

【東京文化財研究所】計20件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（5件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	民俗技術に関する調査・資料収集　無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究（Ｉ4（1）④と一体で実施）	無形文化遺産部	無形民俗文化財研究室長　宮田繁幸
2	東アジアの美術に関する資料学的研究	企画情報部	文化形成研究室長　塩谷　純
3	近現代美術に関する総合的研究	企画情報部	近現代視覚芸術研究室長　田中　淳
4	美術の技法・材料に関する広領域的研究	企画情報部	広領域研究室長　津田徹英
5	無形文化財の保存・活用に関する調査研究	無形文化遺産部	部長　宮田繁幸

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進（2件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	高精細デジタル画像の応用に関する調査研究	企画情報部	文化財アーカイブズ研究室長山梨絵美子
2	文化財の非破壊調査法の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石崎武志

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進（8件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	文化財の生物劣化対策の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石崎武志
2	文化財の保存環境の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石崎武志
3	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究	保存修復科学センター	副センター長　　川野邊　渉
4	文化財の防災計画に関する調査研究	保存修復科学センター	副センター長　　川野邊　渉
5	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
6	国際研修「漆の保存と修復」	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
7	在外日本古美術品保存修復協力事業	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
8	近代の文化遺産の保存修復に関する研究	保存修復科学センター	近代文化遺産研究室長　中山　俊介

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（4件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	文化財保存施策の国際的研究	文化遺産国際協力センター	国際企画情報研究室長　稲葉信子
2	アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究	文化遺産国際協力センター	主任研究員　朽津信明
3	龍門石窟及び陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する調査研究	文化遺産国際協力センター	保存計画研究室長　岡田健
4	敦煌壁画の保護に関する共同研究	文化遺産国際協力センター	保存計画研究室長　岡田健

○諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転とアジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業及び人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	諸外国の文化財保存修復専門家養成	文化遺産国際協力センター	センター長　清水真一

【奈良文化財研究所】計28件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（19件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	文化的景観に関する調査研究	文化遺産部	景観研究室長　内田和伸
2	古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究	文化遺産部	主任研究員　吉川 聡
3	歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究	文化遺産部	建造物研究室長　窪寺茂
4	平城宮跡東院地区（第４２１次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副部長　山崎信二
5	平城宮跡東院地区（第４２３次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副部長　山崎信二
6	平城宮跡東方官衙地区(第４２９次)の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副部長　山崎信二
7	旧大乗院庭園(第４２４次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副部長　山崎信二
8	藤原宮跡大極殿院南門発掘調査	都城発掘調査部　飛鳥藤原地区	部長　巽淳一郎
9	石神遺跡（第２０次）発掘調査	都城発掘調査部　飛鳥藤原地区	部長　巽淳一郎
10	甘樫丘東麓遺跡発掘調査	都城発掘調査部　飛鳥藤原地区	部長　巽淳一郎
11	平城京跡出土遺物の調査研究	都城発掘調査部　平城地区	副部長　山崎信二
12	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	都城発掘調査部　飛鳥藤原地区	部長　巽淳一郎
13	古代瓦に関する研究集会の開催	都城発掘調査部　飛鳥藤原地区	副部長　山崎信二
14	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究	都城発掘調査部	所長　田辺征夫
15	庭園に関する調査研究	文化遺産部	景観研究室長　内田和伸
16	飛鳥地域の歴史に関する調査研究	飛鳥資料館	学芸室長：杉山洋
17	遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究	文化遺産部	遺跡整備研究室長　　山中　敏史
18	遺跡の保存・整備・活用に関する技術開発研究	埋蔵文化財センター	保存修復科学研究室長　肥塚隆保
19	第一次大極殿復原整備研究	都城発掘調査部　平城地区	副部長　山崎信二

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進（5件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	遺跡データベースの作成と公開	埋蔵文化財センター	文化遺産部　遺跡整備研究室長　山中敏史
2	古代官衙・集落に関する研究集会の開催	埋蔵文化財センター	文化遺産部　遺跡整備研究室長　山中敏史
3	遺跡の測量・探査技術の有効利用法の研究	埋蔵文化財センター	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅
4	年輪年代学研究	埋蔵文化財センター	年代学研究室長　光谷拓実
5	動物遺存体による環境考古学研究	埋蔵文化財センター	環境考古学研究室長　松井章

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究	埋蔵文化財センター	保存修復科学研究室長　肥塚隆保

○国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・研究の実施（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	外部機関の要請に基づく文化財の保存修復に関する実践的研究	埋蔵文化財センター	保存修復科学研究室長　肥塚隆保

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	アンコールワット遺跡群西トップ寺院の調査	飛鳥資料館	学芸室長・杉山洋

○諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転とアジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業及び人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力	企画調整部・文化遺産部・都城発掘調査部	企画調整部長　岡村道雄

【東京文化財研究所と奈良文化財研究所との共同研究】計2件

○国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・研究の実施（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力	副所長・保存修復科学センター（東文研） 都城発掘調査部（飛鳥藤原地区） 埋蔵文化財センター、文化遺産部（奈文研）	副所長　三浦定俊（東文研） 副所長　巽淳一郎（奈文研）

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者(役職・名前)
1	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業	文化遺産国際協力センター	センター長　清水真一

20年度　調査研究テーマ一覧

国立文化財機構	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
128件	77件	33件	17件	9件	18件
	文化財研究所計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	共同研究（東京・奈良文化財研究所）	
	51件	20件	28件	3件	

【東京国立博物館】　33件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	特別調査法隆寺献納宝物（第30次）「聖徳太子絵伝」第4回	学芸研究部	上席研究員　原田一敏
2	特別調査「書跡」第5 回（17 年度写経1 回、18 年度写経2 回実施、19 年度古文書1 回、20 年度古文書1 回）	学芸研究部	学芸研究部長　島谷弘幸
3	特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究―尾形光琳風神雷神屏風を中心に	学芸研究部	調査研究課絵画・彫刻室長　田沢裕賀
4	応挙館障壁画の復元に関する調査研究（今年度は、主に修理未了（まくりの壁画）の障壁画について検討）	学芸研究部	列品管理課平常展調整室主任研究員 松嶋雅人
5	館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究	学芸企画部	博物館情報課長　高橋祐次
6	ガンダーラの仏教寺院の伽藍配置と遺物に関する研究（今年度は報告書の執筆）	学芸研究部	列品管理課平常展調整室長　小泉育英
7	博物館の環境保存に関する研究	学芸研究部	保存修復課長　神庭信幸
8	東洋民族資料に関する調査研究	学芸研究部	列品管理課長　谷 豊信
9	耐震性の高い展示手法に関する研究	学芸研究部	保存修復課長　神庭信幸
10	大型油彩画のロール状保存と木枠に張り込まない展示手法法の開発に関する調査研究	学芸研究部	保存修復課長　神庭信幸
11	韓国国立中央博物館所蔵の高麗漆器の保存に関する国際共同研究（韓国国立中央博物館）	学芸研究部	保存修復課長　神庭信幸
12	「法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝の調査研究」（科学研究費補助金・平成17 年度～20 年度）	学芸研究部	上席研究員　原田一敏
13	日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	特任研究員　金子啓明
14	書画料紙の加工法及び保存に関する基礎的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	学芸研究部長　島谷弘幸
15	目録学の構築と古典学の再生（科学研究費基盤Ｓ。研究代表者：田島公　東大教授。平成19-23 年度）	学芸研究部	列品管理課登録室長　田良島 哲
16	国立博物館の機能と役割の変遷に関する基礎的研究 ―館史資料の分析を中心に―（科学研究費補助金）	学芸企画部	博物館情報課情報管理室長　丸山史郎
17	博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	保存修復課長　神庭信幸
18	東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	上席研究員　澤田むつ代
19	東京国立博物館所蔵写真資料データベース（科学研究費補助金）	学芸研究部	調査研究課長　冨田 淳
20	東京国立博物館所蔵古文書データベース（科学研究費補助金）	学芸研究部	調査研究課書跡・歴史室研究員　高梨真行
21	大航海時代以降の東西交流が中国・日本の陶磁器に与えた影響について	学芸研究部	保存修復課保存修復室研究員　三笠景子
22	平成21年度　特集陳列「趙之謙」に関する調査研究	学芸研究部	調査研究課長　冨田 淳
23	明治時代の宝物調査における写真資料に関する調査―横山松三郎、小川一真、早崎梗吉、安村喜当の事跡を中心に―	学芸研究部	調査研究課書跡・歴史室長　冨坂 賢
24	朝鮮王朝時代の工芸作品に関する調査、研究	学芸研究部	調査研究課東洋室長　今井 敦
25	中国宋時代の越州窯青磁が、その後の青磁生産の展開、中国国内の生活文化に与えた影響についての調査	学芸研究部	保存修復課保存修復室研究員　三笠景子
26	金沢北条氏領下総国下河辺庄の総合的研究	学芸研究部	調査研究課書跡・歴史室研究員　高梨真行
27	歴史資料調査	学芸研究部	調査研究課書跡・歴史室長　冨坂 賢
28	有形文化財に係る調査研究	学芸研究部	調査研究課長　冨田 淳
29	博物館環境デザインに関する調査研究	学芸企画部	企画課デザイン室長　木下史青
30	博物館美術教育に関する調査研究	学芸企画部	博物館教育課長　加島 勝
31	博物館教育・普及事業の事例分析と日本の伝統文化に関する先駆的教育・普及理論の構築（科学研究費補助金）	学芸企画部	企画課長　井上洋一
32	博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究	学芸企画部	博物館情報課情報管理室長　丸山史郎
33	ミュージアム・シアターでの公開に向けた研究（凸版印刷との協同）	学芸企画部	博物館教育課長　加島 勝

【京都国立博物館】　17件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究	学芸部	列品管理室長　若杉準治
2	平安仏教とその造形に関する研究	学芸部	上席研究員　西上 実
3	日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察（科学研究費補助金）	学芸部	館長　佐々木 丞平
4	建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究（科学研究費補助金）	学芸部	企画室長　赤尾栄慶
5	修復文化財に関する資料収集及び調査研究	学芸部	保存修理指導室長　村上 隆
6	等伯に関する調査研究（客員研究員）	学芸部	美術室長　山本英男
7	近世絵画に関する調査研究（客員研究員）	学芸部	連携協力室長　山下 善也
8	文化財情報に関する調査研究（客員研究員）	学芸部	企画室長　赤尾栄慶
9	訓点資料としての典籍に関する調査研究（客員研究員）	学芸部	企画室長　赤尾栄慶
10	彫刻に関する調査研究（客員研究員）	学芸部	主任研究員　淺湫 毅
11	西域出土文献に関する調査研究	学芸部	企画室長　赤尾栄慶
12	中・近世の金属工芸品の製作と受用にみる江南、嶺・湖南、瀬戸内の地域特質と相互文化認識、交流媒体の研究（トヨタ財団研究助成）	学芸部	工芸室長　久保智康
13	宸翰（天皇の書）の歴史学的見地からみた調査・研究	学芸部	研究員　羽田 聡
14	瑞光寺ならびに建仁寺両足院所蔵陶磁の調査研究	学芸部	主任研究員　尾野善裕
15	妙心寺本坊、塔頭（麟祥院及び衡梅院）に所蔵されている文化財の調査研究により、特別展覧会「妙心寺展」（仮称）の開催に反映する	学芸部	研究員　羽田 聡
16	輸出漆器に関する調査研究により、特別展覧会「japan蒔絵－宮殿を飾る 東洋の燦めき－」の開催に反映する	学芸部	主任研究員　永島明子
17	妙顕寺・本満寺・本圀寺などに所蔵される文化財の調査研究により、特別展覧会「日蓮展」（仮称）の開催に反映する	学芸部	研究員　大原嘉豊

【奈良国立博物館】　9件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	南部諸諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施	学芸部	学芸部長　西山 厚
2	仏教美術の光学的調査研究（東京文化財研究所との共同研究）	学芸部	学芸部長　西山 厚
3	仏教美実写真収集及びその調査研究	学芸部	資料室長　宮崎幹子
4	我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究	学芸部	学芸部長　西山 厚
5	当館所蔵品についての調査研究（客員研究員）	学芸部	学芸部長　西山 厚
6	統一新羅期の道具瓦集成（科学研究費補助金）	学芸部	工芸考古室員　岩戸晶子
7	古墳時代中期における対外交渉の特質と地域圏の形成・展開過程（科学研究費補助金）	学芸部	養育室長　吉澤 悟
8	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究成果の一部を「国宝法隆寺金堂展」並びに特別陳列「おん祭りの春日信仰の美術」及び「お水取り」に反映させる	学芸部	学芸部長　西山 厚
9	我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査研究成果の一部で平常展の充実を図る	学芸部	学芸部長　西山 厚

【九州国立博物館】　18件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究	企画課	企画課長　　伊藤　嘉章
2	文化財の材質・構造等に関する共同研究（客員研究員）	博物館科学課	環境保全室長　今津　節生
3	博物館における文化財保存修復に関する研究（客員研究員）	博物館科学課	保存修復室研究員　志賀　智史
4	彩色水浸文物の保存科学的研究―中国江蘇省泗水王陵出土文物の保存―（科学研究費補助金）	博物館科学課	環境保全室長　今津　節生
5	ＶＲ画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築（科学研究費補助金）	企画課	文化交流展示室長　河野　一隆
6	近代工芸の美術史・産業史・地域史の基礎資料としての内国勧業博覧会出品作品の研究（科学研究費補助金）	企画課	企画課長　　伊藤　嘉章
7	博物館危機管理としての市民協同型IPM システム構築に向けての基礎研究（科学研究費補助金）	博物館科学課	博物館科学課長　本田　光子
8	博物館におけるＸ線ＣＴスキャンデータの活用（科学研究費補助金）	博物館科学課	環境保全室研究員　鳥越　俊行
9	古代東南アジアにおける三尊像図像の研究－タイ・ミャンマーの図像を中心に－（科学研究費補助金）	企画課	特別展室研究員　原田　あゆみ
10	超高精細大容量画像の安全・ダイナミック表示総合システムの開発（科学技術振興機構）	博物館科学課	環境保全室長　今津　節生
11	近世初期日本絵画における粉本使用例の基礎調査（科学研究費補助金）	企画課	研究員　金井　裕子
12	埴輪に認められる赤色顔料についての基礎的研究（科学研究費補助金）	博物館科学課	保存修復室研究員　志賀　智史
13	被災した近現代歴史資料の救済のための簡便な真空凍結乾燥法の開発（科学研究費補助金）	博物館科学課	特任研究員　村田　忠繁
14	近世初期対馬藩の政治構造と日朝交流（科学研究費補助金）	文化財課	研究員　荒木　和憲
15	室町時代の仏教絵画を中心とする東アジアの宗教美術に関する調査研究（科学研究費補助金）	文化財課	研究員　畑　靖紀
16	トルキ山遼墓出土品から見た唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術（科学研究費補助金）	文化財課	文化財課長　臺信　祐爾
17	高齢者・障がい者・外国人の利用者の視点に立った、展示の内容・方法、施設整備、管理運営面からの研究・実践	総務課	総務課長　樋口　理央
18	音声ガイドのコンテンツ評価と検証	展示課	展示課長　赤司　善彦

【東京文化財研究所】計20件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（5件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	民俗技術に関する調査・資料収集　無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究（Ｉ4（１）④と一体で実施）	無形文化遺産部	無形文化遺産部長　宮田繁幸
2	東アジアの美術に関する資料学的研究	企画情報部	文化形成研究室長　塩谷　純
3	近現代美術に関する総合的研究	企画情報部	近・現代視覚芸術研究室長　山梨絵美子
4	美術の技法・材料に関する広領域的研究	企画情報部	広領域研究室長　綿田　稔
5	無形文化財の保存・活用に関する調査研究	無形文化遺産部	無形文化遺産部長　宮田繁幸

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進（2件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	高精細デジタル画像の応用に関する調査研究	企画情報部	文化財アーカイブズ研究室長　津田徹英
2	文化財の非破壊調査法の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石崎武志

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進（8件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	文化財の生物劣化対策の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石崎武志
2	文化財の保存環境の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石崎武志
3	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
4	文化財の防災計画に関する調査研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
5	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
6	国際研修「紙の保存と修復」	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
7	在外日本古美術品保存修復協力事業	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
8	近代の文化遺産の保存修復に関する研究	保存修復科学センター	近代文化遺産研究室長　中山俊介

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（4件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	文化財保存施策の国際的研究	文化遺産国際協力センター	文化遺産国際協力センター長　清水真一
2	アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究	文化遺産国際協力センター	文化遺産国際協力センター主任研究員 朽津信明
3	龍門石窟及び陝西省唐代陵墓石彫像の保存修復に関する調査研究	文化遺産国際協力センター	保存計画研究室長　岡田　健
4	敦煌壁画の保護に関する調査研究	文化遺産国際協力センター	保存計画研究室長　岡田　健

○諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転とアジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業及び人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	諸外国の文化財保存修復専門家養成	文化遺産国際協力センター	文化遺産国際協力センター長　清水真一

【奈良文化財研究所】計28件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（21件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	文化的景観に関する調査研究	文化遺産部	文化遺産部長　山中敏史
2	古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究	文化遺産部	歴史研究室長　吉川　聡
3	歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究	文化遺産部	建造物研究室長　窪寺茂
4	平城宮跡第一次大極殿院地区南面回廊跡（第431次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　山崎信二
5	平城宮跡第一次大極殿院地区西面回廊跡（第432次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　山崎信二
6	平城宮跡第一次大極殿院地区西面回廊跡（第436次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　山崎信二
7	平城宮跡第一次大極殿院地区西面回廊跡（第437次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　山崎信二
8	平城宮跡第一次大極殿院地区西面回廊跡（第438次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　山崎信二
9	平城宮跡東方官衙地区（第440次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　山崎信二
10	平城京右京三条一坊八坪（第448次調査）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　山崎信二
11	藤原宮跡朝堂院地区の発掘調査	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部長　松村恵司
12	石神遺跡の発掘調査	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部長　松村恵司
13	甘樫丘東麓遺跡の発掘調査	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部長　松村恵司
14	平城京跡出土遺物・遺構の調査研究等	都城発掘調査部　平城地区	副所長　山崎信二
15	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部長　松村恵司
16	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究	都城発掘調査部	副所長　山崎信二等
17	庭園に関する調査研究	文化遺産部	景観研究室長　内田和伸
18	東アジア史における飛鳥の研究及び飛鳥時代工芸技術の研究	飛鳥資料館	学芸室長　杉山洋
19	遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究	文化遺産部	遺跡整備研究室長　平澤毅
20	遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術並びに監視技術の開発的研究	埋蔵文化財センター	保存修復科学研究室長　高妻洋成
21	文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿正殿復原をはじめとする整備・公開・活用に関する専門的・技術的な援助・助言	都城発掘調査部　平城地区	副所長　山崎信二

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進（4件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	遺跡データベースの作成と公開	文化遺産部	文化遺産部長　山中敏史
2	遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法の研究	埋蔵文化財センター	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅
3	年輪年代学研究	埋蔵文化財センター	年代学研究室長　肥塚隆保
4	遺跡出土の動物遺存体や古土壌の考古科学的分析による環境考古学研究	埋蔵文化財センター	環境考古学研究室長　松井章

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究	埋蔵文化財センター	保存修復科学研究室長　高妻洋成

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的､考古学的､保存科学的調査	企画調整部	展示企画室長　杉山　洋

○諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転とアジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業及び人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力	企画調整部	国際遺跡研究室長　井上和人

【東京文化財研究所と奈良文化財研究所との共同研究】計3件

○国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・研究の実施（2件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力	保存修復科学センター（東文研）・埋蔵文化財センター（奈文研）	保存修復科学センター長　石崎武志 埋蔵文化財センター長　肥塚隆保
2	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力	都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）・企画調整部（奈文研）	都城発掘調査部長　松村恵司

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業	文化遺産国際協力センター	文化遺産国際協力センター長　清水真一

21年度 調査研究テーマ一覧

国立文化財機構	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
134件	86件	41件	18件	10件	17件
	文化財研究所計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	共同研究（東京・奈良文化財研究所）	
	48件	20件	26件	2件	

【東京国立博物館】計41件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究	学芸研究部	調査研究課長　富田淳
2	特別調査法隆寺献納宝物（第31次）「聖徳太子絵伝」第5回	学芸研究部	上席研究員　原田一敏
3	特別調査「書跡」第7回	学芸研究部	学芸研究部長　島谷弘幸
4	特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究―尾形光琳風神雷神屏風を中心に	学芸研究部	調査研究課絵画・彫刻室長　田沢裕賀
5	応挙館障壁画の復元に関する調査研究	学芸研究部	企画課特別展室長　松嶋雅人
6	館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究	学芸研究部	博物館情報課長　高橋　裕次
7	ガンダーラの仏教寺院の伽藍配置と遺物に関する研究	学芸研究部	列品管理課平常展調整室長　小泉惠英
8	博物館の環境保存に関する研究	学芸研究部	保存修復課長　神庭　信幸
9	東洋民族資料に関する調査研究	学芸研究部	列品管理課長　谷　豊信
10	韓国国立中央博物館所蔵の高麗漆器の保存に関する国際共同研究	学芸研究部	保存修復課長　神庭信幸
11	日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	特任研究員　金子啓明
12	東アジアの書道史における料紙と書風に関する基礎的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	学芸研究部長　島谷弘幸
13	目録学の構築と古典学の再生（科学研究費補助金）	学芸研究部	列品管理課登録室長 田良島哲
14	国立博物館の機能と役割の変遷に関する基礎的研究―館史資料の分析を中心に―（科学研究費補助金）	学芸研究部	博物館情報課情報管理室長　丸山士郎
15	油彩画の材料・技法に関する共同調査	学芸研究部	保存修復課長　神庭　信幸
16	荻原守衛「女」の石膏原型とブロンズ鋳造に関する共同研究	学芸研究部	保存修復課長　神庭　信幸
17	博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	保存修復課長　神庭　信幸
18	東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究―「正倉院裂」を中心に―（科学研究費補助金）	学芸研究部	特任研究員　澤田むつ代
19	文化財保護の歴史に関する基礎的研究（科学研究費補助金）	学芸企画部	博物館情報課長　高橋裕次
20	隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	博物館教育課長　加島勝
21	原三溪旧蔵近代絵画・彫刻に関する基礎的研究(科学研究費補助金)	学芸研究部	企画課特別展室任期付研究員 植田 彩芳子
22	高度な復元作業のための制作空間の情報化(科学研究費補助金)	学芸研究部	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 河内　晋平
23	狩野晴川院養信筆「法隆寺什物図」の研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 安藤　香織
24	東京国立博物館所蔵写真資料データベース（科学研究費補助金）	学芸研究部	調査研究課長　富田 淳
25	東京国立博物館所蔵古文書データベース（科学研究費補助金）	学芸研究部	博物館教育課ボランティア室研究員 髙梨真行
26	東京国立博物館所蔵印譜データベース（科学研究費補助金）	学芸研究部	調査研究課絵画・彫刻室任期付研究員 関紀子
27	明治時代の宝物調査における写真資料に関する調査―横山松三郎、小川一眞、早崎稼吉、安村喜当の事跡を中心に―	学芸研究部	調査研究課書跡・歴史室長　冨坂　賢
28	古文書および古典籍の修復と装幀形態に関する用語の研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	博物館情報課長　高橋裕次
29	金沢北条氏領下総国下河辺庄の総合的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	博物館教育課ボランティア室研究員 髙梨　真行
30	東アジアの書画料紙における装飾加工と保存に関する総合的研究	学芸研究部	博物館情報課長　高橋　裕次
31	東京国立博物館所蔵ラグーザ寄贈資料の研究	学芸研究部	保存修復課保存修復室主任研究員 土屋裕子
32	曹洞宗寺院に伝来した中世彫刻の調査及び研究	学芸研究部	博物館教育課教育普及室長　浅見　龍介
33	特別調査「工芸」第1回	学芸研究部	調査研究課工芸・考古室長　竹内奈美子
34	高精細デジタル測定技術と職人の知識を融合させた工芸文化財復元の研究	学芸研究部	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 河内　晋平
35	博物館環境デザインに関する調査研究	学芸企画部	企画課デザイン室長　木下史青
36	博物館美術教育に関する調査研究	学芸企画部	博物館教育課長　加島 勝
37	博物館教育・普及事業の事例分析と日本の伝統文化に関する先駆的教育・普及理論の構築（科学研究費補助金）	学芸企画部	企画課長　井上洋一
38	博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究	学芸企画部	博物館情報課情報管理室長　丸山史郎
39	凸版印刷と協同で、ミュージアム・シアターでの公開に向けた研究を実施する	学芸企画部	博物館教育課長　加島 勝
40	クウジット株式会社と協同で、ロケーションアンプを利用した作品鑑賞補助実験「LocationAmp for 法隆寺宝物館」を実施する	学芸企画部	博物館教育課長　加島 勝
41	彫刻におけるデジタル立体造形の可能性と表現方法の研究・教育への応用（科学研究費補助金）	学芸企画部	企画課長　井上洋一

【京都国立博物館】　18件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究	学芸部	工芸室長　尾野善裕
2	鎌倉仏教とその造形に関する研究	学芸部	上席研究員　赤尾栄慶
3	日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察（科学研究費補助金）	学芸部	館長　佐々木 丞平
4	建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究（科学研究費補助金）	学芸部	上席研究員　赤尾栄慶
5	修復文化財に関する資料収集及び調査研究	学芸部	保存修理指導室長　村上 隆
6	文化財の保存・修復に関する調査研究（奈良文化財研究所との共同研究）	学芸部	保存修理指導室長　村上 隆
7	近世絵画に関する調査研究（客員研究員）	学芸部	連携協力室長　山下 善也
8	訓点資料としての典籍に関する調査研究（客員研究員）	学芸部	上席研究員　赤尾栄慶
9	彫刻に関する調査研究（客員研究員）	学芸部	主任研究員　浅湫 毅
10	出土・伝世古陶磁に関する調査研究	学芸部	工芸室長　尾野善裕
11	近代建築に関する調査研究	学芸部	文化財管理監　中村　康
12	漆工芸に関する調査研究	学芸部	主任研究員　永島　明子
13	中国近代絵画に関する調査研究	学芸部	学芸部長　西上　実
14	文化財情報に関する調査研究	学芸部	企画室長　久保智康
15	西域出土文献に関する調査研究	学芸部	上席研究員　赤尾栄慶
16	京都十六本山をはじめとする日蓮法華宗寺院所蔵文化財の調査研究（特別展覧会「日蓮と法華の名宝」準備調査）	学芸部	研究員　大原　嘉豊

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
17	長谷川等伯に関する調査研究	学芸部	美術室長　山本英男
18	特別展覧会「高僧と袈裟」の開催に向けての調査研究	学芸部	主任研究員　山川　暁

【奈良国立博物館】　計10件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	南部諸諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施	学芸部	学芸部長　西山 厚
2	仏教美術の光学的調査研究（東京文化財研究所との共同研究）	学芸部	学芸部長　西山 厚
3	仏教美実写真収集及びその調査研究	学芸部	資料室長　宮崎幹子
4	我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究	学芸部	学芸部長　西山 厚
5	当館所蔵品についての調査研究（客員研究員）	学芸部	学芸部長　西山 厚
6	奈良時代の仏教美術と東アジア世界	学芸部	館長　湯山賢一
7	統一新羅期の道具瓦集成（科学研究費補助金）	学芸部	工芸考古室員　岩戸晶子
8	古墳時代中期における対外交渉の特質と地域圏の形成・展開過程（科学研究費補助金）	学芸部	養育室長　吉澤 悟
9	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究成果の一部を「国宝鑑真和上展」及び「聖地寧波-日本仏教1300年の源流～すべてはここからやって来た」並びに特別陳列「おん祭りの春日信仰の美術」及び「お水取り」に反映させる	学芸部	学芸部長　西山 厚
10	我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査研究成果の一部で平常展の充実を図る	学芸部	学芸部長　西山 厚

【九州国立博物館】　計17件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究	企画課	企画課長　小泉　惠英
2	文化財の材質・構造等に関する共同研究	博物館科学課	環境保全室長　今津　節生
3	博物館における文化財保存修復に関する研究	博物館科学課	保存修復室研究員 志賀　智史
4	博物館危機管理としての市民協同型IPMシステム構築に向けての基礎研究	博物館科学課	博物館科学課長　本田　光子
5	文化遺産の保全に寄与する保存環境の構築	博物館科学課	博物館科学課長　本田　光子
6	東アジアの文化財修復用手漉き和紙の調査研究（UNESCOとの共同）	博物館科学課	保存修復室長　藤田　励夫
7	ＶＲ画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築（科学研究費補助金）	企画課	文化交流展示室長 河野　一隆
8	近代工芸の美術史・産業史・地域史の基礎資料としての内国勧業博覧会出品作品の研究（科学研究費補助金）	学芸部	学芸部長　伊藤　嘉章
9	トルキ山遼墓出土品から見た唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術（科学研究費補助金）	文化財課	文化財課長　臺信　祐爾
10	室町時代の仏教絵画を中心とする東アジアの宗教美術に関する調査研究（科学研究費補助金）	企画課	研究員　畑　靖紀
11	近世初期日本絵画における粉本使用例の基礎研究（科学研究費補助金）	企画課	研究員　金井　裕子
12	埴輪に認められる赤色顔料についての基礎研究（科学研究費補助金）	博物館科学課	保存修復室研究員　志賀　智史
13	被災した近現代歴史資料の救済のための簡便な真空凍結乾燥法の開発（科学研究費補助金）	学芸部	特任研究員　村田　忠繁
14	近世初期対馬藩の政治構造と日朝交流	文化財課	荒木　和憲
15	Ｘ線ＣＴスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析	博物館科学課	環境保全室長　今津　節生
16	高齢者・障がい者・外国人等の利用者の視点に立った、展示の内容・方法、施設整備、管理運営面からの研究・実践（UMP：Universal　Museum　Project）を展開する	総務課	総務課長　樋口　理央
17	平成20年度特別展「工芸のいま　伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への調査を受けて、継続的かつ発展的に調査研究活動を行なう	学芸部	学芸部長　伊藤　嘉章

【東京文化財研究所】計20件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（5件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	民俗技術に関する調査・資料収集　無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究（Ｉ4（1）④と一体で実施）	無形文化遺産部	無形文化遺産部長　宮田繁幸
2	東アジアの美術に関する資料学的研究	企画情報部	文化形成研究室長　塩谷　純
3	近現代美術に関する総合的研究	企画情報部	近現代視覚芸術研究室長　山梨絵美子
4	美術の技法・材料に関する広領域的研究	企画情報部	広領域研究室長　綿田　稔
5	無形文化財の保存・活用に関する調査研究	無形文化遺産部	無形文化遺産部長　宮田繁幸

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進（2件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	高精細デジタル画像の応用に関する調査研究	企画情報部	文化財アーカイブズ研究室長　津田徹英
2	文化財の非破壊調査法の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石﨑武志

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進（8件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	文化財の生物劣化対策の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石﨑武志
2	文化財の保存環境の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石﨑武志
3	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
4	文化財の防災計画に関する調査研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
5	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
6	国際研修「漆の保存と修復」	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
7	在外日本古美術品保存修復協力事業	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
8	近代の文化遺産の保存修復に関する研究	保存修復科学センター	近代文化遺産研究室長　中山俊介

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（4件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	文化財保存施策の国際的研究	文化遺産国際協力センター	国際情報研究室長　岡田　健
2	アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究	文化遺産国際協力センター	主任研究員　朽津信明
3	陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究	文化遺産国際協力センター	国際情報研究室長　岡田　健
4	敦煌壁画の保護に関する調査研究	文化遺産国際協力センター	国際情報研究室長　岡田　健

○諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転とアジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業及び人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	諸外国の文化財保存修復専門家養成	文化遺産国際協力センター	保存計画研究室長　友田正彦

【奈良文化財研究所】計26件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（18件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	文化的景観に関する調査研究	文化遺産部	文化遺産部長　小野健吉
2	古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究	文化遺産部	歴史研究室長　吉川聡
3	歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究	文化遺産部	建造物研究室長　島田敏男
4	平城宮跡東院地区（第446次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	都城発掘調査部長　井上和人
5	平城宮跡第一次大極殿院地区内庭広場（第454次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	都城発掘調査部長　井上和人
6	薬師寺（第457次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	都城発掘調査部長　井上和人
7	興福寺南大門跡（第458次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	都城発掘調査部長　井上和人
8	平城宮跡東方官衙地区(第466次)の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	都城発掘調査部長　井上和人
9	藤原宮跡朝堂院地区の発掘調査	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部副部長　深澤芳樹
10	甘樫丘東麓遺跡の発掘調査	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部副部長　深澤芳樹
11	平城京跡出土遺物・遺構の調査研究等	都城発掘調査部　平城地区	都城発掘調査部長　井上和人
12	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部副部長　深澤芳樹
13	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究	都城発掘調査部　平城地区	都城発掘調査部長　井上和人
14	庭園に関する調査研究	文化遺産部	遺跡整備研究室長　平澤毅
15	東アジア史における飛鳥の研究及び飛鳥時代工芸技術の研究	飛鳥資料館	学芸室長　加藤真二
16	遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究	文化遺産部	遺跡整備研究室長　平澤毅
17	遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術並びに監視技術の開発的研究	埋蔵文化財センター	保存修復科学研究室長　高妻洋成
18	文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿正殿復原をはじめとする整備・公開・活用に関する専門的・技術的な援助・助言	都城発掘調査部　平城地区	都城発掘調査部長　井上和人

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進（4件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	遺跡データベースの作成と公開	埋蔵文化財センター	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅
2	遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法の研究	埋蔵文化財センター	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅
3	年輪年代学研究	埋蔵文化財センター	年代学研究室長　大河内隆之
4	遺跡出土の動物遺存体や古土壌の考古科学的分析による環境考古学研究	埋蔵文化財センター	環境考古学研究室長　松井章

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究	埋蔵文化財センター	保存修復科学研究室長　高妻洋成

○国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・研究の実施（2件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存活用に関する技術的協力	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部副部長　深澤芳樹
2	国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業に関する技術的協力	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部副部長　深澤芳樹

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査	企画調整部	国際遺跡研究室長　杉山　洋

【東京文化財研究所と奈良文化財研究所との共同研究】計2件

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（2件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石崎武志
2	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業	文化遺産国際協力センター	文化遺産国際協力センター　清水真一

22年度 調査研究テーマ一覧

国立文化財機構	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
137件	86件	39件	19件	9件	19件
	文化財研究所計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	共同研究（東京・奈良文化財研究所）	
	51件	21件	29件	1件	

【東京国立博物館】　計39件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究	学芸研究部	調査研究課長　富田淳
2	特別調査法隆寺献納宝物（第32次）「聖徳太子絵伝」第6回	学芸研究部	絵画・彫刻室長　田沢裕賀
3	特別調査「書跡」第8回	学芸研究部	学芸研究部長　島谷弘幸
4	特別調査「工芸」第2回	学芸研究部	調査研究課工芸・考古室長　竹内奈美子
5	特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究―尾形光琳風神雷神屏風を中心に	学芸研究部	絵画・彫刻室長　田沢裕賀
6	特別調査「江戸幕府御用絵師板谷家関係資料」	学芸研究部	絵画･彫刻室長 田沢裕賀
7	館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究	学芸研究部	博物館情報課長　高橋　裕次
8	博物館の環境保存に関する研究	学芸研究部	保存修復課長　神庭　信幸
9	東洋民族資料に関する調査研究	学芸研究部	列品管理課長　谷豊信
10	油彩画の材料・技法に関する共同調査	学芸研究部	保存修復課長　神庭　信幸
11	荻原守衛「女」の石膏原型とブロンズ鋳造に関する共同研究	学芸研究部	保存修復課長　神庭　信幸
12	日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究	学芸研究部	特任研究員　金子啓明
13	目録学の構築と古典学の再生（科学研究費補助金）	学芸研究部	書跡・歴史室長　田良島　哲
14	原三渓旧蔵近代絵画・彫刻に関する基礎的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	任期付研究員　植田　彩芳子
15	博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	保存修復課長　神庭　信幸
16	東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究―「正倉院裂」を中心に―(科学研究費補助金)	学芸研究部	特任研究員　澤田むつ代
17	文化財保護の歴史に関する基礎的研究(科学研究費補助金)	学芸研究部	博物館情報課長　高橋裕次
18	高度な復元作業のための制作空間の情報化(科学研究費補助金)	学芸研究部	列品管理課　河内晋平
19	狩野晴川院養信筆「法隆寺什物図」の研究(科学研究費補助金)	学芸研究部	列品管理課　安藤香織
20	東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究(科学研究費補助金)	学芸研究部	学芸研究部長　島谷弘幸
21	中国書画の表装に関する基礎的研究(科学研究費補助金)	学芸研究部	調査研究課長　富田淳
22	清時代末期の訪中調査における写真資料に関する調査研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	博物館情報課　関紀子
23	占領期の教育政策における国立博物館の役割に関する調査研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	博物館教育課　神辺知加
24	宮廷工芸に関する物質文化的研究―生活感のある工芸史の構築をめざして―（科学研究費補助金）	学芸研究部	列品管理課　猪熊兼樹
25	近現代における古日本染織の移動とコレクション形成に関する基礎的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	企画課　小山弓弦葉
26	東京国立博物館所蔵古文書データベース（科学研究費補助金）	学芸研究部	調査研究課　　高梨真行
27	東京国立博物館所蔵印譜データベース（科学研究費補助金）	学芸研究部	博物館情報課　関紀子
28	隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	保存修復課　和田浩
29	前方後円墳体制東縁地域における国家形成過程の研究：常陸の場合（科学研究費補助金）	学芸研究部	保存修復課　日高慎
30	古文書および古典籍の修復と装幀形態に関する用語の研究(科学研究費補助金)	学芸研究部	博物館情報課長　高橋裕次
31	彫刻におけるデジタル立体造形の可能性と表現方法の研究・教育への応用（科学研究費補助金）	学芸研究部	企画課長　井上洋一
32	アジアの木地螺鈿―その源流、正倉院宝物への道をたどる―（科学研究費補助金）	学芸研究部	列品管理課　猪熊兼樹
33	高精細デジタル測定技術と職人の知識を融合させた工芸文化財復元の研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	列品管理課　河内晋平
34	日本近世実景図研究	学芸研究部	調査研究課　大橋美織
35	博物館環境デザインに関する調査研究	学芸企画部	企画課　木下史青
36	博物館美術教育に関する調査研究	学芸企画部	博物館教育課長　今井敦
37	博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究	学芸企画部	博物館情報課　村田良二
38	凸版印刷と協同で、ミュージアム・シアターでの公開に向けた研究	学芸企画部	企画課長　井上　洋一
39	博物館をみんなのものに～視覚障害児童・生徒へのスクールプログラム– ハンズオンとワークショップを中心に	学芸企画部	博物館教育課長　今井敦

【京都国立博物館】　計19件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究	学芸部	考古室長　宮川禎一
2	鎌倉仏教とその造形に関する調査研究	学芸部	上席研究員　赤尾栄慶
3	日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察（科学研究費補助金）	学芸部	館長　佐々木 丞平
4	建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究　（科学研究費補助金）	学芸部	上席研究員　赤尾栄慶
5	修復文化財に関する資料収集及び調査研究	学芸部	保存修理指導室長　村上 隆
6	文化財の保存・修復に関する調査研究（奈良文化財研究所との共同研究）	学芸部	保存修理指導室長　村上 隆
7	近世絵画に関する調査研究	学芸部	連携協力室長　山下 善也
8	訓点資料としての典籍に関する調査研究	学芸部	上席研究員　赤尾栄慶
9	彫刻に関する調査研究	学芸部	主任研究員　淺湫 毅
10	出土・伝世古陶磁に関する調査研究	学芸部	工芸室長　尾野善裕
11	近代建築に関する調査研究	学芸部	文化財管理監　中村　康
12	文化財情報に関する調査研究	学芸部	企画室長　久保智康
13	特別展覧会「高僧と袈裟」の開催に向けて、寺院所蔵品の調査研究を行う。	学芸部	主任研究員　山川　暁
14	特別展覧会「中国の書画」に向けて、旧上野コレクションと関連作品の調査研究を行う。	学芸部	上席研究員　赤尾栄慶
15	特別展観「上田秋成」の開催に向けて、日本近世文学会と共同で調査研究を行う。	学芸部	アソシエイトフェロー　水谷　亜希
16	特集陳列「園田湖城」の開催に向けて、篆刻資料の調査研究を行う。	学芸部	上席研究員　赤尾栄慶
17	特別展覧会「法然」の開催に向けて、浄土宗寺院所蔵文化財の調査研究を行う。	学芸部	列品管理室長　若杉準治
18	特別展覧会「細川家の至宝」（平成２３年度)の開催に向けて永青文庫と共同で関連作品の調査研究を行う	学芸部	主任研究員　淺湫 毅
19	特別展覧会「中国近代絵画（仮）」（平成２３年度）の開催に向けて、旧須磨コレクションと関連作品の調査研究を行う。	学芸部	学芸部長　西上　実

【奈良国立博物館】　計9件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	南部諸諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施	学芸部	学芸部長　西山 厚
2	仏教美術の光学的調査研究（東京文化財研究所との共同研究）	学芸部	学芸部長　西山 厚
3	仏教美実写真収集及びその調査研究	学芸部	資料室長　宮崎幹子
4	我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究	学芸部	学芸部長　西山 厚
5	当館所蔵品についての調査研究（客員研究員）	学芸部	学芸部長　西山 厚
6	奈良時代の仏教美術と東アジア世界	学芸部	館長　湯山賢一
7	統一新羅期の道具瓦集成（科学研究費補助金）	学芸部	工芸考古室員　岩戸晶子
8	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究成果の一部を特別展「大遣唐使展」、「仏像修理１００年」、「至宝の仏像」及び特別陳列「おん祭りの春日信仰の美術」、「お水取り」に反映させる	学芸部	学芸部長　西山 厚
9	我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査研究成果の一部で名品展の充実を図る	学芸部	学芸部長　西山 厚

【九州国立博物館】　計19件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究	企画課	企画課長　小泉　惠英
2	文化財の材質・構造等に関する共同研究	博物館科学課	環境保全室長　今津　節生
3	博物館における文化財保存修復に関する研究	博物館科学課	保存修復室主任研究員　志賀　智史
4	博物館危機管理としての市民協同型IPMシステム構築に向けての基礎研究	博物館科学課	博物館科学課長　本田　光子
5	東アジアの文化財修復用手漉き和紙の調査研究（UNESCOとの共同）	博物館科学課	保存修復室長　藤田　励夫
6	ＶＲ画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築（科学研究費補助金）	企画課	文化交流展室長　河野　一隆
7	トルキ山遼墓出土品から見た唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術（科学研究費補助金）	文化財課	文化財課長　臺信　祐爾
8	室町時代の仏教絵画を中心とする東アジアの宗教美術に関する調査研究	企画課	主任研究員　畑　靖紀
9	埴輪に認められる赤色顔料についての基礎的研究（科学研究費補助金）	博物館科学課	保存修復室主任研究員　志賀　智史
10	Ｘ線ＣＴスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析（科学研究費補助金）	博物館科学課	環境保全室長　今津　節生
11	アジアの木地螺鈿－その源流、正倉院宝物への道をたどる－（科学研究費補助金）	文化財課	資料管理室長　小林　公治
12	五胡十六国から北魏時代の出土陶俑に関する基礎研究（科学研究費補助金）	企画課	研究員　市元　塁
13	海の東アジアが醸成した貝と漆の文化‘螺鈿’の再発見－その共通性と多様性を探る－（トヨタ財団研究助成）	文化財課	資料管理室長　小林　公治
14	平成20年度特別展「工芸のいま　伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への調査を受けて、継続的かつ発展的に調査研究活動を行なう	学芸部	学芸部長　伊藤　嘉章
15	京都、九州における黄檗宗寺院に関する調査を進め、成果を特別展に反映する	展示課	主任研究員　楠井　隆志
16	日本、韓国、中国における馬文化に関する考古遺品、美術作品に関する調査を進め、成果を特別展に反映する	企画課	文化交流展室長　河野　一隆
17	中国内蒙古自治区出土の遼時代に属する考古遺物に関する調査研究を進め、成果を特別展に反映する	企画課	研究員　市元　塁
18	細川家伝来資料に関する調査を行なう	文化財課	主任研究員　丸山　猶計
19	九博に関連する絵本の次シリーズの企画について検討する	企画課	研究員　市元　塁

【東京文化財研究所】計21件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（5件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	民俗技術に関する調査・資料収集・無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究（Ⅰ4(1)④と一体で実施）	無形文化遺産部	無形文化遺産部長　宮田繁幸
2	東アジアの美術に関する資料学的研究	企画情報部	文化形成研究室長　塩谷　純
3	近現代美術に関する総合的研究	企画情報部	近現代視覚芸術研究室長　山梨絵美子
4	美術の技法・材料に関する広領域的研究	企画情報部	広領域研究室長　綿田　稔
5	無形文化財の保存・活用に関する調査研究	無形文化遺産部	無形文化遺産部長　宮田繁幸

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進（2件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	高精細デジタル画像の応用に関する調査研究	企画情報部	文化財アーカイブズ研究室長　津田徹英
2	文化財の非破壊調査法の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石﨑武志

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進（9件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	文化財の生物劣化対策の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石﨑武志
2	文化財の保存環境の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石﨑武志
3	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
4	文化財の防災計画に関する調査研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
5	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
6	国際研修「紙の保存と修復」	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
7	在外日本古美術品保存修復協力事業	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長　川野邊渉
8	近代の文化遺産の保存修復に関する研究	保存修復科学センター	近代文化遺産研究室長　中山俊介
9	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石﨑武志

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（4件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	文化財保存施策の国際的研究	文化遺産国際協力センター	国際情報研究室長　岡田　健
2	アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究	文化遺産国際協力センター	主任研究員　朽津信明
3	陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究	文化遺産国際協力センター	国際情報研究室長　岡田　健
4	敦煌壁画の保護に関する調査研究	文化遺産国際協力センター	国際情報研究室長　岡田　健

○諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転とアジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業及び人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	諸外国の文化財保存修復専門家養成	文化遺産国際協力センター	文化遺産国際協力センター長　清水真一

【奈良文化財研究所】計29件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（21件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	文化的景観に関する調査研究	文化遺産部	文化遺産部長　小野健吉
2	古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究	文化遺産部	歴史研究室長　吉川聡
3	歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究	文化遺産部	建造物研究室長　島田敏男
4	平城宮跡東院地区（第469次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
5	西大寺旧境内(第473次)の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
6	薬師寺（第474次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
7	薬師寺（第475次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
8	薬師寺（第476次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
9	春日東塔跡(第477次)の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
10	平城宮跡東方官衙地区(第466次)の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
11	藤原宮跡朝堂院地区の発掘調査	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部長　深澤芳樹
12	飛鳥地域の発掘調査	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部長　深澤芳樹
13	平城京跡出土遺物・遺構の調査研究等	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
14	飛鳥・藤原京・平城京などの古代都城の解明に資するために、古代官衙、集落遺跡に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
15	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部長　深澤芳樹
16	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
17	庭園に関する調査研究	文化遺産部	遺跡整備研究室長　平澤毅
18	東アジア史における飛鳥の研究及び飛鳥時代工芸技術の研究	飛鳥資料館	学芸室長　加藤真二
19	遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究	文化遺産部	遺跡整備研究室長　平澤毅
20	遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術並びに監視技術の開発的研究	埋蔵文化財センター	保存修復科学研究室長　高妻洋成
21	文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿正殿復原をはじめとする整備・公開・活用に関する専門的・技術的な援助・助言	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進（4件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	遺跡データベースの作成と公開	埋蔵文化財センター	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅
2	遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法の研究	埋蔵文化財センター	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅
3	年輪年代学研究	埋蔵文化財センター	年代学研究室長　大河内隆之
4	遺跡出土の動物遺存体や古土壌の考古科学的分析による環境考古学研究	埋蔵文化財センター	環境考古学研究室長　松井章

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究	埋蔵文化財センター	保存修復科学研究室長　高妻洋成

○国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・研究の実施（2件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存活用に関する技術的協力	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部長　深澤芳樹
2	国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業大和平野県営飛鳥工区2号幹線の調査及び保存活用に関する技術的協力	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部長　深澤芳樹

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査	企画調整部	国際遺跡研究室長　杉山　洋

【東京文化財研究所と奈良文化財研究所との共同研究】計1件

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業	文化遺産国際協力センター	地域環境研究室長　山内和也

３．　独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価

目　次

１．外部評価委員会報告

２．外部評価委員評価書

（１）総会

（２）博物館調査研究等部会

（３）研究所調査研究等部会

１．外部評価委員会報告

はじめに

本委員会は、研究所調査研究等部会、博物館調査研究等部会、総会の３回に分けて開催し、国立文化財機構における２２年度自己点検評価について、評価が適切に行われているかをはじめ、各事業内容および業務運営の効率化等について、外部の第三者による評価を実施した。評価にあたっては、客観性のある評価に努めた。また、２２年度は第２期中期計画期間の最終年度であるため、中期計画期間全体の意見についても総括した。

総　評

国立文化財機構の２２年度の実績は、全体として高く評価できる。自己点検評価についても、概ね適正に行われていると評価できる。ただし、寄託件数等の数値目標設定になじまないであろういくつかの目標値については、検討を要すると思われる。

２２年度は、機構の統合・発足から４年目となる。機構内の巡回展として「細川家の至宝」、「長谷川等伯」、「誕生！中国文明」等が開催されている他、博物館と研究所の共同事業として「文化財の保存・修復に関する調査研究」（京都国立博物館・奈良文化財研究所）、「仏教美術等の光学的調査研究」（奈良国立博物館・東京文化財研究所）、「春日東塔院（第４７７次）の発掘調査」（奈良国立博物館・奈良文化財研究所）などの共同研究・共同調査が成果を上げており、機構内の協力体制は強化されてきていると言える。

３月１１日の大震災は、今後の活動に多くの変化をもたらすことと予測される。現に東京文化財研究所には文化財レスキューの本部が置かれたとの報告がなされている。第２期中期計画をさらに継続・発展させて第三期中期計画において、新しい事業が従来の活動を圧迫せず、また職員の負担にならず遂行されるよう、工夫を望む。

一方で、人的・財政的には大変厳しい状況にある。第２期中期計画期間が終わり、今後もこのような状況が続くのは異常と言わざるをえない。上部機関に対して強く申し入れるべきである。

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

１　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

収蔵品の収集および寄贈・寄託品の受け入れは、全体として順調に進んでいる。耐震対策の計画的実施をはじめ、保存・活用のための環境整備、あるいは自然科学的調査を取り入れた計画的な修理、これら博物館の基礎的活動が継続的に成果を上げている点は、大いに評価できる。京都国立博物館が、須磨コレクションを中心とする新規・大型の寄贈に対して、手厚い御披露目展をもって酬いられたのは、寄贈者・来館者の琴線に触れる対応であり、今後の寄贈の呼び水にもなるであろう。奈良国立博物館の寄託件数減については、これまで寄託されていた周辺寺社が宝物館・収蔵庫を建設されるため寄託品を引き上げられた由であり、Ｂ評価とされているが全体としては喜ぶべき事である。今後ともそれら寺社と連携を取りながら、より良い保存と活用が図られるよう、時としては指導・助言などにも努められたい。開館以来日が浅い九州国立博物館は３１件もの文化財を新たに購入して館蔵品の補強を急いでいることが認められ、喜ばしい。

また、収蔵品の管理・保存については、東京国立博物館・東洋館などの耐震補強工事はおおむね順調に進捗し、各館において温湿度管理が徹底され、害虫からの被害防止などの措置が継続して取られてきた。保存カルテの作成や収蔵品の計画的修理やデジタル化も順調に進められた。東京国立博物館の空気汚染物質に対する新しい濃度指針の提示や文化財運送中における振動評価にはじめてコンピュータシュミレーションを導入されたことなど、新しい方法への挑戦もあり、今後さらにこうした研究が進み、法人全体で共有できることを期待したい。

２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

「平常展」の名を避けて、東博が「総合文化展」、奈良博が「名品展」と改称されたのは、先行する九博の「文化交流展」とともに、収蔵品の活用の上で適切かつ有意義な方策であると考える。新しい呼び名は、博物館本来の「展観事業の中核」であることを印象づけ、観客の好奇心をかきたてるものと思われる。

特別展については、入館者数が目標に達しなかった展覧会もあったが、昨年同様に四館とも、国立館ならではの充実した内容の大規模な展覧会が開催され、国民の期待に応えたと言える。入場者数では低評価であった展覧会も入場者アンケートでは、好評を博している場合もあり、数値目標設定のあり方や数字にとらわれない質的価値への意欲を持ち続けることも重要であろう。著名な作品を集め観覧者をひきつける展示がある一方で、調査研究の成果としての自主企画の展示活動も重要であるので、今後とも、質が高く、バランスのよい展示企画を期待している。また、東京国立博物館、九州国立博物館２館の「誕生！中国文明」、京都国立博物館の「筆墨精神―中国書画の世界」、奈良国立博物館の「大遣唐使展」、九州国立博物館の「馬―アジアを駆けた二千年」展と、アジアの隣国との文化交流に視野を広げた特別展が目立って多かった。国を代表する国立博物館として、その積極的な姿勢を評価する。

海外展については、韓国国立中央博物館における「高麗仏画大展」（東京国立博物館協力）やタイ王国バンコク国立博物館における「日本とタイ―ふたつの国の巧と美」（九州国立博物館協力）など、地道な国際交流の実が上がっていることを高く評価する。また原発による諸外国の誤認があるので、それを払拭する意味でも積極的に海外展を打つ必要がある。

快適な観覧環境の提供においては、東京国立博物館ではスマートフォンを利用したナビの実証実験も行われており、世の流れに即応したサービスの導入がさらに進むことに期待したい。

３　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

研究紀要の刊行、修理担当者の研修などそれぞれの活動について地道な成果を上げており、順調と言える。今年度も大規模な国際シンポジウムが開催され、充実した海外研究者との交流があり、ナショナルセンターとしての役割を果たしている。中国、韓国など東アジア各国との交流が目覚ましかったことも特筆される成果といえる。調査研究の成果については、研究者・専門家向けに発信するとともに、国民・市民向けに分かりやすい形でも発信願いたい。また、研究紀要や報告書のウェブサイトでの公開を、さらに進めていただきたい。海外の研究者との交流については、この数年間で相当の前進があったように見受けられる。近い将来その成果が海外との共同研究・共同事業などに具体的に反映されることを期待したい。

なお、３月１１日の東日本大震災は、被災地の博物館や文化財にも大きな被害を及ぼしたと報ぜら

れている。今後、文化庁や関係方面からの要請を受けて、国立の博物館と文化財研究所は、被災した文化財の修復と保存に重要な役割を果たしていくものと期待される。この面でも、ナショナルセンターとしての機能が十分発揮されることを期待する。

４　文化財に関する調査及び研究の推進

基礎的・先端的な文化財の調査・研究について、多方面にわたって充分に成果を挙げていると評価できる。

研究所の調査研究では、東京文化財研究所の『日本絵画史年紀資料集成（15 世紀）』『大徳寺五百羅漢図報告書』などの刊行が相次ぎ、今後の研究の基礎資料の整備が一段と前進したと言えるだろう。無形文化遺産についても、音声・画像・映像資料のデジタル化が推進されるとともに、戦前に開発・実用化されたフィルモン音帯に関する共同研究など興味深い事業も実施された。奈良文化財研究所の年輪年代学研究では、新たに栂を年代測定の対象樹種に加え、その成果が期待される。高松塚古墳とキトラ古墳の壁画の劣化の原因の解明と防止対策についても、損傷図面の作成やデジタル化、漆喰の取り外し（キトラ古墳）など、高度な作業が進められ、文化財の非破壊調査法の研究がさらに推進された。また、平城宮跡および飛鳥・藤原宮跡の発掘調査でも継続した成果が蓄積されている。

博物館の調査研究においては、東京国立博物館の「特別調査　工芸」のように、国立博物館４館と文化庁の専門家を動員した共同の調査研究がなされていることを頼もしく思う。また、奈良国立博物館の「我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究」や、九州国立博物館の「日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究」のように、国を代表するミュージアムとして、欧米のみならずアジアの諸国とも地道な交流を重ね、共同の調査研究とその成果を国際シンポジウムや特別展に実らせていることを、高く評価する。京都国立博物館の「日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察」のように意味内容の豊富な課題をもつ調査・研究が行われていることも評価できる。日常的な地道な調査研究が全館規模の取り組みで行われていることは大切なことであり、その努力に敬意を表したい。

文化財の防災に関する研究についても、さらに積極的に進めるとともに、東日本大震災に対応した文化財の緊急的保存・調査事業に、国立文化財機構として主導的な活躍をお願いしたい。

５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進

文化財の保存・修復事業を通した国際協力では、国立文化財機構の文化財研究所ならではの高いレベルの協力事業が推進されており、評価できる。対象国の治安や社会情勢と密接に関連してくるため、連携や調整で困難な点も多くあろうが、アジアを中心に数多く実施されており、引き続き多様な展開を期待したい。一連の国際協力推進の活動は、日本の国際貢献の大きな一助になるとともに、日本に対する理解を諸外国で高める一翼を担っている。

「漢長安城桂宮」、「西トップ遺跡調査報告書」、「バーミヤーン仏教石窟の建築構造およびその意匠と技法」等、海外諸国との協力で積み重ねられてきた調査成果が報告書として刊行されたことは、学問上はなはだ意義が大きい。「東アジアの文化遺産―文化遺産保護国際協力活動を通じて我々は何を発見し共有しうるか―」および「アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査・研究」は、国際協力の下で文化財保護を推進するための社会的、理化学的問題を幅広く論じた意

欲的研究の成果であった。

東日本大震災後、文化財についての認識は大きく変わった。被害を受けた文化財修復（文化財レスキュー）の活動は、今後、その経験知が国際的に活用される財産となるだろう。

６　情報発信機能の強化

研究成果の発信については計画を着実に進めたが、とりわけ奈良文化財研究所において顕著な成果があった。奈良では地元団体によって平城遷都 1300 年祭が企画され、これにあわせて研究所は公開講演会を旺盛に実施し、聴講者数を倍増したほか東京でも二度の開催を試みた。飛鳥資料館では春期特別展「キトラ古墳壁画四神」をはじめとする企画により、目標の二倍以上にあたる１３万人余の入場者があった。平城宮跡資料館についても、リニューアルオープン、特別展開催等により多数の入館者があったと報告されていることも高く評価したい。

「文化財の防災計画に関する調査研究」報告書の刊行は、今次の東日本大震災と重なり、タイムリーな企画・発信となった。報告の内容が実際に役立つことを期待する。

博物館の情報発信については、各館ともデジタル・アーカイブの充実に意欲的に取り組んでいることは認められる。今後とも一層の工夫と努力を期待したい。また、実物をみることの大切さにつながるようなデジタル画像の利用と工夫があってよい。博物館が公共財として国民の生活感覚の中でしっかりした存在感を持つためには、その活動に常に社会の関心を集めることが大切である。そのためには、展覧会等の周知やホームページの充実にとどまらず、将来ビジョンを含めた多様な情報発信にさらに工夫が望まれる。

７　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

高松塚古墳・キトラ古墳壁画の保存修復、平城宮跡・飛鳥藤原宮跡の保存活用等、文化庁の行う事業において順調な成果を得たほか、地方公共団体が実施する多面的な保護・整備・活用事業に専門的な立場から適切に協力・助言を行っている。地方公共団体の関連担当者を対象とした研修等も実施され、文化財保護の質的向上に貢献している。

文化財の防災に関する研究をさらに積極的に進めていただき、その成果を東日本大震災の復旧・復興の際に発信・提供していただきたい。

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

業務運営の効率化に関して、４館２所とも、限られた人員・予算の中で、学術的レベルの高い優れた展示・調査・研究・協力・発信の成果を挙げていることを評価したい。そうした費用対効果の面での「効率性」をどのように目指し、評価するかが課題となろう。４館２所の研究・学芸系職員の協力体制をさらに強化して、調査・研究・学芸業務をさらに有機的に推進していただきたい。

過去の年度から継続して、省エネルギー、リサイクルなどの措置と努力がなされ、施設の有効利用による財源確保の努力も成果をあげているように思われる。また、寄付金の受領や科学研究費の獲得も目標値を上回っていることは評価に値する。業務についても民間委託や一般競争入札も適切に行われていると思われる。

Ⅲ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

人件費については、引き続き削減努力が推進され、２２年度においても目標値を大幅に上回る実績をあげたことは特筆に値する。これは常勤職員の数を極力抑え、非常勤職員やアソシエイト・フェローの活用によるところが大きいと思われる。ただし、人件費削減が果たして良いことなのかどうか。年々繁多、増大する職務に対し、欠員補充も不十分で、給与も見直しでは、職員の健康問題、モチベーションの低下も懸念され、かえって業務効率の低下につながらないだろうかと危惧される。予算削減とともに、短期間で成果をあげることが社会的に求められがちであるが、長期的な見地にたって継続的に調査や基礎研究を行い、着実に実績を蓄積していくことは重要であり、日本における文化の存続自体にも関わる問題である。

収支面については、入場料収入は、前年度に比し２２年度は少し落ち込んでいるが、全体として自己収入は目標値を上回ったことも評価出来よう。

既に進めてきた建物の耐震補強工事に続けて、機構全体の中長期の施設計画を、しっかりと見据えていただきたい。

Ⅳ　その他人事計画等

各博物館と研究所において、積極的に人事交流を進めている。アソシエイト・フェローという新たな制度をつくり、業務の専門性にも対応している。職員を外部の研修に派遣するなどして、その資質の向上が積極的に図られている。職員が外部の情報を得ることは、国内、国外ともに重要であり、今後とも力を入れるべきであろう。

アソシエイト・フェローは昨年度の委員会でも多くの委員が様々な意見を述べられたところであるが、若い彼等の研究の着眼点や、研究に対する真摯な取り組みには目を見張るものがある。有期雇用ということで、その後の人生に対する危機感や、将来への布石としたいとの想いが表れているものであろうか。彼等の研究成果は機構の質向上にとっても有効であるし、人件費を節約しながら正規職員と同様の業務をこなしていただけるということで、メリットは大である。彼等の努力が「捨て石」とならないように切に望みたい。アソシエイト・フェローは研究者育成の場として意義があるが、それに比重がかかりすぎると問題が生じる場合もあるので、バランスを考慮した運用が必要であろう。また、アソシエイト・フェローなどの短期雇用の採用については、他機関と連携して仕組みの拡大を図ることを望む。

今後、中・長期的視点での職員採用と人事政策の適切な運用が重要な課題となろう。

第２期中期計画期間（平成１８年度～２２年度）についてのご意見

平成１８年度から２２年度までの第２期中期計画期間については、国立文化財機構の活動は全体として適切にかつ立派に実施されてきたものと考える。従来の慣例にとらわれず、施設の活用、地域・教育機関との連携など新たな試みが始められるとともに、企画展開催についても柔軟な運用が可能になるなど、全体的に事業の活性化が顕著であり、努力を多としたい。予算や人員の漸減という過酷な条件の中で、機構の運営努力はみごとに国民の期待に応えてきた。ことに目を見張るのは、公衆へのサービスの向上であり、本来の研究、文化財の収集・保管ということはしっかりと行いつつも、職員の意識改革により「開かれた博物館、開かれた文化財研究所」を目指された方向性は間違いではなかった。

また、目標管理による活動の検証が丁寧に行われているほか、外部の意見も積極的に取り入れており、所期の目的を着実に実行していることは評価できる。しかし一方では、予算上の制約が厳しい中で、多様な展開にふさわしい要員の手当て、処遇や労働条件の適正な運用がきちんと確保されているのか、心配な面も感じられる。毎年度の目標達成、新規施策の実行に追われ、それは勿論大切なことではあるが、長期的視点で取り組むべき研究・調査の高度化、専門性の継続、すぐれた人材の開発・育成といった組織にとってベーシックな機能が手薄にならぬよう、充分な目配りをお願いしたい。事業の数が多く、また年度内での実績が求められがちなだけに、職員のかたがたの負担や仕事量は毎年増大していないかと懸念される。それらへの配慮なしに、今後とも予算、人員の規模を縮小していかなければならないというのは、あまりに過酷な条件といわざるを得ない。関係方面の善処が強く望まれる。根本的な見直しの時期にきていると考えられる。

研究成果の発信については充分な努力が為されているものの、せっかくの大きな実績が広く周知されていない面があり、研究者のみでなく国民全般に対して充分に発信するという面でさらに努力の余地もあるように思う。

中期計画Ⅰ―３の「我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与」については、その各事業は順調に推進されたと思われるが、タイトルの表現については、少し検討が必要であろう。独立行政法人となって以来、東京・京都・奈良の３博物館は１期・２期の中期計画の実施を通じて従来の博物館運営のあり方を一新させ、斬新な展示の連発で社会的影響力を大きく延ばした。九州国立博物館も、設立数年にして文化関係者のみならず、ひろく九州の地域社会に確固たる地位を築きつつあるようにみえる。そうしたこれまでの展示活動における新たな挑戦と成果を総括し、それら事業内容を端的に表現する言葉にまとめ、そうした理念を普及させるために中期計画Ⅰ―３のタイトルまたはサブタイトルに含めてはどうだろうか。４博物館が実現してきた新しい事業内容の成果を発信することによって日本及び海外の「博物館活動全体の活性化に寄与」する結果を生みだそうとするのであれば、それにふさわしい言葉が第４期中期目標・計画に盛り込まれることを期待したい。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

委員長　　清　水　眞　澄（三井記念美術館 館長）

副委員長　横　里　幸　一（ＮＨＫプロモーション代表取締役社長）

委員　　稲　田　孝　司（岡山大学名誉教授）

委員　　岡　本　健　一（毎日新聞社客員編集委員）

委員　　小　林　　忠（学習院大学文学部教授）

委員　　酒　井　忠　康（世田谷美術館 館長）

委員　　佐　藤　　信（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

委員　　園　田　直　子（国立民族学博物館文化資源研究センター教授）

委員　　玉　蟲　敏　子（武蔵野美術大学造形学部教授）

委員　　野　口　　昇（日本ユネスコ協会連盟理事長）

委員　　藤　田　治　彦（大阪大学大学院教授）

委員　　藤　好　優　臣（公認会計士）

委員　　森　　弘　子（福岡県文化財保護審議会専門委員）

２．外部評価委員評価書

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎総会

外部評価委員名
横 里　幸 一

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置
１　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承 ２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信 ２２年度も多彩で質の高い企画展が開催されたほか、本館における所蔵品の展示にも工夫が重ねられ、展示については充実した１年だったと評価できる。本格的な日本文化の海外発信の牽引役として海外展の開発にも努めることを含め、今の流れにさらに厚味を増すことを期待したい。 ３　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与 教育機関や地域文化施設、行政との協力関係については、まだまだ質的充実を図る余地があり、日本全体の文化事業のレベルアップ・活性化をめざし、今後さらに活動の強化を求めたい。海外の研究者との交流については、この数年間で相当の前進があったように見受けられる。近い将来その成果が海外との共同研究・共同事業などに具体的に反映されることを期待したい。 ４　文化財に関する調査及び研究の推進 ５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進 ６　情報発信機能の強化 博物館が公共財として国民の生活感覚の中でしっかりした存在感を持つためには、その活動に常に社会の関心を集めることが大切である。そのためには、展覧会等の周知やホームページの充実にとどまらず、将来ビジョンを含めた多様な情報発信にさらに工夫が望まれる。これは無論機構自ら手がけるのが基本であるが、その他に例えば各界のオピニオンリーダーに協力を求め、広く各方面から声を上げるよう促すことも考えて良いのではないかと思われる。 ７　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上
Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置
Ⅲ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画
Ⅳ　その他人事計画等
第２期中期計画期間全体についてのご意見 この４年間の活動をみると、将来の慣例にとらわれず、施設の活用、地域・教育機関との連携など新たな試みが始められるとともに、企画展開催についても柔軟な運用が可能になるなど、全体的に事業の活性化が顕著であり、努力を多としたい。また、目標管理による活動の検証が丁寧に行われているほか、外部の意見も積極的に取り入れており、所期の目的を着実に実行していることは評価できる。 しかし一方では、予算上の制約が厳しい中で、多様な展開にふさわしい要員の手当て、処遇や労働条件の適正な運用がきちんと確保されているのか、心配な面も感じられる。 毎年度の目標達成、新規施策の実行に追われ、それは勿論大切なことではあるが、長期的視点で取り組むべき研究・調査の高度化、専門性の継続、すぐれた人材の開発・育成といった組織にとってベーシックな機能が手薄にならぬよう、充分な目配りをお願いしたい。

◎総会

外部評価委員名

稲田　孝司

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

購入による収蔵品収集については、各館とも計画の趣旨に沿った収集を実施しており、今後とも意義ある資料の収集に努めていただきたい。寄託による収集については、定量評価がB・Sとなっている館が含まれるが、目標値の設定方法に問題があるのか、あるいは実績が寄託者の意向次第という面があってそもそも厳密な定量評価にあまりなじまない性質をもっているのかについて検討が必要であろう。

なお、3月11日の震災に関係する地域博物館等では大きな被害が出ており、機構各博物館においては、直下型地震や東南海・南海地震等も想定し、従来にもまして収蔵品の保護に配慮する必要があろう。

2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

東京国立博物館で平常展を総合文化展に改称し、変わり映えしない展示のイメージを刷新しようという試みは重要である。多くの地域博物館では新設時に巨額の費用をかけて常設展示施設をつくりながらリピーターの確保に苦労しているのが実状であり、展示施設の費用対効果、展示品の選択やローテーション等における工夫の成果を全国へ発信していただきたい。また、改修中東洋館や平常展示館立て替え工事中の京都国立博物館においても、今後上記の問題を念頭においた斬新な展示が示されるものと期待している。

「誕生中国文明」や「東大寺大仏-天平の至宝-」の入館者数が目標に達しなかったことは残念であるが、必要な企画については年間総入館者数が減少しないよう配慮しつつ、今後とも意欲的な取り組みを継続していく必要がある。ただ、入館者数C評価の展示については、アンケートによる満足度がA評価の展示よりやや低い傾向にあることは気がかりで、入館者からの意見をよく分析して今後の工夫に生かすべきであろう。

3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

特別展図録や紀要・報告書等の刊行により調査研究成果の発信は精力的に行われており、また海外との人材交流も順調に進められている。公・私立博物館等に対する援助・助言が4館ともS評価となっているが、内3館については過去3年間平均実績より大幅に低い目標値を設定した結果のSであり、1館については他の3館に比べて過去3年間の平均実績が相当低い経過の中でのS評価であり、いずれも納得が得られにくい評価ではあるまいか。収蔵品等の海外への貸与件数のS評価についても類似の問題点が含まれており、検討を要する。

4　文化財に関する調査及び研究の推進

研究所部会で記述。

5　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進

研究所部会で記述。

6　情報発信機能の強化

研究所部会で記述。

7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

研究所部会で記述。

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

科学研究費補助金の獲得件数については、目標値を達成しているとはいえ、平成２１年度の実績より減少している。研究期間を終了した課題が重なるとこうした状況も起こりうるが、科研費獲得件数は単なる財政的指標ではなく研究水準にかかわる客観的評価の側面がつよいので、継続した努力が望まれる。後者の面からみれば、科研費補助金については獲得額より獲得件数を重視するのが適切であろう。

Ⅲ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

施設利用による財源確保については、今後とも博物館・研究所の本来の事業活動にふさわしいかどうかを適正に判断して進めていただきたい。

Ⅳ　その他人事計画等

アソシエイト・フェローについては、研究者育成の場として意義があるが、それに比重がかかりすぎると問題が生じる場合もあるので、バランスを考慮した運用が必要であろう。

第２期中期計画期間全体についてのご意見

中期計画Ⅰ―３の「我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与」については、（１）調査研究成果の発信、（２）人材の国際交流、（３）研修事業、（４）収蔵品尾貸与、（５）公私立博物館等に対する援助・助言の５項目にかかわる事業が、各年度、順調に推進されたと思われる。

ただ、これら５項目の事業が、中期目標・計画Ⅰ－３のタイトルの表現にふさわしい内容かどうかについては、少し検討が必要であろう。それは、国立文化財機構に含まれる４博物館が「我が国における博物館のナショナルセンター」であるか否かという問題と関係する。４博物館に真に「ナショナルセンター」としての役割を担ってほしいという期待がある一方、現在の法律や行政上の枠組み（４博物館は公・私立博物館にかかわる博物館法の枠外にあり、同じ国立でも国立科学博物館、国立歴史民俗博物館・国立民族学博物館等はそれぞれ固有の法律に基づいて設置）のもとで、そういう役割を担うのは無理だという見方もあろう。帝室博物館以来の伝統を背負って「ナショナルセンター」としての気概を持って博物館運営に当たろうとする意欲は十分に評価されるべきだが、ただ独立行政法人の事業目標・計画としてそのような表現が用いられた場合、やはりその目標が実現可能かどうか、それを実現するに十分な事業内容が計画に含まれているかどうか、といったことがより厳格に問われることになるのではなかろうか。

独立行政法人となって以来、東京・京都・奈良の３博物館は１期・２期の中期計画の実施を通じて従来の博物館運営のあり方を一新させ、斬新な展示の連発で社会的影響力を大きく延ばした。九州国立博物館も、設立　数年にして文化関係者のみならず、ひろく九州の地域社会に確固たる地位を築きつつあるようにみえる。そうしたこれまでの展示活動における新たな挑戦と成果を総括し、それら事業内容を端的に表現する言葉（高邁な理想を示す理念的な言葉から気安いキャッチフレーズまでの幅があってよいが）にまとめ、そうした理念を普及させるために中期計画Ⅰ―３のタイトルまたはサブタイトルに含めてはどうだろうか。そもそも「ナショナルセンター」や第３期中期目標・計画の「博物館の中核」といった言葉は、現に実行している事業内容とは直接関係しない言葉であり、４博物館が「ナショナルセンター」に当たるかどうかを問うこと自体もあまり意味がない。４博物館が実現してきた新しい事業内容の成果を発信することによって日本及び海外の「博物館活動全体の活性化に寄与」する結果を生みだそうとするのであれば、それにふさわしい言葉が今後の中期目標・計画に盛り込まれることを期待したい。

◎総会

外部評価委員名

岡 本　健 一

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

１　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

京博が、須磨コレクションを中心とする新規・大型の寄贈にたいして、手厚い御披露目展をもって酬い

られたのは、寄贈者・来館者の琴線に触れる対応であり、美談です。今後の寄贈の呼び水にもなるでしょう。各館ともひきつづき地道な努力を期待します。

２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

「平常展」の名を避けて、東博が「総合文化展」、奈良博が「名品展」と改称されたのは、先行する九博の「文化交流展」とともに、収蔵品の活用の上で適切かつ有意義な方策であると考えます。これまでの「平常展」では、たしかにマンネリ・付けたしの語感があって、名品たちからリーピーターの足を遠ざけ「宝の持ち腐れ」としかねない状況でした。その点、新しい呼び名ならば、博物館本来の「展観事業の中核」であることを印象づけ、観客の好奇心をかきたてることでしょう。

目下、改築休館中の京博の「平常展」が、再開のさい、どんな新機軸をうち出してこられるか、大きな楽しみです。

申すまでもなく、新鮮なネーミングも経年劣化を免れません。絶えず内容の刷新に努め、あわせて不易と流行（定番の作品と陳列替えの作品）のバランスにも留意ください。

★　博物館・研究所の共同事業について（期間全体についての意見欄を参照ください）

３　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

独法の国立博物館４館が、全国の博物館群のなかでもひときわ高くそびえる独峰的存在であり、関係者がつよい自負心と責任感をもって職務を遂行されていることは、広く認められているところです。しかし、学術分野で卓越した研究中心（ＣＯＥ）が旧帝大以外にも輩出する現在、博物館の世界ではいぜん４館がナショナルセンターとして各地の博物館を領導する（やに聞こえる）のは、いかがなものでしょうか。機構発足時の評価書でも、委員諸氏の驥尾に付して上と同じ疑問を記したことを、あらためて想い起こします。

活性化のために、中央の諸官庁と地方自治体との間でおこなわれているような「短期間の人事交流」が、国立博物館と地方博物館の間でも実現できないものでしょうか？

４　文化財に関する調査及び研究の推進

５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進

６　情報発信機能の強化

７　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

（４～７は、研究所調査研究等部会の項をご覧ください）

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

右肩上がりだった特別展の観客数に、とつぜん急ブレーキがかかりました。そこへ年度末の大震災の追い討ちです。秋以降に持ち直すのか、予断を許しません。難しいでしょうが、これまで以上に厳しい予算の執行で効率化に努めてください。

もっとも、縮み志向だけでは浮上できません。ここは安政大地震のときの江戸市民の故智にならって、「鯰絵」の緊急特別大陳列を開催、上野の丘から「世直し」の狼煙を上げ、元気と景気と観客数の回復をはかるのも、回りまわって効率化の目標達成に有効かもしれません。

Ⅲ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

ひきつづき科学研究費等の獲得に努めてください。

Ⅳ　その他人事計画等

①　東博が大震災当日、帰宅困難な観客のために直ちに緊急避難所を開設し、翌日の朝食を提供されたのは（マニュアルどおりとしても）、心やさしい対応で、感じ入りました。

②　任期切れか任期半ばか、担当者の退職によって科研費付きの調査研究が中断し、Ｆ評価となったのは、残念でした（東博・原三渓旧蔵資料の調査研究）。

第２期中期計画期間全体についてのご意見
①　観客数の爆発する時代に
　独法時代に入って、各館が話題性の高い共催展を連発された結果、しばしば展覧会場が都心の雑踏並みの観客で溢れています。定量的にはＳ評価ですが、環境的には過酷、Ｃ評価以下の状態です。主催館でも「これでいいわけがない」と危惧されている旨、総会でうかがいました。もちろん、誘導・警備に万全を期しておられましょうが、大震災と原発事故いらい、不測の事態が懸念されてなりません。「これでいいわけがない」のなら、具体的な対策を講ずる時ではないでしょうか。

②　収蔵品の研究の発展のために
　収蔵品の研究の深化について提言がありました。思い出されるのは、20 余年前、東博の客員研究員・東野治之氏（当時大阪大学）が法隆寺宝物館の香木から中世ペルシア文字とソグド文字を発見し、シルクロード史研究に重大な貢献をされた、あの学史的事件です。お蔵入り寸前だった香木が、いまや宝物館の名物として注目され、昨年の奈良博「大遣唐使展」でも主役を勤めました。現役学芸員と客員研究員の諸氏が脚下照顧、収蔵品のなかから隠れた「お宝」や素晴らしい価値を発見していただきたいものです。

③　特別展「地震と日本人」の開催――博物館・研究所の共同事業として
　「機構全体で取り組めるプロジェクトを」との提言も委員諸氏から出されました。上のⅡで「鯰絵」の緊急特別陳列を提案しましたが、復興計画に合わせて「地震と日本人」に関する総合的な特別展を、博物館・研究所のコラボレーションで実現できないでしょうか。
　すでに歴史地震の考古遺跡が続々発見され、阪神大震災直後、報告書（埋蔵文化財研究会）にまとめられています。地震考古学の専著も少なくありません。脚光を浴びた貞観地震のみならず、白鳳南海地震の痕跡や墳丘・石室の崩落跡（応神天皇陵、西求女塚、黒塚）が警告を放っています。文献記録に至っては『六国史』『方丈記』をはじめ、民間の記録まで博捜した寺田寅彦企画『日本地震資料』など厖大なデータベース類があります。
　日本人はこれらの歴史地震とどう向かい合い、復活してきたか。江戸時代の「鯰絵」や地震・噴火のかわら版、歌舞伎の「地震加藤」、戦前の教科書に載った小泉八雲原作「稲むらの火」、そして関東・阪神・東日本の三大震災が日本人の心性に及ぼした影響を含めて、立体的に構成する。姶良火山・富士山・浅間山などの世界史的な大噴火も、対象になるでしょう。

④　収蔵品のレプリカの計画的作製・頒布を
　各館のミュージアムショップでは、法隆寺宝物館の金銅仏など、それぞれ独自の精巧なレプリカ（とくに立体）が頒布されていますが、さらに計画的に品数を揃え、需要を掘り起こし、収益増に繋げられないでしょうか。

◎総会

外部評価委員名

小　林　　忠

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

１　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
　各館とも限られた予算の中で、適切な購入をして館蔵品の質量ともの充実に努めていることを評価したい。とくに開館以来日が浅い九州国立博物館は３１件もの文化財を新たに購入して館蔵品の補強を急いでいることが認められ、喜ばしい。
　ただし、寄託品に関しては、良好な収蔵施設を備えて返却を求められる傾向が顕著になっているとのこと、伝統的に寄託に頼るところ大きい京都国立博物館と奈良国立博物館においては、今後の対処に努力されたい。

２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
　博物館にとってその底力を試される平常展示に、「総合文化展」の名称を与えて来館者の関心を引き

つけようとする東京国立博物館の新たな取り組みを評価したい。
　また、東京国立博物館、九州国立博物館２館の「誕生！中国文明」、京都国立博物館の「筆墨精神―中国書画の世界」、奈良国立博物館の「大遣唐使展」、九州国立博物館の「馬―アジアを駆けた二千年」展と、アジアの隣国との文化交流に視野を広げた特別展が目立って多かった。国を代表する国立博物館として、その積極的な姿勢を評価する
　また、国立博物館が特別協力をした海外展、すなわち韓国国立中央博物館に於ける「高麗仏画大展」（東京国立博物館協力）やタイ王国バンコク国立博物館に於ける「日本とタイ―ふたつの国の巧と美」（九州国立博物館協力）など、地道な国際交流の実が上がっていることを高く評価する。

３　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与
　各館ともに繁忙をきわめる日常活動の中、調査研究の成果を刊行物やシンポジウムなどで活発に公表していることに敬意を覚える。
　また、海外研究者との交流も密に行っており、今後の発展に期待したい。

４　文化財に関する調査及び研究の推進
　国立博物館４館と文化庁の専門家を動員した共同の調査研究がなされていることを頼もしく思う。
　また、国を代表するミュージアムとして、欧米のみならずアジアの諸国とも地道な交流を重ね、共同の調査研究とその成果を国際シンポジウムや特別展に実らせていることを、高く評価する。
　科学研究費などの外部資金の導入に積極性を増してきたように思われ、この点でも評価したい。

５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進
　文化財の修復は、現在喫緊の課題といえよう。年々老化していく文化財を健全に保護するには、技術者の国家的な養成が急務と思われる。隣国の中国や韓国に先を越されつつある現状を憂慮している。関係各位の意識改革を強く望みたい。

６　情報発信機能の強化
　各館ともデジタル・アーカイブの充実に意欲的に取り組んでいることは認められるが、欧米の代表的な美術館と競べて、ホームページや館蔵品画像のインターネットでの公開において、見劣りしていることは否めない。今後とも一層の工夫と努力を期待したい。

７　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上
　格別の意見はない。

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置
　意見なし。

Ⅲ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画
　意見なし。

Ⅳ　その他人事計画等
　意見なし。

第２期中期計画期間全体についてのご意見
　予算や人員の漸減という過酷な条件の中で、国立博物館４館の運営努力はみごとに国民の期待に応えてきた。あるいは応えすぎてきたといって、良いかもしれない。大規模動員した特別展にはそれなりの経費や館員の身体的、精神的な負担を余儀なくされている。それらへの配慮なしに、今後とも予算、人員の規模を縮小していかなければならないというのは、あまりに過酷な条件といわざるを得ない。関係方面の善処が強く望まれる。

◎総会

外部評価委員名

酒 井　忠 康

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

限られた予算での収蔵品の整備やデータベース化は適切に行われている。また寄贈・寄託もそれぞれの館が努力されていることは数字にも反映されている。
欲をいえば長期的見通しを立てて、収蔵品の体系化をはかるべき時期にきていると思われる。

2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

東日本大震災後、文化財についての認識は大きく変わった。とくに保存に関して。また原発による諸外国の誤認があるので、それを払拭する意味でも積極的に海外展を打つ必要がある。

3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

公私立博物館への収蔵品の貸与・援助・助言、あるいは研究成果の公開などに関して適切に行われている。しかし国内から国外へというかたちのセンターとしての役割をみたすためには、新しく国際部（4館をまとめて）を開設して恒常的に事業をすすめる必要がある。

4　文化財に関する調査及び研究の推進

「日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察」（京都国立博物館）のような意味内容の豊富な課題をもつ調査・研究が望ましい。日本だけのことではなく、諸外国との比較において検討することによって、異文化理解にもつながる。

5　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進

すでに指摘したように（2で）、被害を受けた文化財修復（文化財レスキュー）の活動は、今後、その経験知が国際的に活用される財産となるだろう。

6　情報発信機能の強化

実物をみることの大切さにつながるようなデジタル画像の利用と工夫があってよい。

7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

質的向上というのは、将来を担う人材の育成や地方で活躍をする専門家の支援にある。大学などとの密接な連携を望む。

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

庶務的性格（領域）での目的は達成されている。しかし、現状では（正直にいって）優秀な研究者が育ちにくい環境になっていると思われる。創造的研究というのは、必ずしも業務の効率化とはむすびつかないからである。役割の性格を認識すべきでしょう。

Ⅲ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

特に申し上げる具体的な提案はありません。

Ⅳ　その他人事計画等

人材不足の現状打破としてアソシエイト・フェローなどの短期雇用を採用しているが、他機関と連携して仕組みの拡大をはかることを望む。

第２期中期計画期間全体についてのご意見

概ね支障なく進行して当初の計画に見合った成果をあげている。しかし大規模事業（収入を上げるための特別展）は止むを得ないとしても、調査・研究・発表などの専門的領域が、それによって活動を縮小せざるを得ないのはよくない。すべて予算や人員不足に関連しているのであろうが、根本的な見直しの時期にきていると考えられる。

◎総会

外部評価委員名

佐　藤　　信

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

１　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

○収蔵品の収集については、寄贈・寄託がさらに進展するよう発信・広報に努力しては如何か。

○収蔵品の保存カルテ作成のスピードをさらに早め、早期の完了をめざすべきではないか。

○文化財修理事業は、四博物館や二研究所の全体による協力体制の構築をめざしていただきたい。

２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

○建物の建替・耐震工事によって博物館事業が停滞してはならず、国民へのサービス低下を補う展示充実その他の事業展開の工夫をお願いしたい。

○特別展・平常展以外にもさまざまなスポット展示・シンポジウム・講座・列品解説などを展開する努力が為されていることは評価できる。

○人気展示の時の混雑対策について、さらに工夫を図っていただきたい。

○特別展の入場者の目標値の推測の精度をさらに上げる工夫を考えていただきたい。

○個別でなく、他の複数の博物館で特別展などのテーマに統一性を持たせて、連携・協力を図ることを進めていただきたい。

○学界の最先端の研究成果とリンクして文化財の意義を紹介・発信するタイプの展示をさらに追求していただきたい。学校教育などとの連携もさらに推進していただきたい。

３　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

○ナショナルセンターとして、国宝・重文・史跡などの文化財情報や国内の諸博物館の展覧会情報などを、国内外に発信する機能をもっていただきたい。

○調査研究成果を、研究者・専門家向けだけでなく、国民・市民向けに分かりやすい形でも発信願いたい。

○研究紀要や報告書の内容をホームページで公開することを、さらに進めていただきたい。

４　文化財に関する調査及び研究の推進

○先端的・基礎的な文化財の調査・研究に、限られた人員。予算のもとで大きな成果を挙げていることは、評価できる。その成果を、専門家向けの報告書・紀要・論文のみでなく、国民向けに分かりやすい形で発信していただきたい。

○基礎的で地道な史跡・歴史史料・美術工芸・無形文化財・保存科学などの文化財に関する調査研究についても、さらに継続して推進し、その成果を発信していただきたい。

○調査・研究のために、引きつづき科学研究費などの競争的資金の獲得に向けて戦略的に取り組んでいただきたい。

○個別の機関のみでなく、国立文化財機構としての四館・二所の学問的資源を全体として動員した調査・研究の展開や、他の機関等との共同の事業展開を図っていただきたい。

○文化財の防災に関する研究をさらに積極的に進めるとともに、東日本大震災に対応した文化財の緊急的保存・調査事業に、国立文化財機構として主導的な活躍をお願いしたい。

５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進

○文化財の保存・修復事業を通した国際協力では、国立文化財機構の文化財研究所ならではの高いレベル

の協力事業が推進されており、評価できる。ひきつづき、多様な展開を期待したい。

６　情報発信機能の強化
○博物館のウェブサイトや文化財研究所のホームページのアクセス件数が膨大な数字になったことは、高く評価できる。引きつづき、情報発信サービスの向上に努めていただきたい。
○４館２所のニュース・たより・パンフレット・年報・紀要・報告書などの冊子体の出版物を、インターネットで閲覧できるようにする事業をさらに進めてほしい。

７　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上
○地方公共団体の文化財保護事業への協力や担当者研修などの面での協力は多様に展開されており、評価できる。
○大学における高等教育との連携は、国立文化財機構の文化財に関する高い調査・研究能力を活かして、文化財研究の裾野や後継者育成を広げていく上で、さらに展開していただきたい。

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置
○４館２所とも、限られた人員・予算の中で、学術的レベルの高い優れた展示・調査・研究・協力・発信の成果を挙げていることを評価したい。そうした費用対効果の面での「効率性」をどのようにめざし、評価するかが課題となろう。
○４館２所の研究・学芸系職員の協力体制をさらに強化して、調査・研究・学芸業務をさらに有機的に推進していただきたい。

Ⅲ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画
○運営費交付金の減額がやむを得ない状況下で、寄付金・入場料収入の有効活用や、科学研究費など競争的外部資金の獲得、他機関との共同事業をさらに追求する必要があろう。
○既に進めてきた建物の耐震補強工事に続けて、機構全体の中長期の施設計画を、しっかりと見据えていただきたい。

Ⅳ　その他人事計画等
○「団塊の世代」の定年退職の後を受けて、今後の中・長期的な研究計画・組織計画に沿った人事計画をしっかりと構想していただきたい。
○アシスタントフェロー・アソシエイトフェローなどで若手研究者を任期付きで活用することは、やむを得ないが、将来の文化財研究を支える若手研究者の「使い捨て」にならないよう、配慮が望まれる。

第２期中期計画期間全体についてのご意見
○第二期中期計画期間においては、基礎的・先端的な文化財の調査・研究と国際協力などの多方面にわたり、期待される成果を充分に挙げてきたと評価できる。
○第二期中期計画期間、人員・予算が削減される方向にありながら、限られた人員・予算の割に大変効率良く大きな実績を挙げていると思われる業務が多くあった。
○研究成果の発信には充分な努力が為されているものの、せっかくの大きな実績が広く周知されていない面があり、研究者のみでなく国民全般に対して充分に発信するという面でさらに努力の余地もあるように思う。

◎総会

外部評価委員名

園 田　直 子

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

１　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
収蔵品の収集および寄贈・寄託品の受け入れは、全体として順調に進んでいる。耐震対策の計画的実施

をはじめ、保存・活用のための環境整備、あるいは自然科学的調査を取り入れた計画的な修理、これら博物館の基礎的活動が継続的に成果を上げている点は、大いに評価できる。

2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
入館者数をおしはかることは困難であろうが、平成 22 年度は、当初の見込みと実際の結果に大きく隔たりのあるケースが散見される。とはいえ定量評価は、当初設定した目標値の設定いかんで評価が大きくかわるものであり、展示の質とは異なる評価となる。著名な作品を集め観覧者をひきつける展示がある一方で、調査研究の成果としての自主企画の展示活動も重要であるので、今後とも、質が高く、バランスのよい展示企画を期待している。

3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与
調査研究成果の発信、海外研究者招聘、研修プログラムの実施、公私立博物館等への援助・助言は、例年どおり、バランスよく展開されている。シンポジウムや研修プログラムの実施にあたっては、各機関レベルでの実施だけでなく、共催や巡回により、予算や人員の効率的な運用をはかるのも一案だろう。

4　文化財に関する調査及び研究の推進
5　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進
6　情報発信機能の強化
7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上
（これらの項目については、研究所調査研究等部会の報告を参照されたい。）

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置
業務の効率化では、光熱水すべてにおいて省エネルギーの努力がされており、評価できる。各種業務の民間委託や一般競争入札が推進されるなか、文化財と人に対するセキュリティーを確保するとともに、業務の質を維持することも併せて求められており、今後も大変なご努力になると想像できる。情報の安全性向上はますます重要になるので、継続的な取り組みをお願いしたい。人件費抑制においては、5 年間で平成 17 年度に比して 9%以上の削減を達成しているが、業務が拡充されていく現状のなか、いかに職員の定年退職後の補充や、若手研究者の雇用を実現していくかについての中・長期的な視点での措置が必要となろう。

Ⅲ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画
予算削減とともに、短期間で成果をあげることが社会的に求められがちであるが、長期的な見地にたって継続的に調査や基礎研究を行い、着実に実績を蓄積していくことは重要であり、日本における文化の存続自体にも関わる問題である。効率化や外部資金獲得の努力をあわせながら、それなりの研究環境および研究員の確保のための資金計画を忘れてはならないと考える。

Ⅳ　その他人事計画等
非公務員化のメリットを活かして、特殊技術や技能をもつ人材を機構独自で採用可能とする規定を整備するとともに、アソシエイトフェローという新たな制度により、業務の専門性に対応していることは評価できる。アソシエイトフェローは、若手研究者が経験を積む機会であるとともに、その専門能力を生かすことができるという意味で、機関にも若手研究者にも有意義な制度と感じる。一方、団塊世代の定年後、いかに専門的知識や技術が伝承できるかが日本の社会全体でも深刻な問題になっている。その対策を見込んだうえでの人事計画をお願いしたい。

第２期中期計画期間全体についてのご意見
研究所調査研究等部門での評価書にも書いたが、第２期中期計画期間を通して、活発な研究活動が展開され、実績は全体として高く評価できる。その反面、事業の数が多く、また年度内での実績が求められがちなだけに、職員のかたがたの負担や仕事量は毎年増大していないかと懸念される。職員の定年退職後の補充、あるいは若手研究者の雇用に関しても、日本全体が経費節減の流れのなか、中・長期的な視点での

措置を考えていただきたい。
　平成 24 年度より「博物館資料保存論」が学芸員課程で必須となり、人材育成の面でも文化財機構への期待は、ますます強くなると思われる。さらには、東日本大震災を受けて、文化財機構のナショナルセンターとしての役割がさらに重要視されるようになろう。長期的視点での救済支援が問われてくることは間違いなく、そのための体制や対策の整備が急がれる。
　なお、現在使用している業務実績書・自己点検評価調書のフォーマットでは、プロジェクトごとの成果は充分に把握できる一方、プロジェクト間の関係が把握しにくいという欠点がある。担当部課間にまたがった活動、ひいては文化財研究所と国立博物館との協力体制がより明らかになるようにすると、文化財機構全体としての活動が総合的に見えてくるようになり、対外的によりアピールするであろう。

◎総会

外部評価委員名

玉 蟲　敏 子

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
　国立四館ともに、昨年度と同様に、資料の蒐集、寄託、修理、保存環境の整備について着実な成果をあげている。ただ、東京国立博物館の突出した規模に対して、他三館の地域的、ジャンル的特徴を前面に出した活動とは性格の相違が浮き彫りになってきており、機構として評価基準を考慮するべき時期にきているように思われる。

2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
　平成 22 年度も昨年同様に、四館ともに、国立館ならではの充実した内容の大規模な展覧会が開催され、国民の期待に応えたと言える。入場者数では低評価であった展覧会も入場者アンケートでは、好評を博している場合もあり、数字にとらわれない質的価値への意欲を持ち続けることも重要だろう。平常展という名称は確かに新しい物好きな日本人の鑑賞行動に相応しくないかもしれない。総合文化展という新たな名のもとに、常にスタンダードな日本・東洋の美の歴史を国民に提示し、知識の共有ないしは教養の基盤整備につながるよう、期待したい。

3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与
　研究紀要の刊行、修理担当者の研修などそれぞれの活動について地道な成果を挙げており、順調と言える。今年度も大規模な国際シンポジウムが開催され、充実した海外研究者との交流があり、ナショナルセンターとしての役割を果たしている。中国、韓国など東アジア各国との交流が目覚ましかったことも特筆される成果といえる。

4　文化財に関する調査及び研究の推進
　昨年同様に、奈良、東京の二研究所、国立四博物館、それぞれに個別の研究テーマに即して、それぞれに館員の努力によって成果を挙げており、順調に活動している。
　高精細ディジタル撮影など、新しい科学的な研究方法はかなり定着してきており、意欲的な成果が期待されるようになってきている。
　東京においてここ数年来掲げられている光琳屏風および他派における金箔の調査が、少しずつでも進展しているようであるが、数年を経ていることもあり、そろそろ成果が公表されていいのではなかろうか。

5　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進
　昨年同様、奈良・東京ともに、従来からの事業の枠組みを守り、順調に推進されている。

6　情報発信機能の強化
　昨年同様に、四館ともに資料のディジタル化、ウェブを用いた情報発信能力の強化について飛躍的に発

展を遂げており、機能強化が十分に実現されている。ただし、数量上の成果に比して、たとえば供与されるディジタル画像の品質が、けっして優れたものと言えない場合もあり、品質のチェックがなおざりされているように危惧される。そうした視点にも留意されたい。

7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

国や地方行政組織にたいする協力・助言もまた、奈良・東京とも伝統的ともいえる事業の厚みがあり、昨年同様に安定した活動となっている。

昨年度の評価書に書いたことでもあるが、連携大学院なども次世代の教育として重要な事業であるが、それを受講した院生たちの進路についても追跡調査があってもよいのではないか。また連携する大学院が特定のものに限られているような印象があり、その範囲を公平に広げる機会もそろそろ模索されていいのではないか。

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

業務運営の効率化については、奈良、東京の二研究所、国立四博物館とも努力をはかっており、その上で数多くの魅力的な展示や研究活動が行われたことは驚異と言える。効率化を緊縮として捉えるのではなく、国民との知性や感性の共有をスムースに行うための方法として理解していくことが必要だろう。

Ⅲ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

独自企画による特別展の意欲が必ずしも収支に反映するとは限らないなかで、国民の支持を得て、観客数の大幅な増加につながることもある。すべての活動が組織や機構といったシステムではなく、生身の人間に拠っていることを充分理解し、企画を立てる際の館員の発想、開かれたスタンスを堅持できるよう、必要以上の緊縮は押さえ、予算の上手な調整を望む。

Ⅳ　その他人事計画等

常勤職員数の抑制のために行われている退職後のスタッフの不補充と任期制研究員の採用は、やむをえない部分があるとはいえ、長い時間をかけて人材育成を行う研究機関にとしては、やはり中長期的にはマイナスであることを強く意識するべきである。任期終了後の再雇用の道を留保するなど、粘り強い対処が必要だろう。

第２期中期計画期間全体についてのご意見

奈良・東京ともに第２期中期計画にかかげた内容を、特別な理由のないかぎり順調に遂行していることが確認できた。その項目を見ると、時宜を得た新しい計画もあれば、従来、行ってきた事業を引き継ぐものも多々あった。今後も、新旧のまざったこのような状態で事業が展開していくことと推察される。

ただし、そうした活動はえてして地道である。美的な事物を効果的に見せる展示に対する努力は処々で成果を上げているが、それだけではなく、研究の本来有する発見の喜びも前面に出して、国民に共有してもらう場でもあってほしいと思う。知的好奇心と美的鑑賞の調和をはかる活動をのぞむところである。そうすることによって研究するということの意義もまた国民に共有され、その支持を得てゆくことにつながると思われる。

3 月 11 日の大震災は、今後の活動に多くの変化をもたらすことと予測される。現に東京文化財研究所には文化財レスキュー隊の本部が置かれたとの報告がなされている。第二期中期計画をさらに継続・発展させて第三次計画において、新しい事業が従来の活動を圧迫せず、また館員の負担にならず遂行されるよう、工夫を望む。

震災の二次災害ともいうべき原発事故によって、これまで積み重ねられてきた海外との交流が消極的になる可能性も危惧される。従来の活動の利点を失うことなく、新たな事業への取り組みが一層なされていくこともまた望むところである

◎総会

外部評価委員名

野　口　　昇

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

平成22年度においても、4つの国立博物館は、自前の予算によって貴重な美術、考古・歴史資料などを購入したほか、寄贈や寄託により、全体として収蔵品の充実・整備を進められたことを評価したい。

また、収蔵品の管理・保存については、東博・東洋館の改修工事はおおむね順調に進捗し、各館において温湿度管理が徹底され、害虫からの被害防止などの措置が継続して取られてきた。保存カルテの作成や収蔵品の計画的修理やデジタル化も順調に進められた。

2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

国立の博物館、研究所による各種の展示、特に特別展は、ビデオによる分かりやすい説明、コンピューター・グラフィックの手法を用いた魅力的な展示、適切な音声ガイドなどが取り入れられており、全般的により魅力的で充実してきているように思われる。関係者の努力に敬意を表したい。また、特別展の多くはＮＨＫの番組で放映され、国民の理解の増進におおいに寄与していることは喜ばしい。「仏教伝来の道―平山郁夫と文化財保護」は、特にメッセージ性に富んだ展示であったと思われる。

日本の歴史・伝統文化の理解促進のため、学校や大学とのさまざまな連携事業が展開されているが、これらの活動はもっと注目されてよいだろう。また、世界博物館の日（5月18日）に、上野の博物館などが一緒になって記念行事を実施していることも多としたい。

なお、さらに多くの日本人と来日外国人にも鑑賞してもらうため、夜間（午後8時ころまで）の開館を増やすことを検討していただけないだろうか。

3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

国立文化財機構の４博物館は、国でなければ運営できない文字通りナショナルセンターである。

博物館の調査研究の成果は、研究紀要や各種報告書の刊行、研究集会やシンポジウムの開催などを通じて広く公開され、博物館関係者、専門家や研究者をはじめ一般の利用に供されている。国内の博物館関係者や修理技術関係者の研修事業もナショナルセンターならではの事業であろう。

なお、3月11日の東日本大震災は、被災地の博物館や文化財にも大きな被害を及ぼしたと報ぜられている。今後、文化庁や関係方面からの要請を受けて、国立の博物館と文化財研究所は、被災した文化財の修復と保存に重要な役割を果たしていくものと期待される。この面でも、ナショナルセンターとしての機能が十分発揮されることを期待する。

4　文化財に関する調査及び研究の推進

研究所部会の私のコメントを参照してください。

5　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進

研究所部会の私のコメントを参照してください。

6　情報発信機能の強化

研究所部会の私のコメントを参照してください。

7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

研究所部会の私のコメントを参照してください。

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

過去の年度から継続して、省エネルギー、リサイクルなどの措置と努力がなされている。施設の有効利用による財源確保の努力も成果をあげているように思われる。

寄付金の受領や科学研究費の獲得も目標値を上回っていることは評価に値する。
業務については民間委託や一般競争入札も適切行われていると思われる。

なお、東日本大震災により本年夏場の電力供給が懸念されているが、特に東京国立博物館および東京文化財研究所においてはこの点の備えが十分になされ適切に対処されることを期待する。

Ⅲ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

人件費については、引き続き削減努力が推進され、平成 22 年度においても、目標値を大幅に上回る実績をあげたことは特筆に値する。これは常勤職員の数を極力抑え、非常勤職員やアソシエイト・フェローの活用によるところがおおきいと思われる。
収支面についてみると、入場料収入は、前年度に比し平成 22 年度は少し落ち込んでいるが、全体として自己収入は目標値を上回ったことも評価出来よう。

Ⅳ　その他人事計画等

団塊世代の職員が多く定年を迎える状況に鑑み、多くの評価委員が指摘されているように、今後、中・長期的視点での職員採用と人事政策の適切な運用が重要な課題となろう。

第２期中期計画期間全体についてのご意見

平成 18 年度から 22 年度までの第２期中期計画期間については、国立文化財機構の活動は全体として適切にかつ立派に実施されてきたものと考える。
5 月 25 日に開催された評価委員会総会の席上、「第 2 期中期計画期間における実績」と題する資料が配布された。この資料には、５カ年間にわたる各項目の実績が表やグラフで簡潔・明瞭に提示されており、全体像を把握する上で大いに役立った。関係者のご努力に敬意を表したい。

なお、研究所部会の評価で書かせていただいた私の拙い意見と同趣旨のことを再度述べさせていただきたい。去る３月１１日の東日本大震災は、いろいろな意味で世界から大きな注目を集めた。その一つが、被災した人々が困難な状況の中で公徳心と礼節をもって行動したことが世界から称賛されたことだが、これは日本人の精神文化の現われであると言えるのではなかろうか。日本人の文化や伝統をまもり、文化的アイデンティティを高めていく上でも、博物館などの果たす役割は極めて大きいと再認識をした次第である。また、実に多くの国々から応援のメッセージと支援金が寄せられたが、これも、戦後の日本が経済復興を成し遂げた後、官民あげて多方面にわたる国際協力を続けてきたことが評価された一面を示すものと言えよう。文化財を守る国際協力もその一端を担っていると言える。
国内外の文化財をまもる活動をとおして、日本のソフトパワーがさらに高められることを期待したい。

◎総会

外部評価委員名

藤田　治彦

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館ともに、適時の適切な収集が行われ、寄贈品や寄託品の受入れとその積極的な活用が図られている。また、収蔵品の保存技術の向上に努め、貴重な文化財の次代への継承が考えられている。保存・活用のための環境整備が、地道ではあるが、順調・着実に進められている。収蔵品の修理等に関するデータベース化が推進されている。

2　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

魅力的な特別展が各館で企画・開催されている。展覧会ごとの目標入場者数を設定するなどの工夫が行われている。他方、入館者が多ければ観覧には困難さも伴うので、適切な目標入場者数の設定が重要である。

平常展の充実も図られているようである。いくつかの館では、平常展の名称をより魅力的なものに変えることによって、入館者増につなげており、その努力は評価されるべきであろう。ただし、新しい名称も、展示の充実が伴わなければ、その名称の定着とともに、入館者数はもとのレベルに戻ることも予想される。

世界の代表的な博物館では、平常展示が最大の魅力になっている。ルーヴルでも、大英博物館でも、そこに行けば必ず見ることのできるものを目当てに多くの人々が繰り返し、世界各地から訪れる。それに対して、日本のミュージアムはかなり異なり、平常展を訪れる人は少なく、各館は特別展で入館者を集めているというのが現状である。しかし、平常展は各館のまさに中核であり、日本人来館者の困難な傾向といったことで片づけるだけでは済まされない。

日本の美術品や文化財の物性的特徴もあり、西洋の絵画や彫刻のように常に展示されているという状況が難しい場合もあるだろうが、その場合には、日本ならではの設定の、ただし、展示も含め、従来とは異なった平常展のありかたがあるだろう。平常展や館蔵品のプラスのイメージをつくりだすことも必要である。特別展の過度なメディア露出がもしあるとするならば、そういった要素とのバランスも常に考えた、平常展（名称は異なるかもしれないが）と館蔵品を重視した運営が期待される。

3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

博物館のナショナルセンターとして、博物館活動全体の活性化に大きく寄与している。地方公共団体や、大学、研究機関との交流を進めている。海外の優れた研究者を招聘し、国際的な交流を推進している。公立および私立の博物館・美術館に対する援助や助言の活動を積極的に行っている。

4　文化財に関する調査及び研究の推進

各館で重要な調査研究が行われ、文化財に関する新たな調査手法の研究・開発が推進されている。文化財の保存や修復に関する支援の拠点として、先端的な調査研究が推進されている。収蔵品に関する調査研究が各館で順調に展開している。

5　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進

保存・修復に関する国際的な研究会やワークショップに積極的に参加している。とりわけアジアにおける国際協力に力を入れている。諸外国における文化財の保存や修復に関する技術的な助言は、世界的な専門的視点からも、文化交流という観点からも重要であり、国立文化財機構は大きな役割を担っている。

6　情報発信機能の強化

ネットワークのセキュリティの充実が図られており、その強化については今後とも力を入れる必要がある。文化財関係データベースの研究が盛んに進められている。それに関連する国際会議等には積極的に参加し、また、中心的に運営に当たるべきであろう。文化財情報や研究成果の公表が各館で進められている。収蔵品のデジタル化には予算的な裏付けが必要である。

7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

地方公共団体や各地の大学、研究機関との連携協力体制が築かれつつある。地方公共団体の関連担当者を対象とした研修等が実施され、文化財保護の質的向上に貢献している。

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

業務の効率化が進められている。省エネルギーやリサイクルが各施設で進められている。また、施設有効利用も各国立博物館、両文化財研究所で進められている。国立博物館、文化財研究所としての本来の機能が十分果たせるような、適切な目標の設定が重要である。

Ⅲ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

自己収入の増加に関しては最大限の努力が行われている。

Ⅳ　その他人事計画等

各博物館と東京文化財研究所ならびに奈良文化財研究所は、積極的に人事交流を進めている。アソシエ

イトフェローという新たな制度をつくり、業務の専門性にも対応している。職員を外部の研修に派遣するなどして、その資質の向上が積極的に図られている。職員が外部の情報を得ることは、国内、国外ともに重要であり、今後とも力を入れるべきであろう。

第２期中期計画期間全体についてのご意見

第２期中期計画は、全体として順調に進められた。最終段階で東日本大震災を経験したが、わが国における関連活動の一大拠点として、期待される活動を推進している。引き続き、その役割を十分担うことが期待される。

◎総会

外部評価委員名

藤好　優臣

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

１　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

３　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

４　文化財に関する調査及び研究の推進

５　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進

６　情報発信機能の強化

７　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

当年度は 69 百万円の損失となりましたが、一時的に発生した環境対策引当金の繰入 224 百万円を除外した経常的利益は 155 百万ですから、全般的な経営努力については評価できます。

しかしながら、独立行政法人として存在するのに重要な自己収入、特に入場料収入がこの 5 年間で最も少ない 892 百万円しか得られなかったのは大いに問題です。

悪い企画展は論外ですが、良い企画でも多くの入場者を動員できる企画展をぜひ多くやっていただきたい。このことは、入場料収入を増加させるだけでなく、ナショナルミュージアムとしての存在価値を更に高めることに繋がると思います。

次に、人件費については、毎年度目標値以上に減少しているのは評価できますし、今後も継続して削減努力を行う必要がありますが、一方において国立博物館にふさわしい規模や質的レベルを維持することも大事ですから、自己収入の増加に応じた人件費の増加は認める等の仕組み作りも必要と考えます。

Ⅲ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

1. 予算と決算とを対比した決算書が、委員会開催時までに作成されていませんが、暫定版で良いので、作成してもらいたい。

2. 予算が前年度の決算とかなり乖離して設定されているケースが見られますので、第三期には留意してもらいたい。

Ⅳ　その他人事計画等

第２期中期計画期間全体についてのご意見

毎年度 運営費交付金が減少しているにもかかわらず1,093 百万円もの利益剰余金を発生させ、一部を国庫に返納する程の成果を上げたことは、独立行政法人設立の趣旨にも合致し、その経営努力を大いに評価します。

◎総会

外部評価委員名

森　　弘子

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

１　歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

購入については、各館の特性に留意しつつバランスの取れた購入がなされている。

寄託・寄贈がコンスタントにあるのも、各館の日頃の文化財保存・修復・活用に対する取り組みへの信頼の表れと思われる。奈良に於いては、これまで寄託されていた周辺寺社が、宝物館・収蔵庫を建設されるため寄託品を引き上げられた由であり、B 評価とされているが、全体としては喜ぶべき事であり、今後ともそれら寺社と連携を取りながら、より良い保存と活用が図られるよう、時としては指導・助言などにもつとめられたい。

東博の空気汚染物質に対する新しい濃度指針の提示や文化財運送中における振動評価にはじめてコンピュータシュミレーションを導入されたことなど、新しい方法への挑戦もあり、今後さらに、こうした研究がすすみ、法人全体で共有できることを期待したい。その一方基本的なことではあるが、人が心がけて文化財の毀損を防ぐことが肝要である。

京博の展示ケース内への害虫の侵入は昨年度も気になるところであったが、ケースの改善・IPM の導入など検討されていないのであろうか。如何に例年にない高温多湿であったとはいえ、どのような状況も常日頃想定しておくべきではなかろうか。大地震や停電なども例年あることではないが、被害に遭ってしまってからでは取り返しがつかない。

２　文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

「平常展」については、九博では当初から「文化交流展示」ということで公衆にも浸透していた。この度、東博では「総合文化展」、奈良博では「なら仏像館」と改称され、イメージチェンジをはかられるようだが、名称ばかりでなく展示内容、広報の在り方等にもさらに工夫してほしい。

平常館再建中の京博が地方で展覧会をされることは、日頃、質の高い、また日本を代表するような文化財に触れる機会が少ない地方にとっては有り難いことである。ことに小中高生にとって、若い時期に教科書に載っているような文化財を目の当たりにすることは感激であり、その子の将来や日本の文化にとっても有意義なことと思われる。開催地の学校等への積極的な働きかけに努力してほしい。また、他館においてもこのような企画がなされることを期待したい。平城遷都 1300 年という千載一遇のチャンスに、奈良博では博物館内外で歴史・文化財に対する人々の理解をたかめることに著しい成果を上げられた。他機関や、地域の要望や活動と密接に連携しながら事業を展開することは、大きな成果を生むことにつながることが証明された。日頃の地道な地域との連携活動が実を結んだのであろう。

特別展では、「誕生！中国文明」展が東博においても九博においても入場者数が少なかった。九博で観覧したが、これ程素晴らしい一級品が来ているのに、本当に勿体ないことと思われた。展示も工夫されて興味が持たれ、研究員の努力がより多くの一般の人に伝わらないのも残念であった。入場者が少ない理由はいろいろあるであろうが、まずポスターが何を意味しているのか全くわからなかったし、イメージが暗かった。展示品の価値の一般への広報もインパクトのあるものではなかった。タイアップするマスコミや宣伝企画会社がいつも同じというわけにはいかないだろうが、得意分野の業者を選定するなどの方法はないものか。なによりも館員のセンスを磨くことが大切ではあるが。

東博、奈良博でクレジットカードが利用できるようになったことは、「今頃？」という感もあるが、評

価したい。東博ではスマートフォンを利用したナビの実証実験も行われており、世の流れに即応したサービスの導入がさらにすすむことに期待したい。

3　我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

研究成果の国内外への広報は、あらゆる媒体を駆使して活発に行われている。

海外の研究者との相互交流も、各館ともに目標値を大幅に上回るほど活発であり喜ばしいが、旅費予算や日常業務との兼ね合いもある。年間スケジュールは目標値を定める頃にはあらかた決まっていると思われるのに、実績と目標値にこのように差が生じるのは何故であろうか。如何に外部資金の導入に努力されたとはいえ、目標値が低すぎるのではなかろうか。

保存や修理技術の研修プログラムは、前年に比して充実してきた。ことに九博の地元大学の文化財保存技術専攻学生に対する研修は新しい試みであり、若い技術者の育成の必要性からも大いに評価されるところである。一度に多人数はできないであろうが、地道に積み重ねて、一人でも多くのプロの技術者の誕生に寄与されたい。

公私立博物館への指導助言や貸与が S・A 評価であるのは、それだけ、公私立博物館も活性化しているということであり喜ばしい。今後とも文化の裾野を広げられることに努められたい。

4　文化財に関する調査及び研究の推進

5　文化財の保存・修復に関する国際協力の推進

6　情報発信機能の強化

7　地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

展覧会の鑑賞ばかりでなく、博物館の施設（庭園を含めて）の利用が、国民の間に浸透し有効利用が一段と進んだ。ただ休日は使用する団体等が多く、混雑するほどであるのに比し、平日の利用が極端に少ないように思われる。平日の利用についても工夫が必要であろう。

一般競争入札は、経費節減の上からも、癒着等防止の上からも必要なことであろう。ただし、専門的業務に於いては、その専門性、継続性の必要から必ずしも価格競争による入札はなじまないものがあり、かえって業務効率を下げる原因にもなりかねない。入札導入に当たっては担当職員の意見を聞いたり、厳しい条件をつけたり、あるいはプロポーザルなどの方法が望ましいと思われる。

業務委託は、可能な限り行われていると思われる。しかし、事故や来館者に対する対応の悪さ等が発生した場合、館の評価やイメージを損なうものであり、「委託業者の責任」では済まされない。業者選定に当たっては、信頼しうる業者であるか十分な検討が必要であるし、既に行われていると思うが、教育も必要である。

Ⅲ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

毎年毎年、前年度比で支出を削減していくことは大変難しいことと思われるが、省エネ・リサイクルなど目標値を達成されていることには敬意を表したい。

平成 22 年度は、展覧会等自己収入が大幅に増加したことは喜ばしいが、毎年それが確保できるわけではない。昨年度をベースにして交付金が減らされることのないようお願いしたい。

人件費の削減は 22 年度約９％の削減で、目標値に対して S 評価であるが、これは果たして良いことなのかどうか。年々繁多、増大する職務に対し、欠員補充も不十分で、給与も見直しでは、職員の健康問題、モチベーションの低下も懸念され、かえって業務効率の低下につながらないだろうかと危惧される。

Ⅳ　その他人事計画等

アソシエイト・フェローは昨年度の委員会でも多くの委員が様々な意見を述べられたところであるが、若い彼等の研究の着眼点や、研究に対する真摯な取り組みには目を見張るものがある。有期雇用ということで、その後の人生に対する危機感や、将来への布石としたいとの想いが表れているものであろうか。彼

等の研究成果は機構の質向上にとっても有効であるし、人件費を節約しながら正規職員と同様の業務をこなしていただけるということで、メリットは大である。彼等の努力が「捨て石」とならないように切に望みたい。
第２期中期計画期間全体についてのご意見 第２期中期計画は着実に達成されたと思う。自己点検評価書の作成には多大なエネルギーを要していると思われるが、これによって進捗状況の把握や反省が毎年なされてきたことが、達成への基礎作業になったと考えられる。また評価委員の意見を反映させて改善さすべきは改善されてきたこともよかったと思う。予算や人員の削減が毎年進行する中、本来の研究、文化財の収集・保管ということはしっかりと行いつつも、職員の意識改革により「開かれた博物館、開かれた文化財研究所」を目指された方向性は間違いではなかった。 機構内部に於いては、人事交流や共同研究、先端機器・技術の共有、情報の共有。 同業種の公私立博物館や地方自治体の専門職に対しては研修の場の提供、指導・助言、文化財の貸与等の機会の増大。 海外に対しては研究、展覧会を始め研究者のみならず民間レベルに於けるまでの交流 公衆に対しては、わかりやすい展示、快適な鑑賞環境の整備、ボランティアの積極的な活用・協働システムの構築、学校への働きかけ、講演会等様々なイベントの提供 等々、５年前には想像もできなかったほどに、国民に理解され、親しみを持たれる機構に変貌した。 こうして得られた人的交流や様々なコト・モノの共有が、苦しい中にも大きな成果を上げ得る力になったのだと思われる。 今期に於いては、数多くの研究成果をあげられたが、やや細切れの感もある。次期は今期の成果を踏まえつつ、法人全体として取り組む、大きなプロジェクトに期待したい。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会　博物館調査研究等部会

部会長　　小　林　　忠（学習院大学文学部教授）

酒　井　忠　康（世田谷美術館 館長）

藤　田　治　彦（大阪大学大学院教授）

森　　弘　子（福岡県文化財保護審議会専門委員）

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎博物館調査研究等部会

外部評価委員名

小 林　　忠

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　平成 22 年度自己点検に関する評価

1　総合的な事項

国立博物館に対する国民の期待は広範多岐の方向性に広がっており、それらの欲求に応える業務が繁多にわたりすぎているという印象が強い。４館各館が、地域の特性も活かしながらそうした期待に応えている日常の努力は、まことに敬服に値するが、一方で、長期的な展望のもとに国立文化財機構総体が関わる求心的な事業を推進すべきかとも考える。

また、一部の有能な館員に負担が集中しすぎる傾向が懸念され、それらの館員への報償的な処置、たとえば大学に於けるサバーティカルのような一定期間の休暇の提供など、思い切った仕組みを新しく考えるべきかと思考する。

2　自己点検評価に関する事項

各館の自己点検評価には、依然としてやや過褒気味なところがあるが、マイナス面への反省も少なからず認められるようになった。それらの誠実な自己評価の多くは、平常の館務に追われて研究成果の公表が遅れていることへの自戒という点に表れている。特定の課題を掲げた調査研究とその成果の公表が、単年度内で完結する必要はなく、次年度、あるいはさらに熟した近い将来での公表も十分に価値あること、いうまでもない。ただし、日常業務のほかに調査研究にも専心できる余裕が得られるよう、適切な配慮を館員に与えてほしいものと切望される。

3　調査研究に関する事項

東京国立博物館の「特別調査　工芸」（４５１１-４）のように、国立博物館４館と文化庁の専門家を動員した共同の調査研究がなされていることを頼もしく思う。

また、奈良国立博物館の「我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究」（4513-4）や、九州国立博物館の「日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究」（4514-1）のように、国を代表するミュージアムとして、欧米のみならずアジアの諸国とも地道な交流を重ね、共同の調査研究とその成果を国際シンポジウムや特別展に実らせていることを、高く評価する。

科学研究費などの外部資金の導入に積極性を増してきたように思われ、この点でも評価したい。

4　その他

特定の宗派や大寺院など特定機関からの集約的な借用による安易な展観の企画が目立っているようで不満を覚える。日常の共同研究の成果による骨太の企画を期待する。たとえば京都国立博物館の「日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的な考察」（4512-3）など、壮大な規模と有意義なテーマの研究が、それにふさわしい内容の大展観として結実することを心から期待する。

Ⅱ　第２期中期計画期間（平成 18～22 年度）についてのご意見

予算や人員の漸減という過酷な条件の中で、国立博物館４館の運営努力はみごとに国民の期待に応えてきた。あるいは応えすぎてきたといって、良いかもしれない。大規模動員した特別展にはそれなりの経費や館員の身体的、精神的な負担を余儀なくされている。それらへの配慮なしに今後とも縮小再生産していかなければならないというのは、あまりに過酷な条件といわざるを得ない。善処が強く望まれる。

◎博物館調査研究等部会

外部評価委員名

酒 井　忠 康

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　平成22年度自己点検に関する評価

1　総合的な事項

各館ともに果たすべき任務を遂行する努力と、工夫を凝らした試みが感じられる。調査・研究の領域では一定の成果を上げ、展示・鑑賞の領域では新しく開発された機材の利用を含めて、さまざまな工夫があり、博物館がより広く多くの来訪者に満足してもらえる方向に進んでいるようすを垣間見た。

財政、人材、環境の整備など多くの不満をかかえたなかで（現状を分析すれば）、活動そのものは支障なくつづけられていておおむね評価できる。

2　自己点検評価に関する事項

これまでよりも評価の公平性がはかられているように思いました。

3　調査研究に関する事項

とくに問題はないが、あるとすれば科学研究費助成金にもっぱら依存している所為かもしれないが、それぞれ研究の成果は上がっていても大局的に見ると、その成果の果実がいかにも専門的・末端的で小さい。調査・研究に関しては国際的な話題となるような大きなプロジェクトを時には組む必要があるのではないだろうか。

4　その他

東京国立博物館での視覚障がい者への対応、京都国立博物館での「日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察」、奈良国立博物館での「なら仏像館」の利用、九州国立博物館での「ＩＰＭシステム構築」や「きゅうーはく絵本」など、創意工夫の跡がありありと覗うことのできる活動であると思った。

Ⅱ　第２期中期計画期間（平成18～22年度）についてのご意見

全体的に支障なく進行していると思います。計画は結果いかんに関係しますが、結果の辻褄合わせで終わらせない工夫が必要です。もう少し大規模プロジェクトがあって然るべきだと思います。

◎博物館調査研究等部会

外部評価委員名

藤 田　治 彦

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　平成22年度自己点検に関する評価

1　総合的な事項

各国立博物館とも、それぞれの特徴を生かして、重要な調査を行い、有意義な研究、収集・保管・公衆への観覧を行っている。各館同士の交流、各国の博物館や文化財関連組織との国際的交流も進めている。この度の東日本大震災と、それに伴う原子力発電所の事故によって、そのような交流が阻害されないよう、一層積極的に、国立博物館の総合的な能力が発揮されることを期待する。

2　自己点検評価に関する事項

定性的評価、定量的評価ともに、評価基準を定めて、適切な自己点検評価が行われている。自己点検評価は、いうまでもなく、評価それ自体以上に、自己点検評価をすることを通じての向上が重要である。自

己点検評価報告書作成のために博物館本来の仕事に支障をきたすといった本末転倒が起きないようにということも含め、評価項目や評価方法の適正化には、一層の工夫が期待される。

３　調査研究に関する事項

（１）有形文化財に係る調査研究

長期的業務、短期的業務ともに、その業務期間に応じて、その発展性や効率性を考えて遂行されている。業務報告書によって長短さまざまであるので、記述のありかたについてある程度の指針は必要であろう。

（２）公衆への観覧を図るための研究

何を「公衆への観覧を図るための研究」とみなすかの判断は館によって異なっており、適正な評価のためにも国立文化財機構としての判断を示す必要があるだろう。おそらく、東京国立博物館は展覧会が非常に多いので個別の展覧会の開催に向けた調査研究等は含まず、その他の館は相対的に展覧会が少ないので、個別の特別展関連の調査研究や展示に関連した業務も「公衆への観覧を図るための研究」とみなす傾向が強いのだろうと想像する。事情や相違はわかるが、国立文化財機構全体としての合意が必要だろう。

４　その他

本自己点検評価報告書のおもな部分が作成されたのは東日本大震災以前であったかもしれないし、報告書の内容の大部分はそれ以前に行われた調査や研究に関するものなので当然ではあるが、震災関連の論及や言及が意外に少ないと感じた。今回の震災を経験して、国立文化財機構が果たす役割は一層大きい。

東京国立博物館の充実はもちろん重要であるが、一層の充実が、設備、人員、予算の各側面で、京都、奈良、九州の各館に必要であることは、首都機能分散化同様に必要である。各館がそれぞれの地域の歴史や文化財をおもに分担するというあり方は自然であり継続されるべきだが、それと同時に、４館ともに日本全体を代表する国立博物館であり、特定の博物館が思いがけない規模の被害を被っても、それを他館が、コレクションその他の点でもカバーできるような国立博物館全体の態勢が可能な限り取られることを期待する。

Ⅱ　第２期中期計画期間（平成 18～22 年度）についてのご意見

第２期中期計画の目標は概ね達成されたと思われるが、予算不足、人員不足等で、各館とも苦しい運営のなかでの目標達成だったと推測される。次の中期計画には、日本の文化財を守るための国立文化財機構としての積極的提案が盛り込まれることを期待する。

◎博物館調査研究等部会

外部評価委員名

森　　弘 子

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　平成 22 年度自己点検に関する評価

１　総合的な事項

平成 22 年度も、各館共に、限られた予算、限られた人員の中で、様々な工夫を凝らしながら最大限の努力をされていると感じられる。

２　自己点検評価に関する事項

自己点検評価が導入されてから数年経過し、ようやく職員もこうしたことに馴れてきたのであろう。当初、A 評価ばかりであることが問題となっていたが、22 年度は S～C 評価まで段階的に行われており、備考欄・総合的評価・中期計画の実施状況の確認欄の記入も充実している。

業務多端のなか、評価調書を作成することは大変なことと思われるが、此の事によって、日常業務の惰性化を防止し、調査研究の問題点の洗い出しが行われるなどして、業務のグレードアップに大きな成果をあげてきたと考えられる。今後ともこうした取り組みは継続されるべきであろう。

３　調査研究に関する事項

ともすれば展覧会の開催準備に追われがちな中、日常的な地道な調査研究が全館規模の取り組みで行われていることは大切なことであり、その努力に敬意を表したい。それとともに、先端的な科学技術を駆使した先駆的な研究によって、これまで知り得なかった成果が上げられていることは、国立の文化財機構ならばこそであり、こうした成果が広く末端の博物館に至るまで享受されることを期待したい。

国際交流は、従来も研究者間の研究交流、展覧会の開催などという形では行われていたが、九州国立博物館のタイ国バンコク国立博物館との交流は、双方の館で同じ展覧会を開催するにとどまらず、市民のタイ国訪問・交流、伝統工芸、伝統芸能の比較・交流まで行われるという画期的なものであった。JICA 草の根技術協力事業「文化財の保存と観光資源としての利活用」の一環ということであるが、このように、他機構・機関との協力による新しい方向性の模索も、今後さらに進められることを期待したい。

４　その他

法人内部における、この度の大震災による被害は今のところ無いというご報告であるが、今後「停電」などの事態が発生した時、収蔵庫等の対応は大丈夫なのであろうか。博物館は、通常の建造物より耐震基準は高く設定された建物であると説明されたが、各収蔵品についての展示・収蔵方法に関するさらなる注意・点検、研究をお願いしたい。また被災された地域の文化財に対して法人としても積極的に、修理・保管などの対策に手をさしのべて頂きたいと思う。

Ⅱ　第２期中期計画期間（平成 18～22 年度）についてのご意見

第２期中期計画期間に於いては、博物館の活性化において大いに成果が上げられた。各館共に、年度計画を立てて行われてきた研究は着実な成果を上げてきている。

デジタル化が急速に進んだ社会に於いて、博物館のデジタル化に向けての作業は、膨大な作業量と思われるが、それも各分野に於いて、着実に進められてきた。また先端的な機器の利用も各館共同での研究等を通じて、法人全体として関わることができるようになった。

全体として計画期間当初より法人内部、外部にかかわらず人的交流が盛んになり、調査研究の実がより有効にあげられてきたと感じられる。また研究に於ける外部資金の導入も積極的に行われるようになった。ことに目を見張るのは、公衆へのサービスの向上であり、IPM 活動など公衆と協働での館の業務運営の構築がなされたことである。この点については各館の事情も異なり温度差があると感じられるが、今後、他館の事例で参考になる所は採り入れ、それぞれの館にあった方法で、さらに「公衆に開かれた博物館」をめざしてほしい。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会　研究所調査研究等部会

部会長	佐　藤　　信	（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
	稲　田　孝　司	（岡山大学名誉教授）
	岡　本　健　一	（毎日新聞社客員編集委員）
	園　田　直　子	（国立民族学博物館文化資源研究センター教授）
	玉　蟲　敏　子	（武蔵野美術大学造形学部教授）
	野　口　　昇	（日本ユネスコ協会連盟理事長）

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎研究所調査研究等部会

外部評価委員名

佐　藤　　信

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　平成22年度自己点検に関する評価

1　総合的な事項

○基礎的・先端的な文化財の調査・研究と国際協力などの多方面にわたり、期待される成果を充分に挙げていると評価できる。中期計画の到達状況もきわめて順調といえよう。研究成果の発信には充分な努力が為されているものの、せっかくの大きな実績が広く周知されていない面があり、研究者のみでなく国民全般に対して充分に発信するという面でさらに努力の余地もあるように思う。

○「年度計画」が、研究所については各所ごとの記載が見えにくくなっているのを、明示してほしい。

○いわゆる「団塊の世代」の所員が多く退職を迎える時期に対応して、将来にわたって長期的に適切な所内の人事構成を維持していく方向性をしっかり堅持していただきたい。

2　自己点検評価に関する事項

○限られた人員・予算の割に大きな実績を挙げていると思われる業務が多くあったが、人員・予算面での「効率」について、評価の対象として比較する方法はないものか、お考えいただきたい。

○科学研究費などの獲得件数・金額なども実績として評価対象に加えてよいのではないか。

○自己評価では、できるだけ定量評価も詳しく記載していただきたい。

3　調査研究に関する事項

○基礎的・先端的な文化財の調査・研究について、多方面にわたって充分に成果を挙げていると評価できる。地味ながら必要不可欠な基礎的研究の分野にも、充分な人的・財政的な配慮をするべきと考える。

○東京・奈良の文化財研究所の協力事業やその体制も段々スムーズに展開してきたように思う。同じ国立文化財機構の中の機関として、所員・館員どうしの私的な交流のみでなく、研究所と博物館とが協力して調査研究成を行うタイプの事業はできないか。

○関連する学会への様々な形の協力も、実績として評価してよいのではないか。

4　国際協力の推進に関する事項

○東京・奈良の文化財研究所とも、文化財保存のための調査・研究や保存修復・人材育成・技術移転などに関する国際協力や国際研究集会の開催では、多分野にわたり、日本ならではの質の高い実績を挙げており、非常に高く評価できる。各国・各組織との協力体制を、個々の所員の尽力に負うのみでなく、研究所としての組織的な事業としていただきたい。

○国立文化財研究所において、世界文化遺産に関する調査・研究を推進することはできないか。

5　調査研究成果の発信に関する事項

○研究所の報告書・研究論集などの出版物が多様かつ大量に刊行され、成果の発信となっていることは大いに評価できる。こうした刊行物が、入手しにくい外部の研究者や一般にも販売されるようにはできないか。インターネットによる、論文・データなどのＰＤＦ公開をさらに展開していただきたい。

○調査研究の成果を、研究者向け報告・論文のみでなく、一般国民に対しても分かりやすい形で出版するなど、発信していただきたい。子供向けの研究所紹介のパンフレット作成などは、有益な事業であった。さらに、研究所の展示スペースの活用のほか、外部の各地の博物館等での展示とか、大学の「オープンキャンパス」に似た公開事業などはできないか。

○ホームページ（インターネット）による調査・研究成果やデータベースなどの発信・公開が多くの人々からアクセスされていることは評価できる。さらに魅力的な情報発信を展開していただきたい。

○両研究所において、国民・市民への公開サービスを担当するシステムを拡充していただきたい。

○国民・市民向けに両研究所の多様な調査・研究成果を発信するシンポジウムをさらに展開していただきたい。
○同じ国立文化財機構である研究所と博物館とが、調査研究成果の発信事業を協力して行うことはできないか。

６　国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項
○国・地方公共団体・博物館・美術館等に対する協力・助言では、委託されたものなど多分野で高レベルの大きな実績を挙げていることは、評価できる。
○国立文化財研究所で、文化財研究における高いレベルを活かした高等教育への協力をさらに進めていただきたい。また、これに加えて初等・中等教育の学校教育との連携をも、進められないものか。

７　その他
○両研究所において、文化財の防災に関する研究をさらに積極的に進めていただき、その成果を東日本大震災の復旧・復興の際に発信・提供していただきたい。

Ⅱ　第２期中期計画期間（平成 18～22 年度）についてのご意見
○第二期中期計画期間においては、基礎的・先端的な文化財の調査・研究と国際協力などの多方面にわたり、期待される成果を充分に挙げてきたと評価できる。
○第二期中期計画期間、人員・予算が削減される方向にありながら、限られた人員・予算の割に大変効率良く大きな実績を挙げていると思われる業務が多くあった。
○研究成果の発信には充分な努力が為されているものの、せっかくの大きな実績が広く周知されていない面があり、研究者のみでなく国民全般に対して充分に発信するという面でさらに努力の余地もあるように思う。

◎研究所調査研究等部会

外部評価委員名

稲田　孝司

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　平成 22 年度自己点検に関する評価
１　総合的な事項
調査研究、国際協力の推進、研究成果の発信等のいずれにおいても計画は達成され、多くの成果刊行物で示されるように、その事業内容は精力的で充実したものであった。

２　自己点検評価に関する事項
各プロジェクトに対する定性的・定量的・総合的な自己評価は、おおむね適正と思われる。

３　調査研究に関する事項
（1）基礎資料の収集は研究所の過去から将来にわたる継続的かつ根幹的な事業であり、この面で着実な成果が蓄積された。具体的には「民俗技術に関する調査・資料収集」（研究所プロジェクト No. 2、以下番号のみ記す）、「無形文化財の保存・活用に関する調査研究」（8）等であるが、その他『日本絵画史年紀資料集成（15 世紀）』（3）は労作であり、『平安時代庭園の研究』（23）は日本文化の特色をよくとらえた研究成果の刊行であった。「古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究」（6）における『明治時代平城宮跡保存運動史料集』の刊行は文化財保護のうえで意義が大きい。また、平城宮・京および飛鳥・藤原宮・京の発掘調査（9・10・17・18 等）でも継続した成果が蓄積されているが、とりわけ春日東塔院にかかわる発掘調査（15）は奈良国立博物館との共同調査であり、従来の研究経過をふまえ、その成果が遺跡保護にも生かされることが期待されよう。
（2）文化財の理化学分析や保存対策等に関する手法の研究については、多彩な文化財を対象とし、また数多くの実践例を通して原理的・応用的研究が進められた。特に「高精細デジタル画像の応用に関する

研究」(28) では大徳寺五百羅漢図銘文の可視画像化により同図研究に大きく貢献し、「文化財の生物劣化対策の研究」(34) においては日光二社一寺の歴史建造物約７０棟を対象とした大規模な調査により新たな木材害虫シバンムシ類の実状を明らかにし、あわせてそれへの対策を検討したこと等が注目される。「近代の文化遺産の保存修復に関する研究」(42) にかかわる『コンクリート構造物の保存と修復』の刊行は、近代日本の産業・歴史をささえたコンクリート構造物の危機的な現状を明らかにし、指定文化財としての保護の促進に貢献するはずである。

（3）その他、「遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究」(25) にかかわる研究集会「地域における遺跡の総合的マネジメント」の開催および『遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり～』の刊行は、町づくりのなかで文化財保護を進めようとする近年の新しい動向に寄与するものであり、また、データベースの構築・更新や定期刊行物の刊行等、地道な作業にも努力が払われた。

４　国際協力の推進に関する事項

国際協力は両研究所の事業のなかで年々比重が大きくなりつつある分野だが、『漢長安城桂宮』(22)、『西トップ遺跡調査報告書』(49)、『バーミヤン仏教石窟の建築構造およびその意匠と技法』(52) 等、海外諸国との協力で積み重ねられてきた調査成果が報告書として刊行されたことは、学問上、はなはだ意義が大きい。『東アジアの文化遺産―文化遺産保護国際協力活動を通じて我々は何を発見し共有しうるか―』(47) および『アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査・研究』(48) は、国際協力の下で文化財保護を推進するための社会的、理化学的問題を幅広く論じた意欲的研究の成果であった。ブータンやタジキスタン(52)等、新たな国際協力の推進にも力が注がれ、文化財関係法令和訳の事業 (61) に当該国の法令が取り上げられたことも適切な配慮であった。

５　調査研究成果の発信に関する事項

本年度における研究成果の発信については、両研究所とも計画を着実に進めたが、とりわけ奈良において顕著な成果があった。奈良では地元団体によって平城遷都 1300 年祭が企画され、これにあわせて研究所は公開講演会を旺盛に実施し、聴講者数を倍増したほか東京でも二度の開催を試みた (71)。飛鳥資料館では春期特別展「キトラ古墳壁画四神」をはじめとする企画により、目標の二倍以上にあたる 13 万人余の入場者があった (76)。

６　国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

高松塚古墳・キトラ古墳壁画の保存修復、平城宮跡・飛鳥藤原宮跡の保存活用等、文化庁の行う事業において順調な成果を得たほか、地方公共団体が実施する多面的な保護・整備・活用事業に専門的な立場から適切に協力・助言をおこなった。岡山県千足古墳の直弧文を描いた石障の保護にあたっては、保存修復科学センター・埋蔵文化財センターの複数部門が連携して協力にあたるなど、地元との信頼関係を深めつつある。

７　その他

とくになし。

Ⅱ　第２期中期計画期間（平成 18～22 年度）についてのご意見

中期計画「１．文化財に関する調査及び研究の推進」は、大別すれば（1）文化財の基礎的・体系的研究すなわち文化財の資料収集とその歴史的考察を中心とする事業と、（2）（3）の文化財の分析・保存・修復を目的とした理化学的研究にかかわる事業とにより実施されたといえる。そしてこの５年間、両者の事業に含まれる多数のプロジェクトが、定められた年次計画のもと、個々の目標を十分に達成したことは明らかであるが、それに加え、両者に含まれる個別プロジェクトの研究が互いに相乗効果を発揮し、東京・奈良両文化財研究所における文化財専門研究機関としての総合力の形成に大きく寄与した点が重要である。それは代表的な事例として高松塚古墳の場合をあげれば十分納得されるはずで、本中期計画期間中に壁画保護のための発掘調査・石室解体・壁画修復といった困難な作業が進められ、この文化庁事業の推進に両文化財研究所の総合力が大きく貢献したことはマスコミをはじめ、ひろく世論・国民の認めるところである。

中期計画「２．国際協力の推進」、同「４．地方公共団体への協力等」についても、上記研究所の総合力が大

きな意味をもつ。とりわけカンボジア等での実績が示すように、発展途上国への文化財協力は調査・保護・修復から人材育成にいたるまでの多面的な協力関係として発展する可能性があり、文化財研究所に対する期待は今後ますます大きくなるであろう。
もとより国内で華やかに報道され、あるいは海外の専門家筋で知られる実績ばかりが研究所を代表する事業ではない。むしろ世間の脚光を浴びにくい地道な資料収集やデータの更新、理化学的な基礎研究等が将来における研究所の力量の基礎をなす。それだけにこうした分野については中期計画「３．調査研究成果の積極的な発信による社会への還元」が重要な意味をもつが、本中期計画期間中、両研究所は膨大な量の研究成果を印刷刊行し、あるいは電子情報として公開し、また黒田記念館・飛鳥資料館の企画展等として一般への普及に努めた。
研究所の自己評価・外部評価については、年次ごと、プロジェクト単位の評価が基本となっており、上に記した研究所全体の総合的な力はなかなか自己評価しにくく、また客観的にも評価されにくい。むしろそれは、研究所の運営方針、マネージメントにかかわる面が大きいかもしれない。両研究所は第２期中期計画期間中に国立文化財機構の一部となったが、博物館との協力をふまえ、中期目標・中期計画の区切りの時期においては目標・計画自体のたて方やプロジェクトの編成、事業の年次配列等について工夫を重ね、より規模が大きくより質の高い総合力の形成に努められるよう期待したい。

◎研究所調査研究等部会

外部評価委員名

岡 本　健 一

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　平成22年度自己点検に関する評価

１　総合的な事項

22年度は第２期中間計画締め括りの年にふさわしく、各分野で多種多彩の成果がまとめられました。なかでも、奈文研では「平城遷都1300年祭」にあわせて、創設いらいの考古・美術・文献の調査・研究の成果をもとに『図説平城京事典』が編まれました。東文研でも四半世紀ぶりに、二代の担当者のリレーによって、紙媒体のデータベース『日本絵画史年紀資料集成　十五世紀』が完成されました。ともに、文化財研究所ならではの見事な達成で、社会・学術に裨益するところ、必ずや大でしょう。

後者は専門家向きの地の塩のような労作ですが、あとがきで編者は、絵画に限っても「今後ぜひ考究すべき材料が、ほぼ手つかずのまま放置されている」と、重大な総括をしています。美術史家・文献史家には必読・傾聴すべき証言ではないでしょうか。門外漢の私も一読して、大槻文彦の『言海』跋文に似た感銘を受けました。難題ですが、16世紀以降についても、ぜひ事業を継承・発展していただきたいものです。

２　自己点検評価に関する事項

自己点検評価書は、総じて濃密かつ目配りのきいた内容に仕上がっています。ただ、21年度につづいて評価は抑制的で、Ｓの数はごく僅か、ほとんどがＡという成績です。とうぜんＳに値する前項の２点も、Ａ止まり（『平城京事典』は評価外）。かねて指摘されているとおり、同じＡでも濃淡・格差があるはずで、分光器にかけて差異を判別しなければ、評価にならないのではないでしょうか。（次ページに愚案を記しました）

３　調査研究に関する事項

質的にも量的にも見事な研究調査の収穫です。古代の門にはじめて本格的に取り組んだ『官衙と門』、平安時代の庭園を集成した『古代庭園研究Ⅱ』、明代羅漢図の銘文を光学的に解読した『大徳寺五百羅漢図報告書』など、いずれも新生面を開く労作です。

金看板の年輪年代学研究では、新たに栂を年代測定の対象樹種に加え、若い世代が美術作品の年代推定に努めている由、その成果が期待されます。

４　国際協力の推進に関する事項

アジア諸国との共同調査研究は、奈文研の『漢長安城桂宮』『日韓文化財論集Ⅱ』、東文研の『西トップ

遺跡調査報告書』などに結実しました。桂宮の遺構（とくに雨落溝の玉石敷）は飛鳥の浄御原宮跡を彷彿させて有益です。震災後、日本で開かれる国際会議・国際競技等の中止が相次ぐおりから、文化財の国際協力事業に累が及ばぬよう願います。

5　調査研究成果の発信に関する事項

①厖大なプロジェクトが順調に達成され、着実に発信されました。とくに「文化財の防災計画に関する調査研究」報告書の刊行は、今次の東日本大震災と重なり、タイムリーな企画・発信となりました。報告の内容がじっさいに役立つことを期待します。「東大寺法華堂の乾漆金剛力士像は低重心で、直下型地震でも転倒しにくい」という測定結果が、昨夏、学会報告されたのも、時宜を得ています。

②地味な木簡に光をあてた記念特別展「天平びとの声をきく」と「木簡黎明」が、それぞれ平城宮跡資料館と飛鳥資料館で開催されたのも、特筆されます。

③発表のタイミングを誤ったために、次の現地説明会で訂正した事案がありました。そのせいか、「正確性」を期するあまり、他のプロジェクトでも「羹に懲りて膾を吹く」式の過剰反応が見受けられました。いつも「石橋を叩いて引っ返す（発表しない）」慎重主義に陥っては、大胆な仮説が産まれないのでは、と危惧します。咎められるのは、誤りを隠すこと。発展性・実証性のある面白い企画と仮説で社会・学界を沸かせてください。

6　国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

国、地方公共団体等の文化財保護事業に対して、その都度適切に助言・協力されています。

古代官衙・集落研究集会は、全国の自治体職員との討論・交流を通じて、結果的に職員の資質の向上にも寄与しているとのこと。直接の助言・研修とは別に、研究集会などのもたらす波及効果の側面にも注目したいと思います。

7　その他――自己点検評価書の記述・表現について（感想）

①同一プロジェクト（見開きページ）のなかで同文・同句の繰り返しが目立ちました。copy＆paste の多用のせいでしょうか。簡潔な表現が望まれます。

②そのなかで、「遺物の出土量は調査者の意志で左右できるものではないが」などと、実感のこもったユニークな警句に出合うと、笑いを誘われ、いそいそと読み継ぐことができます。苦心のほどもうかがえて、敬意を評したくなります（薬師寺旧境内の発掘調査）。ただし、数ページ後にまた同一句が出てきて、ガックリ。「お主もか?!」の気分です。

Ⅱ　第２期中期計画期間（平成18～22年度）についてのご意見

★評価基準の改訂を――

現在の評価基準は、定性的な適時・独創・発展・効率・継続・正確などの項目と、定量的な論文・発表・研究会などの件数で、主として（独創性を除けば）担当者グループの勤勉・努力度を測るモノサシになっています。粒ぞろいの担当者が真面目に、かつ手早く取り組めば、おのずとＡ評価に均一化されます。

しかし、それでいいのか？　なにか腑に落ちないところが残る。さればこそ、毎年、繰り返して議論されたのでした。

「ヒトを中心とした評価の均一化は、もともと予見しえた当然の結果だった」と判れば、基準を変えて、モノ（文化財）そのものの視点を加えれば、どうでしょうか。

考古・美術・建築・民俗・芸能など各分野の文化財がもつ本来の魅力・面白さ・感動力・意外性――ひっくるめて文化財の「価値」を、発見・復元・付与することが、文化財にたずさわる者の重要な使命だとすれば、その達成度の評価は、不可欠と思われます。言葉は熟しませんが、仮に「価値性」「感動性」と呼んでおきます。

高松塚壁画のような超弩級の発見があれば、文句なしに、「感動性／価値性」はもちろん、総合評価も超Ｓです。肉眼では見えない細部を高精細カメラで写しだし、新しい価値が発見できれば、これまた、Ｓです。時には担当者の創意工夫や研鑽努力じたいが感動を呼んで、Ｓと評価されることもあるでしょう。そして、期待される標準的な仕事の達成は、Ａです。このように、「感動性／価値性」の視点は、評価の均一化を破る分光器になりうると愚考します。

ちなみに、メディアの世界では、文化財のニュース報道にあたって専門知識はとうぜん重要ですが、な

により「そのニュースが面白いか?」という視点が重んじられます。新聞で申せば、読者に感動・感銘・意外感・好奇心を喚起できるか、という視点です。ご一考願えれば、さいわいです。

◎研究所調査研究等部会

外部評価委員名

園 田　直 子

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　平成22年度自己点検に関する評価

1　総合的な事項

各担当部課はそれぞれ多くの事業を展開し、いずれにおいても充分な成果をあげている。報告書にとどまらず、論文や学会発表の数が多いことは特筆に値する。プロジェクト形式では、年度末の事業においても、年度内に実績をあげることが求められがちである。職員の方々の仕事量が増大していないか、懸念されるところである。

2　自己点検評価に関する事項

定性的評価や定量的評価においては、それぞれの事業の到達度の差異が分かりやすくなっている一方、総合的評価はほぼ一律な評価となっている。定性的評価や定量的評価で、「S」があったものも、「B」があったものも、最終的な総合的評価でいずれも「A」となるのは悩ましい。

当初計画を大幅に上まわる成果があれば「S」評価、目標に達せなければ「B」評価にするなど、ある程度統一した見解があってもよいのではないだろうか。

3　調査研究に関する事項

調査研究は、無形文化遺産や近代遺産を含めた幅広い分野を対象としており、いずれにおいても意欲的に取り組んでいる。発表論文や報告集などの実績値は高く、全体的に活発な研究活動が行われていることは、大いに評価できる。文化財の防災計画に関する調査研究は、今、まさに求められているものであり、ナショナルセンターとしての今後の役割に注目したい。

文化財に関する調査研究は、長年の基礎研究をもとにしたデータの積み上げや技術改良が、大きな成果に結びつく。今後とも、先端的な研究に意欲的に取り組みつつ、基礎的な調査研究を継続的に緻密に積み上げていける研究環境を維持していただきたい。

4　国際協力の推進に関する事項

文化財の保存・修復に関する国際協力は、対象国の治安や社会情勢と密接に関連してくるため、連携や調整で困難な点も多くあろうが、アジアを中心に数多く実施されている。継続的に開催されている「紙の保存と修復」国際研修、在外日本古美術品保存修復協力事業、国際協力機構やユネスコアジア文化センターへの研修協力を通じて、国際的な人材育成に貢献している。一連の国際協力推進の活動は、日本の国際貢献の大きな一助になるとともに、日本に対する理解を諸外国で高める一翼を担っている。

国際関係では、相手国との関係や受託研究との兼ね合いもあり難しいであろうが、より戦略的な展開も考えられるように思う。一例をあげれば、「文化財保護関連法令シリーズ」は他に例がない、独創的な事業と高く評価しているが、対象国の選択については計画性が明確でない。

5　調査研究成果の発信に関する事項

研究論文集、報告書、年報、図録等の刊行をはじめ、研究集会、講演会、現地説明会、展示公開が活発に行われ、専門家だけでなく、一般の人びとへの情報発信を続けている。

各種のデータベース作成、資料デジタル化が積極的に進められているが、今後はこれまでに集積した記録、情報、研究成果をいかに維持管理し、活用していくかが問われる。直近の問題は、データを逐次追加し、継続的に内容の充実をはかる体制の整備である。中・長期的視点では、デジタルマイグレーションの問題がある。研究所（あるいは文化財機構）としては、どのような方針のもとに進めていくのか、全体的なビジョンの策定が急がれる。

6　国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

これまでと同様、地方公共団体等が実施する事業への援助・助言は、文化財、建造物・遺跡等の有形文化遺産のみならず、無形文化遺産も対象としており、各分野でバランスよく展開されている。博物館・美術館等の保存担当学芸員研修や、埋蔵文化財担当者研修などを通じて、国内で各種文化財に関わる人びとの知識や技術の総合的なレベルアップに寄与している。さらには連携大学院教育で、次世代の人材育成に貢献している。

7　その他

平成24年度より「博物館資料保存論」が学芸員課程で必須となり、人材育成の面でも研究所への期待は、今後、ますます強くなると思われる。その一方で（社会全体の問題であるが）、団塊世代の停年後、いかに専門的知識・技術が伝承できるかが問われてくる。すでに実施あるいは計画している対策があれば、教えていただきたい。

Ⅱ　第２期中期計画期間（平成18～22年度）についてのご意見

第2期中期計画期間を通して、活発な研究活動が展開され、実績は全体として高く評価できる。その反面、事業の数が多く、また年度内での実績が求められがちなだけに、職員のかたがたの負担や仕事量は毎年増大しているのではないだろうか。職員の停年退職後の補充、あるいは若手研究者の雇用に関しても、日本全体が経費節減の流れのなか、中・長期的な視点での措置をとることができているのか懸念されるところである。

現在使用している業務実績書・自己点検評価調書のフォーマットでは、プロジェクトごとの成果は充分に把握できる一方、プロジェクト間の関係が把握しにくいという欠点がある。担当部課間にまたがった活動、東京と奈良の文化研究所が協力した活動、ひいては文化財研究所と国立博物館との協力体制が明らかになるようにすると、研究所はもとより、文化財機構全体としての活動がより総合的に見えてくるようになり、対外的によりアピールするであろう。

評価においては、その該当年度の業績が対象となる。特許取得した非破壊年輪年代測定法のプロジェクトを「S」（平成20年度）と判断したのは適切と考えるが、このような業績は、基礎データを継続的に蓄積し、レファレンスを作成するという地道な調査研究が結実したものでもある。現在「A」評価の基礎研究のなかにも今後、大きくに発展しうる可能性を秘めたプロジェクトがあると推測でき、期待している。当該年度という短い単位で結果（業績）を出し評価することも重要だが、より長期的な視点で、継続的な基礎研究を評価し、支援することも必要であろう。

◎研究所調査研究等部会

外部評価委員名

玉 蟲　敏 子

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　平成22年度自己点検に関する評価

1　総合的な事項

・前年度と同様に、奈良、東京ともに順調に事業を継続・進展させていることが確認できた。
・とりわけ、前年度、一般人向けに訴求力のある報告が少ないと指摘した奈良については、平城遷都1300年祭の後押しもあって、多くの一般向け情報提供があったことが印象に残った。
・東京は奈良のような話題性があまりなく、活動の手堅さとともに地味さも感じた。

2　自己点検評価に関する事項

・奈良、東京ともに自己評価、プレゼンテーションの方法について手際のよい処理がなされていた。
・設定した目標への達成度によりA評価が多かったが、事業を手堅く遂行するだけでなく、より新鮮味のある活動や目標の設定も必要ではないかと思われた。

３　調査研究に関する事項
・奈良、東京ともにそれぞれのテーマによって目覚ましい進展があることが確認できた。たとえば、東京の『日本絵画史年紀資料集成（15 世紀）』『大徳寺五百羅漢図報告書』などの刊行が相次ぎ、今後の研究の基礎資料の整備が一段と前進したと言えるだろう。とくに、後者は高精細ディジタル画像撮影の効果を最大に生かして、裸眼では見えない新しい文字情報を発見したことが目覚ましい成果といえる。
・奈良についても多くの成果が上がっていることが理解できたが、たとえば埋蔵文化財センターの三次元レーザースキャナーなど新しい方法と機器の導入について、今後の新知見の期待が膨らむものであった。

４　国際協力の推進に関する事項
・奈良、東京ともに継続事業が順調に発展していることが確認できた。
・東京の伝統ともいえる在外日本美術保存修復事業は、今年度も世界に散らばる多くの重要な美術工芸品を手掛け、順調に進められていることが分かった。
・今年度も東アジア、東南アジア、西アジアなどへの協力が継続され、人的に交流も順調に進んでいることが分かった。

５　調査研究成果の発信に関する事項
・東京のウェブを用いた情報発信はお家芸ともいえるものだが、今年度も順調に進展し、アクセス件数も増加していることが分かり、喜ばしい成果と言えるものであった。
・奈良の文化遺産部は、平安時代の庭園研究の学際的な進展が目覚ましく、それが、Ｓ評価という論文発表件数の充実につながったようである。そうした努力が平泉文化の世界遺産登録への後押しとなったと信じたい。
・奈良については、平城遷都 1300 年祭というイヴェントと大極殿正殿とその周辺の復元・整備という業務が実を結ぶことができ、国民ならず海外に向けても大きな発信があったことが目を惹いた。今後も継続して国民の注目をつないでいく努力を期待したい。

６　国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項
・前年度と同様に、国や地方行政組織に対する協力・助言も、奈良・東京ともに順調に進んでいることが確認できた。そうした継続性を梃子として、今後明らかになっていくだろう大震災後の文化財の被害について、より実効性のある協力・助言がなされるように期待したい。

７　その他
・東京は、世代交代や組織の編成替えなどがあり、拡大する事業に見合う人的手当もこれから必要となっていくように感じられた。継続事業の遂行はむろんのこと、活発で、より新鮮味のある活動につながっていくよう、組織の充実がさらにもとめられていくのではないか。

Ⅱ　第２期中期計画期間（平成 18～22 年度）についてのご意見
・奈良・東京ともに第２期中期計画にかかげた内容を、特別な理由のないかぎり順調に遂行していることが確認できた。その項目を見ると、時宜を得た新しい計画もあれば、従来、行ってきた事業を引き継ぐものも多々あった。今後も、新旧のまざったこのような状態で事業が展開していくことと推察される。
・しかしながら、3 月 11 日の大震災は、奈良や東京などの文化財に関する研究機関の活動にも多くの変化をもたらすことと予測される。現に東京には文化財レスキュー隊の本部が置かれたとの報告がなされており、今後、新しく加わった事業の担当配置も大きな問題となっていくだろう。
・また、震災の二次災害ともいうべき原発事故によって、これまで積み重ねられてきた海外との交流が消極的になる可能性も危惧される。従来の活動の利点を失うことなく、新たな事業への取り組みが一層なされていくことを望むところである。

◎研究所調査研究等部会

外部評価委員名

野　口　　昇

※事項ごとに評価コメントを記入

Ⅰ　平成22年度自己点検に関する評価

1　総合的な事項

平成 22 年度は、第２期中期計画の最終年度に当たる節目の年であったが、東京および奈良の両研究所においては、有形・無形の多様な文化財に関し、幅広い調査研究、その成果の公開と発信、人材育成のための研修、地方公共団体等への指導・助言、さらには文化財の保存・修復に関する国際協力・国際貢献の諸活動が着実かつ効果的に実施されたことが、逐次送付いただいた刊行物をはじめ、出席する機会を得た研究会などからも確認させていただいた。これらはいずれも国の政策の一環として進められているものであり、また、国の文化財行政を支えるものである。

日本の歴史や文化が改めて注目されている折、両研究所や４つの国立博物館の諸活動は、グローバル化が進む世界の中で、文化の多様性を守り、日本人としてのアイデンティティを高め保持していくためにも極めて重要な意義を持つものであることを、再認識した次第である。

なお、3 月 11 日の東日本大震災により、多くの文化財が被災したと伝えられているが、今後、国立文化財機構が、その専門的知識・経験を生かして、被災文化財の保全・修復に大きな役割を果たすものと期待される。

2　自己点検評価に関する事項

計画の達成度、得られた成果、成果の公表と外部への普及、アンケート調査に示された満足度などに鑑み、各事業項目に関する自己点検は適切になされていると考える。

3　調査研究に関する事項

東京および奈良の両研究所においては、引き続き多方面にわたる調査研究が実施されてきた。

以下は、いくつかの例示である。平城地区や飛鳥・藤原地区の発掘調査をはじめ、出土遺物・遺構などに関する調査研究が実施され、重要な知見が得られ、我が国の古代国家の成立と発展に関する理解が進んでいると思われる。高松塚古墳とキトラ古墳の壁画の劣化の原因の解明と防止対策についても、損傷図面の作成やデジタル化、漆喰の取り外し（キトラ古墳）など、高度な作業が進められてきた。文化財の非破壊調査法（蛍光Ｘ線分析、反射分光分析）の研究がさらに推進された。また、貴重な絵巻について高細密デジタル画像の応用に関する調査研究と展示なども実施されたが、今後の積極的な展開が期待される分野だと思われる。文化的景観に関する研究も継続され研究集会の開催や報告書が作成され、四万十川流域に関するケース・スタディの現地調査が実施された。「生きたものとしての文化的景観」を考える上で貴重な示唆を与えるものとなろう。

無形文化遺産についても、音声・画像・映像資料のデジタル化が推進されるとともに、戦前に開発・実用化されたフィルモン音帯に関する共同研究など興味深い事業も実施された。「無形文化遺産研究報告」第５号も刊行された。日光の社寺の虫害除去などに見られるように、生物劣化対策の研究も継続実施され、貴重な成果が得られた。

さらに、アジアにおける古代都城遺跡に関する日本・中国・韓国との共同研究が実施されたことも意義深いと考える。

4　国際協力の推進に関する事項

平成 22 年度においても、西アジア５カ国を対象とする国際ワークショップの開催、タイおよびカンボジアの文化遺跡に使用されている煉瓦や土などの素材の劣化と保存に関する調査研究などが継続実施されたほか、敦煌壁画の保護に関する共同研究が中国・敦煌研究院との協力の下に進められた。壁画素材劣化のメカニズムの解明のための現地調査、研究会、人材養成などが実施されたが、科研費が利用されたことも多としたい。世界各国の文化財保護に関する法令の収集と和訳およびデータベース化も進められた。文化財の保存・修復に関する国際研究集会は、22 年度においては、災害や紛争からの復興に焦点を当てて実施された。復興という側面を文化遺産の切り口から取り上げたこと自体が新鮮であったとの評価を得たと報告されているが、今回の日本での大震災で被害を受けた文化財の保存・修復を考える際にも、本研究が有意義であったものと思われる。カンボジアのアンコール遺跡群については、現地 APSARA 機構との協力の下に、西トップ寺院の調査研究が継続実施されてきている。また、ユネスコアジア文化センターと協力してアジア各国の専門家のための集団研修や個人研修も継続して実施された。

アフガニスタンとイラクの文化遺産の保護に関する問題は引き続き国際的な関心事であると思われるが、22年度においてもアフガニスタンへのミッションの派遣、国際会議への出席、調査資料集の出版などが実施された。イラクについては、専門家の招へいと研修などが行われた。いずれも日本のユネスコへの信託基金を活用した有意義な国際貢献であると考える。あわせてトルコ、タジキスタンなどの文化遺産の調査研究も実施された。なお、文化財に関する国際資料室の整備のため、関係の資料・書籍の収集とデータベース化が進められたが、今後さらに充実されることを期待する。

5　調査研究成果の発信に関する事項

国の内外における文化財の保存・修復に関する貴重な調査研究の結果は、いずれも報告書の形で出版されたり、研究集会などでその成果が発表されたり、さらにはデータベース化されるなど広く関係者に公開され利用に供されてきている。また、国民的関心の高い高松塚古墳やキトラ古墳の壁画については、文化庁と協力して保存作業状況の一般公開やレプリカの展示などが実施されてきた。奈良文化財研究所の飛鳥資料館なども高松塚壁画館などと可能な連携を強めさらに国民に親しまれる施設として発展することを期待したい。

広報定期刊行物「年報」、「概要」、「ニュース」なども継続刊行され、「美術年鑑」、「美術研究」なども計画どおり順調に刊行されてきた。「オープンレクチャー」も継続されたが、学術的講演として価値の高い事業だと思われる。なお平城遷都 1300 年にあわせ平城宮跡資料館がリニューアルオープンし、特別展が開催され多数の入館者があったと報告されていることも多としたい。

研究所のホームページもデジタル・アーカイブとしての機能を充実してきているようである。

6　国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

平成 22 年度においても、地方公共団体などの要請に応じ、さまざまな事業を通じて、必要な協力や指導・助言が行われてきた。事例としては、平城京域発掘調査に関する助言、藤原宮跡や飛鳥・藤原地域における発掘調査への助言などをはじめ、全国各地の文化遺産の保存・修復について指導や助言が行われてきた。

有形の文化遺産だけでなく、無形文化財・無形民俗文化財の調査や保存等についても地方公共団体や関係団体に対して指導、助言および協力が行われた。また、全国の博物館・美術館の保存担当学芸員のための研修講座も実施され、高い評価を得た。

7　その他

前述のように国や地方公共団体・民間団体などからの要請を受け、あるいは委託を受けて、各種の事業が実施されてきたことは、国の研究機関としての活動の広がりを示すものであり、高く評価できると思われる。また、国の困難な財政状況を考えると、今後、外部からの委託事業の重要性はさらに高まると思われる。

また、民間の財団なども取り込んだ「文化遺産国際協力コンソーシアム」の役割は日本全体の国際協力を進める観点から重要であり、東京文化財研究所が引き続きその事務局機能を果たしていることを評価したい。同コンソーシアムは、22年度においても、研究会や講演会を実施したが、いずれも時宜を得た極めて有意義なものであったと考える。特に、大震災の起こった 3 月 11 日の講演会では、ヨーロッパの文化遺産保護の NGO（ヨーロッパ・ノストラ）副会長のジョン・セル氏が興味深い講演をされたが、大地震の後も冷静に講演を続けられたのが印象的であった。

なお、このたびの大震災に際し、被災にあった人びとが礼節を持って行動をしたことが世界から称賛されたが、これも日本人の精神文化の現われであったと言えるのではないか。故平山郁夫先生は常々「文化財を守ることは、人の心を守ることだ。」とおっしゃっておられた。この言葉が思い出される。また、アフガニスタン、バングラデシュ、カンボジア、など貧しい国々からも応援のメッセージとともに支援が寄せられていると報じられている。これも、戦後の日本が経済復興を成し遂げた後、官民挙げて多方面にわたる国際協力を続けてきたことが評価されたものと言えるのではなかろうか。文化財を守る国際協力もその一端を担っていると言えよう。

文化財を守る活動をとおして、日本のソフトパワーがさらに高められることを期待したい。

Ⅱ　第２期中期計画期間（平成18～22年度）についてのご意見

既に述べたように、各種の事業は順調に実施されていると考えられ、5 年間にわたる中期計画も予定通り達成されてきたと思われる。

Ⅶ 日誌

（法人全体及び六施設共通事項）

年	月	日	記事
22.	4.	16	第１回役員会（東京国立博物館）
22.	4.	21	独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会（研究所調査研究等部会）
22.	4.	26	独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会（博物館調査研究等部会）
22.	6.	3	独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会（総会）
22.	6.	11	第２回役員会（東京国立博物館）
22.	6.	24	平成２１年度定期監査（東京国立博物館）
22.	6.	25	監査法人の監査結果（平成２１年度）通知
22.	7.	6	文部科学省独立行政法人評価委員会文化分科会国立文化財機構部会（第６０回）
22.	7.	8	健康管理のための講習会（東京国立博物館）
22.	7.	9	第３回役員会（京都国立博物館）
22.	7.	16	独立行政法人国立文化財機構運営委員会（東京国立博物館）
22.	7.	20	平成２２年度新任職員研修会（個人情報保護及びハラスメントに関する講演も同時実施）（東京国立博物館）（～７月２２日）
22.	8.	25	文部科学省独立行政法人評価委員会総会（第４１回）
22.	9.	8	第１回研究・学芸系職員連絡協議会（東京国立博物館）
22.	9.	17	第１回６施設連絡協議会（東京国立博物館）
22.	9.	24	第４回役員会（奈良文化財研究所）
22.	12.	15	第２回６施設連絡協議会（東京国立博物館）
22.	12.	24	第５回役員会（東京国立博物館）
23.	1.	13	健康管理のための講習会（東京国立博物館）
23.	1.	21	第６回役員会（東京国立博物館）
23.	2.	8	第２回研究・学芸系職員連絡協議会（東京国立博物館）
23.	2.	9	独立行政法人国立文化財機構の第３期事業年度（平成２１事業年度）財務諸表の承認の通知
23.	2.	24	第３回６施設連絡協議会（東京国立博物館）
23.	3.	4	第７回役員会（東京国立博物館）

（東京国立博物館）

年	月	日	記　　事
22.	4.	1	東京･春･音楽祭 2010　佐藤俊介（ヴァイオリン）（法隆寺宝物館）
22.	4.	2	東京･春･音楽祭 2010　Vive！サクソフォーン･クヮルテット（本館）
22.	4.	4	瀬崎明日香（ヴァイオリン）（平成館）
22.	4.	6	東京･春･音楽祭 2010　佐藤俊介（ヴァイオリン）（法隆寺宝物館）
22.	4.	19	特別展「細川家の至宝」開会式及び特別内覧会
22.	4.	30	鈴木　寛　文部科学副大臣来館
22.	5.	3	天皇皇后両陛下　「平成２２年新指定国宝・重要文化財」行幸啓
22.	5.	4	海外日本古美術展「日本の美　5000 年」開会式（トプカプ宮殿博物館） （主催：文化庁、東京国立博物館、トルコ共和国文化観光省）
22.	5.	18	総合文化展無料観覧日（国際博物館の日）
22.	5.	20	天皇皇后両陛下　特別展「細川家の至宝」行幸啓 特別展「細川家の至宝」10 万人セレモニー
22.	5.	25	江田五月参議院議長来館
22.	6.	20	唐津健（チェロ）、シュレイファー弓子（ハープ）（平成館）
22.	6.	22	臨時休館日（電気設備保守点検）
22.	7.	4	杵屋五三吉（長唄三味線三昧）（平成館）
22.	7.	5	特別展「誕生！中国文明」開会式及び特別内覧会
22.	7.	11	納涼東博寄席（平成館）
22.	7.	14	天皇皇后両陛下　特別展「誕生！中国文明」行幸啓
22.	7.	27	台東区の伝統工芸職人展（平成館）
22.	8.	4	舛添要一参議院議員来館
22.	8.	4	夏休みこども音楽会による総合文化展無料観覧
22.	8.	8	ファミリーコンサート（平成館）
22.	8.	16	夏休み期間中の特別開館日
22.	9.	1	有馬朗人元文部科学大臣来館
22.	9.	20	総合文化展無料観覧日（敬老の日）
22.	9.	23	ジャー・パン・ファン（二胡）（平成館）
22.	9.	26	ワレーリー・イスリャイキン（テノール）渡辺淳（尺八）（平成館）
22.	10.	3	留学生の日
22.	10.	3	日本大学芸術学部デザイン学科ワークショップ「竹のドームをみんなで作る」 （柳瀬荘）
22.	10.	7	特別展「東大寺大仏」開会式及び特別内覧会
22.	10.	7	日本大学芸術学部美術学科絵画コース（絵画・版画）教職員作品展 （～１０月３１日　柳瀬荘）
22.	10.	17	日本大学芸術学部写真学科ワークショップ「光で絵を描く」（柳瀬荘）
22.	10.	18	中国浙江省青年友好代表団来館
22.	10.	20	石田芳弘衆議院議員来館
22.	10.	21	高円宮妃殿下来館　特別展「東大寺大仏―天平の至宝―」お成り
22.	10.	24	日本大学芸術学部美術学科ワークショップ「柳瀬荘Ｔシャツ工房」（柳瀬荘）

22. 10. 30　秋の庭園開放（～１２月１２日）
22. 11. 1　「東京国立博物館の記念日」特別展「東大寺大仏 - 天平の至宝 - 」内覧
22. 11. 4　日本大学芸術学部美術学科彫刻コース教職員作品展（～１１月２８日　柳瀬荘）
22. 11. 5　髙木義明文部科学大臣　特別展「東大寺大仏 - 天平の至宝 - 」視察
22. 11. 7　日本大学芸術学部美術学科ワークショップ「穴・Hole を空間に出現させる」（柳瀬荘）
22. 11. 8　特別展「東大寺大仏―天平の至宝―」による特別会館（及び１１月１５日）
22. 11. 8　特別展「東大寺大仏」10 万人セレモニー
22. 11. 9　綿貫民輔前衆議院議員来館
22. 11. 18　江田五月参議院議員来館
22. 11. 19　松崎哲久衆議院議員来館
22. 11. 20　馬淵澄夫国土交通大臣来館
22. 12. 2　天皇皇后両陛下　特別展「東大寺大仏」行幸啓
22. 12. 6　秋篠宮同妃両殿下　特別展「東大寺大仏」お成り
22. 12. 19　エフゲニー・ザラフィアンツ（ピアノ）中垣雅葉（琴）（平成館）
22. 12. 22　駐日オマーン・スルタン国大使来館
23. 1. 2　博物館に初もうで（～1 月 31 日）新春イベント「獅子舞」他（～1 月 3 日）
23. 1. 15　新春東博寄席
23. 1. 17　特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」開会式及び特別内覧会
23. 1. 21　有馬朗人元文部科学大臣来館
23. 1. 22　福島みずほ社民党党首来館
23. 1. 24　平成 22 年度職員接遇研修（～１月２８日）
23. 2. 1　遠山敦子元文部科学大臣来館
23. 2. 1　高橋はるみ北海道知事来館　本館１５室アイヌ関係展示視察
23. 2. 20　特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」10 万人セレモニー
23. 2. 21　平成 22 年度防災訓練
23. 3. 3　笹木竜三文部科学副大臣　特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」視察
23. 3. 5　荒井広幸参議院議員来館
23. 3. 11　東日本大震災　台東区震度 5 強　夕刻臨時休館（～3 月 28 日）
帰宅困難なお客様 30 名弱平成館ラウンジに宿泊
文化財に被害なし　　黒門・茶室の一部漆喰壁がはがれる
23. 3. 18　東京･春･音楽祭 2011「田崎悦子（ピアノ）」（震災のため中止）
23. 3. 18　東京･春･音楽祭 2011「加藤えりな（ヴァイオリン）」（震災のため中止）
23. 3. 19　東京･春･音楽祭 2011「松井利世子（ヴァイオリン）」（震災のため中止）
23. 3. 24　東京･春･音楽祭 2011「福田進一（ギター）」（震災のため中止）
23. 3. 27　東京･春･音楽祭 2011「中野振一郎（チェンバロ）」（震災のため中止）
23. 3. 29　部分開館（～４月末）　本館及び平成館 1 階は 10 時から 16 時まで開館
表慶館、法隆寺宝物館、資料館、黒田記念館は閉館
23. 3. 29　春の庭園開放（～４月１７日）
23. 3. 31　東京･春･音楽祭 2011「横坂 源（チェロ）」（震災のため中止）

（京都国立博物館）

年	月	日	記　　事
22.	4.	8	運営会議（以後原則として毎月第２、第４木曜日実施）
22.	4.	9	特別展覧会「没後４００年　長谷川等伯」開会式及び特別内覧会（会期４月１０日～５月９日）
22.	4.	13	衛生委員会（以後原則として偶数月第２火曜日実施）
22.	4.	15	鑑査会（以後原則として毎月第３木曜日実施）
22.	4.	19	賛助会員特別鑑賞会
22.	4.	25	特別展覧会「没後４００年　長谷川等伯」入館者１０万人目セレモニー
22.	4.	30	「京都・らくご博物館【春】～新緑寄席～」（ハイアットリージェンシー京都）
22.	5.	25	文化財保存修理所運営委員会
22.	6.	8	産業医による職員対象の衛生管理講習会
22.	7.	17	特別展観「没後２００年記念　上田秋成」（～８月２９日）
22.	8.	2	賛助会員特別鑑賞会
22.	8.	27	「京都・らくご博物館【夏】～納涼寄席～」（ハイアットリージェンシー京都）
22.	9.	3	保存修復技術を専攻する学生のための研修会
22.	10.	5	普通救命講習
22.	10.	8	特別展覧会「文化財保護法６０年記念事業　高僧と袈裟－ころもを伝え　こころを繋ぐ－」開会式及び特別内覧会（会期１０月９日～１１月２３日）
22.	10.	15	自転車をこいで脂肪を燃やして音楽にしよう！自転車発電エコライブ
22.	10.	22	「京都・らくご博物館【秋】～紅葉寄席～」（ハイアットリージェンシー京都）
22.	10.	23	留学生の日
22.	10.	25	賛助会員特別鑑賞会
22.	11.	1	文化庁長官来館
22.	11.	9	買取協議会
22.	12.	20	マナー講習会・クレーム講習会
23.	1.	7	特別展覧会「上野コレクション寄贈５０周年記念　筆墨精神－中国書画の世界－」開会式及び特別内覧会（会期１月８日～２月２０日）
23.	1.	23	座談会「知られざる園田湖城の篆刻芸術」
23.	1.	24	合同防火訓練
23.	1.	26	評議員会
23.	2.	14	賛助会員特別鑑賞会
23.	2.	24	買取協議会
23.	3.	19	音燈華　ジュスカ・グランペール　コンサート
23.	3.	25	特別展覧会「法然上人八百回忌　法然－生涯と美術－」開会式及び特別内覧会（会期３月２６日～５月８日）

（奈良国立博物館）

年	月	日	記　　事
22.	4.	2	特別展「大遣唐使展」
			開会式、特別招待日　（会期４月３日～６月２０日）
22.	4.	10	公開講座「仏教美術の東伝と遣唐使」
22.	4.	8	賛助会員特別鑑賞会
22.	4.	17	トークイベント「大遣唐使展の楽しみ方」
22.	4.	18	サンデートーク「古代の建物と屋根」
22.	4.	19	川端文部科学大臣視察
22.	4.	22	皇太子殿下行啓
22.	4.	23	ジュニア記者クラブ～高校生のための特別内覧会
22.	4.	27	春季仏像仏画供養法要
22.	5.	5	平常展無料観覧日（こどもの日）
22.	5.	8	公開講座「吉備大臣入唐絵巻～寄観無双の絵巻～」
22.	5.	11	第１回陳列品鑑査会
22.	5.	15	特別講演会「遣唐使の時代－倭から日本へ」
22.	5.	18	平常展無料観覧日（国際博物館の日）
22.	5.	23	サンデートーク「舎利の話」
22.	5.	29	公開講座「平城京と遣唐使」
22.	6.	5	国際学術シンポジウム「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」
22.	6.	6	トークイベント「大遣唐使展で仏像に会おう！」
22.	6.	19	公開講座「空海の舎利信仰～法門寺から東寺へ～」
22.	6.	20	サンデートーク「日本仏画史入門」
22.	7.	20	なら仏像館銘板除幕式
			特別展「仏像修理１００年」・「至宝の仏像」
			招待日（会期７月２１日～９月２６日）
22.	7.	25	サンデートーク「病と仏教－平安貴族の疾病観－」
22.	7.	28	賛助会員特別鑑賞会
22.	7.	31	公開講座「仏像修理１００年よもやま話－修理に関わって５０年－」
22.	8.	1	まほろば寄席（第１０回）
22.	8.	2	第１回評議員会
22.	8.	3	夏季仏像仏画供養法要
22.	8.	7	文化財保存修理所公開
22.	8.	22	サンデートーク「梵鐘銘と私」
22.	8.	24	夏季講座「仏像の修理と研究をめぐる諸問題」（８月２６日まで）
22.	9.	11	公開講座「解説　仏像修理１００年」
22.	9.	19	サンデートーク「法隆寺金堂、三組の四天王像とその謎」
22.	9.	20	平常展無料観覧日（敬老の日）
22.	9.	22	秋季仏像仏画供養法要
22.	10.	5	第２回陳列品鑑査会
22.	10.	17	サンデートーク「天馬 Part2－正倉院宝物に描かれた天馬－」

22. 10. 22　特別展「第６２回正倉院展」開会式、特別招待日
（会期１０月２３日から１１月１１日）
22. 10. 23　公開講座「獅子面の模造をめぐって」
22. 10. 24　正倉院学術シンポジウム 2010「正倉院宝物はどこで作られたのか？」
22. 10. 27　賛助会員特別鑑賞会
22. 10. 30　公開講座「正倉院の紙」
22. 11. 1　留学生の日
22. 11. 2　第３回陳列品鑑査会
22. 11. 3　正倉院展親子鑑賞会
22. 11. 6　公開講座「五絃琵琶と紫檀工芸」
22. 11. 9　高円宮妃殿下お成り
22. 11. 20　平常展無料観覧日（関西文化の日　１１月２１日まで）
22. 11. 21　サンデートーク「装飾文様の話」
22. 12. 7　特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」（～平成２３年１月１６日まで）
22. 12. 11　公開講座「若宮おん祭と大和猿楽－猿楽の座の年始め－」
22. 12. 14　第４回陳列品鑑査会
22. 12. 19　サンデートーク「春日曼荼羅と春日若宮の文殊信仰」
23. 1. 5　第５回陳列品鑑査会
23. 1. 10　金春穂高能を語る（実演を含む講演）
23. 1. 13　冬季仏像仏画供養法要
23. 1. 16　サンデートーク「阿育王塔の本生図」
23. 1. 26　文化財防火デー消防訓練
23. 1. 29　まほろば寄席（第１１回）
23. 2. 1　第６回陳列品鑑査会
23. 2. 3　平常展無料観覧日（節分の日）
23. 2. 5　特別陳列「お水取り」（～３月１４日まで）
23. 2. 6　お水取り「講話」と「粥」の会
23. 2. 9　文化財保存修理所公開
23. 2. 10　第１回買取等協議会（彫刻・書跡・工芸・考古）
23. 2. 12　公開講座「修二会－不退の行法－」
23. 2. 13　修復完成記念特別講演会「ウクライナ クリミア半島出土漢代漆器の保存修復」
23. 2. 17　第１回買取等協議会（絵画）、買取等評価会
23. 2. 20　サンデートーク「蓬莱の玉の枝－作り物閑話」
23. 3. 18　第２回評議員会
23. 3. 21　サンデートーク「奈良の仏像・木の仏像」

（九州国立博物館）

年	月	日	記　　事
22.	4.	4	龍馬ウオークｉｎ太宰府（シンポジウム）龍馬イズム!―龍馬ってどんな人?
22.	4.	5	特別展「パリに咲いた古伊万里の華」開会式及び内覧会
22.	4.	8	上海万博パネル展（～4 月 25 日）
22.	4.	10	川端文部科学大臣視察
22.	4.	13	トピック展示「国宝　琉球国王尚家関係資料　修理完成記念展示」（～5 月 23 日）
22.	4.	13	トピック展示「白磁を飾る青－朝鮮時代の青花」（3 月 21 日）
22.	4.	13	福岡新聞学校プロジェクト（～4 月 25 日）
22.	4.	13	「古伊万里展」関連イベント有田焼４００年祭プレイベント「匠の蔵」特別展（～4 月 25 日）
22.	4.	17	第 71 回 きゅーはくミュージアムコンサート～ヴェルサイユのしらべ～
22.	4.	17	「古伊万里展」関連イベントコンサート～ヴェルサイユのしらべ　＋α～（4 月 18 日）
22.	4.	18	シンポジウム　文化遺産をもっと知ろう　訪問しよう
22.	4.	24	「古伊万里展」関連イベント福岡女子短期大学音楽科演奏「ヨーロッパ宮廷の香り」（～4 月 25 日）
22.	4.	24	「古伊万里展」関連イベント映画「マリー・アントワネット」の上映会（4 月 25 日）
22.	4.	27	ボランティア企画イベント　昭和の日「懐かしいＳＬ機関車と昔のカメラ展」（～5 月 5 日）
22.	4.	28	特別展「パリに咲いた古伊万里の華」入場者 2 万人セレモニー
22.	4.	28	トピック展示「南蛮　津久見市所蔵の屏風と漆器」（～6 月 6 日）
22.	4.	29	弦楽合奏団ムジーク・ルンデ　春のコンサート
22.	5.	1	博多の匠工芸展（～5 月 9 日）
22.	5.	1	「古伊万里展」関連イベント親子で楽しむワークショップ「えをかこう、いろをぬろう」挑戦・古伊万里の技！
22.	5.	2	博多の匠工芸展ワークショップ（～5 月 5 日）
22.	5.	2	「古伊万里展」関連イベント親子で楽しむワークショップ「金ピカにかざっちゃえ」大変身！古伊万里ビフォーアフター
22.	5.	8	「古伊万里展」関連イベント 14 代酒井田柿右衛門氏講演会
22.	5.	9	「古伊万里展」関連イベントヨーロッパの宮廷音楽～「パリに咲いた古伊万里の華」開催記念演奏会～
22.	5.	16	第 15 回 九博朝日寄席「藤兵衛、喜多八　二人会」
22.	5.	18	文化交流展無料観覧日（国際博物館の日）
22.	5.	18	「生活の中のデザイン」KCDA 会員選抜展（～5 月 23 日）
22.	5.	21	蔚山（ウルサン）男性合唱団　日本招待演奏会
22.	5.	22	「古伊万里展」関連イベント大橋康二氏講演会「海を渡った古伊万里」
22.	5.	22	「古伊万里展」関連イベント現代に受け継がれる伊万里焼（～5 月 23 日）
22.	5.	23	第 72 回 きゅーはくミュージアムコンサート～パリの街角～
22.	5.	25	特別展「パリに咲いた古伊万里の華」入場者 5 万人セレモニー
22.	5.	30	「古伊万里展」関連イベント松嶋啓介　太宰府凱旋記念トークショー
22.	6.	1	アボリジニアート展（～6 月 6 日）

22. 6. 1 アジア代表日本 2010 田嶋幸三氏×日比野克彦氏トークショー
22. 6. 1 アジア代表日本 2010ASIAN MATCH FLAG PROJECT（マッチフラッグの上空展示）（～7 月 11 日）
22. 6. 1 アジア代表日本 2010 日本サッカーミュージアム所蔵ペナント展（～6 月 18 日）
22. 6. 5 アボリジニアート特別講演会講師：内田真弓（～6 月 6 日）
22. 6. 8 特別展「パリに咲いた古伊万里の華」入場者 7 万人セレモニー
22. 6. 8 大竹美喜書道展『開』（～6 月 13 日）
22. 6. 11 トピック展示「湖の国の名宝-最澄がつないだ近江と太宰府ー」（～9 月 5 日）
22. 6. 12 トピック展示「湖の国の名宝展」開幕記念セレモニー
22. 6. 12 第 73 回 きゅーはくミュージアムコンサート～古楽器による太陽王の時代の音楽～
22. 6. 13 大竹美喜書道展『開』書のデモンストレーション
22. 6. 20 トピック展示「湖の国の名宝展」関連イベント写真展「水と仏の近江」（～7 月 3 日）
22. 6. 20 トピック展示「湖の国の名宝展」関連イベント「浅井三姉妹『江』のふるさと」滋賀県観光パネル展（～7 月 4 日）
22. 7. 4 トピック展示「湖の国の名宝展」関連イベント講演会「最澄がつないだ近江と太宰府」
22. 7. 6 ボランティア企画イベント　七夕（～7 月 11 日）
22. 7. 10 トピック展示「湖の国の名宝展」関連イベント講演会「近江の仏教美術」
22. 7. 11 太宰府市民吹奏楽団　第 6 回まほろばコンサート
22. 7. 12 特別展「馬　アジアを駆けた二千年」開会式及び内覧会
22. 7. 13 筑豊の近代化遺産展（～7 月 25 日）
22. 7. 13 「馬 アジアを駆けた二千年」関連イベントＣＬＵＢ ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休み常設展示　けいばの広場（～9 月 5 日）
22. 7. 17 「馬 アジアを駆けた二千年」関連イベントＣＬＵＢ ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休みワークショップ　馬のスケッチ大会（～8 月 8 日）
22. 7. 17 「馬 アジアを駆けた二千年」関連イベントＣＬＵＢ ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休みポニーとのふれあいイベント（～9 月 5 日）
22. 7. 17 「馬 アジアを駆けた二千年」関連イベントＣＬＵＢ ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休み１着当てゲームにチャレンジ！」（～8 月29 日）
22. 7. 18 「馬 アジアを駆けた二千年」関連イベントＣＬＵＢ ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休みシンポジウム「藤ノ木古墳の馬具」
22. 7. 19 「馬 アジアを駆けた二千年」関連イベントＣＬＵＢ ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休みミュージアムトーク　ＡＫＢ４８ 篠田麻里子が九州国立博物館にやってくる！
22. 7. 24 第 74 回 きゅーはくミュージアムコンサート～大草原に響く馬頭琴の調べ～
22. 7. 25 「馬 アジアを駆けた二千年」関連イベントＣＬＵＢ ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休みミュージアム「馬」セミナー！「日本人と馬」
22. 7. 27 ～環（わ）～いのちの旅博物館・九州国立博物館（北九州市立自然史・歴史博物館連携・交流事業）（～8 月 1 日）
22. 7. 29 「馬 アジアを駆けた二千年」関連イベントＣＬＵＢ ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休みワークショップ　馬のくつ（蹄鉄）でコースターを作ってみよう（～8 月 26 日）
22. 7. 31 「馬 アジアを駆けた二千年」関連イベントＣＬＵＢ ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休み講演会

22. 8. 1 「馬 アジアを駆けた二千年」関連イベントＣＬＵＢ ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休みミュージアム「馬」セミナー！「馬の進化と日本在来馬のルーツ」
22. 8. 3 ハーリー船をつくってみよう（～8 月 4 日）
22. 8. 4 特別展「馬　アジアを駆けた二千年」入場者 1 万人セレモニー
22. 8. 6 ボランティアワークショップ「木目込みまりづくり」
22. 8. 7 九博 こども向け夏休みイベント「いこうよ！あじっぱ夏祭り２０１０」（～8 月 8 日）
22. 8. 10 バードライフ・アジア主催巡回写真展「藤原幸一・観光写真セレクション」地球の声がきこえる（～8 月 27 日）
22. 8. 11 高円宮妃殿下お成り
22. 8. 17 ボランティアワークショップ「ハニワの色付け体験」
22. 8. 18 特別展「馬　アジアを駆けた二千年」入場者 2 万人セレモニー
22. 8. 21 エレキット夏休み工作教室 in 太宰府 2010
22. 8. 21 トピック展示「湖の国の名宝展」関連イベント館長と滋賀県知事のミュージアムトーク
22. 8. 21 平成 22 年度文化庁美術館・博物館活動基盤整備支援事業公開シンポジウム「市民と共に ミュージアム IPM」（～8 月 22 日）
22. 8. 25 飾り山神事「御神入れ（ごしんいれ）」
22. 8. 27 特別展「馬　アジアを駆けた二千年」入場者 3 万人セレモニー
22. 8. 28 吉野ヶ里 Days　in　九博（～8 月 29 日）
22. 8. 28 第 75 回 きゅーはくミュージアムコンサート～音で旅する世界旅行～
22. 9. 4 京築神楽　九州国立博物館公演
22. 9. 5 つくし御当地検定～九州国立博物館と４市１町の魅力再発見～
22. 9. 8 独立行政法人国立青少年教育振興機構理事長来館
22. 9. 9 第 1982 回西日本宝くじ抽せん会
22. 9. 12 第 16 回 九博朝日寄席「鯉昇の落語、三三の落語をきく九月」
22. 9. 14 トピック展示「茶の湯を楽しむ III　名品でたどる室町から桃山の茶」（～11 月 7 日）
22. 9. 15 トピック展示「館蔵仏教美術名品展」（～10 月 24 日）
22. 9. 18 第 76 回 きゅーはくミュージアムコンサート～情熱の秋～
22. 9. 19 太宰府天満宮・九州国立博物館「吹奏楽の祭典」
22. 9. 20 ソープカービング展示・体験
22. 9. 20 文化交流展無料観覧日（敬老の日）
22. 9. 22 ソープカービング展示・体験（～9 月 24 日）
22. 9. 25 第 5 回 太宰府古都の光
22. 9. 25 太宰府古都の光関連イベント浪漫飛行～In The Sky～
22. 9. 28 トピック展示「九州国立博物館の開館５周年のあゆみ」（～12 月 24 日）
22. 10. 4 特別展「誕生！中国文明」開会式及び内覧会
22. 10. 5 「誕生！中国文明」企画イベント 『王朝・技・美の祭典』記念講演会「三国志をめぐる謎」　小説家・三好徹
22. 10. 5 開館 5 周年記念イベント「パネル展 九博のあゆみ」（～10 月 24 日）
22. 10. 9 「誕生！中国文明」企画イベント 『王朝・技・美の祭典』特別公演　胡弓演奏家・趙国良「中国王朝への旅 ―胡弓の調べにのせて―」

22. 10. 9 正倉院展の楽しみ方～まほろばの集いと音楽の調べ in 福岡～
22. 10. 9 開館5周年協賛 出前温泉「足湯」～お！館外にもあった 至福の時～（～10月11日）
22. 10. 9 開館5周年記念イベント「九博大茶会」（～10月31日）表千家同門会／大日本茶道学会／武者小路千家／皇風煎茶礼式／光風流／表千家清雅会／藤蔭流／宗偏流／日本礼道小笠原流／表千家不白流／裏千家博多支部／遠州流／裏千家福岡支部／南坊流
22. 10. 11 第77回 きゅーはくミュージアムコンサート開館5周年記念 博多の伝統芸能～博多芸妓の世界～
22. 10. 15 開館5周年記念イベント「九州人形浄瑠璃フェスティバル」（～10月17日）
22. 10. 15 第5回九州地域ブランドフォーラム九州郷土品祭り（～10月24日）
22. 10. 16 開館5周年記念式典
22. 10. 16 特別展「誕生！中国文明」入場者1万人セレモニー
22. 10. 16 文化交流展無料観覧日
22. 10. 24 「誕生！中国文明」企画イベント『王朝・技・美の祭典』記念講演会「王朝、技、美の誕生 ―中国河南省が生み出した芸術と文化―」
22. 10. 27 トピック展示「能面と能装束」（～12月5日）
22. 10. 28 開館5周年記念ボランティア企画イベント懐かしの蒸気機関車と昔のカメラ展（九博ボランティアフェスタ）（～10月31日）
22. 10. 30 九州歴史資料館開館記念特別展「大宰府―その栄華と軌跡―」開催記念講演会「展望・大宰府研究 ―蔵司跡の調査から―」
22. 10. 30 「誕生！中国文明」企画イベント『王朝・技・美の祭典』中国雑技ミニ公演 ドリームサーカス
22. 10. 31 開館5周年記念ボランティア企画イベント「九博ボランティアフェスタ」
22. 11. 2 特別展「誕生！中国文明」入場者2万人セレモニー
22. 11. 2 「誕生！中国文明」関連イベント日立100年展（日立創業100年記念「街と人と日立」）（～11月7日）
22. 11. 3 文化交流展無料観覧日（留学生の日）
22. 11. 3 映画「Tchindon ちんどん」上映会
22. 11. 3 入館者800万人達成記念セレモニー
22. 11. 3 第78回 きゅーはくミュージアムコンサート懐かしき”ちんどん屋の世界”
22. 11. 6 韓国舞踊の披露
22. 11. 6 「誕生！中国文明」企画イベント『王朝・技・美の祭典』ミュージアムコンサート「中国伝統音楽からクラシックまで」
22. 11. 7 「いいな、いい歯。」週間普及啓発事業
22. 11. 7 「誕生！中国文明」企画イベント『王朝・技・美の祭典』講演会「中国古代王朝の興亡」 小説家・塚本青史
22. 11. 9 第32回読売学生書展（展示）（～11月14日）
22. 11. 10 トピック展示「螺鈿 美しき貝と漆の芸術」（～1月16日）
22. 11. 11 特別展「誕生！中国文明」入場者3万人セレモニー
22. 11. 13 彬子女王殿下お成り
22. 11. 13 アサヒ緑健スポーツメセナ 第8回ふれあい健康ウォーク
22. 11. 14 第32回読売学生書展（書道パフォーマンス）

22. 11. 14　第 32 回読売学生書展（表彰式）
22. 11. 14　「誕生！中国文明」企画イベント 『王朝・技・美の祭典』記念講演会「文字の発生と歩み」　書家・新井光風
22. 11. 16　市民建築文化展・九州（～11 月 21 日）
22. 11. 18　文化庁 第 8 回国際文化フォーラム福岡セッション「文化観光の可能性」
22. 11. 19　特別展「誕生！中国文明」入場者 4 万人セレモニー
22. 11. 21　文化交流展無料観覧日（家族の日）
22. 11. 21　太宰府茶道文化連盟結成記念　第 1 回太宰府市民茶会
22. 11. 21　「誕生！中国文明」展関連イベント　聖福寺「栄西禅師八百年遠諱大法要」に向けて写経・禅画の体験教室
22. 11. 21　「誕生！中国文明」展関連イベント　聖福寺「栄西禅師八百年遠諱大法要」に向けて聖福寺・献茶口切りの儀
22. 11. 21　「誕生！中国文明」展関連イベント　聖福寺「栄西禅師八百年遠諱大法要」に向けて八女茶煎茶会／立礼
22. 11. 23　みかわち焼展（展示・販売）（～11 月 28 日）
22. 11. 23　みかわち焼展（透かし彫り・絵付け無料体験）（～11 月 28 日）
22. 11. 30　西日本能面研究会第 16 回新作能面展（～12 月 5 日）
22. 12. 3　太宰府市小学校音楽会
22. 12. 5　キャンパスフェスタ’10
22. 12. 7　鞠智城ブース展示（～12 月 12 日）
22. 12. 12　第 79 回 きゅーはくミュージアムコンサートゴスペルコンサート＠ミュージアム
22. 12. 18　国際シンポジウム「契丹国（遼王朝）の美術と文化」
22. 12. 19　萩尾望都の世界―文学とアート、そして共生するジャンル
22. 12. 28　特別展「没後 120 年ゴッホ展」開会式及び内覧会
23. 1. 1　トピック展示「邪馬台国　九州と近畿」（～2 月 20 日）
23. 1. 1　「ゴッホ展」関連イベント福岡在住の日展作家による作品展「情熱」（1 月 7 日）
23. 1. 1　「ゴッホ展」関連イベント自画像コンクール「見てみて！○○しているぼく・わたし」入選作品展示（1 月 16 日）
23. 1. 1　「ゴッホ展」関連イベント美の種ひまわりプロジェクト（～2 月 13 日）
23. 1. 3　ボランティア企画「九博のお正月」
23. 1. 8　「ゴッホ展」関連イベント自画像コンクール「見てみて！○○しているぼく・わたし」表彰式
23. 1. 10　「ゴッホ展」関連イベント映画上映会「There is no blue without yellow and orange ゴッホの足跡をたどるヨーロッパの旅と日本の印象」
23. 1. 11　特別展「没後 120 年　ゴッホ展」入場者 5 万人セレモニー
23. 1. 15　「ゴッホ展」関連イベント講演会　＜アルルの寝室＞形見として描かれたレプリカ―ファン・ゴッホと家族　遺族とファン・ゴッホ―
23. 1. 16　「ゴッホ展」関連イベント解説会「ゴッホとゴーギャン」
23. 1. 18　ひなの国九州フェスタ 2011（～1 月 30 日）
23. 1. 19　トピック展示「田中丸コレクションの肥前磁器」（3 月 27 日）
23. 1. 20　特別展「没後 120 年　ゴッホ展」入場者 10 万人セレモニー

23. 1. 21 トピック展示「日本の建築をめぐって」(～4 月 3 日)
23. 1. 23 第 17 回 九博朝日寄席“新春” 菊之丞 菊六 兄弟会
23. 1. 28 東長寺五重塔展 (～2 月 6 日)
23. 1. 29 第 80 回 きゅーはくミュージアムコンサート Afternoon Break with ADMAN
23. 1. 29 第 1 回 親子で茶道体験
23. 1. 31 特別展「没後 120 年ゴッホ展」で障がい者等特別観覧
23. 2. 1 特別展「没後 120 年ゴッホ展」入場者 20 万人セレモニー
23. 2. 9 特別展「没後 120 年ゴッホ展」入場者 30 万人セレモニー
23. 2. 15 筑紫地区小学校児童画展 (九博子どもフェスタ同時開催) (～2 月 20 日)
23. 2. 20 九博子どもフェスタ「博物館って本当に楽しいよ！」
23. 2. 20 第 2 回 親子で茶道体験
23. 2. 20 第 81 回 きゅーはくミュージアムコンサートクラウン楽団『あっとらんだむ』
23. 2. 22 第 5 回福岡県景観大会「景観文化展作品等展示」(～2 月 26 日)
23. 2. 22 平成 22 年度筑紫地区文化財写真展「ちくし再発見～文化財の匠と技～」展 (～3 月 6 日)
23. 2. 26 第 5 回福岡県景観大会「表彰式」「まちづくり団体活動発表会」
23. 3. 8 博多織プロモーション計画 3 展示会「絹鳴」・ワークショップ「博多織ブックマーク作り」(～3 月 13 日)
23. 3. 13 博多織プロモーション計画 3 講演会「献上博多織の心」
23. 3. 14 特別展「黄檗－OBAKU 京都宇治・萬福寺の名宝と禅の新風」開会式及び内覧会
23. 3. 15 「黄檗―OBAKU」関連イベント巡照朝課 (じゅんしょうちょうか) (～3 月 31 日)
23. 3. 19 うたで結ぶ 太宰府～鶴岡コンサート (関雅子)
23. 3. 20 「九博活弁シアター」明治～昭和を飾った大衆娯楽史
23. 3. 21 「黄檗―OBAKU」関連イベント獅子舞
23. 3. 21 第 82 回 きゅーはくミュージアムコンサート～春うらら～
23. 3. 21 第 3 回 親子で茶道体験
23. 3. 26 「黄檗―OBAKU」関連イベント光風流茶席
23. 3. 26 第 15 回 九博デー「筑紫ブランド座談会 私たちの地場産業は「歴史」だった!?」
23. 3. 26 九博を愛する会 米つくり隊「唐臼式もちつき」
23. 3. 26 日韓交流茶会 (～3 月 27 日)
23. 3. 27 「黄檗―OBAKU」関連イベント厄よけストラップ手づくり教室
23. 3. 27 「黄檗―OBAKU」関連イベント講座「肥前鹿島藩の黄檗僧達」 講師：井上敏幸

（東京文化財研究所）

年	月	日	記　　事
22.	4.	14	在外日本古美術品保存修復協力事業運営委員会（第1回）
22.	4.	15	保存修復科学センター研究会文化財の保存環境の研究「博物館の環境―環境モニタリングの結果から―」
22.	4.	21	独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会研究所調査研究等部会
22.	4.	22	中国上海行政学院教育長ほか7名　施設見学
22.	4.	28	企画情報部研究会「「後期印象派・考」について」
22.	5.	10	参議院行政監視委員会視察
22.	5.	11	特集陳列　海外の日本美術品の修復（東京国立博物館）（～ 5月23日）
22.	5.	19	企画情報部研究会「「黒田清輝と西洋文学」補遺―ド・ラマルティヌ「湖」と《湖畔》をめぐって」
22.	5.	24	フランス国立ギメ東洋美術館長 所長表敬訪問
22.	5.	24	調印式：フランス国立ギメ東洋美術館長
22.	5.	24	特別講演「ギメ東洋美術館の歴史」
22.	5.	25	文化遺産国際協力コンソーシアム国際シンポジウム「文化遺産保護は平和の礎をつくる」（国連大学ウ・タント国際会議場）
22.	6.	3	独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会総会（東京国立博物館）
22.	6.	11	在外日本古美術品保存修復協力事業運営委員会（第2回）
22.	6.	21	保存担当学芸員フォローアップ研修
22.	6.	21	第4回伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会「膠（Ⅰ）」
22.	6.	23	企画情報部研究会「神護寺薬師如来立像にかかわる諸問題」
22.	6.	30	拠点交流事業モンゴル：アマルバヤスガラント寺院保存管理計画ワークショップ（～ 7月1日）
22.	7.	6	文部科学省独立行政法人評価委員会国立文化財機構部会（東京国立博物館）
22.	7.	6	総合研究会「修復材料に関する近年の動向」
22.	7.	8	第24回国際文化財保存修復研究会「覆屋保存を考える」
22.	7.	12	博物館・美術館等保存担当学芸員研修（～ 7月23日）
22.	7.	17	共催展「近代日本洋画の巨匠　黒田清輝展」（岩手県立美術館）（～ 8月29日）
22.	7.	21	独立行政法人国立文化財機構新任職員36名　施設見学（～ 7月22日）
22.	7.	26	文化女子大学服飾文化コース服飾史専攻学部生ほか10名　施設見学
22.	7.	28	企画情報部研究会「鈴木其一の草花図について―ポートランド美術館所蔵・鈴木其一筆四季草花図小襖を中心に」「千住と江戸琳派」
22.	7.	28	拠点交流事業インド：インド人保存修復専門家の招へい、研修（～ 8月5日）
22.	8.	2	アフガニスタン人考古学専門家の人材育成（～12月17日）
22.	8.	5	パキスタン国立美術館長 所長表敬訪問
22.	8.	5	香港特別行政区政府・立法議会 内政委員ほか15名　所長表敬訪問、施設見学
22.	8.	23	拠点交流事業モンゴル：アマルバヤスガラント寺院保存管理計画ワークショップおよび建造物保存修復調査研修（～ 8月27日）
22.	8.	30	国際研修「紙の保存と修復」2010（～ 9月17日）
22.	9.	6	小田急エンジニアリングほか9名　施設見学

22. 9. 14 大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト招聘研修（～10 月 7 日）
22. 9. 17 台東区立御徒町台東中学校生徒 5 名　施設見学
22. 9. 22 イラク人保存修復専門家の人材育成事業（～12 月 9 日）
22. 9. 29 企画情報部研究会「「是害房絵」成立の周辺」
22. 10. 5 総合研究会「高松塚古墳壁画の材料調査」
22. 10. 5 在外日本古美術品保存修復協力事業におけるベルリンの紙の修復に関するワークショップ（ベルリン国立アジア美術館）（～10 月 13 日）
22. 10. 15 第 44 回オープンレクチャー「人とモノの力学」（～10 月 16 日）
22. 10. 19 文化財の保存と活用に関する研究会「ガス燻蒸剤の現状と今後」（九州国立博物館）
22. 10. 21 ワークショップ「中央アジア出土壁画の保存修復 2010」（タジキスタン国立古代博物館）（～10 月 27 日）
22. 10. 28 文化庁主催 文化財（美術工芸品）修理技術者講習会受講者ほか 30 名　施設見学
22. 10. 30 台東区立上野中学校学芸発表会における研究所のパネル展示（上野中学校）
22. 11. 2 総合研究会「東アジア近代美術史への一視点」
22. 11. 2 Henniges 博士講演会「Paper conservation science at BOKU in Vienna, Austria」
22. 11. 3 黒田記念館特別公開（～11 月 7 日）
22. 11. 6 臼杵磨崖仏保存環境調査報告会（臼杵市中央公民館）
22. 11. 14 在外日本古美術品保存修復協力事業におけるケルンの漆工品の修復に関するワークショップ（ケルン東洋美術館）（～11 月 25 日）
22. 11. 18 第 5 回無形民俗文化財研究協議会「無形の民俗の保護における博物館・資料館の役割」
22. 11. 18 文化遺産国際協力コンソーシアム第 7 回研究会「アンコール遺跡に対する国際協力と情報管理－情報資源共有化の課題と展望」（同志社大学）
22. 11. 24 企画情報部研究会「岩手・光林寺所蔵　木造聖徳太子立像をめぐって」「作品紹介　京都・神光院地蔵菩薩立像」
22. 11. 29 沖縄県立芸術大学美術工芸学部芸術学専攻学生ほか 6 名　施設見学
22. 12. 6 金沢美術工芸大学日本画専攻学生ほか 5 名　施設見学
22. 12. 7 総合研究会「覆屋の歴史とその効果について」
22. 12. 9 イラク人保存修復専門家研修の成果報告会
22. 12. 12 第 5 回無形文化遺産部公開学術講座「和泉流狂言の伝承―金沢と名古屋―」（石川県立能楽堂）
22. 12. 13 アフガニスタン人考古学専門家の研修成果報告会
22. 12. 13 第 15 回資料保存地域研修―総合的有害生物管理法 Integrated Pest Management―（高知県立歴史民俗資料館）
22. 12. 17 企画情報部研究会「平安初期の神仏習合彫刻史試論　京都・神光院薬師如来立像をめぐって」「“北宋風作善”の受容と印仏・摺仏の像内納入」
23. 1. 11 総合研究会「無形文化遺産保護条約と日本」
23. 1. 13 キルギス共和国科学アカデミー歴史・文化遺産研究所研究員　所長表敬訪問
23. 1. 14 文化遺産国際協力センター研究会「中央アジア・キルギス共和国チュー河流域の遺跡について」
23. 1. 14 第 24 回近代の文化遺産の保存と修復に関する研究会「音声･映像記録メディアの保存と修復について」

23. 1. 17 名古屋市博物館学芸員ほか4名 施設見学
23. 1. 17 イタリア ラクイラ文化遺産復興政府特命副総監 所長表敬訪問
23. 1. 19 第34回文化財の保存および修復に関する国際研究集会「「復興」と文化遺産」（東京国立博物館）（～ 1月21日）
23. 1. 24 文化遺産国際協力コンソーシアム第8回研究会「文化遺産保護の国際動向」
23. 1. 24 総合消防訓練
23. 1. 25 インドネシア西スマトラ州立図書館職員ほか2名 所長表敬訪問
23. 1. 27 日光の歴史的建造物における昆虫トラップ調査結果等報告会（日光社寺文化財保存会）
23. 1. 29 徳川美術館・東京文化財研究所 近世風俗画共同研究調査報告会「歌舞伎図巻」「本多平八郎姿絵屏風」を中心に
23. 2. 1 総合研究会「秋元洒汀と明治の日本画・外伝―文化財アーカイブの見地から」
23. 2. 1 特集陳列「黒田清輝と京都」（東京国立博物館）（～ 3月13日）
23. 2. 2 海外の文化財保存修復専門家養成を目的とする国際研修等の実施に関する研究会（～ 2月3日）
23. 2. 7 インドネシア西スマトラ州文化観光局長ほか5名 所長表敬訪問
23. 2. 15 出土粘土板の保存修復処置に関する研究会
23. 2. 25 保存修復科学センター研究会「文化財施設の環境解析と博物館の省エネ化」
23. 2. 27 『美術研究』400号、『美術史論壇』30号記念、日韓共同シンポジウム 人とモノの「力学」－美術史における「評価」
23. 3. 3 アジア文化遺産国際会議「西アジアの文化遺産―その保護の現状と課題―」（～ 3月5日）
23. 3. 7 ベトナム社会科学院考古学院副院長ほか3名 所長表敬訪問、施設見学
23. 3. 8 「博物館資料保存論」対策講座（～ 3月10日）
23. 3. 11 文化遺産国際協力コンソーシアム講演会「欧州における遺産：非政府的視点から」
23. 3. 12 『美術研究』400号、『美術史論壇』30号記念、日韓共同シンポジウム 人とモノの「力学」―美術史における「評価」（韓国）

（奈良文化財研究所）

年	月	日	記　　事
22.	4.	16	春期特別展「キトラ古墳壁画四神」（飛鳥資料館）（～6 月 13 日）
22.	4.	17	現地説明会「平城第 466 次（平城宮東方官衙地区）発掘調査」
22.	5.	15	キトラ古墳壁画特別公開（飛鳥資料館）（～6 月 13 日）
22.	5.	15	特別講演会（東京会場）「平城宮跡のむかしと今」「大極殿復原」「木簡が語る平城宮の時代」「講演者にきく」（江戸東京博物館）
22.	5.	30	春期特別展示「キトラ古墳壁画四神」特別公開記念講演・討論会「－キトラ古墳壁画を考える－」「－キトラ古墳のこの一年－」「キトラ古墳～四神ってなに？～」（明日香村立中央公民館ホール）
22.	6.	12	公開講演会（第 106 回）「平城遷瓦－都がうつる。瓦もうつる。－」「古代における日本と新羅の交流」（平城宮跡資料館講堂）
22.	6.	14	埋蔵文化財担当者専門研修「建築遺構調査課程」（～6 月 18 日）
22.	7.	3	現地説明会「飛鳥藤原第 163 次（藤原宮朝堂院）発掘調査」
22.	7.	10	夏期企画展「平城宮跡　今･昔－岡田庄三写真展－」（平城宮跡資料館）（～8 月 31 日）
22.	7.	16	夏期企画展「小さな石器の大きな物語」（飛鳥資料館）（～9 月 5 日）
22.	7.	17	現地説明会「平城第 469 次（平城宮跡東院地区西北部）発掘調査」
22.	8.	15	無料観覧日（飛鳥資料館）
22.	9.	1	埋蔵文化財担当者専門研修「古代・中近世瓦調査課程」（～9 月 7 日）
22.	9.	25	特別講演会（東京会場）「くれないはうつろうものぞ」「銅鐸－花器として生きる－」「古代人の肉食の忌避という虚構」「日本庭園のはじまり」「古代遷都の真実－飛鳥宮・藤原宮・平城宮の謎を解き明かす－」「古代史研究と奈良文化財研究所」（有楽町朝日ホール）
22.	9.	25	秋期特別展　平城宮跡発掘調査 50 周年記念「天平びとの声をきく－地下の正倉院･平城宮木簡のすべて」（～11 月 7 日）（平城宮跡資料館）
22.	9.	27	埋蔵文化財担当者専門研修「三次元計測課程」（～10 月 1 日）
22.	10.	3	秋期特別展ギャラリートーク（平城宮跡資料館）（10 月 17 日、10 月 31 日）
22.	10.	6	埋蔵文化財担当者専門研修「保存科学Ⅰ（無機質遺物）課程」（～10 月 15 日）
22.	10.	9	秋期特別展示記念講演会「平城宮発掘史と木簡」「木簡の楽しみ方－在籍二年の目線から－」「木簡の楽しみ方－在籍二十年の目線から－」「平城宮木簡最新情報」（平城宮跡資料館講堂）
22.	10.	16	秋期特別展「木簡黎明－飛鳥に集う　いにしえの文字たち」（飛鳥資料館）（～11 月 28 日）
22.	10.	17	秋期特別展示記念講演会「７世紀木簡のおもしろさ」（飛鳥資料館講堂）
22.	10.	18	埋蔵文化財担当者専門研修「保存科学Ⅱ（有機質遺物）課程」（～10 月 26 日）
22.	10.	23	秋期特別展ギャラリートーク（飛鳥資料館講堂）（11 月 6 日、11 月 20 日）
22.	11.	3	無料観覧日（飛鳥資料館）
22.	11.	13	公開講演会（第 107 回）「玄奘三蔵の見たバーミヤーン」「西大寺食堂院跡出土木簡について」（平城宮跡資料館講堂）
22.	11.	15	消防訓練
22.	11.	16	埋蔵文化財担当者専門研修「遺跡地図情報課程」（～11 月 19 日）

22. 11. 26　冬期企画展「測る、知る、伝える－平城京と文化財－」（平城宮跡資料館）（～1 月 17 日）
22. 11. 29　埋蔵文化財担当者専門研修「自然科学的年代決定法課程」（～12 月 3 日）
22. 12. 5　現地見学会「飛鳥藤原第 165 次（水落遺跡）発掘調査」
22. 12. 9　埋蔵文化財担当者専門研修「報告書作成課程」（～12 月 17 日）
22. 12. 17　現地見学会「平城第 477 次（春日東塔院）発掘調査」（～12 月 21 日）
22. 12. 19　冬期企画展示記念講演会「古代の測量をめぐって」「国土を見つめる測量技術」「歴史を測る－新しい技術で掘り下げる考古学－」（平城宮跡資料館講堂）
23. 1. 17　埋蔵文化財担当者専門研修「出土文字資料調査課程」（～1 月 21 日）
23. 1. 27　埋蔵文化財担当者専門研修「中近世城郭調査整備課程」（～2 月 3 日）
23. 1. 28　冬期企画展「飛鳥の考古学 2010」（飛鳥資料館）（～2 月 28 日）
23. 1. 31　消防訓練
23. 2. 6　無料観覧日（飛鳥資料館）
23. 2. 15　埋蔵文化財担当者専門研修「生物環境調査課程」（～2 月 23 日）
23. 2. 19　春期企画展「発掘速報展　平城 2009・2010」（平城宮跡資料館）（～5 月 8 日）
春期企画展ギャラリートーク（平城宮跡資料館）（会期中毎週金曜日）

Ⅷ 運営委員・評議員・外部評価委員名簿及び組織図・役職員名簿

独立行政法人国立文化財機構運営委員会委員名簿

（平成 23 年 3 月 31 日現在、敬称略）

氏　　名	現　　職	備　考
福　原　　義　春	株式会社資生堂名誉会長	委員長
辻　　惟　雄	東京大学名誉教授	副委員長
青　柳　　正　規	独立行政法人国立美術館理事長	
阿　部　　充　夫	東京国立博物館名誉館長	
石　澤　　良　昭	上智大学長	
今　村　　峯　雄	国立歴史民俗博物館名誉教授	
上　野　　尚　一	朝日新聞社社主	
小　倉　　和　夫	独立行政法人国際交流基金理事長	
佐　藤　　宗　諄	奈良女子大学名誉教授	
白　石　　太一郎	大阪府立近つ飛鳥博物館長	
田　中　　浩　二	九州旅客鉄道株式会社相談役	
辻　村　　泰　善	財団法人元興寺文化財研究所理事長	
中　島　　史　子	フリーライター	
羽毛田　　信　吾	宮内庁長官	
林　田　　ス　マ	大野城市まどかぴあ館長	
マリ・クリスティーヌ	異文化コミュニケーター	
冷　泉　　為　人	財団法人冷泉家時雨亭文庫理事長	

・各館の評議員会評議員名簿

東京国立博物館評議員会評議員名簿

（平成 23 年 3 月 31 日現在、敬称略）

氏　　名	現　　職	備　考
大　沼　　淳	学校法人文化学園理事長	会長
阿　部　　充　夫	東京国立博物館名誉館長	副会長
青　柳　　正　規	独立行政法人国立美術館国立西洋美術館長	
浦　井　　正　明	台東区文化財保護審議会委員	
嵩　井　　雅　幸	東日本旅客鉄道株式会社上野駅長	
小　寺　　正　樹	台東区立忍岡中学校長	
佐　野　　誠	東京都立上野高等学校長	
高　橋　　武　郎	台東区立根岸小学校長	
筑　紫　　みずえ	株式会社グッドバンカー代表取締役社長	
辻　　惟　雄	東京大学名誉教授	
福　原　　義　春	株式会社資生堂名誉会長	
二　木　　忠　男	上野観光連盟会長	
牧　　美　也　子	漫画家	
マリ・クリスティーヌ	異文化コミュニケーター	
宮　田　　亮　平	東京芸術大学長	
吉　住　　弘	台東区長	
林　原　　行　雄	シティグループ・ジャパン・ホールディングス株式会社常任監査役	

京都国立博物館評議員会評議員名簿

（平成 23 年 3 月 31 日現在、敬称略）

氏　　名	現　　職	備　考
興　膳　　宏	京都大学名誉教授	会長
藤　井　　譲　治	京都大学大学院文学研究科教授	副会長
荒　巻　　禎　一	京都府京都文化博物館長	
池　坊　　由　紀	華道家元池坊次期家元	
上　野　　尚　一	朝日新聞社社主	
尾　﨑　　正　明	独立行政法人国立美術館京都国立近代美術館長	
神　居　　文　彰	平等院住職	
佐　藤　　茂　雄	京阪電気鉄道株式会社最高経営責任者（ＣＥＯ） 兼取締役会議長	
高　橋　　隆　博	関西大学文学部教授	
竹　下　　景　子	俳優	
服　部　　重　彦	株式会社島津製作所代表取締役会長	
細　見　　吉　郎	京都市副市長	
湯　山　　賢　一	独立行政法人国立文化財機構奈良国立博物館長	
冷　泉　　為　人	財団法人冷泉家時雨亭文庫理事長	

奈良国立博物館評議員会評議員名簿

（平成 23 年 3 月 31 日現在、敬称略）

氏　　名	現　　職	備　考
森　本　　公　誠	東大寺長老	会長
水　野　　正　好	財団法人大阪府文化財センター理事長	副会長
大　野　　玄　妙	聖徳宗管長・法隆寺住職	
花山院　　弘　匡	春日大社宮司	
栄　原　　永遠男	大阪市立大学大学院文学研究科教授	
佐々木　　丞　平	独立行政法人国立文化財機構理事長	
杉　本　　一　樹	宮内庁正倉院事務所長	
田　辺　　征　夫	奈良文化財研究所長	
檀　　ふ　み	女優	
辻　井　　昭　雄	近畿日本鉄道株式会社相談役	
辻　村　　泰　善	財団法人元興寺文化財研究所理事長	
冨　岡　　將　人	奈良県教育委員会教育長	
中　島　　史　子	フリーライター	
永　村　　眞	日本女子大学文学部教授	
西　口　　廣　宗	株式会社南都銀行代表取締役会長	
山　崎　　しげ子	随筆家	

九州国立博物館評議員会評議員名簿

（平成 23 年 3 月 31 日現在、敬称略）

氏　　名	現　　職	備　考
田　中　　浩　二	九州旅客鉄道株式会社　相談役	会長
高　倉　　洋　彰	西南学院大学国際文化学部教授	副会長
阿　川　　佐和子	文筆家	
遠　藤　　正　雄	ＮＨＫ福岡放送局長	
井　上　　保　廣	太宰府市長	
衛　藤　　卓　也	福岡大学学長	
王　　貞　治	福岡ソフトバンクホークス取締役会長	
酒井田　　柿右衛門	陶芸作家	
永　山　　紘　子	国際ソロプチミストアメリカ日本南リジョン（九州・沖縄地区）直前ガバナー	
高　良　　倉　吉	琉球大学法文学部教授	
海老井　　悦　子	福岡県副知事	
多　田　　昭　重	株式会社西日本新聞社　取締役相談役	
西高辻　　信　良	太宰府天満宮宮司	
林　田　　ス　マ	大野城まどかぴあ館長	

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会委員名簿

（平成 23 年 3 月 31 日現在、敬称略）

氏　　名	現　　職	備　考
清　水　　眞　澄	三井記念美術館長	委員長
横　里　　幸　一	ＮＨＫプロモーション代表取締役社長	副委員長
稲　田　　孝　司	岡山大学名誉教授	
岡　本　　健　一	毎日新聞社客員編集委員	
小　林　　忠	学習院大学文学部教授	
酒　井　　忠　康	世田谷美術館長	
佐　藤　　信	東京大学大学院人文社会系研究科教授	
園　田　　直　子	国立民族学博物館文化資源研究センター教授	
竹　本　　幹　夫	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館長	
玉　蟲　　敏　子	武蔵野美術大学造形学部教授	
野　口　　昇	日本ユネスコ協会連盟理事長	
藤　田　　治　彦	大阪大学大学院教授	
藤　好　　優　臣	公認会計士	
森　　弘　子	福岡県文化財保護審議会専門委員	

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

博物館調査研究等部会委員名簿

（平成 23 年 3 月 31 日現在、敬称略）

氏　　名	現　　職	備　考
小　林　　忠	学習院大学文学部教授	部会長
酒　井　　忠　康	世田谷美術館長	
藤　田　　治　彦	大阪大学大学院教授	
森　　弘　子	福岡県文化財保護審議会専門委員	

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

研究所調査研究等部会名簿

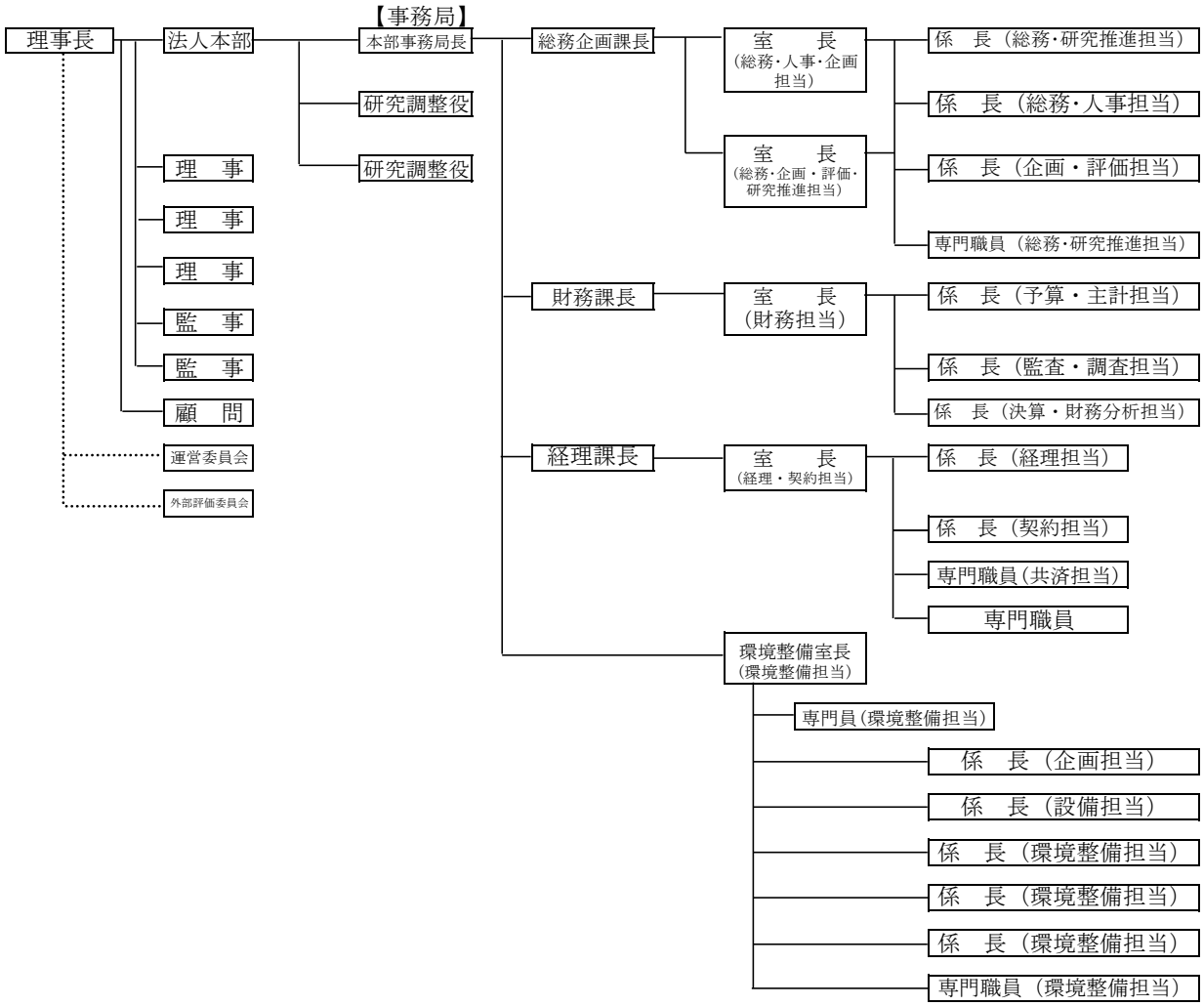
（平成 23 年 3 月 31 日現在、敬称略）

氏　　名	現　　職	備　考
佐　藤　　信	東京大学大学院人文社会系研究科教授	部会長
稲　田　　孝　司	岡山大学名誉教授	
岡　本　　健　一	毎日新聞社客員編集委員	
園　田　　直　子	国立民族学博物館文化資源研究センター教授	
竹　本　　幹　夫	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館長	
玉　蟲　　敏　子	武蔵野美術大学造形学部教授	
野　口　　昇	日本ユネスコ協会連盟理事長	

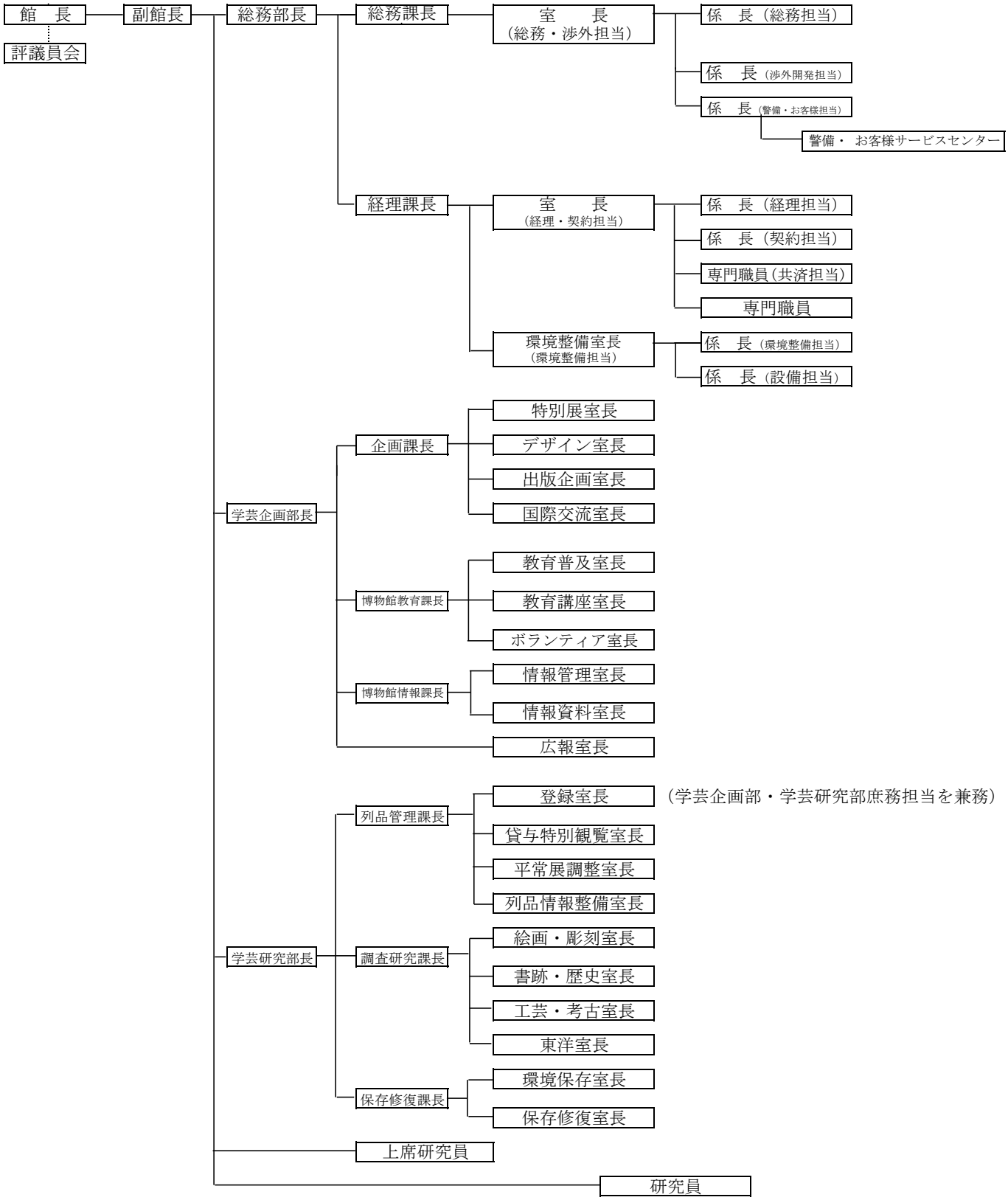
平成23年3月31日現在

◇組　織　図

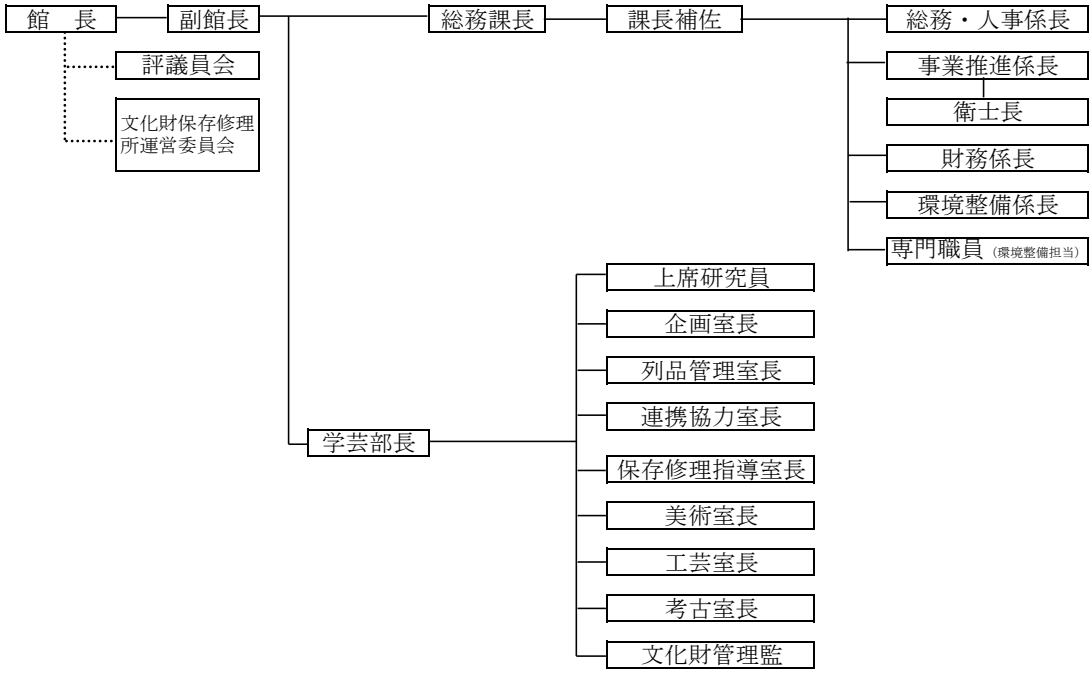
・法　人



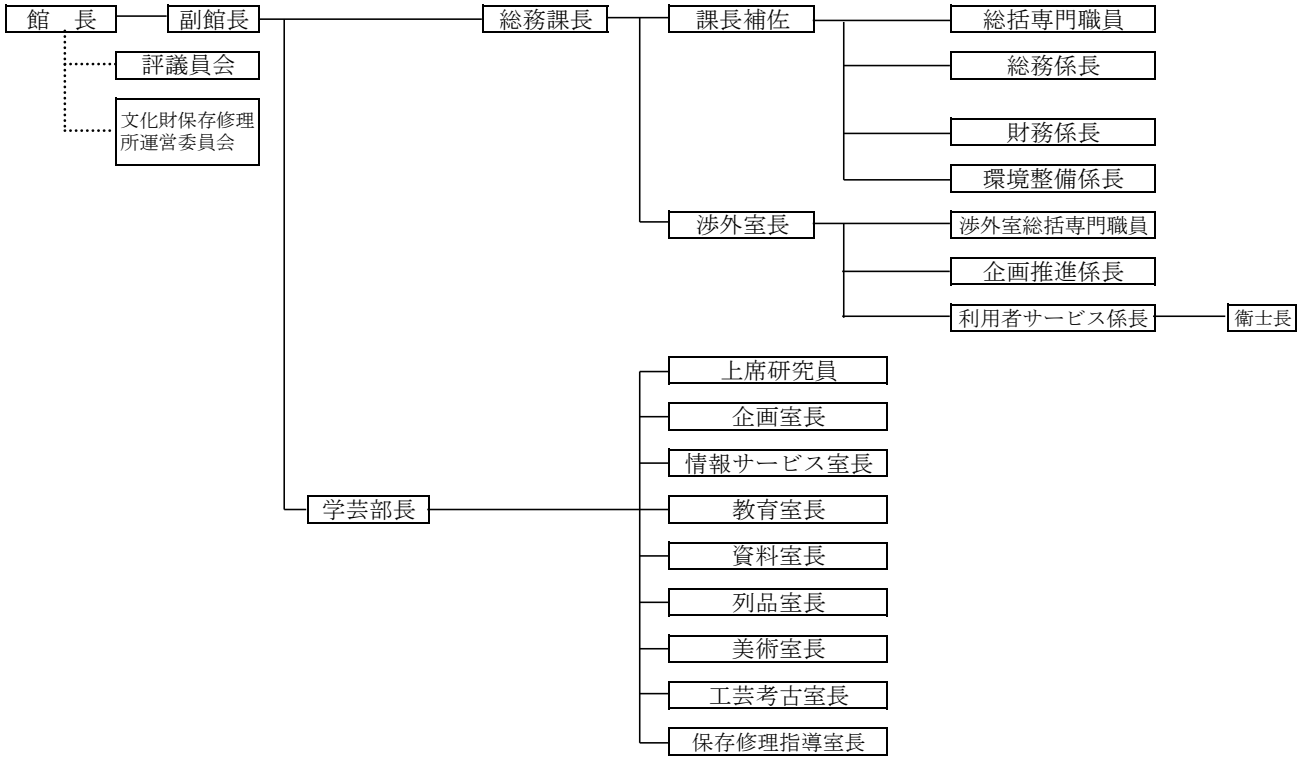
【東京国立博物館】


館　長
副館長
評議員会
総務部長
総務課長
室　長
（総務・渉外担当）
係　長（総務担当）
係　長（渉外開発担当）
係　長（警備・お客様担当）
警備・ お客様サービスセンター
経理課長
室　長
（経理・契約担当）
係　長（経理担当）
係　長（契約担当）
専門職員（共済担当）
専門職員
環境整備室長
（環境整備担当）
係　長（環境整備担当）
係　長（設備担当）
学芸企画部長
企画課長
特別展室長
デザイン室長
出版企画室長
国際交流室長
博物館教育課長
教育普及室長
教育講座室長
ボランティア室長
博物館情報課長
情報管理室長
情報資料室長
広報室長
学芸研究部長
列品管理課長
登録室長
（学芸企画部・学芸研究部庶務担当を兼務）
貸与特別観覧室長
平常展調整室長
列品情報整備室長
調査研究課長
絵画・彫刻室長
書跡・歴史室長
工芸・考古室長
東洋室長
保存修復課長
環境保存室長
保存修復室長
上席研究員
研究員

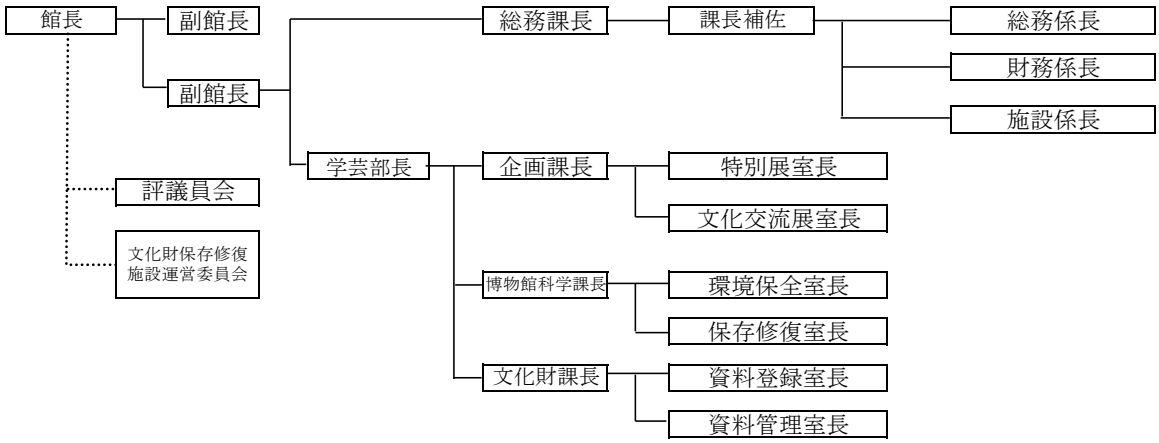
【京都国立博物館】


館　長
副館長
評議員会
文化財保存修理所運営委員会
総務課長
課長補佐
総務・人事係長
事業推進係長
衛士長
財務係長
環境整備係長
専門職員（環境整備担当）
学芸部長
上席研究員
企画室長
列品管理室長
連携協力室長
保存修理指導室長
美術室長
工芸室長
考古室長
文化財管理監

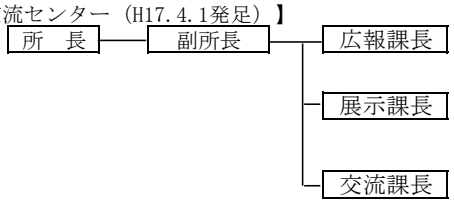
【奈良国立博物館】



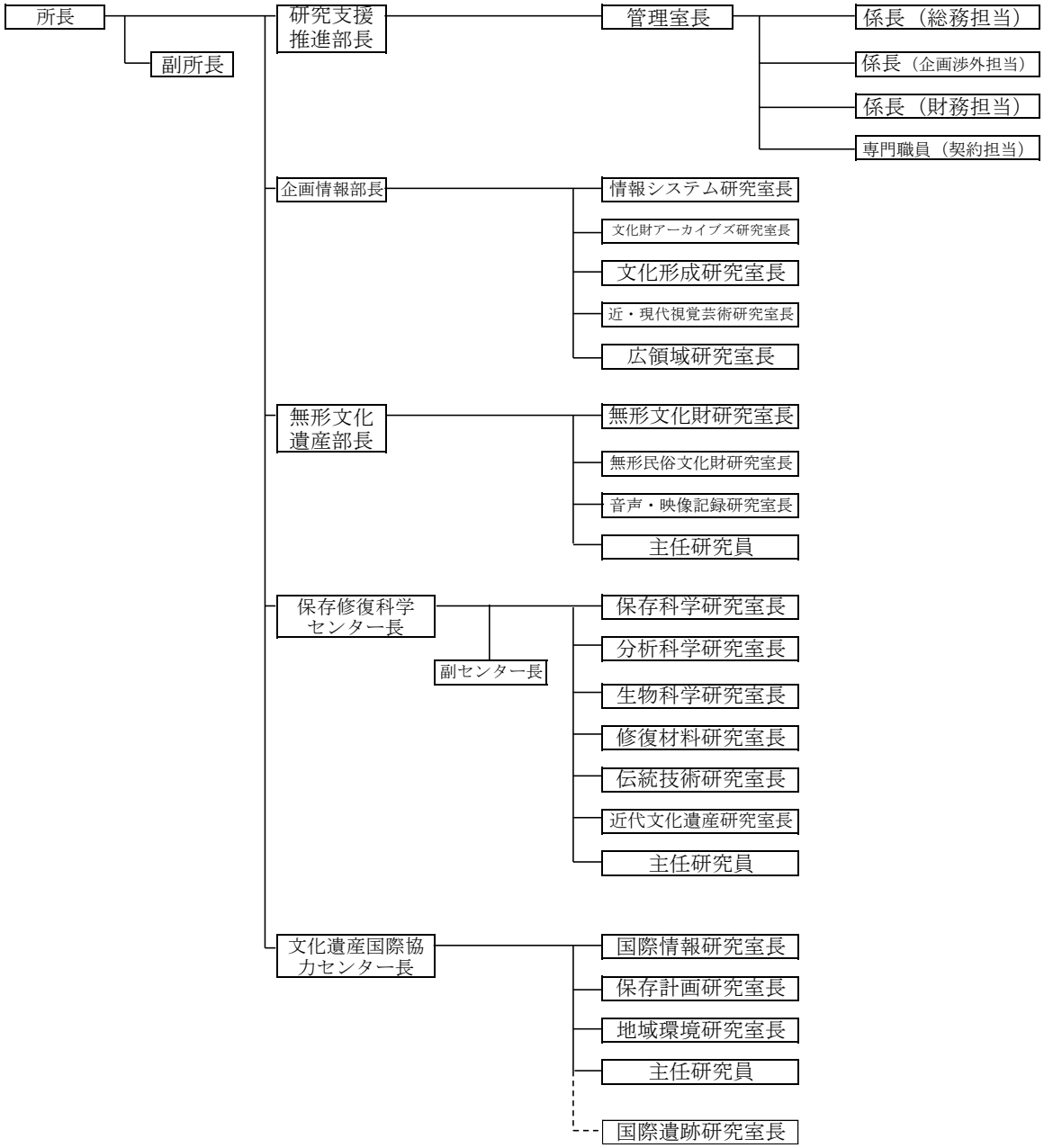
【九州国立博物館】



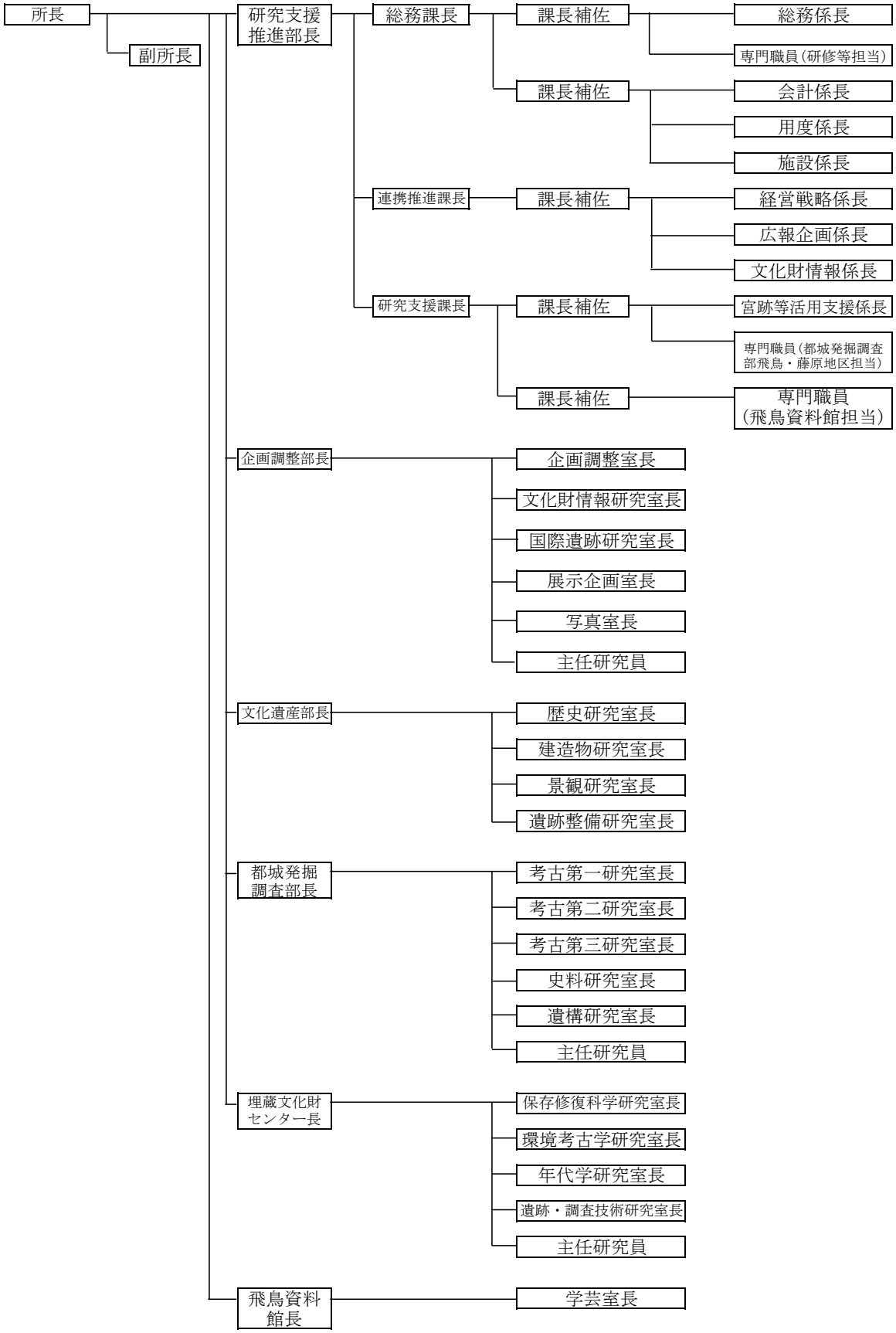
【アジア文化交流センター（H17.4.1発足）】



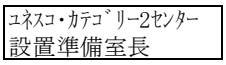
【東京文化財研究所】


所長
副所長
研究支援推進部長
管理室長
係長（総務担当）
係長（企画渉外担当）
係長（財務担当）
専門職員（契約担当）
企画情報部長
情報システム研究室長
文化財アーカイブズ研究室長
文化形成研究室長
近・現代視覚芸術研究室長
広領域研究室長
無形文化遺産部長
無形文化財研究室長
無形民俗文化財研究室長
音声・映像記録研究室長
主任研究員
保存修復科学センター長
副センター長
保存科学研究室長
分析科学研究室長
生物科学研究室長
修復材料研究室長
伝統技術研究室長
近代文化遺産研究室長
主任研究員
文化遺産国際協力センター長
国際情報研究室長
保存計画研究室長
地域環境研究室長
主任研究員
国際遺跡研究室長

【奈良文化財研究所】



【ユネスコ・カテゴリー２センター設置準備室】



平成２２年度　自己点検評価報告書統計表

平成２２年度　自己点検評価報告書　統計表

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

1-(1) 収蔵品

1-(1)-① 収蔵品一覧表 …… 1

1-(1)-② 平成 22 年度新収品一覧表 …… 3

1-(1)-③ 平成 22 年度新収品一覧

【東京国立博物館】…… 4

【京都国立博物館】…… 7

【奈良国立博物館】…… 14

【九州国立博物館】…… 17

1-(2) 寄託品

1-(2)-① 寄託品一覧表 …… 24

1-(2)-② 寄託品増減表 …… 24

1-(2)-③ 登録美術品一覧表 …… 24

1-(3) 収蔵品の管理・保存

1-(3)-① 各収蔵庫、展示場の温湿度…… 25

1-(3)-② 保存カルテ作成件数 …… 26

1-(4) 修理

1-(4)-① 本格修理件数 …… 27

1-(4)-②修理概況

【東京国立博物館】…… 28

【京都国立博物館】…… 44

【奈良国立博物館】…… 46

【九州国立博物館】…… 47

1-(4)-③ 文化財修理データのデータベース化件数 …… 50

2. 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

2-(1) 展示の充実

2-(1)-① 入館者数推移(入館料別)（過去５ヵ年）　(P103　◎共通資料 a-①)

2-(1)-② 入館者数推移(展覧会別)（過去５ヵ年）　(P104　◎共通資料 a-②)

2-(1)-③ 入場料収入　(P106　◎共通資料 a-③)

2-(1)-④ 展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等の設置 …… 51

2-(1)-⑤ 平常展・特別展　(P107　◎共通資料 a-④)

2-(1)-⑥ 広報刊行物一覧 …… 52

2-(2) 歴史・伝統文化の理解促進

2-(2)-① 学習機会の提供(過去５ヵ年) …… 54

2-(2)-② キャンパスメンバーズ…… 55

2-(2)-③ 講座･講演会等の開催実績 …… 58

2-(2)-④ 児童生徒を対象とした教育普及事業 …… 66

2-(2)-⑤ 大学生･大学院生を対象とした教育事業 ･･･ 72
2-(2)-⑥ ボランティア受入れ実績 (P128 ◎共通資料 b)
2-(2)-⑦ 友の会 ･･･ 74
2-(2)-⑧ 賛助会 ･･･ 75
2-(2)-⑨ 渉外活動 ･･･ 76
2-(2)-⑩ 留学生の日 ･･･ 82
2-(3) 快適な観覧環境の提供
2-(3)-① 高齢者､障がい者等に配慮した設備等 ･･･ 83
2-(3)-② 音声ガイド実施状況 ･･･ 83

3. 我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与
3-(1) 収蔵品等に関する調査研究成果の発信
3-(1)-① 学会、研究会等発表実績一覧 (P156 ◎共通資料 c-③)
3-(1)-② 論文等発表実績一覧 (P164 ◎共通資料 c-④)
3-(1)-③ 調査研究刊行物一覧 (P174 ◎共通資料 c-⑤)
3-(1)-④ シンポジウム開催実績一覧 ･･･ 84
3-(2) 海外研究者の招聘
3-(2)-① 研究交流実績一覧 (P130 ◎共通資料 c-①)
3-(3) 公私立博物館等への貸与の推進
3-(3)-① 公私立博物館等への収蔵品･寄託品貸与件数 ･･･ 86
3-(3)-② 公私立博物館等への収蔵品･寄託品貸与先別件数 ･･･ 86
3-(3)-③ 海外への列品貸与 ･･･ 87
3-(3)-④ 考古の相互貸借実績 ･･･ 87
3-(4) 公私立博物館等に対する援助・助言の推進
3-(4)-① 公私立博物館等に対する援助･助言 ･･･ 88

4. 文化財に関する調査及び研究の推進
4-(1) 文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進
4-(1)-① 調査研究テーマ一覧 (P152 ◎共通資料 c-②)
4-(1)-② 学会、研究会等発表実績一覧 (P156 ◎共通資料 c-③)
4-(1)-③ 論文等発表実績一覧 (P164 ◎共通資料 c-④)
4-(1)-④ 調査研究刊行物一覧 (P174 ◎共通資料 c-⑤)
4-(2) 文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進
4-(2)-① 調査研究テーマ一覧 (P152 ◎共通資料 c-②)
4-(2)-② 学会、研究会等発表実績一覧 (P156 ◎共通資料 c-③)
4-(2)-③ 論文等発表実績一覧 (P164 ◎共通資料 c-④)
4-(2)-④ 調査研究刊行物一覧 (P174 ◎共通資料 c-⑤)
4-(3) 文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進
4-(3)-① 調査研究テーマ一覧 (P152 ◎共通資料 c-②)
4-(3)-② 学会、研究会等発表実績一覧 (P156 ◎共通資料 c-③)
4-(3)-③ 論文等発表実績一覧 (P164 ◎共通資料 c-④)

4-(3)-④ 調査研究刊行物一覧 (P174 ◎共通資料 c-⑤)
4-(4) 国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・研究の実施
4-(4)-① 調査研究テーマ一覧 (P152 ◎共通資料 c-②)
4-(4)-② 学会、研究会等発表実績一覧 (P156 ◎共通資料 c-③)
4-(4)-③ 論文等発表実績一覧 (P164 ◎共通資料 c-④)
4-(4)-④ 調査研究刊行物一覧 (P174 ◎共通資料 c-⑤)
4-(5) 有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究
4-(5)-① 調査研究テーマ一覧 (P152 ◎共通資料 c-②)
4-(5)-② 学会、研究会等発表実績一覧 (P156 ◎共通資料 c-③)
4-(5)-③ 論文等発表実績一覧 (P164 ◎共通資料 c-④)
4-(5)-④ 調査研究刊行物一覧 (P174 ◎共通資料 c-⑤)
4-(5)-⑤ 科学研究費補助金による調査研究 (P177 ◎共通資料 c-⑥)
4-(5)-⑥ 客員研究員一覧 (P179 ◎共通資料 c-⑦)

5. 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進
5-(1) 文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究
5-(1)-① 調査研究テーマ一覧 (P152 ◎共通資料 c-②)
5-(1)-② 国際ワークショップ開催実績一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
5-(1)-③ 学会、研究会等発表実績一覧 (P156 ◎共通資料 c-③)
5-(1)-④ 論文等発表実績一覧 (P164 ◎共通資料 c-④)
5-(2) 諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転の推進
5-(2)-① 調査研究テーマ一覧 (P152 ◎共通資料 c-②)
5-(2)-② アジア諸国文化財保護担当者などの人材養成に関する研修等実施状況・・・・・・・・・・ 96

6. 情報発信機能の強化
6-(1) ネットワークのセキュリティの強化及び情報基盤の整備充実
6-(1)-① 文化財関係資料及び図書の受入件数 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
6-(2) 研究所の調査・研究成果の発信
6-(2)-① 調査研究刊行物一覧 (P174 ◎共通資料 c-⑤)
6-(2)-② 公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催実績一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
6-(2)-③ ウェブサイトアクセス件数 (P181 ◎共通資料 d)
6-(3) 黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示公開
6-(3)-① 入館者数推移(入館料別)(過去５ヵ年) (P103 ◎共通資料 a-①)
6-(3)-② 入館者数推移(展覧会別)(過去５ヵ年) (P104 ◎共通資料 a-②)
6-(3)-③ 入場料収入 (P106 ◎共通資料 a-③)
6-(3)-④ 平常展・特別展 (P126 ◎共通資料 a-④)
6-(4) 文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用への協力
6-(4)-① ボランティア受入れ実績 (P128 ◎共通資料 b)
6-(5) 文化財情報・研究成果の公表
6-(5)-① ウェブサイトアクセス件数 (P181 ◎共通資料 d)
6-(5)-② 収蔵品写真(フィルム)のデジタル化件数 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
6-(5)-③ 収集した情報資料数(総数)・・・ 99
6-(5)-④ 特別観覧件数 ・・・ 100

7. 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上
7-① 国･地方公共団体等に対する専門的･技術的な協力･助言 ･･･････････････････････ 101
7-② 専門指導者層を対象とした研修等実施状況及び研究参加者等に対するアンケート結果・ 101

Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置
Ⅱ-1. 職員の意識改革、サービスの向上、業務の効率化
Ⅱ-1-① 施設の有効利用件数 ･･･ 102

◎共通資料
a. 展示
a-①入館者数推移(入館料別) (過去５ヵ年)･･･････････････････････････････････ 103
a-②入館者数推移(展覧会別) (過去５ヵ年)･･･････････････････････････････････ 104
a-③入場料収入 ･･･ 106
a-④平常展・特別展
【東京国立博物館】･･･ 107
【京都国立博物館】･･･ 119
【奈良国立博物館】･･･ 121
【九州国立博物館】･･･ 122
(参考)
【平城宮跡資料館】･･･ 126
【藤原宮跡資料室】･･･ 126
【飛鳥資料館】･･･ 126
b. ボランティア受入れ実績 ･･･ 128
c. 調査研究
c-①研究交流実績一覧 ･･･ 130
c-②調査研究テーマ一覧 ･･･ 152
c-③学会､研究会等発表実績一覧 ･･･ 156
c-④論文等発表実績一覧 ･･･ 164
c-⑤調査研究刊行物一覧 ･･･ 174
c-⑥科学研究費補助金による調査研究 ･･･････････････････････････････････････ 177
c-⑦客員研究員一覧 ･･･ 179
d. ウェブサイトアクセス件数 ･･･ 181

附属資料
平成２２年度特別展アンケート結果

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

1-(1) 収蔵品

1-(1)-① 収蔵品一覧表

平成23年3月31日現在

		国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
		計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文
合計		122,102	130	943	113,258	87	629	6,584	27	177	1,827	13	109	433	3	28
絵画		13,411	34	200	11,089	20	100	1,965	9	54	287	4	42	70	1	4
書跡		3,206	35	165	1,720	14	57	1,310	15	76	139	5	26	37	1	6
彫刻		1,406	1	45	1,102	0	22	143	0	1	143	1	16	18	0	6
建築		78	0	2	21	0	0	49	0	1	5	0	0	3	0	1
金工		16,378	3	54	15,831	1	17	377	2	24	158	0	11	12	0	2
刀剣		3,419	20	57	3,396	19	57				16	0	0	7	1	0
陶磁		3,755	0	17	2,931	0	11	712	0	2	81	0	0	31	0	4
漆工		4,156	6	30	3,735	4	20	192	0	2	74	2	5	155	0	3
染織		4,640	2	25	3,627	0	18	895	1	6	92	1	1	26	0	0
考古		29,955	4	74	28,529	4	55	659	0	10	731	0	8	36	0	1
民族資料		1,300	0	0	1,190	0	0	0	0	0	101	0	0	9	0	0
歴史資料		4,188	0	6	3,880	0	4	282	0	1	0	0	0	26	0	1
和書		17,562	0	1	17,562	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他		3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0
東洋	絵画	684	4	31	684	4	31									
	書跡	1,648	10	12	1,648	10	12									
	彫刻	798	0	20	798	0	20									
	金工	986	0	0	986	0	0									
	陶磁	3,006	0	10	3,006	0	10									
	漆工	524	0	4	524	0	4									
	染織	585	0	1	585	0	1									
	考古	5,809	0	3	5,809	0	3									
	民族	3,468	0	0	3,468	0	0									
法隆寺献納宝物		321	11	182	321	11	182									
黒田記念館収蔵品		814	0	2	814	0	2									
準歴史資料(含和書)		2	0	2	2	0	2									

＊東京国立博物館は、列品管理規程による「旧東洋課所掌分」あり。

＊列品に編入されていない資料については「準歴史資料(含和書)」の項目に記し、列品化整理中の資料とを分けて表示。

＊東京国立博物館、京都国立博物館では、国宝・重要文化財の数は文化庁の指定件数に合わせることとした(このほか東京国立博物館には建造物の重要文化財が5件ある)。

（参考）

【奈良文化財研究所】

○保管及び所蔵文化財・資料概要（主なもの）

平成23年3月31日現在

保管及び所蔵文化財・資料名	数
[文化遺産部]	
国宝・重要文化財建造物保存図	約30,100枚
国宝・重要文化財建造物摺拓本	約26,000枚
国宝・重要文化財建造物写真乾板	約32,000枚
北浦定政関係資料（重要文化財）	約1,100点
棚田嘉十郎関係資料	26点
関野貞関係資料	54点
菅原大三郎資料関係	7箱
森薀資料	約4,500点
村岡正資料	約3,000点
小林剛関係資料	約38箱
牛川喜幸関係資料	2,927点
[都城発掘調査部（平城地区）]	
平城宮跡大膳職推定地出土木簡（重要文化財）	39点
平城宮跡内裏北外郭官衙出土木簡（重要文化財）	1,785点
興福寺旧境内土壙（一乗院宸殿跡下層）出土品（重要文化財）	一括
平城宮・京出土土器・土製品	29,623箱
平城宮・京出土木製品・金属製品・石製品	32,047点
平城宮・京出土瓦類	623,116点
平城宮・京出土木簡	209,000点
[都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)]	
軒丸瓦・軒平瓦	軒丸瓦・軒平瓦
丸瓦・平瓦　土嚢袋	丸瓦・平瓦　土嚢袋
丸瓦・平瓦　整理箱	丸瓦・平瓦　整理箱
土器　整理箱	土器　整理箱
土製品	土製品
木器・木製品	木器・木製品
木簡	木簡
建築部材	建築部材
金属製品	金属製品
石器・石製品	石器・石製品
漏刻復原模型	漏刻復原模型
幢幡復原模型（台付き）	幢幡復原模型（台付き）
飛鳥大仏頭部複製（模刻）	飛鳥大仏頭部複製（模刻）
藤ノ木古墳鞍復原模型	藤ノ木古墳鞍復原模型
富本銭枝銭復原模型	富本銭枝銭復原模型
碁盤復原模型	碁盤復原模型
鉄釜鋳造土坑復原模型	鉄釜鋳造土坑復原模型
[飛鳥資料館]	
高松塚古墳出土品（海獣葡萄鏡　銀製太刀金具　棺金具　ガラス小玉漆塗り木棺）（重要文化財）	一式
須弥山石	1点
石人像	1点
飛鳥寺塔跡出土舎利荘厳具	一式
飛鳥寺出土瓦類	一式
山田寺跡出土品（重要文化財）	一括
和田廃寺鴟尾（都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区所属）	1点
川原寺出土水波紋土磚	2点
岡出土車石	8点
飛鳥各地出土瓦類	一式
川原寺裏山出土三尊磚仏	2点
飛鳥川原宮出土唐居敷	1点
高松塚古墳壁画模写（前田青邨、平山郁夫等）	3面
高松塚古墳人物復元衣装	一式
石上神宮七枝刀レプリカ	1点
水落遺跡遺構1/20模型	1点
猿石模刻	一式
亀石模刻	1点
須弥山石復元模刻	1点
石人像復元模刻	1点
出水酒船石模刻	2点
阿武山古墳出土　玉枕　冠帽　復元模型	3点
川原寺伽藍1/50模型	1点
山田寺金堂復原	1点
°	1点
-	
山田寺発掘遺構1/100模型	1点
石舞台古墳1/20模型	1点
飛鳥寺発掘遺構1/100模型	1点

保管及び所蔵文化財・資料名	数
石のカラト古墳1/20模型	1点
野中寺銅造弥勒菩薩半伽像レプリカ	1点
銅造摩耶夫人及天人像レプリカ	4点
威奈大村骨蔵器レプリカ	1点
長谷寺法華説相図レプリカ	1点
諸陵周垣成就記並諸陵図譜	1点
鼓銅図録	1点
高松塚古墳木棺模造	1点
八釣マキト5号古墳石室	1点
十二支拓本（表装済み・収納箱あり）	一式
キトラ古墳模型	1点
山東省済南市解放橋北唐墓石棺　青龍・白虎・小口面拓本	各1点
近藤千尋関連資料	一式
武人復原	1点
山田寺灯籠復原	1点
壬申の乱ジオラマ	一式
[埋蔵文化センター]	
埼玉県真福寺貝塚資料	一式
岡山県福田貝塚資料	一式
埼玉県上福岡貝塚資料	一式
神奈川県田戸遺跡資料	一式
神奈川県子母口貝塚	一式
神奈川県大口坂貝塚資料	一式
能登縄文資料（15遺跡）	一式
千葉県曽谷貝塚資料	一式
長野県石小屋遺跡資料	一式
山形県蛭沢洞窟資料	一式
東京都小豆沢貝塚資料	一式
茨城県広畑貝塚資料	一式
中国・朝鮮瓦磚資料	一式
岡山地方陶棺資料	一式
下総国分寺・尼寺資料	一式
関東地方加曽利B式資料	一式
岩手県足沢遺跡資料	一式
茨城県浮島貝塚資料	一式
千葉県幸田貝塚資料	一式
滋賀県安土遺跡資料	一式
岡山県黒土遺跡資料	一式
神奈川県保土ヶ谷貝塚資料	一式
千葉県姥山貝塚資料	一式
宮城県川下り・響き資料	一式
大木囲貝塚	
東貝塚	
室浜貝塚	
福浦島貝塚	
里浜貝塚	
東北縄文晩期末資料	一式
東北各地発見縄文資料	一式
北海道資料	一式
発見地不詳縄文資料	一式
発見地不詳須恵器資料	一式
発見地不詳石器・石斧資料	一式
愛知県西滋賀貝塚資料	一式
愛知県吉胡貝塚資料	一式
茨城県前浦遺跡資料	一式
関東地方埴輪資料	一式
静岡県登呂遺跡資料	一式
発見地不詳須恵器資料	一式
発見地不詳石器・石斧資料	一式
愛知県西滋賀貝塚資料	一式
愛知県吉胡貝塚資料	一式
茨城県前浦遺跡資料	一式
関東地方埴輪資料	一式
静岡県登呂遺跡資料	一式

1-(1)-② 平成22年度新収品一覧表

平成23年3月31日現在

		国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
		購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入
合計		591			482			58			15			36		
計		65	70	456	4	23	455	23	35	0	7	8	0	31	4	1
絵画		12	16	0	0	2	0	6	14	0	2	0	0	4	0	0
書跡		9	12	1	1	3	1	2	8	0	1	1	0	5	0	0
彫刻		1	2	1	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	1	0
建築		0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
金工		13	4	0	0	0	0	13	4	0	0	0	0	0	0	0
刀剣		1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
陶磁		2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
漆工		5	11	0	2	2	0	1	4	0	1	5	0	1	0	0
染織		13	7	0	0	3	0	0	2	0	0	0	0	13	2	0
考古		3	2	0	0	0	0	1	1	0	2	1	0	0	0	0
民族資料		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
歴史資料		6	2	453	0	0	453	0	2	0	0	0	0	6	0	0
和書		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東洋	絵画	0	0	0	0	0	0									
	書跡	0	0	0	0	0	0									
	彫刻	0	0	0	0	0	0									
	金工	0	0	0	0	0	0									
	陶磁	0	2	0	0	2	0									
	漆工	0	0	0	0	0	0									
	染織	0	0	0	0	0	0									
	考古	0	1	0	0	1	0									
	民族	0	10	0	0	10	0									
法隆寺献納宝物		0	0	0	0	0	0									
黒田記念館収蔵品		0	0	0	0	0	0									

＊東京国立博物館は、列品管理規程による「旧東洋課所掌分」あり。
＊16年度より、15年度以前「歴史資料」と分類していたのものを「和書」と「歴史資料」に分け表示している。
＊平成19年4月1日付けで黒田記念館収蔵品が東京文化財研究所から東京国立博物館に移管となった。

付表・文化財収集件数の推移

5年間の新収集品一覧表

		平成18年度				平成19年度			平成20年度			平成21年度			平成22年度		
		購入	寄贈	編入	除却	購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入	購入	寄贈	編入
合計		238				972			168			390			591		
小計		53	173	13	1	93	68	811	52	113	3	46	148	196	65	70	456
絵画		8	16	1	0	21	16	0	15	5	0	14	66	0	12	16	0
書跡		3	24	0	0	5	2	0	12	25	0	5	11	0	9	12	1
彫刻		0	8	0	0	1	9	0	4	0	0	2	12	0	1	2	1
建築		0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
金工		0	48	0	0	3	11	0	1	0	2	1	0	0	13	4	0
刀剣		0	5	0	0	1	2	0	0	2	0	2	1	0	1	0	0
陶磁		4	3	0	0	14	1	0	1	2	0	7	16	0	2	0	0
漆工		23	1	1	0	20	1	0	3	11	0	8	2	0	5	11	0
染織		8	7	0	0	19	4	0	10	14	0	0	2	0	13	7	0
考古		2	14	4	0	7	2	1	4	11	1	3	29	0	3	2	0
民族資料		0	2	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
歴史資料		0	5	5	0	0	1	0	2	1	0	4	0	196	6	2	453
和書		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他		0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東洋	絵画	0	6	0	0	0	0	0	0	35	0	0	0	0	0	0	0
	書跡	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0
	彫刻	0	21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	金工	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	陶磁	0	0	0	0	0	12	0	0	2	0	0	1	0	0	2	0
	漆工	1	9	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	染織	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	考古	3	4	0	0	1	3	1	0	0	0	0	2	0	0	1	0
	民族	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0
法隆寺献納宝物		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
黒田記念館収蔵品		0	0	0	0	0	0	809	0	0	0	0	5	0	0	0	0

1-(1)-③ 平成22年度新収品一覧

【東京国立博物館】(計482件)

(1) 購入(4件)

＜書跡＞(1件)

1　○名　　称　一休宗純墨跡　(いっきゅうそうじゅんぼくせき)
　　○作 者 等　一休宗純 (1394～1481) 筆
　　○時　　代　室町時代・15世紀
　　○品　　質　紙本墨書
　　○寸 法 等　1幅　本紙 縦 27.6 cm　横 67.2 cm
　　○作品概要　「峯松」及び七言四句の偈を記す。
　　(釈文)
　　峯松
　　萬年大樹摠無倫
　　葉々枚々翠色新
　　琴瑟不知誰氏曲
　　雲和天外奏陽春
　　一休子宗純老衲「一休」(朱方印)
　　『続禅林墨蹟』所収。

＜刀剣＞(1件)

2　○名　　称　(重要文化財)　刀　(かたな)
　　○作 者 等　伝当麻
　　○時　　代　鎌倉時代・13世紀
　　○品　　質　鉄製
　　○寸 法 等　1口　刃長 65.0 cm　反り 2.2 cm
　　○作品概要　形状　鎬造、庵棟、鎬幅広く、鎬高く、磨上げて反り浅くなり、中鋒。
　　地鉄　板目に柾目が交ってやや肌立ち、地沸厚くつき、地景入る。
　　刃文　直刃調の小乱刃となり、沸よくつき、砂流かかり、金筋・稲妻よく入る。
　　帽子　表は焼詰め、裏は乱れごころとなり、先掃きかける。
　　茎　　大磨上、先入山形、鑢目勝手下り、目釘孔 2、指表に「ゆきふかき　山もかすみて　ほのぼのと　あけ行春の　たきまちのそら　一翁」と金象嵌銘がある。

＜漆工＞(2件)

3　○名　　称　菊螺鈿鞍　(きくらでんくら)
　　○時　　代　鎌倉時代・13～14世紀
　　○品　　質　木製漆塗
　　○寸 法 等　1背　前輪高 30.5 cm　後輪高 30.0 cm　居木長 43.0 cm
　　○作品概要　前輪と後輪の外側に、海・磯と称する段差をもうけた海有鞍。前輪の両肩に一段の手形を刳る。前輪と後輪の表面は黒漆塗として、螺鈿によって埋めつくすように菊の花枝・蜻蛉・蝶などを描いている。また両輪の内側にも、螺鈿によって菊の折枝を表わす。居木の上面は梨子地に仕立てられており、裏面に墨書があり、居木そのものが後補と判明する。

4　○名　　称　源氏物語蒔絵源氏箪笥　(げんじものがたりまきえげんじたんす)
　　○時　　代　江戸時代・17～18世紀
　　○品　　質　木製漆塗
　　○寸 法 等　1基　幅 42.7 cm　奥行 29.1 cm　高 33.1 cm
　　○作品概要　前面に1枚の扉をつけた倹飩式の箪笥で、内に棚板を2枚設け、3段6個の抽斗を収める。6個の抽斗に、源氏物語の冊子を合計53冊(「行幸」巻を欠失)収めている。表面は全体を梨子地として、扉外側と天面・側面・背面にかけて、高蒔絵と平蒔絵に金貝・切金・付描をまじえ、源氏物語の諸場面を描いている。また箪笥の外側各面には、金貝と付描で表わした葵紋と梅鉢紋を散らす。さらに抽斗の前面に、平蒔絵・薄肉高蒔絵に金貝・切金・付描を交え、源氏物語の諸帖を象徴する図柄を描いている。

(2) 寄贈 (23件)

＜絵画＞(2件)

1　○名　　称　風俗東之錦・萩見　(ふうぞくあずまのにしき・はぎみ)
　　○作 者 等　鳥居清長 (1752～1815) 筆
　　○時　　代　江戸時代・18世紀
　　○品　　質　大判錦絵
　　○寸 法 等　1枚　縦 38.6 cm　横 25.2 cm
　　○作品概要　「風俗東之錦」は、全20図からなる鳥居清長を代表する揃物で、20図の内、「萩見」と「春の野遊び」と題された2図のみ、2枚続きで制作されている。本図は、シリーズ中でも名品として知られる「萩見」のうちの左側の図である。

2　○名　　称　渡唐天神像　(ととうてんじんぞう)
　　○時　　代　室町時代・15世紀
　　○品　　質　紙本着色
　　○寸 法 等　1幅　縦 89.8 cm　横 34.5 cm
　　○作品概要　掛幅装　牙軸。正面を向いて立つ渡唐天神の全身を描く。本紙上部に賛があり、賛末に「澹居叟」の款と白文方印一顆、朱文重廓方印一顆がある。
　　渡唐天神像は、室町時代・14世紀末の禅宗寺院に発生した渡唐天神説話(天神が中国に渡り、南宋時代の禅の名僧、無準師範に参禅して法衣を授けられたという説話)に伴い描き始められ、室町時代の作例も数多く現存する。

＜書跡＞(3件)

3　○名　　称　折手本蘭亭詩並後序　(おりてほんらんていしならびにこうじょ)
　　○作 者 等　市河米庵 (1779～1858) 筆
　　○時　　代　江戸時代・嘉永2年(1849)
　　○品　　質　紙本墨書
　　○寸 法 等　7帖　縦 18.2 cm 横 9.5 cm
　　○作品概要　折本装。王羲之父子等が詠じた「蘭亭詩並後序」を書し、また及び王羲之の「十七帖」の第一通を臨書する。落款から嘉永二年(1849)、米庵七十一歳の書であることが明らかである。

4　○名　　称　七言二句「丹楓落日」　(しちごんにく　たんぷうらくじつ)

○作 者 等　中林梧竹（1827～1913）筆
○時　　代　明治時代・20 世紀
○品　　質　紙本墨書
○寸 法 等　1 幅　縦 132.4 ㎝　35.0 ㎝
○作品概要　宋の陸游の七言詩から「丹楓落日野橋晩、断鴈湿雲江路秋」の２句を記す。明治 44 年(1911)梧竹 85 歳の書という。

5　○名　　称　千字文　（せんじもん）
○作 者 等　朱舜水（1600～1682）筆
○時　　代　江戸時代・寛文 3 年(1663)
○品　　質　紙本墨書
○寸 法 等　1 巻　本紙 縦 23.8 横 505.0
○作品概要　千字文全文を草書で書する。朱舜水が筑後柳川に居留していた寛文 3 年(1663)8 月に、柳川藩士安藤省菴（守約）のために書いた旨の奥書がある。安藤（安東）省菴は長崎滞在中の朱舜水に師事した後、柳川に招き、数年にわたってその亡命生活を援助した。

＜漆工＞(2 件)
6　○名　　称　草取蒔絵螺鈿硯蓋　（くさとりまきえらでんすずりぶた）
○時　　代　江戸時代・18 世紀
○品　　質　木製漆塗
○寸 法 等　1 枚　縦 24.5 ㎝　横 23.0 ㎝　高 4.0 ㎝
○作品概要　方形・丸角の硯蓋。表面は全体を黒漆塗として、口縁を金地とする。見込から立ち上がりの内側にかけて、金平蒔絵に螺鈿、鉛平文を交え、田に入って草取りをする人物を表わす。

7　○名　　称　現代根付　（げんだいねつけ）
○時　　代　昭和～平成時代・20～21 世紀
○寸 法 等　40 件
○作品概要　象牙・鹿角・黄楊・黒檀・琥珀などの伝統的素材のほか、マンモス牙やセイウチ牙の化石、マホガニーやタグアナッツ、マカデミアナッツなど様々な新しい材料を用い、自由な主題が表現される現代根付のコレクション。1980 年代から殿下が薨去された 2002 年までに制作された作品が多い。

＜染織＞(3 件)
8　○名　　称　袱紗 紺繻子地長寿三老模様（ふくさ　こんしゅすじちょうじゅさんろうもよう）
○時　　代　江戸時代・19 世紀
○品　　質　繻子に刺繍
○寸 法 等　1 枚　縦 66 ㎝　横 67.5 ㎝
○作品概要　紺繻子地に刺繍のみで「長寿三老」を表わした袱紗である。また、裏地には淡紅の繻子が用いられる。「長寿三老」とは、西王母から不老不死の桃を盗んだ東方朔、浦島太郎、三浦大助の三人のことで、江戸時代には厄払いの門付などにも唱えられるようになった。それに鶴亀を合わせた模様はまさに長寿を願う吉祥模様である。刺繍には唐繍に好まれる強撚糸が用いられ、平繍のほか、刺し繍、駒繍などを用い、立体感がある。刺繍の上からさらに上刺しして衣服の模様や素材の質感を表現する技法は、江戸時代後期の技巧的な繍技の特徴である。毛髪の生え際、衣服の陰影など、刺繍で表現が難しい部分には墨で補筆される。

9　○名　　称　振袖 鶸色縮緬地秋草几帳模様（ふりそで　ひわいろちりめんじあきくさきちょうもよう）
○時　　代　江戸時代・19 世紀
○品　　質　縮緬地に友禅染と刺繍
○寸 法 等　1 領　身丈 174.5 ㎝　裄 63.0 ㎝
○作品概要　縮緬地を鶸色に染め、近景（腰下）に菊・萩・藤袴といった秋草模様を、遠景（腰上）に松に桜の模様を白上げにして、藍で色挿しを施し、紅・紫の釜糸、撚金糸などで刺繍を加える。武家女性が好んだ四季折々の草花の中に几帳や檜扇といった王朝風の景物を配した模様はいわゆる御所解模様と称し、江戸時代後期における武家女性が用いた様式化されたデザインである。
御所解模様には、総模様・腰模様・裾模様の別があり、本品は上臈以上が用いた総模様である。形状は振袖で、成人前の未婚女性が着用したものである。裏地には紅絹を用い、中綿が入るほか、裾には厚めに綿が入る。

10　○名　　称　袱紗 鶸色縮緬地松梅鴛鴦模様（ふくさ　ひわいろちりめんじしょうばいえんおうもよう）
○時　　代　江戸時代・19 世紀
○品　　質　縮緬地に友禅染と刺繍
○寸 法 等　1 枚　縦 64.0 ㎝　横 64.5 ㎝
○作品概要　縮緬を鶸色に染め、模様の部分を白く染め残す白上げの技法を用いて、刺繍を加えて、雪が降り積もる松梅、橋がかかる流水、つがいの鴛鴦模様を表わす。刺繍は釜糸で平繍や刺し繍を施し、撚金糸による駒繍を加えて華やかさを添えた古典的な和刺繍であるが、一部片撚糸を用いたり内部に詰め物を施して肉厚にしたりなど、立体的な表現も見られる。また、流水の部分には幕末に輸入されたプルシアンブルーが用いられて染められている。松葉・菊の葉など、一部墨による上絵が施される。尚、裏地には淡紅繻子が用いられる。

＜東洋陶磁＞(2 件)
11　○名　　称　飴釉面取壺　（あめゆうめんとりつぼ）
○時　　代　朝鮮時代・19c
○品　　質　磁器
○寸 法 等　1 口　高 17.6 ㎝　口径 10.7 ㎝　高台径 10.4 ㎝
○作品概要　白色磁質胎、轆轤成形による筒形の胴に十一の面取りを施した壺。高台を除き内外総体に飴釉を施す。釉面にはむらが生じている。高台に粗い砂粒が付着している。

12　○名　　称　白釉蓮弁文鉢　（はくゆうれんべんもんはち）
○作 者 等　磁州窯
○時　　代　北宋時代・11 世紀
○品　　質　陶製
○寸 法 等　1 口　高 12.0 ㎝　口径 11.8 ㎝　高台径 6.9 ㎝
○作品概要　胎は夾雑物の混じった淡褐色の陶質。
やや下膨れの深鉢で、外面に刀で粗く削りだした細長い蓮弁文が一周する。見込み中央には 3 つの目跡と焼成前についたと思われる疵が一筋みられる。高台は削り出しており、周辺に爪跡がいくつかみとめられる。
外面の裾部分まで白土で化粧をし、透明釉を掛けている。高台は露胎。内面は口縁の下 2～3㎝ 程度まで化粧を施しているが、見込みは透明釉のみ掛けている。

＜東洋考古＞(1 件)
13　○名　　称　土偶　馬　（どぐう　うま）
○時　　代　三国時代（新羅）・6 世紀

○品　　質　　土製
○寸 法 等　　1基　全長 15.3 cm　高 12.5 cm　幅 10.4 cm
○作品概要　　中空に形作られた馬２頭の体躯に、面繋・胸繋・尻繋・障泥・鞍などの馬具を粘土で表現して貼り付けている。
たてがみの毛並みや、鞍・障泥の文様は線刻によって表現されている。

＜東洋民族＞(10 件)

14　○名　　称　　ワヤン･クリ　ダストロストロ　（わやん・くり　だすとろすとろ）
○時　　代　　21 世紀
○品　　質　　水牛の革、角、骨製、彩色
○寸 法 等　　1 体　全長 64.7 cm 像高 43.5 cm
○作品概要　　インドネシアの伝統的な影絵芝居ワヤン・クリに用いられる人形で、マハーバーラタの登場人物ダストロストロを表す。

15　○名　　称　　ワヤン・クリ　エムバン　（わやん・くり　えむばん）
○時　　代　　20 世紀
○品　　質　　水牛の革、角、骨製、彩色
○寸 法 等　　2 体　各 全長 53.3 cm 像高 32.7 cm
○作品概要　　インドネシアの伝統的な影絵芝居ワヤン・クリに用いられる人形で、マハーバーラタに登場する双子の官女エムバンを表す。

16　○名　　称　　ワヤン・クリ　ドゥルユドノ　（わやん・くり　どぅるゆどの）
○時　　代　　21 世紀
○品　　質　　水牛の革、角、骨製、彩色
○寸 法 等　　1 体　全長 90.8 cm 像高 66.5 cm
○作品概要　　インドネシアの伝統的な影絵芝居ワヤン・クリに用いられる人形で、マハーバーラタの登場人物ドゥルユドノを表す。

17　○名　　称　　ワヤン・クリ　ドゥルソソノ　（わやん・くり　どぅるそその）
○時　　代　　21 世紀
○品　　質　　水牛の革、角、骨製、彩色
○寸 法 等　　1 体　全長 86.4 cm 像高 63.8 cm
○作品概要　　インドネシアの伝統的な影絵芝居ワヤン・クリに用いられる人形で、マハーバーラタの登場人物ドゥルソソノを表す。

18　○名　　称　　ワヤン・クリ　スンクニ　　（わやん・くり　すんくに）
○時　　代　　21 世紀
○品　　質　　水牛の革、角、骨、および竹製、彩色
○寸 法 等　　1 体　全長 69.7 cm 像高 48.3 cm
○作品概要　　インドネシアの伝統的な影絵芝居ワヤン・クリに用いられる人形で、マハーバーラタの登場人物スンクニを表す。

19　○名　　称　　ワヤン・クリ　ドゥルノ　（わやん・くり　どぅるの）
○時　　代　　21 世紀
○品　　質　　水牛の革、角、骨製、彩色
○寸 法 等　　1 体　全長 66.8 cm 像高 46.7 cm
○作品概要　　インドネシアの伝統的な影絵芝居ワヤン・クリに用いられる人形で、マハーバーラタの登場人物ドゥルノを表す。

20　○名　　称　　ワヤン・クリ　アスウォトモ　（わやん・くり　あすうぉとも）
○時　　代　　21 世紀
○品　　質　　水牛の革、角、骨製、彩色
○寸 法 等　　1 体　全長 71.2 cm 像高 47.7 cm
○作品概要　　インドネシアの伝統的な影絵芝居ワヤン・クリに用いられる人形で、マハーバーラタの登場人物アスウォトモを表す。

21　○名　　称　　ワヤン・クリ　サルヨ　（わやん・くり　さるよ）
○時　　代　　21 世紀
○品　　質　　水牛の革、角、骨、および竹製、彩色
○寸 法 等　　1 体　全長 69.3 像高 49.9
○作品概要　　インドネシアの伝統的な影絵芝居ワヤン・クリに用いられる人形で、マハーバーラタの登場人物サルヨを表す。

22　○名　　称　　ワヤン・クリ　カルノ　　（わやん・くり　かるの）
○時　　代　　21 世紀
○品　　質　　水牛の革、角、骨、および竹製、彩色
○寸 法 等　　1 体　全長 68.7 cm 像高 49.3 cm
○作品概要　　インドネシアの伝統的な影絵芝居ワヤン・クリに用いられる人形で、マハーバーラタの登場人物カルノを表す。

23　○名　　称　　ワヤン・クリ　ジュンクンマルデオ　（わやん・くり　じゅんくんまるでお）
○時　　代　　21 世紀
○品　　質　　水牛の革、角、骨および竹製、彩色
○寸 法 等　　1 体　全長 69.4 cm 像高 49.4 cm
○作品概要　　インドネシアの伝統的な影絵芝居ワヤン・クリに用いられる人形で、マハーバーラタの登場人物ジュンクンマルデオを表す。

(3) 編入 (455 件)

＜書跡＞(1 件)

1　○名　　称　　額字「春草廬」（がくじ　しゅんそうろ）
○作 者 等　　良尚法親王（1622～1693）筆
○時　　代　　江戸時代・17 世紀
○品　　質　　紙本墨書
○寸 法 等　　1 幅　本紙：縦 22.0 cm 横 60.5 cm
○作品概要　　料紙に「春草廬」と墨書する。江戸時代、河村瑞賢（1618～1699）が摂津淀川改修工事の際に建てた休憩所で、三渓園・柳瀬荘を経て昭和 34 年に当館に移築された庭園内茶室「春草廬」の扁額の草稿と推測される。この扁額も曼殊院門跡良尚法親王（1622～1693）の筆で、三渓が耳庵に贈ったもの。字は扁額と一致する。端に長方朱印（陽刻），奥に方朱印（陰刻・陽刻）の計３か所の押印がある。

＜彫刻＞(1 件)

2　○名　　称　　女　（おんな）
○作 者 等　　荻原守衛（1879～1910）作
○時　　代　　平成 22 年(2010)

○品　　質　ブロンズ製
○寸 法 等　1 躯　像高 98.2 ㎝
○作品概要　両手を後ろで組み、膝をついて上を向く裸婦像。目を閉じて眉を寄せる。本作品は、当館所蔵の荻原守衛「女」石膏原型（C-1593、重要文化財）を３Ｄ計測し、そのデータから原型を作成、それをもとに鋳型を製作し、本作品を鋳造した。

＜歴史資料＞(453 件)
※準歴史資料からの編入は 454 件であったが、このうち 1 件は準歴史資料数を減じ収蔵品総数に影響しないため、編入件数としては 453 件を計上。

3　○名　　称　（歴史資料）
○時　　代　江戸～大正時代・18～20 世紀
○品　　質　巻子、掛軸、折仕立等／紙本墨画、紙本著色等
○作品概要　いわゆる「歴史資料(P)」と称されている分野は、昭和 13 年(1938)旧歴史部の解体に伴い、当時のいずれの部署にも属せなかった資料群である。構成としては、江戸幕府からの引継ぎ資料や、当館の前身といえる書籍館、浅草文庫、内務省博覧会事務局収集資料も多く含まれる。平成 13 年度から、歴史資料を列品に編入する作業を行っており、本年度は 454 件を列品に編入する。その内容は種々多様で、今回編入にかかる中には重要文化財「今井八九郎関係資料」をはじめ、即位儀礼関係の器物類の模写、全国各地の金石文の拓本などが含まれる。

【京都国立博物館】(計 58 件)

(1) 購入(23 件)
＜絵画＞(6 件)

1　○名　　称　柿本人麿像（かきのもとひとまろぞう）
○作 者 等　狩野探幽筆・中院通村賛
○時　　代　江戸時代初期（1647 年・正保 4 年）
○品　　質　紙本墨画
○員　　数　1 幅
○寸　　法　縦 93.0cm　横 26.6cm
○作品概要　「歌聖」として崇拝された柿本人麿の像。直衣の衣紋線の流麗な描線、ぼかしを効かせた水墨描は絶妙で、身体のボリュウムが的確にあらわされている。狩野探幽（1602～1674）の優品で、抜群の技量がしめされている。
和歌の賛者、中院通村（1588-1653）は、後水尾院歌壇で指導的な立場をつとめた堂上歌人で、款記の「内大臣」から正保 4 年（1647）通村 60 歳時の書と分かる。探幽の落款の書風からみても、絵と書は同時期、探幽 46 歳の作とみてよい。
探幽のやまと絵の魅力をよくしめす作品であるとともに、中院通村という堂上人と探幽の直接的な交流をしめす貴重な作品であり、制作年が明確な点でも基準作といえる。

2　○名　　称　やすらい祭絵巻・牛祭絵巻（やすらいまつりえまき・うしまつりえまき）
○作 者 等　（やすらい祭絵巻）松村景文画　上田秋成書　（牛祭絵巻）河村文鳳画　上田秋成書
○時　　代　文化二年（1805）
○品　　質　紙本墨画淡彩
○員　　数　2 巻
○寸　　法　(やすらい祭)28.0×324.0cm　（牛祭）28.0×261.0cm
○作品概要　やすらい祭は、今宮神社で 4 月、都の疫病退散を祈って行われる祭。画を担当する松村景文（1779-1843）は、兄の呉春のあとを継ぎ、四条派の確立に貢献した。唱歌などを記す詞書は、大徳寺長老の獨菴宗譲、伴高蹊の養子で国学者の伴資規（?-1810）、上田秋成（1734-1809）の三者によるもの。
牛祭は、太秦の広隆寺で 10 月の夜に行われる祭。画を担当する河村文鳳（1779-1821）は、岸駒に学んだ京の絵師。巻頭に天龍寺長老の峻堂元機が祭の由来を書き、巻末に秋成が和歌を記す。
「没後 200 年記念 特別展観　上田秋成」で初公開となった作品であり、郷土の祭を描いた本作は、今後様々な角度からの展示活用が期待される。伴資規筆　「也須羅比花祭古謡考」（一冊）が附属。

3　○名　　称　観音図（かんのんず）
○作 者 等　陳賢筆　即非賛
○品　　質　絖本墨画淡彩
○員　　数　1 幅
○寸　　法　本紙　縦 31.5cm　横 47.4cm
○作品概要　本紙の中央右よりに縦方向に折れ目の跡が見え、元来帖仕立てのものを掛け幅に改装したものと推測できる。
重要文化財に指定される萬福寺蔵有の陳賢筆「観音画帖」（崇禎九年〈1636〉）は全 18 図であるが、一般に応化観音は三十三観音を通例とするので、当初は 33 図を一具のものとして陳賢が描いたのではないかと推定されている。
この画帖の図とほぼ同様の体裁の本図は、「観音画帖」の元初体裁の帖から分かれたものかと推定される。
即非が賛を加えた丁酉臘月は、明永暦 11 年（明暦 3、1657）の陰暦 12 月であるが、この年の 2 月 16 日に、即非は長崎に渡来し、崇福寺に入っており、この賛文は、『即非禅師全録』に、「題大士影寄湛禅座」として採られている。

4　○名　　称　鍾馗図（しょうきず）
○作 者 等　曾我蕭白筆　松波酊斎賛
○時　　代　江戸時代中期（1772 年・安永元年）
○品　　質　紙本墨画
○員　　数　1 幅
○寸　　法　縦 127.3cm　横 54.2cm
○作品概要　鍾馗は民間伝承、道教系の神で、邪気をはらう力があると信じられた。下方奥に剣がのぞく。太い濃墨線をざっくりと引いて身体を表わし、濃淡のぼかしによって若干の立体感を表わす。帽子や靴は、すばやいタッチの面と線で形づくられ、靴に濃墨を用いることによって下方に重心を置き、安定感を生んでいる。顔の表情は、何とも卑俗で暗い。
江戸中期、18 世紀の絵画界でとりわけ個性的な画風をしめした曾我蕭白（1730～81）の新出作品で、上部の賛は、松波酊斎（1718～93）による。酊斎は、京都の漢学者、伊藤東涯門の儒者で、文学をもって知られた。酊斎 55 歳、蕭白 43 歳のときの作で、蕭白と京都の儒者との交流をしめす貴重な一作である。

5　○名　　称　聖賢図押絵貼屏風（せいけんずおしえばりびょうぶ）
○作 者 等　狩野山雪筆　林羅山・堀杏庵賛
○時　　代　江戸時代初期（17 世紀前半）
○品　　質　紙本墨画淡彩
○員　　数　6 曲 1 隻
○寸　　法　各図　縦 74.7cm　横 33.7cm　　総寸　縦 121.0cm　横 276.0cm
○作品概要　張良、呂尚、李勣など中国の聖賢を各扇に描く。身体は抑揚のある中太の濃墨線で簡潔に、顔は極細の墨線によって精細に描き出される。いくぶん無表情で端正な顔立ち、吊り上った切れ長の眼など、他の山雪の人物画と同じ特徴をしめす。
狩野山雪（1590～1651）は、京狩野第２代で、初代山楽のあとを継いで江戸初期に活躍。同時に、きわめて個性的な絵師として、若冲や蕭白らとともに注目を集めている。上部の賛は、林羅山（1582～1657）・堀杏庵（1585～1642）による。羅山は江戸初期の徳川幕府の儒官。杏庵も儒

者で羅山の相談役であった。新出の優品であり、羅山・杏庵と山雪との関わりをしめす貴重な作例である。

6　○名　　称　伊勢物語絵巻（いせものがたりえまき）
　　○時　　代　江戸時代初期
　　○品　　質　紙本著色
　　○員　　数　2巻
　　○寸　　法　縦 31.5cm　長（上）2430.0cm　（下）3025.0cm
　　○作品概要　『伊勢物語』の全文を書写し、物語性のある章段を絵画化した「伊勢物語絵」の近世写本で、二巻からなる。この絵巻は、これまで紹介されることのなかった新出資料で、構成は完存する最古の写本として知られる小野家本と同じく、詞書は『伊勢物語』のいわゆる定家本系の百二十五段と一致し、このうち四十五段が絵をともなっている。本作品は江戸初期の制作であるが、近世には広く流布する「嵯峨本伊勢物語絵」（慶長13年・1608初版）の図様に影響されない古体を示し、物語の基本モチーフに加え、人物、植物、室内調度等、多くの景物が付加され、絵画的な豊かさをもつ点に特色がある。

＜書跡＞(2件)

7　○名　　称　李清照「怨王孫」詞（りせいしょう「えんおうそん」し）
　　○作 者 等　沈尹默筆
　　○品　　質　絖本墨書
　　○員　　数　1幅
　　○寸　　法　本紙　縦 121.8cm　横 18.4cm
　　○作品概要　沈尹默（1883―1971）は、浙江呉興の人。新文化運動の推進者として知られ、北京大学教授の時に、李大釗や陳独秀らを大学に迎い入れ、自らも雑誌「新青年」の編集者として活躍、のち学長を務めた。また詩詞と書法の分野でも優れ、上海に移居してからは、専ら書家として名を成した。
　本作は宋の李清照（号は易安居士）の「怨王孫」詞を行草書体で書す。
　早年に碑を学び、中年以後、帖を学び、晩年は、遍く北魏、隋唐の碑版を臨摸したという沈尹默は、碑学派全盛の近代にあって、帖学派の中興者と近年とみに注目されている。本作の清秀円潤な書風はまさにこうした評価を裏付ける。

8　○名　　称　玉篇巻第九残巻（自嗣字至歎字）　紙背金剛界私記（ぎょくへんまきだいきゅうざんかん（しじよりきょうじにいたる）しはいこんごうかいしき）
　　○時　　代　唐時代　7～8世紀（紙背　金剛界私記　平安時代中期　治安元年＜1021＞書写）
　　○品　　質　紙本墨書
　　○員　　数　3紙
　　○寸　　法　縦 27.1cm　全長（3紙）168.7cm
　　○作品概要　『玉篇』は、中国の漢字字書で、南朝梁の大同年間（535―46）、顧野王によって著され、もと三十巻からなるもの。この残巻は、現在、早稲田大学の所蔵である国宝『玉篇』巻第九から遅くとも江戸時代に離れたものであり、「冊部第一百八　凡四字」の最初の「冊」の字釈の途中から「欠部第一百十二　凡一百三字」の第四十字目の「歎」字までである。書写年代は唐時代7世紀から8世紀と見られる所謂「唐鈔本」であり、紙背は治安元年（1021）八月に書写された『金剛界私記』の一部であることがわかる。中国では既に散逸してしまい、なお且つわが国にのみ伝存している写本で、「原本玉篇」と云われ、頗る貴重かつ重要な写本となっている。

＜金工＞(13件)

9　○名　　称　（重要文化財）　金銅錫杖頭（こんどうしゃくじょうとう）
　　○時　　代　鎌倉時代
　　○品　　質　銅・鋳造、鍍金
　　○員　　数　1柄
　　○寸　　法　高 19.8cm　輪径 8.6cm
　　○作品概要　左右各二か所に括りをつけた、鎌倉時代の典型的な形状の輪をもつ錫杖。輪頂には蕨手の間に宝珠を戴き、上段の括りに層塔を立て、下段の括り近くに三日月形（金剛牙）を表す。輪の下端の蕨手間に五輪塔、蕨手上に浄瓶を置く。穂部は蓮弁を二条隆帯で約した四節からなり、各々の表現をまったく違える点が個性的である。また左右各二個を遺す遊鐶も、木瓜形の独特の形状を呈している。注目すべきことに、細部までほとんど形制を同じくした錫杖が存在し（世界救世教蔵、重要文化財）、両者が同一工房で製作されたものと考えられる。精緻をきわめた鋳出と彫金の作行きで、鎌倉時代の仏具製作の具体的な状況まで想像させしめる重要作品である。

10　○名　　称　金銅五鈷杵（こんどうごこしょ）
　　○時　　代　鎌倉時代（13世紀）
　　○品　　質　銅・鋳造、鍍金
　　○員　　数　1口
　　○寸　　法　全長 17.7cm　把長 5.7cm　鈷張 5.5cm
　　○作品概要　密教修法で、行者が修行を妨げる煩悩等を砕破し、本尊と同体となって修法を完成させるために、掌中に握るべき法具。脇鈷基部に鬼面を彫り出し、また逆刺を禽獣の嘴形とするという特異な造形は鎌倉時代の新機軸の表現で、同種の作例はきわめて少ない。また把の二本の約条に綾杉状の刻線を施し、蓮弁を子弁のない素弁とするという表現は、細見美術館蔵の請来様の金銅五鈷杵（重美）を踏襲している。添状によると明治初年まで比叡山横川の松禅院に伝来し、「弘法大師将来」といわれてきたもので、これは前述の形態的特色とも符合し、密教法具の「将来様」という形制の一端が天台宗側でも伝承されてきたことを窺わせ興味深い。

11　○名　　称　金銅種子五鈷鈴（こんどうしゅじごこれい）
　　○時　　代　鎌倉時代（14世紀）
　　○品　　質　銅・鋳造、鍍金
　　○員　　数　1口
　　○寸　　法　高 19.4cm　把長 11.5cm　鈷張 6.5cm
　　○作品概要　密教修法で、諸仏を驚覚させ道場へ勧請するため、行者が実際に振り鳴らす鈴。把中の鬼目を大きく膨らむ鬼面とし、脇鈷の基部にも鬼面を現す。脇鈷の張りは強いものの、把と鈴身の蓮弁表現に硬さを認め、鎌倉時代後期の製作とみられる。鈴身には、円相内にカーン（不動）、バク（釈迦）、マン（文殊）、アン（普賢）、バン（金剛界大日）の種子を表す。通例は金剛界もしくは胎蔵界の四仏ないし五仏を表し、本品のごとく釈迦如来と両脇侍という顕教の仏菩薩を表すのは全くの異例に属す。一つの解釈として、これを十三仏のうちの初七日、二七日、三七日、四七日と十三回忌の追善を司る仏とも考えられる。中陰・年忌に十三仏を導入したのが真言宗で、鎌倉時代に変質をきたしつつあった真言密教の事情を物語る重要作例ということもできる。

12　○名　　称　線刻水分女神鏡像（せんこくみくまりじょしんきょうぞう）
　　○時　　代　平安時代（12世紀）
　　○品　　質　銅・鋳造、彫金
　　○員　　数　1面
　　○寸　　法　径 8.8cm　縁高 0.2cm
　　○作品概要　素鈕、山形鈕で断面台形の周縁がめぐり、界圏をもたないいわゆる宋鏡式鏡を鏡胎とし、鏡面に女神の姿をごく細い毛彫で表す。近い図像の女神が男神二柱を従えた姿を描いた鏡像が金峯山経塚から出土しており（重文・東京国立博物館蔵）、それには、「子守三所」との神名も線刻されるので、本鏡像も金峯山経塚から出土した品で、子守明神、すなわち吉野水分神を表したものである可能性がきわめて高い。なお鏡胎は、12

世紀前半に製作された楓枝蝶鳥鏡であり、線刻はその特徴から、これより遅れる平安時代末期、12 世紀後半に施されたものと考えてよい。

13　○名　　称　銅巻龍獣面文花瓶（どうまきりゅうじゅうめんもんけびょう）
　　○時　　代　室町時代（15～16 世紀）
　　○品　　質　銅・鋳造
　　○員　　数　1 口
　　○寸　　法　高 28.4cm　口径 12.3cm　高台径 13.3cm
　　○作品概要　中国の古代銅器、尊に由来する形の花瓶。下膨れの胴から、やや長く太めの頸がゆるやかに口を広げながら立ち上がる。頸の獣面以外を素文とする代わりに、頸に巻きつくように写実的な龍を耳とする。このような巻龍形の耳は中国銅器に見出すことができず、中国から舶載された唐物銅器を元に、日本で製作された擬唐物銅器とみなされる。巻龍を飾った仏具として知られる聖衆来迎寺や唐招提寺の三具足がいずれも室町時代後半には伝来していたことから推して、本品の製作時期も室町時代とみて差し支えない。

14　○名　　称　銅獣面文管耳瓶（どうじゅうめんもんくだみみへい）
　　○時　　代　南宋～元時代（13 世紀）
　　○品　　質　銅・鋳造
　　○員　　数　1 口
　　○寸　　法　高 20.9cm　口径（長径）6.8cm　胴径（長径）11.5cm　耳間幅 10.0cm
　　○作品概要　扁平で下の胴からゆるやかに立ち上がった頸のくびれ部に管状の耳を付けた瓶。南宋～元時代の窖蔵遺跡から出土する倣古銅器群にしばしば含まれる器形で、中国の銅器研究では貫耳瓶と呼ばれる。本品は全面に５段の文様帯を設け、上より雨龍文、獣面文（饕餮文）、変形龍文、S 字渦巻四菱文、波文を表している。類品中でも、頸が太く全面に細密な文様を表すという古様をみせており、南宋から元時代前期に遡る品と思われる。表面に黒漆を塗っており、日本へ舶載されてから、書院飾あるいは茶の湯の花生や灰立などとして、相当に長期間用いられてきたものとみられる。

15　○名　　称　銅鏡（どうきょう）
　　○時　　代　1. 金または元時代（11～14 世紀） 2. 高麗時代（11～13 世紀） 3. 遼～金時代（10～11 世紀） 4. 高麗または金時代（11～13 世紀） 5. 高麗または金時代（11～13 世紀） 6. 南宋時代（12～13 世紀） 7. 元～明時代（14～15 世紀）
　　○品　　質　銅・鋳造
　　○員　　数　7 面
　　○寸　　法　1. 径 14.5cm　縁高 0.15cm　2. 径 13.4cm　縁高 0.25cm　3. 径 19.1cm　縁高 1.0cm　4. 径 21.5cm　縁高 0.6cm
　　5. 径 23.6cm　縁高 0.7cm　6. 径 18.2cm　縁高 0.3cm　7. 径 15.3cm　縁高 0.8cm
　　○作品概要　中国、朝鮮の銅鏡、７面からなる収集品。
　　1.四童花枝七花鏡　2.菊花唐草鏡　3.花唐草四龍鏡　4.龍樹殿閣鏡　5.双龍鏡　6.湖州六花鏡　7.「喜生貴子」鏡

16　○名　　称　銅牡丹文香炉（どうぼたんもんこうろ）
　　○時　　代　元～明時代（14～15 世紀）
　　○品　　質　銅・鋳造
　　○員　　数　1 口
　　○寸　　法　高 21.3cm　口径 28.2cm
　　○作品概要　大型の円形香炉で、胴には規則的に展開する牡丹唐草を陽鋳する。三脚は丸みを帯び丈の短い逆瓢箪形をなす。口は断面箱形の縁帯をなし、その直下に雲文と五弁花文を交互に表している。
南宋～元時代の龍泉窯青磁にこれときわめて近い香炉がいくつも知られ、とくに韓国中央博物館所蔵品は、葉の形が酷似する。元時代ないし明時代初期頃に製作されたものとみられる。なお底には篆字で「官所」と陽鋳銘がある。明治二年の箱書に、明の帰化人で尾張御深井窯で活動した陳元贇（1587-1671）が来日に際に明から持ち来たったとの将来譚が記される。そのまま信を置く訳にはいかないが、近世以前の舶載であることは間違いない。

17　○名　　称　銅蟠螭文管耳瓶（どうばんちもんくだみみへい）
　　○時　　代　元時代（13～14 世紀）
　　○品　　質　銅・鋳造
　　○員　　数　1 口
　　○寸　　法　高 22.0cm　口径（長径）6.6cm　同径（長径）11.1cm　耳間幅 9.8cm
　　○作品概要　下膨れの胴からゆるやかに立ち上がった頸のやや下寄りに管状の耳を付けた瓶。上・下２段の文様帯を設け、上段に獣面文（饕餮文）、下段に蟠螭文（絡み合う龍文）を表し、脚に巴文（周代銅器の円渦文に由来）と井桁文（同じく夔文に由来）を表す。管耳瓶は、1323 年頃に中国江南の慶元（寧波）を出港し博多へ向かう途中、朝鮮半島南西部、新安沖で沈没したジャンク船の積載銅器群の中にみられ、本品はそれよりも形態、文様ともに古い時期のもの。日本へ舶載された管耳瓶は、中世には書院飾、近世には茶の湯の花生や灰立などとして珍重された。本品もその外観の古色から、相当の長期間、茶の湯で用いられてきたものらしい。

18　○名　　称　銅雷文菱文管耳瓶（どうらいもんひしもんくだみみへい）
　　○時　　代　元時代（13～14 世紀）
　　○品　　質　銅・鋳造
　　○員　　数　1 口
　　○寸　　法　高 18.6cm　口径（長径）4.9cm　胴径（長径）8.3cm　耳間幅 7.6cm
　　○作品概要　扁平な下膨れの胴からやや長く立ち上がった頸のくびれ部に沿って管状の耳を付けた瓶。３段の文様帯を設け、上から獣面文（饕餮文）、雷文菱文、脚に巴文（周代銅器の円渦文に由来）と井桁文（同じく夔文に由来）を表す。管耳瓶は、1323 年頃に中国江南の慶元（寧波）を出港し博多へ向かう途中、朝鮮半島南西部、新安沖で沈没したジャンク船の積載銅器群の中にみられる。本品は頸上半を素文とする点で新安船出土品と近いが、形態はそれより先行する。江戸時代と思しい共箱が添い、蓋表に「古銅灰立　楕圓形」、蓋裏に「から物茶灰立　くた耳地紋」と墨書があって、茶灰立として用いられたことが判明する点でも貴重である。

19　○名　　称　銅牡丹文鉢（どうぼたんもんはち）
　　○時　　代　明時代（16～17 世紀）
　　○品　　質　銅・鍛造、彫金
　　○員　　数　1 口
　　○寸　　法　高 7.4cm　口径 12.9cm　胴径 14.6cm
　　○作品概要　口がすぼまり、球形に膨らむ平底鉢で、口縁直下に雷文帯、胴に牡丹唐草文を粗い蹴彫りで表す。唐草に細かい網目状の表現があり、文様の間地には中国彫金独特の石目状鏨を打つ。底には如意頭文をめぐらし、「宣」字を刻む。牡丹花は獣面に近い表現になるが、類似した獣面文が明代の倣古銅器にみられる。また牡丹唐草の図様の細部表現は、明時代の漆工の沈金表現と共通する。以上から、本品の製作年代は明時代後期まで遡ると考えうる。表面に塗布された黒漆が残り、日本で長期間用いられたことを窺わせる。共箱の蓋に「唐もの　沈金彫　古保志」とあることから、日本に舶載されて以降、建水として用いられたことがわかる。

20　○名　　称　銅唐草文鉢（どうからくさもんはち）
　　○時　　代　明時代（17 世紀）
　　○品　　質　銅・鍛造、彫金

○員　　数　1口
○寸　　法　高 7.4cm　口径 15.3cm　底径 9.0cm
○作品概要　銅牡丹文鉢に比べ、口が垂直に立つ半球形をなし、やや後出的な器形。口縁直下に羽状鋸歯文を連ね、胴に唐草文をやや粗い蹴彫りする。唐草の網目状表現や、間地の布目状鏨は明時代金工品の特色である。茎に円形鏨を打ち連ねた唐草表現は、京都上賀茂神社蔵の寛永五年（1628）奉納の釣灯籠火袋の透彫り唐草や、同年造営の増上寺崇源院霊廟唐門（現鎌倉・建長寺唐門）の唐草透彫り飾金具にみられる。これは江戸初期の飾金具ではきわめて珍しい彫金表現で、本品のような同時期の中国金工の彫金図様と何らかの影響関係があった可能性が高い。以上から、本品は明時代後期、17 世紀前半頃に製作されたものと想定される。

21　○名　　称　銅稜胴双耳壺（どうりょうどうそうじつぼ）
○時　　代　ベトナム（16～18 世紀）
○品　　質　銅・鋳造
○員　　数　1口
○寸　　法　高 10.2cm　口径 13.8cm　胴径 18.9cm
○作品概要　扁平で算盤珠形の胴に、やや上広がりの長い口が立ち上がり、断面方形の環状耳を付ける。肩には２条の細い隆帯をめぐらし、間に七曜文風の珠文を表す。製作技法も独特で、縦２分割鋳型を組み合わせた鋳造品で、表面に鋳皺が細かく残る。以上のごとく特異な形をみせる本品は、ベトナムの少数民族が用いた炊飯用の釜で、今日でも同地の骨董店などで時折みられる。本品は表面に黒漆が塗られ、また箱の蓋表貼紙に「唐物古銅みゝ附建水」、身貼紙に「唐物耳付建水」と記されるように、おそらく近世前半を前後する時期に日本に舶載され、南蛮物の建水として長く用いられてきたものと推測される。

＜漆工＞(1 件)
22　○名　　称　花唐草蒔絵交椅（はなからくさまきえこうい）
○時　　代　江戸時代　17 世紀半ば
○品　　質　木製、蒔絵、螺鈿
○員　　数　1基
○寸　　法　高 66.6cm　巾 37.5cm　奥行 52.5cm
○作品概要　折畳式の椅子。背もたれに挽物製の壺形列柱と連続アーチを組み合わせ、背もたれの上端左右に楯をもつ獅子の彫刻をつけるのは、17 世紀前半のオランダの様式であり、西洋製の木地を京都へ持ち込み、蒔絵と螺鈿で飾った異色の家具である。精緻な石畳文、七宝花菱、花唐草などをあしらい、脚部の側面には薄肉高蒔絵もまじえて華やかな鳳凰を描く。蒔絵螺鈿の様式から、1640 年代のオランダ東インド会社関係者による特注品と思われる。

＜考古＞(1 件)
23　○名　　称　銅板押出三尊仏（どうばんおしだしさんぞんぶつ）
○時　　代　飛鳥時代　7 世紀
○品　　質　銅鍛造・金貼
○員　　数　1面
○寸　　法　縦 27.7cm、横 19.3cm
○作品概要　この押出仏は飛鳥時代末頃に大和地域で製作されたもの。薄い銅板を原型となる半肉彫の銅製仏像に押し当てて叩き、三尊仏を浮き立たせたものである。全体は不整形な長方形の銅板で、厚さは 0.3ｃｍほどの非常に薄いもの。銅銹に覆われ、暗緑色を呈するが、一部には金箔（あるいは鍍金）の露出が見られる。銅板の四隅と短辺長辺の縁辺部には合計 14 個の小円孔を持っており本体を木製光背に固定した釘跡と推定される。この作品は奈良県御所市當麻寺奥院に伝来する重要文化財の「押出銅造三尊仏」と原型を同じくする兄弟の作品である。その関係から製作時期や作られた地域、その技法なども推定できる。新出作品ながらきわめて重要な作品である。

(2)寄贈(35 件)
＜絵画＞(14 件)
1　○名　　称　紅葉双鹿図（もみじそうろくず）
○作 者 等　酒井抱一筆
○時　　代　江戸時代後期
○品　　質　紙本着色
○員　　数　1幅
○寸　　法　縦 71.1cm　横 34.9cm
○作品概要　姫路御典医梅田家伝来

2　○名　　称　竹雀図（ちくじゃくず）
○作 者 等　酒井抱一筆
○時　　代　江戸時代後期
○品　　質　紙本墨画
○員　　数　1幅
○寸　　法　縦 85.2cm　横 26.2cm
○作品概要　姫路御典医梅田家伝来

3　○名　　称　富士山寿老人図（ふじさんじゅろうじんず）
○作 者 等　鈴木其一筆
○時　　代　江戸時代後期
○品　　質　絹本着色
○員　　数　1幅
○寸　　法　縦 94.2cm　横 32.2cm
○作品概要　姫路御典医梅田家伝来

4　○名　　称　正月飾りに白梅・箒に橙図（しょうがつかざりにはくばい・ほうきにだいだいず）
○作 者 等　鈴木其一筆
○時　　代　江戸時代後期
○品　　質　紙本淡彩
○員　　数　2幅
○寸　　法　各 縦 98.1cm　横 29.1cm
○作品概要　姫路御典医梅田家伝来

5　○名　　称　山水図（さんすいず）
○作 者 等　胡遠筆
○時　　代　中国・清時代（19 世紀）
○品　　質　紙本墨画淡彩
○員　　数　1幅

○寸　　法　縦 105.8cm　横 30.0cm
○作品概要　清末の文人画家の胡遠（1823-1866）が画いた淡彩の山水図で、森田皆山なる人物に贈ったもの。胡遠は、字を公寿、号を瘦鶴、または横雲山民といい、華亭（現上海・松江）の人。売画で生計をたてていたが、幕末以降、上海に居住した日本人をとおして、日本での人気は高かった。住友総本社常務理事にして歌人の川田順（1882-1966）の旧蔵品。

6　○名　　称　雪中椿図（せっちゅうつばきず）
○作 者 等　谷道霞嶂筆
○時　　代　昭和 17 年（1942）
○品　　質　紙本墨画淡彩
○員　　数　1 幅
○寸　　法　縦 33.5cm　横 39.0cm
○作品概要　筆者である谷道霞嶂の経歴は詳らかではないが、川田順とは交流が深く、しばしば川田の日記などにその名がみえる。『塔影』昭和 8 年（1933）11 月号には、谷道の個展開催の記事が載る。それによると山水花鳥を得意とした文人画家らしく、本図も雪を冠る椿を、滲みをいかした淡彩で簡略に画く。川田順旧蔵品。

7　○名　　称　聴雨図（光悦所作赤楽雲紋銘曰山乃尾）　（ちょううず（こうえつがつくるところのあからくうんもんめいにいわくやまのお））
○作 者 等　谷道霞嶂筆
○時　　代　近代（20 世紀）
○品　　質　紙本淡彩
○員　　数　1 幅
○寸　　法　縦 31.2cm　横 36.0cm
○作品概要　「しめやかに、しくれふりくる、おとせまり」で始まる「石斎」による和歌に、「山乃尾」の銘を有する本阿弥光悦作の赤楽雲紋の茶碗の図を添えた一幅。楽焼茶碗の「山乃尾」という銘は、大正 14 年（1925）に金沢で料亭「山の尾」を開いていた太田多吉が、星岡茶寮の開店祝いとして北大路魯山人に譲ったことに因む。本図は川田順旧蔵品で、おそらくは筆者の谷道霞嶂と川田は、星岡茶寮で魯山人との交流を深めたのであろう。

8　○名　　称　墨葡萄図（すみぶどうず）
○作 者 等　天龍道人筆
○時　　代　江戸時代(19 世紀)
○品　　質　紙本墨画
○員　　数　1 幅
○寸　　法　縦 129.6cm　横 41.0cm
○作品概要　墨一色で葡萄を画く。筆者の天龍道人（1718-1810）は、肥前（佐賀県）鹿島の出身で、熊代熊斐に師事。後半生は信州（長野県）諏訪湖のほとりに居をかまえ、諏訪湖に端を発する天龍川に因んで自号とした。墨葡萄は宋末元初の画僧・温日観が創始した文人画の主題で、天龍道人はその名手として知られていた。本図は川田順の旧蔵品で、川田は宗良親王の事績を調査するために度々、長野・伊那の大河原（現大鹿村）を訪れていた。

9　○名　　称　木蓮に牡丹図（もくれんにぼたんず）
○作 者 等　杉山琴筆　杉山三郊賛
○時　　代　大正 9 年（1920）
○品　　質　絹本著色
○員　　数　1 幅
○寸　　法　縦 132.8cm　横 40.8cm
○作品概要　本図の筆者である杉山琴は幕末明治期の儒者・川田甕江（1830-1896）の長女で、甕江門下の漢学者・杉山令吉（1855-1945 号は三郊）に嫁いだ。画業においては、明治・大正期の女流南画家・野口小蘋（1847-1917）に師事し、「湘碧女史」の号を用いて花鳥をよくした。琴の異母弟にあたる川田順の旧蔵品。

10　○名　　称　四君子書画合作（しくんししょががっさく）
○作 者 等　野口小蘋、野口小蕙、杉山琴、竹軒閑人筆　杉山三郊賛
○時　　代　大正 2 年（1913）
○品　　質　絖本墨画
○員　　数　1 幅
○寸　　法　縦 122.7cm　横 35.8cm
○作品概要　大正 2 年（1913）に北大路魯山人が主宰する星岡茶寮で、野口小蘋、小蕙の親子、杉山三郊、琴夫婦に「竹軒閑人」が会合した際の作品。小蘋は梅、小蕙は石、琴は蘭、「竹軒閑人」は竹をそれぞれ画き、三郊が着賛する。四君子とは、蘭、竹、菊、梅の四種の草木を指すが、本作では菊は石に替えある。「竹軒閑人」なる人物は未詳だが、大正期の師弟とその家族による文人雅集の一端を示す作品として興味深い。

11　○名　　称　水仙に仏手柑図（すいせんにぶっしゅかんず）
○作 者 等　野口小蘋筆
○時　　代　近代（20 世紀）
○品　　質　紙本墨画淡彩
○員　　数　1 幅
○寸　　法　縦 27.5cm　横 35.7cm
○作品概要　野口小蘋による花籠図。水仙と仏手柑を盛った籠を草略な筆致で画く。本紙左下の白文方印「親印」と朱文方印「小蘋」が鈐されている。川田順旧蔵品。

12　○名　　称　雪中花鳥図（せっちゅうかちょうず）
○作 者 等　幕田誠雲筆
○時　　代　大正 4 年（1915）
○品　　質　紙本墨画淡彩
○員　　数　1 幅
○寸　　法　縦 138.3cm　横 41.4cm
○作品概要　雪降るなかで椿が咲く断崖に集う二羽のオナガの姿を画く。「豊年献瑞」との題から、「雪は豊年の瑞」を絵画化した作であることがわかる。幕田誠雲（1864-1937）は、栃木県宇都宮の出身の南画家。小室翠雲に師事した。

13　○名　　称　川田順関係文芸資料（かわだじゅんかんけいぶんげいしりょう）
○時　　代　昭和時代(20 世紀)
○品　　質　紙本墨画淡彩、紙本墨画、紙本墨書等
○員　　数　一括
○寸　　法　(1)縦 33.0cm　横 24.3cm　(2)縦 27.0cm　横 24.0cm　(3)縦 27.0cm　横 24.0cm　(4)縦 24.0cm　横 27.0cm
(5)各 縦 24.0cm　横 35.7cm　(6) 縦 27.0cm　横 24.0cm　(7) 縦 27.0cm　横 24.0cm　(8)縦 21.0cm　横 18.0cm

(9)縦 30.0cm　横 42.0cm

○作品概要　戦前から戦後にかけて、歌人・川田順が北海道の川湯温泉や鹿児島県の野間嶽など日本各地に旅行した際に贈答した書画色紙などを中心とする資料群。その内訳は以下の通り。(1) 川田順氏肖像めくり　昭和 31 年 (1956)　1 枚、(2) 色紙「川湯温泉の高山植物」「暁堂」落款　1 枚、(3) 色紙「川湯温泉」「暁堂」落款　1 枚、(4) 色紙「野間嶽」「尚義」落款　昭和一八年 (1943)　1 枚、(5) 書画帖　「景信」等落款　1 帖、(6) 色紙「偈頌」「昌光」落款　1 枚、(7) 色紙「かきてなほ」(蛸壺)「孤蝶」落款　1 枚、(8) 色紙「ころころと」(ひきのこゑ)　1 枚、(9) 俳句「菜の花の」「松杉を」めくり　1 枚。

14　○名　　称　二十四孝図屏風 (にじゅうしこうずびょうぶ)
○時　　代　江戸時代前期 (17 世紀)
○品　　質　紙本墨画着色
○員　　数　6 曲 1 隻
○寸　　法　各図　縦 96.2cm　横 38.6cm　総寸　縦 121.5cm　横 282.0cm
○作品概要　中国の親孝行の話を二十四話あつめた「二十四孝」のうち、各扇の上下に二図ずつ、董永・元覚、王褒・黄香、蔡順・ぜん子、ゆ黔婁・呉猛、張孝張禮兄弟・郭巨、陸績・丁蘭の十二話が絵画化されている。残念ながら、保存状態は悪い。もう一隻あって、一双で二十四孝がそろっていたのだろう。画風から、狩野派を学んだ画家による作品とみられるが、特定は難しい。桂宮家旧蔵品。

＜書跡＞(8 件)

15　○名　　称　李白「聞王昌齢左遷龍標遙有此寄」詩書 (りはく「おうしょうれいのりゅうひょうにさせんせらるるをききはるかにこのきあり」ししょ)
○作 者 等　王震筆
○時　　代　中国・民国時代 (20 世紀)
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　1 幅
○寸　　法　縦 134.5cm　横 39.5cm
○作品概要　近代上海の実業家にして書画家としても著名な王震 (1867-1938) の行書幅。李白の七言絶句「聞王昌齢左遷龍標遥有此寄」を書写する。王震は、字を一亭、号を白龍山人といい、浙江呉興の人。日清汽船社長などを経て上海の実業界を取り仕切る一方、親日家でもあった。本作は呉昌碩を継ぐ海上派の文人書画家にふさわしく、流麗で筆力のある書体をみせる。年記を欠くものの、「川田先生属」との為書からは、ともに実業と芸術に長けた者どうし、肝胆相照らす交友の様を彷彿させよう。

16　○名　　称　詩書 (琵琶湖) (ししょ (びわこ))
○作 者 等　鄭孝胥筆
○時　　代　中国・近代 (20 世紀)
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　1 幅
○寸　　法　縦 39.6cm　横 36.4cm
○作品概要　筆者の鄭孝胥 (1860-1938) は清末の官僚で、晩年は満州国の国務院総理 (首相) をつとめた。書家としても知られた。字は太夷、号は蘇戡、蘇盦など。本作は年記を欠くが、川田順の神戸・御影の邸宅「山海居」での宴席の後に、鄭が滋賀の琵琶湖の景観を織り込んで詠んだ七言律詩を書したもの。酔後の筆ゆえに、鄭の字体にある本来の力強さをうかがわせながらも、筆勢が和らいだ書となっている。

17　○名　　称　芳山七絶書 (ほうざんしちぜつしょ)
○作 者 等　片口江東筆
○時　　代　昭和時代 (20 世紀)
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　1 幅
○寸　　法　縦 137.2cm　横 31.2cm
○作品概要　吉野山にまつわる七言絶句を書写する。吉野山は、川田順が歌人としての足跡に関心を寄せていた後醍醐天皇が崩御した地であり、歌中にもその陵墓・延元陵を詠みこむ。本作を書した片口江東 (1872-1967) は、富山県小杉出身の漢詩人・政治家。本名安太郎。小杉の味噌・醤油醸造業を営む名家で、小杉町長、県議会議長などを歴任。木蘇岐山の漢詩結社の月三吟社に参加した。

18　○名　　称　山部赤人歌書 (やまべあかひとのかしょ)
○作 者 等　山岸荷葉筆
○時　　代　昭和時代 (20 世紀)
○品　　質　絖本墨書
○員　　数　1 幅
○寸　　法　縦 135.5cm　横 37.5cm
○作品概要　山部赤人の「不尽の山を望る歌」を万葉仮名で書写した一幅。筆者の山岸荷葉 (1876-1945) は近代の小説家。本名惣次郎。早稲田大学文学科卒。坪内逍遥、そして尾崎紅葉に師事した硯友社の同人で、代表作に『紺暖簾』。書もよくした。

19　○名　　称　和歌短冊(梅) (わかたんざく (うめ))
○作 者 等　伝山本梅逸筆
○時　　代　江戸時代 (19 世紀)
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　1 幅
○寸　　法　(本紙) 縦 35.6cm　横 5.5cm　(全体) 縦 126.0cm　横 15.2cm
○作品概要　「梅」と題した和歌一首を書した短冊。江戸後期に活動した尾張の文人画家で花鳥画を得意とした山本梅逸 (1783-1856) の落款があるが、その筆跡は他の基準作とはやや趣を異にしており、伝称作の可能性がある。

20　○名　　称　三十六歌仙和歌色紙貼交屏風 (さんじゅうろっかせんわかしきしはりまぜびょうぶ)
○時　　代　江戸時代 (18 世紀)
○品　　質　彩牋墨書
○員　　数　6 曲 1 隻
○寸　　法　縦 133.1 ㎝　横 362.8 ㎝ (色紙は各縦 20.1 ㎝　横 18.1 ㎝で計 36 枚)
○作品概要　柿本人麻呂や紀貫之など、のちに三十六歌仙と称された歌人たちの詠歌を歌合形式とし、色紙一枚ずつに書いたもの。色紙はそれぞれ別の筆者による寄合書きで、右上に塗布する札に記された人名を特定してゆくと、享保年間 (1716～1735) の制作と考えられる。全体に破損が多く、また歌仙絵のように肖像はないものの、藤原元真のように本文系統の推移を知るうえで興味ぶかい歌もふくまれている。

21　○名　　称　新三十六歌仙和歌色紙貼交屏風 (しんさんじゅうろっかせんわかしきしはりまぜびょうぶ)
○時　　代　江戸時代 (17 世紀)
○品　　質　彩牋墨書
○員　　数　6 曲 1 隻
○寸　　法　縦 132.9 ㎝　横㎝ 363.3 ㎝ (色紙は各縦 18.4 ㎝×横 16.9 ㎝で計 36 枚)
○作品概要　後鳥羽院や式子内親王など、のちに新三十六歌仙と称された歌人たちの詠歌を歌合形式とし、色紙一枚ずつに書いたもの。色紙はそれぞれ別の

筆者による寄合書きで、右上に塗布する札に記された人名を特定してゆくと、延宝３年（1675）から同７年の間に制作されたと考えられる。全体に破損が多いものの、フェリス女学院大学附属図書館の所蔵する画帖のように、歌合左右の組み合わせが異なるものも存在し、対比検討するうえで意義深い。

22　○名　　称　古活字版日本書紀神代巻　下（慶長勅版）（こかつじばんにほんしょきじんだいのまき　げ（けいちょうちょくはん））
　　○時　　代　桃山時代　慶長４年（1599）
　　○品　　質　紙本木版
　　○員　　数　1冊
　　○寸　　法　縦 28.9㎝　横 21.9㎝
　　○作品概要　文禄から寛永年間（1592～1644）にかけて刊行された、いわゆる古活字版のうち、この『日本書記神代巻』は後陽成天皇（1571～1617）の命により慶長４年（1599）に刊行された勅版である。見返しの「日本書紀／慶長己亥／季春新刊」という巨大な木記は本来、巻上にあったもので、いつのころか巻下に移されたのであろう。完本ではないが、発行部数は百部程度といわれており、じつに貴重な文化財が博物館の収蔵品に加わったといえる。

＜金工＞(4件)

23　○名　　称　刀　銘 帝室技藝員月山貞一七十八歳作(花押)　大正二年七月吉日 以相州鎌倉古傳 為永田兵太郎君　附 軍刀拵
　　（かたな　めい　ていしつぎげいいんがっさんさだいちななじゅうはっさいさく（かおう）　たいしょうにねんしちがつきちじつ　そうしゅうかまくらこでんをもってす　ながたへいたろうくんのため　つけたり　ぐんとうこしらえ）
　　○時　　代　大正時代
　　○品　　質　鉄・鍛造
　　○員　　数　1口
　　○寸　　法　長さ 68.4cm　反り 1.5cm　拵長 95.5cm
　　○作品概要　鎬造、庵棟。小鋒。鍛えは小板目、地沸厚い。刃文は互の目に丁子交じる。拵は銀装。

24　○名　　称　刀　銘 帝室技藝員月山貞一七十八歳謹作(花押)　大正二年十一月日 以鎌倉古傳 為永田敏夫君守護
　　（かたな　めい　ていしつぎげいいんがっさんさだいちななじゅうはっさいきんさく（かおう）　たいしょうにねんじゅういちがつひ　かまくらこでんをもってす　ながたとしおくんしゅごのため）
　　○時　　代　大正時代
　　○品　　質　鉄・鍛造
　　○員　　数　1口
　　○寸　　法　長さ 67.3cm　反り 1.5cm
　　○作品概要　鎬造、庵棟。小鋒。鍛えは小板目、地沸厚い。刃文は互の目に丁子交じる。

25　○名　　称　刀　銘 帝室技藝員月山貞一七十八歳謹作(花押)　大正二年十二月日 以備前一文字傳 為永田亀雄君守護
　　（とう　めい　ていしつぎげいいんがっさんさだいちななじゅうはっさいきんさく（かおう）　たいしょうにねんじゅうにがつひ　びぜんいちもんじでんをもってす　ながたかめおくんしゅごのため）
　　○時　　代　大正時代
　　○品　　質　鉄・鍛造
　　○員　　数　1口
　　○寸　　法　長さ 68.2cm　反り 1.5cm
　　○作品概要　鎬造、庵棟。小鋒。鍛えは小板目、地沸厚い。刃文は小丁子乱れ。

26　○名　　称　薙刀　銘 越前守源信吉作（なぎなた　めい　えちぜんのかみみなもとののぶよしさく）
　　○時　　代　江戸時代
　　○品　　質　鉄・鍛造
　　○員　　数　1口
　　○寸　　法　（現状）長さ 45.5cm　反り 2.8cm
　　○作品概要　鎬造、庵棟。鋒は弱く反る。錆と後世の荒研により、鍛え、刃文等不明。鋒の先端が折れる。

＜漆工＞(4件)

27　○名　　称　籬菊蒔絵小鼓胴（まがきにきくまきえこつづみどう）
　　○時　　代　江戸時代中期
　　○品　　質　挽物製
　　○員　　数　1挺
　　○寸　　法　口径 10.2cm　長 25.4cm
　　○作品概要　黒漆地に金平蒔絵・絵梨地・描割・付描で籬に菊を表す。請に花押（墨書）あり。

28　○名　　称　川田家伝来美濃屋製漆器（かわだけでんらいみのやせいしっき）
　　○時　　代　大正～昭和時代
　　○品　　質　１．指物製　２．桐製
　　○員　　数　2件
　　○寸　　法　１．膳：縦 25.6cm　横 26.1cm　高 8.9cm／椀１　径 10.5cm　高 6.6cm／椀２　径 9.9cm　高 3.9cm／椀３　径 9.3cm　高 2.8cm／椀４　径 8.6cm　高 1.6cm／２．縦 38.6cm　横 8.4cm　高 7.1cm
　　○作品概要　１．隅切長方形、縁付、蝶足の膳１基と、挽物製、高台付の四つ椀。黒漆塗に朱漆で片喰紋。内朱。２．長方形、身底と蓋甲板を橋のように微かに反らせた被蓋造の箱。蓋に浅い手掛け。拭き漆に、金平蒔絵、黒漆で忍草を描く。川田順筆短冊 77 葉と川田周雄筆短冊 2 葉を収める。

29　○名　　称　ハングル版木朱塗箱（はんぐるはんぎしゅぬりばこ）
　　○品　　質　指物製
　　○員　　数　1合
　　○寸　　法　縦 9.0cm　横 14.5cm　高 4.0cm
　　○作品概要　長方形、合口造、上げ底、側面下端に四足を刳り出す。蓋口縁に身の立上がりが組み合う段差を作る（外面に版木を貼る造りのためか）。外面に反転したハングルを浮彫する。黒漆の中塗りの上に朱漆を塗り、これを研いで凸部（文字部分）を黒漆とする。楷書体の文字列は上下を切られ判読できないが小説らしい。庶民層を対象とした完板（完州の木版古代小説）か。

30　○名　　称　黒漆唐草蒔絵衣桁（くろうるしからくさまきえいこう）
　　○品　　質　木製、組立式
　　○員　　数　1基
　　○寸　　法　幅 180.5cm　奥行 44.0cm　高 155.7cm
　　○作品概要　組み立て式の大型の衣桁。基台の外側に桟の続きとなる先端部分を別材で装着するのが珍しい。総体黒漆塗りとし、基台外側の部材、丸柱の付け根、上の桟の両端に、消粉平蒔絵で唐草文様の描金具を表す。葉脈は黒漆で補筆し、上の桟の両小口には十六弁菊花紋を蒔絵で線描する。中の桟は大きく破損しており、破損部を黒いゴムテープで補修している。そのほか塗膜面の欠失多数。要修理。

＜染織＞(2 件)

31 ○名　　称　花卉鳥獣文様刺繍見送（祇園祭函谷鉾旧見送）　松坂屋コレクション（かきちょうじゅうもんようししゅうみおくり（ぎおんまつりかんこぼこきゅうみおくり）　まつざかやこれくしょん）
○時　　代　天保十年（1839）寄進
○品　　質　中央：絹地（平織）　刺繍　　四周：赤羅紗、上部のみ白木綿を付す　　裏地：白木綿　　天地に木材を入れる
○員　　数　1 枚
○寸　　法　刺繍裂：丈 204.0 ㎝　幅 118.0 ㎝　　総丈 347.5 ㎝（赤羅紗までは 330.0 ㎝）総幅 164.5 ㎝
○作品概要　本来は中国で欧州向けにベッドカバーとして製作された刺繍裂で、十七世紀頃の作例と考えられる。下から五分の一は、最下端に大地を示す岩を配し、虎、蓮鷺、馬を置く。残りの五分の四は、中央に大きな円内に、牡丹を取り巻くように二羽の鳳凰をめぐらし、円外の四隅には、右上と左下に尾長鳥、左上と右下には孔雀を配し、隙間を牡丹で埋める。刺繍の技法は、渡し繍あるいは平繍、刺し繍、駒繍を主体とする。下地を見せることなく、文様以外の部分には撚金糸を繍い詰める。刺繍糸には平糸と撚糸の二種を用いる。留繍の糸がかなり切れており修理を要する。祇園祭の函谷鉾の祭礼幕として用いられていた。

32 ○名　　称　刺繍三昧耶形幡　多武峯寺伝来　松坂屋コレクション（ししゅうさんまやぎょうばん　とうのみねでらでんらい　まつざかやこれくしょん）
○時　　代　江戸時代
○品　　質　幡頭・幡身：絹地(綾)　刺繍　　幡足：絹地(平織)　染
○員　　数　2 旒
○寸　　法　①総長 120.0 ㎝　幡身長 62.5 ㎝　幡足長 37.0 ㎝　幡頭幅 37.5 ㎝　幡身幅 25.0 ㎝
②総長 120.0 ㎝　幡身長 61.0 ㎝　幡足長 37.5 ㎝　幡頭幅 36.0 ㎝　幡身幅 25.0 ㎝
○作品概要　幡頭は白綾地、蓮華文様刺繍。幡身は白綾地、片面のみ文様があらわされ、三坪ある各坪とも、円相内にそれぞれ輪宝・羯磨・蓮華を刺繍し、円相の外区は割り付け文様を刺繍。縁および堤は紅綾地、蓮華唐草文様刺繍。刺繍は平繍あるいは渡し繍と留繍を主体とし、刺繍糸の色は白・黄・濃淡萌葱・濃淡浅葱・紺・濃淡紅・紫など。幡足は白・萌黄・紺の段に染め分けられた平絹の周囲を、紅白で染め分けた平絹で覆輪。幡手は欠失。先端に金銅製蓮華唐草彫の吊金具を付す。箱貼札に多武峯寺（現在の談山神社）伝来とあり。折れがあるものの、保存状態は比較的良好。

＜考古＞(1 件)

33 ○名　　称　花脊別所経塚出土品（はなせべっしょきょうづかしゅつどひん）
○時　　代　平安～鎌倉時代　（12～14 世紀）
○品　　質　金銅・青銅・鉄・土
○員　　数　8 件
○寸　　法　古瀬戸灰釉瓶子一口は高 28.5ｃｍ
○作品概要　本品は、京都市左京区花脊別所村に所在した福田寺が所有していた、重要文化財の花脊別所経塚出土品一括（文化庁買上済）に附属したもので未指定の遺物である。鎌倉時代の懸仏の一部とみられる金銅製御正体二件、経筒あるいは六器の破片とみられる青銅破片 17 点一件、短刀の残片とみられる鉄片一括一件、古瀬戸灰釉瓶子一件、青磁破片など陶磁器片三件の合計 8 件である。12 世紀の経塚およびそれに関連する遺物として貴重である。

＜歴史＞(2 件)

34 ○名　　称　井口家伝来　幕末・明治期歴史資料（いぐちけでんらい　ばくまつ・めいじきれきししりょう）
○時　　代　江戸末期～明治時代
○員　　数　一括
○寸　　法　「坂本中岡両氏遺墨記念帖」1 冊は縦 22.7cm　横 14.5cm
○作品概要　坂本龍馬が慶応三年十一月十五日に暗殺された場所として有名な京都河原町通の蛸薬師下ルに所在した醤油商近江屋井口家に伝来した幕末から明治期にかけての多様な歴史資料の一括である。その主なものは慶応四年前後の書簡文書類、坂本龍馬顕彰に関わる図書類、井口家および中井弘に関わる古写真、中井弘宛の書簡や中井がもらった勲章などである。永く井口家で伝来し、近年は京都国立博物館に寄託されていたものを一括で寄贈していただいた。幕末維新期の貴重な情報を含んでいる。

35 ○名　　称　天皇系図（てんのうけいず）
○時　　代　江戸時代
○品　　質　紙本　墨書・朱書
○員　　数　1 枚
○寸　　法　縦 180ｃｍ　横 345ｃｍ
○作品概要　大きな継紙に神代から当今までの歴代天皇系図および橘氏・小野氏・桓武平氏・清和源氏などの諸氏系図を書き込んだ巨大な系図。当今天皇が第 107 代の後陽成天皇と見られることから、系図本体の製作年代は後陽成天皇の在位期間である天正 14 年から慶長 16 年、すなわち 1586 年から 1611 年の間とすることができる。しかし本作品は紙質や筆跡から江戸時代の後期頃と写しと推定される。公家の子弟の学習参考資料か。作品には紙の破れ、汚れなどがあり保存状態はやや悪い。

【奈良国立博物館】(計 15 件)

(1)購入(7 件)

＜絵画＞(2 件)

1 ○名　　称　絹本著色春日地蔵曼荼羅（けんぽんちゃくしょくかすがじぞうまんだら）
○作 者 等
○時　　代　鎌倉時代　14 世紀
○品　　質　絹本著色　掛幅装
○員　　数　1 幅
○寸 法 等　縦 115.3 ㎝　横 39.1 ㎝
○作品概要　本品は、画面上部に御蓋山および春日山、下縁に春日野を表すとみられる樹木や雌雄の神鹿を配し、向かって左上から春日三宮の本地仏である地蔵菩薩が涌雲に乗って飛来し、地獄から衆生を救済するために来迎する姿を描いている。また、地蔵菩薩の右下には烏帽子直衣姿で座る人物が描かれるが暗色の顔料で塗りつぶされ、その上から頭光の光芒を表す截金線が置かれる。地蔵の端正な顔立ちは鎌倉後期の作例に描かれるものにきわめて近似するとともに、着衣に施される精緻な截金文様や金泥の彫塗りによって金属製の荘厳具を表す点にも、鎌倉後期仏画の技法的特色が顕著にみられる。現在知られる春日地蔵曼荼羅のなかでも最古の作例と見ることができる。

2 ○名　　称　絹本著色千手観音影向図（けんぽんちゃくしょくせんじゅかんのんようごうず）
○作 者 等
○時　　代　鎌倉時代　13 世紀
○品　　質　絹本著色　掛幅装
○員　　数　1 幅
○寸 法 等　縦 111.9 ㎝　横 54.7 ㎝
○作品概要　本品は、補陀落山中の千手観音と千手観音に帰依する人物の対面を描いたものである。画面向かって左にやや下を向く十一面多臂の千手観音が斜め向きに立ち、その先には截金線で縁取られた円相があり、なかには烏帽子に白い装束を身につけた人物が千手観音を拝する様子が描かれる。

千手観音の造形や表現技法および俗体の貴人を描く似絵表現から、13 世紀中頃の制作とみられる。なお、画面右上に四行ほどの墨書が残り、その最終行に禅僧が署名で多用する「叟」の字が確認できることから、禅僧による着賛と思われる。補陀落山に立つ千手観音と俗体の貴人が対面するという他例をみない図像の絵画として、日本仏教絵画史上貴重な存在である。

＜書跡＞(1 件)

3　○名　　称　法華経（建治二年東大寺僧宗性発願経）（ほけきょう／けんじにねんとうだいじそうそうしょうほつがんきょう）
　○作 者 等　宗性（1202-78）ほか 12 名
　○時　　代　鎌倉時代　建治 2 年（1276）
　○員　　数　8 巻
　○品　　質　紙本墨書　巻子装
　○寸 法 等　（巻第一）26.3×985.4 ㎝　（巻第二）26.3×1115.2 ㎝　（巻第三）26.3×1050.1 ㎝　（巻第四）26.4×916.1 ㎝
　（巻第五）26.2×996.4 ㎝　（巻第六）26.4×962.1 ㎝　（巻第七）26.4×900.5 ㎝　（巻第八）26.4×807.7 ㎝
　○作品概要　本品は、表裏ともに雲母を引いた楮の打紙に銀泥で界線を引き、『法華経』8 巻を墨書する。表紙は紺紙を用い銀泥で霞文を描き金截箔を、見返しは染色のない紙に金銀の截箔を散らして装飾する。各巻の巻末に写経の目的・経緯を記した奥書があり、鎌倉時代を代表する東大寺学僧の一人である宗性とその周辺の僧が稚児・力命丸の供養のために書写したことが知られる。巻第一は経文から奥書に至るまで宗性の自筆であるが、巻第二以降は周辺の僧が分担書写し奥書のみ宗性が執筆した（但し巻第八は宗性以外の僧が奥書の大半を記す）。書写の背景が判明する点において貴重な鎌倉時代写経であり、中世南都寺院社会の実態を知る上で注目に値する史料である。

＜彫刻＞(1 件)

4　○名　　称　木造僧形立像（もくぞうそうぎょうりゅうぞう）
　○作 者 等
　○時　　代　鎌倉時代　13 世紀
　○品　　質　ヒノキ材　一木割矧造か　内刳　彩色　截金　玉眼
　○員　　数　1 軀
　○寸 法 等　総高　54.5 ㎝　像高　28.9 ㎝　頂ー顎　5.2 ㎝　面幅　3.3 ㎝　面奥　4.3 ㎝
　耳張　4.1 ㎝　胸奥（左）4.1 ㎝　胸奥（右）4.2 ㎝　腹奥　4.9 ㎝　臂張　8.5 ㎝
　袖先張　8.7 ㎝　裾張　6.2 ㎝　足先開（外）5.0 ㎝　足先開（内）2.3 ㎝　台座高 18.4 ㎝
　台座框幅 21.8 ㎝　台座框奥行 17.1 ㎝　光背高　36.7 ㎝　光背幅　19.0 ㎝
　○作品概要　剃髪形で、腕前で合掌し左足先を少し前に踏み出して立つ像である。髪際は彫り表さず薄彩色で髪を描き、白毫を嵌めて、耳朶は紐状で貫通する。着衣は両肩を覆う衣（但し左方では袖を作らないので肩にかかるのみか）の上に左肩から袈裟をかけ、裙をはく。なお台座は七重蓮華座で、光背は周縁に雲唐草をめぐらせる二重円相光である。写実性に富んだ表情や着衣の襞の彫法および精緻な文様などから、鎌倉時代とりわけ 13 世紀の制作と推定される。若干彩色の微細な部分が不明であるものの、截金文様まで確認しうる保存良好な作品である。現段階では、地蔵菩薩像か、もしくは十大弟子ないし釈迦三尊の脇侍としての阿難像である可能性が考えられる。

＜漆工＞(1 件)

5　○名　　称　黒漆宝塔（くろうるしほうとう）
　○作 者 等
　○時　　代　室町時代　16 世紀
　○員　　数　1 基
　○品　　質　木製　黒漆塗　金銅装
　○寸 法 等　総高 100.5 ㎝（礼盤含む）　宝塔総高 88.4 ㎝　礼盤一辺長 54.6 ㎝　基壇 47.9×47.3 ㎝（階段含む）
　○作品概要　本品は、文永 7 年（1270）に興正菩薩叡尊によって造立された金銅宝塔（奈良・西大寺所蔵）を模したと推定される宝塔である。宝塔は天板四隅に猫脚を付けた形式の礼盤上に載る。基壇には四方に階段を設け、上面に高欄をめぐらせている。相輪や宝鎖は金銅製であるが、それ以外は木製で布被せずに黒漆を塗り、基壇内部など外から見えない箇所は素地とする。多少の違いはあるものの、総高をはじめ細部表現、全体のプロポーションに至るまで西大寺の金銅宝塔を忠実に模している。なかでも西大寺愛染堂宝塔（木製漆箔）は本品と近似することから、本品は西大寺に伝来した可能性が高く、近世における西大寺の舎利信仰を考える上で貴重な作例である。

＜考古＞(2 件)

6　○名　　称　三彩小壺〔筑前早良郡出土〕　附　ガラス小玉（さんさいこつぼ・ちくぜんさわらぐんしゅつど／つけたり　がらすこだま）
　○作 者 等
　○時　　代　奈良時代　8 世紀
　○員　　数　1 口　ガラス小玉は 20 点（破片含む）
　○品　　質　（三彩小壺）陶製　施釉　（ガラス小玉）ガラス製
　○寸 法 等　（三彩小壺）身：器高 4.2 ㎝（残存値）　口径 3.7 ㎝（現状値）　最大径　6.3 ㎝
　蓋：器高 1.1 ㎝　直径 4.7 ㎝　つまみ径 1.4 ㎝
　（ガラス小玉）直径（最大）0.7 ㎝　厚さ（最大）0.2 ㎝　孔径（最大）0.3 ㎝
　○作品概要　三彩小壺は身と蓋からなり、胴の中位に最大径をもちながら横方向に強く張り出しており、蓋は上面に僅かな甲盛をもち、扁平化した宝珠つまみが中央に取り付けられている。また、ガラス小玉はかなり扁平でドーナツ形を呈している。器表面に著しい剥離や口縁部の欠損があり、本来の奈良三彩の美しさが損なわれているものの、身・蓋かつ内容物（ガラス小玉）が附属するのは希有なことであり、考古資料的には大いに注目される。なお出土地とされる「筑前早良郡」（現福岡市西区周辺）は、古代の鴻臚館の西方で、姪浜から背振山地まで陸海の両方に通じ、同時代の官道や寺院、郡衙推定地が存在する北部九州の重要拠点である。

7　○名　　称　瀬戸　灰釉櫛目文瓶子〔和歌山県新宮市丹鶴山出土〕（せと　かいゆうくしめもんへいじ／わかやまけんしんぐうしたんかくざんしゅつど）
　○作 者 等
　○時　　代　鎌倉時代　13 世紀後半
　○員　　数　1 口
　○品　　質　陶製　施釉
　○寸 法 等　器高 27.9 ㎝　口径 4.5 ㎝　口縁最大径 5.5 ㎝　胴最大径 18.4 ㎝　底径 10.1 ㎝
　○作品概要　本品は、戦後間もない時期に丹鶴山南面の天理教教会正門付近から白磁四耳壺（元代・景徳鎮産）などとともに出土したと伝えられる。肩を強く張り、腰は引き締めずに直線的に延びて広めの底に至る。また、口は細く引き絞り三角形に折り返した口縁をもち、胴部中央に九つの波頭をもった櫛描波文をめぐらせている。数ある瀬戸の瓶子の中でも、櫛描文様を器面全周にわたって施す作例は珍しく、瀬戸の瓶子の秀作の一つに数えあげられる。製作時期は古瀬戸中期初頭およそ 14 世紀の早い段階に位置づけられる。なお、出土地である丹鶴山は熊野速玉大社の東に隣接し、中世陶器の優品が出土することで知られている。

(2)寄贈(8 件)

＜書跡＞(1 件)

1　○名　　称　公盛書状（こうじょうしょじょう）
　○作 者 等　公盛（1689-1724）
　○時　　代　江戸時代　正徳 5 年（1715）
　○員　　数　1 巻
　○品　　質　紙本墨書

○寸 法 等　18.2×174.0 cm
○作品概要　本品は、江戸時代の東大寺僧で、現在の大仏殿の再建に功績を残した公盛の書状である。年代は明記されないが、『龍松院公盛・公俊・庸訓代々諸興隆略記』（京都・勧修寺所蔵）に、正徳 5 年 2 月・3 月と二度にわたる霊元法皇の東大寺宝物の叡覧、以来法皇の命による東大寺での月例の祈祷や巻数加持・香水献上が記されており、それが本書状の内容と一致することから、正徳 5 年と推定される。書状は、その 4 ヶ月後の 7 月に霊元法皇との間を取り持った円照寺門跡（文応女王）に感謝を述べ、引き続き東大寺復興への協力を求めたものと思われる。公盛の文書はほかに島津家文書の中にわずかに知られる程度であり、違例の少ない公盛書状として貴重である。

＜彫刻＞(1 件)

2　○名　　称　木造菩薩立像（もくぞうぼさつりゅうぞう）
○作 者 等
○時　　代　平安時代　11～12 世紀
○員　　数　1 軀
○品　　質　ヒノキ材　一木造　内刳なし　彩色　彫眼
○寸 法 等　像高 100.5 cm　髪際高 86.6 cm　頂ー顎　25.1 cm　面長　10.4 cm　面幅 10.5 cm
面奥　15.5 cm　耳張　13.5 cm　胸厚（左）15.2 cm　腹厚　16.6 cm　肘張 30.6 cm
最大幅（天衣垂下部）39.0 cm　台座幅 40.4 cm　台座高 21.0 cm
○作品概要　髻（後補）を結って宝冠をかぶる。両耳上を鬢髪がわたる。右手は垂下して第一・二指を軽く捻じ、左手は屈臂して胸前に挙げて軽く握り、持物（亡失）を執る形とする。また、上半身に条帛、下半身に腰布と裙を着用し、天衣をまとって蓮台に立っている。内刳のない一木彫像で、古い時代の要素を残すものの、比較的浅い彫り口などの特徴から、平安時代後期の作と判断される。面部がほぼ制作当初の彫りを残している点が評価され、柔らかみのある肉づけや伏し目がちの表情などにこの時代らしい穏健な作風がうかがえる。なお、尊名は確定できないが、現在の手勢を重視すれば、同時代における作例の多さからみて、観音菩薩である可能性が高い。

＜漆工＞(5 件)

3　○名　　称　黒漆塗鼓胴形花器　北村久齋作（くろうるしぬりこどうがたかき／きたむらきゅうさいさく）
○作 者 等　北村久齋（1875-1959）
○時　　代　近代　明治～昭和時代（1945 年以前）
○員　　数　1 口
○品　　質　木製　黒漆塗
○寸 法 等　長 41.9 cm　口径 14.5 cm　胴径 9.0 cm
○作品概要　正倉院宝物の漆鼓（南倉 115）を模した鼓胴形の花器。金銅製の落としを受け口に掛けて使用する。広葉樹の一材を肉厚に刳り抜き、轆轤挽き成形した上に黒漆を塗って仕上げている。原宝物の本来の用途を離れ、器体の形状に着目して花器に仕立てたものであるが、寸法も概ね一致しており、宝物をよく写している。明治 8 年（1875）に初回の行われた奈良博覧会を契機とし、正倉院宝物や古美術を模したり、翻案したりした意匠が広く採り入れられたいわゆる奈良漆器の典型で、類品も少なからず存在するが、本品は箱書や作風から奈良の漆芸家・北村久齋（1875～1959）の作と目される。奈良漆器の歴史や文化を考える上で好適な一例である。

4　○名　　称　倶利伽羅龍蒔絵経箱復元模造手板　北村昭斎作（くりからりゅうまきえきょうばこふくげんもぞうていた／きたむらしょうさいさく）
○作 者 等　北村昭斎（1938-）
○時　　代　現代　平成 7 年（1995）
○員　　数　1 面
○品　　質　木製　布被　漆塗　蒔絵
○寸 法 等　縦 8.0 cm　横 70.0 cm　厚 1.0 cm
○作品概要　本品は、平成 4・5 年度における文化庁の事業によって制作された倶利伽羅龍蒔絵経箱（原品は奈良・當麻寺奥院所蔵）の復元模造（奈良国立博物館蔵）の製作工程を記録としてまとめた手板である。長方形の板の表面に、2 センチメートル幅で 35 の区画を設け、木地固めから完成に至る 35 工程を、経箱の蓋甲の倶利伽羅龍剣および矜羯羅・制吒迦の二童子部分の意匠を使用して示している。復元模造の制作過程が具体的にわかる点で有意義であるとともに、原品の制作工程を考察する上でも参考になる一品である。

5　○名　　称　玳瑁螺鈿花形盤　北村昭斎作（たいまいらでんはながたばん／きたむらしょうさいさく）
○作 者 等　北村昭斎（1938-）
○時　　代　現代　平成 15 年（2003）
○員　　数　1 面
○品　　質　木製　漆塗　蒔絵　螺鈿　玳瑁
○寸 法 等　最大径 58.5 cm　高 12.5 cm
○作品概要　平成 11 年に重要無形文化財保持者（人間国宝）の認定を受けた漆芸家・北村昭斎氏（1938～）の作品で、器形を探求する昭斎氏の 1990 年代以降の傾向を如実に示す品の一つである。大輪の花を思わせる大胆なフォルムに正倉院宝物を思わせる花形の螺鈿装飾を合わせた造形は古典と斬新さを兼ね備えたもので、正倉院宝物の修理などを手掛けてきた氏ならではの作風が示されている。古稀を前にした氏の芸術の一つの到達点を示す作であり、その作風を回顧する上で重要な位置を占めることは疑いない。また奈良の漆芸文化の今日的水準を示すものとしても大変重要である。第 50 回日本伝統工芸展入選作。

6　○名　　称　蒔絵螺鈿乱箱　北村大通作（まきえらでんみだればこ／きたむらだいつうさく）
○作 者 等　北村大通（1910-92）
○時　　代　近代　明治～昭和時代（1945 年以前）
○員　　数　1 口
○品　　質　木製　漆塗　蒔絵　螺鈿
○寸 法 等　縦 42.4 cm　横 36.4 cm　高 6.6 cm
○作品概要　角を円く作った長方形の蓋を伴わない浅い箱で、木胎に漆を塗って仕上げている。奈良の漆芸家・北村大通（1910～92）の遺作で、色漆を巧みに用いた大らかな作風から大通初期の作品と思われる。外側面には黒漆地に黄白色の梅花文を、内側面と底面には黄白色の地に黒色の梅花文を散らしており、底面に腹巻の大袖を多彩な色漆で表している。大袖の金具に当たる部分は乾漆粉を用いた蒔絵で表しており、金属粉の使用が制限された戦時下の状況を反映すると考えられる。主題からは古典や日本文化への興味がうかがわれるが、これは戦後第 3 回日展に出品された「漆手筥　春日のほとり」などに通ずるもので、大通の作風展開を考える上でも注意される。

7　○名　　称　二月堂食堂机　模造（にがつどうじきどうづくえ　もぞう）
○作 者 等　北村久齋（1875-1959）か
○時　　代　近代・昭和 20 年（1945）以前
○員　　数　1 基
○品　　質　木製　黒漆塗
○寸 法 等　縦 34.2 cm　横 57.5 cm　高 26.5 cm
○作品概要　東大寺二月堂で行われる修二会に参籠する練行衆が、食堂にて行う食堂作法に用いる小さな机を模したもので、伝来などから北村久齋の作と推察される。大きさや端喰の入れ方、あるいは天板裏や側板に記された銘文の記し方に至るまで実際の二月堂食堂机と概ね一致しており、現物の観察に基づいて製作された可能性が想起される。いわゆる奈良漆器の生産では奈良にゆかりのある正倉院宝物や玉虫厨子など上代の美術に加え、二月堂練行衆盤のような実用的な器物も模造されており、特に二月堂食堂机は久齋得意の一つだったと伝えられている。奈良漆器の好適な一例であるとともに、その展開を考える上でも興味深い遺例である。

＜考古＞(1 件)

8　○名　　称　甕（かめ）
　　○作 者 等
　　○時　　代　弥生時代後期　2 世紀
　　○員　　数　1 口
　　○品　　質　土製
　　○寸 法 等　高 22.7 ㎝　口径 14.8 ㎝　底径 3.8 ㎝
　　○作品概要　本品は、奈良県田原本町唐古から出土したと伝える弥生時代の甕である。いわゆるイチジク形の甕で、最大径を胴部中位にもち、口縁部をハ字に大きく開く。また、底部はごく小さく絞られている。唐古は弥生時代の環濠集落として考古学史的にも重要な唐古・鍵遺跡（国指定史跡）の所在する土地である。唐古周辺の典型的な土器と比べて本品はやや暗めの色調を呈するが、完形で遺存する甕は数が少なく、大和の弥生土器の標本的資料として活用が期待される。製作時期は「機内第Ⅵ様式」、およそ 2 世紀に位置づけられる。

【九州国立博物館】（計 36 件）

(1) 購入（31 件）

＜絵画＞（4 件）

1　○名　　称　絹本著色仏涅槃図　命尊筆（けんぽんちゃくしょくぶつねはんず　みょうそんひつ）
　　○作 者 等　命尊筆
　　○時　　代　鎌倉時代・元亨 3 年（1323）
　　○品　　質　絹本著色。掛幅装。画絹一副一舗。
　　○員　　数　1 幅
　　○寸 法 等　縦 270.0　横 212.4cm
　　○作品概要　拘尸那掲羅における釈迦の入滅、涅槃の様子を、鎌倉時代以降主流となる縦長画面に描く。釈迦が目を開け、錫杖の周りに蜂が飛び、釈迦の足元に尼僧が侍するなど、特徴的な図様がみられる。四周には蓮華文の描表装が巡る。
紙背に貼付された供養銘から、元亨 3 年(1323)、法華寺比丘尼行施が願主となり、命尊によって描かれたことが分かる。尊は南都を中心に活躍した絵仏師で、大幅ながら細部まで意を尽くした入念な描写は現在確認されている命尊の作例のなかでも出色の出来栄えを示している。鎌倉時代を代表する完成度の高い優品であるとともに、制作年代、筆者、願主まで明らかな基準作として極めて貴重である。
画面全体の折れや断裂も一部あるが、後補はきわめて少ない。
　　○来　　歴　奈良・法華寺伝来

2　○名　　称　紙本著色物語図　二曲屏風　伝俵屋宗達筆
（しほんちゃくしょくものがたりず　にきょくびょうぶ　でんたわらやそうたつひつ）
　　○作 者 等　伝俵屋宗達(生没年不詳)筆
　　○時　　代　江戸時代・17 世紀
　　○品　　質　紙本著色
　　○員　　数　1 隻
　　○寸 法 等　縦 122.5　横 271.1　cm
　　○作品概要　基壇に建つ入母屋造の建物と、桧皮葺の四脚門の周辺を行く貴人と従者の姿を描く。主題は明らかでないが、俵屋宗達筆「西行物語絵」（重文、個人蔵、渡辺家本）や、同じく宗達筆「西行物語絵」（重文、諸家分蔵、旧毛利家本）と同形の人物やモチーフが認められる。落款や印章はないが、人物表現の特徴、樹木へのいわゆる「たらしこみ」技法の使用、および金箔や金銀泥、金切箔、金野毛、金砂子など多様な金銀の組み合わせ方法を鑑みると、江戸時代初頭に活躍した絵師・俵屋宗達の周辺で制作された可能性が高い。ただし一部に宗達の真筆と認めがたい部分が見られることから、宗達の活動年の下限頃にその強い影響下において制作されたものと考えられる。

3　○名　　称　紙本著色病草紙断簡（せむしの乞食法師）
（しほんちゃくしょく　やまいのそうし　だんかん　せむしのこつじきほうし）
　　○時　　代　平安-鎌倉時代・12 世紀
　　○品　　質　紙本著色。掛幅装。(詞書 2 紙と絵 1 紙)
　　○員　　数　1 幅
　　○寸 法 等　縦 26.0cm 横 38.0cm
　　○作品概要　珍しい病や症例を描く「病草紙」のうち、首から背を大きく曲げ、錫杖を手に画面左方へ歩く乞食（こつじき）法師の様子を描いたもの（名称は詞書による）。この法師は首の骨が硬く、頭を上げられないため、常に俯いて歩いたという。周りには法師を嘲笑する人々が表現されている。「病草紙」は、仏教の経典に説かれる前世の因果による奇病を示したものと考えられている。作風が「地獄草紙」（国宝、東京国立博物館）や「餓鬼草紙」（国宝、京都国立博物館）など、12 世紀末に後白河法皇の下で活躍した絵師・常盤光長に近似することから、本図もその周辺で制作された可能性が高い。当初は京都国立博物館所蔵の「病草紙」10 面（国宝）などと共に一巻の巻子として名古屋の関戸家に伝来していたが、その後現在の掛幅装に改変された。
　　○来　　歴　大館高門、関戸家旧蔵。

4　○名　　称　絹本著色仏涅槃図（けんぽんちゃくしょくぶつねはんず）
　　○時　　代　鎌倉時代・13 世紀
　　○品　　質　絹本著色。掛幅装。画絹四副一舗。軸首と鐶（3 ヶ所）は銅製鍍金。
　　○員　　数　1 幅
　　○寸 法 等　縦 202. 5　横 160. 3cm
　　○作品概要　縦長の画面に右手を枕にして横たわる釈迦を多数の菩薩や動物が囲むという、鎌倉時代以降の涅槃図の典型的な図様をもつ。その一方で、釈迦が目を開ける点、釈迦の足下に尼僧を描く点、黒いテナガザルを描く点など特徴的な図様もみえる。表現に着目すると、伝統的な仏画の描法を拠りどころとしながら、諧調のある墨で巧みにとらえた湧雲や小刻みに蛇行する衣文線など宋画に由来する表現が散見される点も興味深い。金泥を多用する点、寒色系の彩色が支配的である点などから、鎌倉時代後半 13 世紀の制作とみなされる。剥落や小欠損部の補絹が一部にみられるものの、補筆は少なく全体として当初の全容を保っている。

＜書跡＞（5 件）

5　○名　　称　紙本墨書興福寺関係文書（しほんぼくしょこうふくじかんけいもんじょ）
　　○時　　代　鎌倉時代・文治 5 年（1189）頃-建久 9 年（1198）
　　○品　　質　紙本墨書。巻子装。
　　○員　　数　1 巻
　　○寸 法 等　31.9cm（軸含む）、横 1862.9cm、表紙　縦 29.5cm 横 29.3cm
　　○作品概要　興福寺別当覚憲（1131～1213）が受け取った院宣・八条院令旨・摂関家長者御教書等の古文書 34 通を貼り継ぎ、その紙背に覚憲の弟子・信憲（1145～1225）が建久 9 年（1198）に文軌撰『因明入正理論疏』巻第一 を隆昌に書写させたもの。本来は、経典を内側にして巻いていたものと思われるが、現状では古文書を内側にして巻いている。本文料紙数は 34 紙。1 紙長は 52.0～55.0 程度。第 2 紙での計測では、経典は 1 行 20 字から 25 字詰め、1 紙 24 行、界高 24.3、界幅 22.0、上欄 2.9、下欄 2.3。縦の長さを合わせるため、古文書はみな下端を切断されている。表紙と軸は後補。軸に接続する紙が新補されている。虫損や破損はあるが、補修されている。全体に保存状態は良好。経文に脱落なし。

6　○名　　称　紙本墨書伊達政宗自筆書状（しほんぼくしょだてまさむねじひつしょじょう）
　　○作 者 等　伊達政宗
　　○時　　代　江戸時代・17 世紀
　　○品　　質　紙本墨書
　　○員　　数　1 幅
　　○寸 法 等　（本紙）縦 33.1　横 48.7　cm
　　○作品概要　掛幅装。
　　本文全 12 行。行草体の漢字と仮名交り文で揮毫する。保存状態は、本紙・表装とも良好。筆者の伊達政宗（1567～1636）は、室町時代末期から江戸時代初期にかけての武将、仙台藩祖。
　　本書状は、家臣の青木忠五郎友重（1605～36）に宛てたもので、年未詳ながら、書風と花押から晩年の江戸時代寛永年間前半(1624～35)の 11 月 22 日の執筆と推定される。内容は、明日の茶会へ招かれることを楽しみにしていること、沢山持っているだろうが香木一包と鶴の羽を貴殿に進上すること、明日の準備でせわしいだろうからこの礼は無用であることを、晩年期の闊達自在な筆致で記す。

7　○名　　称　紙本墨書惟堂守一墨蹟　与無夢一清偈
　　（しほんぼくしょいどうしゅいちぼくせき　むむいっせいにあたうるげ）
　　○作 者 等　惟堂守一
　　○時　　代　中国・元時代・至順 4 年（1333）
　　○品　　質　紙本墨書
　　○員　　数　1 幅
　　○寸 法 等　（本紙）縦 32.5　横 71.4cm
　　○作品概要　掛幅装（一文字なし）。
　　本文全 18 行。楷書体と行書体を交えて謹直に墨書する。角軸。
　　筆者の惟堂守一（?～1333～?）は、中国・元時代の破庵派の臨済僧・虚谷希陵の法嗣。本作品は、東陽徳輝の下で修行していた日本からの入元僧・無夢一清（1294～1368）の旅立ちに贈った餞別偈で、禅僧としての大成を期待するもの。円爾（1202～80）の法孫にあたる無夢は、嘉元年間（1303～05）に入元し、観応元年（1350）博多に帰着、その後、東福寺 30 世などをつとめ、応安元年（1368）同寺天得庵に 75 歳で示寂した。
　　本作品は、日中の禅の交流を物語る重要な史料であるばかりか、惟堂の遺墨として唯一のもので大変貴重である。のち、元和 5 年（1619）に江月宗玩（1574～1643）が鑑定したことがその著『墨蹟之写』に見え、その後、仙台藩四代藩主伊達綱村が収集し、同家に伝わった。
　　○来　　歴　　仙台伊達家伝来

8　○名　　称　紺紙金字三昧水懺法（こんしきんじざんまいすいぜんほう）
　　○作 者 等　照明
　　○時　　代　中国・明～清時代・15～17 世紀
　　○品　　質　紺紙金字
　　○員　　数　3 帖
　　○寸 法 等　（巻上）表紙 縦 33.9 横 12.1　本紙 縦 33.9 全長 1088.6
　　（巻中）表紙 縦 33.9 横 12.1　本紙 縦 33.9 全長 1014.3
　　（巻下）表紙 縦 33.9 横 12.1　本紙 縦 33.9 全長 1041.1　cm
　　○作品概要　紺紙金字。折本装。上・下巻の表裏表紙は当初と推定される。上巻巻頭に金泥で描かれた見返し絵は、三昧水懺起縁の内容に拠った唐の悟達国師知玄の物語である。続いて、金泥にて龍牌、三昧水懺起縁、本文と続く。下巻巻末には牌に願文を記し、最末には合掌して立つ韋駄天像を描く。本文は 1 行 15 字詰め、半葉 5 行。文中には金泥で句点を施す。料紙は、法華経が印刷された紙を転用したもので、藍染めされた後も版本の文字が透けて確認できる。版本も 1 行 15 字詰めで句点がある。見返し絵と龍牌は墨で下絵を描き金泥でなぞっているが、かならずしも下絵に忠実ではない。紺または薄茶の紙で裏打ちされている。裏打ち後に料紙を貼り継いでいるので、当初からの裏打ちの可能性がある。巻首・巻末や紙背に朱筆で記された文字がある。

9　○名　　称　彩箋墨書詩歌色紙帖　近衛信尹筆（さいせんぼくしょしいかしきしじょう　このえのぶただひつ）
　　○作 者 等　近衛信尹
　　○時　　代　安土桃山～江戸時代・17 世紀
　　○品　　質　彩箋墨書
　　○員　　数　2 帖
　　○寸 法 等　（各帖）縦 29.9　横 24.3　高さ 5.7　（色紙）縦 20.8　横 17.9　cm
　　○作品概要　彩箋墨書。両面折帖仕立。
　　筆者の近衛信尹（1565～1614）は、安土桃山時代から江戸時代の公卿。その書は、はじめ室町時代の持明院流に学び、しだいに藤原定家の書などの家蔵の古筆・古典籍を研究して、近衛流（または三藐院流）と呼ばれる独自の書法をうちたてた。この時代の代表的能書である「寛永の三筆」の一人として、日本書道史上に名高い。本作品は、萌黄、深緑、白、白茶、縹、薄縹、茜の各色の料紙に、金銀の箔と泥を用いて山水や草花等を描いた料紙に、四季の順に『和漢朗詠集』と『新撰朗詠集』所収の漢詩と和歌を 1 首 1 葉に揮毫し、2 帖で合計 72 枚の色紙を収める。筆致は、濃淡、緩急、太細といった変化に富み、雄渾かつ華麗に書法の妙を披歴し、完成度が高い優品である。

＜陶磁＞（2 件）

10　○名　　称　黄清香茶壺（きせいごうちゃつぼ）
　　○作 者 等　中国
　　○時　　代　南宋-元・13-14 世紀
　　○品　　質　陶器。紐輪積、轆轤･叩き調整。
　　○員　　数　1 口
　　○寸 法 等　高 43.6cm 口径 12.3cm 胴径 15.2cm 底径 35.8cm
　　○作品概要　底部からやや斜めに開きながら立ち上がる。腰部辺りでゆるやかに上方へと伸び、長胴形となり肩部から丸く頸部へとすぼめていく。頸部は内湾しながら立ち上がり、玉縁状の口縁とする。肩上部に二条の凹線と波状文を巡らす。肩と口頸部の付け根の間に四つの耳を貼り付ける。腰部から頸部内側までやや緑がかった黄褐色釉を施す。底部中央に貼札「黄清香御壺／仙臺伊達家傳來」（墨書）あり。貼札左に花押状の墨書あり。釉調から「黄清香」と呼ばれるもので、入が入る部分はあるものの完形である。長持ち状の外箱と内箱が添う。外箱、内箱の墨書、貼札、底部の貼札は仙台伊達家伝来と伝える。南北朝以来賞翫されてきた唐物茶壺の姿をよく伝える作品である。
　　○来　　歴　伝 仙台伊達家伝来

11　○名　　称　耳付水指　高取（みみつきみずさし　たかとり）
　　○作　者　等　高取
　　○時　　代　江戸時代・17 世紀
　　○品　　質　陶器の耳付水指。
　　○寸　法　等　高 19.5cm 口径 11.3cm 底径 15.0cm
　　○作 品 概 要　鉄分を含んだ暗褐色の細かな胎土を轆轤で成形する。平底から腰と肩をふくらませ、口縁はくっきりと開く。肩の側面二方には塊状の耳を付け、胴部は三方からゆったりと撓める。肩上部には太くゆらぎのある凹線を一重巡らし、耳横に一ヶ所△状の彫りを入れる。肩と腰の間は凹線で区画し、「＼」、「／」、「×」、「｜」と太い凹線で飾る。底部を除いた外面と内面底部、内側面の一部に暗緑褐色の釉を施す。
　　本作品はかつて唐津と考えられていたが、近年の発掘調査により高取の内ヶ磯窯の作であることが明らかになったもの。その大胆な造形は、同時期の美濃、伊賀、備前などの水指とも共通しており、畿内で隆盛する茶の湯の需要を背景に作られたものであることがわかる。

＜漆工＞（1件）

12　○名　　称　葡萄栗鼠螺鈿箔絵料紙硯箱（ぶどうりすらでんはくえりょうしすずりばこ）
　　○時　　代　琉球・第二尚氏時代・18～19世紀
　　○品　　質　木製漆塗。
　　○員　　数　１具
　　○寸 法 等　（硯箱）縦 26.4㎝　横 21.3㎝　高 6.0㎝　（料紙箱）縦 45.1㎝　横 36.2㎝　高 12.5㎝
　　○作品概要　硯箱、料紙箱ともに、長方形、被蓋造とし、蓋鐓の下端は波形に形を整え、玉縁に仕立てている。器表は潤塗、身内と底は黒漆塗とし、玉縁の部分を朱塗とする。文様は、蓋表、蓋鐓および身の側面に葡萄栗鼠を密に配したもので、葡萄と栗鼠は夜光貝を貼り付けてあらわし、栗鼠の面貌や毛の流れ、葉脈などの細部を付描で描く。また、蔓や一部の葉は箔絵で表現し、葉脈には針描を用いる。
　　蓋鐓下端を波形に刳った特殊な形の料紙硯箱で、後世修理が見られるものの保存状態は良好である。多産を意味する葡萄栗鼠文様は、アジア諸国の工芸品に見られる吉祥文であり、このように螺鈿と箔絵技法を併用して器表全体を埋め尽くす文様構成は、琉球漆器の典型作の一つとなっている。

＜染織＞（13件）

13　○名　　称　縞藍布切伏白糸縫取上衣（しまあいぬのきりぶせしろいとぬいとりうわぎ）
　　○作 者 等　北海道
　　○時　　代　大正時代・20世紀
　　○品　　質　木綿
　　○員　　数　1領
　　○寸 法 等　丈 129.0、裄 61.5ｃｍ
　　○作品概要　和人との交易などによって得られた木綿衣にアイヌ文様を木綿で切り伏せ、刺繍を施している。アイヌ文様は母方の系譜にしたがって伝承されていく。木綿の上衣はアイヌの装いを示すだけでなく、重要な交易品の一つとして交流を示す資料としても貴重である。
　　○来　　歴　山形の庄内地方に伝わった

14　○名　　称　縞藍布切伏浅葱糸縫取上衣（しまあいぬのきりぶせあさぎいとぬいとりうわぎ）
　　○作 者 等　北海道
　　○時　　代　アイヌ文化期-明治時代・19世紀
　　○品　　質　木綿
　　○員　　数　1領
　　○寸 法 等　丈 112.4、裄 61.5㎝
　　○作品概要　和人との交易などによって得られた木綿衣にアイヌ文様を木綿で切り伏せ、刺繍を施している。アイヌ文様は母方の系譜にしたがって伝承されていく。木綿の上衣はアイヌの装いを示すだけでなく、重要な交易品の一つとして交流を示す資料としても貴重である。
　　○来　　歴　山形の庄内地方に伝わった

15　○名　　称　藍・浅葱布切伏萌葱・白糸縫取アットゥシ（あい・あさぎぬのきりぶせもえぎ・しろいとぬいとりあっとぅし）
　　○作 者 等　北海道
　　○時　　代　明治時代・19世紀
　　○品　　質　オヒョウ、木綿
　　○員　　数　1領
　　○寸 法 等　丈 130.3、裄 68.0　㎝
　　○作品概要　アットゥシは、オヒョウなどの木の外皮と木質部の間にある繊維質の内皮を糸に加工し、アットゥシ織機で織った反物から作る。無地にアイヌ文様の切布や刺繍がある。
　　○来　　歴　山形の庄内地方に伝わった

16　○名　　称　格子縞草皮衣（こうしじまそうひい）
　　○作 者 等　北海道
　　○時　　代　アイヌ文化期～明治時代・19世紀
　　○品　　質　イラクサ、木綿
　　○員　　数　1領
　　○寸 法 等　丈 126.0、裄 63.5㎝
　　○作品概要　草皮衣はイラクサという草を加工して織った反物から作る。アットゥシより柔らかく、白っぽい仕上がりになる。襟、袖口、裾に木綿を付ける。使い込まれた使用痕がのこる。補修された箇所もある。
　　○来　　歴　北海道の収集家のコレクションであった。

17　○名　　称　格子縞草皮衣（子供着）（こうしじまそうひい（こどもぎ））
　　○作 者 等　北海道または下北
　　○時　　代　アイヌ文化期-明治時代・19世紀
　　○品　　質　イラクサ、木綿
　　○員　　数　1領
　　○寸 法 等　丈 98.5、裄 56.0㎝
　　○作品概要　草皮衣はイラクサという草を加工して織った反物から作る。アットゥシより柔らかく、白っぽい仕上がりになる。襟、袖口、裾に木綿を付ける。やや小さめで子供用に作られたと推測される。かなり使い込まれた使用痕がある。
　　○来　　歴　北海道の収集家のコレクションであった。

18　○名　　称　縞藍布切伏萌葱糸縫取アットゥシ（しまあいぬのきりぶせもえぎいとぬいとりあっとぅし）
　　○作 者 等　北海道
　　○時　　代　アイヌ文化期-明治時代・19世紀
　　○品　　質　オヒョウ、木綿
　　○員　　数　1領
　　○寸 法 等　丈 106.5、裄 62.5㎝
　　○作品概要　アットゥシは、オヒョウなどの木の外皮と木質部の間にある繊維質の内皮を糸に加工し、アットゥシ織機で織った反物から作る。縞地にアイヌ文様の切布や刺繍がある。かなり使い込まれた使用痕がある。
　　○来　　歴　青森のやん衆(漁師)が使っていた。

19　○名　　称　縞藍布切伏萌葱糸縫取アットゥシ（しまあいぬのきりぶせもえぎいとぬいとりあっとぅし）
　　○作 者 等　北海道
　　○時　　代　アイヌ文化期-明治時代・19世紀
　　○品　　質　オヒョウ、木綿
　　○員　　数　1領
　　○寸 法 等　丈 126.0、裄 66.0㎝

○作品概要　アットゥシは、オヒョウなどの木の外皮と木質部の間にある繊維質の内皮を糸に加工し、アットゥシ織機で織った反物から作る。縞地に切布や刺繍がある。
○来　　歴　青森のやん衆(漁師)が使っていた。

20 ○名　　称　縞アットゥシ（子供着）（しまあっとぅし（こどもぎ））
○作 者 等　北海道
○時　　代　アイヌ文化期-明治時代・19 世紀
○品　　質　オヒョウ、木綿
○員　　数　1 領
○寸 法 等　丈 107.5、裄 60.0 ㎝
○作品概要　アットゥシは、オヒョウなどの木の外皮と木質部の間にある繊維質の内皮を糸に加工し、アットゥシ織機で織った反物から作る。襟、袖口、裾に木綿を付ける。やや小さめで子供用に作られたと推測される。
○来　　歴　青森のやん衆(漁師)が使っていた。

21 ○名　　称　浅葱地牡丹松梅桜散し文紅型衣裳（あさぎじぼたんまつうめさくらちらしもんびんがたいしょう）
○作 者 等　沖縄・首里
○時　　代　琉球 第二尚氏時代-明治時代初期・19 世紀
○品　　質　苧麻。数カ所に小さな虫喰いが認められるが状態は総じて良好である。
苧麻単糸平織（経:撚無し、25 本/cm　緯:撚無し、28 本/cm)。紅型両面染め。文様は牡丹、松、梅、桜文の小文様で、それぞれ 2 つから 3 つの花数にまとまり、蔦文をあわせ、地間には単体の桜文を散らしている。型紙は細模様（奉書紙の全紙約四分の一）を繰り返し用い、総柄に仕上げている。花文は紅色、あずき色、黄色、牡丹葉は緑色が色差しされ、梅文には隈取りが施されている。文様を色差しした後に花文のみ糊防染し、藍の引き染めで地色を染めている。
形態は、単衣仕立て。衿は布を贅沢に使った広衿で、内側に折り返している。衿肩明きが短く、後身頃への繰越はつくらず、衿丈が長く、衿下が短い。袖は付けづめで、身八つ口や振りはなく、袖口下を縫いふさがない広袖である。脇にはマチ（ワチスビ）をつけない。
袖口の始末はせずに耳のままである。衿端は折伏せ縫いにしている。後ろ身頃の身幅に対して、前身頃は衽付けの際に縫い代を大きくとり（縫い代 8.0㎝)、身幅を調整している。裾始末は、背縫いと衽付けの後、三つ折縫いしている。縫い糸は背縫い、脇、衽付けに白の木綿糸を、それ以外には水色の木綿糸を使用している。現在の縫い糸の他に、腰上げ跡や、前身頃の端に 1.5㎝ の縫い代痕が見られる。
○員　　数　1 領
○寸 法 等　丈 128.5㎝ 裄 64.3㎝　織幅 35.0㎝
○作品概要　文様は牡丹、松、梅、桜文の小文様で、蔦文をあわせ、地間には単体の桜文を散らす。型紙は細模様（奉書紙の全紙約四分の一）を繰り返し用い、総柄に仕上げる。単衣仕立て。数カ所に小さな虫喰いが認められるが総じて良好である。
苧麻地の表裏に文様をあわせた両面染めの紅型で、①広衿、②衿丈が長く、衿下が短い、③広袖の付けづめ、④衿肩明きが小さい、⑤衽下がりが短い、⑥衿肩明きを肩山より後ろ身頃側へずらす繰越がない、⑦後幅は布幅いっぱいを使うなど琉装の特徴を保っている。一部縫い直されており、打掛として仕立てられた琉装を帯をしめる和装着物として用いていたと思われる。布地は極細の苧麻糸で織られた一級の上布であり、もともとは首里の上級士族向けの紅型衣裳であった可能性が高い。

22 ○名　　称　黄地竹垣薔薇文紅型裂（きじたけがきばらもんびんがたきれ）
○作 者 等　沖縄・首里
○時　　代　琉球 第二尚氏時代-大正時代・19-20 世紀
○品　　質　絹。絹単糸平織（経:撚無し、52 本/cm　緯:撚無し、34 本/cm)。紅型片面染め。織幅を残し、上下は断ち切られた裂で、下辺の一部にほつれを防ぐためのまつり縫いが残る。下辺に小さな裂けが認められるが、大きな汚れ、切れは認められない。
鮮やかな黄地に表された文様は、垣根の手前と後ろに、大輪の花文を表したものである。大模様の型紙(奉書紙全紙大）を連続して用い、裂地の上下に同模様が二段認められる。花文は、細く鋭角的な枝葉をもった薔薇文で、楕円形と側面形の大輪と、蕾を描く。薔薇の花、葉の表現は二種類あり、ひとつは紅色、薄紫色、緑色を差し、隈取りをほどこし、ひとつは輪郭のみ残し内を格子縞で表す。竹垣は屏風状に屈曲して表され、青色の垣根は不揃いな竪縞をつくる。薔薇の根元から龍の髭状の細長い草が曲線を描いて伸び、竹垣による竪縞と相反する。
○員　　数　1 枚
○寸 法 等　縦 84.6㎝　横 43.2㎝　(織幅 43.2㎝)
○作品概要　織幅を残し、上下は断ち切られた裂で、下辺の一部にほつれを防ぐためのまつり縫いが残る。鮮やかな黄地で、屏風状に屈曲した竹垣根の手前と後ろに、細く鋭角的な枝葉をもった大輪の薔薇文を表す。大模様の型紙(奉書紙全紙大）を連続して用いており、裂地の上下に同模様が二段認められる。
紅型は文様を型紙や筒描きによって糊防染し、その上から顔料や染料で染めを施すもので、琉球時代から続く沖縄の染技法である。王家の衣裳の色である黄地の裂だが、意匠構成や染めは幾分雑駁であることから、踊り衣裳としてつくられた可能性もある。
本作の文様は、鎌倉芳太郎蒐集の紅型型紙資料のうち「垣根薔薇模様白地型紙」（沖縄県立芸術大学附属図書・資料館 収蔵番号 1117）に大変よく似ている。

23 ○名　　称　茜地山水松鶴文更紗（あかねじさんすいまつつるもんさらさ）
○作 者 等　インド・コロマンデル海岸
○時　　代　17-18 世紀
○品　　質　木綿。
インド更紗。木綿単糸平織（経:Z・34 本/cm　緯:Z・28 本/cm)。片面染め、描き染め、蠟防染。広幅の布一面を濃い茜色に染め、山水模様を描き染めと蠟防染にて表す。矩形をいくつも重ねて表した岩山に沿って滝が表され、流れ出した水流は池となり、水辺には太い松の樹、苔むした岩、2 羽の鶴、さらに続く川と見られる水流には、もう 1 羽の鶴が着水する様が描かれる。上記の図様を布一面に繰り返す。ひとつひとつの文様は極めて細緻で、カラムカリという手描きのための筆記用具を用いて輪郭線だけでなく陰影、植物の葉脈や襞も極細線で描き込んでいる。鶴の胴体には花唐草、池の水文は蠟防染で渦巻文を描くなどいたる所を細線で装飾する。縁回しは華やかな大輪の花の唐草文で、しっかりと太い唐草が途切れることなく巡らされている。
全体に擦れや穴が多く、インドネシアで補修されたと見られる接ぎあて（インド更紗）が多数認められる。
○員　　数　1 枚
○寸 法 等　縦 312.0　横 224.0㎝
○作品概要　スマトラ島ランプンに伝世した広幅の大更紗。文様のパターンを繰り返すが、すべて手描きで、ひとつひとつの文様は極めて細緻である。山水モチーフはヨーロッパにおける中国趣味に応じて用いられており、本品は本来ヨーロッパ向け輸出品として制作されたと考えられる。類似品としては、京都の祇園祭、南観音山の前掛として使用されている更紗、ニューヨーク・クーパーヒューイット博物館蔵の更紗が知られる。後者はもとオランダの古渡りで、第二次世界大戦後にニューヨークに運ばれたという。彦根藩井伊家に伝来した彦根更紗の中にも本更紗の松鳥文に近い更紗の裂が伝わっている。日本の古渡更紗と同類の更紗がインドネシアに渡り、当初の姿をそのまま残して今に伝わっていたという点で、真に価値が高い。
○来　　歴　インドネシア・スマトラ島ランプン伝世。1980 年代に現地で入手。

24 ○名　　称　茜地花卉鳥獣文更紗（あかねじかきちょうじょうもんさらさ）
○作 者 等　インド
○時　　代　17-18 世紀
○品　　質　インド更紗。生地は木綿単糸平織（経:Z・23 本/cm　緯:Z・22 本/cm)。一部両面染め、描き染め、蠟防染。
やや厚めの木綿生地に鮮やかな茜色が地色として染められ、文様はすべて描き染めで表される。茜染めは両端の部分のみ両面に染められ、他は

すべて片面染めである。淡い藍色が使われているが裏面には色が抜けていない。意匠構成は中央の矩形と両端の鋸歯文からなり、それぞれの区画の間には黄色地に茜色の縄目文を配した帯が表される。中央の矩形内には蠟防染で立湧様に枠線を引き、枠線内部には側面形の花文を描く。矩形の周りにはこげ茶地に兎文の枠を巡らせ、さらに外側に花弁形の縁をまわし、中は茜色のゴマ手の地文に蹲踞する半人半獣を描く。布地の四分の一位置に接ぎ目が認められる。矩形を囲む茶地兎文の枠の一片が切られ、接ぎあわされた箇所には他の三辺と異なる花弁形の縁まわしが配される。両端に描かれた鋸歯形は直線的ではなく花房の輪郭をとったような曲線を描き、内側は花唐草を中心に両側に猿、鳥がそれぞれ一対で描かれる。両端の左右に帯形区画を設け、中心から外に向かってゴマ手地文に花入りの三角形の区画、こげ茶地に花入りの立湧形の区画を配する。両端の鋸歯文は同じ意匠だが、側面縁の模様は両端で若干異なる。上記のことから、本品は似通った意匠の兄弟裂2枚を接ぎあわせたものとみなされる。
裏面の端2箇所に「4」の字を載せたハート形VEIC印が捺される。

○員　　数　1枚
○寸 法 等　縦 239.0　横 112.0cm
○作品概要　南スマトラで儀礼用の布として使用されていたインド更紗。中央の矩形と両端に鋸歯文で構成され、文様はすべて描き染めである。本品の裏にはイギリス東インド会社が18世紀末まで商標として使用していた。「VEIC(United East India Company　連合東インド会社)」の印が捺されており、イギリス東インド会社によって南スマトラにもたらされたことが考えられる。本品のように端に鋸歯状の模様をともなったデザインのものは、腰巻として着用した際に裏地が見えやすいため、端の部分のみを両面染めにしている。一方、藍色が裏に抜けていないことから本品の藍染めは浸染ではなく藍泥を直接描き染めしていることが考えられる。
○来　　歴　インドネシア・南スマトラ伝世

25　○名　　称　クリシュナ物語図金更紗（くりしゅなものがたりずきんさらさ）
○作 者 等　インド・ラージャスターン州
○時　　代　18-19世紀
○品　　質　インド更紗。木綿単糸平織（経:Z・28本/cm　緯:Z・27本/cm)。片面染め、描き染め、蠟防染、印金。
生地は2枚（幅64.5㎝と56.5㎝）からなり、中心より右よりで接ぎ合わせている。両端には縫い穴が認められる。クリシュナ神の物語を描き染めで描く。中心は3段に区切られ上段は鮮やかな藍地で中心軸に向かいあう形で天界の有翼天人が左右5人、合計10人描かれる。中心の天人は5弁の花を散華し、ほかの天人はそれぞれ竪琴、パカーワジュ（両面太鼓)、ヴィーナー（共鳴体のついた弦楽器)、タンブーラー（弦楽器）を手に音楽を奏でる。中段は淡藍地に染められる。笛を吹くクリシュナ神を中心に左右に6人ずつ12人のゴーピー（牧女）を配する。クリシュナは正面形でカチニと呼ばれるスカート、孔雀の羽飾りの冠、足まで届く豪華な瓔珞をつけている。ゴーピーはそれぞれ片手に供物を、もう一方に団扇、孔雀の羽、払子などを手にする。下段は緑地に染められ主文の背景には山岳模様を表す。左側には樹下のクリシュナと乳搾りのための器を頭上運搬するゴーピー、右側には美しい設えの家屋がふたつ並び、クリシュナと貴族風の人物が描かれる。それらを囲うように召使風の男性や牛の群れが配される。下段の地面にあたる最下段は白地に細い罫線が引かれ、茜地の区画を4つ配し、中に東屋を描く。これら3段の物語図を囲む縁模様の四隅に茜地にハンサ（鵞鳥）を、四辺の縁模様は白地に花唐草を描く。模様の輪郭線のほぼすべてに印金がほどこされた金更紗である。
生地、染め、印金ともに状態は良好である。
○員　　数　1枚
○寸 法 等　縦 93.0　横 121.0cm
○作品概要　本品は模様の輪郭線のほぼすべてに印金がほどこされた豪華な金更紗である。クリシュナはヒンドゥー教のヴィシュヌ神の八番目の化身。15世紀末に現在のウッタルプラデーシュ州マトゥラー近郊でクリシュナ信仰のヴァッラバ派が組織され、その信徒たちは17世紀にはインド北部ラージャスターン州にも広がった。クリシュナを画題とした裂はヴァッラバ派の寺院装飾として用いられており、本品も本来は寺院装飾のうちピチャヴァイと呼ばれる壁掛として仕立てられたと考えられる。なお、本品のように正面形のクリシュナの図様はラージャスターン州ナタドワラの描き更紗やミニアチュールの図様と同様であることが指摘されている。

＜歴史資料＞（6件）

26　○名　　称　紙本著色稲富流砲術奥義秘伝図巻（しほんちゃくしょくいなとみりゅうほうじゅつおうぎひでんずかん）
○時　　代　江戸時代・寛永6年(1629)
○品　　質　紙本著色。巻子装。表紙は茶地亀甲繋文牡丹文金襴で、白無地に茶の縁を廻す貼題箋をつけるが文字は無い。見返しは白無地。紐は紫の無地で先に骨製の小ハゼをつける。軸首は木造印可軸(直径1.9)。
○員　　数　１巻
○寸 法 等　表紙縦24.5　横22.8。本紙縦24.3　全長1112.0(第1紙90.3、第2紙95.0、第3紙91.8、第4紙96.0、第5紙62.5、第6紙94.7、第7紙94.4、第8紙95.9、第9紙46.2、第10紙96.6、第11紙94.7、第12紙71.9、第13紙82.0)㎝
○作品概要　過去の修理で不適切な紙継ぎが行われたと推測される。鉄砲で動物や人を狙う際に、距離や方向によって変わる目当とすべき位置を図と文字で示す。鳥類、蜻蛉、長刀や弓、騎馬武者、的、笹などを描く。奥書の「右此一流一篇拾壱巻之書」から、慶長12年(1607)の稲富一夢(1552～1611)自筆の伝書（3種類25巻）のうち『一流一返之書』の「目当定書」と推測される。
稲富流は、が創設した我が国を代表する砲術流派。一夢は丹後国の出身で初め細川忠興、のち松平忠吉、徳川家康に仕えた。
本書は一夢の没後に近い江戸時代初期の写本であり、当時の砲術の実態を示す好史料である。本書は、慶長19年(1614)に澤村角右衛門が稲富一夢から伝授された書を、さらに寛永6年(1629)に佐龕久間儀太夫が写して越前一伯(松平忠直(1580～1607))へ伝えたものとみられる。

27　○名　　称　長崎阿蘭陀通詞西吉兵衛家関係文書（ながさきおらんだつうじにしきちべえけかんけいもんじょ）
○時　　代　江戸時代・18-19世紀
○品　　質　(1～5,7～10,13,14,18,22)紙本ペン書、(6)紙本銅版、(11,12,15～17)紙本ペン書和訳文は墨書、(23,25～35)紙本墨書、(24)紙本ペン書ヵ
○員　　数　35点
○寸 法 等　(1)縦21.2横16.5　(2)縦23.7横37.2　(3)縦23.1横18.8　(4)縦32.8横42.4　(5)縦23.0横37.0　(6)縦9.7横19.6　(7)縦24.8横21.4　(8)縦17.6横12.3　(9)縦15.5横19.2　(10)縦13.5横8.7　(11)縦17.8横11.5　(12)縦11.2横18.1　(13)縦18.1横22.8　(14)縦15.7横13.7　(15)縦18.0横11.4　(16)縦10.0横14.2　(17)縦6.6横18.5　(18)縦12.0横20.9　(19)縦12.6横15.1　(20)縦22.5横17.8　(21)縦27.4横21.2　(22)縦9.1横13.9　(23)縦18.0横16.6　(24)縦18.5横20.0　(25)縦15.4横15.3　(26)縦10.7横17.0　(27)縦13.3横16.2　(28)縦16.2横24.6　(29)縦27.2横19.3　(30)縦26.8横19.2　(31)縦24.6横17.1　(32)縦24.6横16.9　(33)縦24.5横16.1　(34)縦25.5横20.6　(35)縦16.1横14.3㎝
○作品概要　阿蘭陀通詞はオランダとの貿易・外交・文化交渉の事務に当たった通訳官兼商務官。三十数家を数える阿蘭陀通詞のうち西家は元和2年(1616)に南蛮大通詞、後に阿蘭陀大通詞となった吉兵衛を初代とする。オランダ商館はオランダ東インド会社の日本支店で、寛永18年(1641)に平戸から長崎出島への移転を命じられた。
(1)～(5)は、長崎商館長や商館員の書簡。インドのベンガル長官ティツィングやドゥーフの書簡を含む。
(7)～(22)は開国以降のもので、オランダ人だけでなく、米・英・仏・独人による蘭文と英文による書簡類を含む。多くは貿易に関する簡易な内容。
(23)～(35)は通詞がオランダ語で書いた書簡類。同僚の通詞宛のものが多く、自宅への訪問を乞うなどの簡単な内容。
○来　　歴　内容から長崎阿蘭陀通詞西吉兵衛家に伝来したものと考えられる。

28　○名　　称　紙本墨書大内氏家臣安富氏関係文書（しほんぼくしょおおうちしかしんやすとみしかんけいもんじょ）
○時　　代　室町-江戸時代・15-18世紀
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　1巻
○寸 法 等　(1)縦25.5横34.0 (2)縦15.0横19.9 (3)縦25.7横34.2　(4)縦10.5横26.9 (5)縦25.8横38.2　(6)縦15.7横42.8 (7)縦26.6横37.7 (8)縦14.9横41.0 (9)縦17.1横29.9 (10)縦15.2横38.8 (11)縦24.6横35.2 (12)縦15.1横35.8 (13)縦22.8横35.4 (14)縦15.6横40.1㎝

○作品概要　大内氏は周防・長門を中心に勢力を伸ばし、義弘(1356～99)以降は筑前・豊前の守護職を兼ねた時期もあり、大友氏や少弐氏・菊池氏と争いながら北部九州地域にも勢力をはった。また、朝鮮や明とも盛んに交易を行った。　安富氏は大内氏の重臣で、元寿(ｹﾞﾝｼﾞｭ)は在京雑掌として活躍した。行恒(ﾕｷﾂﾈ)などは大内氏奉行人奉書の奉者として名を連ねている。本文書は、大内持世(ﾓﾁﾖ)(1394～1441)代の 15 世紀前半から義興(ﾖｼｵｷ)(1477～1528)代までの室町時代の文書 13 通(1～8、10～14)と、江戸時代・延享 5 年(1748)に大内政弘(ﾏｻﾋﾛ)(1446～95)感状を一族の安富五右衛門に与えることを記した安富栄誠(ﾋﾃﾞﾉﾌﾞ)置文 1 通（9）から成る。明治時代には山口県士族安富氏に伝来していた。

29 ○名　称　紙本墨書大内義隆袖判安堵状并大内義長袖判下文
（しほんぼくしょおおうちよしたかそではんあんどじょうならびにおおうちよしながそではんくだしぶみ）
○時　代　室町時代・天文 20 年(1551)(大内義隆袖判安堵状)、天文 22 年(1553)(大内義長袖判下文)
○品　質　紙本墨書
○員　数　2 通
○寸 法 等　縦 31.6 横 47.2(大内義隆袖判安堵状)、縦 31.8 横 48.6(大内義長袖判下文)　cm
○作品概要　大内義隆(1507～51)は六カ国の守護を兼ね、大宰大弐にも任官した。重臣陶隆房(ｽｴﾀｶﾌｻ)（1521～55）らの叛乱により天文 20 年(1551)9 月、自害した。大内義隆袖判安堵状は、一宮武成(ｲﾁﾉﾐﾔﾀｹﾅﾘ)に対して父清成(ｷﾖﾅﾘ)所帯の相続を安堵したもの。文書の袖に大振りな花押を記す義隆最晩年のもの。大内義長(?～1557)は陶隆房に擁立されて天文 21 年 2 月に大内氏を継いだ。大内義長袖判下文は一宮修理進武成に対して豊前国田河郡田原村(現福岡県田川郡川崎町田原)のうち 15 町の領知を認めたもので、下文の様式をとっている。書体から大内義隆袖判安堵状と同じ右筆の手になるものと推定される。

30 ○名　称　紙本墨書徳川家康交趾渡海朱印状（しほんぼくしょとくがわいえやすこうちとかいしゅいんじょう）
○時　代　江戸時代・慶長 19 年(1614)
○品　質　紙本墨書
○員　数　1 幅
○寸 法 等　（本紙）縦 43.4 横 60.0　cm
○作品概要　掛幅装。紙表具。本文は「自日本到／交趾國舟也／右／慶長十九年甲寅正月十一日（／は改行を示す）」。料紙は簀の目の太い檀紙と推定されるが、相剥ぎされて薄くなっている。
朱印船制度は、幕府の公許により異国へ渡海する船に朱印状を与えて相手国から航路の安全保障を求めたもの。慶長 19 年(1614)には金地院崇伝（1569～1633）が発給を担当していた。この頃には下付の日付にとらわれず吉日を記入しており、慶長 19 年正月 11 日付けの交趾国への渡海朱印状は 7 通が発給されていて、受給者は舟本弥七、唐人三ほかの 7 名であるが、なお記載にもれた受給者がいる可能性もある。交趾国は現在のベトナム中部から南部にあたり、ホイアンが朱印船の主な渡航先となっていた。

31 ○名　称　福州沿海図（ふくしゅうえんかいず）
○作 者 等　Aucke Pietersz.Jonk もしくは Jan Hendricksz.Tim
○時　代　オランダ王国・ネーデルラント連邦共和国時代・1663 年
○品　質　羊皮紙著色。
○員　数　1 枚
○寸 法 等　縦 79.0 横 92.0　cm
○作品概要　オランダ製の海図。オランダ人地図製作者 Aucke Pietersz.Jonk もしくは Jan Hendricksz.Tim が、1662 年の中国福建省（福州）近海における海戦でオランダ艦隊が鄭成功(1624～62)のジャンク船団を撃破した場面を描いたものである。本図の原本とみられる海図（1662 年 8 月～9 月成立）がオランダ国立公文書館に所蔵されており、本図は 1663 年の年紀をもつことから、同図の副本であると考えられる。
本図は南方を上向きに配し、彩色には 4 色がもちいられ、海上にはオランダ艦隊と鄭成功のジャンク船団、港湾には城塞都市が描かれており、黒インクのペン書きもある。本図の左上には「北緯 26 度 5 分福州の川の手前にある停泊地と港」とあり、計 11 地点（A～K）についての個別的な解説もあり海洋知識がもりこまれる。オランダ艦隊が鄭成功のジャンク船団を撃破・拿捕した様子がこまかく記されている。

（2）寄贈（4 件）

＜彫刻＞（1 件）

1 ○名　称　十一面観音菩薩立像（じゅういちめんかんのんぼさつりゅうぞう）
○作 者 等　日本
○時　代　江戸時代・17 世紀
○品　質　木造（針葉樹材）、彫眼。頂上面より両足に至るまで一材より彫成する。左前臂、水瓶、右足先、両肘後ろで輪を描く天衣部分は別材製とする。
髻頂に如来相の仏面、天冠台上の周囲に変化面 10 面を巡らす。宝冠、冠繒を着ける。白毫相、三道相をあらわす。条帛、裙、腰布、帯状布を着け、天衣を掛ける。装身具は胸飾、瓔珞、臂釧を着ける。左腕は屈臂し、蓮華を差した水瓶を持ち、右腕は垂下して掌を前に向けて五指を伸ばす。右足を軽く踏み出して蓮華座上に立つ。台座は蓮華十重座。光背は頭光、挙身光、周縁部から成る。宝冠、胸飾、瓔珞は銅板製・鍍金。彩色は眉・瞳に墨、唇に朱、髪際線・天冠台に金泥線。頭髪部は墨（もしくは群青）。
○員　数　1 軀
○寸 法 等　像高 27.0cm　総高（光背-台座）49.3cm　光背：高 33.8cm　最大幅 16.2cm　台座：高 15.5cm　下框最大張 18.3cm　下框最大奥 18.0cm
○作品概要　白檀をはじめとする香木を彫刻して作られる檀像は、インドに生まれ、中国で盛んに作られた。平安時代後期以降日本的な洗練が加えられ、素地仕上げの像表面に切金で加飾するなど、典雅で繊細な檀像風の作例が多く生み出された。
本像は、穏やかで繊細な顔つき、現実的な衣端の処理、控え目な衣文の襞、丁重な作柄などの特徴から、江戸時代、17 世紀の制作と考えられ、檀像風彫像の近世における展開を示す佳作といえる。なお、台座・光背は本躰と一具のものではないが、同時代の制作と思われる。

＜染織＞（2 件）

2 ○名　称　久留米絣着物（くるめがすりきもの）
○作 者 等　井上ナカ（1897-1952）・福岡県広川町
○時　代　昭和時代・1930 年代
○品　質　木綿単糸平織（経：S・22 本/cm　緯：S・20 本/cm）。括絣。
○員　数　1 領
○寸 法 等　丈 135.0 裄 61.5（縦 142.0 横 123.0）　cm
○作品概要　久留米絣の着物。生地の織りは稠密かつ均等である。仕立てもしっかりしているが、後身頃の縫い合わせ部分に一部ほつれがみられる。表地には損傷はみられない。左袖下端に若干のヨゴレが認められる。
絣模様については、経絣は約 8㎜ 間隔に約 3㎜ 幅の括り、緯絣は約 3㎜ 間隔に約 3㎜ 幅の括りを施しており、これらが極小柄の井桁模様を構成している。
久留米絣は 19 世紀初め、井上伝によって編み出されたとされ、幕末以降久留米を中心に筑後地方特産品として全国に知られた。本作は井上ナカ氏（明治 30 年－昭和 27 年）が、息子重男氏のために 1930 年代半ばまでに自ら製織し、仕立てた着物である。昭和初期に生産された久留米絣の特徴は主として小柄模様の男物が主流であり、本作は当該時期の作品の特徴をよく表している。

3 ○名　称　久留米絣羽織（くるめがすりはおり）
○作 者 等　井上ナカ（1897-1952）・福岡県広川町
○時　代　昭和時代・1930 年代
○品　質　木綿単糸平織（経：S・22 本/cm　緯：S・20 本/cm）。括絣。

〇員　　数　　１領
〇寸 法 等　　丈 98.7 裄 64.0（縦 105.0 横 125.0)㎝
〇作品概要　　久留米絣の着物。生地の織りは稠密かつ均等で、仕立てもしっかりしている。表地には損傷はなく、裏地は仕立て時のものではない可能性がある。
絣模様については、経絣は約 8㎜ 間隔に約 3㎜ 幅の括り、緯絣は約 3㎜ 間隔に約 3㎜ 幅の括りを施しており、これらが極小柄の井桁模様を構成している。
久留米絣は 19 世紀初め、井上伝によって編み出されたとされ、幕末以降久留米を中心に筑後地方特産品として全国に知られた。本作は井上ナカ氏（明治 30 年－昭和 27 年）が、息子重男氏のために 1930 年代半ばまでに自ら製織し、仕立てた着物である。昭和初期に生産された久留米絣の特徴は主として小柄模様の男物が主流であり、本作は当該時期の作品の特徴をよく表している。

＜民族資料＞（1 件）

4　〇名　　称　　黒地草花文刺繍上着（くろじそうかもんししゅううわぎ）
〇作 者 等　　中国貴州省台江県
〇時　　代　　20 世紀
〇品　　質　　木綿単糸平織（経：S・20 本/㎝　緯：S・18 本/㎝）、編帯繍、堆繍、シュウ（糸＋芻）繍。
〇員　　数　　１領
〇寸 法 等　　縦 82.5 横 125.7㎝
〇作品概要　　中国貴州省台江県に居住する苗族女性の盛装用衣装上衣。前あき。和服と同じく羽織り着用する。本作では草花文などの大部分に編帯繍（テープ状の組紐を平面的に縫いつける技法）が、草花文を埋める部分の一部にシュウ繍（絹製組紐を襞をつくりながら縫いつけていく技法で立体的な厚みを持つ）と、衿や袖の鋸歯文の部分に堆繍（小さく切った絹布や紙片などを三角に折り、重ねるように縫いつける技法）が用いられている。状態はたいへん良好で、ほつれ、破れ、褪色などはみられない。刺繍、蝋防染、砧布など、多彩な染織の技法を駆使して精緻かつ華やかな衣装を制作することでよく知られる貴州省東部の台江県に居住する「台江苗族」の衣装の特徴を備えている。

（3）編入（1 件）
＜建築＞（1 件）

1　〇名　　称　　多宝千仏石幢　幢身拓本（たほうせんぶつせきとう　とうしんたくほん）
〇時　　代　　昭和
〇品　　質　　拓本。軸装。
〇員　　数　　2 幅
〇寸 法 等　　242.3×108.5㎝　241.6×109.0㎝
〇作品概要　　この石幢は、中国東北部で 11 世紀頃に栄えた契丹国で造られた高さ 5.54m の石灰岩製建築物で、その表面には多数の陀羅尼や銘文などが刻まれる。本拓本はその八角形幢身に刻まれた各種陀羅尼を 4 面ずつ 2 枚の紙に拓出・軸装したものである。
〇来　　歴　　京都国立博物館からの無期管理換品

1-(2) 寄託品

1-(2)-① 寄託品一覧表

平成23年3月31日現在

	国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文
合計	11,975	185	1,185	2,726	50	257	6,005	83	612	1,947	52	314	1,297	0	2
絵画	3,225	54	408	412	12	64	2,018	27	243	579	15	101	216	0	0
書跡	1,859	64	267	480	12	30	952	40	201	306	12	35	121	0	1
彫刻	772	11	203	140	1	41	247	1	59	360	9	103	25	0	0
建築	4	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0
金工	1,032	12	88	170	4	18	526	1	40	241	7	30	95	0	0
刀剣	260	10	70	225	8	57				34	2	13	1	0	0
陶磁	1,355	1	6	139	0	2	790	1	3	11	0	0	415	0	1
漆工	764	10	53	136	3	16	470	4	15	104	3	22	54	0	0
染織	763	7	34	73	2	4	514	3	29	47	2	1	129	0	0
考古	939	12	34	157	4	12	446	6	13	230	2	9	106	0	0
民族資料	121	0	0	5	0	0	0	0	0	6	0	0	110	0	0
歴史資料	93	0	9	1	0	0	38	0	9	29	0	0	25	0	0
和書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東洋 絵画	149	2	9	149	2	9									
東洋 書跡	28	1	1	28	1	1									
東洋 彫刻	11	0	0	11	0	0									
東洋 金工	1	0	1	1	0	1									
東洋 陶磁	77	1	0	77	1	0									
東洋 漆工	26	0	2	26	0	2									
東洋 染織	9	0	0	9	0	0									
東洋 考古	487	0	0	487	0	0									
東洋 民族	0	0	0	0	0	0									

＊京都国立博物館・奈良国立博物館は、東洋の寄託品も「日本」に含む。

＊東京国立博物館では、国宝・重要文化財の数は文化庁の指定件数に合わせることとした。

1-(2)-② 寄託品増減表

平成23年3月31日現在

	国立博物館				東京国立博物館				京都国立博物館				奈良国立博物館				九州国立博物館			
	21年度	22年度			21年度	22年度			21年度	22年度			21年度	22年度			21年度	22年度		
	計	新規	返却	計	計	新規	返却	計	計	新規	返却	計	計	新規	返却	計	計	新規	返却	計
合計	11,904	168	97	11,975	2,734	5	13	2,726	5,957	107	59	6,005	1,957	6	16	1,947	1,256	50	9	1,297
絵画	3,189	52	16	3,225	416	0	4	412	1,977	50	9	2018	580	0	1	579	216	2	2	216
書跡	1,861	24	26	1,859	485	0	5	480	945	23	16	952	308	1	3	306	123	0	2	121
彫刻	773	3	4	772	141	0	1	140	248	0	1	247	359	3	2	360	25	0	0	25
建築	4	0	0	4	0	0	0	0	4	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0
金工	1,045	10	23	1,032	170	0	0	170	530	10	14	526	249	0	8	241	96	0	1	95
刀剣	261	1	2	260	226	1	2	225					34	0	0	34	1	0	0	1
陶磁	1,303	60	8	1,355	138	1	0	139	784	11	5	790	11	0	0	11	370	48	3	415
漆工	761	9	6	764	135	1	0	136	468	6	4	470	103	2	1	104	55	0	1	54
染織	764	2	3	763	73	0	0	73	515	2	3	514	47	0	0	47	129	0	0	129
考古	939	3	3	939	156	1	0	157	446	2	2	446	231	0	1	230	106	0	0	106
民族資料	121	0	0	121	5	0	0	5	0	0	0	0	6	0	0	6	110	0	0	110
歴史資料	95	3	5	93	1	0	0	1	40	3	5	38	29	0	0	29	25	0	0	25
和書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東洋 絵画	150	0	1	149	150	0	1	149												
東洋 書跡	28	0	0	28	28	0	0	28												
東洋 彫刻	11	0	0	11	11	0	0	11												
東洋 金工	1	0	0	1	1	0	0	1												
東洋 陶磁	77	0	0	77	77	0	0	77												
東洋 漆工	26	0	0	26	26	0	0	26												
東洋 染織	8	1	0	9	8	1	0	9												
東洋 考古	487	0	0	487	487	0	0	487												
東洋 民族	0	0	0	0	0	0	0	0												

＊東京国立博物館は、列品管理規程による「旧東洋課所掌分」あり。

1-(2)-③ 登録美術品一覧表

平成23年3月31日現在

	国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文	計	国宝	重文
合計	8	0	5	3	0	3	3	0	0	2	0	2	0	0	0
絵画	2	0	2	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
書跡	2	0	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
彫刻	3	0	2	0	0	0	1	0	0	2	0	2	0	0	0
染織	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

1-(3) 収蔵品の管理・保存

1-(3)-① 各収蔵庫、展示場の温湿度

【東京国立博物館】

会場等		空調実施時間	温度			湿度（年間）
			冬	夏	中	
本館	展覧会場	09：00～17：00	12～25℃	20～30℃	16～30℃	15～90%
	収蔵庫	09：00～17：00	18～25℃	18～30℃	18～28℃	42～72%
平成館	展覧会場	09：00～17：00	18～26℃	20～29℃	16～28℃	30～72%
	収蔵庫	09：30～17：00	22～24℃	23～30℃	24～27℃	40～61%
東洋館	展覧会場	閉室中	閉室中	閉室中	閉室中	閉室中
	収蔵庫	閉室中	閉室中	閉室中	閉室中	閉室中
宝物館	展覧会場	24時間運転	21～23℃	22～27℃	23～26℃	32～67%
	収蔵庫	24時間運転	22～24℃	21～23℃	22～24℃	52～57%
表慶館	展覧会場	09：00～17：00	9～22℃	19～28℃	14～27℃	20～82%
	(仮)収蔵庫	09：00～17：00	10～22℃	21～27℃	12～25℃	36～75%
黒田記念館	展覧会場	24時間運転	20～24℃	21～24℃	22～27℃	50～60%
	収蔵庫	24時間運転	22～24℃	23～25℃	24～26℃	38～66%

【京都国立博物館】

会場等		空調実施時間	温度(年間)	湿度（年間）
特別展示館	展覧会場	09：00～18：00	18℃～25℃	57%～60%
	収蔵庫	09：00～17：30	18℃～22℃	55%～60%
平常展示館	展覧会場	——	——	——
	収蔵庫	——	——	——
北収蔵庫		——	——	——
東収蔵庫		09：00～17：30	18℃～22℃	55%～60%
文化財保存修理所		09：00～17：30	22℃～24℃	57%～60%

【奈良国立博物館】

会場等		空調実施時間	温度（年間）		湿度（年間）
			冬	夏	
本館	展覧会場	24時間運転	21℃±1℃	25℃±1℃	60%±2%
西新館	展覧会場	24時間運転	21℃±1℃	25℃±1℃	60%±2%
東新館	展覧会場	24時間運転	21℃±1℃	25℃±1℃	60%±2%
	収蔵庫	24時間運転	21℃±1℃	25℃±1℃	60%
地下回廊	収蔵庫	24時間運転	21℃±1℃	25℃±1℃	60%

【九州国立博物館】

会場等	空調実施時間	温度（年間）	湿度（年間）
3階展覧会場	24時間運転	22℃～26℃	55%±5%
4階展覧会場	7:00～21:00	22℃～26℃	55%±5%
収蔵庫	8:30～21:30	22℃～24℃	材質別に50%±2%、55%±2%、60%±2%

1-(3)-② 保存カルテ作成件数

【東京国立博物館】

合計		2,368		
		列品貸与時	本格修理調査時	応急修理時
計		1,285	79	1,004
絵画		191	3	422
書跡		34	2	32
彫刻		118	0	0
建築		1	0	0
金工		75	0	0
刀剣		20	4	0
陶磁		93	4	0
漆工		48	2	0
染織		40	2	22
考古		207	32	0
歴史資料		38	0	5
民族資料		9	0	22
和書		4	0	98
東洋	絵画	27	9	4
	書跡	20	5	2
	彫刻	2	0	0
	金工	0	0	0
	陶磁	91	2	0
	漆工	2	1	0
	染織	2	1	2
	考古	53	0	0
	民族	0	0	22
法隆寺献納宝物		8	12	1
その他（黒田含）		202	0	372

【京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館】

	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
計	108	218	101
絵画	33	88	20
書跡	21	19	7
彫刻	2	55	6
建築	0	0	1
金工	1	6	0
刀剣		0	0
陶磁	8	0	1
漆工	7	6	3
染織	23	1	55
考古	13	43	2
民族資料	0	0	0
歴史資料	0	0	6
和書	0	0	0
その他	0	0	0

1-(4) 修理

1-(4)-① 本格修理件数

平成23年3月31日現在

		計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
合　計		176	139 (29) [3]	9	9	19
絵　画		22	9	4	2	7
書　跡		18	9 [3]	3	1	5
彫　刻		3	1	1	0	1
建　築		0	0	0	0	0
金　工		8	8	0	0	0
刀　剣		2	2	0	0	0
陶　磁		2	2	0	0	0
漆　工		3	0	1	1	1
染　織		14	14	0	0	0
考　古		62	56 (29)	0	5	1
歴史資料		24	20	0	0	4
和　書		2	2	0	0	0
民族資料		0	0	0	0	0
東洋	絵　画	1	1			
	書　跡	2	2			
	彫　刻	6	6			
	金　工	0	0			
	陶　磁	2	2			
	漆　工	2	2			
	染　織	0	0			
	考　古	2	2			
	民　族	0	0			
法隆寺献納宝物		0	0			
黒田記念館収蔵品		0	0			
館史資料(収蔵品外)		1	1			

※東京国立博物館(　)内は考古相互貸借経費、[　]内は九博経費で、内数。

1-(4)-② 修理概況

【東京国立博物館】 (139件)

〈絵画〉(9件)

1 ○列品番号 A-5
○名　　称 阿弥陀如来像（あみだにょらいぞう）
○時　　代 鎌倉
○年代世紀 14c
○品　　質 絹本着色
○員　　数 1幅
○寸 法 等 128.0×54.4cm
○施工会社 株式会社岡墨光堂
○修理内容 1.解体する。 2.クリーニングする。 3.裏打ちなど補強を施す。 4.補彩する。 5.表装裂、軸首を新調し、掛幅装に仕立てる。 6.桐製保存箱、桐製太巻添軸、包裂、布貼帙などを新調する。 （平成22年度は2まで）

2 ○列品番号 A-110
○名　　称 観音三十三応身図(かんのんさんじゅうさんおうしんず)
○時　　代 室町
○年代世紀 15c
○品　　質 絹本着色
○員　　数 1幅
○寸 法 等 128.7×185.4cm
○施工会社 株式会社文化財保存
○修理内容 1.絵具層に剥落止めを施し、表打ちで画面を保護した後、旧裏打ちを除去する。 2.欠失部に補絹を施し、新たに裏打ちを行う。 3.補絹部分に補彩を施す。 4.軸首を再使用し、裂を新調し、元の掛幅装に仕立てる。 5.桐製保存箱・太巻添軸などを新調して収める。 （平成22年度は3から）

3 ○列品番号 A-261
○名　　称 花鳥図(かちょうず)
○時　　代 明治
○年代世紀 明治14年(1881)
○品　　質 絹本着色
○員　　数 1幅
○寸 法 等 102.8×71.2cm
○施工会社 株式会社半田九清堂
○修理内容 1.表装を解体する。 2.剥落止めを行い、本紙を洗浄する。 3.本格的な剥落止めを行う。 4.本紙を表打ちして保護したうえで、旧裏打紙を除去する。 5.裏打ち、折れ伏せを施す。 6.表装裂・軸首は再利用し、掛幅装に仕立てる。 7.太巻、桐製保存箱、布貼帙を新調する。 （平成22年度は5から）

4 ○列品番号 A-1155
○名　　称 扇面雑画(せんめんざつが)
○時　　代 江戸
○年代世紀 19c
○品　　質 紙本着色・紙本墨画
○員　　数 10面(60面のうち)
○寸 法 等 (上弦/下弦/高)(cm) No.9「藤」50.9/20.0/20.1、No.13「河骨と太蘭」50.2/19.8/20.0、 No.20「山帰来」51.0/19.9/20.0、No.29「水仙」50.7/19.8/20.0、 No.31「瓜に飛蝗」51.3/19.8/20.2、No.35「豆と藁苞」50.8/20.1/20.0、 No.50「山水」50.8/20.0/19.8、No.55「盆栽」50.7/20.3/19.5、 No.57「玩具」50.5/19.1/20.2、No.60「布袋」50.3/19.2/20.1
○施工会社 株式会社半田九清堂
○修理内容 1.台紙を剥がし、本紙を分離する。 2.剥落止めを行う。 3.中性紙マットを製作し、ヒンジで本紙をマットに留め付ける。 4.新調した収納箱に収納する。 （平成22年度は3から）

5 ○列品番号 A-1155
○名　　称 扇面雑画(せんめんざつが)
○時　　代 江戸
○年代世紀 19c
○品　　質 紙本着色・紙本墨画
○員　　数 10面(60面のうち)
○寸 法 等 (上弦/下弦/高)(cm) No.2「桜」49.8/20.2/19.7、No.3「桃」49.8/20.2/19.8、 No.5「早蕨」50.1/20.1/19.7、No.7「菜の花に蝶」50.9/21.1/20.0、 No.10「鉄線」49.9/19.5/19.8
○施工会社 株式会社半田九清堂
○修理内容 1.台紙を剥がし、本紙を分離する。 2.剥落止めを行う。 3.中性紙マットを製作し、ヒンジで本紙をマットに留め付ける。 4.新調した収納箱に収納する。 （平成22年度は2まで）

6 ○列品番号 A-10171
○名　　称 舞楽図屏風(ぶがくずびょうぶ)
○時　　代 江戸
○年代世紀 19c
○品　　質 紙本着色
○員　　数 6曲1双
○寸 法 等 各157.4×363.0cm
○施工会社 株式会社松鶴堂
○修理内容 1.絵具層の剥落止を行う。 2.本紙を保護したうえで、屏風を解体し、本紙を下地からめくる。 3.濾過水を使用し洗浄する。 4.本格的な剥落止めを行う。 5.旧裏打紙を除去する。 6.本紙欠失部分に補紙、亀裂箇所に折伏を施し、裏打ちを行う。絵具層の剥落止、補彩を行う。 7.下地、襲木、表装裂、裏紙は新調し、金具は再利用(欠失部は新調)し、屏風に仕立てる。 （平成22年度は6から）

7 ○列品番号 未決
○名　　称 応挙館障壁画(雁図)(おうきょかんしょうへきが・かりず)
○時　　代 江戸
○年代世紀 天明4年(1784)
○品　　質 紙本墨画
○員　　数 3面(54面のうち)
○寸 法 等 各90.0×180.0cm
○施工会社 株式会社半田九清堂
○修理内容 1.肌裏紙以外の旧裏打紙を除去する。 2.洗浄する。 3.剥落止めを施す。 4.本紙に表打ちを施して保護し、肌裏紙を除去する。 5.裏打ちを行い、欠損部に補彩する。 6.下地を新調し、本紙・裏張り紙を張り込み、展示用縁木を新調して取り付ける。 （平成22年度は5から）

8 ○列品番号 未決
○名　　称 応挙館障壁画(松に岩図)(おうきょかんしょうへきが・まつにいわず)
○時　　代 江戸
○年代世紀 天明4年(1784)
○品　　質 紙本墨画

○員　　数　1面(54面のうち)
○寸 法 等　各90.0×180.0cm
○施工会社　株式会社半田九清堂
○修理内容　1.肌裏紙以外の旧裏打紙を除去する。 2.洗浄する。 3.剥落止めを施す。 4.本紙に表打ちを施して保護し、肌裏紙を除去する。 5.裏打ちを行い、欠損部に補彩する。 6.下地を新調し、本紙・裏張り紙を張り込み、展示用椽木を新調して取り付ける。 (平成22年度は4まで)

9 ○列品番号　A-10447
○名　　称　宇治橋図屏風 (柳橋水車図屏風) (うじばしずびょうぶ・りょうきょうすいしゃずびょうぶ)
○指　　定　重美
○指定年月　昭和23年(1948)4月27日
○時　　代　安土桃山～江戸
○年代世紀　16-17c
○品　　質　紙本金地着色
○員　　数　6曲1双
○寸 法 等　各154.9×326.7cm
○施工会社　アソシエイト・フェロー、国宝修理装こう師連盟
○修理内容　1.修理前の状態を調査し、記録する。 2.屏風装を解体し、本紙を下地から取り外す。解体の前後に剥落止めを施す。 3.ろ過水を表面から噴霧し、下に敷いた吸い取り紙に汚れを吸収させる。 4.表打ちを施して画面を保護し、旧裏打紙と旧補紙を除去する。 5.補紙を施し、肌裏打ち、増裏打ちを行う。 6.仮張りをし、補紙に補彩を施す。 7.骨下地を新調し、下張りを施し、蝶番を付ける。本紙を仮張りから外し、新調した下地に貼り込み、裏面には裏張紙を張り込む。 8.新調した表装裂、尾背、縁木、金具を取り付け、屏風装に仕立てる。 9.旧裏打紙、旧下地、旧金具などのための保存箱を作成する。 (平成22年度は5の途中まで)

〈東洋絵画〉(1件)

10 ○列品番号　TA-535
○名　　称　驢図(ろず)
○時　　代　中華民国
○年代世紀　20c
○品　　質　紙本着色
○員　　数　1幅
○寸 法 等　126.7×73.8cm
○施工会社　株式会社岡墨光堂
○修理内容　1.解体する。 2.クリーニングする。 3.裏打ちなど補強を施す。 4.補彩する。 5.表装裂、軸首を新調し、掛幅装に仕立てる。 6.桐製保存箱、桐製太巻添軸、包裂、布貼帙などを新調する。 (平成22年度は2まで)

〈書跡〉(9件)

11 ○列品番号　B-12
○名　　称　桂切(風葉和歌集断簡)(かつらぎれ・ふうようわかしゅうだんかん)
○時　　代　鎌倉
○年代世紀　14c
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　1枚
○寸 法 等　21.1×16.4cm
○施工会社　アソシエイト・フェロー
○修理内容　1.本紙を台紙から外す。 2.剥落止めを行った後、裏打ち紙を除去する。 3.ろ過水で湿りを与え、クリーニングを行う。 4.表打ちを行い、肌裏紙を除去する。 5.欠失箇所に補紙を施す。 6.新たに裏打ちを行う。 7.台紙を加工し、本紙と付け合せる。 8.表装裂、軸首などを新調し、掛幅装に仕立てる。 9.桐製太巻添軸、包裂、桐製保存箱などを新調する

12 ○列品番号　B-118
○名　　称　詩巻(しかん)
○時　　代　江戸
○年代世紀　17-18c
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　1巻
○寸 法 等　30.6×788.7cm
○施工会社　国宝修理装こう師連盟九州支部
○修理内容　1.巻子装を解体する。 2.補修紙を製作する。 3.欠失箇所に補紙を施す。 4.表装裂、軸首などを新調し、巻子装に仕立てる。 5.包裂、桐製保存箱などを新調する

13 ○列品番号　B-1648
○名　　称　大毘盧遮那成佛神變加持經疏玄記 巻1(だいびるしゃなじょうぶつしんぺんかじきょうしょげんき　まきいち)
○時　　代　鎌倉
○年代世紀　13c
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　1帖
○寸 法 等　25.3×16.2cm
○施工会社　清申堂
○修理内容　1. 朱字に剥落止めを施す。 2. 折本装を解体する。 3. 本紙を洗浄する。 4. 虫損箇所に補紙を施す。 5. 表紙を再利用し、元の折本装に仕立てる。 (平成22年度は4の途中まで)

14 ○列品番号　B-1649
○名　　称　毘盧遮那別行経(びるしゃなべつぎょうきょう)
○時　　代　室町
○年代世紀　永禄9年(1566)
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　1帖
○寸 法 等　26.4×13.6 cm
○施工会社　清申堂
○修理内容　1. 朱字に剥落止めを施す。 2. 折本装を解体する。 3. 本紙を洗浄する。 4. 虫損箇所に補紙を施す。 5. 表紙を再利用し、元の折本装に仕立てる。 (平成22年度は4の途中から)

15 ○列品番号　B-1705
○名　　称　蹴鞠聞書(しゅうぎくききがき)
○時　　代　室町
○年代世紀　大永8年(1528)
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　1巻
○寸 法 等　32.4×739.3cm
○施工会社　清申堂
○修理内容　1. 朱字に剥落止めを施す。 2. 巻子装を解体する。 3. 部分的に施されている裏打紙を除去する。 4. ろ過水で洗浄する。 5. 虫損箇所に補紙を施す。 6. 裏打ちを施す。 7. 表紙、軸首を新調し、元の巻子装に仕立てる。 8. 太巻、桐製保存箱を新調する。 (平成22年度は6から)

16 ○列品番号　B-1986

○名　　称　額字(がくじ)
○時　　代　江戸
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　2巻
○寸 法 等　31.6×869.9、32.1×951.0cm
○施工会社　国宝修理装こう師連盟九州支部
○修理内容　1.巻子装を解体する。 2.補修紙を製作する。 3.欠失箇所に補紙を施す。 4.表装裂、軸首などを新調し、巻子装に仕立てる。 5.包裂、桐製保存箱などを新調する (平成22年度は3の途中まで)

17 ○列品番号　B-2372
○名　　称　扇面(せんめん)
○時　　代　江戸
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　1幅
○寸 法 等　15.5×50.0cm
○施工会社　国宝修理装こう師連盟九州支部
○修理内容　1.掛幅装を解体する。 2.裏打紙を除去する。 3.補修紙を作製し、補紙を施す。 4.裏打ち、折れ伏せを施す。 5.軸首、一文字、中廻し風帯は再利用し、上下の表装裂は新調し、元の掛幅装に仕立てる。 6.太巻、桐製保存箱を新調し、収納する。

18 ○列品番号　B-2558
○名　　称　歌合切(うたあわせぎれ)
○時　　代　鎌倉
○年代世紀　12～13c
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　1幅
○寸 法 等　23.3×27.8cm
○施工会社　株式会社岡墨光堂
○修理内容　1.表装を解体する。 2.裏打紙を除去する。 3.補修紙を作製し、補紙を施す。 4.裏打ち、折れ伏せを施す。 5.軸首、一文字、中廻し風帯は再利用し、上下の表装裂は新調し、元の掛幅装に仕立てる。 6.太巻、桐製保存箱を新調し、収納する。 (平成22年度は4の途中から)

19 ○列品番号　B-3161
○名　　称　偈頌(げじゅ)
○時　　代　江戸
○年代世紀　寛永20年(1643)
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　1幅
○寸 法 等　33.2×51.9cm
○施工会社　株式会社坂田墨珠堂
○修理内容　1.軸装を解体する。 2.クリーニングする。 3.裏打ちなど補強を施す。 4.表装裂などを新調し、掛幅装に仕立てる。 5.桐製保存箱、桐製太巻添軸、包裂などを新調する。 (平成22年度は3の途中まで)

〈東洋書跡〉(2件)

20 ○列品番号　TB-1332
○名　　称　篆書八言聯(てんしょはちごんれん)
○時　　代　清
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　2幅
○寸 法 等　179.0×31.5cm
○施工会社　株式会社文化財保存
○修理内容　1.表装を解体する。 2.裏打紙を除去する。 3.濾過水を使用し洗浄する。 4.墨、朱印に剥落止めを施す。 5.本紙欠失部に補紙を施す。 6.裏打ちを施す。 7.補紙箇所に補彩を行う。 8.表装裂、軸首などを新調し、元の掛幅装に仕立てる。 9.太巻、桐製保存箱、布貼帙を新調する。 (平成22年度は7から)

21 ○列品番号　TB-1546
○名　　称　楷書七言聯(かいしょしちごんれん)
○時　　代　清～民国
○年代世紀　20c
○品　　質　蝋箋墨書
○員　　数　2幅
○寸 法 等　各137.7×27.3cm
○施工会社　株式会社文化財保存
○修理内容　1.軸装を解体する。 2.クリーニングする。 3.裏打ちなど補強を施す。 4.表装裂地を新調し、掛幅装に仕立てる。 5.桐製保存箱、桐製太巻添軸、包裂、布貼帙などを新調する。 (平成22年度は2まで)

〈彫刻〉(1件)

22 ○列品番号　C-306
○名　　称　千手観音菩薩坐像(せんじゅかんのんぼさつざぞう)
○時　　代　南北朝
○年代世紀　14c
○品　　質　ヒノキ材
○員　　数　1躯
○寸 法 等　像高83.7cm
○施工会社　有限会社楽浪文化財修理所
○修理内容　1.清掃及び材質の強化を行う(本体・光背・台座)。 2.彩色層に影響が及ばない範囲で解体を行う(本体・光背・台座)。ただし、台座は蓮肉部のみの解体とする。3.各部材の補修、組付け、組立を行う(本体・光背・台座)。台座は光背を受ける枘部分の補強、光背は立ちの安定化を図る。光背、本体指先等の補足は原則行わない。 4.仕上げとして古色などの彩色を必要最小限行う(本体・光背・台座)。 (平成22年度は3の途中から)

〈東洋彫刻〉(6件)

23 ○列品番号　TC-375
○指　　定　重文
○指定年月　昭和53年(1978)6月15日(彫第3328号)
○名　　称　菩薩立像(ぼさつりゅうぞう)
○時　　代　北斉時代
○年代世紀　天保3年(552)
○品　　質　石灰岩
○員　　数　1躯
○寸 法 等　高257.5cm
○施工会社　文化財修復工房明舎
○修理内容　1.X線撮影などにより内部の心材など内部構造を確認する。 2.検査の結果に基づき、必要に応じて心材の除去、接合箇所の解体、旧補填箇所の除去を行う。 3.埃などのクリーニングを行う。 4.分解部分の強化･再接合を行う。 5.補填･補彩を行う。 6.免震台に設置する(免震台は別途作製)。

24 ○列品番号　TC-381
○名　　称　男神立像(だんしんりゅうぞう)
○時　　代　アンコール
○年代世紀　12c
○品　　質　砂岩
○員　　数　1 躯
○寸 法 等　高 100.0 cm
○施工会社　文化財修復工房明舎
○修理内容　1. 解体する。 2. 埃など表面の汚れを除去する。 3. 接合部に設置する補強用ステンレス棒および固定台を作製する。 4. エポキシ系接着剤を用いて接合・組み立てを行う。 5. 必要な箇所に充填を施す。 (平成 22 年度は 4 から)

25 ○列品番号　TC-382
○名　　称　ヴィシュヌ立像(ヴィシュヌりゅうぞう)
○時　　代　アンコール
○年代世紀　12c
○品　　質　砂石彩色
○員　　数　1 躯(11 片)
○寸 法 等　総高 125 cm
○施工会社　文化財修復工房明舎
○修理内容　1. 心棒の抜き取り。 2. 埃の洗浄。 3. 分解部分の再接合。 4. 充填及び補彩。 5. 安定台の製作。 (平成 22 年度は 2 まで)

26 ○列品番号　TC-468
○名　　称　菩薩頭部(ぼさつとうぶ)
○年代世紀　7～8c
○品　　質　塑造、彩色
○員　　数　1 個
○寸 法 等　高 28.0cm
○施工会社　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
○修理内容　1. 事前調査(X 線 CT スキャナーなど)を行う。 2. 表面を養生して、展示台から分離する。 3. 表面の養生を除去した後、最小限のクリーニングを行う。 4. 彩色層の剥落止めを行う。 5. 塑土の崩落が進行する部分に新たな塑土を充填する。 6. 展示台及び保存箱を作製する。 (平成 22 年度は 2 から)

27 ○列品番号　TC-471
○名　　称　供養者頭部(くようしゃとうぶ)
○年代世紀　7～8c
○品　　質　塑造、彩色
○員　　数　1 個
○寸 法 等　面長 10cm
○施工会社　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
○修理内容　1. 事前調査(X 線 CT スキャナーなど)を行う。 2. 表面を養生して、展示台から分離する。 3. 表面の養生を除去した後、最小限のクリーニングを行う。 4. 彩色層の剥落止めを行う。 5. 塑土の崩落が進行する部分に新たな塑土を充填する。 6. 展示台及び保存箱を作製する。 (平成 22 年度は 1 まで)

28 ○列品番号　TC-497-7
○名　　称　仮面(かめん)
○年代世紀　前 2000～前 1000 年
○品　　質　木、漆、皮革
○員　　数　1 個
○寸 法 等　高 10.8 cm
○施工会社　山下好彦
○修理内容　1. 表面の汚れを毛棒を用いて除去する。 2. 彩色層はセルロース誘導体を含浸させた後、膠と布海苔を用いて剥落止めを行う。 また、皮革には膠を用いる。 3. 外れた骨材の歯は膠などで接着する。 4. 皮革の空隙部分を接着剤で強化する。 5. 保管展示台および保存箱を作製する。 (平成 22 年度は 4 から)

〈金工〉(8 件)

29 ○列品番号　E-14413
○名　　称　青白磁合子(せいはくじごうす)
○時　　代　鎌倉
○年代世紀　建久 7 年(1196)
○品　　質　磁製
○員　　数　1 合
○寸 法 等　蓋高 1.5、口径 8　身高 1.7、口径 8 cm
○施工会社　繭山隆司
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. エポキシ系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂や各種粘土粉末により補填･復元する。 5. アクリル系樹脂を媒剤とした各種粘土粉末や顔料で補彩する。 (平成 22 年度は 2 まで)

30 ○列品番号　E-14924
○名　　称　光背残欠(こうはいざんけつ)
○時　　代　平安
○年代世紀　12c
○品　　質　銅板製、鍍金
○員　　数　1 枚
○寸 法 等　高 20.5(現状)、幅 19.0 cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 頭頂部の欠失を透明の部材で補填し、強化する。 2. 折れや強度の足りない部分を補強する。 3. 全体をクリーニングする。 (平成 22 年度は 3 から)

31 ○列品番号　E-14942
○名　　称　蓮台(れんだい)
○時　　代　平安
○年代世紀　12c
○品　　質　蓮肉:銅製鋳造鍍金　蓮弁:銅板製鍍金
○員　　数　1 基
○寸 法 等　総高 6.2(現状)、蓮肉径 15.1 cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 蓮座をすべて解体する。 2. 台座を別材で作り直す。 3. 蓮弁をクリーニングし、強化をはかる。 4. 蓮弁を再接着する。 (平成 22 年度は 4 から)

32 ○列品番号　E-15012
○名　　称　青白磁合子(せいはくじごうす)
○時　　代　平安
○年代世紀　12c
○品　　質　磁製
○員　　数　1 合
○寸 法 等　蓋高 1.5、口径 9.5　身高 1.7、口径 9.5 cm
○施工会社　繭山隆司

○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. エポキシ系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂や各種粘土粉末により補填･復元する。 5. アクリル系樹脂を媒剤とした各種粘土粉末や顔料で補彩する。 （平成 22 年度は 2 まで）

33 ○列品番号　E-15013-1
○名　称　青白磁合子(身)(せいはくじごうす・み)
○時　代　平安
○年代世紀　12c
○品　質　磁製
○員　数　1 個
○寸 法 等　高 1.7、口径 8 ㎝
○施工会社　繭山隆司
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. エポキシ系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂や各種粘土粉末により補填･復元する。 5. アクリル系樹脂を媒剤とした各種粘土粉末や顔料で補彩する。

34 ○列品番号　E-15013-2
○名　称　青白磁合子(せいはくじごうす)
○時　代　平安
○年代世紀　12c
○品　質　磁製
○員　数　1 個
○寸 法 等　高 2、口径 6.5 ㎝
○施工会社　繭山隆司
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. エポキシ系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂や各種粘土粉末により補填･復元する。 5. アクリル系樹脂を媒剤とした各種粘土粉末や顔料で補彩する。

35 ○列品番号　E-15168
○名　称　陶製経筒蓋(とうせいきょうづつふた)
○時　代　平安
○年代世紀　12c
○品　質　陶製
○員　数　1 個
○寸 法 等　高 10、口径 31.5 ㎝
○施工会社　繭山隆司
○修理内容　1.解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. エポキシ系樹脂で接合する。 4. 硬石膏やポキシ系樹脂、各種粘土粉末などで補填･復元する。 5. アクリル系樹脂を媒剤とした各種粘土粉末や顔料で補彩する。 （平成 22 年度は 4 から）

36 ○列品番号　E-15320
○名　称　青白磁合子(身)(せいはくじごうす・み)
○時　代　平安
○年代世紀　12c
○品　質　磁製
○員　数　1 個
○寸 法 等　高 2、口径 5.5 ㎝
○施工会社　繭山隆司
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. エポキシ系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂や各種粘土粉末により補填･復元する。 5. アクリル系樹脂を媒剤とした各種粘土粉末や顔料で補彩する。 （平成 22 年度は 4 から）

〈刀剣〉（2 件）

37 ○列品番号　F-20166
○指　定　重文
○指定年月　昭和 16 年(1941)7 月 3 日(工芸第 1383 号)
○名　称　太刀　銘・正恒(たち　めい・まさつね)
○時　代　鎌倉
○年代世紀　13c
○品　質　鍛鉄製
○員　数　1 口
○寸 法 等　刃長 69.9、反り 2.0 ㎝
○施工会社　本阿彌道弘
○修理内容　1. 全身を研磨する。 2. 白鞘を新調する。金着太刀緘の作製。 （平成 22 年度は 1 まで）

38 ○列品番号　F-20200
○指　定　重美
○指定年月　昭和 12 年(1937)5 月 27 日
○名　称　太刀　銘・備州長船住景光(たち　めい・びしゅうおさふねじゅうかげみつ)
○時　代　鎌倉
○年代世紀　延慶 2 年(1309)
○品　質　鍛鉄製
○員　数　1 口
○寸 法 等　刃長 73.0、反り 2.1 ㎝
○施工会社　小野　博
○修理内容　1. 全身を研磨する。 2. 白鞘を新調する。金着太刀緘の作製。 （平成 22 年度は 1 まで）

〈陶磁〉（2 件）

39 ○列品番号　G-23
○名　称　色絵波に三日月文碗(いろえなみにみかづきもんわん)
○時　代　江戸
○年代世紀　17c
○品　質　陶製
○員　数　1 口
○寸 法 等　高 8.8 口径 6.2×6.2 高台径 5.0 ㎝
○施工会社　繭山隆司
○修理内容　1. 旧修理の塗料を取り除き、新しく補強し、色合わせをする。 2. 全体をクリーニングする。

40 ○列品番号　G-4832
○名　称　志野草花文向付(しのそうかもんむこうづけ)
○時　代　安土桃山～江戸
○年代世紀　16-17c
○品　質　陶製
○員　数　5 口
○寸 法 等　高 9.0 口径 6.6 底径 5.0 ㎝ほか
○施工会社　繭山隆司
○修理内容　1. 金継ぎを外して補強する。 2. 欠損箇所は樹脂等を充填して補彩を施す。

〈東洋陶磁〉(2件)

41　○列品番号　TG-1360
　　○名　　称　白磁瓜形水注(はくじうりがたすいちゅう)
　　○時　　代　北宋
　　○年代世紀　11～12c
　　○品　　質　磁器
　　○員　　数　1口
　　○寸 法 等　高24.0 口径11.2 底径9.9cm
　　○施工会社　ますぶち工房
　　○修理内容　1.旧修理の塗料を除去する。損傷部分があれば、必要に応じて欠損部分をアクリル樹脂等で接合･補填する。　2.補填部分を補彩する。

42　○列品番号　TG-2909
　　○名　　称　加彩馬(かさいうま)
　　○時　　代　唐
　　○年代世紀　8c
　　○品　　質　陶器
　　○員　　数　１躯
　　○寸 法 等　高32.0、幅29.0cm
　　○施工会社　陶磁器修復たま工房
　　○修理内容　1.欠落した部材を接合する。

〈東洋漆工〉(2件)

43　○列品番号　TH-354
　　○名　　称　楼閣人物螺鈿料紙硯箱(ろうかくじんぶつらでんりょうしすずりばこ)
　　○時　　代　明
　　○年代世紀　17c
　　○品　　質　木製漆塗
　　○員　　数　2合1具
　　○寸 法 等　料紙箱:縦41.6、横24.9、高8.0　硯箱:縦26.5、横19.8、高5.7cm
　　○施工会社　山下好彦
　　○修理内容　1.浮いている螺鈿をおさえる。　2.剥落した破片を接着する。　3.螺鈿の欠失部分は、周囲と色あわせをする。　4.全体に漆固めをして強化する。　(平成22年度は4から)

44　○列品番号　TH-442
　　○名　　称　朱漆十二角却付膳(しゅうるしじゅうにかくきゃくつきぜん)
　　○時　　代　朝鮮
　　○年代世紀　19-20c
　　○品　　質　木製漆塗
　　○員　　数　1脚
　　○寸 法 等　高25.9、径40.22合1具
　　○施工会社　株式会社小西美術工藝社
　　○修理内容　1.クリーニングする。　2.ひび、割れを漆で接着する。　3.欠失部分を補填する。　4.旧修理の塗料は取り除き、色あわせをする。　(平成22年度は2まで)

〈染織〉(14件)

45　○列品番号　I-336-23(F-211)
　　○名　　称　黄地変り鼈文綾幡足(きじかわりいしだたみもんあやばんそく)
　　○時　　代　飛鳥-奈良
　　○年代世紀　7-8c
　　○品　　質　絹製、綾
　　○員　　数　1条
　　○寸 法 等　26.4×11.0cm
　　○施工会社　澤田むつ代、アソシエイト・フェロー
　　○修理内容　1.ガラスを外して裂を取り出す。　2.汚れ等を除去する。　3.糸目を揃えながら文様を合わせて形を整える。　4.小麦粉澱粉糊を用いて和紙で裏打ちする。　5.マット装に仕立てる。

46　○列品番号　I-336-27(F-250)
　　○名　　称　赤地双鳳連珠唐草円文綾幡足(あかじそうほうれんじゅからくさえんもんあやばんそく)
　　○時　　代　飛鳥-奈
　　○年代世紀　7-8c
　　○品　　質　絹製、綾
　　○員　　数　1条
　　○寸 法 等　30.5×11.5cm
　　○施工会社　澤田むつ代、アソシエイト・フェロー
　　○修理内容　1.ガラスを外して裂を取り出す。　2.汚れ等を除去する。　3.糸目を揃えながら文様を合わせて形を整える。　4.小麦粉澱粉糊を用いて和紙で裏打ちする。　5.マット装に仕立てる。

47　○列品番号　I-336-29(F-256)
　　○名　　称　濃黄緑地大双竜唐草四弁花円文綾幡足(こいきみどりじだいひうりゅうからくさしべんかえんもんあやばんそく)
　　○時　　代　飛鳥-奈良
　　○年代世紀　7-8c
　　○品　　質　絹製、綾
　　○員　　数　1条
　　○寸 法 等　29.3×16.8cm
　　○施工会社　澤田むつ代、アソシエイト・フェロー
　　○修理内容　1.ガラスを外して裂を取り出す。　2.汚れ等を除去する。　3.糸目を揃えながら文様を合わせて形を整える。　4.小麦粉澱粉糊を用いて和紙で裏打ちする。　5.マット装に仕立てる。

48　○列品番号　I-336-33(F-259)
　　○名　　称　白地葡萄唐草文綾幡足(しろじぶどうからくさもんあやばんそく)
　　○時　　代　飛鳥-奈良
　　○年代世紀　7-8c
　　○品　　質　絹製、綾
　　○員　　数　1条
　　○寸 法 等　28.5×16.0cm
　　○施工会社　澤田むつ代、アソシエイト・フェロー
　　○修理内容　1.ガラスを外して裂を取り出す。　2.汚れ等を除去する。　3.糸目を揃えながら文様を合わせて形を整える。　4.小麦粉澱粉糊を用いて和紙で裏打ちする。　5.マット装に仕立てる。

49　○列品番号　I-336-36(F-270)
　　○名　　称　黄地亀・唐花入亀甲繋文綾幡足(きじかめ・からはないりきっこうつなぎもんあやばんそく)
　　○時　　代　飛鳥-奈良

○年代世紀　7-8c
○品　　質　絹製、綾
○員　　数　1条
○寸 法 等　28.5×15.7cm
○施工会社　澤田むつ代、アソシエイト・フェロー
○修理内容　1.ガラスを外して裂を取り出す。 2.汚れ等を除去する。 3.糸目を揃えながら文様を合わせて形を整える。 4.小麦粉澱粉糊を用いて和紙で裏打ちする。 5.マット装に仕立てる。

50 ○列品番号　I-336-37(F-273)
○名　　称　黄地並び菱入連珠円文綾幡足(きじならびひしいりれんじゅえんもんあやばんそく)
○時　　代　飛鳥-奈良
○年代世紀　7-8c
○品　　質　絹製、綾
○員　　数　1条
○寸 法 等　28.2×14.5cm
○施工会社　澤田むつ代、アソシエイト・フェロー
○修理内容　1.ガラスを外して裂を取り出す。 2.汚れ等を除去する。 3.糸目を揃えながら文様を合わせて形を整える。 4.小麦粉澱粉糊を用いて和紙で裏打ちする。 5.マット装に仕立てる。

51 ○列品番号　I-336-40(F-282)
○名　　称　紺地双鳥連珠円文綾幡足(こんじそうちょうれんじゅえんもんあやばんそく)
○時　　代　飛鳥-奈良
○年代世紀　7-8c
○品　　質　絹製、綾
○員　　数　1条
○寸 法 等　31.5×15.3cm
○施工会社　澤田むつ代、アソシエイト・フェロー
○修理内容　1.ガラスを外して裂を取り出す。 2.汚れ等を除去する。 3.糸目を揃えながら文様を合わせて形を整える。 4.小麦粉澱粉糊を用いて和紙で裏打ちする。 5.マット装に仕立てる。

52 ○列品番号　I-336-41(F-283)
○名　　称　黄地双鳥二重連珠円文綾(きじそうちょうにじゅうれんじゅえんもんあや)
○時　　代　飛鳥-奈良
○年代世紀　7-8c
○品　　質　絹製、綾
○員　　数　1枚
○寸 法 等　29.5×9.2cm
○施工会社　澤田むつ代、アソシエイト・フェロー
○修理内容　1.ガラスを外して裂を取り出す。 2.汚れ等を除去する。 3.糸目を揃えながら文様を合わせて形を整える。 4.小麦粉澱粉糊を用いて和紙で裏打ちする。 5.マット装に仕立てる。

53 ○列品番号　I-336-58(F-322)
○名　　称　茶地双鳳連珠円文錦(ちゃじそうほうれんじゅえんもんにしき)
○時　　代　飛鳥-奈良
○年代世紀　7-8c
○品　　質　絹製、錦
○員　　数　1枚
○寸 法 等　21.0×22.5cm
○施工会社　澤田むつ代、アソシエイト・フェロー
○修理内容　1.ガラスを外して裂を取り出す。 2.汚れ等を除去する。 3.糸目を揃えながら文様を合わせて形を整える。 4.小麦粉澱粉糊を用いて和紙で裏打ちする。 5.マット装に仕立てる。

54 ○列品番号　I-336-60(F-325)
○名　　称　茶紫地亀甲繋花葉文錦(ちゃむらさきじきっこうつなぎかようもんにしき)
○時　　代　飛鳥-奈良
○年代世紀　7-8c
○品　　質　絹製、錦
○員　　数　1枚
○寸 法 等　8.7×25.0cm
○施工会社　澤田むつ代、アソシエイト・フェロー
○修理内容　1.ガラスを外して裂を取り出す。 2.汚れ等を除去する。 3.糸目を揃えながら文様を合わせて形を整える。 4.小麦粉澱粉糊を用いて和紙で裏打ちする。 5.マット装に仕立てる。

55 ○列品番号　I-336-67(F-332)
○名　　称　緑青地六弁花鳥文錦(みどりあおじろくべんかちょうもんにしき)
○時　　代　飛鳥-奈良
○年代世紀　7-8c
○品　　質　絹製、錦
○員　　数　1枚
○寸 法 等　28.8×8.2cm
○施工会社　澤田むつ代、アソシエイト・フェロー
○修理内容　1.ガラスを外して裂を取り出す。 2.汚れ等を除去する。 3.糸目を揃えながら文様を合わせて形を整える。 4.小麦粉澱粉糊を用いて和紙で裏打ちする。 5.マット装に仕立てる。

56 ○列品番号　I-336-68(F-338)
○名　　称　淡緑地輪繋文錦(うすみどりじわつなぎもんにしき)
○時　　代　飛鳥-奈良
○年代世紀　7-8c
○品　　質　絹製、錦
○員　　数　3枚
○寸 法 等　①6.0×9.8cm、②14.8×8.0cm、③28.0×4.2cm
○施工会社　澤田むつ代、アソシエイト・フェロー
○修理内容　1.ガラスを外して裂を取り出す。 2.汚れ等を除去する。 3.糸目を揃えながら文様を合わせて形を整える。 4.小麦粉澱粉糊を用いて和紙で裏打ちする。 5.マット装に仕立てる。

57 ○列品番号　I-3865
○指　　定　重文
○指定年月日　昭和40年(1965)5月29日(染織第2192号)
○名　　称　小袖 白練緯地松皮菱竹模様(こそで　しろねりたてじまつかわびしたけもよう)
○時　　代　安土桃山
○年代世紀　16～17c
○品　　質　絹(練緯)製

○員　数　1領
○寸 法 等　丈142.0、裄67.0㎝
○施工会社　株式会社染技連
○修理内容　1.表と裏に分ける。 2.表裂は解体する。 3.旧補修糸を外す。 4.補修用の練緯を製織する。 5.全面に補修裂をあてて縫い止める。 6.裏地と真綿は元使いするが、真綿が不足する場合は補う。 7.元の状態に仕立てる。 8.絹の包み裂を新調して納める。 （平成22年度は5の途中から）

58 ○列品番号　I-4288
○名　称　小袖　白綸子地桐樹模様(こそで　しろりんずじとうじゅもよう)
○時　代　江戸
○年代世紀　17～18c
○品　質　絹製
○員　数　1領
○寸 法 等　丈154.0、裄65.0㎝
○施工会社　女子美術大学
○修理内容　1.解体する。 2.刺繍糸のほつれを補強し、弱っている部分も補強する。 3.前身頃の一部と襟の欠失部分に、同種の裂を補足して補修する。 4.裏地(紅平絹)を新調する。 5.薄く真綿を入れて元の状態に仕立てる。 6.絹の畳裂を新調する。

〈考古〉(56件)

59 ○列品番号　J-592
○名　称　鉄刀(てっとう)
○時　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　質　鉄製
○員　数　1本
○寸 法 等　長88.9、身幅3.2㎝
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5.アクリル系絵具で補彩する。 （平成22年度は3から）

60 ○列品番号　J-1548
○名　称　鉢形土器(はちがたどき)
○時　代　縄文
○年代世紀　前2000～前1000年
○品　質　土製
○員　数　1個
○寸 法 等　高13、口径23.5㎝
○施工会社　有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容　1. 接着剤や汚れをクリーニングする。 2. セルロース系樹脂で接合する。 3. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 4. アクリル系絵具で補彩する。 （平成22年度は1まで）

61 ○列品番号　J-2882
○名　称　鉄刀(てっとう)
○時　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　質　鉄製
○員　数　1本
○寸 法 等　長90.6、身幅3.5㎝
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5.アクリル系絵具で補彩する。 （平成22年度は3から）

62 ○列品番号　J-3099
○名　称　須恵器 脚付短頸壺(すえき　きゃくつきたんけいこ)
○時　代　古墳
○年代世紀　6ｃ
○品　質　陶製
○員　数　1個
○寸 法 等　高36.3、口径9㎝
○施工会社　有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 4. アクリル系絵具で補彩する。 （平成22年度は3の途中から）

63 ○列品番号　J-3232
○名　称　須恵器 坏(すえき　つき)
○時　代　奈良
○年代世紀　8c
○品　質　陶製
○員　数　1個
○寸 法 等　高4.5、口径13.5㎝
○施工会社　有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容　1. 接着剤や汚れをクリーニングする。 2. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 3. アクリル系絵具で補彩する。

64 ○列品番号　J-3282
○名　称　須恵器 平瓶(すえき　ひらべ)
○時　代　古墳
○年代世紀　7c
○品　質　陶製
○員　数　1個
○寸 法 等　高16、胴部径15.5㎝
○施工会社　有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容　1. 接着剤や汚れをクリーニングする。 2. セルロース系樹脂で接合する。 3. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 4. アクリル系絵具で補彩する。

65 ○列品番号　J-3285
○名　称　須恵器 ハソウ(すえき　はそう)
○時　代　古墳
○年代世紀　7c
○品　質　陶製
○員　数　1個
○寸 法 等　高13.5、胴部径9.5㎝
○施工会社　有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容　1. 接着剤や汚れをクリーニングする。 2. セルロース系樹脂で接合する。 3. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 4. アクリル系絵具で補彩する。

66 ○列品番号 J-3396
○名　　称 須恵器　提瓶(すえき　ていへい)
○時　　代 古墳
○年代世紀 6-7c
○品　　質 陶製
○員　　数 1個
○寸 法 等 高18.5、口径9.5cm
○施工会社 有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する。

67 ○列品番号 J-3717
○名　　称 須恵器 壺(すえき　つぼ)
○時　　代 古墳
○年代世紀 6c
○品　　質 陶製
○員　　数 1個
○寸 法 等 高21、口径11cm
○施工会社 有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. 接着剤や汚れをクリーニングする。 2. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 3. アクリル系絵具で補彩する。

68 ○列品番号 J-5656
○名　　称 須恵器 子持脚付長頸壺(すえき　こもちきゃくつきちょうけいこ)
○時　　代 古墳
○年代世紀 6ｃ
○品　　質 陶製
○員　　数 1個
○寸 法 等 高36、口径17.5cm
○施工会社 株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容 1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する。 なお、J-22895は接合する可能性があるので、共に供与し、接合関係を確認する。 (平成22年度は4から)

69 ○列品番号 J-5659
○名　　称 須恵器 甕(すえき　かめ)
○時　　代 古墳
○年代世紀 6c
○品　　質 陶製
○員　　数 1個
○寸 法 等 高20.5、口径14.5cm
○施工会社 株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容 1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する。 (平成22年度は2まで)

70 ○列品番号 J-6330
○名　　称 鉄剣残欠(てっけんざんけつ)
○時　　代 古墳
○年代世紀 5c
○品　　質 鉄製
○員　　数 1本
○寸 法 等 長24.9、身幅3.6cm
○施工会社 株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容 1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

71 ○列品番号 J-6331
○名　　称 鉄剣残欠(てっけんざんけつ)
○時　　代 古墳
○年代世紀 5c
○品　　質 鉄製
○員　　数 1本
○寸 法 等 長17.2、身幅2.9cm
○施工会社 株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容 1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

72 ○列品番号 J-6332
○名　　称 鉄剣残欠(てっけんざんけつ)
○時　　代 古墳
○年代世紀 5c
○品　　質 鉄製
○員　　数 1本
○寸 法 等 長5.8、12.7、身幅2.1、2.3cm
○施工会社 株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容 1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

73 ○列品番号 J-6333
○名　　称 鉄刀子(てつとうす)
○時　　代 古墳
○年代世紀 5c
○品　　質 鉄製
○員　　数 1本
○寸 法 等 長12.6、身幅1.6cm
○施工会社 株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容 1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

74 ○列品番号 J-6334
○名　　称 鉄刀子(てつとうす)
○時　　代 古墳
○年代世紀 5c
○品　　質 鉄製

○員　　数　1本
○寸 法 等　長9.5、身幅1.5cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

75 ○列品番号　J-6335
○名　　称　鉄斧(てっぷ)
○時　　代　古墳
○年代世紀　5c
○品　　質　鉄製
○員　　数　1個
○寸 法 等　長8.8、幅3.3cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

76 ○列品番号　J-6336
○名　　称　鉄斧(てっぷ)
○時　　代　古墳
○年代世紀　5c
○品　　質　鉄製
○員　　数　1個
○寸 法 等　長5.3、幅3.1cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

77 ○列品番号　J-6337
○名　　称　鉄斧(てっぷ)
○時　　代　古墳
○年代世紀　5c
○品　　質　鉄製
○員　　数　1個
○寸 法 等　長7.9、幅2.0cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

78 ○列品番号　J-6338
○名　　称　鉄鏃(てつぞく)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　鉄製
○員　　数　1本
○寸 法 等　長4.2、身幅1.8cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

79 ○列品番号　J-6339
○名　　称　鉄鏃(てつぞく)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　鉄製
○員　　数　6本
○寸 法 等　長3.8～8.5、身幅2.0～3.3cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

80 ○列品番号　J-6340
○名　　称　鉄鏃(てつぞく)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　鉄製
○員　　数　1本
○寸 法 等　長3.0、身幅1.8cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

81 ○列品番号　J-6341
○名　　称　鉄鏃(てつぞく)
○時　　代　古墳
○年代世紀　4-5c
○品　　質　鉄製
○員　　数　1本
○寸 法 等　長6.5、身幅1.0cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

82 ○列品番号　J-6342
○名　　称　鉄鏃(てつぞく)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　鉄製
○員　　数　1本
○寸 法 等　長3.5、身幅2.9cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。

5. エポキシ系樹脂により補填・復元する。 6. アクリル系絵具で補彩する。

83 ○列品番号 J-6343
○名　　称 鉄鏃(てつぞく)
○時　　代 古墳
○年代世紀 5c
○品　　質 鉄製
○員　　数 4本
○寸 法 等 長4.2～8.7、身幅1.1～1.8cm
○施工会社 株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容 1. 汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2. 脱塩処理を行う。 3. アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5. エポキシ系樹脂により補填・復元する。 6. アクリル系絵具で補彩する。

84 ○列品番号 J-6344
○名　　称 鉄鏃(てつぞく)
○時　　代 古墳
○年代世紀 5c
○品　　質 鉄製
○員　　数 1本
○寸 法 等 長7.5、身幅1.5cm
○施工会社 株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容 1. 汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2. 脱塩処理を行う。 3. アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5. エポキシ系樹脂により補填・復元する。 6. アクリル系絵具で補彩する。

85 ○列品番号 J-7260-1
○名　　称 土師器 坏(はじき　つき)
○時　　代 古墳
○年代世紀 6c
○品　　質 土製
○員　　数 1個
○寸 法 等 高5.8、口径13.9cm
○施工会社 有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. 接着剤や汚れをクリーニングする。 2. エポキシ系樹脂により補填・復元する。 3. アクリル系絵具で補彩する。

86 ○列品番号 J-7260-3
○名　　称 土師器 坏(はじき　つき)
○時　　代 古墳
○年代世紀 6c
○品　　質 土製
○員　　数 1個
○寸 法 等 高5.4、口径12.7cm
○施工会社 有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. 接着剤や汚れをクリーニングする。 2. エポキシ系樹脂により補填・復元する。 3. アクリル系絵具で補彩する。

87 ○列品番号 J-7260-4
○名　　称 土師器 坏(はじき　つき)
○時　　代 古墳
○年代世紀 6c
○品　　質 土製
○員　　数 1個
○寸 法 等 高5.3、口径13.2cm
○施工会社 有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. 接着剤や汚れをクリーニングする。 2. エポキシ系樹脂により補填・復元する。 3. アクリル系絵具で補彩する。

88 ○列品番号 J-7260-5
○名　　称 土師器 坏(はじき　つき)
○時　　代 古墳
○年代世紀 6c
○品　　質 土製
○員　　数 1個
○寸 法 等 高5.5、口径12.7cm
○施工会社 有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. 接着剤や汚れをクリーニングする。 2. エポキシ系樹脂により補填・復元する。 3. アクリル系絵具で補彩する。

89 ○列品番号 J-7358
○名　　称 埴輪　靫(はにわ　ゆぎ)
○時　　代 古墳
○年代世紀 6c
○品　　質 土製
○員　　数 1個
○寸 法 等 残存高67.5、鰭部幅37.5cm
○施工会社 有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容 1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填・復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する。 6. 安定台(各種樹脂による矢筒部に合わせて作った脱着可能の差し込み式のもの)を新調する。 (平成22年度は4から)

90 ○列品番号 J-7880
○名　　称 鉄刀(てつとう)
○時　　代 古墳
○年代世紀 6c
○品　　質 鉄製
○員　　数 1本
○寸 法 等 長76.5、刀身長67.7、刀身幅3.0cm
○施工会社 株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容 1. 汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2. 脱塩処理を行う。 3. アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5. エポキシ系樹脂により補填・復元する。 6. アクリル系絵具で補彩する。 (平成22年度は2まで)

91 ○列品番号 J-7880
○名　　称 鍔(つば)
○時　　代 古墳
○年代世紀 6c
○品　　質 鉄製
○員　　数 1個

○寸 法 等　長径6.7、短径5.5cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

92 ○列品番号　J-7880
○名　　称　刀装具(とうそうぐ)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　鉄製
○員　　数　4個
○寸 法 等　鞘尻長4.7、幅4.0cmほか
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

93 ○列品番号　J-11623
○名　　称　深鉢形土器(ふかばちがたどき)
○時　　代　縄文
○年代世紀　前2000～前1000年
○品　　質　土製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高14.5、口径17cm
○施工会社　有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する。 (平成22年度は2まで)

94 ○列品番号　J-14252
○名　　称　鉄刀子(てつとうす)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6-7c
○品　　質　鉄製
○員　　数　1本
○寸 法 等　長13.8、身幅1.5cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

95 ○列品番号　J-14253-1.2
○名　　称　鉄鏃(てつぞく)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6-7c
○品　　質　鉄製
○員　　数　2本
○寸 法 等　長8.6、身幅0.8、長5.0、身幅1.0cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。

96 ○列品番号　J-20194
○名　　称　壺(つぼ)
○時　　代　弥生
○年代世紀　1-3ｃ
○品　　質　土製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高22.5、口径10.5cm
○施工会社　有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する。 (平成22年度は2まで)

97 ○列品番号　J-22891
○名　　称　須恵器 甕(すえき かめ)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　陶製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高21、口径15cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する。 (平成22年度は4から)

98 ○列品番号　J-22892
○名　　称　須恵器 長頸壺(すえき　ちょうけいこ)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　陶製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高25、胴部径17.5cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する。 (平成22年度は2まで)

99 ○列品番号　J-22893
○名　　称　土師器 壺(はじき　つぼ)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　土製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高24、口径17cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する。 (平成22年度は2まで)

100 ○列品番号　J-22896-1
○名　　称　須恵器 坏蓋(すえき　つきふた)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　陶製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高4、口径15cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する

101 ○列品番号　J-22896-8
○名　　称　須恵器 坏蓋(すえき　つきふた)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　陶製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高4.5、口径15.5cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する

102 ○列品番号　J-22896-9
○名　　称　須恵器 坏蓋(すえき　つきふた)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　陶製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高3.5、口径14cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 接着剤や汚れをクリーニングする。 2. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 3. アクリル系絵具で補彩する。

103 ○列品番号　J-22896-10
○名　　称　須恵器 坏蓋(すえき　つきふた)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　陶製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高4、口径14cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する

104 ○列品番号　J-22896-11
○名　　称　須恵器 坏蓋(すえき　つきふた)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　陶製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高4、口径14cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する

105 ○列品番号　J-22896-12
○名　　称　須恵器 坏身(すえき　つきみ)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　陶製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高4、口径14.5cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する

106 ○列品番号　J-22896-14
○名　　称　須恵器 坏身(すえき　つきみ)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　陶製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高4、口径14.5cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する

107 ○列品番号　J-22896-17
○名　　称　須恵器 坏身(すえき　つきみ)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　陶製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高4、口径15.5cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する

108 ○列品番号　J-22896-18
○名　　称　須恵器 坏身(すえき　つきみ)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c

○品　　質　陶製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高5、口径15.5cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する

109 ○列品番号　J-22896-19
○名　　称　須恵器 坏身(すえき　つきみ)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　陶製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高4.5、口径15cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する

110 ○列品番号　J-34881
○名　　称　深鉢形土器(ふかばちがたどき)
○時　　代　縄文
○年代世紀　前2000～前1000年
○品　　質　土製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高15、口径15cm
○施工会社　有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する。 (平成22年度は4から)

111 ○列品番号　J-34966
○名　　称　瓢形壺(ひょうけいこ)
○時　　代　弥生
○年代世紀　前2～前1c
○品　　質　土製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高23.5、口径4.5cm
○施工会社　繭山隆司
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. エポキシ系樹脂で接合する。 4. 硬石膏やエポキシ系樹脂、各種粘土粉末により補填･復元する。 5. アクリル系樹脂を媒剤とした各種粘土粉末や顔料で補彩する。 (平成22年度は4から)

112 ○列品番号　J-34967
○名　　称　瓢形壺(ひょうけいこ)
○時　　代　弥生
○年代世紀　前2～前1c
○品　　質　土製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高22.5、口径5cm
○施工会社　繭山隆司
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. エポキシ系樹脂で接合する。 4. 硬石膏やエポキシ系樹脂、各種粘土粉末により補填･復元する。 5. アクリル系樹脂を媒剤とした各種粘土粉末や顔料で補彩する。 (平成22年度は4から)

113 ○列品番号　J-36903-1
○名　　称　銀象嵌鉄刀(ぎんぞうがんてつとう)
○時　　代　古墳
○年代世紀　6c
○品　　質　鉄･銀製
○員　　数　1本
○寸 法 等　長75.9、身幅3.1cm
○施工会社　飛鳥工房
○修理内容　1. 汚れをクリーニングする。 2. 脱塩処理を行う。 3. 表面を覆うさびの除去、全体の強化および象嵌部分の研出しを行う。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する。 (平成22年度は3の途中から)

114 ○列品番号　J-36907
○名　　称　注口土器(ちゅうこうどき)
○時　　代　縄文
○年代世紀　前2000～前1000年
○品　　質　土製
○員　　数　1個
○寸 法 等　高17、最大幅21.5cm
○施工会社　有限会社武蔵野文化財修復研究所
○修理内容　1. 解体する。 2. 接着剤や汚れをクリーニングする。 3. セルロース系樹脂で接合する。 4. エポキシ系樹脂により補填･復元する。 5. アクリル系絵具で補彩する。 (平成22年度は4から)

〈東洋考古〉(2件)

115 ○列品番号　TJ-2216
○名　　称　環頭大刀(かんとうたち)
○時　　代　漢
○年代世紀　前2-後2c
○品　　質　鉄製
○員　　数　1本
○寸 法 等　長116.7　環頭幅3.0cm
○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。 (平成22年度は2まで)

116 ○列品番号　TJ-5719
○名　　称　銅戈(どうか)
○時　　代　戦国～前漢
○年代世紀　前3-前2c
○品　　質　青銅製
○員　　数　1個
○寸 法 等　長25.7cm、最大幅7.2cm

○施工会社　株式会社東都文化財保存研究所
○修理内容　1.汚れをクリーニングし、旧修理を除去する。 2.脱塩処理を行う。 3.アクリル系樹脂で強化する。 4. セルロース系樹脂で接合する。 5.エポキシ系樹脂により補填･復元する。 6.アクリル系絵具で補彩する。 （平成22年度は2まで）

〈歴史資料〉(20件)

117 ○列品番号　P-4028
○名　称　中央階段《上野博物館 正面中央階段断面詳細》（ちゅうおうかいだん　うえのはくぶつかん　しょうめんちゅうおうかいだんだんめんしょうさい）
○時　代　明治
○年代世紀　19c
○品　質　紙本墨画、彩色
○員　数　1枚
○寸 法 等　42.3×45.4cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は3から）

118 ○列品番号　P-4030
○名　称　《上野博物館 正側面1階窓詳細》（うえのはくぶつかん　しょうそくめんいっかいまどしょうさい）
○時　代　明治
○年代世紀　19c
○品　質　紙本墨画、彩色
○員　数　1枚
○寸 法 等　79.6×51.8cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. 本紙が裂けた部分には裏面から和紙で補強する。 4. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は3から）

119 ○列品番号　P-4031
○名　称　UYENO MUSEUM DETAIL《上野博物館 背面1階小窓詳細》（うえのはくぶつかん　はいめんいっかいこまどしょうさい）
○時　代　明治
○年代世紀　19c
○品　質　紙本墨画、彩色
○員　数　1枚
○寸 法 等　59.2×46.8cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. 本紙が裂けた部分には裏面から和紙で補強する。 4. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は3から）

120 ○列品番号　P-4034
○名　称　本家小屋組《上野博物館 母屋小屋組》（ほんけこやぐみ　うえのはくぶつかん　おもやこやぐみ）
○時　代　明治
○年代世紀　19c
○品　質　紙本墨画、彩色
○員　数　1枚
○寸 法 等　60.4×74.5cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. 本紙が折れた部分には裏面から和紙で補強する。 4. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は3から）

121 ○列品番号　P-4038
○名　称　《上野博物館 木製建具断面詳細》（うえのはくぶつかん　もくせいたてぐだんめんしょうさい）
○時　代　明治
○年代世紀　19c
○品　質　紙本墨画、彩色
○員　数　1枚
○寸 法 等　48.4×95.2cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙、足し紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. 本紙が裂けた部分には裏面から和紙で補強する。 4. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は3から）

122 ○列品番号　P-4039
○名　称　《上野博物館 主屋2階展示室床伏、床組詳細》（うえのはくぶつかん　おもやにかいてんじしつゆかふせ、ゆかぐみしょうさい）
○時　代　明治
○年代世紀　19c
○品　質　紙本墨画、彩色
○員　数　1枚
○寸 法 等　60.0×88.8cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. 濾過水を用いて水染みを洗浄し、軽減する。 4. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は4から）

123 ○列品番号　P-4040
○名　称　《上野博物館 背面2階窓詳細》（うえのはくぶつかん　はいめんにかいまどしょうさい）
○時　代　明治
○年代世紀　19c
○品　質　紙本墨画、彩色
○員　数　1枚
○寸 法 等　62.6×81.3cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. 濾過水を用いて水染みを洗浄し、軽減する。 4. 本紙の裂けや穴の部分には裏面から和紙で補強する。 5. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は4から）

124 ○列品番号　P-4041
○名　称　上野博物館背面二階窓下操形之精密図(うえのはくぶつかんはいめんにかいまどしたくりがたのせいみつず)
○時　代　明治
○年代世紀　19c
○品　質　紙本墨画、彩色
○員　数　1枚
○寸 法 等　62.0×90.8cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. 濾過水を用いて水染みを洗浄し、軽減する。 4. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は4から）

125 ○列品番号　P-4042
○名　　称　《上野博物館 翼屋階段室1階床伏》（うえのはくぶつかん　よくやかいだんしついっかいゆかふせ）
○時　　代　明治
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本墨画、彩色
○員　　数　1枚
○寸 法 等　59.0×84.3cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙および足し紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. 濾過水を用いて水染みおよび褐色斑点を洗浄し、軽減する。 4. 本紙が折れた部分には裏面から和紙で補強する。 5. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は4から）

126 ○列品番号　P-4043
○名　　称　《上野博物館 翼屋階段室1階床伏》（うえのはくぶつかん　よくやかいだんしついっかいゆかふせ）
○時　　代　明治
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本墨画、彩色
○員　　数　1枚
○寸 法 等　58.7×88.3cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙および足し紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は3から）

127 ○列品番号　P-4045
○名　　称　《上野博物館 正面玄関柱脚、柱頭詳細》（うえのはくぶつかん　しょうめんげんかんちゅうきゃく、ちゅうとうしょうさい）
○時　　代　明治
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本墨画、彩色
○員　　数　1枚
○寸 法 等　62.8×97.0cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙、足し紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. 本紙が裂けた部分には裏面から和紙で補強する。 4. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は4から）

128 ○列品番号　P-4046
○名　　称　《上野博物館 正面2階ベランダ手摺親柱詳細》（うえのはくぶつかん　しょうめんにかいべらんだてすりおやばしらしょうさい）
○時　　代　明治
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本墨画、彩色
○員　　数　1枚
○寸 法 等　59.6×88.7cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. 部分的に濾過水などを用いて水染みを洗浄し、軽減する。 4. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成21年度は4から）

129 ○列品番号　P-4049
○名　　称　《上野博物館 翼屋階段詳細》（うえのはくぶつかん　よくやかいだんしょうさい）
○時　　代　明治
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本、鉛筆
○員　　数　1枚
○寸 法 等　93.5×56.7cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙、足し紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は3から）

130 ○列品番号　P-4050
○名　　称　《上野博物館 翼屋階段手摺詳細図》（うえのはくぶつかん　よくやかいだんてすりしょうさいず）
○時　　代　明治
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本、鉛筆
○員　　数　1枚
○寸 法 等　55.1×66.4cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. 本紙が折れた部分には裏面から和紙で補強する。 4. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は3から）

131 ○列品番号　P-4051
○名　　称　上野博物館内側壁基礎仕替方之図 Uyeno Museum（うえのはくぶつかんうちがわかべきそしかえかたのず）
○時　　代　明治
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本墨画
○員　　数　1枚
○寸 法 等　57.5×97.7cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. 足し紙を付け直して補強する。 4. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は3から）

132 ○列品番号　P-4052
○名　　称　《上野博物館 木製建具鏡板詳細》（うえのはくぶつかん　もくせいたてぐかがみいたしょうさい）
○時　　代　明治
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本墨画
○員　　数　1枚
○寸 法 等　62.4×86.0cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙、足し紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. 本紙が裂けた部分には裏面から和紙で補強する。 4. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。 （平成22年度は3から）

133 ○列品番号　P-4053
○名　　称　Uyeno Exhibition《上野博物館 翼屋1階壁基部詳細》（うえのはくぶつかん　よくやいっかいかべきぶしょうさい）
○時　　代　明治

○年代世紀　19c
○品　　質　紙本墨画、彩色
○員　　数　1枚
○寸 法 等　62.0×46.4cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。（平成22年度は3から）

134 ○列品番号　P-4054
○名　　称　上野博物館中真セリモチ外側石細工原寸之図（うえのはくぶつかんちゅうしんせりもちそとがわいしざいくげんすんのず）
○時　　代　明治
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本墨画、彩色
○員　　数　1枚
○寸 法 等　57.8×53.4cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙、足し紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. 張り手を付け、仮張りに張り込み、変形修正を行う。 （平成22年度は3から）

135 ○列品番号　P-4055
○名　　称　《上野博物館 煉瓦壁隅部詳細》（うえのはくぶつかん　れんがかべすみぶしょうさい）
○時　　代　明治
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本墨画、彩色
○員　　数　1枚
○寸 法 等　53.0×40.7cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。（平成22年度は3から）

136 ○列品番号　P-4056
○名　　称　《上野博物館 正面中央2階化粧柱下部詳細》（うえのはくぶつかん　しょうめんちゅうおうにかいけしょうばしらかぶしょうさい）
○時　　代　明治
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本墨画、彩色
○員　　数　1枚
○寸 法 等　57.4×48.3cm
○施工会社　有限会社山領絵画修復工房
○修理内容　1. 裏打ち紙を除去する。 2. 表面に付着した汚れを除去する。 3. ゴアテックスを用いて全体に均一に水分を与え、重しをかけ乾燥し、変形修正を行う。（平成22年度は3から）

〈和書〉（2件）
137 ○列品番号　QA-4118
○名　　称　佐渡国図（さどのくにず）
○時　　代　江戸
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本着色、折仕立
○員　　数　1舗
○寸 法 等　73.2×112.3cm
○施工会社　株式会社墨仁堂
○修理内容　1.本紙の剥落止めを行った後、裏打ち紙を除去する。 2.本紙の紙質に合わせた補修紙を作成し、欠損箇所に補紙を施す。 3.美濃紙にて裏打ちを行う。 4.表紙は補修して再使用する。 5.もとの折り目で畳んで、表紙を取り付け、折り畳み装に仕立てる。

138 ○列品番号　QA-4176
○名　　称　上野国図（こうづけのくにず）
○時　　代　江戸
○年代世紀　19c
○品　　質　紙本着色、折仕立
○員　　数　1舗
○寸 法 等　202.5×179.0cm
○施工会社　株式会社墨仁堂
○修理内容　1.本紙の剥落止めを行った後、裏打ち紙を除去する。 2.本紙の紙質に合わせた補修紙を作成し、欠損箇所に補紙を施す。 3.美濃紙にて裏打ちを行う。 4.表紙は補修して再使用する。 5.もとの折り目で畳んで、表紙を取り付け、折り畳み装に仕立てる。

館史資料（収蔵品外）（1件）
139 ○列品番号　館資678
○名　　称　重要雑録（明治26年）（じゅうようざつろく）
○時　　代　明治
○年代世紀　明治26年（1893）
○品　　質　紙本墨書（一部インク）
○員　　数　1冊
○寸 法 等　27.8×19.5×7.6cm
○施工会社　有限会社東京修復保存センター
○修理内容　1.冊子本を解装する。 2.各頁ごとに折れや皺をのばす。 3.劣化が著しい箇所に両面より典具帖による補強を行う。 4.欠失部分に漉き嵌めにて補紙を施す。 5.表紙は新調し、題箋、ラベルなどは再使用する。 6.封筒や付箋は、補紙等を施し、元の場所に貼り付ける。 7.冊子本に仕立てる。 （平成22年度は2まで）

【京都国立博物館】（9件）

＜絵画＞（4件）
1　○名　　称　仙人図団扇（せんにんずだんせん）
○作　　者　玉斎
○品　　質　絹本墨画淡彩
○員　　数　1幀
○寸 法 等　26.0×24.5cm
○施工会社　有限会社　漢和堂
○修理内容　1　本紙の色留作業を行う。2　本紙の染みと汚れを取ること。3　本紙の旧裏打紙を除去すること。4　染みを取った所に天然絵具で補色を行うこと。5　新たに天然絵具で適切に染めた美濃紙で肌裏打をすること。6　生宣紙にて増し裏を入れる。7　表装裂地と寸法について担当者と相談の上決めること。8　本紙と似合う裂地を用い、天然絵具で色染めと光沢調整を施す。9　本紙と表装裂地を別々に仮張りに掛けて乾燥させること。10　本紙と表装裂地の付きまわしを行なう。11　生宣紙にて中裏と総裏を入れて、長期間の仮張りで十分に乾燥させること。12　中国式台紙表装掛軸を仕立てすること。13　布で作品を包み、桐箱に入れ保存収納すること。

2　○名　　称　飛鳥遊羊図めくり（ひちょうゆうようずめくり）
○作　　者　藻皇
○品　　質　絖本墨画

○員　　数　1枚
○寸 法 等　101.0×39.0㎝
○施工会社　有限会社　漢和堂
○修理内容　1　肌裏紙を固定する。2　剥落止めを行う。3　染み抜きと汚れの除去。4　絹の欠損部分の補填。5　中増裏打紙の染め。6　中増裏打ち。7　折れ伏せによる折れ目の補強。8　欠損部分の補色。9　表装裂の調整。10　付け廻し。11　総裏打ち。12　裏張り。13　中国式二色表装掛軸に仕立てる。14　裂で包み、桐箱に納入。

3　○名　　称　山水図扇面（さんすいずせんめん）
○作　　者　姜筠
○品　　質　紙本墨画
○員　　数　1幀
○寸 法 等　上弦66.4㎝　下弦30.0㎝　辺21.6㎝
○施工会社　有限会社　漢和堂
○修理内容　1　本紙の色留作業を行う。2　所々にある白い粉状のカビのようなものは再検査の上適切な措置を取ること。3　本紙の染みと汚れを取ること。4　本紙の旧裏打紙を除去すること。5　染みを取った所に天然絵具で補色を行うこと。6　新たに天然絵具で適切に染めた紙で肌裏打をすること。7　生宣紙にて増し裏を入れる。8　表装裂地と寸法について担当者と相談の上決めること。9　本紙と似合う裂地を用い、天然絵具で色染めと光沢調整を施す。10　本紙と表装裂地を別々に仮張りに掛けて乾燥させること。11　本紙と表装裂地の付きまわしを行なう。12　生宣紙にて中裏と総裏を入れて、長期間の仮張りで十分に乾燥させること。13　中国式台紙表装を仕立てすること、作品の保存を考え作品の上に厚いかぶせ紙を入れること。14　布で包んで、詩書扇面　姜筠筆と同じ帙箱に入れ保存収納すること。

4　○名　　称　詩書扇面（ししょせんめん）
○作　　者　姜筠
○品　　質　金箋墨書
○員　　数　1幀
○寸 法 等　上弦67.2㎝　下弦29.7㎝　辺22.0㎝
○施工会社　有限会社　漢和堂
○修理内容　1　本紙の色留作業を行う。2　本紙の染みと汚れを取ること。3　本紙の旧裏打紙を除去すること。4　染みを取った所に天然絵具で補を行うこと。5　新たに天然絵具で適切に染めた紙で肌裏打をすること。6　生宣紙にて増し裏を入れる。7　表装裂地と寸法について担当者と相談の上決めること。8　本紙と似合う裂地を用い、天然絵具で色染めと光沢調整を施す。9　本紙と表装裂地を別々に仮張りに掛けて乾燥させること。10　本紙と表装裂地の付きまわしを行なう。11　生宣紙にて中裏と総裏を入れて、長期間の仮張りで十分に乾燥させること。12　中国式台紙表装を仕立てすること、作品の保存を考え作品の上に厚いかぶせ紙を入れること。13　布で包んで、山水図扇面　姜筠筆と同じ帙箱に入れ保存収納すること。

＜書跡＞（3件）

5　○名　　称　述書賦扇面（じゅつしょふせんめん）
○作　　者　鄭孝胥
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　1幀
○寸 法 等　上弦53.8㎝　下弦20.6㎝　辺20.0㎝
○施工会社　有限会社　漢和堂
○修理内容　1　本紙の色留作業を行う。2　本紙の染みと汚れを取ること。3　本紙の旧裏打紙を除去すること。4　虫穴を古紙で補修すること。5　染みを取った所及び虫穴を補修した部分に天然絵具で補色を行うこと。6　新たに天然絵具で適切に染めた紙で肌裏打をすること。7　生宣紙にて増し裏を入れる。8　表装裂地と寸法について担当者と相談の上決めること。9　本紙と似合う裂地を用い、天然絵具で色染めと光沢調整を施す。10　本紙と表装裂地を別々に仮張りに掛けて乾燥させること。11　本紙と表装裂地の付きまわしを行なう。12　生宣紙にて中裏と総裏を入れて、長期間の仮張りで十分に乾燥させること。13　中国式台紙表装を仕立てすること、作品の保存を考え作品の上に厚いかぶせ紙を入れること。14　布で包んで、帙箱に入れ保存収納すること。

6　○名　　称　詩書めくり（ししょめくり）
○作　　者　沈尹默
○品　　質　紙本墨書
○員　　数　4枚（5枚のうち）
○寸 法 等　各129.5㎝×　32.4㎝
○施工会社　有限会社　漢和堂
○修理内容　1　染みと汚れを取ること。2　天然絵具で補色をすること。3　天然絵具で適切に染めた紙で肌裏打をすること。4　生宣紙にて増し裏を入れる。5　表装裂地について本紙と似合う特製裂地を用い、天然絵具で色染めと光沢調整を施す。6　本紙と表装裂地を別々に仮張りに掛けて乾燥させること。7　本紙と表装裂地の付きまわしを行なう。8　生宣紙にて中裏と総裏を入れて、長期間の仮張りで十分に乾燥させること。9　中国式軸装を仕立てすること。10　布で作品を包み、四幅の軸を一つの桐箱に入れ保存収納すること。

7　○名　　称　華厳経巻第三十三残巻（二月堂焼経）（けごんきょうかんだい33ざんかん（にがつどうしょうきょう））
○時　　代　奈良時代
○品　　質　紺紙銀字
○員　　数　1巻
○寸 法 等　縦　23.0㎝　総横　394.5㎝
○施工会社　株式会社　光影堂
○修理内容　1　料紙の浮き箇所等に糊挿を施す。2　巻子装を解体し、銀字箇所に膠水溶液にて剥落止を行う。3　浄化水を用い汚れの除去を行い、再度剥落止めを行う。4　適度の湿り気をもって旧補修紙及び肌裏紙を除去する。5　料紙の繊維組成検査を行い、それに応じた紺紙補修紙を作製し、欠失箇所に削補補修を行う。6　染色した薄美濃紙・新糊で肌裏打を行い、一時仮張する。7　折損箇所に対し折れ伏せによる補強補修を行う。8　紺に染色した混合紙・新糊で再度裏打を行い、表裏仮張する。9　表紙を新調し、本紙と接合させる。 軸木・八双竹・紐・包裂も新調する。軸首は黒塗撥軸を新調する。10　旧軸木、軸首、旧表紙は、旧箱に保存する。保存箱は、桐材木口詰太軸巻、桐材屋郎中箱１合を新調する。11　中箱蓋部分に紙製覆いを新調する。

＜彫刻＞（1件）

8　○名　　称　木造菩薩坐像（もくぞうぼさつざぞう）
○時　　代　中国　元～明14～15世紀
○品　　質　木造
○員　　数　1躯
○寸 法 等　総高　約60㎝
○施工会社　株式会社　京都科学
○修理内容　本体 1　修理前写真・X線写真撮影。2　クリーニングを行って、埃や汚れを除去する。3　部分的に解体(背板、左前腕、左右上腕から肘外側にかけての薄い材、膝前)を行い、構造的な強度が不足している箇所を一旦取り外す。　尚、胸の部分のように瓔珞が矧ぎ目にかかっており解体が必ずしも最優先事項とならない箇所や、現状で強度が不足していないかあるいは解体することで外観に著しく干渉する箇所などは基本的に解体しないこととする。錆び釘、接着剤、矧目の充填材等の除去は解体と同時に行う。4　材質補強・虫蝕孔の充填　パラロイドB-72を塗布し、材質的に強化する。　パラロイドに砥の粉を加えた充填材で充填する。5　組立。　仮組を行って、位置確認後接合。6　矧目処理を行う。7　矧目箇所等にアクリル絵の具で補彩を行い、全体との調和を図る。8　修理報告書作成。
台座　1　クリーニングを行って、埃や汚れを除去する。2　材質補強・虫蝕孔の充填　パラロイドB-72を塗布し、材質的に強化する。　パラロイドに砥の粉を加えた充填材で充填する。3　欠損部の新補。　構造上問題のある背面は、新たに作り補う。　像の安定のため台座の枘を利用し桟を取り付ける。4　矧目箇所等にアクリル絵の具で補彩を行い、全体との調和を図る。5　框座を新補し像の安定を図る。

＜漆工＞（1件）

9　○名　　称　蜻蛉蒔絵鞍・鐙（とんぼまきえくら・あぶみ）
○時　　代　江戸時代（万延元年1860年）
○品　　質　木製および鉄製　漆塗　蒔絵
○員　　数　1具
○寸 法 等　鞍：38.7㎝×35.8㎝、高29.0㎝　鐙：各12.1㎝×29.2㎝、高25.1㎝
○施工会社　北村繁
○修理内容　1　一体になっている下鞍や馬氈などを鞍本体から取り外す。　2　修理前に写真撮影と調査を行い、修理計画を立てる。3　毛先の柔らかい筆などを用いて埃を掃った後、精製水やエタノール水溶液等を用いて可能な範囲でクリーニングを行う。4　鞍に生じた漆塗膜の亀裂には生上味漆を割れ目から流しこんで木地を強化し

た後、希釈した麦漆を含浸して隙間を接着する。この際に浮き上がった可能な範囲で加圧して段差を押さえるよう試みるが、塗膜が厚く不可能な場合は現状のままで接着する。5　鎧に生じた漆塗膜の亀裂には生上味漆を割れ目から十分に含浸し、素地の鉄の表面に漆の皮膜を作って空気との接触を出来るだけ遮断する。その後、希釈した麦漆を含浸して隙間を接着する。この際に浮き上がった可能な範囲で加圧して段差を押さえるよう試みるが、塗膜が厚く不可能な場合は現状のままで接着する。6　漆塗膜の接着後、亀裂の隙間に木屎や漆下地を充填して形状を整える。7　漆塗膜の欠失したところは木屎や漆下地で形状を整える。8　新たに施した漆下地は形状を整えた後、違和感なく周囲と調和するように仕上げる。9　修理後の写真撮影を行う。10　木製外箱の蓋の欠損した横桟を新たに補い、接合部を接着して補強する。11　修理前に取り外した下鞍など一式を組み立てる。

【奈良国立博物館】(9件)

<絵画>(2件)

1　○名　　称　絹本著色春日文殊曼荼羅（けんぽんちゃくしょくかすがもんじゅまんだら）
　　○員　　数　1幅
　　○時　　代　鎌倉時代　　14世紀
　　○品　　質　絹本著色
　　○寸 法 等　縦93.6㎝　横34.5㎝
　　○施工会社　株式会社　文化財保存
　　○修理内容　解体修理。表装を解体し裏打紙を全て取り替える本格修理を行う。修理実施前に光学機器等を用いた材料などの分析調査を当館研究員と共同で行い、その成果を随時当館研究員に報告して修理方針を確認する。濾過水を用いて汚れを除去し、膠などの接着剤を用いて剥落止めを施す。旧肌裏紙の取り替えに際しては乾式肌上げ法を採用する。本紙料絹欠失箇所に電子線劣化絹を用いて補絹を施す。表具は二段仏表具に改装し、新調する裂の文様や色調については当館研究員と協議し決定する。桐材太巻添軸、桐材印籠箱、裂貼り帙を新調する。

2　○名　　称　紙本墨画淡彩山水図　伝周文筆（しほんぼくがたんさいさんすいず）
　　○員　　数　1幅
　　○時　　代　室町時代　　文安二年（1445）
　　○品　　質　紙本墨画淡彩
　　○寸 法 等　縦108.0㎝　横32.7㎝
　　○施工会社　株式会社　文化財保存
　　○修理内容　解体修理。表面の水溶性の汚れが修理中に移動しないようクリーニングを施す。乾式肌上げ法により古い裏打紙を全て除去し、新しい裏打紙に取り替える。墨と淡彩については、その定着状況に応じて剥落止めを行う。旧補彩については、本紙と大変よく馴染んでいることから基本的に再使用する。表装裂は全て再使用する。（継続2 年事業のうちの第１年）

<書跡>(1件)

3　○名　　称　紺紙金銀交書　大方広如来不思議境界経（こんしきんぎんこうしょだいほうこうにょらいふしぎきょうがいきょう）
　　○員　　数　1巻
　　○時　　代　平安時代　　12世紀
　　○品　　質　紺紙金銀交書
　　○寸 法 等　縦25.7㎝　横529.4㎝
　　○施工会社　株式会社　文化財保存
　　○修理内容　欠損・破損部分を補修紙で整形し、強い折れと亀裂は折れ伏せで補強する。必要な箇所は金銀泥に剥落止めを施す。紙継ぎを外し不適切な継直しを修正し、表紙には巻緒を新たに付す。修理に伴い、光学調査機器等を用いた紙質調査を行う。また収納箱（桐製）を新調する。

<漆工>(1件)

4　○名　　称　経櫃（きょうびつ）
　　○員　　数　1合
　　○時　　代　平安時代　　12世紀
　　○品　　質　木製黒漆塗
　　○寸 法 等　蓋縦36.5㎝　同横49.5㎝　総高26.6㎝
　　○施工会社　北村繁
　　○修理内容　剥離部は漆塗膜の割目に希釈した漆を浸透させて強化する。虫食いや露出した木地は生漆を浸透させ、木地接合部には麦漆で補強し、漆下地等で形状を整え、表面を調和するように仕上げる。布被のめくれた箇処は麦漆で所定の場所に圧着し、漆下地等で形状を整えた後、漆で色調を整える。打損部は生地部分等に生漆を含浸させて強化し、漆下地等で形状を整えた後、表面を調和するように仕上げる。緩んでいる金具はいったん外し、隙間を詰めて固定する。包裂を新調する。

<考古>(5件)

5　○名　　称　二塚古墳出土遺物（ふたつかこふんしゅつどいぶつ）
　　　金属製品　24件、琥珀製棗玉　1件
　　○員　　数　金属製品：一括、琥珀製棗玉：一括
　　○時　　代　古墳時代後期　　6世紀中ごろ
　　○品　　質　金属製品：鉄製および青銅製、琥珀製棗玉：琥珀製
　　○施工会社　財団法人 元興寺文化財研究所
　　○修理内容　金属製品：処理前調査、クリーニング、脱塩処理、樹脂含浸、接合、樹脂塗布による強化、防錆処理、一部復元、仕上げ、処理後調査。
　　琥珀製棗玉：処理前調査、クリーニング、接合、アクリル樹脂含浸、仕上げ、処理後調査。（継続3ヶ年事業のうちの第2年）

6　○名　　称　鉄製大刀　北和城南古墳出土（てつせいたち　ほくわじょうなんこふんしゅつど）
　　○員　　数　2振
　　○時　　代　古墳時代
　　○品　　質　鉄製
　　○寸 法 等　長 約77㎝、約78㎝
　　○施工会社　財団法人 元興寺文化財研究所
　　○修理内容　処理前調査（X線撮影）、クリーニング、脱塩処理、樹脂含浸、第1次樹脂塗布、接合・復原、第2次樹脂塗布、仕上げ、処理後調査。

7　○名　　称　珠城山1号墳出土遺物（たまきやま1ごうふんしゅつどいぶつ）
　　　雲珠、辻金具、杏葉
　　○員　　数　雲珠：2点、辻金具：一括、杏葉：3個
　　○時　　代　古墳時代後期　　6世紀
　　○品　　質　雲珠：金銅製、辻金具：金銅製、杏葉：金銅製
　　○寸 法 等　雲珠：①縦12.7 横13.5 高4.3　②縦7.5 横7.5 高1.8、辻金具：最大片 縦9.8㎝ 横9.8㎝、
　　杏葉：①縦9.5 横8.8　②縦8.8 横8.6　③縦9.0 横8.7
　　○施工会社　財団法人 元興寺文化財研究所
　　○修理内容　処理前調査（X線撮影）、クリーニング、脱塩処理、樹脂含浸、第1次樹脂塗布、接合・復原、第2次樹脂塗布、仕上げ、処理後調査。
　　（継続2ヶ年事業のうちの第1年）

8　○名　　称　鉄製大刀　珠城山3号墳出土（てつせいたち　たまきやま3ごうふんしゅつど）
　　○員　　数　一括
　　○時　　代　古墳時代後期　　6世紀
　　○品　　質　鉄製
　　○寸 法 等　最大 約110㎝　最小 約70㎝
　　○施工会社　財団法人 元興寺文化財研究所
　　○修理内容　処理前調査（X線撮影）、クリーニング、脱塩処理、樹脂含浸、第1次樹脂塗布、接合・復原、第2次樹脂塗布、仕上げ、処理後調査。
　　（継続2ヶ年事業のうちの第1年）

9　○名　　称　鉄製大刀　佐味田出土（てつせいたち　さみたしゅつど）
　　○員　　数　一括
　　○時　　代　古墳時代

○品　　質　鉄製
○施工会社　財団法人 元興寺文化財研究所
○修理内容　処理前調査（X線撮影）、クリーニング、脱塩処理、樹脂含浸、第1次樹脂塗布、接合・復原、第2次樹脂塗布、仕上げ、処理後調査。
（継続2ヶ年事業のうちの第1年）

【九州国立博物館】（19件）

＜絵画＞（7件）

1　○名　　称　旧円満院宸殿障壁画（きゅうえんまんいんしんでんしょうへきが）　8面（54面11枚のうち）（19年度より継続・6ヵ年計画）
○所 蔵 者　京都国立博物館
○時　　代　江戸時代・17世紀
○品　　質　紙本金地著色、襲木：黒漆塗。引手：木瓜金鍍金
○寸 法 等　No.11）縦177.3 ㎝　横138.0 ㎝　No.12）縦176.2 ㎝　横137.9 ㎝
No.13）縦176.5 ㎝　横137.9 ㎝　No.14）縦174.3㎝　横138.1㎝
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟
○修理内容　1. 京都国立博物館内にて運搬の為の仮剥落止を行なう（平成19年度に施工済）。 2. 九州国立博物館にて写真撮影を行い、修理前の状態を調査・記録する。 3. 解体前の絵具層の剥落止を行なう。 4. 襖装を解体する。 5. 精製水にて表面の汚れ等を除去する。 6. 布苔糊にて絵具層を保護するため表打ちを行なう。 7. 本紙の旧裏打紙、旧補紙を除去する。 8. 本紙欠失箇所には補修紙にて補紙を施す。 9. 本紙の色合いに合わせて，染薄美濃紙にて肌裏を打つ。 10. 椿紙にてさらに裏打紙を打つ。 11. 表打ちの紙を除去する。 12. 杉材を用い総納組隅止めとした下地を８枚新調する。 13. 下地両面に８層の下貼りを施し、よく乾燥させる。 14. 補紙の箇所に補彩を行う。 15. 下貼が完了した下地に本紙上貼りする。下地の裏面には新調の鳥の子紙を貼る。 16. 最終的な絵具層の剥落止を行なう。 17. 引手は元のものを修理し用いる。 18. 漆塗襲木を新調し，襖に仕立てる。

2　○名　　称　浄土曼荼羅図（じょうどまんだらず）　1幅（20年度より継続・3ヶ年計画）
○所 蔵 者　九州国立博物館
○時　　代　鎌倉時代・13世紀
○品　　質　絹本著色、掛軸装、中廻：藍菱金地大牡丹唐草文金襴、総縁：丹地牡丹唐草文銀襴
○寸 法 等　本紙）縦128.5cm　横123.6cm
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。 2. 本紙の旧裏打紙を肌裏紙を残して除去する。 3. 浄化水を表面から噴霧し、浸透させる方法で汚れを出来る限り除去する。 4. 布海苔を用い、養生紙にて表打を行う。 5. 旧肌裏紙及び旧補絹を除去する。 6. 本紙裏面より料絹欠失箇所に劣化絹にて補絹を行う。 7. 本紙の色合いに合わせて、染薄美濃紙にて肌裏を打つ。 8. 表打の養生紙を除去する。 9. 表装裂地は支給の裂地を調整し、肌裏を打つ。 10. 美栖紙にて増裏打を行い、仮張りをする。 11. 折れ伏せを入れ、折れを直す。 12. 仮張りされた本紙と表装裂地を軸装の形に付け廻しをする。 13. 美栖紙にて中裏打を行い、仮張りをする。 14. 宇陀紙にて総裏打を行い、仮張りし充分な乾燥期間をおく。 15. 補絹の箇所に補彩をする。 16. 軸首は元のものを使用し、軸木、発装、啄木等を新調し軸装に仕立てる。 17. 桐太巻添軸１本、桐屋郎箱１合を新調し、羽二重の包裂に包み納入する。

3　○名　　称　春日宮曼荼羅図（かすがみやまんだらず）　1幅
○所 蔵 者　九州国立博物館
○時　　代　鎌倉時代・13-14世紀
○品　　質　絹本著色、掛軸装、総縁：紺地菱金地小牡丹唐草文金襴、中廻風帯：紫地牡丹唐草文印金、軸：蓮華文金軸、箱：桐二重箱
○寸 法 等　本紙）縦68.6cm　横29.7cm
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。 2. 本紙の旧裏打紙を肌裏紙を残して除去する。 3. 浄化水を表面から噴霧し，浸透させる方法で汚れを出来る限り除去する。 4. 布海苔を用い，養生紙にて表打を行う。 5. 旧肌裏紙及び旧補絹を除去する。 6. 本紙裏面より料絹欠失箇所に劣化絹にて補絹を行う。 7. 本紙の色合いに合わせて，染薄美濃紙にて肌裏を打つ。 8. 表打の養生紙を除去する。 9. 表装裂地は支給の裂地を調整し，肌裏を打つ。 10. 美栖紙にて増裏打を行い，仮張りをする。 11. 折れ伏せを入れ，折れを直す。 12. 仮張りされた本紙と表装裂地を軸装の形に付け廻しをする。 13. 美栖紙にて中裏打を行い，仮張りをする。 14. 宇陀紙にて総裏打を行い，仮張りし充分な乾燥期間をおく。 15. 補絹の箇所に補彩をする。 16. 軸首，軸木，発装，啄木等を新調し軸装に仕立てる。 17. 桐太巻添軸，桐屋郎箱を新調し，羽二重の包裂に包み納入する。

4　○名　　称　束帯天神像（そくたいてんじんぞう）　1幅
○所 蔵 者　九州国立博物館
○時　　代　南北朝-室町時代・14-15世紀
○品　　質　絹本著色、掛軸装、総縁：茶地大牡丹唐草文緞子、中廻風帯：紫地小花文綾
一文字：萌黄唐花唐草文金襴、軸：象牙軸、箱：桐屋郎箱
○寸 法 等　本紙）縦90.8cm　横40.6cm
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。 2. 本紙の旧裏打紙を肌裏紙を残して除去する。 3. 浄化水を表面から噴霧し，浸透させる方法で汚れを出来る限り除去する。 4. 布海苔を用い，養生紙にて表打を行う。 5. 旧肌裏紙及び旧補絹を除去する。 6. 本紙裏面より料絹欠失箇所に劣化絹にて補絹を行う。 7. 本紙の色合いに合わせて，染薄美濃紙にて肌裏を打つ。 8. 表打の養生紙を除去する。 9. 表装裂地は支給の裂地を調整し，肌裏を打つ。 10. 美栖紙にて増裏打を行い，仮張りをする。 11. 折れ伏せを入れ，折れを直す。 12. 仮張りされた本紙と表装裂地を軸装の形に付け廻しをする。 13. 美栖紙にて中裏打を行い，仮張りをする。 14. 宇陀紙にて総裏打を行い，仮張りし充分な乾燥期間をおく。 15. 補絹の箇所に補彩をする。 16. 軸首は無地金軸を新調，軸木，発装，啄木等を新調し軸装に仕立てる。 17. 桐太巻添軸，桐屋郎箱を新調し，羽二重の包裂に包み納入する。

5　○名　　称　霊照女像（れいしょうじょぞう）　1幅
○所 蔵 者　奈良国立博物館
○時　　代　室町時代・16世紀、永禄10年（1567）
○品　　質　紙本著色、掛軸装、総縁：薄茶地笹蔓文綾、中廻：茶地鳳凰文金襴、一文字：茶地牡丹唐草文金襴、軸：象牙軸、箱：桐屋郎箱
○寸 法 等　本紙）縦97.2cm　横38.0cm
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。 2. 軸装を解体し，本紙及び表装裂地の旧裏打紙を除去する。 3. 浄化水を表面から噴霧し，浸透させる方法で汚れを出来る限り除去する。 4. 本紙繊維に類似した補修紙を製作する。 5. 本紙欠失箇所に，上記補修紙にて補紙を行う。 6. 本紙の色合いに合わせて，染薄美濃紙にて肌裏を打つ。 7. 別に決定する仕様に基づき表装裂地の調整を行い，肌裏を打つ。 8. 美栖紙にて増裏打を行い，仮張りをする。 9. 折れ伏せを入れ，折れを直す。 10. 仮張りされた本紙と表装裂地を軸装の形に付け廻しをする。 11. 美栖紙にて中裏打を行い，仮張りをする。 12. 宇陀紙にて総裏打を行い，仮張りし充分な乾燥期間をおく。 13. 補紙の箇所に補彩をする。 14. 軸首は元のものを調整，軸木，発装，啄木等を新調し軸装に仕立てる。 15. 桐太巻添軸，桐屋郎箱を新調し，羽二重の包裂に包み納入する。

6　○名　　称　諸宗祖師像（しょしゅうそしぞう）　1幅（22年度より2ヶ年計画）
○所 蔵 者　奈良国立博物館
○時　　代　中国　南宋時代・13世紀
○品　　質　絹本著色、掛軸装、総縁：茶地唐草文海気、中廻風帯：菱金地牡丹文金襴
一文字：紺地縹菱金地桐文金襴、軸：蓮華唐草文金軸、箱：漆塗屋郎箱
○寸 法 等　本紙）縦111.8cm　横55.0cm
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。 2. 本紙の旧裏打紙を肌裏紙を残して除去する。 3. 浄化水を表面から噴霧し，浸透させる方法で汚れを出来る限り除去する。 4. 布海苔を用い，養生紙にて表打を行う。 5. 旧肌裏紙及び旧補絹を除去する。 6. 本紙裏面より料絹欠失箇所に劣化絹にて補絹を行う。 7. 本紙の色合いに合わせて，染薄美濃紙にて肌裏を打つ。 8. 表打の養生紙を除去する。 9. 表装裂地は支給の裂地を調整し，肌裏を打つ。 10. 美栖紙にて増裏打を行い，仮張りをする。 11. 折れ伏せを入れ，折れを直す。 12. 仮張りされた本紙と表装裂地を軸装の形に付け廻しをする。 13. 美栖紙にて中裏打を行い，仮張りをする。 14. 宇陀紙にて総裏打を行い，仮張りし充分な乾燥期間をおく。 15. 補絹の箇所に補彩をする。 16. 軸首，軸木，発装，啄木等を新調し軸装に仕立てる。 17. 桐太巻添軸，桐屋郎箱を新調し，羽二重の包裂に包み納入する。

7　○名　　称　仏涅槃図（ぶつねはんず）　1幅（22年度より4ヶ年計画）
○所 蔵 者　九州国立博物館
○時　　代　鎌倉時代・元亨3年（1323）
○品　　質　絹本著色、書表装、軸：蓮華唐草文金軸、箱：縦桟蓋箱

○寸 法 等　本紙）縦261.0cm　横212.6cm
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　1. 写真撮影を行い，本紙の状態を調査する。 2. 表装の解体を行う。 3. 浄化水を表面から噴霧し，浸透させる方法で汚れを除去する。 4. 本紙表面より料絹欠失箇所に劣化絹にて補絹を行う。 5. 布海苔を用い，養生紙にて表打を行う。 6. 旧肌裏紙及び旧補絹を除去する。 7. 本紙裏面より料絹欠失箇所に劣化絹にて補絹を行う。 8. 本紙の色合いに合わせて，染薄美濃紙にて肌裏を打つ。 9. 表打の養生紙を除去する。 10. 美栖紙にて増裏打を行い，仮張りをする。 11. 折れ伏せを入れ，折れを直す。 12. 本紙両端に金箔押し紙にて覆輪を施す。 13. 美栖紙にて増裏打を行い，仮張りをする。 14. 美栖紙にて中裏打を行い，仮張りをする。 15. 宇陀紙にて総裏打を行い，仮張りし充分な乾燥期間をおく。 16. 補絹の箇所に補彩をする。 17. 新調した軸木，発装，啄木等と軸首・座鐶を取り付け軸装に仕立てる。 18. 桐太巻添軸，桐屋郎箱を新調し，羽二重の包裂に包み納入する。

＜書跡＞（5件）

8　○名　　称　大燈国師墨蹟（だいとうこくしぼくせき）　1巻（21年度より継続・2ヶ年計画）
○所 蔵 者　九州国立博物館
○時　　代　鎌倉時代・14世紀
○品　　質　紙本墨書、掛軸装、上下：浅葱地無地裂、中縁：白茶地小牡丹唐草文金襴
一文字風帯：茶地二重蔓大牡丹唐草文金襴、軸：黒檀頭切軸
箱：(1)引蓋差込み箱（外箱）　(2)屋郎箱（中箱）　(3)革帙付漆塗被蓋箱（内箱）
○寸 法 等　本紙）縦30.4cm　横87.2cm
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。 2. 軸装を解体し，本紙及び表装裂地の旧裏打紙を除去する。 3. 本紙の旧補修紙を除去する。 4. 本紙繊維に類似した補修紙を製作する。 5. 本紙欠失箇所に，上記補修紙にて補紙を行う。 6. 本紙の色合いに合わせ，染薄美濃紙にて肌裏を打つ。 7. 表装裂地は元のものを調整し，肌裏を打つ。 8. 美栖紙にて増裏打を行い，仮張りをする。 9. 折れ伏せを入れ折れを防ぐ。 10. 仮張りされた本紙と表装裂地を軸装の形に付け廻しをする。 11. 美栖紙にて中裏打を行い，仮張りをする。 12. 宇陀紙にて総裏打を行い，仮張りし充分な乾燥期間をおく。 13. 軸首は元のものを使用，中軸，発装，啄木等を新調して軸装に仕立てる。 14. 元の中箱(2)に収まるように桐太巻添軸及び軸受を新調する。 15. 修理完了の本紙を羽二重の包裂に包み元の中箱(2)及び外箱(1)に納入する。 16. 元の内箱(3)は本体の損傷箇所及び革帙を補修し，紙帙で覆い別置する。

9　○名　　称　徐葆光墨跡（じょほこうぼくせき）　1幅
○所 蔵 者　九州国立博物館
○時　　代　中国 清時代・1719年（康熙58）
○品　　質　紙本著色、掛軸装、総縁：茶地石榴唐草文緞子、一文字：縹地鶴松喰雲文金襴、明朝：白茶地無地裂、軸：黒壇軸。箱：桐屋郎箱
○寸 法 等　本紙）縦93.5cm　横43.0cm
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。 2. 軸装を解体し，本紙及び表装裂地の旧裏打紙を除去する。 3. 修理前調査により決定した方針に基づき，本紙の汚れを出来る限り除去する。 4. 本紙の旧補修紙を除去する。 5. 本紙繊維に類似した補修紙を製作する。 6. 本紙欠失箇所に，上記補修紙にて補紙を行う。 7. 本紙の色合いに合わせて，染薄美濃紙にて肌裏を打つ。 8. 表装裂地は総縁・明朝は支給の裂地を調整，一文字は元のものを調整し，肌裏を打つ。 9. 美栖紙にて増裏打を行い，仮張りをする。 10. 折れ伏せを入れ，折れを直す。 11. 仮張りされた本紙と表装裂地を軸装の形に付け廻しをする。 12. 美栖紙にて中裏打を行い，仮張りをする。 13. 宇陀紙にて総裏打を行い，仮張りし充分な乾燥期間をおく。 14. 補紙の箇所に補彩をする。 15. 軸首及び座・鐶は元のものを調整，軸木，発装，啄木等を新調し軸装に仕立てる。 16. 桐太巻添軸，桐屋郎箱を新調し，羽二重の包裂に包み納入する。

10　○名　　称　詩巻（しかん）　1幅
○所 蔵 者　東京国立博物館
○時　　代　琉球・第二尚氏時代・18～19世紀
○品　　質　紙本墨書、巻子装、表紙：更紗模様唐紙、見返：朱色唐紙、軸：中軸に裂を巻く、箱：無
○寸 法 等　本紙）縦30.6cm　横788.7cm
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。 2. 巻子装を解体し，本紙の旧裏打紙を除去する。 3. 本紙繊維に類似した補修紙を製作する。 4. 本紙欠失箇所に，上記補修紙にて補紙を行う。 5. 本紙の色合いに合わせて，染薄美濃紙にて1層の裏打ちを行う。 6. 必要に応じて表紙，見返の剥落止を行う。 7. 表紙，見返繊維に類似した補修紙を作製する。 8. 表紙，見返欠失箇所に，上記補修紙にて補紙を行う。 9. 表紙，見返の色合いに合わせて，染薄美濃紙にて1層の裏打ちを行う。 10. 折れ伏せを入れ，折れを直す。 11. 仮張りし充分な乾燥期間をおく。 12. 表紙，見返の補紙箇所に補彩をする。 13. 仮張りされた本紙，表紙，見返を継ぐ。 14. 軸巻紙，軸首，軸木，発装，紐等を新調し巻子装に仕立てる。(軸首、紐は九州国立博物館が用意) 15. 桐屋郎箱を新調し，羽二重の包裂に包み納入する。

11　○名　　称　額字（がくじ）　2巻（22年度より2ヶ年計画）
○所 蔵 者　東京国立博物館
○時　　代　江戸時代・19世紀
○品　　質　紙本墨書、巻子装、表紙：藍染紙、見返：金野毛散装飾紙、軸：木軸頭切、箱：被箱2巻入
○寸 法 等　第1巻）縦31.6cm　横869.9cm（20紙合計）　第2巻）縦32.1cm　横951.0cm（22紙合計）
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。 2. 巻子装を解体し，本紙の旧裏打紙を除去する。 3. 本紙繊維に類似した補修紙を製作する。 4. 本紙欠失箇所に，上記補修紙にて補紙を行う。 5. 本紙の色合いに合わせて，染薄美濃紙にて1層の裏打ちを行う。 6. 折れ伏せを入れ，折れを直す。 7. 仮張りし充分な乾燥期間をおく。 8. 表紙，見返は新たに作製しそれぞれ裏打ちを行い充分な乾燥期間をおく。 9. 仮張りされた本紙，表紙，見返を継ぐ。 10. 軸巻紙，軸首，軸木，八双，紐等を新調し巻子装に仕立てる。 11. 桐屋郎箱を新調し，旧箱甲板は新箱底に納入する。本紙はそれぞれ羽二重の包裂に包み納入する。

12　○名　　称　扇面（せんめん）　1幅
○所 蔵 者　東京国立博物館
○時　　代　江戸時代・文政10年（1827）
○品　　質　紙本墨書、掛軸装、総縁：薄茶地一重蔓菊花文緞子、中廻：萌黄地一重蔓唐花文緞、明朝：白地無地裂、軸：黒檀軸、箱：桐屋郎箱
○寸 法 等　本紙）縦15.5cm　横50.0cm
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。 2. 軸装を解体し，本紙の旧裏打紙を除去する。 3. 浄化水を表面から噴霧し，浸透させる方法で汚れを出来る限り除去する。 4. 本紙繊維に類似した補修紙を製作する。 5. 本紙欠失箇所に，上記補修紙にて補紙を行う。 6. 本紙の色合いに合わせて，染薄美濃紙にて肌裏を打つ。 7. 表装裂地及び台紙の調整を行い，肌裏を打つ。 8. 美栖紙にて増裏打を行い，仮張りをする。 9. 折れ伏せを入れ，折れを直す。 10. 仮張りされた本紙と台紙，表装裂地を軸装の形に付け廻しをする。 11. 美栖紙にて中裏打を行い，仮張りをする。 12. 宇陀紙にて総裏打を行い，仮張りし充分な乾燥期間をおく。 13. 補紙の箇所に補彩をする。 14. 軸首は元のものを調整，軸木，発装，啄木等を新調し軸装に仕立てる。 15. 桐太巻添軸，桐屋郎箱を新調し，旧箱の甲板及びラベルを新箱底に納入，　羽二重の包裂に包み納入する。

＜彫刻＞（1件）

13　○名　　称　木造面（もくぞうめん）　90面
○所 蔵 者　九州国立博物館
○時　　代　平安時代・12世紀
○品　　質　木造一材製彩色ほか
○寸 法 等　No.1）長さ19.3cm　幅14.6cm　奥行4.8cmほか
○施工会社　財団法人美術院
○修理内容　1.面９０面中７３面を修理対象とする。(非対象は、No.８、９、19、25、35、36、45、46、47、51、52、65、67、68、69、71、80の17面)　2.クリーニングのみは１５面である。他５８面についても、クリーニングは行う。①刷毛・筆等で埃の除去を行う。②精製水・アルカリイオン水・メチルセルロース(水溶液)等で、クリーニングを行う。 3.近世の古色仕上げの除去を行う。 4.彩色及び漆層の剥落止めは、水溶性アクリル樹脂・アクリル樹脂エマルション・メチルセルロース・ふのり・膠等を用い、状況に応じ接着剤を選択する。 5.材質強化にはメチルセルロース、あるいはメチルセルロース＋パラロイドＢ７２等を状況に応じ濃度を変えて用い、濡れ色に留意して行う。 6.割損部あるいは矧ぎ目の接合は、麦漆・膠・エポキシ系樹脂・シアノアクリレートで状況に応じ接合する。 7.カビは、エチルアルコール（７０～１００%液）を用い除去する。 8.虫蝕の処置は、虫穴詰めを要する場合はブチラール樹脂を用い充填する。

＜漆工＞（1件）

14 ○名　　称　亀甲地螺鈿鞍（きっこうじらでんくら）　1背
○所 蔵 者　九州国立博物館
○時　　代　平安時代・12世紀
○品　　質　木製漆塗、螺鈿
○寸 法 等　前輪）高29.0cm　　後輪）高30.3cm　　居木）長39.0cm
○施工会社　株式会社目白漆芸文化財研究所
○修理内容　1. 解体・付着物除去；前輪・後輪・居木を結んである紐を外して解体を行い、4 つの部材に分ける。過去の修理の際に螺鈿部分に被った付着物を除去する。 2. クリーニング；螺鈿の貝がかなり浮き上がり、今にも剥落しそうな状態であるため、危険な箇所に薄い雁皮紙を細かく切り糊で仮止めを行い、剥落を防止しながらクリーニング作業を行う。 3. 接合・組立；麦漆で木地の亀裂接着および安定処理を行う。最後に解体した部材を紐で結び、組み立てる。 4. 強化・整形；螺鈿がほぼ全面にわたり剥落が進み、不安定な状態であるため、前輪・後輪・居木の各部が安定するような受け台をそれぞれ製作した上で、接着作業を行う。接着は原則として膠を使用する。鞍の形状はほとんどが曲面なので、一度に接着作業が行えないため、順次行うこととする。螺鈿が安定した後、一枚一枚の貝の際に錆を施し、貝裏に漆が浸み込まないように養生を行う。塗膜の剥離および亀裂部に順次麦漆を含浸し、接着を行う。 5. 補填；居木の左右の裏面がそれぞれ欠失しているため、同部の欠失した形に合わせ、木材を削り加工した材を嵌め込み、形態の復元を行う。この欠失部は安定の悪い箇所のため、接着は麦漆で行い、後補材との隙間には、刻苧により形態の復元を行う。そして居木と共に下地を施し、後補箇所が特定できるように仕上げつつ、展示上違和感のないようにする。接着した塗膜に際錆を施す。塗膜の劣化を防ぐため、全体に漆固めを行う。

＜考古＞（1件）

15 ○名　　称　単鳳環頭大刀（たんほうかんとうたち）・雲珠（うず）・辻金具（つじかなぐ）（箕田丸山古墳出土遺物のうち）　6点
○所 蔵 者　九州国立博物館
○時　　代　古墳時代・6世紀
○品　　質　鉄地金銅張
○寸 法 等　単鳳環頭大刀）残存長37.5cm　幅3.5cm　雲珠　A）径4.5cm　高3.5cm　　B）径4.5cm　高3.0cm　辻金具　A）長9.5cm　幅7.5cm　　B）長6.5cm　幅6.5cm　　C）長6.0cm　幅6.0cm
○施工会社　株式会社芸匠
○修理内容　1. 観察・記録；修理前の状態を撮影し記録する、必要があればX線写真を撮影する。 2. クリーニング（一次）；対象資料の現状を把握し、埃や錆等のクリーニングをおこなう。 3. 脱塩処理；純水を定期的に交換しながら、採取した水の陰イオンがイオンメータで測定し、0ppmに近くなるまで脱塩処理をおこなう。 4. 防錆処理；ベンゾトリアゾールのアルコール溶液に含浸する。含浸後一定期間乾燥させる。 5. クリーニング（二次）；仕上げの錆取り作業をおこなう。 6. 樹脂含浸；アクリル樹脂を含浸させる。 7. 接合・樹脂強化；接合及び脆弱箇所に、アクリル樹脂で接合後、エポキシ樹脂を充填し補強をおこなう。 8. 補彩；修理箇所にアクリル絵具で補彩を施す。 9. 観察・記録；修理後の状態を撮影し記録する。

＜歴史資料＞（4件）

16 ○名　　称　対馬宗家関係資料（つしまそうけかんけいしりょう）（対馬宗家関係資料のうち）　21箱19巻、4幅、16点　（20年度より継続6ヶ年計画）
○所 蔵 者　九州国立博物館
○時　　代　対馬宗家関係資料）室町時代・16世紀　和歌「君か代は」）江戸時代・18-19世紀
○品　　質　紙本墨書、巻子装、掛軸装ほか
○寸 法 等　対馬宗家関係資料）縦20.0cm　横54.3cmほか　和歌「君か代は」）本紙縦31.1cm　横44.2cm
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　A.21箱19巻
1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。 2. 巻子装を解体する。 3. 本紙の汚れ等を取り去る。 4. 本紙の旧裏打紙を除去し、継ぎを外し、シワ等を伸ばして整形する。 5. 本紙と類似した補修紙を作成する。 6. 本紙欠失箇所に上記補修紙にて補紙を施し、上下には足し紙をつける。 7. 旧裏打紙と同様の色調に染色した薄美濃紙にて肌裏打を施す。 8. 将来折れが予想される箇所に折れ伏せを入れる。 9. 混合紙にて総裏打を施す。 10. 仮張りし、充分な乾燥期間をおく。 11. 各料紙を継ぎ、巻末に新調の軸巻紙を取り付ける。 12. 紐は支給のものを使用、表紙、軸首、中軸、八双は元のものを用い、巻子装に仕立てる。 13. 支給の包み裂に包み納入する 14. 桐太巻添軸を施工巻数分製作する。 15. 施工巻数分を納入できる紙箱を新調する。 ※平成22年度は巻8～10を施工
B. 「君か代は」　1幅
1. 写真撮影を行い，本紙の状態を調査する。 2. 軸装を解体し，本紙及び表装裂地の旧裏打紙を除去する。 3. 本紙繊維に類似した補修紙を製作する。 4. 本紙欠失箇所に上記補修紙にて補紙を行う。 5. 本紙の色合いに合わせて，染薄美濃紙にて肌裏を打つ。 6. 表装裂地は一文字は元のものを調整，その他は支給の裂地を調整し，肌裏を打つ。 7. 美栖紙にて増裏打を行い，仮張りをする。 8. 折れ伏せを入れ折れを防ぐ。 9. 仮張りされた本紙と表装裂地を軸装の形に付け廻しをする。 10. 美栖紙にて中裏打を行い，仮張りをする。 11. 宇陀紙にて総裏打を行い，仮張りし充分な乾燥期間をおく。 12. 補紙の箇所に補彩をする。 13. 軸首，中軸，発装，啄木等を新調して軸装に仕立てる。 14. 桐太巻添軸，桐屋郎箱を新調し，羽二重の包裂に包み納入する。

17 ○名　　称　ベトナム村落関係文書（べとなむそんらくかんけいもんじょ）　30点（21年度より継続・2ヶ年計画）
○所 蔵 者　九州国立博物館
○時　　代　桃山時代・17世紀
○品　　質　紙本墨書
○寸 法 等　縦152.7cm　横359.0cmほか
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。 2. 本紙に付着した埃等の汚れを可能な限り除去する。 3. セロハンテープによる仮補修跡を除去する。 4. 部分的に軽度の湿りを与えてプレスし、折れ皺を直す。 5. 破損箇所に対して補強を行う。 6. 仮巻及び仮表紙を製作する。 7. 2段式桐屋郎箱を3合製作し、羽二重の包裂に包み10点ずつ納入する。 8. 上記の桐屋郎箱を納入する裂四方帙を3箇製作する。

18 ○名　　称　宝満山絵図（ほうまんざんえず）　2鋪
○所 蔵 者　九州国立博物館
○時　　代　江戸時代・17世紀
○品　　質　紙本著色
○寸 法 等　東図：縦82cm　横138cm　　西図：縦80cm　横132cm
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。 2. 膠水溶液にて絵具層の剥落止を行う。 3. 浄化水を表面から噴霧し，浸透させる方法で汚れを出来る限り除去する。 4. 旧裏打紙を除去する。 5. 本紙繊維に類似した補修紙を製作する。 6. 本紙欠失箇所に上記補修紙にて補紙を行う。 7. 美濃紙にて肌裏を打つ。 8. 美栖紙にて増裏を打ち，仮張りをする。 9. 混合紙にて総裏を打ち，仮張りし充分な乾燥期間をおく。 10. 中性紙製の巻芯及び仮表紙を作成する。 11. ２鋪入の桐保存箱を新調し，納入する。

19 ○名　　称　交易船図巻（こうえきせんずかん）　1巻（21年度より継続・2ヶ年計画
○所 蔵 者　九州国立博物館
○時　　代　江戸時代・18世紀
○品　　質　紙本著色、表紙：萌黄地小牡丹唐草文緞子、見返：金箔紙、軸首：木製印可軸
○寸 法 等　第1紙）縦32.0cm　横92.1cm　　第2紙）縦32.0cm　横92.5cm　　第3紙）縦32.0cm　横92.5 cm
第4紙）縦32.0cm　横92.1cm　　第5紙）縦32.0cm　横93.1cm　　第6紙）縦32.0cm　横92.3 cm
第7紙）縦32.0cm　横91.2cm　　第8紙）縦32.0cm　横93.0cm　　第9紙）縦32.0cm　横92.7 cm
第10紙）縦32.0cm　横92.5cm　　第11紙）縦32.0cm　横92.0cm　　第12紙）縦32.0cm　横74.0cm
○施工会社　一般社団法人国宝修理装潢師連盟九州支部
○修理内容　1. 写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。 2. 表紙を取り外し，本紙の継ぎを外す。 3. 膠水溶液にて絵具層の剥落止を行う。 4. 浄化水を表面から噴霧し，浸透させる方法で汚れを出来る限り除去する。 5. 本紙の旧裏打紙を除去する。 6. 補修紙を作成する。 7. 本紙欠失箇所に，上記補修紙にて補紙を施す。 8. 本紙天地の端口を保護するために，生漉和紙にて細い縁をつける。 9. 染色した楮紙にて肌裏を打つ。 10. 美栖紙にて増裏を打つ。 11. 楮と雁皮の混合紙にて総裏を打ち，仮張りする。 12. 補紙を施した箇所に補彩を施す。 13. 表紙，見返，紐を新調する。軸首は元のものを使用する。 14. 軸巻，中軸，八双を新調し，充分乾燥された本紙を仮張りより取り外し，全紙を継ぎ合わせ，巻子装に仕立てる。 15. 桐太巻添軸，桐屋郎箱を各新調し，羽二重の包裂に包み納入する。

1-(4)-③ 文化財修理データのデータベース化件数

平成23年3月31日現在

		国立博物館	東京国立博物館	京都国立博物館
合　計		431	98	333 (106)
絵　画		144	7	137 (44)
書　跡		92	6	86 (32)
彫　刻		90	1	89 (24)
建　築		1	0	1 (0)
金　工		11	11	0 (0)
刀　剣		1	1	0 (0)
陶　磁		2	2	0 (0)
漆　工		3	2	1 (0)
染　織		11	1	10 (4)
考　古		33	33	0 (0)
歴史資料		31	20	11 (2)
和　書		0	0	0 (0)
民族資料		0	0	0 (0)
その他		5	2	3 (0)
東洋	絵　画	0	0	
	書　跡	1	1	
	彫　刻	4	4	
	金　工	0	0	
	陶　磁	2	2	
	漆　工	1	1	
	染　織	0	0	
	考　古	4	4	
	民　族	0	0	
法隆寺献納宝物		0	0	
黒田記念館収蔵品		0	0	
館史資料(収蔵品外)		0	0	

※ 東京国立博物館は、列品管理規程による「旧東洋課所掌分」あり。

※ 京都国立博物館の（　）内は新規入力件数で内数。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

2-(1) 展示の充実

2-(1)-① 入館者数推移（入館料別）

（後述の資料に記載）◎共通資料a-①

2-(1)-② 入館者数推移（展覧会別）

（後述の資料に記載）◎共通資料a-②

2-(1)-③ 入場料収入

（後述の資料に記載）◎共通資料a-③

2-(1)-④ 展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等の設置

平成23年3月31日現在

東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
96%	－%	84%	83%
130件(外国語)	一件(外国語)	21件(外国語)	40件(外国語)
135件(日本語)	一件(日本語)	25件(日本語)	48件(日本語)

パネル等（パネルと同内容の配布資料・音声ガイドを含む）

【東京国立博物館】

・平常展（23年1月2日から総合文化展）　77件（外国語）／77件（日本語）　含国宝室・表慶館
・特集陳列　53件（外国語）／53件（日本語）
・黒田記念館
　平常展（23年1月2日から総合文化展）　0件（外国語）／ 5件（日本語）
※参考　本館2階陳列“日本美術の流れ”案内・解説パンフレット
　36件（外国語）／36件（日本語）

【京都国立博物館】

（平常展示館建て替え工事に伴い平常展示休止中）

【奈良国立博物館】

・名品展（なら仏像館）　16件（外国語）／16件（日本語）
・名品展（西新館）　0件（外国語）／ 4件（日本語）
・特集展示（西新館）　0件（外国語）／ 0件（日本語）
・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」　3件（外国語）／ 3件（日本語）
・特別陳列「お水取り」　2件（外国語）／ 2件（日本語）

【九州国立博物館】

・文化交流展示（トピック展示をのぞく）　27件(外国語)/33件(日本語)
・文化交流展示　音声ガイド　3件(外国語)/0件(日本語)
・文化交流展示　トピック展示
「白磁を飾る青－朝鮮時代の青花―」　1件(外国語)/3件(日本語)
「国宝琉球国王尚家関係資料修理完成記念展示」　0件(外国語)/0件(日本語)
「南蛮　津久見市所蔵の屏風と漆器」　1件(外国語)/1件(日本語)
「湖の国の名宝展」　1件(外国語)/2件(日本語)
「館蔵仏教美術名品展」　1件(外国語)/1件(日本語)
「名品でたどる室町から桃山の茶　茶の湯を楽しむⅢ」　1件(外国語)/3件(日本語)
「九州国立博物館開館５周年　2005～2010 文化交流展示室の５年間」　0件(外国語)/0件(日本語)
「能面と能装束」　1件(外国語)/1件(日本語)
「螺鈿 美しき貝と漆の芸術」　1件(外国語)/1件(日本語)
「邪馬台国　―九州と近畿―」　1件(外国語)/1件(日本語)
「田中丸コレクションの肥前磁器」　1件(外国語)/1件(日本語)
「日本の建築をめぐって」　1件(外国語)/1件(日本語)

2-(1)-⑤ 平常展・特別展

（後述の資料に記載）◎共通資料a-④

2-(1)-⑥ 広報刊行物一覧

【東京国立博物館】

刊行物名	発行部数	配布先
東京国立博物館ニュース695号～ 700号	隔月刊年6回発行　各30,000部	館内で来館者に無償配布 マスコミ媒体等に送付 定期郵送希望者　2,369件 寄贈　国内1308件　海外93件（国内外の美術館・博物館・大学・研究所等） 賛助会　235件、友の会　1412件 （2011年3月末現在）
本館フロアガイド 日本語版・英語版 中国語版・韓国語版 （22年12月末、22年度1月版に改訂） （23年3月、23年度4月版に改訂）	日本語版 22.12　改訂　20,000部 英語版　22.12　改訂　15,000部 中国語版 22.12　改訂　3,000部 韓国語版 22.12　改訂　3,000部 日本語版 23.3　改訂　70,000部 英語版　23.3　改訂　50,000部 中国語版 23.3　改訂　18,000部 韓国語版 23.3　改訂　18,000部	館内で来館者に無償配布
東洋館フロアガイド 日本語版・英語版 中国語版・韓国語版 （休館中のため増刷・改訂なし）	日本語版 英語版 中国語版 韓国語版	休館中のため配布せず
東京国立博物館パンフレット多言語版 （22年10月　増刷）	中国語版 22.10　増刷　3,000部 韓国語版 22.10　増刷　3,000部	館内で来館者に無償配布 大使館等に送付
東京国立博物館マップ （22年8月末　制作） （22年10月末　増刷） （22年12月　改訂）	日本語版 22.8　制作　50,000部 英語版　22.8　制作　5,000部 英語版　22.10　増刷　5,000部 日本語版 22.12　改訂　45,000部 英語版　22.12　改訂　12,000部	館内で来館者に無償配布 マスコミ媒体、学校等に送付
東京国立博物館マップ日本語版 （23年3月　制作）	23.3　制作 100,000部	館内で来館者に無償配布 マスコミ媒体、学校等に送付
東京国立博物館パンフレット多言語版 （23年3月　制作）	英語版　23.3　制作 84,000部	館内で来館者に無償配布 大使館等に送付 特記事項：中国、韓国、仏、独、西の各言語版に関しては、東芝国際交流財団の一部助成を申請中。23年4月に制作予定
東京国立博物館　展示・催しのご案内	23.3　23年春版制作 35,000部	館内で来館者に無償配布 観光案内所、大使館、美術館・博物館、マスコミ媒体等に送付
法隆寺宝物館パンフレット	―――	法隆寺宝物館で配布
庭園ガイド	23.3　増刷　70,000部	館内で配布
応挙館パンフレット	―――	館内で来館者に無償配布 マスコミ媒体等に送付

【京都国立博物館】

刊行物名	発行時期	発行部数	配布先
京都国立博物館だより	4、7、10月、1月	166号（4・5・6月）　25,000部 167号（7・8・9月）　15,000部 168号（10・11・12月）　15,000部 169号（1・2・3月）　15,000部	観覧者、新聞・雑誌・放送局各社、学校・図書館・美術館・博物館ほか、郵送希望者にも発送
Kyoto National Museum Newsletter Vol.106～109	4、7、10月、1月	各3,000部	観覧者
博物館Dictionary No.167	8月	5,000部	観覧者（小学・中学生向け）
平成22年度年間スケジュール	5月	（増刷）　5,000部	観覧者、新聞・雑誌・放送局各社、学校・図書館・美術館・博物館ほか郵送希望者にも発送
平成23年度年間スケジュール	3月	30,000部	
京都国立博物館案内リーフレット（展示案内改訂版）	1月 3月	英語版（改訂版）　7,000部 韓国語版（改訂版）　5,000部 フランス語版（改訂版）　5,000部 スペイン語版（改訂版）　5,000部 中国語版（改訂版）　5,000部 日本語版（改訂版）　20,000部	観覧者
博物館くらぶ第9回チラシ	4月	1,500部	
特別展観「上田秋成」出品一覧、展示替予定表	7月	25,000部	
特集陳列「新収品展」リーフレット	7月	20,000部	
特別展覧会「高僧と袈裟」ワークシート	10月	15,000部	
特別展覧会「高僧と袈裟」出品一覧、展示替予定表	10月	20,000部	
庭園マップ（改訂4版）	1月	5,000部	
七条周辺絵図	2月	10,000部	
留学生の日ポスター・チラシ	9月	10,500部	
特別展覧会「長谷川等伯」出品一覧、展示替予定表	4月	50,000部	

【奈良国立博物館】

刊　行　物　名	発 行 部 数	配　　布　　先
奈良国立博物館だより （年4回）	春・夏・冬号 各20,000部 秋号　40,000部	美術館・博物館・大学・研究所等　約120件
奈良国立博物館リーフレット	日本語版　80,000部 英語版　11,500部 中国語版　3,500部 韓国語版　6,000部 ドイツ語版　1,000部 フランス語版　1,000部 スペイン語版　1,000部	館内で来館者に配布
奈良国立博物館展示案内	50,000部	館内で来館者に配布

【九州国立博物館】

刊　行　物　名	発行部数	配　　布　　先
九州国立博物館案内リーフレット	日本語版　140,000部 中国語版　14,000部 韓国語版　20,000部 英語版　12,000部 合計　186,000部	・館内で来館者に配布 ・旅行会社等へ郵送 特記事項：外国語版は東芝国際交流財団の助成により一部作成
文化交流展示室案内マップ	日本語版 60,000部	・館内で来館者に配布 ・旅行会社等へ郵送
九州国立博物館概要	日本語3,000部 中国語　300部 韓国語　300部 英語　300部	・視察者等に配布
季刊情報誌「アジアージュ」	春(16)号　30,000部 夏(17)号　50,000部 秋(18)号　50,000部 冬(19)号　50,000部	・館内で来館者に配布 ・美術館・博物館、近隣文化施設、 近隣大学、太宰府市、友の会会員等へ郵送
茶室利用のご案内リーフレット	10,000部	・館内で来館者に配布 ・茶道関係者に配布。
九州国立博物館の展示並びにイベントのご案内	毎月　11,800部	・館内で来館者に配布 ・郵便局、学校、病院、図書館、ホテル、公共施設、道の駅等に配布
九州国立博物館開館5周年 2005～2010　文化交流展の5年間 リーフレット	5,000部	・館内で来館者に配布

2-(2) 歴史・伝統文化の理解促進

2-(2)-① 学習機会の提供（過去5ヵ年）

	前中期期間(13～17年度)の平均値	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
○キャンパスメンバーズ						
東京国立博物館	－	16校	22校	29校	35校	35校
京都国立博物館	－	15校	21校	29校	30校	29校
奈良国立博物館	－	12校	20校	25校	27校	28校
九州国立博物館	－	－	21校	22校	29校	27校
○講演会等の回数						
東京国立博物館						
講演会等　実施回数	86回	98回	142回	132回	153回	126回
講演会等　参加者数	10,915人	11,035人	11,361人	12,332人	12,546人	13,319人
①講演会	30回	30回	24回	29回	24回	39回
	7,339人	6,542人	4,770人	7,134人	5,600人	9,290人
アンケート結果		78.37%	79%	82%	87%	91%
（内訳）						
・月例講演会等	14回	12回	12回	12回	12回	11回
	2,602人	1,612人	1304人	2,008人	1,887人	1,637
アンケート結果	81%	73%	82%	82%	87%	89%
・記念講演会	12回	11回	6回	15回	11回	12回
	3,891人	3,519人	1,869人	4,409人	3,516人	3,467人
アンケート結果	80%	81%	81%	81%	85%	91%
・テーマ別講演会	4回	4回	4回	2回	1回	1回
	846人	958人	908人	717人	197人	180人
アンケート結果	85%	87%	69%	83%	90%	92%
・その他講演会	－	3回	2回	－	－	15回
	－	453人	689人	－	－	4,006人
アンケート結果	－	80%	－	－	－	－
②列品解説（ギャラリートーク等）	43回	41回	101回	101回	126回	83回
	3,328人	3,055人	3,934人	4,774人	6,550人	3,659人
③連続講座	1回（2日）	1回（3日）	1回（3日）	1回（3日）	1回（3日）	1回（3日）
	248人	325人	288人	356人	320人	278人
アンケート結果	82%	83%	77%	81%	82%	81%
④公開講座	12回	26回	16回	1回	2回	3回
	－	1,113人	2,369人	68人	76人	92人
アンケート結果	90%	85%	72%	－	93%	100%
京都国立博物館						
講演会等　実施回数	47回	48回	46回	37回	21回	17回
講演会等　参加者数	5,181人	4,980人	4,489人	3,413人	3,002人	2,313人
①土曜講座	46回	47回	45回	36回	19回	15回
	4,989人	4,827人	4,329人	3,254人	2,791人	2,076人
アンケート結果	84%	84%	81%	82%	80%	81%
②夏期講座	1回（3日）	1回（3日）	1回（3日）	1回（3日）	1回（3日）	1回（3日）
	192人	153人	160人	159人	179人	205人
アンケート結果	86%	94%	88%	95%	94%	92%
③社会科教員のための向上講座	－	－	－	－	－	1回
	－	－	－	－	－	32人
奈良国立博物館						
講演会等　実施回数	33回	25回	28回	32回	33回	28回
講演会等　参加者数	3,542人	2,743人	2,949人	3,655人	3,421人	3,349人
①特別展等講座	16回	12回	15回	19回	16回	15回
	2,263人	1,586人	1,943人	2,706人	2,043人	2,172人
アンケート結果	85%	86%	87%	90%	96%	93%
②夏期講座	1回（3日）	1回（3日）	1回（3日）	1回（3日）	1回（3日）	1回（3日）
	328人	486人	358人	362人	391人	556人
アンケート結果	81%	93%	84%	90%	92%	95%
③サンデートーク	16回	12回	12回	12回	11回	12回
	951人	671人	648人	587	584人	621人
アンケート結果	－	－	－	－	91%	88%
④大学との合同公開講座	－	－	－	－	4回	－
	－	－	－	－	353人	－
アンケート結果	－	－	－	－	86%	－
⑤世界遺産学習特別勉強会の共同	－	－	－	－	1回	－
	－	－	－	－	50人	－
アンケート結果	－	－	－	－	－	－
九州国立博物館						
講演会等　実施回数	75回	76回	61回	56回	73回	64回
講演会等　参加者数	4,660人	6,639人	4,168人	5,507人	6,806人	3,996人
①特別展記念講演会	2回	12回	7回	11回	6回	9回
	550人	2,153人	1,892人	2,670人	1,622人	1,410人
アンケート結果	－%	－%	－%	－%	－%	－%
②ミュージアムトーク	66回	47回	42回	37回	42回	44回
	2,411人	1,806人	1,320人	1,096人	1,285人	1,320人
③講演及びシンポジウム	4回	6回	1回	6回	24回	11回
	1,350人	1,280人	316人	1,555人	3,849人	1,266人
アンケート結果	－%	－%	－%	－%	－%	－%
④ミュージアム講座	3回	11回	11回	2回	1回	0回
（教育講座アジアージュ）	349人	1,400人	640人	186人	50人	0人
アンケート結果	86.9%	－%	－%	－%	－%	－%
○大学等との連携事業						
奈良国立博物館						
①放送大学の面接授業	4回	2回	2回	2回	1回	－
	154人	160人	150人	178人	98人	－
②奈良女子大学との連携講座	大学院生3人	大学院生2人	216人	5人	3人	7人
③神戸大学との連携講座	大学院生6人	大学院生2人	10人	10人	10人	10人
九州国立博物館						
①放送大学の面接授業	－	2回	2回	2回	2回	2回
	－	50人	34人	37人	50人	50人

2-⑵-② キャンパスメンバーズ

平成23年3月31日現在

東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
35校	29校（※）	28校（※）	27校

※うち京都・奈良共通加入23校

【東京国立博物館】

①加入校数（35校）

	学校名	対象人数（うち学生数）	備考（入会日）
1	桜美林大学	9,952　(9,001)　人	2008/4/1
2	武蔵野美術大学	8,766　(7,822)　人	2008/4/1
3	文化学園（文化女子大学，文化ファッション大学院大学,文化女子大学短期大学部,文化服装学院,文化服装学院広島校 ,文化外国語専門学校）	10,364　(9,444)　人	2008/4/1
4	東京学芸大学	6,968　(6,244)　人	2008/4/1
5	東京芸術大学	4,427　(3,314)　人	2008/4/1
6	東京大学	34,333　(28,666)　人	2008/4/1
7	お茶の水女子大学	3,796　(3,362)　人	2008/4/1
8	杉野学園（杉野服飾大学,杉野服飾大学短期大学部,ドレスメーカー学院）	1,847　(1,651)　人	2008/4/1
9	大正大学	4,739　(4,380)　人	2008/4/1
10	東海大学	33,202　(29,915)　人	2008/4/1
11	青山学院大学・青山学院女子短期大学	23,098　(21,325)　人	2008/4/1
12	ハリウッド大学院大学・ハリウッドビューティ専門学校	968　(847)　人	2008/4/1
13	成蹊大学（文学部）	2,084　(2,039)　人	2008/4/1
14	多摩美術大学	5,400　(4,834)　人	2008/4/1
15	立教大学	22,523　(20,517)　人	2008/4/1
16	首都大学東京	9,875　(9,161)　人	2008/4/1
17	女子美術大学	4,285　(3,473)　人	2008/4/1
18	東京造形大学	2,038　(1,983)　人	2008/4/1
19	法政大学	40,902　(37,895)　人	2008/4/1
20	筑波大学	20,342　(17,205)　人	2008/4/1
21	昭和女子大学	5,970　(5,245)　人	2008/4/1
22	実践女子大学（文学部）	4,681　(4,546)　人	2008/5/1
23	東洋大学	34,088　(32,181)　人	2008/6/1
24	東洋美術学校	1,195　(952)　人	2008/6/1
25	日本大学（芸術学部）	4,584　(4,422)　人	2008/6/1
26	文教大学・文教大学女子短期大学部	9,485　(8,816)　人	2008/7/1
27	上智学院（上智大学、上智短期大学、上智社会福祉専門学校）	14,282　(12,980)　人	2008/10/1
28	国際基督教大学	3,274　(2,966)　人	2009/4/1
29	了徳寺大学	910　(780)　人	2009/4/1
30	政策研究大学院大学	661　(358)　人	2009/4/1
31	学習院女子大学	1,949　(1,731)　人	2009/11/1
32	尚美学園大学	3,442　(3,102)　人	2009/12/1
33	獨協大学	9,960　(9,351)　人	2010/4/1
34	学習院大学	9,643　(8,672)　人	2010/4/1
35	東京工業大学	12,161　(10,287)　人	2010/7/1

②キャンパスメンバーズを対象とした事業

事業名：キャンパスメンバーズ博物館セミナー	
期　　間	8月18・19・25日（各日2回、計6回実施）
開催場所	平成館大講堂
参加者数	266人
担当研究員数	6人
事業内容	キャンパスメンバーズ加入校の学生を対象に、博物館の歴史、保存修復、博物館情報、教育普及事業等について当館の職員が実例を交えた解説を実施。
事業名：キャンパスメンバーズ教育連携事業	
期　　間	8月16～20・24～27日（9日間）
開催場所	全館
参加者数	32人
担当研究員数	16人
事業内容	キャンパスメンバーズ加入校の学芸員志望学生を対象として、作品の取り扱いを含む博物館実務全般について演習・実習の形式により体験的講座を実施。

【京都国立博物館】

①加入校数（29校）

	学校名	学生数	入会日	入会内容	申請場所	備考
1	佛教大学	21,152人	2007/4/1	奈良博との2館併用	京博	通信教育部含む
2	奈良教育大学	1,466人	2006/4/1	奈良博との2館併用	奈良博	
3	就実大学	1,327人	2008/4/1	奈良博との2館併用	京博	人文科学部のみ
4	学校法人同志社	38,496人	2007/4/1	奈良博との2館併用	奈良博	
5	奈良大学	4,419人	2007/5/1	奈良博との2館併用	奈良博	通信教育部含む
6	京都ノートルダム女子大学	1,731人	2008/5/1	奈良博との2館併用	京博	
7	実践女子大学	4,546人	2008/5/1	奈良博との2館併用	奈良博	短期大学含む
8	京都伝統工芸大学校	375人	2008/5/1	奈良博との2館併用	奈良博	
9	帝塚山大学	6,309人	2006/6/1	奈良博との2館併用	奈良博	高等学校含む
10	奈良女子大学	2,882人	2006/6/1	奈良博との2館併用	奈良博	
11	京都造形芸術大学	8,581人	2006/6/1	京博のみ	京博	通信教育部含む
12	京都工芸繊維大学	4,078人	2007/6/1	奈良博との2館併用	京博	
13	大阪成蹊大学	605人	2007/6/1	奈良博との2館併用	奈良博	芸術学部のみ
14	京都嵯峨芸術大学	1,058人	2006/7/1	奈良博との2館併用	京博	短期大学部含む
15	京都精華大学	4,334人	2006/7/1	奈良博との2館併用	京博	
16	龍谷大学	19,208人	2006/7/1	奈良博との2館併用	京博	
17	京都女子大学	7,559人	2006/7/1	京博のみ	京博	短期大学及び高等学校含む
18	京都橘大学	2,964人	2006/7/1	奈良博との2館併用	京博	正規生のみ

	学校名	学生数	入会日	入会内容	申請場所	備考
19	京都教育大学	2,559人	2008/7/1	奈良博との2館併用	京博	高等学校含む
20	成安造形大学	1,083人	2006/8/1	京博のみ	京博	正規生のみ
21	京都市立芸術大学	1,059人	2008/8/1	京博のみ	京博	正規生及び研究生等
22	京都大学	23,134人	2006/9/1	奈良博との2館併用	京博	京都アメリカ大学コンソーシアムより受入の学生を含む
23	近畿大学	2,402人	2006/9/1	奈良博との2館併用	奈良博	文芸学部のみ(大学院含む)
24	花園大学	2,306人	2006/11/1	京博のみ	京博	
25	奈良先端科学技術大学院大学	1,068人	2007/12/1	奈良博との2館併用	奈良博	正規生及び研究生等
26	大谷大学	4,060人	2006/12/1	京博のみ	京博	短期大学含む
27	大阪大学	24,914人	2008/12/1	奈良博との2館併用	奈良博	
28	京都文教大学	2,900人	2009/6/1	奈良博との2館併用	奈良博	
29	京都外国語大学	4,909人	2009/8/1	奈良博との2館併用	京博	短期大学含む

【奈良国立博物館】

①加入校数（28校）

	学校名	学生数	備考
1	奈良産業大学 （奈良文化高等学校、奈良学園高等学校、奈良文化女子短期大学、奈良学園登美ヶ丘高等学校）	1,869 人	当館の 1 館利用
2	奈良佐保短期大学	312人	〃
3	天理大学	3,382人	〃
4	奈良県立大学	622人	〃
5	大阪樟蔭女子大学（大阪樟蔭女子大学短期大学部、樟蔭高等学校、樟蔭中学校）	3,730人	〃
6	奈良教育大学	1,466人	京都国立博物館との2館利用
7	帝塚山大学（帝塚山高校）	6,309人	〃
8	奈良女子大学	2,882人	〃
9	京都嵯峨芸術大学、京都嵯峨芸術大学短期大学部	1,058人	〃
10	京都精華大学	4,334人	〃
11	京都橘大学	2,964人	〃
12	龍谷大学、龍谷大学短期大学部	19,208人	〃
13	京都大学	23,134人	〃
14	近畿大学　文芸学部、近畿大学大学院文芸学研究科	2,402人	〃
15	佛教大学	21,152人	〃
16	奈良大学	4,419人	〃
17	京都工芸繊維大学	4,078人	〃
18	学校法人　同志社　（同志社大学、同志社女子大学、同志社高等学校、同志社香里高等学校、同志社女子高等学校、同志社国際高等学校）	38,496人	〃
19	大阪成蹊大学 芸術学部	605人	〃
20	奈良先端科学技術大学院大学	1,068人	〃
21	就実大学　人文科学部	1,327人	〃
22	実践女子大学　実践女子短期大学	4,564人	〃
23	京都伝統工芸大学校	375人	〃
24	京都教育大学	2,559人	〃
25	京都ノートルダム女子大学	1,731人	〃
26	大阪大学	24,914人	〃
27	京都文教大学、京都文教短期大学	2,900人	〃
28	京都外国語大学、京都外国語短期大学	4,909人	〃

②キャンパスメンバーズを対象とした事業

事業名：キャンパスメンバーズカード	
内　　容	キャンパスメンバーズ加入大学の学生のリピート来館を促すことを目的にキャンパスメンバーズカードを作成、 来館毎にスタンプを押印し、３回目と６回目に当館のオリジナルグッズを進呈するスタンプラリーを実施した。 カードと併せて、告知のポスターと、カード立ても作成しキャンパスメンバーズ加入大学に配布した。

【九州国立博物館】

①加入校数（27校）

	学校名	学生数	備考
1	九州大学	19,036人	
2	九州産業大学	11,651人	
3	久留米大学	7,726人	
4	サイバー大学	525人	
5	西南学院大学	8,300人	
6	筑紫女学園大学	2,586人	
7	福岡大学	20,823人	
8	福岡国際大学	489人	
9	放送大学福岡学習センター	1,911人	
10	早稲田大学大学院情報生産システム研究科（北九州キャンパス）	443人	
11	九州情報大学	772人	
12	日本経済大学	2,496人	
13	崇城大学芸術学部	260人	
14	近畿大学産業理工学部経営ビジネス学科	440人	
15	九州造形短期大学	326人	
16	筑紫女学園短期大学部	471人	
17	福岡女子短期大学	563人	
18	福岡こども短期大学	465人	
19	久留米大学医学部附属臨床検査専門学校	147人	
20	久留米大学附設高等学校	615人	
21	西南学院高等学校	1,292人	
22	筑紫女学園高等学校	1,885人	
23	筑紫台高等学校	1,462人	
24	東福岡高等学校	2,232人	
25	福岡大学附属大濠高等学校	1,915人	
26	福岡大学附属若葉高等学校	1,116人	

	学校名	学生数	備考
27	九州工業大学	5,963人	

②キャンパスメンバーズを対象とした事業

事業名： 出張講義	
開 催 日	11月10日
開催場所	筑紫台高等学校
出席校	筑紫台高等学校
参加者数	500人
担当研究員数	1人
内　　容	特別展「誕生！中国文明」の講義を実施。

2-(2)-③ 講座・講演会等の開催実績

	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
回数・人数	**126回・13,319人** 講演会39回・9,290人 列品解説（ギャラリートーク等）83回・3,659人 連続講座1回（3日）・278人 公開講座3回・92人	**17回・2,313人** 土曜講座15回・2,076人 夏期講座1回（3日）・205人 社会科教員のための向上講座1回・32人	**28回・3,349人** 特別展等講座15回・2,172人 （公開講座12回　1,522人、 特別講演会1回　316人、 シンポジウム2回　334人） 夏季講座1回(3日)・556人 サンデートーク12回・621人	**64回・3,996人** 特別展記念講演会9回・1,410人 ミュージアムトーク44回・1,320人 講演及びシンポジウム11回・1,266人
	その他展示に関連する事業　15回・3,125人	その他展示に関連する事業　5回・466人	その他展示に関連する事業2回・360人	その他展示に関連する事業76回

【東京国立博物館】

1)　講演会　39回　参加者数9,290人

①月例講演会　計11回　参加者数1,637人

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)	″良い″の割合
4月4日	文化財と科学をとりもつ仕事 講師：環境保存室主任研究員　荒木臣紀	95	2	93.7%
5月15日	国際博物館の日記念事業　東京国立博物館本館 ―モザイク装飾を読み解く 講師：坂井編集企画事務所　坂井基樹氏 左官工　久住有生氏 ＩＮＡＸミュージアム活動推進室室長　　ものづくり工房室長 後藤泰男氏	133	2	93.1%
6月5日	蒔絵の歴史と八橋蒔絵螺鈿硯箱 講師：工芸・考古室長　竹内奈美子	122	2	89.1%
7月24日	友禅　歴史と技法 講師：西陣織物館顧問 藤井健三 氏	97	2	75.0%
8月21日	梵音具－仏教の鳴器 講師：教育普及室長　伊藤信二	144	2	91.5%
9月11日	野々江本江寺遺跡出土木製塔婆と国宝餓鬼草紙に描かれた世界 講師：伊藤雅文氏　財団法人石川県埋蔵文化財センター	131	2	76.7%
10月9日	料紙の加工―日・中・韓の典籍― 講師：京都国立博物館学芸部副部長　赤尾栄慶　氏	133	2	96.2%
11月20日	一歩近づいて見る　聖徳太子絵伝 講師：文化庁文化財部美術学芸課　朝賀浩氏	178	2	86.9%
12月4日	思い出の名碗 講師：菊池寛実記念智美術館館長　林屋晴三氏	172	2	95.5%
23年1月22日	美術のなかの兎 講師：博物館教育課長 今井敦	163	2	91.5%
23年2月6日	仏像の子どもたち 講師：東京芸術大学美術学部准教授 布施英利氏	269	2	93.7%

②記念講演会　計12回　参加者数3,467人

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)	″良い″の割合
4月24日	細川家　美と戦いの７００年 講師：永青文庫理事長、細川家１８代当主　細川護熙　氏	333	2	94.2%
5月28日	細川家　美と戦いの７００年 講師：永青文庫理事長、細川家１８代当主　細川護熙　氏	358	2	97.4%
5月29日	細川護立と日本の近代美術 講師：東京文化財研究所企画情報部文化形成研究室長　塩谷純　氏	210	2	84.7%
7月10日	文字の発生と歩み 講師：書家　新井光風　氏	288	2	91.8%
8月7日	美の競演－中国河南省の文物 講師：学芸企画部長　松本伸之	226	2	91.5%
10月30日	東大寺大仏と天平彫刻 講師：特任研究員　金子啓明	231	2	86.8%
11月6日	大仏さまにこめられた思い―一枝の草一把の土― 講師：華厳宗大本山東大寺別当　北河原公敬　師	301	2	87.9%
11月7日	地面の下の東大寺東塔院を探る 講師：奈良国立文化財研究所埋蔵文化センター主任研究員　金田 明大　氏	200	2	90.1%
23年1月29日	薬師寺と大唐西域壁画 講師：法相宗大本山薬師寺管主　山田法胤　師	330	2	95.6%
23年2月8日	薬師寺僧侶が語る大唐西域壁画 講師：法相宗大本山薬師寺長老　松久保秀胤　師	350	2	91.4%
23年2月19日	仏教伝来の道をたどる 講師：学芸企画部長 松本伸之	260	2	91.4%
23年2月22日	薬師寺僧侶が語る大唐西域壁画 講師：法相宗大本山薬師寺管主　山田法胤　師	380	2	95.6%

③テーマ別講演会　計1回　参加者数180人

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)	″良い″の割合
4月2日	桜セミナー「花見で一句」 俳人　正木ゆう子氏	180	2	92.4%

④その他講演会　計15回　参加者数4,006人

実施日	内容	会場	参加者数(人)	担当研究員(人)
11月14日	文化庁招聘事業 「トルコにおける日本―芸術と日土交流」 イルベル・オルタイル博士　トプカプ宮殿博物館総館長	平成館大講堂	163	2
10月8・19・22・26・29日、 11月9・12・16・19・23・26・30日、 12月7・10日	僧侶によるお話 東大寺僧侶	平成館大講堂	3,843	2

2)　列品解説（ギャラリートーク等）　83回　　参加者総数　3,659人

○列品解説　43回　参加者総数　2578人

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)
4月6日	温湿度を読む 和田浩　環境保存室主任研究員	45	1
4月7日	鑑賞ガイド　国宝「花下遊楽図屏風」 神辺知加　教育講座室研究員	80	1
4月7日	屏風に咲く桜 瀬谷愛　平常展調整室研究員	80	1
4月13日	駿河国図の修理について 荒木臣紀　環境保存室主任研究員	40	1
4月20日	十六羅漢像の修理について 鈴木晴彦　保存修復課アソシエイトフェロー	42	1
4月23日	やきものの修復について 繭山隆司　修理技術者、三笠景子　保存修復課研究員	40	1
4月27日	古文書から見た中世細川家の領国支配 高梨真行 ボランティア室主任研究員	77	1
5月11日	古筆における伝統と創造（世尊寺家の古筆から） 島谷弘幸 学芸研究部長	68	1
5月18日	“古九谷様式”の位相 今井敦　東洋室長	110	1
5月25日	国宝 十六羅漢像について 沖松健次郎　特別展室主任研究員	78	1
6月1日	因幡堂薬師縁起絵巻をみる 瀬谷愛　平常展調整室研究員	60	1
6月8日	鷹見泉石像 遠藤楽子　国際交流室研究員	75	1
6月15日	日本を歩く 冨坂賢　国際交流室研究員	52	1
6月29日	清末文物事情～明治時代の訪中写真 関紀子　絵画・彫刻室研究員	48	1
7月6日	琉球の埋葬―厨子甕の美― 日高慎　保存修復室主任研究員	49	1
7月13日	ミイラについて 後藤健　上席研究員	57	1
7月23日	重文 李白観瀑図 救仁郷秀明　保存修復室長	60	1
7月27日	磁州窯の枕 今井敦　博物館教育課長	70	1
8月3日	古楽器について 伊藤信二　教育普及室長	61	1
8月10日	高麗時代の金鼓 白井克也　平常展調整室長	68	1
8月20日	博物館で音楽会 鈴木みどり　教育普及室主任研究員	25	1
8月27日	中国青銅器鑑賞入門 川村佳男　東洋室研究員	35	1
8月31日	江戸時代の情報流通 田良島哲　書跡・歴史室長	65	1
9月7日	餓鬼草紙について 沖松健次郎　特別展室主任研究員	71	1
9月28日	古墳時代の甲冑 古谷毅　列品情報整備室長	63	1
10月5日	巴形銅器と銅釧 井上洋一　企画課長	72	1
10月19日	平安時代の２体の天王像 丸山士郎　情報管理室長	50	1
10月26日	白糸威二枚胴具足 池田宏　上席研究員	35	1
11月9日	金家作・達磨図鐔について 酒井元樹 工芸・考古室研究員	30	1
11月16日	東京国立博物館所蔵　正倉院の染物 澤田むつ代 特任研究員	99	1
11月30日	葛飾北斎の想像力 田沢裕賀　絵画・彫刻室長	75	1
12月7日	犬張子 猪熊兼樹　貸与特別観覧室主任研究員	35	1
12月14日	五彩人物文長方合子 三笠景子　保存修復室研究員	41	1
23年1月18日	香道具の蒔絵 竹内奈美子 工芸・考古室長	84	2
23年1月25日	古代中国の暮らしを伝える明器 谷豊信 列品管理課長	72	2
23年2月1日	鹿児島県広田遺跡の貝製品 品川欣也 工芸・考古室研究員	50	2
23年2月8日	与謝蕪村筆「蘭亭曲水図屏風」について 大橋美織 絵画・張皇室研究員	92	2
23年2月22日	古代九州の経塚 望月幹夫 特任研究員	51	2
23年3月1日	雛人形の歴史 小山弓弦葉 特別展室主任研究員	70	2
23年3月8日	考古資料の保存と修理 日高慎 保存修復室主任研究員	43	2
23年3月29日	拓本とその流転 富田淳 調査研究課長	80	2
23年3月30日	観賞ガイド「国宝花下遊楽図屏風」 伊藤信二 教育普及室長	55	2

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)
23年3月30日	着物に咲く桜 小山弓弦葉 特別展室主任研究員	25	2

○東京芸術大学学生ボランティアによるギャラリートーク　40回　参加者総数　　1,081人

・平常展示作品ギャラリートーク　36回　参加者総数989人

実施日	回数	テーマ	氏名	参加者(人)
8月5・7・11・13・15・18日	6	康円作「四天王眷属立像」―俗なる姿に宿る表現の妙―	山田美季	230
8月12・19・26日、9月1・8・9日	6	今村紫紅筆「熱国之巻」―点描の風景画―	張鈞惠	138
8月25・31日、9月10・16・26日、10月2日	6	仏教における梵音具―祈りの音―	田澤　梓	192
9月3・12・18・24日、10月6・13日	6	法隆寺献納宝物　金銅透彫灌頂幡―天人の舞う荘厳具―	内山美代子	145
9月19・22・29日、10月7・20・23日	6	浅井忠のフランス風景―芸術家たちを魅了した「夕暮れの村」―	山塙菜未	134
10月9・14・19・24・28・30日	6	良全筆「如意輪観音図」―水墨で描かれた観音の世界―	祝迫眞澄	150

・制作工程模型ギャラリートーク　4回　参加者総数　92人

実施日	回数	テーマ	氏名	参加者(人)
23年2月2・11・17日、3月2日	4	悉皆金色	武田裕子	92

3)　連続講座「中国文明の誕生」　計1回(3日)　参加者総数278人

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)	"良い"の割合
7月17日	中国文明と王朝／ 美の誕生１　死後の世界を彩る品々 講師：列品管理課長　谷豊信 九州国立博物館学芸部企画課特別展室員　市元塁	278	2	81%
7月18日	美の誕生２　仏教美術の開花／ 技の誕生１　青銅器　祭祀の器の展開 講師：九州国立博物館学芸部企画課長　小泉惠英 東洋室研究員　川村佳男			
7月19日	技の誕生２　陶磁器　白い器を求めて／ まとめと質疑応答 講師：保存修復室研究員　三笠景子 列品管理課長　谷豊信 九州国立博物館学芸部企画課長　小泉惠英 東洋室研究員　川村佳男			

4)　公開講座　計3回　参加者総数　92人

開催日	テーマ・講師等	参加者数(人)	担当研究員数(人)	"良い"の割合
23年2月24日、3月10・11日	見学ツアー 保存と修理の現場へ行こう 講師：保存修復課長　神庭信幸、保存修復室長　冨坂賢、保存修復室主任研究員　土屋裕子、保存修復室主任研究員　日高慎、環境保存室主任研究員 荒木臣紀、環境保存室研究員 和田浩、特任研究員 澤田むつ代	92	2	100%

5)　その他展示に関連する事業　計15回　参加者総数　3,125人

実施日	内容	会場	参加者数(人)	担当研究員(人)
4月2・3・9・10日	桜コンサート「東京藝術大学打楽器専攻生と教員によるマリンバアンサンブル 藤本隆文　東京藝術大学音楽部器楽科准教授、久米彩音、牧野美沙	法隆寺宝物館エントランス	770	2
4月4日	応挙館茶会「花見で一服」	応挙館	300	2
5月16日	恩賜上野動物園・国立科学博物館連携事業 上野の山でツルめぐり 恩賜上野動物園・国立科学博物館・東京国立博物館	恩賜上野動物園・国立科学博物館・東京国立博物館	30	2
7月23日	中国展記念公演　チェンミンスペシャルコンサート チェンミン　二胡アーティスト、中国伝統楽器奏者	平成館大講堂	556	2
7月30日	中国展記念公演「京劇のタベ―見方・楽しみ方」 張紹成　京劇俳優　ほか	平成館大講堂	365	2
8月22日	夏休みファミリー音楽会「貴族に伝わった音楽 雅楽を聞いてみよう」	平成館大講堂	327	2
8月27日	教育イベント　夕すずみ能 演者：金春流シテ方・本田光洋師ほか	平成館大講堂	356	2
11月10・17・24日、12月1・7日	芸大ギャラリートーク「月光菩薩について」 東京芸術大学大学院生	平成館ガイダンスルーム	145	2
11月13日	長老講和とこどもによる新作「善財童子」公演	平成館大講堂	276	2

【京都国立博物館】

1)　土曜講座　15回　参加者総数　2,076人

全て特別展覧会関連講座

開催日	テーマ	講師	参加者数(人)
4月10日	長谷川等伯の生涯	山本英男（美術室長）	155
4月24日	狩野永徳にとっての長谷川等伯像	狩野博幸(同志社大学教授)	165
5月1日	等伯画の魅力あれこれ	脇坂淳(京都教育大学名誉教授)	145
7月24日	上田秋成をめぐる京の画家たち	狩野博幸(同志社大学教授)	139
7月31日	秋成のつづら箱ー知られざる名作の数々ー	稲田篤信(首都大学東京教授)	109
8月21日	秋成と『胆大小心録』の画家たち	水谷亜希（研究員）	130
8月28日	新収品展にちなんで	呉孟晋（研究員）	62
10月9日	糞掃衣と金襴袈裟にみる袈裟の変遷	松村薫子(大和ミュージアム学芸員)	112
10月16日	袈裟からたどる東アジアの染織史	山川曉（主任研究員）	106
11月6日	袈裟の紡ぐ物語―智泉聖通尼の生涯と袈裟―	ﾓﾆｶ･ﾍﾞｰﾃ(大谷大学教授)	90
23年1月8日	写本と法帖―文字を観賞する文化―	赤尾栄慶（上席研究員）	175
23年1月22日	上野コレクションと内藤湖南	礪波護（京都大学名誉教授）	166
23年2月5日	明清の文人書画	西上実（学芸部長）	173
23年2月12日	わが師 湖城を語る	水野恵（篆刻家）	185
23年3月26日	法然信仰の美術―絵伝と肖像画―	若杉準治（列品管理室長）	164

2)　夏期講座　1回（3日）

開講日	テーマ	講師	参加者数(人)
7月27日	第1講「美しいキリスト、醜いキリスト―宗教文学と図像の中のキリスト像―」	岡田温司（京都大学教授）	205
	第2講「文学と絵画の交響 ―住吉物語絵の変容―」	若杉準治（列品管理室長）	
	第3講「古典に遊ぶ蒔絵の世界」	永島明子（主任研究員）	
7月28日	第1講「漢鏡の図像と銘文―鏡に鋳こまれた人びとのこころ―」	岡村秀典（京都大学教授）	
	第2講「平安時代の考古遺物にみられる装飾文様―王朝文学と文様の和様化―」	宮川禎一（考古室長）	
	第3講「詩画軸の世界」	山本英男（美術室長）	
7月29日	第1講「上田秋成の画賛」	長島弘明（東京大学教授）	
	特別展観「没後200年記念　上田秋成」見学会		

3)　社会科教員のための向上講座　1回　32人

開講日	テーマ	講師	参加者数(人)
10月26日	講演「本物にふれる大切さ」 館内実地研修「高僧と袈裟」展	山下善也（連携協力室長） 山川暁（主任研究員）	32

4)　その他展示に関連する事業　5回　466人

実施日	内容	会場	参加者数(人)
5月8日	共催記念ギャラリートーク（講師：山川暁主任研究員）	金沢能楽美術館2階展示室	不明
6月9日	「京都きものサローネ」研修会「高僧と袈裟展の魅力～中世織物の世界～」（講師：山川暁主任研究員）	㈱千總本社ビルホール	97
7月27日	特別展観「上田秋成」列品解説（講師：水谷研究員）	京都国立博物館特別展示館	30
7月30日	特別展観「上田秋成」開催記念　映画「雨月物語」映画鑑賞会（第1回）	京都国立博物館丸池付近	154
8月6日	特別展観「上田秋成」開催記念　映画「雨月物語」映画鑑賞会（第2回）	京都国立博物館丸池付近	163
10月22日	特別展覧会「高僧と袈裟」特別鑑賞会列品解説 （講師：山川暁主任研究員）	京都国立博物館特別展示館	22

【奈良国立博物館】

1)　特別展等講座　15回　　参加者総数　2,172人

開催日	テーマ	講師	参加者数
4月10日	「仏教美術の東伝と遣唐使」	当館学芸部企画室長　稲本泰生	101人
5月8日	「吉備大臣入唐絵巻－奇観無双の絵巻－」	学習院大学教授　佐野みどり	180人
5月15日	「遣唐使の時代－倭から日本へ－」	奈良大学教授　　東野治之	316人
5月29日	「平城京と遣唐使」	当館学芸部研究員　野尻忠	180人
6月5日	「遣唐使の時代における東アジアの建築」	ペンシルバニア大学教授　ナンシー・Ｓ・スタインハルト	148人
	「東アジア絵画史における唐代絵画の位置」	東京大学東洋文化研究所准教授　板倉聖哲	
	「檀像の請来と日本的展開」	当館学芸部上席研究員　鈴木喜博	
	「遣唐使のもたらした技術――三彩を中心として」	当館学芸部教育室長　吉澤悟	
	パネル・ディスカッション	ナンシー・Ｓ・スタインハルト、板倉聖哲、　鈴木喜博、吉澤悟	
6月19日	「空海の舎利信仰－法門寺から東寺へ－」	当館学芸部長補佐　内藤栄	180人
7月31日	「仏像修理100年よもやま話－修理にかかわって50年－」	財団法人美術院常務理事　小野寺久幸	125人
9月11日	「解説　仏像修理100年」	当館学芸部上席研究員　鈴木喜博	147人
10月23日	「獅子面の模造をめぐって」	宮内庁正倉院事務所保存課調査室員 山片唯華子	55人
10月24日	基調講演「正倉院宝物を考える　－舶載品と国産品の視点から－」	宮内庁正倉院事務所保存課長　成瀬正和	186人
	研究報告「法隆寺献納宝物の製作地について－金工品を中心にして－」	大正大学教授　加島　勝	
	研究報告「工芸技法からみた国産宝物の特徴」	当館学芸部長補佐　内藤　栄	
	パネル・ディスカッション	成瀬正和・加島勝・内藤栄・王維坤（中国・西北大学教授）	
10月30日	「正倉院の紙」	奈良国立博物館長　湯山賢一	139人
11月6日	「五絃琵琶と紫檀工芸」	帝塚山大学教授　関根俊一	151人
12月11日	「若宮おん祭と大和猿楽－猿楽の座の年初め－」	法政大学准教授　宮本　圭造	53人
23年2月12日	「修二会－不退の行法」	東大寺上院院主　筒井寛昭	103人
23年2月13日	修復完成記念特別講演会「ウクライナ クリミア半島出土漢代漆器の保存修復」		108人
	「ウクライナのスキタイ墳墓について」	ウクライナ国立科学アカデミー附属考古学研究所 Dr.Valentina Mordvintseva	
	「ウクライナ出土漢代漆器の保存科学的処理について」	京都造形芸術大学教授　岡田文夫	
	「ウクライナ出土漢代漆器の伝統的漆工技術による修復について」	漆芸家・漆工修理技術者　北村昭斎	

2)　夏季講座　第39回「仏像修理100年と仏像研究の現在」　1回（3日間）

開講日	テーマ	講師	参加者数
8月24日	「彫刻史研究と仏像の保存修理」	財団法人美術院理事長　西川杏太郎	毎日556人
	「滋賀の仏像の保存修理の思い出」	元滋賀県立琵琶湖文化館長　宮本忠雄	
	「仏像修理の現在」	文化庁主任文化財調査官　奥健夫	
8月25日	「回想：東大寺南大門の仁王像の修理」	当館学芸部上席研究員　鈴木喜博	
	「清涼寺釈迦如来像をめぐって」	同志社大学教授　井上一稔	
	「仏像－研究と鑑賞のあいだで」	大正大学教授　副島弘道	
	「肖像彫刻研究とその課題」	京都大学大学院教授　根立研介	
8月26日	「運慶と霊験仏」	神奈川県立金沢文庫学芸員　瀬谷貴之	
	「奈良国立博物館保管の仏像に関する二、三の知見」	当館学芸部長補佐　岩田茂樹	

3)　サンデートーク　12回　参加者総数　　621人

実施日	テ ー マ	解　説　者	参加者数
4月18日	「古代の建物と屋根」	当館学芸部研究員　　岩戸晶子	68人
5月23日	「舎利の話」	当館学芸部長補佐　　内藤栄	37人
6月20日	「日本仏画史入門」	当館学芸部研究員　　北澤菜月	39人

実施日	テ ー マ	解　説　者	参加者数
7月25日	「病と仏教－平安貴族の疾病観－」	当館学芸部研究員　　斎木涼子	71人
8月22日	「梵鐘銘と私」	当館学芸部主任研究員　野尻忠	43人
9月19日	「法隆寺金堂、三組の四天王像とその謎」	当館学芸部長補佐　　岩田茂樹	94人
10月17日	「天馬Part2－正倉院宝物に描かれた天馬－」	当館学芸部教育室長　　吉澤悟	21人
11月21日	「装飾文様の話」	当館学芸部研究員　　永井洋之	26人
12月19日	「春日曼荼羅と春日若宮の文殊信仰」	当館保存修理指導室長　谷口耕生	30人
23年1月16日	「阿育王塔の本生図」	当館学芸部企画室長　　稲本泰生	42人
23年2月20日	「蓬莱の玉の枝－作り物閑話」	当館学芸部研究員　　清水健	32人
23年3月20日	「奈良の仏像」	当館学芸部上席研究員　鈴木喜博	118人

4)　その他展示に関連するイベント

トークイベント「大遣唐使展」関連　　2回　360人

実施日	内容	会場	参加者数
4月17日	「大遣唐使展の楽しみ方」　出演：はな（モデル）、内藤栄（当館学芸部長補佐）	当館講堂	180人
6月6日	「大遣唐使展で仏像に合おう！」　出演：仏像ガール（仏像ナビゲーター）、 西山厚（当館学芸部長）	当館講堂	180人

【九州国立博物館】

1)　特別展記念講演会　9回　　参加者総数　1,410人

開催日	テーマ	講師	参加者数(人)
5月8日	「古伊万里の華」展関連 14代酒井田柿右衛門氏講演会	人間国宝「色絵磁器」　14代酒井田柿右衛門	300
5月22日	「古伊万里の華」展関連 大橋康二氏講演会「海を渡った古伊万里」	前佐賀県立九州陶磁器文化館館長　大橋康二	200
7月31日	「馬　アジアを駆けた二千年」展関連 講演会 「日本の馬文化 － 人と馬の歴史から － 」 「九州の在来馬」	馬の博物館理事　末崎真澄 東京農業大学農学部講師　川嶋舟	120
10月5日	「誕生！中国文明」展関連 記念講演会「三国志をめぐる謎」	小説家　三好徹	150
10月24日	「誕生！中国文明」展関連記念講演会 「王朝、技、美の誕生　―中国河南省が生み出した芸術と文化―」	当館企画課長　小泉惠英 当館企画課特別展室　市元塁	60
11月7日	「誕生！中国文明」展関連講演会 「中国古代王朝の興亡」	小説家　塚本青史	150
11月14日	「誕生！中国文明」展関連記念講演会「文字の発生と歩み」	書家　新井光風	230
23年1月15日	「ゴッホ展」関連 講演会「＜アルルの寝室＞形見として描かれたレプリカ ―ファン・ゴッホと家族　遺族とファン・ゴッホ―」	大阪大学文学研究科教授　囪府寺司	120
23年1月29日	海外展「日本とタイ―ふたつの国の巧と美」関連 記念講演会「久留米絣」	絣制作作家　松枝哲哉	80

2)　ミュージアムトーク　44回　参加者総数　1,320人

・担当研究員数　延べ44人

・事業内容　文化交流展示室にて担当の研究員が作品に関する解説を行った。

（原則として毎週火曜日の午後3時より15～30分間）

実施日	テーマ	解 説 者	参加者数(人)
4月6日	弥生時代の副葬品	展示課研究員　坂元雄紀	30
4月13日	東南アジアの工芸　身を守る装い	文化財課研究員　原田あゆみ	30
4月20日	広開土王碑文	企画課研究員　市元 塁	30
4月27日	CTによる考古資料の調査	博物館科学課主任研究員　鳥越俊行	30
5月11日	遺跡出土の木製品について	展示課研究員　進村真之	30
5月18日	南蛮漆器について	企画課研究員　川畑憲子	30
5月25日	中国のアショカ王塔	企画課長　小泉惠英	30
6月1日	甕棺墓の中の色	博物館科学課長　本田光子	30
6月8日	色絵って何？	学芸部長　伊藤嘉章	30
6月15日	将軍様の宝物	企画課主任研究員　畑 靖紀	30
6月22日	大宰府の公文書	展示課研究員　酒井芳司	30
6月29日	湖の国の仏たち	展示課主任研究員　楠井隆志	30
7月6日	書跡をたどる　―世尊寺流の書―	文化財課主任研究員　丸山猶計	30
7月13日	遼の石塔	文化財課長　臺信祐爾	30
7月27日	湖の国の名宝	博物館科学課保存修復室長　藤田励夫	30
8月3日	シャーマン衣装の謎Ⅰ	文化財課資料登録室長　小林公治	30
8月10日	博多チャイナタウン	展示課長　赤司善彦	30
8月17日	日本の馬ことはじめ～馬展へのいざない～	企画課文化交流展室長　河野一隆	30
8月24日	蕭白の叡山図について	企画課研究員　金井裕子	30
8月31日	弥生のお墓の色	博物館科学課研究員　志賀智史	30
9月7日	病草紙にみる平安貴族の趣味嗜好	企画課研究員　森實久美子	30
9月14日	大宰府木簡にみる日本語文章表記法の成立	展示課研究員　酒井芳司	30
9月28日	触れて感じる神々の青銅器	博物館科学課環境保全室長　今津節生	30
10月5日	名品でたどる室町から桃山の茶	学芸部長　伊藤嘉章	30
10月19日	琉球の風俗	文化財課研究員　原田あゆみ	30
10月26日	甕棺の製作と地域性	展示課研究員　坂元雄紀	30
11月2日	ガンダーラの菩薩立像	企画課長　小泉惠英	30
11月9日	蒙古襲来と秀吉の朝鮮侵略	文化財課保存修復室長　藤田励夫	30
11月16日	雪舟、中国へ行く	企画課研究員　川畑憲子	30
11月30日	長崎・興福寺の韋駄天像	企画課主任研究員　畑 靖紀	30
12月7日	中国青銅器の謎に迫る！	博物館科学課主任研究員　鳥越俊行	30
12月14日	弥生の赤	博物館科学課長　本田光子	30
12月21日	ガラス小玉の製作について	展示課研究員　進村真之	30
23年1月4日	新春 邪馬台国放談	企画課文化交流展室長　河野一隆	30

実施日	テーマ	解 説 者	参加者数(人)
23年1月18日	姫君の香道具	企画課研究員　川畑憲子	30
23年1月25日	出土遺物からみた邪馬台国問題	展示課長　赤司善彦	30
23年2月1日	陳賢筆白衣観音図と黄檗宗	博物館科学課研究員　森實久美子	30
23年2月8日	朝鮮時代の絵画	企画課研究員　金井裕子	30
23年2月15日	大型鏡が照らす邪馬台国	博物館科学課環境保全室長　今津節生	30
23年2月22日	シャーマン衣装の謎Ⅱ	文化財課資料登録室長　小林公治	30
23年3月1日	漢代の漆	企画課研究員　市元 塁	30
23年3月8日	日本の建築について	文化財課長　臺信祐爾	30
23年3月15日	土偶について	博物館科学課研究員　志賀智史	30
23年3月29日	書跡をたどる － 幕末の書と九州	文化財課主任研究員　丸山猶計	30

3)　講演及びシンポジウム　11回　　参加者数　1,266人

開催日	テーマ	講師	参加者数(人)
7月4日	トピック展示「湖の国の名宝展」関連 講演会「最澄がつないだ近江と太宰府」 「最澄と比叡山」 「太宰府と近江の仏教美術―彫刻を中心にー」 「比叡山をめぐる仏教美術－近江路の彫像を中心にー」	比叡山延暦寺副執行（管理部長） 誉田玄光 元別府大学文学部教授　八尋和泉 元滋賀県立琵琶湖文化館長　宮本忠雄	50
7月10日	トピック展示「湖の国の名宝展」関連 講演会「近江の仏教美術」 六道絵の世界 近江の仏像について 延暦寺所蔵木活字174,261点の世界 ― 日本初の一切経印刷事業 ― 近江の金工品	滋賀県立琵琶湖文化館　上野良信 就実大学教授　土井通弘 当館保存修復室長　藤田励夫 滋賀県立琵琶湖文化館　井上ひろ美	30
7月18日	「馬　アジアを駆けた二千年」展関連 シンポジウム「藤ノ木古墳の馬具」 【基調講演】 「藤ノ木古墳の金銅製馬具」 「藤ノ木古墳出土馬具にみる古代の金工技術」 「藤ノ木古墳にみるデザインの系譜」 【パネルディスカッション】	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館主幹　千賀久 工芸文化研究所理事長　鈴木勉 当館展示課長　赤司善彦 司会／当館企画課　河野一隆 パネリスト／鈴木勉、千賀久、赤司善彦	113
7月25日	「馬　アジアを駆けた二千年」展関連 ミュージアム「馬」セミナー！「日本人と馬」	JRA競走馬総合研究所次長　楠瀬良	45
8月1日	「馬　アジアを駆けた二千年」展関連 ミュージアム「馬」セミナー！「馬の進化と日本在来馬のルーツ」	JRA競走馬総合研究所上席調査役　石田信繁	45
8月21日	トピック展示「湖の国の名宝展」関連 館長と滋賀県知事のミュージアムトーク 「地域の文化を守る・活かす・つなぐ」	滋賀県知事　嘉田由紀子 当館長　三輪嘉六	90
8月21日 8月22日	平成22年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業 公開シンポジウム「市民と共に ミュージアムＩＰＭ」 第１部　市民報告会 「愛知県美術館友の会サポート部会活動とＩＰＭ」 「岐阜県美術館サポーター活動と虫パトロール隊」 「九州国立博物館のボランティア活動」 「環境ボランティアの活動～‘五感’で見守る喜び～」 「ＩＰＭウオッチングデータの集計結果報告～活動の継続～」 地域のＮＰＯ法人によるＩＰＭ活動 「市民によるＩＰＭ活動―ＩＰＭメンテナンスを中心とした活動報告―」 「観世音寺宝蔵での取り組み」 「ＮＰＯ法人による市民活動から会社化したＩＰＭ活動へ」 第２部　講演会 基調講演「市民の力」 「ＩＰＭの担い手としての市民活動への期待と課題」 「ＩＰＭ市民活動への期待と課題」 第３部　意見交換会 「美術館・博物館等のＩＰＭと市民活動の現状、期待と課題」	愛知県美術館美術課長　古田浩俊 愛知県美術館友の会サポート部会 武藤和子・伊藤淳子 岐阜県美術館学芸部課長補佐　谷口輝己 岐阜県美術館サポーター　伊藤武郎・吉村仁禅 当館交流課　上野知彦 当館環境ボランティア　内田祥乃 同　立山左絵子・佐藤哲也 NPO法人ミュージアムIPMサポートセンター　新原茂春 NPO法人文化財保存活用支援センター　小島理美 NPO法人文化財保存活用支援センター・(株)タクト　下川可容子 当館長　三輪嘉六 (財)文化財虫害研究所理事長　三浦定俊 イカリ消毒(株)技術研究所顧問　川越和四 司会／当館博物館科学課長　本田光子 古田浩俊、福岡県立美術館　川浪千鶴、谷口輝己、筑紫野市歴史博物館　奥村俊久、上野知彦、久留米大学比較文化研究所　狩野啓子、太宰府市教育委員会・太宰府市文化ふれあい館　中島恒次郎、同　井上理香、NPO法人ミュージアムIPMサポートセンター　井上誠男、NPO法人文化財保存活用支援センター　森田レイ子、(財)文化財虫害研究所　三浦定俊、イカリ消毒(株)　川越和四	236
10月30日	九州歴史資料館開館記念特別展「大宰府―その栄華と軌跡―」開催記念講演会「展望・大宰府研究 ―蔵司跡の調査から―」 記念講演「大宰府の機能と律令国家」 研究報告「蔵司跡の最新調査研究成果」 研究報告「大宰府史跡出土の付札木簡」 研究報告「大宰府史跡出土の武器・武具」 研究報告「九州歴史資料館と大宰府」	東京大学大学院教授・大宰府史跡調査研究指導委員会委員　佐藤信 九州歴史資料館　岡寺良 当館展示課　酒井芳司 九州歴史資料館　小嶋篤 同　松川博一	300

開催日	テーマ	講師	参加者数(人)
11月18日	文化庁 第８回国際文化フォーラム 福岡セッション「文化観光の可能性」 基調講演「観光と文化」 発表① 発表② 発表③ 発表④ 発表⑤ 座談会　パネル討論「文化観光の可能性」	 前九州観光推進機構会長・九州旅客鉄道(株)相談役　田中浩二 中国文物交流中心主任　王軍 公州博物館長　ユ・ピョンハ タイ サイアム大学教養学部ホテル・観光学科講師　高田知仁 スミソニアン協会フリーア・ギャラリー、アーサー・Ｍ・サックラー・ギャラリー日本美術シニアキュレーター　ジェームス・トーマス・ユーラック 当館長　三輪嘉六 座長／三輪嘉六 パネリスト／田中浩二、王軍、ユ・ピョンハ、高田知仁、ジェームス・トーマス・ユーラック	100
12月18日	国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」 発表１「遼王朝の美術と文化」 発表２「金銀器をめぐって」 発表３「遼金時期の缸瓦窯」 発表４「トルキ山遼墓木製彩棺の保存修復」 パネルディスカッション	 中国・内蒙古博物院　塔拉 中国・内蒙古自治区文物考古研究所　孫建華 中国・赤峰博物館　劉冰 当館環境保全室長　今津節生 司会／当館文化財課長　臺信祐爾 パネリスト／中国・内蒙古博物院　塔拉、中国・内蒙古自治区文物考古研究所　孫建華、中国・赤峰博物館　劉冰、 当館環境保全室　今津節生、当館企画課　市元塁	117
23年1月16日	「ゴッホ展」関連 解説会「ゴッホとゴーギャン」	名古屋市美術館学芸課長　深谷克典	140

4)　その他展示に関連するイベント　76回

展覧会名	期間	内容	会場	参加者数(人)
文化交流展	6月20日～7月3日	トピック展示「湖の国の名宝展」関連イベント 写真展「水と仏の近江」	ミュージアムホール	9,000
	6月20日～7月4日	トピック展示「湖の国の名宝展」関連イベント 「浅井三姉妹『江』のふるさと」滋賀県観光パネル展	エントランス	19,600
パリに咲いた古伊万里の華展	4月13日～4月25日	有田焼４００年祭プレイベント「匠の蔵」特別展	エントランス	32,900
	4月17日～4月18日	コンサート～ヴェルサイユのしらべ＋α～	特別展示室	50
	4月24日～4月25日	福岡女子短期大学音楽科演奏「ヨーロッパ宮廷の香り」	特別展示室	50
	4月24日～4月25日	映画「マリー・アントワネット」の上映会	ミュージアムホール	50
	5月1日	親子で楽しむワークショップ「えをかこう、いろをぬろう」挑戦・古伊万里の技！	和室	9
	5月2日	親子で楽しむワークショップ「金ピカにかざっちゃえ」大変身！古伊万里ビフォーアフター	和室	4
	5月9日	ヨーロッパの宮廷音楽～「パリに咲いた古伊万里の華」開催記念演奏会～	ミュージアムホール	200
	5月22日～23日	現代に受け継がれる伊万里焼	エントランス／研修室	7,700
	5月30日	松嶋啓介　太宰府凱旋記念トークショー	ミュージアムホール	30
アジアを駆けた二千年展	7月13日～9月5日	ＣＬＵＢ　ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休み 常設展示　けいばの広場	エントランス／屋外	128,819
	7月17日・7月18日 7月24日・7月25日 7月31日・8月1日 8月7日・8月8日(8回)	ＣＬＵＢ　ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休み ワークショップ　馬のスケッチ大会	屋外	241
	7月17日・7月18日・ 7月19日・7月24日・ 7月25日・7月29日・ 7月31日・8月1日・ 8月5日・8月7日・ 8月8日・8月12日・ 8月14日・8月15日・ 8月19日・8月21日・ 8月22日・8月26日 8月28日・8月29日・ 9月4日・9月5日(22回)	ＣＬＵＢ　ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休み ポニーとのふれあいイベント	屋外	1,536
	7月17日・7月18日・ 7月24日・7月25日・ 7月31日・8月1日・ 8月7日・8月8日・ 8月14日・8月15日・ 8月21日・8月22日・ 8月28日・8月29日(14回)	ＣＬＵＢ　ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休み １着当てゲームにチャレンジ！	エントランス	2,221
	7月19日	ミュージアムトーク　ＡＫＢ４８ 篠田麻里子が九州国立博物館にやってくる！	ミュージアムホール	560
	7月29日 8月5日 8月12日 8月19日 8月26日 (5回)	ＣＬＵＢ　ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休み ワークショップ　馬のくつ（蹄鉄）でコースターを作ってみよう	エントランス	300
誕生！中国文明展	10月9日	『王朝・技・美の祭典』 特別公演　胡弓演奏家・趙国良 「中国王朝への旅 ―胡弓の調べにのせて―」	特別展示室	50
	10月30日	『王朝・技・美の祭典』 中国雑技ミニ公演　ドリームサーカス	エントランス	60
	11月2日～11月7日	日立100年展（日立創業100年記念「街と人と日立」）	エントランス	19,600
	11月6日	『王朝・技・美の祭典』 ミュージアムコンサート「中国伝統音楽からクラシックまで」	ミュージアムホール	80

展覧会名	期間	内容	会場	参加者数(人)
	11月21日	聖福寺「栄西禅師八百年遠諱大法要」に向けて 写経・禅画の体験教室 聖福寺・献茶口切りの儀 八女茶煎茶会／立礼	 和室 エントランス エントランス	 20 80 50
ゴッホ展	23年1月1日～1月7日	福岡在住の日展作家による作品展「情熱」	ミュージアムホール	7,000
	23年1月1日～1月16日	自画像コンクール「見てみて！〇〇しているぼく・わたし」入選作品展示	エントランス	127,300
	23年1月1日～2月13日	ヒマワリの種でゴッホの自画像モザイクアート 「美の種ひまわりプロジェクト」	エントランス	452,000
	23年1月10日	映画上映会 「There is no blue without yellow and orange　ゴッホの足跡をたどるヨーロッパの旅と日本の印象」	ミュージアムホール	250
黄檗展	23年3月15日～3月31日 (23年5月22日迄)	巡照朝課（じゅんしょうちょうか）	特別展示室	200
	23年3月21日	獅子舞	エントランス	200
	23年3月26日	光風流茶席	茶室	125
	23年3月27日	講座「肥前鹿島藩の黄檗僧達」　講師：井上敏幸	研修室	44
	23年3月27日	厄よけストラップ手作り教室	エントランス	14

2-⑵-④ 児童生徒を対象とした教育普及事業

【東京国立博物館】

1) みどりのライオンプロジェクト

開催期間	4月1日～平成23年3月11日
開催場所	本館20室
入場者数	98,891人　（※本館20室で実施した体験型プログラム参加者数を計数）
担当研究員数	7人
事業内容	みんなで楽しむ教育普及スペース「みどりのライオン」を運営。パネル展示により館全体のガイダンス機能をもたせるとともに、各種レクチャーや体験型プログラム、製作工程模型展示などを児童生徒から一般まで幅広い層に向けて展開。博物館へのアプローチから作品の鑑賞を深めるためのプログラムまで、伝統文化の理解促進に寄与するさまざまな教育普及活動を実施した。また、総合文化展鑑賞の手引きとして、ワークシート3種を制作し、通年配布した。

2)「親と子のギャラリー」

「日本美術のつくり方　2」	
開催期間	6月15日～7月25日（36日間）
開催場所	本館特別2室
入場者数	46,031人
担当研究員数	5人
事業内容	家族での来館のきっかけ、および、平常展鑑賞の一助となることを目的に、伝統的な日本美術の制作工程に焦点をあてた教育普及的展示を夏休みにあわせて実施。技術見本、工程見本を用い、作品ができるまでをわかりやすく紹介した。今回取り上げたジャンルは、料紙装飾、仏像の玉眼と寄木造、友禅染、線彫（金工）の4つ。これらの技法を駆使して作られた「ほんもの」の作品の鑑賞を通して、歴史のなかで培われてきた日本文化のすばらしさを伝える。ハンズオン・コーナーを特別2室内および本館20室に設けた。
関連事業	・ファミリーワークショップ「友禅染に挑戦！」　7月17日 ・おとなのためのワークショップ「友禅染：色挿し体験！」　7月17日 ※ともに詳細は 、3)③ワークショップ　を参照。
「博物館の音楽会」	
開催期間	8月3日～9月5日（36日間）
開催場所	本館特別2室
入場者数	47,302人
担当研究員数	5人
事業内容	日本美術にみる音楽と楽器を題材に、主として小中学生を対象とした教育普及的展示。楽器そのものだけでなく、埴輪・仏画・人形・漆工・金工・陶磁器・図譜などに表された楽器に注目し、管・弦・打など演奏法ごとに分けて展示する。さらに楽器の種類や演奏の方法をわかりやすく解説したパネルや映像を示し、古楽器についての知識を深めてもらうような補助的展示を行う。関連イベントとして、楽器に触れるハンズオン・アクティビティや、宮内庁式部職楽部による演奏会を開催した。
関連事業	・夏休みファミリー音楽会「貴族に伝わった音楽　雅楽を聞いてみよう」　8月22日 ※詳細は 、2-⑵-③　5)その他展示に関連する事業　を参照。 ・ハンズ・オン アクティビティ「楽器に挑戦！」　8月8日、15日、21日、22日 ※詳細は 、3)①平常展示関連体験型プログラム　を参照。

3) 体験型プログラムの実施　　参加者数計 101,622人、　観覧者数計 98,891人

① 平常展示関連体験型プログラム　　参加者数計　101,207人

ハンズオン 体験型展示	平常陳列「暮らしの調度」関連「日本のもようでデザインしよう」	
	期　　間	4月1日～23年3月11日
	開催場所	本館20室
	参加者数	90,274人
ハンズオン 体験型展示	本館リニューアル記念特別公開「冨嶽三十六景」（本館10室）関連「北斎の冨士を作ろう！」	
	期　　間	1月5日～1月16日
	開催場所	本館20室
	参加者数	4,103人
ハンズオン 体験型展示	特集陳列「美術のなかのうさぎと国々のお祝い切手」（本館特別2室）関連「東博ウサギめぐり＆掛軸ふうカレンダー」	
	期　　間	22年1月2日～1月3日
	開催場所	本館20室
	参加者数	4,514人
ハンズオン 体験型展示	ハンズ・オン アクティビティ「楽器に挑戦！」	
	期　　間	①8月8日、②8月15日、③8月21日、④8月22日
	開催場所	本館玄関
	参加者数	①688名、②659名、③505名、④464名

② 制作工程模型展示　　観覧者数計　98,891人（※本館20室にて実施した体験型プログラム参加者数と一体化してカウント）

ハンズオン 体験型展示	「国宝・孔雀明王像ができるまで」	
	期　　間	22年1月13日～22年4月18日
	開催場所	本館20室
	観覧者数	6,533人（人数は4月1日～4月18日）
ハンズオン 体験型展示	「裏彩色　－隠れた色彩の効果－」	
	期　　間	4月20日～6月13日
	開催場所	本館20室
	観覧者数	13,351人
ハンズオン 体験型展示	「一木造ができるまで」	
	期　　間	6月15日～10月3日
	開催場所	本館20室
	観覧者数	34,768人
ハンズオン 体験型展示	「押出仏ができるまで」	
	期　　間	10月5日～12月26日
	開催場所	本館20室
	観覧者数	20,452人
ハンズオン 体験型展示	「悉皆金色　阿弥陀如来像ができるまで」	
	期　　間	1月2日～3月11日
	開催場所	本館20室
	観覧者数	23,787人

③ ワークショップ　　参加者数計　254人

ワークショップ及び関連事業	特集陳列「博物図譜ー桜を中心にー」関連企画（本館16室）関連 ファミリーワークショップ「家族で作る博物図譜（昔の図鑑）」（事前申込制）	
	期　　間	①4月24日、②4月25日
	開催場所	平成館小講堂
	参加者数	①27人、②20人
	担当研究員数	3人
ワークショップ及び関連事業	親と子のギャラリー「日本美術のつくり方　2」(本館特別2室)関連 ファミリーワークショップ「友禅染に挑戦！」（事前申込制）	
	期　　間	7月17日
	開催場所	平成館小講堂
	参加者数	14人
	担当研究員数	3人
ワークショップ及び関連事業	親と子のギャラリー「日本美術のつくり方　2」(本館特別2室)関連 おとなのためのワークショップ「友禅染：色挿し体験」（事前申込制）	
	期　　間	7月17日
	開催場所	平成館小講堂
	参加者数	17人
	担当研究員数	3人
ワークショップ及び関連事業	特集陳列「古写経の世界」（本館特別2室）関連 おとなのためのワークショップ「唐紙もようのオリジナル料紙と継紙カード作り」（事前申込制）	
	期　　間	①10月8日、②10月9日
	開催場所	平成館小講堂
	参加者数	①18人、②13人
	担当研究員数	3人
ワークショップ及び関連事業	特集陳列「古写経の世界」（本館特別2室）関連 ファミリーワークショップ「きらきら光る唐紙(からかみ)を作ってみよう」（事前申込制）	
	期　　間	10月10日
	開催場所	平成館小講堂
	参加者数	18人(6組)
	担当研究員数	3人
ワークショップ及び関連事業	日本美術の流れ「暮らしの調度」（本館8室）関連 おとなのためのワークショップ「オリジナル貝合せを作ってみよう」（事前申込制）	
	期　　間	①10月29日、②10月30日
	開催場所	平成館小講堂
	参加者数	①18人、②14人
	担当研究員数	2人
ワークショップ及び関連事業	日本美術の流れ「暮らしの調度」（本館8室）関連 ファミリーワークショップ「貝合せを作って貝合せに挑戦」（事前申込制）	
	期　　間	①10月30日、②11月3日
	開催場所	平成館小講堂
	参加者数	①10人(4組)、②28人(9組)
	担当研究員数	3人
ワークショップ及び関連事業	総合文化展「金工」（本館13室）関連 ファミリーワークショップ「からだが動くエビを作ってみよう」（事前申込制）	
	期　　間	①1月29日、②1月30日
	開催場所	平成館小講堂
	参加者数	①30人（9組）、②27人（9組）
	担当研究員数	3人

④ 特別展関連体験型プログラム　　参加者数計　161人

ワークショップ及び関連事業	特別展「細川家の至宝」関連　ワークショップ「キミも武将だ！甲冑をまなぼう」	
	期　　間	5月5日
	開催場所	平成館ラウンジ
	参加者数	105人
ワークショップ及び関連事業	特別展「誕生！中国文明」関連　ワークショップ「動物紋飾板をつくろう！」	
	期　　間	8月5日
	開催場所	平成館小講堂
	参加者数	56人

4) 東博スクールプログラム

期　　間	年間
開催場所	全館対象
参加者数	小学校 12校 944人／中学校 72校 3405人／高校 37校 1114人／中高一貫 2校 30人 計123校 5,493人
担当研究員数	5人
事業内容	総合的な学習などでより充実した見学ができるよう、ガイダンスや対話形式の伝統文化理解のための鑑賞教育プログラムを児童・生徒に実施した。スクールプログラムのパンフレットは近隣県の学校へ配布し、全国で閲覧・ダウンロードできるよう、ウェブサイトにも掲載した。

5) 職場体験の受入

期　　間	年間
開催場所	全館対象
参加者数	33校131人
担当研究員数	3名
事業内容	学校教育活動の一環として実施される職場体験の受入を行った。生涯学習ボランティアとともに、お客様案内やアクティビティの補助等、お客様サービスに関わる業務の体験をする。要項は近隣学校へ配布し、全国で閲覧・ダウンロードできるよう、ウェブサイトにも掲載した。

6) 高等学校との連携教育実施

期　　間	9月4日、9月25日、10月2日
開催場所	全館対象
参加者数	13人(連携校10人、一般公募3人)
担当研究員数	2人
事業内容	単位制の都立高等学校との連携プログラム。 広く一般の高校からも受講者を募集し、日本の四季をテーマとした展示鑑賞、ワークショップ、生徒による発表を行う全3回の連続講座を実施した。

7) 教員を対象とした事業の実施

○ 教員鑑賞会の実施

期　　間	①4月23日（特別展「細川家の至宝」）、②7月9日（特別展「誕生！中国文明」）、③10月15日（特別展「東大寺大仏」）
開催場所	①②③平成館大講堂、本平成館2階特別展会場及び平成館1階ガイダンスルーム
参加者数	①61人、②98人、③297人　　計456人
担当研究員数	4人
事業内容	学校との連携を考慮した教員を対象のプログラム。特別展の観覧、解説を実施し、指導要領と関連した授業案を配布した。

○ 全国高等学校美術・工芸教育研究会との連携事業の実施（共催：東京藝術大学）

期　　間	7月28日～7月30日
開催場所	本館展示室、会議室／東京藝術大学
参加者数	46人
担当研究員数	4人
事業内容	全国の高等学校で美術、工芸の授業を担当している教員を対象。研修を通じて伝統美術や工芸に対する理解を深めてもらう。今年度は第6回目として「日本の彫刻」をテーマに博物館では歴史と鑑賞を、大学では実技を実施した。

○ 盲学校のためのスクールプログラム教員研修会

期　　間	3月5日
開催場所	本館展示室
参加者数	36人
担当研究員数	4人
事業内容	全国の盲学校教員を対象とした研修会。盲学校の児童・生徒に向けたスクールプログラムの解説および実際にプログラムを体験してもらった。

【京都国立博物館】

1) 少年少女博物館くらぶ

事業名：博物館　庭園探検隊！～豊臣秀吉ってだれ？～	
実施日	7月24日
対象	小学生から中学生
参加者数	19人（うち子ども8人）

2) 博物館Ｄｉｃｔｉｏｎａｒｙの発行　1回

・発行部数　5,000部
・配 布 先　館内観覧者等

3) 特別展観 没後２００年記念「上田秋成」小中学生の入場料を無料

4) 特別展覧会「高僧と袈裟 ころもを伝えこころを繋ぐ」小中学生向けワークシート作成

・発行部数　15,000部
・配 布 先　館内観覧者

5) 京都市内の小中学校への訪問授業

事業名： 文化財に親しむ授業　「風神雷神図屏風」	
実施日	6月29日　8:50～14:30　45分授業を5回
場所	京都市立金閣小学校（京都市北区平野上柳61-1）
対象	京都市立金閣小学校　6年生4クラス　および保護者
参加者数	140名
事業内容	NPO法人京都文化協会、京都市教育委員会との連携事業。俵屋宗達筆「風神雷神図屏風」の高精細複製を教材として訪問授業を行った。プリントへのセリフの書き込みや、構図を自分たちで考えるなどの作業を通じて、注意深く作品を観察し、特徴や魅力を発見することを目指した。講師は、文化財ソムリエ（京都国立博物館小中学生学習支援プログラム講師）ならびに当館研究員が担当した。
主催	京都国立博物館、NPO法人京都文化協会
事業名： 文化財に親しむ授業　「風神雷神図屏風」	
実施日	10月5日　8:50～12:20　45分授業を4回
場所	京都市立嵯峨小学校（京都市右京区嵯峨釈迦堂大門町35-1）
対象	京都市立嵯峨小学校　6年生3クラス　および保護者
参加者数	130人
事業内容	NPO法人京都文化協会、京都市教育委員会との連携事業。俵屋宗達筆「風神雷神図屏風」の高精細複製を教材として訪問授業を行った。社会科の授業時間を利用し、「風神雷神図屏風を手掛かりに、江戸時代の京都の暮らしに触れよう」をテーマに行った。講師は、文化財ソムリエ（京都国立博物館小中学生学習支援プログラム講師）ならびに当館研究員が担当した。
主催	京都国立博物館、NPO法人京都文化協会
事業名： 文化財に親しむ授業　「八橋図屏風」	
実施日	11月12日　10:00～10:50 50分授業
場所	京都市立蜂ヶ岡中学校　（京都市右京区嵯峨野開町1-1）
対象	京都市立蜂ヶ岡中学校　1年2組

参加者数	36人
事業内容	NPO法人京都文化協会、京都市教育委員会との連携事業。尾形光琳筆「八橋図屏風」の高精細複製を教材として訪問授業を行った。道徳研究の近畿大会にあわせ、公開授業として行った。授業の前半の作品解説を当館研究員が担当し、後半部分を担任教師が担当した。
主催	京都国立博物館、NPO法人京都文化協会
事業名：建仁寺「綴プロジェクト作品展」キッズプログラム	
実施日	11月20日、23日、27日、12月4日　9:00～10:00
場所	大本山　建仁寺（京都市東山区大和大路通四条下る小松町）
対象	小・中学生とその保護者
参加者数	30人
事業内容	NPO法人京都文化協会との連携事業。建仁寺で行われた「綴プロジェクト作品展」にて、会期中の土曜日・祝日の4日間、9時から10時までを子ども用に貸し切り、小中学生を対象に対話型の鑑賞プログラムを行った。俵屋宗達筆「松島図屏風」と、海北友松筆「雲龍図」の2点を中心に解説。講師は、文化財ソムリエ（京都国立博物館小中学生学習支援プログラム講師）ならびに当館研究員が担当した。
主催	京都国立博物館、NPO法人京都文化協会
事業名：　文化財に親しむ授業　「松鷹図」	
実施日	1月28日　9:40～11:30　45分授業を2回
場所	京都市立石田小学校（京都市伏見区石田森西24）
対象	京都市立石田小学校　5・6年生　2クラス
参加者数	70人
事業内容	NPO法人京都文化協会、京都市教育委員会との連携事業。二条城大広間四の間「松鷹図」の高精細複製を教材として訪問授業を行った。「松鷹図」鑑賞ののち、二条城の障壁画の配置について、各部屋にどのような意図でどの画題が選ばれたのかを、教材を用いながら考察した。講師は、文化財ソムリエ（京都国立博物館小中学生学習支援プログラム講師）が担当した。
主催	京都国立博物館、NPO法人京都文化協会
事業名：建仁寺「綴プロジェクト作品展」キッズプログラム	
実施日	3月28日　11:00～12:00、14:00～15:00
場所	大本山　建仁寺（京都市東山区大和大路通四条下る小松町）
対象	小・中学生とその保護者
参加者数	32人
事業内容	NPO法人京都文化協会との連携事業。建仁寺で行われた「綴プロジェクト作品展」にて、小中学生を対象に対話型の鑑賞プログラムを行った。俵屋宗達筆「風神雷神図屏風」と、伊藤若冲筆「樹花鳥獣図屏風」の2点を中心に解説。講師は、文化財ソムリエ（京都国立博物館小中学生学習支援プログラム講師）が担当した。
主催	京都国立博物館、NPO法人京都文化協会

6）社会科教員のための向上講座の実施

実施日	10月26日
開催場所	管理棟3階研修室及び特別展示館
参加者数	32人
担当研究員数	2人
事業内容	京都市内の小中学校で社会科を担当している教員を対象とした事業。「本物にふれる大切さ」と題した講義ののち、特別展覧会「高僧と袈裟」を観覧、解説を実施した。

【奈良国立博物館】

1）修学旅行生等を対象とした文化財の案内・説明資料等の作成と解説

・期間，場所　開館中随時，展示会場・講堂
・団体申込数　30件　計1,162名
・担当研究員数　3人
・事業内容　解説ボランティアによる展示作品の解説

2）世界遺産学習への対応

・期間　4月～21年3月　事前申し込み制
・対応実績　奈良市内の小学校30校　（5年生の全クラスを対象）　計2,221名
・担当研究員数　3人
・事業内容　奈良市教育委員会との共同で、市内の全小学校5年生を対象に、世界遺産「奈良」を通して歴史や文化への愛着を育み、未来に伝え残すことの重要性を学んでもらう。
解説ボランティアによる「世界遺産学習」プログラム（スライド解説と実際の仏像を前にした観賞など）を1時間程度で実施する。今年度は工事等により閉館している期間が長かったため、新たに「仏像コスチューム」授業を追加実施した。

3）子ども向け音声ガイドの制作

・特別展「第62回正倉院展」で制作、899台の利用があった。

【九州国立博物館】

1）博物館における体験型事業の充実

① 教育普及ゾーン（体験型展示室「あじっぱ」）で活用する様々な教育キットの開発

体験型キットの開発・展開	
内容	「あじっぱ」の展示に関する理解を促進するための体験型キット・プログラムの開発 ①新規開発キット、プログラム：「モンゴルの馬具に乗ってみよう」「モンゴルのもようをデザインしよう」「モンゴル・ウズベキスタンの3D写真」「きゅうばっく　モンゴルの馬頭琴」「Boo Booペット」「いろんなもようを織ってみよう」「テープ独楽をまわそう」 ②あじ庵：「日本の水引」「ワヤン・クリッ」「中国の日常生活」「オランダのくらし」「バンコクの街をつくろう！」 ③あじぎゃら：「染付」「つくりカタ展」「のぞいてみよう！浮世絵の世界」「ウズベキスタンの細かな手仕事」「針聞書」
対象	こどもおよび親子連れを中心とした来館者全般
人数	定員なし
実施	開館時は常時開放

② 幅広い層に向け体験活動の促進を図るため、教育活動の場を提供

夏休み子ども向けイベント「いこうよ！あじっぱ夏祭り」	
内容	「あじっぱ」の資料・コンテンツを活用して夏休みに博物館を訪れた子ども、および親子連れに対して博物館体験の場を提供するとともに、ボランティア活動の活性化を図る。
対象	こどもおよび親子連れを中心とした来館者全般
人数	定員なし

実施	8月7日～8月8日の2日間実施、3カ国3コンテンツを運用。参加者約300名（子どものみの数）
ボランティアワークショップ「木目込みまり」「ハニワの色付け体験」	
内容	ボランティアの創意工夫による工作体験講座を展開することによって、夏休みに博物館を訪れた子ども、および親子連れに対して博物館体験の場を提供するとともに、ボランティア活動の活性化を図る。
対象	こどもおよび親子連れを中心とした来館者全般
人数	定員なし
実施	「木目込みまり」8月6日、「ハニワの色付け体験」8月17日、の2日間実施
「絵本でおはなしーはらの なかの はらっぱでー」	
内容	あじっぱにて、きゅーはくの絵本④「はらの なかの はらっぱで」の読み聞かせ。
対象	小学生まで
人数	5名程度
実施	4月11日

③ アジア諸国の文化を理解する様々な体験学習プログラムの開発

体験型展示室「あじっぱ」の運営	
内容	日本と古くから交流のあるアジア・ヨーロッパ7ヵ国の文物を屋台風に展示、資料を実際に使用する・制作する等の体験をとおして素材やデザイン、用途などにおける国相互の類似性や相違性を体感する。平成22年度においては、あじっぱ新規屋台として「モンゴル」「ウズベキスタン」の2カ国を追加した。
対象	こどもおよび親子連れを中心とした来館者全般
人数	最大収容可能人数約80人
実施	開館時は常時開放

④ 博物館の諸活動を体験できるプログラムの開発

なりきり学芸員体験	
内容	「あじっぱ」において、学芸員の仕事の一部を40～50分で体験するワークショップ。収蔵棚から文化財に見立てた資料を選び、実際に手にとって観察し、調査カードを作成し、展示ケースに展示する。 平成22年度より、「なりきり考古学者体験」とあわせて毎月2回、定例化して実施したほか、職場体験・学校団体等の希望者に対して実施した。
対象	小学校中学年以上
人数	1回につき最大8名
実施	ボランティアによる司会進行で実施。毎月第2土曜日「考古学者」、第4土曜「学芸員」、のほか、希望者に対して随時実施（計40回）

2) 九州大学との共同研究成果に基づき、平常展を利用して来館者ニーズに合った情報提供を行うためのプログラムの研究・開発

文化交流展示室におけるPDA機器（携帯情報端末）の開発	
内容	・最新のメディア機器を用いて、より豊かな博物館体験を提供する。 ・来館者の能動的鑑賞による歴史の魅力の発見を支援する。
目的・方針	・本研究は次世代型博物館に向けたインタラクティブな自動誘導機能が付加された展示解説コンテンツと、その展示を効率的に評価できる展示評価支援システムの開発を目的としている。 ・来館者に優しいパーソナル・ミュージアム・コンシェルジュの開発と実証実験を行う。
制作及び運営方法調査	・プロトタイプの展示解説コンテンツと、位置情報取得システムによる運用システムを設置して、事前登録による貸出を行った。展示評価は来館者のログデータを自動的に読み取るとともに、返却後のアンケート調査も併せて実施した。
導入機種の検討	・操作性や視認性を重視した市販器での活用を考慮し、ipadを用いて実験した。

3) 学校教育との連携事業の実施

① 職場体験（中学生）の受け入れ

中学生の職場体験	
内容	中学校で実施される「総合的な学習」に対応し、働く現場での体験を提供することで、自らの進路や職業について考える機会を提供するとともに、博物館への理解を促進する。
人数	1回について最大6名まで
実施	9校に対して実施、体験中学生数46名（実施中学校：筑紫野市立筑山中学校6名、太宰府市立太宰府西中学校6名、大野城市立大利中学校6名、春日市立春日野中学校5名、小郡市立三国中学校6名、福岡県立輝翔館中等教育学校3名、福岡雙葉中学校4名、筑紫野市立二日市中学校4名、筑紫野市立筑紫野南中学校6名）

② ジュニア学芸員（高校生）による教育プログラムの開発

ジュニア学芸員活動	
内容	博物館に関心のある高校生が、学芸員による講話や演習を体験することで、博物館の活動を理解するとともに、自らの進路や職業を考える機会を提供する。
人数	7校26名
実施	12月～3月の日曜日を中心に全8回

③ 博物館活用の促進を図るため、教員研修の場の設置

教師社会体験研修	
内容	学校の教師に対して社会貢献等の体験の場を提供し、教師の資質の向上を支援しつつ、博物館活動への理解促進をはかる。
人数	6名
実施	10年経験教師社会貢献体験研修4名（8月30日～8月31日、2日間）、初任者研修にかかる体験活動研修2名（8月6日～8月8日、3日間）

④ 学校貸出キット「きゅうぱっく」の貸し出し

学校貸出キット「きゅうぱっく」	
内容	博物館の展示に関連するハンズオン資料をパック化して学校等に向けて貸し出し、学校教育および社会教育を支援する。
対象	学校教育団体、社会教育団体その他
実施	小学校14件、中学校15件、高等学校3件、その他17件（その他は博物館1件、放送局1件、アジア太平洋フェスティバル事務局2件、全九州中学校教育研究協議会13件）、計49件

⑤ 出前講座への対応

出前講座への対応	
内容	学校で実施される「総合的な学習」等に対応し、学校に出向いて博物館の機能やアジア各地・日本の歴史・文化についての講義を行う。
対象	研究員による出前講座を希望した学校
実施	11月3日、福岡県立修猷館高校にて実施（参加高校生15名）、対応研究員1名 9月21日、太宰府市立太宰府中学校にて実施（参加中学生12名）、対応研究員1名

⑥ 来館学校団体への対応

来館学校団体への対応	
内容	団体で来館した学校団体のうち、特に希望した学校に対し、体験プログラム等を実施
対象	団体で来館した学校団体のうち、特に体験を希望した学校
実施	福岡県立城南高等学校（4月16日、28名）、福岡県立修猷館高等学校（4月28日、4名）、山口県立宇部高等学校（2月2～3日、39名）、福岡県立太宰府高等学校（2月24日、37名）

4）文化交流展、特別展に関連した教育普及事業の実施

特別展「パリに咲いた古伊万里の華」展　「解説パネル」、「体験コーナー」	
内容	輸出磁器の歴史や技法、デザインの特徴をわかりやすく紹介する「解説パネル」、金装飾磁器の用途を伝える「ポプリの香り体験コーナー」を設置した。これらは巡回先である MOA 美術館、兵庫陶芸美術館へも引き継がれた。
開催場所	特別展示室
特別展「パリに咲いた古伊万里の華」展　親子で楽しむワークショップ 「えをかこう、いろをぬろう」挑戦・古伊万里の技！	
内容	「染付」と「色絵」の絵付技法に触れ、フォトフレームに絵を描いた。
開催場所	研修室（和室）
人数	大人8人 、子ども9人（小・中学生）
実施	5月1日
特別展「パリに咲いた古伊万里の華」展　親子で楽しむワークショップ 「金ピカにかざっちゃえ」大変身！古伊万里ビフォーアフター	
内容	金装飾磁器をまねて湯呑みなどの磁器に装飾を付けて創作し、ヨーロッパの美意識を体感した。
開催場所	研修室（和室）
人数	大人4人、子ども4人（小・中学生）
実施	5月2日
特別展「馬　アジアを駆けた二千年」展　「教育普及コーナー」、「解説パネル」	
内容	グラフィックや模型を用いて馬具をわかりやすく紹介する「教育普及コーナー」を展示室導入部に設置した。また、馬に関する雑学を紹介する解説パネル「おしえてギャロップ」も設置した。
開催場所	特別展示室
特別展「馬 アジアを駆けた二千年」　関連イベント　ＣＬＵＢ ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休み　ワークショップ 馬のスケッチ大会	
開催場所	館外レストラン前広場
人数	241人
実施	7 月 17 日・18 日・24 日・25 日・31 日、8 月 1 日・7 日・8 日
特別展「馬 アジアを駆けた二千年」関連イベント　ＣＬＵＢ ＫＥＩＢＡ馬に楽しむ夏休み　ワークショップ 馬のくつ（蹄鉄）でコースターを作ってみよう	
開催場所	エントランスホール
人数	300人
実施	7 月 29 日、8 月 5 日・12 日・19 日・26 日
特別展「誕生！中国文明」展　「解説パネル」、「体験コーナー」	
内容	展示品に因む漢字の成り立ちから、古代中国の生活や工芸技術や考え方を紹介する解説パネル「かんじチャイナ」を作成した。また、玉器加工の難しさを体感する「玉の原石に錐で穴を開ける体験コーナー」を設置した。これらは巡回先である奈良国立博物館へも引き継がれた。
開催場所	特別展示室
特別展「没後 120 年　ゴッホ展」　「ゴッホメモ」	
内容	ゴッホの生涯や手紙、影響をうけた画家等の内容をまとめた「ゴッホメモ」(A7 サイズ)を作成し、展示を見る前に展示内容の理解を促した。また、エントランスホールで入場を待つ来場者の混雑対策としても活用した。
配布場所	エントランスホール、総合案内、ミュージアムショップ、オープンカフェ、レストラン
配布部数	20万部
開催場所	特別展示室
文化庁海外展「日本とタイ　ふたつの国の巧と美」にかかる伝統工芸ワークショップ	
内容	1 月 29 日：重要無形文化財久留米絣技術保持者の松枝哲哉氏による、久留米絣についての講演および実演 1 月 30 日：腰機形式による製織体験　同時に 8 人が体験できるワークショップを 4 回実施した。
開催場所	バンコク国立博物館
人数	1月29日：約50人　　1月30日：32人
実施	1 月 29 日、30 日
文化交流展示室　「ザ・きゅーはく占いベスト 20」	
内容	児童生徒が楽しみながら展示品の特徴を知ることをねらいとし、選定した 20 点の展示品の特徴や背景を「占い」の形式によって解説した。
開催場所	文化交流展示室
実施	2009 年 6 月～2011 年 3 月
文化交流展示室　「絵本でおはなし－じろじろぞろぞろ－」	
内容	きゅーはくの絵本②「じろじろぞろぞろ」の絵本の読み聞かせと、絵本の主題である「唐船・南蛮船図屏風」を鑑賞しながらギャラリートークを行った。
開催場所	文化交流展示室
人数	大人12人 、子ども14人（小学生・未就学児）
実施	5月16日、6月5日、6月6日
文化交流展示室　「絵本でおはなし－エイサー！ハーリー－」	
内容	展示中の「ハーリー船」を鑑賞して画用紙でハーリー船をつくり、きゅーはくの絵本③「エイサー！ハーリー」の絵本の読み聞かせを行った。
開催場所	文化交流展示室
人数	子ども40人（小学生・高校生・未就学児）
実施	8月3日、8月4日

5）高等教育との連携

① 筑紫女学園大学の指導によるガムランワークショップ

ガムランワークショップ	
内容	筑紫女学園大学の指導によるガムランワークショップの定期的な開催 （筑紫女学園大学准教授と学生、卒業生の指導で、ジャワの伝統的な楽器であるガムランの演奏を体験するワークショップ。事前申込のほか当日の参加も可能。）
実施期間	5月15日、6月19日、7月17日、10月23日、11月13日、12月11日、1月22日、2月19日（全て土曜日）
開催場所	九州国立博物館1階ミュージアムホール、3階特別展示室前スペース（6月19日）
参加者数	毎回約20人程度

2-⑵-⑤　大学生・大学院生を対象とした教育事業

1)　大学等との連携事業

【京都国立博物館】

内　　容	京都大学大学院人間・環境学研究科の歴史文化社会論講座
実施日	通年
開催場所	当館
受入人数	5人
担当研究員数	5人

内　　容	保存修復技術を専攻する学生のための研修会
実施期間	9月3日
開催場所	京都国立博物館
参加者数	16人
担当研究員数	1人

内　　容	京都橘大学との教育提携・学術交流
実施期間	通年
開催場所	京都国立博物館
参加者数	18人
担当研究員数	1人

【奈良国立博物館】

内　　容	奈良女子大学との連携講座
実施期間	前期、後期
開催場所	奈良女子大学、奈良国立博物館
参加者数	前期　４人、後期　３人
担当研究員数	1人

内　　容	神戸大学大学院文化学研究科との連携講座
実施期間	通年
開催場所	神戸大学、奈良国立博物館
参加者数	10人
担当研究員数	2人

【九州国立博物館】

内　　容	放送大学の面接授業
実施期間	12月18日～19日
開催場所	九州国立博物館1階研修室
参加者数	50人

内　　容	筑紫女学園大学文学部アジア文化学科必修科目「ミュージアムで学ぶアジア」 （博物館の概要について講義、博物館展示見学、博物館体験型展示室での異文化体験）
実施期間	4月28日～8月4日
開催場所	筑紫女学園大学、九州国立博物館文化交流展示室、体験型展示室「あじっぱ」
参加者数	150人

内　　容	博物館における文化財保存修復に関する研修
実施期間	8月16日～20日の5日間
開催場所	九州国立博物館保存修復施設
参加者数	4人（吉備国際大学から2人、九州産業大学から1人、別府大学から1人の合計4人が参加した。）

内　　容	博物館実習生の受け入れ
実施期間	7月28日～8月9日の間、延べ10日間実施
参加者数	13大学17名

内　　容	カフェコンサート（福岡女子短期大学の学生による演奏）
実施期間	4月16日、4月23日、5月14日、5月28日、6月11日、6月25日、7月16日、7月23日、8月13日、8月27日、9月17日、10月8日、 10月29日、11月5日、11月26日、12月10日、12月17日、23年1月21日、1月28日、2月25日、3月11日、3月25日（全て金曜日）
開催場所	九州国立博物館1階エントランス（オープンカフェ）
参加者数	毎回80人程度。出演者は毎回8人程度。

2)　インターンシップ

【東京国立博物館】

受入期間	7月22日～23年3月31日
受入部署	学芸企画部　デザイン室、教育普及室、ボランティア室、情報資料室、広報室 学芸研究部　上席研究員(日本工芸)、平常展調整室、東洋室、保存修復課
参加者数	22人（15大学）
担当研究員数	のべ23人
事業内容	博物館学芸員を目指す学生の学習意欲の喚起、高い職業意識の育成を目的とした就業体験プログラム。学生は受入部署において、10～30日間の活動を行った。

【京都国立博物館】

受入期間	8月16日～9月10日
開催場所	文化財保存修理所
参加者数	2人（2大学）
担当研究員数	1人
事業内容	文化財修復大学院生インターンシップ協議会より推薦を受けた学生について、文化財修復に関わる加盟大学院生2名のインターンを受け入れた。11月27日には事務棟研修室にて2名による報告会を行った。

【奈良国立博物館】

受入期間	8月30日～9月8日
受入部門	総務課
参加者数	1人（1大学）
担当研究員数	総務課職員
事業概要	立命館大学とのインターンシップに関する覚書により受入を行った。

3)　学生ボランティア

【東京国立博物館】

期　　間	・ギャラリートーク班 平成22年8月5日～平成22年10月30日（36回） ・制作工程模型作成班ギャラリートーク 平成23年2月2･11･17日･3月2日（4回）
開催場所	当館展示室内ほか
参加者数	・ギャラリートーク班 ボランティア6人、聴講者 計989人 ・制作工程模型作成班ギャラリートーク ボランティア1人　聴講者　92人
担当研究員数	4人
事業内容	東京芸術大学大学院生ギャラリートーク班により入館者に対するギャラリートークを実施。また工程模型作成班により、「悉皆金色－阿弥陀如来像ができるまで」の5工程の制作工程模型の制作、それに係るギャラリートーク「悉皆金色」を実施。

【京都国立博物館】

実施日	4月26日（月）、5月17日（月）、6月21日（月）、8月23日（月）、9月27日（月）、10月/25日（月）、11月8日（月）、1月17日（月）、1月24日（月）
開催場所	京都国立博物館
参加者数	7人
担当研究員数	2人
内容	京都市内の小中学校で訪問授業を行う「文化財ソムリエ」養成のためのスクーリング。 参加者は、京都市内の大学で日本美術を専門に学ぶ大学生、大学院生。

4)　見学対応

【東京国立博物館】

期　　間	年間（2011年1月31日まで）
開催場所	全館対象
参加者数	10件（大学7件、337人／専門学校3件、148名　計485人）
担当研究員数	2人
事業内容	鑑賞の手助け、文化財・博物館への理解促進のため、大学生や大学院生、専門学校生を対象に、東京国立博物館の展示や事業についての解説を含めたガイダンスを実施した。

2-⑵-⑥ ボランティア受入れ実績

（後述の資料に記載）◎共通資料b

2-(2)-⑦ 友の会

1) 会員数

友の会

平成23年3月31日現在

区分 / 館名	友の会会員数	友の会会員 (年会費10,000円)	友の会会員 (一般) (年会費3,000円)	友の会会員 (学生) (年会費2,000円)	友の会会員 (家族) (年会費6,000円)
東京国立博物館	1,412 人	1,412人	―	―	―
京都国立博物館	2,468 人	―	2,369 人	99 人	―
奈良国立博物館	3,180 人	―	3,009 人	125 人	46 人
九州国立博物館	144 人	144 人			―

パスポート

平成23年3月31日現在

区分 / 館名	パスポート会員数	パスポート会員 (一般) (年会費4,000円)	パスポート会員 (一般) (年会費3,000円)	パスポート会員 (学生) (年会費2,500円)	パスポート会員 (学生) (年会費2,000円)
東京国立博物館	13,733 人	12,870 人		863 人	
九州国立博物館	3,318 人	―	1,541 人	―	1,777 人

2) 友の会会員を対象とした事業

【東京国立博物館】

① 東京国立博物館友の会対象旅行会の実施
11月6日～7日
・旅行会　　平城京遷都1300年記念　第62回正倉院展と薬師寺イベントツアー
・旅行先　　奈良国立博物館、平城京、薬師寺、など
・参加者数　21人

② その他
博物館ニュース送付,イベントの鑑賞割引等

【京都国立博物館】

①年1回（4月）、年間催事案内を送付
②京都国立近代美術館、国立国際美術館、国立民族学博物館、京都府京都文化博物館、京都市美術館の平常展、特別展を団体料金に割引(共催展の場合は、割引が適用されない場合あり)
③財団法人京都古文化保存協会が春・秋に実施する【京都非公開文化財特別拝観】の協力社寺拝観料の割引
④当館ミュージアムショップの商品の10%割引

【奈良国立博物館】

①第39回夏季講座「仏像修理100年と仏像研究の現在」
･実施期間　8月24日～26日
･事業内容　奈良女子大学講堂において9講座、展覧会概説を行い、博物館に移動展覧会を見学した。
･参加者数　556人
②京都国立近代美術館、国立国際美術館、国立民族学博物館の平常展、特別展を団体料金に割引
③ミュージアムショップ及びレストランでの割引特典

【九州国立博物館】

季刊情報誌「アジアージュ」、特別展ちらし、特別展連続講座等イベント案内送付、当館ミュージアムショップ・レストラン･カフェでの割引、入会時の記念品プレゼント。

2-(2)-⑧賛助会

1) 会員数

平成23年3月31日現在

館名	東京国立博物館	京都国立博物館		奈良国立博物館
		（社団法人清風会）	（ミュージアム・パートナー）	
件数	235件	391件	1件	64件
内訳	特別会員：16件 維持会員(個人)：191件 維持会員(団体)： 28件	賛助会員：34件 特別会員：61件 普通会員：296件	団体会員：1件	特別支援会員：4件 特別会員：4件 一般会員(個人)：37件 一般会員(団体)：19件

2) 賛助会員を対象とした事業

【東京国立博物館】

① 各特別展開会式へのご招待
② 各特別展につき1回の特別鑑賞会へのご招待

【京都国立博物館】

①「京都国立博物館だより」（年4回）の配布
②当館平常展、特別展の無料観覧
③清風会が行う鑑賞会、見学会、会報に協力
④当館ミュージアムショップの商品の一部割引
⑤国際シンポジウム（年1回）案内の発送

【奈良国立博物館】

①当館平常展、特別展の無料観覧
②各特別展開会式へのご招待
③展覧会図録の1冊贈呈
④「奈良国立博物館だより」（年4回）の配布
⑤当館ミュージアムショップでの展覧会図録の割引
⑥当館レストランでの飲食料金の割引
⑦当館研究員による解説付きの賛助会員特別鑑賞会を実施
4月８日（木）　特別展「大遣唐使展」
　　特別鑑賞会　参加人数38名
７月28日（水）　なら仏像館開幕記念特別展「至宝の仏像」
　　特別展「仏像修理　100年」
　　特別鑑賞会　参加人数36名
10月27日（水）　特別展「第62回正倉院展」
　　特別鑑賞会　参加人数61名

2-(2)-⑨ 渉外活動

【東京国立博物館】

1) 会場提供　16件

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者数（人）
4月5日	懇談会	講談社主催による「GLAMOROUS 5th Anniversary Party」展示鑑賞およびレセプション	法隆寺宝物館	約300
5月22日	懇談会	トヨタ自動車（株）主催による「細川家の至宝」展展示鑑賞およびレセプション	平成館	246
7月26日～8月2日	展示会	台東区主催によるイベント（伝統工芸職人展）	平成館	－
10月5日・6日	懇談会	Ferrari F1 Party 2010	法隆寺宝物館	300
11月29日	懇談会	野村インベストメントフォーラム2010	法隆寺宝物館	150
11月30日	展示鑑賞	クラブツーリズム主催「東大寺大仏 - 天平の至宝 - 」展貸切と法話会	平成館	199
23年2月28日	懇談会	文化庁主催による「文化交流史活動報告会」レセプション	法隆寺宝物館	約100
4月10日 5月16日 6月12日 7月31日 8月21日 10月17日	ガイドツアー	株式会社スタイル・カフェ・ドット・ネットによる リレ・アカデミー　ガイドツアー	本館等	約20
4月10日 6月12日 8月21日	講演会	株式会社スタイル・カフェ・ドット・ネットによる リレ・アカデミー　スクーリング	平成館等	約10

2) 館主催・協力イベント　23件

期間	種類	タイトル	会場	出席者数（人）	備考
4月1日	音楽会	東京・春・音楽祭2010「東博でバッハvol.5　佐藤俊介」	法隆寺宝物館	107	東京・春・音楽祭実行委員会共催
4月2日	音楽会	京・春・音楽祭2010「ヴィーヴ！サクソフォーンカルテット」	本館	約300	東京・春・音楽祭実行委員会共催
4月4日	音楽会	瀬崎明日香ヴァイオリンコンサート	平成館	235	ｻﾛﾝ･ﾄﾞ･ｿﾈｯﾄ共催
4月6日	音楽会	東京・春・音楽祭2010「東博でバッハvol.6　佐藤俊介」	法隆寺宝物館	112	東京・春・音楽祭実行委員会共催
6月20日	音楽会	チェロとハープのコンサート	平成館	245	ｻﾛﾝ･ﾄﾞ･ｿﾈｯﾄ共催
7月4日	音楽会	長唄　三味線三昧	平成館大講堂	477 (2回)	音楽の花束共催
7月11日	イベント	納涼東博寄席	平成館大講堂	378	
8月4日	音楽会	夏休み子ども音楽会	東京文化会館ほか	279	平常展無料入館の協力
8月8日	音楽会	ファミリーコンサート	平成館大講堂	約500 (2回)	東京ｸﾗﾘﾈｯﾄ･ｸﾜｲﾔｰ共催 上野のれん会協力
9月23日	音楽会	二胡コンサート	平成館大講堂	363	台東区芸術文化財団 共催
9月26日	音楽会	テノールと尺八のコンサート	平成館	171	ｻﾛﾝ･ﾄﾞ･ｿﾈｯﾄ共同主催
10月3日	普及 イベント	留学生の日	本館ほか	1065	㈱東京美術協賛
10月3日	ワーク ショップ	デザイン学科ワークショップ 竹のドームをみんなで作る	柳瀬荘	22	日本大学芸術学部共催
10月7日～31日	展示会	美術学科絵画コース教職員作品展	柳瀬荘	506	日大学芸術学部共催
10月17日	ワーク ショップ	写真学科ワークショップ 光で絵を描く	柳瀬荘	10	日大学芸術学部共催
10月24日	ワーク ショップ	美術学科ワークショップ 柳瀬荘Tシャツ工房	柳瀬荘	15	日本大学芸術学部共催
11月4日～28日	展示会	美術学科彫刻コース教職員作品展	柳瀬荘	711	日本大学芸術学部共催
11月7日	ワーク ショップ	美術学科ワークショップ 穴・Holeを空間に出現させる	柳瀬荘	4	日本大学芸術学部共催
12月19日	音楽会	ピアノと二十弦箏のコンサート	平成館	243	ｻﾛﾝ･ﾄﾞ･ｿﾈｯﾄ共同主催
23年1月15日	イベント	新春東博寄席	平成館大講堂	349	

【京都国立博物館】

1) 会場提供　34件

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者（人）	備考
4月2日	研修	研修の開催	研修室	20	装こう師連盟
4月16日	合同講義	合同講義の開催	研修室	25	NHK文化センター大阪教室
4月21日	茶席	ふれあい茶会	茶室	100	岡田保子
4月25日	講演会	等伯展関連講座	研修室	50	JR東海京都奈良近江文化情報事務局
4月28日	研修	研修の開催	茶室	20	赤目自然農塾
5月8日	研修	研修の開催	研修室	20	装こう師連盟
7月8日	研修	研修の開催	研修室	15	装こう師連盟
7月9日	研修	研修の開催	研修室	15	装こう師連盟
7月10日	研修	研修の開催	研修室	15	装こう師連盟
7月19日	茶席	お茶会	茶室	8	山口顕秀
8月22日	茶席	夏のお茶事	茶室	17	田口葉子
8月26日	研修	研修の開催	会議室	20	清風会
8月28日	茶席	茶会	茶室	20	山田幸子
9月25日	研修	研修の開催	研修室及び会議室	15	装こう師連盟
10月11日	茶席	茶会、歌会、書華展	茶室	70	西島真森
10月16日	研修	研修の開催	研修室及び会議室	15	装こう師連盟

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者（人）	備考
10月17日	茶席	お茶事	茶室	6	南坊流　中野宗淳
10月30日	茶席	個人撮影会	茶室	8	森野祐子
11月3日	茶席	個人撮影会	茶室	7	川部有紀
11月7日	茶席	茶会	茶室	15	篠塚直子
11月8日	車両の積み込み	車両の積み込み	駐車場	20	ラリーニッポン
11月13日	研修	研修の開催	研修室	15	装こう師連盟
11月14日	茶席	茶会	茶室	20	吉田怜子
11月19日	研修	研修の開催	研修室	4	清風会
11月20日	茶席	茶会	茶室	20	篠塚直子
11月21日	茶席	茶会	茶室	4	菊池原節子
1月9日	茶席	茶会	茶室	30	南坊流　中野宗淳
1月10日	茶席	茶会	茶室	30	南坊流　中野宗淳
2月9日	茶席	高校生伝統文化はぐくみ事業	茶室	33	府立京都すばる高等学校
2月10日	茶席	個人撮影会	茶室	5	北野春菜
2月20日	茶席	卒業記念茶会	茶室	30	林孝哉
3月11日	研修	研修の開催	研修室	15	装こう師連盟
3月12日	研修	研修の開催	研修室	15	装こう師連盟
3月27日	茶席	個人撮影会	茶室	7	早川千夏

2)　館主催・協力イベント　　6件

期間	種類	タイトル	会場	出席者（人）	備考
4月30日	落語	京都・らくご博物館（春） ～新緑寄席～	ハイアット・リージェンシー京都 ドローイングルーム	187	米朝事務所共催
7月30日、8月6日	上映会	「雨月物語」映画鑑賞会	庭園	317	
10月15日	音楽会	自転車発電エコライブ	庭園	約100	自転車活用推進研究会（後援）
8月27日	落語	京都・らくご博物館（夏） ～納涼寄席～	ハイアット・リージェンシー京都 ドローイングルーム	174	米朝事務所共催
10月22日	落語	京都・らくご博物館（秋） ～紅葉寄席～	同上	148	米朝事務所共催
3月19日	音楽会	音燈華～おんとうげ～	庭園	187	京阪電気鉄道株式会社 特別協賛

【奈良国立博物館】

1) 会場提供　　36件

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者（人）	備考
4月8日	講義	「大遣唐使展」鑑賞のための講義	講堂	20	NHK文化センター
4月11日	講義	「大遣唐使展」鑑賞のための講義	講堂	90	丸八会
4月25日	講演	いにしえの奈良八重桜、再発見の集い	講堂	200	いにしえの奈良八重桜、再発見の集い実行委員会
5月16日	公演	和歌劇「ヌカタ」公演	講堂	180	（株）うたまくら
5月21日	研究会	「診断・メンテナンス技術に関する研究会」	講堂	20	川合忠雄
5月25日	講義	「大遣唐使展」鑑賞のための講義	講堂	150	（株)JRコミュニケーションズ
5月27日	講義	「大遣唐使展」鑑賞のための講義	講堂	40	朝日カルチャーセンター
6月2日	講義	「大遣唐使展」鑑賞のための講義	講堂	150	（株)JRコミュニケーションズ
6月4日	講義	「大遣唐使展」鑑賞のための講義	講堂	45	浜松市美術館友の会
6月8日～9日	研究集会	全国友の会近畿部高年の集まり	講堂	200	奈良友の会
6月9日	講義	「大遣唐使展」鑑賞のための講義	会議室	25	NPO法人 檜の会
6月10日	講義	「大遣唐使展」鑑賞のための講義	講堂	90	（財）京都SKYセンター
6月15日	講義	「大遣唐使展」鑑賞のための講義	講堂	45	NHK文化センター
8月27日	研修	奈良市教育委員会主催奈良市教職員研修講座	講堂	180	奈良市教育センター準備室
8月29日	観光 イベント	２０１０バサラ祭りのメイン会場として、演舞・コンサートを実施	本館 西側敷地	―	バサラ祭実行委員会
9月4日	講義	「ならの仏たち」の講義	講堂	50	大阪よみうり文化センター
9月4日	観光 イベント	「秦　基博」　TALK&LIVE	本館 西側敷地	360	奈良市平城遷都1300年記念市民連携企画実行委員会
11月6日	講義	「第62回正倉院展」鑑賞のための講義	会議室	25	NPO法人 檜の会
10月23日 ～11月11日	茶会	野点の茶会	西新館 ピロティー	18,848	奈良国立博物館特別支援会員結の会
同上	キャンペーン	「奈良のうまいもの」紹介パネル展示	地下回廊	―	奈良県農林部マーケティング課
同上	休憩所	季節の土産物販売	新館西側 敷地	―	株式会社ワールドヘリテージ
同上	休憩所	休憩所及び甘味の販売	同上	―	株式会社 鶴屋吉信
同上	休憩所	休憩所及び喫茶の販売	同上	―	有限会社日本クリーンシステムズ
同上	キャンペーン	「奈良のうまいもの」販売・PR	同上	―	奈良県農林部マーケティング課
同上	キャンペーン	奈良県特産品の物販	同上	―	校倉な会
同上	キャンペーン	記念切手の販売	同上	―	郵政事業株式会社
12月1日	講義	「青丹よし奈良講座」の講義	講堂	35	NPO 法人 エルダーホステル協会
12月16日	講義	「おん祭と春日信仰の美術展」鑑賞のための講義	講堂	30	朝日カルチャーセンター
1月31日	講義	幼稚園児を対象としたお話	講堂	150	奈良市立六条幼稚園
2月16日	研修	真言宗豊山派布教研究所文化財研修	講堂	10	真言宗豊山派教化センター
2月17日	講義	近畿しんきん経営大学研修	講堂	4	奈良中央信用金庫
3月4日	講義	お水取り展鑑賞のための講義	講堂	17	NHK文化センター

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者（人）	備考
3月5日	講義	知れば知るほど奈良はおもしろいツアー	講堂	60	(社)平城遷都1300年記念事業協会
3月15日	講義	阪神ダイワオーナーズレディース会	講堂	80	株式会社　信和エージェンシー　ツーリスト部
3月19日	映画上映	なら国際映画祭NARAtive2010上映会	講堂		NPO法人なら国際映画祭実行委員会
3月26日	講義	美術史学会西支部大会	講堂	120	美術史学会西支部大会事務局

2）館主催・協力イベント　38件

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者（人）	備考
4月6日 4月7日	鑑賞会	タクシー乗務員・ホテル関係者特別鑑賞会	講堂 展示室	200	
4月8日	鑑賞会	賛助会員特別鑑賞会	同上	38	
4月9日	トークイベント	「大仏開眼（前編）」　上映 NHK古代史ドラマスペシャル「大仏開眼」 ふれあいトーク	講堂	140	主催：NHK奈良放送局
4月17日	トークイベント	「大遣唐使展の楽しみ方」 はな（モデル）、内藤栄（奈良国立博物館学芸部長補佐）によるトークイベント	講堂	180	
4月23日	鑑賞会	ジュニア記者クラブ ～高校生のための特別内覧会	講堂、東新館、 なら仏像館	15	主催：NHK奈良放送局
4月29日	講演会	光明皇后1250年大遠忌記念講演 「光明皇后を慕う」	講堂	150	主催：法華寺 奈良国立博物館
5月15日	講演会	特別講演会「遣唐使の時代―倭から日本へ―」 東野治之（奈良大学教授）	奈良県新公会堂 能楽ホール	316	
6月5日	シンポジウム	「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」 講師：ナンシー・S・スタインハルト（米国 ペンシルバニア大学教授）、板倉聖哲（東京大学東洋文化研究所准教授）、鈴木喜博（奈良国立博物館学芸部上席研究員）、吉澤悟（奈良国立博物館学芸部教育室長）	講堂	148	
6月6日	トークイベント	「大遣唐使展で仏像に会おう！」 仏像ガール（仏像ナビゲーター・奈良国立博物館文化大使）、西山厚（奈良国立博物館学芸部長）	講堂	180	
4月3日 ～6月20日	展示	「海彼」 「大遣唐使展」関連の映像展示	地下回廊	―	協力：NHK大阪放送局
4月3日 ～6月20日	展示	「吉備大臣入唐絵巻」 高精細ディジタル画像による展示	地下回廊	―	協力：大日本印刷 シャープ
4月毎月曜日 5月2日 5月5日	体験イベント	「奈良生まれのブロックおもちゃで遊ぼう！」 「大遣唐使展」オリジナルモデルの組み立てを体験	地下回廊	―	協力：ヨシリツ（株）
7月17日 ～9月26日	観光イベント	ライトアッププロムナード・なら	なら仏像館 外観	―	主催：ライトアッププロムナード・なら実行委員会
7月28日	鑑賞会	賛助会員特別鑑賞会	講堂 展示室	36	7月28日
7月29日､8月3日	鑑賞会	タクシー乗務員・ホテル関係者特別鑑賞会	同上	200	
7月21日 ～8月29日	展示	「子供絵画館 in NARA」 ふるさとのお盆の思い出」絵画コンクール入賞作品展覧会	地下回廊	―	主催：日本香堂 後援：朝日学生新聞社
8月1日	落語	「まほろば寄席－奈良国立博物館落語シリーズ第10回－」 月亭　八天、桂　都んぼ,笑福亭喬介、桂 小春團治、による落語会	講堂	167	
8月28日	映画祭	「なら国際映画祭２０１０」 Roger Hsiao監督作品「鑑真大和尚」上映	講堂	120	主催：NPO法人実行委員会
7月31日 ～8月4日	観光イベント	「全国光とあかり祭」 全国光とあかり祭会場として光のｵﾌﾞｼﾞｪ等を配置	なら仏像館 西側広場	―	主催：全国光とあかり祭実行委員会
8月5日～14日	観光イベント	「なら燈花会」 なら燈花会会場としてｶｯﾌﾟ、ｵﾌﾞｼﾞｪ等の配置	新館周辺	―	主催：なら燈花会の会
9月6日	研修会	セクシュアル・ハラスメント研修会 「職場におけるセクシュアル・ハラスメントをなくすには？」	講堂	43	
9月8日 9月15日	特別公開	「文化財保存修理所特別公開」 「仏像修理100年」関連イベントとして、普段は公開していない修理所を当館研究員の解説付きで見学	講堂 修理所	245	
10月24日	シンポジウム	正倉院展学術シンポジウム 「正倉院宝物はどこでつくられたか」	奈良県文化会館 小ホール	186	
10月25日 10月26日	鑑賞会	タクシー乗務員・ホテル関係者特別鑑賞会	講堂 展示室	261	
10月26日	観光イベント	「柿の日」に因み、奈良県特産物である柿を配布し「奈良の柿」をPR	新館前 広場		主催：奈良県農林部 奈良県農業協同組合
10月27日	鑑賞会	賛助会員特別鑑賞会	講堂、展示室	61	
10月16日 ～11月15日	観光イベント	「あるくん奈良スタンプラリー」 奈良町を巡るスタンプラリー	なら仏像館 観覧券売場前	―	主催：はじまりは正倉院展実行委員会
10月23日 ～11月11日	展示	「いけばな展示」 法華寺小池御流のいけばな展示	西新館 1階ロビー	―	
10月23日 ～11月11日	展示	正倉院展作文コンクール入賞作品展示	地下回廊	―	主催：奈良国立博物館 読売新聞社
11月3日	鑑賞会	第62回正倉院展　親子鑑賞会 小学生とその保護者を対象に正倉院展の見所を解説。展覧会を自由観覧。 講師：西山　厚　（奈良国立博物館学芸部長）	講堂	174	
10月23日 ～11月11日	展示	NHK日曜美術館で紹介した正倉院宝物の映像放映	西新館 ピロティー		
1月10日	公演	特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」関連イベント「金春穂高　能を語る」	講堂	143	

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者（人）	備考
1月29日	落語	「まほろば寄席－奈良国立博物館落語シリーズ第11回－」 桂　都丸、林家　染左、笑福亭　岐代松、桂 小春團治による落語会	講堂	165	
2月8日 ～2月14日	観光 イベント	なら瑠璃絵の会場として、東新館北側壁面にプロジェクターによる画像を投影	東新館 北側壁面	―	主催：なら瑠璃絵実行委員会
2月6日	講演 体験	お水取り講話と粥の会	講堂、展示室、茶室控室、二月堂	35	
2月9日	特別公開	「文化財保存修理所特別公開」 普段は公開していない修理所を当館研究員の解説付きで見学	講堂 修理所	第1回　34 第2回　36 第3回　38 計108	
3月1日	講堂	奈良モニターツアー解説	講堂 展示室	22	主催：阪急交通社
3月3日	講演 体験	お水取り展鑑賞とお松明	講堂、展示室、東大寺本坊、二月堂	131	主催：奈良国立博物館特別支援会員　結の会

【九州国立博物館】

1) 会場提供　　43件

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者（人）	備考
4月4日	シンポジウム	龍馬ウオークｉｎ太宰府（シンポジウム）	ミュージアムホール	270	全国龍馬社中／（社）日本ウオーキング協会／（太宰府市商工会）
4月8日～25日	展示	上海万博パネル展	エントランス	40,700	中華人民共和国駐福岡総領事館
4月13日～25日	展示	福岡新聞学校プロジェクト	エントランス	32,900	福岡新聞学校プロジェクト
5月1日～9日	展示	博多の匠工芸展	エントランス	34,300	博多伝統職の会
5月2日～5日	イベント	博多の匠工芸展ワークショップ	研修室	50	博多伝統職の会
5月18日～23日	展示	「生活の中のデザイン」KCDA会員選抜展	エントランス	21,700	九州クラフトデザイン協(KCDA)
5月21日	音楽会	蔚山（ウルサン）男性合唱団　日本招待演奏会	ミュージアムホール	150	JTS（韓国旅行会社）
6月1日～6日	展示	アボリジニアート展	エントランス	22,200	オーストラリア総領事館
6月5日・6日	講演会	アボリジニアート特別講演会　講師：内田真弓	研修室	70	在福岡オーストラリア総領事館
6月8日～13日	展示	大竹美喜書道展『開』	エントランス	28,100	甘木歴史資料館
6月13日	展示	大竹美喜書道展『開』 書のデモンストレーション	エントランス	100	甘木歴史資料館
8月21日	イベント	エレキット夏休み工作教室 in 太宰府 2010	研修室	60	（株）イーケイジャパン
9月4日	公演	京築神楽　九州国立博物館公演	ミュージアムホール	550	京築連帯アメニティ都市圏推進会議／京築神楽の里づくり推進会議
9月9日	イベント	第1982回西日本宝くじ抽せん会	ミュージアムホール	130	(株)みずほ銀行宝くじ部
9月19日	音楽会	「吹奏楽の祭典」	屋外	778	福岡吹奏楽連盟（九州吹奏楽連盟福岡支部）
9月20日	展示	ソープカービング展示・体験	研修室	75	カービングアトリエ ケ、ベッラ
9月22日～24日	展示	ソープカービング展示・体験	研修室	225	カービングアトリエ ケ、ベッラ
9月25日	イベント	第5回 太宰府古都の光	屋外	100	太宰府市ブランド創造協議会
9月25日	イベント	太宰府古都の光関連イベント 浪漫飛行～In The Sky～	エントランス／ミュージアムホール／屋外	300	太宰府市ブランド創造協議会
10月9日	音楽会	正倉院展の楽しみ方 ～まほろばの集いと音楽の調べ in 福岡～	ミュージアムホール	200	読売新聞社／NHK福岡放送局
10月9日～11日	イベント	開館5周年協賛　出前温泉「足湯」 ～お！館外にもあった 至福の時～	屋外	458	福岡県観光温泉地協会
11月3日	上映会	映画「Tchindon ちんどん」上映会	ミュージアムホール	122	第18回ふくおか県民文化祭2010映画「Tchindon ちんどん」上映実行委員会／ふくおか県民文化祭福岡県実行委員会／福岡県／福岡県文化団体連合会／福岡県教育委員会／(財)自治総合センター
11月6日	イベント	韓国舞踊の披露	屋外	80	韓国舞踊研究会／国際交流伽耶舞楽団
11月7日	展示	「いいな、いい歯。」週間普及啓発事業	屋外	2,000	(社)筑紫歯科医師会
11月9日～14日	展示	第32回読売学生書展（展示）	エントランス	24,799	読売新聞西部本社
11月13日	イベント	アサヒ緑健スポーツメセナ　第8回ふれあい健康ウォーク	屋外	500	西日本新聞社
11月14日	展示	第32回読売学生書展（書道パフォーマンス）	エントランス	180	読売新聞西部本社
11月14日	イベント	第32回読売学生書展（表彰式）	ミュージアムホール	380	読売新聞西部本社
11月21日	イベント	太宰府茶道文化連盟結成記念　第1回太宰府市民茶会	茶室／研修室	150	太宰府茶道文化連盟
11月23日～28日	展示	みかわち焼展　（展示・販売）	ミュージアムホール／エントランス	3,495	三川内陶磁器工業協同組合
11月23日～28日	イベント	みかわち焼展　（透かし彫り・絵付け無料体験）	研修室	243	三川内陶磁器工業協同組合
11月30日～12月5日	展示	西日本能面研究会第16回新作能面展	研修室	708	西日本能面研究会
12月3日	音楽会	太宰府市小学校音楽会	ミュージアムホール	679	太宰府市教育委員会／太宰府市小学校音楽会実行委員会
12月5日	イベント	キャンパスフェスタ'10	ミュージアムホール／エントランス	2,533	太宰府キャンパスネットワーク会議
12月7日～12日	展示	鞠智城ブース展示	エントランス	10,200	熊本県／熊本県教育委員会
12月19日	講座	萩尾望都の世界―文学とアート、そして共生するジャンル	ミュージアムホール	210	筑紫女学園大学英語学科
23年2月22日	展示	第5回福岡県景観大会 「景観文化展作品等展示」	エントランス	8,700	福岡県／福岡県美しいまちづくり協議会
23年2月26日	イベント	第5回福岡県景観大会 「表彰式」「まちづくり団体活動発表会」	ミュージアムホール	200	福岡県／福岡県美しいまちづくり協議会
23年3月8日	展示・ワークショップ	博多織プロモーション計画3 展示会・ワークショップ「博多織に触れよう（仮称）」	エントランス／研修室	10,261	九州産業大学芸術学部

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者（人）	備考
23年3月13日	講演会	博多織プロモーション計画3 講演会「献上博多織の技と心（仮題）」	ミュージアムホール	100	九州産業大学芸術学部
23年3月19日	コンサート	うたで結ぶ　太宰府～鶴岡コンサート （関雅子）	ミュージアムホール	250	九州国立博物館振興財団
23年3月26日	イベント	九博を愛する会　米つくり隊「唐臼式もちつき」	屋外	100	九州国立博物館を愛する会
23年3月26日	イベント	日韓交流茶会	エントランス	350	九州国立博物館振興財団／傳統禮節振興会

2) 館主催・協力イベント　86件

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者（人）	備考
4月16日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	110	九州国立博物館／福岡女子短大
4月17日	音楽会	第71回 きゅーはくミュージアムコンサート ～ヴェルサイユのしらべ～	ミュージアムホール	250	九州国立博物館
4月18日	シンポジウム	シンポジウム　文化遺産をもっと知ろう　訪問しよう	ミュージアムホール	―	NPO法人世界遺産ネットワーク
4月23日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	100	九州国立博物館／福岡女子短大
4月27日～5月5日	展示	ボランティア企画イベント　昭和の日 「懐かしいＳＬ機関車と昔のカメラ展」	エントランス	35,600	九州国立博物館ボランティア
4月29日	音楽会	弦楽合奏団ムジーク・ルンデ　春のコンサート	ミュージアムホール	200	弦楽合奏団「ムジーク・ルンデ」
5月14日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	150	九州国立博物館／福岡女子短大
5月15日	ワークショップ	第1回 ガムランワークショップ	ミュージアムホール	15	九州国立博物館
5月16日	落語	第15回 九博朝日寄席 「藤兵衛、喜多八　二人会」	ミュージアムホール	231	九州国立博物館／朝日新聞社
5月23日	音楽会	第72回 きゅーはくミュージアムコンサート ～パリの街角～	エントランス	210	九州国立博物館
5月28日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	110	九州国立博物館／福岡女子短大
6月1日	トークショー	アジア代表日本2010 田嶋幸三氏×日比野克彦氏トークショー	エントランス	100	「アジア代表日本2010」実行委員会
6月1日～7月11日	展示	アジア代表日本2010 ASIAN MATCH FLAG PROJECT（マッチフラッグの上空展示）	エントランス	86,000	「アジア代表日本2010」実行委員会
6月1日～18日	展示	アジア代表日本2010 日本サッカーミュージアム所蔵ペナント展	ミュージアムホール	27,700	「アジア代表日本2010」実行委員会
6月11日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	160	九州国立博物館／福岡女子短大
6月12日	音楽会	第73回 きゅーはくミュージアムコンサート ～古楽器による太陽王の時代の音楽～	エントランス	230	九州国立博物館
6月19日	ワークショップ	第2回 ガムランワークショップ	特別展示室前スペース	50	九州国立博物館
6月25日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	80	九州国立博物館／福岡女子短大
7月6日～11日	イベント	ボランティア企画イベント　七夕	エントランス	―	九州国立博物館ボランティア
7月11日	音楽会	太宰府市民吹奏楽団　第6回まほろばコンサート	ミュージアムホール	460	太宰府市民吹奏楽団／九州国立博物館
7月13日～25日	展示	筑豊の近代化遺産展	エントランス	25,000	筑豊文化財行政連絡協議会
7月16日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	80	九州国立博物館／福岡女子短大
7月17日	ワークショップ	第3回 ガムランワークショップ	ミュージアムホール	12	九州国立博物館
7月23日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	70	九州国立博物館／福岡女子短大
7月24日	音楽会	第74回 きゅーはくミュージアムコンサート ～大草原に響く馬頭琴の調べ～	ミュージアムホール	140	九州国立博物館
7月27日～8月1日	展示	～環（わ）～いのちのたび博物館・九州国立博物館	エントランス	12,500	九州国立博物館／北九州市立自然史・歴史博物館
8月3日・4日	ワークショップ	ハーリー船をつくってみよう	ミュージアムホール	50	九州国立博物館
8月6日	ワークショップ	ボランティアワークショップ「木目込みまりづくり」	ミュージアムホール	24	九州国立博物館ボランティア
8月7日・8日	イベント	九博 こども向け夏休みイベント 「いこうよ！あじっぱ夏祭り２０１０」	ミュージアムホール／エントランス	360	九州国立博物館
8月10日～27日	展示	バードライフ・アジア主催巡回写真展 「藤原幸一・観光写真セレクション」地球の声がきこえる	エントランス	44,100	NPO法人バードライフ・アジア
8月13日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	70	九州国立博物館／福岡女子短大
8月17日	ワークショップ	ボランティアワークショップ「ハニワの色付け体験」	ミュージアムホール	130	九州国立博物館ボランティア
8月21日・22日	シンポジウム	平成22年度文化庁美術館・博物館活動基盤整備支援事業 公開シンポジウム「市民と共に ミュージアムIPM」	ミュージアムホール	236	九州国立博物館
8月25日	イベント	飾り山神事「御神入れ（ごしんいれ）」	エントランス	30	西日本新聞社
8月27日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	70	九州国立博物館／福岡女子短大
8月28日・29日	イベント	吉野ヶ里Days　in　九博	ミュージアムホール	1,314	佐賀県教育委員会／(財)佐賀県芸術文化育成基金／国営吉野ヶ里歴史公園事務所／(財)公園緑地管理財団吉野ヶ里公園管理センター
8月28日	音楽会	第75回 きゅーはくミュージアムコンサート ～音で旅する世界旅行～	エントランス	240	九州国立博物館
9月5日	イベント	つくし御当地検定 ～九州国立博物館と４市１町の魅力再発見～	ミュージアムホール／研修室	150	(社)つくし青年会議所
9月12日	落語	第16回 九博朝日寄席 「鯉昇の落語、三三の落語をきく九月」	ミュージアムホール	215	九州国立博物館／朝日新聞社
9月17日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	60	九州国立博物館／福岡女子短大
9月18日	音楽会	第76回 きゅーはくミュージアムコンサート ～情熱の秋～	エントランス	150	九州国立博物館
10月5日～24日	展示	開館5周年記念イベント「パネル展 九博のあゆみ」	エントランス	57,600	九州国立博物館
10月8日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	50	九州国立博物館／福岡女子短大

期間	種類	イベント等の概要	会場	出席者（人）	備考
10月9日～17日、23日・24日、30日・31日	イベント	開館5周年記念イベント「九博大茶会」	茶室／エントランス	1,962	九州国立博物館
10月11日	音楽会	第77回 きゅーはくミュージアムコンサート 開館5周年記念 博多の伝統芸能～博多芸妓の世界～	ミュージアムホール	300	九州国立博物館
10月15日～17日	イベント	開館5周年記念イベント「九州人形浄瑠璃フェスティバル」	ミュージアムホール	671	九州国立博物館
10月15日～24日	イベント	第5回九州地域ブランドフォーラム 九州郷土品祭り	エントランス／屋外	30,000	日本イベントプロデュース協会九州本部
10月23日	ワークショップ	第4回 ガムランワークショップ	ミュージアムホール	50	九州国立博物館
10月28日～31日	展示	開館5周年記念ボランティア企画イベント 懐かしの蒸気機関車と昔のカメラ展（九博ボランティアフェスタ）	エントランス	12,700	九州国立博物館ボランティア
10月29日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	70	九州国立博物館／福岡女子短大
10月30日	講演会	九州歴史資料館開館記念特別展「大宰府―その栄華と軌跡―」 開催記念講演会「展望・大宰府研究 ―蔵司跡の調査から―」	ミュージアムホール	300	九州歴史資料館／九州国立博物館／（財）太宰府顕彰会／（財）古都大宰府保存協会
10月31日	イベント	開館5周年記念ボランティア企画イベント 「九博ボランティアフェスタ」	エントランス／研修室	3,000	九州国立博物館ボランティア
11月3日	イベント	入館者800万人達成記念セレモニー	エントランス	800	九州国立博物館
11月3日	イベント	第78回 きゅーはくミュージアムコンサート 懐かしき”ちんどん屋の世界”	エントランス	130	九州国立博物館
11月5日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	80	九州国立博物館／福岡女子短大
11月13日	ワークショップ	第5回 ガムランワークショップ	ミュージアムホール	5	九州国立博物館
11月16日～21日	展示	市民建築文化展・九州	エントランス／研修室／ミュージアムホール	24,201	市民建築文化展・九州実行委員会
11月18日	フォーラム	文化庁 第8回国際文化フォーラム 福岡セッション「文化観光の可能性」	ミュージアムホール	100	文化庁／福岡県／九州国立博物館／日経新聞社／ＮＨＫ／九州・沖縄文化力推進会議
11月26日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	140	九州国立博物館／福岡女子短大
12月10日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	50	九州国立博物館／福岡女子短大
12月11日	ワークショップ	第6回 ガムランワークショップ	ミュージアムホール	7	九州国立博物館
12月12日	音楽会	第79回 きゅーはくミュージアムコンサート ゴスペルコンサート@ミュージアム	エントランス	180	九州国立博物館
12月17日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	50	九州国立博物館／福岡女子短大
12月18日	シンポジウム	国際シンポジウム「契丹国（遼王朝）の美術と文化」	ミュージアムホール	117	九州国立博物館
23年1月3日	イベント	ボランティア企画「九博のお正月」	屋外／エントランス	700	九州国立博物館ボランティア
23年1月18日～30日	展示	ひなの国九州フェスタ2011	研修室	10,000	九州のひなまつり広域振興協議会
23年1月21日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	150	九州国立博物館／福岡女子短大
23年1月22日	ワークショップ	第7回 ガムランワークショップ	ミュージアムホール	5	九州国立博物館
23年1月23日	落語	第17回 九博朝日寄席 “新春” 菊之丞　菊六　兄弟会	ミュージアムホール	210	九州国立博物館／朝日新聞社
23年1月28日～2月6日	展示	東長寺五重塔展	ミュージアムホール	48,964	東長寺
23年1月28日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	150	九州国立博物館／福岡女子短大
23年1月29日	音楽会	第80回 きゅーはくミュージアムコンサート	エントランス	450	九州国立博物館
23年1月29日	イベント	第1回 親子で茶道体験	茶室	12	九州国立博物館
23年2月15日	展示	筑紫地区小学校児童画展（九博子どもフェスタ同時開催）	エントランス	13,600	九州国立博物館を愛する会／筑紫地区小学校図画工作教育研究会／九州国立博物館
23年2月19日	ワークショップ	第8回 ガムランワークショップ	ミュージアムホール	26	九州国立博物館
23年2月20日	イベント	九博子どもフェスタ「博物館って本当に楽しいよ！」	ミュージアムホール／エントランス／研修室	1,000	九州国立博物館／九州国立博物館を愛する会／九州国立博物館ボランティア
23年2月20日	イベント	第2回 親子で茶道体験	茶室	12	九州国立博物館
23年2月20日	音楽会	第81回 きゅーはくミュージアムコンサート	エントランス	300	九州国立博物館
23年2月22日	展示	平成22年度筑紫地区文化財写真展 「ちくし再発見～文化財の匠と技～」展	エントランス	21,700	筑紫地区社会教育振興協議会
23年2月25日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	70	九州国立博物館／福岡女子短大
23年3月11日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	50	九州国立博物館／福岡女子短大
23年3月20日	イベント	「九博活弁シアター」 明治～昭和を飾った大衆娯楽史	ミュージアムホール	300	九州国立博物館
23年3月21日	音楽会	第82回 きゅーはくミュージアムコンサート ～春うらら～	エントランス	260	九州国立博物館
23年3月21日	イベント	第3回 親子で茶道体験	茶室	16	九州国立博物館
23年3月25日	音楽会	きゅーはくカフェコンサート	エントランス	70	九州国立博物館／福岡女子短大
23年3月26日	イベント	第15回 九博デー 「筑紫ブランド座談会　私たちの地場産業は「歴史」だった!?」	ミュージアムホール	50	九州国立博物館を愛する会

2-(2)-⑩ 「留学生の日」

館名・日程	内容	アンケート結果概要
東京国立博物館 10月3日(日) 9：30～18：00	○参加者数　1,065人《714人》 留学生　977人《635人》 同伴者　88人《 79人》 (ALT 7人含む) ・平常展のみ無料観覧 ・博物館紹介「東京国立博物館へようこそ」 参加者数：90人（2回計） ・ボランティアによる茶会 参加者数：156人（4回計） ・ボランティアによる英語ガイド ・浮世絵ガイドツアー	・留学生アンケート回答者数433人 回収率　41% ・出身国：中国38%、台湾15%、韓国12%、ドイツ4%　他 ・認知経路：ポスター56%(ポスターと回答したうちの掲示場所： 学校198件、地下鉄18件)、友人から26%、学校関係者から12% ・参加したイベント：観覧のみ39%、お茶会23%、博物館紹介18%、浮世絵ガイドツアー13%、英語ガイド11%
京都国立博物館 10月23日(土) 9：30～18：00	○入館者　184人《136人》 留学生　182人《132人》 同伴者　2人《 4人》 ・お茶会(11時～14時) 110人《 72人》 ・特別展覧会「高僧と袈裟」無料観覧	・留学生アンケート回答者数71人 (回収率38%) ・初めて来館した人が88% ・23%がポスター･チラシで知り、62%が先生･友達から聞いて来た ・出身国：約8割がアジア ・約6割がお茶会に参加 ・お茶会の満足度　94% ・特別展の満足度　92% ・日本の歴史、美術に興味のある方が多い
奈良国立博物館 11月1日(月) 9：00～18：00 (正倉院展会期中のため9：00開館)	○入館者11,806人《13,334 人》 留学生　99人《　77人》 ・「正倉院展」(特別展)及び平常展の無料観覧	・アンケート実施せず
九州国立博物館 11月3日(水・祝) 9：30～17：00	○入館者数 文化交流展(平常展)1,464人《1,897人》 留学生　178人《316人》 ・平常展のみ無料観覧 ・映画「Tchindon（ちんどん)」上映会 ・きゅーはくミュージアムコンサート 懐かしき“ちんどん屋の世界”	・留学生アンケート回答者数5人 (回収率3%) ・出身国：ドイツ40%、中国20%、インド20%、インドネシア20% ・初めて来館した人　80% ・認知経路：友達から聞いた 60%、学校関係者から20% ・来館理由:日本文化をもっと知りたいから 40%、博物館を観察することが好きだから40% ・参加イベント：どれにも参加していない 40%、ちんどん（映画）20%、ちんどん（踊り）20% ・文化交流展満足度：100%(感想、ご意見より)

＊入館者数：《　》内は平成21年度

2-(3) 快適な観覧環境の提供

2-(3)-① 高齢者、障がい者等に配慮した設備等

平成23年3月31日現在

	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
障がい者用トイレ	9か所 （本館4、平成館2、東洋館1、法隆寺宝物館1、資料館1）	4か所 （特別展示館1、南門施設1（乳児ベッド併設）、屋外トイレ1、文化財保存修理所1	3か所 （東新館1、地下回廊2）	6 か所 （本体建物）
障がい者用エレベータ	8基 （本館2、平成館1、東洋館4、法隆寺宝物館1）	昇降装置1基 （管理棟1）	4基 （本館1、本館附属棟1、東新館1、西新館1）	2 基 （本体建物）
スロープ	4か所 （本館、東洋館、法隆寺宝物館、表慶館）	3か所 （南門施設1、本館1、文化財保存修理所1）	3か所 （本館1、本館附属棟1、西新館1）	—
ハンディキャップ優先駐車	2台	3台	—	3 台
車椅子	13台 （本館2台、東洋館1、平成館7、法隆寺宝物館1、表慶館1、正門1）	16台	10台	21 台
乳幼児用設備	○ベビーシート　12か所 ○ベビーチェア　9か所	○ベビーカー　6台 ○ベビーシート　6か所 ○チャイルドシート 2か所	○ベビーシート 2か所	○ベビーカー　5台 ○ベビーシート　15か所 ○ベビーチェア　6 か所
22年度整備事項	・東洋館にステップフロアの各床に停止するエレベーターを設置した。(平成24年以降開館) ・庭園の舗装を改良し、歩行や車椅子に配慮した。 ・本館13台、平成館4台の和便器を洋便器に変更した。			

2-(3)-② 音声ガイド実施状況

東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
・総合文化展 （ガイド端末）23年1月17日～4月17日 （～3/31）：2,217台 ・特別展 「細川家の至宝」 33,507台 ・特別展 「誕生！中国文明」 15,291台 ・特別展 「東大寺大仏」 46,596台 ・特別展 「仏教伝来の道 平山郁夫と文化財保護」 35,456台	・特別展 「長谷川等伯」 （日本語版・一般向け） 36,843台 ・特別展観 「上田秋成」 特集陳列 「新収品展」 （日本語版・一般向け） 1,493台 ・特別展 「高僧と袈裟」 （日本語版・一般向け） 1,927台 ・特別展 「筆墨精神」 特集陳列 「園田湖城」 （日本語版・一般向け） 5,734台 ・特別展 「法然」（会期は5月8日まで） （日本語版・一般向け） （～3/31）:1,671台	・特別展 「大遣唐使展」 （日本語版・一般向け） 27,110台 ・特別展 「第62回正倉院展」 （日本語版・一般向け） 40,960台 （英語版・一般向け） 250台 （日本語版・子供向け） 899台	・文化交流展示 8,587台 （英語版　1,627台） （中国語版　2,186台） （韓国語版　4,774台） ・特別展 「パリに咲いた古伊万里の華」 7,418台 ・特別展 「馬　アジアを駆けた二千年」 3,443台 ・特別展 「誕生！中国文明」 5,226台 ・特別展 「没後120年　ゴッホ展」 57,043台

3 我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

3-(1) 収蔵品等に関する調査研究成果の発信

3-(1)-① 学会、研究会等発表実績一覧

（後述の資料に記載） ◎共通資料c-③

3-(1)-② 論文等発表実績一覧

（後述の資料に記載） ◎共通資料c-④

3-(1)-③ 調査研究刊行物一覧

（後述の資料に記載） ◎共通資料c-⑤

3-(1)-④ シンポジウム開催実績一覧

平成23年3月31日現在

合計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
9件	1件	2件	2件	4件

【東京国立博物館】

○ワークショップ　東京国立博物館の臨床保存（科学研究費補助金（基盤（S）（平成20年～24年））「博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究」）

開 催 日　平成23年1月11日
開催場所　ルーブル美術館会議室
主　　催　東京国立博物館保存修復課、ルーブル美術館版画素描部門
参加人数　41人
事業内容　東京国立博物館が日常的に実践している臨床保存の理論と具体的な活動内容をルーブル美術館で働く保存修復家に紹介し、臨床保存の普及と内容的な深化を目指した討論を行った。討論の結果を、包括的保存システムの構築に反映させる予定である。

【京都国立博物館】

○文化財保護法60年記念事業　シンポジウム『美を伝える』京都国立博物館 文化財保存修理所三十年の歩み

開 催 日　5月26日
開催場所　京都テルサホール
主　　催　京都国立博物館文化財保存修理所設立三十周年記念シンポジウム実行委員会
参加人数　674人
事業内容　文化財保存修理所の設立30周年を記念し、文化財修理に関する講演の第一部と、実際に文化財を修理する現場からの報告の第二部からなるシンポジウムを開催した。

○国際シンポジウム『染織品にみる東アジア交流　―宋・元・明時代の中国とその周辺―』

開 催 日　11月13日
開催場所　国立京都国際会館　アネックスホール
主　　催　京都国立博物館
参加人数　213人
事業内容　特別展覧会「高僧と袈裟」開催を記念し、国内外の高名な研究者５名をお招きし、中世染織品の各国における研究現状を共有し、東アジア染織史の基準作を把握すべくディスカッションを行った。研究発表の第一部とパネル・ディスカッションの第二部からなる。

【奈良国立博物館】

○国際学術シンポジウム「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」

開 催 日　6月5日
開催場所　奈良国立博物館講堂
主　　催　奈良国立博物館
参加人数　150名
事業内容　特別展「平城遷都1300年記念　大遣唐使展」の開催を記念し、我が国の歴史上における遣唐使の意義につき、特に造形芸術の視点で議論を行った。第一部は当館研究員2名を含む研究者4名による研究発表を行い、第二部は右の4名に司会者を加えてのパネルディスカッションを行って、当該テーマについての議論を深めた。

○正倉院学術シンポジウム2010「正倉院宝物はどこで作られたか」

開 催 日　10月24日
開催場所　奈良県文化会館　小ホール
主　　催　奈良国立博物館
後　　援　読売新聞社
参加人数　184名
事業内容　正倉院宝物の製作地をテーマとして、舶載品と国産品の素材研究による製作地の考察や工芸技法に見られる国産品の特徴などを主題として開催した。第一部は当館研究員1名を含む研究者3名による研究発表を行い、第二部は右の3名のほか、中国考古学研究者及び司会者を加えてのパネルディスカッションを行って、当該テーマについての議論を深めた。

【九州国立博物館】

○特別展「馬　アジアを駆けた二千年」関連　シンポジウム「藤ノ木古墳の馬具」

開 催 日　7月18日
開催場所　九州国立博物館ミュージアムホール
主　　催　九州国立博物館
参加者数　113人
事業内容　今回の出品作品のうち最も注目され、古墳時代馬具の最高峰である奈良県藤ノ木古墳出土馬具を中心として、その精巧な技術を自然科学分析から明らかにし、製作地や時代背景について最新の考古学研究の成果が報告された。

○公開シンポジウム「市民と共に　ミュージアムＩＰＭ」

開 催 日　8月21日～22日
開催場所　九州国立博物館ミュージアムホール
主　　催　九州国立博物館（平成22年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業）
連携協力機関　福岡県立美術館、九州歴史資料館、太宰府市文化ふれあい館、筑紫野市歴史博物館、久留米大学比較文化研究所、

NPO法人文化財保存活用支援センター、NPO法人ミュージアムIPMサポートセンター
後　援　福岡県教育委員会、太宰府市、大野城市教育委員会、春日市教育委員会、那珂川町教育委員会、
九州文化財国際交流基金、九州国立博物館を愛する会、財団法人文化財虫害研究所、一般社団法人文化財保存修復学会、一般社団法人国宝修理装こう師連盟、西日本新聞社
参加者数　236人
事業内容　ミュージアムＩＰＭ（総合的有害生物管理）の重要性・必要性を広く社会に発信すると共に、市民活動の成果を照会し、その担い手である支援者からのメッセージを地域社会へ伝える。

○文化庁 第８回国際文化フォーラム福岡セッション「文化観光の可能性」
開 催 日　11月18日
開催場所　九州国立博物館ミュージアムホール
主　催　文化庁、福岡県、日本経済新聞社、ＮＨＫ、九州・沖縄文化力推進会議、九州国立博物館
参加者数　100人
事業内容　美術館・博物館・文化財、パフォーミングアーツ、祭り等の伝統文化やポップカルチャー等の現代文化、また、映画やドラマの舞台といった新たな文化資源を活用した観光促進方策について、関係分野の有識者による論議を行うことにより、観光振興に資する文化発信の在り方について考えるフォーラム。

○国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」
開 催 日　12月18日
開催場所　九州国立博物館ミュージアムホール
主　催　九州国立博物館
後　援　中華人民共和国駐福岡総領事館、（財）九州国立博物館振興財団、福岡県教育委員会、太宰府市、太宰府市教育委員会、
九州文化財国際交流基金
参加者数　117人
事業内容　遼王朝時代（916～1125年）の美術と文化に焦点を当てて、中国内蒙古自治区で相次ぐ王侯貴族の墓などに関する最新の研究成果や動向、またトルキ山遼墓から発掘された木製彩棺の保存修復作業について報告するシンポジウム。

3-(2) 海外研究者の招聘

3-(2)-① 研究交流実績一覧

（後述の資料に記載）　◎共通資料c-①

3-(3) 公私立博物館等への貸与の推進

3-(3)-① 公私立博物館等への収蔵品・寄託品貸与件数

平成23年3月31日現在

		国立博物館計			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
		計	国内	海外	計	国内	海外	計	国内	海外	計	国内	海外	計	国内	海外
貸与先件数		301	278	23	150	138	12	74	70	4	43	39	4	34	31	3
合　計		1,936	1,712	224	1,315	1,155	160	297	281	16	159	145	14	165	131	34
絵画		395	301	94	203	137	66	118	105	13	67	54	13	7	5	2
書跡		89	88	1	34	34	0	34	34	0	12	12	0	9	8	1
彫刻		198	186	12	125	116	9	14	13	1	54	53	1	5	4	1
建築		2	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
金工		100	78	22	76	63	13	9	7	2	6	6	0	9	2	7
刀剣		24	14	10	20	14	6				0	0	0	4	0	4
陶磁		117	103	14	93	80	13	13	13	0	0	0	0	11	10	1
漆工		92	83	9	48	44	4	31	31	0	5	5	0	8	3	5
染織		63	58	5	40	35	5	22	22	0	1	1	0	0	0	0
考古		350	330	20	207	199	8	20	20	0	14	14	0	109	97	12
民族資料		9	9	0	9	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
歴史資料		95	94	1	57	57	0	36	36	0	0	0	0	2	1	1
和書		4	4	0	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東洋	絵画	27	4	23	27	4	23									
	書跡	23	17	6	23	17	6									
	彫刻	9	2	7	9	2	7									
	金工	0	0	0	0	0	0									
	陶磁	91	91	0	91	91	0									
	漆工	2	2	0	2	2	0									
	染織	2	2	0	2	2	0									
	考古	53	53	0	53	53	0									
	民族	0	0	0	0	0	0									
法隆寺献納宝物		8	8	0	8	8	0									
黒田記念館収蔵品		183	183	0	183	183	0									

＊巡回展等で複数館に貸与する場合は、それぞれ館数と文化財件数をカウント。

付表・貸与件数の推移

		平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
貸与先件数		276	279	257	248	301
合　計		1,991	1,737	1,585	1,729	1,936
絵画		558	449	273	436	395
書跡		79	114	81	78	89
彫刻		79	127	168	124	198
建築		0	2	6	3	2
金工		143	113	110	98	100
刀剣		61	18	76	121	24
陶磁		223	206	100	103	117
漆工		94	52	91	92	92
染織		167	92	403	102	63
考古		260	275	183	414	350
民族資料		31	4	0	13	9
歴史資料		22	13	23	11	95
和書		30	15	12	12	4
東洋	絵画	12	18	21	23	27
	書跡	23	23	3	4	23
	彫刻	5	50	15	8	9
	金工	2	0	0	0	0
	陶磁	129	141	5	44	91
	漆工	8	0	2	0	2
	染織	5	0	0	0	2
	考古	58	22	12	21	53
	民族	0	0	0	0	0
法隆寺献納宝物		2	3	1	0	8
黒田記念館収蔵品		0	0	0	22	183

＊東京国立博物館は、列品管理規程による「旧東洋課所掌分」あり。

3-(3)-② 公私立博物館等への収蔵品・寄託品貸与先別件数

○収蔵品

平成23年3月31日現在

	国立博物館計		東京国立博物館		京都国立博物館		奈良国立博物館		九州国立博物館	
	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数
国内	205	1,282	129	1,087	44	142	22	38	10	15
国・国立	24	162	15	142	4	12	3	5	2	3
地方・公立	145	824	88	667	32	115	18	31	7	11
私立団体	36	296	26	278	8	15	1	2	1	1
海外	21	193	12	159	3	10	3	9	3	15

○寄託品

平成23年3月31日現在

	国立博物館計		東京国立博物館		京都国立博物館		奈良国立博物館		九州国立博物館	
	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数	貸与先件数	文化財件数
国内	127	430	30	68	46	139	27	107	24	116
国・国立	14	51	4	15	3	6	4	26	3	4
地方・公立	93	343	18	44	36	120	21	72	18	107
私立団体	20	36	8	9	7	13	2	9	3	5
海外	7	31	1	1	3	6	2	5	1	19

3-(3)-③ 海外への列品貸与

【東京国立博物館】　海外貸与先 12件　　海外貸与文化財 160件[うち寄託品 1件]

展覧会名称	申請者 【 会場 】	貸与期間	種別・員数（件）
文化庁海外展「日本の美 5000 年(Enduring Beauty: 5000 Years of Japanease Art)」	東京国立博物館、文化庁、トルコ共和国文化観光省【トプカプ宮殿博物館（トルコ共和国イスタンブール)】	平成 22 年 5 月 5 日～6 月 28 日	43 件 (絵画 14、彫刻 6、金工 4、刀剣 3、陶磁 5、漆工 3、染織 5、考古 3)
上海万国博覧会　万博博物館、都市足跡館展示	上海万博事務局、上海博物館【万博博物館・都市足跡館(中華人民共和国上海市)】	平成 22 年 5 月 1 日～11 月 15 日	53 件 (絵画 48、金工 1、陶磁 4)
文化庁海外展「アジアへの道」展	文化庁・ブリュッセル芸術センター【ブリュッセル芸術宮殿（ベルギー王国ブリュッセル市)】	平成 22 年 6 月 25 日～10 月 10 日	4 件 (金工 1、陶磁 2、考古 1)
「京都-東京―侍からマンガまで―」展	グリマルディ・フォーラム・モナコ【グリマルディ・フォーラム・モナコ　エスパス・ラベル（モナコ公国モナコ市)】	平成 22 年 7 月 14 日～9 月 12 日	5 件 (絵画 2、彫刻 3)
海外展　上海万博開催記念「千年丹青－日本・中国珍蔵唐宋元絵画精品展－」	東京国立博物館、上海博物館【上海博物館(中華人民共和国上海市)】	平成 22 年 9 月 28 日～11 月 23 日	東洋絵画 20
特別展「百済の冠」	国立公州博物館・2010 世界大百済典推進委員会【国立公州博物館(大韓民国公州市)】	平成 22 年 9 月 18 日～10 月 17 日	考古 3
海外展「高麗仏画大展」	大韓民国 国立中央博物館【国立中央博物館(大韓民国ソウル市)】	平成 22 年 10 月 12 日～11 月 21 日	5[1] (絵画 2、東洋絵画 3[1])
「南宋芸術文化展」	国立故宮博物院【国立故宮博物院(台湾台北市)】	平成 22 年 10 月 8 日～12 月 25 日	東洋書跡 6
「歴代沈壽官展」	朝日新聞社、歴代沈壽官展実行委員会【パリ・三越エトワール（フランス共和国パリ市)】	平成 22 年 10 月 5 日～12 月 11 日	陶磁 1
文化庁海外展「日本とタイ-ふたつの国の巧と美-」展	文化庁、タイ王国文化省芸術局、九州国立博物館・福岡県【バンコク国立博物館（タイ王国バンコク）】	平成 23 年 1 月 15 日～3 月 13 日	13 （金工 7、刀剣 3、陶磁 1、漆工 1、考古 1）
「東南アジア展示」（長期貸与）	大韓民国 国立中央博物館【国立中央博物館(大韓民国ソウル市)】	平成 22 年 2 月 1 日 ～平成 24 年 3 月 10 日	東洋彫刻 5
常設展示（長期貸与）	フランス国立ギメ美術館【フランス国立ギメ美術館（フランス共和国パリ市)】	平成 14 年 1 月 1 日 ～平成 23 年 12 月 31 日	東洋彫刻 2

【京都国立博物館】　海外貸与先 4件　　海外貸与文化財 16件[うち寄託品 6件]

展覧会名称	申請者 【 会場 】	貸与期間	種別・員数（件）
「南宋的藝術與文化特展」（仮称）	國立故宮博物院	平成 22 年 10 月 2 日 ～平成 23 年 1 月 18 日	絵画 2[1]
「京都ー東京、侍からマンガ」	グリマルディ・フォーラム・モナコ	平成 22 年 6 月 23 日～10 月 4 日	6 (絵画 3、彫刻 1、金工 2)
「千年丹青―日本・中国珍蔵唐宋元絵画精品展」	東京国立博物館・上海博物館【上海博物館】	平成 22 年 9 月 6 日～12 月 12 日	絵画 4[1]
「高麗仏画大展」（仮称）	韓国国立中央博物館	平成 22 年 9 月 13 日～12 月 9 日	絵画 4[4]

【奈良国立博物館】　海外貸与先 4件　　海外貸与文化財 14件[うち寄託品 5件]

展覧会名称	申請者 【 会場 】	貸与期間	種別・員数（件）
メトロポリタン美術館 「クビライ・カーンの世界：元王朝の中国美術」	メトロポリタン美術館	平成22年 9月10日 ～平成23年 1月 2日	絵画1[1]
東京国立博物館、上海博物館 「千年丹青－日本・中国珍蔵唐宋元絵画精品展」	東京国立博物館、上海博物館 【上海博物館】	平成22年 9月28日～11月23日	絵画2
韓国国立中央博物館「高麗仏画大展」	韓国国立中央博物館	平成22年10月12日～11月21日	絵画10[4]
バンコク国立博物館 文化庁主催「ふたつの国の巧みと美」	バンコク国立博物館	平成22年12月21日～４月上旬	彫刻1

【九州国立博物館】　海外貸与先 3件　　海外貸与文化財 34件[うち寄託品 19件]

展覧会名称	申請者 【 会場 】	貸与期間	種別・員数（件）
特別展「フビライ・カーンの世界－元代の中国美術」	メトロポリタン美術館	平成 22 年 8 月 20 日 ～平成 23 年 1 月 21 日	漆工 1
「千年丹青ー日本・中国珍蔵唐宋元絵画精品展ー」	上海博物館	平成 22 年 9 月 1 日～12 月 15 日	絵画 1
文化庁主催「ふたつの国の巧と美」展	文化庁・九州国立博物館・バンコク国立博物館	平成 22 年 12 月 10 日 ～平成 23 年 3 月 25 日	32 （絵画1、書跡1、彫刻1、金工7[7]、刀剣4 [3]、陶磁1 [1]、漆工4[1]、考古12[7]、歴史資料1）

3-(3)-④ 考古の相互貸借実績

【東京国立博物館】

貸与先名	貸与件数（件）	借用件数（件）
福岡市博物館	13	18
鹿児島県歴史資料センター黎明館	30	34

【奈良国立博物館】

貸与先名	貸与件数（件）	借用件数（件）
うきたむ風土記の丘考古資料館（山形県）	0	21
山形県立博物館（山形県）	1	0
南相馬市博物館（福島県）	139	2

3-(4) 公私立博物館等に対する援助・助言の推進

3-(4)-① 公私立博物館等に対する援助・助言

計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
319件	84件	123件	35件	77件

【東京国立博物館】84件

	機　関	内　容	期　間	担当者
1	東京国立近代美術館	東京国立近代美術館評議員（美術・工芸部門）	4月1日～23年3月31日	学芸企画部長　松本伸之
2	奈良県立美術館	特別展「花鳥画」中国・朝鮮部分監修	9月28日～11月14日	同上
3	新潟県立近代美術館	ユネスコ無形文化財遺産登録記念　重要無形文化財「小千谷縮・越後上布」展の展示・撤収指導	6月10日、6月28日	企画課特別展室主任研究員　小山弓弦葉
4	高野山　正智院	正智院所蔵染織（袈裟・打敷・幕等）の調査協力および調書作成	8月5日～7日	同上
5	京都染織文化協会	「染織祭」に使用された女性歴代服装資料の調査協力および調書作成	8月9日	同上
6	静岡県教育委員会	江川文庫西蔵文書記録等調査	11月27日～28日	同上
7	東京都江戸東京博物館	2011年大河ドラマ特別展「江　－姫たちの戦国－」展における展示・撤収指導	12月25日、23年1月27日	同上
8	松戸市教育委員会	松戸市小金東漸寺所蔵「二十五菩薩来迎図」の市指定にあたっての調査	11月16日	企画課特別展室主任研究員　沖松健次郎
9	国立民族学博物館	平成22年度「博物館学集中コース」見学研修講師	5月19日	企画課国際交流室長 鬼頭智美
10	ルーブル美術館	来館者数および来館者傾向と分析について	4月13日、5月21日、7月27日、10月15日、23年1月18日	企画課国際交流室研究員　遠藤楽子
11	ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館	日本の博物館･美術館来館者および非来館者の傾向について	23年1月13日	同上
12	根津美術館	特別展「南宋の青磁」特別講演会講師	11月6日	博物館教育課長 今井敦
13	フュージョン・ファイヴ協同組合	中国古陶磁研究調査に関する技術指導及び助言	23年1月5日～3月31日	同上
14	筑波大学	石井コレクション東洋陶磁の調査	23年1月19日	同上
15	長崎県立対馬歴史民俗資料館	宗家文庫資料絵図類等調査委員会委員	5月29日～30日、23年2月26日～27日	博物館教育課教育普及室長　伊藤信二
16	兵庫県立歴史博物館	教育普及事業の指導・助言	23年1月2日	博物館教育課ボランティア室長 鈴木みどり
17	韓国国立果川科学館	博物館におけるボランティア活動について､東京国立博物館の事例発表と指導・助言	9月3日	博物館教育課ボランティア室研究員　藤田千織
18	グラスゴー博物館群	グラスゴー博物館群所蔵1878年東京･グラスゴー交換品に関する調査	23年1月10日～11日	博物館情報課長　高橋祐次、企画課国際交流室研究員　遠藤楽子、列品管理課平常展調整室長　白井克也、列品管理課平常展調整室研究員　横山梓、調査研究課書跡・歴史室長　田良島哲
19	国立歴史民俗博物館	「武士とは何か」展示プロジェクト委員	4月1日～23年3月31日	博物館情報課長　高橋裕次
20	文化庁文化財部美術学芸課	第６回指定文化財（美術工芸品）企画・展示セミナーの講師	6月29日	博物館情報課情報管理室主任研究員　村田良二
21	永青文庫	収蔵品データベース構築に関する助言	7月28日	同上
22	文化庁	メディア芸術デジタルアーカイブ構築事業に関する助言	9月22日	同上
23	総務省	メタデータ情報研究会出席	11月11日	同上
24	文化庁	メディア芸術デジタルアーカイブ（メディアアート分野）構築事業　検討委員会 委員	12月17日、23年1月18日	博物館情報課情報管理室長　村田良二
25	日本活断層学会	日本活断層学会、「日本の活断層百景」の専門委員	4月～23年3月	博物館情報課情報管理室　アソシエイトフェロー　原田明夫
26	日本活断層学会	日本活断層学会企画「日本の活断層・フォトコンクール」実行委員	4月～23年3月	同上
27	東京大学総合博物館	ミュージアムにおける映像活用に関する研修「映像博物学の挑戦」への参加	11月8日～12日	同上
28	全国美術館会議	美術情報･資料の活用法－展覧会カタログからWebまで－(全国美術館会議　情報・資料研究部会企画セミナー）第1講「展覧会カタログ」講師	9月9日	博物館情報課情報資料室専門職員　住広昭子
29	スリランカ・シーギリヤ博物館	地域観光振興をテーマとした研修･国際協力機構(JICA)主催のプロジェクト	5月26日	広報室長　小林牧
30	トルコ共和国　トプカピ宮殿博物館	文化庁海外古美術展「日本の美　5000年」展の作品の輸送随伴、開梱、展示作業	4月23日～5月8日	上席研究員　池田　宏
31	春日大社	赤糸威鎧の修理、保存についての助言	4月1日～23年3月31日	同上
32	三井文庫記念美術館	特別展「徳川家康の遺愛品」展の展示	4月10日、5月17日、6月21日	同上
33	オーストラリア　ヴィクトリア州国立博物館(ウェイン・クロザース氏)	日本の武器武具などの展示、保存方法の指導助言	10月18日	同上
34	ポーランド　ヴロツワフ国立博物館(ドロタ・ルシ・ミエレツカ氏)	刀剣などの研究調査、展示の指導助言	11月22日	同上
35	文化庁	文化財買取協議員	12月9日	同上
36	文化庁	文化財の選定保存技術(第４専門調査会)指定会議の出席	6月25日	特任研究員　澤田むつ代
37	奈良文化財研究所	平成22年度埋蔵文化財担当者専門研修「有機質遺物の材質と保存―繊維―」にかかる講師	10月20日	同上
38	文化庁	文化審議会専門委員会(第１専門調査会)指定会議の出席	23年3月1日～3日	同上
39	厚木市史編集委員会	厚木市史編さん事業に関する調査･助言	5月9日、5月20日、8月29日、23年3月13日	特任研究員　望月幹夫
40	神奈川県教育委員会	神奈川県文化財保護審議委員会委員（考古分野担当）	5月25日、10月26日、23年2月8日	同上

	機　関	内　容	期　間	担当者
41	逗子市教育委員会・葉山町教育委員会	長柄桜山1号墳の発掘調査・整備に関する助言	8月5日、12月10日	同上
42	秦野市教育委員会	二子塚古墳の発掘調査に関する助言	11月16日	同上
43	厚木市教育委員会	あつぎの歴史-縄文・弥生時代編-（あつぎ協働大学における講演）	7月24日	同上
44	馬韓文化研究院・順天大学校博物館	日韓の円筒埴輪（海外著名学者招待講演会における講演）	9月7日	同上
45	東京文化財研究所	在外古美術品保存修復協力事業運営委員会	4月14日、5月26日、6月11日	学芸研究部長　島谷弘幸
46	九州国立博物館	平成22年度九州国立博物館文化財保存修復施設運営委員会	5月17日～18日	同上
47	京都国立博物館	第32回京都国立博物館文化財保存修復委員会の開催について	5月25日	同上
48	ふくやま書道美術館	特別展「王朝の名跡-三蹟を中心として」企画、作品選定など指導・助言。展示指導	7月、9月	同上
49	高梁市	高梁市市政アドバイザー	10月6日	同上
50	日本学術振興会	文部科学省委託生涯学習施策に関する調査研究博物館倫理規定第1回委員会	10月4日	同上
51	文化庁	「文化遺産オンライン」の運営に関する検討会委員	5月7日	列品管理課登録室長 田良島哲
52	国立歴史民俗博物館 （国立歴史民俗博物館考古研究系准教授　上野祥史）	人間文化研究機構連携展示「アジアの境界を越えて」の企画・展示協力	7月13日～9月12日	列品管理課列品情報整備室長 古谷毅
53	国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館 人間文化研究機構連携展示「アジアの境界を越えて」におけるギャラリートーク	8月21日、9月4日	同上
54	天理大学付属天理参考館 （天理大学付属天理参考館考古美術室学芸員　藤原郁代）	創立80周年記念特別展「よみがえるヤマトの王墓　―東大寺山古墳と謎の鉄刀―」の企画・展示協力	9月22日～11月23日	同上
55	出光美術館	水曜講座「これであなたも美人になれる」講演会講師	8月25日	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
56	浦安市当代島公民館	「北斎の生涯と作品」講演会講師	8月28日	同上
57	日本郵政株式会社　郵政資料館	郵政資料館の所蔵資料を活用した郵政の歴史･文化に関する研究会	10月13日	調査研究課書跡・歴史室長 田良島哲
58	文化庁	「全国の博物館・美術館等における収蔵品デジタル・アーカイブ化に関する調査・研究」選定委員	書類審査のみ	同上
59	東京文化財研究所	在外古美術品保存修復協力事業運営委員会	4月14日、6月11日	調査研究課工芸・考古室長 竹内奈美子
60	輪王寺	寺内文化財に関する調査・指導	5月11日	同上
61	徳川美術館	国宝「初音の調度」の総合的研究（科学研究費補助金〔基盤研究C〕）に係る調査	6月23日～24日、11月14日～15日	調査研究課工芸・考古室長 竹内奈美子
62	トルコ共和国　トプカピ宮殿博物館	文化庁海外古美術展「日本の美　5000年」展の作品の管理・撤収作業・輸送随伴	6月16日～7月4日	調査研究課工芸・考古室研究員 品川欣也
63	伊豆の国市教育委員会	大仁町史編さん事業に関する調査･助言	10月3日	同上
64	九州国立博物館	黄檗宗寺院の文化財調査	5月20日	調査研究課東洋室長　浅見龍介
65	文化庁	買取評価会	23年1月13日	同上
66	九州国立博物館	特別展「誕生！中国文明」展示指導	9月26日～10月5日	調査研究課東洋室研究員 川村佳男
67	奈良国立博物館	特別展「誕生！中国文明」展示指導	23年3月30日～4月1日	同上
68	碌山美術館	作品の展示・保存環境についての調査・指導	21年8月13日～22年7月12日	保存修復課長　神庭信幸、保存修復課環境保存室主任研究員　荒木臣紀、保存修復課環境保存室主任研究員　和田浩
69	静岡県立美術館	作品の展示・保存環境についての調査・指導	21年10月29日～22年4月13日	同上
70	千葉市美術館	作品の展示・保存環境についての調査・指導	21年10月29日～22年5月19日	同上
71	松山市中島総合文化センター	作品の展示・保存環境についての調査・指導	21年11月2日～22年4月7日	同上
72	静岡アートギャラリー(静岡市美術館に変更)	作品の展示・保存環境についての調査・指導	21年11月18日～23年1月7日	同上
73	山種美術館	作品の展示・保存環境についての調査・指導	22年3月17日～8月31日	同上
74	日本橋三越	作品の展示・保存環境についての調査・指導	22年3月17日～12月17日	同上
75	九州歴史資料館	作品の展示・保存環境についての調査・指導	22年3月24日～11月11日	同上
76	下関市立美術館	作品の展示・保存環境についての調査・指導	22年3月30日～12月15日	同上
77	名古屋市秀吉清正記念館	作品の展示・保存環境についての調査・指導	4月15日～9月14日	同上
78	常楽寺美術館	作品の展示・保存環境についての調査・指導	4月21日～７月2日	同上
79	大湯ストーンサークル館	作品の展示・保存環境についての調査・指導	4月30日～10月4日	同上
80	沖縄県立博物館・美術館	作品の展示・保存環境についての調査・指導	5月18日～9月1日	同上
81	天理大学附属天理参考館	作品の展示・保存環境についての調査・指導	5月28日～7月22日	同上
82	千葉県立房総のむら	作品の展示・保存環境についての調査・指導	7月12日～10月4日	同上
83	川口市立アートギャラリー・アトリア	やさしい美術鑑賞講座 「日本画の保存修復」講師	6月16日	保存修復課アソシエイトフェロー　鈴木晴彦
84	Smithsonian Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery Department of Conservation and Scientific Research スミソニアン協会 フリーア美術館・アーサー M.サックラー美術館	臨床保存の確立に向けた保存技術の日米交流	9月1日～30日	同上

【京都国立博物館】123件

	機　関	内　容	期　間	担当者
1	株式会社ＮＨＫプロモーション	特別展「法然　生涯と美術」出品交渉	4月1日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
2	東京文化財研究所	在外日本古美術品保存修復協力事業運営委員会	4月14日,5月26日	学芸部 部長 西上　実
3	株式会社ＮＨＫプロモーション	特別展「細川家の至宝」東京会場開会式出席	4月19日～20日	学芸部連携協力室 主任研究員 淺湫　毅
4	株式会社ＮＨＫプロモーション	特別展「法然　生涯と美術」出品交渉	4月25日～26日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
5	岡山大学大学院自然科学研究科	バイオセラミックスに関する研究のため	4月26日～28日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
6	京都教育大学美術科教育研究室	鑑賞教育研究プロジェクト第５回全体会議に出席	4月24日	学芸部企画室 研究員 羽田　聡
7	一般社団法人　文化財保存修復学会	文化財保存修復学会　平成22年度第１回理事会	5月11日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
8	株式会社ＮＨＫプロモーション	特別展「法然　生涯と美術」出品交渉	5月14日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
9	九州国立博物館長	平成２２年度九州国立博物館文化財保存修復施設運営委員会	5月18日～19日	学芸部 部長 西上　実
10	国際仏教学大学院大学　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東アジア仏教写本研究拠点の形成」	「東アジア仏教写本研究拠点の形成」プロジェクト第１回打合せ会及び公開研究会	5月21日～22日	学芸部 上席研究員 赤尾栄慶
11	成城大学	金剛寺蔵の聖教調査	5月23日	同上
12	社団法人清風会	第４８回通常総会並びに見学会	5月30日	学芸部連携協力室 室長 山下善也
13	愛知県	愛知県史編さん委員会文化財部会工芸班会議に出席	5月31日	学芸部列品管理室 主任研究員 山川　暁
14	京都織物卸商業組合	「京都きものサローネ」第二回研修会における講義	6月9日	同上
15	東京文化財研究所長	在外日本古美術品保存修復協力事業運営委員会	6月11日	学芸部 部長 西上　実
16	一般社団法人　文化財保存修復学会	文化財保存修復学会　第32回大会実行委員会並びにプレシンポジウム（研究会）に出席	6月11日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
17	佐渡市長	佐渡市歴史文化遺産群保存活用検討委員会	6月1日～3日	同上
18	島根大学法文学部長	出雲鰐淵寺の歴史的・総合的研究　全体会会議	6月19日～20日	学芸部連携協力室 主任研究員 淺湫　毅
19	国際仏教学大学院大学　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東アジア仏教写本研究拠点の形成」	韓国：松広寺版本調査、海印寺古写本調査	6月25日～28日	学芸部 上席研究員 赤尾栄慶
20	石見銀山資料館	鉱山展示室における展示指導、鉱山遺跡に関する調査指導	6月26日～27日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
21	岡山大学大学院自然科学研究科	バイオセラミックスに関する研究打ち合わせ	6月29日～30日	同上
22	国際仏教学大学院大学　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東アジア仏教写本研究拠点の形成」	フランス国立図書館ＢＮＦ・敦煌写本調査	6月6日～13日	学芸部 上席研究員 赤尾栄慶
23	株式会社ＮＨＫプロモーション	特別展「細川家の至宝」東京会場作品撤収立ち会い	6月6日～7日	学芸部企画室 研究員 羽田　聡
24	財団法人徳川黎明会	国宝「初音の調度」の総合的研究　第７回研究会に出席	6月23日	学芸部企画室 主任研究員 永島明子
25	京都府教育委員会	平成２２年度京都府文化財保護審議会第１回	7月1日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
26	幸田町教育委員会	本光寺の文化財調査	7月3日～4日	学芸部工芸室 室長 尾野善裕
27	一般社団法人　国宝修理装潢師連盟	修理技術者資格制度委員会　第１回試験準備委員会	7月9日	学芸部 上席研究員 赤尾栄慶
28	一般社団法人　国宝修理装潢師連盟	修理技術者資格制度委員会　第１回試験準備委員会	7月9日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
29	大阪府教育委員会事務局	大阪府指定有形文化財の現地調査について	7月13日	学芸部 上席研究員 赤尾栄慶
30	宮内庁皇室経済主管	皇室用美術工芸品（三の丸尚蔵館保管）「春日権現験記絵」修理指導	7月29日～30日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
31	京都教育大学美術科教育研究室	鑑賞教育研究プロジェクト第６回全体会議に出席	7月31日	学芸部企画室 研究員 羽田聡
32	東京文化財研究所長	保存修復科学センター連絡会議	8月4日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
33	東京国立博物館長	収蔵品に関する共同研究（東京国立博物館所蔵文化財「書跡」特別調査会）	8月4日～6日	学芸部 上席研究員 赤尾栄慶
34	岡山大学大学院自然科学研究科長	バイオセラミックスに関する研究のため	8月5日～7日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
35	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	沼津市辻畑古墳出土金属製遺物の保存処理指導	8月19日～20日	同上
36	成城大学	金剛寺蔵の聖教調査	8月22日	学芸部 上席研究員 赤尾栄慶
37	東京国立博物館	法隆寺献納宝物特別調査「聖徳太子絵伝」の調査会	8月23日～25日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
38	文化庁文化財部美術学芸課	醍醐寺所蔵の文化財調査	8月24日～25日,27日	学芸部 上席研究員 赤尾栄慶
39	上海博物館、東京国立博物館	「千年丹青－日本・中国珍蔵唐宋元絵画精品展」展示、撤収など	8月24日,26日,9月6日,9月13日-14日	学芸部美術室 研究員 呉孟晋
40	野崎家塩業歴史館（財団法人竜王会館）	野崎家塩業歴史館所蔵資料の調査指導	H22.8月26日～27日	学芸部工芸室 室長 尾野善裕
41	沖縄県教育委員会	平成２２年度沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査にかかる現地調査	8月30日～9月1日	学芸部企画室 室長 久保智康
42	川西市教育長	川西市文化財審議委員会	8月25日	学芸部 文化財管理監 中村康
43	一般社団法人　文化財保存修復学会	文化財保存修復学会　平成22年度第2回理事会	8月31日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
44	京都府教育委員会	平成２２年度京都府文化財保護審議会第１回	9月1日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
45	京都大学人文科学研究所	シンポジウムへの参加及びロシア所蔵敦煌写本の調査	9月2日～9月8日	学芸部 上席研究員 赤尾栄慶
46	佐賀大学地域学歴史文化研究センター	地域学シンポジウム・講演会「地域学と歴史文化遺産―地域と大学―」において講演	9月4日～5日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
47	浄土宗宗祖法然上人800年	浄土宗宗祖法然上人800年　大遠忌プレス懇談会への出席	9月10日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治

	機　関	内　容	期　間	担当者
48	一般社団法人　文化財保存修復学会	文化財保存修復学会公開シンポジウムに出席	9月11日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
49	株式会社 NHK プロモーション	特別展覧会「法然　生涯と美術」に伴う職員派遣（出品交渉）	9月13日～14日	学芸部企画室 研究員 大原　嘉豊
50	上海博物館、東京国立博物館	「千年丹青－日本・中国珍蔵唐宋元絵画精品展」展示、撤収など	9月14日	学芸部 部長 西上　実
51	名古屋大学大学院文学研究科	東山６１号窯に関する発掘調査指導	9月23日	学芸部工芸室 室長 尾野善裕
52	京都教育大学美術科教育研究室	鑑賞教育研究プロジェクト第７回全体会議に出席	9月25日	学芸部企画室 研究員 羽田聡
53	株式会社ＮＨＫプロモーション	特別展覧会「法然　生涯と美術」に伴う職員派遣（出品交渉）	9月25日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
54	山口市教育委員会	大内氏関連町並遺跡出土金属生産遺物に係る調査指導	9月28日～30日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
55	東京国立博物館	特別調査「江戸幕府御用絵師板谷家伝来資料」の開催に伴う派遣依頼	9月28日～30日	学芸部連携協力室 室長 山下善也
56	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	平成２２年度財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所主催シンポジウム「平安時代の祈りと願い」への派遣依頼	10月3日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
57	島根県教育庁文化財課長	石見銀山遺跡調査に伴う調査指導	10月5日～6日	同上
58	東京国立博物館	講演会「料紙の加工―日・中・韓の典籍」の講師として派遣	10月9日	学芸部 上席研究員 赤尾栄慶
59	成城大学	金剛寺蔵の聖教調査	10月11日	同上
60	野﨑家塩業歴史館（財団法人竜王会館）	野﨑家塩業歴史館所蔵資料の調査指導	10月19日～20日	学芸部工芸室 室長 尾野善裕
61	島根県立古代出雲歴史博物館長	第２回古事記1300年記念展3館合同会議への出席	10月21日～23日	学芸部連携協力室 主任研究員 淺湫　毅
62	島根県立古代出雲歴史博物館	第２回古事記1300年記念展3館合同会議への出席	10月21日～23日	学芸部企画室 室長 久保智康
63	学習院大学文学部	重要文化財「法然上人絵伝」研究報告会への出席	10月23日～24日	学芸部企画室 研究員 大原嘉豊
64	岡山大学大学院自然科学研究科	バイオセラミックスに関する研究のため職員派遣	10月29日～30日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
65	島根県教育委員会	石見銀山遺跡調査活用委員会への出席	10月20日	同上
66	一般社団法人　文化財保存修復学会	文化財保存修復学会　平成22年度第3回理事会	10月22日	同上
67	島根県教育委員会	第１０回神在月古代文化シンポジウム「神々の姿の変遷を考える」講師	10月31日	学芸部連携協力室 主任研究員 淺湫　毅
68	中城村教育委員会	中城城跡出土金属製品の鑑定に伴う職員の派遣	11月1日～2日	学芸部企画室 室長 久保智康
69	株式会社ＮＨＫプロモーション	特別展覧会「法然　生涯と美術」に伴う職員派遣（出品交渉）	11月4日～6日,14日～15日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
70	一般財団法人　デジタル文化財創出機構	シンポジウム「進化するミュージアム」への講師派遣	11月5日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
71	宮内庁	皇室用美術工芸品（三の丸尚蔵館保管）「春日権現験記絵」修理指導	11月11日～12日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
72	東京国立博物館	収蔵品に関する共同研究（特別調査会「工芸（陶磁）」）への派遣依頼	11月16日～17日	学芸部工芸室 室長 尾野善裕
73	兵庫陶芸美術館	平成２２年度兵庫陶芸美術館収集予定作品の価格評価のための派遣依頼	11月12日	同上
74	財団法人徳川黎明会	国宝「初音の調度」の総合的研究　第８回研究会に出席	11月14日	学芸部企画室 主任研究員 永島明子
75	滋賀県教育委員会	滋賀県文化財保護審議会の開催に伴う職員の派遣	11月19日	学芸部企画室 室長 久保智康
76	滋賀県教育委員会	滋賀県文化財保護審議会の開催に伴う職員の派遣	11月19日	学芸部列品管理室 主任研究員 山川　暁
77	滋賀県教育委員会	滋賀県文化財保護審議会の開催に伴う職員の派遣	11月19日	学芸部列品管理室 室長 若杉　準治
78	京都教育大学美術科教育研究室	鑑賞教育研究プロジェクト第８回全体会議に出席	11月23日	学芸部企画室研究員 羽田聡
79	文化庁	文化財の買取協議員の委嘱	11月29日	学芸部連携協力室 室長 山下善也
80	九州国立博物館	九州国立博物館の IPM メンテナンスについての指導	11月30日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
81	東京国立博物館	収蔵品に関する共同研究（特別調査会「工芸（漆工）」）への派遣依頼	12月2日～3日	学芸部企画室 主任研究員 永島明子
82	岡山大学大学院自然科学研究科	バイオセラミックスに関する研究のため職員派遣	12月2日～4日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
83	東京国立博物館	「千年丹青－日本・中国珍蔵唐宋元絵画精品展」展示、撤収など	12月2日-3日,12月11日-12日,12月14日-16日	学芸部美術室 研究員 呉孟晋
84	株式会社ＮＨＫプロモーション	出品交渉、作品撮影会および作品集荷のため	12月3日,17日,24日,27日,H23.1.19,27	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
85	東京国立博物館	平成２２年度第２回法隆寺献納宝物特別調査「聖徳太子絵伝」の調査	12月8日～10日	同上
86	財団法人大阪市博物館協会　大阪文化財研究所長	科学研究費補助金による研究のための職員派遣	12月13日～15日	学芸部工芸室 室長 尾野善裕
87	文化庁	文化財の買取協議員の委嘱	12月15日	学芸部 上席研究員 赤尾栄慶
88	学習院大学文学部	杭全神社本「聖徳太子絵伝に関する調査・研究会への参加	12月18日～19日	学芸部企画室研究員 大原　嘉豊
89	成城大学	金剛寺蔵の聖教調査	12月19日	学芸部 上席研究員 赤尾栄慶
90	大阪市立美術館	作品評価のための職員派遣	12月20日	学芸部工芸室 室長 尾野善裕
91	野﨑家塩業歴史館（財団法人竜王会館）	野﨑家塩業歴史館所蔵資料の調査指導	12月21日～22日	同上
92	株式会社ＮＨＫプロモーション	作品撮影のため	12月24日	学芸部列品管理室 比嘉飛鳥
93	島根県立古代出雲歴史博物館長	古事記1300年記念　神話のふるさと　古代出雲と出雲大社展」第1回企画会議への出席	23年1月11日	学芸部企画室 室長 久保智康
94	島根県立古代出雲歴史博物館長	「古事記1300年記念　神話のふるさと　古代出雲と出雲大社展」第１回企画会議への出席	23年1月11日	学芸部連携協力室 主任研究員 淺湫　毅
95	株式会社ＮＨＫプロモーション	出品依頼のため	23年1月12,13日	学芸部企画室 研究員 大原　嘉豊
96	京都府教育委員会	京都府文化財保護審議会に係る現地調査	23年1月14,18日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
97	京都大学文学研究科長	市民講座「関西中国書画コレクションと京都大学」への講師派遣	23年1月15,29日	学芸部 室長 西上　実
98	成城大学	金剛寺蔵の聖教調査	23年1月16日	学芸部 上席研究員 赤尾栄慶

	機　関	内　容	期　間	担当者
99	財団法人大阪市博物館協会　大阪文化財研究所	科学研究費補助金による研究のための職員派遣	23年1月18日	学芸部工芸室 室長 尾野善裕
100	滋賀県教育委員会	滋賀県文化財保護審議会への職員の派遣	23年1月21日	学芸部列品管理室 室長 若杉　準治
101	滋賀県教育委員会	滋賀県文化財保護審議会への職員の派遣	23年1月21日	学芸部列品管理室 主任研究員 山川　暁
102	一般社団法人　文化財保存修復学会	文化財保存修復学会　理事会	23年1月25日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
103	京都府文化財保護審議会	平成２２年度京都府文化財保護審議会第２回	23年1月28日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
104	滋賀県教育委員会	滋賀県文化財保護審議会への職員の派遣	23年1月28日	学芸部企画室 室長 久保智康
105	国立大学法人大阪大学	東南アジア考古学会・東南アジア学会関東例会　学際ワークショップにおける研究発表への派遣	23年1月29日	学芸部連携協力室 主任研究員 淺湫　毅
106	文化庁	文化財の買取協議員の委嘱	23年1月31日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
107	株式会社ＮＨＫプロモーション	特別展覧会「細川家の至宝展」に伴う職員派遣	23年1月31日～2月1日	学芸部連携協力室 主任研究員 淺湫　毅
108	大垣市教育委員会	桧遺跡の評価に関する派遣	23年2月4日	学芸部工芸室 室長 尾野善裕
109	京都府文化財保護審議会	平成２２年度京都府文化財保護審議会（第３回）の開催	23年2月7日	学芸部列品管理室長 若杉準治
110	滋賀県教育委員会教育長	滋賀県文化財保護審議会への職員の派遣	23年2月8日	同上
111	滋賀県教育委員会教育長	滋賀県文化財保護審議会への職員の派遣	23年2月8日	学芸部列品管理室 主任研究員 山川　暁
112	宮内庁	皇室用美術工芸品（三の丸尚蔵館保管）「春日権現験記絵」修理指導	23年2月17～18日	学芸部列品管理室 室長 若杉準治
113	山口市教育委員会	大内氏関連町並遺跡出土金属生産遺物に係る調査指導	23年2月17～19日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
114	愛媛県美術館	染織作品の調査	23年2月21日	学芸部列品管理室 主任研究員 山川　暁
115	元離宮二条城事務所長	元離宮二条城二之丸御殿障壁画等保存修理委員会への職員派遣	23年2月21日	学芸部保存修理指導室長 村上　隆
116	（財）岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所	岩田東Ａ・岩田西遺跡出土遺物についての指導	23年2月21日	学芸部工芸室長 尾野善裕
117	野﨑家塩業歴史館（財団法人竜王会館）	野﨑家塩業歴史館所蔵資料の調査指導	23年2月22～23日	同上
118	一般社団法人　文化財保存修復学会	文化財保存修復学会大会プログラム作成委員会への派遣	23年2月23日	学芸部保存修理指導室 室長 村上　隆
119	長野県埋蔵文化財センター	第７回柳沢遺跡調査指導委員会への派遣	23年2月24～25日	同上
120	財団法人大阪市博物館協会　大阪文化財研究所	科学研究費補助金による研究のための職員派遣	23年2月27～28日	学芸部工芸室長 尾野善裕
121	財団法人大阪市博物館協会　大阪文化財研究所	科学研究費補助金による研究のための職員派遣	23年2月25～26日	同上
122	愛知県総務部	愛知県史編さん委員会文化財部会工芸班会議に出席	23年3月14日	学芸部列品管理室 主任研究員 山川　暁
123	川西市	川西市文化財審議委員会への派遣	23年3月28日	学芸部 文化財管理監 中村康

【奈良国立博物館】35件

	機　関	内　容	期　間	担当者
1	東大阪市教育委員会	東大阪市文化財保護審議会出席	4月6日	上席研究員　鈴木喜博
2	橿原市教育委員会	橿原市文化財保護審議会出席	5月7日	同上
3	宮内庁	正倉院懇談会出席	6月17日	館長　湯山賢一
4	常楽寺美術館	常楽寺美術館開館40周年記念特別展文化講座講演	7月22･23日	同上
5	文化庁	第1回歴史文化基本構想策定技術指針検討会出席	7月25･26日	同上
6	葛城市歴史博物館	展示指導	7月15日	情報サービス室 北澤菜月
7	文化庁	醍醐寺所蔵文化財の調査	8月27日	情報サービス室　野尻　忠
8	文化庁	醍醐寺所蔵文化財の調査	8月27日	列品室　斎木涼子
9	葛城市歴史博物館	展示指導	8月17日	情報サービス室 北澤菜月
10	メトロポリタン美術館	輸送同行・展示立ち会い	9月7～13日	同上
11	向原寺	仏像調査協力	9月24日	上席研究員　鈴木喜博
12	日本古文書学会	2010年度日本古文書学会出席	9月24～27日	館長　湯山賢一
13	慶州博物館	特別講演及び調査	9月28～30日	学芸部長　西山　厚
14	馬の博物館	馬事博物館資料審査委員会	11月25日	館長　湯山賢一
15	文化庁	文化財購入評価委員会出席	12月10日	美術室長　岩田茂樹
16	メトロポリタン美術館	撤収立ち会い等	12月29日～23年1月7日	情報サービス室 北澤菜月
17	韓国国立中央博物館	出陳交渉（阿弥陀寺）	4月19日	同上
18	韓国国立中央博物館	出陳交渉（談山神社、長谷寺）	4月20日	同上
19	奈良市役所	平城遷都1300年記念市民連携企画実行委員会出席	5月13日	副館長　畑中裕良
20	奈良女子大学	国立大学法人奈良女子大学経営協議会出席	6月10日	館長　湯山賢一
21	韓国国立中央博物館	出陳交渉（中宮寺）	6月17日	情報サービス室 北澤菜月
22	韓国国立中央博物館	出陳借用（信貴山朝護孫子寺、中宮寺）	9月15日	同上
23	文化庁	文化財調査（東大寺）	9月27日	列品室　斎木涼子
24	文化庁	文化財調査（東大寺）	9月30日	同上
25	文化庁	文化財調査（東大寺）	10月1日	同上
26	文化庁	文化財調査（東大寺）	9月27日	同上
27	文化庁	文化財調査（東大寺）	9月30日	同上
28	奈良市議会	奈良市議会、総合計画検討特別委員会出席	10月19日	館長　湯山賢一
29	天理市教育委員会	天理市教育委員会の文化財審議会出席	2月3日	保存修理指導室長　谷口耕生
30	奈良市	奈良市文化財審議会出席	2月22日	上席研究員　鈴木喜博
30	奈良市	奈良市平城遷都1300年記念市民連携企画実行委員会出席	3月11日	副館長　畑中裕良
31	メトロポリタン美術館	モンゴル展撤収立ち会い	12月29日～23年1月7日	情報サービス室 北澤菜月
32	神戸大学	論文審査	23年1月20日	上席研究員　鈴木喜博
33	神戸大学	論文審査	23年1月20日	工芸考古室長　内藤　栄
34	神戸大学	客員教授用務	23年2月14日	上席研究員　鈴木喜博
35	文化庁	醍醐寺所蔵の文化財調査	8月26～27日	館長　湯山賢一

【九州国立博物館】77件

	機　関	内　容	期　間	担当者
1	福岡市教育委員会埋蔵文化財センター	X線CTによる木製居木（鞍）の調査の助言	4月2日	博物館科学課環境保全室長 今津節生
2	福津市教育委員会	X線CTによる鏡片・短剣・直刀の調査の助言	4月8日	同上
3	大野城市教育委員会	X線CTによる鉄剣の調査の助言	4月13日	同上
4	滋賀県立琵琶湖文化館、	琵琶湖文化館友の会総会記念講演会での講演	5月11日～12日	博物館科学課保存修復室長 藤田励夫
5	文化庁	高松塚古墳壁画の保存活用に関わる意見交換会	5月24日～25日	館長　三輪嘉六
6	長崎県立対馬歴史民俗資料館	宗家文庫史料絵図類等調査にかかる助言	5月29日～30日、9月8～9日	博物館科学課保存修復室長 藤田励夫
7	仙台市博物館	チベット展の返却前事前展示状態確認作業、作品点検梱包の指導・助言	5月30日～6月3日	文化財課長　臺信祐爾
8	奈良県桜井市教育委員会	X線CTと三次元計測による木製仮面の調査の助言	6月8日	博物館科学課環境保全室長 今津節生
9	山梨県立博物館	X線CTによる馬の顎骨の調査の助言	6月14日	同上
10	文化庁、ブリュッセル芸術館	文化庁海外展「アジアへの道」会場における展示等についての助言	6月14日～26日	企画課研究員　川畑憲子
11	太宰府市教育委員会	X線CTによる出土品（金属製品、陶磁器）の調査の助言	7月8日	博物館科学課環境保全室長 今津節生
12	下関市教育委員会	X線CT、三次元計測による銅杓の調査の助言	7月9日	同上
13	淡路市埋蔵文化財事務所	五斗長垣内遺跡出土土器付着遺物の分析指導	7月15日～16日	博物館科学課保存修復室　主任研究員　志賀智史
14	奈良県立橿原考古学研究所	X線CTによる槍先の調査の助言	7月16日	博物館科学課環境保全室長 今津節生
15	多良木町教育委員会	X線CTによる経筒の調査の助言	7月21日	同上
16	壱岐市立一支国博物館	しまごと大学講座〔特別講座〕	7月25日	館長　三輪嘉六
17	平戸市教育委員会	重要文化的景観「平戸島の文化的景観」選定記念座談会～地域文化を活かしたまちづくり～	8月7日	同上
18	福岡市教育委員会	X線CTによる鞘の調査の助言	8月12日	博物館科学課環境保全室長 今津節生
19	内蒙古博物院	学術文化交流協定調印式出席に伴う講演	8月13日	館長　三輪嘉六
20	行橋市教育委員会	X線CTによる短甲の調査の助言	8月17日	博物館科学課環境保全室長 今津節生
21	広島大学図書館	紙史料の保存についての助言	8月19日	博物館科学課保存修復室長 藤田励夫
22	柏原市教育委員会	装飾横穴墓のVRデータ取得調査についての助言	8月22日	企画課文化交流展室長 河野一隆
23	一般社団法人文化財保存修復学会	平成22年度文化財保存修復学会専門家養成実践セミナー特別講義	8月30日	館長　三輪嘉六
24	松浦市教育委員会	X線CTによる出土遺物（鉄釘など）の調査の助言	9月7日	博物館科学課環境保全室長 今津節生
25	一般社団法人文化財保存修復学会	文化財保存修復学会公開シンポジウム「文化財をまもるみんぞく資料をまもる」	9月11日	館長　三輪嘉六
26	国立民族学博物館	被災した民族資料の保存修復方法の研究実施のための助言	9月11日～12日	副館長　森田稔
27	国立民族学博物館	被災した文化財の展示手法および鉄燈籠の修復方法に関する意見交換	9月11日～12日	博物館科学課長　本田光子
28	（財）北九州市文化財芸術振興財団	X線CTによる壁石の調査の助言	9月24日	博物館科学課環境保全室長 今津節生
29	韓国国立中央博物館	高麗仏画大展の輸送・展示の助言	10月4日～8日	企画課主任研究員 畑靖紀
30	韓国国立伝統文化学校	2010 International Symposium of Conservation Science for Cultural Propety　（文化財のための保存科学国際シンポジウム2010）	10月6日	館長　三輪嘉六
31	国際会議共同議長　Chan Hee Lee	2010 Great Baekje World Festival International Symposium　（韓国・大百済典国際文化シンポジウム）	10月7日	館長　三輪嘉六
32	松浦市教育委員会	X線CTによる出土遺物(鉄剣など）の調査の助言	10月7日	博物館科学課環境保全室長 今津節生
33	カラコルム博物館　他 モンゴル内各博物館	博物館の収蔵品管理、展示、広報、運営等に関するワークショップの開催（「博物館総論」、「収蔵品の管理と安全」、「博物館と地域・史跡」、「展示の方法」、「収蔵品の収集」、「博物館教育・広報・出版・マーケッティング・法律」、「総合討論」）、カラコルム博物館開館準備助言およびウランバートル市内各博物館への助言	10月12日～22日	文化財課資料管理室長 小林公治
34	佐賀市教育委員会	装飾横穴墓のVRデータの活用についての助言	10月13日	企画課文化交流展室長 河野一隆
35	白石町教育委員会	同上	同上	同上
36	武雄市教育委員会	同上	同上	同上
37	壱岐市	壱岐市・安国寺所蔵長崎県指定文化財保存調査の助言	10月26日	博物館科学課保存修復室長 藤田励夫
38	熊本大学文学部考古研究室	X線CTによ出土資料の調査の助言	11月15日	博物館科学課環境保全室長 今津節生
39	公益財団法人文化財虫害研究所	公益財団法人文化財虫害研究所評議員会	11月15日	館長　三輪嘉六
40	文化庁	第８回国際文化フォーラム福岡セッション「文化観光の可能性」パネルディスカッション	11月18日	同上
41	南山大学	南山大学人類学博物館オープン・リサーチ・センター南山学会合同シンポジウム「新・人類学博物館への提言」	11月24日	副館長　森田稔
42	一般社団法人国宝修理装潢師連盟	平成22年度第16回　国宝修理装こう師連盟定期研修会	11月26日	館長　三輪嘉六
43	名古屋市立大学	名古屋市立大学人間文化研究所開設６周年記念講演会・シンポジウム「博物館と大学がつくりだす魅力あるまち―市博物館と市立大学の新しい取り組み―」 基調講演	11月27日	同上
44	熊本県小学校教育研究会社会科部会	平成22年度熊本県小学校研究会社会科部会研究発表会（阿蘇大会）　講演	12月2日	同上
45	財団法人日本航空協会	「航空と宇宙」定例講演会（「日本の航空100年」記念講演会）	12月14日	同上

	機　関	内　容	期　間	担当者
46	上海博物館	文化財の科学的調査に関する討議、2010博物館文物保存環境国際学術検討会において講演、文化財保存環境に関する討議	12月14日～18日	博物館科学課環境保全室主任研究員　鳥越俊行
47	一般社団法人国宝修理装潢師連盟	修理技術者初級講習会講義	12月17日	副館長　森田稔
48	薩摩川内市教育委員会	X線CTによる人骨の調査の助言	12月27日	博物館科学課環境保全室長　今津節生
49	唐津市教育委員会	佐賀県唐津市鵜殿石仏群保存対策調査委員会	12月27日	同上
50	一般社団法人文化財保存修復学会	文化財保存修復学会第３３回大会第１回実行委員会	23年1月5日～6日	博物館科学課長 本田光子
51	西日本新聞社	「福岡・京都文化フォーラム」パネルディスカッション	23年1月8日	館長　三輪嘉六
52	鹿児島県歴史資料センター黎明館	X線CTによる金剛菩薩像の調査の助言	23年1月13日	博物館科学課環境保全室長　今津節生
53	堺市立博物館　他	文化財の保存および展示の助言	23年1月23日	博物館科学課保存修復室長　藤田励夫
54	名古屋ボストン美術館	「ボストン美術館の至宝展」展示施工打ち合わせ	23年1月24日	博物館科学課長 本田光子
55	臼杵市	臼杵市近世絵図保存修復にかかる助言	23年1月25日	博物館科学課保存修復室長　藤田励夫
56	一般社団法人文化財保存修復学会	一般社団法人文化財保存修復学会理事会	23年1月25日	副館長　森田稔
57	一般社団法人文化財保存修復学会	一般社団法人文化財保存修復学会平成22年度第4回理事会出席、「文化財保存修復学会第33回大会」準備出席	23年1月25日～26日	博物館科学課長 本田光子
58	日光社寺文化財保存会	生物被害調査報告会での講演	23年1月26日～28日	博物館科学課環境保全室主任研究員　鳥越俊行
59	NHKプロモーション	特別展「大神宝展」作品所蔵先打ち合わせ	23年1月27日	副館長　森田稔
60	NHKプロモーション	同上	23年1月28日	同上
61	筑紫野市歴史博物館	平成22年度古文書保存基礎講座	23年1月29日	博物館科学課保存修復室長　藤田励夫、博物館科学課保存修復室　主任研究員　志賀智史
62	名古屋市市民経済局文化観光部名古屋城総合事務所	名古屋城本丸御殿展示・観覧等計画検討会	23年2月1日	副館長　森田稔
63	「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議	第2回「宗像・沖ノ島と関連遺産群」国際シンポジウム出席、第4回「宗像・沖ノ島と関連遺産群」専門家会議	23年2月11日～12日	館長　三輪　嘉六
64	熊本博物館	平成22年度第4回熊本博物館リニューアル検討委員会	23年2月15日	博物館科学課長 本田光子
65	東京大学史料編纂所	紙史料の保存修理についての助言	23年2月17日	博物館科学課保存修復室長　藤田励夫
66	愛知県美術館	木村定三コレクションＭ１０２７の研究会	23年2月17日～19日	博物館科学課保存修復室　主任研究員　志賀智史
67	愛知県美術館	木村定三コレクションＭ１０２７の報告会・研究会	23年2月18日～19日	博物館科学課環境保全室主任研究員　鳥越俊行
68	長崎歴史文化博物館	「平成22年度長崎県博物館協会職員研修」講師	23年2月18日	博物館科学課長 本田光子
69	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館	第46回福井県朝倉氏遺跡研究協議会	23年2月23日	同上
70	文化庁	文化庁専門調査会	23年3月1日～2日	学芸部長　伊藤嘉章
71	吉備国際大学	平成20年度採択組織的な大学院教育改革推進プログラム「グローバルな文化財保存修復技能者の実践的養成」平成22年度（第3期）事業評価委員会	23年3月8日	館長　三輪嘉六
72	別府大学文化財研究所	「経筒のX線CT調査報告」	23年3月10日	博物館科学課環境保全室主任研究員　鳥越俊行
73	奈良国立博物館	奈良国立博物館文化財保存修理所運営委員会	23年3月16日	学芸部長　伊藤嘉章
74	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館	第４６回福井県朝倉氏遺跡研究協議会	23年3月19日～20日	博物館科学課長 本田光子
75	名古屋市市民経済局文化観光部名古屋城総合事務所	名古屋城本丸御殿展示・観覧等計画検討会	23年3月24日	副館長　森田稔
76	文化庁	埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会	23年3月29日	博物館科学課長 本田光子
77	唐津市教育委員会	佐賀県唐津市鵜殿石仏群保存対策調査委員会	23年3月30日	博物館科学課環境保全室長　今津節生

4 文化財に関する調査研究及び研究の推進

4-(1) 文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

4-(1)-① 調査研究テーマ一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-②

4-(1)-② 学会、研究会等発表実績一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-③

4-(1)-③ 論文等発表実績一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-④

4-(1)-④ 調査研究刊行物一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-⑤

4-(2) 文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進

4-(2)-① 調査研究テーマ一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-②

4-(2)-② 学会、研究会等発表実績一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-③

4-(2)-③ 論文等発表実績一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-④

4-(2)-④ 調査研究刊行物一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-⑤

4-(3) 文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進

4-(3)-① 調査研究テーマ一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-②

4-(3)-② 学会、研究会等発表実績一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-③

4-(3)-③ 論文等発表実績一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-④

4-(3)-④ 調査研究刊行物一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-⑤

4-(4) 国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・ 研究の実施

4-(4)-① 調査研究テーマ一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-②

4-(4)-② 学会、研究会等発表実績一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-③

4-(4)-③ 論文等発表実績一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-④

4-(4)-④ 調査研究刊行物一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-⑤

4-(5) 有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

4-(5)-① 調査研究テーマ一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-②

4-(5)-② 学会、研究会等発表実績一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-③

4-(5)-③ 論文等発表実績一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-④

4-(5)-④ 調査研究刊行物一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-⑤

4-(5)-⑤ 科学研究費補助金による調査研究　（後述の資料に記載）◎共通資料c-⑥

4-(5)-⑥ 客員研究員一覧　（後述の資料に記載）◎共通資料c-⑦

5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進

5-(1) 文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究

5-(1)-① 調査研究テーマ一覧

（後述の資料に記載）◎共通資料c-②

5-(1)-② 国際ワークショップ開催実績一覧

【東京文化財研究所】

開催件数：2件　参加者総数：303人

開催日	テーマ	講師等	参加者数
7月8日	第24回国際文化財保存修復研究会「覆屋保存を考える」	朽津信明（文化遺産国際協力センター主任研究員）、アナト・バムルンウォンサ（タイ芸術局第五地区事務所長）、入佐友一郎（福岡県教育庁文化財保護課）、シン・ウンジョン（韓国国立文化財研究所研究員）	71人
23年3月3日～5日	アジア文化遺産国際会議「西アジアの文化遺産―その保護の現状と課題―」	亀井伸雄（東京文化財研究所長）、清水真一（文化遺産国際協力センター長）、岡田　健(保存計画研究室長)、松永秀樹(独立行政法人国際協力機構 中東・欧州部中東二課)、岡田保良(国士舘大学)、西秋良宏(東京大学教授)、ロータス・オマル・マハウィ・アブ・カラキ（ヨルダン遺跡観光省 観光開発部 発展プロジェクト長）、西山徳明（北海道大学教授）、ジアード・ムハンマド・カイード・アル・サード（ヨルダン考古局局長）、藤井純夫（金沢大学教授）、西浦忠輝（国士舘大学）、アッバース・フダイール・アッバース・アル・マフーディ（イラク国立博物館文化復興部局主任）、有村　誠（特別研究員）、フセイン・アリ・ハビーブ（イラク考古局文化協力主任）、大沼克彦（国士舘大学イラク古代文化研究所教授）、アサド・サイフ（レバノン文化省考古総局）、ナーデル・シクラオイ（レバノン文化省考古総局ティール支局）、西山要一（奈良大学教授）、辻村純代（国士舘大学イラク古代文化研究所）、アマル・アブドゥルラマハーン（アル・バーセルセンター センター長）、西藤清秀（奈良県立橿原考古学研究所）、ジャマル・ハイダール（シリア考古局ラタキア博物館館長）、赤澤　威（高知工科大学教授）、ハーリッド・ムハンマド・イブラヒム・アル・シンディ（バーレーン国立博物館）、後藤　健（東京国立博物館）	のべ232人

5-(1)-③ 学会、研究会等発表実績一覧

（後述の資料に記載）◎共通資料c-③

5-(1)-④ 論文等発表実績一覧

（後述の資料に記載）◎共通資料c-④

5-(2) 諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転の推進

5-(2)-① 調査研究テーマ一覧

（後述の資料に記載）◎共通資料c-②

5-(2)-② アジア諸国文化財保護担当者などの人材養成に関する研修等実施状況

【東京文化財研究所】　3件

	研修課程	研修期間	日数	研修対象	参加者数
1	イラク文化財専門家研修	9月22日～12月9日	81日	イラク国立博物館職員	3人
2	アフガニスタン文化財専門家研修	8月2日～12月17日	138日	アブガニスタン･イスラーム共和国情報文化省考古学研究所研究員	2人
3	アフガニスタン文化財専門家研修	9月27日～10月15日	19日	アブガニスタン･イスラーム共和国情報文化省考古学研究所研究員	1人

【奈良文化財研究所】　2件

	研修課程	研修期間	日数	研修対象	参加者数
1	ACCUの実施する文化遺産の保護に資する研修2010（集団研修）	9月7日～10月7日	31日	アジア太平洋地域の政府機関、大学、研究所などに勤務し、文化遺産の管理、保護、修復に携わっているもの。	16人
2	ACCUの実施する文化遺産の保護に資する研修2010（個人研修・モンゴル）	11月16日～12月16日	31日	モンゴル科学アカデミー考古学研究所所属研修生	3人

6 情報発信機能の強化

6-(1) ネットワークのセキュリティの強化及び情報基盤の整備充実

6-(1)-① 文化財関係資料及び図書の受入件数

	東京文化財研究所		奈良文化財研究所	
	22年度受入件数	総件数	22年度受入件数	総件数
図　　書	6,864冊	233,232冊	8,450冊	310,872冊

6-(2) 研究所の調査・研究成果の発信

6-(2)-① 調査研究刊行物一覧

（後述の資料に記載）◎共通資料c-⑤

6-(2)-② 公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催実績一覧

【東京文化財研究所】

公開講演会　1件（2日）

○公開講演会「平成22年度オープンレクチャー」
- ・開 催 日：10月15日
- ・開催場所：東京文化財研究所セミナー室
- ・主　　催：上野の山文化ゾーン連絡協議会
- ・参加人数：200人（10月15日、16日の2日間延べ数）
- ・事業内容：美術史研究の成果を一般に公表すること
  「中世における真宗祖師先徳彫像の制作を廻って」
  「草花の美- 都久夫須麻神社社殿の空間- 」

○公開講演会「平成22年度オープンレクチャー」
- ・開 催 日：10月16日
- ・開催場所：東京文化財研究所セミナー室
- ・主　　催：上野の山文化ゾーン連絡協議会
- ・参加人数：200人（10月15日、16日の2日間延べ数）
- ・事業内容：美術史研究の成果を一般に公表すること
  「御歌所の歌人と書」
  「秋元洒汀と明治の日本画」

国際シンポジウム　1件

○国際シンポジウム「第34回文化財の保存および修復に関する国際研究集会」
- ・開 催 日：1月19～21日
- ・開催場所：東京国立博物館大講堂
- ・主　　催：東京文化財研究所
- ・参加人数：のべ347人
- ・事業内容：「「復興」と文化遺産」

【奈良文化財研究所】

公開講演会　8件

○公開講演会「特別講演会(東京会場)」
- ・開 催 日：5月15日
- ・開催場所：江戸東京博物館
- ・主　　催：奈良文化財研究所
- ・参加人数：409人
- ・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
  「平城宮跡のむかしと今」
  「大極殿復原」
  「木簡が語る平城京の時代」
  「講演者にきく」

○公開講演会「飛鳥資料館春期特別展示「キトラ古墳壁画四神」特別公開記念講演会」
- ・開 催 日：5月30日
- ・開催場所：明日香村立中央公民館ホール
- ・主　　催：飛鳥資料館
- ・参加人数：150人
- ・事業内容：「－キトラ古墳壁画を考える－」
  「－キトラ古墳のこの一年－」
  「キトラ古墳～四神ってなに？～」

○公開講演会「第106回公開講演会」
- ・開 催 日：6月12日
- ・開催場所：奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂
- ・主　　催：奈良文化財研究所
- ・参加人数：222人
- ・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
  「平城遷瓦　－都がうつる。瓦もうつる。－」
  「古代における日本と新羅の交流」

○公開講演会「特別講演会(東京会場)」
- ・開 催 日：9月25日
- ・開催場所：有楽町朝日ホール
- ・主　　催：奈良文化財研究所
- ・参加人数：526人

・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
「くれないはうつろうものぞ」
「銅鐸―花器として生きる―」
「古代人の肉食の忌避という虚構」
「日本庭園のはじまり」
「古代遷都の真実　－飛鳥宮・藤原京・平城京の謎を解き明かす－」
「古代史研究と奈良文化財研究所」

○公開講演会　「平城宮跡資料館秋期特別展示記念講演会」
・開 催 日：10月9日
・開催場所：平城宮跡資料館講堂
・主　　催：奈良文化財研究所
・参加人数：202人
・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
「平城宮発掘史と木簡」
「木簡の楽しみ方－在籍二年の目線から－」
「木簡の楽しみ方－在籍二十年の目線から－」
「平城宮木簡最新情報」

○公開講演会「飛鳥資料館秋期特別展　記念講演会」
・開 催 日：10月17日
・開催場所：飛鳥資料館講堂
・主　　催：飛鳥資料館
・参加人数：47人
・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
「7世紀木簡のおもしろさ」

○公開講演会「第107回公開講演会」
・開 催 日：11月13日
・開催場所：平城宮跡資料館講堂
・主　　催：奈良文化財研究所
・参加人数：206人
・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
「ミニ講演」
「玄奘三蔵の見たバーミヤーン」
「西大寺食堂院跡出土木簡について」

○公開講演会「平城宮跡資料館冬期特別展示記念講演会」
・開 催 日：12月19日
・開催場所：平城宮跡資料館講堂
・主　　催：奈良文化財研究所
・参加人数：271人
・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
「古代の測量をめぐって」
「国土を見つめる測量技術」
「歴史を測る　－新しい技術で掘り下げる考古学－」

現地説明会　5件
○現地説明会「平城第466次（平城宮東方官衙地区）発掘調査」
・開 催 日：4月17日
・開催場所：奈良市佐紀町
・主　　催：奈良文化財研究所
・参加人数：750人
・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
発掘調査

○現地見学会「飛鳥藤原163次(藤原宮朝堂院)」
・開 催 日：7月3日
・開催場所：橿原市高殿町
・主　　催：奈良文化財研究所
・参加人数：423人
・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
発掘調査

○現地見学会「平城第469次（平城宮跡東院地区西北部）発掘調査」
・開 催 日：7月17日
・開催場所：奈良市佐紀町
・主　　催：奈良文化財研究所
・参加人数：950人
・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
発掘調査

○現地説明会「飛鳥藤原第165次（水落遺跡）発掘調査」
・開 催 日：12月5日
・開催場所：高市郡明日香村
・主　　催：奈良文化財研究所
・参加人数：1,420人
・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
発掘調査

○現地説明会「平城477次（春日東塔院）発掘調査」
・開 催 日：22年12月17日～21日
・開催場所：奈良国立博物館なら仏像間＜本館＞南東部）
・主　　催：奈良文化財研究所
・参加人数：300人
・事業内容：文化財に関する調査・研究に基づく成果について、積極的に公開・提供する。
発掘調査

6-(2)-③ ウェブサイトアクセス件数
（後述の資料に記載）◎共通資料d

6-(3) 黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示公開

6-(3)-① 入館者数推移（入館料別）　（過去５ヵ年）
（後述の資料に記載）◎共通資料a-①

6-(3)-② 入館者数推移（展覧会別）　（過去５ヵ年）
（後述の資料に記載）◎共通資料a-②

6-(3)-③ 入場料収入
（後述の資料に記載）◎共通資料a-③

6-(3)-④ 平常展・特別展
（後述の資料に記載）◎共通資料a-④

6-(4) 文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用への協力

6-(4)-① ボランティア受入れ実績
（後述の資料に記載）◎共通資料b

6-(5) 文化財情報・研究成果の公表

6-(5)-① ウェブサイトアクセス件数
（後述の資料に記載）◎共通資料d

6-(5)-② 収蔵品写真（フィルム）等のデジタル化件数

東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
画像　8,639件 文字　130,000字	4,594件	9,501件	画像　1,391件 文字　0字

6-(5)-③ 収集した情報資料数

		東京国立博物館		京都国立博物館		奈良国立博物館		九州国立博物館	
		22年度新規	総数	22年度新規	総数	22年度新規	総数	22年度新規	総数
写真原板(フィルム)		5,577枚	318,773枚	3379枚	250,140枚	1,725枚	361,128枚	1,357枚	19,141枚
デジタル撮影		5,537枚	17,945枚	0枚	0枚	9,959枚	9,959枚	36枚	14,600枚
資料	模造	0	0	0	0	0	0	0	0
	模写	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	0	0	0	0	0	0	0	0
図書	和書	6,149冊	170,538冊	4,262冊	69,985冊	758冊	60,710冊	5,792冊	62,072冊
	漢書	618冊	38,001冊	114冊	19,177冊	0冊	4,871冊	0冊	0冊
	洋書	578冊	11,988冊	297冊	2,205冊	19冊	1,575冊	229冊	1,941冊
	計	7,345冊	220,527冊	4,673冊	91,367冊	777冊	67,156冊	6,021冊	64,013冊
映画フィルム		0	0	0	24巻	0巻	30巻	0	0
スライド		0	0	0	26本 2,779コマ	0本 0コマ	21本 2,192コマ	0	12コマ
マイクロフィルム		2巻	3,656巻	17巻	359巻	0巻	0巻	0巻	515巻

東京国立博物館資料館の利用者数（過去5年間）

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
利用者数	2,920人	3,134人	2,764人	2,898人	2,796人
閉架図書（閲覧）	2,770件	3,321件	3,757件	7,527件	3,138件
マイクロフィルム(閲覧)	1,093件	650件	596件	577件	994件
レファレンスサービス	3,632件	3,299件	4,024件	2,973件	3,339件
コピーサービス	22,530枚	23,287枚	22,669枚	22,438枚	26,210枚

※震災の影響により、23年3月14日～31日は臨時休館

6-(5)-④ 特別観覧件数

申請件数

平成23年3月31日現在

区分		国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
		合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料
合計		1,930	1,064	866	196	3	193	972	698	274	561	316	245	201	47	154
写真撮影		62	7	55	17	2	15	22	1	21	22	4	18	1	0	1
写真原板使用	モノクロ	211	150	61				173	133	40	38	17	21	0	0	0
	カラー	1,176	791	385				731	562	169	288	186	102	157	43	114
写真原板再使用		187	108	79							181	105	76	6	3	3
映画撮影		13	7	6	4	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
テレビ撮影								2	1	1	4	4	0	2	1	1
ビデオ撮影								0	0	0	0			1	0	1
模写		2	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0
模造		1	0	1	1	0	1	0	0	0	0			0	0	0
熟覧		278	1	277	174	0	174	44	1	43	26	0	26	34	0	34

点数

平成23年3月31日現在

区分		国立博物館			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
		合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料	合計	有料	無料
合計		7,251	2,935	4,316	918	3	915	3,462	1,908	1,554	1,686	912	774	1,185	112	1,073
写真撮影		330	17	313	115	2	113	124	2	122	62	13	49	29	0	29
写真原板使用	モノクロ	743	425	318				620	380	240	123	45	78	0	0	0
	カラー	4,346	2,278	2,068				2,559	1,518	1,041	1,025	671	354	762	89	673
写真原板再使用		414	181	233							399	175	224	15	6	9
映画撮影		54	33	21	5	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
テレビ撮影								13	7	6	8	8	0	27	17	10
ビデオ撮影								0	0	0	0			1	0	1
模写		7	0	7	0	0	0	0	0	0	7	0	7	0	0	0
模造		1	0	1	1	0	1	0	0	0	0			0	0	0
熟覧		1,356	1	1,355	797	0	797	146	1	145	62	0	62	351	0	351

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

7-① 国・地方公共団体への協力等に対する専門的・技術的な協力・助言

計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所
502件	159件	343件

【東京文化財研究所】159件

	プロジェクト名称	件数
1	無形文化遺産に関する助言	26件
2	文化財の修復及び整備に関する調査・助言(40件)　(※Ⅰ4(2)②文化財の非破壊調査法の研究に係る指導・助言 23件、Ⅰ4(3)①文化財の生物劣化対策の研究に係る指導助言 12件、Ⅰ4(3)②文化財の保存環境の研究に係る指導・助言 58件)	133件

【奈良文化財研究所】343件

	プロジェクト名称	件数
1	地方公共団体等が行う史跡の整備、復原事業等に関する技術的助言	332件
2	地方公共団体が行う平城京域発掘調査への援助・助言	5件
3	地方公共団体が行う飛鳥・藤原地区の発掘調査への援助・助言	6件

7-② 専門指導者層を対象とした研修等実施状況及び研究参加者等に対するアンケート結果

計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所
16件	5件	11件

【東京文化財研究所】　5件

	研修課程	研修期間	日数	研修対象	研修内容	参加者数	満足度
1	博物館・美術館等の保存担当学芸員研修	7月12日～23日	9日	博物館・美術館等の文化財の保存担当者	文化財の保存科学の基礎と実践上の諸問題についての講義と実習	33人	100%
2	保存担当学芸員フォローアップ研修	6月21日	1日	博物館・美術館等の保存担当学芸員研修修了生	研修修了生に対して最新の保存科学の知識を講義する	97人	99%
3	国際研修「紙の保存と修復」	8月30日～9月17日	15日	海外の博物館・図書館・文書館などの学芸員、修復技術者、教員など	日本の紙文化財の保存と修復に関する講義と実習、研修旅行	10人	100%
4	資料保存地域研修	12月13日	1日	博物館・美術館等の文化施設に勤務する者	文化財の保存環境に関する基礎的な知識について、それぞれの地域に出向いて講義を行う	76人	98%
5	「博物館資料保存論」対策講座	3月8日～10日	3日	大学で「博物館資料保存論」の講義を行う予定の者	平成24年度より学芸員養成課程で必修となる「博物館資料保存論」の講義内容に関する情報提供	81人	94%

【奈良文化財研究所】　11件

	研修課程	研修期間	日数	研修対象	研修内容	参加者数	満足度
1	建築遺構調査課程	6月14日～18日	5日	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	建築遺構調査	16人	100%
2	古代・中近世瓦調査課程	9月1日～7日	7日	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	古代・中近世瓦調査	18人	100%
3	三次元計測過程	9月27日～10月1日	5日	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	三次元計測	11人	100%
4	保存科学Ⅰ(無機質遺物)課程	10月6日～15日	10日	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	保存科学Ⅰ(無機質遺物)	12人	100%
5	保存科学Ⅱ(有機質遺物)課程	10月18日～26日	9日	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	保存科学Ⅱ(有機質遺物)	5人	100%
6	遺跡地図情報課程	11月16日～19日	4日	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	遺跡地図情報	5人	100%
7	自然科学的年代決定法課程	11月29日～12月3日	5日	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	自然科学的年代決定法	5人	100%
8	報告書作成課程	12月9日～17日	9日	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	報告書作成	26人	100%
9	出土文字資料調査課程	23年1月17日～21日	5日	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	出土文字資料調査	15人	100%
10	中近世城郭調査整備課程	23年1月27日～2月3日	8日	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	中近世城郭調査整備	18人	100%
11	生物環境調査課程	23年2月15日～23日	9日	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	生物環境調査	6人	100%

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置
Ⅱ-1　職員の意識改革、サービスの向上、業務の効率化

Ⅱ-1-① 施設の有効利用件数

○件数

		国立文化財機構計	博物館					文化財研究所		
			計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所
合計	総件数	2,749	1,064	538	59	146	321	1,685	196	1,489
	うち有償	524	407	256	44	31	76	117	12	105
	うち無償	2,225	657	282	15	115	245	1,568	184	1384
茶室	総件数	164	164	112	32		20			
	うち有償	83	83	45	32		6			
	うち無償	81	81	67	0		14			
講堂等（講堂、会議室、研修室）	総件数	2,261	593	304	15	120	154	1,668	196	1,472
	うち有償	286	182	89	1	22	70	104	12	92
	うち無償	1,975	411	215	14	98	84	1,564	184	1380
その他（左記以外の建物、敷地）	総件数	205	189	7	10	25	147	16	0	16
	うち有償	38	26	7	10	9	0	12	0	12
	うち無償	167	163	0	0	16	147	4	0	4
撮影利用	総件数	119	118	115	2	1	0	1	0	1
	うち有償	117	116	115	1	0	0	1	0	1
	うち無償	2	2	0	1	1	0	0	0	0

○有償利用の利用金額　（単位：千円）

	国立文化財機構計	博物館					文化財研究所		
		計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所
合計	32,756	30,492	27,987	722	1,238	545	2,264	228	2,036
茶室	3,443	3,443	3,046	340		57			
講堂等（講堂、会議室、研修室）	6,842	6,040	5,074	5	473	488	802	228	574
その他（左記以外の建物、敷地）	8,973	7,529	6,396	368	765	0	1,444	0	1,444
撮影利用	13,498	13,480	13,471	9	0	0	18	0	18

◎共通資料
a 展示

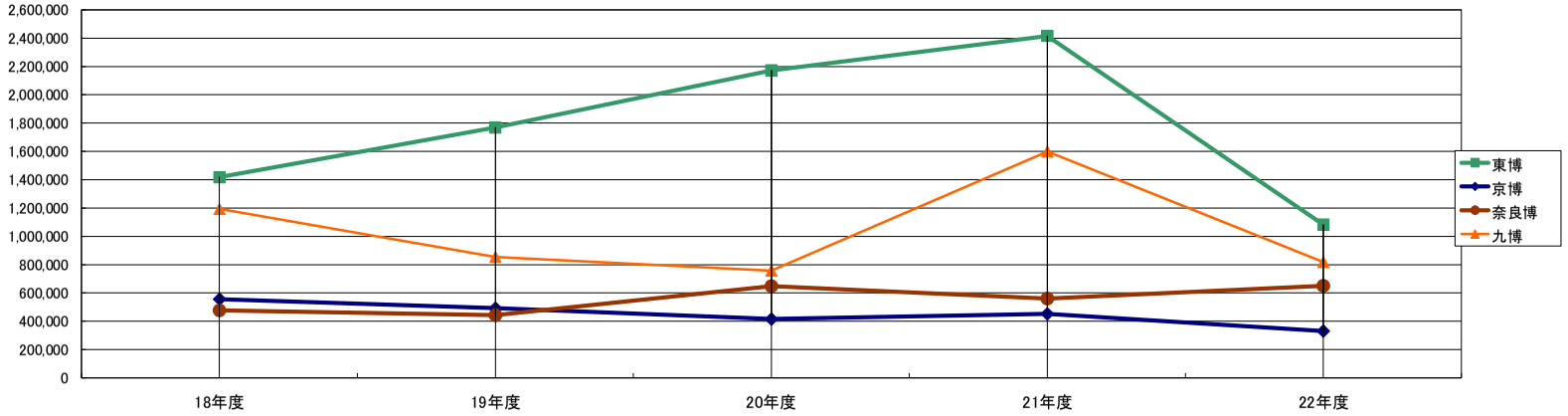
a-① 入館者数推移（入館料別）

年度				18	19	20
国立文化財機構	総入館者数			3,645,023	3,764,567	4,193,381
	平常展	計		1,147,804	1,095,925	1,041,212
		有料	一般	634,662	506,568	461,649
			大学生	102,470	99,428	90,861
			高校生			
			小・中生	—	—	—
			友の会	68,557	70,641	78,718
		無料	一般	—	106,078	116,058
			高校生	13,828	15,270	16,192
			小・中生	189,496	175,712	134,489
		招待者等		138,791	122,228	143,245
	特別展	計		2,497,219	2,668,642	3,152,169
		有料	一般	1,674,220	1,769,987	2,003,625
			高・大生	124,212	131,777	116,329
			小・中生	55,681	27,172	60,359
			友の会	91,580	86,194	51,276
		無料	小・中生	21,681	65,033	52,769
		招待者等		529,845	588,479	867,811
東京国立博物館	総入館者数			1,417,195	1,768,198	2,171,942
	平常展	計		361,773	334,297	412,675
		有料	一般	179,924	165,190	210,423
			大学生	32,734	28,514	27,225
			小・中・高	—	—	—
			友の会	55,649	52,862	65,232
		無料	高校生	13,828	15,270	16,192
			小・中生	31,540	26,471	35,261
		招待者等		48,098	45,990	58,342
	特別展	計		1,055,422	1,433,901	1,759,267
		有料	一般	685,137	946,113	1,162,200
			高・大生	59,466	80,862	64,854
			小・中生	3,177	—	—
			友の会	60,958	52,662	12,988
		無料	小・中生	19,729	50,499	38,903
		招待者等		226,955	303,765	480,322
京都国立博物館	総入館者数			556,770	492,414	416,001
	平常展	計		146,752	165,080	141,965
		有料	一般	57,283	67,586	54,043
			高・大生	15,821	21,182	17,631
			小・中生	—	—	—
			友の会	4,460	5,968	3,915
		無料	小・中生	21,988	15,325	13,674
		招待者等		47,200	55,019	52,702
	特別展	計		410,018	327,334	274,036
		有料	一般	249,037	197,198	157,900
			高・大生	26,903	17,763	16,264
			小・中生	6,749	4,279	2,858
			友の会	15,133	12,092	11,348
		無料	小・中生	1,952	—	—
		招待者等		110,244	96,002	85,666
奈良国立博物館	総入館者数			477,638	442,914	647,854
	平常展	計		137,739	131,336	112,849
		有料	一般	59,868	58,914	47,099
			高・大生	10,569	9,919	7,777
			小・中生	—	—	—
			友の会	4,888	4,188	2,708
		無料	小・中生	39,852	48,069	35,209
		招待者等		22,562	10,246	20,056
	特別展	計		339,899	311,578	535,005
		有料	一般	264,119	235,865	370,001
			高・大生	13,786	13,430	19,907
			小・中生	19,682	6,463	12,393
			友の会	8,423	9,790	14,544
		無料	小・中生	—	—	—
		招待者等		33,889	46,030	118,160
九州国立博物館	総入館者数			1,193,420	854,138	756,918
	平常展	計		501,540	341,282	241,423
		有料	一般	337,587	207,350	142,538
			高・大生	43,346	37,835	36,858
			小・中生	—	—	—
			友の会	3,560	7,623	6,863
		無料	小・中生	96,116	81,707	47,402
		招待者等		20,931	6,767	7,762
	特別展	計		691,880	512,856	515,495
		有料	一般	475,927	356,430	285,004
			高・大生	24,057	16,981	12,103
			小・中生	26,073	16,430	45,108
			友の会	7,066	11,650	12,396
		招待者等		158,757	111,365	160,884
黒田記念館	総入館者数				13,707	19,038
	平常	計			13,707	19,038
		無料	一般		13,707	19,038
平城宮跡資料館	総入館者数				85,486	92,597
	平常	計			85,486	92,597
		無料	一般		85,486	92,597
藤原宮跡資料室	総入館者数				6,885	4,423
	平常	計			6,885	4,423
		無料	一般		6,885	4,423
飛鳥資料館	総入館者数				100,825	84,608
	平常展	計			17,852	16,242
		有料	一般		7,528	7,546
			高・大生		1,978	1,370
		無料	小・中生		4,140	2,943
		招待者等			4,206	4,383
	特別展	計			82,973	68,366
		有料	一般		34,381	28,520
			高・大生		2,741	3,201
		無料	小・中生		14,534	13,866
		招待者等			31,317	22,779

年度				21	22
国立文化財機構	総入館者数			5,156,358	3,392,243
	平常展	計		1,080,509	947,439
		有料	一般	320,974	344,070
			大学生	33,061	34,579
			小・中・高生	—	—
			友の会	73,872	67,151
		無料	一般	49,813	212,611
			小・中・高生	163,663	156,236
		招待者等		439,126	132,792
	特別展	計		4,075,849	2,444,804
		有料	一般	2,885,476	1,459,486
			高・大生	156,452	88,515
			小・中生	69,774	48,563
			友の会	53,074	47,012
		無料	小・中生・一般	56,155	198,991
		招待者等		854,918	602,237
東京国立博物館	総入館者数			2,416,281	1,082,269
	平常展	計		330,536	373,068
		有料	一般	162,674	196,312
			大学生	20,437	24,140
			小・中・高生	—	—
			友の会	64,816	58,496
		無料	高校生	13,499	17,570
			小・中生	25,890	33,585
		招待者等		43,220	42,965
	特別展	計		2,085,745	709,201
		有料	一般	1,505,088	424,337
			高・大生	78,355	24,169
			小・中生	—	—
			友の会	16,680	9,867
		無料	小・中生	42,065	15,301
		招待者等		443,557	235,527
京都国立博物館	総入館者数			452,920	331,131
	平常展	計		—	—
		有料	一般	—	—
			大学生	—	—
			小・中・高生	—	—
			友の会	—	—
		無料	高校生	—	—
			小・中生	—	—
		招待者等		—	—
	特別展	計		452,920	331,131
		有料	一般	276,754	205,194
			高・大生	28,127	18,386
			小・中生	7,297	3,856
			友の会	11,529	10,953
		無料	小・中生	1,103	862
		招待者等		128,110	91,880
奈良国立博物館	総入館者数			560,293	649,878
	平常展	計		136,672	71,566
		有料	一般	53,033	36,436
			大学生	5,391	2,417
			小・中・高生	—	—
			友の会	3,168	2,891
		無料	小・中・高生	38,825	15,293
		招待者等		36,255	14,529
	特別展	計		423,621	578,312
		有料	一般	315,128	428,121
			高・大生	15,411	24,411
			小・中生	13,824	19,106
			友の会	11,131	15,358
		無料	小・中生	—	6,107
		招待者等		68,127	85,209
九州国立博物館	総入館者数			1,599,704	818,034
	平常展	計		544,661	274,545
		有料	一般	98,600	105,638
			大学生	6,737	7,560
			小・中・高生	—	—
			友の会	5,888	5,764
		無料	高校生	27,907	35,990
			小・中生	52,658	50,295
		招待者等		352,871	69,298
	特別展	計		1,055,043	543,489
		有料	一般	757,650	343,079
			高・大生	32,892	19,068
			小・中生	48,653	25,601
			友の会	13,734	10,834
		招待者等		202,114	144,907
黒田記念館	総入館者数			20,345	18,458
	平常	計		20,345	18,458
		無料	一般	20,345	18,458
平城宮跡資料館	総入館者数			25,127	354,346
	平常展	無料	一般	25,127	189,338
	特別展	無料	一般	—	165,008
藤原宮跡資料室	総入館者数			4,341	4,815
	平常	計		4,341	4,815
		無料	一般	4,341	4,815
飛鳥資料館	総入館者数			77,347	133,312
	平常展	計		18,827	15,649
		有料	一般	6,667	5,684
			大学生	496	462
		無料	小・中・高生	4,884	3,503
		招待者等		6,780	6,000
	特別展	計		58,520	117,663
		有料	一般	30,856	58,755
			大学生	1,667	2,481
		無料	小・中・高生	12,987	11,713
		招待者等		13,010	44,714

※21年度より、機構内全施設にて高校生以下平常展無料となった
※東京国立博物館パスポートによる特別展入場者数は、19年度まで友の会に含み、20年度より有料に含む
※21年度以降の飛鳥資料館特別展有料大学生入場者数は、春期特別展のみ高校生を含む

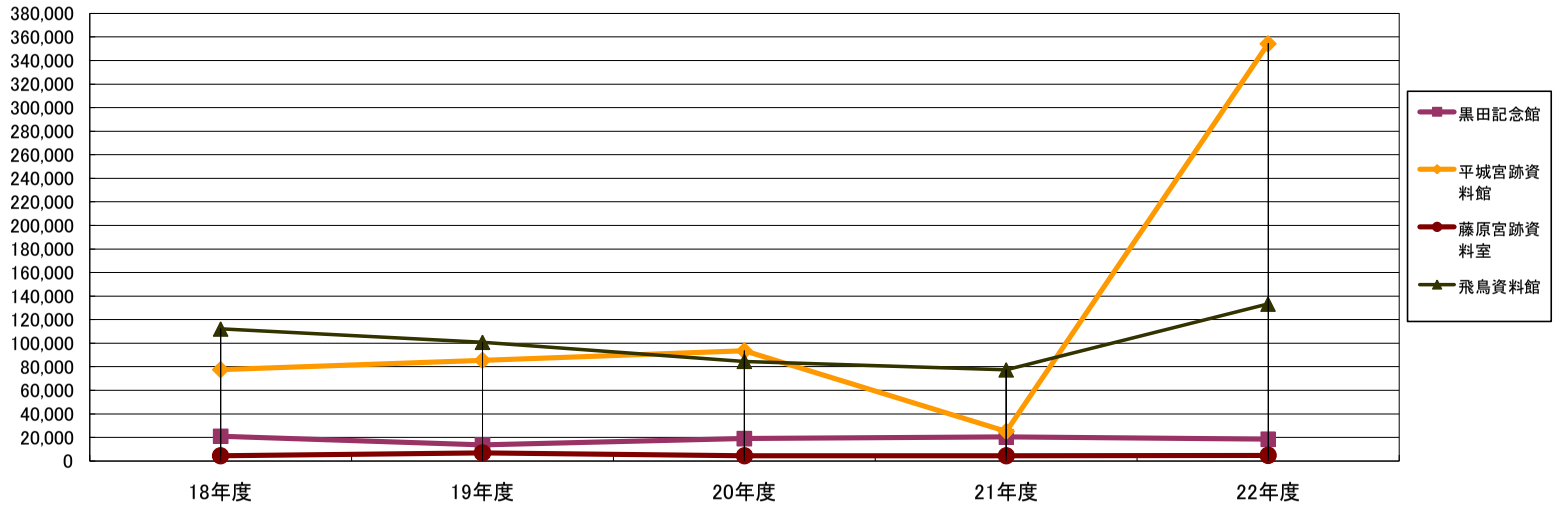
a-② 入館者数推移（展覧会別）
1）国立博物館、国立文化財機構総合計



※1 これらの特別展は、平常展料金のため、平常展のみの入館者に計上。

	18年度（国立博物館）		19年度（国立文化財機構）		20年度（国立文化財機構）		21年度（国立文化財機構）		22年度（国立文化財機構）	
計	総　合　計	3,645,023	総　合　計	3,764,567	総　合　計	4,193,381	総　合　計	5,156,358	総　計	3,392,243
	平常展のみの入館者	1,147,804	平常展のみの入館者	1,095,925	平常展のみの入館者	1,041,212	平常展のみの入館者	1,080,509	平常展のみの入館者	947,439
	特別（共催）展計	2,497,219	特別（共催）展計	2,668,642	特別（共催）展計	3,152,169	特別（共催）展計	4,075,849	特別（共催）展計	2,444,804
東博	総　計	1,417,195	総　計	1,768,198	総　計	2,171,942	総　計	2,416,281	総　計	1,082,269
	平常展のみの入館者	361,773	平常展のみの入館者	334,297	平常展のみの入館者	412,675	平常展のみの入館者	330,536	平常展のみの入館者	373,068
	特別（共催）展計	1,055,422	特別（共催）展計	1,433,901	特別（共催）展計	1,759,267	特別（共催）展計	2,085,745	特別（共催）展計	709,201
	特別展「最澄と天台の国宝」	197,859	特別展「レオナルド・ダ・ヴィンチ　天才の実像」	689,775	特別展「平城遷都1300年記念　国宝 薬師寺展」	742,910	特別展「STORY OF…」	115,568	特別展「細川家の至宝」	182,470
	特別展「プライスコレクション　若冲と江戸絵画展」	317,712	特別展「京都五山　禅の文化」展	108,917	特別展「フランスが夢見た日本」	58,342	特別展「国宝　阿修羅展」	933,895	特別展「誕生！中国文明」	105,538
	特別展「仏像　一木にこめられた祈り」	335,489	特別展「大徳川展」	425,492	特別展「対決ー巨匠たちの日本美術」	326,784	特別展「染付ー藍が彩るアジアの器」	52,731	特別展「東大寺大仏-天平の至宝-」	232,791
	特別展「悠久の美　中国国家博物館名品展」	98,133	特別展「宮廷のみやびー近衛家1000年の名宝」	157,718	特別展「スリランカ-輝く島の美に出会う-」	80,865	特別展「伊勢神宮と神々の美術」	114,796	特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」	188,402
	特別展「マーオリ　楽園の神々」	※1(72,720)	特別展「平城遷都1300年記念　国宝 薬師寺展」	51,999	特別展「大琳派展ー継承と変奏ー」	308,213	特別展「皇室の名宝ー日本美の華」	447,944		
	特別展「レオナルド・ダ・ヴィンチ　天才の実像」	106,229			特別展「未来をひらく福澤諭吉」展	73,128	特別展「国宝　土偶展」	128,285		
					特別展「妙心寺」	151,833	特別展「長谷川等伯展」	292,526		
					特別展「STORY OF…」	4,915				
					特別展「国宝　阿修羅展」	12,277				
京博	総　計	556,770	総　計	492,414	総　計	416,001	総　計	452,920	総　計	331,131
	平常展のみの入館者	146,752	平常展のみの入館者	165,080	平常展のみの入館者	141,965	平常展のみの入館者	0	平常展のみの入館者	0
	特別（共催）展計	410,018	特別（共催）展計	327,334	特別（共催）展計	274,036	特別（共催）展計	452,920	特別（共催）展計	331,131
	特別展「大絵巻展」	186,772	特別展「藤原道長　ー極めた栄華・願った浄土ー」	37,411	特別展「絵画の冒険者　暁斎 kyosai」	76,686	特別展「開山無相大師650 年遠諱記念 妙心寺」	92,144	特別展「没後400年　長谷川等伯」	244,347
	特別展「開館記念110周年記念　美のかけはし」	59,280	特別展「狩野永徳」	230,656	特別展「japan 蒔絵ー宮殿を飾る 東洋の煌めきー」	67,050	特別展「シルクロード 文字を辿って」	25,511	特別展「没後200年記念　上田秋成」	21,705
	特別展「京焼ーみやこの意匠と技ー」	25,283	特別展「憧れのヨーロッパ陶磁」	59,267	特別展「御即位二十年記念 京都御所ゆかりの至宝」	116,363	特別展「日蓮と法華の名宝ー華ひらく京都町衆文化ー」	88,187	特別展「高僧と袈裟-こころを伝え こころを繋ぐ-」	19,297
	特別展「京都御所障壁画ー御常御殿と御学問所ー	138,683			特別展「妙心寺」	13,937	特別展「THE ハプスブルク」	247,078	特別展「筆墨精神　中国書画の世界」	37,535
									特別展「法然-生涯と美術-」(3月31日現在)	8,247
奈良博	総　計	477,638	総　計	442,914	総　計	647,854	総　計	560,293	総　計	649,878
	平常展のみの入館者	137,739	平常展のみの入館者	131,336	平常展のみの入館者	112,849	平常展のみの入館者	136,672	平常展のみの入館者	71,566
	特別（共催）展計	339,899	特別（共催）展計	311,578	特別（共催）展計	535,005	特別（共催）展計	423,621	特別（共催）展計	578,312
	特別展「大勧進　重源」	41,813	特別展「神仏習合」	40,493	特別展「天馬 ーシルクロードを翔ける夢の馬ー	31,910	特別展「国宝 鑑真和上展」	93,779	特別展「大遣唐使展」	202,166
	特別展「北村昭斉ー漆の技ー」	14,571	特別展「美麗　院政期の絵画」	22,696	特別展「国宝　法隆寺金堂展」	132,919	特別展「聖地寧波」	30,548	特別展「仏像修理100年」「至宝の仏像　東大寺法華堂金剛力士像特別公開」	81,342
	特別展「第58回正倉院展」	283,515	特別展「第59回正倉院展」	248,389	特別展「西国三十三所-観音霊場の祈りと美」	106,411	特別展「第61回正倉院展」	299,294	特別展「第62回正倉院展」	294,804
					特別展「第60回正倉院展」	263,765				
九博	総　計	1,193,420	総　計	854,138	総　計	756,918	総　計	1,599,704	総　計	818,034
	平常展のみの入館者	501,540	平常展のみの入館者	341,282	平常展のみの入館者	241,423	平常展のみの入館者	544,661	平常展のみの入館者	274,545
	特別（共催）展計	691,880	特別（共催）展計	512,856	特別（共催）展計	515,495	特別（共催）展計	1,055,043	特別（共催）展計	543,489
	特別展「中国　美の十字路」	10,690	特別展「未来への贈りもの」	77,380	特別展「国宝 大絵巻展 」	115,740	特別展「聖地チベット ポタラ宮と天空の至宝」	140,917	特別展「パリに咲いた古伊万里の華」	84,738
	特別展「うるま　ちゅら島　琉球」	177,478	特別展「日本のやきもの 已選び抜かれた名宝120点」	50,986	特別展「島津の国宝と篤姫の時代」	152,420	特別展「国宝 阿修羅展」	711,154	特別展「馬　アジアを駆けた二千年」	42,022
	特別展「南の貝のものがたり」	63,560	特別展「本願寺展ー親鸞と仏教伝来の道」	197,697	特別展「国宝　天神さま」	174,698	特別展「古代九州の国宝」展	72,741	特別展「誕生！中国文明」	53,409
	特別展「発掘された日本列島2006ー新発見考古速報展ー」		特別展「京都五山　禅の文化」展	171,336	特別展「工芸のいま　伝統と創造」	72,637	特別展「京都妙心寺ー禅の至宝と九州・琉球」	130,231	特別展「没後120年　ゴッホ展」	354,311
	特別展「海の神々ー捧げられた宝物」	139,981	特別展「国宝 大絵巻展」	15,457					特別展「黄檗ーOBAKU」	9,009
	特別展「プライスコレクション　若冲と江戸絵画展」	300,171								

2）研究成果公開施設



	18年度（文化財研究所）		19年度（国立文化財機構）		20年度（国立文化財機構）		21年度（国立文化財機構）		22年度（国立文化財機構）	
計	総　合　計	215,120								
	平常展のみの入館者	119,223								
	特別（共催）展計	95,897								
黒田記念館	総　計	20,975	総　計	13,707	総　計	19,038	総　計	20,345	総　計	18,458
	平常展のみの入館者	20,975	平常展のみの入館者	13,707	平常展のみの入館者	19,038	平常展のみの入館者	20,345	平常展のみの入館者	18,458
	特別（共催）展計		特別（共催）展計		特別（共催）展計		特別（共催）展計		特別（共催）展計	
平城宮跡資料館	総　計	77,560	総　計	85,486	総　計	92,597	総　計	25,127	総　計	354,346
	平常展のみの入館者	77,560	平常展のみの入館者	85,486	平常展のみの入館者	92,597	平常展のみの入館者	25,127	平常展のみの入館者	189,338
	特別（共催）展計		特別（共催）展計		特別（共催）展計		特別（共催）展計		特別（共催）展計	165,008
									企画展「平城宮跡 今・昔－岡田庄三写真展－」	38,443
									特別展「天平びとの声をきく-地下の正倉院・平城宮木簡のすべて-」	92,394
									企画展「測る、知る、伝える　－平城京と文化財－」	20,282
									企画展「発掘速報展2009・2010」	13,889
藤原宮跡資料室	総　計	4,457	総　計	6,885	総　計	4,423	総　計	4,341	総　計	4,815
	平常展のみの入館者	4,457	平常展のみの入館者	6,885	平常展のみの入館者	4,423	平常展のみの入館者	4,341	平常展のみの入館者	4,815
	特別（共催）展計		特別（共催）展計		特別（共催）展計		特別（共催）展計		特別（共催）展計	
飛鳥資料館	総　計	112,128	総　計	100,825	総　計	84,608	総　計	77,347	総　計	133,312
	平常展のみの入館者	16,231	平常展のみの入館者	17,852	平常展のみの入館者	16,242	平常展のみの入館者	18,827	平常展のみの入館者	15,649
	特別（共催）展計	95,897	特別（共催）展計	82,973	特別（共催）展計	68,366	特別（共催）展計	58,520	特別（共催）展計	117,663
	特別展「キトラ古墳と発掘された壁画たち」	76,738	特別展「キトラ古墳壁画四神玄武」	67,007	特別展「キトラ古墳壁画十二支－子・丑・寅－」	51,471	特別展「キトラ古墳壁画四神－青龍・白虎－」	41,242	特別展「キトラ古墳壁画四神」	100,307
	特別展「飛鳥の金工」	12,029	企画展「「とき」を撮す－発掘調査と写真－」	3,344	企画展「飛鳥　古寺巡礼」	3,658	企画展「甦るクメール文明」	3,824	企画展「小さな石器の大きな物語」	5,435
	企画展「東アジアの十二支像」	3,816	特別展「奇偉荘厳　山田寺」	9,342	特別展「まぼろしの唐代精華」	11,695	特別展「三燕文化の考古新発見」	11,006	特別展「木簡黎明－飛鳥に集う いにしえの文字たち」	10,140
	企画展「発掘調査速報展」	3,314	速報展「飛鳥の考古学2007」	1,589	企画展「飛鳥の考古学2008」	1,542	企画展「飛鳥の考古学2009」	2,448	企画展「飛鳥の考古学2010」	1,781
			企画展「絵で見る考古学－早川和子原画展」	1,691						

a-③ 入場料収入

（単位：円）

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
国立文化財機構　計	1,034,937,495	1,081,301,672	1,159,630,962	1,323,819,776	891,598,757
東京国立博物館	391,263,820	514,039,330	611,637,800	662,347,500	268,900,600
京都国立博物館	144,399,600	130,218,030	126,305,930	111,512,790	93,829,670
奈良国立博物館	246,395,770	228,339,500	265,576,036	267,397,290	355,735,620
九州国立博物館	252,878,305	182,000,762	134,177,251	262,889,871	131,683,367
飛鳥資料館		24,975,310	20,121,140	18,006,130	41,449,500
東京文化財研究所黒田作品共催展		1,728,740	1,812,805	1,666,195	0

a-④ 平常展・特別展

【東京国立博物館】

(1) 平常展（23年1月2日から総合文化展）

※震災の影響により、23年3月12日～28日まで臨時休館、23年3月29日からは本館・平成館のみ開館（表慶館・法隆寺宝物館は休館）

1)会　　場
- ①本　館　1階、2階
- ②平成館　1階
- ③表慶館　1階
- ④法隆寺宝物館　1階、2階
- ⑤黒田記念館　2階
- ※東洋館は耐震工事のため休館中

2)開館期間
- 黒田記念館以外　4 月 1 日～23 年 3 月 31 日(297 日間)　　平常展のみの開館日数　98 日間
- 黒田記念館　　4月1日～23年3月31日(84日間)

3)陳列品総件数　　5,610件(うち国宝78件、重要文化財669件)
- ①本館・平成館企画展示室　3,562件(うち国宝53件、重要文化財348件)
- ②表慶館　265件(うち国宝 0件、重要文化財　6件)
- ③法隆寺宝物館　427件(うち国宝16件、重要文化財283件)
- ④平成館考古展示室　1,258件(うち国宝16件、重要文化財108件)
- ⑤黒田記念館　98件(うち国宝 0件、重要文化財　4件)

4)陳列替回数　延べ 290 回

5)入場料金
- 黒田記念館以外　一般600円、大学生400円
- 黒田記念館　　無料

6)特集陳列　全53件

●国宝　◎重要文化財　○重要美術品

場所	テーマ	開催期間	陳列件数(国宝・重文)
本館1階 18室	農村（田園）へのまなざし	22年2月23日(火)～4月4日(日)	34(0.1)
	＜主な作品＞◎春畝、田舎家、枯れ野原(グレー)、栗拾い、案山子		
	平成19年4月に独立行政法人国立博物館と独立行政法人文化財研究所が統合され、独立行政法人国立文化財機構が発足したことを記念して行う第4回目の特集陳列であった。今回の特集陳列では、日本におけるバルビゾン派の受容を、農村(田園)を描いた浅井、黒田の作品でたどる展示をした。		
本館2階 9室	歌舞伎衣裳	22年3月9日(火)～5月16日(日)	14(0.0)
	＜主な作品＞振袖 水浅葱繻子地枝垂桜模様、振袖 紅縮緬地桜流水模様		
	江戸時代後期大奥で活躍した女性のお狂言師、坂東三津江が使用していた歌舞伎衣裳および道具を展示した。今回の展示では、春の季節に合わせて桜の意匠を表わした振袖や、娘道成寺という演目で使用された襦袢などを紹介した。併せて、娘道成寺を描く浮世絵版画を展覧し、江戸時代の三大娯楽の1つであった歌舞伎の文化を見る機会とした。		
本館1階 16室	シリーズ「歴史を伝える」 博物図譜－桜を中心に－	22年3月9日(火)～4月25日(日)	24(0.0)
	＜主な作品＞草花写生図巻、本草図説、遠西舶上画譜		
	日本における博物学は、享保年間(1716～35)に江戸幕府が全国的な物産の調査を行ったのを契機に流行した。写生によって物のかたちを詳しく記録することは、博物学の流行する以前にも、心覚えのスケッチとして行われていたが、なかには自然科学への関心の高まりがうかがえるものもみられる。今回の展示では、季節にちなんだ桜を中心として、博物画の先駆けともいえる狩野探幽(1602～74)の写生図から、明治時代の実用的な掛図にいたるまでの、生き生きとした楽しい博物図譜を紹介した。		
本館1階 19室	伝統工芸－人間国宝の技と美	22年3月9日(火)～6月6日(日)	17(0.0)
	＜主な作品＞乾漆朱菊花方盤、華菱文玳瑁螺鈿箱、鸚鵡小禽葡萄文箱、燿彩鉢 心円		
	当館は文化庁からの管理換品をはじめ、重要無形文化財(人間国宝)の作家による伝統工芸の作品を多数所蔵している。日本の工芸の伝統的な技法を基本として作られたこれらの作品の中から、漆工、金工、陶磁の優品を選んで、その技と美を紹介した。		
平成館 考古展示室	骨角器－人と動物たちとのかかわり－	22年3月16日(火)～9月12日(日)	151(0.0)
	＜主な作品＞燕形銛頭、釣針、犬歯製垂飾、歯牙製垂飾		
	当館における縄文時代から弥生時代にかけての骨角器のコレクションは、その量とともに、質の高さから各方面より古くから注目されてきた。そのコレクションの全貌は、これまでに図版目録、研究図録として公表してきた。今回、その優れたコレクションの一部(狩猟具・漁撈具・装身具など)を展示し、当時の人々の生業の実態に迫ると共に、人間と動物の関わりについてもわかりやすく解説した。		
平成階 企画展示室	東京国立博物館コレクションの保存と修理	22年3月16日(火)～5月9日(日)	22(0.1)
	＜主な作品＞申文、小袖 黒綸子地遠州模様、色絵柏樹双鳥文大皿		

	東京国立博物館が手がける保存と修理の成果を、よりわかりやすく紹介するため、平成20年度に修理が完了した作品を中心に、全19件を展示した。絵画、書跡、工芸、歴史資料、考古にわたるさまざまな分野、形態、技法の作品を取り上げ、修理工程および修理過程で得られた情報をパネルにて詳細に紹介することにより、博物館が担う文化財修理の役割に広い理解を期待する展示とした。		
本館1階 13室	海を渡った日本の漆器	22年3月24日(水)～6月13日(日)	18(0.0)
	＜主な作品＞桔梗蝶楓鹿蒔絵螺鈿聖龕、楼閣山水蒔絵宝石箱、花鳥螺鈿裁縫机		
	近世以降ヨーロッパの上流階級の間には東洋趣味が広く浸透しており、日本の漆器は東洋を象徴する室内装飾調度として、彼らの間で大いに人気を集めた。そのような需要に応えて制作された、安土桃山時代から幕末明治期までの作品をとりあげて輸出漆器の歴史を概観し、日本の漆器が欧州で愛でられ続けたことを紹介した。		
本館1階 特別5室	仏像の道－インドから日本へ	22年3月24日(水)～23年4月3日(火)	21(0.4)
	＜主な作品＞如来坐像、◎如来三尊立像、◎如来坐像		
	東洋館、本館、法隆寺宝物館に展示されていた仏像を一堂に会し、紀元2世紀のガンダーラから、中央アジア、中国、朝鮮半島をへて8世紀の奈良に至るまで、600年にわたる仏像の流れを概観した。仏像の誕生、中国への伝来、唐と奈良などのテーマを設け、それぞれの時代・地域で、どのような仏像が造られ、人々の信仰を集めていたかを紹介した。		
本館1階 14室	中国の五彩と日本の初期色絵	22年3月30日(火)～5月30日(日)	23(0.0)
	＜主な作品＞五彩丸文平鉢、色絵山水船人物図銅鑼鉢、五彩蓮池図大皿、色絵蝶牡丹文大皿、色絵翡翠図平鉢		
	色絵とは白磁をいったん高温で焼きあげ、上絵具で絵付けを施したのち、再び窯に入れて焼き付ける技法で、中国では五彩という。中国の景徳鎮民窯では、明末清初の時期に天啓赤絵、色絵祥瑞、南京赤絵など多種多彩な五彩が焼かれ、さかんに輸出された。江戸時代初期に磁器の生産が始まった九州肥前の有田では、17世紀中葉に中国から色絵の技術が導入され、中国のさまざまな五彩磁器の様式をもとに豊かな創意が加えられて、独創的な初期色絵が花開いた。その中には、かつて加賀の九谷で焼かれたと考えられたことにより、古九谷とよばれた一群も含まれる。中国の五彩と日本の初期色絵を比較することにより、相互の影響関係、そして模倣と創造の不即不離の関係を検証する展示とした。		
本館1階 15室	アイヌの暮らし	4月6日(火)～7月4日(日)	40(0.0)
	＜主な作品＞船模型、アットゥシ布、アットゥシ、銛(マレク)、盆		
	アイヌの暮らしをテーマとして展示した。暮らしの中で使われた織機具や漁撈具、船や家の模型などを陳列した。『蝦夷島奇観』等の写真パネルを多く用いて、展示品の使用された場面がより具体的にイメージできるよう工夫した。		
本館1階 16室	シリーズ「歴史を伝える」 戦国大名と細川家	4月27日(火)～6月6日(月)	20(0.0)
	＜主な作品＞詠歌大概抄、小倉百人一首抄、伊勢物語、土佐家古文書		
	足利氏の一門として鎌倉時代から現代にまで続く武家細川家の歴史を通覧する展示にした。特に室町幕府の政治を担った細川氏の姿を今に伝えてくれる古文書、また幽斎・忠興父子を中心に同家が武家における有数の文化人としての立場に関連する数々の書跡作品・歴史資料の陳列によって、文武両道のイメージを展示での再現を目指した。また幽斎と同時代の戦国大名家伝来の古文書もあわせて陳列して、細川氏と他大名との違いを観覧者に発見してもらえるような工夫も加えた。		
本館2階 特別1・2室	平成22年新指定国宝・重要文化財	4月27日(火)～5月9日(日)	38(2.36)
	＜主な作品＞●越中国射水郡鳴門村墾田図、●伊能忠敬関連資料、◎岩手県平泉遺跡群出土品		
	文化庁との共催により、平成22年に新たに国宝・重要文化財に指定される美術工芸品のうち、38件を展示した。		
平成館 企画展示室	海外の日本美術品の修復	5月11日(火)～5月23日(日)	3(0.0)
	＜主な作品＞歌舞放下芸観覧図屏風、和歌浦蒔絵将棋盤、近江八景蒔絵香棚		
	東京文化財研究所が行ってきた海外所在の日本美術の保存修復事業を紹介した。1991年、文化庁、外務省、国際交流基金、東京文化財研究所が共同で始めた在外日本古美術品保存修復事業は、当初アメリカ合衆国内の機関が所蔵する日本絵画の修復への協力として始まった。その後、範囲をヨーロッパ諸国へ拡大し、絵画だけでなく漆芸品や武器・武具なども対象に加えた。今回の展示では、2009年度に修復の完了した作品3件を展示した。　主催：東京文化財研究所		
本館2階 9室	能面・能装束に見る能の表現－鬼の風姿－	5月18日(火)～7月4日(日)	17(0.1)
	＜主な作品＞◎能面 猿飛出、側次 金地石畳宝尽模様		
	能は鬼能から始まったといわれるように、能舞台における鬼の造形は、能の源流を見る上で重要である。天狗や動物の精霊、あらぶる神々などを演じる際に用いる鬼面と、それに伴う能装束とを組み合わせ、能舞台における鬼の風姿を見ていく展示とした。		
本館2階 特別1・2室	平成21年度新収品展	5月18日(火)～6月13日(日)	48(0.0)
	＜主な作品＞男衾三郎絵詞断簡、〇太刀 長船景光、〇短刀 銘則重、〇薙刀		
	前年度の新収品から、48件をえらび、陳列した。新収品を通じ、文化財の収集という当館の事業の一端をご理解いただく機会とした。		
平成館 企画展示室	清朝末期の光景－小川一眞・早崎梗吉・関野貞が 撮影した中国写真－	5月25日(火)～7月4日(日)	113(0.0)
	＜主な作品＞太和門、函谷関ノ溝道、八角磚塔及び陀羅尼幢(「支那写真帖」のうち)		
	清時代末期、日本では中国の美術や考古、建築に対する関心の高まりをみせ、岡倉天心を嚆矢として、伊東忠太や足立喜六、関野貞らが中国各地で調査を行った。これらの調査の特徴は、写真技術を調査の有効な手段として用いたことにある。本展では明治34年(1901)、小川一眞が東京帝国大学の紫禁城調査に同行して撮影を行った『北京城写真』を中心に、西安に赴任していた早崎梗吉が、東京帝室博物館依頼を受け、河南、陝西地方を撮影した写真資料、および関野貞が明治39年～40年に行った河南、陝西、山東地方の調査で撮影された写真資料を紹介し、日本人がとらえた清時代末期の文物、風景、風俗の情景を窺う展示とした。		

本館1階 14室	中国磁州窯の枕	6月1日(火)～8月8日(日)	25(0.0)
	＜主な作品＞白釉黒地白花牡丹文枕、白釉獅子枕		
	枕は、陶磁器では唐時代より小型のものが、三彩や青磁でつくられるようになる。さまざまな形や装飾のバラエティの豊かな枕を生産するようになったのは、宋から金時代にかけて、活発な生産をおこなった磁州窯である。磁州窯の枕は、吉祥をあらわす動物や植物、故事などが生き生きと描かれ、生に願いを込める当時の人々の思いを表した魅力的な作品が多い。この展示では、磁州窯の製品を中心に、陶磁器で作られたさまざまな枕を紹介した。		
本館1階 16室	シリーズ「歴史を伝える」 日本を歩く－東海編－	6月8日(火)～7月11日(日)	7(0.4)
	＜主な作品＞東海道五十三次図屏風、◎東海道分間延絵図;三島、沼津、原、吉原富士、蒲原、由比、奥津		
	本特集陳列「日本を歩く」は、平成21年度まで蝦夷・北海道編、奥羽・東北編、甲信越編の3地域をとりあげ、地域の歴史、名勝などを紀行文や絵図・地図などをもって紹介してきた。今回は東海編として企画するものであった。具体的な国名としては伊豆・遠江・駿河・三河が該当するが、今回は重要文化財「五海道分間延絵図並見取絵図」が完備している地域なので、これで長尺の場面を紹介した。また、絵画から寄託品「東海道五十三次図屏風」を展示した。		
本館2階 特別2室	親と子のギャラリー 日本美術のつくり方	6月15日(火)～7月25日(日)	13(0.1)
	＜主な作品＞◎法華経(久能寺経) 安楽行品、平家納経(模本) 妙荘厳王本事品 第二十七、小袖 白縮緬地衝立鷹模様、金銅迦陵頻伽文華鬘(模造)		
	美術作品や制作技法に興味を持ってもらうことを目的とした、中高生以上の生徒から一般の来館者までを対象とする教育普及的展示にした。「技法」を知ることは、作品理解の重要な手がかりとなる。伝統的な日本美術の制作技法は、日常では目にする機会も少なく、作品を一見したところでは想像すらつかないものが多い。そこで、専門家に制作を依頼した工程見本や技法サンプルを用いることで、わかりやすい展示を心がけた。さらに、それらの技法を駆使して作られた「ほんもの」の作品の鑑賞を通して、歴史のなかで培われてきた日本文化のすばらしさを伝えた。取り上げるジャンルは、料紙装飾、仏像の玉眼と寄木造、友禅染、線彫(金工)の4つ。また、材料に触る、簡単な作品をつくるなどのハンズオン・コーナーを展示室内および20室に設け、触って実感する展示も試みた。		
本館1階 12室	二体の大日如来と慶派の彫刻	7月6日(火)～9月12日(日)	9 (0.7)
	＜主な作品＞◎大日如来坐像(東京・真如苑)、◎行道面 菩薩、◎大日如来坐像(栃木・光得寺)		
	慶派仏師は、天平彫刻が残る奈良を中心に活躍した奈良仏師のうち平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて活躍した康慶以降、主として「慶」の字を継承した仏師の一派を言う。古典を学んで写実的で運動感に富む新鮮な作風を創造した。運慶、快慶という巨匠を輩出し、奈良や京都の貴族や大寺といった旧来の需要層にとどまらず、鎌倉幕府という新しい勢力の発願による造像も多く手がけた。近年発見された、運慶作品と考えられる光得寺と真如苑所蔵の二体の大日如来像も御家人の足利義兼発願である可能性がある。この陳列では二体の大日如来像を陳列するとともに、運慶の作風に近い伝浄瑠璃寺伝来の十二神将像、快慶が工房を指揮して造った菩薩面などを展示した。		
本館1階 15室	琉球の工芸	7月6日(火)～10月3日(日)	46(0.0)
	＜主な作品＞厨子甕、ドギン、玉ハルビ、鼈甲簪、キンカブ		
	第二尚氏時代を中心とした琉球の工芸作品を展示した。これまでの琉球民俗資料陳列と同様、『琉球国奇観』等の写真パネルを多く用いて、作品の使い方等を具体的にイメージできるよう工夫をした。		
本館1階 16室	シリーズ「歴史を伝える」 古写真－人物を写す－	7月13日(火)～8月1日(日)	48(0.1)
	＜主な作品＞第2回江戸幕府遣外使節団正使・副使・監察役・組頭、◎旧江戸城写真帖、勝海舟、井上馨夫人		
	特集陳列シリーズ「歴史を伝える」では古写真を素材として、記録と記憶、古美術の記録、小川一真と近畿宝物調査と特集陳列を企画してきた。内容としては、古写真の意義、写真のもつ資料性と記録性、写真師の活躍をみた。一方、古写真のデータベース化も進み利用者に便宜を供してきたところである。本年は、このような回顧に立ち被写体としての「人物」に焦点をあてた。素材は『東京国立博物館所蔵幕末明治期写真資料目録』掲載のもので、江戸幕府の遣欧使節、明治の元勲たちである。写真が発明されて間もない時期にカメラの前に立った人々のそれぞれの思いや背景を考えてみるものであった。		
平成館 企画展示室	古代エジプトのミイラ	7月13日(火)～9月20日(月)	16(0.0)
	＜主な作品＞パディインヘルのミイラの包み布、パシェリエンプタハのミイラ		
	明治37年にエジプト考古庁から帝室博物館に寄贈された「パシェリエンプタハのミイラ」を中心に、古代エジプトの葬送に関係する作品を展示した。現在、東洋館が閉鎖中であるため、その多くは公開を控えているが、観覧を望む声は多い。この陳列では、期間を限って、平成館において、関係作品を公開し、来館者の要求に応えるとともに、古代エジプトの生と死を考える機会とした。		
本館1階 16室	シリーズ「歴史を伝える」 江戸時代の情報・通信	8月3日(火)～9月5日(日)	26(0.1)
	＜主な作品＞◎諸街折絵図、古物金石相撲		
	江戸時代に社会が安定すると交通が活発となり、それにともなって文書や書籍、画像などによる情報の流通が盛んになる。さらに大量の情報を組織化した目録や索引、評価を加えた番付などの新しい形式の媒体が発生し、情報化社会の基盤が作られた。この展示では、情報を伝えるさまざまな資料の生の形を示すとともに、情報流通を支えた通信手段についても紹介した。		
本館2階 特別2室	親と子のギャラリー 博物館の音楽会	8月3日(火)～9月5日(日)	25(0.1)
	＜主な作品＞模造 螺鈿槽箜篌、金銅塔鈴、集古十種;肖像人物服章;11、◎埴輪 腰かける巫女		
	日本美術にみる音楽と楽器を題材に、主として小中学生を対象とした教育普及的展示である。日本の古い楽器そのもの、これらの楽器を演奏している場面を表わしたもの、楽器を装飾モチーフとしているものという観点から、埴輪・仏画・人形・漆工・金工・陶磁器・図譜を取り上げ、管・弦・打楽器などのジャンルに分けて展示した。さらに楽器の種類や演奏の方法をわかりやすく解説したパネルや映像を示し、古楽器についての知識を深めてもらうような補助的展示を行った。関連イベントとして、楽器		

	に触れるハンズオン・アクティビティや、宮内庁式部職楽部の協力を得ての演奏会を開催した。		
本館1階 14室	打ち鳴らして音を出す仏具－梵音具－	8月10日(火)～10月3日(日)	23(1.4)
	＜主な作品＞◎銅蝶形磬、◎白銅蓮池文磬、●金銅蓮華唐草文磬、◎銅鰐口、◎梵鐘		
	仏教ではその宗教的雰囲気を高めるために音を出す仏具、梵音具が用いられる。鐘楼に懸けて打ち鳴らす梵鐘はよく知られるが、梵音具にはこのほかにも軒下につるされる鰐口、堂内で用いられる磬、鐃、銅鑼、鉦鼓、雲版、木魚などさまざまなものがある。梵音具は名称が独特であるように、その形もまた独特なものが多い。今回は日本の梵音具の源流になったとみなされる朝鮮半島の梵音具を含め、ふだんあまり目にすることのない、梵音具の独特な造形の世界をご覧いただけるような展示にした。		
本館2階 9室	絹糸と金箔の和様美－縫箔－	8月31日(火)～10月24日(日)	9(0.4)
	＜主な作品＞◎縫箔 紅白段菊芦水鳥模様、◎縫箔 茶地百合御所車模様		
	女性役を演じる際に腰巻に用いられる縫箔であるが、安土桃山時代までは、唐織と同様に女性役の表着として用いられた。桃山時代から江戸時代にかけての縫箔の変遷をたどり、和刺繍と金箔の効果を生かした能装束の美を紹介した。		
本館1階 16室	シリーズ「歴史を伝える」 釈奠－孔子さまのお祭り－	9月7日(火)～10月17日(日)	15(1.0)
	＜主な作品＞賢哲肖像、●延喜式 巻第二十、詩懐紙		
	釈奠は、食物や酒をささげて孔子や弟子たちを祭る行事で、古代の大学寮にはじまり、江戸時代には湯島聖堂、藩校などで春秋の2月と8月に行われた行事である。展示では、行事の具体的な内容や、沿革を伝える釈奠関係の資料を紹介した。		
本館1階 18室	浅井忠のグレー風景－高野コレクション	9月14日(火)～10月24日(日)	6(0.0)
	＜主な作品＞グレー風景、読書		
	実業家高野時次氏の蒐集による、明治の洋画家浅井忠の作品は、油彩画11点、水彩・デッサン56点、掛軸6点の計73点におよび、浅井の円熟した画技を示す滞欧期の水彩画を多く含んでいる。高野コレクションは、この浅井作品全73点が、昭和60年(1985)に氏のご遺志によりご遺族の方々から当館に一括寄贈されたものである。今回の特集陳列では、このコレクションのうち浅井の留学中の作品に注目し、グレー・シュル・ロワン(フランス)で描いた油彩画や水彩画の作品6点をご覧いただき、滞欧中に描いた画面に光を感じさせる詩情あふれる浅井作品の魅力を紹介した。		
本館2階 特別2室	ワヤン－インドネシアの人形芝居－	9月14日(火)～12月5日(日)	41(0.0)
	＜主な作品＞ワヤン・クリ クレスノ、ワヤン・クリ スリカンディ、ワヤン・クリ ドゥルユドノ、ワヤン・クリ カルノ、ワヤン・クリ アルジュノ、ワヤン・クリ ガトゥコチョ		
	インドネシアの伝統的な人形芝居、ワヤンに用いられる人形を展示した。中部ジャワを中心として盛んなワヤン・クリは、水牛の革を用いた影絵人形芝居であり、ダランと呼ばれるたった一人の演者の手により夜を徹して上演される。また、西部ジャワで行われるワヤン・ゴレは、木彫りの人形によって上演されるものである。インドの叙事詩『マハーバーラタ』『ラーマーヤナ』に基づきつつも、演者の即興を交えて自由に演じられるワヤンは、現在もインドネシアで盛んに上演されている。この特集陳列では、当館がこれまでに寄贈を受けたワヤンの人形すべてを展示し、それぞれの役柄や、寄贈の経緯なども含めて解説した。		
平成館 考古展示室室	古墳時代の甲冑	9月14日(火)～12月12日(日)	35(1.2)
	＜主な作品＞方形板革綴短甲片、復元模造 頸甲･肩甲、復元模造 襟甲、●横矧板革綴短甲片(復元修理)、竪矧広板鋲留衝角付冑		
	古墳時代に出現する金属製甲冑は、前期には朝鮮半島南部に近似した形式が成立するが、中期には日本列島独自の帯金式甲冑が成立する。帯金式甲冑は攻撃用武器の発達と共に、断続的な大陸からの技術伝播によって革新され、また汎大陸系甲冑である後期型の挂甲が成立しても、形態を変化させながら生産が継続するところに特徴がある。本展示では、出品の調査成果を交えて、類例が少ない前期型から中期・後期型までの資料を比較して、帯金式甲冑の系譜と成立・展開を示した。		
平成館 企画展示室	日本・中国・朝鮮の料紙	9月28(火)～10月24日(日)	18(3.0)
	＜主な作品＞●王勃集巻第二十九･三十、●淮南鴻烈兵略間詁　第廿(秋萩帖　紙背)、●法華経巻第六(色紙)		
	大陸より日本にもたらされた紙漉きの技術は、奈良時代の国家的な写経事業などによって発展し、麻紙などの製法が全国に広まった。平安時代には、かなの使用にともない、和歌・物語文学や書状の料紙にふさわしい、優雅で書きやすく、繊細な趣のある紙が求められ、中国や朝鮮から輸入された料紙がもてはやされた。この展示では、日本・中国・韓国の料紙をとりあげ、その装飾技法の特徴などを紹介した。		
本館1階 14室	中国の漆器－わざとデザイン	10月5日(火)～11月28日(日)	30(0.0)
	＜主な作品＞龍彫彩漆盆、楼閣人物堆黒盆、屈輪長方形盆、松竹梅填漆合子		
	中国漆工には、彫漆・螺鈿・存星・漆絵・鎗金といった技法があり、これによって花鳥・楼閣人物・屈輪などの文様を表わす。それらの文様には皇帝の象徴や吉祥の意味が込められている。また、無文漆器という色彩と形態に美意識が発揮されたものもある。そのような中国漆工に見られる美意識や文様の意味などを紹介した。		
本館1階 15室	アイヌと儀礼	10月5日(火)～11月28日(日)	40(0.0)
	＜主な作品＞酒盃、護符、アイヌ鍬形、熊送り図、オムシャ図		
	「アイヌと儀礼」をテーマとして展示した。アイヌの人びとが儀礼の場で使用した祭具や衣服、装身具などとともに、熊送りに関する作品を多く展示した。本特集陳列では平沢屏山が描いた儀礼の場面のアイヌ絵を展示し、『蝦夷島奇観』等の写真パネルとともに展示品の使用された場面がより具体的にイメージできるよう工夫した。		
本館1階 16室	シリーズ「歴史を伝える」 東京国立博物館の模写・模造－平家納経－	10月19日(火)～11月28日(日)	20(0.0)
	＜主な作品＞平家納経(模本) 提婆達多品 第十二、厳島経巻(模本) 巻1、平家納経経箱(模造)		
	東京国立博物館は、明治5年(1872)の創立・開館以来、数多くの模写・模造を制作し、購入も行ってきた。今回は、模写・模造のうち、平家納経を中心に展示した。博物館草創期に制作した平家納経模本や、田中親美による平家納経の模造、平家納経に関係		

	する模写・模造を紹介することを通して、当時の博物館や社会的状況をうかがうことができる展示とした。		
本館2階 特別1室	中国書画精華～海を渡ってきた名品たち～	10月19日(火)～12月12日(日)	23(1.12)
	＜主な作品＞◎猿図、◎竹鶏図、◎四万山水図、◎山水図(唐絵手鑑「筆耕園」の内)、●世説新書巻第六残巻、王史二氏墓誌銘稿巻、◎禅院額字「釈迦宝殿」、◎保寧寺賦跋		
	平安時代にわが国に舶載された唐抄本の中には、反故紙として紙背が再利用され、今日改めて本紙を見ると、中国ではすでに失われた貴重な典籍である例が伝えられる。また鎌倉時代以降、禅宗とともに数多く舶載された宋元の絵画は、書院や茶室において、日本人の趣味にもとづいて鑑賞され親しまれてきた。それらの中にも、本場中国ではすでに稀少となっている作例が少なくない。一方、明治以降になると、中国本来の文人趣味を理想とするすぐれた賞鑑家により、中国伝世の歴代の書画の精品が収集された。館蔵品の中から、中国書画の名品を集めた精華展を開催した。		
平成館 企画展示室	東京国立博物館所蔵　正倉院の染物	11月2日(火)～11月28日(日)	41(0.0)
	＜主な作品＞紺地格子襷文纐纈平絹、赤地草花雲鳥文臈纐平絹天蓋垂飾、淡茶地花文風夾纐平絹幡足、赤茶地唐花花弁鳥文夾纐羅		
	当館には、明治のはじめ保存と研究のため、正倉院から頒布された染織品の一群が収蔵されている。これらは織物をはじめ、染物、刺繍などがガラス挟みの状態で260点余りある。昨年度は織物を中心とした展示を行ったので、今年度は染物を中心とした展示とした。残欠になっているものが多いが、正倉院に所蔵されている類裂から当初の用途を推測することができるものも含まれている。聖武天皇一周忌の法要に飾られた羅道場幡の幡足の一部、夾纐羅幡の坪裂や幡足、天蓋 垂飾などといった当初の形をある程度伺うことができるものもある。また、ほぼ同時代に中国で製作され、西域の敦煌で発見された夾纐平絹幡の一部なども展示した。また、作品本来の形や色彩などを後世へ伝えるため、大正時代末に正倉院の染織品を模写した作品もあわせて展示した。		
平成館 企画展示室	古代九州の経塚－北部九州を中心に－	12月7日(火)～23年3月6日(日)	61(0.2)
	＜主な作品＞◎土製彩絵経筒、◎銅製宝塔形経筒、陶製経筒、滑石製経筒、銅製経筒、滑石経		
	今回の特集陳列は、考古相互貸借事業にともなって福岡市博物館から借用した経塚出土品を中心に、当館が所蔵する、北部九州から出土した平安時代の経塚遺物を加えて展示を行った。北部九州には、四王寺山、宝満山、背振山など、山岳信仰で著名な山が多く、それらには経塚も数多く築造されている。今回は普段ほとんど展示する機会のない、◎土製彩絵経筒、◎銅製宝塔形経筒や、九州独特の滑石経なども含めて展示し、資料の有効活用をはかるとともに、古代における北部九州の経塚の実態を明らかにしようとするものにした。		
平成館 考古展示室	神秘に満ちた貝製品－鹿児島県広田遺跡－	12月14日(火)～23年3月11日（金）	64(0.64)
	＜主な作品＞◎貝輪、◎竜佩形貝製垂飾、◎貝符、◎組み合わせ式貝輪、◎有孔円板状貝製品、◎貝珠		
	広田遺跡は、種子島の南東部の海岸に面した砂丘上に位置する墓地遺跡である。ここからは数多くの埋葬遺構とともに100体以上の人骨、そして4万点を越す各種貝製品が発見されている。なかでも独特の文様を刻んだ貝符や貝輪、竜佩形の貝製垂飾などは南島地域独特のものであり、工芸的にも優れたものとして注目をあび、一括して重要文化財に指定されている。このたび「博物館所蔵の考古資料相互活用促進事業」として、鹿児島県歴史資料センター黎明館より、この広田遺跡から出土した貝製品を借用することができた。本特集陳列は、この機会を利用し、普段あまり目にすることない南島の神秘に満ちた貝製品の魅力を広く紹介しようとするものであった。		
本館1階 14室	香りをたのしむ－香道具－	23年1月2日(日)～2月20日(日)	43(0.0)
	＜主な作品＞山水蒔絵十種香箱、蔦細道蒔絵沈箱		
	香道具には形式にとらわれず、遊び心に溢れた作品が多い。特に種々の香木を焚いて、香の名前を言い当てるゲーム、「組香」で用いられる道具類は、造形的にも遊戯性が高い。また沈箱や香合など香木片を収める容器にも自由に趣向が凝らされ、バラエティに富んでいる。蒔絵で精緻に飾られた作品を中心に、繊細優美な香道具の世界をお楽しみいただく展示とした。		
本館1階 15室	アイヌの文様	23年1月2日(日)～4月3日(日)	42(0.0)
	＜主な作品＞盆、アットゥシ、頭巾、丸盆、飾矢筒		
	「アイヌの文様」をテーマとして展示した。アイヌ民族の代表的な文様であるモレウとよばれる渦巻き文を中心に、祭具や衣服、工具や木工品などに施された多彩な飾りや文様を紹介した。アイヌ民族のものだけでなく、樺太ニブヒやウィルタの人びとがつくりだした文様についても紹介した。『蝦夷島奇観』等の写真パネルを多く用いて、展示品の使用された場面がより具体的にイメージできるよう工夫した。		
本館1階 16室	シリーズ「歴史を伝える」 暦と干支	23年1月2日(日)～1月30日(日)	34(0.0)
	＜主な作品＞浮世絵版画 明治四十四年絵暦、具注暦、日本長暦		
	2011年正月展と関連した特集陳列である。暦は時間の単位として体系化されてきたものであるが、時を支配することはすなわち国を支配するのと同義であるとして、各時代・各国家によって様々な暦が為政者によって定められてきた。日本は伝統的に中国の暦を採用し、宣明暦の輸入以後、江戸時代前期に渋川春海がわが国発の自国暦「貞享暦」を作成するまで長く用いられた。 暦は干支や陰陽道などと密接に絡みながら、暦道・暦学といった固有の学問を発達させ人々の生活を規定した。本特集陳列では、代表的な暦を紹介するとともに、祭礼や農業・漁業に特化された暦、さらに意匠をこらした暦などを陳列した。		
本館1階 19室	伝統工芸－技の世界を探る－	23年1月2日(日)～3月6日(日)	5(0.0)
	＜主な作品＞色鍋島技術記録、存星技術記録、布目象嵌技術工程、九谷焼技術記録		
	当館は文化庁からの管理換品をはじめ、重要無形文化財(人間国宝)の作家による伝統工芸の作品を多数所蔵している。日本の工芸の伝統的な技法を基本として作られたこれらの作品の中から、陶磁、漆工、金工の技術記録を選んで、その卓越した技の世界を紹介した。		
本館2階 特別2室	博物館に初もうで－美術のなかのうさぎと国々の お祝い切手－	23年1月2日(日)～1月30日(日)	39(0.0)
	＜主な作品＞兎桔梗図、普通切手　蟠龍 躍鯉 飛雁、新聞郵送用切手　自由の女神 正義の女神 勝利の女神 歴史の女神 暖炉の		

	女神 平和の女神 商業の女神 インディアンの女神、濃萌黄地花兎文金地金襴裂		
	干支(辛卯)にちなみ「うさぎ」、あるいは祝儀・長寿など慶事に関するものを陳列するほか、金工列品に属している明治31年逓信省寄贈の万国切手の整理が終了したことを受け、各国の記念切手よりクリスマスから新年に関するものや、慶祝を記念したものを陳列した。		
本館1階 16室	シリーズ「歴史を伝える」 医学館の漢籍	23年2月1日(火)～3月13日(日)	35(0.0)
	＜主な作品＞黄帝内経素問、太平聖恵方、経籍訪古志		
	医学館は江戸幕府の医師養成機関である。平安時代の医師であった丹波氏の流れを汲むと称した幕府奥医師多紀元孝が私塾として創設し、後に公的な組織となって、幕末まで漢方医学の拠点として勢力を保った。特に清朝の考証学の影響を受けた中国古医書の研究と編纂出版事業は大きな業績として特筆される。この特集では、医学館から当館へ引き継がれた医学関係の漢籍を概観するとともに、幕末期に医学館に属した医学者渋江抽斎や森立之の事跡も紹介した。		
本館1階 18室	黒田清輝と京都	23年2月1日(火)～3月11日（金）	31(0.1)
	＜主な作品＞舞妓、昔語り下絵(舞妓)、昔語り下絵(構図Ⅱ)		
	黒田清輝は1893年夏に9年間におよぶフランス留学を終えて帰国し、同年秋、初めて京都を訪れた。留学中、絵画の師であったラファエル・コランほか多くのジャポニザン(日本趣味を持つ人々)と交遊した黒田であったが、帰国直後のこの京都旅行で、初めて日本の伝統的風俗に触れることになった。本特集陳列は、≪舞妓≫や大作≪昔語り≫のための下絵、画稿など、京都を題材に描いた作品を通じて、黒田と、彼にとって重要な制作の場となった京都との関わりを紹介した。		
本館2階 特別2室	東京国立博物館コレクションの保存と修理	23年2月15日(火)～3月11日（金）	21(0.0)
	＜主な作品＞両界曼荼羅図　胎蔵界曼荼羅、塑造悪鬼首、楼閣人物螺鈿料紙硯箱、千手観音菩薩坐像、白磁刻花文鉢		
	東京国立博物館が手がける保存と修理の成果を、よりわかりやすく紹介するため、平成21年度に修理が完了した作品を中心に展示した。絵画、書跡、工芸、歴史資料、考古にわたるさまざまな分野、形態、技法の作品を取り上げ、修理工程および修理過程で得られた情報をパネルにて詳細に紹介することにより、博物館が担う文化財修理の役割に広い理解を期待する展示とした。		
本館1階 14室	おひなさまと日本の人形	23年2月22日(火)～4月24日(日)	65(0.0)
	＜主な作品＞箪笥 紫檀象牙細工蒔絵雛道具、立雛 次郎左衛門頭、雛道具 三ツ葉葵紋付		
	三月三日の桃の節句にちなみ、毎年恒例の雛飾りの特集を行った。今回は古今雛や、大名家に伝わった雛道具のほか、京都の伝統工芸である御所人形や衣装人形、各地の特色豊かな郷土雛を特集して展示した。		
本館1階 12室	漆芸にみる桜	23年3月29日(火)～6月5日(日)	18 (0.2)
	＜主な作品＞◎初瀬山蒔絵硯箱、◎比良山蒔絵硯箱、桜西行蒔絵硯箱、吉野山蒔絵見台		
	古来、わが国の人々にもっとも親しまれてきた花の一つである、桜を主題にした漆芸品を集めて展示した。様々な用途・形式の作品に、様々な技法によって表わされた桜の意匠を通して、日本人がいかに桜を愛でてきたかをご覧いただいた。		
本館1階 16室	シリーズ「歴史を伝える」 キリシタンの祈り-ミサとオラショ	23年3月29日(火)～4月24日(日)	55(0.39)
	＜主な作品＞◎天正遣欧使節記、◎聖母像(親指のマリア)、祈祷書		
	16世紀後半、日本はキリスト教を受容し、南蛮寺と呼ばれた教会などが各地に造られ、祈りが捧げられた。そこではヨーロッパからもたらされた楽器により教会の音楽が奏でられていたことが、当時の楽譜である『サカラメンタ提要』、ヨーロッパで喝采を浴びた日本の少年たちの演奏を記録した『天正遣欧使節記』から知られる。キリスト教禁制の後、潜伏して隠れキリシタンとなった人々の間に伝わった『祈祷書』は、ラテン語の祈りの言葉を平仮名で記したものであるが、研究によりその旋律がわかっている。今回の展示は、これら祈りの場に流れた音楽を取り上げ、受容期の南蛮寺の祭壇に置かれたキリスト像、聖母子図、そして禁制下のキリシタンたちの祈りの対象であるマリア観音像など礼拝と信仰に焦点をあてて展示した。		
本館2階 特別2室	南太平洋の暮らしと祈り	23年3月29日(火)～4月24日(日)	44(0.0)
	＜主な作品＞仮面、ワニ、クジラの歯のペンダント、ココナッツジュース容器		
	東京国立博物館には、おもに19世紀後半から20世紀初頭にかけて、南太平洋の島々から将来された約500件の民族資料が所蔵されている。当時の南太平洋では、伝統的な暮らしと信仰が近代文明の影響を受けて急激に変わりつつあった。そのため、収蔵品のなかには、すでに現地では見られなくなったものもある。本特集陳列では、当館所蔵の貴重な南太平洋民族資料のなかから、伝統的な暮らしや宗教儀礼にかかわる代表的なものを展示することで、日本に隣接していながらあまり知られていない南太平洋の文化の魅力を紹介した。		
平成館 企画展示室	拓本とその流転	23年3月29日(火)～5月15日(日)	41(0.0)
	＜主な作品＞孔子廟堂碑、孟法師碑、善才寺碑、定武蘭亭序(独孤本)、西嶽華山廟碑(順徳本)、夏承碑、天発神讖碑		
	毎年開催している台東区立書道博物館との連携企画として、平成22年度は中国の拓本を取り上げた。現存する最古の拓本は、敦煌の蔵経洞で発見された唐時代の温泉銘であるが、拓本の起源はそれ以前に遡ると考えられる。しかし唐時代の拓本は、ごく僅かの遺例しかない。宋時代には、上質の紙や墨の製造にともない拓本の技法も多様化し、精緻な拓本は収蔵家の垂涎の的となった。本展は名拓の数々とともに、拓本のたどった流転にも目をむけ、さまざまなエピソードを交えながら、唐拓や宋拓をはじめとする拓本の魅力を紹介した。		
平成館 考古展示室	古墳時代の人々―人物埴輪の表情と所作―	23年3月29日(火)～7月31日(日)	28 (0.0)
	＜主な作品＞埴輪 あごひげの男子頭部、埴輪 笠を被る男子頭部、埴輪 琴を弾く男子、埴輪 頭部に箱を載せる女子		
	東京国立博物館には多数の人物埴輪が収蔵されているが、完全な形として残っているものは少ない。 ただし、一部が欠落しているものの造形的に極めて優れたものもある。そこで、本特集陳列では人物埴輪の様ざまな表情や所作がわかる資料を中心にして、古墳時代の人々の姿にせまった。		

7)広報

・親と子のギャラリー

「日本美術のつくり方」「博物館の音楽会」

会　　期：2010年6月15日～7月25日、8月3日～9月5日

広　　報：

ターゲット：親子および初心者やはじめて博物館に来る人を含む一般の美術愛好家

重点項目：広く一般に向けての情報周知、親子向け媒体へのプロモート

特記事項：リリースの配信2回(約280件)、新聞広告、ウエブ「レッツエンジョイ東京」夏休み企画への広告

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・ＤＭ送付	―
交通広告	―
新聞・雑誌広告	毎日新聞2回、朝日新聞4回、読売新聞　1回
テレビ広告	―
インターネット広告	「レッツエンジョイ東京」広告（バナー、特集記事）
新聞掲載	―
テレビ・ラジオなど	FINE（テレビ東京）、Tokyo Morning Radio（J-WAVE）
雑誌掲載	―
博物館ニュース	告知1回、特集1回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信

・特別企画

「留学生の日」

会　　期：2010年10月3日

広　　報：

ターゲット：留学生

重点項目：学校を通じた広報

特記事項：リリースの配信(約280件)、ポスター・チラシの制作、学校へのＤＭ、大学所在駅の交通広告

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・ＤＭ送付	約510件(大学、語学専門学校等)
交通広告	京王線　大学所在7駅駅貼り、東京メトロ大学所在19駅　ちらしBOX付駅貼り
新聞・雑誌広告	―
テレビ広告	―
新聞掲載	毎日新聞
テレビ・ラジオなど	―
雑誌掲載	―
博物館ニュース	告知1回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信

・特別企画

「博物館に初もうで」、本館リニューアルオープン

会　　期：2011年1月2日～1月30日

広　　報：

ターゲット：一般の美術愛好家、家族連れ、日本人および外国人観光客

重点項目：タレントを起用したイメージポスターによるキャンペーンを展開

特記事項：館の愛称[トーハク]をフックに、館の認知度をあげるキャンペーンを展開、ポスタープレゼントキャンペーンの実施

まだ博物館に来たことのない人、特別展にしか来たことのない人の総合文化展への来場を促進した

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・ＤＭ送付	「初もうで」：約1,950(博物館・美術館・学校・大使館・ギャラリー・カルチャーセンター等) 「リニューアル」：約2,200件(首都圏博物館・美術館・学校・大使館・ギャラリー・ホテル・旅館・インターナショナルスクール・カルチャーセンター等)
交通広告 街頭広告	「初もうで」： 駅貼り（JR山手シングルBセット、東京メトロ、都営地下鉄、東急、京王、京成計約80駅210枚） 「リニューアル」： 駅貼り（JR上野駅集中貼、JR首都圏リーチセット、東京メトロ、東急、京王、京成　計約60駅350枚） 車内吊（京王・京王井の頭　98枚） JR・私鉄駅デジタルサイネージ(20駅27箇所) 新宿アルタビジョン12月31日12：00－18：00独占、銀座4丁目ホットビジョン　1ヶ月間
新聞・雑誌広告	「初もうで」：朝日新聞１回、読売新聞1回、ジャパンタイムズ2回、デイリー読売1回 「リニューアル」：朝日新聞15段カラー1回、毎日新聞15段モノクロ1回、J-nude全面カラー1回
テレビ広告	―
インターネット広告	「初もうで」：レッツエンジョイ東京　正月特集バナー
新聞掲載	朝日新聞、毎日新聞、東京新聞、公明新聞

テレビ・ラジオなど	ぶらぶら美術館(日本テレビ)　LOHAS SUNDAY（J-WAVE）、TIME FOR BRUNCH（J-WAVE）ほか
雑誌掲載	ＧＬＯＷ（宝島社）、一個人（KKベストセラーズ）、ぴあ（ぴあ）　ほか
博物館ニュース	リニューアル特集2回、初もうで特集1回
インターネット	当館ウェブサイト(ホームページ)での紹介、メールマガジンでの情報配信

・特集陳列「拓本とその流転」　台東区立書道博物館との連携企画
会　　期：2011年3月15日～5月15日
広　　報：
ターゲット：書道愛好家
重点項目：新聞および書・美術専門雑誌に向けてのプロモート
特記事項：台東区立書道博物館と連携してリリースを配信
　　報道内見会の実施　(3月14日、12人出席)

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・ＤＭ送付	台東区書道博物館から送付
交通広告	3月初旬～3月中旬　駅貼り広告(ＪＲ上野駅、鶯谷駅)
新聞・雑誌広告	―
テレビ広告	―
新聞掲載	―
テレビなど	―
雑誌掲載	「月刊書道界」など
博物館ニュース	注目の特集蘭掲載　1回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信

・特別企画
「博物館でお花見を」
会　　期：2011年3月23日～4月17日　＊東日本大震災の影響により会期を3月29日～4月17日に変更　開館時間を10：00－16：00に短縮
広　　報：
ターゲット：一般の美術愛好家、家族連れ、日本人および外国人観光客
重点項目：広く一般のマスコミを通じた情報提供。
特記事項：イベント広報を通じて、まだ博物館に来たことのない人の来館を促進。家族づれや外国人観光客向けの媒体へのプロモートを実施。

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・ＤＭ送付	約1256件(全国博物館・美術館・学校・ホール・大使館・ギャラリー・ホテル・旅館・インターナショナルスクール・カルチャーセンター等)
交通広告	駅貼り(ＪＲ、東京メトロ、京王電鉄)、駅貼りちらしボックス付（東京メトロ） ＊東日本大震災の影響によりすべてキャンセル
新聞・雑誌広告	朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、英字新聞　＊東日本大震災の影響によりすべてキャンセル
テレビ広告	―
新聞掲載	―
テレビなど	―
雑誌掲載	東京ウォーカー　など
博物館ニュース	特集2回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信

・長期的な広報
成田空港　広告ボードの設置　第２ターミナルビル本館サテライト　特設ボードの設置（2箇所）2010年8月1日～2011年3月31日
羽田空港　京成新国際ターミナル駅　上下線ホームピラー、可動柵広告　2010年12月1日～2011年5月31日
都営バス　ラッピング広告（3台）　2010年3月25日～2011年3月24日

(2) 特別展・共催展等(海外展・巡回展を含む)

展覧会名：特別展「細川家の至宝－珠玉の永青文庫コレクション－」
開会期間：4月20日～6月6日(43日間)
会　　場：平成館2階　特別展示室第1室～第4室
主　　催：東京国立博物館、永青文庫、NHK、NHKプロモーション、朝日新聞社
後　　援：文化庁
協　　賛：トヨタ自動車、日本写真印刷
陳列品総件数：284件（うち国宝：8件　重要文化財：27件　重要美術品：18件）
入館者数：182,470人(目標入場者数 160,000人・達成率 114.0%)
入場料金：一般 1500 円(1300 円／1200 円)、大学生 1200 円(1000 円／900 円)、高校生 900 円(700 円／600 円) 中学生以下無料　(　)内は前売り／20 名以上の団体料金
担当研究員数：6人

展覧会の内容：
永青文庫の収蔵品を中心に細川家に伝来する美術品や歴史資料を展示し、細川家の歴史と日本の伝統文化を紹介し、あわせて近代日本を代表する美術コレクターである細川護立の審美眼と人物像に迫った。

講演会等：「細川家　美と戦いの７００年」　講師：永青文庫理事長、細川家１８代当主　細川護熙　氏　平成館大講堂　　4月24日　　5月28日
「細川護立と日本の近代美術」講師：東京文化財研究所企画情報部文化形成研究室長　塩谷純　氏　平成館大講堂　5月29日

広報：
ターゲット：広く一般の歴史および美術ファン
重点項目：マスコミおよび交通広告による広く一般への情報提供。細川護熙氏をたてた広報展開
特記事項：　細川護熙永青文庫理事長のインタビューアレンジ等による広報促進、5月5日子ども向けワークショップを開催、糸井重里氏との対談

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・ＤＭ送付 ジュニア用ワークシートＤＭ送付	約6,200件(博物館・美術館・学校（小・中・高・大）、ギャラリー、図書館等) ジュニア用ワークシート：東京近郊小中学校に送付、ウェブサイトからダウンロード、および会場内にて配布
交通広告	駅ボード(ＪＲ25駅27面の大型ボード、JR・メトロ72駅SWボード77面、メトロUボード17駅20面) ポスター駅貼り等(JR上野駅、東急、京王、西武、小田急　計34枚)
新聞・雑誌広告	朝日新聞　5回
テレビ広告	NHKスポット多数回
新聞掲載	朝日新聞(細川氏インタビュー、人物特集、美の履歴書、10万人達成記事)ほか
テレビ放映	ニュース[信長文書]、ラジオビタミン[細川理事出演]、スタジオパークからこんにちは[細川理事出演]、歌うコンシェルジュ(竹内館長出演)、日曜美術館(細川理事出演)、ラジオ深夜便（今井出演）「PON」(日本テレビ)、「ぶらぶら美術館」(BS日テレ)ほか
雑誌掲載	「AERA」（朝日新聞）「ぴあ」（ぴあ）
博物館ニュース	特集2回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信 公式ウェブサイト、共催者(NHK、NHKプロモーション)ウェブサイトでの紹介 「ほぼ日刊イトイ新聞」とのタイアップ　糸井氏×細川氏対談連載 公式サイトで学芸員による「至宝コラム」 ブログ貼り付け用画像の提供

②パブリシティー情報掲載・放映
新聞　377件、雑誌　123件、テレビ/ラジオ 11件、インターネット　20件
③記者発表会　2009年11月19日　外国人記者クラブにて　(64人出席)
④報道内見会　4月19日(175人出席)
⑤教員鑑賞会　4月23日(61人出席)
⑥雑誌「ぴあ」読者内覧会　4月23日(158人出席)

展覧会名：特別展「誕生！中国文明」
開会期間：7月6日～9月5日（55日間）
会　　場：平成館特別展示室第1～4室
主　　催：東京国立博物館、読売新聞社、大広、中国河南省文物局
後　　援：中国大使館
協　　賛：清水建設、光村印刷、トヨタ自動車、三城ホールディングス
協　　力：日本航空、日本貨物航空、TBSラジオ
陳列品総件数：147件
入館者数：105,538人(目標入場者数 220,000人・達成率 48.0%)
入場料金：一般 1500 円(1300 円／1200 円)、大学生 1200 円(1000 円／900 円)、高校生 900 円(700 円／600 円)中学生以下無料 ＊(　)内は前売り／20 名以上の団体料金
担当研究員数：4人

展覧会の内容：
中国歴代に渡って数多くの都が置かれ、常に中原の中心地として中国文化の中で重要な位置を占める河南省の全土から、最近の発掘品を含め、各時代の代表的な名品を選定し、中国文化の真髄に迫った。

講演会等：「文字の発生と歩み」講師：書家　新井光風　氏　平成館大講堂　7月10日
「美の競演ー中国河南省の文物」講師：学芸企画部長　松本伸之平成館大講堂　8月7日

広報：
ターゲット：広く一般の歴史および美術ファン、中国ファン、在日中国人
重点項目：マスコミおよび交通広告による広く一般への情報提供
特記事項：　著名人7名（宮城谷昌光、田原総一郎、鳳蘭、チェン・ミン、木下秀翠、姜尚中、坂東玉三郎）による展覧会応援団を結成。応援コメントの新聞掲載や応援団出演のイベントの開催など。

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ等ＤＭ送付	約10336件(博物館・美術館・学校（小・中・高・大）、ギャラリー、図書館等)
交通広告	駅ボード(ＪＲステーションボード20面、JR・メトロ＊駅SWボード30面、メトロUボード電飾 ポスター駅貼り等(メトロ、京成)、　ポスター車内（京成）、駅デジタルサイネージ27台
新聞・雑誌広告	朝日新聞　１回　読売新聞　6回、日経新聞　1回

ラジオ広告	ＴＢＳラジオスポット
新聞掲載	読売新聞(特集、連載コラム、行幸啓報道)ほか
テレビ放映	ニュース[信長文書]、ラジオビタミン[細川理事出演]、スタジオパークからこんにちは[細川理事出演]、歌うコンシェルジュ(竹内館長出演)、日曜美術館(細川理事出演)、ラジオ深夜便（今井出演）「PON」(日本テレビ)、「ぶらぶら美術館」(BS日テレ)ほか
雑誌掲載	「キュリオマガジン」（フジインターナショナルミント）、「週刊新潮」（新潮社）、一個人（KKベストセラーズ）、「女性自身」（光文社）、「ソトコト」（木楽舎）ほか
博物館ニュース	告知1回、特集2回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信 公式ウェブサイト、共催者(読売新聞)ウェブサイトでの紹介 公式サイトで学芸員による「至宝コラム」 「ほぼ日刊イトイ新聞」とのタイアップ　糸井氏×細川氏対談連載 ブログ貼り付け用画像の提供

②パブリシティー情報掲載・放映
　新聞　310件、雑誌　202件、テレビ/ラジオ 14件、インターネット　38件
③記者発表会　3月18日平成館大講堂にて　(113人出席)
④報道内見会　7月5日(100人出席)
⑤教員鑑賞会　7月9日(98人出席)

展覧会名：光明皇后1250年御遠忌記念　特別展「東大寺大仏―天平の至宝―」

開会期間：10月8日～12月12日（59日間）
会　　場：平成館特別展示室第1～4室
主　　催：東京国立博物館、華厳宗大本山東大寺、読売新聞社
後　　援：文化庁、平城遷都1300年記念事業協会
協　　賛：しみず建設、大和証券、トヨタ自動車、ニッセイ同和損害保険、藤田観光、文化服装学院、みずほ銀行、光村印刷
特別協力：ソニー、ソニービジネスソリューション
協　　力：日本ヒューレット・パッカード、エヌビディア、エルザジャパン
映像協力：　凸版印刷
陳列品総件数：67件（うち国宝11件、重文18件、正倉院宝物12件）
入館者数：232,791人(目標入場者数 420,000人・達成率 55.4%)
入場料金：一般1500円（1300円/1200円）、大学生1200円（1000円/900円）、高校生900円（700円/600円）中学生以下無料 ＊(　)内は前売り
　　／20名以上の団体料金
担当研究員数：5人

展覧会の内容：
　東大寺の大仏建立をめぐる作品を通してその精神世界に迫るとともに、天平文化の精華を展観し、肖像彫刻の傑作などを通じて、今日まで脈々として続く東大寺文化の重要性も紹介した。

講演会等：「東大寺大仏と天平彫刻」　講師：特任研究員　金子啓明　平成館大講堂　　10月30日
　　「地面の下の東大寺東塔院を探る」講師：奈良国立文化財研究所埋蔵文化センター主任研究員　金田 明大氏　平成館大講堂　11月7日

広報：
　ターゲット：広く一般の歴史および美術ファン
　重点項目：マスコミおよび交通広告による広く一般への情報提供
　特記事項：　プレスツアーの実施（7月26日―27日）、大仏の右手レプリカを丸の内マルキューブにて会期前に展示、平城遷都1300年キャラクターせんとくんの招致

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・ＤＭ送付	約8,122件(博物館・美術館・学校（小・中・高・大）、ギャラリー、図書館等)
交通広告	駅ボード(ＪＲ21駅22面のNTボード、JR・私鉄100駅100面SSアクセスボード、JR34駅38面SWボード) ポスター駅貼り等(東京メトロ、京王、西武、京成、東急　多数) 車内吊等（京王、京王井の頭、西武　多数）
新聞・雑誌広告	朝日新聞　＊回
テレビ広告	―
新聞掲載	読売新聞(特集、連載コラム、10万人報道、行幸啓報道)ほか
テレビ/ラジオ	スッキリ！（日本テレビ）、日曜美術館アートシーン（NHK）、LOHAS SUNDAY(J-WAVE)ほか
雑誌掲載	「ぴあ」（ぴあ）、「カーサブルータス」（マガジンハウス）、いきいき（いきいき）、家庭画法（世界文化社）、BAILA（集英社）ほか
博物館ニュース	告知2回、特集1回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信 公式ウェブサイト、共催者(読売新聞)ウェブサイトでの紹介 公式サイトでのブログによる情報発信 ブログ貼り付け用画像の提供

②パブリシティー情報掲載・放映
新聞　214件、雑誌　221件、テレビ/ラジオ 22件、インターネット　43件
③記者発表会　8月9日平成館大講堂にて　(83人出席)
④報道内見会　10月7日(223人出席)
⑤教員鑑賞会　10月15日(297人出席)

展覧会名：文化財保護法制定60周年記念　特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」

開会期間：平成23年1月18日～3月6日 (42日間)
会　　場：平成館特別展示室第1～4室
主　　催：東京国立博物館、ＮＨＫ、ＮＨＫプロモーション、朝日新聞社
特別協力：平山郁夫シルクロード美術館、法相宗大本山薬師寺
協　　賛：大日本印刷
協　　力：文化遺産国際協力コンソーシアム、東京美術倶楽部、朝日生命保険、あいおいニッセイ同和損害保険
後　　援：外務省、文化庁
陳列総件数：101 件(うち重要文化財 5 件)
入館者数：188,402人(目標入場者数 180,000人・達成率104.7%)
入場料金：一般 1500 円(1300 円／1200 円)、大学生 1200 円(1000 円／900 円)、高校生 900 円(700 円／600 円)中学生以下無料 ＊(　)内は前売り／20 名以上の団体料金
担当研究員数：2人

展覧会の内容：
平山郁夫氏の文化財保護活動に関わる偉大な活動を顕彰し、その業績を通して文化財保護の重要性と課題、今後のあり方を考えるために、各地から集めた遺物や、平山氏ゆかりの美術工芸品を展観した。

講演会等　「薬師寺と大唐西域壁画」講師：法相宗大本山薬師寺管主　山田法胤氏　平成館大講堂　　1 月 29 日
「仏教伝来の道をたどる」講師：学芸企画部長　松本伸之平成館大講堂　　2 月 19 日

広報：
ターゲット：広く一般の美術ファン
重点項目：マスコミおよび交通広告による広く一般への情報提供
特記事項： 開会式列席の谷村新二氏への取材誘致

① 広報媒体

種類	設置場所・件数等
ポスター・チラシ・ＤＭ送付	約7630件(博物館・美術館・学校（小・中・高・大）、ギャラリー、図書館等)
交通広告	駅ボード(ＪＲ21駅22面のNTボード、JR35駅40面SWボード) ポスター駅貼り等(東京メトロ、京王、西武、京成、東急　ほか) 車内吊等（東急、西武、京王、京王井の頭、京成、小田急、東武、東京メトロ　ほか）
新聞・雑誌広告	全10段＝2回　半2段＝19回　2段４/1＝6回
テレビ広告	スポット　多数　ミニ番組　多数
新聞掲載	朝日新聞　ほか
テレビ/ラジオ	NHK日曜美術館　本編　ほか
雑誌掲載	Grazia（講談社）、ミセス（文化出版局）、ぴあ（ぴあ）、芸術新潮（新潮社）ほか
博物館ニュース	告知1回、特集1回
インターネット	当館ウェブサイトでの紹介、メールマガジンでの情報配信 公式ウェブサイト、共催者(朝日新聞)ウェブサイトでの紹介

②パブリシティー情報掲載・放映
新聞　459件、雑誌　108件、テレビ/ラジオ 7件、インターネット　15件
③記者発表会　9月29日平成館大講堂にて　(99人出席)
④報道内見会　1月17日(124人出席)

展覧会名：文化庁海外日本古美術展「日本の美　5000年(5000 Years of Japanese Art)」

開会期間：5月5日～ 6月28日 (49日間)
会　　場：トプカプ宮殿博物館（トルコ共和国・イスタンブール）
主　　催：東京国立博物館、文化庁、トルコ共和国文化観光省
後　　援：ー
協　　賛：ー
陳列総件数：47 件（うち国宝：2 件　重要文化財：3 件）
入館者数：607,734人(目標入場者数 ー人・達成率 ー%)
入場料金：無料
担当研究員数：5人

展覧会の内容：
「トルコにおける日本年」の記念事業の一環としてトプカプ宮殿博物館において、縄文時代から江戸時代までの5000年にわたる日本美術の精華を、当館の収蔵品を中心に紹介した。

広報：2010東京国立博物館展示と催しのご案内、東京国立博物館ニュース

展覧会名：The World of Khubilai Khan: Chinese Art in the Yuan Dynasty （クビライ・カーンの世界：元王朝の中国美術）
開会期間：9月20日～平成23年1月2日（105日間）
会　　場：メトロポリタン美術館（アメリカ合衆国・ニューヨーク）
主　　催：メトロポリタン美術館
特別協力：東京国立博物館、奈良国立博物館、中華文物交流協会
後　　援：－
協　　賛：－
陳列総件数：220件（うち重要文化財：3件）
入館者数：166,476人（目標入場者数　－人・達成率　－%）
入場料金：－
担当研究員数：1人

展覧会の内容：
　中国元時代の絵画、工芸美術の優品を一堂に会して紹介した。

広報：2010東京国立博物館展示と催しのご案内

展覧会名：創立80周年記念特別展「よみがえるヤマトの王墓－東大寺山古墳と謎の鉄刀－」
開会期間：9月22日～11月23日（56日間）
会　　場：天理大学附属天理参考館（奈良県天理市）
主　　催：天理大学附属天理参考館、東京国立博物館
後　　援：天理市、奈良県教育委員会、天理市教育委員会、読売新聞大阪本社、読売テレビ放送、奈良テレビ放送
協　　賛：－
陳列総件数：52件（うち重要文化財：20件）
入館者数：11,139人(目標入場者数－人・達成率－%)
入場料金：一般400円・小中学生200円・20名以上の団体300円
担当研究員数：3人

展覧会の内容：
　東京国立博物館と天理参考館が共同で東大寺山古墳出土遺物全点を調査した研究成果を一般に公開するため、出土品のうち、展示可能なものすべてと関連遺物を展示した。

広報：特になし

展覧会名：海外展　万国博覧会開催記念「千年丹青―日本中国珍蔵宋元画精品展」
開会期間：9月28日～11月23日（56日間）
会　　場：上海博物館（中華人民共和国・上海）
主　　催：東京国立博物館、上海博物館
後　　援：－
協　　賛：－
陳列総件数：64件（うち国宝6件、重要文化財22件、重要美術品2件）
入館者数：331,275人(目標入場者数－人・達成率　－%)
入場料金：－
担当研究員数：2人

展覧会の内容：
　当館所蔵品を中心に日本で収蔵される中国・宋元絵画の名品を、上海博物館が所蔵する宋元絵画とともに展示し、その意義や価値に迫った。

広報：2010東京国立博物館展示と催しのご案内、東京国立博物館ニュース

展覧会名：海外展　万国博覧会開催記念「鑑真と空海-日中文化交流の顕彰」
開会期間：9月28日～11月23日（56日間）
会　　場：上海博物館（中華人民共和国・上海）
主　　催：東京国立博物館、文化庁、上海博物館
後　　援：－
協　　賛：－
陳列品総件数：3件（うち国宝：1件　重要文化財：2件）
入館者数：331,275人(目標入場者数－人・達成率　－%)
入場料金：－
担当研究員数：2人

展覧会の内容：
　万国博覧会の開催を記念し、日中の文化交流に多大な功績のあった鑑真と空海に焦点を当てることによって、その業績を顕彰した。

広報：2010東京国立博物館展示と催しのご案内、東京国立博物館ニュース

展覧会名：海外展「高麗仏画大展」
会館期間：10月12日～11月21日（42日間）

会　　場：国立中央博物館・企画展示室（大韓民国・ソウル）
主　　催：国立中央博物館
特別協力：東京国立博物館
後　　援：－
協　　賛：－
陳列総件数：108 件（うち重要文化財 11 件）
入館者数：88,659人(目標入場者数 －人・達成率 －%)
入場料金：－
担当研究員数　1 名

展覧会の内容：
　東アジア美術の最高峰の一つである高麗仏画を日本、韓国、アメリカ、ヨーロッパから一堂に集め、その優れた特色を究明した。

広報：2010東京国立博物館展示と催しのご案内、東京国立博物館ニュース

【京都国立博物館】

(1)平常展

平常展示館建て替え工事に伴い、平常展示休止中。

(2)特別展等・共催展等

展覧会名：特別展覧会「没後400年　長谷川等伯」

会　　期：4月10日～5月9日(27日間)
入場者数：244,347人(目標入場者数 130,000人・達成率187.96%)
陳列件数(うち指定品数)：78件(34件)（国宝3、重文30、重美1）
主 催 者：京都国立博物館、毎日新聞社、ＮＨＫ京都放送局、ＮＨＫプラネット近畿
講 演 会：3回　　参加者数合計 465人
　・関連土曜講座
　　4月10日　長谷川等伯の生涯
　　山本英男（美術室長）
　　155人参加
　　4月24日　狩野永徳にとっての長谷川等伯像
　　狩野博幸(同志社大学教授)
　　165人参加
　　5月1日　等伯画の魅力あれこれ
　　脇坂淳(京都教育大学名誉教授)
　　145人参加
広報媒体：ポスター、ちらし、情報誌、ホームページ、新聞広告、公共放送等

展覧会名：特別展観「没後 200 年記念　上田秋成」

会　　期：7 月 17 日～8 月 29 日(39 日間)
入場者数：21,705人(目標入場者数 20,000人・達成率 108.53%)
陳列件数(うち指定品数)：82件(7件)（重文5、重美2）
主 催 者：京都国立博物館、日本近世文学会
講 演 会：10回　　参加者数合計　609人
　・関連土曜講座
　　7月24日　上田秋成をめぐる京の画家たち
　　狩野博幸(同志社大学教授)
　　165人参加
　　7月31日　秋成のつづら箱－知られざる名作の数々－
　　稲田篤信(首都大学東京教授)
　　109人参加
　　8月21日　秋成と『胆大小心録』の画家たち
　　水谷亜希（研究員）
　　130人参加
　・関連夏期講座
　　7月27日　「美しいキリスト、醜いキリスト―宗教文学と図像の中のキリスト像―」
　　岡田温司（京都大学教授）
　　7月27日　「文学と絵画の交響 ―住吉物語絵の変容―」
　　若杉準治（列品管理室長）
　　7月27日　「古典に遊ぶ蒔絵の世界」
　　永島明子（主任研究員）
　　7月28日　「漢鏡の図像と銘文―鏡に鋳こまれた人びとのこころ―」
　　岡村秀典（京都大学教授）
　　7月28日　「平安時代の考古遺物にみられる装飾文様―王朝文学と文様の和様化―」
　　宮川禎一（考古室長）
　　7月28日　「詩画軸の世界」
　　山本英男（美術室長）
　　7月29日　「上田秋成の画賛」
　　長島弘明（東京大学教授）

ハートピア京都大会議室　205人参加
広報媒体：ポスター、ちらし、情報誌、ホームページ、新聞広告、公共放送等

展覧会名：特集陳列「新収品展」
会　　期：7月17日～8月29日(39日間)
入場者数：－人(上田秋成展と同時開催)
陳列件数(うち指定品数)：99件(4件)（重美4)
主 催 者：京都国立博物館
講 演 会：1回　　参加者数合計　62人
・関連土曜講座
8月28日　新収品展にちなんで
呉孟晋（研究員）
62人参加
広報媒体：ポスター、ちらし、情報誌、ホームページ、新聞広告、公共放送等

展覧会名：特別展覧会「文化財保護法60年記念事業　高僧と袈裟－ころもを伝え こころを繋ぐ－」
会　　期：10月9日～11月23日(40日間)
入場者数：19,297人(目標入場者数 20,000人・達成率96.49%)
陳列件数(うち指定品数)：121件(56件)　(国宝15、重文41)
主 催 者：京都国立博物館
講 演 会：4回　　参加者数合計 521人
・関連土曜講座
10月9日　糞掃衣と金襴袈裟にみる袈裟の変遷
松村薫子(大和ミュージアム学芸員)
112人参加
10月16日　袈裟からたどる東アジアの染織史
山川曉（主任研究員）
106人参加
11月6日　袈裟の紡ぐ物語―智泉聖通尼の生涯と袈裟―
ﾓﾆｶ･ﾍﾞｰﾃ(大谷大学教授)
90人参加
・国際シンポジウム
11月13日　染織品にみる東アジア交流　―宋・元・明時代の中国とその周辺―　　国立京都国際会館アネックスホール　213人参加
広報媒体：ポスター、ちらし、情報誌、ホームページ、新聞広告、公共放送等

展覧会名：特別展覧会「上野コレクション寄贈50周年記念　筆墨精神－中国書画の世界－」
会　　期：1月8日～2月20日(39日間)
入場者数：37,535人(目標入場者数 30,000人・達成率125.12%)
陳列件数(うち指定品数)：113件(35件)　(国宝10、重文23、重美2)
主 催 者：京都国立博物館
講 演 会：3回　　参加者数合計 526人
・関連土曜講座
1月8日　写本と法帖―文字を観賞する文化―
赤尾栄慶（上席研究員）
175人参加
1月22日　上野コレクションと内藤湖南
礪波護（京都大学名誉教授）
166人参加
2月5日　明清の文人書画
西上実（学芸部長）
185人参加
広報媒体：ポスター、ちらし、情報誌、ホームページ、新聞広告、公共放送等

展覧会名：特集陳列「生誕125年記念　篆刻家　園田湖城」
会　　期：1月8日～2月20日(39日間)
入場者数：－人(上田秋成展と同時開催)
陳列件数(うち指定品数)：169件(0件)
主 催 者：京都国立博物館
講 演 会：1回
・関連土曜講座
2月12日　わが師 湖城を語る
水野恵（篆刻家）
185人参加
広報媒体：ポスター、ちらし、ホームページ等

展覧会名：研究成果特別公開「古代の輝きを求めて～デジタル計測でよみがえった古代青銅鏡の世界～」
会　　期：7月17日～8月29日(39日間)
入場者数：－人(上田秋成展と同時開催)
陳列件数(うち指定品数)：8件(6件)(重文6)
主 催 者：京都国立博物館

講 演 会：0回
広報媒体：ポスター、ちらし、ホームページ等

展覧会名：「京都国立博物館所蔵　能装束展」
会　　期：4月17日～5月30日(38日間)
入場者数：4,761人(目標入場者数 なし)
陳列件数(うち指定品数)：18件(0件)
主 催 者：金沢能楽美術館　(共催：京都国立博物館)
講 演 会：0回
広報媒体：ポスター、ちらし、情報誌、ホームページ、新聞広告、公共放送等

【奈良国立博物館】

(1)名品（平常）展

①開館日数：285日(名品展のみの開館日数：136日)陳列件数：　340件
②陳列替回数：101回(なら仏像館 19回、西新館　82回)
　珠玉の仏像（なら仏像館）　19回
　珠玉の仏教美術（西新館）　80回
　国宝を味わう（西新館）　2回

(2)特別展・共催展等

展覧会名：特別展「大遣唐使展」
会　　期：4月3日～6月20日(69日間)
入場者数：202,166人(目標入場者数 120,000人・達成率168. 5%)
陳列件数(うち指定品数)：261件(129件)
講演会：4回　　参加者数合計　641人
トークイベント：2回　参加者数合計　360人
特別講演会:1回　参加者数　316人
国際学術シンポジウム:1回　参加者数　148人

公開講座

期日	講座名	講師(所属)	参加者数
4月10日	「仏教美術の東伝と遣唐使」	稲本　泰生(学芸部企画室長)	101人
5月 8日	「吉備大臣入唐絵巻 －奇観無双の絵巻－」	佐野　みどり(学習院大学教授)	180人
5月29日	「平城京と遣唐使」	野尻　忠(学芸部主任研究員)	180人
6月19日	「空海の舎利信仰 －法門寺から東寺へ－」	内藤　栄（学芸部部長補佐）	180人

トークイベント

期日	内容	出　　演	参加者数
4月17日	「大遣唐使展の楽しみ方」	はな（モデル）、内藤　栄（学芸部部長補佐）	180人
6月6日	「大遣唐使展で仏像に会おう！」	仏像ガール（仏像ナビゲーター）、西山　厚（学芸部長）	180人

特別講演会

期日	テーマ	講師（所属）	参加者数
5月15日	「遣唐使の時代－倭から日本へ」	東野治之（奈良大学教授）	316人

国際学術シンポジウム

期日			
6月5日	「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」	ﾅﾝｼｰ・S・ｽﾀｲﾝﾊﾙﾄ（ペンシルバニア大学教授） 板倉聖哲（東京大学東洋文化研究所准教授） 鈴木喜博（上席研究員） 吉澤　悟（教育室長）	148人

広報媒体：ポスター、ちらし、博物館だより、新聞、テレビ特集番組等

展覧会名：特別展「仏像修理１００年」・「至宝の仏像」
会　　期：7月21日～9月26日(60日間)
入場者数：81,342人(目標入場者数 10,000人・達成率813. 4%)
陳列件数(うち指定品数)：208件(77件)
講演会：2回　　参加者数合計　272人

公開講座

期日	講座名	講師(所属)	参加者数
7月31日	「仏像修理１００年よもやま話」	小野寺　久幸（財団法人美術院常務理事）	125人
9月11日	「展示概説　仏像修理１００年」	鈴木　喜博(学芸部上席研究員)	147人

広報媒体：ポスター、ちらし、博物館だより、新聞、テレビ等

展覧会名：特別展「第62回正倉院展」
会　　期：10月23日～11月11日(20日間)
入場者数：294,804人(目標入場者数 180,000人・達成率163. 8%)
陳列件数：71件
講演会：3回　　参加者数合計　345人
公開講座

期日	講座名	講師(所属)	参加者数
10月23日	「師子面の模造をめぐって」	山片　唯華子(宮内庁正倉院事務所保存課調査室員)	55人
10月30日	「正倉院の紙」	湯山　賢一(館長)	139人
11月 6日	「五絃琵琶と紫檀工芸」	関根　俊一(帝塚山大学教授)	151人

広報媒体：ラジオ、ポスター、ちらし、博物館だより、新聞広告、駅構内看板、テレビ特集番組等

【九州国立博物館】

(1)平常展

①開館日数：312 日(うち平常展のみ開館日数　98 日)
②陳列件数：1668 件(うち国宝 81 件　重要文化財 165 件)
③陳列替え回数：334 回
④入場料金：　一般 420 円、大学生 130 円
⑤トピック展示：全 12 件

トピック展示名称	「白磁を飾る青－朝鮮時代の青花―」				
開催期間	平成 22 年 4 月 13 日(火)～ 平成 23 年 3 月 21 日(月)	開催場所	文化交流展示室 関連展示 10 室	陳列件数(うち指定品件数)	39 件（うち国宝 0 件、重文 0 件）
内容	大阪東洋陶磁美術館所蔵の青花の展示。				

トピック展示名称	「国宝琉球国王尚家関係資料修理完成記念展示」				
開催期間	平成 22 年 4 月 13 日(火)～ 5 月 23 日(日)	開催場所	文化交流展示室 基本展示室Ⅴ	陳列件数(うち指定品件数)	26 件（うち国宝 16 件、重文 0 件）
内容	九博で修理寄託中であった国宝「琉球国王尚家関係資料」の修理完成を記念して展示。				

トピック展示名称	「南蛮　津久見市所蔵の屏風と漆器」				
開催期間	平成 22 年 4 月 28 日(水)～ 6 月 6 日(日)	開催場所	文化交流展示室 関連展示室 11 室	陳列件数(うち指定品件数)	16 件（うち国宝 0 件、重文 0 件）
内容	津久見市が所蔵する南蛮漆器を紹介すると同時に、当館が継続的に収集している南蛮美術の優品を展示。				
講演会等	ミュージアムトーク 5 月 18 日　「南蛮漆器について」川畑憲子（企画課研究員）				

トピック展示名称	「九州国立博物館開館５周年・滋賀県立琵琶湖文化館開館５０周年記念 ―最澄がつないだ近江と太宰府―　　湖の国の名宝展 」				
開催期間	平成 22 年 6 月 11 日(金)～ 9 月 5 日（日）	開催場所	文化交流展示室 関連展示室 9･11 室	陳列件数(うち指定品件数)	57 件（うち国宝 3 件、重文 35 件）
内容	滋賀県・滋賀県立琵琶湖文化館との共同主催によって、琵琶湖をかかえる滋賀県に古くから伝えられた仏教美術の優品を展示。				
講演会等	講演会　3 回　参加者合計　170 人 期日　講演会名　講師（所属）　参加者 7 月　4 日 講演会【最澄がつないだ近江と太宰府】 「最澄と比叡山」　誉田玄光（比叡山延暦寺副執行管理部長）　50 人 「太宰府と近江の仏教美術―彫刻を中心に―」　八尋和泉（元別府大学文学部教授） 「比叡山をめぐる仏教美術－近江路の彫像を中心に－」　宮本忠雄（元滋賀県立琵琶湖文化館長） 7 月 10 日　講演会「近江の仏教美術」　土井通弘（就実大学教授）　30 人 上野良信（滋賀県立琵琶湖文化館） 井上ひろ美（滋賀県立琵琶湖文化館） 藤田励夫（博物館科学課保存修復室長） 8 月 21 日　トピック展示「湖の国の名宝展」　三輪嘉六（九州国立博物館館長）　90 人 ミュージアムトーク＆ギャラリートーク　嘉田由紀子（滋賀県知事） イベント等 6 月 20 日～7 月 3 日　写真展「水と仏の近江」 6 月 20 日～7 月 4 日　滋賀県観光パネル展「浅井三姉妹『江』のふるさと」				

	ミュージアムトーク 7月27日　「湖の国の名宝」藤田励夫（博物館科学課保存修復室長） 8月24日　「蕭白の『叡山図』について」金井裕子（企画課研究員）

トピック展示名称	「館蔵　仏教美術　名品展」				
開催期間	平成22年9月5日(水)～ 10月24日(日)	開催場所	文化交流展示室 関連展示室11室	陳列件数(うち指定品件数)	8件（うち国宝0件、重文4件）
内容	九州国立博物館の所蔵品のうち、仏教美術の名品を紹介する。				

トピック展示名称	「名品でたどる室町から桃山の茶　茶の湯を楽しむⅢ 」				
開催期間	平成22年9月14日(火)～ 11月7日(日)	開催場所	文化交流展示室 関連展示室9室	陳列件数(うち指定品件数)	26件（うち国宝0件、重文4件）
内容	九博の茶室の完成を記念し、君台観左右帳記を手本とした時代以降、茶の湯の世界の展開を総覧する展示。				
講演会等	ミュージアムトーク 10月5日　「名品でたどる室町から桃山の茶」伊藤嘉章（学芸部長）				

トピック展示名称	「九州国立博物館開館５周年　2005～2010文化交流展示室の５年間」				
開催期間	平成22年9月22日～ 12月23日	開催場所	文化交流展示室 基本展示室Ⅴ	陳列件数(うち指定品件数)	8件（うち国宝0件、重文0件）
内容	九博の開館５周年のあゆみをふり返る、ミニ企画。開館前の構想段階から、開館後のさまざまな取り組みと歩みを紹介する。				

トピック展示名称	「能面と能装束」				
開催期間	平成22年10月27日(水)～ 12月5日(日)	開催場所	文化交流展示室 関連展示室11室	陳列件数(うち指定品件数)	34件（うち国宝0件、重文0件）
内容	当館への寄託資料のうち、中世末～江戸時代の能面および能装束を中心として、日本独特の芸能として能の世界を紹介する。				

トピック展示名称	「螺鈿 美しき貝と漆の芸術」				
開催期間	平成22年11月10日(水)～ 平成23年　1月16日(日)	開催場所	文化交流展示室 関連展示室9室	陳列件数(うち指定品件数)	31件（うち国宝0件、重文6件）
内容	東博、九博が所蔵する螺鈿器の優品を展示。				

トピック展示名称	「邪馬台国　九州と近畿」				
開催期間	平成23年1月1日(土)～ 2月20日(日)	開催場所	文化交流展示室 関連展示室3室	陳列件数(うち指定品件数)	108 件（うち国宝 3 件、重文 11 件）
内容	大阪府立弥生文化博物館との共催。近畿の遺物の紹介。				

トピック展示名称	「田中丸コレクションの肥前磁器」				
開催期間	平成23年1月19日(水)～ 3月21日(月)	開催場所	文化交流展示室 関連展示室9室	陳列件数(うち指定品件数)	42件（うち国宝0件、重文0件）
内容	九博寄託の田中丸コレクションを集中的に紹介				

トピック展示名称	「日本の建築をめぐって」				
開催期間	平成23年1月21日(金)～ 4月3日(日)	開催場所	文化交流展示室 関連展示室11室	陳列件数(うち指定品件数)	22件（うち国宝0件、重文0件）
内容	日本の城郭建築、寺院建築などを建築模型を通じて紹介する				

⑥広報

広報媒体：ポスター・チラシ・新聞広告・テレビ、ラジオ等

広報テレビ番組「九博のたからもの」（RKBテレビ）の作成・放送（5月～9月）

九州国立博物館が所蔵または借用している作品1・2点を学芸員が紹介する短編番組（1回2分30秒）を22回分制作し、RKB放送にて5/3から9/25まで、毎週月曜19:55より放送した。（平均視聴率　8.6%）

広報テレビ番組「九博のたからもの」

	放映日	タイトル	解 説 者
第1回	5月3日	遣唐使は太宰府に何を運んだ？	展示課長　赤司善彦
第2回	5月10日	南蛮屏風～大きな世界への小さな“窓”	企画課研究員　金井裕子
第3回	5月17日	南蛮漆器～海を渡った日本の美	企画課研究員　川畑憲子
第4回	5月24日	中世の億万長者の忘れ物とは？	学芸部長　伊藤嘉章
第5回	5月31日	九博で一番大きなたからもの	文化財課長　臺信祐爾
第6回	6月7日	将軍さまのたからもの	企画課主任研究員　畑靖紀
第7回	6月14日	女帝が仏像にこめた祈りとは？	企画課長　小泉惠英
第8回	6月21日	琵琶湖からお宝がやって来た！	博物館科学課保存修復室長　藤田励夫
第9回	6月28日	２０００年前のセレブなブランド食器	企画課研究員　市元塁
第10回	7月5日	蒙古襲来～海から来た最新兵器	博物館科学課環境保全室長　今津節生
第11回	7月12日	１５００年前のファッションリーダー	企画課文化交流展室長　河野一隆
第12回	7月19日	弥生の王は赤色がお好き？	博物館学課主任研究員　志賀智史
第13回	7月26日	九博でお宝の健康チェック！	博物館科学課主任研究員　鳥越俊行
第14回	8月2日	弥生時代のおしゃれな王様	展示課研究員　坂元雄紀
第15回	8月9日	平安からのタイムカプセル	展示課長　赤司善彦
第16回	8月16日	アイヌと琉球～交流が生んだ文化	文化財課主任研究員　原田あゆみ
第17回	8月23日	新技術が生んだスグレモノ	展示課研究員　進村真之
第18回	8月30日	平安時代のイケメンさま	展示課主任研究員　楠井隆志
第19回	9月6日	シャーマン衣装の秘密	文化財課資料管理室長　小林公治
第20回	9月13日	７００年ぶりの里帰り	文化財課主任研究員　丸山猶計
第21回	9月20日	極楽浄土をイメージトレーニング	企画課研究員　森實久美子
第22回	9月25日	平安貴族のノンフィクション	展示課研究員　酒井芳司

(2)特別展・共催展等

展覧会名：特別展「パリに咲いた古伊万里の華」

開期：　4月6日（火）～6月13日（日）（61日間）
会場：　九州国立博物館　特別展示室
主催：　九州国立博物館・福岡県、日本経済新聞社、西日本新聞社、ＴＶＱ九州放送
陳列品総件数：　165　件
入場者数：　84,738人（目標入場者数　50,000人・達成率 169%）
入場料金：　一般　1,300円、高大生　1,000円、小中生　600円
アンケート結果：満足度　95%
講演会：　2回　参加者合計　500人
記念講演会等

期日	講演会名	講師(所属)	参加者
5月 8日	講演会「パリに咲いた古伊万里の華」	１４代　酒井田 柿右衛門	300人
5月22日	講演会「海を渡った古伊万里」	大橋 康二（前佐賀県立九州陶磁文化館館長）	200人

イベント等
4月13日～25日　有田焼４００年祭プレイベント「匠の蔵」特別展　（展示販売会）
4月17日・18日　きゅーはくミュージアムコンサート　～ヴェルサイユのしらべ～ ＋α
4月24日・25日　福岡女子短期大学音楽科演奏　～ヨーロッパ宮廷の香り～
4月24日・25日　映画「マリー・アントワネット」の上映会
5月 1日　親子で楽しむワークショップ［1］「えをかこう、いろをぬろう」―　挑戦・古伊万里の技！　―
5月 2日　親子で楽しむワークショップ［2］「金ピカにかざっちゃえ」―　大変身！古伊万里ビフォーアフター　―
5月 9日　ヨーロッパの宮廷音楽　～「パリに咲いた古伊万里の華」開催記念演奏会～
5月22日～23日　現代に受け継がれる伊万里焼（伊万里焼の実演・絵付け体験のほか、伊万里焼の展示販売）
5月30日　松嶋啓介　太宰府凱旋記念トークショー
広報媒体：ポスター・チラシ・新聞広告・テレビ、ラジオ等
テレビ番組「パリに咲いた古伊万里の華　ヨーロッパを魅了したNIPPONの美」を制作、期間中に放映した。

展覧会名：特別展「馬　アジアを駆けた二千年」

開期：　7月13日（火）～9月5日（日）（48日間）
会場：　九州国立博物館　特別展示室
主催：　九州国立博物館・福岡県、（財）全国競馬・畜産振興会、西日本新聞社、ＴＶＱ九州放送
陳列品総件数：　133件（国宝 23件、重文 24件、中国国家一級文物 4件）
入場者数：　42,022人（目標入場者数　50,000人・達成率　84%）

入場料金：一般　1,300円、高大生　1,000円、小中生　600円
アンケート結果：満足度　80%
講演会：　1回　参加者合計 120人
記念講演会等

期日	講演会名	講師(所属)	参加者
7月31日	講演会「日本の馬文化 － 人と馬の歴史から － 」	末崎真澄（馬の博物館理事）	120人
	「九州の在来馬」	川嶋 舟（東京農業大学農学部講師）	

シンポジウム等

7月18日	シンポジウム　「藤ノ木古墳の馬具」	
	「藤ノ木古墳の金銅製馬具」	千賀 久（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館主幹）
	「藤ノ木古墳出土馬具にみる古代の金工技術」	鈴木　勉（工芸文化研究所理事長）
	「藤ノ木古墳にみるデザインの系譜」	赤司善彦（九州国立博物館展示課長）

イベント等

7月13日～9月 5日	常設展示　けいばの広場
7月17日、18日、19日、24日、25日、29日、31日、8月毎週木・土・日曜日、9月4日、5日	九博で本物の馬と仲良しになろう　「ポニーとのふれあいイベント」
7月19日	ミュージアムトーク　『ＡＫＢ４８　篠田麻里子が　九州国立博物館にやってくる！』 篠田麻里子　（ＡＫＢ４８）
7月17日、18日、24日、25日、31日、8月1日、7日、8日	ワークショップ　馬を観察して描いて見よう「馬のスケッチ大会」
7月17日、18日、24日、25日、31日、8月毎週土・日曜日	レース映像を見ながらみんなで楽しむ　「１着当てゲームにチャレンジ」
7月29日及び8月の毎週木曜日	ワークショップ　「馬のくつ（蹄鉄）でコースターを作ってみよう」
7月25日	ミュージアム「馬」セミナー
「日本人と馬」	楠瀬 良（ＪＲＡ競走馬総合研究所 次長）
8月 1日	「馬の進化と日本在来馬のルーツ」　石田 信繁（ＪＲＡ競走馬総合研究所 上席調査役）

広報媒体：ポスター・チラシ・新聞広告・テレビ、ラジオ等

展覧会名：特別展「誕生！中国文明」

開期：　平成22年10月5日（火）～11月28日（日）（48日間）
会場：　九州国立博物館　特別展示室
主催：　九州国立博物館・福岡県、読売新聞社、ＦＢＳ福岡放送、中国河南省文物局
陳列品総件数：147件（中国国家一級文物63件）
入場者数：　53,409人（目標　90,000人・達成率 59%）
観覧料：一般　1,300円、高大生　1,000円、小中生　600円
アンケート結果：満足度　89%
講演会：　4回　参加者合計 590人
記念講演会等

期日	講演会名	講師(所属)	参加者
10月 5日	記念講演会「三国志をめぐる謎」	三好徹（小説家）	150人
10月24日	記念講演会「王朝、技、美の誕生-中国河南省が生み出した芸術と文化-」	小泉惠英（九州国立博物館企画課長） 市元塁（九州国立博物館企画課特別展室）	60人
11月 7日	講演会「中国古代王朝の興亡」	塚本青史（小説家）	150人
11月14日	記念講演会「文字の発生と歩み」	新井光風（書家）	230人

イベント等

10月 9日	特別公演　胡弓演奏家・趙国良　「中国王朝への旅ー胡弓の調べにのせてー」
10月30日	中国雑技ミニ公演「ドリームサーカス」
11月 6日	ミュージアムコンサート　「中国伝統音楽からクラシックまで」　九州交響楽団弦楽四重奏
11月21日	聖福寺「栄西禅師八百年遠諱大法要」に向けて （写経・禅画の体験教室、聖福寺・献茶口切りの儀、八女茶煎茶会／立礼）

広報媒体：ポスター・チラシ・新聞広告・テレビ、ラジオ等

展覧会名：特別展「没後120年　ゴッホ展」

開期：平成 23 年 1 月 1 日（土）～2 月 13 日（日）（42 日間）
会場：　九州国立博物館　特別展示室
主催：　九州国立博物館・福岡県、西日本新聞社、ＴＮＣテレビ西日本、ＴＶＱ九州放送
陳列品総件数：　122 件
入場者数：　354,311 人（目標入場者数　110,000 人・達成率　322%）
入場料金：　一般　1,500 円、高大生　1,000 円、小中生　600 円
アンケート結果：満足度　85%
講演会：1回　参加者合計　120人
記念講演会等

期日	講演会名	講師(所属)	参加者
23年1月15日	講演会「＜アルルの寝室＞形見として描かれたレプリカ ―ファン・ゴッホと家族　遺族とファン・ゴッホ―」	圀府寺司（大阪大学文学研究科教授）	120人

イベント等

23年1月 1日～ 7日	福岡在住の日展作家による作品展「情熱」
23年1月 1日～16日	自画像コンクール「見てみて！○○しているぼく・わたし」入選作品展示
23年1月 1日～2月13日	ヒマワリの種でゴッホの自画像モザイクアート「美の種ひまわりプロジェクト」

23年1月10日　映画上映会　「There is no blue without yellow and orange　ゴッホの足跡をたどるヨーロッパの旅と日本の印象」
23年1月16日　解説会　「ゴッホとゴーギャン」　深谷克典（名古屋市美術館学芸課長）

広報媒体：ポスター・チラシ・新聞広告・テレビ、ラジオ等

展覧会名：特別展　アジア友好日本古美術海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」
開期：平成 23 年 1 月 15 日（土）～3 月 13 日（日）月・火休館（41 日間）
会場：　タイ王国バンコク国立博物館
主催：　文化庁、九州国立博物館・福岡県、タイ王国文化省芸術局
陳列品総件数：日本側：56 件（うち国宝 2 件、重要文化財 7 件、重要美術品 2 件）、タイ側：51 件
入場者数：　21,525 人
入場料金：　一般 50 バーツ、学生 無料
アンケート結果：満足度　―%
講演会：　1回　参加者合計80人
記念講演会等

期日	講演会名	講師(所属)	参加者
23年1月29日	記念講演会「久留米絣」	松枝哲哉（絣制作作家）	80人

イベント等
23年1月15日　ワークショップ
23年1月15日　ボランティア交流会（プレゼンテーション、交流会）
23年1月29日～30日　日本伝統工芸ワークショップ（久留米絣製織実演及び講演）

(参考)

【平城宮跡資料館】

(1)平常展

①平城宮跡資料館　　開館日数：268日　陳列件数：633件　陳列替回数：1回
　ガイダンスコーナー 開館日数：243日
②特集陳列等　2件

	名称	会期	陳列件数(うち指定品件数)
特別企画展	「平城宮跡　今・昔-岡田庄三写真展-」	７月１０日～８月３１日	37件（0件）
特別企画展	平城宮跡発掘調査50周年記念『天平びとの声をきく-地下の正倉院・平城宮木簡のすべて』	９月２５日～１１月７日	322件（65件）
特別企画展	「測る、知る、伝える-平城京と文化財-」	１１月２６日～１月１７日	94件（12件）
発掘調査速報	発掘速報展　平城2009・2010」	２月１９日～５月８日	104件（0件）

【藤原宮跡資料室】

(1)平常展

①開館日数：242日　陳列件数：91件　陳列替回数：4回
②特集陳列等　8件

	名称	会期	陳列件数（うち指定品件数）
発掘調査の速報展	甘樫丘東麓遺跡の土器、檜隈寺の土器(第157次・159次調査)	2009年12月18日～ 2010年6月28日	土器56件（0件）
	大極殿院回廊出土瓦(第160次調査)	2009年12月 8日～ 2010年7月1日	瓦11件（0件）
	大極殿院南門の土層はぎ取り(第148次調査)	2009年12月8日～	はぎ取り2件（0件）
	藤原宮朝堂院朝庭(163次調査)	2010年7月 5日～2010年11月5日	瓦6件、土器3件（0件）
	甘樫丘東麓遺跡、古宮遺跡(山田道の変遷)(161・152-8次)	2010年7月 5日～2011年1月14日	土器10件（0件）
	水落遺跡(165次)	2010年12月8日	瓦1件、銅管1件（0件）
	檜隈寺周辺の調査(164次)	2011年1月18日～	瓦8件（0件）
	フォトマップハイビジョン動画「キトラ古墳壁画2004」の上映	2011年3月10日～	ブルーレイディスク（0件）

【飛鳥資料館】

(1)平常展

①開館日数：308日　陳列件数：347件　陳列替回数：１回
②特集陳列等 0件

(2)特別展等・共催展等

展覧会名：春期特別展「キトラ古墳壁画四神」
会　期：4月16日～6月13日
入場者数：100,307人
陳列件数（うち指定品数）：27件（10件）
主催者：文化庁・奈良文化財研究所
共催　：奈良県・奈良県教育委員会・明日香村・明日香村教育委員会
後援　：朝日新聞・（社）平城遷都1300年記念事業協会
文化庁主催講演・討論会：1回　　参加者数合計150人
協力：シャープ・近畿日本鉄道・奈良交通

期日	講演会名	講師(所属)

5月30日　「キトラ古墳壁画を考える」　　加藤真二（独）国立文化財機構 奈良文化財研究所 飛鳥資料館 学芸室長
「キトラ古墳のこの一年」　　川野辺渉氏（東京文化財研究所保存修復科学センター副センター長）

討論会名	パネリスト
「キトラ古墳～四神ってなに？～」	加藤真二　（独）国立文化財機構　奈良文化財研究所　飛鳥資料館　学芸室長
	川野邊渉　（独）国立文化財機構　東京文化財研究所　保存修復科学センター　副センター長
	長岡龍作　　東北大学大学院文学研究科教授
	早川和子　　考古イラストレーター
	コーディネーター
	田辺征夫　（独）国立文化財機構理事　　奈良文化財研究所長

展覧会名：「小さな石器の大きな物語」
会　期：　７月１６日～９月５日
入場者数：5,435人
陳列件数（うち指定品数）：206件（0件）
主催者：奈良文化財研究所
後援　：日本旧石器学会
講演会：０回

展覧会名：「木簡黎明-飛鳥に集う　いにしえの文字たち」
会　期：　10月16日～　11月28日
入場者数：10,140人
陳列件数（うち指定品数）：173件（30件）
主催者：奈良文化財研究所飛鳥資料館
後援　：木簡学会
講演会：1回　　参加者数合計47 人

期日	講演会名	講師(所属)
10月17日	「7世紀の木簡のおもしろさ」	寺崎　保広（奈良大学文学部教授）

展覧会名：「飛鳥の考古学2010」
会　期：　22年1月28日～　2月27日
入場者数：1,781人
陳列件数（うち指定品数）：102件（0件）
主催者：奈良文化財研究所
明日香村教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所
講演会：０回

b ボランティア受入れ実績

1　受入人数

平成23年3月31日現在

国立文化財機構	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	奈良文化財研究所
759人	159人	40人	85人	288人	187人

2　活動内容

【東京国立博物館】　計　159人

種別　(登録人数)	概　　要
生涯学習ボランティア (152人)	1)各種教育普及事業の補助活動の充実を図る 【教育普及事業の補助】 ・みどりのライオン ハンズオン体験コーナー「日本のもようでデザインしよう！」補助（通年） ・みどりのライオン ハンズオン体験コーナー「東博ウサギめぐり＆掛軸ふうカレンダー」補助 （平成22年1月2･3日） ・みどりのライオン ハンズオン体験コーナー「北斎の冨士を作ろう」補助 （平成22年1月5日～16日） ・ハンズオン・アクティビティ「楽器に挑戦！」補助（平成22年8月8･15･21･22日） ・学校向けワークショップ補助（通年） ・ファミリー向けワークショップ補助（9回） ・一般向けワークショップ補助（7回） ・制作工程模型展示鑑賞補助　（通年） ・列品解説、各種講演会、イベント事業の実施補助(通年) ・教育普及事業の告知補助(「本日の博物館」シール貼替え・通年) 【館内案内】 ・本館（1階エントランス、2階、17室、20室みどりのライオン紹介コーナー　通年実施） ・多言語案内・手話の告知バッジによる来館者の案内・誘導 【資料印刷・作成】 ・パンフレット「日本美術の流れ」日本語版の印刷（通年） ・ハンズオン体験コーナーリーフレットの印刷（通年） ・たんけんマップの作成・印刷（通年） 【就業体験実施活動補助】 受入数：33校　生徒数：131人 【障がい者対応】 ・バリアフリー班の発足（22名） ・平成22年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備事業により、視覚障がい児童・生徒の受け入れのためのボランティア研修の実施（全12回） ・視覚障がい者対応用ハンズオンツールの点訳作成 ・東京国立博物館ホームページ上のバリアフリーマップ作成のための調査 ・東京国立博物館紹介パンフレットの点訳版　配布 ・ボランティアによるガイドツアー「たてもの散歩」において手話通訳付ガイドツアー（毎月1回実施） ・博物館案内・各ガイドにおける聴覚障がい者対応のためのコミュニケーションボードの使用 【各種連携事業】 ・「留学生の日」(10月3日)内プログラム　ボランティアによる応挙館茶会，浮世絵ガイド、英語ガイドの実施，館内案内 ・「博物館でお花見を」関連プログラム、ボランティアによる茶会「花見で一服」、ガイドツアー「東博桜めぐり」の実施 【ボランティアデー開催】 ・ボランティアによる活動紹介、ワークショップ、ガイドツアーの実施（12月5日） 2)来館者参加型ガイドツアー等の実施 自主企画プログラム（予約ガイド、各種連携事業、ボランティアデーにおける対応を含む。一日複数回実施の場合は、延べ回数）　合計　522回　13373人 ・樹木ツアー　35回　894人参加 ・浮世絵展示解説　53回　1,282人 ・本館ハイライトツアー　100回　2,933人 ・法隆寺宝物館ガイドツアー　50回　1,173人 ・考古展示室ガイド　35回　580人 ・陶磁室エリアガイド　22回　381人 ・庭園茶室ツアー　24回　577人 ・お茶会　30回　1,179人 ・彫刻ガイド　43回　957人 ・英語ガイド　30回　437人(留学生の日は定点ガイドのため､人数に含まず) ・こどもたちのアートスタジオ　8回　145人 ・たてもの散歩ツアー　49回　925人 ・たんけんマップツアー　1回　50人 ・庭園茶室・お茶会　3回　112人 館主催ガイドツアー ・東博桜めぐり（年度をまたいで実施。平成22年4月1日～15日、各日2回、各日1～4グループ） 14回　1271人 ・表慶館アジアギャラリーガイド （平成22年10月1～12月24日、各日1回実施）　25回　477人
東京芸術大学学生ボランティア (7人)	当館研究員と東京藝術大学大学院生が連携し準備、事業を行った。学生の貴重な経験や研究の一助となり、かつ、来館者にとっても展示についての理解を深めるきっかけとなった。 【ギャラリートーク班】6名 総合文化展展示作品に関するギャラリートークを展示室で行った。【計36回、989人】 康円作「四天王眷属立像」―俗なる姿に宿る表現の妙―　6回　230人 今村紫紅筆「熱国之巻」―点描の風景画―　6回　138人 仏教における梵音具―祈りの音―　6回　192人 法隆寺献納宝物　金銅透彫灌頂幡―天人の舞う荘厳具―　6回　145人 浅井忠のフランス風景―芸術家たちを魅了した「夕暮れの村」―　6回　134人 良全筆「如意輪観音図」―水墨で描かれた観音の世界―　6回　150人 【制作工程模型班】1名 古典的制作技法に着目し、当館所蔵品の制作工程模型を制作。模型展示期間にギャラリートークを実施。 制作工程模型制作「悉皆金色―阿弥陀如来像ができるまで」 ギャラリートーク「悉皆金色」　4回　92名

【生涯学習ボランティアに対する研修の実施】
・新規ボランティア研修　4回（22年度分2回、23年度分2回）
・車椅子研修　1回
・ガイドツアー「東博桜めぐり」3回、「表慶館アジアギャラリーガイド」3回
・バリアフリー班研修　12回
・イベント班研修　1回
・ワークショップ班研修　9回
・「とーはくナビ」使用方法研修　2回
・各種自主企画グループ研修11回（年間14回）
【生涯学習ボランティアに対する解説会の実施】（以下の展示等につき実施）
・ミュージアムシアター「興福寺　阿修羅像　奇跡の仏像」1回
・特別展「細川家の至宝―珠玉の永青文庫コレクション―」1回
・ミュージアムシアター「唐招提寺―金堂の技と鑑真和上に捧ぐ御影堂の美－」1回
・特別展「誕生！中国文明」1回
・特別展「東大寺大仏」1回
・特別展「平山郁夫と文化財保護」1回
・本館17室「保存と修理」　2回
・制作工程模型「悉皆金色」1回
・ボランティア室インターンによる「日本画の伝統技法および素材についての実演会」3回

【京都国立博物館】　計40人

・京都橘大学学生によるアンケートボランティア(10月19日から29日、11月9日から12日までの毎火・水・金曜日)(18人)
・調査・研究支援ボランティア(15人)
・文化財ソムリエ(7人)

種　別　(登録人数)	概　要
京都橘大学学生によるアンケートボランティア (18人)	京都橘大学との学術協定に基づき、当館研究員が事前講習を行い、10月19日から29日、11月9日から12日までの毎火・水・金曜日の10時00分から16時00分まで、特別展示館出口にて来館者にアンケート回答の呼びかけを実施。終了後に結果の集計・分析を行った。
調査・研究支援ボランティア (15人)	当館研究員が行う収蔵品調査・社寺調査等の調査・研究業務を支援
文化財ソムリエ(7人)	京都市内の小中学校訪問授業（6月29日の京都市立金閣小学校、10月5日の京都市立嵯峨小学校、1月28日の京都市立石田小学校）において講師をつとめた。また、建仁寺で11月から12月、3月から4月にかけて行われた「綴プロジェクト作品展」（NPO法人京都文化協会主催）にて、キッズプログラム（11月20日、23日、27日、12月4日、3月28日）の講師をつとめた。

【奈良国立博物館】　計85人

種　別　(登録人数)	概　要
解説ボランティア（76人）	・展示会場での作品解説　　延べ284日 ・学校団体グループ案内(事前予約受付分　平常展、特別陳列のみ) 8件、503人 ・その他団体グループ案内(事前予約受付分　平常展、特別陳列のみ) 22件、662人 ・講堂での作品解説(正倉院展のみ)　110回(１日4～7回) ・公開講座、サンデートーク等の支援　24回 ・世界遺産学習の対応　30校、2,221人
イベントボランティア(9人)	

【九州国立博物館】　計288人

種　別　(登録人数)	概　要
展示解説ボランティア (63人)	文化交流展示室での案内、及び？ボックスや展示室入口において来館者の質問や案内依頼等に対応。 展示案内は予約団体(一般・学校)、当日受付(個人・グループ)に対応。
教育普及ボランティア (53人)	「あじっぱ」で来館者への対応。 参加体験型のものづくり教室などを企画・実施。 来館者と展示物を介して交流し、体験を通してアジアの文化を伝える。
館内案内ボランティア (32人)	館内の概要・施設案内(ガイド)およびバックヤードツアーの案内。 館内案内は予約団体(一般・学生)、及び当日来館者に対応。 バックヤードツアーも毎週火・金曜は予約団体のみ、日曜は当日受付で実施。
外国語通訳ボランティア (53人)	英語・韓国語・中国語で、館内のガイド、バックヤードツアーの案内、及び 文化交流展示室での展示物解説を行う。
環境ボランティア (28人)	ＩＰＭ(総合的有害生物管理)活動に関する支援。
イベントボランティア (10人)	お正月、昭和の日、七夕関連のボランティアイベントの企画・立案・実施。
資料整理ボランティア (18人)	郷土人形(土人形)の調書の作成・データ化。 あじぎゃらでの企画展示。
サポートボランティア (19人)	ボランティア広報紙の作成や他部会のボランティアの活動のサポート。 ボランティア同士の横のつながりや、他館ボランティアとの交流の構築。
学生ボランティア (12人)	他部会のボランティアの活動のサポート。 各種イベントの企画・立案・実施。

・この他、地域の手話ボランティアグループ32名が障がい者対応として活動。
(研修)全体研修3回、部会別研修193回、グループ研修44回
(対応来館者数)展示解説(6,518人)、館内案内(4,896人)、バックヤードツアー(3,027人)
※ただし、予約団体のみで、当日受付対応は含まず。

【奈良文化財研究所】　計187人

種　別　(登録人数)	概　要
解説ボランティア (187人)	平城京跡資料館、遺構展示館、復原建物等の案内・解説

・各種ボランティアに対する学習会等
第5期生基礎研修　　3日間

c 調査研究

c-① 研究交流実績一覧

1) 海外研究者招聘・受入実績（延べ人数）

国立文化財機構	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所
328人	15人	7人	9人	9人	103人	185人

【東京国立博物館】15人

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
1	曹　恵珍	韓国	国立中央博物館 教育文化交流団子供博物館チーム学芸研究員	東京国立博物館・国立中央博物館間の学術交流および研究推進のため	9月6日～19日
2	李　政根	韓国	国立中央博物館学芸研究室　考古部学芸研究員	同上	9月27日～10月10日
3	ｲﾙﾍﾞﾙ・ｵﾙﾀｲﾙ	トルコ	トプカプ宮殿博物館総館長	日土交流に関する意見交換および講演会講師および日本博物館事情視察のため	11月11日～17日
4	ｵﾐｭﾙ・ﾄｳﾌｧﾝ	トルコ	トプカプ宮殿博物館主任学芸員	日本博物館･美術館視察および意見交換、オルタイル氏通訳	11月8日～17日
5	王　軍	中国	中国文物交流中心主任	大中国展関係招聘のため	11月19日～23日
6	許 瑩	中国	中国文物交流中心助手	同上	11月19日～23日
7	田 凱	中国	河南博物院副院長	海外展打合わせならびに日本・中国間の学術交流および研究推進のため	23年1月24日～30日
8	銭　衛	中国	中国文物交流中心業務部副主任	中国展打合わせならびに視察のため	23年1月25日～30日
9	白　寧	中国	南京市博物館館長	同上	23年1月24日～30日
10	劉　忠進	中国	山東省淄博市文物事業管理局局長	同上	同上
11	白　進学	中国	陝西省文物局財務処副処級調研員	同上	同上
12	趙　漢涛	中国	浙江省文物局主任科員	同上	同上
13	陳　麗華	中国	北京故宮博物院副院長	特別展「北京故宮博物院精華展」（仮称）打合せならびに展示施設視察のため	23年3月10日～13日
14	丁　孟	中国	北京故宮博物院古器物部副主任	同上	同上
15	董　丹	中国	北京故宮博物院外事処館員	同上	同上

【京都国立博物館】7人

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
1	蔡　涛	中国	広東美術館研究部副研究員	日本学術振興会外国人招へい者	9月9日～3月8日
2	Zhang Shunping	中国	中国シルク博物館　スタッフ	特別展覧会「高僧と袈裟」への出品作品の随伴・展示立会のため	10月4日～10日
3	Yao Dan	中国	中国シルク博物館　スタッフ	同上	同上
4	沈　蓮玉	韓国	韓国伝統文化大学　教授	国際シンポジウム打合せ、研究発表	11月10日～14日
5	周　暘	中国	中国シルク博物館　上級研究員	国際シンポジウム打合せ、研究発表	11月10日～18日
6	Lou Ting	中国	中国シルク博物館　リサーチャー	特別展覧会「高僧と袈裟」への出品作品返却の際の作品随伴のため	11月24日～29日
7	Yu Tingting	中国	中国シルク博物館　スタッフ	同上	同上

【奈良国立博物館】　延べ　9人

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
1	金　承熙	韓国	国立慶州博物館	当館との学術交流	7月23日～8月20日
2	張　鎧生	中国	河南博物院	同上	8月16日～9月15日
3	単　暁明	中国	河南博物院	同上	同上
4	金　鍾佑	韓国	国立慶州博物館	同上	11月26日～12月25日

・その他招へい

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
5	ﾅﾝｼｰ・ｽﾀｲﾝﾊﾙﾄ	アメリカ	ペンシルバニア大学	国際学術シンポジウム出席	6月3日～6月8日
6	李　栄勲	韓国	国立慶州博物館	第６２回正倉院展視察及び意見交換	10月26日～10月28日
7	陳　政煥	韓国	国立慶州博物館	第６２回正倉院展視察及び意見交換	10月26日～10月28日
8	王　維坤	中国	西北大学教授	正倉院学術シンポジウム2010出席	10月23日～10月24日
9	ﾊﾞﾚﾝﾃｨﾅ･ﾓﾙﾄﾞｳﾞｨﾝﾂｪﾝﾊﾞｰ	ウクライナ	ウクライナ国立アカデミー附属考古学研究所	修復完成記念特別講演会講演及び文化財搬出立会	23年2月13日～2月14日

【九州国立博物館】延べ　9人

	氏名	国名	所属機関・役職	用務	期間	備考
1	崔光植	韓国	国立中央博物館・館長	九博及び国内施設の視察・意見交換	8月19日～8月21日	運営費交付金
2	陳永志	中国	内蒙古自治区文物考古研究所・所長	国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」講師	12月13日～12月19日	他機関負担
3	孫建華	中国	内蒙古自治区文物考古研究所・主任	同上	同上	同上

	氏名	国名	所属機関・役職	用務	期間	備考
4	蓋志勇	中国	内蒙古自治区文物考古研究所・主任	国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」講師	12月13日～12月19日	他機関負担
5	劉冰	中国	赤峰博物館・館長	同上	12月13日～12月20日	他機関負担
6	姜大一	韓国	国立韓国伝統文化学校・教授	九博及び国内施設の視察・意見交換・講演	23年2月7日～2月15日	運営費交付金
7	ｺｰﾄﾆｰ･ｼﾓﾀﾞ	アメリカ	ﾌﾘｰｱ美術館/ｱｰｻｰ･M･ｻｯｸﾗｰ美術館・ｱｿｼｴｲﾄﾌｪﾛｰ	文化庁・在外日本古美術に係る博物館・美術館研究協力事業による招聘	23年3月3日～3月26日	他機関負担
8	ﾃﾞﾝﾀﾞｵ	タイ	バンコク国立博物館・館長代理	文化庁海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」に係る作品の点検	23年3月25日～3月31日	他機関負担
9	ｼﾘﾁｬｲ	タイ	タイ王国文化省芸術局・保存修復部長	同上	同上	同上

※上記には、他機関が招聘し、九州国立博物館を訪問（滞在）したものや、自己負担での外国人研究者の訪問実績は含んでいない。
※上記には、日本国内の機関（大学、研究所等）に所属する外国人研究者の招聘は含んでいない。

【東京文化財研究所】延べ　103人

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
1	Jacques Gies ジャック・ジエス	フランス	ギメ美術館　館長	コンソーシアム主催国際シンポジウム「文化遺産保護は平和の礎をつくる」での講演	5月20日～26日
2	Fan Jinshi ファン・ジンシ	中国	中国敦煌研究院　院長	同上	5月24日～27日
3	Wang Xudong ワン・シュウトン	中国	中国敦煌研究院　副院長	同上	同上
4	Li Yongfeng リー・ヨンファン	中国	中国敦煌研究院　院長秘書	同上	同上
5	邵　安定 シャオ・アンディン　Shao Anding	中国	陝西省考古研究院　助理研究員	陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究	6月14日～7月4日
6	張　国彬 ジャン・グオビン Zhang Guobin	中国	敦煌研究院　保護研究所　館員	敦煌壁画の保護に関する共同研究	6月14日～7月4日
7	傅 鵬 フゥ・ペン　Fu Peng	中国	敦煌研究院　保護研究所　館員	同上	同上
8	崔 強 ツィ・チアン　Cui Qiang	中国	敦煌研究院　保護研究所　館員	同上	同上
9	Anat Bumrunwong (Bamrungwongsa) ｱﾅﾄ・ﾌﾞﾑﾙﾝｳｫﾝ	タイ	タイ芸術局　第五地区事務所長	覆屋効果に関する共同研究	7月4日～10日
10	Shin Eun-Jeong シン・ヨンジョン	韓国	韓国国立文化財研究所　保存科学研究室　研究員	国際文化財保存修復研究会にて講演、関連遺跡視察	7月5日～9日
11	金　思憲 キム・サドク KIM Sa-Dug	韓国	大韓民国国立文化財研究所　事務官	日韓共同研究打合せ	同上
12	Harunarayan Singh Choudhary ﾊﾙﾅﾗﾔﾝ･ｼﾝ･ﾁｮｳﾀﾞﾘ	インド	インド考古局ファルダプルフィールド研究室　考古科学助手	アジャンター石窟壁画の保存修復のための共同事業に係る研修	7月28日～8月4日
13		ｱﾌｶﾞﾆｽﾀﾝ		考古学研究に関連する実習と専門知識の研修	8月2日～12月17日
14		ｱﾌｶﾞﾆｽﾀﾝ		考古学研究に関連する実習と専門知識の研修	8月2日～12月17日
15	マーク・ノーマン	イギリス	アシュモリアン美術館修復部門責任者	Ｈ２１，２２年度修復作品（花樹鳥蒔絵螺鈿箪笥）の中間検査	8月27日～9月2日
16	XU Wenjuan ｼｭｳ・ｳｨﾝｼﾞｭｴﾝ	中国	上海博物館　館員	国際研修「紙の保存と修復」	8月29日～9月18日
17	HASHIM Fauziah ハシム・ファウジア	マレーシア	マレーシア・イスラム美術館　保存修復技術者	同上	同上
18	DIDIK Joanna ﾃﾞｨﾃﾞｨｸ・ﾖｱﾝﾅ	アイルランド	アイルランド国立公文書館　紙保存修復技術者	同上	同上
18	HOEVEL Claireホーヴェル・クレア	アメリカ	インディアナポリス美術館紙保存修復技術者	同上	同上
20	KOCSIS Marika コチシュ・マリカ	オーストラリア	クィーン・ヴィクトリア博物館＆美術館紙・織物保存修復技術者	同上	同上
21	KOKOĆ Joanna ココツ・ヨアンナ	ポーランド	ニコラウス・コペルニクス大学トルン学生	同上	同上
22	MAZZARINO Sara ﾏｯﾂｧﾘｰﾉ・ｻﾗ	イギリス	大英図書館　紙保存修復技術者	同上	同上
23	NUÑEZ GAITAN Angela ﾇﾆｪｽ･ｶﾞｲﾀﾝ･ｱﾝﾍﾗ	バチカン市国	バチカン図書館　写本保存修復技術者	同上	同上
24	STORACE Maria Speranza ｽﾄﾗﾁｪ･ﾏﾘｱ･ｽﾍﾟﾗﾝﾂｧ	イタリア	文書・書籍遺産修復保存研究所保存修復技術者	同上	同上
25	CHARLES Catherine ｼｬﾙﾙ・ｶﾄﾘｰﾇ	ベルギー	ナミュール大学モレトゥス・プランタン図書館　本・紙保存修復技術者	同上	同上
26	Alice Kraemerova ｱﾘｼｪ・ｸﾗﾒﾛｰｳﾞｧ	チェコ	国立ナープルステク博物館　学芸員	Ｈ２１，２２年度修復作品（菱繋文螺鈿箪笥）の中間検査	9月4日～10日
27	Apichat Suwan ｱﾋﾟﾁｬｯﾄ・ｽﾜﾝ	タイ	タイ芸術局　技官	覆屋効果に関する共同研究	9月5日～11日

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
28	Agus Widiatmoko ｱｸﾞｽ・ｳｨﾃﾞｨｱﾄﾓｺ	インドネシア	ジャンビ考古遺跡保存事務所 技官	覆屋効果に関する共同研究	9月5日～12日
29	Haeruddin ヘルディン	インドネシア	マカッサル考古遺跡保存事務所 技官	同上	9月6日～11日
30	Ali Ghanim Hafedh ｱﾘ・ｶﾞｰﾆﾑ・ﾊﾌｪﾄﾞ	イラク	イラク国立博物館　保存修復専門家	イラク人保存修復家人材育成のための研修	9月21日～12月10日
31	Hadeel Abdulhadi Hasan ﾊﾃﾞｨｰﾙ・ｱﾌﾞﾄﾞｩﾙﾊｰﾃﾞｨ・ﾊｯｻﾝ	イラク	イラク国立博物館　保存修復専門家	同上	同上
32	Nahlah Nabeel Khaleel ﾅﾌﾗ･ﾅﾋﾞｰﾙ･ﾊﾘｰﾙ	イラク	イラク国立博物館　保存修復専門家	同上	同上
33		ｱﾌｶﾞﾆｽﾀﾝ		考古学研究に関連する実習と専門知識の研修	9月27日～10月15日
34	Thomas J. K. Strang ﾄｰﾏｽ･J.K.ｽﾄﾗﾝｸﾞ	カナダ	カナダ保存研究所　上級保存科学者	文化財の生物劣化対策に関する共同研究	11月1日～16日
35	Susan Catcher スーザン・キャッチャー	イギリス	ヴィクトリア＆アルバート美術館　修復部門　主任紙修復技術者	在外修復・ｳﾞｨｸﾄﾘ&ｱﾙﾊﾞｰﾄ美術館蔵「伯牙弾琴図屏風」修復事業の中間視察・協議および在外修理に関連する装こう材料の調査	11月2日～8日
36	Lee Chan-hee イ・チャンヒ	韓国	公州大学校　自然科学大学文化財保存科学科　教授	臼杵磨崖仏次期保存修理計画に関する研究会における講演	11月4日～7日
37	Kim Sa-dug キム・サドク	韓国	大韓民国国立文化財研究所　文化財保存科学センター　事務官	同上	同上
38	Joan Cumminsジョアン・カミンズ	アメリカ	ブルックリン美術館学芸員	在外日本古美術品保存修復協力事業中間視察	11月13日～18日
39	Bruno Bruguier ブルーノ・ブルギエ	フランス	フランス極東学院　研究員	第7回研究会「文化遺産国際協力における情報資源共有化の課題と展望」における講演	11月15日～23日
40	Samdan Chinzorig ｻﾑﾀﾞﾝ・ﾁﾝｿﾞﾘｸﾞ	モンゴル	モンゴル国立文化遺産センター 文化遺産保存修復室長	遺跡石材の保存強化処理とその評価の手法に関する研修	12月12日～25日
41	Badam Altansukh ﾊﾞﾀﾞﾑ・ｱﾙﾀﾝｽﾌ	モンゴル	モンゴル国立文化遺産センター コンピュータープログラマー	遺跡石材の保存強化処理とその評価の手法に関する研修	12月12日～25日
42	Kerstin Bartels ｶｰｽﾃｨﾝ・ﾊﾞｰﾃﾙｽ	ドイツ	産業技術大学　助教授	平成22年度近代文化遺産研究室研究会「音声・映像記録メディアの保存と修復」における講演	23年1月10日～16日
43	Valery A. Kol'chenko ｳﾞｧﾚﾘｰ　A.　ｺﾙﾁｪﾝｺ	キルギス共和国	キルギス共和国科学アカデミー 歴史・文化遺産研究所　考古・民族課　研究員	キルギス共和国における文化遺産の保存に関する調査研究のための打合せ、研究会出席	23年1月10日～17日
44	Nguyen Thi Anh Dao グエン・ティ・アィン・ダオ	ベトナム	ベトナム社会科学院考古学研究所　研究員	ユネスコ日本信託基金「タンロン・ハノイ文化遺産群の保存」にかかる出土木材遺物の保存手法に関する研修	23年1月10日～29日
45	Nguyen Thi Huong Giang ｸﾞｴﾝ･ﾃｨ･ﾌｫﾝ･ｻﾞﾝ	ベトナム	ベトナム社会科学院考古学研究所　研究員	同上	同上
46	Rudolf Siegfried Morgenstern ﾙﾄﾞﾙﾌ･ｼﾞｰｸﾌﾘｰﾄﾞ･ﾓﾙｹﾞﾝｼｭﾃﾙﾝ	ドイツ	ドレスデン工科大学　名誉教授	「第３４回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会」への参加および講演	23年1月15日～22日
47	Luciano Marchetti ﾙﾁｱｰﾉ・ﾏﾙｹｯﾃｨ	イタリア	イタリア市民保護局　文化財副総監	同上	23年1月17日～22日
48		ｱﾌｶﾞﾆｽﾀﾝ		同上	同上
49	Lejla Hadzic ライラ・ハジッチ	アルバニア	国境なき文化遺産(NGO)　地域調整員	同上	23年1月18日～22日
50	Amra Hadzimuhamedovic ｱﾑﾗ･ﾊｼﾞﾑﾊﾒﾄﾞｳﾞｨｯﾁ	ﾎﾞｽﾆｱ･ﾍﾙﾂｪｺﾞﾋﾞﾅ	ボスニア・ヘルツェゴビナ国家記念物保護委員会　長官	同上	23年1月18日～23日
51	Natalia Dushkina ﾅﾀﾘｱ･ﾃﾞｭｼｭｷﾅ	ロシア	モスクワ建築大学　教授	同上	23年1月18日～24日
52	Ang Choulean アン・チュリアン	カンボジア	王立芸術大学　考古学部　教授	同上	同上
53	Nicholas Stanley-Price ﾆｺﾗｽ･ｽﾀﾝﾘｰﾌﾟﾗｲｽ	イタリア	文化遺産保存アドバイザー	同上	23年1月18日～25日
54	Dorji Wangchuk ドルジ・ワンチュク	ブータン	民族遺産博物館　館長	同上	同上
55	候　衛東 ホウ・ウェイドン　Hou Weidong	中国	中国文化遺産研究院　副院長	同上	23年1月18日～28日
56	葛　川 ゲ・チュアン GE, Chuan	中国	中国文化遺産研究院岩土文物与遺址保護研究所　副所長	文化遺産の防災・減災対策に関する調査	23年1月23日～28日
57	永　昕群 ヨン・シンチュン YONG, Xinqun	中国	中国文化遺産研究院建築保護研究所　副所長	同上	同上
58	崔　明 ツオイ・ミン CUI, Ming	中国	中国文化遺産研究院建築保護研究所　工程師	同上	同上
59	王　晶 ワン・ジン WANG, Jing	中国	中国文化遺産研究院発展研究所 助理館員	同上	同上

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
60	Jeadsada Chevavichavankul ｼﾞｪｻﾀﾞ･ﾁｪｳﾞｧｳﾞｨﾁｬｳﾞｧﾝｸﾙ	タイ	タイ芸術局　技官	覆屋効果に関する共同研究	23年1月24日～30日
61	Siripan Tabphet ｼﾘﾊﾟﾝ・ﾀｯﾍﾟｯﾄ	タイ	タイ芸術局　技官	同上	同上
62	Iskandar Mulia Siregar ｲｽｶﾝﾀﾞﾙ･ﾑﾘｱ･ｼﾚｶﾞﾙ	インドネシア	ボロブドゥール遺産保存研究所保存部長	同上	同上
63	Wicaksono Dwi Nugroho ｳｨｶｿﾉ･ﾄﾞｳｨ･ﾇｸﾞﾛﾎ	インドネシア	モジョケルト遺産保存事務所保存担当技官	同上	同上
64	Yoesoef Boedi Aryanto ﾖｿﾌ･ﾎﾞﾃﾞｨ･ｱﾘﾔﾝﾄ	インドネシア	文化観光省　保存部長	同上	同上
65	Paul van Duin ﾎﾟｰﾙ･ｳﾞｧﾝ･ﾀﾞｲﾝ	オランダ	アムステルダム国立博物館　家具修復責任者	在外修復「螺鈿鶴形合子」中間検査	23年1月24日～31日
66	Pramono プラモノ	インドネシア	アンダラス大学　文学部　教授	「インドネシア西スマトラ州パダンにおける歴史的地区文化遺産復興支援（専門家交流）事業」における専門家交流	23年1月25日～2月2日
67	Adriyetti Amir ｱﾄﾞﾘｱﾃｨ・ｱﾐｰﾙ	インドネシア	アンダラス大学　文学部　教授	同上	同上
68	Surya Esra スルヤ・エスラ	インドネシア	西スマトラ州立図書館　職員	同上	同上
69	Margit Reuss マルギット・ロイス	オランダ	ライデン民俗学博物館　修復技術者	在外修復「花鳥螺鈿枕」中間検査	23年1月29日～2月3日
70	Katriina Simila カトリーナ・シミラ	イタリア	文化財保存修復研究国際センター(ICCROM)　プロジェクトマネージャー	「海外の文化財保存修復専門家養成を目的とする国際研修等の実施に関する研究会」講演	23年2月1日～4日
71	Patcharawee Tunprawat ﾊﾟｯﾁｬﾗｳｨｰ･ﾄｩﾝﾌﾟﾗﾜｯﾄ	タイ	東南アジア文部大臣機構考古学・芸術地域センター　文化遺産管理専門家	同上	同上
72	朴　鐘瑞 パク・ジョン・ソ Park Jong Seo	韓国	韓国国立文化財研究所保存科学センター 学芸研究官	同上	同上
73	張　可 ジャン・ケァ Zhang Ke	中国	中国文化遺産研究院教育トレーニングセンター　助理研究員・副主任	同上	23年2月1日～5日
74	Hervan Bahar ヘルヴァン・バハール	インドネシア	パダン市　地域開発計画局　局長	「インドネシア西スマトラ州パダンにおける歴史的地区文化遺産復興支援（専門家交流）事業」における専門家交流	23年2月7日～13日
75	Prita Wardhani Dumasari ﾌﾟﾘﾀ･ﾜﾙﾀﾞﾆ･ﾄﾞｩﾏｻﾘ	インドネシア	西スマトラ州　文化観光局　局長	同上	同上
76	Edi Hasymi エディ・ハシミ	インドネシア	パダン市　文化観光局　局長	同上	同上
77	Edi Dharma エディ・ダルマ	インドネシア	パダン市　文化観光局　職員	同上	同上
78	Yusuf ユスフ	インドネシア	文化観光省バトゥサンカル遺跡保存事務所　職員	同上	同上
79	Yusfa Hendra Bahar ﾕｽﾌｧ･ﾍﾝﾄﾞﾗ･ﾊﾞﾊｰﾙ	インドネシア	文化観光省バトゥサンカル遺跡保存事務所職員	同上	同上
80	張　正模 ジャン・ジェンモ　Zhang Zhengmo	中国	敦煌研究院　保護研究所助理館員	敦煌芸術の科学的復原研究―壁画材料の劣化メカニズムの解明によるアプローチ	23年2月16日～28日
81	John Grunewald ｼﾞｮﾝ・ｸﾞﾙﾈﾜﾙﾄﾞ	ドイツ	ドレスデン工科大学　教授	保存修復科学ｾﾝﾀｰ研究会「文化財施設の環境解析と博物館の省ｴﾈ化」での講演	23年2月21日～26日
82	Rudolf Plagge ルドルフ・プラーゲ	ドイツ	ドレスデン工科大学　研究員	同上	23年2月21日～26日
83	Volker Koesling ﾌｫﾙｶｰ・ｷｰｽﾘﾝｸﾞ	ドイツ	ドイツ技術博物館　修復部門責任者	近代文化遺産(合成樹脂等）に関する共同研究打合せおよび日本国内における現地調査	23年2月22日～3月3日
84	洪　善杓 ホン・スン・ピョ HONG SUN-PYO	韓国	韓国美術研究所　所長	シンポジウム「人とモノの「力学」―美術史における「評価」」での研究発表および討議参加	23年2月26日～28日
85	文　貞姫 ムン・ジュン・ヒ MOON JUNG-HEE	韓国	韓国美術研究所　学術主任	同上	同上
86	張　辰城 チャン・チン・スン CHANG CHIN-SUNG	韓国	ソウル大学校　考古美術史学科教授	同上	同上
87	Khaled Mohamed Ebrahim al-Sendi ﾊｰﾘｯﾄﾞ･ﾑﾊﾝﾏﾄﾞ･ｲﾌﾞﾗﾋﾑ･ｱﾙ･ｼﾝﾃﾞｨ	バーレーン	バーレーン国立博物館　研究員	「アジア文化遺産国際会議」への出席および講演	23年2月28日～3月7日
88	Loutus Omar Mahawi Abu Karki ﾛｰﾀｽ･ｵﾏﾙ･ﾏﾊｳｨ･ｱﾌﾞ･ｶﾗｷ	ヨルダン	ヨルダン遺跡観光省　観光部門発展プロジェクト責任者	同上	同上
89	Marwan Said Rabah al Zubidi ﾏﾙﾜﾝ･ｻｲｰﾄﾞ･ﾗﾊﾞｰ･ｱﾙ･ｽﾞﾋﾞﾃﾞｨ	ヨルダン	ヨルダン考古局　コンサルタント	同上	同上

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
90	Ziad Mohmmad Kayed al Saad ｼﾞｱｰﾄﾞ･ﾑﾊﾝﾏﾄﾞ･ｶｲ―ﾄﾞ･ｱﾙ･ｻｰﾄﾞ	ヨルダン	ヨルダン考古局　長官	「アジア文化遺産国際会議」への出席および講演	23年2月28日～3月7日
91	Assaad Seif アサド・サイフ	レバノン	レバノン文化省考古総局　職員	同上	同上
92	Nader Siklaoui ﾅｰﾃﾞﾙ・ｼｸﾗｵｲ	レバノン	レバノン文化省考古総局ティール支局　研究員	同上	同上
93	Jamal Haydar Hassan Salimeh ｼﾞｬﾏﾙ･ﾊｲﾀﾞｰﾙ･ﾊｯｻﾝ･ｻﾘﾒｰ	シリア	シリア考古局　ラタキア支局長	同上	同上
94	Ammar Abdulrahman ｱﾏﾙ･ｱﾌﾞﾄﾞｩﾙﾗﾊﾏｰﾝ	シリア	シリア考古局　職員	同上	同上
95	Abbas Khudhair Abbas al-Mahdi ｱｯﾊﾞｰｽ･ﾌﾀﾞｲｰﾙ･ｱｯﾊﾞｰｽ･ｱﾙ･ﾏﾌｰﾃﾞｨ	イラク	イラク国立博物館　文化復興部局主任	同上	23年3月1日～7日
96	Hussein Ali Habeeb ﾌｾｲﾝ･ｱﾘｰﾊﾋﾞｰﾌﾞ	イラク	イラク考古局　文化協力主任	同上	同上
97	Bui Duy Tri ブイ・ドイ・チー	ベトナム	ベトナム社会科学院考古学院副院長	タンロン皇城遺跡保存にかかわる研究協議および京都大学保管木材見学	23年3月5日～12日
98	Do Thi Ngoc Bich ﾄﾞｰ･ﾁｰ･ｺﾞｯｸ･ﾋﾞｯｸ	ベトナム	ベトナム林業大学　上級講師	同上	同上
99	Duong Thi Thuy ｽﾞｵﾝ･ﾃｨ･ﾄｩｲ	ベトナム	ベトナム女性博物館　研究員	同上	同上
100	Nguyen Van Anh ｸﾞｴﾝ･ｳﾞｧﾝ･ｱｲﾝ	ベトナム	ベトナム社会科学院考古学院研究員	同上	同上
101	Wongchat Chatrakul na Ayuddhaya ｳｫﾝﾁｬｯﾄ･ﾁｬﾗｸﾙ･ﾅ･ｱﾕﾀﾔ	タイ	タイ芸術局　技官	煉瓦造文化財の保存に関する共同研究	23年3月7日～12日
102	Nguyen Van Anh ｸﾞｴﾝ･ｳﾞｧﾝ･ｱｲﾝ	ベトナム	ベトナム社会科学院考古学院研究員	タンロン皇城遺跡保存にかかわる研究協議および京都大学保管木材見学	23年3月8日～12日
103	John Sell ジョン・セル	オランダ	ヨーロッパ・ノストラ　副会長	コンソーシアム講演会「ヨーロッパにおける遺産：非政府的視点から」における講演	23年3月9日～13日

【奈良文化財研究所】延べ185人

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
1	李　偉樹　他4名	韓国	韓国国立文化財研究所自然文化財研究室	視察	4月6日
2	彌 燈　他4名	韓国	韓国仏教文化研究所	視察	5月12日
3	ジャック・ジエス	フランス	国立ギメ東洋美術館・館長	視察	5月21日～5月21日
4	アレクサンドル・ソコロフ	ロシア	ロシア国立歴史文書館・館長	日本の史料・文化財の多様な有様や保存状況の視察	5月26日
5	ｾﾙｹﾞｲ･ﾁｪﾙﾆｬﾌｽｷｰ	ロシア	ロシア国立海軍文書館館長	同上	同上
6	ワジム・クリモフ	ロシア	ロシア科学ｱｶﾃﾞﾐｰ東洋古籍文献研究所・上級研究員	同上	同上
7	アレクサンドル・シニーツィン	ロシア	ロシア科学ｱｶﾃﾞﾐｰ人類学・民族博物館・上級研究員	同上	同上
8	田　鳳熙	韓国	ソウル大学校建築学科・教授	歴史的建造物の保存に関する意見交換及び歴史的建造物の視察	6月3日～6月6日
9	金　王稙	韓国	ミョンジ大学校建築学科・教授	同上	同上
10	李　演魯	韓国	ソウル市文化財委員	同上	同上
11	金　周慶	韓国	オウジェ建築事務所・所長	同上	同上
12	都　妍延	韓国	ソウル大学校建築学科・博士課程	同上	同上
13	邱 敏 有	中華民国	台湾中央研究院歴史言語研究所考古学部門助理研究員	遺跡出土の魚骨と現生標本との比較のため	5月31日～6月13日
14	崔　ジャンミ	韓国	国立慶州文化財研究所・学芸研究士	慶州四天王寺址の発掘調査成果の発表と検討のため	6月18日
15	秦 曙 光	中国	河南省古代建築保護研究所・所長	同上	同上
16	呂 軍 輝	中国	河南省古代建築保護研究所・総工程師	同上	同上
17	李 暁 剛	中国	河南省古代建築保護研究所・一級建造師	同上	同上
18	余 暁 川	中国	河南省古代建築保護研究所・副研究員	同上	同上
19	楊 東 昱	中国	河南省古代建築保護研究所・副研究員	同上	同上
20	趙 彤 梅	中国	河南省古代建築保護研究所・副研究員	同上	同上
21	段 建 華	中国	河南省古代建築保護研究所・設計士	同上	同上
22	陳 磊	中国	河南省古代建築保護研究所・設計士	同上	同上

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
23	張 勇	中国	河南省古代建築保護研究所・設計士	慶州四天王寺址の発掘調査成果の発表と検討のため	6月18日
24	趙 明 星	中国	河南省古代建築保護研究所・研究室主任	同上	同上
25	秦 小 麗	カナダ	カナダロイヤルオンタリオ博物館	八木遺跡出土土器の型式学的、編年学的位置を明らかにするための文献調査	7月1日～H.23.6.30
26	許　一権	韓国	国立春川博物館	金属遺物の科学的な保存処理及び分析法研究	7月5日～7月23日
27	Dr.Nagin Nanda	インド	ﾋﾏｰﾁｬﾙﾌﾟﾗﾃﾞｨｯｼｭ州政府環境科学技局・部長	ODAにける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント研修）	7月9日
28	Mr.Bimo Adi Nursanthyasto	インドネシア	公共事業省企画・国際協力局年間企画・分野横断セクター課課長	同上	同上
29	Mr.Nugroho Indra Windardi	インドネシア	環境省環境影響評価部・部長補佐官	同上	同上
30	Ms.AL-DARRAJI Taghreed Ahmed	イラク	環境省環境影響評価部・部長補佐	同上	同上
31	Mr. WINYI Alex Kiiza	ウガンダ	国家環境管理局・環境影響評価担当技官	同上	同上
32	Mr.RIZK Yasser Mahmoud Salahedin Ibrahim	エジプト	水資源灌漑省総合灌漑改善管理プロジェクト、ガルビーヤ県地域調整部・部長	同上	同上
33	MR.KONG Sokvan	カンボジア	シェリムアップ水道公社浄水配水部・部長	同上	同上
34	Ms.GITAU Naomi Njeri	ケニヤ	国家環境管理局　ｺﾝﾌﾟﾗｲｱﾝｽ・執行部　上級技官	同上	同上
35	Mr.GUDA John Ojwang	ケニヤ	ケニア電力電灯会社安全衛生環境部・次長	同上	同上
36	Mr.MAKENYA Brigita Sylvester	タンザニア	タンザニア電力供給会社調査環境部・環境担当技官	同上	同上
37	Ms.ODIMAYO Ebunyemi Modupeoluwa	ナイジェリア	環境省環境影響評価部・環境技官	同上	同上
38	Ms.DIBIGBO Margaret Ngozi	ナイジェリア	国家計画委員会　環境・地域開発部　上級企画官	同上	同上
39	Mr. THANJU Rajendra Prasad	ネパール	ネパール電力公社環境社会調査課・課長補佐	同上	同上
40	Mr.SHRESTHA Chatur Bahadur	ネパール	電力開発局プロジェクト調査・環境調査部　地質技官	同上	同上
41	Mr. IVARAMI Dennis	パプアニューギニア	環境保護局許認可部環境課・上級科学技官	同上	同上
42	Mr. TARI Reedly	バヌアツ	国土天然資源環境保護局・環境影響評価担当技官	同上	同上
43	Ms. NGUYEN Mai Hieu	ベトナム	天然資源環境省環境影響評価審査部・技官	同上	同上
44	Mr.CHAVEZ TUPPIA Jorge Marco	ペルー	環境省環境管理政策・法制局環境影響評価制度専門官	同上	同上
45	Ms.ORBEGOSO REYES Leonor Marilez	ペルー	リマ市上下水道公社環境管理部・環境影響評価制度専門官	同上	同上
46	ﾊﾙﾅﾗﾔﾝ・ｼﾝ・ﾁｮｳﾀﾞﾘ	インド	インド考古局	視察	7月29日
47	韓　剣	中国	西安碑林博物館・副館長	「日中墓誌の比較研究」のため	8月1日～9月28日
48	Tshering Namgyal	ブータン	ブータン政府自治文化省文化局・副技官	同上	同上
49	Phoeung Dara	カンボジア	ｱﾝｺｰﾙｼｪﾑﾘｱｯﾌﾟ地域文化財保護管理機構・技官	同上	同上
50	Ma Chaolong	中国	龍門石窟研究院・副院長	同上	同上
51	Ulaiasi Motonikumi	フィジー	伝統文化省ｲﾀｳｹｲ言語・文化研究所・現地調査官	同上	同上
52	Bhuvan Vikrama	インド	ｲﾝﾄﾞ考古調査局・考古専門職員	同上	同上
53	Fahmi Prihantoro	インドネシア	ｶﾞｼﾞｬ･ﾏﾀﾞ大学人文学部・講師	同上	同上
54	Janna Proskurina	カザフスタン	歴史・文化遺産調査制作センター・遺物修復課長	同上	同上
55	Aidai Sulaimanova	キルギス共和国	ｷﾙｷﾞｽ政府国立科学ｱｶﾃﾞﾐｰ歴史・文化研究所・考古専門職員	同上	同上
56	Soukphachanh Khamphasouk	ラオス	情報文化省遺産局･学術職員	同上	同上
57	Kazutoyo Wase	マーシャル諸島	総務省歴史保存事務所・考古専門職員	同上	同上
58	Aung Aung Kyaw	ミャンマー連邦	ﾐｬﾝﾏｰ政府文化省･考古･国立博物館･図書館局・副局長	同上	同上
59	Kathryn Hurren	ニュージーランド	ニュージーランド史跡トラスト・地域考古学職員	同上	同上
60	Asadullah Khan	パキスタン	パキスタン政府考古博物館局・考古専門職員	同上	同上
61	Mary G.L.D.Barretto-Tesoro	フィリピン	フィリピン大学・准教授	同上	同上
62	K.K.D.Kamal Bowatta	スリランカ	スリランカ政府考古局・地域管理職員	同上	同上
63	Nguyen Chi Cong	ベトナム	コ・ロア史跡及びハノイ皇城保存ｾﾝﾀｰ・事業管理職員	同上	同上

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
64		アフガニスタン		考古学研修	10月4日～10月14日
65		アフガニスタン		同上	10月4日～11月28日
66		アフガニスタン		同上	同上
67	マイケル・バートン	アメリカ	アリゾナ州立大学・教授	生物多様性条約COP10ﾊﾟｰﾄﾅｰｼｯﾌﾟ事業「古代社会の生物多様性に学ぶ」ｴｸｽｶｰｼｮﾝ	10月10日
68	ﾏｰｶﾞﾚｯﾄ・ﾊﾞｰﾄﾝ	アメリカ		同上	同上
69	エメリ・マックラング	メキシコ	メキシコ国立自治大学教授	同上	同上
70	オラシオ・タピア	メキシコ	ﾒｷｼｺ･ﾒﾄﾛﾎﾟﾘﾀﾝ自治大学	同上	同上
71	ロドリゴ・タピア	メキシコ	メキシコ国立自治大学・地理学研究センター准教授	同上	同上
72	トーベン・リック	アメリカ	スミソニアン国立自然史博物館・考古部長	同上	同上
73	ﾃﾞｲﾋﾞｯﾄﾞ・ﾌﾚｲﾃﾞﾙ	アメリカ	ワシントン大学・教授	同上	同上
74	リチャード・メドー	アメリカ	ハーバード大学・教授	同上	同上
75	除　天　進	中国	北京大学・教授	同上	同上
76	ジョシュア・トーニー	アメリカ	フロリダ大学大学院・教授	同上	同上
77	Robin Cleland	アメリカ	ｱﾘｿﾞﾅ州立大学大学院・学生	同上	同上
78	Colleen Strawhacker	アメリカ	ｱﾘｿﾞﾅ州立大学大学院・学生	同上	同上
79	Scott Ingram	アメリカ	ｱﾘｿﾞﾅ州立大学大学院・学生	同上	同上
80	キム・ソンボム　他2名	韓国	国立中原文化財研究所長	海外先進事例調査および関連機関の施設見学	10月13日
81	パク・ジョンフン	韓国	国立中原文化財研究所・企画運営課長	同上	同上
82	ド・イチョル	韓国	国立中原文化財研究所・学芸研究員	同上	同上
83	ｱﾘ･ｶﾞﾆﾑ･ﾊﾌｧﾄﾞ･ｶｲｷ　他2名	イラク	イラク国立博物館	視察	11月8日
84	MUNKHUU Bayarsaikhan	モンゴル	ﾓﾝｺﾞﾙ科学ｱｶﾃﾞﾐｰ考古学研究所･古人類学･古動物学室	ACCU個人研修2010受講	11月16日～12月16日
85	RINCHINKHOROL Munkhtulga	モンゴル	モンゴル科学アカデミー考古学研究所・中世研究室	同上	同上
86	DAVAAKHUU Odsuren	モンゴル	ﾓﾝｺﾞﾙ科学ｱｶﾃﾞﾐｰ考古学研究所・石器時代研究室	同上	同上
87	Samdan Chinzoring	モンゴル	モンゴル文化遺産センター・保存修復室長	モンゴル人専門家研修	12月13日～12月24日
88	Badam Altansukh	モンゴル	モンゴル文化遺産ｾﾝﾀｰ・ｺﾝﾋﾟｭｰﾀﾌﾟﾛｸﾞﾗﾏｰ	同上	同上
89	Angelo Pellegrino	イタリア	オスティア考古学遺産監督事務所所長	国際シンポジウム「古代ローマの海港都市オスティア」エクスカーション	11月19日
90	Marco Sangiorgio	イタリア	オスティア考古学遺産監督事務所技術部長	同上	同上
91	Michele Raddi	イタリア	ローマ考古学遺産特別監督局嘱託考古調査員	同上	同上
92	Ray Laurence	イギリス	ケント大学教授	同上	同上
93	Janet Delain	イギリス	オックスフォード大学講師	同上	同上
94	Kyung Hwan KANG	韓国	韓国文化財庁　史跡課長	大極殿等視察	11月24日
95	Chul Ju KIM	韓国	韓国文化財庁史跡課専門員	同上	同上
96	Pan Yong PARK	韓国	韓国文化財庁　史跡課員	同上	同上
97	Young Bcom KIM	韓国	韓国文化財庁　史跡課員	同上	同上
98	朱　甫　暾　他13名	韓国	韓国木簡学会　会長	施設見学および平城宮見学	12月6日
99	フランソワ・シゴー	フランス	Ccentre de Recherches Historiques	視察	12月15日～12月16日
100	Nguyen Chi Ben 他5名	ベトナム	ベトナム文化芸術研究所	視察	12月18日～12月20日
101	劉　欣　寧	台湾	台湾中央研究院歴史言語研究所	視察	12月22日
102	ｳﾞｧﾚﾘｰ・ｺﾙﾁｪﾝｺ	キルギス共和国	キルギス共和国科学アカデミー歴史・文化遺産研究室	視察	1月11日
103	丁　垚	中国	天津大学	視察	1月24日
104	Yoesoef　Boedi Aryanto	インドネシア	歴史考古総局	視察	1月28日
105	Iskandar Mulia Siregar	インドネシア	ボロブドール研究所	視察	1月28日
106	Wicaksono Dwi Nugroho	インドネシア	モジョケルト遺跡保存事務所	視察	1月28日
107	Adriyetti Amir	インドネシア	アンダラス大学	視察	1月28日
108	Pramomo	インドネシア	アンダラス大学	視察	1月28日
109	Siripan Tabphet	タイ	タイ芸術局	視察	1月28日
110	Jeadsada Chevavichavankul	タイ	タイ芸術局	視察	1月28日
111	ｻｲﾓﾝ･ｹｲﾅｰ 他4名	イギリス　他		視察	3月25日
112	刘 曙 光	中国	中国文化遺産研究院・院長	第一次大極殿完成記念式典等に出席、並びに共同研究に関する打ち合わせ	4月21日～4月24日
113	查 群	中国	中国文化遺産研究院・高級工程師	同上	同上
114	王 巍	中国	中国社会科学院考古研究所・所長	同上	4月21日～4月23日

	氏名	国名	所属機関・職名	用務	期間
115	丛 徳 新	中国	中国社会科学院考古研究所・科研処長	第一次大極殿完成記念式典等に出席、並びに共同研究に関する打ち合わせ	4月21日～4月24日
116	金 奉 建	韓国	国立文化財研究所・所長	同上	同上
117	李 鐘 勲	韓国	国立文化財研究所・学芸研究官	同上	同上
118	蘇 在 龜	韓国	国立慶州文化財研究所所長	同上	同上
119	池 成 眞	韓国	国立慶州文化財研究所・学芸研究士	同上	同上
120	李 熙 濬	韓国	韓国国立文化財研究所	発掘調査交流	5月17日～7月2日
121	王　瑞琴	中国	河南省文物局文物資源処・副処長	共同研究の推進および共同研究の一環で飛鳥資料館にて共同開催する夏期企画展「小さな石器の大きな物語」展での展示に関する指導協力のため	7月18日～7月26日
122	李　占揚	中国	河南省文物考古研究所・第一研究室主任	同上	同上
123	高　宇平	中国	許昌市文物局・副局長	同上	同上
124	沈　陽	中国	中国文化遺産研究院・発展研究所・所長	日中韓３国間共同研究「建築文化遺産保存国際学術会議」出席	9月2日～9月5日
125	劉　江	中国	中国文化遺産研究院・建築保護研究所・副研究員	同上	同上
126	温　玉清	中国	中国文化遺産研究院・発展研究所・副研究員	同上	同上
127	金　徳文	韓国	韓国国立文化財研究所・建築文化財研究室	同上	同上
128	姜　賢	韓国	韓国国立文化財研究所・建築文化財研究室	同上	同上
129	韓　旭	韓国	韓国国立文化財研究所・建築文化財研究室	同上	同上
130	司　治平	中国	河南省文物局・文物処処長	共同研究実施のため	10月25日～11月2日
131	趙　新平	中国	河南省文物考古研究所・副所長	共同研究実施のため	10月25日～10月31日
132	李　輝	中国	河南省文物考古研究所館員	同上	10月25日～11月2日
133	王　建民	中国	河南省文物考古研究所技師	同上	10月25日～10月31日
134	王　勝利	中国	河南省文物考古研究所技師	同上	10月25日～11月2日
135	華　玉冰	中国	遼寧省文物考古研究所・副所長	同上	12月9日～12月16日
136	趙　代盈	中国	遼寧省文物考古研究所館員	同上	12月9日～12月16日
137	樊　聖英	中国	遼寧省文物考古研究所館員	同上	12月9日～12月16日
138	金　奎虎	韓国	国立公州大學校・教授	保存科学研究集会『古代の玉-最新の保存科学的研究の動向』講演	2月4日～2月8日
139	丁　輝	中国	遼寧省文化庁・副庁長	共同研究実施のため	3月15日～3月22日
140	李　向東	中国	遼寧省文物考古研究所所長	同上	同上
141	呂　学明	中国	遼寧省文物考古研究所・副所長	同上	同上
142	銭　国　祥	中国	中国社会科学院考古研究所・洛陽工作站長	同上	3月21日～3月25日
143	肖　淮　雁	中国	中国社会科学院考古研究所・副研究員	同上	同上
144	Ouk Socheat	カンボジア	文化芸術省官房長	文化庁による拠点交流事業である「カンボジア・ポスト・アンコール期の王都とその周辺遺跡の研究」に係る研究会出席	3月22日～3月31日
145	Proeung Chhieng	カンボジア	文化芸術省技術補佐官長	同上	同上
146	Yun Khean	カンボジア	文化芸術省技術補佐官	同上	同上
147	Lam　Sopheak	カンボジア	奈文研 現地補佐員	同上	同上
148	Loeung Ravattey	カンボジア	奈文研 現地補佐員	同上	同上
149	Sok Keo Sovannara	カンボジア	奈文財 現地補佐員	同上	同上
150	Heng Sophady	カンボジア	文化芸術省副所長	同上	同上
151	Heng　Sokpheap	カンボジア	王立芸術大学卒業生	同上	同上
152	Nong Dararaksmey	カンボジア	王立芸術大学卒業生	同上	同上
153	Nep Chanlacsmy	カンボジア	王立芸術大学卒業生	同上	同上

2）他機関の共同研究への参画実績

科学研究費補助金の研究分担者等として参画（延べ人数）

国立文化財機構	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所
58人	17人	6人	4人	5人	12人	14人

【東京国立博物館】延べ17人

	機関名	研究課題	研究代表者名	分担者名
1	大正大学	隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究	教授　加島勝	学芸企画部長　松本伸之
2	東京藝術大学	彫刻におけるデジタル立体造形の可能性と表現方法の研究・教育への応用	副学長　北郷悟	企画課長　井上洋一
3	東京藝術大学	高精細デジタル測定技術と職人の知識を融合させた工芸文化財復元の研究（科学研究費補助金・挑戦的萌芽／分担）	東京藝術大学大学院 佐藤雅彦	列品管理課登録室アソシエイトフェロー　河内晋平
4	東京藝術大学	東京美術学校西洋画科卒業制作作品・自画像の技法材料、保存修復に関する基礎的研究VII	大学院絵画科油画技法材料研究室大学院美術研究科兼任教授　佐藤一郎	保存修復課保存修復室主任研究員　土屋裕子
5	財団法人科学博物館後援会	科学系博物館における学校利用促進方策調査研究委員会	公益事業課長　高安礼士	博物館教育課ボランティア室長 鈴木みどり
6	九州国立博物館	アジアの木地螺鈿－その源流、正倉院宝物への道をたどる－（科学研究費補助金Ｃ／分担）	文化財資料登録室長 小林公治	列品管理課貸与特別観覧室主任研究員　猪熊兼樹
7	明治大学研究・知財戦略機構	新領域創成型研究費「ヒト―資源環境系に占める黒曜石の採掘活動と古環境解析―」	明治大学研究・知財戦略機構特任教授　小野昭	列品管理課登録室アソシエイトフェロー　及川穣
8	明治大学	環境変遷史と人類活動に関する学際的研究（学術フロンティア推進事業）	明治大学文学部教授 杉原重夫	調査研究課工芸・考古室研究員 品川欣也
9	文化女子大学文化ファッション研究機構	近世・近代風俗画における服飾表現に関する分野横断的研究―小袖及び着物の編年的研究への絵画研究の活用―	共立女子大学教授 長崎巌	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
10	東京大学史料編纂所	目録学の構築と古典学の再生（科学研究費補助金・学術創成）	田島公	調査研究課書跡・歴史室長 田良島哲
11	人間文化研究機構	人間文化研究情報資源共有化研究会	理事　石上英一	調査研究課書跡・歴史室長 田良島哲
12	人間文化研究機構国立歴史民俗博物館	中近世における武士と武家の資料論的研究	国立歴史民俗博物館研究部准教授　高橋一樹	博物館情報課長　高橋裕次
13	人間文化研究機構国立歴史民俗博物館	デジタル化された歴史研究情報の高度利用に関する研究	准教授　鈴木卓治	博物館情報課情報管理室長 村田良二
14	人間文化研究機構国立歴史民俗博物館	洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究	教授　小島道裕	保存修復課長　神庭信幸
15	人間文化研究機構国立民族学博物館	有形文化資源の共同利用を推進するための資料管理基盤形成	教授　園田直子	保存修復課長　神庭信幸
16	同上	同上	同上	保存修復課環境保存室主任研究員　荒木臣紀
17	同上	同上	同上	保存修復課環境保存室主任研究員　和田浩

【京都国立博物館】延べ6人

	機関名	研究課題	研究代表者名	分担者名
1	大阪大谷大学	智積院聖教における典籍・文書の基礎的研究	教授　宇都宮啓吾	学芸部上席研究員　赤尾栄慶 学芸部企画室研究員　羽田聡
2	東京国立博物館	東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究	学芸研究部長　島谷弘幸	学芸部上席研究員　赤尾栄慶 学芸部企画室研究員　羽田聡
3	日本女子大学	蝋管を中心とした初期録音資料の音源保存・音声復元・内容分析に関する横断的研究	教授　清水康行	学芸部保存修理指導室長 村上隆
4	大阪大学	南アジアおよび東南アジアにおけるデーヴァラージャ信仰とその造形に関する基礎的研究	名誉教授　肥塚隆	学芸部連携協力室主任研究員 浅湫毅

【奈良国立博物館】延べ4人

	機関名	研究課題	研究代表者名	分担者名
1	筑波大学	東国地域及び東アジア諸国における前近代文書等の形態・料紙に関する基礎的研究	教授　山本 隆志	館長　湯山 賢一
2	奈良教育大学	ユネスコの提起する世界遺産教育の教育内容と教育方法の創造	教授　田渕 五十生	学芸部長　西山 厚
3	東京国立博物館	東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究 －「正倉院裂」を中心に－	上席研究員　澤田 むつ代	学芸部長　西山 厚
4	種智院大学	インド文化圏における仏塔の総合的研究	学長　頼富 本宏	学芸部工芸考古室長　内藤 榮

【九州国立博物館】延べ5人

	機関名	研究課題	研究代表者名	分担者名
1	独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館	東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究	学芸研究部長　島谷　弘幸	文化財課資料登録室主任研究員 丸山　猶計
2	岡山大学	副葬品の構造・材質・色彩からみた古墳葬送空間の再現的研究	大学院社会文化科学研究科教授　松木　武彦	博物館科学課環境保全室長 今津　節生 博物館科学課環境保全室研究員 鳥越　俊行
3	関西大学	飛鳥・川原寺裏山遺跡の総合的研究－出土品から見た川原寺の特質－	文学部教授　米田　文孝	企画課研究員　市元　塁
4	龍谷大学	ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究	文学部教授　宮治　昭	企画課長　小泉　惠英

【東京文化財研究所】延べ12人

	機関名	研究課題	研究代表者名	分担者名
1	大谷大学	世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究－過去の復元から未来への保存へ－	大谷大学文学部教授　松川　節	文化遺産国際協力センター 主任研究員　二神　葉子
2	東京大学	「地図史料学の構築」の新展開－科学的調査・復元研究・データベース－	東京大学史料編纂所 准教授　杉本　史子	保存修復科学センター 分析科学研究室長　早川泰弘
3	弘前大学	中近世北方交易と蝦夷地の内国化に関する研究	弘前大学人文学部 教授　関根　達人	保存修復科学センター 伝統技術研究室長　北野信彦
4	東京大学	観世文庫所蔵能楽関係資料のデジタル･アーカイブを活用した新しい能楽史の構築	東京大学大学院総合文化研究科 教授　松岡　心平	無形文化遺産部 無形文化財研究室長 高桑　いづみ
5	広島市立大学	ヒマラヤを越え河西回廊に伝わった密教的造形と表現､その表象芸術に関する研究	服部　等作	副所長 中野　照男
6	立教大学	アジアの無形文化における仮頭の研究－仮面との比較から－	立教大学異文化コミュニケーション学部教授　細井　尚子	副所長 中野　照男
7	東京大学	文化財保護制度における世界遺産条約の戦略的受容と運用に関する日韓比較研究	東京大学大学院総合文化研究科 教授　岩本　通弥	無形文化遺産部 主任研究員　俵木　悟
8	千葉大学	絵巻に描かれた「場」と「もの」に見る中世日本の重層的世界観に関する研究	千葉大学文学部 教授　池田　忍	企画情報部 研究員　土屋　貴裕
9	早稲田大学	未翻刻浄瑠璃本の網羅的調査・翻刻と複次的活用・公開に向けての基礎的研究	早稲田大学演劇博物館 名誉教授　鳥越　文蔵	無形文化遺産部 音声・映像記録研究室長 飯島満
10	京都大学	ミリ波イメージング技術による木質文化財の生物劣化の非破壊診断装置の開発	京都大学農学研究科 准教授　藤井　義久	保存修復科学センター 生物科学研究室長　木川りか
11	東京藝術大学	文化財科学、美術史学、制作技法研究の情報統合による「薬師寺吉祥天画像」の復元模写研究	東京藝術大学大学院美術研究科 教授　宮廻　正明	保存修復科学センター 分析科学研究室長　早川泰弘
12	筑波大学	中近東･北アフリカにおけるビザンティン建築遺産の記録､保存、公開に関する研究	筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授　日高　健一郎	保存修復科学センター長 石崎　武志

【奈良文化財研究所】延べ14人

	機関名	研究課題	代表者名	分担者名
1	東京大学	目録学の構築と古典学の再生-天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明-	教授　田島　公	都城発掘調査部史料研究室長 渡邉 晃宏
2	同志社大学	東北アジアにおける古環境変動と旧石器編年に関する基礎的研究	教授　松藤　和人	企画調整部主任研究員 加藤 真二
3	奈良大学	東アジア木簡学の確立	教授　角谷　常子	都城発掘調査部史料研究室長 渡邉 晃宏
4	独立行政法人国立科学博物館	徳川将軍親族遺体のデジタル保存と考古学的・人類学的分析-大奥の実態に迫る-	部長　馬場　悠男	埋蔵文化財センター長 松井 章
5	立命館大学	『日本霊異記』の文献・書誌及び歴史地理的検討による古代社会像の再構築	教授　本郷　真紹	都城発掘調査部主任研究員 山本 崇
6	新潟県立看護大学	韓国出土古人骨の形質人類学的研究	准教授　藤田　尚	埋蔵文化財センター客員研究員 橋本 裕子
7	鹿児島大学	考古学と地下探査の協同による近世薩摩焼研究再構築のための基礎的研究	教授　渡辺　芳郎	埋蔵文化財センター主任研究員 金田 明大
8	島根大学	考古学と人類学のコラボレーションによる縄文社会の総合的研究	准教授　山田　康弘	埋蔵文化財センター環境考古学研究室研究員　山崎 健
9	島根大学	考古学と人類学のコラボレーションによる縄文社会の総合的研究	准教授　山田　康弘	埋蔵文化財センター客員研究員 茂原 信生
10	山形県立博物館	日韓内陸地域における雑穀農耕の起源に関する科学的研究	学芸課長　中山　誠二	都城発掘調査部考古第三研究室 研究員　庄田 慎矢
11	北陸学院大学	形・作りとスス・コゲからみた縄文・弥生土器、土師器による調理方法	教授　小林　正史	都城発掘調査部考古第三研究室 研究員　庄田 慎矢
12	東北大学	長期標準年輪曲線の広域ネットワーク拡充とそれに基づく木材産地推定法の検討	助教　大山　幹成	埋蔵文化財センター客員研究員 藤井 裕之
13	立命館大学	都市社会構造と観光活動-観光都市京都の通事的分析と他類似都市との比較-	淳教授　三枝　暁子	都城発掘調査部研究員 浅野 啓介
14	奈良産業大学	正倉院文書による日本語表記成立過程の解明	准教授　桑原　祐子	都城発掘調査部歴史研究室長 渡邉 晃宏

3）研究者海外派遣実績（延べ人数）

国立文化財機構	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所
483人	54人	27人	17人	77人	146人	162人

【東京国立博物館】 延べ54人（先方負担を除く）

○海外交流展経費・国際交流費：延べ10人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	鬼頭　智美	オランダ フランス	4月13日～22日	国際展覧会ｵｰｶﾞﾅｲｻﾞｰ会議出席およびパリ市内文化施設視察のため(ｴﾙﾐﾀｰｼﾞｭ美術館ｱﾑｽﾃﾙﾀﾞﾑ分館(ｵﾗﾝﾀﾞ)、ﾊﾟﾘ日本文化会館、国立ｷﾞﾒ東洋美術館、ｵﾙｾｰ美術館、ﾙｰﾌﾞﾙ美術館(ﾌﾗﾝｽ))	職員旅費（国際交流費）、出張
2	井上　洋一	フランス	5月4日～11日	パリ市内展示施設での所蔵品調査および打合わせのため(ｷﾞﾒ東洋美術館、ﾙｰﾌﾞﾙ美術館、パリ日本文化会館)	同上
3	藤田　千織	韓国	8月25日～9月6日	日本・韓国間の学術情報交流ならびに研究推進のため (国立中央博物館、韓紙工房、忠北大学博物館、国立清州博物館、Leeum Museum、Samsung子供博物館、国立民俗博物館、ソウル歴史博物館、国立現代美術館、国立果川科学館、幼児教育振興院、戦争記念館、西大門自然史博物館)	職員旅費（国際交流費）・先方負担（国立中央博物館）、出張
4	高橋　裕次	韓国	8月25日～9月7日	日本・韓国間の学術情報交流ならびに研究推進のため （国立中央博物館、韓紙工房、忠北大学韓紙研究所、国立清州博物館、Leeum Museum、国家記録院、ナラ記録館、韓国学中央研究所、奎章閣韓国学研究院、仏教中央博物館、靖齋文化財保存研究所、大韓民国国史編纂委員会）	同上
5	松本　伸之	中国	9月16日～21日	日中国交回復40周年記念「甦る中国大文明展」(仮称)におけるご挨拶、出品のお願いおよび特別展「誕生！中国文明」の御礼（中国国家文物局、中国文物交流中心、上海万博、上海博物館）	職員旅費（海外展経費）、出張
6	松本　伸之	中国	11月4日～9日	日中韓国立博物館館長会議および国際博物館会議上海大会（ICOM）出席のため （中国国家博物館、上海博物館、上海国際博覧会）	同上
7	楊　鋭	中国	同上	同上	同上
8	小山　弓弦葉	ドイツ	11月4日～11日	ﾌﾗﾝｸﾌﾙﾄ、ｸﾞﾗｽﾊﾞｳﾊｰﾝ工場及びﾍﾞﾙﾘﾝ、ﾐｭﾝﾍﾝの美術博物館の現状視察のため （博物館島、ｼｬﾙﾛｯﾃﾝ城、ｱﾙﾃ・ﾋﾟﾅｺﾃｰｸ、ﾚｼﾞﾃﾞﾝｽ博物館、ﾐｭﾝﾍﾝ・ﾚｼﾞﾃﾞﾝｽ宮殿宝物庫、ﾆｭﾝﾍﾝﾍﾞﾙｸ城、ｸﾞﾗｽﾊﾞｳﾊｰﾝ社）	職員旅費（国際交流費）、出張
9	矢野　賀一	ドイツ	同上	ﾌﾗﾝｸﾌﾙﾄ、ｸﾞﾗｽﾊﾞｳﾊｰﾝ工場及びﾍﾞﾙﾘﾝ、ﾐｭﾝﾍﾝの美術博物館の現状視察のため (博物館島、ﾍﾞﾙﾘﾝ国立東洋美術館、ｴｼﾞﾌﾟﾄ美術収集館、民俗学博物館、ｸﾞﾘﾌﾟﾄﾃｰｸ、州立古代美術館、ｸﾞﾗｽﾊﾞｳﾊｰﾝ社）	同上
10	和田　浩	ドイツ	11月8日～13日	東洋館ﾘﾆｭｰｱﾙにかかる展示等調査（ﾌﾗﾝｸﾌﾙﾄ、ｸﾞﾗｽﾊﾞｳﾊｰﾝ工場及びﾍﾞﾙﾘﾝ、ﾐｭﾝﾍﾝの美術博物館の現状視察）および展示ケース作成状況確認のため （博物館島、エジプト美術収集館、グラスバウハーン社）	同上

○職員旅費（その他）：延べ17人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	井上　洋一	トルコ	4月23日～5月4日	文化庁海外展「日本の美5000年」にかかる展示作業のため（トプカプ宮殿博物館）	職員旅費（トルコ展経費）、出張
2	池田　宏	トルコ	4月23日～5月8日	同上	同上
3	小林　達朗	トルコ	4月23日～6月4日	文化庁海外展「日本の美5000年」にかかる展示作業および作品点検のため（トプカプ宮殿博物館）	同上
4	白井　克也	ドイツ	5月25日～29日	東洋館改修工事にかかる壁面展示ケースのモックアップ検査及び関係施設視察のため（グラスバウハーン社）	職員旅費（施設整備費）、出張
5	矢野　賀一	ドイツ	同上	同上	同上
6	丸山　士郎	トルコ	5月30日～6月18日	文化庁海外展「日本の美5000年」にかかる作品点検のため（トプカプ宮殿博物館）	職員旅費（トルコ展経費）、出張
7	品川　欣也	トルコ	6月16日～7月4日	文化庁海外展「日本の美5000年」にかかる作品点検および撤収作業のため（トプカプ宮殿博物館）	同上
8	島谷　弘幸	トルコ	6月27日～7月4日	文化庁海外展「日本の美5000年」にかかる撤収作業のため（トプカプ宮殿博物館）	同上
9	木下　史青	ドイツ	9月6日～10日	東京国立博物館東洋館改修その他工事壁面展示ケース工場検査のため（グラスバウハーン社）	職員旅費（施設整備費）、出張
10	白井　克也	ドイツ	9月6日～10日	東京国立博物館東洋館改修その他工事壁面展示ケース工場検査のため（グラスバウハーン社）	職員旅費（施設整備費）、出張
11	塚本　麿充	台湾	10月1日～10日	「文芸紹興―南宋芸術及び文化展」に伴う作品輸送・陳列のため（国立故宮博物院）	職員旅費(調査研究課運営費)、先方負担(国立故宮博物院)出張
12	瀬谷　愛	韓国	10月4日～13日	海外展「高麗仏画大展」の作品添乗・陳列作業および韓国における調査研究のため（国立中央博物館）	職員旅費(特別調査研究等)・先方負担(国立中央博物館)、出張
13	白井　克也	韓国	10月29日～31日	「皇南大塚」「鶏林路14号墓」展示調査研究のため （国立中央博物館）	職員旅費（特別調査研究等）、出張
14	谷　豊信	韓国	11月18日～20日	同上	職員旅費(調査研究課運営費)出張
15	富田　淳	中国	12月15日～19日	台東区立書道博物館と東京国立博物館との共同企画・拓本の流転にかかる作品調査のため（北京故宮博物院）	職員旅費（特別調査研究等）、出張
16	富田　淳	中国	23年2月16日～18日	特集陳列「拓本とその流転」作品集荷・輸送のため （香港中文大学文物館）	職員旅費（調査研究費）、出張
17	浅見　龍介	カンボジア	23年3月18日～21日	アンコール・ワット等調査のため(ｱﾝｺｰﾙ・ﾜｯﾄほか)	同上

○平成22年度科学研究費補助金：延べ27人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	島谷　弘幸	フランス	5月27日～6月2日	「東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究」（基盤研究A）にかかる書跡調査および展示施設視察のため （国立ｷﾞﾒ東洋美術館、ﾊﾟﾘ国立図書館、ﾙｰﾌﾞﾙ美術館、ｵﾙｾｰ美術館、ｵﾗﾝｼﾞｭﾘｰ美術館ほか）	科学研究費補助金（島谷科研）、出張

	氏名	用務先	期間	用務	備考
2	高橋　裕次	フランス	5月27日～6月2日	「東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究」（基盤研究A）にかかる書跡調査および展示施設視察のため （国立ｷﾞﾒ東洋美術館、ﾊﾞﾘ国立図書館、ﾙｰﾌﾞﾙ美術館、ｵﾙｾｰ美術館、ｵﾗﾝｼﾞｭﾘｰ美術館ほか）	科学研究費補助金（島谷科研）、出張
3	富田　淳	フランス	同上	同上	同上
4	土屋　裕子	フランス	同上	同上	同上
5	神庭　信幸	中国	6月21日～25日	「資料保存と四大元素」に関する国際シンポジウム参加のため（中国国家図書館）	科学研究費補助金(神庭科研)、出張
6	和田　浩	中国	8月7日～16日	「隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究」（基盤研究B）の現地調査（牟州巨神山寺、勝福寺、開元寺ほか）	科研分担金(代表者:大正大学　加島勝)、出張
7	富田　淳	中国	8月24日～28日	「中国書画の表装に関する基礎的研究」（基盤研究C)のため（北京故宮博物院、中国国家図書館ほか）	科学研究費補助金(富田科研)、出張
8	島谷　弘幸	アメリカ	9月13日～20日	「東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究」（基盤研究A）にかかる書跡調査および展示施設視察のため(ﾌｫｯｸﾞ美術館、個人所蔵者宅、ｸﾘｰﾌﾞﾗﾝﾄﾞ美術館、ｱｰﾄ・ｲﾝｽﾃｨﾃｭｰﾄ・ｵﾌﾞ・ｼｶｺﾞ)	科学研究費補助金（島谷科研）、出張
9	神庭　信幸	トルコ エジプト	9月19日～10月2日	国際文化財保存修復学会イスタンブール大会参加および大エジプト博物館保存修復センターにおける調査のため （サキプ・サバンジュ美術館（トルコ）、大エジプト博物館保存修復センター（エジプト））	科学研究費補助金（神庭科研）、出張
10	猪熊　兼樹	インド	9月22日～29日	「アジアの木地螺鈿－その源流、正倉院宝物への道をたどる－」（基盤研究C）の調査研究のため （ムンバイ市内、ウダイプール市内）	科研分担金(代表者:九州国立博物館 小林公治)出張
11	関　紀子	中国	10月9日～15日	「清時代末期の訪中調査における写真資料に関する調査研究」（基盤研究C）に伴う出張のため (泰山、普照寺、岱廟、泰安市博物館、蒿里山冥福寺、興隆寺塔、済寧市博物館、京杭大運河、鉄塔寺、嘉祥武氏祠、孝堂山石室、駝山石窟、雲門山石窟、青州市博物館)	科学研究費補助金（関科研）、出張
12	島谷　弘幸	韓国	10月13日～16日	「東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究」（基盤研究A）にかかる書跡調査および展示施設視察のため（国立中央博物館、国立慶州博物館）	科学研究費補助金（島谷科研）、出張
13	富田　淳	韓国	同上	同上	同上
14	関　紀子	中国	10月28日～11月1日	「清時代末期の訪中調査における写真資料に関する調査研究」（基盤研究C）に伴う出張のため （三孔、三孟、王羲之故居、銀雀山竹簡漢墓博物館）	科学研究費補助金（関科研）、出張
15	富田　淳	中国	10月28日～11月1日	「清時代末期の訪中調査における写真資料に関する調査研究」（基盤研究C）に伴う出張のため （三孔、三孟、王羲之故居、銀雀山竹簡漢墓博物館）	科学研究費補助金（関科研）、出張
16	瀬谷　愛	中国	11月14日～17日	「文化財保護の歴史に関する基礎的研究」（基盤研究B）における調査研究のため（上海博物館）	科学研究費補助金(高橋科研)、出張
17	高橋　裕次	中国	12月5日～7日	「古文書および古典籍の修復と装幀形態に関する用語の研究」（基盤研究C）における東アジア紙文化財保存修理シンポジウム参加のため（甘粛省博物館）	科研分担金(代表者:東文研　加藤雅人)出張
18	高橋　裕次	中国	12月8日～9日	「文化財保護の歴史に関する基礎的研究」（基盤研究B）における調査、視察のため（甘粛省博物館）	科学研究費補助金(高橋科研)、出張
19	高橋　裕次	英国	23年1月8日～16日	「文化財保護の歴史に関する基礎的研究」（基盤研究B）における調査研究のため （ｸﾞﾗｽｺﾞｰ ｹﾙﾋﾞﾝｸﾞﾛｰﾌﾞ博物館(ｽｺｯﾄﾗﾝﾄﾞ)、ヴｨｸﾄﾘｱ･ｱﾝﾄﾞ･ｱﾙﾊﾞｰﾄ博物館、大英博物館(ｲﾝｸﾞﾗﾝﾄﾞ)）	科学研究費補助金(高橋科研)、出張
20	田良島　哲	英国	同上	同上	同上
21	白井　克也	英国	同上	同上	同上
22	遠藤　楽子	英国	同上	同上	同上
23	横山　梓	英国	同上	同上	同上
24	神庭　信幸	フランス	23年1月10日～15日	「博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究」（基盤研究S）にかかる調査等のため (ﾙｰﾌﾞﾙ美術館、ｷﾞﾒ美術館、ｾﾙﾆｭｽｷ美術館、日仏大学会館)	科学研究費補助金（神庭科研）、出張
25	鈴木　晴彦	フランス	同上	同上	同上
26	島谷　弘幸	中国	23年2月16日～18日	「中国書画の表装に関する基礎的研究」（基盤研究C)にかかる調査のため（香港中文大学文物館）	科学研究費補助金(富田科研)、出張
27	島谷　弘幸	アメリカ	23年3月19日～27日	「東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究」（基盤研究（A））にかかる作品調査のため （ｸﾘｰﾌﾞﾗﾝﾄﾞ美術館、ﾌｰﾘｱ美術館、ﾌｨﾗﾃﾞﾙﾌｨｱ美術館ほか）	科学研究費補助金（島谷科研）、出張

○先方負担：延べ42人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	富田　淳	中国	4月16日～22日	上海万博展にかかる作品輸送立会いおよび陳列作業のため(万博博物館、都市足跡館)	先方負担（上海博物館）、出張
2	松本　伸之	中国	5月19日～22日	「甦る中国大文明展」（仮）出品作品交渉のため （中国文物交流中心、陝西省文物局、陝西省博物館、兵馬俑博物館）	共催展主催者旅費（NHK）、出張
3	川村　佳男	中国	6月6日～16日	特別展「誕生！中国文明」出品作品の検品、梱包、借用のため（河南博物院、鄭州市内）	共催展主催者旅費(読売新聞)、出張
4	谷　豊信	中国	6月8日～16日	特別展「誕生！中国文明」出品作品の検品、梱包、借用のため（洛陽博物館、洛陽古墓博物館、河南博物院ほか）	同上
5	島谷　弘幸	中国	6月20日～24日	上海博物館における「杉雨の書と眼」展開催にかかる協議のため（上海博物館）	先方負担（謙慎書道会）、出張
6	富田　淳	中国	同上	同上	同上
7	浅見　龍介	モナコ	7月1日～10日	グリマルディ・フォーラム・モナコへの作品貸与にかかる作品輸送および展示作業のため（ｸﾞﾘﾏﾙﾃﾞｨ･ﾌｫｰﾗﾑ）	先方負担（ｸﾞﾘﾏﾙﾃﾞｨ･ﾌｫｰﾗﾑ）、出張
8	島谷　弘幸	中国	7月8日～11日	2013年開催予定の「王羲之の書とその系譜展（仮称）」における作品調査のため（遼寧省博物館）	共催展主催者旅費(毎日新聞)、出張
9	富田　淳	中国	同上	同上	同上
10	田沢　裕賀	アメリカ	7月26日～8月2日	「ボストン美術館　日本美術の至宝」展（仮称）にかかる作品調査および撮影のため（ボストン美術館）	共催展主催者旅費（NHK）、出張
11	酒井　元樹	アメリカ	同上	同上	同上
12	鈴木　晴彦	アメリカ	9月1日～30日	スミソニアン学術協会　東洋絵画部における招聘のため（ﾌｰﾘｱ美術館、ｱｰｻｰ・M・ｻｯｸﾗｰ・ｷﾞｬﾗﾘｰほか）	先方負担(ｽﾐｿﾆｱﾝ学術協会)招聘出張
13	丸山　士郎	モナコ	9月11日～19日	ｸﾞﾘﾏﾙﾃﾞｨ･ﾌｫｰﾗﾑ･ﾓﾅｺへの作品貸与にかかる撤収作業および作品輸送のため　(ｸﾞﾘﾏﾙﾃﾞｨ･ﾌｫｰﾗﾑ･ﾓﾅｺ)	先方負担(ｸﾞﾘﾏﾙﾃﾞｨ･ﾌｫｰﾗﾑ･ﾓﾅｺ)出張

	氏名	用務先	期間	用務	備考
14	富田　淳	中国	9月20日～30日	上海博物館での共催展にかかる作品輸送立会いおよび陳列作業のため（上海博物館）	共催展主催者旅費(上海博物館)出張
15	松本　伸之	カンボジア	9月21日～25日	特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」にかかる作品調査・出品交渉のため（ﾌﾟﾉﾝﾍﾟﾝ国立博物館、日本大使館、ｶﾝﾎﾞｼﾞｱ王国文化芸術省）	共催展主催者旅費（NHK）、出張
16	島谷　弘幸	中国	9月27日～10月1日	上海博物館での共催展における開幕式参加ため（上海博物館）	共催展主催者旅費(上海博物館)出張
17	沖松　健次郎	韓国	10月6日～8日	国立全州博物館開館20周年記念国際学術ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ“朝鮮王室と全州”にかかる発表のため(国立全州博物館)	先方負担(国立全州博物館)招聘出張
18	富田　淳	台湾	10月7日～9日	「文芸紹興―南宋芸術及び文化展」開幕式参加のため（国立故宮博物院）	先方負担（国立故宮博物院）、出張
19	澤田　むつ代	韓国	10月21日～24日	国際学術シンポジウム『忠南文化財の保存科学―陵山里寺址出土遺物を中心に―』出席のため（國立扶余博物館）	先方負担、出張
20	救仁郷　秀明	中国	10月25日～11月3日	「千年丹青－日本・中国珍蔵唐宋元絵画精品展」展示、撤収のため(上海博物館)	共催展主催者旅費(上海博物館) 出張
21	大橋　美織	韓国	10月31日～11月3日	海外展「高麗仏画大展」の展示替え作業のため（国立中央博物館）	共催展主催者旅費（国立中央博物館）、出張
22	神庭　信幸	フランス	11月2日～7日	「日仏科学ワークショップ」出席のため（ストラスブール研究連絡センターほか）	先方負担（日本学術振興会）、出張
23	土屋　裕子	フランス	同上	同上	同上
24	塚本　麿充	中国	11月8日～17日	「千年丹青－日本・中国珍蔵唐宋元絵画精品展」展示、撤収のため(上海博物館)	共催展主催者旅費(上海博物館)出張
25	島谷　弘幸	中国	11月14日～18日	上海博物館での共催展にかかるシンポジウム出席のため（上海博物館）	同上
26	富田　淳	中国	11月14日～29日	上海博物館での共催展にかかる撤収作業および作品輸送立会いのため（上海博物館）	同上
27	松本　伸之	中国	11月15日～18日	展覧会事前協議のため（北京故宮博物院、中国国家文物局ほか）	先方負担（朝日新聞）、出張
28	瀬谷　愛	韓国	11月21日～26日	海外展「高麗仏画大展」の撤収作業および作品随伴のため（国立中央博物館）	共催展主催者旅費（国立中央博物館）、出張
29	塚本　麿充	韓国	11月21日～25日	海外展「高麗仏画大展」の撤収作業のため（国立中央博物館）	同上
30	島谷　弘幸	中国	12月9日～11日	2013年開催予定の「王羲之の書とその系譜展（仮称）」における作品調査のため（遼寧省博物館）	共催展主催者旅費(毎日新聞)出張
31	富田　淳	中国	同上	同上	同上
32	塚本　麿充	中国	12月22日～24日	「千年丹青－日本・中国珍蔵唐宋元絵画精品展」作品輸送のため（上海博物館）	共催展主催者旅費(上海博物館)出張
33	浅見　龍介	カンボジア	23年1月5日～9日	特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」作品集荷のため（プノンペン国立博物館）	共催展主催者旅費（NHK）、出張
34	富田　淳	台湾	23年1月10日～12日	「文芸紹興―南宋芸術及び文化展」作品撤収・返却作業のため（国立故宮博物院）	共催展主催者旅費（国立故宮博物院）、出張
35	松本　伸之	中国	23年1月20日～22日	特別展「北京故宮博物院精華展」（仮称）事前協議および作品調査のため（北京故宮博物院）	共催展主催者旅費(朝日新聞)出張
36	富田　淳	中国	同上	同上	同上
37	塚本　麿充	中国	23年1月23日～26日	同上	同上
38	浅見　龍介	カンボジア	23年3月15日～18日	特別展「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」作品返却のため（プノンペン国立博物館）	共催展主催者旅費（NHK）、出張
39	猪熊　兼樹	中国	23年3月20日～23日	特別展「北京故宮博物院精華展」（仮称）事前協議および作品調査のため（北京故宮博物院）	共催展主催者旅費(朝日新聞)出張
40	富田　淳	中国	23年3月20日～27日	同上	同上
41	川村　佳男	中国	同上	同上	同上
42	塚本　麿充	中国	同上	同上	同上

【京都国立博物館】延べ27人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	赤尾　栄慶	フランス	6月6日～6月13日	フランス国立図書館における敦煌写本調査	
2	赤尾　栄慶	韓国	6月25日～6月28日	松広寺版本調査・海印寺古写本調査	
3	永島　明子	フランス	6月26日～7月2日	ブル王立修道院美術館の古漆器展の見学	
4	淺湫　毅	ドイツ、フランス、モナコ	6月29日～7月11日	グリマルディ・フォーラム「京都―東京　侍からマンガまで」展に貸与する作品の搬送、展示作業	
5	久保　智康	モナコ	7月3日～7月8日	グリマルディ・フォーラム「京都―東京　侍からマンガまで」展の展示作業	
6	大原　嘉豊	モナコ	8月8日～8月12日	グリマルディ・フォーラム「京都―東京　侍からマンガまで」展の展示替作業	
7	赤尾　栄慶	ロシア	9月2日～9月8日	シンポジウムの参加及びロシア所蔵敦煌写本の調査	
8	淺湫　毅	スリランカ	9月6日～19日	ｺﾛﾝﾎﾞ国立博物館及び遺跡等における仏教彫刻の調査	
9	久保　智康	モナコ	9月11日～16日	ｸﾞﾘﾏﾙﾃﾞｨ・ﾌｫｰﾗﾑ「京都―東京　侍からﾏﾝｶﾞまで」展の撤収作業	
10	羽田　聡	モナコ	9月11日～16日	同上	
11	呉　孟晋	中国	9月21日～29日	「千年丹青 - 日本・中国珍蔵唐宋元絵画精品展」展示、撤収	
12	呉　孟晋	台湾	10月2日～7日	台北・国立故宮博物院への作品搬入	
13	山下　善也	アメリカ	10月11日～16日	シンポジウム「Utsushi:The Art of Copying」において研究発表のため	
14	西上　実	中国	10月14日～27日	シンポジウム発表及び展覧会展示替等作業、講演	
15	永島　明子	アメリカ	10月29日～11月5日	Jacqueline Avant蒔絵コレクションの調査	
16	西上　実	中国（マカオ）	11月9日～11月14日	澳門芸術博物館での明末清初金陵画派書画学術研討会に参加発表のため	
17	西上　実	中国	11月23日～29日	上海博物館特別展「千年丹青」日本より貸与作品の撤収・返送	
18	呉　孟晋	台湾	11月26日～28日	国際シンポジウム参加	
19	村上　隆	アメリカ	12月17日～21日	環太平洋国際化学会議に出席・研究発表	
20	淺湫　毅	カンボジア	23年1月4日～1月10日	彫刻作品・遺跡等の調査	
21	尾野　善裕	ベトナム	23年1月11日～15日	ﾍﾞﾄﾅﾑ国立歴史博物館へ収蔵品に関しての調査・分類等	
22	呉　孟晋	台湾	23年1月11日～13日	台北・国立故宮博物院への作品返却	
23	永島　明子	スペイン	23年1月22日～2月5日	ＮＨＫ「シリーズ知られざる在外秘宝～スペイン・修道院を飾る桃山の蒔絵」の収録	
24	尾野　善裕	英国	23年3月1日～6日	特別展覧会「清朝陶磁」に向けての出品交渉	
25	尾野　善裕	中国	22年3月28日～4月1日	中国旅順博物館所蔵日本陶磁の調査	

	氏名	用務先	期間	用務	備考
26	西上　実	中国・香港	23年3月11日～14日	香港芸術院での展覧会観覧講座講演のため	
27	呉　孟晋	アメリカ	23年3月30日～4月6日	アメリカ・アジア学会大会での発表	

【奈良国立博物館】延べ17人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	斎木　涼子	韓国	12月6日～12月28日	国立慶州博物館との学術交流に伴う視察及び調査研究のため	国立慶州博物館

・その他の調査等のための海外渡航実績

	氏名	用務先	期間	用務	備考
2	大西　征爾	ドイツ	5月11日～5月15日	展示ケース検収	ｸﾞﾗｽﾊﾞｳﾊｰﾝ社
3	内藤　栄	ドイツ	同上	同上	同上
4	永井　洋之	中国	6月24日～7月4日	「大遣唐使展」出陳品返却	職員旅費
5	内藤　栄	スリランカ	7月30日～8月9日	科研調査	科研費
6	岩戸　晶子	韓国	7月28日～8月23日	同上	同上
7	北澤　菜月	アメリカ	9月7日～9月13日	メトロポリタン美術館モンゴル展出陳品随行	ﾒﾄﾛﾎﾟﾘﾀﾝ美術館
8	湯山　賢一	韓国	9月16日～9月18日	国立慶州博物館特別展開幕式出席のため	国立慶州博物館
9	野尻　忠	韓国	同上	同上	同上
10	西山　厚	韓国	9月28日～9月30日	特別講演及び調査のため	国立慶州博物館
11	湯山　賢一	中国	12月5日～12月9日	第４回東アジア紙文化財保存修理シンポジウム参加	職員旅費
12	稲本　泰生	韓国	10月30日～11月3日	科研調査	科研費
13	内藤　栄	韓国	12月15日～12月17日	国立慶州博物館特別展視察	国立慶州博物館
14	岩戸　晶子	韓国	同上	同上	同上
15	北澤　菜月	アメリカ	12月29日～23年1月7日	メトロポリタン美術館モンゴル展出陳品返却	ﾒﾄﾛﾎﾟﾘﾀﾝ美術館
16	湯山　賢一	中国	23年2月21日～2月26日	トヨタ財団助成による文化財調査	トヨタ財団
17	宮崎　幹子	アメリカ	23年3月4日～3月14日	文化庁委託研究調査	文化庁

【九州国立博物館】延べ77人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	市元塁	中国	4月7日～4月9日	夏期特別展開催に係る打ち合わせ、および資料調査	職員旅費
2	臺信祐爾	台湾	4月29日～5月2日	情報収集、黄金旺族遼代文化展調査	科研費
3	市元塁	台湾	4月29日～4月30日	同上	同上
4	小林公治	韓国	5月30日～6月4日	韓国の螺鈿に関する調査	助成金
5	市元塁	中国	5月31日～6月4日	五胡十六国から北魏時代の出土陶俑に関する基礎研究に係る現地調査	科研費
6	臺信祐爾	中国	6月6日～6月13日	チベット展作品搬入作業立ち会い、チベット展作品返却作業立ち会い	職員旅費
7	川畑憲子	ベルギー	6月14日～6月26日	文化庁海外展「アジアへの道」会場における展示作業等	他機関負担
8	小林公治	タイ	6月19日～6月25日	「マハ・チャクリ・シリントーン王女主催によるタイの知恵再活性化のための東洋漆研究国際会議」における研究発表、タイ国内螺鈿工房調査	助成金
9	市元塁	中国	6月28日～7月3日	特別展「馬アジアを駆けた二千年」作品点検､集荷輸送業務	職員旅費
10	志賀智史	韓国	7月4日～7月6日	特別展「馬アジアを駆けた二千年」に係る文化財の借用	職員旅費
11	池内一誠	モンゴル	7月21日～7月26日	あじっぱ体験資料収集にともなう調査	他機関負担
12	今津節生	中国	8月4日～8月12日	「トルキ山遼墓出土品からみた唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術」調査研究	科研費
13	三輪嘉六	中国	8月12日～8月15日	学術文化交流協定締結	職員旅費
14	小泉惠英	中国	8月12日～8月19日	学術文化交流協定締結、特別展「草原の正倉院（仮）」に関する作品調査	同上
15	臺信祐爾	中国	8月12日～8月19日	「トルキ山遼墓出土品からみた唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術」調査研究	科研費
16	市元塁	中国	同上	同上	同上
17	末兼俊彦	中国	同上	同上	同上
18	藤田励夫	ベトナム	8月22日～8月28日	ベトナム・ホイアン市における「茶屋新六交趾国貿易渡海図」関連遺跡の調査	他機関負担
19	小泉惠英	タイ	8月26日～8月31日	文化庁海外展「日本とタイ－ふたつの国と巧と美」にかかる協議	海外展経費
20	原田あゆみ	タイ	同上	同上	同上
21	小林公治	韓国	9月9日～9月11日	特別展「馬アジアを駆けた二千年」に係る文化財の返却	職員旅費
22	市元塁	中国	9月11日～9月15日	同上	同上
23	赤司善彦	韓国	9月15日～9月18日	公州博主催特別展「百済の冠」に係る展示作業	他機関負担
24	三輪嘉六	韓国	9月16日～9月18日	同上	同上
25	池内一誠	ｳｽﾞﾍﾞｷｽﾀﾝ	9月29日～10月5日	あじっぱ体験資料収集にともなう調査	他機関負担
26	小林公治	ベトナム、インド、タイ	9月20日～9月30日	ベトナム・インドの螺鈿に関する調査、バンコクでの在留邦人への講演	科研費
27	畑靖紀	韓国	10月4日～10月8日	高麗仏画大展の輸送と展示	他機関負担
28	三輪嘉六	韓国	10月5日～10月8日	世界大百済典関連行事「世界歴史都市、文化遺産と保存に関する国際会議」での講演	同上
29	小林公治	モンゴル	10月9日～10月24日	国際交流基金「カラコルム博物館運営支援」事業による展示物管理等に関する指導助言	同上
30	畑靖紀	アメリカ	10月11日～10月17日	シンポジウム”Utsushi：The Art of Copying“における研究発表、Center for Japanese Studiesによる調査研究	同上
31	赤司善彦	韓国	10月18日～10月19日	公州博主催特別展「百済の冠」に係る展示作品の撤収作業	同上
32	本田光子	タイ	10月28日～11月1日	文化庁海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」に係る展示環境調査、イベント会場調査および協議	海外展経費
33	原田あゆみ	タイ	同上	同上	同上
34	秋山純子	タイ	同上	同上	同上
35	臺信祐爾	中国	10月31日～11月4日	「X線CTスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析」に係る調査	科研費
36	今津節生	中国	10月31日～11月5日	同上	同上

	氏名	用務先	期間	用務	備考
37	市元塁	中国	10月31日～11月5日	五胡十六国から北魏時代の出土陶俑に関する基盤研究に係る現地調査	科研費
38	赤司善彦	イタリア	11月1日～11月10日	エトルリア壁画古墳の現地調査、ポンペイ遺跡壁画の現地調査	他機関負担
39	河野一隆	フランス、イタリア	11月2日～11月8日	フランス東洋美術の調査、ポンペイ・ヘラクレニウム遺跡の現地調査、エトルリア・ローマの墳墓・邸宅のフレスコ画調査のため	科研費
40	畑靖紀	韓国	11月8日～11月9日	高麗仏画大展の展示撤収	他機関負担
41	森實久美子	韓国	同上	同上	同上
42	市元塁	中国	11月14日～11月22日	服飾文化共同研究	同上
43	川畑憲子	中国	11月18日～11月25日	中国古代漆器検討会	同上
44	金井裕子	韓国	11月21日～11月26日	高麗仏画大展の展示撤収・点検・梱包・輸送作業	同上
45	藤田励夫	ドイツ	11月26日～12月2日	絵画を中心とする美術工芸資料にみる琉球王国の港湾と船舶に関する基礎的調査研究	助成金
46	三輪嘉六	中国	12月4日～12月9日	「第４回東アジア紙文化財保存修理シンポジウムー古代紙文化財の修理ー」参加	職員旅費
47	森田稔	中国	同上	同上	同上
48	本田光子	中国	同上	同上	同上
49	藤田励夫	中国	12月6日～12月9日	保存修復室用務に係る情報収集及び意見交換のため	同上
50	市元塁	中国	12月6日～12月12日	特別展「馬王堆展」（仮称）開催に係る資料調査	同上
51	鳥越俊行	中国	12月14日～12月18日	文化財の科学的調査に関する討議、2010博物館文物保存環境国際学術検討会に参加・講演、文化財保存環境に関する討議	他機関負担
52	小泉惠英	タイ	23年1月4日～1月17日	文化庁海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」に係る作品輸送、作品点検、展示、開会式、ワークショップ	海外展経費
53	原田あゆみ	タイ	23年1月5日～1月18日	文化庁海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」に係る展覧会・イベント開催準備	同上
54	秋山純子	タイ	23年1月5日～1月18日	同上	同上
55	赤司善彦	タイ	23年1月7日～1月18日	同上	他機関負担
56	藤田励夫	タイ	23年1月8日～1月17日	同上	海外展経費
57	三輪嘉六	タイ	23年1月13日～1月17日	文化庁海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」開会式、ワークショップ出席	職員旅費
58	森實久美子	タイ	23年1月15日～1月28日	文化庁海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」に係る文化財管理	海外展経費
59	池内一誠	タイ	23年1月26日～2月1日	文化庁海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」関連伝統工芸ワークショップの実施	他機関負担
60	原田あゆみ	タイ	23年1月26日～2月9日	文化庁海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」に係るイベント開催準備及び展示替え作業	海外展経費
61	藤田励夫	タイ	23年2月5日～2月12日	文化庁海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」に係る文化財管理	同上
62	川畑憲子	タイ	23年2月5日～2月12日	同上	同上
63	鳥越俊行	タイ	23年2月10日～2月17日	文化庁海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」に係る文化財管理	海外展経費
64	秋山純子	タイ	23年2月15日～2月24日	同上	同上
65	進村真之	タイ	23年2月22日～3月7日	同上	他機関負担
66	原田あゆみ	タイ	23年3月5日～3月20日	文化庁海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」に係る文化財管理・撤収	海外展経費
67	小泉惠英	韓国	23年3月8日～3月10日	長期借用の見直し、百済展、文化庁海外展、学術文化交流協定更新に関する協議	職員旅費
68	赤司善彦	韓国	同上	同上	他機関負担
69	三輪嘉六	中国	23年3月10日～3月13日	平成２４年度特別展馬王堆展（仮称）開催に係る調査・協議・打ち合わせ	職員旅費
70	川畑憲子	中国	同上	同上	同上
71	志賀智史	中国	同上	同上	同上
72	坂元雄紀	タイ	23年3月12日～3月19日	文化庁海外展「日本とタイ－ふたつの国の巧と美」に係る文化財管理・撤収	海外展経費
73	末兼俊彦	タイ	23年3月12日～3月20日	同上	同上
74	小泉惠英	タイ	23年3月12日～3月21日	同上	同上
75	藤田励夫	中国	23年3月18日～3月23日	絵画を中心とする美術工芸資料にみる琉球王国の港湾と船舶に関する基礎的研究のため	他機関負担
76	赤司善彦	中国	23年3月28日～3月30日	福岡県･江蘇省友好提携締結20周年事業・交流事業・学術文化交流協定更新等に関する協議	同上
77	畑靖紀	中国	同上	同上	海外展経費

【東京文化財研究所】延べ146人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	友田正彦	スリランカ	4月4日～13日	ユネスコ信託基金事業新規案件検討のための調査	
2	有村　誠	イギリス	4月12日～23日	第７回国際西アジア考古学会(7th ICAANE)参加	
3	山内和也	カザフスタン	5月7日～15日	カザフスタンにおける地下探査ワークショップの打合せおよび実施予定の遺跡の下見	
4	影山悦子	タジキスタン	5月16日～6月22日	タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画の保存修復	
5	友田正彦	ベトナム	5月17日～22日	ユネスコ信託基金タンロン皇城遺跡の保存に関わる現地調査および打合せ	
6	石﨑武志	ベトナム	同上	同上	
7	島津美子	タジキスタン	5月23日～6月15日	タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画の保存修復	
8	森井順之	韓国	5月27日～30日	石造文化財着生生物除去方法に関する指導助言	
9	山内和也	ドイツ、タジキスタン	5月29日～6月11日	ドイツ：2010年度のバーミヤン調査の打合せ タジキスタン:タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画の保存修復	
10	岡田　健	中国	5月30日～6月8日	シルクロード人材育成プログラム準備作業	

	氏名	用務先	期間	用務	備考
11	山梨絵美子	台湾	6月6日～9日	「東アジアを形づくる:比較文化の視覚から近代東アジア美術の成立への再考」２０１０国際学者シリーズ講座での講演と国立台湾美術館での台湾近代絵画調査	
12	二神葉子	カンボジア、タイ	6月7日～13日	アンコール遺跡の救済と発展に関する国際調整委員会出席、アンコール遺跡での現地調査および文化省芸術局との研究打合せ	
13	中山俊介	ドイツ	6月14日～21日	在外日本古美術品（絵画）保存修復協力事業のための海外修復	
14	宮田繁幸	フランス、タイ	6月20日～30日	フランス：無形文化遺産条約第３回締約国総会出席 タイ：文科省受託事業の今年度タイ国関係者打合せ	
15	七海由美子	フランス	6月20日～26日	無形文化遺産保護条約関連会合	
16	松山直子	フランス	同上	同上	
17	山内和也	トルコ	6月20日～29日	カッパドキア遺跡の保存修復事業のための予備ミッション。遺跡の視察と現地関係者との打ち合わせ。	
18	鈴木　環	トルコ	同上	同上	
19	北野信彦	カンボジア	6月28日～7月2日	出光文化福祉財団調査・研究事業助成費で申請している東南アジア地域の海外現地調査	
20	友田正彦	モンゴル	6月28日～7月3日	建造物の保存修復計画に関する研修ワークショップ	
21	秋枝ﾕﾐｲｻﾞﾍﾞﾙ	モンゴル	同上	同上	
22	俵木　悟	韓国	6月28日～7月8日	「無形文化遺産の保護に関する日韓研究交流」合意書に基づく研修	
23	中山俊介	ドイツ	7月7日～13日	平成２２年度在外日本古美術品保存修復協力事業　絵画の海外修復工房に於ける第１回目修復作業の監督および２回目のワークショップ打合せ	
24	田代亜紀子	インドネシア	7月9日～13日	第６回文化遺産東アジア会議および文化に関するアセアン会議参加	
25	原本知実	インドネシア	7月9日～13日	第７回文化遺産東アジア会議および文化に関するアセアン会議参加	
26	山内和也	ｱﾌｶﾞﾆｽﾀﾝ	7月9日～30日	「バーミヤン遺跡の保護」事業のミッション参加	
27	有村　誠	ｱﾌｶﾞﾆｽﾀﾝ	同上	同上	
28	安倍雅史	ｱﾌｶﾞﾆｽﾀﾝ	同上	同上	
29	松山直子	モンゴル	7月12日～23日	無形文化遺産保護活動の調査	
30	宮田繁幸	タイ	7月18日～22日	ユネスコバンコク事務所主催「a regional consultation meeting on "Intangible heritage beyond borders"出席	
31	二神葉子	アメリカ、ブラジル	7月21日～8月6日	アメリカ：文化財保護制度関連資料収集 ブラジル：第３４回世界遺産委員会出席	
32	松山直子	中国	8月6日～10日	生態博物館会議出席	
33	友田正彦	ベトナム	8月8日～14日	ユネスコ信託基金タンロン皇城遺跡の保存に関わる現地調査および打合せ	
34	中野照男	中国	8月8日～19日	チベット族雪頓節における仮頭調査	
35	岡田　健	中国	8月12日～9月11日	シルクロード人材育成プログラム、敦煌芸術の科学的復原研究－壁画材料の劣化メカニズムの解明によるアプローチー	
36	清水真一	中国	8月15日～17日	シルクロード人材育成プログラム	
37	原田　怜	アメリカ	8月17日～26日	被災文化遺産復旧に係る調査	
38	島津美子	中国	8月17日～29日	ギジル千仏洞、敦煌莫高窟の壁画調査のため	
39	二神葉子	モンゴル	8月18日～28日	モンゴル国立文化遺産センターの専門家を対象とした石質文化財の保存に関する現地ワークショップの開催	
40	北野信彦	モンゴル	同上	同上	
41	秋枝ﾕﾐｲｻﾞﾍﾞﾙ	モンゴル	8月18日～28日	建造物の保存管理計画ワークショップおよび保存修復調査研修	
42	清水真一	モンゴル	同上	同上	
43	友田正彦	モンゴル	同上	同上	
44	高桑いづみ	韓国	8月23日～28日	大韓民国国立文化財研究所での研修	
45	松山直子	韓国	8月25日～28日	無形文化財保護活動の調査	
46	有村　誠	アルメニア	9月5日～24日	アルメニアに於ける考古学調査実施	
47	鈴木　環	インド	9月8日～10月2日	「インド・アジャンター壁画の保存修復に関する調査研究事業－第４次ミッション」へ参加し、壁画の保存修復に向けたドキュメンテーションの実施	
48	山内和也	インド	9月9日～16日	「インド・アジャンター壁画の保存修復に関する調査研究事業」に関する打合せ	
49	島津美子	インド	同上	同上	
50	二神葉子	モンゴル	9月14日～21日	エルデニ・ゾー寺院の保存に関する現地調査	
51	岡田　健	中国	9月18日～22日	シルクロード人材育成プログラム運営	
52	石崎武志	トルコ	9月19日～10月1日	国際文化財保存学会(IIC)大会参加およびイスタンブールのハギア・ソフィアの環境調査	
53	安倍雅史	ウズベキスタン	9月21日～10月4日	ウズベキスタンに於ける文化遺産保存修復技術実技講習講師	
54	松山直子	マレーシア	9月22日～10月1日	無形文化遺産保護活動関連国際会議の出席および現地調査	
55	中山俊介	ドイツ	9月28日～10月6日	平成２２年度在外日本古美術品保存修復協力事業　絵画の海外修復工房に於ける第２回目修復作業およびワークショップの監督	
56	原田　怜	ｵﾗﾝﾀﾞ、ﾌﾗﾝｽ	9月28日～10月6日	被災文化遺産復旧に係る調査	
57	早川典子	ドイツ	10月3日～8日	在外日本古美術品（絵画）の海外修復工房における修復およびﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ	
58	加藤雅人	ドイツ	10月3日～19日	同上	
59	影山悦子	タジキスタン	10月3日～11月2日	ﾀｼﾞｷｽﾀﾝ国立古代博物館が所蔵する壁画の保存修復およびﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ開催	
60	友田正彦	ベトナム	10月5日～11日	タンロン一ハノイ１０００年記念国際学術シンポジウムへの参加	

	氏名	用務先	期間	用務	備考
61	石﨑武志	韓国	10月7日～9日	韓国文化財保存科学会第３２回大会にて研究発表	
62	森井順之	韓国	10月7日～9日	韓国文化財保存科学会における発表	
63	俵木　悟	韓国	10月9日～12日	韓国民族芸術祝祭現地調査	
64	島津美子	タジキスタン	10月10日～11月2日	タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画の保存修復およびワークショップ開催	
65	川野邊　渉	ドイツ	10月11日～21日	平成２２年度在外日本古美術品保存修復協力事業　絵画の海外修復工房に於ける第２回修復作業およびワークショップの監督、ケルンにおける工芸の海外修復工房における修復作業の監督	
66	亀井伸雄	ドイツ	10月11日～21日	在外日本古美術品保存修復協力事業ワークショップ及び修復作業視察、ならびにドイツ技術博物館及びケルン東洋美術館との合意書締結等	
67	山内和也	ｳｽﾞﾍﾞｷｽﾀﾝ、ｶｻﾞﾌｽﾀﾝ、ｷﾙｷﾞｽﾀﾝ、ﾀｼﾞｷｽﾀﾝ	10月11日～30日	ウズベキスタン：遺跡保存に関する会議出席 ｶｻﾞﾌｽﾀﾝ:ｶｻﾞﾌｽﾀﾝ考古学研究所において打ち合わせおよび遺跡調査 ｷﾙｷﾞｽﾀﾝ:ｷﾙｷﾞｽ考古学研究所において打ち合わせおよび遺跡調査 ﾀｼﾞｷｽﾀﾝ:ﾀｼﾞｷｽﾀﾝ国立古代博物館においてワークショップ開催	
68	中山俊介	ドイツ	10月12日～22日	平成２２年度在外日本古美術品保存修復協力事業　絵画の海外修復工房に於ける第３回修復作業およびワークショップの監督、ケルンにおける工芸の海外修復工房における修復作業の監督	
69	井手真二	ドイツ	10月13日～21日	在外日本古美術品保存修復協力事業に係るドイツ技術博物館及びケルン東洋美術館との合意書締結等	
70	秋枝ﾕﾐｲｻﾞﾍﾞﾙ	インドネシア	10月15日～22日	「ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ西ｽﾏﾄﾗ州ﾊﾟﾀﾞﾝにおける歴史的地区文化遺産復興支援（専門家交流）事業」における現地の状況調査およびﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ・専門家招へい準備の打ち合わせ	
71	山梨絵美子	台湾	10月17日～21日	共同調査報告書刊行のための調査成果および報告書内容についての協議と追加調査	
72	城野誠治	台湾	10月17日～21日	李唐「万嶽松風図」の調査成果および報告書内容についての協議、追加調査	
73	鳥光美佳子	台湾	同上	同上	
74	清水真一	インドネシア	10月17日～22日	「インドネシア西スマトラ州パダンにおける歴史的地区文化遺産復興支援（専門家交流）事業」における現地の状況調査およびワークショップ・専門家招へい準備の打ち合わせ	
75	田代亜紀子	インドネシア	同上	同上	
76	岡田　健	中国	10月17日～30日	ｼﾙｸﾛｰﾄﾞ人材育成ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ、敦煌壁画の保護に関する日中共同研究	
77	石﨑武志	中国	10月24日～27日	シルクロード人材育成プログラム	
78	七海由美子	中国	10月25日～27日	芸術教育と無形文化遺産保護に係る中国主催ASEAN会議出席	
79	二神葉子	イタリア、オーストリア	10月25日～11月4日	イタリア：被災文化遺産復旧に係る調査および文化財保護制度 オーストリア：文化財データベースに関する資料収集	
80	吉田直人	中国	10月27日～29日	シルクロード人材育成プログラム	
81	岡田　健	中国	11月7日～13日	ｼﾙｸﾛｰﾄﾞ人材育成ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ、敦煌壁画の保護に関する日中共同研究	
82	七海由美子	中国	11月11日～14日	文化観光に係る国際会議	
83	松山直子	ケニア共和国	11月12日～21日	第５回無形文化遺産保護条約政府間委員会会議出席	
84	中山俊介	ドイツ	11月12日～12月1日	ﾄﾞｲﾂ:平成22年度在外　工芸の海外修復工房におけるﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ監督	
85	宮田繁幸	ケニア共和国	11月13日～21日	第５回無形文化遺産保護条約政府間委員会会議出席	
86	城野誠治	台湾	11月14日～17日	「文化財専門デジタル撮影ワークショップ」の実施	
87	鳥光美佳子	台湾	同上	同上	
88	友田正彦	中国	11月14日～17日	JICA依頼による耐震建築人材育成ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ参加	
89	鈴木　環	インド	11月14日～12月4日	「ｲﾝﾄﾞ・ｱｼﾞｬﾝﾀｰ壁画の保存修復に関する調査研究事業－第6次ﾐｯｼｮﾝ」へ参加し、インド考古局と共同で、壁画の保存修復にむけた調査を行う	
90	島津美子	インド	同上	同上	
91	山内和也	カザフスタン	11月16日～20日	国際ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ「Ancient and Medieval Uebanization of Euraasia and Development of Almaty city」への参加	
92	飯島　満	韓国	11月22日～28日	「無形文化遺産の保護に関する日韓研究交流」合意書に基づく研修	
93	二神葉子	カンボジア、タイ	11月22日～12月4日	カンボジア:アンコール遺跡での現地調査およびアンコール遺跡の救済と発展に関する国際調整委員会出席 ﾀｲ:ﾁｬﾝﾀﾅﾌﾞﾘｰ、ｱﾕﾀﾔ、ｽｺｰﾀｲでの現地調査および文化省芸術局との打ち合わせ	
94	岡田　健	中国	11月23日～27日	日中韓国共同ｼﾙｸﾛｰﾄﾞ沿線文化財保護人員育成ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ	
95	北野信彦	タイ	11月28日～12月2日	タイ国内における17世紀代の漆文化財に関する調査	
96	山内和也	インド	11月28日～12月4日	「ｲﾝﾄﾞ・ｱｼﾞｬﾝﾀｰ壁画の保存修復に関する調査研究事業－第8次ﾐｯｼｮﾝ」へ参加し、インド考古局と共同で、壁画の保存修復にむけた調査を行う	
97	朽津信明	タイ	11月29日～12月2日	共同研究打ち合わせおよびﾚﾝｶﾞ造遺跡の劣化状況調査	
98	友田正彦	ベトナム	11月29日～12月4日	ﾕﾈｽｺ信託基金ﾀﾝﾛﾝ皇城遺跡の保存に関わる現地調査	
99	石﨑武志	ベトナム	同上	同上	
100	清水真一	ベトナム	11月29日～12月4日	ﾀﾝﾛﾝ皇城遺跡に関する保存管理計画調査および協議	
101	宮田繁幸	タイ	12月1日～9日	International Drum Festival in Celebration of H.M. the King's Birthday Anniversary参加およびタイ国ランパン県無形文化遺産調査	
102	岡田　健	中国	12月3日～8日	陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究および第4回東アジア紙文化財保存修理シンポジウム参加	
103	城野誠治	台湾	12月5日～8日	2010年文化資産保存科学国際シンポジウムでの発表	

	氏名	用務先	期間	用務	備考
104	加藤雅人	中国	12月5日～9日	第4回東アジア紙文化財保存修理シンポジウム「古代紙文化財の修理」への参加、成果発表	
105	森井順之	韓国	12月6日～8日	日韓共同研究発表会への参加、講演および日韓共同研究打ち合わせ	
106	北野信彦	カンボジア	12月6日～10日	ｶﾝﾎﾞｼﾞｱ国内における17世紀代の漆文化財に関する調査	
107	秋枝ﾕﾐｲｻﾞﾍﾞﾙ	インドネシア	12月11日～17日	「ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ西ｽﾏﾄﾗ州ﾊﾟﾀﾞﾝにおける歴史的地区文化遺産復興支援（専門家交流）事業」における現地ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ参加、打合せ	
108	亀井伸雄	中国	12月14日～18日	日中韓国共同シルクロード沿線文化財保護人員育成プログラム終了記念シンポジウム出席、発表および修了式出席	
109	清水真一	中国	同上	同上	
110	岡田　健	中国	同上	同上	
111	清水真一	インドネシア	23年1月4日～10日	「ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ西ｽﾏﾄﾗ州ﾊﾟﾀﾞﾝにおける歴史的地区文化遺産復興支援（専門家交流）事業」における現地ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ講義	
112	亀井伸雄	インドネシア	23年1月5日～10日	同上	
113	松山直子	フィリピン	23年1月10日～14日	無形文化財保護活動の調査	
114	土屋貴裕	アメリカ	23年2月1日～11日	在北米日本中世絵画調査	
115	中山俊介	ドイツ	23年2月2日～9日	平成22年度在外日本古美術品保存修復協力事業　絵画の海外修復工房に於ける第３回目修復作業および納品	
116	山内和也	アルメニア	23年2月7日～13日	協力相手国調査	
117	有村　誠	アルメニア	同上	同上	
118	邊牟木尚美	アルメニア	同上	同上	
119	原本知実	アルメニア	同上	同上	
120	石﨑武志	ドイツ、 トルコ	23年2月7日～17日	ドイツ：文化財の保存環境に関するワークショップ参加 トルコ：イスタンブールのハギア・ソフィアの環境調査	
121	松山直子	タイ、ラオス	23年2月7日～24日	無形文化遺産関連国際会議出席および無形文化遺産保護活動の現地調査	
122	岡田　健	中国	23年2月11日～16日	陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究	
123	島津美子	アメリカ	23年2月13日～20日	タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画断片の有機成分分析	
124	清水真一	ベトナム	23年2月13日～20日	タンロン皇城遺跡に関する建築学的研究のための、出土遺物等の調査	
125	中野照男	中国	23年2月13日～21日	ヒマラヤを越え河西回廊に伝わった密教的造形と表現、その表象芸術に関する研究	
126	原本知実	ﾐｸﾛﾈｼｱ連邦	23年2月17日～25日	協力相手国調査	
127	邊牟木尚美	ドイツ	23年2月19日～26日	ドイツにおける文化遺産保護の人材育成実施機関調査	
128	友田正彦	ベトナム	23年2月19日～26日	タンロン皇城遺跡に関する現地調査、専門家協議参加及び関係打合せ等	
129	影山悦子	タジキスタン	23年2月19日～3月8日	ﾀｼﾞｷｽﾀﾝ国立古代博物館が所蔵する壁画の保存修復	
130	山内和也	タジキスタン、 カザフスタン、 フランス、イギリス	23年2月19日～3月9日	ﾀｼﾞｷｽﾀﾝ:ﾀｼﾞｷｽﾀﾝ国立古代博物館が所蔵する壁画断片の保存修復 ｶｻﾞﾌｽﾀﾝ:ｶｻﾞﾌｽﾀﾝ考古研究所と次年度の事業打合せ ﾌﾗﾝｽ:ﾕﾈｽｺ日本信託基金事業に関する打合せ、ﾊﾞｰﾐﾔﾝ遺跡の保存に関する会議出席および共同研究打合せ ｲｷﾞﾘｽ:「ｱﾌｶﾞﾆｽﾀﾝ古代世界の十字路」展視察	
131	宮田繁幸	タイ、 マレーシア	23年3月2日～8日	タイ：タイ国関係者協議 マレーシア：NEACH セミナ"documentetion and safeguarding of Intangible Cultural Heritage"出席	
132	亀井伸雄	ﾌﾗﾝｽ、ｽｲｽ	23年3月8日～15日	近代文化遺産の保存と修復に関するﾌﾗﾝｽとｽｲｽに於ける現地調査	
133	川野邊　渉	ﾌﾗﾝｽ、ｽｲｽ、ﾄﾞｲﾂ	23年3月8日～18日	近代文化遺産の保存と修復に関するﾌﾗﾝｽとｽｲｽに於ける現地調査およびｹﾙﾝ東洋美術館に於ける作品調査	
134	中山俊介	ﾌﾗﾝｽ、ｽｲｽ、ﾄﾞｲﾂ	同上	同上	
135	加藤雅人	ｲﾀﾘｱ、ﾄﾞｲﾂ	23年3月10日～18日	国際研修「紙の保存と修復」の運営に関する会議および修復現場視察	
136	田中　淳	韓国	23年3月11日～13日	「美術研究」400号、「美術史論壇」30号記念　日韓共同ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	
137	勝木言一郎	韓国	同上	同上	
138	津田徹英	韓国	同上	同上	
139	塩谷　純	韓国	同上	同上	
140	皿井　舞	韓国	同上	同上	
141	土屋貴裕	韓国	同上	同上	
142	綿田　稔	韓国、ドイツ	23年3月11日～20日	韓国：「美術研究」４００号、「美術史論壇」３０号記念　日韓共同シンポジウム ドイツ：在外古美術品保存修復協力事業（絵画）	
143	江村知子	韓国、ドイツ、 アイルランド	23年3月11日～24日	韓国：「美術研究」４００号、「美術史論壇」３０号記念　日韓共同シンポジウム ドイツ：在外古美術品保存修復協力事業（絵画） アイルランド：日本絵画および資料の調査	
144	島津美子	ドイツ	23年3月13日～24日	アジア美術館所蔵のキジル壁画石窟資料の調査	
145	中野照男	ﾄﾞｲﾂ、ｲｷﾞﾘｽ、ﾌﾗﾝｽ	23年3月14日～24日	在外日本古美術品保存修復協力事業予備調査・研究交流の打合せ	
146	田中　淳	ﾄﾞｲﾂ、ｲｷﾞﾘｽ、ﾌﾗﾝｽ	同上	同上	

【奈良文化財研究所】延べ162人

	氏名	用務先	期間	用務	備考
1	加藤　真二	中国	4月23日～5月5日	夏期企画展のための資料調査および科研費の研究分担者として海外調査	運営費交付金：展示科研費：基盤Ａ松藤和人
2	森川　実	中国	4月23日～5月2日	夏期企画展のための資料調査	運営費交付金:展示
3	森本　晋	スペイン	4月4日～4月13日	国際学会「考古学におけるコンピュータの応用と数量的方法」CAA2010)出席と発表	運営費交付金：32190
4	城倉　正祥	中国	4月19日～6月10日	中国社会科学院考古研究所との漢魏洛陽城の共同研究	運営費交付金：32820 国際研究協力事業費
5	井上　和人	アメリカ	4月28日～5月3日	ｵﾚｺﾞﾝ大学アジア太平洋学センター主催「東アジア都市としての奈良」講演	先方負担:ｵﾚｺﾞﾝ大学
6	中村　一郎	中国	5月7日～5月14日	中国社会科学院考古研究所との漢魏洛陽城の共同研究	運営費交付金：32820 国際研究協力事業費
7	鈴木　智大	中国	5月1日～5月10日	中華人民共和国山西省の古代建築調査	科研費：若手B鈴木
8	森本　晋	カザフスタン	5月7日～5月15日	ユネスコ・シルクロード世界遺産登録関連ドキュメンテーション事業の予備調査	運営費交付金：33580 国際研究協力事業費
9	国武　貞克	カザフスタン	同上	同上	同上
10	金田　明大	カザフスタン	同上	同上	同上
11	小野　健吉	台湾	5月15日～5月19日	台湾における庭園調査	京都大学大学院研究経費
12	鈴木　智大	カンボジア	5月28日～6月5日	西トップ寺院の調査研究	運営費交付金：32800 国際協力研究費
13	大林　潤	カンボジア	同上	同上	同上
14	島田　敏男	カンボジア	同上	同上	同上
15	石村　智	カンボジア	5月28日～6月10日	西トップ寺院の調査研究と国際調整委員会参加	運営費交付金：32800 国際協力研究費
16	脇谷　草一郎	ベトナム	5月17日～5月22日	タンロン皇城遺跡保存に係る現地調査参加	先方負担：東京文化財研究所
17	高妻　洋成	ベトナム	同上	同上	同上
18	清水　重敦	民国	5月26日～5月29日	韓国国立文化財研究所主催『弥勒寺シンポジウム』への参加	先方負担：韓国国立文化財研究所
19	森本　晋	ドイツ・タジキスタン	5月29日～6月11日	バーミヤン遺跡保護ユネスコ専門家会議出席・シルクロード世界遺産登録支援事業関連現地踏査	運営費交付金：33580 国際研究協力費
20	杉山　洋	カンボジア	6月22日～7月6日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金：32800
21	小池　伸彦	中国	6月21日～6月23日	遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「朝陽地区隋唐墓の整理と研究」に関する協議	運営費交付金：33600 国際共同研究
22	加藤　真二	中国	同上	同上	同上
23	小野　健吉	フランス	7月7日～7月18日	フランスにおける庭園等の調査	京都大学大学院研究経費
24	庄田　慎矢	韓国	6月20日～6月24日	科学研究費補助金による調査	科学研究費：藤田尚
25	田辺　征夫	中国	7月26日～8月2日	社会科学院考古研究所創立６０周年記念シンポジウム出席	運営費交付金：32820
26	平澤　毅	ブラジル	7月23日～8月7日	第３４回世界遺産委員会出席	運営費交付金：32030
27	丹羽　崇史	中国	7月26日～8月2日	社会科学院考古研究所創立６０周年記念シンポジウム出席	運営費交付金：32820
28	森本　晋	アフガニスタン	7月9日～7月30日	バーミヤン遺跡保護に係る現地調査	運営費交付金：３３５８０
29	高妻　洋成	台湾	7月25日～7月29日	台湾伝統建築壁画及び絵画の保存状況現地調査ならびに保存科学研究と技術の交流及び講演	先方負担：台湾行政院文化建設委員会
30	森先　一貴	ロシア	8月1日～8月16日	ロシア・アムール川下流域における遺跡の発掘調査	他機関科研費：東大大貫
31	庄田　慎矢	韓国	7月25日～7月31日	科学研究費補助金による調査	科学研究費：基盤　Ｂ
32	島田　敏男	ベトナム	9月19日～9月23日	ベトナム社会主義共和国ドゥオンラム村国家文化財指定5周年祭参加・講演	他機関負担：学術研究振興資金（昭和女子大友田博通）
33	庄田　慎矢	ｶﾝﾎﾞｼﾞｱ・ﾀｲ	8月12日～8月19日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金：32800
34	石村　智	ブラジル	7月23日～8月8日	第３４回世界遺産委員会出席・情報収集	運営費交付金：33620
35	石村　智	フィジー	7月15日～7月21日	平成22年度文部科学省「国際協力イニシアティブ」への協力	他機関負担：同志社女子大学
36	番　光	ｶﾝﾎﾞｼﾞｱ･ﾀｲ	8月12日～8月19日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金：32800
37	加藤　真二	中国	8月21日～8月28日	河北省泥河湾での調査	他機関科研費：同志社大学松藤和人
38	杉山　洋	カンボジア	8月11日～9月6日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金：32800
39	大林　潤	ｶﾝﾎﾞｼﾞｱ･ﾀｲ	8月12日～8月19日	同上	同上
40	城倉　正祥	中国	8月19日～8月26日	中国社会科学院考古研究所との共同研究	運営費交付金：32820 国際研究協力事業費
41	芝　康次郎	中国	同上	同上	同上
42	丹羽　崇史	中国	9月10日～9月17日	河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査	運営費交付金：32810 国際研究協力事業費
43	庄田　慎矢	韓国	8月23日～8月26日	科学研究費補助金による調査	科学研究費：基盤　Ｂ
44	井上　幸	中国	8月11日～8月15日	学会発表	科学研究費：研究支援

	氏名	用務先	期間	用務	備考
45	箱崎　和久	ベトナム	9月12日～9月22日	ベトナム社会主義共和国ドンナイ省フーホイ村･フエ省フクテック村の集落調査および類例調査	他機関負担：学術研究振興資金（昭和女子大友田博通）
46	海野　聡	ベトナム	9月12日～9月23日	同上	同上
47	深澤　芳樹	中国	9月10日～9月17日	河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査	運営費交付金：32810 国際研究協力事業費
48	小田　裕樹	中国	9月10日～9月18日	同上	同上
49	高妻　洋成	モンゴル	8月17日～8月28日	ｱﾗｼｬｰﾝ･ﾊﾀﾞ、ｾﾙﾍﾞﾝﾊｰﾙｶﾞｰ両遺跡における石造文化財の保存のための現地調査	東京文化財研究所
50	田村　朋美	モンゴル	同上	同上	同上
51	加藤　真二	ロシア	9月16日～9月27日	科学研究費補助金による国際シンポジウム出席と研究発表	科学研究費：加藤真二
52	玉田　芳英	中国	9月10日～9月18日	河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査	運営費交付金：32810 国際研究協力事業費
53	松本　将一郎	ベトナム	9月12日～9月23日	ベトナム社会主義共和国ドンナイ省フーホイ村･フエ省フクテック村の集落調査および類例調査	他機関負担：学術研究振興資金（昭和女子大友田博通）
54	田村　朋美	韓国	9月1日～9月3日	大韓民国出土ガラス製遺物の調査および情報収集	科学研究費：田村朋美
55	石村　智	フィジー	8月31日～9月6日	フィジーにおける考古学的遺跡の踏査	科学研究費：若手Ｂ
56	降幡　順子	中国	9月10日～9月18日	河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査	運営費交付金：32810 国際研究協力事業費
57	森先　一貴	ロシア	9月18日～9月25日	国際シンポジウム「北東アジアの大陸および島嶼地域における人類の初期居住について」への参加、および研究発表	科学研究費：森先一貴
58	丹羽　崇史	中国	9月22日～9月26日	The Tongling Symposium on the Bronze Civilization 2010に参加	科学研究費:丹羽崇史
59	中村　亜希子	中国	9月10日～9月18日	河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査	運営費交付金：32810 国際研究協力事業費
60	松井　章	韓国	9月7日～9月10日	貝塚の発掘調査方法の指導と出土動物遺存体についての研究指導	先方負担：ウリ文化財研究院
61	平澤　毅	マレーシア	9月12日～9月19日	マラッカ及びジョージタウンの保存管理に関する現地調査等	他機関科研費：鳥取環境大学　張漢賢
62	森本　晋	フランス	9月20日～9月27日	国際学会「考古文化遺産に関するヴァーチャルリアリティー」に出席	運営費交付金：32190 国際研究協力事業費
63	高妻　洋成	中国	9月8日～9月10日	日中韓共同シルクロード沿線文化財保護人材プログラム講師	東京文化財研究所
64	加藤　真二	カザフスタン・タジキスタン	10月12日～10月30日	シルクロード地域の旧石器時代遺物の調査	文化財保護・芸術研究助成財団助成金：32120
65	小野　健吉	韓国	10月20日～10月22日	忠南大学校百済研究所主催学術会議「東アジア古代宮城の後苑」への出席と発表	先方負担：韓国忠南大学校百済研究所
66	高妻　洋成	台湾	9月17日～9月20日	台湾伝統建築壁画及び絵画の保存状況現地調査ならびに保存科学研究と技術の交流及び講演	先方負担：台湾行政院文化建設委員会
67	芝　康次郎	中国	10月21日～11月2日	中国社会科学院考古研究所との共同研究	運営費交付金：32820 国際研究協力事業費
68	城倉　正祥	中国	10月21日～12月24日	同上	同上
69	国武　貞克	カザフスタン・タジキスタン	10月12日～10月30日	旧石器時代遺物を中心とする博物館収蔵考古資料の調査	運営費交付金：33580 国際研究協力事業費
70	森本　晋	カザフスタン・タジキスタン	同上	同上	文化財保護・芸術研究助成財団助成金：39120
71	加藤　真二	中国	12月11日～12月23日	科学研究費による中国細石刃石器群の調査	科学研究費： 加藤真二
72	森先　一貴	ロシア	10月21日～10月31日	ロシア連邦沿海州ハサン地区におけるグヴォズデヴォ５遺跡の発掘調査	科学研究費： 森先一貴
73	杉山　洋	カンボジア	11月11日～12月23日	文化庁委託業務「カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業」	委託業務経費：350612
74	芝　康次郎	中国	12月11日～12月23日	科学研究費による中国細石刃石器群の調査	科学研究費： 加藤真二
75	松井　章	ラオス	11月2日～11月11日	ラオスにおける家畜、家禽の調査	科学研究費： 松井章
76	金田　明大	カンボジア	11月26日～12月3日	文化庁委託業務「カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業」	委託業務経費：350612
77	次山　淳	韓国	11月19日～11月21日	韓国三国時代における出土貨幣および関連資料の調査	科学研究費：20320126
78	石田　由紀子	韓国	同上	同上	同上
79	青木　敬	韓国	11月19日～11月21日	韓国・扶余地域の都城関連遺跡の現地踏査および資料見学	科学研究費：21720294
80	小田　裕樹	韓国	同上	同上	同上
81	井上　幸	中国	10月29日～10月31日	東アジア日本語教育日本文化研究学会で発表	渡航費：科学研究費 滞在費：私費
82	井上　和人	韓国	12月8日～12月10日	国際学術会議「益山歴史遺跡地区の世界遺産的価値の糾明」に出席・講演	先方負担
83	高妻　洋成	カンボジア	11月14日～11月19日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金：32800
84	脇谷　草一郎	カンボジア	同上	同上	同上
85	田村　朋美	カンボジア	同上	同上	同上
86	高妻　洋成	韓国	11月1日～11月5日	International conference on Conservation Ethics for Rational Decision－making: Dialogue between the East and the Westにて招待講演	先方負担
87	清水　重敦	韓国	11月2日～11月4日	日中韓国際シンポジウム「ソウル、北京、東京」への参加	先方負担

	氏名	用務先	期間	用務	備考
88	降幡　順子	カンボジア	11月14日～11月19日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金：32800
89	渡邉　晃宏	韓国	10月26日～10月30日	国立羅州文化財研究所開所5周年記念国際学術大会への参加・報告	先方負担
90	田代　亜紀子	インドネシア	11月20日～11月28日	西スマトラ州パダンにおける歴史的地区文化遺産復興支援（専門家交流）事業への協力	東京文化財研究所
91	深澤　芳樹	韓国	11月9日～11月13日	国立慶州文化財研究所が主催する国際学術ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ「韓国の都城」への出席	先方負担
92	諫早　直人	韓国	同上	同上	同上
93	森本　晋	カンボジア	11月24日～11月27日	アンコール歴史遺跡保存開発国際調整委員会出席	運営費交付金：32800
94	森本　晋	香港	11月29日～12月5日	太平洋近隣友好協会年次大会「ﾃﾞｼﾞﾀﾙｺﾝﾃﾝﾂから知識資産へ」に出席発表	科学研究費：基盤研究（C）
95	井上　直夫	カンボジア	12月6日～12月13日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金：32800
96	岡田　愛	カンボジア	同上	同上	同上
97	紅林　孝彰	カンボジア	12月7日～12月12日	同上	同上
98	今井　晃樹	中国	12月13日～12月24日	中国社会科学院考古研究所との漢魏洛陽城における共同調査への参加	運営費交付金：32820 国際研究協力事業費
99	松井　章	中国	12月12日～12月16日	田螺山遺跡出土の動物遺存体の調査	科学研究費： 松井章
100	高妻　洋成	ベトナム	11月29日～12月3日	タンロン皇城遺跡保存にかかる現地調査に参加	東京文化財研究所
101	脇谷　草一郎	ベトナム	同上	同上	同上
102	高妻　洋成	台湾	12月5日～12月8日	2010文化資産国際検討会にて招待講演	先方負担
103	若杉　智宏	韓国	11月29日～12月28日	国立慶州文化財研究所との発掘調査交流への参加	渡航費：運営費交付金：33600　国際研究協力 滞在費：先方負担 慶州文化財研究所
104	栗山　雅夫	中国	12月13日～12月24日	中国社会科学院考古研究所との漢魏洛陽城における共同調査への参加	運営費交付金：32820 国際研究協力事業費
105	難波　洋三	中国	12月13日～12月17日	同上	同上
106	箱崎　和久	中国	12月10日～12月19日	第一次大極殿院復元にかかる類例の調査、および中国における八角塔に関する調査・研究	運営費交付金：35510 科学研究費： 箱崎和久
107	鈴木　智大	中国	12月10日～12月13日	第一次大極殿院復元にかかる類例の調査	運営費交付金：35510
108	箱崎　和久	ベトナム	12月23日～12月31日	ベトナム社会主義共和国ドンナイ省フーホイ村・フエ省フクテック村の集落調査および類例調査	運営費交付金：35510
109	北山　夏希	中国	12月10日～12月13日	第一次大極殿院復元にかかる類例の調査	他機関負担：学術研究振興資金（昭和女子大友田博通）
110	井上　麻香	中国	12月10日～12月13日	第一次大極殿院復元にかかる類例の調査	運営費交付金：35510
111	黒坂　貴裕	ベトナム	12月23日～12月31日	ベトナム社会主義共和国ドンナイ省フーホイ村・フエ省フクテック村の集落調査および類例調査	他機関負担：学術研究振興資金（昭和女子大友田博通）
112	田代　亜紀子	ベトナム	11月29日～12月3日	タンロン皇城遺跡保存にかかる現地調査に参加	東京文化財研究所
113	芝　康次郎	韓国	1月26日～1月30日	韓国旧石器時代遺跡出土資料の調査	科学研究費： 芝康次郎
114	加藤　真二	韓国	1月26日～1月30日	旧石器時代遺跡出土資料の調査	科学研究費： 加藤真二
115	加藤　真二	中国	3月8日～3月15日	南京博物院所蔵細石器、関連資料の調査	科学研究費： 加藤真二
116	中村　亜希子	中国	1月9日～1月16日	韓代中国東北地域での出土瓦に関する調査	笹川研究助成金
117	庄田　慎矢	中国	1月9日～1月16日	「古代東アジアと日本の蒸し調理」にかかわる調査	三島海雲記念財団
118	森先　一貴	韓国	1月26日～1月30日	旧石器時代遺跡出土資料の調査	科学研究費： 加藤真二
119	清水　重敦	フランス・イタリア	12月22日～1月2日	フランス・イタリアにおける都市景観と歴史的建造物の変容に関する調査研究	京都大学大学院研究経費
120	田代　亜紀子	インドネシア	1月1日～1月8日	インドネシア西スマトラ州パダンにおける歴史的地区文化遺産復興支援（専門家交流）事業への協力	東京文化財研究所
121	田代　亜紀子	ベトナム	1月16日～1月22日	タンロン皇城遺跡保存への協力	東京文化財研究所
122	井上　幸	中国	12月28日～12月31日	資料収集	科学研究費
123	井上　和人	ベトナム	1月16日～1月20日	ハノイ、タンロン皇城発掘調査支援	東京文化財研究所
124	石村　智	アメリカ	1月8日～1月16日	ビショップ博物館にてカヌー資料の調査	他機関負担： 神奈川大学日本常民文化研究所
125	石村　智	ベトナム	1月23日～1月29日	タンロン皇城遺跡保存支援国際協力	東京文化財研究所
126	石村　智	フィジー	1月30日～2月4日	平成２２年度文部科学省「国際イニシアティブ」への協力	他機関負担： 同支社女子大学
127	降幡　順子	イタリア	1月17日～1月22日	日伊文化財協力事業に係わる壁画修復と活用に関するﾜｰｸｼｮｯﾌﾟへの参加	文化庁
128	小野　健吉	アメリカ	3月8日～3月16日	ｺﾛﾝﾋﾞｱ大学との研究交流協議、ｾﾝﾄﾗﾙﾊﾟｰｸおよびｲﾝﾃﾞｨﾍﾟﾝﾃﾞﾝｽ国立公園の調査	運営費交付金：32050
129	難波　洋三	カンボジア	2月9日～2月14日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金：32800
130	杉山　洋	カンボジア	2月9日～2月25日	同上	同上
131	成田　聖	韓国	2月14日～2月18日	日中韓共同研究に係る資料調査および研究交流協約書の協議のため	運営費交付金：33600 国際共同研究費

	氏名	用務先	期間	用務	備考
132	松井　章	韓国	2月24日～2月27日	貝塚の発掘調査方法の指導と出土動物遺存体についての研究指導	先方負担
133	玉田　芳英	カンボジア	2月9日～2月14日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金：32800
134	菊池　　大樹	中国	2月26日～3月4日	王家地遺跡発掘調査資料整理	科研費：宮本一夫
135	深澤　芳樹	カンボジア	2月9日～2月14日	共同研究「環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究」のための調査	他機関負担：神奈川大学日本常民文化研究所
136	田辺　征夫	カザフスタン・ウズベキスタン	2月25日～3月2日	カザフ国立大学と奈良文化財研究所の間における研究協力合意書調印式並びに関連する行事への参加	運営費交付金：33580
137	若杉　智宏	韓国	2月14日～2月18日	日中韓共同研究に係る資料調査および研究交流協約書の協議のため	運営費交付金：33600 国際共同研究費
138	廣瀬　覚	韓国	同上	同上	同上
139	青木　敬	韓国	同上	同上	同上
140	石橋　茂登	韓国	2月14日～2月16日	同上	同上
141	杉山　洋	ベトナム	1月16日～1月29日	タンロン皇城遺跡保存支援国際協力	東京文化財研究所
142	深澤　芳樹	韓国	3月15日～3月19日	（財）中部考古学研究所主催による「海外著名学者招聘講演会」に講師として出席	先方負担：財団法人中部考古学研究所
143	庄田　慎矢	韓国	同上	同上	同上
144	永井　あつ子	カンボジア	2月9日～2月14日	アンコール文化遺産保護に関する研究協力	運営費交付金：32600
145	森本　晋	カザフスタン・ウズベキスタン	2月25日～3月9日	ｶｻﾞﾌ国立大学と奈良文化財研究所の間における研究協力合意書調印式並びに関連する行事への参加,および｢ﾊﾞｰﾐﾔﾝ専門家会議｣出席ならびにｱﾌｶﾞﾆｽﾀﾝ考古資料の調査	運営費交付金：33580
146	青木　達司	中国	2月13日～2月21日	中華人民共和国の史跡・名勝・古典庭園調査	運営費交付金：32050
147	田代　亜紀子	フランス・イギリス	2月28日～3月9日	｢ﾊﾞｰﾐﾔﾝ専門家会議｣出席､ﾊﾞｰﾐﾔﾝ関連資料調査およびｱﾌｶﾞﾆｽﾀﾝ考古資料の調査	運営費交付金：33580
148	松井　章	アメリカ	3月14日～3月23日	ｶﾘﾌｫﾙﾆｱ大学ﾊﾞｰｸﾚｰ校､ﾈﾌﾞﾗｽｶ大学ﾘﾝｶｰﾝ校にて研究討議、資料収集	科学研究費
149	森川　実	ｶｻﾞﾌｽﾀﾝ･ｳｽﾞﾍﾞｷｽﾀﾝ	2月25日～3月2日	カザフ国立大学と奈良文化財研究所の間における研究協力合意書調印式並びに関連する行事への参加	運営費交付金：33580
150	国武　貞克	ｶｻﾞﾌｽﾀﾝ･ｳｽﾞﾍﾞｷｽﾀﾝ	同上	同上	同上
151	田代　亜紀子	ベトナム	2月23日～2月26日	タンロン皇城遺跡保存事業への協力	東京文化財研究所
152	北山　夏希	韓国	2月27日～3月2日	第一次大極殿院復元にかかる類例の調査	運営費交付金：35510
153	井上　麻香	韓国	同上	同上	同上
154	海野　聡	韓国	同上	同上	同上
155	箱崎　和久	韓国	同上	同上	同上
156	丹羽　崇史	中国	3月14日～3月20日	河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査	運営費交付金：32810 国際研究協力事業費
157	小野　健吉	韓国	3月26日～3月30日	韓国における庭園等の現地調査	京都大学大学院研究経費
158	石村　智	ミクロネシア	2月17日～2月24日	ナンマドール遺跡保護の国際協力	文化遺産国際協力コンソーシアム
159	石田　由紀子	中国	3月14日～3月20日	河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査	運営費交付金：32810 国際研究協力事業費
160	若杉　智宏	中国	同上	同上	同上
161	馬場　基	中国	3月13日～3月18日	長沙市出土木簡の調査	科学研究費：角谷常子（奈良大学）
162	石村　智	中華民国・パラオ	2月26日～3月7日	台湾･ﾊﾟﾗｵにおける先史ｵｰｽﾄﾛﾈｼｱ集団関連の調査･ﾊﾟﾗｵにおける戦争遺跡の調査	科学研究費・高梨学術奨励基金

c-② 調査研究テーマ一覧

国立文化財機構	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
137件	86件	39件	19件	9件	19件
	文化財研究所計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	共同研究（東京・奈良文化財研究所）	
	51件	21件	29件	1件	

【東京国立博物館】　計39件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究	学芸研究部	調査研究課長　富田淳
2	特別調査法隆寺献納宝物（第32次）「聖徳太子絵伝」第6回	学芸研究部	絵画・彫刻室長　田沢裕賀
3	特別調査「書跡」第8回	学芸研究部	学芸研究部長　島谷弘幸
4	特別調査「工芸」第2回	学芸研究部	調査研究課工芸・考古室長　竹内奈美子
5	特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究―尾形光琳風神雷神屏風を中心に	学芸研究部	絵画・彫刻室長　田沢裕賀
6	特別調査「江戸幕府御用絵師板谷家関係資料」	学芸研究部	絵画･彫刻室長 田沢裕賀
7	館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究	学芸研究部	博物館情報課長　高橋　裕次
8	博物館の環境保存に関する研究	学芸研究部	保存修復課長　神庭　信幸
9	東洋民族資料に関する調査研究	学芸研究部	列品管理課長　谷豊信
10	油彩画の材料・技法に関する共同調査	学芸研究部	保存修復課長　神庭　信幸
11	荻原守衛「女」の石膏原型とブロンズ鋳造に関する共同研究	学芸研究部	保存修復課長　神庭　信幸
12	日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究	学芸研究部	特任研究員　金子啓明
13	目録学の構築と古典学の再生（科学研究費補助金）	学芸研究部	書跡・歴史室長　田良島　哲
14	原三渓旧蔵近代絵画・彫刻に関する基礎的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	任期付研究員　植田　彩芳子
15	博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	保存修復課長　神庭　信幸
16	東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究―「正倉院裂」を中心に―（科学研究費補助金）	学芸研究部	特任研究員　澤田むつ代
17	文化財保護の歴史に関する基礎的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	博物館情報課長　高橋裕次
18	高度な復元作業のための制作空間の情報化（科学研究費補助金）	学芸研究部	列品管理課　河内晋平
19	狩野晴川院養信筆「法隆寺什物図」の研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	列品管理課　安藤香織
20	東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	学芸研究部長　島谷弘幸
21	中国書画の表装に関する基礎的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	調査研究課長　富田淳
22	清時代末期の訪中調査における写真資料に関する調査研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	博物館情報課　関紀子
23	占領期の教育政策における国立博物館の役割に関する調査研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	博物館教育課　神辺知加
24	宮廷工芸に関する物質文化的研究―生活感のある工芸史の構築をめざして―（科学研究費補助金）	学芸研究部	列品管理課　猪熊兼樹
25	近現代における古日本染織の移動とコレクション形成に関する基礎的研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	企画課　小山弓弦葉
26	東京国立博物館所蔵古文書データベース（科学研究費補助金）	学芸研究部	調査研究課　　高梨真行
27	東京国立博物館所蔵印譜データベース（科学研究費補助金）	学芸研究部	博物館情報課　関紀子
28	隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	保存修復課　和田浩
29	前方後円墳体制東縁地域における国家形成過程の研究：常陸の場合（科学研究費補助金）	学芸研究部	保存修復課　日高慎
30	古文書および古典籍の修復と装幀形態に関する用語の研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	博物館情報課長　高橋裕次
31	彫刻におけるデジタル立体造形の可能性と表現方法の研究・教育への応用（科学研究費補助金）	学芸研究部	企画課長　井上洋一
32	アジアの木地螺鈿―その源流、正倉院宝物への道をたどる―（科学研究費補助金）	学芸研究部	列品管理課　猪熊兼樹
33	高精細デジタル測定技術と職人の知識を融合させた工芸文化財復元の研究（科学研究費補助金）	学芸研究部	列品管理課　河内晋平
34	日本近世実景図研究	学芸研究部	調査研究課　大橋美織
35	博物館環境デザインに関する調査研究	学芸企画部	企画課　木下史青
36	博物館美術教育に関する調査研究	学芸企画部	博物館教育課長　今井敦
37	博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究	学芸企画部	博物館情報課　村田良二
38	凸版印刷と協同で、ミュージアム・シアターでの公開に向けた研究	学芸企画部	企画課長　井上　洋一
39	博物館をみんなのものに～視覚障害児童・生徒へのスクールプログラム- ハンズオンとワークショップを中心に	学芸企画部	博物館教育課長　今井敦

【京都国立博物館】　計19件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　（役職・名前）
1	近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究	学芸部	考古室長　宮川禎一
2	鎌倉仏教とその造形に関する調査研究	学芸部	上席研究員　赤尾栄慶
3	日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察（科学研究費補助金）	学芸部	館長　佐々木 丞平
4	建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究　（科学研究費補助金）	学芸部	上席研究員　赤尾栄慶
5	修復文化財に関する資料収集及び調査研究	学芸部	保存修理指導室長　村上 隆
6	文化財の保存・修復に関する調査研究（奈良文化財研究所との共同研究）	学芸部	保存修理指導室長　村上 隆
7	近世絵画に関する調査研究	学芸部	連携協力室長　山下 善也
8	訓点資料としての典籍に関する調査研究	学芸部	上席研究員　赤尾栄慶
9	彫刻に関する調査研究	学芸部	主任研究員　淺湫 毅
10	出土・伝世古陶磁に関する調査研究	学芸部	工芸室長　尾野善裕
11	近代建築に関する調査研究	学芸部	文化財管理監　中村　康
12	文化財情報に関する調査研究	学芸部	企画室長　久保智康
13	特別展覧会「高僧と袈裟」の開催に向けて、寺院所蔵品の調査研究を行う。	学芸部	主任研究員　山川　曉
14	特別展覧会「中国の書画」に向けて、旧上野コレクションと関連作品の調査研究を行う。	学芸部	上席研究員　赤尾栄慶
15	特別展観「上田秋成」の開催に向けて、日本近世文学会と共同で調査研究を行う。	学芸部	アソシエイトフェロー　水谷　亜希
16	特集陳列「園田湖城」の開催に向けて、篆刻資料の調査研究を行う。	学芸部	上席研究員　赤尾栄慶
17	特別展覧会「法然」の開催に向けて、浄土宗寺院所蔵文化財の調査研究を行う。	学芸部	列品管理室長　若杉準治
18	特別展覧会「細川家の至宝」（平成２３年度）の開催に向けて永青文庫と共同で関連作品の調査研究を行う	学芸部	主任研究員　淺湫 毅
19	特別展覧会「中国近代絵画（仮）」（平成２３年度）の開催に向けて、旧須磨コレクションと関連作品の調査研究を行う。	学芸部	学芸部長　西上　実

【奈良国立博物館】　計9件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	南部諸諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施	学芸部	学芸部長　西山 厚
2	仏教美術の光学的調査研究（東京文化財研究所との共同研究）	学芸部	学芸部長　西山 厚
3	仏教美実写真収集及びその調査研究	学芸部	資料室長　宮崎幹子
4	我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究	学芸部	学芸部長　西山 厚
5	当館所蔵品についての調査研究（客員研究員）	学芸部	学芸部長　西山 厚
6	奈良時代の仏教美術と東アジア世界	学芸部	館長　湯山賢一
7	統一新羅期の道具瓦集成（科学研究費補助金）	学芸部	工芸考古室員　岩戸晶子
8	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究成果の一部を特別展「大遣唐使展」、「仏像修理１００年」、「至宝の仏像」及び特別陳列「おん祭りの春日信仰の美術」、「お水取り」に反映させる	学芸部	学芸部長　西山 厚
9	我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査研究成果の一部で名品展の充実を図る	学芸部	学芸部長　西山 厚

【九州国立博物館】　計19件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究	企画課	企画課長　小泉　惠英
2	文化財の材質・構造等に関する共同研究	博物館科学課	環境保全室長　今津　節生
3	博物館における文化財保存修復に関する研究	博物館科学課	保存修復室主任研究員　志賀　智史
4	博物館危機管理としての市民協同型IPMシステム構築に向けての基礎研究	博物館科学課	博物館科学課長　本田　光子
5	東アジアの文化財修復用手漉き和紙の調査研究（UNESCOとの共同）	博物館科学課	保存修復室長　藤田　励夫
6	ＶＲ画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築（科学研究費補助金）	企画課	文化交流展室長　河野　一隆
7	トルキ山遼墓出土品から見た唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術（科学研究費補助金）	文化財課	文化財課長　臺信　祐爾
8	室町時代の仏教絵画を中心とする東アジアの宗教美術に関する調査研究	企画課	主任研究員　畑　靖紀
9	埴輪に認められる赤色顔料についての基礎的研究（科学研究費補助金）	博物館科学課	保存修復室主任研究員　志賀　智史
10	Ｘ線ＣＴスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析（科学研究費補助金）	博物館科学課	環境保全室長　今津　節生
11	アジアの木地螺鈿－その源流、正倉院宝物への道をたどる－（科学研究費補助金）	文化財課	資料管理室長　小林　公治
12	五胡十六国から北魏時代の出土陶俑に関する基礎研究（科学研究費補助金）	企画課	研究員　市元　塁
13	海の東アジアが醸成した貝と漆の文化‘螺鈿’の再発見－その共通性と多様性を探る－（トヨタ財団研究助成）	文化財課	資料管理室長　小林　公治
14	平成20年度特別展「工芸のいま　伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への調査を受けて、継続的かつ発展的に調査研究活動を行なう	学芸部	学芸部長　伊藤　嘉章
15	京都、九州における黄檗宗寺院に関する調査を進め、成果を特別展に反映する	展示課	主任研究員　楠井　隆志
16	日本、韓国、中国における馬文化に関する考古遺品、美術作品に関する調査を進め、成果を特別展に反映する	企画課	文化交流展室長　河野　一隆
17	中国内蒙古自治区出土の遼時代に属する考古遺物に関する調査研究を進め､成果を特別展に反映する	企画課	研究員　市元　塁
18	細川家伝来資料に関する調査を行なう	文化財課	主任研究員　丸山　猶計
19	九博に関連する絵本の次シリーズの企画について検討する	企画課	研究員　市元　塁

【東京文化財研究所】計21件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（5件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	民俗技術に関する調査・資料収集・無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究（Ⅰ4(1)④と一体で実施）	無形文化遺産部	無形文化遺産部長　宮田繁幸
2	東アジアの美術に関する資料学的研究	企画情報部	文化形成研究室長　塩谷　純
3	近現代美術に関する総合的研究	企画情報部	近現代視覚芸術研究室長　山梨絵美子
4	美術の技法・材料に関する広領域的研究	企画情報部	広領域研究室長　綿田　稔
5	無形文化財の保存・活用に関する調査研究	無形文化遺産部	無形文化遺産部長　宮田繁幸

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進（2件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	高精細デジタル画像の応用に関する調査研究	企画情報部	文化財アーカイブズ研究室長　津田徹英
2	文化財の非破壊調査法の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石﨑武志

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進（9件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	文化財の生物劣化対策の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石﨑武志
2	文化財の保存環境の研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石﨑武志
3	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長 川野邊　渉
4	文化財の防災計画に関する調査研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長 川野邊　渉
5	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長 川野邊　渉
6	国際研修｢紙の保存と修復｣	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長 川野邊　渉
7	在外日本古美術品保存修復協力事業	保存修復科学センター	保存修復科学センター副センター長 川野邊　渉

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
8	近代の文化遺産の保存修復に関する研究	保存修復科学センター	近代文化遺産研究室長　中山俊介
9	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力	保存修復科学センター	保存修復科学センター長　石﨑武志

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（4件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	文化財保存施策の国際的研究	文化遺産国際協力センター	国際情報研究室長　岡田　健
2	アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究	文化遺産国際協力センター	主任研究員　朽津信明
3	陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究	文化遺産国際協力センター	国際情報研究室長　岡田　健
4	敦煌壁画の保護に関する調査研究	文化遺産国際協力センター	国際情報研究室長　岡田　健

○諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転とアジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業及び人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	諸外国の文化財保存修復専門家養成	文化遺産国際協力センター	文化遺産国際協力センター長　清水真一

【奈良文化財研究所】計29件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（21件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	文化的景観に関する調査研究	文化遺産部	文化遺産部長　小野健吉
2	古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究	文化遺産部	歴史研究室長　吉川聡
3	歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究	文化遺産部	建造物研究室長　島田敏男
4	平城宮跡東院地区（第469次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
5	西大寺旧境内(第473次)の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
6	薬師寺（第474次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
7	薬師寺（第475次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
8	薬師寺（第476次）の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
9	春日東塔跡(第477次)の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
10	平城宮跡東方官衙地区(第466次)の発掘調査	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
11	藤原宮跡朝堂院地区の発掘調査	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部長　深澤芳樹
12	飛鳥地域の発掘調査	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部長　深澤芳樹
13	平城京跡出土遺物・遺構の調査研究等	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
14	飛鳥・藤原京・平城京などの古代都城の解明に資するために、古代官衙、集落遺跡に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
15	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部長　深澤芳樹
16	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人
17	庭園に関する調査研究	文化遺産部	遺跡整備研究室長　平澤毅
18	東アジア史における飛鳥の研究及び飛鳥時代工芸技術の研究	飛鳥資料館	学芸室長　加藤真二
19	遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究	文化遺産部	遺跡整備研究室長　平澤毅
20	遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術並びに監視技術の開発的研究	埋蔵文化財センター	保存修復科学研究室長　高妻洋成
21	文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿正殿復原をはじめとする整備・公開・活用に関する専門的・技術的な援助・助言	都城発掘調査部　平城地区	副所長　井上和人

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進（4件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	遺跡データベースの作成と公開	埋蔵文化財センター	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅
2	遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法の研究	埋蔵文化財センター	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅
3	年輪年代学研究	埋蔵文化財センター	年代学研究室長　大河内隆之
4	遺跡出土の動物遺存体や古土壌の考古科学的分析による環境考古学研究	埋蔵文化財センター	環境考古学研究室長　松井章

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究	埋蔵文化財センター	保存修復科学研究室長　高妻洋成

○国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査・研究の実施（2件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存活用に関する技術的協力	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部長　深澤芳樹
2	国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業大和平野県営飛鳥工区2号幹線の調査及び保存活用に関する技術的協力	都城発掘調査部　飛鳥・藤原地区	都城発掘調査部長　深澤芳樹

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査	企画調整部	国際遺跡研究室長　杉山　洋

【東京文化財研究所と奈良文化財研究所との共同研究】計1件

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（1件）

	調査研究テーマ名	担当部課	事業責任者　(役職・名前)
1	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業	文化遺産国際協力センター	地域環境研究室長　山内和也

（参考）受託研究一覧

計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所
50件	18件	32件

【東京文化財研究所】計18件

	調査研究テーマ名	担当部課
1	日本／ユネスコパートナーシップ事業　アジア太平洋地域無形文化遺産保護活動の調査研究（受託）	無形文化遺産部
2	初期洋風画の光学調査（受託）	企画情報部
3	ＧＥＭによる超高感度・大面積ガンマ線イメージセンサー（受託）	保存修復科学センター
4	国指定史跡高瀬石仏保存修理設計監理業務（受託）	保存修復科学センター
5	霧島神宮における彩色剥落薄止めの手法開発及び施工監理（受託）	保存修復科学センター
6	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務（受託）	保存修復科学センター
7	特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務（受託）	保存修復科学センター
8	ユネスコ／日本信託基金　バーミヤーン遺跡の保護プロジェクト（受託）	文化遺産国際協力センター
9	インドネシア西スマトラ州パダンにおける歴史的地区文化遺産復興支援（専門家交流）事業（受託）	文化遺産国際協力センター
10	文化遺産国際協力コンソーシアム事業（受託）	文化遺産国際協力センター
11	文化遺産国際協力拠点交流事業　インド（受託）	文化遺産国際協力センター
12	文化遺産国際協力拠点交流事業　モンゴル（受託）	文化遺産国際協力センター
13	文化遺産国際協力拠点交流事業　中央アジア（受託）	文化遺産国際協力センター
14	エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズ１）にかかる国内支援業務（受託）	文化遺産国際協力センター
15	日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術要員の育成プログラム（受託）	文化遺産国際協力センター
16	ユネスコ／日本信託基金　バクダードにあるイラク博物館の保存修復室の復興プロジェクト（受託）	文化遺産国際協力センター
17	ユネスコ／日本信託基金　タンロン・ハノイ文化遺産群の保存事業（受託）	文化遺産国際協力センター
18	関西大学博物館所蔵重要文化財附縄文土器破片および壷形土器破片の復元修理（受託）	保存修復科学センター

【奈良文化財研究所】計32件

	調査研究テーマ名	担当部課
1	「宇治の文化的景観」における伝統的建造物の保存・整備に関する調査研究（受託）	文化遺産部
2	京都岡崎の文化的景観に関する保存計画策定調査（受託）	文化遺産部
3	相川地区文化的景観　景観変遷・景観構造調査（受託）	文化遺産部
4	「宇治の文化的景観」整備に伴う宇治橋通りの調査研究（受託）	文化遺産部
5	萬翠荘に係る学術調査（受託）	文化遺産部
6	倉見屋荻野家住宅調査（受託）	文化遺産部
7	平城京薬師寺旧境内の調査（資材置場北側搬入路）（受託）	都城発掘調査部(平城)
8	平城京薬師寺旧境内の調査（金堂周辺）（受託）	都城発掘調査部(平城)
9	薬師寺旧境内の発掘調査（休ヶ岡八幡神社境内地）（受託）	都城発掘調査部(平城)
10	第一次大極殿院建造物復原整備にかかる調査委託（受託）	都城発掘調査部(平城)
11	天良七堂遺跡の総合的探査（受託）	埋蔵文化財センター
12	三軒屋遺跡総合的探査（受託）	埋蔵文化財センター
13	「発掘調査のてびき」作成に係る業務（受託）	埋蔵文化財センター
14	平成22年度大宰府史跡・蔵司地区における総合的探査業務（受託）	埋蔵文化財センター
15	永保寺開山堂の年輪年代調査（受託）	埋蔵文化財センター
16	東名遺跡出土動物遺存体調査（受託）	埋蔵文化財センター
17	長割遺跡の動物遺存体調査（受託）	埋蔵文化財センター
18	六反田南遺跡Ⅳにおける動物遺存体の同定（受託）	埋蔵文化財センター
19	田熊石畑遺跡武器形青銅器の保存修理及び保存台作製（受託）	埋蔵文化財センター
20	宇治橋擬宝珠成分分析（受託）	埋蔵文化財センター
21	埋蔵文化財発掘調査に係る青銅器科学分析業務委託（受託）	埋蔵文化財センター
22	土壌水分の蒸発による史跡ガランドヤ古墳石室内環境の変化に関する調査（受託）	埋蔵文化財センター
23	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務（受託）	都城発掘調査部（藤原）
24	特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務（受託）	都城発掘調査部（藤原）
25	国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区檜隈寺跡周辺遺跡発掘調査（受託）	都城発掘調査部(藤原)
26	文化遺産国際協力拠点交流事業（受託）	企画調整部
27	（社）奈良県看護協会第2センター（仮称）新築工事のための発掘調査（受託）	都城発掘調査部(藤原)
28	大和紀伊平野農業水利事業（二期）に係る埋蔵文化財発掘調査（受託）	都城発掘調査部(藤原)
29	興福寺旧境内（奈良第1地方合同庁舎）の発掘調査（受託）	都城発掘調査部(平城)
30	小谷地遺跡出土遺材についての建築史的研究（受託）	都城発掘調査部(平城)
31	平城京跡　右京三条一坊十坪　西一坊坊間西小路の発掘調査（受託）	都城発掘調査部(平城)
32	朱雀大路緑地遺跡発掘調査（受託）	都城発掘調査部(平城)

c-③ 学会、研究会等発表実績一覧

国立文化財機構	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
206件	111件	65件	9件	15件	22件
	文化財研究所計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	共同研究（東京・奈良文化財研究所）	
	95件	43件	52件	0件	

【東京国立博物館】65件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究	「辻が花」を考える　―「ことば」と技法をめぐる五〇〇年の歴史―	企画課特別展室主任研究員 小山弓弦葉	5月22日	服飾文化学会講演会
2	同上	太祖御真と日本の天皇像の比較	企画課特別展室主任研究員 沖松健次郎	10月7日	国立全州博物館 開館20周年記念国際学術シンポジウム「朝鮮王室と全州―朝鮮王朝の発祥地としての全州―」（韓国・国立全州博物館）
3	同上	曾被認定為修内司窯作品的青瓷瓶	博物館教育課長 今井敦	9月28日	宋代官窯与官窯制度国際学術研討会
4	同上	元青花の成立に関する試論	同上	12月4日	東洋陶磁学会平成22年度第3回研究会
5	同上	日本・中国・朝鮮半島の料紙について	博物館情報課長　高橋裕次	12月18日	墨跡研究会
6	同上	徳川家康の甲冑	上席研究員　池田宏	6月5日	三井記念美術博物館
7	同上	有機質遺物の材質と保存―繊維―	特任研究員　澤田むつ代	10月20日	奈良文化財研究所・埋蔵文化財担当者専門研究
8	同上	藤ノ木古墳出土の織物から法隆寺の織物	同上	10月22日	国際シンポジウム「陵山里出土遺物」(韓国・国立扶餘博物館)
9	同上	松代藩真田家における婚礼用衣裳の実態	列品管理課登録室アソシエイトフェロー　佐々木佳美	5月23日	服飾文化学会　第11回大会
10	同上	文化財の学校教育への活用にみる考古学的課題	列品管理課登録室アソシエイトフェロー　及川穣	5月22～23日	日本考古学協会第76回総会・研究発表
11	同上	茨城県ひたちなか市後野遺跡の研究（2）―B地区出土細石器石器群の形成過程―	同上	同上	同上
12	同上	長野県鷹山遺跡群星糞峠黒耀石採掘址の研究―地下採掘活動の起源を探るために―	同上	6月26～27日	日本旧石器学会第8回講演・研究発表・ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ
13	同上	諏訪湖底曽根遺跡と黒耀石原産地をめぐる地域文化の形成過程	同上	10月2～3日	信州黒曜石フォーラム2010・第20回長野県旧石器文化研究交流会「中部高地石材原産地と消費地をめぐる諸問題」
14	同上	坂下報告「遺跡形成過程からみたナイフ形石器文化」へのコメント―石器群形成過程研究からのアプローチ―	同上	23年1月22～23日	石器文化研究会設立25周年記念シンポジウム「ナイフ形石器・ナイフ形石器文化とは何か―概念と実態を問い直す―」
15	同上	当麻曼荼羅縁起をめぐって	列品管理課平常展調整室研究員 瀬谷愛	6月12日	科研Ａ大画面説話画の総合研究　第一回研究会（学習院大学）
16	同上	住吉慶恩から住吉派へ	同上	12月28日	国際シンポジウム「近世やまと絵再考」（国際文化会館）
17	同上	古墳時代中期における甲冑出土古墳の意義	列品管理課列品情報整備室長 古谷毅	10月9日	東松山市埋蔵文化財センター 特別展示会「鉄製短甲を探る」文化財講演会
18	同上	日本に現存する清朝宮蔵の拓本について～蘭亭図帖巻を例に～	調査研究課長　富田淳	12月17日	故宮博物院「清宮蔵善本碑帖特展」専題座談会
19	同上	室町・戦国期の関東争乱と下河辺庄－戸張氏・匝瑳氏の動向	調査研究課書跡・歴史室主任研究員 髙梨真行	6月5日	吉川市地域研究報告会（第16回）
20	同上	兩個“趙令穰”―《秋塘圖》與《湖庄清夏圖》接受的中日比較研究	調査研究課東洋室研究員 塚本麿充	11月16日	上海博物館千年丹青展學術研討會
21	同上	皇帝の文物と北宋の社会―日本文物の交流からの視点	同上	23年2月16日	東京大学東洋文化研究所「21世紀アジアの研究」：アジアが見た日本美術シンポジウム
22	同上	文化財としての古写真について	保存修復課保存修復室長冨坂賢	23年1月21日	江戸東京博物館
23	同上	Development of Oil Paintings in Japan and their Conservation.	保存修復課保存修復室主任研究員 土屋裕子	11月5日	French-Japanese Workshop on Science for Conservation of Cultural Heritage（パリ）
24	同上	茨城の古墳時代終末期と吉田古墳	保存修復課保存修復室主任研究員 日高慎	23年2月26日	水戸市教育委員会
25	同上	呉州手再考―中国漳州窯の発掘および近年の研究成果に基づいて	保存修復課保存修復室研究員 三笠景子	9月25日	第 31 回貿易陶磁研究集会
26	収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究	油彩画の技法および材料に関する共同調査―東京藝術大学と東京国立博物館の学術共同調査―	保存修復課保存修復室主任研究員 土屋裕子、保存修復課長　神庭信幸、東京藝術大学　木島隆康、東京藝術大学　鈴鴨富士子	6月12日～13日	文化財保存修復学会第32回大会

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
27	収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究	紙資料の保全を目的とした機能的な展示用装丁の開発 -多様な形態の紙資料に対応した展示に於いて-	保存修復課アソシエイトフェロー　鈴木晴彦、保存修復課アソシエイトフェロー　米倉乙世、保存修復課アソシエイトフェロー　沖本明子、保存修復課課長　神庭信幸、保存修復課保存修復室主任研究員　土屋裕子	6月12日～13日	文化財保存修復学会第32回大会
28	同上	書見台の新案と活用例 -安全に展示するための工夫-	同上	同上	同上
29	同上	≪事例報告≫両界曼荼羅図（東京国立博物館蔵）の解体修理について	同上	同上	同上
30	館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究	明治前期博物館における洋書の収集	調査研究課書跡・歴史室長　田良島哲	11月14日	アート・ドキュメンテーション学会
31	博物館の環境保存に関する研究	収蔵庫内の空気汚染物質に対する濃度指針の検討	保存修復課長　神庭信幸、保存修復課環境保存室主任研究員　和田浩、保存修復課環境保存室主任研究員　荒木臣紀	6月12日～13日	文化財保存修復学会第32回大会
32	同上	阿修羅立像梱包箱の防振効果	保存修復課環境保存室主任研究員和田浩、保存修復課長　神庭信幸、特任研究員　金子啓明、博物館情報課情報管理室長　丸山士郎	6月12日～13日	文化財保存修復学会第32回大会
33	同上	阿修羅立像の梱包技術	保存修復課長　神庭信幸、保存修復課環境保存室主任研究員　和田浩、特任研究員　金子啓明、博物館情報課情報管理室長　丸山士郎	6月12日～13日	文化財保存修復学会第32回大会
34	博物館の環境保存に関する研究	文化財安全輸送のための取組事例	保存修復課長　神庭信幸、保存修復課環境保存室主任研究員　和田浩	7月9日	第19回日本包装学会年次大会
35	同上	文化財の輸送と包装・東京国立博物館における取り組み	保存修復課長　神庭信幸	11月18日	日本包装専士会様第20回包装技術セミナー(東京)
36	同上	CAEシミュレーション解析による緩衝機材の特性評価事例	保存修復課長　神庭信幸、保存修復課環境保存室主任研究員　和田浩	12月7日	第48回全日本包装技術研究大会
37	博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究（科学研究費補助金 S）	博物館における包括的保存システムの構築に関する研究(Ⅱ)	保存修復課長　神庭信幸、保存修復課環境保存室主任研究員　和田浩、保存修復課環境保存室主任研究員　荒木臣紀、保存修復課保存修復室主任研究員　土屋裕子	6月12日～13日	文化財保存修復学会第32回大会
38	同上	Toward the Establishment of a Guideline for the Concentration of Indoor Atmospheric Contaminants in Storages and Exhibition Rooms of Museums	保存修復課長　神庭信幸	6月23日	「資料保存と四大元素」に関する国際会議 International Conference on “Preservation and the Four Elements”（北京）
39	同上	PRACTICE OF CONSERVATION OF THE TOKYO NATIONAL MUSEUM	保存修復課長　神庭信幸	9月29日	大エジプト博物館保存修復センター講演(カイロ)
40	同上	PRIMARY CARE AND PRACTICE OF CONSERVATION	保存修復課長　神庭信幸	11月4日	French-Japanese Workshop on Science for Conservation of Cultural Heritage
41	同上	The new guideline for the concentration of indoor atmospheric contaminants in exhibition and storage rooms	保存修復課環境保存室主任研究員和田浩、保存修復課環境保存室主任研究員　荒木臣紀、保存修復課保存修復室主任研究員　土屋裕子、保存修復課長　神庭信幸	同上	同上
42	同上	The effect of the dolly in global transport environment	保存修復課環境保存室主任研究員和田浩、保存修復課長　神庭信幸、保存修復課環境保存室主任研究員　荒木臣紀、保存修復課保存修復室主任研究員　土屋裕子	同上	同上
43	同上	Measurement, assessment and improvement of RH with human cooperation at TNM	保存修復課環境保存室主任研究員和田浩、保存修復課環境保存室主任研究員　荒木臣紀、保存修復課保存修復室主任研究員　土屋裕子、保存修復課長　神庭信幸	同上	同上
44	同上	What is remedial treatment? An approach to preventive conservation at the Tokyo National Museum.	同上	同上	同上
45	同上	Digital Radiography in the Field of Cultural Property Research: Present Situation and Issues	同上	同上	同上
46	博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究（科学研究費補助金 S）	博物館における包括的保存システムの構築に関する研究	保存修復課長　神庭信幸、保存修復課環境保存室主任研究員　荒木臣紀、、保存修復課環境保存室主任研究員和田浩、保存修復課保存修復室主任研究員　土屋裕子、保存修復課アソシエートフェロー　鈴木晴彦、保存修復課アソシエートフェロー　米倉乙世、保存修復課アソシエートフェロー　沖本明子、保存修復課環境保存室研究支援者　大場詩野子	11月24日～26日	図書館総合展（横浜）
47	同上	PRACTICE OF CONSERVATION OF THE TOKYO NATIONAL MUSEUM	保存修復課長　神庭信幸	23年1月11日	Workshop of Louvre Museum on Practice of Conservation（パリ）
48	同上	An application of a new roller clamp for scrolls Toward an approach to Symptomatic treatment in conservation	保存修復課長　神庭信幸、保存修復課アソシエートフェロー　鈴木晴彦	同上	同上
49	同上	PRACTICE OF CONSERVATION OF THE TOKYO NATIONAL MUSEUM	保存修復課長　神庭信幸	23年1月13日	JSPS Seminar （ストラスブー ル）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
50	東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究（科学研究費補助金A）	古筆における伝統と創意	学芸研究部長　島谷弘幸	4月20日	日本書芸院展　記念講演会
51	同上	法華経信仰と高僧の書	学芸研究部長　島谷弘幸	8月7日	常楽寺
52	同上	書の伝統と将来	学芸研究部長　島谷弘幸	8月28日	白扇書道会５０周年記念講演会
53	同上	書の見方	学芸研究部長　島谷弘幸	9月5日	岡山県立博物館
54	同上	和様の成立と古筆の展開	学芸研究部長　島谷弘幸	9月11日	ふくやま美術館
55	同上	書の鑑賞と創造	学芸研究部長　島谷弘幸	10月31日	岡山国民文化祭（岡山文化連盟）
56	同上	平家納経　－法華信仰と装飾経－	学芸研究部長　島谷弘幸	11月6日	広島市立大学
57	同上	家熙の「眼」と書	学芸研究部長　島谷弘幸	23年2月13日	「目録学の構築と古典学の再生－天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明－」(科学研究費補助金・学術創成研究費)主催、陽明文庫講座
58	同上	伝統と創造	学芸研究部長　島谷弘幸	23年2月19日	現日書道会
59	博物館環境デザインに関する調査研究	ミュージアムと日本の美術　　―日本の美術の魅力を引き出す展示	企画課デザイン室長 木下史青	11月20日	江東区森下文化センター・平成22年度前期講座〈今に生きるアート2　うつくしい技の伝統〉
60	同上	展示デザインと[筋肉]（仮）	同上	23年1月22日	日本美術解剖学会
61	博物館美術教育に関する調査研究	東京国立博物館のスクールプログラムとワークショップ	博物館教育課教育普及室主任研究員 鈴木みどり	11月9日	東京都中学校美術教育研究会
62	同上	博物館教育勉強会（レズリー・ベッドフォード博士）企画・通訳	博物館教育課ボランティア室研究員 藤田千織	10月25日	文化庁文化財部美術学芸課
63	博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究	新しい「e国宝」について	博物館情報課情報管理室主任研究員 村田良二	6月13日	アート・ドキュメンテーション学会2010年度年次大会
64	同上	ミュージアム資料情報構造化モデル	同上	7月24日	南山大学 人類学博物館情報部会シンポジウム「博物館資料の文化資源化」
65	同上	人文科学とコンピュータ研究を支える資料を考える―MLAの立場から―	同上	23年1月22日	第89回人文科学とコンピュータ研究会

【京都国立博物館】9件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察	神像の出現　―神像とは何か―	淺湫　毅（主任研究員）	10月31日	島根県神有月古代文化シンポジウム　神々の姿の変遷
2	文化財の保存・修復に関する調査研究（奈良文化財研究所との共同研究）	「京都国立博物館所蔵 初代飯塚桃葉作 印籠の材質と製作技法」	保存修理指導室長・ 村上　隆	6月14日	文化財保存修復学会
3	同上	「熊本県下扇原遺跡出土ベンガラのキャラクタリゼーション　・・・ベンガラ研究の新たな試みとして・・・」	同上	6月28日	日本文化財科学会
4	同上	「中世の金精錬技術に関する科学調査について　―長野県川上村梓久保金山遺跡を中心に―」	同上	同上	同上
5	文化財の保存・修復に関する調査研究（奈良文化財研究所との共同研究）	「地域と歴史文化遺産　ー石見銀山遺跡から考えるー」	同上	9月4日	佐賀大学地域学歴史文化研究センター主催：シンポジウム「地域学と歴史文化遺産」
6	同上	「堂ヶ谷経塚のなぞに迫る」	同上	10月3日	㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所シンポジウム「平安時代の祈りと願い」
7	同上	「兵庫県入佐山古墳出土砂鉄のキャラクタリゼーション」	同上	11月9日	粉体粉末冶金協会
8	同上	“Reevaluation of ancient red iron oxides excavated from archaeological sites”	同上	12月18日	Pacifichem2010
9	出土・伝世古陶磁に関する調査研究	東山61号窯（H-61号窯）・上向イ田窯出土須恵器をめぐる諸問題	工芸室長・尾野善裕	7月31日	名古屋大学考古学研究室・歴史土器研究会・勢濃尾研究会・東海土器研究会合同研究会

【奈良国立博物館】　15件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究	仏像の道としての鯖街道	稲本泰生（企画室長）	6月10日	第5回小浜市・若狭町文化財ふれあいフォーラム「鯖街道の多様な文化遺産」
2	奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流	七～八世紀の日本における『優塡王像』の受容	稲本泰生（企画室長）	8月28日	日本宗教史懇話会サマーセミナー
3	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究等	天平彫刻の魅力	岩田茂樹（美術室長）	8月21日	姫路市民教養講座
4	奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流	檀像の請来と日本的展開	鈴木喜博（上席研究員）	6月5日	国際シンポジウム「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
5	奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流	工芸技法からみた国産宝物の特徴	内藤　栄（工芸考古室長）	10月24日	正倉院学術シンポジウム200910
6	同上	遣唐使の時代	野尻　忠（主任研究員）	11月14日	奈良学セミナー
7	同上	遣唐使のもたらした技術―三彩を中心として―	吉澤　悟（教育室長）	6月5日	国際シンポジウム「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」
8	我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究	日本仏画入門	北澤菜月	23年1月26日	韓国国立慶州博物館公開講座
9	同上	高麗と同時期の日本仏画について―高麗仏画と共通する図像をもつ作品を中心に	同上	10月28日	国際ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ「東アジア仏教絵画と高麗仏画」（韓国国立中央博物館）
10	奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流	延喜式にみる製紙工程	湯山賢一	5月	平成22年第2回文化財保存交流セミナー
11	同上	写経と料紙	同上	7月	常楽寺美術館会館40周年記念特別展記念講演会
12	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究等	古代の製紙	同上	7月	第60会法隆寺夏季大学
13	同上	和紙の歴史	同上	8月	國學院大學院友会大阪支部夏季講座
14	奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流	奈良の文化と正倉院宝物	吉澤　悟	10月25日	奈良市立一条高校
15	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究等	あの世の考古学―火葬墓を中心として―	同上	11月13日	帝塚山大学市民講座

【九州国立博物館】　22件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	文化財の材質・構造等に関する共同研究	国宝　初音の調度のX線CT調査（ポスター発表）	博物館科学課環境保全室長 今津節生、博物館科学課環境保全室主任研究員 鳥越俊行、企画課研究員　川畑憲子、徳川美術館　小池富雄氏、	6月12日・13日	文化財保存修復学会第32回大会
2	同上	初音の調度のCT・レントゲン撮影および科学的分析	企画課研究員　川畑憲子	11月13日	徳川美術館特別展「国宝初音の調度」特別企画科研による公開シンポジウム「初音の調度の秘密」
3	同上	国宝辛亥銘（稲荷山）鉄剣のX線CT調査	博物館科学課環境保全室長 今津節生	6月26日・27日	日本文化財科学会第二十七回大会研究発表要旨集
4	文化財の材質・構造等に関する共同研究	神秘に満ちた眼差し、興福寺・阿修羅像をもっと身近に知る CTスキャナーによる1270 年目の健康診断	博物館科学課環境保全室長 今津節生	11月5日	一般財団法人 デジタル文化財創出機構
5	博物館における文化財保存修復に関する研究	糖アルコール含浸法からの新たな展開　―トレハロースを主剤とする出土木材保存法へ	同上	6月26日・27日	日本文化財科学会第二十七回大会研究発表要旨集
6	博物館における文化財保存修復に関する研究	博物館展示におけるデジタルデータの活用	博物館科学課環境保全室長 今津節生	6月26日・27日	日本文化財科学会第二十七回大会研究発表要旨集
7	東アジアの文化財修復用手漉き和紙の調査研究（ＵＮＥＳＣＯとの共同）	韓日古経典の形態と料紙	博物館科学課保存修復室長 藤田励夫	11月20日	韓国仏教美術史学会
8	トルキ山遼墓出土品の保存修復	内蒙古自治区吐爾基山（ﾄﾙｷｻﾝ）遼墓出土彩色木棺の保存 3　－彩色のある棺台の保存修復－	博物館科学課環境保全室長 今津節生	6月12日・13日	文化財保存修復学会第32回大会
9	トルキ山遼墓出土品から見た唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術	トルキ山遼墓木製彩棺の保存修復	同上	12月18日	九州国立博物館国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」
10	同上	トルキ山古墓の鳳凰木棺と契丹文化	企画課研究員　市元塁	同上	同上
11	室町時代の仏教絵画を中心とする東アジアの宗教美術に関する調査研究	室町水墨画における「写し」― 図様と表現の観点から―	企画課主任研究員　畑靖紀	10月12日	"Utsushi: The Art of Copying," University of Hawaii at Manoa
12	同上	山水長巻と観音図―大作に込めた願い	企画課主任研究員　畑靖紀	11月27日	雪舟研究会講演会（山口県立美術館）
13	Ｘ線ＣＴスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析	殷周青銅器のCTスキャナ調査	博物館科学課環境保全室長 今津節生	6月26日・27日	日本文化財科学会第二十七回大会研究発表要旨集
14	同上	Ｘ線ＣＴスキャナを利用した殷時代青銅斝の構造解析	同上	7月28日	アジア鋳造技術史学会、島根県歴史博物館
15	海の東アジアが醸成した貝と漆の文化‘螺鈿’の再発見－その共通性と多様性を探る－（トヨタ財団研究助成）	Mother of Pearl Inlay of Thai and Eastern Asia - from a view point of mutual relationship-	文化財課資料管理室長　小林公治	6月20日	International Confefrence"Study of Oriental Lacquer Initiated by H.R.H. Princess Maha Chakri Sirindhorn for the Revitalization of Thai Wisdom"における基調講演
16	日本、韓国、中国における馬文化に関する考古遺品、美術作品に関する調査を進め、成果を特別展に反映する	古墳時代の九州	企画課文化交流展室長　河野一隆	10月20日	九州東芝会
17	東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究	講演「道風の三体白氏詩巻」	文化財課主任研究員　丸山猶計	4月17日	(財)正木美術館
18	同上	講演「小野道風の筆跡の特色と能書像」	文化財課主任研究員　丸山猶計	11月27日	佛教大学国語国文学会大会
19	飛鳥・川原寺裏山遺跡の総合的研究-出土品から見た川原寺の特質-	Ｘ線ＣＴスキャンによる塼仏の調査	博物館科学課環境保全室長　今津節生、博物館科学課環境保全室主任研究員　鳥越俊行、企画課研究員 市元塁、米田文孝、西光慎治	6月26日	日本文化財科学会

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
20	ガンダーラ仏教美術	仏陀と転輪聖王　ー仏伝を中心にー	企画課長　小泉惠英	10月17日	ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究
21	文化財の計測と構造調査	ハンディ３Dデジタイザによる現場での活用	博物館科学課環境保全室長　今津節生	6月26日・27日	日本文化財科学会第二十七回大会研究発表要旨集
22	文化財の保存方法に関する研究	糖アルコール含浸法からの新たな展開　―トレハロースを主剤とする出土木材保存法へ	同上	同上	同上

【東京文化財研究所】計43件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（13件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	東アジアの美術に関する資料学的研究	中世における真宗祖師先徳彫像の制作をめぐって	企画情報部文化財アーカイブズ研究室長　津田徹英	10月15日	第44回企画情報部オープンレクチャー
2	同上	秋元洒汀と明治の日本画	企画情報部文化形成研究室長　塩谷純	同上	同上
3	同上	山水長巻考―雪舟の再評価にむけて	企画情報部広領域研究室長　綿田稔	23年2月27日	日韓共同シンポジウム「人とモノの「力学」―美術史における「評価」
4	同上	江戸時代初期風俗画の表現世界	企画情報部研究員　江村知子	同上	同上
5	同上	創作と評価―萬鉄五郎《風船を持つ女》を中心に	企画情報部長　田中淳	同上	同上
6	近現代美術に関する総合的研究	黒田清輝と西洋文学補遺―ド・ラマルティヌ「湖」と「湖畔」をめぐって	企画情報部近・現代視覚芸術研究室長　山梨絵美子	5月19日	企画情報部研究会
7	同上	東アジア近代洋画史再考のための二、三の視点	企画情報部近・現代視覚芸術研究室長　山梨絵美子	6月7日	国立台湾師範大学
8	同上	日本近代美術におけるデューラー受容	企画情報部長　田中淳	11月13日	シンポジウム「デューラー受容史　500年」
9	美術の技法・材料に関する広領域的研究	作品紹介　京都神光院・地蔵菩薩立像	企画情報部研究員　皿井舞	11月14日	企画情報部研究会
10	同上	平安初期神仏習合彫刻史試論　京都・神光院薬師如来立像をめぐって	同上	12月17日	同上
11	無形文化財の保存・活用に関する調査研究	独吟一管「海道下り」の伝承再考	無形文化財研究室長、高桑いづみ	7月18日	楽劇学会第18回大会
12	同上	和泉流：狂言小舞のの音楽	無形文化財研究室長、高桑いづみ	12月12日	第5回無形文化遺産部公開学術講座
13	無形民俗文化財の伝承状況に関する調査研究	文化財としての民俗芸能、昭和30～40年代の再検証	主任研究員、俵木悟	10月3日	第62回日本民俗学会年会

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進（3件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	高精細デジタル画像の応用に関する調査研究	歌舞伎図巻の描写について	企画情報部研究員　江村知子	23年1月29日	近世風俗画共同研究調査報告会
2	文化財の非破壊調査法の研究	近赤外LED を光源とした資料撮影で得られる情報	主任研究員、吉田直人　他	6月12日-13日	文化財保存修復学会第32回大会
3	同上	国宝伴大納言絵巻の彩色材料調査	分析科学研究室長、早川泰弘　他	6月26日-27日	日本文化財科学会第27回大会

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進（20件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	文化財の生物劣化対策の研究	X線CTスキャナによる虫損部材の調査（２）	生物科学研究室長　木川りか　他	6月12日-13日	文化財保存修復学会第32回大会
2	同上	文化財公開施設等におけるATP拭き取り検査の活用について	同上	同上	同上
3	文化財の保存環境の研究	書物から発生するガスの空気環境への影響	保存科学研究室長　佐野千絵　他	同上	同上
4	同上	文化財を収納する保存箱の環境の評価方法について	同上	同上	同上
5	同上	凝灰角礫岩の乾燥過程のシミュレーション解析	保存修復科学センター長　石崎武志	同上	同上
6	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究	Nondestructive Deterioration Assessment of the UsukiStone Buddha Statues in Oita, Japan	CHO, JiHyun, KIM, Jiyoung, MORII, Masayuki, LEE, MyeongSeong, KIM, SaDug and LEE ChanHee	10月8日	2010韓国文化遺産保存科学会第32回大会
7	同上	臼杵石仏の次期保存修理計画策定に向けた調査	保存修復科学センター副センター長　川野邊　渉	11月6日	臼杵磨崖仏保存環境調査報告会
8	同上	臼杵石仏の現在の劣化状態とその水環境について	主任研究員　朽津信明	同上	同上
9	同上	臼杵石仏の凍結とその周辺環境について	研究員　森井順之	同上	同上
10	同上	臼杵石仏の凍結防止策～覆屋について	同上	同上	同上
11	同上	臼杵石仏の植物繁茂防止策～紫外線照射および応急修理について	保存修復科学センター副センター長　川野邊　渉、研究員　森井順之	同上	同上
12	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究	国宝及び特別史跡・臼杵磨崖仏の次期保存修理計画	研究員　森井順之	12月7日	日韓共同研究発表会
13	文化財の防災計画に関する調査研究	ステレオカメラを用いた密集仏像群の形状計測手法に関する研究	運天弘樹、巽英之、増田智仁、猪瀬健二、安藤真、研究員　森井順之、研究補佐員　久世めぐみ	6月26日	日本文化財科学会第27回大会
14	同上	鎌倉大仏およびその周辺地盤の常時微動調査	中村豊、斎田淳、立花三裕、研究員森井順之、井上修作、大町達夫	10月17日	第13回日本地震工学シンポジウム

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
15	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究	顔料剥落止めとして利用されたポリビニルアルコールの白化原因とその再現	岡田祐輔・平井利博・藤松仁・滝沢辰洋・保存修復科学センター副センター長　川野邊 渉・研究員　早川典子・客員研究員　坪倉早智子・客員研究員　中條利一郎	6月13日	第32回文化財保存修復学会大会
16	同上	桃山文化期にこえる輸入漆の調達と使用に関する調査	伝統技術研究室長　北野信彦・竜子正彦・川口洋平・川村紀子・客員研究員　本多貴之・宮腰哲雄	6月27日	日本文化財科学会 第27回大会
17	同上	修復材料としての膠の物性	研究員早川典子	6月21日	膠（Ⅰ）- 第4回伝統的修復材料と合成樹脂に関する研究会
18	同上	紫外線照射によるポリビニルアルコール薄膜の白化	岡田祐輔、保存修復科学センター副センター長　川野邊　渉、研究員　早川典子、客員研究員　坪倉早智子、客員研究員　中條利一郎、藤松仁、滝沢辰洋、平井利博	5月26日	第59回高分子学会年次大会
19	近代の文化遺産の保存修復に関する研究	劣化したシアノタイプの修復（２）－アルカリによるシアノタイプの劣化・再発色実験－	客員研究員　坪倉早智子、主任研究員　加藤雅人、近代文化遺産研究室長　中山俊介	6月12日	第32回文化財保存修復学会大会
20	同上	音声・映像記録メディアの保存と修復	近代文化遺産研究室長 中山俊介	23年1月14日	第24回近代の文化遺産の保存修復に関する研究会「音声・映像記録メディアの保存と修復」

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（7件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究	板碑に見られる彩色について	主任研究員　朽津信明	6月26日	日本文化財科学会
2	アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究	遺跡の覆屋保存を考える	主任研究員　朽津信明	7月8日	国際文化財保存修復研究会
3	同上	石造五輪塔で見る岩種による風化速度の違い	同上	10月21日- 22日	日本応用地質学会
4	敦煌壁画の保護に関する共同研究	敦煌莫高窟第285窟南壁に描かれた龕楣の図案と色彩表現	客員研究員　高林弘実　他	6月13日	文化財保存修復学会
5	同上	敦煌莫高窟第285窟北壁に描かれた如来および菩薩に用いられた彩色材料と技法－衣と頭光の表現－	客員研究員　佐藤香子　他	6月13日	文化財保存修復学会
6	同上	敦煌莫高窟285窟に関する3D-GIS技術を基準としたデータベース構築	客員研究員　津村宏臣　他	6月27日	文化財科学会
7	同上	敦煌莫高窟内の壁画の劣化に及ぼす塩の影響	特別研究員　宇野朋子、長谷隆秀他	9月9日	日本建築学会

【奈良文化財研究所】計52件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（16件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	東アジア史における飛鳥の研究及び飛鳥時代工芸技術の研究	The Microblade industry of Lingjing, Xuchang, Henan province, China	加藤真二(展示企画室長)	9月22日	The Initial Human Habitation of the Continental and the Insular Parts of the Northeast Asia
2	同上	霊井遺跡の細石刃技術	加藤真二(展示企画室長)	23年3月6日	第12回　北アジア調査研究報告会
3	文化的景観に関する研究	四万十川流域の文化的景観　景観から読み解く四万十川	恵谷浩子(研究員)	5月30日	四万十・流域圏学会　第10回大会「四万十川流域の活性化」特別記念講演
4	同上	中宇治地区における碾茶生産・製造の有機的関係	同上	12月4日	平成22年度　日本造園学会関西支部大会
5	同上	文化的景観における都市建築	清水重敦(景観研究室長)	12月16日	文化的景観研究集会(第3回)報告
6	同上	白川に息づく茶業風景	恵谷浩子(研究員)	23年1月16日	宇治市白川区伝統的家屋調査中間報告会
7	同上	白川の民家が面白い	松本将一郎(アソシエイトフェロー)	同上	同上
8	同上	相川の景観構造の特質ー二極構造を持つ都市とその周辺環境	清水重敦(景観研究室長)	23年3月6日	佐渡氏相川地区文化的景観調査中間報告会
9	庭園に関する調査研究	文化遺産としての池田氏庭園の保護とその意義	平澤毅(遺跡整備研究室長)	10月29日	秋田県史跡整備市町村協議会研修会他合同講演会
10	同上	古代日本の宮苑	小野健吉(文化遺産部長)	10月21日	韓国忠南大学校百済研究所
11	同上	『桂垣』の補修に関する研究	青木達司(研究員)	12月4日	平成22年度日本造園学会関西支部大会
12	同上	The Garden of Fujiwara no Toshumori's Estate Depicted in Kasuga gongen genki e	小野健吉(文化遺産部長)	23年3月9日	米国コロンビア大学
13	遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究	Protection of the Cultural Properties in Japan	平澤毅(遺跡整備研究室長)	9月15日	George Town, MALAYSIA
14	同上	地域における遺跡の総合的マネジメント	同上	23年1月	遺跡整備・活用研究会（第5回）
15	同上	名称及び天然記念物浦富海岸の価値とその保護	同上	12月4日	平成22年度日本造園学会関西支部大会
16	遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術並びに監視技術の開発的研究	遺跡保存を目的とした水の挙動に関する解析－日田市ガランドヤ古墳における調査事例－	脇谷草一郎(研究員)	6月26日～27日	日本文化財科学会

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進（23件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法の研究	建物の歴史を電磁波でみる―水戸市台渡里遺跡長者山地区VII地点の探査―	金田明大(主任研究員)・西村 康(客員研究員)・西口和彦(客員研究員)	6月26日	日本文化財科学会
2	同上	SVGによる遺構･遺物の記録と活用への基礎的検討	金田明大(主任研究員)	6月26日	日本文化財科学会
3	同上	低コスト三次元レーザースキャナーの利用と実践	同上	同上	同上
4	同上	平城宮跡東方官衙地区におけるGPR探査	金田明大(主任研究員)・西村 康(客員研究員)・西口和彦(客員研究員)	6月26日	日本文化財科学会
5	同上	地面の下の東大寺東塔院を探る	金田明大(主任研究員)	11月7日	東大寺大仏展特別講演会
6	同上	古代の測量をめぐって	小澤毅(遺跡・調査技術研究室長)	12月19日	平城宮跡資料館冬季企画展講演会
7	同上	歴史を測る―新しい技術で掘り下げる考古学―	金田明大(主任研究員)	12月19日	平城宮跡資料館冬季企画展講演会
8	年輪年代学研究	日本年輪年代学研究史話ーアリゾナ大学年輪研究所に保管されている故渡辺直経氏収集の木曽ヒノキ資料をめぐってー	大河内隆之(年代学研究室長)	6月27日	日本文化財科学会第27回
9	年輪年代学研究	日本産ツガ属の年輪年代測定(その3)ー現生材による基準パターンの作成と既存データの再検討ー	藤井裕之(客員研究員)･光谷拓美(客員研究員)	6月26日	日本文化財科学会第27回
10	同上	正倉院宝物・金剛智の袈裟について	児島大輔(アソシエイトフェロー)	7月17日	第66回彫刻史研究会
11	同上	中国における木の文化研究2，3の事例ー樹種道程からのアプローチー	伊東隆夫(客員研究員)・Mechtild MERTZ	23年3月18日	第61回日本木材学会大会
12	同上	On methods of research for wooden Buddhist statues in Japan	児島大輔(アソシエイトフェロー)	23年3月21日	Wood Culture and Science Kyoto2011(WCSK2011)
13	同上	Dendrochronological analysis of Yakushi Hall and wooden statues of Chikouji Temple in Nagano Prefecture	光谷拓美(客員研究員)	同上	同上

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
14	年輪年代学研究	Dendrochronological Potential of Japanese Hemlocks:the Third Species Available for Dating of Modern Wooden Architectures in Western Japan	藤井裕之(客員研究員)	23年3月21日	Wood Culture and Science Kyoto2011(WCSK2011)
15	遺跡出土の動物依存体や古土壌の考古科学的分析による環境考古学研究	考古学から探る日本の環境と食文化の多様性	松井章(埋蔵文化財センター長)	7月16日	人間文化研究機構第13回公開講演会・シンポジウム『生物多様性と文化多様性の接点』
16	同上	橿原遺跡における動物資源利用―骨角器素材利用を中心として―	山崎健(研究員)	9月18日	第203回近江貝塚研究会（滋賀県埋蔵文化財センター）
17	同上	動物遺存体からみた完新世の生物地理―日本における考古動物学の可能性―	同上	9月19日	第16回野生生物保護学会・日本哺乳類学会2010年度合同大会（岐阜大学）
18	同上	古代人の肉食の忌避という虚構	松井章(埋蔵文化財センター長)	9月25日	奈良文化財研究所特別講演
19	同上	Bio-diversity and Concentration of Particular Resources during the Jomon Period, Japan	同上	10月7日	学術ワークショップ『古代社会の生物多様性：自然開発・共生の世界観と人類進化
20	同上	興福寺南大門出土の鎮壇具容器内に納入された魚類遺存体	山崎健(研究員)・森川実(研究員)・芝康次郎(研究員)	11月20日	第13回動物考古学研究集会（名古屋大学博物館）
21	同上	「低湿地」という景観と資源環境	山崎健(研究員)	11月27日～28日	伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・中期篇「大規模集落と弥生社会」（南山大学）
22	同上	動物考古学からみた日本の農耕と牧畜の起源	松井章(埋蔵文化財センター長)	23年3月26日	農耕の起源 Origins of Agriculture
23	同上	野生スンクスの国内記録	山崎健(研究員)	23年3月27日	第6回スンクス研究会

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進（9件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	考古資料の材料・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究	テラヘルツ波イメージングの文化財建造物調査への応用	高妻洋成(保存修復科学研究室長)	6月12日～13日	保存修復学会
2	同上	ミリ波およびテラヘルツ波の文化財への応用Ⅰ―層構造調査へのテラヘルツ波イメージング技術の基礎研究―	高妻洋成(保存修復科学研究室長)	6月26日～27日	日本文化財科学会
3	同上	観察手法による高松塚古墳壁画表面の調査結果報告	同上	同上	同上
4	考古資料の材料・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究	高松塚古墳壁画の材料調査―蛍光X線分析による下地漆喰に関する調査（２）―	降幡順子(主任研究員)	6月26日～27日	日本文化財科学会
5	同上	国宝高松塚古墳壁画の材料調査―目地漆喰および下地漆喰―	肥塚隆保(客員研究員)	同上	同上
6	同上	木造文化財における彩色の劣化機構に対する電磁波の応用	高妻洋成(保存修復科学研究室長)	同上	同上
7	同上	紫色ガラスの分析科学的研究	田村朋美(研究員)	同上	同上
8	同上	Conservation principles of archaeological heritages in Japan	高妻洋成(保存修復科学研究室長)	11月2日	International Symposium -Coservation Ethics for Rational Decision Making: the Dialogue between East and West
9	同上	Non-Destructive Tests for Cultural Heritages in Japan	高妻洋成(保存修復科学研究室長)	12月6日～7日	2010 International Symposium on Cultural Heritage Conservation

○文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究（2件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査	西トップ遺跡の調査	石村智（研究員）	6月21日	第17回国際調整委員会
2	同上	西トップ遺跡の調査と今後	森本晋(文化財情報研究室長)	11月25日	第18回国際調整委員会

○情報発信機能の強化　（2件）

	研究テーマ	発表テーマ	発表者（職名・名前）	実施日	学会等名
1	文化財情報電子化の研究に基づくデータベースの充実	大規模で構造的な遺構への遺構情報モデルの適用	森本晋(文化財情報研究室長)	10月23日	地理情報システム学会
2	同上	遺物実測図の構造	同上	11月19日	第15回遺跡ＧＩＳ研究会

c-④ 論文等発表実績一覧

国立文化財機構	博物館計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
345件	156件	90件	13件	33件	20件
	文化財研究所計	東京文化財研究所	奈良文化財研究所	共同研究（東京・奈良文化財研究所）	
	189件	41件	147件	1件	

【東京国立博物館】　90件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表者（職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究	松本伸之（学芸企画部長）	中国古代の工芸品に表わされた花と鳥	『平城遷都1300年祭特別展　花鳥画－中国・韓国と日本－』	奈良県立美術館	22年9月	無
2	同上	井上洋一（企画課長）	「町田久成」	『博物館学人物史』上	雄山閣	22年7月30日	無
3	同上	松嶋雅人（企画課特別展室長）	狩野一信	日本の美術　534号	ぎょうせい	22年10月	無
4	同上	小山弓弦葉（企画課特別展室主任研究員）	「守られた伝統　―小千谷縮・越後上布―」	「ユネスコ無形文化財遺産登録記念　重要無形文化財「小千谷縮・越後上布」展図録	新潟県立近代美術館	22年6月12日	無
5	同上	同上	「近代染織史研究における『辻が花』の定義について」	『MUSEUM』第627号	東京国立博物館	22年8月15日	有
6	同上	同上	「装束の華」	別冊太陽　日本のこころ―173「世阿弥」	株式会社平凡社	22年10月22日	無
7	同上	沖松健次郎（企画課特別展室主任研究員）	「太祖御真と日本の天皇像の比較」	『国立全州博物館 開館20周年記念国際学術シンポジウム　朝鮮王室と全州―朝鮮王朝の発祥地としての全州―』資料集	国立全州博物館	22年10月7日	無
8	同上	鬼頭智美（企画課国際交流室長）	海外日本古美術展に見る「日本」―国家ブランディングとの関わりと展覧会実施における諸問題	東京国立博物館紀要第46号	東京国立博物館	23年3月31日	無
9	同上	今井敦(博物館教育課長)	白地黒掻落牡丹文瓶	『國華』1381号	國華社	22年11月20日	無
10	同上	同上	江戸時代後期の伊万里染付大皿にみられる（中国趣味）について	『MUSEUM』第630号	東京国立博物館	23年2月15日	有
11	同上	伊藤信二（博物館教育課教育普及室長）	「国宝八角燈籠の歴史と評価」	特別展『東大寺大仏―天平の至宝―』展覧会図録	読売新聞東京本社	22年10月	無
12	同上	高橋裕次（博物館情報課長）	「光明皇后」	同上	同上	同上	無
13	同上	関紀子（博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー）	「清朝末期の光景―小川一眞・早崎梗吉・関野貞が撮影した中国写真―」	特集陳列図録『清朝末期の光景―小川一眞・早崎梗吉・関野貞が撮影した中国写真―』	東京国立博物館	22年5月25日	無
14	同上	同上	「小川一眞の北京城撮影と帝室技芸員任命について」	『MUSEUM』第626号	東京国立博物館	22年6月15日	有
15	同上	原田明夫（博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー）	「東京国立博物館の映像活用について」	『映像博物学の挑戦』事前レポート集　22頁	東京大学総合研究博物館	22年11月1日	無
16	同上	池田宏(上席研究員)	「徳川家康の甲冑―歯朶具足と南蛮胴具足を中心に―」	特別展「徳川家康の遺愛品」	三井記念美術館	22年4月14日	無
17	同上	同上	「厳島神社　紺糸威鎧」ほか	『国宝の美45　工芸4　神宝・甲冑』	朝日新聞出版	22年7月11日	無
18	同上	同上	「櫛引八幡宮の甲冑」	『青森県史　文化財編　美術工芸』	青森県	22年9月30日	無
19	同上	同上	「文化庁海外日本古美術展「日本の美　5000年」開催報告」	月刊文化財568号	第一法規株式会社	23年1月1日	無
20	同上	後藤健（上席研究員）	「パシェリエンブタハのミイラ」について	『美術の窓』8月号	生活の友社	22年8月20日	無
21	同上	澤田むつ代(特任研究員)	「経僧塚古墳出土の織物等について」	『武射経僧塚古墳 石棺篇 報告』	早稲田大学 経僧塚古墳発掘調査団	22年12月	無
22	同上	望月幹夫（特任研究員）	40年ぶりの里帰り	『よみがえるヤマトの王墓-東大寺山古墳と謎の鉄刀-』（創立80周年記念特別展図録）	天理大学出版部	22年9月22日	無
23	同上	谷豊信（列品管理課長）	「中国文明と河南省」	特別展『誕生！中国文明』展覧会図録	読売新聞社、大広	22年7月6日	無
24	同上	安藤香織（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）	来迎図の尊像構成と迎講に関する一考察―法華寺本菩薩・童子幅を中心に―	『MUSEUM』第625号	東京国立博物館	22年4月15日	有
25	同上	及川穣（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）	「2009年の研究動向　旧石器時代」	『東京考古』第28号　110頁	東京考古談話会	22年5月	無
26	同上	同上	「学界動向＜各地における調査と研究＞ 4.東京都」	『石器文化研究』第16号　26-28頁	石器文化研究会	23年1月24日	無
27	同上	同上	「縄文時代早期撚糸文土器研究における稲荷台式提唱資料の意義―都指定文化財と南山大学人類学博物館所蔵資料に着目して―」	『文化財の保護』第43号（頁未定）	東京都教育委員会	23年3月31日	無
28	同上	猪熊兼樹（列品管理課貸与特別観覧室主任研究員）	資料紹介　東京国立博物館蔵『旧儀式図画帖』	『MUSEUM』第626号	東京国立博物館	22年6月15日	有
29	同上	古谷毅(列品管理課列品情報整備室長)	倭の世界・古墳時代中期の特質-王権と威信財-・稲荷山古墳と江田船山古墳-王陵と地方首長墓-	『アジアの境界を越えて』(人間文化研究機構連携展示図録)	国立歴史民俗博物館	22年7月13日	無
30	同上	同上	奈良県三輪馬場山ノ神遺跡の祭祀考古学的検討	『日本基層文化論叢』(楯山林継先生古希記念論文集刊行会編)	雄山閣	22年8月31日	無
31	同上	古谷毅(列品管理課列品情報整備室長)	古墳時代の有銘刀剣・上應星宿 下辟不祥	『よみがえるヤマトの王墓-東大寺山古墳と謎の鉄刀-』（創立80周年記念特別展図録）	天理大学出版部	22年9月22日	無
32	同上	同上	家形のコスモロジー	『よみがえるヤマトの王墓-東大寺山古墳と謎の鉄刀-』（創立80周年記念特別展図録）	天理大学出版部	22年9月22日	無
33	同上	富田淳(調査研究課長)	李宗瀚コレクションについて	書学書道史論叢 2011	書学書道史学会	23年3月	無
34	同上	同上	華夏と安国	拓本とその流転	財団法人台東区芸術文化財団	23年3月	無
35	同上	同上	游丞相蔵玉泉本蘭亭序について～游似の蘭亭序コレクション～	同上	同上	同上	無
36	同上	田沢裕賀（調査研究課絵画・彫刻室長）	「弘前藩の絵師と絵画」	『青森県史 文化財編 美術工芸』	青森県	22年9月30日	無
37	同上	同上	舟木家本「洛中洛外図屏風」の近世初期風俗画における位置付け	東京国立博物館紀要第46号	東京国立博物館	23年3月31日	無
38	同上	大橋美織（調査研究課絵画・彫刻室任期付研究員）	近世紀州における実景図の研究--十代藩主・徳川治宝をめぐる絵画制作状況	『鹿島美術財団年報』27号（別冊）	鹿島美術財団	22年11月15日	有
39	同上	竹内奈美子(調査研究課工芸・考古室長)	葦穂蒔絵鞍鐙	『國華』1378号	國華社	22年8月20日	無

	研究テーマ	発表者 （職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェリー 有無
40	同上	浅見龍介（調査研究課東洋室長）	興福寺作品解説	古寺巡礼　興福寺	淡交社	22年9月1日	無
41	同上	同上	地蔵十輪院と六波羅蜜寺	別冊太陽　運慶　時空を超える形	平凡社	22年12月12日	無
42	同上	浅見龍介（調査研究課東洋室長）	調査報告　永平寺の中世彫刻	『MUSEUM』第629号	東京国立博物館	22年12月15日	有
43	同上	川村佳男（調査研究課東洋室研究員）	古代中国青銅器の流れ－形態・技術・時代背景の視点から－	特別展『誕生！中国文明』展覧会図録	読売新聞社、大広	22年7月6日	無
44	収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究	塚本麿充（調査研究課東洋室研究員）	作品解説	『大和文華館名品図録』	大和文華館	22年10月1日	無
45	同上	同上	翻訳（鶴田武良共訳）顔娟英「南国美術の殿堂建造―台湾展物語―」	五十殿利治編『「帝国」と美術―一九三〇年代日本の対外美術戦略』	国書刊行会	22年11月25日	無
46	同上	塚本麿充（調査研究課東洋室研究員）	「崇高なる山水展」：李郭派山水と東アジア世界	『明日の東洋学』NO.24	東京大学東洋文化研究所	22年11月30日	無
47	同上	同上	解説 絵画	『新編森克己著作集 4 増補日宋文化交流の諸問題』	勉誠出版	23年1月	無
48	同上	同上		曽布川寛監修、関西中国書画コレクション研究会編『中国書画探訪―関西の収蔵家とその名品』（共同編集・執筆）	二玄社	23年1月	無
49	同上	同上		『名品鑑賞シリーズ4 宋画の世界』	大和文華館	23年2月	無
50	同上	同上	「皇帝の文物と北宋の社会―日本文物の交流からの視点」	『BI』vol.5	東京大学東洋文化研究所	23年3月	無
51	同上	冨坂賢(保存修復課保存修復室長)	古今伝授と細川幽斎―歌道にみる戦国のネットワーク―	特別展『細川家の至宝―珠玉の永青文庫コレクション―』展覧会図録	NHK、NHKプロモーション	22年4月	無
52	同上	土屋裕子（保存修復課保存修復室主任研究員）、神庭信幸（保存修復課長）、木島隆康、鈴鴨富士子（東京藝術大学）	油彩画の技法および材料に関する共同調査―東京藝術大学と東京国立博物館の学術共同調査―	文化財保存修復学会第32回大会研究発表要旨集	文化財保存修復学会	22年6月12日～13日	有
53	同上	土屋裕子（保存修復課保存修復室主任研究員）	54. 薄拙太郎（明治38年7月卒業）自画像　東京藝術大学大学美術館　学生制作品ー1215　（「東京美術学校西洋画科卒業制作作品・自画像の技法材料、保存修復に関する基礎的研究VII」）	東京藝術大学美術学部紀要、第48号、2010年	東京藝術大学美術学部	22年12月	有
54	同上	三笠景子（保存修復課保存修復室研究員）	青磁琮形瓶	『國華』1376号	國華社	22年6月	無
55	同上	同上	唐宋時代の越窯と金銀器―線刻装飾を施した呉越国「秘色窯」の青磁	アジア遊学134 東アジアをめぐる金属工芸	勉誠出版	22年7月	無
56	同上	三笠景子（保存修復課保存修復室研究員）	白い器を求めて	特別展『誕生！中国文明』展覧会図録	読売新聞社、大広	22年7月6日	無
57	同上	鈴木晴彦（保存修復課アソシエイトフェロー）、米倉乙世（保存修復課アソシエイトフェロー）、沖本明子（保存修復課アソシエイトフェロー）、神庭信幸（保存修復課長）、土屋裕子（保存修復課保存修復室主任研究員）	紙資料の保全を目的とした機能的な展示用装丁の開発 -多様な形態の紙資料に対応した展示に於いて- 紙資料の保全を目的とした機能的な展示用装丁の開発 -多様な形態の紙資料に対応した展示に於いて-	文化財保存修復学会第32回大会研究発表要旨集	文化財保存修復学会	22年6月12日	有
58	同上	米倉乙世（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー）、鈴木晴彦（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー）、神庭信幸（保存修復課長）、土屋裕子（保存修復課保存修復室主任研究員）	書見台の新案と活用例-安全に展示するための工夫-	同上	同上	同上	有
59	収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究	沖本明子（保存修復課アソシエイトフェロー）、土屋裕子（保存修復課保存修復室主任研究員）、神庭信幸（保存修復課長）、鈴木晴彦（保存修復課アソシエイトフェロー）、米倉乙世（保存修復課アソシエイトフェロー）	≪事例報告≫両界曼荼羅図（東京国立博物館蔵）の解体修理について	文化財保存修復学会第32回大会研究発表要旨集	文化財保存修復学会	22年6月12日	有
60	博物館の環境保存に関する研究	神庭信幸（保存修復課長）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）、荒木臣紀（保存修復課環境保存室主任研究員）	収蔵庫内の空気汚染物質に対する濃度指針の検討	同上	同上	同上	有
61	同上	和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）、神庭信幸（保存修復課長）、金子啓明（特任研究員）、丸山士郎（博物館情報課情報管理室長）	阿修羅立像梱包箱の防振効果	同上	同上	同上	有
62	同上	神庭信幸（保存修復課長）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）、金子啓明（特任研究員）、丸山士郎（博物館情報課情報管理室長）	阿修羅立像の梱包技術	同上	同上	同上	有
63	同上	神庭信幸（保存修復課長）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）、荒木臣紀（保存修復課環境保存室主任研究員）	Toward the Establishment of a Guideline for the Concentration of Indoor Atmospheric Contaminants in Storages and Exhibition rooms of Museums	「資料保存と四大元素」に関する国際会議	中国国家図書館（北京）	22年6月21日～24日	有
64	同上	神庭信幸（保存修復課長）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）	文化財安全輸送のための取組事例	第19回日本包装学会年次大会要旨集	日本包装学会	22年7月9日	有

	研究テーマ	発表者 （職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェリー 有無
65	同上	神庭信幸（保存修復課長）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）	CAEシミュレーション解析による緩衝機材の特性評価事例	第48回全日本包装技術研究大会要旨集	日本包装技術協会	22年12月7日	有
66	博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究（科学研究費補助金S）	神庭信幸（保存修復課長）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）、荒木臣紀（保存修復課環境保存室主任研究員）、土屋裕子（保存修復課保存修復室主任研究員）	博物館における包括的保存システムの構築に関する研究（Ⅱ）	文化財保存修復学会第32回大会研究発表要旨集	文化財保存修復学会	22年6月12日～13日	有
67	東京国立博物館所蔵正倉院関係資料の研究―「正倉院裂」を中心に（科学研究費補助金B）	澤田むつ代（特任研究員）	「天平の染織」	特別展『東大寺大仏―天平の至宝―』展覧会図録	読売新聞東京本社	22年10月	無
68	同上	同上	「天平古裂は正倉院から配布された〈正倉院頒布裂〉」	同上	同上	同上	無
69	東京国立博物館所蔵正倉院関係資料の研究―「正倉院裂」を中心に（科学研究費補助金B）	同上	「東京国立博物館所蔵 正倉院の染物」、「絞りの伝統を受け継ぐ」	特集陳列『東京国立博物館所蔵正倉院の染物』展覧会図録（単著）	東京国立博物館	22年11月1日	無
70	同上	同上	「東京国立博物館所蔵　正倉院の染織品と裂帖、模織品、模写」	科学研究費補助金の研究成果報告書『東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究―「正倉院裂」を中心に―』	東京国立博物館	23年3月	無
71	東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究（科学研究費補助金	島谷弘幸（学芸研究部長 ）	書の美	毎日新聞（毎週日曜日連載）	毎日新聞社	22年4月4日～23年3月27日	無
72	同上	同上	5000 years of Japanese Art	5000 Years of Japanese Art	Republic of Turkey Ministry of Cultural Assets and Museums Topkap Palace Museum、文化庁、東京国立博物館	22年5月4日	無
73	同上	同上	古筆における伝統と創意	公益社団法人　日本書芸院会報150号	公益社団法人　日本書芸院	22年8月5日	無
74	同上	同上	三跡の書と和様の展開	ふくやま書道美術館特別展　王朝の名筆―三蹟を中心として―	ふくやま書道美術館	22年9月11日	無
75	同上	同上	21世紀の古筆手鑑	墨　208号(2011年1・2月号)	芸術新聞社	23年2月1日	無
76	東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究（科学研究費補助金A）	島谷弘幸（学芸研究部長 ）	書の鑑賞と創造	第25回国民文化祭・おかやま2010美術展記録集	社団法人　岡山県文化連盟	23年2月1日	無
77	前方後円墳体制東縁地域における国家形成過程の研究：常陸の場合（科学研究費補助金B／分担）	日高慎（保存修復課保存修復室主任研究員）	茨城県	前方後円墳の終焉	雄山閣	22年10月20日	無
78	同上	同上	茨城県玉里古墳群にみる古墳時代後期首長墓系列	同志社大学考古学シリーズX　考古学は何を語れるか	同志社大学考古学シリーズ刊行会	22年12月27日	有
79	古文書および古典籍の修復と装幀形態に関する用語の研究（科学研究費補助金C/分担）	高橋裕次（博物館情報課長）	「漢籍善本紹介-東京国立博物館(2)-」	『新しい漢字漢文教育』第50号	全国漢文教育学会	22年5月31日	無
80	同上	同上	「漢籍善本紹介-東京国立博物館(3)-」	『新しい漢字漢文教育』第51号	同上	22年11月30日	無
81	博物館環境デザインに関する調査研究	木下史青（企画課デザイン室長）	東京帝室博物館・復興本館の建築設計図面 および関連資料の紹介	近・現代建築のアーカイヴスとドキュメンテーション	社団法人 日本建築学会	22年9月	無
82	同上	同上	「眼力」のスイッチの入れ方	茶道誌淡交2010年　10月号増刊〈茶の湯の展覧会〉	株式会社 淡交社	22年9月10日	無
83	博物館美術教育に関する調査研究	神辺知加（博物館教育課教育講座室主任研究員）	「博物館で行うイベントについて―「博物館でお花見を」を例に」	博物館研究　vol.45 No.12 通巻510号	財団法人　日本博物館協会	22年11月1日	無
84	同上	鈴木みどり（博物館教育課教育普及室主任研究員）	世にも恐ろしい博物館？イースタン州立刑務所博物館	国際博物館の日新聞	NPO法人ミュージアム研究会	22年5月18日	無
85	同上	同上	博物館で伝える日本の伝統文化	教育研究	社団法人初等教育研究会	22年8月1日	無
86	同上	同上	教員の「ミュージアムリテラシー」の展開―歴史系（古美術）博物館の活用	科学系博物館の学校利用促進方策調査研究報告書―教員のミュージアムリテラシー向上プログラム開発―	（財）全国科学博物館振興財団	22年10月18日	無
87	博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究	村田良二（博物館情報課情報管理室主任研究員）	新しい「e国宝」について	アート・ドキュメンテーション学会2010年度年次大会 予稿集	アート・ドキュメンテーション学会	22年6月13日	無
88	同上	同上	ミュージアム資料情報構造化モデル	南山大学 人類学博物館 情報部会シンポジウム「博物館資料の文化資源化」発表要旨	南山大学 人類学博物館	22年7月24日	無
89	同上	村田良二（博物館情報課情報管理室長）	人文科学とコンピュータ研究を支える資料を考える―MLAの立場から―	人文科学とコンピュータ研究会報告89	情報処理学会	23年1月22日	無
90	同上	田良島哲（列品管理課登録室長）	「博物館の情報環境とMLA連携」	『MLA連携の現状・課題・将来』 p.77-85.	勉誠出版	22年6月	無

【京都国立博物館】　13件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表者 （職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェリー 有無
1	日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察	連携協力室主任研究員　淺湫　毅	山形・熊野神社の伝十王坐像について	科学研究費補助金報告書　日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察〈報告編〉	京都国立博物館	1月	無
2	同上	同上	静岡・建穂寺の千手観音立像　仏師長勤作	学叢32	京都国立博物館	5月	無
3	文化財の保存・修復に関する調査研究（奈良文化財研究所との共同研究）	保存修理指導室長　村上 隆	「中平遺跡出土の鈴の材質と構造」	『中平遺跡Ⅱ』（青森県埋蔵文化財調査報告書第490集）	青森県教育委員会	3月	無
4	同上	同上	「下扇原遺跡出土「銅釦」の材質について」	『小野原遺跡群』（熊本県文化財調査報告第257）	熊本県教育委員会	3月	無

	研究テーマ	発表者 （職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェリー 有無
5	同上	同上	「三角縁神獣鏡の材料科学的研究　―静岡市午王堂山3号墳出土鏡を巡って―」	学叢32	京都国立博物館	5月	無
6	同上	同上	「産業遺産研究で結ぶ地域間ネットワーク　…シンポジウム「生産遺跡から探る「モノづくり」の歴史」から「金・銀・銅サミット」へ	『国際文化政策』第1号	国際文化政策研究教育学会	7月	有
7	彫刻に関する調査研究	連携協力室主任研究員　淺湫　毅	定朝様の継承　―六波羅蜜寺地蔵菩薩立像と地蔵院観音菩薩坐像のあいだ―	鳳翔学叢	平等院	3月	無
8	特別展覧会「高僧と袈裟」の開催に向けて、寺院所蔵品の調査研究を行う。	列品管理室主任研究員　山川　暁	ころもが秘めるふたつの歴史	『高僧と袈裟－ころもを伝えこころを繋ぐ－』図録	京都国立博物館	10月	無
9	特別展覧会「中国の書画」に向けて、旧上野コレクションと関連作品の調査研究を行う。	学芸部長　西上 実	筆墨精神－中国の書と画をつなぐもの	『筆墨精神－中国書画の世界－』図録	京都国立博物館・朝日新聞社	1月	無
10	同上	上席研究員　赤尾 栄慶	写本と法帖	同上	同上	同上	無
11	特別展覧会「法然」の開催に向けて、浄土宗寺院所蔵文化財の調査研究を行う。	列品管理室長　若杉 準治	法然信仰の美術－法然上人絵伝－	『法然－生涯と美術－」図録	京都国立博物館・京都新聞社	3月	無
12	同上	企画室研究員　大原嘉豊	浄土宗美術論	同上	同上	同上	無
13	特別展覧会「細川家の至宝」（平成２３年度）の開催に向けて永青文庫と共同で関連作品の調査研究を行う	連携協力室主任研究員　淺湫　毅	宝慶寺から請来された石仏群　―細川護立と中国彫刻―	『細川家の至宝　―珠玉の永青文庫コレクション―』図録	ＮＨＫ・東京国立博物館・京都国立博物館	4月	無

【奈良国立博物館】　33件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表者 （職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェリー 有無
1	奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流	稲本泰生（企画室長）	遣唐使　その光と影－奈良時代を中心に	平城遷都1300年記念　大遣唐使展	奈良国立博物館ほか	22年4月3日	無
2	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究	同上	作品解説	吉祥天女のすべて	薬師寺	22年10月5日	無
3	仏教美術等の光学的調査研究	同上	東大寺前身寺院における塑造神将像の造立－光学調査の概要紹介と報告書の解題を兼ねて	奈良時代の塑造神将像	中央公論美術出版	22年12月16日	無
4	同上	同上	扉解説	同上	同上	同上	無
5	我が国における仏教美術の展開と中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査研究	同上	二月堂本尊光背図像と観音の神変	論集　東大寺二月堂－修二会の伝統とその思想－	東大寺発行・法蔵館発売	22年12月18日	無
6	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究	岩田茂樹（美術室長）	作品解説	塔に誘われて	京都府立山城郷土資料館	22年7月10日	無
7	同上	同上	奈良国立博物館の仏像展示	なら仏像館　名品図録	奈良国立博物館	22年7月21日	無
8	同上	同上	東大寺法華堂金剛力士立像	同上	同上	同上	無
9	同上	同上	大仏をめぐる運慶の造像	別冊太陽　運慶　時空を超えるかたち	平凡社	22年12月12日	無
10	同上	北澤菜月（研究員）	作品解説	吉祥天女のすべて	薬師寺	22年10月5日	無
11	同上	斎木涼子（研究員）	作品解説	同上	同上	同上	無
12	奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流	同上	奈良時代の仁王会	第62回　正倉院展	奈良国立博物館	22年10月23日	無
13	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究	清水健（研究員）	おん祭と春日信仰の美術　総論	おん祭と春日信仰の美術	仏教美術協会	22年12月6日	無
14	奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流	鈴木喜博（上席研究員）	檀像の請来と木彫の成立―初公開の安祥寺十一面観音像に関連して―	平城遷都1300年記念　大遣唐使展	奈良国立博物館ほか	22年4月3日	無
15	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究	同上	仏像修理100年―美術院の歴史とともに―	仏像修理100年	奈良国立博物館	22年7月21日	無
16	同上	同上	春日地蔵の信仰と図像	おん祭と春日信仰の美術	仏教美術協会	22年12月6日	無
17	奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流	谷口耕生（保存修理指導室長）	吉備大臣入唐絵巻―後白河院政期の遣唐使神話―	平城遷都1300年記念　大遣唐使展	奈良国立博物館ほか	22年4月3日	無
18	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究	同上	作品解説	吉祥天女のすべて	薬師寺	22年10月5日	無
19	仏教美術等の光学的調査研究	同上	法華堂執金剛神立像・戒壇院四天王立像の彩色文様	奈良時代の塑造神将像	中央公論美術出版	22年12月16日	無
20	奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流	内藤栄（工芸考古室長）	空海の舎利信仰―法門寺から東寺へ―	平城遷都1300年記念　大遣唐使展	奈良国立博物館ほか	22年4月3日	無
21	同上	永井洋之（ｱｿｼｴｲﾄﾌｪﾛｰ）	五絃琵琶について	第62回　正倉院展	奈良国立博物館	22年10月23日	無
22	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究	西山厚（学芸部長）	作品解説	吉祥天女のすべて	薬師寺	22年10月5日	無
23	奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流	同上	光明皇后の『楽毅論』について	第62回　正倉院展	奈良国立博物館	22年10月23日	無
24	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究	野尻忠（主任研究員）	作品解説	吉祥天女のすべて	薬師寺	22年10月5日	無
25	同上	原瑛莉子（ｱｿｼｴｲﾄﾌｪﾛｰ）	作品解説	同上	同上	同上	無
26	奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流	吉澤悟（教育室長）	二つの「海獣葡萄鏡」	第62回　正倉院展	奈良国立博物館	22年10月23日	無
27	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究	北澤菜月（研究員）	画面に登場する絵「画中画」の役割	週刊国宝の美　34号	朝日新聞出版	22年4月	無
28	同上	同上	祖師の事跡をかたちにする―高僧伝絵巻の時代―	同上	同上	同上	無
29	我が国における仏教美術の展開と中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査研究	同上	作品解説	千年丹青―日本・唐宋元絵画珍品（中文）	上海博物館	22年9月	無
30	同上	同上	林庭珪と周季常、二人の画家とその傾向について	大徳寺伝来五百羅漢図　銘文調査報告書	奈良国立博物館・東京文化財研究所	23年3月25日	無
31	同上	谷口耕生（保存修理指導室長）	木村徳応五百羅漢図―失われた大徳寺本六幅をめぐって―	同上	同上	同上	無
32	当館所蔵品についての調査研究	宮崎幹子（資料室長）	コレクションデータベースから文化財アーカイブズへ―奈良国立博物館における情報資源構築の実践から―	MLA 連携の現状・課題・将来	勉誠出版	22年6月	無

	研究テーマ	発表者 （職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェリー 有無
33	南都諸社寺等に関する計画的な調査研究	湯山賢一（館長）	古代料紙論ノート―『延喜式』にみる製紙工程をめぐって―	正倉院紀要　32号	宮内庁正倉院事務所	22年4月	無

【九州国立博物館】　20件

○有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究

	研究テーマ	発表者 （職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェリー 有無
1	日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究	博物館科学課保存修復室長　藤田励夫	「九州国立博物館所蔵　朱印船交趾渡航図巻」について	『ベトナム・ホイアン国際シンポジウムーホイアンと江戸ー』予稿集	昭和女子大学国際文化研究所	12月4日	無
2	文化財の材質・構造等に関する共同研究	企画課研究員　川畑憲子	桂春院所蔵「菊唐草文玳瑁螺鈿合子」の木地構造について	『漆工史』第33号	漆工史学会	11月13日	有
3	博物館における文化財保存修復に関する研究	博物館科学課環境保全室長　今津節生	九州国立博物館における新しい文化財展示の試み	映像情報メディア学会誌	映像情報メディア学会誌	7月2日	有
4	VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築	企画課文化交流展室長　河野一隆	「装飾古墳研究の新展開」	『史跡で読む日本の歴史』第２巻	吉川弘文館	6月21日	無
5	同上	同上	古墳時代の神と他界観	同上	同上	同上	無
6	トルキ山遼墓出土品から見た唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術	企画課研究員　市元　塁	トルキ山古墓の鳳凰木棺と契丹文化	「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」（九州国立博物館国際シンポジウム資料）	九州国立博物館	12月18日	無
7	室町時代の仏教絵画を中心とする東アジアの宗教美術に関する調査研究	企画課主任研究員　畑靖紀	江戸時代の水墨画	日本の美術Ｖ水墨画Ⅱ	美術年鑑社	10月8日	無
8	Ｘ線ＣＴスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析	博物館科学課環境保全室長　今津節生	Ｘ線ＣＴスキャナを利用した殷時代青銅斝の構造解析	アジア鋳造史学会誌	アジア鋳造技術史学会	8月28日	無
9	五胡十六国から北魏時代の出土陶俑に関する基礎研究	企画課研究員　市元　塁	五胡十六国から北魏時代の装飾馬	馬　アジアを駆けた二千年（展覧会図録）	九州国立博物館	7月10日	無
10	海の東アジアが醸成した貝と漆の文化‘螺鈿’の再発見－その共通性と多様性を探る－（トヨタ財団研究助成）	文化財課資料管理室長　小林公治	Mother of Pearl Inlay of Thai and Eastern Asia - from a view point of mutual relationship- abstract	International Confefrence"Study of Oriental Lacquer Initiated by H.R.H Princess Maha Chakri Sirindhorn for the Revitalization fo Thai and Wisdom"	Thai government(The Fine Arts Department, The Royal Forest Department and The Industrial Promotion Department)	6月20日	無
11	日本、韓国、中国における馬文化に関する考古遺品、美術作品に関する調査を進め、成果を特別展に反映する	企画課文化交流展室長　河野一隆	古墳時代における境界の意義	『史跡で読む日本の歴史』第２巻	吉川弘文館	6月21日	無
12	中国文明に関する調査研究	企画課研究員　市元　塁	漢時代から唐時代にいたる墓と副葬品	誕生！ 中国文明（展覧会図録）	読売新聞社、大広	7月6日	無
13	文化財の保存技術に関する研究	博物館科学課環境保全室長　今津節生	「考古遺物の最新保存技術」	『水下考古技術興案例介紹』Underwater Archaeological Technology and Case Studies	行政文化建設委員會文化資産總管理處籌備處、台湾	12月1日	無
14	同上	博物館科学課環境保全室長　今津節生	糖アルコールを用いた保存処理の方法	同上	同上	同上	無
15	同上	博物館科学課環境保全室長　今津節生	水浸出土木材保存の歴史	同上	同上	同上	無
16	Ｘ線ＣＴスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析	博物館科学課環境保全室長　今津節生	X線CTを利用した殷周青銅器の構造解析（Ｉ）	泉屋博古館紀要、第26号	泉屋博古館	12月1日	無
17	同上	博物館科学課環境保全室長　今津節生	X線CTを利用した殷代青銅[ジ][コウ]の内部構造解析	中国考古学　第10号	中国考古学会	11月27日	有
18	ベトナムの螺鈿に関する基礎的かつ多面的な調査研究	文化財課資料管理室長　小林公治	ベトナムの螺鈿―生産・製品・消費に関する調査研究報告―	『東風西声』第6号	九州国立博物館	3月31日	無
19	文化財の材質・構造等に関する共同研究	企画課研究員　川畑　憲子	九州国立博物館トピック展「湖の国の名宝」出陳漆工品の木地構造について	琵琶湖文化館紀要第27号	琵琶湖文化館	3月31日	無
20	東アジアにおける華厳経美術の展開	企画課研究員　森實久美子	東大寺における善財童子歴参図の歴史	別冊太陽　東大寺	平凡社	10月10日	無

【東京文化財研究所】　41件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（19件）

	研究テーマ	発表者 （職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェリー 有無
1	東アジアの美術に関する資料学的研究	企画情報部長　田中淳	東京文化財研究所『日本美術年鑑』とデジタルアーカイブ	水谷長志編著『MLA連携の現状･課題・将来』	勉誠出版	6月25日	無
2	同上	企画情報部研究員　土屋貴裕	「天狗草紙」の作画工房	『美術研究』403	東京文化財研究所	23年3月29日	有
3	同上	神護寺薬師如来の史的考察	企画情報部研究員　皿井舞	同上	同上	同上	有
4	近現代美術に関する総合的研究	企画情報部文化形成研究室長　塩谷純	川端玉章の研究（三）	『美術研究』401	東京文化財研究所	8月30日	有
5	同上	企画情報部近・現代視覚芸術研究室長　山梨絵美子	渡辺幽香　幼児図	『国華』1382	国華社	12月1日	無
6	同上	企画情報部長　田中　淳	『後期印象派・考－1912年前後を中心に』連載をめぐって	『美術史論壇』31	韓国美術研究所	23年1月1日	無
7	近現代美術に関する総合的研究	企画情報部近・現代視覚芸術研究室長　山梨絵美子	平成二十一年度に寄贈された黒田清輝作品について―《舟》、《芍薬》、《日清役二龍山砲台突撃図》、《林政文肖像》二点	『美術研究』402	東京文化財研究所	23年2月28日	有
8	同上	企画情報部長　田中　淳	画家中川一政　ひねもす走りおおせたる者	『没後20年　中川一政展』カタログ	日本橋高島屋	23年3月3日	無
9	美術の技法・材料に関する広領域的研究	企画情報部文化財アーカイブズ研究室長　津田徹英	「研究資料　奈良国立博物館蔵 木造南無仏太子立像」	『美術研究』401	東京文化財研究所	8月30日	有
10	同上	同上	脱活乾漆技法覚書	『研究資料　脱活乾漆像の技法』	同上	23年3月30日	無
11	無形文化財の保存・活用に関する調査研究	研究員　菊池理予	我が国における工芸技術保護の歴史と現状-染織技術を中心として-	『無形文化遺産研究報告』5	同上	23年3月31日	無
12	同上	音声・映像記録研究室長　飯島　満	フィルモン音帯に関する調査報告	同上	同上	同上	無

	研究テーマ	発表者 （職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェリー 有無
13	無形文化財の保存・活用に関する調査研究	同上	資料紹介　二代目鶴沢清八「義太夫節の種類と解説」	『無形文化財の伝承に関する資料集』	東京文化財研究所	23年 3月31日	無
14	同上	無形文化財研究室長　高桑いづみ	翻刻と解題「横笛細工試律便覧」	同上	同上	同上	無
15	同上	同上	独吟一管「海道下り」の伝承再考	『楽劇学』18	楽劇学会	23年3月31日	有
16	同上	研究員　菊池理予	工芸技術に関する研究-「江戸小紋工芸技術記録」を通じてー	『無形文化財の伝承に関する資料集』	東京文化財研究所	23年3月31日	無
17	無形民俗文化財の伝承状況に関する調査研究	主任研究員　俵木　悟	無形民俗文化財の映像記録-「使える記録」ーの実現に向けて	『日本民俗学』264	日本民俗学会	11月30日	有
18	同上	無形文化遺産部長　宮田繁幸	無形民俗文化財の公開と国際交流ー「国際民俗芸能フェスティバル」の15年ー	『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』	東京文化財研究所	23年3月31日	無
19	同上	主任研究員　俵木　悟	民俗芸能の伝承組織についてのー試論-「保存会」という組織のあり方についてー	同上	同上	同上	無

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進（2件）

	研究テーマ	発表者 （職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェリー 有無
1	文化財の非破壊調査法の研究	分析科学研究室長　早川泰弘	ポータブル蛍光X線分析装置による沖縄県所在ガラス製品の現地調査	保存科学 50	東京文化財研究所	23年3月	有
2	同上	主任研究員　吉田直人	可視反射スペクトルと二次微分スペクトルによる青色色材の判別に関する検討	同上	同上	同上	有

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進（18件）

	研究テーマ	発表者 （職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェリー 有無
1	文化財の生物劣化対策の研究	生物科学研究室長　木川りか　他	日光の歴史的建造物において粘着トラップ（ハエトリリボン）に捕獲された甲虫の集計方法と調査結果	保存科学 50	東京文化財研究所	23年3月	有
2	同上	同上	日光の歴史的建造物を加害するシバンムシ類の殺虫処理方法の検討	同上	同上	同上	有
3	文化財の保存環境の研究	主任研究員　犬塚将英　他	収蔵庫内の温湿度環境とスチール棚の表面温度	同上	同上	同上	有
4	同上	保存科学研究室長　佐野千絵	内装材の異なる収蔵庫の空気環境の比較	同上	同上	同上	無
5	同上	保存修復科学センター長　石﨑武志　他	亜寒帯湿潤大陸性気候における資料保存環境調査ー付着菌・空中浮遊菌のサンプリングを中心としてー	同上	同上	同上	有
6	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究	イ・チャンヒ、チョ・ジヒョン、キム・ジヨン、研究員　森井順之、イ・ミョンソン、キム・サドク	日本・大分県臼杵磨崖仏の損傷度評価と微気候環境分析	日韓共同研究報告書2010	国立文化財研究所／東京文化財研究所	23年 2月1日	無
7	同上	イ・ミョンソン、イ・ジェマン、研究員　森井順之	臼杵磨崖仏に対する保存処理剤の適用研究	同上	同上	同上	無
8	同上	研究員　森井順之	臼杵磨崖仏に対する保存処理剤の適用研究	同上	同上	同上	無
9	同上	客員研究員　藤井　義久・藤原　裕子・生物科学研究室長　木川　りか・原島　誠・喜友名　朝彦・杉山　純多・研究員　早川典子・保存修復科学センター副センター長　川野邊　渉	厳島神社大鳥居の生物劣化調査	保存科学50号	東京文化財研究所	23年3月	有
10	文化財の防災計画に関する調査研究	HANAZATO Tohsikazu, MINOWA Chikahiro, NIITSU Yasushi, NITTO Kazuhiko, KAWAI Naohito, MAEKAWA Hideyuki and MORII Masayuki	Seismic and Wind Performance of Five-Storied Pagoda of Timber Heritage Structure	Advanced Materials Research		10月1日	有
11	同上	中村豊、斎田淳、立花三裕、研究員　森井順之、井上修作、大町達夫	鎌倉大仏およびその周辺地盤の常時微動調査	第13回日本地震工学シンポジウム論文集（PDF版）	日本地震工学会	11月1日	有
12	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究	NAKAURA Yoshiko, NISHIMOTO Tomoyuki, SADAMORI Tatsuya, OKURA Takanori, SAKAMOTO Kurara, CHAEN Hiroto, FUKUDA Shigeharu, HAYAKAWA Noriko, OKA Yasuhiro, andINOUCHI Naora	Preparation of a Furunori-like Polysaccharide and the Similarity with Structures and Physical Properties of Furunori Samples	STARCH -Recent Advances In Biopolymer Science And Technology-	Polish Society of Food Technologist' Malopolska Branch	23年 3月1日	有
13	同上	主任研究員　加藤雅人、君嶋隆幸、酒井良次、保存修復科学センター副センター長　川野邊　渉	三軸織物・紙貼合シートの特性―紙本絹本文化財の裏打を想定して―	保存科学 50	東京文化財研究所	23年3月	有
14	同上	伝統技術研究室長　北野信彦・客員研究員　本多貴之・松尾昭子・高妻洋成	鷹島海底遺跡出土の元寇関連漆製品に関する調査	同上	同上	同上	有
15	近代の文化遺産に関する調査研究	近代文化遺産研究室長　中山俊介	コンクリート構造物の保存と修復	未来につなぐ人類の技１０「コンクリート構造物の保存と修復」	東京文化財研究所	23年3月	無
16	近代の文化遺産に関する調査研究	同上	Conservation and Utilization of Steel Structures	Preservation and Utilization of Steel Structures	東京文化財研究所	23年3月	無

	研究テーマ	発表者 （職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェリー有無
17	同上	近代文化遺産研究室長　中山俊介	鉄構造物の保存と修復	防錆管理 54号	(社)日本防錆技術協会	23年3月	無
18	同上	音声・映像記録研究室長　飯島　満、客員研究員　永井美和子、近代文化遺産研究室長　中山俊介	フィルモン音帯に関する調査報告	無形文化遺産研究報告書	東京文化財研究所	23年3月	無

○文化財の保護制度や施策の国際的動向及び国際協力及び国際共同研究（2件）

	研究テーマ	発表者（職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究	主任研究員　朽津信明	越前式石廟に施された彩色装飾について	考古学と自然科学	日本文化財科学会	6月	有
2	同上	同上	日本における覆屋の歴史について	保存科学 50	東京文化財研究所	23年3月	有

【奈良文化財研究所】 147件

○文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進（77件）

	研究テーマ	発表者（職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	文化的景観に関する調査研究	清水重敦（景観研究室長）	変化を前提とするものとしての文化的景観	奈良文化財研究所紀要2010	奈良文化財研究所	6月	無
2	同上	松本将一郎（アソシエイトフェロー）・惠谷浩子（研究員）	伝統的家屋からみた宇治の文化的景観	同上	同上	同上	無
3	同上	惠谷浩子（研究員）	宇治の文化的景観	奈文研ニュースNo. 38	奈良文化財研究所	9月	無
4	同上	同上	広域の文化的景観をどう捉えるか　四万十川流域を事例として	文化的景観研究集会（第2回）報告書	奈良文化財研究所	12月	無
5	同上	松本将一郎（アソシエイトフェロー）	都市・集落を文化財とすること一伝統的建造物群と文化的景観一	遺跡学研究　第7号	日本遺跡学会	11月	無
6	古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究	吉川聡（歴史研究室長）	整備以前の平城宮跡	奈良文化財研究所紀要2010	奈良文化財研究所	6月	無
7	同上	同上	石山寺一切経「大智度論」の基礎的研究	石山寺資料叢書　史料篇第三	法藏館	23年3月	無
8	歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究	成田聖也(任期付研究員)・他1名	西トップ赤威の建築調査一2009年度の成果一	奈良文化財研究所紀要2010	奈良文化財研究所	22年6月	無
9	同上	箱崎和久(遺構研究室長)	ベトナム中部民家の特質一フエ省フクティック村の調査から一	同上	同上	同上	無
10	同上	海野聡(研究員)	法隆寺所蔵古材調査 1	同上	同上	同上	無
11	同上	黒坂貴裕(研究員)	奈良県近代和風建築とその設計者	同上	同上	同上	無
12	歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究	鈴木智大（研究員）	山木遺跡出土建築部材の調査	奈良文化財研究所紀要2010	奈良文化財研究所	22年6月	無
13	同上	島田敏男（建造物研究室長）	日本の遺跡における建築復元の考え方	第2回韓・中・日建築文化遺産保存学術会議予稿集	第2回韓・中・日建築文化遺産保存学術会議	9月	無
14	同上	大林潤(研究員)	日本における発掘遺構と復元研究	同上	同上	同上	無
15	同上	清水重敦（景観研究室長）	平城宮第一次大極殿の復元と古代建築遺構研究の現在	同上	同上	同上	無
16	同上	島田敏男（建造物研究室長）	魚梁瀬森林鉄道を歩く①～⑥	高知新聞	高知新聞社	5月19日～24日	無
17	同上	同上	大極殿の復原と研究	毎日新聞	毎日新聞社	5月12日	無
18	平城宮跡東院地区（第469次）の発掘調査	芝康次郎(研究員)・桑田訓也(研究員)	平城宮東院地区西北部の調査（平城第469次）	奈文研ニュースNo. 38	奈良文化財研究所	9月	無
19	同上	芝康次郎(研究員)・桑田訓也(研究員)	平城宮東院地区の発掘調査－第469次	奈良文化財研究所紀要2011	同上	23年6月	無
20	薬師寺（第474次）の発掘調査	海野聡(研究員)	薬師寺の調査	奈文研ニュースNo. 39	同上	12月	無
21	同上	同上	薬師寺境内の発掘調査－第474次	奈良文化財研究所紀要2011	同上	23年6月	無
22	薬師寺（第475次）の発掘調査	森川実（研究員）	薬師寺休ヶ丘八幡宮の調査	奈文研ニュースNo. 39	同上	12月	無
23	同上	同上	薬師寺休ヶ丘八幡宮の発掘調査－第475次	奈良文化財研究所紀要2011	同上	23年6月	無
24	薬師寺（第476次）の発掘調査	今井昇輝(研究員)	薬師寺の調査	奈文研ニュースNo. 40	同上	23年3月	無
25	春日東塔跡(第477次)の発掘調査	海野聡(研究員)	春日東塔跡の発掘調査－第477次	同上	同上	同上	無
26	同上	同上	春日東塔跡の調査	奈良文化財研究所紀要2011	同上	23年6月	無
27	平城宮跡東方官衙地区（466次）の発掘調査	国武貞克（研究員）ほか	平城宮東方官衙地区(平城第466次)の調査	奈文研ニュースNo. 37	同上	22年6月	無
28	同上	国武貞克（研究員）・金田明大(主任研究員)	東方官衙地区の調査―第466次	奈良文化財研究所紀要2010	同上	22年6月	無
29	同上	国武貞克（研究員）ほか	東方官衙地区の調査―第466次	奈良文化財研究所紀要2011	同上	23年6月	無
30	同上	金田明大(主任研究員)	土の中には何かがある？？　平城宮東方官衙地区の調査	奈文研ニュースNo. 39	同上	12月	無
31	藤原宮跡朝堂院地区の発掘調査	若杉智宏（研究員）・森先一貴（研究員）・山本崇（主任研究員）	朝堂院の調査－第163次	奈良文化財研究所紀要2011	同上	23年6月	無
32	藤原宮跡朝堂院地区の発掘調査	森先一貴（研究員）	藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第163次）	奈文研ニュースNo. 38	奈良文化財研究所	9月	無
33	同上	若杉智宏（研究員）・深澤芳樹(都城発掘調査部長)	藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第163次）	奈文研ニュースNo. 39	同上	12月	無
34	飛鳥地域の発掘調査	庄田慎矢(研究員)・玉田芳英(考古第二研究室長)・廣瀬覚(研究員)・黒坂貴裕(研究員)	水落遺跡の調査　第165次	奈良文化財研究所紀要2011	同上	23年6月	無
35	同上	庄田慎矢(研究員)	水落遺跡の調査(飛鳥藤原第165次調査)	奈文研ニュースNo. 40	同上	23年3月	無
36	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	山本崇(主任研究員)	解説	木簡黎明－飛鳥に集ういにしえの文字たち	同上	10月	無
37	同上	同上	7世紀の紀年木簡	奈良文化財研究所紀要2011	同上	23年6月	無
38	同上	青木敬(研究員)	掘立柱建物の検討視点	同上	同上	同上	無

	研究テーマ	発表者 （職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェリー 有無
39	同上	石田由紀子(アソシエイトフェロー)	高台・峰寺瓦窯採集の瓦	同上	同上	同上	無
40	同上	豊島直博(主任研究員)	飛鳥池遺跡出土の銅製刀装具	同上	同上	同上	無
41	同上	降幡順子(主任研究員)	キトラ古墳出土遺物の保存処理	同上	同上	同上	無
42	同上	石田由紀子(アソシエイトフェロー)	瓦補遺	同上	同上	同上	無
43	同上	木村理恵(特別研究員)	藤原京右京七条二坊の井戸について	同上	同上	同上	無
44	同上	降幡順子(主任研究員)・木村理恵(特別研究員)	坂田寺出土の地鎮具	同上	同上	同上	無
45	同上	番光（研究員）	甘樫丘東麓遺跡の調査－第161次	同上	同上	同上	無
46	同上	同上	甘樫丘東麓遺跡の調査(飛鳥藤原第161次)	奈文研ニュースNo.37	同上	6月	無
47	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究	城倉正祥（研究員）	漢魏洛陽城　北魏宮城西南隅の発掘調査	奈良文化財研究所紀要 2011	同上	22年6月	無
48	同上	小池伸彦（考古第一研究室長）	遼寧省朝陽地区隋唐墓副葬品の調査	奈文研ニュースNo.37	同上	6月	無
49	同上	玉田芳英（考古第二研究室長）	中国河南省文物考古局との共同研究	奈良文化財研究所紀要2011	同上	12月	無
50	同上	若杉智宏(研究員)	日韓発掘調査交流に参加して	奈文研ニュースNo.40	同上	23年3月	無
51	同上	李熙濬	韓日発掘調査に参加して	奈文研ニュースNo.40	同上	同上	無
52	庭園に関する調査研究	小野健吉(文化遺産部長)	平安時代庭園史の概観と研究の現状	平安時代庭園の研究(古代庭園研究Ⅱ)	同上	同上	無
53	同上	同上	平安時代初期における離宮の庭園　－神泉苑と嵯峨院をめぐって－	同上	同上	同上	無
54	同上	同上	臨池伽藍の系譜と浄土庭園	同上	同上	同上	無
55	同上	高橋知奈津(研究員)	屏風歌にみる平安時代の『山里』	同上	同上	同上	無
56	同上	平澤毅（遺跡整備研究室長）	奈良時代の庭園　－平安時代庭園検討の前提として－	同上	同上	同上	無
57	同上	小野健吉(文化遺産部長)	発掘庭園に見る日本庭園の成立	考古ジャーナルNo.599	ニューサイエンス社	5月	無
58	同上	平澤毅（遺跡整備研究室長）・粟野隆	東アジアにおける理想郷と庭園	奈良文化財研究所紀要2010	奈良文化財研究所	22年6月	無
59	同上	小野健吉(文化遺産部長)	(都市の文化)庭園	史跡で読む日本の歴史9・江戸の都市と文化	吉川弘文館	6月	無
60	同上	平澤毅（遺跡整備研究室長）	古代庭園の世界	古代の都2『平城京の時代』	同上	7月	無
61	同上	小野健吉(文化遺産部長)	(平城京の造営)庭園の姿	季刊考古学第112号・特集平城京研究の現在	雄山閣	8月	無
62	同上	青木敬(研究員)	桂離宮と『桂垣』	遺跡学研究　第7号	日本遺跡学会	11月	無
63	同上	平澤毅（遺跡整備研究室長）	名勝庭園の指定名称	同上	同上	同上	無
64	庭園に関する調査研究	青木敬(研究員)	『桂垣』の補修に関する研究	平成22年度日本造園学会関西支部大会	日本造園学会	12月	無
65	同上	小野健吉(文化遺産部長)	古代日本の宮苑	百済研究第53輯	韓国忠南大学校百済研究所	23年2月	無
66	同上	青木敬(研究員)	『桂垣』と『桂垣』裏ハチク林に関する研究	ランドスケープ研究第74巻第5号	日本造園学会	23年3月	有
67	遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究	平澤毅（遺跡整備研究室長）	遺跡整備と地域づくり	奈良文化財研究所紀要2010	奈良文化財研究所	22年6月	無
68	同上	小野健吉(文化遺産部長)	大極殿復元	古代の都2『平城京の時代』	吉川弘文館	7月	
69	同上	平澤毅（遺跡整備研究室長）	名勝及び天然記念物浦富海岸の価値とその保護	平成22年度日本造園学会関西支部大会	日本造園学会	12月	無
70	同上	同上	自然と文化の多様性をめぐる最近の国際的な動向と視点	グローバルランドスケープ通信(Web公開)	同上	23年1月	無
71	同上	同上	造園学が取り組むべき『遺産』について	ランドスケープ研究第74巻第4号	同上	23年2月	無
72	同上	同上	浦富海岸の名勝地としての価値とその保護	名勝及び天延記念物浦富海岸保存管理計画方報告書	岩美町教育委員会	23年3月	無
73	同上	同上	名勝の保存管理計画策定に関する考察	ランドスケープ研究　第74巻第5号	日本造園学会	23年3月	有
74	遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術並びに監視技術の開発的研究	脇谷草一郎（研究員）	Application of Resitivity Image Profiling Method for Hydrological Analysis in Soil Structural Remains	22nd CIPA Symposium	CIPA	10月11日	有
75	遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術並びに監視技術の開発的研究	研究員　脇谷草一郎	史跡ガランドヤ古墳における水の挙動に関する調査研究	奈良文化財研究所研究紀要2010	奈良文化財研究所	6月15日	無
76	同上	同上	遺跡保存を目的とした水の挙動に関する解析―日田市ガランドヤ古墳における調査事例―	日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集	日本文化財科学会	6月26日	有
77	同上	同上	環境調査	史跡ガランドヤ古墳－史跡ガランドヤ古墳の保存整備に伴う調査報告書－	日田市教育委員会	3月31日	有

○文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進（45件）

	研究テーマ	発表者（職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー 有無
1	遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法の研究	主任研究員　金田明大	文化財のための三次元計測入門	（書籍）	岩田書院	5月20日	無
2	同上	同上	いよいよ柱穴が見えてきた	文化財の壺	文化財方法論研究会	5月22日	無
3	同上	主任研究員　金田明大・客員研究員　西村 康・客員研究員　西口和彦	建物の歴史を電磁波でみる―水戸市台渡里遺跡長者山地区VII地点の探査―	日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集	日本文化財科学会	6月26日	無
4	同上	主任研究員　金田明大	SVGによる遺構・遺物の記録と活用への基礎的検討	同上	同上	同上	無
5	同上	同上	低コスト三次元レーザースキャナーの利用と実践	同上	同上	同上	無
6	同上	主任研究員　金田明大・客員研究員　西村 康・客員研究員　西口和彦	平城宮跡東方官衙地区におけるGPR探査	同上	同上	同上	無
7	同上	主任研究員　金田明大	東大寺境内における遺跡探査	東大寺大仏　天平の至宝	東京国立博物館	10月8日	無

	研究テーマ	発表者（職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
8	同上	同上	人類の来し方を空間情報から考える	月刊測量	日本測量協会	11月1日	無
9	年輪年代学研究	国武貞克（研究員）・藤井博之(客員研究員)・吉岡直人・浅野啓介（研究員）	檜扇の製作に関わる新知見	奈良文化財研究所紀要2010	奈良文化財研究所	23年6月	無
10	同上	山本崇(主任研究員)・藤井博之(客員研究員)	平城宮木簡の樹種	同上	同上	同上	無
11	同上	大河内隆之（年代学研究室長）・光谷拓実（客員研究員）	年輪年代法による補訂	「中世禅宗様建築の研究」　関口欣也著作集	中央公論美術出版	9月	無
12	同上	大河内隆之（年代学研究室長）	年代をはかる	図説　平城京辞典	奈良文化財研究所	12月	無
13	同上	Mechtild Mertz,Takao ITOH	analysis of Wood Spcies in the Collection	In, ed. D.P. Leidy and D. Strahan	Wisdom Embodied:Chinese Buddhist and Daoist Sculpture in The Metropolitan Museum of Art	23年1月	無
14	同上	光谷拓実（客員研究員）	府中石田遺跡出土木材の年輪年代	福井県埋蔵文化財調査報告　第121集　府中石田遺跡ー舞鶴若狭自動車道建設に伴う調査ー	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター	23年3月	無
15	同上	同上	木崎遺跡出土木材の年輪年代	同上	同上	同上	有
16	同上	同上	曲物底板の年輪年代測定	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸＸⅣ　古渡路遺跡	新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団	23年3月	有
17	遺跡出土の動物遺存体や古土壌の考古科学的分析による環境考古学研究	Tsuneo NAKAJIMA・Michiyo NAKAJIMA・Takeshi YAMAZAKI	Evidence for Fish Cultivation during the Yayoi Period in Western Japan.	International Journal of Osteoarchaeology 20-2	John Wiley & Sons, Ltd.	4月	有
18	同上	埋蔵文化財センター長　松井章	粟津湖底遺跡の動物	よくわかる考古学	ミネルヴァ書房	5月	無
19	同上	同上	弥生人の食生活	同上	同上	同上	無
20	同上	同上	渡来した習俗・技術	同上	同上	同上	無
21	同上	研究員　山崎健	近現代の奈良における貝釦製作残滓	奈良文化財研究所紀要2010	奈良文化財研究所	6月	無
22	同上	同上	動物・植物遺存体（甘樫丘東麓遺跡の調査―第157・161次）	同上	同上	同上	無
23	同上	同上	その他（古宮遺跡の調査―第152-8次）	同上	同上	同上	無
24	同上	同上	動物遺存体（檜隅寺周辺の調査―第159次）	同上	同上	同上	無
25	同上	同上	SX9361出土鎮壇具容器の内容物（興福寺南大門の調査―第458次）	同上	同上	同上	無
26	同上	埋蔵文化財センター長　松井章	サケ・マス類	人と動物の関わりあい　-縄文時代の考古学4-	同成社	10月	無
27	同上	同上	韓半島の動物考古学	季刊考古学113　日韓考古学の新潮流	雄山閣	11月	無
28	遺跡出土の動物遺存体や古土壌の考古科学的分析による環境考古学研究	同上	考古学から探る日本の環境と食文化の多様性	人間文化12	学共同利用機関法人人間文化研究機構	11月	無
29	同上	同上	豊後府内遺跡出土のオモゲーとその問題点	『坪井清足先生卒寿記念論文集―埋文行政と研究のはざまで―』	坪井清足先生の卒寿をお祝いする会	11月	無
30	同上	研究員　山崎健	「低湿地」という景観と資源環境―内水面漁撈を端緒として―	伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・中期篇「大規模集落と弥生社会」	伊勢湾岸弥生社会シンポジウムプロジェクト	11月	無
31	同上	Bleed, P., A. Matsui	Why Didn't Agriculture Develop in Japan?A Consideration of Jomon Ecological Style, Niche Construction, and the Origins of Domestication.	Journal of Archaeological Method and Theory	Springer	2010年7月	有
32	同上	研究員　山崎健	「縄文時代」の使われ方―古環境復元と自然再生事業の接点―	遺跡学研究 7	日本遺跡学会	11月	無
33	同上	埋蔵文化財センター長　松井章・研究員　山崎健	環境	平城京事典	柊風舎	12月	無
34	同上	同上	環境考古学	同上	同上	同上	無
35	同上	同上	動物遺存体分析	同上	同上	同上	無
36	同上	同上	樹種同定	同上	同上	同上	無
37	同上	同上	古環境復原	同上	同上	同上	無
38	同上	研究員　山崎健	池島・福万寺遺跡出土の埋葬犬	池島・福万寺遺跡	大阪府文化財センター	23年1月	無
39	同上	同上	日本におけるジャコウネズミの渡来と分布に関する古記録	『スンクスの生物学』	学会出版センター	23年2月	無
40	同上	京都大学大学院人間・環境学研究科　納屋内高史・埋蔵文化財センター長　松井章	カラカミ遺跡出土の動物遺存体（まとめ）	カラカミ遺跡	九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室	23年3月	無
41	同上	埋蔵文化財センター長　松井章	古代人の肉食の忌避という虚構	古代はいま　奈文研最前線	クバプロ	23年3月	無
42	同上	埋蔵文化財センター長　松井章・長野県立歴史館　水沢教子・古環境研究所　金原美奈子・京都大学大学院生　金原裕美子	遺構土壌の水洗選別法による屋代遺跡群の縄文中期集落における生業活動の再検討	長野県立歴史館研究紀要17	長野県立歴史館	23年3月	無
43	同上	研究員　山崎健・客員研究員　橋本裕子	旧練兵場遺跡から出土した動物遺存体と古人骨	旧練兵場遺跡	香川県埋蔵文化財センター	23年3月	無
44	同上	研究員　山崎健	長割遺跡から出土した動物遺存体と古人骨	長割遺跡	新潟県埋蔵文化財調査事業団	23年3月	無
45	同上	客員研究員　丸山真史・埋蔵文化財センター長　松井章	上本町遺跡（UH09-2次調査）から出土した動物遺存体	上本町遺跡	大阪文化財研究所	23年3月	無

○文化財の保存科学や修復技術に関する中心的な支援拠点として先端的調査研究等の推進（17件）

	研究テーマ	発表者（職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究	保存修復科学研究室長　高妻洋成	テラヘルツ波イメージングの文化財建造物調査への応用	文化財保存修復学会第32回大会研究発表要旨集	文化財保存修復学会	6月12日	無

	研究テーマ	発表者 （職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載 年月日	レフェリー有無
2	同上	同上	ミリ波およびテラヘルツ波の文化財への応用Ⅰ―層構造調査へのテラヘルツ波イメージング技術の基礎研究―	日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集	文化財保存修復学会	6月26日	無
3	同上	同上	観察手法による高松塚古墳壁画表面の調査結果報告	同上	同上	同上	無
4	同上	都城発掘調査部主任研究員 降幡順子	高松塚古墳壁画の材料調査―蛍光X線分析による下地漆喰に関する調査（２）―	同上	同上	同上	無
5	同上	客員研究員　肥塚隆保	国宝高松塚古墳壁画の材料調査―目地漆喰および下地漆喰―	同上	同上	同上	無
6	同上	保存修復科学研究室長　高妻洋成	木造文化財における彩色の劣化機構に対する電磁波の応用	同上	同上	同上	無
7	同上	研究員　田村朋美	紫色ガラスの分析科学的研究	同上	同上	同上	無
8	同上	保存修復科学研究室長　高妻洋成	Conservation principles of archaeological heritages in Japan	International Symposium - Coservation Ethics for Rational Decision Making: the Dialogue between East and West	日本文化財科学会	11月2日	無
9	同上	同上	Non-Destructive Tests for Cultural Heritages in Japan	2010 International Symposium on Cultural Heritage Conservation	日本文化財科学会	12月6日	無
10	同上	客員研究員　肥塚隆保	古代ガラスの科学	月刊文化財	文化庁	11月1日	無
11	同上	研究員　田村朋美	材質とその歴史的変遷	同上	同上	同上	無
12	同上	客員研究員　肥塚隆保	韓国出土の古代ガラスの概要	同上	同上	同上	無
13	同上	都城発掘調査部主任研究員 降幡順子	キトラ古墳出土琥珀玉の保存処理	奈良文化財研究所研究紀要2010	奈良文化財研究所	6月15日	無
14	同上	保存修復科学研究室長　高妻洋成	黒塚古墳出土鉄製遺物の保存修理	同上	同上	同上	無
15	同上	客員研究員　肥塚隆保	高松塚古墳壁画の材料調査	同上	同上	同上	無
16	同上	研究員　田村朋美	弥生時代のソーダ石灰ガラス	同上	同上	同上	無
17	同上	保存修復科学研究室長　高妻洋成	木製遺物を包含する埋蔵環境の調査―青谷上寺地遺跡の土壌と地下水―	考古学と自然科学	日本文化財科学会	6月5日	有

○国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査研究の実施（3件）

	研究テーマ	発表者（職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存活用に関する技術的協力	石田由紀子(アソシエイトフェロー)・石橋茂登(主任研究員)・高橋透(アソシエイトフェロー)	檜隈寺周辺の調査－飛鳥藤原第164次	奈良文化財研究所紀要2011	奈良文化財研究所	23年6月	無
2	同上	石田由紀子(アソシエイトフェロー)	檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原164次）	奈文研ニュースNo.39	奈良文化財研究所	12月	無
3	国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業大和平野県営飛鳥工区2号幹線の調査及び保存活用に関する技術的協力	廣瀬覚(研究員)・小田裕樹	藤原京左京七条一坊・八条一坊の調査－第166次	奈良文化財研究所紀要2011	同上	23年6月	無

○情報発信機能の強化　（2件）

	研究テーマ	発表者（職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	文化財情報電子化の研究に基づくデータベースの充実	森本晋（文化財情報研究室長）ほか	大規模で構造的な遺構への遺構情報モデルの適用	地理情報システム学会講演論文集	地理情報システム学会	10月	無
2	同上	同上	遺構情報モデルに基づく地理空間データ作成のための製品仕様書	埋蔵文化財ニュース144	奈良文化財研究所埋蔵文化財センター	23年3月	無

○地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上（3件）

	研究テーマ	発表者（職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	地方公共団体が行う平城京域発掘調査への援助・助言	中村亜希子(任期付研究員)	平城京左京一条二坊の調査一第472次	奈良文化財研究所紀要2011	奈良文化財研究所	23年6月	無
2	同上		2010年度 都城発掘調査部(飛鳥藤原地区)小規模調査等の概要	同上	同上	同上	無
3	同上	青木敬	東方官衙南地区の調査一第162-1次	同上	同上	同上	無

【東京文化財研究所と奈良文化財研究所との共同研究】計1件

○国・地方公共団体の要請に応じた保存措置等のために必要な実践的な調査研究の実施（1件）

	研究テーマ	発表者（職名・名前）	論文テーマ	掲載誌名	発行元	掲載年月日	レフェリー有無
1	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力	松村恵司・廣瀬覚	発掘調査からみた壁画の保存環境	月刊文化財第563号	第一法規	8月	無

c-⑤ 調査研究刊行物一覧

【東京国立博物館】

○調査研究刊行物

刊　行　物　名	発行部数	配　　布　　先
「ＭＵＳＥＵＭ」６２５～６３０号	各1,900	美術館・博物館・大学・研究所等　2,742件(各457件)
「東京国立博物館紀要」４６号	700	美術館・博物館・大学等　334件
「東京国立博物館文化財修理報告」XI	800	美術館・博物館・大学等　91件
「法隆寺献納宝物特別調査概報」ＸＸXI　聖徳太子絵伝４	600	美術館・博物館・大学等　193件
「東京国立博物館図版目録　古写経篇」	600	美術館・博物館・大学等　161件
「ザールデリー―パキスタン古代仏教遺跡の発掘調査―」	500	―
「根付 高円宮コレクション」	2,000	―

○展覧会目録

刊　行　物　名		発行部数	配　　布　　先
特別展	「細川家の至宝―珠玉の永青文庫コレクション―」	―	美術館・博物館・大学等　112件
	「誕生！中国文明」	―	美術館・博物館・大学等　112件
	「東大寺大仏―天平の至宝―」	―	美術館・博物館・大学等　112件
	「仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」	―	美術館・博物館・大学等　112件
特集陳列	「清朝末期の光景―小川一眞・早崎梗吉・関野貞―」	2000	美術館・博物館・大学等　16件
	「ワヤン―インドネシアの人形芝居―」	2000	美術館・博物館・大学等　16件
	「東京国立博物館所蔵正倉院の染物」	2000	美術館・博物館・大学等　16件

【京都国立博物館】

○調査研究刊行物

刊　行　物　名	発行部数	配　　布　　先
文化財保存修理所　修理報告書6	450	大学・図書館・研究機関等
文化財保存修理所　修理報告書7	450	大学・図書館・研究機関等
研究紀要「学叢」第32号	790	美術館・博物館・大学等

○展覧会目録

刊　行　物　名	発行部数	配　　布　　先
特別展覧会「長谷川等伯」	―	美術館・博物館・大学等
特別展観「上田秋成」	―	美術館・博物館・大学等
特別展覧会「高僧と袈裟－ころもを伝え、こころを繋ぐ－」	―	美術館・博物館・大学等
特熱展覧会「筆墨精神－中国書画の世界－」	―	美術館・博物館・大学等
特集陳列「篆刻家　園田湖城」	―	美術館・博物館・大学等

【奈良国立博物館】

○調査研究刊行物

刊　行　物　名	発行部数	配　　布　　先
奈良時代の塑造神将像	250部	美術館・博物館・大学・研究所等
大徳寺伝来五百羅漢図銘文調査報告書（東京文化財研究所と共編）	-	美術館・博物館・大学・研究所等

○名品図録

刊　行　物　名	発行部数	配　　布　　先
なら仏像館名品図録	8,500部	美術館・博物館・大学・研究機関等

○展覧会目録

刊　行　物　名	発行部数	配　　布　　先
平城遷都1300年記念　大遣唐使展	-	美術館・博物館・大学・研究機関等
仏像修理100年	-	美術館・博物館・大学・研究機関等
第６２回正倉院展	-	美術館・博物館・大学・研究機関等
The 62th Annual Exhibiton of Shoso-in Treasures	-	美術館・博物館・大学・研究機関等
おん祭と春日信仰の美術	-	美術館・博物館・大学・研究機関等

【九州国立博物館】

○調査研究刊行物

刊　行　物　名	発行部数	配　　布　　先
九州国立博物館紀要「東風西声」　第６号	950部	美術館・博物館・大学・研究機関等
神々の青銅器リーフレットNo.５	5000部	美術館・博物館・大学・研究機関等
国際セミナー　アジアの螺鈿　予稿集	550部	美術館・博物館・大学・研究機関等
九州国立博物館　博物館科学部門の取り組みⅢ（2009-2010）	5000部	美術館・博物館・大学・研究機関等

○展覧会目録

刊　行　物　名		発行部数	配　　布　　先
特別展	「パリに咲いた古伊万里の華」	―	美術館・博物館・大学・研究機関等
	「馬　アジアを駆けた二千年」	5,500部	美術館・博物館・大学・研究機関等
	「誕生！中国文明」	―	美術館・博物館・大学・研究機関等
	「没後120年　ゴッホ展」	―	美術館・博物館・大学・研究機関等
	「Artisanship and Aesthetic of Japan and Thailand」	―	美術館・博物館・大学・研究機関等
トピック展示	「湖の国の名宝展」	3000部	美術館・博物館・大学・研究機関等
	「茶の湯を楽しむⅢ　名品でたどる室町から桃山の茶」	2500部	美術館・博物館・大学・研究機関等
	「館蔵　仏教美術　名品展」	3000部	美術館・博物館・大学・研究機関等
	「邪馬台国　九州と近畿」	1700部	美術館・博物館・大学・研究機関等
	新春特別公開「徳川美術館所蔵　姫君の金銀香道具」リーフレット	5000部	館内、美術館等
	国宝　琉球国王尚家関係資料修理完成記念展　リーフレット	3000部	那覇市・一般観覧者

【東京文化財研究所】

○調査研究刊行物

刊　行　物　名	発行部数	配　　布　　先
東京文化財研究所年報	1,000	博物館・美術館・大学・研究機関等
東京文化財研究所概要	5,000	博物館・美術館・大学・研究機関等
東文研ニュース 第41～44号	各5,000	博物館・美術館・大学・研究機関等
東文研ニュースダイジェスト（東文研ニュース英語版）第8～9号	各5,000	博物館・美術館・大学・研究機関等
平成21年版　日本美術年鑑	600	博物館・美術館・大学・研究機関等
美術研究 401～403号	各400	博物館・美術館・大学・研究機関等
無形文化遺産研究　第5号	750	博物館・美術館・大学・研究機関等
第5回無形民俗文化財研究協議会報告書	500	博物館・美術館・大学・研究機関等
保存科学 50号	650	博物館・美術館・大学・研究機関等
第33回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会報告書	800	参加者、大学、研究機関、博物館・美術館等
研究資料　脱活乾漆像の技法	400	博物館・美術館・大学・研究機関・図書館等
平等院鳳凰堂仏後壁調査資料目録―蛍光線画像編―	400	博物館・美術館・大学・研究機関・図書館等
日本絵画史年紀資料集成　十五世紀	400	博物館・美術館・大学・研究機関・図書館等
大徳寺五百羅漢図報告書	250	博物館・美術館・大学・研究機関・図書館等
東京文化財研究所蔵書目録8　漢籍	600	博物館・美術館・大学・研究機関・図書館等
子ども向けパンフレット	10000	施設見学に来所した小中高生等
『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』	500	大学・研究機関・教育委員会・図書館等
無形文化財の伝承に関する資料集	700	大学・研究機関・教育委員会・図書館等
第34回文化財の保存および修復に関する国際研究集会「「復興」と文化遺産」（予稿集）	300	研究集会参加者、関係各所
在外日本古美術品保存修復協力事業平成21年度修復報告書（平成22年度）	1,000	図書館、博物館、美術館、研究機関、関係機関等
伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究報告書2010年度	300	研究集会参加者、関係各所
日韓共同研究報告書2010（大韓民国・国立文化財研究所との共同刊行）	100	研究集会参加者、関係各所
臼杵磨崖仏保存環境調査報告書	300	研究集会参加者、関係各所
文化財の防災計画に関する研究報告書	200	研究集会参加者、関係各所
International Course on Conservation of Japanese Paper 2010	400	研修参加者、関係各所
Restoration of Japanese Paintings - Advanced Technology and Traditional Techniques / 日本絵画の修復　－先端と伝統－	800	研究集会参加者、関係各所
未来につなぐ人類の技１０「コンクリート構造物の保存と修復」	1,000	研究集会参加者、関係各所
Preservation and Utilization of Steel Structures	1,000	研究集会参加者、関係各所
アジア文化遺産国際会議報告書　『東アジア地域の文化遺産－文化遺産保護国際協力活動を通じて我々は何を発見し共有しうるか』	300	会議出席者・関係機関等
国際文化財保存修復研究会報告書　『覆屋保存を考える』	500	研究会出席者・関係機関等
アジア文化遺産国際会議報告書　『西アジアの文化遺産－その保護の現状と課題』業務報告書	20	関係機関等
アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査・研究　平成22年度成果報告書	65	関係機関等
關於陝西省墓葬壁画記録保存方法的研究2010	300	関係機関等
敦煌壁画の保護に関する日中共同研究2010	100	関係機関等
アジナ・テパ仏教寺院考古学調査報告	500	関係機関等
バーミヤーン遺跡保存事業概報－2009・2010年度（第9・10次ミッション）－	500	関係機関等
バーミヤーン仏教石窟の建築構造およびその意匠と技法	250	関係機関等
タジキスタン国立古代博物館所蔵壁画断片の保存修復　2009年度（第５次～第７次ミッション）	450	関係機関等
タジキスタン共和国科学アカデミー歴史・考古・民族研究所アーカイヴ、カフカハ遺跡群出土壁画	300	関係機関等
カライ・カフカハⅠ、Ⅱ遺跡出土壁画資料集　写真編２	130	関係機関等
アジャンター第2窟、第９窟壁画　ドキュメンテーションと状態調査	500	関係機関等
Indo-Japanese Project for the Conservation of Ajanta Paintings, 2008	500	関係機関等
出土金属の保存処理	200	関係機関等
Conservation treatment for Archaeological Metal Objects	400	関係機関等
海外の文化財保存修復専門家要請を目的とする国際研修等の実施に関する研究会報告書	100	関係機関等
バーミヤーン遺跡保存事業概報-2009・2010年度（第9・10次ミッション）-	500	関係機関等
平成２２年度協力相手国調査　ブータン	500	関係機関等
平成２２年度協力相手国調査　ブータン　英語	130	関係機関等
被災文化遺産復旧に係る報告書―支援実施国編	500	関係機関等
被災文化遺産復旧に係る報告書―支援実施国編　英語	500	関係機関等
第6回研究会遺跡の情報発信と地域への還元	120	関係機関等
文化遺産保護は平和の礎をつくる予稿集	430	関係機関等
文化遺産保護は平和の礎をつくる報告書	400	関係機関等
文化遺産国際協力コンソーシアムパンフレット	8,000	関係機関等
文化遺産国際協力コンソーシアムパンフレット　英語	1,400	関係機関等
文化遺産国際協力事業紹介	275	関係機関等
文化遺産国際協力事業紹介　英語	275	関係機関等

刊　行　物　名	発行部数	配　　布　　先
「東京文化財研究所とインド考古局との壁画保存に関する拠点交流事業」2010年度業務報告書	50	関係機関等
「東京文化財研究所とモンゴル教育・文化・科学省および文化芸術局との拠点交流事業」2010年度業務報告書　建造物	100	関係機関等
「東京文化財研究所とモンゴル教育・文化・科学省および文化芸術局との拠点交流事業」2010年度業務報告書　碑文・岩画	200	関係機関等
中央アジア出土壁画の保存修復2010	50	関係機関等
「東京文化財研究所と中央アジア諸国における文化財保護に関する拠点交流事業」タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画片の修復（第８次、９次、10次ミッション）2010年度業務報告書	50	関係機関等
『西スマトラ州パダンにおける歴史的建造物および町並み復興支援』	100	関係機関等
『西スマトラ州パダンにおける文字文化財復興支援』	100	関係機関等
国際資料室蔵書目録	100	関係機関等
文化財保護関連法令シリーズ　タジキスタン	300	関係機関等
文化財保護関連法令シリーズ　ブータン	300	関係機関等
フランス文化財法典（四～七巻）	300	関係機関等

【奈良文化財研究所】

○調査研究刊行物

刊　行　物　名	発行部数	配　　布　　先
奈良文化財研究所紀要2010	3000	大学、研究機関、図書館等
奈良文化財研究所概要2010	3500	大学、研究機関、図書館等
奈文研ニュースNo.37～40	各3000	大学、研究機関、図書館等
埋蔵文化財ニュースNo.142～145	142：3,500 143：2,500 144：3,000 145：2,500	教育委員会、図書館、博物館等
西トップ遺跡調査報告書	600	大学、研究機関、図書館等
カンボジア王国アンコール遺跡群西トップ寺院遺跡保全事業　ニュースレター2号、3号	各1000	来訪者等
キトラ古墳壁画四神	8000	館内観覧者
飛鳥の冶金関連遺跡	600	館内観覧者
小さな石器の大きな物語(図録)	2000	館内観覧者
飛鳥資料館　案内リーフレット	30000	館内観覧者
キトラ古墳壁画フォトマップ資料	800	大学、研究機関、教育委員会、図書館等
平城宮跡発掘調査50周年記念　天平びとの声をきくー地下の正倉院・平城宮木簡のすべて	600(日) 500(中) 1000(英) 500(韓)	館内観覧者
測る、知る、伝えるー平城京と文化財ー	10000	館内観覧者
文化財を測る、知る、伝える　の最前線ー空間情報科学と測量・計測技術を用いた文化財研究ー	8000	館内観覧者
発掘速報展　平城2009・2010	10000	館内観覧者
木簡黎明ー飛鳥に集う　いにしえの文字たち(図録)	2500	館内観覧者
木簡黎明ー飛鳥に集う　いにしえの文字たち(カタログ)	2000	館内観覧者
飛鳥の考古学(カタログ)	2000	館内観覧者
文化的景観研究集会(第2回)報告書	1000	大学、研究機関等
四万十川流域の文化的景観調査報告書	600	大学、研究機関等
文化的景観研究集会(第3回)講演・報告資料集	1000	大学、研究機関等
明治時代平城宮跡保存運動史料集	600	大学･研究機関･博物館・図書館等
重要文化財建造物現状変更説明　1956～1958(本文編)	500	大学、研究機関、教育委員会、図書館等
重要文化財建造物現状変更説明　1956～1959(図版編)	500	大学、研究機関、教育委員会、図書館等
平城京第一次大極殿の復元に関する研究２　木部	700	大学、研究機関
ベトナム社会主義共和国　フクティック村　村落調査報告書	700	大学、研究機関
平安時代庭園の研究(古代庭園研究Ⅱ)	700	大学、研究機関等
遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり～ 平成21年度遺跡整備・活用研究集会(第4回)報告書	1000	大学、研究機関等
大極殿彩色パンフレット	10000	館内観覧者
平城宮跡資料館リーフレット	10000	館内観覧者
奈良文化財研究所紹介パンフレット(子供向け)	10000	来訪者等
古代東アジアの造瓦技術	600	大学、研究機関、教育委員会、図書館等
奈良文化財研究所研究報告4　官衙と門(報告編、記録資料編)	各600	大学、研究機関、図書館等
漢長安城桂宮	700	大学、研究機関、図書館等
日韓文化財論集Ⅱ	600	大学、研究機関、図書館等
平城宮発掘調査出土木簡概報(40)	1000	大学、研究機関
平城宮発掘調査報告ⅩⅦ(第一次大極殿院)	600	大学、研究機関
山木遺跡出土建築部材調査報告書	700	大学、研究機関、教育委員会、図書館等
平城京辞典	200	大学、研究機関、教育委員会、図書館等
藤原宮跡資料室案内	20000	来訪者等、館内観覧者
特別史跡藤原宮跡	20000	来訪者等、館内観覧者
飛鳥藤原第165次　発掘調査現地見学会資料(水落遺跡)	2200	現地説明会見学者等
大極殿パンフレット(英語)	1300	館内観覧者

c-⑥ 科学研究費補助金による調査研究

国立文化財機構	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所
81件	15件	2件	1件	6件	21件	36件

【東京国立博物館】15件

	研究テーマ	名前	役職	区分	予算(千円)
1	博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究	神庭　信幸	学芸研究部保存修復課長	基盤研究（S）	31,330
2	東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究	島谷　弘幸	学芸研究部長	基盤研究（A）	8,190
3	日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究	金子　啓明	特任研究員	基盤研究（B）	2,600
4	東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究－「正倉院裂」を中心に－	澤田　むつ代	特任研究員	基盤研究（B）	2,340
5	文化財保護の歴史に関する基礎的研究	高橋　裕次	学芸企画部博物館情報課長	基盤研究（B）	4,030
6	中国書画の表装に関する基礎的研究	富田　淳	学芸研究部調査研究課長	基盤研究（C）	1,820
7	清時代末期の訪中調査における写真資料に関する調査研究	関　紀子	学芸企画部博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー	基盤研究（C）	1,300
8	占領期の教育政策における国立博物館の役割に関する調査研究	神辺　知加	学芸企画部博物館教育課教育講座室主任研究員	基盤研究（C）	1,820
9	宮廷工芸に関する物質文化的研究―生活感のある工芸史の構築をめざして―	猪熊　兼樹	学芸研究部列品管理課貸与特別観覧室主任研究員	基盤研究（C）	2,080
10	近現代における古日本染織の移動とコレクション形成に関する基礎的研究	小山　弓弦葉	学芸企画部企画課特別展室主任研究員	若手研究（A）	2,860
11	原三溪旧蔵近代絵画・彫刻に関する基礎的研究 （H22.7.31担当研究員の異動により補助事業廃止）	植田　彩芳子	学芸研究部企画課特別展室任期付研究員	若手研究（B）	780
12	高度な復元作業のための制作空間の情報化	河内　晋平	学芸研究部調査研究課貸与特別観覧室アソシエイトフェロー	研究活動スタート支援	988
13	狩野晴川院養信筆「法隆寺什物図」の研究	安藤　香織	学芸研究部列品管理課登録室アソシエイトフェロー	研究活動スタート支援	325
14	東京国立博物館所蔵古文書データベース	高梨　真行	学芸研究部調査研究課書跡・歴史室主任研究員	研究成果公開促進費（研究成果データベース）	2,500
15	東京国立博物館所蔵印譜データベース	関　紀子	学芸企画部博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー	研究成果公開促進費（研究成果データベース）	2,700

【京都国立博物館】　2件

	研究テーマ	名前	役職	区分	予算(千円)
1	日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察	佐々木　丞平	館長	基盤研究(A)	5,200
2	建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究	赤尾　栄慶	学芸部上席研究員	基盤研究(B)	4,550

【奈良国立博物館】　1件

	研究テーマ	名前	役職	区分	予算(千円)
1	奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流	湯山　賢一	館長	基盤研究（A）	10,790

【九州国立博物館】　6件

	研究テーマ	名前	役職	区分	予算(千円)
1	ＶＲ画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築	河野　一隆	学芸部企画課 文化交流展室長	基盤研究（A）	8450
2	Ｘ線ＣＴスキャナーによる中国古代青銅器の構造技法解析	今津　節生	学芸部博物館科学課 環境保全室長	基盤研究（B）	3900
3	トルキ山遼墓出土品から見た唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術	臺信　祐爾	学芸部文化財課長	基盤研究（B） 海外	4030
4	アジアの木地螺鈿－その源流、正倉院宝物への道をたどる－	小林　公治	学芸部文化財課 資料管理室長	基盤研究（C）	1560
5	五胡十六国から北魏時代の出土陶俑に関する基礎研究	市元　塁	学芸部企画課研究員	若手研究（B）	1040
6	埴輪に認められる赤色顔料についての基礎的研究	志賀　智史	学芸部博物館科学課 主任研究員	若手研究（B）	1560

【東京文化財研究所】　21件

	研究テーマ	名前	役職	区分	予算(千円)
1	高松塚古墳壁画劣化要因微生物の遺伝・表現形質等基礎データの総合的構築	佐野　千絵	保存修復科学センター 保存科学研究室長	基盤研究（A）	8,190
2	タンロン皇城遺跡の保存活用に関する包括的調査研究	清水　真一	文化遺産国際協力センター長	基盤研究（A） （海外）	11,050
3	歴史的建造物を構成する部材の劣化と対策	石﨑　武志	保存修復科学センター長	基盤研究（B）	3,510
4	諸先学の作品調書・画像資料類の保存と活用のための研究・開発－美術史家の眼を引継ぐ	田中　淳	企画情報部長	基盤研究（B）	4,290
5	文化財修復材料の劣化と文化財に及ぼす影響に関する基礎的研究	早川　典子	保存修復科学センター研究員	基盤研究（B）	13,000
6	敦煌芸術の科学的復原研究―壁画材料の劣化メカニズムの解明によるアプローチ	岡田　健	文化遺産国際協力センター 国際情報研究室長	基盤研究（B）	8,580
7	文化財の被災履歴データベースによる脆弱性評価と保存計画策定への活用に関する研究	二神　葉子	文化遺産国際協力センター 主任研究員	基盤研究（C）	1,300
8	戦災を受けた歴史的建造物の復旧過程が文化財保護制度に与えた影響に関する研究	秋枝　ユミイザベル	文化遺産国際協力センター特別研究員	基盤研究（C）	2,080
9	日本絵画材料の時代的変遷に関する調査研究	早川　泰弘	保存修復科学センター 分析科学研究室長	基盤研究（C）	1,300

	研究テーマ	名前	役職	区分	予算(千円)
10	建築文化財における外観塗装材料の変遷と新塗料開発に関する研究	北野　信彦	保存修復科学センター 伝統技術研究室長	基盤研究（C）	390
11	古文書および古典籍の修復と装幀形態に関する用語の研究	加藤　雅人	保存修復科学センター研究員	基盤研究（C）	780
12	古楽器の形態変化及びジャンル間の交流に関する総合研究	高桑いづみ	無形文化遺産部 無形文化財研究室長	基盤研究（C）	1,040
13	大村西崖の研究	塩谷　純	企画情報部 文化形成研究室長	基盤研究（C）	1,040
14	移動が困難な文化財のためのエックス線を用いた非破壊調査手法の構築	犬塚　将英	保存修復科学センター 主任研究員	若手研究（A）	5,850
15	染織技法の分業化の展開に関する基礎的研究－技法書・絵画資料・実作品の分析を通して	菊池　理予	無形文化遺産部研究員	若手研究（B）	1,690
16	無形の民俗文化財の保護事業の実態と効果に関する民族誌的研究	俵木　悟	無形文化遺産部 主任研究員	若手研究（B）	650
17	デジタルカメラを用いた文化財資料表面付着物の簡便な判別方法の研究	吉田　直人	保存修復科学センター 主任研究員	若手研究（B）	1,170
18	「エフタル期」の図像資料の特定と考察：バーミヤン、ソグド、クチャを中心に	影山　悦子	文化遺産国際協力センター 特別研究員	若手研究（B）	1,040
19	寺院造営組織からみた平安前期彫刻の研究	皿井　舞	企画情報部研究員	若手研究（B）	1,040
20	アルメニアの完新世初頭における先史文化の考古学研究	有村　誠	文化遺産国際協力センター特別研究員	若手研究（B）	1,820
21	インド洋西海域の歴史的港市におけるインド人の居住空間形成に関する研究	岡村　知明	文化遺産国際協力センター 客員研究員	研究活動スタート支援	1,937

【奈良文化財研究所】36件

	研究テーマ	名前	役職	区分	予算(千円)
1	木簡など出土文字資料釈読支援システムの高次化と綜合的研究拠点データベースの構築	渡邉　晃宏	都城発掘調査部史料研究室長	基盤研究（S）	23,660
2	ミリ波およびテラヘルツ波を用いた文化財の新たな非破壊診断技術の開発研究	高妻　洋成	埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長	基盤研究（A）	8,970
3	東アジアにおける家畜の伝播とその展開に関する動物考古学的研究	松井　章	埋蔵文化財センター長	基盤研究（A）	12,870
4	日本初期貨幣史の再構築	次山　淳	都城発掘調査部考古第三研究室長	基盤研究（B）	5,590
5	南都における廃仏毀釈後の資料動態に関する調査研究（前年度申請）	吉川　聡	文化遺産部歴史研究室長	基盤研究（B）	3,770
6	中国細石刃文化の基礎的研究-河南省霊井遺跡石器群の分析を中心として-	加藤　真二	企画調整部展示企画室長	基盤研究（B） 海外	5,070
7	青銅製祭器の生産と流通からみた弥生時代の社会変化の研究	難波　洋三	企画調整部長	基盤研究（C）	780
8	古代の鉛調整加工技術に関する考古学的研究	小池　伸彦	都城発掘調査部考古第一研究室長	基盤研究（C）	780
9	中国産木材の顕微鏡的特徴に関するデータベースの構築	伊東　隆夫	埋蔵文化財センター客員研究員	基盤研究（C）	910
10	古代律令国家の官衙と寺院の占地に関する比較研究	小澤　毅	文化遺産部遺跡・調査技術研究室長	基盤研究（C）	650
11	発掘調査成果の総合的な機械可読化に関する研究	森本　晋	企画調整部文化財情報研究室長	基盤研究（C）	1,300
12	古代ガラス・釉薬の物性から探る製作技術に関する科学的研究	降幡　順子	都城発掘調査部主任研究員	基盤研究（C）	1,560
13	銅鏡にみる古代東アジアの文化交流（育児休暇　H22年3月まで）	中川　あや	都城発掘調査部研究員	若手研究（B）	1,040
14	木簡の構文・文字表記パターンの解析・抽出研究	馬場　基	都城発掘調査部主任研究員	若手研究（B）	650
15	古代工房の復原的比較研究－埴輪・須恵器・瓦の工房を中心に－	城倉　正祥	都城発掘調査部研究員	若手研究（B）	1,040
16	古代中世東アジアにおける八角塔・八角堂の構造と意匠に関する研究	箱崎　和久	都城発掘調査部遺構研究室長	若手研究（B）	1,040
17	南都諸大寺の中世寺院への転成過程に関する建築史学的研究	大林　潤	都城発掘調査部研究員	若手研究（B）	1,170
18	人骨に認められる刑罰痕の研究-打ち首・さらし首を例として-	橋本　裕子	埋蔵文化財センター客員研究員	若手研究（B）	1,300
19	造瓦からみた6～8世紀の日朝交渉	高田　貫太	都城発掘調査部研究員	若手研究（B）	65
20	オセアニア島嶼環境へのラピタ人の適応戦略を探る先史学的研究	石村　智	企画調整部研究員	若手研究（B）	1,820
21	古代日韓における土木技術の系譜にかんする考古学的研究	青木　敬	都城発掘調査部研究員	若手研究（B）	780
22	東アジアにおける失蠟法の出現と展開に関する考古学的研究	丹羽　崇史	企画調整部研究員	若手研究（B）	1,040
23	古代東アジアにおける都城と葬送地に関する考古学的研究	小田　裕樹	都城発掘調査部研究員	若手研究（B）	650
24	校倉造りの歴史的変遷と地域特性に関する研究	黒坂　貴裕	都城発掘調査部研究員	若手研究（B）	910
25	復原設計を方法とする東アジア古代建築の空間及び造形原理の解明	清水　重敦	文化遺産部景観研究室長	若手研究（B）	780
26	中世日本と中国における木造建築の架構システムに関する比較研究	鈴木　智大	都城発掘調査部研究員	若手研究（B）	910
27	土質遺構保存のための基礎的研究-動水勾配を利用した塩類析出抑制法の開発-	脇谷　草一郎	埋蔵文化財センター研究員	若手研究（B）	780
28	東アジアにおけるインド・パシフィックビーズの材質と流通に関する科学的研究	田村　朋美	埋蔵文化財センター研究員	若手研究（B）	780
29	令前木簡と古代文書の機能論的検討による日本における古代文書行政成立史の研究	山本　崇	都城発掘調査部主任研究員	若手研究（B）	1,040
30	日本列島における更新世終末期から完新世初頭における資源獲得行動と社会変化の研究	国武　貞克	都城発掘調査部研究員	若手研究（B）	1,170
31	九州における更新世末の移動・居住システムの変遷過程に関する研究	芝　康次郎	都城発掘調査部研究員	若手研究（B）	1,170
32	奈良時代の中央と地方における建築技術の研究	海野　聡	都城発掘調査部研究員	若手研究（B）	1,170
33	近世建造物の年代測定を目指したツガ年輪パターンの拡充と産地推定	藤井　裕之	埋蔵文化財センター客員研究員	若手研究（B）	780
34	木簡の字形分析による日本古代の異体字の基礎的研究	井上　幸	都城発掘調査部特別研究員	研究活動スタート支援	1,261
35	東アジアにおける古本州島後期旧石器文化の特殊性とその形成過程の研究	森先　一貴	都城発掘調査部研究員	研究活動スタート支援	936
36	ラピタ人の考古学	石村　智	企画調整部研究員	研究成果公開促進費(学術図書)	800

c-⑦ 客員研究員一覧

国立文化財機構	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館	東京文化財研究所	奈良文化財研究所
100人	16人	5人	5人	0人	49人	25人

【東京国立博物館】　16人

	氏 名（所 属）	研 究 課 題
1	田辺　龍太（財団法人切手の博物館学芸員）	当館所蔵の切手に関する調査研究
2	水上嘉代子（財団法人遠山記念館学芸員）	当館に所蔵される小袖形を中心とする日本近世染織の調査・研究
3	大脇　　潔（近畿大学 文芸学部教授）	当館所蔵古瓦の整理および、当館所蔵の藤原宮および藤原京内寺院出土瓦に関する研究
4	金子　浩昌（日本考古学協会会員）	当館所蔵原始・古代骨角製品に関する研究
5	東野　治之（奈良大学文学部教授）	法隆寺献納宝物「古今目録抄」に関する研究
6	小笠原小枝（日本女子大学 家政学部教授）	当館所蔵のインド更紗に関する研究
7	宮下　佐江子（古代オリエント博物館学芸課長）	西アジア古代ガラスの研究
8	澤田　正昭（国士舘大学２１世紀アジア学部教授）	金銅製考古遺物の保存と修理の研究
9	小野　博（美術刀剣研磨技師）	刀剣コレクションに関する保存状態の評価と保存修理の対策
10	松田　清（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）	当館所蔵の洋書及び関連資料の調査研究
11	丸山　清志（城西国際大学物質文化研究センター研究員・助手）	東洋民族オセアニア採集品の調査研究
12	松原　茂（財団法人根津美術館学芸部長）	当館所蔵の絵画に関する研究
13	湊　信幸（前東京国立博物館副館長）	当館所蔵の絵画に関する研究
14	鍋島　稲子（台東区立書道博物館主任研究員）	中国書跡の調査研究
15	岩崎　均史（たばこと塩の博物館主席学芸員）	当館所蔵の大小絵暦に関する研究
16	宮永 美知代（東京藝術大学美術学部助教）	解剖学・美術解剖学および医学関係資料の館史資料に関する調査研究

【京都国立博物館】　5人

	氏 名（所 属）	研 究 課 題
1	奥平　俊六（大阪大学大学院文学研究科教授）	京狩野に関する調査研究
2	山田　奨治（国際日本文化研究センター研究部准教授）	文化財情報に関する調査研究
3	宇都宮　啓吾（大阪大谷大学文学部教授）	訓点資料としての典籍に関する調査研究
4	狩野　博幸（同志社大学文化情報学部教授）	近世絵画に関する調査研究
5	井上　一稔（同志社大学文学部教授）	彫刻に関する調査研究

【奈良国立博物館】　5人

	氏 名（所 属）	研 究 課 題
1	井出誠之輔（九州大学大学院人文科学研究院教授）	仏教絵画の調査及び整理
2	木村法光（元宮内庁正倉院事務所保存課長）	漆工品の調査及び研究
3	森　　郁夫（帝塚山大学人文学部教授）	飛鳥・奈良時代の仏教考古、斑鳩地区出土瓦の調査及び整理
4	根立研介（京都大学大学院文学研究科教授）	仏教彫刻の調査と整理
5	板倉聖哲（東京大学東洋文化研究所准教授）	中国・朝鮮絵画の調査及び整理

【東京文化財研究所】　49人

	氏 名（所 属）	研 究 課 題
1	吉田千鶴子（東京藝術大学非常勤講師）	近代美術資料群の調査・研究
2	相澤正彦（成城大学文芸学部芸術学科教授）	研究プロジェクト「東アジアの美術に関する資料学的研究」の調査研究と研究助言
3	森下正昭（立命館アジア太平洋大学学長室IR AACSBプロジェクトコーディネーター）	研究プロジェクト「東アジアの美術に関する資料学的研究」の調査研究と研究助言
4	三上　豊（和光大学表現学部教授）	近・現代美術の調査研究および関連資料の整理・収集・公開に関する調査研究
5	中村佳史（国立情報学研究所研究員）	研究所アーカイブにおける情報の横断検索の構築のための調査研究と研究所言
6	丸川雄三（国立情報学研究所特任准教授）	近・現代美術の調査研究および関連資料の整理・収集・公開に関する調査研究
7	福岡（深津）裕子（女子美術大学美術館学芸員）	工芸技術（主として染織関係）の伝承実態の調査
8	森下愛子（泉屋博古館職員）	工芸技術（主として陶芸）の伝承実態の調査
9	服部比呂美（国立国会図書館国際子ども図書館非常勤調査員）	無形民俗文化財における風俗・慣習及び民俗技術分野の調査
10	大島暁雄	「民族技術」及び民俗芸能以外の「風俗・慣習」に関する調査研究
11	星野　紘（成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻非常勤講師）	「アジア太平洋地域無形文化遺産保護活動の調査研究」における研究交流
12	永井美和子（早稲田大学非常勤嘱託（演劇博物館））	無形文化財の記録作成
13	今岡謙太郎（武蔵野美術大学造形学部教授）	無形文化財の記録作成
14	三浦定俊（(財)文化財虫害研究所理事長）	光学的方法による文化財の技法材料に関する研究
15	藤井義久（京都大学農学部准教授）	文化財の生物劣化対策の研究
16	呂　俊民	文化財公開施設の室内空気汚染と空気清浄化に関する研究
17	三村　衛（京都大学防災研究所准教授）	古墳墳丘部の地盤工学的調査・研究
18	白石靖幸（北九州市立大学国際環境工学部環境空間デザイン学科准教授）	環境のシミュレーション手法の研究
19	小椋大輔（京都大学大学院工学研究科助教）	環境のシミュレーション手法の研究
20	間渕　創	保存環境調査や科学的手法による材料同定、薬剤等の材料影響に関する科学的分析・研究
21	小峰幸夫（(財)文化財虫害研究所研究員）	文化財の生物劣化対策の研究
22	板垣義郎（(株)ＡＣＭ）	修復材料に関する調査・研究
23	舘川　修	伝統材料に関する調査研究
24	横山晋太郎	近代の文化遺産の保存修復に関する調査・研究
25	長島宏行（(財)日本航空協会）	近代の文化遺産の保存修復、特に航空機保存に関する調査・研究
26	小堀信幸（(財)船の科学館）	近代文化遺産の保存修復に関する調査・研究
27	中右恵理子	キトラ古墳及び高松塚古墳壁画修復に関する調査研究
28	安部倫子（ＳＤラボラトリー）	キトラ古墳及び高松塚古墳壁画修復に関する調査研究
29	本田貴之	文化財の伝統的修復に関する調査研究
30	大林賢太郎（京都造形芸術大学歴史遺産学科準教授、京都造形芸術大学日本庭園・歴史研究センター歴史遺産研究部門長）	修復材料に関する調査研究
31	中條利一郎（帝京科学大学名誉教授）	修復材料に関する調査研究
32	坪倉早智子	キトラ古墳及び高松塚古墳壁画修復に関する調査研究

	氏 名（所 属）	研 究 課 題
33	松島朝秀（東京農工大学科学博物館特任助教）	近代文化遺産の保存修復に関する調査・研究
34	大河原典子	キトラ古墳及び高松塚古墳壁画修復に関する調査研究
35	今井健一郎	国内外の文化財保護法を中心とした文化財保護法についての調査研究
36	鋒井修一 （京都大学大学院工学研究科建築学専攻　教授）	タイ・スコータイ遺跡スリチュム寺院において、大仏の表面に生物を発生しにくくさせる環境条件に関する研究
37	柏谷博之 （国立科学博物館植物研究部菌類・藻類グループ長）	石造文化財の劣化と保存に対する植物の関与についての調査研究
38	津村（高林）弘実	壁画に見られる「劣化」現象に焦点をあて、莫高窟壁画の材料と技法の調査研究
39	前田耕作	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業の推進に関する業務についての研究協力
40	谷口陽子 （筑波大学大学院人文社会学研究科歴史・人類　助教）	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業の推進に関する業務についての研究協力
41	松岡秋子	文化遺産拠点交流事業の推進に関する業務についての研究協力
42	津村宏臣 （同志社大学文化情報学部文化情報学科　准教授）	文化財保存修復国際情報のデータベース化に関する研究
43	佐藤　桂（早稲田大学理工学部研究所客員研究員、サイバー大学メンター）	「文化財国際コンソーシアム事業」における文化遺産情報資源共有化に関連する研究
44	佐藤香子	壁画の調査、分析研究、データの集積管理および、発掘現場における調査記録方法の構築についての研究
45	岡村知明	「文化財国際コンソーシアム事業」における文化遺産国際協力に関する研究
46	松田泰典(国際協力機構大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト･専門家、東京藝術大学･東洋美術学校非常勤講師)	「エジプト国大エジプト博物館保存修復センター設立支援プロジェクト」人材育成と技術移転事業における研究協力
47	伏屋智美 （Getty Conservation Instituteコンサルタント）	「エジプト国大エジプト博物館保存修復センター設立支援プロジェクト」国内支援業務における研究協力
48	末森　薫（国際協力機構　専門家）	「エジプト国大エジプト博物館保存修復センター設立支援プロジェクト」国内支援業務における研究協力
49	藤澤　明	「エジプト国大エジプト博物館保存修復センター設立支援プロジェクト」国内支援業務における研究協力

【奈良文化財研究所】　25人

	氏 名（所 属）	研 究 課 題
1	小林　謙一（元奈良文化財研究所企画調整部長）	遺物及びその調査技術と文化財情報に関する研究
2	加藤　優（徳島文理大学文学部教授）	寺院史、古文献学の研究
3	吉川　真司（京都大学大学院文学研究科教授）	日本古代史の研究
4	宮城　俊作（奈良女子大学生活環境学部教授）	ランドスケープデザイン及び都史デザインに関する調査研究
5	黒崎　直（富山大学人文学部教授）	古代における宮殿・官衙・都城などに関する調査研究及び遺跡の保存・整備・活用の政策及び施策に関する調査研究
6	小浦　久子(大阪大学大学院工学研究科准教授)	都市計画、観光デザインの研究
7	EDWARDS Walter Drew(元天理大学国際文化学部教授)	考古学、文化人類学の研究
8	巽　淳一郎（京都橘大学文学部文化財学科教授）	唐三彩・施釉陶器の研究
9	西口　壽生(元奈良文化財研究所都城発掘調査部考古第二研究室長)	歴史時代土器及び古代都城遺跡、寺院の研究
10	市　大樹（大阪大学大学院文学研究科准教授）	木簡及び都城の研究ならびに日本古代地方支配の研究
11	山中　敏史（元奈良文化財研究所文化遺産部長）	遺跡及びその調査技術の研究
12	西村　康（（財）ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所長）	遺跡探査及び測量の調査研究
13	光谷　拓実(元奈良文化財研究所埋蔵文化財センター年代学研究室長)	年輪年代学及び木材解剖学についての調査研究
14	百橋　明穂（神戸大学大学院人文学研究科教授）	日本美術史についての調査研究
15	千田　剛道（元奈良文化財研究所企画調整部上席研究員）	遺物及びその調査技術と文化財情報に関する研究
16	増井　正哉（奈良女子大学生活環境学部教授）	建築史、保存修復計画、地域計画に関する調査研究
17	田中　大介（大阪市立大学都市文化研究センターCOE研究員）	古代都城制及び古代貨幣・市場経済の研究
18	佐藤　昌憲（元京都工芸繊維大学繊維学部教授）	有機質遺物の材質分析に関する研究
19	芹原　信生（元京都大学霊長類研究所教授）	自然人類学、動物考古学の研究
20	松下　まり子	花粉分析（人と植物のかかわり）についての研究
21	橋本　裕子	骨考古学（古人骨）・墓制・埴輪に関する調査研究
22	伊東　隆夫（元京都大学生存圏研究所教授）	木材組織学の研究
23	藤井　裕之	年輪年代学の研究
24	西口　和彦（元兵庫県立考古博物館調査専門委員）	遺跡探査の研究
25	安田　龍太郎（元奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長）	遺跡・遺物とその調査技術

d ウェブサイトアクセス件数

平成23年3月末現在

	H18	H19	H20	H21	H22
国立博物館計	12,805,988	13,584,803	13,551,529	16,625,712	13,606,613
東京国立博物館	3,680,028	5,504,468	5,211,261	5,687,673	4,971,306
京都国立博物館	757,812	733,885	1,409,634	848,486	805,935 (2,077,562)
奈良国立博物館	1,249,608	1,402,834	1,230,774	2,630,035 (639,030)	3,121,270 (769,293)
九州国立博物館	7,118,540 (1,004,766)	5,943,616 (1,164,425)	5,699,860 (1,480,341)	7,459,518 (1,956,287)	4,708,102 (1,384,701)
文化財研究所計	2,388,763	2,449,875	2,106,989	2,448,108	6,466,167
東京文化財研究所	1,355,306	1,526,409	1,405,278	1,417,203	1,489,091
奈良文化財研究所	1,033,457	923,466	701,711	1,030,905 (571,283)	4,977,076 (641,695)
機構本部		190,624	228,029	293,317	270,913
e国宝	288,752	473,006	383,864	630,399	659,056

※アクセス件数の単位は、東京国立博物館・東京文化財研究所はユーザーセッション数、
奈良国立博物館・九州国立博物館・奈良文化財研究所はページビュー数、
京都国立博物館はトップページビュー数を使用している。
（括弧内の数値はユーザーセッション数）。

附属資料

平成 22 年度特別展アンケート結果

東京国立博物館

１．特別展「細川家の至宝」
２．特別展「誕生！中国文明」
３．特別展「東大寺大仏－天平の至宝－」
４．特別展「仏教伝来の道 平山郁夫と文化財保護」

京都国立博物館

５．特別展覧会「長谷川等伯」
６．特別展観　没後２００年記念「上田秋成」
７．特別展覧会「高僧と袈裟―こころもを伝え こころを繋ぐ―」
８．特別展覧会「筆墨精神―中国書画の世界―」

奈良国立博物館

９．特別展「大遣唐使展」
１０．特別展「仏像修理 100 年/至宝の仏像」
１１．特別展「第 62 回正倉院展」

九州国立博物館

１２．特別展「パリに咲いた古伊万里の華」
１３．特別展「馬　アジアを駆けた二千年」
１４．特別展「誕生！中国文明」
１５．特別展「没後 120 年　ゴッホ展」

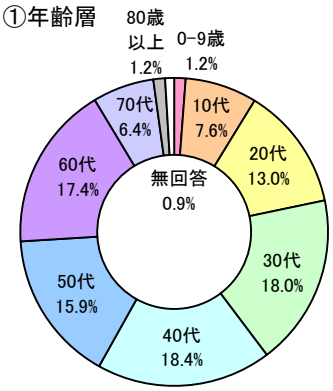
東京国立博物館

特別展「 細川家の至宝展 」
アンケート集計結果

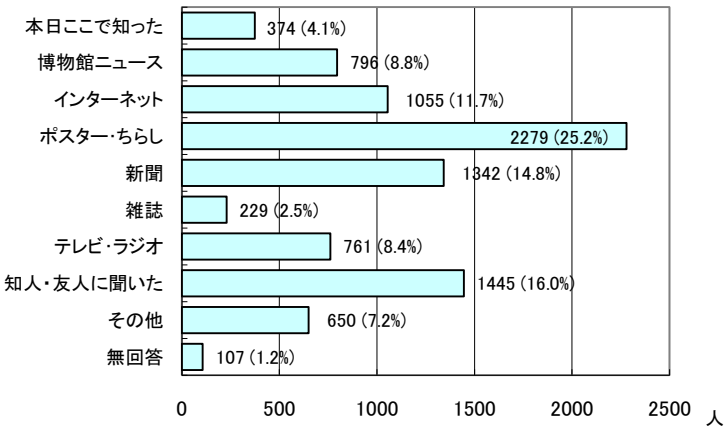
開催期間：平成２２年４月２０日（火）～平成２２年６月６日（日）（４３日間）

回答者数：７，３３６人（総入館者数：１８２，４７０人　アンケート回収率：４．０２％）

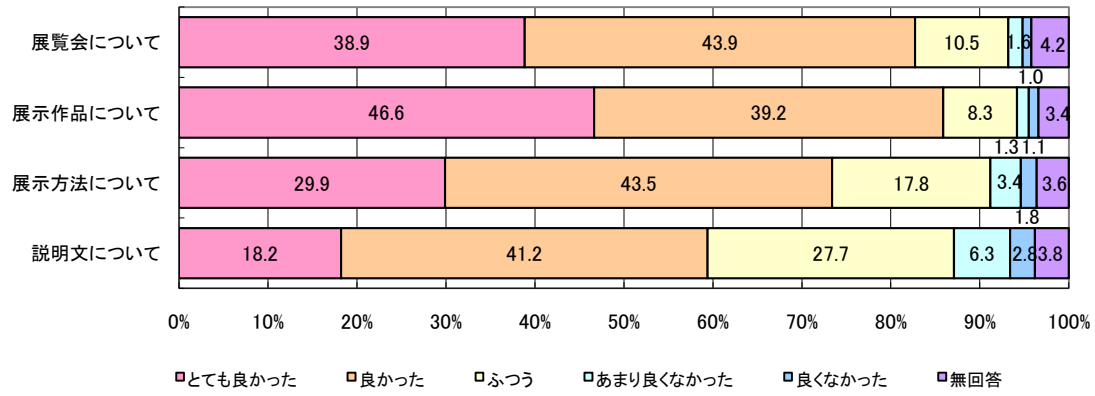
①年齢層



②認知経路（複数回答）



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

・良かった。楽しかった。感動した。素晴らしかった。満足した。
・細川家が貴重な美術品を後世まで守り続けてきたことに感銘を受けた。
・細川家や永青文庫のことが良く分かった。勉強になった。
・幅広いコレクションで興味深かった。色々な作品があり楽しかった。
・説明文文字が小さくて読みにくい。もっと大きな文字にしてほしい。
・もっと詳しい説明がほしかった。
・書状などの古文書類には現代語訳もつけてほしい。書き下し文だけでは意味が分からない。

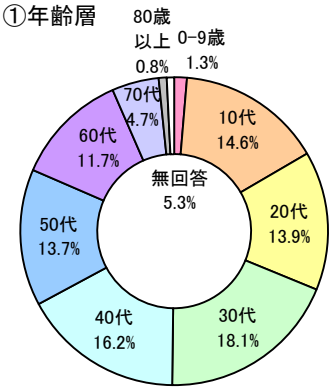
東京国立博物館

特別展「 誕生！中国文明展 」
アンケート集計結果

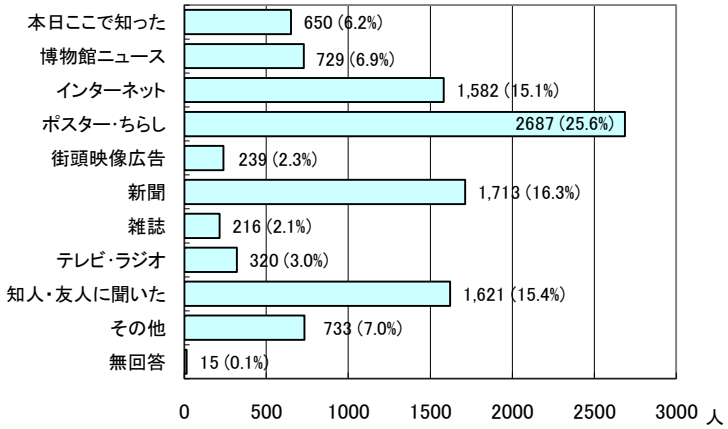
開催期間：平成２２年７月６日（火）～平成２２年９月５日（日）（５５日間）

回答者数：９，３４６人（総入館者数：１０５，５３８人　アンケート回収率：８．８６％）

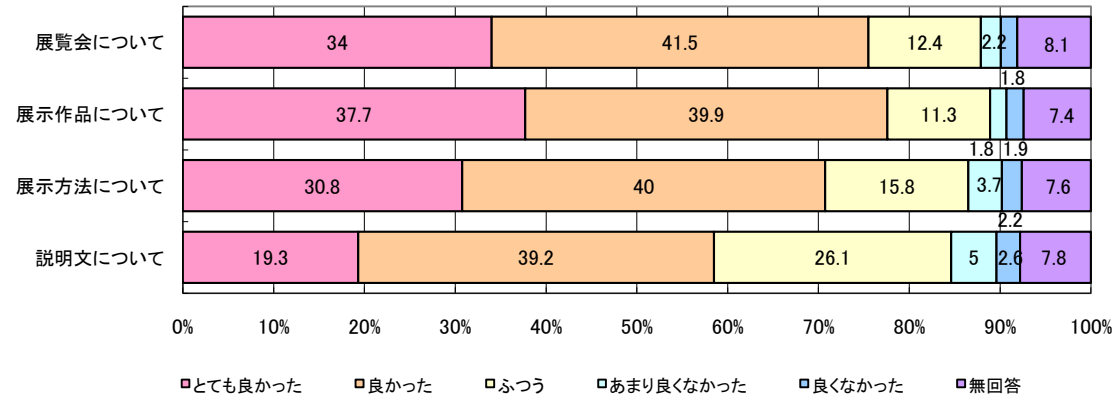
①年齢層



②認知経路（複数回答）



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

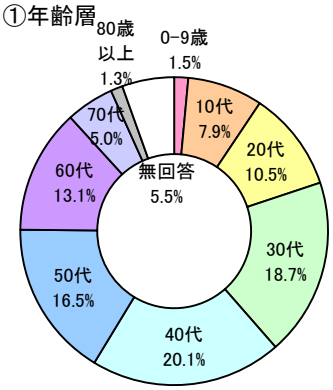
・良かった。素晴らしかった。感動した。満足した。興味深かった。など好評意見。
・展示方法に工夫があり見やすかった。
・中国文明についてよく分かった。勉強になった。
・会場が空いていたのでゆっくり鑑賞することができた。
・もっと詳しい説明がほしかった。
・内側が見えない作品には鏡を、小さくて見にくい作品には拡大鏡をつけてほしい。
・作品の時代がバラバラでテーマも絞られていないので、まとまりがなく混乱した。

東京国立博物館

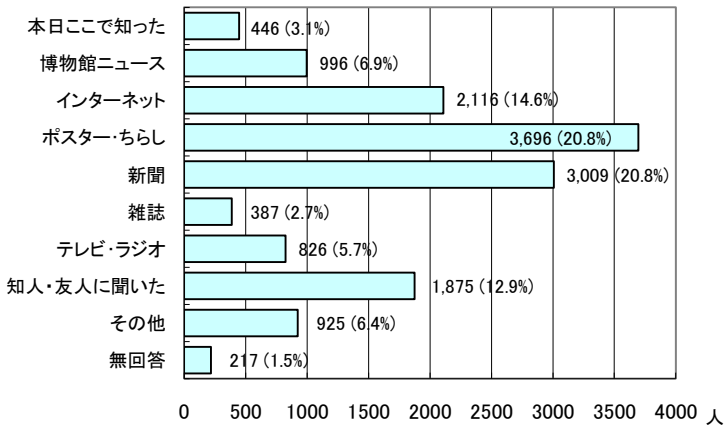
特別展「 東大寺大仏展 」
アンケート集計結果

開催期間：平成２２年１０月８日（金）～平成２２年１２月１２日（日）（５９日間）
回答者数：１２，１６１人（総入館者数：２３２，７９１人　アンケート回収率：５．２２％）

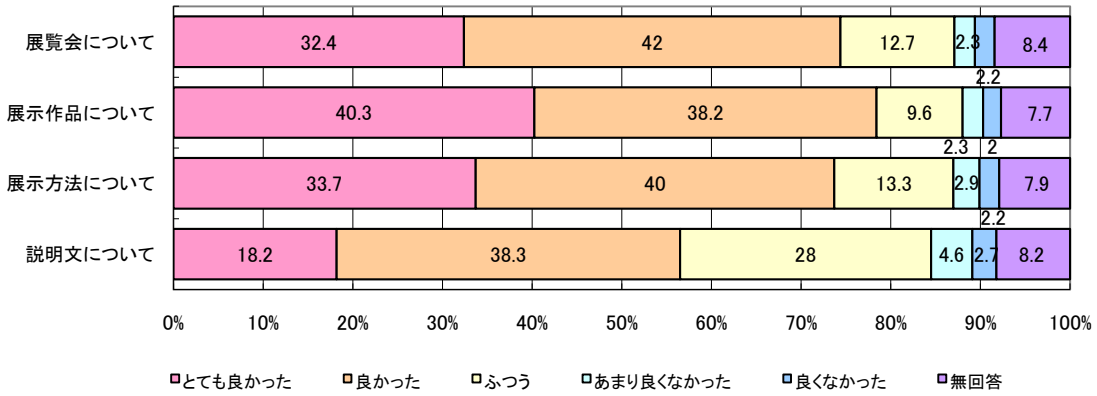
①年齢層



②認知経路（複数回答）



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

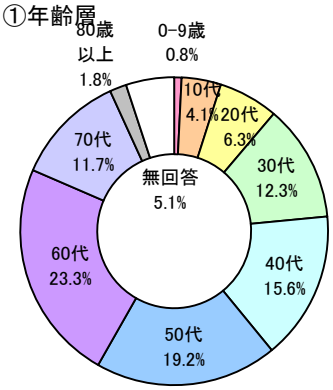
・良かった。素晴らしかった。感動した。楽しかった。見応えがあった。
・バーチャル映像が分かりやすくとても良かった。映像が美しかった。
・展示方法が良かったので見やすかった。
・東大寺の歴史や天平時代についてとても勉強になった。
・説明文をもっと詳しくしてほしい。
・作品を見た後に解説モニターがあるため、人が溜まり鑑賞しづらかった。配置場所を考えてほしい。
・専門用語が多く難しかった。もっと分かりやすい説明にしてほしい。

東京国立博物館

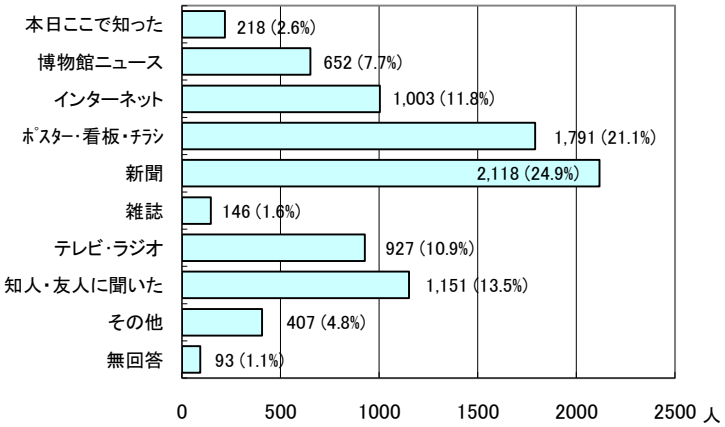
特別展「 平山郁夫展 」
アンケート集計結果

開催期間：平成２３年１月１８日（火）～平成２３年３月７日（日）（４２日間）
回答者数：７１，００人（総入館者数：１８８，４０２人　アンケート回収率：３．７７％）

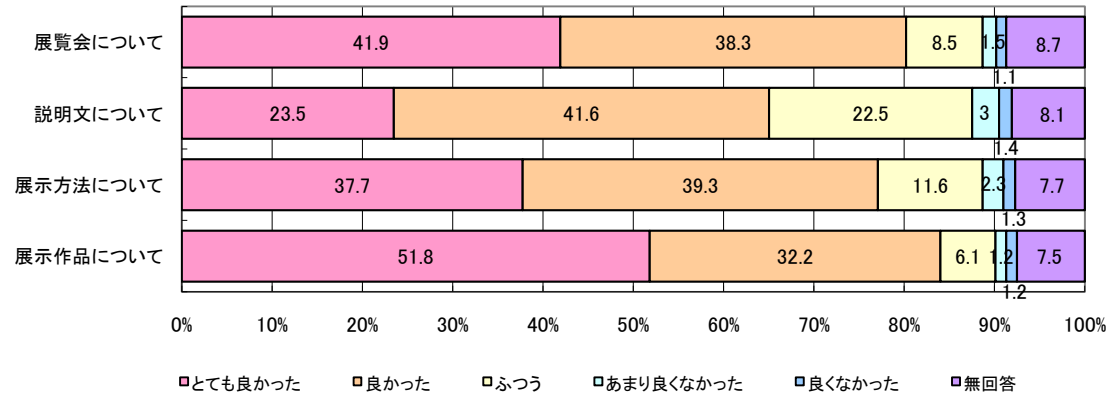
①年齢層



②認知経路（複数回答）



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

・良かった。素晴らしかった。感動した。
・平山先生の文化財保護の活動がよく分かった。
・文字が大きく見やすかった。
・大唐西域壁画が薬師寺で見るのと違った雰囲気で見ることができて良かった。
・平山先生の絵がもう少し多いと良かった。
・もっと詳しい説明がほしかった。

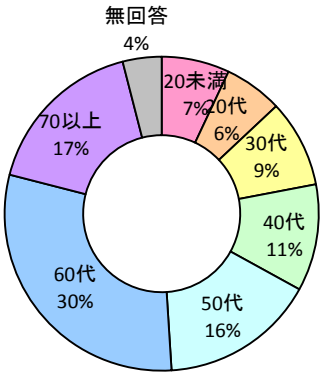
京都国立博物館

特別展覧会「長谷川等伯」

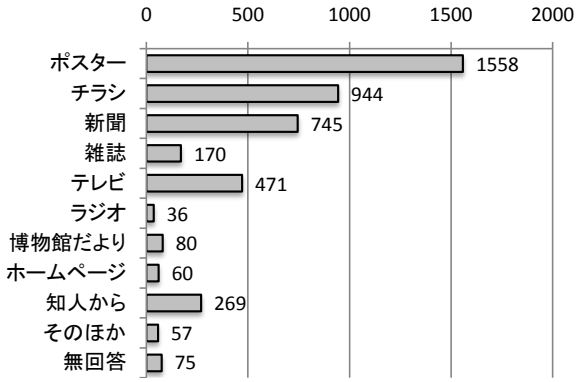
アンケート集計結果

開催期間：4月10日（土）～5月9日（日）（27日間）
回答者数：2,435人（総入館者数　244,347人　アンケート回収率1.0%）

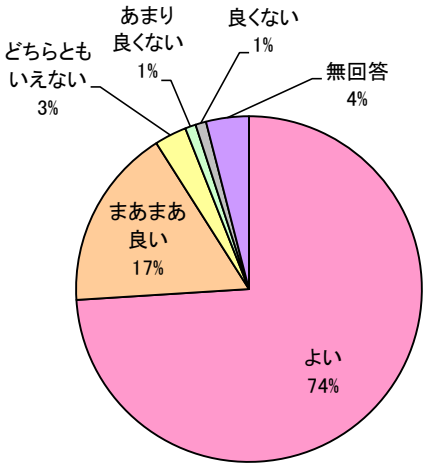
①年齢層



②認知経路（複数回答）



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

・とてもよかった、すばらしかった。（同様242件）
・人が多すぎる。（同様111件）
・作品が多くて見ごたえがあった。（同様78件）
・待ち時間が長くて大変だった。（同様42件）
・次回以降も期待している。（同様33件）
・展覧会期間が短い。（同様31件）
・照明が暗い（同様31件）

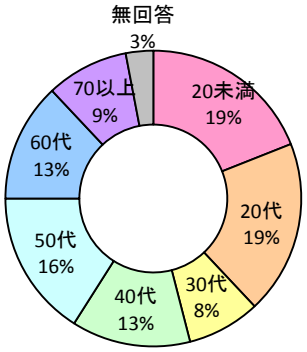
京都国立博物館

特別展観「上田秋成」

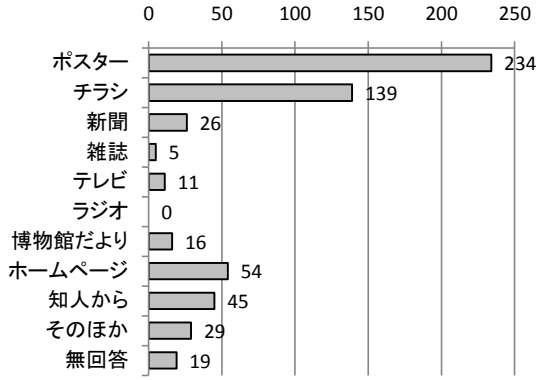
アンケート集計結果

開催期間：7月17日（火）～8月29日（日）　（39日間）
回答者数：365人（総入館者数 21,705人　アンケート回収率 1.7%）

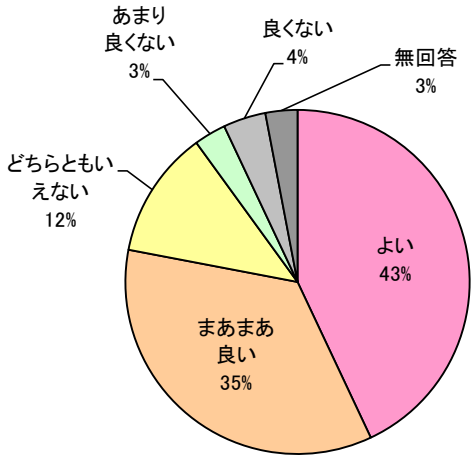
①年齢層



②認知経路（複数回答）



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

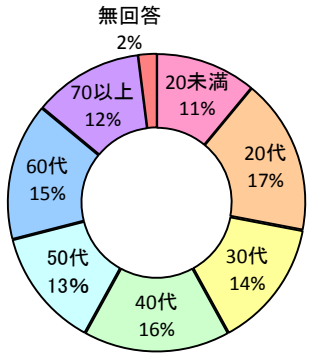
・秋成のことがよく分かった。（同様27件）
・色々な作品が見られてよかった。（同様13件）
・作品数や内容などに満足した。（同様12件）
・作品数が少ない。（同様11件）

京都国立博物館

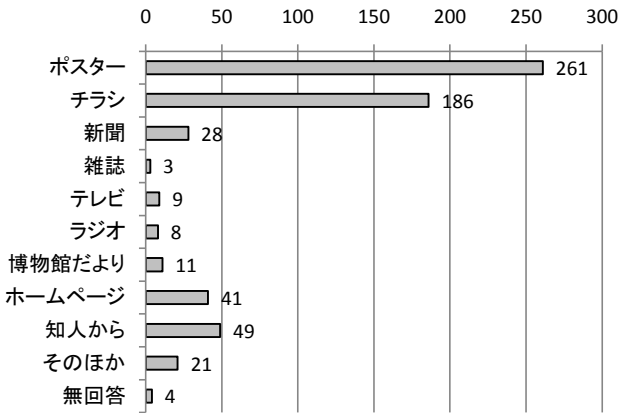
特別展覧会「高僧と袈裟」
アンケート集計結果

開催期間：10月9日（土）～11月23日（火・祝）（40日間）
回答者数：371人（総入館者数　19,297人　アンケート回収率 1.9%）

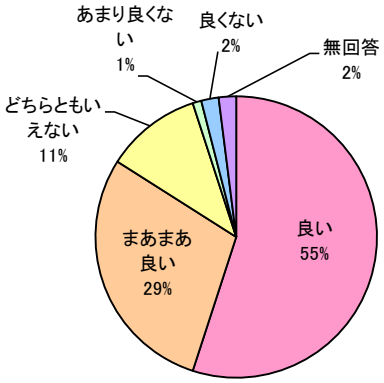
①年齢層



②認知経路（複数回答）



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

・とてもよかった、すばらしかった。（同様53件）
・企画がすばらしかった。（同様19件）
・貴重な作品を見ることができた。（同様15件）
・とても勉強になった。（同様12件）
・解説がよかった、理解の助けになった。（同様12件）
・解説が専門的過ぎる、難しい。（同様10件）

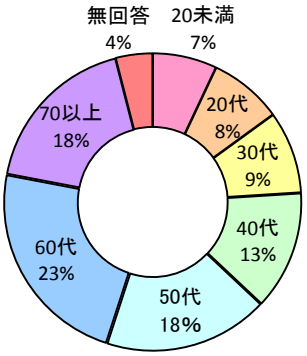
京都国立博物館

特別展覧会「筆墨精神」

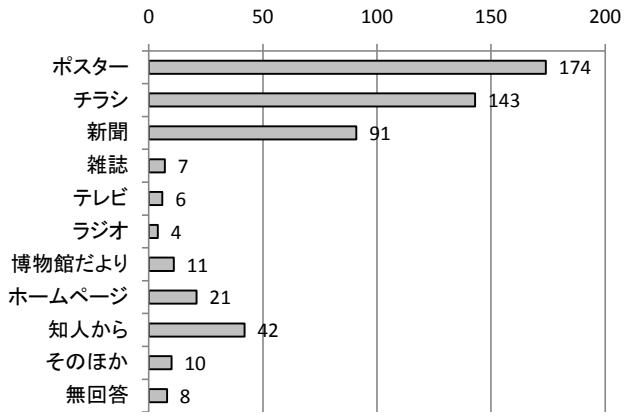
アンケート集計結果

開催期間：1月8日（土）～2月20日（日）（39日間）
回答者数：297人（総入館者数　37,535人　アンケート回収率 0.8%）

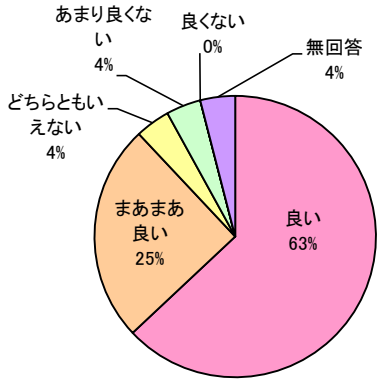
①年齢層



②認知経路（複数回答）



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

・感動した、すばらしかった。（同様32件）
・貴重な作品を見ることができた。（同様10件）
・平常展を早く見たい。（同様8件）
・地味だった。（同様8件）
・漢文、漢詩の内容をもっと解説してほしい。（同様5件）
・用語が難解だった。（同様5件）

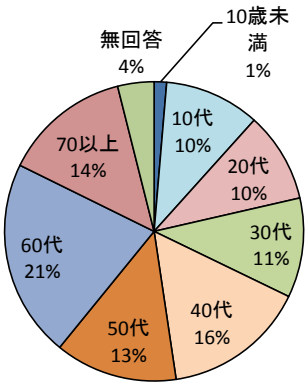
奈良国立博物館

特別展「大遣唐使展」

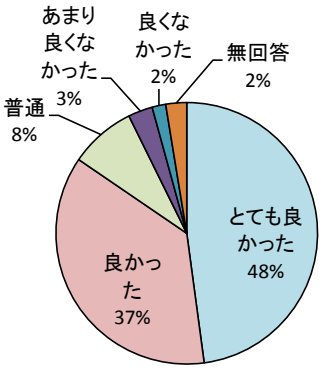
アンケート集計結果

開催期間：4月3日～6月20日(69日間)
回答者数：892人　入場者数202,166人　回収率 0.44%

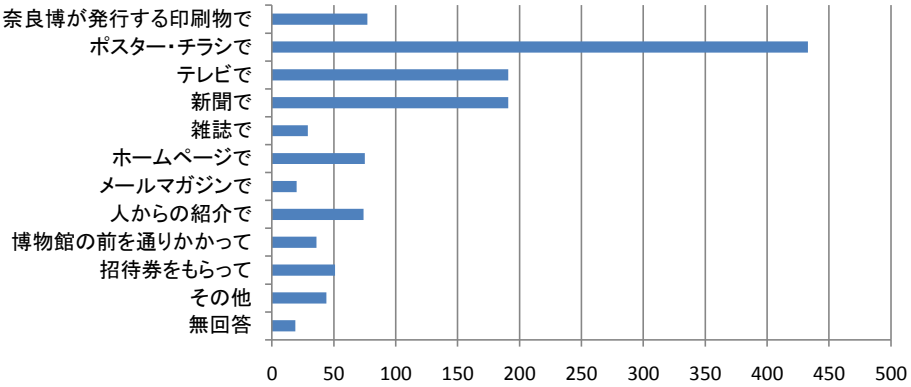
①年齢層



②展示に関する満足度



③認知経路(複数回答)



④主な意見・感想
- 非常に丁寧で行き届いた解説があり、素晴らしかった。
- 質、量ともすばらしい。仏像の種類も多く、とても楽しめた。
- 海外のものと比較展示されている点がおもしろかった。
- 四方から見られる品が多く、多方面から楽しめたのがうれしかった。
- 吉備大臣入唐絵巻のデジタル映像でストーリーを説明してくれて、より理解が深まった。
- もっと難しいかと思ったが、音声ガイドのおかげでわかりやすく、楽しめた。
- 1300年の記念にふさわしい催事で、例年以上に関心が高く持てた。

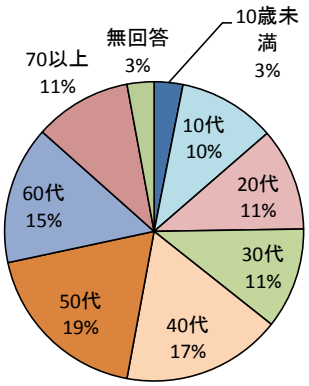
奈良国立博物館

特別展「仏像修理100年/至宝の仏像」

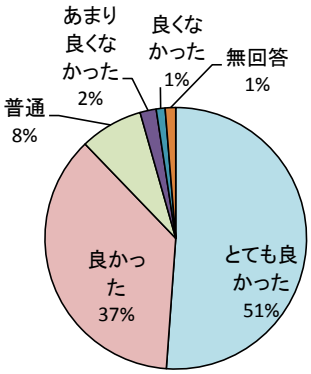
アンケート集計結果

開催期間:7月21日～9月26日(60日間)
回答者数:551人　入場者数81,342人　回収率 0.68%

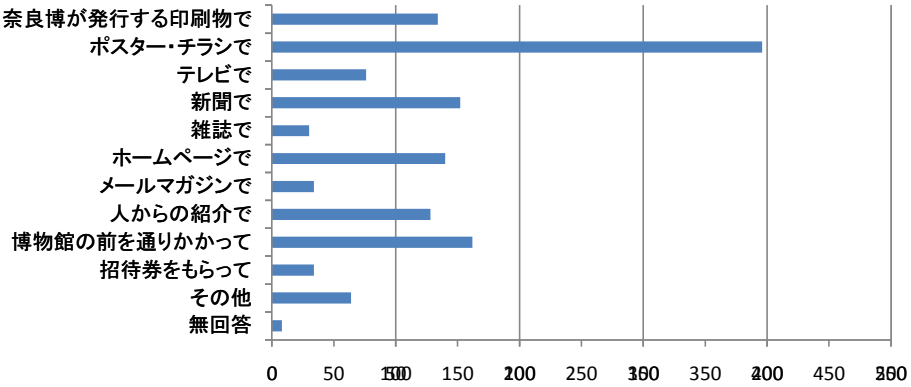
①年齢層



②展示に関する満足度



③認知経路(複数回答)



④主な意見・感想

【仏像修理100年】
・仏像をこういう切り口で展示するというテーマが新鮮で珍しく、とても良かった。
・仏像の元の彩色などが見られるのが良く、美しい。
・触れて匂いも嗅げる触感の展示が斬新。木片を持ち帰れるのもうれしい。

【至宝の仏像】
・照明が良く、仏像が美しく見える。
・展示数が多く、一堂に会したさまざまな仏像を心ゆくまで楽しめた。
・配置方法が見やすく、至近距離でオープンで四方から見られる展示方法もありがたい。

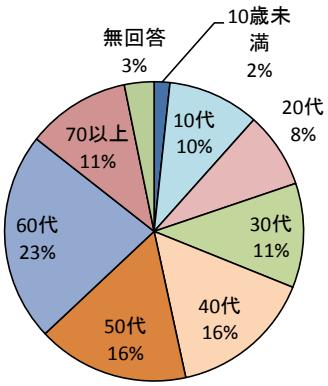
奈良国立博物館

特別展「第62回正倉院展」

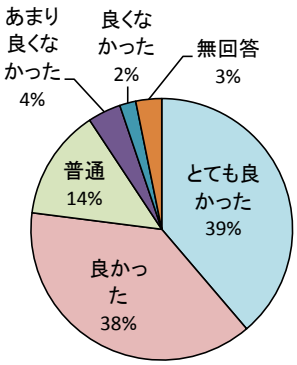
アンケート集計結果

開催期間：10月23日～11月11日(20日間)
回答者数：1,008人　入場者数294,804人　回収率 0.34%

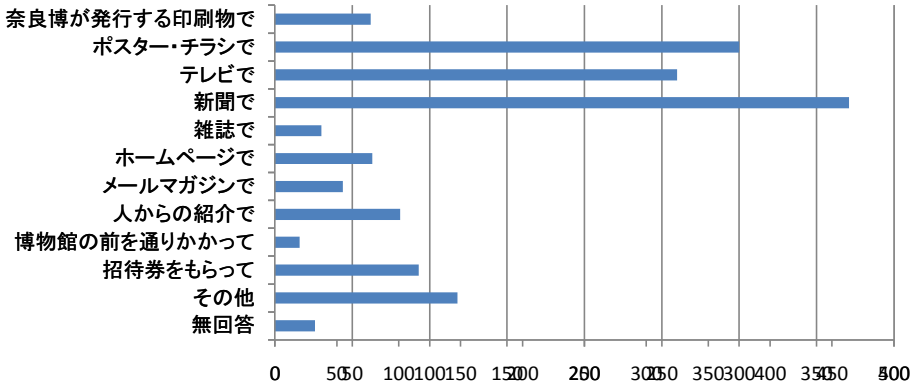
①年齢層



②展示に関する満足度



③認知経路(複数回答)



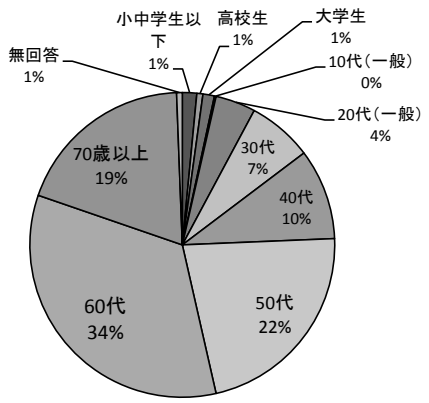
④主な意見・感想

・入館までの待ち時間の途中、ビデオや案内の新聞があり退屈しなかった。期待が盛り上がった。
・人気展示物について、今回のように二通りの鑑賞方法を作り、人が流れるようにしたのが良い。
・最初にボランティアによる解説会を聞いてから観覧したので、ポイントをつかみながら観覧することができた。
・音声ガイドの説明が分かりやすく丁寧で、子ども用があるのもありがたい。
・託児サービスがありがたかった。
・開館時間延長が助かる。入館者が多い割に、流れはスムーズだった。
・展示物の量の多さ、質の高さは感動もの。

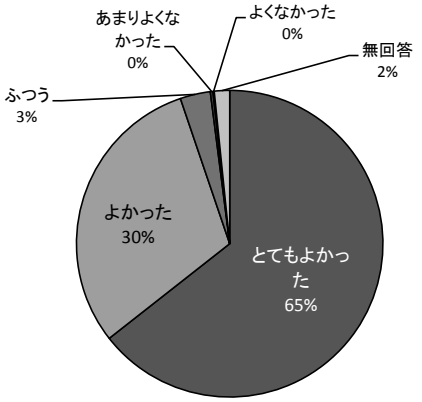
特別展「パリに咲いた古伊万里の華」アンケート集計結果

開催期間：22年4月6日～6月13日　（61日間）
総回答者数： 6,815人（総入館者数：84,738人　アンケート回収率：8.0%）

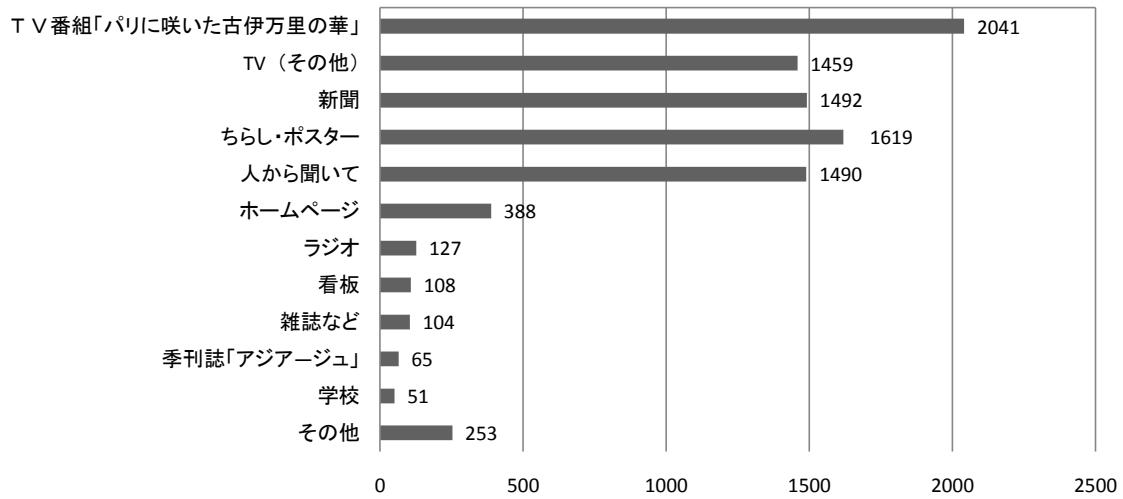
①年齢層



②展示に関する満足度



③認知経路（複数回答）



④主な意見・感想

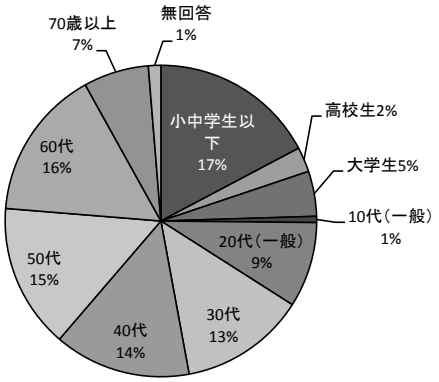
・素晴らしい作品を見せていただきありがとうございます。
・皿等の中や裏面も見れると良い。鏡を利用して裏面等も見えると良い。順路がいまひとつ解からなかった。
・ピンクの説明文は読み難かった。作品の解説を上方に付けてもらえばもっとよかった。
・古伊万里の魅力を再認識できました。 ポスターが良かった。
・休むための椅子を何箇所も増やして欲しい。床は、足に負担が無いようにして欲しい。

九州国立博物館

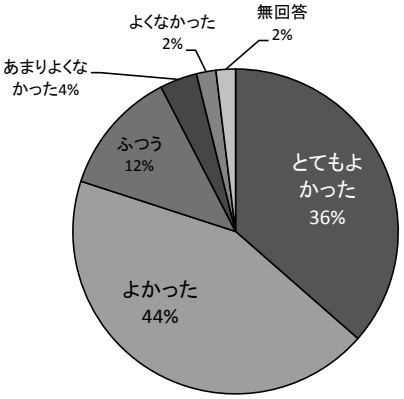
特別展「馬　アジアを駆けた二千年」　アンケート集計結果

開催期間：22年7月13日～9月5日　（48日間）
総回答者数：620人（総入館者数：42,022人　アンケート回収率：1.5%）

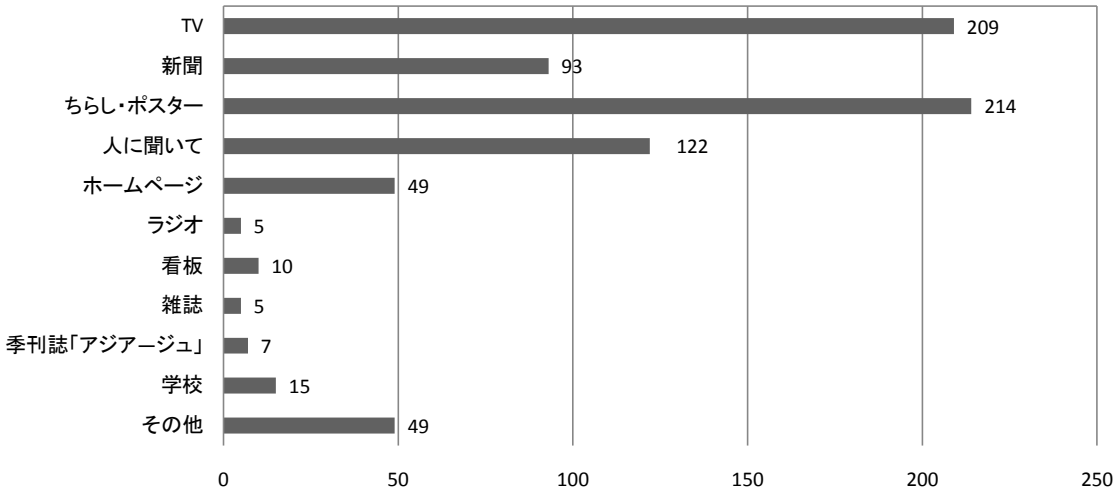
①年齢層



②展示に関する満足度



③認知経路（複数回答）



④主な意見・感想

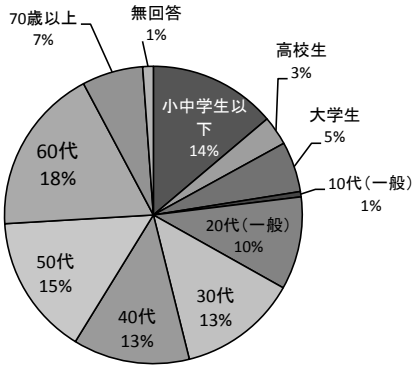
・馬のことがとても解ってもっと好きになりました。馬の歴史が解ってよかったです。
・展示内容が考古資料が多すぎてあきてしまった。鎌倉時代とかの武将の馬具がみたかった。
・もっと解かり易く。全体として良かったが、もっと詳しい説明が欲しいと思った。
・国宝や重要文化財が数多くあり、すごかったです。
・ウェブ上にのってる出陳一覧、陳列替がわかりにくい。子供のために、フリガナがあったほうが良かった。

特別展「誕生！中国文明」　アンケート集計結果

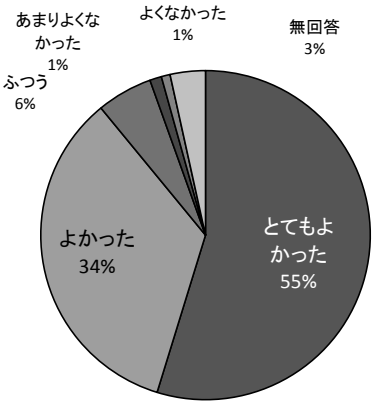
開催期間：22年10月5日～11月28日　（48日間）

総回答者数：347人（総入館者数：53,409人　アンケート回収率：0.6%）

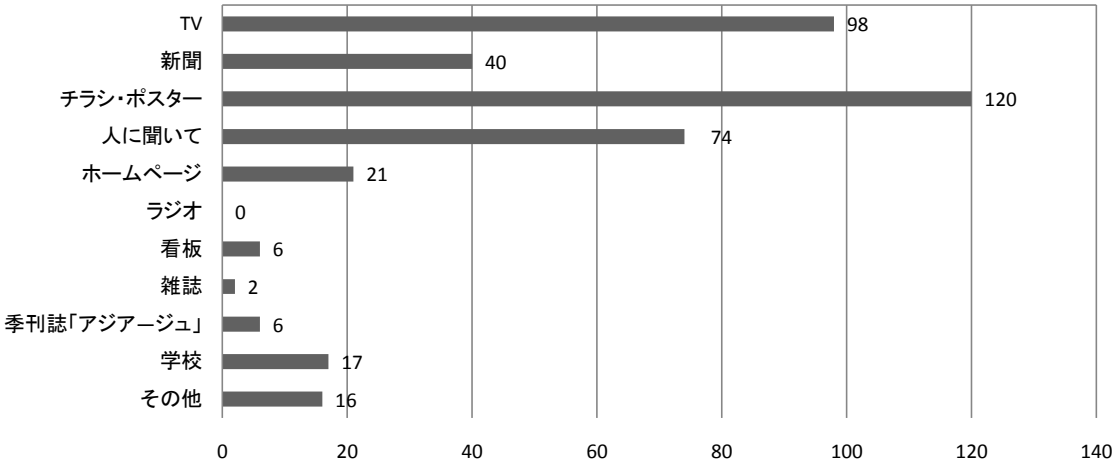
①年齢層



②展示に関する満足度



③認知経路（複数回答）



④主な意見・感想

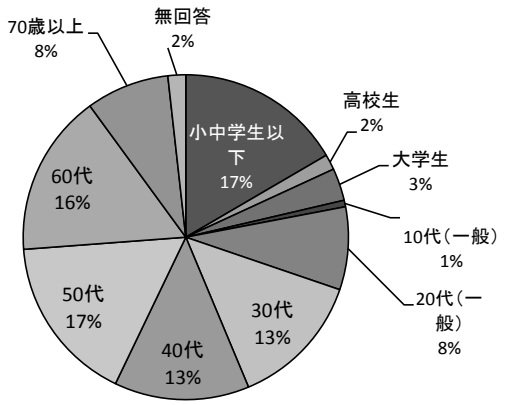
・中国の文化をさらに知ることができて良かった。いろんな展示物があり、体験コーナー（玉の硬さの体験）もあったので楽しめた。
・前面しか見えない物があり、鏡等で裏や中が見えるようにして欲しかった。テレビ映像や音楽が無いのがさみしかった。
・もっと詳しい解説が欲しい。日本語以外（英語等）の説明がない。説明文の位置が悪く、人の流れが良くなかった。
・休む椅子をもっと増やして欲しい。座り心地の良い椅子があると良い。
・会場内の照明が暗く順路が分りにくかった。照明の当て方を工夫して欲しい、馬車の傘の金・金銅の管は文様が見えなかった。

九州国立博物館

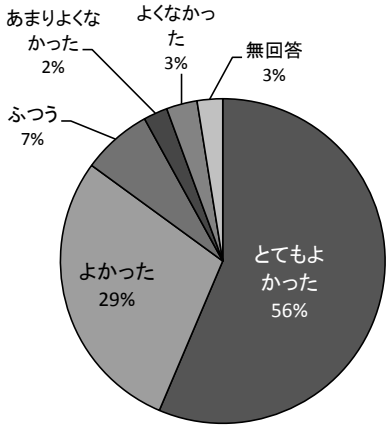
特別展「没後120年　ゴッホ展」　アンケート集計結果

開催期間：23年1月1日～2月13日　（42日間）
総回答者数：3,387人（総入館者数：354,311人　アンケート回収率：1%）

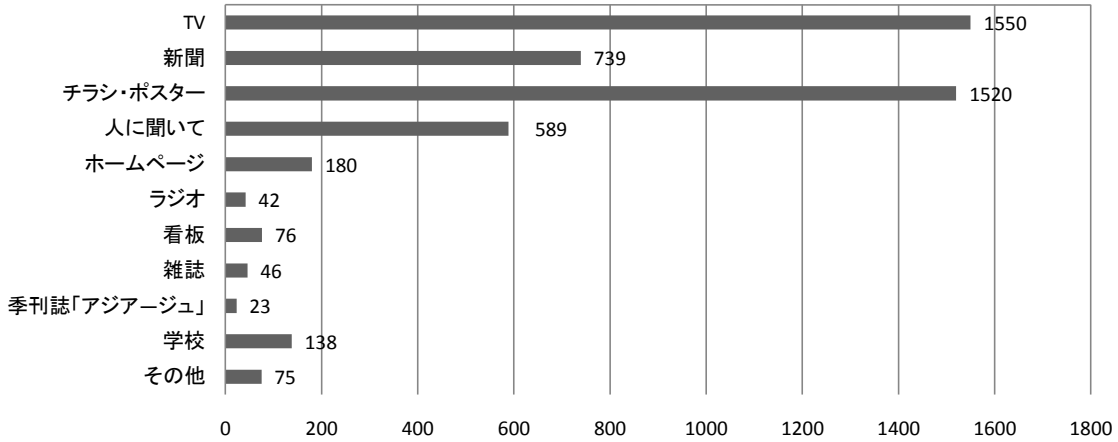
①年齢層



②展示に関する満足度



③認知経路（複数回答）



④主な意見・感想
・ゴッホの生涯が分ってよかった。ゴッホだけでなく、他の作家の作品も観れて楽しめた。雰囲気等も含めて素敵でした。
・音声ガイドが良かった。待ち時間のお知らせは、とても役にたちました。説明が多くあり、特にゴッホと他の人物年表との比較がよ
・人が多すぎてゆっくり見れなかった。もっと入場制限をしてほしい。
・展示室内がせまく、順路が悪い。他の画家の作品とゴッホの作品が解かり難い。
・ゴッホの他の作品も見たかった。照明がよくなかった。

平成 22 年度　独立行政法人国立文化財機構年報
平成 24 年 1 月 31 日発行
編集・発行　独立行政法人国立文化財機構
〒110-8712　東京都台東区上野公園 13 番 9 号
電話　(03)3822-1111（代表）
Fax　(03)3822-1113
印刷 よしみ工産株式会社
©2011. National Institutes for Cultural Heritage,
printed in Japan